

創世記

第一章

一 はじめに神は天と地とを創造された。二 地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。

三 神は「光あれ」と言われた。すると光があつた。四 神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。五 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である。

六 神はまた言われた、「水の間におおぞらがあつて、水と水を分けよ」。七 そのようになつた。神はおおぞらを造つて、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。八 神はそのおおぞらを天と名づけられた。夕となり、また朝となった。第二日である。

九 神はまた言われた、「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」。そのようになつた。一〇 神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まつた所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた。二 神はまた言われた、「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがつて種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ」。そのようになつた。三 地は青草と、種類にしたがつて種

をもつ草と、種類にしたがつて種のある実を結ぶ木とをはえさせた。神は見て、良しとされた。二 夕となり、また朝となった。第三日である。

四 神はまた言われた、「天のおおぞらに光があつて昼と夜とを分け、しるしのため、季節のため、日のため、年のためになり、五 天のおおぞらにあつて地を照らす光となれ」。そのようになつた。六 神は二つの大きな光を造り、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどらせ、また星を造られた。七 神はこれらを天のおおぞらに置いて地を照らせ、一 昼と夜とをつかさどらせ、光とやみとを分けさせられた。神は見て、良しとされた。一 夕となり、また朝となった。第四日である。

二 神はまた言われた、「水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上天のおおぞらを飛べ」。三 神は海の大なる獣と、水に群がるすべての動く生き物とを、種類にしたがつて創造し、また翼のあるすべての鳥を、種類にしたがつて創造された。神は見て、良しとされた。三 神はこれらを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、海の水に満ちよ、また鳥は地にふえよ」。三 夕となり、また朝となった。第五日である。

四 神はまた言われた、「地は生き物を種類にしたがつていさせ。家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがつていさせ」。そのようになつた。五 神は地の獣を種類にしたがつて、家畜を種類にしたがつて、また地に這うすべての物を種類にしたがつて造ら

れた。神は見て、良しとされた。

三六 神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどつて人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。三七 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。三八 神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。三九 神はまた言われた、「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがたの食物となるであらう。四〇 また地のすべての獣、空のすべての鳥、地を這うすべてのもの、すなわち命あるものには、食物としてすべての青草を与える」。そのようになった。四一 神が造つたすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かつた。タとなり、また朝となった。第六日である。

第二章

一 こうして天と地と、その万象とが完成した。二 神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終つて第七日に休まれた。三 神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終つて休ま

れたからである。

四 これが天地創造の由来である。

主なる神が地と天とを造られた時、五 地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。六 しかし地から泉がわきあがつて土の全面を潤していた。七 主なる神は土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった。八 主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造つた人をそこに置かれた。九 また主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。一〇 また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。一一 その第一の名はピソンといい、金のあるハビラの全地をめぐるもので、一二 その地の金は良く、またそこはブドラクと、しまめのうとを産した。一三 第二の川の名はギホンといい、クシの全地をめぐるもの。一四 第三の川の名はヒデケルといい、アツスリヤの東を流れるもの。第四の川はユーフラテである。一五 主なる神は人を連れて行つてエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。一六 主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取つて食べてよろしい。一七 しかし善悪を知る木からは取つて食べてはならない。それを取つて食べると、きつと死ぬであらう」。

「八また主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。九そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。二〇それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。二一そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。二二主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。二三そのとき、人は言った。

「これこそ、ついにわたしの骨の骨、

わたしの肉の肉。

男から取ったものだから、

これを女と名づけよう」。

二四それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。二五人とその妻とは、ふたりとも裸であつたが、恥ずかしいとは思わなかった。

第三章

一さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も

狡猾であつた。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」。二女はへびに言った、「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、三ただ園の中央にある木の实については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。四へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。五それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。六女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた。七すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。

八彼らは、日の涼しい風の吹くころ、園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた。そこで、人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。九主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。一〇彼は答えた、「園の中であなただの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。二神は言われた、「あなたが裸であることを、だれが知らせたのか。食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか」。三人は答えた、「わたしと一緒にしてください」。四たあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。

二三そこで主なる神は女に言われた、「あなたは、なんということをしたのです」。女は答えた、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」。二四主なる神はへびに言われた、

「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最もものろわれる。

おまえは腹で、這いあるき、

一生、ちりを食べるであろう。

一五わたしは恨みをおく、

おまえと女とのあいだに、

おまえのすえと女のすえとの間に。

彼はおまえのかしらを砕き、

おまえは彼のかかとを砕くであろう」。

一六つぎに女に言われた、

「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。

あなたは苦しんで子を産む。

それでもなお、あなたは夫を慕い、

彼はあなたを治めるであろう」。

一七更に人に言われた、「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなと、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、

あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。

一八地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、

あなたは野の草を食べるであろう。

一九あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、

あなたは土から取られたのだから。

あなたは、ちりだから、ちりに帰る」。

二〇さて、人はその妻の名をエバと名づけた。彼女がすべて生きものの母だからである。二三主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造つて、彼らに着せられた。

二三主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取つて食べ、永久に生きるかも知れない」。二三そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。二四神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。

第四章

一人はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言った、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」。二彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。三日がたつて、カインは地の産物を

持つてきて、主に供え物とした。四アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持つてきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。五しかしカインとその供え物とは顧みられなかったので、カインは大いに憤って、顔を伏せた。六そこで主はカインに言われた、「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか。七正しい事をしているのですしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのですしたら、罪が門口に待ち伏せています。それはあなたを慕い求めますが、あなたはそれを治めなければなりません」。

八カインは弟アベルに言った、「さあ、野原へ行こう」。彼らが野にいたとき、カインは弟アベルに立ちかかって、これを殺した。九主はカインに言われた、「弟アベルは、どこにいますか」。カインは答えた、「知りません。わたしが弟の番人でしょうか」。

一〇主は言われた、「あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の音が土の中からわたしに叫んでいます。一今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。二あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」。三カインは主に言った、「わたしの罰は重くて負いきれません。四あなたはあきよう、わたしを地のおもてから追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねばなりません。わたしを

見付ける人はだれでもわたしを殺すでしょう」。五主はカインに言われた、「いや、そうではない。だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう」。そして主はカインを見付ける者が、だれも彼を打ち殺すことのないように、彼に一つのしるしをつけられた。六カインは主の顔を去って、エデンの東、ノドの地に住んだ。

七カインはその妻を知った。彼女はみごもってエノクを産んだ。カインは町を建て、その町の名をその子の名にしたがって、エノクと名づけた。八エノクにはイラデが生れた。イラデの子はメホヤエル、メホヤエルの子はメトサエル、メトサエルの子はレメクである。九レメクはふたりの妻をめとった。ひとりの名はアダといい、ひとりの名はチラといった。一〇アダはヤバルを産んだ。彼は天幕に住んで、家畜を飼う者の先祖となった。二三その弟の名はユバルといった。彼は琴や笛を執るすべての者の先祖となった。三チラもまたトバルカインを産んだ。彼は青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者となった。トバルカインの妹をナアマといった。

三三レメクはその妻たちに言った、

「アダとチラよ、わたしの声を聞け、

レメクの妻たちよ、わたしの言葉に耳を傾けよ。

わたしは受ける傷のために、人を殺し、
受ける打ち傷のために、わたしは若者を殺す。

二四カインのための復讐が七倍ならば、
レメクのための復讐は七十七倍。

三五アダムはまたその妻を知った。彼女は男の子を産み、その名をセツと名づけて言った、「カインがアベルを殺したので、神はアベルの代りに、ひとりの子をわたしに授けられました」。ニセツにもまた男の子が生まれた。彼はその名をエノスと名づけた。この時、人々は主の名を呼び始めた。

第五章

一アダムの系図は次のとおりである。神が人を創造された時、神をかたどって造り、ニ彼らを男と女とに創造された。彼らが創造された時、神は彼らを祝福して、その名をアダムと名づけられた。ミアダムは百三十歳になって、自分にかたどり、自分のかたちのような男の子を生み、その名をセツと名づけた。四アダムがセツを生んで後、生きた年は八百年であつて、ほかに男子と女子を生んだ。五アダムの生きた年は合わせて九百三十歳であつた。そして彼は死んだ。

六セツは百五歳になつて、エノスを生んだ。セツはエノスを生んだ後、八百七年生きて、男子と女子を生んだ。ハセツの年は合わせて九百十二歳であつた。そして彼は死んだ。
九エノスは九十歳になつて、カインを生んだ。一〇エノスはカ

インを生んだ後、八百十五年生きて、男子と女子を生んだ。一エノスの年は合わせて九百五歳であつた。そして彼は死んだ。

ニカインは七十歳になつて、マハレルを生んだ。ニカインはマハレルを生んだ後、八百四十年生きて、男子と女子を生んだ。四カインの年は合わせて九百十歳であつた。そして彼は死んだ。

五マハレルは六十五歳になつて、ヤレドを生んだ。六マハレルはヤレドを生んだ後、八百三十年生きて、男子と女子を生んだ。七マハレルの年は合わせて八百九十五歳であつた。そして彼は死んだ。八ヤレドは百六十二歳になつて、エノクを生んだ。九ヤレドはエノクを生んだ後、八百年生きて、男子と女子を生んだ。一〇ヤレドの年は合わせて九百六十二歳であつた。そして彼は死んだ。

三エノクは六十五歳になつて、メトセラを生んだ。三エノクはメトセラを生んだ後、三百年、神とともに歩み、男子と女子を生んだ。三エノクの年は合わせて三百六十五歳であつた。二四エノクは神とともに歩み、神が彼を取られたので、いなくなつた。

五メトセラは百八十七歳になつて、レメクを生んだ。ニメトセラはレメクを生んだ後、七百八十二年生きて、男子と女子を生んだ。ニメトセラの年は合わせて九百六十九歳であつた。そ

して彼は死んだ。

三ハレメクは百八十二歳になつて、男の子を生み、二九「この子こそ、主が地をのろわれたため、骨折り働くわれわれを慰めるもの」と言つて、その名をノアと名づけた。三〇レメクはノアを生んだ後、五百九十五年生きて、男子と女子を生んだ。三レメクの年は合わせて七百七十七歳であつた。そして彼は死んだ。三ノアは五百歳になつて、セム、ハム、ヤベテを生んだ。

第六章

一人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、二神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとつた。三そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であらう」。四そのころ、またその後にも、地にネピリムがいた。これは神の子たちが人の娘たちのところにはいつて、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士であり、有名な人々であつた。

五主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思ひはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。六主は地の上に人を造つたのを悔いて、心を痛め、七「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去らう。人も獣も、這うものも、空の鳥まで

も。わたしは、これらを作つたことを悔いる」と言われた。ハしかし、ノアは主の前に恵みを得た。

九ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であつた。ノアは神とともに歩んだ。一〇ノアはセム、ハム、ヤベテの三人の子を生んだ。

二時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた。三神が地を見られると、それは乱れていた。すべての人が地の上でその道を乱したからである。三そこで神はノアに言われた、「わたしは、すべての人を絶やそうと決心した。彼らは地を暴虐で満ちしたから、わたしは彼らを地とともに滅ぼそう。一四あなたは、いとすぎの木で箱舟を造り、箱舟の中にへやを設け、アスファルトでそのうちそとを塗りなさい。一五その造り方は次のとおりである。すなわち箱舟の長さは三百キュビト、幅は五十キュビト、高さは三十キュビトとし、一六箱舟に屋根を造り、上へ一キュビトにそれを仕上げ、また箱舟の戸口をその横に設けて、一階と二階と三階のある箱舟を造りなさい。一七わたしは地の上に洪水を送つて、命の息のある肉なるものを、みな天の下から滅ぼし去る。地にあるものは、みな死に絶えるであらう。一八ただし、わたしはあなたと契約を結ぼう。あなたは子らと、妻と、子らの妻たちと共に箱舟にはいりなさい。一九またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて、あなたと共にその命を保たせなさい。それらは雄と雌と

でなければならぬ。二〇すなわち、鳥はその種類にしたがい獣はその種類にしたがい、また地のすべての這うものも、その種類にしたがって、それぞれ二つずつ、あなたのところに入れて、命を保たせなさい。三また、すべての食物となるものをつとて、あなたのところにたくわえ、あなたとこれらのものの食物としなさい。三ノアはすべて神の命じられたようにした。

第七章

一主はノアに言われた、「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人である」とわたしは認めたからである。二あなたはすべての清い獣の中から雄と雌とを七つずつ取り、清くない獣の中から雄と雌とを二つずつ取り、三また空の鳥の中から雄と雌とを七つずつ取って、その種類が全地のおもてに生き残るようにしなさい。四七日の後、わたしは四十日四十夜、地に雨を降らせて、わたしの造ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります。五ノアはすべて主が命じられたようにした。六さて洪水が地に起った時、ノアは六百歳であつた。セノアは子らと、妻と、子らの妻たちと共に洪水を避けて箱舟にはいった。ハまた清い獣と、清くない獣と、鳥と、地に這うすべてのものとの、九雄と雌とが、二つずつノアのもとにきて、神がノアに命じ

られたように箱舟にはいった。一〇こうして七日の後、洪水が地に起った。

二それはノアの六百歳の二月十七日であつて、その日に大なる淵の源は、ことごとく破れ、天の窓が開けて、三雨は四十日四十夜、地に降り注いだ。四その同じ日に、ノアと、ノアの子セム、ハム、ヤベテと、ノアの妻と、その子らの三人の妻とは共に箱舟にはいった。五またすべての種類の獣も、すべての種類の家畜も、地のすべての種類の這うものも、すべての種類の鳥も、すべての翼あるものも、皆はいった。六すなわち命の息のあるすべての肉なるものが、二つずつノアのもとにきて、箱舟にはいった。七そのはいったものは、すべて肉なるものの雄と雌とであつて、神が彼に命じられたようにはいった。そこで主は彼のうしろの戸を閉ざされた。

八洪水は四十日のあいだ地上にあつた。水が増して箱舟を浮べたので、箱舟は地から高く上がった。九また水がみなぎり、地に増したので、箱舟は水のおもてに漂った。一〇水はまた、ますます地にみなぎり、天の下の高い山々は皆おわれた。一一水はその上、さらに十五キュビトみなぎって、山々は全くおわれた。一二地の上に動くすべて肉なるものは、鳥も家畜も獣も、地に群がるすべての這うものも、すべての人もみな滅びた。一三すなわち鼻に命の息のあるすべてのもの、陸にいたすべてのものは死んだ。一四地のおもてにいたすべての生き物は、人も家畜

も、^は這うものも、^{そら}空の鳥もみな地からぬぐい去られて、ただノアと、^{かれ}彼と共に^{はこぶね}箱舟にいたものだけが残った。二四 水は百五十日のあいだ地上にみなぎった。

第八章

一 神はノアと、^{はこぶね}箱舟の中にいたすべての生き物と、すべての家畜とを心にとめられた。神が^{かぜ}風を地の上に吹かせられたので、^{しみず}水は退いた。ニまた淵の源と、^{てん}天の窓とは閉ざされて、^{あめ}天から雨が降らなくなった。三それで水はしだいに地の上から引いて、百五十日の後には水が減り、四箱舟は七月十七日にアララの山にとどまった。五水はしだいに減つて、十月になり、十月一日に^{やま}山々の頂が現れた。

六 四十日たつて、ノアはその造つた箱舟の窓を開いて、セからすを放つたところ、からすは地の上から水がかききるまで、あちらこちらへ飛びまわつた。ハノアはまた地のおもてから、水がひいたかどうかを見ようと、^{かれ}彼の所から、^{はな}はとを放つたが、九はと足^{あし}の裏をとどめる所が見つからなかつたので、箱舟のノアのもとに帰ってきた。水がまだ全地のおもてにあつたからである。彼は手を伸べて、これを捕え、箱舟の中の彼のもとに引き入れた。一〇それから七日待つて再びはとを箱舟から放つた。二とは夕方になつて^{かれ}彼のもとに帰ってきた。見ると、そのくち

ばしには、オリブの若葉があつた。ノアは地から水がひいたのを知つた。三さらに七日待つてまた、はとを放つたところ、もはや^{かれ}彼のもとには帰つてこなかつた。

三六 百一歳の一月一日になつて、地の上の水はかれた。ノアが箱舟のおおいを取り除いて見ると、土のおもては、かわいてゐた。二四 二月二十七日になつて、地は全くかわいた。二五 この時、神はノアに言われた、一六 「あなたは妻と、子らと、子らの妻たちと共に箱舟を出なさい。一七 あなたは、共にいる肉なるすべての生き物、すなわち鳥と家畜と、地のすべての這うものついで出て、これらのものが地に群がり、地の上にふえ広がるようにしなさい」。一八 ノアは共にいた子らと、妻と、子らの妻たちとを連れて出た。一九 またすべての獣、すべての這うもの、すべての鳥、すべて地の上に動くものは皆、種類にしたがつて箱舟を出た。

二〇 ノアは主に祭壇を築いて、すべての清い獣と、すべての清い鳥とのうちから取つて、燔祭を祭壇の上にささげた。二一 主はその香ばしいかおりをかいで、心に言われた、「わたしはもはや二度と人のゆえに地をのろわない。人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである。わたしは、このたびしたように、もう二度と、すべての生きたものを滅ぼさない。三 地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、暑さ寒さも、夏冬も、昼も夜もやむことはないであらう」。

第九章

一神はノアとその子らとを祝福して彼らに言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ。二地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのものの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、三すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える。四しかし肉を、その命である血のままで、食べてはならない。五あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。

六人の血を流すものは、人に血を流される、
神が自分のかたちに人を造られたゆえに。

七あなたがたは、生めよ、ふえよ、

地に群がり、地の上にふえよ」。

八神はノアおよび共にいる子らに言われた、九「わたしはあなたがた及びあなたがたの後の子孫と契約を立てる。一〇またあなたがたと共にいるすべての生き物、あなたがたと共にいる鳥、家畜、地のすべての獣、すなわち、すべて箱舟から出たものは、地のすべての獣にいたるまで、わたしはそれと契約を立てよう。二わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる

者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう」。三さらに神は言われた、「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。四すなわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。五こうして、わたしは、わたしとあなたがた、及びすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた契約を思いおこすゆえ、水はふたたび、すべて肉なる者を滅ぼす洪水とはならない。六にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」。七そして神はノアに言われた、「これがわたしと地にあるすべて肉なるものとの間に、わたしが立てた契約のしるしである」。

八箱舟から出たノアの子らはセム、ハム、ヤベテであった。ハムはカナン之父である。九この三人はノアの子らで、全地の民は彼らから出て、広がったのである。

一〇さてノアは農夫となり、ぶどう畑をつくり始めたが、二彼はぶどう酒を飲んて酔い、天幕の中で裸になつていた。三カサンの父ハムは父の裸を見て、外にいるふたりの兄弟に告げた。四セムとヤベテとは着物を取つて、肩にかけ、うしろ向きに歩み寄つて、父の裸をおおい、顔をそむけて父の裸を見なかった。二

四やがてノアは酔いがきめて、末の子が彼にした事を知ったとき、三五彼は言った、

「カナンはのろわれよ。」

彼はしもべのしもべとなつて、その兄弟たちに仕える」。

三六また言った、

「セムの神、主はほむべきかな、

カナンはそのしもべとなれ。

モ神はヤペテを大いならしめ、

セムの天幕に彼を住まわせられるように。

カナンはそのしもべとなれ」。

三八ノアは洪水の後、なお三百五十年生きた。三九ノアの年は合わせて九百五十歳であつた。そして彼は死んだ。

第一〇章

一ノアの子セム、ハム、ヤペテの系図は次のとおりである。洪水の後、彼らに子が生れた。ニヤペテの子孫はゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メセク、テラスであつた。ミゴメルの子孫はアシケナズ、リパテ、トガルマ。四ヤワンの子孫はエリシヤ、タルシシ、キツテム、ドダニムであつた。五これから海沿いの地の国民が分れて、おのおのその土地におり、その言語にし

たがい、その氏族にしたがつて、その国々に住んだ。

六ハムの子孫はクシ、ミツライム、プテ、カナンであつた。セクシの子孫はセバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカであり、ラアマの子孫はシバとデダンであつた。ハクシの子はニムロデであつて、このニムロデは世の権力者となつた最初の人である。

七彼は主の前に力ある狩獵者であつた。これから「主の前に力ある狩獵者ニムロデのごとし」ということわざが起つた。一〇彼の国は最初シナルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネであつた。二彼はその地からアッスリヤに出て、二ネベ、レホボテイリ、カラ、三および二ネベとカラとの間にある大いなる町レセンを建てた。三ミツライムからルデ族、アナミ族、レハビ族、ナフト族、四パテロス族、カスル族、カフトリ族が出た。カフトリ族からペリシテ族が出た。

五カナンからその長子シドンが出て、またヘテが出た。一六その他エブスびと、アモリびと、ギルガシびと、セヒビびと、アルキびと、セニびと、一ハアルワデびと、ゼマリびと、ハマテびとが出た。後になつてカナンびとの氏族がひろがつた。一九カナンびとの境はシドンからゲラルを経てガザに至り、ソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムを経て、レシヤに及んだ。二〇これらはハムの子孫であつて、その氏族とその言語とにしたがつて、その土地と、その国々にいた。

三セムにも子が生れた。セムはエベルのすべての子孫の先祖

第二章

であつて、ヤベテの兄であつた。ミセムの子孫はエラム、アシウル、アルパクサデ、ルデ、アラムであつた。ミアラムの子孫はウヅ、ホル、ゲテル、マシであつた。ミアルパクサデの子はシラ、シラの子はエベルである。ミエベルにふたりの子が生れた。そのひとりの名をペレグといつた。これは彼の代に地の民が分れたからである。その弟の名をヨクタンといつた。ミヨクタンにアルモダデ、シャレフ、ハザルマウテ、エラ、ミハドラム、ウザル、デクラ、ニハオバル、アビマエル、シバ、ニ九オフル、ハビラ、ヨバブが生れた。これらは皆ヨクタンの子であつた。ミ○彼らが住んだ所はメシヤから東の山地セパルに及んだ。ミこれらはセムの子孫であつて、その氏族とその言語とにしたがつて、その土地と、その国々にいた。

ミこれらはノアの子らの氏族であつて、血統にしたがつて国々に住んでいたが、洪水の後、これらから地上の諸国民が分れたのである。

一全地は同じ発音、同じ言葉であつた。ミ時に人々は東に移り、シナルの地に平野を得て、そこに住んだ。ミ彼らは互に言つた、「さあ、れんがを造つて、よく焼こう」。こうして彼らは石の代りに、れんがを得、しつこいの代りに、アスファルトを得た。四彼

らはまた言つた、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。五時に主は下つて、人の子たちの建てる町と塔とを見て、六言われた、「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであらう。セさあ、われわれは下つて行つて、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」。八こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのをやめた。九これによつてその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らされた。

一〇セムの系図は次のとおりである。セムは百歳になつて洪水の二年の後にアルパクサデを生んだ。一セムはアルパクサデを生んで後、五百年生きて、男子と女子を生んだ。

二アルパクサデは三十五歳になつてシラを生んだ。三アルパクサデはシラを生んで後、四百三年生きて、男子と女子を生んだ。

四シラは三十歳になつてエベルを生んだ。五シラはエベルを生んで後、四百三年生きて、男子と女子を生んだ。

六エベルは三十四歳になつてペレグを生んだ。七エベルはペレグを生んで後、四百三十年生きて、男子と女子を生んだ。

八ペレグは三十歳になつてリウを生んだ。九ペレグはリウを

生んで後、二百九年生きて、男子と女子を生んだ。

ニ○リウは三十二歳になつてセルグを生んだ。ニ○リウはセルグを生んで後、二百七年生きて、男子と女子を生んだ。

ミセルグは三十歳になつてナホルを生んだ。ミセルグはナホルを生んで後、二百年生きて、男子と女子を生んだ。

ニ○ナホルは二十九歳になつてテラを生んだ。ニ○ナホルはテラを生んで後、百十九年生きて、男子と女子を生んだ。

ニ○テラは七十歳になつてアブラム、ナホルおよびハランを生んだ。

ニ○テラの系図は次のとおりである。テラはアブラム、ナホルおよびハランを生み、ハランはロトを生んだ。ニ○ハランは父テラにさきだつて、その生れた地、カルデヤのウルで死んだ。ニ○アブラムとナホルは妻をめとつた。アブラムの妻の名はサライといい、ナホルの妻の名はミルカといってハランの娘である。ハランはミルカの父、またイスカの父である。ニ○サライはうまずめで、子がなかった。

ミテラはその子アブラムと、ハランの子である孫ロトと、子アブラムの妻である嫁サライとを連れて、カナンの地へ行こうとカルデヤのウルを出たが、ハランに着いてそこに住んだ。ミテラの年は二百五歳であつた。テラはハランで死んだ。

第二章

一時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。ニわたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであらう。

ニあなたを祝福する者をわたしは祝福し、

あなたをのろう者をわたしはのろう。

地のすべてのやからは、

あなたによつて祝福される」。

四アブラムは主が言われたようにいで立つた。ロトも彼と共に行った。アブラムはハランを出たとき七十五歳であつた。五アブラムは妻サライと、弟の子ロトと、集めたすべての財産と、ハランで獲た人々とを携えてカナンに行こうとしていで立ち、カナンの地にきた。六アブラムはその地を通つてシケムの所モレのテレピンの木のもとに着いた。そのころカナンびとがその地にいた。七時に主はアブラムに現れて言われた、「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」。アブラムは彼に現れた主のため、そこに祭壇を築いた。八彼はそこからベテルの東の山に移つて天幕を張つた。西にはベテル、東にはアイがあつた。そこに彼は主のために祭壇を築いて、主の名を呼んだ。九アブラムはなお進んでネゲブに移つた。

「さして、その地にききんがあつたのでアブラムはエジプトに寄留しようと、そこに下つた。ききんがその地に激しかったからである。二エジプトにはいろいろとして、そこに近づいたとき、彼は妻サライに言った、「わたしはあなたが美しい女であることを知っています。三それでエジプトびとがあなたを見る時、これは彼の妻であると言つてわたしを殺し、あなたを生かしておくでしょう。三どうかあなたは、わたしの妹だと言つてください。そうすればわたしはあなたのおかげで無事であり、わたしの命はあなたによって助かるでしょう」。四アブラムがエジプトにはいつた時エジプトびとはこの女を見て、たいそう美しい人であるとし、五またパロの高官たちも彼女を見てパロの前でほめたので、女はパロの家に召し入れられた。六パロは彼女のゆえにアブラムを厚くもてなしたので、アブラムは多くの羊、牛、雌雄のろば、男女の奴隷および、らくだを得た。

七ところで主はアブラムの妻サライのゆえに、激しい疫病をパロとその家に下された。八パロはアブラムを召し寄せて言った、「あなたはわたしになんという事をしたのでですか。なぜ彼女が妻であるのをわたしに告げなかったのですか。九あなたはなぜ、彼女はわたしの妹ですと言つたのですか。わたしは彼女を妻にしようとしていました。さあ、あなたの妻はここにいます。連れて行つてください」。一〇パロは彼の事について人々に命じ、彼とその妻およびそのすべての持ち物を送り去ら

せた。

第三章

一アブラムは妻とすべての持ち物を携え、エジプトを出て、ネゲブに上つた。ロトも彼と共に上つた。

ニアブラムは家畜と金銀に非常に富んでいた。三彼はネゲブから旅路を進めてベテルに向かい、ベテルとアイの間の、さきには天幕を張つた所に行つた。四すなわち彼が初めに築いた祭壇の所に行き、その所でアブラムは主の名を呼んだ。五アブラムと共に、行つたロトも羊、牛および天幕を持つていた。六その地は彼らをささえて共に住ませることができなかった。七アブラムの家畜が多かつたため、共に住めなかつたのである。八アブラムの家畜の牧者たちとロトの家畜の牧者たちの間に争いがあつた。そのころカナンびととペリジびとがその地に住んでいた。

九アブラムはロトに言った、「わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間にも、わたしの牧者たちとあなたの牧者たちの間にも争いがないようにしましょう。九全地はあなたの前にあるではありませんか。どうかわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。あなたが右に行けばわたしは左に行きましょう」。一〇ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前で

あつたから、ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた。ニそこでロトはヨルダンの低地をことごとく選びとつて東に移った。こうして彼らは互に別れた。ニアブラムはカナンの地に住んだが、ロトは低地の町々に住み、天幕をソドムに移した。ニソドムの人々はわるく、主に対して、はなはだしい罪びとであつた。

ニロトがアブラムに別れた後に、主はアブラムに言われた、「目をあげてあなたのいる所から北、南、東、西を見わたしなさい。ニ五すべてあなたが見たす地は、永久にあなたとあなたの子孫に与えます。ニ六わたしはあなたの子孫を地のちりのように多くします。もし人が地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えられることができましょう。ニ七あなたは立つて、その地をたてよこに行き巡りなさい。わたしはそれをあなたに与えます。ニ八アブラムは天幕を移してヘブロンにあるマムレのテレビンの木のかたわらに住み、その所で主に祭壇を築いた。

第四章

ニシナルの王アムラベル、エラサル、王アリオク、エラムの王ケダラオメルおよびゴイムの王テダルの世に、ニこれらの王はソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アデマの王シナブ、ゼボイ

ムの王セメベル、およびベラすなわちゾアルの王と戦った。ニこれら五人の王はみな同盟してシデムの谷、すなわち塩の海に向かつて行つた。四すなわち彼らは十二年の間ケダラオメルに仕えたが、十三年目にそむいたので、五十四年目にケダラオメルは彼と連合した王たちと共にきて、アシタロテ・カルナイムでレハイムびとを、ハムでズジびとを、シャベ・キラアタイムでエミびとを撃ち、ハセイルの山地でホリびとを撃つて、荒野のほとりにあるエル・パランに及んだ。七彼らは引き返してエン・ミシパテすなわちカデシへ行つて、アマレクびとの国をことごとく撃ち、またハザゾン・タマルに住むアモリびとをも撃つた。ハそこでソドムの王、ゴモラの王、アデマの王、ゼボイムの王およびベラすなわちゾアルの王は出てシデムの谷で彼らに向かい、戦いの陣をしいた。九すなわちエラムの王ケダラオメル、ゴイムの王テダル、シナルの王アムラベル、エラサル、王アリオクの四人の王に対する五人の王であつた。一〇シデムの谷にはアスファルトの穴が多かつたので、ソドムの王とゴモラの王は逃げてそこに落ちたが、残りの者は山にのがれた。ニそこで彼らはソドムとゴモラの財産と食料とをことごとく奪つて去り、ニまたソドムに住んでいたアブラムの弟の子ロトとその財産を奪つて去つた。

ニ三時に、ひとりの人がのがれてきて、ヘブルびとアブラムに告げた。この時アブラムはエシコルの兄弟、またアネルの兄弟で

あるアモリびととマムレのテレビンの木のカタワに住んでいた。彼らはアブラムと同盟していた。一四アブラムは身内の者が捕虜になったのを聞き、訓練した家の子三百十八人を引き連れてダンまで追って行き、一五そのしもべたちを分けて、夜かれらを攻め、これを撃つてダマスコの北、ホバまで彼らを追った。一六そして彼はすべての財産を取り返し、また身内の者口とその財産および女たちと民とを取り返した。

一七アブラムがケダラオメルとその連合の王たちを撃ち破って帰った時、ソドムの王はシャベの谷、すなわち王の谷に出て彼を迎えた。一八その時、サレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒とを持ってきた。彼はいと高き神の祭司である。一九彼はアブラムを祝福して言った、

「願わくは天地の主なるいと高き神が、アブラムを祝福されるように。」

二〇願わくはあなたの敵をあなたの手に渡されたいと高き神があめられるように。」

アブラムは彼にすべての物の十分の一を贈った。三時にソドムの王はアブラムに言った、「わたしには人をください。財産はあなたが取りなさい」。三アブラムはソドムの王に言った、「天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。三わたしは糸一本でも、くつひも一本でも、あなたのものは何にも受けません。アブラムを富ませたのはわたしだと、あなた

が言わないように。二四ただし若者たちがすでに食べた物は別です。そしてわたしと共に行った人々アネルとエシコルとマムレとはその分を取らせなさい」。

第一章

一これらの事のの後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んだ、
「アブラムよ恐れてはならない、

わたしはあなたの盾である。

あなたの受ける報いは、

はなはだ大きいであろう」。

二アブラムは言った、「主なる神よ、わたしには子がなく、わたしの家を継ぐ者はダマスコのエリエゼルであるのに、あなたはわたしに何をくださろうとするのですか」。三アブラムはまた言った、「あなたはわたしに子を賜わないので、わたしの家に生れたしもべが、あとつぎとなるでしょう」。四この時、主の言葉が彼に臨んだ、「この者はあなたのあとつぎとなるべきではありません。あなたの身から出る者があとつぎとなるべきです」。五そして主は彼を外に連れ出して言われた、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみなさい」。また彼に言われた、「あなたの子孫はあのようにになるでしょう」。六アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。

七 また主は彼に言われた、「わたしはこの地をあなたに与えて、これを継がせようと、あなたをカルデヤのウルから導き出した主です」。八 彼は言った、「主なる神よ、わたしがこれを継ぐのをどうして知ることができますか」。九 主は彼に言われた、「三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山ばとと、家ばとのひなとをわたしの所に連れてきなさい」。一〇 彼はこれらをみな連れてきて、二つに裂き、裂いたものを互に向かい合わせて置いた。ただし、鳥は裂かなかった。 一 荒い鳥が死体の上に降りるとき、アブラムはこれを追い払った。

二 三日の入るころ、アブラムが深い眠りにおそわれた時、大きな恐ろしい暗やみが彼に臨んだ。三 時に主はアブラムに言われた、「あなたはよく心にとめておきなさい。あなたの子孫は他の国に旅びとなつて、その人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう。四 しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう。五 あなたは安らかに先祖のもとに行きます。そして高齢に達して葬られるでしょう。六 四代目になつて彼らはここに帰つて来るでしょう。アモリびとの悪がまだ満ちないからです」。

七 やがて日は入り、暗やみになった時、煙の立つかまど、炎の出るたいまつが、裂いたものの間を通り過ぎた。八 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた、

「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。

エジプトの川から、かの大川ユフラテまで。

九 すなわちケニびと、ケニジびと、カドモニびと、ニ〇 ヘテびと、ペリジびと、レパイムびと、ニアモリびと、カナンびと、ギルガシびと、エブスびとの地を与える」。

第十六章

一 アブラムの妻サライは子を産まなかった。彼女にひとりのつかえめがあつた。エジプトの女で名をハガルといった。ニ サライはアブラムに言った、「主はわたしに子をお授けになりません。どうぞ、わたしのつかえめの所におはいりください。彼女によつてわたしは子をもつことになるでしょう」。アブラムはサライの言葉を聞き入れた。ミ アブラムの妻サライはそのつかえめエジプトの女ハガルをとつて、夫アブラムに妻として与えた。これはアブラムがカナンの地に十年住んだ後であつた。四 彼はハガルの所にはいり、ハガルは子をはらんだ。彼女は自分のほらんだのを見て、女主人を見下げるようになった。五 そこでサライはアブラムに言った、「わたしは受けた害はあなたの責任です。わたしのつかえめをあなたの方とところに与えたのに、彼女は自分のはらんだのを見て、わたしを見下さげます。どうか、主があなたとわたしの間をおさばきになるように」。六 ア

ブラムはサライに言った、「あなたのつかえめはあなたの手のうちにある。あなたの好きなように彼女にしないさい」。そしてサライが彼女を苦しめたので、彼女はサライの顔を避けて逃げた。七主の使は荒野にある泉のほとり、すなわちシユルの道にある泉のほとりで、彼女に会い、ハそして言った、「サライのつかえめハガルよ、あなたはどこからきたのですか、まだどこへ行くのですか」。彼女は言った、「わたしは女主人サライの顔を避けて逃げているのです」。九主の使は彼女に言った、「あなたは女主人のもとに帰って、その手に身を任せなさい」。一〇主の使はまた彼女に言った、「わたしは大いにあなたの子孫を増して、数えきれないほどに多くしましょう」。一二主の使はまた彼女に言った、「あなたは、みごもっています。あなたは男の子を産むでしょう。名をイシマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれました。三彼は野ろぼのような人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手は彼に逆らい、彼はすべての兄弟に敵して住むでしょう」。三そこで、ハガルは自分に語られた主の名を呼んで、「あなたはエル・ロイです」と言った。彼女が「ここでも、わたしを見ていられるかたのうしろを拝めたのか」と言ったことによる。一四それでその井戸は「ベエル・ラハイ・ロイ」と呼ばれた。これはカデシとベレデの間にある。一五ハガルはアブラムに男の子を産んだ。アブラムはハガルが産んだ子の名をイシマエルと名づけた。一六ハガルがイシマエ

ルをアブラムに産んだ時、アブラムは八十六歳であつた。

第七七章

一アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、「わたしは全能の神である。

あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。

二わたしはあなたと契約を結び、

大いにあなたの子孫を増すであらう」。

ミアブラムは、ひれ伏した。神はまた彼に言われた、

四「わたしはあなたと契約を結び、

あなたは多くの国民の父となるであらう。

五あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、

あなたの名はアブラハムと呼ばれるであらう。

わたしはあなたを多くの国民の

父とするからである。

六わたしはあなたに多くの子孫を得させ、国々の民をあなたから起そう。また、王たちもあなたから出るであらう。七わたしはあなた及び後の代々の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであらう。八わたしはあなたと後の子孫とにあなたの宿っているこの地、すなわちカナンの全地を永久の所有として与える。そしてわたしは彼らの神となる

であろう」。

九神はまたアブラハムに言われた、「あなたと後の子孫とは共に代々わたしの契約を守らなければならない。あなたがたのうち一〇男子はみな割礼をうけなければならない。これはわたしとあなたがた及び後の子孫との間のわたしの契約であつて、あなたがたの守るべきものである。二あなたがたは前の皮に割礼を受けなければならない。それがわたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなるであろう。三あなたがたのうちの男子はみな代々、家に生れた者も、また異邦人から銀で買い取つた、あなたの子孫でない者も、生れて八日目に割礼を受けなければならない。四あなたがたの家に生れた者も、あなたが銀で買い取つた者も必ず割礼を受けなければならない。こうしてわたしの契約はあなたがたの身にあつて永遠の契約となるであろう。五割礼を受けない男子、すなわち前の皮を切らない者はわたしの契約を破るゆゑ、その人は民のうちから断たれるであろう」。

一五神はまたアブラハムに言われた、「あなたの妻サライは、もはや名をサライといわず、名をサラと言いなさい。一六わたしは彼女を祝福し、また彼女によつて、あなたがたにひとりの男の子を授けよう。わたしは彼女を祝福し、彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」。一七アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言つた、「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなつて、どうして産

むことができようか」。一八そしてアブラハムは神に言つた、「どうかイシマエルがあなたの前に生きながらえますように」。一九神は言われた、「いや、あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしょう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう。二〇またイシマエルについてはあなたの願ひを聞いた。わたしは彼を祝福して多くの子孫を得させ、大いにそれを増すであろう。彼は十二人の君たちを生むであろう。わたしは彼を大いなる国民としよう。三しかしわたしは来年の今ごろサラがあなたに産むイサクと、わたしの契約を立てるであろう」。

二三神はアブラハムと語り終え、彼を離れて、のぼられた。二四アブラハムは神が自分に言われたように、この日その子イシマエルと、すべて家に生れた者およびすべて銀で買い取つた者、すなわちアブラハムの家の人々のうち、すべての男子を連れてきて、前の皮に割礼を施した。二五アブラハムが前の皮に割礼を受けた時は九十九歳、二六その子イシマエルが前の皮に割礼を受けた時は十三歳であつた。二七この日アブラハムとその子イシマエルは割礼を受けた。二八またその家の人々は家に生れた者も、銀で異邦人から買い取つた者も皆、彼と共に割礼を受けた。

第一八章

「主はマムレのテレビンの木のかたわらでアブラハムに現れた。それは昼の暑いところで、彼は天幕の入口にすわっていたが、二目を上げて見ると、三人の人が彼に向かつて立っていた。彼はこれを見て、天幕の入口から走って行って彼らを迎え、地に身をかがめて、三言った、「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら、どうぞしもべを通り過ぎさないでください。四水をすこし取ってこさせますから、あなたがたは足を洗って、この木の下でお休みください。五わたしは一口のパンを取ってきます。元氣をつけて、それからお出かけください。せっかくしもべの所においでになったのですから」。彼らは言った、「お言葉どおりにしてください」。六そこでアブラハムは急いで天幕に入り、サラの所に行つて言つた、「急いで細かい麦粉三セヤをとり、こねてパンを造りなさい」。七アブラハムは牛の群れに走つて行き、柔らかな良い子牛を取つて若者に渡したので、急いで調理した。ハそしてアブラハムは凝乳と牛乳および子牛の調理したものを取つて、彼らの前に供え、木の下で彼らのかたわらに立って給仕し、彼らは食事した。

九彼らはアブラハムに言つた、「あなたの妻サラはどこにおられますか」。彼は言つた、「天幕の中です」。一〇そのひとりが言つた、「来年の春、わたしはかならずあなたの所に帰つてきましょう。

う。その時、あなたの妻サラには男の子が生まれているでしょう」。サラはうしろの方の天幕の入口で聞いていた。二さてアブラハムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは女の月ものが、すでに止まつていた。三それでサラは心の中で笑つて言つた、「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか」。四主はアブラハムに言われた、「なぜサラは、わたしは老人であるのに、どうして子を産むことができようかと言つて笑つたのか。五主にとって不可能なことがありましようか。来年の春、定めの際に、わたしはあなたの所に帰ってきます。そのときサラには男の子が生まれているでしょう」。六サラは恐れしたので、これを打ち消して言つた、「わたしは笑いません」。主は言われた、「いや、あなたは笑いました」。七その人々はそこを立つてソドムの方に向かつたので、アブラハムは彼らを見送つて共に行つた。八時に主は言われた、「わたしのしよととする事をアブラハムに隠してよいであろうか。九アブラハムは必ず大きな強い国民となつて、地のすべての民がみな、彼によつて祝福を受けるのではないか。一〇わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知つたのである。これは主がかつてアブラハムについて言つた事を彼の上に臨ませるためである」。一一主はまた言われた、「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重いので、二わたしはいま下つて、わたしに届いた叫

びのとおりに、すべて彼らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」。

三 その人々はそこから身を巡らしてソドムの方に行つたが、アブラハムはなお、主の前に立つていた。三 アブラハムは近寄つて言つた、「まことにあなたは正しい者を、悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。二四 たとい、あの町に五十人の正しい者があつても、あなたはなお、その所を滅ぼし、その中にいる五十人の正しい者のためにこれをゆるされないのですか。二五 正しい者と悪い者とと一緒に殺すようなことを、あなたは決してなさらないでしよう。正しい者と悪い者と同じようにすることも、あなたは決してなさらないでしよう。全地をさばく者は公義を行ふべきではありませんか」。二六 主は言われた、「もしソドムで町の中に五十人の正しい者があつたら、その人々のためにその所をすべてゆるそう」。二七 アブラハムは答えて言つた、「わたしはちり灰に過ぎませんが、あえてわが主に申します。二八 もし五十人の正しい者のうち五人欠けたなら、その五人欠けたために町を全く滅ぼされますか」。主は言われた、「もしそこに四十五人いたら、滅ぼさないのであらう」。二九 アブラハムはまた重ねて主に言つた、「もしそこに四十人いたら」。主は言われた、「その四十人のために、これをしてないであらう」。三〇 アブラハムは言つた、「わが主よ、どうかお怒りにならぬよう。わたしは申します。もしそこに三十人いたら」。主は言われた、「そこに三十人いた

ら、これをしてないであらう」。三一 アブラハムは言つた、「いまわたしはあえてわが主に申します。もしそこに二十人いたら」。主は言われた、「わたしはその二十人のために滅ぼさないのであらう」。三二 アブラハムは言つた、「わが主よ、どうかお怒りにならぬよう。わたしはいま一度申します、もしそこに十人いたら」。主は言われた、「わたしはその十人のために滅ぼさないのであらう」。三三 主はアブラハムと語り終り、去つて行かれた。アブラハムは自分の所に歸つた。

第十九章

一 そのふたりのみ使は夕暮にソドムに着いた。そのときロトはソドムの門にすわつていた。ロトは彼らを見て、立つて迎え、地に伏して、二言つた、「わが主よ、どうぞしもべの家に立寄つて足を洗い、お泊まりください。そして朝早く起きてお立ちください」。彼らは言つた、「いや、われわれは広場で夜を過します」。三 しかしロトがしいて勧めたので、彼らはついに彼の所に寄り、家にはいった。ロトは彼らのためにふるまいを設け、種入れぬパンを焼いて食べさせた。四 ところが彼らの寝ないうちに、ソドムの町の人々は、若い者も老人も、民がみな四方からきて、その家を囲み、五 ロトに叫んで言つた、「今夜おまえの所にきた人々はどこにいるか。それをここに出さない。われわれは彼らを

知るであろう」。ハロトは入口におる彼らの所に出て行き、うしろの戸を閉じて、セ言つた、「兄弟たちよ、どうか悪い事はしないでください。ハわたしにまだ男を知らない娘がふたりあります。わたしはこれをあなたがたに、さし出しますから、好きなようにしてください。ただ、わたしの屋根の下にはいったこの人たちには、何もしないでください」。九彼らは言つた、「退け」。また言つた、「この男は渡つてきたよそ者であるのに、いつも、さばきびとになろうとする。それで、われわれは彼らに加えるよりも、おまえに多くの害を加えよう」。彼らはロトの身に激しく迫り、進み寄つて戸を破ろうとした。二〇その時、かのふたりは手を伸べてロトを家の内に引き入れ、戸を閉じた。二一そして家の入口におる人々を、老若の別なく打つて目をくらましたので、彼らは入口を捜すのに疲れた。

二三ふたりはロトに言つた、「ほかにあなたの身内の者がここにおりますか。あなたのむこ、むすこ、娘およびこの町におるあなたの身内の者を、皆ここから連れ出さない。二三われわれがこの所を滅ぼそうとしているからです。人々の叫びが主の前に大きくなり、主はこの所を滅ぼすために、われわれをつかわされたのです」。二四そこでロトは出て行つて、その娘たちをめぐむむこたちに告げて言つた、「立つてこの所から出さない。主がこの町を滅ぼされます」。しかしそれはむこたちには戯れごとにおもに思えた。

二五夜が明けて、み使たちはロトを促して言つた「立つて、ここにゐるあなたの妻とふたりの娘とを連れ出さない。そうしなければ、あなたもこの町の不義のために滅ぼされるでしょう」。二六彼はためらつていたが、主は彼にあわれみを施されたので、かのふたりは彼の手と、その妻の手と、ふたりの娘の手を取つて連れ出し、町の外に置いた。二七彼らを外に連れ出した時そのひとりと言つた、「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえつて見てはならない。低地にはどこにも立ち止まつてはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」。ハロトは彼らに言つた、「わが主よ、どうか、そうさせないでください。一九しもべはすでにあなたの前に恵みを得ました。あなたはわたしの命を救つて、大いなるいつくしみを施されました。しかしわたしは山まではのがれる事ができません。災が身に追い迫つてわたしは死ぬでしょう。二〇あの町をごらんください。逃げていくのに近く、また小さい町です。どうかわたしをそこにのがれさせてください。それは小さいではありませんか。そうすればわたしの命は助かるでしょう」。二一み使は彼に言つた、「わたしはこの事でもあなたの願いをいれて、あなたの言うその町は滅ぼしません。二三急いでそこへのがれなさい。あなたがそこに着くまでは、わたしは何事もする事ができません」。これによつて、その町の名はゾアルと呼ばれた。二三ロトがゾアルに着いた時、日は地の上のぼつた。

二四 主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせて、二五 これらの町と、すべての低地と、その町々のすべての住民と、その地にはえている物を、ことごとく滅ぼされた。二六 しかしロトの妻はうしろを顧みたので塩の柱になった。二七 アブラハムは朝早く起き、さきに主の前に立った所に行つて、二八 ソドムとゴモラの方、および低地の全面をながめると、その地の煙が、かまどの煙のように立ちのぼっていた。二九 こうして神が低地の町々をこぼたれた時、すなわちロトの住んでいた町々を滅ぼされた時、神はアブラハムを覚えて、その滅びの中からロトを救い出された。

三〇 ロトはゾアルを出て上り、ふたりの娘と共に山に住んだ。ゾアルに住むのを恐れたからである。彼はふたりの娘と共に、ほら穴の中に住んだ。三一 時に姉が妹に言った、「わたしたちの父は老い、またこの地には世のならわしのようになり、わたしたちの所に来る男はいません。三二 さあ、父に酒を飲ませ、共に寝て、父によつて子を残しましょう」。三三 彼女たちはその夜、父に酒を飲ませ、姉がはいつて父と共に寝た。ロトは娘が寝たのも、起きたのも知らなかった。三四 あくる日、姉は妹に言った、「わたしは昨夜、父と寝ました。わたしたちは今夜もまた父に酒を飲ませましょう。そしてあなたがはいつて共に寝なさい。わたしたちは父によつて子を残しましょう」。三五 彼らはその夜もまた父に酒を飲ませ、妹が行つて父と共に寝た。ロトは娘の寝たのも、

起きたのも知らなかった。三六 こうしてロトのふたりの娘たちは父によつてはらんだ。三七 姉娘は子を産み、その名をモアブと名づけた。これは今のモアブびとの先祖である。三八 妹もまた子を産んで、その名をベニアンミと名づけた。これは今のアンモンびとの先祖である。

第二〇章

一 アブラハムはそこからネゲブの地に移つて、カデシとシユルの間に住んだ。彼がゲラルにとどまっていた時、ニアブラハムは妻サラのことを、「これはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、人をつかわしてサラを召し入れた。二ところが神は夜の夢にアビメレクに臨んで言われた、「あなたは召し入れたあの女のゆえに死なねばならない。彼女は夫のある身である」。四 アビメレクはまだ彼女に近づいていなかったのと言つた、「主よ、あなたは正しい民でも殺されるのですか。五 彼はわたしに、これはわたしの妹ですと言つたではありませんか。また彼女も自分で、彼はわたしの兄ですと言いました。わたしは心も清く、手もいさぎよく、このことをしました」。六 神はまた夢で彼に言われた、「そうです、あなたが清い心をもつてこのことをしたのを知っていたから、わたしもあなたを守つて、わたしに対して罪を犯させず、彼女にふれることを許さなかったの

す。七いま彼の妻を返しなさい。彼は預言者ですから、あなたのために祈って、命を保たせるでしょう。もし返さないなら、あなたも身内の者もみな必ず死ぬと知らなければなりません」。ハそこでアビメレクは朝早く起き、しもべたちをことごとく召し集めて、これらの事をみな語り聞かせたので、人々は非常に恐れた。九そしてアビメレクはアブラハムを召して言った、「あなたはわれわれに何をするのですか。あなたに対してわたしが大きな罪を犯したために、あなたはわたしとわたしの国とに、大きな罪を負わせるのですか。あなたはしてはならぬことをわたしにしたのです」。一〇アビメレクはまたアブラハムに言った、「あなたはなにも思つて、この事をしたのですか」。ニアブラハムは言った、「この所には神を恐れるということが、まったくないので、わたしの妻のゆえに人々がわたしを殺すと思つたからです。二また彼女はほんとうにわたしの妹なのです。わたしの父の娘ですが、母の娘ではありません。そして、わたしの妻になつたのです。三神がわたしに父の家を離れて、行き巡らせた時、わたしは彼女に、あなたはわたしたちの行くさきざきでわたしを兄であると言つてください。これはあなたがわたしに施す恵みであると言いました」。四そこでアビメレクは羊、牛および男女の奴隷を取つてアブラハムに与え、その妻サラを彼に返した。一五そしてアビメレクは言った、「わたしの地はあなたの前にあります。あなたの好きな所に住みなさい」。一六またサラ

に言った、「わたしはあなたの兄に銀千シケルを与えました。これはあなたの身に起つたすべての事について、あなたに償いをするものです。こうしてすべての人にあなたは正しいと認められます」。一七そこでアブラハムは神に祈つた。神はアビメレクとその妻および、はしためたちをいやされたので、彼らは子を産むようになつた。一八これは主がさきにアブラハムの妻サラのゆえに、アビメレクの家のすべての者の胎を、かたく閉ざされたからである。

第二章

一主は、さきに言われたようにサラを顧み、告げられたようにサラに行われた。ニサラはみごもり、神がアブラハムに告げられた時になつて、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。三アブラハムは生れた子、サラが産んだ男の子の名をイサクと名づけた。四アブラハムは神が命じられたように八日目にその子イサクに割礼を施した。五アブラハムはその子イサクが生れた時百歳であつた。六そしてサラは言った、「神はわたしを笑わせてくださった。聞く者は皆わたしのことで笑うでしょう」。七また言つた、「サラが子に乳を飲ませるだろうと、だれがアブラハムに言い得たであろう。それなのに、わたしは彼が年とつてから、子を産んだ」。

ハさて、おきなごは育つて乳離れした。イサクが乳離れした日にアブラハムは盛んなふるまいを設けた。九サラはエジプトの女ハガルのアブラハムに産んだ子が、自分の子イサクと遊ぶのを見て、〇アブラハムに言った、「このはしためとその子を追いつだしてください。このはしための子はわたしの子イサクと共に、世継となるべき者ではありません。二この事で、アブラハムはその子のために非常に心配した。三神はアブラハムに言われた、「あのわらべのため、またあなたのはしためのために心配することはない。サラがあなたに言うことはすべて聞きいれなさい。イサクに生れる者が、あなたの子孫と唱えられるからです。四しかし、はしための子もあなたの子ですから、これをも、一つの国民とします」。四そこでアブラハムは明くる朝はやく起きて、パンと水の皮袋とを取り、ハガルに与えて、肩に負わせ、その子連れて去らせた。ハガルは去つてベエルシバの荒野にさまよつた。

五やがて皮袋の水が尽きたので、彼女はその子を木の下におき、二六「わたしはこの子の死ぬのを見るに忍びない」と言つて、矢の届くほど離れて行き、子供の方に向いてすわつた。彼女が子供の方に向いてすわつたとき、子供は声をあげて泣いた。二七神はわらべの声を聞かれ、神の使は天からハガルを呼んで言つた、「ハガルよ、どうしたのか。恐れてはいけない。神はあそこにいるわらべの声を聞かれた。二八立つて行き、わらべを取り上

げてあなたの手に抱きなさい。わたしは彼を大いなる国民とするであろう。二九神がハガルの目を開かれたので、彼女は水の井戸のあるのを見た。彼女は行つて皮袋に水を満たし、わらべに飲ませた。三〇神はわらべと共にいまし、わらべは成長した。彼は荒野に住んで弓を射る者となつた。三彼はパランの荒野に住んだ。母は彼のためにエジプトの国から妻を迎えた。

三そのころアビメレクとその軍勢の長ピコルはアブラハムに言つた、「あなたが何事をなさつても、神はあなたと共におられる。三三それゆえ、今ここでわたしをも、わたしの子をも、孫をも欺かないと、神をさしてわたしに誓つてください。わたしがあなたに親切にしたように、あなたもわたしと、このあなたの寄留の地とに、しなければなりません。三四アブラハムは言つた、「わたしは誓います」。

三五アブラハムはアビメレクの家来たちが、水の井戸を奪い取つたことについてアビメレクを責めた。二六しかしアビメレクは言つた、「だれがこの事をしたかわたしは知りません。あなたもわたしに告げたことはなく、わたしもきょうまで聞きませんでした。二七そこでアブラハムは羊と牛とを取つてアビメレクに与え、ふたりは契約を結んだ。二八アブラハムが雌の小羊七頭を分けて置いたところ、二九アビメレクはアブラハムに言つた、「あなたがこれらの雌の小羊七頭を分けて置いたのは、なんのためですか。三〇アブラハムは言つた、「あなたはわたしの手からこ

これらの雌めすの小羊こひつじ七頭しちとうを受け取うつて、わたしがこの井戸いどを掘ほつたことの証しやうとしてください。三これによつてその所ところをベエルシバと名なづけた。彼らかれがふたりそこで暫ちかいをしたからである。三このように彼らかれはベエルシバで契約けいやくを結び、アビメレクとその軍勢ぐんぜいの長ちやうピコルは立たつてペリシテの地ちに帰かえつた。三アブラハムはベエルシバに一本ほんのぎよりゆうの木きを植うえ、その所ところで永遠えいゑんの神しん主しゅの名なを呼よんだ。三四こうしてアブラハムは長い間あいだペリシテびとの地ちにとどまつた。

第二章

一これらの事ことの後のち、神かみはアブラハムを試こころみて彼かれに言いわれた、「アブラハムよ」。彼は言いつた、「ここにおります」。二神かみは言いわれた、「あなたの子こ、あなたの愛あいするひとり子こイサクを連つれてモリヤの地ちに行いき、わたしが示しめす山やまで彼かれを燔祭はんさいとしてささげなさい。三アブラハムは朝あさはやく起おきて、ろばにくらを置おき、ふたりの若者わかものと、その子こイサクとを連れれ、また燔祭はんさいのたきぎを割わり、立たつて神かみが示しめされた所ところに出でかけた。四三日目かめに、アブラハムは目めをあげて、はるかにその場所ばしよを見みた。五そこでアブラハムは若者わかものたちに言いつた、「あなたがたは、ろばと一いっしよ緒しよにここにいなさい。わたしとわらべは向むかこうへ行いつて礼拝れいはいし、そののち、あなたがたの所ところに歸かえつてきます」。六アブラハムは燔祭はんさいのたきぎを取とつて、その子

イサクに負おわせ、手てに火ひと刃物はものとを執とつて、ふたり一いっしよ緒しよに行いつた。七やがてイサクは父ちちアブラハムに言いつた、「父ちちよ」。彼は答こたえた、「子こよ、わたしはここにいます」。イサクは言いつた、「火ひとたきぎとはありますが、燔祭はんさいの小羊こひつじはどこにありますか」。八アブラハムは言いつた、「子こよ、神かみみずから燔祭はんさいの小羊こひつじを備そなえてくださるであろう」。こうしてふたりは一いっしよ緒しよに行いつた。

九彼らかれが神かみの示しめされた場所ばしよにきたとき、アブラハムはそこに祭壇さいだんを築きずき、たきぎを並ならべ、その子こイサクを縛しばつて祭壇さいだんのたきぎの上に載のせた。一〇そしてアブラハムが手てを差さし伸のべ、刃物はものを執とつてその子こイサクを殺ころそうとした時とき、二主しゅの使つかいが天てんから彼かれを呼よんで言いつた、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答こたえた、「はい、ここにおります」。三み使つかいが言いつた、「わらべを手てにかけてはならない。また何も彼かれにしてはならない。あなたの子こ、あなたのひとり子こをさえ、わたしのために惜おしまないの、あなたが神かみを恐おそれる者ものであることをわたしは今いま知しつた」。三この時ときアブラハムが目めをあげて見みると、うしろに、角つのをやぶに掛かけている一頭とうの雄羊おひつじがいた。アブラハムは行いつてその雄羊おひつじを捕とえ、それをその子このかわりに燔祭はんさいとしてささげた。四それでアブラハムはその所ところの名なをアドナイ・エレと呼よんだ。これにより、人々ひとびとは今日こんにちもなお「主しゅの山やまに備そなえあり」と言いう。

五主しゅの使つかいは再び天てんからアブラハムを呼よんで、一六言いつた、「主しゅは言いわれた、『わたしは自分じぶんをさして誓ちかう。あなたがこの事ことをし、

あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかつたので、一七わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、一八また地のもろもろの国民はあなたの子孫によつて祝福を得るであらう。あなたがわたしの言葉に従つたからである』。一九アブラハムは若者たちの所に帰り、みな立つて、共にベエルシバへ行つた。そしてアブラハムはベエルシバに住んだ。

二〇これらの事の後、ある人がアブラハムに告げて言つた、「ミルカもまたあなたの兄弟ナホルに子どもを産みました。二一長男はウヅ、弟はブズ、次はアラムの父ケムエル、三、次はケセデ、ハヅ、ピルダシ、エデラフ、ベトエルです」。二二ベトエルの子はリベカであつて、これら八人はミルカがアブラハムの兄弟ナホルに産んだのである。二三ナホルのそばめで、名をルマという女もまたテバ、ガハム、タハシおよびマア力を産んだ。

第二章

一サラの一生は百二十七年であつた。これがサラの生きながらえた年である。ニサラはカナン地のキリアテ・アルバすなわちヘブロンで死んだ。アブラハムは中にはいつてサラのために悲しみ泣いた。ミアブラハムは死人のそばから立つて、ヘテの人々

に言つた、四「わたしはあなたがたのうちの旅の者で寄留者ですが、わたしの死人を出して葬るため、あなたがたのうちにわたしの所有として一つの墓地をください」。五ヘテの人々はアブラハムに答えて言つた、六「わが主よ、お聞きなさい。あなたはわれわれのうちにあられて、神のような主君です。われわれの墓地の最も良い所にあなたの死人を葬りなさい。その墓地を拒んで、あなたにその死人を葬らせない者はわれわれのうちに、ひとりもないでしょう」。七アブラハムは立ちあがり、その地の民ヘテの人々に礼をして、八彼らに言つた、「もしわたしの死人を葬るのに同意されるなら、わたしの願いをいれて、わたしのためにゾハルの子エフロンの頼み、九彼が持つてゐる畑の端のマクペラのほら穴をじゅうぶんな代価でわたしに与え、あなたがたのうちに墓地を持たせてください」。一〇時にエフロンはヘテの人々のうちにすわつてゐた。そこでヘテびとエフロンはヘテの人々、すなわちすべてその町の門にはいる人々の聞いているところ、アブラハムに答えて言つた、一一「いいえ、わが主よ、お聞きなさい。わたしはあの畑をあなたにさしあげます。またその中にあるほら穴もさしあげます。わたしの民の人々の前で、それをさしあげます。あなたの死人を葬りなさい」。二ニアブラハムはその地の民の前で礼をし、三その地の民の聞いているところでエフロンの言つた、「あなたがそれを承諾されるなら、お聞きなさい。わたしはその畑の代価を払います。お受け取りく

ださい。わたしの死人をそこに葬りましょう」。一四 エフロンはアブラハムに答えて言った、「五」「わが主よ、お聞きなさい。あの地は銀四百シケルですが、これはわたしとあなたの間で、なにほどのことでしょうか。あなたの死人を葬りなさい」。一六 そこでアブラハムはエフロンの言葉にしたがい、エフロンがヘテの人々の聞いているところで言った銀、すなわち商人の通用銀四百シケルを量ってエフロンに与えた。

一七 こうしてマムレの前のマクペラにあるエフロンの畑は、畑も、その中のほら穴も、畑の中およびその周囲の境にあるすべての木も皆、一八 ヘテの人々の前、すなわちその町の門にはいるすべての人々の前で、アブラハムの所有と決まった。一九 その後、アブラハムはその妻サラをカナン地の地にあるマムレ、すなわちヘブロン前のマクペラの畑のほら穴に葬った。二〇 このように畑とその中にあるほら穴とはヘテの人々によってアブラハムの所有の墓地と定められた。

第二章

一 アブラハムは年が進んで老人となった。主はすべての事にアブラハムを恵まれた。ニ さてアブラハムは所有のすべてを管理させていた家の年長のしもべに言った、「あなたの手をわたしのももの下に入れなさい。三 わたしはあなたに天地の神、主をさ

して誓わせる。あなたはわたしが今一緒に住んでいるカナンびとのうちから、娘をわたしの子に妻にめとってはならない。四 あなたはわたしの国へ行き、親族の所へ行つて、わたしの子イサクのために妻をめとらなければならない。五 しもべは彼に言った、「もしその女がわたしについてこの地に来ることを好まないときは、わたしはあなたの子をあなたの出身地に連れ帰るべきでしようか」。六 アブラハムは彼に言った、「わたしの子は決して向こうへ連れ帰つてはならない。七 天の神、主はわたしを父の家、親族の地から導き出してわたしに語り、わたしに誓つて、おまえの子孫にこの地を与えろと言われた。主は、み使をあなたの前につかわされるであらう。あなたはあそこからわたしの子に妻をめとらねばならない。八 けれどもその女があなたについて来ることを好まないなら、あなたはこの誓いを解かれる。ただわたしの子を向こうへ連れ帰つてはならない。九 それでもべは手を主人アブラハムのももの下に入れ、この事について彼に誓った。

一〇 しもべは主人のらくだのうちから十頭のらくだを取つて出かけた。すなわち主人のさまぎまの良い物を携え、立つてアラム・ナハライムにむかい、ナホルの町へ行つた。二 彼はらくだを町の外の、水の井戸のそばに伏させた。時は夕暮で、女たちが水をくみに出る時刻であつた。三 彼は言った、「主人アブラハムの神、主よ、どうか、きよう、わたしにしあわせを授け、主人

アブラハムに恵みを施してください。一三わたしは泉のそばに立っています。町の人々の娘たちが水をくみに出てきたとき、一四娘に向かって『お願いです、あなたの水がめを傾けてわたしに飲ませてください』と言い、娘が答えて、『お飲みください。あなたのらくだにも飲ませましょう』と言ったなら、その者こそ、あなたがしもベイサクのために定められた者ということにしてください。わたしはこれによって、あなたがわたしの主人に恵みを施されることを知りましょう」。

一五彼がまだ言い終らないうちに、アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘リベカが、水がめを肩に載せて出てきた。一六その娘は非常に美しく、男を知らぬ処女であった。彼女が泉に降りて、水がめを満たし、上がってきた時、一七しもべは走り寄って、彼女に会って言った、「お願いです。あなたの水がめの水を少し飲ませてください」。一八すると彼女は「わが主よ、お飲みください」と言って、急いで水がめを自分の手に取りおろして彼に飲ませた。一九飲ませ終って、彼女は言った、「あなたのらくだもみな飲み終るまで、わたしは水をくみましよう」。二〇彼女は急いでかめの水を水ぶねにあげ、再び水をくみに井戸に走って行って、すべてのらくだのために水をくんだ。二一その間その人は主が彼の旅の祝福されるか、どうかを知らうと、黙って彼女を見つめていた。

三三らくだが飲み終ったとき、その人は重さ半シケルの金の鼻輪

一つと、重さ十シケルの金の腕輪二つを取って、三三言った、「あなたはだれの娘か、わたしに話してください。あなたの父の家にわたしどもの泊まる場所がありましようか」。二四彼女は彼に言った、「わたしはナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘です」。二五また彼に言った、「わたしどもには、わらも、飼葉もたくさんあります。また泊まる場所もあります」。二六その人は頭を下げ、主を拜して、三〇言った、「主人アブラハムの神、主はほむべきかな。主はわたしの主人にいつくしみと、まこととを惜しまれなかつた。そして主は旅にあるわたしを主人の兄弟の家に導かれた」。

二八娘は走って行って、母の家のものにこれらの事を告げた。二九リベカにひとりの兄があつて、名をラバンといった。ラバンは泉のそばにいるその人の所へ走って行った。三〇彼は鼻輪と妹の手にある腕輪とを見、また妹リベカが「その人はわたしにこう言った」というのを聞いて、その人の所へ行ってみると、その人は泉のほとりで、らくだのそばに立っていた。三三そこでその人に言った、「主に祝福された人よ、おはいりください。なぜ外に立っておられますか。わたしは家を準備し、らくだのためにも場所を準備しておきました」。三三その人は家にはいった。ラバンはらくだの荷を解いて、わらと飼葉をらくだに与え、また水を与えてその人の足と、その従者たちの足を洗わせた。三三そして彼の前に食物を供えたが、彼は言った、「わたしは用向きを

話すまでは食べません」。ラバンは言った、「お話しください」。

三三そこで彼は言った、「わたしはアブラハムのしもべです。三三主はわたしの主人を大いに祝福して、大いなる者とされました。主はまた彼に羊、牛、銀、金、男女の奴隷、らくだ、ろばを与えられました。三六主人の妻サラは年老いてから、主人に男の子を産みました。主人はその所有を皆これに与えました。三七ところで主人はわたしに誓わせて言いました、『わたしの住んでいる地のカナンびとの娘を、わたしの子の妻にめとってはならない。三八おまえはわたしの父の家、親族の所へ行つて、わたしの子に妻をめとらなければならぬ』。三九わたしは主人に言いました、『もしその女がわたしについてこない時はどういたしましょうか』。四〇主人はわたしに言いました、『わたしの仕えてい

る主は、み使をおまえと一緒につかわして、おまえの旅にさいわいを与えられるであろう。おまえはわたしの親族、わたしの父の家からわたしの子に妻をめとらなければならぬ。四一そのとき、おまえはわたしにした誓いから解かれるであろう。またおまえがわたしの親族に行く時、彼らがおまえにその娘を与えないなら、おまえはわたしにした誓いから解かれるであろう』。

四二わたしはきよう、泉のところにきて言いました、『主人アブラハムの神、主よ、どうか今わたしのゆく道にさいわいを与えてください。四三わたしはこの泉のそばに立っています、水をくみに出てくる娘に向かつて、『お願いです。あなたの水がめの水

を少し飲ませてください』と言ひ、四四「お飲みください。あなたのらくだのためにも、くみましよう」とわたしに言うなら、その娘こそ、主がわたしの主人の子のために定められた女ということにしてください」。

四五わたしが心のうちでそう言い終らないうちに、リベカが水をめを肩に載せて出てきて、水をくみに泉に降りたので、わたしは『お願いです、飲ませてください』と言ひますと、四六彼女は急いで水がめを肩からおろし、『お飲みください。わたしはあなたのらくだにも飲ませましよう』と言ひました。それでわたしは飲みましたが、彼女はらくだにも飲ませました。四七わたしは彼女に尋ねて、『あなたはだれの娘ですか』と言ひますと、『ナホルとその妻ミルカの子ベトエルの娘です』と答えました。そこでわたしは彼女の鼻に鼻輪をつけ、手に腕輪をつけました。四八そしてわたしは頭をさげて主を拝し、主人アブラハムの神、主をほめたたえました。主は主人の兄弟の娘を子にめとらせようと、わたしを正しい道に導かれたからです。四九あなたがたが、もしわたしの主人にいつくしみと、まことを尽そうと思われるなら、そうとわたしにお話しください。そうでなければ、そうでないとお話しください。それによつてわたしは右か左に決めましよう』。

五〇ラバンとベトエルは答えて言った、『この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができ

ません。五リベカがここにおりますから連れて行って、主が言われたように、あなたの主人の妻にしてください。

五アブラハムのしもべは彼らの言葉を聞いて、地に伏し、主を拝した。五三そしてしもべは銀の飾りと、金の飾り、および衣服を取り出してリベカに与え、その兄と母にも価の高い品々を与えた。五四彼と従者たちは飲み食いして宿ったが、あくる朝彼らが起きた時、しもべは言った、「わたしを主人のもとに帰らせてください」。五リベカの兄と母とは言った、「娘は数日、少なくとも十日、わたしどもと共にいて、それから行かせましょう」。

五六しもべは彼らに言った、「主はわたしの道にさいわいを与えられましたから、わたしを引きとめずに、主人のもとに帰らせてください」。五七彼らは言った、「娘を呼んで聞いてみましょう」。五八彼らはリベカを呼んで言った、「あなたはこの人と一緒に行きますか」。彼女は言った、「行きます」。五九そこで彼らは妹リベカと、そのうばと、アブラハムのしもべと、その従者とを送り去らせた。六〇彼らはリベカを祝福して彼女に言った、

「妹よ、あなたは、ちよろずの人の母となれ」。

あなたの子孫はその敵の門を打ち取れ」。

六一リベカは立つて侍女たちと共にらくだに乗り、その人に従って行った。しもべはリベカを連れて立ち去った。

六二さてイサクはベエル・ラハイ・ロイからきて、ネゲブの地に住んでいた。六三イサクは夕暮、野に出て歩いていたが、目をあ

げて、らくだの来るのを見た。六四リベカは目をあげてイサクを見、らくだからおりて、六五しもべに言った、「わたしたちに向かって、野を歩いて来るあの人はだれでしょう」。しもべは言った、「あれはわたしの主人です」。するとリベカは、被衣で身をおおった。六六しもべは自分がしたことすべてをイサクに話した。六七イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとつて妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た。

第二十五章

一アブラハムは再び妻をめとつた。名をケトラという。ニ彼女はジムラン、ヨクシヤン、メダン、ミデアン、イシバクおよびシユワを産んだ。ミヨクシヤンの子はシバとデダン。デダンの子孫はアシユリびと、レトシびと、レウミびとである。四ミデアンの子孫はエパ、エベル、ヘノク、アビダ、エルダアであつて、これらは皆ケトラの子孫であつた。五アブラハムはその所有をことごとくイサクに与えた。六またそのそばめたちの子らにもアブラハムは物を与え、なお生きている間に彼らをその子イサクから離して、東の方、東の国に移らせた。

七アブラハムの生きながらえた年は百七十五年である。ハアブラハムは高齢に達し、老人となり、年が満ちて息絶え、死んでそ

の民に加えられた。九その子イサクとイシマエルは彼をヘテビとゾハルの子エフロンの畑にあるマクペラのほら穴に葬った。これはマムレの向かいにあり、一〇アブラハムがヘテの人々から、買い取った畑であつて、そこにアブラハムとその妻サラが葬られた。二アブラハムが死んだ後、神はその子イサクを祝福された。イサクはベエル・ラハイ・ロイのほとりに住んだ。

三サラのつかえめエジプトとハガルがアブラハムに産んだアブラハムの子イシマエルの系図は次のとおりである。一イシマエルの子らの名を世代にしたがつて、その名をいえば次のとおりである。すなわちイシマエルの長子はネバヨテ、次はケダル、アデビエル、ミブサム、一四ミシマ、ドマ、マツサ、一五ハダデ、テマ、エトル、ネフシ、ケデマ。一六これはイシマエルの子らであり、村と宿営とによる名であつて、その氏族による十二人の君たちである。一七イシマエルのよわいは百三十七年である。彼は息絶えて死に、その民に加えられた。一八イシマエルの子らはハビラからエジプトの東、シウルまでの間に住んで、アシウルに及んだ。イシマエルはすべての兄弟の東に住んだ。

一九アブラハムの子イサクの系図は次のとおりである。アブラハムの子はイサクであつて、二〇イサクは四十歳の時、パダンアラムのアラムびとベトエルの娘で、アラムびとラバンの妹リベカを妻にめとつた。二イサクは妻が子を産まなかつたので、妻のために主に祈り願つた。主はその願いを聞かれ、妻リベカは

みごもつた。三ところがその子らが胎内で押し合つたので、リベカは言つた、「こんなことでは、わたしはどうなるでしょう」。彼女は行つて主に尋ねた。三主は彼女に言われた、

「二つの国民があなたの胎内にあり、

二つの民があなたの腹から別れて出る。

一つの民は他の民よりも強く、

兄は弟に仕えるであらう」。

二四彼女の出産の日がきたとき、胎内にはふたごがあつた。二五さきに出たのは赤くて全身毛ごろもものようであつた。それで名をエサウと名づけた。二六その後、弟が出た。その手はエサウのかかとをつかんでいた。それで名をヤコブと名づけた。リベカが彼らを産んだ時、イサクは六十歳であつた。

二七さてその子らは成長し、エサウは巧みな狩猟者となり、野の人となつたが、ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた。二八イサクは、しかの肉が好きだつたので、エサウを愛したが、リベカはヤコブを愛した。

二九ある日ヤコブが、あつものを煮ていた時、エサウは飢え疲れて野から帰つてきた。三〇エサウはヤコブに言つた、「わたしは飢え疲れた。お願いだ。赤いもの、その赤いものをわたしに食べさせてくれ」。彼が名をエドムと呼ばれたのはこのためである。三イコブは言つた、「まずあなたの長子の特権をわたしに売りなさい」。三エサウは言つた、「わたしは死にそうだ。長子

の特権とつけんなどわたしに何なにになろう」。^三ヤコブはまた言った、「ま
ずわたしに誓ちかいなさい」。彼は誓ちかつて長子の特権とつけんをヤコブに
売うった。^四そこでヤコブはパンとレンズ豆のあつものとをエ
サウに与あたえたので、彼は飲のみ食くいして、立ち去さった。このように
してエサウは長子の特権とつけんを軽かろんじた。

第二十六章

一 アブラハムの時ときにあつた初めはじのききんのほか、またききんが
その国くににあつたので、イサクはゲラルにいるペリシテびとの王おう
アビメレクの所ところへ行いった。^二その時とき、主しゅは彼かれに現あらわれて言いわれた、
「エジプトへ下くだつてはならない。わたしがあなたに示しめす地ちにと
どまりなさい。^三あなたがこの地ちにとどまるなら、わたしはあな
たと共にいて、あなたを祝福しゅくふくし、これらの国くにをことごとくあな
たと、あなたの子孫しそんとに与あたえ、わたしがあなたの父アブラハムに
誓ちかつた誓ちかいを果はたそう。^四またわたしはあなたの子孫しそんを増まして天
の星ほしのようにし、あなたの子孫しそんにこれらの地ちをみな与あたえよう。
そして地のすべの国民こくみんはあなたの子孫しそんによつて祝福しゅくふくをえる
であろう。^五アブラハムがわたしの言葉ことばにしたがつてわたしの
さとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守まもつたからであ
る」。

六 こうしてイサクはゲラルに住すんだ。^七その所ところの人々ひとびとが彼の妻つま

のことを尋ねたとき、「彼女はわたしの妹いもうとです」と彼は言いった。
リベカは美うつくしかったので、その所ところの人々ひとびとがリベカのゆえに自分
を殺ころすかもしれないと思おもつて、「わたしの妻つまです」と言うのを恐おそ
れたからである。^二ハイサクは長ながらくそこにいたが、ある日ひペリシ
テびとの王アビメレクは窓まどから外そとをながめていて、イサクがそ
の妻リベカと戯たわむれているのを見みた。^三そこでアビメレクはイサ
クを召めして言いった、「彼女は確かにあなたの妻つまです。あなたはど
うして『彼女かのじよはわたしの妹いもうとです』と言いわれたのですか」。イサク
は彼かれに言いった、「わたしは彼女のゆえに殺ころされるかもしれないと
思おもつたからです」。^四アビメレクは言いった、「あなたはどうして
こんな事をわれわれにされたのですか。民たみのひとりが軽々かるがるしく
あなたの妻つまと寝ねるような事ことがあれば、その時あなたはわれわれ
に罪つみを負おわせるでしょう」。^五それでアビメレクはすべての民たみ
に命めいじて言いった、「この人ひと、またはその妻つまにさわる者は必ず死しな
なければならぬ」。

ニ イサクはその地ちに種たねをまいて、その年としに百倍ばいの収穫しゅうかくを得えた。
このように主しゅが彼かれを祝福しゅくふくされたので、^三彼は富かぜみ、またますま
す榮さかえて非常に裕福ゆうふくになり、^四羊ひつじの群むれ、牛うしの群むれ及び多くの
しもべを持つようになったので、ペリシテびとは彼かれをねたんだ。
^五またペリシテびとは彼の父アブラハムの時ときに、父のしもべた
ちが掘ほつたすべての井戸いどをふさぎ、土で埋うめた。^六アビメレク
はイサクに言いった、「あなたはわれわれよりも、はるかに強つよくな

られたから、われわれの所を去ってください」。

二七 イサクはそこを去り、ゲラルの谷に天幕を張ってその所に住んだ。二八 そしてイサクは父アブラハムの時に人々の掘った水の井戸を再び掘った。アブラハムの死後、ペリシテびとがふさいだからである。イサクは父がつけた名にしたがってそれらに名をつけた。二九 しかしイサクのしもべたちが谷の中を掘って、そこにわき出る水の井戸を見つけたとき、三〇 ゲラルの羊飼たちは、「この水はわれわれのものだ」と言って、イサクの羊飼たちと争ったので、イサクはその井戸の名をエセクと名づけた。彼らが彼と争ったからである。三一 彼らはまた一つの井戸を掘ったが、これをも争ったので、名をシテナと名づけた。三二 イサクはそこから移ってまた一つの井戸を掘ったが、彼らはこれを争わなかったで、その名をレホボテと名づけて言った、「いま主がわれわれの場所を広げられたから、われわれはこの地にふえるであろう」。

三三 彼はそこからベエルシバに上った。三四 その夜、主は彼に現れて言われた、「わたしはあなたの父アブラハムの神である。あなたは恐れてはならない。わたしはあなたと共にあって、あなたを祝福し、わたしのしもべアブラハムのゆえにあなたの子孫を増すであろう」。三五 それで彼はその所に祭壇を築いて、主の名を呼び、そこに天幕を張った。またイサクのしもべたちはここに一つの井戸を掘った。

三六 時にアビメレクがその友アホザテと、軍勢の長ピコルと共にゲラルからイサクのもとにきたので、二七 イサクは彼らに言った、「あなたがたはわたしを憎んで、あなたがたの中からわたしを追い出されたのに、どうしてわたしの所にこられたのですか」。三八 彼らは言った、「われわれは主があなたと共におられるのを、はつきり見ましたので、いまわれわれの間、すなわちわれわれとあなたとの間に一つの誓いを立てて、あなたと契約を結ぼうと思います。二九 われわれはあなたに害を加えたことはなく、ただ良い事だけをして、安らかに去らせたのですから、あなたにはわれわれに悪い事をしてはなりません。まことにあなたは主に祝福されたかたです」。三〇 そこでイサクは彼らのためにふるまいを設けた。彼らは飲み食いし、三一 あくる朝、はやく起きて互に誓った。こうしてイサクは彼らを去らせたので、彼らはイサクのもとから穏やかに去った。三二 その日、イサクのしもべたちがきて、自分たちが掘った井戸について彼に告げて言った、「わたしたちは水を見つけました」。三三 イサクはそれをシバと名づけた。これによってその町の名は今日にいたるまでベエルシバといわれている。

三四 エサウは四十歳の時、ヘテびとベエリの娘ユデテとヘテびとエロンの娘バスマテとを妻にめとった。三五 彼女たちはイサクとリベカにとって心の痛みとなった。

第二十七章

「イスサクは年老い、目がかすんで見えなくなつた時、長子エサウを呼んで言った、「子よ」。彼は答えて言った、「ここにおります」。ニイスサクは言った。「わたしは年老いて、いつ死ぬかも知れない。ミそれであなたの武器、弓矢をもつて野に出かけ、わたしのために、しかの肉をとつてきて、四わたしの好きなおいしい食べ物を作り、持つてきて食べさせよ。わたしは死ぬ前にあなたを祝福しよう」。

五イスサクがその子エサウに語るのをリベカは聞いていた。やがてエサウが、しかの肉を獲ようと野に出かけたとき、ハリベカはその子ヤコブに言った、「わたしは聞いていましたが、父は兄エサウに、セ『わたしのために、しかの肉をとつてきて、おいしい食べ物を作り、わたしに食べさせよ。わたしは死ぬ前に、主の前であなたを祝福しよう』と言いました。ハそれで、子よ、わたしの言葉にしたがい、わたしの言うとおりにしなさい。九群れの所へ行つて、そこからやぎの子の良いのを二頭わたしの所に取つてきなさい。わたしはそれで父のために、父の好きなおいしい食べ物を作りましょう。一〇あなたはそれを持つて行つて父に食べさせなさい。父は死ぬ前にあなたを祝福するでしょう」。一ヤコブは母リベカに言った、「兄エサウは毛深い人ですが、わたしはなめらかです。二おそらく父はわたしにさわつてみる

でしょう。そうすればわたしは父を欺く者と思われ、祝福を受けず、かえつてのろいを受けるでしょう」。三母は彼に言った、「子よ、あなたがうけるのろいはわたしが受けます。ただ、わたしの言葉に従い、行つて取つてきなさい」。四そこで彼は行つてやぎの子を取り、母の所に持つてきたので、母は父の好きなおいしい食べ物を作つた。五リベカは家にあつた長子エサウの晴着を取つて、弟ヤコブに着せ、「六また子やぎの皮を手と首のなめらかな所につけさせ、七彼女が作つたおいしい食べ物とパンとをその子ヤコブの手にわたした」。

八そこでヤコブは父の所へ行つて言った、「父よ」。すると父は言った、「わたしはここにいる。子よ、あなたはだれか」。九ヤコブは父に言った、「長子エサウです。あなたがわたしに言われたとおりにいたしました。どうぞ起きて、すわつてわたしのしかの肉を食べ、あなたみずからわたしを祝福してください」。一〇イスサクはその子に言った、「子よ、どうしてあなたはこんなに早く手に入れたのか」。彼は言った、「あなたの神、主がわたしにしあわせを授けられたからです」。ニイスサクはヤコブに言った、「子よ、近寄りなさい。わたしは、さわつてみて、あなたが確かにわが子エサウであるかどうかをみよう」。ミヤコブが、父イスサクに近寄つたので、イスサクは彼にさわつてみて言った、「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ」。ミヤコブの手が兄エサウの手のように毛深かつたため、イスサクはヤコブを見かけ

ることができなかったので、彼を祝福した。二四 イサクは言った、「あなたは確かにわが子エサウですか」。彼は言った、「そうです」。二五 イサクは言った、「わたしの所へ持つてきなさい。わが子のしかの肉を食べて、わたしみずから、あなたを祝福しよう」。ヤコブがそれを彼の所へ持つてきたので、彼は食べた。またぶどう酒を持つてきたので、彼は飲んだ。二六 そして父イサクは彼に言った、「子よ、さあ、近寄ってわたしに口づけしなさい」。二七 彼が近寄って口づけした時、イサクはその着物のかおりをかぎ、彼を祝福して言った、

「ああ、わが子のかおりは、
主が祝福された野のかおりのようだ。

二八 どうか神が、天の露と、

地の肥えたところと、多くの穀物と、

新しいぶどう酒とをあなたに賜わるように。

二九 もろもろの民はあなたに仕え、

もろもろの国はあなたに身をかがめる。

あなたは兄弟たちの主となり、

あなたの母の子らは、

あなたに身をかがめるであろう。

あなたをのろう者はのろわれ、

あなたを祝福する者は祝福される」。

三〇 イサクがヤコブを祝福し終って、ヤコブが父イサクの前か

ら出て行くとき、兄エサウが狩から帰ってきた。三一 彼もまたおいしい食べ物を作つて、父の所に持つてきて、言った、「父よ、起きてあなたの子のしかの肉を食べて、あなたみずから、わたしを祝福してください」。三二 父イサクは彼に言った、「あなたは、だれか」。彼は言った、「わたしはあなたの子、長子エサウです」。三三 イサクは激しくふるえて言った、「それでは、あのしかの肉を取つて、わたしに持つてきた者はだれか。わたしはあなたが来る前に、みんな食べて彼を祝福した。ゆえに彼が祝福を得るであろう」。三四 エサウは父の言葉を聞いた時、大声をあげ、激しく叫んで、父に言った、「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。三五 イサクは言った、「あなたの弟が偽つてやつてきて、あなたの祝福を奪つてしまった」。三六 エサウは言った、「よくもヤコブと名づけたものだ。彼は二度までもわたしをおしのけた。さきには、わたしの長子の特権を奪い、こんどはわたしの祝福を奪つた」。また言った、「あなたはわたしのために祝福を残しておかれませんでしたか」。三七 イサクは答えてエサウに言った、「わたしは彼をあなたの主人とし、兄弟たちを皆しもべとして彼に与え、また穀物とぶどう酒を彼に授けた。わが子よ、今となつては、あなたのために何ができようか」。三八 エサウは父に言った、「父よ、あなたの祝福はただ一つだけですか。父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」。エサウは声をあげて泣いた。

三九 父イサクは答えて彼に言った、

「あなたのすみかは地の肥えた所から離れ、
また上なる天の露から離れるであろう。」

四〇 あなたはつるぎをもって世を渡り、

あなたの弟に仕えるであろう。

しかし、あなたが勇み立つ時、

首から、そのくびきを振り落すであろう。」

四二 こうしてエサウは父がヤコブに与えた祝福のゆえにヤコブを憎んだ。エサウは心の内で言った、「父の喪の日も遠くはないであろう。その時、弟ヤコブを殺そう」。四三 しかしリベカは長子エサウのこの言葉を人づてに聞いたので、人をやり、弟ヤコブを呼んで言った、「兄エサウはあなたを殺そうと考えて、みづから慰めています。四四 子よ、今わたしの言葉に従って、すぐハラににいるわたしの兄ラバンのもとにのがれ、四五 あなたの兄の怒りが解けるまで、しばらく彼の所にいなさい。四六 兄の憤りが解けて、あなたのした事を兄が忘れるようになったならば、わたしは人をやって、あなたをそこから迎えましょう。どうして、わたしは一日のうちにあなたがたふたりを失ってよいでしょうか」。

四六 リベカはイサクに言った、「わたしはヘテびとの娘どものこととて、生きてゐるのがいやになりました。もしヤコブがこの地の、あの娘どものようなヘテびとの娘を妻にめとるなら、わたし

は生きていて、何になりましょう」。

第二十八章

一 イサクはヤコブを呼んで、これを祝福し、命じて言った、「あなたはカナンの娘を妻にめとってはならない。二 立つてパダンアラムへ行き、あなたの母の父ベトエルの家に行つて、そこであなたの母の兄ラバンの娘を妻にめとりなさい。三 全能の神が、あなたを祝福し、多くの子を得させ、かつふえさせて、多くの国民とし、四 またアブラハムの祝福をあなたと子孫とに与えて、神がアブラハムに授けられたあなたの寄留の地を継がせてくださるように」。五 こうしてイサクはヤコブを送り出した。ヤコブはパダンアラムに向かい、アラムびとベトエルの子で、ヤコブとエサウとの母リベカの兄ラバンのもとへ行つた。

六 さてエサウは、イサクがヤコブを祝福して、パダンアラムにつかわし、そこから妻をめとらせようとしたこと、彼を祝福し、命じて「あなたはカナンの娘を妻にめとってはならない」と言つたこと、七 そしてヤコブが父母の言葉に従つて、パダンアラムへ行つたことを知つたとき、八 彼はカナンの娘が父イサクの心になわなないのを見た。九 そこでエサウはイシマエルの所に行き、すでにある妻たちのほかにアブラハムの子イシマエルの娘で、ネバヨテの妹 マハラテを妻にめとつた。

「○さてヤコブはベエルシバを立つて、ハラシへ向かつたが、二一つの所に着いた時、日が暮れたので、そこに一夜を過ごし、その所の石を取ってまくらとし、そこに伏して寝た。三時に彼は夢をみた。一つのはしが地の上に立っていて、その頂は天に達し、神の使たちがそれを上り下りしているのを見た。四そして主は彼のそばに立つて言われた、「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう。五あなたの子孫は地のちりのように多くなつて、西、東、北、南にひろがり、地の諸族はあなたと子孫とによつて祝福をうけるであろう。六わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語つた事を行うであろう。七ヤコブは眠りからさめて言つた、「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかつた」。八そして彼は恐れて言つた、「これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」。

「八ヤコブは朝はやく起きて、まくらとしていた石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注いで、九その所の名をベテルと名づけた。その町の名は初めはルズといった。一〇ヤコブは誓いを立てて言つた、「神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物を賜い、二安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたし

ましよう。三またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましよう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」。

第二十九章

「ヤコブはその旅を續けて東の民の地へ行つた。二見ると野に一つの井戸があつて、そのかたわらに羊の三つの群れが伏していた。人々はその井戸から群れに水を飲ませるのであつたが、井戸の口には大きな石があつた。三群れが皆そこに集まると、人々は井戸の口から石をころがして羊に水を飲ませ、その石をまた井戸の口の元のところに返しておくのである。

四ヤコブは人々に言つた、「兄弟たちよ、あなたがたはどこからこられたのですか」。彼らは言つた、「わたしたちはハラシからです」。五ヤコブは彼らに言つた、「あなたがたはナホルの子ラバを知っていますか」。彼らは言つた、「知っています」。六ヤコブはまた彼らに言つた、「彼は無事ですか」。彼らは言つた、「無事です。御覧なさい。彼の娘ラケルはいま羊と一緒にここへきます」。七ヤコブは言つた、「日はまだ高いし、家畜を集める時でもない。あなたがたは羊に水を飲ませてから、また行つて飼いなさい」。八彼らは言つた、「わたしたちはそれはできないのです。群れがみな集まつた上で、井戸の口から石をころがし、そ

れから羊に水を飲ませるのです」。

九 ヤコブがなお彼らと語っている時に、ラケルは父の羊と一緒にきた。彼女は羊を飼っていたからである。一〇 ヤコブは母の兄ラバンの娘ラケルと母の兄ラバンの羊とを見た。そしてヤコブは進み寄って井戸の口から石をころがし、母の兄ラバンの羊に水を飲ませた。ニ ヤコブはラケルに口づけし、声をあげて泣いた。三 ヤコブはラケルに、自分がラケルの父のおいであり、リベカの子であることを告げたので、彼女は走って行って父に話した。

ニ ラバンは妹の子ヤコブがきたという知らせを聞くとすぐ、走って行ってヤコブを迎え、これを抱いて口づけし、家に連れてきた。そこでヤコブはすべての事をラバンに話した。四 ラバンは彼に言った、「あなたはほんとうにわたしの骨肉です」。ヤコブは一か月の間彼と共にいた。

五 時にラバンはヤコブに言った、「あなたはわたしのおいだからといって、ただでわたしのために働くこともないでしょう。どんな報酬を望みますか、わたしに言うてください」。六 さてラバンにはふたりの娘があった。姉の名はレアといい、妹の名はラケルといった。七 レアは目が弱かったが、ラケルは美しく愛らしかった。八 ヤコブはラケルを愛したので、「わたしは、あなたの妹、娘ラケルのために七年あなたに仕えましょう」と言った。九 ラバンは言った、「彼女を他人にやるよりもあなた

にやる方がよい。わたしと一緒にいなさい」。二〇 こうして、ヤコブは七年の間ラケルのために働いたが、彼女を愛したので、ただ数日のように思われた。

ニ ヤコブはラバンに言った、「期日が満ちたから、わたしの妻を与えて、妻の所にはいらしてください」。三 そこでラバンはその所の人々をみな集めて、ふるまいを設けた。四 夕暮となったとき、娘レアをヤコブのもとに連れてきたので、ヤコブは彼女の所にはいった。五 ラバンはまた自分のつかえめジルバを娘レアにつかえめとして与えた。六 朝になつて、見ると、それはレアであつたので、ヤコブはラバンに言った、「あなたはどうしてこんな事をわたしにされたのですか。わたしはラケルのために働いたのではありませんか。どうしてあなたはわたしを欺いたのですか」。七 ラバンは言った、「妹を姉より先にとつがせる事はわれわれの国ではしません。八 まずこの娘のために一週間を過ごさない。そうすればあの娘もあなたにあげよう。あなたは、そのため更に七年わたしに仕えなければならない」。九 ヤコブはそのとおりにして、その一週間が終つたので、ラバンは娘ラケルをも妻として彼に与えた。一〇 ラバンはまた自分のつかえめビルハを娘ラケルにつかえめとして与えた。二〇 ヤコブはまたラケルの所にはいった。彼はレアよりもラケルを愛して、更に七年ラバンに仕えた。

三 主はレアがきらわれるのを見て、その胎を開かれたが、ラケ

ルは、みごもらなかった。三レアは、みごもって子を産み、名をルベンと名づけて、言った、「主がわたしの悩みを顧みられたから、今は夫もわたしを愛するだろう」。三彼女はまだ、みごもって子を産み、「主はわたしが嫌われるのを聞きになつて、わたしにこの子をも賜わった」と言つて、名をシメオンと名づけた。四彼女はまた、みごもって子を産み、「わたしは彼に三人の子を産んだから、こんどこそは夫もわたしに親しむだろう」と言つて、名をレビと名づけた。五彼女はまた、みごもって子を産み、「わたしは今、主をほめたたえる」と言つて名をユダと名づけた。そこで彼女の、子を産むことはやんだ。

第三〇章

一ラケルは自分がヤコブに子を産まないのを知った時、姉をねたんでヤコブに言った、「わたしに子どもをください。さもないと、わたしは死にます」。ニヤコブはラケルに向かい怒つて言った、「あなたの胎に子どもをやどらせないのは神です。わたしが神に代ることができようか」。ミラケルは言った、「わたしのつかえめビルハがいます。彼女の所におはいりなさい。彼女が子を産んで、わたしのひぎに置きます。そうすれば、わたしもまた彼女によつて子を持つでしょう」。四ラケルはつかえめビルハを彼に与えて、妻とさせたので、ヤコブは彼女の所にはいった。五

ビルハは、みごもってヤコブに子を産んだ。六そこでラケルは、「神はわたしの訴えに答え、またわたしの声を聞いて、わたしに子を賜わった」と言つて、名をダンと名づけた。セラケルのつかえめビルハはまた、みごもって第二の子をヤコブに産んだ。ハそこでラケルは、「わたしは激しい争いで、姉と争つて勝った」と言つて、名をナフタリと名づけた。

九さてレアは自分が子を産むことのやんだのを見たとき、つかえめジルパを取り、妻としてヤコブに与えた。一〇レアのつかえめジルパはヤコブに子を産んだ。二そこでレアは、「幸運がきた」と言つて、名をガドと名づけた。ニレアのつかえめジルパは第二の子をヤコブに産んだ。三そこでレアは、「わたしは、しあわせです。娘たちはわたしをしあわせな者と言うでしょう」と言つて、名をアセルと名づけた。

四さてルベンは麦刈りの日に野に出て、野で恋なすびを見つけて、それを母レアのもとに持つてきた。ラケルはレアに言った、「あなたの子の恋なすびをどうぞわたしにください」。五レアはラケルに言った、「あなたがわたしの夫を取ったのは小さな事でしょう。その上、あなたはまたわたしの子の恋なすびをも取ろうとするのですか」。ラケルは言った、「それではあなたの子の恋なすびに換えて、今夜彼をあなたと共に寝させましょう」。六夕方になつて、ヤコブが野から帰つてきたので、レアは彼を出迎えて言った、「わたしの子の恋なすびをもつて、わたし

があなたを雇ったのですから、あなたはわたしの所に、はいらなければなりません」。ヤコブはその夜レアと共に寝た。一七神はレアの願いを聞かれたので、彼女はみごもって五番目の子をヤコブに産んだ。一八そこでレアは、「わたしがつかえめを夫に与えたから、神がわたしにその価を賜ったのです」と言つて、名をイツサカルと名づけた。一九レアはまた、みごもって六番目の子をヤコブに産んだ。二〇そこでレアは、「神はわたしに良い賜物をたまわった。わたしは六人の子を夫に産んだから、今こそ彼はわたしと一緒に住むでしょう」と言つて、その名をゼブルンと名づけた。二一その後、彼女はひとりの娘を産んで、名をデナと名づけた。二三次に神はラケルを心にとめられ、彼女の願いを聞き、その胎を開かれたので、二四彼女は、みごもって男の子を産み、「神はわたしの恥をすすいでくださった」と言つて、二五名をヨセフと名づけ、「主がわたしに、なおひとりの子を加えられるように」と言つた。

二五ラケルがヨセフを産んだ時、ヤコブはラバンに言つた、「わたしを去らせて、わたしの故郷、わたしの国へ行かせてください。二六あなたに仕えて得たわたしの妻子を、わたしに与えて行かせてください。わたしがあなたのために働いた骨折りは、あなたがごぞんじです」。二モラバンは彼に言つた、「もし、あなたの心にかうなら、とどまってください。わたしは主があなたのゆえに、わたしを恵まれるしるしを見ました」。二八また言つた、

「あなたの報酬を申し出てください。わたしはそれを払います」。二九ヤコブは彼に言つた、「わたしがどのようにあなたに仕えたか、またどのようにあなたの家畜を飼ったかは、あなたがごぞんじです。三〇わたしが来る前には、あなたの持つておられたものはわずかでしたが、ふえて多くなりました。主はわたしの行く所どこでも、あなたを恵まれました。しかし、いつになつたらわたしも自分の家を成すようになるでしょうか」。三一彼は言つた、「何をあなたにあげようか」。ヤコブは言つた、「なにもわたしにくださるに及びません。もしあなたが、わたしのためにこの一つの事をしてくださるなら、わたしは今一度あなたの群れを飼ひ、守りましょう。三二わたしはきょう、あなたの群れをみな回つてみて、その中からすべてぶちとまだらの羊、およびすべて黒い小羊と、やぎの中のまだらのものと、ぶちのものとを移しますが、これをわたしの報酬としましょう。三三あとで、あなたがきて、あなたの前でわたしの報酬をしらべる時、わたしの正しい事が証明されるでしょう。もしも、やぎの中にぶちのないもの、まだらでないものがあつたり、小羊の中に黒くないものがあれば、それはみなわたしが盗んだものとなるでしょう」。三四ラバンは言つた、「よろしい。あなたの言われるとおりにしましょう」。三五そこでラバンはその日、雄やぎのしまのあるもの、まだらのもの、すべて雌やぎのぶちのもの、まだらのもの、すべて白みをおびているもの、またすべて小羊の中の黒いもの

を移して子らの手にわたし、三六ヤコブとの間に三日路の隔たりを設けた。ヤコブはラバンの残りの群れを飼った。

ミモヤコブは、はこやなぎと、あめんどくと、すずかけの木の名の枝を取り、皮をはいでそれに白い筋をつくり、枝の白い所を表わし、三皮をはいだ枝を、群れがきて水を飲む鉢、すなわち水ぶねの中に、群れに向かわせて置いた。群れは水を飲みにきた時に、はらんだ。三九すなわち群れは枝の前で、はらんで、しまのあるもの、ぶちのものの、まだらのものを産んだ。四〇ヤコブはその小羊を別においた。彼はまた群れの顔をラバンの群れのしまのあるものと、すべて黒いものに向かわせた。そして自分の群れを別にまとめておいて、ラバンの群れには、入れなかった。四二また群れの強いものが発情した時には、ヤコブは水ぶねの中に、その群れの目の前に、かの枝を置いて、枝の間ではらませた。四三けれども群れの弱いものの時には、それを置かなかった。こうして弱いものはラバンのものとなり、強いものはヤコブのものとなったので、四四この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、およびらくだ、ろばを持つようになった。

第三章

一さてヤコブはラバンの子らが、「ヤコブはわれわれの父の物をことごとく奪い、父の物によってあのすべての富を獲たのだ」と

言っているのを聞いた。二またヤコブがラバンの顔を見るのに、それは自分に対して以前のようではなかった。三主はヤコブに言われた、「あなたの先祖の国へ帰り、親族のもとに行きなさい。わたしはあなたと共にいるであらう」。四そこでヤコブは人をやって、ラケルとレアとを、野に自分の群れのところに招き、五彼女らに言った、「わたしはあなたがたの父の顔を見るのに、わたしに対して以前のようではない。しかし、わたしの父の神はわたしと共におられる。六あなたがたが知っているように、わたしは力のかぎり、あなたがたの父に仕えてきた。七しかし、あなたがたの父はわたしを欺いて、十度もわたしの報酬を変えた。けれども神は彼がわたしに害を加えることをお許しにならなかった。ハもし彼が、『ぶちのものはあなたの報酬だ』と言え、群れは皆ぶちのものを産んだ。もし彼が、『しまのあるものはあなたの報酬だ』と言え、群れは皆しまのあるものを産んだ。九こうして神はあなたがたの父の家畜をとつてわたしに与えられた。一〇また群れが発情した時、わたしが夢に目をあげて見ると、群れの上に乗っている雄やぎは皆しまのあるもの、ぶちのもの、霜ふりのものであった。二その時、神の使が夢の中でわたしに言った、『ヤコブよ』。わたしは答えた、『ここにおります』。三神の使は言った、『目を上げて見てごらん。群れの上に乗っている雄やぎは皆しまのあるもの、ぶちのもの、霜ふりのものです。わたしはラバンがあなたにしたことをみな見ていま

す。「三わたしはベテルの神です。かつてあなたはあそこで柱に油を注いで、わたしに誓いを立てましたが、いま立つてこの地を出て、あなたの生れた国へ帰りなさい」。四ラケルとレアは答えて言った、「わたしたちの父の家に、なおわたしたちの受くべき分、また嗣業がありましようか。五わたしたちは父に他人のように思われてはいませんか。彼はわたしたちを売ったばかりでなく、わたしたちのその金をさえ使い果たしたのです。六神がわたしたちの父から取りあげられた富は、みなわたしたちとわたしたちの子どものものです。だから何事でも神があなたにお告げになった事をしてください」。

七そこでヤコブは立つて、子らと妻たちをらくだに乗せ、八またすべての家畜、すなわち彼がパダンアラムで獲た家畜と、すべての財産を携えて、カナンの地における父イサクのもとへ赴いた。九その時ラバンは羊の毛を切るために出ていたので、ラケルは父の所有のテラピムを盗み出した。一〇またヤコブはアラムびとラバンを欺き、自分の逃げ去るのを彼に告げなかった。二こうして彼はすべての持ち物を携えて逃げ、立つて川を渡り、ギレアデの山地へ向かった。

三三日目になって、ヤコブの逃げ去ったことが、ラバンに聞えたので、三彼は一族を率いて、七日の間そのあとを追ひ、ギレアデの山地で追いついた。四しかし、神は夜の夢にアラムびとラバンに現れて言われた、「あなたは心してヤコブに、よしあし

を言つてはなりません」。

五ラバンはついにヤコブに追いついたが、ヤコブが山に天幕を張っていたので、ラバンも一族と共にギレアデの山に天幕を張った。六ラバンはヤコブに言った、「あなたはなんという事をしたのですか。あなたはわたしを欺いてわたしの娘たちをいくさのとりこのように引いて行きました。七なぜあなたはわたしに告げずに、ひそかに逃げ去ってわたしを欺いたのですか。わたしは手鼓や琴で喜び歌ってあなたを送りだそうとしていたのに。八なぜわたしの孫や娘にわたしが口づけするのを許さなかったのですか。あなたは愚かな事をしました。九わたしはあなたがたに害を加える力をもっているが、あなたがたの父の神が昨夜わたしに告げて、『おまえは心して、ヤコブによしあしを言うな』と言われました。一〇今あなたが逃げ出したのは父の家が非常に恋しくなったからでしょうが、なぜあなたはわたしの神を盗んだのですか。一ニヤコブはラバンに答えた、「たぶんあなたが娘たちをわたしから奪い取るだろうと思つてわたしは恐れたからです。三だれの所にでもあなたの神が見つかったら、その者を生かしてはおきません。何かあなたの物がわたしのところにあるか、われわれの一族の前で、調べてみて、それをお取りください」。ラケルが神を盗んだことをヤコブは知らなかったからである。

四そこでラバンはヤコブの天幕にはいり、またレアの天幕には

いり、更にふたりのはしのための天幕にはいつてみたが、見つからなかつたので、レアの天幕を出てラケルの天幕にはいった。三四しかし、ラケルはすでにテラピムを取つて、らくだのくらの下に入れ、その上にすわっていたので、ラバンは、くまなく天幕の中を捜したが、見つからなかつた。三五その時ラケルは父に言った、「わたしは女の常のことがあつて、あなたの前に立ち上ることができません。わが主よ、どうかお怒りにならぬよう」。彼は捜したがテラピムは見つからなかつた。

三六そこでヤコブは怒つてラバンを責めた。そしてヤコブはラバンに言った、「わたしにどんなあやまちがあり、どんな罪があつて、あなたはわたしのあとを激しく追つたのですか。三七あなたはわたしの物をことごとく探られたが、何かあなたの家の物が見つかりましたか。それを、ここに、わたしの一族と、あなたの一族の前に置いて、われわれふたりの間をさばかせましょう。三八わたしはこの二十年、あなたと一緒にいました、その間あなたの雌羊も雌やぎも子を産みそこねたことはなく、またわたしはあなたの群れの雄羊を食べたこともありませんでした。三九また野獣が、かみ裂いたものは、あなたのもとに持つてこないで、自分でそれを償いました。また昼盗まれたものも、夜盗まれたものも、あなたはわたしにその償いを求められました。四〇わたしのことを言えば、昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできませんでした。四一わたしはこの二十年あなた

の家族のひとりでありました。わたしはあなたのふたりの娘のために十四年、またあなたの群れのために六年、あなたに仕えましたが、あなたは十度もわたしの報酬を変えられました。四二もし、わたしの父の神、アブラハムの神、イサクのかしこむ者がわたしと共におられなかつたなら、あなたはきつとわたしを、から手で去らせたいでしょう。神はわたしの悩みと、わたしの苦労とを顧みられて昨夜あなたを戒められたのです」。

四三ラバンは答えてヤコブに言った、「娘たちはわたしの娘、子どもたちはわたしの孫です。また群れはわたしの群れ、あなたが見るものはみなわたしのものです。これらのわたしの娘たちのため、また彼らが産んだ子どもたちのため、きょうわたしは何をするのができましようか。四四さあ、それではわたしとあなたと契約を結んで、これをわたしとあなたとの間の証拠としましょう」。四五そこでヤコブは石を取り、それを立てて柱とした。四六ヤコブはまた一族の者に言った、「石を集めてください」。彼らは石を取つて、一つの石塚を造つた。こうして彼らはその石塚のかたわらで食事をした。四七ラバンはこれをエガル・サハドタと名づけ、ヤコブはこれをガルエドと名づけた。四八そしてラバンは言った、「この石塚はきょうわたしとあなたとの間の証拠となります」。それでその名はガルエドと呼ばれた。四九またミズパとも呼ばれた。彼がこう言ったからである、「われわれが互に別れたのちも、どうか主がわたしとあなたとの間を見守

られるように。五〇もしあなたがわたしの娘を虐待したり、わたしの娘のほかに妻をめとることがあれば、たといそこにだれひとりいなくても、神はわたしとあなたとの間の証人でいらせられる」。

五二更にラバンはヤコブに言った、「あなたとわたしとの間にわたしが建てたこの石塚をこらんなさい、この柱をこらんなさい。五三この石塚を越えてわたしがあなたに害を加えず、またこの石塚とこの柱を越えてあなたがわたしに害を加えないように。どうかこの石塚があかしとなり、この柱があかしとなるように。五四どうかアブラハムの神、ナホルの神、彼らの父の神がわれわれの間をさばかれるように」。ヤコブは父イサクのかしこむ者によつて誓った。五四そしてヤコブは山で犠牲をささげ、一族を招いて、食事をした。彼らは食事をして山に宿った。五五あくる朝ラバンは早く起き、孫と娘たちに口づけして彼らを祝福し、去つて家に歸つた。

第三章

一さて、ヤコブが旅路に進んだとき、神の使たちが彼に会った。ニヤコブは彼らを見て、「これは神の陣営です」と言つて、その所の名をマハナイムと名づけた。

ミヤコブはセイルの地、エドムの野に住む兄エサウのもとに、さ

きだつて使者をつかわした。四すなわちそれに命じて言つた、「あなたがたはわたしの主人エサウにこう言いなさい、『あなたのしもべヤコブはこう言いました。わたしはラバンのもとに寄留して今までとどまりました。五わたしは牛、ろば、羊、男女の奴隷を持っています。それでわが主に申し上げて、あなたの前に恵みを得ようと人をつかわしたのです』」。

六使者はヤコブのもとに歸つて言つた、「わたしたちはあなたの兄エサウのもとへ行きました。彼もまたあなたを迎えようと四百人を率いてきます」。七そこでヤコブは大いに恐れ、苦しみ、共にいる民および羊、牛、らくだを二つの組に分けて、八言つた、「たとい、エサウがきて、一つの組を撃つても、残りの組はのされるであろう」。

九ヤコブはまた言つた、「父アブラハムの神、父イサクの神よ、かつてわたしに『おまえの国へ歸り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵もう』と言われた主よ、一〇あなたがしもべに施されたすべての恵みとまことをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、つえのほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました。二どうぞ、兄エサウの手からわたしをお救いください。わたしは彼がきて、わたしを撃ち、母や子供たちにまで及ぶのを恐れます。三あなたは、かつて、『わたしは必ずおまえを恵み、おまえの子孫を海の砂の数えがたいほど多くしよう』と言われました」。

三 彼はその夜そこに宿り、持ち物のうちから兄エサウへの贈り物を選んだ。一四すなわち雌やぎ二百、雄やぎ二十、雌羊二百、雄羊二十、一五乳らくだ三十とその子、雌牛四十、雄牛十、雌ろば二十、雄ろば十。一六彼はこれらをそれぞれの群れに分けて、しもべたちの手にわたし、しもべたちに言った、「あなたがたはわたしの先に進みなさい、そして群れと群れとの間には隔たりをおきなさい」。一七また先頭の者に命じて言った、「もし、兄エサウがあなたに会って『だれのしもべで、どこへ行くのか。あなたの前にあるこれらのものはだれの物か』と尋ねたら、一八『あなたのももベヤコブの物で、わが主エサウにおくる贈り物です。彼もわたしたちのうしろにおります』と言いなさい。一九彼は第二の者にも、第三の者にも、また群れ群れについて行くすべての者にも命じて言った、「あなたがたがエサウに会うときは、同じように彼に告げて、二〇『あなたのももベヤコブもわれわれのうしろにおります』と言いなさい」。ヤコブは、「わたしがさきに送る贈り物をもってまず彼をなだめ、それから、彼の顔を見よう。そうすれば、彼はわたしを迎えてくれるであろう」と思ったからである。二一こうして贈り物は彼に先立って渡り、彼はその夜、宿営にやどった。

二三 彼はその夜起きて、ふたりの妻とふたりのつかえめと十一人の子どもとを連れてヤボクの渡しをわたった。二四すなわち彼らを導いて川を渡らせ、また彼の持ち物を渡らせた。二五ヤコブ

はひとりあとに残ったが、ひとりの人が、夜明けまで彼と組打ちした。二五とこころでその人はヤコブに勝てないのを見て、ヤコブのもものつがいにさわったので、ヤコブのもものつがいが、その人と組打ちするあいだにはずれた。二六その人は言った、「夜が明けるからわたしを去らせてください」。ヤコブは答えた、「わたしを祝福してください。あなたを去らせません。二七その人は彼に言った、「あなたの名はなんと言いますか」。彼は答えた、「ヤコブです」。二八その人は言った、「あなたはもはや名をヤコブと言わず、イスラエルと言いなさい。あなたが神と人との、力を争って勝ったからです。二九ヤコブは尋ねて言った、「どうかわたしにあなたの名を知らせてください」。するとその人は、「なぜあなたはわたしの名をきくのですか」と言ったが、その所で彼を祝福した。三〇そこでヤコブはその所の名をベニエルと名づけて言った、「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」。三一こうして彼がベニエルを過ぎる時、日は彼の上ののぼったが、彼はそのものゆえにびっこを引いていた。三二そのため、イスラエルの子らは今日まで、ものつがいの上にある腰の筋を食べない。かの人がヤコブのもものつがい、すなわち腰の筋にさわったからである。

第三章

一 さてヤコブは目をあげ、エサウが四百人を率いて来るのを見た。そこで彼は子供たちを分けてレアとラケルとふたりのつかえめとにわたし、二つかえめとその子供たちをまつ先に置き、レアとその子供たちを次に置き、ラケルとヨセフを最後に置いて、ミみずから彼らの前に進み、七たび身を地にかがめて、兄に近づいた。

四 するとエサウは走ってきて迎え、彼を抱き、そのくびをかかえて口づけし、共に泣いた。五 エサウは目をあげて女と子供たちを見て言った、「あなたと一緒にいるこれらの者はだれですか」。ヤコブは言った、「神がしもべに授けられた子供たちです」。六 そこでつかえめたちはその子供たちと共に近寄ってお辞儀した。七 レアもまたその子供たちと共に近寄ってお辞儀し、それからヨセフとラケルが近寄ってお辞儀した。八 するとエサウは言った、「わたしが会ったあのすべての群れはどうしたのですか」。ヤコブは言った、「わが主の前に恵みを得るためです」。九 エサウは言った、「弟よ、わたしはじゆうぶんもっている。あなたの物はあなたのものにしないさい」。一〇 ヤコブは言った、「いいえ、もしわたしがあなたの前に恵みを得るなら、どうか、わたしの手から贈り物を受けてください。あなたが喜んでわたしを迎えてくださるので、あなたの顔を見て、神の顔を見るように思います」。

二 どうかわたしが持つてきた贈り物を受けてください。神がわたしを恵まれたので、わたしはじゆうぶんもっていますから」。こうして彼がしいたので、彼は受け取った。

三 そしてエサウは言った、「さあ、立つて行こう。わたしが先に行く」。四 ヤコブは彼に言った、「ごぞんじのように、子供たちは、かよわく、また乳を飲ませている羊や牛をわたしが世話をしています。もし一日でも歩かせ過ぎたら群れはみな死んでしまいます。一四 わが主よ、どうか、しもべの先においでください。わたしはわたしの前にいる家畜と子供たちの歩みに合わせて、ゆつくり歩いて行き、セイルでわが主と一緒にしましょう」。

五 エサウは言った、「それならわたしが連れてくる者どものうち幾人かをあなたのもとに残しましょう」。ヤコブは言った、「いいえ、それには及びません。わが主の前に恵みを得させてください」。六 その日エサウはセイルへの帰途についた。七 ヤコブは立つてスコテに行き、自分のために家を建て、また家畜のために小屋を造った。これによつてその所の名はスコテと呼ばれている。

八 こうしてヤコブはパダンアラムからきて、無事カナンの地のシケムの町に着き、町の前に宿営した。九 彼は天幕を張った野の一部をシケムの父ハモルの子らの手から百ヶシタで買い取り、一〇そこに祭壇を建てて、これをエル・エロハ・イスラエルと名づけた。

第三章

「レアがヤコブに産んだ娘デナはその地の女たちに会おうと出かけて行ったが、ニその地のつかさ、ヒビびとハモルの子シケムが彼女を見て、引き入れ、これと寝てはずかしめた。ニ彼は深くヤコブの娘デナを慕い、この娘を愛して、ねんごろに娘に語った。四シケムは父ハモルに言った、「この娘をわたしの妻にめとってください」。五さてヤコブはシケムが、娘デナを汚したことを聞いたけれども、その子らが家畜を連れて野にいたので、彼らの帰るまで黙っていた。六シケムの父ハモルはヤコブと話し合おうと、ヤコブの所に出てきた。セヤコブの子らは野から帰り、この事を聞いて、悲しみ、かつ非常に怒った。シケムがヤコブの娘と寝て、イスラエルに愚かなことをしたためで、こんなことは、してはならぬ事だからである。

ハハモルは彼らと語って言った、「わたしの子シケムはあなたがたの娘を心に慕っています。どうか彼女を彼の妻にください。九あなたがたはわたしたちと婚姻し、あなたがたの娘をわたしたちに与え、わたしたちの娘をあなたがたにめとってください。一〇こうしてあなたがたとわたしたちは一緒に住みましょう。地はあなたがたの前にあります。ここに住んで取引し、ここで財産を獲なさい」。ニシケムはまたデナの父と兄弟たちと言った、「あなたがたの前に恵みを得させてください。あなたが

たがわたしに言われるものは、なんでもさしあげましょう。ニたくさんさんの結納金と贈り物とをお求めになつても、あなたがたの言われるとおりさしあげます。ただこの娘はわたしの妻にください」。

ニしかし、ヤコブの子らはシケムが彼らの妹デナを汚したので、シケムとその父ハモルに偽って答えて、四彼らに言った、「われわれは割礼を受けない者に妹をやる事はできません。それはわれわれの恥とするところですから。五ただ、こうなさればわれわれはあなたがたに同意します。もしあなたがたのうち男子がみな割礼を受けて、われわれのようになるなら、六われわれの娘をあなたがたと与え、あなたがたの娘をわれわれにめとりましょう。そしてわれわれはあなたがたと一緒に住んで一つの民となりましょう。七けれども、もしあなたがたがわれわれに聞かず、割礼を受けないなら、われわれは娘を連れて行きます」。八彼らの言葉がハモルとハモルの子シケムとの心になつたので、九若者は、ためらわずにこの事をした。彼がヤコブの娘を愛したからである。また彼は父の家のうちで一番重んじられた者であつた。一〇そこでハモルとその子シケムとは町の門に行き、町の人々に語って言った、三「この人々はわれわれと親しいから、この地に住まわせて、ここで取引をさせよう。地は広く、彼らをいれるにじゅうぶんである。そしてわれわれは彼らの娘を妻にめとり、われわれの娘を彼らに与えよう。三彼らが

割礼かつれいを受けているように、もしわれわれのうちの男子だんしが皆みな、割礼かつれいを受けるなら、ただこの事ことだけで、この人々ひとびとはわれわれに同意どういし、われわれと一緒に住すんで一つの民たみとなるのだ。二三そうすれば彼らの家畜かちくと財産ざいさんとすべての獣けものとは、われわれのものとなるではないか。ただわれわれが彼らに同意どういすれば、彼らはわれわれと一緒に住すんであらう。二四そこで町の門もんに出入でいりする者はみなハモルとその子シケムとに聞き従したがって、町の門もんに出入でいりするすべての男子だんしは割礼かつれいを受けた。

三五三日目かめになって彼らが痛みを覚えていた時とき、ヤコブのふたりの子こ、すなわちデナの兄弟シメオンとレビとは、おのおのつるぎを取とって、不意ふいに町を襲おそい、男子だんしをことごとく殺ころし、二六またつるぎの刃はにかけてハモルとその子シケムとを殺ころし、シケムの家からデナを連れ出した。二七そしてヤコブの子らは殺ころされた人々ひとびとをはぎ、町をかすめた。彼らが妹を汚けがしたからである。二八すなわち羊ひつじ、牛うし、ろば及び町にあるものと、野にあるもの、二九並びにすべての貨財かさいを奪うばい、その子女こおんなと妻たちを皆とりこにし、家の中なかにある物をことごとくかすめた。三〇そこでヤコブはシメオンとレビに言った、「あなたがたはわたしをこの地の住民じゅうみん、カナンびととペリジびとに忌みきらわせず、わたしに迷惑めいわくをかけた。わたしは、人数が少くないから、彼らが集まってわたしを攻め撃せつならば、わたしも家族も滅ほろぼされるであらう」。三一彼らは言った、「わたしたちの妹を遊女ゆうじよのように彼が扱あつかってよ

いのですか」。

第三章

一ときに神はヤコブに言いわれた、「あなたは立つてベテルに上のぼり、そこに住んで、あなたがさきに兄エサウの顔を避さけてのがれる時とき、あなたに現れた神に祭壇さいだんをつくりなさい。ニヤコブは、その家族および共にいるすべての者に言いった、「あなたがたのうちにある異なる神々かみがみを捨て、身を清めて着物を替かえなさい。三われは立つてベテルに上のぼり、その所でわたしの苦難くなんの日ひにわたしにこたえ、かつわたしの行く道で共におられた神に祭壇を造つくらう。四そこで彼らは持つている異なる神々と、耳につけている耳輪みみわをことごとくヤコブに与えたので、ヤコブはこれをシケムのほりたにあるテレピンの木の下に埋うめた。

五そして彼らは、いで立つたが、大いなる恐れが周囲の町々に起たつたので、ヤコブの子らのあとを追おう者はなかった。六こうしてヤコブは共にいたすべての人々と一緒にカナンの地にあるルズ、すなわちベテルにきた。七彼はそこに祭壇を築きずき、その所をエル・ベテルと名づけた。彼が兄の顔を避さけてのがれる時とき、神がそこで彼に現れたからである。八時にリベカのうばデボラが死んで、ベテルのしもの、かしの木の下に葬ほうむられた。これによつてその木の名をアロン・バクテと呼ばれた。

九 さてヤコブがパダンアラムから帰つてきた時、神は再び彼に現れて彼を祝福された。一〇神は彼に言われた、「あなたの名はヤコブである。しかしあなたの名をモハヤコブと呼んではない。あなたの名をイスラエルとしなさい」。こうして彼をイスラエルと名づけられた。二 神はまた彼に言われた、

「わたしは全能の神である。」

あなたは生めよ、またふえよ。

一つの国民、また多くの国民があなたから出て、王たちがあなたの身から出るであらう。

三 わたしはアブラハムとイサクとに与えた地を、

あなたに与えよう。

またあなたの後の子孫にその地を与えよう」。

三 神は彼と語っておられたその場所から彼を離れてのぼられた。一四 そこでヤコブは神が自分と語られたその場所に、一本の石の柱を立て、その上に灌祭をささげ、また油を注いだ。一五 としてヤコブは神が自分と語られたその場所をベテルと名づけた。

一六 こうして彼らはベテルを立つたが、エフラタに行き着くまでに、なお隔たりのある所でラケルは産気づき、その産は重かつた。一七 その難産に当って、産婆は彼女に言った、「心配することはありません。今度も男の子です」。一八 彼女は死にのぞみ、魂の去ろうとする時、子の名をベノニと呼んだ。しかし、父はこれ

をベニヤミンと名づけた。一九 ラケルは死んでエフラタ、すなわちベツレヘムの道に葬られた。二〇 ヤコブはその墓に柱を立てた。これはラケルの墓の柱であつて、今日に至っている。二一 イスラエルはまた、いで立つてミグダル・エダルの向こうに天幕を張った。

三 イスラエルがその地に住んでいた時、ルベン之父のそばめビルハのところへ行つて、これと寝た。イスラエルはこれを聞いた。

さてヤコブの子らは十二人であつた。二三 すなわちレアの子らはヤコブの長子ルベンとシメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルン。二四 ラケルの子らはヨセフとベニヤミン。二五 ラケルのつかえめビルハの子らはダンとナフタリ。二六 レアのつかえめジルパの子らはガドとアセル。これらはヤコブの子らであつて、パダンアラムで彼に生れた者である。

二七 ヤコブはキリアテ・アルバ、すなわちヘブロンのマムレにいる父イサクのもとへ行つた。ここはアブラハムとイサクとが寄留した所である。二八 イサクの年は百八十歳であつた。二九 イサクは年老い、日満ちて息絶え、死んで、その民に加えられた。その子エサウとヤコブとは、これを葬った。

第三十六章

一 エサウ、すなわちエドムの系図は次のとおりである。ニ エサウはカナンの娘たちのうちから妻をめとつた。すなわちヘテびとエロンの娘アダと、ヒビびとヂベオンの子アナの娘アホリバマとである。三 また、イシマエルの娘ネバヨテの妹バスマテをめとつた。四 アダはエリパズをエサウに産み、バスマテはリウエルを産み、五 アホリバマはエウシ、ヤラム、コラを産んだ。これらはエサウの子であつて、カナンの地で彼に生れた者である。

六 エサウは妻と子と娘と家のすべての人、家畜とすべての獣、またカナンの地で獲たすべての財産を携え、兄弟ヤコブを離れてほかの地へ行つた。七 彼らの財産が多くて、一緒にいることができなかつたからである。すなわち彼らが寄留した地は彼らの家畜のゆえに、彼らをささえることができなかつたのである。八 こうしてエサウはセイルの山地に住んだ。エサウはすなわちエドムである。

九 セイルの山地におつたエドムびとの先祖エサウの系図は次のとおりである。一〇 エサウの子らの名は次のとおりである。すなわちエサウの妻アダの子はエリパズ。エサウの妻バスマテの子はリウエル。ニ エリパズの子らはテマン、オマル、ゼボ、ガタム、ケナズである。ニテムナはエサウの子エリパズのそばめで、アマレクをエリパズに産んだ。これらはエサウの妻アダの

子らである。三 リウエルの子らは次のとおりである。すなわちナハテ、ゼラ、シャンマ、ミザであつて、これらはエサウの妻バスマテの子らである。四 ゼベオンの子アナの娘で、エサウの妻アホリバマの子らは次のとおりである。すなわち彼女はエウシ、ヤラム、コラをエサウに産んだ。

五 エサウの子らの中で、族長たる者は次のとおりである。すなわちエサウの長子エリパズの子らはテマンの族長、オマルの族長、ゼボの族長、ケナズの族長、一六 コラの族長、ガタムの族長、アマレクの族長である。これらはエリパズから出た族長で、エドムの地におつた。これらはアダの子らである。一七 エサウの子リウエルの子らは次のとおりである。すなわちナハテの族長、ゼラの族長、シャンマの族長、ミザの族長。これらはリウエルから出た族長で、エドムの地におつた。これらはエサウの妻バスマテの子らである。一八 エサウの妻アホリバマの子らは次のとおりである。すなわちエウシの族長、ヤラムの族長、コラの族長。これらはアナの娘で、エサウの妻アホリバマから出た族長である。一九 これらはエサウすなわちエドムの子らで、族長たる者である。

二〇 この地の住民ホリびとセイルの子らは次のとおりである。すなわちロタン、シヨバル、ヂベオン、アナ、ニデシヨン、エゼル、デシャン。これらはセイルの子ホリびとから出た族長で、エドムの地におつた。二一 ロタンの子らはホリ、ヘマムであ

り、ロタンの妹はテムナであつた。三三シヨバルの子らは次のとおりである。すなわちアルワン、マナハテ、エバル、シポ、オナム。三四デバオンの子らは次のとおりである。すなわちアヤとアナ。このアナは父デバオンのろばを飼つていた時、荒野で温泉を発見した者である。三五アナの子らは次のとおりである。すなわちデシヨンとアホリバマ。アホリバマはアナの娘である。三六デシヨンの子らは次のとおりである。すなわちヘムダン、エシバン、イテラン、ケラン。三七エゼルの子らは次のとおりである。すなわちビルハン、ザワン、アカン。三八デシヨンの子らは次のとおりである。すなわちウズとアラン。三九ホリびとから出た族長は次のとおりである。すなわちロタンの族長シヨバルの族長、デバオンの族長、アナの族長、四〇デシヨンの族長、エゼルの族長、デシヤンの族長。これらはホリびとから出た族長であつて、その氏族に従つてセイルの地におつた者である。

三イスラエルの人々を治める王がまだなかつた時、エドムの地を治めた王たちは次のとおりである。三二ベオルの子ペラはエドムを治め、その都の名はデナバであつた。三三ペラが死んで、ボズラのゼラの子ヨバブがこれに代つて王となつた。三四ヨバブが死んで、テマンびとの地のホシヤムがこれに代つて王となつた。三五ホシヤムが死んで、ベダデの子ハダデがこれに代つて王となつた。彼はモアブの野でミデアンを撃つた者である。

その都の名はアビテであつた。三六ハダデが死んで、マスレカのサムラがこれに代つて王となつた。三七サムラが死んでユフラテ川のほとりにあるレホボテのサウルがこれに代つて王となつた。三八サウルが死んでアクボルの子バアル・ハナンがこれに代つて王となつた。三九アクボルの子バアル・ハナンが死んで、ハダルがこれに代つて王となつた。その都の名はパウであつた。その妻の名はメヘタベルといつて、メザハブの娘マテレデの娘であつた。

四〇エサウから出た族長の名は、その氏族と住所と名に従つて言えは次のとおりである。すなわちテムナの族長、アルワの族長、エテテの族長、四一アホリバマの族長、エラの族長、ピノンの族長、四二ケナズの族長、テマンの族長、ミブザルの族長、四三マグデエルの族長、イラムの族長。これらはエドムの族長たちであつて、その領地内の住所に従つていったものである。エドムびとの先祖はエサウである。

第三章

一ヤコブは父の寄留の地、すなわちカナンの地に住んだ。ニヤコブの子孫は次のとおりである。

ヨセフは十七歳の時、兄弟たちと共に羊の群れを飼つていた。彼はまだ子供で、父の妻たちビルハとジルパとの子らと共にい

たが、ヨセフは彼らの悪いうわさを父に告げた。三ヨセフは年寄り子であつたから、イスラエルは他のどの子よりも彼を愛して、彼のために長そでの着物をつくつた。四兄弟たちは父がどの兄弟よりも彼を愛するのを見て、彼を憎み、穏やかに彼に語る事ができなかつた。

五ある時、ヨセフは夢を見て、それを兄弟たちに話したので、彼らは、ますます彼を憎んだ。六ヨセフは彼らに言つた、「どうぞわたしが見た夢を聞いてください。セわたしたちが畑の中で束を結わえていたとき、わたしの束が起きて立つと、あなたがたの束がまわりにきて、わたしの束を拝みました。八すると兄弟たちは彼に向かつて、「あなたはほんとうにわたしたちの王になるのか。あなたは実際わたしたちを治めるのか」と言つて、彼の夢とその言葉のゆえにますます彼を憎んだ。九ヨセフはまた一つの夢を見て、それを兄弟たちに語つて言つた、「わたしはまた夢を見ました。日と月と十一の星とがわたしを拝みました。一〇彼はこれを父と兄弟たちに語つたので、父は彼をとがめて言つた、「あなたが見たその夢はどういうのか。ほんとうにわたしとあなたの母と、兄弟たちとが行つて地に伏し、あなたを拝むのか。一一兄弟たちは彼をねたんだ。しかし父はこの言葉を心にとめた。

二三して兄弟たちがシケムに行つて、父の羊の群れを飼つていたとき、三イスラエルはヨセフに言つた、「あなたの兄弟たち

はシケムで羊を飼っているではないか。さあ、あなたを彼らの所へつかわそう。ヨセフは父に言つた、「はい、行きます。一二父は彼に言つた、「どうか、行つて、あなたの兄弟たちは無事であるか、また群れは無事であるか見てきて、わたしに知らせてください。父が彼をヘブロンの谷からつかわしたので、彼はシケムに行つた。一五ひとりの人が彼に会い、彼が野をさまよつていたので、その人は彼に尋ねて言つた、「あなたは何を捜しているのですか。一六彼は言つた、「兄弟たちを捜しているのです。彼らが、どこで羊を飼っているのか、どうぞわたしに知らせてください。一七その人は言つた、「彼らはここを去りました。彼らが『ドタンへ行こう』と言ふのをわたしは聞きました。そこでヨセフは兄弟たちのあとを追つて行つて、ドタンで彼らに会つた。一八ヨセフが彼らに近づかないうちに、彼らははるかにヨセフを見て、これを殺そうと計り、一九互に言つた、「あの夢見る者がやつて来る。二〇さあ、彼を殺して穴に投げ入れ、悪い獣が彼を食つたと言おう。そして彼の夢がどうなるか見よう。ニルベンはこの話を聞いて、ヨセフを彼らの手から救い出そうとして言つた、「われわれは彼の命を取つてはならない。ニルベンはまだ彼らに言つた、「血を流してはいけない。彼を荒野のこの穴に投げ入れよう。彼に手をくだしてはならない。これはヨセフを彼らの手から救いだして父に返すためであつた。二三して、ヨセフが兄弟たちのもとへ行くと、彼らはヨセフの着物、彼が

着ていた長そでの着物をはぎとり、二四彼を捕えて穴に投げ入れた。その穴はからで、その中に水はなかった。

三五こうして彼らはすわってパンを食べた。時に彼らが目をあげて見ると、イシマエルびとの隊商が、らくだに香料と、乳香と、もつやくとを負わせてエジプトへ下り行こうとギレアデからやってきた。

二六そこでユダは兄弟たちに言った、「われわれが弟を殺し、その血を隠して何の益があるう。ニモさあ、われわれは彼をイシマエルびとに売ろう。彼はわれわれの兄弟、われわれの肉身だから、彼に手を下してはならない」。兄弟たちはこれを聞き入れた。二八時にミデアンびとの商人たちが通りかかったので、彼らはヨセフを穴から引き上げ、銀二十シケルでヨセフをイシマエルびとに売った。彼らはヨセフをエジプトへ連れて行った。

二九さてルベンは穴に帰って見たが、ヨセフが穴の中にいなかった。彼は衣服を裂き、三〇兄弟たちのもとに帰って言った、「あの子はいない。ああ、わたしはどこへ行くことができよう」。

三一彼らはヨセフの着物を取り、雄やぎを殺して、着物をその血に浸し、三三その長そでの着物を父に持ち帰って言った、「わたしたちはこれを見つけたが、これはあなたの子の着物か、どうか見さだめてください」。三三父はこれを見さだめて言った、「わが子の着物だ。悪い獣が彼を食ったのだ。確かにヨセフはかみ裂かれたのだ」。三四そこでヤコブは衣服を裂き、荒布を腰にま

とって、長い間その子のために嘆いた。三五子らと娘らとは皆立って彼を慰めようとしたが、彼は慰められるのを拒んで言った、「いや、わたしは嘆きながら陰府に下って、わが子のもとへ行こう」。こうして父は彼のために泣いた。三六さて、かのミデアンびとはエジプトでバロの役人、侍衛長ポテパルにヨセフを売った。

第三十八章

一そのころユダは兄弟たちを離れて下り、アドラムびとで、名をヒラという者の所へ行つた。ニユダはその所で、名をシユアというカナンびとの娘を見て、これをめとり、その所にはいった。三彼女のみごとって男の子を産んだので、ユダは名をエルと名づけた。四彼女は再びみごとって男の子を産み、名をオナンと名づけた。五また重ねて、男の子を産み、名をシラと名づけた。彼女はこの男の子を産んだとき、クジブにおつた。六ユダは長子エルのために、名をタマルという妻を迎えた。七しかしユダの長子エルは主の前に悪い者であつたので、主は彼を殺された。八そこでユダはオナンに言った、「兄の妻の所にはいつて、彼女をめとり、兄に子供を得させなさい」。九しかしオナンはその子が自分のもとならないのを知っていたので、兄の妻の所にはいつた時、兄に子を得させないために地に洩らした。一〇彼のした事は主の

前に悪かったので、主は彼をも殺された。二そこでユダはその子の妻タマルに言った、「わたしの子シラが成人するまで、寡婦のまま、あなたの父の家にいなさい」。彼は、シラもまた兄弟たちのように死ぬかもしれないと、思ったからである。それでタマルは行つて父の家におつた。

三日がたつてシユアの娘ユダの妻は死んだ。その後、ユダは喪を終つてその友アドラムびとヒラと共にテムナに上り、自分の羊の毛を切る者のところへ行つた。三時に、ひとりの人がタマルに告げて、「あなたのしゅうとが羊の毛を切るためにテムナに上つて来る」と言つたので、四彼女は寡婦の衣服を脱ぎすて、被衣で身をおおい隠して、テムナへ行く道のかたわらにあるエナムの入口にすわつていた。彼女はシラが成人したのに、自分がその妻にされないのを知つたからである。一五ユダは彼女を見たとき、彼女が顔をおおつていたため、遊女だと思い、一六道のかたわらで彼女に向かつて言つた、「さあ、あなたの所にはいらせておくれ」。彼はこの女がわが子の妻であることを知らなかつたからである。彼女は言つた、「わたしの所にはいるため、何をくださいますか」。一七ユダは言つた、「群れのうちのやぎの子をあなたにあげよう」。彼女は言つた、「それをくださるまで、しるしをわたしにくださいますか」。一八ユダは言つた、「どんなしるしをあげようか」。彼女は言つた、「あなたの印と紐と、あなたの手にあるつえとを」。彼はこれらを与えて彼女の所

にはいった。彼女はユダによつてみごもつた。一九彼女は起きて去り、被衣を脱いで寡婦の衣服を着た。

二〇やがてユダはその女からしるしを取りもどそうと、その友アドラムびとに託してやぎの子を送つたけれども、その女を見いだせなかつた。二三そこで彼はその所の人々に尋ねて言つた、「エナムで道のかたわらにいた遊女はどこにいますか」。彼らは言つた、「ここには遊女はいません」。三彼はユダのもとに歸つて言つた、「わたしは彼女を見いだせませんでした。またその所の人々は、『ここには遊女はいない』と言いました」。二三そこでユダは言つた、「女に持たせておこう。わたしたちは恥をかきといけないから。とにかく、わたしはこのやぎの子を送つたが、あなたは彼女を見いだせなかつたのだ」。

二四ところが三月ほどたつて、ひとりの人がユダに言つた、「あなたの嫁タマルは姦淫しました。そのうえ、彼女は姦淫によつてみごもりました」。ユダは言つた、「彼女を引き出して焼いてしまえ」。二五彼女は引き出された時、そのしゅうとに人をつかわして言つた、「わたしはこれをもっている人によつて、みごもりました」。彼女はまた言つた、「どうか、この印と、紐と、つえとはいだれのものか、見定めてください」。二六ユダはこれを見定めて言つた、「彼女はわたしよりも正しい。わたしが彼女をわが子シラに与えなかつたためである」。彼は再び彼女を知らなかつた。

ニモ さて彼女の出産の時^{しゅつさん}がきたが、胎内^{たいない}には、ふたごがあつた。
 ニ八 出産^{しゅつさん}の時に、ひとりの子^こが手を出^だしたので、産婆^{さんば}は、「これがさきに出^でた」と言い、緋^ひの糸^{いと}を取^とつて、その手に結^{むす}んだ。ニ九
 そして、その子^こが手^てをひつこめると、その弟^{おとうと}が出^でたので、「どうしてあなたは自分で破^{やぶ}つて出^でるのか」と言^いつた。これによつて名^なはペレツと呼ば^よれた。ニ〇 その後^{のち}、手^てに緋^ひの糸^{いと}のある兄^{あに}が出^でたので、名^なはゼラと呼ば^よれた。

第三十九章

一 さてヨセフは連^つれられてエジプトに下^{くだ}つたが、パロの役人^{やくにん}で侍衛長^{じえいちやう}であつたエジプトびとポテバルは、彼^{かれ}をそこに連^つれ下^{くだ}つたイシマエルびとらの手^てから買^かひ取^とつた。ニ 主^{しゅ}がヨセフと共におられたので、彼^{かれ}は幸運^{こううん}な者^{もの}となり、その主人^{しゅじん}エジプトびとの家^{いえ}におつた。三 その主人^{しゅじん}は主^{しゅ}が彼^{かれ}とともににおられることと、主^{しゅ}が彼^{かれ}の手^てのすることをすべて榮^{さか}えさせられるのを見^みた。四 そこで、ヨセフは彼の前^{まえ}に恵^{めぐ}みを得^え、そのそば近く仕^{つか}えた。彼^{かれ}はヨセフに家^{いえ}をつかさどらせ、持ち物^{もの}をみな彼の手^てにゆだねた。五 彼^{かれ}がヨセフに家^{いえ}とすべての持ち物^{もの}をつかさどらせた時から、主^{しゅ}はヨセフのゆえにそのエジプトびとの家^{いえ}を恵^{めぐ}まれたので、主^{しゅ}の恵^{めぐ}みは彼の家^{いえ}と畑^{はたけ}にあるすべての持ち物^{もの}に及^{およ}んだ。六 そこで彼^{かれ}は持ち物^{もの}をみなヨセフの手^てにゆだねて、自分が食^たべる物^{もの}のほかは、何^{なに}を

も顧^{かえり}みなかつた。
 さてヨセフは姿^{すがた}がよく、顔^{かほ}が美^{うつく}しかった。セこれらの事^{こと}の後^{のち}、主人^{しゅじん}の妻^{つま}はヨセフに目^めをつけて言^いつた、「わたしと寝^ねなさい」。ハヨセフは拒^{こほ}んで、主人^{しゅじん}の妻^{つま}に言^いつた、「御主人^{ごしゅじん}はわたしがいるので家^{いえ}の中^{なか}の何^{なに}をも顧^{かえり}みず、その持ち物^{もの}をみなわたしの手^てにゆだねられました。九 この家^{いえ}にはわたしよりも大^{おお}いなる者^{もの}はありません。また御主人^{ごしゅじん}はあなたを除^{のぞ}いては、何^{なに}をもわたしに禁^さじられませんが、あなたとあなたを御主人^{ごしゅじん}の妻^{つま}であるからです。どうしてわたしはこの大^{おお}きな悪^{あく}をおこなつて、神^{かみ}に罪^{つみ}を犯^{おか}すことができましよう」。一〇 彼女^{かのじよ}は毎日^{まいにち}ヨセフに言^い寄^よつたけれども、ヨセフは聞^ききいれず、彼女^{かのじよ}と寝^ねなかつた。また共にい^いなかつた。一
 ある日^ひヨセフが務^{つとめ}をするために家^{いえ}にはいつた時^{とき}、家^{いえ}の者^{もの}がひとりもそこにい^いなかつたので、二 彼女^{かのじよ}はヨセフの着^{きもの}物^{もの}を捕^{とら}えて、「わたしと寝^ねなさい」と言^いつた。ヨセフは着^{きもの}物^{もの}を彼女^{かのじよ}の手^てに残^{のこ}して外^{そと}にのがれ出^でた。三 彼女^{かのじよ}はヨセフが着^{きもの}物^{もの}を自分の手^てに残^{のこ}して外^{そと}にのがれたのを見^みて、四 その家^{いえ}の者^{もの}どもを呼^よび、彼^{かれ}らに告^つげて言^いつた、「主人^{しゅじん}がわたしたちの所^{ところ}に連^つれてきたヘブルびとは、わたしたちに戯^{たわむ}れます。彼^{かれ}はわたしと寝^ねようとして、わたしの所^{ところ}にはいつたので、わたしは大^{おお}声^{こゑ}で叫^よびました。五 彼^{かれ}はわたしを聲^{こゑ}をあけて叫^よぶのを聞^きくと、着^{きもの}物^{もの}をわたしの所^{ところ}に残^{のこ}して外^{そと}にのがれ出^でました」。六 彼女^{かのじよ}はその着^{きもの}物^{もの}をかたわらに置^おいて、主人^{しゅじん}の帰^{かえ}つて来るのを待^{まち}つた。七 そして彼女^{かのじよ}は次のよう

主人に告げた、「あなたがわたしたちに連れてこられたヘブルのしもべはわたしに戯れようとして、わたしの所にはいつてきました。ハわたしは声をあげて叫んだので、彼は着物をわたしの所に残して外にのがれました」。

「主人はその妻が「あなたのしもべは、わたしにこんな事をした」と告げる言葉を聞いて、激しく怒った。二〇そしてヨセフの主人は彼を捕えて、王の囚人をつなぐ獄屋に投げ入れた。こうしてヨセフは獄屋の中におったが、三 主はヨセフと共におられて彼にいつくしみを垂れ、獄屋番の恵みをうけさせられた。三 獄屋番は獄屋におるすべての囚人をヨセフの手にゆだねたので、彼はそこでするすべての事をおこなった。三 獄屋番は彼の手にゆだねた事はいいさしい顧みなかった。主がヨセフと共におられたからである。主は彼のなす事を榮えさせられた。

第四〇章

一これらの事の後、エジプト王の給仕役と料理役とがその主君エジプト王に罪を犯した。ニパロはふたりの役人、すなわち給仕役の長と料理役の長に向かつて憤り、三侍衛長の家の監禁所、すなわちヨセフがつながれている獄屋に入れた。四侍衛長はヨセフに命じて彼らと共におらせたので、ヨセフは彼らに仕えた。こうして彼らは監禁所で幾日かを過ごした。五さて獄屋につな

がれたエジプト王の給仕役と料理役のふたりは一夜のうちにそれぞれ意味のある夢を見た。六ヨセフが朝彼らのところへ行つて見ると、彼らは悲しみに沈んでいた。七そこでヨセフは自分と一緒に主人の家の監禁所にいるパロの役人たちに尋ねて言った、「どうして、きょう、あなたがたの顔色が悪いのですか」。ハ彼らは言った、「わたしたちは夢を見ましたが、解いてくれる者がいません」。ヨセフは彼らに言った、「解くことは神によるのではありませんか。どうぞ、わたしに話してください」。

九給仕役の長はその夢をヨセフに話して言った、「わたしが見た夢で、わたしの前に一本のぶどうの木がありました。一〇そのぶどうの木に三つの枝があつて、芽を出し、花が咲き、ぶどうのふさが熟しました。二時にわたしの手に、パロの杯があつて、わたしはそのぶどうを取り、それをパロの杯にしぼり、その杯をパロの手にささげました」。三ヨセフは言った、「その解き明かしはこうです。三つの枝は三日です。三 今から三日のうちにパロはあなたの頭を上げて、あなたを元の役目に返すでしょう。あなたはさきに給仕役だった時にされたように、パロの手に杯をささげられるでしょう。一四それで、あなたがしあわせになられたら、わたしを覚えていて、どうかわたしに恵みを施し、わたしの事をパロに話して、この家からわたしを出してください。一五わたしは、実はヘブルびとの地からさらわれてきた者です。またここでもわたしは地下の獄屋に入れられるような事はしな

かつたのです」。

二六 料理役の長はその解き明かしの良かつたのを見て、ヨセフに言った、「わたしも夢を見たが、白いパンのかごが三つ、わたしの頭の上にあつた。一七一 一番上のかごには料理役がパロのためにつくったさまざまな食物があつたが、鳥がわたしの頭の上のかごからそれを食べていた」。

一八 ヨセフは答えて言った、「その解き明かしはこうです。三つのかごは三日です。一九 今から三日のうちにパロはあなたの頭を上げ離して、あなたを木に掛けるでしょう。そして鳥があなたの肉を食い取るでしょう」。

二〇 さて三日目はパロの誕生日であつたので、パロはすべての家来のためにふるまいを設け、家来の中の給仕役の長の頭と料理役の長の頭を上げた。二一 すなわちパロは給仕役の長を給仕役の職に返したので、彼はパロの手に杯をささげた。二三 しかしパロは料理役の長を木に掛けた。ヨセフが彼らに解き明かしたとおりである。二四 ところが、給仕役の長はヨセフを思い出さず、忘れてしまった。

第四章

一 二年の後パロは夢を見た。夢に、彼はナイル川のほとりに立っていた。二 すると、その川から美しい、肥え太った七頭の雌牛が上がってきて草を食っていた。三 その後、また醜い、やせ

細つた他の七頭の雌牛が川から上がってきて、川の岸にいた雌牛のそばに立ち、四 その醜い、やせ細つた雌牛が、あの美しい、肥えた七頭の雌牛を食いつくした。ここでパロは目が覚めた。五 彼はまた眠つて、再び夢を見た。夢に、一本の茎に太った良い七つの穂が出てきた。六 その後また、やせて、東風に焼けた七つの穂が出てきて、七 そのやせた穂が、あの太つて実つた七つの穂をのみつくした。ここでパロは目が覚めたが、それは夢であつた。八 朝になつて、パロは心が騒ぎ、人をつかわして、エジプトのすべての魔術師とすべての知者と呼び寄せ、彼らに夢を告げたが、これをパロに解き明かしうる者がなかつた。

九 そのとき給仕役の長はパロに告げて言った、「わたしはきょう、自分のあやまちを思い出しました。一〇 かつてパロがしもべらに向かつて憤り、わたしと料理役の長とを侍衛長の家の監禁所にお入れになつた時、二 わたしも彼も一夜のうちに夢を見、それぞれ意味のある夢を見ましたが、三 そこに侍衛長のしもべで、ひとりの若いヘブルびとがわれわれと共にいたので、彼に話したところ、彼はわれわれの夢を解き明かし、その夢によつて、それぞれ解き明かしをしました。四 そして彼が解き明かしたとおりになつて、パロはわたしを職に返し、彼を木に掛けられました」。

一四 そこでパロは人をつかわしてヨセフを呼んだ。人々は急いで彼を地下の獄屋から出した。ヨセフは、ひげをそり、着物を

着替えてパロのもとに行つた。二五 パロはヨセフに言つた、「わたしは夢を見たが、これを解き明かす者がいない。聞くところによると、あなたは夢を聞いて、解き明かしができるそうだ」。二六 ヨセフはパロに答えて言つた、「いいえ、わたしではありません。神がパロに平安をお告げになりました」。二七 パロはヨセフに言つた、「夢にわたしは川の岸に立つていた。一八 その川から肥え太つた、美しい七頭の雌牛が上がつてきて草を食つていた。一九 その後、弱く、非常に醜い、やせ細つた他の七頭の雌牛がまた上がつてきた。わたしはエジプト全国で、このような醜いものをまだ見たことがない。二〇 ところがそのやせた醜い雌牛が、初めの七頭の肥えた雌牛を食いつくしたが、二一 腹にはいっても、腹にはいつた事が知れず、やはり初めのように醜かつた。二二 ここでわたしは目が覚めた。二三 わたしはまた夢をみた。一本の茎に七つの実つた良い穂が出てきた。二四 その後、やせ衰えて、東風に焼けた七つの穂が出てきたが、二五 そのやせた穂が、あの七つの良い穂をのみつくした。わたしは魔術師に話したが、わたしにそのわけを示しうる者はなかつた」。

二六 ヨセフはパロに言つた、「パロの夢は一つです。神がこれからしようとすることをパロに示されたのです。二七 七頭の良い雌牛は七年です。七つの良い穂も七年で、夢は一つです。二八 あとに続いて、上がつてきた七頭のやせた醜い雌牛は七年で、東風に焼けた実の入らない七つの穂は七年のききんです。二九

わたしはパロに申し上げたように、神がこれからしようとすることをパロに示されたのです。三〇 エジプト全国に七年の大豊作があり、三一 その後七年のききんが起り、その豊作はみなエジプトの国で忘れられて、そのききんは国を滅ぼすでしょう。三二 後に来るそのききんが、非常に激しいから、その豊作は国のうちで記憶されなくなるでしょう。三三 パロが二度重ねて夢を見られたのは、この事が神によつて定められ、神がすみやかにこれをされるからです。三四 それゆえパロは今、さどく、かつ賢い人を探ね出してエジプトの国を治めさせなさい。三五 パロはこうして国中に監督を置き、その七年の豊作のうちに、エジプトの国の産物の五分の一を取り、三六 続いて来る良い年々のすべての食糧を彼らに集めさせ、穀物を食糧として、パロの手で町々にたくわえ守らせなさい。三七 こうすれば食糧は、エジプトの国に臨む七年のききんに備えて、この国のためにたくわえとなり、この国はききんによつて滅びることがないでしょう」。

三八 この事はパロとそのすべての家来たちの目にかなつた。三九 そこでパロは家来たちに言つた、「われわれは神の霊をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか」。四〇 またパロはヨセフに言つた、「神がこれを皆あなたに示された。あなたのようにさどく賢い者はない。四一 あなたはわたしの家を治めてください。わたしの民はみなあなたの言葉に従うでしょう。わたしはただ王の位でだけあなたにまさる」。四二 パロは更にヨセフに言つ

た、「わたしはあなたをエジプト全国^{ぜんこく}のつかさとする」。四二そしてパロは指輪^{ゆびわ}を手からはずして、ヨセフの手にはめ、亜麻布^{あまふ}の衣服^{いふく}を着せ、金の鎖^{きんさ}をくびにかけ、四三自分の第二^{だいに}の車^{くるま}に彼^{かれ}を乗せ、「ひざまずけ」とその前^{まえ}に呼ば^よわらせ、こうして彼^{かれ}をエジプト全国^{ぜんこく}のつかさとした。四四ついでパロはヨセフに言った、「わたしはパロである。あなたの許^{ゆる}しがなければエジプト全国^{ぜんこく}で、だれも手足^{あし}を上げることはできない」。四五パロはヨセフの名^なをザフナテ・パネアと呼び、オンの祭司^{さいし}ポテペラの娘^{むすめ}アセナテを妻^{つま}として彼^{かれ}に与^{あた}えた。ヨセフはエジプトの国^{くに}を巡^{めぐ}った。

四六ヨセフがエジプトの王^{おう}パロの前^{まえ}に出^でて、エジプト全国^{ぜんこく}をあまねく巡^{めぐ}った。ヨセフはパロの前^{まえ}を出^でて、エジプト全国^{ぜんこく}をあまねく巡^{めぐ}った。四七さて七年^{ねん}の豊作^{ほうさく}のうちに地^ちは豊^{ゆた}かに物^{もの}を産^{さん}した。四八そこでヨセフはエジプトの国^{くに}にできたその七年^{ねん}間の食糧^{しょくりょう}をことごとく集^{あつ}め、その食糧^{しょくりょう}を町々^{まちまち}に納^{おさ}めさせた。すなわち町の周^{しゅう}圍^いにある畑^{はたけ}の食糧^{しょくりょう}をその町^{まち}の中に納^{おさ}めさせた。四九ヨセフは穀物^{こくぶつ}を海の砂^{すな}のように、非常^{ひじょう}に多^{おほ}くたくわえ、量^{はか}りきれなくなつたので、ついに量^{はか}ることをやめた。

五〇ききんの年^{とし}の来^くる前^{まえ}にヨセフにふたりの子^こが生^うまれた。これらはオンの祭司^{さいし}ポテペラの娘^{むすめ}アセナテが産^うんだのである。五一ヨセフは長子^{ちやうし}の名^なをマナセと名づけて言^いった、「神^{かみ}がわたしにすべての苦難^{くなん}と父^{ちち}の家^{いえ}のすべての事^{こと}を忘れさせられた」。五二また次^{つぎ}の子^この名^なをエフライムと名づけて言^いった、「神^{かみ}がわたしを悩^{なや}み

の地^ちで豊^{ゆた}かにせられた」。

五三エジプトの国^{くに}にあつた七年^{ねん}の豊作^{ほうさく}が終^{おわ}り、五四ヨセフの言^いつたように七年^{ねん}のききんが始^{はじ}まつた。そのききんはすべての国^{くに}にあつたが、エジプト全国^{ぜんこく}には食物^{しょくもつ}があつた。五五やがてエジプト全国^{ぜんこく}が飢^うえた時^{とき}、民^{たみ}はパロに食物^{しょくもつ}を叫^{さけ}び求めた。そこでパロはすべてのエジプトびとに言^いった、「ヨセフのもとに行^いき、彼^{かれ}の言^いうようにせよ」。五六ききんが地の全^{ぜん}面^{めん}にあつたので、ヨセフはすべての穀倉^{こくくら}を開^{ひら}いて、エジプトびとに売^うった。ききんはますますエジプトの国^{くに}に激^{はげ}しくなつた。五七ききんが全^{ぜん}地^ちに激^{はげ}しくなつたので、諸国^{しよこく}の人々^{ひとびと}がエジプトのヨセフのもとに穀物^{こくぶつ}を買^かうためにきた。

第四章

一ヤコブはエジプトに穀物^{こくぶつ}があると知^しって、むすこたちに言^いつた、「あなたがたはなぜ顔^{かお}を見合^{みあ}わせているのですか」。二また言^いつた、「エジプトに穀物^{こくぶつ}があるということだが、あなたがたはそこへ下^{くだ}つて行^いつて、そこから、われわれのため穀物^{こくぶつ}を買^かつてきなさい。そうすれば、われわれは生きながらえて、死^しを免^{まぬ}れるであろう」。三そこでヨセフの十^{じゅう}人の兄弟^{けいだい}は穀物^{こくぶつ}を買^かうためにエジプトへ下^{くだ}つた。四しかし、ヤコブはヨセフの弟^{おとうと}ベニヤミンを兄弟^{けいだい}たちと一^{いっしょ}緒^{しよ}にやらなかつた。彼^{かれ}が災^{わざわい}に会^あうのを恐^{おそ}れたか

らである。五こうしてイスラエルの子らは穀物を買おうと人々に交じってやってきた。カナンの地にききんがあつたからである。

六ときにヨセフは国のつかさであつて、国のすべての民に穀物売ることをしていた。ヨセフの兄弟たちはきて、地にひれ伏し、彼を拝した。セヨセフは兄弟たちを見て、それと知つたが、彼らに向かつては知らぬ者のようにし、荒々しく語つた。すなわち彼らに言つた、「あなたがたはどこからきたのか」。彼らは答えた、「食糧を買うためにカナンの地からきました」。ハヨセフは、兄弟たちであるのを知つていたが、彼らはヨセフとは知らなかつた。ハヨセフはかつて彼らについて見た夢を思い出して、彼らに言つた、「あなたがたは回し者で、この国のすきをうかがうためにきたのです」。一〇彼らはヨセフに答えた、「いいえ、わが主よ、しもべらはただ食糧を買うためにきたのです。一われわれは皆、ひとりの人の子で、真実な者です。しもべらは回し者ではありません」。二ヨセフは彼らに言つた、「いや、あなたがたはこの国のすきをうかがうためにきたのです」。三彼らは言つた、「しもべらは十二人兄弟で、カナンの地にいるひとりの人の子です。末の弟は今、父と一緒にいますが、他のひとりはいなくなりました」。四ヨセフは彼らに言つた、「わたしと言つたとおり、あなたがたは回し者です。一五あなたがたをこうしてためしてみよう。パロのいのちにかけて誓います。末の弟

がここにこなければ、あなたがたはここを出ることはできません。一六あなたがたのひとりをやって弟を連れてこさせなさい。それまであなたがたをつないで置いて、あなたがたに誠実があるかどうか、あなたがたの言葉をためしてみよう。パロのいのちにかけて誓います。あなたがたは確かに回し者です」。一七ヨセフは彼らをみな一緒に三日の間、監禁所に入れた。

一八三日目にヨセフは彼らに言つた、「こうすればあなたがたは助かるでしょう。わたしは神を恐れます。一九もしあなたがたが真実な者なら、兄弟のひとりをあなたがたのいる監禁所に残し、あなたがたは穀物を携えて行つて、家族の飢えを救いなさい。二〇そして末の弟をわたしのものと連れてきなさい。そうすればあなたがたの言葉のほんとうであることがわかつて、死を免れるでしょう」。彼らはそのようにした。二一彼らは互に言つた、「確かにわれわれは弟の事で罪がある。彼がしきりに願つた時、その心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかつた。それでこの苦しみに会ふのだ」。三ルベンが彼らに答えて言つた、「わたしはあなたがたに、この子供に罪を犯すなど言つたではないか。それにもかかわらず、あなたがたは聞き入れなかつた。それで彼の血の報いを受けるのです」。三彼らはヨセフが聞きわけているのを知らなかつた。相互の間に通訳者がいたからである。二四ヨセフは彼らを離れて行つて泣き、また帰つてきて彼らと語り、そのひとりシメオンを捕えて、彼らの目

の前で縛った。二五そしてヨセフは人々に命じて、彼らの袋に穀物を満たし、めいめいの銀を袋に返し、道中の食料を与えさせた。ヨセフはこのように彼らにした。

二六 彼らは穀物をろばに負わせてそこを去った。二七そのひとりが宿で、ろばに飼葉をやるため袋をあけて見ると、袋の口に自分の銀があつた。二八 彼は兄弟たちに言った、「わたしの銀は返してある。しかも見よ、それは袋の中にある」。そこで彼らは非常に驚き、互に震えながら言った、「神がわれわれにされたこのことは何事だろう」。

二九 こうして彼らはカナンの地にいる父ヤコブのもとに帰り、その身に起つた事をことごとく告げて言った、三〇「あの国の君は、われわれに荒々しく語り、国をうかがう回し者だと言いました。三 一 われわれは彼に答えました、『われわれは真実な者であつて回し者ではない。三 二 われわれは十二人兄弟で、同じ父の子である。ひとりはいなくなり、末の弟は今父と共にカナンの地にいる』。三 三 その国の君であるその人はわれわれに言いました、『わたしはこうしてあなたがたの真実な者であることを知ろう。あなたがたは兄弟のひとりをわたしのものにに残し、穀物を携えて行つて、家族の飢えを救いなさい。三 四 そして末の弟をわたしのものに連れてきなさい。そうすればあなたがたが回し者ではなく、真実な者であることを知つて、あなたがたの兄弟を返し、この国であなたがたに取引させましよう』」。

三 五 彼らが袋のものをを出して見ると、めいめいの金包みが袋の中にあつたので、彼らも父も金包みを見て恐れた。三 六 父ヤコブは彼らに言った、「あなたがたはわたしの子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなつた。今度はベニヤミンをも取り去る。これらはみなわたしの身にふりかかつて来るのだ」。三 七 ミルベン は父に言った、「もしわたしが彼をあなたのもとに連れて帰らなかつたら、わたしのふたりの子を殺してください。ただ彼をわたしの手にまかせてください。わたしはきつと、あなたのもとに彼を連れて帰ります」。三 八 ヤコブは言った、「わたしの子はあなたがたと共に下つて行つてはならない。彼の兄は死に、ただひとり彼が残っているのだから。もしあなたがたの行く道で彼が災に会えば、あなたがたは、しらがのわたしを悲しんで陰府に下らせるであろう」。

第四三章

一 ききんはその地に激しかつた。二 彼らがエジプトから携えてきた穀物を食い尽した時、父は彼らに言った、「また行つて、われわれのために少しの食糧を買つてきなさい」。三 ユダは父に答えて言った、「あの人はわれわれをきびしく戒めて、弟が一緒にでなければ、わたしの顔を見てはならないと言いました。四 もしあなたが弟をわれわれと一緒にやつてくださるなら、われわれ

は下^{くだ}つて行^いつて、あなたのために食^{しょく}糧^{りやう}を買^かつてきましよう。五
 かし、もし彼^{かれ}をやられないなら、われわれは下^{くだ}つて行^いきませ
 ん。あの人がわれわれに、弟^{おとうと}が一緒^{いっしょ}でなければわたしの顔^{かお}を見
 てはならないと言^いったのですから」。ハイスラエルは言^いった、「な
 ぜ、もうひとりの弟^{おとうと}がある」とあの人に言^いつて、わたしを苦しめ
 のか」。七彼^{かれ}らは言^いった、「あの人がわれわれと一族^{いちぞく}のことを問
 いただして、父^{ちち}はまだ生^いきているか、もうひとりの弟^{おとうと}があるか
 言^いったので、問^とわれるままに答^{こた}えましたが、その人^{ひと}が、弟^{おとうと}を連^つ
 れてこいと言^いおうとは、どうして知^しることができたでしょう」。
 ハユダは父^{ちち}イスラエルに言^いった、「あの子^こをわたしと一緒に^{いっしょ}にやっ
 てくだされば、われわれは立^たつて行^いきましよう。そしてわれわ
 れもあなたも、われわれの子供^{こども}らも生^いきながらえ、死^しを免^{まぬ}れま
 しよう。九わたしは彼^{かれ}の身^みを請^うけ合^あいます。わたしの手^てから彼^{かれ}
 を求^{もと}めなさい。もしわたくしが彼^{かれ}をあなたのもとに連^つれ歸^{かえ}つて、
 あなたの前^{まえ}に置^おかなかつたら、わたしはあなたに対して永^{えい}久^{きう}に
 罪^{つみ}を負^おいましょう。一〇もしわれわれがこんなにためらわな
 かつたら、今^{いま}ごろは二度も行^いつてきたでしょう」。
 ニ父^{ちち}イスラエルは彼^{かれ}らに言^いった、「それではこうしなさい。こ
 の国^{くに}の名^{めい}産^{えん}を器^{うつわ}に入れ、携^{たづな}え下^{くだ}つてその人に贈^{おく}り物^{もの}にしな
 さい。すなわち少しの乳^{ちゅう}香^{かう}、少^{すこ}しの蜜^{みつ}、香^{かうり}料^{りょう}、もつやく、ふすだ
 しろ、あめんどう。三そしてその上^{うへ}に、倍^{ばい}額^{がく}の銀^{ぎん}を手^てに持^もつて
 行^いきなさい。また袋^{ふくろ}の口^{くち}に返^{かえ}してあつた銀^{ぎん}は持^もつて行^いつて返^{かえ}

なさい。たぶんそれは誤^{あやま}りであつたのでしよう。三弟^{おとうと}も連^つ
 れ、立^たつて、またその人^{ひと}の所^{ところ}へ行^いきなさい。一四どうか全^{ぜん}能^{のう}の神^{かみ}
 がその人^{ひと}の前^{まえ}であなたがたをあわれみ、もうひとりの兄^{あに}弟^{てい}とベ
 ニヤミンとを、返^{かえ}させてくださるように。もしわたくしが子^こを失^{うしな}
 わなければならぬのなら、失^{うしな}つてもよい」。一五そこでその
 人^{ひと}々は贈^{おく}り物^{もの}を取り、また倍^{ばい}額^{がく}の銀^{ぎん}を携^{たづな}え、ベニヤミンを連^つ
 立^たつてエジプトへ下^{くだ}り、ヨセフの前に立^たつた。
 ニ六ヨセフはベニヤミンが彼^{かれ}らと共にいるのを見て、家^{いえ}づかさに
 言^いった、「この人^{ひと}々を家^{いえ}に連^つれて行^いき、獸^{けもの}をほふつて、したくす
 るように。この人^{ひと}々は昼^{ひる}、わたしと一緒に^{いっしょ}に食^{しょく}事^じをします」。一七
 その人^{ひと}はヨセフの言^いつたようにして、この人^{ひと}々をヨセフの家^{いえ}へ
 連^つれて行^いつた。一八ところがこの人^{ひと}々はヨセフの家^{いえ}へ連^つれて行^い
 かれたので恐^{おそ}れて言^いつた、「初^{はじ}めの時^{とき}に袋^{ふくろ}に返^{かえ}してあつたあの銀^{ぎん}
 のゆえに、われわれを引き入^ひれたのです。そしてわれわれを襲^{おそ}
 い、攻^せめ、捕^{とら}えて奴^ど隸^{れい}とし、われわれのろばをも奪^{うば}うのです」。一
 九彼^{かれ}らはヨセフの家^{いえ}づかさに近^{ちか}づいて、家^{いえ}の入口^{いりぐち}で、言^いつた、ニ
 〇「ああ、わが主^{しゅ}よ、われわれは最初^{さいしよ}、食^{しょく}糧^{りやう}を買^かうために下^{くだ}
 ってきたのです。三ところが宿^{やど}に行^いつて袋^{ふくろ}をあけて見^みると、めい
 めいの銀^{ぎん}は袋^{ふくろ}の口^{くち}にあつて、銀^{ぎん}の重^{おも}さは元^{もと}のままでした。それ
 でわれわれはそれを持^もつて参^{まい}りました。三そして食^{しょく}糧^{りやう}を買^か
 ために、ほかの銀^{ぎん}をも持^もつて下^{くだ}ってきました。われわれの銀^{ぎん}
 袋^{ふくろ}に入^いれた者^{もの}が、だれであるかは分^{わか}りません」。三三彼は言^いつた、

「安心しなさい。恐れてはいけません。その宝はあなたがたの神、あなたがたの父の神が、あなたがたの袋に入れてあなたがたに賜ったのです。あなたがたの銀はわたしが受け取りました。そして彼はシメオンを彼らの所へ連れてきた。二四こうしてその人はこの人々をヨセフの家へ導き、水を与えて足を洗わせ、また、ろばに飼葉を与えた。二五 彼らはその所で食事をするのだと聞き、贈り物を整えて、昼にヨセフの来るのを待った。

二六 さてヨセフが家に帰ってきたので、彼らはその家に携えてきた贈り物をヨセフにささげ、地に伏して、彼を拝した。二七 ヨセフは彼らの安否を問うて言った、「あなたがたの父、あなたがたがさきに話していたその老人は無事ですか。なお生きながらえておられますか」。二八 彼らは答えた、「あなたのしもべ、われわれの父は無事で、なお生きながらえています」。そして彼らは頭をさげて拝した。二九 ヨセフは目をあげて同じ母の子である弟ベニヤミンを見て言った、「これはあなたがたが前にわたしに話した末の弟ですか」。また言った、「わが子よ、どうか神があなたを恵まれるように」。三〇 ヨセフは弟なつかしさに心がせまり、急いで泣く場所をたずね、へやにはいつて泣いた。三一 やがて彼は顔を洗って出てきた。そして自分を制して言った、「食事にしよう」。三二 そこでヨセフはヨセフ、彼らは彼ら、陪食のエジプトびとはエジプトびと、と別々に席に着いた。エジプトびとはエジプトびとと共に食事することができなかった。それはエジ

プトびとの忌むところであつたからである。三三 こうして彼らはヨセフの前に、長子は長子として、弟は弟としてすわらせられたので、その人々は互に驚いた。三四 またヨセフの前から、めいめいの分が運ばれたが、ベニヤミンの分は他のいずれの者の分よりも五倍多かつた。こうして彼らは飲み、ヨセフと共に楽しんだ。

第四章

一 さてヨセフは家づかさに命じて言った、「この人々の袋に、運べるだけ多くの食糧を満たし、めいめいの銀を袋の口に入れておきなさい。二 またわたしの杯、銀の杯をあの年下の者の袋の口に、穀物の代金と共に入れておきなさい」。家づかさはヨセフの言葉のとおりにした。三 夜が明けると、その人々と、ろばとは送り出されたが、四 町を出て、まだ遠くへ行かないうちに、ヨセフは家づかさに言った、「立つて、あの人々のあとを追いなさい。追いついて、彼らに言いなさい、『あなたがたはなぜ悪をもって善に報いるのですか。なぜわたしの銀の杯を盗んだのですか。五 これはわたしの主人が飲む時に使い、またいつも占いに用いるものではありませんか。あなたがたのした事は悪いことですよ』」。

六 家づかさが彼らに追いついて、これらの言葉を彼らに告げた

とき、セ彼らは言った、「わが主は、どうしてそのようなことを言われるのですか。しもべらは決してそのようなことはいたしません。ハ袋の口で見つけた銀でさえ、カナンの人からあなたの所に持ち帰ったほです。どうして、われわれは御主人の家から銀や金を盗みましよう。九しもべらのうちのだれの所でそれが見つかつても、その者は死に、またわれわれはわが主の奴隷となりましよう。〇家づかさは言った、「それではあなたがたの言葉のようにしよう。杯の見つかつた者はわが主の奴隷とならなければならぬ。ほかの者は無罪です。――そこで彼らは、めいめい急いで袋を地におろし、ひとりひとりその袋を開いた。ニ家づかさは年上から捜し始めて年下に終つたが、杯はベニヤミンの袋の中にあつた。ニそこで彼らは衣服を裂き、おのおの、ろばに荷を負わせて町に引き返した。

一四ユダと兄弟たちとは、ヨセフの家にはいつたが、ヨセフがなおそこにいたので、彼らはその前で地にひれ伏した。一五ヨセフは彼らに言った、「あなたがたのこのしわざは何事ですか。わたしのような人は、必ず占いで当てることを知らないのですか。――ユダは言った、「われわれはわが主に何を言い、何を述べ得ましよう。どうしてわれわれは身の潔白をあらわし得ましよう。神がしもべらの罪をあばかれました。われわれと、杯を持つていた者とは共にわが主の奴隷となりましよう。――七ヨセフは言った、「わたしは決してそのようなことはしない。杯を持つ

ている者だけがわたしの奴隷とならなければならない。ほかの者は安全に父のもとへ上つて行きなさい」。

一八この時ユダは彼に近づいて言った、「ああ、わが主よ、どうぞわが主の耳にひとこと言わせてください。しもべをおこらないでください。あなたはバロのようなかたです。一九わが主はしもべらに尋ねて、『父があるか、また弟があるか』と言われたので、二〇われわれはわが主に言いました、『われわれには老齢の父があり、また年寄り子の弟があります。その兄は死んで、同じ母の子で残っているのは、ただこれだけです。だから父はこれを愛しています』。二一その時あなたはしもべらに言われました、『その者をわたしの所へ連れてきなさい。わたしはこの目で彼を見よう』。二二われわれはわが主に言いました、『その子供は父を離れることができません。もし父を離れたら父は死ぬでしよう』。二三しかし、あなたはしもべらに言われました、『末の弟と一緒に下つてこなければ、おまえたちは再びわたしの顔を見ることはできない』。二四それであなたのしもべである父のもとに上つて、わが主の言葉を彼に告げました。二五ところで、父が『おまえたちは再び行つて、われわれのために少しの食糧を買つてくるように』と言つたので、二六われわれは言いました、『われわれは下つて行けません。もし末の弟と一緒にであれば行きましよう。末の弟が一緒になければ、あの人の顔を見ることができません』。二七あなたのしもべである父は言いました、『おまえた

の知^しっているとお^り、妻^{つま}はわたしにふたりの子^こを産^うんだ。二八^ひひとりは外^{そと}へ出^でたが、きつと裂^さき殺^{ころ}されたのだと思^{おも}う。わたしは今^{いま}になつても彼^{かれ}を見^みない。二九^ふもしおまえたがこ^この子^こをもわたりから取^とつて行^いつて、彼^{かれ}が災^{わざわい}に会^あえば、おまえたは、しらがのわたしを悲^{かな}しんで陰^{よみ}府^{くた}に下^{くだ}らせるであらう。三〇わたしがあなたのしもべである父^{ちち}のもとに帰^{かえ}つて行^いくとき、もしこの子^{こども}供^{ども}が一^{いっしょ}緒^いになかつたら、どうなるでしょう。父^{ちち}の魂^{たましい}は子^{こども}供^{ども}の魂^{たましい}に結^{むす}ばれているです。三一この子^{こども}供^{ども}がわれわれと一緒にい^いないのを見^みたら、父^{ちち}は死^しぬでしよう。そうすればしもべらは、あなたのしもべであるしらがの父^{ちち}を悲^{かな}しんで陰^{よみ}府^{くた}に下^{くだ}せることになるでしょう。三二しもべは父^{ちち}にこの子^{こども}供^{ども}の身^みを請^うけ合^あつて『もしわたしがこの子^こをあなたのもとに連^つれ帰^{かえ}らなかつたら、わたしは父^{ちち}に對^{たい}して永^{えい}久^{きゅう}に罪^{つみ}を負^おいましょう』と言^いつたのです。三三どうか、しもべをこの子^{こども}供^{ども}の代^{かわ}りに、わが主^{しゅ}の奴^ど隷^{れい}としてとどまらせ、この子^{こども}供^{ども}を兄弟^{いっしょ}たちと一緒に上^{のぼ}り行^いかせてください、三四この子^{こども}供^{ども}を連^つれずに、どうしてわたしは父^{ちち}のもとに上^{のぼ}り行^いくことができましよう。父^{ちち}が災^{わざわい}に会^あうのを見^みるに忍^{しの}びません」。

第四章

一そこでヨセフはそばに立^たっているすべての人^{ひと}の前^{まえ}で、自^じ分^{ぶん}を制^{せい}しきれなくなつたので、「人^{ひと}は皆^{みな}ここから出^でてください」と呼^よぶ

ばわつた。それゆえヨセフが兄弟^{きょうだい}たちに自^じ分^{ぶん}のことを明^あかした時^{とき}、ひとりも彼^{かれ}のそばに立^たっている者^{もの}はなかつた。二ヨセフは声^{こゑ}をあげて泣^ないた。エジプト^{エジプト}びとはこれ^{これ}を聞^きき、パロの家^{いえ}もこれを聞^きいた。三ヨセフは兄弟^{きょうだい}たちに言^いつた、「わたしはヨセフです。父^{ちち}はまだ生^いきながらえていますか」。兄弟^{きょうだい}たちは答^{こた}えることができなかった。彼^{かれ}らは驚^{おどろ}き恐^{おそ}れたからである。

四ヨセフは兄弟^{きょうだい}たちに言^いつた、「わたしに近^{ちか}寄^よつてください」。彼^{かれ}らが近^{ちか}寄^よつたので彼^{かれ}は言^いつた、「わたしはあなたがたの弟^{おとうと}ヨセフです。あなたがたがエジプトに売^うつた者^{もの}です。五しかしわたしをここに売^うつたのを嘆^{なげ}くことも、悔^{くや}むこともいりません。神^{かみ}は命^{いのち}を救^{すく}うために、あなたがたよりききにわたしをつかわされたのです。六この二年^{ねん}の間^{あいだ}、国^{くに}中にききんがあつたが、なお五年^{ごねん}の間^{あいだ}は耕^{たがや}すことも刈^かり入^いれることもないでしょう。七神^{かみ}はあなたがたのすえを地^ちに残^{のこ}すため、また大^{おお}いなる救^{すくい}をもつてあなたがたの命^{いのち}を助^{たす}けるために、わたしをあなたがたよりききにつかわされたのです。八それゆえわたしをここにつかわしたのはあなたがたではなく、神^{かみ}です。神^{かみ}はわたしをパロの父^{ちち}とし、その全家^{ぜんか}の主^{しゅ}とし、またエジプト^{エジプト}全国^{ぜんこく}のつかさとされました。九あなたがたは父^{ちち}のもとに急^{いそ}ぎ上^{のぼ}つて言^いいなさい、『あなたがたの子^こヨセフが、こう言^いいました。神^{かみ}がわたしをエジプト^{エジプト}全国^{ぜんこく}の主^{しゅ}とされたから、ためらわずにわたしの所^{ところ}へ下^{くだ}つてきなさい。一〇あなたはゴセンの地^ちに住^すみ、あなたも、あなたの子^こらも、孫^{まご}たちも、羊^{ひつじ}

も牛も、その他のものもみな、わたしの近くにおらせます。二
きぎんはなお五年つづきますから、あなたも、家族も、その他の
ものも、みな困らないように、わたしはそこで養いましょう。一
二あなたがたと弟ベニヤミンが目に見るとおり、あなたがたとに
口から語っているのはこのわたしです。三あなたがたはエジプ
トでの、わたしのいつさいの榮えと、あなたがたが見るいつさい
の事をわたしの父に告げ、急いでわたしの父をここへ連れ下り
なさい。四そしてヨセフは弟ベニヤミンのくびを抱いて泣
き、ベニヤミンも彼のくびを抱いて泣いた。五またヨセフはす
べての兄弟たちに口づけし、彼らを抱いて泣いた。そして後、
兄弟たちは彼と語った。

六時に、「ヨセフの兄弟たちがきた」と言ううわさがパロの家
に聞えたので、パロとその家来たちとは喜んだ。七パロはヨセ
フに言った、「兄弟たちに言いなさい、『あなたがたは、こうし
なさい。獸に荷を負わせてカナンの地へ行き、一八父と家族と
を連れてわたしのものとへきなさい。わたしはあなたがたに、エ
ジプトの地の良い物を与えます。あなたがたは、この国の最も
良いものを食べるでしょう』。九また彼らに命じなさい、『あな
たがたは、こうしなさい。幼な子たちと妻たちのためにエジプ
トの地から車をもって行き、父を連れてきなさい。二〇家財に心
を引かれてはなりません。エジプト全国の良い物は、あなたが
たのものだからです』」。

三イスラエルの子らはそのようにした。ヨセフはパロの命に
従つて彼らに車を与え、また途中の食料をも与えた。三また
めいめいに晴着を与えたが、ベニヤミンには銀三百シケルと
晴着五着とを与えた。四また彼は父に次のようなものを贈つ
た。すなわちエジプトの良い物を負わせたるば十頭と、穀物、パ
ン及び父の道中の食料を負わせた雌ろば十頭。五こうしてヨ
セフは兄弟たちを送り去らせ、彼らに言った、「途中で争つては
なりません。六彼らはエジプトから上つてカナンの地に入
り、父ヤコブのもとへ行つて、七彼に言った、「ヨセフはなお生
きていてエジプト全国のつかさです」。ヤコブは気が遠くなつ
た。彼らの言うことが信じられなかつたからである。八そこ
で彼らはヨセフが語つた言葉を残らず彼に告げた。父ヤコブは
ヨセフが自分を乗せるために送つた車を見て元気づいた。九
そしてイスラエルは言った、「満足だ。わが子ヨセフがまだ生き
ている。わたしは死ぬ前に行つて彼を見よう」。

第四十六章

一イスラエルはその持ち物をことごとく携えて旅立ち、ベエル
シバに行つて、父イサクの神に犠牲をささげた。二この時、神は
夜の幻のうちにイスラエルに語つて言われた、「ヤコブよ、ヤコ
ブよ」。彼は言った、「ここにいます」。三神は言われた、「わたし

は神、あなたの父の神である。エジプトに下るのを恐れてはならない。わたしはあそこであなを大いなる国民にする。四わたしはあなたと一緒にエジプトに下り、また必ずあなたを導き上るであろう。ヨセフが手ずからあなたの目を閉じるであろう。五そしてヤコブはベエルシバを立つた。イスラエルの子らはヤコブを乗せるためにパロの送った車に、父ヤコブと幼な子たちと妻たちを乗せ、六またその家畜とカナンので得た財産を携え、ヤコブとその子孫は皆ともにエジプトへ行つた。セこうしてヤコブはその子と、孫および娘と孫娘などその子孫をみな連れて、エジプトへ行つた。

ハイスラエルの子らでエジプトへ行つた者の名は次のとおりである。すなわちヤコブとその子らであるが、ヤコブの長子はルベン。カルベンの子らはハノク、パル、ヘヅロン、カルミ。一〇シメオンの子らはエムエル、ヤミン、オハデ、ヤキン、ゾハル及びカナンの女の産んだ子シャウル。一二レビの子らはゲルシオン、コハテ、メラリ。一三ユダの子らはエル、オナン、シラ、ペレヅ、ゼラ。エルとオナンはカナンの地で死んだ。ペレヅの子らはヘヅロンとハムル。一四イッサカルの子らはトラ、プワ、ヨブ、シムロン。一五ゼブルンの子らはセレデ、エロン、ヤリエル。一六これらと娘デナとはレアがパダンアラムでヤコブに産んだ子らである。その子らと娘らは合わせて三十三人。一七ガドの子らはゼボン、ハギ、シユニ、エツボン、エリ、アロデ、アレリ。一

セアセルの子らはエムナ、イシワ、イスイ、ベリアおよび妹サラ。ベリアの子らはヘベルとマルキエル。一八これらはラバンが娘レアに与えたジルパの子らである。彼女はこれらをヤコブに産んだ。合わせて十六人。一九ヤコブの妻ラケルの子らはヨセフとベニヤミンとである。二〇エジプトの国でヨセフにマナセとエフライムとが生れた。これはオンの祭司ポテベラの娘アセナテが彼に産んだ者である。二一ベニヤミンの子らはベラ、ベケル、アシベル、ゲラ、ナアマン、エヒ、ロシ、ムツピム、ホパム、アルデ。二二これらはラケルがヤコブに産んだ子らである。合わせて十四人。二三ダンの子はホシム。二四ナフタリの子らはヤジエル、グニ、エゼル、シレム。二五これらはラバンが娘ラケルに与えたビルハの子らである。彼女はこれらをヤコブに産んだ。合わせて七人。二六ヤコブと共にエジプトへ行つたすべての者、すなわち彼の身から出た者はヤコブの子らの妻をのぞいて、合わせて六十六人であつた。二七エジプトでヨセフに生れた子がふたりあつた。エジプトへ行つたヤコブの家の者は合わせて七十人であつた。

二八さてヤコブはユダをさきにヨセフにつかわして、ゴセンで会おうと言わせた。そして彼らはゴセンの地へ行つた。二九ヨセフは車を整えて、父イスラエルを迎えるためにゴセンに上り、父に会い、そのくびを抱き、くびをかかえて久しく泣いた。三〇時に、イスラエルはヨセフに言つた、「あなたがなお生きていて、わ

たしはあなたの顔を見たので今は死んでもよい」。三ヨセフは兄弟たちと父の家族とに言った、「わたしは上つてパロに言う、『カナンの地にいたわたしの兄弟たちと父の家族とがわたしの所へきました。三この者らは羊を飼う者、家畜の牧者で、その羊、牛および持ち物をみな携えてきました』。三もしパロがあなたがたを召して、『あなたがたの職業は何か』と言われたら、三四『しもべらは幼い時から、ずっと家畜の牧者です。われわれも、われわれの先祖もそうです』と言いなさい。そうすればあなたがたはゴセンの地に住むことができましょう。羊飼はすべて、エジプトびとの忌む者だからです」。

第四十七章

一ヨセフは行って、パロに言った、「わたしの父と兄弟たち、その羊、牛およびすべての持ち物がカナンの地からきて、今ゴセンの地におります」。ニそしてその兄弟のうちの五人を連れて行って、パロに会わせた。三パロはヨセフの兄弟たちに言った、「あなたがたの職業は何か」。彼らはパロに言った、「しもべらは羊を飼う者です。われわれも、われわれの先祖もそうです」。四彼らはまたパロに言った、「この国に寄留しようとしてきました。カナンの地はききんが激しく、しもべらの群れのための牧草がないのです。どうかしもべらをゴセンの地に住ませてく

ださい」。五パロはヨセフに言った、「あなたの父と兄弟たちとがあなたのところに来た。六エジプトの地はあなたの前にある。地の最も良い所にあなたの父と兄弟たちとを住ませなさい。ゴセンの地に彼らを住ませなさい。もしあなたが彼らのうちに有能な者があるのを知っているなら、その者にわたしの家畜をつかさどらせなさい」。

七そこでヨセフは父ヤコブを導いてパロの前に立たせた。ヤコブはパロを祝福した。八パロはヤコブに言った、「あなたの年はいくつか」。九ヤコブはパロに言った、「わたしの旅路のとしきは、百三十年です。わたしのよわいの日はわずかで、ふしあわせで、わたしの先祖たちのよわいの日と旅路の日には及びません」。一〇ヤコブはパロを祝福し、パロの前を去った。一一ヨセフはパロの命じたように、父と兄弟たちとのすまいを定め、彼らにエジプトの国で最も良い地、ラメセスの地を所有として与えた。三またヨセフは父と兄弟たちと父の全家とに、家族の数にしたがい、食物を与えて養った。

三さて、ききんが非常に激しかったので、全地に食物がなく、エジプトの国もカナンの国も、ききんのために衰えた。一四それでヨセフは人々が買った穀物の代金としてエジプトの国とカナンの国にあった銀をみな集め、その銀をパロの家に納めた。一五こうしてエジプトの国とカナンの国に銀が尽きたとき、エジプトびとはみなヨセフのもとにきて言った、「食物をください」。

銀が尽きたからとて、どうしてあなたの前で死んでよいでしょう。一六ヨセフは言った、「あなたがたの家畜を出さない。銀が尽きたのなら、あなたがたの家畜と引き替えて食物をわたそう」。一七彼らはヨセフの所へ家畜をひいてきたので、ヨセフは馬と羊の群れと牛の群れ及びろばと引き替えて、食物を彼らにわたした。こうして彼はその年、すべての家畜と引き替えた食物で彼らを養った。一八やがてその年は暮れ、次の年、人々はまたヨセフの所へきて言った、「わが主には何事も隠しませんが、われわれの銀は尽き、獣の群れもわが主のものになって、われわれのからだも田地のほかはわが主の前に何も残っていません。一九われわれはどうして田地と一緒に、あなたの目の前で減んでよいでしょう。われわれと田地とを食物と引き替えて買ってください。われわれは田地と一緒にパロの奴隷となりましょう。また種をください。そうすればわれわれは生きながらえ、死を免れて、田地も荒れないでしょう」。

二〇そこでヨセフはエジプトの田地をみなパロのために買い取った。ききんがエジプトびとに、きびしかったので、めいめいその田畑を売ったからである。こうして地はパロのものとなった。二一そしてヨセフはエジプトの国境のこの端からかの端まで民を奴隷とした。二二ただ祭司の田地は買い取らなかった。祭司にはパロの給与があつて、パロが与える給与で生活したので、その田地を売らなかったからである。二三ヨセフは民に

言った、「わたしはきよう、あなたがたとその田地とを買い取つて、パロのものとした。あなたがたに種をあげるから地にまきなさい。二四收穫の時は、その五分の一をパロに納め、五分の四を自分のものとして田畑の種とし、自分と家族の食糧とし、また子供の食糧としなさい」。二五彼らは言った、「あなたはわれわれの命をお救いください。どうかわが主の前に恵みを得させてください。われわれはパロの奴隷になりましょう」。二六ヨセフはエジプトの田地について、收穫の五分の一をパロに納めることをおきてとしたが、それは今日に及んでいる。ただし祭司の田地だけはパロのものとならなかった。

二七さてイスラエルはエジプトの国でゴセンの地に住み、そこで財産を得、子を生み、大いにふえた。二八ヤコブはエジプトの国で十七年生きながらえた。ヤコブのよわいの日は百四十七年であつた。

二九イスラエルは死ぬ時が近づいたので、その子ヨセフを呼んで言った、「もしわたしがあなたの前に恵みを得るなら、どうか手をわたしのもの下に入れて誓い、親切と誠実をもつてわたしを取り扱ってください。どうかわたしをエジプトには葬らないでください。三〇わたしが先祖たちと共に眠るときには、わたしをエジプトから運び出して先祖たちの墓に葬ってください」。ヨセフは言った、「あなたの言われたようにいたします」。三二ヤコブがまた、「わたしに誓ってください」と言ったので、彼

は誓った。イスラエルは床のかしらで拝んだ。

第四八章

「これらの事の後に、「あなたの父は、いま病氣です」とヨセフに告げる者があつたので、彼はふたりの子、マナセとエフライムとを連れて行つた。二時に人がヤコブに告げて、「あなたの子ヨセフがあなたのもとにきました」と言つたので、イスラエルは努めて床の上にすわつた。ミそしてヤコブはヨセフに言つた、「先に全能の神がカナンの地ルズでわたしに現れ、わたしを祝福して、四言われた、『わたしはおまえに多くの子を得させ、おまえをふやし、おまえを多くの国民としよう。また、この地をおまえの後の子孫に与えて永久の所有とさせる』。五エジプトにいるあなたの所にわたしが来る前に、エジプトの国で生れたあなたのふたりの子はいまわたしの子とします。すなわちエフライムとマナセとはルベンとシメオンと同じようにわたしの子とします。六ただし彼らの後にあなたに生れた子らはあなたのものとなります。しかし、その嗣業はその兄弟の名で呼ばれるでしょう。七わたしはパダンから帰つて来る途中ラケルはカナンの地で死に、わたしは悲しんだ。そこはエフライムに行くまでには、なお隔たりがあつた。わたしはエフライム、すなわちベツレヘムへ行く道のかたわらに彼女を葬つた」。

八ところで、イスラエルはヨセフの子らを見て言つた、「これはだれですか」。九ヨセフは父に言つた、「神がここでわたしにくださつた子どもです」。父は言つた、「彼らをわたしの所に連れてきて、わたしに祝福させてください」。一〇イスラエルの目は老齡のゆえに、かすんで見えなかつたが、ヨセフが彼らを父の所に近寄せたので、父は彼らに口づけし、彼らを抱いた。一そしてイスラエルはヨセフに言つた、「あなたの顔が見られようとは思わなかつたのに、神はあなたの子らをもわたしに見させてくださった」。二そこでヨセフは彼らをヤコブのひざの間から取り出し、地に伏して拝した。三ヨセフはエフライムを右の手に取つてイスラエルの右の手に向かわせ、マナセを左の手に取つてイスラエルの右の手に向かわせ、ふたりを近寄せた。四すると、イスラエルは右の手を伸べて弟エフライムの頭に置き、左の手をマナセの頭に置いた。マナセは長子であるが、こ

とさらそうに手を置いたのである。五そしてヨセフを祝福して言つた、

「わが先祖アブラハムとイサクの仕えた神、
生れてからきようまでわたしを養われた神、

一六すべての災からわたしをあがなわれたみ使よ、
この子供たちを祝福してください。

またわが名と先祖アブラハムとイサクの名とが、
彼らによつて唱えられますように、

また彼らが地の上にふえひろがりましますように」。

「セヨセフは父が右の手をエフライムの頭に置いていたのを見て不満に思い、父の手を取ってエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。ハそしてヨセフは父に言った、「父よ、そうではありません。こちらが長子です。その頭に右の手を置いてください」。一ル父は拒んで言った、「わかつている。子よ、わたしにはわかつている。彼もまた一つの民となり、また大いなる者となるであろう。しかし弟は彼よりも大いなる者となり、その子孫は多くの国民となるであろう」。二こうして彼はこの日、彼らを祝福して言った、

「あなたを指して、イスラエルは、人を祝福して言うであろう、

『神があなたをエフライムのごとく、

またマナセのごとくにせられるように』」。

このように、彼はエフライムをマナセの先に立てた。三イスラエルはまたヨセフに言った、「わたしはやがて死にます。しかし、神はあなたがたと共におられて、あなたがたを先祖の国に導き返されるであろう。三なおわたしは一つの分を兄弟よりも多くあなたに与える。これはわたしがつるぎと弓とを持ってアモリびとの手から取ったものである」。

第四十九章

「ヤコブはその子ら呼んで言った、「集まりなさい。後の日に、あなたがたの上に起ることを、告げましょう、

ニヤコブの子らよ、集まって聞け。

父イスラエルのことばを聞け。

ミルベンよ、あなたはわが長子、

わが勢い、わが力のはじめ、

威光のすぐれた者、権力のすぐれた者。

四しかし、沸き立つ水のようにだから、

もはや、すぐれた者ではあり得ない。

あなたは父の床に上って汚した。

ああ、あなたはわが寢床に上った。

五シメオンとレビとは兄弟。

彼らのつるぎは暴虐の武器。

六わが魂よ、彼らの会議に臨むな。

わが栄えよ、彼らのつどいに連なるな。

七彼らは怒りに任せて人を殺し、

ほしいままに雄牛の足の筋を切った。

八彼らの怒りは、激しいゆえにのろわれ、

彼らの憤りは、はなはだしいゆえにのろわれる。

わたしは彼らをヤコブのうちに分け、

イスラエルのうちに散らそう。

ハユダよ、兄弟たちはあなたをほめる。

あなたの手は敵のくびを押え、

父の子らはあなたの前に身をかがめるであろう。

ユダは、ししの子。

わが子よ、あなたは獲物をもって上つて来る。

彼は雄じしのようにうずくまり、

雌じしのように身を伏せる。

だれがこれを起すことができよう。

一〇つえはユダを離れず、

立法者のつえはその足の間を離れることなく、

シロの来る時までには及ぶであろう。

もろもろの民は彼に従う。

二彼はそのろばの子をぶどうの木につなぎ、

その雌ろばの子を良きぶどうの木につなぎ、

彼はその衣服をぶどうの酒で洗い、

その着物をぶどうの汁で洗うであろう。

三その目はぶどうの酒によって赤く、

その歯は乳によって白い。

四ゼブルンは海べに住み、

舟の泊まる港となつて、

その境はシドンに及ぶであろう。

四イツサカルはたくましいろば、
彼は羊の通りの間に伏している。

五彼は定住の地を見て良しとし、

その国を見て楽しとした。

彼はその肩を下げてにない、

奴隸となつて追ひ使われる。

六ダンはおのれの民をさばくであろう、

イスラエルのほかの部族のように。

七ダンは道のかたわらのへび、

道のほとりのまむし。

馬のかかとをかねで、

乗る者をうしろに落とすであろう。

八主よ、わたしはあなたの救を待ち望む。

九ガドには略奪者が迫る。

しかし彼はかえつて敵のかかちに迫るであろう。

一〇アセルはその食物がゆたかで、

王の美味をいだすであろう。

一ナフタリは放たれた雌しか、

彼は美しい子じかを生むであろう。

三ヨセフは実を結ぶ若木、

泉のほとりの実を結ぶ若木。

その枝は、かきねを越えるであろう。

三 射る者は彼を激しく攻め、
彼を射、彼をいたく悩ました。

二四 しかし彼の弓はなお強く、
彼の腕は素早い。

これはヤコブの全能者の手により、
イスラエルの岩なる牧者の名により、

二五 あなたを助ける父の神により、
また上なる天の祝福、

下に横たわる淵の祝福、
乳ぶさと胎の祝福をもつて、

あなたを恵まれる全能者による。

二六 あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり、
永久の丘の賜物にまさる。

これらの祝福はヨセフのかしらに歸し、
その兄弟たちの君たる者の頭の頂に歸する。

二七 ベニヤミンはかき裂くおおかみ、
朝にその獲物を食らい、

夕にその分捕物を分けるであろう。

二八 さてこれらはイスラエルの十二の部族である。そしてこ
れは彼らの父が彼らに語り、彼らを祝福したもので、彼は祝福
すべきところに従って、彼らのおのおのを祝福した。二九 彼はま
た彼らに命じて言った、「わたしはわが民に加えられようとして

いる。あなたがたはヘテびとエフロンの畑にあるほら穴に、わ
たしの先祖たちと共にわたしを葬ってください。三〇 そのほら
穴はカナンの地のマムレの東にあるマクペラの畑にあり、アブ
ラハムがヘテびとエフロンから畑と共に買い取り、所有の墓地
としたもので、三二そこにアブラハムと妻サラとが葬られ、イサ
クと妻リベカもそこに葬られたが、わたしはまたそこにレアを
葬った。三三あの畑とそこにあるほら穴とはヘテの人々から
買ったものです。三三こうしてヤコブは子らに命じ終つて、足
を床におさめ、息絶えて、その民に加えられた。

第五〇章

一 ヨセフは父の顔に伏して泣き、口づけした。二 そしてヨセフは
彼のしもべである医者たちに、父に薬を塗ることを命じたので、
医者たちはイスラエルに薬を塗った。三 このために四十日を費
した。薬を塗るにはこれほどの日数を要するのである。エジ
プトびとは七十日の間、彼のために泣いた。

四 彼のために泣く日が過ぎて、ヨセフはパロの家の者に言った、
「今もしわたしがあなたがたの前に恵みを得るなら、どうかパロ
に伝えてください。五『わたしの父はわたしに誓わせて言いまし
た『わたしはやがて死にます。カナンの地に、わたしが掘って置
いた墓に葬ってください』。それで、どうかわたしを上つて行

かせ、父を葬らせてください。そうすれば、わたしはまた帰ってきます』。六パロは言った、「あなたの父があなたに誓わせたように上つて行って彼を葬りなさい」。七そこでヨセフは父を葬るために上つて行った。彼と共に上つた者はパロのもろもろの家来たち、パロの家の長老たち、エジプトの国のもろもろの長老たち、ハヨセフの全家とその兄弟たち及びその父の家族であつた。ただ子供と羊と牛はゴセンの地に残した。九また戦車と騎兵も彼と共に上つたので、その行列はたいそう盛んであつた。一〇彼らはヨルダンの向こうのアタデの打ち場に行き着いて、そこで大いに嘆き、非常に悲しんだ。そしてヨセフは七日の間父のために嘆いた。二その地の住民、カナンびとがアタデの打ち場の嘆きを見て、「これはエジプトびとの大いなる嘆きだ」と言つたので、その所の名はアベル・ミツライムと呼ばれた。これはヨルダンの向こうにある。ニヤコブの子らは命じられたようにヤコブにおこなつた。三すなわちその子らは彼をカナンの地へ運んで行って、マクペラの畑のほら穴に葬つた。このほら穴はマムレの東にあつて、アブラハムがヘテびとエフロンから畑と共に買つて、所有の墓地としたものである。四ヨセフは父を葬つた後、その兄弟たち及びすべて父を葬るために一緒に上つた者と共にエジプトに歸つた。

一五ヨセフの兄弟たちは父の死んだのを見て言つた、「ヨセフはことによるとわれわれを憎んで、われわれが彼にしたすべての

悪に、仕返しするに違ひない」。一六そこで彼らはことづけしてヨセフに言つた、「あなたの父は死ぬ前に命じて言われました、一七『おまえたちはヨセフに言いなさい、「あなたの兄弟たちはあなたに悪をおこなつたが、どうかそのとがと罪をゆるしてやつてください』」。今どうかあなたの父の神に仕えるしもべらのとがをゆるしてください」。ヨセフはこの言葉を聞いて泣いた。一八やがて兄弟たちもきて、彼の前に伏して言つた、「このとおり、わたしたちはあなたのしもべです」。一九ヨセフは彼らに言つた、「恐れることはいりません。わたしが神に代ることができません。二〇あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて、今日のように多くの民の命を救はうと計らわれました。二一それゆえ恐れることはいりません。わたしはあなたがたとあなたがたの子供たちを養ひましょう」。彼は彼らを慰めて、親切に語つた。

二二このようにしてヨセフは父の家族と共にエジプトに住んだ。そしてヨセフは百十年生きながらえた。二三ヨセフはエフライムの三代の子孫を見た。マナセの子マキルの子らも生れてヨセフのひざの上に置かれた。二四ヨセフは兄弟たちに言つた、「わたしはやがて死にます。神は必ずあなたがたを顧みて、この国から連れ出し、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地に導き上られるでしょう」。二五さらにヨセフは、「神は必ずあなたがたを顧みられる。その時、あなたがたはわたしの骨をここから携

え上りなさい」と言^いつてイスラエルの子らに誓^{ちか}わせた。二六こう
してヨセフは百十歳^{さい}で死^しんだ。彼^{かれ}らはこれに薬^{くすり}を塗^ぬり、棺^{かん}に納^{おさ}
めて、エジプトに置^おいた。

出エジプト記

第一章

一 さて、ヤコブと共に、おのおのその家族を伴つて、エジプトへ行つたイスラエルの子らの名は次のとおりである。ニすなわちルベン、シメオン、レビ、ユダ、ミイツサカル、ゼブルン、ベニヤミン、四ダン、ナフタリ、ガド、アセルであつた。五 ヤコブの腰から出たものは、合わせて七十人。ヨセフはすでにエジプトにいた。六 そして、ヨセフは死に、兄弟たちも、その時代の人々もみな死んだ。七 けれどもイスラエルの子孫は多くの子を生み、ますますふえ、はなはだ強くなつて、国に満ちるようになった。八 ここに、ヨセフのことを知らない新しい王が、エジプトに起つた。九 彼はその民に言つた、「見よ、イスラエルびとなるこの民は、われわれにとつて、あまりにも多く、また強すぎる。一〇 さあ、われわれは、拔かりなく彼らを取り扱おう。彼らが多くなり、戦いの起るとき、敵に味方して、われわれと戦い、ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう」。二 そこでエジプトびとは彼らの上に監督をおき、重い労役をもつて彼らを苦しめた。彼らはパロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。三 しかしイスラエルの人々が苦しめられるにしたがつて、いよいよふえひろがるので、彼らはイスラエルの人々のゆえに

恐れをなした。三 エジプトびとはイスラエルの人々をきびしく使い、一四 つらい務をもつてその生活を苦しめた。すなわち、しつこいこね、れんが作り、および田畑のあらゆる務に当らせたが、そのすべての労役はきびしかつた。

一五 またエジプトの王は、ヘブルの女のために取上げをする助産婦でひとり名をシフラといい、他のひとは名をプアという者にさとして、一六 言つた、「ヘブルの女のために助産をするとき、産み台の上を見て、もし男の子ならばそれを殺し、女の子ならば生かしておきなさい」。一七 しかし助産婦たちは神をおそれ、エジプトの王が彼らに命じたようにはせず、男の子を生かしておいた。一八 エジプトの王は助産婦たちを召して言つた、「あなたがたはなぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか」。一九 助産婦たちはパロに言つた、「ヘブルの女はエジプトの女とは違い、彼女たちは健やかで助産婦が行く前に産んでしまいます」。二〇 それで神は助産婦たちに恵みをほどこされた。そして民はふえ、非常に強くなつた。二一 助産婦たちは神をおそれたので、神は彼女たちの家を栄えさせられた。二二 そこでパロはそのすべての民に命じて言つた、「ヘブルびとに男の子が生れたならば、みなナイル川に投げこめ。しかし女の子はみな生かしておけ」。

第二章

一 さて、レビの家のひとりの人が行つてレビの娘をめとつた。二 女はみごもつて、男の子を産んだが、その麗しいのを見て、三月のあいだ隠していた。三 しかし、もう隠しきれなくなつたので、パピルスで編んだかごを取り、それにアスファルトと樹脂とを塗つて、子をその中に入れ、これをナイル川の岸の葦の中においた。四 その姉は、彼がどうされるかを知ろうと、遠く離れて立つていた。五 ときにパロの娘が身を洗おうと、川に降りてきた。侍女たちは川べを歩いていたら、彼女は、葦の中にかごのあるのを見て、つかえめをやり、それを取つてこさせ、六 あけて見ると子供がいた。見よ、幼な子は泣いていた。彼女はかわいそうに思つて言つた、「これはヘブルびとの子供です」。七 そのとき幼な子の姉はパロの娘に言つた、「わたしが行つてヘブルの女のうちから、あなたのために、この子に乳を飲ませるうばを呼んでまいりましょうか」。八 パロの娘が「行つてきてください」と言うのと、少女は行つてその子の母を呼んできた。九 パロの娘は彼女に言つた、「この子連れて行つて、わたしに代り、乳を飲ませてください。わたしはその報酬をさしあげます」。女はその子を引き取つて、これに乳を与えた。一〇 その子が成長したので、彼女はこれをパロの娘のところに連れて行つた。そして彼はその子となつた。彼女はその名をモーセと名づけて言つた、「水の

中からわたしが引き出したからです」。

二 モーセが成長して後、ある日のこと、同胞の所に出て行つて、そのはげしい労役を見た。彼はひとりのエジプトびとが、同胞のひとりであるヘブルびとを打つのを見たので、三 左右を見まわし、人のいないのを見て、そのエジプトびとを打ち殺し、これを砂の中に隠した。四 次の日また出て行つて、ふたりのヘブルびとが互に争つてゐるのを見、悪い方の男に言つた、「あなたはなぜ、あなたの友を打つのですか」。五 彼は言つた、「だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのですか。エジプトびとを殺したように、あなたはわたしを殺そうと思ふのですか」。モーセは恐れた。そしてあの事がきつと知れたのだと思つた。六 パロはこの事を聞いて、モーセを殺そうとした。

しかしモーセはパロの前をのがれて、ミデヤンの地に行き、井戸のかたわらに座していた。七 さて、ミデヤンの祭司に七人の娘があつた。彼女たちはきて水をくみ、水槽にみたして父の羊の群れに飲ませようとしたが、八 羊飼たちがきて彼女らを追い払つたので、モーセは立ち上がつて彼女たちを助け、その羊の群れに水を飲ませた。九 彼女たちが父リウエルのところへ帰つた時、父は言つた、「きょうは、どうして、こんなに早く帰つてきたのか」。一〇 彼女たちは言つた、「ひとりのエジプトびとが、わたしたちを羊飼たちの手から助け出し、そのうえ、水をたく

さんくんで、羊の群れに飲ませてくれたのです。二〇彼は娘たちと言った、「そのかたはどこにおられるか。なぜ、そのかたをおいてきたのか。呼んできて、食事をさしあげなさい。二一モーセがこの人と共にいることを好んだので、彼は娘のチツポラを妻としてモーセに与えた。二二彼女が男の子を産んだので、モーセはその名をゲルシヨムと名づけた。「わたしは外国に寄留者となっている」と言ったからである。二三多くの日を経て、エジプトの王は死んだ。イスラエルの人々は、その苦役の務のゆえにうめき、また叫んだが、その苦役のゆえの叫びは神に届いた。二四神は彼らのうめきを聞き、神はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚え、二五神はイスラエルの人々を顧み、神は彼らをしろしめされた。

第三章

一モーセは妻の父、ミデヤンの祭司エテロの羊の群れを飼っていたが、その群れを荒野の奥に導いて、神の山ホレブにきた。二ときに主の使は、しばの中の炎のうちに彼に現れた。彼が見ると、しばは火に燃えているのに、そのしばはなくならなかった。三モーセは言った、「行ってこの大きな見ものを見、なぜしばが燃えてしまわないかを知ろう」。四主は彼がきて見定ようとするのを見、神はしばの中から彼を呼んで、「モーセよ、モーセよ」と

言われた。彼は「ここにいます」と言った。五神は言われた、「ここに近づいてはいけない。足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである」。六また言われた、「わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した。

七主はまた言われた、「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを、つぶさに見、また追いつかう者のゆえに彼らの叫ぶのを聞いた。わたしは彼らの苦しみを知っている。八わたしは下つて、彼らをエジプトびとの手から救い出し、これをかの地から導き上つて、良い広い地、乳と蜜の流れる地、すなわちカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとのおる所に至らせようとしている。九いまイスラエルの人々の叫びがわたしに届いた。わたしはまたエジプトびとが彼らをしえたげる、そのしえたげを見た。一〇さあ、わたしは、あなたをパロにつかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」。二モーセは神に言った、「わたしは、いったい何者でしょう。わたしはパロのところへ行つて、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか」。三神は言われた、「わたしは必ずあなたと共にいる。これが、わたしのあなたをつかわしたしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神に仕えるであろう」。

「三 モーセは神に言った、『わたしはイスラエルの人々のところへ行つて、彼らに『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と言うとき、彼らが『その名はなんというのですか』とわたしに聞かざらば、なんと答えましようか。』四 神はモーセに言われた、『わたしは、有つて有る者』。また言われた、『イスラエルの人々にこう言いなさい、『わたしは有る』というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と。』五 神はまたモーセに言われた、『イスラエルの人々にこう言いなさい、『あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と。これは永遠にわたしの名、これは世々のわたしの呼び名である。』六 あなたは行つて、イスラエルの長老たちを集めて言いなさい、『あなたがたの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である主は、わたしに現れて言われました、『わたしはあなたがたを顧み、あなたがたがエジプトでされている事を確かに見た。』七 それでわたしはあなたがたを、エジプトの悩みから導き出して、カナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの地、乳と蜜の流れる地へ携え上ろうと決心した』と。』八 彼らはあなたの声に聞き従うであろう。あなたはイスラエルの長老たちと一緒にエジプトの王のところへ行つて言いなさい、『ヘブルびとの神、主がわたしたちに現れました。それで、わたしたちを、三日

の道のりほど荒野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげることを許してください』と。』九 しかし、エジプトの王は強い手をもつて迫らなければ、あなたがたを行かせないのをわたしは知っている。』一〇 それで、わたしは手を伸べて、エジプトのうちに行動おとす、さまざまの不思議をもつてエジプトを打とう。その後には彼はあなたがたを去らせるであろう。』二 わたしはこの民にエジプトびとの好意を得させる。あなたがたは去るときに、むなし手で去つてはならない。』三 女はみな、その隣の女と、家に宿っている女に、銀の飾り、金の飾り、また衣服を求めなさい。そしてこれらを、あなたがたのむすこ、娘に着けさせなさい。このようにエジプトびとのものを奪い取りなさい。』

第四章

「モーセは言った、『しかし、彼らはわたしを信ぜず、またわたしの声に聞き従わないで言うでしょう、『主はあなたに現れなかった』と。』二 主は彼に言われた、『あなたの手にあるそれは何か』。彼は言った、『つえです』。』三 また言われた、『それを地に投げなさい』。彼がそれを地に投げると、へびになったので、モーセはその前から身を避けた。』四 主はモーセに言われた、『あなたの手を伸ばして、その尾を取りなさい。』——そこで手を伸ばし

てそれを取ると、手のなかでつえとなつた。――五これは、彼らの先祖たちの神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が、あなたに現れたのを、彼らに信じさせるためである。六主はまた彼に言われた、「あなたの手をふところに入れないさい。七彼が手をふところに入れ、それを出すと、手は、らい病にかかつて、雪のように白くなつていた。八主は言われた、「手をふところにもどしなさい」。彼は手をふところにもどし、それをふところから出して見ると、回復して、もとの肉のようになつていた。ハ主は言われた、「彼らがもしあなたを信ぜず、また初めのしるしを認めないならば、後のしるしは信じるであろう。九彼らがもしこの二つのしるしをも信ぜず、あなたの声に聞き従わないならば、あなたはナイル川の水を取つて、かわいた地に注ぎなさい。あなたがナイル川から取つた水は、かわいた地で血となるであろう」。

一〇モーセは主に言つた、「ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、しもべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです」。一一主は彼に言われた、「だれが人に口を授けたのか。おし、耳しい、目あき、目しいにだれがするのか。主なるわたしではないか。一二それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあつて、あなたの言うべきことを教えるであろう」。一三モーセは言つた、「ああ、主よ、どうか、ほかの適当な人をおつかわしてください」。一四そこで、主は

モーセにむかつて怒りを発して言われた、「あなたの兄弟レビとアロンがいるではないか。わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている。見よ、彼はあなたに会おうとして出てきている。彼はあなたを見て心に喜ぶであろう。一五あなたは彼に語つて言葉をその口に授けなさい。わたしはあなたの口と共にあり、彼の口と共にあつて、あなたがたのなすべきことを教え、一六彼はあなたに代つて民に語るであろう。彼はあなたの口となり、あなたは彼のために、神に代るであろう。一七あなたはそのつえを手執り、それをもつて、しるしを行いなさい」。

一八モーセは妻の父エテロのところへ歸つて彼に言つた、「どうかわたしを、エジプトにいる身うちの者のところへ歸らせ、彼らがまだ生きながらえているか、どうかを見させてください」。エテロはモーセに言つた、「安んじて行きなさい」。一九主はミデヤンでモーセに言われた、「エジプトに歸つて行きなさい。あなたの命を求めた人々はみな死んだ」。二〇そこでモーセは妻と子供たちをとり、ろばに乗せて、エジプトの地に歸つた。モーセは手に神のつえを執つた。

二一主はモーセに言われた、「あなたがエジプトに歸つたとき、わたしはあなたの手に授けた不思議を、みなパロの前で行いなさい。しかし、わたしが彼の心をかたくなにするので、彼は民を去らせないであろう。二二あなたはパロに言いなさい、『主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。二

「わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい。もし彼を去らせるのを拒むならば、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺すであろう」と。

二画さてモーセが途中で宿っている時、主は彼に会って彼を殺そうとされた。二五その時チツポラは火打ち石の小刀を取って、その男の子の前の皮を切り、それをモーセの足につけて言った、「あなたはまことに、わたしにとって血の花婿です」。二六そこで、主はモーセをゆるされた。この時「血の花婿です」とチツポラが言ったのは割礼のゆえである。

二七主はアロンに言われた、「荒野に行つてモーセに会いなさい」。彼は行つて神の山でモーセに会い、これに口づけした。二八モーセは自分をつかわされた主のすべての言葉と、命じられたすべてのしるしをアロンに告げた。二九そこでモーセとアロンは行つてイスラエルの人々の長老たちをみな集めた。三〇そしてアロンは主がモーセに語られた言葉を、ことごとく告げた。また彼は民の前でしるしを行つたので、三一民は信じた。彼らは主がイスラエルの人々を顧み、その苦しみを見られたのを聞き、伏して礼拝した。

第五章

一その後、モーセとアロンは行つてパロに言った、「イスラエル

の神、主はこう言われる、『わたしの民を去らせ、荒野で、わたしのために祭をさせなさい』と」。二パロは言った、「主とはいつたい何者か。わたしがその声に聞き従つてイスラエルを去らせなければならぬのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」。三彼らは言った、「ヘブルびとの神がわたしたちに現れました。どうか、わたしたちを三日の道のりほど荒野に行かせ、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください。そうしなければ主は疫病か、つるぎをもつて、わたしたちを悩まされるからです」。四エジプトの王は彼らに言った、

「モーセとアロンよ、あなたがたは、なぜ民に働きをやめさせようとするのか。自分の労役につくがよい」。五パロはまた言った、「見よ、今や土民の数は多い。しかも、あなたがたは彼らに労役を休ませようとするのか」。六その日、パロは民を追い使う者と、民のかしらたちに命じて言った、セ「あなたがたは、れんがを作るためのわらを、もはや、今までのように、この民に与えてはならない。彼らに自分で行つて、わらを集めさせなさい。ハまた前に作っていた、れんがの数どおりに彼らに作らせ、それを減らしてはならない。彼らはなまけ者だ。それだから、彼らは叫んで、『行つてわたしたちの神に犠牲をささげさせよ』と言うのだ。九この人々の労役を重くして、働かせ、偽りの言葉に心を寄せさせぬようにしなさい」。

一〇そこで民を追い使う者たちと、民のかしらたちは出て行つ

て、民に言った、「パロはこう仰せられる、『あなたがたに、わらは与えない。ニ自分で行つて、見つかる所から、わらを取つて来るがよい。しかし働きは少しも減らしてはならない』と」。ニそこで民はエジプトの全地に散つて、わらのかわりに、刈り株を集めた。ニ追い使う者たちは、彼らをせき立てて言った、「わらがあつた時と同じように、あなたがたの働きの、日ごとの分を仕上げなければならない」。四パロの追い使う者たちがイスラエルの人々の上に立てたかしらたちは、打たれて、「なぜ、あなたがたは、れんが作りの仕事を、きょうも、前のように仕上げないのか」と言われた。

ニそこで、イスラエルの人々のかしらたちはパロのところに行き、叫んで言った、「あなたはなぜ、しもべどもにこんなことをなさるのですか。ニしもべどもは、わらを与えられず、しかも彼らはわたしに、『れんがは作れ』と言うのです。その上、しもべどもは打たれています。罪はあなたの民にあるのです」。ニパロは言った、「あなたがたは、なまけ者だ、なまけ者だ。それだから、『行つて、主に犠牲をささげさせよ』と言うのだ。ニさあ、行つて働きなさい。わらは与えないが、なおあなたがたは定めた数のれんがを納めなければならない」。ルイスラエルの人々のかしらたちは、「れんがの日ごとの分を減らしてはならない」と言われたので、悪い事態になったことを知った。ニ彼らがパロを離れて出てきた時、彼らに会おうとして立つていた

モーセとアロンに会つたので、ニ彼らに言った、「主があなたがたをござらんになつて、さばかれますように。あなたがたは、わたしたちをパロとその家来たちにきらわせ、つるぎを彼らの手に渡して、殺させようとしておられるのです」。

ニモーセは主のもとに帰つて言った、「主よ、あなたは、なぜこの民をひどい目にあわされるのですか。なんのためにわたしをつかわされたのですか。ニわたしがパロのもとに行つて、あなたの名によつて語つてからこのかた、彼はこの民をひどい目にあわせるばかりです。また、あなたは、すこしもあなたの民を救おうとなさいません」。

第六章

ニ主はモーセに言われた、「今、あなたは、わたしがパロに何をしようとしているかを見るであらう。すなわちパロは強い手にいられて、彼らを去らせるであらう。否、彼は強い手にいられて、彼らを国から追い出すであらう」。

ニ神はモーセに言われた、「わたしは主である。ニわたしはアブラハム、イサク、ヤコブには全能の神として現れたが、主という名では、自分を彼らに知らせなかった。四わたしはまたカナン之地、すなわち彼らが寄留したその寄留の地を、彼らに与えるという契約を彼らと立てた。五わたしはまた、エジプトびとが奴隷と

しているイスラエルの人々のうめきを聞いて、わたしの契約を思い出した。六それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい、『わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトびとの労役の下から導き出し、奴隷の務から救い、また伸べた腕と大いなるさばきをもって、あなたがたをあがなうであろう。七わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。わたしがエジプトびとの労役の下からあなたがたを導き出すあなたがたの神、主であることを、あなたがたは知るであろう。八わたしはアブラハム、イサク、ヤコブに与えたと手を挙げて誓ったその地にあなたがたをはいらせ、それを所有として、与えるであらう。わたしは主である』と。九モーセはこのようにイスラエルの人々に語ったが、彼らは心の痛みと、きびしい奴隷の務のゆえに、モーセに聞き従わなかった。

一〇さて主はモーセに言われた、二「エジプトの王パロのところに行って、彼がイスラエルの人々をその国から去らせるように話しなさい」。三モーセは主にむかつて言った、「イスラエルの人々でさえ、わたしの言うことを聞かなかったのに、どうして、くちびるに割礼のないわたしの言うことを、パロが聞き入れましょうか」。四しかし、主はモーセとアロンに語って、イスラエルの人々と、エジプトの王パロのもとに行かせ、イスラエルの人々をエジプトの地から導き出せと命じられた。

一四彼らの先祖の家の首長たちは次のとおりである。すなわち

イスラエルの長子ルベンの子らはハノク、パル、ヘヅロン、カルミで、これらはルベンの一族である。一五シメオンの子らはエムエル、ヤミン、オハデ、ヤキン、ゾハル、およびカナンの女から生れたシャウルで、これらはシメオンの一族である。一六レビの子らの名は、その世代に従えば、ゲルシヨン、コハテ、メラリで、レビの一生は百三十七年であつた。一七ゲルシヨンの子らの一族はリブニとシメイである。一八コハテの子らはアムラム、イツハル、ヘブロン、ウジエルで、コハテの一生は百三十三年であつた。一九メラリの子らはマヘリとムシである。これらはその世代によるレビの一族である。二〇アムラムは父の妹ヨケベデを妻としたが、彼女はアロンとモーセを彼に産んだ。アムラムの一生は百三十七年であつた。二一イツハルの子らはコラ、ネペグ、ジクリである。二二ウジエルの子らはミサエル、エルザパシ、シテリである。二三アロンはナシヨンの姉妹、アミナダブの娘エリセバを妻とした。エリセバは彼にナダブ、アビウ、エレアザル、イタマルを産んだ。二四コラの子らはアツシル、エルカナ、アビアサフで、これらはコラびとの一族である。二五アロンの子エレアザルはプテエルの娘のひとり妻とした。彼女はピネハスを彼に産んだ。これらは、その一族によるレビびとの先祖の家の首長たちである。

二六主が、「イスラエルの人々をその軍団に従って、エジプトの地から導き出ささい」と言われたのは、このアロンとモーセで

ある。二モ 彼らはイスラエルの人々をエジプトから導き出すことについて、エジプトの王パロに語ったもので、すなわちこのモーセとアロンである。

三主がエジプトの地でモーセに語られた日に、四主はモーセに言われた、「わたしは主である。わたしがあなたに語ることには、みなエジプトの王パロに語りなさい」。五しかしモーセは主にむかつて言った、「ごらんのとおり、わたしは、くちびるに割礼のない者です。パロがどうしてわたしの言うことを聞きたいでしょうか」。

第七章

一主はモーセに言われた、「見よ、わたしはあなたをパロに對して神のごときものとする。あなたの兄弟アロンはあなたの預言者となるであろう。二あなたはわたしが命じることと、ことごとく彼に告げなければならない。そしてあなたの兄弟アロンはパロに告げて、イスラエルの人々をその国から去らせるようにさせなければならない。三しかし、わたしはパロの心をかたくなにするので、わたしのしるしと不思議をエジプトの国に多く行っても、四パロはあなたがたの言うことを聞かないであろう。それでわたしは手をエジプトの上に加え、大いなるさばきをくだして、わたしの軍団、わたしの民イスラエルの人々を、エ

ジプトの国から導き出すであろう。五わたしが手をエジプトの上にしし伸べて、イスラエルの人々を彼らのうちから導き出す時、エジプトびとはわたしが主であることを知るようになるであろう。六モーセとアロンはそのように行つた。すなわち主が彼らに命じられたように行つた。七彼らがパロと語つた時、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であつた。

八主はモーセとアロンに言われた、九「パロがあなたがたに、『不思議をおこなつて証拠を示せ』と言う時、あなたはアロンに言いなさい、『あなたのつえを取つて、パロの前に投げなさい』と。するとそれはへびになるであろう。一〇それで、モーセとアロンはパロのところに行き、主の命じられたとおりにおこなつた。すなわちアロンはそのつえを、パロとその家来たちの前に投げると、それはへびになつた。二そこでパロもまた知者と魔法使を召し寄せた。これらのエジプトの魔術師らもまた、その秘術をもつて同じように行つた。三すなわち彼らは、おのおのそのつえを投げたが、それらはへびになつた。しかし、アロンのつえは彼らのつえを、のみつくした。四けれども、パロの心はかたくなになつて、主の言われたように、彼らの言うことを聞かなかつた。

五主はモーセに言われた、「パロの心はかたくなで、彼は民を去らせることを拒んでいる。六あなたは、あすの朝、パロのところに行きなさい。見よ、彼は水のところに出ている。あなたは、

へびに変わったあのつえを手にとり、ナイル川の岸に立つて彼に会い、一六そして彼にいいなさい、『ヘブルびとの神、主がわたしをあなたにつかわして言われます、「わたしの民を去らせ、荒野で、わたしに仕えるようにさせよ」と。しかし今もなお、あなたが聞きいれようとされないのです、一七主はこう仰せられます、「これによってわたしが主であることを、あなたは知るでしょう。見よ、わたしが手にあるつえでナイル川の水を打つと、それは血に変わるであろう。一八そして川の魚は死に、川は臭くなり、エジプトびとは川の水を飲むことをいとうであろう』と。一九主はまたモーセに言われた、「あなたはアロンにいいなさい、『あなたのつえを執つて、手をエジプトの水の上、川の上、流れの上、池の上、またそのすべての水たまりの上にさし伸べて、それを血にならせなさい。エジプト全国にわたつて、木の器、石の器にも、血があるようになるでしょう』と」。

二〇モーセとアロンは主の命じられたようにおこなった。すなわち、彼はパロとその家来たちの目の前で、つえをあげてナイル川の水を打つと、川の水は、ことごとく血に変わった。三そこで川の魚は死に、川は臭くなり、エジプトびとは川の水を飲むことができなくなつた。そしてエジプト全国にわたつて血があつた。三エジプトの魔術師らも秘術をもつて同じようになつた。しかし、主の言われたように、パロの心はかたくなになつた。彼らの言うことを聞かなかつた。三パロは身をめぐらして

家に入り、またこのことをも心に留めなかつた。二四すべてのエジプトびとはナイル川の水が飲めなかつたので、飲む水を得ようと、川のまわりを掘つた。二五主がナイル川を打たれてのち七日を経た。

第八章

一主はモーセに言われた、「あなたはパロのところに行つていいなさい、『主はこう仰せられます、「わたしの民を去らせて、わたしに仕えさせなさい。二しかし、去らせることを拒むならば、見よ、わたしは、かえるをもつて、あなたの領土を、ことごとく撃つであろう。三ナイル川にかえるが群がり、のぼつて、あなたの家、あなたの寝室にはいり、寝台にのぼり、あなたの家来と民の家にはいり、またあなたのかまどや、こね鉢にはいり、四あなたと、あなたの民と、すべての家来のかからだに、はい上がるであろう』と』。五主はモーセに言われた、「あなたはアロンにいいなさい、『つえを持つて、手を川の上、流れの上、池の上にさし伸べ、かえるをエジプトの地にのぼらせなさい』と。六アロンが手をエジプトの水の上にさし伸べたので、かえるはのぼつてエジプトの地をおおつた。七魔術師らも秘術をもつて同じように行い、かえるをエジプトの地にのぼらせた。

八パロはモーセとアロンを召して言つた、「かえるをわたしと、

わたしの民から取り去るように主に願ってください。そのときわたしはこの民を去らせて、主に犠牲をささげさせるでしょう。」^九モーセはパロに言った、「あなたと、あなたの家来と、あなたの民のために、わたしがいつ願って、このかえるを、あなたとあなたの家から断つて、ナイル川だけにとどまらせるべきか、きめてください。」^{一〇}パロは言った、「明日」。モーセは言った、「仰せのとおりになって、わたしたちの神、主に並ぶものがないことを、あなたが知れますように。^二そして、かえるはあなたと、あなたの家と、あなたの家来と、あなたの民を離れてナイル川にだけとどまるでしょう。」^三こうしてモーセとアロンはパロを離れて出た。モーセは主がパロにつかわされたかえるの事について、主に呼び求めたので、^四主はモーセのことばのようになされ、かえるは家から、庭から、また畑から死に絶えた。^{一五}ところがパロは息つくひまのできたのを見て、主が言われたように、その心をかたくなにして彼らの言うことを聞かなかった。

^{一六}主はモーセに言われた、「あなたはアロンに言いなさい、『あなたのつえをさし伸べて地のちりを打ち、それをエジプトの全国にわたって、ぶよとならせなさい』と。」^{一七}彼はそれのように行った。すなわちアロンはそのつえをとつて手をさし伸べ、地のちりを打ったので、ぶよは人と家畜についた。すなわち、地のちりはみなエジプトの全国にわたって、ぶよとなった。^{一八}

魔術師らも秘術をもって同じように行い、ぶよを出そうとしたが、彼らにはできなかった。ぶよが人と家畜についたので、^{一九}魔術師らはパロに言った、「これは神の指です」。しかし主の言われたように、パロの心はかたくなになって、彼らのいうことを聞かなかった。

^{二〇}主はモーセに言われた、「あなたは朝早く起きてパロの前に立ちなさい。ちようど彼は水のところに出ているから彼に言いなさい、『主はこう仰せられる、』わたしの民を去らせて、わたしに仕えさせなさい。^{二一}あなたがわたしの民を去らせないならば、わたしは、あなたとあなたの家来と、あなたの民とあなたの家とに、あぶの群れをつかわすであろう。エジプトびとの家々は、あぶの群れで満ち、彼らの踏む地もまた、そうなるであろう。^{二二}その日わたしは、わたしの民の住むゴセンの地を区別して、そこにあぶの群れを入れないであろう。国の中でわたしが主であることをあなたが知るためである。^{二三}わたしはわたしの民とあなたの民の間に区別をおく。このしるしは、あす起るであろう」と。^{二四}主はそれのようにされたので、おびたしいあぶが、パロの家と、その家来の家と、エジプトの全国にはいつてきて、地はあぶの群れのために害をうけた。

^{二五}そこで、パロはモーセとアロンを召して言った、「あなたがたは行つてこの国の内で、あなたがたの神に犠牲をささげなさい。」^{二六}モーセは言った、「そうすることはできません。わたし

「私たちはエジプトびとの忌むものを犠牲として、わたしたちの神、主にささげるからです。もし、エジプトびとの目の前で、彼らの忌むものを犠牲にささげるならば、彼らはわたしたちを石で打たないでしょうか。二モわたしたちは三日の道のりほど、荒野にはいつて、わたしたちの神、主に犠牲をささげ、主がわたしたちに命じられるようにしなければなりません。三ハパロは言った、「わたしはあなたがたを去らせ、荒野で、あなたがたの神、主に犠牲をささげさせよう。ただあまり遠くへ行つてはならない。わたしのために祈願しなさい」。二九モーセは言った、「わたしはあなたのもとから出て行つて主に祈願しましょう。あすあぶの群れがパロと、その家来と、その民から離れるでしょう。ただパロはまた欺いて、民が主に犠牲をささげに行くのをとめないうようにしてください」。三〇こうしてモーセはパロのもとを出て、主に祈願したので、三主はモーセの言葉のようにされた。すなわち、あぶの群れをパロと、その家来と、その民から取り去られたので、一つも残らなかつた。三三しかしパロはこんどもまた、その心をかたくなにして民を去らせなかつた。

第九章

一主はモーセに言われた、「パロのもとに行つて、彼に言いなさい、『ヘブルびとの神、主はこう仰せられる、「わたしの民を去ら

せて、わたしに仕えさせなさい。二あなたがもし彼らを去らせることを拒んで、なお彼らを留めおくならば、三主の手は最も激しい疫病をもつて、野にいるあなたの家畜、すなわち馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に臨むであろう。四しかし、主はイスラエルの家畜と、エジプトの家畜を区別され、すべてイスラエルの人々に属するものには一頭も死ぬものがないであろう』と。五主は、また、時を定めて仰せられた、「あす、主はこのことを国に行うであろう」。六あくる日、主はこのことを行われたので、エジプトびとの家畜はみな死んだ。しかし、イスラエルの人々の家畜は一頭も死ななかつた。セパロは人をつかわして見させたが、イスラエルの家畜は一頭も死んでいなかった。それでもパロの心はかたくなで、民を去らせなかつた。

ハ主はモーセとアロンに言われた、「あなたがたは、かまどのすすを両手いっぱい取り、それをモーセはパロの目の前で天にむかつて、まき散らしなさい。九それはエジプトの全国にわたつて、細かいちりとなり、エジプト全国で人と獣に付いて、うみの出るはれものとなるであろう。一〇そこで彼らは、かまどのすすを取つてパロの前に立ち、モーセは天にむかつてこれをまき散らしたので、人と獣に付いて、うみの出るはれものとなつた。二魔術師らは、はれもののためにモーセの前に立つことができなかつた。はれものが魔術師らと、すべてのエジプトびとに生じたからである。三しかし、主はパロの心をかたくなにされた

ので、彼は主がモーセに語られたように、彼らの言うことを聞かなかった。

三 主はまたモーセに言われた、「朝早く起き、パロの前に立って、彼に言いなさい、『ヘブルびとの神、主はこう仰せられる、「わたしの民を去らせて、わたしに仕えさせなさい。一四 わたしは、こんどは、もろもろの災を、あなたと、あなたの家来と、あなたの民にくだし、わたしに並ぶものが全地にないことを知らせるであろう。一五 わたしがもし、手をさし伸べ、疫病をもって、あなたと、あなたの民を打つていたらならば、あなたは地から断ち滅ぼされていたであろう。一六 しかし、わたしがあなたをながらえさせたのは、あなたにわたしの力を見させるため、そして、わたしの名が全地に宣べ伝えられるためにほかならない。一七 それに、あなたはなお、わたしの民にむかつて、おのれを高くし、彼らを去らせようとしな。一八 ゆえに、あすの今ごろ、わたしは恐ろしく大きな雹を降らせるであろう。それはエジプトの国が始まった日から今まで、かつてなかったほどのものである。一九 それゆえ、いま、人をやつて、あなたの家畜と、あなたが野にもっているすべてのものを、のがれさせなさい。人も獣も、すべて野にあって家に帰らないものは降る雹に打たれて死ぬであろう』と』。二〇 パロの家来のうち、主の言葉をおそれる者は、そのしもべと家畜を家にのがれさせたが、二三 主の言葉を意にとめないものは、そのしもべと家畜を野に残しておいた。

三 主はモーセに言われた、「あなたの手を天にむかつてさし伸べ、エジプトの全国にわたつて、エジプトの地にいる人と獣と畑のすべての青物の上に雹を降らせなさい」。二三 モーセが天にむかつてつえをさし伸べると、主は雷と雹をおくられ、火は地にむかつて、はせ下つた。こうして主は、雹をエジプトの地に降らされた。二四 そして雹が降り、雹の間に火がひらめき渡つた。雹は恐ろしく大きく、エジプト全国には、国をなしてこのかた、かつてないものであつた。二五 雹はエジプト全国にわたつて、すべて畑にいる人と獣を打つた。雹はまた畑のすべての青物を打ち、野のもろもろの木を折り砕いた。二六 ただイスラエルの人々のいたゴセンの地には、雹が降らなかつた。

二七 そこで、パロは人をつかわし、モーセとアロンを召して言った、「わたしはこんどは罪を犯した。主は正しく、わたしと、わたしの民は悪い。二八 主に祈願してください。この雷と雹はもうじゅうぶんです。わたしはあなたがたを去らせます。もはやとどまらなくてもよろしい」。二九 モーセは彼に言った、「わたしは町を出ると、すぐ、主にむかつてわたしの手を伸べひろげます。すると雷はやみ、雹はもはや降らなくなり、あなたは、地が主のものであることを知られましょう。三〇 しかし、あなたとあなたの家来たちは、なお、神なる主を恐れないことを、わたしは知っています」。三一 亜麻と大麦は打ち倒された。大麦は穂を出し、亜麻は花が咲いていたからである。三二 小麦とスベル

夕妻はおくでであるため打ち倒されなかった。――三 モーセはパロのもとを去り、町を出て、主にむかつて手を伸べひろげたので、雷と雹はやみ、雨は地に降らなくなった。三四 ところがパロは雨と雹と雷がやんだのを見て、またも罪を犯し、心をかたくなにした。彼も家来も、そうであつた。三五 すなわちパロは心をかたくなにし、主がモーセによつて語られたように、イスラエルの人々を去らせなかった。

第二〇章

―そこで、主はモーセに言われた、「パロのもとに行きなさい。わたしは彼の心とその家来たちの心をかたくなにした。これは、わたしがこれらのしるしを、彼らの中に行うためである。二 また、わたしがエジプトびとをあしらつたこと、また彼らの中にわたしが行ったしるしを、あなたがたが、子や孫の耳に語り伝えるためである。そしてあなたがたは、わたしが主であることを知るであらう」。

三 モーセとアロンはパロのもとに行つて彼に言つた、「ヘブルびとの神、主はこう仰せられる、『いつまで、あなたは、わたしに屈伏することを拒むのですか。民を去らせて、わたしに仕えさせなさい。四 もし、わたしの民を去らせることを拒むならば、見よ、あす、わたしはいなごを、あなたの領土にはいらせるであらう。五 それは地のおもてをおおい、人が地を見ることもできないほどになるであらう。そして雹を免れて、残されているものを食い尽し、野にはえているあなたがたの木をみな食い尽すであらう。六 またそれはあなたの家とあなたのすべての家来の家および、すべてのエジプトびとの家に満ちるであらう。このよう

なことは、あなたの父たちも、また、祖父たちも、彼らが地上にあつた日から今日に至るまで、かつて見たことのないものである』と」。そして彼は身をめぐらして、パロのもとを出て行つた。セ パロの家来たちは王に言つた、「いつまで、この人はわれわれのわなとなるのでしょうか。この人々を去らせ、彼らの神なる主に仕えさせては、どうでしょう。エジプトが滅びてしまうことに、まだ気づかれないのですか」。ハ そこで、モーセとアロンは、また、パロのもとに召し出された。パロは彼らに言つた、「行つて、あなたがたの神、主に仕えなさい。しかし、行くものはだれだれか」。九 モーセは言つた、「わたしたちは幼い者も、老いた者も行きます。むすこも娘も携え、羊も牛も連れて行きます。わたしたちは主の祭を執り行わなければならないのですから」。一〇 パロは彼らに言つた、「万一、わたしが、あなたがたに子供を連れてまで去らせるようなことがあれば、主があなたがたと共にいますがい。あなたがたは悪いたくらみをしている。二 それはいけない。あなたがたは男だけ行つて主に仕えるがよい。それが、あなたがたの要求であつた」。彼らは、ついにパロ

の前から追い出された。

三 主はモーセに言われた、「あなたの手をエジプトの地のの上にさし伸べて、エジプトの地になごをのぼらせ、地のすべての青物、すなわち、雹が打ち残したものを、ことごとく食べさせなさい」。三そこでモーセはエジプトの地のの上に、つえをさし伸べたので、主は終日、終夜、東風を地に吹かせられた。朝となつて、東風は、いなごを運んできた。四 いなごはエジプト全国にのぞみ、エジプトの全領土にとどまり、その数がはなはだ多く、このようないなごは前にもなく、また後にもないであらう。五 いなごは地の全面をおおつたので、地は暗くなつた。そして地のすべての青物と、雹の打ち残した木の実を、ことごとく食べたので、エジプト全国にわたつて、木にも畑の青物にも、緑の物としては何も残らなかつた。六 そこで、パロは、急いでモーセとアロンを召して言つた、「わたしは、あなたがたの神主に対し、また、あなたがたに対して罪を犯しました。七 それで、どうか、もう一度だけ、わたしの罪をゆるしてください。そしてあなたがたの神、主に祈願して、ただ、この死をわたしから離れさせてください」。八 そこで彼はパロのところから出て、主に祈願したので、九 主は、はなはだ強い西風に変らせ、いなごを吹き上げて、これを紅海に追いやられたので、エジプト全土には一つのいなごも残らなかつた。一〇 しかし、主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエルの人々を去らせなかつた。

三 主はまたモーセに言われた、「天にむかつてあなたの手をさし伸べ、エジプトの国に、くらやみをこさせなさい。そのくらやみは、さわれるほどである」。三 モーセが天にむかつて手をさし伸べたので、濃いくらやみは、エジプト全国に臨み三日に及んだ。三 三日の間、人々は互に見ることもできず、まただれもその所から立つ者もなかつた。しかし、イスラエルの人々には、みな、その住む所に光があつた。四 そこでパロはモーセを召して言つた、「あなたがたは行つて主に仕えなさい。あなたがたの子供も連れて行つてもよい。ただ、あなたがたの羊と牛は残して置きなさい」。五 しかし、モーセは言つた、「あなたは、また、わたしたちの神、主にささげる犠牲と燔祭の物をも、わたしたちにくださらなければなりません。二六 わたしたちは家畜も連れて行きます。ひずめ一つも残しません。わたしたちは、そのうちから取つて、わたしたちの神、主に仕えねばなりません。またわたしたちは、その場所に行くまでは、何をもつて、主に仕えるべきかを知らないからです」。二七 けれども、主がパロの心をかたくなにされたので、パロは彼らを去らせようとしなかつた。二八 それでパロはモーセに言つた、「わたしの所から去りなさい。心して、わたしの顔は二度と見てはならない。わたしの顔を見る日には、あなたの命はないであらう」。二九 モーセは言つた、「よくぞ仰せられました。わたしは、二度と、あなたの顔を見ないでしょう」。

第一章

「主はモーセに言われた、「わたしは、なお一つの災を、パロとエジプトの上にくだし、その後、彼はあなたがたをここから去らせるであろう。彼が去らせるとき、彼はあなたがたを、ことごとくここから追い出すであろう。ニあなたは民の耳に語つて、男は隣の男から、女は隣の女から、それぞれ銀の飾り、金の飾りを請い求めさせなさい。ミ主は民にエジプトびとの好意を得させられた。またモーセその人は、エジプトの国で、パロの家来たちの目と民の目とに、はなはだ大いなるものと見えた。

四モーセは言つた、「主はこう仰せられる、『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中へ出て行くであろう。五エジプトの国のうちのういごは、位に座するパロのういごをはじめ、ひきうすの後にいる、はしためのういごに至るまで、みな死に、また家畜のういごもみな死ぬであろう。六そしてエジプト全国に大いなる叫びが起るであろう。このようなことはかつてなく、また、ふたたびないであろう。』と。セしかし、すべて、イスラエルの人々にむかつては、人にむかつて、獸にむかつて、犬さえその舌を鳴らさないであろう。これによつて主がエジプトびととイスラエルびととの間の区別をされるのを、あなたがたは知るであろう。ハこれらのあなたの家来たちは、みな、わたしのもとに下つてきて、ひれ伏して言うであろう、『あなたもあなたに従う民もみな

出て行つてください』と。その後、わたしは出て行きます」。彼は激しく怒つてパロのもとから出て行つた。九主はモーセに言われた、「パロはあなたがたの言うことを聞かないであろう。それゆえ、わたしはエジプトの国に不思議を増し加えるであろう」。

一〇モーセとアロンは、すべてこれらの不思議をパロの前に行つたが、主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエルの人々をその国から去らせなかつた。

第二章

「主はエジプトの国で、モーセとアロンに告げて言われた、ニこの月をあなたがたの初めの月とし、これを年の正月としなさい。ミあなたがたはイスラエルの全会衆に言いなさい、『この月の十日におのおの、その父の家ごとに小羊を取らなければならない。すなわち、一家族に小羊一頭を取らなければならない。四もし家族が少なくて一頭の小羊を食べきれないときは、家のすぐ隣のひとと共に、人数に従つて一頭を取り、おのおの食べるところに応じて、小羊を見計らわなければならない。五小羊は傷のないもので、一歳の雄でなければならない。羊またはやぎのうちから、これを取らなければならない。六そしてこの月の十四日まで、これを守つて置き、イスラエルの会衆はみな、夕暮に

これをほふり、七その血を取り、小羊を食する家の入口の二つの柱と、かもいにそれを塗らなければならない。八そしてその夜、その肉を火に焼いて食べ、種入れぬパンと苦菜を添えて食べなければならない。九生でも、水で煮ても、食べてはならない。火に焼いて、その頭を足と内臓と共に食べなければならない。一〇朝までそれを残しておいてはならない。朝まで残るものは火で焼きつくさなければならない。一あなたがたは、こうして、それを食べなければならない。すなわち腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取つて、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である。二三その夜わたしはエジプトの国を巡つて、エジプトの国における人と獣との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであらう。わたしは主である。二三その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたのために、しるしとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであらう。わたしがエジプトの国を撃つ時、災が臨んで、あなたがたを滅ぼすことはないであらう。

二四この日はあなたがたに記念となり、あなたがたは主の祭としてこれを守り、代々、永久の定めとしてこれを守らなければならない。二五七日の間あなたがたは種入れぬパンを食べなければならない。その初めの日に家からパン種を取り除かなければならない。第一日から第七日まで、種を入れたパンを食べる人はみなイスラエルから断たれるであらう。二六かつ、あなたが

たは第一日に聖会を、また第七日に聖会を開かなければならない。これらの日には、なんの仕事もしてはならない。ただ、おのおの食べものだけは作ることができる。二七あなたがたは、種入れぬパンの祭を守らなければならない。ちようど、この日、わたしがあなたがたの軍勢をエジプトの国から導き出したからである。それゆえ、あなたがたは代々、永久の定めとして、その日を守らなければならない。二八正月に、その月の十四日の夕方に、あなたがたは種入れぬパンを食べ、その月の二十一日の夕方まで続けなければならない。一九七日の間、家にパン種を置いてはならない。種を入れたものを食べる者は、寄留の他国人であれ、国に生れた者であれ、すべて、イスラエルの会衆から断たれるであらう。三〇あなたがたは種を入れたものは何も食べてはならない。すべてあなたがたのすまいにおいて種入れぬパンを食べなければならない。

三そこでモーセはイスラエルの長老をみな呼び寄せて言った、「あなたがたは急いで家族ごとに一つの小羊を取り、その過越の獣をほふらなければならない。三また一束のヒソブを取つて鉢の血に浸し、鉢の血を、かもいと入口の二つの柱につけなければならない。朝まであなたがたは、ひとりも家の戸の外に出てはならない。三三主が行き巡つてエジプトびとを撃たれるとき、かもいと入口の二つの柱にある血を見て、主はその入口を過ぎ越し、滅ぼす者が、あなたがたの家にはいつて、撃つのを

許されないのであろう。二四あなたがたはこの事を、あなたと子孫のための定めとして、永久に守らなければならない。二五あなたがたは、主が約束されたように、あなたがたに賜る地に至るとき、この儀式を守らなければならない。二六もし、あなたがたの子供たちが『この儀式はどんな意味ですか』と問うならば、二七あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エジプトびとを撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越して、われわれの家を救われたのである』。民はこのとき、伏して礼拝した。

二八イスラエルの人々は行つてそのようにした。すなわち主がモーセとアロンに命じられたようにした。

二九夜中になつて主はエジプトの国の、すべてのういご、すなわち位に座するパロのういごから、地下のひとやにおる捕虜のういごにいたるまで、また、すべての家畜のういごを撃たれた。三〇それでパロとその家来およびエジプトびとはみな夜のうちに起きあがり、エジプトに大いなる叫びがあつた。死人のない家になかつたからである。三一そこでパロは夜のうちにモーセとアロンを呼び寄せて言つた、「あなたがたとイスラエルの人々は立つて、わたしの民の中から出て行くがよい。そしてあなたがたの言うように、行つて主に仕えなさい。三二あなたがたの言うように羊と牛とを取つて行きなさい。また、わたしを祝福なさい」。

三三こうしてエジプトびとは民をせき立てて、すみやかに国を去らせようとした。彼らは「われわれはみな死ぬ」と思つたからである。三四民はまだパン種を入れない練り粉を、こぼちのまま着物に包んで肩に負つた。三五そしてイスラエルの人々はモーセの言葉のようにして、エジプトびとから銀の飾り、金の飾り、また衣服を請ひ求めた。三六主は民にエジプトびとの情を得させ、彼らの請ひ求めたものを与えさせられた。こうして彼らはエジプトびとのものを奪ひ取つた。

三七さて、イスラエルの人々はラメセスを出立してスコテに向かつた。女と子供を除いて徒歩の男子は約六十万人であつた。三八また多くの入り混じつた群衆および羊、牛など非常に多くの家畜も彼らと共に上つた。三九そして彼らはエジプトから携えて出た練り粉をもつて、種入れぬパンの菓子焼いた。まだパン種を入れていなかったからである。それは彼らがエジプトから追い出されて滞ることができず、また、何の食料をも整理していなかつたからである。

四〇イスラエルの人々がエジプトに住んでいた間は、四百三十年であつた。四一四百三十年の終りとなつて、ちょうどその日に、主の全軍はエジプトの国を出た。四二これは彼らをエジプトの国から導き出すために主が寝ずの番をされた夜であつた。ゆえにこの夜、すべてのイスラエルの人々は代々、主のために寝ずの番をしなければならない。

四三 主はモーセとアロンに言われた、「過越の祭の定めは次のとおりである。すなわち、異邦人はだれもこれを食べてはならない。四しかし、おのおのが金で買ったしもべは、これに割礼を行つてのち、これを食べさせることができる。四五 仮住まいの者と、雇人とは、これを食べるべきではない。四六 ひとつの家でこれを食べなければならない。その肉を少しも家の外に持ち出しではならない。また、その骨を折ってはならない。四七 イスラエルの全会衆はこれを守らなければならない。四八 寄留の外国人があなただけのもにとどまつていて、主に過越の祭を守ろうとすることができ、その男子はみな割礼を受けてのち、近づいてこれを守ることができ、そうすれば彼は彼に国に生れた者のようになるであらう。しかし、無割礼の者はだれもこれを食べてはならない。四九 この律法は国に生れたものにも、あなたがたのうちに寄留している外国人にも同一である」。

五〇 イスラエルの人々は、みなこのようにし、主がモーセとアロンに命じられたようにした。五一 ちょうどその日に、主はイスラエルの人々を、その軍団に従つてエジプトの国から導き出された。

第二三章

一 主はモーセに言われた、「イスラエルの人々のうちで、すべ

てのういづ、すなわちすべて初めに胎を開いたものを、人であれ、獣であれ、みな、わたしのために聖別しなければならない。それはわたしのものである」。

三 モーセは民に言った、「あなたがたは、エジプトから、奴隸の家から出るこの日を覚えなさい。主が強い手をもつて、あなたがたをここから導き出されるからである。種を入れたパンを食べてはならない。四 あなたがたはアビブの月のこの日に出るのである。五 主があなたに与えると、あなたの先祖たちに誓われたカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ヒビびと、エブスびとの地、乳と蜜との流れる地に、導き入れられる時、あなたはこの月にこの儀式を守らなければならない。六 七日のあいだ種入れぬパンを食べ、七日目には主に祭をしなければならぬ。七 種入れぬパンを七日のあいだ食べなければならない。種を入れたパンをあなただけの所に置いてはならない。また、あなたの地区のどこでも、あなたの所にパン種を置いてはならない。八 その日、あなたの子に告げて言いなさい、『これはわたしがエジプトから出るときに、主がわたしになされたことのためである』。九 そして、これを、手につけて、しるしとし、目の間に置いて記念とし、主の律法をあなただけの口に置かなければならない。主が強い手をもつて、あなたをエジプトから導き出されるからである。一〇 それゆえ、あなたはこの定めを年々その期節に守らなければならない。二 主があなたとあなたの先祖たちに誓われたように、あなたを

カナンびとの地に導いて、それをあなたに賜^{たま}う時、二あなた
は、すべて初^{はじ}めに胎^{たい}を開^{ひら}いた者^{もの}、およびあなたの家畜^{かちく}の産^うむう
ごは、ことごとく主^{しゅ}にささげなければならぬ。すなわち、それ
らの男性^{だんせい}のものは主に帰^きせしめなければならぬ。三また、す
べて、ろばの、初^{はじ}めて胎^{たい}を開^{ひら}いたものは、小羊^{こひつじ}をもつて、あがな
わなければならぬ。もし、あがなわれないならば、その首^{くび}を折^おら
なければならぬ。あなたの子^こらのうち、すべて、男^{おとこ}のういご
は、あがなわなければならぬ。一四後^{のち}になつて、あなたの子^こが
『これはどんな意味^いですか』と問^とうならば、これに言^いわなければ
ならない、『主^{しゅ}が強い手^てをもつて、われわれをエジプトから、奴隷^{どれい}
の家^{いえ}から導^{みちび}き出^だされた。一五そのときパロが、かたくなで、われ
われを去^さらせなかつたため、主^{しゅ}はエジプトの国^{くに}のういごを、人^{ひと}
のういごも家畜^{かちく}のういごも、ことごとく殺^{ころ}された。それゆえ、初^{はじ}
めて胎^{たい}を開^{ひら}く男性^{だんせい}のものはみな、主に犠牲^{ぎせい}としてささげるが、わ
たしの子供^{こども}のうちのういごは、すべてあがなうのである。一六そ
して、これを手^てにつけて、しるしとし、目の間^{あいだ}に置^おいて覚^{おぼ}えとし
なければならぬ。主^{しゅ}が強い手^てをもつて、われわれをエジプト
から導^{みちび}き出^だされたからである。』

一七さて、パロが民^{たみ}を去^さらせた時、ペリシテびとの国^{くに}の道^{みち}は近^{うか}
かつたが、神^{かみ}は彼^{かれ}らをそれに導^{みちび}かれなかつた。民^{たみ}が戦^{たたか}いを見^みれ
ば悔^くいてエジプトに帰^{かえ}るであらうと、神^{かみ}は思^{おも}われたからである。
一八神^{かみ}は紅海^{こうかい}に沿^そう荒野^{あらの}の道^{みち}に、民^{たみ}を回^{まわ}らされた。イスラエルの

人^{ひと}々は武装^{ぶそ}してエジプトの国^{くに}を出^でて、上^{のぼ}つた。一九そのときモー
セはヨセフの遺骸^{いたざき}を携^{たず}えていた。ヨセフが、「神^{かみ}は必ずあなたが
たを顧^{かへり}みられるであらう。そのとき、あなたがたは、わたしの
遺骸^{いたざき}を携^{たず}えて、ここから上^{のぼ}つて行^いかなければならない」と言^いつ
て、イスラエルの人^{ひと}々に固^{かた}く誓^{ちか}わせたからである。二〇こうして
彼^{かれ}らは更にスコテから進^{すす}んで、荒野^{あらの}の端^{はし}にあるエタムに宿営^{しゆくえい}
した。三主^{しゅ}は彼^{かれ}らの前^{まえ}に行^いかれ、昼^{ひる}は雲^{くも}の柱^{はしら}をもつて彼^{かれ}らを導^{みちび}
き、夜^{よる}は火^ひの柱^{はしら}をもつて彼^{かれ}らを照^てし、昼^{ひる}も夜^{よる}も彼^{かれ}らを進^{すす}み行^いかせ
られた。三昼^{ひる}は雲^{くも}の柱^{はしら}、夜^{よる}は火^ひの柱^{はしら}が、民^{たみ}の前^{まえ}から離^{はな}れなかつ
た。

第一章

一主^{しゅ}はモーセに言^いわれた、二「イスラエルの人^{ひと}々に告^つげ、引^ひき返^{かえ}
して、ミグドルと海^{うみ}との間^{あいだ}にあるピハヒロテの前^{まえ}、バアルゼボン
の前^{まえ}に宿営^{しゆくえい}させなさい。あなたがたはそれにむかつて、海^{うみ}のか
たわらに宿営^{しゆくえい}しなければならぬ。三パロはイスラエルの人^{ひと}々
について、『彼^{かれ}らはその地^ちで迷^{まよ}っている。荒野^{あらの}は彼^{かれ}らを閉^とじ込^こ
てしまった』と言^いうであらう。四わたしがパロの心^{こころ}をかたくな
にするから、パロは彼^{かれ}らのあとを追^おうであらう。わたしはパロと
そのすべての軍勢^{ぐんせい}を破^{やぶ}つて誉^{ほまれ}を得^え、エジプトびとにわたしは主^{しゅ}
であることを知らせるであらう。彼^{かれ}らはそのようにした。

五民の逃げ去つたことが、エジプトの王に伝えられたので、パロとその家来たちとは、民に対する考えを変えて言つた、「われわれはなぜこのようにイスラエルを去らせて、われわれに仕えさせないようにしたのであらう」。ハそれでパロは戦車を整え、みづからその民を率い、七また、えり抜き、戦車六百と、エジプトのすべての戦車およびすべての指揮者たちを率いた。ハ主がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエルの人々のあとを追つた。イスラエルの人々は意気揚々と出たのである。九エジプトびとは彼らのあとを追ひ、パロのすべての馬と戦車およびその騎兵と軍勢とは、バアルゼボンの前にあるピハヒロテのあたりで、海のかたわらに宿営している彼らに追いついた。

一〇パロが近寄つた時、イスラエルの人々は目を上げてエジプトびとが彼らのあとに進んできているのを見て、非常に恐れた。そしてイスラエルの人々は主にむかつて叫び、「一かつモーセに言つた、「エジプトに墓がないので、荒野で死なせるために、わたしたちを携へ出したのですか。なぜわたしたちをエジプトから導き出して、こんなにするのですか。ニわたしたちがエジプトであなただけに告げて、『わたしたちを捨てておいて、エジプトびとに仕えさせてください』と言つたのは、このことではありませんか。荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかつたのです」。三モーセは民に言つた、「あなたがた

は恐れてはならない。かたく立つて、主がきよう、あなたがたのためになされる救を見なさい。きよう、あなたがたはエジプトびとを見るが、もはや永久に、二度と彼らを見ないであらう。一四主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」。一五主はモーセに言われた、「あなたは、なぜわたしにむかつて叫ぶのか。イスラエルの人々に語つて彼らを進み行かせなさい。一六あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい。一七わたしがエジプトびとの心をかたくなにするから、彼らはそのあとを追つてはいるであらう。こうしてわたしはパロとそのすべての軍勢および戦車と騎兵とを打ち破つて譽を得よう。一八わたしがパロとその戦車とその騎兵とを打ち破つて譽を得るとき、エジプトびとはわたしが主であることを知るのであらう」。

一九このとき、イスラエルの部隊の前行く神の使は移つて彼らのうしろに行つた。雲の柱も彼らの前から移つて彼らのうしろに立ち、二〇エジプトびとの部隊とイスラエルびとの部隊との間にきたので、そこに雲とやみがあり夜もすがら、かれとこれと近づくことなく、夜がすぎた。三モーセが手を海の上にさし伸べたので、主は夜もすがら強い東風をもつて海を退かせ、海を陸地とされ、水は分かれた。三イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行つたが、水は彼ら

の右と左に、かきとなった。三エジプトびとは追つてきて、パ口のすべての馬と戦車と騎兵とは、彼らのあとについて海の中にはいった。二四 暁の更に、主は火と雲の柱のうちからエジプトびとの軍勢を見おろして、エジプトびとの軍勢を乱し、二五 その戦車の輪をきしらせて、進むのに重くされたので、エジプトびとは言った、「われわれはイスラエルを離れて逃げよう。主が彼らのためにエジプトびとと戦う」。

二六 そのとき主はモーセに言われた、「あなたの手を海の上にさし伸べて、水をエジプトびとと、その戦車と騎兵との上に流れ返らせなさい」。二七 モーセが手を海の上にさし伸べると、夜明けになって海はいつもの流れに返り、エジプトびとはこれにむかつて逃げたが、主はエジプトびとを海の中に投げ込まれた。二八 水は流れ返り、イスラエルのあとを追つて海にはいった戦車と騎兵およびパロのすべての軍勢をおおい、ひとりも残らなかつた。二九 しかし、イスラエルの人々は海の中のかわいた地を رفتたが、水は彼らの右と左に、かきとなった。

三〇 このように、主はこの日イスラエルをエジプトびとの手から救われた。イスラエルはエジプトびとが海べに死んでいるのを見た。三一 イスラエルはまた、主がエジプトびとに行われた大いなるみわざを見た。それで民は主を恐れ、主とそのしもべモーセとを信じた。

第一章

一そこでモーセとイスラエルの人々は、この歌を主にむかつて歌った。彼らは歌つて言つた、

「主にむかつてわたしは歌おう、

彼は輝かしくも勝ちを得られた、

彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。

二主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、

彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、

彼はわたしの父の神、わたしは彼をあがめる。

三主はいくさびと、その名は主。

四彼はパロの戦車とその軍勢とを海に投げ込まれた、

そのすぐれた指揮者たちは紅海に沈んだ。

五大水は彼らをおおい、彼らは石のように淵に下つた。

六主よ、あなたの右の手は力をもつて榮光にかがやく、

主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。

七あなたはたいなる威光をもつて、

あなたに立ちむかう者を打ち破られた。

八あなたが怒りを発せられると、

彼らは、わらのように焼きつくされた。

九あなたの鼻の息によつて水は積みかさなり、

流れは堤となつて立ち、

大水は海のもなかに凝り固まった。

九敵は言った、『わたしは追いかけて、追いついて、分捕物を分かち取ろう、わたしの欲望を彼らによって満たそう、つるぎを抜こう、わたしの手は彼らを滅ぼそう。』

一〇あなたが息を吹かれると、海は彼らをおおい、彼らは鉛のように、大水の中に沈んだ。

二主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、ほむべくして恐るべきもの、くすしきわざを行うものであろうか。

三あなたが右の手を伸べられると、地は彼らをのんだ。

四あなたは、あがなわれた民を恵みをもって導き、み力をもつて、あなたの聖なるすまいに伴われた。

五四もろもろの民は聞いて震え、ペリシテの住民は苦しみに襲われた。

五エドムの族長らは、おどろき、モアブの首長らは、わななき、カナンの住民は、みな溶け去った。

六恐れと、おののきとは彼らに臨み、み腕の大いなるゆえに、彼らは石のように黙した、

主よ、あなたの民の通りすぎるまで、

あなたが買いとられた民の通りすぎるまで。

七あなたは彼らを導いて、

あなたの嗣業の山に植えられる。

主よ、これこそあなたのすまいとして、

みずから造られた所、

主よ、み手によって建てられた聖所。

八主は永遠に統治せられる。

一九パロの馬が、その戦車および騎兵と共に海にはいると、主は海の水を彼らの上に流れ返らされたが、イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行つた。二〇そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちも皆タンバリンを取つて、踊りながら、そのあとに従つて出てきた。二三そこでミリアムは彼らに和して歌つた、

「主にむかつて歌え、

彼は輝かしくも勝ちを得られた、

彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた」。

二三さて、モーセはイスラエルを紅海から旅立たせた。彼らはシユルの荒野に入り、三日のあいだ荒野を歩いたが、水を得なかつた。二四彼らはメラに着いたが、メラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、その所の名はメラと呼ばれた。二五とくに、民はモーセにつぶやいて言つた、「わたしたちは何を飲む

のですか」。二五 モーセは主に叫んだ。主は彼に一本の木を示されたので、それを水に投げ入れると、水は甘くなった。

その所で主は民のために定めと、おきてを立てられ、彼らを試みて、二六 言われた、「あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトとに下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であつて、あなたをいやすものである」。

二七 こうして彼らはエリムに着いた。そこには水の泉十二と、なつめやしの木七十本があつた。その所で彼らは水のほとりに宿営した。

第十六章

一 イスラエルの人々の全会衆はエリムを出発し、エジプトの地を出て二か月目の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野にきたが、二その荒野でイスラエルの人々の全会衆は、モーセとアロンにつぶやいた。三 イスラエルの人々は彼らに言った、「われわれはエジプトの地で、肉のなべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べていた時に、主の手にかかつて死んでいたら良かった。あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出して、全会衆を餓死させようとしている」。

四 そのとき主はモーセに言われた、「見よ、わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう。民は出て日々の分を日ごとに集めなければならぬ。こうして彼らがわたしの律法に従うかどうかを試みよう。五六 日目には、彼らが取り入れたものを調理すると、それは日ごとに集めるものの二倍あるであろう」。

六 モーセとアロンは、イスラエルの人々のすべての人々に言った、「夕暮には、あなたがたは、エジプトの地からあなたがたを導き出されたのが、主であることを知るであろう。セまた、朝には、あなたがたは主の栄光を見るであろう。主はあなたがたが主にむかつてつぶやくのを聞かれたからである。あなたがたは、いたいわれわれを何者として、われわれにむかつてつぶやくのか」。ハモーセはまた言った、「主は夕暮にはあなたがたに肉を与えて食べさせ、朝にはパンを与えて飽き足らせられるであろう。主はあなたがたが、主にむかつてつぶやくのを聞かれたからである。いったいわれわれは何者なのか。あなたがたのつぶやくのは、われわれにむかつてでなく、主にむかつてである」。九 モーセはアロンに言った、「イスラエルの人々の全会衆に言いなさい、『あなたがたは主の前に近づきなさい。主があなたがたのつぶやきを聞かれたからである』と」。一〇 それでアロンがイスラエルの人々の全会衆に語ったとき、彼らが荒野の方を望むと、見よ、主の栄光が雲のうちに現れていた。二 主はモーセに言われた、「三」「わたしはイスラエルの人々のつぶやきを聞いて

た。彼らに言いなさい、『あなたがたは夕には肉を食べ、朝にはパンに飽き足りるであらう。そうしてわたしがあなたがたの神、主であることを知るであらう』と。

三三夕べになると、うずらが飛んできて宿営をおおった。また、朝になると、宿営の周囲に露が降りた。三四その降りた露がかわくと、荒野の面には、薄いうろこのようなものがあり、ちょうど地に結ぶ薄い霜のようであった。三五イスラエルの人々はそれを見て互に言った、『これはなんであらう』。彼らはそれがなんであるのか知らなかったからである。モーセは彼らに言った、『これは主があなたがたの食物として賜わるパンである。一六主が命じられるのはこうである、『あなたがたは、おのおのの食べるところに従ってそれを集め、あなたがたの人数に従って、ひとり一オメルずつ、おのおのその天幕におるもののためにそれを取りなさい』と。一七イスラエルの人々はそのようにして、ある者は多く、ある者は少なく集めた。一八しかし、オメルでそれを計ってみると、多く集めた者にも余らず、少なく集めた者にも不足しなかった。おのおのその食べるところに従って集めていた。一九モーセは彼らに言った、『だれも朝までそれを残しておいてはならない』。二〇しかし彼らはモーセに聞き従わなかった。ある者は朝までそれを残しておいたが、虫がついて臭くなつた。モーセは彼らにむかつて怒つた。二一彼らは、おのおのの食べるところに従って、朝ごとにそれを集めたが、日が熱くな

るとそれは溶けた。

三六日目には、彼らは二倍のパン、すなわちひとりに二オメルを集めた。そこで、会衆の長たちは皆きて、モーセに告げたが、三三モーセは彼らに言った、『主の語られたのはこうである、『あすは主の聖安息日で休みである。きよう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残つたものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と。二四彼らはモーセの命じたように、それを朝まで保存したが、臭くならず、また虫もつかなかった。二五モーセは言った、『きよう、それを食べなさい。きようは主の安息日であるから、きようは野でそれを獲られないであらう。二六六日の間はそれを集めなければならない。七日目は安息日であるから、その日には無いであらう』。二七ところが民のうちには、七日目に出て集めようとした者があつたが、獲られなかった。二八そこで主はモーセに言われた、『あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。二九見よ、主はあなたがたに安息日を与えられた。ゆえに六日目には、ふつかつたパンをあなたがたに賜わるのである。おのおのの所にとどまり、七日目にはその所から出てはならない』。三〇こうして民は七日目に休んだ。

三二イスラエルの家はその物の名をマナと呼んだ。それはコエンドロの実のようで白く、その味は蜜を入れたせんべいのようにであつた。三三モーセは言った、『主の命じられることはこうで

ある、『それを一オメルあなたがたの子孫のためにたくわえておきなさい。それはわたしが、あなたがたをエジプトの地から導き出した時、荒野であなたがたに食べさせたパンを彼らに見させるためである』と。三三そしてモーセはアロンに言った「一つのつばを取り、マナ一オメルをその中に入れ、それを主の前に置いて、子孫のためにたくわえなさい」。三四そこで主がモーセに命じられたように、アロンはそれをあかしの箱の前に置いてたくわえた。三五イスラエルの人々は人の住む地に着くまで四十年の間マナを食べた。すなわち、彼らはカナンの地の境に至るまでマナを食べた。三六一オメルは一エバの十分の一である。

第十七章

一イスラエルの人々の全会衆は、主の命に従って、シンの荒野を出発し、旅路を重ねて、レピデムに宿営したが、そこには民の飲む水がなかった。ニそれで、民はモーセと争って言った、「わたしたちに飲む水をください」。モーセは彼らに言った、「あなたがたはなぜわたしと争うのか、なぜ主を試みるのか」。三民はその所で水にかわき、モーセにつぶやいて言った、「あなたはなぜわたしをエジプトから導き出して、わたしたちを、子供や家畜と一緒に、かわきによって死なせようとするのですか」。四このときモーセは主に叫んで言った、「わたしはこの民をどう

すればよいのでしょうか。彼らは、今にも、わたしを石で打ち殺そうとしています」。五主はモーセに言われた、「あなたは民の前に進み行き、イスラエルの長老たちを伴い、あなたがナイル川を打った、つえを手にとって行きなさい。六見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つであろう。あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て、民はそれを飲むことができる」。モーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのように行なった。七そして彼はその所の名をマツサ、またメリバと呼んだ。これはイスラエルの人々が争ったゆえ、また彼らが「主はわたしたちのうちにおられるかどうか」と言つて主を試みたからである。

八ときにアマレクがきて、イスラエルとレピデムで戦った。九モーセはヨシユアに言った、「われわれのために人を選び、出てアマレクと戦いなさい。わたしはあす神のつえを手にとつて、丘の頂に立つであろう」。一〇ヨシユアはモーセが彼に言ったようにし、アマレクと戦った。モーセとアロンおよびホルは丘の頂に登った。ニモーセが手を上げているとイスラエルは勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。三しかしモーセの手が重くなったので、アロンとホルが石を取つて、モーセの足もとに置くと、彼はその上に座した。そしてひとりはこちらに、ひとりはこちらにいて、モーセの手をささえたので、彼の手は日没までさがらなかつた。四ヨシユアは、つるぎにかけてアマレクとその民を打ち敗った。

第一八章

「四 主はモーセに言われた、「これを書物にしるして記念とし、それをヨシユアの耳に入れなさい。わたしは天が下からアマレクの記憶を完全に消し去るであらう」。五 モーセは一つの祭壇を築いてその名を「主はわが旗」と呼んだ。六 そしてモーセは言った、

「主の旗にむかつて手を上げる、主は世々アマレクと戦われる」。

一 さて、モーセのしゅうと、ミデアンの祭司エテロは、神がモーセと、み民イスラエルとにされたすべての事、主がイスラエルをエジプトから導き出されたことを聞いた。二 それでモーセのしゅうと、エテロは、さきに送り返されていたモーセの妻チツポラと、ミそのふたりの子とを連れてきた。そのひとりの名はゲルシヨムといった。モーセが、「わたしは外国で寄留者となつてゐる」と言つたからである。四 ほかのひとりの名はエリエゼルといった。「わたしの父の神はわたしの助けであつて、パロのつるぎからわたしを救われた」と言つたからである。五 こうしてモーセのしゅうと、エテロは、モーセの妻子を伴つて、荒野に行き、神の山に宿営しているモーセの所にきた。六 その時、ある人がモーセに言つた、「ごらんなさい。あなたのしゅうと、エテロは、

あなたの妻とそのふたりの子とを連れて、あなたの所にこられます」。七 そこでモーセはしゅうとを出迎えて、身をかがめ、彼に口づけして、互に安否を問ひ、共に天幕にはいつた。八 そしてモーセは、主がイスラエルのために、パロとエジプトびとにされたすべての事、道で出会つたすべての苦しみ、また主が彼らを救つたことを、しゅうとに物語つたので、九 エテロは主がイスラエルをエジプトびとの手から救い出して、もろもろの恵みを賜つたことを喜んだ。

一〇 そしてエテロは言つた、「主はほむべきかな。主はあなたがたをエジプトびとの手と、パロの手から救ひ出し、民をエジプトびとの手の下から救ひ出された。二 今こそわたしは知つた。実に彼らはイスラエルびとにむかつて高慢にふるまつたが、主はあらゆる神々にまさつて大いにいますことを」。三 そしてモーセのしゅうとエテロは燔祭と犠牲を神に供え、アロンとイスラエルの長老たちもみなきて、モーセのしゅうとと共に神の前で食事をした。

三 あくる日モーセは座して民をさばいたが、民は朝から晩まで、モーセのまわりに立つてゐた。四 モーセのしゅうとは、彼がすべて民にしていることを見て、言つた、「あなたが民にしているこのことはなんですか。あなたひとりが座し、民はみな朝から晩まで、あなたのまわりに立つてゐるのはなぜですか」。五 モーセはしゅうとに言つた、「民が神に伺おうとして、わたしの

所に來るからです。一六 彼らは事があれば、わたしの所にきま
す。わたしは相互の間をさばいて、神の定めと判決を知らせる
のです。一七 モーセのしゅうとは彼に言った、「あなたのしてい
ることは良くない。一八 あなたも、あなたと一緒にいるこの民
も、必ず疲れ果てるであろう。このことはあなたに重過ぎるか
ら、ひとりですることができない。一九 今わたしの言うことを聞
きなさい。わたしはあなたに助言する。どうか神があなたと共に
にいますように。あなたは民のために神の前にいて、事件を神
に述べなさい。二〇 あなたは彼らに定めと判決を教え、彼らの歩
むべき道と、なすべき事を彼らに知らせなさい。二一 また、すべ
ての民のうちから、有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎
む人を選び、それを民の上に立てて、千人の長、百人の長、五十
人の長、十人の長としなさい。二二 平素は彼らに民をさばかせ、
大事件はすべてあなたの所に持つてこさせ、小事件はすべて彼
らにさばかせなさい。こうしてあなたを身軽にし、あなたと共に
に彼らに、荷を負わせなさい。二三 あなたが、もしこの事を行い、
神もまたあなたに命じられるならば、あなたは耐えることができ
き、この民もまた、みな安んじてその所に帰ることができるよう」。
二四 モーセはしゅうとの言葉に従い、すべて言われたようにし
た。二五 すなわち、モーセはすべてのイスラエルのうちから有能
な人を選んで、民の上に長として立て、千人の長、百人の長、五
十人の長、十人の長とした。二六 平素は彼らが民をさばき、むず

かしい事件はモーセに持つてきたが、小さい事件はすべて彼ら
みずからさばいた。二七 こうしてモーセはしゅうとを送り返し
たので、その国に歸つて行つた。

第十九章

一 イスラエルの人々は、エジプトの地を出て後三月目のその日
に、シナイの荒野にはいった。二 すなわち彼らはレピデムを
出立してシナイの荒野に入り、荒野に宿営した。イスラエルは
その所で山の前に宿営した。三 さて、モーセが神のもとに登る
と、主は山から彼を呼んで言われた、「このように、ヤコブの家
に言い、イスラエルの人々に告げなさい、四 『あなたがたは、わ
たしがエジプトびとにした事と、あなたがたを驚の翼に載せて
わたしの所にこさせたことを見た。五 それで、もしあなたがた
が、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら
ば、あなたがたはすべての民にまさつて、わたしの宝となるであ
ろう。六 全地はわたしの所有だからである。七 あなたがたはわた
しに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであらう』。こ
れがあなたのイスラエルの人々に語るべき言葉である」。
八 それでモーセは行つて民の長老たちを呼び、主が命じられた
これらの言葉を、すべてその前に述べたので、八民はみな共に答
えて言つた、「われわれは主が言われたことを、みな行います」。

モーセは民の言葉を主に告げた。九主はモーセに言われた、「見よ、わたしは濃い雲のうちにあつて、あなたに臨むであろう。それはわたしがあなたと語るのを民に聞かせて、彼らに長くあなたを信じさせるためである」。

モーセは民の言葉を主に告げた。一〇主はモーセに言われた、「あなたは民のところに行つて、きようとあす、彼らをきよめ、彼らにその衣服を洗わせ、二三日目までに備えさせなさい。三日目に主が、すべての民の目の前で、シナイ山に下るからである。二三あなたは民のために、周囲に境を設けて言いなさい、『あなたがたは注意して、山に上らず、また、その境界に触れないようにしなさい。山に触れる者は必ず殺されるであろう。三手をそれに触れてはならない。触れる者は必ず石で打ち殺されるか、射殺されるであろう。獣でも人でも生きることができない』。ラツパが長く響いた時、彼らは山に登ることができると。二四そこでモーセは山から民のところに下り、民をきよめた。彼らはその衣服を洗つた。二五モーセは民に言つた、「三日目までに備えをしなさい。女に近づいてはならない」。

二六三日目の朝となつて、かみなりと、いなすまと厚い雲とが、山の上であり、ラツパの音が、はなはだ高く響いたので、宿営におる民はみな震えた。二七モーセが民を神に会わせるために、宿営から導き出したので、彼らは山のかもとに立つた。二八シナイ山は全山煙つた。主が火のなかにあつて、その上に下られた

からである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた。二九ラツパの音が、いよいよ高くなつたとき、モーセは語り、神は、かみなりをもつて、彼に答えられた。三〇主はシナイ山の頂に下られた。そして主がモーセを山の頂に召されたので、モーセは登つた。三一主はモーセに言われた、「下つて行つて民を戒めなさい。民が押し破つて、主のところにきて、見ようとし、多くのものが死ぬことのないようにするためである。三二主に近づく祭司たちにもまた、その身をきよめさせなさい。主が彼らを打つことのないようにするためである。三三モーセは主に言つた、「民はシナイ山に登ることはできないでしょう。あなたがわたしたちを戒めて『山のまわりに境を設け、それをきよめよ』と言われたからです。三四主は彼に言われた、「行け、下れ。そしてあなたはアロンと共に登つてきなさい。ただし、祭司たちと民とが、押し破つて主のところに登ることのないようにしなさい。主が彼らを打つことのないようにするためである。三五モーセは民の所に下つて行つて彼らに告げた。

第二〇章

一神はこのすべての言葉を語つて言われた。

二「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した者である。

- 三 あなたはわたしのほかに、なにものをも神かみとしてはならない。
- 四 あなたは自分のために、刻んだ像ぞうを造つてはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形かたちをも造つてはならない。五 それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神かみ、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものは、父の罪を子に報いて、三四代に及ぼし、六わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであらう。
- 七 あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰ばつしないでは置かないであらう。
- 八 安息日を覚えて、これを聖とせよ。九 六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。一〇 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘むすめ、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。二 主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造つて、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。
- 三 あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜たまわる地で、あなたが長く生きるためである。
- 四 あなたは殺してはならない。
- 五 あなたは姦淫かんいんしてはならない。

- 五 あなたは盗ぬすんではならない。
- 六 あなたは隣人について、偽証ぎしょうしてはならない。
- 七 あなたは隣人の家をむさぼつてはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼつてはならない。
- 八 民は皆、かみなりと、いなずまと、ラツパの音と、山の煙けむつているのを見た。民は恐れおののき、遠く離れて立つた。一九 彼らはモーセに言った、「あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞き従います。神がわたしたちに語られぬようにしてください。それでなければ、わたしたちは死ぬでしょう」。二〇 モーセは民に言った、「恐れてはならない。神はあなたがたを試みるため、またその恐れをあなたがたの目の前において、あなたがたが罪を犯さないようにするために臨まへまれたのである」。
- 二一 そこで、民は遠く離れて立つたが、モーセは神のおられる濃い雲に近づいて行つた。二二 主はモーセに言われた、「あなたはイスラエルの人々にこう言いなさい、『あなたがたは、わたしが天からあなたがたと語るのを見た。三 あなたがたはわたしと並べて、何をも造つてはならない。銀の神々も、金の神々も、あなたがたのために造つてはならない。四 あなたはわたしのために土の祭壇を築き、その上にあなたの燔祭、酬恩祭、羊、牛をささげなければならない。わたしの名を覚えさせるすべての

所で、わたしはあなたに臨んで、あなたを祝福するであろう。二五あなたがもしわたしに石の祭壇を造るならば、切り石で築いてはならない。あなたがもし、のみをそれに当てるならば、それをけがすからである。二六あなたは階段によつて、わたしの祭壇に登つてはならない。あなたの隠し所が、その上にあらわれることのないようにするためである。』

第二章

一これはあなたが彼らの前に示すべきおきてである。二あなたがヘブルびとである奴隷を買う時は、六年のあいだ仕えさせ、七年目には無償で自由の身として去らせなければならない。三彼がもし独身できたならば、独身で去らなければならない。もし妻を持つていたならば、その妻は彼と共に去らなければならない。四もしその主人が彼に妻を与えて、彼に男の子また女の子を産んだならば、妻とその子供は主人のものとなり、彼は独身で去らなければならない。五奴隷がもし『わたしは、わたしの主人とわたしの妻と子供を愛します。わたしは自由の身となつて去ることを好みません』と明言するならば、六その主人は彼を神のもとに連れて行き、戸あるいは柱のところに連れて行って、主人は、きりで彼の耳を刺し通さなければならない。そうすれば彼はいつまでもこれに仕えるであろう。

七もし人がその娘を女奴隷として売るならば、その娘は男奴隷が去るように去つてはならない。八彼女がもし彼女を自分のものと定めた主人の氣にいらぬ時は、その主人は彼女が、あがなわれることを、これに許さなければならない。彼はこれを欺いたのであるから、これを他国の民に売る権利はない。九彼がもし彼女を自分の子のもので定めるならば、これを娘のように扱わなければならない。一〇彼が、たとい、ほかに女をめとることがあつても、前の女に食物と衣服を与えることと、その夫婦の道とを絶えさせてはならない。二彼がもしこの三つを行わなければ、彼女は金を償わずに去ることができる。

三人を撃つて死なせた者は、必ず殺されなければならない。一三しかし、人がたくむことをしないのに、神が彼の手をわたされることのある時は、わたしはあなたのために一つの所を定めよう。彼はその所へのがれることができる。一四しかし人がもし、ことさらにその隣人を欺いて殺す時は、その者をわたしの祭壇からでも、捕えて行って殺さなければならない。

一五自分の父または母を撃つ者は、必ず殺されなければならない。

一六人をかどわかつた者は、これを売つていても、なお彼の手にあつても、必ず殺されなければならない。

一七自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない。

一八人が互に争い、そのひとり石または、こぶしで相手を撃つた時、これが死なないで床につき、一九再び起きあがつて、つえにすぎり、外を歩くようになるならば、これを撃つた者は、ゆるされるであろう。ただその仕事を休んだ損失を償い、かつこれにじゅうぶん治療させなければならぬ。

二〇もし人がつえをもつて、自分の男奴隷または女奴隷を撃ち、その手の下に死ぬならば、必ず罰せられなければならない。二一しかし、彼がもし一日か、ふつか生き延びるならば、その人は罰せられない。奴隷は彼の財産だからである。

二二もし人が互に争つて、身ごもつた女を撃ち、これに流産させるならば、ほかの害がなくとも、彼は必ずその女の夫の求める罰金を課せられ、裁判人の定めるとおりに支払わなければならない。二三しかし、ほかの害がある時は、命には命、二四目には目、歯には歯、手には手、足には足、二五焼き傷には焼き傷、傷には傷、打ち傷には打ち傷をもって償わなければならない。

二六もし人が自分の男奴隷の片目、または女奴隷の片目を撃ち、これをつぶすならば、その目のためにこれを自由の身として去らせなければならぬ。二七また、もしその男奴隷の一本の歯、またはその女奴隷の一本の歯を撃ち落すならば、その歯のためにこれを自由の身として去らせなければならない。

二八もし牛が男または女を突いて殺すならば、その牛は必ず石で撃ち殺されなければならない。その肉は食べてはならない。し

かし、その牛の持ち主は罪がない。二九牛がもし以前から突く癖があつて、その持ち主が注意されても、これを守りおかなかつたために、男または女を殺したならば、その牛は石で撃ち殺され、その持ち主もまた殺されなければならない。三〇彼がもし、あがないの金を課せられたならば、すべて課せられたほどのものを、命の償いに支払わなければならない。三一男の子を突いても、女の子を突いても、この定めに従つて処置されなければならない。三二牛がもし男奴隷または女奴隷を突くならば、その主人に銀三十シケルを支払わなければならない。またその牛は石で撃ち殺されなければならない。

三三もし人が穴をあけたままに置き、あるいは穴を掘つてこれにおおいをしないために、牛または、ろばがこれに落ち込むことがあれば、三穴の持ち主はこれを償い、金をその持ち主に支払わなければならない。しかし、その死んだ獣は彼のものとなるであらう。

三三ある人の牛が、もし他人の牛を突いて殺すならば、彼らはその生きてゐる牛を売つて、その価を分け、またその死んだものを分けなければならない。三六あるいはその牛が以前から突く癖のあることが知られてゐるのに、その持ち主がこれを守りおかなかつたならば、その人は必ずその牛のために牛をもつて償わなければならない。しかし、その死んだ獣は彼のものとなるであらう。

第二章

一もし人が牛または羊を盗んで、これを殺し、あるいはこれを売るならば、彼は一頭の牛のために五頭の牛をもつて、一頭の羊のために四頭の羊をもつて償わなければならない。三 彼は必ず償わなければならない。もし彼に何も無い時は、彼はその盗んだ物のために身を売られるであろう。四もしその盗んだ物がお生きて、彼の手もとにあれば、それは牛、ろば、羊のいずれにせよ、これを二倍にして償わなければならない。

ニもし盗びとが穴をあけてはいるのを見て、これを撃つて殺したときは、その人には血を流した罪はない。三しかし日がのぼつて後ならば、その人に血を流した罪がある。

五もし人が畑またはぶどう畑のものを食わせ、その家畜を放つて他人の畑のものを食させた時は、自分の畑の最も良い物と、ぶどう畑の最も良い物をもつて、これを償わなければならない。

六もし火が出て、いばらに移り、積みあげた麦束、または立穂、または畑を焼いたならば、その火を燃やした者は、必ずこれを償わなければならない。

七もし人が金銭または物品の保管を隣人に託し、それが隣人の家から盗まれた時、その盗びとが見つけれられたならば、これを二倍にして償わなければならない。八もし盗びとが見つけれなければならない、家の主人を神の前に連れてきて、彼が隣人の持ち物に

手をかけたかどうかを、確かめなければならない。

九牛であれ、ろばであれ、羊であれ、衣服であれ、あるいはどんな失った物であれ、それについて言い争いが起り『これがそれです』と言う者があれば、その双方の言い分を、神の前に持ち出さなければならない。そして神が有罪と定められる者は、それを二倍にしてその相手に償わなければならない。

一〇もし人が、ろば、または牛、または羊、またはどんな家畜でも、それを隣人に預けて、それが死ぬか、傷つくか、あるいは奪い去られても、それを見た者がなければ、二双方の間に、隣人の持ち物に手をかけなかったという誓いが、主の前になされなければならない。そうすれば、持ち主はこれを受け入れ、隣人は償うに及ばない。三けれども、それがまさしく自分の所から盗まれた時は、その持ち主に償わなければならない。四もしそれが裂き殺された時は、それを証拠として持つて来るならば、その裂き殺されたものは償うに及ばない。

一四もし人が隣人から家畜を借りて、それが傷つき、または死ぬ場合、その持ち主がそれと共にいない時は、必ずこれを償わなければならない。一五もしその持ち主がそれとおれば、それを償うに及ばない。もしそれが賃借りしたものならば、その賃賃をそれに当てなければならない。

一六もし人がまだ婚約しない処女を誘つて、これと寝たならば、彼は必ずこれに花嫁料を払つて、妻としなければならない。一七

もしその父がこれをその人に与えることをかたく拒むならば、彼は処女の花嫁料に当るほどの金を払わなければならない。

一八魔法使の女は、これを生かしておいてはならない。

一九すべて獣を犯す者は、必ず殺されなければならない。

二〇主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は、断ち滅ぼされなければならない。

二一あなたは寄留の他国人を苦しめてはならない。また、これをしえたててはならない。あなたがたも、かつてエジプトの国で、寄留の他国人であつたからである。二二あなたがたはすべて寡婦、または孤児を悩ましてはならない。二三もしあなたが彼らを悩まして、彼らがわたしにむかつて叫ぶならば、わたしは必ずその叫びを聞くであらう。二四そしてわたしの怒りは燃えたち、つるぎをもつてあなたがたを殺すであらう。あなたがたの妻は寡婦となり、あなたがたの子供たちは孤児となるであらう。

二五あなたが、共にあるわたしの民の貧しい者に金を貸す時は、これに対して金貸しのようにしてはならない。これから利子を取つてはならない。二六もし隣人の上着を質に取るならば、日の入るまでにそれを返さなければならない。二七これは彼の身をおおう、ただ一つの物、彼の膚のための着物だからである。彼は何を着て寝ることができよう。彼がわたしにむかつて叫ぶならば、わたしはこれに聞くであらう。わたしはあわれみ深いからである。

二八あなたは神をののしつてはならない。また民の司をのろつてはならない。

二九あなたの豊かな穀物と、あふれる酒とをささげるに、ためらつてはならない。

あなたのういごを、わたしにささげなければならない。三〇あなたはまた、あなたの牛と羊をも同様にしなければならない。七日の間その母と共に置いて、八日目にそれをわたしに、ささげなければならない。

三一あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない。あなたも、野で裂き殺されたものの肉を食べてはならない。それは犬に投げ与えなければならない。

第三章

一あなたは偽りのうわさを言いふらしてはならない。あなたは悪人と手を携えて、悪意のある証人になつてはならない。二あなたは多数に従つて悪をおこなつてはならない。あなたは訴訟において、多数に従つて片寄り、正義を曲げるような証言をしてはならない。三また貧しい人をその訴訟において、曲げてかばつてはならない。

四もし、あなたが敵の牛または、ろばの迷っているのに会う時は、必ずこれを彼の所に連れて行つて、帰さなければならない。

五もしあなたが憎む者のろばが、その荷物の下に倒れ伏しているのを見る時は、これを見捨てて置かないように気をつけ、必ずその人に手を貸して、これを起さなければならぬ。

六あなたは貧しい者の訴訟において、裁判を曲げてはならない。七あなたは偽り事に遠ざからなければならぬ。あなたは罪のない者と正しい者とを殺してはならない。わたしは悪人を義とすることはないからである。八あなたは賄賂を取ってはならない。賄賂は人の目をくらまし、正しい者の事件をも曲げさせるからである。

九あなたは寄留の他国人をしえたげてはならない。あなたはたはエジプトの国で寄留の他国人であつたので、寄留の他国人の心を知っているからである。

一〇あなたは六年のあいだ、地に種をまき、その産物を取り入れることができる。しかし、七年目には、これを休ませて、耕さずに置かなければならない。そうすれば、あなたの民の貧しい者がこれを食べ、その残りは野の獣が食べることができる。あなたのぶどう畑も、オリブ畑も同様にしなければならぬ。

一一あなたは六日のあいだ、仕事をし、七日目には休まなければならぬ。これはあなたの牛および、ろばが休みを得、またあなたのはしための子および寄留の他国人を休ませるためである。一二わたしが、あなたがたに言つたすべての事に心を留めなさい。他の神々の名を唱えてはならない。また、これをあなたの

くちびるから聞えさせてはならない。

一四あなたは年に三度、わたしのために祭を行わなければならない。一五あなたは種入れぬパンの祭を守らなければならない。わたしが、あなたに命じたように、アビブの月の定めの日七日のあいだ、種入れぬパンを食べなければならない。それはその月にあなたがエジプトから出たからである。だれも、むなし手でわたしの前に出てはならない。一六また、あなたが畑にまいて獲た物の勤労の初穂をささげる刈入れの祭と、あなたの勤労の実を畑から取り入れる年の終りに、取入れの祭を行わなければならない。一七男子はみな、年に三度、主なる神の前に出なければならない。

一八あなたはわたしの犠牲の血を、種を入れたパンと共にささげてはならない。また、わたしの祭の脂肪を翌朝まで残して置いてはならない。

一九あなたの土地の初穂の最も良い物を、あなたの神、主の家に携えてこなければならない。あなたは子やぎを、その母の乳で煮てはならない。

二〇見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。二一あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従ひ、彼にそむいてはならない。わたしの名が彼のうちにあるゆえに、彼はあなたがたのとがをゆるさないであろう。

三しかし、もしあなたが彼の声によく聞き従い、すべてわたしが語ることを行うならば、わたしはあなたの敵を敵とし、あなたのあだをあだとするであろう。

三わたしは使はあなたの前に行つて、あなたをアモリびと、ヘテびと、ペリジびと、カナンびと、ヒビびと、およびエブスびとの所に導き、わたしは彼らを滅ぼすであろう。二四あなたは彼らの神々を拜んではならない。これに仕えてはならない。また彼らのおこないにならつてはならない。あなたは彼らを全く打ち倒し、その石の柱を打ち砕かなければならない。二五あなたがたの神、主に仕えなければならぬ。そうすれば、わたしはあなたがたのパンと水を祝し、あなたがたのうちから病を除き去るであろう。二六あなたの国のうちには流産する女もなく、不妊の女もなく、わたしはあなたの日の数を満ち足らせるであろう。二七わたしはあなたの先に、わたしの恐れをつかし、あなたが行く所の民を、ことごとく打ち敗り、すべての敵に、その背をあなたの方へ向けさせるであろう。二八わたしはまた、くまばちをあなたの先につかわすであろう。これはヒビびと、カナンびと、およびヘテびとをあなたの前から追い払うであろう。二九しかし、わたしは彼らを一年のうちには、あなたの前から追い払わないであろう。土地が荒れすたれ、野の獣が増して、あなたを害することのないためである。三〇わたしは徐々に彼らをあなたの前から追い払うであろう。あなたは、ついにふえひろがつて、この地

を継ぐようになるであろう。三わたしは紅海からペリシテびとの海に至るまでと、荒野からユフラテ川に至るまでを、あなたの領域とし、この地に住んでいる者をあなたの手にわたすであろう。あなたは彼らをあなたの前から追い払うであろう。三あなたたは彼ら、および彼らの神々と契約を結んではならない。三三彼らはあなたの国に住んではならない。彼らがあなたをいぎなつて、わたしに対して罪を犯させることのないためである。もし、あなたが彼らの神に仕えるならば、それは必ずあなたのわなとなるであろう」。

第二章

一また、モーセに言われた、「あなたはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人の長老たちと共に、主のもとにのぼつてきなさい。そしてあなたがたは遠く離れて礼拝しなさい。二ただモーセひとり主が主に近い、他の者は近づいてはならない。また、民も彼と共にのぼつてはならない」。

三モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言つた、「わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います」。四そしてモーセは主の言葉を、ことごとく書きしるし、朝はやく起きて山のふもとに祭壇を築き、イスラエルの十二部族に従つて十二の柱を建て、五イスラエル

の人々のうちの若者たちをつかわして、主に燔祭をささげさせ、また酬恩祭として雄牛をささげさせた。六その時モーセはその血の半ばを取って、鉢に入れ、また、その血の半ばを祭壇に注ぎかけた。七そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼らは答えて言った、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」。八そこでモーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った、「見よ、これは主がこれらのすべての言葉に基いて、あなたがたと結ばれる契約の血である」。

九こうしてモーセはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人の長老たちと共にのぼって行った。一〇そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るおおぞらのようであった。一一神はイスラエルの人々の指導者たちを手にかけれなかったため、彼らは神を見て、飲み食いした。

一二ときに主はモーセに言われた、「山に登り、わたしの所にきて、そこにいなさい。彼らを教えるために、わたしが律法と戒めとを書きしるした石の板をあなたに授けるであろう」。一三そこでモーセは従者ヨシヤと共に立ちあがり、モーセは神の山に登った。一四彼は長老たちに言った、「わたしたちがあなたがたの所に帰って来るまで、ここで待っていないさい。見よ、アロンとホルとが、あなたがたと共にいるから、事ある者は、だれでも彼らの所へ行きなさい」。

一五こうしてモーセは山に登ったが、雲は山をおおっていた。一六主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日のあいだ、山をおおっていたが、七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。一七主の栄光は山の頂で、燃える火のようにイスラエルの人々の目に見えたが、一八モーセは雲の中にはいつて、山に登った。そしてモーセは四十日四十夜、山にいた。

第二十五章

一主はモーセに言われた、「イスラエルの人々に告げて、わたしのためにささげ物を携えてこさせなさい。すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい。二あなたがたが彼らから受け取るべきささげ物はこれである。三あなち金、銀、青銅、四青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸、やぎの毛糸、五あかね染の雄羊の皮、じゅごんの皮、アカシヤ材、六ともし油、七注ぎ油と香ばしい薫香のための香料、七縞めのう、エボデと胸当にはめる宝石。八また、彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしは彼らのうちに住むためである。九すべてあなたがたに示す幕屋の型および、そのもろもろの器の型に従って、これを造らなければならない。

一〇彼らはアカシヤ材で箱を造らなければならない。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半、高さは一キュビト半。一一あな

たは純金じゆんきんでこれをおおわなければならぬ。すなわち内外ないがいともこれをおおい、その上の周囲しゆういに金の飾り縁かざふちを造らなければならぬ。ニまた金の環かん四つを鑄いて、その四すみに取り付けなければならぬ。すなわち二つの環かんをこちら側に、二つの環かんをあちら側に付けなければならぬ。ニまたアカシヤ材さいのさおを造り、金きんでこれをおおわなければならぬ。四としてそのさおを箱はこの側面そめんの環かんに通し、それで箱はこをかつがなければならぬ。ニ五さおは箱はこの環かんに差さして置き、それを抜き放はなしてはならぬ。ニ六そしてその箱はこに、わたしがあなたに与あたえるあかしの板いたを納おさめなければならぬ。ニ七また純金の贖罪所しよぐわいしよを造らなければならぬ。長ながさは二キュビト半はん、幅はばは一キュビト半はん。ニ八また二つの金のケルビムを造らなければならぬ。これを打物造りとし、贖罪所しよぐわいしよの両端りやうはしに置かなければならぬ。ニ九一つのケルブをこの端はしに、一つのケルブをかの端はしに造り、ケルビムを贖罪所しよぐわいしよの一部としてその両端りやうはしに造らなければならぬ。ニ〇ケルビムは翼つばさを高く伸のべ、その翼つばさをもつて贖罪所しよぐわいしよをおおい、顔かおは互たがひにむかい合い、ケルビムの顔かおは贖罪所しよぐわいしよにむかわなければならぬ。ニ一あなたは贖罪所しよぐわいしよを箱はこの上に置き、箱はこの中にはわたしが授けるあかしの板いたを納おさめなければならぬ。ニ二その所でわたしはあなたに会い、贖罪所しよぐわいしよの上から、あかしの箱はこの上にある二つのケルビムの間あいだから、イスラエルの人々ひとびとのために、わたしが命めいじようとするもろもろの事ことを、あなたに語かたるであらう。

ニ三あなたはまたアカシヤ材さいの机つくえを造らなければならぬ。長ながさは二キュビト、幅はばは一キュビト、高たかさは一キュビト半はん。ニ四純金じゆんきんでこれをおおい、周囲しゆういに金の飾り縁かざふちを造り、ニ五またその周囲しゆういに手幅てはばの棧つくを造り、その棧つくの周囲しゆういに金の飾り縁かざふちを造らなければならぬ。ニ六また、そのために金の環かん四つを造り、その四つの足のすみ四か所にその環かんを取り付けなければならぬ。ニ七環かんは棧つくのわきに付けて、机つくえをかつぐさおを入れる所ところとしなければならぬ。ニ八またアカシヤ材さいのさおを造り、金きんでこれをおおい、それをもつて、机つくえをかつがなければならぬ。ニ九また、その皿さら、乳香にゆうかうを盛もる杯はいおよび灌祭そそぎを注ぐための瓶びんと鉢はちを造り、これらは純金じゆんきんで造らなければならぬ。ニ〇そして机つくえの上には供えのパンを置おいて、常にわたしの前まえにあるようにしなければならぬ。ニ一また純金の燭台しよくたいを造らなければならぬ。燭台しよくたいは打物造りとし、その台だい、幹かん、萼がく、節ふし、花はなを一つに連つらなせなければならぬ。ニ二また六つの枝えだをそのわきから出ださせ、燭台しよくたいの三つの枝えだをこの側がわから、燭台しよくたいの三つの枝えだをかの側がわから出ださせなければならぬ。ニ三あめんどうの花はなの形かたちをした三つの萼がくが、それぞれ節ふしと花はなをもつて一つの枝えだにあり、また、あめんどうの花はなの形かたちをした三つの萼がくが、それぞれ節ふしと花はなをもつてほかの枝えだにあるようにし、燭台しよくたいから出る六つの枝えだを、みなそのようにしなければならぬ。ニ四また、燭台しよくたいの幹かんには、あめんどうの花はなの形かたちをした四つの

萼^{がく}を付け、その萼^{がく}にはそれぞれ節^{ふし}と花^{はな}をもたせなさい。三五すなわち二つの枝^{えだ}の下^{した}に一つの節^{ふし}を取り付け、次の二つの枝^{えだ}の下^{した}に一つの節^{ふし}を取り付け、更に次の二つの枝^{えだ}の下^{した}に一つの節^{ふし}を取り付け、燭^{しょく}台^{だい}の幹^{みき}から出る六つの枝^{えだ}に、みなそのようにしなければならぬ。三六それらの節^{ふし}と枝^{えだ}を一つに連ね、ことごとく純金^{じゆんきん}の打物^{うちもの}造りにしなければならぬ。三七また、そのともしび皿^{ざら}を七つ造り、そのともしび皿^{ざら}に火をともして、その前方^{ぜんぽう}を照させなければならぬ。三八その芯^{しん}切りばさみと、芯^{しん}取り皿^{ざら}は純金^{じゆんきん}で造らなければならぬ。三九すなわち純金^{じゆんきん}一タラントで燭^{しょく}台と、これらのもろもろの器^{うつわ}とが造られなければならぬ。四〇そしてあなたが山^{やま}で示^{しめ}された型^{かた}に従^{したが}い、注意^{ちゆうい}してこれを造らなければならぬ。

第二十六章

一あなたはまた十枚^{まい}の幕^{まく}をもつて幕屋^{まくや}を造らなければならぬ。すなわち亜麻^{あま}の撚糸^{ねんし}、青糸^{あおいと}、紫糸^{むつぎいと}、緋糸^{ひいと}で幕^{まく}を作り、巧み^{たく}なわざをもつて、それにケルビムを織^おり出さなければならぬ。二幕^{まく}の長さ^{なが}は、おのおの二十八キュビト、幕^{まく}の幅^{はば}は、おのおの四キュビトで、幕^{まく}は皆同じ寸法^{すんぽう}でなければならぬ。三その幕^{まく}五枚^{まい}を互^{たがい}に連ね合^{つら}わせ、また他の五枚^{まい}の幕^{まく}をも互^{たがい}に連ね合^{つら}わせなければならぬ。四その一連^{いちれん}の端^{はし}にある幕^{まく}の縁^{ふち}に青色^{あおいいろ}の乳^ちをつけ、

また他の一連^{いちれん}の端^{はし}にある幕^{まく}の縁^{ふち}にもそのようにしなければならぬ。五あなたは、その一枚^{まい}の幕^{まく}に乳五十^{ちご}をつけ、また他の一連^{いちれん}の幕^{まく}の端^{はし}にも乳五十^{ちご}をつけ、その乳^ちを互^{たがい}に相向^{あひむ}かわせなければならぬ。六あなたはまた金の輪^わ五十^ごを作り、その輪^わで幕^{まく}を互^{たがい}に連ね合^{つら}わせて一つの幕屋^{まくや}にしなければならぬ。

七また幕屋^{まくや}をおおう天幕^{てんまく}のためにやぎの毛糸^{けいと}で幕^{まく}を作らなければならぬ。すなわち幕^{まく}十一枚^{まい}を作り、ハその一枚^{まい}の幕^{まく}の長さ^{なが}は三十キュビト、その一枚^{まい}の幕^{まく}の幅^{はば}は四キュビトで、その十一枚^{まい}の幕^{まく}は同じ寸法^{すんぽう}でなければならぬ。九そして、その幕^{まく}五枚^{まい}を一つに連ね合^{つら}わせ、またその幕^{まく}六枚^{まい}を一つに連ね合^{つら}わせて、その六枚^{まい}の幕^{まく}を天幕^{てんまく}の前^{まえ}で折り重^{かさ}ねなければならぬ。一〇またその一連^{いちれん}の端^{はし}にある幕^{まく}の縁^{ふち}に乳五十^{ちご}をつけ、他の一連^{いちれん}の幕^{まく}の縁^{ふち}にも乳五十^{ちご}をつけなさい。

二そして青銅^{せいどう}の輪^わ五十^ごを作り、その輪^わを乳^ちに掛け、その天幕^{てんまく}を連ね合^{つら}わせて一つにし、三その天幕^{てんまく}の幕^{まく}の残^{のこ}りの垂^たれる部分^{ぶぶん}、すなわちその残^{のこ}りの半幕^{はんまく}を幕屋^{まくや}のうしろに垂^たれさせなければならぬ。四そして天幕^{てんまく}の幕^{まく}のたけで余^{あま}るものの、こちらのキュビトと、あちらのキュビトとは、幕屋^{まくや}をおおうように、その両側^{りやうがわ}のこちらとあちらとに垂^たれさせなければならぬ。一四また、あかね染^ぞめの雄羊^{おひつじ}の皮^{かわ}で天幕^{てんまく}のおおいと、じゅごんの皮^{かわ}でその上^{うへ}にかけるおおいとを造^{つく}らなければならぬ。

一五あなたは幕屋^{まくや}のために、アカシヤ材^{さい}で立柱^{たてわく}を造^{つく}らなければならぬ。

らない。二六 杵の長さを十キュビト、杵の幅を一キュビト半とし、二七 杵ごとに二つの柄を造つて、かれとこれとを食い合わせ、幕屋のすべての杵にこのようにしなければならぬ。二八 あなたは幕屋のために杵を造り、南側のために杵二十とし、二九 その二十の杵の下に銀の座四十を造つて、この杵の下に、その二つの柄のために二つの座を置き、かの杵の下にもその二つの柄のために二つの座を置かなければならぬ。三〇 また幕屋の他の側、すなわち北側のために杵二十を造り、三一 その銀の座四十を造つて、この杵の下に、二つの座を置き、かの杵の下にも二つの座を置かなければならぬ。三二 また幕屋のうしろ、すなわち西側のために杵六つを造り、三三 幕屋のうしろの二つのすみのために杵二つを造らなければならぬ。三四 これらは下で重なり合い、同じくその頂でも第一の環まで重なり合うようにし、その二つともそのようにしなければならぬ。それらは二つのすみのために設けるものである。三五 こうしてその杵は八つ、その銀の座は十六、この杵の下に二つの座、かの杵の下にも二つの座を置かなければならぬ。三六 またアカシヤ材で横木を造らなければならぬ。三七 また幕屋のこの側の杵のために五つ、三八 また幕屋のかの側の杵のために横木五つ、幕屋のうしろの西側の杵のために横木五つを造り、三九 杵のまん中にある中央の横木は端から端まで通るようにしなければならぬ。四〇 そしてその杵を金でおおい、また横木を通すその環を金で造り、また、そ

の横木を金でおおわなければならぬ。四一 こうしてあなたは山で示された様式に従つて幕屋を建てなければならぬ。四二 また青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で垂幕を作り、巧みなわざをもつて、それにケルビムを織り出さなければならぬ。四三 そして金でおおつた四つのアカシヤ材の柱の金の鉤にこれを掛け、その柱は四つの銀の座の上にすえなければならぬ。四四 その垂幕の輪を鉤に掛け、その垂幕の内にあかしの箱を納めなさい。その垂幕はあなたがたのために聖所と至聖所とを隔て分けるであらう。四五 また至聖所にあるあかしの箱の上に贖罪所を置かなければならぬ。四六 そしてその垂幕の外に机を置き、幕屋の南側に、机に向かい合わせて燭台を置かなければならぬ。ただし机は北側に置かなければならぬ。四七 あなたはまた天幕の入口のために青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、色とりどりに織つたとばりを作らなければならぬ。四八 あなたはそのとばりのためにアカシヤ材の柱五つを造り、これを金でおおい、その鉤を金で造り、またその柱のために青銅の座五つを鋳て造らなければならぬ。

第二十七章

一 あなたはまたアカシヤ材で祭壇を造らなければならぬ。長さ五キュビト、幅五キュビトの四角で、高さは三キュビトであ

る。ニその四すみの上にその一部としてその角を造り、青銅で祭壇をおおわなければならない。三また灰を取るつぼ、十能鉢、肉叉、火皿を造り、その器はみな青銅で造らなければならない。四また祭壇のために青銅の網細工の格子を造り、その四すみで、網の上に青銅の環を四つ取り付けなければならない。五その網を祭壇の出張りの下に取り付け、これを祭壇の高さの半ばに達するようにしなければならない。六また祭壇のために、さおを造らなければならない。すなわちアカシヤ材で、さおを造り、青銅で、これをおおわなければならない。七そのさおを環に通し、さおを祭壇の両側にして、これがかつがなければならない。八祭壇は板で空洞に造り、山で示されたように、これを造らなければならない。

九あなたはまた幕屋の庭を造り、両側では庭のために長さ百キュビトの亜麻の撚糸のあげばりを設け、その一方に当てなければならない。一〇その柱は二十、その柱の二十の座は青銅にし、その柱の鉤と桁とは銀にしなければならない。一また同じく北側のために、長さ百キュビトのあげばりを設けなければならない。二また同じく南側のために、長さ百キュビトの座は青銅にし、その柱の鉤と桁とは銀にしなければならない。三また庭の西側の幅のために五十キュビトのあげばりを設けなければならない。その柱は十、その座も十。四また東側でも庭の幅を五十キュビトにしなければならない。五そしてその一方に十五キュビトのあ

げばりを設けなければならない。その柱は三つ、その座も三つ。六また他の一方にも十五キュビトのあげばりを設けなければならない。その柱は三つ、その座も三つ。七庭の門のために青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、色とりどりに織つた長さ二十キュビトのとばりを設けなければならない。その柱は四つ、その座も四つ。八庭の周囲の柱はみな銀の桁でつなぎ、その鉤は銀、その座は青銅にしなければならない。九八庭の長さは百キュビト、その幅は五十キュビト、その高さは五キュビトで、亜麻の撚糸の布を掛けめぐらし、その座を青銅にしなければならない。一〇すべて幕屋に用いるのもろもろの器、およびそのすべての釘、また庭のすべての釘は青銅で造らなければならない。

一〇あなたはまたイスラエルの人々に命じて、オリブをつぶして採つた純粹の油を、ともし火のために持つてこさせ、絶えずともし火をともしなければならない。ニアロンとその子たちとは、会見の幕屋の中のかしの箱の前にある垂幕の外で、夕から朝まで主の前に、そのともし火を整えなければならない。これはイスラエルの人々の守るべき世々変らざる定めでなければならない。

第二十八章

一またイスラエルの人々のうちから、あなたの兄弟アロンとそ

の子たち、すなわちアロンとアロンの子ナダブ、アビウ、エレザル、イタマルとをあなたのもとにこさせ、祭司としてわたしに仕えさせ、ニまたあなたの兄弟アロンのために聖なる衣服を作つて、彼に榮えと麗しきをもたせなければならぬ。三あなたはすべて心に知恵ある者、すなわち、わたしが知恵の靈を満たした者たちに語つて、アロンの衣服を作らせ、アロンを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせなければならぬ。四彼らの作るべき衣服は次のとおりである。すなわち胸当、エポデ、衣、市松模様の服、帽子、帯である。彼らはあなたの兄弟アロンとその子たちとのために聖なる衣服を作り、祭司としてわたしに仕えさせなければならぬ。

五彼らは金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸を受け取らなければならぬ。六そして彼らは金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸を用い、巧みなわざをもつてエポデを作らなければならぬ。七これに二つの肩ひをもつて、その両端を、これに付けなければならぬ。八エポデの上で、これをつかぬる帯は、同じきれでエポデの作りのように、金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で作らなければならぬ。九あなたは二つの縞めのうを取つて、その上にイスラエルの子たちの名を刻まなければならぬ。一〇すなわち、その名六つを一つの石に、残りの名六つを他の石に、彼らの生れた順に刻まなければならぬ。一一寶石に彫刻する人が印を彫刻するように、イスラエルの子たちの名を

その二つの石に刻み、それを金の編細工にはめ、一二この二つの石をエポデの肩ひもにつけて、イスラエルの子たちの記念の石としなければならぬ。こうしてアロンは主の前でその両肩に彼らの名を負うて記念としなければならぬ。一三あなたはまた金の編細工を作らなければならぬ。一四そして二つの純金の鎖を、ひも細工にねじて作り、そのひもの鎖をかの編細工につけなければならぬ。

一五あなたはまたさばきの胸当を巧みなわざをもつて作り、これをエポデの作りのように作らなければならぬ。すなわち金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、これを作らなければならぬ。一六これは二つに折つて四角にし、長さは一指当り、幅も一指当りとしなければならぬ。一七またその中に寶石を四列にはめ込まなければならぬ。すなわち紅玉髓、貴かんらん石、水晶の列を第一列とし、一八第二列は、ざくろ石、るり、赤縞めのう。一九第三列は黄水晶、めのう、紫水晶。二〇第四列は黄碧玉、縞めのう、碧玉であつて、これらを金の編細工の中にはめ込まなければならぬ。二一その寶石はイスラエルの子らの名に従ひ、その名とひとしく十二とし、おのの印の彫刻のように十二の部族のためにその名を刻まなければならぬ。二二またひも細工にねじた純金の鎖を胸当につけなければならぬ。二三また、胸当のために金の環二つを作り、胸当の両端にその二つの環をつけ、二四かの二筋の金のひもを胸当の端の二つ

の環につけなければならない。二五ただし、その二筋のひもの他の両端をかの二つの編細工につけ、エポデの肩ひもにつけて、前にくるようにしなければならない。二六あなたはまた二つの金の環を作つて、これを胸当の両端につけなければならない。すなわちエポデに接する内側の縁にこれをつけなければならない。二七また二つの金の環を作つて、これをエポデの二つの肩ひもの下の部分につけ、前の方で、そのつなぎ目に近く、エポデの帯の上の方にあるようにしなければならない。二八胸当は青ひもをもつて、その環をエポデの環に結びつけ、エポデの帯の上の方にあるようにしなければならない。こうして胸当がエポデから離れないようにしなければならない。二九アロンが聖所にはいる時は、さばきの胸当にあるイスラエルの子たちの名をその胸に置き、主の前に常に覚えとしなければならない。三〇あなたはさばきの胸当にウリムとトンミムを入れて、アロンが主の前にいたる時、その胸の上にあるようにしなければならない。こうしてアロンは主の前に常にイスラエルの子たちのさばきを、その胸に置かなければならない。

三一あなたはまた、エポデに属する上服をすべて青地で作らなければならない。三二頭を通す口を、そのまん中に設け、その口の周囲には、よろいのえりのように織物の縁をつけて、ほころびないようににし、三三そのすそには青糸、紫糸、緋糸で、ぎくろを作り、そのすその周囲につけ、また周囲に金の鈴をぎくろの

間々につけなければならない。三四すなわち金の鈴にぎくろ、また金の鈴にぎくろと、上服のすその周囲につけなければならない。三五アロンは務の時、これを着なければならぬ。彼が聖所にはいつて主の前にいたる時、また出る時、その音が聞えて、彼は死を免れるであらう。

三六あなたはまた純金の板を造り、印の彫刻のように、その上に『主に聖なる者』と刻み、三七これを青ひもで帽子に付け、それが帽子の前の方に来るようにしなければならない。三八これはアロンの額にあり、そしてアロンはイスラエルの人々がささげる聖なる物、すなわち彼らのもろもろの聖なる供え物についての罪の責めを負うであらう。これは主の前にそれらの受けいられるため、常にアロンの額になければならない。

三九あなたは亜麻糸で市松模様の下服を織り、亜麻布で、ずきんを作り、また、帯を色とりどりに織つて作らなければならない。四〇あなたはまたアロンの子たちのために下服を作り、彼らのために帯を作り、彼らのために、ずきんを作つて、彼らに栄えと麗しきをもたせなければならない。四一そしてあなたはこれをあなたの兄弟アロンおよび彼と共にいるその子たちに着せ、彼らに油を注ぎ、彼らを職に任じ、彼らを聖別し、祭司として、わたしに仕えさせなければならない。四二また、彼らのために、その隠し所をおおう亜麻布のしたばきを作り、腰からも届くようにしなければならない。四三アロンとその子たちは会見の

幕屋にはいる時、あるいは聖所で務をするために祭壇に近づく時に、これを着なければならぬ。そうすれば、彼らは罪を得て死ぬことはないであろう。これは彼と彼の後の子孫とのための永久の定めでなければならない。

第二九章

一あなたは彼らを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせるために、次の事を彼らにしなければならぬ。すなわち若い雄牛一頭と、きずのない雄羊二頭とを取り、ニまた種入れぬパンと、油を混ぜた種入れぬ菓子と、油を塗った種入れぬせんべいとを取りなさい。これらは小麦粉で作らなければならない。ミそしてこれを一つのかごに入れ、そのかごに入れたまま、かの一頭の雄牛および二頭の雄羊と共に携えてこなければならぬ。四あなたはまたアロンとその子たちを会見の幕屋の入口に連れてきて、水で彼らを洗い清め、五また衣服を取り、下服とエポデに属する上服と、エポデと胸当てとをアロンに着せ、エポデの帯を締めさせなければならぬ。六そして彼の頭に帽子をかぶらせ、その帽子の上にかの聖なる冠をいだかせ、七注ぎ油を取って彼の頭につけ、彼に油注ぎをしなければならぬ。八あなたはまた彼の子たちを連れてきて下服を着せ、九彼ら、すなわちアロンとその子たちに帯を締めさせ、ずきんをかぶらせなければならぬ。

い。祭司の職は永久の定めによつて彼らに帰するであろう。あなたはこうして、アロンとその子たちを職に任じなければならぬ。

一〇あなたは会見の幕屋の前に雄牛を引いてきて、アロンとその子たちは、その雄羊の頭に手を置かなければならぬ。一一そして会見の幕屋の入口で、主の前にその雄牛をほふり、一二その雄牛の血を取り、指をもつて、これを祭壇の角につけ、その残りの血を祭壇の基に注ぎかけなさい。一三また、その内臓をおおうすべての脂肪と肝臓の小葉と、二つの腎臓と、その上の脂肪とを取って、これを祭壇の上で焼かなければならぬ。一四ただし、その雄牛の肉と皮と汚物とは、宿営の外で火で焼き捨てなければならない。これは罪祭である。

一五あなたはまた、かの雄羊の一頭を取り、そしてアロンとその子たちは、その雄羊の頭に手を置かなければならぬ。一六あなたはその雄羊をほふり、その血を取って、祭壇の四つの側面に注ぎかけなければならぬ。一七またその雄羊を切り裂き、その内臓と、その足とを洗つて、これをその肉の切れ、および頭と共に置き、一八その雄羊をみな祭壇の上で焼かなければならぬ。これは主にささげる燔祭である。すなわち、これは香ばしいかおりであつて、主にささげる火祭である。

一九あなたはまた雄羊の他の一頭を取り、アロンとその子たちは、その雄羊の頭に手を置かなければならぬ。二〇そしてあな

たはその雄羊をほふり、その血を取つて、アロンの右の耳たぶと、その子たちの右の耳たぶにつけ、また彼らの右の手の親指と、右の足の親指とにつけ、その残りの血を祭壇の四つの側面に注ぎかけなければならない。三 また祭壇の上の血および注ぎ油を取つて、アロンとその衣服、およびその子たちと、その子たちの衣服とに注がなければならない。彼とその衣服、およびその子らと、その衣服とは聖別されるであらう。

三 あなたはまた、その雄羊の脂肪、脂肪、内臓をおおう脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓、その上の脂肪、および右のものもを取らなければならない。これは任職の雄羊である。三 また主の前にある種入れぬパンのかごの中からパン一個と、油菓子一個と、せんべい一個とを取り、三 これをみなアロンの手と、その子たちの手に置き、これを主の前に揺り動かして、揺祭としなければならない。三 五 そしてあなたはこれを彼らの手から受け取り、燔祭に加えて祭壇の上で焼き、主の前に香ばしいかおりとしなければならない。これは主にささげる火祭である。

三六 あなたはまた、アロンの任職の雄羊の胸を取り、これを主の前に揺り動かして、揺祭としなければならない。これはあなたの受ける分となるであらう。三七 あなたはアロンとその子たちの任職の雄羊の胸とも、すなわち揺り動かした揺祭の胸と、ささげたをもとを聖別しなければならない。三八 これはイスラエルの人々から永久に、アロンとその子たちの受くべきささげ

物であつて、イスラエルの人々の酬恩祭の犠牲の中から受くべきもの、すなわち主にささげるささげ物である。

三九 アロンの聖なる衣服は彼の後の子孫に帰すべきである。彼らはこれを着て、油注がれ、職に任ぜられなければならない。四〇 その子たちのうち、彼に代つて祭司となり、聖所で仕えるために会見の幕屋にはいる者は、七日の間これを着なければならない。

三 あなたは任職の雄羊を取り、聖なる場所での肉を煮なければならない。三 アロンとその子たちは会見の幕屋の入口で、その雄羊の肉と、かごの中のパンとを食べなければならない。三 彼らを職に任じ、聖別するため、あがないに用いたこれらのものを、彼らは食べなければならない。他の人はこれを食べてはならない。これは聖なる物だからである。三 四 もし任職の肉、あがるいはパンのうち、朝まで残るものがあれば、その残りは火で焼かなければならない。これは聖なる物だから食べてはならない。

三 五 あなたはわたしがすべて命じるように、アロンとその子たちにしなければならない。すなわち彼らのために七日のあいだ、任職の式を行わなければならない。三六 あなたは毎日、あがないのために、罪祭の雄牛一頭をささげなければならない。また祭壇のために、あがないをなす時、そのために罪祭をささげ、また、これに油を注いで聖別しなさい。三七 あなたは七日の間、

祭壇のために、あがないをして、これを聖別しなければならぬ。こうして祭壇は、いと聖なる物となり、すべて祭壇に触れる者は聖となるであろう。

三八あなたが祭壇の上にささぐべき物は次のとおりである。すなわち当歳の小羊二頭を毎日絶やすことなくささげなければならぬ。三九その一頭の小羊は朝にこれをささげ、他の一頭の小羊は夕にこれをささげなければならぬ。四〇一頭の小羊には、つぶして取った油一ヒンの四分の一をまぜた麦粉十分の一エバを添え、また灌祭として、ぶどう酒一ヒンの四分の一を添えなければならぬ。四一他の一頭の小羊は夕にこれをささげ、朝の素祭および灌祭と同じものをこれに添えてささげ、香ばしいかおりのために主にささげる火祭としなければならぬ。四二これはあなたがたが代々会見の幕屋の入口で、主の前に絶やすことなく、ささぐべき燔祭である。わたしはその所であなただけに会い、あなたと語るであろう。四三また、その所でわたしはイスラエルの人々に会うであろう。幕屋はわたしの栄光によつて聖別されるであろう。四四わたしは会見の幕屋と祭壇とを聖別するであろう。またアロンとその子たちを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせるであろう。四五わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう。四六わたしが彼らのうちに住むために、彼らをエジプトの国から導き出した彼らの神主であることを彼らは知るであろう。わたしは彼らの神主

である。

第三〇章

一あなたはまた香をたく祭壇を造らなければならない。アカシヤ材でこれを造り、二長さ一キュビト、幅一キュビトの四角にし、高さ二キュビトで、これにその一部として角をつけなければならぬ。三その頂、その四つの側面およびその角を純金でおい、その周囲に金の飾り縁を造り、四また、その両側に、飾り縁の下に金の環二つをこれのために造らなければならない。すなわち、その二つの側にこれを造らなければならない。これはそれをかつぐさおを通すところである。五そのさおはアカシヤ材で造り、金でおおわなければならない。六あなたはそれを、あかしの箱の前にある垂幕の前に置いて、わたしがあなたと会うあかしの箱の上にある贖罪所に向かわせなければならない。セアロンはその上で香ばしい薫香をたかなければならない。朝ごとに、ともしびを整える時、これをたかなければならない。ハアロンはまた夕べにともしびをともし時にも、これをたかなければならない。これは主の前にあなたがたが代々に絶やすことなく、ささぐべき薫香である。九あなたがたはその上で異なる香をささげてはならない。燔祭をも素祭をもその上でささげてはならない。また、その上に灌祭を注いではならない。一〇アロンは

年に一度その角に血をつけてあがないをしなければならぬ。すなわち、あがないの罪祭の血をもつて代々にわたり、年に一度これがために、あがないをしなければならぬ。これは主に最も聖なるものである」。

二主はモーセに言われた、三「あなたがイスラエルの人々の数の総計をとるに当り、おのおのその数えられる時、その命のあがないを主にささげなければならぬ。これは数えられる時、彼らのうちに災の起らないためである。一三すべて数に入る者は聖所のシケルで、半シケルを払わなければならない。一シケルは二十ゲラであつて、おのおの半シケルを主にささげ物としなければならぬ。一四すべて数に入る二十歳以上の者は、主にささげ物をしなければならぬ。一五あなたがたの命をあがなうために、主にささげ物をする時、富める者も半シケルより多く出してはならず、貧しい者もそれより少なく出してはならない。一六あなたはイスラエルの人々から、あがないの銀を取つて、これを会見の幕屋の用に当てなければならぬ。これは主の前にイスラエルの人々のため記念となつて、あなたがたの命をあがなうであらう」。

七主はモーセに言われた、一八「あなたはまた洗うために洗盤と、その台を青銅で造り、それを会見の幕屋と祭壇との間に置いて、その中に水を入れ、一九アロンとその子たちは、それで手と足とを洗わなければならない。二〇彼らは会見の幕屋にはいる

時、水で洗つて、死なないようにしなければならぬ。また祭壇に近づいて、その務をなし、火祭を主にささげる時にも、そうしなければならぬ。二三すなわち、その手、その足を洗つて、死なないようにしなければならぬ。これは彼とその子孫の代々にわたる永久の定めでなければならない」。

三主はまたモーセに言われた、三「あなたはまた最も良い香料を取りなさい。すなわち液体の没薬五百シケル、香ばしい肉桂をその半ば、すなわち二百五十シケル、におい菖蒲二百五十シケル、二四桂枝五百シケルを聖所のシケルで取り、また、オリブの油一ヒンを取りなさい。三五あなたはこれを聖なる注ぎ油、すなわち香油を造るわざにしたがい、まぜ合わせて、におい油に造らなければならない。これは聖なる注ぎ油である。三六あなたはこの油を会見の幕屋と、あかしの箱とに注ぎ、三七机と、そのものろの器、燭台と、そのものろの器、香の祭壇、三八燔祭の祭壇と、そのものろの器、洗盤と、その台とに油を注ぎ、三九これらをきよめて最も聖なる物としなければならない。すべてこれに触れる者は聖となるであらう。四〇あなたはアロンとその子たちに油を注いで、彼らを聖別し、祭司としてわたしに仕えさせなければならない。四一そしてあなたはイスラエルの人々に言わなければならない、『これはあなたがたの代々にわたる、わたしの聖なる注ぎ油であつて、三常の人の身にこれを注いではならない。またこの割合をもつて、これと等しいものを造つ

てはならない。これは聖なるものであるから、あなたがたと
 とも聖なる物でなければならぬ。三すべてこれと等し
 い物を作る者、あるいはこれを祭司以外の人に付ける者は、民の
 うちから断たれるであろう」。

三主はまた、モーセに言われた、「あなたは香料、すなわち蘇
 合香、シケレテ香、楓子香、純粹の乳香の香料を取りなさい。
 おのおの同じ量でなければならぬ。三五あなたはこれをもつ
 て香、すなわち香料をつくるわざにしたがつて薫香を造り、塩
 を加え、純にして聖なる物としなさい。三六また、その幾ぶんを
 細かに砕き、わたしがあなたと会う会見の幕屋にある、あかしの
 箱の前にこれを供えなければならぬ。これはあなたがたに最
 も聖なるものである。三七あなたが造る香の同じ割合をもつて、
 それを自分のために造つてはならない。これはあなたにとつて
 主に聖なるものでなければならぬ。三八すべてこれと等しい
 ものを造つて、これをかぐ者は民のうちから断たれるであ
 る」。

第三章

一主はモーセに言われた、二「見よ、わたしはユダの部族に属す
 るホルの子なるウリの子バザレルを名ざして召し、三これに神
 の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、四

工夫を凝らして金、銀、青銅の細工をさせ、五また寶石を切りは
 め、木を彫刻するなど、諸種の工作をさせるであろう。六見よ、
 わたしはまたダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブを
 彼と共にらせ、そしてすべて賢い者の心に知恵を授け、わたしが
 あなたに命じたものを、ことごとく彼らに造らせるであろう。セ
 すなわち会見の幕屋、あかしの箱、その上にある贖罪所、幕屋
 のもろもろの器、ハ机とその器、純金の燭台と、そのもろもろ
 の器、香の祭壇、九燔祭の祭壇とそのもろもろの器、洗盤とその
 台、一〇編物の服、すなわち祭司の務をするための祭司アロンの
 聖なる服、およびその子たちの服、二注ぎ油、聖所のための香
 ばしい香などを、すべてわたしがあなたに命じたように造らせ
 るであろう」。

三主はまたモーセに言われた、三「あなたはイスラエルの人々
 に言いなさい、『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなけ
 ればならない。これはわたしとあなたがたとの間の、代々にわた
 るしるしであつて、わたしがあなたがたを聖別する主であるこ
 とを、知らせるためのものである。一四それゆえ、あなたがたは
 安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日
 である。すべてこれを汚す者は必ず殺され、すべてこの日に
 仕事をする者は、民のうちから断たれるであろう。一五六日のあ
 いだは仕事をしなさい。七日目は全き休みの安息日で、主のた
 めに聖である。すべて安息日に仕事をする者は必ず殺されるで

あろう。一六ゆえに、イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない。一七これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである』。

一八主はシナイ山でモーセに語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち神が指をもつて書かれた石の板をモーセに授けられた。

第三二章

一民はモーセが山を下ることのおそいを見て、アロンのもとに集まって彼に言った、「さあ、わたしたちに先立つて行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼつた人、あのモーセはどうなったのかわからないからです」。ニアロンは彼らに言った、「あなたがたの妻、むすこ、娘らの金の耳輪をはずしてわたしに持つてきなさい」。そこで民は皆その金の耳輪をはずしてアロンのもとに持つてきた。四アロンがこれを彼らの手から受け取り、工具で型を造り、鑄て子牛としたので、彼らは言った、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼつたあなたの神である」。五アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そしてアロンは

布告して言った、「あすは主の祭である」。六そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲みし、立つて戯れた。

七主はモーセに言われた、「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼつたあなたの民は悪いことをした。八彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鑄物の子牛を造り、これを拝み、これに犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼつたあなたの神である』と言っている」。九主はまたモーセに言われた、「わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。一〇それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかつて燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」。

二モーセはその神、主をなだめて言った、「主よ、大いなる力と強き手をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかつて、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか。三どうしてエジプトびとに『彼は悪意をもって彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいでしょうか。どうかあなたの激しい怒りをやめ、あなたの民に下そうとされるこの災を思い直し、四あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこ

の地を皆あなたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであらう」と彼らに仰せられたことを覚えてください。二四それで、主はその民に下すと言われた災について思い直された。

二五 モーセは身を転じて山を下った。彼の手には、かの二枚のあかしの板があった。板はその両面に文字があった。すなわち、この面にも、かの面にも文字があった。二六 その板は神の作、その文字は神の文字であつて、板に彫つたものである。二七 ヨシユアは民の呼ばれる声を聞いて、モーセに言つた、「宿営の中に戦いの声がします」。二八 しかし、モーセは言つた、「勝どきの声でなく、敗北の叫び声でもない。わたしの聞くのは歌の声である」。二九 モーセが宿営に近づくと、子牛と踊りとを見たので、彼は怒りに燃え、手からかの板を投げうち、これを山のふもとで砕いた。三〇 また彼らが造つた子牛を取つて火に焼き、こなごなに砕き、これを水の上にまいて、イスラエルの人々に飲ませた。

三一 モーセはアロンに言つた、「この民があなたに何をしたので、あなたは彼らに大いなる罪を犯させたのですか」。三二 アロンは言つた、「わが主よ、激しく怒らないでください。この民の悪いのは、あなたがごぞんじです。三三 彼らはわたしに言いました、『わたしたちに先立つて行く神を、わたしたちのために造つてください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼつた人、あのモーセは、どうなつたのかわからないからです』。三四 そこでわたしは『だれでも、金を持つている者は、それを取りはずしな

い』と彼らに言いました。彼らがそれをわたしに渡したので、わたしはこれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです」。

三五 モーセは民がほしいままにふるまつたのを見た。アロンは彼らがほしいままにふるまうに任せ、敵の中に物笑いとなつたからである。三六 モーセは宿営の門に立つて言つた、「すべて主につく者はわたしのもとにきなさい」。レビの子たちはみな彼のもとに集まつた。三七 そこでモーセは彼らに言つた、「イスラエルの神、主はこう言われる、『あなたがたは、おのおの腰につるぎを帯び、宿営の中を門から門へ行き巡つて、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ』。三八 レビの子たちはモーセの言葉どおりにしたので、その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。三九 そこで、モーセは言つた、『あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らつて、きよう、主に身をささげた。それで主は、きよう、あなたがたに祝福を与えられるであらう』。四〇 あくる日、モーセは民に言つた、『あなたがたは大いなる罪を犯した。それで今、わたしは主のもとに上つて行く。あなたがたの罪を償ふことが、できるかも知れない』。四一 モーセは主のもとに帰つて、そして言つた、『ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。四二 今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば――しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください』。四三 主はモーセに言われた、『すべてわたしに

罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。三
四しかし、今あなたは行つて、わたしがあなたに告げたとところに
民を導きなさい。見よ、わたしの使はあなたに先立つて行くで
あろう。ただし刑罰の日に、わたしは彼らの罪を罰するであろ
う。
三五そして主は民を撃たれた。彼らが子牛を造つたからである。
それはアロンが造つたのである。

第三章

一さて、主はモーセに言われた、「あなたと、あなたがエジプト
の国から導きのぼつた民とは、ここを立つてわたしがアブラハ
ム、イサク、ヤコブに誓つて、『これをあなたの子孫に与える』と
言つた地にのぼりなさい。ニわたしはひとりの使をつかわして
あなたに先立たせ、カナンびと、アモリびと、ヘテびと、ペリジ
びと、ヒビびと、エブスびとを追い払うであろう。三あなたがた
は乳と蜜の流れる地にのぼりなさい。しかし、あなたがたは、か
たくなな民であるから、わたしが道であなたがたを滅ぼすこと
のないように、あなたがたのうちにあつて一緒にはのぼらない
であろう」。

四民はこの悪い知らせを聞いて憂い、ひとりもその飾りを身に
着ける者はなかった。五主はモーセに言われた、「イスラエルの

人々に言いなさい、『あなたがたは、かたくなな民である。もし
わたしが一刻でも、あなたがたのうちにあつて、一緒にのぼつて
行くならば、あなたがたを滅ぼすであろう。ゆえに、今、あなた
がたの飾りを身から取り去りなさい。そうすればわたしはあな
たがたになすべきことを知るであろう』。六それで、イスラエル
の人々はホレフ山以来その飾りを取り除いていた。
七モーセは幕屋を取つて、これを宿営の外に、宿営を離れて張
り、これを会見の幕屋と名づけた。すべて主に伺い事のある者
は出て、宿営の外にある会見の幕屋に行つた。ハモーセが出て、
幕屋に行く時には、民はみな立ちあがり、モーセが幕屋にはいる
まで、おのおのその天幕の入口に立つて彼を見送つた。九モーセ
が幕屋にはいると、雲の柱が下つて幕屋の入口に立つた。そし
て主はモーセと語られた。一〇民はみな幕屋の入口に雲の柱が
立つのを見ると、立つておのおの自分の天幕の入口で礼拝した。
二人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて語られ
た。こうしてモーセは宿営に帰つたが、その従者なる若者、ヌ
ンの子ヨシユアは幕屋を離れなかつた。
一一モーセは主に言つた、『ごらんください。あなたは『この民を
導きのぼれ』とわたしに言いながら、わたしと一緒につかわれ
る者を知らせてくださいません。しかも、あなたはかつて『わた
しはお前を選んだ。お前はまたわたしの前に恵みを得た』と仰
せになりました。一二それで今、わたしがもし、あなたの前に恵

みを得ますならば、どうか、あなたの道を示し、あなたをわたしに知らせ、あなたの前に恵みを得させてください。また、この国民があなたの民であることを覚えてください。一四 主は言われた「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう。一五 モーセは主に言った「もしあなた自身が一緒に行かれないならば、わたしたちをここからのぼらせないでください。一六 わたしとあなたの民とが、あなたの前に恵みを得ることは、何によって知られましょうか。それはあなたがわたしたちと一緒に行かれて、わたしとあなたの民とが、地の面にある諸民と異なるものになるからではありませんか」。

一七 主はモーセに言われた、「あなたはわたしの前に恵みを得、わたしは名をもつてあなたを知るから、あなたの言ったこの事をもするであろう。一八 モーセは言った、「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示してください。一九 主は言われた、「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ、主の名をあなたの前にのべるであろう。わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれむ。二〇 また言われた、「しかし、あなたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている人はないからである。二一 そして主は言われた、「見よ、わたしのかたわらに一つの所がある。あなたは岩の上に立ちなさい。二二 わたしの栄光がそこを通り過ぎるとき、わたしはあなたを岩の裂け目に入れて、わたしが通り過ぎるまで、手であ

なたをおおうであろう。二三 そしてわたしが手をのけるととき、あなたはわたしのうしろを見るが、わたしの顔は見えないであろう」。

第三十四章

一 主はモーセに言われた、「あなたは前のような石の板二枚を、切つて造りなさい。わたしはあなたが砕いた初めの板にあつた言葉を、その板に書くであろう。二 あなたは朝までに備えをし、朝のうちにシナイ山に登つて、山の頂でわたしの前に立ちなさい。三 だれもあなたと共に登つてはならない。また、だれも山の中にいてはならない。また山の前で羊や牛を飼つていてはならない。四 そこでモーセは前のような石の板二枚を、切つて造り、朝早く起きて、主が彼に命じられたようにシナイ山に登つた。彼はその手に石の板二枚をとつた。五 ときに主は雲の中にあつて下り、彼と共にそこに立つて主の名を宣べられた。六 主は彼の前を過ぎて宣べられた。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、七 いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代におよぼす者」。八 モーセは急ぎ地に伏して拝し、九 そして言った、「ああ主よ、わたしがもし、あなたの前に恵み

を得ますならば、かたくなな民ですけれども、どうか主がわたしたちのうちにあって一緒に行つてください。そしてわたしたちの悪と罪とをゆるし、わたしたちをあなたのものとしてくださいます。

「主は言われた、見よ、わたしは契約を結ぶ。わたしは地のいずこにも、いかなる民のうちに、いまだ行われたことのない不思議を、あなたのすべての民の前に行うであらう。あなたが共に住む民はみな、主のわざを見るであらう。わたしがあなたのためになそうとすることは、恐るべきものだからである。

二 わたしが、きよう、あなたに命じることを守りなさい。見よ、わたしはアモリびと、カナンびと、ヘテびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとを、あなたの前から追ひ払うであらう。三 あなたが行く国に住んでいる者と、契約を結ばないように、気をつけなければならぬ。おそろく彼らはあなたのうちにあって、わなとなるであらう。四 むしろあなたがたは、彼らの祭壇を倒し、石の柱を砕き、アシラ像を切り倒さなければならぬ。五 あなたは他の神を拝んではならない。主はその名を『ねたみ』と言つて、ねたむ神だからである。六 おそろくあなたはその国に住む者と契約を結び、彼らの神々を慕つて姦淫を行い、その神々に犠牲をささげ、招かれて彼らの犠牲を食べ、七 またその娘たちを、あなたのむすこたちにめとり、その娘たちが自分たちの神々を慕つて姦淫を行い、また、あなたのむすこたちをして、彼

らの神々を慕わせ、姦淫を行わせるに至るであらう。

七 あなたは自分のために鋤物の神々を造つてはならない。

八 あなたは種入れぬパンの祭を守らなければならない。すなわち、わたしがあなたに命じたように、アビブの月の定めの際に、七日のあいだ、種入れぬパンを食べなければならない。あなたがアビブの月にエジプトを出たからである。九 すべての初めに生れる者は、わたしのものである。すべてあなたの家畜のういこの雄は、牛も羊もそうである。一〇 ただし、ろばのういごは小羊であがなわなければならない。もしあがなわれないならば、その首を折らなければならない。あなたのむすこのうちのういごは、みなあがなわなければならない。むなし手でわたしの前に出てはならない。

三 あなたは六日のあいだ働き、七日目には休まなければならない。耕し時にも、刈入れ時にも休まなければならない。三 あなたは七週の祭、すなわち小麦刈りの初穂の祭を行わなければならない。また年の終りに取り入れの祭を行わなければならない。三 年に三度、男子はみな主なる神、イスラエルの神の前に出なければならない。四 わたしは国々の民をあなたの前から追ひ払つて、あなたの境を広くするであらう。あなたが年に三度のぼつて、あなたの神、主の前に出る時には、だれもあなたの国を侵すことはないであらう。

五 あなたは犠牲の血を、種を入れたパンと共に供えてはならぬ

い。また過越の祭の犠牲を、翌朝まで残して置いてはならない。
 三六 あなたの土地の初穂の最も良いものを、あなたの神、主の家に携えてこなければならぬ。あなたは子やぎをその母の乳で煮てはならない。ニモ また主はモーセに言われた、「これらの言葉を書きしるしなさい。わたしはこれらの言葉に基いて、あなたおよびイスラエルと契約を結んだからである。ニハ モーセは主と共に、四十日四十夜、そこにいたが、パンも食べず、水も飲まなかった。そして彼は契約の言葉、十戒を板の上に書いた。ニ九 モーセはそのあかしの板二枚を手にして、シナイ山から下ったが、その山を下ったとき、モーセは、さきに主と語ったゆえに、顔の皮が光を放っているのを知らなかった。三〇 アロンとイスラエルの人々とはみな、モーセを見ると、彼の顔の皮が光を放っていたので、彼らは恐れてこれに近づかなかった。三二 モーセは彼らと呼んだ。アロンと会衆のかしらたちとがみな、モーセのもとに帰ってきたので、モーセは彼らと語った。三三 その後、イスラエルの人々がみな近よったので、モーセは主がシナイ山で彼に語られたことを、ことごとく彼らにさとした。三三 モーセは彼らと語り終えた時、顔をおいを顔に当てた。三四 しかしモーセは主の前に行って主と語る時は、出るまで顔をおいを取り除いていた。そして出て来ると、その命じられた事をイスラエルの人人に告げた。三五 イスラエルの人々はモーセの顔を見ると、モーセの顔の皮が光を放っていた。モーセは行って主と語るま

で、また顔をおいを顔に当てた。

第三章

一 モーセはイスラエルの人々の全会衆を集めて言った、「これは主が行えと命じられた言葉である。二 六日の間は仕事をなさい。七日目はあなたがたの聖日で、主の全き休みの安息日であるから、この日に仕事をする者はだれでも殺されなければならない。三 安息日にはあなたがたのすまいのどこでも火をたいてはならない」。

四 モーセはイスラエルの人々の全会衆に言った、「これは主が命じられたことである。五 あなたがたの持ち物のうちから、主にささげる物を取りなさい。すべて、心から喜んでする者は、主にささげる物を持つてきなさい。すなわち金、銀、青銅。六 青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸、やぎの毛糸。七 あかね染めの雄羊の皮、じゆごんの皮、アカシヤ材、ハともし油、注ぎ油と香ばしい薫香のための香料、丸縞めのう、エポデと胸当にはめる寶石。八 すべてあなたがたのうち、心に知恵ある者はきて、主の命じられたものをみな造りなさい。九 すなわち幕屋、その天幕、そのおおい、その鉤と、その柱、その横木、その柱と、その座、三箱と、そのさお、贖罪所、隔ての垂幕、三机と、そのさお、およびそのもろもろの器、供えのパン、一四 また、ともしびのた

めの燭台と、その器、ともしび皿と、ともし油、一五香の祭壇と、そのさお、注ぎ油、香ばしい薫香、幕屋の入口のとばり、一六燔祭の祭壇およびその青銅の網、そのさおと、そのもうもの器洗盤と、その台、一七庭のあげばり、その柱とその座、庭の門のとばり、一八幕屋の釘、庭の釘およびそのひも、一九聖所における務のための編物の服、すなわち祭司の務をなすための祭司アロンの聖なる服およびその子たちの服」。

二〇イスラエルの人々の全会衆はモーセの前を去り、二一すべて心に感じた者、すべて心から喜んでする者は、会見の幕屋の作業と、そのもうもの奉仕と、聖なる服とのために、主にささげる物を携えてきた。二三すなわち、すべて心から喜んでする男女は、鼻輪、耳輪、指輪、首飾り、およびすべての金の飾りを携えてきた。すべて金のささげ物を主にささげる者はそのようにした。二四すべて青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸、やぎの毛糸、あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮を持つてゐる者は、それを携えてきた。二五すべて銀、青銅のささげ物をささげるのできる者は、それを主にささげる物として携えてきた。また、すべて組立ての工事に用いるアカシヤ材を持つてゐる者は、それを携えてきた。二六また、すべて心に知恵ある女たちは、その手をもつて紡ぎ、その紡いだ青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸を携えてきた。二七すべて知恵があつて、心に感じた女たちは、やぎの毛を紡いだ。二八また、かしらたちは縞めのう、およびエポデと胸当

にはめる寶石を携えてきた。二八また、ともしびと、注ぎ油と、香ばしい薫香のための香料と、油とを携えてきた。二九このようにイスラエルの人々は自発のささげ物を主に携えてきた。すなわち主がモーセによつて、なせと命じられたすべての工作のために、物を携えてこようと、心から喜んでする男女はみな、そのようにした。

三〇モーセはイスラエルの人々に言った、「見よ、主はユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、三に彼の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、三二工夫を凝らして金、銀、青銅の細工をさせ、三三また寶石を切りはめ、木を彫刻するなど、諸種の工作をさせ、三四また人を教えうる力を、彼の心に授けられた。彼とダン部族に属するアヒサマクの子アホリアブとが、それである。三五主は彼らに知恵の心を満たして、諸種の工作をさせられた。すなわち彫刻、浮き織および青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸の縫取り、また機織など諸種の工作をさせ、工夫を凝らして巧みなわざをさせられた。

第三十六章

一ベザレルとアホリアブおよびすべて心に知恵ある者、すなわち主が知恵と悟りとを授けて、聖所の組立ての諸種の工事を、い

かなすかを知らせられた者は、すべて主が命じられたようにしなければならぬ」。

ニそこで、モーセはバゼレルとアホリアブおよびすべて心に知恵ある者、すなわち、その心に主が知恵を授けられた者、またきて、その工事をなそうと心に望むすべての者を召し寄せた。三彼らは聖所の組立ての工事をするために、イスラエルの人々が携えてきたもろもろのささげ物を、モーセから受け取ったが、民はなおも朝ごとに、自発のささげ物を彼のもとに携えてきた。四そこで聖所のもろもろの工事をする賢い人々はみな、おのおのしていた工事をやめて、五モーセに言った「民があまりに多く携えて来るので、主がせよと命じられた組立ての工事には余りま

す」。六モーセは命令を発し、宿営中にふれさせて言った、「男も女も、もはや聖所のために、ささげ物をするに及ばない」。それで民は携えて来ることをやめた。七材料はすべての工事を

するのにじゅうぶんで、かつ余るからである。

八すべて工事をする者のうちの心に知恵ある者は、十枚の幕で幕屋をつつた。すなわち亜麻の撚糸、青糸、紫糸、緋糸で造り、巧みなわざをもつて、それにケルビムを織り出した。九幕の長さは、おのおの二十八キュビト、幕の幅は、おのおの四キュビトで、幕はみな同じ寸法である。

一〇その幕五枚を互に連ね合わせ、また他の五枚の幕をも互に連ね合わせ、二その一連の端にある幕の縁に青色の乳をつけ、他

の一連の端にある幕の縁にも、そのようにした。三その一枚の幕に乳五十をつけ、他の一連の幕の端にも、乳五十をつけた。その乳を互に相向かわせた。四そして金の輪五十を作り、その輪で、幕を互に連ね合わせたので、一つの幕屋になった。

五また、やぎの毛糸で幕を作り、幕屋をおおう天幕にした。すなわち幕十一枚を作った。六おのおのの幕の長さは三十キュビト、おのおのの幕の幅は四キュビトで、その十一枚の幕は同じ寸法である。七そして、その幕五枚を一つに連ね合わせ、また、その幕六枚を一つに連ね合わせ、八その一連の端にある幕の縁に、乳五十をつけ、他の一連の幕の縁にも、乳五十をつけた。九そして、青銅の輪五十を作り、その天幕を連ね合わせて一つにした。一〇また、あかね染めの雄羊の皮で、天幕のおおいと、じゅごんの皮で、その上にかけるおおいとを作った。一一また幕屋のためにアカシヤ材をもつて、立枠を作った。一二枠の長さは十キュビト、枠の幅は、おのおの一キュビト半とし、三三枠ごとに二つの柄を造って、かれとこれとをくい合わせ、幕屋のすべての枠にこのようにした。三三幕屋のために枠を造った。すなわち南側のために枠二十を造った。三四その二十の枠の下に銀の座四十を造って、この枠の下に、その二つの柄のために二つの座を置き、かの枠の下にも、その二つの柄のために二つの座を置いた。三五また幕屋の他の側、すなわち北側のためにも枠二十を造った。三六その銀の座四十を造って、この枠の下

にも二つの座を置き、かの杵の下にも二つの座を置いた。ニモまた幕屋のうしろ、西側のために杵六つを造り、ニハ幕屋のうしろの二つのすみのために杵二つを造った。ニ九これらは、下で重なり合い、同じくその頂でも第一の環まで重なり合うようにし、その二つとも二つのすみのために、そのように造った。三〇こうして、その杵は八つ、その銀の座は十六、おのおのの杵の下に、二つずつ座があった。

三二またアカシヤ材の横木を造った。すなわち幕屋のこの側の杵のために五つ、三三また幕屋のかの側の杵のために横木五つ、幕屋のうしろの西側の杵のために横木五つを造った。三三杵のまん中にある中央の横木は、端から端まで通るようにした。三四そして、その杵を金でおおい、また横木を通すその環を金で造り、またその横木を金でおおった。

三五また青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、垂幕を作り、巧みなわざをもって、それにケルビムを織り出した。三六また、これがためにアカシヤ材の柱四本を作り、金でこれをおおい、その鉤を金にし、その柱のために銀の座四つを鑄た。三七また幕屋の入口のために青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、色とりどりに織ったとばりを作った。三八その柱五本と、その鉤とを造り、その柱の頭と桁とを金でおおった。ただし、その五つの座は青銅であつた。

第三十七章

一ベザレルはアカシヤ材の箱を造った。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半、高さは一キュビト半である。二純金で、内そとをおおい、その周囲に金の飾り縁を造った。三また金の環四つを鑄て、その四すみに取りつけた。すなわち二つの環をこちら側に、二つの環をあちら側に取りつけた。四またアカシヤ材のさおを造り、金でこれをおおい、五そのさおを箱の側面の環に通して、箱をかつぐようにした。六また純金で贖罪所を造った。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半である。七また金で、二つのケルビムを造った。すなわち、これを打物造りとし、贖罪所の両端に置いた。ハ一つのケルブをこの端に、一つのケルブをかの端に置いた。すなわちケルビムを贖罪所の一部として、その両端に造った。九ケルビムは翼を高く伸べ、その翼で贖罪所をおおい、顔は互に向かい合った。すなわちケルビムの顔は贖罪所に向かつていた。

一〇またアカシヤ材で、机を造った。長さは二キュビト、幅は一キュビト、高さは一キュビト半である。二純金でこれをおおい、その周囲に金の飾り縁を造った。三またその周囲に手幅の棧を造り、その周囲の棧に金の飾り縁を造った。四またこれがために金の環四つを鑄て、その四つの足のすみ四か所にその環を取りつけた。五その環は棧のわきにあつて、机をかつぐさお

を入れる所とした。一五またアカシヤ材で、机をかつぐさおを造り、金でこれをおおった。一六また机の上の器、すなわちその皿、乳香を盛る杯および灌祭を注ぐための鉢と瓶とを純金で造った。

一七また純金の燭台を造った。すなわち打物造りで燭台を造り、その台、幹、萼、節、花を一つに連ねた。一八また六つの枝をそのわきから出させた。すなわち燭台の三つの枝をこの側から、燭台の三つの枝をかの側から出させた。一九あめんどうの花の形をした三つの萼が、節と花とをもつて、この枝にあり、また、あめんどうの花の形をした三つの萼が、節と花とをもつて、かの枝にあり、燭台から出る六つの枝をみなそのようにした。二〇また燭台の幹には、あめんどうの花の形をした四つの萼を、その節と花とをもたせて取りつけた。二一また二つの枝の下に一つの節を取りつけ、次の二つの枝の下に一つの節を取りつけ、さらに次の二つの枝の下に一つの節を取りつけ、燭台の幹から出る六つの枝に、みなそのようにした。二二それらの節と枝を一つに連ね、ことごとく純金の打物造りとした。二三また、そのとしび皿七つと、その芯切りばさみと、芯取り皿とを純金で造った。二四すなわち純金一タラントをもつて、燭台とそのすべての器とを造った。

二五またアカシヤ材で香の祭壇を造った。長さ一キュビト、幅一キュビトの四角にし、高さ二キュビトで、これにその一部として

角をつけた。二六そして、その頂、その周囲の側面、その角を純金でおい、その周囲に金の飾り縁を造った。二七また、その両側に、飾り縁の下に金の環二つを、そのために造った。すなわちその二つの側にこれを造った。これはそれをかつぐさおを通す所である。二八そのさおはアカシヤ材で造り、金でこれをおおった。

二九また香料を造るわざにしたがつて、聖なる注ぎ油と純粋の香料の薫香とを造った。

第三十八章

一またアカシヤ材で燔祭の祭壇を造った。長さ五キュビト、幅五キュビトの四角で、高さは三キュビトである。二その四すみの上に、その一部とし、その角を造り、青銅で祭壇をおおった。三また祭壇のもろもろの器、すなわち、つぼ、十能、鉢、肉叉、火皿を造った。そのすべての器を青銅で造った。四また祭壇のために、青銅の網細工の格子を造り、これを祭壇の出張りの下に取っつけて、祭壇の高さの半ばに達するようにした。五また青銅の格子の四すみのために、環四つを鋳て、さおを通す所とした。六アカシヤ材で、そのさおを造り、青銅でこれをおおい、七そのさおを祭壇の両側にある環に通して、それをかつぐようにした。祭壇は板をもつて、空洞に造った。

ハまた洗盤と、その台を青銅で造つた。すなわち会見の幕屋の入口で務をなす女たちの鏡をもつて造つた。

九また庭を造つた。その南側のために百キュビトの亜麻の撚糸の庭のあげばりを設けた。一〇その柱は二十、その柱の二十の座は青銅で、その柱の鉤と桁は銀とした。一一また北側のためにも百キュビトのあげばりを設けた。その柱二十、その柱の二十の座は青銅で、その柱の鉤と桁は銀とした。一二また西側のために、五十キュビトのあげばりを設けた。その柱は十、その座も十で、その柱の鉤と桁は銀とした。一三また東側のためにも、五十キュビトのあげばりを設けた。一四その一方に十五キュビトのあげばりを設けた。その柱は三つ、その座も三つ。一五また他の一方にも、同じようにした。すなわち庭の門のこなたかなたとも、十五キュビトのあげばりを設けた。その柱は三つ、その座も三つ。一六庭の周囲のあげばりはみな亜麻の撚糸である。一七柱の座は青銅、柱の鉤と桁とは銀、柱の頭のおおいも銀である。庭の柱はみな銀の桁で連ねた。一八庭の門のとばりは青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、色とりどりに織つたものであつた。長さは二十キュビト、幅なる高さは五キュビトで、庭のあげばりと等しかつた。一九その柱は四つ、その座も四つで、ともに青銅。その鉤は銀、柱の頭のおおいと桁は銀である。二〇ただし、幕屋および、その周囲の庭の釘はみな青銅であつた。

二幕屋、すなわちあかしの幕屋に用いた物の総計は次のとおり

である。すなわちモーセの命に従い、祭司アロンの子イタマルがレビびとを用いて量つたものである。二三ユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザレルは、主がモーセに命じられた事をことごとくした。二四ダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブは彼と共にあつて彫刻、浮き織をなし、また青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸で、縫取りをする者であつた。

二五聖所のものもろの工作に用いたすべての金、すなわち、ささげ物なる金は聖所のシケルで、二十九タラント七百三十シケルであつた。二六会衆のうちの数えられた者のささげた銀は聖所のシケルで、百タラント千七百七十五シケルであつた。二七これはひとり当り一ベカ、すなわち聖所のシケルの半シケルであつて、すべて二十歳以上で数えられた者が六十万三千五百五十人であつたからである。二八聖所の座と垂幕の座とを鑄るために用いた銀は百タラントであつた。すなわち百座につき百タラント、一座につき一タラントである。二九また千七百七十五シケルで柱の鉤を造り、また柱の頭をおおい、柱のために桁を造つた。三〇ささげ物なる青銅は七十タラント二千四百シケルであつた。三一これを用いて会見の幕屋の入口の座、青銅の祭壇と、それにつく青銅の格子、および祭壇のものもろの器を造つた。三二また庭の周囲の座、庭の門の座、および幕屋のものもろの釘と、庭の周囲のものもろの釘を造つた。

第三十九章

一 彼らは青糸、紫糸、緋糸で、聖所の務のための編物の服を作った。またアロンのために聖なる服を作った。主がモーセに命じられたとおりである。

二 また金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸でエポデを作った。三 また金を打ち延べて板とし、これを切つて糸とし、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸に交えて、巧みな細工とした。四 また、これがために肩ひもを作つてこれにつけ、その両端でこれにつけた。五 エポデの上で、これをつかぬる帯は、同じきれで、同じように、金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で作った。主がモーセに命じられたとおりである。

六 また、縞めのうを細工して、金糸の編細工にはめ、これに印を彫刻するように、イスラエルの子たちの名を刻み、セこれをエポデの肩ひもにつけて、イスラエルの子たちの記念の石とした。主がモーセに命じられたとおりである。

七 また胸当を巧みなわざをもつて、エポデの作りのように作った。すなわち金糸、青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で作った。八 胸当は二つに折つて四角にした。すなわち二つに折つて、長さを一指当りとし、幅も一指当りとした。九 その中に寶石四列をはめた。すなわち、紅玉髓、貴かんらん石、水晶の列を第一列とし、二 第二列は、ざくろ石、るり、赤縞めのう、三 第三列

は黄水晶、めのう、紫水晶、三 第四列は黄碧玉、縞めのう、碧玉であつて、これらを金の編細工の中にはめ込んだ。一四 その宝石はイスラエルの子たちの名にしたがい、その名と等しく十二とし、おのおの印の彫刻のように、十二部族のためにその名を刻んだ。一五 またひも細工にねじた純金のくさりを胸当につけた。一六 また金の二つの編細工と、二つの金の環を作り、その二つの環を胸当の両端につけた。一七 かの二筋の金のひもを胸当の端の二つの環につけた。一八 ただし、その二筋のひも他の両端を、かの二つの編細工につけ、エポデの肩ひもにつけて前にくるようにした。一九 また二つの金の環を作つて、これを胸当の両端につけた。すなわちエポデに接する内側の縁にこれをつけた。二〇 また金の環二つを作つて、これをエポデの二つの肩ひもの下の部分につけ、前の方で、そのつなぎ目に近く、エポデの帯の上の方にくるようにした。二一 胸当は青ひもをもつて、その環をエポデの環に結びつけ、エポデの帯の上の方にくるようにした。こうして、胸当がエポデから離れないようにした。主がモーセに命じられたとおりである。

二二 またエポデに属する上服は、すべて青地の織物で作った。二三 上服の口はそのまん中にあつて、その口の周囲には、よろいのえりのように縁をつけて、ほころびないようにした。二四 上服のすそには青糸、紫糸、緋糸、亜麻の撚糸で、ざくろを作りつけ、二五 また純金で鈴を作り、その鈴を上服のすその周囲の、ざくろ

とぎくろとの間につけた。二六すなわち鈴にぎくろ、鈴にぎくろと、務の上服のすその周囲につけた。主がモーセに命じられたとおりである。

モまたアロンとその子たちのために、亜麻糸で織った下服を作り、二八亜麻布で帽子を作り、亜麻布で麗しい頭布を作り、亜麻の撚糸の布で、下ばきを作り、二九亜麻の撚糸および青糸、紫糸、緋糸で、色とりどりに織った帯を作った。主がモーセに命じられたとおりである。

三〇また純金をもつて、聖なる冠の前板を作り、印の彫刻のように、その上に「主に聖なる者」という文字を書き、三一これに青ひもをつけて、それを帽子の上に結びつけた。主がモーセに命じられたとおりである。

三二こうして会見の天幕なる幕屋の、もろもろの工事が終った。イスラエルの人々はすべて主がモーセに命じられたようにおこなった。三三彼らは幕屋と天幕およびそのもろもろの器をモーセのもとに携えてきた。すなわち、その鉤、その杵、その横木の柱、その座、三四あかね染めの雄羊の皮のおおい、じゅごんの皮のおおい、隔ての垂幕、三五あかしの箱と、そのさお、贖罪所、三六机と、そのもろもろの器、供えのパン、三七純金の燭台と、そのともしび皿、すなわち列に並べるともしび皿と、そのもろもろの器、およびそのともし油、三八金の祭壇、注ぎ油、香ばしい薫香、幕屋の入口のとばり、三九青銅の祭壇、その青銅の

格子と、そのさお、およびそのもろもろの器、洗盤とその台、四〇庭のあげばり、その柱とその座、庭の門のとばり、そのひもと、その釘、また会見の天幕の幕屋に用いるもろもろの器、四一聖所で務をなす編物の服、すなわち祭司の務をなすための祭司アロンの聖なる服およびその子たちの服、四二イスラエルの人々は、すべて主がモーセに命じられたように、そのすべての工事をした。四三モーセがそのすべての工事を見ると、彼らは主が命じられたとおり、それをなしとげていたので、モーセは彼らを祝福した。

第四〇章

一主はモーセに言われた。二「正月の元日にあなたは会見の天幕なる幕屋を建てなければならない。三そして、その中にあかしの箱を置き、垂幕で、箱を隔て隠し、四また、机を携え入れ、それに並べるものを並べ、燭台を携え入れて、そのともしびをともさなければならない。五あなたはまた金の香の祭壇を、あかしの箱の前にすえ、とばりを幕屋の入口にかけなければならない。六また燔祭の祭壇を会見の天幕なる幕屋の入口の前にすえ、七洗盤を会見の天幕と祭壇との間にすえて、これに水を入れなければならない。八また周囲に庭を設け、庭の門にとばりをかけなければならない。九そして注ぎ油をとって、幕屋とその中のす

べてのものに注ぎ、それとそれのもろもろの器とを聖別しなければならぬ、こうして、それは聖となるであらう。二〇あなたはまた燔祭の祭壇と、そのすべての器に油を注いで、その祭壇を聖別しなければならぬ。こうして祭壇は、いと聖なるものとなるであらう。二一また洗盤と、その台とに油を注いで、これを聖別し、ニアロンとその子たちを会見の幕屋の入口に連れてきて、水で彼らを洗い、ニアロンに聖なる服を着せ、これに油を注いで聖別し、祭司の務をさせなければならぬ。二四また彼の子たちを連れてきて、これに服を着せ、一五その父に油を注いだように、彼らにも油を注いで、祭司の務をさせなければならぬ。彼らが油そそがれることは、代々ながく祭司職のためになすべきことである」。

二六 モーセはそうに行つた。すなわち主が彼に命じられたように行つた。二七 第二年の正月になつて、その月の元日に幕屋は建つた。二八 すなわちモーセは幕屋を建て、その座をすえ、その杵を立て、その横木をさし込み、その柱を立て、二九 幕屋の上に天幕をひろげ、その上に天幕のおおいをかけた。主がモーセに命じられたとおりである。三〇 彼はまたあかしの板をとつて箱に納め、さおを箱につけ、贖罪所を箱の上に置き、二箱を幕屋に携え入れ、隔ての垂幕をかけて、あかしの箱を隠した。主がモーセに命じられたとおりである。三一 彼はまた会見の天幕なる幕屋の内部の北側、垂幕の外に机をすえ、三三 その上

にパンを列に並べて、主の前に供えた。主がモーセに命じられたとおりである。三四 彼はまた会見の天幕なる幕屋の内部の南側に、机にむかい合せて燭台をすえ、三五 主の前にともしびをともした。主がモーセに命じられたとおりである。三六 彼は会見の幕屋の中、垂幕の前に金の祭壇をすえ、三七 その上に香ばしい薫香をたいた。主がモーセに命じられたとおりである。三八 彼はまた幕屋の入口にとほりをかけ、三九 燔祭の祭壇を会見の天幕なる幕屋の入口にすえ、その上に燔祭と素祭をささげた。主がモーセに命じられたとおりである。四〇 彼はまた会見の天幕と祭壇との間に洗盤を置き、洗うためにそれに水を入れた。四一 モーセとアロンおよびその子たちは、それで手と足を洗つた。四二 すなわち会見の天幕にはいるとき、また祭壇に近づくとき、そこで洗つた。主がモーセに命じられたとおりである。四三 また幕屋と祭壇の周囲に庭を設け、庭の門にとほりをかけた。このようにしてモーセはその工事を終えた。

四四 そのとき、雲は会見の幕屋をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。四五 モーセは会見の幕屋に、はいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。四六 雲が幕屋の上からのぼる時、イスラエルの人々は道に進んだ。彼らはその旅路において常にそうした。四七 しかし、雲がのぼらない時は、そののぼる日まで道に進まなかつた。四八 すなわちイスラエルの家のすべての者の前に、昼は幕屋の上に主の雲

が
あり、
夜は^{よる}雲^{くも}の^{なか}中に火^ひがあつた。
彼^{かれ}らの旅^{たび}路^じにおいて常^{つね}にそ
うであつた。

レビ記

第一章

一主はモーセを呼び、会見の幕屋からこれに告げて言われた、ニ「イスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたのうちだれでも家畜の供え物を主にささげるときは、牛または羊を供え物としてささげなければならない。』」

三もしその供え物が牛の燔祭であるならば、雄牛の全きものをささげなければならない。会見の幕屋の入口で、主の前に受け入れられるように、これをささげなければならない。四彼はその燔祭の獣の頭に手を置かなければならない。そうすれば受け入れられて、彼のためにあがないとなるであろう。五彼は主の前でその子牛をほふり、アロンの子なる祭司たちは、その血を携えてきて、会見の幕屋の入口にある祭壇の周囲に、その血を注ぎかけなければならない。六彼はまたその燔祭の獣の皮をはぎ、節々に切り分けたなければならない。七祭司アロンの子たちは祭壇の上に火を置き、その火の上にたきぎを並べ、ハアロンの子なる祭司たちはその切り分けたものを、頭および脂肪と共に、祭壇の上にある火の上のたきぎの上に並べなければならない。八その内臓と足とは水で洗わなければならない。こうして祭司はすべてのを祭壇の上で焼いて燔祭としなければならない。これ

は火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである。

一〇もしその燔祭の供え物が群れの羊または、やぎであるならば、雄の全きものをささげなければならない。一一彼は祭壇の北側で、主の前にこれをほふり、アロンの子なる祭司たちは、その血を祭壇の周囲に注ぎかけなければならない。一二彼はまたこれを節々に切り分かち、祭司はこれを頭および脂肪と共に、祭壇の上にある火の上のたきぎの上に並べなければならない。一三その内臓と足とは水で洗わなければならない。こうして祭司はそのすべてを祭壇の上で焼いて燔祭としなければならない。これは火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである。一四もし主にささげる供え物が、鳥の燔祭であるならば、山ばとまたは家ばとのひなを、その供え物としてささげなければならない。一五祭司はこれを祭壇に携えて行き、その首を摘み破り、祭壇の上で焼かなければならない。その血は絞り出して祭壇の側面に塗らなければならない。一六またその餌袋は羽と共に除いて、祭壇の東の方にある灰捨て場に捨てなければならない。一七これは、その翼を握つて裂かなければならない。ただし引き離してはならない。祭司はこれを祭壇の上で、火の上のたきぎの上で燔祭として焼かなければならない。これは火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである。

第二章

一人が素祭の供え物を主にささげるときは、その供え物は麦粉でなければならぬ。その上に油を注ぎ、またその上に乳香を添え、二これをアロンの子なる祭司たちのものに携えて行かなければならぬ。祭司はその麦粉とその油の一握りを乳香の全部と共に取り、これを記念の分として、祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである。三素祭の残りはアロンとその子らのものになる。これは主の火祭のいと聖なる物である。

四あなたが、もし天火で焼いたものを素祭としてささげるならば、それは麦粉に油を混ぜて作った種入れぬ菓子、または油を塗った種入れぬ煎餅でなければならぬ。五あなたの供え物が、もし、平鍋で焼いた素祭であるならば、それは麦粉に油を混ぜて作った種入れぬものでなければならぬ。六あなたはそれを細かく砕き、その上に油を注がなければならぬ。これは素祭である。七あなたの供え物が、もし深鍋で煮た素祭であるならば、麦粉に油を混ぜて作らなければならない。八あなたはこれらの物で作った素祭を、主に携えて行かなければならぬ。それを祭司に渡すならば、祭司はそれを祭壇に携えて行き、九その素祭のうちから記念の分を取つて、祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである。

一〇素祭の残りはアロンとその子らのものになる。これは、主の火祭のいと聖なる物である。

二あなたがたが主にささげる素祭は、すべて種を入れて作つてはならない。パン種も蜜も、すべて主にささげる火祭として焼いてはならないからである。三ただし、初穂の供え物としては、これらを主にささげることができる。しかし香ばしいかおりとして祭壇にささげてはならない。四あなたの素祭の供え物は、すべて塩をもつて味をつけないなければならない。あなたの素祭に、あなたの神の契約の塩を欠いてはならない。すべて、あなたの供え物は、塩を添えてささげなければならない。

五もしあなたが初穂の素祭を主にささげるならば、火で穂を焼いたもの、新穀の砕いたものを、あなたの初穂の素祭としてささげなければならない。六あなたはそれに油を加え、その上に乳香を置かなければならない。これは素祭である。七祭司は、その砕いた物およびその油のうちから記念の分を取つて、乳香の全部と共に焼かなければならない。これは主にささげる火祭である。

第三章

一もし彼の供え物が酬恩祭の犠牲であつて、牛をささげるのであれば、雌雄いづれであつても、全きものを主の前にささげな

ければならない。二彼はその供え物の頭に手を置き、会見の幕屋の入口で、これをほふらなければならない。そしてアロンの子なる祭司たちは、その血を祭壇の周囲に注ぎかけなければならない。三彼はまたその酬恩祭の犠牲のうちから火祭を主にささげなければならない。すなわち内臓をおおう脂肪と、内臓の上のすべての脂肪、四二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、ならびに腎臓と共にとられる肝臓の上の小葉である。五そしてアロンの子たちは祭壇の上で、火の上のたきぎの上に置いた燔祭の上で、これを焼かなければならない。これは火祭であつて、主にささげる香ばしいかおりである。

六もし彼の供え物が主にささげる酬恩祭の犠牲で、それが羊であるならば、雌雄いずれであつても、全きものをささげなければならない。七もし小羊を供え物としてささげるならば、それを主の前に連れてきて、八その供え物の頭に手を置き、それを会見の幕屋の前で、ほふらなければならない。そしてアロンの子たちはその血を祭壇の周囲に注ぎかけなければならない。九彼はその酬恩祭の犠牲のうちから、火祭を主にささげなければならない。すなわちその脂肪、背骨に接して切り取る脂肪の全部、内臓をおおう脂肪と内臓の上のすべての脂肪、一〇二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、ならびに腎臓と共に取られる肝臓の上の小葉である。二祭司はこれを祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭であつて、主にささげる食物である。

る。

二もし彼の供え物が、やぎであるならば、それを主の前に連れてきて、

三その頭に手を置き、それを会見の幕屋の前で、ほふらなければならない。そしてアロンの子たちは、その血を祭壇の周囲に注ぎかけなければならない。四彼はまたそのうちから供え物を取り、火祭として主にささげなければならない。すなわち内臓をおおう脂肪と内臓の上のすべての脂肪、五二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、ならびに腎臓と共に取られる肝臓の上の小葉である。六祭司はこれを祭壇の上で焼かなければならない。これは火祭としてささげる食物であつて、香ばしいかおりである。脂肪はみな主に帰すべきものである。七あなたがたは脂肪と血とをいっさい食べてはならない。これはあなたがたが、すべてその住む所で、代々守るべき永久の定めである』。

第四章

一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、『もし人があやまって罪を犯し、主のいましめにそむいて、してはならないことのひとつをした時は次のようにしなければならぬ。三すなわち、油注がれた祭司が罪を犯して、とがを民に及

ぼすならば、彼はその犯した罪のために雄の全き子牛を罪祭として主にささげなければならない。四 その子牛を会見の幕屋の入口に連れてきて主の前に至り、その子牛の頭に手を置き、その子牛を主の前で、ほふらなければならない。五 油注がれた祭司は、その子牛の血を取って、それを会見の幕屋に携え入り、六 そして祭司は指をその血に浸して、聖所の垂幕の前で主の前にその血を七たび注がなければならない。七 祭司はまたその血を取り、主の前で会見の幕屋の中にある香ばしい薫香の祭壇の角に、それを塗らなければならない。その子牛の血の残りはことごとく会見の幕屋の入口にある燔祭の祭壇のもとに注がなければならない。八 またその罪祭の子牛から、すべての脂肪を取らなければならない。すなわち内臓をおおう脂肪と内臓の上のすべての脂肪、九二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、ならびに腎臓と共に取られる肝臓の上の小葉である。一〇 これを取るには酬恩祭の犠牲の雄牛から取るのと同じようにしなければならない。そして祭司はそれを燔祭の祭壇の上で焼かなければならない。二 その子牛の皮とそのすべての肉、およびその頭と足と内臓と汚物など、三すべてその子牛の残りは、これを宿営の外、清い場所なる灰捨て場に携え出し、火をもつてこれをたきぎの上で焼き捨てなければならない。すなわちこれは灰捨て場で焼き捨てらるべきである。三 もしイスラエルの全会衆があやまちを犯し、そのことが会衆の目に隠れていても、主のいましめ

にそむいて、してはならないことの一つをなして、とがを得たならば、一四 その犯した罪が現れた時、会衆は雄の子牛を罪祭としてささげなければならない。すなわちそれを会見の幕屋の前に連れてきて、一五 会衆の長老たちは、主の前でその子牛の頭に手を置き、その子牛を主の前で、ほふらなければならない。一六 そして、油注がれた祭司は、その子牛の血を会見の幕屋に携え入り、一七 祭司は指をその血に浸し、垂幕の前で主の前に七たび注がなければならない。一八 またその血を取って、会見の幕屋の中の主の前にある祭壇の角に、それを塗らなければならない。その血の残りはことごとく会見の幕屋の入口にある燔祭の祭壇のもとに注がなければならない。一九 またそのすべての脂肪を取って祭壇の上で焼かなければならない。二〇 すなわち祭司は罪祭の雄牛にしたように、この雄牛にも、しなければならない。こうして、祭司が彼らのためにあがないをするならば、彼らはゆるされるであろう。二一 そして、彼はその雄牛を宿営の外に携え出し、はじめの雄牛を焼き捨てたように、これを焼き捨てなければならない。これは会衆の罪祭である。二二 またつかさたる者が罪を犯し、あやまつて、その神、主のいましめにそむき、してはならないことの一つをして、とがを得、三三 もしその犯した罪を知ようになったときは、供え物として雄やぎの全きものを連れてきて、三四 そのやぎの頭に手を置き、燔祭をほふる場所で、主の前にこれをほふらなければならない。

これは罪祭である。二五 祭司は指でその罪祭の血を取り、燔祭の祭壇の角にそれを塗り、残りの血は燔祭の祭壇のもとに注がなければならない。二六 また、そのすべての脂肪は、酬恩祭の犠牲の脂肪と同じように、祭壇の上で焼かなければならない。こうして、祭司が彼のためにその罪のあがないをするならば、彼はゆるされるであろう。二七 また一般の人がもしあやまつて罪を犯し、主のいましめにそむいて、してはならないことの一つをして、とがを得、二八 その犯した罪を知るようになったときは、その犯した罪のために供え物として雌やぎの全きものを連れてきて、二九 その罪祭の頭に手を置き、燔祭をほふる場所、その罪祭をほふらなければならぬ。三〇 そして祭司は指でその血を取り、燔祭の祭壇の角にこれを塗り、残りの血をことごとく祭壇のもとに注がなければならぬ。三一 またそのすべての脂肪は、酬恩祭の犠牲から脂肪を取ると同じように取り、これを祭壇の上で焼いて主にささげる香ばしいかおりとしなければならぬ。こうして祭司が彼のためにあがないをするならば、彼はゆるされるであろう。

三二 もし小羊を罪祭のために供え物として連れてくるならば、雌の全きものを連れてこなければならぬ。三三 その罪祭の頭、手を置き、燔祭をほふる場所、これをほふり、罪祭としなければならぬ。三四 そして祭司は指でその罪祭の血を取り、燔祭の祭壇の角にそれを塗り、残りの血はことごとく祭壇のもとに注

がなければならぬ。三五 またそのすべての脂肪は、酬恩祭の犠牲から小羊の脂肪を取ると同じように取り、祭司はこれに主にささげる火祭のように祭壇の上で焼かなければならない。こうして祭司が彼の犯した罪のためにあがないをするならば、彼はゆるされるであろう。

第五章

一 もし人が証人に立ち、誓いの声を聞きながら、その見たこと、知っていることを言わないで、罪を犯すならば、彼はそのとがを負わなければならぬ。二 また、もし人が汚れた野獣の死体、汚れた家畜の死体、汚れた這うものの死体など、すべて汚れたものに触れるならば、そのことに気づかなくても、彼は汚れたものとなつて、とがを得る。三 また、もし彼が人の汚れに触れるならば、その人の汚れが、どのような汚れであれ、それに気づかなくても、彼がこれを知ようになった時は、とがを得る。四 また、もし人がみだりにくちびるで誓い、悪をなそう、または善をなそうと言ふならば、その人が誓つてみだりに言つたことは、それがどんなことであれ、それに気づかなくても、彼がこれを知ようになった時は、これらの一つについて、とがを得る。五 もしこれらの一つについて、とがを得たときは、その罪を犯したことを告白し、六 その犯した罪のために償いとして、雌の家畜、すなわち雌

の小羊または雌やぎを主のもとに連れてきて、罪祭としなければならぬ。こうして祭司は彼のために罪のあがないをするであらう。

もし小羊に手のとどかない時は、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽かを、彼が犯した罪のために償いとして主に携えてきて、一羽を罪祭に、一羽を燔祭にしなければならぬ。ハすなわち、これらを祭司に携えてきて、祭司はその罪祭のものを先にささげなければならぬ。すなわち、その頭を首の根のところで、摘み破らなければならぬ。ただし、切り離してはならない。九そしてその罪祭の血を祭壇の側面に注ぎ、残りの血は祭壇のもとに絞り出さなければならぬ。これは罪祭である。一〇また第二のものは、定めにしたがって燔祭としなければならぬ。こうして、祭司が彼のためにその犯した罪のあがないをするならば、彼はゆるされるであらう。

二もし二羽の山ばとにも、二羽の家ばとのひなにも、手の届かないときは、彼の犯した罪のために、供え物として麦粉十分の一エバを携えてきて、これを罪祭としなければならぬ。ただし、その上に油をかけてはならない。またその上に乳香を添えてはならない。これは罪祭だからである。三彼はこれを祭司のもとに携えて行き、祭司は一握りを取って、記念の分とし、これを主にささげる火祭のように、祭壇の上で焼かなければならぬ。これは罪祭である。三こうして、祭司が彼のため、すなわ

ち、彼がこれらの一つを犯した罪のために、あがないをするならば、彼はゆるされるであらう。そしてその残りは素祭と同じく、祭司に帰するであらう」。

一四主はまたモーセに言われた、一五「もし人が不正をなし、あやまつて主の聖なる物について罪を犯したときは、その償いとして、あなたの値積りにしたが、聖所のシケルで、銀数シケルに当る雄羊の全きものを、群れのうちから取り、それを主に携えてきて、懲祭としなければならぬ。一六そしてその聖なる物について犯した罪のために償いをし、またその五分の一をこれに加えて、祭司に渡さなければならぬ。こうして祭司がその懲祭の雄羊をもって、彼のためにあがないをするならば、彼はゆるされるであらう。

一七また人がもし罪を犯し、主のいましめにそむいて、してはならないことの一つをしたときは、たといそれを知らなくても、彼は罪を得、そのとがを負わなければならぬ。一八彼はあなたの値積りにしたがって、雄羊の全きものを群れのうちから取り、懲祭としてこれを祭司のもとに携えてこなければならぬ。こうして、祭司が彼のために、すなわち彼が知らないで、しかもあやまつて犯した過失のために、あがないをするならば、彼はゆるされるであらう。一九これは懲祭である。彼は確かに主の前にとがを得たからである」。

第六章

一主はまたモーセに言われた、ニ「もし人が罪を犯し、主に對して不正をなしたとき、すなわち預かり物、手にした質草、またはかすめた物について、その隣人を欺き、あるいはその隣人をしえたげ、三あるいは落し物を拾い、それについて欺き、偽って誓うなど、すべて人がそれをなして罪となることの一つについて、四罪を犯し、とがを得たならば、彼はそのかすめた物、しえたげて取った物、預かつた物、拾つた落し物、五または偽り誓つたすべての物を返さなければならぬ。すなわち残りなく償い、更にその五分の一をこれに加え、彼が懲祭をささげる日に、これをその元の持ち主に渡さなければならぬ。六彼はその償いとして、あなたの値積りにしたが、雄羊の全きものを、群れの中から取り、これを祭司のもとに携えてきて、懲祭として主にささげなければならぬ。七こうして、祭司が主の前で彼のためにあがないをするならば、彼はそのいずれを行つてとがを得てもゆるさるであらう」。

八主はまたモーセに言われた、九「アロンとその子たちに命じて言いなさい、『燔祭のおきては次のとおりである。燔祭は祭壇の炉の上に、朝まで夜もすがらあるようにし、そこに祭壇の火を燃え続かせなければならない。一〇祭司は亜麻布の服を着、亜麻布のももひきを身につけ、祭壇の上で火に焼けた燔祭の灰を取つ

て、これを祭壇のそばに置き、二その衣服を脱ぎ、ほかの衣服を着て、その灰を宿営の外の清い場所に携へ出さなければならない。三祭壇の上の火は、そこに燃え続け、それを消してはならない。祭司は朝ごとに、たきぎをその上に燃やし、燔祭をその上に並べ、また酬恩祭の脂肪をその上で焼かなければならない。三火は絶えず祭壇の上に燃え続け、これを消してはならない。

四素祭のおきては次のとおりである。アロンの子たちはそれを祭壇の前で主の前にささげなければならない。一五すなわち素祭の麦粉一握りとその油を、素祭の上にある全部の乳香と共に取つて、祭壇の上で焼き、香ばしいかおりとし、記念の分として主にささげなければならない。一六その残りはアロンとその子たちが食べなければならない。すなわち、種を入れずに聖なる所で食べなければならない。会見の幕屋の庭でこれを食べなければならない。一七これは種を入れて焼いてはならない。わたしはこれをわたしの火祭のうちから彼らの分として与える。これは罪祭および懲祭と同様に、いと聖なるものである。一八アロンの子たちのうち、すべての男子はこれを食べることができ。これは主にささげる火祭のうちから、あなたがたが代々永久に受けるように定められた分である。すべてこれに触れるものは聖となるであらう」。

一九主はまたモーセに言われた、二〇「アロンとその子たちが、ア

ロンの油注がれる日に、主にささぐべき供え物は次のとおりである。すなわち麦粉十分の一エバを、絶えずささげる素祭とし、半ばは朝に、半ばは夕にささげなければならない。二それは油をよく混ぜて平鍋で焼き、それを携えてきて、細かく砕いた素祭とし、香ばしいかおりとして、主にささげなければならない。二彼の子たちのうち、油注がれて彼について祭司となる者は、これをささげなければならない。これは永久に主に帰する分として、全く焼きつくすべきものである。三すべて祭司の素祭は全く焼きつくすべきものであつて、これを食べてはならない」。

四主はまたモーセに言われた、五「アロンとその子たちに言いなさい、『罪祭のおきては次のとおりである。罪祭は燔祭をほふる場所で、主の前にほふらなければならない。これはいと聖なる物である。六罪のためにこれをささげる祭司が、これを食べなければならない。すなわち会見の幕屋の庭の聖なる所で、これを食べなければならない。七すべてその肉に触れる者は聖となるであろう。もしその血が衣服にかかったならば、そのかかったものは聖なる所で洗わなければならない。八またそれを煮た土の器は砕かなければならない。もし青銅の器で煮たのであれば、それはみがいて、水で洗わなければならない。九祭司たちのうちのすべての男子は、これを食ふことができる。これはいと聖なるものである。三しかし、その血を会見の幕屋

に携えていつて、聖所であがないに用いた罪祭は食べてはならない。これは火で焼き捨てなければならない。

第七章

一愆祭のおきては次のとおりである。それはいと聖なる物である。二愆祭は燔祭をほふる場所ではふらなければならない。そして祭司はその血を祭壇の周圍に注ぎかけ、三そのすべての脂肪をささげなければならない。すなわち脂肪尾、内臓をおおう脂肪、四二つの腎臓とその上の腰のあたりにある脂肪、腎臓と共に取られる肝臓の上の小葉である。五祭司はこれを祭壇の上で焼いて、主に火祭としなければならない。これは愆祭である。六祭司たちのうちのすべての男子は、これを食ふことができる。これは聖なる所で食べなければならない。これはいと聖なる物である。七罪祭も愆祭も、そのおきては一つであつて、異なるところはない。これは、あがないをなす祭司に帰する。八人が携えてくる燔祭をささげる祭司、その祭司に、そのささげる燔祭のものの皮は帰する。九すべて天火で焼いた素祭、またすべて深鍋または平鍋で作つたものは、これをささげる祭司に帰する。一〇すべて素祭は、油を混ぜたものも、かわいたものも、アロンのすべての子たちにひとしく帰する。

二主にささぐべき酬恩祭の犠牲のおきては次のとおりであ

る。二三もしこれを感謝のためにささげるのであれば、油を混ぜた種入れぬ菓子と、油を塗った種入れぬ煎餅と、よく混ぜた麦粉に油を混ぜて作った菓子とを、感謝の犠牲に合わせてささげなければならぬ。二三また種を入れたパンの菓子をその感謝のための酬恩祭の犠牲に合わせ、供え物としてささげなければならぬ。二四すなわちこのすべての供え物のうちから、菓子一つずつを取って主にささげなければならぬ。これは酬恩祭の血を注ぎかける祭司に帰する。二五その感謝のための酬恩祭の犠牲の肉は、その供え物をささげた日のうちに食べなければならぬ。少しでも明くる朝まで残して置いてはならない。二六しかし、その供え物の犠牲がもし誓願の供え物、または自発の供え物であるならば、その犠牲をささげた日のうちにそれを食べ、その残りはまた明くる日に食べることが出来る。二七ただし、その犠牲の肉の残りは三日目には火で焼き捨てなければならぬ。二八もしその酬恩祭の犠牲の肉を三日目に少しでも食べるならば、それは受け入れられず、また供え物と見なされず、かえって忌むべき物となるであろう。そしてそれを食べる者はとがを負わなければならない。

二九その肉がもし汚れた物に触れるならば、それを食べることもなく、火で焼き捨てなければならない。犠牲の肉はすべて清い者がこれを食べることが出来る。三〇もし人がその身に汚れがあるのに、主にささげた酬恩祭の犠牲の肉を食べるならば、その

人は民のうちから断たれるであろう。三一人がもしすべて汚れたもの、すなわち人の汚れ、あるいは汚れた獣、あるいは汚れた這うものに触れながら、主にささげた酬恩祭の犠牲の肉を食べるならば、その人は民のうちから断たれるであろう。』

三二主はまたモーセに言われた、三三「イスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたは、すべて牛、羊、やぎの脂肪を食べてはならない。二四自然に死んだ獣の脂肪および裂き殺された獣の脂肪は、さまざまのことに使つてもよい。しかし、それは決して食べてはならない。二五だれでも火祭として主にささげる獣の脂肪を食べるならば、これを食べる人は民のうちから断たれるであろう。二六またあなたがたはすべてその住む所で、鳥にせよ、獣にせよ、すべてその血を食べてはならない。二七だれでもすべて血を食べるならば、その人は民のうちから断たれるであろう。』」

三八主はまたモーセに言われた、三九「イスラエルの人々に言いなさい、『酬恩祭の犠牲を主にささげる者は、その酬恩祭の犠牲のうちから、その供え物を主に携えてこなければならない。四〇主の火祭は手ずからこれを携えてこなければならない。すなわちその脂肪と胸とを携えてきて、その胸を主の前に揺り動かして、揺祭としなければならない。四一そして祭司はその脂肪を祭壇の上で焼かなければならない。その胸はアロンとその子たちに帰する。四二あなたがたの酬恩祭の犠牲のうちから、その右のも

もを挙祭として、祭司に与えなければならぬ。三 アロンの子たちのうち、酬恩祭の血と脂肪とをささげる者は、その右のものも自分の分として、獲るであらう。四 わたしはイスラエルの人々の酬恩祭の犠牲のうちから、その揺祭の胸と挙祭のものもを取つて、祭司アロンとその子たちに与え、これをイスラエルの人々から永久に彼らの受くべき分とする。五 これは主の火祭のうちから、アロンの受ける分と、その子たちの受ける分とであつて、祭司の職をなすため、彼らが主にささげられた日に定められたのである。六 すなわち、これは彼らに油を注ぐ日に、イスラエルの人々が彼らに与えるように、主が命じられたものであつて、代々永久に受くべき分である。七

三〇 これは燔祭、素祭、罪祭、愆祭、任職祭、酬恩祭の犠牲のおきてである。三一 すなわち、主がシナイの荒野においてイスラエルの人々にその供え物を主にささげることが命じられた日に、シナイ山でモーセに命じられたものである。

第八章

一 主はまたモーセに言われた、二 「あなたはアロンとその子たち、およびその衣服、注ぎ油、罪祭の雄牛、雄羊二頭、種入れぬパン一かごを取り、三 また全会衆を会見の幕屋の入口に集めなさい。四 モーセは主が命じられたようにした。そして会衆は

会見の幕屋の入口に集まつた。

五 そこでモーセは会衆にむかつて言つた、「これは主があなたがたにせよと命じられたことである。六 そしてモーセはアロンとその子たちを連れてきて、水で彼らを洗い清め、七 アロンに服を着させ、帯をしめさせ、衣をまとわせ、エポデを着けさせ、エポデの帯をしめさせ、それをもつてエポデを身に結いつけ、八 また胸当を着けさせ、その胸当にウリムとトンミムを入れ、九 その頭に帽子をかぶらせ、その帽子の前に金の板、すなわち聖なる冠をつけさせた。主がモーセに命じられたとおりである。

一〇 モーセはまた注ぎ油を取り、幕屋とそのうちのすべての物に油を注いでこれを聖別し、二 かつ、それを七たび祭壇に注ぎ、祭壇とそのもろもろの器、洗盤とその台に油を注いでこれを聖別し、三 また注ぎ油をアロンの頭に注ぎ、彼に油を注いでこれを聖別した。四 モーセはまたアロンの子たちを連れてきて、服を彼らに着させ、帯を彼らにしめさせ、頭巾を頭に巻かせた。主がモーセに命じられたとおりである。

一四 彼はまた罪祭の雄牛の頭を連れてこさせ、アロンとその子たちは、その罪祭の雄牛の頭に手を置いた。一五 モーセはこれをほぶり、その血を取り、指をもつてその血を祭壇の四すみの角につけて祭壇を清め、また残りの血を祭壇のもとに注いで、これを聖別し、これがためにあがないをした。一六 モーセはまたその内臓の上のすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓とその脂肪とを取

り、これを祭壇の上で焼いた。一七ただし、その雄牛の皮と肉と汚物は宿営の外で、火をもって焼き捨てた。主がモーセに命じられたとおりである。

一八彼はまた燔祭の雄羊を連れてこさせ、アロンとその子たちは、その雄羊の頭に手を置いた。一九モーセはこれをほふつて、その血を祭壇の周囲に注ぎかけた。二〇そして、モーセはその雄羊を節々に切り分かち、その頭と切り分けたものと脂肪とを焼いた。二一またモーセは水でその内臓と足を洗い、その雄羊をことごとく祭壇の上で焼いた。これは香ばしいかおりのための燔祭であつて、主にささげる火祭である。主がモーセに命じられたとおりである。

二三彼はまたほかの雄羊、すなわち任職の雄羊を連れてこさせ、アロンとその子たちは、その雄羊の頭に手を置いた。二四モーセはこれをほふり、その血を取つて、アロンの右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指とにつけた。二五またモーセはアロンの子たちを連れてきて、その血を彼らの右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指とにつけた。そしてモーセはその残りの血を、祭壇の周囲に注ぎかけた。二六彼はまたその脂肪、すなわち脂肪、内臓の上のすべての脂肪、肝臓の小葉、二つの腎臓とその脂肪、ならびにその右のものを取り、二七また主の前にある種入れぬパンのかごから種入れぬ菓子一つと、油を入れたパンの菓子一つと、煎餅一つとを取つて、かの脂肪と右のものとの上に

載せ、二八これをすべてアロンの手と、その子たちの手に渡し、主の前に揺り動かさせて揺祭とした。二九そしてモーセはこれを彼らの手から取り、祭壇の上で燔祭と共に焼いた。これは香ばしいかおりとする任職の供え物であつて、主にささげる火祭である。三〇そしてモーセはその胸を取り、主の前にこれを揺り動かして揺祭とした。これは任職の雄羊のうちモーセに帰すべき分であつた。主がモーセに命じられたとおりである。

三一モーセはまた注ぎ油と祭壇の上の血とを取り、これをアロンとその服、またその子たちとその服とに注いで、アロンとその服、およびその子たちと、その服とを聖別した。

三二モーセはまたアロンとその子たちに言つた、「会見の幕屋の入口でその肉を煮なさい。そして任職祭のかごの中のパンと共に、それをその所で食べなさい。これは『アロンとその子たちが食べなければならぬ』と言え」とわたしが命じられたとおりである。三三あなたがたはその肉とパンとの残つたものを火で焼き捨てなければならぬ。三三あなたがたはその任職祭の終る日まで七日の間、会見の幕屋の入口から出てはならない。あなたがたの任職は七日を要するからである。三四きよう行つたように、あなたがたのために、あがないをせよ、と主はお命じになつた。三五あなたがたは会見の幕屋の入口に七日の間、日夜とどまり、主の仰せを守つて、死ぬことのないようにしなければならぬ。わたしはそのように命じられたからである」。三六アロ

ンとその子たちは主がモーセによってお命じになったことを、ことごとく行つた。

第九章

一八日目になつて、モーセはアロンとその子たち、およびイスラエルの長老たちを呼び寄せ、ニアロンに言つた、「あなたは雄の子牛の全きものを燔祭のために取り、また雄羊の全きものを燔祭のために取つて、主の前にささげなさい。三あなたはまたイスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたは雄やぎを燔祭のために取り、また一歳の全き子牛と小羊とを燔祭のために取りなさい、四また主の前にささげる酬恩祭のために雄牛と雄羊とを取り、また油を混ぜた素祭を取りなさい。主がきようあなたがたに現れたもうからである』。五彼らはモーセが命じたものを会見の幕屋の前に携えてきた。会衆がみな近づいて主の前に立つたので、モーセは言つた、「これは主があなたがたに、せよと命じられたことである。こうして主の栄光はあなたがたに現れるであろう」。セモーセはまたアロンに言つた、「あなたは祭壇に近づき、あなたの罪祭と燔祭をささげて、あなたのため、また民のためにあがないをし、また民の供え物をささげて、彼らのためにあがないをし、すべて主がお命じになったようにしなさい」。

ハそこでアロンは祭壇に近づき、自分のための罪祭の子牛をほふつた。九そしてアロンの子たちは、その血を彼のもとに携えてきたので、彼は指をその血に浸し、それを祭壇の角につけ、残りの血を祭壇のもとに注ぎ、一〇また罪祭の脂肪と腎臓と肝臓の小葉とを祭壇の上で焼いた。主がモーセに命じられたとおりである。一一またその肉と皮とは宿営の外で火をもつて焼き捨てた。

一二彼はまた燔祭の獣をほふり、アロンの子たちがその血を彼に渡したので、これを祭壇の周囲に注ぎかけた。一三彼らがまた燔祭のもの、すなわち、その切り分けたものと頭とを彼に渡したので、彼はこれを祭壇の上で焼いた。一四またその内臓と足とを洗い、祭壇の上で燔祭と共にこれを焼いた。

一五彼はまた民の供え物をささげた。すなわち、民のための罪祭のやぎを取つてこれをほふり、前のようにこれを罪のためにささげた。一六また燔祭をささげた。すなわち、これを定めのようにささげた。一七また素祭をささげ、そのうちから一握りを取り、朝の燔祭に加えて、これを祭壇の上で焼いた。

一八彼はまた民のためにささげる酬恩祭の犠牲の雄牛と雄羊とをほふり、アロンの子たちが、その血を彼に渡したので、彼はこれを祭壇の周囲に注ぎかけた。一九またその雄牛と雄羊との脂肪、すなわち、脂肪、内臓をおおうもの、腎臓、肝臓の小葉。二〇これらの脂肪を彼らはその胸の上に載せて携えてきたので、

彼はその脂肪を祭壇の上で焼いた。三 その胸と右のもとは、アロンが主の前に揺り動かして揺祭とした。モーセが命じたとおりである。

三 アロンは民にむかつて手をあげて、彼らを祝福し、罪祭、燔祭、酬恩祭をささげ終つて降りた。三 モーセとアロンは会見の幕屋に入り、また出てきて民を祝福した。そして主の栄光はすべての民に現れ、二 主の前から火が出て、祭壇の上の燔祭と脂肪とを焼きつくした。民はみな、これを見て喜びよばわり、そしてひれ伏した。

第一〇章

一 さてアロンの子ナダブとアビフとは、おのおのその香炉を取つて火をこれに入れ、薫香をその上に盛つて、異火を主の前にささげた。これは主の命令に反することであつたので、二 主の前から火が出て彼らを焼き滅ぼし、彼らは主の前に死んだ。三 その時モーセはアロンに言つた、「主は、こう仰せられた。すなわち『わたしは、わたしに近づく者のうちに、わたしの聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現すであらう』。アロンは黙していた。

四 モーセはアロンの叔父ウジエルの子ミシヤエルとエルザパンとを呼び寄せて彼らに言つた、「近寄つて、あなたがたの兄弟た

ちを聖所の前から、宿営の外に運び出しなさい。五 彼らは近寄つて、彼らをその服のまま宿営の外に運び出し、モーセの言つたようにした。六 モーセはまたアロンおよびその子エレアザルとイタマルとに言つた、「あなたがたは髪の毛を乱し、また衣服を裂いてはならない。あなたがたが死ぬことのないため、また主の怒りが、すべての会衆に及ぶことのないためである。ただし、あなたがたの兄弟イスラエルの全家は、主が火をもつて焼き滅ぼしたもうたことを嘆いてもよい。七 また、あなたがたは死ぬことのないように、会見の幕屋の入口から外へ出てはならない。あなたがたの上に主の注ぎ油があるからである」。彼らはモーセの言葉のとおりにした。

八 主はアロンに言われた、九 「あなたも、あなたの子たちも会見の幕屋にはいる時には、死ぬことのないように、ぶどう酒と濃い酒を飲んでほならない。これはあなたがたが代々永く守るべき定めとしなければならない。一〇 これはあなたがたが聖なるものと俗なるもの、汚れたものと清いものとの区別をすることができるため、二 また主がモーセによつて語られたすべての定めを、イスラエルの人々に教えることができるためである」。

三 モーセはまたアロンおよびその残つてゐる子エレアザルとイタマルとに言つた、「あなたがたは主の火祭のうちから素祭の残りを取り、パン種を入れずに、これを祭壇のかたわらで食べなさい。これはいと聖なる物である。三 これは主の火祭のうち

からあなたの受ける分、またあなたの子たちの受ける分であるから、あなたがたはこれを聖なる所で食べなければならぬ。わたしはこのように命じられたのである。一四また揺り動かした胸とささげたもとは、あなたとあなたのむすこ、娘たちがこれを清い所で食べなければならぬ。これはイスラエルの人々の酬恩祭の犠牲の中からあなたの分、あなたの子たちの分として与えられるものだからである。一五彼らはそのささげたももと揺り動かした胸とを、火祭の脂肪と共に携えてきて、これを主の前に揺り動かして揺祭としなければならぬ。これは主がお命じになったように、長く受くべき分としてあなたと、あなたの子たちとに帰するであろう」。

一六さてモーセは罪祭のやぎを、ていねいに捜したが、見よ、それがすでに焼かれていたので、彼は残っているアロンの子エレアザルとイタマルとにむかい、怒って言った、一七「あなたがたは、なぜ罪祭のものを聖なる所で食べなかったのか。これはいと聖なる物であつて、あなたがたが会衆の罪を負つて、彼らのために主の前にあがないをするため、あなたがたに賜つた物である。一八見よ、その血は聖所の中に携え入れなかった。その肉はわたしが命じたように、あなたがたは必ずそれを聖なる所で食べるべきであつた」。一九アロンはモーセに言った、「見よ、きよう、彼らはその罪祭と燔祭とを主の前にささげたが、このよ

うな事がわたしに臨んだ。もしわたしが、きよう罪祭のものを食べたとしたら、主はこれを良しとせられたであろうか」。二〇モーセはこれを聞いて良しとした。

第二章

一主はまたモーセとアロンに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、『地にあるすべての獣のうち、あなたがたの食べることができる動物は次のとおりである。三獣のうち、すべてひずめの分かれたもの、すなわち、ひずめの全く切れたもの、反芻するものは、これを食べることができる。四ただし、反芻するもの、またはひずめの分かれたものうち、次のものは食べてはならない。すなわち、らくだ、これは、反芻するけれども、ひずめが分かれていないから、あなたがたには汚れたものである。五岩たぬき、これは、反芻するけれども、ひずめが分かれていないから、あなたがたには汚れたものである。六野うさぎ、これは、反芻するけれども、ひずめが分かれていないから、あなたがたには汚れたものである。七豚、これは、ひずめが分かれており、ひずめが全く切れているけれども、反芻することをしないから、あなたがたには汚れたものである。八あなたがたは、これらのものの肉を食べてはならない。またその死体に触れてはならない。これは、あなたがたには汚れたものである。九水の中にいるすべてのもののうち、あなたがたの食べること

ができるものは次のとおりである。すなわち、海でも、川でも、すべて水の中にいるもので、ひれと、うろこのあるものは、これを食べることができる。二〇すべて水に群がるもの、またすべての水の中にいる生き物のうち、すなわち、すべて海、また川にいて、ひれとうろこのないものは、あなたがたに忌むべきものである。二一これらはあなたがたに忌むべきものであるから、あなたがたはその肉を食べてはならない。またその死体は忌むべきものとしなければならない。二三すべて水の中にいて、ひれも、うろこもないものは、あなたがたに忌むべきものである。

二三鳥のうち、次のものは、あなたがたに忌むべきものとして、食べてはならない。それらは忌むべきものである。すなわち、はげわし、ひげはげわし、みさご、一四とび、はやぶさの類、一五もろもろのからすの類、一六だちよう、よたか、かもめ、たかの類、一七ふくろう、う、みみずく、一八むらさきばん、ペリカン、はげたか、一九ここのとり、さぎの類、やつがしら、こもり。

二〇また羽があつて四つの足で歩くすべてのこの類は、あなたがたに忌むべきものである。二一ただし、羽があつて四つの足で歩くすべてのこの類のうち、その足のうえに、跳ね足があり、それで地の上をはねるものは食べることができる。二三すなわち、そのうち次のものは食べることができる。移住いなこの類、遍歴いなこの類、大いなこの類、小いなこの類である。二四しかし、羽があつて四つの足で歩く、そのほかのすべてのこの類は、

は、あなたがたに忌むべきものである。

二四あなたがたは次の場合に汚れたものとなる。すなわち、すべてこれらのものの死体に触れる者は夕まで汚れる。二五すべてこれらのものの死体を運ぶ者は、その衣服を洗わなければならない。彼は夕まで汚れる。二六すべて、ひずめの分かれた獣で、その切れ目の切れていないもの、また、反芻することをしないものは、あなたがたに汚れたものである。すべて、これに触れる者は汚れる。二七すべて四つの足で歩く獣のうち、その足の裏のふくらみで歩くものは皆あなたがたに汚れたものである。すべてその死体に触れる者は夕まで汚れる。二八その死体を運ぶ者は、その衣服を洗わなければならない。彼は夕まで汚れる。これは、あなたがたに汚れたものである。

二九地にはうろこのないもの、次のものはあなたがたに汚れたものである。すなわち、もぐらねずみ、とびねずみ、とげ尾とかげの類、三〇やもり、大とかげ、とかげ、すなとかげ、カメレオン。三二もろもろのこの類のうち、これらはあなたがたに汚れたものである。すべてこれらのものが死んで、それに触れる者は夕まで汚れる。三三またこれらのものが死んで、それが落ちかつかつた物はすべて汚れる。木の器であれ、衣服であれ、皮であれ、袋であれ、およそ仕事に使う器はそれを水に入れなければならない。それは夕まで汚れているが、そののち清くなる。三三またそれらのものが、土の器の中に落ちたならば、その中にあるものは

皆汚れる。あなたがたはその器をこわさなければならぬ。三四またすべてその中にある食物で、水分のあるものは汚れる。またすべてそのような器の中にある飲み物も皆汚れる。三五またそれらのものの死体が落ちかかったならば、その物はすべて汚れる。天火であれ、かまどであれ、それをこわさなければならぬ。これらは汚れたもので、あなたがたに汚れたものとなる。三六ただし、泉あるいは水の集まった水たまりは汚れない。しかし、その死体に触れる者は汚れる。三七それらのものの死体が、まく種の上に落ちて、それは汚れない。三八ただし、種の上に水がかかっている、その上にそれらのものの死体が、落ちるならば、それはあなたがたに汚れたものとなる。

三九あなたがたの食べる獣が死んだ時、その死体に触れる者は夕まで汚れる。四〇その死体を食べる者は、その衣服を洗わなければならない。夕まで汚れる。その死体を運ぶ者も、その衣服を洗わなければならない。夕まで汚れる。

四一すべて地にはう這うものは忌むべきものである。これを食べてはならない。四二すべて腹はい行くもの、四つ足で歩くもの、あるいは多くの足をもつもの、すなわち、すべて地にはう這うものは、あなたがたはこれを食べてはならない。それらは忌むべきものだからである。四三あなたがたはすべて這うものによつて、あなたがたの身を忌むべきものとしてはならない。また、これをもつて身を汚し、あるいはこれによつて汚されてはな

らない。四四わたしはあなたがたの神、主であるから、あなたがたはおのれを聖別し、聖なる者とならなければならない。わたしは聖なる者である。地にはう這うものによつて、あなたがたの身を汚してはならない。四五わたしはあなたがたの神となるため、あなたがたをエジプトの国から導き上った主である。わたしは聖なる者であるから、あなたがたは聖なる者とならなければならない。四六これは獣と鳥と、水の中に動くすべての生き物と、地に這うすべてのものに関するおきてであつて、四七汚れたものと清いもの、食べられる生き物と、食べられない生き物とを区別するものである。

第二章

一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、『女がもし身ごもつて男の子を産めば、七日のあいだ汚れる。すなわち、月のさわりの日かずほど汚れるであろう。三八八日目はその子の前の皮に割礼を施さなければならない。四その女はなお、血の清めに三十三日を経なければならない。その清めの日の満ちるまでは、聖なる物に触れてはならない。また聖なる所にはいつてはならない。五もし女の子を産めば、二週間、月のさわりと同じように汚れる。その女はなお、血の清めに六十六

日を経なければならぬ。

六 男の子または女の子についての清めの日が満ちるとき、女は燔祭のために一歳の小羊、罪祭のために家ばとのひな、あるいは山ばとを、会見の幕屋の入口の、祭司のもとに、携えてこなければならぬ。七 祭司はこれを主の前にささげて、その女のために、あがないをしなければならぬ。こうして女はその出血の汚れが清まるであろう。これは男の子または女の子を産んだ女のためのおきてである。八 もしその女が小羊に手の届かないときは、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽かを取って、一つを燔祭、一つを罪祭とし、祭司はその女のために、あがないをしなければならぬ。こうして女は清まるであろう』。

第二十三章

一 主はまたモーセとアロンに言われた、二 「人がその身の皮に腫、あるいは吹出物、あるいは光る所ができ、これがその身の皮にらひ病の患部のようになるならば、その人を祭司アロンまたは、祭司なるアロンの子たちのひとりのもとに、連れて行かなければならぬ。三 祭司はその身の皮の患部を見、その患部の毛がもし白く変り、かつ患部が、その身の皮よりも深く見えるならば、それはらひ病の患部である。祭司は彼を見て、これを汚れた者としなければならない。四 もしまたその身の皮の光る所が白

くて、皮よりも深く見えず、また毛も白く変っていないならば、祭司はその患者を七日のあいだ留め置かなければならぬ。五 七日目に祭司はこれを見て、もし患部の様子がなくなり、また患部が皮に広がっていないならば、祭司はその人をさらに七日のあいだ留め置かなければならぬ。六 七日目に祭司は再びその人を見て、患部がもし薄らぎ、また患部が皮に広がっていないならば、祭司はこれを清い者としなければならぬ。これは吹出物である。その人は衣服を洗わなければならない。そして清くなるであろう。七 しかし、その人が祭司に見せて清い者でなかった後に、その吹出物が皮に広くひろがるならば、再び祭司にその身を見せなければならない。八 祭司はこれを見て、その吹出物が皮に広がっているならば、祭司はその人を汚れた者としなければならない。これはらひ病である。

九 もし人にらひ病の患部があるならば、その人を祭司のもとに連れて行かなければならない。一〇 祭司がこれを見て、その皮に白い腫があり、その毛も白く変り、かつその腫に生きた生肉が見えるならば、二 これは古いらひ病がその身の皮にあるのであるから、祭司はその人を汚れた者としなければならない。その人は汚れた者であるから、これを留め置くに及ばない。三 もしらひ病が広く皮に出て、そのらひ病が、その患者の皮を頭から足まで、ことごとくおおい、祭司の見えるところすべてに及んでおれば、三 祭司はこれを見、もしらひ病がその身をことごとくお

おつておれば、その患者を清い者としなければならぬ。それはことごとく白く變つたから、彼は清い者である。一四しかし、もし生肉がその人に現れておれば、汚れた者である。一五祭司はその生肉を見て、その人を汚れた者としなければならぬ。生肉は汚れたものであつて、それはらい病である。一六もしまたその生肉が再び白く變るならば、その人は祭司のもとに行かなければならぬ。一七祭司はその人を見て、もしその患部が白く變つておれば、祭司はその患者を清い者としなければならぬ。その人は清い者である。

一八また身の皮に腫物があつたが、直つて、一九その腫物の場所に白い腫、または赤みをおびた白い光る所があれば、これを祭司に見せなければならぬ。二〇祭司はこれを見て、もし皮よりも低く見え、その毛が白く變つていれば、祭司はその人を汚れた者としなければならぬ。それは腫物に起つたらい病の患部だからである。二一しかし、祭司がこれを見て、もしその所に白い毛がなく、また皮よりも低い所がなく、かえつて薄らいでいるならば、祭司はその人を七日のあいだ留め置かなければならぬ。二二そしてもし皮に広くひろがつているならば、祭司はその人を汚れた者としなければならぬ。それは患部だからである。二三しかし、その光る所がもしその所にとどまつて広がらなければ、それは腫物の跡である。祭司はその人を清い者としなければならぬ。

二四また身の皮にやけどがあつて、そのやけどの生きた肉がもし赤みをおびた白、または、ただ白くて光る所となるならば、二五祭司はこれを見なければならぬ。そしてもし、その光る所にある毛が白く變つて、そこが皮よりも深く見えるならば、これはやけどに生じたらいい病である。祭司はその人を汚れた者としなければならぬ。これはらい病の患部だからである。二六けれども祭司がこれを見て、その光る所に白い毛がなく、また皮よりも低い所がなく、かえつて薄らいでいるならば、祭司はその人を七日のあいだ留め置き、二七七日目に祭司は彼を見なければならぬ。もし皮に広くひろがつているならば、祭司はその人を汚れた者としなければならぬ。これはらい病の患部だからである。二八もしその光る所が、その所にとどまつて、皮に広がらずに、かえつて薄らいでいるならば、これはやけどの腫である。祭司はその人を清い者としなければならぬ。これはやけどの跡だからである。

二九男あるいは女がもし、頭またはあごに患部が生じたならば、三〇祭司はその患部を見なければならぬ。もしそれが皮よりも深く見え、またそこに黄色の細い毛があるならば、祭司はその人を汚れた者としなければならぬ。それはかいせんであつて、頭またはあごのらい病だからである。三一また祭司がそのかいせんの患部を見て、もしそれが皮よりも深く見えず、またそこに黒い毛がないならば、祭司はそこにかいせんの患者を七日のあ

いだ留め置き、三七日目に祭司はその患部を見なければならぬ。そのかいせんがもし広がらず、またそこに黄色の毛がなく、そのかいせんが皮よりも深く見えないならば、三三その人は身をそらなければならぬ。ただし、そのかいせんをそつてはならない。祭司はそのかいせんのある者をさらに七日のあいだ留め置き、三四七日目に祭司はそのかいせんを見なければならぬ。もしそのかいせんが皮に広がらず、またそれが皮よりも深く見えないならば、祭司はその人を清い者としなければならぬ。その人はまたその衣服を洗わなければならぬ。そして清くなるであらう。三五しかし、もし彼が清い者とされた後に、そのかいせんが、皮に広くひろがるならば、三六祭司はその人を見なければならぬ。もしそのかいせんが皮に広がっているならば、祭司は黄色の毛を捜すまでもなく、その人は汚れた者である。三七しかし、もしそのかいせんの様子に変わりなく、そこに黒い毛が生じているならば、そのかいせんは直つたので、その人は清い。祭司はその人を清い者としなければならぬ。

三八また男あるいは女がもし、その身の皮に光る所、すなわち白い光る所があるならば、三九祭司はこれを見なければならぬ。もしその身の皮の光る所が、鈍い白であるならば、これはただ白せんがその皮に生じたのであつて、その人は清い。

四〇人がもしその頭から毛が抜け落ちてても、それがはげならば清い。四一もしその額の毛が抜け落ちてても、それが額のはげならば

清い。四二けれども、もしそのはげ頭または、はげ額に赤みをおびた白い患部があるならば、それはそのはげ頭または、はげ額にらいた病が発したのである。四三祭司はこれを見なければならぬ。もしそのはげ頭または、はげ額の患部の腫が白く赤みをおびて、身の皮にらいた病があらわれているならば、四四その人はらいた病に冒された者であつて、汚れた者である。祭司はその人を確かに汚れた者としなければならぬ。患部が頭にあるからである。

四五患部のあるらいた病人は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口ひげをおおつて『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならぬ。四六その患部が身にある日の間は汚れた者としなければならぬ。その人は汚れた者であるから、離れて住まなければならぬ。すなわち、そのすまいは宿営の外でなければならぬ。

四七また衣服にらいた病の患部が生じた時は、それが羊毛の衣服であれ、亜麻の衣服であれ、四八あるいは亜麻または羊毛の縦糸であれ、横糸であれ、あるいは皮であれ、皮で作つたどのような物であれ、四九もしその衣服あるいは皮、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいは皮で作つたどのような物であれ、その患部が青みをおびているか、あるいは赤みをおびているならば、これはらいた病の患部である。これを祭司に見せなければならぬ。五〇祭司はその患部を見て、その患部のある物を七日のあいだ留め

置き、五二七日目に患部を見て、もしその衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいは皮、またどのように用いられている皮であれ、患部が広がっているならば、その患部は悪性のらい病であつて、それは汚れた物である。五三彼はその患部のある衣服、あるいは羊毛、または亜麻の縦糸、または横糸、あるいはすべて皮で作つた物を焼かなければならない。これは悪性のらい病であるから、その物を火で焼かなければならない。

五三しかし、祭司がこれを見て、もし患部がその衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいはすべて皮で作つた物に広がっていないならば、五四祭司は命じて、その患部のある物を洗わせ、さらに七日の間これを留め置かなければならない。五五そしてその患部を洗つた後、祭司はそれを見て、もし患部の色が変わらなければ、患部が広がらなくても、それは汚れた物である。それが表にあつても裏にあつても腐れであるから、それを火で焼かなければならない。

五六しかし、祭司がこれを見て、それを洗つた後に、その患部が薄らいだならば、その衣服、あるいは皮、あるいは縦糸、あるいは横糸から、それを切り取らなければならない。五七しかし、なおその衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいはすべて皮で作つた物にそれが現れれば、それは再発したのである。その患部のある物を火で焼かなければならない。五八また洗つた衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいはすべて皮で作つた

物から、患部が消え去るならば、再びそれを洗わなければならない。そうすれば清くなるであらう」。

五九これは羊毛または亜麻の衣服、あるいは縦糸、あるいは横糸、あるいはすべて皮で作つた物に生じるらい病の患部について、それを清い物とし、または汚れた物とするためのおきてである。

第四章

一主はまたモーセに言われた、「らい病人が清い者とされる時のおきては次のとおりである。すなわち、その人を祭司のもとに連れて行き、三祭司は宿営の外に出て行つて、その人を見、もしらい病の患部がいていいるならば、四祭司は命じてその清められる者のために、生きている清い小鳥二羽と、香柏の木と、緋の糸と、ヒソプとを取つてこさせ、五祭司はまた命じて、その小鳥の一羽を、流れ水を盛つた土の器の上で殺させ、六そして生きている小鳥を、香柏の木と、緋の糸と、ヒソプと共に取つて、これをかの流れ水を盛つた土の器の上で殺した小鳥の血に、その生きている小鳥と共に浸し、七これをらい病から清められる者に七たび注いで、その人を清い者とし、その生きている小鳥は野に放たなければならない。八清められる者はその衣服を洗い、毛をことごとくそり落とし、水に身をすすいで清くなり、その後、宿営にはいることができる。ただし七日の間はその天幕の外

にしなければならぬ。九そして七日目に毛をことごとくそらなければならぬ。頭の毛も、ひげも、まゆも、ことごとくそらなければならぬ。彼はその衣服を洗い、水に身をすすいで清くなるであらう。

一〇八日目にその人は雄の小羊の全きもの二頭と、一歳の雌の小羊の全きもの一頭とを取り、また麦粉十分の三エバに油を混ぜた素祭と、油一ログとを取らなければならない。一一清めをなす祭司は、清められる人とこれらの物とを、会見の幕屋の入口で主の前に置き、二三祭司は、かの雄の小羊一頭を取って、これを一ログの油と共に愆祭としてささげ、またこれを主の前に揺り動かして揺祭としなければならない。二三この雄の小羊は罪祭および燔祭をほふる場所、すなわち聖なる所で、これをほふらなければならない。愆祭は罪祭と同じく、祭司に帰するものであつて、いと聖なる物である。一四そして祭司はその愆祭の血を取り、これを清められる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とにつけなければならない。一五祭司はまた一ログの油を取って、これを自分の左の手のひらに注ぎ、一六そして祭司は右の指を左の手のひらにある油に浸し、その指をもつて、その油を七たび主の前に注がなければならない。一七祭司は手のひらにある油の残りを、清められる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とに、さきにつけた愆祭の血の上につけなければならない。一八そして祭司は手のひらになお残つてい

る油を、清められる者の頭につけ、主の前で、その人のためにあがないをしなければならない。一九また祭司は罪祭をささげて、汚れのゆえに、清められねばならぬ者のためにあがないをし、その後、燔祭のものをほふらなければならない。二〇そして祭司は燔祭と素祭とを祭壇の上にささげ、その人のために、あがないをしなければならない。こうしてその人は清くなるであらう。

三その人がもし貧しくて、それに手の届かない時は、自分のあがないのために揺り動かす愆祭として、雄の小羊一頭を取り、また素祭として油を混ぜた麦粉十分の一エバと、油一ログとを取り、三さらにその手の届く山ばと二羽、または家ばとのひな二羽を取らなければならない。その一つは罪祭のため、他の一つは燔祭のためである。二三そして八日目に、その清めのために会見の幕屋の入口における祭司のもと、主の前にこれを携えて行かなければならない。二四祭司はその愆祭の雄の小羊と、一ログの油とを取り、これを主の前に揺り動かして揺祭としなければならない。二五そして祭司は愆祭の雄の小羊をほふり、その愆祭の血を取って、これを清められる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とにつけなければならない。二六また祭司はその油を自分の左の手のひらに注ぎ、二七祭司はその右の指をもつて、左の手のひらにある油を、七たび主の前に注がなければならない。二八また祭司はその手のひらにある油を、清められる者の右の耳たぶと、右の手の親指と、右の足の親指とに、すな

わち、愆祭の血をつけたところにつけなければならぬ。二九また祭司は手のひらに残っている油を、清められる者の頭につけ、主の前で、その人のために、あがないをしなければならぬ。三〇その人はその手の届く山ばと一羽、または家ばとのひな一羽をささげなければならない。三すなわち、その手の届くもの一つを罪祭とし、他の一つを燔祭として素祭と共にささげなければならぬ。こうして祭司は清められる者のために、主の前にあがないをするであろう。三三これはらい病の患者で、その清めに必要なものに、手の届かない者のおきてである。

三三主はまたモーセとアロンに言われた、三四「あなたがたに所有として与えるカナンの地に、あなたがたがいる時、その所有の地において、家にわたしがらい病の患部を生じさせることがあれば、三五その家の持ち主はきて、祭司に告げ、『患部のようなものが、わたしの家にあります』と言わなければならぬ。三六祭司は命じて、祭司がその患部を見に行く前に、その家をあけさせ、その家にあるすべての物が汚されないようにし、その後、祭司は、はいってその家を見なければならぬ。三七その患部を見て、もしその患部が家の壁にあつて、青または赤のくぼみをもち、それが壁よりも低く見えるならば、三八祭司はその家を出て、家の入口にいたり、七日の間その家を閉鎖しなければならぬ。三九祭司は七日目に、またきてそれを見、その患部がもし家の壁に広がっているならば、四〇祭司は命じて、その患部のある石を

取り出し、町の外の汚れた物を捨てる場所に捨てさせ、四一またその家の内側のまわりを削らせ、その削ったしつくい町の外に汚れた物を捨てる場所に捨てさせ、四二ほかの石を取って、元の石のところに入れさせ、またほかのしつくいを取って、家を塗らせなければならない。

四三このように石を取り出し、家を削り、塗りがえた後に、その患部がもし再び家に出るならば、四四祭司はまたきて見なければならぬ。患部がもし家に広がっているならば、これは家にあたる悪性のらい病であつて、これは汚れた物である。四五その家は、こぼち、その石、その木、その家のしつくい、ことごとく町の外の汚れた物を捨てる場所に運び出さなければならぬ。四六その家が閉鎖されている日の間に、これにはいる者は夕まで汚れるであろう。四七その家に寝る者はその衣服を洗わなければならぬ。その家で食する者も、その衣服を洗わなければならぬ。

四八しかし、祭司がはいって見て、もし家を塗りかえた後に、その患部が家に広がっていないければ、これはその患部がいえたのであるから、祭司はその家を清いものとしなければならない。四九また彼はその家を清めるために、小鳥二羽と、香柏の木と、緋の糸と、ヒソプとを取り、五〇その小鳥の一羽を流れ水を盛った土の器の上で殺し、五一香柏の木と、ヒソプと、緋の糸と、生きている小鳥とを取って、その殺した小鳥の血と流れ水に浸し、こ

れを七たび家に注がなければならぬ。五二こうして祭司は小鳥の血と流れ水と、生きてゐる小鳥と、香柏の木と、ヒソブと、緋の糸とをもつて家を清め、五三その生きてゐる小鳥は町の外の野に放して、その家のために、あがないをしなければならぬ。こうして、それは清くなるであらう」。

五四これはらい病のすべての患部、かいせん、五五および衣服と家のらい病、五六ならびに腫と、吹出物と、光る所とに関するおきてであつて、五七いつそれが汚れてゐるか、いつそれが清いかを教えるものである。これがらい病に関するおきてである。

第一五章

一主はまた、モーセとアロンに言われた、ニ「イスラエルの人々に言いなさい、『だれでもその肉に流出があれば、その流出は汚れである。三その流出による汚れは次のとおりである。すなわち、その肉の流出が続いていても、あるいは、その肉の流出が止まつていても、共に汚れである。四流出ある者の寝た床はすべて汚れる。またその人のすわつた物はすべて汚れるであらう。五その床に触れる者は、その衣服を洗い、水に身をすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。六流出ある者のすわつた物の上にすわる者は、その衣服を洗い、水に身をすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。七流出あ

る者の肉に触れる者は衣服を洗い、水に身をすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。八流出ある者のつばきが、清い者にかかつたならば、その人は衣服を洗い、水に身をすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。九流出ある者の乗つた鞍はすべて汚れる。一〇また彼の下になつた物に触れる者は、すべて夕まで汚れるであらう。またそれらの物を運ぶ者は、その衣服を洗い、水に身をすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。二流出ある者が、水で手を洗わずに人に触れるならば、その人は衣服を洗い、水に身をすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。三流出ある者が触れた土の器は碎かなければならぬ。木の器はすべて水で洗わなければならない。

三流出ある者の流出がやんで清くなるならば、清めのために七日を数え、その衣服を洗い、流れ水に身をすがなければならぬ。そうして清くなるであらう。一四八日目に、山と二羽、または家ばとのひな二羽を取つて、会見の幕屋の入口に行き、主の前に出て、それを祭司に渡さなければならぬ。一五祭司はその一つを罪祭とし、他の一つを燔祭としてささげなければならぬ。こうして祭司はその人のため、その流出のために主の前に、あがないをするであらう。

一六人がもし精を漏らすことがあれば、その全身を水にすがなければならぬ。彼は夕まで汚れるであらう。一七すべて精の

ついた衣服および皮で作った物は水で洗わなければならない。これは夕まで汚れるであろう。一八 男がもし女と寝て精を漏らすことがあれば、彼らは共に水に身をすすがなければならない。彼らは夕まで汚れるであろう。

一九また女に流出があつて、その身の流出がもし血であるならば、その女は七日のあいだ不浄である。すべてその女に触れる者は夕まで汚れるであろう。二〇その不浄の間に、その女の寝た物はすべて汚れる。またその女のすわった物も、すべて汚れるであろう。二一すべてその女の床に触れる者は、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。二三すべてその女のすわった物に触れる者は皆その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。二四またその女が床の上、またはすわる物の上にいる時、それに触れるならば、その人は夕まで汚れるであろう。二五男がもし、その女と寝て、その不浄を身にうけるならば、彼は七日のあいだ汚れるであろう。また彼の寝た床はすべて汚れるであろう。

二五 女にもし、その不浄の時のほかに、多くの日にわたつて血の流出があるか、あるいはその不浄の時を越して流出があれば、その汚れの流出の日の間は、すべてその不浄の時と同じように、その女は汚れた者である。二六その流出の日の間に、その女の寝た床は、すべてその女の不浄の床と同じようになる。

すべてその女のすわった物は、不浄の汚れのように汚れるであろう。二七すべてこれらの物に触れる人は汚れる。その衣服を洗い、水に身をすすがなければならない。彼は夕まで汚れるであろう。二八しかし、その女の流出がやんで、清くなるならば、自分のために、なお七日を数えなければならない。そして後、清くなるであろう。二九その女は八日目には二羽、または家ばとのひな二羽を自分のために取り、それを会見の幕屋の入口におる祭司のもとに携えて行かなければならない。三〇祭司はその一つを罪祭とし、他の一つを燔祭としてささげなければならない。こうして祭司はその女のため、その汚れの流出のために主の前に、あがないをするであろう。

三二このようにしてあなたがたは、イスラエルの人々を汚れから離さなければならない。これは彼らのうちにあるわたしの幕屋を彼らが汚し、その汚れのために死ぬことのないためである。三三これは流出ある者、精を漏らして汚れる者、三三不浄をわすらう女、ならびに男あるいは女の流出ある者、および不浄の女と寝る者に関するおきてである。

第十六章

一アロンのふたりの子が、主の前に近づいて死んだ後、二主はモーセに言われた、「あなたの兄弟アロンに告げて、彼が時をわ

かたず、垂幕の内なる聖所に入り、箱の上なる贖罪所の前に行かぬようにさせなさい。彼が死を免れるためである。なぜなら、わたしは雲の中にあつて贖罪所の上に現れるからである。ミアロンが聖所に、はいるには、次のようにしなければならぬ。すなわち雄の子牛を罪祭のために取り、雄羊を燔祭のために取り、四聖なる亜麻布の服を着、亜麻布のしもひきをその身に取り、亜麻布の帯をしめ、亜麻布の帽子をかぶらなければならぬ。これらは聖なる衣服である。彼は水に身をすすいで、これを着なければならぬ。五またイスラエルの人々の会衆から雄やぎ二頭を罪祭のために取り、雄羊一頭を燔祭のために取らなければならぬ。

六そしてアロンは自分のための罪祭の雄牛をささげて、自分と自分の家族のために、あがないをしなければならぬ。七アロンはまた二頭のやぎを取り、それを会見の幕屋の入口で主の前に立たせ、八その二頭のやぎのために、くじを引かなければならぬ。すなわち一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのためである。九そしてアロンは主のためのくじに當つたやぎをささげて、これを罪祭としなければならぬ。一〇しかし、アザゼルのためのくじに當つたやぎは、主の前に生かしておき、これをもって、あがないをなし、これをアザゼルのために、荒野に送らなければならぬ。

二すなわち、アロンは自分のための罪祭の雄牛をささげて、

自分と自分の家族のために、あがないをしなければならぬ。彼は自分のための罪祭の雄牛をほふり、二三主の前の祭壇から炭火を満たした香炉と、細かくひいた香ばしい薫香を両手いっぱい取つて、これを垂幕の内に携え入り、二三主の前で薫香をその火にくべ、薫香の雲に、あかしの箱の上なる贖罪所をおおわせなければならぬ。こうして、彼は死を免れるであろう。一四彼はまたその雄牛の血を取り、指をもつてこれを贖罪所の東の面に注ぎ、また指をもつてその血を贖罪所の前に、七たび注がなければならぬ。

一五また民のための罪祭のやぎをほふり、その血を垂幕の内に携え入り、その血をかの雄牛の血のように、贖罪所の上と、贖罪所の前に注ぎ、一六イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならぬ。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなければならぬ。一七彼が聖所であがないをするために、はいつた時は、自分と自分の家族と、イスラエルの全会衆とのために、あがないをなし終えて出るまで、だれも会見の幕屋の内にはならぬ。一八そして彼は主の前の祭壇のもとに出てきて、これがために、あがないをしなければならぬ。すなわち、かの雄牛の血と、やぎの血とを取つて祭壇の四すみの角につけ、一九また指をもつて七たびその血をその上に注ぎ、イスラエルの人々の汚れを除いてこれ

を清くし、聖別しなければならぬ。

二〇こうして聖所と会見の幕屋と祭壇のために、あがないをなし終えたとき、かの生きてゐるやぎを引いてこなければならぬ。二一そしてアロンは、その生きてゐるやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのことが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によつて、これを荒野に送らなければならない。二二こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになつて、人里離れた地に行くであらう。すなわち、そのやぎを荒野に送らなければならない。

二三そして、アロンは会見の幕屋に入り、聖所に入る時に着た亜麻布の衣服を脱いで、そこに置き、二四聖なる所で水に身をすすぎ、他の衣服を着、出てきて、自分の燔祭と民の燔祭とをささげて、自分のため、また民のために、あがないをしなければならぬ。二五また罪祭の脂肪を祭壇の上で焼かなければならぬ。二六かのやぎをアザゼルに送つた者は衣服を洗い、水に身をすすがなければならぬ。その後、宿営に入る事ができる。二七聖所で、あがないをするために、その血を携え入れられた罪祭の雄牛と、罪祭のやぎとは、宿営の外に携え出し、その皮と肉と汚物とは、火で焼き捨てなければならぬ。二八これを焼く者は衣服を洗い、水に身をすすがなければならぬ。その後、宿営に入る事ができる。

二九これはあなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち、七月になつて、その月の十日に、あなたがたは身を悩まし、何の仕事もしてはならない。この国に生れた者も、あなたがたのうちに宿つてゐる寄留者も、そうしなければならぬ。三〇この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。三一これはあなたがたの全き休みの安息日であつて、あなたがたは身を悩まされなければならない。これは永久に守るべき定めである。三二油を注がれ、父に代つて祭司の職に任じられる祭司は、亜麻布の衣服、すなわち、聖なる衣服を着て、あがないをしなければならぬ。三三彼は至聖所のために、あがないをなし、また会見の幕屋のためと、祭壇のために、あがないをなし、また祭司たちのためと、民の全会衆のために、あがないをしなければならぬ。三四これはあなたがたの永久に守るべき定めであつて、イスラエルの人々のもろもろの罪のために、年に一度あがないをするものである。

彼は主がモーセに命じられたとおりにおこなつた。

第七章

一主はまたモーセに言われた、二「アロンとその子たち、およびイスラエルのすべての人々に言いなさい、『主が命じられること

はこれである。すなわちミイスラエルの家のだれでも、牛、羊あ
るいは、やぎを宿営の内ではふり、または宿営の外ではふり、四
それを会見の幕屋の入口に携えてきて主の幕屋の前で、供え物
として主にささげないならば、その人は血を流した者とみなさ
れる。彼は血を流したゆえ、その民のうちから断たれるであろ
う。五これはイスラエルの人々に、彼らが野のおもてではふるの
を常としていた犠牲を主のもとにひいてこさせ、会見の幕屋の
入口における祭司のもとにきて、これを主にささげる酬恩祭の
犠牲としてほふらせるためである。六祭司はその血を会見の
幕屋の入口にある主の祭壇に注ぎかけ、またその脂肪を焼いて
香ばしいかおりとし、主にささげなければならぬ。七彼らが
慕つて姦淫をおこなったみだらな神に、再び犠牲をささげては
ならない。これは彼らが代々ながく守るべき定めである。』
八あなたはまた彼らに言いなさい、『イスラエルの家の者、また
はあなたがたのうちに宿る寄留者のだれでも、燔祭あるいは
犠牲をささげるのに、九これを会見の幕屋の入口に携えてきて、
主にささげないならば、その人は、その民のうちから断たれるで
あろう。

一〇イスラエルの家の者、またはあなたがたのうちに宿る寄留者
のだれでも、血を食べるならば、わたしはその血を食べる人に敵
して、わたしの顔を向け、これをその民のうちから断つてであろ
う。二肉の命は血にあるからである。あなたがたの魂のため

に祭壇の上で、あがないをするため、わたしはこれをあなたがた
に与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからで
ある。三このゆえに、わたしはイスラエルの人々に言った。あ
なたがたのうち、だれも血を食べてはならない。またあなたが
たのうちに宿る寄留者も血を食べてはならない。一ミイスラエ
ルの人々のうち、またあなたがたのうちに宿る寄留者のうち、だ
れでも、食べてもよい獣あるいは鳥を狩り獲た者は、その血を注
ぎ出し、土でこれをおおわなければならない。

二四すべて肉の命は、その血と一つだからである。それで、わた
しはイスラエルの人々に言った。あなたがたは、どんな肉の血
も食べてはならない。すべて肉の命はその血だからである。す
べて血を食べる者は断たれるであらう。一五自然に死んだもの、
または裂き殺されたものを食べる人は、国に生れた者であれ、
寄留者であれ、その衣服を洗い、水に身をすすがなければならぬ
い。彼は夕まで汚れているが、その後、清くなるであらう。一六
もし、洗わず、また身をすすがないならば、彼はその罪を負わな
ければならない。』

第十八章

一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いな
さい、『わたしはあなたがたの神、主である。三あなたがたの住んで

いたエジプトの国の習慣を見習つてはならない。またわたし
 があなたがたを導き入れるカナンの国の習慣を見習つてはな
 らない。また彼らの定めに歩んではならない。四 わたしのおき
 てを行い、わたしに定めを守り、それに歩まなければならない。
 わたしはあなたがたの神、主である。五 あなたがたはわたしの定
 めとわたしのおきてを守らなければならない。もし人が、これ
 を行うならば、これによつて生きるであらう。わたしは主であ
 る。

六 あなたがたは、だれも、その肉親の者に近づいて、これを犯し
 てはならない。わたしは主である。七 あなたの母を犯してはな
 らない。それはあなたの父をはずかしめることだからである。
 彼女はあなたの母であるから、これを犯してはならない。八 あな
 たの父の妻を犯してはならない。それはあなたの父をはずかし
 めることだからである。九 あなたの姉妹、すなわちあなたの父の
 娘にせよ、母の娘にせよ、家に生れたのと、よそに生れたのとな
 り、これを犯してはならない。一〇 あなたのむすこの娘、あ
 るいは、あなたの娘の娘を犯してはならない。それはあなた
 自身をはずかしめることだからである。一一 あなたの父の妻が
 あなたの父によつて産んだ娘は、あなたの姉妹であるから、これ
 を犯してはならない。一二 あなたの父の姉妹を犯してはならな
 い。彼女はあなたの父の肉親だからである。一三 またあなたの
 母の姉妹を犯してはならない。彼女はあなたの母の肉親だから

である。一四 あなたの父の兄弟の妻を犯し、父の兄弟をはずか
 しめてはならない。彼女はあなたのおばだからである。一五 あ
 なたの嫁を犯してはならない。彼女はあなたのむすこの妻であ
 るから、これを犯してはならない。一六 あなたの兄弟の妻を犯し
 てはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることだか
 らである。一七 あなたは女とその娘とを一緒に犯してはならな
 い。またその女のむすこの娘、またはその娘の娘を取つて、これ
 を犯してはならない。彼らはあなたの肉親であるから、これは
 悪事である。一八 あなたは妻のなのお生きているうちにその姉妹
 を取つて、同じく妻となし、これを犯してはならない。

一九 あなたは月のさわりの不浄にある女に近づいて、これを犯し
 てはならない。二〇 隣の妻と交わり、彼女によつて身を汚しては
 ならない。二一 あなたの子どもをモレクにささげてはならない。
 またあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。
 二二 あなたは女と寝るように男と寝てはならない。これは憎む
 べきことである。二三 あなたは獣と交わり、これによつて身を汚
 してはならない。また女も獣の前に立つて、これと交わつては
 ならない。これは道にはずれたことである。

二四 あなたがたはこれらのもろもろの事によつて身を汚しては
 ならない。わたしがあなたがたの前から追い払う国々の人は、
 これらのもろもろの事によつて汚れ、二五 その地もまた汚れてい
 る。ゆえに、わたしはその悪のためにこれを罰し、その地もまた

その住民を吐き出すのである。二六ゆえに、あなたがたはわたしの定めとわたしのおきてを守り、これらのもろもろの憎むべき事の一つでも行つてはならない。国に生れた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者もそうである。二七あなたがたの先にいたこの地の人々は、これらのもろもろの憎むべき事を行ったので、その地も汚れたからである。二八これは、あなたがたがこの地を汚して、この地があなたがたの先にいた民を吐き出したように、あなたがたをも吐き出すことのないためである。二九これらのもろもろの憎むべき事の一つでも行う者があれば、これを行う人は、だれでもその民のうちから断たれるであらう。三〇それゆえに、あなたがたはわたしの言いつけを守り、先に行われたこれらの憎むべき風習の一つをも行つてはならない。またこれによつて身を汚してはならない。わたしはあなたがたの神、主である』。

第十九章

一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々の全会衆に言いなさい、『あなたがたの神、主なるわたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければならぬ。三あなたがたは、おのその母とその父とおそれなければならぬ。またわたしの安息日を守らなければならない。わたしはあなたがたの神、主

である。四むなしい神々に心を寄せてはならない。また自分のために神々を鑄て造つてはならない。わたしはあなたがたの神、主である。

五酬恩祭の犠牲を主にささげるときは、あなたがたが受け入れられるように、それをささげなければならない。六それは、ささげた日と、その翌日とに食べ、三日目まで残つたものは、それを火で焼かなければならない。七もし三日目に、少しでも食べるならば、それは忌むべきものとなつて、あなたは受け入れられないであらう。八それを食べる者は、主の聖なる物を汚すので、そのとがを負わなければならない。その人は民のうちから断たれるであらう。

九あなたがたの地の実のりを刈り入れるときは、畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。またあなたの刈入れの落ち穂を拾つてはならない。一〇あなたのぶどう畑の実を取りつくしてはならない。またあなたのぶどう畑に落ちた実を拾つてはならない。貧しい者と寄留者とのために、これを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。

二あなたがたは盗んではならない。欺いてはならない。互に偽つてはならない。三わたしの名により偽り誓つて、あなたがたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。

三あなたの隣人をしえたげてはならない。また、かすめてはならない。日雇人の賃銀を明くる朝まで、あなたのもとにとどめ

ておいてはならない。一四耳しいを、のろつてはならない。目し
いの前につまずく物を置いてはならない。あなたの神を恐れな
ければならない。わたしは主である。

一五さばきをするとき、不正を行つてはならない。貧しい者を
片よつてかばい、力ある者を曲げて助けてはならない。ただ
正義をもつて隣人をさばかなければならない。一六民のうちを
行き巡つて、人の悪口を言いふらしてはならない。あなたの
隣人の血にかかわる偽証をしてはならない。わたしは主であ
る。

一七あなたは心に兄弟を憎んではならない。あなたの隣人をね
んごろにいきめて、彼のゆえに罪を身に負つてはならない。一八
あなたはあだを返してはならない。あなたの民の人々に恨みを
いだいてはならない。あなた自身のようにあなたの隣人を愛さ
なければならぬ。わたしは主である。

一九あなたがたはわたしの定めを守らなければならぬ。あな
たの家畜に異なつた種をかけてはならない。あなたの畑に二種
の種をまいてはならない。二種の糸の混ぜ織りの衣服を身につ
けてはならない。

二〇だれでも、人と婚姻のある女奴隷で、まだあがなわれず、
自由を与えられていない者と寝て交わつたならば、彼らふたり
は罰を受ける。しかし、殺されることはない。彼女は自由の女
ではないからである。二一しかし、その男は懲祭を主に携えてこ

なければならぬ。すなわち、懲祭の雄羊を、会見の幕屋の入口
に連れてこなければならぬ。二三そして、祭司は彼の犯した罪
のためにその懲祭の雄羊をもつて、主の前に彼のために、あがな
いをするであらう。こうして彼の犯した罪はゆるされるであら
う。

二三あなたがたが、かの地にはいつて、もろもろのくだものの木
を植えるときは、その実はまだ割礼をうけないものと、見なさな
ければならない。すなわち、それは三年の間あなたがたには、
割礼のないものであつて、食べてはならない。二四四年目には、
そのすべての実を聖なる物とし、それをさんびの供え物として
主にささげなければならぬ。二五しかし五年目には、あなたが
たはその実を食べることができるのであらう。こうするならば、
それはあなたがたのために、多くの実を結ぶであらう。わたし
はあなたがたの神、主である。

二六あなたがたは何をも血のままで食べてはならない。また占
いをしてはならない。魔法を行つてはならない。二七あなたが
たのびんの毛を切つてはならない。ひげの両端をそこなつて
はならない。二八死人のために身を傷つけてはならない。また
身に入墨をしてはならない。わたしは主である。

二九あなたの娘に遊女のわざをさせて、これを汚してはならな
い。これはみだらな事が国に行われ、悪事が地に満ちないため
である。三〇あなたがたはわたしの安息日を守り、わたしの聖所

を敬うやまわなければならない。わたしは主しゅである。

三 あなたがたは口寄くちよせ、または占うらない師しのもとにおもむいてはならない。彼らかれに問とうて汚けがされてはならない。わたしはあなたがたの神かみ、主である。

三 あなたは白髪はくはつの人の前まえでは、起立きりつしなければならない。また老人ろうじんを敬うやまい、あなたの神かみを恐れなければならない。わたしは主しゅである。

三 もし他国たこくじん人があなたがたの国くにに寄留きりゆうして共にいるならば、これをしえたげてはならない。四 あなたがたと共にいる寄留きりゆうの他国たこくじん人を、あなたがたと同じ国くにに生れた者のようにし、あなた自身じしんのようにこれを愛あいさなければならない。あなたがたもかつてエジプトの国くにで他国たこくじん人であつたからである。わたしはあなたがたの神かみ、主である。

三 あなたがたは、さばきにおいても、物差ものさしにおいても、はかりにおいても、ますにおいても、不正ふせいを行つてはならない。三六 あなたがたは正しいてんびん、正しいおもり石いし、正しいエバ、正しいヒンを使つかわなければならない。わたしは、あなたがたをエジプトの国くにから導みちびき出したあなたがたの神かみ、主である。三七 あなたがたはわたしのすべての定めと、わたしのすべてのおきてを守つて、これを行おこなわなければならない。わたしは主しゅである』。

第二〇章

一 主しゅはまたモーセに言いわれた、二「イスラエルの人々ひとびとに言いなさい、『イスラエルの人々のうち、またイスラエルのうちに寄留きりゆうする他国たこくじん人のうち、だれでもその子供こどもをモレクにささげる者は、必ず殺ころされなければならない。すなわち、国の民たみは彼かれを石で撃うたなければならない。三 わたしは顔かおをその人ひとに向け、彼かれを民たみのうちから断たつであらう。彼かれがその子供こどもをモレクにささげてわたしの聖所せいじよを汚けがし、またわたしの聖なる名なを汚けがしたからである。四 その人が子供こどもをモレクにささげるとき、国の民たみがもしことさらに、この事に目めをおおい、これを殺ころさないならば、五 わたし自身じしん、顔かおをその人ひととその家族かぞくとに向け、彼かれおよび彼かれに見みならつてモレクを慕したい、これと姦淫かんいんする者ものを、すべて民たみのうちから断たつであらう。

六 もし口寄くちよせ、または占うらない師しのもとにおもむき、彼らかれを慕したつて姦淫かんいんする者ものがあれば、わたしは顔かおをその人ひとに向け、これを民たみのうちから断たつであらう。七 ゆえにあなたがたは、みずからを聖別せいべつし、聖なる者ものとならなければならない。わたしはあなたがたの神かみ、主である。八 あなたがたはわたしの定めを守つて、これを行おこなわなければならない。わたしはあなたがたを聖別せいべつする主である。九 だれでも父ちちまたは母ははをのろう者は、必ず殺ころされなければならない。彼かれが父ちちまたは母ははをのろつたので、その血ちは彼かれに帰かへす

るであらう。

一〇人の妻と姦淫する者、すなわち隣人の妻と姦淫する者があれば、その姦夫、姦婦は共に必ず殺されなければならない。一一その父の妻と寝る者は、その父をはずかしめる者である。彼らはふたりとも必ず殺されなければならない。その血は彼らに帰するであらう。一二子の妻と寝る者は、ふたり共に必ず殺されなければならない。彼らは道ならぬことをしたので、その血は彼らに帰するであらう。一三女と寝るように男と寝る者は、ふたりとも憎むべき事をしたので、必ず殺されなければならない。その血は彼らに帰するであらう。一四女をその母と一緒にめとるならば、これは悪事であつて、彼も、女たちも火に焼かれなければならない。このような悪事をあなたがたのうちになくするためである。一五男がもし、獣と寝るならば彼は必ず殺されなければならない。あなたがたはまた、その獣を殺さなければならない。一六女がもし、獣に近づいて、これと寝るならば、あなたは、その女と獣とを殺さなければならない。彼らは必ず殺さるべきである。その血は彼らに帰するであらう。

一七人がもし、その姉妹、すなわち父の娘、あるいは母の娘に近づいて、その姉妹のはだを見、女はその兄弟のはだを見るならば、これは恥すべき事である。彼らは、その民の人々の目の前で、断たなければならない。彼は、その姉妹を犯したのであるから、その罪を負わなければならない。一八人がもし、月のさわ

りのある女と寝て、そのはだを現すならば、男は女の源を現し、女は自分の血の源を現したのであるから、ふたり共にその民のうちから断たなければならない。一九あなたの母の姉妹、またはあなたの父の姉妹を犯してはならない。これは、自分の肉親の者を犯すことであるから、彼らはその罪を負わなければならない。二〇人がもし、そのおぼと寝るならば、これはおじをはずかしめることであるから、彼らはその罪を負い、子なくして死ぬであらう。二一人がもし、その兄弟の妻を取るならば、これは汚らわしいことである。彼はその兄弟をはずかしめたのであるから、彼らは子なき者となるであらう。

二三あなたがたはわたしの定めとおきてとをことごとく守つて、これを行わなければならない。そうすれば、わたしがあなたがたを住まわせようと導いて行く地は、あなたがたを吐き出さぬであらう。二三あなたがたの前からわたしは追い払う国びとの風習に、あなたがたは歩んではならない。彼らは、このものもろのことをしたから、わたしは彼らを憎むのである。二四わたしはあなたがたに言った、「あなたがたは、彼らの地を獲るであらう。わたしはこれをあなたがたに与えて、これを獲させるであらう。これは乳と蜜との流れる地である」。わたしはあなたがたを他の民から区別したあなたがたの神、主である。二五あなたがたは清い獣と汚れた獣、汚れた鳥と清い鳥を区別しなければならない。わたしはあなたがたのために汚れたものとして区別

した獣、または鳥またはすべて地を這うものによつて、あなたがたの身を忌むべきものとしてはならない。二六あなたがたはわたしに対して聖なる者でなければならぬ。主なるわたしは聖なる者で、あなたがたをわたしのものにしよう、他の民から区別したからである。

二七 男または女で、口寄せ、または占いをする者は、必ず殺されなければならぬ。すなわち、石で撃ち殺さなければならぬ。その血は彼らに帰するであらう』。

第二章

一 主はまたモーセに言われた、「アロンの子なる祭司たちに告げて言いなさい、『民のうちの死人のために、身を汚す者があつてはならない。ニただし、近親の者、すなわち、父、母、むすこ、娘、兄弟のため、三また彼の近親で、まだ夫のない処女なる姉妹のためには、その身を汚してもよい。四しかし、夫にとつてだ姉妹のためには、身を汚してはならない。五彼らは頭の頂をそつてはならない。ひげの両端をそり落してはならない。また身に傷をつけてはならない。六彼らは神に対して聖でなければならぬ。また神の名を汚してはならない。彼らは主の火祭、すなわち、神の食物をささげる者であるから、聖でなければならぬ。七彼らは遊女や汚れた女をめとつてはならない。また夫に出さ

れた女をめとつてはならない。祭司は神に対して聖なる者だからである。八あなたは彼を聖としなければならぬ。彼はあなたの神の食物をささげる者だからである。彼はあなたにとつて聖なる者でなければならぬ。あなたがたを聖とする主、すなわち、わたしは聖なる者だからである。九祭司の娘である者が、淫行をなして、その身を汚すならば、その父を汚すのであるから、彼女を火で焼かなければならない。

一〇その兄弟のうち、頭に注ぎ油を注がれ、職に任ぜられて、その衣服をつけ、大祭司となつた者は、その髪の毛を乱してはならない。またその衣服を裂いてはならない。二 死人のところに、はいつてはならない。また父のためにも母のためにも身を汚してはならない。三 また聖所から出てはならない。神の聖所を汚してはならない。その神の注ぎ油による聖別が、彼の上にあるからである。わたしは主である。三 彼は処女を妻にめとらなければならぬ。四 寡婦、出された女、汚れた女、遊女などをめとつてはならない。ただ、自分の民のうちの処女を、妻にめとらなければならぬ。五 そうすれば、彼は民のうちに、自分の子孫を汚すことはない。わたしは彼を聖別する主だからである』。

一六 主はまたモーセに言われた、「七 アロンに告げて言いなさい、『あなたの代々の子孫で、だれでも身にきずのある者は近寄つて、神の食物をささげてはならない。八 すべて、その身

にきずのある者は近寄つてはならない。すなわち、目しい、足なえ、鼻のかけた者、手足の不つりあいの者、一九足の折れた者の折れた者、二〇せむし、こびと、目にきずのある者、かいせんの者、かさぶたのある者、こうがんのつぶれた者などである。二―すべて祭司アロンの子孫のうち、身にきずのある者は近寄つて、主の火祭をささげてはならない。彼は身にきずがあるから、神の食物をささげるために、近寄つてはならない。三―彼は神の食物の聖なる物も、最も聖なる物も食べることができない。三―ただし、垂幕に近づいてはならない。また祭壇に近寄つてはならない。身にきずがあるからである。彼はわたしの聖所を汚してはならない。わたしはそれを聖別する主である』。二四―モーセはこれをアロンとその子ら及びイスラエルのすべての人々に告げた。

第二章

一―主はまたモーセに言われた、二―「アロンとその子たちに告げて、イスラエルの人々の聖なる物、すなわち、彼らがわたしにささげる物をみだりに用いて、わたしの聖なる名を汚さないようにさせなさい。わたしは主である。三―彼らに言いなさい、『あなたがたの代々の子孫のうち、だれでも、イスラエルの人々が主にささげる聖なる物に、汚れた身をもつて近づく者があれば、その

人はわたしの前から断たれるであらう。わたしは主である。四―アロンの子孫のうち、だれでも、らい病の者、また流出ある者は清くなるまで、聖なる物を食べてはならない。また、すべて死体によつて汚れた物に触れた者、精を漏らした者、五―または、すべて人を汚す這うものに触れた者、または、どのような汚れにせよ、人を汚れさせる人に触れた者、六―このようなものに触れた人は夕まで汚れるであらう。彼はその身を水にすがないならば、聖なる物を食べてはならない。七日が入れば、彼は清くなるであらう。そののち、聖なる物を食べることができない。それは彼の食物だからである。八―自然に死んだもの、または裂き殺されたものを食べ、それによつて身を汚してはならない。わたしは主である。九―それゆえに、彼らはわたしの言いつけを守らなければならぬ。彼らがこれを汚し、これがために、罪を獲て死ぬことのないためである。わたしは彼らを聖別する主である。一〇―すべて一般の人は聖なる物を食べてはならない。祭司の同居人や雇人も聖なる物を食べてはならない。二―しかし、祭司が金をもつて人を買った時は、その者はこれを食べることができ。またその家に生れた者も祭司の食物を食べることができ。三―もし祭司の娘が一般の人にとついだならば、彼女は聖なる供え物を食べてはならない。四―もし祭司の娘が、寡婦となり、または出されて、子供もなく、その父の家に帰り、娘の時のようであれば、その父の食物を食べることができ。ただ

し、一般の人は、すべてこれを食べてはならない。一四もし人があやまつて聖なる物を食べるならば、それにその五分の一を加え、聖なる物としてこれを祭司に渡さなければならぬ。一五祭司はイスラエルの人々が、主にささげる聖なる物を汚してはならない。一六人々が聖なる物を食べて、その罪のとがを負わなければならないようにさせなければならない。わたしは彼らを聖別する主である」。

一七主はまたモーセに言われた、一八「アロンとその子たち、およびイスラエルのすべての人々に言いなさい、『イスラエルの家の者、またはイスラエルにおける他国人のうちのだれでも、誓願の供え物、または自発の供え物を燔祭として主にささげようとするならば、一九あなたがたの受け入れられるように牛、羊、あるいはやぎの雄の全きものをささげなければならない。二〇すべてのきずのあるものはささげてはならない。それはあなたがたのために、受け入れられないからである。二一もし人が特別の誓願をなすため、または自発の供え物のために、牛または羊を酬恩祭の犠牲として、主にささげようとするならば、その受け入れられるために、それは全きものでなければならない。それには、どんなきずもあつてはならない。二三すなわち獣のうちで、めくらのもの、折れた所のあるもの、切り取った所のあるもの、うみの出る者、かいせんの者、かさぶたのある者など、あなたがたは、このようなものを主にささげてはならない。また祭壇の上に、こ

れらを火祭として、主にささげてはならない。二四牛あるいは羊で、足の長すぎる者、または短すぎる者は、あなたがたが自発の供え物とすることはできるが、誓願の供え物としては受け入れられないであろう。二五あなたがたは、こうがんの破れたもの、つぶれたもの、裂けたもの、または切り取られたものを、主にささげてはならない。またあなたがたの国のうちで、このようなことを、行つてはならない。二六また、あなたがたは異邦人の手からこれらのものを受けて、あなたがたの神の食物としてささげてはならない。これらのものには欠点があり、きずがあつて、あなたがたのために受け入れられないからである」。

二七主はまたモーセに言われた、二八「牛、または羊、またはやぎが生れたならば、これを七日の間その母親のもとに置かなければならない。八日目からは主にささげる火祭として受け入れられるであろう。二九あなたがたは雌牛または雌羊をその子と同じ日にほふてはならない。三〇あなたがたが感謝の犠牲を主にささげるときは、あなたがたの受け入れられるようにささげなければならない。三一これはその日のうちに食べなければならない。明くる日まで残しておいてはならない。わたしは主である。

三二あなたがたはわたしの戒めを守り、これを行わなければならない。わたしは主である。三三あなたがたはわたしの聖なる名を汚してはならない。かえつて、わたしはイスラエルの人々の

うちに聖とされなければならぬ。わたしはあなたがたを聖別する主である。三 あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの国から導き出した者である。わたしは主である」。

第三章

一 主はまたモーセに言われた、「イスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたが、ふれ示して聖会とすべき主の定め祭は次のとおりである。これらはわたしの定め祭である。三六日の間は仕事をしなければならない。第七日は全き休みの安息日であり、聖会である。どのような仕事もしてはならない。これはあなたがたのすべてのすまいにおいて守るべき主の安息日である。』」

四 その時々、あなたがたが、ふれ示すべき主の定め祭なる聖会は次のとおりである。五 正月の十四日の夕は主の過越祭である。六 またその月の十五日は主の種入れぬパンの祭である。あなたがたは七日の間は種入れぬパンを食べなければならない。七 その初めの日に聖会を開かなければならない。どんな労働もしてはならない。八 あなたがたは七日の間、主に火祭をささげなければならない。第七日には、また聖会を開き、どのような労働もしてはならない』」。

九 主はまたモーセに言われた、「イスラエルの人々に言いな

さい、『わたしが与える地にはいつて穀物を刈り入れるとき、あなたがたは穀物の初穂の束を、祭司のところへ携えてこなければならない。二 彼はあなたがたの受け入れられるように、その束を主の前に揺り動かすであろう。すなわち、祭司は安息日の翌日に、これを揺り動かすであろう。三 またその束を揺り動かす日に、一歳の雄の小羊の全きものを燔祭として主にささげなければならない。三 その素祭には油を混ぜた麦粉十分の二エパを用い、これを主にささげて火祭とし、香ばしいかおりとしなければならない。またその灌祭には、ぶどう酒一ヒンの四分の一を用いなければならない。四 あなたがたの神にこの供え物をささげるその日まで、あなたがたはパンも、焼麦も、新穀も食べてはならない。これはあなたがたのすべてのすまいにおいて、代々ながく守るべき定めである。』

五 また安息日の翌日、すなわち、揺祭の束をささげた日から満七週を数えなければならない。六 すなわち、第七の安息日の翌日までに、五十日を数えて、新穀の素祭を主にささげなければならない。七 またあなたがたのすまいから、十分の二エパの麦粉に種を入れて焼いたパン二個を携えてきて揺祭としなければならない。これは初穂として主にささげるものである。八 あなたがたはまたパンのほかに、一歳の全き小羊七頭と、若き雄牛一頭と、雄羊二頭をささげなければならない。すなわち、これらをその素祭および灌祭とともに主にささげて燔祭としなけ

ればならない。これは火祭であつて、主に香ばしいかおりとなるであらう。一九また雄やぎ一頭を罪祭としてささげ、一歳の小羊二頭を酬恩祭の犠牲としてささげなければならぬ。二〇そして祭司はその初穂のパンと共に、この二頭の小羊を主の前に揺祭として揺り動かさなければならぬ。これらは主にささげる聖なる物であつて、祭司に帰するであらう。二一あなたがたは、その日にふれ示して、聖会を開かなければならぬ。どのような労働もしてはならない。これはあなたがたのすべてのすまひにおいて、代々ながく守るべき定めである。

二三あなたがたの地の穀物を刈り入れるときは、その刈入れにあつて、畑のすみずみまで刈りつくしてはならない。またあなたがたの穀物の落ち穂を拾つてはならない。貧しい者と寄留者のために、それを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である』。

二三主はまたモーセに言われた、二四「イスラエルの人々に言いなさい、『七月一日をあなたがたの安息の日とし、ラツパを吹き鳴らして記念する聖会としなければならぬ。二五どのような労働もしてはならない。しかし、主に火祭をささげなければならぬ』。

二六主はまたモーセに言われた、二七「特にその七月の十日は贖罪の日である。あなたがたは聖会を開き、身を悩まし、主に火祭をささげなければならぬ。二八その日には、どのような仕事もし

てはならない。これはあなたがたのために、あなたがたの神、主の前にあがないをなすべき贖罪の日だからである。二九すべての日に身を悩まさない者は、民のうちから断たれるであらう。三〇またすべてその日にどのような仕事をして、その人をわたしは民のうちから滅ぼし去るであらう。三一あなたがたはどのような仕事もしてはならない。これはあなたがたのすべてのすまひにおいて、代々ながく守るべき定めである。三二これはあなたがたの全き休みの安息日である。あなたがたは身を悩まさなければならぬ。またその月の九日の夕には、その夕から次の夕まで安息を守らなければならぬ』。

三三主はまたモーセに言われた、三四「イスラエルの人々に言いなさい、『その七月の十五日は仮庵の祭である。七日の間、主の前にそれを守らなければならぬ。三五初めの日に聖会を開かなければならない。どのような労働もしてはならない。三六また七日の間、主に火祭をささげなければならぬ。八日目には聖会を開き、主に火祭をささげなければならぬ。これは聖会の日であるから、どのような労働もしてはならない』。

三七これらは主の定め祭であつて、あなたがたがふれ示して聖会とし、主に火祭すなわち、燔祭、素祭、犠牲および灌祭を、そのささぐべき日にささげなければならぬ。三八このほかに主の安息日があり、またほかに、あなたがたのささげ物があり、またほかに、あなたがたのもろもの誓願の供え物があり、またそ

のほかに、あなたがたのもろもろの自発の供え物がある。これらは皆あなたがたが主にささげるものである。

三九あなたがたが、地の産物を集め終ったときは、七月の十五日から七日のあいだ、主の祭を守らなければならない。すなわち、初めの日にも安息をし、八日目にも安息をしなければならない。四〇初めの日に、美しい木の実と、なつめやしの枝と、茂った木の枝と、谷のはこやなぎの枝を取って、七日の間あなたがたの神、主の前に楽しまなければならない。四一あなたがたは年に七日の間、主にこの祭を守らなければならない。これはあなたがたの代々ながく守るべき定めであつて、七月にこれを守らなければならない。四二あなたがたは七日の間、仮庵に住み、イスラエルで生れた者はみな仮庵に住まなければならない。四三これはわたしがイスラエルの人々をエジプトの国から導き出したとき、彼らを仮庵に住ませた事を、あなたがたの代々の子孫に知らせるためである。わたしはあなたがたの神、主である。』

四四モーセは主の定め祭をイスラエルの人々に告げた。

第二章

一主はまたモーセに言われた、ニ「イスラエルの人々に命じて、オリブを砕いて採った純粋の油を、ともしびのためにあなたの所へ持つてこさせ、絶えずともしびをとさせなさい。ミすなわ

ち、アロンは会見の幕屋のうちのあかしの垂幕の外で、夕から朝まで絶えず、そのともしびを主の前に整えなければならない。これはあなたがたが代々ながく守るべき定めである。四彼は純金の燭台の上に、そのともしびを絶えず主の前に整えなければならない。

五あなたは麦粉を取り、それで十二個の菓子焼かなければならない。菓子一個に麦粉十分の二エパを用いなければならない。六そしてそれを主の前の純金の机の上に、ひと重ね六個ずつ、ふた重ねにして置かなければならない。七あなたはまた、おのおのの重ねの上に、純粋の乳香を置いて、そのパンの記念の分とし、主にささげて火祭としなければならない。ハ安息日ごとに絶えず、これを主の前に整えなければならない。これはイスラエルの人々のささぐべきものであつて、永遠の契約である。九これはアロンとその子たちに帰する。彼らはこれを聖なる所で食べなければならない。これはいと聖なる物であつて、主の火祭のうち彼に帰すべき永久の分である。』

一〇イスラエルの女を母とし、エジプトびとを父とするひとりの者が、イスラエルの人々のうちに出てきて、そのイスラエルの女の産んだ子と、ひとりのイスラエルびとが宿営の中で争いをし、ニそのイスラエルの女の産んだ子が主の名を汚して、のろつたので、人々は彼をモーセのもとに連れてきた。その母はダンの部族のデブリの娘で、名をシロミテといった。ニ人々は

彼を閉じ込めて置いて、主の示しを受けるのを待っていた。

二三時に主はモーセに言われた、「四」あの、のろいごとを言った者を宿営の外に引き出し、それを聞いた者に、みな手を彼の頭に置かせ、全会衆に彼を石で撃たせなさい。五あなたはまたイスラエルの人々に言いなさい、『だれでも、その神のろう者は、その罪を負わなければならない。六主の名を汚す者は必ず殺されるであろう。全会衆は必ず彼を石で撃たなければならない。他国の者でも、この国に生れた者でも、主の名を汚すときは殺されなければならない。七だれでも、人を撃ち殺した者は、必ず殺されなければならない。八獣を撃ち殺した者は、獣をもつてその獣を償わなければならない。九もし人が隣人に傷を負わせるなら、その人は自分がしたように自分にされなければならない。一〇すなわち、骨折には骨折、目には目、歯には歯をもつて、人に傷を負わせたように、自分にもされなければならない。二 獣を撃ち殺した者はそれを償い、人を撃ち殺した者は殺されなければならない。三他国の者にも、この国に生れた者にも、あなたがたは同一のおきてを用いなければならない。わたしはあなたがたの神、主だからである』。三モーセがイスラエルの人々に向かい、「あの、のろいごとを言った者を宿営の外に引き出し、石で撃て」と命じたので、イスラエルの人々は、主がモーセに命じられたようにした。

第二十五章

一主はシナイ山で、モーセに言われた、「イスラエルの人々に言いなさい、『わたしが与える地に、あなたがたがはいったときは、その地にも、主に向かつて安息を守らせなければならない。三六年の間あなたは畑に種をまき、また六年の間ぶどう畑の枝を刈り込み、その実を集めることができる。四しかし、七年目には、地に全き休みの安息を与えなければならない。これは、主に向かつて守る安息である。あなたは畑に種をまいてはならない。また、ぶどう畑の枝を刈り込んではいならない。五あなたの穀物の自然に生えたものは刈り取ってはならない。また、あなたのぶどうの枝の手入れをしないで結んだ実は摘んではならない。これは地のために全き休みの年だからである。六安息の年の地の産物は、あなたがたの食物となるであろう。すなわち、あなたと、男女の奴隷と、雇人と、あなたの所に宿っている他国人と、七あなたの家畜と、あなたの国のうちの獣とのために、その産物はみな、食物となるであろう。八あなたは安息の年を七たび、すなわち、七年を七回数えなければならない。安息の年七たびの年数は四十九年である。九七月の十日にあなたはラツパの音を響き渡らせなければならない。すなわち、贖罪の日にあなたがたは全国にラツパを響き渡らせなければならない。一〇その五十年目を聖別して、國中のすべて

の住民に自由をふれ示さなければならぬ。この年はあなたがたにはヨベルの年であつて、あなたがたは、おのおのその所有の地に帰り、おのおのその家族に帰らなければならぬ。二その五十年目はあなたがたにはヨベルの年である。種をまいてはならない。また自然に生えたものは刈り取つてはならない。手入れをしないで結んだぶどうの実摘みではならない。三この年はヨベルの年であつて、あなたがたに聖であるからである。あなたがたは畑に自然にできた物を食べなければならぬ。

三このヨベルの年には、おのおのその所有の地に帰らなければならぬ。四あなたの隣人に物を売り、また隣人から物を買うときは、互に欺いてはならない。五ヨベルの後の年の数にしたがつて、あなたは隣人から買い、彼もまた畑の産物の年数にしたがつて、あなたに売らなければならぬ。六年の数の多い時は、その値を増し、年の数の少ない時は、値を減さなければならぬ。七彼があなたに売るのは産物の数だからである。八あなたがたは互に欺いてはならない。あなたの神を恐れなければならぬ。わたしはあなたがたの神、主である。

八あなたがたはわたしの定めを行い、またわたしのおきてを守つて、これを行わなければならない。そうすれば、あなたがたは安らかにその地に住むことができるであらう。九地はその実を結び、あなたがたは飽きるまでそれを食べ、安らかにそこに

住むことができるであらう。二〇「七十年目に種をまくことができず、また産物を集めることができなければ、わたしたちは何を食ふようか」とあなたがたは言うのか。三わたしは命じて六年目に、あなたがたに祝福をくだし、三か年分の産物を実らせるであらう。四あなたがたは八十年目に種をまく時には、なお古い産物を食べているであらう。五十年目にその産物のできるまで、あなたがたは古いものを食ふことができるであらう。六地は永代には売つてはならない。地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅びとである。七あなたがたの所有としたどのような土地でも、その土地の買

いもどしに應じなければならぬ。

八あなたの兄弟が落ちぶれてその所有の地を売つた時は、彼の近親者がきて、兄弟の売つたものを買いもどさなければならぬ。九たといいその人に、それを買いもどしてくれる人がいなくても、その人が富み、自分でそれを買ひもどすことができるようになったならば、二〇それを売つてからの年を数えて残りの分を買い手に返さなければならぬ。二一しかし、もしそれを買ひもどすことができるならば、その売つた物はヨベルの年まで買ひ主の手にあり、ヨベルにはもどされて、その人はその所有の地に帰ることができるであらう。

二二人が城壁のある町の住宅を売つた時は、売つてから満一年

の間は、それを買ひもどすことができる。その間は彼に買ひもどすことを許さなければならぬ。三〇 満一年のうちに、それを買ひもどさない時は、城壁のある町の内のその家は永代にそれを買った人のものと定まつて、代々の所有となり、ヨベルの年にももどされないのであらう。三一 しかし、周囲に城壁のない村々の家は、その地方の畑に附属するものとみなされ、買ひもどすことができ、またヨベルの年には、もどされるであらう。三二 レビびとの町々、すなわち、彼らの所有の町々の家は、レビびとはいっても買ひもどすことができる。三三 レビびとのひとり、それを買ひもどさない時は、その所有の町にある売つた家はヨベルの年にはもどされるであらう。レビびとの町々の家はイスラエルの人人のうちに彼らもっている所有だからである。三四 ただし、彼らの町々の周囲の放牧地は売つてはならない。それは彼らの永久の所有だからである。

三五 あなたの兄弟が落ちぶれ、暮して行けない時は、彼を助け、寄留者または旅びとのようにして、あなたと共に生きながらえさせなければならぬ。三六 彼から利子も利息も取つてはならない。あなたの神を恐れ、あなたの兄弟をあなたと共に生きながらえさせなければならぬ。三七 あなたは利子を取つて彼に金を貸してはならない。また利益をえるために食物を貸してはならない。三八 わたしはあなたがたの神、主であつて、カナン

なたがたをエジプトの国から導き出した者である。

三九 あなたの兄弟が落ちぶれて、あなたに身を売るときは、奴隷のように働かせてはならない。四〇 彼を雇人のように、また旅びとのようにしてあなたの所におらせ、ヨベルの年まであなたの所で勤めさせなさい。四一 その時には、彼は子供たちと共にあなたの所から出て、その一族のもとに帰り、先祖の所有の地にもどるであらう。四二 彼らはエジプトの国からわたしが導き出したわたしのしもべであるから、身を売つて奴隷となつてはならない。四三 あなたは彼をきびしく使つてはならない。あなたの神を恐れなければならぬ。四四 あなたがもつ奴隷は男女ともにあなたの周囲の異邦人のうちから買わなければならぬ。すなわち、彼らのうちから男女の奴隷を買うべきである。四五 また、あなたがたのうちに宿っている旅びとの子供のうちからも買うことができる。また彼らのうちあなたがたの国で生れて、あなたがたと共にいる人々の家族からも買うことができる。そして彼らはあなたがたの所有となるであらう。四六 あなたがたは彼らを獲て、あなたがたの後の子孫に所有として継がせることができる。すなわち、彼らは長くあなたがたの奴隷となるであらう。しかし、あなたがたの兄弟であるイスラエルの人人をあなたがたは互にきびしく使つてはならない。四七 あなたと共にいる寄留者または旅びとが富み、そのかたわらにいるあなたの兄弟が落ちぶれて、あなたと共にいるその

寄留者、旅びと、または寄留者の一族のひとりに身を売った場合、四八身を売った後でも彼を買いもどすことができる。その兄弟のひとりが彼を買いもどさなければならぬ。四九あるいは、おじ、または、おじの子が彼を買いもどさなければならぬ。あるいは一族の近親の者が、彼を買いもどさなければならぬ。あるいは自分に富ができたならば、自分で買いもどさなければならぬ。五〇その時、彼は自分の身を売った年からヨベルの年までを、その買い主と共に数え、その年数によつて、身の代金を決めなければならない。五一なお残りの年が多い時は、その年数にしがいい、買われた金額に照して、あがないの金を払わなければならぬ。五二またヨベルの年までに残りの年が少なければ、その人と共に計算し、その年数にしたがつて、あがないの金を払わなければならない。五三彼は年々雇われる人のように扱われなければならない。五四もし彼がこのようにしてあがなわれないならば、ヨベルの年に彼は子供と共に出て行くことができる。五五イスラエルの人々は、わたしのしもべだからである。彼らはわたしがエジプトの国から導き出したわたしのしもべである。わたしはあなたがたの神、主である。

第二十六章

—あなたがたは自分のために、偶像を造つてはならない。また刻んだ像も石の柱も立ててはならない。またあなたがたの地に石像を立てて、それを拝んではならない。わたしはあなたがたの神、主だからである。ニあなたがたはわたしの安息日を守り、またわたしの聖所を敬わなければならない。わたしは主である。

三もしあなたがたがわたしのために歩み、わたしの戒めを守つて、これを行ふならば、四わたしはその季節季節に、雨をあなたがたに与えるであらう。地は産物を出し、畑の木々は実を結ぶであらう。五あなたがたの麦打ちには、ぶどうの取入れの時まで続き、ぶどうの取入れは、種まきの時まで続くであらう。あなたがたは飽きるほどパンを食べ、またあなたがたの地に安らかに住むであらう。六あなたがたが国に平和を与えるから、あなたがたは安らかに寝ることができ、あなたがたを恐れさすものはないであらう。わたしはまた国のうちから悪い獣を絶やすであらう。つるぎがあなたがたの国を行き巡ることはないであらう。七あなたがたは敵を追うであらう。彼らは、あなたがたのつるぎに倒れるであらう。ハあなたがたの五人は百人を追ひ、百人は万人を追ひ、あなたがたの敵はつるぎに倒れるであらう。九わたしはあなたがたを顧み、多くの子孫を獲させ、あなたがたを増し、あなた

がたと結んだ契約を固めるであろう。一〇あなたがたは古い穀物を食べている間に、また新しいものを獲て、その古いものを捨てるようになるであろう。一一わたしは幕屋をあなたがたのうちに建て、心にあなたがたを忌みきらわないであろう。一二わたしはあなたがたのうちに歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであろう。一三わたしはあなたがたの神、主であつて、あなたがたをエジプトの国から導き出して、奴隷の身分から解き放つた者である。わたしはあなたがたのくびきの横木を砕いて、まつすぐに立つて歩けるようにしたのである。

一四しかし、あなたがたがもしわたしに聞き従わず、またこのすべての戒めを守らず、一五わたしの定めを軽んじ、心にわたしのおきてを忌みきらつて、わたしのすべての戒めを守らず、わたしの契約を破るならば、一六わたしはあなたがたにこのようにするであろう。すなわち、あなたがたの上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病をもつて、あなたがたの目を見えなくし、命をやせ衰えさせるであろう。あなたがたが種をまいてもむだである。敵がそれを食べるであろう。一七わたしは顔をあなたがたにむけて攻め、あなたがたは敵の前に撃ちひしがれるであろう。またあなたがたの憎む者があなたがたを治めるであろう。あなたがたは追う者もないのに逃げるであろう。一八それでもなお、あなたがたがわたしに聞き従わないならば、わたしはあなたがたの罪を

七倍重く罰するであろう。一九わたしはあなたがたの誇とする力を砕き、あなたがたの天を鉄のようにし、あなたがたの地を青銅のようにするであろう。二〇あなたがたの力は、むだに費されるであろう。すなわち、地は産物をいださず、国のうちの木々は実を結ばないであろう。

二一もしあなたがたがわたしに逆らつて歩み、わたしに聞き従わないならば、わたしはあなたがたの罪に従つて七倍の災をあなたがたに下すであろう。二三わたしはまた野獣をあなたがたのうちに送るであろう。それはあなたがたの子供を奪い、また家畜を滅ぼし、あなたがたの数を少なくするであろう。あなたがたの大路は荒れ果てるであろう。

二四もしあなたがたがこれらの懲しめを受けてもなお改めず、わたしに逆らつて歩むならば、二五わたしもまたあなたがたに逆らつて歩み、あなたがたの罪を七倍重く罰するであろう。二六わたしはあなたがたの上につるぎを臨ませ、違約の恨みを報いるであろう。あなたがたが町々に集まる時は、あなたがたのうちに疫病を送り、あなたがたは敵の手にわたされるであろう。二七わたしがあなたがたのつえとするパンを砕くとき、十人の女が一つのかまどでパンを焼き、それをはかりにかけてあなたがたに渡すであろう。あなたがたは食べても満たされないであろう。

二八それでもなお、あなたがたがわたしに聞き従わず、わたしに

逆らうて歩むならば、二八わたしもあなたがたに逆らい、怒りをもつて歩み、あなたがたの罪を七倍重く罰するであろう。二九あなたがたは自分のむすこの肉を食べ、また自分の娘の肉を食べるであろう。三〇わたしはあなたがたの高き所をこぼち、香の祭壇を倒し、偶像の死体の上に、あなたがたの死体を投げ捨てて、わたしは心にあなたがたを忌みきらうであろう。三一わたしはまたあなたがたの町々を荒れ地とし、あなたがたの聖所を荒らすであろう。またわたしはあなたがたのささげる香ばしいかおりをかがないであろう。三二わたしがその地を荒らすゆえ、そこに住むあなたがたの敵はそれを見て驚くであろう。三三わたしはあなたがたを国々の間に散らし、つるぎを抜いて、あなたがたの後を追うであろう。あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町々は荒れ地となるであろう。

三四こうしてその地が荒れ果てて、あなたがたは敵の国にある間、地は安息を楽しむであろう。すなわち、その時、地は休みを得て、安息を楽しむであろう。三五それは荒れ果てている日の間、休むであろう。あなたがたがそこに住んでいる間、あなたがたの安息のときに休みを得なかつたものである。三六またあなたがたのうちの残っている者の心に、敵の国でわたしは恐れをいだかせるであろう。彼らは木の葉の動く音にも驚いて逃げ、つるぎを避けて逃げる者のように逃げて、追う者もないのにころび倒れるであろう。三七彼らは追う者もないのに、つるぎをの

がれる者のように折り重なつて、つまずき倒れるであろう。あなたがたは敵の前に立つことができないであろう。三八あなたがたは国々のうちにあつて滅びうせ、あなたがたの敵の地はあなたがたをのみつくすであろう。三九あなたがたのうちの残っている者は、あなたがたの敵の地で自分の罪のゆえにやせ衰え、また先祖たちの罪のゆえに彼らと同じようにやせ衰えるであろう。

四〇しかし、彼らがもし、自分の罪と、先祖たちの罪、すなわち、わたしに反逆し、またわたしに逆らうて歩んだことを告白するならば、四一たといわたしは彼らに逆らうて歩み、彼らを敵の国に引いて行つても、もし彼らの無割礼の心が砕かれ、あまんじて罪の罰を受けるならば、四二そのときわたしはヤコブと結んだ契約を思い起し、またイスラと結んだ契約およびアブラハムと結んだ契約を思い起し、またその地を思い起すであろう。四三しかし、彼らが地を離れて地が荒れ果てている間、地はその安息を楽しむであろう。彼らはまた、あまんじて罪の罰を受けるであろう。彼らがわたしのおきてを軽んじ、心にわたしの定めを忌みきらつたからである。四四それにもかかわらず、なおわたしは彼らが敵の国におるとき、彼らを捨てず、また忌みきらわず、彼らを滅ぼし尽さず、彼らと結んだわたしの契約を破ることをしないであろう。わたしは彼らの神、主だからである。四五わたしは彼らの先祖たちと結んだ契約を彼らのために思い起すであろ

う。彼らはわたしがその神となるために国々の人の目の前で、エジプトの地から導き出した者である。わたしは主である。』四六これらは主が、シナイ山で、自分とイスラエルの人々との間に、モーセによつて立てられた定めと、おきてと、律法である。

第二十七章

一主はモーセに言われた、ニ「イスラエルの人々に言いなさい、『人があなたの値積りに従つて主に身をささげる誓願をする時は、三あなたの値積りは、二十歳から六十歳までの男には、その値積りを聖所のシケルに従つて銀五十シケルとし、四女には、その値積りは三十シケルとしなければならぬ。五また五歳から二十歳までは、男にはその値積りを二十シケルとし、女には十シケルとしなければならぬ。六一か月から五歳までは、男にはその値積りを銀五シケルとし、女にはその値積りを銀三シケルとしなければならぬ。七また六十歳以上は、男にはその値積りを十五シケルとし、女には十シケルとしなければならぬ。ハもしその人が貧しくて、あなたの値積りに応じることができないならば、祭司の前に立ち、祭司の値積りを受けなければならない。祭司はその誓願者の力に従つて値積らなければならない。』

九主に供え物とすることができ家畜で、人が主にささげるも

のはすべて聖なる物となる。一〇ほかのものをそれに代用してはならない。良い物を悪い物に、悪い物を良い物に取り換えてはならない。もし家畜と家畜とを取り換えるならば、その物も、それと取り換えた物も共に聖なる物となるであらう。二もしそれが汚れた家畜で、主に供え物としてささげられないものであるならば、その人はその家畜を祭司の前に引いてこなければならぬ。三祭司はその良い悪いに従つて、それを値積らなければならない。それは祭司が値積るとおりになるであらう。三もしその人が、それをあがなおうとするならば、その値積りにその五分の一を加えなければならない。

四もし人が自分の家を主に聖なる物としてささげるときは、祭司はその良い悪いに従つて、それを値積らなければならない。それは祭司が値積つたとおりになるであらう。五もしその家をささげる人が、それをあがなおうとするならば、その値積りの金に、その五分の一を加えなければならない。そうすれば、それは彼のものとなるであらう。

六もし人が相続した畑の一部を主にささげるときは、あなたはそこにまく種の多少に応じて、値積らなければならない。すなわち、大麦一ホメルの種を銀五十シケルに値積らなければならない。七もしその畑をヨベルの年からささげるのであれば、その価はあなたの値積りのとおりになるであらう。八もしその畑をヨベルの年の後にささげるのであれば、祭司はヨベルの年

までに残^{のこ}っている年^{とし}の数^{かず}に従^{したが}つてその金^{かね}を数^{かぞ}え、それをあなた
の値^{ねづも}積^りりからさし引^ひかなければならない。一^{いち}九^くもしまた、その烟^け
をささげる人^{ひと}が、それをあがなおうとするならば、あなたの値^{ねづも}積^り
の金^{かね}にその五分^{ぶん}の一^{いち}を加^{くわ}えなければならぬ。そうすれば、
それは彼^{かれ}のもの^{もの}と決^きまるであらう。二^に〇^{じゅう}しかし、もしその烟^けをあ
がなわず、またそれを他^たの人^{ひと}に売^うるならば、それはもはやあがな
うことができないであらう。三^{さん}その烟^けは、ヨベルの年^{とし}になつて
期限^{きげん}が切^きれるならば、奉^{ほう}納^{のう}の烟^けと同じく、主^{しゅ}の聖^{せい}なる物^{もの}となり、
祭司^{さいし}の所有^{しやうゆう}となるであらう。三^{さん}もしまた相^{さう}続^{ぞく}した烟^けの一部^{いちぶ}で
なく、買^かつた烟^けを主^{しゅ}にささげる時は、三^{さん}祭司^{さいし}は値^{ねづも}積^りしてヨベ
ルの年^{とし}までの金^{かね}を数^{かぞ}えなければならぬ。その人^{ひと}はその値^{ねづも}積^り
の金^{かね}をその日^ひに主^{しゅ}にささげて、聖^{せい}なる物^{もの}としなければならぬ。
二^に四^しヨベルの年^{とし}にその烟^けは売^うり主^{しゅ}であるその地^ちの相^{さう}続^{ぞく}者^{しや}に返^{かえ}
であらう。二^に五^ごすべてあなたの値^{ねづも}積^りは聖^{せい}所^{じよ}のシケルによつて
しなければならぬ。二^に十^{じゅう}ゲラを一^{いち}シケルとする。

三^{さん}しかし、家畜^{かちく}のういごは、ういごとして主^{しゅ}のもののだか
ら、だれもこれをささげてはならない。牛^{うし}でも羊^{ひつじ}でも、それは主^{しゅ}
のものである。二^にももし汚^{けが}れた家畜^{かちく}であるならば、あなたの値^{ねづも}積^り
にその五分^{ぶん}の一^{いち}を加^{くわ}えて、その人^{ひと}はこれをあがなわなければ
ならない。もしあがなわれないならば、それを値^{ねづも}積^りに従^{したが}つて売^う
らなければならぬ。

二^に八^{はち}ただし、人^{ひと}が自^じ分^{ぶん}の持^もつてゐるもの^{もの}のうちから奉^{ほう}納^{のう}物^{ぶつ}として

主^{しゅ}にささげたものは、人^{ひと}であつても、家畜^{かちく}であつても、また相^{さう}続^{ぞく}
の烟^けであつても、いつさいこれ^{これ}を売^うつてはならない。またあが
なつてはならない。奉^{ほう}納^{のう}物^{ぶつ}はすべて主^{しゅ}に属^{ぞく}するいと聖^{せい}なる物^{もの}で
ある。二^に九^くまたすべて人^{ひと}のうちから奉^{ほう}納^{のう}物^{ぶつ}としてささげられた
人^{ひと}は、あがなつてはならない。彼^{かれ}は必^{かならず}ず殺^{ころ}されなければなら
ない。

三^{さん}〇地^ちの十分^{ぶん}の一^{いち}は地^ちの産^{さん}物^{ぶつ}であれ、木^きの実^みであれ、すべて主^{しゅ}の
ものであつて、主^{しゅ}に聖^{せい}なる物^{もの}である。三^{さん}もし人^{ひと}がその十分^{ぶん}の一^{いち}
をあがなおうとする時は、それにその五分^{ぶん}の一^{いち}を加^{くわ}えなければ
ならない。三^{さん}牛^{うし}または羊^{ひつじ}の十分^{ぶん}の一^{いち}については、すべて牧^{ぼく}者^{しや}の
つえの下^{した}を十^{じゅう}番^{ばん}目^めに通^{とお}るものは、主^{しゅ}に聖^{せい}なる物^{もの}である。三^{さん}その
良^よい悪^{わる}いを問^とうてはならない。またそれを取り換^かへてはならな
い。もし取り換^かえたならば、それと、その取り換^かえたものとは、
共に聖^{せい}なる物^{もの}となるであらう。それをあがなうことはできな
い。二^に。

三^{さん}四^しこれらは主^{しゅ}が、シナイ山^{さん}で、イスラエル^{いすらいへる}の人^{ひと}々のために、モー
セに命^{めい}じられた戒^{かい}めである。

民数記

第一章

一 エジプトの国を出た次の年の二月一日に、主はシナイの荒野において、会見の幕屋で、モーセに言われた、「あなたがたは、イスラエルの人々の全会衆を、その氏族により、その父祖の家によって調査し、そのすべての男子の数の数を、ひとりびひとり数えて、その総数を得なさい。イスラエルのうちで、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者を、あなたとアロンとは、その部隊にしたがつて数えなければならない。四また、すべての部族は、おのの父祖の家の長たるものを、ひとりずつ出して、あなたがたと協力させなければならない。五すなわち、あなたがたに協力すべき人々の名は、次のとおりである。ルベンからはシデウルの子エリヅル。ハシメオンからはツリシャダイの子シルミエル。セユダからはアミナダブの子ナシヨン。ハイツサカルからはツアルの子ネタニエル。カゼブルンからはヘロンの子エリアブ。六ヨセフの子たちのうち、エフライムからはアミホデの子エリシャマ、マナセからはバダヅルの子ガマリエル。七ベニヤミンからはギデオニの子アビダン。ニダンからはアミシャダイの子アヒエゼル。八アセルからはオクランの子パギエル。九ガドからはデウエルの子エリアサフ。一五ナフタリか

らはエナンの子アヒラ。一六これらは会衆のうちから選出された人々で、その父祖の部族のつかさたち、またイスラエルの氏族のかしらたちである。

一七こうして、モーセとアロンが、ここに名を掲げた人々を引き連れて、一八二月一日に会衆をことごとく集めたので、彼らはその氏族により、その父祖の家により、その名の数にしたがつて二十歳以上のものが、ひとりびひとり登録した。一九主が命じられたように、モーセはシナイの荒野で彼らに数えた。

二〇すなわち、イスラエルの長子ルベンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の男子の数の数を、ひとりびひとり得たが、ニルベンの子の部族のうちで、数えられたものは四万六千五百人であった。

二一またシメオンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の男子の数の数を、ひとりびひとり得たが、ニシメオンの部族のうちで、数えられたものは五万九千三百人であった。

二二またガドの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によって調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、二三ガドの部族のうちで、数えられたものは四万五千六百五十人であった。

二四ユダの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖

の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミモユダの部族のうちで、数えられたものは七万四千六百人であつた。

ミハイッサカルの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミユッサカルの部族のうちで、数えられたものは五万四千四百人であつた。

ミゼブルンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミゼブルンの部族のうちで、数えられたものは五万七千四百人であつた。

ミヨセフの子たちのうち、エフライムの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミエフライムの部族のうちで、数えられたものは四万五千人であつた。

ミマナセの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミマナセの部族のうちで、数えられたものは三万二千二百人であつた。

ミベニヤミンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミベニヤミンの部族のうちで、

数えられたものは三万五千四百人であつた。

ミハダンの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミハダンの部族のうちで、数えられたものは六万二千七百人であつた。

ミアセルの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミアセルの部族のうちで、数えられたものは四万一千五百人であつた。

ミナフタリの子たちから生れたものを、その氏族により、その父祖の家によつて調べ、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者の名の数を得たが、ミナフタリの部族のうちで、数えられたものは、五万三千四百人であつた。

ミこれらが数えられた人々であつて、モーセとアロンとイスラエルのつかさたちとが数えた人々である。そのつかさたちは十二人であつて、おのおのその父祖の家のために出たものである。

四五そしてイスラエルの人々のうち、その父祖の家にしたがって数えられた者は、すべてイスラエルのうち、戦争に出ることのできる二十歳以上の者であつて、四六その数えられた者は合わせて六十万三千五百五十人であつた。

四七しかし、レビびとは、その父祖の部族にしたがって、そのうちに数えられなかった。四八すなわち、主はモーセに言われた、四

九「あなたはレビの部族だけは数えてはならない。またその総数をイスラエルの人々のうちに数えあげてはならない。五〇あなたはレビびとに、あかしの幕屋と、そのもうもの器と、それに附属するもうもの物を管理させなさい。彼らは幕屋と、そのもうもの器とを持ち運び、またそこで務をし、幕屋のまわりに宿営しなければならぬ。五一幕屋が進む時は、レビびとがこれを取りくずし、幕屋を張る時は、レビびとがこれを組み立てなければならぬ。ほかの人がこれに近づく時は殺されるであろう。五二イスラエルの人々はその部隊にしたがって、おのおのその宿営に、おのおのその旗のもとにその天幕を張らなければならぬ。五三しかし、レビびとは、あかしの幕屋のまわりに宿営しなければならぬ。そうすれば、主の怒りはイスラエルの人々の会衆の上に臨むことがないであろう。レビびとは、あかしの幕屋の務を守らなければならない」。五四イスラエルの人々はこのようなして、すべて主がモーセに命じられたように行った。

第二章

一主はモーセとアロンに言われた、ニ「イスラエルの人々は、おのおのその部隊の旗のもとに、その父祖の家の旗印にしたがって宿営しなければならぬ。また会見の幕屋のまわりに、それ

に向かつて宿営しなければならぬ。三すなわち、日の出る方、東に宿営するものは、ユダの宿営の旗につく者であつて、その部隊にしたがって宿営し、アミナダブの子ナシヨンが、ユダの子たちのつかさとなるであろう。四その部隊、すなわち、数えられた者は七万四千六百人である。五そのかたわらに宿営する者はイツサカルの部族で、ツアルの子ネタニエルが、イツサカルの子たちのつかさとなるであろう。六その部隊、すなわち、数えられた者は五万四千四百人である。七次はゼブルンの部族で、ヘロンの子エリアブが、ゼブルンの子たちのつかさとなるであろう。八その部隊、すなわち、数えられた者は五万七千四百人である。九ユダの宿営の、その部隊にしたがって数えられた者は、合わせ十八万六千四百人である。これらの者は、まつ先に進まなければならぬ。

一〇南の方では、ルベンの宿営の旗につく者が、その部隊にしたがっており、シデウルの子エリヅルが、ルベンの子たちのつかさとなるであろう。二その部隊、すなわち、数えられた者は四万六千五百人である。三そのかたわらに宿営する者はシメオンの部族で、ツリシャダイの子シルミエルが、シメオンの子たちのつかさとなるであろう。四その部隊、すなわち、数えられた者は五万九千三百人である。五次はガドの部族で、デウエルの子エリアサフが、ガドの子たちのつかさとなるであろう。六その部隊、すなわち、数えられた者は四万五千六百五十人である。一

ハルベンの宿営の、その部隊にしたがつて数えられた者は、合わせて十五万一千四百五十人である。これらの者は二番目に進まなければならない。

モその次に会見の幕屋を、レビびとの宿営とともに、もろもろの宿営の中央にして進まなければならない。彼らは宿営するのと同じように、おのおのその位置で、その旗にしたがつて進まなければならない。

ハ西の方では、エフライムの宿営の旗につく者が、その部隊にしたがつており、アミホデの子エリシャマが、エフライムの子たちのつかさとなるであろう。ニ九その部隊、すなわち、数えられた者は四万五百人である。ニ〇そのかたわらにマナセの部族がおつて、バダヅルの子ガマリエルが、マナセの子たちのつかさとなるであろう。ニ一その部隊、すなわち、数えられた者は三万二千二百人である。ニ次にベニヤミンの部族がおつて、ギデオニの子アビダンが、ベニヤミンの子たちのつかさとなるであろう。ニ二その部隊、すなわち、数えられた者は三万五千四百人である。ニ三エフライムの宿営の、その部隊にしたがつて数えられた者は、合わせて十萬八千八百人である。これらの者は三番目に進まなければならない。

ニ五北の方では、ダンの宿営の旗につく者が、その部隊にしたがつており、アミシヤダイの子アヒエゼルが、ダンの子たちのつかさとなるであろう。ニ六その部隊、すなわち、数えられた者は

六万二千七百人である。ニモそのかたわらに宿営する者は、アセルの部族であつて、オクランの子バギエルが、アセルの子たちのつかさとなるであろう。ニ八その部隊、すなわち、数えられた者は四万一千五百人である。ニ九次にナフタリの部族がおつて、エナンの子アヒラが、ナフタリの子たちのつかさとなるであろう。ニ〇その部隊、すなわち、数えられた者は五万三千四百人である。ニ一ダンの宿営の、数えられた者は合わせて十五万七千六百人である。これらの者はその旗にしたがつて、最後に進まなければならない。

ニ二これがイスラエルの人々の、その父祖の家にしたがつて数えられた人々である。もろもろの宿営の、その部隊にしたがつて数えられた者は合わせて六十万三千五百五十人であつた。ニ三しかし、レビびとはイスラエルの人々のうちに数えられなかつた。主がモーセに命じられたとおりである。

ニ四イスラエルの人々は、すべて主がモーセに命じられたとおりに行い、その旗にしたがつて宿営し、おのおのその氏族に従い、その父祖の家に従つて進んだ。

第三章

一主がシナイ山で、モーセと語られた時の、アロンとモーセの一族は、次のとおりであつた。ニアロンの子たちの名は、次のと

おりである。長子^{ちやうし}はナダブ、次^{つぎ}はアビウ、エレアザル、イタマル。三^{さん}これがアロンの子^こたちの名^なであつて、彼^{かれ}らはみな油^{あぶら}を注^{そそ}がれ、祭司^{さいし}の職^{しやく}に任^{にん}じられて祭司^{さいし}となつた。四^よナダブとアビウとは、シナイの荒野^{あら}において、異火^{ことび}を主^{しゅ}の前にささげたので、主^{まへ}の前^{まえ}で死^しんだ。彼^{かれ}らには子供^{こども}がなかつた。そしてエレアザルとイタマルとが、父^{ちち}アロンの前^{まえ}で祭司^{さいし}の務^{つとめ}をした。

五^ご主^{しゅ}はまたモーセに言^いわれた、六^{ろく}「レビの部族^{ぶぞく}を召^め寄せ、祭司^{さいし}アロンの前^{まえ}に立^たつて仕^{つか}えさせなさい。七^{しち}彼^{かれ}らは会^{かい}見^{けん}の幕屋^{まくや}の前^{まえ}にあつて、アロンと全会衆^{ぜんかいしゅう}のために、その務^{つとめ}をし、幕屋^{まくや}の働^{はたら}きをしなければならぬ。八^{はち}すなわち、彼^{かれ}らは会^{かい}見^{けん}の幕屋^{まくや}の、すべての器^{うつわ}をまもり、イスラエルの人々^{ひとびと}のために務^{つとめ}をし、幕屋^{まくや}の働^{はたら}きをしなければならぬ。九^くあなたはレビびとを、アロンとその子^こたちとに、与^{あた}えなければならぬ。彼^{かれ}らはイスラエルの人々^{ひとびと}のうちから、全^{まづ}くアロンに与^{あた}えられたものである。一〇あなたはアロンとその子^こたちとを立てて、祭司^{さいし}の職^{しやく}を守^{まも}らせなければならぬ。ほかの人^{ひと}で近^{ちか}づくものは殺^{ころ}されるであらう」。

二^に主^{しゅ}はまたモーセに言^いわれた、三^{さん}「わたしは、イスラエルの人々^{ひとびと}のうちの初^{はじ}めに生^うまれたすべてのういごの代^{かわ}りに、レビびとをイスラエルの人々^{ひとびと}のうちから取^とるであらう。レビびとは、わたしのものとなるであらう。四^よういごはすべてわたしのものだからである。わたしは、エジプトの国^{くに}において、すべてのういごを撃^うち殺^{ころ}した日^ひに、イスラエルのういごを、人^{ひと}も獣^{けもの}も、ことごとく聖別^{せいべつ}して、わたしに帰^きせしめた。彼^{かれ}らはわたしのものとなるであらう。わたしは主^{しゅ}である」。

四^よ主^{しゅ}はまたシナイの荒野^{あら}でモーセに言^いわれた、五^ご「あなたはレビの子^こたちを、その父祖^{ふそ}の家^{いえ}により、その氏族^{しぞく}によつて数^{かず}えなさい。すなわち、一^{いち}か月^{げつ}以上の男子^{だんし}を数^{かず}えなければならない」。二^に六^{ろく}それでモーセは主^{しゅ}の言葉^{ことば}にしたがつて、命^{めい}じられたとおりに、それを数^{かず}えた。七^{しち}レビの子^こたちの名^なは次のとおりである。すなわち、ゲルシオン、コハテ、メラリ。八^{はち}ゲルシオンの子^こたちの名^なは、その氏族^{しぞく}によれば次のとおりである。すなわち、リブニ、シメイ。九^くコハテの子^こたちは、その氏族^{しぞく}によれば、アムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル。一〇メラリの子^こたちは、その氏族^{しぞく}によれば、マヘリ、ムシ。これらはその父祖^{ふそ}の家^{いえ}によるレビの氏族^{しぞく}である。

三^{さん}ゲルシオンからリブニびとの氏族^{しぞく}と、シメイびとの氏族^{しぞく}とが出^でた。これらはゲルシオンびとの氏族^{しぞく}である。四^よその数^{かず}えられた者^{もの}すなわち、一^{いち}か月^{げつ}以上の男子^{だんし}の数は合^あわせて七千五百人^{にん}であつた。五^ごゲルシオンびとの氏族^{しぞく}は幕屋^{まくや}の後方^{こうほう}、すなわち、西^{にし}の方に宿営^{しゆくえい}し、六^{ろく}イスラエルの子^こエリアサフが、ゲルシオンびとの父祖^{ふそ}の家^{いえ}のつかさとなるであらう。七^{しち}五^ご会^{かい}見^{けん}の幕屋^{まくや}の、ゲルシオンの子^こたちの務^{つとめ}は、幕屋^{まくや}、天幕^{てんまく}とのおおい、会^{かい}見^{けん}の幕屋^{まくや}の入口^{いりぐち}のとばり、八^{はち}庭^{にわ}のあげばり、幕屋^{まくや}と祭壇^{さいだん}のまわりの庭^{にわ}の入口^{いりぐち}のとばり、そのひも、およびすべてそれに用^{もち}いる物^{もの}を守^{まも}るこ

とである。

ニモまた、コハテからアムラムびとの氏族、イツハルびとの氏族、ヘブロンびとの氏族、ウジエルびとの氏族が出た。これらはコハテびとの氏族である。ニハ一か月以上の男子の数は、合わせて八千六百人であつて、聖所の務を守る者たちである。ニ九コハテの子たちの氏族は、幕屋の南の方に宿営し、三〇ウジエルの子エリザパンが、コハテびとの氏族の父祖の家のつかさとなるであろう。三 彼らの務は、契約の箱、机、燭台、二つの祭壇、聖所の務に用いる器、とばり、およびすべてそれに用いる物を守ることである。三 祭司アロンの子エレアザルが、レビびとのつかさたちの長となり、聖所の務を守るものたちを監督するであろう。三 メラリからマヘリびとの氏族と、ムシびとの氏族とが出た。これらはメラリの氏族である。三四 その数えられた者、すなわち、一か月以上の男子の数は、合わせて六千二百人であつた。三 五アビハイルの子ツリエルが、メラリの氏族の父祖の家のつかさとなるであろう。彼らは幕屋の北の方に宿営しなければならぬ。三六 メラリの子たちが、その務として管理すべきものは、幕屋の枠、その横木、その柱、その座、そのすべての器、およびそれに用いるすべての物、三モならびに庭のまわりの柱とその座、その釘、およびそのひもである。三八 また幕屋の前、その東の方、すなわち、会見の幕屋の東の方に宿営する者は、モーセとアロン、およびアロンの子たちで

あつて、イスラエルの人々の務に代つて、聖所の務を守るものである。ほかの人で近づく者は殺されるであろう。三九 モーセとアロンとが、主の言葉にしたがつて数えたレビびとで、その氏族によつて数えられた者、一か月以上の男子は、合わせて二万二千人であつた。

四〇 主はまたモーセに言われた、「あなたは、イスラエルの人々のうち、すべてういごである男子の一か月以上のものを数えて、その名の数を調べなさい。四一 また主なるわたしのために、イスラエルの人々のうちの、すべてのういごの代りにレビびとを取り、またイスラエルの人々の家畜のうちの、すべてのういごの代りに、レビびとの家畜を取りなさい」。四二 そこでモーセは主の命じられたように、イスラエルの人々のうちの、すべてのういごを数えた。四三 その数えられたういごの男子、すべて一か月以上の者は、その名の数によると二万二千二百七十三人であつた。

四四 主はモーセに言われた、四五 「あなたはイスラエルの人々のうちの、すべてのういごの代りに、レビびとを取り、また彼らの家畜の代りに、レビびとの家畜を取りなさい。レビびとはわたしのものとなる。わたしは主である。四六 またイスラエルの人々のういごは、レビびとの数を二百七十三人超過しているから、そのあがないのために、四七 そのあたまかすによつて、ひとりごとに銀五シケルを取らなければならない。すなわち、聖所のシケルにしたがつて、それを取らなければならない。一シケ

ルは二十ゲラである。四八あなたは、その超過した者をあがなう金を、アロンと、その子たちに渡さなければならない。四九そこでモーセは、レビびとによつてあがなわれた者を超過した人々から、あがないの金を取った。五〇すなわち、モーセは、イスラエルの人々のういごから、聖所のシケルにしたがつて千三百六十五シケルの銀を取り、五一そのあがないの金を、主の言葉にしたがつて、アロンとその子たちに渡した。主がモーセに命じられたとおりである。

第四章

一主はまたモーセとアロンに言われた、二「レビの子たちのうちから、コハテの子たちの総数を、その氏族により、その父祖の家にしたがって調べ、三三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことごとく数えなさい。四コハテの子たちの、会見の幕屋の務は、いと聖なる物にかかわるものであつて、次のとおりである。五すなわち、宿営の進む時に、アロンとその子たちとは、まず、はいつて、隔ての垂幕を取りおろし、それをもつて、あかしの箱をおおい、六その上に、じゅごんの皮のおおいを施し、またその上に総青色の布をうちかけ、環にさおをさし入れる。七また供えのパンの机の上には、青色の布をうちかけ、その上に、さら、乳香を盛る杯、鉢、および灌祭の

瓶を並べ、また絶やさず供えるパンを置き、八緋色の布をその上にうちかけ、じゅごんの皮のおおいをもつて、これをおおい、さおをさし入れる。九また青色の布を取つて、燭台とそれともし火ざら、芯切りばさみ、芯取りざら、およびそれに用いるもろもろの油の器をおおい、一〇じゅごんの皮のおおいのうちに、燭台とそのもろもろの器をいれて、担架に載せる。一一また、金の祭壇の上に青色の布をうちかけ、じゅごんの皮のおおいで、これをおおい、そのさおをさし入れる。一二また聖所の務に用いる務の器をみな取り、青色の布に包み、じゅごんの皮のおおいで、これをおおつて、担架に載せる。一三また祭壇の灰を取り去つて、紫の布をその祭壇の上にうちかけ、一四その上に、務をするのに用いるもろもろの器、すなわち、火ざら、肉さし、十能、鉢、および祭壇のすべての器を載せ、またその上に、じゅごんの皮のおおいをうちかけ、そしてさおをさし入れる。一五宿営の進むとき、アロンとその子たちとが、聖所と聖所のすべての器をおおうことを終つたならば、その後コハテの子たちは、それを運ぶために、はいつてこなければならぬ。しかし、彼らは聖なる物に触れてはならない。触れると死ぬであらう。会見の幕屋のうちの、これらの物は、コハテの子たちが運ぶものである。一六祭司アロンの子エレアザルは、ともし油、香ばしい薫香、絶やさず供える素祭および注ぎ油をつかさどり、また幕屋の全体と、そのうちにあるすべての聖なる物、およびその所のもろもろ

の器をつかさどらなければならない」。

二七主はまた、モーセとアロンに言われた、二八「あなたがたはコハテびとの一族を、レビびとのうちから絶えさせてはならない。一九彼らがいと聖なる物に近づく時、死なないで、命を保つために、このようにしなさい、すなわち、アロンとその子たちが、まず、はいり、彼らをおのおのその働きにつかせ、そのになうべきものを取らせなさい。二〇しかし、彼らは、はいって、ひと目でも聖なる物を見てはならない。見るならば死ぬであろう」。

二三主はまたモーセに言われた、二三「あなたはまたゲルシヨンの子たちの総数を、その父祖の家により、その氏族にしたがつて調べ、二三三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことごとく数えなさい。二四ゲルシヨンびとの氏族の務として働くことと、運ぶ物とは次のとおりである。二五すなわち、彼らは幕屋の幕、会見の幕屋およびそのおおいとその上のじゅごんの皮のおおい、ならびに会見の幕屋の入口のとばりを運び、二六また庭のあげばり、および幕屋と祭壇のまわりの庭の門の入口のとばりと、そのひも、ならびにそれに用いるすべての器を運ばなければならない。そして彼らはすべてこれらのものについての働きをしなければならない。二七ゲルシヨンびとの子たちのすべての務、すなわち、その運ぶことと、働くこととは、すべてアロンとその子たちの命に従わなければならない。あなたがたは彼らにすべてその運ぶべき物を定めて、

これを守らせなければならない。二八これはすなわちゲルシヨンびとの子たちの氏族が、会見の幕屋でする働きであつて、彼らの務は祭司アロンの子イタマルの指揮のもとにおかなければならない。

二九メラリの子たちをもまたあなたはその氏族により、その祖父の家にしたがつて調べ、三〇三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋の働きをすることのできる者を、ことごとく数えなさい。三一彼らが会見の幕屋でするすべての務にしたがつて、その運ぶ責任のある物は次のとおりである。すなわち、幕屋の柱、その横木、その柱、その座、三庭のまわりの柱、その座、その釘、そのひも、またそのすべての器、およびそれに用いるすべてのものである。あなたがたは彼らが運ぶ責任のある器を、その名によつて割り当てなければならない。三三これはすなわちメラリの子たちの氏族の働きであつて、彼らは祭司アロンの子イタマルの指揮のもとに、会見の幕屋で、このすべての働きをしなければならない」。

三四そこでモーセとアロン、および会衆のつかさたちは、コハテの子たちをその氏族により、その父祖の家にしたがつて調べ、三五十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことごとく数えたが、三六その氏族にしたがつて数えられた者は二千七百五十人であつた。三七これはすなわち、コハテびとの氏族の数えられた者で、すべて会見の幕屋で働くこ

とのできる者であつた。モーセとアロンが、主のモーセによつて命じられたところにしたがつて数えたのである。

三八またゲルシヨンの子たちを、その氏族により、その父祖の家にしたがって調べ、三九三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことごとく数えたが、四〇その氏族により、その父祖の家にしたがって数えられた者は二千六百三十人であつた。四一これはすなわち、ゲルシヨンの子たちの氏族の数えられた者で、すべて会見の幕屋で働くことのできる者であつた。モーセとアロンが、主の命にしたがつて数えたのである。

四二またメラリの子たちの氏族を、その氏族により、その父祖の家にしたがって調べ、四三三十歳以上五十歳以下で、務につき、会見の幕屋で働くことのできる者を、ことごとく数えたが、四四その氏族にしたがつて数えられた者は三千二百人であつた。四五これはすなわち、メラリの子たちの氏族の数えられた者で、モーセとアロンが、主のモーセによつて命じられたところにしたがつて数えたのである。

四六モーセとアロン、およびイスラエルのつかさたちは、レビびとを、その氏族により、その父祖の家にしたがって調べ、四七三十歳以上五十歳以下で、会見の幕屋にはいつて務の働きをし、また、運ぶ働きをする者を、ことごとく数えたが、四八その数えられた者は八千五百八十人であつた。四九彼らは主の命により、

モーセによつて任じられ、おのおのその働きにつき、かつその運ぶところを受け持った。こうして彼らは主のモーセに命じられたように数えられたのである。

第五章

一主はまたモーセに言われた、ニ「イスラエルの人々に命じて、らい病人、流出のある者、死体につれて汚れた者を、ことごとく宿営の外に出させなさい。三男でも女でも、あなたがたは彼らを宿営の外に出してそこにおらせ、彼らに宿営を汚させてはならない。わたしがその中に住んでいるからである。四イスラエルの人々はそのようにして、彼らを宿営の外に出した。すなわち、主がモーセに言われたようにイスラエルの人々は行つた。五主はまたモーセに言われた、六「イスラエルの人々に告げなさい、『男または女が、もし人の犯す罪をおかして、主に罪を得、その人がとがある者となる時は、七その犯した罪を告白し、その物の価にその五分の一を加えて、彼がとがを犯した相手方に渡し、そのとがをことごとく償わなければならない。ハしかし、もし、そのとがの償いを受け取るべき親族も、その人にない時は、主にそのとがの償いをして、これを祭司に帰せしめなければならない。九雄羊も、祭司に帰せしめなければならない。カイスラエルの人々

が、祭司のもとに携えて来るすべての聖なるささげ物は、みな祭司に帰せしめなければならない。二〇すべて人の聖なるささげ物は祭司に帰し、すべて人が祭司に与える物は祭司に帰するであらう』。

二主はまたモーセに言われた、三「イスラエルの人々に告げなさい、『もし人の妻たる者が、道ならぬ事をして、その夫に罪を犯し、三人が彼女と寝たのに、その事が夫の目に隠れて現れず、彼女はその身を汚したけれども、それに対する証人もなく、彼女もまたその時に捕えられなかつた場合、四すなわち、妻が身を汚したために、夫が疑いの心を起して妻を疑うことがあり、または妻が身を汚した事がないのに、夫が疑いの心を起して妻を疑うことがあれば、五夫は妻を祭司のもとに伴い、彼女のために大麦の粉一エパの十分の一を供え物として携えてこなければならぬ。ただし、その上に油を注いではならない。また乳香を加えてはならない。これは疑いの供え物、覚えの供え物であつて罪を覚えさせるものだからである。

六祭司はその女を近く進ませ、主の前に立たせなければならぬ。七祭司はまた土の器に聖なる水を入れ、幕屋のゆかのちりを取つてその水に入れ、八その女を主の前に立たせ、女にその髪の毛をほどかせ、覚えの供え物すなわち、疑いの供え物を、その手に持たせなければならぬ。そして祭司は、のろいの苦い水を手に取り、九女に誓わせて、これに言わなければならぬ。

い、「もし人があなたと寝たことがなく、またあなたが、夫のもとにあつて、道ならぬ事をして汚れたことがなければ、のろいの苦い水も、あなたに害を与えないであらう。二〇しかし、あなたが、もし夫のもとにあつて、道ならぬことをして身を汚し、あなたの夫でない人が、あなたと寝たことがあるならば、一一祭司はその女に、のろいの誓いをもつて誓わせ、その女に言わなければならぬ。一二主はあなたのももをやせさせ、あなたの腹をふくれさせて、あなたを民のうちの、のろいとし、また、ののしりとされるように。三また、のろいの水が、あなたの腹にはいつてあなたの腹をふくれさせ、あなたのももをやせさせるように」。その時、女は「アメン、アメン」と言わなければならない。

三祭司は、こののろいを書き物に書きしるし、それを苦い水に洗い落とし、四女にそののろいの水を飲ませなければならぬ。そののろいの水は彼女のうちにはいつて苦くなるであらう。五そして祭司はその女の手から疑いの供え物を取り、その供え物を主の前に揺り動かして、それを祭壇に持つてこなければならぬ。六祭司はその供え物のうちから、覚えの分、一握りを取つて、それを祭壇で焼き、その後、女にその水を飲ませなければならぬ。七その水を女に飲ませる時、もしその女が身を汚し、夫に罪を犯した事があれば、そののろいの水は女のうちにはいつて苦くなり、その腹はふくれ、ももはやせて、その女は

民のうちののろいとなるであろう。三ハしかし、もし女が身を汚した事がなく、清いならば、害を受けしないで、子を産むことができるであろう。

三九これは疑いのある時のおきてである。妻たる者が夫のもとにあつて、道ならぬ事をして身を汚した時、三〇または夫たる者が疑いの心を起して、妻を疑う時、彼はその女を主の前に立たせ、祭司はこのおきてを、ことごとく彼女に行わなければならない。三二こうするならば、夫は罪がなく、妻は罪を負うであろう。』

第六章

一主はまたモーセに言われた、二「イスラエルの人々に言いなさい、『男または女が、特に誓いを立て、ナジルびとなる誓願をして、身を主に聖別する時は、三ぶどう酒と濃い酒を断ち、ぶどう酒の酢となつたもの、濃い酒の酢となつたものを飲まず、また、ぶどうの汁を飲まず、また生でも干したものでも、ぶどうを食べてはならない。四ナジルびとである間は、すべて、ぶどうの木からできるものは、種も皮も食べてはならない。』

五また、ナジルびとたる誓願を立てている間は、すべて、かみそりを頭に当ててはならない。身を主に聖別した日数の満ちるまで、彼は聖なるものであるから、髪の毛をのばしておかなければ

ならない。

六身を主に聖別している間は、すべて死体に近づいてはならない。七父母、兄弟、姉妹が死んだ時でも、そのために身を汚してはならない。神に聖別したしるしが、頭にあるからである。ハ彼はナジルびとである間は、すべて主の聖なる者である。

九もし人がはからずも彼のかたわらに死んで、彼の聖別した頭を汚したならば、彼は身を清める日に、頭をそらなければならない。すなわち、七日目にそれをそらなければならない。

一〇そして八日目に山ばと二羽、または家ばとのひな二羽を携えて、会見の幕屋の入口における祭司の所に行かなければならない。二祭司はその一羽を罪祭に、一羽を燔祭にささげて、彼が死体によつて得た罪を彼のためにあがない、その日に彼の頭を聖別しなければならぬ。三彼はまたナジルびとたる日の数を、改めて主に聖別し、一歳の雄の小羊を携えてきて、燔祭としなければならない。それ以前の日は、彼がその聖別を汚したので、無効になるであろう。

三これがナジルびとの律法である。聖別の日数が満ちた時は、その人を会見の幕屋の入口に連れてこなければならぬ。一四そしてその人は供え物を主にささげなければならない。すなわち、一歳の雄の小羊の全きもの一頭を燔祭とし、一歳の雌の小羊の全きもの一頭を罪祭とし、雄羊の全きもの一頭を酬恩祭とし、一五また種入れぬパンの二かご、油を混ぜて作つた麦粉の

菓子、油を塗った種入れぬ煎餅、および素祭と灌祭を携えてこなければならぬ。一六祭司はこれを主の前に携えてきて、その罪祭と燔祭とをささげ、一七また雄羊を種入れぬパンの二かごと共に、酬恩祭の犠牲として、主にささげなければならぬ。祭司はまたその素祭と灌祭をもささげなければならぬ。一八そのナジルびとは会見の幕屋の入口で、聖別した頭をそり、その聖別した頭の髪を取って、これを酬恩祭の犠牲の下にある火の上に置かなければならぬ。一九祭司はその雄羊の肩の煮えたものと、かごから取った種入れぬ菓子一つと、種入れぬ煎餅一つを取って、これをナジルびとが、その聖別した頭をそった後、その手に授け、二〇祭司は主の前でこれを揺り動かして揺祭としなければならぬ。これは聖なる物であつて、その揺り動かした胸と、ささげたものと共に、祭司に帰するであろう。こうして後、そのナジルびとは、ぶどう酒を飲むことができる。二三これは誓願をするナジルびとと、そのナジルびとたる事のために、主にささげる彼の供え物についての律法である。このほかにその力の及ぶ物をささげることができる。すなわち、彼はその誓う誓願のように、ナジルびとの律法にしたがつて行わなければならぬ。二三主はまたモーセに言われた、二三「アロンとその子たちに言いなさい、『あなたがたはイスラエルの人々を祝福してこのように言わなければならぬ。』」

二四「願わくは主があなたを祝福し、あなたを守られるように。二五願わくは主がみ顔をもつてあなたを照し、あなたを恵まれるように。二六願わくは主がみ顔をあなたに向け、あなたに平安を賜われるように。』」二七こうして彼らがイスラエルの人々のために、わたしの名を唱えるならば、わたしは彼らを祝福するであろう。

第七章

一モーセが幕屋を建て終り、これに油を注いで聖別し、またそのすべての器、およびその祭壇と、そのすべての器に油を注いで、これを聖別した日に、ニイスラエルのつかさたち、すなわち、その父祖の家の長たちは、ささげ物をした。彼らは各部族のつかさたちであつて、その数えられた人々をつかさどる者どもであつた。三彼らはその供え物を、主の前に携えてきたが、おおいのある車六両と雄牛十二頭であつた。つかさふたりに車一両、ひとりに雄牛一頭である。彼らはこれを幕屋の前に引いてきた。四その時、主はモーセに言われた、五「あなたはこれを会見の幕屋の務に用いるために、彼らから受け取って、レビびとに、おのおのその務にしたがつて、渡さなければならぬ。六そこ

でモーセはその車と雄牛を受け取って、これをレビびとに渡した。モすなわち、ゲルシヨンの子たちには、その務にしたがつて、車二両と雄牛四頭を渡し、ハメラリの子たちには、その務にしたがつて車四両と雄牛八頭を渡し、祭司アロンの子イタマルに、これを監督させた。しかし、コハテの子たちには、何をも渡さなかつた。彼らの務は聖なる物を、肩になつて運ぶことであつたからである。一〇つかさたちは、また祭壇に油を注ぐ日に、祭壇奉納の供え物を携えてきて、その供え物を祭壇の前にささげた。二主はモーセに言われた、「つかさたちは一日にひとりずつ、祭壇奉納の供え物をささげなければならない」。

三第一日に供え物をささげた者は、ユダの部族のアミナダブの子ナシヨンであつた。三その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。四また十シケルの金の杯一つ。これには薫香を満たしていた。五また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。六罪祭に使う雄やぎ一頭。七酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはアミナダブの子ナシヨンの供え物であつた。

八第二日にはイッサカルのつかさ、ツアルの子ネタニエルがささげ物をした。九そのささげた供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所の

シケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。一〇また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。一一また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。一二罪祭に使う雄やぎ一頭。一三酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはツアルの子ネタニエルの供え物であつた。

一四第三日にはゼブルンの子たちのつかさ、ヘロンの子エリアブ。一五その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。一六また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。一七また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。一八罪祭に使う雄やぎ一頭。一九酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはヘロンの子エリアブの供え物であつた。

二〇第四日にはルベンの子たちのつかさ、シデウルの子エリツル。二一その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。二二また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。二三また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。二四罪祭に使う雄やぎ一頭。二五酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、

雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはシデウルの子エリツルの供え物であつた。

三六 第五日にはシメオンの子たちのつかさ、ツリシヤダイの子シルミエル。ミモその供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。三八 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。三九 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。四〇 罪祭に使う雄やぎ一頭。四一 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはツリシヤダイの子シルミエルの供え物であつた。

四二 第六日にはガドの子たちのつかさ、デウエルの子エリアサフ。四三 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。四四 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。四五 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。四六 罪祭に使う雄やぎ一頭。四七 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはデウエルの子エリアサフの供え物であつた。

四八 第七日にはエフライムの子たちのつかさ、アミホデの子エリシヤマ。四九 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケ

ル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。五〇 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。五一 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。五二 罪祭に使う雄やぎ一頭。五三 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはアミホデの子エリシヤマの供え物であつた。

五四 第八日にはマナセの子たちのつかさ、パダヅルの子ガマリエル。五五 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。五六 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。五七 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。五八 罪祭に使う雄やぎ一頭。五九 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはパダヅルの子ガマリエルの供え物であつた。

六〇 第九日にはベニヤミンの子らのつかさ、ギデオニの子アビダン。六一 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。六二 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。六三 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。六

四 罪祭に使う雄やぎ一頭。六五 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはギデオニの子アビダンの供え物であつた。

六六 第十日にはダンの子たちのつかさ、アミシャダイの子アヒエゼル。六七 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。六八 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。六九 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。七〇 罪祭に使う雄やぎ一頭。七一 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはアミシャダイの子アヒエゼルの供え物であつた。

七二 第十一日にはアセルの子たちのつかさ、オ克蘭の子パギエル。七三 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。七四 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。七五 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。七六 罪祭に使う雄やぎ一頭。七七 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはオ克蘭の子パギエルの供え物であつた。

七八 第十二日にはナフタリの子たちのつかさ、エナンの子アヒ

ラ。七九 その供え物は銀のさら一つ、その重さは百三十シケル、銀の鉢一つ、これは七十シケル、共に聖所のシケルによる。この二つには素祭に使う油を混ぜた麦粉を満たしていた。八〇 また十シケルの金の杯一つ、これには薫香を満たしていた。八一 また燔祭に使う若い雄牛一頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊一頭。八二 罪祭に使う雄やぎ一頭。八三 酬恩祭の犠牲に使う雄牛二頭、雄羊五頭、雄やぎ五頭、一歳の雄の小羊五頭であつて、これはエナンの子アヒラの供え物であつた。

八四 以上は祭壇に油を注ぐ日に、イスラエルのつかさたちが、祭壇を奉納する供え物として、ささげたものである。すなわち、銀のさら十二、銀の鉢十二、金の杯十二。八五 銀のさらはそれぞれ百三十シケル、鉢はそれぞれ七十シケル、聖所のシケルによれば、この銀の器は合わせて二千四百シケル。八六 また薫香の満たしている十二の金の杯は、聖所のシケルによれば、それぞれ十シケル、その杯の金は合わせて百二十シケルであつた。八七 また燔祭に使う雄牛は合わせて十二、雄羊は十二、一歳の雄の小羊は十二、このほかにその素祭のものがあつた。また罪祭に使う雄やぎは十二。八八 酬恩祭の犠牲に使う雄牛は合わせて二十四、雄羊は六十、雄やぎは六十、一歳の雄の小羊は六十であつて、これは祭壇に油を注いだ後に、祭壇奉納の供え物としてささげたものである。

八九 さてモーセは主と語るために、会見の幕屋にはいつて、あか

しの箱の上の、贖罪所の上、二つのケルビムの間から自分に語られる声を聞いた。すなわち、主は彼に語られた。

第八章

「主はモーセに言われた、『アロンに言いなさい、『あなたがともし火をともし時は、七つのともし火で燭台の前方を照すようにしなさい』。』ミアロンはそのようにした。すなわち、主がモーセに命じられたように、燭台の前方を照すように、ともし火をともした。四燭台の造りは次のとおりである。それは金の打ち物で、その台もその花も共に打物造りであった。モーセは主に示された型にしたがって、そのようにその燭台をつくった。

五主はまたモーセに言われた、六「レビびとをイスラエルの人々のうちから取って、彼らを清めなさい。七あなたはこのようにして彼らを清めなければならない。すなわち、罪を清める水を彼らに注ぎかけ、彼らに全身をそらせ、衣服を洗わせて、身を清めさせ、八そして彼らに若い雄牛一頭と、油を混ぜた麦粉の素祭とを取らせなさい。あなたはまた、ほかに若い雄牛を罪祭のために取らなければならない。九そして、あなたはレビびとを会見の幕屋の前に連れてきて、イスラエルの人々の全会衆を集め、一〇レビびとを主の前に進ませ、イスラエルの人々をして、手をレビびとの上に置かせなければならない。二そしてアロンは、レビ

びとをイスラエルの人々のささげる揺祭として、主の前にささげなければならない。これは彼らに主の務をさせるためである。三それからあなたはレビびとをして、手をかの雄牛の頭の上に置かせ、その一つを罪祭とし、一つを燔祭として主にささげ、レビびとのために罪のあがないをしなければならない。四あなたはレビびとを、アロンとその子たちの前に立たせ、これを揺祭として主にささげなければならない。

四こうして、あなたはレビびとをイスラエルの人々のうちから分かち、レビびとをわたしのものとしなければならない。一五こうして後レビびとは会見の幕屋にはいつて務につくことができる。あなたは彼らを清め、彼らをささげて揺祭としなければならない。二六彼らはイスラエルの人々のうちから、全くわたしにささげられたものだからである。イスラエルの人々のうちの初めに生れた者、すなわち、すべてのういごの代りに、わたしは彼らを取ってわたしのものとした。二七イスラエルの人々のうちのういごは、人も獣も、みなわたしのものだからである。わたしはエジプトの地で、すべてのういごを撃ち殺した日に、彼らを聖別してわたしのものとした。二八それでわたしはイスラエルの人々のうちの、すべてのういごの代りにレビびとを取った。二九わたしはイスラエルの人々のうちからレビびとを取って、アロンとその子たちに与え、彼らに会見の幕屋で、イスラエルの人々に代って務をさせ、またイスラエルの人々のために罪のあ

がないをさせるであらう。これはイスラエルの人々が、聖所に近づいて、イスラエルの人々のうちに災の起ることのないようにするためである」。

二〇モーセとアロン、およびイスラエルの人々の全会衆は、すべて主がレビびとの事につき、モーセに命じられた所にしたがって、レビびとに行つた、すなわち、イスラエルの人々は、そのように彼らに行つた。三そこでレビびとは身を清め、その衣服を洗つた。アロンは彼らを主の前にささげて揺祭とした。アロンはまた彼らのために、罪のあがないをして彼らを清めた。三三こうして後、レビびとは会見の幕屋にはいつて、アロンとその子たちに仕えて務をした。すなわち、彼らはレビびとの事について、主がモーセに命じられた所にしたがって、そのように彼らに行つた。

三三主はまたモーセに言われた、三四「レビびとは次のようにしなければならぬ。すなわち、二十五歳以上の者は務につき、会見の幕屋の働きをしなければならぬ。三五しかし、五十歳からは務の働きを退き、重ねて務をしてはならない。三六ただ、会見の幕屋でその兄弟たちの務の助けをすることができぬ。しかし、務をしてはならない。あなたがレビびとにその務をさせるには、このようにしなければならぬ」。

第九章

一エジプトの国を出た次の年の正月、主はシナイの荒野でモーセに言われた、二「イスラエルの人々に、過越の祭を定め、時に行わせなさい。三この月の十四日の夕暮、定め、それを、行わなければならない。あなたがたは、そのすべての定めと、そのすべてのおきてにしたがって、それを行わなければならない」。

四そこでモーセがイスラエルの人々に、過越の祭を行わなければならないと言つたので、五彼らは正月の十四日の夕暮、シナイの荒野で過越の祭を行つた。すなわち、イスラエルの人々は、すべて主がモーセに命じられたようにおこなつた。六ところが人の死体に触れて身を汚したために、その日に過越の祭を行うことのできない人々があつて、その日モーセとアロンの前にきて、七その人々は彼に言つた、「わたしたちは人の死体に触れて身を汚しましたが、なぜその定め、時に、イスラエルの人々と共に、主に供え物をささげることができないのですか」。八モーセは彼らに言つた、「しばらく待て。主があなたがたについて、どう仰せになるかを聞こう」。

九主はモーセに言われた、一〇「イスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたのうち、また、あなたがたの子孫のうち、死体に触れて身を汚した人も、遠い旅路にある人も、なお、過越の祭を主に対して行うことができるであらう。二すなわち、二月の十四

日の夕暮、それを行い、種入れぬパンと苦菜を添えて、それを食べなければならぬ。二三これを少しでも朝まで残しておいてはならない。またその骨は一本でも折つてはならない。過越の祭のすべての定めにしたがつてこれを行わなければならない。二三しかし、その身は清く、旅に出てもないのに、過越の祭を行わないときは、その人は民のうちから断たれるであろう。このような人は、定めの際に主の供え物をささげないゆえ、その罪を負わなければならない。一四もし他国の人々が、あなたがたのうちに寄留していて、主に対して過越の祭を行おうとするならば、過越の祭の定めにより、そのおきてにしたがつて、これを行わなければならない。あなたがたは他国の人にも、自国の人にも、同一の定めを用いなければならない。』

二五幕屋を建てた日に、雲は幕屋をおおった。それはすなわち、あかしの幕屋であつて、夕には、幕屋の上に、雲は火のように見えて、朝にまで及んだ。一六常にそうであつて、昼は雲がそれをおおい、夜は火のように見えた。一七雲が幕屋を離れてのぼる時は、イスラエルの人々は、ただちに道に進んだ。また雲がとどまる所に、イスラエルの人々は宿営した。一八すなわち、イスラエルの人々は、主の命によつて道に進み、主の命によつて宿営し、幕屋の上に雲がとどまっている間は、宿営していた。一九幕屋の上に、日久しく雲のとどまる時は、イスラエルの人々は主の言いつけを守つて、道に進まなかつた。二〇また幕屋の上に、雲のと

どまる日の少ない時もあつたが、彼らは、ただ主の命にしたがつて宿営し、主の命にしたがつて、道に進んだ。二一また雲は夕から朝まで、とどまることもあつたが、朝になつて、雲がのぼる時は、彼らは道に進んだ。また昼でも夜でも、雲がのぼる時は、彼らは道に進んだ。二三ふつかでも、一か月でも、あるいはそれ以上でも、幕屋の上に、雲がとどまっている間は、イスラエルの人々は宿営して、道に進まなかつたが、それがのぼると道に進んだ。二四すなわち、彼らは主の命にしたがつて宿営し、主の命にしたがつて道に進み、モーセによつて、主が命じられたとおりに、主の言いつけを守つた。

第二〇章

一主はモーセに言われた、二「銀のラッパを二本つくりなさい。すなわち、打物造りとし、それで会衆を呼び集め、また宿営を進ませなさい。三この二つを吹くときは、全会衆が会見の幕屋の入口に、あなたの所に集まつてこなければならない。四もしその一つだけを吹くときは、イスラエルの氏族の長であるつかさたちが、あなたの所に集まつてこなければならない。五またあなたがたが警報を吹き鳴らす時は、東の方の宿営が、道に進まなければならない。六二度目の警報を吹き鳴らす時は、南の方の宿営が、道に進まなければならない。すべて道に進む時は、

警報を吹き鳴らさなければならぬ。七また会衆を集める時にも、ラツパを吹き鳴らす、警報は吹き鳴らしてはならない。ハアロンの子である祭司たちが、ラツパを吹かなければならない。これはあなたがたが、代々なく守るべき定めとしなければならぬ。九また、あなたがたの国で、あなたがたをしえたげるのだとの戦いに出る時は、ラツパをもつて、警報を吹き鳴らさなければならぬ。そうするならば、あなたがたは、あなたがたの神、主に覚えられて、あなたがたの敵から救われるであろう。一〇また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの祝いの時、および月々の第一日には、あなたがたの燔祭と酬恩祭の犠牲をささげるに当つて、ラツパを吹き鳴らさなければならぬ。そうするならば、あなたがたの神は、それによつて、あなたがたを覚えれるであろう。わたしはあなたがたの神、主である」。

二 第二年の二月二十日に、雲があかしの幕屋を離れてのぼつたので、ミイスラエルの人々は、シナイの荒野を出て、その旅路に進んだが、パランの荒野に至つて、雲はとどまつた。二三こうして彼らは、主がモーセによつて、命じられたところにしたがつて、道に進むことを始めた。二四先頭には、ユダの子たちの宿営の旗が、その部隊を従えて進んだ。ユダの部隊の長はアミナダブの子ナシオン、二五イスサカルの子たちの部隊の長はツアルの子ネタニエル、二六ゼブルンの子たちの部隊の長はヘロンの子エリアブであつた。

二七そして幕屋は取りくずされ、ゲルシヨンの子たち、およびメラリの子たちは幕屋を運び進んだ。二八次にルベンの宿営の旗が、その部隊を従えて進んだ。ルベンの部隊の長はシデウの子エリヅル、二九シメオンの子たちの部隊の長はツリシヤダイの子シルミエル、三〇ガドの子たちの部隊の長はデウエルの子エリアサフであつた。

三一そしてコハテびとは聖なる物を運び進んだ。これが着くまでに、人々は幕屋を建て終るのである。三次にエフライムの子たちの宿営の旗が、その部隊を従えて進んだ。エフライムの部隊の長はアミホデの子エリシヤマ、三二マナセの子たちの部隊の長はパダヅルの子ガマリエル、三三ベニヤミンの子たちの部隊の長はギデオニの子アビダンであつた。

三四次にダンの子たちの宿営の旗が、その部隊を従えて進んだ。この部隊はすべての宿営のしんがりであつた。ダンの部隊の長はアミシヤダイの子アヒエゼル、三六アセルの子たちの部隊の長はオクランの子パギエル、三七ナフタリの子たちの部隊の長はエナンの子アヒラであつた。三八イスラエルの人々が、その道に進む時は、このように、その部隊に従つて進んだ。

三九さて、モーセは、妻の父、ミデヤンびとりウエルの子ホバブに言った、「わたしたちは、かつて主がおまえたちに与える約束された所に向かつて進んでいます。あなたも一緒においで

ください。あなたが幸福になられるようにいたしましょう。主がイスラエルに幸福を約束されたのですから」。

三〇 彼はモーセに言った、「わたしは行きません。わたしは国に帰って、親族のもとに行きます」。三二 モーセはまた言った、「どうかわたしたちを見捨てないでください。あなたは、わたしたちが荒野のどこに宿営すべきかを御存じですから、わたしたちの目となつてください。三三 もしあなたが一緒においでくださるなら、主がわたしたちに賜わる幸福をあなたにも及ぼしましょう」。

三三 こうして彼らは主の山を去つて、三日の行程を進んだ。主の契約の箱は、その三日の行程の間、彼らに先立つて行き、彼らのために休む所を尋ねもとめた。三四 彼らが宿営を出て、道に進むとき、昼は主の雲が彼らの上にあつた。

三五 契約の箱が進むときモーセは言った、

「主よ、立ちあがつてください。」

あなたの敵は打ち散らされ、

あなたを憎む者どもは、

あなたの前から逃げ去りますように」。

三六 またそのとどまるとき、彼は言った、

「主よ、帰ってきてください、

イスラエルのちよろずの人に」。

第一章

一 さて、民は災難に会っている人のように、主の耳につぶやいた。主はこれを聞いて怒りを発せられ、主の火が彼らのうちに燃えあがつて、宿営の端を焼いた。二 そこで民はモーセにむかつて叫んだ。モーセが主に祈つたので、その火はしずまつた。三 主の火が彼らのうちに燃えあがつたことによつて、その所の名はタベラと呼ばれた。

四 また彼らのうちにいた多くの寄り集まりびとは欲心を起し、イスラエルの人々もまた再び泣いて言った、「ああ、肉が食べたい。五 われわれは思い起すが、エジプトでは、ただで、魚を食べた。きゅうりも、すいかも、にらも、たまねぎも、そして、にくも。六 しかし、いま、われわれの精根は尽きた。われわれの目の前には、このマナのほか何も無い」。

セ マナは、こえんどうの実のようで、色はブドウの色のようであつた。ハ 民は歩きまわつて、これを集め、ひきうすでひき、または、うすでつき、かまで煮て、これをもちとした。その味は油菓子の味のようにあつた。九 夜、宿営の露がおりるとき、マナはそれと共に降つた。

一〇 モーセは、民が家ごとに、おのおのその天幕の入口で泣くのを聞いた。そこで主は激しく怒られ、またモーセは不快に思つた。二 そして、モーセは主に言った、「あなたはなぜ、しもべに

悪い仕打ちをされるのですか。どうしてわたしはあなたの前に恵みを得ないで、このすべての民の重荷を負わされるのですか。三わたしがこのすべての民を、はらんのですか。わたしがこれを生んだのですか。そうではないのに、あなたはなぜわたしに『養い親が乳児を抱くように、彼らをふところに抱いて、あなたが彼らの先祖たちに誓われた地に行け』と言われるのですか。三わたしはどこから肉を獲て、このすべての民に与えることができますしうか。彼らは泣いて、『肉を食べさせよ』とわたしに言っているのです。一四わたしひとりでは、このすべての民を負うことができません。それはわたしには重過ぎます。一五もしわたしがあなたの前に恵みを得ますならば、わたしにこのような仕打ちをされるよりは、むしろ、ひとり思いに殺し、このうえ苦しみに会わせないでください」。

一六主はモーセに言われた、「イスラエルの長老たちのうち、民の長老となり、つかさとなるべきことを、あなたが知っている者七十人をわたしのものに集め、会見の幕屋に連れてきて、そこにあなたと共に立たせなさい。一七わたしは下つて、その所で、あなたと語り、またわたしはあなたの上にある霊を、彼らにも分け与えるであろう。彼らはあなたと共に、民の重荷を負い、あなたが、ただひとりで、それを負うことのないようにするのである。一八あなたはまた民に言いなさい、『あなたがたは身を清めて、あすを待ちなさい。あなたがたは肉を食べることができ

であろう。あなたがたが泣いて主の耳に、わたしたちは肉が食べたい。エジプトにいた時は良かったと言ったからである。それゆえ、主はあなたがたに肉を与えて食べさせられるであろう。一九あなたがたがそれを食べるのは、一日や二日や五日や十日や二十日ではなく、二〇一か月に及び、ついにあなたがたの鼻から出るようになり、あなたがたは、それに飽き果てるであろう。それはあなたがたのうちにおられる主を軽んじて、その前に泣き、なぜ、わたしたちはエジプトから出てきたのだろうと言ったからである。二一モーセは言った、「わたしと共にいる民は徒歩の男子だけでも六十万です。ところがあなたは、『わたしは彼らに肉を与えて一か月のあいだ食べさせよう』と言われます。三二羊と牛の群れを彼らのためにほふって、彼らを飽きさせるというのですか。海のすべての魚を彼らのために集めて、彼らを飽きさせるといいますか。三三主はモーセに言われた、「主の手は短かろうか。あなたは、いま、わたしの言葉の成るかどうかを見るであろう」。

三四この時モーセは出て、主の言葉を民に告げ、民の長老たち七十人を集めて、幕屋の周囲に立たせた。三五主は雲のうちにあって下り、モーセと語られ、モーセの上にある霊を、その七十人の長老たちにも分け与えられた。その霊が彼らの上にとどまつた時、彼らは預言した。ただし、その後は重ねて預言しなかった。

三六 その時ふたりの者が、宿営にとどまっていたが、ひとりの名はエルダデと言ひ、ひとりの名はメダデといった。彼らの上にも霊がとどまつた。彼らは名をしるされた者であつたが、幕屋に行かなかつたので、宿営のうちに預言した。ニモ時にひとりの若者が走つてきて、モーセに告げて言つた、「エルダデとメダデとが宿営のうちに預言しています。ニハ若い時からモーセの従者であつたヌンの子ヨシユアは答えて言つた、「わが主、モーセよ、彼らをさし止めてください」。ニルモーセは彼に言つた、「あなたは、わたしのためを思つて、ねたみを起しているのか。主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ」。三〇こうしてモーセはイスラエルの長老たちと共に、宿営に引きあげた。

ミさて、主のもとから風が起り、海の向こうから、うずらを運んできて、これを宿営の近くに落した。その落ちた範圍は、宿営の周囲で、こちら側もおおよそ一日の行程、あちら側もおおよそ一日の行程、地面から高さおおよそ二キュビトであつた。ミそこで民は立ち上がつてその日は終日、その夜は終夜、またその次の日も終日、うずらを集めたが、集める事の最も少ない者も、十ホメルほど集めた。彼らはみな、それを宿営の周囲に広げておいた。ミその肉がなお、彼らの齒の間にあつて食べつくさないうちに、主は民にむかつて怒りを発し、主は非常に激しい疫病をもつて民を撃たれた。三四これによつて、その所

の名はキプロテ・ハツタワと呼ばれた。欲心を起した民を、そこに埋めたからである。ミキプロテ・ハツタワから、民はハゼロテに進み、ハゼロテにとどまつた。

第二章

一モーセはクシの女をめとつていたが、そのクシの女をめとつたゆえをもつて、ミリアムとアロンはモーセを非難した。ニ彼らは言つた、「主はただモーセによつて語られるのか。われわれによつても語られるのではないのか」。主はこれを聞かれた。ミモーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人にまざつていた。四そこで、主は突然モーセとアロン、およびミリアムにむかつて「あなたがた三人、会見の幕屋に出てきなさい」と言われたので、彼ら三人は出てきたが、五主は雲の柱のうちにあつて下り、幕屋の入口に立つて、アロンとミリアムを呼ばれた。彼らふたりが進み出ると、六彼らに言われた、「あなたがたは、いまわたしの言葉を聞きなさい。あなたがたのうちに、もし、預言者があるならば、主なるわたしは幻をもつて、これにわたしを知らせ、また夢をもつて、これと語るであらう。セしかし、わたしのしもべモーセとは、そうではない。彼はわたしの全家に忠信なる者である。ハ彼とは、わたしは口ずから語り、明らかに言つて、なぞを使わない。彼はまた主の形を見るのである。なぜ、あな

たがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか」。

九 主は彼らにむかい怒りを発して去られた。一〇 雲が幕屋の上を離れ去った時、ミリアムは、らい病となり、その身は雪のように白くなった。アロンがふり返つてミリアムを見ると、彼女はい病になつていた。二 そこで、アロンはモーセに言った、「ああ、わが主よ、わたしたちは愚かなことをして罪を犯しました。どうぞ、その罰をわたしたちに受けさせないでください。三 どうぞ彼女を母の胎から肉が半ば滅びうせて出る死人のようにしないでください」。三 その時モーセは主に呼ばわつて言った、「ああ、神よ、どうぞ彼女をいやしてください」。四 主はモーセに言われた、「彼女の父が彼女の顔につばきしてさえ、彼女は七日のあいだ、恥じて身を隠すではないか。彼女を七日のあいだ、宿営の外で閉じこめておかなければならない。その後、連れもどしてもよい」。五 そこでミリアムは七日のあいだ、宿営の外で閉じこめられた。民はミリアムが連れもどされるまでは、道に進まなかつた。六 その後、民はハゼロテを立つて進み、パランの荒野に宿営した。

第二三章

一 主はモーセに言われた、二 「人をつかわして、わたしがイスラエルの人々に与えるカナンの地を探らせなさい。すなわち、そ

の父祖の部族ごとに、すべて彼らのうちのつかさたる者ひとりずつをつかわしなさい」。三 モーセは主の命にしたがつて、パランの荒野から彼らをつかわした。その人々はみなイスラエルの人々のかしらたちであつた。四 彼らの名は次のとおりである。ルベンの部族ではザツクルの子シヤンマ、五 シメオンの部族ではホリの子シヤパテ、六 ユダの部族ではエフンネの子カレブ、七 イッサカルの部族ではヨセフの子イガル、八 エフライムの部族ではヌンの子ホセア、九 ベニヤミンの部族ではラフの子パルテ、一〇 ゼブルンの部族ではソデの子ガデエル、一一 ヨセフの部族すなわち、マナセの部族ではスシの子ガデ、一二 ダンの部族ではゲマリの子アンミエル、一三 アセルの部族ではミカエルの子セトル、一四 ナフタリの部族ではワフシの子ナヘビ、一五 ガドの部族ではマキの子ギウエル。一六 以上はモーセがその地を探らせるためににつかわした人々の名である。そしてモーセはヌンの子ホセアをヨシユアと名づけた。

一七 モーセは彼らをつかわし、カナンの地を探らせようとして、これに言った、「あなたがたはネゲブに行つて、山に登り、一八 その地の様子を見、そこに住む民は、強いかわ弱いかわ、少ないか多いかわ、一九 また彼らの住んでいる地は、良いか悪いかわ。人々の住んでいる町々は、天幕か、城壁のある町か、二〇 その地は、肥えているか、やせているか、そこには、木があるかないかを見なさい。あなたがたは、勇んで行つて、その地のくだものを取つてきなさい。

い」。時は、ぶどうの熟し始める季節であった。

ニそこで、彼らはのぼっていつて、その地をチンの荒野からハマテの入口に近いレホブまで探った。ニ彼らはネゲブにのぼって、ヘブロンまで行った。そこにはアナクの子孫であるアヒマン、セシャイ、およびタルマイがいた。ヘブロンはエジプトのゾアンよりも七年前に建てられたものである。ニ三ついに彼らはエシコルの谷に行つて、そこで一ふきのぶどうの枝を切り取り、これを棒をもつて、ふたりでかつぎ、また、ざくろといちじくをも取った。ニ四イスラエルの人々が、そこで切り取ったぶどうの一ふさにちなんで、その所はエシコルの谷と呼ばれた。

ニ五四十日の後、彼らはその地を探り終つて歸つてきた。ニ六そして、パランの荒野にあるカデシにいたモーセとアロン、およびイスラエルの人々の全会衆のもとに行つて、彼らと全会衆とに復命し、その地のくだものを彼らに見せた。ニモ彼らはモーセに言つた、「わたしたちはあなたが、つかわした地へ行きました。そこはまことに乳と蜜の流れている地です。これはそのくだものです。ニ八しかし、その地に住む民は強く、その町々は堅固で非常に大きく、わたしたちはそこにアナクの子孫がいるのを見ました。ニ九またネゲブの地には、アマレクびとが住み、山地にはヘテびと、エブスびと、アモリびとが住み、海べとヨルダンの岸べには、カナンびとが住んでいます」。

ニ三〇そのとき、カレブはモーセの前で、民をしずめて言つた、「わ

たしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことが出来ます」。ニしかし、彼とともにのぼって行つた人々は言つた、「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」。ニ三そして彼らはその探つた地のことを、イスラエルの人々に悪く言いふらして言つた、「わたしたちが行き巡つて探つた地は、そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。ニ四わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちは自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えただけに違いありません」。

第一章

ニそこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。ニまたイスラエルの人々はみなモーセとアロンにむかつてつぶやき、全会衆は彼らに言つた、「ああ、わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかつたのに。この荒野で死んでいたらよかつたのに。ニ三なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか」。

四 彼らは互に言った、「わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」。五 そこで、モーセとアロンはイスラエルの人々の全会衆の前でひれふした。六 このとき、その地を探った者のうちのヌンの子ヨシユアとエフンネの子カレブは、その衣服を裂き、セイスラエルの人々の全会衆に言った、「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。ハもし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行つて、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。九 ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れではありません。彼らはわたしたちの食い物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」。一〇 ところが会衆はみな石で彼らを撃ち殺そうとした。

そのとき、主の栄光が、会見の幕屋からイスラエルのすべての人に現れた。二 主はモーセに言われた、「この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしがもろもろのしるしを彼らのうちに行つたのに、彼らはいつまでわたしを信じないのか。三 わたしは疫病をもつて彼らを撃ち滅ぼし、あなたを彼らよりも大いなる強い国民としよう」。

三 モーセは主に言った、「エジプトびとは、あなたが力をもつて、この民を彼らのうちから導き出されたことを聞いて、一四 この地の住民に告げるでしょう。彼らは、主なるあなたが、この

民のうちにおられ、主なるあなたが、まのあたり現れ、あなたの雲が、彼らの上にとどまり、昼は雲の柱のうちに、夜は火の柱のうちにあって、彼らの前に行かれるのを聞いたのです。一五 いま、もし、あなたがこの民をひとり残らず殺されるならば、あなたのことを聞いた国民は語つて、一六 『主は与えたと誓つた地に、この民を導き入れることができなかったため、彼らを荒野で殺したのだ』と言うでしょう。一七 どうぞ、あなたが約束されたように、いま主の大いなる力を現してください。一八 あなたはかつて、『主は怒ることおそく、いつくしみに富み、罪とがをゆるす者、しかし、罰すべき者は、決してゆるさず、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼす者である』と言われました。一九 どうぞ、あなたの大きないつくしみによつて、エジプトからこのかた、今にいたるまで、この民をゆるされたように、この民の罪をおゆるしてください」。

二〇 主は言われた、「わたしはあなたの言葉のとおりにゆるそう。三 しかし、わたしは生きています。また主の栄光が、全世界に満ちている。三 わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行つたしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞きたがわなかった人々はひとりも、三 わたしがかつて彼らの先祖たちに与えたと誓つた地を見ないであろう。またわたしを侮った人々も、それを見ないであろう。二四 ただし、わたしのしもべカレブは違った心をもつていて、わたしに完全に

従ったので、わたしは彼が行ってきた地に彼を導き入れるであろう。彼の子孫はそれを所有するにいたるであろう。二五 谷にはアマレクびととカナンびとが住んでいるから、あなたがたは、あす、身をめぐらして紅海の道を荒野へ進みなさい」。

二六 主はモーセとアロンに言われた、二七「わたしにむかつてつぶやくこの悪い会衆をいつまで忍ぶことができようか。わたしはイスラエルの人々が、わたしにむかつてつぶやくのを聞いた。二八 あなたは彼らに言いなさい、『主は言われる、「わたしは生きている。あなたがたが、わたしの耳に語ったように、わたしはあなたがたにするであろう。二九 あなたがたは死体となって、この荒野に倒れるであろう。あなたがたのうち、わたしにむかつてつぶやいた者、すなわち、すべて数えられた二十歳以上の者はみな倒れるであろう。三〇 エフンネの子カレブと、ヌンの子ヨシユアのほかは、わたしがかつて、あなたがたを住まわせようと、手をあげて誓った地に、はいることができないうであろう。三一 しかし、あなたがたが、えじきになるであろうと言ったあなたがたの子供は、わたしが導いて、はいるであろう。彼らはあなたがたが、いやしめた地を知るようになるであろう。三二 しかしあなたがたは死体となってこの荒野に倒れるであろう。三三 あなたがたの子たちは、あなたがたの死体が荒野に朽ち果てるまで四十年のあいだ、荒野で羊飼となり、あなたがたの不信の罪を負うであろう。三四 あなたがたは、かの地を探った四十日の日数にし

たがい、その一日を一年として、四十年のあいだ、自分の罪を負い、わたしがあなたがたを遠ざかったことを知るであろう」。三五 主なるわたしがこれを言う。わたしは必ずわたしに逆らって集まったこの悪い会衆に、これをことごとく行うであろう。彼らはこの荒野に朽ち、ここで死ぬであろう」。

三六 こうして、モーセにつかわされ、かの地を探りに行き、帰ってきて、その地を悪く言い、全会衆を、モーセにむかつて、つぶやかせた人々、三七 すなわち、その地を悪く言いふらした人々は、疫病にかかつて主の前に死んだが、三八 その地を探りに行った人々のうち、ヌンの子ヨシユアと、エフンネの子カレブとは生き残った。

三九 モーセが、これらのことを、イスラエルのすべての人々に告げたとき、民は非常に悲しみ、四〇 朝早く起きて山の頂上に登って言った、「わたしたちはここにいます。さあ、主が約束された所へ上って行こう。わたしたちは罪を犯したのだから」。四一 モーセは言った、「あなたがたは、それをなし遂げることもできないのに、どうして、そのように主の命にそむくのか。四二 あなたがたは上って行つてはならない。主があなたがたのうちにおられないから、あなたがたは敵の前に、撃ち破られるであろう。四三 そこには、アマレクびとと、カナンびとがあなたがたの前にいるから、あなたがたは、つるぎに倒れるであろう。あなたがたがそむいて、主に従わなかったゆえ、主はあなたがたと共におられない

いからである」。四しかし、彼らは、ほしいままに山の頂に登った。ただし、主の契約の箱と、モーセとは、宿営の中から出なかつた。四五そこで、その山に住んでいたアマレクびとと、カナンびとが下つてきて、彼らを撃ち破り、ホルマまで追つてきた。

第一章

一主はモーセに言われた、ニ「イスラエルの人々に言いなさい、『あなたがたが、わたしの与えて住ませる地に行つて、三主に火祭をささげる時、すなわち特別の誓願の供え物、あるいは自発の供え物、あるいは祝のときの供え物として、牛または羊を燔祭または犠牲としてささげ、主に香ばしいかおりとするととき、四五その供え物を主にささげる者は、燔祭または犠牲と共に、小羊一頭ごとに、麦粉一エバの十分の一に、油一ヒンの四分の一を混ぜたものを、素祭としてささげ、ぶどう酒一ヒンの四分の一を、灌祭としてささげなければならない。六もし、また雄羊を用いるときは、麦粉一エバの十分の二に、油一ヒンの三分の一を混ぜたものを、素祭としてささげ、七また、ぶどう酒一ヒンの三分の一を、灌祭としてささげて、主に香ばしいかおりとしなければならない。八またあなたが特別の誓願の供え物、あるいは酬恩祭を、主にささげる時、若い雄牛を、燔祭または犠牲とするならば、九麦粉一エバの十分の三に、油一ヒンの二分の一を混ぜたもの

を、素祭として、若い雄牛と共にささげ、一〇また、ぶどう酒一ヒンの二分の一を、灌祭としてささげなければならない。これは火祭であつて、主に香ばしいかおりとするものである。

二雄牛、あるいは雄羊、あるいは小羊、あるいは子やぎは、一頭ごとに、このようにしなければならない。三すなわち、あなたがたのささげる数にてらし、その数にしたがつて、一頭ごとに、このようにしなければならない。四すべて国に生れた者が、火祭をささげて、主に香ばしいかおりとするとときは、このように、これらのことを行わなければならない。五またあなたがたのうちに寄留している他国人、またはあなたがたのうちに、代々ながく住む者が、火祭をささげて、主に香ばしいかおりとしようとする時は、あなたがたがするように、その人もしなければならない。六会衆たる者は、あなたがたも、あなたがたのうちに寄留している他国人も、同一の定めに従わなければならない。これは、あなたがたが代々ながく守るべき定めである。他国の人も、主の前には、あなたがたと等しくなければならない。七すなわち、あなたがたも、あなたがたのうちに寄留している他国人も、同一の律法、同一のおきてに従わなければならない。八主はまたモーセに言われた、ニ「イスラエルの人々に言いなさい、『わたしが導いて行く地に、あなたがたがはいつて、九その地の食物を食べるとき、あなたがたは、ささげ物を主にささげなければならない。一〇すなわち、麦粉の初物で作つた菓子

を、ささげ物としなければならない。これを、打ち場からのささげ物のように、ささげなければならない。三 あなたがたは代々その麦粉の初物で、主にささげ物をしなければならない。

三 あなたがたが、もしあやまって、主がモーセに告げられたこのすべての戒めを行わず、主がモーセによって戒めを与えられた日からこのかた、代々にわたり、あなたがたに命じられたすべての事を行わないとき、二四 すなわち、会衆が知らずに、あやまって犯した時は、全会衆は若い雄牛一頭を、燔祭としてささげ、主に香ばしいかおりとし、これに素祭と灌祭とを定めのように加え、また雄やぎ一頭を、罪祭としてささげなければならない。二五 そして祭司は、イスラエルの人々の全会衆のために、罪のあがないをしなければならぬ。そうすれば、彼らはゆるされるであろう。それは過失だからである。彼らはその過失のために、その供え物として、火祭を主にささげ、また罪祭を主の前にささげなければならない。二六 そうすれば、イスラエルの人々の全会衆はゆるされ、また彼らのうちに寄留している他国人も、ゆるされるであろう。民はみな過失を犯したからである。二七 もし人があやまって罪を犯す時は、一歳の雌やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。二八 そして祭司は、人があやまって罪を犯した時、そのあやまって罪を犯した人のために、主の前に罪のあがないをして、その罪をあがなわなければならない。そうすれば、彼はゆるされるであろう。二九 イスラエルの

人々のうちの、国に生れた者でも、そのうちに寄留している他国人でも、あやまって罪を犯す者には、あなたがたは同一の律法を用いなければならない。三〇 しかし、国に生れた者でも、他国人でも、故意に罪を犯す者は主を汚すもので、その人は民のうちから断たなければならない。三一 彼は主の言葉を侮り、その戒めを破つたのであるから、必ず断たれ、その罪を負わなければならない。三二

三三 イスラエルの人々が荒野におるとき、安息日にひとりの人が、たきぎを集めるのを見た。三三 そのたきぎを集めるのを見た人々は、その人をモーセとアロン、および全会衆のもとに連れてきたが、三四 どう取り扱うべきか、まだ示しを受けていなかった。三三 彼を閉じ込めておいた。三五 そのとき、主はモーセに言われた、「その人は必ず殺されなければならない。全会衆は宿営の外で、彼を石で撃ち殺さなければならない。三六 そこで、全会衆は彼を宿営の外に連れ出し、彼を石で撃ち殺し、主がモーセに命じられたようにした。

三七 主はまたモーセに言われた、三八 「イスラエルの人々に命じて、代々その衣服のすその四すみにふさをつけ、そのふさを青ひもで、すその四すみにつけさせなさい。三九 あなたがたが、そのふさを見て、主のもろもろの戒めを思い起して、それを行い、あなたがたが自分の心と、目の欲に従って、みだらな行いをしないためである。四〇 こうして、あなたがたは、わたしのもろもろ

第一六章

の戒めを思い起して、それを行い、あなたがたの神に聖なる者とならなければならぬ。四 わたしはあなたがたの神、主であつて、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの国から導き出した者である。わたしはあなたがたの神、主である」。

一ここに、レビの子コハテの子なるイヅハルの子コラと、ルベンの子なるエリアブの子ダタンおよびアビラムと、ルベンの子なるペレテの子オンとが結び、ニイスラエルの人々のうち、会衆のうちから選ばれて、つかさとなつた名のある人々二百五十人と共に立つて、モーセに逆らつた。三彼らは集まつて、モーセとアロンとに逆らつて言つた、「あなたがたは、分を越えています。全会衆は、ことごとく聖なるものであつて、主がそのうちにられるのに、どうしてあなたがたは、主の会衆の上に立つのですか」。四モーセはこれ聞いてひれ伏した。五やがて彼はコラと、そのすべての仲間とに言つた、「あす、主は、主にくものはだれ、聖なる者はだれであることを示して、その人をみもとに近づけられるであらう。すなわち、その選んだ人を、みもとに近づけられるであらう。六それで、次のようにしなさい。コラとそのすべての仲間とは、火ぎらを取り、七その中に火を入れ、それに薫香を盛つて、あす、主の前に出なさい。その時、主が選

ばれる人は聖なる者である。レビの子たちよ、あなたがたこそ、分を越えている」。八モーセはまたコラに言つた、「レビの子たちよ、聞きなさい。カイスラエルの神はあなたがたをイスラエルの会衆のうちから分かち、主に近づかせて、主の幕屋の務をさせ、かつ会衆の前に立つて仕えさせられる。これはあなたがたとつて、小さいことであらうか。一〇神はあなたとあなたの兄弟なるレビの子たちをみな近づけられた。あなたがたはなお、その上に祭司となることを求めるのか。二あなたがたとあなたの仲間は、みなそのために集まつて主に敵している。あなたがたはアロンをなと思つて、彼に対してつぶやくのか」。

三モーセは人をやつて、エリアブの子ダタンとアビラムとを呼ばせたが、彼らは言つた、「わたしたちは参りません。四あなたが乳と蜜の流れる地から、わたしたちを導き出して、荒野でわたしたちを殺そうとしている。これは小さいことでしょうか。その上、あなたはわたしたちに君臨しようとしている。五四かつまた、あなたはわたしたちを、乳と蜜の流れる地に導いて行かず、畑と、ぶどう畑とを嗣業として与えもしない。これらの人々の目をくらまそうとするのですか。わたしたちは参りません」。五モーセは大いに怒つて、主に言つた、「彼らの供え物を顧みないでください。わたしは彼らから、ろば一頭をも取つたことなく、また彼らのひとりをも害したことはありません」。六そしてモーセはコラに言つた、「あなたとあなたの仲間はみなアロン

と一緒^{いっしょ}に、あす、主^{しゅ}の前に出^でなさい。一七あなたがたは、おのおの火^ひぎらを取^とつて、それに薫香^{くんかう}を盛り、おのおのその火^ひぎらを主^{しゅ}の前に携^{たずさ}えて行きなさい。その火^ひぎらは会^あわせて二百五十。あなたとアロンも、おのおの火^ひぎらを携^{たずさ}えて行きなさい。一八彼らは、おのおの火^ひぎらを取り、火^ひをその中^{なか}に入れ、それに薫香^{くんかう}を盛り、モーセとアロンと共に、会見^{かいけん}の幕屋^{まくや}の入口^{いりぐち}に立つた。一九そのとき、コラは会衆^{かいしゆ}を、ことごとく会見^{かいけん}の幕屋^{まくや}の入口^{いりぐち}に集めて、彼ら^{かれ}ふたりに逆^{さか}らわせようとしたが、主^{しゅ}の栄光^{えいこう}は全会衆^{ぜんかいしゆ}に現^{あらわ}れた。

二〇主^{しゅ}はモーセとアロンに言^いわれた、二一「あなたがたはこの会衆^{かいしゆ}を離^{はな}れなさい。わたしはただちに彼ら^{かれ}を滅^{ほろ}ぼすであろう」。二三彼ら^{かれ}ふたりは、ひれ伏^ふして言^いつた、「神^{かみ}よ、すべての肉^{にく}なる者の命^{いのち}の神^{かみ}よ、このひとりの人^{ひと}が、罪^{つみ}を犯^{おか}したからといって、あなたは全会衆^{かいしゆ}に対して怒^{いか}られるのですか」。二三主^{しゅ}はモーセに言^いわれた、二四「あなたは会衆^{かいしゆ}に告^つげて、コラとダタンとアビラムのすまいの周囲^{しうい}を去^されと言^いいなさい」。

二五モーセは立^たつてダタンとアビラムのもとに行^いつたが、イスラエルの長老^{ちやうろう}たちも、彼^{かれ}に従^{したが}つて行^いつた。二六モーセは会衆^{かいしゆ}に言^いつた、「どうぞ、あなたがたはこれらの悪い人々^{わるいひと}の天幕^{てんまく}を離^{はな}れてください。彼ら^{かれ}のものには何^{なに}にも触^ふれてはならない。彼ら^{かれ}のもろもろの罪^{つみ}によって、あなたがたも滅^{ほろ}ぼされてはいけなから」。二七そこで人々はコラとダタンとアビラムのすまいの周囲^{しうい}

を離^{はな}れ去^さつた。そして、ダタンとアビラムとは、妻^{つま}、子^こ、および幼児^{ようじ}と一緒に^{いっしょ}に出^でて、天幕^{てんまく}の入口^{いりぐち}に立つた。二八モーセは言^いつた、「あなたがたは主^{しゅ}がこれらのすべての事^{こと}をさせるために、わたしをつかわされたこと、またわたしが、これを自分の心^{しん}にしたがつて行^{おこな}うものでないことを、次のこと^{つぎ}によって知るであろう。二九すなわち、もしこれらの人々^{ひと}が、普通^{ふつう}の死^しに方^{かた}で死^しに、普通^{ふつう}の運命^{うんめい}に会^あうのであれば、主^{しゅ}がわたしをつかわされたのではない。三〇しかし、主^{しゅ}が新しい事^{こと}をされ、地^ちが口^{くち}を開^{ひら}いて、これらの人々と、それに属^{ぞく}する者^{もの}とを、ことごとくのみつくして、生^いきながら陰府^{よみ}に下^{くだ}らせられるならば、あなたがたはこれらの人々^{ひと}が、主^{しゅ}を侮^{あなご}つたのであることを知らなければならない」。

三一モーセが、これらのすべての言^{ことば}を述べ終^{おわ}つたとき、彼ら^{かれ}の下^{した}の土地^{とち}が裂^さけ、三二地^ちは口^{くち}を開^{ひら}いて、彼ら^{かれ}とその家族^{かぞく}、ならびにコラに属^{ぞく}するすべての人々^{ひと}と、すべての所有物^{しやうぶつ}をのみつくした。三三すなわち、彼ら^{かれ}と、彼ら^{かれ}に属^{ぞく}するものは、皆^{みな}生^いきながら陰府^{よみ}に下^{くだ}り、地^ちはその上^{うへ}を開^{ひら}きふさいで、彼ら^{かれ}は会衆^{かいしゆ}のうちから、断^たち滅^{ほろ}ぼされた。三四この時^{とき}、その周囲^{しうい}にいたイスラエルの人々^{ひと}は、みな彼ら^{かれ}の叫^{さけ}びを聞^きいて逃^にげ去^さり、「恐^{おそ}ろく地^ちはわたしたちをも、のみつくすであろう」と言^いつた。三五また主^{しゅ}のもとから火^ひが出て、薫香^{くんかう}を供^{そな}える二百五十人^{にん}をも焼^やきつくした。

三六主^{しゅ}はモーセに言^いわれた、三七「あなたは祭司^{さいし}アロンの子エレアザルに告^つげて、その燃^もえる火^ひの中^{なか}から、かの火^ひぎらを取り出^ださ

せ、その中の火を遠く広くまき散らさせなさい。それらの火ぎらは聖となつたから、三罪を犯して命を失つた人々の、これらの火ぎらを、広い延べ板として、祭壇のおおいとしなさい。これは主の前にささげられて、聖となつたからである。こうして、これはイスラエルの人々に、しるしとなるであろう。三九そこで祭司エレアザルは、かの焼き殺された人々が供えた青銅の火ぎらを取り、これを広く打ち延ばして、祭壇のおおいとし、四〇これをイスラエルの人々の記念の物とした。これはアロンの子孫でないほかの人が、主の前に近づいて、薫香をたくことのないようにするため、またその人がコラ、およびその仲間のようにならなうためである。すなわち、主がモーセによつてエレアザルに言われたとおりである。

四一その翌日、イスラエルの人々の会衆は、みなモーセとアロンとにつぶやいて言つた、「あなたがたは主の民を殺しました」。四二会衆が集まつて、モーセとアロンとに逆らつたとき、会見の幕屋を望み見ると、雲がこれをおおい、主の栄光が現れていた。四三モーセとアロンとが、会見の幕屋の前に行くと、四四主はモーセに言われた、四五「あなたがたはこの会衆を離れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼそう」。そこで彼らふたりは、ひれ伏した。四六モーセはアロンに言つた、「あなたは火ぎらを取つて、それに祭壇から取つた火を入れ、その上に薫香を盛り、急いでそれを会衆のもとに持つて行つて、彼らのために罪のあがないをし

なさい。主が怒りを発せられ、疫病がすでに始まつたからです」。四七そこで、アロンはモーセの言つたように、それを取つて会衆の中に走つて行つたが、疫病はすでに民のうちに始まつていたので、薫香をたいて、民のために罪のあがないをし、四八すでに死んだ者と、なお生きてゐる者との間に立つと、疫病はやんだ。四九コラの事によつて死んだ者のほかに、この疫病によつて死んだ者は一万四千七百人であつた。五〇アロンは会見の幕屋の入口にいるモーセのもとに歸つた。こうして疫病はやんだ。

第十七章

一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に告げて、彼らのうちから、おのおのの父祖の家にしがつて、つえ一本ずつを取りなさい。すなわち、そのすべてのつかさたちから、父祖の家にしがつて、つえ十二本を取り、その人々の名を、おのおののつえに書きしるし、ミレビのつえにはアロンの名を書きしるしなさい。父祖の家のかしらは、おのおののつえ一本を出すのだからである。四そして、これらのつえを、わたしがあなたがたに会う会見の幕屋の中の、あかしの箱の前に置きなさい。五わたしの選んだ人のつえには、芽が出るであろう。こうして、わたしはイスラエルの人々が、あなたがたにむかつて、つぶやくのをや

めさせるであろう」。六モーセが、このようにイスラエルの人々に語ったので、つかさたちはみな、その父祖の家にしたがって、おのおの、つえ一本ずつを彼に渡した。そのつえは合わせて十二本。アロンのつえも、そのつえのうちにあつた。セモーセは、それらのつえを、あかしの幕屋の中の、主の前に置いた。

八その翌日、モーセが、あかしの幕屋にはいつて見ると、レビの家のために出したアロンのつえは芽をふき、つぼみを出し、花が咲いて、あめんどうの実を結んでいた。九モーセがそれらのつえを、ことごとく主の前から、イスラエルのすべての人の所に持ち出したので、彼らは見て、おのおの自分のつえを取った。一〇主はモーセに言われた、「アロンのつえを、あかしの箱の前に持ち帰り、そこに保存して、そむく者どものために、しるしとしなさい。こうして、彼らのわたしに対するつばやきをやめさせ、彼らの死ぬのをまぬかれさせなければならない」。一モモーセはそのようにして、主が彼に命じられたとおりに行つた。

二イスラエルの人々は、モーセに言つた、「ああ、わたしたちは死ぬ。破滅です、全滅です。三主の幕屋に近づく者が、みな死ぬのであれば、わたしたちは死に絶えるではありませんか」。

第一八章

一そこで、主はアロンに言われた、「あなたとあなたの子たち、お

よびあなたの父祖の家の者は、聖所に関する罪を負わなければならない。また、あなたとあなたの子たちとは、祭司職に関する罪を負わなければならない。二あなたはまた、あなたの兄弟なるレビの部族の者、すなわち、あなたの父祖の部族の者どもを、あなたに近づかせ、あなたに連なり、あなたに仕えさせなければならない。ただし、あなたとあなたの子たちとは、共にあかしの幕屋の前で仕えなければならない。三彼らは、あなたの務と、すべての幕屋の務とを守らなければならない。ただし、聖所の器と、祭壇とに近づいてはならない。彼らもあなたがたも、死ぬことのないためである。四彼らはあなたに連なつて、会見の幕屋の務を守り、幕屋のもろもろの働きをしなければならない。ほかの者は、あなたがたに近づいてはならない。五このように、あなたがたは、聖所の務と、祭壇の務とを守らなければならない。そうすれば、主の激しい怒りは、かさねてイスラエルの人々に臨まないであろう。六わたしはあなたがたの兄弟たるレビびとを、イスラエルの人々のうちから取り、主のために、これを賜物として、あなたがたに与え、会見の幕屋の働きをさせる。七あなたがたはあなたの子たちは共に祭司職を守つて、祭壇と、垂幕のうちのすべての事を執り行い、共に勤めなければならない。わたしは祭司の職務を賜物として、あなたがたに与える。ほかの人で近づく者は殺されるであろう」。

八主はまたアロンに言われた、「わたしはイスラエルの人々の、

すべての聖なる供え物で、わたしにささげる物の一部をあなたに与える。すなわち、わたしはこれをあなたと、あなたの子たちに、その分け前として与え、永久に受くべき分とする。九いと聖なる供え物のうち、火で焼かずに、あなたに帰すべきものは次のとおりである。すなわち、わたしにささげるすべての供え物、素祭、罪祭、愆祭はみな、いと聖なる物であつて、あなたとあなたの子たちに帰するであらう。一〇いと聖なる所で、それを食べなければならぬ。男子はみな、それを食べることができ。それはあなたに帰すべき聖なる物である。一一またあなたに帰すべきものはこれである。すなわち、イスラエルの人々のささげる供え物のうち、すべて揺祭とするものであつて、これをあなたとあなたにむすこ娘に与えて、永久に受くべき分とする。あなたの家の者のうち、清い者はみな、これを食べることができ。二すべて油の最もよい物、およびすべて新しいぶどう酒と、穀物の最もよい物など、人々が主にささげる初穂をあなたに与える。三国のすべての産物の初物で、人々が主のもとに携えてきたものは、あなたに帰するであらう。あなたの家の者のうち、清い者はみな、これを食べることができる。四イスラエルのうちの奉納物はみな、あなたに帰する。五すべて肉なる者のういごであつて、主にささげられる者はみな、人でも獣でも、あなたに帰する。ただし、人のういごは必ずあがなわなければならない。また汚れた獣のういごも、あがなわなければならない。

一六人のういごは生後一か月で、あがなわなければならない。そのあがない金はあなたの値積りにより、聖所のシケルにしたがつて、銀五シケルでなければならない。一シケルは二十ゲラである。一七しかし、牛のういご、羊のういご、やぎのういごは、あがなつてはならない。これらは聖なるものである。その血を祭壇に注ぎかけ、その脂肪を焼いて火祭とし、香ばしいかおりとして、主にささげなければならない。一八その肉はあなたに帰する。それは揺祭の胸や右のもとと同じく、あなたに帰する。一九イスラエルの人々が、主にささげる聖なる供え物はみな、あなたとあなたにむすこ娘とに与えて、永久に受ける分とする。これは主の前にあつて、あなたとあなたの子孫とに對し、永遠に変わぬ塩の契約である。二〇主はまたアロンに言われた、「あなたはイスラエルの人々の地のうちに、嗣業をもつてはならない。また彼らのうちに、何の分をも持つてはならない。彼らのうちにあつて、わたしがあなたの方であり、あなたの嗣業である。三わたしはレビの子孫にはイスラエルにおいて、すべて十分の一を嗣業として与え、その働き、すなわち、会見の幕屋の働きに報いる。三イスラエルの人々は、かさねて会見の幕屋に近づいてはならない。罪を得て死なないためである。三レビびとだけが会見の幕屋の働きをしなければならない。彼らがその罪を負うであらう。彼らがイスラエルの人々のうちに、嗣業の地を持たないことをもつて、あなたがたの代々ながく守るべき定

めとしなければならぬ。二四わたしはイスラエルの人々が供え物として主にささげる十分の一を、レビびとに嗣業として与えた。それで『彼らはイスラエルの人々のうちに、嗣業の地を持つてはならない』と、わたしは彼らに言つたのである」。

二五主はモーセに言われた、二六「レビびとに言いなさい、『わたしがイスラエルの人々から取つて、嗣業として与える十分の一を受ける時、あなたがたはその十分の一の十分の一を、主にささげなければならぬ。二七あなたがたのささげ物は、打ち場からの穀物や、酒ぶねからのぶどう酒と同じように見なされるであらう。二八そのようにあなたがたもまた、イスラエルの人々から受けるすべての十分の一の物のうちから、主に供え物をささげ、主にささげたその供え物を、祭司アロンに与えなければならぬ。二九あなたがたの受けるすべての贈物のうちから、その良いところ、すなわち、聖なる部分を取つて、ことごとく供え物として、主にささげなければならぬ』。三〇あなたがたはまた彼らに言いなさい、『あなたがたが、そのうちから良いところを取つてささげる時、その残りの部分はレビびとには、打ち場の産物や、酒ぶねの産物と同じように見なされるであらう。三一あなたがたと、あなたがたの家族とは、どこでそれを食べてもよい。これは会見の幕屋でああなたがたがする働きの報酬である。三二あなたがたが、その良いところをささげるときは、それによつて、あなたがたは罪を負わないであらう。あなたがたはイスラエルの

人々の聖なる供え物を汚してはならない。死をまぬかれるためである』。

第十九章

一主はモーセとアロンに言われた、二「主の命じられた律法の定めは次のとおりである。すなわち『イスラエルの人々に告げて、完全で、傷がなく、まだくびきを負つたことのない赤い雌牛を、あなたのもとに引いてこさせ、三これを祭司エレアザルにわたして、宿営の外にひき出させ、彼の前でこれをほふらせなければならぬ。四そして祭司エレアザルは、指をもつてその血を取り、会見の幕屋の表に向かつて、その血を七たびふりかけなければならぬ。五ついでその雌牛を自分の目の前で焼かせ、その皮と肉と血とは、その汚物と共に焼かなければならぬ。六そして祭司は香柏の木と、ヒソブと、緋の糸とを取つて雌牛の燃えていゝるなかに投げ入れなければならぬ。七そして祭司は衣服を洗ひ、水に身をすすいで後、宿営に、はいることが出来る。ただし祭司は夕まで汚れる。八またその雌牛を焼いた者も水で衣服を洗ひ、水に身をすすがなければならぬ。彼も夕まで汚れる。九それから身の清い者がひとり、その雌牛の灰を集め、宿営の外の清い所にたくわえておかなければならぬ。これはイスラエルの人々の会衆のため、汚れを清める水をつくるために備え

るものであつて、罪を清めるものである。一〇その雌牛の灰を集めた者は衣服を洗わなければならない。その人は夕まで汚れる。これはイスラエルの人々と、そのうちに宿っている他国人との、永久に守るべき定めとしなければならない。

二すべて人の死体に触れる者は、七日のあいだ汚れる。二三その人は三日目と七日目とに、この灰の水をもつて身を清めなければならない。そうすれば清くなるであらう。しかし、もし三日目と七日目とに、身を清めないならば、清くならないであらう。二三すべて死人の死体に触れて、身を清めない者は主の幕屋を汚す者で、その人はイスラエルから断たれなければならない。汚れを清める水がその身に注ぎかけられないゆえ、その人は清くならず、その汚れは、なお、その身にあるからである。

二四人が天幕の中で死んだ時に用いる律法は次のとおりである。すなわち、すべてその天幕にはいつた者、およびすべてその天幕にいた者は七日のあいだ汚れる。一五ふたで上をおおわない器はみな汚れる。一六つるぎで殺された者、または死んだ者、または人の骨、または墓などに、野外で触れる者は皆、七日のあいだ汚れる。一七汚れた者があつた時には、罪を清める焼いた雌牛の灰を取つて器に入れ、流れの水をこれに加え、一八身の清い者がひとりヒソプを取つて、その水に浸し、これをその天幕と、すべての器と、そこにいた人々と、骨、あるいは殺された者、あるいは死んだ者、あるいは墓などに触れた者にとにふりかけなければならない。

ならない。一九すなわちその身の清い人は三日目と七日目とにその汚れたものに、それをふりかけなければならない。そして七日目にその人は身を清め、衣服を洗い、水に身をすがなければならない。そうすれば夕になつて清くなるであらう。

三しかし、汚れて身を清めない人は主の聖所を汚す者で、その人は会衆のうちから断たれなければならない。汚れを清める水がその身に注ぎかけられないゆえ、その人は汚れているからである。三これは彼らの永久に守るべき定めとしなければならない。すなわち汚れを清める水をふりかけた者は衣服を洗わなければならない。また汚れを清める水に触れた者も夕まで汚れるであらう。三すべて汚れた人の触れる物は汚れる。またそれに触れる人も夕まで汚れるであらう』。

第二〇章

一イスラエルの人々の全会衆は正月になつてチンの荒野にはいつた。そして民はカデシにとどまつたが、ミリアムがそこで死んだので、彼女をそこに葬つた。

二そのころ会衆は水が得られなかつたため、相集まつてモーセとアロンに迫つた。三すなわち民はモーセと争つて言つた、「さきにわれわれの兄弟たちが主の前に死んだ時、われわれも死んでいたらよかつたものを。四なぜ、あなたがたは主の会衆をこ

の荒野に導いて、われわれと、われわれの家畜とを、ここで死なせようとするのですか。五 どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水もありません。六 そこでモーセとアロンは会衆の前を去り、会見の幕屋の入口へ行つてひれ伏した。すると主の栄光が彼らに現れ、七 主はモーセに言われた、八 「あなたは、つえをとリ、あなたの兄弟アロンと共に会衆を集め、その目の前で岩に命じて水を出させなさい。こうしてあなたは彼らのために岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませなさい。九 モーセは命じられたように主の前にあるつえを取った。一〇 モーセはアロンと共に会衆を岩の前に集めて彼らに言った、「そむく人たちよ、聞きなさい。われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならぬのであろうか。一 一 モーセは手をあげ、ついで岩を二度打つと、水がたくさんわき出たので、会衆とその家畜はともに飲んだ。二 そのとき主はモーセとアロンに言われた、「あなたがたはわたしを信じないで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかったから、この会衆をわたしが彼らに与えた地に導き入れることができないであらう。三 これがメリバの水であつて、イスラエルの人々はここで主と争つたが、主は自分の聖なることを彼らのうちに現された。

四 さて、モーセはカデシからエドムの王に使者をつかわして言った、「あなたの兄弟、イスラエルはこう申します、『あなたはわたしたちが遭遇したすべての患難をご存じです。一五 わたしたちの先祖はエジプトに下つて行つて、わたしたちは年久しくエジプトに住んでいましたが、エジプトびとがわたしたちと、わたしたちの先祖を悩ましたので、一六 わたしたちが主に呼ばわつたとき、主はわたしたちの声を聞き、ひとりの天の使をつかわして、わたしたちをエジプトから導き出されました。わたしたちは今あなたの領地の端にあるカデシの町におります。一七 どうぞ、わたしたちにあなたの国を通らせてください。わたしたちは畑もぶどう畑も通りません。また井戸の水も飲みません。ただ王の大路を通り、あなたの領地を過ぎるまでは右にも左にも曲りません。一八 しかし、エドムはモーセに言った、『あなたにはわたしの領地をとつてはなりません。さもないと、わたしはつるぎをもつて出て、あなたがたに立ちむかうでしょう。一九 イスラエルの人々はエドムに言った、『わたしたちは大路を通りません。もしわたしたちとわたしたちの家畜とが、あなたの水を飲むことがあれば、その価を払います。わたしは徒歩で通るだけです。二〇 何事もないでしょう。二一 しかし、エドムは『あなたは通ることはなりません』と言つて、多くの民と強い軍勢とを率いて、出て、これに立ちむかつてきた。二二 このようにエドムはイスラエルに、その領地を通ることを拒んだので、イスラエルはエ

ドムからほかに向かった。

三三こうしてイスラエルの人々の全会衆はカデシから進んでホル山に着いた。三主はエドムの国境に近いホル山で、モーセとアロンに言われた、二四「アロンはその民に連ならなければならぬ。彼はわたしがイスラエルの人々に与えた地に、はいることができない。これはメリバの水で、あなたがたがわたしの言葉にそむいたからである。二五あなたはアロンとその子エレアザルを連れてホル山に登り、二六アロンに衣服を脱がせて、それをその子エレアザルに着せなさい。アロンはそのところで死んで、その民に連なるであらう」。二七モーセは主が命じられたとおりにし、連れだつて全会衆の目の前でホル山に登った。二八そしてモーセはアロンに衣服を脱がせ、それをその子エレアザルに着せた。アロンはその山の頂で死んだ。そしてモーセとエレアザルは山から下つたが、二九全会衆がアロンの死んだのを見たとき、イスラエルの全家は三十日の間アロンのために泣いた。

第二章

一時にネゲブに住んでいたカナンびとアラデの王は、イスラエルがアタリムの道をとおつて来ると聞いて、イスラエルを攻撃し、そのうちの数人を捕虜にした。ニそこでイスラエルは主に誓

いを立てて言った、「もし、あなたがこの民をわたしの手にわたしてくださるならば、わたしはその町々をことごとく滅ぼしましょう」。三主はイスラエルの言葉を聞きいれ、カナンびとをわたされたので、イスラエルはそのカナンびとと、その町々をことごとく滅ぼした。それでその所の名はホルマと呼ばれた。

四民はホル山から進み、紅海の道をとおつて、エドムの地を回ろうとしたが、民はその道に堪えがたくなった。五民は神とモーセとにむかい、つぶやいて言った、「あなたがたはなぜわたしたちをエジプトから導き上つて、荒野で死なせようとするのですか。ここには食物もなく、水もありません。わたしたちはこの粗悪な食物はいやになりました」。六そこで主は、火のへびを民のうちに送られた。へびは民をかんだので、イスラエルの民のうち、

多くのものが死んだ。七民はモーセのもとに行つて言った、「わたしたちは主にむかい、またあなたにむかい、つぶやいて罪を犯しました。どうぞへびをわたしたちから取り去られるように主に祈ってください」。モーセは民のために祈った。ハそこで主はモーセに言われた、「火のへびを造つて、それをさおの上に掛けなさい。すべてのかまれた者が仰いで、それを見るならば生きるであらう」。九モーセは青銅で一つのへびを造り、それをさおの上に掛けて置いた。すべてへびにかまれた者はその青銅のへびを仰いで見て生きた。一〇イスラエルの人々は道を進んでオボテに宿営した。二またオボテから進んで東の方、モアブの前

にある荒野において、イエアバリムに宿営した。二三またそこから進んでゼレデの谷に宿営し、二三さらにそこから進んでアルノン川のかなたに宿営した。アルノン川はアモリびとの境から延び広がる荒野を流れるもので、モアブとアモリびとの間にあつて、モアブの境をなしていた。一四それゆえに、「主の戦いの書」にこう言われている。

「スパのワヘブ、

アルノンの谷々、

一五谷々の斜面、

アルの町まで傾き、

モアブの境に寄りかかる」。

一六彼らはそこからベエルへ進んで行った。これは主がモーセにむかつて、「民を集めよ。わたしはかれらに水を与えるであらう」と言われた井戸である。一七その時イスラエルはこの歌をうたつた。

「井戸の水よ、わきあがれ、

人々よ、この井戸のために歌え、

一八笏とつえとをもつて

つかさたちがこの井戸を掘り、

民のおさたちがこれを掘つた」。

そして彼らは荒野からマツタナに進み、一九マツタナからナハリエルに、ナハリエルからバモテに、二〇バモテからモアブの野に

ある谷に行き、荒野を見おろすビスガの頂に着いた。

二二ここでイスラエルはアモリびとの王シホンに使者をつかわして言わせた、二三「わたしにあなたの国を通らせてください。

わたしたちは畑にもぶどう畑にも、はいりません。また井戸の水も飲みません。わたしたちはあなたの領地を通り過ぎるまで、ただ王の大路を通ります」。二四しかし、シホンはイスラエルに自分の領地を通ることを許さなかつた。そしてシホンは民を

ことごとく集め、荒野に出て、イスラエルを攻めようとし、ヤハズにきてイスラエルと戦つた。二五イスラエルは、やいばで彼を

撃ちやぶり、アルノンからヤボクまで彼の地を占領し、アンモンびとの境に及んだ。ヤゼルはアンモンびとの境だからである。二五こうしてイスラエルはこれらの町々をことごとく取つ

た。そしてイスラエルはアモリびとのすべての町々に住み、ヘシボンとそれに附属するすべての村々にいた。二六ヘシボンはアモリびとの王シホンの都であつて、シホンはモアブの以前の王と戦つて、彼の地をアルノンまで、ことごとくその手から奪

い取つたのである。二七それゆえに歌にうたわれている。

「人々よ、ヘシボンにきたれ、

シホンの町を築き建てよ。

二八ヘシボンから火が燃え出し、

シホンの都から炎が出て、

モアブのアルを焼き尽し、

第二章

一 さて、イスラエルの人々はまた道を進んで、エリコに近いヨル

アルノンの高地の君たちを滅ぼしたからだ。
 ニルモアブよ、お前はわざわざいなるかな、
 ケモシの民よ、お前は滅ぼされるであろう。
 彼は、むすこらを逃げ去らせ、
 娘らをアモリびとの王シホンの捕虜とならせた。
 ミ○彼らの子らは滅び去った、
 ヘシボンからデボンまで。
 われわれは荒した、火はついてメデバに及んだ」。
 ミこうしてイスラエルはアモリびとの地に住んだが、ミモー
 セはまた人をつかわしてヤゼルを探らせ、ついにその村々を
 取って、そこにいたアモリびとを追い出し、ミ転じてバシヤ
 ンの道に上って行ったが、バシヤンの王オグは、その民をことごと
 く率い、エデレイで戦おうとして出迎えた。ミ主はモーセに言
 われた、「彼を恐れてはならない。わたしは彼とその民とその地
 とを、ことごとくあなたの手にわたす。あなたはヘシボンに住
 んでいたアモリびとの王シホンにしたように彼にもするであろ
 う」。ミそこで彼とその子とすべての民とを、ひとり残らず撃
 ち殺して、その地を占領した。

ダンのかなたのモアブの平野に宿営した。ニチツポルの子バラ
 クはイスラエルがアモリびとにしたすべての事を見たので、ミ
 モアブは大いにイスラエルの民を恐れた。その数が多かったた
 めである。モアブはイスラエルの人々をひじょうに恐れたの
 で、四ミデアンの長老たちに言った、「この群衆は牛が野の草を
 なめつくすように、われわれの周囲の物をみな、なめつくそうと
 している」。チツポルの子バラクはこの時モアブの王であった。
 五彼はアンモンびとの国のユフラテ川のほとりにあるペトルに
 使者をつかわし、ベオルの子バラムを招こうとして言わせた、
 「エジプトから出てきた民があり、地のおもてをおおってわたし
 の前にいます。六どうぞ今きてわたしのためにこの民をのろつ
 てください。彼らはわたしよりも強いのです。そうしてくださ
 れば、われわれは彼らを撃つて、この国から追い払うことができ
 るかもしれません。あなたが祝福する者は祝福され、あなたが
 のろう者はのろわれることをわたしは知っています」。
 セモアブの長老たちとミデアンの長老たちは占いの礼物を手
 にして出発し、バラムのもとへ行つて、バラクの言葉を告げた。
 ハバラムは彼らに言った、「今夜ここに泊まりなさい。主がわた
 しに告げられるとおりに、あなたがたに返答しましょう」。それ
 でモアブのつかさたちはバラムのもとにとどまった。九とときに
 神はバラムに臨んで言われた、「あなたのところにいるこの人々
 はだれですか」。一〇バラムは神に言った、「モアブの王チツポル

の子バラクが、わたしに人をよこして言いました。二『エジプトから出てきた民があり、地のおもてをおおっています。どうぞ今きてわたしのために彼らをのろつてください。そうすればわたしは戦って、彼らを追い払うことができるかもしれません』。三神はバラムに言われた、「あなたは彼らと一緒にいてはならない。またその民をのろつてはならない。彼らは祝福された者だからである」。四明くる朝起きて、バラムはバラクのつかさたちに言った、「あなたがたは国にお帰りなさい。主はわたしがあなたがたと一緒にいくことを、お許しになりません」。五モアブのつかさたちは立つてバラクのもとに行つて言った、「バラムはわたしたちと一緒に来ることを承知しません」。

六バラクはまた前の者よりも身分の高いつかさたちを前よりも多くつかわした。七彼らはバラムのところへ行つて言った、「チツポルの子バラクはこう申します、『どんな妨げをも顧みず、どうぞわたしのところへおいでください。七わたしはあなたを大いに優遇します。そしてあなたがわたしに言われる事はなんでもいたします。どうぞきてわたしのためにこの民をのろつてください』。八しかし、バラムはバラクの家来たちに答えた、『たといバラクがその家に満ちるほどの金銀をわたしに与えようと、事の大小を問わず、わたしの神、主の言葉を越えては何もすることができません。九それで、どうぞ、あなたがた

も今夜ここにとどまつて、主がこの上、わたしになんと仰せられるかを確かめさせてください。十夜になり、神はバラムに臨んで言われた、『この人々はあなたを招きにくたのだから、立つてこの人々と一緒に行きなさい。ただしわたしが告げることだけを行わなければならない』。

三明くる朝起きてバラムは、ろばにくらをおき、モアブのつかさたちと一緒にいった。三しかるに神は彼が行つたために怒りを発せられ、主の使は彼を妨げようとして、道に立ちふさがっていた。バラムは、ろばに乗り、そのしもべふたりも彼と共にいたが、三ろばは主の使が、手に抜き身のつるぎをもつて、道に立ちふさがっているのを見、道をそれて畑にはいったので、バラムは、ろばを打つて道に返そうとした。四しかるに主の使はまたぶどう畑の間の狭い道に立ちふさがっていた。道の両側には石がぎがあつた。五ろばは主の使を見て、石がきにすり寄り、バラムの足を石がきに押しつけたので、バラムは、また、ろばを打つた。六主の使はまた先に進んで、狭い所に立ちふさがっていた。そこは右にも左にも、曲る道がなかったので、ミろばは主の使を見てバラムの下に伏した。そこでバラムは怒りを発し、つえでろばを打つた。七すると、主が、ろばの口を開かれたので、ろばはバラムにむかつて言った、『わたしがあなたに何をしたというのですか。あなたは三度もわたしを打つたのです』。八バラムは、ろばに言った、『お前がわたしを侮つたか

らだ。わたしの手につるぎがあれば、いま、お前を殺してしまうのだが」。ミ〇ろばはまたバラムに言った、「わたしはあなたが、きょうまで長いあいだ乗られたるばではありませんか。わたしはいつでも、あなたにこのようにしたでしようか」。バラムは言った、「いや、しなかった」。

ミ二のとき主がバラムの目を開かれたので、彼は主の使が手に抜き身のつるぎをもつて、道に立ちふさがっているのを見て、頭を垂れてひれ伏した。ミ三の使は彼に言った、「なぜあなたは三度もろばを打ったのか。あなたが誤って道を行くので、わたしはあなたを妨げようとして出てきたのだ。ミ三ろばはわたしを見て三度も身を巡らしてわたしを避けた。もし、ろばが身を巡らしてわたしを避けなかったなら、わたしはきつと今あなたを殺して、ろばを生かしておいたであろう」。ミ四バラムは主の使に言った、「わたしは罪を犯しました。あなたがわたしをどうめようとして、道に立ちふさがっておられるのを、わたしは知りませんでした。それで今、もし、お気に召さないのであれば、わたしは帰りましょう」。ミ五主の使はバラムに言った、「この人々と一緒に行きなさい。ただし、わたしが告げることのみを述べなければならぬ」。こうしてバラムはバラムのつかさたちと一緒にいった。

ミ六さて、バラムはバラムがきたと聞いて、国境のアルノン川のほとり、国境の一端にあるモアブの町まで出て行って迎えた。

ミ七そしてバラムはバラムに言った、「わたしは人をつかわしてあなたを招いたではありませんか。あなたはなぜわたしのころへきませんでしたか。わたしは実際あなたを優遇することができないでしようか」。ミ八バラムはバラムに言った、「ごらんなさい。わたしはあなたのところにきています。しかし、今、何事かをみずから言うことができませんか。わたしはただ神がわたしの口に授けられることを述べなければなりません」。ミ九こうしてバラムはバラムと一緒にいき、キリアテ・ホゾテにきたとき、四〇バラムは牛と羊とをほふつて、バラムおよび彼と共にいたバラムを連れてきたつかさたちに贈った。

四一明くる朝バラムはバラムを伴ってバモテバアルにのぼり、そこからイスラエルの民の宿営の一端をながめさせた。

第二章

一バラムはバラムに言った、「わたしのために、ここに七つの祭壇を築き、七頭の雄牛と七頭の雄羊とを整えなさい」。ニバラムはバラムの言ったとおりにした。そしてバラムとバラムとは、その祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一頭とをささげた。ミ三バラムはバラムに言った、「あなたは燔祭のかたわらに立っててください。その間にわたしは行ってきます。主はたぶんわたしに会ってくださいでしょう。そして、主がわたしに示される事は

なんでもあなたに告げましょう」。こうして彼は一つのはげ山に登った。四神がバラムに会われたので、バラムは神に言った、「わたしは七つの祭壇を設け、祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一頭とをささげました」。五主はバラムの口に言葉を授けて言われた、「バラクのもとに帰ってこよう言いなさい」。六彼がバラクのもとに帰ってみると、バラクはモアブのすべてのつかさたちと共に燔祭のかたわらに立っていた。セバラムはこの託宣を述べた。

『バラクはわたしをアラムから招き寄せ、

モアブの王はわたしを東の山から招き寄せて言う、

『きてわたしのためにヤコブをのろえ、

きてイスラエルをのろえ』と。

八神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。

主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。

九岩の頂からながめ、

丘の上から見だが、

これはひとり離れて住む民、

もろもろの国民のうちに並ぶものはない。

一〇だれがヤコブの群衆を数え、

イスラエルの無数の民を数え得よう。

わたしは義人のように死に、

わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」。

二そこでバラクはバラムに言った、「あなたはわたしに何をす

るのですか。わたしは敵をのろうために、あなたを招いたのに、あなたはかえって敵を祝福するばかりです」。三バラムは答えた、「わたしは、主がわたしの口に授けられる事だけを語るように注意すべきではないでしょうか」。

三バラクは彼に言った、「わたしと一緒にほかのところへ行つて、そこから彼らをごらんください。あなたはただ彼らの一端を見るだけで、全体を見ることはできないでしょうが、そこからわたしのために彼らをのろってください」。四そして彼はバラムを連れてゾピムの野に行き、ピスガの頂に登つて、そこに七つの祭壇を築き、祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一頭とをささげた。五ときにはバラムはバラクに言った、「あなたはここで、燔祭のかたわらに立っていてください。わたしは向こうへ行つて、主に伺いますから」。六主はバラムに臨み、言葉を口に授けて言われた、「バラクのもとに帰つてこよう言いなさい」。七彼がバラクのところへ行つて見ると、バラクは燔祭のかたわらに立ち、モアブのつかさたちも共にいた。バラクはバラムに言った、「主はなんと言われましたか」。八そこでバラムはまたこの託宣を述べた。

『バラクよ、立って聞け、

チツポルの子よ、わたしに耳を傾けよ。

九神は人のように偽ることはなく、

また人の子のように悔いることもない。

言ったことで、行わないことがあるうか、語ったことで、しとげないことがあるうか。

二〇祝福せよとの命をわたしはうけた、すでに神が祝福されたものを、

わたしは変えることができない。

二だれもヤコブのうちに災のあるのを見ない、またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。

彼らの神、主が共にいまし、王をたたえる声がその中に聞える。

三神は彼らをエジプトから導き出された、彼らは野牛の角のようだ。

三ヤコブには魔術がなく、

イスラエルには占いがなく。

神がそのなすところを時に応じてヤコブに告げ、イスラエルに示されるからだ。

二四見よ、この民は雌じしのように立ち上がり、雄じしのように身を起す。

これはその獲物を食らい、

その殺した者の血を飲むまでは身を横たえない。

二五バラクはバラムに言った、「あなたは彼らをのろうことも祝福することも、やめてください」。二六バラムは答えてバラクに言った、「主の言われることは、なんでもしなければならぬ

と、わたしはあなたに告げませんでしたか」。二七バラクはバラムに言った、「どうぞ、おいでください。わたしはあなたをほかの所へお連れしましょう。神はあなたがそこからわたしのために彼らをのろうことを許されるかもしれせん」。二八そしてバラクはバラムを連れて、荒野を見おろすペオルの頂に行つた。二九バラムはバラクに言つた、「わたしのためにここに七つの祭壇を築き、雄牛七頭と、雄羊七頭とを整えなさい」。三〇バラクはバラムの言つたとおりにし、その祭壇ごとに雄牛一頭と雄羊一頭とをささげた。

第二四章

一バラムはイスラエルを祝福することが主の心になうのを見たので、今度はいつものように行つて魔術を求めることをせず、顔を荒野にむけ、二目を上げて、イスラエルがそれぞれ部族にしたがつて宿営しているのを見た。その時、神の霊が臨んだので、三彼はこの託宣を述べた。

「ペオルの子バラムの言葉、

目を閉じた人の言葉、

四神の言葉を聞く者、

全能者の幻を見る者、

倒れ伏して、目の開かれた者の言葉。

五ヤコブよ、あなたの天幕は麗しい、イスラエルよ、あなたのすまいは、麗しい。

六それは遠くひろがる谷々のよう、川べの園のよう、

主が植えられた沈香樹のよう、流れのほとりの香柏のようだ。

七水は彼らのかめからあふれ、

彼らの種は水の潤いに育つであろう。

彼らの王はアガグよりも高くなり、

彼らの国はあがめられるであろう。

八神は彼らをエジプトから導き出された、

彼らは野牛の角のようだ。

彼らは敵なる国々の民を滅ぼし、

その骨を砕き、

矢をもって突き通すであろう。

九彼らは雄じしのように身をかがめ、

雌じしのように伏している。

だれが彼らを起しえよう。

あなたを祝福する者は祝福され、

あなたをのろう者はのろわれるであろう。

一〇そこでバラクはバラムにむかつて怒りを発し、手を打ち鳴らした。そしてバラクはバラムに言った、「敵をのろうために招い

たのに、あなたはかえつて三度までも彼らを祝福した。一それ
で今あなたは急いで自分のところへ帰ってください。わたしは
あなたを大いに優遇しようと思つた。しかし、主はその優遇を
あなたに得させないようにされました。二バラムはバラクに
言った、「わたしはあなたがたに言つた通り、使者たちに言つた通り
ありませんか、三『たといバラクがその家に満ちるほどの金銀
をわたしに与えようと、主の言葉を越えて心のままに善も悪
も行ふことはできません。わたしは主の言われることを述べる
だけです』。四わたしは今わたしの民のところへ帰つて行きま
す。それでわたしはこの民が後の日にあなたの民にどんなこと
をするかをお知らせしましょう。五そしてこの託宣を述べ
た。

「ベオルの子バラムの言葉、

目を閉じた人の言葉。

一六神の言葉を聞く者、

いと高き者の知識をもつ者、

全能者の幻を見、

倒れ伏して、目の開かれた者の言葉。

一七わたしは彼を見る、しかし今ではない。

わたしは彼を望み見る、しかし近くではない。

ヤコブから一つの星が出、

イスラエルから一本のつえが起り、

モアブのこめかみと、

セツのすべての子らの脳天を撃つであろう。

一八 敵のエドムは領地となり、

セイルもまた領地となるであろう。

そしてイスラエルは勝利を得るであろう。

一九 権を執る者がヤコブから出、

生き残った者を町から断ち滅ぼすであろう。

二〇 バラムはまたアマレクを望み見て、この託宣を述べた。

「アマレクは諸国民のうちの最初のもの、

しかし、ついに滅び去るであろう」。

二一 またケニびとを望み見てこの託宣を述べた。

「お前のすみかは堅固だ、

岩に、お前は巢をつくっている。

二三 しかし、カインは滅ぼされるであろう。

アシユルはいつまでお前を捕虜とするであろうか」。

二三 彼はまたこの託宣を述べた。

「ああ、神が定められた以上、

だれが生き延びることができよう。

二四 キツテムの海岸から舟がきて、

アシユルを攻めなやまし、

エベルを攻めなやますであろう。

そして彼もまたついに滅び去るであろう」。

二五 こうしてバラムは立ち上がって、自分のところへ帰っていった。バラムもまた立ち去った。

第二章

イスラエルはシツテムにとどまっていたが、民はモアブの娘たちと、みだらな事をし始めた。二 その娘たちが神々に犠牲をささげる時に民を招くと、民は一緒にそれを食べ、娘たちの神々を拜んだ。三 イスラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがったので、主はイスラエルにむかつて怒りを発せられた。四 そして主はモーセに言われた、「民の首領をことごとく捕え、日のあるうちにその人々を主の前で処刑しなさい。そうすれば主の怒りはイスラエルを離れるであろう」。五 モーセはイスラエルのさばきびとたちにむかつて言った、「あなたがたはおのの、配下の者どもでペオルのバアルにつきしたがったものを殺しなさい」。

六 モーセとイスラエルの人々の全会衆とが会見の幕屋の入口で泣いていた時、彼らの目の前で、ひとりのイスラエルびとが、その兄弟たちの中に、ひとりのミデアンの女を連れてきた。七 祭司アロンの子なるエレアザルの子ピネハスはこれを見て、会衆のうちから立ち上がり、やりを手に執り、ハそのイスラエルの人の後を追って、奥の間に入り、そのイスラエルの人を突

き、またその女の腹を突き通して、ふたりを殺した。こうして疫病がイスラエルの人々に及ぶのがやんだ。九しかし、その疫病で死んだ者は二万四千人であつた。

一〇主はモーセに言われた、二「祭司アロンの子なるエレアザルの子ピネハスは自分のことのように、わたしの憤激をイスラエルの人々のうちに表わし、わたしの怒りをそのうちから取り去つたので、わたしは憤激して、イスラエルの人々を滅ぼすことをしなかつた。三このゆえにあなたは言いなさい、『わたしは平和の契約を彼に授ける。四これは彼とその後の子孫に永遠の祭司職の契約となるであらう。彼はその神のために熱心であつて、イスラエルの人々のために罪のあがないをしたからである』と」。

一四ミデアンの女と共に殺されたイスラエルの人の名はジムリといい、サルの子で、シメオンびとのうちの一族のつかさであつた。一五またその殺されたミデアンの女の名はコズビといい、ツルの娘であつた。ツルはミデアンの民の一族のかしらであつた。一六主はまたモーセに言われた、一七「ミデアンびとを打ち悩ましなさい。一八彼らはたくらみをもつて、あなたがたを悩まし、ペオルの事と、彼らの姉妹、ミデアンのつかさの娘コズビ、すなわちペオルの事により、疫病の起つた日に殺された女の事とによって、あなたがたを惑わしたからである」。

第二十六章

一疫病の後、主はモーセと祭司アロンの子エレアザルと言われた、二「イスラエルの人々の全会衆の総数をその父祖の家にしたがつて調べ、イスラエルにおいて、すべて戦争に出ることのできる二十歳以上の者を数えなさい」。三そこでモーセと祭司エレアザルとは、エリコに近いヨルダンのほとりにあるモアブの平野で彼らに言つた、四「主がモーセに命じられたように、あなたがたのうちの二十歳以上の者を数えなさい」。エジプトの地から出てきたイスラエルの人々は次のとおりである。

五ルベンがイスラエルの長子である。ルベンの子孫は、ヘノクからヘノクびとの氏族が出、パルからパルびとの氏族が出、ヘゾロンからヘゾロンびとの氏族が出、カルミからカルミびとの氏族が出た。セこれらはルベンびとの氏族であつて、数えられたものは四万三千七百三十人であつた。ハまたパルの子はエリアブ。九エリアブの子はネムエル、ダタン、アビラムである。このダタンとアビラムとは会衆のうちから選出された者で、コラのもがらと共にモーセとアロンとに逆らつて主と争つた時、一〇地は口を開いて彼らとコラとをのみ、その仲間らは死んだ。その時二百五十人が火に焼き滅ぼされて、戒めの鏡となつた。一二ただし、コラの子たちは死ななかつた。

一三シメオンの子孫は、その氏族によれば、ネムエルからネムエ

ルびとの氏族が出、ヤミンからヤミンびとの氏族が出、ヤキンからヤキンびとの氏族が出、ニゼラからゼラびとの氏族が出、シヤウルからシヤウルびとの氏族が出た。一四これらはシメオンびとの氏族であつて、数えられた者は二万二千二百人であつた。

一五ガドの子孫は、その氏族によれば、ゼボンからゼボンびとの氏族が出、ハギからハギびとの氏族が出、シユニからシユニびとの氏族が出、一六オズニからオズニびとの氏族が出、エリからエリびとの氏族が出、一七アロドからアロドびとの氏族が出、アレリからアレリびとの氏族が出た。一八これらはガドの子孫の氏族であつて、数えられた者は四万五百人であつた。

一九ユダの子らはエルとオナンとであつて、エルとオナンとはカナンので死んだ。二〇ユダの子孫は、その氏族によれば、シラからシラびとの氏族が出、ペレヅからペレヅびとの氏族が出、ゼラからゼラびとの氏族が出た。二一ペレヅの子孫は、ヘヅロンからヘヅロンびとの氏族が出、ハムルからハムルびとの氏族が出た。二二これらはユダの氏族であつて、数えられた者は七万六千五百人であつた。

二三イスサカルの子孫は、その氏族によれば、トラからトラびとの氏族が出、プワからプワびとの氏族が出、二四ヤシユブからヤシユブびとの氏族が出、シムロンからシムロンびとの氏族が出た。二五これらはイスサカルの氏族であつて、数えられた者は六

万四千三百人であつた。二六ゼブルンの子孫は、その氏族によれば、セレデからセレデびとの氏族が出、エロンからエロンびとの氏族が出、ヤリエルからヤリエルびとの氏族が出た。二七これらはゼブルンびとの氏族であつて、数えられた者は六万五百人であつた。

二八ヨセフの子らは、その氏族によれば、マナセとエフライムとであつて、二九マナセの子孫は、マキルからマキルびとの氏族が出た。マキルからギレアデが生まれ、ギレアデからギレアデびとの氏族が出た。三〇ギレアデの子孫は次のとおりである。イエゼルからイエゼルびとの氏族が出、ヘレクからヘレクびとの氏族が出、三二アスリエルからアスリエルびとの氏族が出、シケムからシケムびとの氏族が出、三三セミダからセミダびとの氏族が出、ヘペルからヘペルびとの氏族が出た。三三ヘペルの子ゼロペハデには男の子がなく、ただ女の子のみで、ゼロペハデの女の子の名はマアラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといった。三四これらはマナセの氏族であつて、数えられた者は五万二千七百人であつた。

三五エフライムの子孫は、その氏族によれば、次のとおりである。シユテラからはシユテラびとの氏族が出、ベケルからベケルびとの氏族が出、タハンからタハンびとの氏族が出た。三六またシユテラの子孫は次のとおりである。すなわちエランからエランびとの氏族が出た。三七これらはエフライムの子孫の氏族で

あつて、数えられた者は三万二千五百人であつた。以上はヨセフの子孫で、その氏族によるものである。

三八ベニヤミンの子孫は、その氏族によれば、ベラからベラびとの氏族が出、アシベルからアシベルびとの氏族が出、アヒラムからアヒラムびとの氏族が出、ミルシユパムからシユパムびとの氏族が出、ホバムからホバムびとの氏族が出た。四〇ベラの子はアルデとナアマンとであつて、アルデからアルデびとの氏族が出、ナアマンからナアマンびとの氏族が出た。四一これらはベニヤミンの子孫であつて、その氏族によれば数えられた者は四万五千六百人であつた。

四二ダンの子孫は、その氏族によれば、次のとおりである。シユハムからシユハムびとの氏族が出た。これらはダンの氏族であつて、その氏族によるものである。四三シユハムびとのすべての氏族のうち、数えられた者は六万四千四百人であつた。

四四アセルの子孫は、その氏族によれば、エムナからエムナびとの氏族が出、エスイからエスイびとの氏族が出、ベリアからベリアびとの氏族が出た。四五ベリアの子孫のうちへベルからへベルびとの氏族が出、マルキエルからマルキエルびとの氏族が出た。四六アセルの娘の名はサラといった。四七これらはアセルの子孫の氏族であつて、数えられた者は五万三千四百人であつた。四八ナフタリの子孫は、その氏族によれば、ヤジエルからヤジエルびとの氏族が出、グニからグニびとの氏族が出、四九エゼルか

らエゼルびとの氏族が出、シレムからシレムびとの氏族が出た。五〇これらはナフタリの氏族であつて、その氏族により、数えられた者は四万五千四百人であつた。

五一これらはイスラエルの子孫の数えられた者であつて、六十万一千百三十人であつた。

五二主はモーセに言われた、五三「これらの人々に、その名の数にしたがつて地を分け与え、嗣業とさせなさい。五四大きい部族には多くの嗣業を与え、小さい部族には少しの嗣業を与えなさい。すなわち数えられた数にしたがつて、おのおのの部族にその嗣業を与えなければならぬ。五五ただし地は、くじをもつて分け、その父祖の部族の名にしたがつて、それを継がなければならぬ。五六すなわち、くじをもつてその嗣業を大きいものと、小さいものとに分けなければならない」。

五七レビびとのその氏族にしたがつて数えられた者は次のとおりである。ゲルシヨンからゲルシヨンびとの氏族が出、コハテからコハテびとの氏族が出、メラリからメラリびとの氏族が出た。五八レビの氏族は次のとおりである。すなわちリブニびとの氏族、ヘブロンびとの氏族、マハリびとの氏族、ムシびとの氏族、コラびとの氏族であつて、コハテからアムラムが生れた。五九アムラムの妻の名はヨケベデといつて、レビの娘である。彼女はエジプトでレビに生れた者であるが、アムラムにとついで、アロンとモーセおよびその姉妹ミリアムを産んだ。六〇アロ

ンにはナダブ、アビウ、エレアザルおよびイタマルが生れた。六
 ナダブとアビウは異火を主の前にささげた時に死んだ。六二そ
 の数えられた一か月以上のすべての男子は二万三千人であつ
 た。彼らはイスラエルの人々のうちに嗣業を与えられなかつ
 たため、イスラエルの人々のうちに数えられなかつた者である。
 六三これらはモーセと祭司エレアザルが、エリコに近いヨルダン
 のほとりにあるモアブの平野で数えたイスラエルの人々の数で
 ある。六四ただしそのうちには、モーセと祭司アロンがシナイの
 荒野でイスラエルの人々を数えた時に数えられた者はひとりも
 なかった。六五それは主がかつて彼らについて「彼らは必ず荒野
 で死ぬであらう」と言われたからである。それで彼らのうちエ
 フンネの子カレブとヌンの子ヨシユアのほか、ひとりも残つた
 者はなかった。

第二十七章

一さて、ヨセフの子マナセの氏族のうちのヘベルの子、ゼロペハ
 デの娘たちが訴えてきた。ヘベルはギレアデの子、ギレアデは
 マキルの子、マキルはマナセの子である。その娘たちは名をマ
 アラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといったが、ニ彼らは会見
 の幕屋の入口でモーセと、祭司エレアザルと、つかさたちと全
 会衆との前に立つて言った、三「わたしたちの父は荒野で死に

ました。彼は、コラの仲間となつて主に逆らつた者どもの仲間
 のうちには加わりませんでした。彼は自分の罪によつて死んだ
 のですが、男の子がありませんでした。四男の子がないからと
 いて、どうしてわたしたちの父の名がその氏族のうちから削
 られなければならないのでしょうか。わたしたちの父の兄弟
 と同じように、わたしたちにも所有地を与えてください」。

五モーセがその事を主の前に述べると、六主はモーセに言われ
 た、七「ゼロペハデの娘たちの言うことは正しい。あなたは必ず
 彼らの父の兄弟たちと同じように、彼らにも嗣業の所有地を
 与えなければならぬ。すなわち、その父の嗣業を彼らに渡さな
 ければならぬ。八あなたはイスラエルの人々に言いなさい、
 『もし人が死んで、男の子がない時は、その嗣業を娘に渡さな
 ればならない。九もしまた娘もない時は、その嗣業を兄弟に与
 えなければならぬ。一〇もし兄弟もない時は、その嗣業を父
 の兄弟に与えなければならぬ。一一もしまた父に兄弟がない
 時は、その氏族のうちに最も近い親族にその嗣業を与えて
 所有させなければならぬ』。主がモーセに命じられたように
 イスラエルの人々は、これをおきての定めとしなければなら
 ない」。

一二主はモーセに言われた、「このアバリムの山に登つて、わたし
 がイスラエルの人々に与える地を見なさい。一三あなたはそれ
 を見てから、兄弟アロンのようにその民に加えられるであら

う。二四これは会衆がチンの荒野で逆らい争った時、あなたがたはわたしの命にそむき、あの水のかたわらで彼らの目の前にわたしの聖なることを現さなかったからである」。これはチンの荒野にあるカデシのメリバの水である。一五モーセは主に言った、二六「すべての肉なるものの命の神、主よ、どうぞ、この会衆の上にひとりの人を立て、二七彼らの前に出入りし、彼らを導き出し、彼らを導き入れる者とし、主の会衆を牧者のない羊のようにしないでください」。一八主はモーセに言われた、「神の霊のやどっているヌンの子ヨシアを選び、あなたの手をその上におき、一九彼を祭司エレアザルと全会衆の前に立たせて、彼らの前で職に任じなさい。二〇そして彼にあなたの権威を分け与え、イスラエルの人々の全会衆を彼に従わせなさい。二一彼は祭司エレアザルの前に立ち、エレアザルは彼のためにウリムをもつて、主の前に判断を求めなければならない。ヨシアとイスラエルの人々の全会衆とはエレアザルの言葉に従つていで、エレアザルの言葉に従つてはいなければならない」。三三そこでモーセは主が命じられたようにし、ヨシアを選んで、祭司エレアザルと全会衆の前に立たせ、三三彼の上に手をおき、主がモーセによつて語られたとおりに彼を任命した。

第二十八章

一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に命じて言いなさい、『あなたがたは香ばしいかおりとしてわたしにささげる火祭、すなわち、わたしの供え物、わたしの食物を定めるときにわたしにささげることを怠つてはならない』。三また彼らに言いなさい、『あなたがたが主にささぐべき火祭はこれである。すなわち一歳の雄の全き小羊二頭を毎日ささげて常燔祭としなければならない。四すなわち一頭の小羊を朝にささげ、一頭の小羊を夕にささげなければならない。五また麦粉一エパの十分の一に、砕いて取った油一ヒンの四分の一を混ぜて素祭としなければならない。六これはシナイ山で定められた常燔祭であつて、主に香ばしいかおりとしてささげる火祭である。七またその灌祭は小羊一頭について一ヒンの四分の一をささげなければならない。すなわち聖所において主のために濃い酒をそそいで灌祭としなければならない。八夕には他の一頭の小羊をささげなければならない。その素祭と灌祭とは朝のものと同じようにし、その小羊を火祭としてささげ、主に香ばしいかおりとしなければならない。九また安息日には一歳の雄の全き小羊二頭と、麦粉一エパの十分の二に油を混ぜた素祭と、その灌祭とをささげなければならない。一〇これは安息日ごとの燔祭であつて、常燔祭とその灌祭

とに加へらるべきものである。

二 またあなたがたは月々の第一日に燔祭を主にささげなければならぬ。すなわち若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の雄の全き小羊七頭をささげ、三雄牛一頭には麦粉一エパの十分の三に油を混ぜたものを素祭とし、雄羊一頭には麦粉一エパの十分の二に油を混ぜたものを素祭とし、三小羊一頭には麦粉十分の一に油を混ぜたものを素祭とし、これを香ばしいかおりの燔祭として主のために火祭としなければならぬ。一四 またその灌祭は雄牛一頭についてぶどう酒一ヒンの二分の一、雄羊一頭について一ヒンの三分の一、小羊一頭について一ヒンの四分の一をささげなければならぬ。これは年の月々を通じて、新月ごとにささぐべき燔祭である。一五 また常燔祭とその灌祭とのほかに、雄やぎ一頭を罪祭として主にささげなければならぬ。

二六 正月の十四日は主の過越の祭である。一七 またその月の十五日は祭日としなければならぬ。七日のあいだ種入れぬパンを食べなければならぬ。一八 その初めの日には聖会を開かなければならぬ。なんの労役をもしてはならない。一九 あなたがたは火祭として主に燔祭をささげなければならぬ。すなわち若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊七頭をささげなければならぬ。これらはみな全きものでなければならぬ。二〇 その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければならぬ。すなわち雄牛一頭につき麦粉一エパの十分の三、雄羊一頭につき十分

の二をささげ、三 また七頭の小羊にはその一頭ごとに十分の一をささげなければならぬ。二三 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげ、あなたがたのために罪のあがないをしなければならぬ。二四 あなたがたは朝にささげる常燔祭の燔祭のほかに、これらをささげなければならぬ。二五 このようにあなたがたは七日のあいだ毎日、火祭の食物をささげて、主に香ばしいかおりとしなければならぬ。これは常燔祭とその灌祭とのほかにささぐべきものである。二六 そして第七日に、あなたがたは聖会を開かなければならぬ。なんの労役をもしてはならない。

二七 あなたがたは七週の祭、すなわち新しい素祭を主にささげる初穂の日にも聖会を開かなければならぬ。なんの労役をもしてはならない。二八 あなたがたは燔祭をささげて、主に香ばしいかおりとしなければならぬ。すなわち若い雄牛二頭、雄羊一頭、一歳の雄の小羊七頭をささげなければならぬ。二九 その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければならぬ。すなわち雄牛一頭につき一エパの十分の三、雄羊一頭につき十分の二をささげ、三〇 また七頭の小羊には一頭ごとに十分の一をささげなければならぬ。三一 また雄やぎ一頭をささげてあなたがたのために罪のあがないをしなければならぬ。三二 あなたがたは常燔祭とその素祭とその灌祭とのほかに、これらをささげなければならぬ。これらはみな、全きものでなければならぬ。

第二十九章

一 七月には、その月の第一日に聖会を開かなければならない。なんの労役をもしてはならない。これはあなたがたがラツパを吹く日である。二 あなたがたは燔祭をささげて、主に香ばしいかおりとしなければならぬ。すなわち若い雄牛一頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊七頭をささげなければならない。三 その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければならない。すなわち雄牛一頭について一エパの十分の三、雄羊一頭について十分の二をささげ、四 また七頭の山羊には一頭ごとに十分の一をささげなければならない。五 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげ、あなたがたのために罪のあがないをしなければならぬ。六 これは新月の燔祭とその素祭、常燔祭とその素祭、および灌祭のほかのものであつて、これらのものの定めにしたがい、香ばしいかおりとして、主に火祭としなければならぬ。

七 またその七月の十日に聖会を開き、かつあなたがたの身を悩まさなければならぬ。なんの仕事もしてはならない。八 あなたがたは主に燔祭をささげて、香ばしいかおりとしなければならぬ。すなわち若い雄牛一頭、雄羊二頭、一歳の雄の小羊七頭をささげなければならない。これらはみな全きものでなければならぬ。九 その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければならない。すなわち雄牛一頭につき一エパの十分の三、雄羊一頭

につき十分の二をささげ、一〇 また七頭の山羊には一頭ごとに十分の一をささげなければならない。一一 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは贖罪の罪祭と常燔祭とその素祭、および灌祭のほかのものである。

三 七月の十五日に聖会を開かなければならない。なんの労役もしてはならない。七日のあいだ主のために祭をしなければならぬ。三 あなたがたは燔祭をささげて、主に香ばしいかおりの火祭としなければならない。すなわち若い雄牛十三頭、雄羊二頭、一歳の雄の小羊十四頭をささげなければならない。これらはみな全きものでなければならぬ。四 その素祭には油を混ぜた麦粉をささげなければならない。すなわち十三頭の雄牛には一頭ごとに十分の三、その二頭の雄羊には一頭ごとに十分の二をささげ、一五 その十四頭の山羊には一頭ごとに十分の一をささげなければならない。一六 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほかのものである。

七 第二日には若い雄牛十二頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をささげなければならない。一八 その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭とはその数にしたがつて、定めのようにささげなければならない。一九 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほかのものである。二〇 第三日には雄牛十一頭、雄羊二

頭、一歳の雄の全き小羊十四頭をささげなければならない。三
その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭とは、その数にし
たがって定めのようにささげなければならない。三また雄や
ぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは
常燔祭とその素祭および灌祭のほかのものである。

三三 第四日には雄牛十頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭
をささげなければならない。三四 その雄牛と雄羊と小羊とのた
めの素祭と灌祭とは、その数にしたがって定めのようにささげ
なければならない。三五 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげな
ければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほ
かのものである。

三六 第五日には雄牛九頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭
をささげなければならない。三七 その雄牛と雄羊と小羊とのた
めの素祭と灌祭とは、その数にしたがって定めのようにささげ
なければならない。三八 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげな
ければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほ
かのものである。

三九 第六日には雄牛八頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭
をささげなければならない。四〇 その雄牛と雄羊と小羊とのた
めの素祭と灌祭とは、その数にしたがって定めのようにささげ
なければならない。四一 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげな
ければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほ

かのものである。

三三 第七日には雄牛七頭、雄羊二頭、一歳の雄の全き小羊十四頭
をささげなければならない。三三 その雄牛と雄羊と小羊とのた
めの素祭と灌祭とは、その数にしたがって定めのようにささげ
なければならない。三四 また雄やぎ一頭を罪祭としてささげな
ければならない。これらは常燔祭とその素祭および灌祭のほ
かのものである。

三五 第八日にはまた集会を開かなければならない。なんの労役
をもしてはならない。三六 あなたがたは燔祭をささげて主に香
ばしいかおりの火祭としなければならない。すなわち雄牛一
頭、雄羊一頭、一歳の雄の全き小羊七頭をささげなければならな
い。三七 その雄牛と雄羊と小羊とのための素祭と灌祭とは、その
数にしたがって定めのようにささげなければならない。三八 ま
た雄やぎ一頭を罪祭としてささげなければならない。これらは
常燔祭とその素祭および灌祭のほかのものである。

三九 あなたがたは定めの際の時に、これらのものを主にささげな
ければならない。これらはあなたがたの誓願、または自発の供
え物としてささげる燔祭、素祭、灌祭および酬恩祭のほかのも
のである。』

四〇 モーセは主が命じられた事をことごとくイスラエルの人々
に告げた。

第三〇章

「モーセはイスラエルの人々の部族のかしらたちに言った、「これは主が命じられた事である。もし人が主に誓願をかけ、またはその身に物断ちをしようと誓いをするならば、その言葉を破つてはならない。口で言つたとおりにすべて行わなければならない。三またもし女がまだ若く、父の家において、主に誓願をかけ、またはその身に物断ちをしようとする時、四父が彼女の誓願、または彼女の身に断つた物断ちのことを聞いて、彼女に何も言わないならば、彼女はすべて誓願を行い、またその身に断つた物断ちをすべて守らなければならない。五しかし、彼女の父がそれを聞いた日に、それを承認しない時は、彼女はその誓願、またはその身に断つた物断ちをすべてやめることができる。父が承認しないのであるから、主は彼女をゆるさるであらう。六またもし夫のある身で、みづから誓願をかけ、またはその身に物断ちをしようと、軽々しく口で言つた場合、七夫がそれを聞き、それを聞いた日に彼女に何も言わないならば、彼女はその誓願を行い、その身に断つた物断ちを守らなければならない。八しかし、もし夫がそれを聞いた日に、それを承認しないならば、夫はその女がかけた誓願、またはその身に物断ちをしようと、軽々しく口に言つたことをやめさせることができる。主はその女をゆるさるであらう。九しかし、寡婦あるいは離縁された女の

誓願、すべてその身に断つた物断ちは、それを守らなければならない。一〇もし女が夫の家で誓願をかけ、またはその身に物断ちをしようと誓つた時、二夫がそれを聞いて、彼女に何も言わず、またそれに反対しないならば、その誓願はすべて行わなければならない。またその身に断つた物断ちはすべて守らなければならない。三しかし、もし夫がそれを聞いた日にそれを認めないならば、彼女の誓願、または身の物断ちについて、彼女が口で言つた事は、すべてやめることができる。夫がそれを認めなかったのだから、主はその女をゆるさるであらう。四すべての誓願およびすべてその身を悩ます物断ちの誓約は、夫がそれを守らせることができ、または夫がそれをやめさせることができる。五もし夫が彼女に何も言わずに日を送るならば、彼は妻がした誓願、または物断ちをすべて認めたのである。彼はそれを聞いた日に妻に何も言わなかったのだから、それを認めたのである。六しかし、もし夫がそれを聞き、あとになって、それを認めないならば、彼は妻の罪を負わなければならない。七一六これらは主がモーセに命じられた定めであつて、夫と妻との間、および父とまだ若くて父の家にいる娘との間に關するものである。

第二章

一さて主はモーセに言われた、「ミデアンびとにイスラエルの
人々のあだを報いなさい。その後、あなたはあなたの民に加え
られるであろう」。ミモーセは民に言った、「あなたがたのうちか
ら人を選んで戦いのために武装させ、ミデアンびとを攻めて、主
のためミデアンびとに復讐しなさい。四すなわちイスラエルの
すべての部族から、部族ごとに千人ずつを戦いに送り出さなけ
ればならない」。五そこでイスラエルの部族のうちから部族ごと
に千人ずつを選び、一万二千人を得て、戦いのために武装させ
た。六モーセは各部族から千人ずつを戦いにつかわし、また祭司
エレアザルの子ピネハスに、聖なる器と吹き鳴らすラツパとを
執らせて、共に戦いにつかわした。七彼らは主がモーセに命じら
れたようにミデアンびとと戦って、その男子をみな殺した。八
その殺した者のほかにまたミデアンの王五人を殺した。その名
はエビ、レケム、ツル、フル、レバである。またバオルの子バラ
ムをも、つるぎにかけて殺した。九またイスラエルの人々はミデ
アンの女たちとその子供たちを捕虜にし、その家畜と、羊の群
れと、貨財とをことごとく奪い取り、一〇そのすまいのある町々
と、その部落とを、ことごとく火で焼いた。一一こうして彼らは
すべて奪ったものと、かすめたものとは人をも家畜をも取り、一
二その生けどつた者と、かすめたものと、奪ったものとを携え

て、エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野の宿営にお
るモーセと祭司エレアザルとイスラエルの人々の会衆のもと
へもどつてきた。

一三ときにモーセと祭司エレアザルと会衆のつかさたちはみな
宿営の外に出て迎えたが、一四モーセは軍勢の將たち、すなわち
戦場から帰つてきた千人の長たちと、百人の長たちに対して
怒つた。一五モーセは彼らに言った、「あなたがたは女たちをみ
な生かしておいたのか。一六彼らはバラムのはかりごとによつ
て、イスラエルの人々に、バオルのことで主に罪を犯させ、つい
に主の会衆のうちに疫病を起すに至つた。一七それで今、この
子供たちのうちの男の子をみな殺し、また男と寝て、男を知つ
た女をみな殺しなさい。一八ただし、まだ男と寝ず、男を知らな
い娘はすべてあなたがたのために生かしておきなさい。一九そ
してあなたがたは七日のあいだ宿営の外にとどまりなさい。
あなたがたのうちすべて人を殺した者、およびすべて殺された
者に触れた者は、あなたがた自身も、あなたがたの捕虜も共に、
三日目と七日目とに身を清めなければならない。二〇またすべ
ての衣服と、すべての皮の器と、すべてやぎの毛で作つたもの
と、すべての木の器とを清めなければならない」。

二一祭司エレアザルは戦いに出たいくさびとたちに言った、「こ
れは主がモーセに命じられた律法の定めである。二三金、銀、
青銅、鉄、すず、鉛など、二三すべて火に耐える物は火の中を通

さなければならぬ。そうすれば清くなるであろう。なおその上、汚れた清める水で、清めなければならない。しかし、すべて火に耐えないものは水の中を通さなければならない。二四あなたがたは七日目に衣服を洗わなければならない。そして清くなり、その後宿営にはいることができる」。

三五主はモーセに言われた、二六「あなたと祭司エレアザルおよび会衆の氏族のかしらたちは、その生けடுத்த人と家畜の獲物の総数を調べ、二モその獲物を戦いに出的勇士と、全会衆とに折半しなさい。二八そして戦いに出的いくさびとに、人または牛、またはろば、または羊を、おのおの五百ごとに一つを取り、みつぎとして主にささげさせなさい。二九すなわち彼らが受ける半分のなかから、それを取り、主にささげる物として祭司エレアザルに渡しなさい。三〇またイスラエルの人々が受ける半分のなかから、その獲た人または牛、またはろば、または羊などの家畜を、おのおの五十ごとに一つを取り、主の幕屋の務をするレビびとに与えなさい」。三一モーセと祭司エレアザルとは主がモーセに命じられたとおりに行った。

三二そこでその獲物、すなわち、いくさびとたちが奪い取ったものの残りは羊六十七万五千、三三牛七万二千、三四ろば六万一千、三五人三万二千、これはみな男と寝ず、男を知らない女であった。三六そしてその半分、すなわち戦いに出的者の分は羊三十三万七千五百、三七主にみつぎとした羊は六百七十五。三八牛は三

万六千、そのうちから主にみつぎとしたものは七十二。三九ろばは三万五百、そのうちから主にみつぎとしたものは六十一。四〇人は一万六千、そのうちから主にみつぎとしたものは三十二人であった。四一モーセはそのみつぎを主にささげる物として祭司エレアザルに渡した。主がモーセに命じられたとおりである。

四二モーセが戦いに出的人々とは別にイスラエルの人々に与えた半分、四三すなわち会衆の受けた半分は羊三十三万七千五百、四四牛三万六千、四五ろば三万五百、四六人一万六千であつて、四七モーセはイスラエルの人々の受けた半分のなかから、人および獣をおのおの五十ごとに一つを取つて、主の幕屋の務をするレビびとに与えた。主がモーセに命じられたとおりにである。

四八時に軍勢の将であつたものども、すなわち千人の長たちと百人の長たちとがモーセのところに来て、四九モーセに言つた、「しもべらは、指揮下のいくさびとを数えましたが、われわれのうち、ひとりも欠けた者はありませんでした。五〇それで、われわれは、おのおの手に入れた金の飾り物、すなわち腕飾り、腕輪、指輪、耳輪、首飾りなどを主に携えてきて供え物とし、主の前にわれわれの命のあがないをしようと思ひます」。五一モーセと祭司エレアザルとは、彼らから細工を施した金の飾り物を受け取つた。五二千人の長たちと百人の長たちとが、主にささげものとした金は合わせて一万六千七百五十シケル。五三いくさびと

は、おのおの自分のぶんどり物を獲た。五、四、モーセと祭司エレザルとは、千人の長たちと百人の長たちとから、その金を受け取り、それを携えて会見の幕屋に入り、主の前に置いてイスラエルの人々のために記念とした。

第三二章

ー ルベンの子孫とガドの子孫とは非常に多くの家畜の群れを持っていた。彼らがヤゼルの地と、ギレアデの地を見ると、そこは家畜を飼うのに適していたので、ニガドの子孫とルベンの子孫とがきて、モーセと、祭司エレザルと、会衆のつかさたちとに言った、ミ「アタロテ、デボン、ヤゼル、ニムラ、ヘシボン、エレアレ、シバム、ネボ、ベオン、四すなわち主がイスラエルの会衆の前に撃ち滅ぼされた国は、家畜を飼うのに適した地ですが、しもべらは家畜を持っています」。五、彼らはまた言った、「それでもし、あなたの恵みを得られますなら、どうぞこの地をしもべらの領地にして、われわれにヨルダンを渡らせないでください」。

六、モーセはガドの子孫とルベンの子孫とに言った、「あなたがたは兄弟が戦いに行くのに、ここにすわつていようというのか。セ、どうしてあなたがたはイスラエルの人々の心をくじいて、主が彼らに与えられる地に渡ることができないようにするのか。ハ

あなたがたの先祖も、わたしがカデシ・バルネアから、その地を見るためにつかわした時に、同じようなことをした。九、すなわち彼らはエシコルの谷に行つて、その地を見たととき、イスラエルの人々の心をくじいて、主が与えられる地に行くことができないようにした。一〇、そこでその時、主は怒りを発し、誓つて言われた、二「エジプトから出てきた人々で二十歳以上の者はひとりもわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓つた地を見ることはできない。彼らはわたしに従わなかったからである。三、ただケニズびとエフンネの子カレブとヌンの子ヨシユアとはそうではない。このふたりは全く主に従つたからである」。四、主はこのようなにイスラエルにむかつて怒りを発し、彼らを四十年のあいだ荒野にさまよわされたので、主の前に悪を行つたその世代の人々は、ついにみな滅びた。五、あなたがたはその父に代つて立つた罪びとのやからであつて、主のイスラエルに対する激しい怒りをさらに増そうとしている。六、あなたがたがもしもむいて主に従わないならば、主はまたこの民を荒野にすておかれるであろう。そうすればあなたがたはこの民をことごとく滅ぼすに至るであろう」。

七、彼らはモーセのところへ進み寄つて言った、「われわれはこの所に、群衆のために羊のおりを建て、また子供たちのために町々を建てようと思います。八、しかし、われわれは武装してイスラエルの人々の前に進み、彼らをその所へ導いて行きましょ

う。ただわれわれの子供たちは、この地の住民の害をのがれるため、堅固な町々に住ませておかなければなりません。一八われわれはイスラエルの人々が、おのおのその嗣業を受けるまでは、家に帰りません。一九またわれわれはヨルダンのかなたで彼らとともに嗣業を受けません。われわれはヨルダンのこなた、すなわち東の方で嗣業を受けるからです。二〇モーセは彼らに言った、「もし、あなたがたがそのようにし、みな武装して主の前に行つて戦い、二一みな武装して主の前に行つてヨルダンを渡り、主がその敵を自分の前から追い払われて、二三この国が主の前に征服されて後、帰ってくるならば、あなたがたは主の前に、イスラエルの前にも、とがめはないであろう。そしてこの地は主の前にあなたがたの所有となるであろう。二四しかし、そうしないならば、あなたがたは主にむかつて罪を犯した者となり、その罪は必ず身に及ぶことを知らなければなりません。二五あなたがたは子供たちのために町々を建て、羊のために、おりを建てなさい。しかし、あなたがたは約束したことは行わなければならない。二五ガドの子孫とルベンの子孫とは、モーセに言った、「しもべらはあなたの命じられたとおりにいたします。二六われわれの子供たちと妻と羊と、すべての家畜とは、このギレアデの町々に残します。二七しかし、しもべらはみな武装して、あなたの言われるとおり、主の前に渡って行って戦います。二八モーセは彼らのことについて、祭司エレアザルと、ヌンの子

ヨシユアと、イスラエルの人々の部族のうちの氏族のかしらたちとに命じた。二九そしてモーセは彼らに言った、「ガドの子孫と、ルベンの子孫とが、おのおの武装してあなたがたと一緒にヨルダンを渡り、主の前に戦つて、その地をあなたがたが征服するならば、あなたがたは彼らにギレアデの地を領地として与えなければならぬ。三〇しかし、もし彼らが武装してあなたがたと一緒に渡って行かないならば、彼らはカナンのであなたがたのうちに領地を獲なければならぬ。三一ガドの子孫と、ルベンの子孫とは答えて言った、「しもべらは主が言われたとおりにいたします。三二われわれは武装して、主の前にカナンの地へ渡って行きますが、ヨルダンのこなたで、われわれの嗣業をもつことにします」。

三三そこでモーセはガドの子孫と、ルベンの子孫と、ヨセフの子マナセの部族の半ばとに、アモリびとの王シホンの国と、バシヤンの王オグの国とを与えた。すなわち、その国およびその領内の町々とその町々の周囲の地とを与えた。三四こうしてガドの子孫は、デボン、アタロテ、アロエル、三五アテロテ・シヨパン、ヤゼル、ヨグベハ、三六ベテニムラ、ベテハランなどの堅固な町々を建て、羊のおりを建てた。三七またルベンの子孫は、ヘシボン、エレアレ、キリヤタイム、三八および後に名を改めたネボと、バアル・メオンの町を建て、またシブマの町を建てた。彼らは建てた町々に新しい名を与えた。三九またマナセの子マキルの子孫

はギレアデに行つて、そこを取り、その住民アモリびとを追い
 払つたので、四〇モーセはギレアデをマナセの子マキルに与えて
 そこに住まわせた。四一またマナセの子ヤイルは行つて村々を
 取り、それをハオテヤイルと名づけた。四二またノバは行つてケ
 ナテとその村々を取り、自分の名にしたがつて、それをノバと名
 づけた。

第三章

イスラエルの人々が、モーセとアロンとに導かれ、その部隊に
 従つて、エジプトの国を出てから経た旅路は次のとおりであ
 る。ニモーセは主の命により、その旅路にしたがつて宿駅を書
 きとめた。その宿駅にしたがえば旅路は次のとおりである。三
 彼らは正月の十五日にラメセスを出立した。すなわち過越の
 翌日イスラエルの人々は、すべてのエジプトびとの目の前を
 意気揚々と出立した。四その時エジプトびとは、主に撃ち殺さ
 れたすべてのういごを葬っていた。主はまた彼らの神々にも
 罰を加えられた。

五こうしてイスラエルの人々はラメセスを出立してスコテに
 宿営し、ハスコテを出立して荒野の端にあるエタムに宿営し、
 セエタムを出立してバアル・ゼボンの前にあるピハヒロテに引
 き返してミグドルの前に宿営し、ハピハヒロテを出立して、海

のなかをとおつて荒野に入り、エタムの荒野を三日路ほど行つ
 て、メラに宿営し、ルメラを出立し、エリムに行つて宿営した。
 エリムには水の泉十二と、なつめやし七十本とがあつた。一〇エ
 リムを出立して紅海のほとりに宿営し、一一紅海を出立してシ
 ンの荒野に宿営し、一二シンの荒野を出立してドフカに宿営
 し、一三ドフカを出立してアルシに宿営し、一四アルシを出立
 してレピデムに宿営した。そこには民の飲む水がなかった。一五
 レピデムを出立してシナイの荒野に宿営し、一六シナイの荒野
 を出立してキプロテ・ハツタワに宿営し、一七キプロテ・ハツタ
 ワを出立してハゼロテに宿営し、一八ハゼロテを出立してリテ
 マに宿営し、一九リテマを出立してリンモン・パレツに宿営し、
 二〇リンモン・パレツを出立してリブナに宿営し、二一リブナを
 出立してリツサに宿営し、二二リツサを出立してケヘラタに
 宿営し、二三ケヘラタを出立してシャペル山に宿営し、二四シャ
 ペル山を出立してハラダに宿営し、二五ハラダを出立してマケ
 ロテに宿営し、二六マケロテを出立してタハテに宿営し、二七タ
 ハテを出立してテラに宿営し、二八テラを出立してミテカに
 宿営し、二九ミテカを出立してハシモナに宿営し、三〇ハシモナ
 を出立してモセラに宿営し、三一モセラを出立してベネヤカン
 に宿営し、三二ベネヤカンを出立してホル・ハギデガデに宿営
 し、三三ホル・ハギデガデを出立してヨテバタに宿営し、三四ヨテ
 バタを出立してアプロナに宿営し、三五アプロナを出立してエ

ジオン・ゲベルに宿営し、三六エジオン・ゲベルを出立してチンの荒野すなわちカデシに宿営し、三七カデシを出立してエドムの国の端にあるホル山に宿営した。

三八イスラエルの人々がエジプトの国を出て四十年目の五月一日に、祭司アロンは主の命によりホル山に登つて、その所で死んだ。三九アロンはホル山で死んだとき百二十三歳であつた。

四〇カナンの地のネゲブに住んでいたカナンびとアラデの王は、イスラエルの人々の来るのを聞いた。

四二ついで、ホル山を出立してザルモナに宿営し、四三ザルモナを出立してプノンに宿営し、四四プノンをを出立してオボテに宿営し、四五オボテを出立してモアブの境にあるイエ・アバリムに宿営し、四六イエ・アバリムを出立してデボン・ガドに宿営し、四七デボン・ガドを出立してアルモン・デブラタイムに宿営し、四八アルモン・デブラタイムを出立してネボの前にあるアバリムの山に宿営し、四九アバリムの山を出立してエリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野に宿営した。五〇すなわちヨルダンのほとりのモアブの平野で、ベテエシモテとアベル・シツテムとの間に宿営した。

五一エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野で、主はモーセに言われた、五二「イスラエルの人々に言いなさい。あなたがたがヨルダンを渡つてカナンの地にはいるときは、五三その地の住民をことごとくあなただがたの前から追い払い、すべての石像

をこぼち、すべての鑄像をこぼち、すべての高き所を破壊しなねばならない。五四またあなたがたはその地の民を追い払つて、そこに住まなければならぬ。わたしがその地をあなたがたの所有として与えたからである。五五あなたがたは、おのおの氏族ごとにくじを引き、その地を分けて嗣業としなければならぬ。大きい部族には多くの嗣業を与え、小さい部族には少しの嗣業を与えなければならぬ。そのくじの當つた所がその所有となるであろう。あなたがたは父祖の部族にしたがつて、それを継がなければならぬ。五七しかし、その地の住民をあなたがたの前から追い払わないならば、その残して置いた者はあなたがたの目にとげとなり、あなたがたの脇にいはらとなり、あなたがたの住む国において、あなたがたを悩ますであろう。五八また、わたしは彼らにしようと思つたとおり、あなたがたにするであろう」。

第三章

一主はモーセに言われた、二「イスラエルの人々に命じて言いなさい。あなたがたがカナンの地にはいるとき、あなたがたの嗣業となるべき地はカナンの地で、その全域は次のとおりである。三南の方はエドムに接するチンの荒野に始まり、南の境は、東は塩の海の端に始まる。四その境はアクラビムの坂の南を

巡^{めぐ}つてチンに向^むかい、カデシ・バルネアの南^{みなみ}に至^{いた}り、ハザル・アダルに進^{すす}み、アズモンに及^{およ}ぶ。五^ごその境^{さかい}はまたアズモンから転^{てん}じてエジプトの川^{かわ}に至^{いた}り、海^{うみ}に及^{およ}んで尽^つきる。

六^{ろく}西^{にし}の境^{さかい}はおおうみとその沿岸^{えんがん}で、これがあなたがたの西^{にし}の境^{さかい}である。

七^{しち}あなたがたの北^{きた}の境^{さかい}は次のとおりである。すなわちおおうみからホル山^{やま}まで線^{せん}を引き、ハホル山^{やま}からハマテの入口^{いりぐち}まで線^{せん}を引き、その境^{さかい}をゼダデに至^{いた}らせ、九^くまたその境^{さかい}はジフロンの進^{すす}み、ハザル・エノンに至^{いた}つて尽^つきる。これがあなたがたの北^{きた}の境^{さかい}である。

一〇あなたがたの東^{ひがし}の境^{さかい}は、ハザル・エノンからシパムまで線^{せん}を引き、二^にまたその境^{さかい}はアインの東^{ひがし}の方^{ほう}で、シパムからリブラに下^{くだ}り、またその境^{さかい}は下^{くだ}つてキンネレテの海^{うみ}の東^{ひがし}の斜面^{しゃめん}に至^{いた}り、二^にまたその境^{さかい}はヨルダンの下^{くだ}り、塩^{しお}の海^{うみ}に至^{いた}つて尽^つきる。あなたがたの国^{くに}の周囲^{しゅうい}の境^{さかい}は以上のとおりである」。

三^{さん}モーセはイスラエルの人々^{ひとびと}に命^{めい}じて言^いつた、「これはあなたがたが、くじによつて継^つぐべき地^ちである。主^{しゅ}はこれを九^くつの部族^{ぶぞく}と半部族^{はんぶぞく}とに与^{あた}えよと命^{めい}じられた。一四^{じゅうし}それはルベンの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}とガドの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}とが共に父祖^{ふそ}の家^{いえ}にしたがつて、すでにその嗣業^{しぎよう}を受け、またマナセの半部族^{はんぶぞく}もその嗣業^{しぎよう}を受けていたからである。一五^{じゅうご}この二^{ふた}つの部族^{ぶぞく}と半部族^{はんぶぞく}とはエリコに近いヨルダンのかなた、すなわち東^{ひがし}の方^{ほう}、日^ひの出^でる方^{ほう}で、そ

の嗣業^{しぎよう}を受けた」。

一六^{じゅうろく}主^{しゅ}はまたモーセに言^いわれた、一七^{じゅうしち}「あなたがたに、嗣業^{しぎよう}として地^ちを分け与^{あた}える人々^{ひとびと}の名^なは次のとおりである。すなわち祭司^{さいし}エレアザルと、ヌンの子^こヨシユアとである。一八^{じゅうはち}あなたがたはまた、おのおの部族^{ぶぞく}から、つかさひとりずつを選んで、地^ちを分け与^{あた}えさせなければならぬ。一九^{じゅうきゅう}その人々^{ひとびと}の名^なは次のとおりである。すなわちユダの部族^{ぶぞく}ではエフンネの子^こカレブ、二〇^{にじゅう}シメオンの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}ではアミホデの子^こサムエル、二一^{にじゅういち}ベニヤミンの部族^{ぶぞく}ではキスロンの子^こエリダデ、二二^{にじゅうに}ダンの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}ではヨグリの子^こつかさブツキ、二三^{にじゅうさん}ヨセフの子孫^{しよせん}、すなわちマナセの部族^{ぶぞく}ではエポデの子^こつかさハニエル、二四^{にじゅうし}エフライムの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}ではシフタンの子^こつかさケムエル、二五^{にじゅうご}ゼブルンの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}ではパルナクの子^こつかさエリザパン、二六^{にじゅうろく}イッサカルの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}ではアザンの子^こつかさアヒウデ、二七^{にじゅうしち}ナフタリの子孫^{しよせん}の部族^{ぶぞく}ではシロミの子^こつかさパダヘル。二八^{にじゅうはち}カナン^{かなん}の地^ちでイスラエルの人々^{ひとびと}に嗣業^{しぎよう}を分け与^{あた}えることを主^{しゅ}が命^{めい}じられた人々^{ひとびと}は以上のとおりである」。

第三章

一^{いち}エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野^{へいや}で、主^{しゅ}はモー

セに言われた、「イスラエルの人々に命じて、その獲た嗣業のうちから、レビびとに住むべき町々を与えさせなさい。また、あなたがたは、その町々の周囲の放牧地をレビびとに与えなければならぬ。三その町々は彼らの住む所、その放牧地は彼らの家畜と群れ、およびすべての獣のためである。四あなたがたがレビびとに与える町々の放牧地は、町の石がきから一千キュビトの周囲としなければならぬ。五あなたがたは町の外で東側に二千キュビト、南側に二千キュビト、西側に二千キュビト、北側に二千キュビトを計り、町はその中央にしなければならぬ。六あなたがたの町の放牧地はこのようにしなければならぬ。七あなたがたがレビびとに与える町々は六つで、のがれの町とし、人を殺した者がのがれる所としなければならぬ。なおこのほかに四十二の町を与えなければならぬ。八あなたがたがイスラエルの人々に与えなければならぬ。九あなたがたがイスラエルの人々の所有のうちからレビびとに町々を与えるには、大きい部族からは多く取り、小さい部族からは少なく取り、おのおの受ける嗣業にしたがつて、その町々をレビびとに与えなければならぬ。」

九主はモーセに言われた、「○イスラエルの人々に言いなさい。あなたがたがヨルダンを渡つてカナンの地にはいるときは、二あなたがたのために町を選んで、のがれの町とし、あやまつて人

を殺した者を、そこにのがれさせなければならぬ。三これはあなたがたが復讐する者を避けてのがれる町であつて、人を殺した者が会衆の前に立つて、さばきを受けないうちに、殺されることのないためである。四あなたがたが与える町々のうち、六つをのがれの町としなければならぬ。五すなわちヨルダンのかなたで三つの町を与え、カナンの地で三つの町を与えて、のがれの町としなければならぬ。六これらの六つの町は、イスラエルの人々と、他国の人および寄留者のために、のがれの場所としなければならぬ。すべてあやまつて人を殺した者が、そこにのがれるためである。

七もし人が鉄の器で、人を打つて死なせたならば、その人は故殺人である。故殺人は必ず殺されなければならぬ。八またもし人を殺せるほどの石を取つて、人を打つて死なせたならば、その人は故殺人である。故殺人は必ず殺されなければならぬ。九あるいは人を殺せるほどの木の器を取つて、人を打つて死なせたならば、その人は故殺人である。故殺人は必ず殺されなければならぬ。一〇血の復讐をする者は、自分でその故殺人を殺すことができる。すなわち彼に出会ふとき、彼を殺すことができる。一一またもし恨みのために人を突き、あるいは故意に人に物を投げつけて死なせ、一二あるいは恨みによつて手で人を打つて死なせたならば、その打つた者は必ず殺されなければならない。彼は故殺人だからである。血の復讐をする者は、その

故殺人に出会うとき殺すことができる。

三三しかし、もし恨みもないのに思わず人を突き、または、なにごころなく人に物を投げつけ、三三あるいは人のいるのも見ずに、人を殺せるほどの石を投げつけて死なせた場合、その人がその敵でもなく、また害を加えようとしたのでもない時は、二四会衆はこれらのおきてによって、その人を殺した者と、血の復讐をする者との間をさばかなければならない。二五すなわち会衆はその人を殺した者を血の復讐をする者の手から救い出して、逃げて行つたのがれの町に返さなければならぬ。その者は聖なる油を注がれた大祭司の死ぬまで、そこにいなければならぬ。二六しかし、もし人を殺した者が、その逃げて行つたのがれの町の境を出た場合、二七血の復讐をする者は、のがれの町の境の外で、これに出会い、血の復讐をする者が、その人を殺した者を殺しても、彼には血を流した罪はない。二八彼は大祭司の死ぬまで、そののがれの町におるべきものだからである。大祭司の死んだ後は、人を殺した者は自分の所有の地にかえることができる。

二九これらのことはすべてあなたがたの住む所で、代々あなたがたのためのおきての定めとしなければならぬ。三〇人を殺した者、すなわち故殺人はすべて証人の証言にしたがつて殺されなければならぬ。しかし、だれもただひとりの証言によつて殺されることはない。三一あなたがたは死に当る罪を犯した故

殺人の命のあがないしろを取つてはならない。彼は必ず殺されなければならぬ。三二また、のがれの町にのがれた者のために、あがないしろを取つて大祭司の死ぬ前に彼を自分の地に帰り住まわせてはならない。三三あなたがたはそのおる所の地を汚してはならない。流血は地を汚すからである。地の上に流された血は、それを流した者の血によらなければあがなうことができない。三四あなたがたは、その住む所の地、すなわちわたしのおる地を汚してはならない。主なるわたしがイスラエルの人々のうちに住んでいるからである」。

第三十六章

一ヨセフの子孫の氏族のうち、マナセの子マキルの子であるギレアデの子らの氏族のかしらたちがきて、モーセとイスラエルの人々のかしらであるつかさたちとの前で語つて、二言つた、「イスラエルの人々に、その嗣業の地をくじによつて与えることを主はあなたに命じられ、あなたもまた、われわれの兄弟ゼロペハデの嗣業を、その娘たちに与えるよう、主によつて命じられました。三その娘たちがもし、イスラエルの人々のうちの他の部族のむすこたちにとつぐならば、彼女たちの嗣業は、われわれの父祖の嗣業のうちから取り除かれて、そのとつぐ部族の嗣業に加えられるでしょう。こうしてそれはわれわれの嗣業

の分（ぶん）から取り除（のぞ）かれるでしょう。四（よ）そしてイスラエルの人々（ひと）のヨベルの年（とし）がきた時（とき）、彼女（かのじよ）たちの嗣業（しぎよう）は、そのとついで部族（ぶぞく）の嗣業（しぎよう）に加（く）えられるでしょう。こうして彼女（かのじよ）たちの嗣業（しぎよう）は、われわれの父祖（ふそ）の部族（ぶぞく）の嗣業（しぎよう）のうちから取り除（のぞ）かれるでしょう」。

五（ご）モーセは主（し）の言葉（ことば）にしたがって、イスラエルの人々（ひと）に命（めい）じて言（い）った、「ヨセフの子孫（しそん）の部族（ぶぞく）の言（い）うところは正しい。ハゼロベハデの娘（むすめ）たちについて、主（し）が命（めい）じられたことはこうである。すなわち『彼女（かのじよ）たちはその心（こころ）にかなう者（もの）にとついてもよいが、ただその父祖（ふそ）の部族（ぶぞく）の一族（いちぞく）にのみ、とつがなければならぬ。セそうすればイスラエルの人々（ひと）の嗣業（しぎよう）は、部族（ぶぞく）から部族（ぶぞく）に移（うつ）うことはないであろう。イスラエルの人々（ひと）は、おのおのその父祖（ふそ）の部族（ぶぞく）の嗣業（しぎよう）をかたく保（たも）つべきだからである。ハイスラエルの人々（ひと）の部族（ぶぞく）の嗣業（しぎよう）をもっている娘（むすめ）はみな、その父（ちち）の部族（ぶぞく）に属（ぞく）する一族（いちぞく）にとつがなければならぬ。そうすればイスラエルの人々（ひと）は、おのおのその父祖（ふそ）の嗣業（しぎよう）を保（たも）つことができる。九（く）こうして嗣業（しぎよう）は一つの部族（ぶぞく）から他の部族（ぶぞく）に移（うつ）うことはなからう。イスラエルの人々（ひと）の部族（ぶぞく）はおのおのその嗣業（しぎよう）をかたく保（たも）つべきだからである』」。

一〇（じゅう）そこでゼロベハデの娘（むすめ）たちは、主（し）がモーセに命（めい）じられたようにした。二（に）すなわちゼロベハデの娘（むすめ）たち、マアラ、テルザ、ホグラ、ミルカおよびノアは、その父（ちち）の兄弟（きょうだい）のむすこたちにとつた。三（さん）彼女（かのじよ）たちはヨセフの子（こ）マナセのむすこたちの一族（いちぞく）に

とつたので、その嗣業（しぎよう）はその父（ちち）の一族（いちぞく）の属（ぞく）する部族（ぶぞく）にとどまった。

三（さん）これらはエリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野（へいや）で、主（し）がモーセによつてイスラエルの人々（ひと）に命（めい）じられた命令（めいれい）とおきてである。

申命記
しんめいき

第一章

「これはヨルダンの向こうの荒野、パランと、トベル、ラバン、ハゼロテ、デザハブとの間の、スフの前にあるアラバにおいて、モーセがイスラエルのすべての人に告げた言葉である。ニホレブからセイル山の道を経て、カデシ・バルネアに達するには、十一日の道のりである。三第四十年の十一月となり、その月の一日に、モーセはイスラエルの人々にむかつて、主が彼らのため彼に授けられた命令を、ことごとく告げた。四これはモーセがヘシボンに住んでいたアモリびとの王シホン、およびアシタロテとエデレイとに住んでいたバシヤンの王オグを殺した後であった。五すなわちモーセはヨルダンの向こうのモアブの地で、みずから、この律法の説明に当った、そして言った、六「われわれの神、主はホレブにおいて、われわれに言われた、『あなたがたはすでに久しく、この山にとどまっていたが、七身をめぐらして道に進み、アモリびとの山地に行き、その近隣のすべての所、アラバ、山地、低地、ネゲブ、海べ、カナンびとの地、またレバノンに行き、大川ユフラテにまで行きなさい。八見よ、わたしはこの地をあなたがたの前に置いた。この地にはいつて、それを自分のものとしなさい。これは主が、あなたがたの先祖アブラハム、イサ

ク、ヤコブに誓つて、彼らとその後の子孫に与えると言われた所である』。

九あの時、わたしはあなたがたに言った、『わたしはひとりであなただがたを負うことができない。一〇あなたがたの神、主はあなたがたを多くされたので、あなたがたは、きよう、空の星のように多い。一一どうぞ、あなたがたの先祖の神、主があなたがたを、今あるより千倍も多くし、またあなたがたに約束されたように、あなたがたを恵んでくださるように。一二わたしひとりで、どうして、あなたがたを負い、あなたがたの重荷と、あなたがたの争いを処理することができようか。一三あなたがたは、おの部の族ごとに、知恵があり、知識があつて、人に知られてゐる人々を選び出しなさい。わたしはその人々を、あなたがたのかしらとするであらう。一四その時、あなたがたはわたしに答えた、『あなたがしようと言われることは良いことです。一五そこで、わたしは、あなたがたのうちから、知恵があり、人に知られてゐる人々を取つて、あなたがたのかしらとした。すなわち千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長とし、また、あなたがたの部族のつかさびととした。一六また、あのとき、わたしはあなたがたのさばきびとたちに命じて言った、『あなたがたは、兄弟たちの間の訴えを聞き、人とその兄弟、または寄留の他国人との間を、正しくさばかなければならない。一七あなたがたは、さばきをする時、人を片寄り見てはならない。小さい者に

も大いなる者にも聞かなければならない。人の顔を恐れてはならない。さばきは神の事だからである。あなたがたで決めるのにむずかしい事は、わたしのところに持つてこなければならぬ。わたしはそれを聞くであろう。一八わたしはまた、あの時、あなたがたがしなければならぬことを、ことごとく命じた。

一九われわれの神、主が命じられたように、われわれは、ホレブを出立して、あなたがたが見た、あの大きな恐ろしい荒野を通り、アモリびとの山地へ行く道によつて、カデシ・バルネアにきた。二〇その時わたしはあなたがたに言った、『あなたがたは、われわれの神、主がお与えになるアモリびとの山地に着いた。二一見よ、あなたの神、主はこの地をあなたの前に置かれた。あなたの先祖の神、主が告げられたように、上つて行つて、これを自分のものとしなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。』三あなたがたは皆わたしに近寄つて言つた、『われわれは人をさきにつかわして、その地を探らせ、どの道から上るべきか、どの町々に入るべきかを、復命させましよう。』三三このことは良いと思つたので、わたしはあなたがたのうち、おのおのの部族から、ひとりずつ十二人の者を選んだ。三四彼らは身をめぐらして、山地に上つて行き、エシコルの谷へ行つてそれを探り、三五その地のくだものを手に取つて、われわれのところに持つて下り、復命して言つた、『われわれの神、主が賜わる地は良い地です』。

二六しかし、あなたがたは上つて行くことを好まないで、あなたがたの神、主の命令にそむいた。二七そして天幕でつぶやいて言つた、『主はわれわれを憎んでアモリびとの手に渡し、滅ぼさうとしてエジプトの国から導き出されたのだ。二八われわれはどこへ上つて行くのか。兄弟たちは、「その民はわれわれよりも大きくて、背も高い。町々は大きく、その石がきは天に届いてゐる。われわれは、またアナクびとの子孫をその所で見た」と言つて、われわれの心をくじいた。』二九その時、わたしはあなたがたに言つた、『彼らをこわがつてはならない。また恐れてはならない。』三〇先に立つて行かれるあなたがたの神、主はエジプトにおいて、あなたがたの目の前で、すべてのことを行われたように、あなたがたのために戦われるであろう。三一あなたがたはまた荒野で、あなたの神、主が、人のその子を抱くように、あなたを抱かれるのを見た。あなたがたが、この所に来るまで、その道すがら、いつもそうであつた。』三二このように言つても、あなたがたはなお、あなたがたの神、主を信じなかつた。三三主は道々あなたがたの先に立つて行き、あなたがたが宿営する場所を捜し、夜は火のうちにあり、昼は雲のうちにあつて、あなたがたに行くべき道を示された。

三四主は、あなたがたの言葉を聞いて怒り、誓つて言われた、三五『この悪い世代の人々のうちには、わたしが、あなたがたの先祖たちに与えると誓つたあの良い地を見る者は、ひとりもないで

あろう。三六ただエフンネの子カレブだけはそれを見ることが
できるであろう。彼が踏んだ地を、わたしは彼とその子孫に与
えるであろう。彼が全く主に従ったからである。三七主はま
た、あなたがたのゆえに、わたしをも怒つて言われた、『おまえ
もまた、そこにはいることができないであろう。三八おまえに仕
えているヌンの子ヨシユアが、そこにはいるであろう。彼を力
づけよ。彼はイスラエルにそれを獲させるであろう。三九また
あなたがたが、かすめられるであろうと言ったあなたがお
さなごたち、およびその日にまだ善悪をわきまえないあなた
たの子供たちが、そこにはいるであろう。わたしはそれを彼ら
に与える。彼らはそれを所有とするであろう。四〇あなたがた
は身をめぐらし、紅海の道によつて、荒野に進んで行きなさい。』
四一しかし、あなたがたはわたしに答えて言つた、『われわれは主
にむかつて罪を犯しました。われわれの神、主が命じられたよ
うに、われわれは上つて行つて戦いましょう。そして、おの
の武器を身に帯びて、かるがるしく山地へ上つて行こうとした。
四二その時、主はわたしに言われた、『彼らに言いなさい、「あな
たがたは上つて行つてはならない。また戦つてはならない。
わたしはあなたがたのうちにいない。おそろく、あなたがたは
敵に撃たれるであろう。』四三このようにわたしが告げた
のに、あなたがたは聞かないで主の命令にそむき、ほしいままに
山地へ上つて行つたが、四四その山地に住んでいるアモリびと

が、あなたがたに向かつて出てきて、はちが追うように、あなた
がたを追いかけて、セイルで撃ち敗つて、ホルマにまで及んだ。四
五あなたがたは歸つてきて、主の前で泣いたが、主はあなたがた
の声を聞かず、あなたがたに耳を傾けられなかった。四六こうし
てあなたがたは、日久しくカデシにとどまつた。あなたがたの
そこにとどまつた日数のとおりである。

第二章

一それから、われわれは身をめぐらし、主がわたしに告げられた
ように、紅海の方に向かつて荒野に進み入り、日久しくセイル山
を行きめぐつていたが、二主はわたしに言われた、三『あなたが
たは既に久しくこの山を行きめぐつてゐるが、身をめぐらして
北に進みなさい。四おまえはまた民に命じて言え、「あなたがた
は、エサウの子孫、すなわちセイルに住んでゐるあなたがたの
兄弟の領内を通ろうとしている。彼らはあなたがたを恐れる
であろう。それゆゑ、あなたがたはみずから深く慎み、五彼らと
争つてはならない。彼らの地は、足の裏で踏むほどでも、あな
たがたに与えないであろう。わたしがセイル山をエサウに与え
て、領地とさせたからである。六あなたがたは彼らから金で
食物を買つて食べ、また金で水を買つて飲まなければならな
い。七あなたの神、主が、あなたのするすべての事において、あ

なたを恵み、あなたがこの大いなる荒野を通るのを、見守られたからである。あなたの神、主がこの四十年の間、あなたと共におられたので、あなたは何も乏しいことがなかった」。ハこうしてわれわれは、エサウの子孫でセイルに住んでいる兄弟を離れ、アラバの道を避け、エラテとエジオン・ゲベルを離れて進んだ。われわれは転じて、モアブの荒野の方に向かつて進んだ。九その時、主はわたしに言われた、『モアブを敵視してはならない。またそれと争い戦ってはならない。彼らの地は、領地としてあなたに与えない。ロトの子孫にアルを与えて、領地とさせたからである。一〇（むかし、エミびとがこの所に住んでいた。この民は大いなる民であつて、数も多く、アナクびとのように背も高く、二またアナクびとと同じくレパイムであると、みなされていたが、モアブびとは、これをエミびとと呼んでいた。三ホリびとも、むかしはセイルに住んでいたが、エサウの子孫がこれを追い払い、これを滅ぼし、彼らに代つてそこに住んだ。主が賜わった所有の地に、イスラエルがおこなつたのと同じである。）三あなたがたは、いま、立ちあがつてゼレデ川を渡りなさい。』そこでわれわれはゼレデ川を渡つた。四カデシ・バルネアを出てこのかた、ゼレデ川を渡るまでの間の日は三十八年であつて、その世代のいくさびとはみな死に絶えて、宿営のうちにいなくなつた。主が彼らに誓われたとおりである。一五まことに主の手が彼らを攻め、宿営のうちから滅ぼし去られたので、彼らは

ついに死に絶えた。

一六いくさびとがみな民のうちから死に絶えたとき、一七主はわたしに言われた、一八『おまえは、きよう、モアブの領地アルを通ろうとしている。一九アンモンの子孫に近づく時、おまえは彼らを敵視してはならない。また争つてはならない。わたしはアンモンの子孫の地の領地として、おまえに与えない。それをロトの子孫に領地として与えたからである。二〇（これもまたレパイムの国とみなされた。むかし、レパイムがここに住んでいたからである。しかし、アンモンびとは彼らをザムズミびとと呼んだ。二この民は大いなる民であつて数も多く、アナクびとのように背も高かつたが、主はアンモンびとの前から、これを滅ぼされ、アンモンびとがこれを追い払つて、彼らに代つてそこに住んだ。三この事は、セイルに住んでいるエサウの子孫のため、にその前から、ホリびとを滅ぼされたのと同じである。彼らはホリびとを追い払い、これに代つて今日までそこに住んでいる。四またカフトルから出たカフトルびとは、ガザにまで及ぶ村々に住んでいたアビびとを滅ぼして、これに代つてそこに住んでいる。五あなたがたは立ちあがり、進んでアルノン川を渡りなさい。わたしはヘシボンの王アモリびとシホンとその国とを、おまえの手に渡した。それを征服し始めよ。彼と争つて戦え。六きようから、わたしは全天下の民に、おまえをおびえ恐れさせるであらう。彼らはおまえのうわさを聞いて震え、おまえの

ために苦しむであろう。』二六そこでわたしは、ケデモテの荒野から、ヘシボンの王シホンに使者をつかわし、平和の言葉を述べさせた。二七『あなたの国を通らせてください。わたしは大踏をおとていきます、右にも左にも曲りません。二八金で食物を売ってわたしに食べさせ、金をとって水を与えてわたしに飲ませてください。徒歩で通らせてくださるだけでよいのです。二九セイルに住むエサウの子孫と、アルに住むモアブびとが、わたしにしたようにしてください。そうすれば、わたしはヨルダンを渡って、われわれの神、主が賜わる地に行きます。』三〇しかし、ヘシボンの王シホンは、われわれを通らせるのを好まなかった。あなたの神、主が彼をあなたの手に渡すため、その気を強くし、その心をかたくなにされたからである。今日見るとおりである。三時に主はわたしに言われた、『わたしはシホンと、その地とを、おまえに渡し始めた。おまえはそれを征服しはじめ、その地を自分のものとせよ。』三そこでシホンは、われわれを攻めようとして、その民をことごとく率い、出てきてヤハズで戦ったが、三われわれの神、主が彼を渡されたので、われわれは彼とその子らと、そのすべての民とを撃ち殺した。四その時、われわれは彼のすべての町を取り、そのすべての町の男、女および子供を全く滅ぼして、ひとりをも残さなかった。五ただその家畜は、われわれが取った町々のぶんどり物と共に、われわれが獲て自分の物とした。三六アルノンの谷のほとりにあるアロエ

ルおよび谷の中にある町からギレアデに至るまで、われわれが攻めて取れなかった町は一つもなかった。われわれの神、主がことごとくわれわれに渡されたのである。三七ただアンモンの子孫の地、すなわちヤボク川の全岸、および山地の町々、またすべてわれわれの神、主が禁じられた所には近寄らなかった。

第三章

一そしてわれわれは身をめぐらして、バシヤンの道を上って行ったが、バシヤンの王オグは、われわれを迎え撃とうとして、その民をことごとく率い、出てきてエデレイで戦った。二時に主はわたしに言われた、『彼を恐れてはならない。わたしは彼と、そのすべての民と、その地をおまえの手に渡している。おまえはヘシボンに住んでいたアモリびとの王シホンにしたように、彼にするであろう。』三こうしてわれわれの神、主はバシヤンの王オグと、そのすべての民を、われわれの手に渡されたので、われわれはこれを撃ち殺して、ひとりをも残さなかった。四その時、われわれは彼の町々を、ことごとく取った。われわれが取らなかった町は一つもなかった。取った町は六十。アルゴブの全地方であって、バシヤンにおけるオグの国である。五これらは皆、高い石がきがあり、門があり、貫の木のある堅固な町であった。このほかに石がきのない町は、非常に多かった。六われわれ

はヘシボンの王シホンにしたように、これらを全く滅ぼし、そのすべての町の男、女および子供をことごとく滅ぼした。セただし、そのすべての家畜と、その町々からのぶんどり物とは、われわれが獲て自分の物とした。ハその時われわれはヨルダンの向こう側にいるアモリびとのふたりの王の手から、アルノン川からヘルモン山までの地を取った。九(シドンびとはヘルモンをシリオンと呼び、アモリびとはこれをセニルと呼んでいる。)一〇すなわち高原のすべての町、ギレアデの全地、バシヤンの全地、サルカおよびエデレイまで、バシヤンにあるオグの国の町々をことごとく取った。二(バシヤンの王オグはレパイムのただひとの生存者であった。彼の寝台は鉄の寝台であった。これは今なおアンモンびとのラバにあるではないか。これは普通のキュビト尺で、長さ九キュビト、幅四キュビトである。)

三その時われわれは、この地を獲た。そしてわたしはアルノン川のほとりのアロエルから始まる地と、ギレアデの山地の半ばと、その町々とは、ルベンびとと、ガドびととに与えた。三わたしはまたギレアデの残りの地と、オグの国であったバシヤンの全地とは、マナセの半部族に与えた。すなわちアルゴブの全地方である。(そのバシヤンの全地はレパイムの国と唱えられる。一四マナセの子ヤイルは、アルゴブの全地方を取って、ゲシュルびとと、マアカびとの境にまで達し、自分の名にしたがつて、バシヤンをハボテ・ヤイルと名づけた。この名は今日にまで

およんでいる。)一五またわたしはマキルにはギレアデを与えた。一六ルベンびとと、ガドびととには、ギレアデからアルノン川までを与え、その川のまん中をもって境とし、またアンモンびとの境であるヤボク川にまで達せしめた。一七またヨルダンを境として、キンネレテからアラバの海すなわち塩の海まで、アラバをこれに与えて、東の方ビスガのふもとに達せしめた。

一八その時わたしはあなたがたに命じて言った、『あなたがたの神、主はこの地をあなたがたに与えて、これを獲させられるから、あなたがたが勇士はみな武装して、兄弟であるイスラエルの人々に先立つて、渡って行かなければならない。一九ただし、あなたがたの妻と、子供と、家畜とは、わたしが与えた町々にとどまらなければならない。(わたしはあなたがたが多くの家畜を持つているのを知っている。)二〇主がすでにあなたがたに与えられたように、あなたがたの兄弟にも安息を与えられて、彼らもまたヨルダンの向こう側で、あなたがたの神、主が与えられる地を獲るようになったならば、あなたがたはおのわたりがあなたがたに与えた領地に帰ることができる』。二一その時わたしはヨシユアに命じて言った、『あなたの目はあなたがたの神、主がこのふたりの王に行われたすべてのことを見た。主はまたあなたが渡って行くもろもろの国にも、同じように行われるであらう。二二彼らを恐れてはならない。あなたがたの神、主があるがたのために戦われるからである』。

三三その時わたしは主に願つて言つた、三四『主なる神よ、あなたの大いなる事と、あなたの強い手とを、たつた今、しもべに示し始められました。天にも地にも、あなたのようなわざをなし、あなたのような力あるわざのできる神が、ほかにありましようか。三五どうぞ、わたしにヨルダンを渡つて行かせ、その向こう側の良い地、あの良い山地、およびレバノンを見ることができるようにしてください』。三六しかし主はあなたがたのゆえにわたしを怒り、わたしに聞かれなかった。そして主はわたしに言われた、『おまえはもはや足りてゐる。この事については、重ねてわたしに言つてはならない。三七おまえはピスガの頂に登り、目をあげて西、北、南、東を望み見よ。おまえはこのヨルダンを渡ることができないからである。三八しかし、おまえはヨシユアに命じ、彼を励まし、彼を強くせよ。彼はこの民に先立つて渡つて行き、彼らにおまえの見る地を継がせるであろう』。三九こうしてわれわれはベテペオルに対する谷にとどまつていた。

第四章

一イスラエルよ、いま、わたしがあなたがたに教える定めと、おきてとを聞いて、これを行いなさい。そうすれば、あなたがたは生きることができ、あなたがたの先祖の神、主が賜わる地にはいつて、それを自分のものとすることができよう。二わたしがあ

なたがたに命じる言葉に付け加えてはならない。また減らしてはならない。わたしが命じるあなたがたの神、主の命令を守ることをするためにある。三あなたがたの目は、主がバアル・ペオルで行われたことを見た。ペオルのバアルに従つた人々は、あなたの神、主がことごとく、あなたのうちから滅ぼしつくされたのである。四しかし、あなたがたの神、主につき従つたあなたがたは皆、きよう、生きながらえている。五わたしはわたしの神、主が命じられたとおりに、定めと、おきてとを、あなたがたに教える。あなたがたがいつて、自分のものとする地において、そのように行つたためである。六あなたがたは、これを守つて行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう。

七われわれの神、主は、われわれが呼び求める時、つねにわれわれに近くおられる。いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか。八また、いずれの大いなる国民に、きよう、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか。

九ただあなたはみずから慎み、またあなた自身をよく守りなさい。そして目に見たことを忘れず、生きながらえている間、それらの事をあなたの心から離してはならない。またそれらのこと

を、あなたの子孫に知らせなければならぬ。一〇あなたがホレブにおいて、あなたの神、主の前に立つた日に、主はわたしに言われた、『民をわたしのもとに集めよ。わたしは彼らにわたしの言葉を聞かせ、地上に生きながらえる間、彼らにわたしを恐れることを学ばせ、またその子供を教えることのできるようにさせよう』。二そこであなたがたは近づいて、山のふもとに立つたが、山は火で焼けて、その炎は中天に達し、暗黒と雲と濃い雲とがあった。三時に主は火の中から、あなたがたに語られたが、あなたがたは言葉の声を聞いたけれども、声ばかりで、なんの形も見なかった。四主はその契約を述べて、それを行うように、あなたがたに命じられた。それはすなわち十誡であつて、主はそれを二枚の石の板に書きしるされた。五その時、主はわたしに命じて、あなたがたに定めと、おきてとを教えさせられた。あなたがたが渡つて行つて自分のものとする地で、行わせるためであつた。

一五それゆゑ、あなたがたはみずから深く慎まなければならぬ。ホレブで主が火の中からあなたがたに語られた日に、あなたがたはなんの形も見なかった。一六それであなたがたは道を誤つて、自分のために、どんな形の刻んだ像をも造つてはならない。男または女の像を造つてはならない。一七すなわち地の土におるもろもろの獣の像、空を飛ぶもろもろの鳥の像、一八地に這うもろもろの物の像、地の下の水の中におるもろもろの魚

の像を造つてはならない。一九あなたはまた目を上げて天を望み、日、月、星すなわちすべて天の万象を見、誘惑されてそれをおがき、それに仕えてはならない。それらのものは、あなたの神、主が全天下の万民に分けられたものである。二〇しかし、主はあなたがたを取つて、鉄の炬すなわちエジプトから導き出し、自分の所有の民とされた。きよう、見るとおりである。二とこゝろで主はあなたがたのゆゑに、わたしを怒り、わたしがヨルダンを渡つて行くことができなかつたことと、あなたの神、主が嗣業としてあなたがたに賜わる良い地にはいることができなかつたことを誓われた。三わたしはこの地で死ぬ。ヨルダンを渡つて行くことはできない。しかしあなたがたは渡つて行つて、あの良い地を獲得であらう。四あなたがたは憤み、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れて、あなたの神、主が禁じられたどんな形の刻んだ像をも造つてはならない。五あなたがたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である。

一五あなたがたが子を生み、孫を得、長くその地におるうちに、道を誤つて、すべて何かの形に刻んだ像を造り、あなたの神、主の目の前に悪をなして、その憤りを引き起すことがあれば、二六わたしは、きよう、天と地を呼んであなたがたに對してあかしとする。あなたがたはヨルダンを渡つて行つて獲る地から、たちまち全滅するであらう。あなたがたはその所で長く命を保つことができず、全く滅ぼされるであらう。二七主はあなたがたを

国々に散らされるであろう。そして主があなたがたを追いやられる国民のうちに、あなたがたの残る者の数は少ないであろう。二八その所であなたがたは人が手で作った、見ることも、聞くことも、食べることも、かぐこともない木や石の神々に仕えるであろう。二九しかし、その所からあなたの神、主を求め、もし心をつくし、精神をつくして、主を求めるならば、あなたは主に会うであろう。三〇後の日になつて、あなたがなやみにあい、これらのすべての事が、あなたに臨むとき、もしあなたの神、主に立ち帰つてその声に聞きしたがうならば、三一あなたの神、主はいつくしみの深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、またあなたの先祖に誓つた契約を忘れられないであろう。三二試みにあなたの前に過ぎ去つた日について問え。神が地上に人を造られた日からこのかた、天のこの端から、かの端までに、かつてこのように大いなる事があつたであろうか。このようなことを聞いたことがあつたであろうか。三三火の中から語られる神の声をあなたが聞いたように、聞いてなお生きていた民がかつてあつたであろうか。三四あるいはまた、あなたがたの神、主がエジプトにおいて、あなたがたの目の前に、あなたがたのためにしろもろの事をなされたように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、強い手と、伸ばした腕と、大いなる恐るべき事をもつて臨み、一つの国民を他の国民のうちから引き出して、自分の民とされた神が、かつてあつたであろうか。三五あ

なたにこの事を示したのは、主こそ神であつて、ほかに神のいないことを知らせるためであつた。三六あなたがたを訓練するために、主は天からその声を聞かせ、地上では、またその大いなる火を示された。あなたはその言葉が火の中から出るのを聞いた。三七主はあなたの先祖たちを愛されたので、その後の子孫を選び、大いなる力をもつて、みずからあなたをエジプトから導き出し、三八あなたよりも大きく、かつ強いしろもろの国民を、あなたの前から追い払い、あなたをその地に導き入れて、これを嗣業としてあなたに与えようとされること、今日見るとおりである。三九それゆえ、あなたは、きよう知つて、心にとめなければならない。上は天下は地において、主こそ神にいまし、ほかに神のいないことを。四〇あなたは、きよう、わたしが命じる主の定めと命令とを守らなければならない。そうすれば、あなたとあなたの後の子孫はさいわいを得、あなたの神、主が永久にあなたに賜わる地において、長く命を保つことができるであろう。四一それからモーセはヨルダンの向こう側、東の方に三つの町々を指定した。四二過去の恨みによるのではなく、あやまつて隣人を殺した者をそこにのがれさせ、その町の一つにのがれて、命を全うさせるためであつた。四三すなわちルベンびとのためには荒野の中の高地にあるベゼルを、ガドびとのためにはギレアデのラモテを、マナセびとのためにはバシヤンのグランを定めた。

四四 モーセがイスラエルの人々の前に示した律法はこれである。
四五 イスラエルの人々がエジプトから出たとき、モーセが彼らに述べたあかしと、定めと、おきてとはこれである。四六 すなわちヨルダンの向こう側、アモリびとの王シホンの国のベテペオルに對する谷においてこれを述べた。シホンはヘシボンに住んでいたが、モーセとイスラエルの人々が、エジプトを出てきた時、これを撃ち敗つて、四七 その国を獲、またバシヤンの王オグの国を獲た。このふたりはアモリびとの王であつて、ヨルダンの向こう側、東の方におつた。四八 彼らの獲た地はアルノン川のほとりにあるアロエルからシリオン山すなわちヘルモンに及び、四九 ヨルダンの東側のアラバの全部をかねて、アラバの海に達し、ピスガのふもとに及んだ。

第五章

一 さてモーセはイスラエルのすべての人を召し寄せて言つた、「イスラエルよ、きよう、わたしがあなたがたの耳に語る定めと、おきてを聞き、これを学び、これを守つて行え。二 われわれの神、主はホレブで、われわれと契約を結ばれた。三 主はこの契約をわれわれの先祖たちとは結ばず、きよう、ここに生きているにわたるわれわれすべての者と結ばれた。四 主は山で火の中から、あなたがたと顔を合せて語られた。五 その時、わたしは主とあなた

がたとの間に立つて主の言葉をあなたがたに伝えた。あなたがたは火のゆえに恐れて山に登ることができなかったからである。主は言われた、

六 『わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した者である。七 あなたはわたしのほかに何ものをも神としてはならない。八 あなたは自分のために刻んだ像を造つてはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どのような形をも造つてはならない。九 それを拝んではならない。またそれに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし、一〇 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には恵みを施して千代に至るであらう。

二 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。主はその名をみだりに唱える者を罰しないではおかぬであらう。

三 安息日を守つてこれを聖とし、あなたの神、主があなたに命じられたようにせよ。一三 六日のあいだ働いて、あなたのすべてのわざをしなければならぬ。一四 七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたも、あなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、牛、ろば、もろもろの家畜も、あなたの門のうちにおる他国の人も同じである。こうしてあなたのしもべ、はしためを、あなたと同じように休ませな

ければならない。一五 あなたはかつてエジプトの地で奴隷であつたが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕をもつて、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならぬ。それゆゑ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。

一六 あなたの神、主が命じられたように、あなたの父と母とを敬え。あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く命を保ち、さいわいを得ることのできるためである。

一七 あなたは殺してはならない。

一八 あなたは姦淫してはならない。

一九 あなたは盗んではならない。

二〇 あなたは隣人について偽証してはならない。

二一 あなたは隣人の妻をむさぼつてはならない。また隣人の家、畑、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをほしがつてはならない。

二三 主はこれらの言葉を山で火の中、雲の中、濃い雲の中から、大いなる声をもつて、あなたがたの全会衆にお告げになつたが、このほかのことは言われず、二枚の石の板にこれを書きしるして、わたしに授けられた。二三 時に山は火で燃えていたが、あなたがたが暗黒のうちから聞える声を聞くに及んで、あなたがたの部族のすべてのかしらと長老たちは、わたしに近寄つて、二四 言つた、『われわれの神、主がその栄光と、その大いなることと

を、われわれに示されて、われわれは火の中から出るその声を聞きました。きよう、われわれは神が人と語られ、しかもなおその人が生きているのを見ました。二五 われわれはなぜ死ななければならぬでしょうか。この大いなる火はわれわれを焼き滅ぼそうとしています。もしこの上なおわれわれの神、主の声を聞くならば、われわれは死んでしまふでしょう。二六 およそ肉なる者のうち、だれが、火の中から語られる生ける神の声を、われわれのように聞いてなお生きている者がありましようか。二七 あなたはどうぞ近く進んで行つて、われわれの神、主が言われることをみな聞き、われわれの神、主があなたにお告げになることをすべてわれわれに告げてください。われわれは聞いて行きます』。

二八 あなたがたがわたしに語っている時、主はあなたがたの言葉を聞いて、わたしに言われた、『わたしはこの民がおまえに語っている言葉を聞いた。彼らの言つたことはみな良い。二九 ただ願わしいことは、彼らがつねにこのような心をもつてわたしを恐れ、わたしのすべての命令を守つて、彼らもその子孫も永久にさいわいを得るにいたることである。三〇 おまえは行つて彼らに、「あなたがたはおのその天幕に帰れ」と言え。三十一 しかし、おまえはこの所でわたしのそばに立て。わたしはすべての命令と、定めと、おきてとをおまえに告げ示すであらう。おまえはこれを彼らに教え、わたしが彼らに与えて獲させる地におい

て、これを行わせなければならぬ。三それゆえ、あなたがたの神、主が命じられたとおりに、慎んで行わなければならない。そして左にも右にも曲つてはならない。四あなたがたの神、主が命じられた道に歩まなければならない。そうすればあなたがたは生きることができ、かつさいわいを得て、あなたがたの獲る地において、長く命を保つことができるであらう。

第六章

一これはあなたがたの神、主があなたがたに教えよと命じられた命令と、定めと、おきてであつて、あなたがたは渡つて行つて獲る地で、これを行わなければならない。二これはあなたがたの子や孫と共に、あなたの生きながらえる日の間、つねにあなたの神、主を恐れて、わたしが命じるもろもろの定めと、命令とを守らせるため、またあなたが長く命を保つことのできるためである。三それゆえ、イスラエルよ、聞いて、それを守り行え。そうすれば、あなたはさいわいを得、あなたの先祖の神、主があなたに言われたように、乳と蜜の流れる国で、あなたの数は大いに増すであらう。

四イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。五あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。六きよう、わたしがあなたに命じる

これらの言葉をあなたの心に留め、七努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。八またあなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、九またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない。

一〇あなたの神、主は、あなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに向かつて、あなたに与えたと誓われた地に、あなたをはいらせられる時、あなたが建てたものでない大きな美しい町々を得させ、一あなたが満たしたものでないもろもろのよい物を満たした家を得させ、あなたが掘つたものでない掘り井戸を得させ、あなたが植えたものでないぶどう畑とオリブの畑とを得させられるであらう。あなたは食べて飽きるであらう。二その時、あなたはみずから憤み、エジプトの地、奴隸の家から導き出された主を忘れてはならない。三あなたの神、主を恐れてこれに仕え、その名をさして誓わなければならない。四あなたがたは他の神々すなわち周囲の民の神々に従つてはならない。五あなたのうちにおられるあなたの神、主はねたむ神であるから、おそらく、あなたに向かつて怒りを発し、地のおもてからあなたを滅ぼし去られるであらう。

一六あなたがたがマッサでしたように、あなたがたの神、主を試みてはならない。一七あなたがたの神、主があなたがたに命じら

れた命令と、あかしと、定めとを、努めて守らなければならない。
 一八あなたは主が見て正しいとし、良いとされることを行わなければならない。そうすれば、あなたはさいわいを得、かつ主があなたの先祖に誓われた、あの良い地にはいつて、自分のものとする事ができるであろう。一九また主が仰せられたように、あなたの敵を皆あなたの前から追い払われるであろう。
 二〇後の日となつて、あなたの子があなたに問うて言うであろう、『われわれの神、主があなたがたに命じられたこのあかしと、定めと、おきてとは、なんのためですか』。二一その時あなたはその子に言わなければならない。『われわれはエジプトでパロの奴隷であつたが、主は強い手をもつて、われわれをエジプトから導き出された。二三主はわれわれの目の前で、大きな恐ろしいしるしと不思議とをエジプトと、パロとその全家とに示され、二三われわれをそこから導き出し、かつてわれわれの先祖に誓われた地にはいらせ、それをわれわれに賜つた。二四そして主はこのすべての定めを行へと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわれを守つて命を保たせるためである。二五もしわれわれが、命じられたとおりに、このすべての命令をわれわれの神、主の前に守つて行ふならば、それはわれわれの義となるであろう』。

第七章

一あなたの神、主が、あなたの行つて取る地にあなたを導き入れ、多くの国々の民、ヘテびと、ギルガシびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、およびエブスびと、すなわちあなたよりも数多く、また力のある七つの民を、あなたの前から追いはられる時、二すなわちあなたの神、主が彼らをあなたに渡し、これを撃たせられる時は、あなたは彼らを全く滅ぼさなければならない。彼らとあなたの契約をもしてはならない。彼らに何のあわれみをも示してはならない。三また彼らと婚姻をしてはならない。あなたの娘を彼のむすこに与えてはならない。かれの娘をあなたのむすこにめとつてはならない。四それは彼らがあなたのむすこを惑わしてわたしに従わせず、ほかの神々に仕えさせ、そのため主はあなたがたにむかつて怒りを発し、すみやかにあなたがたを滅ぼされることとなるからである。五むしろ、あなたがたはこのように彼らに行わなければならない。すなわち彼らの祭壇をこぼち、その石の柱を撃ち砕き、そのアシラ像を切り倒し、その刻んだ像を火で焼かなければならない。六あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。七主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。

あなたがたはよろずの民のうち、もつとも数の少ないものであつた。ハただ主があなたがたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもつてあなたがたを導き出し、奴隸の家から、エジプトの王パロの手から、あがなひ出されたのである。九それゆえあなたは知らなければならぬ。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及び、〇また彼を憎む者には、めいめいに報いて滅ぼされることを。主は自分を憎む者には猶予することなく、めいめいに報いられる。二それゆえ、きようわたしがあなたに命じる命令と、定めと、おきてとを守つて、これを行わなければならぬ。三あなたがたがこれらのおきてを聞いて守り行ふならば、あなたの神、主はあなたの先祖たちに誓われた契約を守り、いつくしみを施されるであらう。四あなたがたを祝福し、あなたの数を増し、あなたに与えろと先祖たちに誓われた地で、あなたの子女を祝福し、あなたの地の産物、穀物、酒、油、また牛の子、羊の子を増されるであらう。五あなたは万民にまさつて祝福されるであらう。あなたのうち、男も女も子のないものはなく、またあなたの家畜にも子のないものはないであらう。六主はまたすべての病をあなたから取り去り、あなたの知つてゐる、あのエジプトの悪疫にかからせず、ただあなたを憎むすべての者にそれを臨ませられるであらう。七あなたは神、主があ

なたに渡される国民を滅ぼしつくし、彼らを見てあわれんでほならない。また彼らの神々に仕えてはならない。それがあなたのわなとなるからである。八あなたは心のうちで『これらの国民はわたしよりも多いから、どうしてこれを追い払うことができようか』と言うのか。九彼らを恐れてはならない。あなたの神、主がパロと、すべてのエジプトびとにされたことを、よく覚えなさい。一〇すなわち、あなたが目で見た大いなる試みと、しるしと、不思議と、強い手と、伸ばした腕とを覚えなさい。あなたの神、主はこれらをもつて、あなたを導き出されたのである。またそのように、あなたの神、主はあなたが恐れているすべての民にされるであらう。二あなたがたの神、主はまた、くまばちを彼らのうちに送つて、なお残つてゐる者と逃げ隠れてゐる者を滅ぼしつくされるであらう。三あなたは彼らを恐れてはならない。あなたの神、主でである大いなる恐るべき神があなたのうちにおられるからである。四あなたの神、主はこれらの国民を徐々にあなたの前から追い払われるであらう。あなたはすみやかに彼らを滅ぼしつくしてはならない。そうでなければ、野の獣が増してあなたを害するであらう。五しかし、あなたの神、主は彼らをあなたに渡し、大いなる混乱におとし入れて、ついに滅ぼされるであらう。六また彼らの王たちをあなたの手に渡されるであらう。あなたは彼らの名を天の下から消し去るであらう。あなたに立ちむかうも

のはなく、あなたはついに彼らを滅ぼすにいたるであろう。二五あなたは彼らの神々の彫像を火に焼かなければならない。それに着せた銀または金をむきぼつてはならない。これを取つて自分のものにしてはならない。そうでなければ、あなたはこれによつて、わなにかかるであろう。これはあなたの神が忌みきらわれるものだからである。二六あなたは忌むべきものを家に持ちこんで、それと同じようにあなた自身も、のろわれたものとなつてはならない。あなたはそれを全く忌みきらわなければならない。それはのろわれたものだからである。

第八章

一わたしが、きよう、命じるこのすべての命令を、あなたがたは守つて行わなければならない。そうすればあなたがたは生きることができ、かつふえ増し、主があなたがたの先祖に誓われた地にはいつて、それを自分のものとすることができるであろう。二あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導かれたすべての道を覚えなければならない。それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであつた。三それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかつたマナをもつて、あなたを養われた。人はパンだけ

では生きず、人は主の口から出るすべてのことばによつて生きることあなたに知らせるためであつた。四この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかつた。五あなたはまた人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならない。六あなたの神、主の命令を守り、その道に歩んで、彼を恐れなければならない。七それはあなたの神、主があなたを良い地に導き入れられるからである。そこは谷にも山にもわき出る水の流れ、泉、および淵のある地、ハ小麦、大麦、ぶどう、いちじく及びぎくろのある地、油のオリブの木、および蜜のある地、九あなたが食べる食物に欠けることなく、なんの乏しいこともない地である。その地の石は鉄であつて、その山からは銅を掘り取ることができる。一〇あなたは食べて飽き、あなたの神、主がその良い地を賜つたことを感謝するであろう。

二あなたは、きよう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。三あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、三また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、一四おそろく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう。主はあなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出し、一五あなたを導いて、あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通り、あなたのため

に堅い岩から水を出し、二六先祖たちも知らなかったマナを荒野であなたに食べさせられた。それはあなを苦しめ、あなを試みて、ついにはあなをさいわいにするためであつた。一七あなは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言つてはならない。一八あなはあな自身の神、主を覚えなければならぬ。主はあな自身の先祖たちに誓われた契約を今日のように行うために、あなに富を得る力を与えられるからである。一九もしあな自身の神、主を忘れて他の神々に従い、これに仕え、これを拝むならば、――わたしは、きよう、あなにがたに警告する。――あなはがたはきつと滅びるであろう。二〇主があなにがたの前から滅ぼし去られる国々の民のように、あなはがたも滅びるであろう。あなはがたの神、主の声に従わなからである。

第九章

一イスラエルよ、聞きなさい。あなたは、きよう、ヨルダンを渡つて行つて、あなよりも大きく、かつ強い国々を取ろうとしている。その町々は大きく、石がき天に達している。二その民は、あな自身の知つてゐるアナクびとの子孫であつて、大きく、また背が高い。あなはまた『アナクの子孫の前に、だれが立つことができようか』と人の言うのを聞いた。三それゆゑ、あなは、

きよう、あな自身の神、主は焼きつくす火であつて、あな自身に進まれることを知らなければならぬ。主は彼らを滅ぼし、彼らをあな自身の前に屈伏させられるであろう。主があなに言われたように、彼らを追い払い、すみやかに滅ぼさなければならぬ。

四あな自身の神、主があな自身の前から彼らを追い払われた後に、あなは心のなかで『わたしが正しいから主はわたしをこの地に導き入れてこれを獲させられた』と言つてはならない。この国々の民が悪いから、主はこれをあな自身の前から追い払われるのである。五あなが行つてその地を獲るのは、あな自身が正しいからではなく、またあな自身の心がまつすぐだからでもない。この国々の民が悪いから、あな自身の神、主は彼らをあな自身の前から追い払われるのである。これは主があな自身の先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた言葉を行われるためである。

六それであなは、あな自身の神、主があな自身にこの良い地を与えてこれを得させられるのは、あな自身が正しいからではないことを知らなければならぬ。あなは強情な民である。七あなは荒野であな自身の神、主を怒らせたことを覚え、それを忘れてはならない。あなはがたはエジプトの地を出た日からこの所に來るまで、いつも主にそむいた。八またホレブにおいてさえ、あなはがたが主を怒らせたので、主は怒つてあなを滅ぼそうとされた。九わたしが石の板すなわち主があなにがたと結ばれ

た契約の板を受けるために山に登った時、わたしは四十日四十夜、山にいて、パンも食べず水も飲まなかった。二〇主は神の指をもつて書きしるした石の板二枚をわたしに授けられた。その上には、集会の日に主が山で火の中から、あなたがたに告げられた言葉が、ことごとく書いてあった。二すなわち四十日四十夜が終った時、主はわたしにその契約の板である石の板二枚を授け、三そして主はわたしに言われた、『おまえは立って、すみやかにこの所から降りなさい。おまえがエジプトから導き出した民は悪を行つたからである。彼らはわたしに命じた道を早くも離れて、鑄た像を自分たちのために造つた』。

三三主はまたわたしに言われた、『この民を見るのに、これは強情な民である。一四わたしを止めるな。わたしは彼らを滅ぼし、彼らの名を天の下から消し去り、おまえを彼らよりも強く、かつ大いなる国民としよう』。一五そこでわたしは身をめぐらして山を降りたが、山は火で焼けていた。契約の板二枚はわたしの両手にあつた。一六そしてわたしが見ると、あなたがたは、あなたがたの神、主にむかつて罪を犯し、自分たちのために鑄物の子牛を造つて、主が命じられた道を早くも離れたので、一七わたしはその二枚の板をつかんで、両手から投げ出し、あなたがたの目の前でこれを砕いた。一八そしてわたしは前のように四十日四十夜、主の前にひれ伏し、パンも食べず、水も飲まなかった。これはあなたがたが主の目の前に悪をおこない、罪を犯して主

を怒らせたすべての罪によるのである。一九主は怒りを発し、憤りを起し、あなたがたを怒つて滅ぼそうとされたので、わたしは恐れたが、その時もまた主はわたしの願いを聞かれた。二〇主はまた、はなはだしくアロンを怒つて、彼を滅ぼそうとされたが、わたしはその時もまたアロンのために祈つた。二一わたしはあなたがたが造つて罪を得た子牛を取り、それを火で焼き、それを撃ち砕き、よくひいて細かいちりとし、そのちりを山から流れ下る谷川に投げ捨てた。

三二あなたがたはタベラ、マツサおよびキプロテ・ハツタワにおいてもまた主を怒らせた。三三また主はカデシ・バルネアから、あなたがたをつかわそうとされた時、『上つて行って、わたしが与える地を占領せよ』と言われた。ところが、あなたがたはあなたがたの神、主の命令にそむき、彼を信ぜず、また彼の声に聞き従わなかった。三四わたしがあなたがたを知つたその日からこのかた、あなたがたはいつも主にそむいた。

三五そしてわたしは、さきにひれ伏したように、四十日四十夜、主の前にひれ伏した。主があなたがたを滅ぼすと言われたからである。二六わたしは主に祈つて言つた、『主なる神よ、あなたがたの力をもつてあがない、強い手をもつてエジプトから導き出されたあなたの民、あなたの嗣業を滅ぼさないでください。二七あなたのしもべアブラハム、イサク、ヤコブを覚えてください。二八この民の強情と悪と罪とに目をとめないでください。二九

第一〇章

あなたがわれわれを導き出された国の人はおそらく、「主は、約束した地に彼らを導き入れることができず、また彼らを憎んだので、彼らを導き出して荒野で殺したのだ」と言うでしょう。元しかし彼らは、あなたの民、あなたの嗣業であつて、あなたが大きい力と伸ばした腕をもつて導き出されたのです」。

「その時、主はわたしに言われた、『おまえは、前のような石の板二枚を切つて作り、山に登つて、わたしのもとにきなさい。また木の箱一つを作りなさい。ニさきにおまえが砕いた二枚の板に書いてあつた言葉を、わたしはその板に書きしるそう。おまえはそれをその箱におさめなければならない』。ミそこでわたしはアカシヤ材の箱一つを作り、また前のような石の板二枚を切つて作り、その二枚の板を手につけて山に登つた。四主はかつて、かの集会の日に山で火の中からあなたがたに告げられた十誠を書きしるされたように、その板に書きしるし、それを主はわたしに授けられた。五それでわたしは身をめぐらして山から降り、その板を、わたしがつくった箱におさめた。今なおその中にある。主がわたしに命じられたとおりである。

六（こうしてイスラエルの人々はベエロテ・ペネ・ヤカンを出立してモセラに着いた。アロンはその所で死んでそこに葬られ、

その子エレアザルが彼に代つて祭司となつた。七またそこを出立してグデゴダに至り、グデゴダを出立してヨテパタに着いた。この地には多くの水の流れがあつた。ハその時、主はレビの部族を選んで、主の契約の箱をかつき、主の前に立つて仕え、また主の名をもつて祝福することをさせられた。この事は今日に及んでいる。九そのためレビは兄弟たちと一緒に分け前がなく、嗣業もない。あなたの神、主が彼に言われたとおり、主みずからが彼の嗣業であつた。）」

「わたしは前の時のように四十日四十夜、山におつたが、主はその時にもわたしの願いを聞かれた。主はあなたを滅ぼすことを望まねかつた。ニそして主はわたしに『おまえは立ちあがり、民に先立つて進み行き、わたしが彼らに与えると、その先祖に誓つた地に彼らをはいらせ、それを取らせよ』と言われた。

三イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求められる事はなんであるか。ただこれだけである。すなわちあなたの神、主を恐れ、そのすべての道に歩んで、彼を愛し、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主に仕え、ミまた、わたしがきようあなたに命じる主の命令と定めとを守つて、さいわいを得ることである。一四見よ、天と、もろもろの天の天、および地と、地にあるものとはみな、あなたの神、主のものである。一五そうであるのに、主はただあなたの先祖たちを喜び愛し、その後の子孫であるあなたがたを万民のうちから選ばれた。今日見るとおり

第一章

である。一六それゆえ、あなたがたは心に割礼をおこない、もはや強情であつてはならない。一七あなたがたの神である主は、神の神、主の主、大いにして力ある恐るべき神にましまし、人をかたより見ず、また、まいないを取らず、一八みなし子とやもめのために正しいさばきを行い、また寄留の他国人を愛して、食物と着物を与えられるからである。一九それゆえ、あなたがたは寄留の他国人を愛しなさい。あなたがたもエジプトの国で寄留の他国人であつた。二〇あなたの神、主を恐れ、彼に仕え、彼に従い、その名をさして誓わなければならない。二一彼はあなたのさんびすべきもの、またあなたの神であつて、あなたが目に見たこれらの大いなる恐るべき事を、あなたのために行われた。二三あなたの先祖たちは、わずか七十人でエジプトに下つたが、いま、あなたの神、主はあなたを天の星のように多くされた。

一それゆえ、あなたの神、主を愛し、常にそのさとしと、定めとおきてと、戒めとを守らなければならない。二あなたがたは、きよう、次のことを知らなければならない。わたしが語るのは、あなたがたの子供たちに対してではない。彼らはあなたがたの神、主の訓練と、主の大いなる事と、その強い手と、伸べた腕とを知らず、また見なかった。三また彼らは主がエジプトで、エジ

プト王パロとその全国に対して行われたしるしと、わざ、四また主がエジプトの軍勢とその馬と戦車とに行われた事、すなわち彼らがあなたがたのあとを追つてきた時に、紅海の水を彼らの上にあふれさせ、彼らを滅ぼされて、今日に至つた事、五またあなたがたがこの所に来るまで、主が荒野で、あなたがたに行われた事、六およぶルベンの子のエリアブの子、ダタンとアビラムとにされた事、すなわちイスラエルのすべての人々の中で、地が口を開き、彼らと、その家族と、天幕と、彼らに従うすべてのものを、のみつくした事などを彼らは知らず、また見なかった。セしかし、あなたがたは主が行われたこれらの大いなる事を、ことごとく目に見たのである。

ハゆえに、わたしが、きよう、あなたがたに命じる戒めを、ことごとく守らなければならない。そうすればあなたがたは強くなり、渡つて行つて取ろうとする地にはいつて、それを取ることで、九かつ、主が先祖たちに誓つて彼らとその子孫とに与えようと言われた地、乳と蜜の流れる国において、長く生きることができである。一〇あなたがたが行つて取ろうとする地は、あなたがたがでてきたエジプトの地のようではない。あそこで、青物畑できるように、あなたがたは種をまき、足でそれに水を注いだ。二しかし、あなたがたが渡つて行つて取る地は、山と谷の多い地で、天から降る雨で潤っている。三その地は、あなたの神、主が顧みられる所で、年の始めから年の終りまで、

あなたの神、主の目が常にその上にある。

二三もし、きよう、あなたがたに命じるわたしの命令によく聞き従って、あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくして仕えるならば、一四主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨とともに、時にしたがって降らせ、穀物と、ぶどう酒と、油を取り入れさせ、一五また家畜のために野に草を生えさせられるであろう。あなたは飽きるほど食べることができようであろう。一六あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むことのないよう、慎まなければならない。一七おそらく主はあなたがたにむかい怒りを発して、天を閉ざされるであろう。そのため雨は降らず、地は産物を出さず、あなたがたは主が賜わる良い地から、すみやかに滅びうせるであろう。

一八それゆえ、これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、またそれを手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとし、一九これを子供たちに教え、家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、それについて語り、二〇また家の入口の柱と、門にそれを書きしるさなければならない。二一そうすれば、主が先祖たちに与えようと誓われた地に、あなたがたの住む日数およびあなたがたの子供たちの住む日数は、天が地をおおう日数のように多いであろう。二三もしわたしがあなたがたに命じるこのすべての命令をよく守って行い、あなたがたの神、主を愛し、そのすべての道に歩み、主につき従うならば、二三主はこの

国々の民を皆、あなたがたの前から追い払われ、あなたがたはあなたがたよりも大きく、かつ強い国々を取るに至るであろう。二四あなたがたが足の裏で踏む所は皆、あなたがたのものとなり、あなたがたの領域は荒野からレバノンに及び、また大川ユーフラテから西の海に及びであろう。二五だれもあなたがたに立ち向かうことのできる者はないであろう。あなたがたの神、主は、かつて言われたように、あなたがたの踏み入る地の人々が、あなたがたを恐れおののくようにされるであろう。

二六見よ、わたしは、きよう、あなたがたの前に祝福と、のろいとを置く。二七もし、きよう、わたしがあなたがたに命じるあなたがたの神、主の命令に聞き従うならば、祝福を受けるであろう。二八もしあなたがたの神、主の命令に聞き従わず、わたしが、きよう、あなたがたに命じる道を離れ、あなたがたの知らなかつた他の神々に従うならば、のろいを受けるであろう。二九あなたがたの神、主が、あなたがたの行つて占領する地にあなたを導き入れられる時、あなたはゲリジム山に祝福を置き、エバル山にのろいを置かなければならない。三〇これらの山はヨルダンの向こう側、アラバに住んでいるカナンびとの地で、日の入る方の道の西側にあり、ギルガルに向かいあつて、モレのテレビンの木の近くにあるではないか。三一あなたがたはヨルダンを渡り、あなたがたの神、主が賜わる地にはいつて、それを占領しようとしてゐる。あなたがたはそれを占領して、そこに住むであろう。三二

それゆえ、わたしが、きよう、あなたがたに授ける定めと、おきてをことごとく守って行わなければならない。

第二章

「これはあなたの先祖たちの神、主が所有として賜わる地で、あなたがたが世に生きながらえている間、守り行わなければならない定めと、おきてである。二あなたがたの追ひ払う国々の民が、その神々に仕えた所は、高い山にあるものも、丘にあるものも、青木の下にあるものも、ことごとくこわし、三その祭壇をこぼち、柱を砕き、アシラ像を火で焼き、また刻んだ神々の像を切り倒して、その名をその所から消し去らなければならない。四ただし、あなたがたの神、主にはそのようにしてはならない。五あなたがたの神、主がその名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ばれる場所、すなわち主のすまいを尋ね求めて、そこに行き、六あなたがたの燔祭と、犠牲と、十分の一と、ささげ物と、誓願の供え物と、自発の供え物および牛、羊のういごをそこに携えて行つて、七そこであなたがたの神、主の前で食べ、あなたがたも、家族も皆、手を労して獲るすべての物を喜び楽しむものだからである。八そこでは、われわれがきようここでしているように、めいめいで正しいと思うようにふるまつてはなら

ない。九あなたがたはまだ、あなたがたの神、主から賜わる安息と嗣業の地に、はいっていないのである。一〇しかし、あなたがたがヨルダンを渡り、あなたがたの神、主が嗣業として賜わる地に住むようになり、さらに主があなたがたの周囲の敵をことごとく除いて、安息を与え、あなたがたが安らかに住むようになる時、二あなたがたの神、主はその名を置くために、一つの場所を選ばれるであろう。あなたがたはそこにわたしの命じる物をすべて携えて行かなければならない。すなわち、あなたがたの燔祭と、犠牲と、十分の一と、ささげ物およびあなたがたが主に誓つたすべての誓願の供え物とを携えて行かなければならない。三そしてあなたがたのむすこ、娘、しもべ、はしためと共にあなたがたの神、主の前に喜び楽しまなければならない。また町の内におけるレビびとも、そうしなければならない。彼はあなたがたのうちに分け前がなく、嗣業を持たないからである。四慎んで、すべてあなたがよいと思う場所で、みだりに燔祭をささげないようにしなければならない。五ただあなたがたの部族の一つのうちに、主が選ばれるその場所で、燔祭をささげ、またわたしが命じるすべての事をしなければならぬ。六しかし、あなたの神、主が賜わる恵みにしたがって、すべて心に好む獣を、どの町でも殺して、その肉を食べることができ、すなわち、かもしかや雄じかの肉と同様にそれを、汚れた人も、清い人も、食べることができる。七ただし、その血は食べ

てはならない。水のようにならなければならぬ。注がなければならぬ。二七 あなたの穀物と、ぶどう酒と、油との十分の一および牛、羊のういご、ならびにあなたが立てる誓願の供え物と、自発の供え物およびさきげ物は、町の内で食べることはできない。二八 あなたの神、主が選ばれた場所、あなたの神、主の前でそれを食べなければならぬ。すなわちあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、および町の内におけるレビびとと共にそれを食べ、手を勞して獲るすべての物を、あなたの神、主の前に喜び樂しまなければならぬ。二九 慎んで、あなたが世に生きながらえている間、レビびとを捨てないようにしなければならぬ。

三〇 あなたの神、主が約束されたように、あなたの領域を広くされるるとき、あなたは肉を食べたいと願って、『わたしは肉を食べよう』と言うであろう。その時、あなたはほしただけ肉を食べることができない。三二 もしあなたの神、主がその名を置くために選ばれた場所が、遠く離れているならば、わたしが命じるように、主が賜わる牛、羊をほふり、門の内で、ほしただけ食べることができる。三三 かもしかや、雄じかを食べるように、それを食べることができる。すなわち汚れた人も、清い人も一様にそれを食べることができる。三三 ただ堅く慎んで、その血を食べないようにならなければならぬ。血は命だからである。その命を肉と一緒に食べてはならない。三四 あなたはそれを食べてはならない。水のようにそれを地に注がなければならぬ。三五 あなた

はそれを食べてはならない。こうして、主が正しいと見られる事を行うならば、あなたにも後の子孫にも、さいわいがあるであろう。三六 ただあなたのささげる聖なる物と、誓願の物とは、主が選ばれた場所へ携えて行かなければならぬ。三七 そして燔祭をささげる時は、肉と血とをあなたの神、主の祭壇の上にささげなければならぬ。犠牲をささげる時は、血をあなたの神、主の祭壇にそそぎかけ、肉はみずから食べることができる。三八 あなたはわたしが命じるこれらの事を、ことごとく聞いて守らなければならぬ。こうしてあなたの神、主が見て良いとし、正しいとされる事を行うならば、あなたにも後の子孫にも、長くさいわいがあるであろう。

三九 あなたの神、主が、あなたの行つて追い払おうとする国々の民を、あなたの前から断ち滅ぼされ、あなたがついにその国々を獲て、その地に住むようになる時、四〇 あなたはみずから憤り、彼らがあなたの前から滅ぼされた後、彼らにならつて、わなにかかつてはならない。また彼らの神々を尋ね求めて、『これらの国々の民はどのようにその神々に仕えたのか、わたしもそのようにしよう』と言つてはならない。四一 あなたの神、主に対しては、そのようにしてはならない。彼らは主の憎まれるものもろの忌むべき事を、その神々にむかつて行い、むすこ、娘をさええ火に焼いて、神々にささげたからである。

四二 あなたがわたしに命じるこのすべての事を守つて行わ

なければならぬ。これにつけ加えてはならぬ。また減らし
てはならぬ。

第二三章

「あなたがたのうちに預言者または夢みる者が起つて、しるし
や奇跡を示し、二あなたに告げるそのしるしや奇跡が実現して、
あなたがこれまで知らなかつた『ほかの神々に、われわれは従い
仕えよう』と言つても、三あなたはその預言者または夢みる者の
言葉に聞き従つてはならぬ。あなたがたの神、主はあなたが
たが心をつくし、精神をつくして、あなたがたの神、主を愛する
か、どうかを知ろうと、このようにあなたがたを試みられるから
である。四あなたがたの神、主に従つて歩み、彼を恐れ、その戒
めを守り、その言葉に聞き従い、彼に仕え、彼につき従わなけれ
ばならぬ。五その預言者または夢みる者を殺さなければなら
ない。あなたがたをエジプトの国から導き出し、奴隸の家から
あがなれたあなたがたの神、主にあなたがたをそむかせ、あな
たの神、主が歩めと命じられた道を離れさせようとして語るゆ
えである。こうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなけれ
ばならぬ。

六同じ母に生れたあなたの兄弟、またはあなたのむすこ、娘、ま
たはあなたのふところの妻、またはあなたと身命を共にする友

が、ひそかに誘つて『われわれは行つて他の神々に仕えよう』と
言うかも知れない。これはあなたも先祖たちも知らなかつた
神々、セすなわち地のこのはてから、地のかのはてまで、あるい
は近く、あるいは遠く、あなたの周囲にある民の神々である。ハ
しかし、あなたはその人に従つてはならない。その人の言うこ
とを聞いてはならない。その人をあわれんではいない。その
人を憎しんではいない。その人をかばつてはいない。九必
ず彼を殺さなければならぬ。彼を殺すには、あなたがまず彼
に手を下し、その後、民がみな手を下さなければならぬ。一〇
彼はエジプトの国、奴隸の家からあなたを導き出されたあなた
の神、主からあなたを離れさせようとしたのであるから、あなた
は石をもって彼を撃ち殺さなければならぬ。一一そうすれば
イスラエルは皆聞いて恐れ、重ねてこのような悪い事を、あなた
がたのうちにやらないであらう。

一二あなたがたの神、主があなたに与えて住まわせられる町の一つ
で、一三よこしまな人々があなたがたのうちに起つて、あなたが
たの知らなかつた『ほかの神々に、われわれは行つて仕えよう』
と言つて、その町に住む人々を誘惑したことを聞くならば、一四
あなたはそれを尋ね、探り、よく問いたださなければならぬ。
そして、そのような憎むべき事があなたがたのうちにやられた
事が、真実で、確かならば、一五あなたは必ず、その町に住む者
をつるぎの刃にかけて撃ち殺し、その町と、そのうちにおるすべ

ての者、およびその家畜をつるぎの刃にかけて、ことごとく滅ぼさなければならぬ。一六またそのすべてのぶんどり物は、町の広場の中央に集め、火をもつてその町と、すべてのぶんどり物とを、ことごとく焼いて、あなたの神、主にささげなければならぬ。これはながく荒塚となつて、再び建て直されないのであらう。一七そののろわれた物は一つもあなたの手に留めおいてはならない。主が激しい怒りをやめ、あなたに慈悲を施して、あなたをあわれみ、先祖たちに誓われたように、あなたの数を多くされるためである。一八あなたの神、主の言葉に聞き従い、わたしが、きよう、命じるすべての戒めを守り、あなたの神、主が正しいと見られる事を行うならば、このようになるであらう。

第一章

一あなたがたはあなたがたの神、主の子供である。死んだ人のために自分の身に傷をつけてはならない。また額の髪をそつてはならない。二あなたはあなたの神、主の聖なる民だからである。主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。

三忌むべき物は、どんなものでも食べてはならない。四あなたがたの食べることができる獣は次のとおりである。すなわち牛、羊、やぎ、五雄じか、かもしか、こじか、野やぎ、くじか、おお

じか、野羊など、六獣のうち、すべて、ひずめの分れたもの、ひずめが二つに切れたもので、反芻するものは食べることができ。七ただし、反芻するものと、ひずめの分れたものうち、次のものは食べてはならない。すなわち、らくだ、野うさぎ、および岩だぬき、これらは反芻するけれども、ひずめが分れていないから汚れたものである。八また豚、これは、ひずめが分れていないけれども、反芻しないから、汚れたものである。その肉を食べてはならない。またその死体に触れてはならない。

九水の中にいるすべての物のうち、次のものは食べることができ。すなわち、すべて、ひれと、うろこのあるものは、食べることができ。一〇すべて、ひれと、うろこのないものは、食べ

てはならない。これは汚れたものである。二すべて清い鳥は食べることができる。三ただし、次のものは食べてはならない。すなわち、はげわし、ひげはげわし、みさご、三黒とび、はやぶさ、とびの類。四各種のからすの類。五むらさきばん、モペリカン、はげたか、う、一八ここのとり、さぎの類。やつがしら、こもり。一九またすべて羽があつて這うものは汚れたものである。それを食べてはならない。二〇すべて翼のある清いものは食べることができる。

三すべて自然に死んだものは食べてはならない。町の内における寄留の他国人に、それを与えて食べさせることができる。ま

たそれを外国人に売つてもよい。あなたはあなたの神、主の聖なる民だからである。

子やぎをその母の乳で煮てはならない。

三 あなたは毎年、畑に種をまいて獲るすべての産物の十分の一を必ず取り分けなければならぬ。三三としてあなたの神、主の前、すなわち主がその名を置くために選ばれた場所、穀物と、ぶどう酒と、油との十分の一と、牛、羊のういごを食べ、こうして常にあなたの神、主を恐れることを学ばなければならぬ。二四 ただし、その道があまりに遠く、あなたの神、主がその名を置くために選ばれた場所が、非常に遠く離れていて、あなたの神、主があなたを恵まれるとき、それを携えて行くことができなければ、二五 あなたはその物を金に換え、その金を包んで手に取り、あなたの神、主が選ばれた場所に行き、二六 その金をすべてあなたの好む物に換えなければならない。すなわち牛、羊、ぶどう酒、濃い酒など、すべてあなたの欲する物に換え、その所でああなたの神、主の前でそれを食べ、家族と共に楽しまなければならない。二七 町の内におけるレビびとを捨ててはならない。彼はあなたがたのうちに分がなく、嗣業を持たない者だからである。

二八 三年の終りに、その年の産物の十分の一を、ことごとく持ち出して、町の内にたくわえ、二九 あなたがたのうちに分け前がなく、嗣業を持たないレビびと、および町の内における寄留の

他国人と、孤児と、寡婦を呼んで、それを食べさせ、満足させなければならない。そうすれば、あなたの神、主はあなたが手でやるすべての事にあなたを祝福されるであろう。

第一章

一 あなたは七年の終りに、ゆるしを行わなければならない。二 そのゆるしのしかたは次のとおりである。すべてその隣人に貸した貸主はそれをゆるさなければならない。その隣人または兄弟にそれを督促してはならない。主のゆるしが、ふれ示されたからである。三 外国人にはそれを督促することができ、あなたの兄弟に貸した物はゆるさなければならない。四 しかしあなたがたのうちに貧しい者はなくなるであろう。(あなたの神、主が嗣業として与えられる地で、あなたを祝福されるからである。)五 ただし、あなたの神、主の言葉に聞き従って、わたしが、きょう、あなたに命じることの戒めを、ことごとく守り行うとき、そのようになるであろう。六 あなたの神、主が約束されたようにあなたを祝福されるから、あなたは多くの国びとに貸すようになり、借りることはないであろう。またあなたは多くの国びとを治めるようになり、彼らがあなたを治めることはないであろう。七 あなたの神、主が賜われる地で、もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも、町の内におけるならば、その貧しい兄弟にむかつて、

心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。ハ必ず彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない。九あなたは心に邪念を起し、『第七年のゆるしの年が近づいた』と言って、貧しい兄弟に対し、物を惜しんで、何も与えないことのないように慎まなければならない。その人があなたを主に訴えるならば、あなたは罪を得るであらう。二〇あなたは心から彼に与えなければならない。彼に与える時は惜しんではならない。あなたの神、主はこの事のために、あなたをすべての事業と、手のすべての働きにおいて祝福されるからである。二貧しい者はいつでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧しい者と共に、手を開かなければならない』。

二三もしあなたの兄弟であるヘブルの男、またはヘブルの女が、あなたのところに売られてきて、六年仕えたならば、第七年には彼に自由を与えて去らせなければならない。二三彼に自由を与えて去らせる時は、から手で去らせてはならない。四群れと打ち場と、酒ぶねのうちから取って、惜しみなく彼に与えなければならない。すなわちあなたの神、主があなたを恵まれたように、彼に与えなければならない。五あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主があなたをあがない出された事を記憶しなければならない。このゆえにわたしは、きよう、

この事を命じる。二六しかしその人があなたと、あなたの家族を愛し、あなたと一緒にいることを望み、『わたしはあなたを離れて去りたくありません』と言うならば、二七あなたは、きりを取って彼の耳を戸に刺さなければならない。そうすれば、彼はいつまでもあなたの奴隷となるであらう。女奴隷にもそうしなければならない。二八彼に自由を与えて去らせる時には、快く去らせなければならない。彼が六年間、賃銀を取る雇人の二倍あなたに仕えて働いたからである。あなたがそうするならば、あなたの神、主はあなたが行うすべての事にあなたを祝福されるであらう。

一九牛、羊の産む雄のういごは皆あなたの神、主に聖別しなければならない。牛のういごを用いてなんの仕事をもしてはならない。また羊のういごの毛を切ってはならない。二〇あなたの神、主が選ばれる所で、主の前にあなたは家族と共に年ごとにそれを食べなければならない。二一しかし、その獣がもし傷のあるもの、すなわち足なえまたは、めくらなど、すべて悪い傷のあるものである時は、あなたの神、主にそれを犠牲としてささげてはならない。二三町の内でそれを食べなければならない。汚れた人も、清い人も、かもしかや、雄じかと同様にそれを食べることができる。二四ただし、その血は食べてはならない。水のようにそれを地にそそがなければならない。

第一六章

一 あなたはアビブの月を守つて、あなたの神、主のために過越の祭を行わなければならない。アビブの月に、あなたの神、主が夜の間にあなたをエジプトから導き出されたからである。二 主がその名を置くために選ばれる場所で、羊または牛をあなたの神、主に過越の犠牲としてほふらなければならない。三種を入れたパンをそれと共に食べてはならない。七日のあいだ、種入れぬパンすなわち悩みのパンを、それと共に食べなければならない。あなたがエジプトの国から出るとき、急いで出たからである。こうして世に生きながらえる日の間、エジプトの国から出てきた日を常に覚えなければならない。四 その七日の間は、国の内どこにもパン種があつてはならない。また初めの日の夕暮にほふるものの肉を、翌朝まで残しておいてはならない。五 あなたの神、主が賜わる町の内で、過越の犠牲をほふつてはならない。六 ただあなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所で、夕暮の日の入るころ、あなたがエジプトから出た時刻に、過越の犠牲をほふらなければならない。七 そしてあなたの神、主が選ばれる場所で、それを焼いて食べ、朝になつて天幕に帰らなければならない。八 六日のあいだ種入れぬパンを食べ、七日目にあなたの神、主のために聖会を開かなければならない。なんの仕事もしてはならない。

九 また七週間を数えなければならない。すなわち穀物に、かまを入れ始める時から七週間を数え始めなければならない。一〇 そしてあなたの神、主のために七週の祭を行い、あなたの神、主が賜わる祝福にしたがつて、力に応じ、自発の供え物をささげなければならない。一一 こうしてあなたはむすこ、娘、しもべ、はしためおよび町の内におけるレビびと、ならびにあなたがたのうちにおける寄留の他国人と孤児と寡婦と共に、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所で、あなたの神、主の前に喜び樂しまなければならない。一二 あなたはかつてエジプトで奴隷であつたことを覚え、これらの定めを守り行わなければならない。一三 打ち場と、酒ぶねから取入れをしたとき、七日のあいだ仮庵の祭を行わなければならない。一四 その祭の時には、あなたはむすこ、娘、しもべ、はしためおよび町の内におけるレビびと、寄留の他国人、孤児、寡婦と共に喜び樂しまなければならない。一五 主が選ばれる場所で七日の間、あなたの神、主のために祭を行わなければならない。あなたの神、主はすべての産物と、手のすべのわざとにおいて、あなたを祝福されるから、あなたは大きい喜び樂しまなければならない。

一六 あなたのうちの男子は皆あなたの神、主が選ばれる場所で、年に三度、すなわち種入れぬパンの祭と、七週の祭と、仮庵の祭に、主の前に出なければならない。ただし、から手で主の前に出てはならない。一七 あなたの神、主が賜わる祝福にしたがい、

おのおの力に應じて、ささげ物をしなければならない。

一八あなたの神、主が賜わるすべての町々の内に、部族にしたがつて、さばきびとと、つかさびととを、立てなければならぬ。そして彼らは正しいさばきをもつて民をさばかなければならぬ。一九あなたはさばきを曲げてはならない。人をかたより見ではならない。また賄賂を取ってはならない。賄賂は賢い者の目をくらまし、正しい者の事件を曲げるからである。二〇ただ公義のみ求めなければならぬ。そうすればあなたは生きながらえて、あなたの神、主が賜わる地を所有するにいたるであらう。

二一あなたの神、主のために築く祭壇のかたわらに、アシラの木像をも立ててはならない。二二またあなたの神、主が憎まれる柱を立ててはならない。

第七章

一すべて傷があり、欠けた所のある牛または羊はあなたの神、主にささげてはならない。そのようなものはあなたの神、主の忌みきらわれるものだからである。

二あなたの神、主が賜わる町で、あなたがたのうちに、もし男子または女子があなたの神、主の前に悪事をおこなつて、契約にそむき、三行つて他の神々に仕え、それを拝み、わたしの禁じる、日

や月やその他の天の万象を拝むことがあり、四その事を知らせる者があつて、あなたがそれを聞かざらば、あなたはそれをよく調べなければならぬ。そしてその事が真実であり、そのような憎むべき事が確かにイスラエルのうちに行われていたならば、五あなたはその悪事をおこなつた男子または女子を町の門にひき出し、その男子または女子を石で撃ち殺さなければならぬ。六ふたりの証人または三人の証人の証言によつて殺すべき者を殺さなければならぬ。ただひとりの証人の証言によつて殺してはならない。七そのような者を殺すには、証人がまず手を下し、それから民が皆、手を下さなければならぬ。こ

うしてあなたのうちから悪を除き去らなければならぬ。八町の内に訴え事が起り、その事件がもし血を流す事、または権利を争う事、または人を撃つた事などであつて、あなたが、さばきかねるものである時は、立つてあなたの神、主が選ばれる場所にのぼり、九レビびとである祭司と、その時の裁判人に行つて尋ねなければならぬ。彼らはあなたに判決の言葉を告げるであらう。一〇あなたは、主が選ばれるその場所で、彼らが告げる言葉に従つておこない、すべて彼らが教えるように守り行わなければならない。二すなわち彼らが教える律法と、彼らが告げる判決とに従つて行わなければならない。彼らが告げる言葉にそむいて、右にも左にもかたよつてはならない。三もし人がほしいままにふるまい、あなたの神、主の前に立つて仕え

る祭司または裁判人に聞き従わなければならない、その人を殺して、イスラエルのうちから悪を除かなければならない。一三そうすれば民は皆聞いて恐れ、重ねてほしいままにふるまうことをしないであらう。

一四あなたの神、主が賜わる地に行き、それを獲てそこに住むようになる時、もしあなたが『わたしも周囲のすべての国びとのように、わたしの上に王を立てよう』と言うならば、一五必ずあなたの神、主が選ばれる者を、あなたの上に立てて王としなければならぬ。同胞のひとり、あなたの上に立てて王としなければならぬ。同胞でない外国人をあなたの上に立てて王としなければならぬ。一六王となる人は自分のために馬を多く獲ようとしてはならない。また馬を多く獲るために民をエジプトに帰らせてはならない。主はあなたがたにむかつて、『この後かさねてこの道に帰ってはならない』と仰せられたからである。一七また妻を多く持つて心を、迷わしてはならない。また自分のために金銀を多くたくわえてはならない。

一八彼が国の王位につくようになったら、レビびとである祭司の保管する書物から、この律法の写しを一つの書物に書きしるさせ、一九世に生きながらえる日の間、常にそれを自分のもとに置いて読み、こうしてその神、主を恐れることを学び、この律法のすべての言葉と、これらの定めとを守って行わなければならない。二〇そうすれば彼の心が同胞を見くだして、高ぶることな

く、また戒めを離れて、右にも左にも曲ることなく、その子孫と共にイスラエルにおいて、長くその位にとどまることができるであらう。

第一八章

一レビびとである祭司すなわちレビの全部族はイスラエルのうちに、分も嗣業も持たない。彼らは主にささげられる火祭の物と、その他のささげ物とを食べなければならない。二彼らはその兄弟のうちに嗣業を持たない。かつて彼らに約束されたとおり主が彼らの嗣業である。三祭司が民から受ける分は次のとおりである。すなわち犠牲をささげる者は、牛でも、羊でも、その肩と、両方のほおと、胃とを祭司に与えなければならない。四また穀物と、ぶどう酒と、油の初物および羊の毛の初物をも彼らに与えなければならない。五あなたの神、主がすべての部族のうちから彼らを選び出して、彼とその子孫を長く主の名によって立つて仕えさせられるからである。

六レビびとはイスラエルの全地のうち、どこにいる者でも、彼が宿っている町を出て、主が選ばれる場所に行くならば、七彼は主の前に立つてすべての兄弟レビびとと同じように、その神、主の名によって仕えることができる。八彼が食べる分は彼らと同じである。ただし彼はこのほかに父の遺産を売って獲た物

を持つことができる。

九 あなたの神、主が賜^{たま}はれる地にはいつたならば、その国々の民の憎^{にく}むべき事を習^{なら}いおこなつてはならない。一〇 あなたがたのうち、自分のむすこ、娘を火に焼^やいてささげる者があつてはならない。また占^{うらな}いをする者、卜^{とく}者、易^{えき}者、魔法使^{まほうつかい}、呪^{じゆもん}文^{もん}を唱^{とな}える者、口寄^{くちよ}せ、かななぎ、死人^{しにん}に問^とうことをする者があつてはならない。二三 主はすべてこれらの事をする者を憎^{にく}まれるからである。そしてこれらの憎^{にく}むべき事のゆえにあなたの神、主は彼^{かれ}らをあなたの前^{まえ}から追^おひ払^{はら}われるのである。二四 あなたの神、主の前にあなたは全^{まった}き者でなければならぬ。二五 あなたが追^おひ払^{はら}うかの国々の民は卜^{とく}者、占^{うらな}いをする者に聞^きき従^{したが}うからである。しかし、あなたには、あなたの神、主はそうする事を許^{ゆる}されない。

二五 あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者^{よげんしゃ}をあなたのために起^{おこ}されるであろう。あなたがたは彼^{かれ}に聞^きき従^{したが}わなければならない。二六 これはあなたが集^{しゅう}会^{かい}の日^ひにホレブでああなたの神、主に求めたことである。すなわちあなたは『わたしが死ぬ^しことのないようにわたしの神、主の声を二度とわたしに聞かせないでください。またこの大いなる火を二度と見させないでください』と言^いつた。二七 主はわたしに言^いわれた、『彼^{かれ}らが言^いつたことは正しい。一八 わたしは彼^{かれ}らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者^{よげんしゃ}

を彼^{かれ}らのために起^{おこ}して、わたしの言葉をその口^{くち}に授^{さづ}けよう。彼^{かれ}はわたしが命^{めい}じることとを、ことごとく彼^{かれ}らに告^つげるであろう。一九 彼^{かれ}がわたしの名^なによつて、わたしの言葉を語^{かた}るのに、もしこれに聞^きき従^{したが}わない者があつたらば、わたしはそれを罰^{ばつ}するであろう。二〇 ただし預言者^{よげんしゃ}が、わたしに語^{かた}れと命^{めい}じないことを、わたしの名^なによつてほしいままに語^{かた}り、あるいは他の神々の名^なによつて語^{かた}るならば、その預言者は殺^{ころ}さなければならぬ。二二 あなたは心のうちに『われわれは、その言葉が主の言^いわれたものでない、どうして知^しり得^えようか』と言^いうであろう。二三 もし預言者^{よげんしゃ}があつて、主の名^なによつて語^{かた}つても、その言葉が成就^{じゆうじゆ}せず、またその事が起^{おこ}らない時は、それは主が語^{かた}られた言葉ではなく、その預言者がほしいままに語^{かた}つたのである。その預言者を恐^{おそ}れるに及^{およ}ばない。

第十九章

一 あなたの神、主が国々の民を滅^{ほろ}ぼしつくして、あなたの神、主がその地を賜^{たま}はり、あなたがそれを獲^えて、その町々と、その家々に住^すむようになる時は、二 あなたの神、主が与^{あた}えて獲^えさせられる地のうちに、三つの町をあなたのために指定^{ししてい}しなければならぬ。三 そしてそこに行く道^{みち}を備^{そな}へ、またあなたの神、主があなたに継^つがせられる地の領域^{りやういき}を三区に分^わけ、すべて人を殺^{ころ}した者を

そこにのがれさせなければならぬ。

四人を殺した者がそこにのがれて、命を全うすべき場合は次のとおりである。すなわち以前から憎むこともないのに、知らないでその隣人を殺した場合、五たとえば人が木を切ろうとして、隣人と一緒に林に入り、手におのを取って、木を切り倒そうと撃ちおろすとき、その頭が柄から抜け、隣人にあたって、死なせたような場合がそれである。そういう人はこれらの町の一つにのがれて、命を全うすることができぬ。ハそうしなければ、復讐する者が怒って、その殺した者を追いかけて、道が長いために、ついに追いついて殺すであろう。しかし、その人は以前から彼を憎んでいた者でないから、殺される理由はない。セそれでわたしはあなたに命じて『三つの町をあなたのために指定しなければならぬ』と言ったのである。ハあなたの神、主が先祖たちに誓われたように、あなたの領域を広め、先祖たちに与えると言われた地を、ことごとく賜わる時、――九わたしが、きよう、命じるこのすべての戒めを守って、それをおこなひ、あなたの神、主を愛して、常にその道に歩む時――あなたはこれら三つの町のほかに、また三つの町をあなたのために増し加えなければならぬ。一〇これはあなたの神、主が与えて嗣業とされる地のうちで、罪のない者の血が流されないようにするためである。そうしなければ、その血を流したとがは、あなたに帰するであろう。二しかし、もし人が隣人を憎んでそれをつけねらい、立ちか

かつてその人を撃ち殺し、そしてこれらの町の一つにのがれるならば、二三その町の長老たちは人をつかわして彼をそこから引いてこさせ、復讐する者にわたして殺させなければならぬ。二四彼をあわれんでならぬ。罪のない者の血を流したとがを、イスラエルから除かなければならぬ。そうすればあなたにさいわいがあるであろう。

二五あなたの神、主が与えて獲させられる地で、あなたが継ぐ嗣業において、先祖の定めたあなたの隣人の土地の境を移してはならぬ。

二六どんな不正であれ、どんなとがであれ、すべて人の犯す罪は、ただひとりの証人によつて定めてはならない。ふたりの証人の証言により、または三人の証人の証言によつて、その事を定めなければならぬ。二七もし悪意のある証人が起つて、人に対して悪い証言をすることがあれば、二八その相争うふたりの者は主の前に行つて、その時の祭司と裁判人の前に立たなければならぬ。二九その時、裁判人は詳細にそれを調べなければならぬ。そしてその証人がもし偽りの証人であつて、兄弟にむかつて偽りの証言をした者であるならば、一〇あなたがたは彼が兄弟にしようとしたことを彼に行ひ、こうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなければならぬ。一一そうすれば他の人たちは聞いて恐れ、その後ふたたびそのような悪をあなたがたのうちにを行わないであろう。一二あわれんでならぬ。命

には命、目には目、齒には齒、手には手、足には足をもつて償わ
せなければならぬ。

第二〇章

一あなたが敵と戦うために出る時、馬と戦車と、あなたよりも大
ぜいの軍隊を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジ
プトの国から導きのぼられたあなたの神、主が共におられるか
らである。二あなたがたが戦いに臨むとき、祭司は進み出て民に
告げて、三彼らに言わなければならぬ、『イスラエルよ聞け。
あなたがたは、きよう、敵と戦おうとしている。気おくれしては
ならない。恐れてはならない。あわててはならない。彼らに驚
いてはならない。四あなたがたの神、主が共に行かれ、あなたが
たのために敵と戦つて、あなたがたを救われるからである。五
次につかされた民は民に告げて言わなければならぬ。『新しい
家を建て、まだそれをささげていない者があれば、その人を家
に帰らせなければならぬ。そうしなければ、彼が戦いに死ん
だとき、ほかの人がそれを食べるようになるであらう。六ぶど
う畑を作つて、まだその実を食べていない者があれば、その人を
家に帰らせなければならぬ。そうしなければ、彼が戦いに死ん
だとき、ほかの人がそれを食べるようになるであらう。七女と
婚約して、まだその女をめぐつていない者があれば、その人を家

に帰らせなければならぬ。そうしなければ、彼が戦いに死んだ
とき、ほかの人が彼女をめぐつてようになるであらう。八つかさ
たちは、また民に告げて言わなければならぬ。『恐れて気お
くする者があるならば、その人を家に帰らせなければならぬ。
そうしなければ、兄弟たちの心が彼の心のようにくじけるであ
らう。九つかさたちがこのように民に告げ終つたならば、軍勢
のかしらたちを立てて民を率いさせなければならぬ。』

一〇一つの町へ進んで行つて、それを攻めようとする時は、まず
穏やかに降服することを勧めなければならぬ。一一もしその
町が穏やかに降服しようと答えて、門を開くならば、そこに
すべての民に、みつぎを納めさせ、あなたに仕えさせなければ
ならない。一二もし穏やかに降服せず、戦おうとするならば、あ
なたはそれを攻めなければならぬ。一三そしてあなたの神、主が
それをあなたの手にわたされる時、つるぎをもつてそのうちの
男をみな撃ち殺さなければならぬ。一四ただし女、子供、家畜
およびすべて町のうちにあるもの、すなわちぶんどつた物は皆、
戦利品として取ることが出来る。また敵からぶんどつた物はあ
なたの神、主が賜つたものだから、あなたはそれを用いること
ができる。一五遠く離れている町々、すなわちこれらの国々に属
さない町々には、すべてこのようにしなければならぬ。一六た
だし、あなたの神、主が嗣業として与えられるこれらの民の
町々では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない。一

セすなわちヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒ
 ビびと、エブスびとはみな滅ぼして、あなたの神、主が命じられ
 たとおりにしなければならぬ。一ハこれは彼らがその神々を
 拜んでおこなったすべての憎むべき事を、あなたがたに教えて、
 それを行わせ、あなたがたの神、主に罪を犯させることのないた
 めである。

一九長く町を攻め囲んで、それを取ろうとする時でも、おのをふ
 るつて、その木を切り枯らしてはならない。それはあなたの
 食となるものだから、切り倒してはならない。あなたは田野の
 木までも、人のように攻めなければならぬであろうか。二〇た
 だし実を結ばない木とわかつている木は切り倒して、あなたと
 戦っている町にむかい、それをもってとりでを築き、陥落する
 まで、それを攻めることができる。

第二章

一あなたの神、主が与えて獲させられる地で、殺されて野に倒れ
 ている人があつて、だれが殺したのかわからない時は、二長老
 たちと、さばきびとたちが出てきて、その殺された者のある所か
 ら、周囲の町々までの距離をはからなければならぬ。三そして
 その殺された者のある所に最も近い町の長老たちは、まだ使わ
 ない、まだくびきを負わせて引いたことのない若い雌牛をとり、

四その町の長老たちはその雌牛を、耕すことも、種まくことも
 しない、絶えず水の流れている谷へ引いていつて、その谷で雌牛
 のくびを折らなければならぬ。五その時レビの子孫である
 祭司たちは、そこに進み出なければならぬ。彼らはあなたの
 神、主が自分に仕えさせ、また主の名によつて祝福させるため
 に選ばれた者で、すべての論争と、すべての暴行は彼らの言葉に
 よつて解決されるからである。六そしてその殺された者のある
 所に最も近い町の長老たちは皆、彼らが谷でくびを折つた雌牛
 の上で手を洗い、七証言して言わなければならぬ、『われわれ
 の手はこの血を流さず、われわれの目もそれを見なかった。ハ主
 よ、あなたがあがなわれた民イスラエルをおゆるしください。
 罪のない者の血を流したとがを、あなたの民イスラエルのうち
 にとどめないでください。そして血を流したとがをおゆるしく
 ださい』九このようにして、あなたは主が正しいと見られる事
 をおこない、罪のない者の血を流したとがを、あなたがたのうち
 から除き去らなければならぬ。

一〇あなたがたが出て敵と戦う際、あなたの神、主がそれをあなたの
 手にわたされ、あなたがそれを捕虜とした時、二もし捕虜のう
 ちに美しい女のあるのを見て、それを好み、妻にめとろうとする
 ならば、三その女をあなたの家に連れて帰らなければならぬ
 い。女は髪をそり、つめを切り、四また捕虜の着物を脱ぎすて
 て、あなたの家におり、自分の父母のために一か月のあいだ嘆か

なければならぬ。そして後、あなたは彼女の所にはいつて、その夫となり、彼女を妻とすることが出来る。一四その後あなたがもし彼女を好まなくなつたならば、彼女を自由に去らせなければならぬ。決して金で売つてはならない。あなたはすでに彼女をはずかしめたのだから、彼女を奴隷のようにあしらつてはならない。

一五人がふたりの妻をもち、そのひとりには愛する者、ひとりは氣にいらぬ者であつて、その愛する者と氣にいらぬ者のふたりが、ともに男の子を産み、もしその長子が、氣にいらぬ女の産んだ者である時は、一六その子たちに自分の財産を継がせる時、氣にいらぬ女の産んだ長子をさしおいて、愛する女の産んだ子を長子とすることはできない。一七必ずその氣にいらぬ者の産んだ子が長子であることを認め、自分の財産を分ける時には、これに二倍の分け前を与えなければならぬ。これは自分の力の初めであつて、長子の特權を持つてゐるからである。一八もし、わがままで、手に負えない子があつて、父の言葉にも母の言葉にも従わず、父母がこれを懲らしてもきかない時は、一九その父母はこれを捕えて、その町の門に行き、町の長老たちの前に出し、二〇町の長老たちに言わなければならぬ、『わたしたちのこの子はわがままで、手に負えません。わたしたちの言葉に従わず、身持ちが悪く、大酒飲みです』。二一そのとき、町の人は皆、彼を石で撃ち殺し、あなたがたのうちから悪を除き去

らなければならぬ。そうすれば、イスラエルは皆聞いて恐れるであろう。

三もし人が死にあたる罪を犯して殺され、あなたがそれを木の上にかける時は、三翌朝までその死体を木の上に留めておいてはならない。必ずそれをその日のうちに埋めなければならぬ。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、主が嗣業として賜わる地を汚してはならない。

第二章

一あなたの兄弟の牛、または羊の迷つてゐるのを見て、それを見捨てておいてはならない。必ずそれを兄弟のところへ連れて帰らなければならぬ。二もしその兄弟が近くの者でなく、知らない人であるならば、それを自分の家にひいてきて、あなたのところにおき、その兄弟が尋ねてきた時に、それを彼に返さなければならぬ。三あなたの兄弟のろばの場合も、そうしなければならぬ。着物の場合も、そうしなければならぬ。またすべてあなたの兄弟の失つた物を見つけた場合も、そうしなければならぬ。それを見捨てておくことはできない。四あなたの兄弟のろばまたは牛が道に倒れてゐるのを見て、見捨てておいてはならない。必ずそれを助け起さなければならぬ。五女は男の着物を着てはならない。また男は女の着物を着ては

ならない。あなたの神、主はそのような事をする者を忌みきらわれるからである。

六もしあなたが道で、木の上 または地面に鳥の巢のあるのを見つけ、その中に雛または卵があつて、母鳥がその雛または卵を抱いてゐるならば、母鳥を雛と一緒に取つてはならない。七必ず母鳥を去らせ、ただ雛だけを取らなければならない。そうすればあなたはさいわいを得、長く生きながらえることができるであらう。

八新しい家を建てる時は、屋根に欄干を設けなければならない。それは人が屋根から落ちて、血のとがをあなたの家に帰するところのないようにするためである。

九ぶどう畑に二種の種を混ぜてまいてはならない。そうすればあなたがまいた種から産する物も、ぶどう畑から出る物も、みな忌むべき物となるであらう。一〇牛と、ろばとを組み合わせ耕してはならない。一一羊毛と亜麻糸を混ぜて織つた着物を着てはならない。

一二身にまとう上着の四すみに、ふきをつけなければならない。

一三もし人が妻をめとり、妻のところにはいつて後、その女をきらい、一四『わたしはこの女をめとつて近づいた時、彼女に処女の証拠を見なかった』と言つて虚偽の非難をもって、その女に悪名を負わせるならば、一五その女の父と母は、彼女の処女の証拠を取つて、門における町の長老たちに差し出し、一六そして

彼女の父は長老たちに言わなければならない。『わたしはこの人に娘を与えて妻にさせましたが、この人は娘をきらい、一七虚偽の非難をもって、『わたしはあなたの娘に処女の証拠を見なかった』と言います。しかし、これがわたしの娘の処女の証拠です』と言つて、その父母はかの布を町の長老たちの前にひろげなければならない。一八その時、町の長老たちは、その人を捕えて撃ち懲らし、一九また銀百シケルの罰金を課し、それを女の父に与えなければならない。彼はイスラエルの処女に悪名を負わせたからである。彼はその女を妻とし、一生その女を出すことはできない。二〇しかし、この非難が真実であつて、その女に処女の証拠が見られない時は、三その女を父の家の入口にひき出し、町の人々は彼女を石で撃ち殺さなければならない。彼女は父の家で、みだらな事をおこない、イスラエルのうちに愚かな事をしたからである。あなたはこうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなければならない。

二一もし夫のある女と寝ている男を見つけたならば、その女と寝た男およびその女と一緒に殺し、こうしてイスラエルのうちから悪を除き去らなければならない。

二二もし処女である女が、人と婚約した後、他の男が町の内での女に会い、これを犯したならば、二四あなたがたはそのふたりを町の門にひき出して、石で撃ち殺さなければならない。これはその女が町の内におりながら叫ばなかったからであり、また

第三章

その男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたはこうしてあなたがたのうちから悪を除き去らなければならない。
 三〇しかし、男が、人と婚約した女に野で会い、その女を捕えてこれを犯したならば、その男だけを殺さなければならない。二一その女には何もしてはならない。女には死にあたる罪がない。人がその隣人に立ちむかつて、それを殺したと同じ事件だからである。二二これは男が野で女に会ったので、人と婚約したその女が叫んだけれども、救う者がなかったのである。
 二三まだ人と婚約しない処女である女に、男が会い、これを捕えて犯し、ふたりが見つけられたならば、二四女を犯した男は女の父に銀五十シケルを与えて、女を自分の妻としなければならない。彼はその女をはずかしめたゆえに、一生その女を出すことはできない。
 二五だれも父の妻をめとってはならない。父の妻と寝てはならない。

一すべて去勢した男子は主の会衆に加わってはならない。
 二私生児は主の会衆に加わってはならない。その子孫は十代までも主の会衆に加わってはならない。
 ミアンモンびととモアブびとは主の会衆に加わってはならない。

い。彼らの子孫は十代までも、いつまでも主の会衆に加わってはならない。四これはあなたがたがエジプトから出てきた時に、彼らがパンと水を携えてあなたがたを道に迎えず、アラム・ナハライムのペトルからベオルの子バラムを雇って、あなたがたのろわせようとしたからである。五しかし、あなたの神、主はバラムの言うことを聞こうとせず、あなたの神、主はあなたのために、そののろいを変えて、祝福とされた。あなたの神、主があなたを愛されたからである。六あなたは一生いつまでも彼らのために平安をも、幸福をも求めてはならない。
 七あなたはエドムびとを憎んではならない。彼はあなたの兄弟だからである。またエジプトびとを憎んではならない。あなたがたかつてその国の寄留者であつたからである。八そして彼らが産んだ子どもは三代目には、主の会衆に加わることができる。九敵を攻めるために出て陣営におる時は、すべての汚れた物を避けなければならない。

一〇あなたがたのうちに、夜の思いがけない事によつて身の汚れた人があるならば、陣営の外に出なければならない。陣営の内に、はいつてはならない。二しかし、夕方になつて、水で身を洗い、日が没した後、陣営の内に、はいることができ。
 三あなたはまた陣営の外に一つの所を設けておいて、用をたす時、そこに出て行かなければならない。四また武器と共に、くわを備え、外に出て、かがむ時、それをもって土を掘り、向きを

かえて、出た物をおおわなければならない。一四あなたの神、主があなを救い、敵をあなたにわたそうと、陣営の中を歩まれるからである。ゆえに陣営は聖なる所として保たなければならない。主があなの中のうちにきたない物のあるのを見て、離れ去れることのないためである。

一五主人を避けて、あなたのところに逃げてきた奴隷を、その主人にわたしてはならない。一六その者をあなたがたのうちに、あなたと共におらせ、町の一つのうち、彼が好んで選ぶ場所に住ませなければならない。彼を虐待してはならない。

一七イスラエルの女子は神殿娼婦となつてはならない。またイスラエルの男子は神殿男娼となつてはならない。一八娼婦の得た価または男娼の価をあなたの神、主の家に携えて行つて、どんな誓願にも用いてはならない。これはともにあなたの神、主の憎まれるものだからである。

一九兄弟に利息を取つて貸してはならない。金銭の利息、食物の利息などすべて貸して利息のつく物の利息を取つてはならない。二〇外国人には利息を取つて貸してもよい。ただ兄弟には利息を取つて貸してはならない。これはあなたが、はいつて取る地で、あなたの神、主がすべてあなたのする事に祝福を与えられるためである。

二一あなたの神、主に誓願をかける時、それを果たすることを怠つてはならない。あなたの神、主は必ずそれをあなたに求められる

からである。それを怠るときは罪を得るであらう。三しかし、あなたが誓願をかけないならば、罪を得ることはない。三二あなたが口で言つた事は守つて行わなければならない。あなたが口で約束した事は、あなたの神、主にあなたが自発的に誓願したのだからである。

三三あなたが隣人のぶどう畑にはいる時、そのぶどうを心にまかせて飽きるほど食べてもよい。しかし、あなたの器の中に取入れてはならない。三五あなたが隣人の麦畑にはいる時、手でその穂を摘んで食べてもよい。しかし、あなたの隣人の麦畑にのみを入れたてはならない。

第二章

一人が妻をめとつて、結婚したのちに、その女に恥すべきことのあるのを見て、好まなくなつたならば、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせなければならない。二女がその家を出てのち、行つて、ほかの人にとつぎ、三後の夫も彼女をきらつて、離縁状を書き、その手に渡して家を去らせるか、または妻にめとつた後の夫が死んだときは、四彼女はすでに身を汚したのちであるから、彼女を去らせた先の夫は、ふたたび彼女を妻にめとることはできない。これは主の前に憎むべき事だからである。あなたの神、主が嗣業としてあなたに与えられる地に罪を負わ

せてはならない。

五人が新たに妻をめとった時は、戦争に出してはならない。また何の務もこれに負わせてはならない。その人は一年の間、束縛なく家にいて、そのめとった妻を慰めなければならぬ。

六 ひきうす、またはその上石を質にとつてはならない。これは命をつなぐものを質にとることだからである。

セイスラエルの人々のうちの同胞のひとりをかどわかつて、これを奴隷のようにあしらい、またはこれ売る者を見つけたならば、そのかどわかしした者を殺して、あなたがたのうちから悪を除き去らなければならない。

八らい病の起つた時は氣をつけて、すべてレビびとたる祭司が教えることを、よく守って行わなければならない。すなわちわたくしが彼らに命じたように、あなたがたはそれを守って行わなければならない。九 あなたがたがエジプトから出てきたとき、道であなたの神、主がミリアムにされたことを記憶しなければならない。

一〇 あなたが隣人に物を貸すときは、自分でその家にはいつて、質物を取つてはならない。一一 あなたは外に立って、借りた人が質物を外にいるあなたのところへ持ち出さなければならぬ。一二 もしその人が貧しい人である時は、あなたはその質物を留めおいて寝てはならない。一三 その質物は日の入るまでに、必ず返さなければならない。そうすれば彼は自分の上着をかけて

寝ることができて、あなたを祝福するであろう。それはあなたの神、主の前にあなたの義となるであろう。

一四 貧しく乏しい雇人は、同胞であれ、またはあなたの国で、町のうちに寄留している他国人であれ、それを虐待してはならない。一五 賃銀はその日のうちに払い、それを日の入るまで延ばしてはならない。彼は貧しい者で、その心をこれにかけているからである。そうしなければ彼はあなたを主に訴えて、あなたは罪を得るであろう。

一六 父は子のゆえに殺さるべきではない。子は父のゆえに殺さるべきではない。おのおの自分の罪のゆえに殺さるべきである。

一七 寄留の他国人または孤児のさばきを曲げてはならない。寡婦の着物を質に取つてはならない。一八 あなたはかつてエジプトで奴隷であつたが、あなたの神、主がそこからあなたを救い出されたことを記憶しなければならない。それでわたしはあなたにこの事をせよと命じるのである。

一九 あなたが畑で穀物を刈る時、もしその一束を畑におき忘れたならば、それを取りに引き返してはならない。それは寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。そうすればあなたの神、主はすべてあなたがする事において、あなたを祝福されるであろう。二〇 あなたがオリブの実をうち落すときは、ふたたびその枝を捜してはならない。それを寄留の他国人と孤児

と寡婦に取らせなければならぬ。三 またぶどう畑のぶどうを摘み取る時は、その残ったものを、ふたたび捜してはならない。それを寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならぬ。三 あなたはかつてエジプトの国で奴隷であつたことを記憶しなければならぬ。それでわたしはあなたにこの事をせよと命じるのである。

第二十五章

一人と人との間に争い事があつて、さばきを求めてきたならば、さばきびとはこれをさばいて、正しい者を正しいとし、悪い者を悪いとしなければならぬ。二 その悪い者が、むち打つべき者であるならば、さばきびとは彼を伏させ、自分の前で、その罪にしがたい、数えて彼をむち打たせなければならぬ。三 彼をむち打つには四十を越えてはならない。もしそれを越えて、それよりも多くむちを打つときは、あなたの兄弟はあなたの目の前で、はすかしめられることになるであらう。

四 脱穀をする牛にくつこを掛けてはならない。

五 兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで子のない時は、その死んだ者の妻は出て、他人にとつてはならない。その夫の兄弟が彼女の所にはいり、めとつて妻とし、夫の兄弟としての道を彼女につくさなければならぬ。六 そしてその女

が初めに産む男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名をイスラエルのうちに絶やさないようにしなければならぬ。七 しかしその人が兄弟の妻をめとるのを好まないならば、その兄弟の妻は町の門へ行つて、長老たちに言わなければならない、『わたしの夫の兄弟はその兄弟の名をイスラエルのうちに残すのを拒んで、夫の兄弟としての道をつくすことを好みません』。八 そのとき町の長老たちは彼を呼び寄せて、さとさなければならぬ。もし彼が固執して、『わたしは彼女をめとることを好みません』と言うならば、九 その兄弟の妻は長老たちの目の前で、彼のそばに行き、その足のくつを脱がせ、その顔につばきして、答えて言わなければならない。『兄弟の家をたてない者には、このようにすべきです』。一〇 そして彼の家の名は、くつを脱がされた者の家と、イスラエルのうちで呼ばれるであらう。

二 ふたりの人が互に争うときに、そのひとりの人の妻が、打つ者の手から夫を救おうとして近づき、手を伸べて、その人の隠し所をつかまえるならば、三 その女の手を切り落さなければならぬ。あわれみをかけてはならない。

三 あなたの袋に大小二種の重り石を入れておいてはならない。四 あなたの家に大小二種のますをおいてはならない。五 不足のない正しい重り石を持ち、また不足のない正しいますを持たなければならない。そうすればあなたの神、主が賜わる地で、あなたは長く命を保つことができるであらう。一六 すべてこ

のような不正をする者を、あなたの神、主が憎まれるからである。

一七あなたがエジプトから出てきた時、道でアムレクびとがあなたにしたことを記憶しなければならぬ。一八すなわち彼らは道であなたに出会い、あなたがうみ疲れている時、うしろについてきていたすべての弱っている者を攻め撃った。このように彼らは神を恐れなかった。一九それで、あなたの神、主が嗣業として賜わる地で、あなたの神、主があなたの周囲のすべての敵を征服して、あなたに安息を与えられる時、あなたはアムレクの名を天の下から消し去らなければならない。この事を忘れてはならない。

第二十六章

一あなたの神、主が嗣業として賜わる国にはいつて、それを所有し、そこに住む時は、二あなたの神、主が賜わる国にできる、地のすべての実の初物を取ってかごに入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる所へ携えて行かなければならない。三そしてその時の祭司の所へ行つて彼に言わなければならない、『きよう、あなたの神、主にわたしは申します。主がわれわれに与えると先祖たちに誓われた国に、わたしはいることができました。』四そのとき祭司はあなたの手からそのかごを受け取つ

てあなたの神、主の祭壇の前に置かなければならない。

五そして、あなたはあなたの神、主の前に述べて言わなければならない、『わたしの先祖は、さすらいの一アラムびとでありましたが、わずかの人を連れてエジプトへ下つて行つて、その所に寄留し、ついにそこで大きく、強い、人数の多い国民になりました。六ところがエジプトびとはわれわれをしいたげ、また悩まして、つらい労役を負わせましたが、七われわれが先祖たちの神、主に叫んだので、主はわれわれの声を聞き、われわれの悩みと、骨折りと、しいたげとを顧み、八主は強い手と、伸べた腕と、大いなる恐るべき事と、しるしと、不思議とをもつて、われわれをエジプトから導き出し、九われわれをこの所へ連れてきて、乳と蜜の流れるこの地をわれわれに賜わりました。一〇主よ、ごらんください。あなたがわたしに賜わった地の実の初物を、いま携えてきました。』そしてあなたはそれをあなたの神、主の前に置いて、あなたの神、主の前に礼拝し、二あなたの神、主があなたとあなたの家とに賜わったすべての良い物をもつて、レビびとおよびあなたのなかにいる寄留の他国人と共に喜び楽しむければならない。

三第三年すなわち十分の一を納める年に、あなたがすべての産物の十分の一を納め終つて、それをレビびとと寄留の他国人と孤児と寡婦とに与え、町のうちで彼らに飽きるほど食べさせた時、三三あなたの神、主の前で言わなければならない、『わたし

はその聖なる物を家から取り出し、またレビびとと寄留の他国人と孤児と寡婦とにそれを与え、すべてあなたが命じられた命令のとおりにいたしました。わたしはあなたの命令にそむかず、またそれを忘れませんでした。一四わたしはその聖なる物を喪のうちに食べたことがなく、また汚れた身でそれを取り出したことがなく、また死人にそれを供えたことがありませんでした。わたしはわたしの神、主の声に聞き従い、すべてあなたがわたしに命じられたとおりにいたしました。一五あなたの聖なるすみかである天からみそなわして、あなたの民イスラエルと、あなたがわれわれに与えられた地とを祝福してください。これはあなたがわれわれの先祖に誓われた乳と蜜の流れる地です。一六きよう、あなたの神、主はこれらの定めと、おきてとを行うことをあなたに命じられる。それゆえ、あなたは心をつくし、精神をつくしてそれを守り行わなければならない。一七きよう、あなたは主をあなたの神とし、かつその道に歩み、定めと、戒めと、おきてとを守り、その声に聞き従うことを明言した。一八そして、主は先に約束されたように、きよう、あなたを自分の宝の民とされること、また、あなたがそのすべての命令を守るべきことを明言された。一九主は誉と良き名と栄えとをあなたに与えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされるであろう。あなたは主が言われたように、あなたの神、主の聖なる民となるであろう。」

第二十七章

一モーセとイスラエルの長老たちとは民に命じて言った、「わたしが、きよう、あなたがたに命じるすべての戒めを守りなさい。二あなたがたがヨルダンを渡ってあなたの神、主が賜わる国にはいる時、あなたは大きな石数個を立てて、それにしつこいを塗り、三そしてあなたが渡って、あなたの先祖たちの神、主が約束されたようにあなたの神、主が賜わる地、すなわち乳と蜜の流れる地にはいる時、この律法のすべての言葉をその上に書きしるさなければならない。四すなわち、あなたがたが、ヨルダンを渡ったならば、わたしが、きよう、あなたがたに命じるそれらの石をエバル山に立て、それにしつこいを塗らなければならない。五またそこにあなたの神、主のために、祭壇、すなわち石の祭壇を築かなければならない。鉄の器を石に当てず、六自然のままの石であなたの神、主のために祭壇を築き、その上であなたの神、主に燔祭をささげなければならない。七また酬恩祭の犠牲をささげて、その所で食べ、あなたの神、主の前で喜び樂しまなければならない。八あなたはこの律法のすべての言葉をその石の上に明らかに書きしるさなければならない。」

九またモーセとレビびとたる祭司たちとは、イスラエルのすべての人々に言った、「イスラエルよ、静かに聞きなさい。あなたは、きよう、あなたの神、主の民となった。一〇それゆえ、あな

たの神、主の声に聞き従い、わたしが、きよう、命じる戒めと定めとを行わなければならない。』

二『その日またモーセは民に命じて言った、三「あなたがたがヨルダンを渡った時、次の人たちはゲリジム山に立つて民を祝福しなければならぬ。すなわちシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ヨセフおよびベニヤミン。四また次の人たちはエバル山に立つてのろわなければならない。すなわちルベン、ガド、アセル、ゼブルン、ダンおよびナフタリ。五そしてレビびとは大声でイスラエルのすべての人々に告げて言わなければならない。』

六『工人の手で作である刻んだ像、または鑄た像は、主が憎まれるものであるから、それを造つて、ひそかに安置する者はのろわれる。民は、みな答えてアアメンと言わなければならない。』

七『父や母を軽んずる者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

八『隣人との土地の境を移す者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

九『盲人を道に迷わす者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一〇『寄留の他国人や孤児、寡婦のさばきを曲げる者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一一『父の妻を犯す者は、父を恥ずかしめるのであるからのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一二『すべて獣を犯す者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一三『父の娘、または母の娘である自分の姉妹を犯す者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一四『妻の母を犯す者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一五『ひそかに隣人を撃ち殺す者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一六『まいないを取つて罪なき者を殺す者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

一七『この律法の言葉を守り行わない者はのろわれる。民はみなアアメンと言わなければならない。』

第二章

一もしあなたが、あなたの神、主の声によく聞き従い、わたしが、きよう、命じるすべての戒めを守り行うならば、あなたの神、主はあなたを地のもろもろの国民の上に立たせられるであろう。二もし、あなたがあなたの神、主の声に聞き従うならば、このもろもろの祝福はあなたに臨み、あなたに及ぶであろう。三あなたは町の内でも祝福され、畑でも祝福されるであろう。四またあなたの身から生れるもの、地に産する物、家畜の産むもの、す

なわち牛の子、羊の子は祝福されるであろう。五またあなたのかごと、こねばちは祝福されるであろう。六あなたは、はいるにも祝福され、出るにも祝福されるであろう。

七敵が起つてあなたを攻める時は、主はあなたにそれを撃ち敗らせられるであろう。彼らは一つの道から攻めて来るが、あなたの前で七つの道から逃げ去るであろう。八主は命じて祝福をあなたの倉と、あなたの手のすべてのわざにくだし、あなたの神、主が賜わる地であなたを祝福されるであろう。九もし、あなたの神、主の戒めを守り、その道を歩むならば、主は誓われたようにあなたを立てて、その聖なる民とされるであろう。一〇そうすれば地のすべての民は皆あなたが主の名をもって唱えられるのを見てあなたを恐れるであろう。一一主があなたに与えると先祖に誓われた地で、主は良い物、すなわちあなたの身から生れる者、家畜の産むもの、地に産する物を豊かにされるであろう。一二主はその宝の蔵である天をあなたのために開いて、雨を季節にしたがつてあなたの地に降らせ、あなたの手のすべてのわざを祝福されるであろう。あなたは多くの国民に貸すようになり、借りることはないであろう。一三主はあなたをかしらとならせ、尾とはならせられないであろう。あなたはただ栄えて衰えることはないであろう。きよう、わたしが命じるあなたの神、主の戒めに聞き従つて、これを守り行ふならば、あなたは必ずこのようになるであろう。一四きよう、わたしが命じるこのすべて

の言葉を離れて右または左に曲り、他の神々に従い、それに仕えてはならない。

一五しかし、あなたの神、主の声に聞き従わず、きよう、わたしが命じるすべての戒めと定めとを守り行わないならば、このもろもろのろいがあなたに臨み、あなたに及ぶであろう。一六あなたは町のうちでものろわれ、畑でものろわれ、一七あなたのごも、こねばちものろわれ、一八あなたの身から生れるもの、地に産する物、牛の子、羊の子ものろわれるであろう。一九あなたは、はいるにものろわれ、出るにものろわれるであろう。

二〇主はあなたが手をくだすすべての働きにのろいと、混乱と懲しめとを送られ、あなたはついに滅び、すみやかにうせ果てるであろう。これはあなたが悪をおこなつてわたしを捨てたからである。二一主は疫病をあなたの身につかせ、あなたが行つて取る地から、ついにあなたを断ち滅ぼされるであろう。二三主はまた肺病と熱病と炎症と間けつ熱と、かんばつと、立ち枯れと、腐り穂とをもつてあなたを撃たれるであろう。これらのものはあなたを追い、ついにあなたを滅ぼすであろう。二四あなたは頭の上の天は青銅となり、あなたの下の地は鉄となるであろう。二五主はあなたの地の雨を、ちりと、ほこりに変らせ、それが天からあなたの上にくだつて、ついにあなたを滅ぼすであろう。

二六主はあなたを敵の前で敗れさせられるであろう。あなたは一つの道から彼らを攻めて行くが、彼らの前で七つの道から逃

げ去るであろう。そしてあなたは地のもろもろの国に恐るべき
見せしめとなるであろう。二六またあなたの死体は空のもろも
ろの鳥と、地の獣とのえじきとなり、しかもそれを追い払う者は
ないであろう。二七主はエジプトの腫物と潰瘍と壞血病とひぜ
んともってあなたを撃たれ、あなたはいやされることはない
であろう。二八また主はあなたを撃つて気を狂わせ、目を見えな
くし、心を混乱させられるであろう。二九あなたは盲人が暗やみ
に手探りするように、真昼にも手探りするであろう。あなたは
行く道で榮えることがなく、ただ常にしえたげられ、かすめられ
るだけで、あなたを救う者はないであろう。三〇あなたは妻を
めとつても、ほかの人が彼女と寝るであろう。家を建てても、その
中に住まないであろう。ぶどう畑を作つても、その実を摘み取
ることがないであろう。三一あなたの牛が目の前でほふられて
も、あなたはそれを食べることができず、あなたの羊が敵のものに
で奪われても、返されないであろう。あなたの羊が敵のものに
なつても、それを救つてあなたに返す者はないであろう。三二あ
なたのむすこや娘は他国民にわたされる。あなたの目はそれを
見、終日、彼らを慕つて衰えるが、あなたは手を施すすべもな
いであろう。三三あなたの地の産物およびあなたの労して獲た
物はみなあなたの知らない民が食べるであろう。あなたは、た
だ常にしえたげられ、苦しめられるのみであろう。三四こうして
あなたは目に見る事柄によつて、気が狂うにいたるであろう。三

五主はあなたのひぎと、はぎとに悪い、いやし得ない腫物を生じ
させて、足の裏から頭の頂にまで及ぼされるであろう。
三六主はあなたとあなたが立てた王とを携えて、あなたもあなた
の先祖も知らない国に移されるであろう。あなたはそこで木や
石で造つたほかの神々に仕えるであろう。三七あなたは主があ
なたを追いやられるもろもろの民のなかで驚きとなり、ことわ
ざとなり、笑い草となるであろう。三八あなたが多くの種を畑に
携えて出ても、その收穫は少ないであろう。いなごがそれを食
いつくすからである。三九あなたがぶどう畑を作り、それにつち
かつても、そのぶどう酒を飲むことができず、その実を集めるこ
ともないであろう。虫がそれを食べるからである。四〇あなた
の国にはあまねくオリブの木があるであろう。しかし、あなた
はその油を身に塗ることができないであろう。その実がみな落
ちてしまうからである。四一むすこや、娘があなたに生れても、
あなたのものにならないであろう。彼らは捕えられて行くから
である。四二あなたのもろもろの木、および地の産物は、いなご
が取つて食べるであろう。四三あなたのうちに寄留する他国民
は、ますます高くなり、あなたの上に出て、あなたはますます低
くなるであろう。四四彼はあなたに貸し、あなたは彼に貸すこと
ができない。彼はかしらとなり、あなたは尾となるであろう。四
五このもろもろのろいが、あなたに臨み、あなたを追い、つい
に追いついて、あなたを滅ぼすであろう。これはあなたの神主

の聲に聞き従わず、あなたに命じられた戒めと定めとを、あなたが守らなかつたからである。四六これらの事は長くあなたとあなたの子孫のうえにあつて、しるしとなり、また不思議となるであらう。

四七あなたがすべての物に豊かになり、あなたの神、主に心から喜び樂しんで仕えないので、四八あなたは飢え、かわき、裸になり、すべての物に乏しくなつて、主があなたにつかわされる敵に仕えるであらう。敵は鉄のくびきをあなたのくびにかけ、ついにあなたを滅ぼすであらう。四九すなわち主は遠い所から、地のはてから一つの民を、はげたかが飛びかけるように、あなたに攻めきたらせられるであらう。これはあなたがその言葉を知らない民、五〇顔の恐ろしい民であつて、彼らは老人の身を顧みず、幼い者をあわれまず、五一あなたの家畜が産むものや、地の産物を食つて、あなたを滅ぼし、穀物をも、酒をも、油をも、牛の子をも、羊の子をも、あなたの所に残さず、ついにあなたを全く滅ぼすであらう。五二その民は全国ですべての町を攻め囲み、ついにあなたが頼みとする、堅固な高い石がきをことごとく撃ちくずし、あなたの神、主が賜つた国のうちのすべての町々を攻め囲むであらう。五三あなたは敵に囲まれ、激しく攻めなやまされて、ついにあなたの神、主が賜つたあなたの身から生れた者、むすこ、娘の肉を食べるに至るであらう。五四あなたがたのうちのやさしい、温和な男でさえも、自分の兄弟、自分のふと

ころの妻、最後に残っている子供にも食物を惜しんで与えず、五五自分が自分の子供を食べ、その肉を少しでも、この人々のだれにも与えようとはしないであらう。これは敵があなたのすべての町々を囲み、激しく攻め悩まして、何をその人に残さないからである。五六またあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、すなわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようともしない者でも、自分のふところの夫や、むすこ、娘にもかくして、五七自分の足の間からでる後産や、自分の産む子をひそかに食べるであらう。敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである。

五八もしあなたが、この書物にしるされているこの律法のすべての言葉を守り行わず、あなたの神、主というこの栄えある恐るべき名を恐れないならば、五九主はあなたとその子孫の上に激しい災を下されるであらう。その災はきびしく、かつ久しく、その病氣は重く、かつ久しいであらう。六〇主はまた、あなたが恐れた病氣、すなわちエジプトのもろもろの病氣を再び臨ませて、あなたの身につかせられるであらう。六一またこの律法の書にのせてないもろもろの病氣と、もろもろの災とを、主はあなたが滅びるまで、あなたの上に下されるであらう。六二あなたがたは天の星のように多かつたが、あなたの神、主の聲に聞き従わなかつたから、残る者が少なくなるであらう。六三さきに主があなたがたを良くあしらい、あなたがたを多くするのを喜ばれたように、

主は今あなたがたを滅ぼし絶やすのを喜ばれるであろう。あなたがたは、はいって取る地から抜き去られるであろう。六四 主は地のこのはてから、かのはてまでのもろもろの民のうちにあなたがたを散らされるであろう。その所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであろう。六五 その国々の民のうちであなたは安きを得ず、また足の裏を休める所も得られないであろう。主はその所で、あなたの心をおのかせ、目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであろう。六六 あなたの命は細い糸にかかつているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もおぼつかなく思うであろう。六七 あなたが心にいだく恐れと、目に見るものによつて、朝には『ああ夕であればよいのに』と言ひ、夕には『ああ朝であればよいのに』と言うであろう。六八 主はあなたを舟に乗せ、かつてわたしがあなたに告げて、『あなたは再びこれを見ることはない』と言つた道によつて、あなたをエジプトへ連れもどされるであろう。あなたがたはそこで男女の奴隷として敵に売られるが、だれも買う者はないであろう』。

第二十九章

「これは主がモーセに命じて、モアブの地でイスラエルの人々と結ばせられた契約の言葉であつて、ホレブで彼らと結ばれた

契約のほかのものである。

ニモーセはイスラエルのすべての人を呼び集めて言つた、「あなたがたは主がエジプトの地で、パロと、そのすべての家来と、その全地とにせられたすべての事をまのあたり見た。ミすなわちその大きな試みと、しるしと、大きな不思議とをまのあたり見たのである。四しかし、今日まで主はあなたがたの心に悟らせず、目に見させず、耳に聞かせられなかつた。五わたしは四十年の間、あなたがたを導いて荒野を通らせたが、あなたがたの身に付けた着物は古びず、足のくつは古びなかつた。六あなたがたはまたパンも食はず、ぶどう酒も濃い酒も飲まなかつた。こうしてあなたがたは、わたしがあなたがたの神主であることを知るに至つた。七あなたがたがこの所にきたとき、ヘシボンの王シホンと、バシヤンの王オグがわれわれを迎えて戦つたが、われわれは彼らを撃ち敗つて、ハその地を取り、これをルベンびとと、ガドびとと、マナセびとの半ばとに、嗣業として与えた。九それゆえ、あなたがたはこの契約の言葉を守つて、それを行わなければならない。そうすればあなたがたのするすべての事は栄えるであろう。

「あなたがたは皆、きよう、あなたがたの神、主の前に立つている。すなわちあなたがたの部族のかしらたち、長老たち、つかさたちなど、イスラエルのすべての人々、二あなたがたの小さい者たちも、妻たちも、宿営のうちに寄留している他国人も、

あなたのために、たぎぎを割る者も、水をくむ者も、みな主の前に立つて、三あなた神、主が、きよう、あなたと結ばれるあなたの神、主の契約と誓いとに、はいうとしてゐる。二三これは主がさきにあなたに約束されたように、またあなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓われたように、きよう、あなたを立てて自分の民とし、またみずからあなたの神となられるためである。二四わたしはただあなたがただけ、この契約と誓いとを結ぶのではない。二五きよう、ここで、われわれの神、主の前にわれわれと共に立つてゐる者ならびに、きよう、ここにわれわれと共にいない者とも結ぶのである。

二六われわれがどのようにエジプトの国に住んでいたか、どのように国々の民の中を通ってきたか、それはあなたがたが知つてゐる。二七またあなたがたは木や石や銀や金で造つた憎むべき物と偶像とが、彼らのうちにあるのを見た。二八それゆゑ、あなたがたのうちに、きよう、その心にわれわれの神、主を離れてそれらの国民の神々に行つて仕える男や女、氏族や部族があつてはならない。またあなたがたのうちに、毒草や、にがよもぎを生ずる根があつてはならない。二九そのような人はこの誓いの言葉を聞いても、心に自分を祝福して『心をかたくなにして歩んでもわたしには平安がある』と言うであらう。そうすれば潤つた者も、かわいた者もひとしく滅びるであらう。三〇主はそのような人をゆるすことを好まれない。かえつて主はその人に

怒りとねたみを発し、この書物にしるされたすべてののろいを彼の上に加え、主はついにその人の名を天の下から消し去れるであらう。三一主はイスラエルのすべての部族のうちからその人を区別して災をくだし、この律法の書にしるされた契約の中のものもろののろいのようにされるであらう。三二後の代の人、すなわちあなたがたののちに起るあなたがたの子孫および遠い国から来る外国人は、この地の災を見、主がこの地にくだされた病氣を見て言うであらう。三三——全地は硫黄となり、塩となり、焼け土となつて、種もまかれず、実も結ばず、なんの草も生じなくなつて、むかし主が怒りと憤りをもつて滅ぼされたソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムの破滅のようである。——三四すなわち、もろもろの国民は言うであらう、『なぜ、主はこの地にこのようなことをされたのか。この激しい大いなる怒りは何ゆゑか』。三五そのとき人々は言うであらう、『彼らはその先祖の神、主がエジプトの国から彼らを導き出して彼らと結ばれた契約をすて、二六行つて彼らの知らない、また授からない、ほかの神々に仕えて、それを拝んだからである。二七それゆゑ主はこの地にむかつて怒りを発し、この書物にしるされたもろもろののろいをこれにくだし、二八そして主は怒りと、はげしい怒りと大いなる憤りをもつて彼らをこの地から抜き取つて、ほかの国に投げやられた。今日見るとおりである』。

三九隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表

わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属し、われわれにこの律法のすべての言葉を行わせるのである。

第三〇章

一 わたしがあなたがたの前に述べたこのもう一つの祝福と、のろいの事があなたに臨み、あなたがあなたの神、主に追いやられたもう一つの国民のなかでこの事を心に考えて、二 あなたもあなたの子供も共にあなたの神、主に立ち帰り、わたしが、きょう、命じるすべてのことにおいて、心をつくし、精神をつくして、主の声に聞き従うならば、三 あなたの神、主はあなたを再び栄えさせ、あなたをあわれみ、あなたの神、主はあなたを散らされた国々から再び集められるであろう。四 たといあなたが天のはてに追いやられても、あなたの神、主はそこからあなたを集め、そこからあなたを連れ帰られるであろう。五 あなたの神、主はあなたの先祖が所有した地にあなたを帰らせ、あなたはそれを所有するに至るであろう。主はまたあなたを栄えさせ、数を増して先祖たちよりも多くされるであろう。六 そしてあなたの神、主はあなたの心とあなたの子孫の心に割礼を施し、あなたをして、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主を愛させ、こうしてあなたに命を得させられるであろう。七 あなたの神、主はまた、あなたを迫害する敵と、あなたを憎む者とに、このもう一つの

のろいをこうむらせられるであろう。八 しかし、あなたは再び主の声に聞き従い、わたしが、きょう、あなたに命じるすべての戒めを守るであろう。九 そうすればあなたの神、主はあなたのするすべてのことと、あなたの身から生れる者と、家畜の産むものと、地に産する物を豊かに与えて、あなたを栄えさせられるであろう。すなわち主はあなたの先祖たちを喜ばれたように再びあなたを喜んで、あなたを栄えさせられるであろう。一〇 これはあなたが、あなたの神、主の声に聞きしたが、この律法の書に示された戒めと定めとを守り、心をつくし、精神をつくしてあなたの神、主に帰するからである。

二 わたしが、きょう、あなたに命じるこの戒めは、むずかしいものではなく、また遠いものでもない。三 これは天にあるのではないから、『だれがわれわれのために天に上り、それをわれわれのところへ持つてきて、われわれに聞かせ、行わせるであろうか』と言うに及ばない。四 またこれは海のかたにあるのではないから、『だれがわれわれのために海を渡って行き、それをわれわれのところへ携えてきて、われわれに聞かせ、行わせるであろうか』と言うに及ばない。五 この言葉はあなたに、はなはだ近くあつてあなたの口にあり、またあなたの心にあるから、あなたはこれを行うことができる。

六 見よ、わたしは、きょう、命とさいわい、および死と災をあなたの前に置いた。七 すなわちわたしは、きょう、あなたにあ

あなたの神、主を愛し、その道に歩み、その戒めと定めと、おきてとを守ることを命じる。それに従うならば、あなたは生きながらえ、その数は多くなるであろう。またあなたの神、主はあなたが行って取る地であなただを祝福されるであろう。一七しかし、もしあなたが心をそむけて聞き従わず、誘われて他の神々を拝み、それに仕えるならば、一八わたしは、きよう、あなたがたに告げる。あなたがたは必ず滅びるであろう。あなたがたはヨルダンを渡り、はいって行って取る地でなく命を保つことができないであろう。一九わたしは、きよう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならぬ。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。二〇すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につき従わなければならない。そうすればあなたは命を得、かつ長く命を保つことができ、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地に住むことができるであろう」。

第三章

一そこでモーセは続いてこの言葉をイスラエルのすべての人に告げて、二彼らに言った、「わたしは、きよう、すでに百二十歳になり、もはや出入りすることはできない。また主はわたしに『お

まえはこのヨルダンを渡することはできない』と言われた。三あなたの神、主はみずからあなたに先立って渡り、あなたの前からこれらの国々の民を滅ぼし去って、あなたにこれを獲させられるであろう。また主がかつて言われたように、ヨシユアはあなたを率いて渡るであろう。四主がさきにアモリびとの王シホンとオグおよびその地にされたように、彼らにもおこなって彼らを滅ぼされるであろう。五主は彼らをあなたがたに渡されるから、あなたがたはわたしが命じたすべての命令のとおりに行わなければならない。六あなたがたは強く、かつ勇ましくなければならない。彼らを恐れ、おののいてはならない。あなたの神、主があなたと共に行かれるからである。主は決してあなたを見放さず、またあなたを見捨てられないであろう」。

七モーセはヨシユアを呼び、イスラエルのすべての人の目の前で彼に言った、「あなたはこの民と共に行き、主が彼らの先祖たちと与えると誓われた地に入るのであるから、あなたは強く、かつ勇ましくなければならない。あなたは彼らにそれを獲させるであろう。八主はみずからあなたに先立って行き、またあなたと共におり、あなたを見放さず、見捨てられないであろう。恐れてはならない、おののいてはならない」。

九モーセはこの律法を書いて、主の契約の箱をかつぐレビの子孫である祭司およびイスラエルのすべての長老たちに授けた。一〇そしてモーセは彼らに命じて言った、「七年の終りごと

に、すなわち、ゆるしの年の定め（とき）の時になり、かりいおの祭に、ニイスラエルのすべての人があなたの神、主の前に出るため、主の選ばれる場所に来るとき、あなたはイスラエルのすべての人の前でこの律法（りっぽう）を読んで聞かせなければならない。ニすなわち男、女、子供およびあなたの町のうちに寄留（きりゆう）している他国人など民を集め、彼らにこれを聞かせ、かつ学ばせなければならない。そうすれば彼らはあなたがたの神、主を恐れてこの律法の言葉を、ことごとく守り行うであろう。ニまた彼らの子供たちでこれを知らない者も聞いて、あなたがたの神、主を恐れることを学ぶであろう。あなたがたがヨルダンを渡って行って取る地にながらえる日のあいだ常にそうしなければならない」。

四 主はまたモーセに言われた、「あなたの死ぬ（し）日が近づいている。ヨシユアを召して共に会見の幕屋に立ちなさい。わたしは彼に務（つとめ）を命じるであろう」。モーセとヨシユアが行って会見の幕屋に立つと、五 主は幕屋で雲の柱のうちに現（あら）わられた。その雲の柱は幕屋の入口のかたわらにとどまった。

六 主はモーセに言われた、「あなたはまもなく眠（ねむ）って先祖たちと一緒にいるであろう。そのときこの民はたちあがり、はいって行く地の異なる神々（かみ）を慕（した）って姦淫（かんいん）を行い、わたしを捨て、わたしが彼らと結んだ契約（けいやく）を破るであろう。七 その日には、わたしは彼らにむかつて怒（いか）りを発し、彼らを捨て、わたしの顔を彼らに隠（かく）すゆえに、彼らは滅（ほろ）ぼしつくされ、多くの災（わざ）と悩み（なや）みが彼らに臨（のぞ）

むであろう。そこでその日、彼らは言うであろう、『これらの災（わざ）がわれわれに臨（のぞ）むのは、われわれの神（かみ）がわれわれのうちにおられないからではないか』。八 しかも彼らがほかの神々に帰して、もろもろの悪（あく）を行うゆえに、わたしはその日には必ずわたしの顔を隠（かく）すであろう。九 それであなたがたは今、この歌（うた）を書きしるし、イスラエルの人々に教えてその口に唱（とな）えさせ、この歌をイスラエルの人々（ひとびと）に対するわたしのあかしとならせなさい。ニわたしは彼らの先祖（せんぞ）たちに誓（ちか）った、乳（ちち）と蜜（みつ）の流（なが）れる地に彼らを導（みちび）き入れる時、彼らは食べて飽（あ）き、肥（ふ）え太（お）るに及（およ）んで、ほかの神々に歸し、それに仕（つか）えて、わたしを軽（かろ）んじ、わたしの契約（けいやく）を破（やぶ）るであろう。ニこうして多くの災（わざ）と悩み（なや）みとが彼らに臨（のぞ）む時、この歌は彼ら（かれ）らに對（たい）して、あかしとなるであろう。（それはこの歌が彼らの子孫（しよん）の口（くち）にあつて、彼らはそれを忘（わす）れないからである。）わたしが誓（ちか）った地に彼らを導（みちび）き入れる前、すでに彼らが思（おも）ひはかつている事をわたしは知（し）っているからである。三 モーセはその日、この歌（うた）を書いてイスラエルの人々に教（おし）えた。

三 主はヌンの子（こ）ヨシユアに命（めい）じて言（い）われた、「あなたはイスラエルの人々（ひとびと）をわたしが彼ら（かれ）らに誓（ちか）った地に導（みちび）き入れなければならない。それゆえ強（つよ）くかつ勇（いさ）ましくあれ。わたしはあなたと共にいるであろう」。

四 モーセがこの律法（りっぽう）の言葉（ことば）を、ことごとく書物（しょもつ）に書き終（おわ）った時、五 モーセは主の契約（けいやく）の箱（はこ）をかつぐレビ（めい）びとに命（めい）じて言（い）つ

第三二章

た、二六「この律法の書をとつて、あなたがたの神、主の契約の箱のかたわらに置き、その所であなたにむかつてあかしをするものとしなさい。ニモわたしはあなたのそむくことと、かたくななことを知っている。きよう、わたしが生きながらえて、あなたがたと一緒にいる間ですら、あなたがたは主にそむいた。ましてわたしが死んだあとはどんなであろう。ニハあなたがたの部族のすべての長老たちと、つかさたちをわたしのものに集めなさい。わたしはこれらの言葉を彼らに語り聞かせ、天と地とを呼んで彼らにむかつてあかしさせよう。ニ九わたしは知っている。わたしが死んだのち、あなたがたは必ず悪い事をして、わたしに命じた道を離れる。そして後の日に災があなたがたに臨むであろう。これは主の恵と見られることを行い、あなたがたのすることをもつて主を怒らせるからである」。

三〇そしてモーセはイスラエルの全会衆に次の歌の言葉を、ことごとく語り聞かせた。

一 「天よ、耳を傾けよ、わたしは語る、
地よ、わたしの口の言葉を聞け。
ニわたしは雨のように降りそそぎ、
わたしの言葉は露のようにしたたるであろう。

若草の上に降る小雨のように、
青草の上にくだる夕立ちのように。
三わたしは主の名をのべよう、
われわれの神に栄光を帰せよ。
四主は岩であつて、そのみわざは全く、
その道はみな正しい。
主は真実なる神であつて、偽りなく、
義であつて、正である。
五彼らは主にむかつて悪を行い、
そのきずのゆえに、もはや主の子らではなく、
よこしまで、曲つたやからである。
六愚かな知恵のない民よ、
あなたがたはこのようにして主に報いるのか。
主はあなたを生み、あなたを造り、
あなたを堅く立てられたあなたの父ではないか。
七いにしえの日を覚え、
代々の年を思え。
あなたの父に問え、
彼はあなたに告げるであろう。
長老たちに問え、
彼らはあなたに語るであろう。
八いと高き者は人の子らを分け、

諸国民にその嗣業を与えられたとき、
 イスラエルの子らの数に照して、
 もろもろの民の境を定められた。
 九主の分はその民であつて、
 ヤコブはその定められた嗣業である。
 一〇主はこれを荒野の地で見いだし、
 獣のほえる荒地地で会い、
 これを巡り囲んでいたわり、
 目のひとみのように守られた。
 二わしがその巢のひなを呼び起し、
 その子の上に舞いかけり、
 その羽をひろげて彼らをのせ、
 そのつばさの上にこれを負うように、
 二三主はただひとりで彼を導かれて、
 ほかの神々はあずからなかつた。
 二三主は彼に地の高き所を乗り通らせ、
 田畑の産物を食わせ、
 岩の中から蜜を吸わせ、
 堅い岩から油を吸わせ、
 一四牛の凝乳、羊の乳、
 小羊と雄羊の脂肪、
 バシヤンの牛と雄やぎ、

小麦の良い物を食わせられた。
 またあなたはぶどうのしるのあわ立つ酒を飲んだ。
 一五しかるにエシユルンは肥え太つて、足でつけた。
 あなたは肥え太つて、つややかになり、
 自分を造つた神を捨て、
 救の岩を侮つた。
 一六彼らはほかの神々に仕えて、主のねたみを起し、
 憎むべきおこないをもつて主の怒りをひき起した。
 一七彼らは神でもない悪霊に犠牲をささげた。
 それは彼らがかつて知らなかつた神々、
 近ごろ出た新しい神々、
 先祖たちの恐れることもしなかつた者である。
 一八あなたは自分を生んだ岩を軽んじ、
 自分を造つた神を忘れた。
 一九主はこれを見、
 そのむすこ、娘を怒つてそれを捨てられた。
 二〇そして言われた、
 『わたしはわたしの顔を彼らに隠そう。
 わたしは彼らの終りがどうなるかを見よう。
 彼らはそむき、もとのやから、
 真実のない子らである。
 二二彼らは神でもない者をもつて、

わたしにねたみを起させ、
偶像をもつて、わたしを怒らせた。
それゆえ、わたしは民ともいえない者をもつて、
彼らにねたみを起させ、
愚かな民をもつて、彼らを怒らせるであろう。
三 わたしの怒りによって、火は燃えいで、
陰府の深みにまで燃え行き、
地とその産物とを焼きつくし、
山々の基を燃やすであろう。
三 わたしは彼らの上に災を積みかさね、
わたしの矢を彼らにむかつて射つくすであろう。
二四 彼らは飢えて、やせ衰え、
熱病と悪い疫病によって滅びるであろう。
わたしは彼らを獣の齒にかからせ、
地に這うものの毒にあたらせるであろう。
二五 外にはつるぎ、内には恐れがあつて、
若き男も若き女も、
乳のみ子も、しらがの人も滅びるであろう。
二六 わたしはまさに言おうとした、「彼らを遠く散らし、
彼らの事を人々が記憶しないようにしよう」。
二七 しかし、わたしは敵が誇るのを恐れる。
あだびとはまちがえて言うであろう、

「われわれの手が勝ちをえたのだ。
これはみな主がされたことではない」』。
二八 彼らは思慮の欠けた民、
そのうちには知識がない。
二九 もし、彼らに知恵があれば、これをさとり、
その身の終りをわきまえたであろうに。
三〇 彼らの岩が彼らを買わず、
主が彼らをわたされなかつたならば、
どうして、ひとりで千人を追ひ、
ふたりで万人を敗ることができたであろう。
三一 彼らの岩はわれらの岩に及ばない。
われらの敵もこれを認めている。
三二 彼らのぶどうの木は、
ソドムのぶどうの木から出たもの、
またゴモラの野から出たもの、
そのぶどうは毒ぶどう、そのふさは苦い。
三三 そのぶどう酒はへびの毒のよう、
まむしの恐ろしい毒のようである。
三四 これはわたしのもとにかくわれられ、
わたしの倉に封じ込められているではないか。
三五 彼らの足がすべるとき、
わたしはあだを返し、報いをするであろう。

彼らの災の日は近く、
彼らの破滅は、

すみやかに来るであろう。

三六 主はついにその民をさばき、

そのしもべらにあわれみを加えられるであろう。

これは彼らの力がうせ去り、

つながれた者もつながれない者も、

もはやいなくなつたのを、主が見られるからである。

三七 そのとき主は言われるであろう、

『彼らの神々はどこにいるか、

彼らの頼みとした岩はどこにあるか。

三八 彼らの犠牲のあぶらを食い、

灌祭の酒を飲んだ者はどこにいるか。

立ちあがつてあなたがたを助けさせよ、

あなたがたを守らせよ。

三九 今見よ、わたしこそは彼である。

わたしのほかに神はない。

わたしは殺し、また生かし、

傷つけ、またいやす。

わたしの手から救い出しうるものはない。

四〇 わたしは天にむかい手をあげて誓う、

「わたしは永遠に生きる。」

四一 わたしがきらめくつるぎをとき、
手にさばきを握るとき、

わたしは敵にあだを返し、

わたしを憎む者に報復するであろう。

四二 わたしの矢を血に酔わせ、

わたしのつるぎに肉を食わせるであろう。

殺された者と捕えられた者の血を飲ませ、

敵の長髪の頭の肉を食わせるであろう。』

四三 国々の民よ、主の民のために喜び歌え。

主はそのしもべの血のために報復し、

その敵にあだを返し、

その民の地の汚れを清められるからである。』

四四 モーセとヌンの子ヨシアは共に行つて、この歌の言葉を、

ことごとく民に読み聞かせた。四五 モーセはこの言葉を、ことごとくイスラエルのすべての人に告げ終つて、

「あなたがたはわたしが、きよう、あなたがたに命じるこのすべての言葉を心におさめ、子供たちにもこの律法のすべての言葉を守り行うことを命じなければならない。四六 この言葉はあなたがたにとつて、むなしい言葉ではない。これはあなたがたのいのちである。この言葉により、あなたがたはヨルダンを渡つて行つて取る地で、長く命を保つことができるであろう。」

四八 この日、主はモーセに言われた、四九 「あなたはエリコに対す

るモアブの地にあるアバリム山すなわちネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に与えて獲させるカナンの地を見渡させ。五〇あなたは登って行くその山で死に、あなたの民に連なるであろう。あなたの兄弟アロンがホル山で死んでその民に連なるようになるであろう。五一これはあなたがたがチンの荒野にあるメリバテ・カデシの水のほとりで、イスラエルの人々のうちでわたしにそむき、イスラエルの人々のうちでわたしを聖なるものとして敬わなかったからである。五二それであなたはわたしがイスラエルの人々に与える地を、目の前に見るであろう。しかし、その地に、はいることはできない」。

第三三章

一 神の人モーセは死ぬ前にイスラエルの人々を祝福した。祝福の言葉は次のとおりである。

二 「主はシナイからこられ、
セイルからわれわれにむかつてのぼられ、
パランの山から光を放たれ、
ちよろずの聖者の中からこられた。
その右の手には燃える火があった。
三 まことに主はその民を愛される。
すべて主に聖別されたものは、み手のうちにある。

彼らはあなたの足もとに座して、
教をうける。

四 モーセはわれわれに律法を授けて、
ヤコブの会衆の所有とさせた。

五 民のかしらたちが集まり、
イスラエルの部族がみな集まった時、
主はエシユルンのうちに王となられた」。

六 「ルベンが生きる、死にはしない。
しかし、その人数は少なくなるであろう」。

セ ユダについては、こう言った、
「主よ、ユダの声を聞いて、
彼をその民に導きかえしてください。
み手をもつて、彼のために戦ってください。
彼を助けて、敵に当らせてください」。

ハ レビについては言った、
「あなたのトンミムをレビに与えてください。
ウリムをあなたに仕える人に与えてください。
かつてあなたはマツサで彼を試み、
メリバの水のほとりで彼と争われた。
九 彼はその父、その母について言った、
『わたしは彼らを顧みない』。
彼は自分の兄弟をも認めず、

自分の子供をも顧みなかった。

彼らはあなたの言葉にしたがい、

あなたの契約を守ったからである。

○彼らはあなたのおきてをヤコブに教え、

あなたの律法をイスラエルに教え、

薫香をあなたの前に供え、

燔祭を祭壇の上にささげる。

主よ、彼の力を祝福し、

彼の手のわざを喜び受けてください。

彼に逆らう者と、

彼を憎む者との腰を打ち砕いて、

立ち上がるこのできないようにしてください。

ニベニヤミンについては言った、

「主に愛される者、

彼は安らかに主のそばにおり、

主は終日、彼を守り、

その肩の間にすまいを営まれるであろう」。

ニヨセフについては言った、

「どうぞ主が彼の地を祝福されるように。

上なる天の賜物と露、

下に横たわる淵の賜物、

一四日によって産する尊い賜物、

月によって生ずる尊い賜物、

一五いにしえの山々の産する賜物、

とこしえの丘の尊い賜物、

二六地とそれに満ちる尊い賜物、

しばの中におられた者の恵みが、

ヨセフの頭に臨み、

その兄弟たちの君たる者の頭の頂にくだるように。

一七彼の牛のういごは威厳があり、

その角は野牛の角のよう、

これをもつて国々の民をことごとく突き倒し、

地のはてにまで及ぶ。

このような者はエフライムに幾万とあり、

またこのような者はマナセに幾千とある」。

一八ゼブルンについては言った、

「ゼブルンよ、あなたは外に出て楽しみを得よ。

イツサカルよ、あなたは天幕にいて楽しみを得よ。

一九彼らは国々の民を山に招き、

その所で正しい犠牲をささげるであろう。

彼らは海の富を吸い、

砂に隠れた宝を取るからである」。

二〇ガドについては言った、

「ガドを大きくする者は、ほむべきかな。

ガドは、ししのように伏し、
腕や頭の頂をかき裂くであろう。

三 彼は初穂の地を自分のために選んだ。
そこには將軍の分も取り置かれていた。

彼は民のかしらたちと共にきて、

イスラエルと共に主の正義と審判とを行つた。

三 ダンについては言つた、

「ダンはししの子であつて、

バシヤンからおどりである」。

三 ナフタリについては言つた、

「ナフタリよ、あなたは恵みに満たされ、

主の祝福に満ちて、

湖とその南の地を所有する」。

二四 アセルについては言つた、

「アセルは他の子らにまさつて祝福される。

彼はその兄弟たちに愛せられ、

その足を油にひたすことができるように。

二五 あなたの貫の木は鉄と青銅、

あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」。

二六 「エシユルンよ、神に並ぶ者はほかにない。

あなたを助けるために天に乗り、

威光をもつて空を通られる。

二七 ところしえにいます神はあなたのすみかであり、
下には永遠の腕がある。

敵をあなたの前から追い払つて、

『滅ぼせ』と言われた。

二八 イスラエルは安らかに住み、

ヤコブの泉は穀物とぶどう酒の地に、

ひとりいるであろう。

また天は露をくだすであろう。

二九 イスラエルよ、あなたはしあわせである。

だがあなたがたのように、

主に救われた民があるであろうか。

主はあなたを助ける盾、

あなたの威光のつるぎ、

あなたの敵はあなたにへつらい服し、

あなたは彼らの高き所を踏み進むであろう」。

第三章

一 モーセはモアブの平野からネボ山に登り、エリコの向かいの
ピスガの頂へ行つた。そこで主は彼にギレアデの全地をダンま
で示し、ニナフタリの全部、エフライムとマナセの地およびユダ
の全地を西の海まで示し、ミネゲブと低地、すなわち、しゅろの

町エリコの谷をゾアルまで示された。四そして主は彼に言われた、「わたしがアブラハム、イサク、ヤコブに、これをあなたの子孫に与えると言つて誓つた地はこれである。わたしはこれをあなたの目に見せるが、あなたはそこへ渡つて行くことはできない」。五こうして主のしもべモーセは主の言葉のとおりにもアブの地で死んだ。六主は彼をベテペオルに對するモアブの地の谷に葬られたが、今日までその墓を知る人はない。七モーセは死んだ時、百二十歳であつたが、目はかすまず、氣力は衰えていなかった。八イスラエルの人々はモアブの平野で三十日の間モーセのために泣いた。そしてモーセのために泣き悲しむ日はついに終つた。

九ヌンの子ヨシユアは知恵の靈に満ちた人であつた。モーセが彼の上に手を置いたからである。イスラエルの人々は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりにおこなつた。一〇イスラエルには、こののちモーセのような預言者は起らなかつた。一一モーセは主が顔を合わせて知られた者であつた。一二主はエジプトの地で彼をパロとそのすべての家来およびその全地につかわして、もろもろのしるしと不思議を行わせられた。一三モーセはイスラエルのすべての人の前で大いなる力をあらわし、大いなる恐るべき事をおこなつた。

ヨシュア記

第一章

一主のしもべモーセが死んだ後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた、「わたしのしもべモーセは死んだ。それゆえ、今あなたと、このすべての民とは、共に立つて、このヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい。三あなたがたが、足の裏で踏み所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう。四あなたがたの領域は、荒野からレバノンに及び、また大川ユーフラテからヘテびとの全地にわたり、日の入る方の大海に達するであろう。五あなたが生きながらえる日の間、あなたに当ることのできる者は、ひとりもないであろう。わたしは、モーセと共にいたように、あなたがたと共にいるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。六強く、また雄々しくあれ。あなたはこの民に、わたしが彼らに与えると、その先祖たちに誓った地を獲させなければならぬ。七ただ強く、また雄々しくあつて、わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法をことごとく守つて行い、これを離れて右にも左にも曲つてはならない。それはすべてあなたが行くところで、勝利を得るためである。ハこの律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、そのう

ちにしるされていることを、ことごとく守つて行わなければならない。そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう。九わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主と共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」。

一〇そこでヨシュアは民のつかさたちに命じて言つた、「二「宿営のなかを巡つて民に命じて言いなさい、『糧、食の備えをしなさい。三日のうちに、あなたがたはこのヨルダンを渡つて、あなたがたの神、主があなたがたに与えて獲させようとされる地を獲るために、進み行かなければならないからである』」。

二ヨシュアはまたルベンびと、ガドびと、およびマナセの半部族に言つた、「三「主のしもべモーセがあなたがたに命じて、『あなたがたの神、主はあなたがたのために安息の場所を備え、この地をあなたがたに賜わるであろう』と言つた言葉を記憶しなさい。四あなたがたの妻子と家畜とは、モーセがあなたがたに与えたヨルダンのこちら側の地にとどまらなければならぬ。しかし、あなたがたのうちの勇士はみな武装して、兄弟たちの先に立つて渡り、これを助けなければならない。五そして主があなたがたに賜つたように、あなたがたの兄弟たちにも安息を賜わり、彼らもあなたがたの神、主が賜わる地を獲るようになるならば、あなたがたは、主のしもべモーセから与えられた、ヨルダンのこちら側、日の出の方にある、あなたがたの所有

の地^ちに帰^{かえ}つて、それを保^{たも}つことができるであらう。一六 彼^{かれ}らはヨシュアに答^{こた}えた、「あなたがわれわれに命^{めい}じられたことをみな行^{おこな}います。あなたがつかわされる所^{ところ}へは、どこへでも行^いきます。こゝれわれはすべてのことをモーセに聞^きき従^{したが}つたように、あなたに聞^きき従^{したが}います。ただ、どうぞ、あなたの神^{かみ}、主^{しゅ}がモーセと共におられたように、あなたと共におられますように。一八 だれであつても、あなたの命^{めい}令^{れい}にそむき、あなたの命^{めい}じられる言葉^{ことば}に聞^きき従^{したが}わないものがあれば、生^いかしてはおきません。ただ、強^{つよ}く、また雄^お々^おしくあつてください」。

第二章

一ヌンの子^こヨシュアは、シツテムから、ひそかにふたりの斥^{せつ}候^{こう}をつかわして彼^{かれ}らに言^いつた、「行^いつて、その地^ち、特にエリコを探^{さぐ}りなさい」。彼^{かれ}らは行^いつて、名^なをラハブという遊^{ゆう}女^{じょ}の家^{いえ}にはいり、そこに泊^とまつたが、ニエリコの王^{おう}に、「イスラエルの人^{ひと}々のうちの数名^{すうめい}の者が今夜^{こんや}この地^ちを探^{さぐ}るために、はいつてきました」と言^いう者があつたので、ミエリコの王^{おう}は人^{ひと}をやつてラハブに言^いつた、「あなたの所^{ところ}にきて、あなたの家^{いえ}にはいつた人^{ひと}々をこゝへ出^だしなさい。彼^{かれ}らはこの国^{くに}のすべてを探^{さぐ}るためにきたのです」。四しかし、女^{おんな}はすでにそのふたりの人^{ひと}を入れて彼^{かれ}らを隠^{かく}していた。そして彼女^{かのじょ}は言^いつた、「確かにその人^{ひと}々はわたしの所^{ところ}にきました」。

しかし、わたしはその人^{ひと}々がどこからきたのか知^しりませんでしたが、五たそがれ時^{とき}、門^{もん}の閉^とじるころに、その人^{ひと}々は出^でて行^いきました。どこへ行^いつたのかわたしは知^しりません。急^{いそ}いであとを追^おいなさい。追^おいつけるでしょう。六その実^{じつ}、彼^{かれ}女^{じょ}はすでに彼^{かれ}らをつれて屋^や根^ねにのぼり、屋^や上^{じやう}に並^{なら}べてあつた亜^あ麻^まの茎^{くき}の中に彼^{かれ}らを隠^{かく}していたのである。七そこでその人^{ひと}々は彼^{かれ}らのあとを追^おつてヨルダンの道^{みち}を進^{すす}み、渡^{わた}し場^ばへ向^むかつた。あとを追^おう者が出^でて行^いくとすぐ門^{もん}は閉^とざされた。

八ふたりの人^{ひと}がまだ寝^ねないうち、ラハブは屋^{おく}上^{じやう}にのぼつて彼^{かれ}らの所^{ところ}にきた。九そして彼^{かれ}らに言^いつた、「主^{しゅ}がこの地^ちをあなたがたに賜^{たま}つたこと、わたしたちがあなたがたをひじように恐^{おそ}れていること、そしてこの地^ちの民^{たみ}がみなあなたがたの前に震^{ふる}えおののいていることをわたしは知^しっています。一〇あなたがたがエジプトから出^でてこられた時^{とき}、主^{しゅ}があなたがたの前^{まえ}で紅^{こう}海^{かい}の水^{みづ}を干^ほされたこと、およびあなたがたが、ヨルダンの向^むこう側^{がわ}にいたアモリびとのふたりの王^{おう}シホンとオグにされたこと、すなわちふたりを、全滅^{ぜんめつ}されたことを、わたしたちは聞^きいたからです。一

一わたしたちはそれを聞^きくと、心^{こころ}は消^きえ、あなたがたのゆえに人^{ひと}々は全^{ぜん}く勇^{ゆう}氣^きを失^{うしな}つてしまいました。あなたがたの神^{かみ}、主^{しゅ}は上の天^{てん}にも、下の地^ちにも、神^{かみ}でいらせられるからです。二三それで、どうか、わたしがあなたがたを親^{しん}切^{せつ}に扱^{あつか}つたように、あなたがたも、わたしの父^{ちち}の家^{いえ}を親^{しん}切^{せつ}に扱^{あつか}われることをいま主^{しゅ}をさ

して誓い、確かなしるしをください。二三そしてわたしの父母、兄弟、姉妹およびすべて彼らに属するものを生きながらえさせ、わたしたちの命を救って、死を免れさせてください。二四ふたりの人は彼女に言った、「もしあなたがたが、われわれのこのことを他に漏らさないならば、われわれは命にかけて、あなたがたを救います。また主がわれわれにこの地を賜わる時、あなたがたを親切に扱い、真実をつくしましょう」。

二五そこでラハブは綱をもつて彼らを窓からつりおろした。その家が町の城壁の上に建っていて、彼女はその城壁の上に住んでいたからである。二六ラハブは彼らに言った、「追手に会わないように、あなたがたは山へ行つて、三日の間そこに身を隠し、追手の帰つて行くのを待つて、それから去つて行きなさい」。二七ふたりの人は彼女に言った、「あなたがたがわれわれに誓わせたこの誓いについて、われわれは罪を犯しません。一八われわれがこの地に討ち入る時、わたしたちをつりおろした窓に、この赤い糸のひもを結びつけ、またあなたの父母、兄弟、およびあなたの家の家族をみなあなたの家に集めなさい。一九ひとりでも家の戸口から外へ出て、血を流されることがあれば、その責めはその人自身のこうべに帰すでしょう。われわれに罪はありません。しかしあなたの家の中にいる人に手をかけて血を流すことがあれば、その責めはわれわれのこうべに帰すでしょう。二〇またあなたが、われわれのこのことを他に漏らすならば、あなたがたが

われに誓わせた誓いについては、われわれに罪はありません」。二一ラハブは言った、「あなたがたの仰せのとおりにいたしましょう」。こうして彼らを送り出したので、彼らは去った。そして彼女は赤いひもを窓に結んだ。

二三彼らは立ち去つて山にはいり、追手が帰るのを待つて、三日の間そこにとどまつた。追手は彼らをあまねく道に捜したが、ついに見つけることができなかった。二四こうしてふたりの人はまた山を下り、川を渡つて、ヌンの子ヨシュアのもとにきて、その身に起つたことをつぶさに述べた。二五そしてヨシュアに言った、「ほんとうに主はこの国をこごとくわれわれの手にお与えになりました。この国の住民はみなわれわれの前に震えおのいています」。

第三章

一ヨシュアは朝早く起き、イスラエルの人々すべてとともにシツテムを出立して、ヨルダンに行き、それを渡らずに、そこに宿った。二三日の後、つかさたちは宿営の中を行き巡り、三民に命じて言った、「レビびとである祭司たちが、あなたがたの神、主の契約の箱をかきあげるのを見るならば、あなたがたはその所を出立して、そのあとに従わなければならない。四そうすれば、あなたがたは行くべき道を知ることができるであろう。あ

あなたがたは前にこの道をとったことがないからである。しかし、あなたがたと箱との間には、おおよそ二千キュビトの距離をおかなければならない。それに近づいてはならない」。五ヨシユアはまた民に言った、「あなたがたは身を清めなさい。あす、主があなたがたのうちに不思議を行われるからである」。六ヨシユアは祭司たちに言った、「契約の箱をかき、民に先立って渡りなさい」。そこで彼らは契約の箱をかき、民に先立って進んだ。

七主はヨシユアに言われた、「きょうからわたしはすべてのイスラエルの前にあなたを尊い者とするであろう。こうしてわたしがモーセと共にいたように、あなたとともにいることを彼らに知らせるであろう。八あなたは契約の箱をかく祭司たちに命じて言わなければならない、『あなたがたは、ヨルダンの水ぎわへ行くと、すぐ、ヨルダンの中に立ちとどまらなければならない』」。九ヨシユアはイスラエルの人々に言った、「あなたがたはここに近づいて、あなたがたの神、主の言葉を聞きなさい」。一〇そしてヨシユアは言った、「生ける神があなたがたのうちにいないになり、あなたがたの前から、カナンびと、ヘテびと、ヒビびと、ペリジびと、ギルガシびと、アモリびと、エブスびとを、必ず追い払われることを、次のことによって、あなたがたは知るであろう。二ごらんさい。全地の主の契約の箱は、あなたがたに先立ってヨルダンを渡ろうとしている。三それゆえ、今、イスラエルの部族のうちから、部族ごとにひとりずつ、合わせて十

二人を選びなさい。一三全地の主なる神の箱をかく祭司たちの足の裏が、ヨルダンの水の中に踏みとどまる時、ヨルダンの水は流れをせきとめられ、上から流れくだる水はとどまって、うず高くなるであろう」。

一四こうして民はヨルダンを渡ろうとして天幕をいで立ち、祭司たちは契約の箱をかき、民に先立って行つたが、一五箱をかく者がヨルダンにきて、箱をかく祭司たちの足が水ぎわにひたると同時に、一ヨルダンは刈入れの間、中、岸一面にあふれるのであるが、一六上から流れくだる水はとどまって、はるか遠くのザレタンのかたわらにある町アダムのあたりで、うず高く立ち、アラバの海すなわち塩の海の方に流れくだる水は全くせきとめられたので、民はエリコに向かって渡つた。一七すべてのイスラエルが、かわいた地を渡って行く間、主の契約の箱をかく祭司たちは、ヨルダンの中のかわいた地に立つていた。そしてついに民はみなヨルダンを渡り終つた。

第四章

一民が皆、ヨルダンを渡り終つた時、主はヨシユアに言われた、二「民のうちから、部族ごとにひとりずつ、合わせて十二人を選び、三彼らに命じて言いなさい、『ヨルダンの中で祭司たちが足を踏みとどめたその所から、石十二を取り、それを携えて渡り、

今夜あなたがたが宿る場所にすえなさい』。四そこでヨシユアはイスラエルの人々のうちから、部族ごとに、ひとりずつ、かねて定めておいた十二人の者を召し寄せ、五ヨシユアは彼らに言った、「あなたがたの神、主の契約の箱の前に立つて行き、ヨルダンの中に進み入り、イスラエルの人々の部族の数にしたがって、おのおの石一つを取り上げ、肩のせて運びなさい。六これはあなたがたのうちに、しるしとなるであろう。後の日になつて、あなたがたの子どもたちが、『これらの石は、どうしたわけですか』と問うならば、七その時あなたがたは彼らに、むかしヨルダンの水が、主の契約の箱の前で、せきとめられたこと、すなわちその箱がヨルダンを渡った時、ヨルダンの水が、せきとめられたことを告げなければならない。こうして、これらの石は永久にイスラエルの人々の記念となるであろう」。

八イスラエルの人々はヨシユアが命じたようにし、主がヨシユアに言われたように、イスラエルの人々の部族の数にしたがって、ヨルダンの中から十二の石を取り、それを携えて渡り、彼らの宿る場所へ行つて、そこにすえた。九ヨシユアはまたヨルダンの中で、契約の箱をかく祭司たちが、足を踏みとどめた所に、十二の石を立てたが、今日まで、そこに残っている。一〇箱をかく祭司たちは、主がヨシユアに命じて、民に告げさせられた事が、すべて行われてしまうまで、ヨルダンの中に立っていた。すべてモーセがヨシユアに命じたとおりである。民は急いで渡つ

た。二民がみな渡り終つた時、主の箱と祭司たちとは、民の見る前で渡つた。ニルベンの子孫とガドの子孫、およびマナセの部族の半ばは、モーセが彼らに命じていたように武装して、イスラエルの人々に先立つて渡り、三戦いのために武装したおおよそ四万の者が戦うため、主の前に渡つて、エリコの平野に着いた。四この日、主はイスラエルのすべての人の前にヨシユアを尊い者とされたので、彼らはみなモーセを敬つたように、ヨシユアを一生のあいだ敬つた。

五主はヨシユアに言われた、六「あかしの箱をかく祭司たちに命じて、ヨルダンから上がつてこさせなさい」。七ヨシユアは祭司たちに命じて言つた、「ヨルダンから上がつてきなさい」。八主の契約の箱をかく祭司たちはヨルダンの中から上がつてきたが、祭司たちの足の裏がかわいた地にあがると同時に、ヨルダンの水はもとの所に流れかえつて、以前のように、その岸にことごとくあふれた。

九民は正月の十日に、ヨルダンから上がつてきて、エリコの東の境にあるギルガルに宿営した。一〇そしてヨシユアは、人々がヨルダンから取つてきた十二の石をギルガルに立て、ニイスラエルの人々に言つた、「後の日にあなたがたの子どもたちが、その父に『これらの石は、どうしたわけですか』とたずねたならば、三『むかしイスラエルがこのヨルダンを、かわいた地にされて渡つたのだ』と言つて、その子どもたちに知らせなければならな

い。三すなわちあなたがたの神、主はヨルダンの水を、あなたがたのために干しからして、あなたがたを渡らせてくださった。それはあなたがたの神、主が、われわれのために紅海を干しからして、われわれを渡らせてくださったのと同じである。二四このようにされたのは、地のすべての民に、主の手に力のあることを知らせ、あなたがたの神、主をつねに恐れさせるためである」。

第五章

一ヨルダンの向こう側、すなわち西の方におけるアモリびとの王たちと、海へにおけるカナンびとの王たちとは皆、主がイスラエルの人々の前で、ヨルダンの水を干しからして、彼らを渡らせられたと聞いて、イスラエルの人々のゆえに、心は消え、彼らのうちに、もはや元氣もなくなった。

二その時、主はヨシュアに言われた、「火打石の小刀を造り、重ねてまたイスラエルの人々に割礼を行いなさい」。三そこでヨシュアは火打石の小刀を造り、陽皮の丘で、イスラエルの人々に割礼を行った。四ヨシュアが人々に割礼を行った理由はこうである。エジプトから出てきた民のうちの、すべての男子、すなわち、いくさびとたちは皆、エジプトを出た後、途中、荒野で死んだが、五その出てきた民は皆、割礼を受けた者であった。しか

し、エジプトを出た後に、途中、荒野で生まれた民は、みな割礼を受けていなかった。六イスラエルの人々は四十年の間、荒野を歩いていて、そのエジプトから出てきた民、すなわち、いくさびとたちは、みな死に絶えた。これは彼らが主の声に聞き従わなかったで、主は彼らの先祖たちに誓って、われわれに与えようと仰せられた地、乳と蜜の流れる地を、彼らに見させないと誓われたからである。七ヨシュアが割礼を行ったのは、この人々について起きたその子どもたちであった。彼らは途中で割礼を受けていなかったで、無割礼の者であったからである。

八すべての民に割礼を行うことが終つたので、民は宿営のうちの自分の所にとどまって傷の直るのを待った。九その時、主はヨシュアに言われた、「きよう、わたしはエジプトのはずかしめを、あなたがたからころがし去った」。それでその所の名は、今日までギルガルと呼ばれている。

一〇イスラエルの人々はギルガルに宿営していたが、その月の十四日の夕暮、エリコの平野で過越の祭を行なった。二そして過越の祭の翌日、その地の穀物、すなわち種入れぬパンおよびいり麦を、その日に食べたが、三その地の穀物を食べた翌日から、マナの降ることはやみ、イスラエルの人々は、もはやマナを獲なかった。その年はカナン地の産物を食べた。

三ヨシュアがエリコの近くにいたとき、目を上げて見ると、ひとりの人が抜き身のつるぎを手に持ち、こちらに向かつて立っ

ていたので、ヨシユアはその人のところへ行って言った、「あなたはわれわれを助けるのですか。それともわれわれの敵を助けるのですか」。四 彼は言った、「いや、わたしは主の軍勢の将として今きたのだ」。ヨシユアは地にひれ伏し拝して言った、「わが主は何をしもべに告げようとされるのですか」。五 すると主の軍勢の将はヨシユアに言った、「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたが立っている所は聖なる所である」。ヨシユアはそうにした。

第六章

一 さてエリコは、イスラエルの人々のゆえに、かたく閉ざして、出入りするものがなかった。二 主はヨシユアに言われた、「見よ、わたしはエリコと、その王および大勇士を、あなたの手にわたしている。三 あなたがた、いくさびとはみな、町を巡って、町の周囲を一度回らなければならない。六日の間そのようにしなければならない。四 七人の祭司たちは、おのおの雄羊の角のラツパを携えて、箱に先立たなければならない。そして七日目には七度町を巡り、祭司たちはラツパを吹き鳴らさなければならない。五 そして祭司たちが雄羊の角を長く吹き鳴らし、そのラツパの音が、あなたがたに聞える時、民はみな大声に呼ばわり、叫ばなければならない。そうすれば、町の周囲の石がきは、くずれ落ち、民は

みなただちに進んで、攻め上ることができぬ」。六 ヌンの子ヨシユアは祭司たちを召して言った、「あなたがたは契約の箱をかき、七人の祭司たちは雄羊の角のラツパ七本を携えて、主の箱に先立たなければならない。七 そして民に言った、「あなたがたは進んで行って町を巡りなさい。武装した者は主の箱に先立って進まなければならない」。

八 ヨシユアが民に命じたように、七人の祭司たちは、雄羊の角のラツパ七本を携えて、主に先立って進み、ラツパを吹き鳴らした。主の契約の箱はそのあとに従った。九 武装した者はラツパを吹き鳴らす祭司たちに先立って行き、しんがりは箱に従った。ラツパは絶え間なく鳴り響いた。一〇 しかし、ヨシユアは民に命じて言った、「あなたがたは呼ばわつてはならない。あなたがたの声を聞えさせてはならない。また口から言葉を出してはならない。ただ、わたしが呼ばわれと命じる日に、あなたがたは呼ばわらなければならない」。一一 こうして主の箱を持って、町を巡らせ、その周囲を一度回らせた。人々は宿営に帰り、夜を宿営で過ごした。

一二 翌朝ヨシユアは早く起き、祭司たちは主の箱をかき、三 七人の祭司たちは、雄羊の角のラツパ七本を携えて、主の箱に先立ち、絶えず、ラツパを吹き鳴らして進み、武装した者はこれに先立って行き、しんがりは主の箱に従った。ラツパは絶え間なく鳴り響いた。一四 その次の日にも、町の周囲を一度巡って宿営

に帰った。六日の間そのようにした。

二五七日目には、夜明けに、早く起き、同じようにして、町を七度めぐった。町を七度めぐったのはこの日だけであつた。二六七度目に、祭司たちがラツパを吹いた時、ヨシユアは民に言った、「呼ばわりなさい。主はこの町をあなたに賜つた。二七この町と、その中のすべてのものは、主への奉納物として滅ぼされなければならぬ。ただし遊女ラハブと、その家に共にいる者はみな生かしておかなければならぬ。われわれが送つた使者たちをかくまつたからである。一八また、あなたがたは、奉納物に手を触れてはならない。奉納に当り、その奉納物をみずから取つて、イスラエルの宿営を、滅ぼさるべきものとし、それを悩ますことのないためである。一九ただし、銀と金、青銅と鉄の器は、みな主に聖なる物であるから、主の倉に携え入れなければならない。二〇そこで民は呼ばわり、祭司たちはラツパを吹き鳴らした。民はラツパの音を聞くと同時に、みな大声をあげて呼ばつたので、石がきはくずれ落ちた。そこで民はみな、すぐに上つて町にはいり、町を攻め取つた。二一そして町にあるものは、男も、女も、若い者も、老いた者も、また牛、羊、ろばをも、ことごとくつるぎにかけて滅ぼした。

二三その時ヨシユアは、この地を探つたふたりの人に言った、「あの遊女の家にはいつて、その女と彼女に属するすべてのものを連れ出し、彼女に誓つたようにしなさい」。二三斥候となつたそ

の若い人たちはいつて、ラハブとその父母、兄弟、そのほか彼女に属するすべてのものを連れ出し、その親族をみな連れ出して、イスラエルの宿営の外に置いた。二四そして火で町とその中のすべてのものを焼いた。ただ、銀と金、青銅と鉄の器は、主の家の倉に納めた。二五しかし、遊女ラハブとその父の家の一族と彼女に属するすべてのものとは、ヨシユアが生かしておいたので、ラハブは今日までイスラエルのうちに住んでいる。これはヨシユアがエリコを探らせるためにつかわした使者たちをかくまつたためである。

二六ヨシユアは、その時、人々に誓いを立てて言った、「おおよそ立つて、このエリコの町を再建する人は、主の前にのろわれるであらう。

その礎をすえる人は長子を失ひ、

その門を建てる人は末の子を失うであらう。」

二七主はヨシユアと共におられ、ヨシユアの名声は、あまねくその地に広がった。

第七章

一しかし、イスラエルの人々は奉納物について罪を犯した。すなわちユダの部族のうちの、ゼラの子ザブデの子であるカルミの子アカンが奉納物を取つたのである。それで主はイスラエル

の人々にむかつて怒りを発せられた。

ニヨシュアはエリコから人々をつかわし、ベテルの東、ベテアベンの近くにあるアイに行かせようとして、その人々に言った、「上つて行って、かの地を探すべきなさい」。人々は上つて行って、アイを探したが、ニヨシュアのもとに帰ってきて言った、「民をことごとく行かせるには及びません。ただ二、三千人を上らせて、アイを撃たせなさい。彼らは少ないのですから、民をことごとくあそこへやってほねおりをさせるには及びません」。四そこで民のうち、おおよそ三千人がそこに上つたが、ついにアイの人々の前から逃げ出した。五アイの人々は彼らのうち、おおよそ三十六人を殺し、更に彼らを門の前からシバリムまで追つて、下り坂で彼らを殺したので、民の心は消えて水のようになつた。六そのためヨシュアは衣服を裂き、イスラエルの長老たちと共に、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、ちりをかぶつた。セヨシュアは言った、「ああ、主なる神よ、あなたはなにゆえ、この民にヨルダンを渡らせ、われわれをアモリびとの手に渡して滅ぼさせられるのですか。われわれはヨルダンの向こうに、安んじてとどまればよかつたのです。ハああ、主よ。イスラエルがすでに敵に背をむけた今となつて、わたしはまた何を言い得ましょう。九カナンびと、およびこの地に住むすべてのものは、これを聞いて、われわれを攻めかこみ、われわれの名を地から断ち去つてしまふでしょう。それであなたは、あなたの大きいなる名

のために、何をしようとされるのですか」。

一〇主はヨシュアに言われた、「立ちなさい。あなたはこうして、そのようにひれ伏しているのか。ニイスラエルは罪を犯し、わたしに彼らに命じておいた契約を破つた。彼らは奉納物を取り、盗み、かつ偽つて、それを自分の所有物のうちに入れた。ニそれでイスラエルの人々は敵に当ることができず、敵に背をむけた。彼らも滅ぼされるべきものとなつたからである。あなたがたが、その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから滅ぼし去るのでなければ、わたしはもはやあなたがたとは共にいないであろう。三立つて、民を清めて言いなさい、『あなたがたは身を清めて、あすのために備えなさい。イスラエルの神、主はこう仰せられる、』イスラエルよ、あなたがたのうちに、滅ぼされるべきものがある。その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから除き去るまでは、敵に当ることはできないであろう。四それゆえ、あすの朝、あなたがたは部族ごとに進み出なければならぬ。そして主がくじを当てられる部族は、氏族ごとに進みいで、主がくじを当てられる氏族は、家族ごとに進みいで、主がくじを当てられる家族は、男ひとりびとり進み出なければならぬ。五そしてその滅ぼされるべきものを持つていて、くじを当てられた者は、その持ち物全部と共に、火で焼かれなければならぬ。主の契約を破りイスラエルのうちに愚かなことを行つたからである』。

二六 こうしてヨシュアは朝早く起き、イスラエルを部族ごとに進み出させたところ、ユダの部族がくじに当り、モセの氏族を進み出させたところ、ゼラびとの氏族が、くじに当った。ゼラびとの氏族を家族ごとに進み出させたところ、ザブデの家族が、くじに当った。ハザブデの家族を男ひとりびとり進み出させたところ、アカンがくじに当った。アカンはユダの部族のうちの、ゼラの子、ザブデの子なるカルミの子である。一九 その時ヨシュアはアカンに言った、「わが子よ、イスラエルの神、主に栄光を帰し、また主をさんびし、あなたのしたことを今わたしに告げなさい。わたしに隠してはならない」。二〇 アカンはヨシュアに答えた、「ほんとうにわたしはイスラエルの神、主に対して罪を犯しました。わたしがしたのはこうです。二一 わたしはぶんどり物のうちに、シナルの美しい外套一枚と銀二百シケルと、目方五十シケルの金の延べ棒一本のあるのを見て、ほしくなり、それを取りました。わたしの天幕の中に、地に隠してあります。銀はその下にあります」。

二三 そこでヨシュアは使者たちをつかわした。使者たちが天幕に走っていつて見ると、それは彼の天幕に隠れてあって、銀もその下にあった。二三 彼らはそれを天幕の中から取り出して、ヨシュアとイスラエルのすべての人々の所に携えてきたので、それを主の前に置いた。二四 ヨシュアはすべてのイスラエルびとと共に、ゼラの子アカンを捕え、かの銀と外套と金の延べ棒、お

よび彼のむすこ、娘、牛、ろば、羊、天幕など、彼の持ち物をことごとく取って、アコルの谷へ引いていった。二五 そしてヨシュアは言った、「なぜあなたはわれわれを悩ましたのか。主は、きょう、あなたを悩まされるであろう」。やがてすべてのイスラエルびとは石で彼を撃ち殺し、また彼の家族をも石で撃ち殺し、火をもって焼いた。二六 そしてアカンの上に石塚を大きく積み上げたが、それは今日まで残っている。そして主は激しい怒りをやめられたが、このことによつて、その所の名は今日までアコルの谷と呼ばれている。

第八章

一 主はヨシュアに言われた、「恐れてはならない、おののいてはならない。いくさびとを皆、率い、立つて、アイに攻め上りなさい。わたしはアイの王とその民、その町、その地をあなたの手に授ける。二 あなたは、さきにエリコとその王にしたとおり、アイとその王とにしなければならぬ。ただし、ぶんどり物と家畜とは戦利品としてあなたがたのものとする事ができるであろう。あなたはまず、町のうしろに伏兵を置きなさい」。

三 ヨシュアは立つて、すべてのいくさびとと共に、アイに攻め上ろうとして、まず大勇士三万人を選び、それを夜のうちにつかわした。四 ヨシュアは彼らに命じて言った、「あなたがたは町に向

かつて、町のうしろに伏せていなければならぬ。町を遠く離れないで、みな備えをしていなければならぬ。五わたしとわたしに従う民とは皆共に、町に攻め寄せよう。そして彼らが前のようにわれわれにむかつて出てくるとき、われわれは彼らの前から逃げるであろう。六そうすれば彼らはわれわれを追って出てくるであろうから、われわれはついに彼らを町からおびき出すことができる。彼らは言うであろう、『この人々はまた前のように、われわれの前から逃げていく』。こうしてわれわれは彼らの前から逃げるであろう。七その時、あなたがたは伏せている所から立ち上がって、町を取らなければならない。あなたがたの神、主がそれをあなたがたの手に与えられるからである。八あなたがたが、町を取ったならば、町に火を放ち、主が命じられたようにしなければならぬ。わたしはこう、あなたがたに命じるのである。九そうしてヨシユアが彼らをつかわしたので、彼らはアイの西方、ベテルとアイの間の待ち伏せする場所に行つて身を伏せた。ヨシユアはその夜、民の中に宿った。

一〇ヨシユアは明るる朝、早く起きて、民を集め、イスラエルの長老たちと共に、民に先立つて、アイに上つていった。二彼と共にいたいくさびとたちもみな上つていって、町の前に近づき、アイの北に陣を取った。彼らとアイの間には、一つの谷があった。三ヨシユアはおおよそ五千人をとって、町の西方、ベテルとアイの間に、伏せておいた。三こうして民の主力を町の北に

おき、しんがり町を町の西においた。ヨシユアはその夜、谷の中で宿った。一四アイの王はこれを見て、すべての民と共に、急いで、早く起き、アラバに行く下り坂に進み出て、イスラエルと戦った。しかし、王は町のうしろに、すきをうかがう伏兵のおることを知らなかった。一五ヨシユアはイスラエルのすべての人々と共に、彼らに打ち破られたふりをして、荒野の方向へ逃げだしたので、一六その町の民はみな呼ばわり集まつて彼らのあとを追ひ、ヨシユアのあとを追つて町からおびき出され、一七アイにもベテルにも残っているものはひとりもなく、みな出てイスラエルのあとを追ひ、町を開け放して、イスラエルのあとを追つた。一八その時、主はヨシユアに言われた、『あなたがたの手にあるなげやりを、アイの方にさし伸べなさい。わたしはその町をあなたがたの手に与えるであろう』。そこでヨシユアが手にしていたなげやりを、アイの方にさし伸べると、一九伏兵はたちまちその場所から立ち上がり、ヨシユアが手をのべると同時に、走つて町に入り、それを取つて、ただちに町に火をかけた。二〇それでアイの人々が、うしろをふり返つて見ると、町の焼ける煙が天に立ちのぼつていたので、こちらへもあちらへも逃げるすがなかつた。荒野へ逃げていった民も身をかえして、追つてきた者に追つた。三ヨシユアとすべてのイスラエルびとは、伏兵が町を取り、町の焼ける煙が立ち上るのを見て、身をかえしてアイの人々を撃つた。三また町を取つたものは町を出て彼らに向かつたの

で、彼らは、こちらとあちらとからイスラエルの中にはさまれた。こうしてイスラエルびとが彼らを撃つたので、生き残つたもの、逃げおおせたものは、ひとりもなかった。ミそしてアイの王を生けどりにして、ヨシユアのもとへ連れてきた。

二四イスラエルびとは、荒野に追撃してきたアイの住民をことごとく野で殺し、つるぎをもつてひとりも残さず撃ち倒してのち、皆アイに帰り、つるぎをもつてその町を撃ち滅ぼした。二五その日アイの人々はことごとく倒れた。その数は男女あわせて一万二千人であつた。二六ヨシユアはアイの住民をことごとく滅ぼしつくすまでは、なげやりをさし伸べた手を引つこめなかつた。モただし、その町の家畜および、ぶんどり品はイスラエルびとが自分たちの戦利品として取つた。主がヨシユアに命じられた言葉にしたがつたのである。二八こうしてヨシユアはアイを焼いて、永久に荒塚としたが、それは今日まで荒れ地となつてゐる。二九ヨシユアはまた、アイの王を夕方まで木に掛けてさらし、日の入るころ、命じて、その死体を木から取りおろし、町の門の入口に投げすて、その上に石の大塚を積み上げさせたが、それは今日まで残つてゐる。

三〇そしてヨシユアはエバル山にイスラエルの神、主のために一つの祭壇を築いた。三一これは主のしもべモーセがイスラエルの人々に命じたことにもとづき、モーセの律法の書にのるされにゐるように、鉄の道具を当てない自然のままの石の祭壇で

あつて、人々はその上で、主に燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。三二その所で、ヨシユアはまたモーセの書きしるした律法を、イスラエルの人々の前で、石に書き写した。三三こうしてすべてのイスラエルびとは、本国人も、寄留の他国人も、長老、つかさびと、さばきびとと共に、主の契約の箱をかくレビびとである祭司たちの前で、箱のこなたとかなたに分れて、半ばはゲリジム山の前に、半ばはエバル山の前に立つた。これは主のしもべモーセがさきに命じたように、イスラエルの民を祝福するためであつた。三四そして後、ヨシユアはすべての律法の書にのるされてゐる所にしがたつて、祝福と、のろいとに關する律法の言葉をことごとく讀んだ。三五モーセが命じたすべての言葉のうち、ヨシユアがイスラエルの全会衆および女と子どもたちならびにイスラエルのうちに住む寄留の他国人の前で、讀まなかつたものは一つもなかつた。

第九章

一さて、ヨルダンの西側の、山地、平地、およびレバノンまでの大海の沿岸に住むもろもろの王たち、すなわちヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの王たちは、これを聞いて、二心を合わせ、相集まつて、ヨシユアおよびイスラエルと戦おうとした。

ミしかし、ギベオンの住民たちは、ヨシユアがエリコとアイにおこなったことを聞いて、四自分たちも策略をめぐらし、行つて食料品を準備し、古びた袋と、古びて破れたのを繕つたぶどう酒の皮袋とを、ろばに負わせ、五繕つた古ぐつを足にはき、古びた着物を身につけた。彼らの食料のパンは、みなかわいて、砕けていた。六彼らはギルガルの陣營のヨシユアの所にきて、彼とイスラエルの人々に言つた、「われわれは遠い国からまいりました。それで今われわれと契約を結んでください。セしかし、イスラエルの人々はそのヒビびとたちに言つた、「あなたがたはわれわれのうちに住んでいるのかも知れないから、われわれはどうしてあなたがたと契約が結べましょう」。八彼らはヨシユアに言つた、「われわれはあなたのしもべです」。ヨシユアは彼らに言つた、「あなたがたはだれですか。どこからきたのですか」。九彼らはヨシユアに言つた、「しもべどもはあなたの神、主の名のゆえに、ひじように遠い国からまいりました。われわれは主の名声、および主がエジプトで行われたすべての事を聞き、二〇また主がヨルダンの向こう側にいたアモリびとのふたりの王、すなわちヘシボンの王シホン、およびアシタロテにおつたバシヤンの王オグに行われたすべてのことを聞いたからです。ニそれで、われわれの長老たち、および国の住民はみなわれわれに言いました、『おまえたちは旅路の食料を手に携えていつて、彼らに会つて言いなさい、「われわれはあなたがたのしもべで

す。それで今われわれと契約を結んでください』。三ここに
あるこのパンは、あなたがたの所に來るため、われわれが出立
する日に、おのおの家から、まだあたかなのを旅の食料とし
て準備したのですが、今はもうかわいて砕けています。四また
ぶどう酒を満したこれらの皮袋も、新しくつたのですが、破
れました。われわれのこの着物も、くつも、旅路がひじように長
かつたので、古びてしまいました。五そこでイスラエルの
人々は彼らの食料品を共に食べ、主のさしずを求めようとは
しなかつた。六そしてヨシユアは彼らと和を講じ、契約を結ん
で、彼らを生かしておいた。会衆の長老たちは彼らに誓いを立て
た。

二六 契約を結んで三日の後に、彼らはその人々が近くの人々で、
自分たちのうちに住んでいるということを聞いた。二七 イスラ
エルの人々は進んで、三日目にその町々に着いた。その町々と
は、ギベオン、ケピラ、ベエロテおよびキリアテ・ヤリムであつ
た。二八 ところで会衆の長老たちが、すでにイスラエルの神、主を
さして彼らに誓いを立てていたので、イスラエルの人々は彼ら
を殺さなかつた。そこで会衆はみな、長老たちにむかつてつぶや
いた。二九 しかし、長老たちは皆、全会衆に言つた、「われわれは
イスラエルの神、主をさして彼らに誓つた。それゆえ今、彼らに
触れてはならない。三〇 われわれは、こうして彼らを生かしてお
こう。そうすれば、われわれが彼らに立てた誓いのゆえに、怒り

がわれわれに臨むことはないであろう」。三 長たちはまた人々に「彼らを生かしておこう」と言ったので、彼らはずいに、全会衆のために、たきぎを切り、水をくむものとなった。長たちが彼らに言ったとおりである。

三 ヨシュアは彼らを呼び寄せて言った、「あなたがたは、われわれのうちに住みながら、なぜ『われわれはあなたがたからは遠く離れている』と言って、われわれをだましたのか。三 それであなたがたは今のわれ、奴隷となつてわたしの神の家のために、たきぎを切り、水をくむものが、絶えずあなたがたのうちから出るであろう」。二四 彼らはヨシュアに答えて言った、「あなたの神、主がそのしもべモーセに、この地をことごとくあなたがたに与え、この地に住む民をことごとくあなたがたの前から滅ぼし去るようにと、お命じになったことを、しもべどもは明らかに伝え聞きましたので、あなたがたのゆえに、命が危いと、われわれは非常に恐れて、このことをしたのです。二五 われわれは、今、あなたの手のうちにあります。われわれにあなたがして良いと思ひ、正しいと思うことをしてください」。二六 そこでヨシュアは、彼らにそのようにし、彼らをイスラエルの人々の手から救つて殺させなかつた。二七 しかし、ヨシュアは、その日、彼らを、会衆のため、また主の祭壇のため、主が選ばれる場所、たきぎを切り、水をくむ者とした。これは今日までつづいている。

第一〇章

一 エルサレムの王アドニゼデクは、ヨシュアがアイを攻め取つて、それを全く滅ぼし、さきにエリコとその王にしたように、アイとその王にもしたことで、またギベオンの住民が、イスラエルと和を講じて、そのうちにおることを聞き、二 大いに恐れた。それは、ギベオンが大きな町であつて、王の都にもひとしいものであり、またアイより大きくて、そのうちの人々が、すべて強かつたからである。三 それでエルサレムの王アドニゼデクは、ヘブロン、王ホハム、ヤルムテの王ピラム、ラキシの王ヤピア、およびエグロンの王デビルに人をつかわして言った、四 「わたしの所に上つてきて、わたしを助けてください。われわれはギベオンを撃ちましよう。ギベオンはヨシュアおよびイスラエルの人々と和を講じたからです」。五 アモリびとの五人の王、すなわちエルサレムの王、ヘブロン、王、ヤルムテの王、ラキシの王、およびエグロンの王は兵を集め、そのすべての軍勢を率いて上つてきて、ギベオンに向かつて陣を取り、それを攻めて戦つた。

六 ギベオンの人々は、ギルガルの陣営に人をつかわし、ヨシュアに言った、「あなたの手を引かないで、しもべどもを助けてください。早く、われわれの所に上つてきて、われわれを救ひ、助けてください。山地に住むアモリびとの王たちがみな集まつて、

われわれを攻めるからです」。そこでヨシュアはすべてのいきさびと、すべての大勇士を率いて、ギルガルから上つて行つた。ハその時、主はヨシュアに言われた、「彼らを恐れてはならない。わたしが彼らをあなたの手にわたしたからである。彼らのうちには、あなたに当ることのできるものは、ひとりもないであらう」。九ヨシュアは、ギルガルから、よもすがら進みのほつて、にわかには彼らに攻めよせたところ、一〇主は彼らを、イスラエルの前に、恐れあわてさせられたので、イスラエルはギベオンで彼らをおびただしく撃ち殺し、ベテホロンの上り坂をとつて逃げる彼らを、アゼカとマツケダまで追撃した。一一彼らがイスラエルの前から逃げ走つて、ベテホロンの下り坂をおりていた時、主は天から彼らの上に大石を降らし、アゼカにいたるまでもそうされたので、多くの人々が死んだ。イスラエルの人々がつるぎをもつて殺したもののよりも、雹に打たれて死んだもののほうが多かった。

一二主がアモリびとをイスラエルの人々にわたされた日に、ヨシュアはイスラエルの人々の前で主にむかつて言つた、

「日よ、ギベオンの上にとどまれ、

月よ、アヤロンの谷にやすらえ」。

一三民がその敵を撃ち破るまで、

日はとどまり、

月は動かなかつた。

これはヤシャルの書に記されているではないか。日が天の中空にとどまつて、急いで没しなかつたこと、おおよそ一日であつた。一四これより先にも、あとにも、主がこのように人の言葉を聞きいれられた日は一日もなかつた。主がイスラエルのために戦われたからである。

一五こうしてヨシュアはイスラエルのすべての人と共にギルガルの陣営に歸つた。

一六かの五人の王たちは逃げて行つて、マツケダのほら穴に隠れたが、一七五人の王たちがマツケダのほら穴にかくれているのが見つかつたと、ヨシュアに告げる者があつたので、一八ヨシュアは言つた、「ほら穴の口に大石をころがし、そのそばに人を置いて、守らせなさい。一九ただし、あなたがたは、そこにとどまらないで、敵のあとを追ひ、そのしんがりを撃ち、彼らをその町にはいらせてはならない。あなたがたの神、主が彼らをあなたがたの手に渡されたからである」。二〇ヨシュアとイスラエルの人々は、大いに彼らを撃ち殺し、ついに彼らを滅ぼしつくしたが、彼らのうちのがれて生き残つた者どもは、堅固な町々に逃げこんだので、二一民はみな安らかにマツケダの陣営のヨシュアのもとに歸つてきたが、イスラエルの人々にむかつて舌を鳴らす者はひとりもなかつた。

二三その時ヨシュアは言つた、「ほら穴の口を開いて、ほら穴から、かの五人の王たちを、わたしのもとにひき出しなさい」。二三

やがて、そのようにして、かの五人の王たち、すなわち、エルサレムの王、ヘブロン^{おう}の王、ヤルムテ^{おう}の王、ラキシ^{おう}の王、およびエグロン^{おう}の王を、ほら穴から彼のもとにひき出した。二四この王たちをヨシユアのもとにひき出した時、ヨシユアはイスラエルのすべての人々を呼び寄せ、自分と共に行つたいくさびとの長たち^{ちやう}に言った、「近寄つて、この王たちのくびに足をかけなさい」。そこで近寄つて、その王たちのくびに足をかけたので、二五ヨシユアは彼らに言った、「恐れおののいてはならない。強くまた雄々しくあれ。あなたがたが攻めて戦うすべての敵には、主がこのようにされるのである」。二六そして後ヨシユアは彼らを撃つて死なせ、五本の木にかけて、夕暮れまで木の上にさらして置いたが、二七日の入るころになって、ヨシユアが命じたので、これを木からおろし、彼らが隠れていたほら穴に投げ入れ、ほら穴の口に大石を置いた。これは今日まで残っている。

二八その日ヨシユアはマツケダを取り、つるぎをもつて、それと、その王とを撃ち、その中のすべての人を、ことごとく滅ぼして、ひとりも残さず、エリコの王にしたように、マツケダの王にもした。

二九こうしてヨシユアはイスラエルのすべての人を率いて、マツケダからリブナに進み、リブナを攻めて戦った。三〇主が、それと、その王をも、イスラエルの手に渡されたので、つるぎをもつて、それと、その中のすべての人を撃ち滅ぼして、ひとりもその

中に残さず、エリコの王にしたように、その王にもした。

三一ヨシユアはまたイスラエルのすべての人を率いて、リブナからラキシに進み、これに向かつて陣をしき、攻め戦った。三二主がラキシをイスラエルの手に渡されたので、ふつか目にこれを取り、つるぎをもつて、それと、その中のすべての人を撃ち滅ぼした。すべてリブナにしたとおりであつた。

三三その時、ゲゼルの王ホラムが、ラキシを助けるために上つてきたので、ヨシユアは彼と、その民とを撃ち滅ぼして、ついにひとりも残さなかつた。

三四ヨシユアはまたイスラエルのすべての人を率いて、ラキシからエグロンに進み、これに向かつて陣をしき、攻め戦った。三五その日これを取り、つるぎをもつて、これを撃ち、その中のすべての人を、ことごとくその日に滅ぼした。すべてラキシにしたとおりであつた。

三六ヨシユアはまたイスラエルのすべての人を率いて、エグロンからヘブロンに進み上り、これを攻めて戦い、二モそれを取つて、それと、その王、およびそのすべての町々と、その中のすべての人を、つるぎをもつて撃ち滅ぼし、ひとりも残さなかつた。すべてエグロンにしたとおりであつた。すなわち、それとその中のすべての人を、ことごとく滅ぼした。

三八またヨシユアはイスラエルのすべての人を率いて、デビルへひきかえし、これを攻めて戦い、三九それと、その王、およびそ

のすべての町々を取り、つるぎをもつてそれを撃ち、その中のすべての人を、ことごとく滅ぼし、ひとりも残さなかった。彼がデビルと、その王にしたことは、ヘブロンにしたとおりであり、またリブナと、その王にしたとおりであった。

四〇こうしてヨシユアはその地の全部、すなわち、山地、ネゲブ、平地、および山腹の地と、そのすべての王たちを撃ち滅ぼして、ひとりも残さず、すべて息のあるものは、ことごとく滅ぼした。イスラエルの神、主が命じられたとおりであった。四一ヨシユアはカデシ・バルネアからガザまでの国々、およびゴセンの全地を撃ち滅ぼして、ギベオンにまで及んだ。四二イスラエルの神、主がイスラエルのために戦われたので、ヨシユアはこれらすべての王たちと、その地をいちどきに取った。四三そしてヨシユアはイスラエルのすべての人を率いて、ギルガルの陣営に帰った。

第一章

一ハゾルの王ヤビンは、これを聞いて、マドンの王ヨバブ、シムロンの王、およびアクサフの王、ニまた北の山地、キンネロテの南のアラバ、平地、西の方のドルの高地におる王たち、ミすなわち、東西のカナンびと、アモリびと、ヘテびと、ペリジびと、山地のエブスびと、ミツパの地にあるヘルモンのふもとのヒビびとに使者をつかわした。四そして彼らは、そのすべての軍勢を率い

て出てきた。その大軍は浜べの砂のように数多く、馬と戦車も、ひじょうに多かった。五これらの王たちはみな軍を集め、進んできて、共にメロムの水のほとりに陣をしき、イスラエルと戦おうとした。六その時、主はヨシユアに言われた、「彼らのゆえに恐れてはならない。あすの今ごろ、わたしは彼らを皆イスラエルに渡して、ことごとく殺させるであらう。あなたは彼らの馬の足の筋を切り、戦車を火で焼かなければならない」。七そこでヨシユアは、すべてのいくさびとを率いて、にわかにメロムの水のほとりにおし寄せ、彼らを襲った。八主は彼らをイスラエルの手に渡されたので、これを撃ち破り、大シドンおよびミスレポテ・マイムまで、これを追撃し、東の方では、ミツパの谷まで彼らを追い、ついにひとりも残さず撃ちとった。九ヨシユアは主が命じられたとおりに彼らに行い、彼らの馬の足の筋を切り、戦車を火で焼いた。

一〇その時、ヨシユアはひきかえして、ハゾルを取り、つるぎをもつて、その王を撃った。ハゾルは昔、これらすべての国々の盟主であったからである。一一彼らはつるぎをもつて、その中のすべての人を撃ち、ことごとくそれを滅ぼし、息のあるものは、ひとりも残さなかった。そして火をもつてハゾルを焼いた。一二ヨシユアはこれらの王たちのすべての町々、およびその諸王を取り、つるぎをもつて、これを撃ち、ことごとく滅ぼした。主のしもべモーセが命じたとおりであった。一三ただし、丘の上に

立つてゐる町々をイスラエルは焼かなかつた。ヨシユアはただハザルだけを焼いた。一四これらの町のすべてのぶんどり物と家畜とは、イスラエルの人々が戦利品として取つたが、人はみなつるぎをもつて、滅ぼし尽し、息のあるものは、ひとりも残さなかつた。一五主がそのしもべモーセに命じられたように、モーセはヨシユアに命じたが、ヨシユアはそのとおりにおこなつた。すべて主がモーセに命じられたことで、ヨシユアが行わなかつたことは一つもなかつた。

一六こうしてヨシユアはその全地、すなわち、山地、ネゲブの全地、ゴセンの全地、平地、アラバならびにイスラエルの山地と平地を取り、一七セイルへ上つて行く道のハラク山から、ヘルモン山のふもととのレバノンの谷にあるバアルガデまでを獲た。そしてこれらの王たちを、ことごとく捕えて、撃ち殺した。一八ヨシユアはこれらすべての王たちと、長いあいだ戦つた。一九ギベオンの住民ヒビびとのほかに、イスラエルの人々と和を講じた町は一つもなかつた。町々はみな戦争をして、攻め取つたものであつた。二〇彼らが心をかたくなにして、イスラエルに攻めよせたのは、もともと主がそうさせられたので、彼らがのろわれた者となり、あわれみを受けず、ことごとく滅ぼされるためであつた。主がモーセに命じられたとおりである。

二三その時、ヨシユアはまた行つて、山地、ヘブロン、デビル、アナブ、ユダのすべての山地、イスラエルのすべての山地から、ア

ナクびとを断ち、彼らの町々をも共に滅ぼした。二三それでイスラエルの人々の地に、アナクびとは、ひとりもいなくなつた。ただガサ、ガテ、アシドドには、少し残つていただけであつた。二四こうしてヨシユアはその地を、ことごとく取つた。すべて主がモーセに告げられたとおりである。そしてヨシユアはイスラエルの部族にそれぞれの分を与えて、嗣業とさせた。こうしてその地に戦争はやんだ。

第二章

一さてヨルダンの向こう側、日の出の方で、アルノンの谷からヘルモン山まで、および東アラバの全土のうちで、イスラエルの人々が撃ち滅ぼして地を取つた国の王たちは、次のとおりである。二まず、アモリびとの王シホン。彼はヘシボンに住み、その領地は、アルノンの谷のほとりにあるアロエル、および谷の中の町から、ギレアデの半ばを占めて、アンモンびととの境であるヤボク川に達し、三東の方ではアラバをキンネレテの湖まで占め、またアラバの海すなわち塩の海の東におよび、ベテエシモテの道を経て、南はピスガの山のふもとに達した。四次にレバイムの生き残りのひとりであつたバシヤンの王オグ。彼はアシタロテとエデレイとに住み、五ヘルモン山、サレカ、およびバシヤンの全土を領したので、ゲシュルびと、およびマアカびとと境を接

し、またギレアドの半ばを領したので、ヘシボンの王シホンと境を接していた。六主のしもベモーセと、イスラエルの人々とは、彼らを撃ち滅ぼし、そして主のしもベモーセは、これらの地を、ルベンびと、ガドびと、およびマナセの半部族に与えて所有とさせた。

セヨルダンのこちら側、西の方にあって、レバノンの谷にあるバアルガデから、セイルへ上って行く道のハラク山までの間で、ヨシユアと、イスラエルの人々とは、撃ち滅ぼした国の王たちは、次のとおりである。ヨシユアは彼らの地をイスラエルの部族に、それぞれの分を与えて嗣業とさせた。ハこれは、山地、平地、アラバ、山腹、荒野、およびネゲブであつて、ヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの所領であつた。九エリコの王ひとり。ベテルのほとりのアイの王ひとり。一〇エルサレムの王ひとり。ヘブロン王ひとり。一ニヤルムテの王ひとり。ラキシの王ひとり。ニエグロンの王ひとり。ゲゼルの王ひとり。ニデビルの王ひとり。ゲデルの王ひとり。一四ホルマの王ひとり。アラデの王ひとり。一五リブナの王ひとり。アドラムの王ひとり。一六マツケダの王ひとり。ベテルの王ひとり。一七タツプアの王ひとり。ヘベルの王ひとり。一八アペクの王ひとり。シャロンの王ひとり。一九マドンの王ひとり。ハズルの王ひとり。二〇シムロン・メロンの王ひとり。アクサフの王ひとり。二一タアナクの王ひとり。メギドの王ひとり。

り。ニケデシの王ひとり。カルメルヨクネアムの王ひとり。ニミドルの高地におるドルの王ひとり。ガリラヤのゴイイムの王ひとり。二四テルザの王ひとり。合わせて三十一王である。

第二三章

一 さてヨシユアは年が進んで老いたが、主は彼に言われた、「あなたは年が進んで老いたが、取るべき地は、なお多く残っている。二 その残っている地は、次のとおりである。ペリシテびとの全地域、ゲシュルびとの全土、三 エジプトの東のシホルから北にのびて、カナンびとに属するといわれるエクロンの境までの地、ペリシテびとの五人の君たちの地、すなわち、ガザ、アシッド、アシケロン、ガテ、およびエクロン。四 南のアビびとの地、カナンびとの全地、シドンびとに属するメアラからアモリびとの境にあるアペクまでの部分。五 またヘルモン山のふもととのバアルガデからハマテの入口に至るゲバルびとの地、およびレバノンの東の全土。六 レバノンからミスレポテ・マイムまでの山地のすべての民、すなわちシドンびとの全土。わたしはみずから彼らをイスラエルの人々の前から追い払うであらう。わたしが命じたように、あなたはその地をイスラエルに分け与えて、嗣業とさせなければならない。七 すなわち、その地を九つの部族と、マナセの半部族とに分け与えて、嗣業とさせなければならない。」

ハマナセの他の半部族と共に、ルベンびとと、ガドびとは、ヨルダンの向こう側、東の方で、その嗣業をモーセから受けた。主のしもべモーセが、彼らに与えたのは、ユアルノンの谷のほとりにあるアロエル、および谷の中にある町から、デボンとメデバの間にある高原のすべての地。二〇ヘシボンで世を治めた、アモリびとの王シホンのすべての町々を含めて、アンモンの人々の境までの地。二ギレアデと、ゲシュルびと、ならびにマアカびとの領地、ヘルモン山の全土、サルカまでのバシヤン全体。二アシタロテとエデレイで世を治めたバシヤンの王オグの全国。オグはレバイムの生き残りであつた。モーセはこれらを撃つて、追い払つた。二三ただし、イスラエルの人々は、ゲシュルびとと、マアカびとを追い払わなかつた。ゲシュルびとと、マアカびとは、今日までイスラエルのうちに住んでいる。

二四ただレビの部族には、ヨシユアはなんの嗣業をも与えなかつた。イスラエルの神、主の火祭が彼らの嗣業であるからである。主がヨシユアに言われたとおりである。

二五モーセはルベンびとの部族に、その家族にしたがつて嗣業を与えたが、二六その領域はアルノンの谷のほとりにあるアロエル、および谷の中にある町からメデバのほとりのすべての高原、二モヘシボンおよびその高原のすべての町々、デボン、バモテ・バアル、ベテ・バアル・メオン、二ハヤハヅ、ケデモテ、メバアテ、二ルキリアタイム、シブマ、谷の中の山にあるゼレテ・

シヤハル、二〇ベテペオル、ピスガの山腹、ベテエシモテ、二すなわち高原のすべての町々と、ヘシボンで世を治めたアモリびとの王シホンの全国に及んだ。モーセはシホンを、ミデアンのつかさたちエビ、レケム、ツル、ホルおよびレバと共に撃ち殺した。これらはみなシホンの諸侯であつて、その地に住んでいた者である。二イスラエルの人々はまたベオルの子、占い師バラムをもつるぎにかけて、そのほかに殺した者どもと共に殺した。二ミルベンびとの領域はヨルダンを境とした。これはルベンびとが、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と村々を含む。

二四モーセはまたガドの部族、ガドの子孫にも、その家族にしたがつて、嗣業を与えたが、二五その領域はヤゼル、ギレアデのすべての町々、アンモンびとの地の半ばで、ラバの東のアロエルまでの地。二六ヘシボンからラマテ・ミゾバまでの地、およびベトニム、マハナイムからデビルの境までの地。二モ谷の中ではベテハラム、ベテニムラ、スコテ、およびザポンなど、ヘシボンの王シホンの国の残りの部分。ヨルダンを境として、ヨルダンの東側、キンネレテの湖の南の端までの地。二八これはガドびとが、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と村々を含む。

二九モーセはまたマナセの半部族にも、嗣業を与えたが、それはマナセの半部族が、その家族にしたがつて与えられたものであ

る。三〇その領域はマハナイムからバシヤンの全土に及び、バシヤンの王オグの全国、バシヤンにあるヤイルのすべての町々、すなわちその六十の町。三一またギレアデの半ば、バシヤンのオグの国の町であるアシタロテとエデレイ。これらはマナセの子マキルの子孫に与えられた。すなわちマキルの子孫の半ばが、その家族にしたがつて、それを獲た。

三二これらはヨルダンの向こう側、エリコの東のモアブの平野で、モーセが分け与えた嗣業である。三三ただし、レビの部族には、モーセはなんの嗣業をも与えなかった。イスラエルの神、主がその嗣業だからである。主がモーセに言われたとおりである。

第十四章

イスラエルの人々が、カナンの地で受けた嗣業の地は、次のとおりである。すなわち、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシュア、およびイスラエルの人々の部族の首長たちが、これを彼らに分かち、ニ主がモーセによって命じられたように、くじによって、これを九つの部族と、半ばの部族とに、嗣業として与えた。三これはヨルダンの向こう側で、モーセがすでに他の二つの部族と、半ばの部族とに、嗣業を与えていたからである。ただしレビびとには、彼らの中で嗣業を与えず、四ヨセフの子孫が、マナセと、

エフライムの二つの部族となったからである。レビびとには土地の分け前を与えず、ただ、その住むべき町々および、家畜と持ち物とを置くための放牧地を与えたばかりであった。五イスラエルの人々は、主がモーセに命じられたようにおこなつて、その地を分けた。

六時に、ユダの人々がギルガルのヨシユアの所にきて、ケニズびとエフンネの子カレブが、ヨシユアに言った、「主がカデシ・バルネアで、あなたとわたしについて、神の人モーセに言われたことを、あなたはごぞんじです。七主のしもべモーセが、この地を探るために、わたしをカデシ・バルネアからつかわした時、わたしは四十歳でした。そしてわたしは、自分の信ずるところを復命しました。ハしかし、共に上つて行つた兄弟たちは、民の心をくじいてしまいました。わたしは全くわが神、主に従いました。九その日モーセは誓つて、言いました、『おまえの足で踏んだ地は、かならず長くおまえと子孫との嗣業となるであろう。おまえが全くわが神、主に従つたからである』。一〇主がこの言葉をモーセに語られた時からこのかた、イスラエルが荒野に歩んだ四十五年の間、主は言われたように、わたしを生きながらえさせてくださいました。わたしは今日すでに八十五歳ですが、二今もなお、モーセがわたしをつかわした日のように、健やかです。わたしの今の力は、あの時の力に劣らず、どんな働きにも、戦いにも堪えることができます。二三それで主があの日語られ

たこの山地を、どうか今、わたしにください。あの日あなたも聞いたように、そこにはアナキびとがいて、その町々は大きく堅固です。しかし、主がわたしと共におられて、わたしはついには、主が言われたように、彼らを追い払うことができるでしょう」。

二三そこでヨシユアはエフソネの子カレブを祝福し、ヘブロンを彼に与えて嗣業とさせた。一四こうしてヘブロンは、ケニズびとエフソネの子カレブの嗣業となつて、今日に至つてゐる。彼が全くイスラエルの神、主に従つたからである。一五ヘブロンの名は、もとはキリアテ・アルバといった。アルバは、アナキびとのうちの、最も大いなる人であつた。こうしてこの地に戦争はやんだ。

第一章

一ユダの人々の部族が、その家族にしたがつて、くじで獲た地は、南の方では、エドムの境に達し、南のはてにあるチンの荒野に及んでゐた。二その南の境は、塩の海の南の端の、入海から起り、ミアクラビムの坂の南に出てチンに進み、カデシ・バルネアの南から上つて、ヘツロンに進み、アダルに上つていつて、カルカに回り、四アツモンに進んで、エジプトの川に達し、その境は海に至つて尽きる。これが彼らの南の境である。五東の境は塩の海であつて、ヨルダンの川口に達する。北の方の境は、ヨルダ

ンの川口の、入海から起り、六上つてベテホグラに行き、ベテアラバの北を過ぎ、上つてルベンびとボハンの石に達し、七またアコルの谷からデビルに上つて、北におもむき、川の南にあるアドミムの坂に對するギルガルに向かつて進み、エンシメシの水に達し、エンロゲルに至つて尽きる。八またその境はベンヒンノムの谷に沿つて、エブスびとの地、すなわちエルサレムの南のわきの谷に上り、ヒンノムの谷の西にある山の頂に上る。これはレバイムの谷の北の果にあるものである。九その境は、この山の頂からネフトアの水の源に至り、その所からエフロン山の町々に及び、その境は曲つてバアラに達する。これは、すなわちキリアテ・ヤリムである。一〇その境は、バアラから西に回つて、セイル山に及び、ヤリム山、すなわちケサロンの北のわきを経て、ベテシメシに下り、テムナに進み、二エクロンの北の丘のわきに出て、シツケロンに曲り、バアラ山に進み、ヤブネルに達し、海に至つて尽きる。三また西の境は大海であつて、海岸を境とした。これがユダの人々の、その家族にしたがつて獲た地の四方の境である。

二三ヨシユアは、主に命じられたように、エフソネの子カレブに、ユダの人々のうちで、キリアテ・アルバ、すなわちヘブロンを与えて、その分とさせた。アルバはアナクの父であつた。一四カレブはその所から、アナクの子三人を追い払つた。すなわち、セシヤイ、アヒマン、およびタルマイであつて、アナクから出たも

のである。一五そして彼はこの所からデビルに住む民の所に攻め上った。デビルの名は、もとはキリアテ・セベルといった。一六カレブは言った、「キリアテ・セベルを撃つて、これを取る者には、わたしの娘アクサを妻として与えるであろう」。一七ケナズの子で、カレブの弟オテニエルがそれを取ったので、カレブは娘アクサを、妻として彼に与えた。一八彼女がとつぐ時、烟を父に求めるようにと、オテニエルに勧められた。そして彼女が、ろばから降りたので、カレブは彼女に、何を望むのかとたずねた。一九彼女は答えて言った、「わたしに贈り物をください。あなたにはネゲブの地に、わたしをやられるのですから、泉をもください」。カレブは彼女に上の泉と下の泉とを与えた。

二〇ユダの人々の部族が、その家族にしたがつて獲た嗣業は、次のとおりである。二一ユダの人々の部族が、南でエドムの境の方にもつていた遠くの町々は、カブジエル、エデル、ヤグル、ミキナ、デモナ、アダダ、ミケデシ、ハゾル、イテナン、ニ四ジフ、テレム、ベアロテ、ニ五ハゾル・ハダツタ、ケリオテ・ヘツロンすなわちハゾル、ニ六アмам、シマ、モラダ、ニモハザルガダ、ヘシモン、ベテペレテ、ニ八ハザル・シユアル、ベエルシバ、ビジョテヤ、ニ九バアラ、イイム、エゼム、三〇エルトラデ、ケシル、ホルマ、ミチクラグ、マデマンナ、サンサンナ、ミレバオテ、シルヒム、アイン、リンモン。これらの町は合わせて二十九、ならびにそれに属する村々。

三三平地では、エシタオル、ゾラ、アシナ、三四ザノア、エンガンニム、タツプア、エナム、三五ヤルムテ、アドラム、ソコ、アゼカ、三六シヤアライム、アダタイム、ゲデラ、ゲデロタイム。すなわち十四の町々と、それに属する村々。

三七ゼナン、ハダシャ、ミグダルガデ、三八デラン、ミツパ、ヨクテル、三九ラキシ、ボツカテ、エグロン、四〇カボン、ラマム、キテリシ、四一ゲデロテ、ベテダゴン、ナアマ、マツケダ。すなわち十六の町々と、それに属する村々。

四二またリブナ、エテル、アシヤン、四三イフタ、アシナ、ネジブ、四四ケイラ、アクジブ、マレシヤ。すなわち九つの町々と、それに属する村々。

四五エクロンと、その町々、および村々。四六エクロンから海まで、すべてアシドドのほりにある町々、およびそれに属する村々。

四七アシドドとその町々および村々。ガザとその町々および村々。エジプトの川と大海の海岸までが、その境であつた。

四八山地では、シヤミル、ヤツテル、ソコ、四九ダンナ、キリアテ・サンナすなわちデビル、五〇アナブ、エシテモ、アニム、五一ゴセン、ホロン、ギロ。すなわち十一の町々と、それに属する村々。五二アラブ、ドマ、エシヤン、五三ヤニム、ベテタツプア、アペカ、五四ホムタ、キリアテ・アルバすなわちヘブロン、デオル。すなわち九つの町々と、それに属する村々。

五 マオン、カルメル、ジフ、ユツタ、五六 エズレル、ヨクデアム、ザノア、五七 カイン、ギベア、テムナ。すなわち十の町々と、それに属する村々。

五八 ハルホル、ベテズル、ゲドル、五九 マアラテ、ベテアノテ、エルテコン。すなわち六つの町々と、それに属する村々。

六〇 キリアテ・バアルすなわちキリアテ・ヤリム、ラバ。これらの二つの町とそれに属する村々。

六一 荒野では、ベテアラバ、ミデン、セカカ、六二 ニブシヤン、塩の町、エンゲデ。すなわち六つの町々と、それに属する村々。

六三 しかし、ユダの人々は、エルサレムの住民エブスびとを追ひ払うことができなかった。それでエブスびとは今日まで、ユダの人々と共にエルサレムに住んでいる。

第一六章

一 ヨセフの子孫が、くじによつて獲た地の境は、エリコのとりのヨルダン、すなわちエリコの水の東から起つて、荒野に延び、エリコから山地に上っている荒野を経て、ベテルに至り、ニベテルからルズにおもむき、アルキびとの領地であるアタロテに進み、三 西に下つてヤフレテびとの領地に達し、下ベテホロンの地域に及び、ゲゼルに達し、海に至つて尽きる。

四 こうしてヨセフの子孫のマナセと、エフライムとは、その嗣業

を受けた。

五 エフライムの子孫が、その家族にしたがつて獲た地の境は、次のとおりである。彼らの嗣業の東の境は、アタロテ・アダルであつて、上ベテホロンに達し、六 その境は、その所から海に及び、北にはミクメタテがあり、東ではその境はタアナテシロで曲り、進んでヤノアの東に至り、セヤノアからアタロテとナアラにくだり、エリコに達し、ヨルダンに至つて尽きる。ハタツプアからその境は西に進んで、カナの川に達し、海に至つて尽きる。これはエフライムの子孫の部族が、その家族にしたがつて獲た嗣業である。九 このほかにマナセの子孫の嗣業のうちにも、エフライムの子孫のために分け与えられた町々があつて、そのすべての町々と、それに属する村々を獲た。一〇 ただし、ゲゼルに住むカナンびとを、追ひ払わなかつたので、カナンびとは今日までエフライムの中に住み、奴隸となつて追ひ使われている。

第一七章

一 マナセの部族が、くじによつて獲た地は、次のとおりである。マナセはヨセフの長子であつた。マナセの長子で、ギレアデの父であるマキルは、軍人であつたので、ギレアデとバシヤンを獲た。ニマナセの部族の他のものにも、その家族にしたがつて、地を与えたが、それは、アビエゼル、ヘレク、アスリエル、シケム、

ヘベル、セミダで、これらはヨセフの子マナセの男の子孫であつて、その家族にしたがつて、あげたものである。

ミしかし、マナセの子マキル、その子ギレアデ、その子ヘベル、その子であつたゼロペハデには、女の子だけで、男の子がなかった。女の子たちの名は、マヘラ、ノア、ホグラ、ミルカ、テルザといった。四彼女たちは、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシユアおよび、つかさたちの前に進み出て、「わたしたちの兄弟と同じように、わたしたちにも、嗣業を与えよと、主はモーセに命じおきになりました」と言つたので、ヨシユアは主の命にしたがつて、彼らの父の兄弟たちと同じように、彼女たちにも嗣業を与えた。五こうしてマナセはヨルダンの向こう側で、ギレアデとバシヤンの地のほかに、なお十の部分を獲得。ホマナセの娘たちが、男の子らと共に、嗣業を獲得したからである。ギレアデの地は、そのほかのマナセの子孫に分け与えられた。セマナセの獲た地の境は、アセルからシケムの東のミクメタデに及び、その境は南に延びて、エンタツプアの住民に達する。ハタツプアの地はマナセに属していたが、マナセの境にあるタツプアの町は、エフライムの子孫に属していた。九またその境はカナの川に下つて、川の南に至る。その町々はマナセの町々の中にあつて、エフライムに属した。マナセの境は、川の北に沿つて進み、海に達して尽きる。一〇その川の南の地は、エフライムに属し、北はマナセに属する。海がその境となる。マナセは北

はアセルに接し、東はイツサカルに接する。二マナセはまたイツサカルとアセルの中に、ベテシヤンとその村々、イブレラムとその村々、ドルの住民とその村々、エンドルの住民とその村々、タアナクの住民とその村々、メギドの住民とその村々を獲得。このうち第三のものは高地である。ミしかし、マナセの子孫は、これらの町々を取ることができなかった。三しかし、イスラエルとは長くこの地に住み続けようとした。ミしかし、イスラエルの人々が強くなるにしたがつて、カナンびとを役するようになり、ことごとく追い払うことはしなかった。

四ヨセフの子孫はヨシユアに言つた、「主が今まで、わたしを祝福されたので、わたしは数の多い民となつたのに、あなたはなぜ、わたしの嗣業として、ただ一つのくじ、一つの分だけを、くださつたのですか」。五ヨシユアは彼らに言つた、「もしあなたが数の多い民ならば、林に上つていつて、そこで、ペリジびとやレバイムびとの地を自分で切り開くがよい。エフライムの山地が、あなたがたには狭いのだから」。六ヨセフの子孫は答へた、「山地はわたしどもに十分ではありません。かつまた平地におけるカナンびとは、ベテシヤンとその村々におけるものも、エズレルの谷におけるものも、みな鉄の戦車を持っています」。七ヨシユアはまたヨセフの家、すなわちエフライムとマナセに言つた、「あなたは数の多い民で、大きな力をもっています。それでただ一つのくじでは足りません。一八山地をもあなたのも

のとしなければなりません。それは林ではあるが、切り開いて、向こうの端まで、自分のものとしなければなりません。カナンびとは鉄の戦車があつて、強くはあるが、あなたはそれを追い払うことができます」。

第一章

－そこでイスラエルの人々の全会衆は、その地を征服したので、シロに集まり、そこに会見の幕屋を立てた。

ニその時、イスラエルの人々のうちに、まだ嗣業を分かち取らない部族が、七つ残っていたので、ヨシユアはイスラエルの人々に言った、「あなたがたは、先祖の神、主が、あなたがたに与えられた地を取りに行くのを、いつまで怠っているのですか。四部族ごとに三人ずつを出しなさい。わたしはその人々をつかわしませう。彼らは立つていつて、その地を行き巡り、おのの嗣業のために、それを図面にして、わたしのところへ持つてこなければならぬ。五彼らはその地を七つの部分に分けなければならぬ。ユダは南のその領地にとどまり、ヨセフの家は北のその領地にとどまらなければならぬ。六あなたがたは、その地を七つに分けて、図面にし、それをここに、わたしのところへ持つてこなければならぬ。わたしはここで、われわれの神、主の前に、あなたがたのために、くじを引くであろう。セレビ

とは、あなたがたのうちに何の分をも持たない。主の祭司たることが、彼らの嗣業だからである。またガドとルベンとマナセの半部族とは、ヨルダンの向こう側、東の方で、すでにその嗣業を受けた。それは主のしもべモーセが、彼らに与えたものである」。

ハそこでその人々は立つて行つた。その地の図面を作るために出て行く人々に、ヨシユアは命じて言つた、「あなたがたは行つて、その地を行き巡り、それを図面にして、わたしのところに持つて帰りなさい。わたしはシロで、主の前に、あなたがたのために、ここでくじを引きましょう」。九こうしてその人々は行つて、その地を経めぐり、町々にしたがつて、それを七つの部分とし、図面にして、書物に書きしるし、シロの宿営におけるヨシユアのもとへ持つてきた。一〇ヨシユアはシロで、彼らのために主の前に、くじを引いた。そしてヨシユアはその所で、イスラエルの人々に、それぞれの分として、地を分け与えた。

ニまずベニヤミンの子孫の部族のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。そしてそのくじによつて獲た領地は、ユダの子孫と、ヨセフの子孫との間にあつた。ニすなわち、その北の方の境は、ヨルダンに始まり、エリコの北のわきに上り、また西の方の山地をとつて上り、ベテアベンの荒野に達して尽きる。ニそこから、その境はルズに進み、ルズの南のわきに至る。ルズはバテルである。ついでその境は下ベテホロンの南の山にあ

るアタロテ・アダルに下り、二四西の方では、ベテホロンの南にある山から南に曲り、ユダの子孫の町キリアテ・バアルに至つて尽きる。キリアテ・バアルはキリアテ・ヤリムである。これが西の方の境であつた。一五また南の方は、キリアテ・ヤリムの端に始まり、その境はそこからエフロンにおもむき、ネフトアの水の源に至り、一六ついでその境は、レバイムの谷の北の端にあるベシンの谷を見おろす山の端に下り、進んでエブスびとのわきの南、ヒンノムの谷に下り、また下つてエンロゲルに至り、一七北に曲つてエンシメシにおもむき、アドミムの坂に對するゲリロテにおもむき、ルベンびとボハンの石に下り、一八ベテアラバのわきを北に進んで、アラバに下り、一九その境は、ベテホグラの北のわきに進み、ヨルダンの南端で、塩の海の北の入海に至つて尽きる。これが南の境である。二〇ヨルダンは東の方の境となつてゐた。これがベニヤミンの子孫の、その家族にしたがつて獲た嗣業の四方の境である。

ニベニヤミンの子孫の部族が、その家族にしたがつて獲た町々は、エリコ、ベテホグラ、エメクケジツ、ミベテアラバ、ゼマライム、ベテル、ミニアビム、パラ、オフラ、二四ケバル・アンモニ、オフニ、ゲバ。すなわち十二の町々と、それに属する村々。二五またギベオン、ラマ、ベエロテ、ニミツパ、ケピラ、モザ、ミレケム、イルピエル、タララ、ニハゼラ、エレフ、エブスすなわちエルサレム、ギベア、キリアテ・ヤリム。すなわち十四の

町々と、それに属する村々。これがベニヤミンの子孫の、その家族にしたがつて獲た嗣業である。

第十九章

一次にシメオンのため、すなわちシメオンの子孫の部族のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。その嗣業はユダの子孫の嗣業のうちにあつた。二その嗣業として獲たものは、ベエルシバ、すなわちシバ、モラダ、ミハザル・シユアル、バラ、エゼム、四エルトラデ、ベトル、ホルマ、五チクラグ、ベテ・マルカボテ、ハザルスサ、六ベテレバオテ、シャルヘン。すなわち十三の町々と、それに属する村々。七またアイン、リンモン、エテル、アシャン。すなわち四つの町々と、それに属する村々。八およびこれらの町の周囲にあつて、バアラテ・ベエル、すなわちネゲブのラマに至るまでのすべての村々。これがシメオンの子孫の部族の、その家族にしたがつて獲た嗣業である。九シメオンの子孫の嗣業は、ユダの子孫の領域のうちにあつた。これはユダの子孫の分が大きかつたので、シメオンの子孫が、その嗣業を彼らの嗣業の中に獲たからである。

一〇第三にゼブルンの子孫のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。その嗣業の領域はサリデに及び、一一その境は西に上つて、マララに至り、ダバセテに達し、ヨクネアムの東にあ

る川に達し、ニサリデから、東の方、日の出の方に曲り、キスロテ・タボルの境に至り、ダベラテに出て、ヤピアに上り、ニミそこから東の方、日の出の方に進んで、ガテヘベルとイッタ・カジンに至り、リンモンに進んで、ネアの方に曲る。一四北ではその境はハンナトンに回り、イフタエル谷に至って尽きる。一五そしてカツタテ、ナハラル、シムロン、イダラ、ベツレヘムなど十二の町々と、それに属する村々があつた。一六これがゼブルンの子孫の、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と、それに属する村々である。

一七第四にイツサカル、すなわちイツサカルの子孫のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。一八その領域には、エズレル、ケスロテ、シユネム、一八ハパライム、シオン、アナハラテ、二〇ラビテ、キシヨン、エベツ、ニレメテ、エンガンニム、エンハダ、ベテパツゼズがあり、三その境はタボル、シャハヂマ、ベテシメシに達し、その境はヨルダンに至って尽きる。十六の町々と、それに属する村々があつた。二二これがイツサカルの子孫の部族の、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と、それに属する村々である。

二四第五に、アセルの子孫の部族のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。二五その領域には、ヘルカテ、ハリ、ベテン、アクサフ、二六アランメレク、アマデ、ミシャルがあり、その境は西では、カルメルとシホル・リブナテに達し、二七それから東

に折れて、ベテダゴンに至り、北の方ゼブルンと、イプタエルの谷に達し、ベテエメクおよびネイエルに至り、北はカブルにいで、二八更にエブロン、レホブ、ハンモン、カナを経て、大シドンに及び、二九それから、その境はラマに曲り、堅固な町ツロに至る。またその境はホサに曲り、海に至って尽きる。そして、マハラブ、アクジブ、三〇ウンマ、アベク、レホブなど、二十二の町々と、それに属する村々があつた。三三これがアセルの子孫の部族の、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と、それに属する村々である。

三三第六に、ナフタリの子孫のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。三三その境はヘレフから、すなわちザアナニイムのかしの木から起り、アダミ・ネケブおよび、ヤブネルを経て、ラクムに至り、ヨルダンに至って尽きる。三四そしてその境は西に向かつて、アズノテ・タボルに至り、そこからホツコクに出る。南はゼブルンに接し、西はアセルに接し、東はヨルダンのユダに達する。三五その堅固な町々は、ヂデム、ゼル、ハンマテ、ラツカテ、キンネレテ、三六アダマ、ラマ、ハゾル、モケデシ、エデレイ、エンハゾル、三八イロン、ミグダルエル、ホレム、ベテアナテ、ベテシメシなどで、十九の町々と、それに属する村々があつた。三九これがナフタリの子孫の部族が、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と、それに属する村々である。

四〇第七に、ダンの子孫の部族のために、その家族にしたがつて、くじを引いた。四二その嗣業の領域には、ゾラ、エシタオル、イルシメシ、四三シヤラビム、アヤロン、イテラ、四四エロン、テムナ、エクロン、四五エルテケ、ギベトン、バアラテ、四六エホデ、ベネブラク、ガテリンモン、四七メヤルコン、ラツコン、およびヨツパと相對する地域があつた。四八ただし、ダンの子孫の領域は、彼らのために小さかつたので、ダンの子孫は、上つて行き、レセムを攻めてそれを取り、つるぎにかけて撃ち滅ぼし、それを獲てそこに住み、先祖ダンの名にしたがつて、レセムをダンと名づけた。四九これがダンの子孫の部族の、その家族にしたがつて獲た嗣業であつて、その町々と、それに属する村々とである。

五〇こうして国の各地域を嗣業として分け与えることを終つたとき、イスラエルの人々は、自分たちのうちに、一つの嗣業を、ヌンの子ヨシユアに与えた。五〇すなわち、主の命に従つて、彼が求めた町を与えたが、それはエフライムの山地にあるテムナテ・セラであつて、彼はその町を建てなおして、そこに住んだ。

五一これらは、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシユア、およびイスラエルの子孫の部族の族長たちが、シロにおいて会見の幕屋の入口で、主の前に、くじを引いて分け与えた嗣業である。こうして地を分けることを終つた。

第二〇章

一そこで主はヨシユアに言われた、ニ「イスラエルの人々に言いなさい、『先にわたしがモーセによつて言つておいた、のがれの町を選び定め、三あやまつて、知らずに人を殺した者を、そこへのがれさせなさい。これはあなたがたが、あだを討つ者をさけて、のがれる場所となるでしょう。四その人は、これらの町の一つにのがれて行つて、町の門の入口に立ち、その町の長老たちに、そのわけを述べなければならぬ。そうすれば、彼らはその人を町に受け入れて、場所を与え、共に住ませるであらう。五たとい、あだを討つ者が追つてきても、人を殺したその者を、その手に渡してはならない。彼はあやまつて隣人を殺したのであつて、もとからそれを憎んでいたのでないからである。六その人は、会衆の前に立つて、さばきを受けるまで、あるいはその時の大祭司が死ぬまで、その町に住まなければならない。そして後、彼は自分の町、自分の家に歸つて行つて、逃げ出してきたその町に住むことができる』」。

七そこで、ナフタリの山地にあるガリラヤのケデシ、エフライムの山地にあるシケム、およびユダの山地にあるキリアテ・アルバすなわちヘブロンを、これがために選ぶんかち、八またヨルダンの向こう側、エリコの東の方では、ルベンの部族のうちから、高原の荒野にあるベゼル、ガドの部族のうちから、ギレアデのラ

モテ、マナセの部族のうちから、バシヤンのゴランを選び定めた。九これらは、イスラエルのすべての人々、およびそのうちに寄留する他国人のために設けられた町々であつて、すべて、あやまつて人を殺した者を、そこにのがれさせ、会衆の前に立たないうちに、あだを討つ者の手にかかつて死ぬことのないようにするためである。

第二章

一時にレビの族長たちは、祭司エレアザル、ヌンの子ヨシュアおよびイスラエルの部族の族長たちのもとにきて、ニカナの地のシロで彼らに言った、「主はかつて、われわれに住むべき町々を与えることと、それに属する放牧地を、家畜のために与えることを、モーセによって命じられました」。ミそれでイスラエルの人々は、主の命にしたがつて、自分たちの嗣業のうちから、次の町々と、その放牧地とを、レビびとに与えた。

四まずコハテびとの氏族のために、くじを引いた。祭司アロンの子孫であるこれらのレビびとは、くじによつて、ユダの部族、シメオンの部族、およびベニヤミンの部族のうちから、十三の町を獲た。

五その他のコハテびとは、くじによつて、エフライムの部族の氏族、ダンの部族、およびマナセの半部族のうちから、十の町を

獲た。

六またゲルシヨンびとは、くじによつて、イツサカルの部族の氏族、アセルの部族、ナフタリの部族、およびバシヤンにあるマナセの半部族のうちから、十三の町を獲た。

七またメラリびとは、その氏族にしたがつて、ルベンの部族、ガドの部族、およびゼブルンの部族のうちから、十二の町を獲た。ハイスラエルの人々は、主がモーセによつて命じられたとおり、これらの町と、その放牧地とを、くじによつて、レビびとに与えた。

九まずユダの部族と、シメオンの部族のうちから、次に名をあげる町々を与えた。一〇これらはレビびとに属するコハテびとの氏族の一つである、アロンの子孫に与えられた。最初のくじが彼らに当つたからである。一すなわちユダの山地にあるキリアテ・アルバすなわちヘブロンおよびその周囲の放牧地を彼らに与えた。このアルバはアナクの父であつた。二ただし、この町の畑と、それに属する村々とは、すでにエフンネの子カレブが、それを受けて所有していた。

三祭司アロンの子孫に与えたのは、人を殺した者の、のがれる町であるヘブロンとその放牧地、リブナとその放牧地、一四ヤツテルとその放牧地、エシテモアとその放牧地、一五ホロンとその放牧地、デビルとその放牧地、一六アインとその放牧地、ユツタとその放牧地、ベテシメシとその放牧地など、九つの町であつ

て、この二つの部族のうちから分け与えたものである。一七またベニヤミンの部族のうちから、ギベオンとその放牧地、ゲバとその放牧地、ハアナトテとその放牧地、アルモンとその放牧地など、四つの町を与えた。一八アロンの子孫である祭司たちの町は、合わせて十三であつて、それに属する放牧地があつた。

二〇その他のコハテびとであるレビびとの氏族は、くじによつて、エフライムの部族のうちから町を獲た。二一すなわち、その町は、人を殺したものの、のがれる町であるエフライムの山地のシケムとその放牧地、ゲゼルとその放牧地、ミキブザイムとその放牧地、ベテホロンとその放牧地など、四つの町である。二二またダンの部族のうちから分け与えた町は、エルテケとその放牧地、ギベトンとその放牧地、ニ四アヤロンとその放牧地、ガテリンモンとその放牧地など、四つの町である。二五またマナセの半部族のうちから分け与えた町は、タアナクとその放牧地、およびガテリンモンとその放牧地など、二つの町である。二六その他のコハテびとの氏族の町は、合わせて十であつて、それに属する放牧地があつた。

二七ゲルシヨンびとであるレビびとの氏族の一つに与えられた町は、マナセの半部族のうちからは、人を殺した者の、のがれる町であるバシヤンのゴランとその放牧地、およびベエシテラとその放牧地など、二つの町である。二八イツサカルの部族のうちからは、キシヨンとその放牧地、ダベラテとその放牧地、二九ヤ

ルムテとその放牧地、エンガンニムとその放牧地など、四つの町である。三〇アセルの部族のうちからは、ミシャルとその放牧地、アブドンとその放牧地、三ヘルカテとその放牧地、レホブとその放牧地など、四つの町である。三二ナフタリの部族のうちからは、人を殺した者の、のがれる町であるガリラヤのケデシとその放牧地、ハンモテ・ドルとその放牧地、カルタンとその放牧地など、三つの町である。三三ゲルシヨンびとが、その氏族にしたがつて獲た町は、合わせて十三の町であつて、それに属する放牧地があつた。

三四その他のレビびとである、メラリびとの氏族に与えられた町は、ゼブルンの部族のうちからは、ヨクネアムとその放牧地、カルタとその放牧地、三五デムナとその放牧地、ナハラルとその放牧地など、四つの町である。三六ルベンの部族のうちからは、ベゼルとその放牧地、ヤハツとその放牧地、三モケデモテとその放牧地、メパアテとその放牧地など、四つの町である。三八ガドの部族のうちからは、人を殺した者の、のがれる町であるギレアデのラモテとその放牧地、マハナイムとその放牧地、三九ヘシボンとその放牧地、ヤゼルとその放牧地など、合わせて四つの町である。四〇これらはみな、ほかのレビびとであるメラリびとが、その氏族にしたがつて、くじをもつて獲た町であつて、合わせて十二であつた。

四一イスラエルの人々の所有のうちに、レビびとが持った町々

は、合わせて四十八であつて、それに属する放牧地があつた。四ニこれらの町々は、それぞれその周囲に放牧地があつた。これらの町々はみなそうであつた。

四三このように、主が、イスラエルに与えると、その先祖たちに誓われた地を、ことごとく与えられたので、彼らはそれを獲て、そこに住んだ。四四主は彼らの先祖たちに誓われたように、四方に安息を賜わたつたので、すべての敵のうち、ひとりも彼らに手向かう者はなかつた。主が敵をことごとく彼らの手に渡されたからである。四五主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つとしてたがわず、みな実現した。

第二章

一時にヨシユアは、ルベンびと、ガドびと、およびマナセの部族の半ばを呼び集めて、ニ言つた、「あなたがたは主のしもべモーセが命じたことを、ことごとく守り、またわたしの命じたすべての事にも、わたしの言葉に聞きしたがいました。ミ今日まで長い年月の間、あなたがたの兄弟たちを捨てず、あなたがたの神、主の命令をよく守つてきました。四今はずでに、あなたがたの神、主が、あなたがたの兄弟たちに、先に約束されたとおり、安息を賜わるようになりました。それで、あなたがたは身を返して、主のしもべモーセが、あなたがたに与えたヨルダンの向こう側

の所有の地に行き、自分たちの天幕に帰りなさい。五ただ主のしもべモーセが、あなたがたに命じた戒めと、律法とを慎んで行い、あなたがたの神、主を愛し、そのすべての道に歩み、その命令を守つて、主につき従い、心をつくし、精神をつくして、主に仕えなさい。六そしてヨシユアが彼らを祝福して去らせたので、彼らはその天幕に帰つた。

セマナセの部族の半ばには、すでにモーセがバシヤンで所有地を与えたが、他の半ばには、ヨシユアがヨルダンのこちら側、西の方で、その兄弟たちのうちに、所有地を与えた。ヨシユアは、彼らをその天幕に送りかえす時、彼らを祝福して、ハ言つた、「あなたがたは多くの貨財と、おびただしい数の家畜と、金、銀、青銅、鉄、および多くの衣服を持つて天幕に帰り、敵から獲たぶんどり物を兄弟たちに分けなさい。九こうしてルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの部族の半ばは、主がモーセによつて命じられたように、すでに自分の所有地となつてゐるギレアデの地に行こうと、カナンの地のシロで、イスラエルの人々と別れて帰つて行つた。

一〇ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの部族の半ばが、カナンの地のヨルダンのほとりにきた時、その所で、ヨルダンの岸べに一つの祭壇を築いた。それは大きくて遠くから見える祭壇であつた。ニイスラエルの人々は、「ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの部族の半ばが、カナンの地の国境、ヨル

ダンのほとりのイスラエルの人々に属する方で、一つの祭壇を築いた」といううわさを聞いた。ニイスラエルの人々が、それを聞くとひとしく、イスラエルの人々の全会衆はシロに集まって、彼らの所に攻め上ろうとした。

三そしてイスラエルの人々は、祭司エレアザルの子ピネハスをギレアデの地のルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの半部族の所につかわし、四イスラエルの各部族のうちから、父祖の家のつかさ、ひとりずつをあげて、合わせて十人のつかさたちを、彼と共に行かせた。これらはみなイスラエルの氏族のうちで、父祖の家のかしらたる人々であった。五彼らはギレアデの地に行き、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの半部族に語って言った、六「主の全会衆はこう言います、『あなたがたがイスラエルの神にむかつて、とがを犯し、今日、ひるがえって主に従うことをやめ、自分のために一つの祭壇を築いて、今日主にそむこうとするのは何事か。モペオルで犯した罪で、なお足りないとするのか。それがために主の会衆に災が下ったが、われわれは今日もお、その罪から清められていない。一ハしかもあなたがたは、今日、ひるがえって主に従うことをやめようとするのか。あなたがたが、きよう、主にそむくならば、あす、主はイスラエルの全会衆にむかつて怒られるであろう。一カもしあなたがたの所有の地が清くないのであれば、主の幕屋の立つてゐる主の所有の地に渡ってきて、われわれのうちに、所有の地を

獲なさい。ただ、われわれの神、主の祭壇のほかに、自分のために祭壇を築いて、主にそむき、またわれわれをそむく者とならせないでください。二〇ゼラの子アカンは、のろわれた物について、とがを犯し、それがためイスラエルの全会衆に、怒りが臨んだではないか。またその罪によつて滅びた者は、彼ひとりではなかった』」。

三その時、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの半部族は、イスラエルの氏族のかしらたちに答えて言った、三「力ある者、神、主。力ある者、神、主。主は知ろしめす。イスラエルもまた知らなければならぬ。もしそれがそむくことであり、あるいは主に罪を犯すことであるならば、きよう、われわれをゆるさないでください。三われわれが祭壇を築いたことが、もし主に従うことをやめるためであり、またその上に、燔祭、素祭をささげるためであり、あるいはまたその上に、酬恩祭の犠牲をささげるためであったならば、主みずから、その罪を問いただしてください。四しかし、われわれは次のことを考えてしたのです。すなわち、のちの日になつて、あなたがたの子孫が、われわれの子孫にむかつて言うことがあるかも知れませんが、『あなたがたは、イスラエルの神、主と、なんの關係があるのですか。ニルベンの子孫と、ガドの子孫よ、主は、あなたがたと、われわれとの間に、ヨルダンを境とされました。あなたがたは主の民の特権がありません』。こう言つて、あなたがたの子孫が、わ

われの子孫に、主を拝むことをやめさせるかも知れないので、三六われわれは言いました、『さあ、われわれは一つの祭壇を築こう。燔祭のためではなく、また犠牲のためでもなく、ミモただあなたがたと、われわれとの間、およびわれわれの後の子孫の間に、証拠とならせて、われわれが、燔祭と犠牲、および酬恩祭をもつて、主の前で、主にとめをするためである。こうすれば、のちの日になって、あなたがたの子孫が、われわれの子孫に、「あなたがたは主の民の特権がありません」とは言わないであろう。』二八またわれわれは言いました、『のちの日に、われわれ、またわれわれの子孫が、もしそのようなことを言われるならば、その時、われわれは言おう、「われわれの先祖が造った主の祭壇の型をごらん下さい。これは燔祭のためではなく、また犠牲のためでもなく、あなたがたと、われわれとの間の証拠である」。二九主にそむき、ひるがえつて今日、主に従うことをやめて、われわれの神、主の幕屋の前にある祭壇のほかに、燔祭、素祭、または犠牲をささげるための祭壇を築くようなことは、決していたしません』。

三〇祭司ピネハス、および会衆のつかさたち、すなわち彼と共に行ったイスラエルの氏族のかしらたちは、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの子孫が語った言葉を聞いて、それを良しとした。三一そして祭司エレアザルの子ピネハスは、ルベンの子孫、ガドの子孫、およびマナセの子孫に言った、「今日、われ

われは、主がわれわれのうちにいますことを知った。あなたがたが、主にむかつて、このとがを犯さなかったからである。あなたがたは今、イスラエルの人々を、主の手から救い出したのである」。

三二こうして祭司エレアザルの子ピネハスと、つかさたちは、ルベンの子孫、およびガドの子孫に別れて、ギレアデの地からカナンの地に帰り、イスラエルの人々のところに行つて復命したので、三三イスラエルの人々はそれを良しとした。そしてイスラエルの人々は神をほめたたえ、ルベンの子孫、およびガドの子孫の住んでいる国を滅ぼすために攻め上ろうとは、もはや言わなかった。三四ルベンの子孫とガドの子孫は、その祭壇を「あかし」と名づけて言った、「これは、われわれの間にあって、主が神にいますというあかしをするものである」。

第二章

一主がイスラエルの周囲の敵を、ことごとく除いて、イスラエルに安息を賜わつてのち、久しくたち、ヨシユアも年が進んで老いた。二ヨシユアはイスラエルのすべての人、その長老、かしらたち、さばきびと、つかさびとたちを呼び集めて言った、「わたしは年も進んで老人となった。三あなたがたは、すでにあなたがたの神、主が、このもろもろの国びとに行われたすべてのことを見

た。あなたがたのために戦われたのは、あなたがたの神、主である。四見よ、わたしはヨルダンから、日の入る方、大海までの、このもろもろの残っている国々と、すでにわたしは滅ぼし去つたすべての国々を、くじをもつて、あなたがたに分け与え、あなたがたの各部族の嗣業とさせた。五あなたがたの前から、その国民を打ち払い、あなたがたの目の前から追い払われるのは、あなたがたの神、主である。そしてあなたがたの神、主が約束されたように、あなたがたは彼らの地を獲得であらう。六それゆえ、あなたがたは堅く立つて、モーセの律法の書にしろされていることを、ことごとく守つて行わなければならない。それを離れて右にも左にも曲つてはならない。七あなたがたのうちに残っている、これらの国民と交じつてはならない。彼らの神々の名を唱えてはならない。それをさして誓つてはならない。またそれに仕え、それを拝んではならない。八ただ、今日までしてきたように、あなたがたの神、主につき従わなければならない。九主が大いなる強き国民を、あなたがたの前から追い払われた。あなたがたには今日まで、立ち向かうことのできる者は、ひとりもなかった。一〇あなたがたのひとり、千人を追い払うことができるであらう。あなたがたの神、主が約束されたように、みずからあなたがたのために戦われるからである。二それゆえ、あなたがたは深く慎んで、あなたがたの神、主を愛さなければならない。三しかし、あなたがたがもしひるがえつて、これらの国民

の、生き残つて、あなたがたの中にとどまる者どもと親しくなり、これと婚姻し、ゆききするならば、三あなたがたは、しかと知らなければならない。あなたがたの神、主は、もはや、これらの国民をあなたがたの前から、追い払うことをされないであらう。彼らは、かえつて、あなたがたのわなとなり、網となり、あなたがたのわきに、むちとなり、あなたがたの目に、とげとなつて、あなたがたはついに、あなたがたの神、主が賜つたこの良い地から、滅びうせるであらう。

四見よ、今日、わたしは世の人のみな行く道を行こうとする。あなたがたがみな、心のうちにまた、肝に銘じて知っているように、あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束されたもろもろの良いことで、一つも欠けたものはなかった。みなあなたがたに臨んで、一つも欠けたものはなかった。一五しかし、あなたがたの神、主があなたがたについて約束された、もろもろの良いことが、あなたがたに臨んだように、主はまた、もろもろの悪いことをあなたがたに下して、あなたがたの神、主が賜つたこの良い地から、ついに、あなたがたを滅ぼし断たれるであらう。一六もし、あなたがたの神、主が命じられたその契約を犯し、行つて他の神々に仕え、それを拝むならば、主はあなたがたにむかつて怒りを発し、あなたがたは、主が賜つた良い地から、すみやかに滅びうせるであらう。

第二四章

「ヨシュアは、イスラエルのすべての部族をシケムに集め、イスラエルの長老、かしら、さばきびと、つかさたちを召し寄せて、共に神の前に進み出た。ニそしてヨシュアはすべての民に言った、「イスラエルの神、主は、こう仰せられる、『あなたがたの先祖たち、すなわちアブラハムの父、ナホルの父テラは、昔、ユフラテ川の向こうに住み、みな、ほかの神々に仕えていたが、ミわたしは、あなたがたの先祖アブラハムを、川の向こうから連れ出して、カナンの全地を導き通り、その子孫を増した。わたしは彼にイサクを与え、四イサクにヤコブとエサウを与え、エサウにはセイルの山地を与えて、所有とさせたが、ヤコブとその子供たちはエジプトに下った。五わたしはモーセとアロンをつかわし、またエジプトのうちに不思議をおこなって、これに災を下し、その後あなたがたを導き出した。六わたしはあなたがたの父たちを、エジプトから導き出し、あなたがたが海にきたとき、エジプトびとは、戦車と騎兵とをもつて、あなたがたの父たちを紅海に追ってきた。七そのとき、あなたがたの父たちが主に呼ばわったので、主は暗やみをあなたがたにエジプトびとの間に置き、海を彼らの上に傾けて彼らをおおわれた。あなたがたは、わたしがエジプトでしたことを目で見た。そして長い間、荒野に住んでいた。八わたしはまたヨルダンの向こう側に住んでいたアモリ

びとの地に、あなたがたを導き入れた。彼らはあなたがたと戦ったので、わたしは彼らをあなたがたの手に渡して、彼らの地を獲させ、彼らをあなたがたの前から滅ぼし去った。九ついで、モアブの王チツポルの子バラクが立つて、イスラエルに敵し、人をつかわし、ベオルの子バラムを招き、あなたがたをのろわせようとしたが、一〇わたしがバラムに聞こうとしなかったのので、彼は、かえって、あなたがたを祝福した。こうしてわたしは彼の手からあなたがたを救い出した。一一そしてあなたがたは、ヨルダンを渡つて、エリコにきたが、エリコの人々はあなたがたと戦い、アモリびと、ペリジびと、カナンびと、ヘテびと、ギルガシびと、ヒビびと、およびエブスびとも、あなたがたと戦ったが、わたしは彼らをあなたがたの手に渡した。一二わたしは、あなたがたの前に、くまばちを送つて、あのアモリびとのふたりの王を、あなたがたの前から追い払った。これはあなたがたのつるぎ、または、あなたがたの弓によつてではなかった。一三そしてわたしは、あなたがたが自分で勞しなかった地を、あなたがたに与え、あなたがたが建てなかった町を、あなたがたに与えた。そしてあなたがたはいまその所に住んでいる。あなたがたはまた自分で作らなかつたぶどう畑と、オリブ畑の実を食べている』。

一四それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもつて、主に仕え、あなたがたの先祖が、川の向

こう、およびエジプトで仕えた他の神々を除き去つて、主に仕えなさい。一五もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きよう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」。

一六その時、民は答えて言った、「主を捨てて、他の神々に仕えるなど、われわれは決していたしません。一七われわれの神、主がみずからわれわれと、われわれの先祖とを、エジプトの地、奴隸の家から導き上り、またわれわれの目の前で、あの大きなしるしを行い、われわれの行くすべての道で守り、われわれが通つたすべての国民の中でわれわれを守られたからです。一八主はまた、この地に住んでいたアモリびとなど、すべての民を、われわれの前から追い払われました。それゆえ、われわれも主に仕えます。主はわれわれの神だからです」。

一九しかし、ヨシユアは民に言った、「あなたがたは主に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神であつて、あなたがたの罪、あなたがたのとがを、ゆるされないからである。二〇もしあなたがたが主を捨てて、異なる神々に仕えるならば、あなたがたにさいわいを下されたのちにも、ひるがえつてあなたがたに災をくだし、あなたがたを滅ぼしつくされるであらう」。二民はヨシユアに言った、「いいえ、われわれは主に仕

えます」。三そこでヨシユアは民に言った、「あなたがたは主を選んで、主に仕えると言つた。あなたがたみずからその証人である」。彼らは言つた、「われわれは証人です」。四ヨシユアはまた言つた、「それならば、あなたがたのうちに、異なる神々を除き去り、イスラエルの神、主に、心を傾けなさい」。五民はヨシユアに言つた、「われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に聞きしたがいます」。六こうしてヨシユアは、その日、民と契約をむすび、シケムにおいて、定めと、おきてを、彼らのために設けた。七ヨシユアはこれらの言葉を神の律法の書にしるし、大きな石を取つて、その所で、主の聖所にあるかしの木の下にそれを立て、八ヨシユアは、すべての民に言つた、「見よ、この石はわれわれのあかしとなるであろう。主がわれわれに語られたすべての言葉を、聞いたからである。それゆえ、あなたがたが自分の神を捨てることのないために、この石が、あなたがたのあかしとなるであろう」。九こうしてヨシユアは民を、おのその嗣業の地に歸し去らせた。

二〇これらの事の後、主のしもべ、ヌンの子ヨシユアは百十歳で死んだ、二一人々は彼をその嗣業の地のうちのテムナテ・セラに葬つた。テムナテ・セラは、エフライムの山地で、ガアシ山の北にある。

三イスラエルはヨシユアの世にある日の間、また主がイスラエルのために行われたもろもろのことを知つていて、ヨシユアの

あとに生き残った長老たちが世にある日の間、つねに主に仕えた。

ミイスラエルの人々が、エジプトから携え上ったヨセフの骨は、むかしヤコブが銀百枚で、シケムの父ハモルの子から買ったと取ったシケムのうちの地所の一部に葬られた。これはヨセフの子孫の嗣業となった。

ミ Aaron の子 エレアザル も死んだ。人々は彼を、その子ピネハスに与えられた町で、エフライムの山地にあるギベアに葬った。

士師記

第一章

「ヨシユアが死んだ後、イスラエルの人々は主に問うて言った、「わたしたちのうち、だれが先に攻め上つて、カナンびとと戦いましょうか」。ニ主は言われた、「ユダが上るべきである。わたしはこの国を彼の手にてわたした」。ミユダはその兄弟シメオンに言った、「わたしと一緒に、わたしに割り当てられた領地へ上つて行つて、カナンびとと戦つてください。そうすればわたしもあなたと一緒に、あなたに割り当てられた領地へ行きましょう」。そこでシメオンは彼と一緒に行った。四ユダが上つて行くと、主は彼らの手にカナンびととペリジびとをわたされたので、彼らはベゼクで一万人を撃ち破り、五またベゼクでアドニベゼクに会い、彼と戦つてカナンびととペリジびとを撃ち破つた。六アドニベゼクは逃げたが、彼らはそのあとを追つて彼を捕え、その手足の親指を切り放つた。セアドニベゼクは言った、「かつて七十人の王たちが手足の親指を切られて、わたしの食卓の下で、くずを拾つたことがあつたが、神はわたしを殺したように、わたしに報いられたのだ」。人々は彼をエルサレムへ連れて行つたが、彼はそこで死んだ。

ハユダの人々はエルサレムを攻めて、これを取り、つるぎをもつ

てこれを撃ち、町に火を放つた。九その後、ユダの人々は山地とネゲブと平地に住んでいるカナンびとと戦うために下つたが、一〇ユダはまずヘブロンに住んでいるカナンびとを攻めて、セシヤイとアヒマンとタルマイを撃ち破つた。ヘブロンのもとの名はキリアテ・アルバであつた。

二またそこから進んでデビルの住民を攻めた。(デビルのもとの名はキリアテ・セペルであつた。)三時にカレブは言った、「キリアテ・セペルを撃つて、これを取る者には、わたしの娘アクサを妻として与えるであらう」。四カレブの弟ケナズの子オテニエルがそれを取つたので、カレブは娘アクサを妻として彼に与えた。五アクサは行くとき彼女の父に畑を求め、夫にすすめられたので、アクサがろばから降りると、カレブは彼女に言った、「あなたは何を望むのか」。六アクサは彼に言った、「わたしに贈り物をください。あなたはわたしをネゲブの地へやられるのですから、泉をもってください」。それでカレブは上の泉と下の泉とを彼女に与えた。

七モーセのしゅうとであるケニびとの子孫はユダの人々と共に、しゅろの町からアラドに近いネゲブにあるユダの野の上つてきて、アマレクびとと共に住んだ。八そしてユダはその兄弟シメオンと共に、ゼパテに住んでいたカナンびとを撃ち、それをことごとく滅ぼした。これによつてその町の名はホルマと呼ばれた。九ハユダはまたガザとその地域、アシケロンとその

地域、エクロンとその地域を取った。一九主がユダと共におられたので、ユダはついに山地を手に入れたが、平地に住んでいた民は鉄の戦車をもっていたので、これを追い出すことができなかった。二〇人々はモーセがかつて言ったように、ヘブロンをカレブに与えたので、カレブはその所からアナクの三人の子を追い出した。二一ベニヤミンの人々はエルサレムに住んでいたエブスびとを追い出さなかったので、エブスびとは今日までベニヤミンの人々と共にエルサレムに住んでいる。

三二ヨセフの一族はまたベテルに攻め上ったが、主は彼らと共におられた。三三すなわちヨセフの一族は人をやつてベテルを探らせた。この町のもとの名はルズであった。三四その斥候たちは町から出てきた人を見て、言った、「どうぞこの町にはいる道を教えてください。そうすればわたしたちはあなたに恵みを施しましょう」。三五彼が町にはいる道を教えたので、彼らはつぎをもつて町を撃った。しかし、かの人とその家族は自由に去らせた。三六その人はヘテびとの地に行つて町を建て、それをルズと名づけた。これは今日までその名である。

三七マナセはベテシヤンとその村里の住民、タアナクとその村里の住民、ドルとその村里の住民、イブレアムとその村里の住民、メギドとその村里の住民を追い出さなかったので、カナンびとは引き続きその地に住んでいたが、二ハイスラエルは強くなつたとき、カナンびとを強制労働に服させ、彼らをことごとくは追い出さなかった。

二九またエフライムはゲゼルに住んでいたカナンびとを追い出さなかったので、カナンびとはゲゼルにおいて彼らのうちに住んでいた。

三〇ゼブルンはキテロンの住民およびナハラルの住民を追い出さなかったので、カナンびとは彼らのうちに住んで強制労働に服した。

三二アセルはアッコの住民およびシドン、アヘラブ、アクジブ、ヘルバ、アピク、レホブの住民を追い出さなかったので、三三アセルびとは、その地の住民であるカナンびとのうちに住んでいた。彼らが追い出さなかったからである。

三三ナフタリはベテシメシの住民およびベテアナテの住民を追い出さずに、その地の住民であるカナンびとのうちに住んでいた。しかしベテシメシとベテアナテの住民は、ついに彼らの強制労働に服した。

三四アモリびとはダンの人々を山地に追い込んで平地に下ることを許さなかった。三五アモリびとは引き続きハルヘレス、アヤロン、シヤラビムに住んでいたが、ヨセフの一族の手が強くなつたので、彼らは強制労働に服した。三六アモリびとの境はアクラビムの坂からセラを経て上の方に及んだ。

第二章

「主の使がギルガルからボキムに上つて言った、『わたしはあなたがたをエジプトから上らせて、あなたがたの先祖に誓った地に連れてきて、言った、『わたしはあなたと結んだ契約を決して破ることはない。』あなたがたはこの国の住民と契約を結んではならない。彼らの祭壇をこぼたなければならない』と。しかし、あなたがたはわたしの命令に従わなかった。あなたがたは、なんということをしたのか。』それでわたしは言う、『わたしはあなたがたの前から彼らを追い払わないであろう。彼らはかえつてあなたがたの敵となり、彼らの神々はあなたがたのわなとなるであろう』と。四 主の使がこれらの言葉をイスラエルのすべての人々に告げたので、民は声をあげて泣いた。五 それでその所の名をボキムと呼んだ。そして彼らはその所で主に犠牲をささげた。

六 ヨシユアが民を去らせたので、イスラエルの人々はおのその領地へ行って土地を獲た。七 民はヨシユアの在世中も、またヨシユアのあとに生き残った長老たち、すなわち主がかつてイスラエルのために行われたすべての大いなるわざを見た人々の在世中も主に仕えた。八 こうして主のしもべヌンの子ヨシユアは百十歳で死んだ。九 人々は彼をエフライムの山地のガアシ山の北のテムナテ・ヘレスにある彼の領地内に葬った。一〇 そ

てその時代の者もまたことごとくその先祖たちのもとにあつめられた。その後ほかの時代が起つたが、これは主を知らず、また主がイスラエルのために行われたわざをも知らなかった。

二 イスラエルの人々は主の前に悪を行い、もろもろのバアルに仕え、三 かつエジプトの地から彼らを導き出された先祖たちの神、主を捨てて、ほかの神々すなわち周囲にある国民の神々に従い、それにひきまずいて、主の怒りをひき起した。三 すなわち彼らは主を捨てて、バアルとアシタロテに仕えたので、四 主の怒りがイスラエルに対して燃え、かすめ奪う者の手にわたして、かすめ奪わせ、かつ周囲のもろもろの敵の手に売られたので、彼らは再びその敵に立ち向かうことができなかった。五 彼らがどこへ行つても、主の手は彼らに災をした。これは主がかつて言われ、また主が彼らに誓われたとおりで、彼らはひどく悩んだ。

一六 その時、主はさばきづかさを起して、彼らをかすめ奪う者の手から救い出された。一七 しかし彼らはそのさばきづかさにも従わず、かえつてほかの神々を慕つてそれと姦淫を行い、それにひきまずき、先祖たちが主の命令に従つて歩んだ道を、いちはやく離れ去つて、そのようには行わなかった。一八 主が彼らのためにさばきづかさを起されたとき、そのさばきづかさの在世中、主はさばきづかさと共におられて、彼らを敵の手から救い出された。これは彼らが自分をしえたげ悩ました者のゆえ

に、うめき悲しんだので、主が彼らをあわれまれたからである。一九しかしさばきづかさが死ぬと、彼らはそむいて、先祖たちにまさって悪を行い、ほかの神々に従ってそれに仕え、それにひざまずいてそのおこないをやめず、かたくなな道を離れなかった。二〇それで主はイスラエルに対し激しく怒って言われた、「この民はわたしがかつて先祖たちに命じた契約を犯し、わたしの命令に従わないゆえ、ニわたしもまたヨシユアが死んだときに残しておいた国民を、この後、彼らの前から追い払わないであらう。三これはイスラエルが、先祖たちの守ったように主の道を守ってそれに歩むかどうかをわたしが試みるためである」。四それゆえ主はこれらの国民を急いで追い払わずに残しておいて、ヨシユアの手にわたされなかったのである。

第三章

一すべてカナンのもろもろの戦争を知らないイスラエルの人々を試みるために、主が残しておかれた国民は次のとおりである。二これはただイスラエルの代々の子孫、特にまだ戦争を知らないものに、それを教え知らせるためである。三すなわちペリシテびとの五人の君たちと、すべてのカナンびとと、シドンびとおよびレバノン山に住んで、バアル・ヘルモン山からハマテの入口までを占めていたヒビびとなどであって、四これらをもつてイス

ラエルを試み、主がモーセによって先祖たちに命じられた命令に、彼らが従うかどうかを知ろうとされたのである。五しかるにイスラエルの人々はカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとのうちに住んで、六彼らの娘を妻にめとり、また自分たちの娘を彼らのむすこに与えて、彼らの神々に仕えた。

七こうしてイスラエルの人々は主の前に悪を行い、自分たちの神、主を忘れて、バアルおよびアシラに仕えた。八そこで主はイスラエルに対して激しく怒り、彼らをメソポタミヤの王クシヤン・リシャタイムの手に売りわたされたので、イスラエルの人々は八年の間、クシヤン・リシャタイムに仕えた。九しかし、イスラエルの人々が主に呼ばわったとき、主はイスラエルの人々のために、ひとりの救助者を起して彼らを救われた。すなわちカレブの弟、ケナズの子オテニエルである。一〇主の霊がオテニエルに臨んだので、彼はイスラエルをさばいた。彼が戦いに出て、主はメソポタミヤの王クシヤン・リシャタイムをその手にわたされたので、オテニエルの手はクシヤン・リシャタイムに勝ち、二国は四十年のあいだ太平であった。ケナズの子オテニエルはついに死んだ。

三イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなった。すなわち彼らが主の前に悪をおこなったので、主はモアブの王エグロンを強めて、イスラエルに敵対させられた。三エグロンはアン

モンおよびアマレクの人々を集め、きてイスラエルを撃ち、しゅろの町を占領した。一四こうしてイスラエルの人々は十八年の間モアブの王エグロンに仕えた。

一五しかしイスラエルの人々が主に呼ばわったとき、主は彼らのために、ひとりの救助者を起された。すなわちベニヤミンびと、ゲラの子、左ききのエホデである。イスラエルの人々は彼によつてモアブの王エグロンに、みつぎ物を送った。一六エホデは長さ一キュビトのもろ刃のつるぎを作らせ、それを衣の下、右のものの上に帯びて、一七モアブの王エグロンにみつぎ物をもつてきた。エグロンは非常に肥えた人であつた。一八エホデがみつぎ物をささげ終つたとき、彼はみつぎ物になつてきた民を帰らせ、九かれ自身はギルガルに近い石像のある所から引きかえして言つた、「王よ、わたしはあなたに申しあげる機密をもつています」。そこで王は「さがつておれ」と言つたので、かたわらに立っている者は皆出て行つた。二〇エホデが王のところにはいつて来ると、王はひとりで涼みの高殿に座していたので、エホデが「わたしは神の命によつてあなたに申しあげることがあります」と言うと、王は座から立ちあがつた。二一そのときエホデは左の手を伸ばし、右のものもからつるぎをとつて王の腹を刺した。二二つるぎのつかも刃と共にはいったが、つるぎを腹から抜き出さなかつたので、脂肪が刃をふさいだ。そして汚物が出た。二三エホデは廊下に出て、王のおる高殿の戸を閉じ、錠をお

ろした。

二四彼が出た後、王のしもべどもがきて、高殿の戸に錠のおろされてあるのを見て、「王はきつと涼み殿のへやで足をおおつておられるのだ」と思った。二五しもべどもは長いあいだ待つていたが、王がなお高殿の戸を開かないので、心配してかぎをとつて開いて見ると、王は床にたおれて死んでいた。

二六エホデは彼らのためらうまに、のがれて石像のある所を過ぎ、セイラに逃げていつた。二七彼が行つてエフライムの山地にラツパを吹き鳴らしたので、イスラエルの人々は彼と共に山地から下つてエホデに従つた。二八エホデは彼らに言つた、「わたしについてきなさい。主はあなたがたの敵モアブびとをあなたがたの手にわたされます」。そこで彼らはエホデに従つて下り、ヨルダンの渡し場をおさえ、モアブびとをひとりも渡らせなかつた。二九そのとき彼らはモアブびとおおよそ一万人を殺した。これはいづれも肥え太つた勇士であつて、ひとりも、のがれた者がなかつた。三〇こうしてモアブはその日イスラエルの手に服し、国は八十年のあいだ太平であつた。

三一エホデの後、アナテの子シャムガルが起り、牛のむちをもつてペリシテびと六百人を殺した。この人もまたイスラエルを救つた。

第四章

一 エホデが死んだ後、イスラエルの人々がまた主の前に悪をおこなったので、二 主は、ハゾルで世を治めていたカナンの王ヤビンの手に彼らを売りわたされた。ヤビンの軍勢の長はハロセテ・ゴイムに住んでいたシセラであった。三 彼は鉄の戦車九百両をもち、二十年の間イスラエルの人々を激しくしえたげたので、イスラエルの人々は主に向かって呼ばわった。

四 そのころラピドテの妻、女預言者デボラがイスラエルをさばいていた。五 彼女はエフライムの山地のラマとベテルの間にあゝるデボラのしゅろの木の下に座し、イスラエルの人々は彼女のもとに上つてきて、さばきをうけた。六 デボラは人をつかわして、ナフタリのケデシからアビノアムの子バラクを招いて言った、「イスラエルの神、主はあなたに、こう命じられるではありませんか、『ナフタリの部族とゼブルンの部族から一万人を率い、行つて、タボル山に陣をしけ。セわたしはヤビンの軍勢の長シセラとその戦車と軍隊とをキシヨン川に引き寄せて、あなたに出あわせ、彼をあなたの手にわたすであろう』。ハバラクは彼女に言った、「あなたがもし一緒に行つてくだされば、わたしは行きます。しかし、一緒に行つてくだらないならば、行きません」。七 デボラは言った、「必ずあなたと一緒にいきます。しかしあなたは今行く道では譽を得ないでしょう。主はシセラを女

の手にわたされるからです」。デボラは立つてバラクと一緒にケデシに行つた。八 バラクはゼブルンとナフタリをケデシに呼び集め、一万人を従えて上つた。デボラも彼と共に上つた。九 二時にケニびとヘベルはモーセのしゅろとホバブの子孫であるケニびとから分れて、ケデシに近いザアナイムのかしの木までも遠く行つて天幕を張つていた。

一〇 アビノアムの子バラクがタボル山に上つたと、人々がシセラに告げたので、一 一シセラは自分の戦車の全部すなわち鉄の戦車九百両と、自分と共にいるすべての民をハロセテ・ゴイムからキシヨン川に呼び集めた。二 四デボラはバラクに言った、「さあ、立ちあがりなさい。きようは主がシセラをあなたの手にわたされる日です。主はあなたに先立つて出られるではありませんか」。そこでバラクは一万人を従えてタボル山から下つた。三 五主はつるぎをもつてシセラとすべての戦車および軍勢をこごとくバラクの前に撃ち敗られたので、シセラは戦車から飛びおり、徒歩で逃げ去つた。六 ハバラクは戦車と軍勢とを追撃してハロセテ・ゴイムまで行つた。シセラの軍勢はこごとくつるぎにたおれて、残つたものはひとりもなかった。

七 しかしシセラは徒歩で逃げ去つて、ケニびとヘベルの妻ヤエルの天幕に行つた。ハゾルの王ヤビンとケニびとヘベルの家とは互にむつまじかつたからである。八 ヤエルは出てきてシセラを迎え、彼に言った、「おはいりください。主よ、どうぞうち

へおはいりください。恐れるにはおよびません」。シセラが天幕にはいったので、ヤエルは毛布をもつて彼をおおった。一シセラはヤエルに言った、「どうぞ、わたしに水を少し飲ませてください。のどがかわきましたから」。ヤエルは乳の皮袋を開いて彼に飲ませ、また彼をおおった。二シセラはまたヤエルに言った、「天幕の入口に立っていてください。もし人がきて、あなたに『だれか、ここにおりますか』と問うならば『おりません』と答えてください」。三しかし彼が疲れて熟睡したとき、ヘベルの妻ヤエルは天幕のくぎを取り、手に槌を携えて彼に忍び寄り、こめかみにくぎを打ち込んで地に刺し通したので、彼は息絶えて死んだ。三バラクがシセラを追ってきたとき、ヤエルは彼を出迎えて言った、「おいでなさい。あなたが求めている人をお見せしましょう」。彼がヤエルの天幕にはいつて見ると、シセラはこめかみにくぎを打たれて倒れて死んでいた。

三三こうしてその日、神はカナンンの王ヤビンをイスラエルの人々の前に撃ち敗られた。三四そしてイスラエルの人々の手はますますカナンびとの王ヤビンの上に重くなって、ついにカナンンの王ヤビンを滅ぼすに至った。

第五章

一その日デボラとアビノアムの子バラクは歌って言った。

二「イスラエルの指導者たちは先に立ち、民は喜び勇んで進み出た。主をさんびせよ。

三もろもろの王よ聞け、もろもろの君よ、耳を傾けよ。

わたしは主に向かって歌おう、わたしはイスラエルの神、主をほめたたえよう。

四主よ、あなたがセイルを出、

エドムの地から進まれたとき、

地は震い、天はしたたり、

雲は水をしたたらせた。

五もろもろの山は主の前に揺り動き、

シナイの主、すなわちイスラエルの神、主の前に揺り動いた。

六アナテの子シヤムガルるとき、

ヤエルの時には隊商は絶え、

旅人はわき道をとおった。

七イスラエルには農民が絶え、

かれらは絶え果てたが、

デボラよ、ついにあなたは立ちあがり、立つてイスラエルの母となった。

八人々が新しい神々を選んだとき、

戦いは門に及んだ。

イスラエルの四万人のうちに、盾あるいは槍の見られたことがあったか。

九わたしの心は民のうちの喜び勇んで進み出たイスラエルのつかさたちと共にある。

主をさんびせよ。

一〇茶色のろばに乗るもの、毛氈の上にすわるもの、

および道を歩むものよ、共に歌え。

二楽人の調べは水くむ所に聞える。

かれらはそこで主の救を唱え、

イスラエルの農民の救を唱えている。

その時、主の民は門に下つて行つた。

二三起きよ、起きよ、デボラ。

起きよ、起きよ、歌をうたえ。

立てよ、バラク、とりこを捕えよ、

アビノアムの子よ。

二三その時、残つた者は尊い者のように下つて行き、主の民は勇士のように下つて行つた。

一四彼らはエフライムから出て谷に進み、

兄弟ベニヤミンはあなたの民のうちにある。

マキルからはつかさたちが下つて行き、

ゼブルンからは指揮を執るものが下つて行つた。

一五イツサカルはバラクと同じく、イツサカルはバラクと同じく、

直ちにそのあとについて谷に突進した。

しかしルベンの氏族は大いに思案した。

一六なぜ、あなたは、おりの間にとどまつて、

羊の群れに笛吹くのを聞いているのか。

ルベンの氏族は大いに思案した。

一七ギレアデはヨルダンの向こうにとどまつていた。

なぜ、ダンは舟のかたわらにとどまつたか。

アセルは浜べに座し、

その波止場のかたわらにとどまつていた。

一八ゼブルンは命をすてて、死を恐れぬ民である。

野の高い所におけるナフタリもまたそうであつた。

一九もろもろの王たちはきて戦つた。

その時カナン王たちは、

メギドの水のほとりのタアナクで戦つた。

彼らは一片の銀をも獲なかつた。

二〇もろもろの星は天より戦い、

その軌道をはなれてシセラと戦つた。

二一キシヨンの川は彼らを押し流した、

激しく流れる川、キシヨンの川。

わが魂よ、勇ましく進め。

二三その時、軍馬ははせ駆けり、馬のひずめは地を踏みならした。

二三主の使は言った、『メロズをのろえ、

激しくその民をのろえ、

彼らはきて主を助けず、

主を助けて勇士を攻めなかつたからである』。

二四ケニびとへベルの妻ヤエルは、

女のうちの最も恵まれた者、

天幕に住む女のうち最も恵まれた者である。

二五シセラが水を求めると、ヤエルは乳を与えた。

すなわち貴重な鉢に凝乳を盛ってささげた。

二六ヤエルはくぎに手をかけ、

右手に重い槌をとって、

シセラを打ち、その頭を砕き、

粉々にして、そのこめかみを打ち貫いた。

二七シセラはヤエルの足もとにかがんで倒れ伏し、

その足もとにかがんで倒れ、

そのかがんだ所に倒れて死んだ。

二八シセラの母は窓からながめ、

格子窓から叫んで言った、

『どうして彼の車の来るのがおそいのか、

どうして彼の車の歩みがかどらないのか』。

二九その侍女たちの賢い者は答え、

母またみずからおのれに答えて言った、

三〇『彼らは獲物を得て、

それを分けているのではないか、

人ごとにひとり、ふたりのおなごを取り、

シセラの獲物は色染めの衣、

縫い取りした色染めの衣の獲物であろう。

すなわち縫い取りした色染めの衣二つを、

獲物としてそのくびにまとうであろう』。

三一主よ、あなたの敵はみなこのように滅び、

あなたを愛する者を

太陽の勢いよく上るようにしてください。

こうして後、国は四十年のあいだ太平であった。

第六章

一イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなったので、主は彼らを七年の間ミデアンびとの手にわたされた。ニミデアンびとの手はイスラエルに勝った。イスラエルの人々はミデアンびとのゆえに、山にある岩屋と、ほら穴と要害とを自分たちのために造った。ミイスラエルびとが種をまいた時には、いつもミデア

ンびと、アマレクびとおよび東方の民が上つてきてイスラエル
 びとを襲い、四イスラエルびとに向かつて陣を取り、地の産物を
 荒してガザの附近にまで及び、イスラエルのうちに命をつなぐ
 べき物を残さず、羊も牛もろばも残さなかった。五彼らが家畜
 と天幕を携えて、いなごのように多く上つてきたからである。
 すなわち彼らとそれのらくだは無数であつて、彼らは国を荒すた
 めにはいつてきたのであつた。六こうしてイスラエルはミデア
 ンびとのために非常に衰え、イスラエルの人々は主に呼ばわつ
 た。

セイスラエルの人々がミデアンびとのゆえに、主に呼ばわつた
 ととき、八主はひとりの預言者をイスラエルの人々につかわして
 彼らに言われた、「イスラエルの神、主はこう言われる、『わたし
 はかつてあなたがたをエジプトから導き上り、あなたがたを
 奴隷の家から携え出し、九エジプトびとの手およびすべてあな
 たがたをしえたげる者の手から救い出し、あなたがたの前から
 彼らを追い払つて、その国をあなたがたに与えた。一〇そしてあ
 なたがたに言つた、『わたしはあなたがたの神、主である。あな
 たがたが住んでいる国のアモリびとの神々を恐れてはならな
 い』と。しかし、あなたがたはわたしの言葉に従わなかつた』。
 ニさて主の使がきて、アビエゼルびとヨアシに属するオフラに
 あるテレビンの木の下に座した。時にヨアシの子ギデオンはミ
 デアンびとの目を避けるために酒ぶねの中で麦を打つていた

が、ニ主の使は彼に現れて言つた、「大勇士よ、主はあなたと共に
 におられます」。ニギデオンは言つた、「ああ、君よ、主がわた
 したちと共におられるならば、どうしてこれらの事がわたした
 ちに臨んだのでしょうか。わたしたちの先祖が『主はわれわれを
 エジプトから導き上られたではないか』といつて、わたしたちに
 告げたそのすべての不思議なみわざはどこにありますか。今、
 主はわたしたちを捨てて、ミデアンびとの手にわたされまし
 た」。四主はふり向いて彼に言われた、「あなたはこのあなたの
 力をもつて行つて、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出
 しなさい。わたしがあなたをつかわすではありませんか。一
 五ギデオンは主に言つた、「ああ主よ、わたしはどうしてイスラ
 エルを救うことができましようか。わたしの氏族はマナセのう
 ちで最も弱いものです。わたしはまたわたしの父の家族のうち
 で最も小さいものです」。一六主は言われた、「しかし、わたしが
 あなたと共にいるから、ひとりを撃つようにミデアンびとを撃
 つことができるでしょう」。一七ギデオンはまた主に言つた、「わ
 たしがもしあなたの前に恵みを得ていますならば、どうぞ、わた
 しと語るのがあなたであるというしるしを見せてください。一八
 どうぞ、わたしが供え物を携えてあなたのもとにもどつてきて、
 あなたの前に供えるまで、ここを去らないでください」。主は言
 われた、「わたしはあなたがもどつて来るまで待ちましよう」。
 一九そこでギデオンは自分の家に行つて、やぎの子を整え、一エ

パの粉で種入れぬパンをつくり、肉をかごに入れ、あつものをつぽに盛り、テレピンの木の下における彼のもとに持つてきて、それを供えた。三〇神の使は彼に言った、「肉と種入れぬパンをとつて、この岩の上に置き、それにあつものを注ぎなさい」。彼はそのようにした。三すると主の使が手にもつていたつえの先を出して、肉と種入れぬパンに触れると、岩から火が燃えあがつて、肉と種入れぬパンとを焼きつくした。そして主の使は去つて見えなくなつた。三三ギデオンはその人が主の使であつたことをさとつて言った、「ああ主なる神よ、どうなることでしょう。わたしは顔をあわせて主の使を見たのですから」。三三主は彼に言われた、「安心せよ、恐れるな。あなたは死ぬことはない」。二四そこでギデオンは主のために祭壇をそこに築いて、それを「主は平安」と名づけた。これは今日までアビエゼルびとのオフラにある。

三五その夜、主はギデオンに言われた、「あなたの父の雄牛と七歳の第二の雄牛とを取り、あなたの父のもつているバアルの祭壇を打ちこわし、そのかたわらにあるアシラ像を切り倒し、二六あなたの神、主のために、このとりでの頂に、石を並べて祭壇を築き、第二の雄牛を取り、あなたが切り倒したアシラの木をもつて燔祭をささげなさい」。二七ギデオンはしもべ十人を連れて、主が言われたとおりにおこなつた。ただし彼は父の家族のものが、および町の人々を恐れたので、昼それを行うことができず、夜そ

れを行つた。

二八町の人々が朝早く起きて見ると、バアルの祭壇は打ちこわされ、そのかたわらのアシラ像は切り倒され、新たに築いた祭壇の上に、第二の雄牛がささげられてあつた。二九そこで彼らは互に「これはだれのしわざか」と言つて問い尋ねたすえ、「これはヨアシの子ギデオンのしわざだ」と言つた。三〇町の人々はヨアシに言つた、「あなたのむすこを引き出して殺しなさい。彼はバアルの祭壇を打ちこわしそのかたわらにあつたアシラ像を切り倒したのです」。三三しかしヨアシは自分に向かつて立つていすべの者に言つた、「あなたがたはバアルのために言い争うのですか。あるいは彼を弁護しようとなさるのですか。バアルのために言い争う者は、あすの朝までに殺されるのです。バアルがもし神であるならば、自分の祭壇が打ちこわされたのだから、彼みずから言い争うべきです」。三三そこでその日、「自分の祭壇が打ちこわされたのだから、バアルみずからその人と言い争うべきです」と言つたので、ギデオンはエルバアルと呼ばれた。三三時にミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民がみな集まつてヨルダン川を渡り、エズレルの谷に陣を取つたが、三四主の霊がギデオンに臨み、ギデオンがラツパを吹いたので、アビエゼルびとは集まつて彼に従つた。三五次に彼があまねくマナセに使者をつかわしたので、マナセびともまた集まつて彼に従つた。彼がまたアセル、ゼブルンおよびナフタリに使者をつかわ

すと、その人々も上つて彼を迎えた。

三六 ギデオンは神に言った、「あなたがかつて言われたように、わたしの手によつてイスラエルを救おうとされるならば、三七 わたしは羊の毛一頭分を打ち場に置きますから、露がその羊の毛の上にだけあつて、地がすべてかわいているようにしてください。これによつてわたしは、あなたがかつて言われたように、わたしの手によつてイスラエルをお救いになることを知るでしょう」。

三八 すなわちそのようになった。彼が翌朝早く起きて、羊の毛をかき寄せ、その毛から露を絞ると、鉢に満ちるほどの水が出た。三九 ギデオンは神に言った、「わたしをお怒りにならないように願います。わたしにもう一度だけ言わせてください。どうぞ、もう一度だけ羊の毛をもつてためさせてください。どうぞ、羊の毛だけをかわかして、地にはことごとく露があるようにしてください」。四〇 神はその夜、そうされた。すなわち羊の毛だけかわいて、地にはすべて露があつた。

第七章

一 さてエルバアルと呼ばれるギデオンおよび彼と共にいたすべての民は朝早く起き、ハロデの泉のほとりに陣を取った。ミデアンびとの陣は彼らの北の方にあり、モレの丘に沿つて谷の中にあつた。

二 主はギデオンに言われた、「あなたと共にいる民はあまりに多い。ゆえにわたしは彼らの手にミデアンびとをわたさない。おそろくイスラエルはわたしに向かつてみずから誇り、『わたしは自身の手で自分を救つたのだ』と云うであらう。三 それゆえ、民の耳に触れ示して、『だれでも恐れおののく者は帰れ』と言いなさい。四 こうしてギデオンは彼らを試みたので、民のうち歸つた者は二万二千人あり、残つた者は一万人であつた。

四 主はまたギデオンに言われた、「民はまだ多い。彼らを導いて水ぎわに下りなさい。わたしはそこで、あなたのために彼らを試みよう。わたしがあなたに告げて『この人はあなたと共に行くべきだ』と云う者は、あなたと共に行くべきである。またわたしがあなたに告げて『この人はあなたと共に行つてはならない』と云う者は、だれも行つてはならない。五 そこでギデオンが民を導いて水ぎわに下ると、主は彼に言われた、『すべて犬のなめるように舌をもつて水をなめる者はそれを別にしておきなさい。またすべてひぎを折り、かがんで水を飲む者もそうしなさい』。六 そして手を口にあてて水をなめた者の数は三百人であつた。残りの民はみなひぎを折り、かがんで水を飲んだ。七 主はギデオンに言われた、『わたしは水をなめた三百人の者をもつて、あなたがたを救い、ミデアンびとをあなたの手にわたそう。残りの民はおのおのその家に帰らせなさい』。八 そこで彼はかの三百人を留めおき、残りのイスラエルびとの手から、つぼとラツパ

を取り、民をおのおのその天幕に帰らせた。時にミデアンびとの陣は下の谷の中にあつた。

九その夜、主はギデオンに言われた、「立てよ、下つて行って敵陣に攻め入れ。わたしはそれをあなたの手にわたす。一〇もしあなたが下つて行くことを恐れるならば、あなたのしもべプラと共に敵陣に下つて行って、一彼らの言うところを聞け。そうすればあなたの手が強くなつて、敵陣に攻め下ることができであらう」。ギデオンがしもべプラと共に下つて、敵陣にある兵隊たちの前哨地点に行つてみると、二ミデアンびと、アマレクびとおよびすべての東方の民はいなごのように数多く谷に沿つて伏していた。そのらくだは海べの砂のように多くて数えきれなかつた。三ギデオンがそこへ行つたとき、ある人がその仲間に夢を語つていた。その人は言つた、「わたしは夢を見た。大麦のパン一つがミデアンの陣中にころがつてきて、天幕に達し、それを打ち倒し、くつがえしたので、天幕は倒れ伏した」。四仲間が答えて言つた、「それはイスラエルの人、ヨアシの子ギデオンのつるぎにちがいない。神はミデアンとすべての軍勢を彼の手にわたされるのだ」。

五ギデオンは夢の物語とその解き明かしとを聞いたので、礼拝し、イスラエルの陣営に帰り、そして言つた、「立てよ、主はミデアンの軍勢をあなたがたの手にわたされる」。一六そして彼は三百人を三組に分け、手に手にラツパと、からつぽとを取ら

せ、つぽの中にたいまつをとませ、一七彼らに言つた、「わたしを見て、わたしのするようにしなさい。わたしが敵陣のはずれに達したとき、あなたがたもわたしのするようにしなさい。一八わたしと共にいる者がみなラツパを吹くと、あなたがたもまたすべての陣営の四方でラツパを吹き、『主のためだ、ギデオンのためだ』と言いなさい」。

一九こうしてギデオンと、彼と共にいた百人の者が、中更の初めに敵陣のはずれに行つてみると、ちょうど番兵を交代した時であつたので、彼らはラツパを吹き、手に携えていたつぽを打ち砕いた。二〇すなわち三組の者がラツパを吹き、つぽを打ち砕き、左の手にはたいまつをとり、右の手にはラツパを持つてそれを吹き、「主のためのつるぎ、ギデオンのためのつるぎ」と叫んだ。二三しておのおのその持ち場に立ち、敵陣を取り囲んだので、敵軍はみな走り、大声をあげて逃げ去つた。二三三百人のものがラツパを吹くと、主は敵軍をしてみな互に同志打ちさせられたので、敵軍はゼレラの方、ベテシッタおよびアベルメホラの境、タバテの近くまで逃げ去つた。三三イスラエルの人々はナフタリ、アセルおよび全マナセから集まつてきて、ミデアンびとを追撃した。

三四ギデオンは使者をあまねくエフライムの山地につかわし、「下つてきて、ミデアンびとを攻め、ベタバラに至るまでの流れを取り、またヨルダンをも取れ」と言わせた。そこでエフライム

の人々はみな集まつてきて、ベタバラに至るまでの流れを取り、またヨルダンをも取った。三五 彼らはまたミデアンびとのふたりの君オレブとゼエブを捕え、オレブをオレブ岩のほとりで殺し、ゼエブをゼエブの酒ぶねのほとりで殺した。またミデアンびとを追撃し、オレブとゼエブの首を携えてヨルダンの向こうのギデオンのもとへ行つた。

第八章

「エフライムの人々はギデオンに向かい「あなたが、ミデアンびとと戦うために行かれたとき、われわれを呼ばれなかったが、どうしてそういうことをされたのですか」と言つて激しく彼を責めた。ニギデオンは彼らに言つた、「今わたしのした事は、あなたがたのした事と比べものになりましようか。エフライムの拾ひ集めた取り残りのぶどうはアビエゼルの収穫したぶどうにもまさるではありませんか。ミ神はミデアンの君オレブとゼエブをあなたがたの手にわたされしました。わたしのなし得た事は、あなたがたのした事と比べものになりましようか」。ギデオンがこの言葉を述べると、彼らの憤りは解けた。

四ギデオンは自分に従つていた三百人と共にヨルダンに行つてこれを渡り、疲れながらもなお追撃したが、五 彼はスコテの人々に言つた、「どうぞわたしに従っている民にパンを与えてくだ

さい。彼らが疲れているのに、わたしはミデアンの王ゼバとザルムンナを追撃しているのですから」。ハスコテのつかさたちは言つた、「ゼバとザルムンナは、すでにあなたの手のうちにあるのですか。われわれはどうしてあなたの軍勢にパンを与えねばならないのですか」。セギデオンは言つた、「それならば主がわたしの手にゼバとザルムンナをわたされるとき、わたしは野のいばらと、おどろをもつて、あなたがたの肉を打つであらう」。ハそしてギデオンはそこからペヌエルに上り、同じことをペヌエルの人々に述べると、彼らもスコテの人々が答えたように答えたので、九ペヌエルの人々に言つた、「わたしが安らかに歸つてきたとき、このやぐらを打ちこわすであらう」。

一〇 さてゼバとザルムンナは軍勢おおよそ一万五千人を率いて、カルコルにいた。これは皆、東方の民の全軍のうち生き残つたもので、戦死した者は、つるぎを帯びているものが十二万人あつた。ニギデオンはノバとヨグベハの東の隊商の道を上つて、敵軍の油断しているところを撃つた。ニゼバとザルムンナは逃げたが、ギデオンは追撃して、ミデアンのふたりの王ゼバとザルムンナを捕え、その軍勢をことごとく撃ち敗つた。

一三 こうしてヨアシの子ギデオンはヘレスの坂をとおつて戦いから帰り、一四 スコテの若者ひとりを捕えて、尋ねたところ、彼はスコテのつかさたち及び長老たち七十七人の名をギデオンのために書きしるした。一五 ギデオンはスコテの人々のところ

へ行つて言った、「あなたがたがかつて『ゼバとザルムンナはすでにあなたの手のうちにあるのか。われわれはどうしてあなたの疲れた人々にパンを与えねばならないのか』と言って、わたしをのしつたそのゼバとザルムンナを見なさい」。一六そして彼は、その町の長老たちを捕え、野のいばらと、おどろとを取り、それをもってスコテの人々を懲らし、一七またパヌエルのやぐらを打ちこわして町の人々を殺した。

一八そしてギデオンはゼバとザルムンナに言った、「あなたがたがタボルで殺したのは、どんな人々であつたか」。彼らは答えた、「彼らはあなたに似てみな王子のように見えました」。一九ギデオンは言った、「彼らはわたしの兄弟、わたしの母の子たちだ。主は生きておられる。もしあなたがたが彼らを生かしておいたならば、わたしはあなたがたを殺さないのだが」。二〇そして長子エテルに言った、「立つて、彼らを殺しなさい」。しかしその若者はなお年が若かつたので、恐れてつるぎを抜かなかつた。二三そこでゼバとザルムンナは言った、「あなた自身が立つて、わたしたちを撃つてください。人によってそれぞれ力も違いますから」。ギデオンは立ちあがつてゼバとザルムンナを殺し、彼らのらくだの首に掛けてあつた月形の飾りを取つた。

三三イスラエルの人々はギデオンに言った、「あなたはミデアンの手からわれわれを救われたのですから、あなたも、あなたの子も孫もわれわれを治めてください」。三三ギデオンは彼らに言つ

た、「わたしはあなたがたを治めることはいたしません。またわたしの子もあなたがたを治めてはなりません。主があなたがたを治められます」。三四ギデオンはまた彼らに言った、「わたしはあなたがたに一つの願いがあります。あなたがたのぶんどつた耳輪をめぐめいわたしにください」。ミデアンびとはイシマエルびとであつたゆえに、金の耳輪を持つていたからである。三五彼らは答えた、「わたしどもは喜んでそれをさしあげます」。そして衣をひろげ、めぐめいぶんどつた耳輪をその中に投げ入れた。三六こうしてギデオンが求めて得た金の耳輪の重さは一七七百金シケルであつた。ほかに月形の飾りと耳飾りと、ミデアンの王たちの着た紫の衣およびらくだの首に掛けた首飾りなどもあつた。三七ギデオンはそれをもつて一つのエポデを作り、それを自分の町オフラに置いた。イスラエルは皆それを慕つて姦淫をおこなつた。それはギデオンとその家にとつて、わなとなつた。三八このようにしてミデアンはイスラエルの人々に征服されて、再びその頭をあげる事ができなかつた。そして国はギデオンの世にあるうち、四十年のあいだ太平であつた。三九ヨアシの子エルバアルは行つて自分の家に住んだ。四〇ギデオンは多くの妻をもつていたので、自分の子供だけで七十人あつた。四一シケムにいた彼のめかけがまたひとりの子を産んだので、アビメレクと名づけた。四二ヨアシの子ギデオンは高齡に達して死に、アビエゼルびとのオフラにある父ヨアシの墓に

葬^{ほうむ}られた。

三三 ギデオンが死ぬと、イスラエルの人々はまたバアルを慕^{した}つて、これと姦淫^{かんいん}を行い、バアル・ベリテを自分たちの神とした。三四 すなわちイスラエルの人々は周囲^{しゅうい}のもろの敵の手から自分たちを救^{すく}われた彼らの神、主を覚え、三五 またエルバアルすなわちギデオンがイスラエルのためにしたもろの善行^{ぜんこう}に応^{おう}じて彼の家族に親切^{しんせつ}をつくすこともしなかった。

第九章

一 さてエルバアルの子アビメレクはシケムに行き、母の身内^{みうち}の人たちのもとに行つて、彼らと母の父の家^{いへ}の一族^{いちぞく}に言つた、二 『どうぞ、シケムのすべての人々の耳^{みみ}に告^つげてください、『エルバアルのすべての子七十人^{こにん}であな^{おき}がたを治めるのと、ただひとりであな^{おき}がたを治めるのと、どちらがよいか。わたしがあな^{おき}がたの骨肉^{こつにく}であることを覚えてください』と。三 そこで母の身内^{みうち}の人たちがアビメレクに代^{かわ}つてこれらの言葉^{ことば}をことごとくシケムのすべての人々の耳^{みみ}に告^つげると、彼らは心をアビメレクに傾^{かたむ}け、『彼はわれわれの兄弟だ』と言^いつて、四 バアル・ベリテの宮^{みや}から銀七十シケルを取^とつて彼に与^{あた}えた。アビメレクはそれをもつて、やくぎのならず者を雇^{やと}つて自分に従^{したが}わせ、五 オフラにある父の家^{いへ}に行^いつて、エルバアルの子で、自分の兄弟^{きょうだい}である七

十人を、一つの石^{いし}の上^{うへ}で殺^{ころ}した。ただしエルバアルの末^{すえ}の子ヨタムは身を隠^{かく}したので生き残^{のこ}つた。六 そこでシケムのすべての人々とベテミロのすべての人々は集^{あつ}まり、行^いつてシケムにある石^{いし}の柱^{はしら}のかたわらのテレビンの木^きのも^もとで、アビメレクを立てて王^{おう}とした。

七 このことをヨタムに告^つげる者^{もの}があつたので、ヨタムは行^いつてゲリジム山^{やま}の頂^{いただき}に立^たち、大声^{おほい}に叫^{こゑ}んで彼らに言^いつた、『シケムの人々よ、わたしに聞きなさい。そうすれば神^{かみ}はあなたがたに聞^きかれるでしょう。八 ある時^{とき}、もろもろの木^きが自分^{じぶん}たちの上^{うへ}に王^{おう}を立てようと出^でて行^いつてオリブの木^きに言^いつた、『わたしたちの王^{おう}になつてください』。九 しかしオリブの木^きは彼らに言^いつた、『わたしはどうして神^{かみ}と人とをあがめるために用^{もち}いられるわたしの油^{あぶら}を捨^すてて行^いつて、もろもろの木^きを治^{おさ}めることができましょう』。一〇 もろもろの木^きはまたいちじくの木^きに言^いつた、『きてわたしたちの王^{おう}になつてください』。一一 しかしいちじくの木^きは彼らに言^いつた、『わたしはどうしてわたしの甘味^{かんみ}と、わたしの良^よい果実^{かじつ}とを捨^すてて行^いつて、もろもろの木^きを治^{おさ}めることができましょう』。一二 もろもろの木^きはまたぶどうの木^きに言^いつた、『きてわたしたちの王^{おう}になつてください』。一三 しかし、ぶどうの木^きは彼らに言^いつた、『わたしはどうして神^{かみ}と人とを喜^{よろこ}ばせるわたしのぶどう酒^{しゅ}を捨^すてて行^いつて、もろもろの木^きを治^{おさ}めることができましょう』。一四 そこですべての木^きはいばらに言^いつた、『きてわたしたちの王^{おう}に

なつてください。一五 いばらはもろもろの木に言った、『あなたがたが真実にわたしを立てて王にするならば、きてわたしの陰に難を避けなさい。そうしなければ、いばらから火が出てレバノンの香柏を焼きつくすでしょう。』

一六 あなたがたがアビメレクを立てて王にしたことは、真実と敬意をもつてしたものです。あなたがたはエルバアルとその家をよく扱い、彼のおこないに応じてしたのです。一七 わたしの父はあなたがたのために戦い、自分の命を投げ出して、あなたがたをミデアンの手から救い出したのに、一八 あなたがたは、きょう、わたしの父の家に反抗して起り、その子七十人を一つの石の上で殺し、その腰元の子アビメレクをあなたがたの身内の者であるゆえに立てて、シケムの人々の王にしました。一九 あなたがたが、きょう、エルバアルとその家になされたことが真実と敬意をもつてしたものであるならば、アビメレクのために喜びなさい。彼もまたあなたがたのために喜ぶでしょう。二〇 しかし、そうでなければ、アビメレクから火が出て、シケムの人々とベテミロとを焼きつくし、またシケムの人々とベテミロからも火が出てアビメレクを焼きつくすでしょう。二一 こうしてヨタムは走って逃げ去り、ベエルに行き、兄弟アビメレクの顔をさけてそこに住んだ。

二二 アビメレクは三年の間イスラエルを治めたが、二三 神はアビメレクとシケムの人々の間に悪霊をおくられたので、シケムの

人々はアビメレクを欺くようになった。二四 これはエルバアルの七十人が受けた暴虐と彼らの血が、彼らを殺した兄弟アビメレクの上と、彼の手を強めてその兄弟を殺させたシケムの人々の上とに報いとなつてきたのである。二五 シケムの人々は彼に敵して待ち伏せする者を山々の頂におき、すべてその道を通り過ぎる者を略奪させた。このことがアビメレクに告げ知らされた。

二六 さてエベデの子ガアルはその身内の人々と一緒にシケムに移住したが、シケムの人々は彼を信用した。二七 人々は畑に出てぶどうを取り入れ、それを踏み絞つて祭をし、神の宮に行つて飲み食いしてアビメレクをのろつた。二八 そしてエベデの子ガアルは言った、『アビメレクは何ものか。シケムのわれわれは何ものなれば彼に仕えなければならないのか。エルバアルの子とその役人ゼブルはシケムの先祖ハモルの一族に仕えたではないか。われわれはどうして彼に仕えなければならないのか。二九 ああ、この民がわたしの手の下にあつたらよいのだが。そうすればわたしはアビメレクをやめさせ、アビメレクに向かって『おまえの軍勢を増して出てこい』と言うであらう。』

三〇 町のつかさゼブルはエベデの子ガアルの言葉を聞いて怒りを発し、三一 使者をアルマにおけるアビメレクにつかわして言わせた、『エベデの子ガアルとその身内の人々がシケムにきて、町を騒がせ、あなたにそむかせようとしています。三二 それであなた

と、あなたと共にいる人々が夜のうちにやって、野に身を伏せ、
 三朝になつて、日ののぼるとき、早く起き出て町を襲うならば、
 ガアルと、彼と共にいる民は出てきて、あなたに抵抗するでしょう。その時あなたは機を得て、彼らを撃つことができるでしょう。

三アビメレクと、彼と共にいたすべての民は夜のうちに起き出て、四組に分れ、身を伏せてシケムをうかがつた。三五エベデの子ガアルが出て、町の門の入口に立つたとき、アビメレクと、彼と共にいた民が身を伏せていたところから立ちあがつたので、三六ガアルは民を見てゼブルに言つた、「ごらんない。民が山々の頂からおりてきます」。ゼブルは彼に言つた、「あなたは山々の影を人のように見るのです」。モガアルは再び言つた、「ごらんない。民が国の中央部からおりてきます。一組は古い師のテレピンの木の方からきます」。三八ゼブルは彼に言つた、「あなたがかつて『アビメレクは何ものか。われわれは何ものなれば彼に仕えなければならないのか』と言つたあなたの口は今どこにありますか。これはあなたが侮つた民ではありませんか。今、出て彼らと戦いなさい」。三九そこでガアルはシケムの人々を率い、出てアビメレクと戦つたが、四〇アビメレクは彼を追つたので、ガアルは彼の前から逃げた。そして傷つき倒れる者が多く、門の入口にまで及んだ。四一こうしてアビメレクは引き続いてアルマにいたが、ゼブルはガアルとその身内の人々を追ひ

出してシケムにおらせなかつた。

四二翌日、民が畑に出ると、そのことがアビメレクに聞えた。四三アビメレクは自分の民を率い、それを三組に分け、野に身を伏せて、うかがっていると、民が町から出てきたので、たちあがつてこれを撃つた。四四アビメレクと、彼と共にいた組の者は襲つて行つて、町の門の入口に立ち、他の二組は野にいたすべてのものを襲つて、それを殺した。四五アビメレクはその日、終日、町を攻め、ついに町を取つて、そのうちの民を殺し、町を破壊して、塩をまいた。

四六シケムのやぐらの人々は皆これを聞いて、エルベリテの宮の塔にはいった。四七シケムのやぐらの人々が皆集まつたことがアビメレクに聞えたので、四八アビメレクは自分と一緒にいた民をことごとく率いてザルモン山にのぼり、アビメレクは手におのを取つて、木の枝を切り落とし、それを取りあげて自分の肩にのせ、一緒にいた民にむかつて言つた、「あなたがたはわたしが見たことを見たとおりに急いでしなさい」。四九そこで民もまた皆おのおのその枝を切り落とし、アビメレクに従つて行つて、枝を塔によせかけ、塔に火をつけて彼らを攻めた。こうしてシケムのやぐらの人々もまたことごとく死んだ。男女おおよそ一千人であつた。

五〇ついでアビメレクはテベツに行き、テベツに向かつて陣を張り、これを攻め取つたが、五一町の中に一つの堅固なやぐらが

「三しかしあなたがたはわたしを捨てて、ほかの神々に仕えた。それゆえ、わたしはかさねてあなたがたを救わないであろう。――四あなたがたが選んだ神々に行つて呼ばわり、あなたがたの悩みの時、彼らにあなたがたを救わせるがよい」。――五イスラエルの人々は主に言つた、「わたしたちは罪を犯しました。なんでもあなたが良いと思われれることをしてください。ただどうぞ、きよう、わたしたちを救つてください」。――六そうして彼らは自分たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた。それで主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなつた。――七時にアンモンの人々は召集されてギレアデに陣を取つたが、イスラエルの人々は集まつてミヅパに陣を取つた。――八その時、民とギレアデの君たちとは互に言つた、「だれがアンモンの人々に向かつて戦いを始めるか。その人はギレアデのすべての民のかしらとなるであろう」。

第二章

――さてギレアデびとエフタは強い勇士であつたが遊女の子で、エフタの父はギレアデであつた。ニギレアデの妻も子供を産んだが、その妻の子供たちが成長したとき、彼らはエフタを追い出して彼に言つた、「あなたはほかの女の産んだ子だから、わたしたちの父の家を継ぐことはできません」。ミそれでエフタはそ

の兄弟たちのもとから逃げ去つて、トブの地に住んでいると、やくざ者がエフタのもとに集まつてきて、彼と一緒に出かけ略奪を事としていた。

四日がたつて後、アンモンの人々はイスラエルと戦うことになり、五アンモンの人々がイスラエルと戦つたとき、ギレアデの長老たちは行つてエフタをトブの地から連れてこようとして、六エフタに言つた、「きて、わたしたちの大将になつてください。そうすればわたしたちはアンモンの人々と戦うことができます」。セエフタはギレアデの長老たちに言つた、「あなたがたはわたしを憎んで、わたしの父の家から追い出したではありませんか。しかるに今あなたがたが困っている時とはいえ、わたしのところに来るとはどういうわけですか」。ハギレアデの長老たちはエフタに言つた、「それでわたしたちは今、あなたに帰つたのです。どうぞ、わたしたちと一緒に言つて、アンモンの人々と戦つてください。そしてわたしたちとギレアデに住んでいるすべてのもののかしらになつてください」。九エフタはギレアデの長老たちに言つた、「もしあなたがたが、わたしをつれて帰つて、アンモンの人々と戦わせるとき、主が彼らをわたしにわたされるならば、わたしはあなたがたのかしらとなりましょう」。一〇ギレアデの長老たちはエフタに言つた、「主はあなたとわたしたちの間の証人です。わたしたちは必ずあなたの言われるとおりにしましょう」。二そこでエフタはギレアデの長老

たちと一緒に（いっしょ）行（い）った。民（たみ）は彼（かれ）を立てて自分（じぶん）たちのかしらとし、大將（たいしょう）とした。それでエフタはミツパで、自分（じぶん）の言葉（ことば）をことごとく主（しゅ）の前に述べた。

三（さん）かくてエフタはアンモンの人々（ひとびと）の王（おう）に使者（ししや）をつかわして言（い）った、「あなたはわたしとなんのかかわりがあつて、わたしのところへ攻（せ）めてきて、わたしの国（くに）と戦（たたか）おうとするのですか」。三（さん）アンモンの人々（ひとびと）の王（おう）はエフタの使者（ししや）に答（こた）えた、「昔（むかし）、イスラエルがエジプトから上（のぼ）つてきたとき、アルノンからヤボクに及（およ）び、またヨルダンに及（およ）わたしの国（くに）を奪（うば）い取（と）つたからです。それゆえ今（いま）、穏（おだ）やかにそれを返（かえ）しなさい」。四（よ）エフタはまた使者（ししや）をアンモンの人々（ひとびと）の王（おう）につかわして、「五（い）言（い）わせた、「エフタはこう申（もう）します、『イスラエルはモアブの地（ち）も、またアンモンの人々（ひとびと）の地（ち）も取（と）りませんでした。二（に）イスラエルはエジプトから上（のぼ）つてきたとき、荒野（あらの）をとつて紅海（こうかい）にいたり、カデシにきました。一（いち）そしてイスラエルは使者（ししや）をエドムの王（おう）につかわして「どうぞ、われわれにあなたの国（くに）を通（とお）らせてください」と言（い）わせましたが、エドムの王（おう）は聞きいれませんでした。また同じ（おな）ように人（ひと）をモアブの王（おう）につかわしたが、彼（かれ）も承諾（しやうだく）しなかつたので、イスラエルはカデシにとどまりました。一（いち）それから荒野（あらの）をとつて、エドムの地（ち）とモアブの地（ち）を回（まわ）り、モアブの地（ち）の東部（とうぶ）に達（たつ）し、アルノンの向（む）こうに宿営（しゆくえい）しましたがモアブの領域（りやういき）には、はいりませんでした。アルノンはモアブの境（さかい）だからです。一（いち）次にイスラエルは

ヘシボンの王（おう）すなわちアモリびとの王（おう）シホンに使者（ししや）をつかわし、シホンに向（む）かつて「どうぞ、われわれにあなたの国（くに）をとつて、われわれの目的（もくぎ）地（ち）へ行（い）かせてください」と言（い）わせました。二（に）ところがシホンはイスラエルを信（しん）ぜず、その領域（りやういき）を通（とお）らせないばかりか、かえつてすべての民（たみ）を集（あつ）めてヤハツに陣（じん）を取り、イスラエルと戦（たたか）いましたが、三（さん）イスラエルの神（かみ）、主（しゅ）はシホンとそのすべての民（たみ）をイスラエルの手（て）にわたされたので、イスラエルは彼（かれ）らを撃（う）ち破（やぶ）つて、その土地（とち）に住（す）んでいたアモリびとの地（ち）をことごとく占領（せんりよう）し、三（さん）アルノンからヤボクまでと、荒野（あらの）からヨルダンまで、アモリびとの領域（りやういき）をことごとく占領（せんりよう）しました。三（さん）このようにイスラエルの神（かみ）、主（しゅ）はその民（たみ）イスラエルの前（まえ）からアモリびとを追（お）い払（は）われたのに、あなたはそれを取（と）ろうとするのですか。二（に）あなたは、あなたの神（かみ）ケモシがあなたに取（と）らせるものを取（と）らないのですか。われわれはわれわれの神（かみ）、主（しゅ）がわれわれの前（まえ）から追（お）い払（は）われたものの土地（とち）を取る（と）のです。二（に）あなたはモアブの王（おう）チツポルの子（こ）バラクにまさる者（もの）ですか。バラクはかつてイスラエルと争（あらそ）つたことがありますか。かつて彼（かれ）らと戦（たたか）つたことがありますか。三（さん）イスラエルはヘシボンとその村里（むら）に住（す）み、またアロエルとその村里（むら）およびアルノンの岸（きし）に沿（そ）うすべての町（まち）々に住（す）むこと三（さん）百年（ねん）になりますが、あなたがたはどうしてその間（かん）にそれを取（と）りもどさなかつたのですか。二（に）わたしはあなたに何も悪い事（こと）をしたこともないのに、あなたはわ

たしと戦^{たたか}つて、わたしに害^{がい}を加えようします。審判者^{しんぱんしや}であられる主よ、どうぞ、きよう、イスラエルの人々とアンモンの人々との間^{あいだ}をおさばきください」。二八しかしアンモンの人々の王はエフタが言いつかわした言葉^{ことば}をききいれなかった。

二九時に主の霊^{れい}がエフタに臨^{のぞ}み、エフタはギレアデおよびマナセをとつて、ギレアデのミツパに行き、ギレアデのミツパから進んでアンモンの人々のところに行つた。三〇エフタは主に誓願^{せいがん}を立てて言つた、「もしあなたがアンモンの人々をわたしの手にわたされるならば、三わたしはアンモンの人々に勝つて帰るときに、わたしの家の戸口から出てきて、わたしを迎えるものはだれでも主のものとし、その者を燔祭^{はんさい}としてささげましょう」。三エフタはアンモンの人々のところに進んで行つて、彼らと戦つたが、主は彼らをエフタの手にわたされたので、三アロエルからミンニテの附近まで、二十の町を撃ち敗り、アベル・ケラミムに至るまで、非常に多くの人を殺した。こうしてアンモンの人々はイスラエルの人々の前に攻め伏せられた。

三二やがてエフタはミツパに帰り、自分の家に来ると、彼の娘が鼓^{つづみ}をもち、舞い踊つて彼を迎えた。彼女はエフタのひとり子で、ほかに男子も女子もなかった。三三エフタは彼女を見ると、衣を裂いて言つた、「ああ、娘よ、あなたは全くわたしを打ちのめした。わたしを悩ますものとなった。わたしが主に誓つたのだから改めることはできないのだ」。三六娘は言つた、「父よ、あ

なたは主に誓われたのですから、主があなたのために、あなたの敵アンモンの人々に報復された今、あなたが言われたとおりにわたしにしてください」。三七娘はまた父に言つた、「どうぞ、この事をわたしにさせてください。すなわち二か月の間わたしをゆるし、友だちと一緒に、山々をゆきめぐり、わたしの処女であることを嘆かせてください」。三八エフタは「行きなさい」と言つて、彼女を二か月の間出してやつた。彼女は友だちと一緒に、山の上で自分の処女であることを嘆いたが、三九二か月の後、父のもとに帰つてきたので、父は誓つた誓願^{せいがん}のとおりになつた。彼女はおこなつた。彼女はついに男を知らなかつた。四〇これによつて年々イスラエルの娘たちは行つて、年に四日ほどギレアデびとエフタの娘のために嘆くことがイスラエルのならわしとなつた。

第二章

一エフライムの人々は集まつてザボンに行き、エフタに言つた、「なぜあなたは進んで行つてアンモンの人々と戦いながら、われわれを招いて一緒に行かせませんでしたか。われわれはあなたの家に火をつけてあなたと一緒に焼いてしまします」。二エフタは彼らに言つた、「かつてわたしとわたしの民がアンモンの人々と大いに争つたとき、あなたがたを呼んだが、あなたがたはわ

たしを彼らの手から救つてくれませんでした。三 あなたがたが救つてくれないのを見たから、わたしは命がけでアンモンの人々のところへ攻めて行きますと、主は彼らをわたしの手にわたされたのです。どうしてあなたがたは、きよう、わたしのところに上つてきて、わたしと戦おうとするのですか」。四 そこでエフタはギレアデの人々をことごとく集めてエフライムと戦い、ギレアデの人々はエフライムを撃ち破った。これはエフライムが「ギレアデびとよ、あなたがたはエフライムとマナセのうちにいるエフライムの落人だ」と言つたからである。五 そしてギレアデびとはエフライムに渡るヨルダンの渡し場を押えたので、エフライムの落人が「渡らせてください」と言うとき、ギレアデの人々は「あなたはエフライムびとですか」と問い、その人がもし「そうではありません」と言うならば、六 またその人に「では『シボレテ』と言つてごらんなさい」と言い、その人がそれを正しく発音することができないで「セボレテ」と言うときは、その人を捕えて、ヨルダンの渡し場で殺した。その時エフライムびとの倒れたものは四万二千人であつた。

七 エフタは六年の間イスラエルをさばいた。ギレアデびとエフタはついに死んで、ギレアデの自分の町に葬られた。

八 彼の後にベツレヘムのイブザンがイスラエルをさばいた。九 彼に三十人のむすこがあつた。また三十人の娘があつたが、それを自分の氏族以外の者にとつがせ、むすこたちのためには三

十人の娘をほかからめとつた。彼は七年の間イスラエルをさばいた。一〇 イブザンはついに死んで、ベツレヘムに葬られた。二 彼の後にゼブルンびとエロンがイスラエルをさばいた。彼は十年の間イスラエルをさばいた。三 ゼブルンびとエロンはついに死んで、ゼブルンの地のアヤロンに葬られた。

四 彼の後にピラトンびとヒレルの子アブドンがイスラエルをさばいた。五 彼に四十人のむすこ及び三十人の孫があり、七十頭のろばに乗つた。彼は八年の間イスラエルをさばいた。六 ピラトンびとヒレルの子アブドンはついに死んで、エフライムの地のアマレクびとの山地にあるピラトンに葬られた。

第二三章

イスラエルの人々がまた主の前に悪を行つたので、主は彼らを四十年の間ペリシテびとの手にわたされた。

二 ここにダンびとの氏族の者で、名をマノアというゾラの人があつた。その妻はうまずめで、子を産んだことがなかつた。三 主の使がその女に現れて言つた、「あなたはうまずめで、子を産んだことがあります。しかし、あなたは身ごもつて男の子を産むでしょう。四 それであなたは氣をつけて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。五 あなたは身ごもつて男の子を産むでしょう。その

頭にかみそりをあててはなりません。その子は生れた時から神にささげられたナジルびとです。彼はベリシテびとの手からイスラエルを救い始めるでしょう」。六そこでその女はきて夫に言った、「神の人がわたしのところにきました。その顔かたちは神の使の顔かたちのように、たいそう恐ろしゅうございました。わたしはその人が、どこからきたのか尋ねませんでしたが、その人もわたしに名を告げませんでした。しかしその人はわたしに『あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。それであなたはぶどう酒または濃い酒を飲むではなりません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。その子は生れた時から死ぬ日まで神にささげられたナジルびとです』と申しました」。

八そこでマノアは主に願ひ求めて言った、「ああ、主よ、どうぞ、あなたがさきにつかわされた神の人をもう一度わたしたちに臨ませて、わたしたちがその生れる子になすべきことを教えさせてください」。九神がマノアの願ひを聞かれたので、神の使は女が畑に座していた時、ふたたび彼女に臨んだ。しかし夫マノアは一緒にいなかった。一〇女は急ぎ走って行って夫に言った、「さきごろ、わたしに臨まれた人がまたわたしに現れました」。一マノアは立つて妻のあとについて行き、その人のもとに行つて言った、「あなたはかつてこの女にお告げになったおかたですか」。その人は言った、「そうです」。二マノアは言った、「あなたの言われたことが事実となったとき、その子の育て方および

これになすべき事はなんでしょうか」。三主の使はマノアに言った、「わたしがさきに女に言ったことは皆、守らせなければなりません。四すなわちぶどうの木から産するものはすべて食べてはなりません。またぶどう酒と濃い酒を飲むではなりません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」。

五マノアは主の使に言った、「どうぞ、わたしたちに、あなたを引き留めさせ、あなたのために子やぎを備えさせてください」。六主の使はマノアに言った、「あなたがわたしを引き留めても、わたしはあなたの食物をたべません。しかしあなたが燔祭を備えようとなさるのであれば、主にそれをささげなさい」。マノアは彼が主の使であるのを知らなかつたからである。七マノアは主の使に言った、「あなたの名はなんといいますか。あなたの言われたことが事実となったとき、わたしたちはあなたをあげましょう」。八主の使は彼に言った、「わたしの名は不思議です。どうしてあなたはそれをたずねるのですか」。九そこでマノアは子やぎと素祭とをとり、岩の上でそれを主にささげた。主は不思議なことをされ、マノアとその妻はそれを見た。一〇すなわち炎が祭壇から天にあがったとき、主の使は祭壇の炎のうちにあつてのぼつた。マノアとその妻は見て、地にひれ伏した。三主の使はふたたびマノアとその妻に現れなかつた。その時マノアは彼が主の使であることを知つた。四マノアは妻に向

かつて言った、「わたしたちは神を見たから、きつと死ぬであらう」。三妻は彼に言った、「主がもし、わたしたちを殺そうと思われたのならば、わたしたちの手から燔祭と素祭をおうけにならなかつたでしょう。またこれらのすべての事をわたしたちにお示しになるはずはなく、また今わたしたちにこのような事をお告げにならなかつたでしょう」。二四やがて女は男の子を産んで、その名をサムソンと呼んだ。その子は成長し、主は彼を恵まれた。二五主の霊はゾラとエシタオルの間のマハネダンにおいて初めて彼を感動させた。

第一四章

一サムソンはテムナに下つて行き、ペリシテびとの娘で、テムナに住むひとりの女を見た。二彼は帰つてきて父母に言った、「わたしはペリシテびとの娘で、テムナに住むひとりの女を見ました。彼女をめぐつてわたしの妻にしてください」。三父母は言った、「あなたが行って、割礼をうけないペリシテびとのうちから妻を迎えようとするのは、身内の娘たちのうちに、あるいはわたしたちのすべての民のうちに女がないためなのですか」。しかしサムソンは父に言った、「彼女をわたしにめぐつてください。彼女がわたしの心にかないますから」。

四父母はこの事が主から出たものであることを知らなかつた。

サムソンはペリシテびとを攻めようと、おりをうかがっていたからである。そのころペリシテびとはイスラエルを治めていた。

五かくてサムソンは父母と共にテムナに下つて行った。彼がテムナのぶどう畑に着くと、一頭の若いししがほえたけつて彼に向かつてきた。六時に主の霊が激しく彼に臨んだので、彼はあたかも子やぎを裂くようにそのししを裂いたが、手にはなんの武器も持っていなかつた。しかしサムソンはそのしたことを父にも母にも告げなかつた。七サムソンは下つて行って女と話し合つたが、女はサムソンの心になつた。八日がたつて後、サムソンは彼女をめぐろうとして帰つたが、道を転じて、かのししのしかばねを見ると、ししのからだに、はちの群れと、蜜があつた。九彼はそれをかきあつめ、手にとつて歩きながら食べ、父母のもとに帰つて、彼らに与えたので、彼らもそれを食べた。しかし、ししのからだからその蜜をかきあつめたことは彼らに告げなかつた。

一〇そこで父が下つて、女のもとに行つたので、サムソンはそこにあるまいを設けた。そうすることは花婿のならわしであつたからである。二人々はサムソンを見ると、三十人の客を連れてきて、同席させた。三サムソンは彼らに言った、「わたしはあなたがたに一つのなぞを出しましょう。あなたがたがもし七日のふるまいのうちにそれを解いて、わたしに告げることができた

なら、わたしはあなたがたに亜麻の着物三十と、晴れ着三十をさしあげましょう。二三しかしあなたがたが、それをわたしに告げることができなければ、亜麻の着物三十と晴れ着三十をわたしにくれなければなりません。彼らはサムソンに言った、「なぞを出しなさい。わたしたちはそれを聞きましょう」。一四サムソンは彼らに言った、

「食らう者から食い物が出、
強い者から甘い物が出た」。

彼らは三日のあいだなぞを解くことができなかった。

一五四日目になって、彼らはサムソンの妻に言った、「あなたの夫を説きすめて、なぞをわたしたちに明かすようにしてください。そうしなければ、わたしたちは火をつけてあなたとあなたの父の家を焼いてしまいます。あなたはわたしたちの物を取るために、わたしたちを招いたのですか」。一六そこでサムソンの妻はサムソンの前に泣いて言った、「あなたはただわたしを憎むだけで、愛してくれません。あなたはわたしの国の人々になぞを出して、それをわたしに解き明かしませんでした」。サムソンは彼女に言った、「わたしは自分の父にも母にも解き明かさなかつた。どうしてあなたに解き明かせよう」。一七彼女は七日のふるまいの間、彼の前に泣いていたが、七日目になって、サムソンはついに彼女に解き明かした。ひどく彼に迫つたからである。そこで彼女はなぞを自分の国の人々にあかした。一八七日

目になって、日の没する前に町の人々はサムソンに言った、

「蜜より甘いものに何があるう」。

ししより強いものに何があるう」。

サムソンは彼らに言った、

「わたしの若い雌牛で耕さなかつたなら、
わたしのなぞは解けなかつた」。

一九この時、主の霊が激しくサムソンに臨んだので、サムソンはアシケロンに下つて行つて、その町の者三千人を殺し、彼らからはぎ取つて、かのなぞを解いた人々に、その晴れ着を与え、激しく怒つて父の家に帰つた。二〇サムソンの妻は花婿付添人であつた客の妻となつた。

第一章

一日がたつて後、麦刈の時にサムソンは子やぎを携えて妻をおとずれ、「へやにはいつて、妻に会いましょう」と言つたが、妻の父ははいることを許さなかつた。二そして父は言つた、「あなたが確かに彼女をきらつたに相違ないと思つたので、わたしは彼女をあなたの客であつた者にやりました。彼女の妹は彼女よりもきれいでありませんか。どうぞ、彼女の代りに妹をめとつてください」。三サムソンは彼らに言つた、「今度はわたしがペリシテびとに害を加えても、彼らのことでは、わたしに罪がな

い」。四そこでサムソンは行って、きつね三百匹を捕え、たいまつをとり、尾と尾をあわせて、その二つの尾の間に一つのたいまつを結びつけ、五たいまつに火をつけて、そのきつねをペリシテビとのまだ刈らない麦の中に放し入れ、そのたばね積んだものと、まだ刈らないものを焼き、オリブ畑をも焼いた。六ペリシテビとは言った、「これはだれのしわざか」。人々は言った、「テムナびとの婿サムソンだ。そのしゅうとがサムソンの妻を取り返して、その客であつた者に与えたからだ」。そこでペリシテビとは上つてきて彼女とその父の家を火で焼き払つた。セサムソンは彼らに言った、「あなたがたがそんなことをするならば、わたしはあなたがたに仕返しせずにはおかない」。八そしてサムソンは彼らを、さんざんに撃つて大ぜい殺した。こうしてサムソンは下つて行って、エタムの岩の裂け目に住んでいた。

九そこでペリシテビとは上つてきて、ユダに陣を取り、レヒを攻めたので、一〇ユダの人々は言った、「あなたがたはどうしてわれわれのところに攻めのぼつてきたのですか」。彼らは言った、「われわれはサムソンを縛り、彼がわれわれにしたように、彼にするために上つてきたのです」。一一そこでユダの人々三千人がエタムの岩の裂け目下つて行って、サムソンに言った、「ペリシテビとはわれわれの支配者であることをあなたは知らないのですか。あなたはどうしてわれわれにこんな事をしたのですか」。サムソンは彼らに言った、「彼らがわたしにしたように、わ

たしは彼らにしたのです」。一二彼らはまたサムソンに言った、「われわれはあなたを縛つて、ペリシテビとの手にわたすために下つてきたのです」。サムソンは彼らに言った、「あなたがた自身はわたしを撃たないということを誓いなさい」。一三彼らはサムソンに言った、「いや、われわれはただ、あなたを縛つて、ペリシテビとの手にわたすだけです。決してあなたを殺しません」。彼らは二本の新しい綱をもつて彼を縛つて、岩からひきあげた。

一四サムソンがレヒにきたとき、ペリシテビとは声をあげて、彼に近づいた。その時、主の霊が激しく彼に臨んだので、彼の腕にかかつていた綱は火に焼けた亜麻のようになって、そのなわめが手から解けて落ちた。一五彼はろばの新しいあご骨一つを見つけたので、手を伸べて取り、それをもつて一千人を打ち殺した。一六そしてサムソンは言った、

「ろばのあご骨をもつて山また山を築き、

ろばのあご骨をもつて一千人を打ち殺した」。

一七彼は言い終ると、その手からあご骨を投げ捨てた。これがためにその所は「あご骨の丘」と呼ばれた。

一八時に彼はひどくかわきを覚えたので、主に呼ばわつて言った、「あなたはしもべの手をもつて、この大きな救を施されたのに、わたしは今、かわいて死に、割礼をうけないものの手に陥ろうとしています」。一九そこで神はレヒにあるくぼんだ所を裂か

れたので、そこから水が流れ出た。サムソンがそれを飲むと彼の霊はもとにかえつて元気づいた。それでその名を「呼ばわつた者の泉」と呼んだ。これは今日までレヒにある。二〇サムソンはベリシテびとの時代に二十年の間イスラエルをさばいた。

第一六章

一サムソンはガザへ行つて、そこでひとりの遊女を見、その女のところにはいった。二「サムソンがここに来た」と、ガザの人々に告げるものがあつたので、ガザの人々はその所を取り囲み、夜通し町の門で待ち伏せし、「われわれは朝まで待つて彼を殺そう」と言つて、夜通し静かにしていた。三サムソンは夜中まで寝たが、夜中に起きて、町の門のとびらと二つの門柱に手をかけて、貫の木もろともに引き抜き、肩に載せて、ヘブロンに向かいにある山の頂に運んで行つた。

四この後、サムソンはソレクの谷に居るデリラという女を愛した。五ペリシテびとの君たちはその女のところにきて言つた、「あなたはサムソンを説きすすめて、彼の大力はどこにあるのか、またわれわれはどうすれば彼に勝つて、彼を縛り苦しめることができるかを見つけないさい。そうすればわれわれはおの銀千百枚づつをあなたにさしあげましょう」。六そこでデリラはサムソンに言つた、「あなたの大力はどこにあるのか、またどう

すればあなたを縛つて苦しめることができるか、どうぞわたしに聞かせてください」。七サムソンは女に言つた、「人々がもし、かわいたことのない七本の新しい弓弦をもつてわたしを縛るなら、わたしは弱くなつてほかの人のようになるでしょう」。八そこでペリシテびとの君たちが、かわいたことのない七本の新しい弓弦を女に持つてきたので、女はそれをもつてサムソンを縛つた。九女はかねて奥のへやに人を忍ばせておいて、サムソンに言つた、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫つています」。しかしサムソンはその弓弦を、あたかも亜麻糸が火にあつて断たれるように断ち切つた。こうして彼の力の秘密は知れなかつた。

一〇デリラはサムソンに言つた、「あなたはわたしを欺いて、うそを言いました。どうしたらあなたを縛ることができるか、どうぞ今わたしに聞かせてください」。二サムソンは女に言つた、「もし人々がまだ用いたことのない新しい綱をもつて、わたしを縛るなら、弱くなつてほかの人のようになるでしょう」。三そこでデリラは新しい綱をとり、それをもつて彼を縛り、そして彼に言つた、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫つています」。時に人々は奥のへやに忍んでいたが、サムソンはその綱を糸のように腕から断ち落した。

三そこでデリラはサムソンに言つた、「あなたは今まで、わたしを欺いて、うそを言いましたが、どうしたらあなたを縛ることが

できるか、わたしに聞かせてください」。彼は女に言った、「あなたがもし、わたしの髪の毛七ふさを機縦糸と一緒に織つて、くぎでそれを留めておくならば、わたしは弱くなつてほかの人のようになるでしょう」。そこで彼が眠つたとき、デリラはサムソンの髪の毛、七ふさをとつて、それを機の縦糸に織り込み、四くぎでそれを留めておいて、彼に言った、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」。しかしサムソンは目をさまして、くぎと機縦糸とを引き抜いた。

二五そこで女はサムソンに言った、「あなたの心がわたしを離れているのに、どうして『おまえを愛する』と言うことができますか。あなたはすでに三度もわたしを欺き、あなたの大力がどこにあるかをわたしに告げませんでした」。二六女は毎日その言葉をもつて彼に迫り促したので、彼の魂は死ぬばかりに苦しんだ。二七彼はついにその心をことごとく打ち明けて女に言った、「わたしの頭にはかみそりを当てたことがあります。わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去つて弱くなり、ほかの人のようになるでしょう」。

二八デリラはサムソンがその心をことごとく打ち明けたのを見人をつかわしてペリシテびとの君たちを呼んで言った、「サムソンはその心をことごとくわたしに打ち明けましたから、今度こそ上つておいでなさい」。そこでペリシテびとの君たちは、銀を

携えて女のもとに上つてきた。一九女は自分のひざの上にサムソンを眠らせ、人を呼んで髪の毛、七ふさをそり落させ、彼を苦しめ始めたが、その力は彼を去つていった。二〇そして女が「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」と言つたので、彼は目をさまして言った、「わたしはいつものように出て行つて、からだをゆすろう」。彼は主が自分を去られたことを知らなかった。二三そこでペリシテびとは彼を捕えて、両眼をえぐり、ガザに引いて行つて、青銅の足かせをかけて彼をつないだ。こうしてサムソンは獄屋の中で、うすをひいていたが、三三その髪の毛はそり落された後、ふたたび伸び始めた。

三三さてペリシテびとの君たちは、彼らの神ダゴンに大いなる犠牲をささげて祝をしようと、共に集まつて言つた、「われわれの神は、敵サムソンをわれわれの手にわたされた」。三四民はサムソンを見て、自分たちの神をほめたたえて言つた、「われわれの神は、われわれの国を荒し、われわれを多く殺した敵をわれわれの手にわたされた」。三五彼らはまた心に喜んで言つた、「サムソンを呼んで、われわれのために戯れ事をさせよう」。彼らは獄屋からサムソンを呼び出して、彼らの前に戯れ事をさせた。彼らがサムソンを柱のあいだに立たせると、二六サムソンは自分の手をひいている若者に言つた、「わたしの手を放して、この家をささえている柱をさぐらせ、それに寄りかかせてください」。二七その家には男女が満ち、ペリシテびとの君たちも皆そ

ここにいた。また屋根の上には三千人ばかりの男女がいて、サムソンの戯れ事をするのを見ていた。

ニハサムソンは主に呼ばわって言った、「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテびとにあだを報いさせてください」。ニルそしてサムソンは、その家をささえている二つの中柱の一つを右の手に、一つを左の手にかかえて、身をそれに寄せ、三〇「わたしはペリシテびとと共に死のう」と言つて、力をこめて身をかがめると、家はその中にいた君たちと、すべての民の上に倒れた。こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった。ミヤがて彼の身内の人たちおよび父の家族の者がみな下つてきて、彼を引き取り、携え上つて、ゾラとエシタオルの間にある父マノアの墓に葬った。サムソンがイスラエルをさばいたのは二十年であつた。

第十七章

「ここにエフライムの山地の人で、名をミカと呼ぶものがあつた。ニ彼は母に言った、「あなたはかつて銀千百枚を取られたので、それをのろい、わたしにも話されましたが、その銀はわたしが持っています。わたしがそれを取ったのです」。母は言った、

「どうぞ主がわが子を祝福されますように」。ミルそして彼が銀千百枚を母に返したので、母は言った、「わたしはわたしの子のために一つの刻んだ像と、一つの鑄た像を造るためにその銀をわたしの手から主に献納します。それで今それをあなたに返ししましょう」。四ミカがその銀を母に返したので、母はその銀二百枚をとつて、それを銀細工人に与え、一つの刻んだ像と、一つの鑄た像を造らせた。その像はミカの家にあつた。五このミカという人は神の宮をもち、エポデとテラピムを造り、その子のひとりを立てて、自分の祭司とした。六そのころイスラエルには王がなかつたので、人々はおのおの自分の目の正しいと思うことを行つた。

セさてここにユダの氏族のもので、ユダのベツレヘムからきたひとりの若者があつた。彼はレビびとであつて、そこに寄留していたのである。ハこの人は自分の住むべきところを尋ねて、ユダのベツレヘムの町を去り、旅してエフライムの山地のミカの家に来た。九ミカは彼に言った、「あなたはどこからおいでになりましたか」。彼は言った、「わたしはユダのベツレヘムのレビびとですが、住むべきところを尋ねて旅をしているのです」。一〇ミカは言った、「わたしと一緒にいて、わたしのために父とも祭司ともなつてください。そうすれば年に銀十枚と衣服ひとそろいと食物とをさしあげましょう」。ニレビびとはついにその人と一緒に住むことを承諾した。そしてその若者は彼の子の

ひとりのようになつた。ニミカはレビびとであるこの若者を立てて自分の祭司としたので、彼はミカの家にいた。ニミそれでミカは言った、「今わたしはレビびとを祭司に持つようになつたので、主がわたしをお恵みくださることがわかりました」。

第一八章

一 そのころイスラエルには王がなかつた。そのころダンびとの部族はイスラエルの部族のうちにあつて、その日までまだ嗣業の地を得なかつたので自分たちの住むべき嗣業の地を求めていた。ニそれでダンの人々は自分の部族の総勢のうちから、勇者五人をゾラとエシタオルからつかわして土地をうかがい探らせた。すなわち彼らに言った、「行つて土地を探つてきなさい」。彼らはエフライムの山地に行き、ミカの家に着いて、そこに宿ろうとした。ニ彼らがミカの家に近づいたとき、レビびとである若者の声を聞きわけたので、身をめぐらしてそこにはいつて彼に言った、「だれがあなたをここに連れてきたのですか。あなたはここで何をしていますのですか。ここになんの用があるのですか」。四若者は彼らに言った、「ミカが、かようかようにしてわたしを雇つたので、わたしはその祭司となつたのです」。五彼らは言った、「どうぞ、神に伺つて、われわれが行く道にしあわせがあるかどうかを知らせてください」。六その祭司は彼らに言つ

た、「安心して行きなさい。あなたがたが行く道は主が見守つておられます」。

七そこで五人の者は去つてライシに行き、そこにいる民を見ると、彼らは安らかに住まい、その穏やかで安らかなことシドンびとのようであつて、この国には一つとして欠けたものがなく、富を持ち、またシドンびとと遠く離れており、ほかの民と交わることもがなかつた。八かくて彼らがゾラとエシタオルにおける兄弟たちのもとに帰つてくると、兄弟たちは彼らに言った、「いかがでしたか」。九彼らは言った、「立つて彼らのところに攻め上りましょう。われわれはかの地を見たが、非常に豊かです。あなたがたはなぜじつとしているのですか。ためらわずに進んで行つて、かの地を取りなさい。〇あなたがたが行けば、安らかにいる民の所に行くでしょう。その地は広く、神はそれをあなたがたの手に賜わるのです。そこには地にあるもの一つとして欠けているものはありません」。

二そこでダンの氏族のもの六百人が武器を帯びて、ゾラとエシタオルを出発し、ニ上つて行つてユダのキリアテ・ヤリムに陣を張つた。このゆえに、その所は今日までマハネダンと呼ばれる。それはキリアテ・ヤリムの西にある。ニ彼らはそこからエフライムの山地に進み、ミカの家に着いた。

四かのライシの国をうかがいに行つた五人の者はその兄弟たちと言つた、「あなたがたはこれらの家にエポデとテラピムと刻

んだ像と鑄た像のあるのを知っていますか。それであなたがたは今、なすべきことを決めなさい。」一五そこで彼らはその方へ身をめぐらして、かのレビびとの若者の家すなわちミカの家に行って、彼に安否を問うた。「しかし武器を帯びた六百人のダンの人々は門の入口に立っていた。一七かの土地をうかがいに行つた五人の者は上つて行つて、そこにはいり、刻んだ像とエポデとテラピムと鑄た像とを取つたが、祭司は武器を帯びた六百人の者と共に門の入口に立っていた。一八彼らがミカの家にはいつて刻んだ像とエポデとテラピムと鑄た像とを取つた時、祭司は彼らに言つた、「あなたがたは何をなさいますか。」一九彼らは言つた、「黙りなさい。あなたの手を口にあてて、われわれと一緒にきて、われわれのために父とも祭司ともなりなさい。ひとりの家の祭司であるのと、イスラエルの一部族、一族の祭司であるのと、どちらがよいですか。」二〇祭司は喜んで、エポデとテラピムと刻んだ像とを取り、民のなかに加わつた。二一かくて彼らは身をめぐらして去り、その子供たちと家畜と貨財をさきにたてて進んだが、三ミカの家のはるかに離れたとき、ミカは家に近い家の人々を集め、ダンの人々に追いつき、三ミダンの人々を呼んだので、彼らはふり向いてミカに言つた、「あなたがそのように仲間を連れてきたのは、どうしたのですか。」二四彼は言つた、「あなたがたが、わたしの造つた神々および祭司を奪い去つたので、わたしに何が残っていますか。しか

るにあなたがたがわたしに向かつて『どうしたのですか』と言われるとは何事ですか。」二五ダンの人々は彼に言つた、「あなたは大きな声を出さないがよい。気の荒い連中があなたに撃ちかかつて、あなたは自分の命と家族の命を失うようになるでしょう。」二六こうしてダンの人々は去つて行つたが、ミカは彼らの強いを見て、くびすをかえして自分の家に歸つた。二七もきて彼らはミカが造つた物と、ミカと共にいた祭司とを奪つてライシにおもむき、穏やかで、安らかな民のところへ行つて、つるぎをもつて彼らを撃ち、火をつけてその町を焼いたが、三ハシドンを遠く離れており、ほかの民との交わりがなかつたので、それを救うものがなかつた。その町はベテレホブに属する谷にあつた。彼らは町を建てなおしてそこに住み、三九イスラエルに生れた先祖ダンの名にしたがつて、その町の名をダンと名づけた。その町の名はもとハライシであつた。三〇そしてダンの人々は刻んだ像を自分たちのために安置し、モーセの孫すなわちゲルシヨムの子ヨナタンとその子孫がダンびとの部族の祭司となつて、国が捕囚となる日にまで及んだ。三一神の家がシロにあつたあいだ、常に彼らはミカが造つたその刻んだ像を飾つて置いた。

第一章

「そのころ、イスラエルに王がなかった時、エフライムの山地の奥にひとりのレビびとが寄留していた。彼はユダのベツレヘムからひとりの女を迎えて、めかけとしていたが、ニそのめかけは怒って、彼のところを去り、ユダのベツレヘムの父の家に帰って、そこに四か月ばかり過ごした。ニそこで夫は彼女をなだめて連れ帰ろうと、しもべと二頭のろばを従え、立って彼女のあとを追って行った。彼が女の父の家に着いた時、娘の父は彼を見て、喜んで迎えた。四娘の父であるしゅうとが引き留めたので、彼は三日共におり、みな飲み食いしてそこに宿った。五四日目に彼らは朝はやく起き、彼が立ち去ろうとしたので、娘の父は婿に言った、「少し食事をして元氣をつけ、それから出かけなさい。ニそこでふたりは座して共に飲み食いがしたが、娘の父はその人に言った、「どうぞもう一晩泊まって楽しく過ごさなさい」。ニその人は立って去ろうとしたが、しゅうとがしいたので、ついにまたそこに宿った。ハ五日目になつて、朝はやく起きて去ろうとしたが、娘の父は言った、「どうぞ、元氣をつけて、日が傾くまでとどまりなさい」。そこで彼らふたりは食事をした。ニその人がついにめかけおよびしもべと共に去ろうとして立ちあがったとき、娘の父であるしゅうとは彼に言った、「日も暮れようとしている。どうぞもう一晩泊まりなさい。日は傾いた。ここに

宿つて楽しく過ごさなさい。そしてあしたの朝はやく起きて出立し、家に帰りなさい」。

ニしかし、その人は泊まることを好まないで、立つて去り、エブスすなわちエルサレムの向かいに着いた。くらをおいた二頭のろばと彼のめかけも一緒であつた。ニ彼らがエブスに近づいたとき、日はすでに没したので、しもべは主人に言った、「さあ、われわれは道を転じてエブスびとのこの町にはいつて、そこに宿りましょう」。ニ主人は彼に言った、「われわれは道を転じて、イスラエルの人々の町でない外国人の町に、はいつてはならない。ギベアまで行こう」。ニ彼はまたしもべに言った、「さあ、われわれはギベアからマカ、そのうちの一つに着いてそこに宿ろう」。ニ四彼らは進んで行ったが、ベニヤミンに属するギベアの近くで日が暮れたので、ニギベアへ行つて宿ろうと、そこに道を転じ、町にはいつて、その広場に座した。だれも彼らを家に迎えて泊めてくれる者がなかったからである。

ニ六時にひとりの老人が夕暮に畑の仕事から帰ってきた。この人はエフライムの山地の者で、ギベアに寄留していたのである。ただしこの所の人々はベニヤミンびとであつた。ニ彼は目をあげて、町の広場に旅人のおるのを見た。老人は言った、「あなたはどこへ行かれるのですか。どこからおいでになりましたか」。ニその人は言った、「われわれはユダのベツレヘムから、エフライムの山地の奥へ行くものです。わたしはあそこの者

で、ユダのベツレヘムへ行き、今わたしの家に帰るところですが、だれもわたしを家に泊めてくれる者がありません。一九われわれには、ろばのわらも飼葉もあり、またわたしと、はしためとしもべと共にいる若者との食物も酒もあつて、何も欠けているものはありません。二〇老人は言つた、「安心しなさい。あなたの必要なものはなんでも備えましょう。ただ広場で夜を過ごしはなりません。三〇そして彼を家に連れていつて、ろばに飼葉を与えた。彼らは足を洗つて飲み食ひした。

三一彼らが楽しく過ごしていた時、町の人々の悪い者どもがその家を取り囲み、戸を打ちたたいて、家のあるじである老人に言つた、「あなたの家に来た人を出しなさい。われわれはその者を知るのであらう。三二しかし家のあるじは彼らのところに出ていつて言つた、「いいえ、兄弟たちよ、どうぞ、そんな悪いことをしないでください。この人はすでにわたしの家にはいつたのだから、そんなつまらない事をしないでください。三四ここに処女であるわたしの娘と、この人のめかけがいます。今それを出しますから、それをはずかしめ、あなたがたの好きなようにしなさい。しかしこの人にはそのようなつまらない事をしないでください。三五しかし人々が聞きいれなかつたので、その人は自分のめかけをとつて彼らのところに出した。彼らはその女を犯して朝まで終夜はずかしめ、日ののぼるころになつて放し帰らせた。二六朝になつて女は自分の主人を宿してくれた人の家の

戸口にきて倒れ伏し、夜のあけるまでに及んだ。

二七彼女の主人は朝起きて家の戸を開き、出て旅立とうとする、そのめかけである女が家の戸口に、手を敷居にかけて倒れていた。二八彼は女に向かつて、「起きよ、行こう」と言つたけれども、なんの答もなかった。そこでその人は女をろばに乗せ、立つて自分の家におもむいたが、二九その家に着いたとき、刀を執り、めかけを捕えて、そのからだを十二切れに断ち切り、それをイスラエルの全領域にまねく送つた。三〇それを見たものはみな言つた、「イスラエルの人々がエジプトの地から上つてきた日から今日まで、このような事は起つたこともなく、また見たこともない。この事をよく考え、協議して言うことを決めよ」。

第二〇章

一そこでイスラエルの人々は、ダンからベエルシバまで、またギレアデの地からもみな出てきて、その会衆はひとりのようにミヅパで主のもとに集まつた。二民の首領たち、すなわちイスラエルのすべての部族の首領たちは、みづから神の民の集合に出た。つるぎを帯びている歩兵が四十万人あつた。三ベニヤミンの人々は、イスラエルの人々がミヅパに上つたことを聞いた。イスラエルの人々は言つた、「どうして、この悪事が起つたのか、われわれに話してください」。四殺された女の夫であるレビびと

は答えて言った、「わたしは、めかけと一緒(いっしょ)にベニヤミンに属(ぞく)するギベアへ行(い)って宿(やど)りましたが、五ギベアの人々(ひと)は立つてわたしを攻(せ)め、夜の間に、わたしのおる家(いえ)を取り囲(かこ)んで、わたしを殺(ころ)そうと企(くわだ)て、ついにわたしのめかけをはずかしめて、死(し)なせました。六それでわたしはめかけを捕(とら)えて断(た)ち切り、それをイスラエルの嗣業(しぎよう)のすべて(すべて)の地方(ちほう)にあまねく送(おく)りました。彼ら(かれ)がイスラエルにおいて憎(にく)むべきみだらなことを行(な)ったからです。セイラエルの人々(ひと)よ、あなたがたは皆(みな)自分の意見(いけん)と考(かん)えをここに述(の)べてください」。

八民(たみ)は皆(みな)ひとりのように立(た)って言(い)った、「われわれはだれも自分の天幕(てんまく)に行(い)きません。まただれも自分の家(いえ)に帰(かえ)りません。九われわれが今(いま)ギベアに對(たい)してしようとする事(こと)はこれです。われわれはくじを引(ひ)いて、ギベアに攻(せ)めのぼりましょう。一〇すなわちイスラエルのすべての部族(ぶぞく)から百人(にん)について十人(にん)、千人(にん)について百人(にん)、万人(にん)について千人(にん)を選んで、民(たみ)の糧食(りょうしょく)をとらせ、民(たみ)はベニヤミンのギベアに行(い)って、ベニヤミンびとがイスラエルにおいておこなったすべてのみだらな事(こと)に對(たい)して、報復(ほうふく)しましょう。一一こうしてイスラエルの人々(ひと)は皆(みな)集(あつ)まり、一致(いっし)結束(けつそく)して町(まち)を攻(せ)めようとした。

一二イスラエルのもろもろの部族(ぶぞく)は人々(ひと)をあまねくベニヤミンの部族(ぶぞく)のうちにつかわして言(い)わせた、「あなたがたのうちに起(た)ったこの事(こと)は、なんたる悪事(あくじ)でしょうか。一三それで今(いま)ギベアにい

るあの悪い人々(わるいひと)をわたしなさい。われわれは彼ら(かれ)を殺(ころ)して、イスラエルから悪(あく)を除(のぞ)き去(さ)りましょう」。しかしベニヤミンの人々(ひと)はその兄弟(きょうだい)であるイスラエルの人々(ひと)の言葉(ことば)を聞(き)きいれなかった。一四かえってベニヤミンの人々(ひと)は町々(まちまち)からギベアに集(あつ)まり、出てイスラエルの人々(ひと)と戦(たたか)おうとした。一五その日(ひ)、町々(まちまち)から集(あつ)まったベニヤミンの人々(ひと)はつるぎを帯(お)びている者(もの)二万六千人(にん)あり、ほかにギベアの住民(じゆうみん)で集(あつ)まった精兵(せいへい)が七百人(にん)あった。一六このすべての民(たみ)のうちに左ききの精兵(せいへい)が七百人(にん)あって、いずれも一本(ほん)の毛(け)すじをねらって石(いし)を投(な)げて、はずれることがなかった。一七イスラエルの人々(ひと)の集(あつ)まった者は(もの)ベニヤミンを除(のぞ)いて、つるぎを帯(お)びている者(もの)四十万人(にん)あり、いずれも軍人(ぐんじん)であつた。

一八イスラエルの人々(ひと)は立ちあがってベテルにのぼり、神(かみ)に尋(たず)ねた、「われわれのうち、いずれがさきにのぼって、ベニヤミンの人々(ひと)と戦(たたか)いましょうか」。主(しゅ)は言(い)われた、「ユダがさきに」。

一九そこでイスラエルの人々(ひと)は、朝(あさ)起きて、ギベアに對(たい)し陣(じん)を取(と)った。二〇すなわちイスラエルの人々(ひと)はベニヤミンと戦(たたか)うために出て行(い)って、ギベアで彼ら(かれ)に對(たい)して戦(たたか)いの備(そな)えをしたが、二一ベニヤミンの人々(ひと)はギベアから出(で)てきて、その日(ひ)イスラエルの人々(ひと)のうち二万二千人(にん)を地(ち)に撃(う)ち倒(たお)した。二三しかしイスラエルの民(たみ)の人々(ひと)は奮(ふん)いたって初(はじ)めの日(ひ)に備(そな)えをした所(ところ)にふたたび戦(たたか)いの備(そな)えをした。二四そしてイスラエルの人々(ひと)は上(のぼ)って

行つて主の前に夕暮まで泣き、主に尋ねた、「われわれは再びわれわれの兄弟であるベニヤミンの人々と戦いを交えるべきでしょうか」。主は言われた、「攻めのぼれ」。

二四そこでイスラエルの人々は、次の日またベニヤミンの人々の所に攻めよせたが、三五ベニヤミンは次の日またギベアから出て、これを迎え、ふたたびイスラエルの人々のうち一万八千人を地に撃ち倒した。これらは皆つるぎを帯びている者であつた。三六これがためにイスラエルのすべての人々すなわち全軍はベテルに上つて行つて泣き、その所で主の前に座して、その日夕暮まで断食し、燔祭と酬恩祭を主の前にささげた。三七そしてイスラエルの人々は主に尋ね、――そのころ神の契約の箱はそこにあつて、ニアロンの子エレアザルの子であるピネハスが、それに仕えていた――そして言つた、「われわれはなおふたたび出て、われわれの兄弟であるベニヤミンの人々と戦うべきでしょうか。あるいはやめるべきでしょうか」。主は言われた、「のぼれ。わたしはあす彼らをあなたがたの手にわたすであらう」。

三九そこでイスラエルはギベアの周囲に伏兵を置き、四〇そしてイスラエルの人々は三日目にまたベニヤミンの人々のところに攻めのぼり、前のようにギベアに対して備えをした。三一ベニヤミンの人々が出て、民を迎えたが、ついに町からおびき出されたので、彼らは前のように大路で民を撃ちはじめ、また野でイスラエルの人を三十人ばかり殺した。その大路は、一つはベテルに

至り、一つはギベアに至るものであつた。三二ベニヤミンの人々は言つた、「彼らは初めのように、われわれの前に撃ち破られる」。しかしイスラエルの人々は言つた、「われわれは逃げて、彼らを町から大路におびき出そう」。三三そしてイスラエルの人々は皆その所から立つてバアル・タマルに備えをした。その間に待ち伏せていたイスラエルの人々がその所から、すなわちゲバの西から現れ出た。三四すなわちイスラエルの全軍のうちから精兵一万人がきて、ギベアを襲い、その戦いは激しかった。しかしベニヤミンの人々は災の自分たちに迫っているのを知らなかつた。三五主がイスラエルの前にベニヤミンを撃ち敗られたので、イスラエルの人々は、その日ベニヤミンと二万五千一百人を殺した。これらは皆つるぎを帯びている者であつた。三六こうしてベニヤミンの人々は自分たちの撃ち敗られたのを見た。

そこでイスラエルの人々はギベアに対して設けた伏兵をたのんで、ベニヤミンびとを避けて退いた。三七伏兵は急いでギベアに突き入り、進んでつるぎをもつて町をこごとく撃つた。三八イスラエルの人々と伏兵の間に定めた合図は、町から大いなるのろしがあがるとき、三九イスラエルの人々が戦いに転じることであつた。さてベニヤミンは初めイスラエルの人々を撃つて三十人ばかりを殺したので言つた、「まことに彼らは最初の戦いのようにわれわれの前に撃ち敗られる」。四〇しかし、のろしが煙の

柱となつて町からのぼりはじめたので、ベニヤミンの人々がうしろを見ると、町はみな煙となつて天にのぼつていた。四一その時イスラエルの人々が向きを変えたので、ベニヤミンの人々は災が自分たちに迫つたのを見て、うろたえ、四二イスラエルの人々の前から身をめぐらして荒野の方に向かったが、戦いが彼らに迫り、町から出てきた者どもは、彼らの中にはさんで殺した。四三すなわちイスラエルの人々はベニヤミンの人々を切り倒し、追い撃ち、踏みにつけて、ノハから東の方ギベアの向かいにまで及んだ。四四ベニヤミンの倒れた者は一万八千人で、みな勇士であつた。四五彼らは身をめぐらして荒野の方、リンモンの岩まで逃げたが、イスラエルの人々は大路でそのうち五千人を切り倒し、なおも追撃してギドムに至り、そのうちの二千人を殺した。四六こうしてその日ベニヤミンの倒れた者はつるぎを帯びている者合わせて二万五千人で、みな勇士であつた。四七しかし六百人の者は身をめぐらして荒野の方、リンモンの岩まで逃げて、四か月の間リンモンの岩に住んだ。四八そこでイスラエルの人々はまた身をかえしてベニヤミンの人々を攻め、つるぎをもつて人も獣もすべて見つけたものを撃ち殺し、また見つけたすべての町に火をかけた。

第二章

一かつてイスラエルの人々はミツパで、「われわれのうちひとりもその娘をベニヤミンびとの妻として与える者があつてはならない」と言つて誓つたので、二民はベテルに行つて、そこで夕暮まで神の前に座し、声をあげて激しく泣いて、三言つた、「イスラエルの神、主よ、どうしてイスラエルにこのような事が起つて、今日イスラエルに一つの部族が欠けるようになったのですか」。四翌日、民は早く起きて、そこに祭壇を築き、燔祭と酬恩祭をささげた。五そしてイスラエルの人々は言つた、「イスラエルのすべての部族のうちで集会に上つて、主のもとに行かなかつた者はだれか」。これは彼らがミツパにのぼつて、主のもとに行かない者のことについて大いなる誓いを立てて、「その人は必ず殺されなければならぬ」と言つたからである。六しかしイスラエルの人々は兄弟ベニヤミンをあわれんで言つた、「今日イスラエルに一つの部族が絶えた。七われわれは主をさして、われわれの娘を彼らに妻として与えないと誓つたので、かの残つた者どもに妻をめとらせるにはどうしたらよいであらうか」。八彼らはまた言つた、「イスラエルの部族のうちで、ミツパにのぼつて主のもとに行かなかつたのはどの部族か」。ところがヤベシ・ギレアデからはひとりも陣営にきて集会に臨んだ者がなかつた。九すなわち民を集めて見ると、ヤベシ・ギレアデの住民

はひとりもそこにいなかった。一〇そこで会衆は勇士一万二千人をかしこにつかわし、これに命じて言った、「ヤベシ・ギレアデに行つて、その住民を、女、子供もろともつるぎをもって撃て。二そしてこのようにしなければならぬ。すなわち男および男と寝た女はことごとく滅ぼさなければならぬ」。三こうして彼らはヤベシ・ギレアデの住民のうちで四百人の若い処女を獲た。これはまだ男と寝たことがなく、男を知らないものである。彼らはこれをカナンの地にあるシロの陣営に連れてきた。

三そこで全会衆は人をつかわして、リンモンの岩におるベニヤミンの人々に平和を告げた。四ベニヤミンの人々がその時、歸つてきたので、彼らはヤベシ・ギレアデの女のうちから生かしておいた女をこれに与えたが、なお足りなかった。五こうして民は、主がイスラエルの部族のうちに欠陥をつくられたことのために、ベニヤミンをあわれんだ。

六会衆の長老たちは言った、「ベニヤミンの女が絶えたので、かの残りの者どもに妻をめとらせるにはどうしたらよいでしようか」。七彼らはまた言った、「イスラエルから一つの部族が消えうせないためにベニヤミンのうちの残りの者どもに、あつぎがなければならぬ。八しかし、われわれの娘を彼らの妻に与えることはできない。イスラエルの人々が『ベニヤミンに妻を与える者はのろわれる』と言つて誓つたからである」。九そ

れで彼らは言った、「年々シロに主の祭がある」。シロはベテルの北にあつて、ベテルからシケムにのぼる大路の東、レバナの南にある。一〇そして彼らはベニヤミンの人々に命じて言った、「あなたがたは行つて、ぶどう畑に待ち伏せして、三うかがいなさい。もしシロの娘たちが踊りを踊りに出てきたならば、ぶどう畑から出て、シロの娘たちのうちから、めいめい自分の妻をとつて、ベニヤミンの地に連れて行きなさい。三もしその父あるいは兄弟がきて、われわれに訴えるならば、われわれは彼らに、『われわれのために彼らをゆるしてください。戦争のときにわれわれは、彼らのおのの妻をとつてやらなかったし、またあなたがたも彼らに与えなかったからです。もし与えたならば、あなたがたは罪を犯したことになるからでした』と言いましう」。三三ベニヤミンの人々はそうに行い、踊っている者どものうちから自分たちの数にしたがつて妻を取り、それを連れて領地に歸り、町々を建てなおして、そこに住んだ。三四こうしてイスラエルの民は、その時そこを去つて、おのおのその部族および氏族に歸つた。すなわちそこを立つて、おのおのその嗣業の地に歸つた。

三五そのころ、イスラエルには王がなかったので、おのおの自分の目に正しいと見るところをおこなつた。

ルツ記

第一章

一さばきづかさが世を治めているころ、国に飢きんがあつたので、ひとりの人がその妻とふたりの男の子を連れてユダのベツレヘムを去り、モアブの地へ行ってそこに滞在した。ニその人の名はエリメレク、妻の名はナオミ、ふたりの男の子の名はマロンとキリオンといい、ユダのベツレヘムのエフラタびとであつた。彼らはモアブの地へ行って、そこにおつたが、ニナオミの夫エリメレクは死んで、ナオミとふたりの男の子が残された。四ふたりの男の子はそれぞれモアブの女を妻に迎えた。そのひとりの名はオルパといい、ひとりの名はルツといった。彼らはそこに十年ほど住んでいたが、五マロンとキリオンのふたりもまた死んだ。こうしてナオミはふたりの子と夫とに先だたれた。

六その時、ナオミはモアブの地で、主がその民を顧みて、すでに食物をお与えになつてゐることを聞いたので、その嫁と共に立つて、モアブの地からふるさとへ帰ろうとした。セそこで彼女は今いる所を出立し、ユダの地へ帰ろうと、ふたりの嫁を連れて道に進んだ。ハしかしナオミはふたりの嫁に言った、「あなたがたは、それぞれ自分の母の家に帰って行きなさい。あなたがたが、死んだふたりの子とわたしに親切をつくしたように、どう

ぞ、主があなたがたに、いづくしみを賜わりますよう。九どうぞ、主があなたがたに夫を与え、夫の家で、それぞれ身の落ちつき所を得させられるように」。こう言つて、ふたりの嫁に口づけしたので、彼らは声をあげて泣き、「オナオミに言った、「いいえ、わたしたちは一緒にあなたの民のところへ帰ります」。ニしかしナオミは言つた、「娘たちよ、帰って行きなさい。どうして、わたしと一緒にいくつというのですか。あなたがたの夫となる子はまだわたしの胎内にいると思うのですか。三娘たちよ、帰って行きなさい。わたしは年をとつてゐるので、夫をもつことはできません。たとい、わたしが今夜、夫をもち、また子を産む望みがあるとしても、ニそのためあなたにあなたがたは、子どもの成長するまで待つてゐるつもりなのですか。あなたがたは、そのために夫をもたずにゐるつもりなのですか。娘たちよ、それはいけません。主の手がわたしに臨み、わたしを責められたことで、あなたがたのために、わたしは非常に心を痛めてゐるので」。四彼らはまた声をあげて泣いた。そしてオルパはそのしゅうとめに口づけしたが、ルツはしゅうとめを離れなかつた。

五そこでナオミは言つた、「ごらんなさい。あなたの相嫁は自分の民と自分の神々のもとへ帰って行きました。あなたも相嫁のあとについて帰りなさい」。ハしかしルツは言つた、「あなたを捨て、あなたを離れて帰ることをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、またあなたの宿

られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。一七あなたの死なれる所でわたしも死んで、そのかたわらに葬られます。もし死に別れでなく、わたしがあなたと別れるならば、主よ、どうぞわたしをいくえにも罰してください。一八ナオミはルツが自分と一緒にいるのをみたので、そのうえ言うことをやめた。

一九そしてふたりは旅をつづけて、ついにベツレヘムに着いた。彼らがベツレヘムに着いたとき、町はこぞつて彼らのために騒ぎたち、女たちは言った、「これはナオミですか」。二〇ナオミは彼らに言った、「わたしをナオミ（楽しみ）と呼ぶずに、マラ（苦しみ）と呼んでください。なぜなら全能者がわたしをひどく苦しめられたからです。二一わたしは出て行くときは豊かでありましたが、主はわたしをから手で帰されました。主がわたしを悩まし、全能者がわたしに災をくだされたのに、どうしてわたしをナオミと呼ぶのですか」。二二こうしてナオミは、モアブの地から帰った嫁、モアブの女ルツと一緒に帰ってきて、大麦刈の初めにベツレヘムに着いた。

第二章

一さてナオミには、夫エリメレクの一族で、非常に裕福なひとりの親戚があつて、その名をボアズといった。二モアブの女ル

ツはナオミに言った、「どうぞ、わたしを畑に行かせてください。だれか親切な人が見当るならば、わたしはその方のあとについて落ち穂を拾います」。ナオミが彼女に「娘よ、行きなさい」と言ったので、ミルツは行って、刈る人たちのあとに従い、畑で落ち穂を拾ったが、彼女ははからずもエリメレク一族であるボアズの畑の部分にきた。四その時ボアズは、ベツレヘムからきて、刈る者どもに言った、「主があなたがたと共におられますように」。五彼らは答えた、「主があなたを祝福されますように」。六ボアズは刈る人たちを監督しているしもべに言った、「これはだれの娘ですか」。六刈る人たちを監督しているしもべは答えた、「あれはモアブの女で、モアブの地からナオミと一緒に帰ってきたのですが、七彼女は『どうぞ、わたしに、刈る人たちのあとについて、束のあいだで、落ち穂を拾い集めさせてください』と言いました。そして彼女は朝早くきて、今まで働いて、少しのあいだも休みませんでした」。

八ボアズはルツに言った、「娘よ、お聞きなさい。ほかの畑に穂を拾いに行つてはいけません。またここを去つてはなりません。わたしとところで働く女たちを離れないで、ここにいなさい。九人々が刈りとっている畑に目をとめて、そのあとについて行きなさい。わたしは若者たちに命じて、あなたのじやまをしないようにと、言つておいたではありませんか。あなたがかわく時には水がめのところへ行つて、若者たちのくんだのを飲み

なさい。」「彼女(かのじよ)は地に伏(ふ)して拝(はい)し、彼(かれ)に言(い)った、「どうしてあなたは、わたしのような外国人(がいこくじん)を顧(かへり)みて、親切(しんせつ)にしてくださるのですか。」「ボアズは答(こた)えて彼女(かのじよ)に言(い)った、「あなたの夫(おつと)が死(し)んでこのかた、あなたがしゅうとめにつくしたと、また自分の父母(ふぼ)と生(う)まれた国(くに)を離(はな)れて、かつて知らなかつた民(たみ)のところにきたことは皆(みな)わたしに聞(きこ)えました。」「三(さん)どうぞ、主(しゅ)があなたのしたこと(き)に報(むく)いられるように。どうぞ、イスラエルの神(かみ)、主(しゅ)、すなわちあなたがその翼(つばさ)の下(した)に身(み)を寄(よ)せようとしてきた主(しゅ)からしゅうぶんの報(むく)いを得(え)られるように。」「三(さん)彼女は言(い)った、「わが主(しゅ)、まことにありがとうございます。わたしはあなたのはしためのひとりにも及(およ)ばないのに、あなたはこんなにわたしを慰(なぐさ)め、はしためにねんごろに語(かた)られました。」

「四(し)食事(しょくじ)の時(とき)、ボアズは彼女(かのじよ)に言(い)った、「ここへきて、パンを食(た)べ、あなたの食(た)べる物(もの)を酢(す)に浸(ひた)しなさい。」「彼女(かのじよ)が刈(か)る人(ひと)々(たち)のかたわらにすわつたので、ボアズは焼麦(やきむぎ)を彼女(かのじよ)に与(あた)えた。彼女(かのじよ)は飽(あ)きるほど食(た)べて残(のこ)した。」「五(ご)そして彼女(かのじよ)がまた穂(ほ)を拾(ひろ)おうと立ちあがつたとき、ボアズは若者(わかもの)たちに命(めい)じて言(い)った、「彼女(かのじよ)には束(たば)の間(あいだ)でも穂(ほ)を拾(ひろ)わせなさい。とがめてはならない。」「六(ろく)また彼女(かのじよ)のために束(たば)からわざと抜き落(おと)しておいて拾(ひろ)わせなさい。しかつてはならない。」「七(しち)こうして彼女(かのじよ)は夕暮(ゆぐれ)まで畑(はたけ)で落(お)ち穂(ほ)を拾(ひろ)った。そして拾(ひろ)つた穂(ほ)を打(う)つと、大麦(おおむぎ)は一エパほどあつた。」「八(はち)彼女はそれを携(たずさ)せて町(まち)にはいり、しゅうとめ(しゅうとめ)にその拾(ひろ)つたも

のを見(み)せ、かつ食(た)べ飽(あ)きて、残(のこ)して持(も)ちかへつたものを取り出(だ)して与(あた)えた。」「九(く)しゅうとめは彼女(かのじよ)に言(い)った、「あなたは、きょう、どこで穂(ほ)を拾(ひろ)いましたか。どこで働(はたら)きましたか。あなたをそのように顧(かへり)みてくださったかたに、どうか祝福(しゅくふく)があるように。」「そこで彼女(かのじよ)は自分(じぶん)がだれの所(ところ)で働(はたら)いたかを、しゅうとめ(しゅうとめ)に告(つ)げて、「わたしは、きょう働(はたら)いたのはボアズという名(な)の人の所(ところ)です」と言(い)った。」「三(さん)ナオミは嫁(よめ)に言(い)った、「生きている者(もの)をも、死(し)んだ者(もの)をも、顧(かへり)みて、いづくしみを賜(たま)わる主(しゅ)が、どうぞその人(ひと)を祝福(しゅくふく)されますように。」「ナオミはまた彼女(かのじよ)に言(い)った、「その人(ひと)はわたしたちの縁(えん)者(じや)で、最も近(ちか)い親戚(しんせき)のひとりです。」「三(さん)モアブの女(おんな)ルツは言(い)った、「その人(ひと)はまたわたしに『あなたはわたしのところの刈(かり)入れが全(ぜん)部(ぶ)終(おわ)るまで、わたしのしもべたちのそばについていなさい』と言(い)いました。」「三(さん)ナオミは嫁(よめ)ルツに言(い)った、「娘(むすめ)よ、その人(ひと)のところ(ところ)で働(はたら)く女(おんな)たちと一緒に出(で)かけるのはけつこ(けつこ)うです。そうすればほかの畑(はたけ)で人(ひと)にいじめられるのを免(まぬ)れるでしょう。」「三(さん)それで彼女(かのじよ)はボアズのところで働(はたら)く女(おんな)たちのそばについていて穂(ほ)を拾(ひろ)い、大麦(おおむぎ)刈(かり)と小麦(こむぎ)刈(かり)の終(はたら)るまでそうした。こうして彼女(かのじよ)はしゅうとめ(しゅうとめ)と一緒に暮(くら)した。

第三章

一時(とき)にしゅうとめナオミは彼女(かのじよ)に言(い)った、「娘(むすめ)よ、わたしはあな

たの落ち着き所を求めて、あなたをしあわせにすべきではないでしょうか。二あなたが一緒に働いた女たちの主人ボアズはわたくしたちの親戚ではありませんか。彼は今夜、打ち場で大麦をおおぎ分けます。三それであなたは身を洗って油をぬり、晴れ着をまといて打ち場に下って行きなさい。ただ、あなたはその人が飲み食いを終るまで、その人に知られてはなりません。四そしてその人が寝る時、その寝る場所を見定め、はいって行って、その足の所をまくって、そこに寝なさい。彼はあなたのすべきことを知らせるでしょう。五ルツはしゅうとめに言った、「あなたのおつしやることを皆いたしましょう」。

六こうして彼女は打ち場に下り、すべてしゅうとめが命じたとおりにした。セボアズは飲み食いして、心をたのしませたあとで、麦を積んである場所のかたわらへ行って寝た。そこで彼女はひそかに行き、ボアズの足の所をまくって、そこに寝た。ハ夜中になって、その人は驚き、起きかえって見ると、ひとりの女が足のところに寝ていたの、九「あなたはだれですか」と言うと、彼女は答えた、「わたしはあなたのはしためルツです。あなたのすそで、はしためをおおってください。あなたは最も近い親戚です」。一〇ボアズは言った、「娘よ、どうぞ、主があなたを祝福されるように。あなたは貧富にかかわらず若い人に従い行くことはせず、あなたが最後に示したこの親切は、さきに示した親切にまさっています。二それで、娘よ、あなたは恐れるに

およびません。あなたが求めることは皆、あなたのためにいたしましょう。わたしの町の人々は皆、あなたがりっぱな女であることを知っているからです。三たしかにわたしは近い親戚ではありませんが、わたしよりも、もっと近い親戚があります。一三今夜はここにとどまりなさい。朝になって、もしその人が、あなたのために親戚の義務をつくすならば、よろしい、その人にさせなさい。しかし主は生きておられます。その人が、あなたのために親戚の義務をつくすことを好まないならば、わたしはあなたのために親戚の義務をつくしましょう。朝までここにおやすみなさい」。

一四ルツは朝まで彼の足のところに寝たが、だれかれの見分け難いころに起きあがった。それはボアズが「この女の打ち場にきたことが人に知られてはならない」と言ったからである。一五そしてボアズは言った、「あなたの着る外套を持ってきて、それを広げなさい」。彼女がそれを広げると、ボアズは大麦六オメルをはかって彼女に負わせた。彼女は町に帰り、一六しゅうとめのところへ行くと、しゅうとめは言った、「娘よ、どうでしたか」。そこでルツはその人が彼女にしたことをことごとく告げて、一七言った、「あのかたはわたしに向かつて、から手で、しゅうとめのところへ帰ってはならないと言って、この大麦六オメルをわたしにくださいました」。一八しゅうとめは言った、「娘よ、この事がどうなるかわかるまでお待ちなさい。あの人は、きょう、そ

の事を決定しなければ落ち着かないでしょう」。

第四章

「ボアズは町の門のところへ上つていつて、そこにすわった。すると、さきにボアズが言った親戚の人が通り過ぎようとしたので、ボアズはその人に言った、「友よ、こちらへきて、ここにおすわりください」。彼はきてすわった。ニボアズはまた町の長老十人を招いて言った、「ここにおすわりください」。彼らがすわった時、ニボアズは親戚の人に言った、「モアブの地から帰ってきたナオミは、われわれの親族エリメレクの地所を売ろうとしています。四それでわたしはそのことをあなたに知らせ、ここにすわっている人々と、民の長老たちの前で、それを買いなさいと、あなたに言おうと思ひました。もし、あなたがそれをあがなおうと思はれるならば、あがなってください。しかし、あなたがそれをあがなわないならば、わたしにそう言つて知らせてください。それをあがなう人は、あなたのほかにはなく、わたしはあなたの次ですから」。彼は言つた、「わたしがあがないまいしよ」。五そこでボアズは言つた、「あなたがナオミの手からその地所を買う時には、死んだ者の妻であつたモアブの女ルツをも買つて、死んだ者の名を起してその嗣業を伝えなければなりません」。六その親戚の人は言つた、「それでは、わたしに

はあがなうことができません。そんなことをすれば自分の嗣業をそこないます。あなたがわたしに代つて、自分であがなつてください。わたしはあがなうことができませんから」。七むかしイスラエルでは、物をあがなう事と、権利の譲渡について、万事を決定する時のならわしはこうであつた。すなわち、その人は、自分のくつを脱いで、相手の人に渡した。これがイスラエルでの証明の方法であつた。八そこで親戚の人がボアズにむかい「あなたが自分であがなひなさい」と言つて、そのくつを脱いだので、九ボアズは長老たちとすべての民に言つた、「あなたがたは、きよう、わたしが生きてエリメレクのすべての物およびキリオンとマロンのすべての物をナオミの手から買ひとつた事の証人です。一〇またわたしはマロンの妻であつたモアブの女ルツをも買つて、わたしの妻としました。これはあの死んだ者の名を起してその嗣業を伝え、死んだ者の名がその一族から、またその郷里の門から断絶しないようにするためです。きようあなたがたは、その証人です」。一とすると門にいたすべての民と長老たちは言つた、「わたしたちは証人です。どうぞ、主があなただけにはいる女を、イスラエルの家をたてたラケルとレアのふたりのようにされましよう。どうぞ、あなたがエフラタで富を得、ベツレヘムで名を揚げられますように。一二どうぞ、主がこの若い女によつてあなたに賜はる子供により、あなたの家が、かのタルマルがユダに産んだベレツの家のようになりますように」。

三三こうしてボアズはルツをめとつて妻とし、彼女のところには
いった。主は彼女をめぐもらせられたので、彼女はひとりの男
の子を産んだ。一四そのとき、女たちはナオミに言つた、「主はほ
むべきかな、主はあなたを見捨てずに、きょう、あなたにひとり
の近親をお授けになりました。どうぞ、その子の名がイスラエ
ルのうちに高く揚げられますように。一五彼はあなたのいのち
を新たにし、あなたの老年を養う者となるでしょう。あなたを
愛するあなたの嫁、七人のむすこにもまさる彼女が彼を産んだ
のですから」。一六そこでナオミはその子を取り、ふところに置
いて、養い育てた。一七近所の女たちは「ナオミに男の子が生れ
た」と言つて、彼に名をつけ、その名をオベデと呼んだ。彼はダ
ビデの父であるエッサイの父となつた。一八さてペレツの子孫
は次のとおりである。ペレツからヘヅロンが生れ、一九ヘヅロ
ンからラムが生れ、ラムからアミナダブが生れ、二〇アミナダブか
らナシオンが生れ、ナシオンからサルモンが生れ、二一サルモン
からボアズが生れ、ボアズからオベデが生れ、二二オベデから
エッサイが生れ、エッサイからダビデが生れた。

サムエル記上

第一章

一 エフライムの山地のラマタイム・ゾビムに、エルカナという名の人があった。エフライムびとで、エロハムの子であった。エロハムはエリウの子、エリウはトフの子、トフはツフの子である。ニエルカナには、ふたりの妻があつて、ひとりの名はハンナといい、ひとりの名はペニンナといった。ペニンナには子どもがあつたが、ハンナには子どもがなかった。

三 この人は年ごとに、その町からシロに上つて行って、万軍の主を拝し、主に犠牲をささげるのを常とした。シロには、エリのふたりの子、ホフニとピネハスとがいて、主に仕える祭司であつた。四 エルカナは、犠牲をささげる日、妻ペニンナとそのむすこ娘にはみな、その分け前を与えた。五 エルカナはハンナを愛していたが、彼女には、ただ一つの分け前を与えるだけであつた。主がその胎を閉ざされたからである。六 また彼女を憎んでいる他の妻は、ひどく彼女を悩まして、主がその胎を閉ざされたことを恨ませようとした。セこうして年は暮れ、年は明けたが、ハンナが主の宮に上るごとに、ペニンナは彼女を悩ましたので、ハンナは泣いて食べることもしなかった。八 夫エルカナは彼女に言った、「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。どうして心

に悲しむのか。わたしはあなたにとつて十人の子どもよりもまさっているではないか」。

九 シロで彼らが飲み食いしたのち、ハンナは立ちあがつた。その時、祭司エリは主の神殿の柱のかたわらの座にすわっていた。

一〇 ハンナは心に深く悲しみ、主に祈つて、はげしく泣いた。二そして誓いを立てて言った、「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」。

三 彼女が主の前で長く祈つていたので、エリは彼女の口に目をとめた。四 ハンナは心のうちで物を言っていたので、くちびるが動くだけで、声は聞えなかった。それゆえエリは、酔っているのだと思つて、一四 彼女に言った、「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい」。一五 しかしハンナは答えた、「いいえ、わが主よ。わたしは不幸な女です。ぶどう酒も濃い酒も飲んだのはありません。ただ主の前に心を注ぎ出していたのです。一六 はしためを、悪い女と思わないでください。積る憂いと悩みのゆえに、わたしは今まで物を言っていたのです」。一七 そこでエリは答えた、「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとどけられるように」。一八 彼女は言った、「どうぞ、はしためにも、あなたの前に恵みを得させてください」。こうして、その女は去つて食事し、その顔は、もはや悲

しげではなくなった。

一九 彼らは朝早く起きて、主の前に礼拝し、そして、ラマにある家に帰って行った。エルカナは妻ハンナを知り、主が彼女を顧みられたので、二〇 彼女はみごもり、その時が巡ってきて、男の子を産み、「わたしがこの子を主に求めたからだ」といって、その名をサムエルと名づけた。

二一 エルカナその人とその家族とはみな上っていて、年ごとの犠牲と、誓いの供え物とをささげた。三しかしハンナは上って行かず、夫に言った、「わたしはこの子が乳離れしてから、主の前に連れていって、いつまでも、そこにおらせましょう」。三二 夫エルカナは彼女に言った、「あなたが良いと思うようにして、この子の乳離れするまで待ちなさい。ただどうか主がその言われたことを実現してくださるように」。こうしてその女はとどまつて、その子に乳をのませ、乳離れするのを待っていたが、二四 乳離れた時、三歳の雄牛一頭、麦粉一エパ、ぶどう酒のほいった皮袋一つを取り、その子連れて、シロにある主の宮に行つた。その子はなお幼かった。二五 そして彼らはその牛を殺し、子供をエリのもとへ連れて行つた。二六 ハンナは言つた、「わが君よ、あなたは生きておられます。わたしは、かつてここに立つて、あなたの前で、主に祈つた女です。二七 この子を与えてくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとだけられました。二八 それゆえ、わたしもこの子を主にさ

さげます。この子は一生のあいだ主にささげたものです」。そして彼らはそこで主を礼拝した。

第二章

一 ハンナは祈つて言つた、

「わたしの心は主によつて喜び、

わたしの力は主によつて強められた、

わたしの口は敵をあざ笑う、

あなたの救によつてわたしは楽しむからである。

二 主のように聖なるものはない、

あなたのほかに、だれもない、

われわれの神のような岩はない。

三 あなたがたは重ねて高慢に語つてはならない、

たかぶりの言葉を口にするをやめよ。

主はすべてを知る神であつて、

もろもろのおこないは主によつて量られる。

四 勇士の弓は折れ、

弱き者は力を帯びる。

五 飽き足りた者は食のために雇われ、

飢えたものは、もはや飢えることがない。

うまずめは七人の子を産み、

多くの子をもつ女は孤独となる。

六主は殺し、また生かし、

陰府にくだし、また上げられる。

七主は貧しくし、また富ませ、

低くし、また高くされる。

八貧しい者を、ちりのなから立ちあがらせ、

乏しい者を、あくたのなから引き上げて、

王侯と共にすわらせ、

栄誉の位を継がせられる。

地の柱は主のものであつて、

その柱の上に、世界をすえられたからである。

九主はその聖徒たちの足を守られる、

しかし悪いものどもは暗黒のうちに滅びる。

人は力をもつて勝つことができないからである。

一〇主と争うものは粉々に砕かれるであらう、

主は彼らにむかつて天から雷をとどろかし、

地のはてまでもさばき、王に力を与え、

油そそがれた者の力を強くされるであらう。

二 エルカナはラマにある家に帰つたが、幼な子は祭司エリの前
にいて主に仕えた。

三 さて、エリの子らは、よこしまな人々で、主を恐れなかった。

四 民のささげ物についての祭司のならわしはこうである。人

が犠牲をささげる時、その肉を煮る間に、祭司のしもべは、みつ

またの肉刺しを手につけて、二四それをかま、またはなべ、ま

たはおおがま、または鉢に突き入れ、肉刺しの引き上げるものは

祭司がみな自分のものとした。彼らはシロで、そこに来るすべ

てのイスラエルの人に、このようにした。一五人々が脂肪を焼く

前にもまた、祭司のしもべがきて、犠牲をささげる人に言うので

あつた、「祭司のために焼く肉を与えよ。祭司はあなたから煮た

肉を受けない。生の肉がよい。」一六その人が、「まず脂肪を焼か

せましょう。その後ほしだけ取ってください」と言うとき、しも

べは、「いや、今もりたい。くれないなら、わたしは力づくで、

それを取ろう」と言う。一七このように、その若者たちの罪は、主

の前に非常に大きかつた。この人々が主の供え物を軽んじたか

らである。

一八サムエルはまだ幼く、身に亜麻布のエポデを着けて、主の前

に仕えていた。一九母は彼のために小さい上着を作り、年ごと

に、夫と共にその年の犠牲をささげるために上る時、それを

持つてきた。二〇エリはいつもエルカナとその妻を祝福して

言つた、「この女が主にささげた者のかわりに、主がこの女に

よつてあなたに子を与えられるように」。そして彼らはその家

に帰るのを常とした。

二一 こうして主がハンナを顧みられたので、ハンナはみごもつ

て、三人の男の子とふたりの女の子を産んだ。わらべサムエル

は主の前で育った。

三三 エリはひじょうに年をとった。そしてその子らがイスラエルの人々にしたいいろいろなことを聞き、また会見の幕屋の入口で勤めていた女たちと寝たことを聞いて、三彼らに言った、「なにゆえ、そのようなことをするのか。わたしはこのすべての民から、あなたがたの悪いおこないのことを聞く。三四 わが子らよ、それはいけない。わたしの聞く、主の民の言いふらしている風説は良くない。三五 もし人が人に対して罪を犯すならば、神が仲裁されるであろう。しかし人が主に對して罪を犯すならば、だが、そのとりなしをすることができようか」。しかし彼は父の言うことに耳を傾けようとしなかった。主が彼らを殺そうとされたからである。

三六 わらべサムエルは育っていき、主にも、人々にも、ますます愛せられた。

三七 このとき、ひとりの神の人が、エリのもとにきて言った、「主はかく仰せられる、『あなたの先祖の家がエジプトでパロの家の奴隷であつたとき、わたしはその先祖の家に自らを現した。三八そしてイスラエルのすべての部族のうちからそれを選び出して、わたしの祭司とし、わたしの祭壇に上つて、香をたかせ、わたしの前でエポデを着けさせ、また、イスラエルの人々の火祭をことごとくあなたの先祖の家に与えた。三九 それにどうしてあなたがたは、わたしが命じた犠牲と供え物をむさぼりの目を

もって見るのか。またなにゆえ、わたしよりも自分の子らを尊び、わたしの民イスラエルのささげるもろの供え物の、最も良き部分をもって自分を肥やすのか』。四〇 それゆえイスラエルの神、主は仰せられる、『わたしはかつて、『あなたの家とあなたの父の家とは、永久にわたしの前に歩むであろう』と言った。』しかし今、主は仰せられる、『決してそうはしない。わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう。四一 見よ、日が来るであろう。その日、わたしはあなたの力と、あなたの父の家の力を断ち、あなたの家に年老いた者をなくするであろう。四二 そのとき、あなたは災のうちにあって、イスラエルに与えられるもろの繁栄を、ねたみ見るであろう。あなたの家には永久に年老いた者がいなくなるであろう。四三 しかしあなたの一族のひとりを、わたしの祭壇から断たないであろう。彼は残されてその目を泣きはらし、心を痛めるであろう。またあなたの家に生れ出るものは、みなつるぎに死ぬであろう。四四 あなたのふたりの子ホフニとピネハスの身に起ることが、あなたのためにそのしるしとなるであろう。すなわちそのふたりは共に同じ日に死ぬであろう。四五 わたしは自分のために、ひとりの忠実な祭司を起す。その人はわたしの心と思ひに従つて行ふであろう。わたしはその家を確立しよう。その人はわたしが油そそいだ者の前につねに歩むであろう。四六 そしてあなたの家で生き残っている人々はみなきて、彼

に一枚の銀と一個のパンを請い求め、「どうぞ、わたしを祭司の職の一つに任じ、一口のパンでも食べることができるようになしてください」と言うであろう』」。

第三章

「わらべサムエルは、エリの前で、主に仕えていた。そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった。

ニさてエリは、しだいに目がかすんで、見ることができなくなり、そのとき自分のへやで寝ていた。三神のもしびはまだ消えず、サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた時、四主は「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた。彼は「はい、ここにおります」と言つて、五エリの所へ走つていつて言つた、「あなたが呼びになりました。わたしは、ここにおります」。しかしエリは言つた、「わたしは呼ばない。帰つて寝なさい」。彼は行つて寝た。六主はまたかさねて「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとへ行つて言つた、「あなたが呼びになりました。わたしは、ここにおります」。エリは言つた、「子よ、わたしは呼ばない。もう一度寝なさい」。七サムエルはまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現されなかつた。八主はまた三度目にサムエルを呼ばれたので、サムエルは起きてエリのもとへ行つて言つた、「あなたが呼びになりました。わたしは、こ

ここにおります」。その時、エリは主がわらべを呼ばれたのであることを悟つた。九そしてエリはサムエルに言つた、「行つて寝なさい。もしあなたが呼ばれたら、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい」。サムエルは行つて自分の所で寝た。

一〇主はきて立ち、前のように、「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれたので、サムエルは言つた、「しもべは聞きます。お話しください」。二その時、主はサムエルに言われた、「見よ、わたしはイスラエルのうちに一つの事をする。それを聞く者はみな、耳が二つとも鳴るであろう。三その日には、わたしが、かつてエリの家について話したことを、はじめから終りまでことごとく、エリに行うであろう。四わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかつたからである。五それゆえ、わたしはエリの家に誓う。エリの家は悪く、犠牲や供え物をもつてしても、永久にあがなわれないであろう」。

六サムエルは朝まで寝て、主の宮の戸をあけたが、サムエルはその幻のことをエリに語るのを恐れた。七しかしエリはサムエルを呼んで言つた、「わが子サムエルよ」。サムエルは言つた、「はい、ここにおります」。八エリは言つた、「何事をお告げになつたのか。隠さず話してください。もしお告げになつたことを一つでも隠して、わたしに言わないならば、どうぞ神があなた

を罰し、さらに重く罰せられるように」。一八そこでサムエルは、その事をことごとく話して、何も彼に隠さなかった。エリは言った、「それは主である。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」。

一九サムエルは育つていった。主が彼と共におられて、その言葉をも一つも地に落ちないようにされたので、二〇ダンからベエルシバまで、イスラエルのすべての人は、サムエルが主の預言者と定められたことを知った。二一主はふたたびシロで現れた。すなわち主はシロで、主の言葉によつて、サムエルに自らを現された。こうしてサムエルの言葉は、あまねくイスラエルの人々に及んだ。

第四章

一イスラエルびとは出てペリシテびとと戦おうとして、エベネゼルのほとりに陣をしき、ペリシテびとはアペクに陣をしいた。二ペリシテびとはイスラエルびとにむかつて陣備えをしたが、戦うに及んで、イスラエルびとはペリシテびとの前に敗れ、ペリシテびとは戦場において、おおよそ四千人を殺した。三民が陣営に退いた時、イスラエルの長老たちは言った、「なにゆえ、主はきよう、ペリシテびとの前にわれわれを敗れたのか。シロへ行って主の契約の箱をここへ携えてくることにしよう。そ

して主をわれわれのうちに迎えて、敵の手から救つていただこう」。四そこで民は人をシロにつかわし、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の契約の箱を、そこから携えてこさせた。その時エリのふたりの子、ホフニとピネハスは神の契約の箱と共に、その所にいた。

五主の契約の箱が陣営についていた時、イスラエルびとはみな大声で叫んだので、地は鳴り響いた。六ペリシテびとは、その叫び声を聞いて言った、「ヘブルびとの陣営の、この大きな叫び声は何事か」。そして主の箱が、陣営に着いたことを知った時、セペリシテびとは恐れて言った、「神々が陣営にきたのだ」。彼らはまた言った、「ああ、われわれはわざわいである。このようなことは今までなかった。ハああ、われわれはわざわいである。だれがわれわれをこれらの強い神々の手から救い出すことができようか。これらの神々は、もろもろの災をもつてエジプトびとを荒野で撃つたのだ。七ペリシテびとよ、勇気を出して男らしくせよ。ヘブルびとがあなたがたに仕えたように、あなたがたが彼らに仕えることのないために、男らしく戦え」。

八こうしてペリシテびとが戦つたので、イスラエルびとは敗れて、おのおのその家に逃げて帰った。戦死者はひじょうに多く、イスラエルの歩兵で倒れたものは三万であった。二一また神の箱は奪われ、エリのふたりの子、ホフニとピネハスは殺された。

三 その日ひとりのベニヤミンびとが、衣服を裂き、頭に土をかぶつて、戦場から走ってシロにきた。ニ 彼が着いたとき、エリは道のかたわらにある自分の座にすわって待ちかまえていた。その心に神の箱の事を気づかっていたからである。その人が町にはいつて、情報をつたえたので、町はこぞつて叫んだ。一四 エリはその叫び声を聞いて言った、「この騒ぎ声は何か」。その人は急いでエリの所へきてエリに告げた。一五 その時エリは九十八歳で、その目は固まって見ることができなかった。一六 その人はエリに言った、「わたしは戦場からきたものです。きよう戦場からのがれたのです」。エリは言った、「わが子よ、様子はどうであつたか」。一七 しらせをもたらしたその人は答えて言った、「イスラエルびとは、ペリシテびとの前から逃げ、民のうちにはまた多くの戦死者があり、あなたのふたりの子、ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました」。一八 彼が神の箱のことを言つたとき、エリはその座から、あおむけに門のかたわらに落ち、首を折つて死んだ。老いて身が重かつたからである。彼のイスラエルをさばいたのは四十年であつた。

一九 彼の嫁、ピネハスの妻はみづもつて出産の時が近づいていたが、神の箱が奪われたこと、しゅうとと夫が死んだというしらせを聞いたとき、陣痛が起り身をかがめて子を産んだ。ニ〇 彼女が死にかかつている時、世話をしていた女が彼女に言った、「恐れることはありません。男の子が生まれました」。しかし彼女は

答えもせず、また顧みもしなかつた。ニ一 ただ彼女は「栄光はイスラエルを去つた」と言つて、その子をイカボデと名づけた。これは神の箱の奪われたこと、また彼女のしゅうとと夫のことによるのである。ニ二 彼女はまた、「栄光はイスラエルを去つた。神の箱が奪われたからです」と言つた。

第五章

一 ペリシテびとは神の箱をぶんどつて、エベネゼルからアシッドに運んできた。ニ そしてペリシテびとはその神の箱を取つてダゴンの宮に運びこみ、ダゴンのかたわらに置いた。三 アシッドの人々が、次の日、早く起きて見ると、ダゴンが主の箱の前に、うつむきに地に倒れていた。彼らはダゴンを起して、それをもとの所に置いた。四 その次の朝また早く起きて見ると、ダゴンはまた、主の箱の前に、うつむきに地に倒れていた。そしてダゴンの頭と両手とは切れて離れ、しきいの上にあり、ダゴンはただ胴体だけとなつていた。五 それゆえダゴンの祭司たちやダゴンの宮にはいる人々は、だれも今日にいたるまで、アシッドのダゴンのしきいを踏まない。

六 そして主の手はアシッドびとの上にきびしく臨み、主は腫物をもつてアシッドとその領域の人々を恐れさせ、また悩まされた。セアシッドの人々は、このありさまを見て言つた、「イスラエ

ルの神の箱を、われわれの所に、とどめ置いてはならない。その神の手が、われわれと、われわれの神ダゴンの上にきびしく臨むからである」。ハそこで彼らは人をつかわして、ペリシテびとの君たちを集めて言った、「イスラエルの神の箱をどうしましう」。彼らは言った、「イスラエルの神の箱はガテに移そう」。人々はイスラエルの神の箱をそこに移した。九彼らがそれを移すと、主の手がその町に臨み、非常な騒ぎが起った。そして老若を問わず町の人々を撃たれたので、彼らの身に腫物ができた。一〇そこで人々は神の箱をエクロンに送ったが、神の箱がエクロンに着いた時、エクロンの人々は叫んで言った、「彼らがイスラエルの神の箱をわれわれの所に移したのは、われわれと民を滅ぼすためである」。一そこで彼らは人をつかわして、ペリシテびとの君たちをみな集めて言った、「イスラエルの神の箱を送り出して、もとの所に返し、われわれと民を滅ぼすことのないようにしよう」。恐ろしい騒ぎが町中に起っていたからである。そこには神の手が非常にきびしく臨んでいたので、二死なない人は腫物をもって撃たれ、町の叫びは天に達した。

第六章

一主の箱は七か月の間ペリシテびとの地にあった。ニペリシテびとは、祭司や占い師を呼んで言った、「イスラエルの神の箱を

どうしましうか。どのようなにして、それをもとの所へ送り返せばよいか告げてください」。三彼らは言った、「イスラエルの神の箱を送り返す時には、それをむなく返してはならない。必ず彼にとがの供え物をもって償いをしなければならぬ。そうすれば、あなたがたはいやされ、また彼の手がなぜあなたがたを離れないかを知ることができるであらう」。四人々は言った、「われわれが償うとがの供え物には何をしましうか」。彼らは答えた、「ペリシテびとの君たちの数にしたがって、金の腫物五つと金のねずみ五つである。あなたがたすべてと、君たちに臨んだ災は一つだからである。五それゆえ、あなたがたの腫物の像と、地を荒すねずみの像を造り、イスラエルの神に栄光を帰するならば、たぶん彼は、あなたがた、およびあなたがたの神々と、あなたがたの地に、その手を加えることを軽くされるであらう。六なにゆえ、あなたがたはエジプトびととパロがその心をかたくなにしたように、自分の心をかたくなにするのか。神が彼らを悩ましたので、彼らは民を行かせ、民は去ったではないか。七それゆえ今、新しい車一両を造り、まだくびきを付けたことのない乳牛二頭をとり、その牛を車につなぎ、そのおのおの子牛を乳牛から離して家に連れ帰り、ハ主の箱をとって、それをその車に載せ、あなたがたがとがの供え物として彼に償う金の作り物をつきの箱におさめてそのかたわらに置き、それを送って去らせなさい。九そして見ていて、それが自分の領地へ行く道

を、ベテシメシへ上るならば、この大いなる災を、われわれに下したの**は**彼である。しかし、そうしない時は、われわれを撃つたのは彼の**手**ではなく、その事の偶然であつたことを知るであらう。

二〇人々はそのようにした。すなわち、彼らは二頭の乳牛をとつて、これを車につなぎ、そのおの**の**子牛を家に閉じこめ、二主の箱、および金のねずみと、腫物の像をおさめた箱とを車に載せた。三すると雌牛はまっすぐにベテシメシの方向へ、ひとすじに大路を歩み、鳴きながら進んでいつて、右にも左にも曲らなかつた。ペリシテびとの君たちは、ベテシメシの境までそのあとについていった。三時にベテシメシの人々は谷で小麦を刈り入れていたが、目をあげて、その箱を見、それを迎えて喜んだ。四車はベテシメシびとヨシユアの畑にはいつて、そこにどまつた。その所に大きな石があつた。人々は車の木を割り、その雌牛を燔祭として主にささげた。五レビびとは主の箱と、そのかたわらの、金の作り物をおさめた箱を取りおろし、それを大石の上に置いた。そしてベテシメシの人々は、その日、主に燔祭を供え、犠牲をささげた。六ペリシテびとの五人の君たちはこれを見て、その日、エクロンに帰つた。

七ペリシテびとが、とがの供え物として、主に償いをした金の腫物は、次のとおりである。すなわちアシドドのために一つ、ガザのために一つ、アシケロンのために一つ、ガテのために一つ、

エクロンのために一つであつた。八また金のねずみは、城壁をめぐらした町から城壁のない村里にいたるまで、すべて五人の君たちに属するペリシテびとの町の数にしたがつて造つた。主の箱をおろした所のかたわらにあつた大石は、今日にいたるまで、ベテシメシびとヨシユアの畑にあつて、あかしとなつてゐる。

九ベテシメシの人々で主の箱の中を見たものがあつたので、主はこれを撃たれた。すなわち民のうち七十人を撃たれた。主が民を撃つて多くの者を殺されたので、民はなげき悲しんだ。二〇ベテシメシの人々は言つた、「だが、この聖なる神、主の前に立つことができようか。主はわれわれを離れてだれの所へ上つて行かれたらよいのか」。三そして彼らは、使者をキリアテ・ヤリムの人々につかわして言つた、「ペリシテびとが主の箱を返したから、下つてきて、それをあなたがたの所へ携え上つてくださ

第七章

一キリアテ・ヤリムの人々は、きて、主の箱を携え上り、丘の上のアビナダブの家に持つてきて、その子エレアザルを聖別して、主の箱を守らせた。二その箱は久しくキリアテ・ヤリムにとどまつて、二十年を経た。イスラエルの全家は主を慕つて嘆いた。

三その時サムエルはイスラエルの全家に告げていった、「もし、あなたがたが一心に主に立ち返るのであれば、ほかの神々とアシタロテを、あなたがたのうちから捨て去り、心を主に向け、主のみに仕えなければならぬ。そうすれば、主はあなたがたをペリシテびとの手から救い出されるであろう」。四そこでイスラエルの人々はバアルとアシタロテを捨て去り、ただ主にのみ仕えた。

五サムエルはまた言った、「イスラエルびとを、ことごとくミツパに集めなさい。わたしはあなたがたのために主に祈りましょう」。六人々はミツパに集まり、水をくんでそれを主の前に注ぎ、その日、断食してその所で言った、「われわれは主に對して罪を犯した」。サムエルはミツパでイスラエルの人々をさばいた。セイスラエルの人々のミツパに集まったことがペリシテびとに聞えたので、ペリシテびとの君たちは、イスラエルに攻め上つてきた。イスラエルの人々はそれを聞いて、ペリシテびとを恐れた。ハそしてイスラエルの人々はサムエルに言った、「われわれのため、われわれの神、主に叫ぶことを、やめなideくください。そうすれば主がペリシテびとの手からわれわれを救い出されるでしょう」。九そこでサムエルは乳を飲む小羊一頭をとり、これを全き燔祭として主にささげた。そしてサムエルはイスラエルのために主に叫んだので、主はこれに答えられた。一〇サムエルが燔祭をささげていた時、ペリシテびとはイスラエルと戦おうと

して近づいてきた。しかし主はその日、大いなる雷をペリシテびとの上にとどろかせて、彼らを乱されたので、彼らはイスラエルびとの前に敗れて逃げた。一イスラエルの人々はミツパを出てペリシテびとを追ひ、これを撃つて、ベテカルの下まで行つた。

二その時サムエルは一つの石をとつてミツパとエシヤナの間にすえ、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と言つて、その名をエベネゼルと名づけた。三こうしてペリシテびとは征服され、ふたたびイスラエルの領地にはいらなかった。サムエルの一生の間、主の手が、ペリシテびとを防いだ。四ペリシテびとがイスラエルから取つた町々は、エクロンからガテまで、イスラエルにかえり、イスラエルはその周囲の地をもペリシテびとの手から取りかえした。またイスラエルとアモリびとの間には平和があつた。

五サムエルは一生の間イスラエルをさばいた。一六年ごとにサムエルはベテルとギルガル、およびミツパを巡つて、その所々でイスラエルをさばき、セラムに歸つた。そこに彼の家があつたからである。その所でも彼はイスラエルをさばき、またそこで主に祭壇を築いた。

第八章

「サムエルは年老いて、その子らをイスラエルのさばきづかきとした。ニ長子の名はヨエルといい、次の子の名はアビヤと言った。彼らはベエルシバでさばきづかきであつた。ミしかしその子らは父の道を歩まないで、利にむかい、まいないを取つて、さばきを曲げた。

四この時、イスラエルの長老たちはみな集まつてラマにおけるサムエルのもとにきて、五言つた、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください」。六しかし彼らが、「われわれをさばく王を、われわれに与えよ」と言うのを聞いて、サムエルは喜ばなかつた。そしてサムエルが主に祈ると、七主はサムエルに言われた、「民が、すべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。八彼らは、わたしがエジプトから連れ上つた日から、きょうまで、わたしを捨ててほかの神々に仕え、さまざまの事をわたしにしたように、あなたにもしているのである。九今その声に聞き従いなさい。ただし、深く彼らを戒めて、彼らを治める王のならわしを彼らに示さなければならぬ」。

一〇サムエルは王を立てることを求める民に主の言葉をことごとく

とく告げて、二言つた、「あなたがたを治める王のならわしは次のとおりである。彼はあなたがたのむすこを取つて、戦車隊に入れ、騎兵とし、自分の戦車の前に走らせるであらう。ニ彼はまたそれを千人の長、五十人の長に任じ、またその地を耕させ、その作物を刈らせ、またその武器と戦車の装備を造らせるであらう。三また、あなたがたの娘を取つて、香をつくる者とし、料理をする者とし、パンを焼く者とするであらう。四また、あなたがたの畑とぶどう畑とオリブ畑の最も良い物を取つて、その家来に与え、五あなたがたの穀物と、ぶどう畑の、十分の一を取つて、その役人と家来に与え、六また、あなたがたの男女の奴隷および、あなたがたの最も良い牛とろばを取つて、自分のために働かせ、七また、あなたがたの羊の十分の一を取り、あなたがたは、その奴隷となるであらう。八そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王のゆえに呼ばれるであらう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであらう」。

九ところが民はサムエルの声に聞き従うことを拒んで言つた、「いいえ、われわれを治める王がなければならぬ。一〇われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」。ニサムエルは民の言葉をことごとく聞いて、それを主の耳に告げた。三主はサムエルに言われた、「彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立てよ」。サムエルはイスラエルの人々に言つた、「あなたがた

は、めいめいその町に帰りなさい」。

第九章

一 さて、ベニヤミンの人で、キシという名の裕福な人があった。キシはアビエルの子、アビエルはゼロルの子、ゼロルはベコラテの子、ベコラテはアピヤの子、アピヤはベニヤミンびとである。ニキシにはサウルという名の子があった。若くて麗しく、イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はなく、民のだれよりも肩から上、背が高かった。

三 サウルの父キシの数頭のろばがいなくなった。そこでキシは、その子サウルに言った、「しもべをひとり連れて、立つて行き、ろばを捜してきなさい」。四 そこでふたりはエフライムの山地を通りすぎ、シヤリシヤの地を通り過ぎたけれども見当らず、シヤリムの地を通り過ぎたけれどもおらず、ベニヤミンの地を通り過ぎたけれども見当らなかった。

五 彼らがツフの地にきた時、サウルは連れてきたしもべに言った、「さあ、帰ろう。父は、ろばのことよりも、われわれのことを心配するだろう」。六 ところが、しもべは言った、「この町には神の人がおられます。尊い人で、その言われることはみなそのとおりになります。その所へ行きましよう。われわれの出できた旅のことについて何か示されるでしょう」。七 サウルはしもべ

に言った、「しかし行くのであれば、その人に何を贈ろうか。袋のパンはもはや、なくなり、神の人に持つていく贈り物がない。何かありますか」。八 しもべは、またサウルに答えた、「わたしの手に四分の一シケルの銀があります。わたしはこれを、神の人に与えて、われわれの道を示してもらいましよう」。九 昔イスラエルでは、神に問うために行く時には、こう言った、「さあ、われわれは先見者のところへ行こう」。今の預言者は、昔は先見者といわれていたのである。――サウルはそのしもべに言った、「それは良い。さあ、行こう」。こうして彼らは、神の人のいるその町へ行つた。

二 彼らは町へ行く坂を上っている時、水くむために出てくるおとめたちに出会つたので、彼らに言った、「先見者はここにおられますか」。三 おとめたちは答えた、「おられます。ごろんなさい、この先です。急いで行きなさい。民がきよう高き所で犠牲をささげるので、たつた今、町にこられたところです。――あなたがたは、町にはいるとすぐ、あのかたが高き所に上つて食事される前に会えるでしょう。民はそのかたがこられるまでは食事をしません。あのかたが犠牲を祝福されてから、招かれた人々が食事をするのです。さあ、上つていきなさい。すぐに会えるでしょう」。四 こうして彼らは町に上つていった。そして町の中には、はらうとした時、サムエルは高き所に上るため彼らのほうに向かつて出てきた。

二五 さてサウルが来る一日前に、主はサムエルの耳に告げて言われた、二六「あすの今ごろ、あなたの所に、ベニヤミンの地から、ひとりの人をつかわすであろう。あなたはその人に油を注いで、わたしの民イスラエルの君としなさい。彼はわたしの民をペリシテびとの手から救い出すであろう。わたしの民の叫びがわたしに届き、わたしがその悩みを顧みるからである」。セサムエルがサウルを見た時、主は言われた、「見よ、わたしの言ったのはこの人である。この人がわたしの民を治めるであろう」。

二八 そのときサウルは、門の中でサムエルに近づいて言った、「先見者の家はどこですか。どうか教えてください」。一九 サムエルはサウルに答えた、「わたしがその先見者です。わたしの前に行つて、高き所に上りなさい。あなたがたは、きよう、わたしと一緒に食事しなさい。わたしはあすの朝あなたを帰らせ、あなたの心にあることをみな示しましょう。二〇 三日前に、いなくなつたあなたのろばは、もはや見つかつたので心になくなくてもよろしい。しかしイスラエルのすべての望ましきものはだれのものですか。それはあなたのもの、あなたの父の家のすべての人のものではありませんか」。二三 サウルは答えた、「わたしはイスラエルのうちの最も小さい部族のベニヤミンびとであつて、わたしの一族はまたベニヤミンのどの一族よりも卑しいものではありませんか。どうしてあなたは、そのようなことをわたしに言われるのですか」。

二三 サムエルはサウルとそのしもべを導いて、へやにはいり、招かれた三十人ほどのうちの上座にすわらせた。二四 そしてサムエルは料理人に言つた、「あなたに渡して、取りのけておくようにと云つておいた分を持つてきなさい」。二五 料理人は、ももとその上の部分を取り上げて、それをサウルの前に置いた。そしてサムエルは言つた、「ごらんなさい。取つておいた物が、あなたの前に置かれています。召しあがつてください。あなたが客人たちと一緒に食事ができるように、この時まで、あなたのために取つておいたものです」。

こうしてサウルはその日サムエルと一緒に食事をした。二五 そして彼らが高き所を下つて町にはいつた時、サウルのために屋上に床が設けられ、彼はその上に身を横たえて寝た。二六 そして夜明けになつて、サムエルは屋上のサウルに呼ばわつて言つた、「起きなさい。あなたをお送りします」。サウルは起き上がった。そしてサウルとサムエルのふたりは、共に外に出た。二七 彼らが町はずれに下つた時、サムエルはサウルに言つた、「あなたのしもべに先に行くように言いなさい。しもべが先に行つたら、あなたは、しばらくここに立ちとどまつてください。神の言葉を知らせましょう」。

第一〇章

「その時サムエルは油のびんを取つて、サウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った、「主はあなたに油を注いで、その民イスラエルの君とされたではありませんか。あなたは主の民を治め、周囲の敵の手から彼らを救わなければならぬ。主があなたに油を注いで、その嗣業の君とされたことの、しるしは次のとおりです。ニあなたがきよう、わたしを離れて、去つて行くとき、ベニヤミンの領地のゼルザにあるラケルの墓のかたわらで、ふたりの人に会うでしょう。そして彼らはあなたに言います、『あなたが捜しに行かれたらばは見つかりました。いま父上は、ろばよりもあなたがたの事を心配して、『わが子のことは、どうしよう』と言つておられます』。ニあなたが、そこからお進んで、タボルのかしの木の所へ行くと、そこでベテルに上つて神を拝もうとする三人の者に会うでしょう。ひとりとは三頭の子やぎを連れ、ひとりは三つのパンを携へ、ひとりは、ぶどう酒のはいった皮袋一つを携へている。四彼らはあなたにあいさつし、二つのパンをくれるでしょう。あなたはそれを、その手から受けなければならぬ。五その後、あなたは神のギベアへ行く。そこはペリシテびとの守備兵のいる所である。あなたはその所へ行つて、町にはいる時、立琴、手鼓、笛、琴を執る人々を先に行かせて、預言しながら高き所から降りてくる一群の預言者に会う

でしょう。六その時、主の霊があなたの上にもはげしく下つて、あなたは彼らと一緒に預言し、變つて新しい人となるでしょう。七これらのしるしが、あなたの身に起つたならば、あなたは手当たりしだいになんでもしなさい。神があなたと一緒におられるからです。ハあなたはわたしに先立つてギルガルに下らなければならぬ。わたしはあなたのもとに下つていつて、燔祭を供え、酬恩祭をささげるでしょう。わたしがあなたのもとに行つて、あなたのしなければならぬ事をあなたに示すまで、七日のあいだ待たなければならぬ」。

九サウルが背をかえしてサムエルを離れたとき、神は彼に新しい心を与えられた。これらのしるしは皆その日に起つた。一〇彼らはギベアにきた時、預言者の一群に出会つた。そして神の霊が、はげしくサウルの上により、彼は彼らのうちにいて預言した。二もとからサウルを知つていた人々はみな、サウルが預言者たちと共に預言するのを見て互に言つた、「キシの子に何事が起つたのか。サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」。三その所のひとりの者が答えた、「彼らの父はだれなのか」。それで「サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」というのが、ことわざとなつた。四サウルは預言することを終えて、高き所へ行つた。

五サウルのおじが、サウルとそのしもべに言つた、「あなたがたは、どこへ行つたのか」。サウルは言つた、「ろばを捜しにい

たのですが、どこにもいないので、サムエルのもとに行きました。一五 サウルのおじは言った、「サムエルが、どんなことを言ったか、どうぞ話してください」。一六 サウルはおじに言った、「ろばが見つかったと、はつきり、わたしたちに言いました」。しかしサムエルが言った王国のことについて、おじには何も告げなかった。

一七 さて、サムエルは民をミツパで主の前に集め、一八 イスラエルの人々に言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはイスラエルをエジプトから導き出し、あなたがたをエジプトびとの手、およびすべてあなたがたをしえたげる王国の手から救い出した』。一九 しかしあなたがたは、きよう、あなたがたをその悩みと苦しみの中から救われるあなたがたの神を捨て、その上、『いいえ、われわれの上に王を立てよ』と言う。それゆえ今、あなたがたは、部族にしたがい、また氏族にしたがって、主の前に出なさい」。

二〇 こうしてサムエルがイスラエルのすべての部族を呼び寄せた時、ベニヤミンの部族が、くじに当たった。二一 またベニヤミンの部族をその氏族にしたがって呼び寄せた時、マテリの氏族が、くじに当たり、マテリの氏族を人ごとに呼び寄せた時、キシの子サウルが、くじに当たった。しかし人々が彼を捜した時、見つからなかった。二三 そこでまた主に「その人はここにきているのですか」と問うと、主は言われた、「彼は荷物の間に隠れている」。二

三 人々は走って行って、彼をそこから連れてきた。彼は民の中に立ったが、肩から上は、民のどの人よりも高かった。二四 サウルはすべての民に言った、「主が選ばれた人をごらんさない。民のうちに彼のような人はいないではありませんか」。民はみな「王万歳」と叫んだ。

二五 その時サムエルは王国のならわしを民に語り、それを書にしているして、主の前におさめた。こうしてサムエルはすべての民をそれぞれ家に帰らせた。二六 サウルもまたギベアにある彼の家に帰った。そして神にその心を動かされた勇士たちも彼と共に行った。二七 しかし、よこしまな人々は「この男がどうしてわれわれを救うことができよう」と言って、彼を軽んじ、贈り物をしなかった。しかしサウルは黙っていた。

第一章

一 アンモンびとナハシは上つてきて、ヤベシ・ギレアデを攻め囲んだ。ヤベシの人々はナハシに言った、「われわれと契約を結びなさい。そうすればわれわれはあなたに仕えます」。二 しかしアンモンびとナハシは彼らに言った、「次の条件であなたがたと契約を結ぼう。すなわち、わたしが、あなたがたすべての右の目をえぐり取って、全イスラエルをはずかしめるといふことだ」。三 ヤベシの長老たちは彼に言った、「われわれに七日の猶予を与

え、イスラエルの全領土に使者を送ることを許してください。そしてもしわれわれを救う者がいない時は降伏します」。四 こうして使者が、サウルのギベアにきて、この事を民の耳に告げたので、民はみな声をあげて泣いた。

五 その時サウルは畑から牛のあとについてきた。そしてサウルは言った、「民が泣いているのは、どうしたのか」。人々は彼にヤベシの人々の事を告げた。六 サウルがこの言葉を聞いた時、神の霊が激しく彼の上に臨んだので、彼の怒りははなはだしく燃えた。七 彼は一くびきの牛をとり、それを切り裂き、使者の手によってイスラエルの全領土に送って言わせた、「だれであつてもサウルとサムエルとに従って出ない者は、その牛がこのようにされるであろう」。民は主を恐れて、ひとりのように出てきた。八 サウルはベゼクでそれを数えたが、イスラエルの人々は三十万、ユダの人々は三万であつた。九 そして人々は、きた使者たちに言った、「ヤベシ・ギレアデの人にこう言いなさい、『あす、日の暑くなるころ、あなたがたは救を得るであろう』と」。使者が帰つて、ヤベシの人々に告げたので、彼らは喜んだ。一〇 そこでヤベシの人々は言った、「あす、われわれは降伏します。なんでも、あなたがたが良いと思うことを、われわれにしてください」。二 明るる日、サウルは民を三つの部隊に分け、あかつきに敵の陣営に攻め入り、日の暑くなるころまで、アンモンびとを殺した。生き残った者はちりぢりになって、ふたり一緒にいるもの

はなかつた。

三 その時、民はサムエルに言った、「さきに、『サウルがどうしてわれわれを治めることができようか』と言ったものはだれでしょうか。その人々を引き出してください。われわれはその人々を殺します」。三 しかしサウルは言った、「主はきよう、イスラエルに救を施されたのですから、きようは人を殺してはなりません」。四 そこでサムエルは民に言った、「さあ、ギルガルへ行つて、あそこで王国を一新しよう」。五 こうして民はみなギルガルへ行つて、その所で主の前にサウルを王とし、酬恩祭を主の前にささげ、サウルとイスラエルの人々は皆、その所で大いに祝つた。

第二章

一 サムエルはイスラエルの人々に言った、「見よ、わたしは、あなたがたの言葉に聞き従つて、あなたがたの上に王を立てた。二 見よ王は今、あなたがたの前に歩む。わたしは年老いて髪は白くなつた。わたしの子らもあなたがたと共にいる。わたしは若い時から、きようまで、あなたがたの前に歩んだ。三 わたしはここにいる。主の前と、その油そそがれた者の前に、わたしを訴えよ。わたしが、だれの牛を取つたか。だれのろばを取つたか。だれを欺いたか。だれをしえたげたか。だれの手から、まいな

いを取つて、自分の目をくらましたか。もしそのようなことがあれば、わたしはそれを、あなたがたに償おう。四 彼らは言った、「あなたは、われわれを欺いたことも、しえたげたこともありません。また人の手から何も取つたことはありません。五 サムエルは彼らに言った、「あなたがたが、わたしの手のうちに、なんの不正をも見いださないことを、主はあなたがたにあかしされる。その油こそがれた者も、きようそれをあかしする」。彼らは言った、「あかしされます」。

六 サムエルは民に言った、「モーセとアロンを立てて、あなたがたの先祖をエジプトの地から導き出された主が証人です。七 それゆえ、あなたがたは今、立ちなさい。わたしは主が、あなたがたとあなたがたの先祖のために行われたすべての救のわざについて、主の前に、あなたがたと論じよう。八 ヤコブがエジプトに行つて、エジプトびとが、彼らを、しえたげた時、あなたがたの先祖は主に呼ばわつたので、主はモーセとアロンをつかわされた。そこで彼らは、あなたがたの先祖をエジプトから導き出して、この所に住まわせた。九 しかし、彼らがその神、主を忘れたので、主は彼らをハゾルの王ヤビンの軍の長シセラの手に渡し、またペリシテびとの手とモアブの王の手にわたされた。そこで彼らがイスラエルを攻めたので、一〇 民は主に呼ばわつて言った、『われわれは主を捨て、バアルとアシタロテに仕えて、罪を犯しました。今、われわれを敵の手から救い出してください。』

われわれはあなたに仕えます。二 主はエルバアルとバラクとエフタとサムエルをつかわして、あなたがたを周囲の敵の手から救い出されたので、あなたがたは安らかに住むことができた。三 ところが、アンモンびとの王ナハシが攻めてくるのを見たとき、あなたがたの神、主があなたがたの王であるのに、あなたがたはわたしに、『いいえ、われわれを治める王がなければならぬ』と言つた。四 それゆえ、今あなたがたの選んだ王、あなたがたが求めた王を見なさい。主はあなたがたの上に王を立てられた。五 もし、あなたがたが主を恐れ、主に仕えて、その声に聞き従い、主の戒めにそむかず、あなたがたも、あなたがたを治める王も共に、あなたがたの神、主に従うならば、それで良い。六 しかし、もしあなたがたが主の声に聞き従わず、主の戒めにそむくならば、主の手は、あなたがたとあなたがたの王を攻めるであろう。七 それゆえ、今、あなたがたは立つて、主が、あなたがたの目の前で行われる、この大いなる事を見なさい。八 きようは小麦刈の時ではないか。わたしは主に呼ばれるであろう。九 そのとき主は雷と雨を下して、あなたがたが王を求めて、主の前に犯した罪の大いなることを見させ、また知らせられるであろう。一〇 ハとしてサムエルが主に呼ばわつたので、主はその日、雷と雨を下された。民は皆ひじょうに主とサムエルとを恐れた。

一一 民はみなサムエルに言った、「しもべらのために、あなたの

神、主に祈つて、われわれの死なないようにしてください。われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」。二〇サムエルは民に言った、「恐れることはない。あなたがたは、このすべての悪をおこなった。しかし主に従うことをやめず、心をつくして主に仕えなさい。三むなししい物に迷って行つてはならない。それは、あなたがたを助けることも救うこともできないむなししいものだからである。三主は、その大いなる名のゆえに、その民を捨てられないであろう。主が、あなたがたを自分の民とすることを良しとされるからである。三また、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けつしてしないであろう。わたしはまた良い、正しい道を、あなたがたに教えるであろう。二四あなたがたは、ただ主を恐れ、心をつくして、誠実に主に仕えなければならない。そして主がどんなに大きいことをあなたがたのためにされたかを考えなければならない。二五しかし、あなたがたが、なおも悪を行うならば、あなたがたも、あなたがたの王も、共に滅ぼされるであろう」。

第二章

一サウルは三十歳で王の位につき、二年イスラエルを治めた。ニさてサウルはイスラエルびと三千を選んだ。二千はサウルと

共にミクマシ、およびベテルの山地におり、一千はヨナタンと共にベニヤミンのギベアにいた。サウルはその他の民を、おのの、その天幕に帰らせた。三ヨナタンは、ゲバにあるペリシテびとの守備兵を敗った。ペリシテびとはそのことを聞いた。そこで、サウルは国中に、あまねく角笛を吹きならして言わせた、「ヘブルびとよ、聞け」。四イスラエルの人は皆、サウルがペリシテびとの守備兵を敗ったこと、そしてイスラエルがペリシテびとに憎まれるようになったことを聞いた。こうして民は召されて、ギルガルのサウルのもとに集まった。

五ペリシテびとはイスラエルと戦うために集まった。戦車三千、騎兵六千、民は浜べの砂のように多かった。彼らは上つてきて、ベテアベンあつぱくの東のミクマシに陣を張った。ハイスラエルびとは、ひどく圧迫され、味方が危くなつたのを見て、ほら穴に、縦穴に、岩に、墓に、ため池に身を隠した。セまた、あるヘブルびとはヨルダンを渡つて、ガドとギレアデの地へ行つた。しかしサウルはなおギルガルにいて、民はみな、ふるえながら彼に従つた。

ハサウルは、サムエルが定めたように、七日のあいだ待つたが、サムエルがギルガルにこなかったので、民は彼を離れて散つて行つた。九そこでサウルは言った、「燔祭と酬恩祭をわたしの所に持つてきなさい」。こうして彼は燔祭をささげた。一〇その燔祭をささげ終ると、サムエルがきた。サウルはあいさつをし

ようと、彼を迎えに出た。二その時サムエルは言った、「あなたは何をしたのですか」。サウルは言った、「民はわたしを離れて散って行き、あなたは定まった日のうちにこれないのに、ペリシテびとがミクマシに集まったのを見たので、三わたしは、ペリシテびとが今にも、ギルガルに下つてきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の恵みを求めることをしてないと思います、やむを得ず燔祭をささげました」。四サムエルはサウルに言った、「あなたは愚かなことをした。あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主は今あなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。五しかし今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心にかなう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた。あなたが主の命じられた事を守らなかったからである」。六こうしてサムエルは立つて、ギルガルからベニヤミンのギベアに上つていった。

七サウルは共にいる民を数えてみたが、おおよそ六百人あった。八サウルとその子ヨナタン、ならびに、共にいる民は、ベニヤミンのゲバにおり、ペリシテびとはミクマシに陣を張っていた。九そしてペリシテびとの陣から三つの部隊にわかれた略奪隊が出てきて、一部隊はオフラの方に向かつて、シユアルの地に行き、二一部隊はベテホロンの方に向かい、一部隊は荒野の方のゼボイムの谷を見おろす境の方に向かった。

一九そのころ、イスラエルの地にはどこにも鉄工がいなかった。ペリシテびとが「ヘブルびとはつるぎも、やりも造つてはならない」と言つたからである。二〇ただしイスラエルの人は皆、そのすきざき、くわ、おの、かまに刃をつけるときは、ペリシテびとの所へ下つて行つた。二一すきざきと、くわのための料金は一ピムであり、おのに刃をつけるのと、とげのあるむちを直すのは三分の一シケルであつた。二三それでこの戦いの日には、サウルおよびヨナタンと共にいた民の手には、つるぎもやりもなく、ただサウルとその子ヨナタンとがそれを持つていた。二四ペリシテびとの先陣はミクマシの渡りに進み出た。

第四章

一ある日、サウルの子ヨナタンは、その武器を執る若者に「さあ、われわれは向こう側の、ペリシテびとの先陣へ渡つて行こう」と言つた。しかしヨナタンは父には告げなかった。二サウルはギベアのはずれで、ミグロンにある、ざくろの木の下にとどまつていたが、共にいた民はおおよそ六百人であつた。三またアヒヤはエボデを身に着けて共にいた。アヒヤはアヒトブの子、アヒトブはイカボデの兄弟、イカボデはピネハスの子、ピネハスはシロにおいて主の祭司であつたエリの子である。民はヨナタンが出かけることを知らなかった。四ヨナタンがペリシテびとの

先陣に渡って行こうとする渡りには、一方に険しい岩があり、他方にも険しい岩があり、一方の名をボゼツといい、他方の名をセネといった。五岩の一つはミクマシの前にあって北にあり、一つはゲバの前にあって南にあった。

ハヨナタンはその武器を執る若者に言った、「さあ、われわれはこの割礼なき者どもの先陣へ渡って行こう。主がわれわれのために何か行われるであろう。多くの人をもつて救うのも、少ない人をもつて救うのも、主にとつては、なんの妨げもないからである」。武器を執る者は彼に言った、「あなたの望みどおりになさい。わたしは一緒にいます。わたしはあなたと同じ心です」。ハヨナタンはまた言った、「われわれは、あの人々の所に渡って行って、彼らに身を現そう。九そして、もし彼らがわれわれに、『こちらから行くまで待て』と言うならば、われわれはその場にとどまり、彼らの所に上つていかなければならぬ。もし彼らが『われわれのところへ上つてこい』と言うならば、われわれは上つて行こう。主が彼らをわれわれの手に渡されるからである。これをもつてしるしとしよう。――こうしてふたりはペリシテびとの先陣に、その身を現したので、ペリシテびとは言った、「見よ、ヘブルびとが、隠れていた穴から出てくる」。三先陣の人々はヨナタンと、その武器を執る者に叫んで言った、「われわれのところの上つてこい。目に、もの見せてくれよう」。ヨナタンは、その武器を執る者に言った、「わたしのあとに

ついて上つてきなさい。主は彼らをイスラエルの手に渡されたのだ」。四そしてヨナタンはよじ登り、武器を執る者もそのあとについて登った。ペリシテびとはヨナタンの前に倒れた。武器を執る者も、あとについて行ってペリシテびとを殺した。四ヨナタンとその武器を執る者とは、手始めに殺したものは、おおよそ二十人であつて、このことはくびきの牛の耕す畑のおおよそ半分の内で行われた。五そして陣営にいる者、野にいるもの、およびすべての民は恐怖に襲われ、先陣のもの、および略奪隊までも、恐れおののいた。また地は震い動き、非常に大きな恐怖となつた。

六ベニヤミンのギベアにいたサウルの番兵たちが見ると、ペリシテびとの群衆はくずれて右往左往していた。七その時サウルは、共にいる民に言った、「人数を調べて、われわれのうちのだれが行つたかを見よ」。人数を調べたところ、ヨナタンとその武器を執る者とはそこにいなかった。八サウルはアヒヤに言った、「エポデをここに持つてきなさい」。その時、アヒヤはイスラエルの人々の前でエポデを身に着けていたからである。九サウルが祭司に語っている間にも、ペリシテびとの陣営の騒ぎはますます大きくなつたので、サウルは祭司に言った、「手を引きなさい」。二〇こうしてサウルおよび共にいる民は皆、集まって戦いに出た。ペリシテびとはつるぎをもつて同志打ちしたので、非常に大きな混乱となつた。二一また先にペリシテびと

と共にいて、彼らと共に陣営にきていたヘブルびとたちも、翻つてサウルおよびヨナタンと共にいるイスラエルびとにくようになった。三またエフライムの山地に身を隠していたイスラエルびとたちも皆、ペリシテびとが逃げると聞いて、彼らもまた戦いに出て、それを追撃した。三こうして主はその日イスラエルを救われた。そして戦いはベテアベンに移った。二四しかしその日イスラエルの人々は苦しんだ。これはサウルが民に誓わせて「夕方まで、わたしが敵にあだを返すまで、食物を食べる者は、のろわれる」と言ったからである。それゆえ民のうちには、ひとりも食物を口にしたものはなかった。二五ところで、民がみな森の中にはいると、地のおもてに蜜があつた。二六民は森にはいった時、蜜のしたたっているのを見た。しかしだれもそれを手に取って口につけるものがなかった。民が誓いを恐れたからである。二七しかしヨナタンは、父が民に誓わせたことを聞かなかつたので、手を伸べてつえの先を蜜はちの巣に浸し、手に取って口につけた。すると彼は目がはつきりした。二八その時、民のひとりが言った、「あなたの父は、かたく民に誓わせて『きよう、食物を食べる者は、のろわれる』と言われしました。それで民は疲れているのです」。二九ヨナタンは言った、「父は国を悩ませました。ごらんなさい。この蜜をすこしなめたばかりで、わたしの目がこんなに、はつきりしたではありませんか。三〇まして、民がきよう敵からぶんどつた物を、じゅうぶん

食べていたならば、さらに多くのペリシテびとを殺していたでしょうに」。

三その日イスラエルびとは、ペリシテびとを撃つて、ミクマシからアヤロンに及んだ。そして民は、ひじょうに疲れたので、三ぶんどり物に、はせかかつて、羊、牛、子牛を取つて、それを地の上に殺し、血のままでそれを食べた。三三人々はサウルに言った、「民は血のままで食べて、主に罪を犯しています」。サウルは言った、「あなたがたはそむいている。この所へ、わたしのもとに大きな石をころがしてきなさい」。三四サウルはまた言った、「あなたがたは分れて、民の中にはいつて、彼らに言いなさい。『おのおの牛または、羊を引いてきてここでほふつて食べなさい。血のままで食べて、主に罪を犯してはならない』。そこで民は皆、その夜、おのおの牛を引いてきて、それを、その所でほふつた。三五こうしてサウルは主の一つの祭壇を築いた。これはサウルが主のために築いた最初の祭壇である。三六サウルは言った、「われわれは夜のうちにペリシテびとを追つて下り、夜明けまで彼らをかすめて、ひとりも残らぬようにしましょう。人々は言った、「良いと思われることを、なんでもしてください」。しかし祭司は言った、「われわれは、ここで、神に尋ねましょう」。三七そこでサウルは神に伺つた、「わたしはペリシテびとを追つて下るべきでしょうか。あなたは彼らをイスラエルの手に渡されるでしょうか」。しかし神はその日は答えられ

なかつた。三八そこでサウルは言った、「民の長たちよ、みなこの所に近よりなさい。あなたがたは、よく見きわめて、きょうのこの罪が起きたわけを知らなければならぬ。三九イスラエルを救う主は生きておられる。たとい、それがわたしの子ヨナタンであつても、必ず死ななければならぬ」。しかし民のうちに はひとりも、これに答えるものがいなかつた。四〇サウルはイスラエルのすべての人に言った、「あなたがたは向こう側にいなさい。わたしとわたしの子ヨナタンはこちら側にいましょう」。民はサウルに言った、「良いと思われれることをしてください」。四一そこでサウルは言った、「イスラエルの神、主よ、あなたはきょう、なにゆえしもべに答えられなかつたのですか。もしこの罪がわたしにあるか、またはわたしの子ヨナタンにあるのでしたら、イスラエルの神、主よ、ウリムをお与えください。しかし、もしこの罪が、あなたの民イスラエルにあるのでしたら、トニムをお与えください」。こうしてヨナタンとサウルとが、くじに当り、民はのがれた。四二サウルは言った、「わたしは、わたしの子ヨナタンかを決めるために、くじを引きなさい」。くじはヨナタンに当つた。

四三サウルはヨナタンに言った、「あなたがしたことを、わたしに言いなさい」。ヨナタンは言った、「わたしは確かに手にあつたつえの先に少しばかりの蜜をつけて、なめました。わたしはここにいます。死は覚悟しています」。四四サウルは言った、「神が

わたしをいくえにも罰してくださいるように。ヨナタンよ、あなたは必ず死ななければならぬ」。四五その時、民はサウルに言った、「イスラエルのうちにこの大いなる勝利をもたらしたヨナタンが死ななければならぬのですか。決してそうではありません。主は生きておられます。ヨナタンの髪の毛一すじも地に落してはなりません。彼は神と共にきょう働いたのです」。こうして民はヨナタンを救つたので彼は死を免れた。四六サウルはペリシテびとを追うことをやめて引きあげ、ペリシテびとはその国へ歸つた。

四七サウルはイスラエルの王となつて、周囲のもろもろの敵、すなわちモアブ、アンモンの人々、エドム、ゾバの王たちおよびペリシテびとと戦い、すべて向かう所で勝利を得た。四八サウルは勇ましく働き、アマレクびとを撃つて、イスラエルびとを略奪者の手から救ひ出した。

四九さて、サウルのむすこたちはヨナタン、エスイ、およびマルキシユアである。ふたりの娘の名は次のとおりである。すなわち姉の名はメラブ、妹の名はミカルである。五〇サウルの妻の名はアヒノアムといい、アヒマアズの娘である。また軍の長の名はアブネルといい、サウルのおじネルの子である。五一サウルの父キシとアブネルの父ネルとは、アビエルの子である。

五二サウルの一生の間、ペリシテびとと激しい戦いがあつた。サウルは力の強い人や勇気のある人を見ると、それを召し

かかえた。

第一章

一 さて、サムエルはサウルに言った、「主は、わたしをつかわし、あなたに油をそそいで、その民イスラエルの王とされました。それゆえ、今、主の言葉を聞きなさい。ニ万軍の主は、こう仰せられる、『わたしは、アマレクがイスラエルにした事、すなわちイスラエルがエジプトから上つてきた時、その途中で敵対したことについて彼らを罰するであらう。』今、行つてアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆるすな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも皆殺せ」。

四 サウルは民を呼び集め、テライムで人数を調べたところ、歩兵は二十万、ユダの人は一万であつた。五 そしてサウルはアマレクの町へ行つて、谷に兵を伏せた。六 サウルはケニびとに言った、「さあ、あなたがたはアマレクびとを離れて、下つていつてください。彼らと一緒にあなたがたを滅ぼすようなことがあつてはならない。あなたがたは、イスラエルの人々がエジプトから上つてきた時、親切にしてくれたのですから」。そこでケニびとはアマレクびとを離れて行つた。七 サウルはアマレクびとを撃つて、ハビラからエジプトの東にあるシウルにまで及んだ。ハ

そしてアマレクびとの王アガグをいけどり、つるぎをもつてその民をことごとく滅ぼした。九 しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いもの、肥えたものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すことを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した。

一〇 その時、主の言葉がサムエルに臨んだ、二「わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである」。サムエルは怒つて、夜通し、主に呼ばわつた。三 そして朝サウルに会うため、早く起きたが、サムエルに告げる人があつた、「サウルはカルメルにきて、自分のために戦勝記念碑を建て、身をかえして進み、ギルガルへ下つて行きました」。四 サムエルがサウルのもとへ来ると、サウルは彼に言った、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」。五 サムエルは言った、「それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声と、わたしの聞く牛の声は、いったい、なんですか」。六 サウルは言った、「人々がアマレクびとの所から引いてきたのです。民は、あなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しました」。七 サムエルはサウルに言った、「おやめなさい。昨夜、主がわたしに言われたことを、あなたに告げましょう」。サウルは彼に言った、「言つてください」。

ニサムエルは言った、「たとい、自分では小さいと思つても、あなたはイスラエルの諸部族の長ではありませんか。主はあなたに油を注いでイスラエルの王とされた。ハそして主はあなたに使命を授け、つかわして言われた、『行つて、罪びとなるアマレクびとを滅ぼし尽せ。彼らを皆殺しにするまで戦え』。一ルそれであるのに、どうしてあなたは主の声に聞き従わないで、ぶんどり物にとびかかり、主の目の前に悪をおこなつたのですか」。ニサムエルはサムエルに言った、「わたしは主の声に聞き従い、主がつかわされた使命を帯びて行き、アマレクの王アガグを連れてきて、アマレクびとを滅ぼし尽しました。ニしかし民は滅ぼし尽すべきもののうち最も良いものを、ギルガルで、あなたの神、主にささげるため、ぶんどり物のうちから羊と牛を取りました」。ニサムエルは言った、

「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであらうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。

ニ三そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからである。

あなたが主のことばを捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた」。

ニ四サウルはサムエルに言った、「わたしは主の命令とあなたの

言葉にそむいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に聞き従つたからです。ニ五どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰つて、主を拜ませてください」。ニ六サムエルはサウルに言った、「あなたと一緒に帰りません。あなたが主の言葉を捨てたので、主もあなたを捨てて、イスラエルの王位から退けられたからです」。ニ七こうしてサムエルが去ろうとして身をかわしたとき、サウルがサムエルの上着のすそを捕えたので、それは裂けた。ニ八サムエルは彼に言った、「主はきよう、あなたからイスラエルの王国を裂き、もつと良いあなたの隣人に与えられた。ニ九またイスラエルの栄光は偽ることもなく、悔いることもない。彼は人ではないから悔いることはない」。ニ一〇サウルは言った、「わたしは罪を犯しましたが、どうぞ、民の長老たち、およびイスラエルの前で、わたしを尊び、わたしと一緒に帰つて、あなたの神、主を拜ませてください」。ニ一三そこでサムエルはサウルのあとについて帰った。そしてサウルは主を拜んだ。

ニ三時にサムエルは言った、「わたしの所にアマレクびとの王アガグを引いてきなさい」。アガグはうれしそうにサムエルの所に来た。アガグは「死の苦しみはきつと過ぎ去つたのだ」と思つた。ニ三サムエルは言った、「あなたのつるぎは多くの女に子供を失わせた。そのようにあなたの母も女のうちに最も無惨に子供を失う者となるであらう」。サムエルはギルガルで主の前に、アガグを寸断した。

三三そしてサムエルはラマに行き、サウルは故郷のギベアに上つて、その家に帰った。三五サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルを見なかった。しかしサムエルはサウルのために悲しんだ。また主はサウルをイスラエルの王としたことを悔いられた。

第一六章

一さて主はサムエルに言われた、「わたしがすでにサウルを捨てて、イスラエルの王位から退けたのに、あなたはいつまで彼のために悲しむのか。角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘムびとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである」。ニサムエルは言った、「どうしてわたしは行くことができましょう。サウルがそれを聞けば、わたしを殺すでしょう」。主は言われた、「一頭の子牛を引いていつて、『主に犠牲をささげるためにきました』と言いなさい。三そしてエッサイを犠牲の場所に呼びなさい。その時わたしはあなたのすることを示します。わたしがあなたに告げる人に油を注がなければならない。四サムエルは主が命じられたようにして、ベツレヘムへ行つた。町の長老たちは、恐れながら出て、彼を迎え、「穏やかな事のためにこられたのですか」と言った。五サムエルは言った、「穏やかな事のためです。わたしは主に犠牲をささげるためにきました。身をき

よめて、犠牲の場所にわたしと共にきてください」。そしてサムエルはエッサイとその子たちをきよめて犠牲の場に招いた。六彼らがきた時、サムエルはエリアブを見て、「自分の前にいるこの人こそ、主が油をそそがれる人だ」と思った。セしかし主はサムエルに言われた、「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」。ハそこでエッサイはアビナダブを呼んでサムエルの前を通らせた。サムエルは言った、「主が選ばれたのはこの人でもない」。九エッサイはシヤンマを通らせたが、サムエルは言った、「主が選ばれたのはこの人でもない」。一〇エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせたが、サムエルはエッサイに言った、「主が選ばれたのはこの人たちではない」。一一サムエルはエッサイに言った、「あなたにむすこたちは皆ここにいますか」。彼は言った、「まだ末の子が残っていますが羊を飼っています」。サムエルはエッサイに言った、「人をやって彼を連れてきなさい。彼がここに来るまで、われわれは食卓につきません」。一二そこで人をやって彼をつれてきた。彼は血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人であった。主は言われた、「立つてこれに油をそそげ。これがその人である」。一三サムエルは油の角をとって、その兄弟たちの中で、彼に油をそそいだ。この日からのち、主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ。そしてサムエルは立つてラマへ行つた。

「四さて主の霊はサウルを離れ、主から来る悪霊が彼を悩ました。五サウルの家来たちは彼に言った、「ごらんなさい。神から来る悪霊があなたを悩ましているのです。六どうぞ、われわれの主君が、あなたの前に仕えている家来たちに命じて、じょうずに琴をひく者ひとりを捜させてください。神から来る悪霊があなたに臨む時、彼が手で琴をひくならば、あなたは良くなれるでしょう」。七そこでサウルは家来たちに言った、「じょうずに琴をひく者を捜して、わたしのもとに連れてきなさい」。八その時、ひとりの若者がこたえた、「わたしはベツレヘムびとエツサイの子を見ましたが、琴がじょうずで、勇気もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、姿の美しい人です。また主が彼と共におられます」。九そこでサウルはエツサイのもとに使者をつかわして言った、「羊を飼っているあなたの子ダビデをわたしのもとによこしなさい」。一〇エツサイは、ろばにパンを負わせ、皮袋にいれたぶどう酒一袋と、やぎの子とを取って、その子ダビデの手によってサウルに送った。二ダビデはサウルのもとにきて、彼に仕えた。サウルはひじょうにこれを愛して、その武器を執る者とした。三またサウルは人をつかわしてエツサイに言った、「ダビデをわたしに仕えさせてください。彼はわたしの心にかないました」。四神から出る悪霊がサウルに臨む時、ダビデは琴をとり、手でそれをひくと、サウルは気が静まり、良くなって、悪霊は彼を離れた。

第十七章

一さてペリシテびとは、軍を集めて戦おうとし、ユダに属するソコに集まって、ソコとアゼラの間にあるエパス・ダミムに陣取った。二サウルとイスラエルの人々は集まってエラの谷に陣取り、ペリシテびとに対して戦列をしいた。三ペリシテびとは向こうの山の上に立ち、イスラエルはこちらの山の上に立った。その間に谷があった。四時に、ペリシテびとの陣から、ガテのゴリアテという名の、戦いをいどむ者が出てきた。身のたけは六キュビト半。五頭には青銅のかぶとを頂き、身には、うろことじのよろいを着ていた。そのよろいは青銅で重さ五千シケル。六また足には青銅のすね当を着け、肩には青銅の投げやりを背負っていた。七手に持つているやりの柄は、機の巻棒のようであり、やりの穂の鉄は六百シケルであった。彼の前には、盾を執る者が進んだ。八ゴリアテは立つてイスラエルの戦列に向かつて叫んだ、「なにゆえ戦列をつくって出てきたのか。わたしはペリシテびと、おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえたちから、ひとりを選んで、わたしのところへ下つてこさせよ。九もしその人が戦ってわたしを殺すことができたなら、われわれはおまえたちの家来となる。しかしわたしが勝つてその人を殺したら、おまえたちは、われわれの家来になって仕えなければならない」。一〇またこのペリシテびとは言った、「わたしは、きようイスラエ

ルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わたしと戦わせよ」。ニサウルとイスラエルのすべての人は、ペリシテびとのこの言葉を聞いて驚き、ひじょうに恐れた。

ニさて、ダビデはユダのベツレヘムにいたエフラタびとエッサイという名の人の子で、この人に八人の子があつたが、サウルの世には年が進んで、すでに年老いていた。ニエッサイの子のうち、上の三人はサウルに従つて戦争に出た。その戦いに出た三人の子の名は、長子をエリアブといい、次をアビナダブといい、第三をシャンマと言つた。ニダビデは末の子であつて、兄三人はサウルにしたがつた。ニダビデはサウルの所から行つたりきたりして、ベツレヘムで父の羊を飼つていた。ニ六あのペリシテびとは四十日の間、朝夕出てきて、彼らの前に立つた。

ニ七時に、エッサイはその子ダビデに言つた、「兄たちのため、このいり麦一エバと、この十個のパンをとつて、急に陣営にいる兄の所へ持つていきなさい。ニ八またこの十の乾酪を取つて、千人の長にもつて行き、兄たちの安否を見とどけて、そのしるしをもらつてきなさい」。

ニ九さてサウルと彼らおよびイスラエルのすべての人は、エラの谷でペリシテびとと戦つていた。ニ〇ダビデは朝はやく起きて、羊を番人に託し、エッサイが命じたように食料品を携えて行つた。彼が陣営に着いた時、軍勢は、ときの声をあげて戦線に出ようとしていた。ニ一そしてイスラエルとペリシテびとは

戦列を敷いて、軍と軍と向き合つた。ニ三ダビデは荷物をおろして、荷物を守る者にあずけ、戦列の方へ走つて、兄たちの所へ行き、彼らの安否を尋ねた。ニ四兄たちと語っている時、ペリシテびとの戦列から、ガテのペリシテびとで、名をゴリアテという、あの戦いをいどむ者が上つてきて、前と同じ言葉を言つたので、ダビデはそれを聞いた。

ニ四イスラエルのすべての人は、その人を見て、避けて逃げ、ひじょうに恐れた。ニ五イスラエルの人々はまた言つた、「あなたがたは、あの上つてきた人を見たか。確かにイスラエルにいどむために上つてきたのだ。彼を殺す人は、王が大いなる富を与えて富ませ、その娘を与え、その父の家にはイスラエルのうちで税を免れさせるであらう」。ニ六ダビデはかたわらに立つている人々に言つた、「このペリシテびとを殺し、イスラエルの恥をすすぐ人には、どうされるのですか。この割礼なきペリシテびとは何者なので、生ける神の軍をいどむのか」。ニ七民は前と同じように、「彼を殺す人にはこうされるであらう」と答えた。

ニ八上の兄エリアブはダビデが人々と語るのを聞いて、ダビデに向かい怒りを発して言つた、「なんのために下つてきたのか。野に在るわずかの羊はだれに託したのか。あなたのわがままと悪い心はわかつている。戦いを見るために下つてきたのだ」。ニ九ダビデは言つた、「わたしが今、何をしたいのですか。ただひと言ひただけではありませんか」。ニ〇またふり向いて、ほ

かの人（ひと）に前（まえ）のように語（かた）つたところ、民（たみ）はまた同じ（おな）ように答（こた）えた。三（さん）人（ひと）々はダビデの語（かた）つた言葉（ことば）を聞（き）いて、それをサウルに告（つ）げたので、サウルは彼（かれ）を呼（よ）び寄（よ）せた。三（さん）ダビデはサウルに言（い）つた、「だれも彼（かれ）のゆえに氣（き）を落（お）してはなりません。しもべが行（い）つてあのペリシテびとと戦（たたか）いましう」。三（さん）サウルはダビデに言（い）つた、「行（い）つて、あのペリシテびとと戦（たたか）うことはできない。あなたは年少（ねんしょう）だが、彼は若（わか）い時（とき）からの軍（ぐん）人（じん）だからです」。三（さん）四（し）しかしダビデはサウルに言（い）つた、「しもべは父（ちち）の羊（ひつじ）を飼（か）つていたのですが、しし、あるいはくまがきて、群（む）れの小（こ）羊（ひつじ）を取（と）つた時（とき）、三（さん）五（ご）わたしはそのあとを追（お）つて、これを撃（う）ち、小（こ）羊（ひつじ）をその口（くち）から救（すく）いだしました。その獸（けもの）がわたしにとびかかつてきた時（とき）は、ひげをつかまえて、それを撃（う）ち殺（ころ）しました。三（さん）六（ろく）しもべはすでに、ししとくまを殺（ころ）しました。この割（か）れなきペリシテびとも、生（い）ける神（かみ）の軍（ぐん）をいのだのですから、あの獸（けもの）の一（いっ）頭（とう）のようになるでしう」。三（さん）七（しち）ダビデはまた言（い）つた、「ししのつめ、くまのつめからわたしを救（すく）い出（だ）された主（しゅ）は、またわたしを、このペリシテびとの手（て）から救（すく）い出（だ）されるでしう」。サウルはダビデに言（い）つた、「行（い）きなさい。どうぞ主（しゅ）があなたと共（とも）におられるように」。三（さん）八（はち）そしてサウルは自分（じぶん）のいくさ衣（ころも）をダビデに着（き）せ、青銅（せいどう）のかぶとを、その頭（あたま）にかぶらせ、また、うろことじのよろいを身（み）にまとわせた。三（さん）九（きゅう）ダビデは、いくさ衣（ころも）の上に、つるぎを帯（お）びて行（い）こうとしたが、できなかつた。それに慣（な）れていなかつたからである。そこでダ

ビデはサウルに言（い）つた、「わたしはこれらのものを着（き）けていくことはできません。慣（な）れていないからです」。四（よ）ダビデはそれらを脱（ぬ）ぎすて、手（て）につえをとり、谷間（たにま）からなめらかな石（いし）五（ご）個（こ）を選びとつて自分（じぶん）の持（も）つてゐる羊（ひつじ）飼（か）の袋（ふくろ）に入れ、手（て）に石（いし）投（な）げを執（と）つて、あのペリシテびとに近（ちか）づいた。

四（よ）そのペリシテびとは進（すす）んできてダビデに近（ちか）づいた。そのたてを執（と）る者が彼（かれ）の前（まえ）にいた。四（よ）二（に）ペリシテびとは見（み）まわしてダビデを見（み）、これを侮（あざと）つた。まだ若（わか）くて血（けつ）色（しよく）がよく、姿（すがた）が美（うつく）しかつたからである。四（よ）三（さん）ペリシテびとはダビデに言（い）つた、「つえを持（も）つて、向（む）かつてくるが、わたしは犬（いぬ）なのか」。ペリシテびとは、また神（かみ）々（々）の名（な）によつてダビデをのろつた。四（よ）四（し）ペリシテびとはダビデに言（い）つた、「さあ、向（む）かつてこい。おまえの肉（にく）を、空（そら）の鳥（とり）、野（の）の獸（けもの）のえじきにしてくれよう」。四（よ）五（ご）ダビデはペリシテびとに言（い）つた、「おまえはつるぎと、やりと、投（な）げやりを持（も）つて、わたしに向（む）かつてくるが、わたしは万（ばん）軍（ぐん）の主（しゅ）の名（な）すなわち、おまえがいのだんだ、イスラエルの軍（ぐん）の神（かみ）の名（な）によつて、おまえに立（た）ち向（む）かう。四（よ）六（ろく）きよう、主（しゅ）は、おまえをわたしの手（て）にわたされるであらう。わたしは、おまえを撃（う）つて、首（くび）をはね、ペリシテびとの軍（ぐん）勢（せい）の死（し）かばねを、きよう、空（そら）の鳥（とり）、地（ち）の野（や）獸（じく）のえじきにし、イスラエルに、神（かみ）がおられることを全（ぜん）地に知（し）らせよう。四（よ）七（しち）またこの全（ぜん）会（かい）衆（しゆ）も、主（しゅ）は救（すく）いを施（ほどこ）すのに、つるぎとやりを用（もち）いられないことを知（し）るであらう。この戦（たたか）いは主（しゅ）の戦（たたか）いであつて、主（しゅ）がわれ

われの手におまえたちを渡されるからである」。

四八そのペリシテびとが立ち上がり、近づいてきてダビデに立ち向かったので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、ペリシテびとに立ち向かった。四九ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げて投げて、ペリシテびとの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつむきに地に倒れた。

五〇こうしてダビデは石投げと石をもってペリシテびとに勝ち、ペリシテびとを撃つて、これを殺した。ダビデの手につるぎがなかったので、五一ダビデは走りよってペリシテびとの上に乗り、そのつるぎを取って、さやから抜きはなし、それをもって彼を殺し、その首をはねた。ペリシテの人々は、その勇士が死んだのを見て逃げた。五二イスラエルとユダの人々は立ちあがり、ときをあげて、ペリシテびとを追撃し、ガテおよびエクロンの門にまで及んだ。そのためペリシテびとの負傷者は、シヤライムからガテおよびエクロンに行く道の上に倒れた。五三イスラエルの人々はペリシテびとの追撃を終えて帰り、その陣営を略奪した。五四ダビデは、あのペリシテびとの首を取ってエルサレムへ持つて行ったが、その武器は自分の天幕に置いた。

五五サウルはダビデがあのかのペリシテびとに向かつて出ていくのを見て、軍の長アブネルに言った、「アブネルよ、この若者はだれの子か」。アブネルは言った、「王よ、あなたのいのちにかけて誓います。わたしは知らないのです」。五六王は言った、「この

若者がだれの子か、尋ねてみよ」。五七ダビデが、あのかのペリシテびとを殺して帰ってきた時、アブネルは、ペリシテびとの首を手にもっている彼を、サウルの前に連れて行つた。五八サウルは彼に言った、「若者よ、あなたはだれの子か」。ダビデは答えた、「あなたのしもべ、ベツレヘムびとエツサイの子です」。

第一章

一ダビデがサウルに語り終えた時、ヨナタンの心はダビデの心に結びつき、ヨナタンは自分の命のようにダビデを愛した。二この日、サウルはダビデを召しかかえて、父の家に帰らせなかった。三ヨナタンとダビデとは契約を結んだ。ヨナタンが自分の命のようにダビデを愛したからである。四ヨナタンは自分が着ていた上着を脱いでダビデに与えた。また、そのいくさ衣、およびつるぎも弓も帯も、そのようにした。五ダビデはどこでもサウルがつかわす所に出て行つて、てがらを立てたので、サウルは彼を兵の隊長とした。それはすべての民の心にかない、またサウルの家来たちの心にもかなった。

六人々が引き揚げてきた時、すなわちダビデが、あのかのペリシテびとを殺して帰った時、女たちはイスラエルの町々から出てきて、手鼓と祝い歌と三糸の琴をもって、歌いつ舞いつ、サウル王を迎えた。七女たちは踊りながら互に歌いかわした、

「サウルは千を撃ち殺し、

ダビデは万を撃ち殺した」。

ハサウルは、ひじょうに怒り、この言葉に気を悪くして言った、「ダビデには万といい、わたしには千と言う。この上、彼に与えるものは、国のほかないではないか」。九サウルは、この日からのちダビデをうかがった。

一〇次の日、神から来る悪霊がサウルにはげしく臨んで、サウルが家の中で狂いわめいたので、ダビデは、いつものように、手で琴をひいた。その時、サウルの手にやりがあつたので、二サウルは「ダビデを壁に刺し通そう」と思つて、そのやりをふり上げた。しかしダビデは二度身をかわしてサウルを避けた。

三主がサウルを離れて、ダビデと共におられたので、サウルはダビデを恐れた。三それゆえサウルは、ダビデを遠ざけて、千人の長としたので、ダビデは民の先に立つて出入りした。四またダビデは、すべてそのすることに、てがらを立てた。主が共におられたからである。五サウルはダビデが大きなたてがらを立てるのを見て彼を恐れたが、六イスラエルとユダのすべての人はダビデを愛した。彼が民の先に立つて出入りしたからである。

七その時サウルはダビデに言った、「わたしの長女メラブを、あなたに妻として与えよう。ただ、あなたはわたしのために勇ましく、主の戦いを戦いなさい」。サウルは「自分の手で彼を殺

さないで、ペリシテびとの手で殺そう」と思つたからである。一ハダビデはサウルに言った、「わたしは何者なのでしょう。わたしの親族、わたしの父の一族はイスラエルのうちで何者なのでしょう。そのわたしが、どうして王のむこになることができるでしょう」。二しかしサウルの娘メラブは、ダビデにとつぐべき時になつて、メボラびとアデリエルに妻として与えられた。

三サウルの娘ミカルはダビデを愛した。人々がそれをサウルに告げたとき、サウルはその事を喜んだ。三サウルは「ミカルを彼に与えて、彼を欺く手だてとし、ペリシテびとの手で彼を殺そう」と思つたので、サウルはふたたびダビデに言った、「あなたを、きょう、わたしのむこにします」。三そしてサウルは家来たちに命じた、「ひそかにダビデに言いなさい、『王はあなたが気に入りに、王の家来たちも皆あなたを愛しています。それゆえ王のむこになりなさい』」。三そこでサウルの家来たちはこの言葉をダビデの耳に語つたので、ダビデは言った、「わたしのよいうな貧しく、卑しい者が、王のむこになることは、あなたがたには、たやすいことと思われませんか」。四サウルの家来たちはサウルに、「ダビデはこう言った」と告げた。五サウルは言った、「あなたがたはダビデにこう言いなさい、『王はなにも結納を望まれない。ただペリシテびとの陽の皮一百を獲て、王のあだを討つことを望まれる』」。これはサウルが、ダビデをペリシテびとの手によつて倒そうと思つたからである。六サウルの家来

たちが、この言葉をダビデに告げた時、ダビデは王のむこになることを良しとした。そして定めた日がまだこないうちに、ニモダビデは従者をつれて、立つて行き、ペリシテびと二百人を殺して、その陽の皮を携え帰り、王のむこになるために、それをごとく王にささげた。そこでサウルは娘ミカルを彼に妻として与えた。ニハしかしサウルは見て、主がダビデと共におられること、またイスラエルのすべての人がダビデを愛するのを知った時、ニルサウルは、ますますダビデを恐れた。こうしてサウルは絶えずダビデに敵した。

ミ○さてペリシテびとの君たちが攻めてきたが、ダビデは、彼らが攻めてくるごとに、サウルのどの家来よりも多くのてがらを立てたので、その名はひじように尊敬された。

第十九章

一サウルはその子ヨナタンおよびすべての家来たちにダビデを殺すようにと言った。しかしサウルの子ヨナタンは深くダビデを愛していた。ニヨナタンはダビデに言った、「父サウルはあなたを殺そうとしています。それゆえあすの朝、気をつけて、わからない場所に身を隠しててください。ミわたしは出て行って、あなたがいる野原で父のかたわらに立ち、父にあなたのことを話しましょう。そして、何かわたしにわかれば、あなたに告げま

しょう」。四ヨナタンは父サウルにダビデのことをほめて言った、「王よ、どうか家来ダビデに対して罪を犯さないでください。彼は、あなたに罪を犯さず、また彼のしたことは、あなたのためになることでした。五彼は命をかけて、あのペリシテびとを殺し、主はイスラエルの人々に大いなる勝利を与えられたのです。あなたはそれを見て喜ばれました。それであるのに、どうしてゆえなくダビデを殺し、罪なき者の血を流して罪を犯そうとされるのですか」。ハサウルはヨナタンの言葉を聞き入れた。そしてサウルは誓った、「主は生きておられる。わたしは決して彼を殺さない」。セヨナタンはダビデを呼んでこれらのことをみなダビデに告げた。そしてヨナタンがダビデをサウルのもとに連れてきたので、ダビデは、もとのようにサウルの前にいた。

ハところがまた戦争がおこって、ダビデは出てペリシテびとと戦い、大いに彼らを殺したので、彼らはその前から逃げ去った。九さてサウルが家にいて手にやりを持ってすわっていた時、主から来る悪霊がサウルに臨んだので、ダビデは琴をひいていたが、一〇サウルはそのやりをもってダビデを壁に刺し通そうとした。しかし彼はサウルの前に身をかわしたので、やりは壁につきささった。そしてダビデは逃げ去った。

二その夜、サウルはダビデの家に使者たちをつかわして見張りをさせ、朝になって彼を殺さようとした。しかしダビデの妻ミカルはダビデに言った、「もし今夜のうちに、あなたが自分の

命を救わないならば、あすは殺されるでしょう」。「三そしてミカルがダビデを窓からつりおろしたので、彼は逃げ去った。三ミカルは一つの像をとつて、寢床の上に横たえ、その頭にやぎの毛の網をかけ、着物をもつてそれをおおった。四サウルはダビデを捕えるため使者たちをつかわしたが、彼女は言つた、「あの人は病氣です」。五そこでサウルは、ダビデを見させようと使者たちをつかわして言つた、「彼を寢床のまま、わたしの所に連れてきなさい。わたしが彼を殺そう」。六使者たちがはいつて見ると、寢床には像が横たえてあつて、その頭には、やぎの毛の網がかけてあつた。七サウルはミカルに言つた、「あなたは どうして、このようにわたしを欺いて、わたしの敵を逃がしたのか」。ミカルはサウルに答えた、「あの人はわたしに『逃がしてくれ。さもないと、おまえを殺す』と言いました」。

八ダビデは逃げ去り、ラマにいるサムエルのもとへ行つて、サウルが自分にしたすべてのことを彼に告げた。そしてダビデとサムエルは行つてナヨテに住んだ。九ある人がサウルに「ダビデはラマのナヨテにいます」と告げたので、一〇サウルは、ダビデを捕えるために、使者たちをつかわした。彼らは預言者の一群が預言していて、サムエルが、そのうちの、かしらとなつて立っているのを見たが、その時、神の靈はサウルの使者たちにも臨んで、彼らもまた預言した。二サウルは、このことを聞いて、他の使者たちをつかわしたが、彼らもまた預言した。サウルは

三たび使者たちをつかわしたが、彼らもまた預言した。三そこでサウルはみずからラマに行き、セクの大井戸に着いた時、問うて言つた、「サムエルとダビデは、どこにおるか」。ひとりの人が答えた、「彼らはラマのナヨテにいます」。三そこでサウルはそこからラマのナヨテに行つたが、神の靈はまた彼にも臨んで、彼はラマのナヨテに着くまで歩きながら預言した。四そして彼もまた着物を脱いで、同じようにサムエルの前でも預言し、一日一夜、裸で倒れ伏していた。人々が「サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」というのはこのためである。

第二〇章

一ダビデはラマのナヨテから逃げてきて、ヨナタンに言つた、「わたしが何をし、どのような悪いことがあり、あなたの父の前にどんな罪を犯したので、わたしを殺そうとされるのでしょうか」。二ヨナタンは彼に言つた、「決して殺されることはありません。父は事の大小を問わず、わたしに告げないことはありません。どうして父がわたしにその事を隠しましょう。そのようなことはありません」。三しかしダビデは答えた、「あなたの父は、わたしがあなたの好意をえていることをよく知っております。それで『ヨナタンが悲しむことのないように、これを知らせないで』と思うておられるのです。しかし、主は生き

ておられ、あなたの魂は生きています。わたしと死との間は、ただ一歩です」。四 ヨナタンはダビデに言った、「あなたが言われることはなんでもします」。五 ダビデはヨナタンに言った、「あすは、ついたちですから、わたしは王と一緒に食事をしなければなりません。しかしわたしを行かせて三日目の夕方まで、野原に隠れることを許してください。六 もしあなたの父がわたしのことを尋ねられるならば、その時、言ってください、『ダビデはふるさとの町ベツレヘムへ急いで行くことを許してください』と、しきりにわたしに求めました。そこで全家の年祭があるからです。七 もし彼が「良し」と言われるなら、しもべは安全ですが、怒られるなら、わたしに害を加える決心でおられるのを知ってください。八 あなたは、主の前で、しもべと契約を結んでくださいました。それでどうぞしもべにいつくしみを施してください。しかし、もしわたしに悪いことがあるならば、あなた自らわたしを殺してください。どうしてあなたの父のもとへわたしを引いていかなければならないでしょう」。九 ヨナタンは言った、「そのようなことは決してありません。父があなたに害を加える決心をしていることがわたしにわかっているならば、わたしはそれをあなたに告げないでおきましょうか」。一〇 ダビデはヨナタンに言った、「あなたの父が荒々しくあなたに答えられる時、だれがわたしに告げるでしょうか」。二 ヨナタンはダビデに言った、「さあ、野原へ出ていこう」。こうしてふたりは野原へ

出て行った。

三 そしてヨナタンはダビデに言った、「イスラエルの神、主が、証人です。明日か明後日の今ごろ、わたしが父の心を探つて、父がダビデに対して良いのを見ながら、人をつかわしてあなたに知らせないようなことをするでしょうか。四 しかし、もし父があなたに害を加えようと思っているのに、それをあなたに知らせず、あなたを逃がして、安全に去らせないならば、主よ、どうぞ幾重にも、このヨナタンを罰してください。どうぞ主が父と共におられたように、あなたと共におられますように。五 もしわたしがなお生きながらえているならば、主のいつくしみをわたしに施し、死を免れさせてください。六 またわたしの家をも、長くあなたのいつくしみにあずからせてください。主がダビデの敵をことごとく地のおもてから断ち滅ぼされる時、七 ヨナタンの名をダビデの家から絶やさないでください。どうぞ主がダビデの敵に、あだを返されるように。八 そしてヨナタンは重ねてダビデに誓わせた。彼を愛したからである。ヨナタンは自分の命のように彼を愛していた。

九 ヨナタンはダビデに言った、「あすはついたちです。あなたの席があいているので、どうしたのかと尋ねられるでしょう。一〇 九三日目には、きびしく尋ねられるでしょうから、先にあなたが隠れた場所へ行つて、向こうの石塚のかたわらにいてください。二 わたしは的を射るようにして、矢を三本、そのそばに放ちま

す。三そして、『行つて矢を捜してきなさい』と言って子供をつかわしませう。わたしが子供に、『矢は手前にある。それを取つてきなさい』と言うならば、その時あなたはきてください。主が生きておられるように、あなたは安全で、何も危険がないからです。三しかしわたしがその子供に、『矢は向こうにある』と言うならば、その時、あなたは去つて行きなさい。主があなたを去らせられるのです。三あなたとわたしとで話しあつた事については、主が常にあなたとわたしとの間におられます」。

二四そこでダビデは野原に身を隠した。さて、ついでたちになつたので、王は食事をするため席に着いた。二五王はいつものように壁寄りに席に着き、ヨナタンはその向かい側の席に着き、アプネルはサウルの横の席に着いたが、ダビデの場所にはだれもいなかった。

二六ところがその日サウルは何も言わなかつた、「彼に何か起つて汚れたのだろう。きつと汚れたのにちがいない」と思つたからである。二七しかし、ふつか目すなわち、ついでたちの明くる日も、ダビデの場所はいつたので、サウルは、その子ヨナタンに言った、「どうしてエッサイの子は、きのうもきょうも食事にこないのか」。二八ヨナタンはサウルに答えた、「ダビデは、ベツレヘムへ行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求めました。二九彼は言いました、『わたしに行かせてください。われわれの一族が町で祭をするので、兄がわたしに来るようにと

命じました。それでもし、あなたの前に恵みを得更すならば、どうぞ、わたしに行くことを許し、兄弟たちにあわせてください』。それで彼は王の食卓にこなかったのです」。

三〇その時サウルはヨナタンにむかつて怒りを発し、彼に言った、「あなたは心の曲つた、そむく女の産んだ子だ。あなたがエッサイの子を選んで、自分の身ははずかしめ、また母の身ははずかしめていることをわたしが知らないと思うのか。三エッサイの子がこの世に生きながらえている間は、あなたも、あなたの王国も堅く立つていくことはできない。それゆえ今、人をつかわして、彼をわたしのもとに連れてこさせなさい。彼は必ず死ななければならぬ」。三一ヨナタンは父サウルに答えた、「どうして彼は殺されなければならぬのですか。彼は何をしたのですか」。三二ところがサウルはヨナタンを撃とうとして、やりを彼に向かつて振り上げたので、ヨナタンは父がダビデを殺そうと、心に決めていたのを知つた。三四ヨナタンは激しく怒つて席を立ち、その月のふつかには食事をしなかつた。父がダビデをはずかしめたので、ダビデのために憂えたからである。

三五あくる朝、ヨナタンは、ひとりの小さい子供を連れて、ダビデと打ち合わせたように野原に出て行つた。三六そしてその子供に言った、「走つて行つて、わたしの射る矢を捜しなさい」。子供が走つて行く間に、ヨナタンは矢を彼の前の方に放つた。三七そして子供が、ヨナタンの放つた矢のところへ行つた時、ヨナ

タンは子供のうしろから呼ばわって、「矢は向こうにあるではないか」と言った。三ハヨナタンはまた、その子供のうしろから呼ばわって言った、「早くせよ、急げ。とどまるな」。その子供は矢を拾い集めて主人ヨナタンのもとにきた。三九しかし子供は何も知らず、ヨナタンとダビデだけがそのことを知っていた。四〇ヨナタンは自分の武器をその子供に渡して言った、「あなたはこれを町へ運んで行きなさい」。四一子供が行ってしまうとダビデは石塚のかたわらをはなれて立ちいで、地にひれ伏して三度敬礼した。そして、ふたりは互に口づけし、互に泣いた。やがてダビデは心が落ち着いた。四二その時ヨナタンはダビデに言った、「無事に行きなさい。われわれふたりは、『主が常にわたしとあなたの間におられ、また、わたしの子孫とあなたの子孫の間におられる』と言って、主の名をさして誓ったのです」。こうしてダビデは立ち去り、ヨナタンは町にはいった。

第二章

一ダビデはノブに行き、祭司アヒメレクのところへ行った。アヒメレクはおのきながらダビデを迎えて言った、「どうしてあなたはひとりですか。だれも供がないのですか」。ニダビデは祭司アヒメレクに言った、「王がわたしに一つの事を命じて、『わたしがおまえをつかわしてさせる事、またわたしが命じたこと

については、何をも人に知らせてはならない』と言われました。そこでわたしは、ある場所に若者たちを待たせてあります。三とこで今あなたの手もとにパン五個でもあれば、それをわたしにください。なければなんでも、あるものをください」。四祭司はダビデに答えて言った、「常のパンはわたしの手もとにありません。ただその若者たちが女を慎んでさえたのでしたら、聖別したパンがあります」。五ダビデは祭司に答えた、「わたしが戦いに出るいつもの時のように、われわれはたしかに女たちを近づけていません。若者たちの器は、常の旅であつたとしても、清いのです。まして、きよう、彼らの器は清くないでしょうか」。六そこで祭司は彼に聖別したパンを与えた。その所に、供えのパンのほかにはパンがなく、このパンは、これを取り下げる日に、あたたかいパンと置きかえるため、主の前から取り下げたものである。

七その日、その所に、サウルのしもべのひとりが、主の前に留め置かれていた。その名はドエグといい、エドムびとであつて、サウルの牧者の長であつた。

八ダビデはまたアヒメレクに言った、「ここに、あなたの手もとに、やりかつるぎがありませんか。王の事が急を要したので、わたしはつるぎも武器も持つてこなかったのです」。九祭司は言った、「あなたがエラの谷で殺したペリシテびとゴリアテのつるぎが、布に包んでエボデのうしろにあります。もしあなたがこれ

を取ろうとおもわれるなら、お取りください。ここにはそのほかにありません」。ダビデは言った、「それにまさるものはありません。それをわたしにください」。二〇ダビデはその日サウルを恐れて、立つてガテの王アキシのところへ逃げて行つた。一アキシの家来たちはアキシに言った、「これはあの国の王ダビデではありませんか。人々が踊りながら、互に歌いかわして、

『サウルは千を撃ち殺し、

ダビデは万を撃ち殺した』

と言つたのは、この人のことではありませんか」。三ダビデは、これらの言葉を心におき、ガテの王アキシを、ひじように恐れたので、三人々の前で、わざと挙動を変え、捕えられて氣違いのふりをし、門のとびらを打ちたたき、よだれを流して、ひげに伝わらせた。四アキシは家来たちに言つた、「あなたがたの見るように、この人は氣違いだ。どうして彼をわたしの所へ連れてきたのか。五わたしに氣違いが必要なのか。この者を連れてきて、わたしの前で狂わせようというのか。この者をわたしの家へ入れようとするのか」。

第二章

一こうしてダビデはその所を去り、アドラムのほら穴へのがれた。彼の兄弟たちと父の家の者は皆、これを聞き、その所に

下つて彼のもとにきた。二また、しえたげられている人々、負債のある人々、心に不満のある人々も皆、彼のもとに集まつてきて、彼はその長となつた。おおよそ四百人の人々が彼と共にあつた。

三ダビデはそこからモアブのミヅパへ行き、モアブの王に言つた、「神がわたしのためにどんなことをされるかわかるまで、どうぞわたしの父母をあなたの所におらせてください」。四そして彼はモアブの王に彼らを託したので、彼らはダビデが要害にある間、王の所におつた。五さて、預言者ガドはダビデに言つた、「要害にとどまつていないで、去つてユダの地へ行きなさい」。そこでダビデは去つて、ハレテの森へ行つた。

六サウルは、ダビデおよび彼と共にいる人々が見つかったということを聞いた。サウルはギベアで、やりを手にもつて、丘のぎよりゆうの木の下にすわつており、家来たちはみなそのまわりに立つていた。セサウルはまわりに立つている家来たちに言つた、「あなたがたベニヤミンびとは聞きなさい。エッサイの子もまた、あなたがたのおのにおの煙やぶどう煙を与え、おののを千人の長、百人の長にするであらうか。ハあなたがたは皆共にはかつてわたしに敵した。わたしの子がエッサイの子と契約を結んでも、それをわたしに告げるものではなく、またあなたがたのうち、ひとりもわたしのために憂えず、きょうのように、わたしの子がわたしのしもべをそそのかしてわたしに逆らわせ、道で

彼がわたしを待ち伏せするようになって、わたしに告げる者はない。九その時エドムびとドエグは、サウルの家来たちのそばに立っていたが、答えて言った、「わたしはエツサイの子がノブにいるアヒトブの子アヒメレクの所にきたのを見ました。一〇アヒメレクは彼のために主に問い、また彼に食物を与え、ペリシテびとゴリアテのつるぎを与えました」。

二そこで王は人をつかわして、アヒトブの子祭司アヒメレクとその父の家来のすべての者、すなわちノブの祭司たちを召したので、みな王の所にきた。三サウルは言った、「アヒトブの子よ、聞きなさい」。彼は答えた、「わが主よ、わたしはここにおります」。三サウルは彼に言った、「どうしてあなたはエツサイの子と共にやってわたしに敵し、彼にパンとつるぎを与え、彼のために神に問い、きょうのように彼をわたしに逆らって立たせ、道で待ち伏せさせるのか」。四アヒメレクは王に答えて言った、「あなたの家来のうち、ダビデのように忠義な者がほかにありませんか。彼は王の娘婿であり、近衛兵の長であって、あなたの家で尊ばれる人ではありませんか。五彼のために神に問うたのは、きょう初めてでしょうか。いいえ、決してそうではありません。王よ、どうぞ、しもべと父の全家に罪を負わせないでください。しもべは、これについては、事の大小を問わず、何をも知らなかったのです」。六王は言った、「アヒメレクよ、あなたは必ず殺されなければならない。あなたの父の全家も同じであ

る」。七そして王はまわりに立っている近衛の兵に言った、「身をひるがえして、主の祭司たちを殺しなさい。彼らもダビデと協力していて、ダビデの逃げたのを知りながら、それをわたしに告げなかったからです」。ところが王の家来たちは主の祭司たちを殺すために手を下そうとはしなかった。八そこで王はドエグに言った、「あなたが身をひるがえして、祭司たちを殺しなさい」。エドムびとドエグは身をひるがえして祭司たちを撃ち、その日亜麻布のエポデを身につけている者八十五人を殺した。九彼はまた、つるぎをもつて祭司の町ノブを撃ち、つるぎをもつて男、女、幼な子、乳飲み子、牛、ろば、羊を殺した。一〇しかしアヒトブの子アヒメレクの子たちのひとりで、名をアビヤタルという人は、のがれてダビデの所に走った。三そしてアビヤタルは、サウルが主の祭司たちを殺したことをダビデに告げたので、三ダビデはアビヤタルに言った、「あの日、エドムびとドエグがあそこにいたので、わたしは彼がきつとサウルに告げるであろうと思った。わたしがあなたの父の家の人々の命を失わせるもとなつたのです。三あなたたはわたしの所にとどまってください。恐れることはありません。あなたの命を求める者は、わたしの命をも求めているのです。わたしの所におられるならば、あなたは安全でしょう」。

第二章

「さて人々はダビデに告げて言った、「ペリシテびとがケイラを攻めて、打ち場の穀物をかすめています」。ニそこでダビデは主に問うて言った、「わたしが行って、このペリシテびとを撃ちましょうか」。主はダビデに言われた、「行ってペリシテびとを撃ち、ケイラを救いなさい」。しかしダビデの従者たちは彼に言った、「われわれは、ユダのここにおつてさえ、恐れているのに、ましてケイラへ行って、ペリシテびとの軍に当ることができませんようか」。四ダビデが重ねて主に問うたところ、主は彼に答えて言われた、「立つて、ケイラへ下りなさい。わたしはペリシテびとをあなたの手に渡します」。五ダビデとその従者たちはケイラへ行って、ペリシテびとと戦い、彼らの家畜を奪いとり、彼らを多く撃ち殺した。こうしてダビデはケイラの住民を救った。

六アヒメレクの子アビヤタルは、ケイラにいるダビデのもとにのがれてきた時、手にエポデをもつて下つてきた。七さてダビデのケイラにきたことがサウルに聞えたので、サウルは言った、「神はわたしの手に彼をわたされた。彼は門と貫の木のある町にはいつて、自分で身を閉じこめたからである」。ハそこでサウルはすべての民を戦いに呼び集めて、ケイラに下り、ダビデとその従者を攻め囲もうとした。九ダビデはサウルが自分に害を加

えようとしているのを知つて、祭司アビヤタルに言った、「エポデを持つてきてください」。一〇そしてダビデは言った、「イスラエルの神、主よ、しもべはサウルがケイラにきて、わたしのために、この町を滅ぼそうとしていることを確かに聞きました。二ケイラの人々はわたしを彼の手に渡すでしょうか。しもべの聞いたように、サウルは下つてくるでしょうか。イスラエルの神、主よ、どうぞ、しもべに告げてください」。主は言われた、「彼は下つて来る」。三ダビデは言った、「ケイラの人々はわたしと従者たちをサウルの手にわたすでしょうか」。主は言われた、「彼らはあなたがたを渡すであろう」。四そこでダビデとその六百人はどの従者たちは立つて、ケイラを去り、いずこともなくさまよつた。ダビデのケイラから逃げ去つたことがサウルに聞えたので、サウルは戦いに出ることをやめた。五ダビデは荒野にある要害におり、またジフの荒野の山地におつた。サウルは日々に彼を尋ね求めたが、神は彼をその手に渡されなかつた。

六さてダビデはサウルが自分の命を求めて出てきたので恐れた。その時ダビデはジフの荒野のホレシにいたが、一六サウルの子ヨナタンは立つて、ホレシにいるダビデのもとに行き、神によつて彼を力づけた。一七そしてヨナタンは彼に言った、「恐れるにはおよびません。父サウルの手はあなたに届かないでしょう。あなたはイスラエルの王となり、わたしはあなたの次とな

るでしょう。このことは父サウルも知っています」。一八こうして彼らふたりは主の前で契約を結び、ダビデはホレシにとどまり、ヨナタンは家に帰った。

一九その時ジフびとはギベアにいるサウルのもとに上って行き、そして言った、「ダビデは、荒野の南にあるハキラの丘の上のホレシの要害に隠れて、われわれと共にいるではありませんか。ニ〇それゆえ王よ、あなたが下って行くという望みのおり、いま下ってきてください。われわれは彼を王の手に渡します」。ニ一サウルは言った、「あなたがたはわたしに同情を寄せてくれたのです。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。ニ二あなたがたは行って、なお確かめてください。彼のよく行く所とだれがそこで彼を見たかを見きわめてください。人の語るところによると、彼はひじょうに悪賢いそうだ。ニ三それで、あなたがたは彼が隠れる隠れ場所をみな見きわめ、確かな知らせをもってわたしの所に帰ってきなさい。その時わたしはあなたがたと共にいきます。もし彼がこの地にいるならば、わたしはユダの氏族をあまねく尋ねて彼を捜しだします」。ニ四彼らは立って、サウルに先立ってジフへ行った。

さてダビデとその従者たちは荒野の南のアラバにあるマオンの荒野にいた。ニ五そしてサウルとその従者たちはきて彼を捜した。人々がこれをダビデに告げたので、ダビデはマオンの荒野にある岩の所へ下って行った。サウルはこれを聞いて、マ

オンの荒野にきてダビデを追った。ニ六サウルは山のこちら側を歩き、ダビデとその従者たちとは山のむこう側を行った。そしてダビデは急いでサウルからのがれようとした。サウルとその従者たちが、ダビデとその従者たちを囲んで捕えようとしたからである。ニ七その時、サウルの所に、ひとりの使者がきて言った、「ペリシテびとが国を侵しています。急いできてください」。ニ八そこでサウルはダビデを追うことをやめて帰り、行ってペリシテびとに当たった。それで人々は、その所を「のがれの岩」と名づけた。ニ九ダビデはそこから上ってエンゲデの要害にいた。

第二章

一サウルがペリシテびとを追うことをやめて帰ってきたとき、人々は彼に告げて言った、「ダビデはエンゲデの野にいます」。ニそこでサウルは、全イスラエルから選んだ三千の人を率い、ダビデとその従者たちとを捜すため、「やぎの岩」の前へ出かけた。ニ途中、羊の通りの所にきたが、そこに、ほら穴があり、サウルは足をおおうために、その中にはいった。その時、ダビデとその従者たちは、ほら穴の奥にいた。四ダビデの従者たちは彼に言った、「主があなたに告げて、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることがで

きる』と言われた日がきたのです」。そこでダビデは立つて、ひそかに、サウルの上着のすそを切った。五しかし後になって、ダビデはサウルの上着のすそを切ったことに、心の責めを感じた。ハダビデは従者たちに言った、「主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は禁じられる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手をとるのとは良くない」。セダビデはこれらの言葉をもって従者たちを差し止め、サウルを撃つことを許さなかった。サウルは立つて、ほら穴を去り、道を進んだ。

ハダビデもまた、そのあとから立ち、ほら穴を出て、サウルのうしろから呼ばわつて、「わが君、王よ」と言った。サウルがうしろをふり向いた時、ダビデは地にひれ伏して拝した。九そしてダビデはサウルに言った、「どうして、あなたは『ダビデがあなたを害しようとしている』という人々の言葉を聞かれるのですか。一〇あなたは、この日、自分の目で、主があなたをきよう、ほら穴の中でわたしの手に渡されたのをごらんになりました。人々はわたしにあなたを殺すことを勧めたのですが、わたしは殺しませんでした。『わが君は主が油を注がれた方であるから、これに敵して手をとることはしない』とわたしは言いました。二二わが父よ、ごらん下さい。あなたの上着のすそは、わたしの手にあります。わたしがあなたの上着のすそを切り、しかも、あなたを殺さなかったことによつて、あなたは、わたしの手に悪も、と

がもないことを見て知られるでしょう。あなたはわたしの命を取ろうと、ねらつておられますが、わたしはあなたに対して罪をおかしたことはないのです。二二どうぞ主がわたしとあなたの間をさばかれましように。また主がわたしのために、あなたに報いられましように。しかし、わたしはあなたに手をくだすことをしないでしよう。二三昔から、ことわざに言っているように、『悪は悪人から出る』。しかし、わたしはあなたに手をくだすことをしないでしよう。二四イスラエルの王は、だれを追つて出てこられたのですか。あなたは、だれを追つておられるのですか。死んだ犬を追つておられるのです。一匹の蚤を追つておられるのです。二五どうぞ主がさばきびととなつて、わたしとあなたの間をさばき、かつ見て、わたしの訴えを聞き、わたしをあなたの手から救い出してください」。二六

ハダビデがこれらの言葉をサウルに語り終つたとき、サウルは言った、「わが子ダビデよ、これは、あなたの声であるか」。そしてサウルは声をあげて泣いた。二七サウルはまたダビデに言った、「あなたはわたしよりも正しい。わたしがあなたに悪を報いたのに、あなたはわたしに善を報いる。一ハきよう、あなたはいかに良くわたしをあつかつたかを明らかにしました。すなわち主がわたしをあなたの手にわたされたのに、あなたはわたしを殺さなかったのです。二八人は敵に会つたとき、敵を無事に去らせるでしようか。あなたが、きよう、わたしにした事のゆえに、

どうぞ主があなたに良い報いを与えられるように。二〇今わたしは、あなたがかならず王となることを知りました。またイスラエルの王国が、あなたの手によつて堅く立つことを知りました。三それゆえ、あなたはわたしのあとに、わたしの子孫を断たず、またわたしの父の家から、わたしの名を滅ぼし去らないと、いま主をさして、わたしに誓つてください。三そこでダビデはサウルに、そのように誓つた。そしてサウルは家に帰り、ダビデとその従者たちは要害にのぼつて行つた。

第二章

一さてサムエルが死んだので、イスラエルの人々はみな集まつて、彼のためにひじょうに悲しみ、ラマにあるその家に彼を葬つた。

そしてダビデは立つてパランの荒野に下つて行つた。ニマオンに、ひとりの人があつて、カルメルにその所有があり、ひじょうに裕福で、羊三千頭、やぎ一千頭を持っていた。彼はカルメルで羊の毛を切っていた。三その人の名はナバルといい、妻の名はアビガイルといった。アビガイルは賢くて美しかったが、その夫は剛情で、粗暴であつた。彼はカレブびとであつた。四ダビデは荒野にいて、ナバルがその羊の毛を切っていることを聞いたので、五十人の若者をつかわし、その若者たちに言つた、「カル

メルに上つて行つてナバルの所へ行き、わたしの名をもつて彼にあいさつし、六彼にこう言いなさい、『どうぞあなたに平安があるように。あなたの家に平安があるように。またあなたのすべての持ち物に平安があるように。セわたしはあなたが羊の毛を切つておられることを聞きました。あなたの羊飼たちはわれわれと一緒にいたのですが、われわれは彼らを少しも害しませんでした。また彼らはカルメルに在る間に、何ひとつ失つたことはありません。ハあなたの若者たちに聞いてみられるならば、わかります。それゆえ、わたしの若者たちに、あなたの好意を示してください。われわれは祝の日にきたのです。どうぞ、あなたの手もとにあるものを、贈り物として、しもべどもとあなたの子ダビデにください』。

九ダビデの若者たちは行つて、ダビデの名をもつて、これらの言葉をナバルに語り、そして待つていた。一〇ナバルはダビデの若者たちに答えて言つた、「ダビデとはだれか。エツサイの子とはだれか。このごろは、主人を捨てて逃げるしもべが多い。二どうしてわたしのパンと水、またわたしの羊の毛を切る人々のためにほふつた肉をとつて、どこからきたのかわからない人々に与えることができようか。ニダビデの若者たちは、そこを去り、歸つてきて、彼にこのすべての事を告げた。三そこでダビデは従者たちに言つた、「おのおの、つるぎを帯びなさい」。彼らはおのおのつるぎを帯び、ダビデもまたつるぎを帯びた。

そしておおよそ四百人がダビデに従って上つていき、二百人は荷物にもつのところにとどまつた。

一四ところで、ひとりの若者がナバルの妻アビガイルに言った、「ダビデが荒野から使者をつかわして、主人にあいさつをしたのに、主人はその使者たちをのしられました。一五しかし、あの人々はわれわれに大へんよくしてくれて、われわれは少しも害を受けず、またわれわれが野にいた時、彼らと共にいた間は、何ひとつ失ったことはありませんでした。一六われわれが羊を飼つて彼らと共にいる間、彼らは夜も昼もわれわれのかきとなつてくれました。一七それで、あなたは今それを知つて、自分のすることを考えてください。主人とその一家に災が起きるからです。しかも主人はよこしまな人で、話しかけることもできません」。

一八その時、アビガイルは急いでパン二百、ぶどう酒の皮袋二つ、調理した羊五頭、いり麦五セア、ほしぶどう百ふき、ほしいちじくのかたまり二百を取つて、ろばにのせ、一九若者たちに言った、「わたしのさきに進みなさい。わたしはあなたがたのうしろに、ついて行きます」。しかし彼女は夫ナバルには告げなかった。二〇アビガイルが、ろばに乗つて山陰を下つてきた時、ダビデと従者たちは彼女の方に向かつて降りてきたので、彼女はその人々に出会つた。二一さて、ダビデはさきにこう言った、「わたしはこの人が荒野で持つてゐる物をみな守つて、その人に

属する物を何ひとつなくならないようにしたが、それは全くむだであつた。彼はわたしのした親切に悪をもつて報いた。三もしわたしがあすの朝まで、ナバルに属するすべての者のうちひとりの男でも残しておくならば、神が幾重にもダビデを罰してくださるやうに」。

二三アビガイルはダビデを見て、急いで、ろばを降り、ダビデの前で地にひれ伏し、二四その足もとに伏して言った、「わが君よ、このとがをわたしだけに負わせてください。しかしどうぞ、はしために、あなたの耳に語ることを許し、はしための言葉をお聞きください。二五わが君よ、どうぞ、このよこしまな人ナバルのことを氣にかけないでください。あの人はその名のとおりです。名はナバルで、愚かな者です。あなたのはしためであるわたしは、わが君なるあなたがつかわされた若者たちを見なかつたのです。二六それゆえ今、わが君よ、主は生きておられます。またあなたは生きておられます。主は、あなたがきて血を流し、また手ずから、あだを報いるのをとどめられました。どうぞ今、あなたの敵、およびわが君に害を加えようとする者は、ナバルのごとくになりますやうに。二七今、あなたのつかえめが、わが君に携えてきた贈り物を、わが君に従う若者たちに与えてください。二八どうぞ、はしためのとがを許してください。主は必ずわが君のために確かな家を造られるでしょう。わが君が主のいくさを戦い、またこの世に生きながらえらるる間、あなたのうちに

悪いことが見いだされないからです。二九たとい人が立つてあなたを追ひ、あなたの命を求めても、わが君の命は、生きている者の束にたばねられて、あなたの神主のもとに守られるでしょう。しかし主はあなたの敵の命を、石投げの中から投げるように、投げ捨てられるでしょう。三〇そして主があなたについて語られたすべての良いことをわが君に行い、あなたをイスラエルのつかさに任じられる時、三あなたが、ゆえなく血を流し、またわが君がみずからあだを報いたと言うことで、それがあなたのつまずきとなり、またわが君の心の責めとなることのないようにしてください。主がわが君を良くせられる時、このはしためを思いだしてください」。

三三ダビデはアビガイルに言った、「きょう、あなたをつかわして、わたしを迎えさせられたイスラエルの神、主はほむべきかな。三三あなたの知恵はほむべきかな。またあなたはほむべきかな。あなたは、きょう、わたしがきて血を流し、手ずからあだを報いることをとどめられたのです。三四わたしがあなたを害することをとどめられたイスラエルの神、主はまことに生きておられる。もしあなたが急いでわたしに会いにこなかったならば、あすの朝までには、ナバルのところに、ひとりの男も残らなかったでしょう」。三五ダビデはアビガイルが携えてきた物をその手から受けて、彼女に言った、「あなたは無事にのぼって、家に帰りなさい。わたしはあなたの声を聞きいれ、あなたの願い

を許します」。

三六こうしてアビガイルはナバルのもとにきたが、見よ、彼はその家で、王の酒宴のような酒宴を開いていた。ナバルは心に楽しみ、ひじょうに酔っていたので、アビガイルは明るる朝まで事の大小を問わず何をも彼に告げなかった。三七朝になってナバルの酔いがさめたとき、その妻が彼にこれらの事を告げると、彼の心はそのうちに死んで、彼は石のようになった。三八十日ばかりして主がナバルを撃たれたので彼は死んだ。

三九ダビデはナバルが死んだと聞いて言った、「主はほむべきかな。主はわたしがナバルの手から受けた侮辱に報いて、しもべが悪をおこなわないようにされた。主はナバルの悪行をそのこうべに報いられたのだ」。ダビデはアビガイルを妻にめとろうと、人をつかわして彼女に申し込んだ。四〇ダビデのしもべたちはカルメルにいるアビガイルの所にきて、彼女に言った、「ダビデはあなたを妻にめとろうと、われわれをあなたの所へつかわしたのです」。四一アビガイルは立ち、地にひれ伏し拝して言った、「はしためは、わが君のしもべたちの足を洗うつかえめです」。四二アビガイルは急いで立ち、ろばに乗って、五人の侍女たちを連れ、ダビデの使者たちに従って行き、ダビデの妻となった。

四三ダビデはまたエズレルのアヒノアムをめとった。彼女たちはふたりともダビデの妻となった。四四ところでサウルはその

娘、ダビデの妻ミカルを、ガリムの人であるライシの子バルテに与えた。

第二十六章

「そのころジフびとがギベアにおけるサウルのもとにきて言った、「ダビデは荒野の前にあるハキラの山に隠れているではありませんか」。ニサウルは立つて、ジフの荒野でダビデを捜すために、イスラエルのうちから選んだ三千人をひき連れて、ジフの荒野に下った。ニサウルは荒野の前の道のかたわらにあるハキラの山に陣を取った。ダビデは荒野にとどまっていたが、サウルが自分のあとを追って荒野にきたのを見て、四斥候を出し、サウルが確かにきたのを知った。五そしてダビデは立つて、サウルが陣を取っている所へ行つて、サウルとその軍の長、ネルの子アブネルの寝ている場所を見た。サウルは陣所のうちに寝ていて、民はその周囲に宿営していた。

六ダビデは、ヘテびとアヒメレク、およびゼルヤの子で、ヨアブの兄弟であるアビシヤイに言った、「だれがわたしと共にサウルの陣に下つて行くか」。アビシヤイは言った、「わたしが一緒に下つて行きます」。セこうしてダビデとアビシヤイとが夜、民のところへ行つてみると、サウルは陣所のうちに身を横たえて寝ており、そのやりは枕もとに地に突きさしてあった。そして

アブネルと民らとはその周囲に寝ていた。ハアビシヤイはダビデに言った、「神はきよう敵をあなたの手に渡されました。どうぞわたしに、彼のやりをもつてひと突きで彼を地に刺しとおさせてください。ふたたび突くには及びません」。しかしダビデはアビシヤイに言った、「彼を殺してはならない。主が油を注がれた者に向かつて、手をのべ、罪を得ない者があろうか」。ニダビデはまた言った、「主は生きておられる。主が彼を撃たれるであらう。あるいは彼の死ぬ日が来るであらう。あるいは戦いに下つて行つて滅びるであらう。――主が油を注がれた者に向かつて、わたしが手をのべることを主は禁じられる。しかし今、そのまくらもとにあるやりと水のびんを取りなさい。そしてわれわれは去ろう」。ニこうしてダビデはサウルの枕もとから、やりと水のびんを取つて彼らは去つたが、だれもそれを見ず、だれも知らず、また、だれも目をさまさず、みな眠っていた。主が彼らを深く眠らされたからである。

ニダビデは向こう側に渡つて行つて、遠く離れて山の頂に立った。彼らの間の隔たりは大きかった。四ダビデは民とネルの子アブネルに呼ばわつて言った、「アブネルよ、あなたは答えなのか」。アブネルは答えて言った、「王を呼んでいるあなたはだれか」。ニダビデはアブネルに言った、「あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があろうか。それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らなかったのか。

民のひとり、あなたの主君である王を殺そうとして、はいりこんだではないか。一六あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそそがれた、あなたの主君を守らなかつたからだ。いま王のやりがどこにあるか。その枕もとにあつた水のびんがどこにあるかを見なさい」。

一七サウルはダビデの声を聞きわけて言った、「わが子ダビデよ、これはあなたの声か」。ダビデは言った、「王、わが君よ、わたしの声です」。一八ダビデはまた言った、「わが君はどうしてしもべのあとを追われるのですか。わたしが何をしたのですか。わたしの手になんのわるいことがあるのですか。一九王、わが君よ、どうぞ、今しもべの言葉を聞いてください。もし主があなたを動かして、わたしの敵とされたのであれば、どうぞ主が供え物を受けて和らいでくださるように。もし、それが人であるならば、どうぞその人々が主の前にのろいを受けるように。彼らが『おまえは行つて他の神々に仕えなさい』と言って、きよう、わたしを追い出し、主の嗣業にあずかることができないようにしたからです。二〇それゆえ今、主の前を離れて、わたしの血が地に落ちることのないようにしてください。イスラエルの王は、人が山で、しやこを追うように、わたしの命を取ろうとして出てこられたのです」。

二一その時、サウルは言った、「わたしは罪を犯した。わが子ダビ

デよ、帰つてきてください。きよう、わたしの命があなたの目に尊く見られたゆえ、わたしは、もはやあなたに害を加えないであらう。わたしは愚かなことをして、非常なまちがいをした」。二三ダビデは答えた、「王のやりは、ここにあります。ひとりの若者に渡つてこさせ、これを持ちかえらせてください。二四主はおののにその義と真実に従つて報いられます。主がきよう、あなたをわたしの手に渡されたのに、わたしは主が油を注がれた者に向かつて、手をのべることをしなかつたのです。二五きよう、わたしがあなたの命を重んじたように、どうぞ主がわたしの命を重んじて、もろもろの苦難から救い出してください。二六サウルはダビデに言った、「わが子ダビデよ、あなたはほむべきかな。あなたは多くの事をおこなつて、それをなし遂げるであらう」。こうしてダビデはその道を行き、サウルは自分の所へ歸つた。

第二十七章

一ダビデは心のうちに言った、「わたしは、いつかはサウルの手にかかつて滅ぼされるであらう。早くペリシテびとの地へのがれるほかはない。そうすればサウルはこの上イスラエルの地にわたしをくまなく捜すことはやめ、わたしは彼の手からのがれることができるであらう」。二こうしてダビデは、共にいた六百

人と一緒に、立つてガテの王マオクの子アキシの所へ行つた。三
 ダビデと従者たちは、おのおのその家族とともに、ガテでアキ
 シと共に住んだ。ダビデはそのふたりの妻、すなわちエズレル
 の女アヒノアムと、カルメルの子女でナバルの妻であつたアビガ
 イルと共にあつた。四ダビデがガテにのがれたことがサウルに
 聞えたので、サウルはもはや彼を捜さなかつた。

五さてダビデはアキシに言つた、「もしわたしがあなたの前に恵
 みを得るならば、どうぞ、いなかにある町のうちで一つの場所を
 わたしに与えてそこに住まわせてください。どうしてしもべが
 あなたと共に王の町に住むことができましょうか」。六アキシは
 その日チクラグを彼に与えた。こうしてチクラグは今日にいた
 るまでユダの王に属している。セダビデがペリシテびとの国に
 住んだ日の数は一年と四か月であつた。

八さてダビデは従者と共にのぼつて、ゲシウルびと、ゲゼルびと
 およびアマレクびとを襲つた。これらは昔からシウルに至るま
 での地の住民であつて、エジプトに至るまでの地に住んでい
 た。九ダビデはその地を撃つて、男も女も生かしおかず、羊と牛
 とろばとらくだと衣服とを取つて、アキシのもとに帰つてきた。
 一〇アキシが「あなたはきょうどこを襲いましたか」と尋ねると、
 ダビデは、その時々、「ユダのネゲブです」、「エラメルびとのネ
 ゲブです」、「ケニびとのネゲブです」と言つた。二ダビデは男も
 女も生かしおかず、ひとりをもガテに引いて行かなかつた。そ

れはダビデが、「恐らくは、彼らが、『ダビデはこうした』と言つ
 て、われわれのことを告げるであろう」と思つたからである。ダ
 ビデはペリシテびとのいなかに住んでいる間はこうするのが常
 であつた。三アキシはダビデを信じて言つた、「彼は自分を全
 くその民イスラエルに憎まれるようにした。それゆゑ彼は
 永久にわたしのしもべとなるであろう」。

第二十八章

一そのころ、ペリシテびとがイスラエルと戦おうとして、いくさ
 のために軍勢を集めたので、アキシはダビデに言つた、「あなた
 は、しかと承知してください。あなたとあなたの従者たちと
 は、わたしと共に出て、軍勢に加わらなければなりません」。二ダ
 ビデはアキシに言つた、「よろしい、あなたはしもべが何をする
 かを知られるでしょう」。アキシはダビデに言つた、「よろしい、
 あなたを終身わたしの護衛の長としよう」。

三さてサムエルはすでに死んで、イスラエルのすべての人は彼
 のために悲しみ、その町ラマに葬つた。また先にサウルは口寄
 せや占い師をその地から追放した。四ペリシテびとが集まつて
 きてシユネムに陣を取つたので、サウルはイスラエルのすべて
 の人を集めて、ギルボアに陣を取つた。五サウルはペリシテびと
 の軍勢を見て恐れ、その心はいたくおののいた。六そこでサウル

は主に伺いをたてたが、主は夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても彼に答えられなかった。セサウルはしもべたちと言った、「わたしのために、口寄せの女を捜し出しなさい。わたしは行つてその女に尋ねよう」。しもべたちは彼に言った、「見よ、エンドルにひとりの口寄せがいます」。

ハサウルは姿を変えてほかの着物をまとい、ふたりの従者を伴って行き、夜の間に、その女の所にきた。そしてサウルは言った、「わたしのために口寄せの術を行つて、わたしがあなたに告げる人呼び起してください」。九女は彼に言った、「あなたはサウルがしたことをごぞんじでしょう。彼は口寄せや占い師をその国から断ち滅ぼしました。どうしてあなたは、わたしの命にわなをかけて、わたしを死なせようとするのですか」。二〇サウルは主をさして彼女に誓つて言った、「主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けることはないでしょう」。二一女は言った、「あなたのためにだれを呼び起しましょうか」。サウルは言った、「サムエルを呼び起してください」。二二女はサムエルを見た時、大声で叫んだ。そしてその女はサウルに言った、「どうしてあなたはわたしを欺かれたのですか。あなたはサウルです」。二三王は彼女に言った、「恐れることはない。あなたには何が見えるのですか」。女はサウルに言った、「神のようなかたが地からのぼられるのが見えます」。二四サウルは彼女に言った、「その人はどんな様子をしていますか」。彼女は言った、

「ひとりの老人がのぼつてこられます。その人は上着をまとつておられます」。サウルはその人がサムエルであることを知り、地にひれ伏して拝した。

二五サムエルはサウルに言った、「なぜ、わたしを呼び起して、わたしを煩わすのか」。サウルは言った、「わたしは、ひじょうに悩んでいます。ペリシテびとがわたしに向かつていくさを起し、神はわたしを離れて、預言者によっても、夢によっても、もはやわたしに答えられないのです。それで、わたしのすべきことを知るために、あなたを呼びました」。二六サムエルは言った、「主があなたを離れて、あなたの敵となられたのに、どうしてあなたはわたしに問うのですか。二七主は、わたしによつて語られたとおり、あなたに行われた。主は王国を、あなたの手から裂きはなして、あなたの隣人であるダビデに与えられた。二八あなたは主の声に聞き従わず、主の激しい怒りに従つて、アマレクびとを撃ち滅ぼさなかつたゆえに、主はこの事を、この日、あなたに行われたのである。二九主はまたイスラエルをも、あなたと共に、ペリシテびとの手に渡されるであらう。あすは、あなたもあなたの子らもわたしと一緒にになるであらう。また主はイスラエルの軍勢をもペリシテびとの手に渡される」。三〇そのときサウルは、ただちに、地に伸び、倒れ、サムエルの言葉のために、ひじょうに恐れ、またその力はうせてしまった。その一日一夜、食物をとつていなかったからである。三二女は

第二十九章

サウルのもとにきて、彼のおののいてゐるのを見て言った、「あなたのつかえめは、あなたの声に聞き従い、わたしの命をかけて、あなたの言われた言葉に従いました。三それゆえ今あなたも、つかえめの声に聞き従い、一口のパンをあなたの前にそなえさせてください。あなたはそれをめしあがつて力をつけ、道を行ってください」。三ところがサウルは断つて言った、「わたしは食べません」。しかし彼のしもべたちも、その女もしいてすめたので、サウルはその言葉を聞きいれ、地から起きあがり、床の上にすわった。四その女は家に肥えた子牛があつたので、急いでそれをほふり、また麦粉をとり、こねて、種入れぬパンを焼き、五サウルとそのしもべたちの前に持ってきたので、彼らは食べた。そして彼らは立ち上がつて、その夜のうちに去つた。

一さてペリシテびとは、その軍勢をことごとくアベクに集めた。イスラエルびとはエズレルにある泉のかたわらに陣を取つた。ニペリシテびとの君たちは、あるいは百人、あるいは千人を率いて進み、ダビデとその従者たちはアキシと共に、しんがりになつて進んだ。三その時、ペリシテびとの君たちは言った、「これらのヘブルびとはここで何をしているのか」。アキシはペリシテびとたちに言った、「これはイスラエルの王サウルのしもべダ

ビデではないか。彼はこの日ごろ、この年ごろ、わたしと共にいたが、逃げ落ちてきた日からきようまで、わたしは彼にあやまちがあつたのを見たことがない」。四しかしペリシテびとの君たちは彼に向かつて怒つた。そしてペリシテびとの君たちは彼に言った、「この人を帰らせて、あなたが彼を置いたもの所の所へ行かせなさい。われわれと一緒に彼を戦いに下らせてはならない。戦いの時、彼がわれわれの敵となるかも知れないからである。この者は何をもつてその主君とやわらぐことができようか。ここにいる人々の首をもつてするほかはあるまい。五これは、かつて人々が踊りのうちに歌いかわして、

『サウルは千を撃ち殺し、

ダビデは万を撃ち殺した』

と言つた、あのダビデではないか」。

六そこでアキシはダビデを呼んで言つた、「主は生きておられる。あなたは正しい人である。あなたがわたしと一緒に戦いに出入りすることをわたしは良いと思つてゐる。それはあなたがわたしの所にきた日からこの日まで、わたしは、あなたに悪い事があつたのを見たことがないからである。しかしペリシテびとの君たちはあなたを良く言わない。七それゆえ今安らかに帰つて行きなさい。彼らが悪いと思うことはしないがよろう」。ハダビデはアキシに言つた、「しかしわたしが何をしたいというのですか。わたしがあなたに仕えはじめた日からこの日まで、あ

なたはしもべの身に何を見られたので、わたしは行って、わたしの主君である王の敵と戦うことができないのですか」。ルアキシはダビデに答えた、「わたしは見て、あなたが神の使のようにりっぱな人であることを知っている。しかし、ペリシテびとの君たちは、『われわれと一緒に彼を戦いに上らせてはならない』と言っている。――それで、あなたは、一緒にきたあなたの主君のしもべたちと共に朝早く起きなさい。そして朝早く起き、夜が明けてから去りなさい。――こうしてダビデとその従者たちとは共にペリシテびとの地へ帰ろうと、朝早く起きて出立したが、ペリシテびとはエズレルへ上って行った。

第三〇章

――さてダビデとその従者たちが三日目にチクラグにきた時、アマレクびとはすでにネゲブとチクラグを襲っていた。彼らはチクラグを撃ち、火をはなつてこれを焼き、ニその中にいた女たちおよびすべての者を捕虜にし、小さい者をも大きい者をも、ひとりも殺さずに、引いて、その道に行った。ニダビデと従者たちはその町にきて、町が火で焼かれ、その妻とむすこ娘らは捕虜となったのを見た。四ダビデおよび彼と共にいた民は声をあげて泣き、ついに泣く力もなくなった。五ダビデのふたりの妻すなわちエズレルの女アヒノアムと、カルメルびとナバルの妻であつ

たアビガイルも捕虜になった。六その時、ダビデはひじょうに悩んだ。それは民がみなおのおのそのむすこ娘のために心を痛めたため、ダビデを石で撃とうと言ったからである。しかしダビデはその神、主によって自分を力づけた。

七ダビデはアヒメレクの子、祭司アビヤタルに、「エボデをわたしのところに持つてきなさい」と言ったので、アビヤタルは、エボデをダビデのところに持つてきた。八ダビデは主に伺いをたてて言った、「わたしはこの軍隊のあとを追うべきですか。わたしはそれに追いつくことができましようか」。主は彼に言われた、「追いなさい。あなたは必ず追いついて、確かに救い出すことができるであろう」。九そこでダビデは、一緒にいた六百人の者と共に出立してベソル川へ行つたが、あとに残る者はそこにとどまつた。一〇すなわちダビデは四百人と共に追撃をつづけたが、疲れてベソル川を渡れない者二百人はとどまつた。

二彼らは野で、ひとりのエジプトびとを見て、それをダビデのもとに引いてきて、パンを食べさせ、水を飲ませた。ニまた彼らはほしいちじくのかたまり一つと、ほしぶどう二ぶさを彼に与えた。彼は食べて元気を回復した。彼は三日三夜、パンを食べず、水を飲んでいなかったからである。ニダビデは彼に言った、「あなたはだれのものか。どこからきたのか」。彼は言った、「わたしはエジプトの若者で、アマレクびとの奴隷です。三日前にわたしが病気になるので、主人はわたしを捨てて行きまし

た。「四わたしどもは、ケレテびとのネゲブと、ユダに属する地と、カレブのネゲブを襲い、また火でチクラグを焼きはらいました」。「五ダビデは彼に言った、「あなたはその軍隊のところへわたしを導き下つてくれるか」。彼は言った、「あなたはわたしを殺さないこと、またわたしを主人の手に渡さないことを、神をさしてわたしに誓ってください。そうすればあなたはその軍隊のところへ導き下りましょう」。

「六彼はダビデを導き下つたが、見よ、彼らはペリシテびとの地とユダの地から奪い取ったさまざまな多くのぶんどり物のゆえに、食い飲み、かつ踊りながら、地のおもてにあまねく散りひろがっていた」。「七ダビデは夕ぐれから翌日の夕方まで、彼らを撃つたので、らくだに乗って逃げた四百人の若者たちのほかに、ひとりものがれた者はなかった」。「八こうしてダビデはアマレクびとが奪い取ったものをみな取りもどした。またダビデはそのふたりの妻を救い出した」。「九そして彼らに属するものは、小さいものも大きいものも、むすこも娘もぶんどり物も、アマレクびとが奪い去った物は何をも失わないで、ダビデがみな取りもどした」。「一〇ダビデはまたすべての羊と牛を取った。人々はこれらの家畜を彼の前に追って行きながら、「これはダビデのぶんどり物だ」と言った。

「二そしてダビデが、あの疲れてダビデについて行くことができずに、ベソル川のほとりにとどまっていた二百人の者のところ

へきた時、彼らは出てきてダビデを迎え、またダビデと共にいる民を迎えた。ダビデは民に近づいてその安否を問うた。「三そのときダビデと共に行った人々のうちで、悪く、かつよこしまな者どもはみな言った、「彼らはわれわれと共に行かなかったのだから、われわれはその人々にわれわれの取りもどしたぶんどり物を分け与えることはできない。ただおのおのにその妻子を与えて、連れて行かせましょう」。「四しかしダビデは言った、「兄弟たちよ、主はわれわれを守って、攻めてきた軍隊をわれわれの手に渡された。その主が賜わったものを、あなたがたはどのようにしてはならない」。「五だれがこの事について、あなたがたに聞き従いますか。戦いに下つて行った者の分け前と、荷物のかたわらにとどまっていた者の分け前を同様にしなければならぬ。彼らはひとしく分け前を受けるべきである」。「六この日以来、ダビデはこれをイスラエルの定めとし、おきてとして今日に及んでいる。

「七ダビデはチクラグにきて、そのぶんどり物の一部をユダの長老である友人たちにおくつて言った、「これは主の敵から取ったぶんどり物のうちからあなたがたにおくる贈り物である」。「八そのおくり先は、ベテルにいる人々、ネゲブのラモテにいる人々、ヤッテルにいる人々、ヒアロエルにいる人々、シフモテにいる人々、エシテモアにいる人々、ラカルにいる人々、ニエラメルびとの町々にいる人々、ケニびとの町々にいる人々、

三〇ホルマにいる人々、ボラシヤンにいる人々、アタクにいる人々、三一ヘブロンにいる人々、およびダビデとその従者たちが、さまよい歩いたすべての所にいる人々であつた。

第三章

一さてペリシテびとはイスラエルと戦つた。イスラエルの人々はペリシテびとの前から逃げ、多くの者は傷ついてギルボア山にたおれた。ニペリシテびとはサウルとその子らに攻め寄り、そしてペリシテびとはサウルの子ヨナタン、アビナダブ、およびマルキシユアを殺した。三戦いは激しくサウルに迫り、弓を射る者どもがサウルを見つけて、彼を射たので、サウルは射る者たちにひどい傷を負わされた。四そこでサウルはその武器を執る者に言つた、「つるぎを抜き、それをもってわたしを刺せ。さもな」と、これらの無割礼の者どもがきて、わたしを刺し、わたしをなぶり殺しにするであらう。しかしその武器を執る者は、ひじょうに恐れて、それに応じなかつたので、サウルは、つるぎを執つて、その上に伏した。五武器を執る者はサウルが死んだのを見て、自分もまたつるぎの上に伏して、彼と共に死んだ。六こうしてサウルとその三人の子たち、およびサウルの武器を執る者、ならびにその従者たちは皆、この日共に死んだ。七イスラエルの人々で、谷の向こう側、およびヨルダンの向こう側にいる者

が、イスラエルの人々の逃げるのを見、またサウルとその子たちの死んだのを見て町々を捨てて逃げたので、ペリシテびとはきてその中に住んだ。

ハあくる日、ペリシテびとは殺された者から、はぎ取るためにきたが、サウルとその三人の子たちがギルボア山にたおれているのを見つけた。九彼らはサウルの首を切り、そのよいをはぎ取り、ペリシテびとの全地に人をつかわして、この良い知らせを、その偶像と民と共に伝えさせた。一〇また彼らは、そのよいをアシタロテの神殿に置き、彼のからだをベテシヤンの城壁にくぎづけにした。一一ヤベシ・ギレアデの住民たちは、ペリシテびとがサウルにした事を聞いて、三勇士たちはみな立ち、夜もすがら行つて、サウルのからだと、その子たちのからだをベテシヤンの城壁から取りおろし、ヤベシにきて、これをそこで焼き、一二その骨を取つて、ヤベシのぎよりゆうの木の下に葬り、七日の間、断食した。

サムエル記下

第一章

「サウルが死んだ後、ダビデはアマレクびとを撃つて帰り、ふつかの間、チクラグにとどまっていたが、三三日目となつて、ひとりの人が、その着物を裂き、頭に土をかぶつて、サウルの陣営からきた。そしてダビデのもとにきて、地に伏して拝した。ミダビデは彼に言った、「あなたはどこからきたのか」。彼はダビデに言った、「わたしはイスラエルの陣営から、のがれてきたのです」。四ダビデは彼に言った、「様子はどうか話さない」。彼は答えた、「民は戦いから逃げ、民の多くは倒れて死に、サウルとその子ヨナタンもまた死にました」。五ダビデは自分と話している若者に言った、「あなたはサウルとその子ヨナタンが死んだのを、どうして知つたのか」。六彼に話している若者は言った、「わたしは、はからずも、ギルボア山にいましたが、サウルはそのやりによりかかつており、戦車と騎兵とが彼に攻め寄ろうとしていました。七その時、彼はうしろを振り向いてわたしを見、わたしを呼びましたので、『ここにいます』とわたしは答えました。八彼は『おまえはだれか』と言いましたので、『アマレクびとです』と答えました。九彼はまたわたしに言いました、『そばにきて殺してください。わたしは苦しみに耐えない。ま

だ命があるからです』。一〇そこで、わたしはそのそばにいつて彼を殺しました。彼がすでに倒れて、生きることのできないのを知つたからです。そしてわたしは彼の頭にあつた冠と、腕につけていた腕輪とを取つて、それをわが主のもとに携えてきたのです」。

二そのときダビデは自分の着物をつかんでそれを裂き、彼と共にいた人々も皆同じようにした。三彼らはサウルのため、またその子ヨナタンのため、また主の民のため、またイスラエルの家のために悲しみ泣いて、夕暮まで食を断つた。それは彼らがつるぎに倒れたからである。四ダビデは自分と話していた若者に言った、「あなたはどこの人ですか」。彼は言った、「アマレクびとで、寄留の他国人の子です」。五ダビデはまた彼に言った、「どうしてあなたは手を伸べて主の油を注がれた者を殺すことを恐れなかつたのですか」。六ダビデはひとりの若者を呼び、「近寄つて彼を撃て」と言った。そこで彼を撃つたので死んだ。七ダビデは彼に言った、「あなたの流した血の責めはあなたに帰する。あなたが自分の口から、『わたしは主の油を注がれた者を殺した』と言つて、自身にむかつて証拠を立てたからである」。八ダビデはこの悲しみの歌をもつて、サウルとその子ヨナタンのために哀悼した。――ハこれは、ユダの人々に教えるための弓の歌で、ヤシヤルの書にしろされている。――彼は言った、

一九「イスラエルよ、あなたの栄光は、

あなたの高き所で殺された。

ああ、勇士たちは、ついに倒れた。

三〇ガテにこの事を告げてはいけない。

アシケロンのちまたに伝えてはならない。

おそらくはペリシテびとの娘たちが喜び、
割礼なき者の娘たちが勝ちほこるであろう。

三ギルボアの山よ、

露はおまえの上におりるな。

死の野よ、

雨もおまえの上に降るな。

その所に勇士たちの盾は捨てられ、

サウルの盾は油を塗らずに捨てられた。

三殺した者の血を飲まずには、

ヨナタンの弓は退かず、

勇士の脂肪を食べないでは、

サウルのつるぎは、むなしくは帰らなかった。

三三サウルとヨナタンとは、愛され、かつ喜ばれた。

彼らは生きるにも、死ぬにも離れず、

わしよりも早く、

ししよりも強かった。

三四イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。
彼は緋色の着物をもつて、

はなやかにあなたがたを装い、

あなたがたの着物に金の飾りをつけた。

三五ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。

ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。

三六わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。

あなたはわたしにとつて、いとも楽しい者であった。

あなたがわたしを愛するのは世の常のようでなく、

女の愛にもまさっていた。

三モああ、勇士たちは倒れた。

戦いの器はうせた。

第二章

一この後、ダビデは主に問うて言った、「わたしはユダの一つの町に上るべきでしょうか」。主は彼に言われた、「上りなさい」。ダビデは言った、「どこへ上るべきでしょうか」。主は言われた、「ヘブロンへ」。二そこでダビデはその所へ上った。彼のふたりの妻、エズレルの女アヒノアムと、カルメルびとナバルの妻であつたアビガイルも上った。三ダビデはまた自分と共にいた人々を、皆その家族と共に連れて上った。そして彼らはヘブロンの町に住んだ。四時にユダの人々がきて、その所でダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした。

人々がダビデに告げて、「サウルを葬ったのはヤベシ・ギレアドの人々である」と言ったので、五ダビデは使者をヤベシ・ギレアドの人々につかわして彼らに言った、「あなたがたは、主君サウルにこの忠誠をあらわして彼を葬った。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。六どうぞ主がいまあなたがたに、いくしみと真実を示されるように。あなたがたが、この事をしたので、わたしもまたあなたがたに好意を示すであろう。七今あなたがたは手を強くし、雄々しくあれ。あなたがたの主君サウルは死に、ユダの家がわたしに油を注いで、彼らの王としたからである」。

八さてサウルの軍の長、ネルの子アブネルは、さきにサウルの子イシボセテを取り、マハナイムに連れて渡り、九彼をギレアド、アシウルびと、エズレル、エフライム、ベニヤミンおよび全イスラエルの王とした。一〇サウルの子イシボセテはイスラエルの王となった時、四十歳であつて、二年の間、世を治めたが、ユダの家はダビデに従った。二ダビデがヘブロンにいてユダの家の王であつた日数は七年と六か月であつた。

三ニネルの子アブネル、およびサウルの子イシボセテの家来たちはマハナイムを出てギベオンへ行つた。四ニゼルヤの子ヨアブとダビデの家来たちも出ていって、ギベオンの池のそばで彼らと出会い、一方は池のこちら側に、一方は池のあちら側にすわつた。五ヨアブはヨアブに言った、「さあ、若者たちを立たせ

て、われわれの前で勝負をさせよう」。ヨアブは言った、「彼らを立たせよう」。一五こうしてサウルの子イシボセテとベニヤミンびととのために十二人、およびダビデの家来たち十二人を数えて出した。彼らは立つて進み、一六おのおの相手の頭を捕え、つるぎを相手のわき腹に刺し、こうして彼らは共に倒れた。それゆえ、その所はヘルカテ・ハツリムと呼ばれた。それはギベオンにある。一七その日、戦いはひじょうに激しく、アブネルとイスラエルの人々はダビデの家来たちの前に敗れた。

一八その所にゼルヤの三人の子、ヨアブ、アビシヤイ、およびアサヘルがいたが、アサヘルは足の早いこと、野のかもしれないかのようにあつた。一九アサヘルはアブネルのあとを追つていったが、行くのに右にも左にも曲ることなく、アブネルのあとに走つた。二〇アブネルは後をふりむいて言つた、「あなたはアサヘルであつたか」。アサヘルは答えた、「わたしです」。二一アブネルは彼に言つた、「右か左に曲つて、若者のひとりをつかえ、そのよろいを奪いなさい」。しかしアサヘルはアブネルを追うことをやめず、ほかに向かうともしなかつた。二二アブネルはふたたびアサヘルに言つた、「わたしを追うことをやめて、ほかに向かいなさい。あなたを地に撃ち倒すことなど、どうしてわたしにできようか。それをすれば、わたしは、どうしてあなたの兄ヨアブに顔を合わせることできようか」。二三それでもなお彼は、ほかに向かうことを拒んだので、アブネルは、やりの石突きで彼の腹を

突いたので、やりはその背中に^{せなか}に出た。彼はそこに倒れて、その場で死んだ。そしてアサヘルが倒れて死んでいる場所に^{ばしょ}来る者は皆立ちどまった。

二画しかしヨアブとアビシヤイとは、なおアブネルのあとを追ったが、彼らがギベオンの荒野の道のほとり、ギアの前^{まえ}にあるアンマの山^{やま}にきた時、日は暮れた。二五ベニヤミンの人々はアブネルのあとについてきて、集まり、一隊となつて、一つの山の頂に立った。二六その時アブネルはヨアブに呼ばわつて言つた、「いつまでもつるぎをもつて滅ぼそうとするのか。あなたはその結果の悲惨^{ひさん}なのを知らないのか。いつまで民にその兄弟を追うことをやめよと命じないのか」。二七ヨアブは言つた、「神は生きておられる。もしあなたが言いださなかつたならば、民はおのおのその兄弟を追わずに、朝のうちに去つていたであらう」。二八こうしてヨアブは角笛を吹いたので、民はみな立ちどまつて、もはやイスラエルのあとを追わず、また重ねて戦わなかつた。

二九アブネルとその従者^{じゆうしや}たちは、夜もすがら、アラバを通つて行き、ヨルダンを渡り、昼まで行進を續けてマハナイムに着いた。三〇ヨアブはアブネルを追うことをやめて帰り、民をみな集めたが、ダビデの家来^{けらい}たち十九人とアサヘルとが見当らなかつた。三一しかし、ダビデの家来^{けらい}たちは、アブネルの従者であるベニヤミンの人々三百六十人を撃ち殺した。三二人々はアサヘルを取り

上げてベツレヘムにあるその父の墓に葬つた。ヨアブとその従者^{じゆうしや}たちは、夜もすがら行つて、夜明けにヘブロンに着いた。

第三章

一サウルの家とダビデの家との間の戦争は久しく続^{つづ}き、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱^{よわ}くなつた。

二ヘブロンでダビデに男の子が生まれた。彼の長子はエズレルの女アヒノアムの産んだアムノン、三その次はカルメルびとナバルの妻であつたアビガイルの産んだキレアブ、第三はゲシユルの王タルマイの娘マアカの子アブサロム、四第四はハギテの子アドニヤ、第五はアビタルの子シパテヤ、五第六はダビデの妻エグラの産んだイテレアム。これらの子がヘブロンでダビデに生れた。

六サウルの家とダビデの家とが戦いを續けている間に、アブネルはサウルの家で、強くなつてきた。七さてサウルには、ひとりのそばめがあつた。その名をリヅパといい、アヤの娘であつたが、イシボセテはアブネルに言つた、「あなたはなぜわたしの父のそばめのところにはいつたのですか」。八アブネルはイシボセテの言葉を聞き、非常に怒つて言つた、「わたしはユダの犬のかしらですか。わたしはききよう、あなたの父サウルの家と、その兄弟と、その友人とに忠誠をあらわして、あなたをダビデの手

に渡すことをしなかったのに、あなたはきよう、女の事のあやまちを挙げてわたしを責められる。九主がダビデに誓われたことを、わたしは彼のためにし遂げないならば、神がアブネルをいくえにも罰しられるように。一〇すなわち王国をサウルの家から移し、ダビデの位をダンからベエルシバに至るまで、イスラエルとユダの上に立たせられるであらう。一一イシボセテはアブネルを恐れたので、ひと言も彼に答えることができなかった。ニアブネルはヘブロンにいるダビデのもとに使者をつかわしに言った、「国はだれのものですか。わたしと契約を結びなさい。わたしはあなたに力添えして、イスラエルをことごとくあなたのものにしましょう。一二ダビデは言った、「よろしい。わたしは、あなたと契約を結びましょう。ただし一つの事をあなたに求めます。あなたがきてわたしの顔を見るとき、まずサウルの娘ミカルを連れて来るのでなければ、わたしの顔を見ることはできません。一四それからダビデは使者をサウルの子イシボセテにつかわしに言った、「ペリシテびとの陽の皮一百をもつてめとったわたしの妻ミカルを引き渡さない」。一五そこでイシボセテは人をやつて彼女をその夫、ライシの子パルテルから取ったので、一六その夫は彼女と共に行き、泣きながら彼女のあとについて、バホルムまで行つたが、アブネルが彼に「帰って行け」と言つたので彼は帰つた。

一七アブネルはイスラエルの長老たちと協議して言つた、「あな

たがたは以前からダビデをあなたがたの王とすることを求めていましたが、一八今それをしなさい。主がダビデについて、『わたしのしもべダビデの手によつて、わたしの民イスラエルをペリシテびとの手、およびもろもろの敵の手から救い出すであらう』と言われたからです。一九アブネルはまたベニヤミンにも語つた。そしてアブネルは、イスラエルとベニヤミンの全家が良いと思うことをみな、ヘブロンでダビデに告げようとして出発した。

二〇アブネルが二十人を従えてヘブロンにいるダビデのもとに行つた時、ダビデはアブネルと彼に従っている従者たちのために酒宴を設けた。ニアブネルはダビデに言つた、「わたしは立つて行き、イスラエルをことごとく、わが主、王のもとに集めて、あなたと契約を結ばせ、あなたの望むものをことごとく治められるようにいたしましょう。こうしてダビデはアブネルを送り帰らせただけで、彼は安全に去つて行つた。

三ちようどその時、ダビデの家来たちはヨアブと共に多くのぶんどり物を携えて略奪から帰つてきた。しかしアブネルはヘブロンにダビデのもとにはいなかった。ダビデが彼を帰らせて彼が安全に去つたからである。三三ヨアブおよび彼と共にいた軍勢がみな帰つてきたとき、人々はヨアブに言つた、「ネルの子アブネルが王のもとにきたが、王が彼を帰らせただけで彼は安全に去つた。三四そこでヨアブは王のもとに行つて言つた、「あな

たは何をなさったのですか。アブネルがあなたの所にきたのに、あなたはどうして、彼を返し去らせられたのですか。二五ネルの子アブネルがあなたを欺くためにきたこと、そしてあなたの出入りを知り、またあなたのなさっていることを、ことごとく知るためにきたことをあなたはごぞんじです」。

三六 ヨアブはダビデの所から出てきて、使者をつかわし、アブネルを追わせたので、彼らはシラの井戸から彼を連れて帰った。しかしダビデはその事を知らなかった。二モアブネルがヘブロンに帰ってきたとき、ヨアブはひそかに語ろうといつて彼を門のうちに連れて行き、その所で彼の腹を刺して死なせ、自分の兄弟アサハルの血を報いた。二八その後ダビデはこの事を聞いて言った、「わたしとわたしの王国とは、ネルの子アブネルの血に關して、主の前に永久に罪はない。二九どうぞ、その罪がヨアブの頭と、その父の全家に帰するように。またヨアブの家には流出を病む者、らい病人、つえにたよる者、つるぎに倒れる者、または食物の乏しい者が絶えないように」。三〇こうしてヨアブとその弟アビシャイとはアブネルを殺したためであった。三二ダビデはヨアブおよび自分と共にいるすべての民に言った、「あなたがたは着物を裂き、荒布をまとい、アブネルの前に嘆きながら行きなさい」。そしてダビデ王はその棺のあとに従った。三三 人々はアブネルをヘブロンに葬った。王はアブネルの

墓で声をあげて泣き、民もみな泣いた。三三 王はアブネルのために悲しみの歌を作つて言った、

「愚かな人の死ぬように、

アブネルがどうして死んだのか。

三四 あなたの手は縛られず、

足には足かせもかけられないのに、

悪人の前に倒れる人のように、

あなたは倒れた」。

そして民は皆、ふたたび彼のために泣いた。三五 民はみなきて、日のあるうちに、ダビデにパンを食べさせようとしたが、ダビデは誓つて言った、「もしわたしが日の入る前に、パンでも、ほかのものでも味わうならば、神がわたしをいくえにも罰せられるように」。三六 民はみなそれを見て満足した。すべて王のすることとは民を満足させた。三七その日すべての民およびイスラエルは皆、ネルの子アブネルを殺したのは、王の意思によるものではないことを知った。三八 王はその家来たちに言った、「この日イスラエルで、ひとりの偉大なる將軍が倒れたのをあなたがたは知らないのか。三九 わたしは油を注がれた王であるけれども、今日なお弱い。ゼルヤの子であるこれらの人々はわたしの手におえない。どうぞ主が悪を行う者に、その悪にしたがって報いられるように」。

第四章

「サウルの子イシボセテは、アブネルがヘブロンで死んだことを聞いて、その力を失い、イスラエルは皆あわてた。ニサウルの子イシボセテにはふたりの略奪隊の隊長があつた。ひとりの名はバアナ、他のひとりの名はレカブといつて、ベニヤミンの子孫であるベロテびとリンモンの子たちであつた。（それはベロテもまたベニヤミンのうちに数えられているからである。ニベロテびとはギッタタイムに逃げていつて、今日までその所に寄留している）。

四 さてサウルの子ヨナタンに足のなえた子がひとりあつた。エズレルからサウルとヨナタンの事の知らせがきた時、彼は五歳であつた。うばが彼を抱いて逃げたが、急いで逃げる時、その子は落ちて足なえとなつた。その名はメビボセテといつた。

五 ベロテびとリンモンの子たち、レカブとバアナとは出立して、日の暑いころイシボセテの家にきたが、イシボセテは昼寝をしていた。六 家の門を守る女は麦をあおぎ分けていたが、眠くなつて寝てしまった。そこでレカブとその兄弟バアナは、ひそかに中にはいった。七 彼らが家にはいった時、イシボセテは寢室で床の上に寝ていたので、彼らはそれを撃つて殺し、その首をはね、その首を取つて、よもすがらアラバの道を行き、ハイシボセテの首をヘブロンにいるダビデのもとに携えて行つて王に言った、

「あなたの命を求めたあなたの敵サウルの子イシボセテの首です。主はきよう、わが君、王のためにサウルとそのすえとに報復されました。八 ダビデはベロテびとリンモンの子レカブとその兄弟バアナに答えた、「わたしの命を、もろもろの苦難から救われた主は生きておられる。一〇 わたしはかつて、人がわたしに告げて、『見よ、サウルは死んだ』と言つて、みずから良いおとずれを伝える者と思つていた者を捕えてチクラグで殺し、そのおとずれに報いたのだ。二 悪人が正しい人をその家の床の上で殺したときは、なおさらのことだ。今わたしが、彼の血を流した罪を報い、あなたがたを、この地から絶ち滅ぼさないのであるうか。三 そしてダビデは若者たちに命じたので、若者たちは彼らを殺し、その手足を切り離し、ヘブロン池のほとりで木に掛けた。人々はイシボセテの首を持って行つて、ヘブロンにあるアブネルの墓に葬つた。

第五章

一 イスラエルのすべての部族はヘブロンにいるダビデのもとにきて言つた、「われわれは、あなたの骨肉です。ニ 先にサウルがわれわれの王であつた時にも、あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そして主はあなたに、『あなたはわたしの民イスラエルを牧するであらう。またあなたはイスラエルの君となる

であろう』と言われました」。三このようにイスラエルの長老たちが皆、ヘブロンにいる王のもとにきたので、ダビデ王はヘブロンで主の前に彼らと契約を結んだ。そして彼らはダビデに油を注いでイスラエルの王とした。四ダビデは王となったとき三十三歳で、四十年の間、世を治めた。五すなわちヘブロンで七年六月ユダを治め、またエルサレムで三十三年、全イスラエルとユダを治めた。

六王とその従者たちとはエルサレムへ行つて、その地の住民エブスびとを攻めた。エブスびとはダビデに言った、「あなたはけつして、ここに攻め入ることはできない。かえつて、めしいや足なえでも、あなたを追い払うであろう」。彼らが「ダビデはここに攻め入ることはできない」と思ったからである。七ところがダビデはシオンの要害を取った。これがダビデの町である。八その日ダビデは、「だれでもエブスびとを撃とうとする人は、水をくみ上げる縦穴を上つて行つて、ダビデが心に憎んでいる足なえやめしいを撃て」と言った。それゆえに人々は、「めしいや足なえは、宮にはいつてはならない」と言いならわしている。九ダビデはその要害に住んで、これをダビデの町と名づけた。またダビデはミロから内の周囲に城壁を築いた。一〇こうしてダビデはますます大いなる者となり、かつ万軍の神、主が彼と共におられた。

二ツロの王ヒラムはダビデに使者をつかわして、香柏および

大工と石工を送った。彼らはダビデのために家を建てた。二そしてダビデは主が自分を堅く立ててイスラエルの王とされたこと、主がその民イスラエルのためにその王国を興されたことを悟った。

三ダビデはヘブロンからきて後、さらにエルサレムで妻とそばめを入れたので、むすこと娘がまたダビデに生れた。四エルサレムで彼に生れた者の名は次のとおりである。シャンムア、シヨバブ、ナタン、ソロモン、一五イブハル、エリシユア、ネペグ、ヤピア、一六エリシヤマ、エリアダ、およびエリペレテ。

一七さてペリシテびとは、ダビデが油を注がれてイスラエルの王になったことを聞き、みな上つてきてダビデを捜したが、ダビデはそれを聞いて要害に下つて行つた。一八ペリシテびとはきて、レパイムの谷に広がっていた。一九ダビデは主に問うて言った、「ペリシテびとに向かつて上るべきでしょうか。あなたは彼らをわたしの手に渡されるでしょうか」。主はダビデに言われた、「上るがよい。わたしはかならずペリシテびとをあなたの手に渡すであろう」。二〇そこでダビデはバアル・ペラジムへ行つて、彼らをその所で撃ち破り、そして言った、「主は、破り出る水のように、敵をわたしの前に破られた」。それゆえにその所の名はバアル・ペラジムと呼ばれている。二一ペリシテびとはその所に彼らの偶像を捨てて行つたので、ダビデとその従者たちはそれら運び去った。

三ペリシテびとが、ふたたび上つてきて、レパイムの谷に広がったので、ミダビデは主に問うたが、主は言われた、「上つてはならない。彼らのうしろに回り、バルサムの木の前から彼らを襲いなさい。二四バルサムの木の上に行進の音が聞えたならば、あなたは奮い立たなければならぬ。その時、主があなたの前に出て、ペリシテびとの軍勢を撃たれるからである」。二五ダビデは、主が命じられたようにして、ペリシテびとを撃ち、ゲバからゲゼルに及んだ。

第六章

一ダビデは再びイスラエルのえり抜きの者三万人をことごとく集めた。二そしてダビデは立つて、自分と共にいるすべての民と共にバアレ・ユダへ行つて、神の箱をそこからかき上ろうとした。この箱はケルビムの上に座しておられる万軍の主の名をもつて呼ばれている。三彼らは神の箱を新しい車に載せて、山の上にあるアビナダブの家から運び出した。四アビナダブの子たち、ウザとアヒオとが神の箱を載せた新しい車を指揮し、ウザは神の箱のかたわらに沿い、アヒオは箱の前に進んだ。五ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもつて歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊った。

六彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、

それを押えた。牛がつまずいたからである。七すると主はウザに向かつて怒りを発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。彼は神の箱のかたわらで死んだ。八主がウザを撃たれたので、ダビデは怒った。その所は今日までペレヅ・ウザと呼ばれている。九その日ダビデは主を恐れて言った、「どうして主の箱がわたしの所に来ることができようか」。一〇ダビデは主の箱をダビデの町に入れることを好まず、これ移してガテビとオベデエドムの家に運ばせた。二神の箱はガテビとオベデエドムの家に三か月とどまつた。主はオベデエドムとその全家を祝福された。

三しかしダビデ王は、「主が神の箱のゆえに、オベデエドムの家とそのすべての所有を祝福されている」と聞き、ダビデは行つて、喜びをもつて、神の箱をオベデエドムの家からダビデの町にかき上つた。四主の箱をかく者が六歩進んだ時、ダビデは牛と肥えた物を犠牲としてささげた。五そしてダビデは力をきわめて、主の箱の前で踊った。その時ダビデは亜麻布のエポデをつけていた。六五こうしてダビデとイスラエルの全家とは、喜びの叫びと角笛の音をもつて、神の箱をかき上つた。

七主の箱がダビデの町にはいった時、サウルの娘ミカルは窓からながめ、ダビデ王が主の前に舞い踊るのを見て、心のうちにダビデをさげすんだ。八人々は主の箱をかき入れて、ダビデがそのために張った天幕の中のその場所に置いた。そしてダビ

デは燔祭と酬恩祭を主の前にささげた。一ハダビデは燔祭と酬恩祭をささげ終った時、万軍の主の名によって民を祝福した。一九そしてすべての民イスラエルの全民衆に、男にも女にも、おのおのパンの菓子一個、肉一きれ、ほしぶどう一かたまりを分け与えた。こうして民はみなおのおのその家に帰った。

二〇ダビデが家族を祝福しようとして帰ってきた時、サウルの娘ミカルはダビデを出迎えて言った、「きようイスラエルの王はなんと威厳のあつたことでしょう。いたずら者が、恥も知らず、その身を現すように、きよう家来たちのはしためらの前に自分の身を現されました」。二一ダビデはミカルに言った、「あなたの父よりも、またその全家よりも、むしろわたしを選んで、主の民イスラエルの君とせられた主の前に踊つたのだ。わたしはまた主の前に踊るであろう。三わたしはこれよりももっと軽んじられるようにしよう。そしてあなたの目には卑しめられるであろう。しかしわたしは、あなたがさきに言った、はしためたちに譽を得るであろう」。二三こうしてサウルの娘ミカルは死ぬ日まで子供がなかった。

第七章

一さて、王が自分の家に住み、また主が周囲の敵をことごとく打ち退けて彼に安息を賜わった時、二王は預言者ナタンに言った、

「見よ、今わたしは、香柏の家に住んでいるが、神の箱はなお幕屋のうちにある」。三ナタンは王に言った、「主があなたと共におられますから、行つて、すべてあなたの心にあるところを行いなさい」。

四その夜、主の言葉がナタンに臨んで言った、五「行つて、わたしのしもべダビデに言いなさい、『主はこう仰せられる。あなたはわたしの住む家を建てようとするのか。六わたしはイスラエルの人々をエジプトから導き出した日から今日まで、家に住まわず、天幕をすまいとして歩んできた。セわたしはイスラエルのすべての人々と共に歩んだすべての所で、わたしがわたしの民イスラエルを牧することを命じたイスラエルのさばきづかさのひとりに、ひと言でも「どうしてあなたがたはわたしのために香柏の家を建てないのか」と、言ったことがあるであろうか。ハそれゆえ、今あなたは、わたしのしもべダビデにこう言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取つて、わたしの民イスラエルの君とし、九あなたがどこへ行くにも、あなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしはまた地上の大いなる者の名のような大いなる名をあなたに得させよう。一〇そしてわたしの民イスラエルのために一つの所を定めて、彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにするのである。二また前のように、わたしがわたしの民イ

スラエルの上にさばきづかさを立てた日からこのかたのように、悪人が重ねてこれを悩ますことはない。わたしはあなたのもろもろの敵を打ち退けて、あなたに安息を与えるであろう。主はまた「あなたのために家を造る」と仰せられる。二あなたの日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。三彼はわたしの名のために家を建てて。わたしは長くその国の位を堅くしよう。四わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう。もし彼が罪を犯すならば、わたしは人のつえと人の子のむちをもつて彼を懲らす。五しかしわたしはわたしのいつくしみを、わたしがあなたの前から除いたサウルから取り去ったように、彼からは取り去らない。六あなたの家と王国はわたしの前に長く保つてであろう。あなたの位は長く堅うせられる。七モナタンはすべてこれらの言葉のように、またすべてこの幻のようにダビデに語った。

八その時ダビデ王は、はいつて主の前に座して言った、「主なる神よ、わたしがだれ、わたしの家が何であるので、あなたはこれまでわたしを導かれたのですか。九主なる神よ、これはなおあなたの目には小さい事です。主なる神よ、あなたはまたしもべの家の、はるか後の事を語って、きたるべき代々のことを示されました。一〇ダビデはこの上なをあなたに申しあげることができましよう。主なる神よ、あなたはしもべを知っておられる

のです。二あなたの約束のゆえに、またあなたの心に從つて、あなたはこのもろもろの大きな事をを行い、しもべにそれを知らせられました。三主なる神よ、あなたは偉大です。それは、われわれがすべて耳に聞いたところによれば、あなたのような者はなく、またあなたのほかに神はないからです。四地のどの国民が、あなたの民イスラエルのようにでありましようか。これは神が行つて、自分のためにあがなつて民とし、自らの名をあげられたもの、また彼らのために大いなる恐るべきことをなし、その民の前から国びととその神々を追ひ出されたものです。五そしてあなたの民イスラエルを永遠にあなたの民として、自分のために、定められました。主よ、あなたは彼らの神となられたのです。六主なる神よ、今あなたが、しもべとしもべの家とについて語られた言葉を長く堅うして、あなたの言われたとおりにしてください。七そうすれば、あなたの名はとこしえにあがめられて、『万軍の主はイスラエルの神である』と言われ、あなたのしもべダビデの家は、あなたの前に堅く立つことができましよう。八万軍の主、イスラエルの神よ、あなたはしもべに示して、『おまえのために家を建てよう』と言われました。それゆえ、しもべはこの祈をあなたにささげる勇氣を得たのです。九主なる神よ、あなたは神にましまし、あなたの言葉は真実です。あなたはこの良き事をしもべに約束されました。一〇どうぞ今、しもべの家を祝福し、あなたの前に長くつづかせてくだ

さるように。主なる神よ、あなたがそれを言われたのです。どうぞあなたの祝福によつて、しもべの家がながく祝福されますように」。

第八章

一この後ダビデはペリシテびとを撃つて、これを征服した。ダビデはまたペリシテびとの手からメテグ・アンマを取った。ニ彼はまたモアブを撃ち、彼らを地に伏させ、なわをもつて彼らを測った。すなわち二筋のなわをもつて殺すべき者を測り、一筋のなわをもつて生かしておく者を測った。そしてモアブびとは、ダビデのしもべとなつて、みつぎを納めた。

ミダビデはまたレホブの子であるゾバの王ハダデゼルが、ユフラテ川のほとりにその勢力を回復しようとして行くところを撃った。四そしてダビデは彼から騎兵千七百人、歩兵二万人を取った。ダビデはまた一百の戦車の馬を残して、そのほかの戦車の馬はみなその足の筋を切った。五ダマスコのスリヤびとが、ゾバの王ハダデゼルの助けのためにきたので、ダビデはスリヤびと二万二千人を殺した。六そしてダビデはダマスコのスリヤに守備隊を置いた。スリヤびとは、ダビデのしもべとなつて、みつぎを納めた。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。セダビデはハダデゼルのしもべらが持っていた金の盾

を奪つて、エルサレムに持つてきた。ハダビデ王はまたハダデゼルの町、ベタとベロタイから、ひじように多くの青銅を取った。九時にハマテの王トイは、ダビデがハダデゼルのすべての軍勢を撃ち破つたことを聞き、一〇その子ヨラムをダビデ王のもとにつかわして、彼にあいさつし、かつ祝を述べさせた。ハダデゼルはかつてしばしばトイと戦いを交えたが、ダビデがハダデゼルと戦つてこれを撃ち破つたからである。ヨラムが銀の器と金の器と青銅の器を携えてきたので、二ダビデ王は征服したすべての国民から取つてさき上げた金銀と共にこれらをも主にささげた。三すなわちエドム、モアブ、アンモンの人々、ペリシテびと、アマレクから獲た物、およびゾバの王レホブの子ハダデゼルから獲たぶんどり物と共にこれをささげた。

ミ三こうしてダビデは名声を得た。彼は歸つてきてから塩の谷でエドムびと一万八千人を撃ち殺した。四そしてエドムに守備隊を置いた。すなわちエドムの全地に守備隊を置き、エドムびとは皆ダビデのしもべとなった。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。

ミ五こうしてダビデはイスラエルの全地を治め、そのすべての民に正義と公平を行つた。六ゼルヤの子ヨアブは軍の長、アヒルデの子ヨシヤパテは史官、セラヤは書記官、ハエホヤダの子ベナヤはケレテびととペレテびとの長、ダビデの子たちは祭司で

あつた。

第九章

一時にダビデは言った、「サウルの家の人で、なお残っている者があるか。わたしはヨナタンのために、その人に恵みを施そう」。ニさて、サウルの家にデバという名のしもべがあつたが、人々が彼をダビデのもとに呼び寄せたので、王は彼に言った、「あなたがデバか」。彼は言った、「しもべがそうです」。三王は言った、「サウルの家の人はまだ残っていませんか。わたしはその人に神の恵みを施そうと思う」。デバは王に言った、「ヨナタンの子がまだおります。あしなえです」。四王は彼に言った、「その人はどこにいるのか」。デバは王に言った、「彼はロ・デバルのアンミエルの子マキルの家にあります」。五ダビデ王は人をつかわして、ロ・デバルのアンミエルの子マキルの家から、彼を連れてこさせた。六サウルの子ヨナタンの子であるメピボセテはダビデのもとにきて、ひれ伏して拝した。ダビデが、「メピボセテよ」と言ったので、彼は、「しもべは、ここにあります」と答えた。七ダビデは彼に言った、「恐れることはない。わたしはかならずあなたの父ヨナタンのためにあなたに恵みを施しましょう。あなたの父サウルの地をみなあなたに返します。またあなたは常にわたしの食卓で食事をしなさい」。八彼は拝して言っ

た、「あなたは、しもべを何とおぼしめして、死んだ犬のようなわたしを顧みられるのですか」。

九王はサウルのしもべデバを呼んで言った、「すべてサウルとその家に属する物を皆、わたしはあなたの主人の子に与えた。一〇あなたと、あなたの子たちと、しもべたちとは、彼のために地を耕して、あなたの主人の子が食べる食物を取り入れなければならぬ。しかしあなたの主人の子メピボセテはいつもわたしの食卓で食事をするであらう」。デバには十五人の男の子と二十人のしもべがあつた。二デバは王に言った、「すべて王が主君がしもべに命じられるとおりに、しもべはいたしましう」。こうしてメピボセテは王の子のひとりのようにダビデの食卓で食事をした。三メピボセテには小さい子があつて、名をミカといった。そしてデバの家に住んでいる者はみなメピボセテのしもべとなった。四メピボセテはエルサレムに住んだ。彼がいつも王の食卓で食事をしたからである。彼は両足とも、なえていた。

第一〇章

一この後アンモンの人々の王が死んで、その子ハヌンがこれに代つて王となった。二そのときダビデは言った、「わたしはナハシの子ハヌンに、その父がわたしに恵みを施したように、恵みを

施そう。そしてダビデは彼を、その父のゆえに慰めようと、しもべをつかわした。ダビデのしもべたちはアンモンの人々の地に行ったが、ミアンモンの人々のつかさたちはその主君ハヌンに言った、「ダビデが慰める者をあなたのもとにつかわしたのは彼があなたの父を尊ぶためだと思われませんか。ダビデがあなたのもとに、しもべたちをつかわしたのは、この町をうかがい、それを探つて、滅ぼすためではありませんか」。四そこでハヌンはダビデのしもべたちを捕え、おのおの、ひげの半ばをそり落し、その着物を巾より断ち切り腰の所までにして、彼らを帰らせた。五人々がこれをダビデに告げたので、ダビデは人をつかわして彼らを迎えさせた。その人々はひじょうに恥じたからである。そこで王は言った、「ひげがのびるまでエリコにとどまつて、その後、帰りなさい」。

六アンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれていることがわかったので、人をつかわして、ベテ・レホブのスリヤびととゾバのスリヤびととの歩兵二万人およびマアカの王とその一千人トブの人一万二千人を雇い入れた。セダビデはそれを聞いて、ヨアブと勇士の全軍をつかわしたので、ハアンモンの人々は出て、門の入口に戦いの備えをした。ゾバとレホブとのスリヤびと、およびトブとマアカの人々は別に野にいた。

九ヨアブは戦いが前後から自分に迫ってくるのを見て、イスラエルのえり抜きの兵士のうちから選んで、これをスリヤびとに

対して備え、一〇そのほかの民を自分の兄弟アビシャイの手にわたして、アンモンの人々に対して備えさせ、二そして言った、「もしスリヤびとがわたしに手ごわいときは、わたしを助けてください。もしアンモンの人々があなたに手ごわいときは、行ってあなたを助けましょう。三勇ましくしてください。われわれの民のため、われわれの神の町々のため、勇ましくしましょう。どうぞ主が良いと思われることをされるように」。三ヨアブが自分と一緒にいる民と共に、スリヤびとに向かって戦おうとして近づいたとき、スリヤびとは彼の前から逃げた。四アンモンの人々はスリヤびとが逃げるのを見て、彼らもまたアビシャイの前から逃げて町にはいった。そこでヨアブはアンモンの人々を撃つことをやめてエルサレムに帰った。

五しかしスリヤびとは自分たちのイスラエルに打ち敗れたのを見て、共に集まった。六そしてハダデゼルは人をつかわし、ユフラテ川の向こう側にいるスリヤびとを率いてヘラムにこさせた。ハダデゼルの軍の長シヨバクがこれを率いた。七この事がダビデに聞えたので、彼はイスラエルをことごとく集め、ヨルダンを渡つてヘラムにきた。スリヤびとはダビデに向かって備えをして彼と戦った。八しかしスリヤびとがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはスリヤびとの戦車の兵七百、騎兵四万を殺し、またその軍の長シヨバクを撃つたので、彼はその所で死んだ。九ハダデゼルの家来であつた王たちはみな、

自分たちがイスラエルに打ち敗られたのを見て、イスラエルと和を講じ、これに仕えた。こうしてスリヤびとは恐れて再びアンモンの人々を助けることをしなかった。

第二章

一春になって、王たちが戦いに出るに及んで、ダビデはヨアブおよび自分と共にいる家来たち、並びにイスラエルの全軍をつかわした。彼らはアンモンの人々を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。

二さて、ある日の夕暮、ダビデは床から起き出て、王の家の屋上を歩いてしたが、屋上から、ひとりの女がからだを洗っているのを見た。その女は非常に美しかった。三ダビデは人をつかわしてその女のことを探らせたが、ある人は言った、「これはエリアムの娘で、ヘテびとウリヤの妻バテシバではありませんか」。四そこでダビデは使者をつかわして、その女を連れてきた。女は彼の所にきて、彼はその女と寝た。(女は身の汚れを清めていたのである。)こうして女はその家に帰った。五女は妊娠したので、人をつかわしてダビデに告げて言った、「わたしは子をほらみました」。

六そこでダビデはヨアブに、「ヘテびとウリヤをわたしの所につかわせ」と言つてやったので、ヨアブはウリヤをダビデの所につ

かわした。セウリヤがダビデの所にきたので、ダビデは、ヨアブはどうしているか、民はどうしているか、戦いはうまくいっているかとたずねた。八そしてダビデはウリヤに言った、「あなたの家に行つて、足を洗いなさい」。ウリヤは王の家を出ていったが、王の贈り物が彼の後に従った。九しかしウリヤは王の家の入口で主君の家来たちと共に寝て、自分の家に帰らなかった。一〇人々がダビデに、「ウリヤは自分の家に帰りませんでした」と告げたので、ダビデはウリヤに言った、「旅から帰ってきたのではないか。どうして家に帰らなかったのか」。一ウリヤはダビデに言った、「神の箱も、イスラエルも、ユダも、小屋の中に住み、わたしの主人ヨアブと、わが主君の家来たちが野のおもてに陣を取っているのに、わたしはどうして家に帰って食い飲みし、妻と寝ることができましょう。あなたは生きておられます。あなたの魂は生きています。わたしはこの事をいたしません」。二ダビデはウリヤに言った、「きょうも、ここにとどまりなさい。わたしはあす、あなたを去らせましょう」。そこでウリヤはその日と次の日エルサレムにとどまった。三ダビデは彼を招いて自分の前で食い飲みさせ、彼を酔わせた。夕暮になって彼は出ていって、その床に、主君の家来たちと共に寝た。そして自分の家には下つて行かなかった。

四朝になってダビデはヨアブにあてた手紙を書き、ウリヤの手紙に託してそれを送った。五彼はその手紙に、「あなたがたはウ

リヤを激しい戦いの最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」と書いた。一六ヨアブは町を囲んでいたので、勇士たちがいると知っていた場所にUriヤを置いた。一七町の人々が出てきてヨアブと戦ったので、民のうち、ダビデの家来たちにも、倒れるものがあり、ヘテびとUriヤも死んだ。一八ヨアブは人をつかわして戦いのことをつぶさにダビデに告げた。一九ヨアブはその使者に命じて言った、「あなたが戦いのことをつぶさに王に語り終ったとき、二〇もし王が怒りを起して、『あなたがたはなぜ戦おうとしてそんなに町に近づいたのか。彼らが城壁の上から射るのを知らなかったのか。ニエルベセテの子アビメレクを撃つたのはだれか。ひとりの女が城壁の上から石を投げて彼をテベツで殺したのではなかったか。あなたがたはなぜそんなに城壁に近づいたのか』と言われたならば、その時あなたは、『あなたのしもべ、ヘテびとUriヤもまた死にました』と言いなさい」。

三三こうして使者は行き、ダビデのもとにきて、ヨアブが言いつかわしたことをことごとく告げた。三三使者はダビデに言った、「敵はわれわれよりも有利な位置を占め、出てきてわれわれを野で攻めましたが、われわれは町の入口まで彼らを追い返ししました。二四その時、射手どもは城壁からあなたの家来たちを射ましたので、王の家来のある者は死に、また、あなたの家来ヘテびとUriヤも死にました」。三五ダビデは使者に言った、「あなたはヨ

アブにこう言いなさい、『この事で心配することはない。つるぎはこれをも彼をも同じく滅ぼすからである。強く町を攻めて戦い、それを攻め落しなさい』と。そしてヨアブを励ましなさい。二六Uriヤの妻は夫Uriヤが死んだことを聞いて、夫のために悲しんだ。二七その喪が過ぎた時、ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召し入れた。彼女は彼の妻となつて男の子を産んだ。しかしダビデがしたこの事は主を怒らせた。

第二章

一主はナタンをダビデにつかわされたので、彼はダビデの所にきて言った、「ある町にふたりの人があつて、ひとりはずき、ひとりは貧しかった。二富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持つていたが、三貧しい人は自分が買った一頭の小さい雌の小羊のほかに何も持つていなかった。彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、彼の食物を食べ、彼のわんから飲み、彼のふところまで寝て、彼にとっては娘のようであつた。四時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもとにきたが、自分の羊または牛のうちから一頭を取つて、自分の所にきた旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取つて、これを自分の所にきた人のために調理した」。五ダビデはその人の事をひじょうに怒つてナタンに言つ

た、「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである。六かつその人はこの事をしたため、またあわれまなかつたため、その小羊を四倍にして償わなければならない」。

セナタンはダビデに言った、「あなたがその人です。イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とし、あなたをサウルの手から救いだし、ハあなたに主人の家を与え、主人の妻たちをあなたのふところに与え、またイスラエルとユダの家をあなたに与えた。もし少なかつたならば、わたしはもつと多くのものをあなたに増し加えたであろう。九どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなったのですか。あなたはつるぎをもつてヘテびとウリヤを殺し、その妻をとつて自分の妻とした。すなわちアンモンの人々のつるぎをもつて彼を殺した。一〇あなたがわたしを軽んじてヘテびとウリヤの妻をとり、自分の妻としたので、つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであろう。一一主はこう仰せられる、『見よ、わたしはあなたの家からあなたの上に災を起すであろう。わたしはあなたの目の前であなたの妻たちを取つて、隣びとに与えるであろう。その人はこの太陽の前で妻たちと一緒に寝るであろう。一二あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、太陽の前にこの事をするのである』。一三ダビデはナタンに言った、「わたしは主に罪をおかしました」。ナタンはダビデに言った、「主もまたあなたの罪を除

かれました。あなたは死ぬことはないでしょう。一四しかしあなたはこの行いによつて大いに主を侮つたので、あなたに生れる子供はかならず死ぬでしょう」。一五こうしてナタンは家に帰つた。

さて主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を撃たれたので、病氣になつた。一六ダビデはその子のために神に嘆願した。すなわちダビデは断食して、へやにはいり終夜地に伏した。一七ダビデの家の長老たちは、彼のかたわらに立つて彼を地から起そうとしたが、彼は起きようとはせず、また彼らと一緒に食事をしなかつた。一八七日目にその子は死んだ。ダビデの家来たちはその子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。それは彼らが、「見よ、子のなお生きている間に、われわれが彼に語つたのに彼はその言葉を聞きいれなかつた。どうして彼にその子の死んだことを告げることができようか。彼は自らを害するかも知れない」と思つたからである。一九しかしダビデは、家来たちが互にささやき合うのを見て、その子の死んだのを悟り、家来たちに言った、「子は死んだのか」。彼らは言った、「死なれました」。二〇そこで、ダビデは地から起き上がり、身を洗い、油をぬり、その着物を替えて、主の家にはいつて拜した。そののち自分の家に行き、求めて自分のために食物を備えさせて食べた。二一家来たちは彼に言った、「あなたのなさつたこの事はなんでしょうか。あなたは子の生きている間はその子のために断食して泣

くれました。しかし子が死ぬと、あなたは起きて食事をなさいました」。ミダビデは言った、「子の生きている間に、わたしが断食して泣いたのは、『主がわたしをあわれんで、この子を生かしてくださるかも知れない』と思ったからです。ミしかし今は死んだので、わたしはどうして断食しなければならぬでしようか。わたしは再び彼をかえらせることができますか。わたしは彼の所に行くでしょうが、彼はわたしの所に帰ってこないでしよう」。

ミダビデは妻バテシバを慰め、彼女の所には行って、彼女と共に寝たので、彼女は男の子を産んだ。ダビデはその名をソロモンと名づけた。主はこれを愛された。ミ五そして預言者ナタンをつかわし、命じてその名をエデアと呼ばせられた。

ミ六さてヨアブはアンモンの人々のラバを攻めて王の町を取った。ミ七ヨアブは使者をダビデにつかわして言った、「わたしはラバを攻めて水の町を取りました。ミ八あなたは今、残りの民を集め、この町に向かつて陣をしき、これを取りなさい。わたしがこの町を取って、人がわたしの名をもつて、これと呼ぶようにならないためです」。ミ九そこでダビデは民をことごとく集めてラバへ行き、攻めてこれを取った。ミ一〇そしてダビデは彼らの王の冠をその頭から取りはなした。それは金で重きは一タラントであった。宝石がはめてあり、それをダビデの頭に置いた。ダビデはその町からぶんどり物を非常に多く持ち出した。ミ一また

ダビデはそのうちの民を引き出して、彼らをのこぎりや、鉄のつるはし、鉄のおのを使う仕事につかせ、また、れんが造りの労役につかした。彼はアンモンの人々のすべての町にこのようにした。そしてダビデと民とは皆エルサレムに帰った。

第二三章

一さてダビデの子アブサロムには名をタマルという美しい妹があつたが、その後ダビデの子アムノンはこれを恋した。ニアムノンは妹タマルのために悩んでついにわづらった。それはタマルが処女であつて、アムノンは彼女に何事もすることができないと思つたからである。ミ三ところがアムノンにはひとりの友だちがあつた。名をヨナダブといい、ダビデの兄弟シメアの子である。ヨナダブはひじょうに賢い人であつた。四彼はアムノンに言った、「王子よ、あなたは、どうして朝ごとに、そんなにやせ衰えるのですか。わたしに話さないのですか」。アムノンは彼に言った、「わたしは兄弟アブサロムの妹タマルを恋しているのです」。五ヨナダブは彼に言った、「あなたは病と偽り、寢床に横たわつて、あなたの父がきてあなたを見るとき彼に言いなさい、『どうぞ、わたしの妹タマルをこさせ、わたしの所に食物を運ばせてください。そして彼女がわたしの目の前で食物をととのえ、彼女の手からわたしが食べることのできるようにさ

せてください」。六そこでアムノンは横になつて病と偽つたが、王がきて彼を見た時、アムノンは王に言った、「どうぞわたしの妹タマルをこさせ、わたしの目の前で二つの菓子を作らせて、彼女の手からわたしが食べることでできるようにしてください」。

七ダビデはタマルの家に人をつかわして言させた、「あなたの兄アムノンの家へ行って、彼のために食物をとのえなさい」。ハそこでタマルはその兄アムノンの家へ行ったところ、アムノンは寝ていた。タマルは粉を取つて、これをこね、彼の目の前で菓子を作り、その菓子を焼き、丸なべを取つて彼の前にそれをあけた。しかし彼は食べることを拒んだ。そしてアムノンは、「みな、わたしを離れて出てください」と言つたので、皆彼を離れて出た。○アムノンはタマルに言つた、「食物を寝室に持つてきてください。わたしはあなたの手から食べます」。そこでタマルは自分の作つた菓子をとり、寝室にはいり兄アムノンの所へ持つていった。ニタマルが彼に食べさせようとして近くに持つて行った時、彼はタマルを捕えて彼女に言つた、「妹よ、来て、わたしと寝なさい」。ニタマルは言つた、「いいえ、兄上よ、わたしをはずかしめてはなりません。このようなことはイスラエルでは行われません。この愚かなことをしてはなりません。ニわたしは恥をわたしはどこへ持つて行くことができましよう。あなたはイスラエルの愚か者のひとりとなるでしよう。そ

れゆえ、どうぞ王に話してください。王がわたしをあなたに与えないことはないでしよう」。四しかしアムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、タマルよりも強かつたので、タマルをはずかしめてこれと共に寝た。

五それからアムノンは、ひじように深くタマルを憎むようになった。彼女を憎む憎しみは、彼女を恋した恋よりも大きかつた。アムノンは彼女に言つた、「立つて、行きなさい」。ニタマルはアムノンに言つた、「いいえ、兄上よ、わたしを返すことは、あなたがさきにわたしになさつた事よりも大きい悪です」。しかしアムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、ニ彼に仕えている若者と呼んで言つた、「この女をわたしの所から外におくり出し、そのあとに戸を閉ざすがよい」。ハこの時、タマルは長そでの着物を着ていた。昔、王の姫たちの処女である者はこのような着物を着たからである。アムノンのしもべは彼女を外に出して、そのあとに戸を閉ざした。ニタマルは灰を頭にかぶり、着ていた長そでの着物を裂き、手を頭にのせて、叫びながら去つて行った。

三兄アブサロムは彼女に言つた、「兄アムノンがあなたと一緒にいたのか。しかし妹よ、今は黙つていなさい。彼はあなたの兄です。この事を心にとめなくてよろしい」。こうしてタマルは兄アブサロムの家に寂しく住んでいた。ニダビデ王はこれらの事をことごとく聞いて、ひじように怒つた。ニアブサロム

はアムノンに良いことも悪いことも語ることをしなかった。それはアムノンがアブサロムの妹タマルをはずかしめたので、アブサロムが彼を憎んでいたからである。

三三 満二年の後、アブサロムはエフライムの近くにあるバアル・ハヅルで羊の毛を切らせていた時、王の子たちをことごとく招いた。三四 そしてアブサロムは王のもとにきて言った、「見よ、しもべは羊の毛を切らせております。どうぞ王も王の家来たちも、しもべと共にきてください」。三五 王はアブサロムに言った、「いいえ、わが子よ、われわれが皆行つてはならない。あなたの重荷になるといけないから」。アブサロムはダビデにお願いした。しかしダビデは行くことを承知せず彼に祝福を与えた。三六 そこでアブサロムは言った、「それでは、どうぞわたしの兄アムノンをわれわれと共に行かせてください」。王は彼に言った、「どうして彼があなと共に行かなければならないのか」。三七 しかしアブサロムは彼にお願いしたので、ついにアムノンと王の子たちを皆、アブサロムと共に行かせた。三八 そこでアブサロムは若者たちに命じて言った、「アムノンが酒を飲んで、心楽しくなった時を見すまし、わたしがあなたがたに、『アムノンを撃て』と言う時、彼を殺しなさい。恐れることはしない。わたしが命じるのではないか。雄々しくしなさい。勇ましくしなさい」。三九 アブサロムの若者たちはアブサロムの命じたようにアムノンにおこなったので、王の子たちは皆立つて、おのおの

その驃馬に乗つて逃げた。

四〇 彼らがまだ着かないうちに、「アブサロムは王の子たちをことごとく殺して、ひとりも残っている者がいない」という知らせがダビデに達したので、四一 王は立ち、その着物を裂いて、地に伏した。そのかたわらに立つていた家来たちも皆その着物を裂いた。四二 しかしダビデの兄弟シメアの子ヨナダブは言った、「わが主よ、王の子たちである若者たちがみな殺されたとお考えになつてはなりません。アムノンだけが死んだのです。これは彼がアブサロムの妹タマルをはずかしめた日から、アブサロムの命によつて定められていたことなのです。四三 それゆえ、わが主、王よ、王の子たちが皆死んだと思つて、この事を心にとめられてはなりません。アムノンだけが死んだのです」。

四四 アブサロムはのがれた。時に見張りをしていた若者が目をあげて見ると、山のかたわらのホロナイムの道から多くの民の来るのが見えた。四五 ヨナダブは王に言った、「見よ、王の子たちがきました。しもべの言つたとおりです」。四六 彼が語ることを終つた時、王の子たちはきて声をあげて泣いた。王もその家来たちも皆、非常にげしく泣いた。

四七 しかしアブサロムはのがれて、ゲシュルの王アミホデの子タルマイのもとに行つた。ダビデは日々その子のために悲しんだ。四八 アブサロムはのがれてゲシュルに行き、三年の間そこにいた。四九 王は心に、アブサロムに会うことを、せつに望んだ。

アムノンは死んでしまい、ダビデが彼のことはあきらめていたからである。

第四章

「ゼルヤの子ヨアブは王の心がアブサロムに向かつているのを知った。そこでヨアブはテコアに人をつかわして、そこからひとりの賢い女を連れてこさせ、その女に言った、「あなたは悲しみのうちにある人をよそおって、喪服を着、油を身に塗らず、死んだ人のために長いあいだ悲しんでいる女のように、よそおって、三王のもとに行き、しかしかと彼に語りなさい」。こうしてヨアブはその言葉を彼女の口に授けた。

四テコアの女は王のもとに行き、地に伏して拝し、「王よ、お助けください」と言った。五王は女に言った、「どうしたのか」。女は言った、「まことにわたしは寡婦でありまして、夫は死にました。六つかえめにはふたりの子どもがあり、ふたりは野で争いましたが、だれも彼らを引き分ける者がなかったので、ひとりはいに他の者を撃つて殺しました。七すると全家族がつかえめに逆らい立つて、『兄弟を撃ち殺した者を引き渡すがよい。われわれは彼が殺したその兄弟の命のために彼を殺そう』と言いい、彼らは世継をも殺そうとしました。こうして彼らは残っているわたしの炭火を消して、わたしの夫の名をも、跡継をも、地

のおもてにとどめないようにしようとしています」。

八王は女に言った、「家に帰りなさい。わたしはあなたのことについて命令を下します」。九テコアの女は王に言った、「わが主王よ、わたしとわたしの父の家にその罪を帰してください。どうぞ王と王の位には罪がありませんように」。一〇王は言った、「もしあなたに何か言う者があれば、わたしの所に連れてきなさい。そうすれば、その人は重ねてあなたに触れることはないでしょう」。一一女は言った、「どうぞ王が、あなたの神、主をおぼえて、血の報復をする者に重ねて滅ぼすことをさせず、わたしの子の殺されることのないようにしてください」。王は言った、「主は生きておられる。あなたの子の髪の毛一筋も地に落ちることはないでしょう」。

一二女は言った、「どうぞ、つかえめにひと言、わが主、王に言わせてください」。ダビデは言った、「言いなさい」。一三女は言った、「あなたは、それならばどうして、神の民に向かつてこのような事を図られたのですか。王は今この事を言われたことによつて自分を罪ある者とされていきます。それは王が追放された者を帰らせられないからです。一四わたしたちはみな死ななければなりません。地にこぼれた水の再び集めることのできないのと同じです。しかし神は、追放された者が捨てられないように、てだてを設ける人の命を取ることにはなさいません。一五わたしがこの事を王、わが主に言おうとして来たのは、わたしが民

を恐れただからです。つかえめは、こう思ったのです、『王に申し上げよう。王は、はしための願いのようにしてくださいるかもしれない。二六王は聞いてくださる。わたしとわたしの子を共に滅ぼして神の嗣業から離れさせようとする人の手から、はしためを救い出してくださいるのだから』。七つかえめはまた、こう思ったのです、『王、わが主の言葉はわたしを安心させるであらう』と。それは王、わが主は神の使のように善と悪を聞きわけられるからです。どうぞあなたの神、主があなたと共におられますように』。

一八王は女に答えて言った、「わたしが問うことに隠さず答えてください」。女は言った、「王、わが主よ、どうぞ言うてください」。一九王は言った、「このすべての事において、ヨアブの手があなたと共にありますか」。女は答えた、「あなたはたしかに生きておられます。王、わが主よ、すべて王、わが主の言われた事から人は右にも左にも曲ることはできません。わたしに命じたのは、あなたのしもべヨアブです。彼がつかえめの口に、これらの言葉をことごとく授けたのです。二〇事のなりゆきを変えるため、あなたのしもべヨアブがこの事をしましたのです。わが君には神の使の知恵のような知恵があつて、地の上のすべてのことを知っておられます」。

二三そこで王はヨアブに言った、「この事を許す。行つて、若者アブサロムを連れ帰るがよい」。二三ヨアブは地にひれ伏して拝

し、王を祝福した。そしてヨアブは言った、「わが主、王よ、王がしもべの願いを許されたので、きょうしもべは、あなたの前に恵みを得たことを知りました」。二三そこでヨアブは立つてゲシウルに行き、アブサロムをエルサレムに連れてきた。二四王は言った、「彼を自分の家に引きこもらせるがよい。わたしの顔を見てはならない」。こうしてアブサロムは自分の家に引きこもり、王の顔を見なかった。

二五さて全イスラエルのうちにアブサロムのように、美しさのためほめられた人はなかった。その足の裏から頭の頂まで彼には傷がなかった。二六アブサロムがその頭を刈る時、その髪の毛は刈ったが、王のはかりで二百シケルあつた。毎年の終りにそれを刈るのを常とした。それが重くなると、彼はそれを刈ったのである。二モアブサロムに三人のむすこと、タマルという名のひとりの娘が生れた。タマルは美しい女であつた。

二八こうしてアブサロムは満二年の間エルサレムに住んだが、王の顔を見なかった。二九そこでアブサロムはヨアブを王のもとにつかわそうとして、ヨアブの所の人に人をつかわしたが、ヨアブは彼の所にこようとはしなかった。彼は再び人をつかわしたがヨアブはこようとはしなかった。三〇そこでアブサロムはその家来に言った、「ヨアブの畑はわたしの畑の隣にあつて、そこに大麦がある。行つてそれに火を放ちなさい」。アブサロムの家来たちはその畑に火を放った。三一ヨアブは立つてアブサロ

ムの家^{いえ}にきて彼^{かれ}に言^いった、「どうしてあなたの家来^{けらい}たちはわたしの畑^{はたけ}に火^ひを放^{はな}つたのですか」。三 アブサロムはヨアブに言^いった、「わたしはあなたに人^{ひと}をつかわして、ここへ来るようにと言^いったのです。あなたを王^{おう}のもとにつかわし、『なんのためにわたしはゲシュルからきたのですか。なおあそこ^{そこ}にいたならば良かったでしょうに』と言^いわせようとしたのです。それゆえ今^{いま}わたしに王^{おう}の顔^{かお}を見^みさせてください。もしわたしに罪^{つみ}があるなら王^{おう}にわたしを殺^{ころ}させてください」。三三 そこでヨアブは王^{おう}のもとへ行^いって告^つげたので、王^{おう}はアブサロムを召^めしよせた。彼は王^{おう}のもとにきて、王^{おう}の前に地^ちにひれ伏^ふして拝^{はい}した。王^{おう}はアブサロムに口^{くち}づけした。

第一章

一 この後^{のち}、アブサロムは自分^{じぶん}のために戦車^{せんしや}と馬^{うま}、および自分^{じぶん}の前^{まえ}に駆^かける者^{もの}五十人^{にん}を備^{そな}えた。二 アブサロムは早く起^おきて門^{もん}の道^{みち}のかたわらに立^たつのを常^{つね}とした。人^{ひと}が訴^{うた}えがあつて王^{おう}に裁判^{さいばん}を求め^{もと}に来^くると、アブサロムはその人^{ひと}を呼^よんで言^いった、「あなたはどの町^{まち}の者^{もの}ですか」。その人^{ひと}が「しもべはイスラエルのこれ^{これ}の部族^{ぶそく}のものです」と言^いうと、三 アブサロムはその人^{ひと}に言^いった、「見^みよ、あなたの要求^{ようきゆう}は良く、また正しい。しかしあなたのことを聞^きくべき人^{ひと}は王^{おう}がまだ立^たてていない」。四 アブサロムはまた

言^いった、「ああ、わたしがこの地^ちのさばきびとであつたならばよいのに。そうすれば訴^{うた}え、または申^{もう}立^{した}てのあるものは、皆^{みな}わたしの所^{ところ}にきて、わたしはこれに公平^{こうへい}なさばきを行^{おこな}うことができるのだが」。五 そして人^{ひと}が彼^{かれ}に敬礼^{けいれい}しようとして近^{ちか}づくとき、彼は手^てを伸^のべ、その人^{ひと}を抱^だきかかえて口^{くち}づけした。六 アブサロムは王^{おう}にさばきを求め^{もと}て来るすべてのイスラエルびとにこのようにした。こうしてアブサロムはイスラエルの人々^{ひとびと}の心^{こころ}を自分^{じぶん}のものとした。

七 そして四年^{ねん}の終^{おわ}りに、アブサロムは王^{おう}に言^いった、「どうぞわたしを行^いかせ、ヘブロンで、かつて主^{しゅ}に立^たてた誓^{ちか}いを果^{はた}させてください。八 それは、しもべがスリヤのゲシュルにいた時^{とき}、誓^{ちか}いを立^たてて、『もし主^{しゅ}がほんとうにわたしをエルサレムに連れ歸^{かえ}つてくださるならば、わたしは主に礼拝^{らいはい}をささげます』と言^いったからです。九 王^{おう}が彼^{かれ}に、「安^{やす}らかに行きなさい」と言^いったので、彼は立^たつてヘブロンへ行^いつた。一〇 そしてアブサロムは密使^{みつし}をイスラエルのすべての部族^{ぶそく}のうちにつかわして言^いった、「ラツパの響^{ひび}きを聞^きくならば、『アブサロムがヘブロンで王^{おう}となつた』と言^いいなさい」。一一 二百人^{にん}の招^{まね}かれた者^{もの}がエルサレムからアブサロムと共に行^いつた。彼^{かれ}らは何^{なに}心^{こころ}なく行^いき、何事^{なにこと}をも知らなかつた。一二 アブサロムは犠牲^{ぎせい}をささげている間^{あいだ}に人^{ひと}をつかわして、ダビデの議官^{ぎかん}ギロびとアヒトペルを、その町^{まち}ギロから呼^よび寄せた。徒党^{とどう}は強^{つよ}く、民^{たみ}はしだいにアブサロムに加^{くわ}わつた。

三ひとりりの使者がダビデのところにて、「イスラエルの人々の心はアブサロムに従いました」と言った。四ダビデは、自分と一緒にエルサレムにいるすべての家来に言った、「立て、われわれは逃げよう。そうしなければアブサロムの前からのがれることはできなくなるであろう。急いで行くがよい。さもないと、彼らが急ぎ追いついて、われわれに害をこうむらせ、つるぎをもって町を撃つであろう」。五王のしもべたちは王に言った、「しもべたちは、わが主君、王の選ばれる所をすべて行います」。六こうして王は出て行き、その全家は彼に従った。王は十人のめかけを残して家を守らせた。七王は出て行き、民はみな彼に従った。彼らは町はずれの家にとどまった。八彼のしもべたちは皆、彼のかたわらを進み、すべてのケレテびとと、すべてのペレテびと、および彼に従ってガテからきた六百人のガテびとは皆、王の前に進んだ。

一九時に王はガテびととイッタイに言った、「どうしてあなたもまた、われわれと共に行くのですか。あなたは帰って王と共にいなさい。あなたは外国人で、また自分の国から追放された者だからです。二〇あなたは、きのう来たばかりです。わたしは自分の行く所を知らずに行くのに、どうしてきよう、あなたを、われわれと共にさまよわせてよいでしょう。あなたは帰りなさい。あなたの兄弟たちも連れて帰りなさい。どうぞ主が恵みと真実をあなたに示してくださるように」。二一しかしイッタイは

王に答えた、「主は生きておられる。わが君、王は生きておられる。わが君、王のおられる所に、死ぬも生きるも、しもべもまたそこにおります」。二二ダビデはイッタイに言った、「では進んで行きなさい」。そこでガテびととイッタイは進み、また彼のすべての従者および彼と共にいた子どもたちも皆、進んだ。二三國中みな大声で泣いた。民はみな進んだ。王もまたキデロンの谷を渡って進み、民は皆進んで荒野の方に向かった。

二四そしてアビヤタルも上ってきた。見よ、ザドクおよび彼と共にいるすべてのレビびともまた、神の契約の箱をかいてきた。彼らは神の箱をおろして、民がごとごとく町を出てしまうのを待った。二五そこで王はザドクに言った、「神の箱を町にかきもどすがよい。もしわたしが主の前に恵みを得るならば、主はわたしを連れ帰って、わたしにその箱とすまいとを見させてくださるであろう。二六しかしもし主が、『わたしはおまえを喜ばない』とそう言われるのであれば、どうぞ主が良しと思われれることをわたしにしてください。わたしはここにおります」。二七王はまた祭司ザドクに言った、「見よ、あなたもアビヤタルも、ふたりの子たち、すなわちあなたの子アヒマズとアビヤタルの子ヨナタンを連れて、安らかに町に帰りなさい。二八わたしはあなたがたから言葉があつて知らせをうけるまで、荒野の渡し場にとどまります」。二九そこでザドクとアビヤタルは神の箱をエルサレムにかきもどり、そこにとどまった。

三〇ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登る時に泣き、その頭をおおい、はだしで行った。彼と共にいる民もみな頭をおおって登り、泣きながら登った。三一時に、「アヒトベルがアブサロムと共に謀した者のうちにいる」とダビデに告げる人があったのでダビデは言った、「主よ、どうぞアヒトベルの計略を愚かなものにしてください」。

三二ダビデが山の頂にある神を礼拝する場所にきた時、見よ、アルキびとホシャイはその上着を裂き、頭に土をかぶり、来てダビデを迎えた。三三ダビデは彼に言った、「もしあなたがわたしと共に進むならば、わたしの重荷となるであろう。三四しかしもしあなたが町に帰ってアブサロムに向かい、『王よ、わたしはあなたのしもべとなります。わたしがこれまで、あなたの父のしもべであつたように、わたしは今あなたのしもべとなります』と言うならば、あなたはわたしのためにアヒトベルの計略を破ることができであろう。三五祭司たち、ザドクとアビヤタルとは、あなたが共にあそこにいるではないか。それゆえ、あなたは王の家から聞くことをことごとく祭司たち、ザドクとアビヤタルとに告げなさい。三六あそこには彼らと共にそのふたりの子たち、すなわちザドクの子アヒマズとアビヤタルの子ヨナタンとがいる。あなたがたは聞いたことをことごとく彼らの手によつてわたしに通報しなさい」。三七そこでダビデの友ホシャイは町にはいった。その時アブサロムはすでにエルサレムには

いつていた。

第十六章

一ダビデが山の頂を過ぎて、すこし行つた時、メピボセテのしもべチバは、くらを置いた二頭のろばを引き、その上にパン二百個、干ぶどう百ふさ、夏のくだもの一百、ぶどう酒一袋を載せてきてダビデを迎えた。二王はチバに言った、「あなたはどれこれらのものを持ってきたのですか」。チバは答えた、「ろばは王の家族が乗るため、パンと夏のくだものは若者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で弱つた者が飲むためです」。三王は言った、「あなたの主人の子はどこにおるのですか」。チバは王に言った、「エルサレムにとどまっています。彼は、『イスラエルの家はきよう、わたしの父の国をわたしに返すであろう』と思つたのです」。四王はチバに言った、「見よ、メピボセテのものはことごとくあなたのものです」。チバは言った、「わたしは敬意を表します。わが主、王よ、あなたの前にいつまでも恵みを得させてください」。

五ダビデ王がバホルムにきた時、サウルの家の一族の者がひとりそこから出てきた。その名をシメイといい、ゲラの子である。彼は出てきながら絶えずのろつた。六そして彼はダビデとダビデ王のよろもろの家来に向かつて石を投げた。その時、民と

勇士たちはみな王の左右にいた。セシメイはのろう時にこう言った、「血を流す人よ、よこしまな人よ、立ち去れ、立ち去れ。ハあなたが代つて王となつたサウルの家の血をすべて主があなたに報いられたのだ。主は王国をあなたの子アブサロムの手に渡された。見よ、あなたは血を流す人だから、災に会うのだ」。九時にゼルヤの子アビシヤイは王に言った、「この死んだ犬がどうしてわが主、王をのろつてよからうか。わたしに、行つて彼の首を取らせてください」。しかし王は言った、「ゼルヤの子たちは、あなたがたと、なんのかかわりがあるのか。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ』と言われたからであるならば、だが、『あなたはどうかしてこういうことをするのか』と言つてよいであらうか」。ニダビデはまたアビシヤイと自分のすべての家来と言つた、「わたしの身から出たわが子がわたしの命を求めている。今、このベニヤミンびととしてはなおさらだ。彼を許してのろわせておきなさい。主が彼に命じられたのだ。ニシはわたしの悩みを顧みてくださるかもしれない。また主はきよう彼ののろいにかえて、わたしに善を報いてくださるかも知れない」。ニ三こうしてダビデとその従者たちとは道を行つたが、シメイはダビデに並んで向かいの山の中腹を行き、行きながらのろい、また彼に向かつて石や、ちりを投げつけた。ニ四王および共にいる民はみな疲れてヨルダンに着き、彼はその所で息をついだ。

ニ五さてアブサロムとすべての民、イスラエルの人々はエルサレムにきた。アヒトベルもアブサロムと共にいた。ニ六ダビデの友であるアルキびとホシヤイがアブサロムのもとにきた時、ホシヤイはアブサロムに「王万歳、王万歳」と言つた。ニ七アブサロムはホシヤイに言つた、「これはあなたがその友に示す真実なのか。あなたはどうかしてあなたの友と一緒に行かなかつたのか」。ニ八ホシヤイはアブサロムに言つた、「いいえ、主とこの民とイスラエルのすべての人々が選んだ者にわたしは属し、かつその人と一緒におります。ニ九かつまたわたしはだれに仕えるべきですか。その子の前に仕えるべきではありませんか。あなたの父の前に仕えたように、わたしはあなたの前に仕えます」。ニ一そこでアブサロムはアヒトベルに言つた、「あなたがたは、われわれがどうしたらよいのか、計りごとを述べなさい」。ニ二アヒトベルはアブサロムに言つた、「あなたの父が家を守るために残された、めかけたちの所にはいりなさい。そうすればイスラエルは皆あなたが父上に憎まれることを聞くでしょう。そしてあなたと一緒にいる者の手は強くなるでしょう」。ニ三こうして彼らがアブサロムのために屋上に天幕を張つたので、アブサロムは全イスラエルの目の前で父のめかけたちの所にはいつた。ニ四そのころアヒトベルが授ける計りごとは人が神のみ告げを伺うようであつた。アヒトベルの計りごとは皆ダビデにもアブサロムにも共にそのように思われた。

第十七章

一時にアヒトベルはアブサロムに言った、「わたしに一万二千の人を選び出させてください。わたしは立つて、今夜ダビデのあとを追ひ、二彼が疲れて手が弱くなっているところを襲つて、彼をあわてさせましょう。そして彼と共にいる民がみな逃げるとき、わたしは王ひとりを撃ち取り、三すべての民を花嫁がその夫のもとに帰るようになあなたに帰らせましょう。あなたが求めておられるのはただひとりの命だけです。民はみな穏やかになるでしょう」。四この言葉はアブサロムとイスラエルのすべての長老の心になつた。

五そこでアブサロムは言った、「アルキびとホシヤイをも呼びよせなさい。われわれは彼の言うことを聞きましょう」。六ホシヤイがアブサロムのもとにきた時、アブサロムは彼に言った、「アヒトベルはこのように言った。われわれは彼の言葉のように行うべきか。いけないのであれば、言いなさい」。七ホシヤイはアブサロムに言った、「このたびアヒトベルが授けた計りごとは良くありません」。八ホシヤイはまた言った、「ごぞんじのように、あなたの父とその従者たちとは勇士です。その上彼らは、野で子を奪われた熊のように、ひどく怒っています。また、あなたの父はいくさびとですから、民と共に宿らないでしょう。九彼は今でも穴の中か、どこかほかの所にかくれています。もし民のう

ちの幾人かが手始めに倒れるならば、それを聞く者はだれでも、『アブサロムに従う民のうちに戦死者があつた』と言うでしょう。一〇そうすれば、ししの心のような心のある勇ましい人であつても、恐れて消え去ってしまうでしょう。それはイスラエルのすべての人が、あなたの父の勇士であること、また彼と共にいる者が、勇ましい人々であることを知っているからです。二ところでわたしの計りごとは、イスラエルをダンからベエルシバまで、海べの砂のように多くあなたのもとに集めて、あなたみずから戦いに臨むことです。三こうしてわれわれは彼の見つかる場所で彼を襲ひ、つゆが地におりるように彼の上に下る。そして彼および彼と共にいるすべての人をひとりも残さないでしょう。四もし彼がいずれかの町に退くならば、全イスラエルはその町になわをかけ、われわれはそれを谷に引き倒して、そこに一つの小石も見られないようにするでしょう。五アブサロムとイスラエルの人々はみな、『アルキびとホシヤイの計りごとは、アヒトベルの計りごとよりもよい』と言った。それは主がアブサロムに災を下そうとして、アヒトベルのよい計りごとを破ることを定められたからである。

六そこでホシヤイは祭司たち、ザドクとアビヤタルとに言った、「アヒトベルはアブサロムとイスラエルの長老たちのためにこういう計りごとをした。またわたしはこういう計りごとをした。七六それゆえ、あなたがたはすみやかに人をつかわしてダ

ビデに告げ、『今夜、荒野の渡し場に宿らないで、必ず渡って行きなさい。さもないと王および共にいる民はみな、滅ぼされるでしょう』と言いなさい。二七時に、ヨナタンとアヒマアズはエングゲルで待つていた。ひとりのつかえめが行つて彼らに告げ、彼らは行つてダビデ王に告げるのが常であつた。それは彼らが町にはいるのを見られないようにするためである。一八ところがひとりの若者が彼らを見てアブサロムに告げたので、彼らふたりは急いで去り、バホリムの、あるひとりの人の家にきた。その人の庭に井戸があつて、彼らはその中に下つたので、一九女はおおいを取つてきて井戸の口の上にひろげ、麦をその上にまき散らした。それゆえその事は何も知れなかつた。二〇アブサロムのしもべたちはその女の家にきて言つた、「アヒマアズとヨナタンはどこにいますか」。女は彼らに言つた、「あの人は小川を渡つて行きました」。彼らは尋ねたが見当らなかつたのでエルサレムに歸つた。

二三 彼らが去つた後、人々は井戸から上り、行つてダビデ王に告げた。すなわち彼らはダビデに言つた、「立つて、すみやかに川を渡りなさい。アヒトペルがあなたがたに対してこういう計りごとをしたからです。二三そこでダビデは立つて、共にいるすべての民と一緒にヨルダンを渡つた。夜明けには、ヨルダンを渡らない者はひとりもなかつた。

二四 アヒトペルは、自分の計りごとが行われぬのを見て、ろば

にくらを置き、立つて自分の町に行き、その家に歸つた。そして家の人に遺言してみずからくびれて死に、その父の墓に葬られた。

二五 ダビデはマハナイムにきた。またアブサロムは自分と共にいるイスラエルのすべての人々と一緒にヨルダンを渡つた。二六 アブサロムはアマサをヨアブの代りに軍の長とした。アマサはかのナハシの娘でヨアブの母ゼルヤの妹であるアビガルをめとつたイシマエルびと、名はイトラという人の子である。二七そしてイスラエルとアブサロムはギレアデの地に陣取つた。

二八 ダビデがマハナイムにきた時、アンモンの人々のうちのラバのナハシの子シヨビと、ロ・デバルのアンミエルの子マキル、およびロゲリムのギレアデびとバルジライは、二九 寝床と鉢、土器、小麦、大麦、粉、いり麦、豆、レンズ豆、三〇 蜜、凝乳、羊、乾酪をダビデおよび共にいる民が食べるために持つてきた。それは彼らが、「民は荒野で飢え疲れかわいている」と思つたからである。

第一章

一 さてダビデは自分と共にいる民を調べて、その上に千人の長、百人の長を立てた。二そしてダビデは民をつかわし、三分の一をヨアブの手に、三分の一をゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイ

の手に、三分の一をガテびとイッタイの手にあずけた。こうして王は民に言った、「わたしもまた必ずあなたがたと一緒に出ます」。しかし民は言った、「あなたは出てはなりません。それはわれわれがどんなに逃げて、彼らはわれわれに心をとめず、われわれの半ばが死んでも、われわれに心をとめないからです。しかしあなたはわれわれの一万に等しいのです。それゆえあなたは町の中からわれわれを助けてくださる方がよろしい」。四王は彼らに言った、「あなたがたの最も良いと思うことをわたしはしましょう」。こうして王は門のかたわらに立ち、民は皆あるいは百人、あるいは千人となつて出て行つた。五王はヨアブ、アビシヤイおよびイッタイに命じて、「わたしのため、若者アブサロムをおだやかに扱うように」と言った。王がアブサロムの事についてすべての長たちに命じている時、民は皆聞いていた。六こうして民はイスラエルに向かつて野に出て行き、エフライムの森で戦つたが、モイスラエルの民はその所でダビデの家来たちの前に敗れた。その日その所に戦死者が多く、二万に及んだ。八そして戦いはあまねくその地のおもてに広がった。この日、森の滅ぼした者は、つるぎの滅ぼした者よりも多かつた。九さてアブサロムはダビデの家来たちに行き会つた。その時アブサロムは騾馬に乗っていたが、騾馬は大きいかしの木の、茂った枝の下を通つたので、アブサロムの頭がそのかしの木にかかつて、彼は天地の間につりさがつた。騾馬は彼を捨てて過ぎ

て行つた。一〇ひとりの人がそれを見てヨアブに告げて言つた、「わたしはアブサロムが、かしの木にかかつているのを見ました」。二ヨアブはそれを告げた人に言つた、「あなたはそれを見たのか。それなら、どうしてあなたは彼をその所で、地に撃ち落さなかつたのか。わたしはあなたに銀十シケルと帯一筋を与えたであらうに」。三その人はヨアブに言つた、「たといわたしの手は銀十シケルを受けても、手を出して王の子に敵することはしません。王はわれわれが聞いているところで、あなたとアビシヤイとイッタイに、『わたしのため若者アブサロムを保護せよ』と命じられたからです。四もしわたしがそむいて彼の命をそこなつたのであれば、何事も王に隠れることはありませんから、あなたはみずから立つてわたしを責められたでしよう」。一四そこで、ヨアブは「こうしてあなたと共にとどまつてはおられない」と言つて、手に三筋の投げやりを取り、あのかしの木にかかつて、なお生きているアブサロムの心臓にこれを突き通した。一五ヨアブの武器を執る十人の若者たちは取り巻いて、アブサロムを撃ち殺した。一六こうしてヨアブがラツパを吹いたので、民はイスラエルのあとを追うことをやめて歸つた。ヨアブが民を引きとめたからである。一七人々はアブサロムを取つて、森の中の大きな穴に投げいれ、その上にひじょうに大きい石塚を積み上げた。そしてイスラエルはみなおのおのその天幕に逃げ歸つた。一八さてアブ

サロムは生きている間に、王の谷に自分のために一つの柱を建てた。それは彼が、「わたしは自分の名を伝える子がない」と思ったからである。彼はその柱に自分の名をつけた。その柱は今日までアブサロムの碑となえられている。

「九さてザドクの子アヒマアズは言った、「わたしは走って行って、主が王を敵の手から救い出されたおとずれを王に伝えましょう。」「三〇ヨアブは彼に言った、「きようは、おとずれを伝えるはならない。おとずれを伝えるのは、ほかの日にしなさい。きようは王の子が死んだので、おとずれを伝えてはならない。」「三ニヨアブはクシびとに言った、「行って、あなたの見た事を王に告げなさい。」「クシびとはヨアブに礼をして走って行った。」「三ザドクの子アヒマアズは重ねてヨアブに言った、「何事があるうとも、わたしにもクシびとのあとから走って行かせてください。」「ヨアブは言った、「子よ、おとずれの報いを得られないのに、どうしてあなたは走って行こうとするのか。」「三彼は言った、「何事があるうとも、わたしは走って行きます。」「ヨアブは彼に言った、「走って行きなさい。」「そこでアヒマアズは低地の道走って行き、クシびとを追いつつた。

「三四時にダビデは二つの門の間にすわっていた。そして見張りの者が城壁の門の屋根にのぼり、目をあげて見ていると、ただひとり走ってくる者があった。三見張りの者が呼ばわつて王に告げたので、王は言った、「もしひとりならば、その口にお

とずれがあるであろう。その人は急いできて近づいた。三見張りの者は、ほかにまたひとり走ってくるのを見たので、門の方に呼ばわつて言った、「見よ、ほかにただひとり走ってくる者があります。」「王は言った、「彼もまたおとずれを持つてくるのだ。」「三見張りの者は言った、「まっ先に走って来る人はザドクの子アヒマアズの方です。」「王は言った、「彼は良い人だ。良いおとずれを持つてくるであろう。」。

「三八時にアヒマアズは呼ばわつて王に言った、「平安でいらせられますように。」「そして王の前に地にひれ伏して言った、「あなたの神、主はほむべきかな。主は王、わが君に敵して手をあげた人々を引き渡されました。」「三九王は言った、「若者アブサロムは平安ですか。」「アヒマアズは答えた、「ヨアブがしもべをつかわす時、わたしは大きな騒ぎを見ましたが、何事であつたか知りません。」「三〇王は言った、「わきへ行つて、そこに立っていない。」「彼はわきへ行つて立つた。

「三一その時クシびとがきた。そしてそのクシびとは言った、「わが君、王が良いおとずれをお受けくださるよう。主はきよう、すべてあなたに敵して立つた者どもの手から、あなたを救い出されたのです。」「三二王はクシびとに言った、「若者アブサロムは平安ですか。」「クシびとは答えた、「王、わが君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あの若者のようになりますように。」「三三王はひじょうに悲しみ、門の上のへや

に上^{のぼ}つて泣^ないた。彼は行^いきなながらこのように言^いつた、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代^{かわ}つて死^しねばよかつたのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」。

第二十九章

一時^{とき}にヨアブに告^つげる者^{もの}があつて、「見^みよ、王^{おう}はアブサロムのために泣^なき悲^{かな}しんでいる」と言^いつた。ニこうしてその日^ひの勝^{しょう}利^りはすべての民^{たみ}の悲^{かな}しみとなつた。それはその日^ひ、民^{たみ}が、「王^{おう}はその子のために悲^{かな}しんでいる」と人の言^いうのを聞^きいたからである。ニそして民^{たみ}はその日^ひ、戦^{たたか}いに逃^にげて恥^はじている民^{たみ}がひそかに、はいるように、ひそかに町^{まち}にはい^いつた。四王^{おう}は顔^{かお}をおおつた。そして王^{おう}は大声^{おほこゑ}に叫^{さけ}んで、「わが子アブサロムよ。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と言^いつた。五時^{とき}にヨアブは家^{いえ}にはい^いり、王^{おう}のもとにきて言^いつた、「あなたは、きよう、あなたの命^{いのち}と、あなたのむすこ娘^{むすめ}たちの命^{いのち}、およびあなたの妻^{つま}たちの命^{いのち}と、めかけたちの命^{いのち}を救^{すく}つたすべての家来^{けらい}の顔^{かお}をはずかしめられました。ハそれはあなたが自分^{じぶん}を憎^{にく}む者^{もの}を愛^{あい}し、自分^{じぶん}を愛^{あい}する者^{もの}を憎^{にく}まれるからです。あなたは、きよう、軍^{ぐん}の長^{ちやう}たちをも、しもべたちをも顧^{かえり}みないことを示^{しめ}されました。きよう、わたしは知^しりました。もし、アブサロムが生^いきていて、われわれが皆^{みな}きよう死^しんでいたら、あなたの目^めにかなつたでしょう。セ今^{いま}立^たつて出^でて行^いつて、しもべた

ちにねんごろに語^{かた}つてください。わたしは主^{しゅ}をさして誓^{ちか}います。もしあなたが出^でられないならば、今夜^{こんや}あなたと共^{とも}にとどまる者^{もの}はひとりもないでしょう。これはあなたが若い時^{とき}から今^{いま}までにこうむられたすべての災^{わざ}よりも、あなたにとつて悪いでしょう」。ハそこで王^{おう}は立^たつて門^{もん}のう^うちの座^ざについた。人々^{ひと}はすべての民^{たみ}に、「見^みよ、王^{おう}は門^{もん}に座^ざしている」と告^つげたので、民^{たみ}はみな王^{おう}の前^{まえ}にきた。

さてイスラエルはおのおのその天幕^{てんまく}に逃^にげ歸^{かえ}つた。九そしてイスラエルのもろもろの部族^{ぶぞく}の中で民^{たみ}はみな争^{あらそ}つて言^いつた、「王^{おう}はわれわれを敵^{てき}の手^てから救^{すく}い出し、またわれわれをペリシテびとの手^てから助^{たす}け出^だされた。しかし今はアブサロムのために国^{くに}のそとに逃^にげておられる。ニまたわれわれが油^{あぶら}を注^{そそ}いで、われわれの上^{うへ}に立^たてたアブサロムは戦^{たたか}いで死^しんだ。それであるのに、どうしてあなたがたは王^{おう}を導^{みちび}きかえることについて、何^{なに}をも言^いわないのか」。

ニダビデ王^{おう}は祭司^{さいし}たちザドクとアビヤタルとに人^{ひと}をつかわし^て言^いつた、「ユダの長老^{ちやうらう}たちに言^いいなさい、『全^{ぜん}イスラエルの言葉^{ことば}が王^{おう}に達^{たつ}したのに、どうしてあなたがたは王^{おう}をその家^{いえ}に導^{みちび}きかえる最後の者^{もの}となるのですか。ニあなたがたはわたしの兄弟^{きょうだい}、わたしの骨肉^{こつにく}です。それにどうして王^{おう}を導^{みちび}きかえる最後の者^{もの}となるのですか。ニまたアマサに言^いいなさい、『あなたはわたしの骨肉^{こつにく}ではありませんか。これから後^{のち}あなたがたをヨアブに

代えて、わたしの軍の長とします。もしそうしないときは、神が幾重にもわたしを罰してくださいるように』。一四こうしてダビデはユダのすべての人の心を、ひとりのように自分に傾けさせたので、彼らは王に、「どうぞあなたも、すべての家来たちも帰ってきてください」と言いおくれた。一五そこで王は帰ってきてヨルダンまで来ると、ユダの人人は王を迎えるためギルガルにきて、王にヨルダンを渡らせた。

一六バホリムのベニヤミンびと、ゲラの子シメイは、急いでユダの人々と共に下つてきて、ダビデ王を迎えた。一七一千人のベニヤミンびとが彼と共にいた。またサウルの家のしもべズバもその十五人のむすこと、二十人のしもべを従えて、王の前にヨルダンに駆け下つた。一八そして王の家族を渡し、王の心になうことをしようと渡し場を渡つた。ゲラの子シメイはヨルダンを渡ろうとする時、王の前にひれ伏し、一九王に言つた、「どうぞわが君が、罪をわたしに帰しられないように。またわが君、王のエルサレムを出られた日に、しもべがおこなつた悪い事を思い出されないように。どうぞ王がそれを心に留められないように。二〇しもべは自分が罪を犯したことを知っています。それゆえ、見よ、わたしはきよう、ヨセフの全家のまつ先に下つてきて、わが主、王を迎えるのです」。二一ゼルヤの子アビシヤイは答えて言つた、「シメイは主が油を注がれた者をのろつたので、そのために殺されるべきではありませんか」。二二ダビデは言つた、「あ

なたがたゼルヤの子たちよ、あなたがたとなにのかかわりがあつて、あなたがたはきようわたしに敵対するのか。きよう、イスラエルのうちで人を殺して良からうか。わたしが、きようイスラエルの王となつたことを、どうして自分で知らないことがあろうか」。二三こうして王はシメイに、「あなたを殺さない」と言つて、王は彼に誓つた。

二四サウルの子メピボセテは下つてきて王を迎えた。彼は王が去つた日から安らかに帰る日まで、その足を飾らず、そのひげを整えず、またその着物を洗わなかつた。二五彼がエルサレムからきて王を迎えた時、王は彼に言つた、「メピボセテよ、あなたはどうしてわたしと共に行かなかつたのか」。二六彼は答えた、「わが主、王よ、わたしの家来がわたしを欺いたのです。しもべは彼に、『わたしのために、ろばにくらを置き。わたしはそれに乗つて王と共に行く』と言つたのです。しもべは足なえだからです。二七二七ところが彼はしもべのことをわが主、王の前に、あしぎまに言つたのです。しかし、わが主、王は神の使のようであらせられます。それで、あなたの良いと思われることをしてください。二八ハわたしの父の全家はわが主、王の前にはみな死んだ人にすぎないのに、あなたはしもべを、あなたの食卓で食事をする人々のうちに置かれました。わたしになんの権利があつて、重ねて王に訴えることができましょう」。二九王は彼に言つた、「あなたは どうしてなおも自分のことを言うのですか。わたしは決めま

した。あなたとデバとはその土地を分けなさい。三〇メピボセテは王に言った、「わが主、王が安らかに家に帰られたのですから、彼にそれをみな取らせてください」。

ミサデギレアデびとバルジライはロゲリムから下つてきて、ヨルダンで王を見送るため、王と共にヨルダンに進んだ。三二バルジライは、ひじょうに年老いた人で八十一歳であった。彼はまた、ひじょうに裕福な人であったので、王がマハナイムにとどまつている間、王を養った。三三王はバルジライに言った、「わたしと一緒に渡って行きなさい。わたしはエルサレムであなをわたしと共に養い、ましよう」。三四バルジライは王に言った、「わたしは、なお何年いきながらえるので、王と共にエルサレムに上るのですか。三五わたしは今日八十歳です。わたしに、良いこと悪いことがわきまえられるでしょうか。しもべは食べるもの、飲むものを味わうことができましようか。わたしは歌う男や歌う女の声をまだ聞くことができましようか。それであるのに、しもべはどうしてなおわが主、王の重荷となつてよろしいでしょうか。三六しもべは王と共にヨルダンを渡つて、ただ少し行きましょう。どうして王はこのような報いをわたしに報いらなければならないのでしょうか。三七どうぞしもべを帰らせてください。わたしは自分の町で、父母の墓の近くで死にます。ただし、あなたのしもベキムハムがここにおります。わが主、王と共に彼を渡って行かせてください。またあなたが

良いと思われる事を彼にしてください」。三八王は答えた、「キムハムはわたしと共に渡って行かせます。わたしは、あなたが良いと思われる事を彼にしましょう。またあなたが望まれることはみな、あなたのためにいたします」。三九こうして民はみなヨルダンを渡った。王は渡つた時、バルジライに口づけして、祝福したので、彼は自分の家に帰つていった。四〇王はギルガルに進んだ。キムハムも彼と共に進んだ。ユダの民はみな王を送り、イスラエルの民の半ばもまたそうした。

四一さてイスラエルの人々はみな王の所にきて、王に言った、「われわれの兄弟であるユダの人々は、何ゆえにあなたを盗み去つて、王とその家族、およびダビデに伴っているすべての従者にヨルダンを渡させたのですか」。四二ユダの人々はみなイスラエルの人々に答えた、「王はわれわれの近親だからです。あなたがたはどうしてこの事で怒られるのですか。われわれが少しでも王の物を食べたことがありますか。王が何か賜物をわれわれに与えたことがありますか」。四三イスラエルの人々はユダの人々に答えた、「われわれは王のうちに十の分を持っています。またダビデのうちにもわれわれはあなたがたよりも多くを持っています。それであるのに、どうしてあなたがたはわれわれを軽んじたのですか。われらの王を導き帰ろうと最初に言ったのはわれわれではないのですか」。しかしユダの人々の言葉はイスラエルの人々の言葉よりも激しかった。

第二〇章

一 さて、その所にひとりよこしまな人があつて、名をシバと
 いった。ビクリの子で、ベニヤミンびとであつた。彼はラッパ
 を吹いて言つた、「われわれはダビデのうちに分がない。また
 エッサイの子のうちに嗣業を持たない。イスラエルよ、おの
 のその天幕に帰りなさい」。ニそこでイスラエルの人々は皆ダビ
 デに従う事をやめて、ビクリの子シバに従つた。しかしユダの
 人々はその王につき従つて、ヨルダンからエルサレムへ行つ
 た。

ミダビデはエルサレムの自分の家に来た。そして王は家を守る
 ために残しておいた十人のめかけたちを取つて、一つの家に入
 れて守り、また養つたが、彼女たちの所には、はいらなかつた。
 彼女たちは死ぬ日まで閉じこめられ一生、寡婦としてすごし
 た。

四 王はアマサに言つた、「わたしのため三日のうちにユダの人々
 を呼び集めて、ここにきなさい」。五アマサはユダを呼び集める
 ために言つたが、彼は定められた時よりもおくれた。六ダビデは
 アビシヤイに言つた、「ビクリの子シバは今われわれにアブサロ
 ムよりも多くの害をするであろう。あなたの主君の家来たちを
 率いて、彼のあとを追いなさい。さもないと彼は堅固な町々を
 獲て、われわれを悩ますであろう」。七こうしてヨアブとケレテ

びととベレテびと、およびすべての勇士はアビシヤイに従つて
 出た。すなわち彼らはエルサレムを出て、ビクリの子シバのあ
 とを追つた。八彼らがギベオンにある大石のところにいた時、ア
 マサがきて彼らに会つた。時にヨアブは軍服を着て、帯をしめ、
 その上にさやに納めたつるぎを腰に結んで帯びていたが、彼が
 進み出た時つるぎは抜け落ちた。九ヨアブはアマサに、「兄弟
 よ、あなたは安らかですか」と言つて、ヨアブは右の手をもって
 アマサのひげを捕えて彼に口づけしようとしたが、一〇アマサは
 ヨアブの手につるぎがあることに気づかなかつたので、ヨアブ
 はそれをもつてアマサの腹部を刺して、そのはらわたを地に流
 し出し、重ねて撃つこともなく彼を殺した。

こうしてヨアブとその兄弟アビシヤイはビクリの子シバのあ
 とを追つた。二時にヨアブの若者のひとりアマサのかたわ
 らに立つて言つた、「ヨアブに味方する者、ダビデにつく者はヨ
 アブのあとに従いなさい」。三アマサは血に染んで大路の中
 ころがつていたので、そのそばに来る者はみな彼を見て立ちど
 まつた。この人は民がみな立ちどまるのを見て、アマサを大路
 から畑に移し、衣服をその上にかけた。四アマサが大路から移
 されたので、民は皆ヨアブに従つて進み、ビクリの子シバのあ
 とを追つた。

五シバはイスラエルのすべての部族のうちを通つてベテマア
 カのアベルにきた。ビクリびとは皆、集まつてきて彼に従つ

た。二五そこでヨアブと共にいたすべての人々がきて、彼をベテマアカのアベルに囲み、町に向かつて土塁を築いた。それはとりでに向かつて立てられた。こうして彼らは城壁をくずそうとしてこれを撃った。一六その時、ひとりの賢い女が町から呼ばわった、「あなたがたは聞きなさい。あなたがたは聞きなさい。ヨアブに、『ここにきてください。わたしはあなたに言うことがあります』と仰ってください」。一七彼がその女に近寄ると、女は「あなたがヨアブですか」と言った。彼は「そうです」と答えた。すると女は彼に「はしための言葉を聞きください」と言ったので、「聞きましよう」と彼は言った。一八そこで女は言った、「昔、人々はいつも、『アベルで尋ねなさい』と言って、事を定めました。一九わたしはイスラエルのうちの平和な、忠誠な者です。そうであるのに、あなたはイスラエルのうちで母ともいふべき町を滅ぼそうとしておられます。どうして主の嗣業を、のみ尽そうとされるのですか」。二〇ヨアブは答えた、「いいえ、決してそうではなく、わたしが、のみ尽したり、滅ぼしたりすることはありません。二一事實はそうではなく、エフライムの山地の人ビクリの子、名をシバという者が手をあげて王ダビデにそむいたのです。あなたがたが彼ひとりを渡すならば、わたしはこの町を去ります」。女はヨアブに言った、「彼の首は城壁の上からあなたの所へ投げられるでしょう」。二三こうしてこの女が知恵をもって、すべての民の所に行ったので、彼らはビクリの子シバの

首をはねてヨアブの所へ投げ出した。そこでヨアブはラツパを吹きならしたので、人々は散って町を去り、おのこの家に帰った。ヨアブはエルサレムにいる王のもとに帰った。二四ヨアブはイスラエルの全軍の長であつた。エホヤダの子ベナヤはケレテびと、およびペレテびとの長、二五アドラムは徴募人の長、アヒルデの子ヨシヤバテは史官、二六シワは書記官、ザドクとアビヤタルとは祭司。二七またヤイルびとイラはダビデの祭司であつた。

第二章

一ダビデの世に、年また年と三年、ききんがあつたので、ダビデが主に尋ねたところ、主は言われた、「サウルとその家とに、血を流した罪がある。それはかつて彼がギベオンびとを殺したためである」。二そこで王はギベオンびとを召しよせた。ギベオンびとはイスラエルの子孫ではなく、アモリびとの残りであつて、イスラエルの人々は彼らと誓いを立てて、その命を助けた。ところがサウルはイスラエルとユダの人々のために熱心であつたので、彼らを殺そうとしたのである。三それでダビデはギベオンびとに言った、「わたしはあなたがたのために、何をすればよいのですか。どんな償いをすれば、あなたがたは主の嗣業を祝福するのですか」。四ギベオンびとは彼に言った、「これはわれわれ

と、サウルまたはその家との間の金銀の問題ではありません。またイスラエルのうちのひとりでも、われわれが殺そうというのでもありません」。ダビデは言った、「わたしがあなたがたのために何をすればよいと言うのですか」。五かれらは王に言った、「われわれを滅ぼした人、われわれを滅ぼしてイスラエルの領域のどこにもおらせないようにと、たくらんだ人、六その人の子孫七人を引き渡してください。われわれは主の山にあるギベオンで、彼らを主の前に木にかけましょう」。王は言った、「引き渡しましょう」。

セしかし王はサウルの子ヨナタンの子であるメピボセテを惜しんだ。彼らの間、すなわちダビデとサウルの子ヨナタンとの間に、主をさして立てた誓いがあつたからである。ハ王はアヤの娘リヅパがサウルに産んだふたりの子アルモニとメピボセテ、およびサウルの娘メラブがメホラびとバルジライの子アデリエルに産んだ五人の子を取って、九彼らをギベオンびとの手に引き渡したので、ギベオンびとは彼らを山で主の前に木にかけた。彼ら七人は共に倒れた。彼らは刈入れの初めの日、すなわち大麦刈りの初めに殺された。

一〇アヤの娘リヅパは荒布をとって、それを自分のために岩の上に敷き、刈入れの初めから、その人々の死体の上に天から雨が降るまで、昼は空の鳥が死体の上にこないようにし、夜は野の獣を近寄せなかつた。ニアヤの娘でサウルのめかけであつた

リヅパのしたことがダビデに聞えたので、三ダビデは行ってサウルの骨とその子ヨナタンの骨を、ヤベシギレアデの人々の所から取ってきた。これはペリシテびとがサウルをギルボアで殺した日に、木にかけたベテシヤンの広場から、彼らが盗んでいたものである。三ダビデはそこからサウルの骨と、その子ヨナタンの骨を携えて上つた。また人々はそのかけられた者どもの骨を集めた。二四こうして彼らはサウルとその子ヨナタンの骨を、ベニヤミンの地のゼラにあるその父キシの墓に葬り、すべて王の命じたようにした。この後、神はその地のために、祈を聞かれた。

一五ペリシテびとはまたイスラエルと戦争をした。ダビデはその家来たちと共に下つてペリシテびとと戦つたが、ダビデは疲れていた。二六時にイシビベノブはダビデを殺そうと思つた。イシビベノブは巨人の子孫で、そのやりは青銅で重さ三百シケルあり、彼は新しいつるぎを帯びていた。セしかしゼルヤの子アビシヤイはダビデを助けて、そのペリシテびとを撃ち殺した。そこでダビデの従者たちは彼に誓つて言った、「あなたはわれわれと共に、重ねて戦争に出てはなりません。さもないと、あなたはイスラエルのともし火を消すでしょう」。

一八この後、再びゴブでペリシテびととの戦いがあつた。時にホシヤびとシベカイは巨人の子孫のひとりサフを殺した。一九ここにまたゴブで、ペリシテびととの戦いがあつたが、そこでは

第二二章

ベツレヘムびとヤレオレギムの子エルハナンは、ガテびとゴリアテを殺した。そのやりの柄は機の巻棒のようであった。ニまたガテで再び戦いがあつたが、そこにひとりの背の高い人があり、その手の指と足の指は六本ずつで、その数は合わせて二十四本であつた。彼もまた巨人から生れた者であつた。ニ彼はイスラエルをのしつたので、ダビデの兄弟シメアの子ヨナタンが彼を殺した。ニこれらの四人はガテで巨人から生れた者であつたが、ダビデの手とその家来たちの手に倒れた。

一ダビデは主がもろもろの敵の手とサウルの手から、自分を救い出された日に、この歌の言葉を主に向かつて述べ、ニ彼は言つた、

「主はわが岩、わが城、わたしを救う者、
ニわが神、わが岩。わたしは彼に寄り頼む。
わが盾、わが救の角、
わが高きやぐら、わが避け所、
わが救主。あなたはわたしを暴虐から救われる。
四わたしは、ほめまつるべき主に呼ばわつて、
わたしは敵から救われる。
五死の波はわたしをとりまき、

滅びの大水はわたしを襲つた。

六陰府の綱はわたしをとりかこみ、
死のわなはわたしに、たち向かつた。

七苦難のうちにわたしは主を呼び、

またわが神に呼ばわつた。

主がその宮からわたしの声を聞かれて、
わたしの叫びはその耳にとどいた。

八その時地は震いうごき、

天の基はゆるぎふるえた。

彼が怒られたからである。

九煙はその鼻からたち上り、

火はその口から出て焼きつくし、

白熱の炭は彼から燃え出た。

一〇彼は天を低くして下られ、

暗やみが彼の足の下にあつた。

二彼はケルブに乗つて飛び、

風の翼に乗つてあらわれた。

三彼はその周囲に幕屋として、

やみと濃き雲と水の集まりとを置かれた。

四そのみ前の輝きから

炭火が燃え出た。

五主は天から雷をとどろかせ、

いと高き者は声を出された。

一五 彼はまた矢を放つて彼らを散らし、
いなくまを放つて彼らを撃ち破られた。

一六 主のどがめと、その鼻のいぶきとによって、
海の底はあらわれ、

世界の基が、あらわになった。

一七 彼は高き所から手を伸べてわたしを捕え、
大水の中からわたしを引き上げ、

一八 わたしの強い敵と、わたしを憎む者から
わたしを救われた。

彼らはわたしにとつて、あまりにも強かつたからだ。

一九 彼らはわたしの災の日にわたしに、たち向かつた。

しかし主はわたしの支柱となられた。

二〇 彼はまたわたしを広い所へ引きだされ、

わたしを喜ばれて、救つてくださった。

二一 主はわたしの義にしたがつてわたしに報い、

わたしの手の清きにしがたつて

わたしに報いかえされた。

二三 それは、わたしが主の道を守り、悪を行わず、
わが神から離れたことがないからである。

二四 そのすべてのおきてはわたしの前にあつて、

わたしはその、み定めを離れたことがない。

二四 わたしは主の前に欠けた所なく、
自らを守つて罪を犯さなかつた。

二五 それゆえ、主はわたしの義にしたがい、
その目のまえにわたしの清きにしがたつて、

わたしに報いられた。

二六 忠実な者には、あなたは忠実な者となり、

欠けた所のない人には、

あなたは欠けた所のない者となり、

二七 清い者には、あなたは清い者となり、

まがつた者には、かたいぢな者となられる。

二八 あなたはへりくだる民を救われる、

しかしあなたの目は高ぶる者を見て

これをひくくせられる。

二九 まことに、主よ、あなたはわたしのとし火、

わが神はわたしのやみを照される。

三〇 まことに、あなたによつて

わたしは敵軍をふみ滅ぼし、

わが神によつて石がきをとび越えることができる。

三一 この神こそ、その道は非のうちどころなく、

主の約束は真実である。

彼はすべて彼に寄り頼む者の盾である。

三二 主のほかに、だれが神か、

われらの神のほか、だれが岩であるか。

三三この神こそわたしの堅固な避け所であり、わたしの道を安全にされた。

三四わたしの足をめじかの足のようにして、わたしを高い所に安全に立たせ、

三五わたしの手を戦いに慣らされたので、わたしの腕は青銅の弓を引くことができる。

三六あなたはその救の盾をわたしに与え、あなたの助けは、わたしを大いなる者とされた。

三七あなたはわたしを歩く広い場所を与えられたので、わたしの足はすべらなかつた。

三八わたしは敵を追つて、これを滅ぼし、これを絶やすまでは帰らなかつた。

三九わたしは彼らを絶やし、彼らを砕いたので、彼らは立つことができず、わたしの足もとに倒れた。

四〇あなたは戦いのために、わたしに力を帯びさせわたしを攻める者をわたしの下にかがませられた。

四一あなたによつて、敵は

そのうしろをわたしに向けたので、わたしを憎む者をわたしは滅ぼした。

四二彼らは見まわしたが、救う者はいなかつた。彼らは主に叫んだが、彼らには答えられなかつた。

四三わたしは彼らを地のちりのように細かに打ちくだき、

ちまたのどろのように、踏みにじつた。

四四あなたはわたしを国々の民との争いから救い出し、わたしをもうもろの国民のかしらとされた。

四五異国の人たちはきてわたしにこび、わたしの事を聞くとすぐわたしに従つた。

四六異国の人たちは、うちしおれてその城からふるえながら出てきた。

四七主は生きておられる。わが岩はほむべきかな。わが神、わが救の岩はあがむべきかな。

四八この神はわたしのために、あだを報い、もうもろの民をわたしの下に置かれた。

四九またわたしを敵から救い出し、あだの上にわたしをあげ、

暴虐の人々からわたしを救い出された。

五〇それゆえ、主よ、わたしはもうもろの国民の中で、あなたをたたえ、

あなたの、み名をほめ歌うであらう。

五一主はその王に大いなる勝利を与え、油を注がれた者に、ダビデとその子孫とに、

第二章

とこしえに、いつくしみを施される」。

「これはダビデの最後の言葉である。
エッサイの子ダビデの託宣、
すなわち高く挙げられた人、
ヤコブの神に油を注がれた人、
イスラエルの良き歌びとの託宣。
「主の霊はわたしによつて語る、
その言葉はわたしの舌の上にある。
ミイスラエルの神は語られた、
イスラエルの岩はわたしに言われた、
『人を正しく治める者、
神を恐れて、治める者は、
四朝の光のように、
雲のない朝に、輝きでる太陽のように、
地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む』。
五まことに、わが家はするように、
神と共にあるではないか。
それは、神が、よろず備わつて確かな
とこしえの契約をわたしと結ばれたからだ。

どうして彼はわたしの救と願いを、
皆なしとげられぬことがあろうか。
六しかし、よこしまな人は、いばらのようで、
手をもつて取ることができないゆえ、
みな共に捨てられるであらう。
七これに触れようとする人は
鉄や、やりの柄をもつて武装する、
彼らはことごとく火で焼かれるであらう」。
八ダビデの勇士たちの名は次のとおりである。タクモンびとヨ
セブ・バッセベテはかの三人のうちの長であつたが、彼はいちじ
に八百人に向かつて、やりをふるい、それを殺した。
九彼の次はアホアびとドドの子エレアザルであつて、三勇士の
ひとりである。彼は、戦おうとしてそこに集まつたペリシテび
とに向かつて戦いをいどみ、イスラエルの人々が退いた時、ダビ
デと共にいたが、〇立つてペリシテびとを撃ち、ついに手が疲
れ、手がつるぎに着いて離れないほどになつた。その日、主は大
いなる勝利を与えられた。民は彼のあとに帰つてきて、ただ殺
された者をはぎ取るばかりであつた。
二彼の次はハラルびとアゲの子シャンマであつた。ある時、ペ
リシテびとはレヒに集まつた。そこに一面にレンズ豆を作つた
地所があつた。民はペリシテびとの前から逃げたが、二三彼はそ
の地所の中に立つて、これを防ぎ、ペリシテびとを殺した。そし

て主は大いなる救を与えられた。

二三 三十人の長たちのうちの三人は下つて行って刈入れのころに、アドラムのほら穴にいるダビデのもとにきた。時にペリシテびとの一隊はレパイムの谷に陣を取っていた。一四 その時ダビデは要害におり、ペリシテびとの先陣はベツレヘムにあつたが、一五 ダビデは、せつに望んで、「だれかベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよいのだが」と言った。一六 そこでその三人の勇士たちはペリシテびとの陣を突き通つて、ベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水を汲み取つて、ダビデのもとに携えてきた。しかしダビデはそれを飲むとはせず、主の前にそれを注いで、「一言つた、「主よ、わたしは断じて飲むことをいたしません。いのちをかけて行つた人々の血を、どうしてわたしは飲むことができましょう」。こうして彼はそれを飲むとはしなかつた。三勇士はこれらのことを行つた。

一八 ゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人の長であつた。彼は三百人に向かつて、やりをふるい、それを殺した。そして、彼は三人と共に名を得た。一九 彼は三十人のうち最も尊ばれた者で、彼らの長となつた。しかし、かの三人には及ばなかつた。

二〇 エホヤダの子ベナヤはカブジエル出身の勇士であつて、多くのてがらを立てた。彼はモアブのアリエルのふたりの子を撃

ち殺した。彼はまた雪の日に下つて行って、穴の中でししを撃ち殺した。二一 彼はまた姿のうるわしいエジプトびとを撃ち殺した。そのエジプトびとは手にやりを持っていたが、ベナヤはつえをとつてその所に下つていき、エジプトびとの手からやりをもぎとつて、そのやりをもつて殺した。二二 エホヤダの子ベナヤはこれらの事をして三勇士と共に名を得た。二三 彼は三十人のうちに有名であつたが、かの三人には及ばなかつた。ダビデは彼を侍衛の長とした。

二四 三十人のうちにあつたのは、ヨアブの兄弟アサヘル。ベツレヘム出身のドドの子エルハナン。二五 ハロデ出身のシャナン。ハロデ出身のエリカ。二六 パルテびとヘレヅ。テコア出身のイツケシの子イラ。二七 アナトテ出身のアビエゼル。ホシヤびとメブンナイ。二八 アホアびとザルモン。ネトパ出身のマハライ。二九 ネットパ出身のバアナの子ヘレブ。ベニヤミンびとのギベアから出たリバイの子イツタイ。三〇 ピラトンのベナヤ。ガアシの谷出身のヒダイ。三二 アルバテびとアビアルボン。バホリム出身のアズマウテ。三三 シヤルボン出身のエリヤバ。ヤセンの子たち。ヨナタン。三三 ハラルびとシャンマ。ハラルびとシヤラルの子アヒアム。三四 マアカ出身のアハスバイの子エリペレテ。ギロ出身のアヒトペルの子エリアム。三五 カルメル出身のヘヅロ。アルバびとパアライ。三六 ゴバ出身のナタンの子イガル。ガドびとバニ。三七 アンモンびとゼレク。ゼルヤの

子ヨアブの武器を執る者、ベエロテ出身のナハライ。ミハイテル
びとイラ。イテルびとガレブ。三九ヘテびとウリヤ。合わせて
三十七人である。

第二十四章

一主は再びイスラエルに向かつて怒りを発し、ダビデを感動し
て彼らに逆らわせ、「行つてイスラエルとユダとを数えよ」と言
われた。二そこで王はヨアブおよびヨアブと共にいる軍の長た
ちに言った、「イスラエルのすべての部族のうちを、ダンからベ
エルシバまで行き巡つて民を数え、わたしに民の数を知らせな
さい」。三ヨアブは王に言った、「どうぞあなたの神、主が、民を
今よりも百倍に増してくださいますように。そして王、わが主
がまのあたり、それを見られますように。しかし王、わが主は何
ゆえにこの事を喜ばれるのですか」。四しかし王の言葉がヨアブ
と軍の長たちとに勝つたので、ヨアブと軍の長たちとは王の前
を退き、イスラエルの民を数えるために出て行った。五彼らはヨ
ルダンを渡り、アロエルから、すなわち谷の中にある町から始め
て、ガドに向かい、ヤゼルに進んだ。六それからギレアデに行き、
またヘテびとの地にあるカデシに行き、それからダンに至り、ダ
ンからシドンにまわり、七またツロの要害に行き、ヒビびと、お
よびカナンびとのすべての町に行き、ユダのネゲブに出てベエ

ルシバへ行つた。八こうして彼らは国をあまねく行き巡つて、九
か月と二十日を経てエルサレムにきた。九そしてヨアブは民の
総数を王に告げた。すなわちイスラエルには、つるぎを抜く
勇士たちが八十万あった。ただしユダの人々は五十万であつ
た。

一〇しかしダビデは民を数えた後、心に責められた。そこでダ
ビデは主に言った、「わたしはこれをおこなつて大きな罪を犯し
ました。しかし主よ、今どうぞしもべの罪を取り去ってください
い。わたしはひじょうに愚かなことをいたしました」。一一ダビ
デが朝起きたとき、主の言葉はダビデの先見者である預言者ガ
デに臨んで言った、二「行つてダビデに言いなさい、『主はこう
仰せられる、『わたしは三つのことを示す。あなたはその一つを
選ぶがよい。わたしはそれをあなたに行うであろう』』と」。三
ガデはダビデのもとにきて、彼に言った、「あなたの国に三年の
ききんをこさせようか。あなたが敵に追われて三か月敵の前に
逃げるようにしようか。それとも、あなたの国に三日の疫病を
おくらうか。あなたは考えて、わたしがどの答を、わたしをつか
わされた方になすべきかを決めなさい」。四ダビデはガデに
言った、「わたしはひじょうに悩んでいます、主のあわれみは
大きいゆえ、われわれを主の手に陥らせてください。わたしを
人の手には陥らせないでください」。

一五そこで主は朝から定めの時まで疫病をイスラエルに下され

た。ダンからベエルシバまでに民の死んだ者は七万人あった。
 二六 天の使が手をエルサレムに伸べてこれを滅ぼそうとしたが、
 主はこの害悪を悔い、民を滅ぼしている天の使に言われた、「も
 はや、じゆうぶんである。今あなたの手をとどめるがよい」。そ
 の時、主の使はエブスびとアラウナの打ち場のかたわらにいた。
 二七 ダビデは民を撃っている天の使を見た時、主に言った、「わ
 しは罪を犯しました。わたしは悪を行いました。しかしこれら
 の羊たちは何をしたのですか。どうぞあなたの手をわたしとわ
 たしの父の家に向けてください」。

一八 その日ガデはダビデのところにきて彼に言った、「上つて
 行つてエブスびとアラウナの打ち場で主に祭壇を建てなさい」。
 一九 ダビデはガデの言葉に従い、主の命じられたように上つて
 行つた。二〇 アラウナは見おろして、王とそのしもべたちが自分
 の方に進んでくるのを見たので、アラウナは出てきて王の前に
 地にひれ伏して拝した。二一 そしてアラウナは言った、「どうし
 て王が主は、しもべの所にこられましたか」。ダビデは言っ
 た、「あなたから打ち場を買い取り、主に祭壇を築いて民に下る
 災をとどめるためです」。二二 アラウナはダビデに言った、「どう
 ぞ王、わが主のよいと思われる物を取ってささげてください。
 燔祭にする牛もあります。たきぎにする打穀機も牛のくびきも
 あります。二三 王よ、アラウナはこれをごとく王にささげま
 す」。アラウナはまた王に、「あなたの神、主があなたを受けいれ

られますように」と言った。二四 しかし王はアラウナに言った、
 「いいえ、代価を支払つてそれをあなたから買い取ります。わた
 しは費用をかけずに燔祭をわたしの神、主にささげることはし
 ません」。こうしてダビデは銀五十シケルで打ち場と牛とを買
 い取つた。二五 ダビデはその所で主に祭壇を築き、燔祭と酬恩祭
 をささげた。そこで主はその地のために祈を聞かれたので、災
 がイスラエルに下ることはとどまつた。

列王紀上

第一章

「ダビデ王は年がすすんで老い、夜着を着せても暖まらなかつたので、ニその家来たちは彼に言った、「王わが主のために、ひとりの若いおとめを捜し求めて王にはべらせ、王の付添いとし、あなたのふところに寝て、王わが主を暖めさせましょう」。ニそして彼らはあまねくイスラエルの領土に美しいおとめを捜し求めて、シュナミびとアビシヤグを得、王のもとに連れてきた。四おとめは非常に美しく、王の付添いとなって王に仕えたが、王は彼女を知ることがなかった。

五さてハギテの子アドニヤは高ぶって、「わたしは王となろう」と言い、自分のために戦車と騎兵および自分の前に駆ける者五十人を備えた。六彼の父は彼が生れてこのかた一度も「なぜ、そのような事をするのか」と言つて彼をたしなめたことがなかった。アドニヤもまた非常に姿の良い人であつて、アブサロムの次に生れた者である。七彼がゼルヤの子ヨアブと祭司アビヤタルとに相談したので、彼らはアドニヤに従つて彼を助けた。ハしかし祭司ザドクと、エホヤダの子ベナヤと、預言者ナタンおよびシメイとレイ、ならびにダビデの勇士たちはアドニヤに従わなかつた。

九アドニヤはエンロゲルのほとりにある「へびの石」のかたわらで、羊と牛と肥えた家畜をほふつて、王の子である自分の兄弟たち、および王の家来であるユダの人々をことごとく招いた。一〇しかし預言者ナタンと、ベナヤと、勇士たちと、自分の兄弟ソロモンとは招かなかつた。

二時にナタンはソロモンの母バテシバに言った、「ハギテの子アドニヤが王となつたのをお聞きになりませんでしたか。われわれの主ダビデはそれをごぞんじなのです。ニそれでいま、あなたに計りごとを授けて、あなたの命と、あなたの子ソロモンの命を救うようにいたしましょう。ニあなたはずぐダビデ王のところへ行つて、『王わが主よ、あなたは、はしたために誓つて、おまえの子ソロモンが、わたしに次いで王となり、わたしの位に座するであろうと言われたではありませんか。そうであるのに、どうしてアドニヤが王となつたのですか』と云いなさい。一四あなたがなとお王と話しておられる間に、わたしもまた、あなたのあとから、はいつて行つて、あなたの言葉を確認しましょう」。一五そこでバテシバは寢室にはいつて王の所へ行つた。(王は非常に老いて、シュナミびとアビシヤグが王に仕えていた)。一六バテシバは身をかがめて王を拜した。王は言った、「何の用か」。一七彼女は王に言った、「わが主よ、あなたは、あなたの神、主をさして、はしたために誓い、『おまえの子ソロモンがわたしに次いで王となり、わたしの位に座するであろう』と言われました。一

ハそうであるのに、ごらんない、今アドニヤが王となりました。王わが主よ、あなたはそれをごぞんじなのです。一九彼は牛と肥えた家畜と羊をたくさんほふつて、王の子たち、および祭司アビヤタルと、軍の長ヨアブを招きましたが、あなたのしもベソロモンは招きませんでした。二〇王わが主よ、イスラエルすべての目はあなたに注がれ、だれがあなたに次いで、王わが主の位に座すべきかを告げられるのを望んでいます。二一王わが主が先祖と共に眠られるとき、わたしと、わたしの子ソロモンは謀叛人とみなされるでしょう」。

三二バテシバがなお王と話しているうちに、預言者ナタンがはいってきた。三三人々は王に告げて、「預言者ナタンがここにおります」と言った。彼は王の前にはいり、地に伏して王を拝した。三四そしてナタンは言った、「王わが主よ、あなたは、『アドニヤがわたしに次いで王となり、わたしの位に座するであろう』と仰せられましたか。三五彼はきよう下つていつて、牛と、肥えた家畜と羊をたくさんほふつて、王の子たちと、軍の長ヨアブと、祭司アビヤタルを招きました。彼らはアドニヤの前で飲み、飲まして、『アドニヤ万歳』と言いました。三六しかし、あなたのしもべであるわたしと、祭司ザドクと、エホヤダの子ベナヤと、あなたがさせられた事ですか。あなたはしもべたちに、だれがあなたに次いで王わが主の位に座すべきかを告げられませんでした」。

した」。

三八バデア王は答えて言った、「バテシバをわたしのところに呼びなさい」。彼女は王の前にはいつてきて、王の前に立った。三九すると王は誓つて言った、「わたしの命をすべての苦難から救われた主は生きておられる。四〇わたしがイスラエルの神、主をさしてあなたに誓い、『あなたの子ソロモンがわたしに次いで王となり、わたしに代つて、わたしの位に座するであろう』と言つたように、わたしはききよう、そのようにしよう」。三一そこでバテシバは身をかがめ、地に伏して王を拝し、「わが主バデア王が、とこしえに生きながらえられますように」と言った。

三二バデアは言った、「祭司ザドクと、預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤをわたしの所に呼びなさい」。やがて彼らは王の前にきた。三三王は彼らに言った、「あなたがたの主君の家来たちを連れ、わが子ソロモンをわたしの騾馬に乗せ、彼を導いてギホンに下り、三四その所で祭司ザドクと預言者ナタンは彼に油を注いでイスラエルの王としなさい。そしてラツパを吹いて、『ソロモン王万歳』と言いなさい。三五それから、あなたがたは彼に従つて上つてきなさい。彼はきて、わたしの位に座し、わたしに代つて王となるであろう。わたしは彼を立ててイスラエルとユダの上に主君とする」。三六エホヤダの子ベナヤは王に答えて言った、「アアメン、願わくは、王わが主君の神、主もまたそう仰せられますように。三七願わくは、主が王わが主君と共にいら

れたように、ソロモンと共におられて、その位をわが主君ダビデ王の位よりも大きくせられますように」。

三八そこで祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ、ならびにケレテびとと、ペレテびとは下つて行って、ソロモンをダビデ王の騾馬に乗せ、彼をギホンに導いて行つた。三九祭司ザドクは幕屋から油の角を取つてきて、ソロモンに油を注いだ。そしてラツパを吹き鳴らし、民は皆「ソロモン王万歳」と言つた。四〇民はみな彼に従つて上り、笛を吹いて大いに喜び祝つた。地は彼らの声で裂けるばかりであつた。

四一アドニヤおよび彼と共にいた客たちは皆食事を終つたとき、これを聞いた。ヨアブはラツパの音を聞いて言つた、「町の中のあの騒ぎは何か」。四二彼の言葉のなお終らないうちに、そこへ祭司アビヤタルの子ヨナタンがきたので、アドニヤは彼に言つた、「はいりなさい。あなたは勇敢な人で、よい知らせを持つてきたのでしよう」。四三ヨナタンは答えてアドニヤに言つた、「いえ、主君ダビデ王はソロモンを王とせられました。四四王は祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ、ならびにケレテびとと、ペレテびとをソロモンと共につかわされたので、彼らはソロモンを王の騾馬に乗せて行き、四五祭司ザドクと預言者ナタンはギホンで彼に油を注いで王としました。そして彼らがそこから喜んで上つて来るので、町が騒がしいのです。あなたが聞いた声はそれなのです。四六こうしてソロモンは王

の位に座し、四七かつ王の家来たちがきて、主君ダビデ王に祝いを述べて、『願わくは、あなたの神がソロモンの名をあなたの名よりも高くし、彼の位をあなたの位よりも大きくされますように』と言いました。そして王は床の上で拝されました。四八王はまたこう言われました、『イスラエルの神、主はほむべきかな。主はきよう、わたしの位に座するひとりの子を与えて、これをわたしに見せてくださった』と。

四九その時アドニヤと共にいた客はみな驚き、立つておのの自分の道に去つて行つた。五〇そしてアドニヤはソロモンを恐れ、立つて行つて祭壇の角をつかんだ。五一ある人がこれをソロモンに告げて言つた、「アドニヤはソロモンを恐れ、今彼は祭壇の角をつかんで、『どうぞ、ソロモン王がきよう、つるぎをもつてしもべを殺さない』とわたしに誓つてくださるように』と言つています」。五二ソロモンは言つた、「もし彼がよい人となるならば、その髪の毛ひとすじも地に落ちることはなからう。しかし彼のうちに悪のあることがわかるならば、彼は死ななければならぬ」。五三ソロモンは人をつかわして彼を祭壇からつれて下らせた。彼がきてソロモンを拝したので、ソロモンは彼に「家に帰りなさい」と言つた。

第二章

「ダビデの死ぬ日が近づいたので、彼はその子ソロモンに命じて言った、**二**「わたしは世のすべての人の行く道を行こうとしてゐる。あなたは強く、男らしくなければならぬ。**三**あなたの神、主のさとしを守り、その道に歩み、その定めと戒めと、おきてとあかしとを、モーセの律法にしるされているとおりに守らなければならぬ。そうすれば、あなたがするすべての事と、あなたの向かうすべての所で、あなたは栄えるであろう。**四**また主がさきにわたしについて語つて『もしおまえの子たちが、その道を慎み、心をつくし、精神をつくして真実をもつて、わたしの前に歩むならば、おまえに次いでイスラエルの位にのぼる人が、欠けることはなからう』と言われた言葉を確実にされるであろう。

五またあなたはゼルヤの子ヨアブがわたしにした事、すなわち彼がイスラエルのふたりの軍の長ネルの子アブネルと、エテルの子アマサにした事を知っている。彼はこのふたりを殺して、戦争で流した地を太平の時に報い、罪のない者の血をわたしの腰のまわりの帯と、わたしの足のくつにつけた。**六**それゆえ、あなたの知恵にしたがって事を行い、彼のしらがを安らかに陰府に下らせてはならない。**七**ただしギレアドびとバルジライの子らには恵みを施し、彼らをあなたの食卓で食事する人々のうち

に加えなさい。彼らはわたしがあなたの兄弟アブサロムを避けて逃げた時、わたしを迎えてくれたからである。**八**またバホルムのベニヤミンびとゲラの子シメイがあなたと共にゐる。彼はわたしにマハナイムへ行つた時、激しいのろいの言葉をもってわたしをのろつた。しかし彼がヨルダンへ下つてきて、わたしを迎えたので、わたしは主をさして彼に誓ひ、『わたしはつるぎをもってあなたを殺さない』と言つた。**九**しかし彼を罪のない者としてはならない。あなたは知恵のある人であるから、彼になすべき事を知っている。あなたは彼のしらがを血に染めて陰府に下らせなければならぬ。

一〇ダビデはその先祖と共に眠つて、ダビデの町に葬られた。**一一**ダビデがイスラエルを治めた日数は四十年であつた。すなわちヘブロンで七年、エルサレムで三十三年、王であつた。**一二**このようにしてソロモンは父ダビデの位に座し、国は堅く定まつた。**一三**さて、ハギテの子アドニヤがソロモンの母バテシバのところへきたので、バテシバは言つた、「あなたは穏やかな事のためにきたのですか」。彼は言つた、「穏やかな事のためです」。**一四**彼はまた言つた、「あなたに申しあげる事があります」。バテシバは言つた、「言ひなさい」。**一五**彼は言つた、「ごぞんじのように、国はわたしのもので、イスラエルの人は皆わたしが王になるものと期待してゐました。しかし国は転じて、わたしの兄弟のものとなりました。彼のものとなつたのは、主から出たことです。

二六 今わたしはあなたに一つのお願いがあります。断らないでください。バテシバは彼に言った、「言いなさい」。一七 彼は言った、「どうかソロモン王に請うて、――王はあなたに断るようなことはしないでしようから――シユナミびとアビシヤグをわたしに与えて妻にさせてください」。一八 バテシバは言った、「よろしい。わたしはあなたのために王に話しましょう」。

一九 バテシバはアドニヤのためにソロモン王に話するため、王のもとへ行つた。王は立つて迎え、彼女を拝して王座に着き、王母のために座を設けさせたので、彼女は王の右に座した。二〇 そこでバテシバは言った、「あなたに一つのお願いがあります。お断りにならないでください」。王は彼女に言った、「母上よ、あなたの願いを言うてください。わたしは断らないでしよう」。二一 彼女は言った、「どうぞ、シユナミびとアビシヤグをあなたの兄弟アドニヤに与えて、妻にさせてください」。二三 ソロモン王は答えて母に言った、「どうしてアドニヤのためにシユナミびとアビシヤグを求められるのですか。彼のためには国をも求めなさい。彼はわたしの兄で、彼の味方には祭司アビヤタルとゼルヤの子ヨアブがいるのですから」。二四 そしてソロモン王は主をさして誓つて言った、「もしアドニヤがこの言葉によつて自分の命を失うのであれば、どんなにでもわたしを罰してください。二五 わたしを立てて、父ダビデの位にのぼらせ、主が約束されたように、わたしに一家を与えてくださった主は生きておられる。

アドニヤはきよう殺されなければならない。二五 ソロモン王はエホヤダの子ベナヤをつかわしたので、彼はアドニヤを撃つて殺した。

二六 王はまた祭司アビヤタルに言った、「あなたの領地アナトテへ行きなさい。あなたは死に当る者ですが、さきにわたしの父ダビデの前に神、主の箱をかつぎ、またすべてわたしの父が受けた苦しみを、あなたと共に苦しんだので、わたしは、きようは、あなたを殺しません。二七 そしてソロモンはアビヤタルを主の祭司職から追放した。こうして主がシロでエリの家について言われた主の言葉が成就した。

二八 さてこの知らせがヨアブに達したので、ヨアブは主の幕屋にのがれて、祭壇の角をつかんだ。ヨアブはアブサロムを支持しなかつたけれども、アドニヤを支持したからである。二九 ヨアブが主の幕屋にのがれて、祭壇のかたわらにいて、ソロモン王に告げる者があつたので、ソロモン王はエホヤダの子ベナヤをつかわし、「行つて彼を撃て」と言った。三〇 ベナヤは主の幕屋へ行つて彼に言った、「王はあなたに、出て来るようにと申されます」。しかし彼は言った、「いや、わたしはここで死にます」。ベナヤは王に復命して言った、「ヨアブはこう申しました。またわたしにこう答えました」。三一 そこで王はベナヤに言った、「彼が言うようにし、彼を撃ち殺して葬り、ヨアブがゆえなく流した血のとがをわたしと、わたしの父の家から除き去りなさい。三二

主はまたヨアブが血を流した行為を、彼自身のこうべに報いられるであろう。これは彼が自分よりも正しいとされたふたりの人、すなわちイスラエルの軍の長ネルの子アブネルと、ユダの軍の長エテルの子アマサを、つるぎをもって撃ち殺し、わたしの父ダビデのあずかり知らない事をしたからである。三三それゆえ、彼らの血は永遠にヨアブのこうべと、その子孫のこうべに帰すであろう。しかしダビデと、その子孫と、その家と、その位とには、主から賜わる平安が永久にあるであろう。三四そこでエホヤダの子ベナヤは上つていって、彼を撃ち殺した。彼は荒野にある自分の家に葬られた。三五王はエホヤダの子ベナヤを、ヨアブに代つて軍の長とした。王はまた祭司ザドクをアビヤタルに代らせた。

三六また王は人をつかわし、シメイを召して言った、「あなたはエルサレムのうちに、自分のために家を建てて、そこに住み、そこからどこへも出てはならない。三七あなたが出て、キデロン川を渡る日には、必ず殺されることを、しかと知らなければならない。あなたの血はあなたのこうべに帰すであろう。三八シメイは王に言った、「お言葉は結構です。王、わが主の仰せられるとおり、しもべはいたしましょう」。こうしてシメイは久しくエルサレムに住んだ。

三九ところが三年の後、シメイのふたりの奴隷が、ガテの王マアカの子アキシのところへ逃げ去った。人々がシメイに告げて、

「ごらんない、あなたの奴隷はガテにいます」と言ったので、四〇シメイは立つて、ろばにくらを置き、ガテのアキシのところへ行つて、その奴隷を尋ねた。すなわちシメイは行つてその奴隷をガテから連れてきたが、四一シメイがエルサレムからガテへ行つて帰ったことがソロモン王に聞えたので、四二王は人をつかわし、シメイを召して言った、「わたしはあなたに主をさして誓わせ、かつおごそかにあなたを戒めて、『あなたが出て、どこかへ行く日には、必ず殺されることを、しかと知らなければならない』と言つたではないか。そしてあなたは、わたしに『お言葉は結構です。従います』と言つた。四三ところで、あなたはなぜ主に対する誓いと、わたしが命じた命令を守らなかったのか」。四四王はまたシメイに言った、「あなたは自分の心に、あなたがわたしの父ダビデにしたもろもろの悪を知っている。主はあなたの悪をあなたのこうべに報いられるであろう。四五しかしソロモン王は祝福をうけ、ダビデの位は永久に主の前に堅く立つてであろう」。四六王がエホヤダの子ベナヤに命じたので、彼は出ていってシメイを撃ち殺した。こうして国はソロモンの手に堅く立った。

第三章

一 ソロモン王はエジプトの王パロと縁を結び、パロの娘をめ

とつてダビデの町に連れてきて、自分の家と、主の宮と、エルサレムの周囲の城壁を建て終るまでそこにおらせた。二そのころまで主の名のために建てた宮がなかったたので、民は高き所で犠牲をささげていた。

三ソロモンは主を愛し、父ダビデの定めに歩んだが、ただ彼は高き所で犠牲をささげ、香をたいた。四ある日、王はギベオンへ行つて、そこで犠牲をささげようとした。それが主要な高き所であつたからである。ソロモンは一千の燔祭をその祭壇にささげた。五ギベオンで主は夜の夢にソロモンに現れて言われた、「あなたに何を与えようか、求めなさい」。六ソロモンは言つた、「あなたのしもべであるわたしの父ダビデがあなたに對して誠実と公義と真心とをもつて、あなたの前に歩んだので、あなたはたいなるいつくしみを彼に示されました。またあなたは彼のために、このたいなるいつくしみをたくわえて、今日、彼の位に座する子を授けられました。七わが神、主よ、あなたはこのしもべを、わたしの父ダビデに代つて王とならせられました。しかし、わたしは小さい子供であつて、出入りするのを知りません。八かつ、しもべはあなたが選ばれた、あなたの民、すなわちその数が多くて、数えることもできないほどのおびたしい民の中におります。九それゆゑ、聞きわけける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください。だれが、あなたのこのたいなる民を

さばくことができましょう」。

一〇ソロモンはこの事を求めたので、そのことが主のみどころになつた。一一そこで神は彼に言われた、「あなたはこの事を求めて、自分のために長命を求めず、また自分のために富を求めず、また自分の敵の命をも求めず、ただ訴えをききわけける知恵を求めたゆゑに、二見よ、わたしはあなたの言葉にしたがつて、賢い、英明な心を与える。あなたの先にはあなたに並ぶ者がなく、あなたの後にもあなたに並ぶ者は起らないであろう。三わたしはまたあなたの求めないもの、すなわち富と譽をもあなたに与える。あなたの生きていくかぎり、王たちのうちにあなたに並ぶ者はないであろう。四もしあなたが、あなたの父ダビデの歩んだように、わたしの道に歩んで、わたしの定めと命令を守るならば、わたしはあなたの日を長くするのである」。

一五ソロモンが目を見ましてみると、それは夢であつた。そこで彼はエルサレムへ行き、主の契約の箱の前に立つて燔祭と酬恩祭をささげ、すべての家来のために祝宴を設けた。

一六さて、ふたりの遊女が王のところにきて、王の前に立つた。一七ひとりの女は言つた、「ああ、わが主よ、この女とわたしとはひとつの家に住んでいます、わたしはこの女と一緒に家にいる時、子を産みました。一八ところがわたしの産んだ後、三日目にこの女もまた子を産みました。そしてわたしたちは一緒にいました、家にはほかにだれもわたしたちと共にいた者はなく、

ただわたしはたちふたりだけでした。一九ところがこの女は自分の子の上に伏したので、夜のうちにその子は死にました。二〇彼女は夜中に起きて、はしための眠っている間に、わたしの子にわたしたのかたわらから取って、自分のふところに寝かせ、自分の死んだ子をわたしのふところに寝かせました。三わたしは朝、子に乳を飲ませようとして起きて見ると死んでいました。しかし朝になってよく見ると、それはわたしが産んだ子ではありませんでした。三ほかの女は言った、「いいえ、生きているのがわたしの子です。死んだのはあなたの子です」。初めの女は言った、「いいえ、死んだのがあなたの子です。生きているのはわたしの子です」。彼らはこのように王の前に言い合った。

三三この時、王は言った、「ひとりとは『この生きているのがわたしの子で、死んだのがあなたの子だ』と言い、またひとりとは『いいえ、死んだのがあなたの子で、生きているのはわたしの子だ』と言う」。二四そこで王は「刀を持ってきなさい」と言ったので、刀を王の前に持ってきた。二五王は言った、「生きている子を二つに分けて、半分をこちらに、半分をあちらに与えよ」。二六すると生きている子の母である女は、その子のために心がやけるようになって、王に言った、「ああ、わが主よ、生きている子を彼女に与えてください。決してそれを殺さないでください」。しかしほかのひとりと言った、「それをわたしのものにも、あなたのものにもしないで、分けてください」。二七すると王は答えて

言った、「生きている子を初めの女に与えよ。決して殺してはならない。彼女はその母なのだ」。二八イスラエルは皆王が与えた判決を聞いて王を恐れた。神の知恵が彼のうちにあつて、さばきをするのを見たからである。

第四章

一ソロモン王はイスラエルの全地の王であつた。二彼の高官たちは次のとおりである。ザドクの子アザリヤは祭司。ミシヤの子エリホレフとアヒヤは書記官。アヒルデの子ヨシヤバテは史官。四エホヤダの子ベナヤは軍の長。ザドクとアビヤタルは祭司。五ナタンの子アザリヤは代官の長。ナタンの子ザブデは祭司で、王の友であつた。六アヒシャルは宮内卿。アブダの子アドニラムは徴募の長であつた。

七ソロモンはまたイスラエルの全地に十二人の代官を置いた。その人々は王とその家のために食物を備えた。すなわちおの一年に一月ずつ食物を備えるのであつた。ハその名は次のとおりである。エフライムの山地にはベンホル。九マカヅと、シヤラビムと、ベテシメシと、エロン・ベテハナンにはベンデケル。一〇アルボテにはベンヘセデ、（彼はソコとヘベルの全地を担当した）。一二ドルの高地の全部にはベン・アビナダブ、（彼はソロモンの娘タパテを妻とした）。一三アヒルデの子バアナはタ

アナクとメギドと、エズレルの下、ザレタンのかたわらにあるベテシヤンの全地を担当して、ベテシヤンからアベル・メホラに至り、ヨクメアムの向こうにまで及んだ。ニラモテ・ギレアデにはベンゲベル、(彼はギレアデにあるマナセの子ヤイルの村々を担当し、またバシヤンにあるアルゴブの地方の城壁と青銅の貫木の大きな町六十を担当した)。一四マハナイムにはイドの子アヒナダブ。一五ナフタリにはアヒマアズ、(彼もソロモンの娘バスマテを妻にめとった)。一六アセルとベアロテにはホシヤイの子バアナ。一七モイツサカルにはバルアの子ヨシヤパテ。一八ベニヤミンにはエラの子シメイ。一九アモリびとの王シホンの地およびバシヤンの王オグの地なるギレアデの地にはウリの子ゲベル。彼はその地のただひとりの代官であつた。

二〇ユダとイスラエルの人々は多くて、海べの砂のようであつたが、彼らは飲み食ひして楽しんだ。二三ソロモンはユフラテ川からペリシテびとの地と、エジプトの境に至るまでの諸国を治めたので、皆みづぎ物を携えてきて、ソロモンの一生のあいだ仕えた。

二四さてソロモンの一日の食物は細かい麦粉三十コル、荒い麦粉六十コル、二三肥えた牛十頭、牧場の牛二十頭、羊百頭で、そのほかに雄じか、かもしか、こじか、および肥えた鳥があつた。二五これはソロモンがユフラテ川の西の地方をテフサからガザまで、ことごとく治めたからである。すなわち彼はユフラテ川

の西の諸王をことごとく治め、周囲至る所に平安を得た。二五ソロモンの一生の間、ユダとイスラエルはダンからベエルシバに至るまで、安らかにのおの自分たちのぶどうの木の下と、いちじくの木の下に住んだ。二六ソロモンはまた戦車の馬の、うまや四千と、騎兵一万二千を持つていた。二七そしてそれらの代官たちはおのおの当番の月にソロモン王のため、およびすべてソロモン王の食卓に連なる者のために、食物を備えて欠けることのないようにした。二八また彼らはおのおのその割当にしたがつて馬および早馬に食わせる大麦とわらを、その馬のいる所に持つてきた。

二九神はソロモンに非常に多くの知恵と悟りを授け、また海べの砂原のように広い心を授けられた。三〇ソロモンの知恵は東の人々の知恵とエジプトのすべての知恵にまさつた。三一彼はすべての人よりも賢く、エズラびとエタンよりも、またマホルの子ヘマン、カルコル、ダルダよりも賢く、その名声は周囲のすべての国々に聞えた。三二彼はまた箴言三千を説いた。またその歌は一千五百あつた。三三彼はまた草木のことを論じてレバノンの香柏から石がきにはえるヒソパにまで及んだ。彼はまた獣と鳥と這うものと魚のことを論じた。三四諸国の人々はソロモンの知恵を聞くためにきた。地の諸王はソロモンの知恵を聞いて人をつかわした。

第五章

一 さてツロの王ヒラムは、ソロモンが油を注がれ、その父に代つて、王となつたのを聞いて、家来をソロモンにつかわした。ヒラムは常にダビデを愛したからである。ニそこでソロモンはヒラムに人をつかわして言った、三「あなたの知られるとおり、父ダビデはその周囲にあつた敵との戦いのゆえに、彼の神、主の名のために宮を建てることができず、主が彼らをその足の裏の下に置かれるのを待ちました。四ところが今わが神、主はわたしに四方の太平を賜つて、敵もなく、災もなくなつたので、五主が父ダビデに『おまえに代つて、おまえの位に、わたしがつかせるおまえの子、その人がわが名のために宮を建てるであらう』と言われたように、わが神、主の名のために宮を建てるように思ひます。六それゆえ、あなたは命令を下して、レバノンの香柏をわたしのために切り出させてください。わたしのしもべたちをあなたのしもべたちと一緒に働かせます。またわたしはすべてあなたのおつしやるとおり、あなたのしもべたちの賃銀をあなたに払います。あなたの知られるとおり、わたしたちのうちにはシドンびとのように木を切るに巧みな人がないからです」。

七ヒラムはソロモンの言葉を聞いて大いに喜び、「きよう、主はあがむべきかな。主はこのおびたしい民を治める賢い子をダビデに賜わった」と言った。ハそしてヒラムはソロモンに人をつ

かわして言った、「わたしはあなたが申しおくられたことを聞きました。香柏の材木と、いとすぎの材木については、すべてお望みのようにいたします。九わたしのしもべどもにそれをレバノンから海に運びおろさせましょう。わたしはそれをいかだに組んで、海路 あなたの指示される場所まで送り、そこでそれをくずししましょう。あなたはそれを受け取ってください。また、あなたはわたしの家のために食物を供給して、わたしの望みをかなえてください」。一〇こうしてヒラムはソロモンにすべて望みのように香柏の材木と、いとすぎの材木を与えた。一一またソロモンはヒラムにその家の食物として小麦二万コルを与え、またオリブをつぶして取った油二万コルを与えた。このようにソロモンは年々ヒラムに与えた。一二主は約束されたようにソロモンに知恵を賜わった。またヒラムとソロモンの間は平和であつて、彼らふたりは条約を結んだ。

一三ソロモン王はイスラエルの全地から強制的に労働者を徴募した。その徴募人員は三万人であつた。一四ソロモンは彼らを一か月交代に一人ずつレバノンにつかわした。すなわち一か月レバノンに、二か月家にあり、アドニラムは徴募の監督であつた。一五ソロモンにはまた荷を負う者が七万人、山で石を切る者が八万人あつた。一六ほかにソロモンには工事を監督する上役の官吏が三千三百人あつて、工事に働く民を監督した。一七王は命じて大きい高価な石を切り出させ、切り石をもつて宮の基を

すえさせた。一八こうしてソロモンの建築者と、ヒラムの建築者およびゲバルびとは石を切り、材木と石とを宮を建てるために備えた。

第六章

イスラエルの人々がエジプトの地を出て後四百八十年、ソロモンがイスラエルの王となって第四年のジフの月すなわち二月に、ソロモンは主のために宮を建てることを始めた。ニソロモン王が主のために建てた宮は長さ六十キュビト、幅二十キュビト、高さ三十キュビトであった。三宮の拝殿の前の廊は宮の幅にしたがって長さ二十キュビト、その幅は宮の前で十キュビトであった。四彼は宮に、内側の広い枠の窓をつけた。五また宮の壁につけて周囲に脇屋を設け、宮の壁すなわち拝殿と本殿の壁の周囲に建てめぐらし、宮の周囲に脇間があるようにした。六下の脇間は長さ五キュビト、中の広さ六キュビト、第三のは広さ七キュビトであった。宮の外側には壁に段を造って、梁を宮の壁の中差し込まないようにした。七宮は建てる時に、石切り場で切り整えた石をもつて造ったので、建てている間は宮のうちには、つちも、おのも、その他の鉄器もその音が聞えなかった。八下の脇間の入口は宮の右側にあり、回り階段によって中の

脇間に、中の脇間から第三の脇間にのぼった。九こうして彼は宮を建て終り、香柏のたるきと板をもつて宮の天井を造った。一〇また宮につけて、おのおの高さ五キュビトの脇間のある脇屋を建てめぐらし、香柏の材木をもつて宮に接続させた。

二そこで主の言葉がソロモンに臨んだ、三「あなたが建てるこの宮については、もしあなたがわたしのために歩み、おきてを行い、すべての戒めを守り、それに従って歩むならば、わたしはあなたの父ダビデに約束したことを成就する。四そしてわたしはイスラエルの人々のうちに住み、わたしの民イスラエルを捨てることはない」。

四こうしてソロモンは宮を建て終った。五彼は香柏の板をもつて宮の壁の内側を張った。すなわち宮の床から天井のたるきまで香柏の板で張った。また、いとすぎの板をもつて宮の床を張った。六また宮の奥に二十キュビトの室を床から天井のたるきまで香柏の板をもつて造った。すなわち宮の内に至聖所としての本堂を造った。七宮すなわち本殿の前にある拝殿は長さ四十キュビトであった。八宮の内側の香柏の板は、ひさの形と、咲いた花を浮彫りにしたもので、みな香柏の板で、石は見えなかった。九そして主の契約の箱を置くために、宮の内の奥に本殿を設けた。一〇本殿は長さ二十キュビト、幅二十キュビト、高さ二十キュビトであって、純金でこれをおおった。また香柏の祭壇を造った。ニソロモンは純金をもつて宮

の内側をおおい、本殿の前に金の鎖をもつて隔てを造り、金をもつてこれをおおった。三また金をもつて残らず宮をおおい、ついに宮を飾ることをことごとく終えた。また本殿に属する祭壇をことごとく金でおおった。

三本殿のうちにオリブの木をもつて二つのケルビムを造った。その高さはおのおの十キュビト。四そのケルブの一つの翼の長さは五キュビト、またそのケルブの他の翼の長さも五キュビトであつた。一つの翼の端から他の翼の端までは十キュビトあつた。五他のケルブも十キュビトであつて、二つのケルビムは同じ寸法、同じ形であつた。六このケルブの高さは十キュビト、かのケルブの高さも同じであつた。七ソロモンは宮のうちの奥にケルビムをすえた。ケルビムの翼を伸ばしたところ、このケルブの翼はこの壁に達し、かのケルブの翼はかの壁に達し、他の二つの翼は宮の中で互に触れ合つた。八彼は金をもつてそのケルビムをおおった。

九彼は宮の周囲の壁に、内外の室とも皆ケルビムと、しゅろの木と、咲いた花の形の彫り物を刻み、一〇宮の床は、内外の室とも金でおおった。

三本殿の入口にはオリブの木のとびらを造つた。そのとびらの上のかまちと脇柱とで五辺形をなしていた。三その二つのとびらもオリブの木であつて、ソロモンはその上にケルビムとしゅろの木と、咲いた花の形を刻み、金をもつておおった。すな

わちケルビムと、しゅろの木の上に金を着せた。

三こうしてソロモンはまた拝殿の入口のためにオリブの木の四角の形に脇柱を造つた。四その二つのとびらはいとすぎであつて、一つのとびらは二つにたたむ折り戸であり、他のとびらも二つにたたむ折り戸であつた。五ソロモンはその上にケルビムとしゅろの木と、咲いた花を刻み、金をもつて彫り物の上を形どおりにおおった。六また切り石三かさねと、香柏の角材ひとかさねをもつて内庭を造つた。

七第四年のジブの月に主の宮の基をすえ、八第十一年のブルの月すなわち八月に、宮のすべての部分が設計どおりに完成した。ソロモンはこれを建てるのに七年を要した。

第七章

一またソロモンは自分の家を建てたが、十三年かかつてその家を全部建て終つた。

二彼はレバノンの森の家を建てた。長さ百キュビト、幅五十キュビト、高さ三十キュビトで、三列の香柏の柱があり、その柱の上に香柏の梁があつた。四十五本の柱の上にある室は香柏の板でおおった。柱は各列十五本あつた。五また窓わくが三列あつて、窓と窓と三段に向かい合つていた。五戸口と窓はみな四角の枠をもち、窓と窓と三段に向かい合つた。

六また柱の広間を造つた。長さ五十キュビト、幅三十キュビトであつた。柱の前に一つの広間があり、その玄関に柱とひさしがあつた。

七またソロモンはみずから審判をするために玉座の広間、すなわち審判の広間を造つた。床からたるきまで香柏をもつておつた。

八ソロモンが住んだ宮殿はその広間のうしろの他の庭にあつて、その造作は同じであつた。ソロモンはまた彼がめとつたパロの娘のために家を建てたが、その広間と同じであつた。

九これらはみな内外とも、土台から軒まで、また主の宮の庭から大庭まで、寸法に合わせて切つた石、すなわち、のこぎりでひいた高価な石で造られた。一〇また土台は高価な石、大きな石、すなわち八キュビトの石、十キュビトの石であつた。二その上には寸法に合わせて切つた高価な石と香柏とがあつた。三また大庭の周囲には三かさねの切り石と、一かさねの香柏の角材があつた。主の宮の内庭と宮殿の広間の庭の場合と同じである。

四ソロモン王は人をつかわしてツロからヒラムを呼んできた。

五彼は青銅の柱二本を鑄た。一本の柱の高さは十八キュビト、そのまわりは綱をもつて測ると十二キュビトあり、指四本の厚さで空洞であつた。他の柱も同じである。一六また青銅を溶かして柱頭二つを造り、柱の頂にすえた。その一つの柱頭の高さは五キュビト、他の柱頭の高さも五キュビトであつた。一七柱の頂にある柱頭のために鎖に編んだ飾りひもで市松模様の網細工二つを造つた。すなわちこの柱頭のために一つ、かの柱頭のために一つを造つた。一八またさくろを造つた。すなわち二並びのさくろを一つの網細工の上のまわりに造つて、柱の頂にある柱頭を巻いた。他の柱頭にも同じようにした。一九この廊の柱の頂にある柱頭の上に四キュビトのゆりの花の網細工があつた。二〇二つの柱の上端の丸い突出部の上にある網細工の柱頭の周囲には、おのおの二百のさくろが二並びになつていた。二一この柱を神殿の廊に立てた。すなわち南に柱を立てて、その名をヤキンと名づけ、北に柱を立てて、その名をボアズと名づけた。二二その柱の頂にはゆりの花の網細工があつた。こうしてその柱の造作ができあがつた。

二三また海を鑄て造つた。縁から縁まで十キュビトであつて、周囲は円形をなし、高さ五キュビトで、その周囲は綱をもつて測ると三十キュビトであつた。二四その縁の下には三十キュビトの周囲をめぐるひさごがあつて、海の周囲を囲んでいた。そのひさごは二並びで、海を鑄る時に鑄たものである。二五その海は十二の牛の上に置かれ、その三つは北に向かい、三つは西に向か

い、三つは南に向かい、三つは東に向かつていた。海はその上に置かれ、牛のうしろは皆内に向かつていた。二六海の厚さは手の幅で、その縁は杯の縁のように、ゆりの花に似せて造られた。海には水が二千バテはあった。

二七また青銅の台を十個造った。台は長さ四キュビト、幅四キュビト、高さ三キュビトであつた。二八その台の構造は次のとおりである。台には鏡板があり、鏡板は枠の中にあつた。二九枠の中にある鏡板には、ししと牛とケルビムとがあり、また、ししと牛の上と下にある枠の斜面には花飾りが細工してあつた。三〇また台にはおのおの四つの青銅の車輪と、青銅の車軸があり、その四すみには洗盤のささえがあつた。そのささえは、おのおの花飾りのかたわらに鑄て造りつけてあつた。三一その口は一キュビト上に突き出て、台の頂の内にあり、その口は丸く、台座のように造られ、深さ一キュビト半であつた。またその口には彫り物があつた。その鏡板は四角で、丸くなかつた。三二四つの車輪は鏡板の下にあり、車軸は台に取り付けてあり、車輪の高さはおのおの一キュビト半であつた。三三車輪の構造は戦車の車輪の構造と同じで、その車軸と縁と輻と轂とはみな鑄物であつた。三四おのおの台の四すみに四つのささえがあり、そのささえは台の一部をなしていた。三五台の上には高さ半キュビトの丸い帯輪があつた。そして台の上にあるその支柱と鏡板とはその一部をなしていた。三六その支柱の表面と鏡板にはそ

れぞれの場所に、ケルビムと、ししと、しゆろを刻み、またその周囲に花飾りを施した。三七このようにして十個の台を造った。それはみな同じ鑄方、同じ寸法、同じ形であつた。

三八また青銅の洗盤を十個造った。洗盤はおのおの四十バテの水がはいり、洗盤はおのおの四キュビトであつた。十個の台の上にはおのおの一つずつの洗盤があつた。三九その台の五個を宮の南の方に、五個を宮の北の方に置き、宮の東南の方に海をすえた。

四〇ヒラムはまたつぼと十能と鉢を造った。こうしてヒラムはソロモン王のために主の宮のすべての細工をなし終えた。四一すなわち二本の柱と、その柱の頂にある柱頭の二つの玉と、柱の頂にある柱頭の二つの玉をおおう二つの網細工と、四二その二つの網細工のためのぎくろ四百。このぎくろは一つの網細工に、二並びにつけて、柱の頂にある柱頭の二つの玉を巻いた。四三また十個の台と、その台の上の十個の洗盤と、四四一つの海と、その海の下十二の牛とであつた。

四五さてつぼと十能と鉢、すなわちヒラムがソロモン王のために造った主の宮のこれらの器はみな光のある青銅であつた。四六王はヨルダンの低地で、スコテとザレタンとの間の粘土の地でこれらを鑄た。四七ソロモンはその器が非常に多かつたので、皆それをはからずにおいた。その青銅の重さは、はかり得なかつた。四八またソロモンは主の宮にあるもろもろの器を造った。すな

わち金の祭壇と、供えのパンを載せる金の机、四九および純金の燭台。この燭台は本殿の前に、五つは南に、五つは北にあつた。また金の花と、ともしび皿と、心かきと、五〇純金の皿と、心切りばさみと、鉢と、香の杯と、心取り皿と、至聖所である宮の奥のとびらのためおよび、宮の拝殿のとびらのために、金のひじつぽを造つた。

五二こうしてソロモン王が主の宮のために造るすべての細工は終つた。そしてソロモンは父ダビデがささげた物、すなわち金銀および器物を携え入り、主の宮の宝蔵の中にたくわえた。

第八章

一ソロモンは主の契約の箱をダビデの町、すなわちシオンからかつぎ上ろうとして、イスラエルの長老たちと、すべての部族のかしらたちと、イスラエルの人々の氏族の長たちをエルサレムでソロモン王のもとに召し集めた。ニイスラエルの人は皆エタニムの月すなわち七月の祭にソロモン王のもとに集まつた。ミイスラエルの長老たちが皆来たので、祭司たちは箱を取りあげた。四そして彼らは主の箱と、会見の幕屋と、幕屋にあるすべての聖なる器をかつぎ上つた。すなわち祭司とレビびとがこれらの物をかつぎ上つた。五ソロモン王および彼のもとに集まつたイスラエルの会衆は皆彼と共に箱の前で、羊と牛をささげた

が、その数が多くて調べることも数えることもできなかった。六祭司たちは主の契約の箱をその場所にかつぎ入れた。すなわち宮の本殿である至聖所のうちのケルビムの翼の下に置いた。セケルビムは翼を箱の所に伸べていたので、ケルビムは上から箱とそのさおをおおつた。ハさおは長かつたので、さおの端が本殿の前の聖所から見えた。しかし外には見えなかつた。そのさおは今日までそこにある。九箱の内には二つの石の板のほか何もなかつた。これはイスラエルの人々がエジプトの地から出たとき、主が彼らと契約を結ばれたときに、モーセがホレブで、それに納めたものである。一〇そして祭司たちが聖所から出たとき、雲が主の宮に満ちたので、二祭司たちは雲のために立つて仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。

二三そこでソロモンは言つた、

「主は日を天に置かれた。

しかも主は自ら濃き雲の中に住まおうと言われた。

二三わたしはあなたのために高き家、

とこしえのみすまいを建てた」。

一四王は身をめぐらして、イスラエルのすべての会衆を祝福した。その時イスラエルのすべての会衆は立つていた。一五彼は言つた、「イスラエルの神、主はほむべきかな。主はその口をもつてわたしの父ダビデに約束されたことを、その手をもつて

なし遂げられた。主は言われた、一六『わが民イスラエルをエジプトから導き出した日から、わたしはわたしの名を置くべき宮を建てるために、イスラエルのもろもろの部族のうちから、どの町をも選んだことがなかった。ただダビデを選んで、わが民イスラエルの上に立たせた』と。モイスラエルの神、主の名のために宮を建てることは、わたしの父ダビデの心にあつた。一八しかし主はわたしの父ダビデに言われた、『わたしの名のために宮を建てることはあなたの心にあつた。あなたの心にこの事のあつたのは結構である。一九けれどもあなたはその宮を建ててはならない。あなたの身から出るあなたの子がわたしの名のために宮を建てるであろう』と。二〇そして主はその言われた言葉を行われた。すなわちわたしは父ダビデに代つて立ち、主が言われたように、イスラエルの位に座し、イスラエルの神、主の名のために宮を建てた。二一わたしはまたそこに主の契約を納めた箱のために一つの場所を設けた。その契約は主がわれわれの先祖をエジプトの地から導き出された時に、彼らと結ばれたものである』。

二三ソロモンはイスラエルの全会衆の前で、主の祭壇の前に立ち、手を天に伸べて、二三言つた、『イスラエルの神、主よ、上の天にも、下の地にも、あなたのような神はありません。あなたは契約を守られ、心をつくしてあなたの前に歩むあなたのしもべらに、いつくしみを施し、二四あなたのしもべであるわたしの父

ダビデに約束されたことを守られました。あなたが口をもつて約束されたことを、手をもつてなし遂げられたことは、今日見るとおりであります。二五それゆえ、イスラエルの神、主よ、あなたのしもべであるわたしの父ダビデに、あなたが約束して『おまえがわたしの前に歩んだように、おまえの子孫が、その道を慎んで、わたしの前に歩むならば、おまえにはイスラエルの位に座する人が、わたしの前に欠けることはないであろう』と言われたことを、ダビデのために守ってください。二六イスラエルの神よ、どうぞ、あなたのしもべであるわたしの父ダビデに言われた言葉を確認してください。

二七しかし神は、はたして地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。ましてわたしの建てたこの宮はなおさらです。二八しかしわが神、主よ、しもべの祈と願いを顧みて、しもべがきよう、あなたの前にささげる叫びと祈をお聞きください。二九あなたが『わたしの名をそこに置く』と言われた所、すなわち、この宮に向かつて夜昼あなたの目をお開きください。しもべがこの所に向かつて祈る祈をお聞きください。三〇しもべと、あなたの民イスラエルがこの所に向かつて祈る時に、その願いをお聞きください。あなたのすみかである天で聞き、聞いておゆるしくください。

三もし人がその隣りに対して罪を犯し、誓いをすることを求められる時、来てこの宮であなたの祭壇の前に誓うならば、三

あなたは天で聞いて行い、あなたのしもべらをさばき、悪人を罰して、そのおこないの報いをそのこうべに歸し、義人を義として、その義にしたがつて、その人に報いてください。

三三もしあなたの民イスラエルが、あなたに対して罪を犯したために敵の前に敗れた時、あなたに立ち返つて、あなたの名をあげ、この宮であなたに祈り願うならば、三四あなたは天にあつて聞き、あなたの民イスラエルの罪をゆるして、あなたが彼らの先祖に賜つた地に彼らを歸らせてください。

三五もし彼らがあなたに罪を犯したために、天が閉ざされて雨がなく、あなたが彼らを苦しめられる時、彼らがこの所に向かつて祈り、あなたの名をあげ、その罪を離れるならば、三六あなたは天で聞き、あなたのしもべ、あなたの民イスラエルの罪をゆるし、彼らに歩むべき良い道を教えて、あなたが、あなたの民に嗣業として与えられた地に雨を降らせてください。

三七もし国にききんがあるか、もしくは疫病、立ち枯れ、腐り穂、いなご、青虫があるか、もしくは敵のために町の中に攻め囲まれていることがあるか、どんな災害、どんな病気があつても、三八もし、だれでも、あなたの民イスラエルがみな、おのおのその心の悩みを知つて、この宮に向かい、手を伸べるならば、どんな祈、どんな願いでも、三九あなたは、あなたのすみかである天で聞いてゆるし、かつ行い、おのおのの人に、その心を知つておられるゆえ、そのすべての道にしたがつて報いてください。ただ、あなただ

け、すべての人の心を知つておられるからです。四〇あなたが、われわれの先祖に賜つた地に、彼らの生きながらえる日の間、常にあなたを恐れさせてください。

四一またあなたの民イスラエルの者でなく、あなたの名のために遠い国から来る異邦人が、四二それは彼らがあなたの大いなる名と、強い手と、伸べた腕とについて聞き及ぶからです、——もしきて、この宮に向かつて祈るならば、四三あなたは、あなたのすみかである天で聞き、すべて異邦人があなたに呼び求めることをかなえさせてください。そうすれば、地のすべての民は、あなたの民イスラエルのように、あなたの名を知り、あなたを恐れ、またわたしが建てたこの宮があなたの名によつて呼ばれることを知るにいたるでしょう。

四四あなたの民が敵と戦うために、あなたがつかわされる道を通つて出て行くとき、もし彼らがあなたの選ばれた町、わたしがあなたの名のために建てた宮の方に向かつて、主に祈るならば、四五あなたは天で、彼らの祈と願いを聞いて彼らをお助けください。

四六彼らがあなたに対して罪を犯すことがあつて、——人は罪を犯さない者はないのです、——あなたが彼らを怒り、彼らを敵にわたし、敵が彼らを捕虜として遠近にかかわらず、敵の地に引いて行く時、四七もし彼らが捕われていった地で、みずから省みて悔い、自分を捕えていった者の地で、あなたに願い、『われわれ

は罪を犯しました、そむいて悪を行いました』と言ひ、四八自分を捕えていった敵の地で、心をつくし、精神をつくしてあなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた地、あなたが選ばれた町、わたしがあなたの名のために建てた宮の方に向かつて、あなたに祈るならば、四九あなたのすみかである天で、彼らの祈と願いを聞いて、彼らを助け、五〇あなたの民が、あなたに對して犯した罪と、あなたに對して行つたすべてのあやまちをゆるし、彼らを捕えていった者の前で、彼らにあわれみを得させ、その人々が彼らをあわれむようにしてください。五一（彼らはあなたがエジプトから、鉄のかまどの中から導き出されたあなたの民、あなたの嗣業であるからです）。五二どうぞ、しもべの願いと、あなたの民イスラエルの願ひに、あなたの目を開き、すべてあなたに呼び求める時、彼らの願ひをお聞きください。五三あなたは彼らを地のすべての民のうちから區別して、あなたの嗣業とされたからです。主なる神よ、あなたがわれわれの先祖をエジプトから導き出された時、モーセによつて言われたとおりです」。

五四ソロモンはこの祈と願ひをことごとく主にささげ終ると、それまで天に向かつて手を伸べ、ひざまずいていた主の祭壇の前から立ちあがり、五五立つて大声でイスラエルの全会衆を祝福して言つた、五六「主はほむべきかな。主はすべて約束されたように、その民イスラエルに太平を賜わつた。そのしもべモーセ

によつて仰せられたその良き約束は皆一つもたがわなかつた。五七われわれの神がわれわれの先祖と共におられたように、われわれと共におられるように。われわれを離れず、またわれわれを見捨てられないように。五八われわれの心を主に傾けて、主のすべての道に歩ませ、われわれの先祖に命じられた戒めと定めと、おきてとを守らせられるように。五九主の前にわたしが述べたこれらの願ひの言葉が、日夜われわれの神、主に覚えられるように。そして主は日々、の事に、しもべを助け、主の民イスラエルを助けられるように。六〇そうすれば、地のすべての民は主が神であることと、他に神のないことを知るに至るであらう。六一それゆえ、あなたがたは、今日のようにわれわれの神、主に對して、心は全く眞実であり、主の定めに進み、主の戒めを守らなければならぬ」。

六二そして王および王と共にいるすべてのイスラエルびとは主の前に犠牲をささげた。六三ソロモンは酬恩祭として牛二万二千頭、羊十二万頭を主にささげた。こうして王とイスラエルの人々は皆主の宮を奉獻した。六四その日、王は主の宮の前にある庭の中を聖別し、その所で燔祭と素祭と酬恩祭の脂肪をささげた。これは主の前にある青銅の祭壇と素祭と酬恩祭の脂肪とを受けるに足りなかつたからである。

六五その時ソロモンは七日の間われわれの神、主の前に祭を行つた。ハマテの入口からエジプトの川に至るまでのすべて

のイスラエルびとの大いなる会衆が彼と共にいた。六六八日目にソロモンは民を帰らせた。民は王を祝福し、主がそのしもべダビデと、その民イスラエルとに施されたもろもろの恵みを喜び、心に楽しんでその天幕に帰って行った。

第九章

ーソロモンが主の宮と王の宮殿およびソロモンが建てようとしたすべてのものを建て終った時、ニ主はかつてギベオンでソロモンに現れたように再び現れて、ニ彼に言われた、「あなたが、わたしの前に願った祈と願いとを聞いた。わたしはあなたが建てたこの宮を聖別して、わたしの名を永久にそこに置く。わたしの目と、わたしの心は常にそこにあるであろう。四あなたがもし、あなたの父ダビデが歩んだように全き心をもって正しくわたしの前に歩み、すべてわたしが命じたようにおこなって、わたしの定めと、おきてとを守るならば、五わたしは、あなたの父ダビデに約束して『イスラエルの王位にのぼる人があなたに欠けることはないであろう』と言ったように、あなたのイスラエルに王たる位をながく確保するであろう。六しかし、あなたがた、またはあなたがたの子孫がそむいてわたしに従わず、わたしがあなたがたの前に置いた戒めと定めとを守らず、他の神々に行つて、それに仕え、それを拝むならば、七わたしはイス

ラエルを、わたしが与えた地のおもてから断つてであろう。またわたしの名のために聖別した宮をわたしの前から投げすててであろう。そしてイスラエルはもろもろの民のうちにことわざとなり、笑い草となるであろう。八かつ、この宮は荒塚となり、そのかたわらを過ぎる者は皆驚き、うそぶいて『なにゆえ、主はこの地と、この宮とにこのようにされたのか』と言うであろう。九その時人々は答えて『彼らは自分の先祖をエジプトの地から導き出した彼らの神、主を捨てて、他の神々につき従い、それを拝み、それに仕えたために、主はこのすべての災を彼らの上に下したのである』と言うであろう」。

ーソロモンは二十年を経て二つの家すなわち主の宮と王の宮殿とを建て終った時、ニツロの王ヒラムがソロモンの望みに任せて香柏と、いとすぎと、金とを供給したので、ソロモン王はガリラヤの地の町二十をヒラムに与えた。ニしかしヒラムがツロから来て、ソロモンが彼に与えた町々を見たとき、それらは彼の氣にいらなかったので、ニ彼は、「兄弟よ、あなたがくださったこれらの町々は、いったいなんですか」と言った。それで、そこは今日までカブルの地と呼ばれている。一四ヒラムはかつて金百二十タラントを王に贈った。

ー五ソロモン王が強制的に労働者を徴募したのはこうである。すなわち主の宮と自分の宮殿と、ミロとエルサレムの城壁と、ハゾルとメギドとゲゼルを建てたためであつた。一六（エジプト

の王パロはかつて上つてきて、ゲゼルを取り、火でこれを焼き、その町に住んでいたカナンびとを殺し、これをソロモンの妻である自分の娘に与えて婚姻の贈り物としたので、モソロモンはそのゲゼルを建て直した。また下ベテホロンと、ハバアラテとユダの国の荒野にあるタマル、一丸およびソロモンが持つていた倉庫の町々、戦車の町々、騎兵の町々ならびにソロモンがエルサレム、レバノンおよびそのすべての領地において建てようと思んだものをことごとく建てたためであった。二〇すべてイスラエルの子孫でないアモリびと、ヘテびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの残った者、三その地にあつて彼らのあとに残った子孫すなわちイスラエルの人々の滅ぼしつくすことのできなかった者を、ソロモンは強制的に奴隷として徴募をおこなひ、今日に至っている。三しかしイスラエルの人々をソロモンはひとりも奴隷としなかった。彼らは軍人、また彼の役人、司令官、指揮官、戦車隊長、騎兵隊長であつたからである。三ソロモンの工事を監督する上役の官吏は五百五十人であつて、工事に働く民を治めた。

三四パロの娘はダビデの町から上つて、ソロモンが彼女のために建てた家に住んだ。その時ソロモンはミロを建てた。

三五ソロモンは主のために築いた祭壇の上に年に三度燔祭と酬恩祭をささげ、また主の前に香をたいた。こうしてソロモンは宮を完成した。

二六ソロモン王はエドムの地、紅海の岸のエラテに近いエジプト・ゲベルで数隻の船をつつた。二七ヒラムは海のことを知っている船員であるそのしもべをソロモンのしもべと共にその船でつかわした。二八彼らはオフルへ行つて、そこから金四百二十タラントを取つて、ソロモン王の所にもつてきた。

第一〇章

一シバの女王は主の名にかかわるソロモンの名声を聞いたので、難問をもつてソロモンを試みようとしたが、二彼女は多くの従者を連れ、香料と、たくさんのお金と宝石とをらくだに負わせてエルサレムにきた。彼女はソロモンのもとにきて、その心にあることをことごとく彼に告げたが、三ソロモンはそのすべての問に答えた。王が知らないで彼女に説明のできないことは一つもなかった。四シバの女王はソロモンのもろもろの知恵と、ソロモンが建てた宮殿、五その食卓の食物と、列座の家来たちと、その侍臣たちの伺候ぶり、彼らの服装と、彼の給仕たち、および彼が主の宮でささげる燔祭を見て、全く心を奪われてしまった。

六彼女は王に言った、「わたしが国であなただけの事と、あなたの知恵について聞いたことは真実でありました。しかしわたしはがきて、目に見るまでは、その言葉を信じませんでした。今見

るとその半分もわたしは知らされていなかったのです。あなたの知恵と繁栄はわたしが聞いたうわさにまさっています。あなたの奥方たちはさいわいです。常にあなたの前に立つて、あなたの知恵を聞く家来たちはさいわいです。あなたと神、主はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをイスラエルの位にのぼらせられました。主は永久にイスラエルを愛せられるゆえ、あなたを王として公道と正義とを行わせられるのです。そして彼女は金百二十タラントおよび多くの香料と宝石とを王に贈った。シバの女王がソロモン王に贈ったような多くの香料は再びこなかった。

二 オフルから金を載せてきたヒラムの船は、またオフルからたぐさんのびやくだんの木と宝石とを運んできたので、二王はびやくだんの木をもって主の宮と王の宮殿のために壁柱を造り、また歌う人々のために琴と立琴とを造った。このようなびやくだんの木は、かつてきたこともなく、また今日まで見たこともなかった。

三 ソロモン王はその豊かなのにしたがってシバの女王に贈り物をしたほかに、彼女の望みにまかせて、すべてその求める物を贈った。そして彼女はその家来たちと共に自分の国へ帰っていった。

二四 さて一年の間にソロモンのところに、はいつてきた金の目方は六百六十六タラントであった。二五 そのほかに貿易商および

商人の取引、ならびにアラビヤの諸王と国の代官たちからもはいつてきた。一六 ソロモン王は延金の大盾二百を造った。その大盾にはおのおの六百シケルの金を用いた。一七 また延金の小盾三百を造った。その小盾にはおのおの三ミナの金を用いた。王はこれらをレバノンの森の家に置いた。一八 王はまた大きな象牙の玉座を造り、純金をもってこれをおおった。一九 その玉座に六つの段があり、玉座の後に子牛の頭があり、座席の両側にひじ掛けがあつて、ひじ掛けのわきに二つのししが立つていた。二〇 また六つの段のおのおのの両側に十二のししが立つていた。このような物はどここの国でも造られたことがなかった。二一 ソロモン王が飲むときに用いた器は皆金であつた。またレバノンの森の家の器も皆純金であつて、銀のものはなかった。銀はソロモンの世には顧みられなかった。二三 これは王が海にタルシシの船隊を所有して、ヒラムの船隊と一緒に航海させ、タルシシの船隊に三年に一度、金、銀、象牙、さる、くじやくを載せてこさせたからである。

二四 このようにソロモン王は富も知恵も、地のすべての王にまさつていたので、二五 全地の人々は神がソロモンの心に授けられた知恵を聞くとしてソロモンに謁見を求めた。二六 人々はおのおの贈り物を携えてきた。すなわち銀の器、金の器、衣服、没薬、香料、馬、騾馬など年々定まつていた。

二七 ソロモンは戦車と騎兵とを集めたが、戦車一千四百両、騎兵

一万二千あつた。ソロモンはこれを戦車の町とエルサレムの王のもとに置いた。ニモ王はエルサレムで、銀を石のように用い、香柏を平地にあるいちじく桑のように多く用いた。ニハソロモンが馬を輸入したのはエジプトとクエからであつた。すなわち王の貿易商はクエから代価を払って受け取つてきた。ニ九エジプトから輸入される戦車一両は銀六百シケル、馬は百五十シケルであつた。このようにして、これらのものが王の貿易商によつて、ヘテびとのすべての王たちおよびスリヤの王たちに輸出された。

第一章

一 ソロモン王は多くの外国の女を愛した。すなわちパロの娘モアブびと、アンモンびと、エドムびと、シドンびと、ヘテびとの女を愛した。ニ主はかつてこれらの国民について、イスラエルの人々に言われた、「あなたがたは彼らと交わつてはならない。彼らもまたあなたがたと交わつてはならない。彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせるからである」。しかしソロモンは彼らを愛して離れなかつた。ニ彼には王妃としての妻七百人、そばめ三百人があつた。その妻たちが彼の心を転じたのである。四ソロモンが年老いた時、その妻たちが彼の心を転じて他の神々に従わせたので、彼の心は父ダビデの心のように

には、その神、主に真実でなかつた。五これはソロモンがシドンびとの女神アシタロテに従い、アンモンびとの神である憎むべき者ミルコムに従つたからである。六このようにソロモンは主の目の前に悪を行い、父ダビデのように全くは主に従わなかつた。セそしてソロモンはモアブの神である憎むべき者ケモシのために、またアンモンの人々の神である憎むべき者モレクのためにエルサレムの東の山に高き所を築いた。ハ彼はまた外国のすべての妻たちのためにもそうしたので、彼女たちはその神々に香をたき、犠牲をささげた。

九このようにソロモンの心が転じて、イスラエルの神、主を離れたため、主は彼を怒られた。すなわち主がかつて二度彼に現れ、一〇この事について彼に、他の神々に従つてはならないと命じられたのに、彼は主の命じられたことを守らなかつたからである。ニそれゆえ、主はソロモンに言われた、「これがあなたの本心であり、わたしが命じた契約と定めとを守らなかつたので、わたしは必ずあなたから国を裂き離して、それをあなたの家来に与える。ニしかしあなたの父ダビデのために、あなたの世にはそれをしないが、あなたの子の手からそれを裂き離す。ニ三ただし、わたしは国をことごとくは裂き離さず、わたしのしもべダビデのために、またわたしが選んだエルサレムのために一つの部族をあなたの子に与えるであろう」。

一四こうして主はエドムびとハダデを起して、ソロモンの敵とさ

れた。彼はエドムの王家の者であつた。一五さきにダビデはエドムにいたが、軍の長ヨアブが上つていつて、戦死した者を葬り、エドムの男子をことごとく打ち殺した時、一六（ヨアブはイスラエルの人々と共に六か月そこにとどまつて、エドムの男子をことごとく断つた）。一七ハダデはその父のしもべである数人のエドムびとと共に逃げてエジプトへ行くとした。その時ハダデはまだ少年であつた。一八彼らがミデアンを立つてパランへ行き、パランから人々を伴つてエジプトへ行き、エジプトの王パロのところへ行くと、パロは彼に家を与え、食糧を定め、かつ土地を与えた。一九ハダデは大いにパロの心になつたので、パロは自分の妻の妹すなわち王妃タペネスの妹を妻として彼に与えた。二〇タペネスの妹は彼に男の子ゲヌバテを産んだので、タペネスはその子をパロの家のうちで乳離れさせた。ゲヌバテはパロの家で、パロの子どもたちと一緒にいた。二一さてハダデはエジプトで、ダビデがその先祖と共に眠つたことと、軍の長ヨアブが死んだことを聞いたので、ハダデはパロに言った、「わたしを去らせて、国へ帰らせてください」。二二パロは彼に言った、「わたしと共にいて、なんの不足があつて国へ帰ることを求めるのですか」。彼は言った、「ただ、わたしを帰らせてください」。

二三神はまたエリアダの子レゼンを起してソロモンの敵とされた。彼はその主人ゾバの王ハダデゼルのもとを逃げ去つた者で

あつた。二四ダビデがゾバの人々を殺した後、彼は人々を自分のまわりに集めて略奪隊の首領となつた。彼らはダマスコへ行つて、そこに住み、ダマスコで彼を王とした。二五彼はソロモンの一生の間、イスラエルの敵となつて、ハダデがしたように害をなし、イスラエルを憎んでスリヤを治めた。

二六ゼレダのエフライムびとネバテの子ヤラベアムはソロモンの家来であつたが、その母の名はゼルヤといつて寡婦であつた。彼もまたその手をあげて王に敵した。二七彼が手をあげて、王に敵した事情はこうである。ソロモンはミロを築き、父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。二八ヤラベアムは非常に手腕のある人であつたが、ソロモンはこの若者がよく働くのを見て、彼にヨセフの家のすべての強制労働の監督をさせた。二九そのころ、ヤラベアムがエルサレムを出たとき、シロびとである預言者アヒヤが道で彼に会つた。アヒヤは新しい着物を着ていた。そして彼らふたりだけが野にいた。三〇アヒヤは着ている着物をつかんで、それを十二切れに裂き、三一ヤラベアムに言った、「あなたは十切れを取りなさい。イスラエルの神、主はこう言われる、『見よ、わたしは国をソロモンの手から裂き離して、あなたに十部族を与えよう。三一（ただし彼はわたしのももダビデのために、またわたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだ町エルサレムのために、一つの部族をもつであらう）。三三それは彼がわたしを捨てて、シドンびとの女神アシタロテと、モアブ

の神ケモシと、アンモンの人々の神ミルコムを拝み、父ダビデのように、わたしの道に歩んで、わたしの目になう事を行い、わたしの定めと、おきてを守ることをしなかったからである。三四しかし、わたしは国をことごとくは彼の手から取らない。わたしが選んだ、わたしのしもべダビデが、わたしの命令と定めとを守つたので、わたしは彼のためにソロモンを一生の間、君としよう。三五そして、わたしはその子の手から国を取つて、その十部族をあなたに与える。三六その子には一つの部族を与えて、わたしの名を置くために選んだ町エルサレムで、わたしのしもべダビデに、わたしの前に常に一つのともしびを保たせるであらう。三七わたしがあなたを選び、あなたはすべて心の望むところを治めて、イスラエルの上に王となるであらう。三八もし、あなたが、わたしの命じるすべての事を聞いて、わたしの道に歩み、わたしの目になう事を行い、わたしのしもべダビデがしたように、わたしの定めと戒めとを守るならば、わたしはあなたと共にいて、わたしがダビデのために建てたように、あなたのために堅固な家を建てて、イスラエルをあなたに与えよう。三九わたしはこのためにダビデの子孫を苦しめる。しかし永久にはない。四〇ソロモンはヤラバアムを殺そうとしたが、ヤラバアムは立つてエジプトにのがれ、エジプト王シシャクのところへ行つて、ソロモンの死ぬまでエジプトにいた。

四二ソロモンのそのほかの事績と、彼がしたすべての事およびそ

の知恵は、ソロモンの事績の書にしるされているではないか。四三ソロモンがエルサレムでイスラエルの全地を治めた日は四十年であつた。四四ソロモンはその先祖と共に眠つて、父ダビデの町に葬られ、その子レハバアムが代つて王となつた。

第二章

一レハバアムはシケムへ行つた。すべてのイスラエルびとが彼を王にしようとシケムへ行つたからである。二ネバテの子ヤラバアムはソロモンを避けてエジプトにのがれ、なおそこにいたが、これを聞いてエジプトから帰つたので、三人々は人をつかわして彼を招いた。そしてヤラバアムとイスラエルの会衆は皆レハバアムの所にきて言つた、四「父上はわれわれのくびきを重くされましたが、今父上のきびしい使役と、父上がわれわれに負わせられた重いくびきとを軽くしてください。そうすればわれわれはあなたに仕えます」。五レハバアムは彼らに言つた、「去つて、三日過ぎてから、またわたしのところにきなさい」。それで民は立ち去つた。

六レハバアム王は父ソロモンの存命中ソロモンに仕えた老人たちと相談して言つた、「この民にどう返答すればよいと思いますか」。七彼らはレハバアムに言つた、「もし、あなたが、きょう、この民のしもべとなつて彼らに仕え、彼らに答えるとき、ねんごろ

に語られるならば、彼らは永久にあなたのしもべとなるでしよう。ハしかし彼は老人たちが与えた勧めを捨てて、自分と一緒に大きくなって自分に仕えている若者たちに相談して、九彼らに言った、「この民がわたしにむかつて『あなたの父がわれわれに負わせたくびきを軽くしてください』というのに、われわれはなんと返答すればよいと思いますか」。一〇彼と一緒に大きくなった若者たちは彼に言った、「あなたにむかつて『父上はわれわれのくびきを重くされましたが、あなたはそれをわれわれのために軽くしてください』と言うこの民に、こう言いなさい、『わたしの小指は父の腰よりも太い。二父はあなたがたに重くくびきを負わせたが、わたしはさらに、あなたがたのくびきを重くしよう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそりをもってあなたがたを懲らそう』と」。

三さてヤラバアムと民は皆、王が「三日目に再びわたしのところに来るように」と言ったとおりに、三日目にレハバアムのところに来た。三王は荒々しく民に答え、老人たちが与えた勧めを捨てて、四若者たちの勧めに従い、彼らに告げて言った、「父はあなたがたのくびきを重くしたが、わたしはあなたがたのくびきを、さらに重くしよう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそりをもってあなたがたを懲らそう」。一五このように王は民の言うことを聞きいれなかった。これはかつて主がシロびとアヒヤによって、ネバテの子ヤラバアムに言われた言葉

を成就するために、主が仕向けられた事であった。

一六イスラエルの人々は皆、王が自分たちの言うことを聞きいれないのを見たので、民は王に答えて言った、

「われわれはダビデのうちに何の分があるうか、エツサイの子のうちに嗣業がない。

イスラエルよ、あなたがたの天幕へ帰れ。

ダビデよ、今自分の家の事を見よ」。

そしてイスラエルはその天幕へ去っていった。一七しかしレハバアムはユダの町々に住んでいるイスラエルの人々を治めた。

一八レハバアム王は徴募の監督であつたアドラムをつかわしたが、イスラエルが皆、彼を石で撃ち殺したので、レハバアム王は急いで車に乗り、エルサレムへ逃げた。一九こうしてイスラエルはダビデの家にそむいて今日に至つた。二〇イスラエルは皆ヤラバアムの帰つてきたのを聞き、人をつかわして彼を集會に招き、イスラエルの全家の上に王とした。ユダの部族のほかはダビデの家に従う者がなかった。

二三ソロモンの子レハバアムはエルサレムに来て、ユダの全家とベニヤミンの部族の者、すなわちえり拔きの軍人十八万を集め、国を取りもどすために、イスラエルの家と戦おうとしたが、三神の言葉が神の人シマヤに臨んだ、三「ソロモンの子であるユダの王レハバアム、およびユダとベニヤミンの全家、ならびにそのほかの民に言いなさい、二四『主はこう仰せられる。あなたが

たは上^{のぼ}つていつてはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエルの人々と戦^{たたか}つてはならない。おのおの家に帰^{かえ}りなさい。この事はわたしから出^でたのである』。それで彼らは主の言葉^{ことば}をきき、主の言葉に従^{したが}つて帰^{かえ}つていった。

ニヤラバームはエフライムの山地にシケムを建てて、そこに住んだ。彼はまたそこから出てベヌエルを建てた。ニハしかしヤラバームはその心のうちに言^いつた、「国は今ダビデの家にもどるであろう。ニモもしこの民がエルサレムにある主の宮に犠牲^{ぎせい}をささげるために上^{のぼ}るならば、この民の心はユダの王である彼らの主君レハバームに帰^{かえ}り、わたしを殺^{ころ}して、ユダの王レハバームに帰^{かえ}るであろう」。ニハそこで王は相談^{さうだん}して、二つの金の子牛^{きんのかしう}を造^{つく}り、民に言^いつた、「あなたがたはもはやエルサレムに上^{のぼ}るには、およばない。イスラエルよ、あなたがたをエジプトの国から導^{みちび}き上^{のぼ}つたあなたがたの神を見よ」。ニハそして彼は一つをベテルにすえ、一つをダンに置^おいた。ニハこの事は罪となつた。民がベテルへ行^いつて一つを礼拝^{らいはい}し、ダンへ行^いつて一つを礼拝^{らいはい}したからである。ニ彼はまた高き所に家を造^{つく}り、レビの子孫でない一般の民を祭司に任^{にんめい}めた。ニまたヤラバームはユダで行^{おこな}う祭と同じ祭を八月の十五日に定め、そして祭壇に上^{のぼ}つた。彼はベテルでそのように行^{おこな}い、彼が造^{つく}つた子牛に犠牲^{ぎせい}をささげた。また自分の造^{つく}つた高き所の祭司をベテルに立てた。ニハこうして彼はベテルに造^{つく}つた祭壇に八月の十五日に上^{のぼ}つた。これは彼が

自分^{じぶん}で勝手に考^{かんが}へつた月であつた。そして彼はイスラエルの人々のために祭を定め、祭壇に上^{のぼ}つて香をたいた。

第二三章

一見よ、神の人が主の命によつてユダからベテルにきた。その時ヤラバームは祭壇の上に立^たつて香をたいていた。ニ神の人は祭壇にむかい主の命によつて呼^よばわつて言^いつた、「祭壇よ、祭壇よ、主はこう仰せられる、『見よ、ダビデの家にひとりの子が生れる。その名をヨシヤという。彼はおまえの上で香をたく高き所の祭司らを、おまえの上にささげる。また人の骨がおまえの上で焼かれる』。ニその日、彼はまた一つのしるしを示^{しめ}して言^いつた、「主の言われたしるしはこれである、『見よ、祭壇は裂け、その上にある灰はこぼれ出るであろう』。四ヤラバーム王は、神の人がベテルにある祭壇にむかつて呼^よばわる言葉を聞いた時、祭壇から手を伸^のばして、『彼を捕えよ』と言^いつたが、彼にむかつて伸^のばした手が枯^かれて、ひつ込めることができなかった。五そして神の人が主の言葉をもつて示^{しめ}したしるしのように祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出^でた。六王は神の人に言^いつた、「あなたの神、主に願^{ねが}い、わたしのために祈^{いの}つて、わたしの手をもとに返^{かえ}せてください」。神の人が主に願^{ねが}つたので、王の手はもとに返^{かえ}つて、前^{まえ}のようになつた。セそこで王は神の人に言^いつた、「わたしと

一緒に家にきて、身を休めなさい。あなたに謝礼をさしあげましょう。ハ神の人は王に言った、「たとい、あなたの家の半ばをくださつても、わたしはあなたと一緒にまいりません。またこの所では、パンも食べず水も飲みません。九主の言葉によつてわたしは、『パンを食べてはならない、水を飲んではいけません。また来た道から帰つてはならない』と命じられているからです。一〇こうして彼はほかの道を行き、ベテルに来た道からは帰らなかった。

二さてベテルにひとりの年若い預言者が住んでいたが、そのむすこたちがきて、その日神の人がベテルでした事どもを彼に話した。また神の人が王に言った言葉をもその父に話した。三父が彼らに「その人はどの道を行つたか」と聞いたので、むすこたちはユダからきた神の人の行つた道を父に示した。四父はむすこたちに言った、「わたしのためにろばにくらを置きなさい。彼らがろばにくらを置いたので、彼はそれに乗り、四神の人のあとを追つて行き、かしの木の下にすわっているのを見て、その人に言った、「あなたはユダからこられた神の人ですか」。その人は言った、「そうです」。五そこで彼はその人に言った、「わたしと一緒に家にきてパンを食べてください」。六その人は言った、「わたしはあなたと一緒に引き返すことはできません。あなたと一緒に行くことはできません。またわたしはこの所であなたと一緒にパンも食べず水も飲みません。一七主の

言葉によつてわたしは、『その所でパンを食べてはならない、水を飲んではいけません。また来た道から帰つてはならない』と云われているからです。一八彼はその人に言った、「わたしもあなたと同じ預言者ですが、天の使が主の命によつてわたしに告げて、『その人を一緒に家に連れ帰り、パンを食べさせ、水を飲ませよ』と言いました。これは彼がその人を欺いたのである。一九そこでその人は彼と一緒に引き返し、その家でパンを食べ、水を飲んだ。

二〇彼らが食卓についていたとき、主の言葉が、その人をつれて帰つた預言者に臨んだので、二彼はユダからきた神の人にむかい呼ばわつて言った、「主はこう仰せられます、『あなたが主の言葉にそむき、あなたの神、主がお命じになつた命令を守らず、三引き返して、主があなたに、パンを食べてはならない、水を飲んではいけません、と言われた場所でパンを食べ、水を飲んだゆえ、あなたの死体はあなたの先祖の墓に行かないであらう』。四三そしてその人がパンを食べ、水を飲んだ後、彼はその人のため、すなわちつれ帰つた預言者のためにろばにくらを置いた。五こうしてその人は立ち去つたが、道でししが彼に会つて彼を殺した。そしてその死体は道に捨てられ、ろばはそのかたわらに立ち、しもまた死体のかたわらに立つていた。五五人々はそこをとおつて、道に捨てられている死体と、死体のかたわらに立つているししを見て、かの老預言者の住んでいる町にきてそ

れを話した。

三六 その人を道からつれて帰った預言者はそれを聞いて言った、「それは主の言葉にそむいた神の人だ。主が彼に言われた言葉のように、主は彼をししにわたされ、ししが彼を裂き殺したのだ」。三七 そしてむすこたちに言った、「わたしのためにろばにくらを置きなさい」。彼らがくらを置いたので、三八 彼は行って、死体が道に捨てられ、ろばとししが死体のかたわらに立っているのを見た。ししはその死体を食べず、ろばも裂いていなかった。三九 そこで預言者は神の人の死体を取りあげ、それをろばに載せて町に持ち帰り、悲しんでそれを葬った。四〇 すなわちその死体を自分の墓に納め、皆これがために「ああ、わが兄弟よ」と言って悲しんだ。四一 彼はそれを葬って後、むすこたちに言った、「わたしが死んだ時は、神の人を葬った墓に葬り、わたしの骨を彼の骨のかたわらに納めなさい。四二 彼が主の命によって、ペテルにある祭壇にむかい、またサマリヤの町々にある高き所のすべての家にむかつて呼ばわった言葉は必ず成就するのです」。

四三 この事の後も、ヤラバアムはその悪い道を離れて立ち返ることをせず、また一般の民を、高き所の祭司に任命した。すなわち、だれでも好む者は、それを立てて高き所の祭司とした。四四 この事はヤラバアムの家の罪となって、ついにこれを地のおもてから断ち滅ぼすようになった。

第四章

一 そのころヤラバアムの子アヒヤが病氣になったので、ニヤラバアムは妻に言った、「立って姿を変え、ヤラバアムの妻であることの知られないようにしてシロへ行きなさい。わたしがこの民の王となることを、わたしに告げた預言者アヒヤがそこにいます。三 パン十個と菓子数個および、みつ一びんを携えて彼のところへ行きなさい。彼はこの子がどうなるかをあなたに告げるでしょう」。

四 ヤラバアムの妻はそうにして、立つてシロへ行き、アヒヤの家に着いたが、アヒヤは年老いたため、目がかすんで見る事ができなかった。五 しかし主はアヒヤに言われた、「ヤラバアムの妻が子供の事をあなたに尋ねるために来る。子供は病氣だ。あなたは彼女にこう言う言わなければならない」。

六 彼女は来るとき、他人を装っていた。しかし彼女が戸口にはいつてきたとき、アヒヤはその足音を聞いて言った、「ヤラバアムの妻よ、はいりなさい。なぜ、他人を装うのですか。わたしはあなたにきびしい事を告げるよう、命じられています。七 行ってヤラバアムに言いなさい、『イスラエルの神、主はこう仰せられる、』「わたしはあなたを民のうちからあげ、わたしの民イスラエルの上に立てて君とし、八 国をダビデの家から裂き離して、それをあなたに与えたのに、あなたはわたしのしもべダビデが、わた

しの命令を守つて一心にわたしに従い、ただわたしの目になつた事のみを行つたようではなく、九あなたよりも先にいたすべての者にまさつて悪をなし、行つて自分のために他の神々と鑄た像を造り、わたしを怒らせ、わたしをうしろに捨て去つた。〇それゆえ、見よ、わたしはヤラバアムの家に災を下し、ヤラバアムに属する男は、イスラエルについて、つなかれた者も、自由な者もことごとく断ち、人があつたを残りなく焼きつくすように、ヤラバアムの家を全く断滅ぼすであらう。一ヤラバアムに属する者は、町で死ぬ者を犬が食べ、野で死ぬ者を空の鳥が食べるであらう。主がこれを言われるのである』。三あなたは立つて、家へ帰りなさい。あなたの足が町にはいる時に、子どもは死にます。三そしてイスラエルは皆、彼のために悲しんで彼を葬るでしょう。ヤラバアムに属する者は、ただ彼だけ墓に葬られるでしょう。ヤラバアムの家のうちで、彼はイスラエルの神、主にむかつて良い思いをいだいていたからです。四主はイスラエルの上にひとりの王を起されます。彼はその日ヤラバアムの家を断つでしょう。五その後主はイスラエルを撃つて、水に揺らぐ葦のようにし、イスラエルを、その先祖に賜つたこの良い地から抜き去つて、ユフラテ川の向こうに散らされるでしょう。彼らがアシラ像を造つて主を怒らせたからです。六主はヤラバアムの罪のゆえに、すなわち彼がみずから犯し、またイスラエルに犯させたその罪のゆえにイスラエルを

捨てられるでしょう。

七ヤラバアムの妻は立つて去り、テルザへ行つて、家の敷居をまたいだ時、子どもは死んだ。八イスラエルは皆彼を葬り、彼のために悲しんだ。主がそのしもべ預言者アヒヤによつて言われた言葉のとおりである。九ヤラバアムのその他の事績、彼がどのように戦い、どのように世を治めたかは、イスラエルの王の歴代志の書に記されている。一〇ヤラバアムが世を治めた日は二十二年であつた。彼はその先祖と共に眠つて、その子ナダブが代つて王となつた。

一三ソロモンの子レハバアムはユダで世を治めた。レハバアムは王となつたとき四十一歳であつたが、主がその名を置いたために、イスラエルのすべての部族のうちから選ばれた町エルサレムで、十七年世を治めた。その母の名はナアマといつてアンモンびとであつた。三ユダの人々はその先祖の行つたすべての事にまさつて、主の目の前に悪を行い、その犯した罪によつて主の怒りを引き起した。三彼らもすべての高い丘の上と、すべての青木の下に、高き所と石の柱とアシラ像とを建てたからである。四その国にはまた神殿男娼たちがいた。彼らは主がイスラエルの人々の前から追い払われた国民のすべての憎むべき事をならい行つた。

五レハバアムの王の第五年にエジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上つてきて、六主の宮の宝物と、王の宮殿の宝物を

奪い去った。彼はそれをごとごとく奪い去り、またソロモンの造った金の盾をみな奪い去った。ミレハベアムはその代りに青銅の盾を造って、王の宮殿の門を守る侍衛長の手にわたした。二王が主の宮にはいることに、侍衛はそれを携え、また、それを侍衛のへやへ持ち帰った。

ミレハベアムのその他の事績と、彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。ミレハベアムとヤラベアムの間には絶えず戦争があった。ミレハベアムはその先祖と共に眠って先祖と共にダビデの町に葬られた。その母の名はナアマといつてアンモンびとであつた。その子アビヤムが代つて王となつた。

第一章

一ネバテの子ヤラベアム王の第十八年にアビヤムがユダの王となり、ニエルサレムで三年世を治めた。その母の名はマアカといつて、アブサロムの娘であつた。二彼はその父が先に行つたもろもろの罪をおこない、その心は父ダビデの心のようにその神、主に対して全く真実ではなかつた。四それにもかかわらず、その神、主はダビデのために、エルサレムにおいて彼に一つのもしびを与え、その子を彼のあとに立てて、エルサレムを固められた。五それはダビデがヘテびとウリヤの事のほか、一生の間、

主の目になう事を行い、主が命じられたすべての事に、そむかなかつたからである。六レハベアムとヤラベアムの間には一生の間、戦争があつた。セアビヤムのその他の行為と、彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。アビヤムとヤラベアムの間にも戦争があつた。ハアビヤムはその先祖と共に眠って、ダビデの町に葬られ、その子アサが代つて王となつた。

九イスラエルの王ヤラベアムの第二十年にアサはユダの王となり、一〇エルサレムで四十一年世を治めた。その母の名はマアカといつてアブサロムの娘であつた。二アサはその父ダビデがしたように主の目になう事をし、三神殿男娼を国から追い出し、先祖たちの造つたもろもろの偶像を除いた。三彼はまたその母マアカが、アシラのために憎むべき像を造らせたので、かのじよ太後の位から退けた。そしてアサはその憎むべき像を切り倒してキデロンの谷で焼き捨てた。四ただし高き所は除かなかつた。けれどもアサの心は一生の間、主に対して全く真実であつた。五彼は父の献納した物と自分の献納した物、金銀および器物を主の宮に携え入れた。

六アサとイスラエルの王バアシアの間に一生の間、戦争があつた。七イスラエルの王バアシアはユダに攻め上り、ユダの王アサの所に、だれをも出入りさせないためにラマを築いた。八そこでアサは主の宮の宝蔵と、王の宮殿の宝蔵に残っている

金銀をことごとく取って、これを家来たちの手にわたし、そしてアサ王は彼らをダマスコに住んでいるスリヤの王、ヘジヨンの子タブリモンの子であるベネハダデにつかわして言わせた、「わたしとあなたの父との父との間に結ばれていたように、わたしとあなたの間に同盟を結びましょう。わたしはあなたに金銀の贈り物をさしあげます。行つて、あなたとイスラエルの王バアシアとの同盟を破棄し、彼をわたしの所から撤退させてください」。ニ○ベネハダデはアサ王の言うことを聞き、自分の軍勢の長たちをつかわしてイスラエルの町々を攻め、イヨンとダンとアベル・ベテ・マアカおよびキンネレテの全地と、ナフタリの全地を撃った。ニバアシアはこれを聞き、ラマを築くことをやめて、テルザにとどまった。三○そこでアサ王はユダ全国に布告を發した。ひとりも免れる者はなかった。すなわちバアシアがラマを築くために用いた石と材木を運びこさせ、アサ王はそれを用いて、ベニヤミンのゲバとミヅパを築いた。三二アサのその他の事績とそのすべての勲功と、彼がしたすべての事および彼が建てた町々は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。彼は老年になつて足を病んだ。三四アサはその先祖と共に眠つて、父ダビデの町に先祖と共に葬られ、その子ヨシヤパテが代つて王となつた。

三五ユダの王アサの第二年にヤラベアムの子ナダブがイスラエルの王となつて、二年イスラエルを治めた。二六彼は主の目の前

に悪を行い、その父の道に歩み、父がイスラエルに犯させた罪をおこなつた。

モイッサカルの家のアヒヤの子バアシアは彼に対してむほんを企て、ペリシテびとに属するギベトンで彼を撃った。これはナダブとイスラエルが皆ギベトンを囲んでいたからである。二八こうしてユダの王アサの第三年にバアシアは彼を殺し、彼に代つて王となつた。二九彼は王となるとすぐヤラベアムの全家を撃ち、息のある者をひとりもヤラベアムの家に残さず、ことごとく滅ぼした。主がそのしもべシロびとアヒヤによつて言われた言葉のとおりであつて、三〇これはヤラベアムがみずから犯し、またイスラエルに犯させた罪のため、また彼がイスラエルの神、主を怒らせたその怒りによるのであつた。

三ナダブのその他の事績と、彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。三二アサとイスラエルの王バアシアの間には一生の間戦争があつた。

三三ユダの王アサの第三年にアヒヤの子バアシアはテルザでイスラエルの全地の王となつて、二十四年世を治めた。三四彼は主の目の前に悪を行い、ヤラベアムの道に歩み、ヤラベアムがイスラエルに犯させた罪をおこなつた。

第一六章

一そこで主の言葉がハナニの子エヒウに臨み、バアシヤを責めて言った、「わたしはあなたをちりの中からあげて、わたしの民イスラエルの上に君としたが、あなたはヤラベアムの道に歩み、わたしの民イスラエルに罪を犯させ、その罪をもつてわたしを怒らせた。ミそれでわたしは、バアシヤとその家を全く滅ぼし去り、あなたの家をネバテの子ヤラベアムの家のようにする。四バアシヤに属する者で、町で死ぬ者は犬が食べ、彼に属する者で、野で死ぬ者は空の鳥が食べるであろう」。

五バアシヤのその他の事績と、彼がした事と、その勲功とは、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。六バアシヤはその先祖と共に眠つて、テルザに葬られ、その子エラが代つて王となった。七主の言葉はまたハナニの子預言者エヒウによつて臨み、バアシヤとその家を責めた。これは彼が主の目の前に、もろもろの悪を行い、その手のわざをもつて主を怒らせ、ヤラベアムの家にならつたためであり、また彼がヤラベアムの家を滅ぼしたためであつた。

八ユダの王アサの第二十六年にバアシヤの子エラはテルザでイスラエルの王となり、二年世を治めた。九彼がテルザにいて、テルザの宮殿のつかさアルザの家で酒を飲んで酔つた時、その家来で戦車隊の半ばを指揮していたジムリが、彼にそむいた。一

〇そしてユダの王アサの第二十七年にジムリは、はいつてきて彼を撃ち殺し、彼に代つて王となった。

二ジムリは王となつて、位についた時、バアシヤの全家を殺し、その親族または友だちの男子は、ひとりも残さなかつた。三こうしてジムリはバアシヤの全家を滅ぼした。主が預言者エヒウによつてバアシヤを責めて言われた言葉のとおりである。四これはバアシヤのもろもろの罪と、その子エラの罪のためであつて、彼らが罪を犯し、またイスラエルに罪を犯させ、彼らの偶像をもつてイスラエルの神、主を怒らせたからである。五エラのその他の事績と、彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。

六ユダの王アサの第二十七年にジムリはテルザで七日の間、世を治めた。民はペリシテびとに属するギベトンにむかつて陣取つていたが、七その陣取つていた民が「ジムリはむほんを起して王を殺した」と人のいうのを聞いたので、イスラエルは皆その日陣営で、軍の長オムリをイスラエルの王とした。八そこでオムリはイスラエルの人々と共にギベトンから上つてテルザを囲んだ。九ジムリはその町の陥るのを見て、王の宮殿の天守にはいり、王の宮殿に火をかけてその中で死んだ。一〇これは彼が犯した罪のためであつて、彼が主の目の前に悪を行い、ヤラベアムの道に歩み、ヤラベアムがイスラエルに犯させたその罪を行つたからである。二〇ジムリのその他の事績と、彼が企てた

陰謀は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされているではないか。

三 その時イスラエルの民は二つに分れ、民の半ばはギナテの子テブニに従って、これを王としようとし、半ばはオムリに従った。三しかしオムリに従った民はギナテの子テブニに従った民に勝って、テブニは死に、オムリが王となった。三ユダの王アサの第三十一年にオムリはイスラエルの王となつて十二年世を治めた。彼はテルザで六年王であつた。三四 彼は銀二タラントでセメルからサマリヤの山を買い、その上に町を建て、その建てた町の名をその山の持ち主であつたセメルの名に従つてサマリヤと呼んだ。

三五 オムリは主の目の前に悪を行い、彼よりも先にいたすべての者にまさつて悪い事をした。三六 彼はネバテの子ヤラベアムのすべての道に歩み、ヤラベアムがイスラエルに罪を犯させ、彼らの偶像をもつてイスラエルの神、主を怒らせたその罪を行つた。三モ オムリが行つたその他の事績と、彼があらわした勲功とは、イスラエルの王の歴代志の書にしるされているではないか。三八 オムリはその先祖と共に眠つて、サマリヤに葬られ、その子アハブが代つて王となつた。

三九 ユダの王アサの第三十八年にオムリの子アハブがイスラエルの王となつた。オムリの子アハブはサマリヤで二十二年イスラエルを治めた。三〇 オムリの子アハブは彼よりも先にいたす

べての者にまさつて、主の目の前に悪を行つた。三 彼はネバテの子ヤラベアムの罪を行うことを、軽い事とし、シドンびとの王エテバルの娘イゼベルを妻にめとり、行つてバアルに仕え、これを拝んだ。三 彼はサマリヤに建てたバアルの宮に、バアルのために祭壇を築いた。三 アハブはまたアシラ像を造つた。アハブは彼よりも先にいたイスラエルのすべての王にまさつてイスラエルの神、主を怒らせることを行つた。三四 彼の代にベテルびとヒエルはエリコを建てた。彼はその基をすえる時に長子アビラムを失い、その門を立てる時に末の子セグブを失つた。主がヌンの子ヨシユアによつて言われた言葉のとおりである。

第七章

一 ギレアデのテシベに住むテシベびとエリヤはアハブに言つた、「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられます。わたしの言葉のないうちは、数年雨も露もないでしょう」。二 主の言葉がエリヤに臨んだ、三 「ここを去つて東におもむき、ヨルダンの東にあるケリテ川のほとりに身を隠しなさい。四 そしてその川の水を飲みなさい。わたしはからすに命じて、そこであなたを養わせよう」。五 エリヤは行つて、主の言葉のとおりにした。すなわち行つて、ヨルダンの東にあるケリテ川のほとりに住んだ。六 すると、からすが朝ごとに彼の所にパンと肉を運

び、また夕ぐことにパンと肉を運んできた。そして彼はその川の水を飲んだ。セしかし国に雨がなかったので、しばらくしてその川は干涸れた。

ハその時、主の言葉が彼に臨んで言った、九「立つてシドンに属するザレパテへ行つて、そこに住みなさい。わたしはそのところのやもめ女に命じてあなたを養わせよう」。一〇そこで彼は立つてザレパテへ行つたが、町の門に着いたとき、ひとりのやもめ女が、その所でたぎぎを拾っていた。彼はその女に声をかけて言った、「器に水を少し持つてきて、わたしに飲ませてください」。一「彼女が行つて、それを持つてこようとした時、彼は彼女を呼んで言った、「手に一口のパンを持つてきてください」。三彼女は言った、「あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしはたぎぎ二、三本を拾ひ、うちへ帰つて、わたしと子供のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしてゐるのです」。三エリヤは彼女に言った、「恐れるにはおよばない。行つて、あなたが言ったとおりにしなさい。しかしまず、それでわたしのために小さいパンを、一つ作つて持つてきなさい。その後、あなたと、あなたの子供のために作りなさい。一四『主が雨を地のおもてに降らす日まで、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えない』とイスラエルの神、主が言われるからです」。一五 彼女は行つて、エリヤが言ったとおりにした。彼女

と彼および彼女の家族は久しく食べた。一六 主がエリヤによつて言われた言葉のように、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかつた。

一七これらの事の後、その家の主婦であるこの女の男の子が病氣になつた。その病氣はたいそう重く、息が絶えたので、一八彼女はエリヤに言った、「神の人よ、あなたはわたしに、何の恨みがあるのですか。あなたはわたしの罪を思い出させるため、またわたしの子を死なせるためにおいでになつたのですか」。一九エリヤは彼女に言った、「子をわたしによこしなさい」。そして彼女のふところから子供を取り、自分のいる屋上のへやへかかえて上り、自分の寝台に寝かせ、二〇主に呼ばわつて言った、「わが神、主よ、あなたはわたしが宿っている家のやもめにさえ災をくだして、子供を殺されるのですか」。二三そして三度その子供の上に身を伸ばし、主に呼ばわつて言った、「わが神、主よ、この子供の魂をもとに帰らせてください」。二三 主はエリヤの声を聞きいれたので、その子供の魂はもとに帰つて、彼は生きかへつた。二三 エリヤはその子供を取つて屋上のへやから家の中につれて降り、その母にわたして言った、「ごらんなさい。あなたの子は生きかえりました」。二四 女はエリヤに言った、「今わたしはあなたが神の人であることと、あなたの口にある主の言葉が真実であることを知りました」。

第一八章

「多くの日を経て、三年目に主の言葉がエリヤに臨んだ、「行って、あなたの身をアハブに示しなさい。わたしは雨を地に降らせる」。ニエリヤはその身をアハブに示そうとして行った。その時、サマリヤにききんが激しかった。ミアハブは家づかきオバデヤを召した。（オバデヤは深く主を恐れる人で、四イゼベルが主の預言者を断ち滅ぼした時、オバデヤは百人の預言者を救い出して五十人ずつほら穴に隠し、パンと水をもつて彼らを養った）。ミアハブはオバデヤに言った、「国中のすべての水の源とすべての川に行ってみるがよい。馬と騾馬を生かしておくための草があるかもしれない。そうすれば、われわれは家畜をいくぶんでも失わずにすむであろう」。六彼らは行き巡る地をふたりで分け、アハブはひとりでこの道を行き、オバデヤはひとりで他の道を行った。

七オバデヤが道を進んでいた時、エリヤが彼に会った。彼はエリヤを認めて伏して言った、「わが主エリヤよ、あなたはここにおられるのですか」。ハエリヤは彼に言った、「そうです。行って、あなたの主人に、エリヤはここにいと告げなさい」。九彼は言った、「わたしにどんな罪があつて、あなたはしもべをアハブの手にわたして殺そうとされるのですか。一〇あなたの神、主は生きておられます。わたしの主人があなたを尋ねるために、人

をつかわさない民はなく、国もありません。そしてエリヤはいないと言う時は、その国、その民に、あなたが見つからないという誓いをさせるのです。二あなたは今『行って、エリヤはここにいると主人に告げよ』と言われます。三しかしわたしがあなたを離れて行くと、主の霊はあなたを、わたしの知らない所へ連れて行くでしょう。わたしが行ってアハブに告げ、彼があなたを見つけることができなければ、彼はわたしを殺すでしょう。しかし、しもべは幼い時から主を恐れている者です。四イゼベルが主の預言者を殺した時に、わたしがした事、すなわち、わたしが主の預言者のうち百人を五十人ずつほら穴に隠して、パンと水をもつて養った事を、わが主は聞かれませんでしたか。五ところが今あなたは『行って、エリヤはここにいると主人に告げよ』と言われます。そのようなことをすれば彼はわたしを殺すでしょう。六エリヤは言った、「わたしの仕える万軍の主は生きておられる。わたしは必ず、きよう、わたしの身を彼に示すであろう。七オバデヤは行ってアハブに会い、彼に告げたので、アハブはエリヤに会おうとして行った。

八ミアハブはエリヤを見たとき、彼に言った、「イスラエルを悩ます者よ、あなたはここにいるのですか」。ハ彼は答えた、「わたしがイスラエルを悩ますものではありません。あなたと、あなたの父の家が悩ましたのです。あなたがたが主の命令を捨て、バアルに従ったためです。九それで今、人をつかわしてイスラエ

ルのすべての人およびバアルの預言者四百五十人、ならびにアシラの預言者四百人、イゼベルの食卓で食事する者たちをカルメル山に集めて、わたしの所にこさせなさい」。

三〇そこでアハブはイスラエルのすべての人に人をつかわして、預言者たちをカルメル山に集めた。三一そのときエリヤはすべての民に近づいて言った、「あなたがたはいつまで二つのものの中に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい。しかしバアルが神ならば、それに従いなさい」。民はひと言も彼に答えなかった。三二エリヤは民に言った、「わたしはただひとり残った主の預言者です。しかしバアルの預言者は四百五十人あります。三三われわれに二頭の牛をください。そして一頭の牛を彼らに選ばせ、それを切り裂いて、たきぎの上に載せ、それに火をつけずにおかせなさい。わたしも一頭の牛を整え、それをたきぎの上に載せて火をつけずにおきましょう。三四こうしてあなたがたはあなたがたの神の名を呼びなさい。わたしは主の名を呼びましょう。そして火をもって答える神を神としましょう」。民は皆答えて「それがよからう」と言った。三五そこでエリヤはバアルの預言者たちに言った、「あなたがたは大ぜいだから初めに一頭の牛を選んで、それを整え、あなたがたの神の名を呼びなさい。ただし火をつけてはなりません」。三六彼らは与えられた牛を取って整え、朝から昼までバアルの名を呼んで「バアルよ、答えてください」と言った。しかしなんの声もなく、また答

える者もなかった。彼らは自分たちの造った祭壇のまわりに踊った。三七昼になってエリヤは彼らをあざけて言った、「彼は神だから、大声をあげて呼びなさい。彼は考えにふけていてのか、よそへ行ったのか、旅に出たのか、または眠っていて起きなければならないのか」。三八そこで彼らは大声に呼びわたり、彼らのならわしに従って、刀とやりで身を傷つけ、血をその身に流すに至った。三九こうして昼が過ぎても彼らはなお叫び続けて、夕の供え物をささげる時にまで及んだ。しかしなんの声もなく、答える者もなく、また顧みる者もなかった。

四〇その時エリヤはすべての民にむかつて「わたしに近寄りなさい」と言ったので、民は皆彼に近寄った。彼はこわれている主の祭壇を繕った。四一そしてエリヤは昔、主の言葉がヤコブに臨んで、「イスラエルをあなたの名とせよ」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取り、四二その石で主の名によつて祭壇を築き、祭壇の周囲に種二セヤをいれるほどの大きさの、みぞを作った。四三また、たきぎを並べ、牛を切り裂いてたきぎの上に載せて言った、「四つのために水を満たし、それを燔祭とたきぎの上に注げ」。四四また言った、「それを二度せよ」。二度それをする、また言った、「三度それをせよ」。三度それをした。四五水は祭壇の周囲に流れた。またみぞにも水を満たした。

四六夕の供え物をささげる時になって、預言者エリヤは近寄って

言った、「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ、イスラエルでは、あなたが神であること、わたしがあなたのしもべであつて、あなたの言葉に従つてこのすべての事を行つたことを、今日知らせてください。主よ、わたしに答えてください、わたしに答えてください。主よ、この民にあなたが神であること、またあなたが彼らの心を翻されたのであることを知らせてください」。三八そのとき主の火が下つて燔祭と、たきぎと、石と、ちりとを焼きつくし、またみぞの水をなめつくした。三九民は皆見て、ひれ伏して言った、「主が神である。主が神である」。四〇エリヤは彼らに言った、「バアルの預言者を捕えよ。そのひとりも逃がしてはならない」。そこで彼らを捕えたので、エリヤは彼らをキシオン川に連れくだつて、そこで彼らを殺した。

四一エリヤはアハブに言った、「大雨の音がするから、上つて行って、食い飲みしなさい」。四二アハブは食い飲みするために上つていった。しかしエリヤはカルメルの頂に登り、地に伏して顔をひざの間に入れていたが、四三彼はしもべに言った、「上つていつて海の方を見なさい」。彼は上つていつて、見て、「何もありません」と言つたので、エリヤは「もう一度行きなさい」と言つて七度に及んだ。四四七度目にしもべは言つた、「海から人の手ほどの小さな雲が起つています」。エリヤは言つた、「上つていつて、『雨にとどめられないように車を整えて下れ』とアハブに言いなさい」。四五すると間もなく、雲と風が起り、空が黒く

なつて大雨が降つてきた。アハブは車に乗つてエズレルへ行つた。四六また主の手がエリヤに臨んだので、彼は腰をからげ、エズレルの入口までアハブの前に走つていつた。

第二十九章

一アハブはエリヤのしたすべての事、また彼がすべての預言者を刀で殺したことをイゼベルに告げたので、ニイゼベルは使者をエリヤにつかわして言つた、「もしわたしが、あすの今ごろ、あなたの命をあの人々のひとりの命のようにしていいないならば、神々がどんなにでも、わたしを罰してください」。三そこでエリヤは恐れて、自分の命を救うために立つて逃げ、ユダに属するベエルシバへ行つて、しもべをそこに残し、四自分は一日の道のりほど荒野にはいつて行つて、れだまの木の下に座し、自分の死を求めて言つた、「主よ、もはや、じゆうぶんです。今わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまざる者ではありません」。五彼はれだまの木の下に伏して眠つたが、天の使が彼にさわり、「起きて食べなさい」と言つたので、六起きて見ると、頭のそばに、焼け石の上で焼いたパン一個と、一びんの水があつた。彼は食べ、かつ飲んでまた寝た。七主の使は再びきて、彼にさわつて言つた、「起きて食べなさい。道が遠くて耐えられないでしょうから」。八彼は起きて食べ、かつ飲み、その食物で力づ

いて四十日四十夜行つて、神の山ホレブに着いた。

九その所で彼はほら穴にはいつて、そこに宿つたが、主の言葉が彼に臨んで、彼に言われた、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか」。一〇彼は言つた、「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀をもつてあなたの預言者たちを殺したのです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。一主は言われた、「出て、山の上で主の前に、立ちなさい」。その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風の後に地震があつたが、地震の中にも主はおられなかった。三地震の後に火があつたが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。一エリヤはそれを聞いて顔を外套に包み、出てほら穴の口に立つと、彼に語る声が聞えた、「エリヤよ、あなたはここで何をしているのか」。四彼は言つた、「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました。イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、刀であなたの預言者たちを殺したからです。ただわたしだけ残りましたが、彼らはわたしの命を取ろうとしています」。五主は彼に言われた、「あなたの道を歸つて行つて、ダマスコの荒野におもむき、ダマスコに着いて、ハザエルに油を注ぎ、スリヤの王としなさい。一六またニムシの子エヒ

ウに油を注いでイスラエルの王としなさい。またアベルメホラのシャパテの子エリシヤに油を注いで、あなたに代つて預言者としなさい。一七ハザエルのつるぎをのがれる者をエヒウが殺し、エヒウのつるぎをのがれる者をエリシヤが殺すであろう。一八また、わたしはイスラエルのうちに七千人を残すであろう。皆バアルにひぎをかがめず、それに口づけしない者である」。

一九さてエリヤはそこを去つて行つて、シャパテの子エリシヤに会つた。彼は十二くびきの牛を前に行かせ、自分は十二番目のくびきと共にいて耕していた。エリヤは彼のかたわらを通り過ぎて外套を彼の上にかけた。二〇エリシヤは牛を捨て、エリヤのあとに走つてきて言つた、「わたしの父母に口づけさせてください。そして後あなたに従いましよう」。エリヤは彼に言つた、「行つてきなさい。わたしはあなたに何をしましたか」。二一エリシヤは彼を離れて歸り、ひとくびきの牛を取つて殺し、牛のくびきを燃やしてその肉を煮、それを民に与えて食べさせ、立つて行つてエリヤに従い、彼に仕えた。

第二〇章

一スリヤの王ベネハダデはその軍勢をことごとく集めた。三十二人の王が彼と共におり、また馬と戦車もあった。彼は上つてサマリヤを囲み、これを攻めた。二また彼は町に使者をつかわ

し、イスラエルの王アハブに言った、「ベネハダデはこう申しま
す、三『あなたの金銀はわたしのもの、またあなたの妻たちと
子供たちの最も美しい者もわたしのものです』。四イスラエル
の王は答えた、「王、わが主よ、仰せのとおり、わたしと、わた
しの持ち物は皆あなたのものです」。五使者は再びきて言った、
「ベネハダデはこう申します、『わたしはさきに人をつかわして、
あなたの金銀、妻子を引きわたせと言いました。しかし、あす
の今ごろ、しもべたちをあなたにつかわします。彼らはあなた
の家と、あなたの家来の家を探つて、すべて彼らの氣にいる物を
手に入れて奪い去るでしょう』」。

セそこでイスラエルの王は国の長老をことごとく召して言っ
た、「よく注意して、この人が無理な事を求めているのを知りな
さい。彼は人をつかわして、わたしの妻子と金銀を求めたが、わ
たしはそれを拒まなかった」。ハすべての長老および民は皆彼
に言った、「聞いてはなりません。承諾してはなりません」。九
それで彼はベネハダデの使者に言った、「王、わが主に告げな
さい。『あなたが最初に要求されたことは皆いたしましょう。し
かし今度の事はできません』。使者は去つて復命した。一〇ベ
ネハダデは彼に人をつかわして言った、「もしサマリヤのちり
が、わたしに従うすべての民の手を満たすに足りるならば、神々
がどんなにでも、わたしを罰してくださるように」。一イスラ
エルの王は答えた、「武具を帯びる者は、それを脱ぐ者のように

誇つてはならない』と告げなさい」。二ベネハダデは仮小屋で、
王たちと酒を飲んでいたが、この事を聞いて、その家来たちに
言った、「戦いの備えをせよ」。彼らは町にむかつて戦いの備え
をした。

三この時ひとりの預言者がイスラエルの王アハブのもとにき
て言った、「主はこう仰せられる、『あなたはこの大軍を見たか。
わたしはきよう、これをあなたの手にわたす。あなたは、わたし
が主であることを、知るようになるであらう』」。四アハブは
言った、「だれにさせましょうか」。彼は言った、「主はこう仰せ
られる、『地方の代官の家来たちにさせよ』」。アハブは言った、
「だれが戦いを始めましょうか」。彼は答えた、「あなたです」。一
五そこでアハブは地方の代官の家来たちを調べたところ二百三
十二人あつた。次にすべての民、すなわちイスラエルのすべて
の人を調べたところ七千人あつた。

六彼らは昼ごろ出ていったが、ベネハダデは仮小屋で、味方の
三十二人の王たちと共に酒を飲んで酔っていた。七地方の
代官の家来たちが先に出ていった。ベネハダデは斥候をつかわ
したが、彼らは「サマリヤから人々が出てきた」と報告したので、
八彼は言った、「和解のために出てきたのであつても、生どりに
せよ。また戦いのために出てきたのであつても、生どりにせ
よ」。

九地方の代官の家来たちと、それに従う軍勢が町から出てい

て、二〇おのおのその相手を撃ち殺したので、スリヤびとは逃げた。イスラエルはこれを追ったが、スリヤの王ベネハダデは馬に乗り、騎兵を従えてのがれた。二イスラエルの王は出て行って、馬と戦車をぶんどり、また大いにスリヤびとを撃ち殺した。三時に、かの預言者がイスラエルの王のもとにきて言った、「行って、力を養い、なすべき事をよく考えなさい。来年の春にはスリヤの王が、あなたのところに攻め上ってくるからです」。三スリヤの王の家来たちは王に言った、「彼らの神々は山の神です。それから彼らがわれわれよりも強かったです。もしわれわれが平地で戦うならば、必ず彼らよりも強いでしょう。二四それでこうしなさい。王たちをおのおのその地位から退かせ、総督を置いてそれに代らせなさい。二五またあなたが失った軍勢に等しい軍勢を集め、馬は馬、戦車は戦車をもつて補いなさい。こうしてわれわれが平地で戦うならば必ず彼らよりも強いでしょう」。彼はその言葉を聞きいれて、そのようにした。

二六春になつて、ベネハダデはスリヤびとを集めて、イスラエルと戦うために、アペクに上つてきた。二七イスラエルの人々は召集され、糧食を受けて彼らを迎え撃つために出かけた。イスラエルの人々はやぎの二つの小さい群れのように彼らの前に陣取ったが、スリヤびとはその地に満ちていた。二八その時神の人がきて、イスラエルの王に言った、「主はこう仰せられる、『スリヤびとが、主は山の神であつて、谷の神ではないと言っている

から、わたしはこのすべての大軍をあなたの手にわたす。あなたは、わたしが主であることを知るようになるであらう』。二九彼らは七日の間、互にむかいあつて陣取り、七日目になつて戦いを交えたが、イスラエルの人々は一日にスリヤびとの歩兵十万人を殺した。三〇そのほかの者はアペクの町に逃げこんだが、城壁がくずれて、その残つた二万七千人の上に倒れた。

ベネハダデは逃げて町に入り、奥の間にはいつた。三一家来たちは彼に言った、「イスラエルの家の王たちはあわれみ深い王であると聞いています。それでわれわれの腰に荒布をつけ、くびになわをかけて、イスラエルの王の所へ行かせてください。たぶん彼はあなたの命を助けるでしょう」。三二そこで彼らは荒布を腰にまき、なわをくびにかけてイスラエルの王の所へ行つて言った、「あなたのしもべベネハダデが『どうぞ、わたしの命を助けてください』と申しています」。アハブは言った、「彼はまだ生きていますか。彼はわたしの兄弟です」。三三その人々はこれを吉兆としてすみやかに彼の言葉をうけ、「そうです。ベネハダデはあなたの兄弟です」と言つたので、彼は言つた、「行って彼をつれてきなさい」。それでベネハダデは彼の所にでてきたので、彼はこれを自分の車に乗せた。三四ベネハダデは彼に言った、「わたしの父が、あなたの父上から取った町々は返します。またわたしの父がサマリヤに造つたように、あなたはダマスコに、あなたのために市場を設けなさい」。アハブは言っ

た、「わたしはこの契約をもつてあなたを帰らせましよう」。こうしてアハブは彼と契約を結び、彼を帰らせた。

三五 さて預言者のともがらのひとり主の言葉に従つてその仲間に言った、「どうぞ、わたしを撃つてください」。しかしその人は撃つことを拒んだので、三六 彼はその人に言った、「あなたは主の言葉に聞き従わないゆえ、わたしを離れて行くとき、ししがあなたを殺すでしょう」。その人が彼のそばを離れて行くとき、ししが彼に会つて彼を殺した。三七 彼はまたほかの人に会つて言った、「どうぞ、わたしを撃つてください」。するとその人は彼を撃ち、撃つて傷つけた。三八 こうしてその預言者は行って、道のかたわらで王を待ち、目にほうたいを当てて姿を変えていた。三九 王が通り過ぎる時、王に呼ばわつて言った、「しもべはいくさの中に出て行きましたが、ある軍人が、ひとりの人をわたしの所につれてきて言いました、『この人を守つていなさい。もし彼がいなくなれば、あなたの命を彼の命に代えるか、または銀一タラントを払わなければならない』。四〇 ところが、しもべはあちらこちらと忙しくしていたので、ついに彼はいなくなりました」。イスラエルの王は彼に言った、「あなたはそのとおりなさばかなければならない。あなたが自分でそれを定めたのです」。四一 そこで彼が急いで目のほうたいを取り除いたので、イスラエルの王はそれが預言者のひとりであることを知った。四二 彼は王に言った、「主はこう仰せられる、『わたしが滅ぼそうと定

めた人を、あなたは自分の手から放して行かせたので、あなたの命は彼の命に代り、あなたの民は彼の民に代るであらう』と」。四三 イスラエルの王は悲しみ、かつ怒つて自分の家におもむき、サマリヤに帰った。

第二章

一 さてエズレルびとナボテはエズレルにぶどう畑をもっていたが、サマリヤの王アハブの宮殿のかたわらにあったので、ニアハブはナボテに言った、「あなたのぶどう畑はわたしの家の近くにあるので、わたしに譲つて青物畑にさせてください。その代り、わたしはそれよりも良いぶどう畑をあなたにあげましょう。もしお望みならば、その価を金でさしあげましょう」。三 ナボテはアハブに言った、「わたしは先祖の嗣業をあなたに譲ることを断じていたしません」。四 アハブはエズレルびとナボテが言った言葉を聞いて、悲しみ、かつ怒つて家にはいった。ナボテが「わたしは先祖の嗣業をあなたに譲りません」と言ったからである。アハブは床に伏し、顔をそむけて食事をしなかった。五 妻イゼベルは彼の所にきて、言った、「あなたは何をそんなに悲しんで、食事をなさらないのですか」。六 彼は彼女に言った、「わたしはエズレルびとナボテに『あなたのぶどう畑を金で譲ってください。もし望むならば、その代りに、ほかのぶどう畑をあ

げよう』と言ったが、彼は答えて『わたしはぶどう畑を譲りませ
ん』と言ったからだ。七妻イゼベルは彼に言った、「あなたが今
イスラエルを治めているのですか。起きて食事をし、元氣を出
してください。わたしがエズレルびとナボテのぶどう畑をあな
たにあげます」。

八彼女はアハブの名で手紙を書き、彼の印をおして、ナボテと同
じように、その町に住んでいる長老たちと身分の尊い人々に、
その手紙を送った。九彼女はその手紙に書きしるした、「断食を
布告して、ナボテを民のうちの高い所にすわらせ、一〇またふた
りのよこしまな者を彼の前にすわらせ、そして彼を訴えて、『あ
なたは神と王とをのろった』と言わせなさい。こうして彼を引
き出し、石で撃ち殺しなさい」。二その町の人々、すなわち、そ
の町に住んでいる長老たちおよび身分の尊い人々は、イゼベル
が言いつかわしたようにした。彼女が彼らに送った手紙に書き
しるされていたように、三彼らは断食を布告して、ナボテを民
のうちの高い所にすわらせた。四そしてふたりのよこしまな
者はいってきて、その前にすわり、そのよこしまな者たちが民
の前でナボテを訴えて、「ナボテは神と王とをのろった」と言っ
た。そこで人々は彼を町の外に引き出し、石で撃ち殺した。五
そして人々はイゼベルに「ナボテは石で撃ち殺された」と言い
送った。

一五イゼベルはナボテが石で撃ち殺されたのを聞くとすぐ、アハ

ブに言った、「立って、あのエズレルびとナボテが、あなたに金
で譲ることを拒んだぶどう畑を取りなさい。ナボテは生きてい
ません。死んだのです」。一六アハブはナボテの死んだのを聞く
とすぐ、立って、エズレルびとナボテのぶどう畑を取るために、
そこへ下っていった。

一七そのとき、主の言葉がテシベびとエリヤに臨んだ、一八「立つ
て、下って行き、サマリヤにいるイスラエルの王アハブに会いな
さい。彼はナボテのぶどう畑を取ろうとしてそこへ下ってい
る。一九あなたは彼に言わなければならない、『主はこう仰せら
れる、あなたは殺したのか、また取ったのか』と。また彼に言
いなさい、『主はこう仰せられる、犬がナボテの血をなめた場所で、
犬があなたの血をなめるであろう』」。

二〇アハブはエリヤに言った、「わが敵よ、ついに、わたしを見つ
けたのか」。彼は言った、「見つけました。あなたが主の目の前
に悪を行うことに身をゆだねたゆえ、三わたしはあなたに災を
くだし、あなたを全く滅ぼし、アハブに属する男は、イスラエルに
いてつながれた者も、自由な者もことごとく断ち、三またあな
たの家をネバテの子ヤラバアムの家のようにし、アヒヤの子バ
アシャの家のようにするでしょう。これはあなたがわたしを怒
らせた怒りのゆえ、またイスラエルに罪を犯させたゆえです。二
三イゼベルについて、主はまた言われました、『犬がエズレルの
地域でイゼベルを食うであろう』と。二四アハブに属する者は、

町で死ぬ者を犬が食い、野で死ぬ者を空の鳥が食うでしょう」。

三五 アハブのように主の目の前に悪を行うことに身をゆだねた者はなかった。その妻イゼベルが彼をそのかしたのである。

三六 彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われたアモリびとがしたように偶像に従って、はなはだ憎むべき事を行った。

三モアハブはこれらの言葉を聞いた時、衣を裂き、荒布を身にまとい、食を断ち、荒布に伏し、打ちしおれて歩いた。二八この時、主の言葉がテシベびとエリヤに臨んだ、二九「アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているゆえ、わたしは彼の世には災を下さない。その子の世に災をその家に下すであらう」。

第二章

一 スリヤとイスラエルの間に戦争がなくて三年を経た。ニしかし三年目にユダの王ヨシヤパテがイスラエルの王の所へ下っていったので、ミイスラエルの王はその家来たちに言った、「あなたがたは、ラモテ・ギレアデがわれわれの所有であることを知っていますか。しかもなおわれわれはスリヤの王の手からそれを取らずに黙っているのです」。

四 彼はヨシヤパテに言った、「ラモテ・ギレアデで戦うためにわたしと一緒に行かれませんか」。ヨシヤパテはイスラエルの王に言った、「わたしはあなたと一つで

す。わたしの民はあなたの民と一つです。わたしの馬はあなたの馬と一つです」。

五 ヨシヤパテはまたイスラエルの王に言った、「まず、主の言葉を伺いなさい」。ハそこでイスラエルの王は預言者四百人ばかりを集めて、彼らに言った、「わたしはラモテ・ギレアデに戦いに行くべきでしょうか、あるいは控えるべきでしょうか」。彼らは言った、「上つていきなさい。主はそれを王の手にわたされるでしょう」。

セ ヨシヤパテは言った、「ここには、われわれの問うべき主の預言者がほかにいませんか」。ハイスラエルの王はヨシヤパテに言った、「われわれが主に問うことのできる人が、まだひとりいます。イムラの子ミカヤです。彼はわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い事だけを預言するので、わたしは彼を憎んでいます」。

ヨシヤパテは言った、「王よ、そう言わないでください」。九 そこでイスラエルの王は役人を呼んで、「急いでイムラの子ミカヤを連れてきなさい」と言った。一〇 さてイスラエルの王およびユダの王ヨシヤパテは王の服を着て、サマリヤの門の入口の広場に、おのおのその王座にすわり、預言者たちは皆その前で預言していた。ニ ケナアナの子ゼデキヤは鉄の角を造って言った、「主はこう仰せられます、『あなたはこれらの角をもつてスリヤびとを突いて彼らを滅ぼしなさい』」。

三 預言者たちは皆そのように預言して言った、「ラモテ・ギレアデに上つていつて勝利を得なさい。主はそれを王の手にわたされるでしょう」。

う」。

三 さてミカヤを呼びにいった使者は彼に言った、「預言者たちは一致して王に良い事を言いました。どうぞ、あなたも、彼らのひとりの言葉のようにして、良い事を言ってください」。四 ミカヤは言った、「主は生きておられます。主がわたしに言われる事を申しましょう」。五 彼が王の所へ行くと、王は彼に言った、「ミカヤよ、われわれはラモテ・ギレアデに戦いに行くべきでしょうか、あるいは控えるべきでしょうか」。彼は王に言った、「上つていつて勝利を得なさい。主はそれを王の手にわたされるでしょう」。六 しかし王は彼に言った、「幾たびあなたを誓わせたなら、あなたは主の名をもって、ただ真実のみをわたしに告げるでしょうか」。七 彼は言った、「わたしはイスラエルが皆、牧者のない羊のように、山に散っているのを見ました。すると主は『これらの者は飼主がいらない。彼らをそれぞれ安らかに、その家に帰らせよ』と言われました」。八 イスラエルの王はヨシャパテに言った、「彼がわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い事だけを預言すると、あなたに告げたではありませんか」。九 ミカヤは言った、「それゆえ主の言葉を聞きなさい。わたしは主がその玉座にすわり、天の万軍がそのかたわらに、右左に立っているのを見たが、二〇 主は『だがアハブをいざなつてラモテ・ギレアデに上らせ、彼を倒れさせるであろうか』と言われました。するとひとりはこの事を言い、ひとりとはほか

の事を言いました。二 その時一つの霊が進み出て、主の前に立ち、『わたしは彼をいざないましよう』と言いました。三 主は『どのような方法でするのか』と言われたので、彼は『わたしが出て行って、偽りを言う霊となつて、すべての預言者の口に宿りましよう』と言いました。そこで主は『おまえは彼をいざなつて、それを成し遂げるであろう。出て行って、そうしなさい』と言われました。四 それで主は偽りを言う霊をあなたのすべての預言者の口に入れ、また主はあなたの身に起る災を告げられたのです。五 するとケナアナの子ゼデキヤは近寄つて、ミカヤのほおを打つて言った、『どのようにして主の霊がわたしを離れて、あなたに語りましたか』。六 ミカヤは言った、『あなたが奥の間にはいつて身を隠すその日に、わかるでしょう』。七 イスラエルの王は言った、『ミカヤを捕え、町のつかさアモンと、王の子ヨアシの所へ引いて帰つて、二〇 言いなさい、『王がこう言います、この者を獄屋に入れ、わずかのパンと水をもって彼を養い、わたしが勝利を得て帰ってくるのを待て』。二八 ミカヤは言った、『もしあなたが勝利を得て帰つてこられるならば、主がわたしによつて語られなかったのです』。また彼は言った、『あなたがあたがた、すべての民よ、聞きなさい』。二九 こうしてイスラエルの王とユダの王ヨシャパテはラモテ・ギレアデに上つていった。三〇 イスラエルの王はヨシャパテに言った、『わたしは姿を変えて、戦いに行きます。あなたは王の

服を着けなさい」。イスラエルの王は姿を変えて戦いに行つた。ミさて、スリヤの王は、その戦車長三十二人に命じて言つた、「あなたがたは、小さい者とも大きい者とも戦わないで、ただイスラエルの王とだけ戦いなさい」。ミ戦車長らはヨシヤパテを見たとき、これはきつとイスラエルの王だと思つたので、身をめぐらして、これと戦おうとすると、ヨシヤパテは呼ばわつた。ミ戦車長らは彼がイスラエルの王でないのを見たので、彼を追うことをやめて引き返した。ミ四しかし、ひとりの人が何心なく弓をひいて、イスラエルの王の胸当てと草摺の間を射たので、彼はその戦車の御者に言つた、「わたしは傷を受けた。戦車をめぐらして、わたしを戦場から運び出せ」。ミ五その日戦いは激しくなつた。王は戦車の中にささえられて立ち、スリヤびとにむかつていたが、ついに、夕暮になつて死んだ。傷の血は戦車の底に流れた。ミ六日の没するころ、軍勢の中に呼ばわる声がした、「めいめいその町へ、めいめいその国へ帰れ」。

ミ七王は死んで、サマリヤへ携え行かれた。人々は王をサマリヤに葬つた。ミ八またその戦車をサマリヤの池で洗つたが、犬がその血をなめた。また遊女がそこで身を洗つた。王が言われた言葉のとおりである。ミ九アハブのそのほかの事績と、彼がしたすべての事と、その建てた象牙の家と、その建てたすべての町は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。四〇こうしてアハブはその先祖と共に眠つて、その子アハジャが

代つて王となつた。

四一アサの子ヨシヤパテはイスラエルの王アハブの第四年にユダの王となつた。四二ヨシヤパテは王となつた時、三十五歳であつたが、エルサレムで二十五年世を治めた。その母の名はアズバといい、シルヒの娘であつた。四三ヨシヤパテは父アサのすべての道に歩み、それを離れることなく、主の目にかなう事をした。ただし高き所は除かなかつたので、民はなお高き所で犠牲をささげ、香をたいた。四四ヨシヤパテはまたイスラエルの王と、よしみを結んだ。

四五ヨシヤパテのその他の事績と、彼があらわした勲功およびその戦争については、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。四六彼は父アサの世になお残つていた神殿男娼たちを国のうちから追い払つた。

四七そのころエドムには王がなく、代官が王であつた。四八ヨシヤパテはタルシシの船を造つて、金を獲るためにオフルに行かせようとしたが、その船はエジオン・ゲベルで難破したため、ついに行かなかつた。四九そこでアハブの子アハジャはヨシヤパテに「わたしの家来をあなたの家来と一緒に船で行かせなさい」と言つたが、ヨシヤパテは承知しなかつた。五〇ヨシヤパテはその先祖と共に眠つて、父ダビデの町に先祖と共に葬られ、その子ヨラムが代つて王となつた。

五一アハブの子アハジャはユダの王ヨシヤパテの第十七年にサ

マリヤでイスラエルの王となり、二年イスラエルを治めた。五
彼は主の目の前に悪を行い、その父の道と、その母の道、および
かのイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの道に歩
み、五三バアルに仕えて、それを拝み、イスラエルの神、主を怒
らせた。すべて彼の父がしたとおりであつた。

列王紀下

第一章

一 アハブが死んだ後、モアブはイスラエルにそむいた。

ニ さてアハジヤはサマリヤにある高殿のらんかんから落ちて病氣になったので、使者をつかわし、「行ってエクロンの神バアル・ゼブに、この病氣がなおるかどうかを尋ねよ」と命じた。三 時に、主の使はテシベびとエリヤに言った、「立つて、上つて行き、サマリヤの王の使者に会つて言いなさい、『あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブに尋ねようとして行くのは、イスラエルに神がないためか』。四 それゆえ主はこう仰せられる、『あなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』。そこでエリヤは上つて行つた。

五 使者たちがアハジヤのもとに帰ってきたので、アハジヤは彼らに言った、『なぜ帰ってきたのか』。六 彼らは言った、『ひとりの人が上つてきて、われわれに会つて言いまして、『おまえたちをつかわした王の所へ帰つて言いなさい。主はこう仰せられる、あなたがエクロンの神バアル・ゼブに尋ねようとして人をつかわすのは、イスラエルに神がないためなのか。それゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう』。七 アハジヤは彼らに言った、『上つてきて、あなたがたに会つて、こ

れらの事を告げた人はどんな人であつたか』。八 彼らは答えた、『その人は毛ごろもを着て、腰に皮の帯を締めていました』。彼は言った、『その人はテシベびとエリヤだ』。

九 そこで王は五十人の長を、部下の五十人と共にエリヤの所へつかわした。彼がエリヤの所へ上つていくと、エリヤは山の頂にすわつていたので、エリヤに言った、『神の人よ、王があなたに、下つて来るようにと言われます』。一〇 しかしエリヤは五十人の長に答えた、『わたしがもし神の人であるならば、火が天から下つて、あなたと部下の五十人とを焼き尽くすでしょう』。そのように火が天から下つて、彼と部下の五十人とを焼き尽くした。

二 王はまた他の五十人の長を、部下の五十人と共にエリヤにつかわした。彼は上つていつてエリヤに言った、『神の人よ、王がこう命じられます、『すみやかに下つてきなさい』』。ニしかしエリヤは彼らに答えた、『わたしがもし神の人であるならば、火が天から下つて、あなたと部下の五十人とを焼き尽くすでしょう』。そのように神の火が天から下つて、彼と部下の五十人とを焼き尽くした。

三 王はまた第三の五十人の長を部下の五十人と共につかわした。第三の五十人の長は上つていつて、エリヤの前にひざまずき、彼に願つて言った、『神の人よ、どうぞ、わたしの命と、あなたのしもべであるこの五十人の命をあなたの目に尊いものとみなしてください。一四 ごらんない、火が天からくだつて、さ

きの五十人の長ふたりと、その部下の五十人ずつとを焼き尽しました。しかし今わたしの命をあなたの目に尊いものとみなしてください。二五その時、主の使はエリヤに言った、「彼と共に下りなさい。彼を恐れてはならない」。そこでエリヤは立つて、彼と共に下り、王のもとへ行つて、一六王に言った、「主はこう仰せられます、『あなたはエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようと使者をつかわしたが、それはイスラエルに、その言葉を求むべき神がないためであるか。それゆえあなたは、登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであらう』」。

一七彼はエリヤが言った主の言葉のとおりに死んだが、彼に子がいなかったので、その兄弟ヨラムが彼に代つて王となつた。これはユダの王ヨシヤパテの子ヨラムの第二年である。一八アハジヤのその他の事績は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされているではないか。

第二章

一主がつむじ風をもつてエリヤを天に上らせようとされた時、エリヤはエリヤと共にギルガルを出て行つた。二エリヤはエリヤに言った、「どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをベテルにつかわされるのですから」。しかしエリヤは言った、「主は生きておられます。またあなたも生きておられま

す。わたしはあなたを離れません」。そして彼らはベテルへ下つた。三ベテルにいる預言者のともがらが、エリヤのもとに出てきて彼に言った、「主がきよう、あなたの師事する主人をあなたから取られるのを知っていますか」。彼は言った、「はい、知っています。あなたがたは黙っていてください」。

四エリヤは彼に言った、「エリヤよ、どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをエリコにつかわされるのですから」。しかしエリヤは言った、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そして彼らはエリコへ行つた。五エリコにいた預言者のともがらが、エリヤのもとにきて彼に言った、「主がきよう、あなたの師事する主人をあなたから取られるのを知っていますか」。彼は言った、「はい、知っています。あなたがたは黙っていてください」。六エリヤはまた彼に言った、「どうぞ、ここにとどまってください。主はわたしをヨルダンにつかわされるのですから」。しかし彼は言った、「主は生きておられます。またあなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そしてふたりは進んで行つた。七預言者のともがら五十人も行つて、彼らにむかつて、はるかに離れて立つていた。彼らふたりは、ヨルダンのほとりに立つたが、八エリヤは外套を取り、それを巻いて水を打つと、水が左右に分れたので、ふたりはかわいた土の上を渡ることができた。

九彼らが渡ったとき、エリヤはエリシャに言った、「わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい」。エリシャは言った、「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください」。一〇エリヤは言った、「あなたはむずかしい事を求める。あなたがもし、わたしが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見ないならば、そのようにはならない」。二彼らが進みながら語っていた時、火の車と火の馬があらわれて、ふたりを隔てた。そしてエリヤはつむじ風に乗って天にのぼった。三エリシャはこれを見て「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、再び彼を見なかった。

そこでエリシャは自分の着物をつかんで、それを二つに裂き、三またエリヤの身から落ちた外套を取り上げ、帰ってきてヨルダンの岸に立った。四そしてエリヤの身から落ちたその外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言い、彼が水を打つと、水は左右に分れたので、エリシャは渡った。

一五エリコにいた預言者のともがらは彼の近づいて来るのを見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言った。そして彼らは来て彼を迎え、その前に地に伏して、一六彼に言った、「しもべらの所に力の強い者が五十人います。どうぞ彼らをつかわして、あなたの主人を尋ねさせてください。主の霊が彼

を引きあげて、彼を山か谷に投げたのかも知れません」。エリシャは「つかわしてはならない」と言ったが、一七彼の恥じるまで、しいたので、彼は「つかわしなさい」と言った。それで彼らは五十人の者をつかわし、三日の間、尋ねたが、彼を見いださなかった。一八エリシャのなおエリコにとどまっている時、彼らが帰ってきたので、エリシャは彼らに言った、「わたしは、あなたがたに、行つてはならないと告げたではないか」。

一九町の人々はエリシャに言った、「見られるとおり、この町の場所が良いが水が悪いので、この地は流産を起すのです」。二〇エリシャは言った、「新しい皿に塩を盛って、わたしに持ってきてなさい」。彼らは持ってきた。三エリシャは水の源へ出て行って、塩をそこに投げ入れて言った、「主はこう仰せられる、『わたしはこの水を良い水にした。もはやここには死も流産も起らないであろう』」。三三こうしてその水はエリシャの言ったとおりになり、良い水になって今日に至っている。

三三彼はそこからベテルへ上ったが、上つて行く途中、小さい子供らが町から出てきて彼をあざけり、彼にむかつて「はげ頭よ、のぼれ。はげ頭よ、のぼれ」と言ったので、三四彼はふり返つて彼らを見、主の名をもって彼らをのろつた。すると林の中から二頭の雌ぐまが出てきて、その子供らのうち四十二人を裂いた。三五彼はそこからカルメル山へ行き、そこからサマリヤに帰った。

第三章

一 ユダの王ヨシヤパテの第十八年にアハブの子ヨラムはサマリヤでイスラエルの王となり、十二年世を治めた。二 彼は主の目の前に悪をおこなったが、その父母のようではなかった。彼がその父の造ったバアルの石柱を除いたからである。三 しかし彼はイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪につき従って、それを離れなかった。

四 モアブの王メシヤは羊の飼育者で、十万の小羊と、十万の雄羊の毛とを年々イスラエルの王に納めていたが、五 アハブが死んだ後、モアブの王はイスラエルの王にそむいた。六 そこでヨラム王はその時サマリヤを出て、イスラエルびとをことごとく集め、七 また、人をユダの王ヨシヤパテにつかわし、「モアブの王はわたしにそむきました。あなたはモアブと戦うために、わたしと一緒に行かれませんか」と言わせた。彼は言った、「行きましょう。わたしはあなたと一つです。わたしの民はあなたの民と一つです。わたしの馬はあなたの馬と一つです」。八 彼はまた言った、「われわれはどの道を上るのですか」。ヨラムは答えた、「エドムの荒野の道を上りましょう」。

九 こうしてイスラエルの王はユダの王およびエドムの王と共に出て行った。しかし彼らは回り道をして、七日の間進んだが、軍勢とそれに従う家畜の飲む水がなかったので、一〇 イスラエル

の王は言った、「ああ、主は、この三人の王をモアブの手に渡そうとして召し集められたのだ」。二 ヨシヤパテは言った、「われわれが主に問うことのできる主の預言者はここにいませんか」。イスラエルの王のひとりの家来が答えた、「エリヤの手に水を注いだシヤパテの子エリシヤがここにいます」。三 ヨシヤパテは言った、「主の言葉が彼にあります」。そこでイスラエルの王とヨシヤパテとエドムの王とは彼のもとへ下つていった。

三 エリシヤはイスラエルの王に言った、「わたしはあなたとなんのかかわりがありますか。あなたの父上の預言者たちと母上の預言者たちの所へ行きなさい」。イスラエルの王は彼に言った、「いいえ、主がこの三人の王をモアブの手に渡そうとして召し集められたのです」。四 エリシヤは言った、「わたしの仕える万軍の主は生きておられます。わたしはユダの王ヨシヤパテのためにするのでなければ、あなたを顧み、あなたに会うことはしないのだが、一五 いま楽人をわたしの所に連れてきなさい」。そこで楽人が楽を奏すると、主の手が彼に臨んで、一六 彼は言った、「主はこう仰せられる、『わたしはこの谷を水たまりで満たそう』。一七 これは主がこう仰せられるからである、『あなたがたは風も雨も見ないのに、この谷に水が満ちて、あなたがたと、その家畜および獣が飲むであろう』。一八 これは主の目には小さい事である。主はモアブびとをも、あなたがたの手に渡される。一九 そしてあなたがたはすべての堅固な町と、すべての良い町を撃

ち、すべての良い木を切り倒し、すべての水の井戸をふさぎ、石をもつて地のすべての良い所を荒すであろう」。二〇あくる朝になって、供え物をささげる時に、水がエドムの方から流れてきて、水は国に満ちた。

ニさてモアブびとは皆、王たちが自分たちを攻めるために上つてきたのを聞いたので、よろいを着ることのできる者を、老いも若きもことごとく召集して、国境に配置したが、三朝はやく起きて、太陽がのぼって水を照したとき、モアブびとは目の前に血のように赤い水を見たので、三彼らは言った、「これは血だ、きつと王たちが互に戦つて殺し合つたのだ。だから、モアブよ、ぶんどりに行きなさい」。四しかしモアブびとがイスラエルの陣営に行くと、イスラエルびとは立ちあがってモアブびとを撃つたので、彼らはイスラエルの前から逃げ去つた。イスラエルびとは進んで、モアブびとを撃ち、その国にはいつて、二五町々を滅ぼし、おのおの石を一つずつ、地のすべての良い所に投げて、これに満ちし、水の井戸をことごとくふさぎ、良い木をことごとく切り倒して、ただキル・ハラセテはその名を残すのみとなつたが、石を投げる者がこれを囲んで撃ち滅ぼした。ニ六モアブの王は戦いがあまりに激しく、当りがたいのを見て、つるぎを抜く者七百人を率い、エドムの王の所に突き入ろうとしたが、果さなかつたので、ニ七自分の位を継ぐべきその長子をとつて城壁の上で燔祭としてささげた。その時イスラエルに大い

る憤りが臨んだので、彼らは彼をすてて自分の国に帰つた。

第四章

一預言者のともがらの、ひとりの妻がエリシヤに呼ばわつて言った、「あなたのしもべであるわたしの夫が死にました。ごぞんじのように、あなたのしもべは主を恐れる者でありましたが、今、債主がきて、わたしのふたりの子供を取つて奴隷にしようとしているのです」。ニエリシヤは彼女に言った、「あなたのために何をしましょうか。あなたの家にどんな物があるか、言いなさい」。彼女は言った、「二びんの油のほかは、はしのための家に何もありません」。三彼は言った、「ほかへ行つて、隣の人々から器を借りなさい。あいた器を借りなさい。少しばかりではいけません。四そして内にはいつて、あなたの子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり、そのすべての器に油をいつで、いつぱいになつたとき、一つずつそれを取りのけておきなさい」。五彼女は彼を離れて去り、子供たちと一緒に戸の内に閉じこもり、子供たちの持つて来る器に油をいつだ。六油が満ちたとき、彼女は子供に「もつと器を持つてきなさい」と言つたが、子供が「器はもうありません」と言つたので、油はとまつた。七そこで彼女は神の人のところにきて告げたので、彼は言つた、「行つて、その油を売つて負債を払いなさい。あなたと、あなたの子供たちはその残りで暮す

ことができます」。

ハある日エリシヤはシユネムへ行つたが、そこにひとりの裕福な婦人がいて、しきりに彼に食事をすすめたので、彼はそこを通ることに、そこに寄つて食事をした。九その女は夫に言った、「いつもわたしたちの所を通るあの人は確かに神の聖なる人です。一〇わたしたちは屋上に壁のある一つの小さいへやを造り、そこに寝台と机といすと燭台とを彼のために備えましょう。そうすれば彼がわたしたちの所に来るとき、そこに、はいることができます」。

二さて、ある日エリシヤはそこにきて、そのへやにはいり、そこに休んだが、三彼はそのしもべゲハジに「このシユネムの女を呼んできなさい」と言った。彼がその女を呼ぶと、彼女はきてエリシヤの前に立つたので、四エリシヤはゲハジに言った、「彼女に言いなさい、『あなたはこんなにねんごろに、わたしたちのために心を用いられたが、あなたのためには何をしたらよいでしょうか。王または軍勢の長にあなたの事をよろしく頼むことをお望みですか』」。彼女は答えて言った、「わたしは自分の民のうちに住んでいます」。五エリシヤは言った、「それでは彼女のために何をしようか」。ゲハジは言った、「彼女には子供がなく、その夫は老いています」。六するとエリシヤが「彼女を呼びなさい」と言ったので、彼女を呼ぶと、来て戸口に立つた。七エリシヤは言った、「来年の今ごろ、あなたはひとりの子を抱く

でしょう」。彼女は言った、「いいえ、わが主よ、神の人よ、はしめを欺かないでください」。八しかし女はついに身ごもつて、エリシヤが彼女に言ったように、次の年のそのころに子を産んだ。

九その子が成長して、ある日、刈入れびとの所へ出ていつて、父のもとへ行つたが、一〇父にむかつて「頭が、頭が」と言ったので、父はしもべに「彼を母のもとへ背負っていきなさい」と言った。二〇彼を背負つて母のもとへ行くと、昼まで母のひざの上ですわつていたが、ついに死んだ。二一母は上がつていつて、これを神の人の寝台の上に置き、戸を閉じて出てきた。二三そして夫を呼んで言った、「どうぞ、しもべひとりと、ろば一頭をわたしにかけてください。急いで神の人の所へ行つて、また帰ってきます」。二四夫は言った、「どうしてきよう彼の所へ行こうとするのか。きようは、ついたちでもなく、安息日でもない」。彼女は言った、「よろしいのです」。二五そして彼女はろばにくらを置いて、しもべに言った、「速く駆けさせなさい。わたしが命じる時でなければ、歩調をゆるめてはなりません」。二六こうして彼女は出発してカルメル山へ行き、神の人の所へ行つた。二七神の人は彼女の近づいてくるのを見て、しもべゲハジに言った、「向こうから、あのシユネムの女が来る。二八すぐ走つて行つて、彼女を迎えて言いなさい、『あなたは無事ですか。あなたの夫は無事ですか。あなたの子供は無事ですか』」。彼女は答えた、

「無事です」。二モところが彼女は山にきて、神の人の所へくるとエリシャの足にすがりついた。ゲハジが彼女を追いのけようと近よった時、神の人は言った、「かまわずにおきなさい。彼女は心に苦しみがあるのだから。主はそれを隠して、まだわたしにお告げにならないのだ」。二ハそこで彼女は言った、「わたしがあるに子を求めましたか。わたしを欺かないでくださいと言ったではありませんか」。三ハエリシャはゲハジに言った、「腰をひきからげ、わたしのつえを手にとって行きなさい。だれに会っても、あいさつしてはならない。またあなたにあいさつする者があつても、それに答えてはならない。わたしのつえを子供の顔の上に置きなさい」。三〇子供の母は言った、「主は生きておられます。あなたも生きておられます。わたしはあなたを離れません」。そこでエリシャはついに立ちあがつて彼女のあとについて行つた。三ゲハジは彼らの先に行つて、つえを子供の顔の上に置いたが、なんの声もなく、生きかえつたしるしもなかった。ので、帰つてきてエリシャに会い、彼に告げて「子供はまだ目をさましません」と言つた。

三エリシャが家にはいつて見ると、子供は死んで、寝台の上に横たわつていたので、三彼はいつて戸を閉じ、彼らふたりだけ内にて主に祈つた。三四そしてエリシャが上がつて子供のの上に伏し、自分の口を子供の口の上に、自分の目を子供の目の上に、自分の両手を子供の両手の上にあて、その身を子供のの上に伸

ばしたとき、子供のからだは暖かになった。三五こうしてエリシャは再び起きあがつて、家の中をあちらこちらと歩み、また上がつて、その身を子供のの上に伸ばすと、子供は七たびくしやみをして目を開いた。三六エリシャはただちにゲハジを呼んで、「あのシユネムの女を呼べ」と言つたので、彼女を呼んだ。彼女がはいつてくるとエリシャは言った、「あなたの子供をつれて行きなさい」。三モ彼女ははいつてきて、エリシャの足もとに伏し、地に身をかがめた。そしてその子供を取りあげて出ていった。

三八エリシャはギルガルに帰つたが、その地いききんがあつた。預言者のともがらが彼の前に座していたので、エリシャはそれしもべに言つた、「大きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい」。三九彼らのうちのひとりが畑に出ていつて青物をつんだが、つる草のあるのを見て、その野うりを一包つんできて、煮物のかまの中に切り込んだ。彼らはそれが何であるかを知らなかったからである。四〇やがてこれを盛つて人々に食べさせようとしたが、彼らがその煮物を食べようとした時、叫んで、「ああ神の人よ、かまの中に、たべると死ぬものがはいつています」と言つて、食べることができなかつたので、四エリシャは「それでは粉を持つて来なさい」と言つて、それをかまに投げ入れ、「盛つて人々に食べさせなさい」と言つた。かまの中には、なんの毒物もなくなつた。

四二その時、バアル・シャリシャから人がきて、初穂のパンと、

大^{おお}麦^{むぎ}のパン二十個^こと、新^{しん}穀^{こく}一袋^{ふくろ}とを神^{かみ}の人のもとに持^もつてきたので、エリシャは「人々^{ひとびと}に与^{あた}えて食^たべさせなさい」と言^いつたが、四^よ三^{さん}その召^{めし}使^{しかい}は言^いつた、「どうしてこれ^{これ}を百人^{にん}の前に供^{そな}えるのですか」。しかし彼^{かれ}は言^いつた、「人々^{ひとびと}に与^{あた}えて食^たべさせなさい。主^{しゅ}はこう言^いわれる、『彼^{かれ}らは食^たべてなお余^{あま}すであらう』。四^よ四^しそこで彼^{かれ}はそれ^{それ}を彼^{かれ}らの前に供^{そな}えたので、彼^{かれ}らは食^たべてなお余^{あま}した。主^{しゅ}の言^{ことば}葉^はのとおりであつた。

第五章

一スリヤ王^{おう}の軍勢^{ぐんぜい}の長^{ちやう}ナアマンはその主君^{しゅくん}に重^{おも}んじられた有力^{うりよく}な人^{ひと}であつた。主^{しゅ}がかつて彼^{かれ}を用^{もち}いてスリヤに勝^{しょう}利^りを得^えさせられたからである。彼^{かれ}は大^{だい}勇^{ゆう}士^しであつたが、らい病^{びやう}をわづらつていた。ニさきにスリヤびとが略^{りやく}奪^{だつ}隊^{たい}を組^くんで出^でてきたとき、イスラエルの地^ちからひとり^{ひとり}の少^{しょう}女^{じよ}を捕^{とら}えて行^いつた。彼^{かれ}女^{じよ}はナアマンの妻^{つま}に仕^{つか}えたが、三^{さん}その女主人^{おんなしゆじん}にむかつて、「ああ、御^ご主人^{しゅじん}がサマリヤにいる預^よ言^{げん}者^{しゃ}と共におられたらよかつたでしように。彼^{かれ}はそ^そのらい病^{びやう}をい^いやしたことでしように」と言^いつたので、四^よナアマンは行^いつて、その主君^{しゅくん}に、「イスラエルの地^ちからきた娘^{むすめ}がこ^こうい^いう事^{こと}を言^いいました」と告^つげると、五^ごスリヤ王^{おう}は言^いつた、「それでは行^いきなさい。わたしはイスラエルの王^{おう}に手紙^{てがみ}を書^かきましよう」。

そこで彼^{かれ}は銀^{ぎん}十^{じゅう}タラントと、金^{きん}六^{りく}千^{せん}シケルと、晴^はれ着^ぎ十^{じゅう}着^{ちやく}を携^{たず}えて行^いつた。六^{ろく}彼^{かれ}がイスラエルの王^{おう}に持^もつて行^いつた手紙^{てがみ}には、「この手紙^{てがみ}があなたにとどいたならば、わたしの家来^{けらい}ナアマンを、あなたにつかわしたとことと御承^{ごしょう}知^ちください。あなたに彼^{かれ}のらい病^{びやう}をい^いやしていただくためです」とあつた。セイスラエルの王^{おう}はその手紙^{てがみ}を読^よんだ時^{とき}、衣^{ころも}を裂^さいて言^いつた、「わたしは殺^{ころ}した人^{ひと}は、らい病^{びやう}人^{にん}をわたしにつかわして、それをい^いやせと云^いうのか。あなたがたは、彼^{かれ}がわたしに争^{あらそ}いをしかけているのを知^しつて警^{けい}戒^{かい}するがよい」。

八^{はち}神^{かみ}の人^{ひと}エリシャは、イスラエルの王^{おう}がその衣^{ころも}を裂^さいたことを聞^きき、王^{おう}に人^{ひと}をつかわして言^いつた、「どうしてあなたは衣^{ころも}を裂^さいたのですか。彼^{かれ}をわたしのもとにこさせなさい。そうすれば彼^{かれ}はイスラエルに預^よ言^{げん}者^{しゃ}のあることを知^しるようになるでしように」。九^くそこでナアマンは馬^{うま}と車^{くるま}とを従^{したが}えてきて、エリシャの家^{いえ}の入口^{いりぐち}に立^たつた。一〇するとエリシャは彼^{かれ}に使^し者^{しゃ}をつかわして言^いつた、「あなたはヨルダンへ行^いつて七^{なな}たび身^みを洗^{あら}いなさい。そうすれば、あなた^{あなた}の肉^{にく}はもとにかえつて清^{きよ}くなるでしように」。二しかしナアマンは怒^{いか}つて去^さり、そして言^いつた、「わたしは、彼^{かれ}がきつとわたしのもとに出^でてきて立^たち、その神^{かみ}、主^{しゅ}の名^なを呼^よんで、その箇^か所^{しょ}の上^{うへ}に手^てを動^{うご}かして、らい病^{びやう}をい^いやすのだらうと思^{おも}つた。三^{さん}ダマスコの川^{かわ}アバナとパルパルはイスラエルのすべ

の川水にまざるではないか。わたしはこれらの川に身を洗って清まることができないのであろうか」。こうして彼は身をめぐらし、怒って去った。三その時、しもべたちは彼に近よって言った、「わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしようか。まして彼はあなたに『身を洗って清くなれ』と言うだけではありませんか」。四そこでナアマンは下つて行って、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を浸すと、その肉がもとにかえって幼な子の肉のようになり、清くなった。

五彼はすべての従者を連れて神の人のもとに帰ってきて、その前に立つて言った、「わたしは今、イスラエルのほか、全地のどこにも神のおられないことを知りました。それゆえ、どうぞ、しもべの贈り物を受けてください」。六エリシャは言った、「わたしの仕える主は生きておられる。わたしは何も受けません」。彼はして受けさせようとしたが、それを拒んだ。七そこでナアマンは言った、「もしお受けにならないのであれば、どうぞ驛馬に二駄の土をしもべにください。これから後しもべは、他の神には燔祭も犠牲もささげず、ただ主ののみささげます。八どうぞ主がこの事を、しもべにおゆるしくださるようにな。すなわち、わたしの主君がリンモンの宮にはいつて、そこで礼拝するとき、わたしの手によりかかることがあり、またわたしもリンモンの宮で身をかめることがありましよう。わたしはリンモン

の宮で身をかめる時、どうぞ主がその事を、しもべにおゆるしくださるようにな」。九エリシャは彼に言った、「安んじて行きなさい」。

ナアマンがエリシャを離れて少し行ったとき、一〇神の人エリシャのしもべゲハジは言った、「主人はこのスリヤびとナアマンをいたわつて、彼が携えてきた物を受けなかった。主は生きておられる。わたしは彼のとを追いかけて、彼から少し、物を受けよう」。三そしてゲハジはナアマンのあとを追つたが、ナアマンは自分のあとから彼が走つてくるのを見て、車から降り、彼を迎えて、「変つた事があるのですか」と言うと、三彼は言った、「無事です。主人がわたしをつかわして言わせます、『ただいまエフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若者が、わたしのもとに來ましたので、どうぞ彼らに銀一タラントと晴れ着二着を与えてください』」。三ナアマンは、「どうぞ二タラントを受けてください」と言つて彼にいい、銀二タラントを二つの袋に入れ、晴れ着二着を添えて、自分のふたりのしもべに渡したので、彼らはそれを負つてゲハジの先に立つて進んだが、四彼は丘にきたとき、それを彼らの手から受け取つて家のうちにおさめ、人々を送りかえしたので、彼らは去つた。五彼がはいつて主人の前に立つと、エリシャは彼に言った、「ゲハジよ、どこへ行つてきたのか」。彼は言った、「しもべはどこへも行きません」。六エリシャは言った、「あの人が車をはなれて、あなた

を迎えたとき、わたしの心はあなたと一緒にそこにいたではないか。今は金を受け、着物を受け、オリブ畑、ぶどう畑、羊、牛、しもべ、はしためを受ける時であろうか。ニモそれゆえ、ナアマンのらしい病はあなたに着き、ながくあなたの子孫に及ぶであろう」。彼がエリシャの前を出ていくとき、らしい病が発して雪のようになくなっていった。

第六章

一 さて預言者のともがらはエリシャに言った、「わたしたちがあなたと共に住んでいる所は狭くなりましたので、ニわたしたちをヨルダンに行かせ、そこからめいめい一本ずつ材木を取ってきて、わたしたちの住む場所を造らせてください」。エリシャは言った、「行きなさい」。三 時にそのひとり、二「どうぞあなたも、しもべらと一緒に行ってください」と言ったので、エリシャは「行きましょう」と答えた。四 そしてエリシャは彼らと一緒に行った。彼らはヨルダンへ行って木を切り倒したが、五 ひとりが材木を切り倒しているとき、おのの頭が水の中に落ちたので、彼は叫んで言った。「ああ、わが主よ。これは借りたものです」。六 神の人は言った、「それはどこに落ちたのか」。彼がその場所を知らせると、エリシャは一本の枝を切り落とし、そこに投げ入れて、そのおのの頭を浮かべ、七「それを取りあげよ」と言ったの

で、その人は手を伸べてそれを取った。

八 かつてスリヤの王がイスラエルと戦っていたとき、家来たちと評議して「しかじかの所にわたしの陣を張ろう」と言うと、九 神の人はイスラエルの王に「あなたは用心して、この所をとってはなりません。スリヤびとがそこに下つてきますから」と言い送った。一〇 それでイスラエルの王は神の人が自分に告げてくれた所の人をつかわし、警戒したので、その所でみずからを防ぎえたことは一、二 回にとどまらなかった。

二 スリヤの王はこの事のために心を悩まし、家来たちを召して言った、「われわれのうち、だれがイスラエルの王と通じているのか、わたしに告げる者はないか」。三 ひとりの家来が言った、「王、わが主よ、だれも通じている者はいません。ただイスラエルの預言者エリシャが、あなたが寢室で語られる言葉でもイスラエルの王に告げるのです」。四 王は言った、「彼がどこにいるか行って捜しなさい。わたしは人をやって彼を捕えよう」。時に「彼はドタンにいる」と王に告げる者があつたので、五 王はそこに馬と戦車および大軍をつかわした。彼らは夜のうちに来て、その町を囲んだ。

六 神の人の召使が朝早く起きて出て見ると、軍勢が馬と戦車をもって町を囲んでいたの、その若者はエリシャに言った、「ああ、わが主よ、わたしたちはどうしましょうか」。七 エリシャは言った、「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼

らと共にいる者よりも多いのだから」。二七そしてエリシヤが祈つて「主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください」と言う、主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシヤのまわりにあつた。「ハスリヤびとがエリシヤの所に下つてきた時、エリシヤは主に祈つて言つた、「どうぞ、この人々の目をくらましてください」。するとエリシヤの言葉のとおり、彼らの目をくらまされた。一九そこでエリシヤは彼らに「これはその道ではない。これはその町でもない。わたしについてきなさい。わたしはあなたがたを、あなたがたの尋ねる人の所へ連れて行きましょう」と言つて、彼らをサマリヤへ連れて行つた。

三〇彼らがサマリヤにはいったとき、エリシヤは言つた、「主よ、この人々の目を開いて見させてください」。主は彼らの目を開かれたので、彼らが見ると、見よ、彼らはサマリヤのうちに來ていた。三イスラエルの王は彼らを見て、エリシヤに言つた、「わが父よ、彼らを撃ち殺しましょうか。彼らを撃ち殺しましょうか」。三エリシヤは答えた、「撃ち殺してはならない。あなたはつるぎと弓をもつて、捕虜にした者どもを撃ち殺すでしょうか。パンと水を彼らの前に供えて食い飲みさせ、その主君のもとへ行かせなさい」。三そこで王は彼らのために盛んなふるまいを設けた。彼らが食い飲みを終わると彼らを去らせたので、その主君の所へ歸つた。スリヤの略奪隊は再びイスラエルの地に

こなかつた。

二四この後スリヤの王ベネハダデはその全軍を集め、上つてきてサマリヤを攻め囲んだので、二五サマリヤに激しいききんが起つた。すなわち彼らがこれを攻め囲んだので、ついに、ろばの頭一つが銀八十シケルで売られ、はとのふん一カブの四分の一が銀五十シケルで売られるようになった。二六イスラエルの王が城壁の上をとつていた時、ひとりの女が彼に呼ばわつて、「わが主、王よ、助けてください」と言つたので、二七彼は言つた、「もし主があなたを助けられないならば、何をもつてわたしがあなたを助けることができよう。打ち場の物をもつてか、酒ぶねの物をもつてか」。二八そして王は女に尋ねた、「何事なのですか」。彼女は答えた、「この女はわたしにむかつて『あなたの子をください。わたしたちは、きようそれを食べ、あす、わたしの子を食べましょう』と言いました。二九それでわたしたちは、まずわたしの子を煮て食べましたが、次の日わたしが彼女にむかつて『あなたの子をください。わたしたちはそれを食べましょう』と言いますと、彼女はその子を隠しました」。三〇王はその女の言葉を聞いて、衣を裂き、――王は城壁の上をとつていたが、民が見ると、その身に荒布を着けていた――三一そして王は言つた「きよう、シャパテの子エリシヤの首がその肩の上にすわつていゝるならば、神がどんなにでもわたしを罰してくださいるように」。三二さてエリシヤはその家に座していたが、長老たちもきて彼

と共に座した。王は自分の所から人をつかわしたが、エリシヤはその使者がまだ着かないうちに長老たちに言った、「あなたがたは、この人を殺す者がわたしの首を取るために、人をつかわすのを見ますか。その使者がきたならば、戸を閉じて、内に入れたはなりません。彼のうしろに、その主君の足音がするではありませんか」。三三彼がなお彼らと語っているうちに、王は彼のもとに下つてきて言った、「この災は主から出たのです。わたしはどうしてこの上、主を待たなければならぬでしょうか」。

第七章

一エリシヤは言った、「主の言葉を聞きなさい。主はこう仰せられる、『あすの今ごろサマリヤの門で、麦粉一セアを一シケルで売り、大麦二セアを一シケルで売るようになるであらう』」。二時にひとりの副官すなわち王がその人の手によりかかつていた者が神の人に答えて言った、「たとい主が天に窓を開かれても、そんな事がありえましようか」。エリシヤは言った、「あなたは自分の目をもってそれを見るであらう。しかしそれを食べることはなからう」。三さて町の門の入口に四人のらい病人がいたが、彼らは互に言った、「われわれはどうしてここに座して死を待たねばならぬのか。四われわれがもし町にはいろうといえ、町には食物

が尽きているから、われわれはそこで死ぬであらう。しかしここに座していても死ぬのだ。いつその事、われわれはスリヤびとの陣営へ逃げて行こう。もし彼らがわれわれを生かしておいてくれるならば、助かるが、たといわれわれを殺しても死ぬばかりだ」。五そこで彼らはスリヤびとの陣営へ行こうと、たそがれに立ちあがったが、スリヤびとの陣営のほとりに行つて見ると、そこにはだれもいなかった。六これは主がスリヤびとの軍勢に戦車の音、馬の音、大軍の音を聞かせられたので、彼らは互に「見よ、イスラエルの王がわれわれを攻めるために、ヘテびとの王たちおよびエジプトの王たちを雇つてきて、われわれを襲うのだ」と言つて、またそがれに立つて逃げ、その天幕と、馬と、ろばを捨て、陣営をそのままにして置いて、命を全うしようと逃げたからである。八そこでらい病人たちは陣営のほとりに行き、一つの天幕にはいつて食い飲みし、そこから金銀衣服を持ち出してそれを隠し、また来て、他の天幕に入り、そこからも持ち出してそれを隠した。九そして彼らは互に言った、「われわれのしている事はよくない。きようは良いおとずれのある日であるのに、黙つていて、夜明けまで待つならば、われわれは罰をこうむるであらう。さあ、われわれは行つて王の家族に告げよう」。一〇そこで彼らは来て、町の門を守る者を呼んで言った、「わたしたちがスリヤびとの陣営に行つて見ると、そこにはだれの姿も見えず、また人声

もなく、ただ、馬とろばがつないであり、天幕はそのままでした。二そこで門を守る者は呼ばわって、それを王の家族のうちに知らせた。三王は夜のうちに起きて、家来たちに言った、「スリヤびとがわれわれに對して図っている事をあなたがたに告げよう。彼らは、われわれの飢えているのを知つて、陣營を出て野に隠れ、『イスラエルびとが町を出たら、いけどりにして、町に押し入ろう』と考えているのだ。」四家来のひとりか答えて言った、「人々に、ここに残っている馬のうち五頭を連れてこさせてください。ここに残っているこれらの人々は、すでに滅びうせたイスラエルの全群衆と同じ運命にあうのですから。わたしは人をやつてうかがわせましょう。」五そこで彼らはふたりの騎兵を選んだ。王はそれをつかわし、「行つて見よ」と言つて、スリヤびとの軍勢のあとをつけさせたので、二五彼らはそのあとを追つてヨルダンまで行つたが、道にはすべて、スリヤびとがあわてて逃げる時に捨てていった衣服と武器が散らばっていた。その使者は歸つてきて、これを王に告げた。

二六そこで民が出ていつて、スリヤびとの陣營をかすめたので、麦粉一セアは一シケルで売られ、大麦二セアは一シケルで売られ、主の言葉のとおりになつた。二七王は自分がその人の手によりかかつていた、あの副官を立てて門を管理させたが、民は門で彼を踏みつけたので、彼は死んだ。すなわち、王が神の人のところの下つてきた時、神の人が言つたとおりであつた。二八これは

神の人が王にむかつて、「あすの今ごろ、サマリヤの門で大麦二セアを一シケルで売り、麦粉一セアを一シケルで売るようになるであろう」と言つたときに、一九その副官が神の人に答えて、「たとい主が天に窓を開かれても、そんな事がありえようか」と言つたからである。そのとき神の人は「あなたは自分の目をもつてそれを見るであろう。しかしそれを食べることはなからう」と言つたが、二〇これはそのとおり彼に臨んだ。すなわち民が門で彼を踏みつけたので彼は死んだ。

第八章

一エリシャはかつて、その子を生きかえらせてやつた女に言ったことがある。「あなたは、ここを立つて、あなたの家族と共に行き、寄留しようと思ふ所に寄留しなさい。主がききんを呼び下されたので、七年の間それがこの地に臨むから。」二そこで女は立つて神の人の言葉のようになし、その家族と共に行つてペリシテびとの地に七年寄留した。三七年たつて後、女はペリシテびとの地から歸つてきて、自分の家と畑のために王に訴えようとしていつた。四時に王は神の人のしもべゲハジにむかつて「エリシャがしたもうもの大きな事をわたしに話してください」と言つて、彼と物語つていた。五すなわちエリシャが死人を生きかえらせた事を、ゲハジが王と物語つていたとき、その子を生き

かえらせてもらった女が、自分の家と畑のために王に訴えてきたので、ゲハジは言った、「わが主、王よ、これがその女です。またこれがその子で、エリシャが生きかえらせたのです」。六王がその女に尋ねると、彼女は王に話したので、王は彼女のためにひとりの役人に命じて言った、「すべて彼女に属する物、ならびに彼女がこの地を去った日から今までのその畑の産物をことごとく彼女に返しなさい」。

七さてエリシャはダマスコに來た。時にスリヤの王ベネハダデは病氣であつたが、「神の人がここに來た」と告げる者があつたので、ハ王はハザエルに言った、「贈り物を携えて行つて神の人を迎え、彼によつて主に『わたしのこの病氣はなおりましようか』と言つて尋ねなさい」。九そこでハザエルは彼を迎えよう、ダマスコのもろもろの良い物をらくだ四十頭に載せ、贈り物として携え行き、エリシャの前に立つて言った、「あなたの子、スリヤの王ベネハダデがわたしをあなたにつかわして、『わたしのこの病氣はなおりましようか』と言わせています」。一〇エリシャは彼に言った、「行つて彼に『あなたは必ずなおります』と告げなさい。ただし主はわたしに、彼が必ず死ぬことを示されました」。一三そして神の人がひとみを定めて彼の恥じるまで見つめ、やがて泣き出したので、二ハザエルは言った、「わが主よ、どうして泣かれるのですか」。エリシャは答えた、「わたしはあなたがイスラエルの人々にしようとする害悪を知っているか

らです。すなわち、あなたは彼らの城に火をかけ、つるぎをもつて若者を殺し、幼な子を投げうち、妊娠の女を引き裂くでしょう」。一三ハザエルは言った、「しもべは一匹の犬にすぎないのに、どうしてそんな大きな事をする事ができましよう」。エリシャは言った、「主がわたしに示されました。あなたはスリヤの王となるでしょう」。一四彼がエリシャのもとを去つて、主君のところへ行くと、「エリシャはあなたになんと言つたか」と尋ねられたので、「あなたが必ずなおるでしょうと、彼はわたしに告げました」と答えた。一五しかし翌日になつてハザエルは布を取つて水に浸し、それをもつて王の顔をおおつたので、王は死んだ。ハザエルは彼に代つて王となつた。

一六イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年に、ユダの王ヨシヤパテの子ヨラムが位についた。一七彼は王となつたとき三十二歳で、八年の間エルサレムで世を治めた。一八彼はアハブの家がしたようにイスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘が彼の妻であつたからである。彼は主の目の前に悪をおこなつたが、一九主はしもべバビデのためにユダを滅ぼすことを好まれなかつた。すなわち主は彼とその子孫に常にともしびを与える

と、彼に約束されたからである。二〇ヨラムの世にエドムがそむいてユダの支配を脱し、みずから王を立てたので、二ヨラムはすべての戦車を従えてザイルにわたつて行き、その戦車の指揮官たちと共に、夜のうちに立ちあ

がつて、彼を包围しているエドムびとを撃った。しかしヨラムの軍隊は天幕に逃げ帰った。三エドムはこのようにそむいてユダの支配を脱し、今日に至っている。リブナもまた同時にそむいた。三ヨラムのその他の事績および彼がしたすべての事は、ユダの歴代志の書に記されているではないか。二四ヨラムはその先祖たちと共に眠って、ダビデの町にその先祖たちと共に葬られ、その子アハジヤが代つて王となった。

二五イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年にユダの王ヨラムの子アハジヤが位についた。二六アハジヤは王となったとき二十二歳で、エルサレムで一年世を治めた。その母は名をアタリヤと言つて、イスラエルの王オムリの孫娘であつた。二モアハジヤはまたアハブの家の道に歩み、アハブの家がしたように主の目の前に悪をおこなつた。彼はアハブの家の婿であつたからである。

二八彼はアハブの子ヨラムと共に行つて、スリヤの王ハザエルとラモテ・ギレアデで戦つたが、スリヤびとらはヨラムに傷を負わせた。二九ヨラム王はそのスリヤの王ハザエルと戦うときにラマでスリヤびとに負わされた傷をいやすため、エズレルに帰つたが、ユダの王ヨラムの子アハジヤはアハブの子ヨラムが病んでいたので、エズレルに下つて彼をおとずれた。

第九章

一時に預言者エリシャは預言者のともがらのひとりを呼んで言つた、「腰をひきからげ、この油のびんを携えて、ラモテ・ギレアデへ行きなさい。ニそこに着いたならば、ニムシの子ヨシヤパテの子であるエヒウを尋ね出し、内にはいつて彼をその同僚たちのうちから立たせて、奥の間に連れて行き、ニ油のびんを取つて、その頭に注ぎ、『主はこう仰せられる、わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とする』と言ひ、そして戸をあけて逃去りなさい。とどまつてはならない」。

四そこで預言者であるその若者はラモテ・ギレアデへ行つたが、五来て見ると、軍勢の長たちが会議中であつたので、彼は「將軍よ、わたしはあなたに申しあげる事があります」と言つと、エヒウが答えて、「われわれすべてのうちの、だれにですか」と言つたので、彼は「將軍よ、あなたにです」と言つた。六するとエヒウが立ちあがつて家にはいつたので、若者はその頭に油を注いで彼に言つた、「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『わたしはあなたに油を注いで、主の民イスラエルの王とする。七あなたは主君アハブの家を撃ち滅ぼさなければならぬ。それによつてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血と、主のすべてのしもべたちの血をイゼベルに報いる。ハアハブの全家は滅びるであらう。アハブに属する男は、イスラエルにいて、つ

ながれた者も、自由な者も、ことごとくわたしは断ち、ユアハブの家をネバテの子ヤラバアムのようにし、アヒヤの子バアシャの家のようにする。二〇犬がイズレルの地域でイゼベルを食い、彼女を葬る者はないであろう』。そして彼は戸をあけて逃げ去った。

二やがてエヒウが主君の家来たちの所へ出て来ると、彼らはエヒウに言った、「変った事はありませんか。あの気違いは、なんのためにあなたの所にきたのですか」。エヒウは彼らに言った、「あなたがたは、あの人を知っています。またその言う事も知っています」。二彼らは言った、「それは違います。どうぞわれわれに話してください」。そこでエヒウは言った、「彼はこうこう、わたしに告げて言いました、『主はこう仰せられる、わたしはあなたに油を注いで、イスラエルの王とする』。三すると彼らは急いで、おのおの衣服をとり、それを階段の上のエヒウの下に敷き、ラツパを吹いて「エヒウは王である」と言った。

四こうしてニムシの子であるヨシャパテの子エヒウはヨラムにそむいた。(ヨラムはイスラエルをことごとく率いて、ラモテ・ギレアデでスリヤの王ハザエルを防いだが、五ヨラム王はスリヤの王ハザエルと戦った時に、スリヤびとに負わされた傷をいやすため、エズレルに帰っていた。)エヒウは言った、「もしこれがあなたがたの本心であるならば、ひとりもこの町から忍び出て、これをエズレルに告げてはならない」。六そしてエヒ

ウは車に乗ってエズレルへ行つた。ヨラムがそこに伏していたからである。またユダの王アハジヤはヨラムを見舞うために下っていた。

七さてエズレルのやぐらに、ひとりの物見が立っていたが、エヒウの群衆が来るのを見て、「群衆が見える」と言ったので、ヨラムは言った、「ひとりを馬に乗せてつかわし、それに会わせて『平安ですか』と言わせなさい」。八そこでひとりが馬に乗って行き、彼に会って言った、「王はこう仰せられます、『平安ですか』」。エヒウ言った、「あなたは平安となんの關係がありますか。わたしのあとについてきなさい」。物見はまた告げて言った、「使者は彼らの所へ行きましたが、帰ってきません」。九そこで再び人を馬でつかわしたので、彼らの所へ行つて言った、「王はこう仰せられます、『平安ですか』」。エヒウは答えて言った、「あなたは平安となんの關係がありますか。わたしのあとについてきなさい」。二〇物見はまた告げて言った、「彼も、彼らの所へ行きましたが帰ってきません。あの車の操縦はニムシの子エヒウの操縦するのに似て、猛烈な勢いで操縦して来ます」。三そこでヨラムが「車を用意せよ」と言ったので、車を用意すると、イスラエルの王ヨラムと、ユダの王アハジヤは、おのその車で出て行った。すなわちエヒウに会うために出て行って、エズレルびとナボテの地所で彼に会った。三ヨラムはエヒウを見て言った、「エヒウよ、平安ですか」。エヒウは答えた、「あ

なたの母イゼベルの姦淫と魔術とが、こんなに多いのに、どうして平安でありえましようか」。三三その時ヨラムは車をめぐらして逃げ、アハジヤにむかつて、「アハジヤよ、反逆です」と言う。二四エヒウは手に弓をひきしぼって、ヨラムの両肩の間を射たので、矢は彼の心臓を貫き、彼は車の中に倒れた。二五エヒウはその副官ビデカルに言った、「彼を取りあげて、エズレルびとナボテの畑に投げ捨てなさい。かつて、わたしとあなたと、ふたり共に乗って、彼の父アハブに従ったとき、主が彼について、この預言をされたことを記憶しなさい。二六すなわち主は言われた、『まことに、わたしはきのうナボテの血と、その子らの血を見た』。また主は言われた、『わたしはこの地所であなかに報復する』と。それゆえ彼を取りあげて、その地所に投げすて、主の言葉のようになさい」。

二七ユダの王アハジヤはこれを見てベテハガンの方へ逃げたが、エヒウはそのあとを追ひ、「彼をも撃て」と言ったので、イブレアムのほとりのグルの坂で車の中の彼を撃った。彼はメギドまで逃げて行って、そこで死んだ。二八その家来たちは彼を車に載せてエルサレムに運び、ダビデの町で彼の墓にその先祖たちと共に葬った。

二九アハブの子ヨラムの第十一年にアハジヤはユダの王となつたのである。

三〇エヒウがエズレルにきた時、イゼベルはそれを聞いて、その

目を塗り、髪を飾って窓から望み見たが、三エヒウが門にはいつてきたので、「主君を殺したジムリよ、無事ですか」と言つた。三三するとエヒウは顔をあげて窓にむかい、「だれか、わたしに味方する者があるか。だれかあるか」と言う。二、三人の宦官がエヒウを望み見たので、三エヒウは「彼女を投げ落せ」と言つた。彼らは彼女を投げ落したので、その血が壁と馬とはねかかった。そして馬は彼女を踏みつけた。三四エヒウは内にはいつて食い飲みし、そして言つた、「あののろわれた女を見、彼女を葬りなさい。彼女は王の娘なのだ」。三五しかし彼らが彼女を葬ろうとして行つて見ると、頭蓋骨と、足と、たなごころのほか何もなかった。三六帰つて、彼に告げると、彼は言つた、「これは主が、そのしもべ、テシベびとエリヤによつてお告げになつた言葉である。すなわち『エズレルの地で犬がイゼベルの肉を食うであろう。三モイゼベルの死体はエズレルの地で、糞土のように野のおもてに捨てられて、だれも、これはイゼベルだ、と言うことができないであろう』」。

第二〇章

一アハブはサマリヤに七十人の子供があつた。エヒウは手紙をしたためてサマリヤに送り、町のつかさたちと、長老たちと、アハブの子供の守役たちとに伝えて言つた、「二あなたがたの主君

の子供たちがあなたがたと共におり、また戦車も馬も、堅固な町も武器もあるのだから、この手紙があなたがたのもとに届いたらば、すぐ、三あなたがたは主君の子供たちのうち最もすぐれた、最も適当な者を選んで、その父の位にすえ、主君の家のために戦いなさい。四彼らは大いに恐れて言った、「ふたりの王たちがすでに彼に当ることができなかつたのに、われわれがどうして当ることができよう」。五そこで宮廷のつかさ、町のつかさ、長老たちと守役たちはエヒウに人をつかわして言った、「わたしたちは、あなたのしもべです。すべてあなたが命じられる事をいたします。わたしたちは王を立てることを好みません。あなたがよいと思われることをしてください」。六そこでエヒウは再び彼らに手紙を書き送って言った、「もしあなたがたが、わたしに味方し、わたしに従おうとするならば、あなたがたの主君の子供たちの首を取って、あすの今ごろエズレルにいるわたしのもとに持ってきたさい。そのころ、王の子供たち七十人は彼らを育てていた町のおもだった人々と共にいた。七彼らはその手紙を受け取ると、王の子供たちを捕えて、その七十人をことごとく殺し、その首をかごにつめて、エズレルにいるエヒウのもとに送った。八使者が来て、エヒウに告げ、「人々が王の子供たちの首を持ってきました」と言うのと、「あくる朝までそれを門の入口に、ふた山に積んでおけ」と言った。九朝になると、彼は出て行って立ち、すべての民に言った、「あなたがたは正しい。主君にそ

むいて彼を殺したのはわたしです。しかしこのすべての者どもを殺したのはだれですか。一〇これであなたがたは、主がアハブの家について告げられた主の言葉は一つも地に落ちないことを知りなさい。主は、そのしもべエリヤによってお告げになった事をなし遂げられたのです。一一こうしてエヒウは、アハブの家に属する者でエズレルに残っている者をことごとく殺し、またそのすべてのおもだった者、その親しい者およびその祭司たちを殺して、彼に属する者はひとりも残さなかつた。一二さてエヒウは立つてサマリヤへ行つたが、途中、牧者の集まり場で、一三ユダの王アハジヤの身内の人々に会い、「あなたがたはどなたですか」と言うのと、「わたしたちはアハジヤの身内の者ですが、王の子供たちと、王母の子供たちの安否を問うために下ってきたのです」と答えたので、一四エヒウは「彼らをいけどれ」と命じた。そこで彼らをいけどつて、集まり場の穴のかたわらで彼ら四十二人をことごとく殺し、ひとりをも残さなかつた。一五エヒウはそこを立つて行つたが、自分を迎えにきたレカブの子ヨナダブに会つたので、彼にあいさつして、「あなたの心は、わたしがあなたに対するように真実ですか」と言うのと、ヨナダブは「真実です」と答えた。するとエヒウは「それならば、あなたの手をわたしに伸べなさい」と言つたので、その手を伸べると、彼を引いて自分の車に上らせ、一六「わたしと一緒にきて、わたしがあなたが主になすのを見なさい」と言つた。そして彼を自分の車に

乗せ、ニモサマリヤへ行つて、アハブに属する者で、サマリヤに残っている者をことごとく殺して、その一族を滅ぼした。主がエリヤにお告げになった言葉のとおりである。

「八次いでエヒウは民をことごとく集めて彼らに言った、「アハブは少しばかりバアルに仕えたが、エヒウは大いにこれに仕えるであらう。一九それゆえ、今バアルのすべての預言者、すべての礼拝者、すべての祭司をわたしのもとに召しなさい。ひとりもこない者のないようにしなさい。わたしは大いなる犠牲をバアルにささげようとしている。すべてこない者は生かしておかない」。しかしエヒウはバアルの礼拝者たちを滅ぼすために偽つてこうしたのである。ニ〇そしてエヒウは「バアルのために聖会を催しなさい」と命じたので、彼らはこれを布告した。ニエヒウはあまねくイスラエルに人をつかわしたので、バアルの礼拝者たちはことごとく来た。こないで残った者はひとりもなかった。彼らはバアルの宮にはいったので、バアルの宮は端から端までいっぱいになった。ニ三その時エヒウは衣装をつかさどる者に「祭服を取り出してバアルのすべての礼拝者に与えよ」と言ったので、彼らのために祭服を取り出した。ニ四そしてエヒウはレカブの子ヨナダブと共にバアルの宮に入り、バアルの礼拝者たちに言った、「調べてみて、ここにはただバアルの礼拝者のみで、主のしもべはひとりも、あなたがたのうちにいないようにしなさい」。ニ四こうして彼は犠牲と燔祭とをささげる

ためにはいった。

さてエヒウは八十人の者を外に置いて言った、「わたしがあなたがたの手に渡す者をひとりでも逃す者は、自分の命をもってその人の命に換えなければならない」。ニ五こうして燔祭をささげることが終ったとき、エヒウはその侍衛と將校たちに言った、「はいって彼らを殺せ。ひとりも逃がしてはならない」。侍衛と將校たちはつるぎをもつて彼らを撃ち殺し、それを投げ出して、バアルの宮の本殿に入り、ニ六バアルの宮にある柱の像を取り出して、それを焼いた。ニ七また彼らはバアルの石柱をこわし、バアルの宮をこわして、かわやとしたが今日まで残っている。

ニ八このようにエヒウはイスラエルのうちからバアルを一掃した。ニ九しかしエヒウはイスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪、すなわちベテルとダンにある金の子牛に仕えることをやめなかった。ニ〇主はエヒウに言われた、「あなたはわたしの目にかなう事を行うにあたって、よくそれを行い、またわたしの心にあるすべての事をアハブの家にしたので、あなたの子孫は四代までイスラエルの位に座するであらう」。ニ一しかしエヒウはイスラエルの神、主の律法を心をつくして守り行おうとはせず、イスラエルに罪を犯させたヤラベアムの罪を離れなかった。

ニ二この時にあたって、主はイスラエルの領地を切り取ることを

始められた。すなわちハザエルはイスラエルのすべての領域を侵し、ミヨルダンの東で、ギレアドの全地、カドびと、ルベンびと、マナセびとの地を侵し、アルノン川のほとりにあるアロエルからギレアドとバシヤンに及んだ。三四エヒウのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇は、ことごとくイスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。三五エヒウはその先祖たちと共に眠ったので、彼をサマリヤに葬った。その子エホアハズが代つて王となった。三六エヒウがサマリヤでイスラエルを治めたのは二十八年であつた。

第一章

一 さてアハジヤの母アタリヤはその子の死んだのを見て、立つて王の一族をことごとく滅ぼしたが、ニヨラム王の娘で、アハジヤの姉妹であるエホシバはアハジヤの子ヨアシを、殺されようとしている王の子たちのうちから盗み取り、彼とそうばとを寝室に入れて、アタリヤに隠したので、彼はついに殺されなかつた。ミヨアシはうばと共に六年の間、主の宮に隠れていたが、その間アタリヤが国を治めた。

四 第七年になつてエホヤダは人をつかわして、カリびとと近衛兵との大將たちを招きよせ、主の宮にいる自分のもとにこさせ、彼らと契約を結び、主の宮で彼らに誓いをさせて王の子を見

せ、五命じて言つた、「あなたがたのする事はこれです、すなわち、安息日に非番となつて王の家を守るあなたがたの三分の一は、六宮殿を守らなければならない。(他の三分の一はスルの門におり、三分の一は近衛兵のうしろの門におる)。すべて安息日に当番で主の宮を守るあなたがたの二つの部隊は、ハのおのの武器を手につけて王のまわりに立たなければならない。すべて列に近よる者は殺されなければならない。あなたがたは王が出る時にも、はいる時にも王と共にいなければならない。」

九 そこでその大將たちは祭司エホヤダがすべて命じたとおりにおこなつた。すなわち彼らはおのおの安息日に非番となる者と、安息日に当番となる者となつて率いて祭司エホヤダのもとにきたので、一 祭司は主の宮にあるダビデ王のやりと盾を大將たちに渡した。二 近衛兵はおのおの手に武器をとつて主の宮の南側から北側まで、祭壇と宮を取り巻いて立つた。三 そこでエホヤダは王の子をつれ出して冠をいだかせ、律法の書を渡し、彼を王と宣言して油を注いだので、人々は手を打つて「王万歳」と言つた。

一三 アタリヤは近衛兵と民の声を聞いて、主の宮に入り、民のところへ行つて、一四 見ると、王は慣例にしたがつて柱のかたわらに立ち、王のかたわらには大將たちとラツパ手たちが立ち、また国の民は皆喜んでラツパを吹いていたので、アタリヤはその

衣を裂いて、「反逆です、反逆です」と叫んだ。二五その時祭司エホヤダは軍勢を指揮していた大將たちに命じて、「彼女を列の間をとおつて出て行かせ、彼女に従う者をつるぎをもつて殺しなさい」と言った。これは祭司がさきに「彼女を主の宮で殺してはならない」と言つたからである。一六そこで彼らは彼女を捕え、王の家の馬道へ連れて行つたが、彼女はついにそこで殺された。

一七かくてエホヤダは主と王および民との間に、皆主の民となるという契約を立てさせ、また王と民との間にもそれを立てさせた。一八そこで国の民は皆バアルの宮に行つて、これをこわし、その祭壇とその像を打ち砕き、バアルの祭司マツタンをその祭壇の前で殺した。そして祭司は主の宮に管理人を置いた。一九次いでエホヤダは大將たちと、カリびとと、近衛兵と国のすべての民を率いて、主の宮から王を導き下り、近衛兵の門の道から王の家に入り、王の位に座せしめた。二〇こうして国の民は皆喜び、町はアタリヤが王の家でつるぎをもつて殺されてのち、おだやかになった。二一ヨアシは位についた時七歳であつた。

第二章

一ヨアシはエヒウの第七年に位につき、エルサレムで四十年の間、世を治めた。その母はベエルシバの出身で、名をデビアと

いつた。二ヨアシは一生の間、主の目にかなう事をおこなつた。祭司エホヤダが彼を教えたからである。三しかし高き所は除かなかつたので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。

四ヨアシは祭司たちに言つた、「すべて主の宮に聖別してささげる銀、すなわちおのおのが課せられて、割当てしたがって人々の出す銀、および人々が心から願つて主の宮の持つてくる銀は、五これを祭司たちがおのおのその知る人から受け取り、どこでも主の宮に破れの見える時は、それをもつてその破れを繕わなければならない。六ところがヨアシ王の二十三年に至るまで、祭司たちは主の宮の破れを繕わなかつた。七それで、ヨアシ王は祭司エホヤダおよび他の祭司たちを召して言つた、「なぜ、あなたがたは主の宮の破れを繕わないのか。あなたがたはもはや知人から銀を受けてはならない。主の宮の破れを繕うためにそれを渡しなさい。八祭司たちは重ねて民から銀を受けない事と、主の宮の破れを繕わない事とに同意した。

九そこで祭司エホヤダは一つの箱を取り、そのふたに穴をあけて、それを守る祭司の宮の入口の右側、祭壇のかたわらに置いた。そして門を守る祭司たちは主の宮にはいつてくる銀をこごとくその中に入れた。一〇こうしてその箱の中に銀が多くなつたのを見ると、王の書記官と大祭司が上つてきて、主の宮にある銀を数えて袋に詰めた。二そしてその数えた銀を、工事をつかさどる

主の宮の監督者の手にわたしたので、彼らはそれを主の宮に働く木工と建築師に払い、三石工および石切りに払い、またそれをもつて主の宮の破れを繕う材木と切り石を買い、主の宮を繕うために用いるすべての物のために費した。三ただし、主の宮にはいつてくるその銀をもつて主の宮のために銀のたらい、心切りばさみ、鉢、ラツパ、金の器、銀の器などを造ることはしなかった。四ただこれを工事をする者に渡して、それで主の宮を繕わせた。五またその銀を渡して工事をする者に払わせた人々と計算することはしなかった。彼らは正直に事をおこなったからである。六窓祭の銀と罪祭の銀は主の宮に、はいらないで、祭司に帰した。

七そのころ、スリヤの王ハザエルが上つてきて、ガテを攻めてこれを取った。そしてハザエルがエルサレムに攻め上ろうとして、その顔を向けたとき、一ハユダの王ヨアシはその先祖、ユダの王ヨシヤパテ、ヨラム、アハジヤが聖別してささげたすべての物、およびヨアシ自身が聖別してささげた物、ならびに主の宮の倉と、主の宮にある金をことごとく取つて、スリヤ王のハザエルに贈つたので、ハザエルはエルサレムを離れ去った。

一九ヨアシのその他の事績および彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書にしるされていではないか。二〇ヨアシの家来たちは立つて徒党を結び、シラに下る道にあるミロの家でヨアシを殺した。三すなわちその家来シメアテの子ヨザカル

と、シヨメルの子ヨザバデが彼を撃つて殺し、彼をその先祖と同じく、ダビデの町に葬った。その子アマジヤが代つて王となった。

第三章

一ユダの王アハジヤの子ヨアシの第二十三年にエヒウの子エホアハズはサマリヤでイスラエルの王となり、十七年世を治めた。二彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を行いつづけて、それを離れなかった。三そこで主はイスラエルに対して怒りを発し、エホアハズの治世の間、絶えずイスラエルをスリヤの王ハザエルの手になたし、またハザエルの子ベネハダデの手になたされた。四しかしエホアハズが主に願ひ求めたので、主はついにこれを聞きいれられた。スリヤの王によつて悩まされたイスラエルの悩みを見られたからである。五それで主がひとり救助者をイスラエルに賜つたので、イスラエルの人々はスリヤびとの手をのがれ、前のよう自分たちの天幕に住むようになった。六それにもかかわらず、彼らはイスラエルに罪を犯させたヤラバアムの家の罪を離れず、それを行いつづけた。またアシラの像もサマリヤに立つたままであつた。七さきにスリヤの王が彼らを滅ぼし、踏み砕くちりのようにしたのでエホアハズの軍勢で残つたものは、ただ

騎兵五十人、戦車十両、歩兵一万人のみであつた。ハエホアハズその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。九エホアハズは先祖たちと共に眠つたので、彼をサマリヤに葬つた。その子ヨアシが代つて王となつた。

一〇ユダの王ヨアシの第三十七年に、エホアハズの子ヨアシはサマリヤでイスラエルの王となり、十六年世を治めた。一彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムのもろもろの罪を離れず、それに歩んだ。二ヨアシのその他の事績と、彼がしたすべての事およびユダの王アマジヤと戦つたその武勇は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。三ヨアシは先祖たちと共に眠つて、ヤラベアムがその位に座した。そしてヨアシはイスラエルの王たちと同じくサマリヤに葬られた。

一四さてエリシヤは死ぬ病氣にかかつていたが、イスラエルの王ヨアシは下つてきて彼の顔の上に涙を流し、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と言つた。一五エリシヤは彼に「弓と矢を取りなさい」と言つたので、弓と矢を取つた。一六エリシヤはまたイスラエルの王に「弓に手をかけなさい」と言つたので、手をかけた。するとエリシヤは自分の手を王の手の上におき、「東向きの窓をあげなさい」と言つたので、それをあげると、エリシヤはまた「射なさい」と言つた。彼が射る

と、エリシヤは言つた、「主の救の矢、スリヤに對する救の矢。あなたはアペクでスリヤびとを撃ち破り、彼らを滅ぼしつくすであらう」。一八エリシヤはまた「矢を取りなさい」と言つたので、それを取つた。エリシヤはまたイスラエルの王に「それをもつて地を射なさい」と言つたので、三度射てやめた。一九すると神の人は怒つて言つた、「あなたは五度も六度も射るべきであつた。そうしたならば、あなたはスリヤを撃ち破り、それを滅ぼしつくすことができたであらう。しかし今あなたはそうしなかつたので、スリヤを撃ち破ることはただ三度だけであらう」。

二〇こうしてエリシヤは死んで葬られた。さてモアブの略奪隊は年が改まるごとに、国にはいつて来るのを常とした。二時に、ひとりの人を葬ろうとする者があつたが、略奪隊を見たので、その人をエリシヤの墓に投げ入れて去つた。その人はエリシヤの骨に触れるとすぐ生きかえつて立ちあがつた。

二三スリヤの王ハザエルはエホアハズの一生の間、イスラエルを悩ましたが、三主はアブラハム、イサク、ヤコブと結ばれた契約のゆえにイスラエルを恵み、これをあわれみ、これを顧みて滅ぼすことを好まず、なおこれをみ前から捨てられなかつた。

二四スリヤの王ハザエルはついに死んで、その子ベネハダデが代つて王となつた。二五そこでエホアハズの子ヨアシは、父エホアハズがハザエルに攻め取られた町々を、ハザエルの子ベネハダデの手から取り返した。すなわちヨアシは三度彼を撃ち破つ

て、イスラエルの町々を取り返した。

第一章

イスラエルの王エホアハズの子ヨアシの第二年に、ユダの王ヨアシの子アマジヤが王となった。ニ彼は王となった時二十五歳で、二十九年の間エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの出身で、名をエホアダンといった。ミアマジヤは主の目にかなう事をおこなったが、先祖ダビデのようではなかった。彼はすべての事を父ヨアシがおこなったようにおこなった。四ただし高き所は除かなかった。民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。五彼は国が彼の手のうちに強くなった時、父ヨアシ王を殺害した家来たちを殺したが、六その殺害者の子供たちは殺さなかった。これはモーセの律法の書に「父は子のゆえに殺さるべきではない。子は父のゆえに殺さるべきではない。おのおの自分の罪のゆえに殺さるべきである」と言われている。

七アマジヤはまた塩の谷でエドムびと一万人を殺した。またセラを攻め取って、その名をヨクテルと名づけたが、今日までそのとおりである。

八そこでアマジヤがエヒウの子エホアハズの子であるイスラエ

ルの王ヨアシに使者をつかわして、「さあ、われわれは互に顔を合わせよう」と言わせたので、九イスラエルの王ヨアシはユダの王アマジヤに言い送った、「かつてレバノンのいばらがレバノンの香柏に、『あなたの娘をわたしのむすこの妻にください』と言いつたことがあったが、レバノンの野獣がおとつて、そのいばらを踏み倒した。一〇あなたは太いエドムを撃つて、心にたかぶっているが、その榮譽に満足して家にとどまりなさい。何ゆえ、あなたは災をひき起して、自分もユダも共に滅びるような事をするのですか」。

二しかしアマジヤが聞きいれなかった。イスラエルの王ヨアシは上つてきた。そこで彼とユダの王アマジヤはユダのベテシメシで互に顔をあわせたが、ニユダはイスラエルに敗れて、おのおのその天幕に逃げ帰った。三イスラエルの王ヨアシはアハジヤの子ヨアシの子であるユダの王アマジヤをベテシメシで捕え、エルサレムにきて、エルサレムの城壁をエフライムの門から隅の門まで、おおよそ四百キュビトにわたつてこわし、四また主の宮と王の家の倉にある金銀およびもろもろの器をことごとく取り、かつ人質をとつてサマリヤに帰った。

五ヨアシのその他の事績と、その武勇および彼がユダの王アマジヤと戦った事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。六ヨアシはその先祖たちと共に眠って、イスラエルの王たちと共にサマリヤに葬られ、その子ヤラバアムが

代つて王となつた。

ニモヨアシの子であるユダの王アママジヤは、エホアハズの子であるイスラエルの王ヨアシが死んで後、なお十五年生きながらえた。ハアママジヤのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。一九時に人々がエルサレムで徒党を結び、彼に敵対したので、彼はラキシに逃げていったが、その人々はラキシに人をつかわして彼をそこで殺させた。二〇人々は彼を馬に載せて運んできて、エルサレムで彼を先祖たちと共にダビデの町に葬った。ニそしてユダの民は皆アザリヤを父アマジヤの代りに王とした。時に年十六歳であつた。ニ彼はエラテの町を建てて、これをユダに復帰させた。これはかの王がその先祖たちと共に眠つた後であつた。

ニユダの王ヨアシの子アママジヤの第十五年に、イスラエルの王ヨアシの子ヤラバアムがサマリヤで王となつて四十一年の間、世を治めた。ニ彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を離れなかつた。ニ彼はハマテの入口からアラバの海まで、イスラエルの領域を回復した。イスラエルの神、主がガテヘベルのアミッタイの子である。そのしもべ預言者ヨナによつて言われた言葉のとおりである。ニ六主はイスラエルの悩みの非常に激しいのを見られた。そこにはつながられた者も、自由な者もいなくなり、またイスラエルを助ける者もいなくなつた。ニモしかし主はイスラエルの名を天が

下から消し去らうとは言われなかつた。そして彼らをヨアシの子ヤラバアムの手によつて救われた。

ニハヤラバアムのその他の事績と、彼がしたすべての事およびその武勇、すなわち彼が戦争をした事および、かつてユダに属していたダマスコとハマテを、イスラエルに復帰させた事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。ニルヤラバアムはその先祖であるイスラエルの王たちと共に眠つて、その子ゼカリヤが代つて王となつた。

第一章

ニイスラエルの王ヤラバアムの第二十七年に、ユダの王アマジヤの子アザリヤが王となつた。ニ彼が王となつた時は十六歳で、五十二年の間、エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの出身で、名をエコリアといつた。ニ彼は主の目にかう事を行い、すべての事を父アマジヤが行つたようになつた。四ただし高き所は除かなかつたので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。五主が王を撃たれたので、その死ぬ日まで、らい病人となつて、離れ家に住んだ。王の子ヨタムが家の事を管理し、国の民をさばいた。ハアザリヤのその他の事績と、彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。ニアザリヤはその先祖たちと共に眠つたので、彼をダ

ビデの町にその先祖たちと共に葬った。その子ヨタムが代つて王となった。

ハユダの王アザリヤの第三十八年にヤラバアムの子ゼカリヤがサマリヤでイスラエルの王となり、六か月世を治めた。九彼はその先祖たちがおこなったように主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を離れなかった。○ヤベシの子シャルムが徒党を結んで彼に敵し、イブレアムで彼を撃ち殺し、彼に代つて王となった。ニゼカリヤのその他の事績は、イスラエルの王の歴代志の書に記されている。ニ主はかつてエヒウに、「あなたの子孫は四代までイスラエルの位に座するであろう」と告げられたが、はたしてそのとおりになつた。

ニミヤベシの子シャルムはユダの王ウジヤの第三十九年に王となり、サマリヤで一か月世を治めた。ニ四時にガデの子メナヘムがテルザからサマリヤに上つてきて、ヤベシの子シャルムをサマリヤで撃ち殺し、彼に代つて王となった。ニ五シャルムのその他の事績と、彼が徒党を結んだ事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されている。ニ六その時メナヘムはテルザから進んでいって、タツプアと、そのうちにいるすべての者、およびその領域を撃つた。すなわち彼らが彼のために開かなかつたので、これを撃つて、そのうちの妊娠の女をことごとく引き裂いた。ニ七ユダの王アザリヤの第三十九年に、ガデの子メナヘムはイス

ラエルの王となり、サマリヤで十年の間、世を治めた。ニ八彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を一生の間、離れなかった。ニ九時にアッスリヤの王プルが国に攻めてきたので、メナヘムは銀一千タラントをプルに与えた。これは彼がプルの助けを得て、国を自分の手のうちに強くするためであつた。ニ〇すなわちメナヘムはその銀をイスラエルのすべての富める者に課し、その人々におのの銀五十シケルを出させてアッスリヤの王に与えた。こうしてアッスリヤの王は国にとどまらないで帰つていった。ニメナヘムのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されているではないか。ニメナヘムは先祖たちと共に眠り、その子ペカヒヤが代つて王となった。

ニミメナヘムの子ペカヒヤはユダの王アザリヤの第五十年に、サマリヤでイスラエルの王となり、二年の間、世を治めた。ニ四彼は主の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラバアムの罪を離れなかった。ニ五時に彼の副官であつたレマリヤのペカが、ギレアデびと五十人と共に徒党を結んで彼に敵し、サマリヤの、王の宮殿の天守で彼を撃ち殺した。すなわちペカは彼を殺し、彼に代つて王となった。ニ六ペカヒヤのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書に記されている。

ニモレマリヤの子ペカはユダの王アザリヤの第五十二年に、サマ

リヤでイスラエルの王となり、二十年の間、世を治めた。二八彼は主の目の前に悪をおこない、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムの罪を離れなかった。

二九イスラエルの王ペカの世に、アッスリヤの王テグラテピレセルが来て、イヨン、アベル・ベテマアカ、ヤノア、ケデシ、ハゾル、ギレアデ、ガリラヤ、ナフタリの全地を取り、人々をアッスリヤへ捕え移した。三〇時にエラの子ホセアは徒党を結んで、レマリヤの子ペカに敵し、彼を撃ち殺し、彼に代って王となった。これはウジヤの子ヨタムの第二十年であつた。三一ペカのその他の事績と彼がしたすべての事は、イスラエルの王の歴代志の書にしるされている。

三二レマリヤの子イスラエルの王ペカの第二年に、ユダの王ウジヤの子ヨタムが王となった。三三彼は王となった時二十五歳であつたが、エルサレムで十六年の間、世を治めた。母はザドクの娘で、名をエルシャといつた。三四彼は主の目になう事を行い、すべて父ウジヤの行つたようにおこなつた。三五ただし高き所は除かなかつたので、民はなおその高き所で犠牲をささげ、香をたいた。彼は主の宮の上の門を建てた。三六ヨタムのその他の事績と彼がしたすべての事は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。三七そのころ、主はスリヤの王レヂンとレマリヤの子ペカをユダに攻めこさせられた。三八ヨタムは先祖たちと共に眠つて、その先祖ダビデの町に先祖たちと共に

葬られ、その子アハズが代つて王となった。

第十六章

一レマリヤの子ペカの第十七年にユダの王ヨタムの子アハズが王となった。二アハズは王となった時二十歳で、エルサレムで十六年の間、世を治めたが、その神、主の目になう事を先祖ダビデのようには行わなかつた。三彼はイスラエルの王たちの道に歩み、また主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の憎むべきおこないにしたがつて、自分の子を火に焼いてささげ物とした。四かつ彼は高き所、また丘の上、すべての青木の下で犠牲をささげ、香をたいた。

五そのころ、スリヤの王レヂンおよびレマリヤの子であるイスラエルの王ペカがエルサレムに攻め上つて、アハズを囲んだが、勝つことができなかった。六その時エドムの王はエラテを回復してエドムの所領とし、ユダの人々をエラテから追い出した。そしてエドムびとがエラテにきて、そこに住み、今日に至つていゝる。七そこでアハズは使者をアッスリヤの王テグラテピレセルにつかわして言わせた、「わたしはあなたのしもべ、あなたの子です。スリヤの王とイスラエルの王がわたしを攻め囲んでいます。どうぞ上つてきて、彼らの手からわたしを救い出してください」。八そしてアハズは主の宮と王の家の倉にある金と銀をと

り、これを贈り物としてアツスリヤの王におくつたので、九アツスリヤの王は彼の願いを聞きいれた。すなわちアツスリヤの王はダマスコに攻め上つて、これを取り、その民をキルに捕え移し、またレゼンを殺した。

一〇アハズ王はアツスリヤの王テグラテピレセルに会おうとダマスコへ行つたが、ダマスコにある祭壇を見たので、アハズ王はその祭壇の作りにしたがって、その詳しい図面と、ひな型とを作つて、祭司ウリヤに送つた。二そこで祭司ウリヤはアハズ王がダマスコから送つたものにしたがって祭壇を建てた。すなわち祭司ウリヤはアハズ王がダマスコから帰るまでにそのとおりにつくた。三王はダマスコから帰つてきて、その祭壇を見、祭壇に近づいてその上に登り、三燔祭と素祭を焼き、灌祭を注ぎ、酬恩祭の血を祭壇にそそぎかけた。一四彼はまた主の前にあつた青銅の祭壇を宮の前から移した。すなわちそれを新しい祭壇と主の宮の間から移して、新しい祭壇の北の方にすえた。一五そしてアハズ王は祭司ウリヤに命じて言つた、「朝の燔祭と夕の素祭および王の燔祭とその素祭、ならびに國中の民の燔祭とその素祭および灌祭は、この大きな祭壇の上で焼きなさい。また燔祭の血と犠牲の血はすべてこれにそそぎかけなさい。あの青銅の祭壇をわたしは伺いを立てるのに用いよう。」一六祭司ウリヤはアハズ王がすべて命じたたとおりにおこなつた。

一七またアハズ王は台の鏡板を切り取つて、洗盤をその上から

移し、また海をその下にある青銅の牛の上からおろして、石の座の上にすえ、一八また宮のうちに造られていた安息日用のおいのある道、および王の用いる外の入口をアツスリヤの王のために主の宮から除いた。一九アハズのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書にしるされてゐるではないか。二〇アハズは先祖たちと共に眠つて、ダビデの町にその先祖たちと共に葬られ、その子ヒゼキヤが代つて王となつた。

第十七章

一ユダの王アハズの第十二年にエラの子ホセアが王となり、サマリヤで九年の間、イスラエルを治めた。二彼は主の目の前に行つたが、彼以前のイスラエルの王たちのようではなかつた。三アツスリヤの王シヤルマネセルが攻め上つたので、ホセアは彼に隸属して、みつぎを納めたが、四アツスリヤの王はホセアがついに自分にそむいたのを知つた。それはホセアが使者をエジプトの王ソにつかわし、また年々納めていたみつぎを、アツスリヤの王に納めなかつたからである。そこでアツスリヤの王は彼を監禁し、獄屋につないだ。五そしてアツスリヤの王は攻め上つて國中を侵し、サマリヤに上つてきて三年の間、これを攻め囲んだ。六ホセアの第九年になつて、アツスリヤの王はついにサマリヤを取り、イスラエルの人々をアツスリヤに捕えていつ

て、ハラと、ゴザンの川ハボルのほとりと、メデアの町々において、

セこの事が起つたのは、イスラエルの人々が、自分たちをエジプトの地から導き上つて、エジプトの王パロの手をのがれさせられたその神、主にむかつて罪を犯し、他の神々を敬い、ハ主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人のならわしに従つて歩み、またイスラエルの王たちが定めたならわしに従つて歩んだからである。カイスラエルの人々はその神、主にむかつて正らぬ事をひそかに行い、見張台から堅固な町に至るまで、すべての町々に高き所を建て、一〇またすべての高い丘の上、すべての青木の下に石の柱とアシラ像を立て、一主が彼らの前から捕え移された異邦人がしたように、すべての高き所で香をたき、悪事を行つて、主を怒らせた。二また主が彼らに「あなたがたはこの事をしてはならない」と言われたのに偶像に仕えた。三主はすべての預言者、すべての先見者によつてイスラエルとユダを戒め、「翻つて、あなたがたの悪い道を離れ、わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、またわたしのしもべである預言者たちによつてあなたがたに伝えたすべての律法のとおり、わたしの戒めと定めとを守れ」と仰せられたが、一四彼らは聞きいれず、彼らの先祖たちがその神、主を信じないで、強情であつたように、彼らは強情であつた。一五そして彼らは主の定めを捨て、主が彼らの先祖たちと結ばれた契約を破り、また彼らに与え

られた警告を軽んじ、かつむなしい偶像に従つてむなしくなり、また周囲の異邦人に従つた。これは主が、彼らのようにおこなつてはならないと彼らに命じられたものである。一六彼らはその神、主のすべての戒めを捨て、自分のために二つの子牛の像を鑄て造り、またアシラ像を造り、天の万象を拝み、かつバアルに仕え、一七またそのむすこ、娘を火に焼いてささげ物とし、占いおよびまじないをなし、主の目の前に悪をおこなうことに身をゆだねて、主を怒らせた。一八それゆえ、主は大いにイスラエルを怒り、彼らをみ前から除かれたので、ユダの部族のほが残つた者はなかつた。

一九ところがユダもまたその神、主の戒めを守らず、イスラエルが定めたならわしに歩んだので、二〇主はイスラエルの子孫をことごとく捨て、彼らを苦しめ、彼らを略奪者の手にわたして、ついに彼らをみ前から打ちすてられた。

二一主はイスラエルをダビデの家から裂き離されたので、イスラエルはネバテの子ヤラバアムを王としたが、ヤラバアムはイスラエルに、主に従うことをやめさせ、大きな罪を犯させた。三イスラエルの人々がヤラバアムのおこなつたすべての罪をおこない続けて、それを離れなかつたので、三三ついに主はそのしもべである預言者たちによつて言われたように、イスラエルをみ前から除き去られた。こうしてイスラエルは自分の国からアツスリヤに移されて今日に至っている。

二四 かくてアッスリヤの王はバビロン、クタ、アワ、ハマテおよびセパルワイムから人々をつれてきて、これをイスラエルの人々の代りにサマリヤの町々におらせたので、その人々はサマリヤを領有して、その町々に住んだ。二五 彼らがそこに住み始めた時、主を敬うことをしなかつたので、主は彼らのうちにししを送り、ししは彼らのうちの数人を殺した。二六 そこで人々はアッスリヤの王に告げて言った、「あなたが移してサマリヤの町々におらせられたあの国々の民は、その地の神のおきてを知らないゆえに、その神は彼らのうちにししを送り、ししは彼らを殺した。これは彼らが、その地の神のおきてを知らないためです」。二七 アッスリヤの王は命じて言った、「あなたがたがあそこに移した祭司のひとりをあそこへ連れて行きなさい。彼をあそこへやって住ませ、その国の神のおきてをその人々に教えさせなさい」。

二八 そこでサマリヤから移された祭司のひとりが来てベテルに住み、どのように主を敬うべきかを彼らに教えた。二九 しかしその民はおのおの自分の神々を造って、それをサマリヤびとが造った高き所の家に安置した。民は皆住んでいる町々でそのうにおこなった。三〇 すなわちバビロンの人々はスコテ・ベノテを造り、クタの人々はネルガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、ミアワの人々はニブハズとタルタクを造り、セパルワイムびとはその子を火に焼いて、セパルワイムの神アデランメレ

クおよびアナンメレクにささげた。三一 彼はまた主を敬い、自分たちのうちから一般の民を立てて高き所の祭司としたので、その人々は高き所の家で勤めをした。三二 このように彼らは主を敬ったが、また彼らが出てきた国々のならわしにしたがつて、自分たちの神々にも仕えた。三四 今日に至るまで彼らは先のならわしにしたがつておこなっている。

彼らは主を敬わず、また主がイスラエルと名づけられたヤコブの子孫に命じられた定めにも、おきてにも、律法にも、戒めにも従わない。三五 主はかつて彼らと契約を結び、彼らに命じて言われた、「あなたがたは他の神々を敬ってはならない。また彼らを拜み、彼らに仕え、彼らに犠牲をささげてはならない。三六 ただ大きな力と伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から導き上った主をのみ敬い、これを拜み、これに犠牲をささげなければならぬ。三七 またあなたがたのために書きしるされた定めと、おきてと、律法と、戒めとを、慎んで常に守らなければならぬ。他の神々を敬ってはならない。三八 わたしがあなたがたと結んだ契約を忘れてはならない。また他の神々を敬ってはならない。三九 ただあなたがたの神、主を敬わなければならぬ。主はあなたがたをすべての敵の手から救い出されるであろう。四〇 しかし彼らは聞きいれず、かえって先のならわしにしたがつておこなった。

四一 このように、これらの民は主を敬い、またその刻んだ像にも

仕えたが、その子たちも、孫たちも同様であつて、彼らはその先祖がおこなつたように今日までおこなつてゐる。

第十八章

イスラエルの王エラの子ホセアの第三年にユダの王アハズの子ヒゼキヤが王となつた。ニ彼は王となつた時二十五歳で、エルサレムで二十九年の間、世を治めた。その母はゼカリヤの娘で、名をアビといつた。ミヒゼキヤはすべて先祖ダビデがおこなつたように主の目にかなう事を行い、四高き所を除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し、モーセの造つた青銅のへびを打ち碎いた。イスラエルの人々はこの時までそのへびに向かつて香をたいていたからである。人々はこれをネホシタンと呼んだ。ミヒゼキヤはイスラエルの神、主に信頼した。そのために彼のあとにも彼の先にも、ユダのすべての王のうちに彼に及ぶ者はなかつた。六すなわち彼は固く主に従つて離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守つた。七主が彼と共におられたので、すべて彼が出て戦うところで功をあらわした。彼はアツスリヤの王にそむいて、彼に仕えなかつた。八彼はペリシテびとを撃ち敗つて、ガザとその領域にまで達し、見張台から堅固な町にまで及んだ。

九ヒゼキヤ王の第四年すなわちイスラエルの王エラの子ホセア

の第七年に、アツスリヤの王シアルマネセルはサマリヤに攻め上つて、これを囲んだが、一〇三年の後ついにこれを取つた。サマリヤが取られたのはヒゼキヤの第六年で、それはイスラエルの王ホセアの第九年であつた。ニアツスリヤの王はイスラエルの人々をアツスリヤに捕えていつて、ハラと、ゴザンの川ハボルのほとりと、メデアの町々に置いた。ニこれは彼らがその神、主の言葉にしたがわず、その契約を破り、主のしもべモーセの命じたすべての事に耳を傾けず、また行わなかつたからである。

三ヒゼキヤ王の第十四年にアツスリヤの王セナケリブが攻め上つてユダのすべての堅固な町々を取つたので、四ユダの王ヒゼキヤは人をラキシにつかわしてアツスリヤの王に言つた、「わたしは罪を犯しました。どうぞ引き上げてください。わたしに課せられることはなんでもいたします」。アツスリヤの王は銀三百タラントと金三十タラントをユダの王ヒゼキヤに課した。五ヒゼキヤは主の宮と王の家の倉とにある銀をことごとく彼に与えた。六この時ユダの王ヒゼキヤはまた主の神殿の戸および柱から自分が着せた金をはぎ取つて、アツスリヤの王に与えた。七アツスリヤの王はまたタルタン、ラブサリスおよびラブシヤケを、ラキシから大軍を率いてエルサレムにいるヒゼキヤ王のもとにつかわした。彼らは上つてエルサレムに來た。彼らはエルサレムに着くと、布さらし場に行く大路に沿つてゐる

上の池の水道のかたわらへ行つて、そこに立つた。一八そして彼らが王を呼んだので、ヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナ、およびアサフの子である史官ヨアが彼らのところに出てきた。

一九ラブシャケは彼らに言った、「ヒゼキヤに言いなさい、『大王、アツスリヤの王はこう仰せられる。あなたが頼みとする者は何か。二〇口先だけの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。あなたは今だれにたよつて、わたしにそむいたのか。三 今あなたは、あの折れかけている葦のつえ、エジプトを頼みとしているが、それは人がよりかかる時、その人の手を刺し通すであろう。エジプトの王パロはすべて寄り頼む者にそのようにする。三しかしあなたがもし「われわれは、われわれの神、主を頼む」とわたしに言うのであれば、その神はヒゼキヤがユダとエルサレムに告げて、「あなたがたはエルサレムで、この祭壇の前に礼拝しなければならぬ」と言つて、その高き所と祭壇とを除いた者ではないか。三三さあ、わたしの主君アツスリヤの王とかけをせよ。もしあなたの方に乗る人があるならば、わたしは馬二千頭を与えよう。三四あなたはエジプトを頼み、戦車と騎兵を請い求めているが、わたしの主君の家来のうちの最も小さい一隊長でさえ、どうして撃退することができようか。三五わたしがこの所を滅ぼすために上つてきたのは、主の許しなしにしたことであらうか。主がわたしにこの地に攻め上つてこれを滅ぼせと言わ

れたのだ』。

二六その時ヒルキヤの子エリアキムおよびセブナとヨアはラブシャケに言った、「どうぞ、アラム語でもベドモに話してください。わたしたちは、それがわかるからです。城壁の上にいる民の聞いているところで、わたしたちにユダヤの言葉で話さないでください。二七しかしラブシャケは彼らに言った、「わたしは主君は、あなたの主君とあなたにだけでなく、城壁の上に座している人々にも、この言葉を告げるためにわたしをつかわしたのではないか。彼らも、あなたがたと共に自分の糞尿を食い飲みするに至るであろう」。

二八そしてラブシャケは立ちあがり、ユダヤの言葉で大声に呼ばわつて言った。「大王、アツスリヤの王の言葉を聞け。二九王はこう仰せられる、『あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。彼はあなたがたをわたしの手から救いだすことはできない。三〇ヒゼキヤが「主は必ずわれわれを救い出される。この町はアツスリヤ王の手に陥ることはない」と言つても、あなたがたは主を頼みとしてはならない。三一あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アツスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたはわたしと和解して、わたしに降服せよ。そうすればあなたがたはおのおの自分のぶどうの実を食べ、おのおの自分のいちじくの実を食べ、おのおの自分の井戸の水を飲むことができるであらう。三二やがてわたしが来て、あなたがたを一

つの国へ連れて行く。それはあなたがたの国のように穀物とぶどう酒のある地、パンとぶどう畑のある地、オリブの木と蜜のある地である。あなたがたは生きながらえることができ、死ぬことはない。ヒゼキヤが「主はわれわれを救われる」と言つて、あなたがたを惑わしても彼に聞いてはならない。三三 諸国民の神々のうち、どの神がその国をアッスリヤの王の手から救つたか。三四 ハマテやアルパデの神々はどこにいるのか。セパルワイム、ヘナおよびイワの神々はどこにいるのか。彼らはサマリヤをわたしの手から救い出したか。三五 国々のすべての神々のうち、その国をわたしの手から救い出した者があつたか。主がどうしてエルサレムをわたしの手から救い出すことができるか。う』」。

三六 しかし民は黙して、ひと言も彼に答えなかつた。王が命じて「彼に答えてはならない」と言つておいたからである。三七 こうしてヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナ、およびアサフの子である史官ヨアは衣を裂き、ヒゼキヤのもとに来て、ラブシャケの言葉を彼に告げた。

第十九章

一 ヒゼキヤ王はこれを聞いて、衣を裂き、荒布を身にまとつて主に宮に入り、二 宮内卿エリアキムと書記官セブナおよび祭司の

うちの年長者たちに荒布をまといせて、アモツの子預言者イザヤのもとにつかわした。三 彼らはイザヤに言つた、「ヒゼキヤはこう申されます、『きようは悩みと、懲しめと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、これを産み出す力がないのです。四 あなたの神、主はラブシャケがその主君アッスリヤの王につかわされて、生ける神をそしつたもろの言葉を聞かれたかもしれない。そしてあなたの神、主はその聞いた言葉をとがめられるかもしれません。それゆえ、この残っている者のために祈をささげてください』。五 ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに來たとき、六 イザヤは彼らに言つた、「あなたがたの主君にこう言いなさい、『主はこう仰せられる、アッスリヤの王の家来たちが、わたしをそしつた言葉を聞いて恐れるには及ばない。七 見よ、わたしは一つの霊を彼らのうちに送つて、一つのうわさを聞かせ、彼を自分の国へ歸らせて、自分の国でつるぎに倒れさせるであらう』」。

八 ラブシャケは引き返して、アッスリヤの王がリブナを攻めているところへ行つた。彼が王のラキシを去つたことを聞いたからである。九 この時アッスリヤの王はエチオピアの王テルハカについて、「彼はあなたと戦うために出てきた」と人々がいのを聞いたので、再び使者をヒゼキヤにつかわして言つた、「一〇 「ユダの王ヒゼキヤにこう言いなさい、『あなたは、エルサレムはアッスリヤの王の手に陥ることはない、と言うあなたの信頼す

る神に欺かれてはならない。二あなたはアッスリヤの王たちがもろもろの国々にした事、彼らを全く滅ぼした事を聞いていゝ。どうしてあなたが救われることができようか。三わたしの父たちはゴザン、ハラシ、レゼフ、およびテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救ったか。四ハマテの王、アルパデの王、セバルワイムの町の王、ヘナの王およびイワの王はどこにいるのか」。

四ヒゼキヤは使者の手から手紙を受け取ってそれを読み、主の宮にのぼって行って、主の前にそれをひろげ、五そしてヒゼキヤは主の前に祈って言った、「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいられます。あなたは天と地を造られました。六主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いてごらんください。セナケリブが生ける神をそしるために書き送った言葉をお聞きください。七主よ、まことにアッスリヤの王たちはもろもろの民とその国々を滅ぼし、八またその神々を火に投げ入れました。それらは神ではなく、人の手の作ったもので、木や石だから滅ぼされたのです。九われわれの神、主よ、どうぞ、今われわれを彼の手から救い出してください。そうすれば地の国々は皆、主であるあなただけが神でいらされることを知るようになるでしょう。一〇その時アモツの子イザヤは人をつかわしにヒゼキヤに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられる、

『アッスリヤの王セナケリブについてあなたがわたしに祈ったことは聞いた』。三主が彼について語られた言葉はこうである、

『処女であるシオンの娘は

あなたを侮り、あなたをあざける。

エルサレムの娘は

あなたのうしろで頭を振る。

三あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。

あなたはだれにむかつて声をあげ、

目を高くあげたのか。

イスラエルの聖者にむかつてしたのだ。

三あなたは使者をもつて主をそしって言った、

「わたしは多くの戦車をひきいて山々の頂にのぼり、

レバノンの奥に行き、

たけの高い香柏と最も良いとすぎを切り倒し、

またその果の野営地に行き、

その密林にはいった。

四わたしは井戸を掘って外国の水を飲んだ。

わたしは足の裏で、

エジプトのすべての川を踏みからした」。

三五あなたは聞かなかったか、

昔わたしがこれを定めたことを。

堅固な町々をあなたが荒塚とすることも、いにしえの日からわたしが計画して今これをおこなうのだ。

二六 そのうちに住む民は力弱くおののき、恥をいだいて、野の草のように、青菜のようになり、育たないで枯れる屋根の草のようになった。

二七 わたしはあなたのすわること、出入りすること、わたしにむかつて怒り叫んだことをも知っている。

二八 あなたがわたしにむかつて怒り叫んだことと、

あなたの高慢がわたしの耳にはいったため、

わたしはあなたの鼻に輪をつけ、

あなたの口にくつわをはめて、

あなたをもときた道へ引きもどすであろう。』

二九 『あなたに与えるしはこれである。すなわち、ことしは落ち穂からはえたものを食べ、二年目にはまたその落ち穂からはえたものを食べ、三年目には種をまき、刈り入れ、ぶどう畑を作つてその実を食べるであろう。三〇 ユダの家ののがれて残る者は再び下に根を張り、上に実を結ぶであろう。三すなわち残る者がエルサレムから出て、のがれた者がシオンの山から出て来るであろう。主の熱心がこれをされるであろう。』

三三 それゆえ、主はアッスリヤの王について、こう仰せられる、『彼はこの町にこない、またここに矢を放たない、盾をもつてそ

の前に来ることなく、また塁を築いてこれを攻めることはない。三三 彼は来た道を帰つて、この町に、はいることはない。主がこれを言う。三四 わたしは自分のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守つて、これを救うであろう。』

三五 その夜、主の使がでて、アッスリヤの陣営で十八万五千人を撃ち殺した。人々が朝早く起きて見ると、彼らは皆、死体となっていた。三六 アッスリヤの王セナケリブは立ち去り、帰つて行つて二ネベにいたが、三七 その神ニスロクの神殿で礼拝していた時、その子アデランメレクとシャレゼルが、つるぎをもつて彼を殺し、ともにアララテの地へ逃げて行つた。そこでその子エサルハドンが代つて王となつた。

第二〇章

一 そのころ、ヒゼキヤは病氣になつて死にかかつていた。アモツの子預言者イザヤは彼のところにきて言つた、「主はこう仰せられます、『家の人に遺言をなさい。あなたは死にます。生きながらえることはできません』。二 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈つて言つた、三 「ああ主よ、わたしが真実を真心をもつてあなたの前に歩み、あなたの目になうことをおこなつたのをどうぞ思い起してください」。そしてヒゼキヤは激しく泣いた。四 イザヤがまだ中庭を出ないうちに主の言葉が彼に臨

んだ、五「引き返して、わたしの民の君ヒゼキヤに言いなさい、『あなたの父ダビデの神、主はこう仰せられる、わたしはあなたの祈を聞き、あなたの涙を見た。見よ、わたしはあなたをいやす。三日目にはあなたは主の宮に上るであろう。ハかつ、わたしはあなたのよわいを十五年増す。わたしはあなたと、この町とをアッスリヤの王の手から救い、わたしの名のため、またわたしのしもべダビデのためにこの町を守るであろう』。セそしてイザヤは言った、「干しいちじくのひとつかたまりを持ってきて、それを腫物につけさせなさい。そうすれば直るでしょう」。

ハヒゼキヤはイザヤに言った、「主がわたしをいやされる事と、三日目にわたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましようか」。カイザヤは言った、「主が約束されたことを行われることについては、主からこのしるしを得られるでしょう。すなわち日影が十度進むか、あるいは十度退くかです」。二〇ヒゼキヤは答えた、「日影が十度進むことはたやすい事です。むしろ日影を十度退かせてください」。二そこで預言者イザヤが主に呼ばれると、アハズの日時計の上に進んだ日影を、十度退かせられた。

三そのころ、バラダンの子であるバビロンの王メロダクバラダンは、手紙と贈り物を持たせて使節をヒゼキヤにつかわした。これはヒゼキヤが病んでいることを聞いたからである。一三ヒゼキヤは彼らを喜び迎えて、宝物の蔵、金銀、香料、貴重な油

および武器倉、ならびにその倉庫にあるすべての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある物も、ヒゼキヤが彼らに見せない物は一つもなかった。二四その時、預言者イザヤはヒゼキヤ王のもとにきて言った、「あの人々は何を言いましたか。どこからきたのですか」。ヒゼキヤは言った、「彼らは遠い国から、バビロンからきたのです」。二五イザヤは言った、「彼らはあなたの家で見ましたか」。ヒゼキヤは答えて言った、「わたしの家にある物を皆見ました。わたしの倉庫のうちには、わたしが彼らに見せない物は一つもありません」。

二六そこでイザヤはヒゼキヤに言った、「主の言葉を聞きなさい、二七『主は言われる、見よ、すべてあなたの家にある物、および、あなたの先祖たちが今日までに積みたくわえた物の、バビロンに運び去られる日が来る。何も残るものはないであろう。二八また、あなたの身から出るあなたの子たちも連れ去られ、バビロンの王の宮殿で宦官となるであろう』。一九ヒゼキヤはイザヤに言った、「あなたが言われた主の言葉は結構です」。彼は「せめて自分が世にあるあいだ、平和と安全があれば良いことではなからうか」と思ったからである。

三〇ヒゼキヤのその他の事績とその武勇および、彼が貯水池と水道を作つて、町に水を引いた事は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。三一ヒゼキヤはその先祖たちと共に眠つて、その子マナセが代つて王となつた。

第二章

「マナセは十二歳で王となり、五十五年の間、エルサレムで世を治めた。母の名はヘフジバといった。ニマナセは主がイスラエルの人々の前から追い払われた国々の民の憎むべきおこないにならつて、主の目の前に悪をおこなつた。≡彼は父ヒゼキヤがこわした高き所を建て直し、またイスラエルの王アハブがしたようにバアルのために祭壇を築き、アシラ像を造り、かつ天の万象を拝んで、これに仕えた。四また主の宮のうちに数個の祭壇を築いた。これは主が「わたしの名をエルサレムに置く」と言われたその宮である。五彼はまた主の宮の二つの庭に天の万象のために祭壇を築いた。六またその子を火に焼いてささげ物とし、占いをし、魔術を行い、口寄せと魔法使を用い、主の目の前に多くの悪を行つて、主の怒りを引き起した。七彼はまたアシラの彫像を作つて主の宮に置いた。主はこの宮についてダビデとその子ソロモンに言われたことがある、「わたしはこの宮と、わたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだエルサレムとに、わたしの名を永遠に置く。ハもし、彼らがわたしが命じたすべての事、およびわたしのしもべモーセが命じたすべての律法を守り行ふならば、イスラエルの足を、わたしが彼らの先祖たちに与えた地から、重ねて迷い出させないであらう」。九しかし彼らは聞きいれなかつた。マナセが人々をいざなつて

悪を行つたことは、主がイスラエルの人々の前に滅ぼされた国々の民よりもはなはだしかつた。

○そこで主はそのしもべである預言者たちによつて言われた、二「ユダの王マナセがこれらの憎むべき事を行い、彼の先にあつたアモリびとの行つたすべての事よりも悪い事を行い、またその偶像をもつてユダに罪を犯させたので、ニイスラエルの神、主はこう仰せられる、見よ、わたしはエルサレムとユダに災をくだそうとしている。これを聞く者は、その耳が二つながら鳴るであらう。≡わたしはサマリヤをはかつた測りなわと、アハブの家に用いた下げ振りをエルサレムにほどこし、人が皿をぬぐい、これをぬぐつて伏せるように、エルサレムをぬぐい去る。≡四わたしは、わたしの嗣業の民の残りを捨て、彼らを敵の手に渡す。彼らはもろもろの敵のえじきとなり、略奪にあうであらう。≡五これは彼らの先祖たちがエジプトを出た日から今日に至るまで、彼らがわたしの目の前に悪を行つて、わたしを怒らせたためである」。

「マナセはまた主の目の前に悪を行つて、ユダに罪を犯させたその罪のほかに、罪なき者の血を多く流して、エルサレムのこの果から、かの果にまで満した。

「マナセのその他の事績と、彼がおこなつたすべての事およびその犯した罪は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。ハマナセは先祖たちと共に眠つて、その家の園すなわ

ちウザの園に葬られ、その子アモンが代つて王となった。

一九アモンは王となった時二十二歳であつて、エルサレムで二年の間、世を治めた。母はヨテバのハルツの娘で、名をメシユレメテといった。二〇アモンはその父マナセのおこなつたように、主の目の前に悪を行つた。二三すなわち彼はすべてその父の歩んだ道に歩み、父の仕えた偶像に仕えて、これを拝み、三先祖たちの神、主を捨てて、主の道に歩まなかつた。三三アモンの家来たちはついに彼に敵して徒党を結び、王をその家で殺したが、四国の民は、アモン王に敵して徒党を結んだ者をことごとく撃ち殺した。そして国の民はアモンの子ヨシヤを王としてアモンに代らせた。三五アモンのその他の事績は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。三六アモンはウザの園にある墓に葬られ、その子ヨシヤが代つて王となった。

第二章

一ヨシヤは八歳で王となり、エルサレムで三十一年の間、世を治めた。母はボヅカテのアダヤの娘で、名をエデダといった。二ヨシヤは主の目にかなう事を行い、先祖ダビデの道に歩んで右にも左にも曲らなかつた。

三ヨシヤ王の第十八年に王はメシユラムの子アザリヤの子である書記官シヤパンを主の宮につかわして言つた、四「大祭司ヒル

キヤのもとへのぼつて行つて、主に宮にはいつてきた銀、すなわち門を守る者が民から集めたものの総額を彼に数えさせ、五それを工事をつかさどる主の宮の監督者の手に渡させ、彼らから主の宮で工事をする者にそれを渡して、宮の破れを繕わせなさい。六すなわち木工と建築師と石工にそれを渡し、また宮を繕う材木と切り石を買わせなさい。七ただし彼らは正直に事を行うから、彼らに渡した銀については彼らと計算するに及ばない」。ハその時大祭司ヒルキヤは書記官シヤパンに言つた、「わたしは主の宮で律法の書を見つけました」。そしてヒルキヤがその書物をシヤパンに渡したので、彼はそれを読んだ。九書記官シヤパンは王のもとへ行き、王に報告して言つた、「しもべどもは宮にあつた銀を皆出して、それを工事をつかさどる主の宮の監督者の手に渡しました」。一〇書記官シヤパンはまた王に告げて「祭司ヒルキヤはわたしに一つの書物を渡しました」と言い、それを王の前で読んだ。

二王はその律法の書の言葉を聞くと、その衣を裂いた。三そして王は祭司ヒルキヤと、シヤパンの子アヒカムと、ミカヤの子アクボルと、書記官シヤパンと、王の大臣アサヤとに命じて言つた、四「あなたがたは行つて、この見つかった書物の言葉について、わたしのため、民のため、またユダ全国のために主に尋ねなさい。われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについてしるされている事を行なかつたため

に、主はわれわれにむかつて、大いなる怒りを発しておられるからです」。

一四そこで祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シャパンおよびアサヤはシャルムの妻である女預言者ホルダのもとへ行つた。シャルムはハルハスの子であるテクワの子で、衣装べやを守る者であつた。その時ホルダはエルサレムの下町に住んでいた。彼らがホルダに告げたので、一五ホルダは彼らに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『あなたがたをわたしにつかわした人に言いなさい。一六主はこう言われます、見よ、わたしはユダの王が読んだあの書物のすべての言葉にしたがつて、災をこの所と、ここに住んでいる民に下そうとしている。一七彼らがわたしを捨てて他の神々に香をたき、自分たちの手で作つたもろもろの物をもって、わたしを怒らせたからである。それゆえ、わたしはこの所にむかつて怒りの火を発する。これは消えることがないであろう』。一八ただし主に尋ねるために、あなたがたをつかわしたユダの王にはこう言いなさい、『あなたが聞いた言葉についてイスラエルの神、主はこう仰せられます、一九あなたは、わたしがこの所と、ここに住んでいる民にむかつて、これは荒れ地となり、のろいとなるであろうと言ふのを聞いた時に悔い、主の前にへりくだり、衣を裂いてわたしの前に泣いたゆえ、わたしもまたあなたの言うことを聞いたのであると主は言われる。二〇それゆえ、見よ、わたしはあなたを先祖たちの

もとに集める。あなたは安らかに墓に集められ、わたしがこの所にくだもろもろの災を目に見ることはないであろう』。彼らはこの言葉を王に持ち帰った。

第三章

一そこで王は人をつかわしてユダとエルサレムの長老たちをこごとく集めた。二そして王はユダのもろもろの人々と、エルサレムのすべての住民および祭司、預言者ならびに大小のすべての民を従えて主の宮にのぼり、主の宮で見つかった契約の書のことばをこごとく彼らに読み聞かせた。三次いで王は柱のかたわらに立つて、主の前に契約を立て、主に従つて歩み、心をつくし精神をつくして、主の戒めと、あかしと、定めとを守り、この書物にしろされているこの契約の言葉を行うことを誓つた。民は皆その契約に加わつた。

四こうして王は大祭司ヒルキヤと、それに次ぐ祭司たちおよび門を守る者どもに命じて、主の神殿からバアルとアシラと天の万象とのために作つたもろもろの器を取り出させ、エルサレムの外のキデロンの野でそれを焼き、その灰をベテルに持つて行かせた。五また、ユダの町々とエルサレムの周囲にある高き所で香をたくためにユダの王たちが任命した祭司たちを廃し、またバアルと日と月と星宿と天の万象とに香をたく者どもをも廃

した。六彼はまた主の宮からアシラ像を取り出し、エルサレムの外のキデロン川に持つて行つて、キデロン川でそれを焼き、それを打ち砕いて粉とし、その粉を民の墓に投げすてた。七また主の宮にあった神殿男娼の家をこわした。そこは女たちがアシラ像のために掛け幕を織る所であつた。八彼はまたユダの町々から祭司をことごとく召しよせ、また祭司が香をたいたゲバからベエルシバまでの高き所を汚し、また門にある高き所をこわした。これらの高き所は町のつかさヨシユアの門の入口にあり、町の門にはいる人の左にあつた。九高き所の祭司たちはエルサレムで主の祭壇にのぼることをしなかつたが、その兄弟たちのうちにあつて種入れぬパンを食べた。一〇王はまた、だれもそのむすこ娘を火に焼いて、モレクにささげ物とすることのないように、ベンヒンノムの谷にあるトペテを汚した。一一またユダの王たちが太陽にささげて主の宮の門に置いた馬を、境内にある侍従ナタンメレクのへやのかたわらに移し、太陽の車を火で焼いた。一二また王はユダの王たちがアハズの高殿の屋上に造つた祭壇と、マナセが主の宮の二つの庭に造つた祭壇とをこわして、それを打ち砕き、砕けたものをキデロン川に投げすてた。一三また王はイスラエルの王ソロモンが昔シドンびとの憎むべき者アシタロテと、モアブびとの憎むべき者ケモシと、アンモンの人々の憎むべき者ミルコムのためにエルサレムの東、滅亡の山の南に築いた高き所を汚した。一四またもろもろの石柱を打ち

砕き、アシラ像を切り倒し、人の骨をもつてその所を満たした。一五また、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤラベアムが造つた高き所、すなわちその祭壇と高き所とを彼はこわし、その石を打ち砕いて粉とし、かつアシラ像を焼いた。一六そしてヨシヤは身をめぐらして山に墓のあるのを見、人をつかわしてその墓から骨を取らせ、それをその祭壇の上で焼いて、それを汚した。昔、神の人が主の言葉としてこの事を呼ばわり告げたが、そのとおりになつた。一七その時ヨシヤは「あそこに見える石碑は何か」と尋ねた。町の人々が彼に「あれはあなたがベテルの祭壇に対して行われたこれらの事を、ユダからきて預言した神の人の墓です」と言つたので、一八彼は言つた、「そのままにして置きなさい。だれもその骨を移してはならない」。それでその骨と、サマリヤからきた預言者の骨には手をつけなかつた。一九またイスラエルの王たちがサマリヤの町々に造つて、主を怒らせた高き所の家も皆ヨシヤは取り除いて、彼がすべてベテルに行つたようにこれに行つた。二〇彼はまた、そこにあつた高き所の祭司たちを皆祭壇の上で殺し、人の骨を祭壇の上で焼いた。こうして彼はエルサレムに帰つた。二三そして王はすべての民に命じて、「あなたがたはこの契約の書にしろるされているように、あなたがたの神、主に過越の祭を執り行いなさい」と言つた。二三さばきづかさがイスラエルをさばいた日からこのかた、またイスラエルの王たちとユダの王たち

の世にも、このような過越の祭を執り行つたことはなかったが、三ヨシヤ王の第十八年に、エルサレムでこの過越の祭を主に執り行つたのである。

二四 ヨシヤはまた祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物に記されている律法の言葉を確実に行うために、口寄せと占い師とテラピムと偶像およびユダの地とエルサレムに見られるものもろの憎むべき者を取り除いた。二五 ヨシヤのように心をつくし、精神をつくし、力をつくしてモーセのすべての律法にしたがい、主に寄り頼んだ王はヨシヤの先にはなく、またその後にも彼のような者は起らなかった。

二六 けれども主はなおユダにむかつて発せられた激しい大いなる怒りをやめられなかった。これはマナセがもろもろの腹だたしい行いをもつて主を怒らせたためである。二七 それゆえ主は言われた、「わたしはイスラエルを移したように、ユダをもわたしの目の前から移し、わたしが選んだこのエルサレムの町と、わたしの名をそこに置こうと言つたこの宮とを捨ててであらう」。二八 ヨシヤのその他の事績と、彼が行つたすべての事は、ユダの王の歴代志の書にしるされているではないか。二九 ヨシヤの世にエジプトの王パロ・ネコが、アッスリヤの王のところへ行こうと、ユフラテ川をさして上つてきたので、ヨシヤ王は彼を迎え撃とうと出て行つたが、パロ・ネコは彼を見るや、メギドにおいて彼を殺した。三〇 その家来たちは彼の死体を車に載せ、メギドか

らエルサレムに運んで彼の墓に葬つた。国の民はヨシヤの子エホアハズを立て、彼に油を注ぎ、王として父に代らせた。

三一 エホアハズは王となつた時二十三歳で、エルサレムで三か月の間、世を治めた。母はリブナのエレミヤの娘で、名をハムタルといつた。三二 エホアハズは先祖たちがすべて行つたように主の目の前に悪を行つたが、三三 パロ・ネコは彼をハマテの地のリブラにつないで置いて、エルサレムで世を治めることができないうようにした。また銀百タラントと金一タラントのみつぎを国に課した。三四 そしてパロ・ネコはヨシヤの子エリアキムを父ヨシヤに代つて王とならせ、名をエホヤキムと改め、エホアハズをエジプトへ引いて行つた。エホアハズはエジプトへ行つてそこで死んだ。三五 エホヤキムは金銀をパロに送つた。しかし彼はパロの命に従つて金を送るために国に税を課し、国の民おののからその課税にしたがつて金銀をきびしく取り立てて、それをパロ・ネコに送つた。

三六 エホヤキムは二十五歳で王となり、エルサレムで十一年の間、世を治めた。母はルマのパダヤの娘で、名をゼビダといつた。三七 エホヤキムは先祖たちがすべて行つたように主の目の前に悪を行つた。

第二章

一 エホヤキムの世にバビロンの王ネブカデネザルが上つてきたので、エホヤキムは彼に隸属して三年を経たが、ついに翻つて彼にそむいた。ニ主はカルデヤびとの略奪隊、スリヤびとの略奪隊、モアブびとの略奪隊、アンモンびとの略奪隊をつかわしてエホヤキムを攻められた。すなわちユダを攻め、これを滅ぼすために彼らをつかわされた。主がそのしもべである預言者たちによつて語られた言葉のとおりである。三これは全く主の命によつてユダに臨んだもので、ユダを主の目の前から払い除くためであつた。すなわちマナセがすべておこなつたその罪のため、四また彼が罪なき人の血を流し、罪なき人の血をエルサレムに満たしたためであつて、主はその罪をゆるそうとはされなかつた。五エホヤキムのその他の事績と、彼がおこなつたすべての事は、ユダの王の歴代志の書に記されているではないか。六エホヤキムは先祖たちとともに眠り、その子エホヤキンが代つて王となつた。七エジプトの王は再びその国から出てこなかつた。バビロンの王がエジプトの川からユフラテ川まで、すべてエジプトの王に属するものを取つたからである。

八エホヤキンは王となつた時十八歳で、エルサレムで三月の間、世を治めた。母はエルサレムのエルナタンの娘で、名をネホシタといつた。九エホヤキンはすべてその父がおこなつたよう

に主の目の前に悪を行つた。

一〇そのころ、バビロンの王ネブカデネザルの家来たちはエルサレムに攻め上つて、町を囲んだ。一一その家来たちが町を囲んでいたとき、バビロンの王ネブカデネザルもまた町に攻めてきた。一二ユダの王エホヤキンはその母、その家来、そのつかさたち、および侍従たちと共に出て、バビロンの王に降服したので、バビロンの王は彼を捕虜とした。これはネブカデネザルの治世の第八年であつた。三彼はまた主の宮ののもろもろの宝物および王家の宝物をこごとく持ち出し、イスラエルの王ソロモンがつくつて主の神殿に置いたもろもろの金の器を切りこわした。主が言われたとおりである。四彼はまたエルサレムのすべての市民、およびすべてのつかさとすべての勇士、ならびにすべての木工と鍛冶一万人を捕えて行つた。残つた者は国の民の貧しい者のみであつた。五さらに彼はエホヤキンをバビロンに捕えて行き、また王の母、王の妻たち、および侍従と国のうちのおもな人々をも、エルサレムからバビロンへ捕えて行つた。六またバビロンの王はすべて勇敢な者七千人、木工と鍛冶一千人ならびに強くて良く戦う者をみな捕えてバビロンへ連れて行つた。七そしてバビロンの王はエホヤキンの父の兄弟マッタニヤを王としてエホヤキンに代え、名をゼデキヤと改めた。

八ゼデキヤは二十一歳で王となり、エルサレムで十一年の間、世を治めた。母はリブナのエレミヤの娘で、名をハムタルと

いった。「九ゼデキヤはすべてエホヤキムがおこなったように主の目の前に悪を行つた。二〇エルサレムとユダにこのような事の起つたのは主の怒りによるので、主はついに彼らをみ前から払いすてられた。」

さてゼデキヤはバビロンの王にそむいた。

第二章

一そこでゼデキヤの治世の第九年の十月十日に、バビロンの王ネブカデネザルはもろもろの軍勢を率い、エルサレムにきて、これにむかつて陣を張り、周囲にとりでを築いてこれを攻めた。二こうして町は囲まれて、ゼデキヤ王の第十一年にまで及んだが、三その四月九日になって、町のうちにききんが激しくなり、その地の民に食物がなくなつた。四町の一角がついに破れたので、王はすべての兵士とともに、王の園のかたわらにある二つの城壁のあいだの門の道から夜のうちに逃げ出して、カルデヤびとが町を囲んでいる間に、アラバの方へ落ち延びた。五しかしカルデヤびとの軍勢は王を追い、エリコの平地で彼に追いついた。彼の軍勢はみな彼を離れて散り去つたので、六カルデヤびとは王を捕え、彼をリブラにいるバビロンの王のもとへ引いていつて彼の罪を定め、七ゼデキヤの子たちをゼデキヤの目の前で殺し、ゼデキヤの目をえぐり、足かせをかけてバビロンへ連れて

行つた。

八バビロンの王ネブカデネザルの第十九年の五月七日に、バビロンの王の臣侍衛の長ネブザラダンがエルサレムにきて、九主の宮と王の家とエルサレムのすべての家を焼いた。すなわち火をもつてすべての大きな家を焼いた。一〇また侍衛の長と共にいたカルデヤびとのすべての軍勢はエルサレムの周囲の城壁を破壊した。二そして侍衛の長ネブザラダンは、町に残された民およびバビロン王に降服した者と残りの群衆を捕え移した。三ただし侍衛の長はその地の貧しい者を残して、ぶどうを作る者とし、農夫とした。

四カルデヤびとはまた主の宮の青銅の柱と、主の宮の洗盤の台と、青銅の海を砕いて、その青銅をバビロンに運び、五またつぼと、十能と、心切りばさみと、香を盛る皿およびすべて神殿の務に用いる青銅の器、六また心取り皿と鉢を取り去つた。侍衛の長はまた金で作つた物と銀で作つた物を取り去つた。七ソロモンが主の宮のために造つた二つの柱と、一つの海と洗盤の台など、これらのもろもろの器の青銅の重さは量ることができなかつた。八一つの柱の高さは十八キュビトで、その上に青銅の柱頭があり、柱頭の高さは三キュビトで、柱頭の周囲に網細工とぎくろがあつて、みな青銅であつた。他の柱もその網細工もこれと同じであつた。

九侍衛の長は祭司長セラヤと次席の祭司ゼパニヤと三人の門

を守る者ものを捕え、一い九くまた兵士へいしをつかさどるひとりの役人やくにんと、王おうの前まえにはべる者もののうち、町で見つかつた者五人にんと、その地ちの民たみを募もつた軍勢ぐんぜいの長の書記官しよきかんと、町で見つかつたその地ちの民六十人にんを町から捕え去つた。二に侍衛じえいの長ネブザラネブザラは彼らかれらを捕えて、リブラにいるバビロンの王おうのもとへ連れて行つたので、三さんバビロンの王はハマテの地ちのリブラで彼らかれらを撃ち殺した。このようにしてユダはその地ちから捕え移された。

三さんさてバビロンの王ネブカデネザルはユダの地ちに残してとどまらせた民たみの上に、シャパンの子アヒカムの子であるゲダリヤを立てて総督そうとくとした。三さん時に軍勢ぐんぜいの長たちおよびその部下ぶかの人々は、バビロンの王がゲダリヤを総督そうとくとしたことを聞いて、ミヅパにいるゲダリヤのもとにきた。すなわちネタニヤの子イシマエル、カレヤの子ヨハナン、ネトパびとタンホメテの子セラヤ、マアカびとの子ヤザニヤおよびその部下ぶかの人々がゲダリヤのもとにきた。二に四しゲダリヤは彼らかれらとその部下ぶかの人々に誓つて言つた、「あなたがたはカルデヤびとのしもべとなることを恐れてはならない。この地ちに住んで、バビロンの王に仕えなさい。そうすればあなたがたは幸福を得るでしょう」。二に五ごところが七月になつて、王の血統けつとうのエリシヤマの子であるネタニヤの子イシマエルは十人にんの者と共にきて、ゲダリヤを撃ち殺し、また彼と共にミヅパにいたユダヤ人と、カルデヤびとを殺した。二に六ろくそのため、大小の民および軍勢の長たちは、みな立つてエジプトへ

行つた。彼らはカルデヤびとを恐れたからである。

三さんモユダの王エホヤキンが捕え移されて後三十七年ねんの十二月がつ十七日、すなわちバビロンの王エビルメロダクエビルメロダクの治世の第一年に、王はユダの王エホヤキンを獄屋から出してハねんごろに彼を慰め、その位を彼と共にバビロンにいる王たちの位よりも高くした。三さん九くこうしてエホヤキンはその獄屋の衣を脱ぎ、一生の間、常に王の前で食事した。三さん〇彼は一生の間、たえず日々ひびの分を王から賜わつて、その食物とした。

歴代志上

第一章

一 アダム、セツ、エノス、ニケナン、マハラレル、ヤレド、ミエノク、メトセラ、ラメク、四ノア、セム、ハム、ヤペテ。
 五 ヤペテの子らはゴメル、マゴグ、マダイ、ヤワン、トバル、メセク、テラス。六 ゴメルの子らはアシケナズ、デパテ、トガルマ。セヤワンの子らはエリシヤ、タルシシ、キツテム、ロダニム。
 ハハムの子らはクシ、エジプト、プテ、カナン。九 クシの子らはセバ、ハビラ、サブタ、ラアマ、サブテカ。ラアマの子らはシバとデダン。一〇 クシはニムロデを生んだ。ニムロデは初めて世の権力ある者となった。
 ニ エジプトはルデびと、アナムびと、レハブびと、ナフトびと、ニパテロスびと、カスルびと、カフトルびとを生んだ。カフトルびとからペリシテびとが出た。
 ニ カナンは長子シドンとヘテを生んだ。一四 またエブスびと、アモリびと、ギルガシびと、一五 ヒビびと、アルキびと、セニびと、一六 アルワデびと、ゼマリびと、ハマテびとを生んだ。
 一七 セムの子らはエラム、アシウル、アルバクサデ、ルデ、アラム、ウズ、ホル、ゲテル、メセクである。一八 アルバクサデはシラを生み、シラはエベルを生んだ。一九 エベルにふたりの子が生

れた。ひとりの名はベレグ——彼の代に地の民が散り分れたからである——その弟の名はヨクタンといった。二〇 ヨクタンはアルモダデ、シャレフ、ハザル・マウテ、エラ、ニハドラム、ウザル、デクラ、三 エバル、アビマエル、シバ、三 オフル、ハビラ、ヨバブを生んだ。これらはみなヨクタンの子である。

二四 セム、アルバクサデ、シラ、二五 エベル、ペレグ、リウ、二六 セルグ、ナホル、テラ、二七 アブラムすなわちアブラハムである。二八 アブラハムの子らはイサクとイシマエルである。二九 彼らの子孫は次のとおりである。イシマエルの長子はネバヨテ、次はケダル、アデビエル、ミブサム、三〇 ミシマ、ドマ、マツサ、ハダデ、テマ、三二 エトル、ネフシ、ケデマ。これらはイシマエルの子孫である。三三 アブラハムのそばめケトラの子孫は次のとおりである。彼女はジムラン、ヨクシャン、メダン、ミデアン、イシバク、シユワを産んだ。ヨクシャンの子らはシバとデダンである。三三 ミデアンの子らはエパ、エベル、ヘノク、アビダ、エルダア。これらはみなケトラの子孫である。

三六 アブラハムはイサクを生んだ。イサクの子らはエサウとイスラエル。三七 エサウの子らはエリパズ、リウエル、エウシ、ヤラム、コラ。三八 エリパズの子らはテマン、オマル、ゼピ、ガタム、ケナズ、テムナ、アマレク。三九 リウエルの子らはナハテ、ゼラ、シャンマ、ミツザ。

四〇 ハセイルの子らはロタン、シヨバル、ヂベオン、アナ、デシヨ

ン、エゼル、デシヤン。三九ロタンの子らはホリとホمام。ロタンの妹はテムナ。四〇シヨバルの子らはアルヤン、マナハテ、エバル、シピ、オナム。チベオンの子らはアヤとアナ。四一アナの子はデシヨン。デシヨンの子らはハムラン、エシバン、イテラン、ケラン。四二エゼルの子らはビルハン、ザワン、ヤカン。デシヤンの子らはウズとアララン。

四三イスラエルの人々を治める王がまだなかった時、エドムの地を治めた王たちは次のとおりである。ベオルの子ベラ。その都の名はデナバといった。四四ベラが死んで、ボズラのゼラの子ヨバブが代つて王となった。四五ヨバブが死んで、テマンびとの地のホシヤムが代つて王となった。四六ホシヤムが死んで、ベダテの子ハダデが代つて王となった。彼はモアブの野でミデアンを撃つた。彼の都の名はアビテといった。四七ハダデが死んで、マスレカのサムラが代つて王となった。四八サムラが死んで、ユフラテ川のほとりのレホボテのサウルが代つて王となった。四九サウルが死んで、アクボルの子バアル・ハナンが代つて王となった。五〇バアル・ハナンが死んで、ハダデが代つて王となった。彼の都の名はバイといった。彼の妻はマテレデの娘であつて、名をメヘタベルといった。マテレデはメザハブの娘である。五一ハダデも死んだ。

エドムの族長は、テムナ侯、アルヤ侯、エテテ侯、五二アホリバマ侯、エラ侯、ピノン侯、五三ケナズ侯、テマン侯、ミブザル侯、

五四マグデエル侯、イラム侯。これらはエドムの族長である。

第二章

ーイスラエルの子らは次のとおりである。ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イツサカル、ゼブルン、ニダン、ヨセフ、ベニヤミン、ナフタリ、ガド、アセル。ミユダの子らはエル、オナン、シラである。この三人はカナンの女バテシユアがユダによつて産んだ者である。ユダの長子エルは主の前に悪を行つたので、主は彼を殺された。四ユダの嫁タマルはユダによつてペレヅとゼラを産んだ。ユダの子らは合わせて五人である。

五ペレヅの子らはヘヅロンとハムル。六ゼラの子らはジムリ、エタン、ヘマン、カルコル、ダラで、合わせて五人である。セカルミの子はアカル。アカルは奉納物について罪を犯し、イスラエルを悩ました者である。ハエタンの子はアザリヤである。

九ヘヅロンに生れた子らはエラメル、ラム、ケルバイである。一〇ラムはアミナダブを生み、アミナダブはユダの子孫のつかさナシヨンを生んだ。一ナシヨンはサルマを生み、サルマはボアズを生み、ニボアズはオベデを生み、オベデはエツサイを生んだ。三エツサイは長子エリアブ、次にアビナダブ、第三にシメア、四第四にネタンエル、第五にラダイ、五第六にオゼム、第七にダビデを生んだ。一六彼らの姉妹はゼルヤとアビガイルで

ある。ゼルヤの産んだ子はアビシャイ、ヨアブ、アサヘルの三人である。二〇アビガイルはアマサを産んだ。アマサの父はイシマエルびとエテルである。

一八ヘツロンの子カレブはその妻アズバおよびエリオテによって子をもうけた。その子らはエシル、シヨバブ、アルドンである。一九カレブはアズバが死んだのでエフラタをめとった。エフラタはカレブによってホルを産んだ。二〇ホルはウリを生み、ウリはベザレルを生んだ。

二三そののちヘツロンはギレアデの父マキルの娘の所にはいった。彼が彼女をめとったときは六十歳であつた。彼女はヘツロンによつてセグブを産んだ。二三セグブはヤイルを生んだ。ヤイルはギレアデの地に二十三の町をもつていた。三三しかしゲシウルとアラムは彼らからハボテ・ヤイルおよびケナテとその村里など合わせて六十の町を取った。これらはみなギレアデの父マキルの子孫であつた。三四ヘツロンが死んだのち、カレブは父ヘツロンの妻エフラタの所にはいった。彼女は彼にテコアの父アシウルを産んだ。

三五ヘツロンの長子エラメルの子らは長子ラム、次はブナ、オレン、オゼム、アヒヤである。三六エラメルはまたほかの妻をもつていた。名をアタラといって、オナムの母である。三七エラメルの長子ラムの子らはマアツ、ヤミン、エケルである。三八オナムの子らはシャンマイとヤダである。シャンマイの子らはナダブ

とアビシウルである。三九アビシウルの妻の名はアビハイルといつて、アバンとモリデを産んだ。四〇ナダブの子らはセレデとアツパウムである。セレデは子をもたずに死んだ。四一アツパウムの子はイシ、イシの子はセシャン、セシャンの子はアヘライである。四二シャンマイの兄弟ヤダの子らはエテルとヨナタンである。エテルは子をもたずに死んだ。四三ヨナタンの子らはペレテとザザである。以上はエラメルの子孫である。四四セシャンには男の子はなく、ただ女の子のみであつたが、彼はヤルハと呼ぶエジプトびとの奴隷をもつていたので、四五セシャンは娘を奴隷ヤルハに与えてその妻とさせた。彼女はヤルハによつてアツタイを産んだ。四六アツタイはナタンを生み、ナタンはザバデを生み、モザバデはエフラルを生み、エフラルはオベデを生み、ミハオベデはエヒウを生み、エヒウはアザリヤを生み、三九アザリヤはヘレツを生み、ヘレツはエレアサを生み、四〇エレアサはシスマイを生み、シスマイはシャルムを生み、四一シャルムはエカミヤを生み、エカミヤはエリシヤマを生んだ。

四二エラメルの兄弟であるカレブの子らは長子をマレシヤといつてジフの父である。マレシヤの子はヘブロン。四三ヘブロンの子らはコラ、タツプア、レケム、シマである。四四シマはラムを生んだ。ラムはヨルカムの父である。またレケムはシャンマイを生んだ。四五シャンマイの子はマオン。マオンはベテヅルの父である。四六カレブのそばめエバはハラン、モザ、

ガゼズを産んだ。ハランはガゼズを生んだ。四七エダイの子らはレゲム、ヨタム、ゲシャン、ペレテ、エバ、シヤフである。四ハカレブのそばめマアカはシベルとテルハナを産み、四九またマデマンナ之父シヤフおよびマクベナとギベア之父シワを産んだ。カレブの娘はアクサである。五〇これらはカレブの子孫であつた。

エフラタの長子ホルの子らはキリアテ・ヤリムの父シヨバル、五ベツレヘムの父サルマおよびベテガデルの父ハレフである。五ニキリアテ・ヤリムの父シヨバル子らはハロエとメヌコテびとの半ばである。五三キリアテ・ヤリムの氏族はイテルびと、プテびと、シユマびと、ミシラびとであつて、これらからザレアびとおよびエシタオルびとが出た。五四サルマの子らはベツレヘム、ネトパびと、アタロテ・ベテ・ヨアブ、マナハテびとの半ばおよびゾリびとである。五五またヤベツに住んでいた書記の氏族テラテびと、シメアテびと、スカテびとである。これらはケニびとであつてレカブの家の先祖ハマテから出た者である。

第三章

一ヘブロンで生れたダビデの子らは次のとおりである。長子はアムノンでエズレルびとアヒノアムから生れ、次はダニエルでカルメルびとアビガイルから生れ、二第三はアブサロムでゲ

シユルの王タルマイの娘マアカの産んだ子、第四はアドニヤでハギテの産んだ子、三第五はシパテヤでアビタルから生れ、第六はイテレアムで、彼の妻エグラから生れた。四この六人はヘブロンで彼に生れた。ダビデがそこで王となつていたのは七年六月、エルサレムで王となつていたのは三十三年であつた。五エルサレムで生れたものは次のとおりである。すなわちシメア、シヨバブ、ナタン、ソロモン。この四人はアンミエルの娘バテシユアから生れた。六またイブハル、エリシヤマ、エリペレテ、セノガ、ネベグ、ヤピア、ハエリシヤマ、エリアダ、エリペレテの九人、九これらはみなダビデの子である。このほかに、そばめどの産んだ子らがあり、タマルは彼らの姉妹であつた。

一〇ソロモンの子はレハベアム、その子はアビヤ、その子はアサ、その子はヨシヤパテ、二その子はヨラム、その子はアハジヤ、その子はヨアシ、三その子はアマジヤ、その子はアザリヤ、その子はヨタム、四その子はアハズ、その子はヒゼキヤ、その子はマナセ、五その子はアモン、その子はヨシヤ、六ヨシヤの子らは長子ヨハナン、次はエホヤキム、第三はゼデキヤ、第四はシャルテル、一ハマルキラム、ペダヤ、セナザル、エカミア、ホシヤマ、ネダビヤである。九ペダヤの子らはゼルバベルとシメイである。ゼルバベルの子らはメシユラムとハナニヤ。シロミ

テは彼らの姉妹である。二〇またハシユバ、オヘル、ベレキヤ、ハサデヤ、ユサブ・ヘセデの五人がある。二一ハナニヤの子らはベラテヤとエシヤヤ、その子レパヤ、その子アルナン、その子オバデヤ、その子シカニヤである。二二シカニヤの子らはシマヤ。シマヤの子らはハットシ、イガル、バリア、ネアリヤ、シヤパテの六人である。二三ネアリヤの子らはエリオエナイ、ヒゼキヤ、アズリカムの三人である。二四エリオエナイの子らはホダヤ、エリアシブ、ペラヤ、アックブ、ヨハナン、デラヤ、アナニの七人である。

第四章

一ユダの子らはペレヅ、ヘヅロン、カルミ、ホル、シヨバルである。二シヨバルの子レアヤはヤハテを生み、ヤハテはアホマイとラハデを生んだ。これらはザレアびとの一族である。三エタムの子らはエズレル、イシマおよびイデバシ、彼らの姉妹の名はハゼレルポニである。四ゲドルの父はベヌエル、ホシヤの父はエゼルである。これらはベツレヘムの父エフラタの長子ホルの子らである。五テコアの父アシユルにはふたりの妻ヘラとナアラとがあった。六ナアラはアシユルによつてアホザム、ヘベル、テメニおよびアハシタリを産んだ。これらはナアラの子である。セヘラの子らはゼレテ、エゾアル、エテナンである。ハコヅはアヌ

ブとゾベバを生んだ。またハルムの子アハルヘルの氏族も彼らから出た。九ヤベツはその兄弟のうちで最も尊ばれた者であった。その母が「わたしは苦しんでこの子を産んだから」と言つてその名をヤベツと名づけたのである。一〇ヤベツはイスラエルの神に呼ばわつて言つた、「どうか、あなたが豊かにわたしを恵み、わたしの国境を広げ、あなたの手がわたしとともにあつて、わたしを災から免れさせ、苦しみをうけさせられないように」。神は彼の求めるところをゆるされた。一一シユワの兄弟ケルブはメヒルを生んだ。メヒルはエシトンの父、二エシトンはベトラバ、パセアおよびイルナハシの父テヒンナを生んだ。これらはレカの人々である。三ケナズの子らはオテニエルとセラヤ。オテニエルの子らはハタテとメオノタイ。四メオノタイはオフラを生み、セラヤはゲハラシムの父ヨアブを生んだ。彼らは工人であつたのでゲハラシムと呼ばれたのである。五エフンネの子カレブの子らはイル、エラおよびナアム。エラの子はケナズ。六エハレルの子らはジフ、ジバ、テリア、アサレルである。七エズラの子らはエテル、メレデ、エベル、ヤロン。次のものはメレデがめとつたパロの娘ビテヤの子らである。すなわち彼女はみごもつてミリアム、シャンマイおよびイシバを産んだ。イシバはエシテモアの父である。八彼の妻はユダヤ人で、ゲドルの父エレデとソコの父ヘベルとザノアの父エクトエルを産んだ。九ナハムの姉妹であるホデヤの妻の子らはガ

ルムびとケイラの父およびマアカびとエシテモアである。ニ○シモンの子らはアムノン、リンナ、ベネハナン、テロンである。イシの子らはゾヘとベネゾヘテである。ニユダの子シラの子らはレカの父エル、マレシヤの父ラダおよびベテアシベアの亜麻布織の家の一族、ニならびにモアブを治めてレヘムに帰つたヨキム、コゼバの人々、ヨアシおよびサラフである。その記録は古い。ニこれらの者は陶器を造る人で、ネタイムおよびゲデラに住み、王の用をするため、王とともに、そこに住んだ。

ニ四シメオンの子らはネムエル、ヤミン、ヤリブ、ゼラ、シャウル。ニ五シャウルの子はシャルム、その子はミブサム、その子はミシマ。ニ六ミシマの子孫は、その子はハムエル、その子はザツクル、その子はシメイ。ニモシメイには男の子十六人、女の子六人あつたが、その兄弟たちには多くの子はなかつた。またその氏族の者はすべてユダの子孫ほどにはふえなかつた。ニ八彼らの住んだ所はベエルシバ、モラダ、ハザル・シユアル、ニ九ビルハ、エゼム、トラデ、ニ〇ベトエル、ホルマ、チクラグ、ニ一ベテ・マルカボテ、ハザル・スシム、ベテ・ピリ、およびシャライムである。これらはダビデの世に至るまで彼らの町であつた。ニ三その村里はエタム、アイン、リンモン、トケン、アシヤンの五つの町である。ニ四またこれらの町々の周囲に多くの村があつて、バアルまでおよんだ。彼らのすみかは以上のとおりで、彼らはおのの系図をもつていた。ニ五メシヨバブ、ヤムレク、アマジ

ヤの子ヨシヤ、ニ五ヨエル、アシエルのひこ、セラヤの孫、ヨシピアの子エヒウ。ニ六エリオエナイ、ヤコバ、エシヨハヤ、アサヤ、アデエル、エシミエル、ベナヤ、ニ七およびシピの子ジザ。シピはアロンの子、アロンはエダヤの子、エダヤはシムリの子、シムリはシマヤの子である。ニ八ここに名をあげた者どもはその氏族の長であつて、それらの氏族は大いにふえ広がつた。ニ九彼らは群れのために牧場を求めてゲドルの入口に行き、谷の東の方まで進み、四〇ついに豊かな良い牧場を見いだした。その地は広く穏やかで、安らかであつた。その地の前の住民はハムびとであつたからである。四一これらの名をしるした者どもはユダの王ヒゼキヤの世に行つて、彼らの天幕と、そこにいたメウニびとを撃ち破り、彼らをことごとく滅ぼして今日に至つてゐる。そこには、群れのための牧場があつたので、彼らはそこに住んだ。四二またシメオンびとのうちの五百人はイシの子らペラテヤ、ネアリヤ、レパヤ、ウジエルをかしらとしてセイル山に行き、四三アマレクびとで、のがれて残つてゐた者を撃ち滅ぼして、今日までそこに住んでゐる。

第五章

イスラエルの長子ルベンの子らは次のとおりである。ーールベンは長子であつたが父の床を汚したので、長子の権はイスラ

エルの子ヨセフの子らに与えられた。それで長子の権による系図にしろされていない。ニまたユダは兄弟たちにまさる者となり、その中から君たる者がだが長子の権はヨセフのものとなつたのである。――ミすなわちイスラエルの長子ルベンの子らはハノク、パル、ヘヅロン、カルミ。四ヨエルの子らはその子はシマヤ、その子はゴグ、その子はシメイ、五その子はミカ、その子はレアヤ、その子はバアル、六その子はベエラである。このベエラはアツスリヤの王テルガテ・ピルネセルが捕え移した者である。彼はルベンびとのつかさであつた。七彼の兄弟たちは、その氏族により、その歴代の系図によれば、かしらエイエルおよびゼカリヤ、ハベラなどである。ペラはアザズの子、シマの孫、ヨエルのひこである。彼はアロエルに住み、ネボおよびバアル・メオンまで及んでいたが、九ギレアデの地の家畜がふえ増したので、彼は東の方ユフラテ川のこなたの荒野の入口にまで住んだ。一〇またサウルの時、彼らはハガルびとと戦つて、これを撃ち倒し、ギレアデの東の全部にわたつて彼らの天幕に住んだ。

ニガドの子孫はこれと相對してバシヤンの地に住み、サルカまで及んでいた。ニ三そのかしらはヨエル、次はシャパム、ヤアナイ、シャパテで、ともにバシヤンに住んだ。ニ四彼らの兄弟たちは、その氏族によればミカエル、メシユラム、シバ、ヨライ、ヤカン、ジア、エベルの七人である。ニ四これらはホリの子アビハ

イルの子らである。ホリはヤロアの子、ヤロアはギレアデの子、ギレアデはミカエルの子、ミカエルはエシサイの子、エシサイはヤドの子、ヤドはブズの子である。ニ五アヒはアブデルの子、アブデルはグニの子、グニはその氏族の長である。ニ六彼らはギレアデとバシヤンとその村里とシャロンのすべての放牧地に住んで、その四方の境にまで及んでいた。ニ七これらはみなユダの王ヨタムの世とイスラエルの王ヤラバアムの世に系図にのせられた。

ニハルベンびとと、ガドびとと、マナセの半部族には出て戦いうる者四万四千七百六十人あり、皆勇士で、盾とつるぎをとり、弓をひき、戦いに巧みな人々であつた。ニ九彼らはハガルびとおよびエトル、ネフシ、ノダブなどと戦つたが、ニ〇助けを得てこれを攻めたので、ハガルびとおよびこれとともにいた者は皆、彼らの手にわたされた。これは彼らが戦いにあつて神に呼ばわり、神に寄り頼んだので神はその願いを聞かれたからである。ニ一彼らはその家畜を奪い取つたが、らくだ五万、羊二十五万、ろば二千あり、また人は十万人あつた。ニ三これはその戦いが神によつたので、多くの者が殺されて倒れたからである。そして彼らは捕え移される時まで、これに代つてその所に住んだ。ニ四マナセの半部族の人々はこの地に住み、ふえ広がつて、ついにバシヤンからバアル・ヘルモン、セニルおよびヘルモン山にまで及んだ。ニ四その氏族の長たちは次のとおりである。すなわ

ち、エベル、イシ、エリエル、アズリエル、エレミヤ、ホダヤ、ヤデエル。これらは皆その氏族の長で名高い大勇士であつた。三、五彼らは先祖たちの神にむかつて罪を犯し、神が、かつて彼らの前から滅ぼされた国の民の神々を慕つて、これと姦淫したので、ニイスラエルの神は、アッスリヤの王ブルの心を奮い起し、またアッスリヤの王テルガテ・ピルネセルの心を奮い起されたので、彼はついにルベンびとと、ガドびとと、マナセの半部族を捕えて行き、ハウラとハボルとハラとゴザン川のほとりに移して今日に至っている。

第六章

一レビの子らはゲルシオン、コハテ、メラリ。ニコハテの子らはアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル。ミアムラムの子らはアロン、モーセ、ミリアム。アロンの子らはナダブ、アビウ、エレアザル、イタマル。四エレアザルはピネハスを生み、ピネハスはアビシユアを生み、五アビシユアはブッキを生み、ブッキはウジを生み、六ウジはゼラヒヤを生み、ゼラヒヤはメラヨテを生み、七メラヨテはアマリヤを生み、アマリヤはアヒトブを生み、八アヒトブはザドクを生み、ザドクはアヒマアズを生み、九アヒマアズはアザリヤを生み、アザリヤはヨナハンを生み、一〇ヨナハンはアザリヤを生んだ。このアザリヤはソロモンがエルサレム

に建てた宮で祭司の務をした者である。二アザリヤはアマリヤを生み、アマリヤはアヒトブを生み、ニアヒトブはザトクを生み、ザトクはシャルムを生み、三シャルムはヒルキヤを生み、ヒルキヤはアザリヤを生み、四アザリヤはセラヤを生み、セラヤはヨザダクを生んだ。五ヨザダクは主がネブカデネザルの手によつてユダとエルサレムの人を捕え移された時に捕えられて行つた。

六レビの子らはゲルシオン、コハテおよびメラリ。七ゲルシオンの子らの名はリブニとシメイ。八コハテの子らはアムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエルである。九メラリの子らはマヘリとムシ。これらはレビびととその家筋による氏族である。一〇ゲルシオンの子はリブニ、その子はヤハテ、その子はジンマ、二その子はヨア、その子はイド、その子はゼラ、その子はヤテライ。三コハテの子はアミナダブ、その子はコラ、その子はアシル、四その子はエルカナ、その子はエビアサフ、その子はアシル、五その子はタハテ、その子はウリエル、その子はウジヤ、その子はシャウル。六エルカナの子らはアマサイとアヒモテ、七その子はエルカナ、その子はゾバイ、その子はナハテ、八その子はエリアブ、その子はエロハム、その子はエルカナ。九サムエルの子らは、長子はヨエル、次はアビヤ。一〇メラリの子はマヘリ、その子はリブニ、その子はシメイ、その子はウザ、一一その子はシメア、その子はハギヤ、その子はアサヤであ

る。

三 契約の箱を安置したのち、ダビデが主の宮で歌をうたう事をつかさどらせた人々は次のとおりである。三 彼らは会見の幕屋の前で歌をもつて仕えたが、ソロモンがエルサレムに主の宮を建ててからは、一定の秩序に従つて務を行つた。三三 その務をしたもの、およびその子らは次のとおりである。コハテびとの子らのうちヘマンは歌をうたう者、ヘマンはヨエルの子、ヨエルはサムエルの子、四 サムエルはエルカナの子、エルカナはエロハムの子、エロハムはエリエルの子、エリエルはトアの子、五 トアはツフの子、ツフはエルカナの子、エルカナはマハテの子、マハテはアマサイの子、六 アマサイはエルカナの子、エルカナはヨエルの子、ヨエルはアザリヤの子、アザリヤはゼパニヤの子、七 ゼパニヤはタハテの子、タハテはアシルの子、アシルはエビアサフの子、エビアサフはコラの子、八 コラはイツハルの子、イツハルはコハテの子、コハテはレビの子、レビはイスラエルの子である。九 ヘマンの兄弟アサフはヘマンの右に立つた。アサフはベレキヤの子、ベレキヤはシメアの子、四〇 シメアはミカエルの子、ミカエルはバアセヤの子、バアセヤはマルキヤの子、四一 マルキヤはエテニの子、エテニはゼラの子、ゼラはアダヤの子、四二 アダヤはエタンの子、エタンはジンマの子、ジンマはシメイの子、四三 シメイはヤハテの子、ヤハテはゲルシヨンの子、ゲルシヨンはレビの子である。四四 また彼らの兄弟である

メラリの子らが左に立つた。そのうちのエタンはキシの子、キシはアブデの子、アブデはマルクの子、四五 マルクはハシャビヤの子、ハシャビヤはアマジヤの子、アマジヤはヒルキヤの子、四六 ヒルキヤはアムジの子、アムジはバニの子、バニはセメルの子、四七 セメルはマヘリの子、マヘリはムシの子、ムシはメラリの子、メラリはレビの子である。四八 彼らの兄弟であるレビびとたちは、神の宮の幕屋のもろもろの務に任じられた。

四九 アロンとその子らは燔祭の壇と香の祭壇の上にささげることとなし、また至聖所のすべてのわざをなし、かつイスラエルのためにあがないをなした。すべて神のしもべモーセの命じたとおりである。五〇 アロンの子孫は次のとおりである。アロンの子はエレアザル、その子はピネハス、その子はアビシユア、五一 その子はブッキ、その子はウジ、その子はゼラヒヤ、五二 その子はメラヨテ、その子はアマリヤ、その子はアヒトブ、五三 その子はザドク、その子はアヒマアズである。

五四 アロンの子孫の住む所はその境のうちに宿営によつていえば次のとおりである。まずコハテびとの氏族がくじによつて得たところ、五五 すなわち彼らと与えられたところは、ユダの地にあるヘブロンとその周囲の放牧地である。五六 ただし、その町の田畑とその村々は、エフンネの子カレブに与えられた。五七 そしてアロンの子孫に与えられたものは、のがれの町であるヘブロンおよびリブナとその放牧地、ヤッテルおよびエシテモア

とその放牧地、五ハヒレンとその放牧地、デビルとその放牧地、五
 九アシャンとその放牧地、ベテシメシとその放牧地である。六〇
 またベニヤミンの部族のうちからはゲバとその放牧地、アレメ
 テとその放牧地、アナトテとその放牧地を与えられた。彼らの
 町は、すべてその氏族のうちに十三あつた。

六二またコハテの子孫の残りの者は部族の氏族のうちからと、半
 部族すなわちマナセの半部族のうちからくじによつて十の町を
 与えられた。六三またゲルシヨンの子孫はその氏族によつて
 イッサカルの部族、アセルの部族、ナフタリの部族、およびバ
 シヤンのマナセの部族のうちから十三の町が与えられた。六四
 メラリの子孫はその氏族によつてルベンの子孫、ガドの子孫、お
 よびゼブルンの部族のうちからくじによつて十二の町が与えら
 れた。六四このようにイスラエルの人々はレビびとに町々とそ
 の放牧地とを与えた。六五すなわちユダの子孫の部族とシメオ
 ンの部族の子孫と、ベニヤミンの子孫の部族のうちからここに
 名をあげたこれらの町をくじによつて与えた。

六六コハテの子孫の氏族はまたエフライムの部族のうちからも
 町々を獲てその領地とした。六七すなわち彼らが与えられた、の
 がれの町はエフライムの山地にあるシケムとその放牧地、ゲゼ
 ルとその放牧地、ハハヨクメアムとその放牧地、ベテホロンとそ
 の放牧地、六九アヤロンとその放牧地、ガテリンモンとその放牧
 地である。七〇またマナセの半部族のうちからは、アネルとその

放牧地およびビレアムとその放牧地を、コハテの子孫の氏族の
 残りのものに与えた。

七一ゲルシヨンの子孫に与えられたものはマナセの半部族のう
 ちからはバシヤンのゴランとその放牧地、アシタロテとその
 放牧地。七二イッサカルの部族のうちからはケデシとその放牧
 地、ダバラテとその放牧地、セトラモテとその放牧地、アネムと
 その放牧地。七三アセルの部族のうちからはマシヤルとその
 放牧地、アブドンとその放牧地、七四ホコクとその放牧地、レホ
 ブとその放牧地。七五ナフタリの部族のうちからはガリラヤの
 ケデシとその放牧地、ハンモンとその放牧地、キリアタイムとそ
 の放牧地である。七六このほかのもの、すなわちメラリの子孫に
 与えられたものはゼブルンの部族のうちからリンモンとその
 放牧地、タボルとその放牧地、七八エリコに近いヨルダンのかな
 た、すなわちヨルダンの東ではルベンの部族のうちからは荒野
 のベゼルとその放牧地、ヤザとその放牧地、七九ケデモテとその
 放牧地、メパアテとその放牧地。八〇ガドの部族のうちからはギ
 レアデのラモテとその放牧地、マハナイムとその放牧地、八一ヘ
 シボンとその放牧地、ヤゼルとその放牧地である。

第七章

ーイッサカルの子らはトラ、プワ、ヤシユブ、シムロムの四人。

ニトラの子らはウジ、レパヤ、エリエル、ヤマイ、エブサム、サムエル。これは皆トラの子で、その氏族の長である。その子孫の大勇士たる者はダビデの世にはその数二万二千六百人であった。ミウジの子はイズラヒヤ、イズラヒヤの子らはミカエル、オバデヤ、ヨエル、イシアの五人で、みな長たる者であった。四その子孫のうちに、その氏族に従えば軍勢の士卒三万六千人あった。これは彼らが妻子を多くもっていたからである。五イツサカルの子はすべての氏族のうちの兄弟たちで系図によつて数えられた大勇士は合わせて八万七千人あった。

ハベニヤミンの子らはベラ、ベケル、エデアエルの三人。セベラの子らはエツボン、ウジ、ウジエル、エレモテ、イリの五人で、皆その氏族の長である。その系図によつて数えられた大勇士は二万二千三十四人あった。ハベケルの子らはゼミラ、ヨアシ、エリエゼル、エリオエナイ、オムリ、エレモテ、アビヤ、アナトテ、アラメテで皆ベケルの子らである。九その子孫のうち、その氏族の長として系図によつて数えられた大勇士は二万二百人あった。一〇エデアエルの子らはビルハン。ビルハンの子らはエウシ、ベニヤミン、エホデ、ケナアナ、ゼタン、タルシシ、アヒシヤハル。二皆エデアエルの子らで氏族の長であった。その子孫のうちには、いくさに出てよく戦う大勇士が一万七千二百人あった。三またイルの子らはシユパムとホパム。アヘルの子はホシムである。

三ナフタリの子らはヤハジエル、グニ、エゼル、シャルムで皆ビルハの産んだ子である。一四マナセの子らはそのそばめであるスリヤの女の産んだアスリエル。彼女はまたギレアデの父マキルを産んだ。一五マキルはホパムとシユパムの妹マアカという者を妻にめとつた。二番目の子はゼロペハデという。ゼロペハデには女の子だけがあつた。一六マキルの妻マアカは男の子を産んで名をベレシと名づけた。その弟の名はシャレシ。シャレシの子らはウラムとラケムである。一七ウラムの子はベダン。これらはマナセの子マキルの子であるギレアデの子らである。一八その妹ハンモレケテはイシホデ、アビエゼル、マヘラを産んだ。一九セミダの子らはアヒアン、シケム、リキ、アニアムである。

二〇エフライムの子はシュテラ、その子はベレデ、その子はタハテ、その子はエラダ、その子はタハテ、三その子はザバデ、その子はシュテラである。エゼルとエレアデはガテの土人らに殺された。これは彼らが下つて行つてその家畜を奪おうとしたからである。三父エフライムが日久しくこのために悲しんだので、その兄弟たちが来て彼を慰めた。三三そののち、エフライムは妻のところにはいった。妻ははらんで男の子を産み、その名をベリアと名づけた。その家に災があつたからである。三四エフライムの娘セラは上と下のベテホロンおよびウゼン・セラを建てた。三五ベリアの子はレバ、その子はレセフ、その子はテラ、

その子はタハン、ニ六その子はラダン、その子はアミホデ、その子はエリシャマ、ニ七その子はヌン、その子はヨシユア。ニ八エライムの子孫の領地と住所はベテルとその村々、また東の方ではナアラン、西の方ではゲゼルとその村々、またシケムとその村々、アワとその村々。ニ九またマナセの子孫の国境に沿って、ベテシヤンとその村々、タアナクとその村々、メギドンとその村々、ドルとその村々で、イスラエルの子ヨセフの子孫はこれらの所に住んだ。

三〇アセルの子らはイムナ、イシワ、エスイ、ベリアおよびその姉妹セラ。三一ベリアの子らはヘベルとマルキエル。マルキエルはビルザヒテの父である。三二ヘベルはヤフレテ、シヨメル、ホタムおよびその姉妹シユアを生んだ。三三ヤフレテの子らはパサク、ビムハル、アシワテ。これらはヤレフテの子らである。三四彼の兄弟シヨメルの子らはロガ、ホバおよびアラム。三五シヨメルの子らはヘレムの子らはゾパ、イムナ、シレシ、アマル。三六ゾパの子らはスア、ハルネベル、シユアル、ベリ、イムラ、ミセベゼル、ホド、シヤンマ、シルシヤ、イテラン、ベエラ。三八エテルの子らはエフンネ、ピスパおよびアラ。三九ウラの子らはアラ、ハニエル、およびリヂア。四〇これらは皆アセルの子孫であつて、その氏族の長、えりぬきの大勇士、つかさたちのかしらであつた。その系図によつて数えられた者で、いくさに出てよく戦う者の数は二万六千人であつた。

第八章

一ベニヤミンの生んだ者は長子はベラ、その次はアシベル、第三はアハラ、ニ第四はノハ、第五はラパ。ミベラの子らはアダル、ゲラ、アビウデ、四アビシユア、ナアマン、アホア、五ゲラ、シフパム、ヒラム。六エホデの子らは次のとおりである。(これらはゲバの住民の氏族の長であつて、マナハテに捕え移されたものである。)セすなわちナアマン、アヒヤ、ゲラすなわちヘグラム。ゲラはウザとアヒフデの父であつた。ハシヤハライムは妻ホシムとバアラを離別してのち、モアブの国で子らをもうけた。九彼が妻ホデシによつてもうけた子らはヨバブ、デビア、メシヤ、マルカム、一〇エウヅ、シヤキヤ、ミルマ。これらはその子らであつて氏族の長である。二彼はまたホシムによつてアビトブとエルパアルをもうけた。ニエルパアルの子らはエベル、ミシヤムおよびセメド。彼はオノとロドとその村々を建てた者である。三またベリアとシマがあつた。(これはアヤロンの住民の氏族の長であつて、ガテの住民を追い払つたものである。)四またアヒオ、シヤシヤク、エレモテ。五ゼバデヤ、アラデ、アデル、六ミカエル、イシパおよびヨハはベリアの子らであつた。七ゼバデヤ、メシユラム、ヘゼキ、ヘベル、八ハイシメライ、エズリアおよびヨバブはエルパアルの子らであつた。九ヤキン、ジクリ、ザベデ、一〇エリエナイ、チルタイ、エリエル、ニアダ

ヤ、ベラヤおよびシムラテはシマの子らであつた。三イシパ
ン、ヘベル、エリエル、三アブドン、ジクリ、ハナン、二四ハナ
ニヤ、エラム、アントテヤ、二五イペデヤおよびベヌエルはシャ
シャクの子らであつた。二六シヤムセライ、シハリア、アタリヤ、
ニモヤレシヤ、エリヤおよびジクリはエロハムの子らであつた。
二八これらは歴代の氏族の長であり、またかしらであつて、エル
サレムに住んだ。

二九ギベオンの父エイエルはギベオンに住み、その妻の名はマア
カといつた。三〇その長子はアブドンで、次はツル、キシ、バア
ル、ナダブ、三ゲドル、アヒオ、ザケル、三〇およびミクロテ。ミ
クロテはシメアを生んだ。これらもまた兄弟たちと向かい
あつてエルサレムに住んだ。三三ネルはキシを生み、キシはサウ
ルを生み、サウルはヨナタン、マルキシユア、アビナダブ、エシ
バアルを生んだ。三四ヨナタンの子はメリバアルで、メリバアル
はミカエルを生んだ。三五ミカの子らはピトン、メレク、タレア、
アハズである。三六アハズはエホアダを生み、エホアダはアレメ
テ、アズマウテ、ジムリを生み、ジムリはモザを生み、三七モザ
はビネアを生んだ。ビネアの子はラバ、ラバの子はエレアサ、エ
レアサの子はアゼルである。三八アゼルには六人の子があり、そ
の名はアズリカム、ボケル、イシマエル、シャリヤ、オバデヤ、
ハナンで、皆アゼルの子である。三九その兄弟エセクの子らは、
長子はウラム、次はエウシ、第三はエリペレテである。四〇ウラ

ムの子らは大勇士で、よく弓を射る者であつた。彼は多くの子
と孫をもち、百五十人もあつた。これらは皆ベニヤミンの子孫
である。

第九章

一このようにすべてのイスラエルびとは系図によつて数えられ
た。これらはイスラエルの列王紀に記されている。ユダはそ
の不信のゆえにバビロンに捕囚となつた。二その領地の町々に
最初に住んだものはイスラエルびと、祭司、レビびとおよび宮に
仕えるしもべたちであつた。三またエルサレムにはユダの子孫、
ベニヤミンの子孫およびエフライムとマナセの子孫が住んでい
た。四すなわちユダの子ペレツの子孫のうちではアミホデの子
ウタイ。アミホデはオムリの子、オムリはイムリの子、イムリは
バニの子である。五シロびとのうちでは長子アサヤとそのほか
の子たち。六ゼラの子孫のうちではユエルとその兄弟六百九十
人。セベニヤミンの子孫のうちではハセヌアの子ホダビヤの子
であるメシユラムの子サル、ハエロハムの子イブニヤ、ミクリの
子であるウジの子エラおよびイブニヤの子リウエルの子である
シパテヤの子メシユラム、九ならびに彼らの兄弟たちで、その
系図によれば合わせて九百五十六人。これらの人々は皆その
氏族の長であつた。

一〇祭司のうちではエダヤ、ヨアリブ、ヤキン、一一およびヒルキヤの子アザリヤ、ヒルキヤはメシユラムの子、メシユラムはザドクの子、ザドクはメラヨテの子、メラヨテはアヒトブの子である。アザリヤは神の宮のつかさである。一二またエロハムの子アダヤ、エロハムはパシユルの子、パシユルはマルキヤの子である。またアデエルの子はマアセヤ、アデエルはヤゼラの子、ヤゼラはメシユラムの子、メシユラムはメシレモテの子、メシレモテはインメルの子である。一三そのほかに彼らの兄弟たちもあつた。これらはその氏族の長で、合せて一千七百六十人、みな神の宮の務をするのに、はなはだ力のある人々であつた。

一四レビびとのうちではハシユブの子シマヤ、ハシユブはアズリカムの子、アズリカムはハシャビヤの子で、これらはメラリの子孫である。一五またバクバツカル、ヘレシ、ガラル、およびアサフの子ジクリの子であるミカの子マツタニヤ、一六ならびにエドトンの子ガラルの子であるシマヤの子オバデヤおよびエルカナの子であるアサの子ベレキヤ、エルカナはネトパびとの村里に住んだ者である。

一七門を守るものはシャルム、アツクブ、タルモン、アヒマンおよびその兄弟たちで、シャルムはその長であつた。一八彼は今日まで東の方にある王の門を守っている。これらはレビの子孫で、門を守る者である。一九コラの子エビヤサフの子であるコレの子シャルムおよびその氏族の兄弟たちなどのコラびとは

幕屋のもろもろの門を守る務をつかさどつた。その先祖たちは主の営をつかさどり、その入口を守る者であつた。二〇エレアザルの子ビネハスが、むかし彼らのつかさであつた。主は彼とともにおられた。二一メシレミヤの子ゼカリヤは会見の幕屋の門を守る者であつた。二三これらは皆選ばれて門を守る者で、合せて二百十二人あつた。彼らはその村々で系図によつて数えられた者で、ダビデと先見者サムエルが彼らを職に任じたのである。二四こうして彼らとその子孫は監守人として、主の家である幕屋の家の門をつかさどつた。二五門を守る者は東西南北の四方にいた。二六またその村々にいる兄弟たちは七日ごとに代り、来て彼らを助けた。二七門を守る者の長である四人のレビびとは神の家のもろもろの室と宝をつかさどつた。二八彼らは神の家を守る身であるから、そのまわりに宿つた。そして朝ごとにこれを開くことをした。

二九そのうちに務の器をつかさどる者があつた。彼らはその数を調べて携え入り、またその数を調べて携え出した。三〇またそのほかの品、すべての聖なる器および麦粉、ぶどう酒、油、乳香、香料をつかさどる者があつた。三一また祭司のともがらのうちに香料を混ぜる者があつた。三二コラびととシャルムの長子でレビびとのひとりであるマタテヤはせんべいを造る勤めをつかさどつた。三三またコハテびとの子孫であるその兄弟たちのうち

に供えのパンをつかさどつて、安息日ごとにこれを整える者ど

もがあつた。

ミレビびとの氏族の長であるこれらの者は歌うたう者であつて、宮のもろもろの室に住み、ほかの務はしなかつた。彼らは日夜自分の務に従つたからである。ミこれらはレビびとの歴代の氏族の長であつて、かしらたる人々であつた。彼らはエルサレムに住んだ。

ミ五ギベオンの父エヒエルはギベオンに住んでいた。その妻の名はマアカといつた。ミ彼の長子はアブドン、次はツル、キシ、バアル、ネル、ナダブ、ミゲドル、アヒオ、ゼカリヤ、ミクロテである。ミミクロテはシメアムを生んだ。彼らもその兄弟たちとともにエルサレムに住んで、その兄弟たちと向かいあつていた。ミネルはキシを生み、キシはサウルを生み、サウルはヨナタン、マルキシユア、アビナダブ、エシバアルを生んだ。ミヨナタンの子はメリバアルで、メリバアルはミカを生んだ。ミミカの子らはピトン、メレク、タレアおよびアハズである。ミニアハズはヤラを生み、ヤラはアレメテ、アズマウテおよびジムリを生み、ジムリはモザを生み、ミモザはピネアを生んだ。ピネアの子はレバヤ、その子はエレアサ、その子はアゼルである。ミ四アゼルに六人の男の子があつた。その名はアズリカム、ボケル、イシマエル、シャリヤ、オバデヤ、ハナン。これらはみなアゼルの子らであつた。

第一〇章

一さてペリシテびとはイスラエルと戦つたが、イスラエルの人々がペリシテびとの前から逃げ、ギルボア山で殺されて倒れたので、ニペリシテびとはサウルとその子たちのあとを追ひ、サウルの子ヨナタン、アビナダブおよびマルキシユアを殺した。ミ戦いは激しくサウルにおし迫り、射手の者どもがついにサウルを見つけたので、彼は射手の者どもに傷を負わされた。四そこでサウルはその武器を執る者に言つた、「つるぎを抜き、それをもつてわたしを刺せ。さもないと、これらの割礼なき者が来て、わたしをはずかしめるであらう」。しかしその武器を執る者がいたく恐れて聞きいれなかつたので、サウルはつるぎをとつてその上に伏した。五武器を執る者はサウルの死んだのを見て、自分もまたつるぎの上に伏して死んだ。六こうしてサウルと三人の子らおよびその家族は皆ともに死んだ。七谷にいたイスラエルの人々は皆彼らの逃げるのを見、またサウルとその子らの死んだのを見て、町々をすてて逃げたので、ペリシテびとが来てそのうちに住んだ。

ハあくる日ペリシテびとは殺された者から、はぎ取るために来て、サウルとその子らのギルボア山に倒れているのを見、サウルをはいでその首と、よろいかぶとを取り、ペリシテびとの国の四方に人をつかわして、この良き知らせをその偶像と民に告げ

第二章

させた。一〇そしてサウルのよろいかぶとを彼らの神の家に置き、首をダゴンの神殿にくぎづけにした。ニしかしヤベシ・ギレアデの人々は皆ペリシテびとがサウルにしたことを聞いたので、三勇士たちが皆立ち上がり、サウルのからだとその子らのからだをとって、これをヤベシに持つて来て、ヤベシのかしの木の下にその骨を葬り、七日の間、断食した。

三こうしてサウルは主にむかつて犯した罪のために死んだ。すなわち彼は主の言葉を守らず、また口寄せに問うことをして、四主に問うことをしなかった。それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデに与えられた。

一ここにイスラエルの人は皆ヘbronにいるダビデのもとに集まって来て言った、「われわれは、あなたの骨肉です。ニ先にサウルが王であった時にも、あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そしてあなたの神、主はあなたに『あなたはわが民イスラエルを牧する者となり、わが民イスラエルの君となるであろう』と言われました」。三このようにイスラエルの長老が皆ヘbronにいる王のもとに來たので、ダビデはヘbronで主の前に彼らと契約を結んだ。そして彼らは、サムエルによって語られた主の言葉に従ってダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とし

た。

四ダビデとすべてのイスラエルはエルサレムへ行った。エルサレムはすなわちエブスであつて、そこにはその地の住民であるエブスびとがいた。五エブスの住民はダビデに言った、「あなたはここにはいつてはならない」。しかし、ダビデはシオンの要害を取った。これがすなわちダビデの町である。六この時ダビデは言った、「だれでも第一にエブスびとを撃つ者を、かしらとし、将とする」。ゼルヤの子ヨアブが第一にのぼっていったので、かしらとなつた。七そしてダビデがその要害に住んだので人々はこれをダビデの町と名づけた。八ダビデはまたその町の周囲すなわちミロから四方に石がきを築き、ヨアブは町のほかの部分をつつた。九こうしてダビデはますます大いなる者となつた。万軍の主が彼とともにおられたからである。

一〇ダビデの勇士のおもなものは次のとおりである。彼らはイスラエルのすべての人とともにダビデに力をそえて国を得させ、主がイスラエルについて言われた言葉にしたがつて、彼を王とした人々である。ニダビデの勇士の数は次のとおりである。すなわち三人の長であるハクモニびとの子ヤシヨベアム、彼はやりをふるつて三百人に向かい、一度にこれを殺した者である。三彼の次はアホアびとドドの子エレアザルで、三勇士のひとりである。四彼はダビデとともにパスタミムにいたが、ペリシテびとがそこに集まって来て戦った。そこに一面に大麦のはえ

た地所があつた。民はペリシテびとの前から逃げた。一四しかし彼は地所の中に立つてこれを防ぎ、ペリシテびとを殺した。そして主は大いなる勝利を与えて彼らを救われた。

二五三十人の長たちのうちの三人は下つて行ってアドラムのほらあなの岩の所にいるダビデのもとへ行つた。時にペリシテびとの軍勢はレイムの谷に陣を取つていた。一六その時ダビデは要害におり、ペリシテびとの先陣はベツレヘムにあつたが、一七ダビデはせつに望んで、「だれかベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよいのだが」と言つた。一八そこでその三人はペリシテびとの陣を突き通つて、ベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をくみ取つて、ダビデのもとに携えて来た。しかしダビデはそれを飲もうとはせず、それを主の前に注いで、「わが神よ、わたしは断じてこれをいたしません。命をかけて行つたこの人たちの血をどうしてわたしは飲むことができましよう。彼らは命をかけてこの水をとつて来たのです」。それゆえ、ダビデはこの水を飲もうとはしなかつた。三勇士はこのことをおこなつた。

二〇ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人の長であつた。彼はやりをふるつて三百人に立ち向かい、これを殺して三人のほかに名を得た。三彼は三十人のうち、最も尊ばれた者で、彼らのかしらとなつた。しかし、かの三人には及ばなかつた。

三三エホヤダの子ベナヤは、カブジエル出身の勇士であつて、多

くのがらを立てた。彼はモアブのアリエルのふたりの子を撃ち殺した。彼はまた雪の日に下つて行って、穴の中でしを撃ち殺した。三彼はまた身のたけ五キュビトばかりのエジプトびとを撃ち殺した。そのエジプトびとは手に機の巻棒ほどのやりを持つていたが、ベナヤはつえをとつて彼の所へ下つて行き、エジプトびとの手から、やりをもぎとり、そのやりをもつて彼を殺した。二四エホヤダの子ベナヤは、これらの事を行つて三勇士のほかに名を得た。二五彼は三十人のうちに有名であつたが、かの三人には及ばなかつた。ダビデは彼を侍衛の長とした。

二六軍団のうちの勇士はヨアブの兄弟アサヘル。ベツレヘム出身のドドの子エルハナン。二七ハロデ出身のシャンマ。ペロンびとヘレヅ。二八テコア出身のイツケシの子イラ。アナトテ出身のアビエゼル。二九ホシヤテびとシベカイ。アホアびとイライ。三〇ネトバ出身のマハライ。ネトバ出身のバアナの子ヘレデ。三一ベニヤミンびとのギベアから出たリバイの子イタイ。ピラトンのベナヤ。三二ガアシの谷のホライ。アルバテびとアビエル。三三バハルム出身のアズマウテ。シャルボン出身のエリヤバ。三四ギゾンびとハセム。ハラルびとシャゲの子ヨナタン。三五ハラルびとサカルの子アヒアム。ウルの子エリパル。三六メケラテびとヘペル。ペロンびとアヒヤ。三七カルメル出身のヘズロ。エズバイの子ナアライ。三八ナタンの兄弟ヨエル。ハグリの子ミブハル。三九アンモンびとゼレク。ゼルヤの子ヨ

アブの武器^{ぶき}を執^とるもの、ベエロテ出身^{しゅっしん}のナハライ。四〇イテルびとイラ。イテルびとガレブ。四一ヘテびとウリヤ。アハライの子ザバデ。四二ルベンびとシザの子アデナ。彼^{かれ}はルベンびとの長^{ちやう}であつて、三十人^{にん}を率^{ひき}いた。四三またマアカの子ハナン。ミテニびとヨシャパテ。四四アシテラテびとウジヤ。アロエルびとホタムの子^こらシヤマとエイエル。四五テジびとシムリの子エデアエルおよびその兄弟^{きやうだい}ヨハ。四六マハブびとエリエル。エルナムの子^こらエリバイおよびヨシヤビヤ。モアブびとイテマ。四七エリエル、オベデおよびメゾバびとヤシエルである。

第二章

一ダビデがキシの子サウルにしりぞけられて、なおチクラグにいた時^{とき}、次^{つぎ}の人々^{ひとびと}が彼^{かれ}のもとに來た。彼らはダビデを助^{たす}けて戰^{たたか}つた勇士^{ゆうし}たちのうちにあり、二弓^{ゆみ}をよくする者^{もの}、左右^{さゆう}いづれの手^てをもつてもよく矢^やを射^{いし}、石^{いし}を投^なげる者^{もの}で、ともにベニヤミンびとで、サウルの同族^{どうぞく}である。三そのかしらはアヒエゼル、次^{つぎ}はヨアシで、ともにギベア出身^{しゅっしん}のシマアの子たちである。またエリエルとペレテで、ともにアズマウテの子たちである。またベラカおよびアナトテ出身^{しゅっしん}のエヒウ。四またギベオン出身^{しゅっしん}のイシマヤ、彼^{かれ}は三十人^{にん}のうちの勇士^{ゆうし}で、その三十人^{にん}の長^{ちやう}である。またエレミヤ、ヤハジエル、ヨハナン、ゲデラ出身^{しゅっしん}のヨザバデ、五エ

ルザイ、エリモテ、ベアリヤ、シマリヤ、ハリフびとシパテヤ、ハエルカナ、イシア、アザリエル、ヨエゼル、ヤシヨベアムで、これらはコラびとである。セまたゲドルのエロハムの子たちであるヨエラおよびゼバデヤである。

ハガドびとのうちから荒野^{あらの}の要害^{ようがい}に來て、ダビデについた者^{もの}は皆勇士^{みなゆうし}で、よく戰^{たたか}う軍人^{ぐんじん}、よく盾^{たて}とやりをつかう者^{もの}、その顔^{かお}はししの顔^{かお}のようで、その速^{はや}いことは山^{やま}にいるしかのようであつた。九彼^{かれ}らのかしらはエゼル、次^{つぎ}はオバデヤ、第三^{だい}はエリアブ、一〇第四^{だい}はミシマンナ、第五^{だい}はエレミヤ、二第六^{だい}はアツタイ、第七^{だい}はエリエル、三第八^{だい}はヨナハン、第九^{だい}はエルザバデ、三第十^{だい}はエレミヤ、第十一^{だい}はマクバナイである。一四これらはガドの子孫^{しそん}で軍勢^{ぐんぜい}の長^{ちやう}たる者^{もの}、その最も小さい者^{もの}でも百人^{にん}に當^{あた}り、その最も大^{おほ}いなる者^{もの}は千人^{にん}に當^{あた}つた。一五正月^{しょうがつ}、ヨルダンがその全岸^{ぜんきし}にあふれたとき、彼^{かれ}らはこれを渡^{わた}つて、谷々^{たにだに}にいる者^{もの}をことごとく東^{ひがし}に西^{にし}に逃^にげ走^{はし}らせた。

一六ベニヤミンとユダの子孫^{しそん}のうちの人々^{ひとびと}が要害^{ようがい}に來て、ダビデについた。一七ダビデは出^でて彼^{かれ}らを迎^{むか}へて言^いつた、「あなたがたが好意^{こうい}をもつて、わたしを助^{たす}けるために來たのならば、わたしの心^{こころ}もあなたがたと、ひとつになりましょう。しかし、わたしの手^てになんの悪事^{あくじ}もないのに、もしあなたがたが、わたしを欺^{あざむ}いて、敵^{てき}に渡^{わた}すためであるならば、われわれの先祖^{せんぞ}の神^{かみ}がどうぞみそなわして、あなたがたを責^せめられますように」。一八時に靈^{れい}が三

十人の長アマサイに臨み、アマサイは言った、

「ダビデよ、われわれはあなたのもの。」

エッサイの子よ、われわれはあなたと共にある。

平安あれ、あなたに平安あれ。

あなたを助ける者に平安あれ。

あなたの神があなたを助けられる。」

そこでダビデは彼らを受け入れて部隊の長とした。

一九さきにダビデがペリシテびとと共にサウルと戦おうと攻めて来たとき、マナセびと数人がダビデについた。(ただしダビデはついにペリシテびとを助けなかった。それはペリシテびとの君たちが相はかつて、「彼はわれわれの首をとって、その主君サウルのもとに帰るであろう」と言って、彼を去らせたからである。)二〇ダビデがチクラグへ行つたとき、マナセびとアデナ、ヨザバデ、エデアエル、ミカエル、ヨザバデ、エリウ、ゲルタイが彼についた。皆マナセびとの千人の長であった。三彼らはダビデを助けて敵軍に当つた。彼らは皆大勇士で軍勢の長であった。三ダビデを助ける者が日に日に加わって、ついに大軍となり、神の軍勢のようになった。

三三主の言葉に従い、サウルの国をダビデに与えようとして、ヘブロンにいるダビデのもとに来た武装した軍隊の数は、次のとおりである。三四ユダの子孫で盾とやりをとり、武装した者六千八百人、三五シメオンの子孫で、よく戦う勇士七千百人、三六レビ

の子孫からは四千六百人。三七エホヤダはアロンの家のつかさで、彼に属する者は三千七百人。三八ザドクは年若い勇士で、彼の氏族から出た將軍は三十二人。三九サウルの同族、ベニヤミンの子孫からは三千人、ベニヤミンびとの多くはなおサウルの家に忠義をつくしていた。四〇エフライムの子孫からは二万八百人、皆勇士で、その氏族の名ある人々であつた。四一マナセの半部族からは一万八千人、皆ダビデを王に立てようとして上つて来て、名をつらねた者である。四二イツサカルの子孫からはよく時勢に通じ、イスラエルのなすべきことをわきまえた人々が来た。その長たる者が二百人あつて、その兄弟たちは皆その指揮に従つた。四三ゼブルンからは五万人、皆訓練を経た軍隊で、もろもろの武器で身をよよい、一心にダビデを助けた者である。四四ナフタリからは將たる者一千人および盾とやりをとつてこれに従う者三万七千人。四五ダンびとからは武装した者二万八千六百人。四六アセルからは戦いの備えをした熟練の者四万人。三七またヨルダンのかなたルベンびと、ガドびと、マナセの半部族からはもろもろの武器で身をよつた者十二万人であつた。

三八すべてこれらの戦いの備えをしたいくさびとらは真心をもつてヘブロンに来て、ダビデを全イスラエルの王にしようとした。このほかのイスラエルびともまた、心をひとつにしてダビデを王にしようとした。三九彼らはヘブロンにダビデとともに三日いて、食い飲みした。その兄弟たちは彼らのために備え

をしたからである。四〇また彼らに近い人々はイツサカル、ゼブルン、ナフタリなどの遠い所の者まで、ろば、らくだ、騾馬、牛などに食物を負わせて来た。すなわち麦粉の食物、干いちじく、干ぶどう、ぶどう酒、油、牛、羊などを多く携えて来た。これはイスラエルに喜びがあつたからである。

第二三章

ここにダビデは千人の長、百人の長などの諸將と相はかり、ニそしてダビデはイスラエルの全会衆に言った、「もし、このことをあなたがたがよしとし、われわれの神、主がこれを許されるならば、われわれは、イスラエルの各地に残っているわれわれの兄弟ならびに、放牧地の付いている町々にいる祭司とレビびとに、使をつかわし、われわれの所に呼び集めましょう。ミまた神の箱をわれわれの所に移しましょう。われわれはサウルの世にはこれをおろそかにしたからです」。四 会衆は一同「そうしましょう」と言った。このことがすべての民の目に正しかったからである。

五そこでダビデはキリアテ・ヤリムから神の箱を運んでくるため、エジプトのシホルからハマテの入口までのイスラエルをことごとく呼び集めた。六そしてダビデとすべてのイスラエルはバアラすなわちユダのキリアテ・ヤリムに上り、ケルビムの上に

座しておられる主の名をもつて呼ばれている神の箱をそこらかき上ろうと、七神の箱を新しい車にのせて、アビナダブの家からひきだし、ウザとアヒヨがその車を御した。八ダビデおよびすべてのイスラエルは歌と琴と立琴と、手鼓と、シンバルと、ラツパをもつて、力をきわめて神の前に踊った。

九彼らがキドンの打ち場に来た時、ウザは手を伸べて箱を押えた。牛がつまずいたからである。一〇ウザが手を箱につけたことによつて、主は彼に向かつて怒りを発し、彼を撃たれたので、彼はその所で神の前に死んだ。二 主がウザを撃たれたので、ダビデは怒つた。その所は今日までペレツ・ウザと呼ばれている。三その日ダビデは神を恐れて言った、「どうして神の箱を、わたしの所へかいて行けようか」。四それでダビデはその箱を自分の所ダビデの町へは移さず、これを転じてガテびとオベデ・エドムの家に運ばせた。五 神の箱は三か月の間、オベデ・エドムの家に、その家族とともにとどまつた。主はオベデ・エドムの家族とそのすべての持ち物を祝福された。

第二四章

一ツロの王ヒラムはダビデに使者をつかわし、彼のために家を建てさせようと香柏および石工と木工を送った。ニダビデは主が自分を堅く立ててイスラエルの王とされたことと、その民イ

スラエルのために彼の国を大いに興されたことを悟った。

ミダビデはエルサレムでまた妻たちをめとつた。そしてダビデにまたむすこ、娘が生れた。四彼がエルサレムで得た子たちの名は次のとおりである。すなわちシヤンマ、シヨバブ、ナタン、ソロモン、エイブハル、エリシユア、エルペレテ、ハノガ、ネベグ、ヤビア、セエリシヤマ、ベエリアダ、エリペレテである。

ハさてペリシテびとはダビデが油を注がれて全イスラエルの王になつたことを聞いたので、ペリシテびとはみな上つてきてダビデを捜した。ダビデはこれを聞いてこれに當ろうと出ていったが、ルペリシテびとはすでに來て、レバイムの谷を侵した。ミダビデは神に問うて言つた、「ペリシテびとに向かつて上るべきでしょうか。あなたは彼らをわたしの手にわたされるでしょうか。」主はダビデに言われた、「上りなさい。わたしは彼らをあなたの手にわたそう。」ミそこで彼はバアル・ペラジムへ上つていった。その所でダビデは彼らを打ち敗り、そして言つた、「神は破り出る水のように、わたしの手で敵を破られた」。それゆえ、その所の名はバアル・ペラジムと呼ばれている。ミ彼らが自分たちの神をそこに残して退いたので、ダビデは命じてこれを火で焼かせた。

ミペリシテびとは再び谷を侵した。ミダビデが再び神に問うたので神は言われた、「あなたは彼らを追つて上つてはならない。遠回りしてバルサムの木の前から彼らを襲いなさい。」

バルサムの木の上に行進の音が聞えたならば、あなたは行つて戦いなさい。神があなたの前に出てペリシテびとの軍勢を撃たれるからです。」ミダビデは神が命じられたようにして、ペリシテびとの軍勢を撃ち破り、ギベオンからゲゼルに及んだ。ミそこでダビデの名はすべての国々に聞えたり、主はすべての国びとに彼を恐れさせられた。

第一章

ミダビデはダビデの町のうちに自分のために家を建て、また神の箱のために所を備え、これがために幕屋を張つた。ミダビデは言つた、「神の箱をかくべき者はただレビびとのみである。主が主の箱をかかせ、また主に長く仕えさせるために彼らを選ばれたからである。」ミダビデは主の箱をこれのために備えた所にかき上るため、イスラエルをこごとくエルサレムに集めた。ミダビデはまたアロンの子孫とレビびとを集めた。五すなわち、コハテの子孫のうちからはウリエルを長としてその兄弟百二十人、ヘメラリの子孫のうちからはアサヤを長としてその兄弟二百二十人、セゲルシヨムの子孫のうちからはヨエルを長としてその兄弟百三十人、ハエリザパンの子孫のうちからはシマヤを長としてその兄弟二百人、ルヘブロンの子孫のうちからはエリエルを長としてその兄弟八十人、ミウジエルの子孫のうちから

はアミナダブを長としてその兄弟百十二人である。二ダビデは祭司ザドクとアビヤタル、およびレビびとウリエル、アサヤ、ヨエル、シマヤ、エリエル、アミナダブを召し、三彼らに言った、「あなたがたはレビびとの氏族の長である。あなたがたとあなたがたの兄弟とともに身を清め、イスラエルの神、主の箱をわたしがそのために備えた所にかき上りなさい。三さきにこれをかいた者があなたがたでなかったので、われわれの神、主はわれわれを撃たれました。これはわれわれがその定めにしたがつてそれを扱わなかったからです」。四そこで祭司たちとレビびとたちはイスラエルの神、主の箱をかき上るために身を清め、五レビびとたちはモーセが主の言葉にしたがつて命じたように、神の箱をさおをもって肩になつた。

六ダビデはまたレビびとの長たちに、その兄弟たちを選んで歌うたう者となし、立琴と琴とシンバルなどの楽器を打ちはやし、喜びの声をあげることを命じた。七そこでレビびとはヨエルの子ヘマンと、その兄弟ベレキヤの子アサフおよびメラリの子孫である彼らの兄弟クシャヤの子エタンを選んだ。八またこれに次ぐその兄弟たちがこれと共にいた。すなわちゼカリヤ、ヤziel、セミラモテ、エイエル、ウンニ、エリアブ、ベナヤ、マアセヤ、マッタテヤ、エリペレホ、ミクネヤおよび門を守る者オベデ・エドムとエイエル。九歌うたう者ヘマン、アサフおよびエタンは青銅のシンバルを打ちはやす者であつた。二〇

ゼカリヤ、アジエル、セミラモテ、エイエル、ウンニ、エリアブ、マアセヤ、ベナヤはアラモテにしたがつて立琴を奏する者であつた。三しかしマッタテヤ、エリペレホ、ミクネヤ、オベデ・エドム、エイエル、アザジヤはセミニテにしたがつて琴をもつて指揮する者であつた。三ケナニヤはレビびとの楽長で、音楽に通じていたので、これを指揮した。三ベレキヤとエルカナは箱のために門を守る者であつた。四祭司シバニヤ、ヨシヤパテ、ネタネル、アマサイ、ゼカリヤ、ベナヤ、エリエゼルらは神の箱の前でラツパを吹き、オベデ・エドムとエヒアは箱のために門を守る者であつた。

五ダビデとイスラエルの長老たちおよび千人の長たちは行つて、オベデ・エドムの家から主の契約の箱を喜び勇んでかき上つた。六神が主の契約の箱をかくレビびとを助けられたので、彼らは雄牛七頭、雄羊七頭をささげた。七モダビデは亜麻布の衣服を着ていた。箱をかくすべてのレビびとは、歌うたう者、音楽をつかさどるケナニヤも同様である。ダビデはまた亜麻布のエポデを着ていた。八こうしてイスラエルは皆、声をあげ、角笛を吹きならし、ラツパと、シンバルと、立琴と琴をもつて打ちはやして主の契約の箱をかき上つた。

九主の契約の箱がダビデの町にはいったとき、サウルの娘ミカルが窓からながめ、ダビデ王の舞い踊るのを見て、心のうち

に彼をいやしめた。

第一六章

一人々は神の箱をかき入れて、ダビデがそのために張った幕屋のうちに置き、そして燔祭と酬恩祭を神の前にささげた。ニダビデは燔祭と酬恩祭をささげ終えたとき、主の名をもつて民を祝福し、ミイスラエルの人々に男にも女にもおのおのパン一つ、肉一切れ、干ぶどう一かたまりを分け与えた。

四ダビデはまたレビびとのうちから主の箱の前に仕える者を立てて、イスラエルの神、主をあがめ、感謝し、ほめたたえさせた。

五楽長はアサフ、その次はゼカリヤ、エイエル、セミラモテ、エイエル、マツタテヤ、エリアブ、ベナヤ、オベデ・エドム、エイエルで、彼らは立琴と琴を弾じ、アサフはシンバルを打ち鳴らし、六祭司ベナヤとヤハジエルは神の契約の箱の前でつねにラッパを吹いた。

七その日ダビデは初めてアサフと彼の兄弟たちを立てて、主に感謝をささげさせた。

八主に感謝し、その名を呼び、

そのみわざをもちろもろの民の中に知らせよ。

九主にむかつて歌え、主をほめ歌え。

そのもちろもろのくすしきみわざを語れ。

一〇その聖なる名を誇れ。

どうか主を求める者の心が喜ぶように。

二主とそのみ力とを求めよ。
つねにそのみ顔をたずねよ。

三三三そのしもべアブラハムのすえよ、

その選ばれたヤコブの子らよ。

主のなされたくすしきみわざと、その奇跡と、

そのみ口のさばきとを心にとめよ。

四彼はわれわれの神、主にいます。

そのさばきは全地にある。

五主はとこしえにその契約をみこころにとめられる。

これはよろずよに命じられたみ言葉であつて、

六アブラハムと結ばれた契約、

イスラエルに誓われた約束である。

七主はこれを堅く立ててヤコブのために定めとし、

イスラエルのためにとこしえの契約として、

八言われた、「あなたにカナンの地を与えて、

あなたがたの受ける嗣業の分け前とする」と。

九その時、彼らの数は少なく、

数えるに足らず、かの国で旅びとなり、

一〇国から国へ行き、

この国からほかの民へ行つた。

三主は人の彼らをしえたげるのをゆるされず、

彼らのために王たちを懲しめて、

三 言われた、「わが油そそがれた者たちに
さわつてはならない。

わが預言者たちに害を加えてはならない」と。

三三 全地よ、主に向かつて歌え。

日ごとにその救を宣べ伝えよ。

二四 もろもろの国の中にその栄光をあらわし、

もろもろの民の中にくすしきみわざをあらわせ。

二五 主は大いなるかたにいまして、

いとほめたたうべき者、

もろもろの神にまさつて、恐るべき者だからである。

二六 もろもろの民のすべての神はむなし。

しかし主は天を造られた。

二七 誉と威厳とはそのみ前にあり、

力と喜びとはその聖所にある。

二八 もろもろの民のやからよ、主に帰せよ、

栄光と力とを主に帰せよ。

二九 そのみ名にふさわしい栄光を主に帰せよ。

供え物を携えて主のみにきたれ。

聖なる装いをして主を拝め。

三〇 全地よ、そのみ前におののけ。

世界は堅く立つて、動かされることはない。

三 天は喜び、地はたのしみ、

もろもろの国民の中に言え、「主は王であられる」と。

三三 海とその中に満つるものとは鳴りどよめき、

田畑とその中のすべての物は喜べ。

三三 そのとき林のもろもろの木も主のみに喜び歌う。

主は地をさばくためにこられるからである。

三四 主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいづくしみはとこしえに絶えることがない。

三五 また言え、「われわれの救の神よ、われわれを救い、

もろもろの国民の中から

われわれを集めてお救いください。

そうすればあなたの聖なるみ名に感謝し、

あなたの誉を誇るでしょう。

三六 イスラエルの神、主は、

とこしえからとこしえまでほむべきかな」と。

その時すべての民は「アアメン」と言つて主をほめたたえた。

三七 ダビデはアサフとその兄弟たちを主の契約の箱の前にとめ

おいて、常に箱の前に仕え、日々のわざを行わせた。三八 オベデ・

エドムとその兄弟たちは合わせて六十八人である。またエド

ムの子オベデ・エドムおよびホサは門守であつた。三九 祭司ザ

ドクとその兄弟である祭司たちはギベオンにある高き所で主

の幕屋の前に仕え、四〇 主がイスラエルに命じられた律法にする

されたすべてのことにしたがって燔祭の壇の上に朝夕たえず

燔祭を主にささげた。四「また彼らとともにヘマン、エドトンおよびほかの選ばれて名をしるされた者どもがいて、主のいつくしみの世々限りなきことについて主に感謝した。四三すなわちヘマンおよびエドトンは彼らとともにいて、ラツパ、シンバルおよびその他の聖歌のための楽器をとって音楽を奏し、エドトンの子らは門を守った。

四三こうして民は皆おのおの家に帰り、ダビデはその家族を祝福するために帰って行った。

第七章

一さてダビデは自分の家に住むようになったとき、預言者ナタンに言った、「見よ、わたしは香柏の家に住んでいるが、主の契約の箱は天幕のうちにある」。ニナタンはダビデに言った、「神があなたとともにおられるから、すべてあなたの心にあるところを行いなさい」。

三その夜、神の言葉がナタンに臨んで言った、四「行つてわたしのしもべダビデに告げよ、『主はこう言われる、わたしの住む家を建ててはならない。五わたしはイスラエルを導き上つた日から今日まで、家に住まわず、天幕から天幕に、幕屋から幕屋に移つたのである。六わたしはすべてのイスラエルと共に歩んだすべての所で、わたしの民を牧することを命じたイスラエルの

さばきづかさのひとりに、ひと言でも、『どうしてあなたがたは、わたしのために香柏の家を建てないのか』と言つたことがあるだろうか』と。セそれゆえ今あなたは、わたしのしもべダビデにこう言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる、『わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取つて、わたしの民イスラエルの君とし、八あなたがどこへ行くにもあなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去つた。わたしはまた地の上の大きいなる者の名のような名をあなたに得させよう。九そしてわたしはわが民イスラエルのために一つの所を定めて、彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにしよう。一〇また前のように、すなわちわたしがわが民イスラエルの上にさばきづかさを立てた時からこのかたのように、悪い人が重ねてこれを荒すことはないであろう。わたしはまたあなたのもろの敵を征服する。かつわたしは主があなたのために家を建てられることを告げる。一あなたの日が満ち、あなたの先祖たちの所へ行かねばならぬとき、わたしはあなたの子、すなわちあなたの子らのひとりを、あなたのあとに立てて、その王国を堅くする。二彼はわたしのために家を建ててであろう。わたしは長く彼の位を堅くする。三わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。わたしは、わたしのいつくしみを、あなたのさきにあつた者から取り去つたように、彼からは取り去らない。一四かえつて、わたしは彼を長くわたしの家に、わ

たしの王国にすえおく。彼の位はとこしえに堅く立つであらう。』五ナタンはすべてこれらの言葉のように、またすべてこの幻のようにダビデに語った。

一六そこで、ダビデ王は、はいつて主の前に座して言った、「主なる神よ、わたしがだれ、わたしの家がなんであるので、あなたはこれまでわたしを導かれたのですか。一七神よ、これはあなたの目には小さな事です。主なる神よ、あなたはしもべの家にいて、はるか後の事を語って、きたるべき代々のことを示されました。一八しもべの名譽については、ダビデはこの上あなたに何を申しあげることができましょう。あなたはしもべを知っておられるからです。一九主よ、あなたはしもべのために、またあなたの心にしたがって、このもうもの大いなる事をなし、すべての大いなる事を知らされました。二〇主よ、われわれがすべて耳に聞いた所によれば、あなたのようなものはなく、またあなたのほかに神はありません。二一また地上のどの国民が、あなたの民イスラエルのようにでありましょうか。これは神が行って、自分のためにあがなって民とし、エジプトからあなたがあがない出されたあなたの民の前から国々の民を追い払い、大いなる恐るべき事を行って、名を得られたものではありませんか。二三あなたはあなたの民イスラエルを長くあなたの民とされました。主よ、あなたは彼らの神となられたのです。二四それゆえ主よ、あなたがしもべと、しもべの家について語られた言葉を長く堅く

して、あなたの言われたとおりにしてください。二五そうすればあなたの名はとこしえに堅くされ、あがめられて、『イスラエルの神、万軍の主はイスラエルの神である』と言われ、またあなたのしもべダビデの家はあなたの前に堅く立つことができるでしょう。二六わが神よ、あなたは彼のために家を建てると、しもべに示されました。それゆえ、しもべはあなたの前に祈る勇氣を得ました。二七主よ、あなたは神にいまし、この良き事をしもべに約束されました。二八それゆえどうぞいま、しもべの家を祝福し、あなたの前に長く続かせてくださるように。主よ、あなたの祝福されるものは長く祝福を受けるからです。』

第一章

一この後ダビデはペリシテびとを撃つてこれを征服し、ペリシテびとの手からガテとその村々を取った。

二彼はまたモアブを撃った。モアブびとはダビデのしもべとなつて、みつぎを納めた。

三ダビデはまた、ハマテのゾバの王ハダデゼルがユフラテ川のほとりに、その記念碑を建てようとして行つたとき彼を撃った。四そしてダビデは彼から戦車一千、騎兵七千人、歩兵二万人を取った。ダビデは一百の戦車の馬を残して、そのほかの戦車の馬はみなその足の筋を切った。五その時ダマスコのスリヤびと

がゾバの王ハダデゼルを助けるために来たので、ダビデはそのスリヤびと二万二千人を殺した。六そしてダビデはダマスコのスリヤに守備隊を置いた。スリヤびとはみつぎを納めてダビデのしもべとなった。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。セダビデはハダデゼルのしもべらが持つていた金の盾を奪つて、エルサレムに持つてきた。ハまたハダデゼルの町テブハテとクンからダビデは非常に多くの青銅を取つた。ソロモンはそれを用いて青銅の海、柱および青銅の器を造つた。

九時にハマテの王トイはダビデがゾバの王ハダデゼルのすべての軍勢を撃ち破つたことを聞き、一〇その子ハドラムをダビデ王につかわして、彼にあいさつさせ、かつ祝を述べさせた。ハダデゼルはかつてしばしばトイと戦いを交えたが、ダビデはハダデゼルと戦つて、これを撃ち破つたからである。ハドラムは金、銀および青銅のさまざまな器を贈つたので、ニダビデ王はこれをエドム、モアブ、アンモンの人々、ペリシテびと、アマクレなどの諸国民のうちから取つてきた金銀とともに、主にささげた。

ニゼルヤの子アビシヤイは塩の谷で、エドムびと一万八千を撃ち殺した。ニダビデはエドムに守備隊を置き、エドムびとは皆ダビデのしもべとなった。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。一四こうしてダビデはイスラエルの全地を治め、そのすべての民に公道と正義を行つた。一五ゼルヤの子ヨアブは軍の長、アヒルデの子ヨシヤパテは史官、一六アヒトブの

子ザドクとアビヤタルの子アビメレクは祭司、シャウシヤは書記官、一七エホヤダの子ベナヤはケレテびととペレテびとの長、ダビデの子たちは王のかたわらにはべる大臣であつた。

第十九章

一この後アンモンの人々の王ナハシが死んで、その子がかつて王となつた。ニそのときダビデは言つた、「わたしはナハシの子ハヌンに、彼の父がわたしに恵みを施したように、恵みを施そう」。そしてダビデは彼をその父のゆえに慰めようとして使者をつかわした。ダビデのしもべたちはハヌンを慰めるためアンモンの人々の地に来たが、三アンモンの人々のつかさたちはハヌンに言つた、「ダビデが慰める者をあなたのもとにつかわしたことによって、あなたは彼があなたの父を尊ぶのだと思われませんか。彼のしもべたちが来たのは、この国をうかがい、探つて滅ぼすためではありませんか」。四そこでハヌンはダビデのしもべたちを捕えて、そのひげをそり落とし、その着物を中ほどから断ち切つて腰の所までにして彼らを帰してやつた。五ある人々が来て、この人たちのされたことをダビデに告げたので、彼らは人をつかわして、彼らを迎えさせた。その人々が非常に恥じたからである。そこで王は言つた、「ひげがのびるまでエリコにとどまつて、その後帰りなさい」。

ハアンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれることをしたとわかつたので、ハヌンおよびアンモンの人々は銀千タラントを送つてメソポタミヤとアラム・マアカ、およびゾバから戦車と騎兵を雇い入れた。セすなわち戦車三万二千およびマアカの王とその軍隊を雇い入れたので、彼らは来てメデバの前に陣を張つた。そこでアンモンの人々は町々から寄り集まつて、戦いに出動した。ハダビデはこれを聞いてヨアブと勇士の全軍をつかわしたので、ハアンモンの人々は出て来て町の入口に戦いの備えをした。また助けに来た王たちは別に野にいた。

一〇時にヨアブは戦いが前後から自分に向かつているのを見て、イスラエルのえり抜きの兵士のうちから選んで、これをスリヤびとに対して備え、二そのほかの民を自分の兄弟アビシヤイの手にわたして、アンモンの人々に対して備えさせ、三そして言つた、「もしスリヤびとがわたしに手ごわいときは、わたしを助けてください。もしアンモンの人々があなたに手ごわいときは、あなたを助けましょう。三勇ましくしてください。われわれの民のためと、われわれの神の町々のために、勇ましくしましょう。どうか、主が良いと思われれることをされるように」。四こうしてヨアブが自分と一緒にいる民と共にスリヤびとに向かつて戦おうとして近づいたとき、スリヤびとは彼の前から逃げた。五アンモンの人々はスリヤびとの逃げるのを見て、彼らもまたヨアブの兄弟アビシヤイの前から逃げて町にはいつた。

そこでヨアブはエルサレムに帰つた。

一六しかしスリヤびとは自分たちがイスラエルの前に打ち敗れたのを見て、使者をつかわし、ハダデゼルの軍の長シヨパクの率いるユフラテ川の向こう側にいるスリヤびとを引き出した。一七この事がダビデに聞えたので、彼はイスラエルをことごとく集め、ヨルダンを渡り、彼らの所に来て、これに向かつて戦いの備えをした。ダビデがこのようにスリヤびとに対して戦いの備えをしたとき、彼はダビデと戦つた。一八しかしスリヤびとがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはスリヤびとの戦車の兵七千、歩兵四万を殺し、また軍の長シヨパクをも殺した。一ハダデゼルのしもべたちは味方の者がイスラエルに打ち敗れたのを見て、ダビデと和を講じ、彼に仕えた。スリヤびとは再びアンモンびとを助けることをしなかつた。

第二〇章

一春になつて、王たちが戦いに出るに及んで、ヨアブは軍勢を率いてアンモンびとの地を荒し、行つてラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまつた。ヨアブはラバを撃つて、これを滅ぼした。二そしてダビデは彼らの王の冠をその頭から取りはなした。その金の重さを量つてみると一タラント、またその中に宝石があつた。これをダビデの頭に置いた。ダビデはま

たその町のぶんどり物を非常に多く持ち出した。ミまた彼はそのうちの民を引き出して、これをのこぎりと、鉄のつるはしとおのを使う仕事につかせた。ダビデはアンモンびとのすべての町々にこのように行った。そしてダビデと民とは皆エルサレムに帰った。

四この後ゲゼルでペリシテびとと戦いが起った。その時ホシャびとシベカイが巨人の子孫のひとりシパイを殺した。かれらはついに征服された。五ここにまたペリシテびとと戦いがあつたが、ヤイルの子エルハナンはガテびとゴリアテの兄弟ラミを殺した。そのやりの柄は機の巻棒のようであつた。六またガテに戦いがあつたが、そこにひとりの背の高い人がいた。その手の指と足の指は六本ずつで、合わせて二十四本あつた。彼もまた巨人から生れた者であつた。七彼はイスラエルをのしつたので、ダビデの兄弟シメアの子ヨナタンがこれを殺した。八これらはガテで巨人から生れた者であつたが、ダビデの手とその家来たちの手に倒れた。

第二章

一時にサタンが起つてイスラエルに敵し、ダビデを動かしてイスラエルを数えさせようとした。ニダビデはヨアブと軍の将校たちに言った、「あなたがたは行つて、ベエルシバからダンまで

のイスラエルを数え、その数を調べてわたしに知らせなさい」。ミヨアブは言つた、「それがどのくらいあつても、どうか主がその民を百倍に増されるように。しかし王わが主よ、彼らは皆あなたのしもべではありませんか。どうしてわが主はこの事を求められるのですか。どうしてイスラエルに罪を下させられるのですか」。四しかし王の言葉がヨアブに勝つたので、ヨアブは出て行つて、イスラエルをあまねく行き巡り、エルサレムに帰つて来た。五そしてヨアブは民の総数をダビデに告げた。すなわちイスラエルにはつるぎを抜く者が百十万人、ユダにはつるぎを抜く者が四十七万人あつた。六しかしヨアブは王の命令を快しとしなかつたので、レビとベニヤミンとはその中に数えなかつた。

七この事が神の目に悪かつたので、神はイスラエルを撃たれた。八そこでダビデは神に言つた、「わたしはこの事を行つて大いに罪を犯しました。しかし今どうか、しもべの罪を除いてください。わたしは非常に愚かなことをいたしました」。九主はダビデの先見者ガデに告げて言われた、「〇「行つてダビデに言いなさい、『主はこう仰せられる、わたしは三つの事を示す。あなたはその一つを選びなさい。わたしはそれをあなたに行おう』と」。ニガデはダビデのもとに来て言つた、「主はこう仰せられます、『あなたは選びなさい。ニすなわち三年のききんか、あるいは三月の間、あなたのあだの前に敗れて、敵のつるぎに追いつかれ

るか、あるいは三日の間、主のつるぎすなわち疫病がこの国にあつて、主の使がイスラエルの全領域にわたつて滅ぼすことをするか。いま、わたしがどういふ答をわたしをつかわしたものにすべきか決めなさい。ニダビデはガデに言つた、「わたしは非常に悩んでいるが、主のあわれみは大きいゆえ、わたしを主の手に陥らせてください。しかしわたしを人の手に陥らせないでください」。

一四そこで主はイスラエルに疫病を下されたので、イスラエルびとのうち七万人が倒れた。一五神はまたみ使をエルサレムにつかわして、これを滅ぼそうとされたが、み使がまさに滅ぼそうとしたとき、主は見られて、この災を悔い、その滅ぼすみ使に言われた、「もうじゆうぶんだ。今あなたの手をとどめよ」。そのとき主の使はエブスびとオルナンの打ち場のかたわらに立つていた。ニ六ダビデが目を見て見ると、主の使が地と天の間に立つて、手に抜いたつるぎをもち、エルサレムの上にさし伸べていたので、ダビデと長老たちは荒布を着て、ひれ伏した。一七そしてダビデは神に言つた、「民を数えよと命じたのはわたしではありませんか。罪を犯し、悪い事をしたのはわたしです。しかしこれらの羊は何をしましたか。わが神、主よ、どうぞあなたの手をわたしと、わたしの父の家にむけてください。しかし災をあなたの民に下さないでください」。

一八時に主の使はガデに命じ、ダビデが上つて行つて、エブスび

とオルナンの打ち場で主のために一つの祭壇を築くように告げさせた。一九そこでダビデはガデが主の名をもつて告げた言葉に従つて上つて行つた。二〇そのときオルナンは麦を打つていたが、ふりかえつてみ使を見たので、ともにいた彼の四人の子は身をかくした。ニ一ダビデがオルナンに近づくと、オルナンは目上げてダビデを見、打ち場から出て来て地にひれ伏してダビデを拝した。ニ二ダビデはオルナンに言つた、「この打ち場の所をわたしに与えなさい。わたしは災が民に下るのをとどめるため、そこに主のために一つの祭壇を築きます。あなたは、そのじゆうぶんな価をとつてこれをわたしに与えなさい」。ニ三オルナンはダビデに言つた、「どうぞこれをお取りなさい。そして王わが主の良しと見られるところを行いなさい。わたしは牛を燔祭のために、打穀機をたぎぎのために、麦を素祭のためにささげます。わたしは皆これをささげます」。ニ四ダビデ王はオルナンに言つた、「いいえ、わたしはじゆうぶんな代価を払つてこれを買います。わたしは主のためにあなたのものを取ることをしません。また、費えなしに燔祭をささげることはいけません」。ニ五それでダビデはその所のために金六百シケルをはかつて、オルナンに払つた。ニ六こうしてダビデは主のために、その所に一つの祭壇を築き、燔祭と酬恩祭をささげて、主を呼んだ。主は燔祭の祭壇の上に天から火を下して答えられた。ニ七また主がみ使に命じられたので、彼はつるぎをさやにおさめた。

二八その時ダビデは主がエブスびとオルナンの打ち場で自分に答えられたのを見たので、その所で犠牲をささげた。二九モーセが荒野で造った主の幕屋と燔祭の祭壇とは、その時ギベオンの高き所にあつたからである。三〇しかしダビデはその前へ行つて神に求めることができなかった。彼が主の使のつるぎを恐れただからである。

第二章

一それでダビデは言つた、「主なる神の家はこれである、イスラエルのための燔祭の祭壇はこれである」と。

ニダビデは命じてイスラエルの地にいる他国人を集めさせ、また神の家を建てるのに用いる石を切るために石工を定めた。三ダビデはまた門のとびらのくぎ、およびかすがいに用いる鉄をおびただしく備えた。また青銅を量ることもできないほどおびただしく備えた。四また香柏を数えきれぬほど備えた。これはシドンびととツロの人々がおびただしく香柏をダビデの所に持つて来たからである。五ダビデは言つた、「わが子ソロモンは若く、かつ経験がない。また主のために建てる家はきわめて壮大で、万国に名を得、栄えを得るものでなければならぬ。それゆえ、わたしはその準備をしておこう」と。こうしてダビデは死ぬ前に多くの物資を準備した。

六そして彼はその子ソロモンを召して、イスラエルの神、主のために家を建てることを命じた。七すなわちダビデはソロモンに言つた、「わが子よ、わたしはわが神、主の名のために家を建てよう」と志していた。八ところが主の言葉がわたしに臨んで言われた、『おまえは多くの血を流し、大いなる戦争をした。おまえはわたしの前で多くの血を地に流したから、わが名のために家を建ててはならない。九見よ、男の子がおまえに生れる。彼は平和の人である。わたしは彼に平安を与えて、周囲のもろもろの敵に煩わされないようにしよう。彼の名はソロモンと呼ばれ、彼の世にわたしはイスラエルに平安と静穏とを与える。一〇彼はわが名のために家を建てるであろう。彼はわが子となり、わたしは彼の父となる。わたしは彼の王位をながくイスラエルの上に堅くするであろう。』一ニそれでわが子よ、どうか主があなたと共にいまし、あなたが神、主の家を建てさせてくださる言われたように、あなたの神、主の家を建てさせてくださる言に。三ただ、どうか主があなたに分別と知恵を賜ひ、あなたをイスラエルの上に立たせられるとき、あなたの神、主の律法を、あなたに守らせてくださるように。四あなたがもし、主がイスラエルについてモーセに命じられた定めとおきてとを慎んで守るならば、あなたは栄えるであろう。心を強くし、勇め。恐れはならない、おののいてはならない。五見よ、わたしは苦難のうちにあつて主の家のために金十萬タラント、銀百万タラン

トを備え、また青銅と鉄を量ることもできないほどおびただしく備えた。また材木と石をも備えた。あなたはまたこれに加えなければならぬ。一五あなたにはまた多数の職人、すなわち石や木を切り刻む者、工作に巧みな各種の者がある。一六金、銀、青銅、鉄もおびただしくある。たつて行いなさい。どうか主があなたと共におられるように」。

一七ダビデはまたイスラエルのすべてのつかさたちにその子ソロモンを助けるように命じて言った、一八「あなたがたの神、主はあなたがたとともにおられるではないか。四方に泰平を賜わったではないか。主はこの地の民をわたしの手にわたされたので、この地は主の前とその民の前に服している。一九それであなたがたは心をつくし、精神をつくしてあなたがたの神、主を求めなさい。たつて主なる神の聖所を建て、主の名のために建てるその家に、主の契約の箱と神の聖なるもろもろの器を携え入れなさい」。

第二章

一ダビデは老い、その日が満ちたので、その子ソロモンをイスラエルの王とした。

二ダビデはイスラエルのすべてのつかさおよび祭司とレビびとを集めた。ミレビびとの三十歳以上のものを数えると、その男の

数が三万八千人あった。四ダビデは言った、「そのうち二万四千人は主の家の仕事をつかさどり、六千人はつかさびと、およびさばきびととなり、五千人は門を守る者となり、また四千人はさんびのためにわたしの造った楽器で主をたたえよ」。六そしてダビデは彼らをレビの子らにしたがってゲルシヨン、コハテ、メラリの組に分けた。

セゲルシヨンの子らはラダンとシメイ。ハラダンの子らは、かしろのエヒエルとゼタムとヨエルの三人。カシメイの子らはシロミテ、ハジエル、ハランの三人。これらはラダンの氏族の長であつた。一〇シメイの子らはヤハテ、ジナ、エウシ、ベリアの四人。皆シメイの子で、ニヤハテはかしら、ジザはその次、エウシとベリアは子が多くなかつたので、ともに数えられて一つの氏族となつた。

ニコハテの子らはアムラム、イツハル、ヘブロン、ウジエルの四人。ニアムラムの子らはアロンとモーセである。アロンはその子らとともに、ながくいと聖なるものを聖別するために分かつたれて、主の前に香をたき、主に仕え、常に主の名をもつて祝福することをなした。一四神の人モーセの子らはレビの部族のうち数えられた。一五モーセの子らはゲルシヨンとエリエゼル。一六ゲルシヨンの子らは、かしらはシブエル。一七エリエゼルの子らは、かしらはレハビヤ。エリエゼルにはこのほかに子になかつた。しかしレハビヤの子らは非常に多かつた。一八イ

ヅハルの子らは、かしらはシロミテ。ニルヘブロンの子らは長子
はエリヤ、次はアマリヤ、第三はヤハジエル、第四はエカメアム。
ミウジエルの子らは、かしらはミカ、次はイシアである。

ニメラリの子らはマヘリとムシ。マヘリの子らはエレアザル
とキシ。ミエレアザルは男の子がなくて死に、ただ娘たちだけ
であつたが、キシの子であるその身内の男たちが彼女たちをめ
とつた。ミムシの子らはマヘリ、エデル、エレモテの三人であ
る。

二四これらはその氏族によるレビの子孫であつて、その人数が数
えられ、その名がしるされて、主の家の務をなした二十歳以上の
者で、氏族の長であつた。二五ダビデは言つた、「イスラエルの
神、主はその民に平安を与え、ながくエルサレムに住まわれる。
二六レビびとは重ねて幕屋およびその勤めの器物をかつぐこと
はない。二七――ダビデの最後の言葉によつて、レビびとは二十
歳以上の者が数えられた――二八彼らの務はアロンの子孫を助
けて主の家の働きをし、庭とへやの仕事およびすべての聖なる
ものを清めること、そのほか、すべて神の家の働きをすることと
ある。二九また供えのパン、素祭の麦粉、種入れぬ菓子、焼いた
供え物、油をまぜた供え物をつかさどり、またすべて分量およ
び大きさを量ることをつかさどり、三〇また朝ごとに立つて主に
感謝し、さんびし、夕にもまたそのようにし、三一また安息日と
新月と祭日に、主にもろもろの燔祭をささげるときは、絶えず主

の前にその命じられた数にしたがつてささげなければならな
い。三二このようにして彼らは会見の幕屋と聖所の務を守り、主
の家の働きのためにその兄弟であるアロンの子らに仕えなけ
ればならない」。

第二章

一アロンの子孫の組は次のとおりである。すなわちアロンの子
らはナダブ、アビウ、エレアザル、イタマル。二ナダブとアビウ
はその父に先だつて死に、子になつたので、エレアザルとイタ
マルが祭司となつた。三ダビデはエレアザルの子孫ザドクとイ
タマルの子孫アヒメレクの助けによつて彼らを分けて、それぞ
れの勤めにつけた。四エレアザルの子孫のうちにはイタマルの
子孫のうちよりも長たる人々が多かつた。それでエレアザルの
子孫で氏族の長である十六人と、イタマルの子孫で氏族の長で
ある者八人にこれを分けた。五このように彼らは皆ひとしく、く
じによつて分けられた。聖所のつかさ、および神のつかさは、と
もにエレアザルの子孫とイタマルの子孫から出たからである。
六レビびとネタネルの子である書記シマヤは、王とつかさたち
と祭司ザドクとアビヤタルの子アヒメレクと祭司およびレビび
との氏族の長たちの前で、これを書きしるした。すなわちエレ
アザルのために氏族一つを取れば、イタマルのためにも一つを

取つた。

七第一のくじはヨアリブに当り、第二はエダヤに当り、ハ第三はハリムに、第四はセオリムに、九第五はマルキヤに、第六はミヤミンに、一〇第七はハツコヅに、第八はアビヤに、一一第九はエシユアに、第十はシカニヤに、一二第十一はエリアシブに、第十三はヤキムに、一三第十三はホツパに、第十四はエシバブに、一四第十五はビルガに、第十六はインメルに、一五第十七はヘヅルに、第十八はハピセツに、一六第十九はペタヒヤに、第二十はエゼキエルに、一七第二十一はヤキンに、第二十二はガムルに、一八第二十三はデラヤに、第二十四はマアジャに当つた。一九これは、彼らの先祖アロンによつて設けられた定めにしたがい、主の家に就いて務をなす順序であつて、イスラエルの神、主の彼に命じられたとおりである。

二〇このほかのレビの子孫は次のとおりである。すなわちアムラムの子らのうちではシュバエル。シュバエルの子らのうちではエデヤ。ミレハビヤについては、レハビヤの子らのうちでは長子イシア。ミイヅハリびとのうちではシロミテ。シロミテの子らのうちではヤハテ。二一ヘブロンの子らは長子はエリヤ、次はアマリヤ、第三はヤハジエル、第四はエカメアム。二四ウジエルの子らのうちではミカ。ミカの子らのうちではシャミル。二五ミカの兄弟はイシア。イシアの子らのうちではゼカリヤ。二六メラリの子らはマヘリとムシ。ヤジアの子らはベノ。二七メラ

リの子孫のヤジアから出た者はベノ、シヨハム、ザツクル、イブリ。二八マヘリからエレアザルが出た。彼には子がなかつた。二九カキシについては、キシの子はエラメル。三〇ムシの子らはマヘリ、エデル、エリモテ。これらはレビびとの子孫で、その氏族によつていつた者である。三一これらの者もまた氏族の兄もその弟も同様に、ダビデ王と、ザドクと、アヒメレクと、祭司およびレビびとの氏族の長たちの前で、アロンの子孫であるその兄弟たちのようにくじを引いた。

第二章

一ダビデと軍の長たちはまたアサフ、ヘマンおよびエドトンの子らを勤めのために分かち、琴と、立琴と、シンバルをもつて預言する者にした。その勤めをなした人々の数は次のとおりである。二アサフの子たちはザツクル、ヨセフ、ネタニヤ、アサレラであつて、アサフの指揮のもとに王の命によつて預言した者である。三エドトンについては、エドトンの子たちはゲダリヤ、ゼリ、エサヤ、ハシャビヤ、マツタテヤの六人で、琴をもつて主に感謝し、かつほめたたえて預言したその父エドトンの指揮の下にあつた。四ヘマンについては、ヘマンの子たちはブツキヤ、マツタニヤ、ウジエル、シブエル、エリモテ、ハナニヤ、ハナニ、エリアタ、ギダルテ、ロママテ・エゼル、ヨシベカシャ、マロテ、

ホテル、マハジオテである。五これらは皆、神がご自身の約束にしたがって高くされた王の先見者ヘマンの子たちであつた。神はヘマンに男の子十四人、女の子三人を与えられた。六これらの者は皆その父の指揮の下にあつて、主の宮で歌をうたい、シンバルと立琴と琴をもって神の宮の務をした。アサフ、エドトンおよびヘマンは王の命の下にあつた。七彼らおよび主に歌をうたうことのために訓練され、すべて熟練した兄弟たちの数は二百八十八人であつた。八彼らは小なる者も、大なる者も、教師も生徒も皆ひとしくその務のためにくじを引いた。

九第一のくじはアサフのためにヨセフに当り、第二はゲダリヤに当つた。彼とその兄弟たちおよびその子たち、合わせて十二人。一〇第三はザツクルに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二第四はイヅリに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。三第五はネタニヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。四第六はブツキヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。五第七はアサレラに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。六第八はエサヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。七第九はマツタニヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。八第十はシメイに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。九第十一はアザリエルに当つた。

その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一〇第十二はハシヤビヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一一第十三はシュバエルに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一二第十四はマツタテヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一三第十五はエレモテに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一四第十六はハナニヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一五第十七はヨシベカシヤに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一六第十八はハナニに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一七第十九はマロテに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一八第二十はエリアタに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。一九第二十一はホテルに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二〇第二十二はギダルテに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二一第二十三はマハジオテに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人。二二第二十四はロمامテ・エゼルに当つた。その子たちおよびその兄弟たち、合わせて十二人であつた。

第二十六章

一門を守る者の組は次のとおりである。すなわちコラびとのうちでは、アサフの子孫のうちのコレの子メシレミヤ。ニメシレミヤの子たちは、長子はゼカリヤ、次はエデアエル、第三はゼバデヤ、第四はヤテニエル、第五はエラム、第六はヨハナン、第七はエリヨエナイである。四オベデ・エドムの子たちは、長子はシマヤ、次はヨザバデ、第三はヨア、第四はサカル、第五はネタネル、第六はアンミエル、第七はイツサカル、第八はピウレタイである。神が彼を祝福されたからである。六彼の子シマヤにも数人の子が生れ、有能な人々であったので、その父の家を治める者となった。セすなわちシマヤの子たちはオテニ、レパエル、オベデ、エルザバデで、エルザバデの兄弟エリウとセマキヤは力ある人々であつた。ハこれらは皆オベデ・エドムの子孫である。彼らはその子たちおよびその兄弟たちと共にその勤めに適した力ある人々で、合わせて六十二人、みなオベデ・エドムに属する者である。九メシレミヤにも子たちと兄弟たち合わせて十八人あつて、皆力ある人々であつた。一〇メラリの子孫ホサにも子たちがあつた。そのかしらはシムリ、これは長子ではなかつたが、父はこれをかしらにしたのであつた。二次はヒルキヤ、第三はテバリヤ、第四はゼカリヤである。ホサの子たちと兄弟たちは合わせて十三人である。

二これらは門を守る者の組の長たる人々であつて、その兄弟たちと同様に務をなして、主の宮に仕えた。三彼らはそれぞれ門のために小なる者も、大なる者も等しく、その氏族にしたがつてくじを引いた。四東の門のくじはシレミヤに当つた。また彼の子で思慮深い義士ゼカリヤのためにくじを引いたが、北の門のくじがこれに当つた。五オベデ・エドムには南の門のくじ、その子たちには倉のくじ、六シユパムとホサには西の門のくじが当つた。これは坂の大路にあるシャレケテの門のかたわらにあつた。守る者と守る者とが相對していた。七東の方には毎日六人、北の方には毎日四人、南の方には毎日四人、倉には二人と二人、八西の方パルバルには大路に四人、パルバルに二人。九門を守る者の組は以上のとおりで、コラの子孫とメラリの子孫であつた。

一〇レビびとのうちアヒヤは神の宮の倉および聖なる物の倉をつかさどつた。ニラダンの子孫すなわちラダンから出たゲルシヨンびとの子孫で、ゲルシヨンびとの氏族の長はエヒエリである。

三エヒエリ、ゼタムおよびその兄弟ヨエルの子たちは主の宮の倉をつかさどつた。ミアムラムびと、イツハルびと、ヘブロンびと、ウジエルびとのうちでは次のとおりであつた。四すなわちモーセの子ゲルシヨムの子シブエルは倉のつかさであつた。五その兄弟でエリエゼルから出た者は、その子はレハビ

ヤ、その子はエサヤ、その子はヨラム、その子はジクリ、その子はシロミテである。ニ六このシロミテとその兄弟たちはすべての聖なる物の倉をつかさどった。これはダビデ王と、氏族の長と、千人の長と、百人の長と、軍の長たちのささげたものである。ニモすなわち彼らが戦いで獲たぶんどり物のうちから主の宮の修繕のためにささげたものである。ニ八またすべて先見者サムエル、キシの子サウル、ネルの子アブネル、ゼルヤの子ヨアブなどがささげた物。すべてこれらのささげ物はシロミテとその兄弟たちが管理した。

ニ九イヅハルびとのうちでは、ケナニヤとその子たちが、つかさおよびさばきびととしてイスラエルの外事のために選ばれた。ミ〇ヘブロンびとのうちでは、ハシヤビヤおよびその兄弟など勇士千七百人があつて、ヨルダンのこなた、すなわち西の方でイスラエルの監督となり、主のすべての事をを行い、王に奉仕した。ミ一ヘブロンびとのうちでは、系図と氏族によつてエリヤがヘブロンびとの長であつたが、ダビデの治世の第四十年に彼らを尋ね求め、ギレアデのヤゼルで彼らのうちから大勇士を得た。ミ二ダビデ王は彼とその兄弟など氏族の長たち二千七百人の勇士をルベンびと、ガドびと、マナセびとの半部族の監督となし、すべて神につける事と王の事をつかさどらせた。

第二十七章

ーイスラエルの子孫のうちで氏族の長、千人の長、百人の長、およびつかさたちは年のすべての月の間、月ごとに交替して組のすべての事をなして王に仕えたが、その数にしたがえば各組二万四千人あつた。ニまず第一の組すなわち正月の分はザブデエルの子ヤシヨベアムがこれを率いた。その組には二万四千人あつた。ミ彼はペレヅの子孫で、正月の軍団のすべての将たちのかしらであつた。四二月の組はアホアびとドダイがこれを率いた。その組には二万四千人あつた。五三月の第三の將は祭司エホヤダの子ベナヤが長であつて、その組には二万四千人あつた。六このベナヤはかの三十人のうちの勇士であつて三十人を率い、その子アミザバデがその組にあつた。七四月の第四の將はヨアブの兄弟アサヘルであつて、その子ゼバデヤがこれに次いだ。その組には二万四千人あつた。八五月の第五の將はイスラビびとシャンモテであつて、その組には二万四千人あつた。九六月の第六の將はテコアびとイツケシの子イラであつて、その組には二万四千人あつた。一〇七月の第七の將はエフライムの子孫であるペロンびとヘレヅであつて、その組には二万四千人あつた。一一八月の第八の將はゼラびとの子孫であるホシヤびとシベカイであつて、その組には二万四千人あつた。一二九月の第九の將はベニヤミンの子孫であるアナトテびとアビエゼルで

あつて、その組には二万四千人あつた。三十月の第十の将はゼラビとの子孫であるネトバびとマハライであつて、その組には二万四千人あつた。四十一月の第十一の将はエフライムの子孫であるピラトンびとベナヤであつて、その組には二万四千人あつた。五十二月の第十二の将はオテニエルの子孫であるネトバびとヘルダイであつて、その組には二万四千人あつた。六なおイスラエルの部族を治める者たちは次のとおりである。ルベンびとのつかさはデクリの子エリエゼル。シメオンびとのつかさはマアカの子シパテヤ。モレビびとのつかさはケムエルの子ハシャビヤ。アロンびとのつかさはザドク。ハユダのつかさはダビデの兄弟のひとりエリウ。イツサカルのつかさはミカエルの子オムリ。ナゼブルンのつかさはオバデヤの子イシマヤ。ナフタリのつかさはアズリエルの子エレモテ。ニエフライムの子孫のつかさはアザジャの子ホセア。マナセの半部族のつかさはベダヤの子ヨエル。ニギレアデにあるマナセの半部族のつかさはゼカリヤの子イド。ベニヤミンのつかさはアブネルの子ヤシエル。ミダンのつかさはエロハムの子アザリエル。これらはイスラエルの部族のつかさたちであつた。しかしダビデは二十歳以下の者は数えなかつた。主がかつてイスラエルを天の星のように多くすると言われたからである。ニゼルヤの子ヨアブは数え始めたが、これをなし終えなかつた。その数えることによつて怒りがイスラエルの上に臨んだ。また

その数はダビデ王の歴代志に載せなかつた。

ニ五アデエルの子アズマウテは王の倉をつかさどり、ウジヤの子ヨナタンは田野、町々、村々、もろもろの塔にある倉をつかさどり、ニシケルブの子エズリは地を耕す農夫をつかさどり、ニモラマテびとシメイはぶどう畑をつかさどり、シブミびとザブデはぶどう畑から取つたぶどう酒の倉をつかさどり、ニハゲデルびとバル・ハナンは平野のオリブの木といちじく桑の木をつかさどり、ヨアシは油の倉をつかさどり、ニシヤロンびとシテライはシャロンで飼う牛の群れをつかさどり、アデライの子シヤパテはもろもろの谷における牛の群れをつかさどり、ミイシマエルびとオビルはらくだをつかさどり、メロノテびとエデヤはろばをつかさどり、ニハガルびとヤジズは羊の群れをつかさどつた。彼らは皆ダビデ王の財産のつかさであつた。

ニ三またダビデのおじヨナタンは議官で、知恵ある人であり、学者であつた。また彼とハクモニの子エヒエルは王の子たちの補佐であつた。ニ四アヒトペルは王の議官。アルキびとホシャイは王の友であつた。ニ五アヒトペルに次ぐ者はベナヤの子エホヤダおよびアビヤタル。王の軍の長はヨアブであつた。

第二十八章

ーダビデはイスラエルのすべての長官、すなわち部族の長、王に

仕えた組の長、千人の長、百人の長、王とその子たちのすべての財産および家畜のつかさ、宦官、有力者、勇士などをことごとくエルサレムに召し集めた。ニそしてダビデ王はその足で立ち上がって言った、「わが兄弟たち、わが民よ、わたしに聞きなさい。わたしは主の契約の箱のため、われわれの神の足台のために安住の家を建てようとの志をもち、すでにこれを建てる準備をした。しかし神はわたしに言われた、『おまえはわが名のために家を建ててはならない。おまえは軍人であつて、多くの血を流したからである』と。四それにもかかわらず、イスラエルの神、主はわたしの父の全家のうちからわたしを選んで長くイスラエルの王とせられた。すなわちユダを選んでかしらとし、ユダの家のうちで、わたしの父の家を選び、わたしの父の子らのうちで、わたしを喜び、全イスラエルの王とせられた。五そして主はわたしに多くの子を賜わり、そのすべての子らのうちからわが子ソロモンを選び、これを主の国の位にすわらせて、イスラエルを治めさせようとせられた。六主はまたわたしに言われた、『おまえの子ソロモンがわが家およびわが庭を造るであらう。わたしは彼を選んでわが子となしたからである。わたしは彼の父となる。七彼がもし今日のように、わが戒めとわがおきてを固く守って行ふならば、わたしはその国をいつまでも堅くするであらう』と。ハそれゆえいま、主の会衆なる全イスラエルの目の前およびわれわれの神の聞かれる所であなたがたに勧め

る。あなたがたはその神、主のすべての戒めを守り、これを求めなさい。そうすればあなたがたはこの良き地を所有し、これをあなたがたの後の子孫に長く嗣業として伝えることができる。九わが子ソロモンよ、あなたの父の神を知り、全き心をもって喜び勇んで彼に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いを悟られるからである。あなたがたもし彼を求めるならば会うことができる。しかしあなたがたがもしかれを捨ててならば彼は長くあなたを捨てられるであらう。一〇それであなたは慎みなさい。主はあなたを選んで聖所とすべき家を建てさせようとされるのだから心を強くしてこれを行いなさい。一一こうしてダビデは神殿の廊およびその家、その倉、その上の室、その内の室、贖罪所の室などの計画をその子ソロモンに授け、二またその心にあつたすべてのもの、すなわち主の宮の庭、周囲のすべての室、神の家、倉、ささげ物の倉などの計画を授け、三また祭司およびレビびとの組と、主の宮のもろもろの務の仕事と、主の宮のもろもろの勤めの器物について授け、四またもろもろの勤めに用いるすべての金の器を造る金の目方、およびもろもろの勤めに用いる銀の器の目方を定めた。一五すなわち金の燭台と、そのともし皿の目方、おのおのの燭台と、そのともし皿の金の目方を定め、また銀の燭台についてもおのおのの燭台の用法にしたがって燭台と、そのともし皿の銀の目方を定めた。一六また供えのパンの机については、そのおの

の机つくえのために金きんの目方めかたを定め、また銀ぎんの机つくえのためにも銀ぎんを定め、一七また肉にくさし、鉢はち、かめに用いる純金じゆんきんの目方めかたを定め、金の大杯たいはいについてもおののおのの目方めかたを定め、銀ぎんの大杯たいはいについてもおののおのの目方めかたを定め、一八また香かうの祭壇さいだんのために精金せいきんの目方めかたを定め、また翼つばさを伸べて主しゅの契約けいやくの箱はこをおおっているケルビムの金きんの車のひな型がたの金きんを定めた。一九ダビデはすべての工作こうさくが計画けいかくにしたがってなされるため、これについて主しゅの手てによって書かかれたものにより、これをことごとく明らかにした。

二〇ダビデはその子ソロモンに言った、「あなたは心を強くし、勇いさんでこれを行おこないなさい。恐おそれてはならない。おののいてはならない。主なる神かみ、わたしの神かみがあなたとともにおられるからである。主はあなたを離はなれず、あなたを捨てず、ついに主しゅの宮みやの務つとめのすべての工こう事をなし終おえさせられるでしょう。二一見みよ、神かみの宮みやのすべての務つとめのためには祭司さいしとレビレビびとの組ぐみがある。またもろもろの勤つとめのためにすべての仕事を喜よろこんでする巧たくみな者ものが皆みなあなたと共にある。またつかさたちおよびすべての民たみもあなたの命めいじるところをことごとく行おこなうでしょう」。

第二十九章

一ダビデ王おうはまた全会衆ぜんかいしゆうに言った、「わが子ソロモンは神かみがただひとりを選えらばれた者ものであるが、まだ若わかくて経験けいけんがなく、この

事業じぎやうは大きい。この宮みやは人ひとのためではなく、主なる神かみのためだからである。二そこでわたしは力ちからをつくして神かみの宮みやのために備そなえた。すなわち金きんの物ものを造つくるために金きん、銀ぎんの物もののために銀ぎん、青銅せいどうの物もののために青銅せいどう、鉄てつの物もののために鉄てつ、木の物もののために木きを備そなえた。その他縞しまめのう、はめ石いし、アンチモニイ、色のついた石いし、さまざまの宝石ほうせき、大理石だいりせきなどおびたしい。三なおわたしはわが神かみの宮みやに熱心ねっしんなるがゆえに、聖なる家いえのために備そなえたすべての物ものに加えて、わたしの持つている金銀きんぎんの財宝さいほうをわが神かみの宮みやにささげる。四すなわちオフルの金きん三千タラント、精銀せいぎん七千タラントをそのもろもろの建物たてものの壁かべをおおうためにささげる。五金は金きんの物もののために、銀ぎんは銀ぎんの物もののために、すべて工人こうじんによって造つくられるもののために用もちいる。だれかきよう、主しゅにその身みをささげる者もののように喜よろこんでささげ物ものをするだろうか」。

六そこで氏族しぞくの長ちやうたち、イスラエルの部族ぶぞくのつかさたち、千人にんの長ちやう、百人ひやくにんの長ちやうおよび王おうの工こう事じをつかさどる者ものたちは喜よろこんでささげ物ものをした。セこうして彼かれらは神かみの宮みやの務つとめのために金五千タラント一万ダリク、銀一万タラント、青銅一万八千タラント、鉄十萬タラントをささげた。ハ寶石ほうせきを持つている者ものはそれをゲルシヨンびとエヒエルの手てによって神かみの宮みやの倉くらに納おさめた。九彼かれらがこのように真心しんこうからみずから進すすんで主にささげたので、民たみはそのみずから進すすんでささげたのを喜よろこんだ。ダビデ王おうもまた大いに喜よろこんだ。

「そこでダビデは全会衆の前で主をほめたたえた。ダビデは言った、「われわれの先祖イスラエルの神、主よ、あなたはとしえにほむべきかたです。一主よ、大いなることと、力と、栄光と、勝利と、威光とはあなたのものです。天にあるもの、地にあるものも皆あなたのものです。主よ、国もまたあなたのものです。あなたは万有のかしらとして、あがめられます。二富と誉とはあなたから出ます。あなたは万有をつかさどられます。あなたの手には勢いと力があります。あなたの手はすべてのものを大いならしめ、強くされます。三われわれの神よ、われわれは、いま、あなたに感謝し、あなたの光栄ある名をたたえます。四しかしわれわれがこのように喜んでささげることができて、わたしは何者でしょう。わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。五われわれはあなたの前ではすべての先祖たちのように、旅びとです、寄留者です。われわれの世にある日は影のようで、長くともまるとはできません。六われわれの神、主よ、あなたの聖なる名のために、あなたに家を建てようとしてわれわれが備えたこの多くの物は皆あなたの手から出たもの、また皆あなたのものです。七わが神よ、あなたは心のためし、また正直を喜ばれることを、わたしは知っています。わたしは正しい心で、このすべての物を喜んでささげました。今わたしはまた、ここにおるあなたの民が喜んで、みずから進ん

であなたにささげ物をするのを見ました。一八われわれの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたの民の心にこの意志と精神とをいつまでも保たせ、その心をあなたに向けさせてください。一九またわが子ソロモンに心をつくしてあなたの命令と、あなたのあかしと、あなたのさだめとをさせて、これをことごとく行わせ、わたしが備えをした宮を建てさせてください」。

「そしてダビデが全会衆にむかつて、「あなたがたの神、主をほめたたえよ」と言ったので、全会衆は先祖たちの神、主をほめたたえ、伏して主を拝し、王に敬礼した。二そしてその翌日彼らは全イスラエルのために主に犠牲をささげた。すなわち燔祭として雄牛一千、雄羊一千、小羊一千をその灌祭と共に主にささげ、おびただしい犠牲をささげた。三そしてその日、彼らは大いなる喜びをもって主の前に食い飲みした。

彼らはさらに改めてダビデの子ソロモンを王となし、これに油を注いで主の君となし、またザドクを祭司とした。三こうしてソロモンはその父ダビデに代り、王として主の位に座した。彼は栄え、イスラエルは皆彼に従った。四またすべてのつかさたち、勇士たち、およびダビデ王の王子たちも皆ソロモン王に忠誠を誓った。五主は全イスラエルの目の前でソロモンを非常に大いならしめ、彼より前のイスラエルのどの王も得たことのない王威を彼に与えられた。

三六 このようにエッサイの子ダビデは全イスラエルを治めた。ニ
 七 彼がイスラエルを治めた期間は四十年であつた。すなわちヘ
 ブロンで七年世を治め、エルサレムで三十三年世を治めた。ニハ
 彼は高齡に達し、年も富も誉も満ち足りて死んだ。その子ソロ
 モンが彼に代つて王となつた。ニ九 ダビデ王の始終の行爲は、
 先見者サムエルの書、預言者ナタンの書および先見者ガドの書
 にしるされている。三〇 そのうちには彼のすべての政と、その力
 および彼とイスラエルと他のすべての国々に臨んだ事どもをし
 るしている。

歴代志下

第一章

一ダビデの子ソロモンはその国に自分の地位を確立した。その神、主が共にいまして彼を非常に大いなる者にされた。

ニソロモンはすべてのイスラエルびと、すなわち千人の長、百人の長、さばきびとおよびイスラエルの全地のすべてのつかさ、氏族のかしらたちに告げた。ミそしてソロモンとイスラエルの全会衆とともにギベオンにある高き所へ行った。主のしもべモーセが荒野で造った神の会見の幕屋がそこにあったからである。四しかし神の箱はダビデがすでにキリアテ・ヤリムから、これのために備えた所に運び上らせてあった。ダビデはさきに、エルサレムでこれのために天幕を張って置いたからである。五またホルの子であるウリの子ベザレルが造った青銅の祭壇がその所の主の幕屋の前にあり、ソロモンおよび会衆は主に求めた。六ソロモンはそこに上って行って、会見の幕屋のうちにある主の前の青銅の祭壇に燔祭一千をささげた。

七その夜、神はソロモンに現れて言われた、「あなたに何を与えようか、求めなさい」。八ソロモンは神に言った、「あなたはわたしの父ダビデに大いなるいつくしみを示し、またわたしを彼に代って王とされました。九主なる神よ、どうぞわが父ダビデに

約束された事を果してください。あなたは地のちりのような多くの民の上にわたしを立てて王とされたからです。一〇この民の前に出入りすることのできるように今わたしに知恵と知識とを与えてください。だがこのような大いなるあなたの民をさばくことができましようか。二神はソロモンに言われた、「この事があなたの心にあつて、富をも、宝をも、誉をも、またあなたを憎む者の命をも求めず、また長命をも求めず、ただわたしがあなたを立てて王としたわたしの民をさばくために知恵と知識とを自分のために求めたので、三知恵と知識とはあなたに与えられている。わたしはまたあなたの前の王たちの、まだ得たことのないほどの富と宝と誉とをあなたに与えよう。あなたの後の者も、このようなものを得ないでしよう。四それからソロモンはギベオンの高き所を去り、会見の幕屋の前を去って、エルサレムに帰り、イスラエルを治めた。

五ソロモンは戦車と騎兵とを集めたが、戦車一千四百両、騎兵一万二千人あった。ソロモンはこれを戦車の町々と、エルサレムの王のもとに置いた。六王は銀と金を石のようにエルサレムに多くし、香柏を平野のいちじく桑のように多くした。七ソロモンが馬を輸入したのはエジプトとクエからであった。すなわち王の貿易商人がクエから代価を払って受け取って来た。八七彼らはエジプトから戦車一両を銀六百シケルで輸入し、馬一頭を銀百五十で輸入した。同じようにこれらのものが彼らに

よつてヘテびとのすべての王たち、およびスリヤの王たちにも輸出された。

第二章

一 さてソロモンは主の名のために一つの宮を建て、また自分のために一つの王宮を建てようと思つた。ニそしてソロモンは荷を負う者七万人、山で石を切り出す者八万人、これらを監督する者三千六百人を数え出した。ミソロモンはまずツロのヒラムに人をつかわして言わせた、「あなたはわたしの父ダビデに、その住むべき家を建てるために香柏を送られました。どうぞ彼にされたように、わたしにもして下さい。四見よ、わたしはわが神、主の名のために一つの家を建て、これを聖別して彼にささげ、彼の前にこうばしい香をたき、常供のパンを供え、また燔祭を安息日、新月、およびわれらの神、主の定めの際に朝夕ささげ、これをイスラエルのながく守るべき定めにしようとしています。五またわたしの建てる家は大きな家です。われらの神はすべての神よりも大いなる神だからです。ハしかし、天も、諸天の天も彼を入れることができないのに、だれが彼のために家を建てることができましょうか。わたしは何者ですか、彼のために家を建てるというのも、ただ彼の前に香をたく所に、ほかならなんのです。セそれで、どうぞ金、銀、青銅、鉄の細工および紫糸、

緋糸、青糸の織物にくわしく、また彫刻の術に巧みな工人ひとりをわたしに送つて、父ダビデが備えておいたユダとエルサレムのわたしの工人たちと一緒に働かせてください。ハまたどうぞレバノンから香柏、いとすぎ、びやくだんを送ってください。わたしはあなたのしもべたちがレバノンで木を切ることをよくわきまえているのを知っています。わたしのしもべたちも、あなたのしもべたちと一緒に働かせ、九わたしのためにたくさん材木を備えさせてください。わたしの建てる家は非常に広大なものですから。〇わたしは木を切るあなたのしもべたちに砕いた小麦二万コル、大麦二万コル、ぶどう酒二万バテ、油二万バテを与えます」。

二 そこでツロの王ヒラムは手紙をソロモンに送つて答えた、「主はその民を愛するゆえに、あなたを彼らの王とされました」。

三 ヒラムはまた言つた、「天地を造られたイスラエルの神、主はほむべきかな。彼はダビデ王に賢い子を与え、これに分別と知恵を授けて、主のために宮を建て、また自分のために、王宮を建てることをさせられた。

三 いまわたしは達人ヒラムという知恵のある工人をつかわします。四 彼はダンの子孫である女を母とし、ツロの人を父とし、金銀、青銅、鉄、石、木の細工および紫糸、青糸、亜麻糸、緋糸の織物にくわしく、またよくもろもろの彫刻をし、意匠を凝らしてもろもろの工作をします。彼を用いてあなたの工人お

よびあなたの父、わが主ダビデの工人と一緒に働かせなさい。一五それでいまわが主の言われた小麦、大麦、油およびぶどう酒をそのしもべどもに送ってください。一六あなたの求められる材木はレバノンから切りだし、いかだに組んで、海からヨツパに送ります。あなたはそれをエルサレムに運び上げなさい」。

一七そこでソロモンはその父ダビデが数えたようにイスラエルの国にいるすべての他国人を数えたが、合わせて十五万三千六百人あつた。一八彼はその七万人を荷を負う者とし、八万人を山で木や石を切る者とし、三千六百人を民を働かせる監督者とした。

第三章

一ソロモンはエルサレムのモリアの山に主の宮を建てることを始めた。そこは父ダビデに主が現れた所、すなわちエブスびとオルナンの打ち場にダビデが備えた所である。ニソロモンが宮を建て始めたのは、その治世の四年の二月であつた。ミソロモンの建てた神の宮の基の寸法は次のとおりである。すなわち昔の尺度によれば長さ六十キュビト、幅二十キュビト、四宮の前の廊は宮の幅に従つて長さ二十キュビト高さ百二十キュビトで、その内部は純金でおつた。五またその拝殿はいとすぎの板で張り、精金をもってこれをおおい、その上にしゅろと鎖の形

を施した。六また寶石をはめ込んで宮を飾つた。その金はパルワイムの金であつた。七彼はまた金をもつてその宮、すなわち、梁、敷居、壁および戸をおおい、壁の上にケルビムを彫りつけた。八彼はまた至聖所を造つた。その長さは宮の長さにしたがつて二十キュビト、幅も二十キュビトである。彼は精金六百タラントをもつてこれをおつた。九その釘の金の重さは五十シケルであつた。彼はまた階上の室も金でおつた。

一〇彼は至聖所に木を刻んだケルビムの像を二つ造り、これをおつた。ニケルビムの翼の長さは合わせて二十キュビトであつた。すなわち一つのケルブの一つの翼は五キュビトで、宮の壁に届き、ほかの翼も五キュビトで、他のケルブの翼に届き、三他のケルブの一つの翼も五キュビトで、宮の壁に届き、ほかの翼も五キュビトで、先のケルブの翼に接していた。ニ三これらのケルビムの翼は広げると二十キュビトあつた。かれらは共に足で立ち、その顔は拝殿に向かつていた。一四ソロモンはまた青糸、紫糸、緋糸および亜麻糸で垂幕を造り、その上にケルビムの縫い取りを施した。

一五彼は宮の前に柱を二本造つた。その高さは三十五キュビト、おのおのの柱の頂に五キュビトの柱頭を造つた。一六彼は首飾のような鎖を造つて、柱の頂につけ、ざくろ百を造つてその鎖の上につけた。一七彼はこの柱を神殿の前に、一本を南の方に、一本を北の方に立て、南の方のをヤキンと名づけ、北の方のを

ボアズと名づけた。

第四章

一 ソロモンはまた青銅の祭壇を造った。その長さ二十キュビト、幅二十キュビト、高さ十キュビトである。二 彼はまた海を鑄て造った。縁から縁まで十キュビトであつて、周囲は円形をなし、高さ五キュビトで、その周囲は綱をもつて測ると三十キュビトあつた。三 海の下には三十キュビトの周囲をめぐるひさごの形があつて、海の周囲を囲んでゐた。そのひさごは二並びで、海を鑄る時に鑄たものである。四 その海は十二の牛の上に置かれ、その三つは北に向かい、三つは西に向かい、三つは南に向かい、三つは東に向かつてゐた。海はその上に置かれ、牛のうしろはみな内に向かつてゐた。五 海の厚さは手の幅で、その縁は杯の縁のように、ゆりの花に似せて造られた。海には水を三千バテ入れることができた。六 彼はまた物を洗うために洗盤十個を造つて、五個を南側に、五個を北側に置いた。その中で燔祭に用いるものを洗つた。しかし海は祭司がその中で身を洗うためであつた。

七 彼はまた金の燭台十個をその定めに従つて造り、拝殿の中の南側に五個、北側に五個を置き、八 また机十個を造り、神殿の中の南側に五個、北側に五個を置き、また金の鉢百を造つた。九 彼

はまた祭司の庭と大庭および庭の戸を造り、その戸を青銅でおつた。一〇 彼は海を宮の東南のすみにすえた。

二 ヒラムはまたつばと十能と鉢とを造つた。こうしてヒラムはソロモン王のため、神の宮の工事を終えた。三 すなわち二本の柱と玉と、柱の頂にある二つの柱頭と、柱の頂にある柱頭の二つの玉をおおう二つの網細工と、三 その二つの網細工のためのぎくろ四百、このぎくろはおのの網細工に二並びにつけて、柱の頂にある柱頭の二つの玉を巻いてゐた。四 彼はまた台と台の上の洗盤と、五 一つの海とその下の十二の牛を造つた。六 つば、十能、肉さしなどすべてこれらの器物を、達人ヒラムはソロモン王のため、主の宮のために、光のある青銅で造つた。七 王はヨルダンの低地で、スコテとゼレダの間の粘土の地でこれを鑄た。八 このようにソロモンはこれらのすべての器物を非常に多く造つたので、その青銅の重量は、量ることができなかった。

九 こうしてソロモンは神の宮のすべての器物を造つた。すなわち金の祭壇と、供えのパンを載せる机、一〇 また定めのように本殿の前で火をともし純金の燭台と、そのともしび皿を造つた。三 その花、ともしび皿、心かきは精金であつた。三 また心切りばさみ、鉢、香の杯、心取り皿は純金であつた。また宮の戸、すなわち至聖所の内部の戸および拝殿の戸のひじつばは金であつた。

第五章

一こうしてソロモンは主の宮のためにしたすべての工事を終った。そしてソロモンは父ダビデがささげた物、すなわち金銀およびもろの器物を携えて行つて神の宮の宝蔵に納めた。ニソロモンは主の契約の箱をダビデの町シオンからかつぎ上るうとして、イスラエルの長老たちと、すべての部族のかしらたちと、イスラエルの人々の氏族の長老たちをエルサレムに召し集めた。ミイスラエルの人々は皆七月の祭に王のもとに集まった。四イスラエルの長老たちが皆きたので、レビびとたちは箱を取り上げた。五彼らは箱と、会見の幕屋と、幕屋にあるすべて聖なる器をかつぎ上った。すなわち祭司とレビびとがこれらの物をつぎ上った。六ソロモン王および彼のもとに集まったイスラエルの会衆は皆箱の前で羊と牛をささげたが、その数が多くて、調べることも数えることもできなかった。セこうして祭司たちは主の契約の箱をその場所にかつぎ入れ、宮の本殿である至聖所のうちのケルビムの翼の下に置いた。ハケルビムは翼を箱の所の上に伸べていたので、ケルビムは上から箱とそのさおをおつた。九さおは長かったので、さおの端が本殿の前の聖所から見えた。しかし外部には見えなかった。さおは今日までそこにある。一〇箱の内には二枚の板のほか何もなかった。これはイスラエルの人々がエジプトから出て来たとき、主が彼らと

契約を結ばれ、モーセがホレブでそれを納めたものである。二そして祭司たちが聖所から出たとき（ここにいた祭司たちは皆その組の順にかかわらず身を清めた。三またレビびとの歌うたう者、すなわちアサフ、ヘマン、エドトンおよび彼らの子たちと兄弟たちはみな亜麻布を着、シンバルと、立琴と、琴をとつて祭壇の東に立ち、百二十人の祭司は彼らと一緒に立つてラツパを吹いた。ミラツパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した。そして彼らがラツパと、シンバルとその他の楽器をもつて声をふりあげ、主をほめて

「主は恵みあり、

そのあわれみはとこしえに絶えることがない」

と言ったとき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。一四祭司たちは雲のゆえに立つて勤めをすることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである。

第六章

一そこでソロモンは言った、

「主はみずから濃き雲の中に住まおうと言われた。

ニしかしわたしはあなたのために高き家、

とこしえのみすまいを建てた」。

ミそして王は顔をふり向けてイスラエルの全会衆を祝福した。

その時イスラエルの全会衆は立つていた。四彼は言った、「イスラエルの神、主はほむべきかな。主は口をもつてわが父ダビデに約束されたことを、その手をもつてなし遂げられた。すなわち主は言われた、五『わが民をエジプトの地から導き出した日から、わたしはわが名を置くべき家を建てるために、イスラエルのもろもろの部族のうちから、どの町をも選んだことがなく、また他のだれをもわが民イスラエルの君として選んだことがない。六わが名を置くために、ただエルサレムだけを選び、またわが民イスラエルを治めさせるために、ただダビデだけを選んだ。七イスラエルの神、主の名のために家を建てることは、父ダビデの心にあった。ハしかし主は父ダビデに言われた、『わたしの名のために家を建てることはあなたの心にあった。あなたの心にこの事のあったのは結構である。九しかしあなたはその家を建ててはならない。あなたの腰から出るあなたの子がわたしの名のために家を建てるであろう』。一〇そして主はそう言われた言葉を行われた。すなわちわたしは父ダビデに代つて立ち、主が言われたように、イスラエルの位に座し、イスラエルの神、主の名のために家を建てた。二わたしはまた、主がイスラエルの人々と結ばれた主の契約を入れた箱をそこに納めた」。

三ソロモンはイスラエルの全会衆の前、主の祭壇の前に立つて、手を伸べた。四ソロモンはさきに長さ五キュビト、幅五キュビト、高さ三キュビトの青銅の台を造つて、庭のまん中にす

えて置いたので、彼はその上に立ち、イスラエルの全会衆の前でひざをかがめ、その手を天に伸べて、一四言つた、「イスラエルの神、主よ、天にも地にも、あなたのような神はありません。あなたは契約を守られ、心をつくしてあなたの前に歩むあなたのしもべらに、いつくしみを施し、一五あなたのしもべ、わたしの父ダビデに約束されたことを守られました。あなたが口をもつて約束されたことを、手をもつてなし遂げられたことは、今日見るとおりであります。一六それゆえ、イスラエルの神、主よ、あなたのしもべ、わたしの父ダビデに、あなたが約束して、『おまえがわたしの前に歩んだように、おまえの子孫がその道を慎んで、わたしのおきてに歩むならば、おまえにはイスラエルの位に座する人がわたしの前に欠けることはない』と言われたことを、ダビデのためにお守りください。一七それゆえ、イスラエルの神、主よ、どうぞ、あなたのしもべダビデに言われた言葉を確認してください。

一八しかし神は、はたして人と共に地上に住まわれるでしょうか。見よ、天も、いと高き天もあなたをいれることはできません。わたしの建てたこの家などなおさらです。一九しかしわが神、主よ、しもべの祈と願いを顧みて、しもべがあなたの前にささげる叫びと祈をお聞きください。二〇どうぞ、あなたの目を昼も夜もこの家に、すなわち、あなたの名をそこに置くと言われた所に向かつてお開きください。どうぞ、しもべがこの所に向

かつてささげる祈をお聞きください。三 どうぞ、しもべと、あなたの民イスラエルがこの所に向かつて祈る時に、その願いをお聞きください。あなたのすみかである天から聞き、聞いておゆるしください。

三もし人がその隣り人に対して罪を犯し、誓いをすることを求められるとき、来てこの宮で、あなたの祭壇の前に誓うならば、三 あなたは天から聞いて、行い、あなたのしもべらをさばき、悪人に報いをなして、その行いの報いをそのこうべに帰し、義人を義として、その義にしたがつてその人に報いてください。

三四もしあなたの民イスラエルが、あなたに対して罪を犯したために、敵の前に敗れた時、あなたに立ち返つて、あなたの名をあげ、この宮であなたの前に祈り願うならば、三五 あなたは天から聞き、あなたの民イスラエルの罪をゆるして、あなたが彼らとその先祖に与えられた地に彼らを帰らせてください。

三六もし彼らがあなたに罪を犯したために、天が閉ざされて、雨がなく、あなたが彼らを苦しめられるとき、彼らがこの所に向かつて祈り、あなたの名をあげ、その罪を離れるならば、三七 あなたは天にあつて聞き、あなたのしもべ、あなたの民イスラエルの罪をゆるして、彼らに歩むべき良い道を教え、あなたの民に嗣業として賜わった地に雨を降らせてください。

三八もし国にききんがあるか、もしくは疫病、立ち枯れ、腐り穂、いなご、青虫があるか、または敵のために町の門の中に攻め囲ま

れることがあるか、どんな災害、どんな病気があつても、三九もし、ひとりか、あるいはあなたの民イスラエルが皆おのおのその心の悩みを知つて、この宮に向かい、手を伸べるならば、どんな祈、どんな願いでも、四〇 あなたはそのすみかである天から聞いてゆるし、おのおのの人に、その心を知つておられるゆえ、そのすべての道にしたがつて報いてください。ただあなただけがすべての人の心を知つておられるからです。四一 あなたがわれわれの先祖たちに賜わった地に、彼らの生きながらえる日の間、常にあなたを恐れさせ、あなたの道に歩ませてください。

四二 またあなたの民イスラエルの者でなく、他国人で、あなたの大きな名と、強い手と、伸べた腕のために遠い国から来て、この宮に向かつて祈るならば、四三 あなたは、あなたのすみかである天から聞き、すべて他国人があなたに呼び求めるようにしてください。そうすれば地のすべての民はあなたの民イスラエルのように、あなたの名を知り、あなたを恐れ、またわたしが建てたこの宮が、あなたの名によつて呼ばれることを知るにいたるでしょう。

四四 あなたの民が敵と戦うために、あなたがつかわされる道によつて出るとき、もし彼らがあなたの選ばれたこの町と、わたしがあなたの名のために建てたこの宮に向かつてあなたに祈るならば、四五 あなたは天から彼らの祈と願いを聞いて彼らをお助けください。四六 彼らがあなたに対して罪を犯すことがあつて、

——罪を犯さぬ人はいないゆえ、——あなたが彼らを怒って、敵にわたし、敵が彼らを捕虜として遠い地あるいは近い地に引いて行くとき、ミモもし、彼らが捕われて行った地で、みずから省みて悔い、その捕われの地であなたに願ひ、『われわれは罪を犯し、よこしまな事をし、悪を行いました』と言ひ、ミハその捕われの地で心をつくし、精神をつくしてあなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた地、あなたが選ばれた町、わたしがあなたの名のために建てたこの宮に向かつて祈るならば、ミ九あなたのすみかである天から、彼らの祈と願ひとを聞いて彼らを助け、あなたに向かつて罪を犯したあなたの民をおゆるしください。四〇わが神よ、どうぞ、この所でささげる祈にあなたの目を開き、あなたの耳を傾けてください。

四一主なる神よ、今あなたと、あなたの力の箱が立つて、あなたの安息所におはいりください。主なる神よ、どうぞあなたの祭司たちに救の衣を着せ、

あなたの聖徒たちに恵みを喜ばせてください。

四二主なる神よ、どうぞあなたの油そそがれた者の顔を退けないでください。

あなたのしもバデビデに示されたいつくしみを覚えて下さい。

第七章

—ソロモンが祈り終ったとき、天から火が下つて燔祭と犠牲を焼き、主の栄光が宮に満ちた。ミ主の栄光が主の宮に満ちたので、祭司たちは主の宮に、はいることができなかった。ミイスラエルの人々はみな火が下つたのを見、また主の栄光が宮に臨んだのを見て、敷石の上で地にひれ伏して拜し、主に感謝して言った、

「主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」。

四三そして王と民は皆主の前に犠牲をささげた。五ソロモン王のささげた犠牲は、牛二万二千頭、羊十二万頭であつた。こうして王と民は皆神の宮をささげた。六祭司はその持ち場に立ち、レビびとも主の樂器をとつて立つた。その樂器はダビデ王が主に感謝するために造つたもので、ダビデが彼らの手によつてささげるとき、「そのいつくしみは、とこしえに絶えることがない」ととなえさせたものである。祭司は彼らの前でラツパを吹き、すべてのイスラエルびとは立つていた。

セソロモンはまた主の宮の前にある庭の中を聖別し、その所で燔祭と酬恩祭のあぶらをささげた。これはソロモンが造つた青銅の祭壇が、その燔祭と素祭とあぶらとを載せるに足りなかつたからである。

ハその時ソロモンは七日の間、祭を行った。ハマテの入口からエジプトの川に至るまでのすべてのイスラエルびとが彼と共にあり、非常に大きな会衆であった。九そして八日目に聖会を開いた。彼らは七日の間、祭壇奉獻の礼を行い、七日の間、祭を行ったが、一〇七月二十三日に至ってソロモンは民をその天幕に帰らせた。皆主がダビデ、ソロモンおよびその民イスラエルに施された恵みのために喜び、かつ心に楽しんで去った。二こうしてソロモンは主の家と王の家とを造り終えた。すなわち彼は主の家と自分の家について、しようと計画したすべての事を首尾よくなし遂げた。三時に主は夜ソロモンに現れて言われた、「わたしはあなたの祈を聞き、この所をわたしのために選んで、犠牲をささげる家とした。三わたしが天を閉じて雨をなくし、またはわたしがいなごに命じて地の物を食わせ、または疫病を民の中に送るとき、一四わたしの名をもつてとなえられるわたしの民が、もしへりくだり、祈って、わたしの顔を求め、その悪い道を離れるならば、わたしは天から聞いて、その罪をゆるし、その地をいやす。一五今この所にささげられる祈にわたしの目を開き、耳を傾ける。一六今わたしはわたしの名をながくここにどめるために、この宮を選び、かつ聖別した。わたしの目とわたしの心は常にここにある。一七あなたがもし父ダビデの歩んだようにわたしの前に歩み、わたしが命じたとおりに行き、行って、わたしの定めとおきてとを守るならば、一八わたしは

あなたの父ダビデに契約して『イスラエルを治める人はあなたに欠けることがない』と言ったとおりに、あなたの王の位を堅くする。

一九しかし、あなたがたがもし翻って、わたしがあなたがたの前に置いた定めと戒めとを捨て、行って他の神々に仕え、それを拝むならば、二〇わたしはあなたがたをわたしの与えた地から抜き去り、またわたしの名のために聖別したこの宮をわたしの前から投げ捨て、もろもろの民のうちにことわざとし、笑い草とする。二一またこの宮は高いけれども、ついには、そのかたわらを過ぎる者は皆驚いて、『何ゆえ主はこの地と、この宮とにこのようにされたのか』と言うであらう。二二その時人々は答えて『彼らはその先祖たちをエジプトの地から導き出した彼らの神、主を捨て、他の神々につき従い、それを拝み、それに仕えたために、主はこのすべての災を彼らの上に下したのである』と言うであらう。

第八章

一ソロモンは二十年を経て、主の家と自分の家とを建て終った。二またソロモンはヒラムから送られた町々を建て直して、そこにイスラエルの人々を住ませた。三ソロモンはまたハマテ・ゾバを攻めて、これを取った。四彼は

また荒野にタデモルを建て、もろもろの倉の町をハマテに建てた。五また城壁、門、貫の木のある堅固な町、上ベテホロンと下ベテホロンを建てた。ハソロモンはまたバアラテと自分のもつていたすべての倉の町と、すべての戦車の町と、騎兵の町、ならびにエルサレム、レバノンおよび自分の治める全地方に建てようとして望んだものを、ことごとく建てた。セすべてイスラエルの子孫でないヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとの残った民、ハその地にあつて彼らのあとに残ったその子孫、すなわちイスラエルの子孫が滅ぼし尽さなかった民に、ソロモンは強制徴募をおこなつて今日に及んでいる。しかし、イスラエルの人々をソロモンはその工事のためには、ひとりも奴隸としなかった。彼らは兵士となり、将校となり、戦車と、騎兵の長となつた。これらはソロモン王のおもな官吏で、二百五十人あり、民を治めた。

ニソロモンはパロの娘をダビデの町から連れ上つて、彼女のために建てた家に入れて言つた、「主の箱を迎えた所は神聖であるから、わたしの妻はイスラエルの王ダビデの家に住んではならない」。

ニソロモンは廊の前に築いておいた主の祭壇の上で主に燔祭をささげた。ニすなわちモーセの命令に従つて、毎日定めのようにささげ、安息日、新月および年に三度の祭、すなわち種入れぬパンの祭、七週の祭、仮庵の祭にこれをささげた。一四ソロモ

ンは、その父ダビデのおきてに従つて、祭司の組を定めてその職に任じ、またレビびとをその勤めに任じて、毎日定めのように祭司の前でさんびと奉仕をさせ、また門を守る者に、その組にしたがつて、もろもろの門を守らせた。これは神の人ダビデがどのように命じたからである。一五祭司とレビびとはすべての事につき、また倉の事について、王の命令にそむかなかった。一六このようにソロモンは、主の宮の基をすえた日からこれをなし終えたときまで、その工事の準備をことごとくなしたので、主の宮は完成した。

一七それからソロモンはエドムの地の海べにあるエジオン・ゲベルおよびエロテへ行つた。一八時にヒラムはそのしもべどもの手によつて船団を彼に送り、また海の事になれたしもべどもをつかわしたので、彼らはソロモンのしもべらと共にオフルへ行き、そこから金四百五十タラントを取つて、これをソロモン王のもとに携えてきた。

第九章

一シバの女王はソロモンの名声を聞いたので、難問をもつてソロモンを試みようとして、非常に多くの従者を連れ、香料と非常にたくさん金と宝石とをらくだに負わせて、エルサレムのソロモンのもとに来て、その心にあることをことごとく彼に告げた。

ニソロモンは彼女のすべての間に答えた。ソロモンが知らないで彼女に説明のできないことは一つもなかった。ミシバの女王はソロモンの知恵と、彼が建てた家を見、四またその食卓の食物と、列座の家来たちと、その侍臣たちの伺候振りと彼らの服装、および彼の給仕たちとその服装、ならびに彼が主の宮でさげらる燔祭を見て、全く気を奪われてしまった。

五彼女が王に言った、「わたしは国であなたの事と、あなたの知恵について聞いたうわさは真実でした。しかしわたしは来て目に見るまでは、そのうわさを信じませんでした。今見ると、あなたの知恵の大いなることはその半分もわたしに知らされませんでした。あなたはわたしの聞いたうわさにまさっています。セあなたの奥方たちはさいわいです。常にあなたの前に立つて、あなたの知恵を聞くこのあなたの家来たちはさいわいです。ハあなたの神、主はほむべきかな。主はあなたを喜び、あなたをその位につかせ、あなたの神、主のために王とされました。あなたの神はイスラエルを愛して、とこしえにこれを堅くするために、あなたをその王とされ、公道と正義を行われるのです」。九そして彼女は金百二十タラント、および非常に多くの香料と宝石とを王に贈った。シバの女王がソロモンに贈ったような香料は、いまだかつてなかった。

一〇オフルから金を携えて来たヒラムのしもべたちとソロモンのしもべたちはまた、びやくだんの木と宝石をも携えて来た。一

一王はそのびやくだんの木で、主の宮と王の家とに階段を造り、また歌うたう者のために琴と立琴を造った。このようなものはかつてユダの地で見たことがなかった。

ニソロモン王は、シバの女王が贈った物に報いたほかに、彼女の望みにまかせて、すべてその求めるものを贈った。そして彼女はその家来たちと共に自分の国へ帰って行った。

三さて一年の間にソロモンの所にはいつて来た金の目方は六百六十六タラントであった。四このほかに貿易商および商人の携えて来たものがあつた。またアラビヤのすべての王たちおよび国の代官たちも金銀をソロモンに携えてきた。五ソロモン王は延金の大盾二百を造った。その大盾にはおのおの六百シケルの延金を用いた。六また延金の小盾三百を造った。小盾にはおのおの三百シケルの金を用いた。王はこれらをレバノンの森の家に置いた。七王はまた大きな象牙の玉座を造り、純金でこれをおおった。八その玉座には六つの段があり、また金の足台があつて共に玉座につらなり、その座する所の両方に、ひじかけがあつて、ひじかけのわきに二つのししが立っていた。九また十二のししが六つの段のおのおのの両側に立っていた。このような物はどの国でも造られたことがなかった。一〇ソロモン王が飲むときに用いた器はみな金であつた。またレバノンの森の家の器もみな純金であつて、銀はソロモンの世には尊ばれなかった。三これは王の船がヒラムのしもべたちを乗せ

てタルシシへ行き、三年ごとに一度、そのタルシシの船が金、銀、象牙、さる、くじやくを載せて来たからである。

三このようにソロモン王は富と知恵において、地のすべての王にまさっていたので、三地のすべての王は神がソロモンの心に授けられた知恵を聞こうとしてソロモンに謁見を求めた。二四人々はおのおの贈り物を携えてきた。すなわち銀の器、金の器、衣服、没薬、香料、馬、騾馬など年々定まっていた。二五ソロモンは馬と戦車のために馬屋四千と騎兵一万二千を持ち、これを戦車の町に置き、またエルサレムの王のもとに置いた。二六彼はユフラテ川からペリシテびとの地と、エジプトの境に至るまでのすべての王を治めた。二七王はまた銀を石のようにエルサレムに多くし、香柏を平野のいちじく桑のように多くした。二八また人々はエジプトおよび諸国から馬をソロモンのために輸入した。

二九ソロモンのそのほかの始終の行爲は、預言者ナタンの書と、シロびとアヒヤの預言と、先見者イドがネバテの子ヤラバアムについて述べた黙示のなかに、しるされているではないか。三〇ソロモンはエルサレムで四十年の間イスラエルの全地を治めた。三一ソロモンはその先祖たちと共に眠って、父ダビデの町に葬られ、その子レハバアムが代って王となった。

第一〇章

レハバアムはシケムへ行つた。すべてのイスラエルびとが彼を王にしようとシケムへ行つたからである。二ネバテの子ヤラバアムは、ソロモンを避けてエジプトにのがれていたが、これを聞いてエジプトから帰つたので、三人々は人をつかわして彼を招いた。そこでヤラバアムとすべてのイスラエルは来て、レハバアムに言った、四「あなたの父は、われわれのくびきを重くしましたが、今あなたの父のきびしい使役と、あなたの父が、われわれに負わせた重いくびきを軽くしてください。そうすればわたしたちはあなたに仕えましょう」。五レハバアムは彼らに答えた、「三日の後、またわたしの所に来なさい」。それで民は去った。

六レハバアム王は父ソロモンの存命中ソロモンに仕えた長老たちに相談して言つた、「あなたがたはこの民にどう返答すればよいと思いますか」。七彼らはレハバアムに言つた、「あなたがもしこの民を親切にあつかひ、彼らを喜ばせ、ねんごろに語られるならば彼らは長くあなたのしもべとなるでしょう」。八しかし彼は長老たちが与えた勧めをすてて、自分と一緒に大きくなつて自分に仕えている若者たちに相談して、九彼らに言つた、「あなたがたは、この民がわたしに向かつて、『あなたの父上が、われわれに負わせたくびきを軽くしてください』と言うのに、われわ

それはなんと返答すればよいと思ひますか。」「彼と一緒に大きくなつた若者たちは彼に言った、「あなたに向かつて、『あなたの父は、われわれのくびきを重くしたが、あなたは、それをわれわれのために軽くしてください』と言つたこの民に、こう言いなさい、『わたしの小指は父の腰よりも太い、二父はあなたがたに重いくびきを負わせたが、わたしはさらに、あなたがたのくびきを重くしよう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそりであなたがたを懲らそう』」。

三 さてヤラバアムと民は皆、王が「三日目にわたしのところに來なさい」と言つたとおりに、三日目にレハバアムのところへ行つた。三 王は荒々しく彼らに答えた。すなわちレハバアム王は長老たちの勧めをすて、四 若者たちの勧めに従ひ、彼らに告げて言つた、「父はあなたがたのくびきを重くしたが、わたしは更にこれを重くしよう。父はむちであなたがたを懲らしたが、わたしはさそりであなたがたを懲らそう。」「五 このように王は民の言うことを聞きいれなかつた。これは主が、かつてシロびとアヒヤによつて、ネバテの子ヤラバアムに言われた言葉成就するために、神がなされたのであつた。

六 イスラエルの人々は皆、王が自分たちの言うことを聞きいれないのを見たので、民は王に答えて言つた、

「われわれはダビデのうちに何の分があるうか。
われわれはエッサイの子のうちに嗣業がない。

イスラエルよ、めいめいの天幕に帰れ。
ダビデよ、今あなたの家を見よ」。

そしてイスラエルは皆彼らの天幕へ去つて行つた。七 しかしレハバアムはユダの町々に住んでいるイスラエルの人々を治めた。八 レハバアム王は徴募人の監督であつたアドラムをつかわしたが、イスラエルの人々が石で彼を撃ち殺したので、レハバアム王は急いで車に乗り、エルサレムに逃げた。九 こうしてイスラエルはダビデの家にそむいて今日に至つた。

第二章

レハバアムはエルサレムに来て、ユダとベニヤミンの家の者、すなわち、えり抜き軍人十八万人を集め、国を取りもどすためにイスラエルと戦おうとしたが、二 主の言葉が神の人シマヤに臨んで言つた、三 「ソロモンの子、ユダの王レハバアムおよびユダとベニヤミンにいるすべてのイスラエルの人々に言いなさい、四 『主はこう仰せられる、あなたがたは上つてはならない。あなたがたの兄弟と戦つてはならない。おのの自分の家に帰るなさい。この事はわたしから出たのである』。それで人々は主の言葉を聞き、ヤラバアムを攻めに行くのをやめて歸つた。五 レハバアムはエルサレムに住んで、ユダに防衛の町々を建てた。六 すなわちベツレヘム、エタム、テコア、セベテズル、ソコ、

アドラム、ハガテ、マレシヤ、ジフ、ユアドライム、ラキシ、アゼカ、ニゾラ、アヤロン、およびヘブロン。これらはユダとベニヤミンにあつて要害の町々である。ニ彼はその要害を堅固にし、これに軍長を置き、糧食と油とぶどう酒をたくわえ、ニまたそのすべての町に盾とやりを備えて、これを非常に強化し、そしてユダとベニヤミンを確保した。

ニイスラエルの全地の祭司とレビびとは四方の境から来てレハバームに身を寄せた。ニ四すなわちレビびとは自分の放牧地と領地を離れてユダとエルサレムに來た。これはヤラバームとその子らが彼らを排斥して、主の前に祭司の務をさせなかつたためである。ニヤラバームは高き所と、みだらな神と、自分で造つた子牛のために自分の祭司を立てた。ニ六またイスラエルのすべての部族のうちで、すべてその心を傾けて、イスラエルの神、主を求める者は先祖の神、主に犠牲をささげるために、レビびとに従つてエルサレムに來た。ニ七このように彼らはユダの国を堅くし、ソロモンの子レハバームを三年の間強くした。彼らは三年の間ダビデとソロモンの道に歩んだからである。

ニ八レハバームはダビデの子エレモテの娘マハラテを妻にめとつた。マハラテはエッサイの子エリアブの娘アビハイルが産んだ者である。ニ九彼女はエウシ、シマリヤおよびザハムの三子を産んだ。ニ〇彼はまた彼女の後にアブサロムの娘マアカをめとつた。マアカはアビヤ、アッタイ、ジザおよびシロミテを産

んだ。ニレハバームはアブサロムの娘マアカをすべての妻とそばめにまさつて愛した。彼は妻十八人、そばめ六十人をめとつて、男の子二十八人と女の子六十人をもうけた。ニレハバームはマアカの子アビヤを立ててかしらとし、その兄弟の長とした。彼はアビヤを王にしようと思つたからである。ニ三それで王は賢くとり行い、そのむすこたちをことごとく、ユダとベニヤミンの全地方にあるすべての要害の町に散在させ、彼らに糧食を多く与え、また多くの妻を得させた。

第二章

ニレハバームはその国が堅く立ち、強くなるに及んで、主のおきてを捨てた。イスラエルも皆彼になつた。ニ彼らがこのように主に向かつて罪を犯したので、レハバーム王の五年にエジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上つてきた。ニ三その戦車は一千二百、騎兵は六万、また彼に従つてエジプトから來た民、すなわちリビアびと、スキびと、エチオピアびとは無数であつた。ニ四シシャクはユダの要害の町々を取り、エルサレムに迫つて來た。ニ五そこで預言者シマヤは、レハバームおよびシシャクのゆえに、エルサレムに集まつたユダのつかさたちのもとにきて言つた、「主はこう仰せられる、『あなたがたはわたしを捨てたので、わたしもあなたがたを捨ててシシャクにわたした』と。ニ六そこ

でイスラエルのつかさたち、および王はへりくだって、「主は正しい」と言った。モシは彼らのへりくだるのを見られたので、主の言葉がシマヤにのぞんで言った、「彼らがへりくだったから、わたしは彼らを滅ぼさないで、間もなく救を施す。わたしはシシャクの手によって、怒りをエルサレムに注ぐことをしない。しかし彼らはシシャクのしもべになる。これは彼らがわたしに仕えることと、国々の王たちに仕えることとの相違を知るためである」。

九 エジプトの王シシャクはエルサレムに攻めのぼって、主の宮の宝物と、王の家の宝物とを奪い去った。すなわちそれらをことごとく奪い去り、またソロモンの造った金の盾をも奪い去った。○それでレハバーム王は、その代りに青銅の盾を造って、王の家の門を守る侍衛長たちの手に渡した。――王が主の宮にはいるごとに侍衛は来て、これを負い、またこれを侍衛のへやへ持つて帰った。ニレハバームがへりくだったので主の怒りは彼を離れ、彼をことごとく滅ぼそうとはされなかった。またユダの事情もよくなった。

ニレハバーム王はエルサレムで自分の地位を確立し、世を治めた。すなわちレハバームは四十一歳のとき位につき、十七年の間エルサレムで世を治めた。エルサレムは主がその名を置くためにイスラエルのすべての部族のうちから選ばれた町である。彼の母はアンモンの女で、名をナアマといった。ニレハバ

ームは主を求めることに心を傾けないで、悪い事を行った。
ニレハバームの始終の行爲は、預言者シマヤおよび先見者イドの書にのしるされてゐるではないか。レハバームとヤラバームとの間には絶えず戦争があつた。ニレハバームはその先祖たちと共に眠つて、ダビデの町に葬られ、その子アビヤが彼に代つて王となつた。

第二三章

ニヤラバーム王の第十八年にアビヤがユダの王となつた。ニ彼は三年の間エルサレムで世を治めた。彼の母はギベアのウリエルの娘で、名をミカヤといつた。

ここにアビヤとヤラバームとの間に戦争が起り、アビヤは四十万の精兵から成る勇敢な軍勢をもつて戦いにいで、ヤラバームも大勇士から成る八十万の精兵をもつて、これに向かつて戦いの備えをした。四時にアビヤはエフライムの山地にあるゼマライム山の上に立つて言った、「ヤラバームおよびイスラエルの人々よ皆聞け。五あなたがたはイスラエルの神、主が塩の契約をもつてイスラエルの国をながくダビデとその子孫に賜つたことを知らないのか。六ところがダビデの子ソロモンの家來であるネバテの子ヤラバームが起つて、その主君にそむき、七また卑しい無頼のともがらが集まつて彼にくみし、ソロモンの子レハ

ベアムに敵したが、レハベアムは若く、かつ意志が弱くてこれに当ることができなかった。

八 今また、あなたがたは大軍をたのみ、またヤラベアムが造つて、あなたがたの神とした金の子牛をたのんで、ダビデの子孫の手にある主の国に敵対しようとしている。九 またあなたがたはアロンの子孫である主の祭司とレビびとを追ひだして、他の国々の民がするように祭司を立てたではないか。すなわちだれでも若い雄牛一頭、雄羊七頭を携えてきて、自分を聖別する者は皆あの神でない者の祭司とすることができた。一〇 しかしわれわれにおいては、主がわれわれの神であつて、われわれは彼を捨てない。また主に仕える祭司はアロンの子孫であり、働きのなす者はレビびとである。二 彼らは朝ごと夕ごとに主に燔祭と、こうばしい香をささげ、供えのパンを純金の机の上に供え、また金の燭台とそのともしび皿を整えて、夕ごとにともすのである。このようにわれわれはわれわれの神、主の務を守っているが、あなたがたは彼を捨てた。三 見よ、神はみずからわれわれと共におられて、われわれのかしらとなられ、また、その祭司たちはラツパを吹きならして、あなたがたを攻める。イスラエルの人々よ、あなたがたの先祖の神、主に敵して戦つてはならない。あなたがたは成功しない。

三 ヤラベアムは伏兵を彼らのうしろに回らせたので、彼の軍隊はユダの前にあり、伏兵は彼らのうしろにあつた。四 ユダはう

しろを見ると、敵が前とうしろにあつたので、主に向かつて呼ばわり、祭司たちはラツパを吹いた。五 そこでユダの人々はその声をあげた。ユダの人々がときの声をあげると、神はヤラベアムとイスラエルの人々をアビヤとユダの前に打ち敗れたので、六 イスラエルの人々はユダの前から逃げた。神が彼らをユダの手に渡されたので、七 アビヤとその民は、彼らをおびたでしく撃ち殺した。イスラエルの殺されて倒れた者は五十万人、皆精兵であつた。八 このように、この時イスラエルの人々は打ち負かされ、ユダの人々は勝を得た。彼らがその先祖の神、主を頼んだからである。九 アビヤはヤラベアムを追撃して数個の町を彼から取つた。すなわちベテルとその村里、エシヤナとその村里、エフロンとその村里である。一〇 ヤラベアムは、アビヤの世には再び力を得ることができず、主に撃たれて死んだ。三 しかしアビヤは強くなり、妻十四人をめとり、むすこ三十二人、むすめ十六人をもうけた。三 アビヤのその他の行為すなわちその行動と言葉は、預言者イドの注釈に記されるされている。

第一章

一 アビヤはその先祖たちと共に眠つて、ダビデの町に葬られ、その子アサが代つて王となつた。アサの治世に国は十年の間、穏

やかであつた。ニアサはその神、主の目に良しと見え、また正しと見えることを行つた。Ⅲ彼は異なる祭壇と、もろもろの高き所を取り除き、石柱をこわし、アシラ像を切り倒し、四ユダに命じてその先祖たちの神、主を求めさせ、おきてと戒めとを行わせ、ユダのすべての町々から、高き所と香の祭壇とを取り除いた。そして国は彼のもとに穏やかであつた。Ⅵ彼は国が穏やかであつたので、要害の町数個をユダに建てた。また主が彼に平安を賜つたので、この年ごろ戦争がなかつた。Ⅶ彼はユダに言つた、「われわれはこれらの町を建て、その周囲に石がきを築き、やぐらを建て、門と貫の木を設けよう。われわれがわれわれの神、主を求めたので、この国はなおわれわれのものであり、われわれが彼を求めたので、四方において、われわれに平安を賜わつた」。こうして彼らは滞りなく建て終つた。Ⅷニアサの軍隊はユダから出た者三十万人あつて、盾とやりをとり、ベニヤミンから出た者二十八万人あつて、小盾をとり、弓を引いた。これはみな大勇士であつた。

Ⅸエチオピアびとゼラが、百万の軍隊と三百の戦車を率いて、マレシヤまで攻めてきた。Ⅹニアサは出て、これを迎え、マレシヤのゼパタの谷に戦いの備えをした。Ⅺ時にニアサはその神、主に向かつて呼ばわつて言つた、「主よ、力のある者を助けることも、力のない者を助けることも、あなたにおいては異なることではありません。われわれの神、主よ、われわれをお助けくださ

い。われわれはあなたに寄り頼み、あなたの名によつてこの大軍に当ります。主よ、あなたはわれわれの神です。どうぞ人をあなたに勝たせないでください」。Ⅻそこで主はニアサの前とユダの前でエチオピアびとを撃ち敗られたので、エチオピアびとは逃げ去つた。Ⅼニアサと彼に従う民は彼らをゲラルまで追撃したので、エチオピアびとは倒れて、生き残つた者はひとりもなかつた。主と主の軍勢の前に撃ち破られたからである。ユダの人々の得たぶんどり物は非常に多かつた。Ⅽ彼はまた、ゲラルの周囲の町々をことごとく撃ち破つた。主の恐れが彼らの上に臨んだからである。そして彼らはそのすべての町をかすめ奪つた。その内に多くの物があつたからである。Ⅾまた家畜をもっている者の天幕を襲い、多くの羊とらくだを奪い取つて、エルサレムに帰つた。

第一章

Ⅰ時に神の霊がオデデの子アザリヤに臨んだので、Ⅱ彼は出ていつてニアサを迎え、これに言つた、「ニアサおよびユダとベニヤミンの人々よ、わたしに聞きなさい。あなたがたが主と共にいる間は、主もあなたがたと共におられます。あなたがたが、もし彼を求めぬならば、彼に会うでしょう。しかし、彼を捨ててならば、彼もあなたがたを捨てられるでしょう。Ⅲそもそも、イスラ

エルには長い間、まことの神がなく、教をなす祭司もなく、律法もなかった。四しかし、悩みの時、彼らがイスラエルの神、主に立ち返り、彼を求めたので彼に会った。五そのころは、出る者にも入る者にも、平安がなく、大いなる騒乱が国々のすべての住民を悩ました。六国は国に、町は町に撃ち碎かれた。神がもろもろの悩みをもって彼らを苦しめられたからです。七しかしあなたがたは勇気を出しなさい。手を弱くしてはならない。あなたがたのわざには報いがあるからです」。

八アサはこれらの言葉すなわちオデデの子アザリヤの預言を聞いて勇気を得、憎むべき偶像をユダとベニヤミンの全地から除き、また彼がエフライムの山地で得た町々から除き、主の宮の廊の前にあつた主の祭壇を再興した。九彼はまたユダとベニヤミンの人々およびエフライム、マナセ、シメオンから来て、彼らの間に寄留していた者を集めた。その神、主がアサと共におられるのを見て、イスラエルからアサのもとに下つた者が多くあつたからである。一〇彼らはアサの治世の十五年の三月にエルサレムに集まり、二携えてきたぶんどり物のうちから牛七百頭、羊七千頭をその日主にささげた。三そして彼らは契約を結び、心をつくし、精神をつくして先祖の神、主を求めることと、三すべてイスラエルの神、主を求めない者は老幼男女の別なく殺さるべきことを約した。四そして彼らは大声をあげて叫び、ラッパを吹き、角笛を鳴らして、主に誓いを立てた。一五ユダは

皆その誓いを喜んだ。彼らは心をつくして誓いを立て、精神をつくして主を求めたので、主は彼らに会い、四方で彼らに安息を賜わった。

一六アサ王の母マアカがアシラのために憎むべき像を造つたので、アサは彼女をおとして太后とせず、その憎むべき像を切り倒して粉々に碎き、キデロン川でそれを焼いた。一七ただし高き所はイスラエルから除かなかったが、アサの心は一生の間、正しかった。一八彼はまた、その父のささげた物および自分のささげた物、すなわち銀、金並びに器物などを主の宮に携え入れた。一九そしてアサの治世の三十五年までは再び戦争がなかった。

第十六章

一アサの治世の三十六年にイスラエルの王バアシャはユダに攻め上り、ユダの王アサの所にだれをも出入りさせないためにラマを築いた。二そこでアサは主の宮と王の家の宝蔵から金銀を取り出し、ダマスコに住んでいるスリヤの王ベネハダデに贈つて言った、三「わたしの父とあなたの父の間のように、わたしとあなたの間に同盟を結びましょう。わたしはあなたに金銀を贈ります。行つて、あなたとイスラエルの王バアシャとの同盟を破り、彼をわたしから撤退させてください」。四ベネハダデはアサ王の言うことを聞き、自分の軍勢の長たちをつかわしてイス

ラエルの町々を攻め、イヨンとダンとアベル・マイムおよびナフタリのすべての倉の町を撃つた。五バアシヤはこれを聞いて、ラマを築くことをやめ、その工事を廃した。六そこでアサ王はユダの全国の人々を引き連れ、バアシヤがラマを建てるために用いた石と木材を運んでこさせ、それをもってゲバとミツパを建てた。

七そのころ先見者ハナニがユダの王アサのもとに来て言った、「あなたがスリヤの王に寄り頼んで、あなたの神、主に寄り頼まなかったで、スリヤ王の軍勢はあなたの手からのがれてしまった。ハかのエチオピアびとと、リビアびとは大軍で、その戦車と騎兵は、はなはだ多かったではないか。しかしあなたが主に寄り頼んだので、主は彼らをあなたの手に渡された。九主の目はあまねく全地を行きめぐり、自分に向かって心を全うする者のために力をあらわされる。今度の事では、あなたは愚かな事をした。ゆえにこの後、あなたに戦争が臨むであらう」。二〇するとアサはその先見者を怒って、獄屋に入れた。この事のために激しく彼を怒ったからである。アサはまたそのころ民のある者をしえたげた。

二見よ、アサの始終の行爲は、ユダとイスラエルの列王の書に記されている。三アサはその治世の三十九年に足を病み、その病は激しくなったが、その病の時に、主を求めないで医者を求めた。四アサは先祖たちと共に眠り、その治世の四十一年に

死んだ。一四人々は彼が自分のためにダビデの町に掘っておいた墓に葬り、製香の術をもって造った様々の香料を満した床に横たえ、彼のためにおびただしく香をたいた。

第十七章

一アサの子ヨシヤパテがアサに代つて王となり、イスラエルに向かつて自分を強くし、ニユダのすべての堅固な町々に軍隊を置き、またユダの地およびその父アサが取ったエフライムの町々に守備隊を置いた。三主はヨシヤパテと共におられた。彼がその父ダビデの最初の道に歩んで、バアルに求めず、四その父の神に求めて、その戒めに歩み、イスラエルの行いにならなかつたからである。五それゆえ、主は国を彼の手に堅く立てられ、またユダの人々は皆ヨシヤパテに贈り物を持ってきた。彼は大いなる富と誉とを得た。六そこで彼は主の道に心を励まし、さらに高き所とアシラ像とをユダから除いた。

七彼はまたその治世の三年に、つかさたちベネハイル、オバデヤ、ゼカリヤ、ネタンエルおよびミカヤをつかわしてユダの町々で教えさせ、八また彼らと共にレビびとのうちからシマヤ、ネタニヤ、ゼバデヤ、アサヘル、セミラモテ、ヨナタン、アドニヤ、トビヤ、トバドニヤをつかわし、またこれらのレビびとと共に祭司エリシヤマとヨラムをもつかわした。九彼らは主の律法の

書を携えて、ユダで教をなし、またユダの町々をことごとく巡回して、民の間に教をなした。

○そこでユダの周囲の国々は皆主を恐れ、ヨシヤパテと戦うことをしなかった。ニまた、ペリシテびとのうちで贈り物や、みづぎの銀をヨシヤパテの所に持つてくる者があり、またアラビヤびとは雄羊七千七百頭、雄やぎ七千七百頭を彼に持つてきた。ニこうしてヨシヤパテはますます大いになり、ユダに要害および倉の町を建て、ニユダの町々に多くの軍需品を持ち、またエルサレムに大勇士である軍人たちを持つていた。一四彼らをその氏族によつて数えれば次のとおりである。すなわちユダから出た千人の長のうちでは、アデナという軍長と彼に従う大勇士三十万人、一五その次は軍長ヨハナンと彼に従う者二十八万人、一六その次は喜んでその身を主にささげた者ジクリの子アマジヤと彼に従う大勇士二十万人。一七ベニヤミンから出た者のうちでは、エリアダという大勇士と彼に従う弓および盾を持つ者二十万人、一八その次はヨザバデと彼に従う戦いの備えある者十八万人である。一九これらは皆王に仕える者たちで、このほかにまたユダ全国の堅固な町々に、王が駐在させた者があつた。

第一八章

一ヨシヤパテは大いなる富と誉とをもち、アハブと縁を結んだ。

ニ彼は数年の後、サマリヤに下つて、アハブをおとずれた。アハブは彼と彼に従つてきた民のために羊と牛を多くほふり、ラモテ・ギレアデに一緒に攻め上ることを彼にすすめた。ミイスラエルの王アハブはユダの王ヨシヤパテに言つた、「あなたはわたしと一緒にラモテ・ギレアデに攻めて行きますか」。ヨシヤパテは答えた、「わたしはあなたと一つです、わたしの民はあなたの民と一つです。わたしはあなたと一緒に戦いに臨みましよう」。

四ヨシヤパテはまたイスラエルの王に言つた、「まず主の言葉を求めなさい」。五そこでイスラエルの王は預言者四百人を集めて彼らに言つた、「われわれはラモテ・ギレアデに、戦いに行くべきか、あるいは控えるべきか」。彼らは言つた、「上つて行きなさい。神はそれを王の手にわたされるでしよう」。六ヨシヤパテは言つた、「ほかにわれわれが問うべき主の預言者はここにいませんか」。七イスラエルの王はヨシヤパテに言つた、「ほかになおひとります。われわれはこの人によつて主に問うことができそうですが、彼はわたしについて良い事を預言したことがなく、常に悪いことだけを預言するので、わたしは彼を憎みます。その者はイムラの子ミカヤです」。ヨシヤパテは言つた、「王よ、そうは言わないでください」。八そこでイスラエルの王はひとりの役人を呼んで、「イムラの子ミカヤを急いで連れてきなさい」と言つた。九さてイスラエルの王およびユダの王ヨシヤパテは王の衣を着て、サマリヤの門の入口の広場におのおのその玉座に座し、

預言者たちは皆その前で預言していた。二ケナアナの子ゼデキヤは鉄の角を造つて言つた、「主はこう仰せられます、『あなたはこれらの角をもつてスリヤびとを突いて滅ぼし尽しなさい』。三預言者たちは皆そのように預言して言つた、『ラモテ・ギレアデに上つていつて勝利を得なさい。主はそれを王の手にわたされるでしょう』」。

三さてミカヤを呼びに行った使者は彼に言つた、「預言者たちは一致して王に良い事を言いました。どうぞ、あなたの言葉も彼らのひとりの言葉のようにし、良い事を言つてください」。三ミカヤは言つた、「主は生きておられる。わが神の言われることをわたしは申します」。四彼が王の所へ行くと、王は彼に言つた、「ミカヤよ、われわれはラモテ・ギレアデに戦いに行くべきか、あるいは控えるべきか」。彼は言つた、「上つて行つて勝利を得なさい。彼らはあなたの手にわたされるでしょう」。五しかし王は彼に言つた、「幾たびあなたを誓わせたなら、あなたは主の名をもつて、ただ真実のみをわたしに告げるだろうか」。六彼は言つた、「わたしはイスラエルが皆牧者のない羊のように山に散つてゐるのを見ました。すると主は『これらの者は主人をもつてゐない。彼らをそれぞれ安らかに、その家に帰らせよ』と言われました」。七イスラエルの王はヨシヤパテに言つた、「わたしはあなたに、彼はわたしについて良い事を預言せず、ただ悪い事だけを預言すると告げたではありませんか」。八ミカヤは

言つた、「それだから主の言葉を聞きなさい。わたしは主がその玉座に座し、天の万軍がその右左に立つてゐるのを見たが、一九主は、『だれがイスラエルの王アハブをいぎなつて、ラモテ・ギレアデに上らせ、彼を倒れさせるであらうか』と言われた。するとひとり、こうしようと言ひ、ひとり、ああしようと言つた。二その時一つの霊が進み出て、主の前に立ち、『わたしを彼をいぎなましよう』と言つたので、主は彼に『何をもつてするか』と言われた。三彼は『わたしが出て行つて、偽りを言う霊となつて、すべての預言者の口に宿りましよう』と言つた。そこで主は『おまえは彼をいぎなつて、それをなし遂げるであらう。出て行つて、そうしなさい』と言われた。三それゆえ、主は偽りを言う霊をこの預言者たちの口に入れ、また主はあなたについて災を告げられたのです」。

三するとケナアナの子ゼデキヤが近寄つてミカヤのほおを打つて言つた、「主の霊がどの道からわたしを離れて行つて、あなたに語りましたか」。四ミカヤは言つた、「あなたが奥の間にはいつて身を隠す日に見るでしょう」。五イスラエルの王は言つた、「ミカヤを捕え、町のつかさアモンと王の子ヨアシの所へ引いて行つて、二六言いなさい、『王はこう言う、この者を獄屋に入れ、少しばかりのパンと水をもつて彼を養ひ、わたしが勝利を得て帰つてくるのを待て』と」。二七ミカヤは言つた、「あなたがもし勝利を得て帰るならば、主はわたしによつて語られな

かったのです」。また彼は言った、「あなたがたすべての民よ、聞きなさい」。

ニハこうしてイスラエルの王とユダの王ヨシヤパテは、ラモテ・ギレアドに上った。ニハイスラエルの王はヨシヤパテに言った、「わたしは姿を変えて戦いに行きましょう。しかしあなたは王の衣を着けなさい」。イスラエルの王は姿を変えて戦いに行った。ミ○さて、スリヤの王は、その戦車隊長たちに命じて言った、「あなたがたは小さい者とも、大きい者とも戦ってはならない。ただイスラエルの王とのみ戦いなさい」。ミ戦車隊長らはヨシヤパテを見たとき、これはきつとイスラエルの王だと思つたので、身を巡らしてこれと戦おうとした。しかしヨシヤパテが呼ばわつたので、主はこれを助けられた。すなわち神は敵を彼から離れさせられた。ミ戦車隊長らは彼がイスラエルの王でないのを見たので、彼を追うことをやめて引き返した。ミしかし、ひとりの人が、なにごころなく弓を引いて、イスラエルの王の胸当と、くさずりの間を射たので、彼はその車の御者に言った、「わたしは傷を受けたから、車をめぐらして、わたしを軍中から運び出せ」。ミ四その日戦いは激しくなつた。イスラエルの王は車の中に自分をささえて立ち、夕暮までスリヤびとに向かつていたが、日の入るころになって死んだ。

第十九章

ユダの王ヨシヤパテは、つつがなくエルサレムの自分の家に帰った。ミそのとき、先見者ハナニの子エヒウが出てヨシヤパテを迎えて言った、「あなたは悪人を助け、主を憎む者を愛してよいのですか。それゆえ怒りが主の前から出て、あなたの上に臨みます。ミしかしあなたには、なほ良い事もあります。あなたはアシラ像を国の中から除き、心を傾けて神を求められました」。四ヨシヤパテはエルサレムに住んでいたが、また出て、ベエルシバからエフライムの山地まで民の中を巡り、先祖たちの神、主に彼らを導き返した。五彼はまたユダの國中、すべての堅固な町ごとに裁判人を置いた。六そして裁判人たちに言った、「あなたがたは自分のする事に気をつけなさい。あなたがたは人のために裁判するのではなく、主のためにするのです。あなたがたが裁判する時には、主はあなたがたと共におられます。セだからあなたがたは主を恐れ、慎んで行いなさい。われわれの神、主には不義がなく、人をかたより見ることなく、まいないを取ることもないからです」。

ハヨシヤパテはまたレビびと、祭司、およびイスラエルの氏族の長たちを選んでエルサレムに置き、主のために裁判を行い、争議の解決に当らせた。彼らはエルサレムに居住した。九ヨシヤパテは彼らに命じて言った、「あなたがたは主を恐れ、真実と真心

とをもつて行わなければならない。二〇すべてその町々に住んでいるあなたがたの兄弟たちから、血を流した事または律法と戒め、定めとおきてなどの事について訴えてきたならば、彼らをさとして、主の前に罪を犯させず、怒りがあなたがたと、あなたがたの兄弟たちに臨まないようにしなさい。そのようにすれば、あなたがたは罪を犯すことがないでしょう。二見よ、祭司長アマリヤは、あなたがたの上において、主の事をすべてつかさどり、イシマエルの子、ユダの家のつかさぜバデヤは王の事をすべてつかさどり、またレビびとはあなたがたの前にあつて役人となります。雄々しく行動しなさい。主は正直な人と共におられます」。

第二〇章

一この後モアブびと、アンモンびとおよびメウニびとらがヨシヤパテと戦おうと攻めてきた。二その時ある人がきて、ヨシヤパテに告げて言った、「海のかなたのエドムから大軍があなたに攻めて来ます。見よ、彼らはハザゾン・タマル(すなわちエンゲデ)にいます」。三そこでヨシヤパテは恐れ、主に顔を向けて助けを求め、ユダ全国に断食をふれさせた。四それでユダはこぞつて集まり、主の助けを求めた。すなわちユダのすべての町から人々が来て主を求めた。

五そこでヨシヤパテは主の宮の新しい庭の前で、ユダとエルサレムの会衆の中に立つて、六言つた、「われわれの先祖の神、主よ、あなたは天にいます神ではありませんか。異邦人のすべての国を治められるではありませんか。あなたの手には力があり、勢いがあつて、あなたに逆らいうる者はありません。セわれの神よ、あなたはこの国の民をあなたの民イスラエルの前から追い払つて、あなたの友アブラハムの子孫に、これを永遠に与えられたではありませんか。ハ彼らはここに住み、あなたの名のためにここに聖所を建てて言いました、九『つるぎ、審判、疫病、ききんなどの災がわれわれに臨む時、われわれはこの宮の前に立つて、あなたの前におり、その悩みの中であなたに呼ばわれます。すると、あなたは聞いて助けられます。あなたの名はこの宮にあるからです』と。一〇今アンモン、モアブ、およびセイル山の人々をごらんください。昔イスラエルがエジプトの国から出てきた時、あなたはイスラエルに彼らを侵すことをゆるされなかつたので、イスラエルは彼らを離れて、滅ぼしませんでした。二彼らがわれわれに報いるところをごらんください。彼らは来て、あなたがわれわれに賜つたあなたの領地からわれわれを追い払おうとしています。三われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれはこのように攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかなるすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」。

二三 ユダの人々はその幼な子、その妻、および子供たちと共に皆主の前に立つていた。二四 その時主の霊が会衆の中でアサフの子孫であるレビびとヤハジエルに臨んだ。ヤハジエルはゼカリヤの子、ゼカリヤはベナヤの子、ベナヤはエイエルの子、エイエルはマツタニヤの子である。二五 ヤハジエルは言った、「ユダの人々、エルサレムの住民、およびヨシヤパテ王よ、聞きなさい。主はあなたがたにこう仰せられる、『この大軍のために恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。』二六 あす、彼らの所へ攻め下りなさい。見よ、彼らはヂヅの坂から上つて来る。あなたがたはエルエルの野の東、谷の端でこれに会うであろう。二七 この戦いには、あなたがたは戦うに及ばない。ユダおよびエルサレムよ、あなたがたは進み出て立ち、あなたがたと共におられる主の勝利を見なさい。恐れてはならない。おののいてはならない。あす、彼らの所に攻めて行きなさい。主はあなたがたと共におられるからである』。

二八 ヨシヤパテは地にひれ伏した。ユダの人々およびエルサレムの民も主の前に伏して、主を拝した。二九 その時コハテびとの子孫、およびコラびとの子孫であるレビびとが立ち上がり、大声をあげてイスラエルの神、主をさんびした。

三〇 彼らは朝早く起きてテコアの野に出て行った。その出て行くとき、ヨシヤパテは立つて言った、「ユダの人々およびエルサ

レムの民よ、わたしに聞きなさい。あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう。三一 彼はまた民と相談して人々を任命し、聖なる飾りを着けて軍勢の前に進ませ、主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ、

「主に感謝せよ、

そのいづくしみはとこしえに絶えることがない」

と言わせた。三二 そして彼らが歌をうたい、さんびし始めた時、主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは打ち敗られた。三三 すなわちアンモンとモアブの人々は立ち上がって、セイル山の民に敵し、彼らを殺して全く滅ぼしたが、セイルの民を殺し尽すに及んで、彼らもおのおの互に助けて滅ぼしあつた。

三四 ユダの人々は野の物見やぐらへ行つて、かの群衆を見たが、地に倒れた死体だけであつて、ひとりものがれた者はなかつた。

三五 それでヨシヤパテとその民は彼らの物を奪うために来て見ると、多数の家畜、財宝、衣服および宝石などおびただしくあつたので、おのおのそれをはぎ取つたが、運びきれないほどたくさんで、かすめ取るに三日もかかった。それほど物が多かったのである。三六 四日目に彼らはベラカの谷に集まり、その所で主を祝福した。それでその所の名を今日までベラカの谷と呼んで

いる。ニモそしてユダとエルサレムの人々は皆ヨシヤパテを先に立て、喜んでエルサレムに帰ってきた。主が彼らにその敵のことによって喜びを与えられたからである。ニハすなわち彼らは立琴、琴およびラッパをもつてエルサレムの主の宮に來た。ニルそしてもろもろの国の民は主がイスラエルの敵と戦われたことを聞いて神を恐れた。ミ〇こうして神が四方に安息を賜ったので、ヨシヤパテの国は穩やかであつた。

ミこのようにヨシヤパテはユダを治めた。彼は三十五歳の時、王となり、二十五年の間エルサレムで世を治めた。彼の母の名はアズバといつてシルヒの娘である。ミヨシヤパテは父アサの道を歩んでそれを離れず、主の目に正しいと見られることを行つた。ミしかし高き所は除かず、また民はその先祖の神に心を傾けなかつた。

ミ四ヨシヤパテのその他の始終の行為は、ハナニの子エヒウの書に記される、イスラエルの列王の書に載せられてある。

ミ五この後ユダの王ヨシヤパテはイスラエルの王アハジヤと相結んだ。アハジヤは悪を行つた。ミ六ヨシヤパテはタルシシへ行く船を造るためにアハジヤと結び、エジオン・ゲベルで一緒に船数隻を造つた。ミ七その時マレシヤのドダワの子エリエゼルはヨシヤパテに向かつて預言し、「あなたはアハジヤと相結んだので、主はあなたの造つた物をこわされます」と言つたが、その船は難破して、タルシシへ行くことができなかつた。

第二章

一ヨシヤパテは先祖たちと共に眠り、先祖たちと共にダビデの町に葬られ、その子ヨラムが代つて王となつた。ニヨシヤパテの子であるその兄弟たちはアザリヤ、エヒエル、ゼカリヤ、アザリヤ、ミカエルおよびシパテヤで、皆ユダの王ヨシヤパテの子たちであつた。ミその父は彼らに金、銀、宝物の賜物を多く与え、またユダの要害の町々を与えたが、ヨラムは長子なので、国はヨラムに与えた。四ヨラムはその父の位に登つて強くなつた時、その兄弟たちをことごとくつるぎにかけて殺し、またユダのつかさたち数人を殺した。五ヨラムは位についた時三十二歳で、エルサレムで八年の間世を治めた。六彼はアハブの家がしたようにイスラエルの王たちの道に歩んだ。アハブの娘を妻としたからである。このように彼は主の目の前に悪をおこなつたが、セ主はさきにダビデと結ばれた契約のゆえに、また彼とその子孫とにながく、ともしびを与えると約束されたことによつて、ダビデの家を滅ぼすことを好まれなかつた。

ハヨラムの世にエドムがそむいて、ユダの支配を脱し、みずから王を立てたので、九ヨラムはその将校たち、およびすべての戦車を従えて渡つて行き、夜のうちに立ち上がつて、自分を包圍しているエドムびととその戦車の隊長たちを撃つた。一〇エドムはこのようにそむいてユダの支配を脱し、今日に至つてゐる。そ

のころリブナもまたそむいてユダの支配を脱した。ヨラムが先祖たちの神、主を捨てたからである。

二 彼はまたユダの山地に高き所を造つて、エルサレムの民に姦淫を行わせ、ユダを惑わした。三 その時預言者エリヤから次のような一通の手紙がヨラムのもとに來た、「あなたの先祖ダビデの神、主はこう仰せられる、『あなたは父ヨシヤパテの道に歩まず、またユダの王アサの道に歩まないで、ミイスラエルの王たちの道に歩み、ユダとエルサレムの民に、かのアハブの家がイスラエルに姦淫を行わせたように、姦淫を行わせ、またあなたの父の家の者で、あなたにまざっているあなたの兄弟たちを殺したゆえ、四 主は大いなる災をもつてあなたの民と子供と妻たちと、すべての所有を撃たれる。五 あなたはまた内臓の病氣にかかつて大病になり、それが日に日に重くなつて、ついに内臓が出るようになる』」。

六 その時、主はヨラムに対してエチオピアびとの近くに住んでいるペリシテびととアラビヤびとの霊を振り起されたので、七 彼らはユダに攻め上つて、これを侵し、王の家にある貨財をことごとく奪い去り、またヨラムの子供と妻たちをも奪い去つたので、末の子エホアハズのほかに、ひとりも残つた者がなかつた。

八 このもろもろの事の後、主は彼を撃つて内臓にいえがたい病氣を起させられた。一九時がたつて、二年の終りになり、その

内臓が病氣のために出て、重い病苦によつて死んだ。民は彼の先祖のために香をたいたように、彼のために香をたかなかつた。二〇 ヨラムはその位についた時三十二歳で、八年の間エルサレムで世を治め、ついに死んだ。ひとりも彼を惜しむ者がなかつた。人々は彼をダビデの町に葬つたが、王たちの墓にはなかつた。

第二章

一 エルサレムの民はヨラムの末の子アハジヤを彼の代りに王とした。かつてアラビヤびとと一緒に陣營に攻めてきた一隊の者が上の子たちをことごとく殺したので、ユダの王ヨラムの子アハジヤが王となつたのである。二 アハジヤは王となつた時四十二歳で、エルサレムで一年の間世を治めた。その母はオムリの娘で名をアタリヤといつた。三 アハジヤもまたアハブの家の道に歩んだ。その母が彼の相談相手となつて悪を行わせたからである。四 彼はまたアハブの家がしたように主の目の前に悪を行つた。すなわちその父が死んだ後、アハブの家の者がその相談役となつたので、彼はついに自分を滅ぼすに至つた。五 アハジヤはまた彼らの勧めに従つて、イスラエルの王アハブの子ヨラムと共にラモテ・ギレアデへ行き、スリヤの王ハザエルと戦つたが、スリヤびとはヨラムに傷を負わせた。六 そこでヨラ

ムはスリヤの王ハザエルと戦った時、ラマで負ったその傷をいやすためにエズレルに帰った。ユダの王ヨラムの子アハジヤはアハブの子ヨラムが病氣なのでエズレルに下つてこれを見舞った。

セアハジヤがヨラムを見舞に行つたことによつて滅びに至つたのは神によつて定められたことである。すなわち彼がそこに着いた時、ヨラムと一緒に出て、ニムシの子エヒウを迎えた。エヒウは主がアハブの家を断ち滅ぼすために油を注がれた者である。エヒウはアハブの家を罰するにあたつて、ユダのつかさたち、およびアハジヤの兄弟たちの子らがアハジヤに仕えているのを見たので、彼らをも殺した。九アハジヤはサマリヤに隠れていたが、エヒウが彼を捜し求めたので、人々は彼を捕え、エヒウのもとに引いてきて、彼を殺した。ただし「彼は心をつくして主を求めたヨシヤバテの子である」と人々は言つたのでこれを葬った。こうしてアハジヤの家には国を統べ治めうる者がなくなつた。

一〇アハジヤの母アタリヤは自分の子の死んだのを見て、立つてユダの家の王子をとごとく滅ぼしたが、ニ王の娘エホシバはアハジヤの子ヨアシを王の子たちの殺される者のうちから盗み取り、彼とそうばを寝室においた。こうしてエホシバがヨアシをアタリヤから隠したので、アタリヤはヨアシを殺さなかつた。エホシバはヨラム王の娘、またアハジヤの妹で、祭司エ

ホヤダの妻である。ニこうしてヨアシは神の宮に隠れて彼らと共にいること六年、その間アタリヤが国を治めた。

第三章

一第七年になつて、エホヤダは勇気をだしてエロハムの子アザリヤ、ヨハナンの子イシマエル、オベデの子アザリヤ、アダヤの子マアセヤ、ジクリの子エリシャパテなどの百人の長たちを招いて契約を結ばせた。ニそこで彼らはユダを行きめぐつて、ユダのすべての町からレビびとを集め、またイスラエルの氏族の長たちを集めて、エルサレムに來た。ミそしてその会衆は皆神の宮で王と契約を結んだ。その時エホヤダは彼らに言つた、「主がダビデの子孫のことについて言われたように、王の子が位につくべきです。四あなたがたのなすべき事はこれです。すなわちあなたがた祭司およびレビびとの安息日にはいつて来る者の、三分の一は門を守る者となり、五三分の一は王の家におり、三分の一は礎の門におり、民は皆、主の宮の庭にいなさい。六祭司と勤めをするレビびとのほかは、だれも主の宮に、はいつてはならない。彼らは聖なる者であるから、はいることができる。民は皆、主の命令を守らなければならない。セレビびとはめいめい手に武器をとつて王のまわりに立たなければならない。宮にはいる者をすべて殺しなさい。あなたがたは王がはいる時にも出る

時にも、王と共にいなさい。」

ハそこでレビびとおよびユダの人々は、祭司エホヤダがすべて命じたように行い、めいめいその組の者で、安息日にはいつて来るべき者と、安息日に出て行くべき者を率いていた。祭司エホヤダが組の者を去らせなかったからである。ユダまた祭司エホヤダは、神の宮にあるダビデ王のやりおよび大盾、小盾を百人の長たちに渡し、「○また王を守るために、すべての民にめいめい手に武器をとらせ、宮の南側から北側にわたって、祭壇と宮に沿って立たせた。○こうして王の子を連れ出して、これに冠をいただかせ、あかしの書を渡して王となし、エホヤダおよびその子たちが彼に油を注いだ。そして「王万歳」と言った。

ニアタリヤは民の走りながら王をはめる声を聞いたので、主の宮に入り、民の所へ行って、「ミ見ると、王は入口で柱のかたわらに立ち、王のかたわらには將軍たちとラツパ手が立つており、また国の民は皆喜んでラツパを吹き、歌をうたう者は楽器をもつてさんびしていたので、アタリヤは衣を裂いて「反逆だ、反逆だ」と叫んだ。○その時エホヤダは軍勢を統率する百人の長たちを呼び出し、「列の間から彼女を連れ出せ、彼女に従う者をつるぎで殺せ」と言った。祭司が彼女を主の宮で殺してはならないと言ったからである。○五そこで人々は彼女に手をかけ、王の家の馬の門の入口まで連れて行き、その所で彼女を殺した。○エホヤダは自分とすべての民と王との間に、彼らは皆、主の

民となるとの契約を結んだ。○七そこですべての民はバアルの家に行つて、それをこわし、その祭壇とその像とを打ち砕き、バアルの祭司マツタンを祭壇の前で殺した。○八エホヤダはまた主の宮の守衛を、祭司とレビびとの指揮のもとに置いた。このレビびとは昔ダビデがモーセの律法にしろされているように、喜びと歌をもつて主に燔祭をささげるために、主の宮に配置したものであつて、今そのダビデの例にならつたものである。○九彼はまた主の宮のもろもろの門に門衛を置き、汚れた者は何によつて汚れた者でも、はいらせないようにした。○こうしてエホヤダは百人の長たち、貴族たち、民のつかさたちおよび国のすべての民を率いて、主の宮から王を連れ下り、上の門から王の家に進み、王を国の位につかせた。○三国の民は皆喜んだ。町はアタリヤがつるぎで殺された後、穏やかであつた。

第二章

○一ヨアシは位についた時七歳で、エルサレムで四十年の間、世を治めた。彼の母はベエルシバから出た者で名をデビアといつた。○二ヨアシは祭司エホヤダの世にある日の間は常に主の良しと見られることを行つた。○三エホヤダは彼のためにふたりの妻をめぐとり、彼に男子と女子が生れた。

○四この後ヨアシは主の宮を修繕しようと志して、五祭司とレビ

びとを集めて言った、「ユダの町々へ行って、あなたがたの神の宮を年々修繕する資金をすべてのイスラエルびとから集めなさい。その事を急いでしなさい」。ところがレビびとはこれを急いでしなかった。そこで王はかしらであるエホヤダを召して言った、「あなたはなぜレビびとに求めて、主のしもべモーセがあかしの幕屋のためにイスラエルの会衆に課した税金をユダとエルサレムから取り立てさせないのか」。セカの悪い女アタリヤの子らが神の宮に侵入して主の宮のもろもろの奉納物を取り、バアルのために用いたからである。

そこで王は命じて一個の箱を造らせ、これを主の宮の門の外に置き、ユダとエルサレムにふれて、神のしもべモーセが荒野でイスラエルに課した税金を主のために持つてこさせた。すべてのつかさたちおよびすべての民は皆喜んでその税金を持つて来て、その箱に投げ入れたので、ついに箱はいっぱいになった。ニレビびとはその箱に金が多くあるのを見て、王の役人の所へ持つて行くと、王の書記と祭司長の下役とが来て、その箱を傾け、これを取つてもとの所に返した。彼らは日々このようにして金をおびたしく集めた。三王とエホヤダはこれを主の宮の工事をなす者に渡し、石工および木工を雇つて、主の宮を修繕させ、また鉄工および青銅工を雇つて、主の宮を修復させた。三工人たちは働いたので、修復の工事は彼らの手によつてはかどり、神の宮を、もとの状態に復し、これを堅固

にした。四それをなし終つたとき、余つた金を王とエホヤダの前に持つて来たので、それをもつて主の宮のために器物を造つた。すなわち勤めの器、燔祭の器、香の皿、および金銀の器を造つた。エホヤダの世にある日の間は、絶えず主の宮で燔祭をささげた。

五しかしエホヤダは年老い、日が満ちて死んだ。その死んだ時は百三十歳であつた。六人々は彼をダビデの町で王たちの中に葬つた。彼はイスラエルにおいて神とその宮とに良い事を行つたからである。

七エホヤダの死んだ後、ユダのつかさたちが来て、うやうやしく王に敬意を表した。王は彼らに聞き従つた。八彼らはその先祖の神、主の宮を捨てて、アシラ像および偶像に仕えたので、そのとがのために、怒りがユダとエルサレムに臨んだ。九主は彼らをご自分に引き返そうとして、預言者たちをつかわし、彼らにむかつてあかしをさせられたが、耳を傾けなかった。

一〇そこで神の霊が祭司エホヤダの子ゼカリヤに臨んだので、彼は民の前に立ち上がつて言った、「神はこう仰せられる、『あなたがたが主の戒めを犯して、災を招くのはどういうわけであるか。あなたがたが主を捨てたために、主もあなたがたを捨てられたのである』。三しかし人々は彼を害しようとして計り、王の命によつて、石をもつて彼を主の宮の庭で撃ち殺した。三このようにヨアシ王はゼカリヤの父エホヤダが自分に施した恵みを思

わず、その子こを殺ころした。ゼカリヤは死ぬ時とき、「どうぞ主しゅがこれをみそなわして罰ばつせられるように」と言いった。

三三さんさん年の終おわりになつて、スリヤの軍勢ぐんぜいはヨアシにむかつて攻め上り、ユダとエルサレムに来て、民たみのつかさたちをことごとく民のうちから滅ほろぼし、そのぶんどり物を皆みなダマスコの王おうに送おくつた。二四にじゅうの時ときスリヤの軍勢ぐんぜいは少数で来たのであるが、主しゅは大軍を彼らかれの手に渡わたされた。これは彼らかれがその先祖の神かみ、主しゅを捨てたためである。このように彼らはヨアシを罰ばつした。

三五さんごスリヤ軍はヨアシに大傷を負おわせて捨て去さつたが、ヨアシの家来けらいたちは祭司エホヤダの子の血のために、党を結んで彼にそむき、彼を床の上に殺して、死なせた。人々は彼をダビデの町に葬ほうむつたが、王の墓には葬ほうむらなかつた。二六にじゅう党を結んで彼にそむいた者は、アンモンの女シメアテの子ザバデおよびモアブの女シムリテの子ヨザバデであつた。二七にじゅうヨアシの子らのこと、ヨアシに對する多くの預言および神の宮の修理の事などは、列王の書の注釈ちゆしやくにしるされている。ヨアシの子アマジヤが彼に代つて王となつた。

第二十五章

一いちアマジヤは王となつた時二十五歳で、二十九年の間エルサレムで世を治めた。その母はエルサレムの者で、名をエホアダン

といつた。二アマジヤは主の良しと見られることを行つたが、全き心をもつてではなかつた。三さん彼は、国が彼の手のうちに強くなつたとき、父ヨアシ王を殺害した家来たちを殺した。四よしかしその子供たちは殺さなかつた。これはモーセの律法の書に示しされている所に従つたのであつて、そこに主は命じて、「父は子のゆえに殺されるべきではない。子は父のゆえに殺されるべきではない。おのおの自分の罪のゆえに殺されるべきである」と言いわれている。

五アマジヤはユダの人々を集め、その氏族に従つて、千人の長に付属させ、または百人の長に付属させた。ユダとベニヤミンのすべてに行つた。そして二十歳以上の者を数えたところ、やりと盾をとつて戦いに臨みうる精兵三十万人を得た。六ろく彼はまた銀百タラントをもつてイスラエルから大勇士十万人を雇つた。七しちその時、神の人が彼の所に來て言つた、「王よ、イスラエルの軍勢をあなたと共に行かせてはいけません。主はイスラエルびと、すなわちエフライムのすべての人々とは共におられないからです。ハもしあなたがこのような方法で戦いに強くなろうと思ふならば、神はあなたを敵の前に倒されるでしょう。神には助ける力があり、また倒す力があるからです。九アマジヤは神の人に言つた、「それではわたしはイスラエルの軍隊に与えた百タラントをどうしましょうか」。神の人は答えた、「主はそれよりも多いものをあなたにお与えになることができます」。一〇そ

こでアマジヤはエフライムから来て自分に加わった軍隊を分離して帰させたので、彼らはユダに対して激しい怒りを発し、火のように怒って自分の所に帰った。しかしアマジヤは勇気を出し、その民を率いて塩の谷へ行き、セイルびと一万人を撃ち殺した。三またユダの人々はこのほかに一万人をいけどり、岩の頂に引いて行つて岩の頂から彼らを投げ落したので、皆こななに砕けた。三ところがアマジヤが自分と共に戦いに行かないで帰してやつた兵卒らが、サマリヤからベテホロンまでのユダの町々を襲つて三千人を殺し、多くの物を奪い取つた。

一四アマジヤはエドムびとを殺して帰つた時、セイルびとの神々を携えてきて、これを安置して自分の神とし、これを礼拝し、これにささげ物をなした。一五それゆえ、主はアマジヤに向かつて怒りを発し、預言者を彼につかわして言わせられた、「かの民の神々は自分の民をあなたの手から救うことができなかつたのに、あなたは どうしてそれを求めたのか」。一六彼がこう王に語ると、王は彼に、「われわれはあなたを王の顧問にしたのですか。やめなさい。あなたは どうして殺されようとするのですか」と言つたので、預言者はやめて言つた、「あなたは この事を行つて、わたしのいさめを聞きいれないゆえ、神はあなたを滅ぼそうと定められたことをわたしは知っています」。

一七そこでユダの王アマジヤは協議の結果、人をエヒウの子エホアハズの子であるイスラエルの王ヨアシにつかわし、「さあ、わ

れわれは互に顔をあわせよう」と言わせたところ、一八イスラエルの王ヨアシはユダの王アマジヤに言い送つた、「レバノンのいばらが、かつてレバノンの香柏に、『あなたの娘をわたしのむすこの妻に与えよ』と言いつたところが、レバノンの野獣が通るかかつて、そのいばらを踏み倒した。一九あなたは『見よ、わたしはエドムを撃ち破つた』と言つて心に誇り高ぶっている。しかしあなたは自分の家にとどまっていなさい。どうしてあなたは災を引き起して、自分もユダも共に滅びようとするのか」。

二〇しかしアマジヤは聞きいれなかつた。これは神から出たのであつて、彼らがエドムの神々を求めたので神は彼らを敵の手に渡されるためである。二一そこでイスラエルの王ヨアシは上つて来て、ユダのベテシメシでユダの王アマジヤと顔を合わせたが、三ユダはイスラエルに撃ち破られ、おのおのその天幕に逃げ帰つた。二三その時イスラエルの王ヨアシはエホアハズの子ヨアシの子であるユダの王アマジヤをベテシメシで捕えて、エルサレムに引いて行き、エルサレムの城壁をエフライム門から、隅の門まで四百キュビトほどをこわし、二四また神の宮のうちで、オベデエドムが守つていたすべての金銀およびもろもろの器物ならびに王の家の財宝を奪い、また人質をとつて、サマリヤに帰つた。

二五ユダの王ヨアシの子アマジヤはイスラエルの王エホアハズの子ヨアシが死んで後なお十五年生きながらえた。二六アマジ

ヤのその他の始終の行爲は、ユダとイスラエルの列王の書に記されてゐるではないか。ニモアマジャがそむいて、主に従わなくなつた時から、人々はエルサレムにおいて党を結び、彼に敵したので、彼はラキシに逃げて行つたが、その人々はラキシに人をやつて、彼をその所で殺させた。二八人々はこれを馬に負わせて持つてきて、ユダの町でその先祖たちと共にこれを葬つた。

第二十六章

一そこでユダの民は皆ウジヤをとつて王となし、その父アマジャに代らせた。時に十六歳であつた。ニ彼はエラテを建て、これをふたたびユダのものにした。これはかの王がその先祖たちと共に眠つた後であつた。ミウジヤは王となつた時十六歳で、エルサレムで五十二年の間世を治めた。その母はエルサレムの者で名をエコリヤといつた。四ウジヤは父アマジャがしたように、すべて主の良しと見られることを行つた。五彼は神を恐れることを自分に教えたゼカリヤの世にある日の間、神を求めることに努めた。彼が主を求めた間、神は彼を榮えさせられた。六彼は出てペリシテびとと戦ひ、ガテの城壁、ヤブネの城壁およびアシドドの城壁をくずし、アシドドの地とペリシテびととなかに町を建てた。七神は彼を助けてペリシテびとと、グルバアルに住むアラビヤびとおよびメウニびとを攻め撃たせられた。

ハアンモンびとはウジヤにみつぎを納めた。ウジヤは非常に強くなつたので、その名はエジプトの入口までも広まつた。九ウジヤはまたエルサレムの隅の門、谷の門および城壁の曲りかどにやぐらを建てて、これを堅固にした。一〇彼はまた荒野にやぐらを建て、また多くの水ためを掘つた。彼は平野にも平地にもたくさんの家畜をもつていたからである。彼はまた農事を好んだので、山々および肥えた畑には農夫とぶどうをつくる者をもつていた。二ウジヤはまたよく戦う一軍団を持つていた。彼らは書記エリエルと、つかさマアセヤによつて調べた数に従つて組々に分れ、皆王の軍長のひとりハナニヤの指揮下にあつた。三その氏族の長である大勇士の数は合わせて二千六百人であつた。四その指揮下にある軍勢は三十万七千五百人で、皆大いなる力をもつて戦ひ、王を助けて敵に當つた。五ウジヤはその全軍のために盾、やり、かぶと、よろい、弓および石投げの石を備へた。六彼はまたエルサレムで技術者の考案した機械を造つて、これをやぐらおよび城壁のすみずみにすえ、これをもつて矢および大石を射出した。こうして彼の名声は遠くまで広まつた。彼が驚くほど神の助けを得て強くなつたからである。一六ところが彼は強くなるに及んで、その心に高ぶり、ついに自分を滅ぼすに至つた。すなわち彼はその神、主にむかつて罪を犯し、主の宮にはいつて香の祭壇の上に香をたこうとした。一七その時、祭司アザリヤは主の祭司である勇士八十人を率いて、

彼のあとに従^{したが}つてはいり、一ハウジャ王^{おう}を引き止^とめて言^いった、「ウジャよ、主に香^{かう}をたくことはあなたのなすべきことではなく、ただアロンの子孫^{しそん}で、香^{かう}をたくために清められた祭司^{さいし}たち^のすることです。すぐ聖所^{せいじよ}から出^でなさい。あなたは罪^{つみ}を犯^{おか}しました。あなたは主^{しゅ}なる神^{かみ}から栄えを得^えることはできません」。二九するとウジャは怒^{いか}りを発^{はつ}し、香炉^{かうろ}を手^てにとつて香^{かう}をたこうとしたが、彼が祭司^{さいし}に向^{むか}つて怒^{いか}りを発^{はつ}している間に、らい病^{びょう}がその額^{ひたい}に起^おつた。時に彼は主^{しゅ}の宮^{みや}で祭司^{さいし}たちの前^{まえ}、香^{かう}の祭壇^{さいだん}のかたわらにいた。三祭司^{さいし}の長^{ちやう}アザリヤおよびすべての祭司^{さいし}たちが彼^{かれ}を見ると、彼の額^{ひたい}にらい病^{びょう}が生^{はつ}じていたので、急^{いそ}いで彼^{かれ}をそこから追^おい出^だした。彼自身^{かれじしん}もまた主^{しゅ}に撃^うたれたことを知^しつて、急^{いそ}いで出^でて行^いつた。ニウジャ王^{おう}は、死ぬ日^ひまでらい病^{びょう}人^{にん}であつた。彼はらい病^{びょう}人^{にん}であつたので、離^{はな}れ殿^{どの}に住^すんだ。主^{しゅ}の宮^{みや}から断^たれたからである。その子ヨタムが王^{おう}の家^{いえ}をつかさどり、国^{くに}の民^{たみ}を治^{おさ}めた。三ウジャのその他の始^{はじ}終^{しゆう}の行^{こう}為^いは、アモツの子預^{よげん}言^ん者^{しや}イザヤがこれを書^かきしるした。ニウジャは先祖^{せんぞ}たちと共に眠^{ねむ}つたので、人々^{ひと}は「彼はらい病^{びょう}人^{にん}である」と言^いつて、王^{おう}たちの墓^{はか}に連^{つら}なる墓^ぼ地^ちに、その先祖^{せんぞ}たちと共に葬^{ほうむ}つた。その子ヨタムが彼^{かれ}に代^{かわ}つて王^{おう}となつた。

第二十七章

一ヨタムは王^{おう}となつた時^{とき}二十五歳^{じふごさい}で、十六年^{じゅうろくねん}の間^{あいだ}エルサレムで世^よを治^{おさ}めた。その母^{はは}はザドクの娘^{むすめ}で名^なをエルシャといつた。ニヨタムはその父ウジャがしたように主^{しゅ}の良^よしと見^みられることをした。しかし主^{しゅ}の宮^{みや}には、はいらなかつた。民^{たみ}はなお悪^{あく}を行^{おこな}つた。三彼は主^{しゅ}の宮^{みや}の上^{うへ}の門^{もん}を建^たて、オペルの石^{いし}がきを多く築^{きず}増^まし、四またユダの山地^{さんち}に数個^{すうこ}の町^{まち}を建^たて、林^{はやし}の間に城^{しろ}とやぐらを築^{きず}いた。五彼はアンモンびとの王^{おう}と戦^{たたか}つてこれに勝^かつた。その年^{ねん}アンモンの人々^{ひと}は銀百^{ぎんひゃく}タラント、小麦^{こむぎ}二万^{にまん}コル、大麦^{おおむぎ}一万^{いちまん}コルを彼^{かれ}に贈^{おく}つた。アンモンの人々^{ひと}は第二^{だいに}年^{ねん}にも第三^{だいに}年^{ねん}にも同じ^{おなじ}ように彼^{かれ}に納^{おさ}めた。六ヨタムはその神^{しん}、主^{しゅ}の前にその行^{こう}いを堅^{かた}くしたので力^{ちから}ある者^{もの}となつた。七ヨタムのその他の行^{こう}為^い、そのすべて^{すべて}の戦^{たたか}いおよびその行^{こう}いなどは、イスラエルとユダの列王^{れつおう}の書^{しよ}に記^しされてい^いる。八彼は王^{おう}となつた時^{とき}、二十五歳^{じふごさい}で、十六年^{じゅうろくねん}の間^{あいだ}エルサレムで世^よを治^{おさ}めた。九ヨタムはその先祖^{せんぞ}と共に眠^{ねむ}つたので、ダビデの町^{まち}に葬^{ほうむ}られ、その子アハズが彼^{かれ}に代^{かわ}つて王^{おう}となつた。

第二十八章

一アハズは王^{おう}となつた時^{とき}二十歳^{にじふさい}で、十六年^{じゅうろくねん}の間^{あいだ}エルサレムで世^よ

を治めたが、その父ダビデとは違って、主の良しと見られることを行わず、ニイスラエルの王たちの道に歩み、またもろもろのバアルのために鑄た像を造り、ミベンヒンノムの谷で香をたき、その子らを火に焼いて供え物とするなど、主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の憎むべき行いにならない、四また高き所の上、丘の上、すべての青木の下で犠牲をささげ、香をたいた。

五それゆえ、その神、主は彼をスリヤの王の手に渡されたので、スリヤびとは彼を撃ち破り、その民を多く捕虜として、ダマスコに引いて行った。彼はまたイスラエルの王の手に渡されたので、イスラエルの王も彼を撃ち破って大いに殺した。六すなわちレマリヤの子ペカはユダで一日のうちに十二万人を殺した。皆勇士であつた。これは彼らがその先祖の神、主を捨てたためである。七その時、エフライムの勇士ジクリという者が王の子マアセヤ、宮内大臣アズリカムおよび王に次ぐ人エルカナを殺した。ハイスラエルの人々はついにその兄弟のうちから婦人ならびに男子、女子など二十万人を捕虜にし、また多くのぶんどり物を取り、そのぶんどり物をサマリヤに持つて行った。九その時そこに名をオデデという主の預言者があつて、サマリヤに歸つて来た軍勢の前に進み出て言った、「見よ、あなたがたの先祖の神、主はユダを怒つて、これをあなたがたの手に渡されたが、あなたがたは天に達するほどの怒りをもつてこれを殺した。一〇それば

かりでなく、あなたがたは今、ユダとエルサレムの人々を従わせて、自分の男女の奴隷にしようと思つている。しかしあなたがた自身もまた、あなたがたの神、主に罪を犯しているではないか。二いまわたしに聞き、あなたがたがその兄弟のうちから捕えて来た捕虜を放ち帰らせなさい。主の激しい怒りがあなたがたの上に臨んでいるからです。三そこでエフライムびとのおもなる人々、すなわちヨハナンの子アザリヤ、メシレモテの子ベレキヤ、シャルムの子ヒゼキヤ、ハデライの子アマサらもまた、戦争から歸つた者どもに向かつて立ちあがり、一三彼らに言つた、「捕虜をここに引き入れてはならない。あなたがたはわたしどもに主に対するとがを得させて、さらにわれわれの罪とがを増し加えようとしている。われわれのとがは大きく、激しい怒りがイスラエルの上に臨んでいるからです。一四そこで兵卒どもがその捕虜とぶんどり物をつかさたちと全会衆の前に捨てておいたので、一五前に名をあげた人々が立つて捕虜を受け取り、ぶんどり物のうちから衣服をとつて、裸の者に着せ、また、くつをはかせ、食ひ飲みさせ、油を注ぎなどし、その弱い者を皆ろばに乗せ、こうして彼らをしゅろの町エリコに連れて行つて、その兄弟たちに渡し、そしてサマリヤに歸つて来た。一六その時アハズ王は人をアッスリヤの王につかわして助けを求めさせた。一七エドムびとが再び侵入してユダを撃ち、民を捕え去つたからである。一八ペリシテびともまた平野の町々およ

びユダのネゲブの町々を侵して、ベテシメシ、アヤロン、ゲデロテおよびソコとその村里、テムナとその村里、ギムゾとその村里を取って、そこに住んだ。一九これはイスラエルの王アハズのゆえに、主がユダを低くされたのであって、彼がユダのうちにみだらなことを行い、主に向かつて大いに罪を犯したからである。二〇アツスリヤの王テルガデ・ピルネセルは彼の所に來たが、彼に力を添えないで、かえって彼を悩ました。ニアハズは主の宮と王の家、およびつかさたちの家の物を取ってアツスリヤの王に与えたが、それはアハズの助けにはならなかった。

三三このアハズ王はその悩みの時にあたって、ますます主に罪を犯した。三三すなわち、彼は自分を撃ったダマスコの神々に、犠牲をささげて言った、「スリヤの王たちの神々はその王たちを助けるから、わたしもそれに犠牲をささげよう。そうすれば彼らはわたしを助けるであろう」と。しかし、彼らはかえってアハズとイスラエル全国とを倒す者となった。三四アハズは神の宮の器物を集めて、神の宮の器物を切り破り、主の宮の戸を閉じ、エルサレムのすべてのすみずみに祭壇を造り、三五ユダのすべての町々に高き所を造つて、他の神々に香をたきなどして、先祖の神、主の怒りを引き起した。三六アハズのその他の始終の行為およびそのすべての行動は、ユダとイスラエルの列王の書に記されている。モアハズはその先祖たちと共に眠つたので、エルサレムの町にこれを葬った。しかし、イスラエルの王たちの墓

には持つて行かなかつた。その子ヒゼキヤが彼に代つて王となつた。

第二十九章

一ヒゼキヤは王となつた時二十五歳で、二十九年の間エルサレムで世を治めた。その母はアビヤと言つて、ゼカリヤの娘である。ニヒゼキヤは父ダビデがすべてなしたように主の良しと見られることをした。

三彼はその治世の第一年の一月に主の宮の戸を開き、かつこれを繕つた。四彼は祭司とレビびとを連れていつて、東の広場に集め、五彼らに言つた、「レビびとよ、聞きなさい。あなたがたは今、身を清めて、あなたがたの先祖の神、主の宮を清め、聖所から汚れを除き去りなさい。六われわれの先祖は罪を犯し、われわれの神、主の悪と見られることを行つて、主を捨て、主のすまいに顔をそむけ、うしろを向けた。七また廊の戸を閉じ、ともしびを消し、聖所でイスラエルの神に香をたかず、燔祭をささげなかつた。八それゆえ、主の怒りはユダとエルサレムに臨み、あなたがたが目に見るように、主は彼らを恐れと驚きと物笑いにされた。九見よ、われわれの父たちはつるぎにたおれ、われわれのむすこたち、むすめたち、妻たちはこれがために捕虜となつた。一〇今わたしは、イスラエルの神、主と契約を結ぶ志をもつてい

る。そうすればその激しい怒りは、われわれを離れるであらう。二わが子らよ、今は怠つてはならない。主はあなたがたを選んで、主の前に立つて仕えさせ、ご自分に仕える者となし、また香をたく者とされたからである」。三そこでレビびとは立ち上がった。すなわちコハテびとの子孫のうちでは、アマサイの子マハテおよびアザリヤの子ヨエル。メラリの子孫では、アブデの子キシおよびエハレルの子アザリヤ。ゲルシヨンびとのうちでは、ジンマの子ヨアおよびヨアの子エデン。ニエリザパンの子孫のうちでは、シムリとエイエル。アサフの子孫のうちでは、ゼカリヤとマツタニヤ。四ヘマンの子孫のうちでは、エヒエルとシメイ。エドトンの子孫のうちでは、シマヤとウジエルである。五彼らはその兄弟たちを集めて身を清め、主の言葉による王の命令に従つて、主の宮を清めるためにはいつて来た。六祭司たちが主の宮の奥にはいつてこれを清め、主の宮にあった汚れた物をことごとく主の宮の庭に運び出すと、レビびとはそれを受けて外に出し、キデロン川に持つて行つた。七彼らは正月の元日に清めることを始めて、その月の八日に主の宮の廊に達した。それから主の宮を清めるのに八日を費し、正月の十六日にこれを終つた。八そこで彼らはヒゼキヤ王の所へ行つて言つた、「われわれは主の宮をことごとく清め、また燔祭の壇とそのすべての器物、および供えのパンの机とそのすべての器物とを清めました。九またアハズ王がその治世に罪を犯し

て捨てたすべての器物をも整えて清めました。それらは主の祭壇の前にあります」。三そこでヒゼキヤ王は朝早く起きいで、町のつかさたちを集めて、主の宮に上つて行き、三雄牛七頭、雄羊七頭、小羊七頭、雄やぎ七頭を引いてこさせ、国と聖所とユダのためにこれを罪祭とし、アロンの子孫である祭司たちに命じてこれを主の祭壇の上にささげさせた。三すなわち、雄牛をほふると、祭司たちはその血を受けて祭壇にふりかけ、また雄羊をほふると、その血を祭壇にふりかけ、また小羊をほふると、その血を祭壇にふりかけた。三三として罪祭の雄やぎを王と会衆の前に引いて来たので、彼らはその上に手を置いた。三四そして祭司たちはこれをほふり、その血を罪祭として祭壇の上にささげてイスラエル全国のためにあがないをした。これは王がイスラエル全国のために燔祭および罪祭をささげること命じたためである。三五王はまたレビびとを主の宮に置き、ダビデおよび王の先見者ガドと預言者ナタンの命令に従つて、これにシンバル、立琴および琴をとらせた。これは主がその預言者によつて命じられたところである。三六こうしてレビびとはダビデの楽器をとり、祭司はラッパをとつて立つた。三七そこでヒゼキヤは燔祭を祭壇の上にささげることが命じた。燔祭をささげ始めた時、主の歌をうたい、ラッパを吹き、イスラエルの王ダビデの楽器をならし始めた。三八そして会衆は皆礼拝し、歌うたう者は歌をうた

い、ラツパ手はラツパを吹き鳴らし、燔祭が終るまですべてこのようであつたが、二九ささげる事が終ると、王および彼と共にいた者はみな身をかがめて礼拝した。三〇またヒゼキヤ王およびつかさたちはレビびとに命じて、ダビデと先見者アサフの言葉をもつて主をさんびさせた。彼らは喜んでさんびし、頭をさげて礼拝した。

三二その時、ヒゼキヤは言つた、「あなたがたはすでに主に仕えるために身を清めたのであるから、進みよつて、主の宮に犠牲と感謝の供え物を携えて来なさい」と。そこで会衆は犠牲と感謝の供え物を携えて来た。また志ある者は皆燔祭を携えて来た。三三会衆の携えて来た燔祭の数は雄牛七十頭、雄羊百頭、小羊二百頭、これらは皆主に燔祭としてささげるものであつた。三三また奉納物は牛六百頭、小羊三千頭であつた。三四ところが祭司が少なくてその燔祭の物の皮を、はぎつくすことができなかった。そこで、その兄弟であるレビびとがこれを助けて、そのわざをなし終え、その間に他の祭司たちは身を清めた。これはレビびとが祭司たちよりも、身を清めることに、きちようめんであつたからである。三五このほかおびたしい燔祭があり、また、酬恩祭の脂肪および燔祭の灌祭もあつた。こうして、主の宮の勤めは回復された。三六この事は、にわかになされたけれども、神がこのように民のために備えをされたので、ヒゼキヤおよびすべての民は喜んだ。

第三〇章

一ヒゼキヤはイスラエルとユダにあまねく人をつかわし、また手紙をエフライムとマナセに書き送り、エルサレムにある主の宮に来て、イスラエルの神、主に過越の祭を行うように勧めた。二王はすでにつかさたちおよびエルサレムにおける全会衆に計つて、二月に過越の祭を行うことを定めた。三——これは身を清めた祭司の数が足らず、民もまた、エルサレムに集まらなかつたので、正月にこれを行うことができなかつたからである——四この事が、王にも全会衆にも良かったので、五この事を定めて、ベエルシバからダンまでイスラエルにあまねくふれ示し、エルサレムに来て、イスラエルの神、主に過越の祭を行うことを勧めた。これはしるさされているように、これを行う者が多くなかつたゆえである。六そこで飛脚たちは、王とそのつかさたちから受けた手紙をもつて、イスラエルとユダをあまねく行き巡り、王の命を伝えて言つた、「イスラエルの人々よ、あなたがたはアブラハム、イサク、イスラエルの神、主に立ち返りなさい。そうすれば主は、アッスリヤの王たちの手からのがれた残りのあなたがたに、帰られるでしょう。七あなたがたの父たちおよび兄弟たちのようになつてはならない。彼らはその先祖たちの神、主にむかつて罪を犯したので、あなたがたの見るように主は彼らを滅びに渡されたのです。八あなたがたの父たちのように

強情にならないで、主に帰服し、主がとこしえに聖別された聖所に入り、あなたがたの神、主に仕えなさい。そうすれば、その激しい怒りがあなたがたを離れるでしょう。九もしあなたがたが主に立ち返るならば、あなたがたの兄弟および子供は、これを捕えていった者の前にあわれみを得て、この国に帰ることができでしょう。あなたがたの神、主は恵みあり、あわれみある方であられるゆえ、あなたがたが彼に立ち返るならば、顔をあなたがたにそむけられることはありません」。

一〇このように飛脚たちは、エフライムとマナセの国にはいつて、町から町に行き巡り、ついに、ゼブルンまで行つたが、人々はこれをあざけり笑つた。二ただしアセル、マナセ、ゼブルンのうちには身を低くして、エルサレムにきた人々もあつた。三またユダにおいては神の手が人々に一つ心を与えて、王とつかさたが主の言葉によつて命じたことを行わせた。

三三こうして二月になつて、多くの民は、種入れぬパンの祭を行つたためエルサレムに集まつたが、非常に大きな会衆であつた。四彼らは立つてエルサレムにあるもろの祭壇を取り除き、またすべての香をたく祭壇を取り除いてキデロン川に投げずて、二五二月の十四日に過越の小羊をほふつた。そこで祭司たちおよびレビびとはみずから恥じ、身を清めて主の宮に燔祭を携えて来た。二六彼らは神の人モーセの律法に従い、いつものようにその所に立ち、祭司たちは、レビびとの手から血を受けて注い

だ。二七時に、会衆のうちにまだ身を清めていない者が多かつたので、レビびとはその清くないすべての人々に代つて過越の小羊をほふり、主に清めてさき上げた。二八多くの民すなわちエフライム、マナセ、イッサカル、ゼブルンからきた多くの者はまだ身を清めていないのに、書きしるされたとおりにしないで過越の物を食べた。それでヒゼキヤは、彼らのために祈つて言つた、「恵みふかき主よ、彼らをゆるしてください。一九彼らは聖所の清めの規定どおりにしなかつたけれども、その心を傾けて神を求め、その先祖の神、主を求めたのです。二〇主はヒゼキヤに聞いて、民をいやされた。二三そこでエルサレムに来ていたイスラエルの人々は大いなる喜びをいだいて、七日のあいだ種入れぬパンの祭を行つた。またレビびとと祭司たちは日々に主をさんびし、力をつくして主をたたえた。二三そしてヒゼキヤは主の勤めによく通じているすべてのレビびとを深くねぎらつた。こうして人々は酬恩祭の犠牲をささげ、その先祖の神、主に感謝して、七日のあいだ祭の供え物を食べた。

三三なお全会衆は相はかつて、さらに七日のあいだ祭を守ることを定め、喜びをもつてまた七日のあいだ守つた。二四時にユダの王ヒゼキヤは雄牛一千頭、羊七千頭を会衆に贈り、また、つかさたは雄牛一千頭、羊一万頭を会衆に贈つた。祭司もまた多く身を清めた。二五ユダの全会衆および祭司、レビびと、ならびにイスラエルからきた全会衆、およびイスラエルの地から

きた他^た国^{こく}人^{じん}と、ユダに住^すむ他^た国^{こく}人^{じん}は皆^{みな}喜^{よろこ}んだ。二六このようにエルサレムに大^{おほ}なる喜^{よろこ}びがあつた。イスラエルの王^{おう}ダビデの子ソロモンの時^{とき}からこのかた、このような事^{こと}はエルサレムになつた。二七このとき祭^{さい}司^したちとレビ^{れび}びとは立^たつて、民^{たみ}を祝^{しゅく}福^{ふく}したが、その声^{こゑ}は聞^きかれ、その祈^{いのり}は主^{しゅ}の聖^{せい}なるすみかである天^{てん}に達^{たつ}した。

第三章

一この事^{こと}がすべて終^{おわ}つた時^{とき}、そこにいたイスラエル^{いすらい}びとは皆^{みな}、ユダの町^{まち}々^{まち}に出^いて行^いつて、石柱^{せきちゆう}を砕^{くだ}き、アシラ像^{ぞう}を切り倒^{たお}し、ユダとベニヤミンの全^{ぜん}地^ち、およびエフライムとマナセにある高^{たか}き所^{ところ}と祭^{さい}壇^{だん}とを取りこわし、ついにこれをことごとく破^は壊^{かい}した。そしてイスラエルの人^{ひと}々^{びと}はおのおのその町^{まち}々^{まち}、その所^{ところ}領^{りやう}に帰^{かえ}つた。

二ヒゼキヤは祭^{さい}司^しおよびレビ^{れび}びとの班^{はん}を定め、班^{はん}ごとにおのその勤^{つと}めに従^{したが}つて、祭^{さい}司^しとレビ^{れび}びとに燔^{はん}祭^{さい}と酬^{しゆふ}恩^{おん}祭^{さい}をささげさせ、主^{しゅ}の営^{えい}の門^{もん}で勤^{つと}めをし、感^{かん}謝^{しゃ}をし、さんびをさせた。三また燔^{はん}祭^{さい}のために自^じ分^{ぶん}の財^{ざい}産^{さん}のうちから王^{おう}の分^{ぶん}を出^だした。すなわち朝^{あさ}夕^{ゆふ}の燔^{はん}祭^{さい}および安息^{あんそく}日^{にち}、新^{しん}月^{げつ}、定^{さだ}め^めの祭^{まつり}などの燔^{はん}祭^{さい}のために出^だして、主^{しゅ}の律^{りつ}法^{ぽう}にしるされてい^いるとおりにした。四またエルサレムに住^すむ民^{たみ}に、祭^{さい}司^しとレビ^{れび}びとにその分^{ぶん}を与^{あた}へることを命^{めい}じ

た。これは彼^{かれ}らをして主^{しゅ}の律^{りつ}法^{ぽう}に身^みをゆだねさせるためである。五その命^{めい}令^{れい}が伝^{つた}わるやいなや、イスラエルの人^{ひと}々^{びと}は穀^{こく}物^{もつ}、酒^{さけ}、油^{あぶら}、蜜^{みつ}ならびに畑^{はたけ}のもろもろの産^{さん}物^{ぶつ}の初^{はつ}物^{ぶつ}を多^{おほ}くささげ、またすべての物^{もの}の十^{じゅう}分^{ぶん}の一^{いち}をおびただしく携^{たず}えて来^きた。ハユダの町^{まち}々^{まち}に住^すんでいたイスラエルとユダの人^{ひと}々^{びと}もまた牛^{うし}、羊^{ひつじ}の十^{じゅう}分^{ぶん}の一^{いち}ならびにその神^{かみ}、主^{しゅ}にささげられた奉^{ほう}納^{のう}物^{ぶつ}を携^{たず}えて来^きて、これを積^つみ重^{かさ}ねた。セ三月にこれを積^つみ重^{かさ}ねることを始^{はじ}め、七月にこれを終^{おわ}つた。ハヒゼキヤおよびつかさたちは来^きて、その積^つみ重^{かさ}ねた物^{もの}を見^み、主^{しゅ}とその民^{たみ}イスラエルを祝^{しゅく}福^{ふく}した。九そしてヒゼキヤがその積^つみ重^{かさ}ねた物^{もの}について祭^{さい}司^しおよびレビ^{れび}びとに問^とい尋^{たず}ねた時^{とき}、「○ザドクの家^{いえ}から出^でた祭^{さい}司^しの長^{ちやう}アザリヤは彼^{かれ}に答^{こた}えて言^いつた、「民^{たみ}が主^{しゅ}の宮^{みや}に供^{そな}え物^{もの}を携^{たず}えて来^くることを始^{はじ}めてからこのかた、われわれは飽^あきるほど食^たべたが、たくさん残^{のこ}りました。主^{しゅ}がその民^{たみ}を恵^{めぐ}まれたからです。それでわれわれは、このように多^{おほ}くの残^{のこ}つた物^{もの}をもつてい^いるのです」。

二そこでヒゼキヤは主^{しゅ}の宮^{みや}のうちに室^{むろ}を設^{もう}けることを命^{めい}じたので、彼^{かれ}らはこれを設^{もう}け、三その供^{そな}え物^{もの}の十^{じゅう}分^{ぶん}の一^{いち}および奉^{ほう}納^{のう}物^{ぶつ}を忠^{ちゅう}実^{じつ}に携^{たず}え入^いれた。これをつかさどる者^{もの}のかしらはレビ^{れび}びとコナニヤで、その兄^{あに}弟^{てい}シメイは彼^{かれ}に次^{つぎ}ぐ者^{もの}となり、三エヒエル、アザジヤ、ナハテ、アサヘル、エレモテ、ヨザバデ、エリエル、イスマキヤ、マハテ、ベナヤらは、ヒゼキヤ王^{おう}および神^{かみ}の宮^{みや}のつかさアザリヤの任^{にん}命^{めい}によつて、コナニヤおよびその

兄弟シメイを助けて、その監督者となつた。一四 東の門を守る者レビびとイムナの子コレは、神にささげる自貢のささげ物をつかさどり、主の供え物および最も聖なる物を分配した。一五 彼を助ける者はエデン、ミニヤミン、エシユア、シマヤ、アマリヤおよびシカニヤで、皆祭司の町々でその兄弟たちに、班によつて、老若ひとしく忠実に分配した。一六 ただしすべて登録された三歳以上の男子で主の宮に入り、その班に従つて日々の職分をつくし、その受持の勤めをなす者は除かれた。一七 祭司の登録はその氏族によつてなされ、二十歳以上のレビびとの登録はその班により、その受持にしたがつてなされた。一八 また祭司はその幼な子、その妻、そのむすこ、その娘、全会衆と共に登録した。彼らは忠実に身を聖なる事にささげたからである。一九 また町々の放牧地におけるアロンの子孫である祭司たちのためには、町ごとに人を名ざし選んで、祭司のうちのすべての男およびレビびとの中の登録されたすべての者に、その分を与えさせた。

二〇 ヒゼキヤはユダ全国にこのようにし、良い事、正しい事、忠実な事をその神、主の前に行つた。二一 彼がその神を求めるために神の宮の務につき、律法につき、戒めについて始めたわざは、ことごとく心をつくして行い、これをなし遂げた。

第三章

一 ヒゼキヤがこれらの事を忠実に行つた後、アッスリヤの王セナケリブが来てユダに侵入し、堅固な町々に向かつて陣を張り、これを攻め取ろうとした。二 ヒゼキヤはセナケリブが来て、エルサレムを攻めようとするのを見たので、三 そのつかさたちおよび勇士たちと相談して、町の外にある泉の水を、ふさぐとした。彼らはこれを助けた。四 多くの民は集まつて、すべての泉および国の中を流れる谷川をふさいで言つた、「アッスリヤの王たちがきて、多くの水を得られるようなことをしておいていだらうか」。五 ヒゼキヤはまた勇気を出して、破れた城壁をことごとく築き直して、その上にやぐらを建て、その外にまた城壁を巡らし、ダビデの町のミロを堅固にし、武器および盾を多く造り、六 軍長を民の上に置き、町の門の広場に民を集めて、これを励まして言つた、七 「心を強くし、勇みたちなさい。アッスリヤの王をも、彼と共にいるすべての群衆をも恐れてはならない。おののいてはならない。われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも大いなる者だからである。八 彼と共にいる者は肉の腕である。しかしわれわれと共にいる者はわれわれの神、主であつて、われわれを助け、われわれに代つて戦われる」。民はユダの王ヒゼキヤの言葉に安心した。

九 この後アッスリヤの王セナケリブはその全軍をもつてラキシ

を囲んでいたが、その家来をエルサレムにつかわして、ユダの王ヒゼキヤおよびエルサレムにいるすべてのユダの人に告げさせて言った、「○「アッスリヤの王セナケリブはこう言います、『あなたがたは何を頼んでエルサレムにこもっているのか。』ヒゼキヤは「われわれの神、主がアッスリヤの王の手から、われわれを救つてくださる」と言つて、あなたがたをそのかし、飢えと、かわきをもつて、あなたがたを死なせようとしているのではないか。三このヒゼキヤは主のもろもろの高き所と祭壇を取り除き、ユダとエルサレムに命じて、「あなたがたはただ一つの祭壇の前で礼拝し、その上に犠牲をささげなければならぬ」と言つた者ではないか。三あなたがたは、わたしおよびわたしの先祖たちが、他の国々のすべての民にしたことを知らないのか。それらの国々の民の神々は、少しでもその国を、わたしの手から救い出すことができたか。一四わたしの先祖たちが滅ぼし尽したそれらの国民のもろもろの神のうち、だれか自分の民をわたしの手から救い出すことのできたものがあるか。それで、どうしてあなたがたの神が、あなたがたをわたしの手から救い出すことができよう。一五それゆえ、あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。そそのかされてはならない。また彼を信じてはならない。いずれの民、いずれの国の神もその民をわたしの手、または、わたしの先祖の手から救いだすことができなかったのだから、ましてあなたがたの神が、どうしてわたしの手からあな

たがたを救いだすことができるか』」。

一六セナケリブの家来は、このほかにも多く主なる神、およびそのしもべヒゼキヤをそしつた。一七セナケリブはまた手紙を書き送つて、イスラエルの神、主をあざけり、かつそしつて言った、「諸国の民の神々が、その民をわたしの手から救い出さなかったように、ヒゼキヤの神も、その民をわたしの手から救い出さないであろう」と。一八そして彼らは大声をあげ、ユダヤの言葉をもつて、城壁の上にいるエルサレムの民に向かって叫び、これをおどし、かつおびやかした。彼らは町を取るためである。一九このように彼らがエルサレムの神について語ることに、人の手のわざである地上の民の神々について語るようであつた。

二〇そこでヒゼキヤ王およびアモツの子預言者イザヤは共に祈つて、天に呼ばわつたので、三主はひとりのみ使をつかわして、アッスリヤ王の陣営にいるすべての大勇士と将官、軍長らを滅ぼされた。それで王は赤面して自分の国に帰つたが、その神の家にはいった時、その子のひとり、つるぎをもつて彼をその所で殺した。三このように主は、ヒゼキヤとエルサレムの住民をアッスリヤの王セナケリブの手およびすべての敵の手から救い出し、いたる所で彼らを守られた。三そこで多くの人々はささげ物をエルサレムに携えてきて主にささげ、また宝物をユダの王ヒゼキヤに贈つた。この後ヒゼキヤは万国の民に尊ばれた。

二四 そのころ、ヒゼキヤは病んで死ぬばかりであつたが、主に祈つたので、主はこれに答えて、しるしを賜つた。二五 しかしヒゼキヤはその受けた恵みに報いることをせず、その心が高ぶつたので、怒りが彼とユダおよびエルサレムに臨もうとしたが、二六 ヒゼキヤはその心の高ぶりを悔いてへりくだり、またエルサレムの住民も同様にしたので、主の怒りは、ヒゼキヤの世には彼らに臨まなかつた。

二七 ヒゼキヤは富と栄誉をきわめ、宝蔵造つて、金、銀、寶石、香料、盾および各種の尊い器物をおさめ、二八 また倉庫造つて穀物、酒、油などの産物をおさめ、小屋造つて種々の家畜を置き、おりを造つて羊の群れを置き、二九 また多数の町を設け、かつ羊と牛をおびただしく所有した。神が非常に多くの貨財を彼に賜つたからである。三〇 このヒゼキヤはまたギホンの水の源をふさいで、これをダビデの町の西の方にまつすぐに引き下した。このようにヒゼキヤはそのすべてのわざをなし遂げた。三十一 しかしバビロンの君たちが使者をつかわして、この国にあつた、しるしについて尋ねさせた時には、神は彼を試みて、彼の心にあることを、ことごとく知るために彼を捨て置かれた。三二 ヒゼキヤのその他の行為およびその徳行は、アモツの子預言者イザヤの黙示とユダとイスラエルの列王の書に記される。三三 ヒゼキヤはその先祖たちと共に眠つたので、ダビデの子孫の墓のうちの高い所に葬られた。ユダの人々およびエル

サレムの住民は皆その死に當つて彼に敬意を表した。その子マナセが彼に代つて王となつた。

第三章

一 マナセは十二歳で王となり、五十五年の間エルサレムで世を治めた。二 彼は主がイスラエルの人々の前から追い払われた国々の民の憎むべき行いに見ならつて、主の目の前に惡を行つた。三 すなわち、その父ヒゼキヤがこわした高き所を再び築き、またもろもろのバアルのために祭壇を設け、アシラ像を造り、天の万象を拜んで、これに仕え、四 また主が「わが名は永遠にエルサレムにある」と言われた主の宮のうちに数個の祭壇を築き、五 主の宮の二つの庭に天の万象のために祭壇を築いた。六 彼はまたベンヒンノムの谷でその子供を火に焼いて供え物とし、占いをし、魔法をつかい、まじないを行い、口寄せと、占い師を任用するなど、主の前に多くの惡を行つて、その怒りをひき起した。七 彼はまた刻んだ偶像を造つて神の宮に安置した。神はこの宮についてダビデとその子ソロモンに言われたことがある、「わたしはこの宮と、わたしがイスラエルのすべての部族のうちから選んだエルサレムとに、わたしの名を永遠に置く。八 彼らがあり、わたしがすべて命じた事、すなわち、モーセが伝えたすべての律法と定めとおきてとを慎んで行ふならば、わたしがあなた

がたの先祖のために定めた地から、重ねてイスラエルの足を移すことをしない」と。九 マナセはこのようにユダとエルサレムの住民を迷わせ、主がイスラエルの人々の前に滅ぼされた国々の民にもまさつて悪を行わせた。

一〇 主はマナセおよびその民に告げられたが、彼らは心に留めなかつた。一一 それゆえ、主はアッスリヤの王の軍勢の諸將をこれに攻めこさせられたので、彼らはマナセをかぎで捕え、青銅のかせにつないで、バビロンに引いて行つた。一二 彼は悩みにあうに及んで、その神、主に願ひ求め、その先祖の神の前に大いに身を低くして、三 神に祈つたので、神はその祈を受けいれ、その願いを聞き、彼をエルサレムに連れ帰つて、再び国に臨ませられた。これによつてマナセは主こそ、まことに神にいますことを知つた。

一四 この後、彼はダビデの町の外の石がきをギホンの西の方の谷のうちに築き、魚の門の入口にまで及ぼし、またオペルに石がきをめぐらして、非常に高くこれを築き上げ、ユダのすべての堅固な町に軍長を置き、一五 また主の宮から、異邦の神々および偶像を取り除き、主の宮の山とエルサレムに自分で築いたすべての祭壇を取り除いて、町の外に投げ捨て、一六 主の祭壇を築き直して、酬恩祭および感謝の犠牲を、その上にささげ、ユダに命じてイスラエルの神、主に仕えさせた。一七 しかし民は、なお高き所で犠牲をささげた。ただしその神、主のみささげた。

一八 マナセのそのほかの行為、その神にささげた祈、およびイスラエルの神、主の名をもつて彼に告げた先見者たちの言葉は、イスラエルの列王の記録のうちにしるされている。一九 またその祈と、祈の聞かれた事、そのもろもろの罪と、とが、その身を低くする前に高き所を築いて、アシラ像および刻んだ像を立てた場所などは、先見者の記録のうちにしるされている。二〇 マナセはその先祖たちと共に眠つたので、その家に葬られた。その子アモンが彼に代つて王となつた。

二一 アモンは王となつた時二十二歳で、二年の間エルサレムで世を治めた。二三 彼はその父マナセのしたように主の前に悪を行つた。すなわちアモンはその父マナセが造つたもろもろの刻んだ像に犠牲をささげて、これに仕え、二三 その父マナセが身を低くしたように主の前に身を低くしなかつた。かえつてこのアモンは、いよいよそのとがを増した。二四 その家来たちは党を結んで彼にそむき、彼をその家で殺した。二五 しかし国の民は、党を結んでアモン王にそむいた者どもをことごとく撃ち殺した。そして国の民はその子ヨシヤを王となして、そのあとを継がせた。

第三章

一 ヨシヤは八歳のとき王となり、エルサレムで三十一年の間世

を治めた。ニ彼は主の良しと見られることをなし、その父ダビデの道を歩んで、右にも左にも曲らなかつた。ニ彼はまだ若かつたが、その治世の第八年に父ダビデの神を求めることを始め、その十二年には高き所、アシラ像、刻んだ像、鑄た像などを除いて、ユダとエルサレムを清めることを始め、四もろもろのバアルの祭壇を、自分の前で打ちこわさせ、その上に立つていた香の祭壇を切り倒し、アシラ像、刻んだ像、鑄た像を打ち砕いて粉々にし、これらの像に犠牲をささげた者どもの墓の上にそれをまき散らし、五祭司らの骨をそのもろもろの祭壇の上で焼き、こうしてユダとエルサレムを清めた。六またマナセ、エフライム、シメオンおよびナフタリの荒れた町々にもこのようにし、七もろもろの祭壇をこわし、アシラ像およびもろもろの刻んだ像を粉々に打ち砕き、イスラエル全国の香の祭壇をことごとく切り倒して、エルサレムに帰った。

ハヨシヤはその治世の十八年に、国と宮とを清めた時、その神主の宮を繕わせようと、アザリヤの子シヤパン、町のつかさマアセヤおよびヨアハズの子史官ヨアをつかわした。九彼らは大祭司ヒルキヤのもとへ行つて、神の宮にはいった金を渡した。これは門を守るレビびとがマナセ、エフライムおよびその他のすべてのイスラエル、ならびにユダとベニヤミンのすべての人およびエルサレムの住民の手から集めたものである。一〇彼らはこれを主の宮を監督する職工らの手に渡したので、主の宮で

働く職工らは、これを宮を繕い直すために支払つた。ニすなわち、大工および建築者にこれを渡して、ユダの王たちが破つた建物のために、切り石および骨組の材木を買わせ、梁材を整えさせた。三その人々は忠実に仕事をした。その監督者はメラリの子孫であるレビびとヤハテとオバデヤ、およびコハテびとの子孫であるゼカリヤとメシユラムであつて、工事をつかさどつた。また楽器に巧みなレビびとがこれに伴つた。ニ彼らはまた荷を負う者を監督し、様々の仕事に働くすべての者をつかさどつた。また他のレビびとは書記となり、役人となり、また門衛となつた。

四さて彼らが主の宮にはいった金を取りだした時、祭司ヒルキヤはモーセの伝えた主の律法の書を発見した。五そこでヒルキヤは書記官シヤパンに言つた、「わたしは主の宮で律法の書を発見しました」と。そしてヒルキヤはその書をシヤパンに渡した。ニシヤパンはその書を王のもとに持つて行き、さらに王に復命して言つた、「しもべらはゆだねられた事をことごとくなし、七主の宮にあつた金をあけて、監督者の手および職工の手に渡しました。八書記官シヤパンはまた王に告げて、「祭司ヒルキヤはわたしに一つの書物を渡しました」と言い、シヤパンはそれを王の前で読んだ。九王はその律法の言葉を聞いて衣を裂いた。一〇そして王はヒルキヤおよびシヤパンの子アヒカムとミカの子アブドンと書記官シヤパンと王の家来アサヤとに命

じて言った、三「あなたがたは行って、この発見された書物の言葉についてわたしのために、またイスラエルとユダの残りの者のために主に問いなさい。われわれの先祖たちが主の言葉を守らず、すべてこの書物にしていることを行わなかったの、主はわれわれに大いなる怒りを注がれるからです」。

三そこでヒルキヤおよび王のつかわした人々は、シャルムの妻である女預言者ホルダのもとへ行った。シャルムはハスラの子であるトクハテの子で、衣装を守る者である。時にホルダはエルサレムの第二区に住んでいた。彼らはホルダにその趣意を語ったので、三ホルダは彼らに言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられます、『あなたがたをわたしにつかわした人に告げなさい。二四主はこう仰せられます。見よ、わたしはユダの王の前で読んだ書物にしているものもろものろい、すなわち災をこの所と、ここに住む者に下す。二五彼らはわたしを捨てて、他の神々に香をたき、自分の手で造つたものもろの物をもつて、わたしの怒りを引き起そうとしたからである。それゆえ、わたしの怒りは、この所に注がれて消えない。二六しかしあなたがたをつかわして、主に問わせるユダの王にはこう言いなさい。イスラエルの神、主はこう仰せられる。あなたが聞いた言葉について、二七この所と、ここに住む者を責める神の言葉を、あなたが聞いた時、心に悔い、神の前に身をひくくし、わたしの前にへりくだり、衣を裂いて、わたしの前に泣いたので、わた

しもまた、あなたに聞いた、と主は言われる。二八見よ、わたしはあなたを先祖たちのもとに集める。あなたは安らかにあなたの墓に集められる。あなたはわたしがこの所と、ここに住む者に下すものもろの災を目に見ることがない』と」。彼らは王に復命した。

二九そこで王は人をつかわしてユダとエルサレムの長老をことごとく集め、三〇そして王は主の宮に上って行った。ユダのすべての人々、エルサレムの住民、祭司、レビびと、およびすべての民は、老いた者も若い者もことごとく彼に従った。そこで王は主の宮で発見した契約の書の言葉を、ことごとく彼らの耳に読み聞かせ、三二そして王は自分の所に立つて、主の前に契約を立て、主に従って歩み、心をつくし、精神をつくして、その戒めと、あかしと定めとをまもり、この書にしているされた契約の言葉を行おうと言ひ、三三エルサレムおよびベニヤミンの人々を皆これに加わせた。エルサレムの住民は先祖の神であるその神の契約にしたがって行った。三三ヨシヤはイスラエルの人々に属するすべての地から、憎むべきものをことごとく取り除き、イスラエルにいるすべての人をその神、主に仕えさせた。ヨシヤが世にある日の間は、彼らは先祖の神、主に従って離れなかつた。

第三章

一 ヨシヤはエルサレムで主に過越の祭を行つた。すなわち正月の十四日に過越の小羊をほふらせ、ニ祭司にその職務をとり行わせ、彼らを励まして主の宮の務をさせ、ミまた主の聖なる者となつてすべてのイスラエルびとを教えるレビびとに言つた、「あなたがたはイスラエルの王ダビデの子ソロモンの建てた宮に、聖なる箱を置きなさい。再びこれを肩になうに及ばない。あなたがたの神、主およびその民イスラエルに仕えなさい。四あなたがたはイスラエルの王ダビデの書、およびその子ソロモンの書に基いて氏族にしたがい、その班によつて、みずから備えをなし、五あなたがたの兄弟である民の人々の氏族の区分にしたがつて聖所に立ち、このためにレビびとの氏族の分が欠けることのないようにしなさい。六あなたがたは過越の小羊をほふり、身を清め、あなたがたの兄弟のために備えをし、モーセが伝えた主の言葉にしたがつて行いなさい」。

七 ヨシヤは、小羊および子やぎを民の人々に贈つた。これは皆その所に在るすべての人のための過越の供え物であつて、その数三万、また雄牛三千を贈つた。それらは王の所有から出したのである。ハそのつかさたちも民と祭司とレビびとに真心から贈つた。また神の宮のつかさたちヒルキヤ、ゼカリヤ、エヒエルも小羊と子やぎ二千六百頭、牛三百頭を祭司に与えて過越の供

え物とした。九またレビびとの長である人々すなわちコナニヤおよびその兄弟シマヤ、ネタンエルならびにハシャビヤ、エイエル、ヨザバデなども小羊と子やぎ五千頭、牛五百頭をレビびとに贈つて過越の供え物とした。

一〇このように勤めることが備わつたので、王の命に従つて祭司たちはその持ち場に立ち、レビびとはその班に従つて仕え、二やがて過越の小羊がほふられたので、祭司はその血を受け取つて注いだ。レビびとはその皮をはいだ。ニそれから燔祭の物を取り分け、それを民の人々の氏族の区分に従つて渡し、主にささげさせた。これはモーセの書にしろされたとおりである。また牛をもこのようにした。ミそして定めに従つて過越の小羊を火であぶり、その他の聖なる供え物を深なべ、かま、浅なべなどに煮て、急いですべての民の人々にくばつた。一四その後、彼らは自分のためと、祭司たちのために備えをした。アロンの子孫である祭司たちは、燔祭と脂肪をささげるのに忙しくて、夜になつたからである。それでレビびとは自分たちのためと、アロンの子孫である祭司たちのために備えたのである。一五アサフの子孫である歌うたう者たちは、ダビデ、アサフ、ヘマンおよび王の先見者エドトンの命に従つてその持ち場において、門衛たちはおのおの門において、その職務を離れるに及ばなかつた。兄弟であるレビびとが彼らのために備えたからである。

二六 このようにその日、主の勤めの事がごとく備わつたので、ヨシヤ王の命に従つて過越の祭を行い、主の祭壇に燔祭をささげた。一七 ここに来ていたイスラエルの人々は、そのとき過越の祭を行い、また七日の間、種入れぬパンの祭を行った。一八 預言者サムエルの日からこのかた、イスラエルでこのような過越の祭を行ったことはなかった。またイスラエルの諸王のうちには、ヨシヤが、祭司、レビびと、ならびにそこに来たユダとイスラエルのすべての人々、およびエルサレムの住民と共に、行つたような過越の祭を行つた者はひとりもなかった。一九 この過越の祭はヨシヤの治世の第十八年に行われた。

二〇 このようにヨシヤが宮を整えた後、エジプトの王ネコはユフラテ川のほとりにあるカルケミシで戦うために上つてきたので、ヨシヤはこれを防ごうと出て行つた。二一 しかしネコは彼に使者をつかわして言つた、「ユダの王よ、われわれはお互に何のあずかるところがありますか。わたしはきよう、あなたを攻めようとして来たのではありません。わたしの敵の家を攻めようとして来たのです。神がわたしに命じて急がせています。わたしと共におられる神に逆らうことをやめなさい。そうしないと、神はあなたを滅ぼされるでしょう」。二二 しかしヨシヤは引き返すことを好まず、かえつて彼と戦うために、姿を変え、神の口から出たネコの言葉を聞きいれず、行つてメギドの谷で戦つたが、二三 射手の者どもがヨシヤを射あてたので、王はその

家来たちに、「わたしを助け出せ。わたしはひどく傷ついた」と言つた。二四 そこで家来たちは彼を車から助け出し、王のもつていた第二の車に乗せてエルサレムにつれて行つたが、ついに死んだので、その先祖の墓にこれを葬つた。そしてユダとエルサレムは皆ヨシヤのために悲しんだ。二五 時にエレミヤはヨシヤのために哀歌を作つた。歌うたう男、歌うたう女は今日に至るまで、その哀歌のうちにヨシヤのことを述べ、イスラエルのうちにこれを例とした。これは哀歌のうちにしるされている。二六 ヨシヤのその他の行為、主の律法にしるされた所に従つて行つた徳行、二七 およびその始終の行いなどは、イスラエルとユダの列王の書にしるされている。

第三十六章

一 国の民はヨシヤの子エホアハズを立て、エルサレムでその父に代つて王とならせた。二 エホアハズは王となつた時二十三歳で、エルサレムで三月の間、世を治めたが、三 エジプトの王はエルサレムで彼を廃し、かつ銀百タラント、金一タラントの罰金を国に課した。四 そしてエジプト王は彼の兄弟エリアキムをユダとエルサレムの王とし、その名をエホヤキムと改め、その兄弟エホアハズを捕えてエジプトへ引いて行つた。五 エホヤキムは王となつた時二十五歳で、十一年の間エルサレ

ムで世を治めた。彼はその神、主の前に悪を行つた。六時に、バビロンの王ネブカデネザルが彼の所に攻め上り、彼をバビロンに引いて行こうとして、かせにつないだ。ネブカデネザルはまた主の宮の器物をバビロンに運んで行つて、バビロンにあるその宮殿にそれをおさめた。ハエホヤキムのその他の行為、その行つた憎むべき事および彼がひそかに行つた事などは、イスラエルとユダの列王の書に記されている。その子エホヤキンが彼に代つて王となつた。

九エホヤキンは王となつた時八歳で、エルサレムで三月と十日の間、世を治め、主の前に悪を行つた。一〇年が改まり春になつて、ネブカデネザル王は人をつかわして、彼を主の宮の尊い器物と共にバビロンに連れて行かせ、その兄弟ゼデキヤをユダとエルサレムの王とした。

ニゼデキヤは王となつた時二十一歳で、十一年の間エルサレムで世を治めた。三彼はその神、主の前に悪を行い、主の言葉を伝える預言者エレミヤの前に、身をひくくしなかつた。三彼はまた、彼に神をさして誓わせたネブカデネザル王にもそむいた。彼は強情で、その心をかたくなにして、イスラエルの神主に立ち返らなかつた。一四祭司のかしらたちおよび民らもまた、すべて異邦人のもろろの憎むべき行為にならつて、はなはだしく罪を犯し、主がエルサレムに聖別しておかれた主の宮を汚した。

一五その先祖の神、主はその民と、すみかをあわれむがゆえに、しきりに、その使者を彼らにつかわされたが、一六彼らが神の使者たちをあざけり、その言葉を軽んじ、その預言者たちをののしつたので、主の怒りがその民に向かつて起り、ついに救うことができないようになった。

一七そこで主はカルデヤびとの王を彼らに攻めこさせられたので、彼はその聖所の家でするぎをもつて若者たちを殺し、若者をも、処女をも、老人をも、しらがの者をもあわれまなかつた。主は彼らをことごとく彼の手に渡された。一八彼は神の宮のもろもろの大小の器物、主の宮の貨財、王とそのつかさたちの貨財など、すべてこれをバビロンに携えて行き、一九神の宮を焼き、エルサレムの城壁をくずし、そのうちの宮殿をことごとく火で焼き、そのうちの尊い器物をことごとくこわした。二〇彼はまたつるぎをのがれた者どもを、バビロンに捕えて行つて、彼とその子らの家来となし、ペルシヤの国の興るまで、そうして置いた。二一これはエレミヤの口によつて伝えられた主の言葉の成就するためであつた。こうして国はついにその安息をうけた。すなわちこれはその荒れている間、安息して、ついに七十年が満ちた。二三ペルシヤ王クロスの元年に当り、主はエレミヤの口によつて伝えた主の言葉を成就するため、ペルシヤ王クロスの霊を感動させたので、王はあまねく國中にふれ示し、またそれを書き示して言つた、二三「ペルシヤの王クロスはこう言う、『天の神、主

は地上ちじょうの国々くにくにをことごとくわたしに賜たまわつて、主しゅの宮みやをユダにあるエルサレムたに建てることをわたしに命めいじられた。あなたがたのうち、その民たみである者ものは皆みな、その神かみ、主しゅの助けたすを得えて上のほつて行きなさい』。

エズラ記^き

第一章

ーペルシヤ王^{おう}クロスの元年^{がんねん}に、主^{しゅ}はさきにエレミヤの口^{くち}によって伝えられた主^{しゅ}の言葉^{ことば}を成就^{じょうじゆ}するため、ペルシヤ王^{おう}クロスの心^{こころ}を感動^{かんどう}されたので、王^{おう}は全国^{ぜんこく}に布告^{ふこく}を発^{はつ}し、また詔書^{しやうしよ}をもって告^つげて言^いった、

ニ「ペルシヤ王^{おう}クロスはこのように言^いう、天^{てん}の神^{かみ}、主^{しゅ}は地上^{ちじよう}の国々^{こくに}をことごとくわたしに下^{くだ}さつて、主^{しゅ}の宮^{みや}をユダにあるエルサレムに建^たてることをわたしに命^{めい}じられた。ミあなたがたのうち、その民^{たみ}である者は皆^{みな}その神^{かみ}の助け^{たす}を得^えて、ユダにあるエルサレムに上^{のぼ}つて行^いき、イスラエルの神^{かみ}主^{しゅ}の宮^{みや}を復興^{ふつこう}せよ。彼^{かれ}はエルサレムにいます神^{かみ}である。四^よすべて生き残^{いのち}つて、どこに宿^{やど}つている者^{もの}でも、その所^{ところ}の人々^{ひとびと}は金^{きん}、銀^{ぎん}、貨財^{かさい}、家畜^{かちく}をもつて助^{たす}け、そのほかにまたエルサレムにある神^{かみ}の宮^{みや}のために真心^{まじこころ}よりの供^{そな}え物^{もの}をささげよ。」

五^いそこでユダとベニヤミンの氏族^{しぞく}の長^{ちやう}、祭司^{さいし}およびレビびとなど、すべて神^{かみ}にその心^{こころ}を感動^{かんどう}された者は、エルサレムにある主^{しゅ}の宮^{みや}を復興^{ふつこう}するために上^{のぼ}つて行^いこうと立ち上^たがった。六^{ろく}その周囲^{しゅうい}の人々^{ひとびと}は皆^{みな}、銀^{ぎん}の器^{うつわ}、金^{きん}、貨財^{かさい}、家畜^{かちく}および宝物^{たからもの}を与^{あた}えて彼^{かれ}らを力^{ちから}づけ、そのほかにまた、もろもろの物^{もの}を惜^おしげなくささげ

た。セクロス王^{おう}はまたネブカデネザルが、さきにエルサレムから携^{たず}え出して自分の神^{かみ}の宮^{みや}に納^{おさ}めた主^{しゅ}の器^{うつわ}を取り出^だした。八^{はち}すなわちペルシヤ王^{おう}クロスは倉^{くら}づかさミテレダテの手^てによつてこれを取り出^だして、ユダのつかさセシバザルに数^{かず}え渡^{わた}した。九^くその数^{かず}は次のとおりである。金^{きん}のたらい一千^{せん}、銀^{ぎん}のたらい一千^{せん}、香^{かう}炉^ろ二十九^{じゅう}、一〇金の鉢^{はち}三十^{さん}、銀^{ぎん}の鉢^{はち}二千四百十^{にせんしやうじゅう}、その他の器^{うつわ}一千^{せん}、二^に金銀^{きんぎん}の器^{うつわ}は合^あわせて五千四百六十九^{ごせんしやうむそくじゅう}あったが、セシバザルは捕^ほ囚^{しう}を連れてバビロンからエルサレムに上^{のぼ}つた時^{とき}、これら

第二章

ーバビロンの王^{おう}ネブカデネザルに捕^{とら}えられて、バビロンに移^{うつ}された者^{もの}のうち、捕^ほ囚^{しう}をゆるされてエルサレムおよびユダに上^{のぼ}つて、おのおの自分の町^{まち}に帰^{かえ}つたこの州^{しゅう}の人々^{ひとびと}は次のとおりである。ニ彼^{かれ}らはゼルバベル、エシユア、ネヘミヤ、セラヤ、レエラヤ、モルデカイ、ビルシヤン、ミスパル、ビッグワイ、レホム、バアナと共に帰^{かえ}つてきた。

そのイスラエルの民^{たみ}の人数^{にんすう}は次のとおりである。ミパロシの子孫^{しそん}は二千百七十二人^{にせんひやくしちじふににん}、四^しシパテヤの子孫^{しそん}は三百七十二人^{さんひやくしちじふににん}、五^ごアラの子孫^{しそん}は七百七十五人^{しちひやくしちじふごにん}、六^{ろく}パハテ・モアブの子孫^{しそん}すなわちエシユアとヨアブの子孫^{しそん}は二千八百十二人^{にせんはちひやくににん}、セエラムの子孫^{しそん}は一

千二百五十四人、ハザツトの子孫は九百四十五人、九ザツカイの子孫は七百六十人、一〇バニの子孫は六百四十二人、ニベバイの子孫は六百二十三人、ニアズガデの子孫は一千二百二十二人、ミアドニカムの子孫は六百六十六人、一四ビグワイの子孫は二千五十六人、一五アデンの子孫は四百五十四人、一六アテルの子孫は三十二人、一七アザマウテの子孫は四十二人、一八アズマウテの子孫は四百三十三人、一九アマトテの子孫は二百二十三人、二〇ギバルの子孫は九十五人、二一ベツレヘムの子孫は二百二十三人、二二ネトパの子孫は五十六人、二三アマトテの子孫は二百一十八人、二四アズマウテの子孫は四十二人、二五キリアテ・ヤリム、ケピラおよびベエロテの子孫は七百四十三人、二六ラマおよびゲバの子孫は六百二十一人、二七ミクマシの子孫は二百二十二人、二八ペテルおよびアイの子孫は二百二十三人、二九ネボの子孫は五十二人、三〇マグビシの子孫は百五十六人、三一他のエラムの子孫は一千二百五十四人、三二ハリムの子孫は三百二十人、三三ロド、ハデデおよびオノの子孫は七百二十五人、三四エリコの子孫は三百四十五人、三五セナアの子孫は三千六百三十人。

三六祭司は、エシユアの子孫は九百七十三人、三七インメルの子孫は一千五十二人、三八パシユルの子孫は一千二百四十七人、三九ハリムの子孫は一千七十七人。

四〇レビびとは、ホダヤの子孫は三十二人、エシユアとカデミエルの子孫は七十四人、四一歌うたう者は、アサフの子孫は百二十八人、四二

門衛の子孫は、シャルムの子孫、アテルの子孫、タルモンの子孫、アツクブの子孫、ハテタの子孫、シヨバイの子孫合わせて百三十九人。

四三宮に仕えるしもべたちは、デハの子孫、ハスバの子孫、タバオテの子孫、四四ケロスの子孫、シアハの子孫、パドンの子孫、四五レバナの子孫、ハガバの子孫、アツクブの子孫、四六ハガバの子孫、シャルマイの子孫、ハナンの子孫、四七ギデルの子孫、ガハルの子孫、レアヤの子孫、四八レヂンの子孫、ネコダの子孫、ガザムの子孫、四九ウザの子孫、パセアの子孫、ベサイの子孫、五〇アスナの子孫、メウニムの子孫、ネフシムの子孫、五一バクブクの子孫、ハクパの子孫、ハルホルの子孫、五二バツリテの子孫、メヒダの子孫、ハルシャの子孫、五三バルコスの子孫、シセラの子孫、テマの子孫、五四ネザアの子孫、ハテパの子孫である。

五五ソロモンのしもべたちの子孫は、ソタイの子孫、ハツソベレテの子孫、ペリダの子孫、五六ヤアラの子孫、ダルコンの子孫、ギデルの子孫、五七シパテヤの子孫、ハツテルの子孫、ポケレテ・ハツゼバイムの子孫、アミの子孫。

五八宮に仕えるしもべたちとソロモンのしもべたちの子孫とは合わせて三百九十二人。

五九次にあげる人々はテル・メラ、テル・ハレサ、ケルブ、アダシオンおよびインメルから上つて来た者であつたが、彼らはその氏族とその血統とを示して、そのイスラエルの者であることを

明らかにすることができなかった。六〇すなわちデラヤの子孫、トビヤの子孫、ネコダの子孫で合わせて六百五十二人。六一祭司の子孫のうちにはハバヤの子孫、ハツコツの子孫、バルジライの子孫があった。バルジライはギレアデびとバルジライの娘たちのうちから妻をめとったので、その名で呼ばれることになった。六二これらの者は系譜に載つた者たちのうちに自分の名を尋ねたが見いだされなかったもので、汚れた者として、祭司の職から除かれた。六三総督は彼らに告げて、ウリムとトンミムを身につける祭司の興るまでは、いと聖なる物を食べてはならないと言った。

六四会衆は合わせて四万二千三百六十人であつた。六五このほかに、しもべおよびはしため合わせて七千三百三十七人、また歌うたう男女二百人あつた。六六その馬は七百三十六頭、その騾馬は二百四十五頭、六七そのらくだは四百三十五頭、そのろばは六千七百二十頭あつた。

六八氏族の長数人はエルサレムにある主の宮の所にきた時、神の宮をもとの所に建てるために真心よりの供え物をささげた。六九すなわち、その力に従つて工事のために倉に納めたものは、金六万一千ダリク、銀五千ミナ、祭司の衣服百かさねであつた。七〇祭司、レビびと、および民のある者はエルサレムおよびその近郊に住み、歌うたう者、門衛および宮に仕えるしもべたちはその町々に住み、一般のイスラエルびとは自分たちの町々に住ん

だ。

第三章

一こうしてイスラエルの人々はその町々に住んでいたが、七月になって、民はひとりのようにエルサレムに集まつた。ニそこでヨザダクの子エシユアとその仲間の祭司たち、およびシャルテルの子ゼルバベルとその兄弟たちは立つて、イスラエルの神の祭壇を築いた。これは神の人モーセの律法にしろされたところに従つて、その上に燔祭をささげるためであつた。三彼らは国々の民を恐れていたので、祭壇をもとの所に設けた。そしてその上で燔祭を主にささげ、朝夕それをささげた。四また、しるされたところに従つて飯庵の祭を行い、おきてに従つて、毎日ささぐべき数のとおりに、日々の燔祭をささげた。五そしてその後は常燔祭、新月と主のすべて定められた祭にささげる供え物および各自が主にささげる真心よりの供え物をささげた。六すなわち七月一日から燔祭を主にささげることを始めたが、主の宮の基礎はまだすえられてなかつた。セそこで石工と木工に金を渡し、またシドンとツロの人々に食料、飲み物および油を与えて、ペルシャ王クロスから得た許可に従つて、レバノンからヨツパの海に香柏を運ばせた。ハさてエルサレムの神の宮に帰つた次の年の二月に、シャルテ

ルの子ゼルバベルとヨザダクの子エシユアはその兄弟である他の祭司、レビびとおよび捕囚からエルサレムに帰って来たすべての人々と共に工事を始め、二十歳以上のレビびとを立てて、主の宮の工事を監督させた。九そこでユダの子孫であるエシユアとその子らおよびその兄弟、カデミエルとその子らは共に立て、神の宮で工事をなす者を監督した。ヘナダデの子らおよびレビびとの子らと、その兄弟たちもまた一緒にあつた。〇こうして建築者が主の宮の基礎をすえた時、祭司たちは礼服をつけてラツパをとり、アサフの子らであるレビびとはシンバルをとり、イスラエルの王ダビデの指令に従って主をさんびした。二彼らは互に歌いあつて主をほめ、かつ感謝し、

「主はめぐみ深く、

そのいつくしみは

とこしえにイスラエルに絶えることがない」と言った。そして民はみな主をさんびするとき、大声をあげて叫んだ。主の宮の基礎がすえられたからである。二しかし祭司、レビびと、氏族の長である多くの人々のうちに、もとの宮を見た老人たちがあつたが、今この宮の基礎のすえられるのを見た時、大声をあげて泣いた。また喜びのために声をあげて叫ぶ者も多かった。三それで、人々は民の喜び叫ぶ声と、民の泣く声とを聞きわけることができなかった。民が大声に叫んだので、その声が遠くまで聞えたからである。

第四章

一ユダとベニヤミンの敵である者たちは捕囚から帰ってきた人々が、イスラエルの神、主のために神殿を建てていることを聞き、ニゼルバベルと氏族の長たちのもとに来て言った、「われわれも、あなたがたと一緒にこれを建てさせてください。われわれはあなたがたと同じく、あなたがたの神を礼拝します。アツスリヤの王エサル・ハドンがわれわれをここに連れて来た日からこのかた、われわれは彼に犠牲をささげてきました」。三しかしゼルバベル、エシユアおよびその他のイスラエルの氏族の長たちは、彼らに言った、「あなたがたは、われわれの神に宮を建てることにあずかつてはなりません。ペルシャの王クロス王がわれわれに命じたように、われわれだけで、イスラエルの神、主のために建てるのです」。

四そこでその地の民はユダの民の手を弱らせて、その建築を妨げ、五その企てを破るために役人を買収して彼らに敵せしめ、ペルシャ王クロスの代からペルシャ王ダリヨスの治世にまで及んだ。六アハスエロスの治世、すなわちその治世の初めに、彼らはユダとエルサレムの住民を訴える告訴状を書いた。

七またアルタシャスタの世にビシラム、ミテレダテ、タビエルおよびその他の同僚も、ペルシャ王アルタシャスタに手紙を書いた。その手紙の文はアラム語で書かれて訳されていた。ハ長官

レホムと書記官シムシャイはアルタスタ王にエルサレムを訴えて次のような手紙をしたためた。九すなわち長官レホムと書記官シムシャイおよびその他の同僚、すなわち裁判官、知事、役人、ペルシャ人、エレクの人々、バビロン人、スサの人々すなわちエラムびと、一〇およびその他の民すなわち大いなる尊いオスナバルが、移してサマリヤの町々および川向こうのその他の地に住ませた者どもが、一送った手紙の写しはこれである。

――「アルタスタ王へ、川向こうのあなたのしもべども、あいさつを申し上げます。二王よ、ご承知ください。あなたのもことから、わたしたちの所に上つて来たユダヤ人らはエルサレムに来て、かのそむいた悪い町を建て直し、その城壁を築きあげ、その基礎をつくらっています。三王よ、いまご承知ください。もしこの町を建て、城壁を築きあげるならば、彼らはみつぎ、関税、税金を納めなくなります。そうすれば王の収入が減るでしょう。四われわれは王宮の塩をはむ者ですから、王の不名誉を見るに忍びないので、人をつかわして王にお聞かせするのです。五歴代の記録をお調べください。その記録の書において、この町はそむいた町で、諸王と諸州に害を及ぼしたものであることを見、その中に古来、むほんの行われたことを知られるでしょう。この町が滅ぼされたのはこれがためなのです。六われわれは王にお知らせいたします。もしこの町が建てられ、城壁が築きあげられたなら、王は川向こうの領地を失うに至る

でしょう」。

七王は返書を送つて言った、「長官レホム、書記官シムシャイ、その他サマリヤおよび川向こうのほかの所に住んでいる同僚に、あいさつをする。いま、一八あなたがたがわれわれに送った手紙を、わたしの前に明らかに読ませた。一九わたしは命令を下して調査させたところ、この町は古来、諸王にそむいた事、その中に反乱、むほんのあつたことを見いだした。二〇またエルサレムには大いなる王たちがあつて、川向こうの地をことごとく治め、みつぎ、関税、税金を納めさせたこともあつた。二一それでああなたがたは命令を伝えて、その人々をとどめ、わたしの命令の下るまで、この町を建てさせてはならない。二二あなたがたは憤んでこのことについて怠ることのないようにしなさい。どうして損害を増して、王に害を及ぼしてよからうか」。

三アルタスタ王の手紙の写しがレホムおよび書記官シムシャイとその同僚の前に読み上げられたので、彼らは急いでエルサレムのユダヤ人のもとにおもむき、腕力と権力をもつて彼らをやめさせた。四それでエルサレムにある神の宮の工事は中止された。すなわちペルシャ王ダリヨスの治世の二年まで中止された。

第五章

一 さて預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤのふたりの預言者は、ユダとエルサレムにいるユダヤ人に向かつて、彼らの上にいますイスラエルの神の名によつて預言した。ニそこでシャルテルの子ゼルバベルおよびヨザダクの子エシユアは立ちあがつて、エルサレムにある神の宮を建て始めた。神の預言者たちも、彼らと共にいて彼らを助けた。

三 その時、川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその同僚は彼らの所に来てこう言つた、「だがあなたがたにこの宮を建て、この城壁を築きあげてことを命じたのか」。四 また「この建物を建てている人々の名はなんというのか」と尋ねた。五 しかしユダヤ人の長老たちの上には、神の目が注がれていたので、彼らはこれをやめさせることができず、その事をダリヨスに奏して、その返答の来るのを待った。

六 川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその同僚である川向こうの州の知事たちが、ダリヨス王に送つた手紙の写しは次のとおりである。セすなわち、彼らが王に送つた手紙には、次のようにしるされてあつた。「願わくはダリヨス王に全き平安があるように。ハ王に次のことをお知らせいたします。すなわち、われわれがユダヤ州へ行き、かの大いなる神の宮へ行つて見たところ、それは大きな石をもつて建てられ、材木

を組んで壁をつくり、その工事は勤勉に行われ、彼らの手によつて大いにはかどつています。九そこでわれわれはその長老たちに尋ねてこう言いました、『だがあなたがたにこの宮を建て、この城壁を築きあげてことを命じたのか』と。一〇われわれはまた彼らのかしらたる人々の名を書きしるして、あなたにお知らせするために、その名を尋ねました。ニすると、彼らはわれわれに答えてこう言いました、『われわれは天地の神のしもべであつて、年久しい昔に建てられた宮を、再び建てるのです。これはもと、イスラエルの大いなる王の建てあげたものですが、一ニわれわれの先祖たちが、天の神の怒りを引き起したため、神は彼らを、カルデヤびとバビロンの王ネブカデネザルの手に渡されたので、彼はこの宮をこわし、民をバビロンに捕えて行きました。三ところがバビロンの王クロスの元年に、クロス王は神のこの宮を再び建てることの命令を下されました。四またクロス王は先にネブカデネザルが、エルサレムの宮からバビロンの神殿に移した神の宮の金銀の器を、バビロンの神殿から取り出して、彼が総督に任じたセシバザルという名の者に渡して、二五彼に言われました、「これらの器を携えて行つて、エルサレムにある宮に納め、神の宮をもとの所に建てよ」と。二六そこでこのセシバザルは来てエルサレムにある神の宮の基礎をすえしました。その時から今に至るまで、建築が続けていますが、まだ完成しないのです』と。二七それで今、もし王がよしと見られるなら

ば、バビロンにある王の宝庫を調べて、エルサレムの神のこの宮を建てることの命令が、はたしてクロス王から出ているかどうかを確かめ、この事についての王の考えをわれわれに伝えてください」。

第六章

そこでダリヨス王は命を下して、バビロンのうちで、古文書をおさめてある書庫を調べさせたところ、ニメデヤ州の都エクタナで、一つの巻物を見いだした。そのうちにこうしるされてある。

「記録。ミクロス王の元年にクロス王は命を下した、『エルサレムにある神の宮については、犠牲をささげ、燔祭を供える所の宮を建て、その宮の高さを六十キュビトにし、その幅を六十キュビトにせよ。四太いなる石の層を三段にし、木の層を一段にせよ。その費用は王の家から与えられる。五またネブカデネザルが、エルサレムの宮からバビロンに移した神の宮の金銀の器物は、これをかえして、エルサレムにある宮のものと所に持つて行き、これを神の宮に納めよ』」。

六「それで川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその同僚である川向こうの州の知事たちよ、あなたがたはこれに遠ざかり、七神のこの宮の工事を彼らに任せ、ユダヤ人の

知事とユダヤ人の長老たちに、神のこの宮をもとの所に建てさせよ。八わたしはまた命を下し、神のこの宮を建てることについて、あなたがたがこれらのユダヤ人の長老たちになすべき事を示す。王の財産、すなわち川向こうの州から納めるみつぎの中から、その費用をじゅうぶんそれらの人々に与えて、その工事を滞らないようにせよ。九またその必要とするもの、すなわち天の神にささげる燔祭の子牛、雄羊および小羊ならびに麦、塩、酒、油などエルサレムにいる祭司たちの求めにしたがって、日々怠りなく彼らに与え、一〇彼らにこうばしい犠牲を天の神にささげさせ、王と王子たちの長寿を祈らせよ。一一わたしはまた命を下す。だれでもこの命ずる所を改める者があるならば、その家の梁は抜き取られ、彼はその上にくぎづけにされ、その家はまた、これがために汚物の山とされるであらう。一二これを改めようとする者、あるいはエルサレムにある神のこの宮を滅ぼそうとして手を出す王あるいは民は、かしこにその名をとどめられる神よ、願わくはこれを倒されるように。われダリヨスは命を下す。心してこれを行え」。

一三ダリヨス王がこう言い送ったので、川向こうの州の知事タテナイおよびセタル・ボズナイとその同僚たちは心してこれを行なった。一四そしてユダヤ人の長老たちは、預言者ハガイおよびイドの子ゼカリヤの預言によって建て、これをなし遂げた。彼らはイスラエルの神の命令により、またクロス、ダリヨスおよび

びペルシャ王アルタシャスタの命によつて、これを建て終つた。
一五 この宮はダリヨス王の治世の六年アダルの月の三日に完成した。

一六 そこでイスラエルの人々、祭司たち、レビびとおよびその他の捕囚から帰つた人々は、喜んで神のこの宮の奉獻式を行つた。一七 すなわち神のこの宮の奉獻式において、雄牛一百頭、雄羊二百頭、小羊四百頭をささげ、またイスラエルの部族の数にしたがつて、雄やぎ十二頭をささげて、すべてのイスラエルびとのための罪祭とした。一八 またモーセの書にしろされてあるように祭司を組別により、レビびとを班別によつて立て、エルサレムで神に仕えさせた。

一九 こうして捕囚から歸つて来た人々は、正月の十四日に過越の祭を行つた。二〇 すなわち祭司、レビびとたちは共に身を清めて皆清くなり、すべて捕囚から歸つて来た人々のため、その兄弟である祭司たちのため、また彼ら自身のために過越の小羊をほふつた。二一 そして捕囚から歸つて来たイスラエルの人々、およびその地の異邦人の汚れを捨てて彼らに連なり、イスラエルの神、主を拝しようとする者はすべてこれを食べ、二二 喜んで七日の間、種入れぬパンの祭を行つた。これは主が彼らを喜ばせ、またアッスリヤの王の心を彼らに向かわせ、彼にイスラエルの神にいます神の宮の工事を助けさせられたからである。

第七章

一 これらの事のの後ペルシャ王アルタシャスタの治世にエズラという者があつた。エズラはセラヤの子、セラヤはアザリヤの子、アザリヤはヒルキヤの子、ニhilキヤはシャルムの子、シャルムはザドクの子、ザドクはアヒトブの子、ミアヒトブはアマリヤの子、アマリヤはアザリヤの子、アザリヤはメラヨテの子、四 メラヨテはゼラヒヤの子、ゼラヒヤはウジの子、ウジはブツキの子、五 ブツキはアビシユアの子、アビシユアはピネハスの子、ピネハスはエレアザルの子、エレアザルは祭司長アロンの子である。六 このエズラはバビロンから上つて来た。彼はイスラエルの神、主がお授けになつたモーセの律法に精通した学者であつた。その神、主の手が彼の上にあつたので、その求めることを王はことごとく許した。

セアルタシャスタ王の七年にまたイスラエルの人々および祭司、レビびと、歌うたう者、門衛、宮に仕えるしもべなどエルサレムに上つた。八 そして王の七年の五月にエズラはエルサレムに來た。九 すなわち正月の一日にバビロンを出立して、五月一日にエルサレムに着いた。その神の恵みの手が彼の上にあつたからである。一〇 エズラは心をこめて主の律法を調べ、これを行ひ、かつイスラエルのうちに定めとおきてを教えた。

二 主の戒めの言葉、およびイスラエルに賜わつた定めに通じた

学者で、祭司であるエズラにアルタシャスタ王の与えた手紙の写しは、次のとおりである。二「諸王の王アルタシャスタ、天の神の律法の学者である祭司エズラに送る。今、三わたしは命を下す。わが国のうちにいるイスラエルの民およびその祭司、レビびとのうち、すべてエルサレムへ行こうと望む者は皆、あなたと共に行くことができる。一四あなたは、自分の手にあるあなたの神の律法に照して、ユダとエルサレムの事情を調べるために、王および七人の議官によつてつかわされるのである。一五かつあなたは王およびその議官らが、エルサレムにいますイスラエルの神に真心からささげる銀と金を携え、一六またバビロン全州であなたが獲るすべての金銀、および民と祭司とが、エルサレムにあるその神の宮のために、真心からささげた供え物を携えて行く。一七それであなたはその金をもつて雄牛、雄羊、小羊およびその素祭と灌祭の品々を氣をつけて買い、エルサレムにあるあなたがたの神の宮の祭壇の上に、これをささげなければならぬ。一八また、あなたとあなたの兄弟たちが、その余った金銀でしようと思うよい事があるならば、あなたがたの神のみに従つてそれを行え。一九またあなたがたの神の勤め事のためにあなたが与えられた器は、エルサレムの神の前に納めよ。二〇そのほかあなたがたの神の宮のために用うべき必要なものがあれば、それを王の倉から出して用いよ。

三 われ、アルタシャスタ王は川向こうの州のすべての倉つかさ

に命を下して言う、『天の神の律法の学者である祭司エズラがあなたがたに求める事は、すべてこれを心して行え。二三すなわち銀は百タラントまで、小麦は百コルまで、ぶどう酒は百バテまで、油は百バテまで、塩は制限なく与えよ。二四天の神の宮のために、天の神の命じるところは、すべて正しくこれを行え。そうしないと神の怒りが、王と王の子らの国に臨むであろう』。二五われわれは、またあなたがたに告げる、『祭司、レビびと、歌うたう者、門衛、宮に仕えるしもべ、および神のこの宮の仕えびとたちには、みつぎ、租税、税金を課してはならぬ』。

二五 エズラよ、あなたはあなたの手にある神の知恵によつて、つかさおよび裁判人を立て、川向こうの州のすべての民、すなわちあなたの神の律法を知っている者たちを、ことごとくさばかせよ。あなたがたはまたこれを知らない者を教えよ。二六あなたがたの神の律法および王の律法を守らない者を、きびしくその罪に定めて、あるいは死刑に、あるいは追放に、あるいは財産没収に、あるいは投獄に処せよ。

二七 われわれの先祖の神、主はほむべきかな。主はこのように、王の心に、エルサレムにある主の宮を飾る心を起させ、二八また王の前と、その議官の前と王の大臣の前で、わたしに恵みを得させられた。わたしはわが神、主の手がわたしのの上にあるので力を得、イスラエルのうちから首領たる人々を集めて、わたしと共に上らせた。

第八章

「アルタシャスタ王の治世に、バビロンからわたしと一緒に上つて来た者の氏族の長、およびその系譜は次のとおりである。ニピネハスの子孫のうちではゲルシヨム。イタマルの子孫のうちではダニエル。ダビデの子孫のうちではシカニヤの子ハツトシ。ミパロシの子孫のうちではゼカリヤおよび彼と共に系譜に載せられた男百五十人。四パハテ・モアブの子孫のうちではセラヒヤの子エリヨエナイおよび彼と共にある男二百人。五ザツツの子孫のうちではヤハジエルの子シカニヤおよび彼と共にある男三百人。六アデンの子孫のうちではヨナタンの子エベデおよび彼と共にある男五十人。セエラムの子孫のうちではアタリヤの子エサヤおよび彼と共にある男七十人。ハシパテヤの子孫のうちではミカエルの子ゼバデヤおよび彼と共にある男八十人。九ヨアブの子孫のうちではエヒエルの子オバデヤおよび彼と共にある男二百十八人。一〇バニの子孫のうちではヨシピアの子シロミテおよび彼と共にある男百六十人。一一ベバイの子孫のうちではベバイの子ゼカリヤおよび彼と共にある男二十八人。一二アズガデの子孫のうちではハツカタンの子ヨハナシおよび彼と共にある男百十人。一三アドニカムの子孫のうちでは後に来た者とも、その名はエリペレテ、ユエル、シマヤおよび彼らと共にある男六十人。一四ビグワイの子孫のうちでは

ウタイとザツクルおよび彼らと共にある男七十人である。

一五わたしは彼らをアハワに流れる川のほとりに集めて、そこに三日のあいだ露営した。わたしは民と祭司とを調べたが、そこにはレビの子孫はひとりもいなかった。一六人をつかわしてエリエゼル、アリエル、シマヤ、エルナタン、ヤリブ、エルナタン、ナタン、ゼカリヤ、メシユラムという首長たる人々を招き、またヨヤリブ、およびエルナタンのような見識のある人々を招いた。一七そしてわたしはカシピアという所の首長イドのもとに彼らをつかわし、カシピアという所にいるイドと、その兄弟である宮に仕えるしもべたちに告ぐべき言葉を、彼らに授け、われわれの神の宮のために、仕え人をわれわれに連れて来いと言った。一八われわれの神がよくわれわれを助けられたので、彼らはイスラエルの子、レビの子、マヘリの子孫のうちの思慮深い人、すなわちセレビヤおよびその子らとその兄弟たち十八人を、われわれに連れて来、一九またハシヤビヤおよび彼と共に、メラリの子孫のエサヤとその兄弟およびその子ら二十人、二〇および宮に仕えるしもべ、すなわちダビデとそのつかさたちが、レビびとに仕えさせるために選んだ宮に仕えるしもべ二百二十人を連れてきた。これらの者は皆その名を言つて記録された。二三そこでわたしは、かしのアハワ川のほとりで断食を布告し、われわれの神の前で身をひくくし、われわれと、われわれの幼き者と、われわれのすべての貨財のために、正しい道を示され

るように神に求めた。三これは、われわれがさきに王に告げて、「われわれの神の手は、神を求めるすべての者の上にやさしく下り、その威力と怒りとはすべて神を捨てる者の上に下る」と言ったので、わたしは道中の敵に対して、われわれを守るべき歩兵と騎兵とを、王に頼むことを恥じたからである。三そこでわれわれは断食して、このことをわれわれの神に求めたところ、神はその願いを聞きいれられた。

三六 わたしはおもだった祭司十二人すなわちセレビヤ、ハシヤビヤおよびその兄弟十人を選び、三金銀および器物、すなわち王と、その議官と、その諸侯およびすべて在留のイスラエルびとが、われわれの神の宮のためにささげた奉納物を量つて彼らに渡した。三六 わたしが量つて彼らの手に渡したものは、銀六百五十タラント、銀の器百タラント、金百タラントであった。三モまた金の大杯が二十あつて、一千ダリクに当る。また光り輝く青銅の器二個あつて、その尊いこと金のようである。三八そしてわたしは彼らに言った、「あなたがたは主に聖別された者である。この器物も聖である。またこの金銀は、あなたがたの先祖の神、主にささげた真心よりの供え物である。三九 あなたがたはエルサレムで、主の宮のへやの中で、祭司長、レビびとおよびイスラエルの氏族のかしらたちの前で、これを量るまで、見張り、かつ守りなさい」。三〇そこで祭司およびレビびとたちは、その金銀および器物を、エルサレムにあるわれわれの神の宮に携

えて行くため、その重さのものを受け取った。

三 われわれは正月の十二日に、アハワ川を出立してエルサレムに向かったが、われわれの神の手は、われわれの上にあつて、敵の手および道に待ち伏せする者の手から、われわれを救われた。三 われわれはエルサレムに着いて、三日そこにいたが、四四目にわれわれの神の宮の内、その金銀および器物を、ウリヤの子祭司メラモテの手に量つて渡した。ピネハスの子エレアザルが彼と共にいた。またエシユアの子ヨザバデ、およびビンヌイの子ノアデヤのふたりのレビびとも、彼らと共にいた。三 四すなわちそのすべての数と重さとを調べ、その重さは皆書きとめられた。

三五 そのとき捕囚の人々で捕囚から帰つて来た者は、イスラエルの神に燔祭をささげた。すなわちイスラエル全体のために雄牛十二頭、雄羊九十六頭、小羊七十七頭をささげ、また罪祭として雄やぎ十二頭をささげた。これらはみな、主にささげた燔祭である。三六 彼らはまた王の命令書を、王の総督たち、および川向こうの州の知事たちに渡したので、彼らは民と神の宮とを援助した。

第九章

一これらの事がなされた後、つかさたちは、わたしのもとに来て

言った、「イスラエルの民、祭司およびレビびとは諸国の民と離れないで、カナンびと、ヘテびと、ペリジびと、エブスびと、アンモンびと、モアブびと、エジプトびと、アモリびとなどの憎むべき事を行いました。ニすなわち、彼らの娘たちをみずからめとり、またそのむすこたちにめとつたので、聖なる種が諸国の民とまじりました。そしてつかさたる者、長たる者が先だつて、このとがを犯しました」。三わたしはこの事を聞いた時、着物と上着とを裂き、髪の毛とひげを抜き、驚きあきれてすわった。四イスラエルの神の言葉におののく者は皆、捕囚から帰つて来た人々のとがのゆえに、わたしのもとに集まつたが、わたしは夕の供え物の時まで、驚きあきれてすわった。五夕の供え物の時になつて、わたしは断食から立ちあがり、着物と上着を裂いたまゝ、ひげをかがめて、わが神、主にむかつて手をさし伸べて、六言つた、

「わが神よ、わたしはあなたにむかつて顔を上げるのを恥じて、赤面します。われわれの不義は積つて頭よりも高くなり、われわれのとがは重なつて天に達したからです。七われわれの先祖の日から今日まで、われわれは大いなるとがを負い、われわれの不義によつて、われわれとわれわれの王たち、および祭司たちは国々の王たちの手にわたされ、つるぎにかけられ、捕え行かれ、かすめられ、恥をこうむりました。今日のとおりです。八ところがいま、われわれの神、主は、しばし恵みを施して、のがれ残る

べき者をわれわれのうちに置き、その聖所のうちに確かなよりどころを与え、こうしてわれわれの神はわれわれの目を明らかにし、われわれをその奴隷のうちにあつて、少しく生き返らせられました。九われわれは奴隷の身でありますが、その奴隷たる時にも神はわれわれを見捨てられず、かえつてペルシヤ王たちの目の前でいつくしみを施して、われわれを生き返らせ、われわれの神の宮を建てさせ、その破壊をつくらせ、ユダとエルサレムでわれわれに保護を与えられました。

一〇われわれの神よ、この後、何を言うことができましょう。われわれは、あなたの戒めを捨てたからです。一一あなたはかつて、あなたのしもべである預言者たちによつて命じて仰せられました、『おまえたちが行つて獲ようとする地は、各地の民の汚れにより、その憎むべきわざによつて汚れた地で、この果から、かの果まで、その汚れに満ちている。一二それでおまえたちの娘を、彼らのむすこに与えてはならない。彼らの娘を、おまえたちのむすこにめとつてはならない。また永久に彼らの平安をも福祉をも求めてはならない。そうすればおまえたちは強くなくなり、その地の良き物を食べ、これを永久におまえたちの子孫に伝えて嗣業とさせることができる』と。一三われわれの悪い行いにより、大いなるとがによつて、これらすべてのことが、すでにわれわれに臨みましたが、われわれの神なるあなたは、われわれの不義よりも軽い罰をくだして、このように残りの者を与えて

くださったのを見ながら、一四われわれは再びあなたの命令を破つて、これらの憎むべきわざを行う民と縁を結んでよいでしょうか。あなたはわれわれを怒つて、ついに滅ぼし尽し、残る者も、のがれる者もないようにされるのではないでしようか。一五ああ、イスラエルの神、主よ、あなたは正しくいらされます。われわれはのがれて残ること今日のとおりです。われわれは、とがをもってあなたの前にあります。それゆえだれもあなたの前に立つことはできません」。

第一〇章

一エズラが神の宮の前に泣き伏して祈り、かつぎんげしていた時、男、女および子供の大きな群集がイスラエルのうちから彼のもとに集まつてきた。民はいたく泣き悲しんだ。二時にエラムの子孫のうちのエヒエルの子シカニヤが、エズラに告げて言った、「われわれは神にむかつて罪を犯し、この地の民から異邦の女をめとりました。しかし、このことについてはイスラエルに、今なお望みがあります。三それでわれわれはわが主の教と、われわれの神の命令におのく人々の教に従つて、これらの妻ならびにその子供たちを、ことごとく追い出すという契約を、われわれの神に立てましょう。そして律法に従つてこれを行いましょう。四立ちあがってください、この事はあなたの

仕事です。われわれはあなたを助けます。心を強くしてこれを行いなさい。五エズラは立つて、おもどつた祭司、レビびとおよびすべてのイスラエルびとに、この言葉のように行うことを誓わたので、彼らは誓つた。

六エズラは神の宮の前から出て、エリアシブの子ヨハナンのへやにはいったが、そこへ行つても彼はパンも食はず、水も飲まずに夜を過ごした。これは彼が、捕囚から帰つた人々のとがを嘆いたからである。七そしてユダおよびエルサレムにあまねく布告を出し、捕囚から帰つたすべての者に告げて、エルサレムに集まるべき事と、八つかさおよび長老たちのさとしに従つて、三日のうちにこない者はだれでもその財産はことごとく没収され、その人自身は捕われ人の会から破門されると言つた。

九そこでユダとベニヤミンの人々は皆三日のうちにエルサレムに集まつた。これは九月の二十日であつた。すべての民は神の宮の前の広場に座して、このことのため、また大雨のために震えおののいていた。一〇時に祭司エズラは立つて彼らに言つた、「あなたがたは罪を犯し、異邦の女をめとつて、イスラエルのとがを増した。一それで今、あなたがたの先祖の神、主にぎんげして、そのみ旨を行いなさい。あなたがたはこの地の民および異邦の女と離れなさい。二すると会衆は皆大声をあげて答えた、「あなたの言われたとおり、われわれは必ず行います。三しかし民は多く、また大雨の季節ですから、外に立つてゐることは

できません。またこれは一日やふつかの仕事ではありません。われわれはこの事について大いに罪を犯したからです。一四それでどうぞ、われわれのつかさたちは全会衆のために立つてください。われわれの町の内に、もし異邦の女をめとつた者があ
るならば、みな定めの際にこさせなさい。またおのおの町の長老および裁判人も、それと一緒にこさせなさい。そうすればこの事によるわれわれの神の激しい怒りは、ついにわれわれを離れるでしょう。一五ところがアサヘルの子ヨナタンおよびテクワの子ヤハジアはこれに反対した。そしてメシラムおよびレビびとシャベタイは彼らを支持した。

一六そこで捕囚から帰つて来た人々はこのように行つた。すなわち祭司エズラは、氏族の長たちをその氏族にしたがい、おのその名をさして選んだ。彼らは十月の一日から座してこの事を調べ、一七正月の一日になつて、異邦の女をめとつた人々をこごとく調べ終つた。

一八祭司の子孫のうちで異邦の女をめとつた事のあらわれた者は、ヨザダクの子エシユアの子ら、およびその兄弟たちのうちではマアセヤ、エリエゼル、ヤリブ、ゲダリヤであつた。一九彼らはその妻を離縁しようという誓いをなし、すでに罪を犯したといふので、そのとがのために雄羊一頭をささげた。二〇インメルの子らのうちではハナニおよびゼバデヤ。二一ハリムの子らのうちではマアセヤ、エリヤ、シマヤ、エヒエル、ウジヤ。三

パシユルの子らのうちではエリオエナイ、マアセヤ、イシマエル、ネタンエル、ヨザバデ、エラサ。

三レビびとのうちではヨザバテ、シメイ、ケラヤ（すなわちケリタ）、ペタヒヤ、ユダ、エリエゼル。二四歌うたう者のうちではエリアシブ。門衛のうちではシャルム、テレム、ウリ。

二五イスラエルのうち、パロシの子らの中ではラミヤ、エジヤ、マルキヤ、ミヤミン、エレアザル、ハシャビヤ、ベナヤ。二六エラムの子らの中ではマツタニヤ、ゼカリヤ、エヒエル、アブデ、エレモテ、エリヤ。二七ザットの子らの中ではエリオエナイ、エリアシブ、マツタニヤ、エレモテ、ザバデ、アジザ。二八ベバイの子らの中ではヨハナン、ハナニヤ、ザバイ、アテライ。ニ
九バニの子らの中ではメシラム、マルク、アダヤ、ヤシユブ、シャル、エレモテ。三〇パハテ・モアブの子らの中ではアデナ、ケラル、ベナヤ、マアセヤ、マツタニヤ、ベザレル、ピンヌイ、マナセ。三一ハリムの子らの中ではエリエゼル、イシヤ、マルキヤ、シマヤ、シメオン、三二ベニヤミン、マルク、シマリヤ。三
三ハシユムの子らの中ではマツテナイ、マツタタ、ザバデ、エリパレテ、エレマイ、マナセ、シメイ。三四バニの子らの中ではマアダイ、アムラム、ウエル、三五ベナヤ、ベデヤ、ケルヒ、三
六ハワニア、メレモテ、エリアシブ、三七マツタニヤ、マツテナイ、ヤアス。三八ピンヌイの子らの中ではシメイ、三九シレミヤ、ナタン、アダヤ、四〇マクナデバイ、シャシャイ、シャライ、四一ア

ザリエル、シレミヤ、シマリヤ、^{四三}シャルム、アマリヤ、ヨセフ。^{四三}ネボの子^こらではエイエル、マッタテヤ、ザバデ、ゼビナ、ヤツダイ、ヨエル、ベナヤ。^{四四}これらの者は皆^{もの}異邦^{みないほう}の女^{おんな}をめとつた者^{もの}である。彼^{かれ}らはその女^{おんな}たちをその子供^{こども}と共に離縁^{りえん}した。

ネヘミヤ書

第一章

一 ハカリヤの子ネヘミヤの言葉。
 第二十年のキスレウの月に、わたしが首都ササにいた時、ニわたしの兄弟のひとりハナニが数人の者と共にユダから来たので、わたしは捕囚を免れて生き残ったユダヤ人の事およびエルサレムの事を尋ねた。三 彼らはわたしに言った、「かの州で捕囚を免れて生き残った者は大いなる悩みと、はずかしめのうちにあり、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼かれたままであります」と。
 四 わたしはこれらの言葉を聞いた時、すわって泣き、数日のあいだ嘆き悲しみ、断食して天の神の前に祈つて、五 言った、「天の神、主、おのれを愛し、その戒めを守る者には契約を守り、いつくしみを施される大いなる恐るべき神よ、六 どうぞ耳を傾け、目を開いてしもべの祈を聞いてください。わたしは今、あなたのしもべであるイスラエルの子孫のために、昼も夜もみ前に祈り、われわれイスラエルの子孫が、あなたに対して犯した罪をさんげいたします。まことにわたしも、わたしの父の家も罪を犯しました。七 われわれはあなたに対して大いに悪い事を行い、あなたのためにもベモーセに命じられた戒めをも、定めをも、おきてをも

守りませんでした。八 どうぞ、あなたのしもべベモーセに命じられた言葉を、思い起してください。すなわちあなたは言われました、『もしあなたがたが罪を犯すならば、わたしはあなたがたを、もろもろの民の間に散らす。九 しかし、あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの戒めを守つて、これを行うならば、たといあなたがたのうちの散らされた者が、天の果にいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住まわせるために選んだ所に連れて来る』と。一〇 彼らは、あなたが大いなる力と強い手をもって、あがなわれたあなたのしもべ、あなたの民です。二 主よ、どうぞしもべの祈と、あなたの名を恐れることを喜ばぬあなたのしもべらの祈に耳を傾けてください。どうぞ、きょう、しもべを恵み、この人の目の前であわれみを得させてください。この時、わたしは王の給仕役であつた。

第二章

一 アルタシヤスタ王の第二十年、ニサン月に、王の前に酒が出た時、わたしは酒をついで王にささげた。これまでわたしは王の前で悲しげな顔をしていたことはなかった。二 王はわたしに言われた、「あなたは病氣でもないのにどうして悲しげな顔をしているのか。何か心に悲しきものをもっているにちがいない。そこでわたしは大いに恐れて、三 王に申しあげた、「どうぞ王よ、

長生きされますように。わたしの先祖の墳墓の地であるあの町は荒廃し、その門が火で焼かれたままであるのに、どうしてわたしは悲しげな顔をしないでいられましょうか。四王はわたしにむかつて、「それでは、あなたは何を願うのか」と言われたので、わたしは天の神に祈って、五王に申しあげた、「もし王がよしとされ、しもべがあなたの前に恵みを得ますならば、どうかわたしを、ユダにあるわたしの先祖の墳墓の町につかわして、それを再建させてください」。六時に王妃もかたわらに座していたが、王はわたしに言われた、「あなたの旅の期間はどれほどですか。いつごろ帰ってきますか」。こうして王がわたしをつかわすことをよしとされたので、わたしは期間を定めて王に申しあげた。七わたしはまた王に申しあげた、「もし王がよしとされるならば、川向こうの州の知事たちに与える手紙をわたしに賜わり、わたしはユダに行きつくまで、彼らがわたしを通過させるようにしてください。八また王の山林を管理するアサフに与える手紙をも賜わり、神殿に属する城の門を建てるため、また町の石がき、およびわたしの住むべき家を建てるために用いる材木をわたしに与えるようにしてください」。わたしの神がよくわたしを助けられたので、王はわたしの願いを許された。九そこでわたしは川向こうの州の知事たちの所へ行つて、王の手紙を渡した。なお王は軍の長および騎兵をわたしと共につかわした。一〇ところがホロニびとサンバラテおよびアンモンび

と奴隷トビヤはこれを聞き、イスラエルの子孫の福祉を求める人が来たというので、大いに感情を害した。二わたしはエルサレムに着いて、そこに三日滞在した後、三夜中に起き出た。数人の者がわたしに伴ったが、わたしは、神がエルサレムのためになそうとして、わたしの心に入れたことを、だれにも告げ知らせず、またわたしが乗った獣のほかに、獣をつれて行かなかった。四わたしは夜中に出て谷の門を通り、龍の井戸および糞の門に行つて、エルサレムのくずれた城壁や、火に焼かれた門を調査し、五また泉の門および王の池に行つたが、わたしの乗っている獣の通るべき所もなかった。五六わたしはまたその夜のうちに谷に沿つて上り、城壁を調査したうえ、身をめぐらして、谷の門を通つて帰つた。一六つかさたちは、わたしがどこへ行つたか、何をしたかを知らなかった。わたしはまたユダヤ人にも、祭司たちにも、尊い人たちにも、つかさたちにも、その他工事をする人々にもまだ知らせなかった。一七しかしわたしはついに彼らに言つた、「あなたがたの見るとおり、われわれは難局にある。エルサレムは荒廃し、その門は火に焼かれた。さあ、われわれは再び世のはずかしめをうけることのないように、エルサレムの城壁を築こう」。一八そして、わたしの神がよくわたしを助けられたことを彼らに告げ、また王がわたしに語られた言葉をも告げたので、彼らは「さあ、立ち上がつて築こう」と言い、奮い立つて、この良きわざに着手しよ

うとした。一九ところがホロニびとサンバラテ、アンモンびと奴隷トビヤおよびアラビヤびとガシムがこれを聞いて、われわれをあざけり、われわれを侮つて言った、「あなたがたは何をするのか、王に反逆しようとするのか」。二〇わたしは彼らに答えて言った、「天の神がわれわれを恵まれるので、そのしもべであるわれわれは奮い立つて築くのである。しかしあなたがたはエルサレムに何の分もなく、権利もなく、記念もない」。

第三章

一かくて大祭司エリアシブは、その兄弟である祭司たちと共に立つて羊の門を建て、これを聖別してそのとびらを設け、さらにこれを聖別して、ハンメアの望楼に及ぼし、またハナネルの望楼にまで及ぼした。二彼の次にはエリコの人々が建て、その次にはイムリの子ザツクルが建てた。三魚の門はハツセナアの子らが建て、その梁を置き、そのとびらと横木と貫の木とを設けた。四その次にハツコツの子ウリヤの子メレモテが修理し、その次にメシザベルの子ベレキヤの子メシラムが修理し、その次にバナナの子ザドクが修理した。五その次にテコアびとらが修理したが、その貴人たちはその主の工事に服さなかった。六古い門はパセアの子ヨイアダおよびベソデヤの子メシラムがこれを修理し、その梁を置き、そのとびらと横木と貫の木とを

設けた。七その次にギベオンびとメラテヤ、メロノテびとヤドン、および川向この州の知事の行政下にあるギベオンとミツパの人々が修理した。八その次にハルハヤの子ウジエルなどの金細工人が修理し、その次に製香者のひとりハナニヤが修理した。こうして彼らはエルサレムを城壁の広い所まで復旧した。九その次にエルサレムの半区域の知事ホルの子レバヤが修理し、一〇その次にハルマフの子エダヤが自分の家と向かい合っている所を修理し、その次にはハシャブニヤの子ハットシが修理した。二ハリムの子マルキヤおよびバハテ・モアブの子ハシユブも他の部分および炉の望楼を修理した。三その次にエルサレムの他の半区域の知事ハロヘシの子シャルムがその娘たちと共に修理した。

三谷の門はハヌンがザノアの民と共にこれを修理し、これを建て直して、そのとびらと横木と貫の木とを設け、また糞の門まで城壁一千キュビトを修理した。

四糞の門はベテ・ハケレムの区域の知事レカブの子マルキヤがこれを修理し、これを建て直して、そのとびらと横木と貫の木とを設けた。

五泉の門はミツパの区域の知事コロホゼの子シャルンがこれを修理し、これを建て直して、おおいを施し、そのとびらと横木と貫の木とを設けた。彼はまた王の園のほとりのシラの池に沿った石がきを修理して、ダビデの町から下る階段にまで及ん

だ。二六その後(のち)にベテズルの半区域(はんくいき)の知事(ちじ)アズブクの子ネヘミヤが修理(しゅうり)して、ダビデの墓(はか)と向かい合(あ)った所(ところ)に及び、掘池(ほりけ)と勇士(ゆうし)の宅(たけ)にまで及んだ。二七その後(のち)にバニの子レホムなどのレビびとが修理(しゅうり)し、その次(つぎ)にケイラの半区域(はんくいき)の知事(ちじ)ハシャビヤがその区域(くいき)のために修理(しゅうり)した。二八その後(のち)にケイラの半区域(はんくいき)の知事(ちじ)ヘナダデの子バワイなどその兄弟(きょうだい)たちが修理(しゅうり)し、二九その次にエシユアの子でミツパの知事(ちじ)であるエゼルが、城壁(じやうへき)の曲りかどにある武器倉(ぶきくら)に上(のぼ)る所(ところ)と向かい合(あ)った他の部分(たのぶぶん)を修理(しゅうり)し、三〇その後(のち)にザバイの子バルクが、力(ちから)をつくして城壁(じやうへき)の曲りかどから大祭司(だいさいし)エリアシブの家(いえ)の門(もん)までの他の部分(たのぶぶん)を修理(しゅうり)し、三一その後(のち)にハツコツの子ウリヤの子メレモテが、エリアシブの家(いえ)の門(もん)からエリアシブの家(いえ)の端(たん)までの他の部分(たのぶぶん)を修理(しゅうり)し、三二彼の後(のち)に低地(ていち)の人々(ひと)である祭司(さいし)たちが修理(しゅうり)し、三三その後(のち)にベニヤミンおよびハシユブが、自分(じぶん)たちの家(いえ)と向かい合(あ)っている所(ところ)を修理(しゅうり)し、その後(のち)にアナニヤの子マアセヤの子アザリヤが、自分(じぶん)の家(いえ)の附近(ふきん)を修理(しゅうり)し、三四その後(のち)にヘナダデの子ビンヌイが、アザリヤの家(いえ)から城壁(じやうへき)の曲りかど、およびすみまでの他の部分(たのぶぶん)を修理(しゅうり)した。三五ウザイの子パラルは、城壁(じやうへき)の曲りかどと向かい合(あ)っている所(ところ)および監視(かんし)の庭(にわ)に近い王(おう)の上(うへ)の家(いえ)から突(つ)き出(で)ている望楼(ぼうろう)と向かい合(あ)っている所(ところ)を修理(しゅうり)した。その後(のち)にパロシの子ペダヤ、二六およびオベルに住(す)んでいる宮(みや)に仕えるしもべたちが、東(ひがし)の方(ほう)の水(みず)の門(もん)と向かい合(あ)っている所(ところ)、および突(つ)き出(で)ている望楼(ぼうろう)と向かい

合(あ)っている所(ところ)まで修理(しゅうり)した。二七その後(のち)にテコアびとが、突(つ)き出(で)ている大望楼(だいぼうろう)と向かい合(あ)っている他の部分(たのぶぶん)を修理(しゅうり)し、オベルの城壁(じやうへき)にまで及んだ。

二八馬(うま)の門(もん)から上(うへ)の方は祭司(さいし)たちが、おののおの自分(じぶん)の家(いえ)と向かい合(あ)っている所(ところ)を修理(しゅうり)した。二九その後(のち)にインメルの子ザドクが、自分(じぶん)の家(いえ)と向かい合(あ)っている所(ところ)を修理(しゅうり)し、その後(のち)にシカニヤの子シマヤという東(ひがし)の門(もん)を守る者(もの)が修理(しゅうり)し、三〇その後(のち)にシレミヤの子ハナニヤおよびザラフの第六(だいろく)の子ハヌンが他の部分(たのぶぶん)を修理(しゅうり)し、三二その後(のち)にベレキヤの子メシラムが、自分(じぶん)のへやと向かい合(あ)っている所(ところ)を修理(しゅうり)した。三三その後(のち)に金細工(きんさいく)人のひとりマルキヤという者(もの)が、召集(しやうしゅう)の門(もん)と向かい合(あ)っている所(ところ)を修理(しゅうり)して、すみ(すみ)の二階(にかい)のへやに至(いた)り、宮(みや)に仕えるしもべたちおよび商人(しょうにん)の家(いえ)にまで及んだ。三三またすみ(すみ)の二階(にかい)のへやと羊(ひつじ)の門(もん)の間(あいだ)は金細工(きんさいく)人と商人(しょうにん)たちがこれを修理(しゅうり)した。

第四章

一サンバラテはわれわれが城壁(じやうへき)を築(きず)くのを聞(き)いて怒(いか)り、大(おお)に憤(いかり)ってユダヤ人(よだやじん)をあざけつた。二彼は(かれ)その兄弟(きょうだい)たちおよびサマリヤの兵隊(へいたい)の前(まえ)で語(かた)って言(い)った、「この弱々(よわよわ)しいユダヤ人(よだやじん)は何(なに)をしているのか。自分(じぶん)で再興(さいきよう)しようとするのか。犠牲(ぎせい)をささげようとするのか。一日(いちにち)で事を終(お)えようとするのか。塵塚(ちりづか)の中(なか)の

石はすでに焼けているのに、これを取りだして生かそうとするのか。三またアンモンびとトビヤは、彼のかたわらにいて言った、「そうだ、彼らの築いている城壁は、きつね一匹が上つてもくずれるであろう」と。四「われわれの神よ、聞いてください。われわれは侮られています。彼らのはずかしめを彼らのこうべに返し、彼らを捕囚の地でぶんどり物にしてください。五彼らのがをおおわず、彼らの罪をみ前から消し去らないでください。彼らは築き建てる者の前であなたを怒らせたからです」。六こうしてわれわれは城壁を築いたが、石がきはみな相連なつて、その高さの半ばにまで達した。民が心をこめて働いたからである。

七ところがサンバラテ、トビヤ、アラビヤびと、アンモンびと、アシドドびとは、エルサレムの城壁の修理が進展し、その破れ目もふさがり始めたと聞いて大いに怒り、ハ皆共に相ばかり、エルサレムを攻めて、その中に混乱を起そうとした。九そこでわれわれは神に祈り、また日夜見張りを置いて彼らに備えた。

一〇その時、ユダびとは言った、「荷を負う者の力は衰え、そのうえ、灰土がおびただしいので、われわれは城壁を築くことができない」。一またわれわれの敵は言った、「彼らの知らないうちに、また見ないうちに、彼らの中にはいりこんで彼らを殺し、その工事をやめさせよう」。二また彼らの近くに住んでいるユダヤ人たちはきて、十度もわれわれに言った、「彼らはその住んで

いるすべての所からわれわれに攻め上るでしょう」と。三そこでわたしは民につるぎ、やりおよび弓を持たせ、城壁の後の低い所、すなわち空地にその家族にしたがつて立たせた。一四わたしは見めぐり、立つて尊い人々、つかさたち、およびその他の民らに言った、「あなたがたは彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え、あなたがたの兄弟、むすこ、娘、妻および家のために戦いなさい」。

一五われわれの敵は自分たちの事が、われわれに悟られたことを聞き、また神が彼らの計りごとを破られたことを聞いたので、われわれはみな城壁に帰り、おのおのその工事を続けた。一六その日から後は、わたしのしもべの半数は工事に働き、半数はやり、盾、弓、よろいをもって武装した。そしてつかさたちは城壁を築いているユダの全家の後に立つた。一七荷を負い運ぶ者はおのおの片手で工事をなし、片手に武器を執つた。一八築き建てる者はおのおのその腰につるぎを帯びて築き建て、ラッパを吹く者はわたしのかたわらにいた。一九わたしは尊い人々、つかさたち、およびその他の民に言った、「工事は大きくかつ広がつているので、われわれは城壁の上で互に遠く離れている。二〇どこでもラッパの音を聞いたなら、そこにいるわれわれの所に集まってほしい。われわれの神はわれわれのために戦われます」。二一このようにして、われわれは工事を進めたが、半数の者は夜明けから星の出る時まで、やりを執っていた。二二その時わた

しはまた民に告げて、「おのおのそのしもべと共にエルサレムの内に宿り、夜はわれわれの護衛者となり、昼は工事をするように」と言った。三そして、わたしも、わたしの兄弟たちも、わたしのしもべたちも、わたしを護衛する人々も、われわれのうちひとりも、その衣を脱がず、おのおの手に武器を執っていた。

第五章

一さて、ここに民がその妻と共に、その兄弟であるユダヤ人に向かつて大いに叫び訴えることがあった。二すなわち、ある人々は言った、「われわれはむすこ娘と共に大ぜいいます。われわれは穀物を得て、食べて生きていかなければなりません。三またある人々は言った、「われわれは飢えのために、穀物を得ようと田畑も、ぶどう畑も、家も抵当に入れてあります。四ある人々は言った、「われわれは王の税金のために、われわれの田畑およびぶどう畑をもつて金を借りました。五現にわれわれの肉はわれわれの兄弟の肉に等しく、われわれの子供も彼らの子供に等しいのに、見よ、われわれはむすこ娘を人の奴隷とするようにしいられています。われわれの娘のうちには、すでに人の奴隷になった者もあります。われわれの田畑も、ぶどう畑も他人のものになつているので、われわれにはどうする力もありません。六わたしは彼らの叫びと、これらの言葉を聞いて大に怒った。

七わたしはみずから考えたすえ、尊い人々およびつかさたちを責めて言った、「あなたがたはめいめいその兄弟から利息をとっている。そしてわたしは彼らの事について大会を開き、ハ彼らに言った、「われわれは異邦人に売られたわれわれの兄弟ユダヤ人を、われわれの力にしたがってあがなった。しかるにあなたがたは自分の兄弟を売ろうとするのか。彼らはわれわれに売られるのか。彼らは黙してひと言もいわなかった。九わたしはまた言った、「あなたがたのする事はよくない。あなたがたは、われわれの敵である異邦人のそしりをやめさせるために、われわれの神を恐れつつ事をなすべきではないか。一〇わたしもわたしの兄弟たちも、わたしのしもべたちも同じく金と穀物とを貸しているが、われわれはこの利息をやめよう。一どうぞ、あなたがたは、きょうにも彼らの田畑、ぶどう畑、オリブ畑および家屋を彼らに返し、またあなたがたが彼らから取つた金銭、穀物、ぶどう酒、油などの百分の一を返しなさい。二すると彼らは「われわれはそれを返します。彼らから何をも要求しません。あなたの言うようにします」と言った。そこでわたしは祭司たちを呼び、彼らにこの言葉のとおりに行うという誓いを立てさせた。三わたしはまたわたしのふところを打ち払って言った、「この約束を実行しない者を、どうぞ神がこのように打ち払って、その家およびその仕事を離れさせられるように。その人はこのように打ち払われてむなしくなるように」。

会衆はみな「アアメン」と言つて、主をさんびした。そして民はこの約束のとおりに行つた。

「四またわたしは、ユダの地の総督に任せられた時から、すなわちアルタシヤスタ王の第二十年から第三十二年まで、十二年の間、わたしもわたしの兄弟たちも、総督としての手当てを受けなかつた。」「五わたしより以前の総督らは民に重荷を負わせ、彼らから銀四十シケルのほかにパンとぶどう酒を取り、また彼らのしもべたちも民を圧迫した。しかしわたしは神を恐れるので、そのようなことはしなかつた。」「六わたしはかえつて、この城壁の工事に身をゆだね、どんな土地をも買つたことはない。わたしのしもべたちは皆そこに集まつて工事をした。」「七またわたしの食卓にはユダヤ人と、つかさたち百五十人もあり、そのほかに、われわれの周囲の異邦人のうちからきた人々もあつた。」「八これがために一日に牛一頭、肥えた羊六頭を備え、また鶏をもわたしのために備え、十日ごとにたくさんのぶどう酒を備えたが、わたしはこの民の労役が重かつたので、総督としての手当てを求めなかつた。」「九わが神よ、わたしがこの民のためにしたすべての事を覚えて、わたしをお恵みください。」

第六章

「サンバラテ、トビヤ、アラビヤびとガシムおよびその他のわれ

われの敵は、わたしが城壁を築き終つて、一つの破れも残らないと聞いた。(しかしその時にはまだ門のとびらをつけていなかったのである。))「そこでサンバラテとガシムはわたしに使者をつかわして言つた、「さあ、われわれはオノの平野にある一つの村で会見しよう」と。彼らはわたしに危害を加えようと考えていたのである。」「三それでわたしは彼らに使者をつかわして言わせた、「わたしは大いなる工事をしているから下つて行くことはできない。どうしてこの工事をさしおいて、あなたがたの所へ下つて行き、その間、工事をやめることができようか。」「四彼らは四度までこのようにわたしに人をつかわしたが、わたしは同じように彼らに答えた。五ところが、サンバラテは五度目にそのしもべを前のようにわたしにつかわした。その手には開封の手紙を携えていた。六その中に次のようにしるしてあつた、「諸国民の間に言い伝えられ、またガシムも言っているが、あなたはユダヤ人と共に反乱を企て、これがために城壁を築いている。またその言うところによれば、あなたは彼らの王になろうとしている。七またあなたは預言者を立てて、あなたのことをエルサレムにのべ伝えさせ、『ユダに王がある』と言わせているが、そのことはこの言葉のとおり王に聞えるでしょう。それゆえ、今おいでなさい。われわれは共に相談しましょう。」「八そこでわたしは彼に人をつかわして言わせた、「あなたの言うようなことはしていません。あなたはそれを自分の心から造り出したので

す」と。九彼らはみな「彼らの手が弱つて工事をやめるようになれば、工事は成就しないだろう」と考えて、われわれをおどそうとしたのである。しかし神よ、どうぞいまわたしの手を強めてください。

一〇さてわたしはメヘタベルの子デラヤの子シマヤの家にいったところ、彼は閉じこもっていて言った、「われわれは神の宮すなわち神殿の中で会合し、神殿の戸を閉じておきましょう。彼らはあなたを殺そうとして来るからです。きつと夜のうちにあなたを殺そうとして来るでしょう」。一わたしは言った、「わたしのような者がどうして逃げられよう。わたしのような者でだれが神殿にはいつて命を全うすることができよう。わたしははいらない」。二わたしは悟った。神が彼をつかわされたのではない。彼がわたしにむかつてこの預言を伝えたのは、トビヤとサンバラテが彼を買収したためである。三彼が買収されたのはこの事のためである。すなわちわたしを恐れさせ、わたしにこのようにさせて、罪を犯させ、わたしに悪名をきせて侮辱するためであった。四わが神よ、トビヤ、サンバラテおよび女預言者ノアデヤならびにその他の預言者など、すべてわたしを恐れさせようとする者たちをおぼえて、彼らが行ったこれらのわざに報いてください。

一五こうして城壁は五十二日を経て、エルルの月の二十五日に完成した。一六われわれの敵が皆これを聞いた時、われわれの

周囲の異邦人はみな恐れ、大いに面目を失った。彼らはこの工事が、われわれの神の助けによって成就したことを悟ったからである。一七またそのころ、ユダの尊い人々は多くの手紙をトビヤに送った。トビヤの手紙もまた彼らにきた。一八トビヤはアラの子シカニヤの婿であつたので、ユダのうちの多くの者が彼と誓いを立てていたからである。トビヤの子ヨハナンもベレキヤの子メシユラムの娘を妻にめとつた。一九彼らはまたトビヤの善行をわたしの前に語り、またわたしの言葉を彼に伝えた。トビヤはたびたび手紙を送つて、わたしを恐れさせようとした。

第七章

一城壁が築かれて、とびらを設け、さらに門衛、歌うたう者およびレビびとを任命したので、二わたしは、わたしの兄弟ハナニと、城のつかさハナニヤに命じて、エルサレムを治めさせた。彼は多くの者にまさつて忠信な、神を恐れる者であつたからである。三わたしは彼らに言った、「日の暑くなるまではエルサレムのもろもろの門を開いてはならない。人々が立つて守つてゐる間に門を閉じさせ、貫の木を差せ。またエルサレムの住民の中から番兵を立てて、おのおのにその所を守らせ、またおのおの家と向かい合う所を守らせよ」。四町は広くて大きかったが、その内の民は少なく、家々はまだ建てられていなかった。

五時に神はわたしの心に、尊い人々、つかさおよび民を集めて、家系によってその名簿をしらべようとの思いを起された。わたしは最初に上つて来た人々の系図を発見し、その中にこのようにしるしてあるのを見いだした。

ハバビロンの王ネブカデネザルが捕え移した捕囚のうち、ゆるされてエルサレムおよびユダに上り、おのおの自分の町に帰ったこの州の人々は次のとおりである。セ彼らはゼルバベル、エシユア、ネヘミヤ、アザリヤ、ラアミヤ、ナハマニ、モルデカイ、ビルシヤン、ミスペレテ、ビグワイ、ネホム、バアナと一緒に帰ってきた者たちである。

そのイスラエルの民の人数は次のとおりである。ハパロシの子孫は二千百七十二人。カシパテヤの子孫は三百七十二人。アラの子孫は六百五十二人。ニパハテ・モアブの子孫すなわちエシユアとヨアブの子孫は二千八百十八人。ニエラムの子孫は一千二百五十四人。ミザットの子孫は八百四十五人。ニザツカイの子孫は七百六十人。ニビンヌイの子孫は六百四十八人。ニエババイの子孫は六百二十八人。モアズガデの子孫は二千三百二十二。ニハアドニカムの子孫は六百六十七人。ニグワイの子孫は二千六十七人。ニアドンの子孫は六百五十五人。ニヒゼキヤの家のアテルの子孫は九十八人。ミハシユムの子孫は三百二十八人。ミベザイの子孫は三百二十四人。ニハリフの子孫は百十二人。ニギベオンの子孫は九十五人。ニ

ベツレヘムおよびネトパの人々は百八十八人。ニモアナトテの人々は百二十八人。ニハベテ・アズマウテの人々は四十二人。ニキリアテ・ヤリム、ケピラおよびベエロテの人々は七百四十三人。ミラマおよびゲバの人々は六百二十一人。ミミクマシの人々は百二十二。ミベテルおよびアイの人々は百二十三。ミほかのネボの人々は五十二人。ミほかのエラムの子孫は一千二百五十四人。ミハリムの子孫は三百二十人。ミエリコの人々は三百四十五人。ミモロド、ハデテおよびオノの人々は七百二十一人。ミセナアの子孫は三千九百三十人。ミ九祭司では、エシユアの家のエダヤの子孫は九百七十三人。四〇インメルの子孫が一千五十二人。四一パシユルの子孫が一千二百四十七人。四二ハリムの子孫が一千十七人。

四三レビびとは、エシユアの子孫すなわちホデワの子孫のうちのカデミエルの子孫が七十四人。

四四歌うたう者では、アサフの子孫が百四十八人。

四五門衛では、シャルムの子孫、アテルの子孫、タルモンの子孫、アツクブの子孫、ハタタの子孫およびシヨバイの子孫合わせて百三十八人。

四六宮に仕えるしもべでは、ジハの子孫、ハスパの子孫、タバオテの子孫、四七ケロスの子孫、シアの子孫、パドンの子孫、四八レバナの子孫、ハガバの子孫、サルマイの子孫、四九ハナンの子孫、ギデルの子孫、ガハルの子孫、五〇レアヤの子孫、レデンの子孫、

ネコダの子孫、五ニガザムの子孫、ウザの子孫、パセアの子孫、五ニベサイの子孫、メウニムの子孫、ネフセシムの子孫、五ニバクブクの子孫、ハクパの子孫、ハルホルの子孫、五ニバヅリテの子孫、メヒダの子孫、ハルシャの子孫、五ニバルコスの子孫、シセラの子孫、テマの子孫、五ニネデアの子孫およびハテパの子孫、五ニソロモンの子孫、五ニベであった者たちの子孫では、ソタイの子孫、ソペレテの子孫、ペリダの子孫、五ニヤアラの子孫、ダルコンの子孫、ギデルの子孫、五ニシパテヤの子孫、ハツテルの子孫、ボケレテ・ハツゼバイムの子孫、アモンの子孫、六〇宮に仕えるしもべたちとソロモンのしもべであった者たちの子孫とは合わせて三百九十二人。

六ニテルメラ、テルハレサ、ケルブ、アドンおよびインメルから上つて来た者があつたが、その氏族と、血統とを示して、イスラエルの者であることを明らかにすることができなかった。その人々は次のとおりである。六ニすなわちデラヤの子孫、トビヤの子孫、ネコダの子孫であつて、合わせて六百四十二人。六ニまた祭司のうちにホバヤの子孫、ハツコヅの子孫、バルジライの子孫がある。バルジライはギレアデびとバルジライの娘たちのうちから妻をめとつたので、その名で呼ばれた。六四これらの者はこの系図に載つた者のうちに、自分の籍をたずねたが、なかつたので、汚れた者として祭司の職から除かれた。六五総督は彼らに告げて、ウリムとトンミムを帯びる祭司の起るまでは、いと聖なる

物を食べてはならぬと言つた。

六六 会衆は合わせて四万二千三百六十人であつた。六七このほかに男女の奴隷が七千三百三十七人、歌うたう者が男女合わせて二百四十五人あつた。六八その馬は七百三十六頭、その騾馬は二百四十五頭、六九そのらくだは四百三十五頭、そのろばは六千七百二十頭であつた。

七〇 氏族の長のうち工事のためにささげ物をした人々があつた。総督は金一千ダリク、鉢五十、祭司の衣服五百三十かさねを倉に納めた。七一 また氏族の長のうちのある人々は金二万ダリク、銀二千二百ミナを工事のために倉に納めた。七二 その他の民の納めたものは金二万ダリク、銀二千ミナ、祭司の衣服六十七かさねであつた。

七三 こうして祭司、レビびと、門衛、歌うたう者、民のうちのあつた人々、宮に仕えるしもべたち、およびイスラエルびとは皆その町々に住んだ。

イスラエルの人々はその町々に住んで七月になつた。

第八章

一 その時民は皆ひとりりになつて水の門の前の広場に集まり、主がイスラエルに与えられたモーセの律法の書を持つて来るように、学者エズラに求めた。ニ祭司エズラは七月の一日に

律法りっぽうを携たずさえて来て、男女だんじょの会衆かいしゅうおよびすべて聞いて悟さとることのできる人々ひとびとの前にあらわれ、三水みずの門もんの前まえにある広場ひろばで、あけぼのから正午しょうごまで、男女だんじょおよび悟さとることのできる人々ひとびとの前まえでこれを読よんだ。民たみはみな律法りっぽうの書しよに耳みみを傾かたむけた。四よ学者がくしやエズラはこの事ことのために、かねて設もうけた木の台だいの上に立たったが、彼かれのかたわらには右みぎの方にマッタテヤ、シマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤおよびマアセヤが立たち、左ひだりの方ほうにはベダヤ、ミサエル、マルキヤ、ハシユム、ハシバダナ、ゼカリヤおよびメシユラムが立たった。五ごエズラはすべての民たみの前にその書しよを開ひらいた。彼かれはすべての民たみよりも高い所ところにいたからである。彼かれが書しよを開ひらくと、すべての民たみは起立きりつした。ハエズラは大いなる神かみ、主しゆをほめ、民たみは皆みなその手てをあげて、「アアメン、アアメン」と言いつて答こたえ、こうべをたれ、地ちにひれ伏ふして主しゆを拝はいした。モエシユア、バニ、セレビヤ、ヤミン、アツクブ、シャベタイ、ホデヤ、マアセヤ、ケリタ、アザリヤ、ヨザバデ、ハナン、ペラヤおよびレビレビびとたちは民たみに律法りっぽうを悟さとらせた。民たみはその所ところに立たつていた。ハ彼らかれはその書しよすなわち神かみの律法りっぽうをめいりように読よみ、その意味いみを解とき明あかしてその読よむところを悟さとらせた。

九こ総督そうとくであるネヘミヤと、祭司さいしであり、学者がくしやであるエズラと、民たみを教えるレビレビびとたちはすべての民たみに向むかつて「この日はあなたがたの神かみ、主しゆの聖せいなる日ひです。嘆なげいたり、泣ないたりしてはならない」と言いった。すべての民たみが律法りっぽうの言葉ことばを聞いて泣ないたから

である。一〇そして彼らに言いった、「あなたがたは去さつて、肥こえたものを食たべ、甘いものを飲のみなさい。その備そなえのないものには分わけてやりなさい。この日はわれわれの主しゆの聖せいなる日ひです。憂うれえてはならない。主しゆを喜よろこぶことはあなたがたの力ちからです」。一レビレビびともまたすべての民たみを静しずめて、「泣なくことをやめなさい。この日は聖せいなる日ひです。憂うれえてはならない」と言いった。二三すべての民たみは去さつて食たい飲のみし、また分わけけ与あたえて、大いに喜よろこんだ。これは彼らかれが読よみ聞きかされた言葉ことばを悟さとつたからである。

二三次つぎの日ひ、すべての民たみの氏族しぞくの長ちやうたち、祭司さいし、レビレビびとらは律法りっぽうの言葉ことばを学まなぶために学者がくしやエズラのもとに集あつまつてきて、一四律法りっぽうのうち主しゆがモーセに命めいじられたこと、すなわちイスラエルの人々ひとびとは七月がつの祭まつりの間あいだ、飯かい庵いおの中なかに住すむべきことがしるされてい

るのを見みいだした。一五またすべての町々まちまちおよびエルサレムにのべ伝つたえて、「あなたがたは山やまに出て行いつて、オリブと野生やせいのオリブ、ミルトス、なつめやし、および茂しげつた木の枝えだを取とつてきて、しるされてあるとおり、飯かい庵いおを造つくれ」と言いつてあるのを見みいだした。一六それで民たみは出て行いつて、それを持もつて帰かえり、おのおのその家の屋根やねの上うへ、その庭にわ、神かみの宮みやの庭にわ、水の門もんの広場ひろば、エフライムエフライムの門もんの広場ひろばなどに飯かい庵いおを造つくつた。一七捕囚ほしうから帰かえつて来た会衆かいしゅうは皆飯かい庵いおを造つくつて、飯かい庵いおに住すんだ。ヌンの子こヨシユアの日ひからこの日ひまで、イスラエルの人々ひとびとはこのように行いつたことがなかつた。それでその喜よろこびは非常に大おおきかつた。一八エズラは

はじめの日から終りの日まで、毎日神の律法の書を読んだ。人々は七日の間、祭を行い、八日目になって、おきてにしたがって聖会を開いた。

第九章

一その月の二十四日にイスラエルの人々は集まって断食し、荒布をまとい、土をかぶった。ニそしてイスラエルの子孫は、すべての異邦人を離れ、立つて自分の罪と先祖の不義とをざんげした。三彼らはその所に立つて、その日の四分の一をもってその神、主の律法の書を読み、他の四分の一をもってざんげをなし、その神、主を拝した。四その時エシユア、バニ、カデミエル、シバニヤ、ブンニ、セレビヤ、バニ、ケナニらはレビびとの台の上に立ち、大声をあげて、その神、主に呼ばわった。五それからまたエシユア、カデミエル、バニ、ハシャブニヤ、セレビヤ、ホデヤ、セバニヤ、ベタヒヤなどのレビびとは言った、「立ちあがって永遠から永遠にいますあなたがたの神、主をほめなさい。あなたの尊い名はほむべきかな。これはすべての祝福と喜びを越えるものです」。

六またエズラは言った、「あなたは、ただあなたのみ、主でいらせられます。あなたは天と諸天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、これをこと

ごとく保たれます。天の万軍はあなたを拝します。七あなたは主、神でいらせられます。あなたは昔アブラムを選んでカルデヤのウルから導き出し、彼にアブラハムという名を与え、ハ彼の心があなたの前に忠信なのを見られて、彼と契約を結び、その子孫にカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、エブスびとおよびギルガシびとの地を与え、と言われたが、ついにあなたはその約束を成就されました。あなたは正しくいらせられるからです。

九あなたはわれわれの先祖がエジプトで苦難を受けるのを顧みられ、また紅海のほとりで呼ばわり叫ぶのを聞きいられ、一〇しるしと不思議とをあらわしてパロと、そのすべての家来と、その国のすべての民を攻められました。彼らがわれわれの先祖に對して、ごうまんにふるまったことを知られたからです。そしてあなたが名をあげられたこと今日のようです。一あなたはまだ彼らの前で海を分け、彼らに、かわいた地を踏んで海の中を通らせ、彼らを追う者を、石を大水に投げ入れるように淵に投げ入れ、三昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもってその行くべき道を照されました。二あなたはまたシナイ山の上に下り、天から彼らと語り、正しいおきてと、まことの律法および良きさだめと戒めとを授け、四あなたの聖なる安息日を彼らに示し、あなたのしもべモーセによつて戒めと、さだめと、律法とを彼らに命じ、五天から食物を与えてその飢えをとど

め、岩から水を出してそのかわきを潤し、また、彼らに与える
誓われたその国にはいつて、これを獲るように彼らに命じら
れました。

二六しかし彼ら、すなわちわれわれの先祖はこうまんにふるま
い、かたくなで、あなたの戒めに従わず、二七従うことを拒み、あ
なたが彼らの中で行われた奇跡を心にとめず、かえつてかた
くなり、みずからひとりのかしらを立てて、エジプトの奴隷の
生活に帰ろうとしました。しかしあなたは罪をゆるす神、恵み
あり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かにまし
して、彼らを捨てられませんでした。二八また彼らがみずから一
つの鑄物の子牛を造つて、『これはあなたがたをエジプトから導
き上つたあなたがたの神である』と言つて、大いに汚し事を
行つた時にも、二九あなたは大きいなるあわれみをもつて彼ら
を荒野に見捨てられず、昼は雲の柱を彼らの上から離さないで
道々彼らを導き、夜は火の柱をもつて彼らの行くべき道を照さ
れました。三〇またあなたは良きみたまを賜わつて彼らを教え
あなたのマナを常に彼らの口に与え、また水を彼らに与えて、か
わきをとどめ、三四十十年の間彼らを荒野で養われたので、彼ら
はなんの欠けるところもなく、その衣服も古びず、その足もはれ
ませんでした。三三そしてあなたは彼らに諸国、諸民を与えて、
これをすべて分かち取らせられました。彼らはヘシボンの王シ
ホンの領地、およびバシヤンの王オグの領地を獲ました。三三ま

た彼らの子孫を増して空の星のようにし、彼らの先祖たちに、は
いつて獲よと言われた地に彼らを導き入れられたので、二四その
子孫は、はいつてこの地を獲ました。あなたはまた、この地に住
むカナンびとを彼らの前に征服し、その王たちおよびその地の
民を彼らの手に渡して、意のままに扱わせられました。二五それ
で彼らは堅固な町々および肥えた地を取り、もろもろの良い物
の満ちた家、掘池、ぶどう畑、オリブ畑および多くの果樹を獲
食べて飽き、肥え太り、あなたの大きいなる恵みによつて楽しま
した。

二六それにもかかわらず彼らは不従順で、あなたにそむき、あ
なたの律法を後に投げ捨て、彼らを戒めて、あなたに立ち返らせ
ようとした預言者たちを殺し、大いに汚し事を行いました。二七
そこであなたは彼らを敵の手に渡して苦しめられました。二八
あなたがその苦難の時にあなたに呼ばわつたので、あなたは天から
これを聞かれ、大いなるあわれみをもつて彼らに救う者と与え、
敵の手から救わせられました。二九ところが彼らは安息を得る
やいなや、またあなたの前に悪事を行つたので、あなたは彼ら
を敵の手に捨て置いて、これに治めさせられましたが、彼らがま
た立ち返つてあなたに呼ばわつたので、あなたは天からこれを
聞き、あわれみをもつてしばしば彼らを救ひ出し、二九彼らを戒
めて、あなたの律法に引きもどそうとされました。けれども彼
らはこうまんにふるまい、あなたの戒めに従わず、人がこれを行

うならば、これによって生きるといふあなたのおきてを破つて罪を犯し、肩をそびやかし、かたくなになつて、聞き従おうとはしませんでした。三〇それでもあなたは年久しく彼らを忍び、あなたの預言者たちにより、あなたのみたまをもつて彼らを戒められました。彼らは耳を傾けなかつたので、彼らを国々の民の手に渡されました。三一しかしあなたは大きいなるあわれみによつて彼らを絶やさず、また彼らを捨てられませんでした。あなたは恵みあり、あわれみある神でいらせられるからです。三二それゆゑ、われわれの神、契約を保ち、いつくしみを施される大いにして力強く、恐るべき神よ、アッスリヤの王たちの時から今日まで、われわれとわれわれの王たち、つかさたち、祭司たち、預言者たち、先祖たち、およびあなたのすべての民に臨んだものもろの苦難を小さい事と見ないでください。三三われわれに臨んだすべての事について、あなたは正しいのです。あなたは誠実をもつて行われたのに、われわれは悪を行つたのです。三四われわれの王たち、つかさたち、祭司たち、先祖たちはあなたの律法を行わず、あなたが与えになった命令と戒めに聞き従いませんでした。三五すなわち彼らはおのれの国において、あなたが下さった大きな恵みのうちにおり、またあなたが与えになった広い肥えた地におりながら、あなたに仕えず、また自分の悪いわざをやめることをしませんでした。三六われわれは今日奴隷です。あなたがわれわれの先祖に与えて、その実と

その良き物とを食べさせようとした地で、われわれは奴隷となつてゐるのです。三七そしてこの地はわれわれの罪のゆゑに、あなたがわれわれの上に立てられた王たちのために多くの産物を出しています。かつ彼らはわれわれの身をも、われわれの家畜をも意のままに左右することができるので、われわれは大いなる苦難のうちにあるのです」。

三八このもろの事のためにわれわれは堅い契約を結んで、これを記録し、われわれのつかさたち、レビびとたち祭司たちはこれに印を押した。

第一〇章

一印を押した者はハカリヤの子である総督ネヘミヤ、およびゼデキヤ、ニセラヤ、アザリヤ、エレミヤ、ニパシウル、アマリヤ、マルキヤ、四ハットシ、シバニヤ、マルク、五ハリム、メレモテ、オバデヤ、六ダニエル、ギンネトン、バルク、セメシユラム、アビヤ、ミヤミン、ハマアジヤ、ビルガイ、シマヤで、これらは祭司である。

九レビびとではアザニヤの子エシユア、ヘナダデの子らのうちのピンヌイ、カデミエル、一〇およびその兄弟シバニヤ、ホデヤ、ケリタ、ペラヤ、ハナン、ニミカ、レホブ、ハシャビヤ、ニザツクル、セレビヤ、シバニヤ、ニホデヤ、バニ、ベニヌである。一

四民のかしらではパロシ、パハテ・モアブ、エラム、ザット、バニ、ニブンニ、アズガデ、ベバイ、ニハアドニヤ、ビグワイ、アデン、ニエアテル、ヒゼキヤ、アズル、ニハホデヤ、ハシユム、ベザイ、ニハハリフ、アナトテ、ノバイ、ニマグピアシ、メシユラム、ヘジル、ニメシザベル、ザドク、ヤドア、ニペラテヤ、ハナン、アナニヤ、ニホセア、ハナニヤ、ハシユブ、ニハロヘシ、ピルハ、シヨベク、ニレホム、ハシャブナ、マアセヤ、ニアヒヤ、ハナン、アナン、ニマルク、ハリム、バアナである。

ニ八その他の民、祭司、レビびと、門を守る者、歌うたう者、宮に仕えるしもべ、ならびにすべて国々の民と離れて神の律法に従った者およびその妻、むすこ、娘などすべて知識と悟りのある者は、ニ九その兄弟である尊い人々につき従い、神のしもべモーセによつて授けられた神の律法に歩み、われわれの主、主のすべての戒めと、おきてと、定めとを守り行うために、のろいと誓いとに加わった。ニ〇われわれはこの地の民らにわれわれの娘を与えず、われわれのむすこに彼らの娘をめとらない。ニ三またこの地の民らगतとい品物または穀物を安息日に携えて来て売ろうとしても、われわれは安息日または聖日にはそれを買わない。また七年ごとに耕作をやめ、すべての負債をゆるす。

ニ三われわれはまたみずから規定を設けて、われわれの神の宮の用のために年々シケルの三分の一を出し、ニ三供えのパン、常素祭、常燔祭のため、安息日、新月および定めめの祭の供え物

のため、聖なる物のため、イスラエルのあがないをなす罪祭、およびわれわれの神の宮のもろもろのわざのために用いることにした。ニ四またわれわれ祭司、レビびとおよび民はくじを引いて、律法にしろされてあるようにわれわれの神、主の祭壇の上にたくべきたぎの供え物を、年々定められた時に氏族にしたがつて、われわれの神の宮に納める者を定めた。ニ五またわれわれの土地の初なり、および各種の木の実の初なりを、年々主の宮に携えてくることを誓い、ニ六また律法にしろしてあるように、われわれの子どもおよび家畜のういご、およびわれわれの牛や羊のういごを、われわれの神の宮に携えてきて、われわれの神の宮に仕える祭司に渡し、ニ七われわれの麦粉の初物、われわれの供え物、各種の木の実、ぶどう酒および油を祭司のもとに携えて行つて、われわれの神の宮のへやに納め、またわれわれの土地の産物の十分の一をレビびとに与えることにした。レビびとはわれわれのすべての農作をなす町において、その十分の一を受くべき者だからである。ニ八レビびとが十分の一を受ける時には、アロンの子孫である祭司が、そのレビびとと共にいなければならない。そしてまたレビびとはその十分の一の十分の一を、われわれの神の宮に携え上つて、へやまたは倉に納めなければならない。ニ九すなわちイスラエルの人々およびレビの子孫は穀物、ぶどう酒および油の供え物を携えて行つて、聖所の器物および勤めをする祭司、門衛、歌うたう者たちのいるへやにこれ

を納めなければならぬ。こうしてわれわれは、われわれの神の宮をなおざりにしない。

第二章

一民のつかさたちはエルサレムに住み、その他の民はくじを引いて、十人のうちからひとりずつを、聖都エルサレムに来て住ませ、九人を他の町々に住ませた。ニまたすべてみずから進みでてエルサレムに住むことを申し出た人々は、民はこれを祝福した。

ミさてエルサレムに住んだこの州の長たちは次のとおりである。ただしユダの町々ではおのおのその町々にある自分の所有地に住んだ。すなわちイスラエルびと、祭司、レビびと、宮に仕えるしもべ、およびソロモンのしもべであつた者たちの子孫である。四そしてエルサレムにはユダの子孫およびベニヤミンの子孫のうちのある者たちが住んだ。すなわちユダの子孫ではウジヤの子アタヤで、ウジヤはゼカリヤの子、ゼカリヤはアマリヤの子、アマリヤはシパテヤの子、シパテヤはマハラレルの子、マハラレルはペレツの子孫である。五またバルクの子マアセヤで、バルクはコロホゼの子、コロホゼはハザヤの子、ハザヤはアダヤの子、アダヤはヨヤリブの子、ヨヤリブはゼカリヤの子、ゼカリヤはシロニびとの子である。六ペレツの子孫でエルサレムに住

んだ者は合わせて四百六十八人で、みな勇敢な人々である。

セベニヤミンの子孫では次のとおりである。すなわちメシユラムの子サルで、メシユラムはヨエデの子、ヨエデはペダヤの子、ペダヤはコラヤの子、コラヤはマアセヤの子、マアセヤはイテエルの子、イテエルはエサヤの子である。ハその次はガバイおよびサライなどで合わせて九百二十八人。九ヅクリの子ヨエルが彼らの監督である。ハッセヌアの子ユダがその副官として町を治めた。

一〇祭司ではヨヤリブの子エダヤ、ヤキン、二および神の宮のつかさセラヤで、セラヤはヒルキヤの子、ヒルキヤはメシユラムの子、メシユラムはザドクの子、ザドクはメラヨテの子、メラヨテはアヒトブの子である。三宮の務をするその兄弟は八百二十二人あり、また、エロハムの子アダヤがある。エロハムはペラリヤの子、ペラリヤはアムジの子、アムジはゼカリヤの子、ゼカリヤはパシホルの子、パシホルはマルキヤの子である。四アダヤの兄弟で、氏族の長たる者は二百四十二人あり、またアザリエルの子アマシサイがある。アザリエルはアハザイの子、アハザイはメシレモテの子、メシレモテはインメルの子である。五その兄弟である勇士は百二十八人あり、その監督はハッゲドリムの子ザブデエルである。

六レビびとではハシユブの子シマヤで、ハシユブはアズリカムの子、アズリカムはハシャビヤの子、ハシャビヤはブンニの子で

ある。二六またシャベタイおよびヨザバデがある。これらはレ
ビびとのかしらであつて、神の宮の外のわざをつかさどつた。一
セまたミカの子マツタニヤがある。ミカはザブデの子、ザブデ
はアサフの子である。マツタニヤは祈の時に感謝の言葉を唱え
始める者である。その兄弟のうちのバクブキヤは彼に次ぐ者
であつた。またシャンマの子アブダがある。シャンマはガラル
の子、ガラルはエドトンの子である。二八聖都におけるレビびとは
合わせて二百八十四人であつた。

二九門衛では門を守るアツクブ、タルモンおよびその兄弟たち
合わせて百七十二人である。三〇その他のイスラエルびと、
祭司、レビびとたちは皆ユダのすべての町々にあつて、おのおの
自分の嗣業にとどまつた。三ただし宮に仕えるしもべたちは
オベルに住み、デハおよびギシバが宮に仕えるしもべたちを
監督していた。

三二エルサレムにおけるレビびとの監督はウジである。ウジはバ
ニの子、バニはハシャビヤの子、ハシャビヤはマツタニヤの子、
マツタニヤはミカの子である。ミカは歌うたう者なるアサフの
子孫である。ウジは神の宮のわざを監督した。三三彼らについ
ては王からの命令があつて、歌うたう者に日々の定まつた分を
与えさせた。三四またユダの子ゼラの子孫であるメシザベルの
子ベタヒヤは王の手に属して民に関するすべての事を取り
扱つた。

三五また村々とその田畑については、ユダの子孫の者はキリア
テ・アルバとその村々、デボンとその村々、エカブジエルとその
村々に住み、三六エシユア、モラダおよびベテペレテに住み、三七
ハザル・シユアルおよびベエルシバとその村々に住み、三八チク
ラグおよびメコナとその村々に住み、三九エンリンモン、ザレア、
ヤルムテに住み、四〇ザノア、アドラムおよびそれらの村々、ラ
キシとその田野、アゼカとその村々に住んだ。こうして彼らは
ベエルシバからヒンノムの谷にまで宿営した。四一ベニヤミン
の子孫はまたゲバからミクマシ、アヤおよびベテルとその村々
に住み、四二アナトテ、ノブ、アナニヤ、四三ハゾル、ラマ、ギツ
タイム、四四ハデデ、ゼボイム、ネバラテ、四五ロド、オノ、工人
の谷に住んだ。四六レビびとの組のユダにあるもののうちベニ
ヤミンに合したのもあつた。

第二章

一シャルテルの子ゼルバベルおよびエシユアと一緒に上つてき
た祭司とレビびとは次のとおりである。すなわちセラヤ、エレ
ミヤ、エズラ、ニアマリヤ、マルク、ハットシ、ミシカニヤ、レ
ホム、メレモテ、四イド、ギンネトイ、アビヤ、五ミヤミン、マ
アデヤ、ビルガ、ハシマヤ、ヨヤリブ、エダヤ、セサライ、アモ
ク、ヒルキヤ、エダヤで、これらの者はエシユアの時代に祭司お

よびその兄弟きょうだいらのかしらであつた。

ハレビびとではエシユア、ビンヌイ、カデミエル、セレビヤ、ユダ、マツタニヤで、マツタニヤはその兄弟きょうだいらと共に感謝かんしゃのことをつかさどつた。九また彼らの兄弟きょうだいであるバグブキヤおよびウシノは彼らの向かいに立つて勤めをした。一〇エシユアの子はヨアキム、ヨアキムの子はエリアシブ、エリアシブの子はヨイアダ、ニヨイアダの子はヨナタン、ヨナタンの子はヤドアである。ニニヨアキムの時代に祭司さいしで氏族しぞくの長であつた者はセラヤの氏族しぞくではメラヤ、エレミヤの氏族しぞくではハナニヤ、ミエズラの氏族しぞくではメシユラム、アマリヤの氏族しぞくではヨハナン、一四マルキの氏族しぞくではヨナタン、シバニヤの氏族しぞくではヨセフ、一五ハリムの氏族しぞくではアデナ、メラヨテの氏族しぞくではヘルカイ、一六イドの氏族しぞくではゼカリヤ、ギンネトンの氏族しぞくではメシユラム、一七アビヤの氏族しぞくではジクリ、ミニヤミンの氏族しぞく、モアデヤの氏族しぞくではピルタイ、一八ビルガの氏族しぞくではシャンマ、シマヤの氏族しぞくではヨナタン、一九ヨヤリブの氏族しぞくではマツテナイ、エダヤの氏族しぞくではウジ、二〇サライの氏族しぞくではカライ、アモクの氏族しぞくではエベル、二一ヒルキヤの氏族しぞくではハシャビヤ、エダヤの氏族しぞくではネタンエルである。ミレビびとについては、エリアシブ、ヨイアダ、ヨハナンおよびヤドアの時代に、その氏族しぞくの長たちが登録とうろくされた。また祭司さいしたちもペルシャ王おうダリヨスの治世ちせいまで登録とうろくされた。二三レビの子孫しそんで氏族しぞくの長たる者は、エリアシブの子ヨハナンの世まで

歴代志れきだいいしの書しよにしている。二四レビびとのかしらはハシャビヤ、セレビヤおよびカデミエルの子エシユアであつて、その兄弟きょうだいたち相向かい合い、組と組と対応して神の人ダビデの命令めいれいに従い、さんびと感謝かんしゃをささげた。二五マツタニヤ、バクブキヤ、オバデヤ、メシユラム、タルモンおよびアックブは門を守る者で門の内の倉を監督した。二六これらはヨザダクの子エシユアの子ヨアキムの時代、また総督ネヘミヤおよび学者である祭司エズラの時代にいた人々である。

二七さてエルサレムの城壁の落成式に當つて、レビびとを、そのすべての所から招いてエルサレムにこさせ、感謝と、歌と、シンバルと、立琴と、琴とをもつて喜んで落成式を行おうとした。二八そこで、歌うたう人々はエルサレムの周囲の地方、ネトパびとの村々から集まつてきた。二九またベテギルガルおよびゲバとアズマウテの地方からも集まつてきた。この歌うたう者たちはエルサレムの周囲に自分の村々を建てていたからである。三〇そして祭司とレビびとたちは身を清め、また民およびもろもろの門と城壁とを清めた。

三一そこでわたしはユダのつかさたちを城壁の上にのぼらせ、また感謝する者の二つの大きな組を作つて、行進させた。その一つは城壁の上を右に糞の門をさして進んだ。三二そのあとに従つて進んだ者はホシャヤ、およびユダのつかさたちの半ば、三三ならびにアザリヤ、エズラ、メシユラム、三四ユダ、ベニヤミン、

シマヤ、エレミヤであつた。三五また数人の祭司がラツパをもつて従つた。すなわちヨナタンの子ゼカリヤ。ヨナタンはシマヤの子、シマヤはマッタニヤの子、マッタニヤはミカヤの子、ミカヤはザツクルの子、ザツクルはアサフの子である。三六またゼカリヤの兄弟たちシマヤ、アザリエル、ミラライ、ギラライ、マアイ、ネタンエル、ユダ、ハナニなどであつて、神の人ダビデの楽器を持つて従つた。そして学者エズラは彼らの先に進んだ。三七彼らは泉の門を経て、まっすぐに進み、城壁の上り口で、ダビデの町の階段から上り、ダビデの家の上を過ぎて東の方、水の門に至つた。

三八他の一組の感謝する者は左に進んだ。わたしは民の半ばと共に彼らのあとに従つた。そして城壁の上を行き、炉の望楼の上を過ぎて、城壁の広い所に至り、三九エフライムの門の上を通り、古い門を過ぎ、魚の門およびハナネルの望楼とハンメアの望楼を過ぎて、羊の門に至り、近衛の門に立ち止まつた。四〇こうして二組の感謝する者は神の宮にはいつて立つた。わたしもそこに立ち、つかさたちの半ばもわたしと共に立つた。四一また祭司エリアキム、マアセヤ、ミニヤミン、ミカヤ、エリオエナイ、ゼカリヤ、ハナニヤらはラツパを持ち、四二マアセヤ、シマヤ、エレアザル、ウジ、ヨハナン、マルキヤ、エラムおよびエゼルも共にいた。そして歌うたう者たちは声高く歌つた。エズラヒヤはその監督であつた。四三こうして彼らはその日、大いなる犠牲を

ささげて喜んだ。神が彼らをおおいに喜び樂しませられたからである。女子供までも喜んだ。それでエルサレムの喜びの声は遠くまで聞えた。

四四その日、倉のもろもろのへやをつかさどる人々を選び、ささげ物、初物、十分の一など律法の定めるところの祭司およびレビびとの分を町々の田畑にしたがつて取り集めて、へやに入れることをつかさどらせた。これは祭司およびレビびとの仕えるのを、ユダびとが喜んだからである。四五彼らはダビデおよびその子ソロモンの命令に従つて、神の勤めおよび清め事の勤めをした。歌うたう者および門を守る者もそのように行つた。四六昔ダビデおよびアサフの日には、歌うたう者のかしらがひとりいて、神にさんびと感謝をささげる事があつた。四七またゼルバベルの日およびネヘミヤの日には、イスラエルびとはみな歌うたう者と門を守る者に日々の分を与え、またレビびとに物を聖別して与え、レビびとはまたこれを聖別してアロンの子孫に与えた。

第二章

一その日モーセの書を読んで民に聞かせたが、その中にアンモンびと、およびモアブびとは、いつまでも神の会にはいつてはならないとするされているのを見いだした。二これは彼らがか

つて、パンと水をもつてイスラエルの人々を迎えず、かえつてこれをのろわせるためにバラムを雇つたからである。しかしわれわれの神はそののろいを変えて祝福とされた。三 人々はこの律法を聞いた時、混血の民をことごとくイスラエルから分け離れた。

四 これより先、われわれの神の宮のへやをつかさどつていた祭司エリアシブは、トビヤと縁組したので、五 トビヤのために大きなへやを備えた。そのへやはもと、素祭の物、乳香、器物および規定によつてレビびと、歌うたう者および門を守る者たちに与える穀物、ぶどう酒、油の十分の一、ならびに祭司のためのささげ物を置いた所である。六 その当時、わたしはエルサレムにいなかった。わたしはバビロンの王アルタシャスタの三十二年に王の所へ行つたが、しばらくたつて王にいとまを請ひ、セエルサレムに来て、エリアシブがトビヤのためにした悪事、すなわち彼のために神の宮の庭に一つのへやを備えたことを発見した。ハ わたしは非常に怒り、トビヤの家の器物をことごとくそのへやから投げだし、九 命じて、すべてのへやを清めさせ、そして神の宮の器物および素祭、乳香などを再びそこに携え入れた。

一〇 わたしはまたレビびとがその受くべき分を与えられていなかったことを知った。これがためにその務をなすレビびとおよび歌うたう者たちは、おのおの自分の畑に逃げ帰つた。二 それ

でわたしはつかさたちを責めて言つた、「なぜ神の宮を捨てさせたのか」。そしてレビびとを招き集めて、その持ち場に復帰させた。三 そこでユダの人々は皆、穀物、ぶどう酒、油の十分の一を倉に携えてきた。四 わたしは祭司シレミヤ、学者ザドクおよびレビびとベダヤを倉のつかさとし、またマツタニヤの子ザツクルの子ハナンをその助手として倉をつかさどらせた。彼らは忠実な者と思われたからである。彼らの任務は兄弟たちに分配する事であつた。五 わが神よ、この事のためにわたしを覚えてください。わが神の宮とその勤めのためにわたしが行った良きわざをぬぐい去らないでください。

六 そのころわたしはユダのうちで安息日に酒ぶねを踏む者、麦束を持つてきて、ろばに負わす者、またぶどう酒、ぶどう、いちじくおよびさまざまな荷を安息日にエルサレムに運び入れる者を見たので、わたしは彼らが食物を売つていたその日に彼らを戒めた。七 六そこに住んでいたツロの人々もまた魚およびさまざまな品物を持つてきて、安息日にユダの人々に売り、エルサレムで商売した。八 そこでわたしはユダの尊い人々を責めて言つた、「あなたがたはなぜこの悪事を行つて、安息日を汚すのか。九 あなたがたの先祖も、このように行つたので、われわれの神はこのすべての災を、われわれとこの町に下されたではないか。ところがあなたがたは安息日を汚して、さらに大いなる怒りをイスラエルの上に招くのである」。

一九そこで安息日の前に、エルサレムのもろもろの門が暗くなり始めた時、わたしは命じてそのとびらを閉じさせ、安息日が終るまでこれを開いてはならないと命じ、わたしのしもべ数人を門に置いて、安息日に荷を携え入れさせないようにした。二〇これがために、商人およびさまざまの品物売る者どもは一、二回エルサレムの外に宿った。二一わたしは彼らを戒めて言った、「あなたがたはなぜ城壁の前に宿るのか。もしあなたがたが重ねてそのようなことをするならば、わたしはあなたがたを処罰する」と。そのとき以来、彼らは安息日にはこなかった。二三わたしはまたレビびとに命じて、その身を清めさせ、来て門を守らせて、安息日を聖別した。わが神よ、わたしのためにまた、このことを覚え、あなたの大きいないくしきをもつて、わたしをあわれんでください。

二四そのころまた、わたしはアシドド、アンモン、モアブの女をめぐらしたユダヤ人を見た。二五彼らの子供の半分はアシドドの言葉を語って、ユダヤの言葉を語ることができず、おのおのその母親の出た民の言葉を語った。二六わたしは彼らを責め、またののしり、そのうちの数人を撃つて、その毛を抜き、神の名をさして誓わせて言った、「あなたがたは彼らのむすこに自分の娘を与えてはならない。またあなたがたのむすこ、またはあなたがた自身のために彼らの娘をめぐらしてはならない。二七イスラエルの王ソロモンはこれらのことによつて罪を犯したではないか。

彼のような王は多くの国民のうちにもなく、神に愛せられた者である。神は彼をイスラエル全国の王とせられた。ところが異邦の女たちは彼に罪を犯させた。二八それゆえあなたがたが異邦の女をめぐり、このすべての大いなる悪を行つて、われわれの神に罪を犯すのを、われわれは聞き流しにしておけようか」。二九大祭司エリアシブの子ヨイアダのひとりの子はホロニびとサンバラテの婿であつたので、わたしは彼をわたしのところから追い出した。三〇わが神よ、彼らのことを覚えてください。彼らは祭司の職を汚し、また祭司およびレビびとの契約を汚しました。

三〇このように、わたしは彼らを清めて、異邦のものをことごとく捨てさせ、祭司およびレビびとの務を定めて、おのおのそのわざにつかせた。三一また定められた時に、たぎの供え物をささげさせ、また初物をささげさせた。わが神よ、わたしを覚え、わたしをお恵みください。

エステル記

第一章

一 アハシユエロスすなわちインドからエチオピアまで百二十七州を治めたアハシユエロスの世、ニアハシユエロス王が首都ササで、その国の位に座していたころ、三その治世の第三年に、彼はその大臣および侍臣たちのために酒宴を設けた。ペルシャとメディアの將軍および貴族ならびに諸州の大臣たちがその前にいた。四その時、王はその盛んな国の富と、その王威の輝きと、はなやかさを示して多くの日を重ね、百八十日に及んだ。五これらの日が終った時、王は王の宮殿の園の庭で、首都ササにいる大小のすべての民のために七日の間、酒宴を設けた。六そこには白綿布の垂幕と青色のとばりとがあつて、紫色の細布のひもで銀の輪および大理石の柱につながれていた。また長いすは金銀で作られ、石膏と大理石と真珠貝および宝石の切りはめ細工の床の上に置かれていた。七酒は金の杯で賜わり、その杯はそれぞれ違ったもので、王の大きな度量にふさわしく、王の用いる酒を惜しみなく賜わった。八その飲むことは法にかなひ、だれもしいられることはなかつた。これは王が人々におのおの自分の好むようにさせよと宮廷のすべての役人に命じておいたからである。九王妃ワシテもまたアハシユエロス王に属する王宮

の内で女たちのために酒宴を設けた。

一〇七日目にアハシユエロス王は酒のために心が楽しくなり、王の前に仕える七人の侍従メホマン、ビズタ、ハルボナ、ビグタ、アバグタ、ゼタルおよびカルカスに命じて、二王妃ワシテに王妃の冠をかぶらせて王の前にこさせよと言った。これは彼女が美しかったので、その美しさを民らと大臣たちに見せるためであつた。三ところが、王妃ワシテは侍従が伝えた王の命令に従つて来ることを拒んだので、王は大いに憤り、その怒りが彼の内に燃えた。

三そこで王は時を知っている知者に言った、――王はすべて法律と審判に通じている者に相談するのを常とした。一四時に王の次にいた人々はペルシャおよびメディアの七人の大臣カルシナ、セタル、アデマタ、タルシシ、メレス、マルセナ、メムカンであつた。彼らは皆王の顔を見る者で、国の首位に座する人々であつた。――五「王妃ワシテは、アハシユエロス王が侍従をもつて伝えた命令を行わないゆえ、法律に従つて彼女にどうしたらよからうか。」六メムカンは王と大臣たちの前で言った、「王妃ワシテはただ王にむかつて悪い事をしたばかりでなく、すべての大臣およびアハシユエロス王の各州のすべての民にむかつてもしたのです。七王妃のこの行いはあまねくすべての女たちに聞えて、彼らはついにその目に夫を卑しめ、『アハシユエロス王は王妃ワシテに、彼の前に来るように命じたがこな

第二章

かった』と言うでしよう。一ハ王妃のこの行いを聞いたペルシャ
 とメディアの大いじん、夫人たちもまた、今日、王のすべての大臣たち
 にこのように言うでしよう。そうすれば必ず卑しめと怒りが多
 く起ります。二もし王がよしとされるならば、ワシテはこの
 後、再びアハシエロス王の前にきてはならないという王の
 命令を下し、これをペルシャとメディアの法律の中に書き入れて
 変ることのないようにし、そして王妃の位を彼女にまさる他の
 者に与えなさい。三王の下される詔がこの大きな国にあまね
 く告げ示されるとき、妻たる者はことごとく、その夫を高下の別
 なく共に敬うようになるでしよう。四王と大臣たちはこの
 言葉によしとしたので、王はメムカンの言葉のとおりに行つ
 た。五王は王の諸州にあまねく書を送り、各州にはその文字
 にしたがひ、各民族にはその言語にしたがつて書き送り、すべて
 男子たる者はその家の主となるべきこと、また自分の民の言語
 を用いて語るべきことをさとした。

一これらのことの後、アハシエロス王の怒りがとけ、王はワシ
 テおよび彼女のしたこと、また彼女に対して定めたことを思い
 起した。二時に王に仕える侍臣たちは言った、「美しい若い処女
 たちを王のために尋ね求めましよう。三どうぞ王はこの国の

各州において役人を選び、美しい若い処女をことごとく首都ス
 サにある婦人の居室に集めさせ、婦人をつかさどる王の侍従ヘ
 ガイの管理のもとにおいて、化粧のための品々を彼らに与えて
 ください。四こうして御意にかなうおとめをとつて、ワシテの代
 りに王妃としてください。王はこの事をよしとし、そのように
 行つた。

五さて首都スサにひとりのユダヤ人がいた。名をモルデカイと
 いい、キシのひこ、シメイの孫、ヤイルの子で、ベニヤミンびと
 であった。六彼はバビロンの王ネブカデネザルが捕えていつた
 ユダの王エコニヤと共に捕えられていつた捕虜のひとりで、エ
 ルサレムから捕え移された者である。七彼はそのおじの娘ハ
 ダッサすなわちエステルを養ひ育てた。彼女には父も母もな
 かつたからである。このおとめは美しく、かわいらしかつたが、
 その父母の死後、モルデカイは彼女を引きとつて自分の娘とし
 たのである。八王の命令と詔が伝えられ、多くのおとめが首都
 スサに集められて、ヘガイの管理のもとにおかれたとき、エステ
 ルもまた王宮に携え行かれ、婦人をつかさどるヘガイの管理の
 もとにおかれた。九このおとめはヘガイの心になつて、そのい
 つくしみを得た。すなわちヘガイはすみやかに彼女に化粧の
 品々および食物の分け前を与え、また宮中から七人のすぐれ
 た侍女を選んで彼女に付き添わせ、彼女とその侍女たちを婦人
 の居室のうちの最も良い所に移した。一〇エステルは自分の民

のことをも、自分の同族のことをも人に知らせなかった。モルデカイがこれを知らずなど彼女に命じたからである。二モルデカイはエステルの様子および彼女がどうしているかを知ろうと、毎日婦人の居室の庭の前を歩いた。

三おとめたちはおの婦人のための規定にしたがつて十二か月を経て、順番にアハシエロス王の所へ行くのであった。これは彼らの化粧の期間として、没薬の油を用いること六か月、香料および婦人の化粧に使う品々を用いること六か月が定められていたからである。四こうしておとめは王の所へ行くのであった。そしておとめが婦人の居室を出て王宮へ行く時には、すべてその望む物が与えられた。五そして夕方行つて、あくる朝第二の婦人の居室に帰り、そばめたちをつかさどる王の侍従シャシガズの管理に移された。王がその女を喜び、名ざして召すのでなければ、再び王の所へ行くことはなかった。五さてモルデカイのおじアビハイルの娘、すなわちモルデカイが引きとつて自分の娘としたエステルが王の所へ行く順番となつたが、彼女は婦人をつかさどる王の侍従ヘガイが勧めた物のほか何をも求めなかった。エステルはすべて彼女を見る者に喜ばれた。六エステルがアハシエロス王に召されて王宮へ行つたのは、その治世の第七年の十月、すなわちテベテの月であつた。七王はすべての婦人にまさつてエステルを愛したので、彼女はすべての処女にまさつて王の前に恵みといつくしみ

とを得た。王はついに王妃の冠を彼女の頭にいただかせ、ワシテに代つて王妃とした。八そして王は大いなる酒宴を催して、すべての大臣と侍臣をもてなした。エステルの酒宴がこれである。また諸州に免税を行い、王の大きな度量にしたがつて贈り物を与えた。

九二度目に処女たちが集められたとき、モルデカイは王の門にすわつていた。一〇エステルはモルデカイが命じたように、まだ自分の同族のことをも自分の民のことをも人に知らせなかった。エステルはモルデカイの言葉に従うこと、彼に養ひ育てられた時と少しも変らなかつた。二そのころ、モルデカイが王の門にすわつていた時、王の侍従で、王のへやの戸を守る者のうちのビグタンとテレシのふたりが怒りのあまりアハシエロス王を殺そうとねらつていたが、三その事がモルデカイに知れたので、彼はこれを王妃エステルに告げ、エステルはこれをモルデカイの名をもつて王に告げた。四その事が調べられて、それに相違ないことがあらわれたので、彼らふたりは木にかけられた。この事は王の前で日誌の書にかきしるされた。

第三章

一これらの事のの後、アハシエロス王はアガブとハンメダタの子ハマンを重んじ、これを昇進させて、自分と共にいるすべ

ての大臣たちの上にその席を定めさせた。二王の門の内にいる王の侍臣たちは皆ひざまずいてハマンに敬礼した。これは王が彼についてこうすることを命じたからである。しかしモルデカイはひざまずかず、また敬礼しなかった。三そこで王の門にいる王の侍臣たちはモルデカイにむかつて、「あなたはどうして王の命令にそむくのか」と言った。四彼らは毎日モルデカイにこう言うけれども聞きいれなかった。その事がゆるされるかどうかを見ようと、これをハマンに告げた。なぜならモルデカイはすでに自分のユダヤ人であることを彼らに語ったからである。五ハマンはモルデカイのひざまずかず、また自分に敬礼しないのを見て怒りに満たされたが、ただモルデカイだけを殺すことを潔しとしなかった。彼らがモルデカイの属する民をハマンに知らせたので、ハマンはアハシエロスの国のうちにいるすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの属する民をことごとく滅ぼそうと図った。

セアハシエロス王の第十二年の正月すなわちニサンの月に、ハマンの前で、十二月すなわちアダル月の月まで、一日一日のため、一月一月のために、プルすなわちくじを投げさせた。ハそしてハマンはアハシエロス王に言った、「お国の各州にいる諸民のうちに、散らされて、別れ別れになっている一つの民がいます。その法律は他のすべての民のものと異なり、また彼らは王の法律を守りません。それゆえ彼らを許しておくことは王の

ためになりません。九もし王がよしとされるならば、彼らを滅ぼせと詔をお書きください。そうすればわたしは王の事をつかさどる者たちの手に銀一万タラントを量りわたして、王の金庫に入れさせましょう」。一〇そこで王は手から指輪をはずし、アガブとハンメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマンにわたした。二そして王はハマンに言った、「その銀はあなたに与える。その民もまたあなたに与えるから、よいと思うようにしなさい」。

三そこで正月の十三日に王の書記官が召し集められ、王の総督、各州の知事および諸民のつかさたちにハマンが命じたことをことごとく書きしるした。すなわち各州に送るものにはその文字を用い、諸民に送るものにはその言語を用い、おのおののアハシエロス王の名をもつてそれを書き、王の指輪をもつてそれに印を押した。三そして急使をもつてその書を王の諸州に送り、十二月すなわちアダル月の十三日に、一日のうちにすべてのユダヤ人を、若い者、老いた者、子供、女の別なく、ことごとく滅ぼし、殺し、絶やし、かつその貨財を奪い取れと命じた。四この文書の写しを詔として各州に伝え、すべての民に公示して、その日のために備えさせようとした。五急使は王の命令により急いで出ていった。この詔は首都スサで発布された。時に王とハマンは座して酒を飲んでいたが、スサの都はあわて惑った。

第四章

一モルデカイはすべてこのなされたことを知ったとき、その衣を裂き、荒布をまとい、灰をかぶり、町の中へ行つて大声をあげ、激しく叫んで、二王の門の入口まで行つた。荒布をまといては王の門の内にはいることができないからである。三すべて王の命令と詔をうけ取つた各州ではユダヤ人のうちに大いなる悲しみがあり、断食、嘆き、叫びが起り、また荒布をまとい、灰の上に座する者が多かつた。

四エステルの侍女たちおよび侍従たちがきて、この事を告げたので、王妃は非常に悲しみ、モルデカイに着物を贈り、それを着せて、荒布を脱がせようとしたが受けなかつた。五そこでエステルは王の侍従のひとりで、王が自分にはべらせたハタクを召し、モルデカイのもとへ行つて、それは何事であるか、何ゆえであるかを尋ねて来るようにと命じた。ハハタクは出て、王の門の前にある町の広場にいるモルデカイのもとへ行くと、モルデカイは自分の身に起つたすべての事を彼に告げ、かつハマンがユダヤ人を滅ぼすことのために王の金庫に量り入れると約束した銀の正確な額を告げた。ハまた彼らを滅ぼさせるために、スサで発布された詔書の写しを彼にわたし、それをエステルに見せ、かつ説きあかし、彼女が王のもとへ行つてその民のために王のあわれみを請い、王の前に願い求めるように彼女に言い伝えよ

と言つた。九ハタクが歸つてきてモルデカイの言葉をエステルに告げたので、一〇エステルはハタクに命じ、モルデカイに言葉を伝えさせて言つた、二「王の侍臣および王の諸州の民は皆、男でも女でも、すべて召されなければならぬという一つの法律のあることを知っています。ただし王がその者に金の笏を伸べれば生きることができのです。しかしわたしはこの三十日の間、王のもとへ行くべき召をこうむらないのです」。三エステルの言葉をモルデカイに告げたので、四「モルデカイは命じてエステルに答えさせて言つた、五「あなたは王宮にいるゆえ、すべてのユダヤ人と異なり、難を免れるだろうと思つてはならない。一四あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救がユダヤ人のために起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。あなたがこの国に迎えられるのは、このような時のためでなかつたのだれが知りましょう」。一五そこでエステルは命じてモルデカイに答えさせた、一六「あなたは行つてスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。三日のあいだ夜も昼も食ひ飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがあつた死なねばならないのなら、死にます」。一七モルデカイは行つて、エステルがすべて自分に命じた

とおりに行った。

第五章

一三日目にエステルは王妃の服を着、王宮の内庭に入り、王の広間にむかつて立った。王は王宮の玉座に座して王宮の入口にむかつていたが、ニ王妃エステルが庭に立つているのを見て彼女に恵みを示し、その手にある金の笏をエステルの方に伸ばしたので、エステルは進みよってその笏の頭にさわった。三王は彼女に言った、「王妃エステルよ、何を求めるのか。あなたの願いは何か。国の半ばでもあなたに与えよう」。四エステルは言った、「もし王がよしとされるならば、きょうわたしが王のために設けた酒宴に、ハマンとご一緒に臨みください」。五そこで王は「ハマンを速く連れてきて、エステルの言うようにせよ」と言い、やがて王とハマンはエステルの設けた酒宴に臨んだ。六酒宴の時、王はエステルに言った、「あなたの求めることは何か。必ず聞かれる。あなたの願いは何か。国の半ばでも聞きとどけられる」。七エステルは答えて言った、「わたしの求め、わたしの願いはこれです。ハもしわたしが王の目の前に恵みを得、また王がもしわたしの求めを許し、わたしの願いを聞きとどけるのをよしとされるならば、ハマンとご一緒に、あすまた、わたしが設けようとする酒宴に、お臨みください。わたしはあす王のお言葉

どおりにいたしましょう」。

九こうしてハマンはその日、心に喜び樂しんで出てきたが、ハマンはモルデカイが王の門にいて、自分にむかつて立ちあがりもせず、また身動きもしないのを見たので、モルデカイに對し怒りに満たされた。一〇しかしハマンは耐え忍んで家に帰り、人をやつてその友だちおよび妻ゼレシを呼んでこさせ、一そしてハマンはその富の榮華と、そのむすこたちの多いことと、すべて王が自分を重んじられたこと、また王の大臣および侍臣たちにまさって自分を昇進させられたことを彼らに語った。二ハマンはまた言った、「王妃エステルは酒宴を設けたが、わたしのほかはだれも王と共にこれに臨ませなかった。あすもまたわたしは王と共に王妃に招かれている。三しかしユダヤ人モルデカイが王の門に座しているのを見る間は、これらの事もわたしには樂しくない」。四その時、妻ゼレシとすべての友は彼に言った、「高き五十キュビトの木を立てさせ、あすの朝、モルデカイをその上に掛けるように王に申し上げなさい。そして王と一緒に樂しんでその酒宴においでなさい」。ハマンはこの事をよしとして、その木を立てさせた。

第六章

一その夜、王は眠ることができなかつたので、命じて日々の事を

しるした記録の書を持つてこさせ、王の前で読ませたが、ニその中に、モルデカイがかつて王の侍従で、王のへやの戸を守る者のうちのビグタナとテレシのふたりが、アハシエロス王を殺そうとねらっていることを告げた、とされるのを見いだした。ミそこで王は言った、「この事のために、どんな榮譽と爵位をモルデカイに与えたか」。王に仕える侍臣たちは言った、「何も彼に与えていません」。四王は言った、「庭にゐるのはだれか」。この時ハマンはモルデカイのために設けた木にモルデカイを掛けることを王に申し上げようと王宮の外庭にはいつてきていた。五王の侍臣たちが「ハマンが庭に立つています」と王に言ったので、王は「ここへ、はいらせよ」と言った。六やがてハマンがはいって来ると王は言った、「王が榮譽を与えようと思う人にはどうしたらよからうか」。ハマンは心のうちに言った、「王はわたし以外にだれに榮譽を与えようと思われるだろうか」。セハマンは王に言った、「王が榮譽を与えようと思われる人のためには、ハ王の着られた衣服を持つてこさせ、また王の乗られた馬すなわちその頭に王冠をいただいた馬をひいてこさせ、九その衣服と馬とを王の最も尊い大臣のひとりの手にわたして、王が榮譽を与えようと思われる人にその衣服を着させ、またその人を馬に乗せ、町の広場を導いて通らせ、『王が榮譽を与えようと思う人にはこうするのだ』とその前に呼ばわらせなさい」。一〇それで王はハマンに言った、「急いであなたが言ったように、そ

の衣服と馬とを取り寄せ、王の門に座しているユダヤ人モルデカイにそうしなさい。あなたが言ったことを一つも欠いてはならない」。一そこでハマンは衣服と馬とを取り寄せ、モルデカイにその衣服を着せ、彼を馬に乗せて町の広場を通らせ、その前に呼ばわって、「王が榮譽を与えようと思う人にはこうするのだ」と言った。

二こうしてモルデカイは王の門に帰ってきたが、ハマンは憂え悩み、頭をおおつて急いで家に帰った。三そしてハマンは自分の身に起つた事をことごとくその妻ゼレシと友だちに告げた。するとその知者たちおよび妻ゼレシは彼に言った、「あのモルデカイ、すなわちあなたがその人の前に敗れ始めた者が、もしユダヤ人の子孫であるならば、あなたは彼に勝つことはできない。必ず彼の前に敗れるでしょう」。

四彼らがなおハマンと話している時、王の侍従たちがきてハマンを促し、エステルが設けた酒宴に臨ませた。

第七章

一王とハマンは王妃エステルの酒宴に臨んだ。二このふつか目の酒宴に王はまたエステルに言った、「王妃エステルよ、あなたの求めることは何か。必ず聞かれる。あなたの願いは何か。国の半ばでも聞きとどけられる」。三王妃エステルは答えて言っ

た、「王よ、もしわたしが王の目の前に恵みを得、また王がもしよしとされるならば、わたしの求めにしたがってわたしの命をわたしに与え、またわたしの願いにしたがってわたしの民をわたしに与えてください。四 わたしとわたしの民は売られて滅ぼされ、殺され、絶やされようとしています。もしわたしたちが男女の奴隷として売られただけなら、わたしは黙っていたでしょう。わたしたちの難儀は王の損失とは比較にならないからです。五 アハシユエロス王は王妃エステルに言った、「そんな事をしようとは心にたくらんでいる者はだれか。またどこにいるのか」。六 エステルは言った、「そのあだ、その敵はこの悪いハマンです」。そこでハマンは王と王妃の前に恐れおののいた。七 王は怒って酒宴の席を立ち、宮殿の園へ行ったが、ハマンは残って王妃エステルに命ごいをした。彼は王が自分に害を加えようと定めたのを見たからである。八 王が宮殿の園から酒宴の場所に帰ってみると、エステルのいた長いすの上にハマンが伏していたので、王は言った、「彼はまたわたしの家で、しかもわたしの前で王妃をはずかしめようとするのか」。この言葉が王の口から出たとき、人々は、ハマンの顔をおおった。九 その時、王に付き添っていたひとりの侍従ハルボナが「王のためによい事を告げたあのモルデカイのためにハマンが用意した高さ五十キユビトの木がハマンの家に立っています」と言ったので、王は「彼をそれに掛けよ」と言った。一〇 そこで人々はハマンをモルデカイ

のために備えてあつたその木に掛けた。こうして王の怒りは和らいだ。

第八章

一 その日アハシユエロス王は、ユダヤ人の敵ハマンの家を王妃エステルに与えた。モルデカイは王の前にきた。これはエステルが自分とモルデカイがどんな関係の者であるかを告げたからである。二 王はハマンから取り返した自分の指輪をはずして、モルデカイに与えた。エステルはモルデカイにハマンの家を管理させた。

三 エステルは再び王の前に奏し、その足もとにひれ伏して、アガグびとハマンの陰謀すなわち彼がユダヤ人に対して企てたその計画を除くことを涙ながらに請い求めた。四 王はエステルにむかつて金の笏を伸べたので、エステルは身を起して王の前に立ち、五 そして言った、「もし王がよしとされ、わたしが王の前に恵みを得、またこの事が王の前に正しいと見え、かつわたしが王の目にかなうならば、アガグびとハンメダタの子ハマンが王の諸州にいるユダヤ人を滅ぼそうとはかつて書き送った書を取り消す旨を書かせてください。六 どうしてわたしは、わたしの民に臨もうとする災を、だまつて見ていることができましようか。七 どうしてわたしの同族の滅びるのを、だまつて見ていることが

できましようか」。セアハシエロス王は王妃エステルとユダヤ人モルデカイに言った、「ハマンがユダヤ人を殺そうとしたので、わたしはハマンの家をエステルに与え、またハマンを木に掛けさせた。ハあなたがたは自分たちの思うままに王の名をもってユダヤ人についての書をつくり、王の指輪をもってそれに印を押すがい。王の名をもって書き、王の指輪をもって印を押した書はだれも取り消すことができない」。

その時王の書記官が召し集められた。それは三月すなわちシワンの月の二十三日であった。そしてインドからエチオピアまでの百二十七州にいる総督、諸州の知事および大臣たちに、モルデカイがユダヤ人について命じたとおりに書き送った。すなわち各州にはその文字を用い、各民族にはその言語を用いて書き送り、ユダヤ人に送るものにはその文字と言語を用いた。○その書はアハシエロス王の名をもって書かれ、王の指輪をもって印を押し、王の御用馬として、そのうまやに育った早馬に乗る急使によって送られた。○その中で、王はすべての町にいるユダヤ人に、彼らが相集まって自分たちの生命を保護し、自分たちを襲おうとする諸国、諸州のすべての武装した民を、その妻子もろともに滅ぼし、殺し、絶やし、かつその貨財を奪い取ることを許した。○三ただしこの事をアハシエロス王の諸州において、十二月すなわちアダルの月の十三日に、一日のうちにいうことを命じた。○三この書いた物の写しを詔として各州に伝

え、すべての民に公示して、ユダヤ人に、その日のために備えて、その敵にあだをかえさせようとした。○四王の御用馬である早馬に乗った急使は、王の命によって急がされ、せきたてられて出て行った。この詔は首都ササで出された。○五モルデカイは青と白の朝服を着、大きな金の冠をいただき、紫色の細布の上着をまとい王の前から出て行った。ササの町中、声をあげて喜んだ。○六ユダヤ人には光と喜びと楽しみと誉があった。○七いずれの州でも、いずれの町でも、すべて王の命令と詔の伝達された所では、ユダヤ人は喜び楽しみ、酒宴を開いてこの日を祝日とした。そしてこの国の民のうち多くの者がユダヤ人となった。これはユダヤ人を恐れる心が彼らのうちに起ったからである。

第九章

○十二月すなわちアダルの月の十三日、王の命令と詔の行われる時が近づいたとき、すなわちユダヤ人の敵が、ユダヤ人を打ち伏せようと望んでいたのに、かえってユダヤ人が自分たちを憎む者を打ち伏せることとなったその日に、○二ユダヤ人はアハシエロス王の各州にある自分たちの町々に集まり、自分たちに害を加えようとする者を殺そうとしたが、だれもユダヤ人に逆らうことのできるものはなかった。すべての民がユダヤ人を

恐れたからである。三 諸州の大臣、総督、知事および王の事をつかさどる者は皆ユダヤ人を助けた。彼らはモルデカイを恐れたからである。四 モルデカイは王の家で大いなる者となり、その名声は各州に聞えわたった。この人モルデカイがますます勢力ある者となったからである。五 そこでユダヤ人はつるぎをもつてすべての敵を撃つて殺し、滅ぼし、自分たちを憎む者に対し心のままに行つた。六 ユダヤ人はまた首都スサにおいても五百人を殺し、滅ぼした。七 またパルシヤンダタ、ダルボン、アスパタ、ハボラタ、アダリヤ、アリダタ、九 パルマシタ、アリサイ、アリダイ、ワエザタ、一〇 すなわちハンメダタの子で、ユダヤ人の敵であるハマンの十人の子をも殺した。しかし、そのぶんどり物には手をかけなかった。

二 その日、首都スサで殺された者の数が王に報告されると、三 王は王妃エステルに言つた、「ユダヤ人は首都スサで五百人を殺し、またハマンの十人の子を殺した。王のその他の諸州ではどんなに彼らは殺したことであろう。さてあなたの求めることは何か。必ず聞かれる。更にあなたの願いは何か。必ず聞きとどけられる」。三 エステルは言つた、「もし王がよしとされるならば、どうぞスサにいるユダヤ人にあすも、きょうの詔のように行うことをゆるしてください。かつハマンの十人の子を木に掛けさせてください」。四 王はそうせよと命じたので、スサにおいて詔が出て、ハマンの十人の子は木に掛けられた。五 ア

ダルの月の十四日にまたスサにいるユダヤ人が集まり、スサで三百人を殺した。しかし、そのぶんどり物には手をかけなかった。

六 王の諸州にいる他のユダヤ人もまた集まって、自分たちの生命を保護し、その敵に勝つて平安を得、自分たちを憎む者七万五千人を殺した。しかし、そのぶんどり物には手をかけなかった。七 これはアダルの月の十三日であつて、その十四日に休んで、その日を酒宴と喜びの日とした。八 しかしスサにいるユダヤ人は十三日と十四日に集まり、十五日に休んで、その日を酒宴と喜びの日とした。九 それゆえ村々のユダヤ人すなわち城壁のない町々に住む者はアダルの月の十四日を喜びの日、酒宴の日、祝日とし、互に食べ物を贈る日とした。

一〇 モルデカイはこれらのことを書きしるしてアハシユエロス王の諸州にいるすべてのユダヤ人に、近い者にも遠い者にも書を送り、一 アダルの月の十四日と十五日とを年々祝うことを命じた。二三 すなわちこの両日にユダヤ人がその敵に勝つて平安を得、またこの月は彼らのために憂いから喜びに変わり、悲しみから祝日に変つたので、これらを酒宴と喜びの日として、互に食べ物を贈り、貧しい者に施しをする日とせよとした。

二三 そこでユダヤ人は彼らがすでに始めたように、またモルデカイが彼らに書き送つたように、行うことを約束した。二四 これはアガギとハンメダタの子ハマン、すなわちすべてのユダヤ人

の敵がユダヤ人を滅ぼそうとはかり、プルすなわちくじを投げて彼らを絶やし、滅ぼそうとしたが、二五エステルが王の前にきたとき、王は書を送つて命じ、ハマンがユダヤ人に対して企てたその悪い計画をハマンの頭上に臨ませ、彼とその子らを木に掛けさせたからである。二六このゆえに、この両日をプルの名にしたがつてプリムと名づけた。そしてこの書のすべての言葉により、またこの事について見たところ、自分たちの会ったところによつて、ニモユダヤ人は相定め、年々その書かかれているところにしたがい、その定められた時にしたがつて、この両日を守り、自分たちと、その子孫およびすべて自分たちにつらなる者はこれを行ひ続けて廃することなく、二八この両日を、代々、家々、州々、町々において必ず覚えて守るべきものとし、これらのプリムの日がユダヤ人のうちに絶えられないようにし、またこの記念がその子孫の中に絶えることのないようにした。二九さらにアビハイルの娘である王妃エステルとユダヤ人モルデカイは、権威をもつてこのプリムの第二の書を書き、それを確かめた。三〇そしてアハシユエロスの国の百二十七州にいるすべてのユダヤ人に、平和と真実の言葉をもつて書を送り、三二断食と悲しみのことについて、ユダヤ人モルデカイと王妃エステルが、かつてユダヤ人に命じたように、またユダヤ人たちが、かつて自分たちとその子孫のために定めたように、プリムのこれらの日をその定めた時に守らせた。三三エステルの命令はプ

リムに関するこれらの事を確定した。またこれは書にしるされた。

第二〇章

一アハシユエロス王はその国および海に沿つた国々にみつぎを課した。二彼の権力と勢力によるすべての事業、および王がモルデカイを高い地位にのぼらせた事の詳しい話はメディアとベルシャの王たちの日誌の書にしるされているではないか。三ユダヤ人モルデカイはアハシユエロス王に次ぐ者となり、ユダヤ人の中にあつて大いなる者となり、その多くの兄弟に喜ばれた。彼はその民の幸福を求め、すべての国民に平和を述べたからである。

ヨブ記

第一章

「ウヅの地にヨブという名の人があつた。そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった。二彼に男の子七人と女の子三人があり、三その家畜は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭で、しもべも非常に多く、この人は東の人々のうちで最も大いなる者であつた。四そのむすこたちは、めいめい自分の日に、自分の家でふるまいを設け、その三人の姉妹をも招いて一緒に食い飲みするのを常とした。五そのふるまいの日がひとめぐり終るごとに、ヨブは彼らを呼び寄せて聖別し、朝早く起きて、彼らすべての数にしたがつて燔祭をささげた。これはヨブが「わたしのむすこたちは、ことによつたら罪を犯し、その心に神をのろつたかもしれない」と思つたからである。ヨブはいつも、このように行つた。

六ある日、神の子たちが来て、主の前に立つた。サタンも来てその中にいた。七主は言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンは主に答えて言つた、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。八主はサタンに言われた、「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか」。九サタンは主に答えて言つた、「ヨブ

はいたずらに神を恐れましようか。一〇あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられたではありませんか。あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。一しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃つてごらんさい。彼は必ずあなたの顔に向かつて、あなたをのろうでしょう。二主はサタンに言われた、「見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない」。サタンは主の前から出て行つた。

三ある日ヨブのむすこ、娘たちが第一の兄の家で食事をし、酒を飲んでいたとき、四使者がヨブのもとに来て言つた、「牛が耕し、ろばがそのかたわらで草を食つていると、一五シバびどが襲つてきて、これを奪い、つるぎをもつてもべたちを打ち殺しました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ました」。一六彼がなお語つているうちに、またひとりが来て言つた、「神の火が天から下つて、羊およびしもべたちを焼き滅ぼしました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ました」。一七彼がなお語つているうちに、またひとりが来て言つた、「カルデヤびどが三組に分れて来て、らくだを襲つてこれを奪い、つるぎをもつてもべたちを打ち殺しました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ました」。一八彼がなお語つているうちに、またひとりが来て言つた、

「あなたのむすこ、娘たちが第一の兄の家で食事をし、酒を飲んでいると、一九荒野の方から大風が吹いてきて、家の四すみを撃ったので、あの若い人たちの上につぶれ落ちて、皆死にました。わたしはただひとりのがれて、あなたに告げるために来ました」。

三〇このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、三そして言った、

「わたしは裸で母の胎を出た。

また裸でかしこに帰ろう。

主が与え、主が取られたのだ。

主の名はほむべきかな」。

三三すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、また神に向かつて愚かなことを言わなかった。

第二章

一ある日、また神の子たちが来て、主の前に立った。サタンもまたその中に来て、主の前に立った。主はサタンに言われた、「あなたはどこから来たか」。サタンは主に答えて言った、「地を行きめぐり、あちらこちら歩いてきました」。主はサタンに言われた、「あなたは、わたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にないことを気づいたか。あ

なたは、わたしを勧めて、ゆえなく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお堅く保って、おのれを全うした」。四サタンは主に答えて言った、「皮には皮をもつてします。人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。五しかしいま、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃つてごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」。六主はサタンに言われた、「見よ、彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ」。

七サタンは主の前から出て行って、ヨブを撃ち、その足の裏から頭の頂まで、いやな腫物をもつて彼を悩ました。八ヨブは陶器の破片を取り、それで自分の身をかき、灰の中にすわった。九時にその妻は彼に言った、「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい」。一〇しかしヨブは彼女に言った、「あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」。すべてこの事においてヨブはそのくちびるをもつて罪を犯さなかった。

二時に、ヨブの三人の友がこのすべての災のヨブに臨んだのを聞いて、めいめい自分の所から尋ねて来た。すなわちテマンびとエリパズ、シユヒびとビルダデ、ナアマびとゾパルである。彼らはヨブをいたわり、慰めようとして、たがいに約束してきたのである。三彼らは目をあげて遠方から見たが、彼のヨブであ

ることを認めたいほどであつたので、声をあげて泣き、めいめい自分の上着を裂き、天に向かつて、ちりをうちあげ、自分たちの頭の上にまき散らした。三こうして七日七夜、彼と共に地に座して、ひと言も彼に話しかける者がなかつた。彼の苦しみは非常に大きいのを見たからである。

第三章

一この後、ヨブは口を開いて、自分の生れた日をのろつた。二すなわちヨブは言つた、

三「わたしの生れた日は滅びうせよ。

『男の子が、胎にやどつた』と言つた夜も
そのようになれ。

四その日は暗くなるように。

神が上からこれを顧みられないように。

光がこれを照さないように。

五やみと暗黒がこれを取りもどすように。

雲が、その上にとどまるように。

日を暗くする者が、これを脅かすように。

六その夜は、暗やみが、これを捕えるように。

年の日のうちに加わらないように。

月の数にもはならないように。

七また、その夜は、はらむことのないように。
喜びの聲がそのうちに聞かれぬように。
八日をのろう者が、これをのろうように。
レビヤタンを奮い起すに巧みな者が、
これをのろうように。

九その明けの星は暗くなるように。

光を望んでも、得られないように。

また、あけぼののまぶたを見ることのないように。

一〇これは、わたしの母の胎の戸を閉じず、

また悩みをわたしの目に隠さなかつたからである。

二なにゆえ、わたしは胎から出て、死ななかつたのか。

腹から出たとき息が絶えなかつたのか。

三なにゆえ、ひぎが、わたしを受けたのか。

なにゆえ、乳ぶさがあつて、

わたしはそれを吸つたのか。

三三そうしなかつたならば、

わたしは伏して休み、眠つたであらう。

そうすればわたしは安んじており、

一四自分のために荒れ跡を築き直した

地の王たち、参議たち、

一五あるいは、こがねを持ち、

しろがねを家に満たした

君たちと一緒にいたであらう。

一六なにゆえ、わたしは人知れずおる胎児のごとく、
光を見ないみどりごのようでなかったのか。

一七かしこでは悪人も、あばれることをやめ、
うみ疲れた者も、休みを得、

一八捕われ人も共に安らかにおり、
追い使う者の声を聞かない。

一九小さい者も大きい者もそこにおり、
奴隷も、その主人から解き放される。

二〇なにゆえ、悩む者に光を賜い、
心の苦しむ者に命を賜わったのか。

二一このような人は死を望んでも来ない、
これを求めることは隠れた宝を

掘るよりも、はなはだしい。
二三彼らは墓を見いだすとき、非常に喜び楽しむのだ。

二四なにゆえ、その道の隠された人に、
神が、まがきをめぐらされた人に、光を賜わるのか。

二五わたしの嘆きはわが食物に代つて来り、
わたしのうめきは水のように流れ出る。

二六わたしの恐れるものが、わたしに臨み、
わたしの恐れおののくものが、わが身に及ぶ。

二七わたしは安らかでなく、またおだやかでない。

わたしは休みを得ない、ただ悩みのみが来る」。

第四章

一その時、テマンびとエリパズが答えて言った、

二「もし人があなたにむかつて意見を述べるならば、
あなたは腹を立てるでしょうか。

三しかしだれが黙っておれましょう。
三見よ、あなたは多くの人を教えたとし、

衰えた手を強くした。
四あなたの言葉はつまずく者をたすけ起し、

かよいひびぎを強くした。
五ところが今、この事があなたに臨むと、

あなたは耐え得ない。
この事があなたに触れると、あなたはおじ惑う。

六あなたが神を恐れていることは、
あなたのよりどころではないか。

七あなたの道の全きことは、あなたの望みではないか。
七考えてみよ、だれが罪のないのに、

滅ぼされた者があるか。
どこに正しい者で、断ち滅ぼされた者があるか。

八わたしの見た所によれば、不義を耕し、

害悪をまく者は、それを刈り取っている。

九 彼らは神のいぶきによって滅び、

その怒りの息によって消えうせる。

一〇 ししのほえる声、たけきししの声はともにやみ、
若きししのきばは折られ、

二 雄じしは獲物を得ずに滅び、
雌じしの子は散らされる。

三 さて、わたしに、言葉がひそかに臨んだ、
わたしの耳はそのささやきを聞いた。

四 三すなわち人の熟睡するころ、
夜の幻によって思い乱れている時、

五 恐れがわたしに臨んだので、おののき、
わたしの骨はことごとく震えた。

六 五時に、霊があつて、わたしの顔の前を過ぎたので、
わたしの身の毛はよだつた。

七 二六そのものは立ちどまつたが、
わたしはその姿を見わけることができなかった。

八 一つのかたちが、わたしの目の前にあつた。
わたしは静かな声を聞いた、

九 二七『人は神の前に正しくありえようか。
人はその造り主の前に清くありえようか。』

一〇 一八見よ、彼はそのしもべをさえ頼みとせず、

その天使をも誤れる者とみなされる。

一九 まして、泥の家に住む者、
ちりをその基とする者、

しみのようにつぶされる者。

二〇 彼らは朝から夕までの間に打ち砕かれ、
顧みる者もなく、永遠に滅びる。

二一 もしその天幕の綱が
彼らのうちに取り去られるなら、

ついに悟ることもなく、死にうせるではないか』

第五章

一 試みに呼んでみよ、

だれかあなたに答える者があるか。
どの聖者にあなたは頼もうとするのか。

二 確かに、憤りは愚かな者を殺し、
ねたみはあさはかな者を死なせる。

三 わたしは愚かな者の根を張るのを見た、
しかしわたしは、にわかにならず、

四 その子らは安きを得ず、
町の門でしえたげられても、これを救う者がいない。

五 その収穫は飢えた人が食べ、

いばらの中からさえ、これを奪う。

また、かわいた者はその財産をあえぎ求める。

六 苦しきは、ちりから起るものでなく、

悩みは土から生じるものでない。

七 人が生れて悩みを受けるのは、

火の子が上に飛ぶにひとしい。

ハしかし、わたしであるならば、神に求め、

神に、わたしの事をまかせる。

九 彼は大きな事をされるかたで、測り知れない、

その不思議なみわざは数えがたい。

一〇 彼は地に雨を降らせ、野に水を送られる。

二 彼は低い者を高くあげ、

悲しむ者を引き上げて、安全にされる。

三 彼は悪賢い者の計りごとを敗られる。

それで何事もその手になし遂げることとはできない。

三 彼は賢い者を、彼ら自身の悪巧みによつて捕え、

曲つた者の計りごとをくつがえされる。

四 彼らは昼も、やみに会ひ、

真昼にも、夜のように手探りする。

五 彼は貧しい者を彼らの口のつるぎから救ひ、

また強い者の手から救われる。

一六 それゆえ乏しい者に望みがあり、

不義はその口を閉じる。

一七 見よ、神に戒められる人はさいわいだ。

それゆえ全能者の懲しめを軽んじてはならない。

一八 彼は傷つけ、また包み、

撃ち、またその手をもつていやされる。

一九 彼はあなたを六つの悩みから救ひ、

七つのうちでも、災はあなたに触れることがない。

二〇 ききんの時には、あなたをあがなつて、

死を免れさせ、

いくさの時には、つるぎの力を免れさせられる。

二一 あなたは舌をもつてむち打たれる時にも、

おおい隠され、

滅びが来る時でも、恐れることはない。

二二 あなたは滅びと、ききんとを笑い、

地の獣をも恐れることはない。

二三 あなたは野の石と契約を結び、

野の獣はあなたと和らぐからである。

二四 あなたは自分の天幕の安全なことを知り、

自分の家畜のおりを見回つても、欠けた物がなく、

二五 また、あなたの子孫の多くなり、

そのすえが地の草のようになるのを知るであらう。

二六 あなたは高齢に達して墓に入る、

第六章

あたかも麦束をその季節になつて
打ち場に運びあげるようになるであらう。
二七 見よ、われわれの尋ねきわめた所はこのとおりだ。
あなたはこれを聞いて、みずから知るがよい」。

一 ヨブは答えて言つた、

二 「どうかわたしの憤りが正しく量られ、

同時にわたしの災も、はかりにかけられるように。

三 そうすれば、これは海の砂よりも重いに相違ない。

それゆえ、わたしの言葉が軽率であつたのだ。

四 全能者の矢が、わたしのうちにあり、

わたしの霊はその毒を飲み、

神の恐るべき軍勢が、わたしを襲い攻めている。

五 野ろばは、青草のあるのに鳴くであらうか。

牛は飼葉の上でうなるであらうか。

六 味のない物は塩がなくて食べられようか。

すべりひゆのしるは味があるうか。

七 わたしの食欲はこれに触れることを拒む。

これは、わたしのきらう食物のようだ。

八 どうかわたしの求めるものが獲られるように。

どうか神がわたしの望むものをくださるように。

九 どうか神がわたしを打ち滅ぼすことをよしとし、

み手を伸べてわたしを断たれるように。

一〇 そうすれば、わたしはなお慰めを得、

激しい苦しみの中にあつても喜ぶであらう。

わたしは聖なる者の言葉を

否んだことがないからだ。

二 わたしにどんな力があつて、

なお待たねばならないのか。

わたしにどんな終りがあるので、

なお耐え忍ばねばならないのか。

三 わたしの力は石の力であるのか。

わたしの肉は青銅のようであるのか。

三三 まことに、わたしのうちに助けはなく、

救われる望みは、わたしから追いやられた。

三四 その友に対するいつくしみをさし控える者は、

全能者を恐れることをすてて。

三五 わが兄弟たちは谷川のように、

過ぎ去る出水のように欺く。

一六 これは氷のために黒くなり、

そのうちに雪が隠れる。

一七 これは暖かになると消え去り、

暑あつくなるとその所ところからなくなる。

一八 隊たいしやう商みちはその道みちを転てんじ、

むなしい所ところへ行いつて滅ほろびる。

一九 テマの隊たいしやう商のぞはこれを望のぞみ、

シバの旅たびびとはこれを慕したう。

二〇 彼かれらはこれにたよつたために失望しつぽうし、

そこに来きてみて、あわてる。

二一 あなたがたは今いまわたしにはこのような者ものとなつた。

あなたがたはわたしの災難さいなんを見て恐おそれた。

二二 わたしは言いつたことがあるか、『わたしに与あたえよ』と、

あるいは『あなたがたの財産さいさんのうちから

わたしのために、まいないを贈おくれ』と、

二三 あるいは『あだの手てからわたしを救すくい出だせ』と、

あるいは『しえたげる者ものの手てから

わたしをあがなえ』と。

二四 わたしに教おしえよ、そうすればわたしは黙だまるであろう。

わたしただの誤ごつてゐる所ところをわたしに悟さとらせよ。

二五 正しい言葉ことばはいかに力ちからのあるものか。

しかしあなたがたの戒めいましめは何なにを戒めるのか。

二六 あなたがたは言葉ことばを戒めいましめうと思おもうのか。

望のぞみの絶たえた者ものの語かたることは風かぜのようなものだ。

二七 あなたがたは、みなしごのためにくじをひき、

あなたがたの友ともをさえ売うり買かひするであろう。

二八 今いま、どうぞわたしを見みられよ、

わたしはあなたがたの顔かおに向むかつて偽いつわらない。

二九 どうぞ、思おもいなおせ、まぢがつてはならない。

さらに思おもいなおせ、

わたしの義ぎは、なおわたしのうちにある。

三〇 わたしの舌したに不義ふぎがあるか。

わたしの口くちは災わざわいを

わきまえることができぬであろうか。

第七章

一 地上ちじやうの人ひとには、

激はげしい労務ろうむがあるではないか。

またその日ひは雇人やといにんの日ひのようではないか。

二 奴隸どれいが夕暮ゆうぐれを慕したうように、

雇人やといにんがその賃銀ちんぎんを望のぞむように、

三 わたしは、むなしい月つきを持もたせられ、

悩なやみの夜よるを与あたえられる。

四 わたしは寝るときに言いう、『いつ起おきるだらうか』と。

しかし夜よるは長ながく、暁あかつきまでころびまわる。

五 わたしの肉にくはうじと土つちくれとをまとい、

わたしの皮は固ま^{かた}っては、またくずれる。

六 わたしの日は機^{はた}のひよりも速^{はや}く、
望^{のぞ}みをもたずに消え去る。

七 記憶^{きおく}せよ、わたしの命は息にすぎないことを。

わたしの目は再び幸^{ふたさいわい}を見ることがない。

八 わたしを見る者^{もの}の目は、

かさねてわたしを見ることがなく、

あなたがわたしに目を向けられても、

わたしはいない。

九 雲^{くも}が消えて、なくなるように、

陰府^{よみくた}に下る者は上がつて来ることがない。

一〇 彼は再びその家^{いえ}に帰らず、

彼の所^{ところ}も、もはや彼^{かれ}を認めない。

二 それゆえ、わたしはわが口^{くち}をおさえず、

わたしの霊^{れい}のもだえによつて語り、

わたしの魂^{たましい}の苦しさによつて嘆く。

三 わたしは海^{うみ}であるのか、龍^{りゆう}であるのか、

あなたはわたしの上^{うへ}に見張^{みは}りを置かれる。

四 『わたしの床^{とこ}はわたしを慰^{なぐさ}め、

わたしの寢床^{ねどこ}はわが嘆^{なげ}きを軽くする』と

わたしが言うとき、

一四 あなたは夢^{ゆめ}をもつてわたしを驚^{おどろ}かし、

幻^{まぼろし}をもつてわたしを恐れさせられる。

一五 それゆえ、わたしは息^{いき}の止まることを願^{ねが}い、
わが骨^{ほね}よりもむしろ死^しを選ぶ。

一六 わたしは命^{いのち}をいとう。

わたしは長く生^いきることを望^{のぞ}まない。

わたしに構^{かま}わないでください。

わたしの日は息^{いき}にすぎないのだから。

一七 人は何^{なに}者^{もの}なので、あなたはこれを大きなものとし、
これに心^{こころ}をとめ、

一八 朝^{あさ}ごとに、これを尋^{たず}ね、

絶^たえ間^まなく、これを試^{こころ}みられるのか。

一九 いつまで、あなたはわたしに目^めを離^{はな}さず、

つばをのむまも、わたしを捨てておかれないのか。

二〇 人を監視^{かんし}される者^{もの}よ、わたしが罪^{つみ}を犯^{おか}したとて、

あなたに何^{なに}をなしえようか。

なにゆえ、わたしをあなたの的^{まと}とし、

わたしをあなたの重荷^{おもに}とされるのか。

二一 なにゆえ、わたしのとがをゆるさず、

わたしの不義^{ふぎ}を除^{のぞ}かれないのか。

わたしはいま土^{つち}の中に横^{よこ}たわる。

あなたがわたしを尋^{たず}ねられても、

わたしはいないでしょう」。

第八章

一時にシユヒびとビルダデが答えて言った、
 ニ「いつまであなたは、そのような事を言うのか。
 あなたの口の言葉は荒い風ではないか。
 三神は公義を曲げられるであろうか。
 全能者は正義を曲げられるであろうか。
 四あなたの子たちが彼に罪を犯したので、
 彼らをそのとがの手に渡されたのだ。
 五あなたがもし神に求め、全能者に祈るならば、
 六あなたがもし清く、正しくあるならば、
 彼は必ずあなたのために立つて、
 あなたの正しいすみかを榮えさせられる。
 七あなたの初めは小さくあつても、
 あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
 八先の代の人に問うてみよ、
 先祖たちの尋ねきわめた事を学べ。
 九われわれはただ、きのうからあつた者で、
 何も知らない、
 われわれの世にある日は、影のようなものである。
 一〇彼らはあなたに教え、あなたに語り、
 その悟りから言葉を出さないであろうか。

二紙草は泥のない所に生長することができようか。
 葦は水のない所におい茂ることができようか。
 三これはなお青くて、まだ刈られないのに、
 すべての草に先だつて枯れる。
 四すべて神を忘れる者の道はこのとおりだ。
 五神を信じない者の望みは滅びる。
 六その頼むところは断たれ、
 その寄るところは、くもの巢のようだ。
 七五その家によりかかろうとすれば、家は立たず、
 それにすがろうとしても、それは耐えない。
 八六彼は日の前に青々と茂り、
 その若枝を園にはびこらせ、
 七その根を石塚にからませ、
 八岩の間に生きていても、
 九一八もしその所から取り除かれれば、
 その所は彼を拒んで言うであろう、
 『わたしはあなたを見たことがない』と。
 一〇見よ、これこそ彼の道の喜びである、
 十一そしてほかの者が地から生じるであろう。
 一二見よ、神は全き人を捨てられない。
 一三また悪を行う者の手を支持されない。
 一四二彼は笑いをもつてあなたの口を満たし、

第九章

喜びの声をもつてあなたのくちびるを満たされる。
 三 あなただを憎む者は恥を着せられ、
 悪しき者の天幕はなくなる。」

一 ヨブは答えて言った、

二 「まことにわたしは、その事の
 そのとおりであることを知っている。

しかし人はどうして神の前に正しくありえようか。
 三 よし彼と争おうとしても、

千に一つも答えることができない。
 四 彼は心賢く、力強くあられる。

だが彼にむかい、おのれをかたくなにして、
 栄えた者があるか。

五 彼は、山を移されるが、山は知らない。
 彼は怒りをもつて、これらをくつがえされる。

六 彼が、地を震い動かしてその所を離れさせられると、
 その柱はゆらぐ。

七 彼が日に命じられると、日は出ない。
 彼はまた星を閉じこめられる。

八 彼はただひとり天を張り、

海の波を踏まれた。

九 彼は北斗、オリオン、
 プレアデスおよび南の密室を造られた。

一〇 彼が大いなる事をされることは測りがたく、
 不思議な事をされることは数知れない。

二 見よ、彼がわたしのかたわらを通られても、
 わたしは彼を見ない。

彼は進み行かれるが、わたしは彼を認めない。
 三 見よ、彼が奪い去られるのに、

だが彼をばはむことができるか。
 だが彼にむかつて『あなたは何をするのか』と
 言うことができるか。

四 神はその怒りをやめられない。
 五 ラハブを助ける者どもは彼のもとにかがんだ。

六 四 どうしてわたしは彼に答え、
 言葉を選んで、彼と議論することができよう。

七 五 たといわたしは正しくても答えることができない。
 わたしを責められる者に

あわれみを請わなければならない。
 八 六 たといわたしが呼ばわり、

彼がわたしに答えられても、
 わたしの声に耳を傾けられたとは信じない。

一七 彼は大風をもつてわたしを撃ち碎き、
 ゆえなく、わたしに多くの傷を負わせ、
 一八 わたしに息をつかせず、
 苦い物をもつてわたしを満たされる。
 一九 力の争いであるならば、彼を見よ、
 さばきの事であるならば、
 だれが彼を呼び出すことができよう。
 二〇 たといわたしは正しくても、
 わたしの口はわたしを罪ある者とする。
 二一 といわたしは罪がなくても、
 彼はわたしを曲つた者とする。
 二二 わたしは罪がない、しかしわたしは自分を知らない。
 わたしは自分の命をいとう。
 二三 皆同一である。それゆえ、わたしは言う、
 『彼は罪のない者と、悪しき者とを
 共に滅ぼされるのだ』と。
 二四 災がにわかに人を殺すような事があると、
 彼は罪のない者の苦難をあざ笑われる。
 二五 世は悪人の手に渡されてある。
 彼はその裁判人の顔をおわれる。
 もし彼でなければ、これはだれのしわざか。
 二六 わたしの日は飛脚よりも速く、

飛び去つて幸を見ない。
 二七 これは走ること葦舟のごとく、
 えじきに襲いかかる、わしのようだ。
 二八 たといわたしは『わが嘆きを忘れ、
 憂い顔をかえて元氣よくなろう』と言つても、
 二九 わたしはわがもろもろの苦しみを恐れる。
 あなたがわたしを罪なき者とされないことを
 わたしは知っているからだ。
 三〇 わたしは罪ある者とされている。
 どうして、いたずらに労する必要があるか。
 三一 たといわたしは雪で身を洗い、
 灰汁で手を清めても、
 三二 あなたはわたしを、みぞの中に投げ込まれるので、
 わたしの着物も、わたしをいとうようになる。
 三三 神はわたしのようにはないゆえ、
 わたしは彼に答えることができない。
 われわれは共にさばきに臨むことができない。
 三四 われわれの間には、
 われわれふたりの上に手を置くべき仲裁者がいない。
 三五 どうか彼がそのつえをわたしから取り離し、
 その怒りをもつて、
 わたしを恐れさせられないように。

第二〇章

三五 そうすれば、わたしは語つて、
彼を恐れることはない。
わたしはみずからそのような者ではないからだ。

一 わたしは自分の命をいとう。
わたしは自分の嘆きを包まず言いあらわし、
わが魂の苦しみによつて語ろう。
二 わたしは神に申そう、
わたしを罪ある者とされないように。
なぜわたしと争われるかを知らせてほしい。
三 あなたはしえたげをなし、み手のわざを捨て、
悪人の計画を照すことを良しとされるのか。
四 あなたの持つておられるのは肉の目か、
あなたは人が見るように見られるのか。
五 あなたの日は人の日のごとく、
あなたの年は人の年のものであるのか。
六 あなたはなにゆえわたしのとがを尋ね、
わたしの罪を調べられるのか。
七 あなたはわたしの罪のないことを知つておられる。
またあなたの手から救い出さる者はない。

八 あなたの手はわたしをかたどり、わたしを作つた。
ところが今あなたはかえつて、わたしを滅ぼされる。
九 どうぞ覚えてください、
あなたは土くれをもつてわたしを作られた事を。
ところが、わたしをちりに返そうとされるのか。
一〇 あなたはわたしを乳のように注ぎ、
乾酪のように凝り固まらせたではないか。
一一 あなたは肉と皮とをわたしに着せ、
骨と筋とをもつてわたしを編み、
一二 命といつくしみをわたしに授け、
わたしを顧みてわが霊を守られた。
一三 しかしあなたはこれらの事をみ心に秘めおかれた。
この事があなたの心のうちにあつた事を
わたしは知つてゐる。
一四 わたしはもし罪を犯せば、
あなたはわたしに目をつけて、
わたしを罪から解き放されぬ。
一五 わたしはもし悪ければわたしはわざわいだ。
たとひわたしは正しくても、
わたしは頭を上げることができない。
わたしは恥に満ち、悩みを見ているからだ。
一六 もし頭をあげれば、

第二章

そこでナアマびとゾパルは答えて言った、

あなたは、ししのようにわたしを追い、
 わたしにむかつて再びくすしき力をあらわされる。
 七 あなたは証人を入れ替えてわたしを攻め、
 わたしにむかつてあなたの怒りを増し、
 新たに軍勢を出してわたしを攻められる。
 八 なにゆえあなたはわたしを胎から出されたか、
 わたしは息絶えて目に見られることなく、
 九 胎から墓に運ばれて、
 初めからなかった者のようであつたなら、
 よかつたのに。
 一〇 わたしの命の日はいくばくもないではないか。
 どうぞ、しばしわたしを離れて、
 少し慰めを得させられるように。
 二 わたしが行つて、帰ることのないその前に、
 これを得させられるように。
 わたしは暗き地、暗黒の地へ行く。
 三 これは暗き地で、やみにひとしく、
 暗黒で秩序なく、光もやみのようだ」。

二 「言葉が多ければ、答なしにすまされるだろうか。
 口の達者な人は義とされるだろうか。
 三 あなたのむなしい言葉は人を沈黙させるだろうか。
 あなたがあげるとき、
 人はあなたを恥じさせないだろうか。
 四 あなたは言う、『わたしの教は正しい、
 わたしは神の目に潔い』と。
 五 どうぞ神が言葉を出し、
 あなたにむかつてくちびるを開き、
 六 知恵の秘密をあなたに示されるように。
 神はさまざまの知識をもたれるからである。
 それであなたは知るがよい、神はあなたの罪よりも
 軽くあなたを罰せられることを。
 七 あなたは神の深い事を窮めることができるか。
 全能者の限界を窮めることができるか。
 八 それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。
 それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか。
 九 その量は地よりも長く、海よりも広い。
 一〇 彼がもし行きめぐつて人を捕え、
 さばきに召し集められるとき、
 だれが彼をはばむことができよう。
 二 彼は卑しい人間を知つておられるからだ。

彼は不義を見る時、

これに心をとめられぬであろうか。

二三しかし野ろばの子が人として生れるとき、
愚かな者も悟りを得るであらう。

二四もしあなたが心を正しくするならば、
神に向かつて手を伸べるであらう。

二五もしあなたの手に不義があるなら、それを遠く去れ、
あなたの天幕に悪を住まわせてはならない。

二六そうすれば、あなたは恥じることなく
顔をあげることができ、

堅く立って、恐れることはない。

二七あなたは苦しみを忘れ、

あなたのこれを覚えることは、
流れ去った水のようになる。

二八そしてあなたの命は真昼よりも光り輝き、
たとい暗くても朝のようになる。

二九あなたは望みがあるゆえに安んじ、
保護されて安らかにいこうことができる。

三〇あなたは恐れさせるものはない。
多くの者はあなたの好意を求めるであらう。

三〇しかし悪しき者の目は衰える。

彼らは逃げ場を失い、

その望みは息の絶えるにひとしい」。

第二二章

一そこでヨブは答えて言った、

二「まことに、あなたがたのみ、人である、
知恵はあなたがたと共に死ぬであらう。

三しかしわたしも、あなたがたと同様に悟りをもつ。
わたしはあなたがたに劣らない。

だれがこのような事を知らないだろうか。

四わたしは神に呼ばわって、聞かれた者であるのに、
その友の物笑いとなつてゐる。

正しく全き人は物笑いとなる。

五安らかな者の思いには、
不幸な者に対する侮りがあつて、

足のすべる者を待つてゐる。

六かすめ奪う者の天幕は栄え、
神を怒らす者は安らかである。

自分の手に神を携えている者も同様だ。
七しかし獣に問うてみよ、

それはあなたに教える。

空の鳥に問うてみよ、

それはあなたに告げる。

ハあるいは地の草や木に問うてみよ、

彼らはあなたに教える。

海の魚もまたあなたに示す。

九 これらすべてのもののうち、いずれか

主の手がこれをしたことを知らぬ者があろうか。

一〇 すべての生き物の命、

およびすべての人の息は彼の手のうちにある。

二 口が食物を味わうように、

耳は言葉を聞きまえないであらうか。

三 老いた者には知恵があり、

命の長い者には悟りがある。

四 知恵と力は神と共にあり、

深慮と悟りも彼のものである。

五 彼が破壊すれば、再び建てることができな

い。彼が人を閉じ込めれば、開き出すことができない。

六 彼が水を出せば、地をくつがえす。

七 力と深き知恵は彼と共にあり、

惑わされる者も惑わす者も彼のものである。

八 彼は議士たちを裸にして連れ行き、

さばきびとらを愚かにし、

一八 王たちのきずなを解き、

彼らの腰に腰帶を巻き、

一九 祭司たちを裸にして連れ行き、

力ある者を滅ぼし、

二〇 みずから頼む者たちの言葉を奪い、

長老たちの分別を取り去り、

二一 君たちの上に侮りを注ぎ、

強い者たちの帯を解き、

二三 暗やみの中から隠れた事どもをあらわし、

暗黒を光に引き出し、

二四 国々を大きくし、またこれを滅ぼし、

国々を広くし、また捕え行き、

二五 地の民の長たちの悟りを奪い、

彼らを道なき荒野にさまよわせ、

二六 光なき暗やみに手探りさせ、

二七 酔うた者のようによりめかせる。

第三章

一 見よ、わたしの目は、
これをことごとく見た。

わたしの耳はこれを聞いて悟った。

二あなたがたの知っている事は、わたしも知っている。わたしはあなたがたに劣らない。

三しかしわたしは全能者に物を言おう、わたしは神と論ずることを望む。

四あなたがたは偽りをもつてうわべを繕う者、皆、無用の医師だ。

五どうか、あなたがたは全く沈黙するように。これがあなたがたの知恵であろう。

六今、わたしの論ずることを聞くがよい。わたしの口で言い争うことに耳を傾けるがよい。

七あなたがたは神のために不義を言おうとするのか。また彼のために偽りを述べるのか。

八あなたがたは彼にひいきしようとするのか。神のために争おうとするのか。

九神があなたがたを調べられるとき、あなたがたは無事だろうか。

あなたがたは人を欺くように彼を欺くことができるか。

一〇あなたがたがもし、ひそかにひいきするならば、彼は必ずあなたがたを責められる。

一一その威厳はあなたがたを恐れさせないであろうか。

彼をおそれる恐れが

あなたがたに臨まないであろうか。

二あなたがたの格言は灰のことわざだ。あなたがたの盾は土の盾だ。

三黙して、わたしにかかわるな、わたしは話そう。何事でもわたしに来るなら、来るがよい。

四わたしはわが肉をわが歯に取り、わが命をわが手のうちに置く。

五見よ、彼はわたしを殺すであろう。わたしは絶望だ。

しかしなおわたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう。

一六これこそわたしの救となる。神を信じない者は、神の前に出ることができないからだ。

一七あなたがたはよくわたしの言葉を聞き、わたしの述べる所を耳に入れよ。

一八見よ、わたしはすでにわたしの立ち場を言い並べた。わたしは義とされることをみずから知っている。

一九だれかわたしと言ひ争う事のできる者があろうか。もしあるならば、わたしは黙して死ぬであろう。

二〇ただわたしに二つの事を許してください。そうすれば、わたしはあなたの顔をさせて

隠れることはないでしょう。

二 あなたの手をわたしから離してください。

あなたの恐るべき事をもって

わたしを恐れさせないでください。

三 そしてお呼びください、わたしは答えます。

わたしに物を言わせて、

あなたご自身、わたしにお答えください。

三 わたしのよこしまと、わたしの罪がどれほどあるか。

わたしのとがと罪とをわたしに知らせてください。

二四 なにゆえ、あなたはみ顔をかくし、

わたしをあなたの敵とされるのか。

二五 あなたは吹き回される木の葉をおどし、

干あがったもみがらを追われるのか。

二六 あなたはわたしについて苦き事どもを書きしるし、

わたしに若い時の罪を継がせ、

二七 わたしの足を足かせにはめ、

わたしのすべての道をうかがい、

わたしの足の周囲に限りをつけられる。

二八 このような人は腐れた物のように朽ち果て、

虫に食われた衣服のようにすたれる。

第一四章

一 女から生れる人は

日が短く、悩みに満ちている。

二 彼は花のように咲き出て枯れ、

影のように飛び去って、とどまらない。

三 あなたはこのような者にさえ目を開き、

あなたの前に引き出して、さばかれるであろうか。

四 だれが汚れたもののうちから清いものを

出すことができようか、ひとりもない。

五 その日は定められ、

その月の数もあなたと共にあり、

あなたがその限りを定めて、

越えることのできないようにされたのだから、

六 彼から目をはなし、手をひいてください。

そうすれば彼は雇人のように、

その日を楽しむことができるでしょう。

七 木には望みがある。

たとい切られてもまた芽をだし、

その若枝は絶えることがない。

八 たといその根が地の中に老い、

その幹が土の中に枯れても、

九 なお水の潤いにあえば芽をふき、
若木のように枝を出す。

一〇 しかし人は死ねば消えうせる。
息が絶えれば、どこにおるか。

二 水が湖から消え、

川が干涸び、かわくように、

三 人は伏して寝、また起きず、

天のつきるまで、目ざめず、

その眠りからさまされぬ。

四 どうぞ、わたしを陰府にかくし、

あなたの怒りのやむまで、潜ませ、

わたしのために時を定めて、

わたしを覚えてください。

五 人がもし死ねば、また生きるでしょうか。

わたしはわが服役の諸日の間、

わが解放の来るまで待つでしよう。

六 あなたがお呼びになるとき、

わたしは答えるでしよう。

七 あなたはみ手のわざを顧みられるでしよう。

八 その時あなたはわたしの歩みを数え、

わたしの罪を見のがされるでしよう。

九 わたしのとがは袋の中に封じられ、

あなたはわたしの罪を塗りかくされるでしよう。

一〇 しかし山は倒れてくずれ、
岩もその所から移される。

一一 水は石をうがち、

大水は地のちりを洗い去る。

一二 このようにあなたは人の望みを断たれる。

一三 あなたはながく彼に勝つて、彼を去り行かせ、
彼の顔かたちを変らせて追いやられる。

一四 彼の子らは尊くなつても、彼はそれを知らない、
卑しくなつても、それを悟らない。

一五 ただおのが身に痛みを覚え、

おのれのために嘆くのみである」。

第一章

一 そこでテマンびとエリパズは答えて言つた、

二 「知者はむなしき知識をもつて答えるであろうか。
東風をもつてその腹を満たすであろうか。

三 役に立たない談話をもつて論じるであろうか。
無益な言葉をもつて争うであろうか。

四 ところがあなたは神を恐れることを捨て、
神の前に祈る事をやめている。

五 神の前に祈る事をやめている。

五 あなたの罪はあなたの口を教え、
あなたは悪賢い人の舌を選び用いる。
六 あなたの口みずからあなたの罪を定める、
わたしではない。

七 あなたのくちびるがあなたに逆らって証明する。
八 あなたは最初に生れた人であるのか。
九 あなたが知るものは

わかれわれも知るではないか。
あなたが悟るものは

わかれわれも悟るではないか。
一〇 われわれの中にはしらがの人、

年老いた人もあつて、
あなたの父よりも年上だ。

二 神の慰めおよびあなたに対するやさしい言葉も、
あなたにとつて、あまりに小さいというのか。

三 どうしてあなたの心は狂うのか。
どうしてあなたの目はしばたたくのか。

四 あなたが神にむかつて気をいらだて、
このような言葉をあなたの口から出すのはなぜか。

一四 人はいかなる者か、どうしてこれは清くありえよう。
女から生れた者は、どうして正しくありえよう。
一五 見よ、神はその聖なる者にすら信を置かれぬ、
もろもろの天も彼の目には清くない。

一六 まして憎むべき汚れた者、
また不義を水のように飲む人においては。

一七 わたしはあなたに語ろう、聞くがよい。
わたしは自分の見た事を述べよう。

一八 これは知者たちがその先祖からうけて、
隠す所なく語り伝えたものである。

一九 彼らにのみこの地は授けられて、
他国人はその中に行き来したことがなかった。

二〇 悪しき人は一生の間、もだえ苦しむ。
残酷な人には年の数が定められている。

二一 その耳には恐ろしい音が聞え、
繁栄の時には滅ぼす者が彼に臨む。

二二 彼は、暗やみから帰りうるとは信ぜず、
つるぎにねらわれる。

二三 彼は食物はどこにあるかと言いつつさまよい、
暗き日が手近に備えられてあるのを知る。

二四 悩みと苦しみが彼を恐れさせ、
戦いの備えをした王のように彼に打ち勝つ。

二五 これは彼が神に逆らうてその手を伸べ、
全能者に逆らうて高慢にふるまい、

二六 盾の厚い面をもつて強情に、
彼にはせ向かうからだ。

二七 また彼は脂肪をもつてその顔をおおい、
その腰には脂肪の肉を集め、

二八 滅ぼされた町々に住み、
人の住まない家、荒塚となる所におるからだ。

二九 彼は富める者とならず、その富はながく続かない、
また地に根を張ることはない。

三〇 彼は暗やみからのがれることができない。
炎はその若枝を枯らし、

その花は風に吹き去られる。
三 彼をしてみずから欺いて、

むなしい事にたよらせてはならない。
その報いはむなしいからだ。

三 彼の時のこない前にその事がなし遂げられ、
彼の枝は緑とならないであらう。

三 彼はぶどうの木のように、
その熟さない実をふり落すであらう。

またオリブの木のように、その花を落すであらう。
三四 神を信じない者のやからは子なく、

まいないによる天幕は火で焼き滅ぼされるからだ。
三五 彼らは害悪をはらみ、不義を生み、
その腹は偽りをつくる」。

第二十六章

一 そこでヨブは答えて言った、

二 「わたしはこのような事を数多く聞いた。
あなたがたは皆人を慰めようとして、

かえつて人を煩わす者だ。
三 むなしき言葉に、はてしがあるか。

あなたは何に激して答をするのか。
四 わたしもあなたがたのように語ることができる。

もしあなたがたがわたしと代ったならば、
わたしは言葉を練つて、あなたがたを攻め、

あなたがたに向かつて頭を振ることができる。
五 また口をもつて、あなたがたを強くし、

くちびるの慰めをもつて、あなたがたの苦しみを和らげる
ことができる。

六 たといわたしは語つても、
わたしの苦しみは和らげられない。

たといわたしは忍んでも、

どれほどそれがわたしを去るであらうか。

七 まことに神は今わたしを疲れさせた。

彼はわたしのやからをことごとく荒した。

八 彼はわたしを、しわ寄せさせた。

これがわたしに對する証拠である。

またわたしのやせ衰えた姿が立つて、わたしを攻め、

わたしの顔にむかつて証明する。

九 彼は怒つてわたしをかき裂き、わたしを憎み、

わたしに向かつて齒をかみ鳴らした。

わたしの敵は目を鋭くして、わたしを攻める。

一〇 人々はわたしに向かつて口を張り、

侮つてわたしのほおを打ち、

ともに集まつてわたしを攻める。

一一 神はわたしをよこしまな者に渡し、

悪人の手に投げいれられる。

一二 わたしは安らかであつたのに、

彼はわたしを切り裂き、

首を捕えて、わたしを打ち碎き、

わたしを立てて的とされた。

一三 その射手はわたしを囲む。

彼は無慈悲にもわたしの腰を射通し、

わたしの肝を地に流れ出させられる。

一四 彼はわたしを打ち破つて、破れに破れを加え、
勇士のようにわたしに、はせかかられる。

一五 わたしは荒布を膚に縫いつけ、

わたしの角をちりに伏せた。

一六 わたしの顔は泣いて赤くなり、

わたしのまぶたには深いやみがある。

一七 しかし、わたしの手には暴虐がなく、

わたしの祈は清い。

一八 地よ、わたしの血をおおつてくれるな。

わたしの叫びに、休む所を得させるな。

一九 見よ、今でもわたしの証人は天にある。

わたしのために保証してくれる者は高い所にある。

二〇 わたしの友はわたしをあざける、

しかしわたしの目は神に向かつて涙を注ぐ。

二一 どうか彼が人のために神と弁論し、

人とその友との間をさばいてくれるように。

二二 数年過ぎ去れば、

わたしは歸らぬ旅路に行くであらう。

第二十七章

一 わが靈は破れ、わが日は尽き、

墓はわたしを待っている。

二 まことにあざける者どもはわたしのまわりにあり、わが目は常に彼らの侮りを見る。

三 どうか、あなた自ら保証となられるように。

ほかにだれがわたしのために保証となってくれる者があろうか。

四 あなたは彼らの心を閉じて、悟ることのないようにされた。

それゆえ、彼らに勝利を得させられるはずはない。

五分け前を得るために友を訴えるものは、その子らの目がつぶれるであろう。

六 彼はわたしを民の笑い草とされた。わたしは顔につばきされる者となる。

七 わが目は憂いによつてかすみ、わがからだはすべて影のようだ。

八 正しい者はこれに驚き、罪なき者は神を信ぜぬ者に対して憤る。

九 それでもなお正しい者はその道を堅く保ち、潔い手をもつ者はますます力を得る。

一〇 しかし、あなたがたは皆再び来るがよい、わたしはあなたがたのうちに賢い者を見ないのだ。

二 わが日は過ぎ去り、わが計りごととは敗れ、

わが心の願いも敗れた。

二 彼らは夜を昼に変える。彼らは言う、『光が暗やみに近づいている』と。

三 わたしがもし陰府をわたしの家として望み、暗やみに寝床をのべ、

四 穴に向かつて『あなたはわたしの父である』と言い、うじに向かつて『あなたはわたしの母、わたしの姉妹である』と言うならば、

五 わたしの望みはどこにあるか、だれがわたしの望みを見ることができようか。

六 これは下つて陰府の関門にいたり、われわれは共にちりに下るであろうか。

第二十八章

一 そこでシユヒビとビルダデは答えて言つた、

二 「あなたはいつまで言葉にわなを設けるのか。あなたはまず悟るがよい、それからわれわれは論じよう。

三 なぜ、われわれは獣のように思われるのか。なぜ、あなたの目に愚かな者と見えるのか。

四 怒つておのが身を裂く者よ、

あなたのために地に捨てられるだろうか。
 岩はその所から移されるだろうか。

五 悪しき者の光は消え、

その火の炎は光を放たず、

六 その天幕のうちの光は暗く、

彼の上のもしびは消える。

七 その力ある歩みはせめられ、

その計りごとは彼を倒す。

八 彼は自分の足で網にかかり、

また落し穴の上を歩む。

九 わなは彼のかかとを捕え、

網わなは彼を捕える。

一〇 輪なわは彼を捕えるために地に隠され、

張り網は彼を捕えるために道に設けられる。

一一 恐ろしい事が四方にあつて彼を恐れさせ、

その歩みにしたがって彼を追う。

一二 その力は飢え、

災は彼をつまずかすために備わっている。

一三 その皮膚は病によつて食いつくされ、

死のういごは彼の手足を食いつくす。

一四 彼はその頼む所の天幕から引き離されて、

恐れれの王のもとに追いやられる。

一五 彼に属さない者が彼の天幕に住み、
 硫黄が彼のすまいの上になき散らされる。

一六 下ではその根が枯れ、

上ではその枝が切られる。

一七 彼の形見は地から滅び、

彼の名はちまたに消える。

一八 彼は光からやみに追いやられ、

世の中から追い出される。

一九 彼はその民の中に子もなく、孫もなく、

彼のすみかには、ひとりも生き残る者はない。

二〇 西の者は彼の日について驚き、

東の者はおじ恐れる。

二一 まことに、悪しき者のすまいはこのようであり、
 神を知らない者の所はこのようである」。

第十九章

一 そこでヨブは答えて言った、

二 「あなたがたはいつまでわたしを悩まし、
 言葉をもつてわたしを打ち砕くのか。

三 あなたがたはすでに十度もわたしをはずかしめ、
 わたしを悪くあしらつてもなお恥じないのか。

四たといわたしが、まことにあやまつたとしても、そのあやまちは、わたし自身にとどまる。

五もしあなたがたが、

まことにわたしに向かつて高ぶり、

わたしの恥を論じるならば、

六『神がわたしをしえたげ、

その網でわたしを囲まれたのだ』と知るべきだ。

七見よ、わたしが『暴虐』と叫んでも答えられず、

助けを呼び求めても、さばきはない。

八彼はわたしの道にかきをめぐらして、

越えることのできないようにし、

わたしの行く道に暗やみを置かれた。

九彼はわたしの栄えをわたしからはぎ取り、

わたしのこうべから冠を奪い、

一〇四方からわたしを取りこわして、うせさせ、

わたしの望みを木のように抜き去り、

二わたしに向かつて怒りを燃やし、

わたしを敵のひとりのように思われた。

三その軍勢がいつせいに来て、

壘を築いて攻め寄せ、

わたしの天幕のまわりに陣を張った。

三三彼はわたしの兄弟たちを

わたしから遠く離れさせられた。

わたしを知る人々は全くわたしに疎遠になった。

一四わたしの親類および親しい友はわたしを見捨て、

一五わたしの家に宿る者はわたしを忘れ、

わたしのはしためらはわたしを他人のように思い、

わたしは彼らの目に他国人となった。

一六わたしがしもべを呼んでも、彼は答えず、

わたしは口をもつて彼に請わなければならぬ。

一七わたしの息はわが妻にいとわれ、

わたしは同じ腹の子たちにきらわれる。

一八わらべたちさえもわたしを侮り、

わたしが起き上がれば、わたしをあざける。

一九親しい人々は皆わたしをいみきらい、

わたしの愛した人々はわたしにそむいた。

二〇わたしの骨は皮と肉につき、

わたしはわずかに歯の皮をもつてのがれた。

二一わが友よ、わたしをあわれめ、わたしをあわれめ、神のみ手がわたしを打ったからである。

二二あなたがたは、なにゆえ神のようにわたしを責め、

わたしの肉をもつて満足しないのか。

二三どうか、わたしの言葉が、書きとめられるように。

どうか、わたしの言葉が、書物にされるように。

第二〇章

―そこでナアマびとゾパルは答えて言った、

二 四鉄の筆と鉛とをもつて、
ながく岩に刻みつけられるように。

三 五わたしは知る、

わたしをあがなう者は生きておられる、
後の日に彼は必ず地のの上に立たれる。

二六 わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、
わたしは肉を離れて神を見るであろう。

二七 もしかもわたしの味方として見るであろう。
わたしの見る者はこれ以外のものではない。

わたしの心はこれを望んでこがれる。

二八 あなたがたがもし『われわれはどうして
彼を責めようか』と言ひ、

また『事の根源は彼のうちに見いだされる』
と言ふならば、

二九 つるぎを恐れよ、

怒りはつるぎの罰をきたらすからだ。

これによつて、あなたがたは、

さばきのあることを知るであろう。』

二 「これによつて、わたしは答えようとの思いを起し、
これがために心中しきりに騒ぎ立つ。

三 わたしはわたしをはずかしめる非難を聞く、
しかし、わたしの悟りの霊がわたしに答えさせる。

四 あなたはこの事を知らないのか、

昔から地の上に人の置かれてよりこのかた、

五 悪しき人の勝ち誇はしばらくであつて、
神を信じない者の楽しみは

ただつかのまであることを。

六 たといその高さが天に達し、

その頭が雲におよんでも、

七 彼はおのれの糞のように、とこしえに滅び、

彼を見た者は言うであろう、『彼はどこにおるか』と。

八 彼は夢のように飛び去つて、再び見ることはない。

彼は夜の幻のように追ひ払われるであろう。

九 彼を見た目はかさねて彼を見ることなく、

彼のいた所も再び彼を見ることがなからう。

一〇 その子らは貧しい者に恵みを求め、

その手は彼の貨財を償うであろう。

一一 その骨には若い力が満ちている、

しかしそれは彼と共にちりに伏すであろう。

一二 たとい悪は彼の口に甘く、

これを舌の裏にかくし、

二三これを惜しんで捨てることなく、

口の中に含んでいても、

二四その食物は彼の腹の中で変り、

彼の内で毒蛇の毒となる。

二五彼は貨財をのんでも、またそれを吐き出す、

神がそれを彼の腹から押し出されるからだ。

二六彼は毒蛇の毒を吸い、

まむしの舌は彼を殺すであろう。

二七彼は蜜と凝乳の流れる川々を見ることができない。

二八彼はほねおつて獲たものを返して、

それを食うことができない。

その商いによって得た利益をもって

楽しむことができない。

二九彼が貧しい者をしえたげ、これを捨てたからだ。

彼は家を奪い取つても、

それを建てることができない。

三〇彼の欲張りは足ることを知らぬゆえ、

その楽しむ何物をも救うことができないであろう。

三 彼が残して食べなかつた物とは一つもない。

それゆえ、その繁栄はながく続かないであろう。

三三その力の満ちている時、彼は窮境に陥り、

悩みの手がことごとく彼の上に臨むであろう。

三三 彼がその腹を満たそうとすれば、

神はその激しい怒りを送つて、

それを彼の上に降り注ぎ、彼の食物とされる。

二四 彼は鉄の武器を免れても、

青銅の矢は彼を射通すであろう。

二五 彼がこれをその身から引き抜けば、

きらめく矢じりがその肝から出てきて、

恐れが彼の上に臨む。

二六 もろもろの暗黒が彼の宝物のためにたくわえられ、

人が吹き起したものでない火が彼を焼きつくし、

その天幕に残っている者を滅ぼすであろう。

二七 天は彼の罪をあらわし、

地は起つて彼を攻めるであろう。

二八 その家の財産は奪い去られ、

神の怒りの日に消えうせるであろう。

二九 彼が悪しき人の神から受ける分、

神によって定められた嗣業である」。

第二章

一そこでヨブは答えて言った、

二「あなたがたはとくと、わたしの言葉^{ことば}を聞き、これをもつて、あなたがたの慰めとするがよい。三まずわたしをゆるして語らせなさい。わたしが語ったのち、あざけるのもよからう。四わたしのつぶやきは人に対してであらうか。わたしはどうして、いらだたないでいられようか。五あなたがたはわたしを見て、驚き、手を口にあてるがよい。六わたしはこれに思うと恐ろしくなつて、からだがしきりに震えわななく。七なにゆえ悪しき人が生きながらえ、老齢に達し、かつ力強くなるのか。八その子らは彼らの前に堅く立ち、その子孫もその目の前に堅く立つ。九その家は安らかで、恐れがなく、神のつえは彼らの上に臨むことがない。一〇その雄牛は種を与えて、誤ることなく、その雌牛は子を産んで、そこなうことがない。二彼らはその小さい者どもを群れのように連れ出し、その子らは舞い踊る。三彼らは手鼓と琴に合わせて歌い、笛の音によつて楽しみ、

三その日をさいわいに過す、安らかに陰府にくだる。四彼らは神に言う、『われわれを離れよ、われわれはあなたの道を知^しることを好まない。五全能者は何者なので、われわれはこれに仕えねばならないのか。われわれはこれに祈つても、なんの益があるか』と。六見よ、彼らの繁栄は彼らの手にあるではないか。悪人の計りごとは、わたしの遠く及ぶ所でない。七悪人のとしびの消されること、幾たびあるか。その災の彼らの上に臨むこと、神がその怒りをもつて苦しみを与えられること、幾たびあるか。八彼らが風の前のわらのようになること、あらしに吹き去られるもみがらのようになること、幾たびあるか。九あなたがたは言う、『神は彼らの罪を積みたくわえて、その子らに報いられるのだ』と。どうかそれを彼ら自身に報いて、彼らにその罪を知らせられるように。

二〇すなわち彼ら自身じしんの目にその滅ほろびを見みさせ、全能者ぜんのうしやの怒りいかを彼らかれに飲のませられるように。

二一その月の数かずのつきるとき、

彼らはその後の家いえになんのかかわる所ところがあるうか。

二三神かみは天てんにある者ものたちをさえ、さばかれるのに、

だれが神かみに知識ちしきを教おしえることができようか。

二四ある者は繁栄はんえいをきわめ、

全く安やすらかに、かつおだやかに死しに、

二五そのからだには脂肪しぼうが満みち、

その骨ほねの髓ずいは潤うるっている。

二六ある者は心こころを苦しめて死しに、

なんの幸さいわいをも味わうことがない。

二七彼らかれはひとしくちに伏ふし、

うじにおおわれる。

二八見みよ、わたしはあなたがたの思おもいを知しり、

わたしを害がいしようとするたくらみを知る。

二九あなたがたは言う、『王侯おうこうの家いえはどこにあるか、

悪人あくにんの住すむ天幕てんまくはどこにあるか』と。

三〇あなたがたは道行みちゆく人々ひとびとに問とわなかつたか、

彼らの証言しょうげんを受け入いれないのか。

三一すなわち、災わざわいの日に悪人あくにんは免まぬか、

激げきしい怒りいかの日に彼かれは救すくい出だされる。

三二だれが彼かれに向むかつて、

その道みちを告つげ知しらせる者ものがあるか、

だれが彼かれのした事ことを彼かれに報むくいる者ものがあるか。

三三彼はかかれて墓はかに行いき、

塚つかの上うへで見張みはりされ、

三四谷たにの土つちくれも彼かれには快こころよく、

すべての人ひとはそのあとに従したがう。

彼の前まえに行いつた者ものも数えきれない。

三五それで、あなたがたはどうしてむなしい事ことをもつて、

わたしを慰なぐさめようとするのか。

あなたがたの答こたえは偽いつわり以外いがいの何なにものでもない」。

第二章

一そこでテマンびとエリパズは答こたえて言いつた、

二「人は神かみを益えきすることができるのであるうか。

賢かしこい人も、ただ自身じしんを益えきするのみである。

三あなたが正ただしくても、全能者ぜんのうしやになんの喜よろこびがあろう。

あなたが自分の道みちを全まうしても、

彼かれになんの利益りえきがあろう。

四神かみはあなたが神かみを恐おそれることのゆえに、

あなたを責せめ、あなたをさばかれるであろうか。

五 あなたの悪は大きいではないか。

あなたの罪は、はてしがない。

六 あなたはゆえなく兄弟のものを質にとり、裸な者の着物をはぎ取り、

七 疲れた者に水を飲ませず、

飢えた者に食物を与えなかった。

八 力ある人は土地を得、

名ある人はそのうちに住んだ。

九 あなたは、やもめをむなしく去らせた。

みなしごの腕は折られた。

一〇 それゆえ、わなはあなたをめぐり、

恐怖は、にわかあなたを驚かす。

二 あなたの光は暗くされ、

あなたは見ることができない。

大水はあなたをおおうであろう。

三 神は天に高くおられるではないか。

見よ、いと高き星を。いかに高いことよ。

四 それであなたは言う、『神は何を知っておられるか。』

彼は黒雲を通して、さばくことができるのか。

五 濃い雲が彼をおおい隠すと、

彼は見ることができない。

彼は天の大空を歩まれるのだ』と。

五 あなたは悪しき人々が踏んだ

いにしへの道を守ろうとするのか。

六 彼らは時がこないうちに取り去られ、その基は川のように押し流された。

七 彼らは神に言った、『われわれを離れてください』と、

また『全能者はわれわれに何をなしえようか』と。

八 しかし神は彼らの家を良い物で満たされた。

ただし悪人の計りごとは

わたしのくみする所ではない。

九 正しい者はこれを見て喜び、

罪なき者は彼らをあざ笑って言う、

一〇 『まことにわれわれのあだは滅ぼされ、その残した物は火で焼き滅ぼされた』と。

二 あなたは神と和らいで、平安を得るがよい。

そうすれば幸福があなたに来るでしょう。

三 どうか、彼の口から教を受け、

その言葉をあなたの心におさめるように。

四 あなたがもし全能者に立ち返って、おのれを低くし、

あなたの天幕から不義を除き去り、

五 こがねをちりの中に置き、

オフルのこがねを谷川の石の中に置き、

六 全能者があなたのこがねとなり、

第二三章

一そこでヨブは答えて言った、

二「きょうもまた、わたしのつばきやきは激しく、
彼の手はわたしの嘆きにかかわらず、重い。

三どうか、彼を尋ねてどこで会えるかを知り、
そのみ座に至ることができるよう。

四わたしは彼の前にわたしの訴えをならべ、

あなたの貴重なしろがねとなるならば、

二六その時、あなたは全能者を喜び、
神に向かつて顔をあげることが出来る。

二七あなたが彼に祈るならば、彼はあなたに聞かれる。
そしてあなたは自分の誓いを果たす。

二八あなたが事をなそうと定めるならば、
あなたはその事を成就し、

あなたの道には光が輝く。

二九彼は高ぶる者を低くされるが、
へりくだる者を救われるからだ。

三〇彼は罪のない者を救われる。

あなたはその手の潔いことによつて、
救われるであろう」。

口をきわめて論議するであろう。

五わたしは、わたしに答えられるみ言葉を知り、
わたしに言われる所を悟ろう。

六彼は大きいなる力をもつて、
わたしと争われるであろうか、

いな、かえつてわたしを顧みられるであろう。
七かしこでは正しい人は彼と言ひ争うことができる。

そうすれば、わたしはわたしをさばく者から
永久に救われるであろう。

八見よ、わたしが進んでも、彼を見ない。
退いても、彼を認めることができない。

九左の方に尋ねても、会うことができない。
右の方に向かつて、見ることができない。

一〇しかし彼はわたしの歩む道を知つておられる。
彼がわたしを試みられるとき、

わたしは金のように出て来るであろう。
二わたしの足は彼の歩みに堅く従つた。

わたしは彼の道を守つて離れなかつた。
三わたしは彼のくちびるの命令にそむかず、

その口の言葉をわたしの胸にたくわえた。
四しかし彼は変ることではない。

だが彼をひるがえすことができようか。

第二章

彼はその心の欲するところを行われるのだ。

一四 彼はわたしのために定めた事をなし遂げられる。そしてこのような事が多く彼の心にある。

一五 それゆえ、わたしは彼の前におののく。

わたしは考えるとき、彼を恐れる。

一六 神はわたしの心を弱くされた。

全能者はわたしを恐れさせられた。

一七 わたしは、やみによって閉じこめられ、

暗黒がわたしの顔をおおっている。

一八 なにゆえ、全能者はさばきの時を定めておかれぬのか。

なにゆえ、彼を知る者がその日を見ないのか。

二世には地境を移す者、

群れを奪つてそれを飼う者、

三みなしごのろばを追いやる者、

やもめの牛を質に取る者、

四 貧しい者を道から押しつける者がある。

世の弱い者は皆彼らをさけて身をかくす。

五 見よ、彼らは荒野における野ろばのように出て働き、

野で獲物を求めて、その子らの食物とする。

六 彼らは畑でそのまぐさを刈り、

また悪人のぶどう畑で拾い集める。

七 彼らは着る物がなく、裸で夜を過ごし、

寒さに身をおおうべき物もない。

八 彼らは山の雨にぬれ、しのぎ場もなく岩にすがる。

九 (みなしごをその母のふところから奪い、

貧しい者の幼な子を質にとる者がある。)

一〇 彼らは着る物がなく、裸で歩き、

飢えつつ麦束を運び、

二 悪人のオリブ並み木の中で油をしぼり、

酒ぶねを踏んでも、かわきを覚える。

三 町の中から死のうめきが起り、

傷ついた者の魂が助けを呼び求める。

しかし神は彼らの祈を顧みられない。

四 光にそむく者たちがある。

五 彼らは光の道を知らず、光の道にとどまらない。

六 人を殺す者は暗いうちに起き出て

弱い者と貧しい者を殺し、

夜は盗びとなる。

七 姦淫する者の目はたそがれを待つて、

『だれもわたしを見ていないだろう』と言い、

顔におおう物を当てる。

一六 彼らは暗やみで家をうがち、

昼は閉じこもって光を知らない。

一七 彼らには暗黒は朝である。

彼らは暗黒の恐れを友とするからだ。

一八 あなたがたは言う、

『彼らは水のおもてにすみやかに流れ去り、

その受ける分は地でのろわれ、

酒ぶねを踏む者はだれも

彼らのぶどう畑の道に行かない。

一九 ひでりと熱さは雪水を奪い去る、

陰府が罪を犯した者に対するも、これと同様だ。

二〇 町の広場は彼らを忘れ、

彼らの名は覚えられないことなく、

不義は木の折られるように折られる』と。

二 彼らは子を産まぬうまずめをくらい、

やもめをあわれむことをしない。

三 しかし神はその力をもつて、

強い人々を生きたがらせられる。

彼らは生きる望みのない時にも起きあがる。

三 神が彼らに安全を与えられるので、

彼らは安らかである。

神の目は彼らの道の上にある。

二四 彼らはしばし高められて、いなくなり、

ぜにあおいのように枯れて消えうせ、

麦の穂先のように切り取られる。

二五 もし、そうでないなら、

だれがわたしにその偽りを証明し、

わが言葉のむなしいことを示しうるだろうか」。

第二十五章

一 そこでシユヒびとビルダデは答えて言った、

二 「大権と恐れとは神と共にある。

彼は高き所で平和を施される。

三 その軍勢は数えることができるか。

何物かその光に浴さないものがあるか。

四 それで人はどうして神の前に正しくありえようか。

女から生れた者がどうして清くありえようか。

五 見よ、月さえも輝かず、

星も彼の目には清くない。

六 うじのような人、

虫のような人の子はなおさらである」。

第二十六章

一そこでヨブは答えて言った、

二「あなたは力のない者をどれほど助けたかしかない。
 気力のない腕をどれほど救ったかしかない。

三知恵のない者をどれほど教えたかしかない。
 悟りをどれほど多く示したかしかない。

四あなたはだれの助けによって言葉を出したのか。
 あなたから出たのはだれの霊なのか。

五亡霊は水およびその中に住むものの下に震う。

六神の前では陰府も裸である。

滅びの穴もおおい隠すものはない。

七彼は北の天を空間に張り、

地を何もなし所に掛けられる。

八彼は水を濃い雲の中に包まれるが、

その下の雲は裂けない。

九彼は月のおもてをおおい隠して、

雲をその上にのべ、

一〇水のおもてに円を描いて、

光とやみとの境とされた。

二 彼が戒めると、天の柱は震い、かつ驚く。

三 彼はその力をもつて海を静め、

その知恵をもってラハブを打ち砕き、
 一三その息をもつて天を晴れわたらせ、
 その手をもつて逃げるへびを突き通される。
 一四見よ、これらはただ彼の道の端にすぎない。
 われわれが彼について聞く所は
 いかにかすかなさやきであろう。
 しかし、その力のとどろきに至つては、
 だれが悟ることができるか」。

第二十七章

一ヨブはまた言葉をついで言った、

二「神は生きておられる。

彼はわたしの義を奪い去られた。
 全能者はわたしの魂を悩まされた。

三わたしの息がわたしのうちにあり、
 神の息がわたしの鼻にある間、

四わたしのくちびるは不義を言わない、

わたしの舌は偽りを語らない。

五わたしは断じて、あなたがたを正しいとは認めない。

わたしは死ぬまで、潔白を主張してやめない。

六わたしは堅くわが義を保つて捨てない。

わたしは今まで一日も心に責められた事がない。

セどうか、わたしの敵は悪人のようになり、

わたしに逆らう者は

不義なる者のようになるように。

八神が彼を断ち、その魂を抜きとられるとき、

神を信じない者になんの望みがあるう。

九災が彼に臨むとき、

神はその叫びを聞かれるであろうか。

一〇彼は全能者を喜ぶであろうか、

常に神を呼ぶであろうか。

一一わたしは神のみ手についてあなたがたに教え、

全能者と共にあるものを隠すことをしない。

一二見よ、あなたがたは皆みずからこれを見た、

それなのに、どうしてむなし者となつたのか。

一三これは悪人の神から受ける分、

压制者の全能者から受ける嗣業である。

一四その子らがふえればつるぎに渡され、

その子孫は食物に飽きることがない。

一五その生き残つた者は疫病で死んで埋められ、

そのやもめらは泣き悲しむことをしない。

一六たとい彼は銀をちりのように積み、

衣服を土のようにならべても、

一七その備えるものは正しい人がこれを着、

その銀は罪なき者が分かち取るであろう。

一八彼の建てる家は、くもの巢のようであり、

番人の造る小屋のようである。

一九彼は富める身で寝ても、再び富むことがなく、

目を開けばその富はない。

二〇恐ろしい事が大水のように彼を襲い、

夜はつむじ風が彼を奪い去る。

二一東風が彼を揚げると、彼は去り、

彼をその所から吹き払う。

二三それは彼を投げつけて、あわれむことなく、

彼はその力からのがれようと、もがく。

二四それは彼に向かつて手を鳴らし、

あざけり笑つて、その所から出て行かせる。

第二十八章

一しろがねには掘り出す穴があり、

精錬するこがねには出どころがある。

二くろがねは土から取り、

あかがねは石から溶かして取る。

三人は暗やみを破り、

いやはてまでも尋ねきわめて、
 暗やみおよび暗黒の中から鉱石を取る。
 四 彼らは人の住む所を離れて縦穴をうがち、
 道行く人に忘れられ、
 人を離れて身をつり上げ、揺れ動く。
 五 地はそこから食物を出す。
 その下は火でくつがえされるようにくつがえる。
 六 その石はサファイヤのある所、
 そこにはまた金塊がある。
 七 その道は猛禽も知らず、たかの目もこれを見ず、
 ハ 猛獣もこれを踏まず、ししもこれを通らなかつた。
 九 人は堅い岩に手をくだして、
 山を根元からくつがえす。
 一〇 彼は岩に坑道を掘り、
 その目はもろもろの尊い物を見る。
 二 彼は水路をふさいで、漏れないようにし、
 隠れた物を光に取り出す。
 三 しかし知恵はどこに見いだされるか。
 悟りのある所はどこか。
 三 人はそこに至る道を知らない、
 また生ける者の地でそれを獲ることができない。
 一四 淵は言う、『それはわたしのうちにない』と。

また海は言う、『わたしのもとにない』と。
 一五 精金もこれと換えることはできない。
 銀も量つてその価とすることはできない。
 一六 オフルの金をもつてしても、
 その価を量ることはできない。
 尊い縞めのうも、サファイヤも同様である。
 一七 こがねも、玻璃もこれに並ぶことができない。
 また精金の器物もこれと換えることができない。
 一八 さんごも水晶も言うに足りない。
 知恵を得るのは真珠を得るのにまさる。
 一九 エチオピアのトバズもこれに並ぶことができない。
 純金をもつてしても、その価を量ることはできない。
 二〇 それでは知恵はどこから来るか。
 悟りのある所はどこか。
 二一 これはすべての生き物の目に隠され、
 空の鳥にも隠されている。
 二二 滅びも死も言う、
 『われわれはそのうわさを耳に聞いただけだ』。
 二三 神はこれに至る道を悟っておられる、
 彼はそのある所を知っておられる。
 二四 彼は地の果までもみそなわし、
 天が下を見きわめられるからだ。

第二十九章

二五 彼が風に重さを与え、
水をますで量られたとき、
二六 彼が雨のために規定を設け、
雷のひらめきのために道を設けられたとき、
二七 彼は知恵を見て、これをあらわし、
これを確かめ、これをきわめられた。
二八 そして人に言われた、
『見よ、主を恐れることは知恵である、
悪を離れることは悟りである』と」。

一 ヨブはまた言葉をついで言った、
二 「ああ過ぎた年月のようであつたらよいのだが、
神がわたしを守ってくださいった日のようであつたらよいのだが。
三 あの時には、彼のともしびがわたしの頭の上に輝き、
彼の光によってわたしは暗やみを歩んだ。
四 わたしの盛んな時のようであつたならよいのだが。
あの時には、神の親しみが
わたしの天幕の上にあつた。
五 あの時には、全能者がなわたしと共にいまし、

わたしの子供たちもわたしの周囲にいた。
六 あの時、わたしの足跡は乳で洗われ、
岩もわたしのために油の流れを注ぎだした。
七 あの時には、わたしは町の門に出て行き、
わたしの座を広場に設けた。
八 若い者はわたしを見てしりぞき、
老いた者は身をおこして立ち、
九 君たる者も物言うことをやめて、
その口に手を当て、
一〇 尊い者も声をおさめて、
その舌を上あごにつけた。
一一 耳に聞いた者はわたしを祝福された者となし、
目に見た者はこれをあかしした。
一二 これは助けを求める貧しい者を救い、
また、みなしごおよび助ける人のない者を
救ったからである。
一三 今にも滅びようとした者の祝福がわたしに来た。
わたしはまたやもめの心をして喜び歌わせた。
一四 わたしは正義を着、正義はわたしをおおった。
わたしの公義は上着のごとく、
また冠のようであつた。
一五 わたしは目しいの目となり、

足なえの足となり、

一六 貧しい者の父となり、

知らない人の訴えの理由を調べてやった。

一七 わたしはまた悪しき者のきばを折り、

その齒の間から獲物を引き出した。

一八 その時、わたしは言った、

『わたしは自分の巢の中で死に、

わたしの日は砂のように多くなるであろう。

一九 わたしの根は水のほとりにはびこり、

露は夜もすがらわたしの枝におくであろう。

二〇 わたしの榮えはわたしと共に新しく、

わたしの弓はわたしの手にいつも強い』と。

二一人々はわたしに聞いて待ち、

黙して、わたしの教に従った。

二三 わたしが言った後は彼らは再び言わなかった。

わたしの言葉は彼らの上に

雨のように降りそそいだ。

二三 彼らは雨を待つように、わたしを待ち望み、

春の雨を仰ぐように口を開いて仰いだ。

二四 彼らが希望を失った時にも、

わたしは彼らにむかつてほへんだ。

彼らはわたしの顔の光を除くことができなかった。

三五 わたしは彼らのために道を選び、

そのかしらとして座し、

軍中の王のようにしており、

嘆く者を慰める人のようであった。

第三〇章

一 しかし今はわたしよりも年若い者が、

かえってわたしをあざ笑う。

彼らの父はわたしが卑しめて、

群れの犬と一緒にさえしなかった者だ。

二 彼らの手の力からわたしは何を得るであろうか、

彼らはその氣力がすでに衰えた人々だ。

三 彼らは乏しさと激しい飢えとによって、

かわいた荒地地をかむ。

四 彼らは、ぜにあおいおよび灌木の葉を摘み、

れだまの根をもつて身を暖める。

五 彼らは人々の中から追いだされ、

盗びとを追うように、人々は彼らを追い呼ばれる。

六 彼らは急流の谷間に住み、

土の穴または岩の穴におり、

七 灌木の中になき、いらくさの下に押し合う。

ハ彼らは愚かな者の子、また卑しい者の子であつて、
国から追いだされた者だ。

九それなのに、わたしは今彼らの歌となり、
彼らの笑い草となつた。

一〇彼らはわたしをいとい、遠くわたしをはなれ、
わたしの顔につばきすること、ためらわない。

一一神がわたしの綱を解いて、
わたしを卑しめられたので、

彼らもわたしの前に慎みを捨てた。
二二このともがらはわたしの右に立ち上がり、

わたしを追いかけ、
わたしにむかつて滅びの道を築く。

二三彼らはわたしの道をこわし、わたしの災を促す。
これをさし止める者はない。

二四彼らは広い破れ口からはいるように進みきたり、
破壊の中をおし寄せる。

二五恐ろしい事はわたしに臨み、
わたしの誉は風のように吹き払われ、

わたしの繁栄は雲のように消えうせた。
二六今は、わたしの魂はわたしの内にとけて流れ、

悩みの日はわたしを捕えた。
二七夜はわたしの骨を激しく悩まし、

わたしをかむ苦しみは、やむことがない。

一八それは暴力をもつて、わたしの着物を捕え、
はだ着のえりのように、わたしをしめつける。

一九神がわたしを泥の中に投げ入れられたので、
わたしはちり灰のようになった。

二〇わたしがあなたにむかつて呼ばわつても、
あなたは答えられない。

わたしは立つていても、あなたは顧みられない。
二一あなたは變つて、わたしに無情な者となり、

み手の力をもつてわたしを攻め悩まされる。
二二あなたはわたしを揚げて風の上に乗せ、

大風のうなり声の中に、もませられる。
二三わたしは知っている、あなたはわたしを死に歸らせ、

すべての生き物の集まる家に歸らせられることを。
二四さりながら荒塚の中にある者は、

手を伸べないであろうか、
災の中にある者は助けを呼び求めないであろうか。

二五わたしは苦しい日を送る者のために
泣かなかつたか。

わたしの魂は貧しい人のために
悲しまなかつたか。

二六しかしわたしが幸を望んだのに災が来た。

第二二章

光^{ひかり}を待ち望^まんだのにやみが来た。

二モわたしのはらわたは沸^わきかえつて、静^{しず}まらない。
悩^{なや}みの日^ひがわたしに近^{ちか}づいた。

三ハわたしは日^ひの光^{ひかり}によらずに黒^{くろ}くなつて歩き、
公^{こう}会^{かい}の中^{なか}に立つて助け^{たす}けを呼^よび求^{もと}める。

四九わたしは山^{やま}犬^{いぬ}の兄^{きょう}弟^{だい}となり、
だちようの友^{とも}となつた。

五〇わたしは皮^ひ膚^ふは黒^{くろ}くなつて、はげ落^おち、
わたしの骨^{ほね}は熱^{あつ}さによつて燃^もえ、

六三わたしは琴^{こと}は悲^{かな}しみ^の音^{おと}となり、
わたしの笛^{ふえ}は泣^なく者^{もの}の声^{こゑ}となつた。

一わたしは、わたしの目^めと
契^{けい}約^{やく}を結^{むす}んだ、

二どうして、おとめを慕^{した}うことができようか。
三もしそうすれば上^{うへ}から神^{かみ}の下^{くだ}される分^{ぶん}は

四どんなであらうか。
五高^{たか}き所^{ところ}から全^{ぜん}能^{のう}者^{しや}の与^{あた}えられる嗣^し業^{ぎやう}は

六どんなであらうか。
七三不^ふ義^ぎなる者^{もの}には災^{わざ}が下^{くだ}らないであらうか。

八悪^{あく}をなす者^{もの}には災^{さい}難^{なん}が臨^{のぞ}まないであらうか。

九四彼はわたしの道^{みち}をみそなわし、
わたしの歩^{あゆ}みをことごとく数^{かず}えられぬであらうか。

一〇五もし、わたしがうそと共に歩^{あゆ}み、
わたしの足^{あし}が偽^{いつわ}りにむかつて

一一急^{いそ}いだことがあるなら、
六（正しいはかりをもつてわたしを量^{はか}れ、

七そうすれば神^{かみ}はわたしの潔^{けつ}白^{ぱく}を知られるであらう。）
七もしわたしの歩^{あゆ}みが、道^{みち}をはなれ、

八わたしは心^{こころ}がわたしの目^めにしたがつて歩^{あゆ}み、
わたしの手^てに汚^{けが}れがついていたなら、

九ハわたしのまいたのを他^たの人^{ひと}が食^たべ、
わたしのために成^{せい}長^{ちやう}するものが、

一〇抜^ぬき取^とられてもかまわない。
九もし、わたしの心^{こころ}が、女^{おんな}に迷^{まよ}ったことがあるか、

一一またわたしが隣^{とな}り人^{ひと}の門^{もん}で
待^{まち}ち伏^ふせしたことがあるなら、

一二〇わたしの妻^{つま}が他^たの人^{ひと}のためにうすをひき、
他^たの人^{ひと}が彼^{かの}女^{じよ}の上^{うへ}に寝^ねてかまわない。

一三二これは重^{おも}い罪^{つみ}であつて、
さばきびとに罰^{ばつ}せられるべき悪^{あく}事^じだからである。

一四二これは滅^{ほろ}びに至^{いた}るまでも焼^やきつくす火^ひであつて、

わたしのすべての産業を根こそぎ焼くであろう。

二三 わたしのしもべ、また、はしためが

わたしと言ひ争つたときに、

わたしがもしその言ひ分を退けたことがあるなら、

一四 神が立ち上がられるとき、わたしはどうしようか、

神が尋ねられるとき、なんとお答えしようか。

一五 わたしを胎内に造られた者は、

彼をも造られたのではないか。

われわれを腹の内に形造られた者は、

ただひとりではないか。

一六 わたしがもし貧しい者の願いを退け、

やもめの目を衰えさせ、

一七 あるいはわたしひとりで食物を食べて、

みなしごに食べさせなかつたことがあるなら、

一八 (わたしは彼の幼い時から父のように彼を育て、

またその母の胎を出たときから彼を導いた。)

一九 もし着物がないために死のうとする者や、

身をおおう物のない貧しい人をわたしが見た時に、

二〇 その腰がわたしを祝福せず、

また彼がわたしの羊の毛で

暖まらなかつたことがあるなら、

二一 もしわたしを助ける者が門におけるのを見て、

みなしごにむかつてわたしの手を
振り上げたことがあるなら、

二三 わたしの肩骨が、肩から落ち、

わたしの腕が、つけ根から折れてもかまわない。

三三 わたしは神から出る災を恐れる、

その威光の前には何事もなすことはできない。

三四 わたしがもし金をわが望みとし、

精金をわが頼みと言つたことがあるなら、

三五 わたしがもしわが富の大きな事と、

わたしの手に多くの物を獲た事とを

喜んだことがあるなら、

一六 わたしがもし日の輝くのを見、

または月の照りわたつて動くのを見た時、

二七 心ひそかに迷つて、手に口つけたことがあるなら、

二八 これもまたさばきびとに罰せらるべき悪事だ。

わたしは上なる神を欺いたからである。

二九 わたしがもしわたしを憎む者の滅びるのを喜び、

または災が彼に臨んだとき、

勝ち誇つたことがあるなら、

三〇 (わたしはわが口に罪を犯させず、

のろいをもつて彼の命を求めたことはなかつた。)

三一 もし、わたしの天幕の人々で、

『だれか彼の肉に飽きなかった者があるか』と、言わなかったことがあるなら、

三三 (他国人はちまたに宿らず、わたしはわが門を旅びとに開いた。)

三三 わたしはもし人々の前にわたしのとがをおおい、わたしの悪事を胸の中に隠し、わたしのとががあるなら、三三 わたしが大衆を恐れ、宗族の侮りにおぢて、口を閉じ、門を出なかつたことがあるなら、

三五 ああ、わたしに聞いてくれる者があればよいのだが、(わたしのかきはんがここにある。)

どうか、全能者がわたしに答えられるように。)

ああ、わたしの敵の書いた

告訴状があればよいのだが。

三六 わたしは必ずこれを肩に負い、冠のようにこれをわが身に結び、

三七 わが歩みの数を彼に述べ、

君たる者のようにして、彼に近づくであろう。

三八 もしわが田畑がわたしに向かつて呼ばわり、

そのうねみぞが共に泣き叫んだことがあるなら、

三九 もしわたしが金を払わないでその産物を食べ、

その持ち主を死なせたことがあるなら、

四〇 小麦の代りに、いばらがはえ、

大麦の代りに雑草がはえてもかまわない』。
ヨブの言葉は終った。

第三二章

「このようにヨブが自分の正しいことを主張したので、これら三人の者はヨブに答えるのをやめた。二その時ラム族のブズびとバラケルの子エリフは怒りを起した。すなわちヨブが神よりも自分の正しいことを主張するので、彼はヨブに向かって怒りを起した。三またヨブの三人の友がヨブを罪ありとしながら、答える言葉がなかつたので、エリフは彼らにむかつて怒りを起した。四エリフは彼らが皆、自分よりも年長者であつたので、ヨブに物言うことをひかえて待つていたが、五ここにエリフは三人の口に答える言葉のないのを見て怒りを起した。六ブズびとバラケルの子エリフは答えて言つた、

「わたしは年若く、あなたがたは年老いている。

それゆえ、わたしははばかりて、

わたしの意見を述べることをあえてしなかつた。

七わたしは思つた、『日を重ねた者が語るべきだ、

年を積んだ者が知恵を教えるべきだ』と。

八しかし人のうちには霊があり、

全能者の息が人に悟りを与える。

九 老いた者、必ずしも知恵があるのではなく、
年とつた者、必ずしも道理をわきまえるのではない。

一〇 ゆえにわたしは言う、『わたしに聞け、
わたしもまたわが意見を述べよう』。

二 見よ、わたしはあなたがたの言葉に期待し、
その知恵ある言葉に耳を傾け、
あなたがたが言うべき言葉を捜し出すのを
待っていた。

三 わたしはあなたがたに心をとめたが、
あなたがたのうちにヨブを言いふせる者は
ひとりもなく、

また彼の言葉に答える者はひとりもなかった。

三 おそらくあなたがたは言うだろう、

『われわれは知恵を見いだした、

彼に勝つことのできるのは神だけで、

人にはできない』と。

四 彼はその言葉をわたしに向けて言わなかった。

わたしはあなたがたの言葉をもって

彼に答えることはしない。

五 彼らは驚いて、もはや答えることをせず、

彼らには、もはや言うべき言葉がない。

一六 彼らは物言わず、

立ちとどまって、もはや答えるところがないので、
わたしはこれ以上待つ必要があらうか。

一七 わたしもまたわたしの分を答え、
わたしの意見を述べよう。

一八 わたしには言葉が満ち、
わたしのうちの霊がわたしに迫るからだ。

一九 見よ、わたしの心は口を開かないぶどう酒のように、
新しいぶどう酒の皮袋のように、
今にも張りさけようとしている。

二〇 わたしは語つて、気を晴らし、
くちびるを開いて答えよう。

二一 わたしはだれをもかたより見ることなく、
また何人にもへつらうことをしない。

二二 わたしはへつらうことを知らないからだ。

もしへつらうならば、わたしの造り主は直ちに

わたしを滅ぼされるであらう。

第三三章

一 だから、ヨブよ、今わたしの言うことを聞け、
わたしのすべての言葉に耳を傾けよ。

二 見よ、わたしは口を開き、口の中の舌は物言う。

三 わたしの言葉はわが心の正しきを語り、
 わたしのくちびるは真実をもつてその知識を語る。
 四 神の霊はわたしを造り、
 全能者の息はわたしを生かす。
 五 あなたがもしできるなら、わたしに答えよ、
 わたしの前に言葉を整えて、立て。
 六 見よ、神に対しては、わたしもあなたと同様であり、
 わたしもまた土から取って造られた者だ。
 七 見よ、わたしの威厳はあなたを恐れさせない、
 わたしの勢いはあなたを圧しない。
 八 確かに、あなたはわたしの聞くところと言った、
 わたしはあなたの言葉の声を聞いた。
 九 あなたは言う、『わたしはいさぎよく、とがはない。
 わたしは清く、不義はない。
 一〇 見よ、彼はわたしを攻める口実を見つけ、
 わたしを自分の敵とみなし、
 一一 わたしの足をかせにはめ、
 わたしのすべての行いに目をとめられる』と。
 一二 見よ、わたしはあなたに答える、
 あなたはこの事において正しくない。
 神は人よりも大いなる者だ。
 一三 あなたが『彼はわたしの言葉に

少しも答えられない』といつて、
 彼に向かつて言い争うのは、どういうわけであるか。
 一四 神は一つの方法によって語られ、
 また二つの方法によって語られるのだが、
 人はそれを悟らないのだ。
 一五 人々が熟睡するとき、または床にまどろむとき、
 夢あるいは夜の幻のうちで、
 一六 彼は人々の耳を開き、
 警告をもつて彼らを恐れさせ、
 一七 こうして人にその悪しきわざを離れさせ、
 高ぶりを人から除き、
 一八 その魂を守つて、墓に至らせず、
 その命を守つて、つるぎに滅びないようにされる。
 一九 人はまたその床の上で痛みによって懲らされ、
 その骨に戦いが絶えることなく、
 二〇 その命は、食物をいとい、
 その食欲は、おいしい食物をきらう。
 二一 その肉はやせ落ちて見えず、
 その骨は見えなかつたものでもあらわになり、
 二二 その魂は墓に近づき、その命は滅ぼす者に近づく。
 二三 もしそこに彼のためにひとりの天使があり、
 千のうちのひとりであつて、仲保となり、

人にその正しい道を示すならば、

二四 神は彼をあわれんで言われる、

『彼を救って、墓に下ることを免れさせよ、

わたしはすでにあがないしを得た。』

二五 彼の肉を幼な子の肉よりもみずみずしくならせ、

彼を若い時の元気に帰らせよ』と。

二六 その時、彼が神に祈るならば、神は彼を顧み、

喜びをもつて、み前にいたらせ、

その救を人に告げ知らせられる。

二七 彼は人々の前に歌って言う、

『わたしは罪を犯し、正しい事を曲げた。

しかしわたしに報復がなかった。

二八 彼はわたしの魂をあがなつて、

墓に下らせられなかった。

わたしの命は光を見ることができると。

二九 見よ、神はこれらすべての事を

ふたたび、みたび人に行い、

三〇 その魂を墓から引き返し、

彼に命の光を見させられる。

三一 ヨブよ、耳を傾けてわたしに聞け、

黙せよ、わたしは語ろう。

三二 あなたがもし言うべきことがあるなら、

わたしに答えよ、

語れ、わたしはあなたを正しい者にしようと

望むからだ。

三三 もし語ることがないなら、わたしに聞け、

黙せよ、わたしはあなたに知恵を教えよう。』

第三四章

一 エリフはまた答えて言った、

二 「あなたがた知恵ある人々よ、わたしの言葉を聞け、

あなたがた知識ある人々よ、わたしに耳を傾けよ。

三口が食物を味わうように、

耳は言葉をわきまえるからだ。

四 われわれは正しい事を選び、

われわれの間に良い事の

何であるかを明らかにしよう。

五 ヨブは言った、『わたしは正しい、

神はわたしの公義を奪われた。

六 わたしは正しいにもかかわらず、偽る者とされた。

わたしにはとががないけれども、

わたしの矢傷はいえない』と。

七 だれかヨブのような人があろう。

彼はあざけりを水のように飲み、

八 悪をなす者どもと交わり、悪人と共に歩む。

九 彼は言った、『人は神と親しんでも、

なんの益もない』と。

一〇 それであなたがた理解ある人々よ、わたしに聞け、

神は断じて悪を行うことなく、

全能者は断じて不義を行うことはない。

二 神は人のわざにしたがつてその身に報い、

おのおのの道にしたがつて、

その身に振りかからせられる。

二三 まことに神は悪しき事を行われない。

全能者はさばきをまげられない。

二三 だれかこの地を彼にゆだねた者があるか。

だれか全世界を彼に負わせた者があるか。

一四 神がもしその霊をご自分に取り取りもし、

その息をご自分に取りあつめられるならば、

一五 すべての肉は共に滅び、

人はちりに帰るであらう。

一六 もし、あなたに悟りがあるならば、これを聞け、

わたしの言うところに耳を傾けよ。

一七 公義を憎む者は世を治めることができようか。

正しく力ある者を、あなたは非難するであらうか。

一八 王たる者に向かつて『よこしまな者』と言ひ、

つかさたる者に向かつて、『悪しき者』と

言うことができるであらうか。

一九 神は君たる者をもかたより見られることなく、

富める者を貧しき者にまさつて

顧みられることはない。

彼らは皆み手のわざだからである。

二〇 彼らはまたたく間に死に、

民は夜の間に振われて、消えうせ、

力ある者も人手によらずに除かれる。

二一 神の目が人の道の上にあつて、

そのすべての歩みを見られるからだ。

二三 悪を行う者には身を隠すべき暗やみもなく、

暗黒もない。

二三 人がさばきのために神の前に出るとき、

神は人のために時を定めておかれない。

二四 彼は力ある者をも調べることなく打ち滅ぼし、

他の人々を立てて、これに替えられる。

二五 このように、神は彼らのわざを知り、

夜の間に彼らをくつがえされるので、

彼らはやがて滅びる。

二六 彼は人々の見る所で、

彼らをその惡のために撃たれる。

ニモこれは彼らがそむいて彼に従わず、その道を全く顧みないからだ。

ニハこうして彼らは貧しき者の叫びを

彼のもとにいたらせ、

悩める者の叫びを彼に聞かせる。

ニ九彼が黙っておられるとき、

だれが非難することができようか。

彼が顔を隠されるとき、

だれが彼を見ることができようか。

一国の上にも、一人の上にも同様だ。

三〇これは神を信じない者が世を治めることがなく、

民をわなにかける事のないようにするためである。

三一だれが神に向かつて言ったか、

『わたしは罪を犯さないのに、懲しめられた。』

三二わたしの見ないものをわたしに教えられたい。

もしわたしが悪い事をしたなら、

重ねてこれをしない』と。

三三あなたが拒むゆえに、

彼はあなたの好むように報いをされるであろうか。

あなたみずから選ぶがよい、わたしはしない。

あなたの知るところを言いなさい。

三四悟りある人々はわたしに言うだろう、

わたしに聞くところの知恵ある人は言うだろう、

三五『ヨブの言うところは知識がなく、

その言葉は悟りがない』と。

三六どうかヨブが終りまで試みられるように、

彼は悪人のように答えるからである。

三七彼は自分の罪に、とがを加え、

われわれの中にあつて手をうち、

神に逆らつて、その言葉をしげくする」。

第三十五章

一エリフはまた答えて言つた、

二「あなたはこれを正しいと思うのか、

あなたは『神の前に自分は正しい』と言うのか。

三あなたは言う、『これはわたしになんの益があるか、

罪を犯したのとくらべて

なんのまさるところがあるか』と。

四わたしはあなたおよび、

あなたと共にいるあなたの友人たちに答えよう。

五天を仰ぎ見よ、

あなたの上なる高き空を望み見よ。

六 あなたが罪を犯しても、
彼になんのさしさわりがあるか。

あなたのとがが多くても、彼に何をなし得ようか。

七 またあなたは正しくても、彼に何を与え得ようか。

彼はあなたの手から何を受けられるであろうか。

八 あなたの悪はただあなたのような人にかかり、

あなたの義はただ人の子にかかわるのみだ。

九 したげの多いために叫び、

力ある者の腕のゆえに呼ばれる人々がある。

一〇 しかし、ひとりとして言う者はない、

『わが造り主なる神はどこにおられるか、

彼は夜の間に歌を与え、

二 地の獣よりも多く、われわれを教え、

空の鳥よりも、われわれを賢くされる方である』と。

三 彼らが叫んでも答えられないのは、

悪しき者の高ぶりによる。

四 まことに神はむなしい叫びを聞かれない。

また全能者はこれを顧みられない。

五 あなたが彼を見ないと言う時はなおさらだ。

さばきは神の前にある。

六 あなたは彼を待つべきである。

七 今彼が怒りをもつて罰せず、

罪とがを深く心にとめられないゆえに
一六 ヨブは口を開いてむなしい事を述べ、
無知の言葉をしげくする」。

第三十六章

一 エリフは重ねて言った、

二 「しばらく待て、わたしはあなたに示すことがある。

なお神のために言うべき事がある。

三 わたしは遠くからわが知識を取り、

わが造り主に正義を帰する。

四 まことにわたしの言葉は偽らない。

知識の全き者があなたと共にいる。

五 見よ、神は力ある者であるが、

何を卑しめられない、

その悟りの力は大きい。

六 彼は悪しき者を生かしておかれない、

苦しむ者のためにさばきを行われる。

七 彼は正しい者から目を離さず、

位にある王たちと共に、とこしえに、

彼らをすわらせて、尊くされる。

八 もし彼らが足かせにつながら、

悩みのなわに捕えられる時は、

九 彼らの行いと、とがと、

その高ぶったふるまいを彼らに示し、

一〇 彼らの耳を開いて、教を聞かせ、

悪を離れて帰ることを命じられる。

二 もし彼らが聞いて彼に仕えるならば、

彼らはその日を幸福に過ごし、

その年を楽しく送るであろう。

三 しかし彼らが聞かないならば、つるぎによって滅び、

知識を得ないで死ぬであろう。

三三 心に神を信じない者どもは怒りをたくわえ、

神に縛られる時も、助けを呼び求めることをしない。

三四 彼らは年若くして死に、

その命は恥のうちに終る。

三五 神は苦しむ者をその苦しみによって救い、

彼らの耳を逆境によって開かれる。

一六 神はまたあなたを悩みから、

束縛のない広い所に誘い出された。

そしてあなたの食卓に置かれた物は

すべて肥えた物であった。

一七 しかしあなたは悪人のうくべき

さばきをおのれに満たし、

さばきと公義はあなたを捕えている。

一八 あなたは怒りに誘われて、

あざけりに陥らぬように心せよ。

あがないしろの大きいなるがために、おのれを誤るな。

一九 あなたの叫びはあなたを守って、

悩みを免れさせるであろうか、

いかに力をつくしても役に立たない。

二〇 人々がその所から断たれる

その夜を慕ってはならない。

二一 慎んで悪に傾いてはならない。

あなたは悩みよりもむしろこれを選んだからだ。

二三 見よ、神はその力をもってあがめられる。

だれか彼のように教える者があるか。

三三 だれか彼のためにその道を定めた者があるか。

だれか『あなたは悪い事をした』と

言いうる者があるか。

三四 神のみわざをほめたたえる事を忘れてはならない。

これは人々の歌いあがめるところである。

三五 すべての人はこれを仰ぎ見る。

人は遠くからこれを見るにすぎない。

三六 見よ、神は大いなる者にいまして、

われわれは彼を知らない。

第三十七章

その年の数も計り知ることができない。

二モ彼は水のしたたりを引きあげ、

その霧をしたたらせて雨とされる。

二ハ空はこれを降らせて、人の上に豊かに注ぐ。

二九だれか雲の広がるわけと、

その幕屋のとどろくわけとを

悟ることができようか。

三〇見よ、彼はその光をおのれのまわりにひろげ、

また海の底をおおわれる。

三二彼はこれらをもつて民をさばき、

食物を豊かに賜い、

三三いなすまをもつてもろ手を包み、

これに命じて敵を打たせられる。

三三そのとどろきは、

悪にむかつて怒りに燃える彼を現す。

一これがためにわが心もまたわななき、

その所からとび離れる。

二聞け、神の声のとどろきを、

またその口から出るささやきを。

三彼はこれを天が下に放ち、

その光を地のすみずみまで至らせられる。

四その後、声のとどろき、

彼はそのいかめしい声をもって鳴り渡られる。

その声の聞える時、

彼はいなすまを引きとめられない。

五神はその驚くべき声をもって鳴り渡り、

われわれの悟りえない大いなる事を行われる。

六彼は雪に向かつて『地に降れ』と命じ、

夕立および雨に向かつて『強く降れ』と命じられる。

七彼はすべての人の手を封じられる。

これはすべての人にみわざを知らせるためである。

ハその時、獣は穴に入り、そのほらにとどまる。

九つむじ風はそのへやから、

寒さは北風から来る。

一〇神のいぶきによって氷が張り、

広々とした水は凍る。

二彼は濃い雲に水気を負わせ、

雲はそのいなすまを散らす。

三これは彼の導きによってめぐる。

彼の命じるところをことごとく

世界のおもてに行うためである。

二三 神がこれらをこさせるのは、懲しめのため、
あるいはその地のため、
あるいはいつくしみのためである。

二四 ヨブよ、これを聞け、
立つて神のくすしきみわざを考えよ。

二五 あなたは知っているか、
神がいかにこれらに命じて、
その雲の光を輝かされるかを。

二六 あなたは知っているか、雲のつりあいと、
知識の全き者のくすしきみわざを。

二七 南風によつて地が穏やかになる時、
あなたの着物が熱くなることを。

二八 あなたは鑄た鏡のように堅い大空を、
彼のように張ることができるか。

二九 われわれが彼に言うべき事をわれわれに教えよ、
われわれは暗くて、言葉をつらねることはできない。

三〇 わたしは語ることがあると
彼に告げることができようか、
人は滅ぼされることを望むであろうか。

三一 光が空に輝いているとき、風過ぎて空を清めると、
人々はその光を見ることができない。

三二 北から黄金のような輝きがでてくる。

神には恐るべき威光がある。

三三 全能者は――

われわれはこれを見いだすことができない。
彼は力と公義とにすぐれ、

正義に満ちて、これを曲げることはない。

二四 それゆえ、人々は彼を恐れる。

彼はみずから賢いと思う者を顧みられない。

第三十八章

一 この時、主はつむじ風の中からヨブに答えられた、

二 「無知の言葉をもつて、

神の計りごとを暗くするこの者はだれか。

三 あなたは腰に帯して、男らしくせよ。

わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。

四 わたしが地の基をすえた時、どこにいたか。

もしあなたが知っているなら言え。

五 あなたがもし知っているなら、

だれがその度量を定めたか。

だれが測りなわを地の上に張ったか。

六 その土台は何の上に置かれたか。

その隅の石はだれがすえたか。

七かの時には明けの星は相共に歌い、
神の子たちはみな喜び呼ばわった。

八海の水が流れいで、胎内からわき出たとき、
だれが戸をもつて、これを閉じこめたか。

九あの時、わたしは雲をもつて衣とし、
黒雲をもつてむつきとし、

一〇これがために境を定め、
関および戸を設けて、

二言つた、『ここまで来てよい、越えてはならぬ、
おまえの高波はここにとどまるのだ』と。

三あなたは生れた日からこのかた朝に命じ、
夜明けにその所を知らせ、

四これに地の縁をとらえさせ、
悪人をその上から振り落させたことがあるか。

五地は印せられた土のように変り、
衣のようにいろいろとられる。

六悪人はその光を奪われ、
その高くあげた腕は折られる。

七あなたは海の源に行つたことがあるか。
淵の底を歩いたことがあるか。

八死の門はあなたのために開かれたか。
あなたは暗黒の門を見たことがあるか。

一八あなたは地の広さを見きわめたか。

一九光のある所に至る道はいずれか。

二〇あなたはこれをその境に導くことができるか。
その家路を知っているか。

二一あなたは知っているだろう、
あなたはかの時すでに生れており、

またあなたの日数も多いのだから。

二二あなたは雪の倉にはいつたことがあるか。
ひよりの倉を見たことがあるか。

二三これらは悩みの時のため、いくさと戦いの日のため、
わたしがたくわえて置いたものだ。

二四光の広がる道はどこか。
東風の地に吹き渡る道はどこか。

二五だれが大雨のために水路を切り開き、
いかずちの光のために道を開き、

二六人なき地にも、人なき荒野にも雨を降らせ、
二七荒れすたれた地をあき足らせ、

これに若草をはえさせるか。
二八雨に父があるか。

露の玉はだれが生んだか。

二九 氷はだれの胎から出たか。

空の霜はだれが生んだか。

三〇 水は固まって石のようになり、淵のおもては凍る。

三一 あなたはプレアデスの鎖を結ぶことができるか。

オリオンの綱を解くことができるか。

三二 あなたは十二宮をその時にしたがって

引き出すことができるか。

北斗とその子星を導くことができるか。

三三 あなたは天の法則を知っているか、

そのおきてを地に施すことができるか。

三四 あなたは声を雲にあげ、

多くの水にあなたをおおわせることができるか。

三五 あなたはいなずまをつかわして行かせ、

『われわれはここにいます』と、

あなたに言わせることができるか。

三六 雲に知恵を置き、

霧に悟りを与えたのはだれか。

三七 だれが知恵をもつて雲を数えることができるか。

だれが天の皮袋を傾けて、

三八 ちりを一つに流れ合わせ、

土くれを固まらせることができるか。

三九 あなたはししのために食物を狩り、

子じしの食欲を満たすことができるか。

四〇 彼らがほら穴に伏し、

林のなかに待ち伏せする時、

あなたはこの事をなすことができるか。

四一 からすの子が神に向かつて呼ばわり、

食物がなくて、さまようとき、

からすにえさを与える者はだれか。

第三十九章

一 あなたは岩間のやぎが

子を産むときを知っているか。

あなたは雌じかが子を産むのを見たことがあるか。

二 これらの妊娠の月を数えることができるか。

これらが産む時を知っているか。

三 これらは身をかがめて子を産み、

そのはらみ子を産みいだす。

四 その子は強くなつて、野に育ち、

出て行つて、その親のもとに帰らない。

五 だれが野ろばを放つて、自由にしたか。

だれが野ろばのつなぎを解いたか。

六 わたしは荒野をその家として与え、

荒れ地をそのすみかとして与えた。

七これは町の騒ぎをいやしめ、御者の呼ぶ声を聞きいれず、

八山を牧場としてはせまわり、もろもろの青物を尋ね求める。

九野牛は快くあなたに仕え、

あなたの飼葉おけのかたわらにとどまるだろうか。

一〇あなたは野牛に手綱をつけて

うねを歩かせることができるか、

これはあなたに従つて谷を耕すであろうか。

二その力が強いからとて、

あなたはこれに頼むであろうか。

またあなたの仕事をこれに任せるであろうか。

三あなたはこれにたよつて、あなたの穀物を

打ち場に運び帰らせるであろうか。

三三だちようは威勢よくその翼をふるう。

しかしこれにはきれいな羽と羽毛があるか。

一四これはその卵を土の中に捨て置き、

これを砂のなかで暖め、

五足でつぶされることも、

野の獣に踏まれることも忘れている。

一六これはその子に無情であつて、

あたかも自分の子でないようにし、その苦勞のむなしくなるをも恐れない。

一七これは神がこれに知恵を授けず、

悟りを与えなかつたゆえである。

一八これがその身を起して走る時には、

馬をも、その乗り手をもあざける。

一九あなたは馬にその力を与えることができるか、

力をもつてその首を装うことができるか。

二〇あなたはこれをいなごのように、

とばせることができるか。

その鼻あらしの威力は恐ろしい。

二二これは谷であがき、その力に誇り、

みずから出ていつて武器に向かう。

三三これは恐れをあざ笑つて、驚くことなく、

つるぎをさけて退くことがない。

三三矢筒はその上に鳴り、

やりと投げやりと、あいきらめく。

二四これはたけりつ、狂いつ、地をひとのみにし、

ラッパの音が鳴り渡つても、立ちどまることがない。

二五これはラッパの鳴るごとにハアハアと言ひ、

遠くから戦いをかぎつけ、

隊長の大声およびときの声を聞き知る。

第四〇章

二六 たかが舞いあがり、その翼をのべて南に向かうのは、
あなたの知恵によるのか、
二七 わしがかけのぼり、その巢を高い所につくるのは、
あなたの命令によるのか。
二八 これは岩の上にすみかを構え、
岩のとがり、または険しい所におり、
二九 そこから獲物をうかがう。
その目の及ぶところは遠い。
三〇 そのひなもまた血を吸う。
おおよそ殺された者のある所には、これもそこにいる」。

一 主はまたヨブに答えて言われた、
二 「非難する者が全能者と争おうとするのか、
神と論ずる者はこれに答えよ」。
三 そこで、ヨブは主に答えて言った、
四 「見よ、わたしはまことに卑しい者です、
なんとあなたに答えましょうか。
ただ手を口に当てるのみです。
五 わたしはすでに一度言いました、また言いません、
すでに二度言いました、重ねて申しません」。

六 主はまたつむじ風の中からヨブに答えられた、
七 「あなたは腰に帯して、男らしくせよ。
わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。
八 あなたはなお、わたしに責任を負わそうとするのか。
あなたはわたしを非とし、
自分を是としようとするのか。
九 あなたは神のような腕を持っているのか、
神のような声でどろきわたることができるか。
一〇 あなたは威光と尊厳とをもつてその身を飾り、
栄光と華麗とをもつてその身を装ってみよ。
一一 あなたのあふるる怒りを漏らし、
すべての高ぶる者を見て、これを低くせよ。
一二 すべての高ぶる者を見て、これをかがませ、
また悪人をその所で踏みつけ、
一三 彼らをとものにちりの中にうずめ、
その顔を隠れた所に閉じこめよ。
一四 そうすれば、わたしもまた、あなたをほめて、
あなたの右の手は
あなたを救うことができるでしょう。
一五 河馬を見よ、
これはあなたと同様にわたしが造ったもので、
牛のように草を食う。

一六 見よ、その力は腰にあり、
その勢いは腹の筋にある。

一七 これはその尾を香柏のように動かし、
そのもの筋は互にからみ合う。

一八 その骨は青銅の管のようで、
その肋骨は鉄の棒のようだ。

一九 これは神のわざの第一のものであって、
これを造った者がこれにつるぎを授けた。

二〇 山もこれがために食物をいだし、
もろもろの野の獣もそこに遊ぶ。

二一 これは酸棗の木の下に伏し、
葦の茂み、または沼に隠れている。

二二 酸棗の木はその陰でこれをおおい、
川の柳はこれをめぐり囲む。

二三 見よ、たとい川が荒れても、これは驚かない。
ヨルダンがその口に注ぎかかつて、

これはあわてない。
二四 だが、かぎでこれを捕えることができるか。

だが、わなでその鼻を貫くことができるか。

第四章

一 あなたはつり針で

わにをつり出すことができるか。
糸でその舌を押えることができるか。

二 あなたは葦のなわをその鼻に通すことができるか。
つり針でそのあごを突き通すことができるか。

三 これはしきりに、あなたに願ひ求めるであろうか。
柔らかな言葉をあなたに語るであろうか。

四 これはあなたと契約を結ぶであろうか。
あなたはこれを取って、ながくあなたのしもべと

することができであろうか。
五 あなたは鳥と戯れるようにこれと戯れ、

またあなたのおとめたちのために、
これをつないでおくことができるであろうか。

六 商人の仲間はこれを商品として、
小売商人の間に分けるであろうか。

七 あなたは、もりでその皮を満たし、
やすでその頭を突き通すことができるか。

八 あなたの手をこれの上に置き、
あなたは戦いを思い出して、

再びこれをしないであろうか。

九 見よ、その望みはむなしくなり、
これを見てすら倒れる。

一〇 あえてこれを激する勇氣のある者はひとりもない。
それで、だれがわたしの前に立つことができるか。

二 だれが先にわたしに与えたので、
わたしはこれに報いるのか。

天が下にあるものは、ことごとくわたしのものだ。
三 わたしはこれが全身と、その著しい力と、
その美しい構造について

黙っていることはできない。

三 だれがその上着をはぐことができるか。
だれがその二重のよろいの間に

はいることができるか。
一四 だれがその顔の戸を開くことができるか。
そのまわりの歯は恐ろしい。

一五 その背は盾の列でできていて、
その堅く閉じたさまは密封したように、

一六 相互に密接して、

風もその間に、はいることができず、
一七 互に相連なり、

固く着いて離すことができない。
一八 これが、くしゃみすれば光を発し、

その目はあけぼののまぶたに似ている。

一九 その口からは、たいまつが燃えいで、
火花をいだす。

二〇 その鼻の穴からは煙が出てきて、
さながら煮え立つなべの水煙のごとく、
燃える葦の煙のようだ。

二一 その息は炭火をおこし、
その口からは炎が出る。

二三 その首には力が宿っていて、
恐ろしさが、その前に踊っている。

二三 その肉片は密接に相連なり、
固く身に着いて動かすことができない。

二四 その心臓は石のように堅く、
うすの下石のように堅い。

二五 その身を起すときは勇士も恐れ、
その衝撃によつてあわて惑う。

二六 つるぎがこれを撃つても、きかない、
やりも、矢も、もりも用をなさない。

二七 これは鉄を見ること、わらのように、
青銅を見ることが朽ち木のようである。

二八 弓矢もこれを逃がすことができない。
石投げの石もこれには、わらくずとなる。

第二章

一そこでヨブは主に答えて言った、

二「わたしは知ります、

あなたはすべての事をなすことができ、
またいかなるおぼしめしでも、

あなたにできないことはないことを。

三『無知をもつて神の計りごとをおおう
この者はだれか』。

二九こん棒もわらくずのようにみなされ、
投げやりの響きを、これはあざ笑う。

三〇その下腹は鋭いかわらのかけらのようで、
麦こき板のようにその身を泥の上に伸ばす。

三一これは淵をかなえのように沸きかえらせ、
海を香油のなべのようにする。

三二これは自分のあとに光る道を残し、
淵をしらがのうに思わせる。

三三地の上にはこれと並ぶものなく、
これは恐れのない者に造られた。

三四これはすべての高き者をさげすみ、
すべての誇り高ぶる者の王である』。

それゆえ、わたしはみずから悟らない事を言い、
みずから知らない、測り難い事を述べました。

四『聞け、わたしは語ろう、
わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ』。

五わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、
今はわたしの目であなたを拝見いたします。

六それでわたしはみずから恨み、
ちり灰の中で悔います』。

七主はこれらの言葉をヨブに語られて後、テマンびとエリパズ
に言われた、

「わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かつて燃え
る。あなたがたが、わたしのしもべヨブのように正しい事をわ

たしについて述べなかつたからである。ハそれで今、あなたがた
は雄牛七頭、雄羊七頭を取つて、わたしのしもべヨブの所へ行

き、あなたがたのために祈るであらう。わたしは彼の祈を受けい
れるによつて、あなたがたの愚かを罰することをしない。あな

たがたはわたしのしもべヨブのように正しい事をわたしについ
て述べなかつたからである」。

九そこでテマンびとエリパズ、シユヒびとビルダデ、ナアマびと
ゾパルは行って、主が彼らに命じられたようにしたので、主はヨ

ブの祈を受けいれられた。

一〇ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブの繁栄をもとにかえし、そして主はヨブのすべての財産を二倍に増された。二そこで彼のすべての兄弟、すべての姉妹、および彼の旧知の者どもことごとく彼のもとに来て、彼と共にその家で飲み食いし、かつ主が彼にくださったすべての災について彼を慰め、おのおの銀一ケシタと金の輪一つを彼に贈った。三主はヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった。四また彼は男の子七人、女の子三人をもった。五彼はその第一の娘をエミマと名づけ、第二をケジアと名づけ、第三をケレンハツプクと名づけた。六全国のうちでヨブの娘たちほど美しい女はなかった。父はその兄弟たちと同様に嗣業を彼らにも与えた。七この後、ヨブは百四十年生きながらえて、その子とその孫と四代までを見た。八ヨブは年老い、日満ちて死んだ。

詩篇^{しへん}

第一篇

一 悪^{あく}しき者^{もの}のはかりごとに歩^{あゆ}まず、
罪^{つみ}びとの道^{みち}に立^たたず、
あざける者^{もの}の座^ざにすわらぬ人^{ひと}はさいわいである。
二 このような人^{ひと}は主^{しゅ}のおきてをよろこび、
昼^{ひる}も夜^{よる}もそのおきてを思^{おも}う。
三 このような人^{ひと}は流れのほとりに植^うえられた木^きの
時^{とき}が来^くると実^みを結^{むす}び、
その葉^はもしほまないように、
そのなすところは皆^{みな}栄^{さか}える。
四 悪^{あく}しき者^{もの}はそうでない、
風^{かぜ}の吹^ふき去^さるもみがらのようだ。
五 それゆえ、悪^{あく}しき者^{もの}はさばきに耐^たえない。
罪^{つみ}びとは正^{ただ}しい者^{もの}のつどいに立^たつことができな
い。
六 主^{しゅ}は正^{ただ}しい者^{もの}の道^{みち}を知^しられる。
しかし、悪^{あく}しき者^{もの}の道^{みち}は滅^{ほろ}ぶる。

第二篇

一 なにゆえ、もろもろの国^{くに}びとは騒^{さわ}ぎたち、
もろもろの民^{たみ}はむなしい事^{こと}をたくらむのか。
二 地^ちのもろもろの王^{おう}は立ち構^{かま}え、
もろもろのつかさはともに、はかり、
主^{しゅ}とその油^{あぶら}そがれた者^{もの}とに逆^{さか}らつて言^いう、
三 「われらは彼^{かれ}らのかせをこわし、
彼^{かれ}らのきずなを解^とき捨^すてるであらう」と。
四 天^{てん}に座^ざする者^{もの}は笑^{わら}い、
主^{しゅ}は彼^{かれ}らをあざけられるであらう。
五 そして主^{しゅ}は憤^{いきどお}りをもつて彼^{かれ}らに語^{かた}り、
激^げしい怒^{いか}りをもつて彼^{かれ}らを恐^{おそ}れ惑^{まど}わせて言^いわれる、
六 「わたしはわが王^{おう}を聖^{せい}なる山^{やま}シオンに立^たてた」と。
七 わたしは主^{しゅ}の詔^{みことり}をのべよう。
主^{しゅ}はわたしに言^いわれた、「おまえはわたしの子^こだ。
きよう、わたしはおまえを生^うんだ。
八 わたしに求^{もと}めよ、わたしはもろもろの国^{くに}を
嗣^し業^{ぎやう}としておまえに与^{あた}え、
地^ちのはてまでもおまえの所有^{しやう}として与^{あた}える。
九 おまえは鉄^{てつ}のつえをもつて彼^{かれ}らを打^うち破^{やぶ}り、
陶^{とう}工^{こう}の作^{つく}る器^{うつもの}物^{もの}のように彼^{かれ}らを

打ち砕くであろう」と。

一〇それゆえ、もろもろの王よ、賢くあれ、地のつかさらよ、戒めをうけよ。

二恐れをもつて主に仕え、おののきをもつて

三その足に口づけせよ。

さもないと主は怒つて、

あなたがたを道で滅ぼされるであろう、

その憤りがすみやかに燃えるからである。

すべて主に寄り頼む者はさいわいである。

第三篇

ダビデがその子アブサロムを避けてのがれたときの歌

一主よ、わたしに敵する者のいかに多いことでしょう。

わたしに逆らって立つ者が多く、

二「彼には神の助けがない」と、

わたしについて言う者が多いのです。「セラ

ミしかし主よ、あなたはわたしを囲む盾、わが榮え、

わたしの頭を、もたげてくださるかたです。

四わたしが声をあげて主を呼ばわると、

主は聖なる山からわたしに答えられる。「セラ

五わたしはふして眠り、また目をさます。

主がわたしをささえられるからだ。

六わたしを囲んで立ち構える

ちよろずの民をもわたしは恐れない。

七主よ、お立ちください。

わが神よ、わたしをお救いください。

あなたはわたしのすべての敵のほおを打ち、

悪しき者の齒を折られるのです。

八救は主のものです。

どうかあなたの祝福が

あなたの民の上にありますように。「セラ

第四篇

聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわれたダビデの歌

一わたしの義を助け守られる神よ、

わたしが呼ばれる時、お答えください。

あなたはわたしが悩んでいた時、

わたしをくつろがせてくださいました。

わたしをあわれみ、わたしの祈をお聞きください。

二人の子らよ、いつまでわたしの誉をはずかしめるのか。

いつまでむなししい言葉を愛し、

偽りを慕い求めるのか。「セラ

第五篇

聖歌隊の指揮者によって笛にあわせてうたわれたダビデの歌

一 主よ、わたしの言葉に耳を傾け、

わたしの嘆きに、み心をとめてください。

三 しかしあなたがたは知るがよい、

主は神を敬う人をご自分のために聖別されたことを。

主はわたしが呼ばれる時におききくださる。

四 あなたがたは怒つても、罪を犯してはならない。

床の上で静かに自分の心に語りなさい。「セラ

五 義のいけにえをささげて主に寄り頼みなさい。

六 多くの人は言う、

「どうか、わたしたちに良い事が見られるように。

主よ、どうか、み顔の光を

わたしたちの上に照されるように」と。

七 あなたがわたしの心にお与えになった喜びは、

穀物と、ぶどう酒の豊かな時の喜びに

まさるものでした。

八 わたしは安らかに伏し、また眠ります。

主よ、わたしを安らかにおらせてくださるのは、

ただあなただけです。

二 わが王、わが神よ、

わたしの叫びの声をお聞きください。

わたしはあなたに祈っています。

三 主よ、朝ごとにあなたはわたしの声を聞かれます。

わたしは朝ごとにあなたのために

いけにえを備えて待ち望みます。

四 あなたは悪しき事を喜ばれる神ではない。

悪人はあなたのもとに身を寄せることはできない。

五 高ぶる者はあなたの目の前に立つことはできない。

あなたはすべて悪を行う者を憎まれる。

六 あなたは偽りを言う者を滅ぼされる。

主は血を流す者と、人をだます者を忌みきらわれる。

七 しかし、わたしはあなたの豊かないづくしみによって、

あなたの家に入り、

聖なる宮にむかって、かしこみ伏し拝みます。

八 主よ、わたしのあだのゆえに、

あなたの義をもってわたしを導き、

わたしの前にあなたの道をまっすぐにしてください。

九 彼らの口には真実がなく、彼らの心には滅びがあり、

そののどは開いた墓、

その舌はへつらいを言うのです。

一〇 神よ、どうか彼らにその罪を負わせ、

第六篇

そのはかりごとによつて、みずから倒れさせ、
 その多くのとがのゆえに彼らを追いだしてください。
 彼らはあなたにそむいたからです。
 ニしかし、すべてあなたに寄り頼む者を喜ばせ、
 とこしえに喜び呼ばわらせてください。
 また、み名を愛する者があなたによつて
 喜びを得るように、彼らをお守りください。
 ニ主よ、あなたは正しい者を祝福し、
 盾をもつてするように、
 恵みをもつてこれをおおい守られます。

聖歌隊の指揮者によつてシエミニテにあわせ琴をもつてうたわせたダビデの歌

一主よ、あなたの怒りをもつて、わたしを責めず、
 あなたの激しい怒りをもつて、
 わたしを懲しめないでください。
 ニ主よ、わたしをあわれんでください。
 わたしは弱り衰えています。
 主よ、わたしをいやしてください。
 わたしの骨は悩み苦しんでいます。
 ニわたしの魂もまたいたく悩み苦しんでいます。

第七篇

主よ、あなたはいつまでお怒りになるのですか。
 四主よ、かえりみて、わたしの命をお救いください。
 あなたはいつくしみにより、わたしをお助けください。
 五死においては、あなたを覚えるものではなく、
 陰府においては、だれがあなたを
 ほめたたえることができましょうか。
 六わたしは嘆きによつて疲れ、
 夜ごとに涙をもつて、わたしのふしどをただよわせ、
 わたしのしとねをぬらした。
 セわたしの目は憂いによつて衰え、
 もろもろのあだのゆえに弱くなつた。
 ハすべて悪を行う者よ、わたしを離れ去れ。
 主はわたしの泣く声を聞かれた。
 九主はわたしの願いを聞かれた。
 主はわたしの祈をうけられる。
 一〇わたしの敵は恥じて、いたく悩み苦しみ、
 彼らは退いて、たちどころに恥をうけるであらう。

ベニヤミンびとクシのことについてダビデが主にむかつてうたつたシガヨンの歌

一 わが神、主よ、わたしはあなたに寄り頼みます。
 どうかすべての追い迫る者からわたしを救い、
 わたしをお助けください。
 ニ さもないと彼らは、ししのように、わたしをかき裂き、
 助ける者の来ないうちに、引いて行くでしょう。
 三 わが神、主よ、もしわたしがこの事を行つたならば、
 もしわたしの手によこしま事があるならば、
 四 もしわたしの友に悪をもつて報いたことがあり、
 ゆえなく、敵のものを略奪したことがあるならば、
 五 敵にわたしを追ひ捕えさせ、
 わたしの命を地に踏みにじらせ、
 わたしの魂をちりにゆだねさせてください。(セラ
 六 主よ、怒りをもつて立ち、
 わたしの敵の憤りにむかつて立ちあがり、
 わたしのために目をさましてください。
 あなたはさばきを命じられました。
 セもろもろの民をあなたのまわりにつどわせ、
 その上なる高みくらにおすわりください。
 ハ 主はもろもろの民をさばかれます。
 主よ、わたしの義と、わたしにある誠実に従つて、
 わたしをさばいてください。
 九 どうか悪しき者の悪を断ち、

一 正しき者を堅く立たせてください。
 義なる神よ、あなたは人の心と思いとを調べられます。
 ニ わたしを守る盾は神である。
 神は心の直き者を救われる。
 三 神は義なるさばきびと、
 日ごとに憤りを起される神である。
 四 もし人が悔い改めないならば、神はそのつるぎをとぎ、
 その弓を張つて構え、
 五 また死に至らせる武器を備え、
 その矢を火矢とされる。
 六 見よ、悪しき者は邪悪をはらみ、
 害毒をやどし、偽りを生む。
 七 彼は穴を掘つて、それを深くし、
 みずから作つた穴に陥る。
 八 その害毒は自分のかしらに帰り、
 その強暴は自分のこうべに下る。
 九 わたしは主にむかつて、
 その義にふさわしい感謝をささげ、
 いと高き者なる主の名をほめ歌うであらう。

第八篇

聖歌隊の指揮者によつてギテトにあわせてうたわせたダビデの歌

一 主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、
いかに尊いことでしよう。

あなたの栄光は天の上にあり、

二 みどりごと、ちのみごとの口によつて、

ほめたたえられています。

あなたは敵と恨みを晴らす者とを静めるため、

あだに備えて、とりでを設けられました。

三 わたしは、あなたの指のわざなる天を見、

あなたが設けられた月と星とを見て思います。

四人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、

人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。

五 ただ少しく人を神よりも低く造つて、

栄えと誉とをこうむらせ、

六 これにみ手のわざを治めさせ、

よろずの物をその足の下におかれました。

七 すべての羊と牛、また野の獣、

八 空の鳥と海の魚、海路を通うものまでも。

九 主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、

いかに尊いことでしよう。

第九篇

聖歌隊の指揮者によつてムツラバンのしらべにあわせてうたわせたダビデの歌

一 わたしは心をつくして主に感謝し、
あなたのくすしきみわざを
ことごとく宣べ伝えます。

二 いと高き者よ、あなたによつて

わたしは喜びかつ樂しみ、

あなたの名をほめ歌います。

三 わたしの敵は退くとき、

つまずき倒れてあなたの前に滅びました。

四 あなたがわたしの正しい訴えを

助け守られたからです。

あなたはみくらに座して、

正しいさばきをされました。

五 あなたはもろもろの国民を責め、

悪しき者を滅ぼし、

永久に彼らの名を消し去られました。

六 敵は絶えはてて、とこしえに滅び、

あなたが滅ぼされたもろもろの町は

その記憶さえ消えうせました。

七 しかし主はとこしえに、み位に座し、

七

さばきのために、みくらを設けられました。

八主は正義をもつて世界をさばき、

公平をもつてもろもろの民をさばかれます。

九主はしえたげられる者のとりで、

なやみの時のとりです。

一〇み名を知る者はあなたに寄り頼みます。

主よ、あなたを尋ね求める者を

あなたは捨てられたことがないからです。

二シオンに住まわれる主にむかつてほめうたい、

そのみわざをもうもろの民のなかに宣べ伝えよ。

二三血を流す者にあだを報いられる主は彼らを心にとめ、

苦しむ者の叫びをお忘れにならないからです。

二四主よ、わたしをあわれんでください。

死の門からわたしを引きあげられる主よ、

あだする者のわたしを悩ますのを

みそなわしてください。

二五そうすれば、わたしはあなたのすべての誉を述べ、

シオンの娘の門で、

あなたの救を喜ぶことができますよう。

二六もうもろの国民は自分の作った穴に陥り、

隠し設けた網に自分の足を捕えられる。

二七主はみずからを知らせ、さばきを行われた。

第二〇篇

悪しき者は自分の手で作ったわなに捕えられる。(ビガヨン、

セラ

二七悪しき者、また神を忘れるもろもろの国民は

陰府へ去つて行く。

二八貧しい者は常に忘れられるのではない。

苦しむ者の望みはとこしえに滅びるのではない。

二九主よ、立ちあがってください。

人に勝利を得させず、もろもろの国民に、

み前でさばきを受けさせてください。

三〇主よ、彼らに恐れを起させ、もろもろの国民に

自分がただ、人であることを知らせてください。(セラ

一主よ、なにゆえ遠く離れて

立たれるのですか。

なにゆえ悩みの時に身を隠されるのですか。

二悪しき者は高ぶつて貧しい者を激しく責めます。

どうぞ彼らがその企てたばかりごとに

みずから捕えられますように。

三悪しき者は自分の心の願いを誇り、

むさぼる者は主をのろい、かつ捨てる。

四 悪しき者は誇り顔をして、神を求めない。

その思いに、すべて「神はない」という。

五 彼の道は常に榮え、

あなたのさばきは彼を離れて高く、

彼はすべてのあだを口先で吹く。

六 彼は心の内に言う、「わたしは動かされることはなく、

世々わざわいにあうことがない」と。

七 その口はのろいと、欺きと、しえたげとに満ち、

その舌の下には害毒と不正とがある。

八 彼は村里の隠れ場におり、

忍びやかな所で罪のない者を殺す。

その目は寄るべなき者をうかがい、

九 隠れ場にひそむしのように、ひそかに待ち伏せする。

彼は貧しい者を捕えようと待ち伏せし、

貧しい者を網にひきいれて捕える。

一〇 寄るべなき者は彼の力によつて

打ちくじかれ、衰え、倒れる。

一一 彼は心のうちに言う、「神は忘れた、

神はその顔を隠した、

神は絶えて見ることはなからう」と。

一二 主よ、立ちあがってください。

神よ、み手をあげてください。

苦しむ者を忘れないでください。

一三 なにゆえ、悪しき者は神を侮り、心のうちに

「あなたはがめることをしない」と言うのですか。

一四 あなたはみそなわし、悩みと苦しみとを見て、

それをみ手に取られます。

寄るべなき者はあなたに身をゆだねるのです。

あなたはいつもみなしごを助けられました。

一五 悪しき者と悪を行う者の腕を折り、

その悪を一つも残さないまでに探り出してください。

一六 主はとこしえに王でいらせられる。

もろもろの国民は滅びて

主の国から跡を断つでしょう。

一七 主よ、あなたは柔和な者の願いを聞き、

その心を強くし、耳を傾けて、

一八 みなしごと、しえたげられる者とのために

さばきを行われます。

地に属する人は再び人を脅かすことはないでしょう。

第二一篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわれたダビデの歌

一 わたしは主に寄り頼む。

第二二篇

聖歌隊の指揮者によってシエミニデにあわせてうたわせたダビデの歌

一 主よ、お助けください。神を敬う人は絶え、

なにゆえ、あなたがたはわたしにむかつて言うのか、
「鳥のように山にのがれよ。」

二 見よ、悪しき者は、暗やみで、
心の直き者を射ようと弓を張り、
弦に矢をつがえている。

三 基が取りこわされるならば、

正しい者は何をなし得ようか」と。

四 主はその聖なる宮にいまし、主のみくらは天にあり、
その目は人の子らをみそなわし、

そのまぶたは人の子らを調べられる。

五 主は正しき者をも、悪しき者をも調べ、

そのみ心は乱暴を好む者を憎まれる。

六 主は悪しき者の上に炭火と硫黄とを降らせられる。

燃える風は彼らがその杯にうくべきものである。

七 主は正しくいまして、

正しい事を愛されるからである。

直き者は主のみ顔を仰ぎ見るであらう。

第二三篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一 主よ、いつまでなのですか。

忠信な者は人の子らのなかから消えうせました。

二人はみなその隣り人に偽りを語り、

へつらいのくちびると、ふたごころとをもつて語る。

三 主はすべてのへつらいのくちびると、

大きな事を語る舌とを断たれるように。

四 彼らは言う、「わたしたちは舌をもつて勝を得よう、

わたしたちのくちびるはわたしたちのものだ、

だれがわたしたちの主人であるか」と。

五 主は言われる、「貧しい者がかすめられ、

乏しい者が嘆くゆえに、わたしはいま立ちあがつて、

彼らをその慕い求める安全な所に置こう」と。

六 主のことは清き言葉である。

地に設けた炉で練り、七たびきよめた銀のようである。

七 主よ、われらを保ち、

とこしえにこの人々から免れさせてください。

八 卑しい事が人の子のなかにあがめられている時、

悪しき者はいたる所でほしいままに歩いていきます。

第一四篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。
彼らは腐れはて、憎むべき事をなし、
善を行う者はない。

とこしえにわたしをお忘れになるのですか。
いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。
二 いつまで、わたしは魂に痛みを負い、ひねもす心に
悲しみをいだかなければならないのですか。
いつまで 敵はわたしの上にあがめられるのですか。
三 わが神、主よ、みそなわして、わたしに答え、
わたしの目を明らかにしてください。
さもないと、わたしは死の眠りに陥り、
四 わたしの敵は「わたしは敵に勝った」と言い、
わたしのあだは、わたしの動かされることによつて喜ぶで
しょう。

五 しかしわたしはあなたのいつくしみに信頼し、
わたしの心はあなたの救を喜びます。
六 主は豊かにわたしをあしらわれたゆえ、
わたしは主にむかつて歌います。

第一五篇

ダビデの歌

一 主よ、あなたの幕屋にやどるべき者はだれですか、
あなたの聖なる山に住むべき者はだれですか。

二 主は天から人の子らを見おろして、
賢い者、神をたずね求める者が
あるかないかを見られた。
三 彼らはみな迷い、みなひとしく腐れた。
善を行う者はない、ひとりもない。
四 すべて悪を行う者は悟りがないのか。
彼らは物食うようにわが民をくらい、
また主を呼ぶことをしない。
五 その時、彼らは大いに恐れた。
神は正しい者のやからと共におられるからである。
六 あなたがたは貧しい者の計画を
はずかしめようとする。
しかし主は彼の避け所である。
セどうか、シオンからイスラエルの救が出るように。
主がその民の繁栄を回復されるとき、
ヤコブは喜び、イスラエルは楽しむであろう。

第二六篇

二 直く歩み、義を行い、心から真実を語る者、
 三 その舌をもつてそしらず、その友に悪をなさず、
 隣り人に対するそしりを取りあげず、
 四 その目は神に捨てられた者を卑しめ、
 主を恐れる者を尊び、
 誓った事は自分の損害になつても変えることなく、
 五 利息をとつて金銭を貸すことなく、まいないを取つて
 罪のない者の不利をはかることをしない人である。
 これらの事を行う者は
 とこしえに動かされることはない。

ダビデのミクタムの歌

一 神よ、わたしをお守りください。
 わたしはあなたに寄り頼みます。
 二 わたしは主に言う、「あなたはわたしの主、
 あなたのほかにはわたしの幸はない」と。
 三 地にある聖徒は、
 すべてわたしの喜ぶすぐれた人々である。
 四 おおよそ、ほかの神を選ぶ者は悲しみを増す。
 わたしは彼らのささげる血の灌祭を注がず、

その名を口にとなえることをしない。

五 主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきもの。

あなたはわたしの分け前を守られる。

六 測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。

まことにわたしは良い嗣業を得た。

七 わたしにさとしをさすげられる主をほめまつる。

夜はまた、わたしの心がわたしを教える。

八 わたしは常に主をわたしの前に置く。

主がわたしの右にいますゆえ、

わたしは動かされることはない。

九 このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。

わたしの身もまた安らかである。

一〇 あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、

あなたの聖者に墓を見させられないからである。

一一 あなたはいのちの道をわたしに示される。

あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、

あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。

第二七篇

ダビデの祈

一 主よ、正しい訴えを聞き、わたしの叫びにみ心をとめ、

偽りのないくちびるから出るわたしの祈に
耳を傾けてください。

ニどうかわたしについての宣告がみ前から出て、
あなたの目が公平をみられるように。

三あなたがわたしの心をためし、夜、わたしに臨み、
わたしを試みられても、わたしのうちに

なんの悪い思いをも見いだされないうちに。
わたしの口も罪を犯しません。

四人のおこないの事をいえば、
あなたのかちびるの言葉によつて、

わたしは不法な者の道を避けた。
五わたしの歩みはあなたの道に堅く立ち、

わたしの足はすべることがなかったのです。
六神よ、わたしはあなたに呼ばわれます。

あなたはわたしに答えられます。
どうか耳を傾けて、

わたしの述べることをお聞きください。
七寄り頼む者をそのあだから右の手で救われる者よ、

あなたのいつくしみを驚くばかりにあらわし、
八ひとみのようにわたしを守り、

みつばさの陰にわたしを隠し、
九わたしをしえたげる悪しき者から、

わたしを囲む恐ろしい敵から、のがれさせてください。

一〇彼らはその心を閉じて、あわれむことなく、
その口をもつて高ぶつて語るのです。

二彼らはわたしを追いつめ、わたしを囲み、
わたしを地に投げ倒さんと、その目をそそぎます。

三彼らはかき裂かんと、いらだつしのごとく、
隠れた所にひそみ待つ子じしのです。

三三主よ、立ちあがって、彼らに立ちむかい、
彼らを倒してください。

つるぎをもつて悪しき者から
わたしのいのちを救ってください。

三四主よ、み手をもつて人々からわたしをお救ください。
すなわち自分の分け前をこの世で受け、

あなたの宝をもつてその腹を満たされる
世の人々からわたしをお救ください。

彼らは多くの子に飽き足り、
その富を幼な子に残すのです。

一五しかしわたしは義にあつて、み顔を見、
目ざめる時、みかたちを見て、満ち足りるでしょう。

第一八篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせた主のしもべダビデの歌 すなわち主がもろもろのあだの手とサウルの手から救い出された日にダビデはこの歌の言葉を主にむかつて述べて言つた

一 わが力なる主よ、わたしはあなたを愛します。

二 主はわが岩、わが城、わたしを救う者、

わが神、わが寄り頼む岩、

わが盾、わが救の角、わが高きやぐらです。

三 わたしはほめまつるべき主に呼ばわつて、

わたしの敵から救われるのです。

四 死の綱は、わたしを取り巻き、

滅びの大水は、わたしを襲いました。

五 陰府の綱は、わたしを囲み、

死のわなは、わたしに立ちむかいました。

六 わたしは悩みのうちに主に呼ばわり、

わが神に叫び求めました。

七 主はその宮からわたしの声を聞かれ、

主にさけぶわたしの叫びがその耳に達しました。

八 そのとき地は揺れ動き、山々の基は震い動きました。

主がお怒りになったからです。

八 煙はその鼻から立ちのぼり、

火はその口から出て焼きつくし、

炭はそれによつて燃えあがりました。

九 主は天をたれて下られ、

暗やみがその足の下にありました。

一〇 主はケルブに乗つて飛び、風の翼をもつてかけり、

二 やみをおおいとして、自分のまわりに置き、

水を含んだ暗い濃き雲をその幕屋とされました。

二三 そのみ前の輝きから濃き雲を破つて、

ひようと燃える炭とが降つてきました。

二三 主はまた天に雷をとどろかせ、

いと高き者がみ声を出されると、

ひようと燃える炭とが降つてきました。

二四 主は矢を放つて彼らを散らし、

いなずまをひらめかして彼らを打ち敗れました。

二五 主よ、そのとき、あなたのとがめと、

あなたの鼻のいぶきとによつて、海の底はあらわれ、

地の基があらわになったのです。

二六 主は高い所からみ手を伸べて、わたしを捕え、

大水からわたしを引きあげ、

七 わたしの強い敵と、わたしを憎む者から

わたしを助け出されました。

彼らはわたしにまさつて強かつたからです。

一八 彼らはわたしの災の日にわたしを襲いました。
しかし主はわたしのささえとなられました。

一九 主はわたしを広い所につれ出し、

わたしを喜ばれるがゆえに、わたしを助けられました。

二〇 主はわたしの義にしたがってわたしに報い、

わたしの手の清きにしがたって

わたしに報いさえされました。

二一 わたしは主の道を守り、

悪意をもつて、わが神を離れたことがなかったのです、

二三 そのすべてのおきてはわたしの前にあつて、

わたしはその定めを捨てたことがなかったのです。

二四 わたしは主の前に欠けたところがなく、

自分を守つて罪を犯しませんでした。

二五 このゆえに主はわたしの義にしたがい、

その目の前にわたしの手の清きにしがたって

わたしに報いられました。

二六 あなたはいつくしみある者には、

いつくしみある者となり、

欠けたところのない者には、

欠けたところのない者となり、

二七 清い者には、清い者となり、

ひがんだ者には、ひがんだ者となられます。

二七 あなたは苦しんでいる民を救われますが、
高ぶる目をひくくされるのです。

二八 あなたはわたしのともしびをともし、

わが神、主はわたしのやみを照されます。

二九 まことに、わたしはあなたによつて敵軍を打ち破り、

わが神によつて城壁をとり越えることができます。

三〇 この神こそ、その道は完全であり、

主の言葉は真実です。

主はすべて寄り頼む者の盾です。

三一 主のほかに、だれが神でしょうか。

われらの神のほかに、だれが岩でしょうか。

三二 神はわたしに力を帯びさせ、

わたしの道を安全にされました。

三三 神はわたしの足をめじかの足のようになされ、

わたしを高い所に安全に立たせ、

三四 わたしの手を戦いに慣らされたので、

わたしの腕は青銅の弓をもひくことができます。

三五 あなたはその救の盾をわたしに与え、

あなたの右の手はわたしをささえ、

あなたの助けはわたしを大いなる者とされました。

三六 あなたがわたしの歩む所を広くされたので、

わたしの足はすべらなかつたのです。

三〇 わたしは敵を追って、これに追いつき、

これを滅ぼしつくすまでは帰らなかったのです。

三一 わたしが彼ら突き通したので、

彼らは立ちあがることができず、

わたしの足もとに倒れました。

三二 あなたは戦いのためにわたしに力を帯びさせ、

わたしに立ち向かう者らをわたしのもとに、

かがませられました。

四〇 あなたは敵にその後をわたしに向けさせられたので、

わたしは自分を憎む者を滅ぼしました。

四二 彼らは助けを叫び求めたが、救う者はなく、

主にむかつて叫んだけれども、

彼らに答えられなかったのです。

四三 わたしは彼らを風の前のちりのように細かに砕き、

ちまたの泥のように打ち捨てました。

四四 あなたは民の争いからわたしを救い、

わたしをもろもろの国民のかしらとされました。

四五 彼らはわたしの事を聞くと、ただちにわたしに従い、

異邦の人々はきて、わたしにへつらいました。

四六 異邦の人々は打ちしおれて、

その城から震えながら出てきました。

四六 主は生きておられます。わが岩はほむべきかな。
わが救の神はあがむべきかな。

四七 神はわたしにあだを報いさせ、

もろもろの民をわたしのもとに従わせ、

四八 わたしの敵からわたしを救い出されました。

まことに、あなたはわたしに逆らって

起りたつ者の上にわたしをあげ、

不法の人からわたしを救い出されました。

四九 このゆえに主よ、

わたしはもろもろの国民のなかであなたをたたえ、

あなたのみ名をほめ歌います。

五〇 主はその王に大いなる勝利を与え、

その油そそがれた者に、ダビデとその子孫とに、

としえにいつくしみを加えられるでしょう。

第一九篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわれたダビデの歌

一 もろもろの天は神の栄光をあらわし、

大空はみ手のわざをしめす。

二 この日は言葉をかの日につたえ、

この夜は知識をか夜につげる。

三 話すことなく、語ることなく、

その声も聞えないのに、

四 その響きは全地にあまねく、

その言葉は世界のはてにまで及ぶ。

神は日のために幕屋を天に設けられた。

五日は花婿がその祝のへやから出てくるように、

また勇士が競い走るように、その道を喜び走る。

六 それは天のはてからのぼって、

天のはてにまで、めぐって行く。

その暖まりをこうむらないものはない。

七 主のおきては完全であつて、魂を生きかえらせ、

主のあかしは確かであつて、無学な者を賢くする。

八 主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、

主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする。

九 主を恐れる道は清らかで、

とこしえに絶えることがなく、

主のさばきは真実であつて、ことごとく正しい。

一〇 これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、

また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い。

二 あなたのしもべは、これらによって戒めをうける。

これらを守れば、大いなる報いがある。

三 だれが自分のあやまちを知ることができましようか。

どうか、わたしを隠れたとがから解き放ってください。

三 また、あなたのしもべを引きとめて、

故意の罪を犯させず、

これに支配されることのないようにしてください。

そうすれば、わたしはあやまちのない者となつて、

大いなるとがを免れることができるでしょう。

一四 わが岩、わがあがないぬしなる主よ、

どうか、わたしの口の言葉と、心の思いが

あなたの前に喜ばれますように。

第二〇篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 主が悩みの日にあなたに答え、

ヤコブの神の名があなたを守られるように。

二 主が聖所から助けをあなたにおくり、

シオンからあなたをささえ、

三 あなたのよろもろの供え物をみ心にとめ、

あなたの燔祭をうけられるように。(セラ

四 主があなたの心の願いをゆるし、

あなたのはかりごとを

ことごとく遂げさせられるように。

第二一篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 主よ、王はあなたの力によつて喜び、
あなたの助けによつて、
いかに大きな喜びをもつことでしょう。
二 あなたは彼の心の願いをゆるし、

五 われらがあなたの勝利を喜びうたい、
われらの神の名によつて旗を揚げるように。
主があなたの求めをすべて遂げさせられるように。
六 今わたしは知る、
主はその油そそがれた者を助けられることを。
主はその右の手による大いなる勝利をもつて
その聖なる天から彼に答えられるであらう。
七 ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。
しかしわれらは、われらの神、
主の名を誇る。
八 彼らはかがみ、また倒れる。
しかしわれらは起きて、まっすぐに立つ。
九 主よ、王に勝利をおさずください。
われらが呼ばれる時、われらにお答えください。

そのくちびるの求めをいなまねなかった。(セラ
三 あなたは大いなる恵みをもつて彼を迎え、
そのかしらに純金の冠をいただかせられる。
四 彼がいのちを求めると、あなたはそれを彼にさづけ、
世々限りなくそのよわいを長くされた。
五 あなたの助けによつて彼の栄光は大きい。
あなたは誉と威厳とを彼に与えられる。
六 まことに、あなたは彼をとこしえに恵まれた者とし、
み前に喜びをもつて楽しませられる。
七 王は主に信頼するゆえ、
いと高き者のいづくしみをこうむつて、
動かされることはない。
八 あなたの手はもろもろの敵を尋ね出し、
あなたの右の手はあなたを憎む者を
尋ね出すであらう。
九 あなたが怒る時、
彼らを燃える炉のようにするであらう。
主はみ怒りによつて彼らをのみつくされる。
火は彼らを食いつくすであらう。
一〇 あなたは彼らのすえを地から断ち、
彼らの種を人の子らの中から滅ぼすであらう。
二 たい彼らがあなたにむかつて悪い事を企て、

悪いはかりごとを思いめぐらしても、
なし遂げることとはできない。

二三あなたは彼らを逃げ走らせ、
あなたの弓弦を張って、彼らの顔をねらうであらう。

二三主よ、力をあらわして、みずからを高くしてください。

われらはあなたの大能をうたい、
かつほめたたえるでしょう。

第二二篇

聖歌隊の指揮者によってあけほのめじかのしらべにあわせてうたわせたダビデの歌

一わが神、わが神、

なにゆえわたしを捨てられるのですか。

なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、

わたしの嘆きの言葉を聞かれなさいのですか。

二わが神よ、わたしが昼よばわつても、

あなたは答えられず、

夜よばわつても平安を得ません。

三しかしイスラエルのさんびの上に座しておられる
あなたは聖なるおかたです。

四われらの先祖たちはあなたに信頼しました。

彼らが信頼したので、あなたは彼らを助けられました。

五彼らはあなたに呼ばわつて救われ、

あなたに信頼して恥をうけなかったのです。

六しかし、わたしは虫であつて、人ではない。

人にそしられ、民に侮られる。

七すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、

くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、

八「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。」

主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。

九しかし、あなたはわたしを生れさせ、

母のふところにとわたしを安らかに守られた方です。

一〇わたしは生れた時から、あなたにゆだねられました。

母の胎を出てからこのかた、

あなたはわたしの神でいらせられました。

二わたしを遠く離れないでください。

悩みが近づき、助ける者がいないのです。

三多くの雄牛はわたしを取り巻き、

バシヤンの強い雄牛はわたしを囲み、

四かき裂き、ほえたけるししののように、

わたしにむかつて口を開く。

一四わたしは水のように注ぎ出され、

わたしの骨はことごとくはずれ、

わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちに溶けた。

二五 わたしの力は陶器の破片のようにかわき、
わたしの舌はあごにつく。

あなたはわたしを死のちに伏させられる。

一六 まことに、犬はわたしをめぐり、

悪を行う者の群れがわたしを囲んで、

わたしの手と足を刺し貫いた。

一七 わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。

彼らは目をとめて、わたしを見る。

一八 彼らは互にわたしの衣服を分け、

わたしの着物をくじ引にする。

一九 しかし主よ、遠く離れないでください。

わが力よ、速く来てわたしをお助けください。

二〇 わたしの魂をつるぎから、

わたしのいのちを犬の力から助け出してください。

二一 わたしをししの口から、

苦しむわが魂を野牛の角から救い出してください。

二三 わたしはあなたのみ名を兄弟たちに告げ、

会衆の中であなたをほめたたえるでしょう。

二三 主を恐れる者よ、主をほめたたえよ。

ヤコブのもろものすえよ、主をあがめよ。

イスラエルのもろものすえよ、主をおじおそれよ。

二四 主が苦しむ者の苦しみをかるんじ、いとわれず、

またこれにみ顔を隠すことなく、

その叫ぶときに聞かれたからである。

二五 大いなる会衆の中で、

わたしのさんびはあなたから出るのです。

わたしは主を恐れる者の前で、

わたしの誓いを果たします。

二六 貧しい者は食べて飽くことができ、

主を尋ね求める者は主をほめたたえるでしょう。

どうか、あなたがたの心かとこしえに生きるように。

二七 地のはての者はみな思い出して、主に帰り、

もろもの国のやからはみな、

目前に伏し拝むでしょう。

二八 国は主のものであつて、

主はもろもの国民を統べ治められます。

二九 地の誇り高ぶる者はみな主を拝み、

ちりに下る者も、

おのれを生きたがらえさせえない者も、

みなその目前にひざまずくでしょう。

三〇 子々孫々、主に仕え、

人々は主のことをきたるべき代まで語り伝え、

三 主がなされたその救を
後に生れる民にのべ伝えるでしょう。

第二三篇

ダビデの歌

一 主はわたしの牧者であつて、
わたしには乏しいことがない。
二 主はわたしを緑の牧場に伏させ、
いこいのみぎわに伴われる。
三 主はわたしの魂をいきかえらせ、
み名のためにわたしを正しい道に導かれる。
四 たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、
わざわいを恐れません。
あなたがわたしと共におられるからです。
あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。
五 あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、
わたしのこうべに油をそそがれる。
わたしの杯はあふれます。
六 わたしの生きているかぎりは
必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。
わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう。

第二四篇

ダビデの歌

一 地と、それに満ちるもの、
世界と、そのなかに住む者とは主のものである。
二 主はその基を大海のうえにすえ、
大川のうえに定められた。
三 主の山に登るべき者はだれか。
その聖所に立つべき者はだれか。
四 手が清く、心のいさぎよい者、
その魂がむなしい事に望みをかけない者、
偽つて誓わない者こそ、その人である。
五 このような人は主から祝福をうけ、
その救の神から義をうける。
六 これこそ主を慕う者のやから、
ヤコブの神の、み顔を求める者のやからである。「セラ
七 門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。
八 栄光の王がはいられる。
九 栄光の王とはだれか。
強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である。
九 門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。
栄光の王がはいられる。

第二五篇

ダビデの歌

一〇この栄光の王とはだれか。万軍の主、これこそ栄光の王である。「セラ」

一主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。
ニわが神よ、わたしはあなたに信頼します。
どうか、わたしをはずかしめず、
わたしの敵を勝ち誇らせないでください。
ミすべてあなたを待ち望む者をはずかしめず、
みだりに信義にそむく者をはずかしめてください。
四主よ、あなたの大路をわたしに知らせ、
あなたの道をわたしに教えてください。
五あなたのまことをもつて、わたしを導き、
わたしを教えてください。
あなたはわが救の神です。
わたしはひねもすあなたを待ち望みます。
六主よ、あなたのあわれみと、いつくしみを
思い出してください。
これはいにしえから絶えることがなかったのです。
七わたしの若き時の罪と、とがとを

思い出さないでください。
主よ、あなたの恵みのゆえに、
あなたのいつくしみにしたがって、
わたしを思い出してください。
八主は恵みふかく、かつ正しくいらせられる。
それゆえ、主は道を罪びとに教え、
九へりくだる者を公義に導き、
一〇主のすべての道はその契約とあかしとを守る者には
いつくしみであり、まことである。
二主よ、み名のために、わたしの罪をおゆるしくください。
わたしの罪は大きいのです。
三主を恐れる人はだれか。
四主はそその選ぶべき道をその人に教えられる。
五彼はみずからさいわいに住まい、
そのすえは地を継ぐであろう。
六主の親しみは主をおそれる者のためにあり、
主はその契約を彼らに知らせられる。
七わたしの目は常に主に向かっている。
八わたしの足を網から取り出されるからである。
九わたしをかえりみ、わたしをあわれんでください。
わたしはひとりわびしく苦しんでいるのです。

第二六篇

ダビデの歌

一主よ、わたしをさばいてください。
わたしは誠実に歩み、
迷うことなく主に信頼しています。

二わたしは心の悩みをゆるめ、
わたしを苦しきから引き出してください。
三わたしの苦しき悩みをかえりみ、
わたしのすべての罪をおゆるしくください。
四わたしの敵がいかに多く、
かつ激しい憎しみをもちて
わたしを憎んでいるかをこらなくください。
五わたしは魂を守り、わたしをお助けください。
六わたしはあなたに寄り頼んでいます。
七どうか、誠実と潔白とが、
わたしを守ってくれるように。
八わたしはあなたを待ち望んでいます。
九神よ、イスラエルをあがなひ、
すべての悩みから救いだしてください。

一主よ、わたしをためし、わたしを試み、
わたしの心と思いを練りきよめてください。
二あなたのいつくしみはわたしの目の前にあり、
わたしはあなたのまことによつて歩みました。
三わたしは偽る人々と共にすわらず、
四偽善者と交わらず、
五悪を行う者のつどいを憎み、
六悪しき者と共にすわることをしません。
七主よ、わたしは手を洗つて、罪のないことを示し、
八あなたの祭壇をめぐつて、
九感謝の歌を声高くうたい、
十あなたにくすしきみわざをことごとくのべ伝えまゝ。
一主よ、わたしはあなたの住まわれる家と、
あなたの栄光のとどまる所とを愛します。
二九どうか、わたしを罪びとと共に、
わたしはいのちを、血を流す人々と共に、
取り去らないでください。
三〇彼らの手には悪い企てがあり、
四彼らの右の手は、まいないで満ちています。
五しかしわたしは誠実に歩みます。
六わたしをあがない、わたしをあわれんでください。
七わたしは足は平らかな所に立つています。

わたしは会衆のなかで主をたたえましょう。

第二七篇

ダビデの歌

一 主はわたしの光、わたしの救だ、

わたしはだれを恐れよう。

主はわたしの命のとりでだ。

わたしはだれをおじ恐れよう。

二 わたしのあだ、わたしの敵である悪を行う者どもが、

襲ってきて、わたしをそしり、わたしを攻めるとき、

彼らはつまずき倒れるであらう。

三 たとい軍勢が陣営を張って、わたしを攻めても、

わたしの心は恐れない。

たといくさが起って、わたしを攻めても、

なおわたしはみずから頼むところがある。

四 わたしは一つの事を主に願った、

わたしはそれを求める。

わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、

主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを。

五 それは主が悩みの日に、

その仮屋のうちにわたしを潜ませ、

その幕屋の奥にわたしを隠し、

岩の上にわたしを高く置かれるからである。

六 今わたしのこうべはわたしをめぐる敵の上に

高くあげられる。

それゆえ、わたしは主の幕屋で

喜びの声をあげて、いけにえをささげ、

歌って、主をほめたたえるであらう。

七 主よ、わたしが声をあげて呼ばわるとき、

聞いて、わたしをあわれみ、わたしに答えてください。

八 あなたは仰せられました、

「わが顔をたずね求めよ」と。

あなたにむかって、わたしの心は言います、

「主よ、わたしはみ顔をたずね求めます」と。

九 み顔をわたしに隠さないでください。

怒ってあなたのしもべを退けないでください。

あなたはわたしの助けです。

わが救の神よ、わたしを追い出し、

わたしを捨てないでください。

一〇 たとい父母がわたしを捨てても、

主がわたしを迎えられるでしょう。

二 主よ、あなたの道をわたしに教え、

わたしのあだのゆえに、

第二八篇

ダビデの歌

わたしを平らかな道に導いてください。
 二 わたしのあだの望むがままに、
 わたしを引き渡さないでください。
 偽りのあかしをする者がわたしに逆らつて起り、
 暴言を吐くからです。
 三 わたしは信じます、
 生ける者の地でわたしは主の恵みを見ることを。
 四 主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。
 主を待ち望め。

一 主よ、わたしはあなたにむかつて呼ばわれます。
 わが岩よ、わたしにむかつて
 耳しいとらないでください。
 もしあなたが黙っておられるならば、おそろく、
 わたしは墓に下る者と等しくなるでしょう。
 二 わたしがあなたにむかつて助けを求め、
 あなたの至聖所にむかつて手をあげるとき、
 わたしの願いの声を聞いてください。
 三 悪しき者および悪を行う者らと共に

わたしを引き行かないでください。
 彼らはその隣り人とむつまじく語るけれども、
 その心には害悪をいだく者です。
 四 どうぞ、そのわざにしたがい、
 その悪しき行いにしたがって彼らに報い、
 その手のわざにしたがって彼らに報い、
 その受くべき罰を彼らに与えてください。
 五 彼らは主のもろもろのみわざと、
 み手のわざとを顧みないゆえに、
 主は彼らを倒して、再び建てられることはない。
 六 主はほむべきかな。
 主はわたしの願いの声を聞かれた。
 七 主はわが力、わが盾。
 わたしの心は主に寄り頼む。
 わたしは助けを得たので、わたしの心は大いに喜び、
 歌をもって主をほめたたえる。
 ハ 主はその民の力、
 その油こそがれた者の救のとりである。
 九 どうぞ、あなたの民を救い、あなたの嗣業を恵み、
 彼らの牧者となつて、とこしえに彼らをいだし導いてくだ
 さい。

第二九篇

ダビデの歌

一 神の子らよ、主に帰せよ、
 栄光と力を主に帰せよ。
 ニ 名々の栄光を主に帰せよ、
 聖なる装いをもって主を拜め。
 三 主のみ声は水の上にあり、
 栄光の神は雷をとどろかせ、
 主は大水の上におられる。
 四 主のみ声は力があり、
 主のみ声は威厳がある。
 五 主のみ声は香柏を折り砕き、
 主はレバノンの香柏を折り砕かれる。
 六 主はレバノンを子牛のように踊らせ、
 シリオンを若い野牛のように踊らされる。
 七 主のみ声は炎をひらめかす。
 八 主のみ声は荒野を震わせ、
 主はカデシの荒野を震わされる。
 九 主のみ声はかしの木を巻きあげ、また林を裸にする。
 その宮で、すべてのものは呼ばわって言う、
 「栄光」と。

第三〇篇

宮をささげるときにうたったダビデの歌

一 主は洪水の上に座し、
 主はみくらに座して、とこしえに王であらせられる。
 二 主はその民に力を与え、
 平安をもつてその民を祝福されるであらう。
 一 主よ、わたしはあなたをあがめます。
 あなたはわたしを引きあげ、
 敵がわたしの事によつて喜ぶのを、
 ゆるされなかつたからです。
 ニ わが神、主よ、
 わたしがあなたにむかつて助けを叫び求めると、
 あなたはわたしをいやしてくださいました。
 三 主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、
 墓に下る者のうちから、
 わたしを生き返らせてくださいました。
 四 主の聖徒よ、主をほめうたい、
 その聖なる名に感謝せよ。
 五 その怒りはただつかのまで、
 その恵みはいのちのかぎり長いからである。

夜はよもすがら泣きかなしんでも、
朝と共に喜びが来る。

六 わたしは安らかな時に言った、

「わたしは決して動かされることはない」と。

七 主よ、あなた恵みをもって、

わたしをゆるがない山のように堅くされました。

あなたがみ顔をかくされたので、

わたしはおじ惑いました。

八 主よ、わたしはあなたに呼ばわれました。

ひたすら主に請い願いました、

九 「わたしが墓に下るならば、

わたしの死になんの益があるでしょうか。

ちりはあなたをほめたたえるでしょうか。

あなたのまことをのべ伝えるでしょうか。

一〇 主よ、聞いてください、わたしをあわれんでください。

主よ、わたしの助けとなってください」と。

一一 あなたはわたしのために、嘆きを踊りにかえ、

荒布を解き、喜びをわたしの帯とされました。

一二 これはわたしの魂があなたをほめたたえて、

口をつぐむことのないためです。

わが神、主よ、

わたしはとこしえにあなたに感謝します。

第三一篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 主よ、わたしはあなたに寄り頼みます。

とこしえにわたしをはずかしめず、

あなたの義をもってわたしをお助けください。

二 あなたの耳をわたしに傾けて、

すみやかにわたしをお救いください。

わたしのためにのがれの岩となり、

わたしを救う堅固な城となってください。

三 まことに、あなたはわたしの岩、わたしの城です。

四名のためにわたしを引き、わたしを導き、

四 わたしのためにひそかに設けた網から

わたしを取り出してください。

あなたはわたしの避け所です。

五 わたしは、わが魂をみ手にゆだねます。

主、まことの神よ、

あなたはわたしをあがなわれました。

六 あなたはむなししい偶像に心を寄せる者を憎まれます。

しかしわたしは主に信頼し、

七 あなたのいつくしみを喜び樂しみます。

あなたがわたしの苦しみをかえりみ、

わたしの悩みにみころをとめ、
 ハわたしを敵の手にわたさず、
 わたしの足を広い所に立たせられたからです。
 九主よ、わたしをあわれんでください。
 わたしは悩み苦しんでいます。
 わたしの目は憂いによつて衰え、
 わたしの魂も、からだもまた衰えました。
 〇わたしのいのちは悲しみによつて消えゆき、
 わたしの年は嘆きによつて消えさり、
 わたしの力は苦しみによつて尽き、
 わたしの骨は枯れはてました。
 二わたしはすべてのあだにそしられる者となり、
 隣り人には恐れられ、
 知り人には恐るべき者となり、
 ちまたでわたしを見る者は避けて逃げます。
 三わたしは死んだ者のように人の心に忘れられ、
 破れた器のようになりました。
 二三まことに、わたしは多くの人のささやくのを聞きます、
 「至る所に恐るべきことがある」と。
 彼らはわたしに逆らつてともに計り、
 わたしのいのちを取ろうと、たくらむのです。
 一四しかし、主よ、わたしはあなたに信頼して、言います、

「あなたはわたしの神である」と。
 一五わたしの時はあなたのみにあります。
 わたしをわたしの敵の手と、
 わたしを責め立てる者から救い出してください。
 二六み顔をしもべの上に輝かせ、
 いつくしみをもつてわたしをお救いください。
 一七主よ、わたしはあなたに呼ばわれます、
 わたしをはずかしめないでください。
 悪しき者に恥をうけさせ、
 彼らに声をあげさせずに陰府に行かせてください。
 一八高ぶりと侮りともつて正しい者をみだりにそしる
 偽りのくちびるをつぐませてください。
 一九あなたを恐れる者のためにたくわえ、
 あなたに寄り頼む者のために
 人の子らの前に施されたあなたの恵みは
 いかに大いなるものでしょう。
 二〇あなたは彼らを見前のひそかな所に隠して
 人々のはかりごとを免れさせ、
 また飯屋のうちに潜ませて
 舌の争いを避けさせられます。
 二一主はほむべきかな、
 包围された町のようにわたしが囲まれたとき、

第三二篇

ダビデのマスギールの歌

主は驚くばかりに、いつくしみをわたしに示された。
 三 わたしは驚きあわてて言った、
 「わたしはあなたの目の前から断たれた」と。
 しかしわたしがあなたに助けを呼び求めたとき、
 わたしの願いを聞きいれられた。
 三三 すべての聖徒よ、主を愛せよ。
 主は眞実な者を守られるが、
 おごりふるまう者にはしたたかに報いられる。
 三四 すべての主を待ち望む者よ、
 強くあれ、心を雄々しくせよ。

一 そのとががゆるされ、
 その罪がおおい消される者はさいわいである。
 二 主によつて不義を負わされず、
 その霊に偽りのない人はさいわいである。
 三 わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、
 ひねもす苦しむうめいたので、
 わたしの骨はふるび衰えた。
 四 あなたのみ手が昼も夜も、

わたしのの上に重かつたからである。
 わたしの力は、夏のひでりによつてかれるように、
 かれ果てた。「セラ」
 五 わたしは自分の罪をあなたに知らせ、
 自分の不義を隠さなかった。
 わたしは言った、
 「わたしのとがを主に告白しよう」と。
 その時あなたはわたしの犯した罪をゆるされた。「セラ」
 六 このゆえに、すべて神を敬う者はあなたに祈る。
 大水の押し寄せる悩みの時にも
 その身に及ぶことはない。
 七 あなたはわたしの隠れ場であつて、
 わたしを守つて悩みを免れさせ、
 救をもつてわたしを囲まれる。「セラ」
 ハ わたしはあなたを教え、あなたの行くべき道を示し、
 わたしの目をあなたにとめて、さとすであらう。
 九 あなたはさとりのない馬のようであつてはならない。
 また驟馬のようであつてはならない。
 彼らはくつわ、たづなをもつておさえられなければ、
 あなたに従わないであらう。
 一〇 悪しき者は悲しみが多い。
 しかし主に信頼する者はいつくしみで囲まれる。

第三三篇

二 正しき者よ、主によつて喜び樂しめ、
すべて心の直き者よ、喜びの声を高くあげよ。

一 正しき者よ、主によつて喜び、
さんびは直き者にふさわしい。

二 琴をもつて主をさんびせよ、

十弦の立琴をもつて主をほめたたえよ。

三 新しい歌を主にむかつて歌い、

喜びの声をあげて巧みに琴をかきならせ。

四 主のみことばは直く、

そのすべてのみわざは眞実だからである。

五 主は正義と公平とを愛される。

地は主のいつくしみで満ちている。

六 もろもろの天は主のみことばによつて造られ、

天の万軍は主の口の息によつて造られた。

七 主は海の水を水がめの中に集めるように集め、

深い淵を倉におさめられた。

八 全地は主を恐れ、

世に住むすべての者は主を恐れかしこめ。

九 主が仰せられると、そのようになり、

命じられると、堅く立つたからである。

一〇 主はもろもろの国のはかりごとをむなくし、

もろもろの民の企てをくじかれる。

二 主のはかりごとはとこしえに立ち、

そのみこころの思ひは世々に立つ。

三 主をおのが神とする国はさいわいである。

主がその嗣業として選ばれた民はさいわいである。

四 主は天から見おろされ、

すべての人の子らを見、

一四 そのおられる所から

地に住むすべての人をながめられる。

一五 主はすべて彼らの心を造り、

そのすべてのわざに心をとめられる。

一六 王はその軍勢の多きによつて救を得ない。

勇士はその力の大きいによつて助けを得ない。

一七 馬は勝利に頼みとならない。

その大いなる力も人を助けることはできない。

一八 見よ、主の目は主を恐れる者の上にあり、

そのいつくしみを望む者の上にある。

一九 これは主が彼らの魂を死から救い、

きぎんの時にも生きながらえさせるためである。

二〇 われらの魂は主を待ち望む。

第三四篇

主はわれらの助け、われらの盾である。
 二 われらは主の聖なる名に信頼するがゆえに、
 われらの心は主にあって喜ぶ。
 三 主よ、われらが待ち望むように、
 あなたのいつくしみをわれらの上にたれてください。

ダビデがアビメレクの前で狂ったさまをよそおい、追われて出ていったときの歌

一 わたしは常に主をほめまつる。
 そのさんびはわたしの口に絶えない。
 二 わが魂は主によつて誇る。
 苦しむ者はこれを聞いて喜ぶであろう。
 三 わたしと共に主をあがめよ、
 われらは共にみ名をほめたたえよう。
 四 わたしが主に求めたとき、主はわたしに答え、
 すべての恐れからわたしを助け出された。
 五 主を仰ぎ見て、光を得よ、
 そうすれば、あなたがたは、
 恥じて顔を赤くすることはない。
 六 この苦しむ者が呼ばわったとき、主は聞いて、

すべての悩みから救い出された。
 七 主の使は主を恐れる者のまわりに
 陣をしいて彼らを助けられる。
 ハ 主の恵みふかきことを味わい知れ、
 主に寄り頼む人はさいわいである。
 九 主の聖徒よ、主を恐れよ、
 主を恐れる者には乏しいことがないからである。
 一〇 若きしは乏しくなつて飢えることがある。
 しかし主を求める者は良き物に欠けることはない。
 二 子らよ、来てわたしに聞け、
 わたしは主を恐るべきことをあなたがたに教えよう。
 三 さいわいを見ようとして、いのちを慕い、
 ながらえることを好む人はだれか。
 三 三 あなたの舌をおさえて悪を言わせず、
 あなたのくちびるをおさえて偽りを言わすな。
 四 悪を離れて善をおこない、
 やわらぎを求めて、これを努めよ。
 五 主の目は正しい人をかえりみ、
 その耳は彼らの叫びに傾く。
 六 主のみ顔は悪を行う者にむかい、
 その記憶を地から断ち滅ぼされる。
 七 正しい者が助けを叫び求めるとき、主は聞いて、

第三五篇

ダビデの歌

彼らをそのすべての悩みから助け出される。
 一八主は心の砕けた者に近く、
 たましいの悔いくずおれた者を救われる。
 一九正しい者には災が多い。
 しかし、主はすべてその中から彼を助け出される。
 二〇主は彼の骨をことごとく守られる。
 その一つだに折られることはない。
 二一悪は悪しき者を殺す。
 正しい者を憎む者は罪に定められる。
 三主はそのしもべらの命をあがなわれる。
 主に寄り頼む者はひとりだに
 罪に定められることはない。

一主よ、わたしと争う者とあらそい、
 わたしと戦う者と戦ってください。
 二盾と大盾とを執って、
 わたしを助けるために立ちあがってください。
 ミやりと投げやりとを抜いて、
 わたしに追い迫る者に立ちむかい、

「わたしはおまえの救である」と、
 わたしに言ってください。
 四どうか、わたしの命を求める者を
 はずかしめ、いやしめ、
 わたしにむかつて悪をたくらむ者を退け、
 あわてふためかせてください。
 五彼らを風の前のもみがらのようにし、
 主の使に彼らを追いやらせてください。
 六彼らの道を暗く、なめらかにし、
 主の使に彼らを追い行かせてください。
 七彼らはゆえなくわたしのために網を隠し、
 ゆえなくわたしのために穴を掘ったからです。
 ハ不意に滅びを彼らに臨ませ、
 みずから隠した網にとらえられ、
 彼らを滅びに陥らせてください。
 九そのときわが魂は主によつて喜び、
 その救をもつて楽しむでしょう。
 一〇わたしの骨はことごとく言うでしよう、
 「主よ、だれかあなたにたぐうべき者がありません。
 あなたは弱い者を強い者から助け出し、
 弱い者と貧しい者を、
 かすめ奪う者から助け出される方です」と。

二 惡意のある証人が起つて、

わたしの知らない事をわたしに尋ねる。

三 彼らは惡をもつてわたしの善に報い、

わが魂を寄るべなき者とした。

四 三しかし、わたしは彼らが病んだとき、

荒布をまとい、断食してわが身を苦しめた。

わたしは胸にこうべをたれて祈った、

「四 ちようど、わが友、わが兄弟のために

悲しんだかのように。

わたしは母をいたむ者のように

悲しみうなだれて歩きまわった。

五 しかし彼らはわたしのつまずくとき、喜びつどい、

ともに集まってわたしを責めた。

わたしの知らない他国の者は

わたしをのしつてやめなかった。

六 彼らはますます、けがす言葉をもつてあざけり、

わたしにむかつて齒をかみならした。

七 主よ、いつまであなたはながめておられますか、

わたしを彼らの破壊から、

わたしのいのちを若きしから救い出してください。

八 わたしは大いなるつどいの中で、あなたに感謝し、

多くの民の中で、あなたをほめたたえるでしょう。

九 偽つてわたしの敵となつた者どももの

わたしについて喜ぶことを許さないでください。

ゆえなく、わたしを憎む者どももの

たがいに目くばせすることを許さないでください。

一〇 彼らは平和を語らず、

国のうちに穏やかに住む者にむかつて

欺きの言葉をたくらむからです。

二 彼らはわたしにむかつて口をあけひろげ、

「あはあ、あはあ、われらの目はそれを見た」と

言います。

三 主よ、あなたはこれを見られました。

もださないでください。

主よ、わたしに遠ざからないでください。

四 主よ、わが神、わが主よ、

わがさばきのため、わが訴えのために奮いたち、

目をさましてください。

五 主よ、わが神、主よ、

あなたの義にしたがつてわたしをさばき、

わたしの事について彼らを喜ばせないでください。

六 彼らにその心のうちで、

「あはあ、われらの願つたことが達せられた」と

言わせないでください。

また彼らに「われらは彼を滅ぼしつくした」と
言わせないでください。

二六 わたしの災を喜ぶ者どもを

ともに恥じ、あわてふためかせてください。

わたしにむかつて誇りたかぶる者どもに

恥と、はずかしめとを着せてください。

二七 わたしの義を喜ぶ者をば

喜びの声をあげて喜ばせ、

「そのしもべの幸福を喜ばれる主は大いなるかな」と

つねに言わせてください。

二八 わたしの舌はひねもすあなたの義と、

あなたの誉とを語るでしょう。

第三六篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせた主のしもベダビデの歌

一 とがは悪しき者にむかい、その心のうちに言う。

その目の前に神を恐れる恐れはない。

二 彼は自分の不義があらわされないため、

また憎まれないために、みずからその目でおもねる。

三 その口の言葉はよこしまと欺きである。

彼は知恵を得ることと、善を行う事とをやめた。

四 彼はその床の上でよこしまな事をたくらみ、
よからぬ道に身をおいて、悪をきらわれない。

五 主よ、あなたのいつくしみは天にまで及び、

あなたのまことは雲にまで及ぶ。

六 あなたの義は神の山のごとく、

あなたのさばきは大きな淵のようだ。

主よ、あなたは人と獣とを救われる。

七 神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょう。

八 あなたの家の豊かなのによつて飽き足りる。

あなたはその樂しみの川の水を彼らに飲ませられる。

九 いのちの泉はあなたのもとにあり、

われらはあなたの光によつて光を見る。

一〇 どうか、あなたを知る者に絶えずいつくしみを施し、

心の直き者に絶えず救を施してください。

二 高ぶる者の足がわたしを踏み、

悪しき者の手がわたしを追い出すことを

ゆるさないでください。

三 悪を行う者はそこに倒れ、

彼らは打ち伏せられて、起きあがることはできない。

第三七篇

ダビデの歌

一 悪をなす者のゆえに、心を悩ますな。
 不義を行う者のゆえに、ねたみを起すな。
 ニ 彼らはやがて草のように衰え、
 青菜のようにしおれるからである。
 三 主に信頼して善を行え。
 そうすればあなたはこの国に住んで、安きを得る。
 四 主によつて喜びをなせ。
 主はあなたの心の願いをかなえられる。
 五 あなたの道を主にゆだねよ。
 主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、
 六 あなたの義を光のように明らかにし、
 あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる。
 七 主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め。
 おのが道を歩んで栄える者のゆえに、
 悪いはかりごとを遂げる人のゆえに、心を悩ますな。
 ハ 怒りをやめ、憤りを捨てよ。
 心を悩ますな、これはただ悪を行うに至るのみだ。
 九 悪を行う者は断ち滅ぼされ、
 主を待ち望む者は国を継ぐからである。

一〇 悪しき者はただしばらくで、うせ去る。
 あなたは彼の所をつぶさに尋ねても彼はいない。
 二 しかし柔和な者は国を継ぎ、
 豊かな繁栄をたのしむことができる。
 三 悪しき者は正しい者にむかつて
 はかりごとをめぐらし、これにむかつて齒がみする。
 四 悪しき者は悪しき者を笑われる、
 彼の日の来るのを見られるからである。
 五 悪しき者はつるぎを抜き、弓を張つて、
 貧しい者と乏しい者を倒し、
 直く歩む者を殺そうとする。
 六 五しかしそのつるぎはおのが胸を刺し、
 その弓は折られる。
 七 正しい人の持ち物の少ないのは、
 多くの悪しき者の者の豊かなのにまさる。
 八 悪しき者の腕は折られるが、
 主は正しい者を助けささえられるからである。
 九 ハ主は全き者のもろもろの日を知られる。
 彼らの嗣業はとこしえに続く。
 一〇 彼らは災の時にも恥をこうむらず、
 ききんの日にも飽き足りる。
 一一 しかし、悪しき者は滅び、

主の敵は牧場の栄えの枯れるように消え、
煙のように消えうせる。

三 悪しき者は物を借りて返すことをしない。

しかし正しい人は寛大で、施し与える。

三 主に祝福された者は国を継ぎ、

主にのろわれた者は断ち滅ぼされる。

三 人の歩みは主によって定められる。

主はその行く道を喜ばれる。

二四 たといその人が倒れても、

全く打ち伏せられることはない、

主がその手を助けさせられるからである。

三五 わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、

正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が

食物を請いあるくのを見たことがない。

三六 正しい人は常に寛大で、物を貸し与え、

その子孫は祝福を得る。

三七 悪をさけて、善を行え。

そうすれば、あなたはとこしえに住むことができる。

三八 主は公義を愛し、

その聖徒を見捨てられないからである。

正しい者はとこしえに助け守られる。

しかし、悪しき者の子孫は断ち滅ぼされる。

三九 正しい者は国を継ぎ、

とこしえにその中に住むことができる。

四〇 正しい者の口は知恵を語り、

その舌は公義を述べる。

四一 その心には神のおきてがあり、

その歩みはすべることがない。

四二 悪しき者は正しい人をうかがい、

これを殺そうとはかる。

四三 主は正しい人を悪しき者の手にゆだねられない、

またさばかれる時、これを罪に定められることはない。

四四 主を待ち望め、その道を守れ。

そうすれば、主はあなたを上げて、国を継がせられる。

あなたは悪しき者の

断ち滅ぼされるのを見るであらう。

四五 わたしは悪しき者が勝ち誇って、

レバノンの香柏のようにそびえたつを見た。

四六 しかし、わたしが通り過ぎると、

見よ、彼はいなかった。

わたしは彼を尋ねたけれども見つからなかった。

四七 全き人に目をそそぎ、直き人を見よ。

おだやかな人には子孫がある。

四八 しかし罪を犯す者どもは共に滅ぼされ、

悪しき者の子孫は断たれる。
 三九 正しい人の救は主から出る。
 主は彼らの悩みの時の避け所である。
 四〇 主は彼らを助け、彼らを解き放ち、
 彼らを悪しき者どもから解き放って救われる。
 彼らは主に寄り頼むからである。

第三八篇

記念のためにうたったダビデの歌

一 主よ、あなたの憤りをもつてわたしを責めず、
 激しい怒りをもつてわたしを懲らさないでください。
 二 あなたの矢がわたしに突き刺さり、
 あなたの手がわたしの上にくだりました。
 三 あなたの怒りによつて、
 わたしの肉には全きところなく、
 わたしの罪によつて、
 わたしの骨には健やかなところはありません。
 四 わたしの不義はわたしの頭を越え、
 重荷のように重くて負うことができません。
 五 わたしの愚かによつて、
 わたしの傷は悪臭を放ち、腐れただれました。

六 わたしは折れかがんで、いたくうなだれ、
 ひねもす悲しんで歩くのです。
 セ わたしの腰はことごとく焼け、
 わたしの肉には全きところがありません。
 ハ わたしは衰えはて、いたく打ちひしがれ、
 わたしの心の激しい騒ぎによつてうめき叫びます。
 九 主よ、わたしのすべての願いはあなたに知られ、
 わたしの嘆きはあなたに隠れることはありません。
 一〇 わたしの胸は激しく打ち、わたしの力は衰え、
 わたしの目の光もまた、わたしを離れ去りました。
 二 わが友、わがともがらは
 わたしの災を見て離れて立ち、
 わが親族もまた遠く離れて立っています。
 三 わたしのいのちを求める者はわなを設け、
 わたしをそこなおうとする者は滅ぼすことを語り、
 ひねもす欺くことをはかるのです。
 三しかしわたしは耳しいのうに聞かず、
 おしのように口を開きません。
 四 まことに、わたしは聞かない人のごとく、
 議論を口にしない人のようです。
 五 しかし、主よ、わたしはあなたを待ち望みます。
 わが神、主よ、

あなたこそわたしに答えられるのです。

一六 わたしは祈ります、「わが足のすべるとき、わたしにむかつて高ぶる彼らにわたしのことによって喜ぶことをゆるさないでください」と。

一七 わたしは倒れるばかりになり、わたしの苦しみは常にわたしと共にあります。

一八 わたしは、みずから不義を言いあらわし、わが罪のために悲しみます。

一九 ゆえなく、わたしに敵する者は強く、偽ってわたしを憎む者は多いのです。

二〇 悪をもって善に報いる者は、

わたしがいよいよ事に従うがゆえに、わがあだとなります。

二一 主よ、わたしを捨てないでください。

わが神よ、わたしに遠ざからないでください。

二三 主、わが救よ、

すみやかにわたしをお助けください。

第三九篇

聖歌隊の指揮者エドトンによつてうたわれたダビデの歌

一 わたしは言った、「舌をもって罪を犯さないために、

わたしの道を慎み、

悪しき者のわたしの前にある間は

わたしの口にくつわをかけよう」と。

二 わたしは黙して物言わず、むなしく沈黙を守った。

しかし、わたしの悩みはさらにひどくなり、

三 わたしの心はわたしのうちに熱し、

思いつづけるほどに火が燃えたので、

わたしは舌をもって語った。

四 「主よ、わが終りと、

わが日の数のどれほどであるかをわたしに知らせ、

わが命のいかにはかないかを知らせてください。

五 見よ、あなたはわたしの日をつかのまとされました。

わたしの一生はあなたの前では無にひとしいのです。

まことに、すべての人はその盛んな時でも

息にすぎません。「セラ

六 まことに人は影のように、さまよいます。

まことに彼らはむなしい事のために

騒ぎまわるのです。

彼は積みたくわえるけれども、

だれがそれを収めるかを知りません。

七 主よ、今わたしは何を待ち望みましょう。

わたしの望みはあなたにあります。

ハわたしをすべてのとがから助け出し、
 愚かな者にわたしをあざけらせないでください。
 カわたしは黙して口を開きません。
 あなたがそれをなされたからです。
 一〇あなたが下された災を
 わたしから取り去ってください。
 わたしはあなたのみ手に打ち懲らされることにより
 滅びるばかりです。
 二 あなたは罪を責めて人を懲らされるとき、
 その慕い喜ぶものを、しみが食うように、
 消し滅ぼされるのです。
 まことにすべての人は息にすぎません。「セラ
 二三 主よ、わたしの祈を聞き、
 わたしの叫びに耳を傾け、
 わたしの涙を見て、もださないでください。
 わたしはあなたに身を寄せる旅びと、
 わがすべての先祖たちのように寄留者です。
 二三 わたしが去って、うせない前に、
 み顔をそむけて、わたしを喜ばせてください」。

第四〇篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 わたしは耐え忍んで主を待ち望んだ。
 主は耳を傾けて、わたしの叫びを聞かれた。
 二 主はわたしを滅びの穴から、泥の沼から引きあげて、
 わたしの足を岩の上におき、
 わたしの歩みをたしかにされた。
 三 主は新しい歌をわたしの口に授け、
 われらの神にささげるさんびの歌を
 わたしの口に授けられた。
 多くの人はこれを見て恐れ、
 かつ主に信頼するであろう。
 四 主をおのが頼みとする人、
 高ぶる者にたよらず、
 偽りの神に迷う者にたよらない人はさいわいである。
 五 わが神、主よ、あなたのくすしきみわざと、
 われらを思ひおもひとは多くて、
 くらべうるものはない。
 わたしはこれを語り述べようとしても
 多くて数えることはできない。
 六 あなたはいけにえと供え物とを喜ばれない。

あなたはわたしの耳を開かれた。

あなたは燔祭と罪祭とを求められない。

七その時わたしは言った、「見よ、わたしはまいります。書の巻に、わたしのためにしるされています。」

八わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。

あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と。

九わたしは大いなる集会で、

救についての喜びのおとずれを告げ示しました。

見よ、わたしはくちびるを閉じませんでした。

主よ、あなたはこれをご存じです。

一〇わたしはあなたの救を心のうちに隠しおかず、

あなたのまことと救とを告げ示しました。

わたしはあなたのいつくしみとまこととを大いなる集会に隠しませんでした。

二主よ、あなたのあわれみをわたしに惜しまず、

あなたのいつくしみとまこととをもつて

常にわたしをお守りください。

二三数えがたい災がわたしを囲み、

わたしの不義がわたしに追い迫つて、

物見ることができないまでになりました。

それはわたしの頭の毛よりも多く、

わたしの心は消えうせるばかりになりました。

二三主よ、みこころならばわたしをお救いください。

主よ、すみやかにわたしをお助けください。

一四わたしのいのちを奪おうと尋ね求める者どもをことごとく恥じあわてさせてください。

わたしのそこなわれることを願う者どもをうしろに退かせ、恥を負わせてください。

一五わたしにむかつて「あはあ、あはあ」と言う者どもを自分の恥によって恐れおののかせてください。

一六しかし、すべてあなたを尋ね求める者は

あなたによって喜び樂しむように。

あなたの救を愛する者は

常に「主は大いなるかな」ととなえるように。

一七わたしは貧しく、かつ乏しい。

しかし主はわたしをかえりみられます。

あなたはわが助け、わが救主です。

わが神よ、ためらわないでください。

第四一篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一貧しい者をかえりみる人はさいわいである。

主はそのような人を悩みの日に救い出される。

二主は彼を守つて、生きながらえさせられる。
 彼はこの地にあつて、さいわいな者と呼ばれる。
 あなたは彼をその敵の欲望にわたされない。
 三主は彼をその病の床でささえられる。
 あなたは彼の病む時、その病をことごとくいやされる。
 四わたしは言つた、「主よ、わたしをあわれみ、
 わたしをいやしてください。
 わたしはあなたにむかつて罪を犯しました」と。
 五わたしの敵はわたしをそしつて言う、
 「いつ彼は死に、その名がほろびるであろうか」と。
 六そのひとりがわたしを見ようとして来るとき、
 彼は偽りを語り、その心によこしまを集め、
 外に出てはそれを言いふらす。
 七すべてわたしを憎む者は
 わたしについて共にささやき、
 わたしのために災を思いめぐらす。
 ハ彼らは言う、「彼に一つのたたりがつきまತ್ತたから、
 倒れ伏して再び起きあがらないであろう」と。
 カわたしの信頼した親しい友、
 わたしのパンを食べた親しい友さえも
 わたしにそむいてくびすをあげた。
 一〇しかし主よ、わたしをあわれみ、

第四二篇

わたしを助け起してください。
 そうすればわたしは彼らに報い返すことができます。
 二わたしの敵がわたしに打ち勝てないことによつて、
 あなたがわたしを喜ばれることを
 わたしは知ります。
 三あなたはわたしの全きによつて、
 わたしをささえ、とこしえにみ前に置かれます。
 四イスラエルの神、主は
 とこしえからとこしえまでほむべきかな。
 アアメン、アアメン。
 聖歌隊の指揮者によつてうたわせたコラの子のマスギールの歌
 一神よ、しがが谷川を慕いあえぐように、
 わが魂もあなたを慕いあえぐ。
 二わが魂はかわいてるように神を慕い、
 いける神を慕う。
 三いつ、わたしは行つて神のみ顔を
 見ることができるだろうか。
 四人々がひねもすわたしにむかつて
 「おまえの神はどこにいるのか」と言いつづける間は

わたしの涙は昼も夜もわたしの食物であつた。

四 わたしはかつて祭を守る多くの人と共に

群れをなして行き、

喜びと感謝の歌をもつて彼らを神の家に導いた。

今これらの事を思い起して、

わが魂をそそぎ出すのである。

五 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。

何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。

神を待ち望め。

わたしはなおわが助け、

わが神なる主をほめたたえるであろう。

六 わが魂はわたしのうちにうなだれる。

それで、わたしはヨルダンの地から、またヘルモンから、

ミザルの山からあなたを思い起す。

七 あなたの山からあなたを思い起す。またハルモンから、

あなたの大滝の響きによつて淵々呼びこたえ、

あなたの波、あなたの大波は

ことごとくわたしの上を越えていった。

八 昼には、主はそのいつくしみをほどこし、

夜には、その歌すなわちわがいのちの神にささげる

祈がわたしと共にある。

九 わたしはわが岩なる神に言う、

「何ゆえわたしをお忘れになりましたか。

何ゆえわたしは敵のしえたげによつて

悲しみ歩くのですか」と。

一〇 わたしのあだは骨も砕けるばかりに

わたしをののしり、

ひねもすわたしにむかつて

「おまえの神はどこにいるのか」と言う。

二 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。

何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。

神を待ち望め。

わたしはなおわが助け、

わが神なる主をほめたたえるであろう。

第四三篇

一 神よ、わたしをさばき、

神を恐れない民にむかつて、

わたしの訴えをあげつらい、

たばかりをなすよこしまな人から

わたしを助け出してください。

二 あなたはわたしの寄り頼む神です。

なぜわたしを捨てられたのですか。

なぜわたしは敵のしえたげによつて

悲しみ歩くのですか。

三 あなたの光とまことを送ってわたしを導き、
あなたの聖なる山と、あなたの住まわれる所に
わたしをいたらせてください。

四 その時わたしは神の祭壇へ行き、

わたしの大きな喜びである神へ行きます。

神よ、わが神よ、

わたしは琴をもつてあなたをほめたたえます。

五 わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。

何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。

神を待ち望め。

わたしはなおわが助け、

わが神なる主をほめたたえるであろう。

第四篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたコラの子のマスキールの歌

一 神よ、いにしえ、われらの先祖たちの日に、

あなたがなされたみわざを

彼らがわれらに語つたのを耳で聞きました。

二 すなわちあなたはみ手をもつて、もろもろの国民を

追い払ってわれらの先祖たちを植え、

またもろもろの民を悩まして、

われらの先祖たちをふえ広げられました。

三 彼らは自分のつるぎによつて国を獲たのでなく、

また自分の腕によつて勝利を得たのでありません。

ただあなたの右の手、あなたの腕、

あなたのみ顔の光によるのでした。

あなたが彼らを恵まれたからです。

四 あなたはわが王、わが神、

ヤコブのために勝利を定められる方です。

五 われらはあなたによつて、あだを押し倒し、

われらに立ちむかう者を、

み名によつて踏みじめるのです。

六 わたしは自分の弓を頼まず、わたしのつるぎもまた、

わたしを救うことができなからず。

七 しかしあなたはわれらをあだから救い、

われらを憎む者はずかしめられました。

八 われらは常に神によつて誇り、

とこしえにあなたのみ名に感謝するでしょう。「セラ

九 ところがあなたはわれらを捨てて恥を負わせ、

われらの軍勢と共に出て行かれませんでした。

一〇 あなたがわれらをあだの前から退かせられたので、

われらの敵は心のままにかすめ奪いました。

- 二 あなたはわれらをほふられる羊のようにし、
 またもろもろの国民のなかに散らされました。
- 三 あなたはわずかの金であなたの民を売り、
 彼らのために高い価を求められませんでした。
- 三 あなたはわれらを隣りにせしらせ、
 われらをめぐる者どもに侮らせ、
 あざけられました。
- 四 またもろもろの国民のなかにわれらを笑い草とし、
 もろもろの民のなかに笑い者とされました。
- 五 わがはずかしめはひねもすわたしの前にあり、
 恥はわたしの顔をおおいました。
- 六 これはそしる者と、ののしる者の言葉により、
 敵と、恨みを報いる者のゆえによるのです。
- 七 これらの事が皆われらに臨みましたが、
 われらはあなたを忘れず、
 あなたの契約にそむくことがありませんでした。
- 八 われらの心はたじろがず、
 またわれらの歩みはあなたの道を離れませんでした。
- 九 それでもあなたは山犬の住む所でわれらを碎き、
 暗やみをもつてわれらをおおわれました。
- 一〇 われらがもしわれらの神の名を忘れ、
 ほかの神に手を伸べたことがあったならば、

第四五篇

- 三 神はこれを見あらわされないでしょうか。
 神は心の秘密をも知っておられるからです。
- 三 ところがわれらはあなたのためにひねもす殺されて、
 ほふられる羊のようにみなされました。
- 三 主よ、起きてください。なぜ眠っておられるのですか。
 目をさましてください。
- われらをとこしえに捨てないでください。
- 四 なぜあなたはみ顔を隠されるのですか。
 なぜわれらの悩みと、しえたげを
 お忘れになるのですか。
- 五 まことにわれらの魂はかがんで、ちりに伏し、
 われらのからだは土につきました。
- 六 起きて、われらをお助けください。
 あなたのいつくしみのゆえに、
 われらをあがなってください。
- 聖歌隊の指揮者によってゆりの花のしらべにあわせてうたわせたコラの子のマ
 スキールの歌、愛の歌
- 一 わたしの心はうるわしい言葉であふれる。
 わたしは王についてよんだわたしの詩を語る。

わたしの舌はすみやかに物書く人の筆のようだ。

二あなたは人の子らにまさって麗しく、
気品がそのくちびるに注がれている。

このゆえに神はとこしえにあなたを祝福された。

三ますらおよ、光栄と威厳をもつて、
つるぎを腰に帯びよ。

四真理のため、また正義を守るために
威厳をもって、勝利を得て乗り進め。

あなたの右の手はあなたに恐るべきわざを
教えるであろう。

五あなたの矢は鋭くて、王の敵の胸をつらぬき、
もろもろの民はあなたのもとに倒れる。

六神から賜わったあなたの位は永遠にかぎりなく続き、
あなたの王のつえは公平のつえである。

七あなたは義を愛し、悪を憎む。

このゆえに神、あなたの神は喜びの油を
あなたのともがらにまさって、あなたに注がれた。

八あなたの衣はみな没薬、芦荟、肉桂で、
よいかおりを放っている。

琴の音は象牙の殿から出て、あなたを喜ばせる。
九あなたの愛する女たちのうちには王の娘たちがあり、
王妃はオフルの金を飾って、あなたの右に立つ。

一〇娘よ、聞け、かえりみて耳を傾けよ。

あなたの民と、あなたの父の家とを忘れよ。

二王はあなたのうるわしきを慕うであろう。
彼はあなたの主であるから、彼を伏しおがめ。

三ツ口の民は贈り物を持ちきたり、
民のうちの富める者もあなたの好意を請い求める。

四王の娘は殿のうちに栄えをきわめ、
こがねを織り込んだ衣を着飾っている。

五彼女が縫い取りした衣を着て王のもとに導かれ、
その供びとなるおとめらは
彼女に従ってその行列にある。

六彼らは喜びと楽しみをもつて導かれ行き、
王の宮殿にはいる。

七あなたの子らは父祖に代って立ち、
あなたは彼らを全地に君とするであろう。

八わたしはあなたの名をよろず代におぼえさせる。
このゆえにもろもろの民は世々かぎりなく
あなたをほめたたえるであろう。

第四六篇

聖歌隊の指揮者によって女の声のしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

一 神はわれらの避け所また力である。
悩める時のいと近き助けである。

二 このゆえに、たとい地は変り、
山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。

三 たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、
そのさわぎによつて山は震え動くとも、

われらは恐れない。(セラ)

四 一つの川がある。

その流れは神の都を喜ばせ、

いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。

五 神がその中におられるので、都はゆるがない。

神は朝はやく、これを助けられる。

六 もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く、

神がその声を出されると地は溶ける。

七 万軍の主はわれらと共におられる、

ヤコブの神はわれらの避け所である。(セラ)

八 来て、主のみわざを見よ、

主は驚くべきことを地に行われた。

九 主は地のはてまでも戦いをやめさせ、

弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。

一〇 「静まつて、わたしこそ神であることを知れ。

わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、

全地にあがめられる」。

二 万軍の主はわれらと共におられる、
ヤコブの神はわれらの避け所である。(セラ)

第四七篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたコラの子の歌

一 もろもろの民よ、手をうち、

喜びの声をあげ、神にむかつて叫べ。

二 いと高き主は恐るべく、

全地をしろしめす大いなる王だからである。

三 主はもろもろの民をわれらに従わせ、

もろもろの国をわれらの足の下に従わせられた。

四 主はその愛されたヤコブの誇を

われらの嗣業として、われらのために選ばれた。(セラ)

五 神は喜び叫ぶ声と共にのぼり、

主はラッパの声と共にのぼられた。

六 神をほめうたえよ、ほめうたえよ、

われらの王をほめうたえよ、ほめうたえよ。

七 神は全地の王である。

巧みな歌をもつてほめうたえよ。

八 神はもろもろの国民を統べ治められる。

第四八篇

神はその聖なるみくらに座せられる。
 九もろもろの民の君たちはつどい来て、
 アブラハムの神の民となる。
 一〇地のもろもろの盾は神のものである。
 神は大いにあがめられる。

コラの子の歌、さんび

一主は大いなる神であつて、
 われらの神の都、その聖なる山で、
 大いにほめたたえらるべき方である。
 ニシオンの山は北の端が高くて、うるわしく、
 全地の喜びであり、大いなる王の都である。
 ミそのもろもろの殿のうちに神はみずからを
 高きやぐらとして現された。
 四見よ、王らは相会して共に進んできたが、
 五彼らは都を見るや驚き、
 あわてふためき、急ぎ逃げ去った。
 六おののきは彼らに臨み、
 その苦しみは産みの苦しみをする女のようにであつた。
 七あなたは東風を起してタルシシの舟を破られた。

第四九篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたコラの子の歌

ハさきにわれらが聞いたように、
 今われらは万軍の主の都、
 われらの神の都でこれを見ることができた。
 神はとしえにこの都を堅くされる。「セラ
 九神よ、われらはあなたの宮のうちで
 あなたのいつくしみを思いました。
 一〇神よ、あなたの言は、あなたのみ名のように、
 地のはてにまで及びます。
 あなたの右の手は勝利で満ちています。
 ニあなたのさばきのゆえに、
 シオンの山を喜ばせ、ユダの娘を楽しませてください。
 ニシオンのまわりを歩き、あまねくめぐつて、
 そのやぐらを数え、
 ニ三その城壁に心をとめ、そのもろもろの殿をしらべよ。
 これはあなたがたが後の代に語り伝えるためである。
 一四これこそ神であり、
 世々かぎりなくわれらの神であつて、
 とこしえにわれらを導かれるであろう。

一 もろもろの民よ、これを聞け、
すべて世に住む者よ、耳を傾けよ。

二 低きも高きも、富めるも貧しきも、共に耳を傾けよ。
三 わが口は知恵を語り、わが心は知識を思う。

四 わたしは耳をたとえに傾け、
琴を鳴らして、わたしのなぞを解き明かそう。

五 わたしをしえたげる者の不義が
わたしを取り囲む悩みの日に、

どうして恐れなければならぬのか。

六 彼らはおの富をたのみ、
そのたからの多いのを誇る人々である。

七 まことに人はだれも自分をあがなうことはできない。
そのいのちの価を神に払うことはできない。

八 九とこしえに生きながらえて、墓を見ないために
そのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、

それを満足に払うことができないからである。

一〇 まことに賢い人も死に、
愚かな者も、獣のような者も、ひとしく滅んで、
その富を他人に残すことは人の見るところである。

二 たい彼らはその地を自分の名をもって呼んでも、
墓こそ彼らのとこしえのすまい、

世々彼らのすみかである。

二 人は榮華のうちに長くとどまることはできない、
滅びうせる獣にひとしい。

三 これぞ自分をたのみ愚かな者どもの成りゆき、
自分の分け前を喜ぶ者どもの果である。(セラ)

四 彼らは陰府に定められた羊のように
死が彼らを牧するであろう。

彼らはまつすぐに墓に下り、そのかたちは消えうせ、
陰府が彼らのすまいとなるであろう。

五 しかし神はわたしを受けられるゆえ、
わたしの魂を陰府の力からあがなわれる。(セラ)

一六 人が富を得るときも、
その家の栄えが増し加わるときも、恐れてはならない。

一七 彼が死ぬときは何ひとつ携え行くことができず、
その栄えも彼に従って下つて行くことは

ないからである。

一八 たい彼が生きながらえる間、自分を幸福と思つても、
またみずから幸な時に、人々から称賛されても、

一九 彼はついにその先の先祖の仲間につながる。
彼らは絶えて光を見ることがない。

二〇 人は榮華のうちに長くとどまることはできない。
滅びうせる獣にひとしい。

第五〇篇

アサフの歌

一 全能者なる神、主は詔して、
 日の出るところから日の入るところまで
 あまねく地に住む者を召し集められる。
 二 神は麗しさのきわみであるシオンから光を放たれる。
 三 われらの神は来て、もだされない。
 四 神はその民をさばくために、
 上なる天および地に呼ばれる。
 五 「いけにえをもつてわたしと契約を結んだ
 わが聖徒をわたしのものに集めよ」と。
 六 天は神の義をあらわす、
 神はみずから、さばきぬしだからである。「セラ
 セ」わが民よ、聞け、わたしは言う。
 イスラエルよ、わたしはあなたにむかつて
 あかしをなす。
 わたしは神、あなたの神である。
 ハわたしがあなたを責めるのは、
 あなたはいけにえのゆえではない。

あなたの燔祭はいつもわたしの前にある。
 九 わたしはあなたの家から雄牛を取らない。
 またあなたのおりから雄やぎを取らない。
 一〇 林のすべての獣はわたしのもの、
 丘の上の千々の家畜もわたしのものである。
 二 わたしは空の鳥をことごとく知っている。
 野に動くすべてのものはわたしのものである。
 三 たといわたしは飢えても、あなたに告げない、
 世界とそこに満ちるものとは
 わたしのものである。
 四 感謝のいけにえを神にささげよ。
 あなたは雄牛の肉を食べ、
 雄やぎの血を飲むだろうか。
 五 感謝のいけにえを神にささげよ。
 あなたの誓いをいと高き者に果せ。
 六 悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、
 あなたはわたしをあがめるであろう」。
 七 七 かし神は悪しき者に言われる、
 「あなたはなんの権利があつてわたしの定めを述べ、
 わたしの契約を口にするのか」。
 八 八 あなたは教を憎み、わたしの言葉を捨て去つた。
 九 九 あなたは盗びとを見ればこれとむつみ、
 一〇 一〇 姦淫を行う者と交わる。

一九あなたはその口を惡にわたし、
あなたの舌はたばかりを仕組む。

二〇あなたは座してその兄弟をそしり、
自分の母の子をのしる。

二一あなたがこれらの事をしたのを、わたしが黙っていたので、

あなたはわたしを全く自分とひとしい者と思つた。

しかしわたしはあなたを責め、

あなたの目の前にその罪をならべる。

三神を忘れる者よ、このことを思え。

さもないとわたしはあなたをかき裂く。

そのときだれも助ける者はないであろう。

二三感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる。
自分のおこないを憤む者にはわたしは神の救を示す。

第五一篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌 これはダビデがバテセバに
通つた後預言者ナタンがきたときによんだもの

一神よ、あなたのいつくしみによつて、

わたしをあわれみ、

あなたの豊かなあわれみによつて、

わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。

二わたしの不義をことごとく洗い去り、

わたしの罪からわたしを清めてください。

三わたしは自分のとがを知っています。

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。

四わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、

あなたの前に悪い事を行いました。

それゆえ、あなたが宣告をお与えになるときは正しく、

あなたが人をさばかれるときは誤りがありません。

五見よ、わたしは不義のなかに生れました。

わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました。

六見よ、あなたは真実を心のうちに求められます。

それゆえ、わたしの隠れた心に知恵を教えてください。

セヒソプをもつて、わたしを清めてください、

わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗ってください、

わたしは雪よりも白くなるでしょう。

八わたしに喜びと楽しみとを満し、

あなたが砕いた骨を喜ばせてください。

九み顔をわたしの罪から隠し、

わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。

一〇神よ、わたしのために清い心をつくり、

わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。

二 わたしをみ前から捨てないでください。

あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。

三 あなたの救の喜びをわたしに返し、

自由の霊をもつて、わたしをささえてください。

三 そうすればわたしは、とがを犯した者に

あなたの道を教え、

罪びとはあなたに帰ってくるでしょう。

一四 神よ、わが救の神よ、

血を流した罪からわたしを助け出してください。

わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょう。

一五 主よ、わたしのくちびるを開いてください。

わたしの口はあなたの誉をあらわすでしょう。

一六 あなたはいけにえを好まれません。

たといわたしは燔祭をささげても

あなたは喜ばれないでしょう。

一七 神の受けられるいけにえは砕けた魂です。

神よ、あなたは砕けた悔いた心を

かるしめられません。

一八 あなたのみこころにしたがってシオンに恵みを施し、

エルサレムの城壁を築きなおしてください。

一九 その時あなたは義のいけにえと燔祭と、

全き燔祭とを喜ばれるでしょう。

その時あなたの祭壇に雄牛がささげられるでしょう。

第五二篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデのマスギールの歌。これはエドムび

とドエグがサウルにきて、「ダビデはアヒメレクの家にきた」と告げたときにダ

ビデがよんだもの

一 力ある者よ、何ゆえあなたは

神を敬う人に与えた災について誇るのか。

あなたはひねもす人を滅ぼすことをたくらむ。

二 虚偽を行う者よ、あなたの舌は鋭いかみそりのようだ。

三 あなたは善よりも悪を好み、

まことを語るよりも偽りを語ることを好む。「セラ

四 欺きの舌よ、あなたはすべての滅ぼす言葉を好む。

五 しかし神はとこしえにあなたを砕き、

あなたを捕えて、その天幕から引き離し、

生ける者の地から、あなたの根を絶やされる。「セラ

六 正しい者はこれを見て恐れ、彼を笑つて言うであろう、

七 「神をおのが避け所とせず、その富の豊かなるを頼み、

その宝に寄り頼む人を見よ」と。

八 しかし、わたしは神の家にある

緑のオリブの木のようにだ。
わたしは世々かぎりなく神のいつくしみを頼む。
九あなたがこの事をなされたので、
わたしはとこしえに、あなたに感謝し、
聖徒の前であなたの名をふれ示そう。
これはよいことだからである。

第五三篇

聖歌隊の指揮者によってマハラテのしらべにあわせてうたわせたダビデのマス
キールの歌

一愚かな者は心のうちに「神はない」と言う。
彼らは腐れはて、憎むべき不義をおこなった。
善を行う者はない。
二神は天から人の子を見おろして、
賢い者、神を尋ね求める者があるかないかを見られた。
三彼らは皆そむき、みなひとしく墮落した。
善を行う者はない、ひとりもない。
四悪を行う者は悟りがいいのか。
彼らは物食うようにわが民を食らい、
また神を呼ぶことをしない。
五彼らは恐るべきことのない時に大いに恐れた。

神はよこしまな者の骨を散らされるからである。
神が彼らを捨てられるので、
彼らは恥をこうむるであろう。
六どうか、シオンからイスラエルの救が出るように。
神がその民の繁栄を回復される時、
ヤコブは喜び、イスラエルは楽しむであろう。

第五四篇

聖歌隊の指揮者によって琴をもつてうたわせたダビデのマスキールの歌。これ
はジフびとがサウルにきて、「ダビデはわれらのうちに隠れている」と言った時
によんだもの

一神よ、み名によってわたしを救い、
み力によってわたしをさばいてください。
二神よ、わたしの祈をきき、
わが口の言葉に耳を傾けてください。
三高ぶる者がわたしに逆らって起り、
あらぶる者がわたしのいのちを求めています。
彼らは神をおのが前に置くことをしません。「セラ
四見よ、神はわが助けぬし、
主はわがいのちを守られるかたです。
五神はわたしのあだに災をもつて報いられるでしょう。

あなたのまことをもって彼らを滅ぼしてください。
 六 わたしは喜んであなたにいけにえをささげます。
 主よ、わたしはみな名に感謝します。
 これはよい事だからです。
 七 あなたはすべての悩みからわたしを救い、
 わたしの目に敵の敗北を見させられたからです。

第五篇

聖歌隊の指揮者によって琴をもつてうたわれたダビデのマスキールの歌

一 神よ、わたしの祈に耳を傾けてください。
 わたしの願いを避けて身を隠さないでください。
 ニ わたしにみこころをとめ、わたしに答えてください。
 わたしは悩みによって弱りはて、
 三 敵の声と、悪しき者のしえたげとによって
 気が狂いそうです。
 彼らはわたしに悩みを臨ませ、
 怒ってわたしを苦しめるからです。
 四 わたしの心はわがうちにもだえ苦しめ、
 死の恐れがわたしの上に落ちました。
 五 恐れとおののきがわたしに臨み、
 はなはだしい恐れがわたしをおおいました。

六 わたしは言います、
 「どうか、はどのようにに翼をもちたいものだ。
 そうすればわたしは飛び去って安きを得るであろう。
 七 わたしは遠くのがれ去って、野に宿ろう。（セラ
 ハわたしは急ぎ避難して、
 はやてとあらしをのがれよう」と。
 九 主よ、彼らのはかりごとを打ち破ってください。
 彼らの舌を混乱させてください。
 わたしは町のうちに暴力と争いを見えるからです。
 一〇 彼らは昼も夜も町の城壁の上を歩きめぐり、
 町のうちには害悪と悩みとがあります。
 ニ また滅ぼす事が町のうちにあり、
 しえたげと欺きとはその市場を
 離れることがありません。
 三 わたしをののしる者は敵ではありません。
 もしそうであるならば忍ぶことができます。
 わたしにむかって高ぶる者はあだではありません。
 もしそうであるならば身を隠して
 彼を避けることができます。
 三 しかしそれはあなたです、わたしと同じ者、
 わたしの同僚、わたしの親しい友です。
 一四 われらはたがいに楽しく語らい、

つれだつて神の宮に上りました。

二五 どうぞ、死を彼らに臨ませ、

生きたままで陰府に下らせ、

恐れをもって彼らを墓に去らせてください。

二六 しかしわたしが神に呼ばわれれば、

主はわたしを救われます。

二七 タベに、あしたに、真昼にわたしが嘆きうめけば、

主はわたしの声を聞かれます。

二八 八たといわたしを攻める者が多くとも、

主はわたしがたたかう戦いから

わたしを安らかに救い出されます。

二九 昔からみくらに座しておられる神は

聞いて彼らを悩まされるでしょう。(セラ

彼らはおきてを守らず、神を恐れないからです。

三〇 わたしの友はその親しき者に手を伸ばして、

その契約を破った。

三一 その口は牛酪よりもなめらかだが、

その心には戦いがある。

その言葉は油よりもやわらかだが、

それは抜いたつるぎである。

三二 あなたの荷を主にゆだねよ。

主はあなたをささえられる。

主は正しい人の動かされるのを決してゆるされない。

三三 しかし主よ、あなたは彼らを

滅びの穴に投げ入れられます。

血を流す者と欺く者とは

おのが日の半ばも生きながらえることはできません。

しかしわたしはあなたに寄り頼みます。

第五六篇

聖歌隊の指揮者によつて、「遠き所における音をたてぬは」とのしらべにあわせて

うたわせたダビデのミクタムの歌。これはダビデがガテでペリシテびとに捕え

られたときによんだもの

一 神よ、どうかわたしをあわれんでください。

人々がわたしを踏みつけ、

あだする人々がひねもすわたしをしえたげます。

二 わたしの敵はひねもすわたしを踏みつけ、

誇りたかぶつて、わたしと戦う者が多いのです。

三 わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます。

四 わたしは神によつて、そのみ言葉をほめたええです。

わたしは神に信頼するゆえ、恐れることはありません。

肉なる者はわたしに何をなし得ましようか。

五 彼らはひねもすわたしの事を妨害し、

その思いはことごとくわたしにわざわいします。

六 彼らは共に集まって身をひそめ、

わたしの歩みに目をとめ、

わたしのいのちをうかがい求めます。

七 神よ、彼らにその罪を報い、

憤りをもつてもろもろの民を倒してください。

八 あなたはわたしのさすらいを数えられました。

わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください。

これは皆あなたの書に

しるされているではありませんか。

九 わたしが呼び求める日に、わたしの敵は退きます。

これによつて神がわたしを守られることを知ります。

一〇 わたしは神によつてそのみ言葉をほめたたえ、

主によつてそのみ言葉をほめたたえます。

一一 わたしは神に信頼するゆえ、恐れることはありません。

人はわたしに何をなし得ましょうか。

一二 神よ、わたしがあなたに立てた誓いは

果さなければなりません。

わたしは感謝の供え物をあなたにささげます。

一三 あなたはわたしの魂を死から救い、

わたしの足を守つて倒れることなく、

いのちの光のうちに神の前に

わたしを歩ませられたからです。

第五七篇

聖歌隊の指揮者によつて、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたダビデのミクタムの歌。これはダビデが洞にはいつてサウルの手をのがれたときによんだもの

一 神よ、わたしをあわれんでください。

わたしをあわれんでください。

わたしの魂はあなたに寄り頼みます。

滅びのあらしの過ぎ去るまでは

あなたの翼の陰をわたしの避け所とします。

二 わたしはいと高き神に呼ばわれます。

わたしのためにすべての事をなしとげられる神に

呼ばわれます。

三 神は天から送つてわたしを救い、

わたしを踏みつける者はずかしめられます。「セラ

すなわち神はそのいつくしみとまこととを

送られるのです。

四 わたしは人の子らをむさぼり食らうししの中に

横たわっています。

彼らの齒はほこ、また矢、彼らの舌は鋭いづるぎです。

五神よ、みずからを天よりも高くし、
みさかえを全地の上にあげてください。
六彼らはわたしの足を捕えようと網を設けました。
わたしの魂はうなだれました。

彼らはわたしの前に穴を掘りました。
しかし彼らはみずからその中に陥ったのです。(セラ
七神よ、わたしの心は定まりました。

わたしの心は定まりました。
わたしは歌い、かつほめたたえます。
八わが魂よ、さめよ。立琴よ、琴よ、さめよ。

わたしはしのめを呼びさします。
九主よ、わたしはもろもろの民の中であなたに感謝し、
もろもろの国の中であなたをほめたたえます。

一〇あなたのいつくしみは大きく、天にまで及び、
あなたのまことは雲にまで及びます。

二神よ、みずからを天よりも高くし、
みさかえを全地の上にあげてください。

第五八篇

聖歌隊の指揮者によつて、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたダビ
デのミクタムの歌

一あなたがた力ある者よ、
まことにあなたがたは正しい事を語り、
公平をもつて人の子らをさばくのか。

二否、あなたがたは心のうちに悪い事をたくらみ、
その手は地に暴虐を行う。

三悪しき者は胎を出た時から、そむき去り、
生れ出た時から、あやまちを犯し、偽りを語る。

四五彼らはへびの毒のような毒をもち、
魔法使または巧みに呪文を唱える者の声を聞かない
耳をふさぐ耳しいのまむしのようにである。

六神よ、彼らの口の歯を折ってください。

主よ、若いししのきばを抜き砕いてください。
七彼ら流れゆく水のように消え去らせ、

踏み倒される若草のように衰えさせてください。
八また溶けてどろどろになるかたつむりのように、

時ならず生れた日を見ぬ子のようにしてください。
九あなたがたの釜がまだいばらの熱を感じない前に

青いのも、燃えているのも共につむじ風に
吹き払われるように彼らを吹き払ってください。

一〇正しい者は復讐を見て喜び、
その足を悪しき者の血で洗うであろう。

二そして人々は言うであろう、

「まことに正しい者には報いがある。
まことに地にさばきを行われる神がある」と。

第五九篇

聖歌隊の指揮者によつて、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたダビデのミクタムの歌。これはサウルがダビデを殺そうとして人をつかわし、その家をうかがわせたときダビデのよんだもの

一 わが神よ、どうかわたしをわが敵から助け出し、
わたしに逆らつて起りたつ者からお守りください。

二 悪を行う者からわたしを助け出し、

血を流す人からわたしをお救いください。

三 見よ、彼らはひそみかくれて、わたしの命をうかがい、

力ある人々が共に集まつてわたしを攻めます。

主よ、わたしにとがも罪もなく、

四 わたしにあやまちもないのに、

彼らは走りまわつて備えをします。

わたしを助けるために目をさまして、ごらんください。

五 万軍の神、主よ、あなたはイスラエルの神です。

目をさまして、もろもろの国民を罰し、

悪をたくらむ者どもに、

あわれみを施さないでください。「セラ

六 彼らは夕ごとに帰つてきて、
犬のようにほえて町をあさりまわる。

七 見よ、彼らはその口をもつてほえ叫び、

そのくちびるをもつてうなり、

「だれが聞くものか」と言う。

八 しかし、主よ、あなたは彼らを笑い、

もろもろの国民をあざけり笑われる。

九 わが力よ、わたしはあなたにむかつてほめ歌います。

神よ、あなたはわたしの高きやぐらです。

一〇 わが神はそのいつくしきをもつて

わたしを迎えられる。

わが神はわたしに敵の敗北を見させられる。

二 どうぞ、わが民の忘れることのないために、

彼らを殺さないでください。

主、われらの盾よ、み力をもつて彼らをよろめかせ、

彼らを倒れさせないでください。

三 彼らの口の罪、そのくちびるの言葉のために

彼らをその高ぶりに捕われさせてください。

彼らが語るのろいと偽りのために

四 憤りをもつて彼らを滅ぼし、

もはやながらえることのないまでに、

彼らを滅ぼしてください。

第六〇篇

聖歌隊の指揮者によつて、「あかしのゆり」というしらべにあわせて教のために
うたわせたダビデのミクタムの歌。これはダビデが、アラムナハライムおよび
アラムソバと戦つたとき、ヨアブがその帰りに、塩の谷でエドムびと一万二千
人を殺したときによんだもの

一 神よ、あなたはわれらを捨て、

そうすれば地のはてまで、
人々は神がヤコブを治められることを
知るに至るでしょう。「セラ
二 彼らは夕ごとに帰ってきて、
犬のようにほえて町をあさりまわる。
三 彼らは食い物のためにあるきまわり、
飽くことを得なければ怒りうなる。
四 しかし、わたしはあなたのみ力をうたい、
朝には声をあげてみいつくしみを歌います。
あなたはわたしの悩みの日にわが高きやぐらとなり、
わたしの避け所となられたからです。
五 わが力よ、わたしはあなたにむかつてほめうたいます。
神よ、あなたはわが高きやぐら、
わたしにいつくしみを賜わる神であられるからです。

われらを打ち破られました。
あなたは憤られました。
再びわれらをかえしてください。
二 あなたは国を震わせ、これを裂かれました。
その破れをいやしてください。
三 国が揺れ動くのです。
四 あなたはその民に耐えがたい事をさせ、
人をよろめかす酒をわれらに飲ませられました。
五 あなたは弓の前のがれた者を再び集めようと
あなたを恐れる者のために
一つの旗を立てられました。「セラ
六 あなたは愛される者が助けを得るために、
右の手をもつて勝利を与え、
われらに答えてください。
七 神はその聖所で言われた、
「わたしは大いなる喜びをもつてシケムを分かち、
スコテの谷を分かち与えよう。
八 ユダはわたしのつえである。
九 ハモアブはわたしの足だらい、

第六一篇

エドムにはわたしのくつを投げる。
 ペリシテについては、かちどきをあげる」と。
 九だれがわたしを堅固な町に至らせるでしょうか。
 だれがわたしをエドムに導くでしょうか。
 一〇神よ、あなたはわれらを捨てられたではありませんか。
 神よ、あなたはわれらの軍勢と共に出て行かれませんか。
 二われらに助けを与えて、あだにむかわせてください。
 人の助けはむなしのです。
 三われらは神によつて勇ましく働きます。
 われらのあだを踏みにする者は神だからです。

聖歌隊の指揮者によつて琴にあわせてうたわせたダビデの歌

一神よ、わたしの叫びを聞いてください。
 わたしの祈に耳を傾けてください。
 ニわが心のくずおれるとき、
 わたしは地のはてからあなたに呼ばわれます。
 わたしを導いて
 わたしの及びがたいほどの高い岩に
 のぼらせてください。
 三あなたはわたしの避け所、

第六二篇

聖歌隊の指揮者によつてエドムのしらべにしたがつてうたわせたダビデの歌

敵に対する堅固なやぐらです。
 四わたしをどこしえにあなたの幕屋に住ませ、
 あなたの翼の陰にのがれさせてください。(セラ)
 五神よ、あなたはわたしのもろもろの誓いを聞き、
 みなを恐れる者に賜わる嗣業を
 わたしに与えられました。
 六どうか王のいのちを延ばし、
 そのよわいをよろずよに至らせてください。
 七彼をどこしえに神の前に王たらしめ、
 いくしきとまことに命じて
 彼を守らせてください。
 ハそうすればわたしはどこしえにみなをほめうたい、
 日ごとにわたしのもろもろの誓いを果たしましょう。

一わが魂はもだしてただ神をまつ。
 わが救は神から来る。
 ニ神こそわが岩、わが救、
 わが高きやぐらである。
 わたしはいたく動かされることはない。

三 あなたがたは、いつまで人に押し迫るのか。

あなたがたは皆、傾いた石がきのように、

揺り動くまがきのように人を倒そうとするのか。

四 彼らは人を尊い地位から落そうとのみばかり、

偽りを喜び、その口では祝福し、

心のうちではのろうのである。「セラ

五 わが魂はもだしてただ神をまつ。

わが望みは神から来るからである。

六 神こそわが岩、わが救、

わが高きやぐらである。

わたしは動かされることはない。

七 わが救とわが誉とは神にある。

神はわが力の岩、わが避け所である。

八 民よ、いかなる時にも神に信頼せよ。

そのみ前にあなたがたの心を注ぎ出せ。

神はわれらの避け所である。「セラ

九 低い人はむなしく、高い人は偽りである。

彼らをはかりにおけば、彼らは共に息よりも軽い。

一〇 あなたがたは、しえたげにたよってはならない。

かすめ奪うことに、むなしい望みをおいてはならない。

富の増し加わるとき、これに心をかけてはならない。

二 神はひとたび言われた、

わたしはふたたびこれを聞いた、
力は神に属することを。

二三 主よ、いつくしみもまたあなたに属することを。

あなたは人おのおののわざにしたがつて

報いられるからである。

第六三篇

ユダの野にあつたときによんだダビデの歌

一 神よ、あなたはわたしの神、

わたしは切にあなたをたずね求め、

わが魂はあなたをかわき望む。

水なき、かわき衰えた地にあるように、

わが肉体はあなたを慕いこがれる。

二 それでわたしはあなたの力と栄えとを見ようと、

聖所にあつて目をあなたに注いだ。

三 あなたのいつくしみは、いのちにもまさるゆえ、

わがくちびるはあなたをほめたたえる。

四 わたしは生きながらえる間、あなたをほめ、

手をあげて、み名を呼びまつる。

五六 わたしが床の上であなたを思いだし、

夜のふけるままにあなたを深く思うとき、

わたしの魂は髓とあぶらとをもって

もてなされるように飽き足り、

わたしの口は喜びのくちびるをもって

あなたをほめたたえる。

七あなたはわたしの助けとなられたゆえ、

わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う。

八わたしの魂はあなたにすがりつき、

あなたの右の手はわたしをささえられる。

九しかしわたしの魂を滅ぼそうとたずね求める者は

地の深き所に行き、

一〇つるぎの力にわたされ、山犬のえじきとなる。

二しかし王は神にあつて喜び、

神によつて誓う者はみな誇ることができる。

偽りを言う者の口はふさがれるからである。

第六四篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一神よ、わたしが嘆き訴えるとき、

わたしの声をお聞きください。

敵の恐れからわたしの命をお守りください。

二わたしを隠して、悪を行う者の

ひそかなはかりごとから免れさせ、

不義を行う者ののはかりごとから免れさせてください。

三彼らはその舌をつるぎのやうにとぎ、

苦い言葉を矢のやうに放ち、

四隠れた所から罪なき者を射ようとする。

にわかに彼を射て恐れることがない。

五彼らは悪い企てを固くたもち、

共にはかり、ひそかにわなをかけて言う、

「だれがわれらを見破ることができるか。

六だれがわれらの罪をたずね出すことができるか。

われらは巧みに、

はかりごとを考えめぐらしたのだ」と。

人の内なる思いと心とは深い。

七しかし神は矢をもって彼らを射られる。

彼らはにわかに傷をうけるであらう。

八神は彼らの舌のゆえに彼らを滅ぼされる。

彼らを見る者は皆そのこうべを振るであらう。

九その時すべての人は恐れ、神のみわざを宣べ伝え、

そのなされた事を考えるであらう。

一〇正しい人は主にあつて喜び、かつ主に寄り頼む。

すべて心の直き者は誇ることができ。

第六五篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌 さんび

一 神よ、シオンにて、あなたをほめたたえることは
ふさわしいことである。

人はあなたに誓いを果すであろう。

三 祈を聞かれる方よ、

すべての肉なる者は罪のゆえにあなたに来る。

われらのとががわれらに打ち勝つとき、

あなたはこれをゆるされる。

四 あなたに選ばれ、あなたに近づけられて、

あなたの大庭に住む人はさいわいである。

われらはあなたの家、あなたの聖なる宮の

恵みによつて飽くことができる。

五 われらの救の神よ、

地のもろもろのはてと、遠き海の望みであるあなたは

恐るべきわざにより、

救をもつてわれらに答えられる。

六 あなたは大能を帯び、

そのみ力によつて、もろもろの山を堅く立たせられる。

七 あなたは海の響き、大波の響き、

もろもろの民の騒ぎを静められる。

八 それゆえ、地のはてに住む人々も、

あなたのもろもろのしるしを見て恐れる。

あなたは朝と夕の出る所をして

喜び歌わせられる。

九 あなたは地に臨んで、これに水をそそぎ、

これを大いに豊かにされる。

神の川は水で満ちている。

あなたはそのように備えて

彼らに穀物を与えられる。

一〇 あなたはその田みぞを豊かにうるおし、

そのうねを整え、夕立ちをもつてそれを柔らかにし、

そのもえ出るのを祝福し、

二 またその恵みをもつて年の冠とされる。

あなたの道にはあぶらがしたたる。

三 野の牧場はしたり、小山は喜びをまとい、

三 牧場は羊の群れを着、

もろもろの谷は穀物をもつておおわれ、

彼らは喜び呼ばわつて共に歌う。

第六六篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせた歌 さんび

一 全地よ、神にむかつて喜び呼ばわれ。

二 そのみ名の栄光を歌え。

栄えあるさんびをささげよ。

三 神に告げよ。

「あなたのもろもろのみわざは恐るべきかな。

大いなるみ力によつて、あなたの敵はみ前に屈服し、

四 全地はあなたを拝み、あなたをほめうたい、

み名をほめうたうであらう」と。(セラ

五 来て、神のみわざを見よ。

人の子らにむかつてなされることは恐るべきかな。

六 神は海を変えて、かわいた地とされた。

人々は徒歩で川を渡った。

その所でわれらは神を喜んだ。

七 神は大能をもつて、とこしえに統べ治め、

その目はもろもろの国民を監視される。

そむく者はみずからを高くしてはならない。(セラ

ハ もろもろの民よ、われらの神をほめよ。

神をほめたたえる声を聞えさせよ。

九 神はわれらを生きながらえさせ、

われらの足のすべるのをゆるめられない。

一〇 神よ、あなたはわれらを試み、

しろがねを練るように、われらを練られた。

二 あなたはわれらを網にひきいれ、

われらの腰に重き荷を置き、

三 人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。

われらは火の中、水の中を通った。

しかしあなたはわれらを広い所に導き出された。

三 わたしは燔祭をもつてあなたの家に行き、

わたしの誓いをあなたに果します。

一四 これはわたしが悩みにあつたとき、

わたしのくちびるの言い出したもの、

わたしの口が約束したものです。

一五 わたしは肥えたものの燔祭を

雄羊のいけにえの煙と共にあなたにささげ、

雄牛と雄やぎとをささげます。(セラ

一六 すべて神を恐れる者よ、来て聞け。

神がわたしのためになされたことを告げよう。

一七 わたしは声をあげて神に呼ばわり、

わが舌をもつて神をあがめた。

一八 もしわたしが心に不義をいだいていたならば、

主はお聞きにならないであろう。

一九 しかし、まことに神はお聞きになり、

わが祈の声にみこころをとめられた。

二〇 神はほむべきかな。

神はわが祈をしりぞけず、
そのいつくしみをわたしから取り去られなかった。

第六七篇

聖歌隊の指揮者によつて琴にあわせてうたわせた歌、さんび

一 どうか、神がわれらをあわれみ、われらを祝福し、
そのみ顔をわれらの上に照されるように。「セラ
二 これはあなたの道があまねく地に知られ、
あなたの救の力がもろもろの国民のうちに
知られるためです。

三 神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、
もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください。

四 もろもろの国民を樂しませ、

また喜び歌わせてください。

あなたは公平をもつてもろもろの民をさばき、
地の上なるもろもろの国民を導かれるからです。「セラ

五 神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、
もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください。

六 地はその産物を出しました。

神、われらの神はわれらを祝福されました。

七 神はわれらを祝福されました。

地のもろもろのはてにことごとく
神を恐れさせてください。

第六八篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌、さんび

一 神よ、立ちあがつて、その敵を散らし、
神を憎む者をみ前から逃げ去らせてください。

二 煙の追いやられるように彼らを追いやり、
ろうの火の前に溶けるように

悪しき者を神の前に滅ぼしてください。

三 しかし正しい者を喜ばせ、

神の前に喜び踊らせ、喜び樂しませてください。

四 神にむかつて歌え、そのみ名をほめうたえ。

雲に乗られる者にむかつて歌声をあげよ。

その名は主、そのみ前に喜び踊れ。

五 その聖なるすまいにおられる神は

みなしごの父、やもめの保護者である。

六 神は寄るべなき者に住むべき家を与え、

めしゅうどを解いて幸福に導かれる。

しかしそむく者はかわいた地に住む。

七 神よ、あなたが民に先だち出で、

荒野を進み行かれたとき、「セラ
 ハシナイの主なる神の前に、
 イスラエルの神なる神の前に、
 地は震い、天は雨を降らせました。
 九神よ、あなたは豊かな雨を降らせて、
 疲れ衰えたあなたの嗣業の地を回復され、
 一〇あなたの群れは、そのうちにすまいを得ました。
 神よ、あなたは恵みをもって
 貧しい者のために備えられました。
 二主は命令を下される。
 おとずれを携えた女たちの大いなる群れは言う、
 三「もうものの軍勢の王たちは
 逃げ去り、逃げ去った」と。
 家にとどまる女たちは獲物を分ける、
 三たとい彼らは羊のおりの中にとどまるとも。
 はとの翼は、しろがねをもっておおわれ、
 その羽はきらめくこがねをもっておおわれ。
 一四全能者がかしこで王たちを散らされたとき、
 ザルモンに雪が降った。
 一五神の山、バシヤンの山、
 峰かさなる山、バシヤンの山よ。
 一六峰かさなるもうものの山よ、

何ゆえ神がすまいにと望まれた山をねたみ見るのか。
 まことに主はとしえにそこに住まわれる。
 一七主は神のいくさ車幾千万をもつて、
 シナイから聖所に来られた。
 一八あなたはとりこを率い、
 人々のうちから、またそむく者のうちから
 贈り物をうけて、高い山に登られた。
 主なる神がそこに住まわれるためである。
 一九日々にわれらの荷を負われる主はほむべきかな。
 神はわれらの救である。「セラ
 二〇われらの神は救の神である。
 死からのがれ得るのは主なる神による。
 二三神はその敵のこうべを打ち砕き、
 おのがとがの中に歩む者の
 毛深い頭のいただきを打ち砕かれる。
 二三主は言われた、
 「わたしはバシヤンから彼らを携え帰り、
 海の深い所から彼らを携え帰る。
 二三あなたはその足を彼らの血に浸し、
 あなたの犬の舌はその分け前を
 敵から得るであろう」と。
 二四神よ、人々はあなたのこうごうしい行列を見た。

わが神、わが王の、聖所に進み行かれるのを見た。

二五 歌う者は前に行き、琴をひく者はあとになり、
おとめらはその間にあって手鼓を打つて言う、

二六 「大いなる集会で神をほめよ。

イスラエルの源から出た者よ、主をほめまつれ」と。

二七 そこに彼らを導く年若いベニヤミンがおり、
その群れの中にユダの君たちがおり、

ゼブルンの君たち、ナフタリの君たちがいる。

二八 神よ、あなたの大能を奮い起してください。

われらのために事をなされた神よ、

あなたの力をお示ください。

二九 エルサレムにあるあなたの宮のために、

王たちはあなたに贈り物をささげるでしょう。

三〇 葦の中に住む獣、

もろもろの民の子牛を率いる雄牛の群れを

いましめてください。

みつぎ物をむさぼる者たちを足の下に踏みつけ、

戦いを好むもろもろの民を散らしてください。

三一 青銅をエジプトから持ちきたらせ、

エチオピアには急いでその手を

神に伸ばさせてください。

三二 地のもろもろの国よ、神にむかつて歌え、

主をほめうたえ。「セラ

三三 いにしえからの天の天に乘られる

主にむかつてほめうたえ。

見よ、主はみ声を出し、力あるみ声を出される。

三四 力を神に帰せよ。その威光はイスラエルの上にあり、

その力は雲の中にある。

三五 神はその聖所で恐るべく、

イスラエルの神はその民に力と勢いとを与えられる。

神はほむべきかな。

第六九篇

聖歌隊の指揮者によつてゆりの花のしらべにあわせてうたわせたダビデの歌

一 神よ、わたしをお救いください。

大水が流れ来て、わたしの首にまで達しました。

二 わたしは足がかりもない深い泥の中に沈みました。

わたしは深い水に陥り、

大水がわたしの上を流れ過ぎました。

三 わたしは叫びによつて疲れ、わたしののどはかわき、

わたしの目は神を待ちわびて衰えました。

四 ゆえなく、わたしを憎む者は

わたしの頭の毛よりも多く、

偽いつわつてわたしの敵てきとなり、

わたしを滅ほろぼそうとする者は強つよいのです。

わたしは盗ぬすまなかつた物ものをも

償つくななければならぬのですか。

五かみ神かみよ、あなたはわたしの愚おろかなことを

知しつておられます。

わたしのもろものがは

あなたに隠かくれることはありません。

六ばんぐん万軍かみの神しゆ、主しゆよ、あなたを待ち望のぞむ者ものが

わたしの事ことによつて、

はずかしめられることのないようにしてください。

イスラエルの神かみよ、あなたを求めもとめる者ものが

わたしの事ことによつて、

恥はじを負おわせられることのないようにしてください。

七はじわたしはあなたのためにそしりを負おい、

恥はじがわたしの顔かおをおつたのです。

八ははわたしはわが兄弟きょうだいには、知らぬ者ものとなり、

わが母ははの子こらには、のけ者ものとなりました。

九こあなたの家いえを思おもう熱心ねっしんがわたしを食くいつくし、

あなたをそしる者もののそしりが

わたしに及およんだからです。

一〇わたしが断食だんじきをもつてわたしの魂たましいを悩なやませば、

かえつてそれによつてそしりをうけました。

二 わたしが荒布あらぬのを衣ころもとすれば、

かえつて彼かれらのことわざとなりました。

三 わたしは門もんに座ざする者ものの話題わだいとなり、

酔よいどれの歌うたとなりました。

四しかし主しゆよ、わたしはあなたに祈いのります。

神かみよ、恵めぐみの時ときに、

あなたのいつくしみの豊ゆたかなるにより、

わたしにお答こたえください。

一四 あなたのまことの救すくいにより、

わたしを泥どろの中に沈しずまぬよう助け出たすしてください。

わたしを憎にくむ者ものから、

また深ふかい水みずからわたしを助たすけ出だしてください。

一五 大水おほみづがわたしの上うへを流ながれ過ぎることなく、

淵ふちがわたしをのむことなく、

穴あながその口くちをわたしの上うへに閉とじることのないように

してください。

一六 主しゆよ、あなたのいつくしみの深ふかきにより、

わたしにお答こたえください。

あなたのあわれみの豊ゆたかなるにより、

わたしを顧かえりみてください。

一七 あなたの顔かおをしもべに隠かくさないでください。

わたしは悩んでいるのです。

すみやかにわたしにお答えください。

一八 わたしに近く寄って、わたしをあがない、
わが敵のゆえにわたしをお救いください。

一九 あなたはわたしの受けるそしりと、

恥と、はるかしめとを知っておられます。

わたしのお前は皆あなたの前にあります。

二〇 そしりがわたしの心を砕いたので、

わたしは望みを失いました。

わたしは同情する者を求めたけれども、ひとりもなく、
慰める者を求めたけれども、ひとりも見ませんでした。

二一 彼らはわたしの食物に毒を入れ、

わたしのかわいた時に酔を飲ませました。

二二 彼らの前の食卓を網とし、

彼らが犠牲をささげる祭を、わなとしてください。

二三 彼らの目を暗くして見えなくし、

彼らの腰を常に震わせ、

二四 あなたの憤りを彼らの上にそそぎ、

あなたの激しい怒りを彼らに追いつかせてください。

二五 彼らの宿営を荒し、

ひとりもその天幕に住まわせないでください。

二六 彼らはあなたが撃たれた者を迫害し、

あなたが傷つけられた者をさらに苦しめるからです。

二七 彼らに、罰に罰を加え、

あなたの赦免にあずからせないでください。

二八 彼らをいのちの書から消し去って、

義人のうちに記録されることのないように

してください。

二九 しかしわたしは悩み苦しんでいます。

神よ、あなたの救が

わたしを高い所に置かれますように。

三〇 わたしは歌をもつて神の名をほめたたえ、

感謝をもつて神をあがめます。

三一 これは雄牛または角とひずめのある雄牛にまさって

主を喜ばせるでしょう。

三二 へりくだる者は、これを見て喜べ。

神を求める者よ、あなたがたの心を生きかえらせよ。

三三 主は乏しい者に聞き、

その捕われ人をかろしめられないからである。

三四 天と地は主をほめたたえ、

海とその中に動くあらゆるものは主をほめたたえよ。

三五 神はシオンを救い、

ユダの町々を建て直されるからである。

そのしもべらはそこに住んでこれを所有し、

三六そのしもべらの子孫はこれを継ぎ、
 名を愛する者はその中に住むであろう。

第七〇篇

聖歌隊の指揮者によってうたわれたダビデの記念の歌

一 神よ、みころならばわたしをお救いください。
 主よ、すみやかにわたしをお助けください。
 ニ わたしのいのちをたずね求める者どもを
 恥じあわてさせてください。
 わたしのそこなわれることを願う者どもを
 うしろに退かせ、恥を負わせてください。
 三 「あはあ、あはあ」と言う者どもを
 自分の恥によって恐れおののかせてください。
 四 すべてあなたを尋ね求める者は
 あなたによって喜び楽しむように。
 あなたを愛する者は
 つねに「神は大いなるかな」ととなえるように。
 五 しかし、わたしは貧しく、かつ乏しい。
 神よ、急いでわたしに来てください。
 あなたはわが助け、わが救主です。
 主よ、ためらわないでください。

第七一篇

一 主よ、わたしはあなたに寄り頼む。
 とこしえにわたしをはずかしめないでください。
 ニ あなたの義をもつてわたしを助け、
 わたしを救い出してください。
 あなたの耳を傾けて、わたしをお救いください。
 三 わたしのためにのがれの岩となり、
 わたしを救う堅固な城となってください。
 あなたはわが岩、わが城だからです。
 四 わが神よ、悪しき者の手からわたしを救い、
 不義、残忍な人の支配から、
 わたしを救い出してください。
 五 主なる神よ、あなたはわたしの若い時からの
 わたしの望み、わたしの頼みです。
 六 わたしは生れるときからあなたに寄り頼みました。
 あなたはわたしを母の胎から取り出されたかたです。
 わたしは常にあなたをほめたたえます。
 七 わたしは多くの人に
 怪しまれるような者となりました。
 しかしあなたはわたしの堅固な避け所です。
 ハ わたしの口はひねもす、あなたをたたえるさんびと、

頌榮しょうえいとをもつて満みたされています。

九 わたしが年老としおいた時とき、わたしを見離みはなさないでください。
わたしが力ちから衰おろえた時とき、わたしを見捨みすてないでください。

一〇 わたしの敵てきはわたしについて語かたり、

わたしの中のちをうかがう者は共にはかつて、

二 「神かみは彼かれを見捨みすてた。彼かれを助たすける者ものがないから
彼かれを追おつて捕とらえよ」と言いいます。

三 神かみよ、わたしに遠とほざからないでください。

わが神かみよ、すみやかに来きてわたしを助たすけてください。

三 わたしにあだする者ものを恥はじさせ、滅ほろぼしてください。
わたしをそこなわんとする者ものを、

そしりと、はずかしめとをもつておおつてください。

一四 しかしわたしは絶たえず望のぞみをいだいて、
いよいよあなたをほめたたえるでしょう。

一五 わたしの口くちはひねもすあなたの義ぎと、
あなたの救すくいを語るでしょう。

わたしはその数かずを知らないからです。

一六 わたしは主なる神かみの大神能たいのうのみわざを携たずえゆき、
ただあなたの義ぎのみを、ほめたたえるでしょう。

一七 神かみよ、あなたはわたしを若い時ときから教おしえられました。
わたしはなお、

あなたのくすしきみわざを宣のべ伝つたえます。

一八 神かみよ、わたしが年老としおいて、しらがともるとも、

あなたの力ちからをきたらんとするすべての代よに
宣のべ伝つたえるまで、わたしを見捨みすてないでください。

一九 神かみよ、あなたの大神能たいのうと義ぎとは高い天てんにまで及およぶ。

あなたは大きいなる事ことをなされました。

神かみよ、だれかあなたに等ひとしい者ものがあるでしょうか。

二〇 あなたはわたしを多くの重おもい悩なやみに
あわされましたが、再ふたびわたしを生いかし、
地の深ふかい所ところから引ひきあげられるでしょう。

二一 あなたはわたしの誉ほまれを増まし、
再ふたびわたしを慰なぐさめられるでしょう。

二三 わが神かみよ、わたしはまた立たて琴ことをもつて

あなたと、あなたのまこととをほめたたえます。
イスラエルの聖者せいじやよ、

わたしは琴ことをもつてあなたをほめ歌うたいます。
三 わたしがあなたにむかつてほめ歌うたうとき、

わがくちびるは喜よろこび呼よばわり、
あなたがあがなわれたわが魂たましいもまた
喜よろこび呼よばわれるでしょう。

二四 わたしの舌したもまたひねもす
あなたの義ぎを語かたるでしょう。

わたしをそこなわんとした者ものが

恥^はあわてたからです。

第七二篇

ソロモンの歌^{うた}

一 神よ、あなたの公平^{こうへい}を王^{おう}に与^{あた}え、
 あなたの義^ぎを王^{おう}の子^こに与^{あた}えてください。
 二 彼は義^ぎをもつてあなたの民^{たみ}をさばき、
 公平^{こうへい}をもつてあなたの貧^{まず}しい者^{もの}をさばくように。
 三 もろもろの山^{やま}と丘^{おか}とは義^ぎによつて
 民^{たみ}に平和^{へいわ}を与^{あた}えるように。
 四 彼は民^{たみ}の貧^{まず}しい者^{もの}の訴^{うった}えを弁護^{べんご}し、
 乏^{とほ}しい者^{もの}に救^{すくい}を与^{あた}え、
 しえたげる者^{もの}を打ち砕^{くだ}くように。
 五 彼は日^ひと月^{つき}とのあらんかぎり、
 世々^{よよい}生きながらえるように。
 六 彼は刈^かり取^とつた牧草^{まきぐさ}の上に降^ふる雨^{あめ}のごとく、
 地^ちを潤^{うる}す夕立^{ゆうだ}ちのごとく臨^{のぞ}むように。
 七 彼の世^よに義^ぎは栄^{さか}え、
 平和^{へいわ}は月^{つき}のなくなるまで豊^{ゆた}かであるように。
 ハ 彼は海^{かい}から海^{うみ}まで治^{おさ}め、
 川^{かわ}から地^ちのはてまで治^{おさ}めるように。

九 彼のあだは彼の前^{まえ}にかがみ、
 彼の敵^{てき}はちりをなめるように。
 一〇 タルシシおよび島々^{しまじま}の王^{おう}たちはみつぎを納^{おさ}め、
 シバとセバの王^{おう}たちは贈^{おく}り物を携^{たず}えて来るように。
 二 もろもろの王^{おう}は彼の前^{まえ}にひれ伏^ふし、
 もろもろの国民^{くんにたみ}は彼^{かれ}に仕^{つか}えるように。
 三 彼は乏^{とほ}しい者^{もの}をその呼^よばわる時^{とき}に救^{すく}い、
 貧^{まず}しい者と、助^{たす}けなき者^{もの}とを救^{すく}う。
 三 彼は弱^{よわ}い者^{もの}と乏^{とほ}しい者^{もの}とをあわれみ、
 乏^{とほ}しい者^{もの}のいのちを救^{すく}い、
 四 彼^{かれ}らのいのちを、しえたげと暴力^{ぼうりよく}とからあがなう。
 彼^{かれ}らの血^ちは彼の目^めに尊^{たつと}い。
 二五 彼は生きながらえ、
 シバの黄金^{おうごん}が彼^{かれ}にささげられ、
 彼^{かれ}のために絶^たえず祈^{いのり}がささげられ、
 ひねもす彼^{かれ}のために祝^{しゆくふく}福^{ふく}が求められるように。
 二六 国^{くに}のうちには穀物^{こくもつ}が豊^{ゆた}かにみのり、
 その実^みはレバノンのように山々^{やまやま}の頂^{いただき}に波打^{なみう}ち、
 人々^{ひとびと}は野^のの草^{くさ}のごとく町々^{まちまち}に栄^{さか}えるように。
 二七 彼の名^なはとこしえに続^{つづ}き、
 その名^{めいせい}は日^ひのあらん限り、絶^たえることのないように。
 人々^{ひとびと}は彼^{かれ}によつて祝^{しゆくふく}福^{ふく}を得^え、

第七三篇

アサフの歌

もろもろの国民は彼をさいわいなる者と
 となえるように。
 ハイスラエルの神、主はほむべきかな。
 ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。
 一 九その光榮ある名はどこしえにほむべきかな。
 全地はその榮光をもつて満たされるように。
 アアメン、アアメン。
 二〇 エッサイの子ダビデの祈は終つた。

アサフの歌
 一 神は正しい者にむかい、
 心の清い者にむかつて、まことに恵みふかい。
 ニ しかし、わたしは、わたしの足がつまずくばかり、
 わたしの歩みがすべるばかりであつた。
 ミ これはわたしが、悪しき者の榮えるのを見て、
 その高ぶる者をねたんだからである。
 四 彼らには苦しみがなく、
 その身はすこやかで、つやがあり、
 五 ほかの人々のように悩むことがなく、
 ほかの人々のように打たれることはない。

六 それゆえ高慢は彼らの首飾となり、
 暴力は衣のように彼らをおおっている。
 七 彼らは肥え太つて、その目はとびいで、
 その心は愚かな思いに満ちあふれている。
 ハ 彼らはあざけり、悪意をもつて語り、
 高ぶつて、しえたげを語る。
 九 彼らはその口を天にさからつて置き、
 その舌は地をあるきまわる。
 一〇 それゆえ民は心を変えて彼らをほめたたえ、
 彼らのうちにあやまちを認めない。
 二 彼らは言う、「神はどうして知り得ようか、
 いと高き者に知識があろうか」と。
 三 見よ、これらは悪しき者であるのに、
 常に安らかで、その富が増し加わる。
 四 まことに、わたしはいたずらに心をきよめ、
 罪を犯すことなく手を洗つた。
 五 わたしはひねもす打たれ、
 朝ごとに懲しめをうけた。
 六 もしわたしが「このような事を語ろう」と言つたなら、
 わたしはあなたの子らの代を誤らせたであろう。
 七 しかし、わたしがこれを知ろうと思ひめぐらしたとき、
 これはわたしにめんどろな仕事のように思われた。

一七 わたしが神の聖所に行つて、
 彼らの最後を悟り得たまではそうであつた。
 一八 まことにあなたは彼らをなめらかな所に置き、
 彼らを滅びに陥らせられる。
 一九 なんと彼らはまたたくまに滅ぼされ、
 恐れをもつて全く一掃されたことであらう。
 二〇 あなたが目をさまして
 彼らの影をかるしめられるとき、
 彼らは夢みた人の目をさました時のようである。
 二一 わたしの魂が痛み、わたしの心が刺されたとき、
 二二 わたしは愚かで悟りがなく、
 あなたに対しては獣のようであつた。
 二三 けれどもわたしは常にあなたと共にあり、
 あなたはわたしの右の手を保たれる。
 二四 あなたはさとしをもつてわたしを導き、
 その後わたしを受けて栄光にあずからせられる。
 二五 わたしはあなたのほかに、だれを天にもち得よう。
 地にはあなたのほかに慕うものはない。
 二六 わが身とわが心とは衰える。
 しかし神はとこしえにわが心の力、わが嗣業である。
 二七 見よ、あなたに遠い者は滅びる。
 あなたは、あなたにそむく者を滅ぼされる。

第七四篇

アサフのマスキールの歌

一 神よ、なぜ、われらをとこしえに捨てられるのですか。
 なぜ、あなたの牧の羊に怒りを燃やされるのですか。
 二 昔あなたが手に入れられたあなたの公会、
 すなわち、あなたの嗣業の部族となすために
 あがなわれたものを思い出してください。
 あなたが住まれたシオンの山を
 思い出してください。
 三 とこしえの滅びの跡に、あなたの足を向けてください。
 敵は聖所で、すべての物を破壊しました。
 四 あなたのあだは聖所の中でほえさげび、
 彼らのしるしを立てて、しるしとしました。
 五 彼らは上の入口では、おのをもつて
 木の格子垣を切り倒しました。
 六 また彼らは手おのと鎚とをもつて
 聖所の彫り物をことごとく打ち落しました。

七 彼らはあなたの聖所に火をかけ、
 名(な)のすみかをけがして、地に倒(たお)しました。
 ハ 彼らは心のうちに言(い)いました、
 「われらはことごとくこれを滅(ほろ)ぼそう」と。
 彼らは国のうちの神の会堂(かいどう)をことごとく焼(や)きました。
 九 われらは自分たちのしるしを見(み)ません。
 預言者(よげんしゃ)も今(いま)はいません。
 十 としていつまで続(つづ)くのか、われらのうちには、
 知る者(しもの)がありません。
 一〇 神(かみ)よ、あだはいつまであざけるでしょうか。
 敵(てき)はとこしえにあなたの名(な)をのしるでしょうか。
 ニ なぜあなたは手(て)を引(ひ)かれるのですか。
 なぜあなたは右(みぎ)の手(て)を
 ふところに入れておかれるのですか。
 二三 神(かみ)はいにしえからわたしの王(おう)であつて、
 救(すくい)を世(よ)の中(なか)に行(な)われた。
 二三 あなたはみ力(ちから)をもつて海(うみ)をわかし、
 水(みづ)の上(うへ)の龍(りゆう)の頭(あたま)を砕(くだ)れた。
 二四 あなたはレビヤタンの頭(あたま)をくだき、
 これを野(の)の獣(けもの)と与(あた)へえじきとされた。
 二五 あなたは泉(いずみ)と流(なが)れとを開(ひら)き、
 絶(た)えず流(なが)れるもろもろの川(かわ)をからされた。

二六 昼(ひる)はあなたのもの、夜(よる)もまたあなたのもの。
 あなたは光(ひかり)と太陽(たいよう)とを設(もう)けられた。
 二七 あなたは地(ち)のもろもろの境(さかい)を定め、
 夏(なつ)と冬(ふゆ)とを造(つく)られた。
 二八 主(しゅ)よ、敵(てき)はあなたをあざけり、
 愚(おろ)かな民(たみ)はあなたの名(な)をのしります。
 この事(こと)を思(おも)ひ出(だ)してください。
 二九 どうかあなたのはとの魂(たましい)を
 野(の)の獣(けもの)にわたさないでください。
 貧(まず)しい者のい(お)のちをとこしえに忘(わす)れないでください。
 三〇 あなたの契(けい)約(やく)をかえりみててください。
 地(ち)の暗(くら)い所(ところ)は暴力(ぼうりよく)のすまいで満(み)ちています。
 三二 しえたげられる者(もの)を恥(は)じさせないでください。
 貧(まず)しい者と乏(とほ)しい者(もの)とに
 み名(な)をほめたたえさせてください。
 三三 神(かみ)よ、起(お)きてあなたの訴(うた)えをあげつらい、
 愚(おろ)かな者(もの)のひねもすあなたをあざけるのを
 みこころにとめてください。
 三三 あなたはあなたのあだの叫(さけ)びを忘(わす)れないでください。
 あなたの敵(てき)の絶(た)えずあがる騒(さわ)ぎを
 忘(わす)れないでください。

第七五篇

聖歌隊の指揮者によって、「滅ぼすな」というしらべにあわせてうたわせたアサ

フの歌、さんび

一 神よ、われらはあなたに感謝します。

われらは感謝します。

われらはあなたのみ名を呼び、

あなたのくすしきみわざを語ります。

二 定まった時が来れば、

わたしは公平をもつてさばく。

三 地とすべてこれに住むものがよろめくとき、

わたしはその柱を堅くする。「セラ

四 わたしは、誇る者には「誇るな」と言い、

悪しき者には「角をあげるな、

五角を高くあげるな、

高慢な態度をもつて語るな」と言う。

六 上げることは東からでなく、西からでなく、

また荒野からでもない。

七 それはさばきを行われる神であつて、

神はこれを下げ、かれを上げられる。

八 主の手には杯があつて、

よく混ぜた酒があわだっている。

第七六篇

聖歌隊の指揮者によって琴にあわせてうたわせたアサフの歌、さんび

一 神はユダに知られ、

そのみ名はイスラエルにおいて偉大である。

二 その幕屋はサレムにあり、

そのすまいはシオンにある。

三 かしこで神は弓の火矢を折り、

盾とつるぎと戦いの武器をこわされた。「セラ

四 あなたは永久の山々にまさつて

光榮あり、威嚴がある。

五 雄々しい者はかすめられ、彼らは眠りに沈み、

いくさびとは皆その手を施すことができなかつた。

六 ヤコブの神よ、あなたのとがめによって、

主がこれを注ぎ出されると、

地のすべての悪しき者は

これを一滴も残さずに飲みつくすであろう。

九 かしわたしはとこしえに喜び、

ヤコブの神をほめうたいます。

一〇 悪しき者の角はことごとく切り離されるが

正しい者の角はあげられるであろう。

乗り手と馬とは深い眠りに陥った。

セしかし、あなたがたこそは恐るべき方である。

あなたが怒りを発せられるとき、

だれがみ前に立つことができるよう。

八九あなたは天からさばきを仰せられた。

神が地のしえたげられた者を救うために、

さばきに立たれたとき、地は恐れて、沈黙した。「セラ

一〇まことに人の怒りはあなたをほめたたえる。

怒りの余りをあなたは帯とされる。

二あなたがたの神、主に誓いを立てて、それを償え。

その周囲のすべての者は

恐るべき主に贈り物をささげよ。

三主はもろもろの君たちのいのちを断たれる。

主は地の王たちの恐るべき者である。

第七七篇

聖歌隊の指揮者によってエドトンのしらべにしたがつてうたわせたアサフの歌

一わたしは神にむかい声をあげて叫ぶ。

わたしが神にむかつて声をあげれば、

神はわたしに聞かれる。

二わたしは悩みの日に主をたずね求め、

夜はわが手を伸べてたゆむことなく、

わが魂は慰められるのを拒む。

三わたしは神を思うとき、嘆き悲しみ、

深く思うとき、わが魂は衰える。「セラ

四あなたはわたしのまぶたをささえて閉じさせず、

わたしは物言うこともできないほどに悩む。

五わたしは昔の日を思い、

いにしえの年を思う。

六わたしは夜、わが心と親しく語り、

深く思うてわが魂を探り、言う、

七「主はとこしえにわれらを捨てられるであろうか。

ふたたび、めぐみを施されないであろうか。

ハそのいつくしみはとこしえに絶え、

その約束は世々ながくすたれるであろうか。

九神は恵みを施すことを忘れ、怒りをもって

そのあわれみを閉じられたであろうか」と。「セラ

一〇その時わたしは言う、「わたしの悲しみは

いと高き者の右の手が変ったことである」と。

二わたしは主のみわぎを思い起す。

わたしは、いにしえからの

あなたのくすしきみわぎを思いいだす。

三わたしは、あなたのすべてのみわぎを思い、

第七八篇

アサフのマスキールの歌

あなたの力あるみわざを深く思う。

二三 神よ、あなたの道は聖である。

われらの神のように大いなる神はだれか。

二四 あなたは、くすしきみわざを行われる神である。

あなたは、もろもろの民の間に、その大能をあらわし、

一五 その腕をもつておのれの民をあがない、

ヤコブとヨセフの子らをあがなわれた。(セラ

一六 神よ、大水はあなたを見た。

大水はあなたを見ておのき、淵もまた震えた。

一七 雲は水を注ぎいだし、空は雷をとどろかし、

あなたの矢は四方にきらめいた。

一八 あなたの雷のとどろきは、つむじ風の中にあり、

あなたのいなずまは世を照し、地は震い動いた。

一九 あなたの大路は海の中にあり、

あなたの道は大水の中にあり、

あなたの足跡はたずねえなかった。

二〇 あなたは、その民をモーセとアロンの手によつて

羊の群れのように導かれた。

一 わが民よ、わが教を聞き、

わが口の言葉に耳を傾けよ。

二 わたしは口を開いて、たとえを語り、

いにしえからの、なぞを語ろう。

三 これはわれらがさきに聞いて知ったこと、

またわれらの先祖たちが

われらに語り伝えたことである。

四 われらはこれの子孫に隠さず、主の光榮あるみわざと、

その力と、主のなされたくすしきみわざとを

きたるべき代に告げるであらう。

五 主はあかしをヤコブのうちにたて、

おきてをイスラエルのうちに定めて、

その子孫に教うべきことを

われらの先祖たちに命じられた。

六 これは次の代に生れる子孫がこれを知り、

みずから起つて、そのまた子孫にこれを伝え、

七 彼らをして神に望みをおき、

神のみわざを忘れず、その戒めを守らせるためである。

八 またその先祖たちのようにかたくなで、

そむく者のやからとなり、その心が定まりなく、

その魂が神に忠実でないやからと

ならないためである。

九 エフライムの人々は武装し、弓を携えたが、戦いの日に引き返した。
 一〇 彼らは神の契約を守らず、そのおきてにしたがって歩むことを拒み、二 神がなされた事と、彼らに示されたくすしきみわざとを忘れた。
 三 神はエジプトの地と、ゾアンの野でくすしきみわざを彼らの先祖たちの前に行われた。
 四 神は海を分けて彼らを通らせ、水を立たせて山のようにされた。
 五 神は雲をもつて彼らを導き、夜は、よもすがら火の光をもつて彼らを導かれた。
 六 神は荒野で岩を裂き、淵から飲むように豊かに彼らに飲ませ、一六 また岩から流れを引いて、川のように水を流れさせられた。
 一七 ところが彼らはなお神にむかつて罪をかさね、荒野でいと高き者にそむき、一八 おのが欲のために食物を求めて、その心のうちに神を試みた。
 一九 また彼らは神に逆らって言った、「神は荒野に宴を設けることができるだろうか。」

二〇 見よ、神が岩を打たれると、水はほとばしりで、流れがあふれた。
 二一 神はまたパンを与えることができるだろうか。民のために肉を備えることができるだろうか」と。
 二二 それゆえ、主は聞いて憤られた。
 二三 火はヤコブにむかつて燃えあがり、怒りはイスラエルにむかつて立ちのぼった。
 二四 これは彼らが神を信ぜず、その救の力を信用しなかったからである。
 二五 しかし神は上なる大空に命じて天の戸を開き、二六 彼らの上にマナを降らせて食べさせ、天の穀物を彼らに与えられた。
 二七 人は天使のパンを食べた。
 二八 神は彼らに食物をおくつて飽き足らせられた。
 二九 神は天に東風を吹かせ、三〇 神は天に東風を導かれた。
 三一 神は彼らの上に肉をちりのように降らせ、翼ある鳥を海の砂のように降らせて、三八 その宿営のなか、そのすまいのまわりに落された。
 三九 こうして彼らは食べて、飽き足ることができた。
 四〇 神が彼らにその望んだものを与えられたからである。
 四一 ところが彼らがまだその欲を離れず、

食物しょくもつがなお口くちの中なかにあるうちに、
 三 神かみの怒いかりが彼らかれにむかつて立ちのぼり、
 彼らかれのうちの最も強い者ものを殺し、
 イスラエルのうちのえり抜きぬの者を打ち倒たおされた。
 三 すべてこれらの事ことがあつたにもかかわらず、
 彼らかれはなお罪つみを犯おかし、
 そのくすしきみわざを信じしんじなかつた。
 三 三 それゆえ神かみは彼らかれの日ひを息いきのように消えさせ、
 彼らかれの年としを恐れをもつて過すこさせられた。
 四 神かみが彼らかれを殺ころされたとき、彼らかれは神かみをたずね、
 悔くいて神かみを熱心ねっしんに求めた。
 三 五 こうして彼らかれは、神かみは彼らかれの岩いわ、いと高き神かみは
 彼らかれのあがないぬしであることを思い出だした。
 三 六 しかし彼らかれはその口くちをもつて神かみにへつらい、
 その舌したをもつて神かみに偽いつわりを言いつた。
 三 七 彼らかれの心こころは神かみにむかつて堅実けんじつでなく、
 神かみの契約けいやくに眞実しんじつでなかつた。
 三 八 しかし神かみはあわれみに富とまれるので、
 彼らかれの不義ふぎをゆるして滅ほろぼさず、
 しばしばその怒いかりをおさえて、
 その憤いきどおりをことごとくふり起おこされなかつた。
 三 九 また神かみは、彼らかれがただ肉にくであつて、

過すぎ去されば再びふたたび歸かえりこぬ風かぜであることを
 思い出だされた。
 四 〇 幾いくたび彼らかれは野ので神かみにそむき、
 荒野あらのかみで神かみを悲かなしませたことであらうか。
 四 一 彼らかれはかさねがさね神かみを試こころみ、
 イスラエルの聖者せいじやを怒いからせた。
 四 二 彼らかれは神かみの力ちからをも、
 神かみが彼らかれをあだからあがなわれた日ひをも
 思い出ださなかつた。
 四 三 神かみはエジプトでもろもろのしるしをおこない、
 ゾアンの野のでもろもろの奇跡きせきをおこない、
 四 四 彼らかれの川かわを血ちに変かわらせて、
 その流れを飲のむことができないようにされた。
 四 五 神かみははえの群むれを彼らかれのうちに送おくつて彼らかれを食くわせ、
 かえるを送おくつて彼らかれを滅ほろぼされた。
 四 六 また神かみは彼らかれの作物さくもつを青虫あおむしにわたし、
 彼らかれの勤勞きんろうの実みをいなごにわたされた。
 四 七 神かみはひようをもつて彼らかれのぶどうの木きを枯からし、
 霜しもをもつて彼らかれのいちじく桑くわの木きを枯からされた。
 四 八 神かみは彼らかれの家畜かちくをひようにわたし、
 彼らかれの群むれを燃もえるいはずまにわたされた。
 四 九 神かみは彼らかれの上に激げしい怒いかりと、憤いきどおりと、

恨みと、悩みと、滅ぼす天使の群れとを放たれた。

五〇 神はその怒りのために道を設け、
彼らの魂を死から免れさせず、

そのいのちを疫病にわたされた。

五一 神はエジプトですべてのういごを撃ち、

ハムの天幕で彼らの力の初めの子を撃たれた。

五二 こうして神はおのれの民を羊のように引き出し、

彼らを荒野で羊の群れのように導き、

五三 彼らを安らかに導かれたので

彼らは恐れることがなかった。

しかし海は彼らの敵をのみつくした。

五四 神は彼らをその聖地に伴い、

その右の手をもって獲たこの山に伴いこられた。

五五 神は彼らの前からもろもろの国民を追い出し、

その地を分けて嗣業とし、

イスラエルの諸族を彼らの天幕に住まわせられた。

五六 しかし彼らはいと高き神を試み、これにそむいて、

そのもろもろのあかしを守らず、

五七 そむき去って、先祖たちのように真実を失い、

狂った弓のようにねじれた。

五八 彼らは高き所を設けて神を怒らせ、

刻んだ像をもって神のねたみを起した。

五九 神は聞いて大いに怒り、

イスラエルを全くしりぞけられた。

六〇 神は人々のなかに設けた幕屋なる

シロのすまいを捨て、

六一 その力をとりことならせ、

その栄光をあだの手にわたされた。

六二 神はその民をつるぎにわたし、

その嗣業にむかつて大いなる怒りをもらされた。

六三 火は彼らの若者たちを焼きつくし、

彼らのおとめたちは婚姻の歌を失い、

六四 彼らの祭司たちはつるぎによって倒れ、

彼らのやもめたちは嘆き悲しむことさえしなかった。

六五 そのとき主は眠った者のさめたように、

勇士が酒によって叫ぶように目をさまして、

六六 そのあだを撃ち退け、

とこしえの恥を彼らに負わせられた。

六七 神はヨセフの天幕をしりぞけ、

エフライムの部族を選ばず、

六八 ユダの部族を選び、

神の愛するシオンの山を選ばれた。

六九 神はその聖所を高い天のように建て、

とこしえに基を定められた地のように建てられた。

七〇 神はそのしもべダビデを選んで、
 羊のおりから取り、
 七 乳を与える雌羊の番をするところからつれて来て、
 その民ヤコブ、その嗣業イスラエルの牧者とされた。
 七〇 こうして彼は直き心をもって彼らを牧し、
 巧みな手をもって彼らを導いた。

第七九篇

アサフの歌

一 神よ、もろもろの異邦人はあなたの嗣業の地を侵し、
 あなたの聖なる宮をけがし、
 エルサレムを荒塚としました。
 ニ 彼らはあなたのしもべのしかばねを
 空の鳥に与えてえさとし、
 あなたの聖徒の肉を地の獣に与え、
 ミ その血をエルサレムのまわりに水のように流し、
 これを葬る人がありませんでした。
 四 われらは隣り人にそしられ、
 まわりの人々に侮られ、あざけられる者となりました。
 五 主よ、いつまでなのですか。
 とこしえにお怒りになられるのですか。

あなたのねたみは火のように燃えるのですか。
 六 どうか、あなたを知らない異邦人と、
 あなたの名を呼ばない国々の上に
 あなたの怒りを注いでください。
 七 彼らはヤコブを滅ぼし、
 そのすみかを荒したからです。
 ハ われらの先祖たちの不義をみこころにとめられず、
 あわれみをもって、すみやかにわれらを
 迎えてください。

われらは、はなはだしく低くされたからです。
 九 われらの救の神よ、
 み名の栄光のためにわれらを助け、
 み名のためにわれらを救い、
 われらの罪をおゆるしくください。
 一〇 どうして異邦人は言うのでしょうか、
 「彼らの神はどこにいるのか」と。
 あなたのしもべらの流された血の報いを
 われらのまのあたりになして、
 異邦人に知らせてください。
 ニ 捕われ人の嘆きを
 あなたの目前にいたらせ、
 あなたの大きいなる力により、

死に定められた者を守りながらえさせてください。
 二主よ、われらの隣り人があなたをそしつたそしりを
 七倍にして彼らのふところに報い返してください。
 三そうすれば、あなたの民、あなたの牧の羊は、
 とこしえにあなたに感謝し、
 世々あなたをほめたたえるでしょう。

第八〇篇

聖歌隊の指揮者によってゆりの花のしらべにあわせてうたわせたアサフのあかの歌

一イスラエルの牧者よ、
 羊の群れのようにヨセフを導かれる者よ、
 耳を傾けてください。
 ケルビムの上に座せられる者よ、
 光を放ってください。
 ニエフライム、ベニヤミン、マナセの前に
 あなたの力を振り起し、
 来て、われらをお救いください。
 三神よ、われらをもとに返し、
 み顔の光を照してください。
 そうすればわれらは救をえるでしょう。

四万軍の神、主よ、
 いつまで、その民の祈にむかつて
 お怒りになるのですか。
 五あなたは涙のパンを彼らに食わせ、
 おおの涙を彼らに飲ませられました。
 六あなたはわれらを隣り人のあざけりとし、
 われらの敵はたがいにあざわらいました。
 七万軍の神よ、われらをもとに返し、
 われらの救われるため、み顔の光を照してください。
 ハあなたは、ぶどうの木をエジプトから携え出し、
 もろもろの国民を追い出して、これを植えられました。
 九あなたはこれがために地を開かれたので、
 深く根ざして、国にはびこりました。
 一〇山々はその影でおおわれ、
 神の香柏はその枝でおおわれました。
 ニこれはその枝を海にまでのべ、
 その若枝を大川にまでのべました。
 三あなたは何ゆえ、そのかきをくずして
 道ゆくすべての人にその実を
 摘み取らせられるのですか。
 四林のいのししはこれを荒し、
 野のすべての獣はこれを食べます。

第八一篇

聖歌隊の指揮者によってギテトのしらべにあわせてうたわせたアサフの歌

一四 万軍の神よ、再び天から見おろして、
このぶどうの木をかえりみてください。

一五 あなたの右の手の植えられた幹と、
みずからのために強くされた枝とを
かえりみてください。

一六 彼らは火をもつてこれを焼き、
これを切り倒しました。

彼らを見顔のとがめによつて滅ぼしてください。

一七 しかしあなたの手をその右の手の人の上におき、
みずからのために強くされた人の子の上
においてください。

一八 そうすれば、われらはあなたを
離れ退くことはありません。

われらを生かしてください。

われらはあなたのみ名を呼びます。

一九 万軍の神、主よ、われらをもとに返し、
み顔の光を照してください。

そうすればわれらは救をえるでしょう。

一 われらの力なる神にむかつて高らかに歌え。

ヤコブの神にむかつて喜びの声をあげよ。

二 歌をうたい、鼓を打て。

良い音の琴と立琴とをかきならせ。

三 新月と満月とわれらの祭の日とに

ラツパを吹きならせ。

四 これはイスラエルの定め、

ヤコブの神のおきてである。

五 神が出てエジプトの国を攻められたとき、

ヨセフのなかにこれを立てて、あかしとされた。

わたしはかしこでまだ知らなかった言葉を聞いた、

六 「わたしはあなたの肩から重荷をのぞき、

あなたの手をかごから免れさせた。

七 あなたが悩んだとき、呼ばわつたので

わたしはあなたを救った。

わたしは雷の隠れた所で、あなたに答え、

メリバの水のほとりで、あなたを試みた。(セラ

ハわが民よ、聞け、わたしはあなたに勧告する。

イスラエルよ、あなたがわたしに聞き従うことを望む。

九 あなたのうちに他の神があつてはならない。

あなたは外国の神を拝んではならない。

一〇 わたしはエジプトの国から、

第八二篇

アサフの歌

- 一 神は神の会議のなかに立たれる。
神は神々のなかで、さばきを行われる。
- 二 「あなたがたはいままで不正なさばきをなし、

あなたをつれ出したあなたの神、主である。
あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう。
二 しかしわが民はわたしの声に聞き従わず、
イスラエルはわたしを好まなかつた。
三 それゆえ、わたしは彼らを
そのかたくなな心にまかせ、
その思いのままにいくにまかせた。
三 わたしはわが民のわたしに聞き従い、
イスラエルのわが道に歩むことを欲する。
四 わたしはすみやかに彼らの敵を従え、
わが手を彼らのあだに向けよう。
五 主を憎む者も彼らに恐れ従い、
彼らの時はとこしえに続くであろう。
六 わたしは麦の最も良いものをもってあなたを養い、
岩から出た蜜をもってあなたを飽かせるであろう」。

第八三篇

アサフの歌、さんび

- 一 神よ、沈黙を守らないでください。
神よ、何も言わずに、黙っていないでください。
二 見よ、あなたの敵は騒ぎたち、
あなたを憎む者は頭をあげました。

悪しき者に好意を示すのか。「セラ
三 弱い者と、みなしごとを公平に扱い、
苦しむ者と乏しい者の権利を擁護せよ。
四 弱い者と貧しい者を救い、
彼らを悪しき者の手から助け出せ」。
五 彼らは知ることなく、悟ることもなくて、
暗き中をさまよう。
地のもろもろの基はゆり動いた。
六 わたしは言う、「あなたがたは神だ、
あなたがたは皆いと高き者の子だ。
七 しかし、あなたがたは人のように死に、
もろもろの君のひとりのように倒れるであろう」。
八 神よ、起きて、地をさばいてください。
すべての国民はあなたのものだからです。

三 彼らはあなたの民にむかつて
巧みなはかりごとをめぐらし、
あなたの保護される者にむかつて相ともに計ります。
四 彼らは言います、
「さあ、彼らを断ち滅ぼして国を立てさせず、
イスラエルの名を
ふたたび思い出させないようにしよう」。
五 彼らは心をひとつにして共にはかり、
あなたに逆らって契約を結びます。
六 すなわちエドムの天幕に住む者とイシマエルびと、
モアブとハガルびと、
セゲバルとアンモンとアマレク、
ペリシテとツロの住民などです。
七 ハアツスリヤもまた彼らにくみしました。
八 彼らはロトの子孫を助けました。「セラ
九 あなたがミデアンにされたように、
キシヨン川でセラとヤビンにされたように、
彼らにしてください。
一〇 彼らはエンドルで滅ぼされ、
地のために肥料となりました。
一一 彼らの貴人をオレブとゼエブのように、
そのすべての君たちを

ゼバとザルムンナのようにしてください。
一二 彼らは言いました、「われらは神の牧場を獲て、
われらの所有にしよう」と。
一三 わが神よ、彼らを巻きあげられるちりのように、
風の前のもみがらのようにしてください。
一四 林を焼く火のように、
山を燃やす炎のように、
一五 あなたのはやてをもつて彼らを追い、
つむじかぜをもつて彼らを恐れさせてください。
一六 彼らの顔に恥を満たしてください。
一七 主よ、そうすれば彼らはあなたの名を求めるでしょう。
一八 彼らをとこしえに恥じ恐れさせ、
あわて惑つて滅びうせさせてください。
一九 主という名をおもちになるあなたのみ、
全地をしろしめすいと高き者であることを
彼らに知らせてください。

第八四篇

聖歌隊の指揮者によつてギテトのしらべにあわせてうたわせたゴラの子の歌
一 万軍の主よ、
あなたのすまいはいかに麗しいことでしょう。

ニわが魂は絶えいるばかりに主の天庭を慕い、
わが心とわが身は生ける神にむかつて喜び歌います。
三すずめがすみかを得、
つばめがそのひなをいれる巢を得るように、
万軍の主、わが王、わが神よ、
あなたの祭壇のかたわらに
わがすまいを得させてください。
四あなたの家に住み、
常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。「セラ
五その力があなたにあり、
その心がシオンの大路にある人はさいわいです。
六彼らはバカの谷を通つても、
そこを泉のある所とします。
また前の雨は池をもつてそこをおおいます。
七彼らは力から力に進み、
シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。
八万軍の神、主よ、わが祈をおきください。
ヤコブの神よ、耳を傾けてください。「セラ
九神よ、われらの盾をみそなわし、
あなたの油そそがれた者の顔をかえりみてください。
一〇あなたの天庭にいる一日は、
よそにいる千日にもまさるのです。

第八五篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたコラの子の歌

わたしは悪の天幕にいるよりは、
むしろ、わが神の家の門守となることを願います。
二主なる神は日です、盾です。
主は恵みと誉とを与え、
直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。
三万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。
一主よ、あなたはみ国にめぐみを示し、
ヤコブの繁栄を回復されました。
二あなたはその民の不義をゆるし、
彼らの罪をことごとくおわれしました。「セラ
三あなたはすべての怒りを捨て、
激しい憤りを遠ざけられました。
四われらの救の神よ、われらを回復し、
われらに対するあなたの憤りをおやめください。
五あなたはとこしえにわれらを怒り、
よろずよまで、あなたの怒りを延ばされるのですか。
六あなたの民が、あなたによつて喜びを得るため、
われらを再び生かされないのですか。

第八六篇

ダビデの祈

主よ、あなたのいつくしみをわれらに示し、
 あなたの救をわれらに与えてください。
 ハわたしは主なる神の語られることを聞きましょう。
 主はその民、その聖徒、
 ならびにその心を主に向ける者に、
 平和を語られるからです。
 かまことに、その救は神を恐れる者に近く、
 その栄光はわれらの国にとどまるでしょう。
 一〇 いつくしみと、まこととは共に会い、
 義と平和とは互に口づけし、
 二 まことは地からはえ、
 義は天から見おろすでしょう。
 三 主が良い物を与えられるので、
 われらの国はその産物を出し、
 四 義は主のみ前に行き、
 その足跡を道とするでしょう。

一 主よ、あなたの耳を傾けて、わたしにお答えください。
 わたしは苦しみかつ乏しいからです。

二 わたしのいのちをお守りください。
 わたしは神を敬う者だからです。
 あなたに信頼するあなたのしもべをお救いください。
 あなたはわたしの神です。
 三 主よ、わたしをあわれんでください。
 わたしはひねもすあなたに呼ばわれます。
 四 あなたのもべの魂を喜ばせてください。
 主よ、わが魂はあなたを仰ぎ望みます。
 五 主よ、あなたは恵みふかく、寛容であつて、
 あなたに呼ばれるすべての者に
 いつくしみを豊かに施されます。
 六 主よ、わたしの祈に耳を傾け、
 わたしの願いの声をお聞きください。
 セ わたしの悩みの日にわたしはあなたに呼ばわれます。
 あなたはわたしに答えられるからです。
 ハ 主よ、もろもろの神のうちにあなたに等しい者はなく、
 また、あなたのみわざに等しいものはありません。
 ニ 主よ、あなたが造られたすべての国民は
 あなたの前に来て、伏し拝み、
 み名をあがめるでしょう。
 一〇 あなたは大いなる神で、くすしきみわざをなされます。
 ただあなたのみ、神でいらせられます。

二主よ、あなたの道をわたしに教えてください。
わたしはあなたの真理に歩みます。

心をひとつにしてみ名を恐れさせてください。

三わが神、主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、
とこしえに、み名をあがめるでしょう。

三わたしに示されたあなたのいつくしみは大きく、
わが魂を陰府の深い所から助け出されたからです。

四神よ、高ぶる者はわたしに逆らって起り、
荒ぶる者の群れはわたしのいのちを求め、

彼らは自分の前にあなたを置くことをしません。

五しかし主よ、あなたはあわれみと恵みに富み、
怒りをおそくし、いつくしみと、まことに

豊かな神でいらされます。

一六わたしをかえりみ、わたしをあわれみ、
あなたのしもべにみ力を与え、

あなたのはしための子をお救いください。

一七わたしに、あなたの恵みのしるしを

あらわしてください。

そうすれば、わたしを憎む者どもは

わたしを見て恥じるでしょう。

主よ、あなたはわたしを助け、

わたしを慰められたからです。

第八七篇

コラの子の歌、さんび

一主が基をすえられた都は聖なる山の上に立つ。

二主はヤコブのすべてのすまいにまさつて、
シオンのもろもろの門を愛される。

三神の都よ、あなたについて、
もろもろの栄光ある事が語られる。「セラ

四わたしはラハブとバビロンを
わたしを知る者のうちに挙げる。

ペリシテ、ツロ、またエチオピアを見よ。

「この者はかしこに生れた」と言われる。

五しかしシオンについては

「この者も、かの者もその中に生れた」と言われる。

いと高き者みずからシオンを

堅く立てられるからである。

六主がもろもろの民を登録されるとき、

「この者はかしこに生れた」としるされる。「セラ

七歌う者と踊る者はみな言う、

「わがもろもろの泉はあなたのうちにある」と。

第八八篇

聖歌隊の指揮者によつてマハラテ・レアノテのしらべにあわせてうたわせたコ
ラの子の歌、さんび。エズラびとヘマンのマスギールの歌

一 わが神、主よ、わたしは昼、助けを呼び求め、
夜、み前に呼び求めます。

二 わたしの祈をみ前にいたらせ、

わたしの叫びに耳を傾けてください。

三 わたしの魂は悩みに満ち、

わたしのいのちは陰府に近づきます。

四 わたしは穴に下る者のうちに数えられ、

力のない人のようにになりました。

五 すなわち死人のうちに捨てられた者のように、

墓に横たわる殺された者のように、

あなたが再び心にとめられない者のようにな
りました。

六 彼らはあなたのみ手から断ち滅ぼされた者です。

七 あなたはわたしを深い穴、

暗い所、深い淵に置かれました。

八 あなたの怒りはわたしの上に重く、

あなたはもろもろの波をもつて

わたしを苦しめられました。「セラ

ハ あなたはわが知り人をわたしから遠ざけ、
わたしを彼らの忌みきらう者とされました。

わたしは閉じこめられて、のがれることはできません。

九 わたしの目は悲しみによつて衰えました。

主よ、わたしは日ごとにあなたを呼び、

あなたにむかつてわが両手を伸ばしました。

一〇 あなたは死んだ者のために

奇跡を行われるでしょうか。

なき人のたましいは起きあがつて

あなたをほめたたえるでしょうか。「セラ

二 あなたのいつくしみは墓のなかに、

あなたのまことは滅びのなかに、

宣べ伝えられるでしょうか。

三 あなたの奇跡は暗やみに、

あなたの義は忘れの国に知られるでしょうか。

四 しかし主よ、わたしはあなたに呼びわります。

あしたに、わが祈をあなたのみ前にささげます。

五 主よ、なぜ、あなたはわたしを捨てられるのですか。

なぜ、わたしにみ顔を隠されるのですか。

六 わたしは若い時から苦しんで死ぬばかりです。

あなたの脅しにあつて衰えはてました。

七 あなたは激しい怒りがわたしを襲い、

第八九篇

エズラびとエタンのマスキールの歌

あなたの恐ろしい脅しがわたしを滅ぼしました。
 一七これらの事がひねもす大水のようにわたしをめぐり、
 わたしを全く取り巻きました。
 一八あなたは愛する者と友とをわたしから遠ざけ、
 わたしの知り人を暗やみにおかれました。

一主よ、わたしはとこしえにあなたのいつくしみを歌い、
 わたしの口をもつてあなたのまことを
 よろずよに告げ知らせます。

二あなたのいつくしみはとこしえに堅く立ち、
 あなたのまことは天のように
 ゆるぐことはありません。

三あなたは言われました、
 「わたしはわたしの選んだ者と契約を結び、
 わたしのしもべダビデに誓った、

四『わたしはあなたの子孫をとこしえに堅くし、
 あなたの王座を建てて、よろずよに至らせる』。(セラ
 五主よ、もろもろの天に
 あなたのくすしきみわざをほめたたえさせ、

聖なる者のついで、

あなたのまことをほめたたえさせてください。

六大空のうちに、

だれか主と並ぶものがあるでしょうか。

神の子らのうちに、

だれか主のような者があるでしょうか。

七主は聖なる者の会議において恐るべき神、

そのまわりにあるすべての者にまさつて

大いなる恐るべき者です。

八万軍の神、主よ、

主よ、だれかあなたのように

大能のある者があるでしょうか。

あなたのまことは、あなたをめぐっています。

九あなたは海の荒れるのを治め、

その波の起るとき、これを静められます。

一〇あなたはラハブを、殺された者のように打ち砕き、

あなたの敵を力ある腕をもつて散らされました。

二もろもろの天はあなたのものの、

地もまたあなたのものの、

世界とそこにあるものとは

あなたがその基をおかれたものです。

二三北と南はあなたがこれを造られました。

タボルとヘルモンは、なみ名を喜び歌います。

二三 あなたは^{たいのう}大能の腕をもたれます。

あなたの手は強く、あなたの右の手は高く、

二四 義と公平はあなたのみくらの基、

いつくしみと、まことはあなたの前に行きます。

二五 祭の日の喜びのこえ声を知る民はさいわいです。

主よ、彼らはみ顔の光のなかを歩み、

二六 ひねもす、み名によつて喜び、

あなたの義をほめたたえます。

二七 あなたは彼らの力の栄光だからです。

われらの角はあなたの恵みによつて

高くあげられるでしょう。

二八 われらの盾は主に属し、

われらの王はイスラエルの聖者に属します。

二九 昔あなたは幻をもつてあなたの聖徒に告げて

言われました、

「わたしは勇士に栄冠を授け、

民の中から選ばれた者を高くあげた。

三〇 わたしはわがしもバビデを得て、

これにわが聖なる油をそそいだ。

三一 わが手は常に彼と共にあり、

わが腕はまた彼を強くする。

三 敵は彼をだますことなく、

悪しき者は彼を卑しめることはない。

三三 わたしは彼の前にもろもろのあだを打ち滅ぼし、

彼を憎む者どもを打ち倒す。

三四 わがまことと、わがいつくしみは彼と共にあり、

わが名によつて彼の角は高くあげられる。

三五 わたしは彼の手を海の上におき、

彼の右の手を川の上におく。

三六 彼はわたしにむかい『あなたはわが父、

わが神、わが救の岩』と呼ぶであらう。

三七 わたしはまた彼をわがういごとし、

地の王たちのうちの最も高い者とする。

三八 わたしはとこしえに、

わがいつくしみを彼のために保ち、

わが契約は彼のために堅く立つ。

三九 わたしは彼の家系をとこしえに堅く定め、

その位を天の日数のようにながらえさせる。

四〇 もしその子孫がわがおきてを捨て、

わがさばきに従つて歩まないならば、

四一 もし彼らがわが定めを犯し、

わが戒めを守らないならば、

四二 わたしはつえをもつて彼らのとがを罰し、

むちをもつて彼らの不義を罰する。

三三 しかし、わたしはわがいつくしみを
彼から取り去ることなく、

わがまことにそむくことはない。

三四 わたしはわが契約を破ることなく、
わがくちびるから出た言葉を変えることはない。

三五 わたしはひとたびわが聖によつて誓つた。

わたしはダビデに偽りを言わない。

三六 彼の家系はどこしえに続き、

彼の位は太陽のように常にわたしの前にある。

三七 また月のようにどこしえに堅く定められ、

大空の続くかぎり堅く立つ」。(セラ

三八 しかしあなたは、あなたの油そそがれた者を

捨ててしりぞけ、

彼に対して激しく怒られました。

三九 あなたはそのしもべとの契約を廃棄し、

彼の冠を地になげうつて、けがされました。

四〇 あなたはその城壁をことごとくこわし、

そのとりでを荒れすたれさせられました。

四一 そこを通り過ぎる者は皆彼をかすめ、

彼はその隣り人のあざけりとなりました。

四二 あなたは彼のあだの右の手を高くあげ、

そのもろもろの敵を喜ばせられました。

四三 まことに、あなたは彼のつるぎの刃をかえして、
彼を戦いに立たせられなかつたのです。

四四 あなたは彼の手から王のつえを取り去り、

その王座を地に投げすてられました。

四五 あなたは彼の若き日をちぢめ、

恥をもつて彼をおおわれました。(セラ

四六 主よ、いつまでなのですか。

どこしえにお隠れになるのですか。

あなたの怒りはいつまで火のように燃えるのですか。

四七 主よ、人のいのちの、いかに短く、

すべての人の子を、いかにはなく造られたかを、

みこころにとめてください。

四八 だれか生きて死を見ず、

その魂を陰府の力から

救いうるものがあるでしょうか。(セラ

四九 主よ、あなたがまことをもつてダビデに誓われた

昔のいつくしみはどこにありますか。

五〇 主よ、あなたのしもべがうけるはずかしめを

みこころにとめてください。

主よ、あなたのもろもろの敵はわたしをそしり、

あなたの油そそがれた者の足跡をそしります。

わたしはもろもろの民のそしりを
わたしのふところにいだいているのです。
五三主はとこしえにほむべきかな。
アアメン、アアメン。

第九〇篇

神の人モーセの祈

一主よ、あなたは世々われらのすみかで
いらせられる。

二山がまだ生れず、
あなたがまだ地と世界とを造られなかつたとき、
とこしえからとこしえまで、
あなたは神でいらせられる。

三あなたは人をちに帰らせて言われます、
「人の子よ、帰れ」と。

四あなたの目の前には千年も
過ぎ去ればきのうのごとく、
夜の間のひと時のようです。

五あなたは人を大水のように流れ去らせられます。
彼らはひと夜の夢のごとく、
あしたにもえでる青草のようです。

六あしたにもえでて、栄えるが、
夕べには、しおれて枯れるのです。

七われらはあなたの怒りによつて消えうせ、
あなたの憤りによつて滅び去るのです。

八あなたはわれらの不義をみ前におき、
われらの隠れた罪をみ顔の光のなかにおかれました。
九われらのすべての日は、

あなたの怒りによつて過ぎ去り、
われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。

一〇われらのよわいは七十年にすぎません。
あるいは健やかであつても八十年でしょう。

しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであつて、
その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。

二だれがあなたの怒りの力を知るでしょうか。
だれがあなたをおそれる恐れにしたがつて
あなたの憤りを知るでしょうか。

三われらにおのが日を数えることを教えて、
知恵の心を得させてください。

四主よ、み心を変えてください。
いつまでお怒りになるのですか。

五あなたのしもべをあわれんでください。
一四あしたに、あなたのいつくしきをもつて

第九一篇

われらを飽き足らせ、

世を終るまで喜び樂しませてください。

二五あなたがわれらを苦しめられた多くの日と、

われらが災にあつた多くの年とに比べて、

われらを樂しませてください。

一六あなたのみわざを、あなたのしもべらに、

あなたの栄光を、その子らにあらわしてください。

一七われらの神、主の恵みを、われらの上にくだし、

われらの手のわざを、われらの上に

榮えさせてください。

われらの手のわざを榮えさせてください。

一八いと高き者のもとにある

隠れ場に住む人、全能者の陰にやどる人は

二主に言うであろう、「わが避け所、わが城、

わが信頼しまつるわが神」と。

二三主はあなたをかりゆうどのわなど、

恐ろしい疫病から助け出されるからである。

四主はその羽をもつて、あなたをおおわれる。

あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。

そのまことは大盾、また小盾である。

五あなたは夜の恐ろしい物をも、

昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。

六また暗やみに歩きまわる疫病をも、

真昼に荒す滅びをも恐れることはない。

七たとい千人はあなたのかたわらに倒れ、

万人はあなたの右に倒れても、

その災はあなたに近づくことはない。

八あなたはただ、その目をもつて見、

悪しき者の報いを見るだけである。

九あなたは主を避け所とし、

いと高き者をすまいとしたので、

一〇災はあなたに臨まず、

悩みはあなたの天幕に近づくことはない。

一一これは主があなたのために天使たちに命じて、

あなたの歩むすべての道で

あなたを守らせられるからである。

一二彼らはその手で、あなたをささえ、

石に足を打ちつけることのないようにする。

一三あなたはししと、まむしとを踏み、

若いししと、へびとを足の下に踏みこむであろう。

一四彼はわたしを愛して離れないゆえに、

第九二篇

わたしは彼を助けよう。
 彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る。
 二五 彼がわたしを呼ぶとき、わたしは彼に答える。
 わたしは彼の悩みのときに、共にいて、
 彼を救い、彼に光栄を与えよう。
 一六 わたしは長寿をもつて彼を満ち足らせ、
 わが救を彼に示すであらう。

安息日の歌、さんび

一 いと高き者よ、主に感謝し、
 み名をほめたたえるのは、よいことです。
 二 あしたに、あなたのいつくしみをあらわし、
 夜な夜な、あなたのまことをあらわすために、
 三十弦の楽器と立琴を用い、
 琴のたえなる調べを用いるのは、よいことです。
 四 主よ、あなたはみわざをもつて
 わたしを樂しませられました。
 わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。
 五 主よ、あなたのみわざは
 いかに大いなることでしょう。

あなたのもろもろの思いは、いとも深く、
 六 鈍い者は知ることができず、
 愚かな者はこれを悟ることができません。
 セタとい、悪しき者は草のようにもえいで、
 不義を行う者はことごとく榮えても、
 かれ彼らはとこしえに滅びに定められているのです。
 ハしかし、主よ、あなたはとこしえに
 高き所にいらせられます。
 九 主よ、あなたの敵、あなたの敵は滅び、
 不義を行う者はことごとく散らされるでしょう。
 一〇 しかし、あなたはわたしの角を
 野牛の角のように高くあげ、
 新しい油をわたしに注がれました。
 二 わたしの目はわが敵の没落を見、
 わたしの耳はわたしを攻める悪者どもの
 破滅を聞きました。
 三 正しい者はなつめやしの木のように榮え、
 レバノンの香柏のように育ちます。
 三三 彼らは主の家に植えられ、
 われらの神の大庭に榮えます。
 三四 彼らは年老いてなお実を結び、
 いつも生氣に満ち、青々として、

一五 主の正しいことを示すでしょう。
主はわが岩です。
主には少しの不義もありません。

第九三篇

一 主は王となり、
威光の衣をまとわれます。
主は衣をまとい、力をもつて帯とされます。
まことに、世界は堅く立つて、
動かされることはありません。
二 あなたの位はいにしえより堅く立ち、
あなたはとこしえよりいらせられます。
三 主よ、大水は声をあげました。
大水はその声をあげました。
大水はそのとどろく声をあげます。
四 主は高き所にいらせられて、
その勢いは多くの水のとどろきにまさり、
海の大波にまさって盛んです。
五 あなたのあかしはいとも確かです。
主よ、聖なることはとこしえまでも
あなたの家にふさわしいのです。

第九四篇

一 あだを報いられる神、主よ、
あだを報いられる神よ、光を放ってください。
二 地をさばかれる者よ、
立つて高ぶる者にその受くべき罰をお与えください。
三 主よ、悪しき者はいつまで、
悪しき者はいつまで勝ち誇るでしょうか。
四 彼らは高慢な言葉を吐き散らし、
すべて不義を行う者はみずから高ぶります。
五 主よ、彼らはあなたの民を打ち碎き、
あなたの嗣業を苦しめます。
六 彼らはやもめと旅びとのいのちをうばい、
みなしごを殺します。
七 彼らは言います、「主は見えない、
ヤコブの神は悟らない」と。
八 民のうちの鈍き者よ、悟れ。
愚かな者よ、いつ賢くなるだろうか。
九 耳を植えた者は聞くことをしないだろうか、
目を造った者は見ることをしないだろうか。
一〇 もろもろの国民を懲らす者は
罰することをしないだろうか、

人を教える者は知識をもたないだろうか。

二主は人の思いの、むなしいことを知られる。

三主よ、あなたによって懲らされる人、

あなたのおきてを教えられる人はさいわいです。

三あなたはその人を災の日からのがれさせ、

悪しき者のために穴が掘られるまで

その人に平安を与えられます。

四主はその民を捨てず、

その嗣業を見捨てられないからです。

五さばきは正義に帰り、

すべて心の正しい者はそれに従うでしょう。

六だれがわたしのために立ちあがって、

悪しき者を責めるだろうか。

だれがわたしのために立つて、

不義を行う者を責めるだろうか。

七もしも主がわたしを助けられなかったならば、

わが魂はとくに音なき所に住んだであろう。

八しかし「わたしの足がすべる」と思ったとき、

主よ、あなたのいつくしみは

わたしをささえられました。

九わたしのうちに思い煩いの満ちるとき、

あなたの慰めはわが魂を喜ばせます。

第九五篇

一〇定めをもつて危害をたくらむ悪しき支配者は

あなたと親しむことができるでしょうか。

三彼らは相結んで正しい人の魂を責め、

罪のない者に死を宣告します。

三しかし主はわが高きやぐらとなり、

わが神はわが避け所の岩となりました。

三主は彼らの不義を彼らに報い、

彼らをその悪のゆえに滅ぼされます。

われらの神、主は彼らを滅ぼされます。

一さあ、われらは主にむかつて歌い、

われらの救の岩にむかつて喜ばしい声をあげよう。

二われらは感謝をもつて、み前に行き、

主にむかい、さんびの歌をもつて、

喜ばしい声をあげよう。

三主は大いなる神、

すべての神にまさって大いなる王だからである。

四地の深い所は主のみ手にあり、

山々の頂もまた主のものである。

五海は主のもの、主はこれを造られた。

第九六篇

一 新しい歌を主にむかつてうたえ。

またそのみ手はかわいた地を造られた。
 六さあ、われらは拝み、ひれ伏し、
 われらの造り主、主のみ前にひざまずこう。
 七主はわれらの神であり、
 われらはその牧の民、そのみ手の羊である。
 どうか、あなたがたは、
 きよう、そのみ声を聞くように。
 ハあなたがたは、メリバにいた時のように、
 また荒野のマツサにいた日のように、
 心をかたくなにしてはならない。
 九あの時、あなたがたの先祖たちは
 わたしのわざを見たにもかかわらず、
 わたしを試み、わたしをためした。
 一〇わたしは四十年の間、その代をきらって言った、
 「彼らは心の誤っている民であつて、
 わたしの道を知らない」と。
 二それゆえ、わたしは憤つて、
 彼らはわが安息に入ることができないと誓つた。

全地よ、主にむかつてうたえ。
 二主にむかつて歌い、そのみ名をほめよ。
 日ごとにその救を宣べ伝えよ。
 三もろもろの国の中にその栄光をあらわし、
 もろもろの民の中にそのくすしきみわざをあらわせ。
 四主は大なる神であつて、いともほめたたうべきもの、
 もろもろの神にまさつて恐るべき者である。
 五もろもろの民のすべての神はむなしい。
 しかし主はもろもろの天を造られた。
 六誉と、威厳とはそのみ前にあり、
 力と、うるわしきとはその聖所にある。
 七もろもろの民のやからよ、主に帰せよ、
 栄光と力とを主に帰せよ。
 ハそのみ名にふさわしい栄光を主に帰せよ。
 九聖なる装いをして主を拝め、
 全地よ、そのみ前におののけ。
 一〇もろもろの国民の中に言え、
 「主は王となられた。
 世界は堅く立つて、動かされることはない。
 主は公平をもつてもろもろの民をさばかれる」と。
 二天は喜び、地は楽しみ、

海とその中に満ちるものとは鳴りどよめき、
 二 田畑とその中のすべての物は大地に喜べ。
 そのとき、林のもろもろの木も
 主のみ前に喜び歌うであらう。
 三 主は来られる、地をさばくために来られる。
 主は義をもつて世界をさばき、
 まことをもつてもろもろの民をさばかれる。

第九七篇

一 主は王となられた。地は楽しみ、
 海に沿った多くの国々は喜べ。
 二 雲と暗やみとはそのまわりにあり、
 義と正とはそのみくらの基である。
 三 火はそのみ前に行き、
 そのまわりのあだを焼きつくす。
 四 主のいなずまは世界を照し、
 地は見ておののく。
 五 もろもろの山は主のみ前に、
 全地の主のみ前に、ろうのように溶けた。
 六 もろもろの天はその義をあらわし、
 よろずの民はその栄光を見た。

七 すべて刻んだ像を拜む者、
 むなしい偶像をもつてみずから誇る者は
 はずかしめをうける。
 もろもろの神は主のみ前にひれ伏す。

ハ 主よ、あなたのさばきのゆえに、
 シオンは聞いて喜び、ユダの娘たちは楽しむ。
 九 主よ、あなたは全地上にいまして、いと高く、
 もろもろの神にまさって大いにあがめられます。
 一〇 主は悪を憎む者を愛し、その聖徒のいのちを守り、
 これを悪しき者の手から助け出される。
 二 光は正しい人のために現れ、
 喜びは心の正しい者のためにあらわれる。
 三 正しき人よ、主によって喜べ、
 その聖なるみ名に感謝せよ。

第九八篇

歌

一 新しき歌を主にむかつてうたえ。
 主はくすしきみわぎをなされたからである。
 その右の手と聖なる腕とは、
 おのれのために勝利を得られた。

第九九篇

一 主は王となられた。

ニ主はその勝利を知らせ、
 その義をもろもろの国民の前にあらわされた。
 ミ主はそのいつくしみと、まことを
 イスラエル家にむかつて覚えられた。
 地のもろもろのはては、われらの神の勝利を見た。
 四 全地よ、主にむかつて喜ばしき声をあげよ。
 声を放って喜び歌え、ほめうたえ。
 五 琴をもつて主をほめうたえ。
 琴と歌の声をもつてほめうたえ。
 六 ラツパと角笛の音をもつて
 王なる主の前に喜ばしき声をあげよ。
 七 海とその中に満ちるもの、
 世界とそのうちに住む者とは鳴りどよめけ。
 八 大水はその手を打ち、
 もろもろの山は共に主のみに喜び歌え。
 九 主は地をさばくために来られるからである。
 主は義をもつて世界をさばき、
 公平をもつてもろもろの民をさばかれる。

もろもろの民はおののけ。
 主はケルビムの上に座せられる。
 地は震えよ。
 ニ主はシオンにおられて大いなる神、
 主はもろもろの民の上に高くいらせられる。
 ミ彼らはあなたの大いなる恐るべき名を
 ほめたたえるであろう。
 主は聖でいらせられる。
 四 大能の王であり、公義を愛する者であるあなたは
 堅く公平を立て、ヤコブの中に正と義とを行われた。
 五 われらの神、主をあがめ、
 その足台のもとで拝みまつれ。
 主は聖でいらせられる。
 六 その祭司の中にモーセとアロンとがあつた。
 そのみ名を呼ぶ者の中にサムエルもあつた。
 彼らが主に呼ばわると、主は答えられた。
 七 主は雲の柱のうちで彼らに語られた。
 彼らはそのあかしと、
 彼らに賜わった定めとを守った。
 八 われらの神、主よ、あなたは彼らに答えられた。
 あなたは彼らにゆるしを与えられた神であつたが、
 悪を行う者には報復された。

九 われらの神、主をあがめ、その聖なる山で拝みまつれ。
われらの神、主は聖でいらせられるからである。

第二〇〇篇

感謝の供え物のための歌

一 全地よ、主にむかつて喜ばしき声をあげよ。
二 喜びをもつて主に仕えよ。

歌いつつ、そのみ前にきたれ。

三 主こそ神であることを知れ。

われらを造られたものは主であつて、

われらは主のものである。

われらはその民、その牧の羊である。

四 感謝しつつ、その門に入り、

ほめたたえつつ、その大庭に入れ。

主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。

五 主は恵みふかく、そのいつくしみはかぎりなく、

そのまことはよろず代に及ぶからである。

第二〇一篇

ダビデの歌

一 わたしはいつくしみと公義について歌います。

主よ、わたしはあなたにむかつて歌います。

二 わたしは全き道に心をとめます。

あなたはいつ、わたしに来られるでしょうか。

わたしは直き心をもつて、わが家のうちを歩みます。

三 わたしは目の前に卑しい事を置きます。

わたしはそむく者の行いを憎みます。

それはわたしに付きまといません。

四 ひがんだ心はわたしを離れるでしょう。

わたしは悪い事を知りません。

五 ひそかに、その隣り人をそしる者を

わたしは滅ぼします。

高ぶる目と高慢な心の人を耐え忍ぶ事はできません。

六 わたしは国のうちの忠信な者に好意を寄せ、

わたしと共に住ませます。

全き道を歩む者はわたしに仕えるでしょう。

七 欺くことをする者は

わが家のうちに住むことができません。

偽りを言う者はわが目の前に立つことができません。

八 わたしは朝ごとに国の悪しき者を

ことごとく滅ぼし、

不義を行う者をことごとく主の都から断ち除きます。

第一〇二篇

苦しむ者が思いくずおれてその嘆きを主の面前に注ぎ出すときの祈

一主よ、わたしの祈をお聞きください。

わたしの叫びをみ前に至らせてください。

二わたしの悩みの日にみ顔を隠すことなく、

あなたの耳をわたしに傾け、

わが呼ばれる日に、すみやかにお答えください。

三わたしの日は煙のように消え、

わたしの骨は灰のように燃えるからです。

四わたしの心は草のように撃たれて、しおれました。

わたしはパンを食べることを忘れしました。

五わが嘆きの声によつて

わたしの骨はわたしの肉に着きます。

六わたしは荒野のはげたかのごとく、

荒れた跡のふくろうのようです。

七わたしは眠らずに

屋根にひとりいるすずめのようにです。

八わたしの敵はひねもす、わたしをそしり、

わたしをあざける者はわが名によつてのろいます。

九わたしは灰をパンのように食べ、

わたしの飲み物に涙を交えました。

一〇これはあなたの憤りと怒りのゆえです。

あなたはわたしをもたげて投げすてられました。

二わたしのよわいは夕暮の日影のようです。

わたしは草のようにしおれました。

三しかし主よ、あなたはどこしえにみくらに座し、

そのみ名はよるず代に及びます。

四あなたは立つてシオンをあわれまれるでしょう。

これはシオンを恵まれる時であり、

定まった時が来たからです。

五あなたのしもべはシオンの石をも喜び、

そのちりをさえあわれむのです。

六もうもろの国民は主のみ名を恐れ、

地のもろもろの王はあなたの栄光を恐れるでしょう。

七主はシオンを築き、

その栄光をもつて現れ、

七乏しい者の祈をかえりみ、

彼らの願いをかしめられないからです。

八ききたるべき代のために、この事を書きしるしましょう。

そうすれば新しく造られる民は、

主をほめたたえるでしょう。

九主はその聖なる高き所から見おろし、

天から地を見られた。

三〇これは捕われ人の嘆きを聞き、
死に定められた者を解き放ち、

三人々がシオンで主のみ名をあらわし、
エルサレムでその誉をあらわすためです。

三その時もろもろの民、もろもろの国は
ともに集まって、主に仕えるでしょう。

三三主はわたしの力を中途でくじき、
わたしのよわいを短くされました。

三四わたしは言いました、「わが神よ、
どうか、わたしのよわいの半ばで

わたしを取り去らないでください。
あなたのよわいはよろず代に及びます」と。

三五あなたはいにしえ、地の基をすえられました。
天もまたあなたのみ手のわざです。

三六これらは滅びるでしょう。
しかしあなたは長らえられます。

これらはみな衣のように古びるでしょう。
あなたがこれらを上着のように替えられると、

これらは過ぎ去ります。
ニモしかしあなたは変ることなく、

あなたのよわいは終ることがありません。
二八あなたのしもべの子らは安らかに住み、

その子孫はあなたの前に堅く立てられるでしょう。

第一〇三篇

ダビデの歌

一わがたましいよ、主をほめよ。

わがうちなるすべてのものよ、
その聖なるみ名をほめよ。

二わがたましいよ、主をほめよ。
そのすべてのめぐみを心にとめよ。

三主はあなたのすべての不義をゆるし、
あなたのすべての病をいやし、

四あなたのいのちを墓からあがないだし、
いつくしみと、あわれみとをあなたにこうむらせ、

五あなたの生きながらえるかぎり、
良き物をもってあなたを飽き足らせられる。

こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる。
六主はすべてしえたげられる者のために

正義と公正とを行われる。
七主はおのれの道をモーセに知らせ、

おのれのしわざをイスラエルの人々に知らせられた。
八主はあわれみに富み、めぐみふかく、

怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。
 九主は常に責めることをせず、
 また、とこしえに怒りをいだかれない。
 一〇主はわれらの罪にしたがつてわれらをあしらわず、
 われらの不義にしたがつて報いられない。
 二天が地よりも高いように、
 主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、
 二三東が西から遠いように、
 主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。
 二三父がその子供をあわれむように、
 主はおのれを恐れる者をあわれまれる。
 一四主はわれらの造られたさまを知り、
 われらのちりであることを
 覚えていられるからである。
 一五人は、そのよわいは草のごとく、
 その栄えは野の花にひとしい。
 一六風がその上を過ぎると、うせて跡なく、
 その場所にきいても、もはやそれ知らない。
 一七しかし主のいつくしみは、とこしえからとこしえまで、
 主を恐れる者の上にあり、その義は子らの子に及び、
 一八その契約を守り、
 その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ。

第一〇四篇

一主はその玉座を天に堅くすえられ、
 そのまつりごとはすべての物を統べ治める。
 二〇主の使たちよ、
 そのみ言葉の声を聞いて、これを行ふ勇士たちよ、
 主をほめまつれ。
 二二そのすべての万軍よ、
 そのみこころを行ふしもべたちよ、主をほめよ。
 二三主が造られたすべての物よ、
 そのまつりごとの下にあるすべての所で、
 主をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。
 一わがたましいよ、主をほめよ。
 わが神、主よ、あなたはいとも大いにして
 誉と威厳とを着、
 二光を衣のようにまとい、天を幕のように張り、
 三水の上におのが高殿のうつばりをおき、
 雲をおのれのいくさ車とし、風の翼に乗りあるき、
 四風をおのれの使者とし、
 火と炎をおのれのしもべとされる。
 五あなたは地をその基の上にすえて、

とこしえに動くことのないようにされた。

六 あなたはこれを衣でおおうように大水でおおわれた。
水はたたえて山々の上を越えた。

七 あなたのとがめによって水は退き、
あなたの雷の声によって水は逃げ去った。

八 山は立ちあがり、
谷はあなたが定められた所に沈んだ。

九 あなたは水に境を定めて、これを越えさせず、
再び地をおおうことのないようにされた。

一〇 あなたは泉を谷にわき出させ、
それを山々の間に流れさせ、

二 野のもろもろの獣に飲ませられる。
野のろばもそのかわきをいやす。

三 空の鳥もそのほとりに住み、
こずえの間にさえずり歌う。

四 あなたはその高殿からもろもろの山に水を注がれる。
地はあなたのみわぎの実をもって満たされる。

五 あなたは家畜のために草をはえさせ、
また人のためにその栽培する植物を与えて、

六 地から食物を出させられる。
七 五すなわち人の心を喜ばすぶどう酒、

その顔をつややかにする油、

人の心を強くするパンなどである。

一六 主の木と、主がお植えになったレバノンの香柏とは
豊かに潤され、

一七 鳥はその中に巣をつくり、
こうのとりはもみの木をそのすまいとする。

一八 高き山はやぎのすまい、
岩は岩だぬきの隠れる所である。

一九 あなたは月を造って季節を定められた。
日はその入る時を知っている。

二〇 あなたは暗やみを造って夜とされた。
その時、林の獣は皆忍び出る。

二一 若きししはほえてえさを求め、神に食物を求める。
二二 三日が出ると退いて、その穴に寝る。

二三 人は出てわざにつき、その勤勞は夕べに及ぶ。
二四 主よ、あなたのみわぎはいかに多いことであろう。

あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。
地はあなたの造られたもので満ちている。

二五 かしこに大いなる広い海がある。
その中に無数のもの、大小の生き物が満ちている。

二六 そこに舟が走り、
あなたが造られたレビヤタンはその中に戯れる。

二七 彼らは皆あなたが時にしたがって

食物をお与えになるのを期待している。

二八あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。

あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる。

二九あなたがみ顔を隠されると、彼らはあわてふためく。

あなたが彼らの息を取り去られると、

彼らは死んでちに帰る。

三〇あなたが霊を送られると、彼らは造られる。

あなたは地のおもてを新たにされる。

三どうか、主の栄光がとこしえにあるように。

主がそのみわざを喜ばれるように。

三主が地を見られると、地は震い、

山に触れられると、煙をいだす。

三わたしは生きるかぎり、主にむかつて歌い、

ながらえる間はわが神をほめ歌おう。

三四どうか、わたしの思いが主に喜ばれるように。

わたしは主によって喜ぶ。

三五どうか、罪びとが地から断滅ほされ、

悪しき者が、もはや、いなくなるように。

わがたましいよ、主をほめよ。

主をほめたたえよ。

第一〇五篇

一主に感謝し、そのみ名を呼び、

そのみわざをもうもろの民のなかに知らせよ。

二主にむかつて歌え、主をほめうたえ、

そのすべてのくすしきみわざを語れ。

三その聖なるみ名を誇れ。

主を尋ね求める者の心を喜ばせよ。

四主とそのみ力とを求めよ、

つねにそのみ顔を尋ねよ。

五六そのしもべアブラハムの子孫よ、

その選ばれた者であるヤコブの子らよ、

主のなされたくすしきみわざと、

その奇跡と、そのみ口のさばきを心にとめよ。

七彼はわれらの神、主でいらせられる。

そのさばきは全地にある。

八主はとこしえに、その契約をみこころにとめられる。

これはよろず代に命じられたみ言葉であつて、

九アブラハムと結ばれた契約、

イスラエルに誓われた約束である。

一〇主はこれを堅く立てて、ヤコブのために定めとし、

イスラエルのために、とこしえの契約として

二 言われた、「わたしはあなたにカナンの地を与えて、あなたがたの受ける嗣業の分け前とする」と。

三 このとき彼らの数は少なく、数えるに足らず、その所で旅びとなり、

四 この国から他の国へ行き、この国から他の民へ行つた。

五 主は人の彼らをしえたげるのをゆるさず、彼らのために王たちを懲しめて、

六 言われた、「わが油そそがれた者たちにさわつてはならない、

七 わが預言者たちに害を加えてはならない」と。

八 主はききんを地に招き、人のつえとするパンをことごとく碎かれた。

九 また彼らの前にひとりをつかわされた。すなわち売られて奴隸となつたヨセフである。

一〇 彼の足は足かせをもつて痛められ、彼の首は鉄の首輪にはめられ、

一一 彼の言葉の成る時まで、主のみ言葉が彼を試みた。

一二 王は人をつかわして彼を解き放ち、民のつかさは彼に自由を与えた。

一三 王はその家のつかさとして

その所有をことごとくつかさどらせ、

一四 その心のままに君たちを教えさせ、長老たちに知恵を授けさせた。

一五 その時イスラエルはエジプトにきたり、ヤコブはハムの地に寄留した。

一六 主はその民を大いに増し加え、これをそのあだよりも強くされた。

一七 主は人々の心をかえて、その民を憎ませ、そのしもべたちを悪賢く扱わせられた。

一八 主はそのしもべモーセと、そのお選びになつたアロンとをつかわされた。

一九 彼らはハムの地で主のしるしと、奇跡とを彼らのうちにおこなつた。

二〇 主は暗やみをつかわして地を暗くされた。しかし彼らはそのみ言葉に従わなかつた。

二一 主は彼らの水を血に変らせて、その魚を殺された。

二二 彼らの国には、かえるが群がり、王の寝間にまではいつた。

二三 主が言われると、はえの群れがきたり、ぶよが国じゅうにあつた。

二四 主は雨にかえて、ひょうを彼らに与え、きらめくいなすまを彼らの国に放たれた。

三 主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木とを撃ち、
 彼らの国のもろもろの木を折り砕かれた。
 四 主が言われると、いなごがきたり、
 無数の若いいなごが来て、
 五 彼らの国のすべての青物を食いつくし、
 その地の実を食いつくした。
 六 主は彼らの国のすべてのういごを撃ち、
 彼らのすべての力の初めを撃たれた。
 七 モそして金銀を携えてイスラエルを出て行かせられた。
 その部族のうちに、ひとりの倒れる者もなかった。
 八 エジプトは彼らの去るのを喜んだ。
 彼らに対する恐れが彼らに臨んだからである。
 九 主は雲をひろげておいとし、
 夜は火をもつて照された。
 四〇 また彼らの求めによつて、うずらを飛びきたらせ、
 天から、かてを豊かに彼らに与えられた。
 四一 主が岩を開かれると、水がほとぼしり出て、
 かわいた地に川のように流れた。
 四二 これは主がその聖なる約束と、
 そのしもべアブラハムを覚えられたからである。
 四三 こうして主はその民を導いて喜びつつ出て行かせ、
 その選ばれた民を導いて歌いつつ出て行かせられた。

第一〇六篇

四 主はもろもろの国びとの地を彼らに与えられたので、
 彼らはもろもろの民の勤労の実を自分のものとした。
 四五 これは彼らが主の定めを守り、
 そのおきてを行うためである。
 主をほめたたえよ。
 一 主をほめたたえよ。
 主に感謝せよ、主は恵みふかく、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 ニだれが主の全能のみわざを語り、
 その誉をことごとく言いあらわすことができようか。
 三公正を守る人々、常に正義を行う人はさいわいである。
 四 主よ、あなたがその民を恵まれるとき、
 わたしを覚えてください。
 あなたが彼らを救われるとき、
 わたしを助けてください。
 五 そうすれば、わたしはあなたの選ばれた者の繁栄を見、
 あなたの国民の喜びをよろこび、
 あなたの嗣業と共に誇ることができるでしょう。
 六 われらは先祖たちと同じく罪を犯した。

われらは不義をなし、悪しきことを行つた。
 セわれらの先祖たちはエジプトにいたとき、
 あなたにくすしきみわざに心を留めず、
 あなたのいつくしみの豊かなのを思わず、
 紅海で、いと高き神にそむいた。
 ハけれども主はその大能を知らせようと、
 み名のために彼らを救われた。
 九主は紅海をしかつて、それをかわかし、
 彼らを導いて荒野を行くように、淵を通らせられた。
 一〇こうして主は彼らをあだの手から救い、
 敵の力からあがなわれた。
 二水が彼らのあだをおおつたので、
 そのうち、ひとりも生き残つた者はなかつた。
 二三このとき彼らはそのみ言葉を信じ、
 その誉を歌つた。
 二四しかし彼らはまもなくそのみわざを忘れ、
 その勧めを待たず、
 一四野でわがままな欲望を起し、
 荒野で神を試みた。
 一五主は彼らにその求めるものを与えられたが、
 彼らのうちに病氣を送つて、やせ衰えさせられた。
 一六人々が宿営のうちでモーセをねたみ、

主の聖者アロンをねたんだとき、
 一七地が開けてダタンを飲み、
 アビラムの仲間をおおつた。
 一八火はまたこの仲間のうちに燃え起り、
 炎は悪しき者を焼きつくした。
 一九彼らはホレフで子牛を造り、
 鑄物の像を拜んだ。
 二〇彼らは神の栄光を
 草を食う牛の像と取り替えた。
 二二三彼らは、エジプトで大いなる事をなし、
 ハムの地でくすしきみわざをなし、
 紅海のほとりで恐るべき事をなされた
 救主なる神を忘れた。
 二四しかし主のお選びになつたモーセは
 破れ口で主のみに立ち、
 み怒りを引きかえして、滅びを免れさせた。
 二五彼らは麗しい地を侮り、主の約束を信ぜず、
 二六またその天幕でつぶやき、
 主のみ声に聞き従わなかつた。
 二七それゆえ、主はみ手をあげて、彼らに誓い、
 彼らを荒野で倒れさせ、

三モまたその子孫を、もろもろの国民のうちに追い散らし、
もろもろの地に彼らをまき散らそうとされた。

三八また彼らはベオルのバアルを慕つて、
死んだ者にささげた、いけにえを食べた。

三九彼らはそのおこないをもつて主を怒らせたので、
彼らのうちに疫病が起つた。

四〇その時ピネハスが立つて仲裁にはいったので、
疫病はやんだ。

四一これによつてピネハスはよろず代まで、
とこしえに義とされた。

四二彼らはまたメリバの水のほとりで主を怒らせたので、
モーセは彼らのために災にあつた。

四三これは彼らが神の霊にそむいたとき、
彼がそのくちびるで軽率なことを言つたからである。

四四彼らは主が命じられたもろもろの民を滅ぼさず、
四五かえつてもろもろの国民とまじつて

そのわざにならない、

四六自分たちのわなとなつた偶像に仕えた。

四七彼らはそのむすこ、娘たちを悪霊にささげ、
四八罪のない血、すなわちカナンの偶像にささげた

そのむすこ、娘たちの血を流した。
こうして国は血で汚された。

三九このように彼らはそのわざによつておのれを汚し、
そのおこないによつて姦淫をなした。

四〇それゆえ、主の怒りがその民にむかつて燃え、
その嗣業を憎んで、

四一彼らをもろもろの国民の手にわたされた。
彼らはおのれを憎む者に治められ、

四二その敵にしえたげられ、
その力の下に征服された。

四三主はしばしば彼らを助けられたが、
彼らははかりごとを設けてそむき、

その不義によつて低くされた。
四四それにもかかわらず、主は彼らの叫びを聞かれたとき、

その悩みをかえりみ、
四五その契約を彼らのために思い出し、

そのいつくしみの豊かなるにより、
四六彼らを変えられ、

あわれまれるようにされた。
四七われらの神、主よ、われらを救つて、

もろもろの国民のなかから集めてください。
われらはあなたの聖なる名に感謝し、

あなたの誉を誇るでしょう。

第一〇七篇

四 ハイスラエルの神、主は

とこしえからとこしえまでほむべきかな。

すべての民は「アメン」ととなえよ。

主をほめたたえよ。

一 「主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と、

二 主にあがなわれた者は言え。

主は彼らを悩みからあがない、

三 もろもろの国から、

東、西、北、南から彼らを集められた。

四 彼らは人なき荒野にさまよい、

住むべき町にいたる道を見いださなかった。

五 彼らは飢え、またかわき、

その魂は彼らのうちに衰えた。

六 彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、

主は彼らをその悩みから助け出し、

七 住むべき町に行き着くまで、まっすぐな道に導かれた。

八 どうか、彼らが主のいつくしみと、

人の子らになされたくすしみわざとのために、

主に感謝するように。

九 主はかわいた魂を満ち足らせ、

飢えた魂を良き物で満たされるからである。

一〇 暗黒と深いやみの中にいる者、

苦しむと、くろがねに縛られた者、

二 彼らは神の言葉にそむき、

いと高き者の勧めを軽んじたので、

三 主は重い労働をもって彼らの心を低くされた。

彼らはつまずき倒れても、助ける者がなかった。

四 彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、

主は彼らをその悩みから救い、

五 暗黒と深いやみから彼らを導き出して、

そのかせをこわされた。

六 どうか、彼らが主のいつくしみと、

人の子らになされたくすしみわざとのために、

主に感謝するように。

七 主は青銅のとびらをこわし、

鉄の貫の木を断ち切られたからである。

八 ある者はその罪に汚れた行いによって病み、

その不義のゆえに悩んだ。

九 彼らはすべての食物をきらつて、

死の門に近づいた。

一九 彼らはその悩みのうちに主に呼ばわたったので、
 主は彼らをその悩みから救い、
 二〇 そのみ言葉をつかわして、彼らをいやし、
 彼らを滅びから助け出された。
 二一 どうか、彼らが主のいつくしみと、
 人の子らになされたくすしきみわざとのために、
 主に感謝するように。
 二二 彼らが感謝のいけにえをささげ、
 喜びの歌をもつて、そのみわざを言いあらわすように。
 二三 舟で海にくんだり、大海で商売をする者は、
 二四 主のみわざを見、
 また深い所でそのくすしきみわざを見た。
 二五 主が命じられると暴風が起つて、海の波をあげた。
 二六 彼らは天にのぼり、淵にくんだり、
 悩みによつてその勇氣は溶け去り、
 二七 酔った人のようによろめき、
 よろめいて途方にくれる。
 二八 彼らはその悩みのうちに主に呼ばわたったので、
 主は彼らをその悩みから救い出された。
 二九 主があらしを静められると、
 海の波は穏やかになった。
 三〇 こうして彼らは波の静まったのを喜び、

主は彼らをその望む港へ導かれた。
 三二 どうか、彼らが主のいつくしみと、
 人の子らになされたくすしきみわざとのために、
 主に感謝するように。
 三三 彼らが民の集会で主をあがめ、
 長老の会合で主をほめたたえるように。
 三四 主は川を野に変らせ、
 泉をかわいた地に変らせ、
 塩地に變らせられる。
 三五 主は野を池に変らせ、かわいた地を泉に変らせ、
 三六 飢えた者をそこに住まわせられる。
 こうして彼らはその住むべき町を建て、
 三七 畑に種をまき、ぶどう畑を設けて
 多くの収穫を得た。
 三八 主が彼らを祝福されたので彼らは大いにふえ、
 その家畜の滅るのをゆるされなかった。
 三九 彼らがしえたげと、悩みと、悲しみによつて
 減り、かつ卑しめられたとき、
 四〇 主はもろもろの君に侮りをそそぎ、
 道なき荒れ地にさまよわせられた。
 四一 しかし主は貧しい者を悩みのうちからあげて、

第一〇八篇

その家族を羊の群れのようにされた。
 四三正しい者はこれを見て喜び、
 もろもろの不義はその口を閉じた。
 四四すべて賢い者はこれらの事に心をよせ、
 主のいつくしみをさとるようにせよ。

ダビデの歌さんび

一 神よ、わが心は定まりました。
 わが心は定まりました。
 わたしは歌い、かつほめたたえます。
 わが魂よ、さめよ。
 ニ 立琴よ、琴よ、さめよ。
 わたしはしのめを呼びさします。
 ミ 主よ、わたしはもろもろの民の中であなたに感謝し、
 もろもろの国の中であなたをほめたたえます。
 四 あなたのいつくしみは大きく、天にまでおよぶ
 あなたのまことは雲にまで及ぶ。
 五 神よ、みずからを天よりも高くし、
 みさかえを全地の上にあげてください。
 六 あなたの愛される者が助けを得るために、

右のみ手をもって救をほどこし、
 わたしに答えてください。
 セ 神はその聖所で言われた、
 「わたしは大いなる喜びをもってシケムを分かち、
 スコテの谷を分かち与えよう。
 ハギレアデはわたしのもの、
 マナセもわたしのものである。
 エフライムはわたしのかぶと、
 ユダはわたしのつえである。
 ヌモアブはわたしの足だらひ、
 エドムにはわたしのくつを投げる。
 ペリシテについては、かちどきをあげる」。
 コ だれがわたしを堅固な町に至らせるであろうか。
 だれがわたしをエドムに導くであろうか。
 ニ 神よ、あなたはわれらを捨てられたではありませんか。
 神よ、あなたはわれらの軍勢と共に出て行かれませんか。
 ニ三 われらに助けを与えて、あだにむかわせてください。
 人の助けはむなしからず。
 ニ三 われらは神によつて勇ましく働きます。
 われらのあだを踏みじる者は神だからです。

第一〇九篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 わたしのほめたたえる神よ、もださないでください。
 ニ 彼らは悪しき口と欺きの口をあけて、わたしにむかい、
 偽りの舌をもつてわたしに語り、
 三 恨みの言葉をもつてわたしを囲み、
 ゆえなくわたしを攻めるのです。
 四 彼らはわが愛にむくいて、わたしを非難します。
 しかしわたしは彼らのために祈ります。
 五 彼らは悪をもつてわが善に報い、
 恨みをもつてわが愛に報いるのです。
 六 彼の上に悪しき人を立て、
 訴える者に彼を訴えさせてください。
 七 彼がさばかれるとき、彼を罪ある者とし、
 その祈を罪に変えてください。
 ハ その日を少なくし、
 その財産をほかの人にとらせ、
 ニ その子らをみなしごにし、
 その妻をやもめにしてください。
 一〇 その子らを放浪者として施しをこわせ、
 その荒れたすまいから追い出させてください。

ニ 彼が持つているすべての物を債主に奪わせ、
 その勤労の実をほかの人にかすめさせてください。
 ニ 彼にいつくしみを施す者はひとりもなく、
 またそのみなしごをあわれむ者もなく、
 ニ 三 その子孫を絶えさせ、
 その名を次の代に消し去ってください。
 一四 その父たちの不義は主の目前に覚えられ、
 その母の罪を消し去らないでください。
 一五 それらを常に主の目前に置き、
 彼の記憶を地から断つてください。
 一六 これは彼がいつくしみを施すことを思わず、
 かえつて貧しい者、乏しい者を責め、
 心の痛める者を殺そうとしたからです。
 一七 彼はのろうことを好んだ。
 のろいを彼に臨ませてください。
 彼は恵むことを喜ばなかった。
 恵みを彼から遠ざけてください。
 一八 彼はのろいを衣のように着た。
 のろいを水のようにその身にしみこませ、
 油のようにその骨にしみこませてください。
 一九 またそれを自分の着る着物のようにならせ、
 常に締める帯のようにならせてください。

二〇これがわたしを非難する者と、
わたしに逆らって悪いことを言う者の
主からうける報いとしてください。

三しかし、わが主なる神よ、

あなたはみ名のために、わたしを顧みてください。

あなたのいづくしみの深きにより、

わたしをお助けください。

三わたしは貧しく、かつ乏しいのです。

わたしの心はわがうちに傷ついています。

三わたしは夕日の影のように去りゆき、

いなごのように追ひ払われます。

二四わたしのひぎは断食によってよろめき、

わたしの肉はやせ衰え、

二五わたしは彼らにそしられる者となりました。

彼らはわたしを見ると、頭を振ります。

二六わが神、主よ、わたしをお助けください。

あなたのいづくしみにしたがって、

わたしをお救いください。

二七主よ、これがあなたのみ手のわざであること、

あなたがそれをなされたことを、

彼らに知らせてください。

二八彼らはのろうけれども、あなたは祝福されます。

第二一〇篇

ダビデの歌

一主はわが主に言われる、

「わたしがあなたのよろもろの敵を

あなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。

二主はあなたの力あるつえをシオンから出される。

あなたはよろもろの敵のなかで治めよ。

三あなたの民は、あなたがその軍勢を

聖なる山々に導く日に

心から喜んでおのれをささげるであらう。

あなたの若者は朝の胎から出る露のように

わたしを攻める者はずかしめ、

あなたのしもべを喜ばせてください。

二九わたしを非難する者にはずかしめを着せ、

おのが恥を上着のようにまとわせてください。

三〇わたしはわが口をもって大いに主に感謝し、

多くの人のなかで主をほめたたえます。

三一主は貧しい者の右に立つて、

死罪にさだめようとする者から

彼を救われるからです。

第二一篇

あなたに来るであろう。

四主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、
「あなたはメルキゼデクの位にしたがつて
とこしえに祭司である」。

五主はあなたの右におられて、
その怒りの日に王たちを打ち破られる。

六主はもろもろの国のなかでさばきを行い、

しかばねをもって満たし、

広い地を治める首領たちを打ち破られる。

七彼は道のほとりの川からくんで飲み、

それによって、そのこうべをあげるであろう。

一主をほめたたえよ。

わたしは正しい者のつどい、および公会で、
心をつくして主に感謝する。

二主のみわぎは偉大である。

すべてそのみわぎを喜ぶ者によって尋ね窮められる。

三そのみわぎは栄光と威厳とに満ち、

その義はとこしえに、うせることがない。

四主はそのくすしきみわぎを記念させられた。

第二二篇

主は恵みふかく、あわれみに満ちていられる。

五主はおのれを恐れる者に食物を与え、

その契約をとこしえに心にとめられる。

六主はもろもろの国民の所領をその民に与えて、

みわぎの力をこれにあらわされた。

七そのみ手のわざは真実かつ公正であり、

すべてのさとしは確かである。

八これらは世々かぎりなく堅く立ち、

真実と正直とをもってなされた。

九主はその民にアがないを施し、

その契約をとこしえに立てられた。

そのみ名は聖にして、おそれおい。

一〇主を恐れることは知恵のはじめである。

これを行う者はみな良き悟りを得る。

主の誉は、とこしえに、うせることはない。

一主をほめたたえよ。

主をおそれて、そのもろもろの戒めを
大いに喜ぶ人はさいわいである。

二その子孫は地において強くなり、

正しい者のやかからは祝福を得る。

三 繁栄と富とはその家にあり、

その義はとこしえに、うせることはない。

四 光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる。

主は恵み深く、あわれみに満ち、正しくいらせられる。

五 恵みを施し、貸すことをなし、

その事を正しく行う人はさいわいである。

六 正しい人は決して動かされることなく、

とこしえに覚えられる。

七 彼は悪いおとずれを恐れず、

その心は主に信頼してゆるがない。

八 その心は落ち着いて恐れることなく、

ついにそのあだについての願いを見る。

九 彼は惜しげなく施し、貧しい者に与えた。

その義はとこしえに、うせることはない。

その角は譽を得てあげられる。

一〇 悪しき者はこれを見て怒り、

齒をかみならして溶け去る。

悪しき者の願いは滅びる。

第一一三篇

一 主をほめたたえよ。

主のしもべたちよ、ほめたたえよ。

主のみ名をほめたたえよ。

二 今より、とこしえに至るまで主のみ名はほむべきかな。

三日のいずるところから日の入るところまで、

主のみ名はほめたたえられる。

四 主はもろもろの国民の上に高くいらせられ、

その栄光は天よりも高い。

五 われらの神、主にくらぶべき者はだれか。

主は高き所に座し、

六 遠く天と地とを見おろされる。

七 主は貧しい者をちりからあげ、

乏しい者をあくたからあげて、

八 もろもろの君たちと共にすわらせ、

その民の君たちと共にすわらせられる。

九 また子を産まぬ女に家庭を与え、

多くの子供たちの喜ばしい母とされる。

主をほめたたえよ。

第一一四篇

イスラエルがエジプトをいで、
 ヤコブの家が異言の民を離れたとき、
 ニユダは主の聖所となり、
 イスラエルは主の所領となった。
 三海はこれを見て逃げ、
 ヨルダンはうしろに退き、
 四山は雄羊のように踊り、
 小山は小羊のように踊った。
 五海よ、おまえはどうして逃げるのか、
 ヨルダンは、おまえはどうしてうしろに退くのか。
 六山よ、おまえたちはどうして雄羊のように踊るのか、
 小山よ、おまえたちはどうして小羊のように踊るのか。
 七地よ、主のみ前におののけ、
 ヤコブの神のみ前におののけ。
 ハ主は岩を池に変らせ、
 石を泉に変らせられた。

第二一五篇

一主よ、栄光を

われらにではなく、われらにではなく、
 あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、
 ただ、み名にのみ帰してください。
 ニなにゆえ、もろもろの国民は言うのでしょうか、
 「彼らの神はどこにいるのか」と。
 三われらの神は天にいらせられる。
 神はみこころにかなうすべての事を行われる。
 四彼らの偶像はしろがねと、こがねで、
 人の手のわざである。
 五それは口があつても語ることができない。
 目があつても見ることができない。
 六耳があつても聞くことができない。
 鼻があつてもかぐことができない。
 七手があつても取ることができない。
 足があつても歩くことができない。
 また、のどから声を出すこともできない。
 ハこれを造る者と、これに信頼する者とはみな、
 これと等しい者になる。
 カイスラエルよ、主に信頼せよ。
 主は彼らの助け、また彼らの盾である。
 ニ○アロンの家よ、主に信頼せよ。
 主は彼らの助け、また彼らの盾である。

第一一六篇

一 主を恐れる者よ、主に信頼せよ。
 主は彼らの助け、また彼らの盾である。
 二 主はわれらをみこころにとめられた。
 主はわれらを恵み、イスラエルの家を恵み、
 アロンの家を恵み、
 三 また、小さい者も、大いなる者も、
 主を恐れる者を恵まれる。
 四 どうか、主があなたがたを増し加え、
 あなたがたと、あなたがたの子孫とを
 増し加えられるように。
 五 天地を造られた主によつて
 あなたがたが恵まれるように。
 六 天は主の天である。
 しかし地は人の子らに与えられた。
 七 死んだ者も、音なき所に下る者も、
 主をほめたたえることはない。
 八 しかし、われらは今より、とこしえに至るまで、
 主をほめまつるであらう。
 主をほめたたえよ。

一 わたしは主を愛する。
 主はわが声と、わが願いとを聞かれたからである。
 二 主はわたしに耳を傾けられたので、
 わたしは生きるかぎり主を呼びまつるであらう。
 三 死の綱がわたしを取り巻き、
 陰府の苦しみがわたしを捕えた。
 四 その時わたしは主のみ名を呼んだ。
 「主よ、どうぞわたしをお救いください」と。
 五 主は恵みふかく、正しくいらせられ、
 われらの神はあわれみに富まれる。
 六 主は無学な者を守られる。
 わたしが低くされたとき、主はわたしを救われた。
 七 わが魂よ、おまえの平安に帰るがよい。
 主は豊かにおまえをあしらわれたからである。
 ハ あなたはわたしの魂を死から、わたしの目を涙から、
 わたしの足をつまずきから助け出されました。
 ニ わたしは生ける者の地で、主の目前に歩みます。
 ニ〇 「わたしは大いに悩んだ」と言つた時にもなお信じた。
 二 わたしは驚きあわてたときに言つた、

第二一七篇

一 もろもろの国よ、主をほめたたえよ。

「すべての人は当にならぬ者である」と。
 二 わたしに賜わったもろもろの恵みについて、
 どうして主に報いることができようか。
 三 わたしは救の杯をあげて、
 主のみ名を呼ぶ。
 四 わたしはすべての民の前で、
 主にわが誓いをつぐなおう。
 五 主の聖徒の死はそのみ前において尊い。
 六 主よ、わたしはあなたのしもべです。
 わたしはあなたのしもべ、あなたのはしための子です。
 あなたはわたしのなわめを解かれました。
 セ わたしは感謝のいけにえをあなたにささげて、
 主のみ名を呼びます。
 ハ わたしはすべての民の前で
 主にわが誓いをつぐないます。
 九 エルサレムよ、あなたの中で、
 主の家の大庭の中で、これをつぐないます。
 主をほめたたえよ。

第二一八篇

もろもろの民よ、主をたたえまつれ。
 ニ われらに賜わるそのいづくしみは大きいからである。
 主のまことはとこしえに絶えることがない。
 主をほめたたえよ。

一 主に感謝せよ、主は恵みふかく、
 そのいづくしみはとこしえに絶えることがない。
 ニ イスラエルは言え、
 「そのいづくしみはとこしえに絶えることがない」と。
 ミ アロンの家は言え、
 「そのいづくしみはとこしえに絶えることがない」と。
 四 主をおそれる者は言え、
 「そのいづくしみはとこしえに絶えることがない」と。
 五 わたしが悩みのなかから主を呼ぶと、
 主は答えて、わたしを広い所に置かれた。
 六 主がわたしに味方されるので、
 恐れることはない。
 人はわたしに何をなし得ようか。
 セ 主はわたしに味方し、わたしを助けられるので、
 わたしを憎む者についての願いを見るであろう。

一八主に寄り頼むは人にたよるよりも良い。
 一九主に寄り頼むはもろもろの君にたよるよりも良い。
 二〇もろもろの国民はわたしを囲んだ。
 二一わたしは主のみ名によつて彼らを滅ぼす。
 二二彼らはわたしを囲んだ、わたしを囲んだ。
 二三わたしは主のみ名によつて彼らを滅ぼす。
 二四彼らは蜂のようにわたしを囲み、
 二五いばらの火のように燃えたつた。
 二六わたしは主のみ名によつて彼らを滅ぼす。
 二七わたしはひどく押されて倒れようとしたが、
 二八主はわたしを助けられた。
 二九主はわが力、わが歌であつて、
 三〇わが救となられた。
 三一五聞け、勝利の喜ばしい歌が正しい者の天幕にある。
 三二「主の右の手は勇ましいはたらきをなし、
 三三主の右の手は高くあがり、
 三四主の右の手は勇ましいはたらきをなす」。
 三五わたしは死ぬことなく、生きながらえて、
 三六主のみわが物を語るであらう。
 三七主はわたしを懲らされたが、
 三八死にはわたしをなげなかつた。
 三九わたしのために義の門を開け、

四十わたしはその内にはいつて、主に感謝しよう。
 四一これは主の門である。
 四二正しい者はその内にはいるであらう。
 四三わたしはあなたに感謝します。
 四四あなたがわたしに答えて、わが救となられたことを。
 四五家造りらの捨てた石は
 四六隅のかしら石となつた。
 四七これは主のなされた事で
 四八われらの目には驚くべき事である。
 四九これは主が設けられた日であつて、
 五〇われらはこの日に喜び楽しむであらう。
 五一主よ、どうぞわれらをお救いください。
 五二主よ、どうぞわれらを榮えさせてください。
 五三主のみ名によつてはいる者はさいわいである。
 五四われらは主の家からあなたをたたえます。
 五五主は神であつて、われらを照された。
 五六枝を携えて祭の行列を祭壇の角にまで進ませよ。
 五七あなたはわが神、わたしはあなたをあがめます。
 五八主に感謝せよ、主は恵みふかく、
 五九そのいつくしみはとこしえに
 六〇絶えることがない。

第一一九篇

アレフ

一 おのが道を全くして、
主のおきてに歩む者はさいわいです。

二 主のもろもろのあかしを守り
心をつくして主を尋ね求め、

三 また悪を行わず、主の道に歩む者はさいわいです。

四 あなたはさとしを命じて、ねんごろに守らせられます。

五 どうかわたしの道を堅くして、

あなたの定めを守らせてください。

六 わたしは、あなたのもろもろの戒めに目をとめる時、

恥じることはありません。

七 わたしは、あなたの正しいおきてを学ぶとき、

正しい心をもってあなたに感謝します。

八 わたしはあなたの定めを守ります。

わたしを全くお捨てにならないでください。

ベス

九 若い人はどうしておのが道を

清く保つことができるでしょうか。

み言葉にしたがって、

それを守るよりほかにありません。

一〇 わたしは心をつくしてあなたを尋ね求めます。

わたしをあなたの戒めから

迷い出させないでください。

二 わたしはあなたにむかつて

罪を犯すことのないように、

心のうちにみ言葉をたくわえました。

三 あなたはほむべきかな、主よ、

あなたの定めをわたしに教えてください。

四 わたしはくちびるをもって、

あなたの口から出る

もろもろのおきてを言いあらわします。

五 わたしは、もろもろのたからを喜ぶように、

あなたのあかしの道を喜びます。

六 わたしは、あなたのさとしを思い、

あなたの道に目をとめます。

七 わたしはあなたの定めを喜び、

あなたのみ言葉を忘れません。

ギメル

八 あなたのもべを豊かにあしらって、

生きながらえさせ、

み言葉を守らせてください。

九 わたしの目を開いて、あなたのおきてのうちの

くすしき事を見させてください。

一九わたしはこの地にあつては寄留者です。

あなたの戒めをわたしに隠さないでください。

二〇わが魂はつねにあなたのおきてを慕つて、

絶えいるばかりです。

二一あなたは、あなたの戒めから迷い出る
高ぶる者、のろわれた者を責められます。

二二わたしはあなたのあかしを守りました。

彼らのそしりと侮りとを

わたしから取り去ってください。

二三たといもろもろの君が座して、

わたしをそこなおうと図つても、

あなたのしもべは、あなたの定めを深く思います。

二四あなたのあかしは、わたしを喜ばせ、

わたしを教えさとすものです。

ダレス

二五わが魂はちりについています。

み言葉に従つて、わたしを生き返らせてください。

二六わたしが自分の歩んだ道を語つたとき、

あなたはわたしに答えられました。

あなたの定めをわたしに教えてください。

二七あなたのさとしの道を

わたしにわきまえさせてください。

わたしはあなたのくすしみわがを深く思います。

二八わが魂は悲しみによつて溶け去ります。

み言葉に従つて、わたしを強くしてください。

二九偽りの道をわたしから遠ざけ、

あなたのおきてをねんごろに教えてください。

三〇わたしは真実の道を選び、

あなたのおきてをわたしの前に置きました。

三一主よ、わたしはあなたのあかしに堅く従つています。

願わくは、わたしをはずかしめないでください。

三二あなたがわたしの心を広くされるとき、

わたしはあなたの戒めの道を走ります。

三三主よ、あなたの定め道をわたしに教えてください。

わたしは終りまでこれを守ります。

三四わたしに知恵を与えてください。

わたしはあなたのおきてを守り、

心をつくしてこれに従います。

三五わたしをあなたの戒めの道に導いてください。

わたしはそれを喜ぶからです。

三六わたしの心をあなたのあかしに傾けさせ、

不正な利得に傾けさせないでください。

ワウ

ミわたしの目をほかにむけて、むなしいものを見させず、
 あなたの道をもつて、わたしを生かしてください。
 ミ八あなたを恐れる者にかかわる約束を
 あなたのしもべに堅くしてください。
 ミ九わたしの恐れるそしりを除いてください。
 あなたのおきては正しいからです。
 四〇見よ、わたしはあなたのさとしを慕います。
 あなたの義をもつて、
 わたしを生かしてください。

四二主よ、あなたの約束にしたがつて、
 あなたのいつくしみと、
 あなたの救をわたしに臨ませてください。
 四三そうすれば、わたしをそしる者に、
 答えることができます。
 わたしはあなたのみ言葉に信頼するからです。
 四四またわたしの口から真理の言葉を
 ことごとく除かないでください。
 わたしの望みはあなたのおきてにあるからです。
 四四わたしは絶えず、とこしえに、
 あなたのおきてを守ります。
 四五わたしはあなたのさとしを求めたので、

ザイン

自由に歩むことができます。
 四六わたしはまた王たちの前に
 あなたのあかしを語つて恥じることはありません。
 四七わたしは、わたしの愛するあなたの戒めに
 自分の喜びを見いだすからです。
 四八わたしは、わたしの愛するあなたの戒めを尊び、
 あなたの定めを深く思っています。

四九どうか、あなたのしもべに言われた
 み言葉を思い出してください。
 あなたはわたしにそれを望ませられました。
 五〇あなたの約束はわたしを生かすので、
 わが悩みの時の慰めです。
 五一高ぶる者は大いにわたしをあざ笑います。
 しかしわたしはあなたのおきてを離れません。
 五二主よ、わたしはあなたの昔からのおきてを思い出して、
 みずから慰めます。
 五三あなたのおきてを捨てる悪しき者のゆえに、
 わたしは激しい憤りを起します。
 五四あなたの定めはわが旅の家で、
 わたしの歌となりました。
 五五主よ、わたしは夜の間にあなたののみ名を思い出して、

あなたのおきてを守ります。

五六 わたしはあなたのさとしを守ったことによつて、
この祝福がわたしに臨みました。

ヘス

五七 主はわたしの受くべき分です。

わたしはあなたのみ言葉を守つて約束します。

五八 わたしは心をつくして、あなたの恵みを請い求めます。

あなたの約束にしたがつて、

わたしをお恵みください。

五九 わたしは、あなたの道を思うとき、

足をかえして、あなたのあかしに向かいます。

六〇 わたしはあなたの戒めを守るのに、

すみやかで、ためらいません。

六一 たい、悪しき者のなわがわたしを捕えても、

わたしはあなたのおきてを忘れません。

六二 わたしはあなたの正しいおきてのゆえに

夜半に起きて、あなたに感謝します。

六三 わたしは、すべてあなたを恐れる者、

またあなたのさとしを守る者の仲間です。

六四 主よ、地はあなたのいつくしみで満ちています。

あなたの定めをわたしに教えてください。

テス

六五 主よ、あなたはみ言葉にしたがつて

しもべをよくあしらわれました。

六六 わたしに良い判断と知識を教えてください。

わたしはあなたの戒めを信じるからです。

六七 わたしは苦しめない前には迷いました。

しかし今はみ言葉を守ります。

六八 あなたは善にして善を行われます。

あなたの定めをわたしに教えてください。

六九 高ぶる者は偽りをもつて

わたしをことごとくおおいいます。

しかしわたしは心をつくして

あなたのをしを守ります。

七〇 彼らの心は肥え太つて脂肪のようです。

しかしわたしはあなたのおきてを喜びます。

七一 苦しみにあつたことは、わたしに良い事です。

これによつてわたしはあなたのおきてを

学ぶことができました。

七二 あなたの口のおきては、わたしのためには

幾千の金銀貨幣にもまさるのです。

ヨード

七三 あなたのみ手はわたしを造り、

わたしを形造りました。

カフ

わたしに知恵を与えて、

あなたの戒めを学ばせてください。

七四あなたを恐れる者はわたしを見て喜ぶでしょう。

わたしはみ言葉によつて望みをいだいたからです。

七五主よ、わたしはあなたのさばきの正しく、

また、あなたが真実をもつて

わたしを苦しめられたことを知っています。

七六あなたがしもべに告げられた約束にしたがつて、

あなたのいづくしみをわが慰めとしてください。

七七あなたのあわれみをわたしに臨ませ、

わたしを生かしてください。

あなたのおきてはわが喜びからです。

七八高ぶる者に恥をこうむらせてください。

彼らは偽りをもつて、わたしをくつがえしたからです。

しかしわたしはあなたのさとしを深く思います。

七九あなたをおそれる者と、

あなたのあかしを知る者とは

わたしに帰らせてください。

八〇わたしの心を全くして、

あなたの定めを守らせてください。

そうすればわたしは恥をこうむることがありません。

八一わが魂はあなたの救を慕つて絶えいるばかりです。

わたしはみ言葉によつて望みをいただきます。

八二わたしの目はあなたの約束を待つによつて衰え、

「いつ、あなたはわたしを慰められるのですか」と

尋ねます。

八三わたしは煙の中の皮袋のようになりましたが、

なお、あなたの定めを忘れませんでした。

八四あなたのしもべの日はどれほど続くでしょうか。

いつあなたは、わたしを迫害する者を

さばかれるでしょうか。

八五高ぶる者はわたしをおとしいれようと

穴を掘りました。

彼らはあなたのおきてに従わない人々です。

八六あなたの戒めはみな真実です。

彼らは偽りをもつてわたしを迫害します。

わたしをお助けください。

八七彼らはこの地において、

ほとんどわたしを滅ぼしました。

しかし、わたしはあなたのさとしを捨てませんでした。

八八あなたのいづくしみにしたがって

わたしを生かしてください。

そうすればわたしはあなたの口から出る

あかしを守ります。

ラメド

八九主よ、あなたのみ言葉は

天においてとこしえに堅く定まり、

九〇あなたのまことはよろずよに及びます。

あなたが地を定められたので、地は堅く立っています。

九一これらのものはあなたの仰せにより、

堅く立って今日に至っています。

よろずのものは皆あなたのしもべだからです。

九二あなたのおきてがわが喜びとならなかつたならば、

わたしはついに悩みのうちに滅びたでしょう。

九三わたしは常にあなたのさとしを忘れません。

あなたはこれをもって、わたしを生かされたからです。

九四わたしはあなたのものです。

わたしをお救いください。

わたしはあなたのさとしを求めました。

九五悪しき者はわたしを滅ぼそうと

待ち伏せています。

しかし、わたしはあなたのあかしを思います。

九六わたしはすべての全きことに

限りあることを見ました。

しかしあなたの戒めは限りなく広いのです。

メモ

九七いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。

わたしはひねもすこれを深く思います。

九八あなたの戒めは常にわたしと共にあるので、

わたしをわが敵にまさって賢くします。

九九わたしはあなたのあかしを深く思うので、

わがすべての師にまさって知恵があります。

一〇〇わたしはあなたのさとしを守るので、

老いた者にまさって事をわきまえます。

一〇一わたしはみ言葉を守るために、

わが足をとどめて、すべての悪い道に行かせません。

一〇二あなたがわたしを教えられたので、

わたしはあなたのおきてを離れません。

一〇三あなたのみ言葉はいかにわがあごに

甘いことでしょう。

蜜にまさってわが口に甘いのです。

一〇四わたしはあなたのさとしによって知恵を得ました。

それゆえ、わたしは偽りのすべての道を憎みます。

ヌン

一〇五あなたのみ言葉はわが足のとしび、

わが道の光です。

一〇六 わたしはあなたの正しいおきてを守^{まも}ることを誓^{ちか}い、
かつこれを実行^{じっこう}しました。

一〇七 わたしはいたく苦しみました。

主^{しゅ}よ、み言葉^{ことば}に従^{したが}って、わたしを生^いかしてください。

一〇八 主^{しゅ}よ、わがさんびの供え物^{もの}をうけて、

あなたのおきてを教^{おし}えてください。

一〇九 わたしのいのちは常に危険^{きけん}にさらされています。

しかし、わたしはあなたのおきてを忘^{わす}れません。

一一〇 悪^{あく}しき者はわたしのためにわなを設^{もう}けました。

しかし、わたしはあなたのさとしから迷^{まよ}い出^でません。

一一一 あなたのあかしはとしえにわが嗣業^{しぎやう}です。

まことに、そのあかしはわが心の喜^{よろこ}びです。

一二二 わたしはあなたの定め^{さだめ}を終^{おわ}りまで、

としえに守^{まも}ろうと心を傾^{かたむ}けます。

サメク

一二三 わたしは二心^{ふたこころ}の者^{もの}を憎^{にく}みます。

しかしあなたのおきてを愛^{あい}します。

一二四 あなたはわが隠^{かく}れ場^ば、わが盾^{たて}です。

わたしはみ言葉^{ことば}によつて望^{のぞ}みいだきます。

一二五 悪^{あく}をなす者^{もの}よ、わたしを離^{はな}れ去^され、

わたしはわが神^{かみ}の戒^{いまし}めを守る^{まも}るのです。

一二六 あなたの約束^{やくそく}にしたがって、

わたしをささえて、ながらえさせ、

わが望^{のぞ}みについて恥^はじることの

ないようにしてください。

一二七 わたしをささえてください。

そうすれば、わたしは安^{やす}らかで、

常にあなた^{つね}の定め^{さだめ}に心をそそぎます。

一二八 すべてあなたの定め^{さだめ}から迷^{まよ}い出^でる者^{もの}を

あなたは、かろしめられます。

まことに、彼^{かれ}らの欺^{あざむ}きはむなしのです。

一二九 あなたは地^ちのすべての悪^{あく}しき者^{もの}を、

金^{かな}かすのようになされます。

それゆえ、わたしはあなたのあかしを愛^{あい}します。

一二〇 わが肉^{にく}はあなたを恐^{おそ}れるので震^{ふる}えます。

わたしはあなたのさばきを恐^{おそ}れます。

アイン

一二三 わたしは正^{ただ}しく義^ぎになつたことを行^{おこな}いました。

わたしを捨て^すて、しえたげる者^{もの}に

ゆだねないでください。

一二四 しもべのために保証^{ほしょう}人^{にん}となつて、

高^{たか}ぶる者^{もの}にわたしを、しえたげさせないでください。

一二五 わが目^めはあなたの救^{すくい}と、

あなたの正^{ただ}しい約束^{やくそく}とを待^{まち}ち望^{のぞ}んで衰^{おとし}えます。

ペ

二四あなたのいつくしみにしたがって、しもべをあしらい、

あなたの定めを教えてください。

二五わたしはあなたのしもべです。

わたしに知恵を与えて、

あなたのあかしを知らせてください。

二六彼らはあなたのおきてを破りました。

今は主のはたらかれる時です。

二七それゆえ、わたしは金よりも、

純金よりもまさってあなたの戒めを愛します。

二八それゆえ、わたしは、あなたのもろもの

さとしにしたがって、正しき道に歩み、

すべての偽りの道を憎みます。

二九あなたのあかしは驚くべきものです。

それゆえ、わが魂はこれを守ります。

三〇み言葉が開けると光を放って、

無学な者に知恵を与えます。

三一わたしはあなたの戒めを慕うゆえに、

口を広くあけてあえぎ求めました。

三二名を愛する者に常にされるように、

わたしをかえりみ、わたしをあわれんでください。

三三あなたの約束にしたがって、わが歩みを確かにし、
すべての不義に支配されないようにしてください。

三四わたしを人のしえたげからあがなってください。

そうすればわたしは、あなたのさとしを守ります。

三五み顔をしもべの上に照し、

あなたの定めを教えてください。

三六人々があなたのおきてを守らないので、

わが目の涙は川のように流れます。

ツアデー

三七主よ、あなたは正しく、

あなたのさばきは正しいのです。

三八あなたの正義と、この上ない真実とをもって

あなたのあかしを命じられました。

三九わたしのあだが、あなたのみ言葉を忘れるので、

わが熱心はわたしを滅ぼすのです。

四〇あなたの約束はまことに確かです。

あなたのしもべはこれを愛します。

四一わたしは取るにたらない者で、人に侮られるけれども、

なお、あなたのさとしを忘れません。

四二あなたの義はとこしえに正しく、

あなたのおきてはまことです。

コフ

一四三 悩みと苦しみがわたしに臨みました。
 しかしあなたの戒めはわたしの喜びです。
 一四四 あなたのあかしはとこしえに正しいのです。
 わたしに知恵を与えて、生きながらえさせてください。
 一四五 わたしは心をつくして呼ばわります。
 主よ、お答えください。
 わたしはあなたの定めを守ります。
 一四六 わたしはあなたに呼ばわります。
 わたしをお救いください。
 わたしはあなたのあかしを守ります。
 一四七 わたしは朝早く起き出て呼ばわります。
 わたしはみ言葉によつて望みをいだくのです。
 一四八 わが目は夜警の交代する時に先だつてさめ、
 あなたの約束を深く思います。
 一四九 あなたのいつくしみにしたがって、
 わが声を聞いてください。
 主よ、あなたの公義にしたがつて、
 わたしを生かしてください。
 一五〇 わたしをしえたげる者が
 悪いたくらみをもつて近づいています。
 彼らはあなたのおきてを遠くはなれているのです。

レシ

一五一 しかし主よ、あなたは近くいらせられます。
 あなたののもろもろの戒めはまことです。
 一五二 わたしは早くからあなたのあかしによつて、
 あなたがこれをとこしえに
 立てられたことを知りました。
 一五三 わが悩みを見て、わたしをお救いください。
 わたしはあなたのおきてを忘れないからです。
 一五四 わが訴えを弁護して、わたしをあがない、
 あなたの約束にしたがつて、
 わたしを生かしてください。
 一五五 救は悪しき者を遠く離れている。
 彼らはあなたの定めを求めないからです。
 一五六 主よ、あなたのあわれみは大きい。
 あなたの公義に従つて、わたしを生かしてください。
 一五七 わたしをしえたげる者、
 わたしをあだする者は多い。
 しかしわたしは、あなたのあかしを離れません。
 一五八 不信仰な者があなたのみ言葉を守らないので、
 わたしは彼らを見て、いとわしく思います。
 一五九 わたしがいいかにあなたのさとしを
 愛するかをお察してください。

シン

主よ、あなたのいつくしみにしたがって、

わたしを生かしてください。

一六〇 あなたのみ言葉の全体は真理です。

あなたの正しいおきてのすべては

とこしえに絶えることはありません。

一六一 もろもろの君はゆえなくわたしをしえたげます。

しかしわが心はみ言葉をおそれます。

一六二 わたしは大いなる獲物を得た者のように

あなたのみ言葉を喜びます。

一六三 わたしは偽りを憎み、忌みきらいます。

しかしあなたのおきてを愛します。

一六四 わたしはあなたの正しいおきてのゆえに、

一日に七たびあなたをほめたたえます。

一六五 あなたのおきてを愛する者には大いなる平安があり、

何ものも彼らをつまずかすことはできません。

一六六 主よ、わたしはあなたの救を望み、

あなたの戒めをおこないます。

一六七 わが魂は、あなたのあかしを守ります。

わたしはいたくこれを愛します。

一六八 わがすべての道があなたのみ前にあるので、

わたしはあなたのさとしと、あかしとを守ります。

タウ

一六九 主よ、どうか、わが叫びをみ前にいたらせ、

み言葉に従って、わたしに知恵をお与えください。

一七〇 わが願いをみ前にいたらせ、

み言葉にしたがって、わたしをお助けください。

一七一 あなたの定めをわたしに教えられるので、

わがくちびるはさんびを唱えます。

一七二 あなたのすべての戒めは正しいので、

わが舌はみ言葉を歌います。

一七三 わたしはあなたのさとしを選びました。

あなたのみ手を、常にわが助けとしてください。

一七四 主よ、わたしはあなたの救を慕います。

あなたのおきてはわたしの喜びです。

一七五 わたしを生かして、

あなたをほめたたえさせ、

あなたのおきてを、わが助けとしてください。

一七六 わたしは失われた羊のように迷い出ました。

あなたのしもべを捜し出してください。

わたしはあなたの戒めを忘れないからです。

第二二〇篇

都もうでの歌

一 わたしが悩みのうちに、主に呼ばわると、
主はわたしに答えられる。

二 「主よ、偽りのくちびるから、
欺きの舌から、わたしを助け出してください」。

三 欺きの舌よ、おまえに何が与えられ、
何が増えられるであろうか。

四 ますらおの鋭い矢と、
えにしだの熱い炭とである。

五 わざわいなるかな、わたしはメセクにやどり、
ケダルの天幕のなかに住んでいる。

六 わたしは久しく平安を憎む者のなかに住んでいた。
七 わたしは平安を願う、

しかし、わたしが物言うとき、彼らは戦いを好む。

第二二一篇

都もうでの歌

一 わたしは山にむかつて目をあげる。

わが助けは、どこから来るであろうか。

二 わが助けは、天と地を造られた主から来る。

三 主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。
あなたを守る者はまどろむことがない。

四 見よ、イスラエルを守る者は
まどろむこともなく、眠ることもない。

五 主はあなたを守る者、
主はあなたの右の手をおおう陰である。

六 昼は太陽があなたを撃つことなく、
夜は月があなたを撃つことはない。

七 主はあなたを守つて、すべての災を免れさせ、
またあなたの命を守られる。

八 主は今からとこしえに至るまで、
あなたの出ると入るとを守られるであろう。

第二二二篇

ダビデがよんだ都もうでの歌

一 人々がわたしにむかつて「われらは主の家にこう」
と言ったとき、わたしは喜んだ。

二 エルサレムよ、われらの足は
あなたの門のうちに立っている。

三 しげくつらなつた町のように

建てられているエルサレムよ、
四もろもろの部族すなわち主の部族が、
そこに上つて来て主のみ名に感謝することは、
イスラエルのおきてである。

五そこにさばきの座、
ダビデの家の王座が設けられてあつた。
六エルサレムのために平安を祈れ、

「エルサレムを愛する者は榮え、
七その城壁のうちに平安があり、

もろもろの殿のうちに安全があるように」と。

八わが兄弟および友のために、わたしは
「エルサレムのうちに平安があるように」と言い、
九われらの神、主の家のために、わたしは
エルサレムのさいわいを求めるであらう。

第二二三篇

都もうでの歌

一天に座しておられる者よ、
わたしはあなたにむかつて目をあげます。
二見よ、しもべがその主人の手に目をそそぎ、
はしためがその主婦の手に目をそそぐように、

われらはわれらの神、主に目をそそいで、
われらをあわれまれるのを待ちます。
三主よ、われらをあわれんでください。
われらをあわれんでください。
われらに悔りが満ちあふれています。
四思い煩いのない者のあざけりと、高ぶる者の悔りとは、
われらの魂に満ちあふれています。

第二二四篇

ダビデがよんだ都もうでの歌

一今、イスラエルは言え、
主がもしわれらの方におられなかったならば、
二人々がわれらに逆らつて立ちあがつたとき、
主がもしわれらの方におられなかったならば、
三彼らの怒りがわれらにむかつて燃えたつたとき、
彼らはわれらを生きているままで、のんだであらう。
四また大水はわれらを押し流し、
激流はわれらの上を越え、
五さか巻く水はわれらの上を越えたであらう。
六主はほむべきかな。
主はわれらをえじきとして

彼らの齒にわたされなかった。

セわれらは野鳥を捕えるわなをのがれる
鳥のようにのがれた。

わなは破れてわれらはのがれた。

ハわれらの助けは天地を造られた主のみ名にある。

第二二五篇

都もうでの歌

一 主に信頼する者は、動かされることなくて、

とこしえにあるシオンの山のようである。

ニ山々がエルサレムを囲んでいるように、

主は今からとこしえにその民を囲まれる。

ミこれは悪しき者のつえが

正しい者の所領にとどまることなく、

正しい者がその手を

不義に伸べることはないためである。

四 主よ、善良な人と、

心の正しい人にと、さいわいを施してください。

五 しかし転じて自分の曲つた道に入る者を

主は、悪を行おう者と共に去らせられる。

イスラエルの上に平安があるように。

第二二六篇

都もうでの歌

一 主がシオンの繁栄を回復されたとき、

われらは夢みる者のようであった。

ニ その時われらの口は笑いで満たされ、

われらの舌は喜びの声で満たされた。

その時「主は彼らのために大いなる事をなされた」と

言つた者が、もろもろの国民の中にあつた。

ミ 主はわれらのために大いなる事をなされたので、

われらは喜んだ。

四 主よ、どうか、われらの繁栄を、

ネゲブの川のように回復してください。

五 涙をもつて種まく者は、

喜びの声をもつて刈り取る。

六 種を携え、涙を流して出て行く者は、

束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう。

第二二七篇

ソロモンがよんだ都もうでの歌

一 主が家を建てられるのでなければ、

建てる者の勤勞はむなし。

主が町を守られるのでなければ、
守る者のさめているのはむなし。

二あなたがたが早く起き、おそく休み、

辛苦のかてを食べることは、むなしなことである。
主はその愛する者に、眠っている時にも、

なくてはならぬものを与えられるからである。

三見よ、子供たちは神から賜わった嗣業であり、
胎の実は報いの賜物である。

四壮年の時の子供は勇士の手にある矢のようだ。

五矢の満ちた矢筒を持つ人はさいわいである。

彼は門で敵と物言うとき恥じることはない。

第二二八篇

都もうでの歌

一すべて主をおそれ、主の道に歩む者はさいわいである。

二あなたは自分の手の勤勞の実を食べ、

幸福で、かつ安らかであろう。

三あなたの妻は家の奥にいて

多くの実を結ぶぶどうの木のようにであり、

あなたの子供たちは食卓を囲んで

オリブの若木のようにである。

四見よ、主をおそれる人は、このように祝福を得る。
五主はシオンからあなたを祝福されるように。

あなたは世にあるかぎりエルサレムの繁栄を見、

六またあなたの子らの子を見るであろう。

どうぞ、イスラエルの上に平安があるように。

第二二九篇

都もうでの歌

一今イスラエルは言え、

「彼らはわたしの若い時から、ひどくわたしを悩ました。

二彼らはわたしの若い時から、ひどくわたしを悩ました。

しかしわたしに勝つことができなかつた。

三耕す者はわたしの背の上をたがやして、

そのうねみぞを長くした」と。

四主は正しくいらせられ、

悪しき者のなわを断ち切られた。

五シオンを憎む者はみな、

恥を得て、退くように。

六彼らを、育たないさきに枯れる

屋根の草のようにしてください。

セこれを刈る者はその手に満たず、
これをたばねる者はそのふところに満たない。
ハかたわらを過ぎる者は、
「主の恵みがあなたの上にあるように。
われらは主のみ名によつて
あなたがたを祝福する」と言わない。

第二三〇篇

都もうでの歌

一主よ、わたしは深い淵からあなたに呼ばれる。
ニ主よ、どうか、わが声を聞き、
あなたの耳をわが願いの声に傾けてください。
三主よ、あなたがもし、もろもろの不義に
目をとめられるならば、
主よ、だれが立つことができましょうか。
四しかしあなたには、ゆるしがあるので、
人に恐れかしこまれるでしょう。
五わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。
そのみ言葉によつて、わたしは望みをいただきます。
六わが魂は夜回りが暁を待つにまさり、
夜回りが暁を待つにまさつて主を待ち望みます。

セイスラエルよ、主によつて望みをいだけ。
主には、いつくしみがあり、
また豊かなあがないがあるからです。
ハ主はイスラエルを
そのもろもろの不義からあがなわれます。

第二三一篇

ダビデがよんだ都もうでの歌

一主よ、わが心はおごらず、わが目は高ぶらず、
わたしはわが力の及ばない大いなる事と
くすしきわざとに関係いたしません。
ニかえつて、乳離れしたみどりごが、
その母のふところに安らかにあるように、
わたしはわが魂を静め、かつ安らかにしました。
わが魂は乳離れしたみどりごのように、安らかです。
三イスラエルよ、今からとこしえに
主によつて望みをいだけ。

第二三二篇

都もうでの歌

一 主よ、ダビデのために、
 そのもろもろの辛苦をみこころにとめてください。
 ニ ダビデは主に誓い、
 ヤコブの全能者に誓いを立てて言いました、
 三四五 「わたしは主のために所を捜し出し、
 ヤコブの全能者のためにすまいを求め得るまでは、
 わが家に入らず、わが寝台に上らず、
 わが目に眠りを与えず、
 わがまぶたにまどろみを与えません」。
 六 見よ、われらはエフラタでそれを聞き、
 ヤアルの野でそれを見とめた。
 七 「われらはそのすまいへ行つて、
 その足台のもとにひれ伏そう」。
 ハ 主よ、起きて、あなたの力のはこと共に、
 あなたの安息所におはいりください。
 九 あなたの祭司たちに義をまとわせ、
 あなたの聖徒たちに喜び呼ばらせてください。
 一〇 あなたのしもべダビデのために、
 あなたの油そそがれた者の顔を、
 しりぞけないでください。
 一二 主はまことをもってダビデに誓われたので、
 それにそむくことはない。すなわち言われた、

「わたしはあなたの身から出た子のひとり、
 あなたの位につかせる。
 ニ もしあなたの子らがわたしの教える
 契約と、あかしとを守るならば、
 その子らもまた、とこしえに
 あなたの位に座するであろう」。
 ニ三 主はシオンを選び、
 それをご自分のすみかにしようと望んで言われた、
 ニ四 「これはとこしえにわが安息所である。
 わたしはこれを望んだゆえ、ここに住む。
 ニ五 わたしはシオンの糧食を豊かに祝福し、
 食物をもつてその貧しい者を飽かせる。
 ニ六 またわたしはその祭司たちに救を着せる。
 その聖徒たちは声高らかに喜び呼ばわるであろう。
 ニ七 わたしはダビデのために
 そこに一つの角をはえさせる。
 わたしはわが油そそがれた者のために
 一つのともしびを備えた。
 ニ八 わたしは彼の敵に恥を着せる。
 しかし彼の上にはその冠が輝くであろう」。

第一三三篇

ダビデがよんだ都もうでの歌

一 見よ、兄弟が和合して共におるのは
いかに麗しく楽しいことであろう。
ニ それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、
アロンのひげに流れ、
その衣のえりにまで流れくだるようだ。
ミ またヘルモンの露がシオンの山に下るようだ。
これは主がかしこに祝福を命じ、
とこしえに命を与えられたからである。

第一三四篇

都もうでの歌

一 見よ、夜、主の家に立つて
主に仕えるすべてのしもべよ、
主をほめよ。
ニ 聖所にむかつてあなたがたの手をあげ、
主をほめよ。
ミ どうぞ主、天と地を造られた者、
シオンからあなたを祝福されるように。

第一三五篇

一 主をほめたたえよ、
主の名をほめたたえよ。
主のしもべたちよ、ほめたたえよ。
ニ 主の家に立つ者、
われらの神の家の大庭に立つ者よ、ほめたたえよ。
ミ 主は恵みふかい、主をほめたたえよ。
主は情ぶかい、そのみをほめ歌え。
四 主はおのがためにヤコブを選び、
イスラエルを選んで、おのれの所有とされた。
五 わたしは主のたいなることと、
われらの主のすべての神に
まさることを知っている。
六 主はそのみどころにかなう事を、
天にも地にも、海にもすべての淵にも行われる。
七 主は地のはてから雲をのぼらせ、
雨のためにいなすまを造り、その倉から風を出される。
八 主は人から獣にいたるまで、
エジプトのういごを撃たれた。
九 エジプトよ、主はおまえの中に、
しるしと不思議とを送って、

パロとそのすべてのしもべとに臨のぞまれた。

一〇主は多くの国民を撃ち、
力ある王たちを殺された。

二すなわちアモリびとの王シホン、バシヤンの王オグ、
ならびにカナンのすべての国々である。

二三主は彼らの地を嗣業とし、
その民イスラエルに嗣業として与えられた。

二三主よ、あなたのみ名はとこしえに絶えることがない。
主よ、あなたの名声はよろずよに及ぶ。

一四主はその民をさばき、
そのしもべらにあわれみをかけられるからである。

一五もろもろの国民の偶像はしろがねと、こがねで、
人の手のわざである。

一六それは口があつても語ることができない。
目があつても見ることができない。

一七耳があつても聞くことができない。
またその口には息がない。

一八これを造る者と、これに信頼する者とはみな、
これと等しい者になる。

一九イスラエルの家よ、主をほめよ。
アロンの家よ、主をほめよ。

二〇レビの家よ、主をほめよ。

第一三六篇

主を恐れる者よ、主をほめまつれ。

二エルサレムに住まれる主は、
シオンからほめたたえらるべきである。

主をほめたたえよ。

一主に感謝せよ、主は恵みふかく、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

二もろもろの神の神に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

三もろもろの主の主に感謝せよ、
そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

四ただひとり大いなるくすしきみわざを
なされる者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
五知恵をもって天を造られた者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
六地を水の上に敷かれた者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
七大いなる光を造られた者に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

八 昼をつかさどらすために日を造られた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 九 夜をつかさどらすために月と、
 もろもろの星とを造られた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一〇 エジプトのういごを撃たれた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一一 イスラエルをエジプトびとの中から
 導き出された者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一二 強い手と伸ばした腕とをもつて、
 これを救い出された者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一三 紅海を二つに分けられた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一四 イスラエルにその中を通らせられた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一五 パロとその軍勢とを紅海で
 打ち敗られた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一六 その民を導いて荒野を通らせられた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

一七 大いなる王たちを撃たれた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一八 名ある王たちを殺された者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 一九 アモリびとの王シホンを殺された者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二〇 バシヤンの王オグを殺された者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二一 彼らの地を嗣業として与えられた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二二 そのしもベイスラエルに嗣業として
 これを与えられた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二三 われらが卑しかった時に
 われらをみこころにとめられた者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二四 われらのあだからわれらを
 助け出された者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二五 すべての肉なる者に食物を与えられる者に感謝せよ、
 そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。
 二六 天の神に感謝せよ、

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。

第一三七篇

一 われらは

バビロンの川のほとりにすわり、
シオンを思い出して涙を流した。

ニ われらはその中のやなぎにわれらの琴をかけた。

三 われらをとりにした者が、

われらに歌を求めたからである。

われらを苦しめる者が楽しみにしようと、

「われらにシオンの歌を一つうたえ」と言った。

四 われらは外国にあつて、

どうして主の歌をうたえようか。

五 エルサレムよ、もしわたしがあなたを忘れるならば、

わが右の手を衰えさせてください。

六 もしわたしがあなたを思い出さないならば、

もしわたしがエルサレムを

わが最高の喜びとしないならば、

わが舌をあごにつかせてください。

七 主よ、エドムの人々がエルサレムの日に、

「これを破壊せよ、これを破壊せよ、

その基までも破壊せよ」と
言ったことを覚えてください。

八 破壊者であるバビロンの娘よ、

あなたがわれらにしたことを、

あなたに仕返しする人はさいわいである。

九 あなたのみどりごを取つて

岩になげうつ者はさいわいである。

第一三八篇

ダビデの歌

一 主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、

もろもろの神の前であなたをほめ歌います。

ニ わたしはあなたの聖なる宮にむかつて伏し拝み、

あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、

みなに感謝します。

あなたはそのみ名と、み言葉を

すべてのものにまさって高くされたからです。

三 あなたはわたしが呼ばわった日にわたしに答え、

わが魂の力を増し加えられました。

四 主よ、地のすべての王はあなたに感謝するでしょう。

彼らはあなたの口のもろもろの言葉を

聞いたからです。

五 彼らは主のもろもろの道について歌うでしょう。
主の栄光は大きいからです。

六 主は高くいらせられるが低い者をかえりみられる。
しかし高ぶる者を遠くから知られる。

七 たといわたしが悩みのなかを歩いて、

あなたはわたしを生かし、

み手を伸ばしてわが敵の怒りを防ぎ、

あなたの右の手はわたしを救われます。

八 主はわたしのために、みこころをなしとげられる。
主よ、あなたのいつくしみは

とこしえに絶えることはありません。

あなたのみ手のわざを捨てないでください。

第一三九篇

聖歌隊の指揮者によってうたわせたダビデの歌

一 主よ、あなたはわたしを探り、

わたしを知りつくされました。

二 あなたはわがすわるをも、立つをも知り、

遠くからわが思いをわきまえられます。

三 あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、

わがもろもろの道をことごとく知っておられます。

四 わたしの舌に一言もないのに、

主よ、あなたはことごとくそれを知られます。

五 あなたは後から、前からわたしを囲み、

わたしの上にみ手をおかれます。

六 このような知識はあまりに不思議で、

わたしには思いも及びません。

これは高くて達することはできません。

七 わたしはどこへ行つて、

あなたのみたまを離れましょうか。

わたしはどこへ行つて、

あなたのみ前をのがれましょうか。

八 わたしが天にのぼつても、あなたはそこにおられます。

わたしが陰府に床を設けても、

あなたはそこにおられます。

九 わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、

一〇 あなたのみ手はその所でわたしを導き、

あなたの右のみ手はわたしをささえられます。

一一 「やみはわたしをおおい、

わたしを囲む光は夜となれ」とわたしが言つても、

一二 あなたには、やみも暗くはなく、

夜も昼のように輝きます。

あなたには、やみも光も異なることはありません。

二三 あなたはわが内臓をつくり、

わが母の胎内でわたしを組み立てられました。

二四 わたしはあなたをほめたたえます。

あなたは恐るべく、くすしき方だからです。

あなたのみわざはくすしく、

あなたは最もよくわたしを知っておられます。

二五 わたしが隠れた所で造られ、

地の深い所でつづり合されたとき、

わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。

二六 あなたの目は、

まだできあがらないわたしのからだを見られた。

わたしのためにつくられたわがよわいの日の

まだ一日もなかったとき、

その日はことごとくあなたの書にしろされた。

二七 神よ、あなたのもうしろのみ思いは、

なんとわたしに尊いことでしょう。

その全体はなんと広大なことでしょう。

二八 わたしがこれを数えようとすれば、

その数は砂よりも多い。

わたしが目ざめるとき、

わたしはなおあなたと共にいます。

二九 神よ、どうか悪しき者を殺してください。

血を流す者をわたしから離れ去らせてください。

三〇 彼らは敵意をもってあなたをあなたどおり、

あなたに逆らって高ぶり、悪を行う人々です。

三一 主よ、わたしはあなたを憎む者を憎み、

あなたに逆らって起り立つ者を

いとうではありませんか。

三二 わたしは全く彼らを憎み、

彼らをわたしの敵と 생각합니다。

三三 神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、

わたしを試みて、わがもうしろの思いを

知ってください。

三四 わたしに悪しき道のあるかないかを見て、

わたしをとこしえの道に導いてください。

第一四〇篇

聖歌隊の指揮者によつてうたわせたダビデの歌

一 主よ、悪しき人々からわたしを助け出し、

わたしを守って、

乱暴な人々からのがれさせてください。

二 彼らは心のうちに悪い事をはかり、

絶えず戦いを起します。

三 彼らはへびのようにおのが舌を鋭くし、

そのくちびるの下にはまむしの毒があります。(セラ

四 主よ、わたしを保つて、

悪しき人の手からのがれさせ、

わたしを守つて、わが足をつまずかせようとする

乱暴な人々からのがれさせてください。

五 高ぶる者はわたしのためにわなを伏せ、

綱をもつて綱を張り、

道のほとりにわなを設けました。(セラ

六 わたしは主に言います、「あなたはわが神です。

主よ、わが願いの声に耳を傾けてください。

七 わが救の力、主なる神よ、

あなたは戦いの日に、わがこうべをおおわれました。

八 主よ、悪しき人の願いをゆるさないでください。

その悪しき計画をとげさせないでください。(セラ

九 わたしを囲む者がそのこうべをあげるとき、

そのくちびるの害悪で彼らをおおってください。

一〇 燃える炭を彼らの上に落してください。

彼らを穴に投げ入れ、

再び上がることのできないようにしてください。

二 悪口を言う者を世に立たせないでください。

乱暴な人をすみやかに災に追い捕えさせてください」。

二 わたしは主が苦しむ者の訴えをたすけ、

貧しい者のために正しいさばきを

行われることを知っています。

三 正しい人は必ずみ名に感謝し、

直き人はみ前に住むでしょう。

第一四一篇

ダビデの歌

一 主よ、わたしはあなたに呼びわります。

すみやかにわたしをお助けください。

わたしがあなたに呼びわるとき、

わが声に耳を傾けてください。

二 わたしの祈を、み前にささげる薫香のようにみなし、

わたしのあげる手を、

夕べの供え物のようにみなしてください。

三 主よ、わが口に門守を置いて、

わがくちびるの戸を守ってください。

四 悪しき事にわが心を傾けさせず、

不義を行う人々と共に

悪しきわざにあずからせないでください。

第一四二篇

ダビデがほら穴にいた時によんだマスキールの歌 祈

一 わたしは声を出して主に呼ばわり、
声を出して主に願い求めます。

二 わたしはみ前にわが嘆きを注ぎ出し、
み前にわが悩みをあらわします。

三 わが霊のわがうちに消えうせようとする時も、
あなたはわが道を知られます。

彼らはわたしを捕えようと

わたしの行く道にわなを隠しました。

四 わたしは右の方に目を注いで見回したが、

わたしに心をとめる者はひとりもありません。

わたしには避け所がなく、

わたしをかえりみる人はありません。

五 主よ、わたしはあなたに呼ばわれます。

わたしは言います、「あなたはわが避け所、
生ける者の地でわたしの受くべき分です。

六 どうか、わが叫びにみころをとめてください。

わたしは、はなはだしく低くされています。

わたしを責める者から助け出してください。

彼らはわたしにまさって強いのです。

また彼らのうまき物を食べさせないでください。

五 正しい者にいつくしみをもつてわたしを打たせ、
わたしを責めさせてください。

しかし悪しき者の油をわがこうべに
そそがせないでください。

わが祈は絶えず彼らの悪しきわざに
敵しているからです。

六 彼らはおのれを罪に定める者にわたされるとき、
主のみ言葉のまことなることを学ぶでしょう。

七 人が岩を裂いて地の上に打ち砕くように、

彼らの骨は陰府の口にまき散らされるでしょう。

しかし主なる神よ、わが目はあなたに向かっています。

わたしはあなたに寄り頼みます。

わたしを助けるものもないままに
捨ておかないでください。

九 わたしを守って、

彼らがわたしのために設けたわなと、

悪を行う者のわなとをのがれさせてください。

一〇 わたしのがれると同時に、

悪しき者をおのれの網に陥らせてください。

第一四三篇

ダビデの歌

セわたしをひとやから出し、
み名に感謝させてください。
あなたが豊かにわたしをあしらわれるので、
正しい人々はわたしのまわりに集まるでしょう。

一 主よ、わが祈を聞き、

わが願いに耳を傾けてください。

あなたの真実と、あなたの正義とをもって、

わたしにお答えください。

二 あなたのしもべのさばきに

たずさわらないでください。

生ける者はひとりもみ前に義とされないからです。

三 敵はわたしをせめ、

わがいのちを地に踏みにじり、

死んで久しく時を経た者のように

わたしを暗い所に住ませました。

四 それゆえ、わが霊はわがうちに消えうせようとし、

わが心はわがうちに荒れさびれています。

五 わたしはいにしえの日を思い出し、

あなたが行われたすべての事を考え、
あなたのみ手のわざを思い出します。

六 わたしはあなたにむかつて手を伸べ、

わが魂は、かわききった地のように

あなたを慕います。(セラ)

七 主よ、すみやかにわたしにお答えください。

わが霊は衰えます。

わたしにみ顔を隠さないでください。

さもないと、わたしは穴にくだる者のようにならでしよう。

ハ あしたに、あなたのいつくしみを聞かせてください。

わたしはあなたに信頼します。

わが歩むべき道を教えてください。

わが魂はあなたを仰ぎ望みます。

九 主よ、わたしをわが敵から助け出してください。

わたしは避け所を得るために

あなたのもとにのがれました。

一〇 あなたのみむねを行うことを教えてください。

あなたはわが神です。

恵みふかい、みたまをもつて

わたしを平らかな道に導いてください。

二 主よ、み名のために、わたしを生かし、

第一四四篇

ダビデの歌

あなたの義ぎによつて、
 わたしを悩みなやから救すくい出だしてください。
 二 また、あなたのいつくしみによつて、わが敵てきを断たち、
 わがあだをことごとく滅ほろぼしてください。
 わたしはあなたのしもべです。

一 わが岩いわなる主しゅはほむべきかな。
 主しゅは、いくさすることをわが手てに教おしえ、
 戦たたかうことをわが指ゆびに教おしえられます。
 二 主はわが岩いわ、わが城しろ、
 わが高たかきやぐら、わが救すくい主ぬし、
 わが盾たて、わが寄より頼たのむ者ものです。
 主はもろもろの民たみをおのれに従したがわせます。
 三 主よ、人は何なにものなので、あなたはこれをかえりみ、
 人の子ひとこは何なにものなので、
 これをみこころに、とめられるのですか。
 四 人は息いきにひとしく、
 その日は過ぎゆく影かげにひとしいのです。
 五 主よ、あなたの天てんを垂たれてくだり、

山やまに触ふれて煙けむりを出ださせてください。
 六 いなずまを放はなつて彼らかれを散ちらし、
 矢やを放はなつて彼らかれを打うち敗やぶつてください。
 七 高い所ところからみ手を伸のべて、わたしを救すくい、
 大水おおみづから、異邦人いほうじんの手てから
 わたしを助たすけ出だしてください。
 八 彼らかれの口くちは偽いつわりを言いい、
 その右みぎの手ては偽いつわりの右みぎの手てです。
 九 神かみよ、わたしは新しい歌うたをあなたにむかつて歌うたい、
 十 弦じゆげんの立琴たてことにあわせてあなたをほめ歌うたいます。
 一〇 あなたは王おうたちに勝しょう利りを与あたえ、
 そのしもべダビデを救すくわれます。
 二 わたしを残忍ざんにんなつるぎから救すくい、
 異邦人いほうじんの手てから助たすけ出だしてください。
 彼らかれの口くちは偽いつわりを言いい、
 その右みぎの手ては偽いつわりの右みぎの手てです。
 三 われらのむすこたちはその若い時とき、
 よく育そだつた草木くさきのようです。
 われらの娘むすめたちは宮みやの建物たてもののために刻きざまれた
 すみの柱はしらのようです。
 三 われらの倉くらは満みちて様々さまざまの物ものを備そなえ、
 われらの羊ひつじは野のでちよろずの子こを産うみ、

第一四五篇

ダビデのさんびの歌

一四われらの家畜はみごもつて子を産むに誤ることなく、
われらのちまたには悩みの叫びがありません。
一五このような祝福をもつ民はさいわいです。
主をおのが神とする民はさいわいです。

一わが神、王よ、わたしはあなたをあがめ、
世々かぎりなくみ名をほめまつります。

ニわたしは日ごとあなたをほめ、

世々かぎりなくみ名をほめたたえます。

三主は大いなる神で、

大いにほめたたえらるべきです。

その大いなることは測り知ることができません。

四この代はかの代にむかつて

あなたのみわざをほめたたえ、

あなたの大能のはたらきを宣べ伝えるでしょう。

五わたしはあなたの威厳の光栄ある輝きと、

あなたのくすしきみわざとを深く思います。

六人々はあなたの恐るべきはたらきの勢いを語り、

わたしはあなたの大いなることを宣べ伝えます。

七彼らはあなたの豊かな恵みの思い出を言いあらわし、
あなたの義を喜び歌うでしょう。

八主は恵みふかく、あわれみに満ち、

怒ることおそく、いつくしみ豊かです。

九主はすべてのものに恵みがあり、

そのあわれみはすべてのみわざの上にあります。

一〇主よ、あなたのすべてのみわざはあなたに感謝し、

あなたの聖徒はあなたをほめまつるでしょう。

二彼らはみ国の栄光を語り、あなたのみ力を宣べ、

三あなたの大能のはたらきと、

み国の光栄ある輝きとを人の子に知らせるでしょう。

四あなたの国はとこしえの国です。

あなたのまつりごとはよろこぶに

絶えることはありません。

五主はすべて倒れんとする者をささえ、

すべてかがむ者を立たせられます。

六よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。

あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。

七あなたはみ手を開いて、

すべての生けるものの願いを飽かせられます。

八主はそのすべての道に正しく、

そのすべてのみわざに恵みふかく、

第一四六篇

一八すべて主を呼ぶ者、誠をもって主を呼ぶ者に主は近いのです。
 一九主はおのれを恐れる者の願いを満たし、またその叫びを聞いてこれを救われます。
 二〇主はおのれを愛する者をすべて守られるが、悪しき者をことごとく滅ぼされます。
 二一わが口は主の誉を語り、すべての肉なる者は世々かぎりなくその聖なるみ名をほめまつるでしょう。

一主をほめたたえよ。
 わが魂よ、主をほめたたえよ。
 ニわたしは生けるかぎり主をほめたたえ、ながらえる間は、わが神をほめうたおう。
 三もろもろの君に信頼してはならない。
 四その息が出ていけば彼は土に帰る。
 その日には彼のもろもろの計画は滅びる。
 五ヤコブの神をおのが助けとし、

第一四七篇

その望みをおのが神、主におく人はさいわいである。
 六主は天と地と、海と、その中にあるあらゆるものを造り、とこしえに真実を守り、
 七しえたげられる者のためにさばきをおこない、飢えた者に食物を与えられる。
 主は捕われ人を解き放たれる。
 ハ主は盲人の目を開かれる。
 主はかがむ者を立たせられる。
 主は正しい者を愛される。
 九主は寄留の他国人を守り、みなしごと、やもめとをささえられる。
 しかし、悪しき者の道を滅びに至らせられる。
 一〇主はとこしえに統べ治められる。
 シオンよ、あなたの神はよろず代まで統べ治められる。
 主をほめたたえよ。

一主をほめたたえよ。
 われらの神をほめうたうことはよいことである。
 主は恵みふかい。

さんびはふさわしいことである。

二主はエルサレムを築き、

イスラエルの追いやられた者を集められる。

三主は心の打ち砕かれた者をいやし、

その傷を包まれる。

四主はもろもろの星の数を定め、

すべてそれに名を与えられる。

五われらの主は大いなる神、

力も豊かであつて、その知恵ははかりがたい。

六主はしえたげられた者をささえ、

悪しき者を地に投げ捨てられる。

七主に感謝して歌え、

琴にあわせてわれらの神をほめうたえ。

八主は雲をもつて天をおおい、地のために雨を備え、

もろもろの山に草をはえさせ、

九食物を獣に与え、

また鳴く小がらすに与えられる。

一〇主は馬の力を喜ばれず、

人の足をよみせられない。

二主はおのれを恐れる者

そのいつくしみを望む者とをよみせられる。

三エルサレムよ、主をほめたたえよ。

シオンよ、あなたの神をほめたたえよ。

三主はあなたの門の貫の木を堅くし、

あなたのうちにいる子らを祝福されるからである。

四主はあなたの国境を安らかにし、

最も良い麦をもつてあなたを飽かせられる。

五主はその戒めを地に下される。

そのみ言葉はすみやかに走る。

六主は雪を羊の毛のように降らせ、

霜を灰のようにまかれる。

七主は氷をパンくずのように投げうたれる。

だれがその寒さに耐えることができましょうか。

八主はみ言葉を下してこれを溶かし、

その風を吹かせられると、もろもろの水は流れる。

九主はそのみ言葉をヤコブに示し、

そのもろもろの定めと、おきてとを

イスラエルに示される。

一〇主はいずれの国民をも、

このようにはあしらわれなかった。

彼らは主のもろもろのおきてを知らない。

主をほめたたえよ。

第一四八篇

一 主をほめたたえよ。

もろもろの天から主をほめたたえよ。

もろもろの高き所で主をほめたたえよ。

二 その天使よ、みな主をほめたたえよ。

その万軍よ、みな主をほめたたえよ。

三日よ、月よ、主をほめたたえよ。

輝く星よ、みな主をほめたたえよ。

四 いと高き天よ、天の上にある水よ、

主をほめたたえよ。

五 これらのものに主のみ名をほめたたえさせよ、

これらは主が命じられると造られたからである。

六 主はこれらをとこしえに堅く定め、

越えることのできないその境を定められた。

七 海の獣よ、すべての淵よ、地から主をほめたたえよ。

八 火よ、あられよ、雪よ、霜よ、み言葉を行うあらしよ、

九 もろもろの山、すべての丘、

実を結ぶ木、すべての香柏よ、

一〇 野の獣、すべての家畜、這うもの、翼ある鳥よ、

二 地の王たち、すべての民、

君たち、地のすべてのつかさよ、

第一四九篇

一 主をほめたたえよ。

主にむかつて新しい歌をうたえ。

聖徒のついで、主の誉を歌え。

ニイスラエルにその造り主を喜ばせ、

シオンの子らにその王を喜ばせよ。

三 彼らに踊りをもつて主のみ名をほめたたえさせ、

鼓と琴とをもつて主をほめ歌わせよ。

四 主はおのが民を喜び、

へりくだる者を勝利をもつて飾られるからである。

五 聖徒を栄光によって喜ばせ、

二 若い男子、若い女子、老いた人と若い者よ、
三 彼らをして主のみ名をほめたたえさせよ。
そのみ名は高く、たぐいなく、
その栄光は地と天の上にあるからである。
四 主はその民のために一つの角をあげられた。
これはすべての聖徒のほめたたえるもの、
主に近いイスラエルの人々の
ほめたたえるものである。
主をほめたたえよ。

第一五〇篇

その床とこの上うへで喜びよろこび歌うたわせよ。
 六 そののどには神かみをあがめる歌うたがあり、
 その手てにはもろ刃はのつるぎがある。
 七 これはもろもろの国くににあだを返し、
 もろもろの民たみを懲こらし、
 八 彼らかれの王おうたちを鎖くさりで縛しばり、
 彼らかれの貴人きじんたちを鉄てつのかせで縛しばりつけ、
 九 しるされたさばきを彼らかれに行おこなうためである。
 これはすべての聖徒せいとに与あたえられる誉ほまれである。
 主しゅをほめたたえよ。

緒琴おごとと笛ふえをもつて主しゅをほめたたえよ。
 五 音おとの高いシンバルをもつて主しゅをほめたたえよ。
 鳴りひびくシンバルをもつて主しゅをほめたたえよ。
 六 息いきのあるすべてのものに主しゅをほめたたえさせよ。
 主しゅをほめたたえよ。

一 主しゅをほめたたえよ。
 その聖所せいじよで神かみをほめたたえよ。
 その力ちからのあらわれる大空おおぞらで主しゅをほめたたえよ。
 二 その大能たのうのはたらきのゆえに主しゅをほめたたえよ。
 そのすぐれて大いなることおおのゆえに
 主しゅをほめたたえよ。
 ミラツバの声こえをもつて主しゅをほめたたえよ。
 立琴たちごとと琴ことをもつて主しゅをほめたたえよ。
 四 鼓つづみと踊りおどをもつて主しゅをほめたたえよ。

箴言
しんげん

第一章

一 ダビデの子、イスラエルの王ソロモンの箴言。
二 これは人に知恵と教訓とを知らせ、
悟りの言葉をさとらせ、
三 賢い行いと、正義と公正と
公平の教訓をうけさせ、
四 思慮のない者に悟りを与え、
若い者に知識と慎みを得させるためである。
五 賢い者はこれを聞いて学に進み、
さとい者は指導を得る。
六 人はこれによつて箴言と、たとえと、
賢い者の言葉と、そのなぞとを悟る。
七 主を恐れることは知識のはじめである、
愚かな者は知恵と教訓を軽んじる。
八 わが子よ、あなたは父の教訓を聞き、
母の教を捨ててはならない。
九 それらは、あなたの頭の麗しい冠となり、
あなたの首の飾りとなるからである。
一〇 わが子よ、悪者があなたを誘つても、

それに従つてはならない。
二 彼らがあなたに向かつて、「一緒に来なさい。
われわれは待ち伏せして、人の血を流し、
罪のない者を、ゆえなく伏してねらい、
三 陰府のように、彼らを生きたままで、のみ返し、
健やかな者を、墓に下る者のようにしよう。
三 われわれは、さまたまの尊い貨財を得、
奪い取った物で、われわれの家を満たそう。
四 あなたもわれわれの仲間に加わりなさい、
われわれは共に一つの金袋を持つ」と言つても、
五 わが子よ、彼らの仲間になつてはならない、
あなたの足をとどめて、彼らの道に行つてはならない。
六 彼らの足は悪に走り、
血を流すことに速いからだ。
七 すべての鳥の目の前で
網を張るのは、むだである。
八 彼らは自分の血を待ち伏せし、
自分の命を伏してねらうのだ。
九 すべての利をむさぼる者の道はこのようなものである。
これはその持ち主の命を取り去るのだ。
一〇 知恵は、ちまたに呼ばわり、
市場にその声をあげ、

三 城壁の頂で叫び、町の門の入口で語る。

三 「思慮のない者たちよ、あなたがたは、いつまで思慮のないことを好むのか。

あざける者は、いつまで、あざけり楽しみ、愚かな者は、いつまで、知識を憎むのか。

三 わたしの戒めに心をとめよ、見よ、わたしは自分の思いを、あなたがたに告げ、わたしの言葉を、あなたがたに知らせる。

二 四 わたしは呼んだが、あなたがたは聞くことを拒み、手を伸べたが、顧みる者はなく、

二 五 かえつて、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、わたしの戒めを受けなかったので、

二 六 わたしもまた、あなたがたが災にあう時に、笑い、あなたがたが恐慌にあう時、あざけるであろう。

二 七 これは恐慌が、あらしのようにあなたがたに臨み、災が、つむじ風のように臨み、

悩みと悲しみとが、あなたがたに臨む時である。

二 八 その時、彼らはわたしを呼ぶであろう、しかし、わたしは答えない。

ひたすら、わたしを求めるであろう、しかし、わたしに会えない。

二 九 彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、

第二章

三〇 わたしの勧めに従わず、

すべての戒めを軽んじたゆえ、

三 一 自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる。

三 二 思慮のない者の不従順はおのれを殺し、愚かな者の安樂はおのれを滅ぼす。

三 三 しかし、わたしに聞き従う者は安らかに住まい、災に会う恐れもなく、安全である」。

一 わが子よ、もしあなたが

わたしの言葉を受け、

わたしの戒めを、あなたの心におさめ、

二 あなたの耳を知恵に傾け、

あなたの心を悟りに向け、

三 しかも、もし知識を呼び求め、悟りを得ようと、あなたの声をあげ、

四 銀を求めるように、これを求め、かくれた宝を尋ねるように、これを尋ねるならば、

五 あなたは、主を恐れることを悟り、神を知ることができるようになる。

六 これは、主が知恵を与え、
 知識と悟りとは、み口から出るからである。
 七 彼は正しい人のために、確かな知恵をたくわえ、
 誠実に歩む者の盾となつて、
 ハ 公正の道を保ち、その聖徒たちの道筋を守られる。
 九 そのとき、あなたは、ついに正義と公正、
 公平とすべての良い道を悟る。
 一〇 これは知恵が、あなたの心にはいり、
 知識があなたの魂に楽しみとなるからである。
 一一 慎みはあなたを守り、
 悟りはあなたを保つて、
 一二 悪の道からあなたを救い、
 偽りをいう者から救う。
 一三 彼らは正しい道を離れて、暗い道に歩み、
 一四 悪を行うことを楽しみ、悪人の偽りを喜び、
 一五 その道は曲り、その行いは、よこしまである。
 一六 慎みと悟りはまたあなたを遊女から救い、
 言葉の巧みな、みだらな女から救う。
 一七 彼女は若い時の友を捨て、
 その神に契約したことを忘れている。
 一八 その家は死に下り、その道は陰府におもむく。
 一九 すべて彼女のもとへ行く者は、帰らない、

第三章

また命の道にいたらない。
 二〇 こうして、あなたは善良な人々の道に歩み、
 正しい人々の道を守ることができる。
 二一 正しい人は地にながらえ、
 誠実な人は地にとどまる。
 二二 しかし悪しき者は地から断ち滅ぼされ、
 不信実な者は地から抜き捨てられる。
 一 わが子よ、わたしの教を忘れず、
 わたしの戒めを心にとめよ。
 二 そうすれば、これはあなたの日を長くし、
 命の年を延べ、あなたに平安を増し加える。
 三 いつくしみと、まことを捨ててはならない、
 それをあなたの首に結び、心の碑にするせ。
 四 そうすれば、あなたは神と人との前に
 恵みと、誉とを得る。
 五 心をつくして主に信頼せよ、
 自分の知識にたよつてはならない。
 六 すべての道で主を認めよ、
 そうすれば、主はあなたの道をまつすぐにされる。

七 自分を見て賢いと思つてはならない、主を恐れて、悪を離れよ。

八 そうすれば、あなたの身を健やかにし、あなたの骨に元氣を与える。

九 あなたの財産と、

すべての産物の初なりをもつて主をあがめよ。

一〇 そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、

あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。

二 わが子よ、主の懲しめを軽んじてはならない、その戒めをきらつてはならない。

三 主は、愛する者を、戒められるからである、

あたかも父がその愛する子を戒めるように。

三 知恵を求めて得る人、

悟りを得る人はさいわいである。

四 知恵によつて得るものは、

銀によつて得るものにまさり、

その利益は精金よりも良いからである。

五 知恵は宝石よりも尊く、

あなたの望む何物も、これと比べるに足りない。

一六 その右の手には長寿があり、

左の手には富と、誉がある。

一七 その道は楽しい道であり、

その道筋はみな平安である。

一八 知恵は、これを捕える者には命の木である、これをしつかり捕える人はさいわいである。

一九 主は知恵をもつて地の基をすえ、

悟りをもつて天を定められた。

二〇 その知識によつて海はわきいで、雲は露をそそぐ。

二 わが子よ、確かな知恵と、憤みとを守つて、

それをあなたの目から離してはならない。

三 それはあなたの魂の命となり

あなたの首の飾りとなる。

三三 こうして、あなたは安らかに自分の道を行き、

あなたの足はつまずくことがない。

二四 あなたは座しているとき、恐れることはなく、

伏すとき、あなたの眠りはこころよい。

二五 あなたはにわかに起る恐怖を恐れることなく、

悪しき者の滅びが来ても、それを恐れることはない。

二六 これは、主があなたの信頼する者であり、

あなたの足を守つて、

わなに捕われさせられないからである。

二七 あなたの手に善をなす力があるならば、

これをなすべき人になすことを

さし控えてはならない。

第四章

二八あなたが物を持つている時、その隣り人に向かい、
「去つて、また来なさい。」

あす、それをあげよう」と言つてはならない。

二九あなたの隣り人がかたわらに安らかに住んでいる時、
これに向かつて、悪を計つてはならない。

三〇もし人があなたに悪を行つたのでなければ、
ゆえなく、これと争つてはならない。

三一暴虐な人を、うらやんではならない、

そのすべての道を選んでではない。

三二よこしまな者は主に憎まれるからである、
しかし、正しい者は主に信任される。

三三主の、のろいは悪しき者の家にある、
しかし、正しい人のすまいは主に恵まれる。

三四彼はあざける者をあざけり、
へりくだる者に恵みを与えられる。

三五知恵ある者は、誉を得る、
しかし、愚かな者ははずかしめを得る。

一子供らよ、父の教を聞き、
悟りを得るために耳を傾けよ。

二わたしは、良い教訓を、あなたがたにさずける。
わたしの教を捨ててはならない。

三わたしもわが父には子であり、
わが母の目には、ひとりのいとし子であつた。

四父はわたしを教えて言つた、
「わたしの言葉を、心に留め、

わたしの戒めを守つて、命を得よ。」

五それを忘れることなく、
またわが口の言葉にそむいてはならない、

知恵を得よ、悟りを得よ。
六知恵を捨てるな、それはあなたを守る。

七知恵の初めはこれである、知恵を得よ、
それを愛せよ、それはあなたを保つ。

八あなたが何を求めるにしても、悟りを得よ。
九それを尊べ、そうすれば、それはあなたを高くあげる、

もしそれをいだくならば、それはあなたを尊くする。
一〇それはあなたの頭に麗しい飾りを置き、

栄えの冠をあなたに与える」。

一〇わが子よ、聞け、わたしの言葉をうけいれよ、
そうすれば、あなたの命の年は多くなる。

二わたしは知恵の道をあなたに教え、
正しい道筋にあなたを導いた。

- 二 あなたが歩くとき、その歩みは妨げられず、
 走る時にも、つまずくことはない。
- 三 教訓をかたくとらえて、離してはならない、
 それを守れ、それはあなたの命である。
- 四 よこしまな者の道に、はいってはいならない、
 悪しき者の道を歩んではならない。
- 五 それを避けよ、通つてはいならない、
 それを離れて進め。
- 六 彼らは悪を行わなければ眠ることができず、
 人をつまづかせなければ、寝ることができず、
- 七 不正のパンを食らい、暴虐の酒を飲むからである。
- 八 正しい者の道は、夜明けの光のようだ、
 いよいよ輝きを増して真昼となる。
- 九 悪しき人の道は暗やみのようだ、
 彼らは何につまずくかを知らない。
- 一〇 わが子よ、わたしの言葉に心をとめ、
 わたしの語ることに耳を傾けよ。
- 一一 それを、あなたの目から離さず、
 あなたの心のうちに守れ。
- 一二 それは、これを得る者の命であり、
 またその全身を健やかにするからである。
- 一三 油断することなく、あなたの心を守れ、

第五章

- 命の泉は、これから流れ出るからである。
- 二 曲つた言葉をあなたから捨てさり、
 よこしまな談話をあなたから遠ざけよ。
- 三 あなたは、まっすぐに正面を見、
 あなたのまぶたはあなたの前を、まっすぐに見よ。
- 四 あなたの足の道に気をつけよ、
 そうすれば、あなたのすべての道は安全である。
- 五 右にも左にも迷い出てはいならない、
 あなたの足を悪から離れさせよ。
- 一 わが子よ、わたしの知恵に心をとめ、
 わたしの悟りに耳をかたむけよ。
- 二 これは、あなたが慎みを守り、
 あなたのくちびるに知識を保つためである。
- 三 遊女のくちびるは蜜をしたたらせ、
 その言葉は油よりもなめらかである。
- 四 かしついいには、彼女はにがよもぎのように苦く、
 もろ刃のつるぎのように鋭くなる。
- 五 その足は死に下り、
 その歩みは陰府の道におもむく。

六 彼女はいのちの道に心をとめず、
 その道は人を迷わすが、彼女はそれを知らない。
 七 子供らよ、今わたしの言うことを聞け、
 わたしの口の言葉から、離れ去つてはならない。
 ハ あなたの道を彼女から遠く離し、
 その家の門に近づいてはならない。
 九 おそらくはあなたがあなたの譽を他人にわたし、
 あなたの年を無慈悲な者にわたすに至る。
 一〇 おそらくは他人があなたの資産によって満たされ、
 あなたの労苦は他人の家に行く。
 一一 としてあなたの終りが来て、
 あなたの身と、からだが減びるとき、泣き悲しんで、
 一二 言うであろう、「わたしは教訓をいとい、
 心に戒めを軽んじ、
 一三 教師の声に聞き従わず、
 わたしを教える者に耳を傾けず、
 一四 集まりの中、会衆のうちにあって、
 わたしは、破滅に陥りかけた」と。
 一五 あなたは自分の水ためから水を飲み、
 自分の井戸から、わき出す水を飲むがよい。
 一六 あなたの泉を、外にまきちらし、
 水の流れを、ちまたに流してよからうか。

第六章

一七 それを自分だけのものとし、
 他人を共にあずからせてはならない。
 一八 あなたの泉に祝福を受けさせ、
 あなたの若い時の妻を楽しめ。
 一九 彼女は愛らしい雌じか、美しいかのようだ。
 いつも、その乳ぶさをもつて満足し、
 その愛をもつて常に喜べ。
 二〇 わが子よ、どうして遊女に迷い、
 みだらな女の胸をいだくのか。
 二一 人の道は主の目の前にあり、
 主はすべて、その行いを見守られる。
 二三 悪しき者は自分のとがに捕えられ、
 自分の罪のなわにつなされる。
 二四 彼は、教訓がないために死に、
 その愚かさの大きいことよって滅びる。

一 わが子よ、あなたがもし
 隣り人のために保証人となり、
 他人のために手をうって誓ったならば、
 二 もしあなたのくちびるの言葉によつて、
 わなにかかり、

あなたの口の言葉によつて捕えられたならば、
 ミわが子よ、その時はこうして、おのれを救え、
 あなたは隣り人の手に陥つたのだから。
 急いで行つて、隣り人にひたすら求めよ。
 四あなたの目を眠らせず、
 あなたのまぶたを、まどろませず、
 五かもしかが、かりゆうどの手からのがれるように、
 鳥が鳥を取る者の手からのがれるように、
 おのれを救え。
 六なまけ者よ、ありのところへ行き、
 そのすることを見て、知恵を得よ。
 七ありは、かしらなく、つかさなく、王もないが、
 八夏のうちに食物をそなえ、
 刈入れの時に、かてを集める。
 九なまけ者よ、いつまで寝ているのか、
 いつ目をさまして起きるのか。
 一〇しばらく眠り、しばらくまどろみ、
 手をこまぬいて、またしばらく休む。
 二それゆえ、貧しさは盗びとのようにあなたに來り、
 乏しさは、つわもののようにあなたに來る。
 三よこしまな人、悪しき人は
 偽りの言葉をもつて行きめぐり、

三目でめくばせし、足で踏み鳴らし、指で示し、
 四よこしまな心をもつて悪を計り、
 絶えず争いをおこす。
 五それゆえ、災は、にわかに彼に臨み、
 たちまちにして打ち敗られ、助かることはない。
 六主の憎まれるものが六つある、
 否、その心に、忌みきらわれるものが七つある。
 七すなわち、高ぶる目、偽りを言う舌、
 罪なき人の血を流す手、
 八悪しき計りごとをめぐらす心、
 すみやかに悪に走る足、
 九偽りをのべる証人、
 また兄弟のうちに争いをおこす人がこれである。
 一〇わが子よ、あなたの父の戒めを守り、
 あなたの母の教を捨てな。
 二つねに、これをあなたの心に結び、
 あなたの首のまわりにつけよ。
 三これは、あなたが歩くとき、あなたを導き、
 あなたが寝るとき、あなたを守り、
 あなたが目ざめるとき、あなたと語る。
 三戒めはともしびである、教は光である、
 教訓の懲しめは命の道である。

二四 これは、あなたを守つて、悪い女に近づかせず、みだらな女の、巧みな舌に惑わされぬようにする。
 二五 彼女の麗しさを心に慕つてはならない、そのまぶたに捕えられてはならない。
 二六 遊女は一塊のパンのために雇われる、しかし、みだらな女は人の尊い命を求める。
 二七 人は火を、そのふところにいだいてその着物が焼かれぬであらうか。
 二八 また人は、熱い火を踏んで、その足が、焼かれぬであらうか。
 二九 その隣の妻と不義を行う者も、それと同じだ。すべて彼女に触れる者は罰を免れることはできない。
 三〇 盗びとが飢えたとき、その飢えを満たすために盗むならば、人は彼を軽んじないであらうか。
 三一 もし捕えられたなら、その七倍を償い、その家の貨財を、ことごとく出さなければならぬ。
 三二 女と姦淫を行う者は思慮がない。これを行う者はおのれを滅ぼし、
 三三 傷と、はずかしめとを受けて、その恥をすぐことができない。
 三四 ねたみは、その夫を激しく怒らせるゆえ、

第七章

恨みを報いるとき、容赦することはない。
 三五 どのようなあがない物をも顧みず、多くの贈り物をして、和らがない。
 一 わが子よ、わたしの言葉を守り、わたしの戒めをあなたの心にたくわえよ。
 二 わたしの戒めを守つて命を得よ、わたしの教を守ること、ひとみを守るようにせよ。
 三 これをあなたの指にむすび、これをあなたの心の碑にするせ。
 四 知恵に向かつて、「あなたはわが姉妹だ」と言い、悟りに向かつては、あなたの友と呼べ。
 五 そうすれば、これはあなたを守つて遊女に迷わせず、言葉巧みな、みだらな女に近づかせない。
 六 わたしはわが家の窓により、格子窓から外をのぞいて、
 七 思慮のない者のうちに、若い者のうちに、ひとりの知恵のない若者のいるのを見た。
 八 彼はちまたを過ぎ、女の家に行く曲りかどに近づき、その家に行く道を、

九 たそがれに、よいに、

また夜中に、また暗やみに歩いていった。

一〇 見よ、遊女の装いをした陰険な女が彼に会う。

一一 この女は、騒がしくて、慎みなく、

その足は自分の家にとどまらず、

一二 ある時はちまたにあり、ある時は市場にあり、

すみずみに立って人をうかがう。

一三 この女は彼を捕えて口づけし、

恥しらぬ顔で彼に言う、

一四 「わたしは酬恩祭をささげなければならなかったが、

きよう、その誓いを果たしました。

一五 それでわたしはあなたを迎えようとして出て、

あなたを尋ね、あなたに会いました。

一六 わたしは床に美しい、しとねと、

エジプトのあや布を敷き、

一七 没薬、ろかい、桂皮をもつて

わたしの床をおわせました。

一八 さあ、わたしたちは夜が明けるまで、

情をつくし、愛をかわして楽しみましょう。

一九 夫は家にいません、

遠くへ旅立ち、

二〇 手に金袋を持って出ました。

満月になるまでは帰りません」と。

二 女が多くの、なまめかしい言葉をもって彼を惑わし、

巧みなくちびるをもつて、いざなうと、

三 若い人は直ちに女に従った、

あたかも牛が、ほふり場に行くように、

雄じかが、すみやかに捕えられ、

三三 ついに、矢がその内臓を突き刺すように、

鳥がすみやかに網にかかるように、

彼は自分が命を失うようになることを知らない。

三四 子供らよ、今わたしの言うことを聞き、

わが口の言葉に耳を傾けよ。

三五 あなたの心を彼女の道に傾けてはならない、

またその道に迷ってはならない。

三六 彼女は多くの人を傷つけて倒した、

まことに、彼女に殺された者は多い。

三七 その家は陰府へ行く道であつて、

死のへやへ下って行く。

第八章

一 知恵は呼ばわらないのか、

悟りは声をあげないのか。

二これは道のほとりの高い所の頂、

また、ちまたの中に立ち、

三町の入口にあるもろもろの門のかたわら、

正門の入口で呼ばわつて言う、

四「人々よ、わたしはあなたがたに呼ばわり、

声をあげて人の子らと呼ぶ。

五思慮のない者よ、悟りを得よ、

愚かな者よ、知恵を得よ。

六聞け、わたしは高貴な事を語り、

わがくちびるは正しい事を語り出す。

七わが口は眞実を述べ、

わがくちびるは悪しき事を憎む。

八わが口の言葉はみな正しい、

そのうちに偽りと、よこしまはない。

九これはみな、さとき者の明らかにするところ、

知識を得る者の正しとするところである。

一〇あなたがたは銀を受けるよりも、わたしの教を受けよ、

精金よりも、むしろ知識を得よ。

一一知恵は宝石にまさり、

あなたがたの望むすべての物は、

これと比べるにたりない。

一二知恵であるわたしは悟りをすみかとし、

知識と慎みとをもつ。

一三主を恐れるとは悪を憎むことである。

わたしは高ぶりと、おごりと、悪しき道と、

偽りの言葉とを憎む。

一四計りごとと、確かな知恵とは、わたしにある、

わたしには悟りがあり、わたしには力がある。

一五わたしによつて、王たる者は世を治め、

君たる者は正しい定めを立てる。

一六わたしによつて、主たる者は支配し、

つかさたる者は地を治める。

一七わたしは、わたしを愛する者を愛する、

わたしをせつに求める者は、わたしに出会う。

一八富と誉とはわたしにあり、

すぐれた宝と繁栄もまたそうである。

一九わたしの実は金よりも精金よりも良く、

わたしの産物は精銀にまさる。

二〇わたしは正義の道、公正な道筋の中を歩み、

二わたしを愛する者に宝を得させ、

またその倉を満ちさせる。

二三主が昔そのわざをなし始められるとき、

そのわざの初めとして、わたしを造られた。

二四いにしえ、地のなかつた時、

初めに、わたしは立てられた。

二四 まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、わたしはすでに生れ、

二五 山もまだ定められず、丘もまだなかった時、わたしはすでに生れた。

二六 すなわち神がまだ地をも野をも、地のちりのもとをも造られなかった時である。

二七 彼が天を造り、海のおもてに、大空を張られたとき、わたしはそこにあつた。

二八 彼が上に空を堅く立たせ、淵の泉をつよく定め、

二九 海にその限界をたて、水にその岸を越えないようにし、

また地の基を定められたとき、
三〇 わたしは、そのかたわらにあつて、名匠となり、

日々に喜び、常にその前に楽しみ、
三一 その地で楽しみ、

また世の人を喜んだ。
三二 それゆえ、子供らよ、今わたしの言うことを聞け、

わたしの道を守る者はさいわいである。
三三 教訓を聞いて、知恵を得よ、

これを捨ててはならない。

第九章

三三 わたしの言うことを聞き、

日々わたしの門のかたわらでうかがい、わたしの戸口の柱のわきで待つ人はさいわいである。

三五 それは、わたしを得る者は命を得、主から恵みを得るからである。

三六 わたしを失う者は自分の命をそこなう、すべてわたしを憎む者は死を愛する者である」。

一 知恵は自分の家を建て、

その七つの柱を立て、
二 獣をほふり、酒を混ぜ合わせて、

ふるまいを備え、

三 はしためをつかわして、町の高い所で呼ばわり言わせた、
四 「思慮のない者よ、ここに来れ」と。

また、知恵のない者に言う、
五 「来て、わたしのパンを食べ、

わたしの混ぜ合わせた酒をのみ、
六 思慮のないわざを捨てて命を得、

悟りの道を歩め」と。

七 あざける者を戒める者は、自ら恥を得、
 悪しき者を責める者は自ら傷を受ける。
 ハ あざける者を責めるな、
 おそらく彼はあなたを憎むであろう。
 知恵ある者を責めよ、彼はあなたを愛する。
 九 知恵ある者に教訓を授けよ、
 彼はますます知恵を得る。
 正しい者を教えよ、彼は学に進む。
 一〇 主を恐れることは知恵のもとである、
 聖なる者を知ることが、悟りである。
 二 わたしによつて、あなたの日は多くなり、
 あなたの命の年は増す。
 三 もしあなたがたに知恵があるならば、
 あなた自身のために知恵があるのである。
 もしあなたがあざけるならば、
 あなたひとりとその責めを負うことになる。
 三 愚かな女は、騒がしく、みだらで、恥を知らない。
 四 彼女は家の戸口に座し、
 町の高い所にある座にすわり、
 五 道を急ぐ行き来の人を招いて言う、
 一六 「思慮のない者よ、ここに来れ」と。
 また知恵のない人に向かつてこれに言う、

第二〇章

一七 「盗んだ水は甘く、
 ひそかに食べるパンはうまい」と。
 一八 かしその人は、死の影がそこにあることを知らず、
 彼女の客は陰府の深みにおけることを知らない。
 一 ソロモンの箴言。
 知恵ある子は父を喜ばせ、
 愚かな子は母の悲しみとなる。
 二 不義の宝は益なく、
 正義は人を救い出して、死を免れさせる。
 三 主は正しい人を飢えさせず、
 悪しき者の欲望をくじかれる。
 四 手を動かすことを怠る者は貧しくなり、
 勤め働く者の手は富を得る。
 五 夏のうちに集める者は賢い子であり、
 刈入れの時に眠る者は恥をきたらせる子である。
 六 正しい者のこうべには祝福があり、
 悪しき者の口は暴虐を隠す。
 七 正しい者の名はほめられ、
 悪しき者の名は朽ちる。

八 心のさとき者は戒めを受ける、
 むだ口をたたく愚かな者は滅ぼされる。
 九 まつすぐに歩む者の歩みは安全である、
 しかし、その道を曲げる者は災にあう。
 一〇 目で、めくばせする者は憂いをおこし、
 あからさまに、戒める者は平和をきたらせる。
 一一 正しい者の口は命の泉である、
 悪しき者の口は暴虐を隠す。
 一二 憎しみは、争いを起し、
 愛はすべてのとがをおおう。
 一三 さとき者のくちびるには知恵があり、
 知恵のない者の背にはむちがある。
 一四 知恵ある者は知識をたくわえる、
 愚かな者のむだ口は、今にも滅びをきたらせる。
 一五 富める者の宝は、その堅き城であり、
 貧しい者の乏しきは、その滅びである。
 一六 正しい者の受ける賃銀は命に導き、
 悪しき者の利得は罪に至る。
 一七 教訓を守る者は命の道にあり、
 懲しめを捨てては道はふみ迷う。
 一八 憎しみを隠す者には偽りのくちびるがあり、
 そしりを口に出す者は愚かな者である。

一九 言葉が多ければ、とがを免れない、
 自分のくちびるを制する者は知恵がある。
 二〇 正しい者の舌は精銀である、
 悪しき者の心は価値が少ない。
 二一 正しい者のくちびるは多くの人を養い、
 愚かな者は知恵がなくて死ぬ。
 二二 主の祝福は人を富ませる、
 主はこれになんの悲しみをも加えない。
 二三 愚かな者は、戯れ事のように悪を行う、
 さとき人には賢い行いが楽しみである。
 二四 悪しき者の恐れることは自分に来り、
 正しい者の願うことは与えられる。
 二五 あらしが通りすぎる時、
 悪しき者は、もはや、いなくなり、
 正しい者は永久に堅く立てられる。
 二六 なまけ者は、これをつかわす者にとつては、
 酢が歯をいため、煙が目を悩ますようなものだ。
 二七 主を恐れることは人の命の日を多くする、
 悪しき者の年は縮められる。
 二八 正しい者の望みは喜びに終り、
 悪しき者の望みは絶える。
 二九 主は、まつすぐに歩む者には城であり、

第二章

悪あくを行おこなう者ものには滅ほろびである。

一〇 正しい者ただはいつまでも動うごかされることはない、

悪あくしき者ものは、地ちに住すむことができない。

一一 正しい者ただの口くちは知恵ちえをいだし、

偽いつわりの舌したは抜ぬかれる。

一二 正しい者ただのくちびるは喜よろこばるべきことをわきまえ、

悪あくしき者ものの口くちは偽いつわりを語かたる。

一 偽いつわりのはかりは主しゅに憎にくまれ、

正ただしいふんどうは彼かれに喜よろこばれる。

二 高たかぶりが来くれば、恥はじもまた来くる、

へりくだる者ものには知恵ちえがある。

三 正しい者ただの誠実せいじつはその人ひとを導みちびき、

不信実ふしんじつな者もののよこしまはその人ひとを滅ほろぼす。

四 宝たからは怒いかりの日ひに益えきなく、

正義せいぎは人ひとを救すくい出して、死しを免まぬかれさせる。

五 誠実せいじつな者ものは、その正義せいぎによつて、

その道みちをまっすぐにせられ、

悪あくしき者ものは、その悪あくによつて倒たふれる。

六 正しい者ただはその正義せいぎによつて救すくわれ、

不信実ふしんじつな者ものは自分じぶんの欲よくによつて捕とらえられる。

七 悪あくしき者ものは死ぬしぬとき、その望のぞみは絶たえ、

不信心ふしんじんな者ものの望のぞみもまた絶たえる。

八 正しい者ただは、悩なやみから救すくわれ、

悪あくしき者ものは代かわつてそれに陥おちい。

九 不信心ふしんじんな者ものはその口くちをもつて隣となり人ひとを滅ほろぼす、

正しい者ただは知識ちしきによつて救すくわれる。

一〇 正しい者ただが、しあわせになれば、その町まちは喜よろこび、

悪あくしき者ものが滅ほろびると、喜よろこびの声こゑがおこる。

一一 町まちは正しい者ただの祝しゆくふく福ふくによつて、高たかくあげられ、

悪あくしき者ものの口くちによつて、滅ほろぼされる。

一二 隣となり人ひとを侮あなどる者ものは知恵ちえがない、

さとき人ひとは口くちをつぐむ。

一三 人ひとのよしあしを言いいあるく者ものは秘密ひみつをもらす、

心こころの忠信ちゅうしんなる者ものは事ことを隠かくす。

一四 指導しどう者しやがなければ民たみは倒たふれ、

助言じよげん者しやが多おほければ安全あんぜんである。

一五 他人たにんのために保証ほしょうをする者ものは苦くるしみをうけ、

保証ほしょうをきかう者ものは安全あんぜんである。

一六 しとやかな女おんなは、誉ほまれを得え、

強暴きやうぼうな男おとこは富とみを得える。

一七 いつくしみある者ものはおのれ自身じしんに益えきを得え、

残忍な者はおのれの身をそこなう。

一八 悪しき者の得る報いはむなしく、正義を播く者は確かな報いを得る。

一九 正義を堅く保つ者は命に至り、悪を追ひ求める者は死を招く。

二〇 心のねじけた者は主に憎まれ、まっすぐに道を歩む者は彼に喜ばれる。

二一 確かに、悪人は罰を免れない、しかし正しい人は救を得る。

二二 美しい女の憤みがないのは、金の輪の、ぶたの鼻にあるようだ。

二三 正しい者の願いは、すべて良い結果を得、悪しき者の望みは怒りに至る。

二四 施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、

かえつて貧しくなる者がある。

二五 物惜しみしない者は富み、人を潤す者は自分も潤される。

二六 穀物を、しまい込んで売らない者は民にのろわれる、それを売る者のこうべには祝福がある。

二七 善を求める者は恵みを得る、悪を求める者には悪が来る。

第二二章

二八 自分の富を頼む者は衰える、正しい者は木の青葉のように栄える。

二九 自分の家族を苦しめる者は風を所有とする、愚かな者は心のさとき者のしもべとなる。

三〇 正しい者の結ぶ実は命の木である、不法な者は人の命をとる。

三一 もし正しい者がこの世で罰せられるならば、悪しき者と罪びとは、なおさらである。

一 戒めを愛する人は知識を愛する、懲しめを憎む者は愚かである。

二 善人は主の恵みをうけ、悪い計りごとを設ける人は主に罰せられる。

三 人は悪をもつて堅く立つことはできない、正しい人の根は動くことはない。

四 賢い妻はその夫の冠である、恥をこうむらせる妻は

夫の骨に生じた腐れのようなものである。

五 正しい人の考えは公正である、悪しき者の計ることは偽りである。

六 悪しき者の言葉は、人の血を流そうとうかがう、
 正しい人の口は人を救う。
 七 悪しき者は倒されて、うせ去る、
 正しい人の家は堅く立つ。
 八 人はその悟りにしたがって、ほめられ、
 心のねじけた者は、卑しめられる。
 九 身分の低い人でも自分で働く者は、
 みずから高ぶって食に乏しい者にまさる。
 一〇 正しい人はその家畜の命を顧みる、
 悪しき者は残忍をもつて、あわれみとする。
 二 自分の田地を耕す者は食糧に飽きる、
 無益な事に従う者は知恵がない。
 三 悪しき者の堅固なやぐらは崩壊する、
 正しい人の根は堅く立つ。
 四 悪人はくちびるのどがよって、わなに陥る、
 しかし正しい人は悩みをのがれる。
 五 人はその口の実によつて、幸福に満ち足り、
 人の手のわざは、その人の身に帰る。
 六 愚かな人の道は、自分の目に正しく見える、
 しかし知恵ある者は勧めをいれる。
 七 愚かな人は、すぐに怒りをあらわす、
 しかし賢い人は、はずかしめをも氣にとめない。

七 眞実を語る人は正しい証言をなし、
 偽りの証人は偽りを言う。
 八 つるぎをもつて刺すように、
 みだりに言葉を出す者がある、
 しかし知恵ある人の舌は人をいやす。
 九 眞実を言うくちびるは、いつまでも保つ、
 偽りを言う舌は、ただ、まばたきの間だけである。
 一〇 悪をたくらむ者の心には欺きがあり、
 善をはかる人には喜びがある。
 二 正しい人にはなんの害悪も生じない、
 しかし悪しき者は災をもつて満たされる。
 三 偽りを言うくちびるは主に憎まれ、
 眞実を行う者は彼に喜ばれる。
 四 さとき人は知識をかくす、
 しかし愚かな者は自分の愚かなことをあらわす。
 五 勤め働く者の手はついに人を治める、
 怠る者は人に仕えるようになる。
 六 心に憂いがあればその人をかませる、
 しかし親切な言葉はその人を喜ばせる。
 七 正しい人は悪を離れ去る、
 しかし悪しき者は自ら道に迷う。
 八 怠る者は自分の獲物を捕えない、

第二章

しかし勤め働く人は尊い宝を獲る。

二八正義の道には命がある、

しかし誤りの道は死に至る。

一 知恵ある子は父の教訓をきく、

あざける者は、懲しめをきかない。

二 善良な人はその口の実によって、幸福を得る、

不信実な者の願いは、暴虐である。

三口を守る者はその命を守る、

くちびるを大きく開く者には滅びが来る。

四 なまけ者の心は、願い求めても、何も得ない、

しかし勤め働く者の心は豊かに満たされる。

五 正しい人は偽りを憎む、

しかし悪しき人は恥ずべく、忌まわしくふるまう。

六 正義は道をまつすぐ歩む者を守り、

罪は悪しき者を倒す。

七 富んでいると偽って、何も持たない者がいる、

貧しいと偽って、多くの富を持つ者がいる。

八 人の富はその命をあがなう、

しかし貧しい者にはあがなうべき富がない。

九 正しい者の光は輝き、

悪しき者のともしびは消される。

一〇 高ぶりはただ争いを生じる、

勧告をきく者は知恵がある。

二 急いで得た富は減る、

少しづつたくわえる者はそれを増すことができる。

三 望みを得ることが長びくときは、心を悩ます、

願いがかなうときは、命の木を得たようだ。

三三 言葉の軽んじる者は滅ぼされ、

戒めを重んじる者は報いを得る。

三四 知恵ある人の教は命の泉である、

これによって死のわなをのがれることができる。

三五 善良な賢い者は恵みを得る、

しかし、不信実な者の道は滅びである。

一六 おおよそ、さとき者は知識によって事をおこない、

愚かな者は自分の愚を見せびらかす。

一七 悪しき使者は人を災におとし入れる、

しかし忠実な使者は人を救う。

一八 貧乏と、はずかしめとは教訓を捨てて来る者に、

しかし戒めを守る者は尊ばれる。

一九 願いがかなえば、心は楽しい、

愚かな者は悪を捨ててをきらう。

第一章

一〇 知恵ある者とともに歩む者は知恵を得る。
 愚かな者の友となる者は害をうける。
 二 災は罪びとを追ひ、
 正しい者は良い報いを受ける。
 三 善良な人はその嗣業を子孫にのこす、
 しかし罪びとの富は正しい人のためにたくわえられる。
 三 貧しい人の新田は多くの食糧を産する、
 しかし不正によれば押し流される。
 二四 むちを加えない者はその子を憎むのである、
 子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる。
 二五 正しい者は食べてその食欲を満たす、
 しかし悪しき者の腹は満たされない。

一 知恵はその家を建て、
 愚かさは自分の手でそれをこわす。
 二 まっすぐに歩む者は主を恐れる、
 曲つて歩む者は主を侮る。
 三 愚かな者の言葉は自分の背にむちを当てる、
 知恵ある者のくちびるはその身を守る。
 四 牛がなければ穀物はない、

牛の力によつて農作物は多くなる。
 五 眞実な証人はうそをいわない、
 偽りの証人はうそをつく。
 六 あざける者は知恵を求めても得られない、
 さとき者は知識を得ることがたやすい。
 七 愚かな者の前を離れ去れ、
 そこには知識の言葉がないからである。
 ハ さとき者の知恵は自分の道をわきまえることにあり、
 愚かな者の愚かは、欺くことにある。
 九 神は悪しき者をあざけられる、
 正しい者は、その恵みを受ける。
 一〇 心の苦しみは心みずからが知る、
 その喜びには他人はあずからない。
 二 悪しき者の家は滅ぼされ、
 正しい者の幕屋は栄える。
 三 三人が見て自ら正しいとする道でも、
 その終りはついに死に至る道となるものがある。
 三 笑う時にも心に悲しみがあがり、
 喜びのはてに憂いがある。
 四 心のもとれる者はそのしわざの実を刈り取り、
 善良な人もまたその行いの実を刈り取る。
 五 思慮のない者はすべてのことを信じる、

さとき者は自分の歩みを慎む。

一六 知恵ある者は用心ぶかく、悪を離れる、愚かな者は高ぶって用心しない。

一七 怒りやすい者は愚かなことを行い、賢い者は忍耐強い。

一八 思慮のない者は愚かなことを自分のものとする、さとき者は知識をもって冠とする。

一九 悪人は善人の前にひれ伏し、悪しき者は正しい者の門にひれ伏す。

二〇 貧しい者はその隣にさえも憎まれる、しかし富める者は多くの友をもつ。

二一 隣り人を卑しめる者は罪びとである、貧しい人をあわれむ者はさいわいである。

二二 悪を計る者はおのれを誤るではないか、善を計る者にはいつくしみと、まこととがある。

二三 すべての勤労には利益がある、しかし口先だけの言葉は貧乏をきたらせるだけだ。

二四 知恵ある者の冠はその知恵である、愚かな者の花の冠はただ愚かさである。

二五 まことの証人は人の命を救う、偽りを吐く者は裏切者である。

二六 主を恐れることによって人は安心を得、

その子らはのがれ場を得る。

二七 主を恐れることは命の泉である、人を死のわなからのがれさせる。

二八 王の榮えは民の多いことにあり、君の滅びは民を失うことにある。

二九 怒りをおそくする者は大いなる悟りがあり、気の短い者は愚かさをあらわす。

三〇 穏やかな心は身の命である、しかし興奮は骨を腐らせる。

三一 貧しい者をしえたげる者はその造り主を侮る、乏しい者をあわれむ者は、主をうやまう。

三二 悪しき者はその悪しき行いによって滅ぼされ、正しい者はその正しき行いによって、のがれ場を得る。

三三 知恵はさとき者の心にとどまり、愚かな者の心に知られない。

三四 正義は国を高くし、罪は民をはずかしめる。

三五 賢いしもべは王の恵みをうけ、恥をきたらす者はその怒りにあう。

第一章

一 柔かい答は憤りをとどめ、
 激しい言葉は怒りをひきおこす。
 二 知恵ある者の舌は知識をわかち与え、
 愚かな者の口は愚かを吐き出す。
 三 主の目はどこにでもあつて、
 悪人と善人を見張っている。
 四 優しい舌は命の木である、
 乱暴な言葉は魂を傷つける。
 五 愚かな者は父の教訓を軽んじる、
 戒めを守る者は賢い者である。
 六 正しい者の家には多くの宝がある、
 悪しき者の所得には煩いがある。
 七 知恵ある者のくちびるは知識をひろめる、
 愚かな者の心はそうでない。
 八 悪しき者の供え物は主に憎まれ、
 正しい者の祈は彼に喜ばれる。
 九 悪しき者の道は主に憎まれ、
 正義を求める者は彼に愛せられる。
 一〇 道を捨てる者には、きびしい懲しめがあり、
 戒めを憎む者は死に至る。

二 陰府と滅びとは主の目の前にあり、
 人の心はなおさらである。
 三 あざける者は戒められることを好まない、
 また知恵ある者に近づかない。
 三 心に楽しみがあれば顔色も喜ばしい、
 心に憂いがあれば気はふさぐ。
 四 さとき者の心は知識をたずね、
 愚かな者の口は愚かさを食物とする。
 五 悩んでいる者の日々はことごとくつらく、
 心の楽しい人は常に宴会をもつ。
 六 少しの物を所有して主を恐れるのは、
 多くの宝をもつて苦労するのにまさる。
 七 野菜を食べて互に愛するのは、
 肥えた牛を食べて互に憎むのにまさる。
 八 憤りやすい者は争いをおこし、
 怒りをおそくする者は争いをとどめる。
 九 なまけ者の道には、いばらがはえしげり、
 正しい者の道は平らかである。
 一〇 知恵ある子は父を喜ばせる、
 愚かな人はその母を軽んじる。
 二 無知な者は愚かなことを喜び、
 さとき者はまっすぐに歩む。

三 相はかることがなければ、計画は破れる、
はかる者が多ければ、それは必ず成る。

三 人は口から出る好ましい答によって喜びを得る、
時になつた言葉は、いかにも良いものだ。

二四 知恵ある人の道は上つて命に至る、

こうしてその人は下にある陰府を離れる。

二五 主は高ぶる者の家を滅ぼし、

やもめの地境を定められる。

二六 悪人の計りことは主に憎まれ、

潔白な人の言葉は彼に喜ばれる。

二七 不正な利をむさぼる者はその家を煩らわせる、
まいないを憎む者は生きながらえる。

二八 正しい者の心は答えるべきことを考える、

悪しき者の口は悪を吐き出す。

二九 主は悪しき者に遠ざかり、正しい者の祈を聞かれる。

三〇 目の光は心を喜ばせ、

よい知らせは骨を潤す。

三 ためになる戒めを聞く耳をもつ者は、

知恵ある者の中にとどまる。

三 教訓を捨てる者はおのれの命を軽んじ、

戒めを重んじる者は悟りを得る。

三 主を恐れることは知恵の教訓である、

謙遜は、榮譽に先だつ。

第一六章

一心にはかることは人に属し、

舌の答は主から出る。

二人の道は自分の目にことごとく潔しと見える、

しかし主は人の魂をはかられる。

三 あなたはなすべき事を主にゆだねよ、

そうすれば、あなたの計るところは必ず成る。

四 主はすべての物をおのおのその用のために造り、

悪しき人をも災の日のために造られた。

五 すべて心に高ぶる者は主に憎まれる、

確かに、彼は罰を免れない。

六 いつくしみとまことによつて、とがはあがなわれる、

主を恐れることによつて、人は悪を免れる。

七 人の道が主を喜ばせる時、

主はその人の敵をもその人と和らがせられる。

八 正義によつて得たわずかなものは、

不義によつて得た多くの宝にまさる。

九 人は心に自分の道を考え計る、

しかし、その歩みを導く者は主である。

一〇王のくちびるには神の決定がある、
 さばきをするとき、その口に誤りがない。
 一一正しいはかりと天びんとは主のものである、
 袋にあるふんどうもすべて彼の造られたものである。
 一二悪を行うことは王の憎むところである、
 その位が正義によつて堅く立つてゐるからである。
 一三正しいくちびるは王に喜ばれる、
 彼は正しい事を言う者を愛する。
 一四王の怒りは死の使者である、
 知恵ある人はこれをなだめる。
 一五王の顔の光には命がある、
 彼の恵みは春雨をもたらす雲のようだ。
 一六知恵を得るのは金を得るのにまさる、
 悟りを得るのは銀を得るよりも望ましい。
 一七悪を離れることは正しい人の道である、
 自分の道を守る者はその魂を守る。
 一八高ぶりは滅びにさきだち、
 誇る心は倒れにさきだつ。
 一九へりくだつて貧しい人々と共にゐるのは、
 高ぶる者と共にいて、獲物を分けるにまさる。
 二〇慎んで、み言葉をおこなう者は栄える、
 主に寄り頼む者はさいわいである。

二一心に知恵ある者はさとき者となえられる、
 くちびるが甘ければ、
 その教に人を説きつける力を増す。
 二二知恵はこれを持つ者に命の泉となる、
 しかし、愚かさは愚かな者の受ける懲しめである。
 二三知恵ある者の心はその言うところを賢くし、
 またそのくちびるに人を説きつける力を増す。
 二四ここちよい言葉は蜂蜜のように、
 魂に甘く、からだを健やかにする。
 二五人が見て自分で正しいとする道があり、
 その終りはついに死にいたる道となるものがある。
 二六ほねおる者は飲食のためにほねおる、
 その口が自分に迫るからである。
 二七よこしまな人は悪を企てる、
 そのくちびるには激しい火のようなものがある。
 二八偽る者は争いを起し、
 つげ口する者は親しい友を離れさせる。
 二九しえたげる者はその隣り人をいざない、
 これを良くない道に導く。
 三〇めくばせする者は悪を計り、
 くちびるを縮める者は悪事をなし遂げる。
 三一しらは栄えの冠である、

第一章

正しく生きることによつてそれが得られる。
 三 怒りをおそくする者は勇士にまさり、
 自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。
 三 人はくじをひく、
 しかし事を定めるのは全く主のことである。

一 平穩であつて、

ひとかたまりのかわいたパンのあるのは、
 争いがあつて、食物の豊かな家にまさる。
 二 賢いしもべは身持の悪いむすこを治め、
 かつ、その兄弟たちの中にあつて、
 資産の分け前を獲る。

三 銀を試みるものはるつば、金を試みるものは炉、
 人の心を試みるものは主である。

四 悪を行う者は偽りのくちびるに聞き、
 偽りをいう者は悪しき舌に耳を傾ける。

五 貧しい者をあざける者はその造り主を侮る、
 人の災を喜ぶ者は罰を免れない。

六 孫は老人の冠である、
 父は子の榮えである。

七 すぐれた言葉は愚かな者には似合わない、
 まして偽りを言うくちびるは
 君たる者には似合わない。

八 まいないはこれを贈る人の目には幸運の玉のようだ、
 その向かう所、どこでも彼は榮える。

九 愛を追い求める人は人のあやまちをゆるす、
 人のことを言いふらす者は友を離れさせる。

一〇 一度の戒めがさとき人に徹するのは、
 百度の懲しめが愚かな人に徹するよりも深い。

二 悪しき者はただ、そむく事のみを求め、
 それゆえ、彼に向かつては残忍な使者がつかかわされる。

三 愚かな者が愚かな事をするのに会うよりは、
 子をとられた雌ぐまに会うほうがよい。

三 悪をもて善に報いる者は、
 悪がその家を離れることがない。

四 争いの初めは水がもれるのに似ている、
 それゆえ、けんかの起らないうちにそれをやめよ。

五 悪しき者を正しいとする者、正しい者を悪いとする者、
 この二つの者はともに主に憎まれる。

六 愚かな者はすでに心が無いのに、
 どうして知恵を買おうとして

手にその代金を持つてゐるのか。

一七 友はいずれの時にも愛する、
兄弟はなやみの時のために生れる。
一八 知恵のない人は手をうって、
その隣り人の前で保証をする。
一九 争いを好む者は罪を好む、
その門を高くする者は滅びを求める。
二〇 曲つた心の者はさいわいを得ない、
みだりに舌をもつて語る者は災に陥る。
二一 愚かな子を生む者は嘆きを得る、
愚か者の父は喜びを得ない。
二二 心の楽しみは良い薬である、
たましいの憂いは骨を枯らす。
二三 悪しき者は人のふところからまいないを受けて、
さばきの道をまげる。
二四 さとき者はその顔を知恵にむける、
しかし、愚かな者は目を地の果にそそぐ。
二五 愚かな子はその父の憂いである、
またこれを産んだ母の痛みである。
二六 正しい人を罰するのはよくない、
尊い人を打つのは悪い。
二七 言葉を少なくする者は知識のある者、
心の冷静な人はさとき人である。

第八章

一八 愚かな者も黙っているときは、知恵ある者と思われ、
そのくちびるを閉じている時は、さとき者と思われる。
一人と交わりをしない者は口実を捜し、
すべてのよい考えに激しく反対する。
二 愚かな者は悟ることを喜ばず、
ただ自分の意見を言い表わすことを喜ぶ。
三 悪しき者が来ると、卑しめもまた来る、
不名誉が来ると、はずかしめも共にくる。
四人の口の言葉は深い水のように、
知恵の泉は、わいて流れる川である。
五 悪しき者をえこひいきすることは良くない、
正しい者をさばいて、悪しき者とすることも良くない。
六 愚かな者のくちびるは争いを起し、
その口はむち打たれることを招く。
七 愚かな者の口は自分の滅びとなり、
そのくちびるは自分を捕えるわなとなる。
八 人のよしあしをいう者の言葉は
おいしい食物のようで、腹の奥にしみこむ。
九 その仕事を怠る者は、滅ぼす者の兄弟である。

一〇 主の名は堅固なやぐらのようだ、
正しい者はその中に走りこんで救を得る。
二 富める者の富はその堅き城である、
それは高き城壁のように彼を守る。
三 人の心の高ぶりは滅びにさきだち、
謙遜は榮譽にさきだつ。
四 三事をよく聞かないで答える者は、
愚かであつて恥をこうむる。
五 四人の心は病苦をも忍ぶ、
しかし心の痛むときは、だれがそれに耐えようか。
六 五さとき者の心は知識を得、
知恵ある者の耳は知識を求める。
七 六人の贈り物は、その人のために道をひらき、
また尊い人の前に彼を導く。
八 七先に訴え出る者は正しいように見える、
しかしその訴えられた人が来て、それを調べて、事は明らかになる。
九 八くじは争いをとどめ、
かつ強い争い相手の間を決定する。
一〇 九助けあう兄弟は堅固な城のようだ、
しかし争いは、やぐらの貫の木のようにだ。
一一 人は自分の言葉の結ぶ実によつて、

第十九章

満ち足り、そのくちびるの産物によつて自ら飽きる。
二 死と生とは舌に支配される、
これを愛する者はその実を食べる。
三 妻を得る者は、良き物を得る、
かつ主から恵みを与えられる。
四 三貧しい者は、あわれみを請い、
富める者は、はげしい答をする。
五 四世には友らしい見せかけの友がある、
しかし兄弟よりもたのもしき友もある。
六 一正しく歩む貧しい者は、
曲つたことを言う愚かな者にまさる。
七 二人が知識のないのは良くない、
足で急ぐ者は道に迷う。
八 三人は自分の愚かさによつて道につまずき、
かえつて心のうちに主をうらむ。
九 四富は多くの新しい友を作る、
しかし貧しい人はその友に捨てられる。
一〇 五偽りの証人は罰を免れない、
偽りをいう者はのがれることができない。

六 気前のよい人にこびる者は多い、
 人はみな贈り物をする人の友となる。
 七 貧しい者はその兄弟すらもみなこれを憎む、
 ましてその友はこれに遠ざからないであらうか。
 言葉をかけてこれと呼んでも、
 去つて帰らないのである。
 ハ 知恵を得る者は自分の魂を愛し、
 悟りを保つ者は幸を得る。
 九 偽りの証人は罰を免れない、
 偽りをいう者は滅びる。
 一〇 愚かな者が、ぜいたくな暮しをするのは、
 ふさわしいことではない、
 しもべたる者が、君たる者を治めるなどは、
 なおさらである。
 一一 悟りは人に怒りを忍ばせる、
 あやまちをゆるすのは人の譽である。
 一二 王の怒りは、ししのほえるようであり、
 その恵みは草の上におく露のようである。
 一三 愚かな子はその父の災である、
 妻の争うのは、雨漏りの絶えないのとひとしい。
 一四 家と富とは先祖からうけつぐもの、
 賢い妻は主から賜わるものである。

一五 怠り人は人を熟睡させる、
 なまけ者は飢える。
 一六 戒めを守る者は自分の魂を守る、
 み言葉を軽んじる者は死ぬ。
 一七 貧しい者をあわれむ者は主に貸すのだ、
 その施しは主が償われる。
 一八 望みのあるうちに、自分の子を懲らせ、
 これを滅ぼす心を起してはならない。
 一九 怒ることの激しい者は罰をうける、
 たとい彼を救つてやつても、
 さらにくり返さねばならない。
 二〇 勧めを聞き、教訓をうけよ、
 そうすれば、ついには知恵ある者となる。
 二一 人の心には多くの計画がある、
 しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ。
 二二 三人に望ましいのは、いつくしみ深いことである、
 貧しい人は偽りをいう人にまさる。
 二三 主を恐れることは人を命に至らせ、
 常に飽き足りて、災にあうことはない。
 二四 なまけ者は、手を皿に入れても、
 それを口を持つてゆくことをしない。
 二五 あざける者を打て、そうすれば思慮のない者も慎む。

第二〇章

さとき者を戒めよ、そうすれば彼は知識を得る。

二六 父に乱暴をはたらき、母を追い出す者は、

恥をきたらし、はずかしめをまねく子である。

二七 わが子よ、知識の言葉をはなれて人を迷わせる

教訓を聞くことをやめよ。

二八 悪い証人はさばきをあざけり、

悪しき者の口は悪をむさぼり食う。

二九 さばきはあざける者のために備えられ、

むちは愚かな者の背のために備えられる。

一 酒は人をあざける者とし、

濃い酒は人をあばれ者とする、

これに迷わされる者は無知である。

二 王の怒りは、ししがほえるようだ、

彼を怒らせる者は自分の命をそこなう。

三 争いに関係しないことは人の誉である、

すべて愚かな者は怒り争う。

四 なまけ者は寒いときに耕さない、

それゆえ刈入れのときになって、求めても何も無い。

五人の心にある計りごととは深い井戸の水のようだ、

しかし、さとき人はこれをくみ出す。

六 自分は真実だという人が多い、

しかし、だれが忠信な人に会うであろうか。

七 欠けた所なく、正しく歩む人――

その後の子孫はさいわいである。

八 さばきの座にすわる王は

その目をもつて、すべての悪をふるいわけける。

九 だれが「わたしは自分の心を清めた、

わたしの罪は清められた」ということができようか。

一〇 互に違つた二種のはかり、二種のますは、

ひとしく主に憎まれる。

二 幼な子でさえも、その行いによつて自らを示し、

そのすることの清いか正しいかを現す。

三 聞く耳と、見る目とは、

ともに主が造られたものである。

三 眠りを愛してはならない、そうすれば貧しくなる、

目を開け、そうすればパンに飽くことができる。

四 買う者は、「悪い、悪い」という、

しかし去つて後、彼は自ら誇る。

五 金もあり、価の高い宝石も多くあるが、

尊い器は知識のくちびるである。

一六 人のために保証する者からは、まずその着物を取れ、

他人のために保証する者をば抵当に取れ。

一七 欺き取ったパンはおいしい、

しかし後にはその口は砂利で満たされる。

一八 計りごととは共に議することによって成る、

戦おうとするならば、まずよく議しなければならぬ。

一九 歩きまわって人のよしあしをいう者は秘密をもらす、
くちびるを開いて歩く者と交わってはならない。

二〇 自分の父母をのしる者は、

そのともしびは暗やみの中に消える。

二一 初めに急いで得た資産は、

その終りがさいわいでない。

二二 「わたしが悪に報いる」と言つてはならない、

主を待ち望め、主はあなたを助けられる。

二三 互に違つた二種のふんどうは主に憎まれる、

偽りのはかりは良くない。

二四 人の歩みは主によって定められる、

人はどうして自らその道を、

明らかにすることができようか。

二五 軽々しく「これは聖なるさきげ物だ」と言い、

また誓いを立てて後に考えることは、

その人のわなとなる。

二六 知恵ある王は、

第二章

箕をもつてあおぎ分けるように悪人を散らし、
車をもつて脱殺するように、これを罰する。

二七 人の魂は主のともしびであり、人の心の奥を探る。

二八 いつくしみと、まこととは王を守る、

その位もまた正義によって保たれる。

二九 若い人の榮えはその力、

老人の美しさはそのしらがである。

三〇 傷つくまでに打てば悪い所は清くなり、

むちで打てば心の底までも清まる。

一 王の心は、主の手のうちにあつて、

水の流れのようだ、

主はみこころのままにこれを導かれる。

二人の道は自分の目には正しく見える、

しかし主は人の心をはかられる。

三 正義と公平を行うことは、

犠牲にもまさつて主に喜ばれる。

四 高ぶる目とおごる心とは、

悪しき人のともしびであつて、罪である。

五 勤勉な人の計画は、ついにその人を豊かにする、

すべて怠るものは貧しくなる。

六 偽りの舌をもつて宝を得るのは、

吹きはらわれる煙、死のわなである。

七 悪しき者の暴虐はその身を滅ぼす、

彼らは公平を行うことを好まないからである。

八 罪びとの道は曲っている、

潔白な人の行いはまっすぐである。

九 争いを好む女と一緒に家におるよりは

屋根のすみにおるほうがよい。

一〇 悪しき者の魂は悪を行うことを願う、

その隣り人にも好意をもつて見られない。

一一 あざけるものが罰をうけるならば、

思慮のない者は知恵を得る。

知恵ある者が教をうけるならば知識を得る。

一二 正しい神は、悪しき者の家をもとめて、

悪しき者を滅びに投げいれられる。

一三 耳を閉じて貧しい者の呼ぶ声を聞かない者は、

自分が呼ぶときに、聞かれぬ。

一四 ひそかな贈り物は憤りをなだめる、

ふところのまいないは激しい怒りを和らげる。

一五 公義を行うことは、正しい者には喜びであるが、

悪を行う者には滅びである。

一六 悟りの道を離れる人は、
死人の集会の中におる。

一七 快樂を好む者は貧しい人となり、

酒と油とを好む者は富むことがない。

一八 悪しき者は正しい者のあがないとなり、

不信実な者は正しい人に代る。

一九 争い怒る女と共にあるよりは、

荒野に住むほうがましだ。

二〇 知恵ある者の家には尊い宝があり、

愚かな人はこれを、のみ尽す。

二一 正義といつくしみを追い求める者は、

命と誉とを得る。

二二 知恵ある者は強い者の城にのぼって、

その頼みとするとりでをくすす。

二三 口と舌とを守る者は

その魂を守つて、悩みにあわせぬ。

二四 高ぶりおごる者を「あざける者」となづける、

彼は高慢無礼な行いをするものである。

二五 なまけ者の欲望は自分の身を殺す、

これはその手を働かせないからである。

二六 悪しき者はひねもす人の物をむさぼる、

正しい者は与えて惜しまない。

第二章

一七 悪しき者の供え物は憎まれる、
 悪意をもつてささげる時はなおさらである。
 一八 偽りの証人は滅ぼされる、
 よく聞く人の言葉はすたることがない。
 一九 悪しき者はあつかましくし、
 正しい人はその道をつつしむ。
 二〇 主に向かつては知恵も悟りも、
 計りごとも、なんの役にも立たない。
 二一 戦いの日のために馬を備える、
 しかし勝利は主による。

一 令名は大いなる富にまさり、
 恩恵は銀や金よりも良い。
 二 富める者と貧しい者とは共に世におる、
 すべてこれを造られたのは主である。
 三 賢い者は災を見て自ら避け、
 思慮のない者は進んでいつて、罰を受ける。
 四 謙遜と主を恐れることとの報いは、
 富と誉と命とである。
 五 よこしまな者の道にはいばらとわながあり、

たましいを守る者は遠くこれを離れる。
 六 子をその行くべき道に従って教えよ、
 そうすれば年老いても、それを離れることがない。
 七 富める者は貧しき者を治め、
 借りる者は貸す人の奴隷となる。
 八 悪をまく者は災を刈り、
 その怒りのつえはすたれる。
 九 人を見て恵む者はめぐまれる、
 自分のパンを貧しい人に与えるからである。
 一〇 あざける者を追放すれば争いもまた去り、
 かつ、いさかきも、はずかしめもなくなる。
 一一 心の潔白を愛する者、その言葉の上品な者は、
 王がその友となる。
 一二 主の目は知識ある者を守る、
 しかし主は不信心な者の言葉を敗られる。
 一三 なまけ者は言う、「ししがそとにいる、
 わたしは、ちまたで殺される」と。
 一四 遊女の口は深い落とし穴である、
 主に憎まれる者はその中に陥る。
 一五 愚かなことが子供的心中につながれている、
 懲しめのむちは、これを遠く追いだす。
 一六 貧しい者をしえたげて自分の富を増そうとする者と、

一六 富める者に与える者とは、ついに必ず貧しくなる。
 一七 あなたが自分の耳を傾けて知恵ある者の言葉を聞き、
 かつ、わたしの知識にあなたの心をを用いよ。
 一八 これをあなたのうちに保ち、
 ことごとく、あなたのくちびるに備えておくなら、
 楽しいことである。
 一九 あなたが主に、寄り頼むことのできるように、
 わたしはきよう、これをあなたにも教える。
 二〇 わたしは、勧めと知識との三十の言葉を
 あなたのためにしるしたではないか。
 二一 それは正しいこと、真実なことをあなたに示し、
 あなたをつかわした者に
 真実の答をさせるためであつた。
 二二 貧しい者を、貧しいゆえに、かすめてはならない、
 悩む者を、町の門でおさえつけてはならない。
 二三 それは主が彼らの訴えをただし、
 かつ彼らをそこなう者の命を、
 そこなわれるからである。
 二四 怒る者と交わるな、憤る人と共に行くな。
 二五 それはあなたがその道にならつて、
 みずから、わなに陥ることのないためである。
 二六 あなたは人と手を打つ者となつてはならない、

第二三章

一 人の負債の保証をしてはならない。
 二七 あなたが償うものがないとき、
 あなたの寝ている寝床までも、
 人が奪い取つてよからうか。
 二八 あなたの先祖が立てた古い地境を移してはならない。
 二九 あなたはそのわざに巧みな人を見るか、
 そのような人は王の前に立つが、
 卑しい人々の前には立たない。
 一 治める人と共に座して食事するとき、
 あなたの前にあるものを、よくわきまえ、
 二 あなたがもし食をたしなむ者であるならば、
 あなたののどに刀をあてよ。
 三 そのごちそうをむさぼり食へてはならない、
 これは人を欺く食物だからである。
 四 富を得ようと苦労してはならない、
 かしく思いとどまるがよい。
 五 あなたの目をそれにとめると、それはない、
 富はたちまち自ら翼を生じて、
 わしのように天に飛び去るからだ。

六 物惜しみする人のパンを食^たべてはならない、
 そのごちそうをむさぼり願^{ねが}つてはならない。
 七 彼は心のうちで勘定^{かんじよう}する人のように、
 「食^くえ、飲^のめ」とあなたに言うけれども、
 その心はあなたに真実^{しんじつ}ではない。
 八 あなたはついにその食^たべた物を吐^はき出すようになり、
 あなたのねんごろな言葉^{ことば}もむだになる。
 九 愚^{おろ}かな者の耳^{みみ}に語^{かた}つてはならない、
 彼はあなたの言葉^{ことば}が示^{しめ}す知恵^{ちえ}をいやしめるからだ。
 一〇 古い地境^{しきがい}を移^{うつ}してはならない、
 みなしごの畑^{はたけ}を侵^{おか}してはならない。
 二 彼^{かれ}らのあがない主^{しゅ}は強くいらせられ、
 あなたに逆^{さか}らつて彼^{かれ}らの訴^{うた}えを弁護^{べんご}されるからだ。
 三 あなた^{きこ}の心を教訓^{きようくん}に用^{もち}い、
 あなたの耳^{みみ}を知識^{ちしき}の言葉^{ことば}に傾^{かたむ}けよ。
 四 三子^{さんこ}を懲^こらすことを、さし控^{ひか}えてはならない、
 むちで彼^{かれ}を打^うつても死ぬ^しことはない。
 五 もし、むちで彼^{かれ}を打^うつならば、
 その命^{いのち}を陰府^{よみ}から救^{すく}うことができる。
 六 五^ごわが子^こよ、もしあなたの心^{こころ}が賢^{かしこ}くあれば、
 わたしの心^{こころ}もまた喜^{よろこ}び、
 七 一六^{いちじゅうろく}もしあなたのくちびるが正^{ただ}しい事^{こと}を言^いうならば、

わたしの心^{こころ}も喜^{よろこ}ぶ。
 八 七^{しち}心に罪^{つみ}びとをうらやんではならない、
 ただ、ひねもす主^{しゅ}を恐^{おそ}れよ。
 九 八^{はち}かならず後の^{のち}よい報^{むく}いがあつて、
 あなたの望^{のぞ}みは、すたらない。
 一〇 九^{きゅう}わが子^こよ、よく聞^きいて、知恵^{ちえ}を得^えよ、
 かつ、あなたの心^{こころ}を道^{みち}に向け^むけよ。
 一一 一〇^{じゅう}酒^{さけ}にふけり、
 肉^{にく}をたしなむ者と交^{まじ}わつてはならない。
 一二 二^に酒^{さけ}にふける者と、肉^{にく}をたしなむ者^{もの}とは貧^{まず}しくなり、
 眠^{ねむ}りをむさぼる者は、ぼろを身^みにまとうようになる。
 一三 三^{さん}あなたを生^うんだ父^{ちち}のいうことを聞^きき、
 年^{とし}老^{らう}いた母^{はは}を軽^{かろ}んじてはならない。
 一四 四^し真理^{しんり}を買^かえ、これを売^うつてはならない、
 知恵^{ちえ}と教訓^{きようくん}と悟^{さと}りをも買^かえ。
 一五 五^ご正しい人^{ただひと}の父^{ちち}は大^{おほ}いによろこび、
 知恵^{ちえ}ある子^こを生^うむ者は子^このために樂^{たの}しむ。
 一六 六^{ろく}あなた^{あなた}の父^ふ母^ぼを樂^{たの}しませ、
 あなたを産^うんだ母^{はは}を喜^{よろこ}ばせよ。
 一七 七^{しち}わが子^こよ、あなたの心^{こころ}をわたしに与^{あた}え、
 あなたの目^めをわたしの道^{みち}に注^{そそ}げ。
 一八 八^{はち}遊女^{ゆうじょ}は深^{ふか}い穴^{あな}のごとく、

みだらな女は狭い井戸のようだ。

二八 彼女は盗びとのように人をうかがい、

かつ世の人のうちに、不信実な者を多くする。

二九 災ある者はだれか、憂いある者はだれか、

争いをする者はだれか、煩いある者はだれか、

ゆえなく傷をうける者はだれか、

赤い目をしている者はだれか。

三〇 酒に夜をふかす者、

行つて、混ぜ合わせた酒を味わう者である。

三一 酒はあかく、杯の中にあわだち、なめらかにくだる、

あなたはこれを見てはならない。

三二 これはついに、へびのようにかみ、

まむしのように刺す。

三三 あなたの目は怪しいものを見、

あなたの心は偽りを言う。

三四 あなたは海の中に寝ている人のように、

帆柱の上に寝ている人のようになる。

三五 あなたは言う、

「人がわたしを撃つたが、わたしは痛くはなかった。

わたしを、たたいたが、わたしは何も覚えはない。

いつわたしはさめるのか、

また酒を求めよう」と。

第二章

一 悪を行う人をうらやんではならない、

また彼らと共にいることを願つてはならない。

二 彼らはその心に強奪を計り、

そのくちびるに人をそこなうことを語るからである。

三 家は知恵によつて建てられ、悟りによつて堅くせられ、

四 また、へやは知識によつてさまざまの尊く、

麗しい宝で満たされる。

五 知恵ある者は強い人よりも強く、

知識ある人は力ある人よりも強い。

六 良い指揮によつて戦いをすることができ、

勝利は多くの議する者がいるからである。

七 知恵は高く、愚かな者の及ぶところではない、

愚かな者は門で口を開くことができない。

八 悪を行うことを計る者を

人はいたずら者となえる。

九 愚かな者の計るところは罪であり、

あざける者は人に憎まれる。

一〇 もしあなたが悩みの日に氣をくじくならば、

あなたの力は弱い。

一一 死地にひかれゆく者を助け出せ、

滅びによろめきゆく者を救え。

二二 あなたが、われわれはこれを知らなかつたといつても、心をはかる者はそれを悟らないであろうか。

あなたの魂を守る者はそれを知らないであろうか。

彼はのおのの行いにより、人に報いないであろうか。

二三 わが子よ、蜜を食べよ、これは良いものである、

また、蜂の巣のしたたりはあなたの口に甘い。

二四 知恵もあなたの魂にはそのようであることを知れ。

それを得るならば、かならず報いがあつて、あなたの望みは、すたらない。

二五 悪しき者がするように、

正しい者の家をうかがつてはならない、

その住む所に乱暴をしてはならない。

二六 正しい者は七たび倒れても、また起きあがる、

しかし、悪しき者は災によつて滅びる。

二七 あなたのあだが倒れるとき楽しんでではない、

彼のつまずくとき心に喜んでではない。

二八 主はそれを見て悪いこととし、

その怒りを彼から転じられる。

二九 悪を行う者のゆえに心を悩ましてはならない、

よこしまな者をうらやんではならない。

三〇 悪しき者には後の良い報いはない、

よこしまな者のともしびは消される。

三二 わが子よ、主と王とを恐れよ、

そのいづれにも不従順であつてはならない。

三三 その災はたちまち起るからである。

この二つの者からくる滅びをだれが知り得ようか。

三三 これらもまた知恵ある者の箴言である。

片寄つたさばきをするのは、よくない。

三四 悪しき者に向かつて、「あなたは正しい」という者を、

人々はのろい、諸民は憎む。

三五 悪しき者をせめる者は恵みを得る、

また幸福が与えられる。

三六 正しい答をする者は、

くちびるに、口づけするのである。

三七 外で、あなたの仕事を整え、

畑で、すべての物をおのれのために備え、

その後あなたの家を建てるがよい。

三八 ゆえなく隣りに敵して、証言をしてはならない、

くちびるをもつて欺いてはならない。

三九 「彼がわたしにしたように、わたしも彼にしよう、

わたしは人がしたところにしたがつて、

その人に報いよう」と言つてはならない。

四〇 わたしはなまけ者の畑のそばと、

第二十五章

知恵のない人のぶどう畑のそばを通つてみたが、
 三 いばらが一面に生え、あざみがその地面をおおい、
 その石がきはくずれていた。
 三 わたしはこれを見て心をとどめ、
 これを見て教訓を得た。

三 「しばらく眠り、しばらくまどろみ、
 手をこまぬいて、またしばらく休む」。
 三 四 それゆえ、貧しきは盗びとのように、あなたに來、
 乏しきは、つわもののように、あなたに來る。

一 これらもまたソロモンの箴言であり、
 ユダの王ヒゼキヤに属する人々がこれを書き写した。
 二 事を隠すのは神の誉であり、
 事を窮めるのは王の誉である。
 三 天の高さと地の深さと、
 王たる者の心とは測ることができない。
 四 銀から、かなくそを除け、
 そうすれば、銀細工人が器を造る材料となる。
 五 王の前から悪しき者を除け、
 そうすれば、その位は正義によつて堅く立つ。

六 王の前で自ら高ぶつてはならない、
 偉い人の場に立つてはならない。
 七 尊い人の前で下にきげられるよりは、
 「ここに上がれ」といわれるほうがましだ。

八 あなたが目に見たことを、
 軽々しく法廷に出してはならない。
 九 あなたはとうしようとするのか。
 九 隣り人と争うことがあるならば、ただその人と争え、
 他人の秘密をもらしてはならない。

一〇 そうでないと、聞く者があなたをいやしめ、
 あなたは、いつまでもそしられる。

二 おりになつて語る言葉は、
 銀の彫り物に金のりんごをはめたようだ。
 三 知恵をもつて戒める者は、これをきく者の耳にとつて、
 金の耳輪、精金の飾りのようだ。
 三 忠実な使者はこれをつかわす者にとって、
 刈入れの日に冷やかな雪があるようだ、
 よくその主人の心を喜ばせる。
 四 贈り物をするとき偽つて誇る人は、
 雨のない雲と風のようだ。
 五 忍耐をもつて説けば君も言葉をいれる、

柔らかな舌は骨を砕く。

一六 蜜を得たならば、ただ足るほどにこれを食べよ、おそろくは食べすぎして、それを吐き出すであろう。

一七 隣り人の家に足をしげくしてはならない、おそろくは彼は煩わしくなつて、

あなたを憎むようになろう。

一八 隣り人に敵して偽りのあかしを立てる人は、こん棒、つるぎ、または鋭い矢のようだ。

一九 悩みに会うとき不信心な者を頼みにするのは、悪い齒、またはなえた足を頼みとするようなものだ。

二〇 心の痛める人の前で歌をうたうのは、

寒い日に着物を脱ぐようであり、

また傷の上に酢をそそぐようだ。

二一 もしあなたのあだが飢えてゐるならば、

パンを与えて食べさせ、

もしかわいてゐるならば水を与えて飲ませよ。

二二 こうするのは、火を彼のこうべに積むのである、

主はあなたに報いられる。

二三 北風は雨を起し、

陰言をいう舌は人の顔を怒らす。

二四 争いを好む女と一緒に家におるよりは、

屋根のすみにおるほうがよい。

第二十六章

二五 遠い国から来るよい消息は、

かわいてゐる人が飲む冷やかな水のようだ。

二六 正しい者が悪い者の前に屈服するのは、

井戸が濁つたよう、また泉がよごれたようなものだ。

二七 蜜を多く食べるのはよくない、

ほめる言葉は控え目にするがよい。

二八 自分の心を制しない人は、

城壁のない破れた城のようだ。

一 譽が愚かな者にふさわしくないのは、

夏に雪が降り、刈入れの時に雨が降るようなものだ。

二 いわれのないのろいは、飛びまわるすずめや、

飛びかけるつばめのようなもので、止まらない。

三 馬のためにはむちがあり、

ろばのためにはくつわがあり、

愚かな者の背のためにはつえがある。

四 愚かな者にその愚かさにしたがつて答をするな、

自分も彼と同じようにならないためだ。

五 愚かな者にその愚かさにしたがつて答をせよ、

彼が自分の目に自らを知恵ある者と見ないためだ。

六 愚かな者に託して事を言い送る者は、
 自分の足を切り去り、身に害をうける。
 七 あしなえの足は用がない、
 愚かな者の口には箴言もそれにひとしい。
 八 譽を愚かな者に与えるのは、
 石を石投げにつなぐようだ。
 九 愚かな者の口に箴言があるのは、
 酔った者が、とげのあるつえを手で振り上げるようだ。
 一〇 通りがかりの愚か者や、酔った者を雇う者は、
 すべての人を傷つける射手のようだ。
 一一 犬が帰つて来てその吐いた物を食べるように、
 愚かな者はその愚かさをくり返す。
 一二 自分の目に自らを知恵ある者とする人を、
 あなたは見るか、
 彼よりもかえって愚かな人に望みがある。
 一三 なまけ者は、「道にしがいる」、
 ちまたにしがいる」という。
 一四 戸がちようつがいによつて回るように、
 なまけ者はその寢床で寢返りをする。
 一五 なまけ者は手を皿に入れても、
 それを口を持ってゆくことをいとう。
 一六 なまけ者は自分の目に、

よく答えることのできる七人の者よりも、
 自らを知恵ありとする。
 一七 自分に關係のない争いにたずさわる者は、
 通りすぎる犬の耳をとらえる者のようだ。
 一八 隣り人を欺いて、
 「わたしはただ戯れにした」という者は、
 燃え木または矢、または死を、
 投げつける氣違ひのようだ。
 一九 たきがなければ火は消え、
 人のよしあしを言う者がなければ争いはやむ。
 二〇 おき火に炭をつぎ、火にたきをくべるように、
 争いを好む人は争いの火をおこす。
 二一 三人のよしあしをいう者の言葉は
 おいしい食物のようで、腹の奥にしみこむ。
 二二 くちびるはなめらかであっても、心の悪いのは
 上ぐすりをかけた土の器のようだ。
 二三 憎む者はくちびるをもつて自ら飾るけれども、
 心のうちには偽りをいだく。
 二四 彼が声をやわらげて語つても、信じてはならない。
 その心に七つの憎むべきものがあるからだ。
 二五 たとい偽りをもつてその憎しみをかくしても、
 彼の悪は会衆の中に現れる。

第二十七章

一七 穴を掘る者は自らその中に陥る、
石をまろばしあげる者の上に、その石はまろびかえる。
一八 偽りの舌は自分が傷つけた者を憎み、
へつらう口は滅びをきたらせる。

一 あすのことを誇つてはならない、
一日のうちに何がおこるかを
知ることができないからだ。
二 自分の口をもつて自らをほめることなく、
他人にほめさせよ。
三 自分のくちびるをもつてせず、
ほかの人にあなたをほめさせよ。
四 石は重く、砂も軽くはない、
しかし愚かな者の怒りはこの二つよりも重い。
五 憤りはむごく、怒りははげしい、
しかしねたみの前には、だれが立ちえよう。
六 あからさまに戒めるのは、
ひそかに愛するのにまさる。
七 愛する者が傷つけるのは、まことからであり、
あだの口づけするのは偽りからである。

七 飽いている者は蜂蜜をも踏みつける、
しかし飢えた者には苦い物でさえ、みな甘い。
八 その家を離れてさまよう人は、
巣を離れてさまよう鳥のようだ。
九 油と香とは人の心を喜ばせる、
しかし魂は悩みによつて裂かれる。
一〇 あなたの友、あなたの父の友を捨てな、
あなたが悩みにあう日には兄弟の家に行くな、
近い隣り人は遠くにいる兄弟にまさる。
二 わが子よ、知恵を得て、わたしの心を喜ばせよ、
そうすればわたしをそしめる者に答えることができる。
三 賢い者は災を見て自ら避け、
思慮のない者は進んでいつて、罰を受ける。
四 三人のために保証する者からは、まずその着物をとれ、
他人のために保証をする者をば抵当に取れ。
五 朝はやく起きて大声にその隣り人を祝すれば、
かえつてのろいと見なされよう。
六 雨の降る日に雨漏りの絶えないのと、
争い好きな女とは同じだ。
七 この女を制するのは風を制するのとおなじく、
右の手に油をつかむのとおなじだ。
八 鉄は鉄をとぐ、

そのように人はその友の顔をとぐ。

一八 いちじくの木を守る者はその実を食べる、主人を尊ぶ者は誉を得る。

一九 水にうつせば顔と顔とが応じるように、人の心はその人をうつす。

二〇 陰府と滅びとは飽くことなく、人の目もまた飽くことがない。

二一 三つばによつて銀をためし、二つばによつて金をためし、

人はその称賛によつてためされる。

二三 愚かな者をうすに入れ、

きねをもつて、麦と共にこれをついても、

その愚かさは去ることがない。

二四 あなたの羊の状態をよく知り、

あなたの群れに心をとめよ。

二五 富はいつまでも続くものではない、

どうして位が末代までも保つてであろうか。

二六 草が刈り取られ、新しい芽がのび、

山の牧草も集められると、

二七 小羊はあなたの衣料を出し、

やぎは畑を買う価となり、

二八 やぎの乳は多くて、

第二十八章

あなたと、あなたの家のものの食物となり、おとめらを養うのにじゅうぶんである。

一 悪しき者は追う人もないのに逃げる、正しい人はししのように勇ましい。

二 国の罪によつて、治める者は多くなり、さどく、また知識ある人によつて、国はながく保つ。

三 貧しい者をしえたげる貧しい人は、糧食を残さない激しい雨のようだ。

四 律法を捨てる者は悪しき者をほめる、律法を守る者はこれに敵対する。

五 悪人は正しいことを悟らない、主を求める者はこれをことごとく悟る。

六 正しく歩む貧しい者は、曲つた道を歩む富める者にまさる。

七 律法を守る者は賢い子である、不品行な者と交わるものは、父をはずかしめる。

八 利息と高利とによつてその富をます者は、貧しい者を恵む者のために、それをたくわえる。

九 耳をそむけて律法を聞かない者は、

その祈でさえも憎まれる。

一〇正しい者を悪い道に惑わす者は、

みずから自分の穴に陥る、

しかし誠実な人は幸福を継ぐ。

二富める人は自分の目に自らを知恵ある者と見る、

しかし悟りのある貧しい者は彼を見やぶる。

三正しい者が勝つときは、大いなる栄えがある、

悪しき者が起るときは、民は身をかくす。

三三その罪を隠す者は栄えることがない、

言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける。

一四常に主を恐れる人はさいわいである、

心をかたくなにする者は災に陥る。

一五貧しい民を治める悪いつかさは、

ほえるしし、または飢えたくまのようだ。

一六悟りのないつかさは残忍な圧制者である、

不正の利を憎む者は長命を得る。

一七人を殺してその血を身に負う者は

死ぬまで、のがれびとである、

だれもこれを助けてはならない。

一八正しく歩む者は救を得、

曲った道に歩む者は穴に陥る。

一九自分の田地を耕す者は食糧に飽き、

無益な事に従う者は貧乏に飽きる。

二〇忠実な人は多くの祝福を得る、

急いで富を得ようとする者は罰を免れない。

二一人を片寄り見ることは良くない、

人は一切のパンのために、とがを犯すことがある。

三欲の深い人は急いで富を得ようとする、

かえって欠乏が自分の所に来ることを知らない。

三三人を戒める者は舌をもってへつらう者よりも、

大いなる感謝をうける。

二四父や母の物を盗んで「これは罪ではない」と言う者は、

滅ぼす者の友である。

二五むさぼる者は争いを起し、

主に信頼する者は豊かになる。

二六自分の心を頼む者は愚かである、

知恵をもつて歩む者は救を得る。

二七貧しい者に施す者は物に不足しない、

目をおおつて見ない人は多くののろいをうける。

二八悪しき者が起るときは、民は身をかくす、

その滅びるときは、正しい人が増す。

第二十九章

一 しばしばしかられても、
 なおかたくなな者は、
 たちまち打ち敗られて助かることはない。
 二 正しい者が権力を得れば民は喜び、
 悪しき者が治めるとき、民はうめき苦しむ。
 三 知恵を愛する人はその父を喜ばせ、
 遊女に交わる者はその資産を浪費する。
 四 王は公儀をもつて国を堅くする、
 しかし、重税を取り立てる者はこれを滅ぼす。
 五 その隣りにへつらう者は、
 彼の足の前に網を張る。
 六 悪人は自分の罪のわなに陥る、
 しかし正しい人は喜び楽しむ。
 七 正しい人は貧しい者の訴えをかえりみる、
 悪しき人はそれを知ろうとはしない。
 ハ あざける人は町を乱し、
 知恵ある者は怒りを静める。
 九 知恵ある人が愚かな人と争うと、
 愚かな者はただ怒り、
 あるいは笑つて、休むことがない。

一〇 血に飢えてゐる人は罪のない者を憎む、
 悪しき者は彼の命を求め。
 二 愚かな者は怒りをことごとく表わし、
 知恵ある者は静かにこれをおさえる。
 三 もし治める者が偽りの言葉に聞くならば、
 その役人らはみな悪くなる。
 四 貧しい者と、しえたげる者とは共に世におる、
 主は彼ら両者の目に光を与えられる。
 五 もし王が貧しい者を公平にさばくならば、
 その位はいつまでも堅く立つ。
 六 五むちと戒めとは知恵を与える、
 わがままにさせた子はその母に恥をもたらす。
 七 悪しき者が権力を得ると罪も増す、
 正しい者は彼らの倒れるのを見る。
 八 あなたの子を懲しめよ、
 そうすれば彼はあなたを安らかにし、
 またあなたの心に喜びを与える。
 九 ハ 預言がなければ民はわがままにふるまう、
 しかし律法を守る者はさいわいである。
 一〇 九しもべは言葉だけで訓練することはできない、
 彼は聞いて知つても、心にとめないからである。
 二〇 言葉の軽率な人を見るか、

第三〇章

彼かれよりもかえつて愚おろかな者のほうに望のぞみがある。

二 しもべをその幼おきない時からわがままに育そだてる人ひとは、
ついにそれを自分じぶんのあとつぎにする。

三 怒いかる人は争あらそいを起おこし、
憤いきどおる人は争あらそいの罪つみを犯おかす。

四 人の高たかぶりはその人ひとを低ひくくし、
心こころにへりくだる者は誉ほまれを得える。

五 盗ぬすびとにくみする者は自分じぶんの魂たましいを憎にくむ、
彼かれはのろいを聞きいても何事なにことをも口外こうがいしない。

六 人ひとを恐おそれると、わなに陥おちる、
主しゅに信しん頼らいする者は安やすらかである。

七 治おさめる者の飲の心かんしんを得えようとする人ひとは多おほい、
しかし人ひとの事ことを定さだめるのは主しゅによる。

八 正ただしい人ひとは不正ふせいを行おこなう人ひとを憎にくみ、
悪あしき者ものは正ただしく歩あゆむ人ひとを憎にくむ。

一 マツサの人ひとヤケの子アグルの言ことば葉は。
その人ひとはイテエルに向むかつて言いった、
すなわちイテエルと、ウカルとに向むかつて言いった、
わたしは確たしかに人ひとよりも愚おろかであり、

わたしには人ひとの悟さとりがない。

二 わたしはまだ知恵ちえをならうことができず、
また、聖せいなる者ものを悟さとることもできない。

三 天てんにのぼつたり、下くだつたりしたのはだれか、
風かぜをこぶしの中に集あつめたのはだれか、

水みづを着物きものに包つつんだのはだれか、
地のすべの限界げんかいを定さだめた者ものはだれか、

その名なは何か、その子この名なは何か、
あなたは確たしかにそれを知しっている。

四 神かみの言ことば葉ははみな真実しんじつである、
神かみは彼かれに寄より頼たのむ者ものの盾たてである。

五 その言ことば葉はに付つけ加くわえてはならない、
彼かれがあなたを責せめ、あなたを偽いつわり者ものとされなためだ。

六 わたしは二つのことをあなたに求もとめます、
わたしの死しなないうちに、これをかなえてください。

七 ハうそ、偽いつわりをわたしから遠とほざけ、
貧まずしくもなく、また富とみもせず、

ただなくてならぬ食物しょくもつでわたしを養やしなってください。
九 飽あき足たりて、あなたを知らないといい、

「主しゅとはだれか」と言いうことのないため、
また貧まずしくて盗ぬすみをし、

わたしの神かみの名なを汚よごすことのないためです。

一〇あなたは、しもべのことをその主人に、あしざまにいつてはならない、
 そうでないとは彼はあなたをのろい、
 あなたは罪をきせられる。
 二世には父をのろつたり、母を祝福しない者がある。
 三世には自分の目にみずからを清い者として、
 なおその汚れを洗われぬものがある。
 三世にはまた、このような人がある――
 ああ、その目のいかに高きことよ、
 またそのまぶたのいかにつりあがつてゐることよ。
 一四世にはまたつるぎのような歯をもち、
 刀のようなきばをもつて、
 貧しい者を地の上から、
 乏しい者を人の中から食い滅ぼすものがある。
 一五蛭にふたりの娘があつて、
 「与えよ、与えよ」という。
 飽くことを知らないものが三つある、
 いや、四つあつて、
 皆「もう、たくさんです」と言わない。
 一六すなわち陰府、不妊の胎、水にかわく地、
 「もう、たくさんだ」といわない火がそれである。
 一七自分の父をあざけり、

母に従うのを卑しいこととする目は、
 谷のからすがこれをつき出し、
 はげたかがこれを食べる。
 一八わたしにとつて不思議にたえないことが三つある、
 いや、四つあつて、わたしには悟ることができない。
 一九すなわち空を飛ぶはげたかの道、
 岩の上を這うへびの道、
 海をはしる舟の道、
 男の女にあう道がそれである。
 二〇遊女の道もまたそうだ、
 彼女は食べて、その口をぬぐつて、
 「わたしは何もわるいことはしない」と言う。
 二一地は三つのことによつて震う、
 いや、四つのことによつて、耐えることができない。
 二三すなわち奴隸たる者が王となり、
 愚かな者が食物に飽き、
 二三忌みきらわれた女が嫁に行き、
 はしためが女主人のあとにすわることである。
 二四この地上に、小さいけれども、
 非常に賢いものが四つある。
 二五ありは力のない種類だが、
 その食糧を夏のうちに備える。

第三章

一 マツサの王レムエルの言葉、すなわちその母が彼に教え

二六 岩だぬきは強くない種類だが、
 その家を岩につくる。
 二七 いなごは王がないけれども、
 みな隊を組んでいで立つ。
 二八 やもりは手でつかまえられるが、
 王の宮殿におる。
 二九 歩きぶりの堂々たる者が三つある、
 いや、四つあって、みな堂々と歩く。
 三〇 すなわち獣のうちでもつとも強く、
 何もの前にも退かない、しし、
 三尾を立てて歩くおんどり、雄やぎ、
 その民の前をいばつて歩く王がそれである。
 三一 あなたがもし愚かであつて自ら高ぶり、
 あるいは悪事を計つたならば、
 あなたの手を口に当てるがよい。
 三三 乳をしめれば凝乳が出る、
 鼻をしめれば血がでる、
 怒りをしめれば争いが起る。

たものである。
 ニわが子よ、何を言おうか。
 わが胎の子よ、何を言おうか。
 わたしが願をかけて得た子よ、
 何をいおうか。
 三 あなたを女に力をついやすな、
 王をも滅ぼすものに、あなたの道を任せな。
 四 レムエルよ、酒を飲むのは、王のすることではない、
 王のすることではない、
 濃い酒を求めるのは君たる者のすることではない。
 五 彼らは酒を飲んで、おきてを忘れ、
 すべて悩む者のさばきを曲げる。
 六 濃い酒を滅びようとしている者に与え、
 酒を心の苦しむ人に与えよ。
 七 彼らは飲んで自分の貧乏を忘れ、
 その悩みをもちや思い出さない。
 ハ あなたは黙っている人のために、
 すべてのみなしごの訴えのために、口を開くがよい。
 九 口を開いて、正しいさばきを行い、
 貧しい者と乏しい者の訴えをただせ。
 一〇 だれが賢い妻を見つけたことができるか、
 彼女は宝石よりもすぐれて尊い。

二 その夫の心は彼女を信頼して、
収益に欠けることはない。
三 彼女は生きながらえている間、
その夫のために良いことをして、悪いことをしない。
四 また商人の舟のように、
遠い国から食糧を運んでくる。
五 彼女はまだ夜のあけぬうちに起きて、
その家の者の食べ物を備え、
その女たちに日用の分を与える。
六 彼女は畑をよく考えてそれを買ひ、
その手の働きの実をもつて、ぶどう畑をつくり、
七 力をもつて腰に帶し、その腕を強くする。
八 彼女は商品のもうけのあるのを知っている、
そのともしびは終夜消えることがない。
九 彼女は手を糸取り棒にのべ、
その手に、つむを持ち、
十 手を貧しい者に開き、
乏しい人に手をさしのべる。
十一 彼女は家の者のために雪を恐れない、
その家の者はみな紅の着物を着ているからである。

三 彼女は自分のために美しいしとねを作り、
亜麻布と紫布をもつてその着物とする。
三三 その夫はその地の長老たちと共に、
町の門に座するので、人に知られている。
三四 彼女は亜麻布の着物をつくつて、それを売り、
帯をつくつて商人に渡す。
三五 力と気品とは彼女の着物である、
そして後の日を笑っている。
三六 彼女は口を開いて知恵を語る、
その舌にはいづくしみの教がある。
三七 彼女は家の事をよくかえりみ、
怠りのかてを食べることをしない。
三八 その子らは立ち上がつて彼女を祝ひ、
その夫もまた彼女をほめたたえて言う、
三九 「りっぱに事をなし遂げる女は多いけれども、
あなたはすべてのにまさっている」と。
四〇 あでやかさは偽りであり、美しさはつかのまである、
しかし主を恐れる女はほめたたえられる。
四一 その手の働きの実を彼女に与え、
その行いのために彼女を町の門でほめたたえよ。

伝道の書

第一章

一 ダビデの子、エルサレムの王である伝道者の言葉。

二 伝道者は言う、

空の空、空の空、いつさいは空である。

三日の下で人が勞するすべての勞苦は、

その身になんの益があるか。

四 世は去り、世はきたる。

しかし地は永遠に変わらない。

五日はいで、日は没し、

その出た所に急ぎ行く。

六 風は南に吹き、また転じて、北に向かい、

めぐりにめぐって、またそのめぐる所に帰る。

七 川はみな、海に流れ入る、

しかし海は満ちることがない。

八 川はその出てきた所にまた帰って行く。

九 すべての事は人をうみ疲れさせる、

人はこれを言いつくすことができない。

目は見ることに飽きることがなく、

耳は聞くことに満足することがない。

九 先にあつたことは、また後にもある、
先になされた事は、また後にもなされる。

日の下には新しいものはない。

一〇 「見よ、これは新しいものだ」と

言われるものがあるか、

それはわれわれの前にあつた世々に、

すでにあつたものである。

二 前の者のことは覚えられないことがない、

また、きたるべき後の者のことも、

後に起る者はこれを覚えることがない。

三 伝道者であるわたしはエルサレムで、イスラエルの王であつた。三 わたしは心をつくし、知恵を用いて、天が下に行われる

すべてのことを尋ね、また調べた。これは神が、人の子らに与え

て、ほねおらせられる苦しい仕事である。四 わたしは日の下で

人が行うすべてのわざを見たが、みな空であつて風を捕えるよ

うである。

五 曲つたものは、まっすぐにすることができない、

欠けたものは数えることができない。

六 わたしは心の中に語つて言つた、「わたしは、わたしより先に

エルサレムを治めたすべての者にまさつて、多くの知恵を得た。

わたしの心は知恵と知識を多く得た」。七 わたしは心をつくし

て知恵を知り、また狂気と愚痴とを知ろうとしたが、これもまた

風を捕えるようなものであると悟った。

一八それは知恵が多ければ悩みが多く、知識を増す者は憂いを増すからである。

第二章

一わたしは自分の心に言った、「さあ、快樂をもつて、おまえを試みよう。おまえは愉快に過ぐすがよい」と。しかし、これもまた空であつた。二わたしは笑について言った、「これは狂氣である」と。また快樂について言った、「これは何をするのか」と。三わたしの心は知恵をもつてわたしを導いているが、わたしは酒をもつて自分の肉体を元氣づけようと試みた。また、人の子は天が下でその短い一生の間、どんな事をしたら良いかを、見きわめるまでは、愚かな事をしようと思ひた。四わたしは大きな事業をした。わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設け、五園と庭をつくり、またすべて実のなる木をそこに植え、六池をつくつて、木のおい茂る林に、そこから水を注がせた。七わたしは男女の奴隷を買つた。またわたしの家で生れた奴隷を持つていた。わたしはまた、わたしより先にエルサレムにいただれよりも多くの牛や羊の財産を持つていた。八わたしはまた銀と金を集め、王たちと国々の財宝を集めた。またわたしは歌うたう男、歌うたう女を得た。また人の子の楽しみとするそばめを多

く得た。

九こうして、わたしは大いなる者となり、わたしより先にエルサレムにいたすべての者よりも、大いなる者となつた。わたしの知恵もまた、わたしを離れなかつた。一〇なんでもわたしの目の好むものは遠慮せず、わたしの心の喜ぶものは拒まなかつた。わたしの心がわたしのすべての労苦によつて、快樂を得たからである。そしてこれはわたしのすべての労苦によつて得た報いであつた。二そこで、わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であつて、風を捕えるようなものであつた。日の下には益となるものはないのである。

三わたしはまた、身をめぐらして、知恵と、狂氣と、愚痴とを見た。そもそも、王の後に来る人は何をなし得ようか。すでに彼がなした事にすぎないのだ。四光が暗きにまざるように、知恵が愚痴にまざるのを、わたしは見ひた。五知者の目は、その頭にある。しかし愚者は暗やみを歩む。けれどもわたしはなお同一の運命が彼らのすべてに臨むことを知つてゐる。六わたしは心に言つた、「愚者に臨む事はわたしにも臨むのだ。それでどうしてわたしは賢いことがあるう。わたしはまた心に言つた、「これもまた空である」と。七そもそも、知者も愚者も同様になく覚えられぬものではない。きたるべき日には皆忘れられてしまふのである。知者が愚者と同一ように死ぬのは、どうし

たことであろう。一七そこで、わたしは生きることをつた。日の下に行われるわざは、わたしに悪しく見えたからである。皆空であつて、風を捕えるようである。

一八わたしは日の下で勞したすべての勞苦を憎んだ。わたしの後に来る人にこれを残さなければならぬからである。一九そして、その人が知者であるか、または愚者であるかは、だれが知り得よう。そうであるのに、その人が、日の下でわたしが勞し、かつ知恵を働かしてなしたすべての勞苦をつかさどることになるのだ。これもまた空である。二〇それでわたしはふり返つてみて、日の下でわたしが勞したすべての勞苦について、望みを失つた。二一今ここに人があつて、知恵と知識と才能をもつて勞しても、これがために勞しない人に、すべてを残して、その所有とさせなければならぬのだ。これもまた空であつて、大いに悪い。二三そもそも、人は日の下で勞するすべての勞苦と、その心づかいによつてなんの得るところがあるか。二四そのすべての日はただ憂いのみであつて、そのわざは苦しく、その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である。

二五人は食い飲みし、その勞苦によつて得たもので心を楽しませるより良い事はない。これもまた神の手から出ることを、わたしは見た。二六だれが神を離れて、食い、かつ楽しむことのできる者があるう。二七神は、その心になう人に、知恵と知識と喜びとをくださる。しかし罪びとには仕事を与えて集めること

と、積むことをさせられる。これは神の心になう者にそれを賜うためである。これもまた空であつて、風を捕えるようである。

第三章

一天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。

二生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、三殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、四泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、五石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、六捜すに時があり、失うに時があり、保つに時があり、捨てるに時があり、七裂くに時があり、縫うに時があり、黙るに時があり、語るに時があり、八愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある。

九 働く者はその勞することにより、なんの益を得るか。

一〇 わたしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。一一 神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。一二 わたしは知っている。人にはその生きながらえている間、楽しく愉快に過ごすよりほかに良い事はない。一三 またすべての人が食い飲みし、そのすべての勞苦によつて樂しみを得ることは神の賜物である。一四 わたしは知っている。すべて神がなさる事は永遠に変わることがなく、これに加えることも、これから取ることもできない。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れをもつようになるためである。一五 今あるものは、すでにあつたものである。後にあるものも、すでにあつたものである。神は追いやられたものを尋ね求められる。一六 わたしはまた、日の下を見たが、さばきを行う所にも不正があり、公義を行う所にも不正がある。一七 わたしは心に言つた、「神は正しい者と悪い者とをさばかれる。神はすべての事と、すべてのわざに、時を定められたからである」と。一八 わたしはまた、人の子らについて心に言つた、「神は彼らをためして、彼らに自分たちが獸にすぎないことを悟らせられるのである」と。一九 人の子らに臨むところは獸にも臨むからである。すなわち一様に彼らに臨み、これの死ぬように、彼も死ぬのである。彼ら

はみな同様の息をもっている。人は獸にまさるところがない。すべてのものは空だからである。二〇 みな一つ所に行く。皆ちりから出て、皆ちりに帰る。二一 だれが知るか、人の子らの靈は上にのぼり、獸の靈は地にくだるかを。二三 それで、わたしは見た、人はその働きによつて樂しむにこした事はない。これが彼らの分だからである。だれが彼をつれていつて、その後の、どうなるかを見させることができるか。

第四章

一 わたしはまた、日の下に行われるすべてのしえたげを見た。見よ、しえたげられる者の涙を。彼らを慰める者はない。しえたげる者の手には権力がある。しかし彼らを慰める者はいない。二 それで、わたしはなお生きている生存者よりも、すでに死んだ死者を、さいわいな者と思つた。三 しかし、この両者よりもしさいわいなのは、まだ生れない者で、日の下に行われる悪きわざを見ない者である。

四 また、わたしはすべての勞苦と、すべての巧みなわざを見たが、これは人が互にねたみあつてなすものである。これもまた空であつて、風を捕えるようである。五 愚かなる者は手をつかねて、自分の肉を食う。六 片手に物を満たして平穩であるのは、両手に物を満たして

労苦し、風を捕えるのにまさる。

セわたしはまた、日の下に空なる事のあるのを見た。ハここに人がある。ひとりであつて、仲間もなく、子もなく、兄弟もない。それでも彼の労苦は窮まりなく、その目は富に飽くことがない。また彼は言わない、「わたしはだれのために労苦するのか、どうして自分を樂しませないのか」と。これもまた空であつて、苦しいわざである。

九ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によつて良い報いを得るからである。一〇すなわち彼らが倒れる時には、そのひとりがその友を助け起す。しかしひとりであつて、その倒れる時、これを助け起す者のない者はわざわいである。一またふたりが一緒に寝れば暖かである。ひとりだけで、どうして暖かになり得ようか。三人がもし、そのひとりを攻め撃つたなら、ふたりで、それに当るであらう。三つよりの綱はたやすくは切れない。

二三貧しくて賢いわらへば、老いて愚かで、もはや、いさめをいれることを知らない王にまさる。一四たとい、その王が獄屋から出て、王位についた者であつても、また自分の国に貧しく生れて王位についた者であつても、そうである。一五わたしは日の下に歩むすべての民が、かのわらべのように王に代つて立つのを見た。一六すべての民は果てしがない。彼はそのすべての民を導いた。しかし後に来る者は彼を喜ばない。たしかに、これもま

た空であつて、風を捕えるようである。

第五章

一神の宮に行く時には、その足を慎むがよい。近よつて聞くは愚かな者の犠牲をささげるのにまさる。彼らは悪を行つてゐることを知らないからである。二神の前で軽々しく口をひらき、また言葉を出そうと、心にあせつてはならない。神は天にいまし、あなたは地におるからである。それゆえ、あなたは言葉を少なくせよ。

三夢は仕事の多いことによつてきたり、愚かなる者の声は言葉の多いことによつて知られる。

四あなたは神に誓いをなすとき、それを果すことを延ばしてはならない。神は愚かな者を喜ばれないからである。あなたの誓つたことを必ず果せ。五あなたが誓いをして、それを果さないよりは、むしろ誓いをしないほうがよい。六あなたの口が、あなたに罪を犯させないようにせよ。また使者の前にそれは誤りであつたと言つてはならない。どうして、神があなたの言葉を怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてよからうか。

七夢が多ければ空なる言葉も多い。しかし、あなたは神を恐れよ。

八あなたは国のうちに貧しい者をしえたげ、公道と正義を曲げ

ることのあるのを見て、その事を怪しんではならない。それは位の高い人よりも、さらに高い者があつて、その人をうかがうからである。そしてそれらよりもなお高い者がある。九しかし、要するに耕作した田畑をもつ国には王は利益である。

一〇金銭を好む者は金銭をもつて満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これもまた空である。

二財産が増せば、これを食う者も増す。その持ち主は目にそれを見るだけで、なんの益があるか。

三働く者は食ふことが少なくとも多くても、快く眠る。しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることをゆるさない。

三わたしは日の下に悲しむべき悪のあるのを見た。すなわち、富はこれをたくわえるその持ち主に害を及ぼすことである。二四またその富は不幸な出来事によつてうせ行くことである。それで、その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。二五彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰つて行く。彼はその労苦によつて得た何物をもその手に携え行くことができない。二六人は全くその来たように、また去つて行かなければならない。これもまた悲しむべき悪である。風のために労する者になんの益があるか。二七人は一生、暗やみと、悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある。

二八見よ、わたしが見たところの善かつ美なる事は、神から賜つた短い一生の間、食ひ、飲み、かつ日の下で労するすべて

の労苦によつて、楽しみを得る事である。これがその分だからである。一九また神はすべての人に富と宝と、それを楽しむ力を与え、またその分を取らせ、その労苦によつて楽しみを得させられる。これが神の賜物である。三〇このような人は自分の生きる日のことを多く思わない。神は喜びをもつて彼の心を満たされるからである。

第六章

一わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。これは人々の上に重い。二すなわち神は富と、財産と、誉とを人に与えて、その心に慕うものを、一つも欠けることのないようにされる。しかし神は、その人にこれを持つことを許されないで、他人がこれを持つようになる。これは空である。悪しき病である。三たとい人は百人の子をもうけ、また命長く、そのよい日の日が多くても、その心が幸福に満足せず、また葬られることがなければ、わたしは言う、流産の子はその人にまさると。四これはむなくして来て、暗やみの中に去つて行き、その名は暗やみにおおわれる。五またこれは日を見ず、物を知らない。けれどもこれは彼よりも安らかである。六たとい彼は千年に倍するほど生きても幸福を見ない。みな一つ所に行くのではないか。

七人の労苦は皆、その口のためである。しかしその食欲は満た

第七章

されない。ハ賢い者は愚かな者になんのまさるところがあるか。また生ける者の前に歩むことを知る貧しい者もなんのまさるところがあるか。九目に見る事は欲望のさまよい歩くにまさる。これもまた空であつて、風を捕えるようなものである。一〇今あるものは、すでにその名がつけられた。そして人はいかなる者であるかは知られた。それで人は自分よりも力強い者と争ふことはできない。二言葉が多ければむなしい事も多い。人になんの益があるか。三人はその短く、むなしい命の日を影のように送るのに、何が人のために善であるかを知ることができよう。だれがその身の後に、日の下に何があるであろうかを人に告げることができるか。

一 良き名は良き油にまさり、死ぬる日は生る日にまさる。
 二 悲しみの家にはいるのは、宴会の家にはいるのにまさる。
 死はすべての人の終りだからである。
 生きてゐる者は、これを心にとめる。
 三 悲しみは笑いにまさる。
 顔に憂いをもつことによつて、

心は良くなるからである。
 四 賢い者の心は悲しみの家にある、愚かな者の心は楽しみのある家にある。
 五 賢い者の戒めを聞くのは、愚かな者の歌を聞くのにまさる。
 六 愚かな者の笑いは、かまの下に燃えるいばらの音のようである。これもまた空である。
 七 たしかに、しえたげは賢い人を愚かにし、まいないは人の心をそこなう。
 八 事の終りはその初めよりも良い。
 耐え忍ぶ心は、おごり高ぶる心にまさる。
 九 気をせきたてて怒るな。
 怒りは愚かな者の胸に宿るからである。
 一〇 「昔が今よりもよかつたのはなぜか」と言ふな。あなたがこれを問うのは知恵から出るのではない。
 二 知恵に財産が伴うのは良い。
 それは日を見る者どもに益がある。
 三 知恵が身を守るのは、金銭が身を守るようである。
 しかし、知恵はこれを持つ者に生命を保たせる。
 これが知識のすぐれた所である。
 三 神のみわざを考えみよ。

神の曲げられたものを、

だれがまっすぐにすることができるか。

一四 順境の日には楽しみ、逆境の日には考えよ。神は人に将来どういう事があるかを、知らせないために、彼とこれとを等しく造られたのである。

一五 わたしはこのむなししい人生において、もろもろの事を見た。そこには義人がその義によつて滅びることがあり、悪人がその悪によつて長生きすることがある。一六 あなたは義に過ぎてはならない。また賢きに過ぎてはならない。あなたはどのようにして自分を滅ぼしてよからうか。一七 悪に過ぎてはならない。また愚かであつてはならない。あなたはどのようにして、自分の時のこないのに、死んでよからうか。一八 あなたがこれを執るのはよい、また彼から手を引いてはならない。神をかしこむ者は、このすべてからのがれ出るのである。

一九 知恵が知者を強くするのは、十人のつかさが町におるのにまさる。

二〇 善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。

二一 人の語るすべての事に心をとめてはならない。これはあなたが、自分のしもべのあなたをのろう言葉を聞かないためである。二三 あなたもまた、しばしば他人をのろつたのを自分の心に知っているからである。

二四 わたしは知恵をもつてこのすべての事を試みて、「わたしは

知者となろう」と言つたが、遠く及ばなかつた。二四 物事の理は遠く、また、はなはだ深い。だれがこれを見いだすことができよう。二五 わたしは、心を転じて、物を知り、事を探り、知恵と道理を求めようとし、また悪の愚かなこと、愚痴の狂気であることを知ろうとした。二六 わたしは、その心が、わなと網のような女、その手が、かせのような女は、死よりも苦い者であることを見いだした。神を喜ばす者は彼女からのがれる。しかし罪びとは彼女に捕えられる。二七 伝道者は言う、見よ、その数を知ろうとして、いちいち数えて、わたしが得たものはこれである。二八 わたしはなおこれを求めたけれども、得なかつた。わたしは千人のうちにひとりの男子を得たけれども、そのすべてのうちに、ひとりの女子をも得なかつた。二九 見よ、わたしが得た事は、ただこれだけである。すなわち、神は人を正しい者に造られたけれども、人は多くの計略を考え出した事である。

第八章

一 だれが知者のようになり得よう。

だれが事の意義を知り得よう。

人の知恵はその人の顔を輝かせ、またその粗暴な顔を変える。

二 王の命を守れ。すでに神をさして誓つたことゆえ、驚くな。三

事が悪い時は、王の前を去れ、ためらうな。彼はすべてその好むところをなすからである。四王の言葉は決定的である。だが彼に「あなたは何をするのか」と言うことができようか。五命令を守る者は災にあわれない。知者の心は時と方法をわきまえている。六人の悪が彼の上に重くても、すべてのわざには時と方法がある。七後に起る事を知る者はない。どんな事が起るかをだれが彼に告げ得よう。八風をとどめる力をもつ人はない。また死の日をつかさどるものはない。戦いには免除はない。また悪はこれを行う者を救うことができない。九わたしはこのすべての事を見た。また日の下に行われるもろもろのわざに心を用いた。時としてはこの人が、かの人を治めて、これに害をこうむらせることがある。

一〇またわたしは悪人の葬られるのを見た。彼らはいつも聖所に入りし、それを行ったその町でほめられた。これもまた空である。二悪しきわざに対する判決がすみやかに行われなために、人の子らの心はもつぱら悪を行うことに傾いている。三罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしこみ、み前に恐れをいだく者には幸福があることを、わたしは知っている。三しかし悪人には幸福がない。またその命は影のようであつて長くは続かない。彼は神の前に恐れをいだかないからである。

一四地の上に空な事が行われている。すなわち、義人であつて、

悪人に臨むべき事が、その身に臨む者がある。また、悪人であつて、義人に臨むべき事が、その身に臨む者がある。わたしは言つた、これもまた空である。二五そこで、わたしは歡樂をたえらる。それは日の下では、人にとつて、食ひ、飲み、楽しむよりほかに良い事はないからである。これこそは日の下で、神が賜つた命の日の間、その勤勞によつてその身に伴うものである。二六わたしは心をつくして知恵を知ろうとし、また地上に行われるわざを昼も夜も眠らずに窮めようとしたとき、一七わたしは神のもろもろのわざを見たが、人は日の下に行われるわざを窮めることはできない。人はこれを尋ねようと勞しても、これを窮めることはできない。また、たとい知者があつて、これを知ろうと思つても、これを窮めることはできないのである。

第九章

一わたしはこのすべての事に心を用いて、このすべての事を明らかにしようとした。すなわち正しい者と賢い者、および彼らのわざが、神の手にあることを明らかにしようとした。愛するか憎むかは人にはわからない。彼らの前にあるすべてのことは空である。二すべての人に臨むところは、みな同様である。正しい者にも正しくない者にも、善良な者にも悪い者にも、清い者にも汚れた者にも、犠牲をささげる者にも、犠牲をささげない者

にも、その臨むところは同様である。善良な人も罪びとも異なることはない。誓いをなす者も、誓いをなすことを恐れる者も異なることはない。ミすべての人に同一に臨むのは、日の下に行われるすべての事のうちの悪事である。また人の心は悪に満ち、その生きている間は、狂気がその心のうちにあり、その後は死者のもとに行くのである。四すべて生ける者に連なる者には望みがある。生ける犬は、死せるししにまさるからである。五生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事からさえも、ついに忘れられる。六その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない。

七あなたは行つて、喜びをもつてあなたのパンを食べ、楽しい心をもつてあなたの酒を飲むがよい。神はすでに、あなたのわざをよみせられたからである。

八あなたの衣を常に白くせよ。あなたの頭に油を絶やすな。九日の下で神から賜わったあなたの空なる命の日の間、あなたは愛する妻と共に楽しく暮すがよい。これはあなたが世にあつてうける分、あなたが日の下で労する労苦によつて得るものだからである。〇すべてあなたの手のなしうる事は、力をつくしてなせ。あなたの行く陰府には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。

二わたしはまた日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。また賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。三人はその時を知らない。魚がわざわいの網にかかり、鳥がわなにかかるように、人の子らもわざわいの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである。

三またわたしは日の下にこのような知恵の例を見た。これはわたしにとって大きな事である。四ここに一つの小さい町があつて、そこに住む人は少なかったが、大いなる王が攻めて来て、これを囲み、これに向かつて大きな雲梯を建てた。五しかし、町のうちにひとりの貧しい知恵のある人がいて、その知恵をもつて町を救つた。ところがだれひとり、その貧しい人を記憶する者がなかった。六そこでわたしは言う、「知恵は力にまさる。しかしかの貧しい人の知恵は軽んぜられ、その言葉は聞かれなかった」。

七静かに聞かれる知者の言葉は、愚かな者の中のつかさたる者の叫びにまさる。八知恵は戦いの武器にまさる。しかし、ひとりの罪びとは多くの良きわざを滅ぼす。

第一〇章

一 死んだはえは、香料を造る者の

あぶらを臭くし、

少しの愚痴は知恵と誉よりも重い。

二 知者の心は彼を右に向けさせ、

愚者の心は左に向けさせる。

三 愚者は道を行く時、思慮が足りない、

自分の愚かなことをすべての人に告げる。

四 つかさたる者があなたに向かつて立腹しても、

あなたの所を離れてはならない。

温順は大いなるとがを和らげるからである。

五 わたしは日の下に一つの悪のあるのを見た。それはつかさたる者から出るあやまちに似ている。六 すなわち愚かなる者が高い地位に置かれ、富める者が卑しい所に座している。七 わたしはしもべたる者が馬に乗り、君たる者が奴隷のように徒歩であるのを見た。

八 穴を掘る者はみずからこれに陥り、

石がきをこわす者は、へびにかまれる。

九 石を切り出す者はそれがために傷をうけ、

木を割る者はそれがために危険にさらされる。

一〇 鉄が鈍くなつたとき、人がその刃をみがかなければ、

力を多くこれに用いねばならない。

しかし、知恵は人を助けてなし遂げさせる。

二 へびがもし呪文をかけられる前に、かみつけば、

へび使は益がない。

三 知者の口の言葉は恵みがある、

しかし愚者のくちびるはその身を滅ぼす。

四 愚者の口の言葉の初めは愚痴である、

またその言葉の終りは悪い狂気である。

五 愚者は言葉を多くする、

しかし人はだれも後に起ることを知らない。

だがその身の後に起る事を

告げることができようか。

六 愚者の労苦はその身を疲れさせる、

彼は町にはいる道をさえ知らない。

七 あなたの王はわらべであつて、

その君たちが朝から、ごちそうを食べる国よ、

あなたはわざわいだ。

八 あなたの王は自主の子であつて、

その君たちが酔うためでなく、力を得るために、

適当な時にごちそうを食べる国よ、

あなたはさいわいだ。

九 怠惰によつて屋根は落ち、

あなたはさいわいだ。

無精によつて家は漏る。

一 九 食事は笑いのためになされ、

酒は命を樂しませる。

金銭はすべての事に應じる。

二〇 あなたは心のうちでも王をのろつてはならない、

また寢室でも富める者をのろつてはならない。

空の鳥はあなたの声を伝え、

翼のあるものは事を告げるからである。

第一章

一 あなたのパンを水の上に投げよ、

多くの日の後、あなたはそれを得るからである。

二 あなたは一つの分を七つまた八つに分けよ、

あなたは、どんな災が地に起るかを知らないからだ。

三 雲がもし雨で満ちるならば、地にそれを注ぐ、

また木がもし南か北に倒れるならば、

その木は倒れた所に横たわる。

四 風を警戒する者は種をまかない、

雲を観測する者は刈ることをしない。

五 あなたは、身ごもつた女の胎の中で、どうして霊が骨にはいるかを知らない。そのようにあなたは、すべての事をなされる神

のわざを知らない。

六 朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは二つともに良いのであるか、あなたは知らないからである。

七 光は快いものである。目に太陽を見るのは楽しいことである。

八 人が多くの年、生きながらえ、そのすべてにおいて自分を樂し

ませて、暗い日の多くあるべきことを忘れてはならない。す

べて、きたらんとする事は皆空である。

九 若い者よ、あなたの若い時に樂しめ。あなたの若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心の道に歩み、あなたの目の見る

ところに歩め。ただし、そのすべての事のために、神はあなたを

さばかれることを知れ。

一〇 あなたの心から悩みを去り、あなたのからだから痛みを除

け。若い時と盛んな時はともに空だからである。

第二章

一 あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がき

たり、年が寄つて、「わたしにはなんの樂しみもない」と言うよ

うにならない前に、ニまた日や光や、月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲が帰らないうちに、そのようにせよ。ニその

からである。

日になると、家を守る者は震え、力ある人はかがみ、ひきこなす女は少ないために休み、窓からのぞく者の目はかすみ、四町の門は閉ざされる。その時ひきこなす音は低くなり、人は鳥の声によつて起きあがり、歌の娘たちは皆、低くされる。五彼らはまた高いものを恐れる。恐ろしいものが道にあり、あめんどうは花咲き、いなごはその身をひきずり歩き、その欲望は衰え、人が永遠の家に行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる。その後、銀のひもは切れ、金の皿は碎け、水がめは泉のかたわらで破れ、車は井戸のかたわらで碎ける。セチリは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る。八伝道者は言う、「空の空、いつさいは空である」と。

九さらに伝道者は知恵があるゆえに、知識を民に教えた。彼はよく考え、尋ねきわめ、あまたの箴言をまとめた。一〇伝道者は麗しい言葉を得ようとつとめた。また彼は真実の言葉を正しく書きしるした。

二知者の言葉は突き棒のようであり、またよく打った釘のようなものであつて、ひとりの牧者から出た言葉が集められたものである。三わが子よ、これら以外の事にも心を用いよ。多くの書を作れば際限がない。多く学べばからだが疲れる。

三三事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。一四神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれる

雅歌^が

第一章

ーソロモンの雅歌^が

ニどうか、あなたの口の口づけをもって、
わたしに口づけしてください。

あなたの愛はぶどう酒にまさり、

三あなたのにおい油はかんばしく、

あなたの名は注がれたにおい油のようです。

それゆえ、おとめたちはあなたを愛するのです。

四あなたのあとについて、行かせてください。

わたしは急いでまいりましょう。

王はわたしをそのへやに連れて行かれた。

わたしたちは、あなたによって喜び楽しみ、

ぶどう酒にまさって、あなたの愛をほめたたえます。

おとめたちは真心をもってあなたを愛します。

五エルサレムの娘たちよ、

わたしは黒いけれども美しい。

ケダルの天幕のように、ソロモンのとばりのように。

六わたしが日に焼けているがために、

日がわたしを焼いたがために、

わたしを見つめてはならない。

わが母の子らは怒って、わたしにぶどう園を守らせた。

しかし、わたしは自分のぶどう園を守らなかつた。

七わが魂の愛する者よ、

あなたはどこで、あなたの群れを養い、

昼の時にどこで、それを休ませるのか、

わたしに告げてください。

どうして、わたしはさまよう者のように、

あなたの仲間の群れのかたわらに、

いなければならぬのですか。

八女のうちの最も美しい者よ、

あなたが知らないなら、群れの足跡に従って行って、

羊飼たちの天幕のかたわらで、

あなたの子やぎを飼いなさい。

九わが愛する者よ、

わたしはあなたをパロの車の雌馬になぞらえる。

一〇あなたのほおは美しく飾られ、

あなたの首は宝石をつらねた首飾で美しい。

二われわれは銀を散らした金の飾り物を、

あなたのために造ろう。

三王がその席に着かれたとき、

わたしのナルドはそこをおりを放った。

第二章

一 わが愛する者は、わたしにとつては、
わたしの乳ぶさの間にある没薬の袋のようです。
二 わが愛する者は、わたしにとつては、
エンゲデのぶどう園にある
ヘナ樹の花ぶさのようです。
三 わが愛する者よ、見よ、あなたは美しい、
見よ、あなたは美しい、あなたの目ははとのようだ。
四 わが愛する者よ、見よ、あなたは美しく、
まことにりつばです。
わたしたちの床は緑、
七 わたしたちの家の梁は香柏、
そのたるきはいとすぎです。

一 わたしはシャロンのぼら、
谷のゆりです。
二 おとめたちのうちにわが愛する者のあるのは、
いばらの中にゆりの花があるようだ。
三 わが愛する者の若人たちの中にあるのは、
林の木の中にりんごの木があるようです。
わたしは大きな喜びをもって、彼の陰にすわった。

彼の与える実はわたしの口に甘かった。
四 彼はわたしを酒宴の家に連れて行った。
わたしの上にひるがえる彼の旗は愛であった。
五千ぶどうをもって、わたしに力をつけ、
りんごをもって、わたしに元氣をつけてください。
わたしは愛のために病みわずらっているのです。
六 どうか、彼の左の手がわたしの頭の下にあり、
右の手がわたしを抱いてくれるように。
セエルサレムの娘たちよ、
わたしは、かもしかと野の雌じかをさして、
あなたがたに誓い、お願いする、
愛のおのずから起るときまでは、
ことさらに呼び起すことも、
さますこともしないように。
八 わが愛する者の声が聞える。
見よ、彼は山をとび、丘をおどり越えて来る。
九 わが愛する者はかもしかのごとく、
若い雄じかのようです。
見よ、彼はわたしたちの壁のうしろに立ち、
窓からのぞき、格子からうかがっている。
一〇 わが愛する者はわたしに語って言う、
「わが愛する者よ、わが麗しき者よ、

立つて、出てきなさい。

二 見よ、冬は過ぎ、

雨もやんで、すでに去り、

三 もろもろの花は地にあらわれ、

鳥のさえずる時がきた。

山ばとの声がわれわれの地に聞える。

三 いちじくの木はその実を結び、

ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ。

わが愛する者よ、わが麗しき者よ、

立つて、出てきなさい。

四 岩の裂け目、がけの隠れ場におけるわがはとよ、

あなたの顔を見せなさい。

あなたの声を聞かせなさい。

あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。

五 われわれのためにきつねを捕えよ、

ぶどう園を荒す小ぎつねを捕えよ、

われわれのぶどう園は花盛りだから」と。

一六 わが愛する者はわたしのもの、わたしは彼のもの。

彼はゆりの花の中で、その群れを養っている。

一七 わが愛する者よ、

日の涼しくなるまで、

影の消えるまで、身をかえして出ていって、

険しい山々の上で、かもしかのように、
若い雄じかのようになってください。

第三章

一 わたしは夜、床の上で、

わが魂の愛する者をたずねた。

わたしは彼をたずねたが、見つからなかった。

わたしは彼を呼んだが、答がなかった。

二 「わたしは今起きて、町をまわり歩き、

街路や広場で、わが魂の愛する者をたずねよう」と、

彼をたずねたが、見つからなかった。

三 町をまわり歩く夜回りたちに出会ったので、

「あなたがたは、

わが魂の愛する者を見ましたか」と尋ねた。

四 わたしが彼らと別れて行くとき、

わが魂の愛する者に出会った。

わたしは彼を引き留めて行かせず、

ついにわが母の家につれて行き、

わたしを産んだ者のへやにはいった。

五 エルサレムの娘たちよ、

わたしは、かもしかと野の雌じかをさして、

あなたがたに誓い、お願いする、
 愛のおのずから起るときまでは、
 ことさらに呼び起すことも、
 さますこともしないように。
 六 没薬、乳香など、商人のもろもろの香料をもって、
 かおりを放ち、
 煙の柱のように、荒野から上つて来るものは何か。
 七 見よ、あれはソロモンの乗物で、
 六十人の勇士がそのまわりにいる。
 イスラエルの勇士で、
 八 皆、つるぎをとり、戦いをよくし、
 おのおの腰に剣を帯びて、
 夜の危険に備えている。
 九 ソロモン王はレバノンの木をもつて、
 自分のために輿をつくつた。
 一〇 その柱は銀、そのうしろは金、
 その座は紫の布でつくつた。
 その内部にはエルサレムの娘たちが、
 愛情をこめてつくつた物を張りつけた。
 ニ シオンの娘たちよ、出てきてソロモン王を見よ。
 彼は婚姻の日、心の喜びの日に、
 その母の彼にかぶらせた冠をいただいている。

第四章

一 わが愛する者よ、
 見よ、あなたは美しい、見よ、あなたは美しい。
 あなたの目は、顔おおいのうしろにあつて、
 はとのようなだ。
 あなたの髪はギレアデの山を下る
 やぎの群れのようなだ。
 ニ あなたの歯は洗い場から上つてきた
 毛を切られた雌羊の群れのようなだ。
 ミ あなたを産んで、一匹も子のないものはない。
 その口は愛らしい。
 あなたのはおは顔おおいのうしろにあつて、
 ざくろの片われのようなだ。
 四 あなたの首は武器倉のために建てた
 ダビデのやぐらのようだ。
 その上には一千の盾を掛けつらね、
 みな勇士の大盾である。
 五 あなたの両乳ぶさは、
 かもしかの二子である二匹の子じかが、
 ゆりの花の中に草を食べているようだ。

六日の涼しくなるまで、影の消えるまで、わたしは没藥の山および乳香の丘へ急ぎ行こう。わが愛する者よ、

あなたはことごとく美しく、少しのきずもない。

ハわが花嫁よ、レバノンからわたしと一緒にきなさい、
レバノンからわたしと一緒にきなさい。

アマナの頂いただきを去さり、セニルおよびヘルモンいただきの頂さを去さり、
ししの穴あな、ひよやまうさの山さを去さりなさい。

九わが妹、わが花嫁よ、あなたはわたしの心を奪った。

あなたはただひと目^めで、

あなたの首飾のひと玉で、わたしの心を奪った。

一〇わが妹、わが花嫁よ、

あなたの愛は、なんと麗うるわしいことであろう。

あなたの愛はぶどう酒よりも、

あなたの香油こうゆのかおりはすべての香料こうりようよりも、

いかにすぐれていることであろう。

二わが花嫁よ、はなよめあなたのくちびるは甘露かんろをしたたらせ、

あなたの舌の下には、
蜜と乳とがある。

あなたの衣（ころも）のかおりはレバノンのかおりのようだ。

三 わが妹、わが花嫁は閉じた園、

と
その
閉じた園、
ふう
封じた泉のようだ。
いずみ

一三 あなたの産み出す物は、

第五章

もろもろの良き実をもつぎくろの園
ヘンナおよびナルド、

二四ナルド、さふらん、しょうぶ、肉桂、

さまざまの乳香の木、

もつやく
没薬、
ろかい、
およびすべての尊い香料である。
たつと こうりよう

二五 あなたは園そのいすみなばの泉、生いける水みづの井い、

またレバノンから流れ出る川である。

六北風よ、起れ、南風よ、きたれ。

わが園そのを吹ふいて、そのかおりをひろく散ちらせ。

わが愛する者がその園にはいつてきて、

その良い実を食^たべるように。

一 わが妹、わが花嫁よ、

わたしはわが園そのにはいつて、わが没薬もつやくと香料こうりようとを集めあつ、

わが蜜蜂みつばちの巣すと、蜜みつとを食たべ、

わがぶどう酒しゅと乳ちちとを飲のむ。

とも
、
く
、
の
、

友によあい 食ひとにえ 飲おめの

愛する人々よ　大いに飲め
ねむ　こころ

二ねたしは眠ていたか。心はさめていた。
聞きなさい、つが愛する者が口をさへいてゐる。

「わが妹、わが愛する者、
わがはと、わが全き者よ、あけてください。
わたしの頭は露でぬれ、
わたしの髪の毛は夜露でぬれている」と言う。
三 わたしはすでに着物を脱いだ、
どうしてまた着られようか。
すでに足を洗った、
どうしてまた、よごせようか。
四 わが愛する者が掛けがねに手をかけたので、
わが心は内におどった。
五 わたしが起きて、
わが愛する者のためにあけようとしたとき、
わたしの手から没薬がしたたり、
わたしの指から没薬の液が流れて、
貫の木の取手の上に落ちた。
六 わたしはわが愛する者のために開いたが、
わが愛する者はすでに帰り去った。
彼が帰り去ったとき、わが心は力を失った。
わたしは尋ねたけれども見つけからず、
呼んだけれども答がなかった。
七 町をまわり歩く夜回りらは
わたしを見ると、撃って傷つけ、

城壁を守る者らは、わたしの上着をはぎ取った。
八 エルサレムの娘たちよ、
わたしはあなたがたに誓って、お願いする。
もしわが愛する者を見たら、
わたしが愛のために病みわずらっていると、
彼に告げてください。
九 女のうちの最も美しい者よ、
あなたの愛する者は、ほかの人の愛する者に、
なんのまさるところがあるか。
あなたの愛する者は、ほかの人の愛する者に、
なんのまさるところがあつて、
そのように、わたしたちに誓い、願うのか。
一〇 わが愛する者は白く輝き、かつ赤く、
万人にぬきんで、
二 その頭は純金のように、
その髪の毛はうねっていて、からすのように黒い。
三 その目は泉のほとりのはとのように、
乳で洗われて、良く落ち着いている。
四 そのほおは、かんばしい花の床のように、
かおりを放ち、
そのくちびるは、ゆりの花のようで、没薬の液をしたたら
す。

第六章

一四その手は宝石をはめた金の円筒のごとく、
 そのからだはサファイヤをもつておつた
 象牙の細工のごとく、
 一五その足のすねは金の台の上にすえた
 大理石の柱のごとく、
 その姿はレバノンのごとく、香柏のようで、美しい。
 一六その言葉は、はなはだ美しく、
 彼はことごとく麗しい。
 エルサレムの娘たちよ、
 これがわが愛する者、これがわが友なのです。

一 女のうちの最も美しい者よ、
 あなたの愛する者はどこへ行つたか。
 あなたの愛する者はどこへおもむいたか。
 わたしたちはあなたと一緒にたずねよう。
 ニわが愛する者は園の中で、群れを飼ひ、
 またゆりの花を取るために自分の園に下り、
 かんばしい花の床へ行きました。
 三わたしはわが愛する人のもの、
 わが愛する者はわたしのものです。

彼はゆりの花の中で、その群れを飼っています。
 四わが愛する者よ、あなたは美しいことテルザのごとく、
 麗しいことエルサレムのごとく、
 恐るべきこと旗を立てた軍勢のようだ。
 五あなたの目はわたしを恐れさせるゆえ、
 わたしからそむけてください。
 あなたの髪はグレアデの山を下る
 やぎの群れのようだ。
 六あなたの歯は洗い場から上つてきた
 雌羊の群れのようだ。
 みな二子を産んで、一匹も子のないものはない。
 七あなたのほおは顔おおいのうしろにあつて、
 ざくろの片われのようだ。
 八王妃は六十人、そばめは八十人、
 また数しれぬおとめがいる。
 九わがはと、わが全き者はただひとり、
 彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ。
 おとめたちは彼女を見て、さいわいな者となえ、
 王妃たち、そばめたちもまた、彼女を見て、ほめた。
 一〇「このしのめのように見え、
 月のように美しく、太陽のように輝き、
 恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者はだれか」。

第七章

二 わたしは谷の花を見、ぶどうが芽ざしたか、
 ざくろの花が咲いたかを見ようと、
 くるみの園へ下つていった。
 三 わたしの知らないうちに、わたしの思いは、
 わたしを車の中のわが君のかたわらにおらせた。
 三 帰れ、帰れ、シユラムの女よ、
 帰れ、帰れ、わたしたちはあなたを見たいものだ。
 あなたがたはどうしてマハナイムの踊りを見るように
 シユラムの女を見たいのか。

一 女王のような娘よ、
 あなたの足は、くつの中にあつて、
 なんと麗しいことであろう。
 あなたのももは、まろやかで、玉のごとく、
 名人の手のわざのようだ。
 二 あなたのほぞは、
 混ぜたぶどう酒を欠くことのない丸い杯のごとく、
 あなたの腹は、
 ゆりの花で囲まれた山盛りの麦のようだ。
 三 あなたの両乳ぶさは、

かもしかの二子である二匹の子じかのようだ。
 四 あなたの首は象牙のやぐらのごとく、
 あなたの目は、バテラビムの門のほとりにある
 ヘシボンの池のごとく、
 あなたの鼻は、ダマスコを見おろす
 レバノンのやぐらのようだ。
 五 あなたの頭は、カルメルのようにあなたを飾り、
 髪の毛は紫色のようで、王はそのたれ髪に捕われた。
 六 愛する者よ、快活なおとめよ、
 あなたはなんと美しく愛すべき者であろう。
 七 あなたはなつめやしの木のように威厳があり、
 あなたの乳ぶさはそのふさのようだ。
 ハ わたしは言う、「このなつめやしの木にのぼり、
 その枝に取りつこう。
 どうか、あなたの乳ぶさが、ぶどうのふさのごとく、
 あなたの息のにおいがりんごのごとく、
 九 あなたの口づけが、
 なめらかに流れ下る良きぶどう酒のごとく、
 ぐちびると歯の上をすべるように」と。
 一〇 わたしはわが愛する人のもの、彼はわたしを恋慕う。
 二 わが愛する者よ、
 さあ、わたしたちはいなかへ出ていって、

第八章

村里に宿りましょう。

二 わたしたちは早く起き、ぶどう園へ行つて、
ぶどうの木が芽ざしたか、ぶどうの花が咲いたか、
ざくろが花咲いたかを見ましょう。

その所で、わたしはわが愛をあなたに与えます。

三 恋なすは、かおりを放ち、

もろもろの良きくだものは、

新しいのも古いのも

共にわたしたちの戸の上にある。

わが愛する者よ、

わたしはこれをあなたのためにたくわえました。

一 どうか、あなたは、

わが母の乳ぶさを吸った

わが兄弟のようになつてください。

わたしがそとであなたに会うとき、

あなたに口づけしても、

だれもわたしをいやしめないでしよう。

二 わたしはあなたを導いて、わが母の家に行き、

わたしを産んだ者のへやにはいり、

香料のはいつたぶどう酒、ざくろの液を、
あなたに飲ませましょう。

三 どうか、彼の左の手がわたしの頭の下にあり、
右の手がわたしを抱いてくれるように。

四 エルサレムの娘たちよ、

わたしはあなたがたに誓い、お願いする、

愛のおのずから起るときまでは、

ことさらに呼び起すことも、

さますこともしないように。

五 自分の愛する者によりかかつて、

荒野から上つて来る者はだれですか。

りんごの木の下で、わたしはあなたを呼びました。

あなたの母上は、かしこで、

あなたのために産みの苦しみをなし、

あなたの産んだ者が、かしこで産みの苦しみをした。

六 わたしをあなたの心に置いて印のようにし、

あなたの腕に置いて印のようになしてください。

愛は死のように強く、

ねたまは墓のように残酷だからです。

そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。

七 愛は大水も消すことができない、

洪水もおぼれさせることができない。

もし人がその家の財産をことごとく与えて、
愛に換えようとするならば、

いたくいやしめられるでしょう。

ハわたしたちに小さい妹がある、まだ乳ぶさが無い。

わたしたちの妹に縁談のある日には、

彼女のために何をしてやろうか。

九彼女が城壁であるなら、その上に銀の塔を建てよう。

彼女が戸であるなら、香柏の板でそれを囲もう。

一〇わたしは城壁、わたしの乳ぶさは、

やぐらのようでありました。

それでわたしは彼の目には、

平和をもたらず者のようでありました。

二ソロモンはバアルハモンにぶどう園をもっていた。

彼はぶどう園を、守る者どもにあずけて、

おのおのその実のために銀一千を納めさせた。

三わたしのものであるぶどう園は、わたしの前にある。

ソロモンよ、あなたは一千を獲るでしょう、

その実を守る者どもは二百を獲るでしょう。

三三園の中に住む者よ、

わたしの友だちはあなたの声に耳を傾けます、

どうぞ、それをわたしに聞かせてください。

一四わが愛する者よ、急いでください。

かんばしい山々の上で、かもしかのように、
また若い雄じかのようになってください。

イザヤ書

第一章

「アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世にユダとエルサレムについて見た幻。」

二天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ、
主が次のように語られたから、

「わたしは子を養い育てた、

しかし彼らはわたしにそむいた。

三牛はその飼主を知り、

ろばはその主人のまぐさおけを知る。

しかしイスラエルは知らず、

わが民は悟らない」。

四ああ、罪深い国びと、不義を負う民、

悪をなす者のすえ、墮落せる子らよ。

彼らは主を捨て、

イスラエルの聖者をあなどり、

これをうとんじ遠ざかった。

五あなたがたは、どうして重ね重ねそむいて、

なおも打たれようとするのか。

その頭はことごとく病み、

その心は全く弱りはてている。

六足のうらから頭まで、

完全なところがなく、

傷と打ち傷と生傷ばかりだ。

これを絞り出すものなく、包むものなく、

油をもつてやわらげるものもない。

七あなたがたの国は荒れすたれ、

町々は火で焼かれ、

田畑のものはあなたがたの前で外国人に食われ、

滅ぼされたソドムのように荒れすたれた。

ハシオンの娘はぶどう畑の仮小屋のように、

きゆうり畑の番小屋のように、

包囲された町のように、ただひとり残った。

九もし万軍の主が、

われわれに少しの生存者を残されなかったなら、

われわれはソドムのようになり、

またゴモラと同じようになったであろう。

一〇あなたがたソドムのつかさたちよ、

主の言葉を聞け。

あなたがたゴモラの民よ、

われわれの神の教に耳を傾けよ。

二主は言われる、

「あなたがたがささげる多くの犠牲は、
わたしになんの益があるか。

わたしは雄羊の燔祭と、

肥えた獣の脂肪とに飽いている。

わたしは雄牛あるいは小羊、

あるいは雄やぎの血を喜ばない。

二三あなたがたは、わたしにまみえようとして来るが、
だが、わたしの庭を踏み荒すことを求めたか。

二三あなたがたは、もはや、

むなしい供え物を携えてきてはならない。

薫香は、わたしの忌みきらうものだ。

新月、安息日、また会衆を呼び集めること――

わたしは不義と聖会とに耐えられない。

一四あなたがたの新月と定め祭とは、

わが魂の憎むもの、

それはわたしの重荷となり、

わたしは、それを負うのに疲れた。

一五あなたがたが手を伸べるとき、

わたしは目をおおって、あなたがたを見ない。

たとい多くの祈をささげても、わたしは聞かない。

あなたがたの手は血まみれである。

一六あなたがたは身を洗って、清くなり、

わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、
悪を行うことをやめ、

一七善を行うことをならい、公平を求め、

しえたげる者を戒め、

みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ。

一八主は言われる、

さあ、われわれは互に論じよう。

たといあなたがたの罪は緋のようであっても、

雪のように白くなるのだ。

紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。

一九もし、あなたがたが快く従うなら、

地の良き物を食べることができる。

二〇しかし、あなたがたが拒みそむくならば、

つるぎで滅ぼされる」。

これは主がその口で語られたことである。

二一かつては忠信であった町、

どうして遊女となったのか。

昔は公平で満ち、

正義がそのうちにやどっていたのに、

今は人を殺す者ばかりとなつてしまった。

二三あなたの銀はかすとなり、

あなたのぶどう酒は水をまじえ、

二三 あなたのつかさたちはそむいて、盗びとの仲間となり、

みな、まいないを好み、贈り物を追い求め、みなしごを正しく守らず、

寡婦の訴えは彼らに届かない。

二四 このゆえに、主、万軍の主、

イスラエルの全能者は言われる、

「ああ、わたしはわが敵にむかつて憤りをもらし、わがあだにむかつて恨みをはらす。

二五 わたしはまた、わが手をあなたに向け、

あなたのかすを灰汁で溶かすように溶かし去り、

あなたの混ざり物をすべて取り除く。

二六 こうして、あなたのさばきびとをもとのとおりに、

あなたの議官を初めのおりに回復する。

その後あなたは正義の都、

忠信の町となえられる」。

二七 シオンは公平をもつてあがなわれ、

そのうちの悔い改める者は、

正義をもつてあがなわれる。

二八 しかし、そむく者と罪びとは共に滅ぼされ、

主を捨てる者は滅びうせる。

二九 あなたがたは、みずから喜んだかしの木によって、

はずかしめを受け、

みずから選んだ園によって、恥じ赤らむ。

三〇 あなたがたは葉の枯れるかしの木のように、

水のない園のようになり、

三一 強い者も麻くずのように、

そのわざは火花のようになり、

その二つのものは共に燃えて、それを消す者はない。

第二章

一 アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて示された言葉。

二 終りの日に次のことが起る。

主の家の山は、

もろもろの山のかしらとして堅く立ち、

もろもろの峰よりも高くそびえ、

すべて国はこれに流れてき、

三 多くの民は来て言う、

「さあ、われわれは主の山に登り、

ヤコブの神の家へ行こう。

彼はその道をわれわれに教えられる、

われわれはその道に歩もう」と。

律法はシオンから出、

主の言葉はエルサレムから出るからである。

四 彼はもろもろの国のあいだにさばきを行い、
多くの民のために仲裁に立たれる。

こうして彼らはそのつるぎを打ちかえて、すきとし、

そのやりを打ちかえて、かまし、

国は国にむかつて、つるぎをあげず、

彼らはもはや戦いのことを学ばない。

五 ヤコブの家よ、

さあ、われわれは主の光に歩もう。

六 あなたはあなたの民ヤコブの家を捨てられた。

これは彼らが東の国からの占い師をもつて満ちし、

ペリシテびとのように占い者となり、

外国人と同盟を結んだからである。

七 彼らの国には金銀が満ち、その財宝は限らない。

また彼らの国には馬が満ち、その戦車も限らない。

八 また彼らの国には偶像が満ち、

彼らはその手のわざを拝み、

その指で作ったものを拝む。

九 こうして人はかがめられ、人々は低くされる。

どうか彼らをおゆるしにならぬように。

一〇 あなたは岩の間にはいり、ちりの中にかくれて、

主の恐るべき前と、その威光の輝きとを避けよ。

二 その日には目をあげて高ぶる者は低くせられ、

おごる人はかがめられ、

主のみ高くあげられる。

三 これは、万軍の主の一日があつて、

すべて誇る者と高ぶる者、

すべておのれを高くする者と得意な者にと
臨むからである。

三 またレバノンの高くそびえるすべての香柏、

バシヤンのすべてののかしの木、

四 またすべての高い山々、

すべてのそびえ立つ峰々、

五 すべての高きやぐら、

すべての堅固な城壁、

六 タルシシのすべての船、

すべての麗しい船舶に臨む。

七 その日には高ぶる者はかがめられ、

おごる人は低くせられ、

主のみ高くあげられる。

八 こうして偶像はことごとく滅びうせる。

九 主が立つて地を脅かされるとき、

人々は岩のほら穴にはいり、また地の穴にはいつて、

第三章

主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。
 二〇その日、人々は拝むためにみずから造つた
 しろがねの偶像と、こがねの偶像とを、
 もぐらもちと、こうもりに投げ与え、
 三岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、
 主が立つて地を脅かされるとき、
 主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける。
 三あなたがたは鼻から息の出入りする人に、
 たよることをやめよ、
 このような者はなんの価値があろうか。

一見よ、主、万軍の主は
 エルサレムとユダから
 ささえとなり、頼みとなるもの――
 すべてささえとなるパン、
 すべてささえとなる水――を取り去られる。
 ニすなわち勇士と軍人、
 裁判官と預言者、
 占い師と長老、
 三五十人の長と身分の高い人、

議官と巧みな魔術師、
 老練なまじない師を取り去られる。
 四わたしはわらべを立てて彼らの君とし、
 みどりごに彼らを治めさせる。
 五民は互に相しえたげ、
 人はおのおのその隣をしえたげ、
 若い者は老いたる者にむかつて高ぶり、
 卑しい者は尊い者にむかつて高ぶる。
 六その時、人はその父の家で、兄弟をつかまえて言う、
 「あなたは外套を持つている、
 わたしたちのつかさびとになつて、
 この荒れ跡をあなたの手で治めてください」と。
 七その日、彼は声をあげて言う、
 「わたしはいやす者となることはできません、
 わたしの家にはパンもなく、外套ありません、
 わたしを立てて、
 民のつかさびとにしないでください」。
 ハこれは彼らの言葉と行いとが主にそむき、
 その栄光の目をおかしたので、
 エルサレムはつまずき、ユダは倒れたからである。
 九彼らの不公平は彼らにむかつて不利なあかしをし、
 ソドムのようにその罪をあらわして隠さない。

わざわいなるかな、
彼らはみずから悪の報いをうけた。

一〇正しい人に言え、彼らはさいわいであると。
彼らはその行いの実を食べるからである。

二悪しき者はわざわいだ、彼は災をうける。
その手のなした事が彼に報いられるからである。

三わが民は幼な子にしえたげられ、
女たちに治められる。

ああ、わが民よ、あなたを導く者は
かえつて、あなたを迷わせ、

あなたの行くべき道を混乱させる。
三主は言い争うために立ちあがり、

その民をさばくために立たれる。
一四主はその民の長老と君たちとをさばいて、

「あなたがたは、ぶどう畑を食い荒した。
貧しい者からかすめとつた物は、

あなたがたの家にある。
一五なぜ、あなたがたはわが民を踏みじり、

貧しい者の顔をすり碎くのか」と
万軍の神、主は言われる。

一六主は言われた、
シオンの娘らは高ぶり、

首をのぼしてあるき、目でこびをおくり、
その行くとき気どつて歩き、
その足でりんりんと鳴り響かす。

一七それゆえ、主はシオンの娘らの頭を
撃つて、かさぶたでおおい、
彼らの隠れた所をあらわされる。

一八その日、主は彼らの美しい装身具と服装すなわち、くるぶし
輪、髪ひも、月形の飾り、一九耳輪、腕輪、顔おおい、三〇頭飾り、
すね飾り、飾り帯、香箱、守り袋、三指輪、鼻輪、三礼服、外套、
肩掛、手さげ袋、三薄織の上着、亜麻布の着物、帽子、被衣な
どを取り除かれる。

二四芳香はかわつて、悪臭となり、
帯はかわつて、なわとなり、

よく編んだ髪はかわつて、かぶろとなり、
はなやかな衣はかわつて、荒布の衣となり、
美しい顔はかわつて、焼き印された顔となる。

二五あなたの男たちはつるぎに倒れ、
あなたの勇士たちは戦いに倒れる。

二六シオンの門は嘆き悲しみ、
シオンは荒れすたれて、地に座する。

第四章

一その日、七人の女がひとりの男にすがって、「わたしたちは自分のパンをたべ、自分の着物を着ます。ただ、あなたの名によつて呼ばれることを許して、わたしたちの恥を取り除いてください」と言う。

二その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また光栄となる。三四そして主が審判の霊と滅亡の霊とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあつて、生命の書にしろされた者は聖なる者となえられる。五その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであつて、六昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる。

第五章

一わたしはわが愛する者のために、
そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。
わが愛する者は土肥えた小山の上に、

一つのぶどう畑をもっていた。
二彼はそれを掘りおこし、石を除き、

それに良いぶどうを植え、
その中に物見やぐらを建て、

またその中に酒ぶねを掘り、
良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。

ところが結んだものは野ぶどうであつた。

三それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、
どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。

四わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、
何かなすべきことがあるか。

わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、
どうして野ぶどうを結んだのか。

五それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、
あなたがたに告げる。

わたしはそのまがきを取り去つて、
食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、

踏み荒されるにまかせる。
六わたしはこれを荒して、

刈り込むことも、耕すこともせず、
おどろと、いばらとを生えさせ、

また雲に命じて、その上に雨を降らさない。

七 万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、
主が喜んでそこに植えられた物は、

ユダの人々である。

主はこれに公平を望まれたのに、

見よ、流血。

正義を望まれたのに、

見よ、叫び。

ハわざわいなるかな、彼らは家に家を建て連ね、

田畑に田畑をまし加えて、余地をあまさず、

自分ひとり、国のうちに住まおうとする。

九 万軍の主はわたしの耳に誓って言われた、

「必ずや多くの家は荒れすたれ、

大きな麗しい家も住む者がないようになる。

一〇 十反のぶどう畑もわずかに一エパの実を結び、

一ホメルの種もわずかに一エパの実を結ぶ。」

二 わざわいなるかな、彼らは朝早く起きて、

濃き酒をおい求め、

夜のふけるまで飲みつづけて、

酒にその身を焼かれています。

二三 彼らの酒宴には琴あり、立琴あり、

鼓あり笛あり、ぶどう酒がある。

しかし彼らは主のみわざを顧みず、

み手のなされる事に目をとめない。

二三 それゆえ、わが民は無知のために、とりこにせられ、

その尊き者は飢えて死に、

そのもろもろの民は、かわきによって衰えはてる。

二四 また陰府はその欲望を大きくし、

その口を限りなく開き、

エルサレムの貴族、そのもろもろの民、

その群衆およびそのうちの喜びたのしめる者はみな

その中に落ちこむ。

二五 人はかがめられ、人々は低くせられ、

高ぶる者の目は低くされる。

二六 しかし万軍の主は公平によってあがめられ、

聖なる神は正義によって、

おのれを聖なる者として示される。

二七 こうして小羊は自分の牧場におるように草をはみ、

肥えた家畜および子やぎは荒れ跡の中で食を得る。

二八 わざわいなるかな、

彼らは偽りのなわをもつて悪を引きよせ、

車の綱をもつてするように罪を引きよせる。

二九 彼らは言う、「彼を急がせ、

そのわざをすみやかにさせよ、

それを見せてもらおう。

イスラエルの聖者の定める事を近づききたらせよ、
それを見せてもらおう」と。

二〇 わざわいなるかな、彼らは悪を呼んで善といい、
善を呼んで悪といい、

暗きを光とし、光を暗しとし、
苦きを甘しとし、甘きを苦しとする。

二一 わざわいなるかな、彼らはおのれを見て、賢しとし、
みずから顧みて、さとしとする。

二二 わざわいなるかな、
彼らはぶどう酒を飲むことの英雄であり、
濃き酒をまぜ合わせることの勇士である。

二三 彼らはまいないによって悪しき者を義とし、
義人からその義を奪う。

二四 それゆえ、火の舌が刈り株を食い尽すように、
枯れ草が炎の中に消えうせるように、

彼らの根は朽ちたものとなり、
彼らの花はちりのように飛び去る。

彼らは万軍の主の律法を捨て、
イスラエルの聖者の言葉を侮ったからである。

二五 それゆえ、主はその民にむかつて怒りを発し、
み手を伸べて彼らを撃たれた。

山は震い動き、

彼らのしかばねは、ちまたの中で、
あくたのようになつた。

それにもかかわらず、み怒りはやまず、
なお、み手を伸ばされる。

二六 主は旗をあげて遠くから一つの国民を招き、
地の果から彼らと呼ばれる。

見よ、彼らは走つて、すみやかに来る。
二七 その中には疲れる者も、つまずく者もなく、

まどろむ者も、眠る者もない。
その腰の帯はとけず、

そのくつのひもは切れていない。
二八 その矢は鋭く、その弓はことごとく張り、

その馬のひずめは火打石のように、
その車の輪はつむじ風のように思われる。

二九 そのほえることは、ししのように、
若いししのようにほえ、

うなつて獲物を捕え、
かすめ去つても救う者がいない。

三〇 その日、その鳴りどよめくことは、
海の鳴りどよめくようだ。

もし地をのぞむならば、見よ、暗きと悩みとがあり、
光は雲によって暗くなる。

第六章

「ウジヤ王の死んだ年、わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た。ニその上にセラピムが立ち、おのおの六つの翼をもっていた。その二つをもつて顔をおおい、二つをもつて足をおおい、二つをもつて飛びかけり、三互に呼びかわして言った。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」。

四その呼ばわっている者の声によつて敷居の基が震い動き、神殿の中に煙が満ちた。五その時わたしは言った、「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。

六この時セラピムのひとり火ばしをもつて、祭壇の上から取った燃えている炭を手へ携え、わたしのところに飛んできて、セわたしの口に触れて言った、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」。ハわたしはまた主の言われる声を聞いた、「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」。その時わたしは言った、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」。九主は言われた、「あなたは行つて、この民にこう言

いなさい、

『あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟つてはならない。

あなたがたはくりかえし見るがよい、しかしわかつてはならない』と。

一〇あなたはこの民の心を鈍くし、

その耳を聞えにくくし、その目を閉ざしなさい。

これは彼らがその目で見、その耳で聞き、

その心で悟り、

悔い改めていやされることのないためである」。

二そこで、わたしは言った、「主よ、いつまでですか」。

主は言われた、

「町々は荒れすたれて、住む者もなく、

家には人かげもなく、国は全く荒れ地となり、

三人々は主によつて遠くへ移され、

荒れはてた所が国の中に多くなる時まで、

こうなっている。

二三その中に十分の一の残る者があつても、

これもまた焼き滅ぼされる。

テレビンの木またはかしの木が切り倒されるとき、

その切り株が残るように」。

聖なる種族はその切り株である。

第七章

ユダの王、ウジヤの子ヨタム、その子アハズの時、スリヤの王レヂンとレマリヤの子であるイスラエルの王ペカとが上つてきて、エルサレムを攻めたが勝つことができなかった。二時に「スリヤがエフライムと同盟している」とダビデの家に告げる者があつたので、王の心と民の心とは風に動かされる林の木のように動揺した。

三その時、主はイザヤに言われた、「今、あなたとあなたの子シヤル・ヤシユブと共に出て行つて、布さらしの野へ行く大路に沿う上池の水道の端でアハズに会い、四彼に言いなさい、『氣をつけて、静かにし、恐れてはならない。レヂンとスリヤおよびレマリヤの子が激しく怒つても、これら二つの燃え残りのくすぶっている切り株のゆえに心を弱くしてはならない。五スリヤはエフライムおよびレマリヤの子と共にあなたにむかつて悪い事を企てて言う、六「われわれはユダに攻め上つて、これを脅し、われわれのためにこれを破り取り、タビエルの子をその王にしよう」と。

七主なる神はこう言われる、

この事は決して行われぬ、また起ることはない。

ハスリヤのかしらはダマスコ、

ダマスコのかしらはレヂンである。

(六十五年のうちにエフライムは敗れて、国をなさぬようになる。)

九エフライムのかしらはサマリヤ、

サマリヤのかしらはレマリヤの子である。

もしあなたがたが信じないならば、立つことはできない』。一〇主は再びアハズに告げて言われた、二「あなたの神、主に一つのしるしを求めよ、陰府のように深い所に、あるいは天のように高い所に求めよ」。三しかしアハズは言った、「わたしはそれを求めて、主を試みることをいたしません」。四そこでイザヤは言った、「ダビデの家よ、聞け。あなたがたは人を煩わすことを小さい事とし、またわが神をも煩わそうとするのか。五それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。六見よ、おとめがみごもつて男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。七その子が悪を捨て、善を選ぶことを知るころになつて、凝乳と、蜂蜜とを食べる。八それはこの子が悪を捨て、善を選ぶことを知る前に、あなたが恐れているふたりの王の地は捨てられるからである。九主はエフライムがユダから分れた時からこのかた、臨んだことのないような日をあなたと、あなたの民と、あなたの父の家とに臨ませられる。それはアッスリヤの王である」。一〇その日、主はエジプトの川々の源にいる、はえを招き、アッスリヤの地にいる蜂を呼ばれる。一一彼らはみな来て、険しい

谷、岩の裂け目、すべてのいばら、すべての牧場の上にとどまる。
 三〇その日、主は大川の向こうから雇ったかみそり、すなわち
 アツスリヤの王をもつて、頭と足の毛とをそり、また、ひげを
 も除き去られる。三十一その日、人は若い雌牛一頭と羊二頭を飼
 い、

三十二それから出る乳が多いので、凝乳を食べることができ、す
 べて国のうちに残された者は凝乳と、蜂蜜とを食べることがで
 きる。

三十三その日、銀一千シケルの価ある千株のぶどうの木があった所
 も、ことごとくいばらと、おどろの生える所となり、三十四いばら
 と、おどろとが地にはびこるために、人々は弓と矢をもつてそこ
 へ行く。三十五くわをもつて掘り耕したすべての山々にも、あなた
 は、いばらと、おどろとを恐れて、そこへ行くことができない。
 その地はただ牛を放ち、羊の踏むところとなる。

第八章

一主はわたしに言われた、「一枚の大きな札を取つて、その上に
 普通の文字で、『マヘル・シヤラル・ハシ・バズ』と書きなさい」。
 ニそこで、わたしは確かな証人として、祭司ウリヤおよびエベレ
 キヤの子ゼカリヤを立てた。三わたしは預言者の妻に近づくこと、
 彼女はみごもつて男の子を産んだ。その時、主はわたしに言わ

れた、「その名をマヘル・シヤラル・ハシ・バズと呼びなさい。四
 それはこの子がまだ『おとうさん、おかあさん』と呼ぶことを知
 らないうちに、ダマスコの富と、サマリヤのぶんどり品とが、
 アツスリヤ王の前に奪い去られるからである」。

五主はまた重ねてわたしに言われた、六「この民はゆるやかに流
 れるシロアの水を捨てて、レヂンとレマリヤの子の前に恐れく
 じける。七それゆえ見よ、主は勢いたけく、みなぎりわたる大川
 の水を彼らにむかつてせき入れられる。これはアツスリヤの王
 と、そのものもろの威勢とであつて、そのすべての支流にはびこ
 り、すべての岸を越え、ハユダに流れ入り、あふれみなぎつて、首
 にまで及ぶ。インマヌエルよ、その広げた翼はあまねく、あなた
 の国に満ちわたる」。

九もろもろの民よ、打ち破られて、驚きあわてよ。

遠き国々のものよ、耳を傾けよ。

腰に帯して、驚きあわてよ。

腰に帯して、驚きあわてよ。

一〇ともに計れ、しかし、成らない。

言葉を出せ、しかし、行われぬ。

神がわれわれと共におられるからである。

二主は強いみ手をもつて、わたしを捕え、わたしに語り、この
 民の道に歩まないように、さとして言われた、三「この民がす
 べて陰謀となえるものを陰謀となえてはならない。彼らの

恐れるものを恐れてはならない。またおののいてはならない。
 二三 あなたがたは、ただ万軍の主を聖として、彼をかしこみ、彼を恐れなければならない。一四 主はイスラエルの二つの家には聖所となり、またまたげの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、わなとなる。一五 多くの者はこれにつまずき、かつ倒れ、破られ、わなにかけられ、捕えられる」。
 一六 わたしは、あかしを一つにまとめ、教をわが弟子たちのうちに封じておこう。一七 主はいま、ヤコブの家に、み顔をかくしておられるとはいえ、わたしはその主を待ち、主を望みまつる。一八 見よ、わたしと、主のわたしに賜わった子たちとは、シオンの山にいます万軍の主から与えられたイスラエルのしるしであり、前ぶれである。一九 人々があなたがたにむかつて「さえざるように、さきやくように語る巫子および魔術者に求めよ」という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであらうか。二〇 ただ教とあかしとに求めよ。まことに彼らはこの言葉によつて語るが、そこには夜明けがない。二一 彼らはしえたげられ、飢えて国の中を経あるく。その飢えるとき怒りを放ち、自分たちの王、自分たちの神をのろい、かつその顔を天に向ける。二二 また地を見ると、見よ、悩みと暗きと、苦しみのやみとがあり、彼らは暗黒に追いやられる。

第九章

一 しかし、苦しみにあつた地にも、やみがなくなる。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地にはずかしめを与えられたが、後には海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤに光榮を与えられる。

二 暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。
 暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。

三 あなたが国民を増し、その喜びを大きくされたので、
 彼らは刈入れ時に喜ぶように、
 獲物を分かつ時に楽しむように、
 あなたの前に喜んだ。

四 これはあなたが彼らの負っているくびきと、

その肩のつえと、しえたげる者のむちとを、
 ミデアンの日になされたように折られたからだ。

五 すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、
 血にまみれた衣とは、

火の燃えくさとなつて焼かれる。

六 ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、
 ひとりの男の子がわれわれに与えられた。

まつりごとはその肩にあり、
 その名は、「靈妙なる議士、大能の神、

とこしえの父、平和の君」ととなえられる。

もそのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、
ダビデの位に座して、その国を治め、
今より後、とこしえに公平と正義とをもって

これを立て、これを保たれる。

万軍の主の熱心がこれをなされるのである。

ハ主はひと言をヤコブにおくり、

これをイスラエルの上にくだされる。

九すべてこの民、

エフラ임とサマリヤに住む者とは知るであろう。

彼らは高ぶり、心おこつて言う、

一〇「かわらがくずれても、

われわれは切り石をもつて建てよう。

くわの木が切り倒されても、

われわれは香柏をもつてこれにかえよう」と。

二それゆえ、主は敵を起して彼らを攻めさせ、

そのあだを奮い立たせられる。

二三東にスリヤびとあり、西にペリシテびとあり、

彼らは大口をあけてイスラエルを食い尽す。

それでも主の怒りはやまず、

なおも、そのみ手を伸ばされる。

二三しかもなお、この民は自分たちを撃つた者に帰らず、

万軍の主を求めない。

一四それゆえ、主はイスラエルから頭と尾と、
しゅろの枝と葦とを一日のうちに断ち切られる。

一五その頭とは、長老と尊き人、

その尾とは、偽りを教える預言者である。

一六この民を導く者は、これを迷わせ、

彼らに導かれる者は、のみ尽される。

一七それゆえ、主はその若き人々を喜ばれず、

そのみなしごと寡婦とをあわれまれない。

彼らはみな、不信仰であつて、悪を行う者、

すべての口は愚かな事を語るからである。

それでも主の怒りはやまず、

なおも、そのみ手を伸ばされる。

一八悪は火のように燃え、

いばらと、おどろとを食い尽し、

茂りあう林を焼き、煙の柱となつて巻きあがる。

一九万軍の主の怒りによつて地は焼け、

その民は火の燃えくさのようになり、

だれもその兄弟をあわれむ者がない。

二〇彼らは右手につかんでも、なお飢え、

左手で食べても飽くことがない。

おのおのその隣り人の肉を食う。

第一〇章

ニマナセはエフライムを、
エフライムはマナセを食くい、
彼らは共にユダを攻めせる。
それでも主の怒りはやまず、
なおも、そのみ手を伸のばされる。

一 わざわいなるかな、
不義ふぎの判決はんけつを下くだす者、暴虐ぼうぎやくの宣告せんこくを書かきしる者。
ニ 彼らは乏とほしい者の訴うったえを引き受うけず、
わが民のうちの貧しい者の権利けんりをはぎ、
寡婦かふの資産しさんを奪うばい、みなしごのものをかすめる。
三 あなたがたは刑罰けいばつの日がきたなら、
何をしようとするのか。
大風おおかぜが遠くから来るとき、
何をしようとするのか。
あなたがたはのがれていつて、
だれに助けを求めようとするのか。
また、どこにあなたがたの富を残のこそうとするのか。
四 ただ捕とらわれた者の中なかにがみ、
殺ころされた者の中に伏し倒れるのみだ。

それでも主の怒りはやまず、
なおも、そのみ手を伸のばされる。
五 ああ、アツスリヤはわが怒りのつえ、
わが憤りのむちだ。
六 わたしは彼をつかわして不信の国を攻め、
彼に命じてわが怒りの民を攻め、かすめ奪うばわせ、
彼らをちまたの泥のように踏みにじらせる。
七 しかし彼はそのようには思おもわず、
その心もそのようには考えず、
かえってその心は滅ほろぼすことを思い、
あまたの国々を倒たおそうとする。
八 彼は言う、「わが諸侯はみな王ではないか。
九 カルノはカルケミシのようではないか。
ハマテはアルバデのようではないか。
サマリヤはダマスコのようにではないか。
一〇 わが手は偶像に仕える国々に伸のびた。
その彫ほった像はエルサレムおよび
サマリヤのものにまさっていた。
一一 わたしはサマリヤとその偶像に行おこなったように、
エルサレムとその偶像に行わぬであらうか」。
一二 主がシオンの山とエルサレムになさうとすることを、ことごとくなし遂とげられた時、主はアツスリヤ王の無礼な言葉と、そ

の高^{たか}ぶりとを罰^{ばつ}せられる。二三彼は言^いう、

「わが手^ての力^{ちから}により、またわが知^ち恵^えによつて、

わたしはこれをなした。わたしは賢^{さか}いからである。

わたしはもろもろの民^{たみ}の境^{さかい}を除^{のぞ}き、

その財^{さい}宝^{ほう}を奪^{うば}った。

またわたしは雄^{おう}牛^しのように、

位^{くらい}に座^まする者^{もの}を引きおろした。

一四わが手^ては巢^すを取る^とるように、

もろもろの民^{たみ}の富^{とみ}を得^えた。

またわたしは人^{ひと}々が捨^すてられた卵^{たまご}を集^{あつ}めるように、

全^{ぜん}地^ちを取り集^{あつ}めた。

あるいは翼^{つばさ}を動^{うご}かし、あるいは口^{くち}を開^{ひら}き、

あるいはべちやくちや言^いう者^{もの}もなかつた」。

一五おのは、それを用^{もち}いて切^きる者^{もの}にむかつて、

自分^{じぶん}を誇^{ほこ}ることができようか。

のこぎりは、それを動^{うご}かす者^{もの}にむかつて、

みづから高^{たか}ぶることができようか。

これはあたかも、むちが自分^{じぶん}をあげる者^{もの}を動^{うご}かし、

つえが木^きでない者^{もの}をあけようとするのに等^{ひと}しい。

一六それゆえ、主^{しゅ}、万^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}は、

その肥^こえた勇^{ゆう}士^しの中に病^な氣^びを送^{おく}つて衰^{おとろ}えさせ、

その榮^{えい}光^{こう}の下^{した}に火^ひの燃^もえるような炎^{ほのお}を燃^もやされる。

一七イスラエルの光^{ひかり}は火^ひとなり、

その聖^{せい}者^{しや}は炎^{ほのお}となり、

そのいばらと、おどろとを一日^{いちにち}のうちに焼^やき滅^{ほろ}ぼす。

一八また、その林^{はやし}と土^{つち}肥^こえた田^た畑^{はた}の榮^{さか}えを、

魂^{たましい}も、からだも二つながら滅^{ほろ}ぼし、

病^やめる者^{もの}のやせ衰^{おとろ}える時^{とき}のようにされる。

一九その林^{はやし}の木^きの残^{のこ}りのものはわずかであつて、

わらべもそれを書^かきとめることができる。

二〇その日^ひにはイスラエルの残^{のこ}りの者^{もの}と、ヤコブの家^{いえ}の生^いき残^{のこ}つ

た者^{もの}とは、もはや自分^{じぶん}たちを撃^うつた者^{もの}にたよらず、真^ま心^{ごころ}をもつて

イスラエルの聖^{せい}者^{しや}、主^{しゅ}にたより、三残^{のこ}りの者^{もの}、すなわちヤコブ

の残^{のこ}りの者^{もの}は大^{たい}能^{のう}の神^{かみ}に帰^{かえ}る。三あなたの民^{たみ}イスラエルは海^{うみ}

の砂^{すな}のようであつても、そのうちに残^{のこ}りの者^{もの}だけが帰^{かえ}つて来る。

滅^{ほろ}びはすでに定^{さだ}まり、義^ぎであふれている。三三主^{しゅ}、万^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}は定^{さだ}

められた滅^{ほろ}びを全^{ぜん}地^ちに行^{おこな}われる。

二四それゆえ、主^{しゅ}、万^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}はこう言^いわれる、「シオンに住^すむわが

民^{たみ}よ、アツスリヤびとが、エジプトびとがしたように、むちを

もつてあなたを打^うち、つえをあけてあなたをせめても、彼^{かれ}らを恐^{おそ}

れてはならない。二五ただしばらくして、わが憤^{いきどお}りはやみ、わが

怒^{いか}りは彼^{かれ}らを滅^{ほろ}ぼすからである。二六万^{ばん}軍^{ぐん}の主^{しゅ}は、むかしミデア

ンびとをオレブの岩^{いわ}で撃^うつた時^{とき}のように、彼^{かれ}らにむかつて、む

ちをふるわれる。またそのつえを海^{うみ}の上にのばし、エジプトで

なされたように、それをあげられる。ニモその日には、彼の重荷はあなたの肩からおり、彼のくびきはあなたの首から離れる」。

彼はリンモンから上り、

ニハアイアテにきたり、ミグロンを過ぎ、

ミクマシでその行李をとどめ、

ニル渡しを過ぎて、ゲバに宿る。

ラマはおののき、サウルのギベアは逃げ去った。

ミ○ガリムの娘よ、声をあげて叫べ。

ライシよ、耳を傾けよ。

アナトテよ、彼に答えよ。

ニマデメナは逃げ去り、ゲビムの民は隠れ場を求めた。

ミ○この日は彼はノブに立ちとどまり、

シオンの娘の山、エルサレムの丘にむかつて、

その手を振る。

ミ○見よ、主、万軍の主は、

恐ろしい力をもって枝を切りおろされる。

たけの高いものも切り落され、

そびえ立つものは低くされる。

三四主はおのをもつて茂りあう林を切られる。

みごとな木の茂るレバノンも倒される。

第一章

一 エツサイの株から一つの芽が出、

その根から一つの若枝が生えて実を結び、

ニその上に主の霊がとどまる。

これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、

主を知る知識と主を恐れる霊である。

三 彼は主を恐れることを楽しみとし、

その目の見るところによつて、さばきをなさず、

その耳の聞るところによつて、定めをなさず、

四 正義をもつて貧しい者をさばき、

公平をもつて国のうちの

柔和な者のために定めをなし、

その口のむちをもつて国を撃ち、

そのくちびるの息をもつて悪しき者を殺す。

五 正義はその腰の帯となり、

忠信はその身の帯となる。

六 おおかみは小羊と共にやどり、

ひようは子やぎと共に伏し、

子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、

小さいわらべに導かれ、

七 雌牛と熊とは食い物を共にし、

牛の子と熊の子と共に伏し、

ししは牛のようにわらを食い、

ハ乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、

乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。

九彼らはわが聖なる山のどこにおいても、

そこなうことなく、やぶることがない。

水が海をおおっているように、

主を知る知識が地に満ちるからである。

一〇その日、エッサイの根が立つて、もろもろの民の旗となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある。

二その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者をアツスリヤ、エジプト、パテロス、エチオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海沿いの国々からあがなわれる。

二三主は国々のために旗をあげて、

イスラエルの追いやられた者を集め、

ユダの散らされた者を地の四方から集められる。

二四エフライムのねたみはうせ、

ユダを悩ます者は断たれ、

エフライムはユダをねたまず、

ユダはエフライムを悩ますことはない。

二五しかし彼らは西の方ペリシテびとの肩に

襲いかかり、

相共に東の民をかすめ、

その手をエドムおよびモアブに伸べ、

アンモンの人々をおのれに従わせる。

二五主はエジプトの海の舌をからし、

川の上に手を振って熱い風を吹かせ、

その川を打って七つの川となし、

くつをぬらさないで渡らせられる。

二六その民の残れる者のために

アツスリヤからの大路があり、

昔イスラエルがエジプトの国から

上ってきた時にあつたようになる。

第二章

一その日あなたは言う、

「主よ、わたしはあなたに感謝します。

あなたは、さきにわたしにむかつて怒られたが、

その怒りはやんで、わたしを慰められたからです。

二見よ、神はわが救である。

わたしは信頼して恐れることはない。

主なる神はわが力、わが歌であり、

わが救となられたからである」。

三 あなたがたは喜びをもつて、救の井戸から水をくむ。四 その日、あなたがたは言う、

「主に感謝せよ。

そのみ名を呼べ。

そのみわざをもうもろの民の中につたえよ。

そのみ名のあがむべきことを語りつげよ。

五 主をほめうたえ。

主はそのみわざを、みごとになし遂げられたから。

これを全地に宣べ伝えよ。

ハ シオンに住む者よ、声をあげて、喜びうたえ。

イスラエルの聖者はあなたがたのうちで

大いなる者だから」。

第二三章

一 アモツの子イザヤに示されたバビロンについての託宣。

二 あなたがたは木のない山に旗を立て、

声をあげて彼らを招き、

手を振って彼らを貴族の門に、はいらせよ。

三 わたしはわが怒りのさばきを行うために

聖別した者どもに命じ、

わが勇士、わが勝ち誇る者どもを招いた。

四 聞け、多くの民のような騒ぎ声が山々に聞える。

聞け、もうもろの国々、寄りつどえる

もうもろの国民のざわめく声が聞える。

これは万軍の主が

戦いのために軍勢を集められるのだ。

五 彼らは遠い国から、天の果から来る。

これは、主とその憤りの器で、

全地を滅ぼすために来るのだ。

六 あなたがたは泣き叫べ。主の日が近づき、

滅びが全能者から来るからだ。

七 それゆえ、すべての手は弱り、

すべての人の心は溶け去る。

八 彼らは恐れおののき、苦しみと悩みに捕えられ、

子を産まんとする女のようにもだえ苦しみ、

互に驚き、顔を見あわせ、

その顔は炎のようになる。

九 見よ、主の日が来る。

残忍で、憤りと激しい怒りをもつてこの地を荒し、

その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る。

一〇 天の星とその星座とはその光を放たず、

太陽は出ても暗く、

月はその光を輝かさな^{ひかりかがや}い。

二 わたしはその惡^{あく}のために世^よを罰^{ばつ}し、

その不義^{ふぎ}のために惡^{わる}い者^{もの}を罰^{ばつ}し、

高^{たか}ぶる者^{もの}の誇^{ほこり}をとどめ、

あらぶる者^{もの}の高慢^{こうまん}を低^{ひく}くする。

三 わたしは人^{ひと}を精金^{せいきん}よりも、

オフルのこがねよりも少^{すく}なくする。

三 それゆえ、万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}の憤^{いきどお}りにより、

その激^{はげ}しい怒^{いか}りの日^ひに、

天^{てん}は震^{ふる}い、地^ちは揺^ゆり動^{うご}いて、その所^{ところ}をはなれる。

四 彼^{かれ}らは追^おわれた、かもしかのように、

あるいは集^{あつ}める者^{もの}のな^{ひじ}い羊^{ひつじ}のようになつて、

おのおの自^じ分の民^{たみ}に歸^{かえ}り、

自^じ分の国^{くに}に逃^にげて行^いく。

五 すべて見^みいだされる者^{もの}は刺^さされ、

すべて捕^{とら}えられる者^{もの}はつるぎによつて倒^{たお}され、

六 彼^{かれ}らのみどりこはその目^めの前^{まえ}で投^なげ碎^{くだ}かれ、

その家^{いえ}はかすめ奪^{うば}われ、その妻^{つま}は汚^{けが}される。

七 見^みよ、わたしは、しろがねをも顧^{かへり}みず、

こがねをも喜^{よろこ}ばないメデアびとを起^{おこ}して、

彼^{かれ}らにむかわせる。

一八 彼^{かれ}らの弓^{ゆみ}は若^{わか}い者^{もの}を射^{いこ}殺^{ころ}し、

腹^{はら}の実^みをあわれむことなく、

幼^{おさな}子^こを見^みて、惜^おしむことがない。

一九 国^{くに}々の誉^{ほまれ}であり、

カルデヤびとの誇^{ほこり}である麗^{うるわ}しいバビロンは、

神^{かみ}に滅^{ほろ}ぼされたソドム、ゴモラのようになる。

二〇 ここにはな^ながく住^すむ者^{もの}が絶^たえ、

世^よ々にいたるまで住^すみつ^つく者^{もの}がな^なく、

アラビヤびともそこに天幕^{てんまく}を張^はらず、

羊飼^{ひつじかい}もそこに群^むれを伏^ふさせることがない。

二一 ただ、野^のの獸^{けもの}がそこに伏^ふし、

ほえる獸^{けもの}がその家^{いえ}に満^みち、

だちようがそこに住^すみ、

鬼神^{きしん}がそこに踊^{おど}る。

三二 ハイエナはその城^{しろ}の中^{なか}で鳴^なき、

山犬^{やまいぬ}は樂^{たの}しい宮殿^{きやうでん}でほえる。

その時^{とき}の來^きるのは近^{ちか}い、

その日^ひは延^のびることがない。

第一四章

一 主^{しゅ}はヤコブをあわれみ、イスラエルを再^{ふた}び選^{えら}んで、これをおの
れの地^ちに置^おかれる。異邦^{いほう}人^{じん}はこれに加^{くわ}わつて、ヤコブの家^{いえ}に結^{むす}

びつらなり、ニもろもろの民は彼らを連れてその所に導いて来る。そしてイスラエルの家は、主の地で彼らを男女の奴隷とし、さきに自分たちを捕虜にした者を捕虜にし、自分たちをしえたげた者を治める。

三主があなたの苦勞と不安とを除き、またあなたが服した苦役を除いて、安息をお与えになるとき、四あなたはこのあざけりの歌をとえ、バビロンの王をのしつて言う、

「あの、しえたげる者は全く絶えてしまった。

あの、おごる者は全く絶えてしまった。

五主は悪い者のつえと、

つかさびとの笏を折られた。

六彼らは憤りをもつてもろもろの民を

絶えず撃つては打ち、

怒りをもつてもろもろの国を治めても、

そのしえたげをとどめる者がなかった。

七全地はやすみを得、穏やかになり、

ことごとく声をあげて歌う。

八いとすぎおよびレバノンの香柏でさえも

あなたのゆえに喜んで言う、

『あなたはすでに倒れたので、

もはや、きこりが上つてきて、

われわれを攻めることはない』。

九下の陰府はあなたのために動いて、あなたの来るのを迎え、地のもろもろの指導者たちの亡霊をあなたのために起し、

国々のもろもろの王を

その王座から立ちあがらせる。

一〇彼らは皆あなたに告げて言う、

『あなたもまたわれわれのように弱くなった、

あなたもわれわれと同じようになった』。

一一あなたの榮華とあなたの琴の音は

陰府に落ちてしまった。

うじはあなたの下に敷かれ、

みみずはあなたをおおっている。

一二黎明の子、明けの明星よ、

あなたは天から落ちてしまった。

もろもろの国を倒した者よ、

あなたは切られて地に倒れてしまった。

一三あなたはさきに心のうちに言った、

『わたしは天にのぼり、

わたしの王座を高く神の星の上におき、

北の果なる集会の山に座し、

一四雲のいただきにのぼり、

いと高き者のようになろう。』

一五しかしあなたは陰府に落され、
穴の奥底に入れられる。

一六あなたを見る者はつくづくあなたを見、
あなたに目をとめて言う、

『この人は地を震わせ、国々を動かし、

一七世界を荒野のようにし、その都市をこわし、
捕えた者をその家に

解き帰さなかつた者であるのか。』

一八もろもろの国の王たちは皆
尊いさまで、自分の墓に眠る。

一九しかしあなたは忌みきらわれる月足らぬ子のように
墓のそとに捨てられ、

つるぎで刺し殺された者でおわれ、
踏みつけられる死体のように穴の石に下る。

二〇あなたは自分の国を滅ぼし、
自分の民を殺したために、

彼らと共に葬られることはない。
どうか、悪を行う者の子孫は

とこしえに名を呼ばれることのないように。

二一先祖のよこしまのゆえに、
その子孫のためにほふり場を備えよ。

これは彼らが起つて地を取り、
世界のおもてに町々を

満たすことのないためである。』

二三万軍の主は言われる、「わたしは立つて彼らを攻め、バビロン
からその名と、残れる者、その子と孫とを断ち滅ぼす、と主は言
う。三わたしはこれをはりねずみのすみかとし、水の池とし、
滅びのほうきをもって、これを払い除く、と万軍の主は言う。』

二四万軍の主は誓つて言われる、

「わたしが思つたように必ず成り、
わたしが定めたように必ず立つ。

二五わたしはアッスリヤびとをわが地で打ち破り、
わが山々で彼を踏みにじる。

こうして彼が置いたくびきは
イスラエルびとから離れ、

彼が負わせた重荷は
イスラエルびとの肩から離れる。』

二六これは全地について定められた計画である。
これは国々の上に伸ばされた手である。

二七万軍の主が定められるとき、
だれがそれを取り消すことができるのか。

その手を伸ばされるとき、
だれがそれを引きもどすことができるのか。

第二十五章

ーモアブについての託宣。

二八 アハズ王の死んだ年にこの託宣があつた、
 二九 「ペリシテの全地よ、あなたを打つたむちが
 折られたことを喜んではいならない。
 へびの根からまむしが出、
 その実は飛びかけるへびとなるからだ。
 三〇 いと貧しい者は食を得、
 乏しい者は安らかに伏す。
 しかし、わたしはききんをもつて
 あなたの子孫を殺し、
 あなたの残れる者を滅ぼす。
 三一 門よ、泣きわめけ。町よ、叫べ。
 ペリシテの全地よ、恐れあまり消えうせよ、
 北から煙が来るからだ。
 その隊列からは、ひとりも脱落する者はない」。
 三二 その国の使者たちになんと答えようか。
 「主はシオンの基をおかれた、
 その民の苦しむ者は
 この中に避け所を得る」と答えよ。

アルは一夜のうちに荒されて、モアブは滅びうせ、
 キルは一夜のうちに荒されて、モアブは滅びうせた。
 ニデボンの娘は高き所にのぼって泣き、
 モアブはネボとメデバの上で嘆き叫ぶ。
 おのおのその頭をかぶるにし、
 そのひげをことごとくそつた。
 三 彼らはそのちまたで荒布をまとい、
 その屋根または広場で、みな泣き叫び、
 四 ヘシボンとエレアレとは叫び、
 その声はヤハズまで聞える。
 それゆえ、モアブの兵士は声をあげ、
 その魂はおののく。
 五 わが心はモアブのために叫び呼ばれる。
 その落人はゾアルおよび
 エグラテ・シリシヤにのがれ、
 泣きながらルヒテの坂をのぼり、
 ホロナイムの道で滅びの叫びをあげる。
 六 ニムリムの水はかわき、
 草は枯れ、苗は消えて、青い物はない。
 セそれゆえ、彼らはその得た富と、
 そのたくわえた物とを携えて、柳の川をわたる。
 ハ その叫びの声はモアブの境をめぐり、

第二十六章

その嘆きの声はエグライムにいたり、
またその嘆きの声はベエル・エリムにいたる。
カデボンの水は血で満ちる。
わたしはデボンの上にさらに災を加え、
モアブのがれた者と
この地の残った者と共に、ししを送る。

一 彼らはセラから荒野の道によつて
小羊をシオンの娘の山に送り、
国のつかさに納めた。
ニ モアブの娘らはアルノンの渡しで、
さまよう鳥のように、
巢を追われたひなのようである。
三 「相はかつて、事を定めよ。
真昼の中でも、あなたの陰を夜のようにし、
さすらい人を隠し、
のがれて来た者をわたさず、
四 モアブのさすらい人を、あなたのうちにやどらせ、
彼らの避け所となつて、滅ぼす者からのがれさせよ。
しえたげる者がなくなり、滅ぼす者が絶え、

踏みにじる者が地から断たれたとき、
五 一つの玉座がいつくしみによつて堅く立てられ、
ダビデの幕屋にあつて、
さばきをなし、公平を求め、
正義を行うに、すみやかなる者が
真実をもつてその上に座する」。
六 われわれはモアブの高ぶりのことを聞いた、
その高ぶることは、はなはだしい。
われわれはその誇と、高ぶりと、
そのおごりとのことを聞いた、
その自慢は偽りである。
七 それゆえ、モアブは泣き叫べ、
民はみなモアブのために泣き叫べ。
全く撃ちのめされて、
キルハレセテの干ぶどうのために嘆け。
ハ ヘシボンの畑と、
シブマのぶどうの木とは、しほみ衰えた。
国々のもろもろの主が、
その枝を打ち落したからである。
その枝はさきにはヤゼルまでいたり、
荒野にまではびこり、
そのつるは広がって海を越えた。

第十七章

九それゆえ、わたしはヤゼルと共に、
シブマのぶどうの木のために泣く。

ヘシボンよ、エレアレよ、

わたしは涙をもってあなたを浸す。

ときの声が、あなたの果実と、

あなたの収穫の上にふりかかってくるからである。

一〇喜びと楽しみとは土肥えた畑から取り去られ、

ぶどう畑には歌うことなく、

喜び呼ばわることなく、

酒ぶねを踏んで酒を絞る者なく、

ぶどうの収穫を喜ぶ声はやんだ。

一二それゆえ、わが魂はモアブのために、

わが心はキルハレスのために、

琴のように鳴りひびく。

一三モアブが高き所に出て、おのれを疲れさせ、またその聖所に

きて祈っても、効果はない。

一四これは主がさきにモアブについて語られたみ言葉である。一

四しかし今、主は語って言われる、「モアブの栄えはその大いなる

群衆にもかかわらず、雇人の年とひとしく三年のうちに、

はすかしめを受け、残れる者はまことに少なく、力がない」。

一ダマスコについての託宣。

見よ、ダマスコは町の姿を失って、荒塚となる。

二その町々とはどこしえに捨てられ、

家畜の群れの住む所となつて、伏しやすむが、

これを脅かす者はない。

三エフライムのとりではすたり、

ダマスコの主権はやみ、

スリヤの残れる者は、イスラエルの子らの

栄光のように消えうせると

万軍の主は言われる。

四その日、ヤコブの栄えは衰え、

その肥えたる肉はやせ、

五あたかも刈入れ人がまだ刈らない麦を集め、

かいなをもつて穂を刈り取ったあとのように、

レバイムの谷で穂を拾い集めたあとのようになる。

六オリブの木を打つとき、

二つ三つの実をこずえに残し、

あるいは四つ五つを

みのり多き木の枝に残すように、

とり残されるものがあると

イスラエルの神、主は言われる。

その日、人々はその造り主を仰ぎのぞみ、イスラエルの聖者に
 目をとめ、ハおのれの手^てのわざである祭壇^{いだん}を仰ぎのぞまず、おの
 れの指^{ゆび}が造つたアシラ像^{さう}と香^{かう}の祭壇^{さいだん}とに目をとめない。

九その日、彼らの堅固な町々は昔イスラエルの子らのゆえに捨て去られたヒビびとおよびアモリびとの荒れ跡のように荒れ地になる。

「これはあなたがたが自分の救の神を忘れ、
自分の避け所なる岩を心にとめなかったからだ。」

それゆえ、あなたがたは美しい植物を植え、
異なる神の切り枝をさし、

二その植うえた日ひにこれを成長せいちようさせ、
そのまいた朝あさにこれを花咲はなさかせても、

その收穫しゆうかくは悲かなしみと、いやしがたい苦くるしみの日ひにとび去さる。

二三 ああ、多くの民はなりどよめく、
海うみのなりどよめくように、彼かれらはなりどよめく。

ああ、もろもろの国くにはなりとどろく、
 おおみず大水のなりとどろくように、
 彼かれらはなりとどろく。

二三もろもろの国は多くの水の
なりとどろくように、なりとどろく。

しかし、神は彼らを懲しめられる。

第一章

彼らは遠くのがれて、

風かぜに吹ふき去さられる山やまの上うへのもみがらのように、
また暴風ぼうふうにうず巻まくちりのように追おいやられる。

一四 夕暮ゆうぐれには、見みよ、恐おそれがある。

まだ夜の明けないうちに彼らはうせた。

これはわれわれをかすめる者の受くべき分、われわれを奪う者の引くべきくじである。

一 ああ、エチオピアの川々かわがわのかなたなる

ぶんぶんとはおと
ニこの国は葦の船を水にうかべ、

ナイル川かわによつて使者ししやと
とく走る使者ししやよ、行け。

川々の分れる国の、たけ高く、膚のなめらかな民、
遠近に恐れられる民、

力強く、戦いに勝つ民へ行け。
ミすべて世におけるもの、地に住むものよ、

山やまの上うえに旗はたの立たつときは見みよ、
ラッパの鳴なりひびくときは聞きけ。

四 主^{しゅ}はわたしにこう言^いわれた、
 ラッパの鳴^なりひびくときは聞^きけ。

第一章

「晴れわたった日光の熱のように、刈入れの熱むして露の多い雲のように、わたしは静かにわたしのすまいから、ながめよう」。

五刈入れの前、花は過ぎてその花がぶどうとなつて熟すとき、彼はかまをもつて、つるを刈り、枝を切り去る。

六彼らはみな山の猛禽と、地の獣とに捨て置かれる。

猛禽はその上で夏を過ごし、地の獣はみなその上で冬を過ごす。

七その時、川々の分れる国のたけ高く、膚のなめらかな民、遠くの者にも近くの者にも恐れられる民、力強く、戦いに勝つ民から

万軍の主はささげる贈り物を携えて、万軍の主のみ名のある所、シオンの山に来る。

一エジプトについての託宣。
見よ、主は速い雲に乗つて、エジプトに来られる。
エジプトのもろもろの偶像は、み前に震えおののき、

エジプトびとの心は彼らのうちに溶け去る。
ニわたしはエジプトびとを奮立たせて、エジプトびとに逆らわせる。
彼らはおのおのその兄弟に敵して戦い、おのおのその隣に敵し、町は町を攻め、国は国を攻める。
三エジプトびとの魂は、彼らのうちにうせて、むなしくなる。
わたしはその計りごとを破る。
かれは偶像および魔術師、巫子および魔法使に尋ね求める。
四わたしはエジプトびとをきびしい主人の手に渡す、荒々しい王が彼らを治めると、主、万軍の主は言われる。
五ナイルの水はつき、川はかれてかわく。
六またその運河は臭いにおいを放ち、エジプトのナイルの支流はややに減つてかわき、葦とよしとは枯れはてる。
七ナイルのほとり、ナイルの岸には裸の所があり、ナイルのほとりにまいた物はことごとく枯れ、散らされて、うせ去る。
八漁夫は嘆き、

すべてナイルにつりをたれる者は悲しみ、
網を水のおもてにうつ者は衰える。

練つた麻で物を作る者と、
白布を織る者は恥じる。

○国の柱たる者は砕かれ、
すべて雇われて働く者は嘆き悲しむ。

ニゾアンの君たちは全く愚かであり、
パロの賢い議官らは愚かな計りごとをなす。
あなたがたはどうしてパロにむかつて

「わたしは賢い者の子、いにしえの王の子です」と
言うことができようか。

ニあなた達の賢い者はどこにおるか。

彼らをして、

万軍の主がエジプトについて定められたことを
あなたに告げ知らしめよ。

ニゾアンの君たちは愚かとなり、

メンピスの君たちは欺かれ、

エジプトのもろもろの部族の隅の石たる彼らは、
かえってエジプトを迷わせた。

ニ主は曲つた心を彼らのうちに混ぜられた。

彼らはエジプトをして、

すべてその行うことに迷わせ、

あたかも酔つた人の物吐くときに

よろめくようにさせた。

ニエジプトに対しては、頭あるいは尾、

しゅろの枝あるいは葦が

共になしうるわざはない。

ニその日、エジプトびとは女のようになり、万軍の主の彼らの
上に振り動かされるみ手の前に恐れおののく。ニエジプトの地は、
エジプトびとに恐れられ、ユダについて語り告げることが聞く
エジプトびとはみな、万軍の主がエジプトびとにむかつて定め
られた計りごとゆえに恐れる。

ニその日、エジプトの地にカナンの国ことばを語り、また万軍
の主の誓いを立てる五つの町があり、その中の一つは太陽の町
となえられる。

ニその日、エジプトの国の中に主をまつる一つの祭壇があり、
その境に主をまつる一つの柱がある。ニこれはエジプトの国
で万軍の主の、しるしとなり、あかしとなる。彼らがしえたげる
者のゆえに、主に叫び求めるとき、主は救う者をつかわして、彼
らを守り助けられる。ニ主はご自分をエジプトびとに知らせ
られる。その日、エジプトびとは主を知り、犠牲と供え物とを
もって主に仕え、主に誓願をたててこれを果す。ニ主はエジプ
トを撃たれる。主はこれを撃たれるが、またいやされる。それ
ゆえ彼らは主に帰る。主は彼らの願いをいれて、彼らをいやさ

れる。

三三その日、エジプトからアッスリヤに通う大路があつて、アッスリヤびとはエジプトに、エジプトびとはアッスリヤに行き、エジプトびとはアッスリヤびとと共に主に仕える。

三四その日、イスラエルはエジプトとアッスリヤと共に三つ相並び、全地のうちで祝福をうけるものとなる。三五万軍の主は、これを祝福して言われる、「さいわいなるかな、わが民なるエジプト、わが手のわざなるアッスリヤ、わが嗣業なるイスラエル」と。

第二〇章

一アッスリヤの王サルゴンからつかわされた最高司令官がアシドドに来て、これを攻め、これを取った年、――ニその時に主はアモツの子イザヤによつて語つて言われた、「さあ、あなたの腰から荒布を解き、足からくつを脱ぎなさい」。そこでイザヤはそれのようにし、裸、はだしで歩いた。――三主は言われた、「わがしもベイザヤは三年の間、裸、はだしで歩き、エジプトとエチオピアに対するしるしとなり、前ぶれとなつたが、四このようにエジプトびとのとりことエチオピアびとの捕われ人とは、アッスリヤの王に引き行かれて、その若い者も老いた者もみな裸、はだしで、しりをあらわし、エジプトの恥を示す。五彼らはその頼

みとしたエチオピアのゆえに、その誇としたエジプトのゆえに恐れ、かつ恥じる。六その日には、この海べに住む民は言う、『見よ、われわれが頼みとした国、すなわちわれわれのがれて行つて助けを求め、アッスリヤ王から救い出されようとした国はすでにこのとおりである。われわれはどうしてのがれることができようか』と。」

第二一章

一海の荒野についての託宣。

つむじ風がネゲブを吹き過ぎるように、荒野から、恐るべき地から、来るものがある。

ニわたしは一つのきびしい幻を示された。

かすめ奪う者はかすめ奪い、

滅ぼす者は滅ぼす。

エラムよ、のぼれ、メディアよ、囲め。

わたしはすべての嘆きをやめさせる。

三それゆえ、わが腰は激しい痛みに満たされ、

出産に臨む女の苦しみのような苦しみが

わたしを捕えた。

わたしは、かがんで聞くことができず、

恐れおののいて見ることができない。

四 わが心はみだれ惑い、

わななき恐れること、はなはだしく、

わたしのあこがれたたそがれは

変つておののきとなつた。

五 彼らは食卓を設け、

じゅうたんで敷いて食ひ飲みする。

もろもろの君よ、立つて、盾に油をぬれ。

六 主はわたしにこう言われた、

「行つて、見張びとをおき、

その見るところを告げさせよ。

七 馬に乗つて二列に並んだ者と、ろばに乗つた者と、

らくだに乗つた者とを彼が見るならば、

耳を傾けてつまびらかに聞かせよ」。

八 その時、見張びとは呼ばわつて言つた、

「主よ、わたしがひねもすやぐらに立ち、

夜もすがらわが見張所に立つていると、

九 見よ、馬に乗つて二列に並んだ者がここに來ます」。

彼は答えて言つた、

「倒れた、バビロンは倒れた、

その神々の像はことごとく打ち砕かれて

地に伏した」。

一〇 ああ、踏みにじられたわが民、わが打ち場の子よ、

イスラエルの神、万軍の主から

わたしが聞いたところのものを

あなたがたに告げる。

二 ドマについての託宣。

セイルからわたしに呼ばれる者がある、

「夜回りよ、今は夜のなんどきですか、

夜回りよ、今は夜のなんどきですか」。

三 夜回りは言う、

「朝がきます、夜もまたきます。

もしあなたがたが聞こうと思うならば聞きなさい、

また來なさい」。

三 アラビヤについての託宣。

デダンびとの隊商よ、

あなたがたはアラビヤの林にやどる。

一四 テマの地に住む民よ、

水を携えて、かわいた者を迎え、

パンをもつて、逃げのがれた者を迎えよ。

一五 彼らはつるぎを避け、抜いたつるぎを避け、

張つた弓を避け、また激しい戦いを避けて、

逃げてきたからである。

一六 主はわたしにこう言われた、「雇人の年期のように一年以内

にケダルのすべての榮華はつきはてる。一七 ケダルの子らの

勇士で、射手の残る者は少ない」。これはイスラエルの神、主が語られたのである。

第二二章

一 幻の谷についての託宣。

あなたがたはなぜ、みな屋根にのぼったのか。

二 叫び声で満ちている者、

騒がしい都、喜びに酔っている町よ。

あなたのうちの殺された者は

つるぎで殺されたのではなく、

また戦いに倒れたのでもない。

三 あなたのつかさたちは皆共にのがれて行つたが、

弓を捨てて捕えられた。

彼らは遠く逃げて行つたが、

あなたのうちの見つかった者はみな捕えられた。

四 それゆえ、わたしは言つた、

「わたしを顧みてくれるな、

わたしはいたく泣き悲しむ。

わが民の娘の滅びのために、

わたしを慰めようと努めてはならない」。

五 万軍の神、主は幻の谷に

騒ぎと、踏みにじりと、混乱の日をこさせられる。

城壁はくずれ落ち、叫び声は山に聞える。

六 エラムは籐を負い、

戦車と騎兵とをもつてきたり、

キルは盾をあらわした。

七 あなたの最も美しい谷は戦車で満ち、

騎兵はもろもろの門にむかつて立つた。

八 ユダを守るおおいに取り除かれた。

その日あなたは林の家の武具を仰ぎ望んだ。九 またあなたがたはダビデの町の破れの多いのを見、下の池の水を集め、一〇 エルサレムの家を数え、またその家をこわして城壁を築き、一一 つの貯水池を二つの城壁の間に造つて古池の水をひいた。しかしあなたがたはこの事をなされた者を仰ぎ望まず、この事を昔から計画された者を顧みなかった。

二 その日、万軍の神、主は

泣き悲しみ、頭をかぶるにし、

荒布をまとうことを命じられたが、

三 見よ、あなたがたは喜び樂しみ、

牛をほふり、羊を殺し、

肉を食ひ、酒を飲んで言う、

「われわれは食ひ、かつ飲もう、

明日は死ぬのだから」。

一四 万軍の主はみずからわたしの耳に示された、
「まことに、この不義はあなたがたが死ぬまで、

ゆるされることはない」と

万軍の神、主は言われる。

一五 万軍の神、主はこう言われる、「さあ、王の家をつかさどるこの執事セブナに行つて言いなさい、一六『あなたはここになんの係わりがありますか。あなたはだれの縁故でここに自分のために墓を掘ったのですか。あなたは高い所に墓を掘り、岩をうがつて自分のためにすみかをつつた。一七 強い人よ、見よ、主はあなたを激しくなげ倒される。主はあなたを堅くつかまえ、一八 ぐるぐるまわして、まりのように広々とした地に投げられる。主人の家の恥となる者よ、あなたはそこで死に、あなたの華麗な車はそこに残る。一九 わたしは、あなたをその職から追い、その地位から引きおろす。二〇 その日、わたしは、わがしもべヒルキヤの子エリアキムを呼んで、二一 あなたの衣を着せ、あなたの帯をしめさせ、あなたの権力を彼の手にゆだねる。彼はエルサレムの民とユダの家との父となる。二二 わたしはまたダビデのかぎを彼の肩に置く。彼が開けば閉じる者なく、彼が閉じれば開く者はない。二三 わたしは彼を堅い所に打つたきぎのようにする。そして彼はその父の家の誉の座となり、二四 その父の家のすべての重さは彼の上にかかる。すなわちその子、その孫およびすべての小さい器、鉢からすべてののびんにいたるまでみな、

彼の上にかかる』。二五 万軍の主は言われる、「その日、堅い所に打つたきぎは抜け、切られて落ちる。その上にかかっている荷もまた取り去られる」と主は語られた。

第二章

一 ツロについての託宣。

タルシシのもろもろの船よ、泣き叫べ、

ツロは荒れすたれて、家なく、

船舶まりする港もないからだ。

この事はクプロの地から彼らに告げ知らせられる。

ニ海べに住む民よ、

シドンの商人よ、もだせ、

あなたがたの使者は海を渡り、

大なる水の上にあつた。

ミツロの収入はシホルの穀物、

ナイル川の収穫であつた。

ツロはもろもろの国びとの商人であつた。

四 シドンよ、恥じよ、

海は言つた、海の城は言う、

「わたしは苦しまず、また産まなかつた。

わたしは若い男子を養わず、

また処女を育てなかつた」。

五この報道がエジプトに達するとき、
彼らはツロについての報道によって、いたく苦しむ。

六タルシシに渡れ、

海べに住む民よ、泣き叫べ。

七これがその起源も古い町、

自分の足で移り、速くに移住した町、

あなたがたの喜び誇る町なのか。

ハツロにむかつてこれを定めたのはだれか。

ツロは冠を授けた町、

その商人は君たち、

その貿易業者は地の尊い人々であつた。

九万軍の主はすべての栄光の誇を汚し、

地のすべての尊い者はずかしめるために

これを定められたのだ。

一〇タルシシの娘よ、

ナイル川のようにおのが地にあふれよ。

もはや束縛するものはない。

一一主はその手を海の上に伸べて

国々を震い動かされた。

主はカナンについて詔を出し、

そのとりでをこわされた。

一二主は言われた、

「しえたげられた処女シドンの娘よ、

あなたはもはや喜ぶことはない。

立つて、クプロに渡れ、

そこでもあなたは安息を得ることはない。

一三カルデアびとの国を見よ、アッスリヤではなく、この民がツ

ロを野の獣のすみかに定めた。彼らはやぐらを建て、もろもろ

の宮殿をこわして荒塚とした。

一四タルシシのもろもろの船よ、泣き叫べ、

あなたがたのとりでは荒れすたれたから。

一五その日、ツロはひとりの王のながらえる日と同じく七十年の

間忘れられ、七十年終つて後、ツロは遊女の歌のようになる、

一六「忘れられた遊女よ、

琴を執つて町を經めぐり、

巧みに弾じ、多くの歌をうたつて、

人に思い出されよ」。

一七七十年終つて後、主はツロを顧みられる。ツロは再び淫行の

価を得て、地のおもてにある世のすべての国々と姦淫を行い、一

ハその商品とその価とは主にささげられる。これはたくわえら

れることなく、積まれることなく、その商品は主の前に住む者

のために豊かな食物となり、みごとな衣服となる。

第二章

一 見よ、主はこの地をむなしくし、
これを荒れすたれさせ、これをくつがえして、
その民を散らされる。
二 そして、その民も祭司もひとしく、
しもべも主人もひとしく、
はしためも主婦もひとしく、
買う者も売る者もひとしく、
貸す者も借りる者もひとしく、
債権者も債務者もひとしく、
この事にあう。
三 地は全くむなしくされ、全くかすめられる。
主がこの言葉を告げられたからである。
四 地は悲しみ、衰え、
世はしおれ、衰え、
天も地と共にしおれはてる。
五 地はその住む民の下に汚された。
これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、
とこしえの契約を破ったからだ。
六 それゆえ、のろいは地をのみつくし、
そこに住む者はその罪に苦しみ、

また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。
七 新しいぶどう酒は悲しみ、ぶどうはしおれ、
心の楽しい者もみな嘆く。
八 鼓の音は静まり、
喜ぶ者の騒ぎはやみ、
琴の音もまた静まった。
九 彼らはもはや歌をうたつて酒を飲まず、
濃き酒はこれを飲む者に苦くなる。
一〇 混乱せる町は破られ、
すべての家は閉ざされて、はいることができない。
二 ちまたには酒の不足のために叫ぶ声があり、
すべての喜びは暗くなり、
地の楽しみは追いやられた。
二 三 町には荒れすたれた所のみ残り、
その門もこわされて破れた。
三 地のうちで、もろもろの民のなかで残るものは、
オリブの木の打たれた後の実のように、
ぶどうの収穫の終つた後にその採り残りを
集めるときになる。
四 彼らは声をあげて喜び歌う。
主の威光のゆえに、西から喜び呼ばれる。
一五 それゆえ、東で主をあがめ、

海沿いの国々でイスラエルの神、主の名をあがめよ。

一六 われわれは地の果から、さんびの歌を聞いた、
「栄光は正しい者にある」と。

しかし、わたしは言う、「わたしはやせ衰える、

わたしはやせ衰える、わたしはわざわいだ。

欺く者はあざむき、

欺く者は、はなはだしくあざむく」。

一七 地に住む者よ、

恐れと、落し穴と、わなとはあなたの上にある。

一八 恐れの声のをがれる者は落し穴に陥り、

落し穴から出る者はわなに捕えられる。

天の窓は開け、地の基が震い動くからである。

一九 地は全く砕け、

地は裂け、

地は激しく震い、

二〇 地は酔いどれのようによろめき、

飯小屋のようにゆり動く。

そのとがはその上に重く、

ついに倒れて再び起きあがることはない。

二一 その日、主は天において、天の軍勢を罰し、

地の上で、地のもろもろの王を罰せられる。

二二 彼らは囚人が土ろうの中になか

第二十五章

集められるように集められて、

獄屋の中に閉ざされ、

多くの日を経て後、罰せられる。

二三 こうして万軍の主がシオン山の

およびエルサレムで統べ治め、

かつその長老たちの前に

その栄光をあらわされるので、

月はあわて、日は恥じる。

一 主よ、あなたはわが神、

わたしはあなたをあがめ、み名をほめたたえる。

あなたはさきに驚くべきみわざを行い、

いにしえから定めた計画を

真実をもって行われたから。

二 あなたは町を石塚とし、堅固な町を荒塚とされた。

外国人のやかたは、もはや町ではなく、

とこしえに建てられることはない。

三 それゆえ、強い民はあなたを尊び、

あらぶる国々の町はあなたを恐れる。

四 あなたは貧しい者のとりでとなり、

乏しい者の悩みのときのとおりとなり、

あらしをさける避け所となり、

熱さをさける陰となられた。

あらぶる者の及ぼす害は、

石がきを打つあらしのごとく、

五かわいた地の熱さのようだからである。

あなたは外国人の騒ぎをおさえ、

雲が陰をもつて熱をとどめるように

あらぶる者の歌をとどめられる。

六万軍の主はこの山で、すべての民のために肥えたものをもつて祝宴を設け、久しくたくわえたぶどう酒をもつて祝宴を設けられる。すなわち髓の多い肥えたものと、よく澄んだ長くたくわえたぶどう酒をもつて祝宴を設けられる。セまた主はこの山で、すべての民のかぶつてゐる顔とおいと、すべての国のおおつてゐるおおい物とを破られる。ハ主はとこしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである。

九その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しむ」と。

一〇主の手はこの山にとどまり、モアブは肥だめの中に踏まれる

わらのように、おのれの所で踏みにじられる。二彼はその中で泳ぐ物が泳ごうとして手を伸ばすように、その手を伸ばす。しかし主はその高ぶりを、その手の巧みなわざと共に低くされる。三その石がきの高い城郭を主は傾け倒し、地に投げうつて、ちりにかえされる。

第二十六章

一その日ユダの国で、この歌をうたう、

「われわれは堅固な町をもつ。

主は救をその石がきとし、

またとりでとされる。

二門を開いて、信仰を守る正しい国民を入れよ。

三あなたは全き平安をもつて

こころざしの堅固なものを守られる。

彼はあなたに信頼しているからである。

四とこしえに主に信頼せよ、

主なる神はとこしえの岩だからである。

五主は高き所、そびえたつ町に住む者をひきおろし、

これを伏させ、これを地に伏させて、

ちりにかえされる。

六こうして足で踏まれ、

貧しい者の足で踏まれ、
乏しい者はその上を歩む」。

七 正しい者の道は平らである。

あなたは正しい者の道をなめらかにされる。

八 主よ、あなたがさばきをなさる道で、

われわれはあなたを待ち望む。

われわれの魂の慕うものは、

あなたの記念の名である。

九 わが魂は夜あなたを慕い、

わがうちなる霊は、せつにあなたを求め。

あなたのさばきが地に行われるとき、

世に住む者は正義を学ぶからである。

一〇 悪しき者は恵まれても、なお正義を学ばず、

正しい地にあつても不義を行い、

主の威光を仰ぐことをしない。

一一 主よ、あなたのみ手が高くあがるけれども、

彼らはそれを顧みない。

どうか、あなたの、おのが民を救われる熱心を

彼らに見させて、大いに恥じさせ、

火をもつてあなたの敵を焼き滅ぼしてください。

一二 主よ、あなたはわれわれのために

平和を設けられる。

あなたはわれわれのために

われわれのすべてのわざをなし遂げられた。

一三 われわれの神、主よ、

あなた以外のものもろの主がわれわれを治めた。

しかし、われわれはただ、

あなたの名のみをあがめる。

一四 死んだ者はまた生きない。

亡霊は生き返らない。

それで、あなたは彼らを罰して滅ぼし、

彼らの思い出をことごとく消し去られた。

一五 主よ、あなたはこの国民を増し加えられた。

あなたはこの国民を増し加えられた。

あなたは栄光をあらわされた。

あなたは地の境を四方に広げられた。

一六 主よ、彼らは悩みのとき、あなたに求めた。

彼らがあなたの懲しめにあつたとき、

祈をささげた。

一七 主よ、はらめる女の産むときが近づいて苦しみ、

その痛みによつて叫ぶように、

われわれはあなたのゆえに、そのようであつた。

一八 われわれは、はらみ、苦しんだ。

しかしわれわれの産んだものは風にすぎなかつた。

第二十七章

われわれは救を地に施すこともせず、
また世に住む者を滅ぼすこともしなかった。
一九あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。
ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。
あなたの露は光の露であつて、
それを亡霊の国の上に降られるからである。
二〇さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、
あなたのうしろの戸を閉じて、
憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。
二一見よ、主はそのおられる所を出て、
地に住む者の不義を罰せられる。
地はその上に流された血をあらわして、
殺された者を、もはやおおうことがない。

二その日、主は堅く大いなる強いつるぎで逃げるへびレビヤタン、曲りくねるへびレビヤタンを罰し、また海における龍を殺される。

二その日
「麗しきぶどう畑よ、このことを歌え。
三主なるわたしはこれを守り、

常に水をそそぎ、
夜も昼も守つて、そこなう者のないようにする。
四わたしは憤らない。
いばら、おどろがわたしと戦うなら、
わたしは進んでこれを攻め、
皆もろともに焼きつくす。
五それを望まないなら、わたしの保護にたよつて、
わたしと和らぎをなせ、
わたしと和らぎをなせ」。
六後になれば、ヤコブは根をはり、
イスラエルは芽を出して花咲き、
その実を全世界に満たす。
七主は彼らを撃つた者を撃たれたように
彼らを撃たれたか。
あるいは彼らを殺した者が殺されたように
彼らは殺されたか。
八あなたは彼らと争つて、彼らを追放された。
主は東風の日に、その激しい風をもつて
彼らを移しやられた。
九それゆえ、ヤコブの不義は
これによつて、あがなわれる。
これによつて結ぶ実は彼の罪を除く。

第二十八章

一 エフライムの酔いどれの誇る冠と、

すなわち彼が祭壇のすべての石を
砕けた白堊のようにし、
アシラ像と香の祭壇とを再び建てないことである。
二 堅固な町は荒れてさびしく、
捨て去られたすまいは荒野のようだ。
三 牛はそこに草を食い、
そこに伏して、その木の枝を裸にする。
四 その枝が枯れると、折り取られ、
女が来てそれを燃やす。
これは無知の民だからである。
それゆえ、彼らを造られた主は
彼らをあわれまれない。
彼らを形造られた主は、彼らを恵まれない。
三イスラエルの人々よ、その日、主はユフラテ川からエジプト
の川にいたるまで穀物の穂を打ち落とされる。そしてあなたがた
は、ひとりびとり集められる。三その日大いなるラツパが鳴り
びびき、アツスリヤの地にある失われた者と、エジプトの地に追
いやられた者とがきて、エルサレムの聖山で主を拝む。

酒におぼれた者の肥えた谷のかしらにある
しほみゆく花の美しい飾りは、わざわいだ。
二見よ、主はひとりの力ある強い者を持つておられる。
これはひようをまじえた暴風のように、
破り、そこなう暴風雨のように、
大水のあふれみなぎる暴風のように、
それを激しく地に投げうつ。
三 エフライムの酔いどれの誇る冠は
足で踏みにじられる。
四 肥えた谷のかしらにある
しほみゆく花の美しい飾りは、
夏前に熟した初なりのいちじくのようなだ。
人がこれを見ると、取るやいなや、食べてしまう。
五 その日、万軍の主はその民の残った者のために、
栄えの冠となり、麗しい冠となられる。
六 また、さばきの席に座する者にはさばきの霊となり、
戦いを門まで追い返す者には力となられる。
七 しかし、これらもまた酒のゆえによろめき、
濃き酒のゆえによろける。
祭司と預言者とは濃き酒のゆえによろめき、
酒のゆえに心みだれ、
濃き酒のゆえによろける。

彼らは幻を見るときに誤り、

さばきを行うときにつまづく。

ハすべての食卓は吐いた物で満ち、清い所はない。

九「彼はだれに知識を教えようとするのか。

だれにおとずれを説きあかそうとするのか。

乳をやめ、乳ぶさを離れた者にするのだろうか。

一〇それは教訓に教訓、教訓に教訓、

規則に規則、規則に規則。

ここにも少し、そこにも少し教えるのだ」。

二否、むしろ主は異国のくちびると、

異国の舌とをもつてこの民に語られる。

二三主はさきに彼らに言われた、

「これが安息だ、

疲れた者に安息を与えよ。

これが休息だ」と。

しかし彼らは聞こうとはしなかった。

二三それゆえ、主の言葉は彼らに、

教訓に教訓、教訓に教訓、

規則に規則、規則に規則、

ここにも少し、そこにも少しとなる。

これは彼らが行って、うしろに倒れ、

破られ、わなにかけられ、捕えられるためである。

一四それゆえ、エルサレムにあるこの民を治める
あざける人々よ、主の言葉を聞け。

一五あなたがたは言った、

「われわれは死と契約をなし、

陰府と協定を結んだ。

みなぎりあふれる災の過ぎる時にも、

それはわれわれに來ない。

われわれはうそを避け所となし、

偽りをもつて身をかくしたからである」。

一六それゆえ、主なる神はこう言われる、

「見よ、わたしはシオンに

一つの石をすえて基とした。

これは試みを経た石、

堅くすえた尊い隅の石である。

『信ずる者はあわてることがはない』。

一七わたしは公平を、測りなわとし、

正義を、下げ振りとする。

ひようは偽りの避け所を滅ぼし、

水は隠れ場を押し倒す」。

一八その時あなたがたが死とたたえた契約は取り消され、

陰府と結んだ協定は行われぬ。

みなぎりあふれる災の過ぎるとき、

あなたがたはこれによつて打ち倒される。

一九それが過ぎるごとに、あなたがたを捕える。

それは朝な朝な過ぎ、

昼も夜も過ぎるからだ。

このおとずれを聞きわきまえることは、
全くの恐れである。

二〇床が短くて身を伸べることができず、
かける夜具が狭くて

身をおおうことができないからだ。

二一主はベラジム山で立たれたように立ちあがり、
ギベオンの谷で憤られたように憤られて、

その行いをなされる。

その行いは類のないものである。

またそのわざをなされる。

そのわざは異なつたものである。

二三それゆえ、あなたがたはあざけてはならない。

さもないと、あなたがたのなわめは、きびしくなる。

わたしは主なる万軍の神から

全地の上に臨む滅びの宣言を聞いたからである。

二三あなたがたは耳を傾けて、わが声を聞くがよい。

心してわが言葉を聞くがよい。

二四種をまくために耕す者は絶えず耕すだろうか。

彼は絶えずその地をひらき、

まぐわをもつて土をならすだろうか。

二五地のおもてを平らにしたならば、

いのんどもをまき、クミンをまき、

小麦をうねに植え、大麦を定めた所に植え、

スベルト麦をその境に植えないだろうか。

二六これは彼の神が正しく、

彼を導き教えられるからである。

二七いのんどもは麦こき板でこかない、

クミンはその上に車輪をころがさない。

いのんどもを打つには棒を用い、

クミンを打つにはさおを用いる。

二八人はパン用の麦を打つとき砕くだろうか、

否、それが砕けるまでいつまでも打つことをしない。

馬をもつてその上に車輪を引かせるとき、

それを砕くことをしない。

二九これもまた万軍の主から出ることである。

その計りごとは驚くべく、

その知恵はすぐれている。

第二十九章

一 ああ、アリエルよ、アリエルよ、
 ダビデが宮をかまえた町よ、
 年に年を加え、祭をめぐりこさせよ。
 ニ その時わたしはアリエルを悩ます。
 そこには悲しみと嘆きとがあつて、
 アリエルのようなものとなる。
 ミ わたしはあなたのまわりに宮を構え、
 やぐらをもつてあなたを囲み、
 墨を築いてあなたを攻める。
 四 その時あなたは深い地の中から物言い、
 低いちりの中から言葉を出す。
 あなたの声は亡霊の声のように地から出、
 あなたの言葉はちりの中から、さえずるようである。
 五 しかしあなたのあだの群れは
 細かなちりのようになり、
 あらぶる者の群れは
 吹き去られるもみがらのようになる。
 また、にわかに、またたくまに、この事がある。
 六 すなわち万軍の主は雷、地震、大いなる叫び、
 つむじ風、暴風および焼きつくす火の炎をもつて

臨まれる。
 セ ソしてアリエルを攻めて戦う国々の群れ、
 すなわちアリエルとその城を攻めて戦い、
 これを悩ます者はみな
 夢のように、夜の幻のようになる。
 ハ 飢えた者が食ふことを夢みても、
 さめると、その飢えがいえないように、
 あるいは、かわいた者が飲むことを夢みても、
 さめると、疲れてそのかわきがとまらないように、
 シ オンの山を攻めて戦う国々の群れも
 そのようになる。
 ニ あなたがたは知覚を失つて気が遠くなれ、
 目がくらんで盲となれ。
 あなたがたは酔つていよ、しかし酒のゆえではない、
 よろめけ、しかし濃き酒のゆえではない。
 ニ オ主が深い眠りの霊をあなたがたの上にそそぎ、
 あなたがたの目である預言者を閉じこめ、
 あなたがたの頭である先見者を
 おおわれたからである。
 ニ それゆえ、このすべての幻は、あなたがたには封じた書物の
 言葉のようになり、人々はこれを読むことのできる者にわたし
 て、「これを読んでください」と言えば、「これは封じてあるから

「読むことができない」と彼は言う。三またその書物を読むことのできない者にわたして、「これを読んでください」と言えば、「読むことはできない」と彼は言う。

二三主は言われた、

「この民は口をもつてわたしに近づき、くちびるをもつてわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、

彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、そらで覚えた人の戒めによるのである。

一四それゆえ、見よ、わたしはこの民に、再び驚くべきわざを行う、

それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、

さとい人の知識は隠される」。

一五わざわいなるかな、

おのが計りごとを主に深く隠す者。

彼らは暗い中でわざを行い、

「だれがわれわれを見るか、

だれがわれわれのことを知るか」と言う。

一六あなたがたは転倒して考えている。

陶器師は粘土と同じものに思われるだろうか。造られた物はそれを造った者について、

「彼はわたしを造らなかつた」と言い、形造られた物は形造った者について、

「彼は知恵がない」と言うことができないか。

一七しばらくしてレバノンに変つて肥えた畑となり、肥えた畑は林のように

思われる時が来るではないか。

一八その日、耳しいは書物の言葉を聞き、目しいの目はその暗やみから、見ることが出来る。

一九柔和な者は主によつて新たな喜びを得、人のなかの貧しい者は

イスラエルの聖者によつて楽しみを得る。

二〇あらゆる者は絶え、

あざける者はうせ、

悪を行おうと、おりをうかがう者は、

ことごとく断ち滅ぼされるからである。

二一彼らは言葉によつて人を罪に定め、

町の門でいさめる者をわなにおとし入れ、

むなししい言葉をかまえて正しい者をしりぞける。

二三それゆえ、昔アブラハムをあがなわれた主は、ヤコブの家に

ついてこう言われる、
「ヤコブは、もはやはずかしめを受けず、その顔は、もはや色を失うことはない。」

第三〇章

三 彼の子孫が、その中にわが手のわざを見るとき、
 彼らはわが名を聖とし、
 ヤコブの聖者を聖として、
 イスラエルの神を恐れる。
 二四 心のあやまれる者も、悟りを得、
 つぶやく者も教をうける」。

一 主は言われる、
 「そむける子らはわざわいだ、
 彼らは計りごとを行うけれども、
 わたしによつてではない。
 彼らは同盟を結ぶけれども、
 わが霊によつてではない、
 罪に罪を加えるためだ。
 二 彼らはわが言葉を求めず、
 エジプトへ下つていつて、パロの保護にたより、
 エジプトの陰に隠れようとする。
 三 それゆえ、パロの保護は
 かえつてあなたがたの恥となり、
 エジプトの陰に隠れることは

あなたがたのはずかしめとなる。
 四 たとい、彼の君たちがゾアンにあり、
 彼の使者たちがハネスに来て、
 五 彼らは皆おのれを益することのできない民により、
 すなわち助けとならず、益とならず、
 かえつて恥となり、はずかしめとなる民によつて、
 恥をかくからである」。
 ハネゲブの獣についての託宣。
 彼らはその富を若いるばの背に負わせ、
 その宝をらくだの背に負わせて、
 雌じし、雄じし、まむしおよび飛びかけるへびの出る
 悩みと苦しみの国を通つて、
 おのれを益することのできない民に行く。
 セそのエジプトの助けは無益であつて、むなし。
 それゆえ、わたしはこれを
 「休んでいるラハブ」と呼んだ。
 ハいま行つて、これを彼らの前で札にしるし、
 書物に載せ、
 後の世に伝えて、とこしえにあかしとせよ。
 九 彼らはそむける民、偽りを言う子ら、
 主の教を聞こうとしない子らだ。
 一〇 彼らは先見者にむかつて「見るな」と言い、

預言者にむかつては

「正しい事をわれわれに預言するな、

耳に聞きよいことを語れ、迷わしごとを預言せよ。

二 大路を去り、小路をはなれ、

イスラエルの聖者について語り聞かすな」と言う。

三 それゆえ、イスラエルの聖者はこう言われる、

「あなたがたはこの言葉を侮り、

しえたげと、よこしまとを頼み、

これにたよるがゆえに、

一三 この不義はあなたがたには

突き出て、くずれ落ちようとする高い石がきの

破れのようにであつて、

その倒壊はにわかに、またたくまに来る。

一四 その破れることは陶器師の器を破るように

惜しむことなく打ち砕き、

その砕けのなかには、炉から火を取り、

池から水をくめるほどの、ひとかけらさえ

見いだされない」。

一五 主なる神、イスラエルの聖者はこう言われた、

「あなたがたは立ち返つて、

落ち着いているならば救われ、
穏やかにして信頼しているならば力を得る」。

しかし、あなたがたはこの事を好まなかつた。

一六 かえつて、あなたがたは言つた、

「否、われわれは馬に乗つて、とんで行こう」と。

それゆえ、あなたがたはとんで帰る。また言つた、

「われらは速い馬に乘ろう」と。

それゆえ、あなたがたを追う者は速い。

一七 ひとりの威嚇によつて千人は逃げ、

五人の威嚇によつてあなたがたは逃げて、

その残る者はわずかに

山の頂にある旗さおのように、

丘の上にある旗のようになる。

一八 それゆえ、主は待つていて、

あなたがたに恵を施される。

それゆえ、主は立ちあがつて、

あなたがたをあわれまれる。

主は公平の神でいらせられる。

すべて主を待ち望む者はさいわいである。

一九 シオンにおり、エルサレムに住む民よ、あなたはもはや泣く

ことはない。主はあなたの呼ばれる声に応じて、必ずあなたに

恵みを施される。主がそれを聞かれるとき、直ちに答えられる。

二〇 たとい主はあなたがたに悩みのパンと苦しみの水を与えられても、あなたの師は再び隠れることはなく、あなたの目はあな

たの師を見る。三また、あなたが右に行き、あるいは左に行くとき、そのうしろで「これは道だ、これに歩め」と言う言葉を耳に聞く。三その時、あなたがたはしろがねをおおった刻んだ像と、こがねを張った鍔た像とを汚し、これをきたない物のようにまき散らして、これに「去れ」と言う。

三主はあなたが地にまく種に雨を与え、地の産物なる穀物をくださる。それはおびたしく、かつ豊かである。その日あなたの家畜は広い牧場で草を食べ、二地を耕す牛と、ろばは、シャベルと、くまででより分けて塩を加えた飼料を食べる。三五大きな虐殺の日、やぐらの倒れる時、すべてのそびえたつ山と、すべての高い丘に水の流れる川がある。二六さらに主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日には、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍となり、七つの日の光のようになる。

二七見よ、主の名は遠い所から燃える怒りと、立ちあがる濃い煙をもつて来る。

そのくちびるは憤りで満ち、

その舌は焼きつくす火のごとく、

二八その息はあふれて首にまで達する

流れのようであつて、

滅びのふるいをもつてもろもろの国をふるい、

また惑わす手綱を

もろもろの民のあごにつけるために来る。

二九あなたがたは、聖なる祭を守る夜のように歌をうたう。また笛をならして主の山にきたり、イスラエルの岩なる主にまみえる時のように心に喜ぶ。三〇主はその威厳ある声を聞かせ、激しい怒りと、焼きつくす火の炎と、豪雨と、暴風と、ひようとをもつてその腕の下ることを示される。三一主がそのむちをもつて打たれる時、アッスリヤの人々は主の声によつて恐れおののく。三二主が懲しめのつえを彼らの上に加えられるごとに鼓を鳴らし、琴をひく。主は腕を振りかざして、彼らと戦われる。三三焼き場はすでに設けられた。しかも王のために深く広く備えられ、火と多くのたきぎが積まれてある。主の息はこれを硫黄の流れのように燃やす。

第三章

一助けを得るためにエジプトに下り、馬にたよる者はわざわいだ。

彼らは戦車が多いので、これに信頼し、騎兵がはなはだ強いので、これに信頼する。

しかしイスラエルの聖者を仰がず、

また主にはかることをしない。

二それにもかかわらず、主もまた賢くいらせられ、

必ず災をくだし、その言葉を取り消すことなく、
 立つて悪をなす者の家を攻め、
 また不義を行う者を助ける者を攻められる。
 ミカのエジプトびとは人であつて、神ではない。
 その馬は肉であつて、霊ではない。
 主がみ手を伸ばされるとき、
 助ける者はつまずき、
 助けられる者も倒れて、皆ともに滅びる。
 四主はわたしにこう言われた、
 「ししまたは若いししが獲物をつかんで、
 ほえたけると、
 あまたの羊飼が呼び出されて、これにむかつて、
 その声によつて驚かず、
 その叫びによつて恐れないように、
 万軍の主は下つてきて、
 シオンの山およびその丘で戦われる。
 五鳥がひなを守るように、
 万軍の主はエルサレムを守り、
 これを守つて救い、これを惜しんで助けられる」。
 ハイスラエルの人々よ、主に帰れ。あなたがたは、はなはだしく
 主にそむいた。七その日、あなたがたは自分の手で造つて罪を犯
 したしるがねの偶像と、こがねの偶像をめいめい投げすてる。

第三二章

ハ「アツスリヤびとはつるぎによつて倒れる、
 人のつるぎではない。
 つるぎが彼らを滅ぼす、
 人のつるぎではない。
 彼らはつるぎの前から逃げ去り、
 その若い者は奴隷の働きをしいられる。
 九彼らの岩は恐れによつて過ぎ去り、
 その君たちはあわて、旗をすてて逃げ去る」。
 これは主の言葉である。
 主の火はシオンにあり、その炉はエルサレムにある。
 一見よ、ひとりの王が
 正義をもつて統べ治め、
 君たちは公平をもつてつかさどり、
 ニおのおの風をさける所
 暴風雨をのがれる所のように、
 かわいた所にある水の流れのように、
 疲れた地にある大きな岩の陰のようになる。
 ミこうして、見る者の目は開かれ、
 聞く者の耳はよく聞き、

四 氣短な者の心は悟る知識を得、
 どもの舌はたやすく、

あざやかに語ることができる。

五 愚かな者は、もはや尊い人と呼ばれることなく、
 悪人はもはや、りっぱな人と言われることはない。

六 それは愚かな者は愚かなことを語り、

その心は不義をたくらみ、よこしまを行い、

主について誤ったことを語り、

飢えた者の望みを満たさず、

かわいた者の飲み物を奪い取るからである。

七 悪人の行いは悪い。

彼は悪い計りごとをめぐらし、

偽りの言葉をもって貧しい者をおとしいれ、

乏しい者が正しいことを語っても、

なお、これをおとしいれる。

八 しかし尊い人は尊いことを語り、

つねに尊いことを行う。

九 安んじている女たちよ、起きて、わが声を聞け。

思い煩いなき娘たちよ、わが言葉に耳を傾けよ。

一〇 思い煩いなき女たちよ、

一年あまりの日をすぎて、

あなたがたは震えおののく。

ぶどうの収穫がむなしく、
 実を取り入れる時が来ないからだ。

二 安んじている女たちよ、震え恐れよ。

思い煩いなき女たちよ、震えおののけ。

衣を脱ぎ、裸になって腰に荒布をまとえ。

三 良き畑のため、

実り豊かなぶどうの木のために胸を打て。

三 いばら、おどろの生えているわが民の地のため、

喜びに満ちている町にある

すべての喜びの家のために胸を打て。

四 宮殿は捨てられ、にぎわった町は荒れすたれ、

丘と、やぐらとは、とこしえにほら穴となり、

野のろばの楽しむ所、

羊の群れの牧場となるからである。

一五 しかし、ついには霊が上から

われわれの上にそそがれて、

荒野は良き畑となり、

良き畑は林のごとく見られるようになる。

一六 その時、公平は荒野に住み、

正義は良き畑にやどる。

一七 正義は平和を生じ、

正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である。

第三三章

一 八わが民は平和の家におり、
安らかなすみかにおり、
静かな休み所におる。
二 九しかし林はことごとく切り倒され、
町もことごとく倒される。
三 十すべての水のほとりに種をまき、
牛およびろばを自由に放ちおくあなたがたは、
さいわいである。

一 わざわいなるかな、
おのれ自ら滅ぼされないのに、人を滅ぼし、
だれも欺かないのに人を欺く者よ。
二 あなたが滅ぼすことをやめたとき、
あなたは滅ぼされ、
あなたが欺くことを終えたとき、
あなたは欺かれる。
三 主よ、われわれをお恵みください、
われわれはあなたを待ち望む。
四 朝ごとに、われわれの腕となり、
悩みの時に、救となってください。

五 三鳴りとどろく声によつて、もろもろの民は逃げ去り、
あなたが立ちあがられると、
もろもろの国は散らされる。
六 四青虫が物を集めるようにぶんどり品は集められ、
いなごのとびつどうように、
人々はその上にとびつどう。
七 五主は高くいらせられ、高い所に住まわれる。
八 主はシオンに公平と正義とを満たされる。
九 また主は救と知恵と知識を豊かにして、
あなたの代を堅く立てられる。
十 主を恐れることはその宝である。
十一 七見よ、勇士たちは外にあつて叫び、
平和の使者はいたく嘆く。
十二 ハ大路は荒れすたれて、旅びとは絶え、
契約は破られ、証人は軽んぜられ、
人を顧みることがない。
十三 九地は嘆き衰え、
レバノンのは恥じて枯れ、
シヤロンは荒野のようになり、
バシヤンとカルメルはその葉を落す。
十四 一〇主は言われる、
「今わたしは起きよう、いま立ちあがろう、

いま自らを高くしよう。

二 あなたがたは、もみがらをほらみ、わらを産む。

あなたがたの息は火となつて、

あなたがたを食いつくす。

三 もろもろの民は焼かれて石灰のようになり、いばらが切られて火に燃やされたようになる」。

三 あなたがた遠くにいる者よ、

わたしがおこなつたことを聞け。

あなたがた近くにいる者よ、

わが大能を知れ。

四 シオンの罪びとは恐れに満たされ、おのきは神を恐れない者を捕えた。

「われわれのうち、だれが

焼きつくす火の中におろすことができよう。

われわれのうち、だれが

とこしえの燃える火の中におろすことができよう」。

五 正しく歩む者、正直に語る者、

しえたげて得た利をいやしめる者、

手を振つて、まいたいを取らない者、

耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者、

目を閉じて悪を見ない者、

一六 このよな人は高い所に住み、

堅い岩はそのとりでとなり、

そのパンは与えられ、その水は絶えることがない。

七 あなたの目は麗しく飾つた王を見、

遠く広い国を見る。

八 あなたの心はかの恐ろしかった事を思い出す。

「数を調べた者はどこにいるか。

みつぎを量つた者はどこにいるか。

やぐらを数えた者はどこにいるか」。

九 あなたはもはや高慢な民を見ない。

かの民の言葉はあいまいで、聞きとりがたく、

その舌はどもつて、悟りがたい。

一〇 定め祭の町シオンを見よ。

あなたの目は平和なすまい、

移されることのない幕屋エルサレムを見る。

その杭はとこしえに抜かれず、

その綱は、ひとすじも断たれることはない。

一三 主は威厳をもつてかしこにいまし、

われわれのために広い川と流れのある所となり、

その中には、こぐ舟も入らず、

大きな船も過ぎることはない。

一四 主はわれわれのさばき主、

主はわれわれのつかさ、

第三四章

主はわれわれの王であつて、われわれを救われる。

二三 あなたの船綱は解けて、

帆柱のもとを結びかためることができず、

帆を張ることもできない。

その時多くの獲物とぶんどり品は分けられ、

足なえまでも獲物を取る。

二四 そこに住む者のうちには、

「わたしは病氣だ」と言う者はなく、

そこに住む民はその罪がゆるされる。

一 もろもろの国よ、近づいて聞け。

もろもろの民よ、耳を傾けよ。

地とそれに満ちるもの、

世界とそれから出るすべてのものよ、聞け。

二 主はすべての国にむかつて怒り、

そのすべての軍勢にむかつて憤り、

彼らをことごとく滅ぼし、

彼らをわたして、ほふらせられた。

三 彼らは殺されて投げすてられ、

その死体の悪臭は立ちのぼり、

山々はその血で溶けて流れる。

四 天の万象は衰え、

もろもろの天は巻物のように巻かれ、

その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、

いちじくの木から葉の落ちるように落ちる。

五 わたしのつるぎは天において憤りをもって酔った。

見よ、これはエドムの上にくだり、

わたしが滅びに定めた民の上にくだつて、

これをさばく。

六 主のつるぎは血で満ち、脂肪で肥え、

小羊とやぎの血、

雄羊の腎臓の脂肪で肥えている。

主がボズラで犠牲の獣をほふり、

エドムの地で大いに殺されたからである。

七 野牛は彼らと共にほふり場にくだり、

子牛は力ある雄牛と共にくだる。

その国は血で酔い、

その土は脂肪で肥やされる。

八 主はあだをかえす日を持ち、

シオンの訴えのために報いられる年を

もたれるからである。

九 エドムのもろもろの川は變つて樹脂となり、

その土は變つて硫黄となり、

その地は變つて燃える樹脂となつて、

二〇夜も昼も消えず、

その煙は、とこしえに立ちのぼる。

これは世々荒れすたれて、

とこしえまでもそこを通る者はない。

二たかと、やまあらしとがそこをすみかとし、

ふくろうと、からすがそこに住む。

主はその上に荒廢をきたらせる測りなわを張り、

尊い人々の上に混亂を起す下げ振りをさげられる。

三人々はこれを名づけて「国なき所」といい、

その君たちは皆うせてなくなる。

二三そのとりでの上には、いばらが生え、

その城には、いらくさと、あざみとが生え、

山犬のすみか、だちようのおる所となる。

二四野の獸はハイエナと出合い、

鬼神はその友を呼び、

夜の魔女もそこに降りてきて、休み所を得る。

二五ふくろうはそこに巢をつくつて卵を産み、

それをかえして、そのひなを翼の陰に集める。

とびもまた、おのおのその連れ合いと共に、

そこに集まる。

二六あなたがたは主の書をつまびらかに
たずねて、これを読め。

これらのものは一つも欠けることなく、

また一つもその連れ合いを欠くものはない。

これは主の口がこれを命じ、

その靈が彼らを集められたからである。

二七主は彼らのためにくじを引き、

手ずから測りなわをもつて、この地を分け与え、

長く彼らに所有させ、

世々ここに住まわせられる。

第三十五章

一荒野と、かわいた地とは楽しみ、

さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、

二さかんに花咲き、

かつ喜び楽しみ、かつ歌う。

これにレバノンの栄えが与えられ、

カルメルおよびシャロンの麗しさが与えられる。

彼らは主の栄光を見、われわれの神の麗しさを見る。

三あなたがたは弱った手を強くし、

よろめくひざを健やかにせよ。

四 心おののく者に言え、

「強くあれ、恐れてはならない。

見よ、あなたがたの神は報復をもつて臨み、

神の報いをもつてこられる。

神は来て、あなたがたを救われる」と。

五 その時、目しいの目は開かれ、

耳しいの耳はあけられる。

六 その時、足なえは、しかのように飛び走り、

おしの舌は喜び歌う。

それは荒野に水がわきいで、

さばくに川が流れるからである。

七 焼けた砂は池となり、

かわいた地は水の源となり、

山犬の伏したすみかは、

葦、よしの茂りあう所となる。

八 そこに大路があり、

その道は聖なる道となえられる。

汚れた者はこれを通り過ぎることはできない、

愚かなる者はそこに迷い入ることはない。

九 そこには、ししはおらず、

飢えた獣も、その道にのぼることはなく、

その所でこれに会うことはない。

ただ、あがなわれた者のみ、そこを歩む。

一〇 主にあがなわれた者は帰つてきて、

その頭に、とこしえの喜びをいただき、

歌うたいつつ、シオンに来る。

彼らは楽しみと喜びとを得、

悲しみと嘆きとは逃げ去る。

第三十六章

一 ヒゼキヤ王の第十四年に、アッスリヤの王セナケリブが上つ

てきて、ユダのすべての堅固な町々を攻め取った。ニアッスリヤ

の王はラキシからラブシヤケをエルサレムにつかわし、大軍を

率いてヒゼキヤ王のもとへ行かせた。ラブシヤケは布ざらしの

野へ行く大路に沿う、上の池の水道のかたわらに立った。三 この

時ヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナおよび

アサフの子である史官ヨアが彼の所に出てきた。

四 ラブシヤケは彼らに言った、「ヒゼキヤに言いなさい、『大王

アッスリヤの王はこう仰せられる、あなたが頼みとする者は何

か。五 口先だけの言葉が戦争をする計略と力だと考えるのか。

あなたは今だれを頼んで、わたしにそむいたのか。六 見よ、あな

たはかの折れかけている葦のつえエジプトを頼みとしている

が、それは人が寄りかかるとき、その人の手を刺し通す。エジプ

トの王パロはすべて寄り頼む者にそのようにするのだ。セシかし、あなたがもし「われわれはわれわれの神、主を頼む」とわたしに言うならば、ヒゼキヤがユダとエルサレムに告げて、「あなたがたはこの祭壇の前で礼拝しなければならぬ」と言つて除いたのは、その神の-high 所と祭壇ではなかつたのか。ハさあ、今わたしの主君アツスリヤの王とかけをせよ。もしあなたの方に乗る人があるならば、わたしは馬二千頭を与えよう。九あなたはエジプトを頼み、戦車と騎兵を請い求めているが、わたしの主君の家来の中の最も小さい一隊長でさえ、どうして撃退することができようか。一〇わたしがこの国を滅ぼすために上つてきたのは、主の許しなしでしたことであらうか。主はわたしに、この国へ攻め上つて、これを滅ぼせと言われたのだ』。

二その時、エリアキム、セブナおよびヨアはラブシャケに言つた、「どうぞ、アラム語でもべたちに話してください。わたしたちはそれがわかるからです。城壁の上にいる民の聞いているところで、わたしたちにユダヤの言葉で話さないでください」。三しかしラブシャケは言つた、「わたしの主君は、あなたの主君とあなたにだけでなく、城壁の上に座している人々にも、この言葉を告げるために、わたしをつかわされたのではないか。彼らをも、あなたがたと共に自分の糞尿を食い飲みするに足らせるためではないか」。

三三そしてラブシャケは立ちあがり、ユダヤの言葉で大声に呼ば

わつて言つた、「大王、アツスリヤの王の言葉を聞け。一四王はこう仰せられる、『あなたがたはヒゼキヤに欺かれてはならない。彼はあなたがたを救い出すことはできない。一五ヒゼキヤが、主は必ずわれわれを救い出される。この町はアツスリヤの王の手に陥ることはない、と言つても、あなたがたは主を頼みとしてはならない』。一六あなたがたはヒゼキヤの言葉を聞いてはならない。アツスリヤの王はこう仰せられる、『あなたがたは、わたしと和ぼくして、わたしに降服せよ。そうすれば、あなたがたはめいめい自分のぶどうの実を食べ、めいめい自分のいちじくの実を食べ、めいめい自分の井戸の水を飲むことができる。一七やがて、わたしが来て、あなたがたを一つの国へ連れて行く。それは、あなたがたの国のように穀物とぶどう酒の多い地、パンとぶどう畑の多い地だ。一八ヒゼキヤが、主はわれわれを救われる、と言つて、あなたがたを惑わすことのないように気をつけよ。もろもろの国の神々のうち、どの神がその国をアツスリヤの王の手から救つたか。一九ハマテやアルパデの神々はどこにいるか。セパルワイムの神々はどこにいるか。彼らはサマリヤをわたしの手から救い出したか。二〇これらの国々のすべての神々のうちに、だれかその国をわたしの手から救い出した者があるか。主がどうしてエルサレムをわたしの手から救い出すことができるか。』」。

三三しかし民は黙つてひと言も答えなかつた。王が命じて、「彼

に答えてはならない」と言っておいたからである。三その時ヒルキヤの子である宮内卿エリアキム、書記官セブナおよびアサフの子である史官ヨアは衣を裂き、ヒゼキヤのもとに来て、ラブシャケの言葉を彼に告げた。

第三十七章

一ヒゼキヤ王はこれを聞いて、衣を裂き、荒布を身にまとって主の宮に入り、二宮内卿エリアキムと書記官セブナおよび祭司のうちの年長者たちに荒布をまとわせて、アモツの子預言者イザヤのもとへつかわした。三彼らはイザヤに言った、「ヒゼキヤはこう言います、『きようは悩みと責めと、はずかしめの日です。胎児がまさに生れようとして、これを産み出す力がないのです。四あなたの神、主は、あるいはラブシャケのもろの言葉を聞かれたかもしれせん。彼はその主君アッスリヤの王につかわされて、生ける神をそしりました。あなたの神、主はその言葉を聞いて、あるいは責められるかもしれせん。それゆえ、この残っている者のために祈をささげてください』」。

五ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、六イザヤは彼らに言った、「あなたがたの主君にこう言いなさい、『主はこう仰せられる、アッスリヤの王のしもべらが、わたしをそしった言葉を聞いて恐れるには及ばない。七見よ、わたしは一つの霊を

彼のうちに送って、一つのうわさを聞かせ、彼を自分の国へ帰らせて、その国でつるぎに倒れさせる』」。

ハラブシャケは引き返して、アッスリヤの王がリブナを攻めているところへ行つた。彼は王がラキシを去つたことを聞いたからである。九この時、アッスリヤの王はエチオピアの王テルハカについて、「彼はあなたと戦うために出てきた」と人々が言うのを聞いた。彼はこのことを聞いて、使者をヒゼキヤにつかわそうとして言った、一〇「ユダの王ヒゼキヤにこう言いなさい、『あなたは、エルサレムはアッスリヤの王の手に陥ることはない、と言うあなたの信賴する神に欺かれてはならない。一あなたアッスリヤの王たちが、国々にしたこと、彼らを全く滅ぼしたことを聞いている。どうしてあなたは救われることができようか。二わたしの先祖たちはゴザン、ハラン、レゼフおよびテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救つたか。三ハマテの王、アルパデの王、セパルワイムの町の王、ヘナの王およびイワの王はどこにいるか』」。

四ヒゼキヤは使者の手から手紙を受け取ってそれを読み、主の宮にのぼっていつて、主の前にそれをひろげ、五主に祈つて言った、六「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ、地のすべての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます。あなたは天と地とを造られました。七主よ、耳を傾けて聞いてください。主よ、目を開いて見てください。セナ

ケリブが生ける神をそしるために書き送った言葉を聞いてください。二八主よ、まことにアツスリヤの王たちは、もろもろの民とその国々を滅ぼし、二九またその神々を火に投げ入れました。それらは神ではなく、人の手の造ったもので、木や石だから滅ぼされたのです。三〇今われわれの神、主よ、どうぞ、われわれを彼の手から救い出してください。そうすれば地の国々は皆あなただけが主でいらせられることを知るようになるでしょう。三一その時アモツの子イザヤは人をつかわしてヒゼキヤに言った、「イスラエルの神、主はこう言われる、あなたはアツスリヤの王セナケリブについてわたしに祈ったゆえ、三二主が彼について語られた言葉はこうである、

『処女であるシオンの娘は

あなたを侮り、あなたをあざける。

エルサレムの娘は、あなたのうしろで頭を振る。

三三あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。

あなたはだれにむかって声をあげ、

目を高くあげたのか。

イスラエルの聖者にむかってだ。

三四あなたは、そのしもべらによつて

主をそしって言った、

「わたしは多くの戦車を率いて山々の頂にのぼり、

レバノンの奥へ行き、

たけの高い香柏と、最も良いとすぎを切り倒し、またその果の高地へ行き、その密林にはいった。三五わたしは井戸を掘つて水を飲んだ。わたしは足の裏で

エジプトのすべての川を踏みからした」。

二六あなたは聞かなかったか、

昔わたしがそれを定めたことを。

堅固な町々を、

あなたがこわして荒塚とすることも、

いにしえの日から、わたしが計画して

今それをきたらせたのだ。

二七そのうちに住む民は力弱く、

おののき恥をいだいて、

野の草のように、青菜のようになり、

育たずに枯れる屋根の草のようになった。

二八わたしは、あなたの座すること、出入りすること、

また、わたしにむかって

怒り叫んだことをも知っている。

二九あなたが、わたしにむかって怒り叫んだことと、

あなたの傲慢な言葉とがわたしの耳にはいったゆえ、

わたしは、あなたの鼻に輪をつけ、

あなたの口にくつわをはめて、

あなたを、もと来た道へ引きもどす』。

三〇 あなたに与えるしるしはこれである。すなわち、ことは落ち穂から生えた物を食べ、二年目には、またその落ち穂から生えた物を食べ、三年目には種をまき、刈り入れ、ぶどう畑を作つてその実を食べる。三一 ユダの家の、のがれて残る者は再び下に根を張り、上に実を結ぶ。三二 すなわち残る者はエルサレムから出、のがれる物はシオン山の山から出る。万軍の主の熱心がこれをなし遂げられる。

三三 それゆえ、主はアッスリヤの王について、こう仰せられる、『彼はこの町にこない。またここに矢を放たない。また盾をもつて、その前にこない。また塁を築いて、これを攻めることはない。三四 彼は来た道から歸つて、この町に、はいることはない、と主は言う。三五 わたしは自分のため、また、わたしのしもべダビデのために町を守つて、これを救おう』。

三六 主の使がでて、アッスリヤびとの陣營で十八万五千人を撃ち殺した。人々が朝早く起きて見ると、彼らは皆死体となつていた。三七 アッスリヤの王セナケリブは立ち去り、歸つていつて二ネベにいたが、三八 その神ニスロクの神殿で礼拝していた時、その子らのアデラン・メレクとシャレゼルがつるぎをもつて彼を殺し、ともにアララテの地へ逃げていった。それで、その子エサルハドンが代つて王となつた。

第三十八章

一 そのころヒゼキヤは病氣になつて死にかかつていた。アモツの子預言者イザヤは彼のところに来て言つた、『主はこう仰せられます、あなたの家を整えておきなさい。あなたは死にます、生きながらえることはできません。二 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて主に祈つて言つた、三「ああ主よ、願わくは、わたしが眞実と眞心とをもつて、み前に歩み、あなたの目にかなう事を行つたのを覚えてください」。そしてヒゼキヤはひどく泣いた。四 その時主の言葉がイザヤに臨んで言つた、五「行つて、ヒゼキヤに言いなさい、『あなたの父ダビデの神、主はこう仰せられます、『わたしはあなたの祈を聞いた。あなたの涙を見た。見よ、わたしはあなたのよわいを十五年増そう。六 わたしはあなたと、この町とをアッスリヤの王の手から救ひ、この町を守ろう』』。

七 主が約束されたことを行われることについては、あなたは主からこのしるしを得る。八 見よ、わたしはアハズの日時計の上に進んだ日影を十度退かせよう』。すると日時計の上に進んだ日影が十度退いた。

九 次の言葉はユダの王ヒゼキヤが病氣になつて、その病氣が直つた後、書きしるしたものである。

一〇 わたしは言つた、わたしはわが一生のまつ盛りに、去らなければならぬ。

わたしは陰府の門に閉ざされて、
わが残りの年を失わなければならない。

二わたしは言った、わたしは生ける者の地で、
主を見ることなく、

世における人々のうちに、再び人を見ることがない。

三わがすまいは抜き去られて
羊飼の天幕のようにわたしを離れる。

わたしは、わが命を機織りのように巻いた。

彼はわたしを機から切り離す。

あなたは朝から夕までの間に、わたしを滅ぼされる。

三わたしは朝まで叫んだ。

主はししのようにわが骨をことごとく砕かれる。

あなたは朝から夕までの間に、わたしを滅ぼされる。

一四わたしは、つばめのように、つるのように鳴き、

はこのようにうめき、

わが目は上を見て衰える。

主よ、わたしは、しえたげられています。

どうか、わたしの保証人となってください。

二五しかし、わたしは何を言うことができましょう。

主はわたしに言われ、

かつ、自らそれをなされたからである。

わが魂の苦しみによって、

わが眠りはことごとく逃げ去った。

一六主よ、これらの事によつて人は生きる。

わが霊の命もすべてこれらの事による。

どうか、わたしをいやし、

わたしを生かしてください。

一七見よ、わたしが大いなる苦しみにあつたのは、

わが幸福のためであつた。

あなたはわが命を引きとめて、

滅びの穴をまぬかれさせられた。

これは、あなたがわが罪をことごとく、

あなたの後に捨てられたからである。

一八陰府は、あなたに感謝することはできない。

死はあなたをさんびすることはできない。

墓にくだる者は、

あなたのまことを望むことはできない。

一九ただ生ける者、生ける者のみ、

きょう、わたしがするように、あなたに感謝する。

父はあなたのまことを、その子らに知らせる。

二〇主はわたしを救われる。

われわれは世にあるかぎり、

主の家で琴にあわせて、歌をうたおう。

三
イザヤは言った、「千いちじくのひとかたまりを持つてこさ

せ、それを腫物につけなさい。そうすれば直るでしょう」。三ヒゼキヤはまた言った、「わたしが主の家に上ることについて、どんなしるしがありましょうか」。

第三九章

－そのころ、バラダンの子であるバビロンの王メロダク・バラダンは手紙と贈り物を持たせて使節をヒゼキヤにつかわした。これはヒゼキヤが病気であったが、直ったことを聞いたからである。ニヒゼキヤは彼らを喜び迎えて、宝物の蔵、金銀、香料、貴重な油および武器倉、ならびにその倉庫にあるすべての物を彼らに見せた。家にある物も、国にある物も、ヒゼキヤが彼らに見せない物は一つもなかった。三時に預言者イザヤはヒゼキヤ王のもとに来て言った、「あの人々は何を言いましたか。どこから来たのですか」。ヒゼキヤは言った、「彼らは遠い国から、すなわちバビロンから来たのです」。四イザヤは言った、「彼らは、あなたの家で何を見ましたか」。ヒゼキヤは答えて言った、「彼らは、わたしの家にある物を皆見ました。倉庫のうちには、彼らに見せなかった物は一つもありません」。

五そこでイザヤはヒゼキヤに言った、「万軍の主の言葉を聞きなさい。六見よ、すべてあなたの家にある物およびあなたの先祖たちが今日までに積みたくわえた物がバビロンに運び去られる日

が来る。何も残るものはない、と主が言われます。七また、あなたの身から出るあなたの子たちも連れ去られて、バビロンの王の宮殿において宦官となるでしょう」。八ヒゼキヤはイザヤに言った、「あなたが言われた主の言葉は結構です」。彼は「少なくとも自分が世にある間は太平と安全があるだろう」と思ったからである。

第四〇章

－あなたがたの神は言われる、
「慰めよ、わが民を慰めよ、
ニねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、
その服役の期は終り、
そのとがはすでにゆるされ、
そのもろもろの罪のために二倍の刑罰を
主の手から受けた」。

三呼ばわる者の声がする、
「荒野に主の道を備え、
さばくに、われわれの神のために、
大路をまつすぐにせよ。
四もろもろの谷は高くせられ、
もろもろの山と丘とは低くせられ、

高底のある地は平らになり、
 険しい所は平地となる。
 五こうして主の栄光があらわれ、
 人は皆ともにこれを見る。
 これは主の口が語られたのである。
 六声が聞える、「呼ばわれ」。
 わたしは言つた、「なんと呼ばわりしましょうか」。
 「人はみな草だ。
 その麗しさは、すべて野の花のようだ。
 七主の息がその上に吹けば、
 草は枯れ、花はしぼむ。
 たしかに人は草だ。
 ハ草は枯れ、花はしぼむ。
 しかし、われわれの神の言葉は
 とこしえに変わることはない」。
 九よきおとずれをシオンに伝える者よ、
 高い山にのぼれ。
 よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、
 強く声をあげよ、
 声をあげて恐れるな。
 ユダのもろもろの町に言え、
 「あなたがたの神を見よ」と。

一〇見よ、主なる神は全能をもってこられ、
 その腕は世を治める。
 見よ、その報いは主と共にあり、
 そのほたらきの報いは、そのみ前にある。
 二主は牧者のようにその群れを養い、
 そのかいなに小羊をいだし、
 そのふところに入れて携えゆき、
 乳を飲ませているものをやさしく導かれる。
 三だれが、たなごころをもつて海をはかり、
 指を伸ばして天をはかり、
 地のちりを枿に盛り、
 てんびんをもつて、もろもろの山をはかり、
 はかりをもつて、もろもろの丘をはかったか。
 四だれが、主の霊を導き、
 その相談役となつて主を教えたか。
 五主はだれと相談して悟りを得たか。
 六だれが主に公義の道を教え、
 知識を教え、悟りの道を示したか。
 七見よ、もろもろの国民は、おけの一しずくのように、
 はかりの上のちりのように思われる。
 八見よ、主は島々を、ほこりのようにあげられる。
 九レバノン、は、たぎぎに足りない、

またその獣は、燔祭に足りない。

一七主のみ前には、もろもろの国民は無きにひとしい。彼らは主によつて、無きもののように、むなしなもののように思われる。

一八それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか。

一九偶像は細工人が鑄て造り、

鍛冶が、金をもつて、それをおおい、

また、これがために銀の鎖を造る。

二〇貧しい者は、ささげ物として

朽ちることのない木を選び、

巧みな細工人を求めて、

動くことのない像を立たせる。

二一あなたがたは知らなかったか。

あなたがたは聞かなかったか。

初めから、あなたがたに伝えられなかったか。

地の基をおいた時から、

あなたがたは悟らなかったか。

二三主は地球のはるか上に座して、

地に住む者をいなこのように見られる。

主は天を幕のようにひろげ、

これを住むべき天幕のように張り、

二四また、もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなくされる。

二五彼らは、かろうじて植えられ、かろうじてまかれ、

その幹がかろうじて地に根をおろしたとき、

神がその上を吹かれると、彼らは枯れて、

わらのように、つむじ風にまき去られる。

二六聖者は言われる、

「それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、

わたしは、だれにひとしいというのか」。

二七目を高くあげて、

だが、これらのものを創造したかを見よ。

主は数をしらべて万軍をひきいだし、

おのおのをその名で呼ばれる。

その勢いの大きいなるにより、

またその力の強きがゆえに、

一つも欠けることはない。

二八モヤコブよ、何ゆえあなたは、

「わが道は主に隠れている」と言うか。

イスラエルよ、何ゆえあなたは、

「わが訴えはわが神に顧みられない」と言うか。

二九あなたは知らなかったか、

あなたは聞かなかったか。

第四章

主はとしえの神、地の果の創造者であつて、
 弱ることなく、また疲れることなく、
 その知恵ははかりがたい。
 二九 弱つた者には力を与え、
 勢いのない者には強さを増し加えられる。
 三〇 年若い者も弱り、かつ疲れ、
 壮年の者も疲れはてて倒れる。
 三十一 しかし主を待ち望む者は新たな力を得、
 わしのように翼をはつて、のぼることができる。
 走つても疲れることなく、
 歩いても弱ることはない。

一 海沿いの国々よ、
 静かにして、わたしに聞け。
 もろもろの民よ、力を新たにし、近づいて語れ。
 われわれは共にさばきの座に近づこう。
 ニだれが東から人を起したか。
 彼はその行く所で勝利をもつて迎えられ、
 もろもろの国を征服し、
 もろもろの王を足の下に踏みつけ、

そのつるぎをもつて彼らをちりのようにし、
 その弓をもつて吹き去られる、わらのようにする。
 三 彼はこれらの者を追つて
 その足のまだ踏んだことのない道を、
 安らかに過ぎて行く。
 四 だれがこの事を行つたか、なしたか。
 だれが初めから世々の人々を呼び出したか。
 主なるわたしは初めであつて、
 また終りと共にあり、わたしがそれだ。
 五 海沿いの国々は見て恐れ、
 地の果は、おののき、近づいて来た。
 六 彼らはおのおのその隣を助け、
 その兄弟たちに言う、「勇気を出せよ」と。
 七 細工人は鍛冶を励まし、
 鎚をもつて平らかにする者は金敷きを打つ者に、
 はんだづけについて言う、「それは良い」と。
 また、くぎをもつてそれを堅くし、
 動くことのないようにする。
 ハしかし、わがしもベイスラエルよ、
 わたしの選んだヤコブ、
 わが友アブラハムの子孫よ、
 九 わたしは地の果から、あなたを連れてき、

地のすみずみから、あなたを召して、

あなたに言った、「あなたは、わたしのしもべ、わたしは、あなたを選んで捨てなかつた」と。

「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。

わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもつて、あなたをささえる。

二見よ、あなたにむかつて怒る者はみな、はじて、あわてふためき、

あなたと争う者は滅びて無に帰する。

三あなたは、あなたと争う者を尋ねても見いださず、あなたと戦う者は全く消えうせる。

四あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとつてあなたに言う、「恐れてはならない、わたしはあなたを助ける」。

五主は言われる、「虫にひとしいヤコブよ、イスラエルの人々よ、恐れてはならない。

わたしはあなたを助ける。あなたをあがなう者はイスラエルの聖者である。

六見よ、わたしはあなたを鋭い歯のある新しい打穀機とする。

あなたは山を打つて、これを粉々にし、

丘をもみがらのようにする。

一六あなたがあおげば風はこれを巻き去り、つむじ風がこれを吹き散らす。

あなたは主によつて喜びイスラエルの聖者によつて誇る。

一七貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、

主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない。

一八わたしは裸の山に川を開き、谷の中に泉をいだし、

荒野を池となし、かわいた地を水の源とする。

一九わたしは荒野に香柏、アカシヤ、ミルトスおよびオリブの木を植え、

さばくに、いとすぎ、すずかけ、からまつをとともに置く。

二〇人々はこれを見て、主のみ手がこれをなし、イスラエルの聖者がこれを創造されたことを知り、

かつ、よく考えて共に悟る」。

二一主は言われる、「あなたはたの訴えを出せ」と。

ヤコブの王は言われる、

「あなたがたの証拠を持つてこい。」

三 それを持つてきて、起るべき事をわれわれに告げよ。
さきの事どもの何であるかを告げよ。

われわれはよく考えて、その結末を知ろう。
あるいはきたるべき事をわれわれに聞かせよ。

三三 この後きたるべき事をわれわれに告げよ。

われわれはあなたがたが神であることを
知るであらう。

幸をくだし、あるいは災をくだせ。

われわれは驚いて肝をつぶすであらう。

二四 見よ、あなたがたは無きものである。

あなたがたのわざはむなし。

あなたがたを選ぶ者は憎むべき者である」。

二五 わたしはひとりを起して北からこさせ、

わが名を呼ぶ者を東からこさせる。

彼はもろもろのつかさを踏みつけて

しつこいようにし、

陶器師が粘土を踏むようにする。

二六 だれか、初めからこの事を

われわれに告げ知らせたか。

だれか、あらかじめわれわれに告げて、

「彼は正しい」と言わせたか。

ひとりもこの事を告げた者はない。

ひとりも聞かせた者はない。

ひとりもあなたがたの言葉を聞いた者はない。

二七 わたしははじめてこれをシオンに告げた。

わたしは、よきおとずれを伝える者を

エルサレムに与える。

二八 しかし、わたしが見ると、ひとりもない。

彼らのなかには、わたしが尋ねても

答える助言者はひとりもない。

二九 見よ、彼らはみな人を惑わす者であつて、

そのわざは無きもの、

その鑄た像はむなしき風である。

第四章

一 わたしの支持するわがしもべ、

わたしの喜ぶわが選ぶ人を見よ。

わたしはわが霊を彼に与えた。

彼はもろもろの国びとに道をしめす。

二 彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、

その声をちまたに聞えさせず、

三 また傷ついた葦を折ることなく、
 ほのぐらい灯心を消すことなく、
 真実をもつて道をしめす。
 四 彼は衰えず、落胆せず、
 ついに道を地に確立する。
 海沿いの国々はその教を待ち望む。
 五天を創造してこれをのべ、
 地とそれに生ずるものをひらき、
 その上の民に息を与え、
 その中を歩む者に霊を与えられる
 主なる神はこう言われる、
 六 「主なるわたしは正義をもつてあなたを召した。
 わたしはあなたの手を取り、あなたを守った。
 わたしはあなたを民の契約とし、
 もろもろの国びとの光として与え、
 七 盲人の目を開き、
 囚人を地下の獄屋から出し、
 暗きに座する者を獄屋から出させる。
 ハ わたしは主である、これがわたしの名である。
 わたしはわが栄光をほかの者に与えない。
 また、わが誉を刻んだ像に与えない。
 九 見よ、さきに預言した事は起った。

わたしは新しい事を告げよう。
 その事がまだ起らない前に、
 わたしはまず、あなたがたに知らせよう。
 ○ 主にむかつて新しき歌をうたえ。
 地の果から主をほめたたえよ。
 海とその中に満ちるもの、
 海沿いの国々とそれに住む者とは鳴りどよめ。
 二 荒野とその中のもろもろの町と、
 ケダルびとの住むもろもろの村里は声をあげよ。
 セラの民は喜びうたえ。
 山の頂から呼びわたり叫べ。
 三 栄光を主に歸し、
 その誉を海沿いの国々で語り告げよ。
 四 主は勇士のように出て行き、
 いくさ人のように熱心を起し、
 ときの声をあげて呼びわたり、
 その敵にむかつて大能をあらわされる。
 五 わたしは久しく声を出さず、
 黙して、おのれをおさえていた。
 今わたしは子を産もうとする女のように叫ぶ。
 わたしの息は切れ、かつあえぐ。
 六 わたしは山と丘とを荒し、

すべての草を枯らし、
 もろもろの川を島とし、
 もろもろの池をからす。
 二六 わたしは目ししいを
 彼らのまだ知らない大路に行かせ、
 まだ知らない道に導き、
 暗きをその前に光とし、
 高低のある所を平らにする。
 わたしはこれらの事をおこなつて彼らを捨てない。
 二七 刻んだ偶像に頼み、鑄た偶像にむかつて
 「あなたがたは、われわれの神である」と言う者は
 退けられて、大いに恥をかく。
 二八 耳ししいよ、聞け。
 目ししいよ、目を注いで見よ。
 二九 だれか、わがしもべのほかに目ししいがあるか。
 だれか、わがつかわす使者のような耳ししいがあるか。
 だれか、わが献身者のような目ししいがあるか。
 だれか、主のしもべのような目ししいがあるか。
 三〇 彼は多くの事を見ても認めず、
 耳を開いても聞かない。
 三一 主はおのれの義のために、
 その教を大いなるものとし、

かつ光栄あるものとすることを喜ばれた。
 三二 ところが、この民はかすめられ、奪われて、
 みな穴の中に捕われ、獄屋の中に閉じこめられた。
 彼らはかすめられても助ける者がなく、
 物を奪われても「もどせ」と言う者もない。
 三三 あなたがたのうち、
 だれがこの事に耳を傾けるだろうか、
 だれが心をもちいて
 後のためにこれを聞くだろうか。
 三四 ヤコブを奪わせた者はだれか。
 かすめる者にイスラエルをわたした者はだれか。
 これは主ではないか。
 われわれは主にむかつて罪を犯し、
 その道に歩むことを好まず、
 またその教に従うことを好まなかった。
 三五 それゆえ、主は激しい怒りと、
 猛烈な戦いを彼らに臨ませられた。
 それが火のように周囲に燃えても、彼らは悟らず、
 彼らを焼いても、心にとめなかった。

第四三章

ーヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった、

わたしはあなたの名を呼んだ、

あなたはわたしのものだ。

ニあなたが水の中を過ぎるとき、

わたしはあなたと共にいる。

川の中を過ぎるとき、

水はあなたの上にあふれることがない。

あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、

炎もあなたに燃えつくことがない。

三わたしはあなたの神、主である、

イスラエルの聖者、あなたの救主である。

わたしはエジプトを与えて

あなたのあがないしろとし、

エチオピアとセバとをあなたの代りとする。

四あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、

わたしはあなたを愛するがゆえに、

あなたの代りに人を与え、

あなたの命の代りに民を与える。

五恐れるな、わたしはあなたと共にいる。

わたしは、あなたの子孫を東からこさせ、

西からあなたを集める。

六わたしは北にむかつて『ゆるせ』と言ひ、

南にむかつて『留めるな』と言う。

わが子らを遠くからこさせ、

わが娘らを地の果からこさせよ。

七すべてわが名をもつてとなえられる者をこさせよ。

わたしは彼らをわが栄光のために創造し、

これを造り、これを仕立てた」。

八目があつても目しいのような民、

耳があつても耳しいのような民を連れ出せ。

九国々はみな相つどい、

もろもろの民は集まれ。

彼らのうち、だれがこの事を告げ、

さきの事どもを、

われわれに聞かせることができるか。

その証人を出して、おのれの正しい事を証明させ、

それを聞いて「これは真実だ」と言わせよ。

一〇主は言われる、「あなたがたはわが証人、

わたしが選んだわがしもべである。

それゆえ、あなたがたは知つて、わたしを信じ、

わたしが主であることを悟ることができる。

わたしより前に造られた神はなく、

わたしより後にもない。

二ただわたしのみ主である。

わたしのほかに救う者はいない。

三わたしはさきに告げ、かつ救い、かつ聞かせた。

あなたがたのうちには、ほかの神はなかった。

あなたがたはわが証人である」と主は言われる。

四「わたしは神である、今より後もわたしは主である。

わが手から救い出しうる者はない。

わたしがおこなえば、

だが、これをとどめることができよう」。

五あなたがたをあがなう者、イスラエルの聖者、

主はこう言われる、

「あなたがたのために、

わたしは人をバビロンにつかわし、

すべての貫の木をこわし、

カルデヤびとの喜びの声を嘆きに変らせる。

六わたしは主、あなたがたの聖者、

イスラエルの創造者、あなたがたの王である」。

七海のなかに大路を設け、

大いなる水の中に道をつくり、

八戦車および馬、軍勢および兵士を出てこさせ、

これを倒して起きることができないようにし、

絶え滅ぼして、灯心の消えうせるようにされる

主はこう言われる、

九「あなたがたは、さきの事を思い出してはならない、

また、いにしえのことを考えてはならない。

一〇見よ、わたしは新しい事をなす。

やがてそれは起る、

あなたがたはそれを知らないのか。

わたしは荒野に道を設け、

さばくに川を流れさせる。

一一野の獣はわたしをあがめ、

山犬および、だちようもわたしをあがめる。

わたしが荒野に水をいだし、

さばくに川を流れさせて、

わたしの選んだ民に飲ませるからだ。

一二この民は、わが誉を述べさせるために

わたしは自分のために造ったものである。

一三ところがヤコブよ、あなたはわたしを呼ばなかった。

一四あなたは燔祭の羊をわたしに持つてこなかった。

また犠牲をもつてわたしをあがめなかった。

第四章

わたしは供え物の重荷をあなたに負わせなかった。
 また乳香をもつてあなたを煩わさなかった。
 二四 あなたは金を出して、
 わたしのために菖蒲を買わず、
 犠牲の脂肪を供えて、わたしを飽かせず、
 かえつて、あなたの罪の重荷をわたしに負わせ、
 あなたの不義をもつて、わたしを煩わせた。
 二五 わたしこそ、わたし自身のために
 あなたのとがを消す者である。
 わたしは、あなたの罪を心にとめない。
 二六 あなたは、自分の正しいことを証明するために
 自分のことを述べて、わたしに思い出させよ。
 われわれは共に論じよう。
 ニモ あなたの遠い先祖は罪を犯し、
 あなたの仲保者らはわたしにそむいた。
 ニ八 それゆえ、わたしは聖所の君たちを汚し、
 ヤコブを全き滅びにわたし、
 イスラエルをののしらしめた。

ーしかし、わがしもべヤコブよ、

わたしが選んだイスラエルよ、いま聞け。
 ニ あなたを造り、あなたを胎内に形造り、
 あなたを助ける主はこう言われる、

『わがしもべヤコブよ、

わたしが選んだエシウルンよ、恐れるな。

三 わたしは、かわいた地に水を注ぎ、
 干からびた地に流れをそそぎ、

わが霊をあなたの子らにそそぎ、

わが恵みをあなたの子孫に与えるからである。

四 こうして、彼らは水の中の草のように、

流れのほとりの柳のように、生え育つ。

五 ある人は「わたしは主のものである」と言い、

ある人はヤコブの名をもって自分呼び、

またある人は「主のものである」と手にしるして、

イスラエルの名をもって自分と呼ぶ」。

六 主、イスラエルの王、イスラエルをあがなう者、

万軍の主はこう言われる、

「わたしは初めであり、わたしは終りである。

わたしのほかに神はない。

七 だれかわたしに等しい者があるか。

その者はそれを示し、またそれを告げ、

わが前に言いつらねよ。

だが、昔から、きたるべき事を聞かせたか。

その者はやがて成るべき事をわれわれに告げよ。

ハ恐れてはならない、またおのいてはならない。

わたしはこの事を昔から、

あなたがたに聞かせなかつたか、

また告げなかつたか。

あなたがたはわが証人である。

わたしのほかに神があるか。

わたしのほかに岩はない。

わたしはそのあることを知らない。

九 偶像を造る者は皆むなし、彼らの喜ぶところのものは、なんの役にも立たない。その信者は見ることもなく、また知ることもない。ゆえに彼らは恥を受ける。一〇 だが神を造り、またなんの役にも立たない偶像を鑄たか。二 見よ、その仲間は皆恥を受ける。その細工人らは人間にすぎない。彼らが皆集まつて立つとき、恐れて共に恥じる。

二三 鉄の細工人はこれを造るのに炭の火をもつて細工し、鋤をもつてこれを造り、強い腕をもつてこれを鍛える。彼が飢えれば力は衰え、水を飲まなければ疲れはてる。二四 木の細工人は線を引き、鉛筆でえがき、かなで削り、コンパスでえがき、それを人の美しい姿にしたがつて人の形に造り、家の中に安置する。二五 彼は香柏を切り倒し、あるいはかしの木、あるいはかしの

木を選んで、それを林の木の中で強く育てる。あるいは香柏を植え、雨にそれを育てさせる。一五 こうして人はその一部をとつて、たきぎとし、これをもつて身を暖め、またこれを燃やしてパンを焼き、また他の一部を神に造つて拝み、刻んだ像に造つてその前にひれ伏す。一六 その半ばは火に燃やし、その半ばで肉を煮て食べ、あるいは肉をあぶつて食べ飽き、また身を暖めて言う、「ああ、暖まつた、熱くなつた」と。一七 そしてその余りをもつて神を造つて偶像とし、その前にひれ伏して拝み、これに祈つて、「あなたはわが神だ、わたしを救え」と言う。

一八 これらの人は知ることがなく、また悟ることがない。その目はふさがれて見ることができず、その心は鈍くなつて悟ることができない。一九 その心のうちに思うことをせず、また知識がなく、悟りがないために、「わたしはその半ばを火に燃やし、またその炭火の上でパンを焼き、肉をあぶつて食べ、その残りの木をもつて憎むべきものを造るのか。木のはしくれの前にひれ伏すのか」と言う者もない。二〇 彼は灰を食い、迷つた心に惑わされて、おのれを救うことができず、また「わが右の手に偽りがあるではないか」と言わない。

二一 ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。

あなたはわがしもべだから。

わたしはあなたを造つた、

あなたはわがしもべだ。

イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。

三 わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、
あなたの罪を霧のように消した。

わたしに立ち返れ、

わたしはあなたをあがなったから。

三 天よ、歌え、主がこの事をなされたから。
地の深き所よ、呼ばわれ。

もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、
声を放つて歌え。

主はヤコブをあががない、

イスラエルのうちに栄光をあらわされたから。

二四 あなたをあががない、

あなたを胎内に造られた主はこう言われる、

「わたしは主である。わたしはよろずの物を造り、
ただわたしだけが天をのべ、地をひらき、

——だれがわたしと共にいたか——

二五 偽る物のしるしをむなしくし、

占う者を狂わせ、

賢い者をうしろに退けて、その知識を愚かにする。

二六 わたしは、わがしもべの言葉を遂げさせ、

わが使の計りごとを成らせ、

エルサレムについては、

『これは民の住む所となる』と言い、

ユダのもろもろの町については、

『ふたたび建てられる、

わたしはその荒れ跡を興そう』と言い、

二七 また淵については、『かわけ、わたしは

あなたのもろもろの川を干す』と言い、

二八 またクロスについては、『彼はわが牧者、

わが目的をことごとくなし遂げる』と言い、

エルサレムについては、

『ふたたび建てられる』と言い、

神殿については、

『あなたの基がすえられる』と言う。

第四章

一 わたしはわが受膏者クロスの
右の手をとって、

もろもろの国をその前に従わせ、

もろもろの王の腰を解き、

とびらをその前に開かせて、

門を閉じさせない、と言われる主は

その受膏者クロスにこう言われる、

二「わたしはあなたの前に行つて、
 もろもろの山を平らにし、
 青銅のとびらをこわし、鉄の貫の木を断ち切り、
 三あなたに、暗い所にある財宝と、
 ひそかな所に隠した宝物とを与えて、
 わたしは主、あなたの名を呼んだ
 イスラエルの神であることをあなたに知らせよう。
 四わがしもベヤコブのために、
 わたしの選んだイスラエルのために、
 わたしはあなたの名を呼んだ。
 あなたがわたしを知らなくても、
 わたしはあなたに名を与えた。
 五わたしは主である。
 わたしのほかに神はない、ひとりもない。
 あなたがわたしを知らなくても、
 わたしはあなたを強くする。
 六これは日の出る方から、また西の方から、
 人々がわたしのほかに神のないことを
 知るようにするためである。
 わたしは主である、わたしのほかに神はない。
 七わたしは光をつくり、また暗きを創造し、
 繁栄をつくり、またわざわいを創造する。

わたしは主である、
 すべてこれらの事をなす者である。
 八天よ、上より水を注げ、
 雲は義を降らせよ。
 地は開けて救を生じ、また義をも、生えさせよ。
 主なるわたしはこれを創造した。
 九陶器が陶器師と争うように、
 おのれを造つた者と争う者はわざわいだ。
 粘土は陶器師にむかつて
 『あなたは何を造るか』と言ひ、
 あるいは『あなたの造つた物には手がなひ』と
 言うだろうか。
 一〇父にむかつて
 『あなたは、なぜ子をもうけるのか』と言ひ、
 あるいは女にむかつて
 『あなたは、なぜ産みの苦しみをするのか』と
 言う者はわざわいだ。
 ニイスラエルの聖者、
 イスラエルを造られた主はこう言われる、
 『あなたがたは、わが子らについてわたしに問ひ、
 またわが手のわざについてわたしに命ずるのか。
 二三わたしは地を造つて、その上に人を創造した。

わたしは手をもって天をのべ、
その万軍を指揮した。

二三わたしは義をもってクロスを起した。

わたしは彼のすべての道をまっすぐにしよう。

彼はわが町を建て、

わが捕囚を価のためでなく、

また報いのためでもなく解き放つ」と

万軍の主は言われる。

二四主はこう言われる、

「エジプトの富と、エチオピアの商品と、

たけの高いセバびとは

あなたに来て、あなたのものとなり、あなたに従い、

彼らは鎖につながれて来て、あなたの前にひれ伏し、

あなたに願って言う、

『神はただあなたと共にいまし、

このほかに神はなく、ひとりもない』。

二五イスラエルの神、救主よ、

まことに、あなたは

ご自分を隠しておられる神である。

二六偶像を造る者は皆恥を負い、はすかしめを受け、

ともに、あわてふためいて退く。

二七しかし、イスラエルは主に救われて、

とこしえの救を得る。

あなたがたは世々かぎりなく、

恥を負わず、はすかしめを受けない。

二八天を創造された主、すなわち神であつて

また地をも造り成し、これを堅くし、

いたずらにこれを創造されず、

これを人のすみかに造られた主はこう言われる、

「わたしは主である、わたしのほかに神はない。

二九わたしは隠れたところ、地の暗い所で語らず、

ヤコブの子孫に

『わたしを尋ねるのはむだだ』と言わなかった。

主なるわたしは正しい事を語り、

まっすぐな事を告げる。

三〇もろもろの国からのがれてきた者よ、

集まつてきて、共に近寄れ。

木像をにない、

救うことのできない神に祈る者は無知である。

三一あなたがたの言い分を持つてきて述べよ。

また共に相談せよ。

この事をだれがいにしえから示したか。

だれが昔から告げたか。

わたし、すなわち主ではなかったか。

第四十六章

わたしのほかに神はない。
 わたしは義なる神、救主であつて、
 わたしのほかに神はない。
 三 地の果なるもろもろの人よ、
 わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。
 わたしは神であつて、ほかに神はないからだ。
 三 わたしは自分をさして誓つた、
 わたしの口から出た正しい言葉は帰ることがない、
 『すべてのひざはわが前にかがみ、
 すべての舌は誓いをたてる』。
 二 四人はわたしについて言う、
 『正義と力とは主のみある』と。
 人々は主にきたり、
 主にむかつて怒る者は皆恥を受ける。
 二五 しかしイスラエルの子孫は皆
 主によつて勝ち誇ることができぬ」。

一 ベルは伏し、ネボはかがみ、
 彼らの像は獣と家畜との上にある。
 あなたがたが持ち歩いたものは荷となり、

疲れた獣の重荷となつた。
 二 彼らはかがみ、彼らは共に伏し、
 重荷となつた者を救うことができず
 かえつて、自分は捕われて行く。
 三 「ヤコブの家よ、
 イスラエルの家の残つたすべての者よ、
 生れ出た時から、わたしに負われ、
 胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、
 わたしに聞け。
 四 わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、
 白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。
 わたしは造つたゆえ、必ず負い、
 持ち運び、かつ救う。
 五 あなたがたは、わたしをだれにたぐい、
 だれと等しくし、だれにくらべ、
 かつなぞらえようとするのか。
 六 彼らは袋からこがねを注ぎ出し、
 はかりをもつて、しろがねをはかり、
 金細工人を雇つて、それを神に造らせ、
 これにひれ伏して拜む。
 七 彼らはこれをもたげて肩に載せ、
 持つて行つて、その所に置き、そこに立たせる。

これはその所から動くことができない。
 人がこれに呼ばわつても答えることができない。
 また彼をその悩みから救うことができない。
 ハあなたがたはこの事をおぼえ、よく考えよ。
 そむける者よ、この事を心にとめよ、
 九いにしえよりこのかたの事をおぼえよ。
 わたしは神である、わたしのほかに神はない。
 わたしは神である、わたしと等しい者はない。
 一〇わたしは終りの事を初めから告げ、
 まだなされない事を昔から告げて言う、
 『わたしの計りことは必ず成り、
 わが目的をことごとくなし遂げる』と。
 二わたしは東から猛禽を招き、
 遠い国からわが計りごとを行う人を招く。
 わたしはこの事を語ったゆえ、必ずこさせる。
 わたしはこの事をはかったゆえ、必ず行う。
 三心をかたくなにして、救に遠い者よ、
 わたしに聞け。
 三わたしはわが救を近づかせるゆえ、
 その来ることは遠くない。
 わが救はおそくない。
 わたしは救をシオンに与え、

第四十七章

わが栄光をイスラエルに与える」。

一処女なるバビロンの娘よ、
 下つて、ちりの中にすわれ。
 カルデヤびとの娘よ、
 王座のない地にすわれ。
 あなたはもはや、やさしく、たおやかな女と
 となえられることはない。
 二石うすをとつて粉をひけ、
 顔をおいを取り去り、うちぎを脱ぎ、
 すねをあらわして川を渡れ。
 三あなたの裸はあらわれ、
 あなたの恥は見られる。
 わたしはあだを報いて、何人とも助けない。
 四われわれをあがなう者は
 その名を万軍の主といい、
 イスラエルの聖者である。
 五カルデヤびとの娘よ、
 黙してすわれ、また暗い所にはいれ。
 あなたはもはや、もろもろの国の女王と

となえられることはない。

六 わたしはわが民を憤り、

わが嗣業を汚して、これをあなたの手に渡した。

あなたはこれに、あわれみを施さず、

年老いた者の上に、はなはだ重いくびきを負わせた。

七 あなたは言った、

「わたしは、とこしえに女王となる」と。

そして、あなたはこれらの事を心にとめず、

またその終りを思わなかった。

八 楽しみにふけり、安らかにおり、

心のうちに「ただわたしだけで、

わたしのほかにだれもなく、

わたしは寡婦となることはない、

また子を失うことはない」と言う者よ、

今この事を聞け。

九 これらの二つの事は一日のうちに、

またたくまにあなたに臨む。

すなわち子を失い、寡婦となる事は

たといあなたが多くの魔術を行い、

魔法のたいなる力をもつてしても

ことごとくあなたに臨む。

一〇 あなたは自分の惡に寄り頼んで言う、

「わたしを見る者はない」と。

あなたの知恵と、あなたの知識とは

あなたを惑わした。

あなたは心のうちに言った、

「ただわたしだけで、わたしのほかにだれもない」と。

二 しかし、わざわいが、あなたに臨む、

あなたは、それをあがなうことができない。

なやみが、あなたを襲う、

あなたは、それをつぐなうことができない。

滅びが、にわかあなたに臨む、

あなたは、それについて何も知らない。

三 あなたが若い時から勤め行つたあなたの魔法と、

多くの魔術とをもつて立ちむかつてみよ、

あるいは成功するかもしれない、

あるいは敵を恐れさせるかもしれない。

四 あなたは多くの計りごとによってうみ疲れた。

かの天を分かちつて、星を見る者、

新月によつて、あなたに臨む事を告げる者を

立ちあがらせて、あなたを救わせてみよ。

五 見よ、彼らはわらのようになって、

火に焼き滅ぼされ、

自分の身を炎の勢いから、救い出すことができない。

第四八章

その火は身を暖める炭火ではない、
またその前にすわるべき火でもない。

一五 あなたが勤めて行ったものと、
あなたの若い時からあなたと売り買ひした者とは、
ついにこのようになる。

彼らはめいめい自分の方向にさすらいゆき、
ひとりもあなたを救う者はない。

一 ヤコブの家よ、これを聞け。

あなたがたはイスラエルの名をもつてとなえられ、

ユダの腰から出、
主の名によって誓い、

イスラエルの神となえるけれども、

真実をもつてせず、正義をもつてしない。

二 彼らはみずから聖なる都のものとなえ、

イスラエルの神に寄り頼む。

その名は万軍の主という。

三 「わたしはさきに成った事を、いにしえから告げた。
わたしは口から出して彼らに知らせた。

わたしは、にわかにこの事を行い、そして成った。

四 わたしはあなたが、かたくなで、その首は鉄の筋、
その額は青銅であることを知るゆえに、

五 いにしえから、かの事をあなたに告げ、
その成らないさきに、これをあなたに聞かせた。

そうでなければ、あなたは言うだろう、

『わが偶像がこれをしたのだ、

わが刻んだ像と、鑄た像がこれを命じたのだ』と。

六 あなたはすでに聞いた、

すべてこれが成ったことを見よ。

あなたがたはこれを宣べ伝えないのか。

わたしは今から新しい事、

あなたがまだ知らない隠れた事を

あなたに聞かせよう。

七 これらの事はいま創造されたので、

いにしえからあつたのではない。

この日以前には、あなたはこれを聞かなかつた。

そうでなければ、あなたは言うだろう、

『見よ、わたしはこれを知っていた』と。

八 あなたはこれを聞くこともなく、知ることもなく、

あなたの耳は、いにしえから開かれなかつた。

わたしはあなたが全く不信心で、

生れながら反逆者となえられたことを

知^しつていたからである。

九 わが名^なのために、わたしは怒^{いか}りをおそくする。
わが誉^{ほまれ}のために、わたしはこれをおさえて、
あなたを断^たち滅^{ほろ}ぼすことをしない。

一〇 見^みよ、わたしはあなたを練^ねつた。

しかし銀^{ぎん}のようにではなくて、
苦^{くる}しみの炉^ろをもってあなたを試^{こころ}みた。

二 わたしは自分^{じぶん}のために、自分^{じぶん}のためにこれを行^{おこな}う。
どうしてわが名^なを汚^{けが}させることができよう。

わたしはわが栄^{えい}光^{こう}を

ほかの者^{もの}に与^{あた}えることをしない。

ニヤコブよ、わたしの召^めしたイスラエルよ、

わたしに聞^きけ。

わたしはそれだ、わたしは初^{はじ}めであり、

わたしはまた終^{おわ}りである。

三 わが手^ては地^ちの基^{もと}をすえ、

わが右^{みぎ}の手^ては天^{てん}をのべた。

わたしと呼^よぶと、彼^{かれ}らはもろともに立^たつ。

一四 あなたがたは皆^{みな}集^{あつ}まって聞^きけ。

彼^{かれ}らのうち、だれがこれらの事^{こと}を告^つげたか。

主^{しゅ}の愛^{あい}せられる彼^{かれ}は

主^{しゅ}のみこころをバビロンに行^{おこな}い、

その腕^{うで}はカルデヤびとの上^{うへ}に臨^{のぞ}む。

一五 語^{かた}つたのは、ただわたしであつて、

わたしは彼^{かれ}を召^めした。

わたしは彼^{かれ}をこさせた。

彼はそ^{みち}の道^{みち}に栄^{さか}える。

一六 あなたがたはわたしに近^{ちか}寄^よつて、これを聞^きけ。

わたしは初^{はじ}めから、ひそかに語^{かた}らなかつた。

それが成^なつた時^{とき}から、わたしはそこにいたのだ」。

いま主^{しゅ}なる神^{かみ}は、わたしとその霊^{れい}とをつかわされた。

一七 あなたのあがない主^{ぬし}、イスラエルの聖^{せい}者^{じや}、

主^{しゅ}はこ^いう言^いわれる、

「わたしはあなたの神^{かみ}、主^{しゅ}である。

わたしは、あなたの利益^{りえき}のために、あなたを教^{おし}え、

あなたを導^{みちび}いて、その行^いくべき道^{みち}に行^いかせる。

一八 どうか、あなたはわたしの戒^{いまい}めに聞^きき従^{したが}うように。

そうすれば、あなたの平安^{へいあん}は川^{かわ}のように、

あなたの義^ぎは海^{うみ}の波^{なみ}のようになり、

一九 あなたのすえは砂^{すな}のように、

あなたの子孫^{しそん}は砂粒^{すなつぶ}のようになって、

その名^なはわが前^{まえ}から断^たたれることなく、滅^{ほろ}ぼされることは

ない」。

二〇 あなたがたはバビロンから出^で、

第四九章

カルデヤからのがれよ。

喜びの声をもつてこれをもつてこれをのべ聞かせ、
地の果にまで語り伝え、

「主はそのしもべヤコブをあがなわれた」と言え。

三 主が彼らを導いて、さばくを通らせられたとき、
彼らは、かわいたことがなかった。

主は彼らのために岩から水を流れさせ、

また岩を裂かれると、水がほとばしり出た。

三 主は言われた、

「悪い者には平安がない」と。

一 海沿いの国々よ、わたしに聞け。

遠いところのもろもろの民よ、耳を傾けよ。

主はわたしを生れ出た時から召し、

母の胎を出た時からわが名を語り告げられた。

二 主はわが口を鋭利なつるぎとなし、

わたしをみ手の陰にかくし、

とぎすました矢となして、

箴にわたしを隠された。

三 また、わたしに言われた、

「あなたはわがしもべ、

わが栄光をあらわすべきイスラエルである」と。

四 しかし、わたしは言った、

「わたしはいたずらに働き、

益なく、むなしく力を費した。

しかもなお、まことにわが正しきは主と共にあり、

わが報いはわが神と共にある」と。

五 ヤコブをおのれに帰らせ、

イスラエルをおのれのもとに集めるために、

わたしを腹の中からつくつて

そのしもべとされた主は言われる。

(わたしは主の前に尊ばれ、

わが神はわが力となられた)

六 主は言われる、

「あなたがわがしもべとなつて、

ヤコブのもろもろの部族をおこし、

イスラエルのうちの残つた者を帰らせることは、

いとも軽い事である。

わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、

わが救を地の果にまでいたらせよう」と。

七 イスラエルのあがない主、

イスラエルの聖者なる主は、

人に侮られる者、民に忌みきらわれる者、つかさたちのしもべにむかつてこう言われる、「もろもろの王は見て、立ちあがり、もろもろの君は立つて、拝する。これは真実なる主、イスラエルの聖者が、あなたを選ばれたゆえである」。

ハ主はこう言われる、

「わたしは恵みの時に、あなたに答え、救の日にあなたを助けた。

わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。九わたしは捕えられた人に『出よ』と言ひ、暗きにおる者に『あらわれよ』と言う。

彼らは道すがら食べることができ、すべての裸の山にも牧草を得る。

○彼らは飢えることがなく、かわくこともない。また熱い風も、太陽も彼らを撃つことはない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、泉のほとりに彼らを導かれるからだ。

二わたしは、わがもろもろの山を道とし、わが大路を高くする。

三見よ、人々は遠くから来る。見よ、人々は北から西から、またスエネの地から来る。

三三天よ、歌え、地よ、喜べ。もろもろの山よ、声を放つて歌え。主はその民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ。

四しかしシオンは言つた、

「主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた」と。

五「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるうか。たとい彼らが忘れるようなことがあつても、わたしは、あなたを忘れることはない。

六見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。あなたの石がきは常にわが前にある。

七あなたを建てる者は、あなたをこわす者を追い越し、あなたを荒した者は、あなたから出て行く。

八あなたの目をあげて見ませ。彼らは皆集まつて、あなたのもとに来る。主は言われる、わたしは生きている、あなたは彼らを皆、飾りとして身につけ、花嫁の帯のようにこれを結ぶ。

一九あなたの荒れ、かつすたれた所、こわされた地は、
 住む人の多いために狭くなり、
 あなたを、のみつくした者は、はるかに離れ去る。
 二〇あなたが子を失った後に生れた子らは、
 なおあなたの耳に言う、
 『この所はわたしには狭すぎる、
 わたしのために住むべき所を得させよ』と。
 二一その時あなたは心のうちに言う、
 『だれがわたしのためにこれらの者を産んだのか。
 わたしは子を失って、子をもたない。
 わたしは捕われ、かつ追いやられた。
 だれがこれらの者を育てたのか。
 見よ、わたしはひとり残された。
 これらの者はどこから来たのか』と。
 二二主なる神はこう言われる、
 「見よ、わたしは手をもろもろの国にむかつてあげ、
 旗をもろもろの民にむかつて立てる。
 彼らはそのふところにあなたの子らを携え、
 その肩にあなたの娘たちを載せて来る。
 二三もろもろの王は、あなたの養父となり、
 その王妃たちは、あなたの乳母となり、
 彼らはその顔を地につけて、あなたにひれ伏し、

あなたの足のちりをなめる。
 こうして、あなたはわたしが主であることを知る。
 わたしを待ち望む者は恥をこうむることがない」。
 二四勇士が奪った獲物を
 どうして取り返すことができようか。
 暴君がかすめた捕虜を
 どうして救い出すことができようか。
 二五しかし主はこう言われる、
 「勇士がかすめた捕虜も取り返され、
 暴君が奪った獲物も救い出される。
 わたしはあなたと争う者と争い、
 あなたの子らを救うからである。
 二六わたしはあなたをしえたげる者にその肉を食わせ、
 その血を新しい酒のように飲ませて酔わせる。
 こうして、すべての人はわたしが主であつて、
 あなたの救主、またあなたのあがない主、
 ヤコブの全能者であることを知るようになる」。

第五〇章

一主はこう言われる、
 「わたしがあなたがたの母を去らせたその離縁状は、

どこにあるか。

わたしはどの債主にあなたがたを売りわたしたか。
見よ、あなたがたは、その不義のために売られ、
あなたがたの母は、

あなたがたのとがのために出されたのだ。

ニわたしが出来たとき、

なぜひとりもいなかったか。

わたしが呼んだとき、

なぜひとりも答える者がなかったか。

わたしの手が短くて、

あがなうことができないのか。

わたしは救う力を持たないのか。

見よ、わたしが、しかると海はかれ、
川は荒野となり、

その中の魚は水がないために、

かわき死んで悪臭を放つ。

三わたしは黒い衣を天に着せ、

荒布をもつてそのおおいとする。

四主なる神は教をうけた者の舌をわたしに与えて、

疲れた者を言葉をもつて助けることを知らせ、

また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、

教をうけた者のように聞かせられる。

五主なる神はわたしの耳を開かれた。

わたしは、そむくことをせず、

退くことをしなかった。

六わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、

わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、

恥とつばきとを避けるために、

顔をかくさなかった。

七しかし主なる神はわたしを助けられる。

それゆえ、わたしは恥じることがなかった。

それゆえ、わたしは顔を火打石のようにした。

わたしは決してはずかしめられないことを知る。

八わたしを義とする者が近くおられる。

だれがわたしと争うだろうか、

われわれは共に立つ。

わたしのあだはだれか、

わたしの所へ近くこさせよ。

九見よ、主なる神はわたしを助けられる。

だれがわたしを罪に定めるだろうか。

見よ、彼らは皆衣のようにふるび、

しみのために食いつくされる。

一〇あなたがたのうち主を恐れ、

そのしもべの声に聞き従い、

第五章

暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、
おのれの神にたよる者はだれか。
二 見よ、火を燃やし、たいまつをともし者よ、
皆その火の炎の中を歩め、
またその燃やした、たいまつの中を歩め。
あなたがたは、これをわたしの手から受けて、
苦しみのうちに伏し倒れる。

一 「義を追い求め、
主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。
あなたがたの切り出された岩と、
あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ。
二 あなたがたの父アブラハムと、
あなたがたを産んだサラとを思いみよ。
わたしは彼をただひとりであつたときに召し、
彼を祝福して、その子孫を増し加えた。
三 主はシオンを慰め、
またそのすべて荒れた所を慰めて、
その荒野をエデンのように、
そのさばくを主の園のようにされる。

こうして、その中に喜びと楽しみとがあり、
感謝と歌の声とがある。
四 わが民よ、わたしに聞け、
わが国びとよ、わたしに耳を傾けよ。
律法はわたしから出、
わが道はもろもろの民の光となる。
五 わが義はすみやかに近づき、
わが救は出て行つた。
わが腕はもろもろの民を治める。
海治いの国々はわたしを待ち望み、
わが腕に寄り頼む。
六 目をあげて天を見、また下なる地を見よ。
天は煙のように消え、地は衣のようにふるび、
その中に住む者は、ぶよのように死ぬ。
しかし、わが救はとこしえにながらえ、
わが義はくじけることがない。
七 義を知る者よ、
心のうちにわが律法をたもつ者よ、わたしに聞け。
人のそしりを恐れてはならない、
彼らのもののしりに驚いてはならない。
八 彼らは衣のように、しみに食われ、
羊の毛のように虫に食われるからだ。

しかし、わが義はとこしえにながらえ、
わが救はよろず代に及ぶ。

九主のかいなよ、

さめよ、さめよ、力を着よ。

さめて、いにしえの日、昔の代にあつたようになれ。

ラハブを切り殺し、

龍を刺し貫いたのは、あなたではなかったか。

〇海をかわかし、大いなる淵の水をかわかし、

また海の深き所を、

あがなわれた者の過ぎる道とされたのは、

あなたではなかったか。

二主にあがなわれた者は、

歌うたいつつ、シオンに帰つてきて、

そのこうべに、とこしえの喜びをいただき、

彼らは喜びと楽しみとを得、

悲しみと嘆きとは逃げ去る。

三「わたしこそあなたを慰める者だ。

あなたは何者なれば、死ぬべき人を恐れ、

草のようになるべき人の子を恐れるのか。

二三天をのべ、地の基をすえられた

あなたの造り主、主を忘れて、

なぜ、しえたげる者が滅ぼそうと備えをするとき、

その憤りのゆえに常にひねもす恐れるのか。
しえたげる者の憤りはどこにあるか。

四身をかがめている捕われ人は、すみやかに解かれて、
死ぬことなく、穴にくだることなく、

その食物はつきることがない。

一五わたしは海をふるわせ、

その波をなりどよめかすあなたの神、主である。

その名を万軍の主という。

一六わたしはわが言葉をあなたの口におき、

わが手の陰にあなたを隠した。

こうして、わたしは天をのべ、地の基をすえ、

シオンにむかつて、あなたはわが民であると言う。

一七エルサレムよ、起きよ、起きよ、立て。

あなたはさきに主の手から憤りの杯をうけて飲み、

よろめかす大杯を、滓までも飲みほした。

一八その産んだもろもろの子のなかに、

自分を導く者なく、

その育てたもろもろの子のなかに、

自分の手をとる者がない。

一九これら二つの事があなたに臨んだ――

だれがあなたと共に嘆くだろうか――
荒廃と滅亡、ききんとつるぎ。

だれがあなたを慰めるだろうか。

二〇 あなたの子らは息絶えだえになり、網にかかった、かもしかのように、すべてのちまたのすみに横たわり、主の憤りと、あなたの神の責めとは、彼らに満ちている。

二三 それゆえ、苦しめる者、酒にではなく酔っている者よ、これを聞け。

三 あなたの主、おのが民の訴えを弁護される

あなたの神、主はこう言われる、

「見よ、わたしはよろめかす杯を

あなたの手から取り除き、

わが憤りの大杯を取り除いた。

あなたは再びこれを飲むことはない。

三三 わたしはこれをあなたを悩ます者の手におく。

彼らはさきにあなたにむかつて言った、

『身をかめよ、われわれは越えていこう』と。

そしてあなたはその背を地のようにし、

ちまたのようにして、

彼らの越えていくにまかせた。

第五章

一 シオンよ、さめよ、さめよ、力を着よ。

二 聖なる都エルサレムよ、美しい衣を着よ。

三 割礼を受けない者および汚れた者は、

もはやあなたのところに、はいることがないからだ。

四 捕われたエルサレムよ、

あなたの身からちりを振り落せ、起きよ。

五 捕われたシオンの娘よ、

あなたの首のなわを解きすてよ。

六 三主はこう言われる、「あなたがたは、ただで売られた。金を出

さずにあがなわれる」。四 主なる神はこう言われる、「わが民はさ

きにエジプトへ下って行って、かしこに寄留した。またアツス

リヤびとはゆえなく彼らをしえたげた。五 それゆえ、今わたしは

ここに何をしようか。わが民はゆえなく捕われた」と主は言わ

れる。主は言われる、「彼らをつかさどる者はわめき、わが名は

常にひねもす侮られる。六 それゆえ、わが民はわが名を知るに

いたる。その日には彼らはこの言葉を語る者がわたしであること

を知る。わたしはここにおる」。

七 よきおとずれを伝え、平和を告げ、

よきおとずれを伝え、救を告げ、

シオンにむかつて「あなたの神は王となられた」と
 言う者の足は山の上にあつて、
 なんと麗しいことだろう。
 ハ聞けよ、あなたの見張びとは声をあげて、
 共に喜び歌つてゐる。
 彼らは目と目と相合わせて、
 主がシオンに帰られるのを見るからだ。
 カエルサレムの荒れすたれた所よ、
 声を放つて共に歌え。
 主はその民を慰め、
 エルサレムをあがなわれたからだ。
 一〇主はその聖なるかいなを、
 もろもろの国びとの前にあらわされた。
 地のすべての果は、われわれの神の救を見る。
 二去れよ、去れよ、そこを出て、
 汚れた物にさわるな。
 その中を出よ、主の器をになう者よ、
 おのれを清く保て。
 二三あなたがたは急いで出るに及ばない、
 また、とんで行くにも及ばない。
 主はあなたがたの前行き、
 イスラエルの神はあなたがたの

第五三章

しんがりとなられるからだ。
 二三見よ、わがしもべは栄える。
 彼は高められ、あげられ、ひじように高くなる。
 二四多くの人が彼に驚いたように――
 彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、
 その姿は人の子と異なつていたからである――
 二五彼は多くの国民を驚かす。
 王たちは彼のゆえに口をつむぐ。
 それは彼らがまだ伝えられなかつたことを見、
 まだ聞かなかつたことを悟るからだ。
 一だれがわれわれの聞いたことを
 信じ得たか。
 主の腕は、だれにあらわれたか。
 二彼は主の前に若木のように、
 かわいた土から出る根のように育つた。
 彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、
 われわれの慕うべき美しさもない。
 三彼は侮られて人に捨てられ、
 悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおつて忌みきらわれる者のように、
 彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。
 四まことに彼はわれわれの病を負い、
 われわれの悲しみをになった。
 しかるに、われわれは思った、
 彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。
 五しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、
 われわれの不義のために碎かれたのだ。
 彼はみずから懲しめをうけて、
 われわれに平安を与え、
 その打たれた傷によつて、
 われわれはいやされたのだ。
 六われわれはみな羊のように迷つて、
 おの自分の道に向かつて行つた。
 主はわれわれすべての者の不義を、
 彼の上におかれた。
 七彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、
 口を開かなかつた。
 ほふり場にひかれて行く小羊のように、
 また毛を切る者の前に黙っている羊のように、
 口を開かなかつた。
 ハ彼は暴虐なさばきによつて取り去られた。

その代の人のうち、だれが思つたであらうか、
 彼はわが民のとがのために打たれて、
 生けるものの地から断たれたのだと。
 九彼は暴虐を行わず、
 その口には偽りがなかつたけれども、
 その墓は悪しき者と共に設けられ、
 その塚は悪をなす者と共にあつた。
 〇しかも彼を碎くことは主のみ旨であり、
 主は彼を悩まされた。
 彼が自分を、とがの供え物となすとき、
 その子孫を見ることができ、
 その命をながくすることができる。
 かつ主のみ旨が彼の手によつて栄える。
 二彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。
 義なるわがしもべはその知識によつて、
 多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。
 三それゆゑ、わたしは彼に大いなる者と共に
 物を分かち取らせる。
 彼は強い者と共に獲物を分かち取る。
 これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、
 とがある者と共に数えられたからである。
 しかも彼は多くの人の罪を負い、

とがある者のためにとりなしをした。

第五十四章

一「子を産まなかつたうまずめよ、歌え。
産みの苦しみをしなかつた者よ、
声を放つて歌いよばわれ。

夫のない者の子は、
とついだ者の子よりも多い」と主は言われる。

二「あなたの天幕の場所を広くし、
あなたのすまいの幕を張りひろげ、
惜しむことなく、あなたの綱を長くし、

あなたの杭を強固にせよ。

三あなたは右に左にひろがり、
あなたの子孫はもろもろの国を獲、

荒れすたれた町々をも住民で満たすからだ。

四恐れてはならない。

あなたは恥じることがない。

あわてふためいてはならない。

あなたは、はずかしめられることがない。

あなたは若い時の恥を忘れ、

寡婦であつた時のはずかしめを、

再び思い出すことがない。

五あなたを造られた者はあなたの夫であつて、
その名は万軍の主。

あなたをあがなわれる者は、

イスラエルの聖者であつて、

全地の神となえられる。

六捨てられて心悲しむ妻、

また若い時にとついで出された妻を招くように

主はあなたを招かれた」と

あなたの神は言われる。

七「わたしはしばしばあなたを捨てたけれども、
大いなるあわれみをもってあなたを集める。

ハあふれる憤りをもつて、

しばしばが顔を隠したけれども、

とこしえのいつくしみをもつて、

あなたをあわれむ」と

あなたをあがなわれる主は言われる。

九「このことはわたしにはノアの時のようだ。

わたしはノアの洪水を、

再び地にあふれさせないと誓つたが、

そのように、わたしは再びあなたを怒らない、

再びあなたを責めないと誓つた。

一〇山は移り、丘は動いても、

わがいつくしみはあなたから移ることなく、
平安を与えるわが契約は動くことがない」と
あなたをあわれまれる主は言われる。

二「苦しみをうけ、あらしにもてあそばされ、
慰めを得ない者よ、

見よ、わたしはアンチモニーであなたの石をすえ、
サファイヤであなたの基をおき、

二二めのうであなたの尖塔を造り、
紅玉であなたの門を造り、

あなたの城壁をことごとく寶石で造る。

二三あなたの子らはみな主に教をうけ、

あなたの子らは大いに栄える。

一四あなたは義をもつて堅く立ち、

しえたげから遠ざかつて恐れることはない。

また恐怖から遠ざかる、

それはあなたに近づくことがないからである。

一五たとい争いを起す者があつても

わたしによるのではない。

すべてあなたと争う者は、あなたのゆえに倒れる。

一六見よ、炭火を吹きおこして、

その目的にかなう武器を造り出す鍛冶は、

わたしが創造した者、

また荒し滅ぼす者も、わたしが創造した者である。
一七すべてあなたを攻めるために造られる武器は、
その目的を達しない。

すべてあなたに逆らい立つて、争い訴える舌は、
あなたに説き破られる。

これが主のしもべらの受ける嗣業であり、
また彼らがわたしから受ける義である」と
主は言われる。

第五章

一「さあ、かわいている者は

みな水にきたれ。

金のない者もきたれ。

来て買い求めて食べよ。

あなたがたは来て、金を出さずに、

ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。

二なぜ、あなたがたは、

かてにもならぬもののために金を費し、
飽きることもできぬもののために労するのか。

わたしによく聞き従え。

そうすれば、良い物を食べることができ、

最も豊かな食物で、自分を楽しませることができる。

三耳を傾け、わたしにきて聞け。

そうすれば、あなたがたは生きることができる。

わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、

ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える。

四見よ、わたしは彼を立てて、

もろもろの民への証人とし、

また、もろもろの民の君とし、命令する者とした。

五見よ、あなたは知らない国民を招く、

あなたを知らない国民は

あなたのもとに走ってくる。

これはあなたの神、主、

イスラエルの聖者のゆえであり、

主があなたに光栄を与えられたからである。

六あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、

主を尋ねよ。

近くおられるうちに呼び求めよ。

七悪しき者はその道を捨て、

正らぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。

そうすれば、主は彼にあわれみを施される。

われわれの神に帰れ、

主は豊かにゆるしを与えられる。

八わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、

わが道は、あなたがたの道とは異なっていると

主は言われる。

九天が地よりも高いように、

わが道は、あなたがたの道よりも高く、

わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。

〇天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、

地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、

種まく者に種を与え、

食べる者にかてを与える。

二このように、わが口から出る言葉も、

むなしくわたしに帰らない。

わたしの喜ぶところのことをなし、

わたしが命じ送った事を果す。

三あなたがたは喜びをもって出てきて、

安らかに導かれて行く。

山と丘とはあなたの前に声を放って喜び歌い、

野にある木はみな手を打つ。

三三いとすぎは、いばらに代って生え、

ミルトスの木は、おどろに代って生える。

これは主の記念となり、

また、とこしえのしるしとなつて、
絶えることはない」。

第五十六章

一主はこう言われる、
「あなたがたは公平を守つて正義を行へ。
わが救の来るのは近く、
わが助けのあらわれるのが近いからだ。
二安息日を守つて、これを汚さず、
その手をおさえて、悪しき事をせず、
このように行ふ人、
これを堅く守る人の子はさいわいである」。
三主に連なつてゐる異邦人は言つてはならない、
「主は必ずわたしをその民から分かつたれる」と。
宦官もまた言つてはならない、
「見よ、わたしは枯れ木だ」と。
四主はこう言われる、
「わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、
わが契約を堅く守る宦官には、
五わが家のうちで、わが垣のうちに、
むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与へ、

絶えることの無い、とこしえの名を与える。
六また主に連なり、主に仕え、
主の名を愛し、そのしもべとなり、
すべて安息日を守つて、これを汚さず、
わが契約を堅く守る異邦人は――
七わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、
わが祈の家のうちで樂しませる、
彼らの燔祭と犠牲とは、
わが祭壇の上に受けいれられる。
わが家はすべての民の
祈の家となえられるからである」。
ハイスラエルの追いやられた者を集められる
主なる神はこう言われる、
「わたしはさらに人を集めて、
すでに集められた者に加えよう」と。
九野のすべての獣よ、
林におるすべての獣よ、来て食らえ。
一〇見張人らはみな目しいで、知ることがなく、
みな、おしの犬で、ほえることができない。
みな夢みる者、伏してゐる者、
まどろむことを好む者だ。
一一この犬どもは強欲で、飽くことを知らない。

第五十七章

彼らはまた悟ることのできない牧者で、
皆おのが道にむかいゆき、
おのおのみな、おのれの利を求め、
二三彼らは互に言う、
「さあ、われわれは酒を手に入れ、
濃い酒をあびるほど飲もう。
あすも、きょうのようであるだろう、
すばらしい日だ」と。

一正しい者が滅びても、
心にとめる人がなく、
神を敬う人々が取り去られても、悟る者はない。
正しい者は災の前に取り去られて、
ニ平安に入るからである。
すべて正直に歩む者は、その床に休むことができる。
三しかし、あなたがた女魔法使の子よ、
姦夫と遊女のすえよ、こちらへ近寄れ。
四あなたがたは、だれにむかつて戯れをなすのか。
だれにむかつて口を開き、舌を出すのか。
あなたがたは背信の子ら、

偽りのすえではないか。
五あなたがたは、かしの木の間、
すべての青木の下で心をこがし、
谷の中、岩のはざままで子どもを殺した。
六あなたは谷のなめらかな石を自分の嗣業とし、
これを自分の分け前とし、
これに灌祭をそそぎ、供え物をささげた。
わたしはこれらの物によつてなだめられようか。
七あなたは高くそびえた山の上に自分の床を設け、
またそこに登つて行つて犠牲をささげた。
八また戸および柱のうしろに、
あなたのしるしを置いた。
あなたはわたしを離れて自分の床をあらわし、
それにのぼつて、その床をひろくした。
また彼らと契約をなし、彼らの床を愛し、
その裸を見た。
九あなたは、におい油を携えてモレクに行き、
多くのかおり物をささげた。
またあなたの使者を遠くにつかわし、
陰府の深い所にまでつかわした。
一〇あなたは道の長いのに疲れても、
なお「望みがない」とは言わなかった。

あなたはおのが力の回復を得たので、
衰えることがなかった。

二 あなたはだれをおじ恐れて、偽りを言い、
わたしを覚え、また心におかなかったのか。

わたしが久しく黙っていたために、

あなたはわたしを恐れなかったのではなかったか。

三 わたしはあなたの義と、あなたのわざを告げ示そう、
しかしこれらはあなたを益しない。

四 あなたが呼ばれる時、

あなたが集めておいた偶像にあなたを救わせよ。

風は彼らを運び去り、

息は彼らを取り去る。

しかしわたしに寄り頼む者は地を継ぎ、

わが聖なる山をまもる。

五 主は言われる、

「土を盛り、土を盛つて道を備えよ、

わが民の道から、つまずく物を取り去れ」と。

六 いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、

その名を聖となえられる者がこう言われる、

「わたしは高く、聖なる所に住み、

また心砕けて、へりくだる者と共に住み、

へりくだる者の霊をいかし、

砕ける者の心をいかさす。

七 わたしはかぎりなく争わない、

また絶えず怒らない。

霊はわたしから出、

いのちの息はわたしがつくつたからだ。

八 彼のむさぼりの罪のゆえに、

わたしは怒つて彼を打ち、

わが顔をかくして怒つた。

しかし彼はなおそむいて、おのが心の道へ行つた。

九 わたしは彼の道を見た。

わたしは彼をいやし、

また彼を導き、慰めをもつて彼に報い、

悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう。

一〇 遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、

わたしは彼をいやそう」と主は言われる。

一一 しかし悪しき者は波の荒い海のようなだ。

静まることのできないで、

その水はついに泥と汚物とを出す。

一二 わが神は言われる、

「よこしまな者には平安がない」と。

第五八章

一「大いに呼ばわつて声を惜しむな。
あなたの声をラッパのようにあげ、
わが民にそのとがを告げ、
ヤコブの家にその罪を告げしめ。
二彼らは日々わたしを尋ね求め、
義を行い、神のおきてを捨てない国民のように、
わが道を知ることが喜び。
彼らは正しいさばきをわたしに求め、
神に近づくことを喜び。
三彼らは言う、
『われわれが断食したのに、
なぜ、ごらんにならないのか。
われわれがおのれを苦しめたのに、
なぜ、ごぞんじないのか』と。
見よ、あなたがたの断食の日には、
おのが楽しみを求め、
その働き人をことごとくしえたげる。
四見よ、あなたがたの断食するのは、
ただ争いと、いさかいのため、
また悪のこぶしをもつて人を打つためだ。

きよう、あなたがたのなす断食は、
その声を上に聞えさせるものではない。
五このようなものは、わたしの選ぶ断食であろうか。
人のおのれを苦しめる日であろうか。
そのこうべを葦のように伏せ、
荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。
あなたは、これを断食となえ、
主に受けいられる日と、となえるであろうか。
六わたしが選ぶところの断食は、
悪のなわをほどこき、くびきのひもを解き、
しえたげられる者を放ち去らせ、
すべてのくびきを折るなどの事ではないか。
七また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、
さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、
裸の者を見て、これを着せ、
自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。
八そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、
あなたは、すみやかにいやされ、
あなたの義はあなたの前に行き、
主の栄光はあなたのしんがりとなる。
九また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、
あなたが叫ぶとき、

『わたしはここにおる』と言われる。

もし、あなたの中にかくびきを除き、指をさすこと、悪い事を語ることがを除き、

一〇 飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、

あなたの光は暗きに輝き、

あなたのやみは真昼のようになる。

二 主は常にあなたを導き、

良き物をもつてあなたの願いを満ち足らせ、

あなたの骨を強くされる。

あなたは潤った園のように、

水の絶えない泉のようになる。

三 あなたの子らは久しく荒れたれたる所を興し、

あなたは代々やぶれた基を立て、

人はあなたを『破れを繕う者』と呼び、

『市街を繕つて住むべき所となす者』と呼ぶようになる。

三 もし安息日にあなたの足をとどめ、

わが聖日にあなたの楽しみをなさず、

安息日を喜びの日と呼び、

主の聖日を尊ぶべき日となえ、

これを尊んで、おのが道を行わず、

おのが楽しみを求めず、

むなしい言葉を語らないならば、

一四 その時あなたは主によって喜びを得、

わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、

あなたの先祖ヤコブの嗣業をもつて、

あなたを養う。

これは主の口から語られたものである。

第五九章

一 見よ、主の手が短くて、

救い得ないのではない。

その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。

二 ただ、あなたがたの不義が

あなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。

またあなたがたの罪が

主の顔をおおつたために、お聞きにならないのだ。

三 あなたがたの手は血で汚れ、

あなたがたの指は不義で汚れ、

あなたがたのくちびるは偽りを語り、

あなたがたの舌は悪をささやき、

四 ひとりも正義をもつて訴え、

眞実をもつて論争する者がない。
 彼らはむなしきことを頼み、偽りを語り、
 害悪をはらみ、不義を産む。
 五 彼らはまむしの卵をかれし、くもの巣を織る。
 その卵を食べる者は死ぬ。
 卵が踏まれると破れて毒蛇を出す。
 六 その織る物は着物とならない。
 その造る物をもつて身をおおうことができない。
 彼のわざは不義のわざであり、
 彼の手に暴虐の行いがある。
 七 彼らの足は悪に走り、
 罪のない血を流すことに速い。
 彼らの思いは不義の思いであり、
 荒廃と滅亡とがその道にある。
 八 彼らは平和の道を知らず、
 その行く道には公平がない。
 彼らはその道を曲げた。
 すべてこれを歩む者は平和を知らない。
 九 それゆえ、公平は遠くわれわれを離れ、
 正義はわれわれに追いつかない。
 われわれは光を望んでも、暗きを見、
 輝きを望んでも、やみを行く。

一〇 われわれは盲人のように、かきを手さぐりゆき、
 目のない者のように手さぐりゆき、
 眞昼でも、たそがれのようにつまずき、
 強壯な者の中にあつても死人のようだ。
 二 われわれは皆くまのようにほえ、
 はとのようにいたくうめき、
 公平を望んでも、きたらず、
 救を望んでも、遠くわれわれを離れ去る。
 三 われわれのとがは、あなたの前に多く、
 罪は、われわれを訴えて、あかしをなし、
 とがは、われわれと共にあり、
 不義は、われわれがこれを知る。
 四 われわれは、そむいて主をいなみ、
 退いて、われわれの神に従わず、
 しえたげと、そむきとを語り、
 偽りの言葉を心にはらんで、それを言いあらわす。
 五 公平はうしろに退けられ、
 正義ははるかに立つ。
 それは、眞実は広場に倒れ、
 正直は、はいることができないからである。
 六 眞実は欠けてなく、
 悪を離れる者はかすめ奪われる。

主はこれを見て、
公平がなかったことを喜ばれなかった。
一六主は人のないのを見られ、
仲に立つ者のないのをあやしまれた。
それゆえ、ご自分のかいなをもつて、勝利を得、
その義をもつて、おのれをささえられた。
一七主は義を胸当としてまい、
救のかぶとをその頭にいただき、
報復の衣をまとって着物とし、
熱心を外套として身を包まれた。
一八主は彼らの行いにしたがって報いをなし、
あだにむかつて怒り、
敵にむかつて報いをなし、
海沿いの国々にむかつて報いをされる。
一九こうして、人々は西の方から主の名を恐れ、
日の出る方からその栄光を恐れる。
主は、せき止めた川を、
そのいぶきで押し流すように、こられるからである。
二〇主は言われる、
「主は、あがなう者としてシオンにきたり、
ヤコブのうちの、とがを離れる者に至る」と。
主は言われる、「わたしが彼らと立てる契約はこれである。」

あなたの上にあるわが霊、あなたの口においたわが言葉は、今から後としえに、あなたの口から、あなたの子らの口から、あなたの子らの子の口から離れることはない」と。

第六〇章

一起きよ、光を放て。
あなたの光が臨み、
主の栄光があなたの上にのぼったから。
二見よ、暗きは地をおおい、
やみはもろもろの民をおおう。
しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、
主の栄光があなたの上にあらわれる。
三もろもろの国は、あなたの光に來、
もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに來る。
四あなたの目をあげて見ませ、
彼らはみな集まってあなたに來る。
あなたの子らは遠くから來、
あなたの娘らは、かいなにいだかれて來る。
五その時あなたは見て、喜びに輝き、
あなたの心はどよめき、かつ喜ぶ。
海の富が移ってあなたに來、

もろもろの国の宝が、あなたに来るからである。
 六多くのおらくだ、ミデアンおよびエパの若きらくだは
 あなたをおおい、
 シバの人々はみな黄金、乳香を携えてきて、
 主の譽を宣べ伝える。
 セケダルの羊の群れはみなあなたに集まって来、
 ネバヨテの雄羊はあなたに仕え、
 わが祭壇の上にのぼって受けいられる。
 こうして、わたしはわが栄光の家を輝かす。
 ハ雲のように飛び、
 はとがその小屋に
 飛び帰るようにして来る者はだれか。
 九海沿いの国々はわたしを待ち望み、
 タルシシの船はいや先に
 あなたの子らを遠くから載せて来、
 また彼らの金銀を共に載せて来て、
 あなたの神、主の名にささげ、
 イスラエルの聖者にささげる。
 主があなたを輝かされたからである。
 一〇異邦人はあなたの城壁を築き、
 彼らの王たちはあなたに仕える。
 わたしは怒りをもつてあなたを打つたけれども、

また恵みをもつてあなたをあわれんだからである。
 一二あなたの門は常に開いて、
 昼も夜も閉ざすことはない。
 これは人々が国々の宝をあなたに携えて来、
 その王たちを率いて来るためである。
 一二あなたに仕えない国と民とは滅び、
 その国々は全く荒れすたれる。
 一三レバノンの栄えはあなたに来、
 いとすぎ、すずかけ、まつは皆共に来て、
 わが聖所をかざる。
 またわたしはわが足をおく所を尊くする。
 一四あなたを苦しめた者の子らは、
 かがんで、あなたのもとに来、
 あなたをさげすんだ者は、
 ことごとくあなたの足もとに伏し、
 あなたを主の都、
 イスラエルの聖者のシオンとなえる。
 一五あなたは捨てられ、憎まれて、
 その中を過ぎる者もなかったが、
 わたしはあなたを、とこしえの誇、
 世々の喜びとする。
 一六あなたはまた、もろもろの国の乳を吸い、

王たちの乳ぶさを吸い、
 そして主なるわたしが、あなたの救主、
 また、あなたのあがない主、
 ヤコブの全能者であることを知るにいたる。
 こゝろがねの代りにしろがねを携え、
 木の代りに青銅を、石の代りに鉄を携えてきて、
 あなたのまつりごとを平和にし、
 あなたのつかさびとを正しくする。
 一八暴虐は、もはやあなたの地に聞かれず、
 荒廃と滅亡は、もはやあなたの境のうちに聞かれず、
 あなたはその城壁を「救」ととなえ、
 その門を「誉」ととなえる。
 一九昼は、もはや太陽があなたの光とならず、
 夜も月が輝いてあなたを照さず、
 主はとこしえにあなたの光となり、
 あなたの神はあなたの栄えとなられる。
 二〇あなたの太陽は再び没せず、
 あなたの月はかけることがない。
 主がとこしえにあなたの光となり、
 あなたの悲しみの日が終るからである。
 二一あなたの民はことごとく正しい者となつて、

第六章

とこしえに地を所有する。
 彼らはわたしの植えた若枝、わが手のわざ、
 わが栄光をあらわすものとなる。
 三その最も小さい者は氏族となり、
 その最も弱い者は強い国となる。
 わたしは主である。
 その時がくるならば、すみやかにこの事をなす。
 一主なる神の霊がわたしに臨んだ。
 これは主がわたしに油を注いで、
 貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、
 わたしをつかわして心のいためる者をいやし、
 捕われ人に放免を告げ、
 縛られている者に解放を告げ、
 二主の恵みの年と
 われわれの神の報復の日とを告げさせ、
 また、すべての悲しむ者を慰め、
 ミシオンの中の悲しむ者に喜びを与え、
 灰にかえて冠を与え、
 悲しみにかえて喜びの油を与え、

憂いのかにかえて、
 さんびの衣を与えさせるためである。
 こうして、彼らは義のかしの木となえられ、
 主がその栄光をあらわすために
 植えられた者となえられる。
 四彼らはいにしえの荒れた所を建てなおし、
 さきに荒れた所を興し、
 荒れた町々を新たにし、
 世々すたれた所を再び建てる。
 五外国人は立つてあなたがたの群れを飼い、
 異邦人はあなたがたの畑を耕す者となり、
 ぶどうを作る者となる。
 六しかし、あなたがたは主の祭司となえられ、
 われわれの神の役者と呼ばれ、
 もろもろの国の富を食べ、
 彼らの宝を得て喜ぶ。
 七あなたがたは、さきに受けた恥にかえて、
 二倍の賜物を受け、
 はずかしめにかえて、その嗣業を得て楽しむ。
 それゆえ、あなたがたはその地にあつて、
 二倍の賜物を獲、
 とこしえの喜びを得る。

第六二章

ハ主なるわたしは公平を愛し、
 強奪と邪悪を憎み、
 真実をもつて彼らに報いを与え、
 彼らと、とこしえの契約を結ぶからである。
 九彼らの子孫は、もろもろの国の中で知られ、
 彼らの子らは、もろもろの民の中に知られる。
 すべてこれを見る者は
 これが主の祝福された民であることを認める。
 一〇わたしは主を大いに喜び、
 わが魂はわが神を楽しむ。
 主がわたしに救の衣を着せ、
 義の上衣をまとわせて、
 花婿が冠をいただき、
 花嫁が宝玉をもって飾るようにされたからである。
 二地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、
 主なる神は義と誉れを、
 もろもろの国の前に、生やされる。

一シオンの義が
 朝日の輝きのようにあらわれいで、

エルサレムの救^{すくい}が燃^もえたいまつの様^{よう}になるまで、
 わたしはシオンのために黙^{もく}せず、
 エルサレムのために休^{やす}まない。
 ニもろもろの国^{くに}はあなたの義^ぎを見^み、
 もろもろの王^{おう}は皆^{みな}あなたの栄^{さか}えを見る。
 そして、あなたは主^{しゅ}の口^{くち}が定め^{さだ}められる
 新^{あた}しい名^なをもつてとなえられる。
 また、あなたは主^{しゅ}の手^てにある麗^{うるわ}しい冠^{かんむり}となり、
 あなたの神^{かみ}の手^てにある王^{おう}の冠^{かんむり}となる。
 四^よあなたはもはや「捨^すてられた者^{もの}」と言^いわれず、
 あなたの地^ちはもはや「荒^あれた者^{もの}」と言^いわれず、
 あなたは「わが喜^{よろこ}びは彼女^{かのじよ}にある」ととなえられ、
 あなたの地^ちは「配偶^{はいぐう}ある者^{もの}」となえられる。
 主^{しゅ}はあなたを喜^{よろこ}ばれ、
 あなたの地^ちは配偶^{はいぐう}を得^えるからである。
 五^ご若い者^{もの}が処女^{しよじよ}をめとるように
 あなたの子^こらはあなたをめとり、
 花婿^{はなむこ}が花嫁^{はなよめ}を喜^{よろこ}ぶように
 あなたの神^{かみ}はあなたを喜^{よろこ}ばれる。
 エルサレムよ、
 わたしはあなたの城^{じやう}壁^{へき}の上^{うへ}に見^み張^{はり}人^{にん}をおいて、
 昼^{ひる}も夜^{よる}もたえず、もだすことのないようにしよう。

主^{しゅ}に思^{おも}ひ出^だされることを求^{もと}める者^{もの}よ、
 みずから休^{やす}んではならない。
 セ主^{しゅ}がエルサレムを堅^{かた}く立^たてて、
 全^{ぜん}地に誉^{ほまれ}を得^えさせられるまで、
 お休^{やす}みにならぬようにせよ。
 ハ主^{しゅ}はその右^{みぎ}の手^てをさし、
 大^{たい}能^{のう}のかい^かいなをさして誓^{ちか}われた、
 「わたしは再^{また}びあなたの穀^{こく}物^{もつ}を
 あなたの敵^{てき}に与^{あた}えて食^たべさせない。
 また、あなたが労^{ろう}して得^えたぶどう酒^{しゅ}を
 異^い邦^{ほう}人^{じん}に与^{あた}えて飲^のませない。
 九^くしかし、穀^{こく}物^{もつ}を刈^かり入^いれた者^{もの}は
 これを食^たべて主^{しゅ}をほめたたえ、
 ぶどうを集^{あつ}めた者^{もの}は
 わが聖^{せい}所^{じよ}の庭^{にわ}でこれ^のを飲^のむ」。
 ○門^{もん}を通^{とお}つて行^いけ、通^{とお}つて行^いけ。
 民^{たみ}の道^{みち}を備^{そな}えよ。
 土^{つち}を盛^もり、土^{つち}を盛^もつて大^{おお}路^じを設^{もう}けよ。
 石^{いし}を取りのけ。
 もろもろの民^{たみ}の上^{うへ}に旗^{はた}をあげよ。
 ニ見^みよ、主^{しゅ}は地^ちの果^{はて}にまで告^つげて言^いわれた、
 「シオンの娘^{むすめ}に言^いえ、

第六三章

『見よ、あなたの救は来る。
見よ、その報いは主と共にあり、
その働きの報いは、その前にある』と。
二三 彼らは『聖なる民、
主にあがなわれた者』となえられ、
あなたは『人に尋ね求められる者、
捨てられない町』となえられる。』

一 「このエドムから来る者、
深紅の衣を着て、ボズラから来る者はだれか。
その装いは、はなやかに、
大いなる力をもって進み来る者はだれか。
「義をもつて語り、
救を施す力あるわたしがそれだ」。
二 「何ゆえあなたの装いは赤く、
あなたの衣は酒ぶねを踏む者のように赤いのか」。
三 「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。
もろもろの民のなかに、
わたしと事を共にする者はなかった。
わたしは怒りによって彼らを踏み、

憤りによって彼らを踏みにじつたので、
彼らの血がわが衣にふりかかり、
わが装いをことごとく汚した。
四 報復の日がわが心のうちにあり、
わがあがないの年が来たからである。
五 わたしは見たけれども、助ける者はなく、
怪しんだけれども、ささえる者はなかった。
それゆえ、わがかいながわたしを勝たせ、
わが憤りがわたしをささえた。
六 わたしは怒りによって、もろもろの民を踏みにじり、
憤りによって彼らを酔わせ、
彼らの血を、地に流れさせた」。
七 わたしは主がわれわれになされた
すべてのことによって、
主のいつくしみと、主の誉とを語り告げ、
また、そのあわれみにより、
その多くのいつくしみによって、
イスラエルの家に施された
その大いなる恵みを語り告げよう。
八 主は言われた、「まことに彼らはわが民、
偽りのない子らである」と。
そして主は彼らの救主となられた。

九 彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使をもつて彼らを救い、その愛とあわれみとによつて彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた。

一〇 ところが彼らはそむいて

その聖なる霊を憂えさせたので、主はひるがえつて彼らの敵となり、

みずから彼らと戦われた。

一一 その時、民はいにしえのモーセの日を思い出して言つた、

「その群れの牧者を、

海から携えあげた者はどこにいるか。

彼らの中に聖なる霊をおいた者はどこにいるか。

一二 栄光のかいなるモーセの右に行かせ、

彼らの前に水を二つに分けて、

みずから、とこしえの名をつくり、

一三 彼らを導いて、馬が野を走るように、

つまずくことなく淵を通らせた者はどこにいるか。

一四 谷にくだる家畜のように、

主の霊は彼らをいこわせられた。

このように、あなたはおのれの民を導いて

みずから栄光の名をつくられた」。

一五 どうか、天から見おろし、

その聖なる栄光あるすみからごらんください。

あなたの熱心と、大能とはどこにありますか。

あなたのせつなる同情とあわれみとは

おさえられて、わたしにあらわれません。

一六 たといアブラハムがわれわれを知らず、

イスラエルがわれわれを認めなくても、

あなたはわれわれの父です。

主よ、あなたはわれわれの父、

いにしえからあなたの名は

われわれのあながい主です。

一七 主よ、なぜ、われわれをあなたの道から離れ迷わせ、

われわれの心をかたくなにして、

あなたを恐れないようにされるのですか。

どうぞ、あなたのしもべらのために、

あなたの嗣業である部族らのために、

お帰りください。

一八 あなたの聖なる民が、

あなたの聖所を獲て間もないのに、

われわれのあだは、それを踏みにじりました。

一九 われわれはあなたによつて、

いにしえから治められない者のようになり、
あなたの名をもつて、
となえられない者のようになりました。

第六十四章

一 どうか、あなたが天を裂いて下り、
あなたの前に山々が震い動くように。
二 火が柴木を燃やし、
火が水を沸かすときのごとく下られるように。
そして、み名をあなたのあだにあらわし、
もろもろの国をあなたの前に
震えおのかせられるように。
三 あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事を
なされた時に下られたので、山々は震い動いた。
四 いにしえからこのかた、
あなたのほか神を待ち望む者に、
このような事を行われた神を聞いたことはなく、
耳に入れたこともなく、目に見たこともない。
五 あなたは喜んで義を行い、
あなたの道にあつて、
あなたを記念する者を迎えられる。

見よ、あなたは怒られた、われわれは罪を犯した。
われわれは久しく罪のうちにあつた。
われわれは救われるであらうか。
六 われわれはみな汚れた人のようになり、
われわれの正しい行いは、
ことごとく汚れた衣のようである。
われわれはみな木の葉のように枯れ、
われわれの不義は風のようにわれわれを吹き去る。
七 あなたの名を呼ぶ者はなく、
みずから励んで、あなたによりすがる者はない。
あなたはみ顔を隠して、われわれを顧みられず、
われわれをおのれの不義の手に渡された。
八 されど主よ、あなたはわれわれの父です。
われわれは粘土であつて、あなたは陶器師です。
われわれはみな、み手のわざです。
九 主よ、ひどくお怒りにならぬように、
いつまでも不義をみこころにとめられぬように。
どうぞ、われわれを顧みてください。
われわれはみな、あなたの民です。
一〇 あなたの聖なる町々は荒野となり、
シオンは荒野となり、
エルサレムは荒れすたれた。

第六章

二 われわれの先祖があなたをほめたたえた
聖なる麗しいわれわれの宮は火で焼かれ、
われわれが慕った所はことごとく荒れはてた。
二三 主よ、これらの事があつても
なお、あなたはみずからをおさえ、
黙して、われわれをいたく苦しめられるのですか。

一 わたしはわたしを求めなかつた者に
問われることを喜び、
わたしを尋ねなかつた者に
見いだされることを喜んだ。
わたしはわが名を呼ばなかつた国民に言った、
「わたしはここにいて、わたしはここにいて」と。

二 よからぬ道に歩み、
自分の思いに従うそむける民に、
わたしはひねもす手を伸べて招いた。
三 この民はまのあたり常にわたしを怒らせ、
園の中で犠牲をささげ、
かわらの上で香をたき、
四 墓場にすわり、ひそかな所にやどり、

豚の肉を食らい、
憎むべき物の、あつものをその器に盛つて、
五 言う、「あなたはそこに立つて、
わたしに近づいてはならない。
わたしはあなたと区別されたものだから」と。
これらはわが鼻の煙、ひねもす燃える火である。
六 見よ、この事はわが前にするされた、
「わたしは黙っていないで報い返す。
そうだ、わたしは彼らのふところに、
七 彼らの不義と、彼らの先祖たちの不義とを
共に報い返す。
彼らが山の上で香をたき、
丘の上でわたしをそしつたゆえ、
わたしは彼らのさきのわざを量つて、
そのふところに返す」と主は言われる。
八 主はこう言われる、
「人がぶどうのふさの中に、
ぶどうのしるのあるのを見るならば、
『それを破るな、その中に祝福があるから』と言う。
そのようにわたしは、わがしもべらのために行つて、
ことごとくは滅ぼさない。
九 わたしはヤコブから子孫をいだし、

ユダからわが山々を受けつぐべき者をいだす。
わたしが選んだ者はこれを受けつぎ、
わがしもべらはそこに住む。

一〇シャロンは羊の群れの牧場となり、
アコルの谷は牛の群れの伏す所となつて、
わたしを尋ね求めたわが民のものとなる。

一一しかし主を捨て、
わが聖なる山を忘れ、
机を禍福の神に供え、

混ぜ合わせた酒を盛つて
運命の神にささげるあなたがたよ、

一二わたしは、あなたがたを
つるぎに渡すことに定めた。

あなたがたは皆かがんでほふられる。
あなたがたはわたしが呼んだときに答えず、
わたしが語ったときに聞かず、

わたしの目に悪い事をおこない、
わたしの好まなかつた事を選んだからだ」。

一三それゆえ、主なる神はこう言われる、
「見よ、わがしもべたちは食べる、

しかし、あなたがたは飢える。
見よ、わがしもべたちは飲む、

しかし、あなたがたはかわく。
見よ、わがしもべたちは喜ぶ、
しかし、あなたがたは恥じる。

一四見よ、わがしもべたちは心の楽しみによつて歌う、
しかし、あなたがたは心の苦しみによつて叫び、
たましいの悩みによつて泣き叫ぶ。

一五あなたがたの残す名は
わが選んだ者には、のろいの文句となり、
主なる神はあなたがたを殺される。

しかし、おのれのしもべたちを、
ほかの名をもつて呼ばれる。

一六それゆえ、地にあつて
おのれのために祝福を求める者は、

真実の神によつておのれの祝福を求め、
地にあつて誓う者は、真実の神をさして誓う。
さきの悩みは忘れられて、とわが目から隠れうせるからで
ある。

一七見よ、わたしは新しい天と、新しい地とを創造する。
さきの事はおぼえられることなく、
心に思い起すことはない。

一八しかし、あなたがたはわたしの創造するものにより、
とこしえに楽しみ、喜びを得よ。

見よ、わたしはエルサレムを造つて喜びとし、その民を楽しみとする。

一九 わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない。

二〇 わずか数日で死ぬみどりごと、

おのが命の日を満たさない老人とは、

もはやその中にいない。

百歳で死ぬ者も、なお若い者とせられ、

百歳で死ぬ者は、のろわれた罪びととされる。

二 彼らは家を建てて、それに住み、

ぶどう畑を作つて、その実を食べる。

三 彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、

彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。

わが民の命は、木の命のようになり、

わが選んだ者は、

その手のわざをながく楽しむからである。

三 彼らの勤労はむだでなく、

その生むところの子らは災にかからない。

彼らは主に祝福された者のすえであつて、

その子らも彼らと共にいるからである。

二四 彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、

彼らがなお語つているときに、わたしは聞く。

二五 おおかみと小羊とは共に食らい、ししは牛のようにわらを食らい、

へびはちりを食物とする。

彼らはわが聖なる山のどこでもそこなうことなく、

やぶることはない」と主は言われる。

第六十六章

一 主はこう言われる、

「天はわが位、地はわが足台である。

あなたがたはわたしのためにどんな家を建てようとするのか。

またどんな所がわが休み所となるのか」。

二 主は言われる、

「わが手はすべてこれらの物を造つた。

これらの物はことごとくわたしのものである。

しかし、わたしが顧みる人はこれである。

すなわち、へりくだつて心悔い、

わが言葉に恐れおののく者である。

三 牛をほふる者は、また人を殺す者、

小羊を犠牲とする者は、また犬をくびり殺す者、

供え物をささげる者は、また豚の血をささげる者、

乳香を記念としてささげる者は、

また偶像をほめる者である。

これはおのが道を選び、

その心は憎むべきものを楽しむ。

四わたしもまた彼らのために悩みを選び、

彼らの恐れるところのものを彼らに臨ませる。

これは、わたしが呼んだときに答える者なく、

わたしが語ったときに聞くことをせず、

わたしの目に悪い事を行い、

わたしの好まなかった事を選んだからである」。

五あなたがた、主の言葉に恐れおののく者よ、

主の言葉を聞け、

「あなたがたの兄弟たちはあなたがたを憎み、

あなたがたをわが名のために追い出して言った、

『願わくは主がその栄光をあらわして

われわれにあなたがたの喜びを見させよ』と。

しかし彼らは恥を受ける。

六聞けよ、町から起る騒ぎを。

宮から聞える声を。

主がその敵に報復される声を。

七シオンは産みの苦しみをなす前に産み、

その苦しみの来ない前に男子を産んだ。

八だがこのような事を聞いたか、

だがこのような事どもを見たか。

一つの国は一日の苦しんで生れるだろうか。

一つの国民はひと時に生れるだろうか。

しかし、シオンは産みの苦しみをするやいなや

その子らを産んだ。

九わたしが出産に臨ませて

産ませないことがあるうか」と

主は言われる。

「わたしは産ませる者なのに

胎をとぎすであろうか」と

あなたの神は言われる。

一〇「すべてエルサレムを愛する者よ、

彼女と共に喜べ、彼女のゆえに楽しめ。

すべて彼女のために悲しむ者よ、

彼女と共に喜び楽しめ。

二あなたがたは慰めを与えるエルサレムの乳ぶさから

乳を吸って飽くことができ、

またその豊かな栄えから

飲んで楽しむことができるからだ」。

二三主はこう言われる、

「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、

みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。

あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、

ひざの上であやされる。

二三母のその子を慰めるように、

わたしもあなたがたを慰める。

あなたがたはエルサレムで慰めを得る。

一四あなたがたは見て、心喜び、

あなたがたの骨は若草のように栄える。

主の手はそのしもべらと共にあり、

その憤りはその敵にむかっていることを知る。

一五見よ、主は火の中にあらわれて来られる。

その車はつむじ風のような。

激しい怒りをもってその憤りをもらし、

火の炎をもって責められる。

一六主は火をもって、またつるぎをもって、

すべての人にさばきを行われる。

主に殺される者は多い。

一七「みずからを聖別し、みずからを清めて園に行き、その中に

あるものに従い、豚の肉、憎むべき物およびねずみを食う者はみ

な共に絶えうせる」と主は言われる。

一八「わたしは彼らのわざと、彼らの思いとを知っている。わたしは来て、すべての国民と、もろもろのやからとを集める。彼ら

は来て、わが栄光を見る。一九わたしは彼らの中に一つのしるし

を立てて、のがれた者をもろもろの国、すなわちタルシシ、よく

弓をひくプトおよびルデ、トバル、ヤワン、またわが名声を聞か

ず、わが栄光を見ない遠くの海沿いの国々につかわす。彼らは

わが栄光をもろもろの国民の中に伝える。二〇彼らはイスラエ

ルの子らが清い器に供え物を盛って主の宮に携えて来るよう

に、あなたがたの兄弟をことごとくもろもろの国の中から馬

車、かご、騾馬、らくだに乘せて、わが聖なる山エルサレムに

こさせ、主の供え物とする」と主は言われる。二一「わたしはま

た彼らの中から人を選んで祭司とし、レビびととする」と主は言

われる。

二三「わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地が

わたしの前にながくとどまるように、

あなたの子孫と、あなたの名は

ながくとどまる」と主は言われる。

二四「新月ごとに、安息日ごとに、

すべての人はわが前に来て礼拝する」と

主は言われる。

二五「彼らは出て、わたしにそむいた人々のしかばねを見る。そ

のうじは死なず、その火は消えることがない。彼らはすべての

人に忌みきらわれる」。

エレミヤ書

第一章

一 ベニヤミンの地アナトテの祭司のひとりである、ヒルキヤの子エレミヤの言葉。ニアモンの子、ユダの王ヨシヤの時、すなわちその治世の十三年に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。三その言葉はまたヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの時にも臨んで、ヨシヤの子、ユダの王ゼデキヤの十一年の終り、すなわちその年の五月にエルサレムの民が捕え移された時にまで及んだ。

四 主の言葉がわたしに臨んで言う、
五 「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、

あなたを知り、

あなたがまだ生れないさきに、

あなたを聖別し、

あなたを立てて万国の預言者とした」。

六 その時わたしは言った、「ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいか知りません」。しかし主はわたしに言われた、

「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。

だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、

あなたに命じることをみな語らなければならない。

八 彼らを恐れてはならない、

わたしがあなたと共にいて、

あなたを救うからである」と主は仰せられる。

九 そして主はみ手を伸べて、わたしの口につけ、主はわたしに言われた、

「見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた。

一〇 見よ、わたしはきよう、

あなたを万民の上と、万国の上に立て、

あなたに、あるいは抜き、あるいはこわし、

あるいは滅ぼし、あるいは倒し、

あるいは建て、あるいは植えさせる」。

二 主の言葉がまたわたしに臨んで言う、「エレミヤよ、あなたは何を見るか」。わたしは答えた、「あめんどうの枝を見ます」。三 主はわたしに言われた、「あなたの見たとおりだ。わたしは自分の言葉を行おうとして見張っているのだ」。

三 主の言葉がふたたびわたしに臨んで言う、「あなたは何を見るか」。わたしは答えた、「煮え立っているなべを見ます。北からこちらに向かっています」。四 主はわたしに言われた、「災が北から起って、この地に住むすべての者の上に臨む」。五 主は言われる、「見よ、わたしは北の国々のすべての民を呼ぶ。彼らは来て、エルサレムの門の入口と、周囲のすべての城壁、およびユダのすべての町々に向かつて、おのおのその座を設ける。一

第二章

六 わたしは、彼らがわたしを捨てて、すべての悪事を行ったゆえに、わたしのさばきを彼らに告げる。彼らは他の神々に香をたき、自分の手で作った物を拝したのである。一七 しかしあなたは腰に帯して立ち、わたしが命じるすべての事を彼らに告げよ。彼らを恐れてはならない。さもないと、わたしは彼らの前であなをあわてさせる。一八 見よ、わたしはきよ、この全国と、ユダの王と、そのつかさと、その祭司と、その地の民の前に、あなたを堅き城、鉄の柱、青銅の城壁とする。一九 彼らはあなたと戦うが、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」と主は言われる。

一 主の言葉がわたしに臨んで言う、「行つて、エルサレムに住む者の耳に告げよ、主はこう言われる、

わたしはあなたの若い時の純情、

花嫁の時の愛、

荒野なる、種まかぬ地で

わたしに従ったことを覚えている。

ミイサエルは主のために聖別されたもの、その刈入れの初穂である。

すべてこれを食べる者は罪せられ、

災にあう」と主は言われる。

四 ヤコブの家とイスラエルの家のすべてののやからよ、主の言葉を聞け。五 主はこう言われる、

「あなたがたの先祖は、

わたしになんの悪い事があるのを見て、

わたしから遠ざかり、

むなしきものに従つて、むなしくなったのか。

六 彼らは言わなかった、

『われわれをエジプトの地より導き出し、

荒野なる、穴の多い荒れた地、

かわいた濃い暗黒の地、

人の通らない、人の住まない地を

通らせた主はどこにおられるか』と。

七 わたしはあなたがたを導いて豊かな地に入れ、

その実と良い物を食べさせた。

しかしあなたがたはここにはいつて、

わたしの地を汚し、

わたしの嗣業を憎むべきものとした。

八 祭司たちは、

『主はどこにおられるか』と言わなかった。

律法を扱う者たちはわたしを知らず、

つかさたちはわたしにそむき、

預言者たちはバアルによって預言し、益なき者に従って行った。

九 それゆえ、わたしはなお、あなたがたと争う、またあなたがたの子孫と争う」と主は言われる。

一〇 「あなたがたはクプロの島々に渡ってみよ、また人をケダルにつかわして、

このようなことがかつてあったかを

つまびらかに、しらべてみよ。

二 その神を神ではない者に取り替えた国があろうか。

ところが、わたしの民はその栄光を

益なきものと取り替えた。

三 天よ、この事を知って驚け、

おののけ、いたく恐れよ」と主は言われる。

三 「それは、わたしの民が

二つの悪しき事を行ったからである。

すなわち生ける水の源であるわたしを捨てて、

自分で水ためを掘った。

それは、こわれた水ためで、

水を入れておくことのできないものだ。

一四 イスラエルは奴隷であるか、

家に生れたしもべであるか。

それならなぜ捕われの身となったのか。

一五 ししは彼に向かつてほえ、

その声を高くあげて、彼の地を荒した。

その町々は滅びて住む人もない。

一六 メンピスとタパネスの人々もまた、

あなたのかしらの冠を砕いた。

一七 あなたの神、主があなたを道に導かれた時、

あなたは主を捨てたので、

この事があなたに及んだのではないか。

一八 あなたがナイルの水を飲もうとして、

エジプトへ行くのは何のためか。

またユフラテの水を飲もうとして、

アッスリヤへ行くのは何のためか。

一九 あなたの悪事はあなたを懲しめ、

あなたの背信はあなたを責める。

あなたが、あなたの神、主を捨てることの

悪しくかつ苦いことであるのを見て知るがよい。

わたしを恐れることがあなたのうちにないのだ」と

万軍の神、主は言われる。

二〇 「あなたは久しい以前に自分のくびきを折り、

自分のなわめを断ち切つて、

『わたしは仕えることをしない』と言った。

そして、すべての高い丘の上と、

すべての青木の下で、
遊女のように身をかがめた。

二 わたしはあなたを、まったく良い種の
すぐれたぶどうの木として植えたのに、

どうしてあなたは変って、
悪い野ぶどうの木となったのか。

三 たといソーダをもって自ら洗い、

また多くの灰汁を用いても、

あなたの悪の汚れは、なおわたしの前にある」と
主なる神は言われる。

三三 「どうしてあなたは、『わたしは汚れていない、
バアルに従わなかった』と言うことができようか。
谷の中であなたの行いを見るがよい。

あなたのしたことを知るがよい。

あなたは御しがたい若らくだであつて、

その道を行きつもどりつする。

二四 あなたは荒野に慣れた野の雌ろばである、

その欲情のために風にあえぐ。

その欲情をだれがとどめることができようか。

すべてこれを探ねる者は苦勞するにおよばない、

その月であればこれに会うことができる。

二五 あなたの足が、はだしにならないように、

のどが、かわかないようにせよ。

ところが、あなたは言った、『それはだめだ、

わたしは異なる国の者を愛して、

それに従って行こう』と。

二六 盗びとが捕えられて、はずかしめを受けるように、
イスラエルの家は、はずかしめを受ける。

彼らはその王も、そのつかさも、

その祭司も、その預言者もみなそのとおりである。

二七 彼らは木に向かつて、

『あなたはわたしの父です』と言い、

また石に向かつて、

『あなたはわたしを生んでくださった』と言う。

彼らは背をわたしに向けて、

その顔をわたしに向けてない。

しかし彼らが災にあう時は、

『立つて、われわれを救いたまえ』と言う。

二八 あなたが自分のために造った神々は

どこにいるのか。

あなたが災にあう時、

もし彼らがあなたを救えるなら、

立つてもらうがよい。

ユダよ、あなたの神々は、

あなたの町の数ほど多いからである。

二九あなたがたは、なぜわたしと争うのか。

あなたがたは皆わたしにそむいている」と主は言われる。

三〇「わたしがあなたがたの子どもたちを打ったのはむだであつた。

彼らは戒めを受けず、

あなたがたのつるぎは、

たけりたつししのうちに、預言者たちを滅ぼした。

三一あなたがたこの世代の人よ、主の言葉を聞け。

わたしはイスラエルにとつて、

荒野であつたであらうか。

暗黒の地であつたであらうか。

それならなぜ、わたしの民は『われわれは自由だ、

もはやあなたのところへは行かない』と言うのか。

三二おとめはその飾り物を忘れることができようか。

花嫁はその帯を忘れることができようか。

ところが、わたしの民の、

わたしを忘れた日は数えがたい。

三三あなたは恋人を尋ねて、

いかにも巧みにその方に足を向ける。

それゆえ悪い女さえ、あなたの道を学んだ。

三四また、あなたの着物のすそには

罪のない貧しい人の命の血がついていて。

あなたは彼らが押し入るのを見たのではない。

しかも、すべてこれらの事にもかかわらず、

三五あなたは言う、『わたしは罪がない。彼の怒りは、

決してわたしに臨むことがない』と。

あなたが『わたしは罪を犯さなかつた』と

言うことによつて、わたしはあなたをさばく。

三六あなたはなぜ軽々しくさまよつて、

その道を変えようとするのか。

あなたはアツスリヤに、はずかしめを受けたように、

エジプトにもまた、はずかしめを受ける。

三七あなたはまた両手を頭に置いて、そこから出て来る。

主があなたの頼みとする者どもを捨てられたので、

あなたは彼らによつて栄えることがないからだ。

第三章

一もし人がその妻を離婚し、

女が彼のもとを去つて、他人の妻となるなら、

その人はふたたび彼女に帰るであらうか。

その地は大いに汚れないであらうか。
あなたは多くの恋人と姦淫を行った。

しかもわたしに帰ろうというのか」と主は言われる。

二「目をあげてもろもろの裸の山を見よ、
姦淫を行わなかった所がどこにあるか。

荒野にいるアラビヤびとがするように、

あなたは道のかたわらに座して恋人を待った。

あなたは姦淫の悪事をもって、この地を汚した。

三それゆえ雨はとどめられ、春の雨は降らなかつた。

しかもあなたには遊女の額があり、

少しも恥じようとはしない。

四今あなたは、わたしを呼んで言ったではないか、

『わが父よ、あなたはわたしの若い時の友です。』

五永久に怒られるのですか、

終りまで憤られるのですか」と。

見よ、あなたはこう言ったけれども、

なしうるかぎりのもろもろの悪を行った」。

六ヨシヤ王の時、主はまたわたしに言われた、「あなたは、かの背信のイスラエルがしたことを見たか。彼女はすべての高い丘にのぼり、すべての青木の下に行つて、そこで姦淫を行った。セわたしは、彼女がこのすべてを行った後、わたしの所に帰るであらうと思つたが、帰つてこなかつた。その不信の姉妹ユダは

これを見た。ハわたしは背信のイスラエルを、そのすべての姦淫のゆえに、離縁状を与えて出したのをユダは見た。しかもその不信の姉妹ユダは恐れず、自分も行つて姦淫を行った。九彼女にとつて姦淫は軽いことであつたので、石と木とに姦淫を行つて、この地を汚した。一〇このすべての事があつても、なおその不信の姉妹ユダは真心をもつてわたしに帰らない、ただ偽つて

いるだけだ」と主は言われる。

二主はまたわたしに言われた、「背信のイスラエルは不信のユダよりも自分の罪の少ないことを示した。三あなたは行つて

北にむかい、この言葉をのべて言うがよい、

『主は言われる、背信のイスラエルよ、帰れ。

わたしは怒りの顔をあなたがたに向けない、

わたしはいつくしみ深い者である。

いつまでも怒ることはいないと、主は言われる。

三ただあなたは自分の罪を認め、

あなたの神、主にそむいて

すべての青木の下で異なる神々に

あなたの愛を惜しまず与えたこと、

わたしの声に聞き従わなかつたことを

言いあらわせと、主は言われる。

四主は言われる、背信の子らよ、帰れ。

わたしはあなたがたの夫だからである。

町からひとり、氏族からふたりを取つて、

あなたがたをシオンへ連れて行こう。

二五 わたしは自分の心になう牧者たちをあなたがたに与える。彼らは知識と悟りをもつてあなたがたを養う。二六 主は言われる、あなたがたが地に増して多くなるとき、その日には、人々はかさねて「主の契約の箱」と言わず、これを思い出さず、これを覚えす、これを探ねず、これを作らない。二七 そのときエルサレムは主のみ位となえられ、万国の民はここに集まる。すなわち主の名のもとにエルサレムに集まり、かさねて、かたくなに自分の悪い心に従うことはしない。二八 その日には、ユダの家はイスラエルの家と一緒に、北の地から出て、わたしがあなたがたの先祖たちに嗣業として与えた地に共に来る。

一九 どのようにして、

あなたがたをわたしの子どもたちのうちに置き、万国のうちで最も美しい嗣業である良い地をあなたがたに与えようかと、わたしは思っていた。わたしはまた、あなたがわたしを「わが父」と呼び、わたしに従って離れることはないと思っていた。

二〇 イスラエルの家よ、

背信の妻が夫のもとを去るように、

たしかに、あなたがたはわたしにそむいた」と主は言われる」。

三 裸の山の上に声が聞える、

イスラエルの民が悲しみ祈るのである。

彼らが曲った道に歩み、その神、主を忘れたからだ。

三三 「背信の子どもたちよ、帰れ。

わたしはあなたがたの背信をいやす」。

「見よ、われわれはあなたのもとに帰ります。

あなたはわれわれの神、主であらせられます。

三三 まことに、もろもろの丘は迷いであり、

山の上の騒ぎも同じです。

まことに、イスラエルの救は

われわれの神、主にあるのです。

二四 しかし、われわれの幼少の時から、恥ずべきことが、われわれの先祖のほねおつて得たもの、すなわちその羊、その牛、およびそのむすこ、娘たちをことごとくのみ尽しました。二五 われわれは恥の中に伏し、はずかしめにおおわれています。それはわれわれと先祖とが、われわれの幼少の時から今日まで、われわれの神、主に罪を犯し、われわれの神、主の声に従わなかったからです」。

第四章

一 主は言われる、「イスラエルよ、

もし、あなたが帰るならば、

わたしのもとに帰らなければならない。

もし、あなたが憎むべき者を

わたしの前から取り除いて、ためらうことなく、

ニまた真実と正義と正直とをもって、

『主は生きておられる』と誓うならば、

万国の民は彼によって祝福を受け、

彼によって誇る」。

三主はユダの人々とエルサレムに住む人々に

こう言われる、

「あなたがたの新田を耕せ、

いばらの中に種をまくな。

四ユダの人々とエルサレムに住む人々よ、

あなたがたは自ら割礼を行って、

主に属するものとなり、

自分の心の前の皮を取り去れ。

さもないと、あなたがたの悪しき行いのために

わたしの怒りが火のように発して燃え、

これを消す者はない」。

五ユダに告げ、エルサレムに示して言え、

『国中にラツパを吹き、大声に呼ばわって言え、
『集まれ、われわれは堅固な町々へ行く』と。』

六シオンの方を示す旗を立てよ。

避難せよ、とどまつてはならない、

わたしが北から災と

大いなる破壊をこさせるからだ。

七しはその森から出てのぼり、

国々を滅ぼす者は進んできた。

彼はあなたの国を荒そうとして、

すでにその所から出てきた。

あなたの町々は滅ぼされて、

住む者もなくなる。

八このために、あなたがたは荒布を身にまとい、

悲しみ嘆け。

主の激しい怒りが、

まだわれわれを離れないからだ」。

九主は言われる、「その日、王と君たちとはその心を失い、祭司

は驚き、預言者は怪しむ」。一〇そこでわたしは言った、「ああ主

なる神よ、まことにあなたはこの民とエルサレムとをまつたく

欺かれました。『あなたがたは安らかに』と言われました

が、つるぎが命にまでも及びました」。

二その時この民とエルサレムとはこう告げられる、「熱い風が

荒野の裸の山からわたしの民の娘のほうに吹いてくる。これは

あおぎ分けるためではなく、清めるためでもない。三これより

もなお激しい風がわたしのために吹く。いまわたしは彼らにさばきを告げる」。

二三見よ、彼は雲のように上ってくる。

その戦車はつむじ風のように、

その馬はわしの飛ぶよりも速い。

ああ、われわれはわざわいだ、

われわれは滅ぼされる。

二四エルサレムよ、あなたの心の悪を洗い清めよ、

そうするならば救われる。

悪しき思いはいつまで

あなたのうちにとどまるのか。

二五ダンから告げる声がある、

エフライムの山から災を知らせている。

二六国々の民に彼の来ることを告げ、

またエルサレムに知らせよ。

「攻めかこむ者が遠くの国から来て、

ユダの町々にむかつてその声をあげる。

二七彼らは畑を守る者のようにこれを攻めかこむ。

それはわたしにそむいたからだ、主は言われる。

二八あなたの道とその行いとが、

あなたの身にこれを招いたのだ。

これはあなたの悪の結果で、まことに苦く、

あなたの心をつらぬく」。

一九ああ、わがはらわたよ、わがはらわたよ、

わたしは苦しみにもだえる。

ああ、わが心臓の壁よ、

わたしの心臓は、はげしく鼓動する。

わたしは沈黙を守ることができない、

ラツパの声と、戦いの叫びを聞くからである。

二〇破壊に次ぐに破壊があり、

全地は荒され、

わたしの天幕はにわかに破られ、

わたしの幕はたちまち破られた。

二一いつまでわたしは旗を見、

またラツパの声を聞かなければならないのか。

二三「わたしの民は愚かであつて、わたしを知らない。

彼らは愚鈍な子どもで、悟ることがない。

彼らは悪を行うのにさといけれども、

善を行うことを知らない」。

二四わたしは地を見たが、

それは形がなく、またむなしかった。

天をあおいだが、そこには光がなかった。

二五わたしは山を見たが、みな震え、

もろもろの丘は動いていた。

二五 わたしは見たが、人はひとりもおらず、
空の鳥はみな飛び去っていた。

二六 わたしは見たが、豊かな地は荒れ地となり、
そのすべての町は、主の前に、

その激しい怒りの前に、破壊されていた。

二七 それは主がこう言われたからだ、「全地は荒れ地となる。
しかしわたしはことごとくはこれを滅ぼさない。

二八 このために地は悲しみ、上なる天は暗くなる。

わたしですでにこれを言い、これを定めたからだ。

わたしは悔いない、またそれをする事をやめない」。

二九 どの町の人も、騎兵と射手の叫びのために

逃げて森に入り、岩に上る。

町はみな捨てられ、そこに住む人はない。

三〇 ああ、荒された女よ、あなたが紅の着物をき、

金の飾りで身をよそおい、

目を塗って大きくするのは、なんのためか。

あなたが美しくしても、むだである。

あなたの恋人らはあなたを卑しめ、

あなたの命を求めている。

三 わたしは子を産む女のような声、

ういごを産む女の苦しむような声を聞いた。

シオンの娘のあえぐ叫びである。

第五章

両手を伸べて彼女は言う、「わたしはわざわいだ、
わたしを殺す者らの前にわたしは気が遠くなる」と。

「エルサレムのちまたを行きめぐり、
見て、知るがよい。

その広場を尋ねて、公平を行い、

真実を求める者が、ひとりでもあるか捜してみよ。

あれば、わたしはエルサレムをゆるす。

二 彼らは、「主は生きておられる」と言うけれども、

実は、偽って誓うのだ。

三 主よ、あなたの目は、

真実を顧みられるではありませんか。

あなたが彼らを打たれても、痛みを覚え、

彼らを滅ぼされても、懲しめを受けることを拒み、

その顔を岩よりも堅くして、

悔い改めることを拒みました。

四 それで、わたしは言った、

「これらはただ貧しい愚かな人々で、

主の道と、神のおきてを知りません。

五 わたしは偉い人たちの所へ行つて、彼らに語ります。

かれ 彼らは主の道を知り、神のおきてを知っています。ところが、彼らも皆おなじように、くびきを折り、なわめを断っていた。

六 それゆえ林から、ししが出てきて彼らを殺し、荒野から、おおかみが出てきて彼らを滅ぼす。

ひようは彼らの町々をねらっている。

そこから出る者はみな裂かれる。

彼らの罪が多く、

その背信がはなはだしいからである。

七 「わたしはどうしてあなたを、

ゆるすことができるか。

あなたの子どもらは、わたしを捨てさり、

神でもないものをさして誓った。

わたしが彼らを満ち足らせた時、

彼らは姦淫を行い、遊女の家に群れ集まった。

八 彼らは肥え太った丈夫な雄馬のように、

おのおの、いなないて隣の妻を慕う。

九 わたしはこれらの事のために

彼らを罰しないでいられようか。

このような国民にあだを返さないであろうか」と主は言われる。

一〇 「あなたがたはユダのぶどうの並み木の間を、

のぼって行つて、滅ぼせ、

ただ、ことごとく滅ぼしてはならない。

その枝を切り除け、

主のものではないからである。

二 イスラエルの家とユダの家とは

わたしにまったく不信であつた」と主は言われる。

三 「彼らは主について偽り語つて言つた、

『主は何事もなされない、

災はわれわれに來ない、

またつるぎや、ききんを見ることはない。

四 預言者らは風となり、彼らのうちに言葉はない。

かれ 彼らはこのようになる』と」。

五 それゆえ万軍の神、主はこう言われる、

「彼らがこの言葉を語つたので、

見よ、わたしはあなたの口にある

わたしの言葉を火とし、この民をたきぎとする。

火は彼らを焼き尽す」。

六 主は言われる、「イスラエルの家よ、

見よ、わたしは遠い国の民を

あなたがたのところに攻めこさせる。

その国は長く続く国、古い国で、

あなたがたはその国の言葉を知らず、

人々の語るのを悟ることもできない。

一六 その籐は開いた墓のようであり、
彼らはみな勇士である。

一七 彼らはあなたが刈り入れた物と、

あなたの糧食とを食い尽し、

あなたのむすこ娘を食い尽し、

あなたの羊と牛を食い尽し、

あなたのぶどうの木といちじくの木を食い尽し、

またつるぎをもって、あなたが頼みとする

堅固な町々を滅ぼす」。

一八 主は言われる、「しかしその時でも、わたしはことごとくはあなたを滅ぼさない。一九 あなたの民が、『どうしてわれわれの神、主はこれらのすべての事をわれわれになされたのか』と言うならば、あなたは彼らに答えなければならない、『あなたがたがわたしを捨てて、自分の地で異なる神々に仕えたように、あなたがたは自分のものでない地で異邦の人に仕えるようになる』と」。

二〇 これをヤコブの家にのべ、

またユダに示して言え、

二一 「愚かで、悟りもなく、

目があつても見えず、

耳があつても聞えない民よ、これを聞け。

二三 主は言われる、あなたがたはわたしを恐れないのか、

わたしの前におののかないのか。

わたしは砂を置いて海の境とし、
これを永遠の限界として、

越えることができないようにした。

波はさかまいても、勝つことはできない、

鳴りわたつても、これを越えることはできない。

二三 ところが、この民には強情な、そむく心があり、

彼らはわき道にそれて、去つてしまった。

二四 彼らは『われわれに雨を与え、

秋の雨と春の雨を時にしたがって降らせ、

われわれのために刈入れの時を定められた

われわれの神、主を恐れよう』と

その心のうちに言わないのだ。

二五 あなたがたのとがは、これらの事をしりぞけ、

あなたがたの罪は、

良い物があなたがたに来るのをさまたげた。

二六 わが民のうちには悪い者があつて、

鳥をとる人のように身をかがめてうかがい、

わなを置いて人を捕える。

二七 かごに鳥が満ちているように、

彼らの家は不義の宝で満ちている。

それゆえ、彼らは大いなる者、裕福な者となり、

第六章

二八 肥えて、つやがあり、
その悪しき行いには際限がない。
彼らは公正に、みなしこの訴えをさばいて、
それを助けようとはせず、
また貧しい人の訴えをさばかない。
二九 主は言われる、わたしはこのような事のために、
彼らを罰しないであろうか。
わたしはこのような民に、
あだを返さないであろうか。
三〇 驚くべきこと、恐るべきことがこの地に起っている。
三一 預言者は偽って預言し、
祭司は自分の手によって治め、
わが民はこのようにすることを愛している。
しかしあなたがたは
その終りにはどうするつもりか。

一 ベニヤミンの人々よ、
エルサレムの中から避難せよ。
テコアでラツパを吹き、
ベテハケレムに合図の火をあげよ。

北から災が臨み、大いなる滅びが来るからである。
二 わたしは美しい、たおやかなシオンの娘を滅ぼす。
三 牧者たちは、その群れをひきいて来て、
彼女を攻め、彼女の周囲に天幕を張る。
群れはおのおのその所で草を食う。
四 「戦いを始め、彼女を攻めよ。
立て、われわれは真昼に攻撃しよう」。
「わざわざいなるかな、日はや傾き、
夕日の影は長くなった」。
五 「立て、われわれは夜の間に攻撃しよう、
そして彼女のもろもろの宮殿を破壊しよう」。
六 万軍の主はこう言われる、
「あなたがたは彼女の木を切り倒し、
エルサレムにむかつて壘を築け。
これは罰すべき町である、そのうちにはただ圧制だけがある」。
七 井戸に新しい水がわくように
彼女はその悪を常にあらたに流す。
そのうちには暴虐と破壊とが聞える。
わたしの前に病と傷とが絶えない。
八 エルサレムよ、戒めを受けいれよ。
さもないと、わたしはあなたから離れ、

あなたを荒れ地とし、住む人のない地とする」。

九 万軍の主はこう言われる、

「ぶどうの残りを摘みとるように、

イスラエルの残りの民をのこらず摘み取れ。

ぶどうを摘みとる人のように、

あなたの手をふたたびその枝に伸ばせ」。

○わたしはだれに語り、だれを戒めて、聞かせようか。

見よ、彼らの耳は閉ざされて、聞くことができない。

見よ、彼らは主の言葉をあざけり、それを喜ばない。

二 それゆえ、わたしの身には主の怒りが満ち、

それを忍ぶのに、うみつかれている。

「それをちまたにいる子供らと、

集まっている若い人々とに漏らせ。

夫も妻も、老いた人も、

年のひじように進んだ人も捕えられ、

二 彼らの家と畑と妻とは共に他人に渡る。

わたしが手を伸ばして、

この地に住む者を撃つからである」と主は言われる。

三 「それは彼らが、小さい者から大きい者まで、

みな不正な利をむさぼり、

また預言者から祭司にいたるまで、

みな偽りを行っているからだ。

四 彼らは、手輕にわたしの民の傷をいやし、

平安がないのに『平安 平安』と言っている。

五 彼らは憎むべきことをして、恥じたであらうか。

すこしも恥ずかしいとは思わず、

また恥じることを知らなかった。

それゆえ彼らは倒れる者と共に倒れる。

わたしが彼らを罰するとき、

彼らは倒れる」と主は言われる。

六 主はこう言われる、

「あなたがたはわかれ道に立つて、よく見、

いにしえの道につき、

良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、

そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ。

しかし彼らは答えて、

『われわれはその道に歩まない』と言った。

七 わたしはあなたがたの上に見張りとを立て、

『ラッパの音に気をつけよ』と言った。

しかし彼らは答えて、

『われわれは気をつけることはしない』と言った。

八 それゆえ国々の民よ、聞け。

会衆よ、彼らにどのようなことが起るかを知れ。

九 地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災をくだす。

それは彼らのたくらみの実である。
彼らがわたしの言葉に気をつけず、

わたしのおきてを捨てたからである。

二〇シバから、わたしの所に乳香が来、

遠い国から、菖蒲が来るのはなんのためか。

あなたがたの燔祭はわたしには喜ばしくなく、

あなたがたの犠牲もうれしくはない。

二三それゆえ主はこう言われる、

『見よ、わたしはこの民の前につますく石を置く、

人々は父も子も共にそれにつまずき、

隣り人もその友も滅びる』。

二三主はこう言われる、

「見よ、民が北の国から来る、

大いなる国民が地の果から興る。

二三彼らは弓とやりをとる。

彼らは残忍で、あわれみがなく、

海のような響きを立てる。

シオンの娘よ、彼らは馬に乗り、

いくさ人のように身をよろつて、

あなたを攻める」。

二四われわれはそのうわさを聞いて、

手は弱り、子を産む女に臨むような

悩みと苦しみに捕えられた。

二五畑に出てはならない、

また道を歩いてはならない。

敵はつるぎを持ち、恐れが四方にあるからだ。

二六わが民の娘よ、荒布を身にまとい、

灰の中にまろび、

ひとり子を失った時のように、悲しみ、いたく嘆け。

滅ぼす者が、にわかになれわれを襲うからだ。

二七「わたしはあなたを民のうちに立てて、

ためす者、試みる者とした。

あなたが彼らの道を知り、

それをためすことができるようになるためである。

二八彼らはみな、強情な反逆者であつて、

歩きまわつて人をそしる。

彼らは青銅や鉄であつて、みな卑しいことを行う。

二九ふいごは激しく吹き、

鉛は火にとけて尽き、

精錬はいたずらに進む。

悪しき者がまだ除かれなからである。

三〇主が彼らを捨てられたので、

彼らは捨てられた銀と呼ばれる」。

第七章

一主からエレミヤに臨んだ言葉はこうである。二『主の家の門に立ち、その所で、この言葉をのべて言え、主を拝むために、この門をはいるユダのすべての人よ、主の言葉を聞け。三万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたの道とあなたがたの行いを改めるならば、わたしはあなたがたをこの所に住まわせる。四あなたがたは、『これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはならない。

五もしあなたがたが、まことに、その道と行いを改めて、互に公正を行い、六寄留の他国人と、みなしごと、やもめをしえたげることなく、罪のない人の血をこの所に流すことなく、また、ほかの神々に従って自ら害をまねくことをしないならば、七わたしはあなたがたを、わたしが昔あなたがたの先祖に与えたこの地に永遠に住まわせる。

八見よ、あなたがたは偽りの言葉を頼みとしているが、それはむだである。九あなたがたは盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、あなたがたが以前には知らなかった他の神々に従いながら、一〇わたしの名をもつて、となえられるこの家に来てわたしの前に立ち、『われわれは救われた』と言い、しかもすべてこれら憎むべきことを行うのは、どうしたことか。一一わたしの名をもつて、となえられるこの家が、あなたがたの目には

盗賊の巣と見えるのか。わたし自身、そう見たと主は言われる。一二わたしが初めにわたしの名を置いた場所シロへ行き、わが民イスラエルの悪のために、わたしがその場所に対して行ったことを見よ。一三主は言われる、今あなたがたはこれらのすべてのことを行っている。またわたしはあなたがたに、しきりに語つたけれども、あなたがたは聞かず、あなたがたを呼んだけれども答えなかった。一四それゆえわたしはシロに対して行つたように、わたしの名をもつて、となえられるこの家にも行う。すなわちあなたがたが頼みとする所、わたしがあなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの所に行う。一五そしてわたしは、あなたがたのすべての兄弟、すなわちエフライムのすべての子孫を捨てたように、わたしの前からあなたがたをも捨てる。

一六あなたはこの民のために祈つてはならない。彼らのために嘆き、祈つてはならない。またわたしに、とりなしをしてはならない。わたしはあなたの求めを聞かない。一七あなたは彼らがユダの町々と、エルサレムのちまたでしていることを見ないのか。一八子どもらは、たきぎを集め、父たちは火をたき、女は粉をこね、パンを造つてこれを天后に供える。また彼らは他の神々の前に酒を注いで、わたしを怒らせる。一九主は言われる、彼らが怒らせるのはわたしなのか。自分たち自身ではないのか。そして自らうろたえている。二〇それゆえ主なる神はこう言われる、見よ、わたしの怒りと憤りを、この所と、人と獣と、

畑の木と、地の産物とに注ぐ。怒りは燃えて消えることがない」。

三 万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、「あなたがたの犠牲に燔祭の物を合わせて肉を食べるがよい。三 それはあなたがたの先祖をエジプトの地から導き出した日に、わたしは燔祭と犠牲とについて彼らに語ったこともなく、また命じたこともないからである。三 ただわたしはこの戒めを彼らに与えて言った、『わたしの声に聞きしたがいなさい。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わたしはあなたがたに命じるすべての道を歩んで幸を得なさい』と。二四 しかし彼らは聞き従わず、耳を傾けず、自分の悪い心の計りごとと強情にしたがって歩み、悪くなるばかりで、よくはならなかった。二五 あなたがたの先祖がエジプトの地を出た日から今日まで、わたしはわたしのしもべである預言者たちを日々彼らにつかわした。二六 しかし彼らはわたしに聞かず、耳を傾けないで強情になり、先祖たちにもまさって悪を行なった。二七 三といたあなたが彼らにこのすべての言葉を語っても彼らは聞かない。また彼らを呼んでもあなたに答えない。二八 それゆえ、あなたはこう彼らに言わなければならない、『これはその神、主の声に聞き従わず、その戒めを受けられなかった国民である。真実はうせ、彼らの口から絶えた。

二九 あなたの髪の毛を切つて捨てよ、

裸の山の上に嘆きの声をあげよ。

主が、お怒りになつてゐる世の人を
退け捨てられたからだ』。

三〇 主は言われる、ユダの民はわたしの前に悪を行い、わたしの名をもつてとなえられる家に、憎むべき者を置いてそこを汚した。三一 またベンヒンノムの谷にあるトベテの高き所を築いて、むすこ娘を火に焼いた。わたしはそれを命じたことはなく、またそのようなことを考えたこともなかった。三二 主は言われる、それゆえに見よ、その所をトベテ、またはベンヒンノムの谷と呼ぶしないで、ほふりの谷と呼ぶ日が来る。それはほかに場所がないので、トベテに葬るからである。三三 この民の死体は空の鳥と地の獣の食物となり、これを追い払う者もない。三四 そのときわたしはユダの町々とエルサレムのちまたに、喜びの声、楽しみ声、花婿の声、花嫁の声を絶やす。この地は荒れ果てるからである。

第八章

一 主は言われる、その時ユダの王たちの骨と、そのつかさたちの骨と、祭司たちの骨と、預言者たちの骨と、エルサレムに住む人々の骨は墓より掘り出されて、二 彼らの愛し、仕え、従い、求め、また拝んだ、日と月と天の衆群の前にさらされる。その骨

は集める者も葬る者もなく、地のおもてに糞土のようになる。三
この悪しき民のうちの残っている残りの者はみな、わたしが追
いやった場所で、生きることよりも死ぬことを願うようになる
と、万軍の主は言われる。

四 あなたは彼らに言わなければならない。

主はこう仰せられる、

人は倒れたならば、また起きあがらないであろうか。
離れていったならば、帰ってこないであろうか。

五 それにどうしてこの民は、

常にそむいて離れていくのか。

彼らは偽りを固くとらえて、

帰ってくることを拒んでいる。

六 わたしは気をつけて聞いたが、

彼らは正しくは語らなかつた。

その悪を悔いて、

『わたしのした事は何か』という者はひとりもない。

彼らはみな戦場に、はせ入る馬のように、

自分のすきな道に向かう。

七 空のこのとりでもその時を知り、

山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。

しかしわが民は主のおきてを知らない。

ハ どうしてあなたがたは、『われわれには知恵がある、

主のおきてがある』と言うことができようか。
見よ、まことに書記の偽りの筆が
これを偽りにしたのだ。

九 知恵ある者は、はずかしめられ、

あわてふためき、捕えられる。

見よ、彼らは主の言葉を捨てた、

彼らになんの知恵があるうか。

一〇 それゆえ、わたしは彼らの妻を他人に与え、

その畑を征服者に与える。

それは彼らが小さい者から大きい者にいたるまで、

みな不正な利をむさぼり、

預言者から祭司にいたるまで、

みな偽りを行っているからである。

二 彼らは手輕に、わたしの民の傷をいやし、

平安がないのに、『平安、平安』と言っている。

三 彼らは憎むべきことをして、恥じたであろうか。

すこしも恥ずかしいとは思わず、

また恥じることを知らなかつた。

それゆえ彼らは倒れる者と共に倒れる。

わたしが彼らを罰するとき、

彼らは倒れると、主は言われる。

二三 主は言われる、わたしが集めようと思うとき、

ぶどうの木にぶどうはなく、

いちじくの木に、いちじくはなく、

葉さえ、しぼんでゐる。

わたしが彼らに与えたものも、

彼らを離れて、うせ去つた」。

「四 どうしてわれわれはなす事もなく座しているのか。

集まつて、堅固な町にはいり、

そこでわれわれは滅びよう。

われわれが主に罪を犯したので、

われわれの神、主がわれわれを滅ぼそうとして、

毒の水を飲ませられるのだ。

「五 われわれは平安を望んだが、良い事はこなかった。

いやされる時を望んだが、かえつて恐怖が来た。

「六 「彼らの馬のいななきはダンから聞えてくる。

彼らの強い馬の声によつて全地は震う。

彼らは来て、この地と、ここにあるすべてのもの、

町と、そのうちに住む者とを食い滅ぼす。

「七 見よ、魔法をもつてならすことのできない、

へびや、まむしをあなたがたのうちにつかわす。

それはあなたがたをかむ」と主は言われる。

「八 わが嘆きはいやしगतく、

わが心はうちに悩む。

「九 聞け、地の全面から、

わが民の娘の舌があがるのを。

「主はシオンにおられないのか、

シオンの王はそのうちにおられないのか。

「なぜ彼らはその彫像と、

異邦の偶像とをもつて、わたしを怒らせたのか」。

「一〇 「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終つた、

しかしわれわれはまだ救われない」。

「一 わが民の娘の傷によつて、わが心は痛む。

わたしは嘆き、うろたえる。

「三 ギレアデに乳香があるではないか。

その所に医者があるではないか。

それにどうしてわが民の娘は

いやされることがないのか。

第九章

「一 ああ、わたしの頭が水となり、

わたしの目が涙の泉となればよいのに。

そうすれば、わたしは民の娘の殺された者のために

昼も夜も嘆くことができる。

「二 ああ、わたしが荒野に、

隊商の宿を得ることができればよいのに。

そうすれば、わたしは民を離れて

去って行くことができる。

彼らはみな姦淫する者、

不信のともがらだからである。

三 彼らは弓をひくように、その舌を曲げる。

真実ではなく、偽りがこの地に強くなった。

彼らは悪より悪に進み、

またわたしを知らない、主は言われる。

四 あなたがたはおのおの隣りに気をつけよ。

どの兄弟をも信じてはならない。

兄弟はみな、押しのける者であり、

隣り人はみな、ののしって歩く者だからである。

五人はみな、その隣り人を欺き、

真実を言う者はない。

彼らは自分の舌に偽りを言うことを教え、

悪を行い、疲れて悔い改めるいとまもなく、

六 しえたげに、しえたげを積み重ね、

偽りに偽りを積み重ね、

わたしを知拒んでいると、主は言われる。

七 それゆえ万軍の主はこう言われる、

「見よ、わたしは彼らを溶かし、試みる。

このほか、わが民をどうすることができよう。

八 彼らの舌は殺す矢のようだ、

それは偽りを言う。

その口ではおのおの隣り人におだやかに語るが、

その心では彼を待ち伏せる計りごとを立てる。

九 主は言われる、これらのことのために、

わたしが彼らを罰しないだろうか。

わたしがこのような民にあだを返さないだろうか。

一〇 山のために泣き叫び、野の牧場のために悲しめ。

これらは荒れすたれて、通り過ぎる人もない。

ここには牛、羊の鳴く声も聞えず、

空の鳥も獣も皆逃げ去った。

二 わたしはエルサレムを荒塚とし、山犬の巣とする。

またユダの町々を荒して、住む人もない所とする」。

三 知恵があつて、これを悟ることのできる人はだれか。主の口

の言葉をうけて、それを示す人はだれか。この地が滅ぼされて

荒野のようになり、通り過ぎる人もなくなったのはどういうわ

けか。四 主は言われる、「それは彼らの前にわたしが立てたお

きてを彼らが捨てて、わたしの声に聞き従わず、そのとおりに歩

かなかつたからである。五 彼らは強情に自分の心に従い、また

先祖の教えたようにバアルに従った。六 それゆえ万軍の主、イ

スラエルの神はこう言われる、見よ、わたしはこの民に、にがよ

もぎを食べさせ、毒の水を飲ませ、二六彼らも、その先祖たちも知らなかった国びとのうちに彼らを散らし、また彼らを滅ぼし尽すまで、そのうしろに、つるぎをつかわす」。

二七万軍の主はこう言われる、

「よく考えて、泣き女を呼べ。

また人をつかわして巧みな女を招け。

一八彼らに急いでこさせ、

われわれのために泣き悲しませて、

われわれの目に涙をこぼさせ、

まぶたから水をあふれさせよ。

一九シオンから悲しみの声が聞える。

それは言う、『ああ、われわれは滅ぼされ、

いたく、はずかしめられている。

われわれはその地を去り、

彼らがわれわれのすみかをこわしたからだ』。

二〇女たちよ、主の言葉を聞け。

あなたがたの耳に、その口の言葉をいれよ。

あなたがたの娘に悲しみの歌を教え、

おのおのその隣りに哀悼の歌を教えよ。

二三死がわれわれの窓に上つて来、

われわれの邸宅の中にはいり、

ちまたにいる子どもらを絶やし、

広場にいる若い人たちを殺そうとしているからだ。

三三あなたはこう言いなさい、

「主は言われる、『人の死体が糞土のように、

野に倒れているようになり、

また刈入れする人のうしろに残つて、

だれも集めることをしない束のようになる』。

三三主はこう言われる、『知恵ある人はその知恵を誇つてはなら

ない。力ある人はその力を誇つてはならない。富める者はそ

の富を誇つてはならない。三四誇る者はこれを誇とせよ。すな

わち、さどくあつて、わたしを知っていること、わたしが主で

あつて、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であるこ

とを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主

は言われる』。

三五主は言われる、『見よ、このような日が来る。その日には、

割礼をうけても、心に割礼をうけていないすべての人をわたし

は罰する。三六エジプト、ユダ、エドム、アンモンの人々、モア

ブ、および野にいて、髪の毛のすみずみをそる人々はそれであ

る。これらの国びとはみな割礼をうけていない者であり、イス

ラエルの全家もみな心に割礼をうけていない者である』。

第一〇章

イスラエルの家よ、主のあなたがたに語られる言葉を聞け。ニ
主はこう言われる、

「異邦の人の道に習つてはならない。

また異邦の人が天に現れるしるしを恐れても、
あなたがたはそれを恐れてはならない。

三異邦の民のならわしはむなしからだ。

彼らの崇拜するものは、林から切りだした木で、
木工の手で、おのもつて造つたものだ。

四人々は銀や金をもつて、それを飾り、

くぎと錠をもつて動かないようにそれをとめる。

五その偶像は、きゆうり畑のかかしのようで、

ものを言うことができない。

歩くこともできないから、

人に運んでもらわなければならない。

それを恐れるに及ばない。

それは災をくだすことができず、

また幸をくだす力もないからだ」。

六主よ、あなたに並びうる者はありません。

あなたは大きいなる者であり、あなたの名も

その力のために大きいなるものであります。

七万国の王であるあなたを、
恐れない者がありませんか。

あなたを恐れるのは当然のことでもあります。

万国のすべての知恵ある者のうちにも、

その国々のうちにも、

あなたに並びうる者はありません。

八彼らは皆、愚かで鈍く、

偶像の教は、ただ木にすぎない。

九銀ばくはタルシシから渡来し、

金はウバズから携えてくる。

これらは工人と金細工人の工作である。

彼らの着物はすみれ色と紫色である。

これらはみな巧みな細工人の作つた物である。

一〇しかし主はまことの神である。

生きた神であり、永遠の王である。

その怒りによつて地は震いうごき、

万国はその憤りに当ることができない。

二あなたがたは彼らに、こう言わなければならない、「天地を造

らなかつた神々は地の上、天の下から滅び去る」と。

三主はその力をもつて地を造り、

その知恵をもつて世界を建て、

その悟りをもつて天をのべられた。

二三 彼が声を出されると、
 天に多くの水のさわめきがあり、
 また地の果から霧を立ちあがらせられる。
 彼は雨のために、いなびかりをおこし、
 その倉から風を取り出される。
 一四 すべての人は愚かで知恵がなく、
 すべての金細工人は
 その造った偶像のために恥をこうむる。
 その偶像は偽り物で、
 そのうちに息がないからだ。
 一五 これらは、むなしいもので、迷いのわざである。
 罰せられる時に滅びるものである。
 一六 ヤコブの分である彼はこのようなものではない。
 彼は万物の造り主だからである。
 イスラエルは彼の嗣業としての部族である。
 彼の名を万軍の主という。
 一七 囲みの中におる者よ、
 あなたの包を地から取り上げよ。
 一八 主がこう言われるからだ、
 「見よ、わたしはこのたび、
 この地に住む者を投げ捨てる。
 かつ彼らをせめなやまして、思い知らせる」。

一九 わたしはいたでをうけた、ああ、わざわいなるかな、
 わたしの傷は重い。
 しかしわたしは言った、
 「まことに、これは悩みである。
 わたしはこれを忍ばなければならない」と。
 二〇 わたしの天幕は破れ、綱はことごとく切れ、
 子どもたちはわたしを捨てて行つて、いなくなつた。
 もはやわたしの天幕を張る者はなく、
 幕を掛ける者もない。
 二一 牧者は愚かであつて、
 主に問うことをしないからである。
 それゆえ彼らは栄えることもなく、
 その群れはみな散り去つていく。
 二二 聞けよ、うわさのあるのを。
 見よ、北の国から大いなる騒ぎが来る。
 これはユダの町々を荒して山犬の巢とする。
 二三 主よ、わたしは知っています、
 人の道は自身によるのではなく、
 歩む人が、その歩みを
 自分で決めることのできないことを。
 二四 主よ、わたしを懲らしてください。
 正しい道にしたがつて、怒らずに懲らしてください。

第二章

さもないと、わたしは無に帰してしまおうでしょう。

二五 あなたを知らない国民と、

あなたの名をとえない人々と

あなたの怒りを注いでください。

彼らはヤコブを食い尽くし

これを食い尽くして滅ぼし、

そのすみかを荒したからです。

一 主からエレミヤに臨んだ言葉は言う、二「この契約の言葉を聞き、ユダの人々とエルサレムに住む者に告げよ。三彼らに言い、イスラエルの神、主はこう仰せられる、この契約の言葉に従わない人は、のろわれる。四この契約は、わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地、鉄のかまどの中から導き出した時に、彼らに命じたところのものである。すなわち、その時わたしは彼らに言った、わたしの声を聞き、あなたがたに命じるすべてのことを行うならば、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。五そして、わたしがあなたがたの先祖に、乳と蜜との流れる地を与えると誓ったことを、なし遂げると。すなわち今日のとおりでである」。その時わたしは、「主よ、仰せのとおりで」と答えた。

六 主はわたしに言われた、「このすべての言葉を、ユダの町々と、エルサレムのちまたに告げ示し、この契約の言葉を聞き、これを行え、と言いなさい。七わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの地から導き出した時から今日にいたるまで、おごそかに彼らを戒め、絶えず戒めて、わたしの声に聞き従うようにと言った。八しかし彼らは従わず、その耳を傾けず、おのおの自分の悪い強情な心に従って歩んだ。それゆえ、わたしはこの契約の言葉をもつて彼らを責めた。これはわたしが彼らに行えと命じたが、行わなかったものである」。

九 主はまたわたしに言われた、「ユダの人々とエルサレムに住む者のうちに反逆の事がある。一〇彼らは、わたしの言葉を聞くことを拒んだその先祖たちの罪に立ち返り、またほかの神々に従ってそれに仕えた。イスラエルの家とユダの家とは、わたしがその先祖たちと結んだ契約を破った。一一それゆえ主はこう言われる、見よ、わたしは災を彼らの上に下す。彼らはそれを免れることはできない。彼らがわたしを呼んでも、わたしは聞かない。一二ユダの町々とエルサレムに住む者は、行つて、自分たちがそれに香をたいている神々に呼び求めるが、これらは、彼らの災の時にも決して彼らを救うことはできない。一三ユダよ、あなたの神々は、あなたの町の数ほど多くなつた。またあなたがたはエルサレムのちまたの数ほどの祭壇を恥すべき者のために立てた。すなわちバアルに香をたくための祭壇である。

「四それゆえ、この民のために祈つてはならない。また彼らのために泣き、あるいは祈り求めてはならない。彼らがその災の時に、わたしに呼ばわつても、わたしは彼らに聞くことをしないからだ。『五わが愛する者は、わたしの家で何をするのか。すでにこれは悪事を行った。誓願と犠牲の肉とがあなたに災を免れさせることができるであろうか。それであなたは喜びることができであろうか。』六主はあなたを、かつては『良い実のなる美しい青々としたオリブの木』と呼ばれたが、激しい暴風のどろきと共に、主はそれに火をかけ、その枝を焼き払われるのである。七あなたを植えた万軍の主は、あなたに向かつて災を言い渡された。これはイスラエルの家とユダの家とが悪を行い、バアルに香をたいて、わたしを怒らせたからである」。

「八主が知らせてくださったので、わたしはそれを知った。

その時、あなたは彼らの悪しきわざをわたしに示された。

「九しかしわたしは、

ほふられに行く、おとなしい小羊のようで、

彼らがわたしを害しようと、

計りごとをめぐらしているのを知らなかった。

彼らは言う、「さあ、木とその実を共に滅ぼそう。

生ける者の地から彼を絶つて、

その名を人に忘れさせよう」。

「一〇正しいさばきをし、

人の心と思いを探られる万軍の主よ、

わたしは自分の訴えをあなたにお任せしました。

あなたが彼らにあだをかえされるのを見させてください。

「三それゆえ主はアナトテの人々についてこう言われる、彼らはあなたの命を取ろうと求めて言う、『主の名によつて預言してはならない。それをするならば、あなたはわれわれの手にかかつて死ぬであろう』。三それで万軍の主はこう言われる、『見よ、わたしは彼らを罰する。若い人はつるぎで死に、彼らのむすこ娘は、ききんで死に、三だれも残る者はない。わたしがアナトテの人々に災を下し、彼らを罰する年をこさせるからである』。

第二章

「主よ、わたしがあなたと論じ争う時、

あなたは常に正しい。

しかしなお、わたしはあなたの前に、

さばきのことを論じてみたい。

悪人の道がさかえ、

不信心な者がみな繁栄するのはなにゆえですか。

「二あなたが彼らを植えられたので、

彼らは根づき、育つて、実を結びます。

彼らは口ではあなたに近づきますが、

心はあなたから遠ざかっています。

三主よ、あなたはわたしを知り、わたしを見、

わたしの心があなたに対して

いかにあるかを試みられます。

ほふるために羊を引き出すように、彼らを引き出し、

殺す日にそなえて、彼らを残しておいてください。

四いつまで、この地は嘆き、

どの畑の野菜も枯れていてよいでしょう。

この地に住む者の悪によって、

獣と鳥は滅びうせます。

人々は言いました、

「彼はわれわれの終りを見ることはない」と。

五「もしあなたが、徒歩の人と競争して疲れるなら、

どうして騎馬の人と競うことができようか。

もし安全な地で、あなたが倒れるなら、

ヨルダンの密林では、どうするつもりか。

六あなたの兄弟たち、あなたの父の家のものさえ、

あなたを欺き、大声をあげて、あなたを追っている。

彼らが親しげにあなたに語ることがあっても、

彼らを信じてはならない」。

七「わたしはわが家を離れ、わが嗣業を捨て、

わが魂の愛する者を敵の手に渡した。

八わたしの嗣業は、わたしにとって

林の中のししのようなった。

これはわたしに向かつてその声をあげる。

それゆえわたしはこれを憎む。

九わたしの嗣業は、わたしにとって、

斑点のある猛禽のようではないか。

他の猛禽がこれを囲んでいるではないか。

行つて、野の獣をみな集め、

連れてきてこれを食べさせよ。

一〇多くの牧者たちはわたしのぶどう畑を滅ぼし、

わたしの地を踏み荒した。

わたしの麗しい地を荒れた野にした。

二彼らはこれを荒地としてしまった。

その荒地がわたしに向かつて嘆くのだ。

全地は荒地にされた。

しかし、ひとりもこれを心に留める者はない。

三滅ぼす者どもが荒野のすべての、はげ山の上にきた。

主のつるぎが、地の、この果から、かの果までを滅ぼすのだ。

命あるものは安らかであることができない。

二三 彼らは麦をまいて、いばらを刈り取る。

苦勞してもなんの利益もない。

彼らはその收穫を恥じるようになる。

主の激しい怒りによってである」。

「四 わたしがわが民イスラエルにつがせた嗣業に手を触れるすべての悪い隣り人について、主はこう言われる、「見よ、わたしは彼らをその地から抜き出し、ユダの家を彼らのうちから抜き出す。」「五 わたしは、彼らを抜き出したのちに、また彼らをあわれんで、それぞれその嗣業に導き返し、おのおのを、その地に帰らせる。」「六 もし彼らがわたしの民の道を学び、わたしの名によつて、『主は生きておられる』と言つて誓うことが、かつて彼らがわたしの民に教えてバアルをさして誓わせたようになるならば、彼らはわたしの民のうちに建てられる。」「七 しかし耳をかさない民があるときは、わたしはその民を抜き出して滅ぼすと、主は言われる」。

第二章

「主はわたしにこう言われた、「行つて、亜麻布の帯を買い、腰に結べ。水につけてはならない。」「そこで、わたしは主の言葉に従ひ、帯を買つて腰に結んだ。」「三 主の言葉は、再びわたしに臨んで言つた、四 「あなたが買つて腰に結んでいる帯を手に取り、

立つてユフラテの川へ行き、その所の岩の裂け目にこれを隠せ。」「五 わたしは主が命じられたように、行つて、これをユフラテの川のほとりに隠した。」「六 多くの日を経てのち、主はわたしに言われた、「立つて、ユフラテの川へ行き、あなたに命じて、そこに隠させた帯をその所から取つてきなさい。」「七 そこでわたしはユフラテの川へ行き、地を掘つて、隠した所から帯を取り出したが、その帯はそこなわれて、役に立たなくなつていた。

ハ その時、主の言葉がわたしに臨んだ、九 「主はこう仰せられる、これと同じように、わたしはユダの高ぶりとエルサレムの大いなる高ぶりを、破るのである。」「一〇 この悪しき民はわたしの言葉を聞くことを拒み、自分の心を強情にして歩み、また他の神々に従つてこれに仕え、これを拝んでいる。彼らはこの帯のように、なんの役にも立たなくなる。」「二 主は言われる、「帯が人の腰に着くように、イスラエルのすべての家とユダのすべての家とをわたしに着かせ、これをわたしの民とし、名とし、誉とし、榮えとしようとした。しかし彼らは聞き従おうともしなかつた」。

二三 「あなたはこの言葉を彼らに語らなければならない、『イスラエルの神はこう言われる、酒つぽには、みな酒が満ちる』と。彼らはあなたに言うであろう、『酒つぽに、みな酒が満ちることをわれわれが知らないことがあろうか』と。」「三 その時、あなたは彼らに言わなければならない、『主はこう言われる、見よ、わた

しはこの地に住むすべての者と、ダビデの位に座す王たちと、祭司と預言者およびエルサレムに住むすべての者に酔いを満らし、四彼らを互に打ち当てて碎く。父と子をもそのようにすると、主は言われる。わたしは彼らをあわれまず、惜しまず、かわいそうとも思わずに滅ぼす」と。

一五 耳を傾けて聞け、高ぶつてはならない、主がお語りになるからである。

一六 主がまだやみを起されないうちに、

またあなたがたの足が

薄暗がりの山につまずかないうちに、

あなたがたの神、主に栄光を帰せよ。

さもないと、あなたがたが光を望んでいる間に、

主はそれを暗黒に変え、

それを暗やみとされるからである。

一七 もしあなたがたが聞かないならば、

わたしの魂はひそかな所で、

あなたがたの高ぶりのために悲しむ。

また主の群れが、かすめられたために、

わたしの目はいたく泣いて、涙を流すのである。

一八 王と太后とに告げよ、

「あなたがたは低い座にすわりなさい。

麗しい冠はすでに

あなたがたの頭から落ちてしまったからです」。

一九 ネゲブの町々は閉ざされて、これを開く人がない。

ユダはみな捕え移される、

ことごとく捕え移される。

二〇 「目をあげて、北の方からくる者を見よ、

あなたに賜わった群れ、

あなたの麗しい群れはどこにいるのか。

二 彼らがあなたの親しみ慣れた人たちを、

あなたの上に立ててかしらとするとき、

あなたは何を言おうとするのか。

あなたの苦しきは、

子を産む女の苦しみのようでないであろうか。

三 あなたが心のうちに、

『どうしてこのようなことが

わたしに起ったのか』というならば、

あなたの罪が重いゆえに、

あなたの着物のすそはあげられ、

はすかしめを受けるのだ。

三三 エチオピヤびとは

その皮膚を変えることができようか。

ひようはその斑点を変えることができようか。

もしそれができるならば、悪に慣れたあなたがたも、

第二十四章

善ぜんを行おこなうことができる。

二四 わたしはあなたがたを散ちらし、

野のの風かぜに吹ふき散ちられるもみがらのようにする。

二五 主は言いわれる、これがあなたに授さづけられた定め、

わたしが量はかつてあなたに与あたえる分ぶんである。

あなたがわたしを忘わすれて、

偽いつわりを頼たのみとしたからだ。

二六 わたしはまたあなたの着物きもののすそを顔かおまであげて、

あなたの恥はじをあらわす。

二七 わたしはあなたの憎にくむべき行おこない、

あなたの姦淫かんいんと、いななき、

野のの丘おかの上で行おこなったあなたのみだらな行おこないを見た。

エルサレムよ、あなたはわざわいだ、

あなたの清められるのはいつのことであろうか」。

一 ひでりの事ことについてエレミヤに臨のぞんだ主の言葉ことば。

二 「ユダは悲かなしみ、

その町々まちまちの門は傾かたむき、

民は地なみに座ざして嘆なげき、

エルサレムの叫さけびはあがる。

三 その君たちきみは、しもべをつかわして水みづをくませる。

彼らかれが井戸いどの所ところにきても、水みづは見みつからず、

むなしい器うつわをもつて帰かえり、

恥はじ、かつ当惑とうわくして、その頭あたまをおおう。

四 地に雨あめが降ふらず、土つちが、かわいて割われたため、

農夫のうふは恥はじて、その頭あたまをおおう。

五 野のにいる雌めじかでさえも子を産うんで、これを捨すてる。

草くさがないからである。

六 野のろばは、はげ山やまの上に立たって、

山犬やまいぬのようにあえぎ、

草くさのないために、その目めはくらむ。

七 主よ、われわれの罪つみがわれわれを訴うて

不利ふりな証言しょうげんをして、

あなたの名なのために、事ことをなしてください。

われわれの背信はいしんの数かずは多く、

あなたに向むかって罪つみを犯おかしました。

ハイスラエルの望のぞみなる主よ、

悩なやみの時ときの救主すくいぬしよ、

なぜ、あなたはこの地ちに住すむ異邦いほうの人ひとのようにし、

また一夜いちやの宿やどりのために立ち寄よる旅たびびとのように

なさねばならないのですか。

九 なぜ、あなたは、うろたえている人ひとのようにし、

また人を救いえない勇士のように

なさらねばならないのですか。

主よ、あなたはわれわれのうちにいらせられます。

われわれは、み名によって呼ばれている者です。

われわれを見捨てないでください」。

一〇この民について主はこう言われる、

「彼らはこのように好んで、さまよい、

その足をとどめることをしなかったので、

主は彼らを喜ばず、

いまそのとがを覚え、その罪を罰するのだ」。

二主はわたしに言われた、「この民のために恵みを祈ってはな

らない。三彼らが断食しても、わたしは彼らの呼ぶのを聞かな

い。燔祭と素祭をささげても、わたしはそれを受けない。か

えて、つるぎと、ききん、および疫病をもって、彼らを滅ぼ

してしまふ」。

三わたしは言った、「ああ、主なる神よ、預言者たちはこの民に

向かい、『あなたがたは、つるぎを見ることはない。ききんもこ

ない。わたしはこの所に確かな平安をあなたがたに与える』と

言っています」。四主はわたしに言われた、「預言者らはわたし

の名によって偽りの預言をしている。わたしは彼らをつかわさ

なかった。また彼らに命じたこともなく、話したこともない。

彼らは偽りの黙示と、役に立たない占い、および自分の心でつく

りあげた欺きをあなたがたに預言しているのだ。一五それゆえ、

わたしがつかわさないのに、わたしの名によって預言して、『つ

るぎとききんは、この地にこない』と言っているあの預言者につ

いて、主はこう仰せられる、この預言者らは、つるぎとききんに

滅ぼされる。一六また彼らの預言を聞く民は、ききんとつるぎと

によつて、エルサレムのちまたに投げ捨てられる。だれもこれ

を葬る者はない。彼らとその妻、およびそのむすこ娘も同様で

ある。わたしが彼らの悪をその上に注ぐからである。

一七この言葉を彼らに語れ、

『わたしの目は夜も昼も絶えず涙を流す。

わが民の娘であるおとめが大きな傷と

重い打撃によつて滅ぼされるからである。

一八わたしが出て畑に行くとき、

つるぎで殺された者がある。

町にはいるとき、ききんで病んでいる者がある。

預言者も祭司も共にその地にさまよつて、

知るところがない』。

一九あなたはまったくユダを捨てられたのですか。

あなたの心はシオンをきらわれるのですか。

あなたはわれわれを撃つたのに、どうしていやしてはくだ

さらないのでですか。

われわれは平安を望んだが、良い事はこなかった。

第一章

いやされる時を望んだが、かえって恐怖が来た。

二〇主よ、われわれは自分の悪と、

先祖のとがとを認めています。

われわれはあなたに罪を犯しました。

ニみ名のために、われわれを捨てないでください。

あなたの栄えあるみ位を

はずかしめないでください。

あなたがわれわれにお立てになった契約を覚えて、

それを破らないでください。

三 異邦の偽りの神々のうちに、

雨を降らせうる者があるであろうか。

天が自分で夕立ちを降らすことができようか。

われわれの神、主よ、

あなたこそ、これをなさる方ではありませんか。

われわれの待ち望むのはあなたです。

あなたがこれらすべてのことをなさるからです。

一 主はわたしに言われた、「たといモーセとサムエルとがわたしの前に立つても、わたしの心はこの民を顧みない。彼らをわたしの前から追い出し、ここを去らせよ。ニもし彼らが、『われわれ

はどこに行けばよいのか』とあなたに尋ねるならば、彼らに言いなさい、

『主はこう仰せられる、

疫病に定められた者は疫病に、

つるぎに定められた者はつるぎに、

ききに定められた者はききに、

とりこに定められた者はとりこに行く』。

三 主は仰せられる、わたしは四つの物をもって彼らを罰する。

すなわち、つるぎをもって殺し、犬をもってかませ、空の鳥と地

の獣をもって食い滅ぼさせる。四 またユダの王ヒゼキヤの子マ

ナセが、エルサレムで行いのゆえに、わたしは彼らを地のす

べての国が見て恐れおののくものとする。

五 エルサレムよ、だれがあなたをあわれむであろうか。

だれがあなたのために嘆くであろうか。

だれがふり返つて、あなたの安否を問うであろうか。

六 主は言われる、あなたはわたしを捨てた。

そしてますます退いて行く。

それゆえ、わたしは手を伸べてあなたを滅ぼした。

わたしはあわれむことには飽きた。

七 わたしはこの地の門で、

箕で彼らをおおぎ分けた。

彼らがその道を離れなかつたので、

わたしは彼らの子を奪い、
わが民を滅ぼした。

ハわたしは彼らの寡婦の数を
浜べの砂よりも多くした。

わたしは真昼に、滅ぼす者を連れてきて、
若者らの母たちをせめ、

驚きと恐れを、にわかに母たちにおこした。
九七の子を産んだ女は、弱り衰えて、息絶え、

まだ昼であつたが、彼女の日は没した。
彼女は恥じ、うろたえた。

その残りの者は、これを敵のつるぎに渡すと
主は言われる」。

一〇ああ、わたしはわざわいだ。わが母よ、あなたは、なぜ、わ
たしを産んだのか。全国の人とはわたしと争い、わたしを攻める。
わたしは人に貸したこともなく、人に借りたこともないのに、皆
わたしをのろう。二主よ、もしわたしが彼らの幸福をあなたに
祈り求めず、また敵のため、その悩みのときと、災のときに、わ
たしがあなたにとりなしをしなかつたのであれば、彼らのろ
いも、やむをえないでしょう。三人は鉄を、北からくる鉄や
青銅を砕くことができましようか。

二三「わたしはあなたの富と宝を、ぶんどり物として他に与える。
代価を受けることはできない。それはあなたのすべての罪によ

るので、領域内のいたる所にこのことが起る。一四わたしはあ
なたの知らない地で、あなたの敵に仕えさせる。わたしの怒り
によつて火は点じられ、いつまでも燃え続けるからである」。

二五主よ、あなたは知つておられます。

わたしを覚え、わたしを顧みてください。

わたしを迫害する者に、あだを返し、
あなたの寛容によつて、

わたしを取り去らないでください。

わたしがあなたのために、
はずかしめを受けるのを知つてください。

一六わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。
み言葉は、わたしに喜びとなり、

心の楽しみとなりました。

万軍の神、主よ、わたしは、あなたの名をもつて
となえられている者です。

一七わたしは笑いきざめく人のつどいに
すわることなく、また喜ぶことをせず、
ただひとりですわつていました。

あなたの手がわたしの上にあり、
あなたが憤りをもつて

わたしを満たされたからです。

一八どうしてわたしの痛みは止まらず、

傷は重くて、なおらないのですか。

あなたはわたしにとつて、水がなくて人を欺く谷川のようになられるのですか。

一九それゆえ主はこう仰せられる、

「もしあなたが帰ってくるならば、

もとのようにして、わたしの前に立たせよう。

もしあなたが、つまらないことを言うのをやめて、

貴重なことを言うならば、

わたしの口のようになる。

彼らはあなたの所に帰ってくる。

しかしあなたが彼らの所に帰るのではない。

二〇わたしはあなたをこの民の前に、

堅固な青銅の城壁にする。

彼らがあなたを攻めても、

あなたに勝つことはできない。

わたしがあなたと共にいて、あなたを助け、

あなたを救うからであると、主は言われる。

二わたしはあなたを悪人の手から救い、

無慈悲な人の手からあがなう」。

第一章

一主の言葉はまたわたしに臨んだ、二「あなたはこの所で妻をめとつてはならない。またむすこ娘を持つてはならない。三この所で生れるむすこ娘と、この地でこれを産む母たちと、これを生む父たちとについて主はこう言われる、四彼らは死の病にかかつて死に、哀悼する者もなく、埋葬する者もなく、地のおもてに、糞土のようになる。またつるぎと、ききんに滅ぼされて、その死体は空の鳥と地の獣の食い物となる。

五主はこう言われる、喪のある家に、はいつてはならない。また行つて、それを悲しみ嘆いてはならない。わたしがこの民からわたしの平安と、いつくしみと、あわれみとを取り去ったからであると、主は言われる。六大いなる者も小さき者も、この地に死ぬ。彼らは葬られず、また彼らのために悲しむ者もなく、自分の身を傷つける者もなく、髪をそる者もない。七悲しむ者のためにパンをさいて、死者のためにこれを慰める者はなく、また父あるいは母のために慰めの杯をこれに与えて飲ませる者もない。八またあなたは宴会をする家にはいつて、人々と共にすわつて食ひ飲みてはならない。九万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、見よ、あなたの目の前で、あなたのなおこの世にいる間に、わたしは喜びの声と、花婿の聲と、花嫁の聲とをこの所に絶やしてしまう。

一〇あなたがこのすべての言葉（ことば）をこの民（たみ）に告（つ）げるとき、彼（かれ）らがあるに尋（たず）ねて、『主（しゅ）がわれわれにこの大きな災（わざ）を宣告（せんこく）されるのはどうしてですか。われわれにどんな悪い所（わるいところ）があるのですか。われわれの神（かみ）、主（しゅ）にそむいて、われわれが犯（おか）した罪（つみ）とはなんですか』と言う（い）うならば、二あなたは彼（かれ）らに答え（こた）えなければならぬ、『主（しゅ）は仰（おほ）せられる、それはあなたがたの先祖（せんぞ）がわたしを捨て（す）て他の神（かみ）々に従（したが）い、これに仕（つか）え、これを拜（はい）、またわたしを捨て（す）、わたしの律法（りっぽう）を守（まも）らなかったからである。三あなたがたは、あなたがたの先祖（せんぞ）よりも、いつそう悪い（わる）ことをした。見よ、あなたがたはおの自分の悪い強情（こつじやう）な心（こころ）に従（したが）、わたしに聞（き）き従（したが）うことはしない。四それゆえ、わたしはあなたがたをこの地（ち）より追（お）い出し、あなたがたも、あなたがたの先祖（せんぞ）も知らない地（ち）に行（い）かせる。その所（ところ）であなたがたは昼夜（ちゆうや）、ほかの神（かみ）々に仕（つか）えるようになる。これはわたしがあなたがたにあわれみ（あわれみ）を示（しめ）さないからである』と。

一四主（しゅ）は言（い）われる、それゆえ、見よ、こののち『イスラエルの民（たみ）をエジプトの地（ち）から導（みちび）き出（だ）した主（しゅ）は生きておられる』とは言（い）わないで、一五『イスラエルの民（たみ）を北（きた）の国（くに）と、そのすべて追（お）いやられた国々（くに）から導（みちび）き出（だ）した主（しゅ）は生きておられる』という日（ひ）がくる。わたしが彼（かれ）らを、その先祖（せんぞ）に与（あた）えた彼（かれ）らの地（ち）に導（みちび）きかえすからである。

一六主（しゅ）は言（い）われる、見よ、わたしは多くの漁夫（ぎよふ）を呼（よ）んできて、彼（かれ）

らをすなごらせ、また、そののち多くの獵師（りやうし）を呼（よ）んできて、もろもろの山（やま）、もろもろの丘（おか）、および岩（いわ）の裂（さ）け目（め）から彼（かれ）らをかり出（だ）させる。一七わたしの目は彼（かれ）らのすべての道（みち）を見（み）ているからである。みなわたしに隠（かく）れてはいない。またその惡（あく）はわたしの目（め）に隠（かく）れることはない。一八わたしはその惡（あく）とその罪（つみ）の報（むく）いを二倍（ばい）にする。彼（かれ）らとその忌（い）むべき偶像（ぐうぞう）の死（し）体（たい）をもつて、わたしの地（ち）を汚（けが）し、その憎（にく）むべきものをもつて、わたしの嗣業（しごうぎやう）を満（み）たしたからである」。

一九主（しゅ）、わが力（ちから）、わが城（しろ）、
悩（なや）みの時（とき）、のがれ場（ば）、
万（ばん）国の民（たみ）は地（ち）の果（はて）から

あなたのもとにきて申（もう）します、

「われわれの先祖（せんぞ）が受け嗣（つ）いだのは、

ただ偽（いつわ）りと、役（やく）に立（た）たないつまらない事（こと）ばかりです。

二〇人が自分（じぶん）で神（かみ）々（々）を造（つく）ることができましようか。

そういうものは神（かみ）ではありません」。

三「それゆえ、見よ、わたしは彼（かれ）らに知（し）らせよう。すなわち、この際（さい）わたしの力（ちから）と、わたしの勢（いきお）いとを知（し）らせよう。彼（かれ）らはわたしの名（な）が、主（しゅ）であることを知（し）るようになる」。

第十七章

「ユダの罪は、鉄の筆、金剛石のとがりをもってしるされ、彼らの心の碑と、祭壇の角に彫りつけられている。二彼らの子供たちは青木の下と、高い丘の上、野の山の上にある祭壇とアシラのことを覚えていゝ。三わたしはあなたの富とすべての宝とを、あなたの全領域の内て犯した罪の代価として、ぶんどり物とならせる。四わたしがあなたに与えた嗣業からあなたは手をはなすようになる。またわたしは、あなたの知らない地で、あなたの敵に仕えさせる。わたしの怒りによって、火は点じられ、いつまでも燃え続けるからである」。

五主はこう言われる、

「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、

その心が主を離れている人は、のろわれる。

六彼は荒野に育つ小さい木のように、

何も良いことの来るのを見ない。

荒野の、干上がった所に住み、

人の住まない塩地にいる。

七おおよそ主にたより、

主を頼みとする人はさいわいである。

八彼は水のほとりに植えた木のように、

その根を川にのぼし、

暑さにあつても恐れることはない。

その葉は常に青く、

ひでりの年にも憂えることなく、

絶えず実を結ぶ」。

九心はよるずの物よりも偽るもので、

はなはだしく悪に染まつている。

だがこれを、よく知ることができようか。

一〇「主であるわたしは心を探り、思いを試みる。

おのおのに、その道にしたがい、

その行いの実によつて報いをするためである」。

一しやこが自分が産んだのではない卵を抱くように、

不正な財産を得る者がある。

その人は一生の半ばにそれから離れて、

その終りには愚かな者となる。

二初めから高くあげられた榮えあるみ座は、

われわれの聖所のある所である。

三またイスラエルの望みである主よ、

あなたを捨てる者はみな恥をかき、

あなたを離れる者は土に名をしるされます。

それは生ける水の源である主を捨てたからです。

四主よ、わたしをいやしてください、

そうすれば、わたしはいえます。

わたしをお救いください、
そうすれば、わたしは救われます。

あなたはわたしのほめたたえる者だからです。

二五 彼らはわたしに言います、

「主の言葉はどこにあるのか。

今、それを出して見せよ」と。

二六 悪をつかわされるようにとは、

わたしはたつて求めませんでした。

また災の日を願わなかったのを、

あなたはごぞんじです。

わたしのくちびるから出たことは、み前にあります。

二七 どうか、わたしを恐れさせないでください。

災のときに、あなたはわたしののがれ場です。

二八 わたしを攻め悩ます者はずかしめてください。

しかしわたしをはずかしめないでください。

彼らを恐れさせてください。

しかしわたしを恐れさせないでください。

災の日を彼らにきたらせ、

滅びを倍にして彼らを滅ぼしてください。

二九 主はわたしにこう言われた、「行つて、ユダの王たちの出入りするベニヤミンの門、およびエルサレムのすべての門に立つて、
三〇 言いなさい、『これらの門からはいるユダの王たち、およびユ

ダのすべての民とエルサレムに住むすべての者よ、主の言葉を聞きなさい。二主はこう言われる、命が惜しいならば気をつけるがよい。安息日に荷をたずさえ、またはそれを持つてエルサレムの門にはいつてはならない。三また安息日にあなたがたの家から荷を運び出してはならない。なんのわざをもしてはならない。わたしがあなたがたの先祖に命じたように安息日を聖別して守りなさい。四しかし彼らは従わず耳を傾けず、聞くことも、戒めをうけることをも強情に拒んだ。

四五 主は言われる、もしあなたがたがわたしに聞き従い、安息日に荷をたずさえてこの町の門にはいらず、安息日を聖別して、なんのわざをもしないならば、五六ダビデの位に座する王たち、つかさたち、ユダの人々、エルサレムに住む者は、車と馬に乗つてこの町の門からはいることができる。そしてこの町には長く人が住むようになる。二六また人々はユダの町々やエルサレムの周囲、ベニヤミンの地、平地と山地およびネゲブから来て燔祭、犠牲、素祭、乳香、感謝祭をたずさえて主の家にはいる。二七しかし、もしあなたがたがわたしに聞き従わないで、安息日を聖別して守ることをせず、安息日に荷をたずさえてエルサレムの門にはいるならば、わたしは火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。その火は消えることがない』。

第一八章

「主からエレミヤに臨んだ言葉。ニ「立つて、陶器師の家に下って行きなさい。その所でわたしはあなたにわたしの言葉を聞かせよう」。ニわたしは陶器師の家へ下って行った。見ると彼は、ろくろで仕事をしていたが、四粘土で造っていた器が、その人の手の中で仕損じたので、彼は自分の意のままに、それをもってほかの器を造った。

五その時、主の言葉がわたしに臨んだ、六「主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか。イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある。セある時には、わたしが民または国を抜く、破る、滅ぼすということがあるが、ハもしわたしの言った国がその悪を離れるならば、わたしはこれに災を下そうとしたことを思いかえす。九またある時には、わたしが民または国を建て、植えるということがあるが、一〇もしその国がわたしの目に悪と見えることを行い、わたしの声に聞き従わないなら、わたしはこれに幸を与えようとしたことを思いかえす。一二それゆえ、ユダの人々とエルサレムに住む者に言いなさい、『主はこう仰せられる、見よ、わたしはあなたがたに災を下そうと工夫し、あなたがたを攻める計りごとを立てている。あなたがたはおのその悪しき道を離れ、その道

と行いを改めなさい』と。

二三しかし彼らは言う、『それはむだです。われわれは自分の図るところに従い、おのその悪い強情な心にしたがって行動します』と。

二四それゆえ主はこう言われる、
異邦の民のうちのある者に尋ねてみよ、
このような事を聞いた者があろうか。
おとめイスラエルは恐ろしい事をした。

二五レバノンの雪が、
どうしてシリオンの岩を離れようか。
山の水、冷たい川の流れが、
どうしてかわいてしまおうか。

二六それなのにわが民はわたしを忘れて、
偽りの神々に香をたいている。
彼らはその道、古い道につまずき、
また小道に入り、大路からはなれた。

二七自分の地を荒れすたれさせて、
いつまでも人に舌打ちされるものとした。
そこを通る人はみな身震いして、首を振る。

二八わたしは東風のように、彼らをその敵の前に散らす。
その滅びの日には、
わたしは彼らに背を向け、顔を向けない」。

一八 彼らは言った、「さあ、計略をめぐらして、エレミヤを倒そう。祭司には律法があり、知恵ある者には計りごとがあり、預言者には言葉があつて、これらのものが滅びてしまうことはない。さあ、われわれは舌をもつて彼を撃とう。彼のすべての言葉に、心を留めないことにしよう」。

一九 主よ、どうぞわたしにみ心を留め、わたしの訴えをお聞きください。

二〇 悪をもつて善に報いるべきでしうか。

しかもなお彼らはわたしの命を取ろうとして穴を掘りました。

わたしがあなたの前に立つて、

彼らのことを良く言い、

あなたの憤りを止めようとしたのを

覚えてください。

二三 それゆえ、彼らの子どもたちをききんに渡し、

彼らをつるぎの刃に渡してください。

彼らの妻は子を失い、また寡婦となり、

男は疫病にかかつて死に、

若い者は、戦争でつるぎに殺されますように。

二三 あなたが敵をにわかになに彼らに臨ませられるとき、

彼らの家から叫び声が聞えますように。

彼らは穴を掘って、わたしを捕えようとし、

わなをつくつて、わたしの足を捕えようとしたからです。

二三 主よ、あなたは彼らがわたしを殺すためにめぐらしている計略を皆ごぞんじです。

その悪をゆるすことなく、

その罪をあなたの前から消し去らないでください。

彼らをあなたの前に倒れさせてください。

あなたのお怒りになる時に彼らを罰してください。

第十九章

一 主はこう言われる、「行つて、陶器師のびんを買い、民の長老と年長の祭司のうちの数人を伴つて、ニ瀬戸かけの門の入口にあるベンヒンノムの谷へ行き、その所で、わたしがあなたに語る言葉のべて、三言いなさい、『ユダの王たち、およびエルサレムに住む者よ、主の言葉を聞きなさい。万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、見よ、わたしは災をこの所に下す。おおよそ、その災のことを聞くものの耳は両方とも鳴る。四 彼らがわたしを捨て、この所を汚し、この所で、自分も先祖たちもユダの王たちも知らなかった他の神々に香をたき、かつ罪のない者の血を、この所に満たしたからである。五 また彼らはバアルのため

てバアルにささげた。これはわたしの命じたことではなく、定めたことでもなく、また思いもしなかったことである。六主は言われる、それゆえ、見よ、この所をトペテまたはベンヒンノムの谷と呼ばないで、虐殺の谷と呼ぶ日がくる。七またわたしはこの所でユダとエルサレムの計りごとを打ち破り、つるぎをもつて、彼らをその敵の前と、そのいのちを求める者の手に倒れさせ、またその死体を空の鳥と地の獣の食い物とし、ハかつ、この町を荒れすたれさせて、人に舌打ちされるものとする。そこを通る人は皆そのもろもろの災を見て身震いし、舌打ちする。九また彼らがその敵とその命を求める者と共に囲まれて苦しみ悩む時、わたしは彼らに自分のむすこの肉、娘の肉を食べさせる。彼らはまた互にその友の肉を食べるようになる。』

一〇そこで、あなたは、一緒に行く人々の目の前で、そのびんを砕き、二そして彼らに言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる、陶器師の器をひとたび砕くならば、もはやもとのようにすることはできない。このようにわたしはこの民とこの町とを砕く。人々はほかに葬るべき場所がないために、トペテに葬るであろう。三主は仰せられる、わたしはこの所と、ここに住む者にとにこのようにし、この町をトペテのようにする。四エルサレムの家とユダの王たちの家、すなわち彼らがその屋上で天の衆群に香をたき、ほかの神々に酒を注いだ家は、皆トペテの所のように汚される。』

一四 エレミヤは主が彼をつかわして預言させられたトペテから帰つてきて、主の家の庭に立ち、すべての民に言った、一五「万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、見よ、わたしは、この町とそのすべての村々に、わたしの言つたもろもろの災を下す。彼らが強情で、わたしの言葉に聞き従おうとしないからである」。

第二〇章

一 さて祭司インメルの子で、主の宮のつかさの長であつたパシユルは、エレミヤがこれらの事を預言するのを聞いた。二そしてパシユルは預言者エレミヤを打ち、主の宮にある上のベニヤミンの門の足かせにつないだ。三その翌日パシユルがエレミヤを足かせから解き放した時、エレミヤは彼に言った、「主はあなたの名をパシユルとは呼ばないで、『恐れが周囲にある』と呼ばれる。四主はこう仰せられる、見よ、わたしはあなたを、あなた自身とあなたのすべての友だちに恐れを起させる者とする。彼らはあなたが見ている目の前で敵のつるぎに倒れる。わたしはまたユダのすべての民をバビロン王の手に渡す。彼は彼らを捕えてバビロンに移し、つるぎをもつて殺す。五わたしはまたこの町のすべての富と、その獲たすべての物と、そのすべての貴重な物と、ユダの王たちのすべての宝物をその敵の手に渡す。彼ら

はこれのかすめ、民を捕えてバビロンに移す。ハパシユルよ、あなたと、あなたの家に住む者とはみな捕え移される。あなたはバビロンに行つて、その所で死に、その所に葬られる。あなたも、あなたが偽つて預言した言葉に聞き従つた友もみなそのようになる」。

七主よ、あなたがわたしを欺かれたので、

わたしはその欺きに従いました。

あなたはわたしよりも強いので、

わたしを説き伏せられたのです。

わたしは一日中、物笑いとなり、

人はみなわたしをあざけります。

八それは、わたしが語り、呼ばれることに、

「暴虐、滅亡」と叫ぶからです。

主の言葉が一日中、

わが身のはずかしめと、あざけりになるからです。

九もしわたしが、「主のことは、重ねて言わない、

このうえその名によつて語る事はしない」と言えば、

主の言葉がわたしの心にあつて、燃える火の

わが骨のうちに閉じこめられているようで、

それを押えるのに疲れはてて、

耐えることができません。

一〇多くの人のささやくのを聞くからです。

恐れが四方にあります。

「告発せよ。さあ、彼を告発しよう」と言つて、

わが親しい友は皆

わたしのつまずくのを、うかがっています。

また、「彼は欺かれるだろう。

そのとき、われわれは彼に勝つて、

あだを返すことができる」と言います。

二しかし主は強い勇士のように

わたしと共におられる。

それゆえ、わたしに迫りくる者はつまずき、

わたしに打ち勝つことはできない。

彼らは、なし遂げることができなくて、

大いに恥をかく。

その恥は、いつまでも忘れられることはない。

三正しき者を試み、

人の心と思ひを見られる万軍の主よ、

あなたが彼らに、

あだを返されるのを見せてください。

わたしはあなたに、わたしの訴えを

お任せしたからです。

四主に向かつて歌い、主をほめたたえよ。

主は貧しい者の命を、

悪人（あくにん）の手（て）から救（すく）われたからである。

一四 わたしの生（う）まれた日はのろわれよ。

母（はは）がわたしを産（う）んだ日は祝福（しゅくふく）を受けるな。

一五 わたしの父（ちち）に「男（おとこ）の子（こ）が、生（う）れました」と告（つ）げて、彼（かれ）を大（おお）いに喜（よろこ）ばせた人（ひと）は、のろわれよ。

一六 その人（ひと）は、主（しゅ）のあわれみを受（う）けることなく、滅（ほろ）ぼされた町（まち）のようになれ。

朝（あさ）には、彼（かれ）に叫（さけ）びを聞（き）かせ、

昼（ひる）には戦（たたか）いの声（こゑ）を聞（き）かせよ。

一七 彼（かれ）がわたしを胎（たい）内で殺（ころ）さず、

わが母（はは）をわたし（はは）の墓（はかば）場（ば）となさず、

その胎（たい）をいつまでも大（おお）きくしなかつたからである。

一八 なにゆえにわたしは胎（たい）内（ない）を出（で）てきて、

悩（なや）みと悲（かな）しみに会（あ）い、恥（はじ）れを受けて一生（いっしやう）を過（す）すのか。

第二章

一ゼデキヤ王（おう）は、マルキヤの子（こ）パシユルと祭司（さいし）マアセヤの子（こ）ゼパニヤを、エレミヤのもとにつかわし、二「バビロンの王（おう）ネブカデレザルがわれわれを攻（せ）めようとしているゆえ、われわれのため（に）主（しゅ）に尋（たず）ねてほしい。主（しゅ）はそのもろもろの不思議（ふしぎ）なわざをもって、われわれを助（たす）け、バビロンの王（おう）をわれわれから退（しりぞ）かせら

れるかも知（し）れない」と言（い）わせた。その時（とき）主（しゅ）の言葉（ことば）がエレミヤに臨（ぞ）んだ。

三 エレミヤは彼（かれ）らに答（こた）えて言（い）った、「あなたがたはゼデキヤにこのように言（い）いなさい、四『イスラエルの神（かみ）主（しゅ）はこう仰（おほ）せられる、見（み）よ、あなたがたが、この城（じやう）壁（へき）の外（そと）にあつて、あなたがたを攻（せ）め囲（かこ）むバビロンの王（おう）およびカルデヤびとと戦（たたか）うとき、わたしはあなたがたの手に持（も）っている武器（ぶき）をとりあげ、これを町（まち）の中に集（あつ）めさせる。五 わたしは手（て）を伸（の）べ、強（つよ）い腕（うで）をもって、怒（いか）り、憤（ふ）り、激（げ）しく怒（いか）つて、あなたがたを攻（せ）める。六 わたしはまたこの町（まち）に住（す）む人（ひと）と獸（けもの）とを撃（う）つ。彼（かれ）らはみな重（おも）い疫（えき）病（びやう）にかかつて死（し）ぬ。七 主（しゅ）は言（い）われる、この後（のち）、わたしはユダの王（おう）ゼデキヤとその家（け）来（らい）たち、および疫（えき）病（びやう）と、つるぎと、ききんを免（まぬ）かして、この町（まち）に残（のこ）っている民（たみ）を、バビロンの王（おう）ネブカデレザルの手（て）と、その敵（てき）の手（て）およびその命（いのち）を求（もと）める者（もの）の手に渡（わた）す。バビロンの王（おう）はつるぎの刃（や）にかけて彼（かれ）らを撃（う）ち、彼（かれ）らを惜（お）しまず、顧（か）みず、またあわれむこともしない』。

八 あなたはまたこの民（たみ）に言（い）いなさい、『主（しゅ）はこう仰（おほ）せられる、見（み）よ、わたしは命（いのち）の道（みち）と死（し）の道（みち）とをあなたがたの前に置（お）く。九 この町（まち）にとどまる者（もの）は、つるぎと、ききんと、疫（えき）病（びやう）とで死（し）ぬ。しかし、出（で）て行（い）つて、あなたがたを攻（せ）め囲（かこ）んでいるカルデヤびとに降（こう）伏（ふく）する者（もの）は死（し）を免（まぬ）か、その命（いのち）は自分（じぶん）のぶんどり物（もの）となる。一〇 主（しゅ）は言（い）われる、わたしがこの町（まち）に顔（かお）を向（む）けたのは幸（さい）を与（あた）えるた

第二章

めではなく、災わざわいを与えるためである。この町はバビロンの王の手てに渡わたされる。彼は火をもつて、これを焼やき払はらう。」

二 またユダの王の家に言いなさい、『主の言葉を聞きなさい。ニダビデの家よ、主はこう仰おほせられる、朝あさごとに、正しいさばきを行い、物を奪うばわれた人をしえたげる者の手から救すくえ。そうしないと、あなたがたの悪い行いのために、わたしの怒りは火のように燃えて、それを消けすことはできない』。

三 「主は言いわれる、谷に住すむ者よ、平原の岩よ、見よ、わたしはあなたに敵する。あなたがたは言いう、『だれが下くだつてきて、われわれを攻めせめるものか、だれがわれわれのいる所ところに、はいるものか』と。

四 わたしはあなたがたを、その行いの実みによつて罰する。またその林はやしに火をつけて、その周囲しゅういのものをみな焼き尽つくすと、主は言いわれる。」

一 主はこう言いわれる、「ユダの王の家に下くだり、その所ところにこの言葉ことば

をのべて、三言いいなさい、『ダビデの位くらいにすわるユダの王よ、あなたと、あなたの家臣かしん、および、この門からいるあなたの民は主の言葉を聞きなさい。三 主はこう言いわれる、公平こうへいと正義せいぎを行い、物を奪うばわれた人をしえたげる者の手から救すくい、異邦いほうの人、孤児こじ、寡婦かふを悩まし、しえたげてはならない。またこの所に、罪なき者の血ちを流してはならない。四 もしあなたがたがこの言葉を真実しんじつに行うならば、ダビデの位くらいにすわる王とその家臣かしん、およびその民は、車と馬に乗のつて、この家の門にはいることができる。五 しかしあなたがたがこの言葉を聞かないならば、わたしは自身じしんをさして誓ちかうが、この家は荒れ地となると、主は言いわれる。六 主はユダの王の家についてこう言いわれる、

あなたはわたしに対してギレアドのようであり、

レバノンの頂いたきただききのようである。

しかし、わたしは必ずあなたを荒れ地にし、

人の住すまない町にする。

七 わたしは滅ぼす者を設もつけて、あなたを攻めさせる、

彼らはおのおのその武器をとり、

あなたの麗うつくしい香柏こうはくを切り倒し、

火に投げ入れる。

八 多くの国の人はこの町を過すぎ、互に語かたつて、「なぜ主はこの大いなる町をこのようにされたのか」と言うとき、九 人は答こたえて、「これは彼らかれがその神、主の契約けいやくを捨てて他の神々かみかみを拝はいし、これ

に仕えたからである」と言うであらう』。

一〇 死んだ者のために泣くことなく、

またそのために嘆いてはならない。

捕え移されてゆく者のために、激しく泣け。

彼はふたたび帰ってきて、

その故郷を見ることがないからである。

ニ ユダの王ヨシヤの子シヤルムは父ヨシヤについて王となったが、ついにこの所から出て行った。主は彼についてこう言われる、「彼は再びここに帰らない。三 彼はその捕え行かれた所で死に、再びこの地を見ない」。

二三 「不義をもつてその家を建て、

不法をもつてその高殿を造り、

隣り人を雇って何をも与えず、

その賃金を払わない者はわざわいである。

一四 彼は言う、『わたしは自分のために大きな家を建て、

広い高殿を造ろう』と。

そしてこれがために窓を造り、

香柏の鏡板でおおい、それを朱で塗る。

一五 あなたは競って香柏を用いることによって、

王であると思うのか。

あなたの父は食い飲みし、

公平と正義を行って、幸を得たのではないか。

一六 彼は貧しい人と乏しい人の訴えをただして、
さいわいを得た。

こうすることがわたしを知ることではないかと
主は言われる。

一七 しかし、あなたは目も心も、
不正な利益のためにのみ用い、

罪なき者の血を流そうとし、
圧制と暴虐を行おうとする」。

一八 それゆえ、主はユダの王ヨシヤの子エホヤキムについてこう
言われる、

「人々は『悲しいかな、わが兄』、

『悲しいかな、わが姉』』と言つて、

彼のために嘆かない。

また『悲しいかな、主君よ、

『悲しいかな、陛下よ』』と言つて嘆かない。

一九 ろばが埋められるように、彼は葬られる。

引かれて行つて、

エルサレムの門の外に投げ捨てられる」。

二〇 「レバノンに登って呼ばわり、

バシヤンにあなたの声をあげ、

アバリムから呼ばわれ。

あなたの愛する者がみな滅ぼされるからだ。

二 あなたの榮えていた時、わたしはあなたに語ったが『聞きたくはない』と言った。

あなたがわたしの声に聞き従わないことは、あなたの幼い時からの、ならわしであった。

三 あなたの牧者はみな、風に追い立てられ、あなたの愛する者は捕え移される。

その時、あなたは自分のもろもろの悪のために、恥じ、うろたえる。

三三 レバノンに住み、

香柏の中に巢をつくっている者よ、

子を産む女に臨む苦しみのような苦痛が

あなたに臨むとき、

あなたはどんなに嘆くことであろうか」。

三四 「主は言われる、わたしは生きています。ユダの王エホヤキムの子コニヤが、わたしの右手の指輪であっても、わたしはあなたを抜き取る。三五 あなたの命を求める者の手、あなたがその顔を恐れる者の手、すなわちバビロンの王ネブカデレザルの手と、カルデヤびとの手にあなたを渡す。三六 わたしは、あなたと、あなたを産んだ母を、あなたがたの生れた国でない他の国に追いやる。あなたがたはそこで死ぬ。三七 彼らが帰りたいとせつに願う国に、彼らは再び帰ることができない」。

三八 この人コニヤは

卑しむべき、こわれたつぽであろうか、だれも心に留めない器であろうか。

なぜ彼とその子孫は追いやられて、知らない地に投げやられるのか。

三九 ああ、地よ、地よ、地よ、主の言葉を聞けよ。

四〇 主はこう言われる、

「この人を、子なき人として、

またその一生のうち、

榮えることのない人として記録せよ。

その子孫のうち、ひとりも榮えて、

ダビデの位にすわり、

ユダを治めるものが再び起らないからである」。

第二章

一 主は言われる、「わが牧場の羊を滅ぼし散らす牧者はわざわいである」。二 それゆえイスラエルの神、主はわが民を養う牧者についてこう言われる、「あなたがたはわたしの群れを散らし、これを追いやつて顧みなかった。見よ、わたしはあなたがたの悪しき行いによつてあなたがたに報いると、主は言われる。三 わたしの群れの残った者を、追いやつたすべての地から集め、再び

これをそのおりに帰らせよう。彼らは子を産んでその数が多い。四わたしはこれを養う牧者をその上に立てる、彼らは再び恐れることなく、またおのくことなく、いなくなることもないと、主は言われる。

五主は仰せられる、見よ、わたしがダビデのために一つの正しい枝を起す日がくる。彼は王となつて世を治め、榮えて、公平と正義を世に行う。六その日ユダは救を得、イスラエルは安らかにある。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる。

七主は言われる、それゆえ見よ、人々は『イスラエルの民をエジプトの地から導き出された主は生きておられる』とまた言わないで、ハ『イスラエルの家の子孫を北の地と、そのすべて追いやられた地から導き出された神は生きておられる』という日がくる。その時、彼らは自分の地に住んでいる」。

九預言者たちについて。

わが心はわたしのうちに破れ、

わが骨はみな震う。

主とその聖なる言葉のために、

わたしは酔っている人のよう、

酒に打ち負かされた人のようである。

「この地に姦淫を行うものが満ちているからだ。

のろいによって地は嘆き、荒野の牧場はかわく。

彼らの道は悪く、その力は正しくない。

二「預言者と祭司とは共に神を汚す者である。

わたしの家においてすら

彼らの悪を見たとき、主は言われる。

三それゆえ、彼らの道は、

おのずから暗黒の中にある

なめらかな道のようになり、

彼らは押されてその道に倒れる。

わたしが彼らの罰せられる年に、

災をその上に臨ませるからであると、主は言われる。

三わたしはサマリヤの預言者のうちに

不快な事のあるのを見た。

彼らはバアルによつて預言し、

わが民イスラエルを惑わした。

四しかしエルサレムの預言者のうちには、

恐ろしい事のあるのを見た。

彼らは姦淫を行い、偽りに歩み、

悪人の手を強くし、

人をその悪から離れさせない。

彼らはみなわたしにはソドムのようであり、

その民はゴモラのようである」。

五それゆえ万軍の主は預言者についてこう言われる、

「見よ、わたしは彼らに、にがよもぎを食べさせ、

毒の水を飲ませる。

神を汚すことがエルサレムの預言者から出て、全地に及んでいるからである」。

二六 万軍の主はこう言われる、「あなたがたに預言する預言者の言葉を聞いてはならない。彼らはあなたがたに、むなししい望みをいだかせ、主の口から出たのでない、自分の心の黙示を語るのである。二七 彼らは主の言葉を軽んじる者に向かって絶えず、『あなたがたは平安を得る』と言い、また自分の強情な心にしたがつて歩むすべての人に向かって、『あなたがたに災はこない』と言う」。

一八 彼らのうちだれか主の議會に立つて、その言葉を見聞きした者があろうか。

だれか耳を傾けてその言葉を聞いた者があろうか。

一九 見よ、主の暴風がくる。

憤りと、つむじ風が出て、悪人のこうべをうつ。

二〇 主の怒りは、み心に思い定められたことを

なし遂げられるまで退くことはない。

末の日にあなたがたはそれを明らかに悟る。

二一 預言者たちはわたしがつかわさなかったのに、

彼らは走った。

わたしが、彼らに告げなかったのに、

彼らは預言した。

三三 もし彼らがわたしの議會に立ったのであれば、

わたしの民にわが言葉を告げしめて、

その悪い道と悪い行いから、離れさせたであらうに。

三三 「主は言われる、わたしはただ近く神であって、遠くの神ではないのであるか。三四 主は言われる、人は、ひそかな所に身を隠して、わたしに見られないようにすることができようか。

主は言われる、わたしは天と地に満ちていないか。三五 わが名によって偽りを預言する預言者たちが、『わたしは夢を見た、わたしは夢を見た』と言うのを聞いた。三六 偽りを預言する預言者たちの心に、いつまで偽りがあるのか。彼らはその心の欺きを預言する。三七 彼らはその先祖がバアルに従って

わが名を忘れたように、互に夢を語って、わたしの民にわが名を忘れさせようとする。三八 夢をみた預言者は夢を語るがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は誠実にわたしの言葉を語らなければならぬ。わらと麦とをくらべることができようか

と、主は言われる。三九 主は仰せられる、わたしの言葉は火のようではないか。また岩を打ち砕く鎚のようではないか。四〇 それゆえ見よ、わたしはわたしの言葉を互に盗む預言者の敵となる

と、主は言われる。四一 見よ、わたしは、『主は言いたもう』と舌をもって語る預言者の敵となると、主は言われる。四二 主は仰せられる、見よ、わたしは偽りの夢を預言する者の敵となる。彼らはそれを語り、またその偽りと大言をもってわたしの民を惑

わす。わたしが彼らをつかわしたのではなく、また彼らに命じたでもない。それで彼らはこの民にすこしも益にならないと、主は言われる。

「この民のひとり、または預言者、または祭司があなたに、『主の重荷はなんですか』と問うならば、彼らに答えなさい、『あなたがたがその重荷です。そして主は、あなたがたを捨てると言っておられます』と。三三そして、『主の重荷』と言うその預言者、祭司、または民のひとりを、その家族と共にわたしは罰する。三五あなたがたは、みな互に、隣りに、また兄弟に、こう言わなければならない、『主はなんと答えられましたか』、『主はなんと答えられましたか』と。三六しかし重ねて『主の重荷』と言ってはならない。重荷は人おのの自分の言葉だからである。あなたがたは生ける神、万軍の主なるわれわれの神の言葉を曲げる者である。三七あなたは預言者にこう言わなければならない、『主はあなたになんと答えられましたか』、『主はなんと答えられましたか』と。三八もしあなたがたが『主の重荷』と言うならば、主はこう仰せられる、『わたしが人をあなたがたにつかわして、あなたがたは『主の重荷』と言ってはならないと言わせたのに、あなたがたは『主の重荷』という言葉を使ったので、三九わたしは必ずあなたがたを捕え移させ、あなたがたとあなたがたの先祖とに与えたこの町と、あなたがたとを、わたしの前から捨て去る。四〇そして、忘れられることのない永遠のはずかし

めと永遠の恥を、あなたがたにこうむらせる』。

第二章

「バビロンの王ネブカデレザルがユダの王エホヤキムの子エコンニヤおよびユダの君たちと工匠と鍛冶をエルサレムからバビロンに移して後、主はわたしにこの幻をお示しになった。見よ、主の宮の前に置かれているいちじくを盛った二つのかごがあった。二その一つのかごには、はじめて熟したような非常に良いいちじくがあり、ほかのかごには非常に悪くて食べられないほどの悪いいちじくが入れてあった。三主はわたしに、『エレミヤよ、何を見るか』と言われた。わたしは、『いちじくです。その良いいちじくは非常によく、悪いほうのいちじくは非常に悪くて、食べられませんか』と答えた。

四主の言葉がまたわたしに臨んだ、五「イスラエルの神、主はこう仰せられる、この所からカルデヤびとの地に追いつたユダの捕われ人を、わたしはこの良いいちじくのように顧みて恵もう。六わたしは彼らに目をかけてこれを恵み、彼らをこの地に返し、彼らを立てて倒さず、植えて抜かない。七わたしは彼らにわたしが主であることを知る心を与えよう。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らは一心にわたしのものに帰ってくる。

ハ主はこう仰せられる、わたしはユダの王ゼデキヤとそのつかさたち、およびエルサレムの人の残つてこの地にいる者ならびにエジプトの地に住んでいる者を、この悪くて食べられない悪いいちじくのようにしよう。カわたしは彼らを地のもろもろの国で、忌みきらわれるものとし、またわたしの追いやるすべての所で、はずかしめに会わせ、ことわざとなり、あざけりと、のろいに会わせる。〇わたしはつるぎと、ききんと、疫病を彼らのうちに送つて、ついに彼らをわたしに彼らとその先祖とに与えた地から絶えさせる」。

第二十五章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年（バビロンの王ネブカデレザルの元年）にユダのすべての民についての言葉がエレミヤに臨んだ。ニ預言者エレミヤはこの言葉をユダのすべての民とエルサレムに住むすべての人に告げて言つた、三「ユダの王アモンの子ヨシヤの十三年から今日にいたるまで二十三年の間、主の言葉がわたしに臨んだ。わたしはたゆまずにそれをあなたがたに語つてきたが、あなたがたは聞かなかつた。四主はたゆまず、そのしもべである預言者を、あなたがたにつかわされたが、あなたがたは聞かずまた耳を傾けて聞こうとしなかつた。五彼らは言つた、『あなたがたはおの今その悪の道と悪い行い

を捨てなさい。そうすれば主が昔からあなたがたと先祖たちとに与えられた地に永遠に住むことができる。六あなたがたは、ほかの神に従つて、それに仕え、それを拜んではならない。あなたがたの手で作つたものをもつて、わたしを怒らせてはならない。このようなことをしないなら、わたしはあなたがたをそこなうことはない』と。セしかしあなたがたはわたしに聞き従わず、あなたがたの手で作つた物をもつて、わたしを怒らせて自ら害を招いたと、主は言われる。

ハそれゆえ万軍の主はこう仰せられる、あなたがたがわたしの言葉に聞き従わないゆえ、カ見よ、わたしは北の方のすべての種族と、わたしのしもべであるバビロンの王ネブカデレザルを呼び寄せて、この地とその民と、そのまわりの国々を攻め滅ぼさせ、これを忌みきらわれるものとし、人の笑いものとし、永遠のはずかしめとすると、主は言われる。〇またわたしは喜びの声、楽しみの声、花婿の声、花嫁の声、ひきうすの音、ともしびの光を彼らの中に絶えさせる。ニこの地はみな滅ぼされて荒れ地となる。そしてその国々は七十年の間バビロンの王に仕える。三主は言われる、七十年の終つた後に、わたしはバビロンの王と、その民と、カルデヤびとの地を、その罪のために罰し、永遠の荒れ地とする。ニわたしはあの地について、わたしが語つたすべての言葉をその上に臨ませる。これはエレミヤが、万国のことについて預言したものであつて、みなこの書に

されている。一四多くの国々と偉大な王たちとは、彼らをさえ奴隷として仕えさせる。わたしは彼らの行いと、その手のわざに従って報いる」。

一五イスラエルの神、主はわたしにこう仰せられた、「わたしの手から、この怒りの杯を受けて、わたしがあなたをつかわす国々の民に飲ませなさい。一六彼らは飲んで、よろめき狂う。これはわたしは彼らのうちに、つるぎをつかわそうとしているからである」。

一七こうしてわたしは主の手から杯を受け、主がわたしをつかわされた国々の民に飲ませた。一八すなわちエルサレムとユダのすべての町と、その王たちおよびそのつかさたちには飲ませて、それらを滅ぼし、荒れ地とし、人の笑いものとし、のろわれるものとした。今日のとおりである。一九またエジプトの王パロとその家来たち、その君たち、そのすべての民と、二〇もろもろの寄留の異邦人、およびウズの地のすべての王たち、およびペリシテびとの地のすべての王たち、(アシケロン、ガザ、エクロン、アシドドの残りの者)、ニエドム、モアブ、アンモンの子孫、三ツ口のすべての王たち、シドンのすべての王たち、海のかなたの海沿いの地の王たち、三三デダン、テマ、ブズおよびすべて髪の毛のすみずみをそる者、三四アラビヤのすべての王たち、荒野の雑種の民のすべての王たち、三五ジムリのすべての王たち、エラムのすべての王たち、メデアのすべての王たち、二六北のすべての王

たちの遠き者、近き者もつぎつぎに、またすべて地のおもてにある世の国々の王たちもこの杯を飲む。そして彼らの次にバビロンの王もこれを飲む。

二七「それであなたは彼らに言いなさい、『万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、飲め、酔って吐け、倒れて再び立つな、わたしがあなたがたのうちに、つるぎをつかわすからである』。二八「もし彼らがあなたの手から杯を受けて飲むことをしないならば、あなたは彼らに言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる、あなたがたは必ず飲まなければならない。二九見よ、わたしの名をもつて呼ばれるこの町にさえ災を下すのだ。どうしてあなたがたが罰を免れることができようか。あなたがたは罰を免れることはできない。わたしがつるぎを呼び寄せて、地に住むすべての者を攻めるからであると、万軍の主は仰せられる』。三〇それゆえ、あなたは彼らにこのすべての言葉を預言して言いなさい、

『主は高い所から呼ばわり、その聖なるすみから声を出し、自分のすみかに向かつて大いに呼ばわり、地に住むすべての者に向かつてぶどうを踏む者のように叫ばれる。三三叫びは地の果にまで響きわたる。主が国々と争い、

すべての肉なる者をさばき、
悪人をつるぎに渡すからであると、主は言われる。』

三 万軍の主はこう仰せられる、
見よ、国から国へ災が出て行く。

大きなあらしが地の果からおこる。

三 その日、主に殺される人々は、地のこの果から、かの果に及ぶ。彼らは悲しまれず、集められず、また葬られずに、地のおもてに糞土となる。

三 牧者よ、嘆き叫べ、
群れのかしらたちよ、灰の中にまろべ。

あなたがたのほふられる日、
散らされる日が来たからだ。

あなたがたは選り分けられた雄羊のように倒れる。

三 牧者には、のがれ場なく、
群れのかしらたちは逃げる所がない。

三 牧者の叫び声と、

群れのかしらたちの嘆きの声が聞える。

主が彼らの牧場を滅ぼしておられるからだ。

三 七 主の激しい怒りによって、

平和な牧場は荒れていく。

三 八 ししのように彼はその巢を出た。

主のつるぎと、その激しい怒りによって、

彼らの地は荒れ地となった。』

第二十六章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが世を治めた初めのころ、主からこの言葉があった、
「主はこう仰せられる、主の宮の庭に立ち、わたしがあなたに命じて言わせるすべての言葉を、主の宮で礼拝するために来ているユダの町々の人々に告げなさい。ひと言をも言い残しておいてはならない。三 彼らが聞いて、おのその悪い道を離れることがあるかも知れない。そのとき、わたしは彼らの行いの悪いために、災を彼らに下さうとしたのを思いなおす。四 あなたは彼らに言いなさい、『主はこう仰せられる、もしあなたがたがわたしに聞き従わず、わたしがあなたがたの前に定めおいた律法を行わず、五 わたしがあなたがたにしきりにつかわすわたしのしもべである預言者の言葉に聞き従わなければ、(あなたがたは聞き従わなかったが、)六 わたしはこの宮をシロのようにし、またこの町を地の万国にのろわれるものとする。』」

七 祭司と預言者およびすべての民は、エレミヤが主の宮でこれらの言葉を語るのを聞いた。ハエレミヤが主に命じられたすべての言葉を民に告げ終った時、祭司と預言者および民はみな彼を捕えて言った、「あなたは死ななければならない。九 なぜあな

たは主の名によつて預言し、この宮はシロのようになり、この町は荒されて住む人もなくなるであらうと言つたのか」と。民はみな主の宮に集まつてエレミヤを取り囲んだ。

「ユダのつかさたたちはこの事を聞いて王の宮殿を出て主の宮に上り、主の宮の「新しい門」の入口に座した。二祭司と預言者らは、つかさたちとすべての民に訴えて言つた、「この人は死刑に処すべき者です。あなたがたが自分の耳で聞かれたように、この町に逆らう預言をしたのです」。

三その時エレミヤは、つかさたちとすべての民に言つた、「主はわたしをつかわし、この宮とこの町にむかつて、預言をさせられたので、そのすべての言葉をあなたがたは聞いた。三それで、あなたがたは今、あなたがたの道と行いを改め、あなたがたの神、主の声に聞き従いなさい。そうするならば主はあなたがたに災を下そうとしたことを思いなおされる。四見よ、わたしはあなたがたの手の中にある。あなたがたの目に、良いと見え、正しいと思うことをわたしに行うがよい。五ただ明らかにこのことを知つておきなさい。もしあなたがたがわたしを殺すならば、罪なき者の血はあなたがたの身と、この町と、その住民とに帰する。まことに主がわたしをつかわして、このすべての言葉をあなたがたの耳に、告げさせられたからである」。

六つかさたちと、すべての民とは、祭司と預言者に言つた、「この人は死刑に処すべき者ではない。われわれの神、主の名に

よつてわれわれに語つたのである」。七その時この地の長老たち数人が立つて、そこに集まつているすべての者に告げて言つた、「八ユダの王ヒゼキヤの世に、モレシテびとミカはユダのすべての民に預言して言つた、『万軍の主はこう仰せられる、シオンは畑のように耕され、

エルサレムは石塚となり、
宮の山は木のおい茂る高い所となる』。

九ユダの王ヒゼキヤと、すべてのユダの人は彼を殺そうとしたことがあろうか。ヒゼキヤは主を恐れ、主の恵みを求めたので、主は彼らに災を下すとお告げになったのを思いなおされたではないか。しかし、われわれは、自分の身に大きな災を招こうとしている」。

一〇主の名によつて預言した人がほかにもあつた。すなわちキリアテ・ヤリムのシマヤの子ウリヤである。彼はエレミヤとおなじような言葉をもつて、この町とこの地にむかつて預言した。三エホヤキム王と、そのすべての勇士と、すべてのつかさたたちはその言葉を聞いた。そして王は彼を殺そうと思つたが、ウリヤはこれ聞いて恐れ、エジプトに逃げて行つたので、三エホヤキム王は人をエジプトにつかわした。すなわちアクボルの子エルナタンと他の数名の人を、エジプトにつかわした。三彼らはウリヤをエジプトから引き出し、エホヤキム王のもとに連れてきたので、王はつるぎをもつて彼を殺し、その死体を共同

墓地に捨てさせた。

二四しかしシヤパンの子アヒカムはエレミヤを助け、民の手に渡されて殺されることのないようにした。

第二十七章

一ユダの王ヨシヤの子ゼデキヤが世を治め始めたころ、この言葉が主からエレミヤに臨んだ。二すなわち主はこうわたしに仰せられた、「綱と、くびきとを作つて、それをあなたの首につけ、ミエルサレムにいるユダの王ゼデキヤの所に来た使者たちによつて、エドムの王、モアブの王、アンモンびとの王、ツロの王、シドンの王に言いおくりなさい。四彼らの主君にこの命を伝えさせなさい、『万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、あなたがたは主君にこのように告げなければならぬ。五わたしは大いなる力と伸べた腕とをもつて、地と地の上にいる人と獣とをつくつた者である。そして心のままに地を人に与える。六いまわたしはこのすべての国を、わたしのしもべであるバビロンの王ネブカデネザルの手に与え、また野の獣をも彼に与えて彼に仕えさせた。七彼の地に時がくるまで、万国民は彼とその子とその孫に仕える。その時がくるならば、多くの国と大いなる王たちとが彼を自分の奴隷にする。八バビロンの王ネブカデネザルに仕えず、バビロンの王のくび

きを自分の首に負わない民と国とは、わたしがつるぎと、ききんと、疫病をもつて罰し、ついには彼の手によつてことごとく滅ぼすと主は言われる。九それで、あなたがたの預言者、占い師、夢みる者、法師、魔法使が、「あなたがたはバビロンの王に仕えることはない」と言つても、聞いてはならない。一〇彼らはあなたがたに偽りを預言して、あなたがたを自分の国から遠く離れさせ、わたしに、あなたがたを追い出してあなたがたを滅ぼさせるのである。二しかしバビロンの王のくびきを首に負つて、彼に仕える国民を、わたしはその故国に残らせ、それを耕して、そこに住まわせると主は言われる』」。

三わたしはユダの王ゼデキヤにも同じように言つた、「あなたがたは、バビロンの王のくびきを自分の首に負つて、彼とその民とに仕え、そして生きなさい。三どうしてあなたと、あなたの民とが、主がバビロンの王に仕えない国民について言われたように、つるぎと、ききんと、疫病に死んでよからうか。四あなたがたはバビロンの王に仕えることはない」とあなたがたに告げる預言者の言葉を聞いてはならない。彼らがあなたがたに預言していることは偽りであるからだ。五主は言われる、わたしは彼らをつかわしたのではないのに、彼らはわたしの名によつて偽つて預言している。そのために、わたしはあなたがたを追い払い、あなたがたと、あなたがたに預言する預言者たちを滅ぼすようになるのだ」。

二六 わたしはまた祭司とこのすべての民とに語つて言つた、「主はこう仰せられる、『見よ、主の宮の器は今、すみやかに、バビロンから返されてくる』とあなたがたに預言する預言者の言葉を聞いてはならない。それは、彼らがあなたがたに預言していることは偽りであるからだ。一七 彼らのいうことを聞いてはならない。バビロンの王に仕え、そして生きなさい。どうしてこの町が荒地となつてよからうか。一八 もし彼らが預言者であつて、主の言葉が彼らのうちにあるのであれば、主の宮とユダの王の宮殿とエルサレムとに残されている器が、バビロンに移されないように、万軍の主にとりなしを願うべきだ。一九 万軍の主は柱と海と台、その他この町に残っている器について、こう仰せられる。二〇 これはバビロンの王ネブカデネザルが、ユダの王エホヤキムの子エコニヤ、およびユダとエルサレムのすべての身分の尊い人々を捕えてエルサレムからバビロンに移したときに、持ち去らなかつた器である。一一三 すなわち万軍の主イスラエルの神は、主の宮とユダの王の宮殿とエルサレムとに残されている器について、こう仰せられる。二三 これらはバビロンに携え行かれ、わたしが顧みる日までそこにおかれている。その後、わたしはこれらのものを、この所に携え帰らせると主は言われる」。

第二十八章

一 その年、すなわちユダの王ゼデキヤの治世の初め、その第四年の五月、ギベオン出身の預言者であつて、アズルの子であるハナニヤは、主の宮で祭司とすべての民の前でわたしに語つて言つた、「万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、わたしはバビロンの王のくびきを砕いた。三 二年の内に、バビロンの王ネブカデネザルが、この所から取つてバビロンに携えて行つた主の宮の器を、皆この所に帰らせる。四 わたしはまたユダの王エホヤキムの子エコニヤと、バビロンに行つたユダのすべての捕われ人をこの所に帰らせる。それは、わたしがバビロンの王のくびきを、砕くからであると主は言われる」。

五 そこで預言者エレミヤは主の宮のうちに立つている祭司とすべての民の前で、預言者ハナニヤに言つた。六 すなわち預言者エレミヤは言つた、「アアメン。どうか主がこのようにしてくださるように。どうかあなたの預言した言葉が成就して、バビロンに携えて行つた主の宮の器とすべての捕われ人を、主がバビロンから再びこの所に帰らせてくださるように。七 ただし、今わたしがあなたとすべての民の聞いている所で語るこの言葉を聞きなさい。八 わたしと、あなたの先に出た預言者は、むかしから、多くの地と大きな国について、戦いと、ききんと、疫病の事を預言した。九 平和を預言する預言者は、その預言者の言葉が成就す

るとき、真実に主がその預言者をつかわされたのであることが知られるのだ」。

「そこで預言者ハナニヤは預言者エレミヤの首から、くびきを取つて、それを砕いた。二そしてハナニヤは、すべての民の前で語り、『主はこう仰せられる、『わたしは二年のうちに、このように、万国民の首からバビロンの王ネブカデネザルのくびきを離して砕く』』と言った。預言者エレミヤは去つて行つた。

三預言者ハナニヤが預言者エレミヤの首から、くびきを離して砕いた後、しばらくして主の言葉がエレミヤに臨んだ、三「行つて、ハナニヤに告げなさい、『主はこう仰せられる、あなたは木のくびきを砕いたが、わたしはそれに替えて鉄のくびきを作ろう。四万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、わたしは鉄のくびきをこの万国民の首に置いて、バビロンの王ネブカデネザルに仕えさせる。彼らはこれに仕える。わたしは野の獣をも彼に与えた』。五預言者エレミヤはまた預言者ハナニヤに言った、『ハナニヤよ、聞きなさい。主があなたをつかわされたのではない。あなたはこの民に偽りを信じさせた。六それゆえ主は仰せられる、『わたしはあなたを地のおもてから除く。あなたは主に對する反逆を語つたので、今年のうちに死ぬのだ』』と」。

七預言者ハナニヤはその年の七月に死んだ。

第二九章

「これは預言者エレミヤがエルサレムから、かの捕え移された長老たち、およびネブカデネザルによつてエルサレムからバビロンに捕え移された祭司と預言者ならびにすべての民に送つた手紙に書きしるした言葉である。二それはエコニヤ王と太后と宦官およびユダとエルサレムのつかさたち、および工匠と鍛冶とがエルサレムを去つてのちに書かれたものであつて、三エレミヤはその手紙をシヤパンの子エラサおよびヒルキヤの子ゲマリヤの手によつて送つた。この人々はユダの王ゼデキヤがバビロンに行かせ、バビロンの王ネブカデネザルのもとにつかわしたものであつた。その手紙には次のように書いてあつた。四「万軍の主、イスラエルの神は、すべて捕え移された者、すなわち、わたしがエルサレムから、バビロンに捕え移された者に、こう言う、五あなたがたは家を建てて、それに住み、畑を作つてその産物を食べよ。六妻をめぐつて、むすこ娘を産み、また、そのむすこに嫁をめぐとり、娘をとつがせて、むすこ娘を産むようにせよ。その所であなたがたの数を増し、減つてはならない。セわたしはあなたがたを捕え移させたとこの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい。その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである。八万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたのうちにいる預言者と占い師に惑わされて

はならない。また彼らの見る夢に聞き従ってはならない。九それは、彼らがわたしの名によつてあなたがたに偽りを預言しているからである。わたしが彼らをつかわしたのではないと主は言われる。

一〇主はこう言われる、バビロンで七十年が満ちるならば、わたしはあなたがたを顧み、わたしの約束を果し、あなたがたをこの所に導き帰る。一一主は言われる、わたしがあなたがたに對していだいてゐる計画はわたしが知つてゐる。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに將來を与え、希望を与えようとするものである。一二その時、あなたがたはわたしに呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。一三あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、一四わたしはあなたがたに会うと主は言われる。わたしはあなたがたの繁栄を回復し、あなたがたを万国から、すべてわたしがあなたがたを追いやつた所から集め、かつ、わたしがあなたがたを捕われ離れさせたそのものと所に、あなたがたを導き帰ろうと主は言われる。

一五あなたがたは、『主はバビロンでわれわれのために預言者たちを起された』と言つたが、一一六主はダビデの位に座している王と、この町に住むすべての民で、あなたがたと共に捕え移されなかつた兄弟たちについて、こう言われる、一七『万軍の主は

こう言われる、見よ、わたしは、つるぎと、ききんと、疫病を彼らに送り、彼らを悪くて食べられない腐つたいちじくのようにしてしまふ。一八わたしはつるぎと、ききんと、疫病をもつて彼らのあとを追ひ、また彼らを地の万国に忌みきらわれるものとなし、わたしが彼らを追ひやる国々で、のろいとなり、恐れとなり、物笑いとなり、はずかしめとならせる。一九それは彼らがわたしの言葉に聞き従わなかつたからであると主は言われる。わたしはこの言葉を、わたしのしもべである預言者たちによつて、しきりに送つたが、あなたがたは聞こうともしなかつたと主は言われる。――二〇わたしがエルサレムからバビロンに送つたあなたがたすべての捕われ人よ、主の言葉を聞きなさい、二一『わたしの名によつて、あなたがたに偽りを預言しているコラヤの子アハブと、マアセヤの子ゼデキヤについて万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、見よ、わたしは彼らをバビロンの王ネブカデレザルの手に渡す。王はあなたがたの目の前で彼らを殺す。二二バビロンにいるユダの捕われ人は皆、彼らの名を、のろいの言葉に用いて、「主があなたがたをバビロンの王が火で焼いたゼデキヤとアハブのようにされるように」という。二三それは、彼らがイスラエルのうちで愚かな事をし、隣の妻と不義を行い、わたしが命じたのでない偽りの言葉を、わたしの名によつて語つたことによるのである。わたしはそれを知つており、またその証人であると主は言われる』。

二四 ネヘラムびとシマヤにあなたは言いなさい、二五 「万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、あなたは自分の名でエルサレムにいるすべての民と、マアセヤの子祭司ゼパニヤおよびすべての祭司に手紙を送つて言う、二六 『主は祭司エホヤダに代つてあなたを祭司とし、主の宮をつかさどらせ、すべて狂い、かつ預言する者を足かせと首かせにつなげられる。二七 そうであるのに、どうしてあなたは、あなたがたに預言しているアナトテのエレミヤを戒めないのか。二八 彼はバビロンにいるわれわれの所に手紙を送つて、捕われの時はなお長いゆえ、あなたがたは家を建ててそこに住み、畑を作つてその産物を食べよと言つてきた』」。

二九 祭司ゼパニヤはこの手紙を預言者エレミヤに読み聞かせた。三〇 その時、主の言葉がエレミヤに臨んだ、三一 「すべての捕われ人に書き送つて言いなさい、ネヘラムびとシマヤの事について主はこう仰せられる、わたしはシマヤをつかわさなかったのに、彼があなたがたに預言して偽りを信じさせたので、三二 主はこう仰せられる、見よ、わたしはネヘラムびとシマヤとその子孫を罰する。彼は主に対する反逆を語つたゆえ、彼に属する者で、この民のうちに住み、わたしが自分の民に行おうとしている良い事を見るものはひとりもない」。

第三〇章

一 主からエレミヤに臨んだ言葉。二 「イスラエルの神、主はこう仰せられる、わたしがあなたに語つた言葉を、ことごとく書物にしるしなさい。三 主は言われる、見よ、わたしがわが民イスラエルとユダの繁栄を回復する日が来る。主がこれを言われる。わたしは彼らを、その先祖に与えた地に帰らせ、彼らにこれを保たせる」。

四 これは主がイスラエルとユダについて言われた言葉である。

五 「主はこう仰せられる、われわれはおののきの声を聞いた。恐れがあり、平安はない。

六 子を産む男があるか、尋ねてみよ。

七 どうして男がみな子を産む女のように手を腰におくのわたしは見るのか。

八 なぜ、どの人の顔色も青く変つているのか。七 悲しいかな、その日は大いなる日であつて、それに比べるべき日はない。

九 それはヤコブの悩みの時である。

一〇 しかし彼はそれから救い出される。

一一 八万軍の主は仰せられる、その日わたしは彼らの首からそのくびきを碎き離し、彼らの束縛を解く。異邦の人はもはや、彼らを

使役^{しえき}することをしてない。九彼^{かれ}らはその神、主^{しゅ}と、わたしが彼ら^{かれ}のために立^たてるその王^{おう}ダビデに仕^{つか}える。

二〇主は仰^{おほ}せられる、

わがしもべヤコブよ、恐^{おそ}れることはない、イスラエルよ、驚^{おどろ}くことはない。

見^みよ、わたしがあなたを救^{すく}つて、遠^{とほ}くからかえし、あなたの子孫^{しそん}を救^{すく}つて、

その捕^{とら}え移^{うつ}された地^ちからかえすからだ。

ヤコブは帰^{かえ}つてきて、穏^{おだ}やかに安^{やす}らかにおり、彼^{かれ}を恐^{おそ}れさせる者^{もの}はない。

二主は言^いわれる、

わたしはあなたと共にいて、あなたを救^{すく}う。

わたしはあなたを散^ちらした国^{くに}々^{くに}を

ことごとく滅^{ほろ}ぼし尽^{つく}す。

しかし、あなたを滅^{ほろ}ぼし尽^{つく}すことはしない。

わたしは正^{ただ}しい道^{みち}に従^{したが}ってあなたを懲^こらしめる。

決^{けつ}して罰^{ばつ}しないではおかない。

二三主は仰^{おほ}せられる、

あなたの痛^{いた}みはいえず、あなたの傷^{きず}は重^{おも}い。

二四あなたの訴^{うった}えを支持^{しじ}する者^{もの}はなく、

あなたの傷^{きず}をつつむ薬^{くすり}はなく、

あなたをいやすものもない。

二四あなたの愛^{あい}する者^{もの}は皆^{みな}あなたを忘^{わす}れてあなたの事^{こと}を心^{こころ}に留^とめない。

それは、あなたのとがが多く、

あなたの罪^{つみ}がはなはだしいので、

わたしがあだを撃^うつようにあなたを撃^うち、残忍^{ざんにん}な敵^{てき}のように懲^こらしたからだ。

二五なぜ、あなたの傷^{きず}のために叫^{さけ}ぶのか、

あなたの悩^{なや}みはいえることはない。

あなたのとがが多く、

あなたの罪^{つみ}がはなはだしいので、

これらの事^{こと}をわたしはあなたにしたのである。

二六しかし、すべてあなたを食^くい滅^{ほろ}ぼす者^{もの}は

食^くい滅^{ほろ}ぼされ、

あなたをしえたげる者^{もの}は、

ひとり残^{のこ}らず、捕^{とら}え移^{うつ}され、

あなたをかすめる者^{もの}は、かすめられ、

すべてあなたの物^{もの}を奪^{うば}う者^{もの}は奪^{うば}われる者^{もの}となる。

二七主は言^いわれる、

わたしはあなたの健康^{けんこう}を回復^{かいふ}させ、

あなたの傷^{きず}をいやす。

それは、人があなたを捨^すてられた者^{もの}とよび、

『だれも心に留^とめないシオン』というからである。

一八主はこう仰せられる、
見よ、わたしはヤコブの天幕を再び築えさせ、
そのすまいにあわれみを施す。
町は、その丘に建てなおされ、
宮殿はもと立っていた所に立つ。

一九感謝の歌と喜ぶ者の声とが、その中から出る。
わたしが彼らを増すゆえ、彼らは少なくはなく、
また彼らを尊ばれしめるゆえ、
卑しめられることはない。

二〇その子らは、いにしえのようになり、
その会衆はわたしの前に堅く立つ。

すべて彼らをしえたげる者をわたしは罰する。

二三その君は彼ら自身のうちのひとりであり、
そのつかさは、そのうちから出る。

わたしは彼をわたしに近づけ、彼はわたしに近づく。
だれか自分の命をかけて

わたしに近づく者があるうかと
主は言われる。

三三あなたがたは、わたしの民となり、
わたしはあなたがたの神となる」。

三三見よ、主の暴風がくる。
憤りと、つむじ風が出て、悪人のこうべをうつ。

二四主の激しい怒りは、
み心に思い定められたことを行つて、
これを遂げるまで、退くことはない。
末の日にあなたがたはこれを悟るのである。

第三章

一「主は言われる、その時わたしはイスラエルの全部族の神となり、
彼らはわたしの民となる」。

二主はこう言われる、

「つるぎをのがれて生き残った民は、
荒野で恵みを得た。

イスラエルが安息を求めた時、

三主は遠くから彼に現れた。

わたしは限りなき愛をもつてあなたを愛している。
それゆえ、わたしは絶えずあなたに
真実をつくしてきた。

四イスラエルのおとめよ、

再びわたしはあなたを建て、あなたは建てられる。

あなたは再び鼓をもつて身を飾り、
出て行って、喜び楽しむ者と共に踊る。

五またあなたはぶどうの木をサマリヤの山に植える。

植える者は、植えてその実を食べることが出来る。
 六 見守る者がエフライムの山の上に立つて
 呼ばれる日が来る。
 『立つて、シオンに上り、
 われわれの神、主に、もうでよう』と。
 七 主はこう仰せられる、
 「ヤコブのために喜んで声高く歌い、
 万国のかしらのために叫び声をあげよ。
 告げ示し、ほめたたえて言え、
 『主はその民イスラエルの残りの者を救われた』と。
 八 見よ、わたしは彼らを北の国から連れ帰り、
 彼らを地の果から集める。
 彼らのうちには、盲人やあしなえ、
 妊婦、産婦も共にいる。
 彼らは大きな群れとなつて、ここに帰ってくる。
 九 彼らは泣き悲しんで帰ってくる。
 わたしは慰めながら彼らを導き帰る。
 彼らがつまづかないように、まっすぐな道により、
 水の流れのそばを通らせる。
 それは、わたしがイスラエルの父であり、
 エフライムはわたしの長子だからである。
 一〇 万国の民よ、あなたがたは主の言葉を聞き、

これを遠い、海沿いの地に示して言いなさい、
 『イスラエルを散らした者がこれを集められる。
 牧者がその群れを守るようにこれを守られる』と。
 二 すなわち主はヤコブをあがない、
 彼らよりも強い者の手から彼を救いだされた。
 三 彼らは来てシオンの山で声高く歌い、
 主から賜わった良い物のために、
 穀物と酒と油および若き羊と牛のために、
 喜びに輝く。
 その魂は潤う園のようになり、
 彼らは重ねて憂えることがない。
 三 その時おとめたちは舞って楽しみ、
 若い者も老いた者も共に楽しむ。
 わたしは彼らの悲しみを喜びにかえ、
 彼らを慰め、憂いの代りに喜びを与える。
 四 わたしは多くのささげ物で、祭司の心を飽かせ、
 わたしの良き物で、わたしの民を満ち足らせると
 主は言われる。
 五 主はこう仰せられる、
 「嘆き悲しみ、いたく泣く声がラマで聞える。
 ラケルがその子らのために嘆くのである。
 子らがもはやいないので、

彼女はその子らのことで慰められるのを願わない。」

一六 主はこう仰せられる、

「あなたは泣く声をとどめ、
目から涙をながすことをやめよ。

あなたのわぎに報いがある。

彼らは敵の地から帰ってくると主は言われる。

一七 あなたの将来には希望があり、

あなたの子供たちは自分の国に帰ってくると
主は言われる。

一八 わたしは確かに、エフライムが

こう言つて嘆くの聞いた、

『あなたはわたしを懲しめられた、

わたしはくびきに慣れない子牛のように

懲しめをうけた。

主よ、あなたはわたしの神、主でいらせられる、

わたしを連れ帰つて、もとにかえしてください。

一九 わたしはそむき去つた後、悔い、

教をうけた後、ももを打つた。

若い時のはずかしめが身にあるので、

わたしは恥じ、うろたえた。』

二〇 主は言われる、

エフライムはわたしの愛する子、

わたしの喜び子であろうか。

わたしは彼について語ることに、

なお彼を忘れることができない。

それゆえ、わたしの心は彼をしたっている。

わたしは必ず彼をあわれむ。

二一 みずからのために道しるべを置き、

みずからのために標柱を立てよ。

大路に、あなたの通つて行つた道に心を留めよ。

イスラエルのおとめよ、帰れ、

これらの、あなたの町々に帰れ。

二三 不信の娘よ、いつまでさまようのか。

主は地の上に新しい事を創造されたのだ、

女が男を保護する事である。』

二四 万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、
「わたしが彼らを
再び栄えさせる時、人々はまたユダの地とその町々でこの言葉
を言う、

『正義のすみかよ、

聖なる山よ、

どうか主がおまえを祝福してくださいように。』

二五 ユダとそのすべての町の人、および農夫と群れを飼つて歩き
回る者は共にそこに住む。二六 わたしが疲れた魂を飽き足らせ、

すべて悩んでいる魂を慰めるからである。』

二七 ここでわたしは目をさしましたが、わたしの眠りは、ここちよ

かつた。

二〇「主は言われる、見よ、わたしが人の種と獣の種とをイスラエルの家とユダの家とにまくだ日が来る。二八わたしは彼らを抜き、砕き、倒し、滅ぼし、悩まそうと待ちかまえていたように、また彼らを立て、植えようと待ちかまえていると主は言われる。二九その時、彼らはもはや、

『父がすっぱいぶどうを食べたので、

子どもの齒がうく』

とは言わない。三〇人はめいめい自分の罪によつて死ぬ。すっぱいぶどうを食べる人はみな、その齒がうく。

三一主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。三二この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとつてエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であつたのだが、彼らはそのわたしの契約を破つたと主は言われる。三三しかし、これらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にする。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。主は言われる。三四人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはや

その罪を思わない」。

三五主はこう言われる、すなわち太陽を与えて昼の光とし、月と星とを定めて夜の光とし、海をかき立てて、その波を鳴りとどろかせる者——その名は万軍の主という。

三六主は言われる、

「もしこの定めがわたしの前ですたれてしまうなら、イスラエルの子孫もすたつて、

永久にわたしの前で民であることはできない」。

三七主はこう言われる、

「もし上の天を量ることができ、

下の地の基を探ることができるなら、

そのとき、わたしはイスラエルのすべての子孫を

そのもろもろの行いのために捨て去ると

主は言われる」。

三八主は言われる、「見よ、この町が、ハナネルの塔から隅の門まで、主のために再建される時が来る。三九測りなわはそれよりも遠くまっすぐに延びて、ガレブの丘に達し、ゴアのほうに向かう。四〇死体と灰との谷の全部、またキデロンの谷に行くまでと、東のほうの馬の門のすみに行くまでとのすべての畑はみな主の聖なる所となり、永遠にわたつて、ふたたび抜かれ、また倒

されることはない」。

第三章

ユダの王ゼデキヤの十年、すなわちネブカデレザルの十八年に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。ニその時、バビロンの王の軍勢がエルサレムを攻め囲んでいて、預言者エレミヤはユダの王の宮殿にある監視の庭のうちに監禁されていた。ニユダの王ゼデキヤが彼を閉じ込めたのであるが、王は言った、「なぜあなたは預言して言うのか、『主はこう仰せられる、見よ、わたしはこの町をバビロンの王の手に渡し、彼はこれを取る。四またユダの王ゼデキヤはカルデヤびとの手をのがれることなく、かならずバビロンの王の手に渡され、顔と顔を合わせて彼と語り、目と目は相まみえる。五そして彼はゼデキヤをバビロンに引いていき、ゼデキヤは、わたしが彼を顧みる時まで、そこにいると主は言われる。あなたがたは、カルデヤびとと戦つても勝つことはできない』と」。

ハエレミヤは言った、「主の言葉がわたしに臨んで言われる、セ『見よ、あなたのおじシャルムの子ハナメルがあなたの所に來て言う、「アナトテにあるわたしの畑を買いなさい。それは、これを買取り、あがなう権利があなたにあるから」と』。ハはたして主の言葉のように、わたしのいとこであるハナメルが監視の庭

のうちにいるわたしの所に來て言った、『ベニヤミンの地のアナトテにあるわたしの畑を買ってください。所有するものも、あがなうものも、あなたの権利なのです。買い取つてあなたの物にしてください。これが主の言葉であるのをわたしは知っています』。

カそこでわたしは、いとこのハナメルからアナトテにある畑を買取り、銀十七シケルを量つて彼に支払った。ニすなわち、わたしはその証書をつくつて、これに記名し、それを封印し、証人を立て、はかりをもつて銀を量つて与えた。ニそしてわたしはその約定をしるして封印した買収証書と、封印のない写しとを取り、三いとこのハナメルと、買収証書に記名した証人たち、および監視の庭にすわっているすべてのユダヤ人の前で、その証書をマアセヤの子であるネリヤの子バルクに与え、ニ彼らの前で、わたしはバルクに命じて言った、『四』万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、これらの証書すなわち、この買収証書の封印したものと、封印のない写しとを取り、これらを土の器に入れて、長く保存せよ。ニ五万軍の主、イスラエルの神がこう言われるからである、『この地で人々はまた家と畑とぶどう畑を買ふようになる』と』。

ニ六わたしは買収証書をネリヤの子バルクに渡したあとで主に祈つて言った、『七』ああ主なる神よ、あなたは大いなる力と、伸べた腕をもつて天と地をお造りになったのです。あなたので

きないことは、ひとつもありません。一八あなたはいつくしみを
 千万人に施し、また父の罪をそののちの子孫に報いられるので
 す。あなたは大きいなる全能の神でいらせられ、その名は万軍の
 主と申されます。一九あなたの計りごとは大きく、また、事を行
 うのに力があり、あなたの目は人々の歩むすべての道を見て、お
 のおの道にしたがい、その行いの実によつてこれに報いられ
 ます。二〇あなたは、しるしと、不思議なわざとをエジプトの地
 に行い、また今日に至るまでイスラエルと全人類のうちに行い、
 そして今日のように名をあげられました。二一あなたは、しるし
 と、不思議なわざと、強い手と、伸べた腕と、大きいなる恐るべき
 事をもつて、あなたの民イスラエルをエジプトの地から導き出
 し、三三この地を彼らに賜わりました。これはあなたが彼らの
 先祖たちに与えようと誓われた乳と蜜の流れる地です。三三こ
 うして彼らは、はいってこれを獲たのですが、あなたの声に聞き
 従わず、あなたの律法を行わず、すべてあなたがせよと命じられ
 たことをしなかつたので、あなたはこの災を彼らの上にお下し
 になりました。三四見よ、壘が築きあげられたのは、この町を取
 るためです。つるぎと、ききんと、疫病のために、町はこれを
 攻めているカルデヤびとの手に渡されます。あなたの言われた
 ようになりましたのは、ごらんとおりであります。三五主なる
 神よ、あなたはわたしに言われました、「銀をもつて畑を買い、
 証人を立てよ」と。そうであるのに、町はカルデヤびとの手に

渡されています。』

二六主の言葉がエレミヤに臨んだ、二七「見よ、わたしは主である、
 すべて命ある者の神である。わたしにできない事があろうか。
 二八それゆえ、主はこう言われる、見よ、わたしはこの町をカル
 デヤびとと、バビロンの王ネブカデザルの手に渡す。彼はこ
 れを取る。二九この町を攻めているカルデヤびとがきて、この町
 に火をつけて焼き払う。屋根の上で人々が、バアルに香をたき、
 ほかの神々に酒をそそいで、わたしを怒らせたその家をも彼ら
 は焼く。三〇それは、イスラエルの人々とユダの人々とは、その
 若い時から、わたしの前に悪いことのみを行い、またイスラエル
 の民はその手のわざをもつて、わたしを怒らせることばかりを
 したからであると主は言われる。三一この町はそれが建つた日
 からきようまで、わたしの怒りと憤りとをひき起してきたので、
 わたしの前からこれを除き去るのである。三二それは、イスラエ
 ルの民とユダの民とが、もろもろの悪を行つて、わたしを怒らせ
 たことによるのである。——彼らの王たちと、そのつかさたち、
 祭司たち、預言者たち、またユダの人々とエルサレムの住民た
 ちが皆そうである。三三彼らはその背中をわたしに向けて顔を
 わたしに向けず、わたしがたゆまず教えたにもかかわらず、彼ら
 は教を聞かず、またうけないのである。三四彼らは憎むべき物
 を、わが名をもつて呼ばれている家にすえつけて、そこを汚し、
 三五またベンヒンノムの谷にバアルの高き所を築いて、むすこ娘

をモレクにささげた。わたしは彼らにこのようなことを命じたことはなく、また彼らがこの憎むべきことを行つて、ユダに罪を犯させようとは考えもしなかった。

三六 それゆえ今イスラエルの神、主は、この町、すなわちあなたがたが、『つるぎと、ききんと、疫病のためにバビロンの王の手に渡される』といっている町についてこう仰せられる、三七 見よ、わたしは、わたしの怒りと憤りと大いなる怒りをもつて、彼らを追いやつたもう一つの国から彼らを集め、この所へ導きかえつて、安らかに住まわせる。三八 そして彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。三九 わたしは彼らに一つの心と一つの道を与えて常にわたしを恐れさせる。これは彼らが彼ら自身とその後の子孫の幸を得るためである。四〇 わたしは彼らと永遠の契約を立てて、彼らを見捨てずに恵みを施すことを誓い、またわたしを恐れる恐れを彼らの心に置いて、わたしを離れることのないようにしよう。四一 わたしは彼らに恵みを施すことを喜びとし、心をつくし、精神をつくし、真実をもつて彼らがこの地に植える。四二 主はこう仰せられる、わたしがこのもう一つの大きな災をこの民にくだしたように、わたしは彼らに約束するもう一つの幸を彼らの上に下さす。四三 人々はこの地に畑を買ふようになる。あなたがたが、『それは荒れて人も獣もなくなくなり、カルデヤびとの手に渡されてしまう』といっている地であり、四四 人々はベニヤミンの地と、エルサレムの周囲と、ユダの

町々と、山地の町々と、平地の町々と、ネゲブの町々で、銀をもつて畑を買い、証書をつくつて、これに記名し封印し、また証人を立てる。それは、わたしが彼らを再び栄えさせるからであると主は言われる」。

第三章

一 エレミヤがなお監視の庭に閉じ込められている時、主の言葉はふたたび彼に臨んだ、二「地を造られた主、それを形造つて堅く立たせられた主、その名を主と名のつておられる者がこう仰せられる、三 わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されていることを、あなたに示す。四 イスラエルの神、主は壘と、つるぎとを防ぐために破壊されたこの町の家と、ユダの王の家についてこう言われる、五 カルデヤびとは来て戦ひ、わたしが怒りと憤りをもつて殺す人々の死体を、それに満たす。わたしは人々のもう一つの悪のために、この町にわたしの顔をおおい隠した。六 見よ、わたしは健康と、いやしとを、ここにもたらして人々をいやし、豊かな繁栄と安全とを彼らに示す。七 わたしはユダとイスラエルを再び栄えさせ、彼らを立てて、もとのようにする。八 わたしは彼らがわたしに向かつて犯した罪のすべてのとがを清め、彼らがわたしに向かつて犯した罪と反逆のすべてのとがをゆるす。九

この町は地のもろもろの民の前に、わたしのために喜びの名となり、誉となり、栄えとなる。彼らはわたしがわたしの民に施すもろもろの恵みのことを聞く。そして、わたしがこの町に施すもろもろの恵みと、もろもろの繁栄のために恐れて身をふるわす。

一〇主はこう言われる、あなたがたが、『それは荒れて、人もおらず獣もない』というこの所、すなわち、荒れて、人もおらず住む者もなく、獣もないユダの町とエルサレムのちまたに、二再び喜びの声、楽しみの声、花婿の声、花嫁の声、および

『万軍の主に感謝せよ、主は恵みふかく、

そのいつくしみは、いつまでも絶えることがない』

といって、感謝の供え物を主の宮に携えてくる者の声が聞える。それは、わたしがこの地を再び栄えさせて初めのようにするからであると主は言われる。

三万軍の主はこう言われる、荒れて、人もおらず獣もないこの所と、そのすべての町々に再びその群れを伏させる牧者のすまいがあるようになる。三山地の町々と、平地の町々と、ネゲブの町々と、ベニヤミンの地、エルサレムの周囲と、ユダの町々と、群れは再びそれを数える者の手の下を通りすぎると主は言われる。

一四主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に

約束したことをなし遂げる日が来る。一五その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。一六その日、ユダは救を得、エルサレムは安らかにいる。その名は『主はわれわれの正義』となえらるる。

一七主はこう仰せられる、イスラエルの家の上に座する人がダビデの子孫のうちに欠けることはない。一八またわたしの前に燔祭をささげ、素祭を焼き、つねに犠牲をささげる人が、レビビとである祭司のうちに絶えることはない。

一九主の言葉はエレミヤに臨んだ、二〇「主はこう仰せられる、もしあなたがたが、昼と結んだわたしの契約を破り、また夜と結んだわたしの契約を破り、昼と夜が定められた時に来ないようにすることができぬならば、三しもベダビデとわたしが結んだ契約もまた破れ、彼はその位に座して王となる子を与えられない。またわたしがわたしの仕えるレビビとである祭司に立てた契約も破れる。三天の星は数えることができず、浜の砂は量ることができない。そのようにわたしは、しもベダビデの子孫と、わたしに仕えるレビビとである祭司の数を増そう」。

二三主の言葉はエレミヤに臨んだ、二四「あなたはこの民が、『主は自ら選んだ二つのやからを捨てた』といっているのを聞かないか。彼らはこのようにわたしの民を侮って、これを国とみなさないものである。二五主はこう言われる、もしわたしが昼と夜と

に契約を立てず、また天地のおきてを定めなかつたのであれば、
 三六 わたしは、ヤコブとわたしのもベダビデとの子孫を捨てて、再び彼の子孫のうちからアブラハム、イサク、ヤコブの子孫を治める者を選ばない。わたしは彼らを再び栄えさせ、彼らにあわれみをたれよう」。

第三章

一 バビロンの王ネブカデレザルがその全軍と、彼に従っている地のすべての国の人々、およびもろもろの民を率いて、エルサレムとその町々を攻めて戦つていた時に、主からエレミヤに臨んだ言葉、ニ「イスラエルの神、主はこう言われる、行つてユダの王ゼデキヤに告げて言いなさい、『主はこう言われる、見よ、わたしはこの町をバビロンの王の手に渡す。彼は火でこれを焼く。三 あなたはその手をのがれることはできない、必ず捕えられてその手に渡される。あなたはまのあたりバビロンの王を見、顔と顔を合わせて彼と語る。それからバビロンへ行く』。四 しかしユダの王ゼデキヤよ、主の言葉を聞きなさい。主はあなたの事についてこう言われる、『あなたはつるぎで死ぬことはない。五 あなたは安らかに死ぬ。民はあなたの先祖であるあなたの先の王たちのために香をたいいたように、あなたのためにも香をたき、またあなたのために嘆いて「ああ、主君よ」と言う』。わ

たしがこの言葉をいうのであると主は言われる」。

六 そこで預言者エレミヤはこの言葉をことごとくエルサレムでユダの王ゼデキヤに告げた。七 その時バビロンの王の軍勢はエルサレム、および残っているユダのすべての町、すなわちラキシとアゼ力を攻めて戦つていた。それはユダの町々のうちに、これらの堅固な町がなお残つていたからである。

八 ゼデキヤ王がエルサレムにいるすべての民と契約を立てて、彼らに釈放のことを告げ示した後に、主からエレミヤに臨んだ言葉。九 その契約はすなわち人がおのおのそのへブルびとである男女の奴隷を解放し、その兄弟であるユダヤ人を奴隷としないうことを定めたものであった。一〇 この契約をしたつかさたちと、すべての民は人がおのおのその男女の奴隷を解放し、再びこれを奴隷としないということに聞き従つて、これを解放したが、二 後に心を翻し、解放した男女の奴隷をひきかえさせ、再びこれを従わせて奴隷とした。三 そこで主の言葉が主からエレミヤに臨んだ、ニ「イスラエルの神、主はこう言われる、わたしはあなたがたの先祖をエジプトの地、その奴隷であつた家から導き出した時、彼らと契約を立てて言つた、一四 『あなたがたの兄弟であるへブルびとで、あなたがたに身を売り、六年の間あなたがたに仕えた者は、六年の終りに、あなたがたのおのがこれを解放しなければならぬ。あなたがたは彼を解放して、あなたがたに仕えることをやめさせなければならぬ』。と

ころがあなたがたの先祖たちはわたしに聞き従わず、またその耳を傾けなかった。一五しかしあなたがたは今日、心を改め、おのおのその隣りに釈放のことを告げ示して、わたしの見て正しいとすることを言い、かつわたしの名をもつてとなえられる家で、わたしの前に契約を立てた。一六ところがあなたがたは再び心を翻して、わたしの名を汚し、おのおの男女の奴隷をその願いのままに解放したのをひきかえさせ、再びこれを従わせて、あなたがたの奴隷とした。一七それゆえに、主はこう仰せられる、あなたがたがわたしに聞き従わず、おのおのその兄弟とその隣に釈放のことを告げ示さなかったので、見よ、わたしはあなたがたのために釈放を告げ示して、あなたがたをつるぎと、疫病と、ききんとに渡すと主は言われる。わたしはあなたがたを地のものもろの国に忌みきらわれるものとする。一八わたしの契約を破り、わたしの前に立てた契約の定めに従わない人々を、わたしは彼らが二つに裂いて、その二つの間を通つた子牛のようにする。一九すなわち二つに分けた子牛の間を通つたユダのつかさたち、エルサレムのつかさたちと宦官と祭司と、この地のすべての民を、二〇わたしはその敵の手と、その命を求める者の手に渡す。その死体は空の鳥と野の獣の食物となる。二一わたしはまたユダの王ゼデキヤと、そのつかさたちをその敵の手、その命を求める者の手、あなたがたを離れて去つたバビロンの王の軍勢の手に渡す。二三主は言われる、見よ、わたしは彼

らに命じて、この町に引きかえしてこさせる。彼らはこの町を攻めて戦い、これを取り、火を放つて焼き払う。わたしはユダの町々を住む人のない荒れ地とする」。

第三章

一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの時、主からエレミヤに臨んだ言葉。二「レカブびとの家に行つて、彼らと語り、彼らを主の宮の一室に連れてきて、酒を飲ませなさい。三そこでわたしはハバジニヤの子エレミヤの子であるヤザニヤと、その兄弟と、そのむすこたち、およびレカブびとの全家を連れ、四これを主の宮にあるハナンの子たちの室に連れてきた。ハナンはイグダリヤの子であつて神の人であつた。その室は、つかさたちの室の次にあつて、門を守るシャルムの子マアセヤの室の上にあつた。五わたしはレカブびとの前に酒を満したつぽと杯を置き、彼らに、「酒を飲みなさい」と言つたが、六彼らは答えた、「われわれは酒を飲みません。それは、レカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じて、『あなたがたとあなたがたの子孫はいつまでも酒を飲んでほならない。七また家を建てず、種をまかず、またぶどう畑を植えてほならない。またこれを所有してはならない。あなたがたは生きながらえる間は幕屋に住んでいなさい。そうするならば、あなたがたはその宿っている地

に長く生きることができると言ったからです。』ハこうしてわれわれは、レカブの子であるわれわれの先祖ヨナダブがすべて命じた言葉に従って、われわれも、妻も、むすこ娘も生きながらえる間、酒を飲まず、九住む家を建てず、ぶどう畑も畑も種も持たないで、二幕屋に住み、すべてわれわれの先祖ヨナダブがわれわれに命じたところに従い、そのように行いました。二しかしバビロンの王ネブカデザルがこの地に上ってきた時、われわれは言いました、『さあ、われわれはエルサレムへ行こう。カルデヤびとの軍勢とスリヤびとの軍勢が恐ろしい』と。こうしてわれわれはエルサレムに住んでいるのです。』

三その時、主の言葉がエレミヤに臨んだ、三「万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、行つて、ユダの人々とエルサレムに住む者にと告げよ。主は仰せられる、あなたがたはわたしの言葉を聞いて教を受けないのか。一四レカブの子ヨナダブがその子孫に酒を飲むなど命じた言葉は守られてきた。彼らは今日に至るまで酒を飲まず、その先祖の命に従ってきた。ところがあなたがたはわたしがしきりに語つたけれども、わたしに聞き従わなかった。一五わたしはまた、わたしのしもべである預言者たちを、しきりにあなたがたにつかわして言わせた、『あなたがたは今のおおのその悪い道を離れ、その行いを改めなさい。ほかの神々に従い仕えてはならない。そうすれば、あなたがたはわたしがあなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの地に住

むことができる』と。しかしあなたがたは耳を傾けず、わたしに聞かなかった。一六レカブの子ヨナダブの子孫は、その先祖が彼らに命じた命令を守っているのである。しかしこの民はわたしに従わなかった。一七それゆえ万軍の神、主、イスラエルの神はこう仰せられる、見よ、わたしはユダとエルサレムに住む者と共に、わたしが彼らの上に宣告した災を下す。わたしが彼らに語つても聞かず、彼らと呼んでも答えなかったからである。』

一八ところでエレミヤはレカブびとの家の人々に言った、『万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、あなたがたは先祖ヨナダブの命に従い、そのすべての戒めを守り、彼があなたがたに命じた事を行つた。一九それゆえ、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、レカブの子ヨナダブには、わたしの前に立つ人がいつまでも欠けることはない。』

第三十六章

一ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年に主からこの言葉がエレミヤに臨んだ、二「あなたは巻物を取り、わたしがあなたに語つた日、すなわちヨシヤの日から今日に至るまで、イスラエルとユダと万国とに於いてあなたに語つたすべての言葉を、それにしるしなさい。三ユダの家がわたしの下そうとしているすべての災を聞いて、おのおのその悪い道を離れて帰ることもある

う。そうすれば、わたしはそのとがとその罪をゆるすかも知れない」。

四そこでエレミヤはネリヤの子バルクを呼んだ。バルクはエレミヤの口述にしたがって、主が彼にお告げになった言葉をことごとく巻物に書きしるした。五そしてエレミヤはバルクに命じて言った、「わたしは主の宮に行くことを妨げられている。六それで、あなたが行って、断食の日に主の宮で、すべての民が聞いているところで、あなたがわたしの口述にしたがって、巻物に筆記した主の言葉を読みなさい。またユダの人々がその町々から来て聞いているところで、それを読みなさい。七彼らは主の前に祈願をささげ、おのおのその悪い道を離れて帰ることもある。主がこの民に対して宣告された怒りと憤りは大きいからである」。八こうしてネリヤの子バルクはすべて預言者エレミヤが自分に命じたように、主の宮で、その巻物に書かれた主の言葉を読んだ。

九ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月、エルサレムのすべての民と、ユダの町々からエルサレムに來たすべての民とは、主の前に断食を行うべきことを告げ示された。一〇バルクは主の宮の上の庭で、主の宮の新しい門の入口のかたわらにある書記シヤパンの子であるゲマリヤのへやで、巻物に書かれたエレミヤの言葉をすべての民に読み聞かせた。

二シヤパンの子であるゲマリヤの子ミカヤはその巻物にある

主の言葉をことごとく聞いて、三王の家にある書記エリシヤ下つて行くと、もろもろのつかさたち、すなわち書記エリシヤマ、シマヤの子デラヤ、アカボルの子エルナタン、シヤパンの子ゲマリヤ、ハナニヤの子ゼデキヤおよびすべてのつかさたちがそこに座していた。四ミカヤはバルクが民に巻物を読んで聞かせたとき、自分の聞いたすべての言葉を彼らに告げたので、一四つかさたちはクシの子セレミヤの子であるネタニヤの子エホデをバルクのもとにつかわして言わせた、「あなたが民に読み聞かせたその巻物を手に取って、来てください」。そこでネリヤの子バルクは巻物を手に取って、彼らのもとに來たので、一五彼らはバルクに言った、「座してそれを読んでください」。バルクはそれを彼らに読みかかせた。一六彼らはそのすべての言葉を聞き、恐れて互に見かわし、バルクに言った、「われわれはこのすべての言葉を、王に報告しなければならぬ」。一七そしてバルクに尋ねて言った、「このすべての言葉を、あなたがどのようにして書いたのか話してください。彼の口述によるのですか」。一八バルクは彼らに答えた、「彼がわたしにこのすべての言葉を口述したので、わたしはそれを墨汁で巻物に書いたのです」。一九つかさたちはバルクに言った、「行って、エレミヤと一緒に身を隠しなさい。人に所在を知られてはなりません」。

二〇そこで彼らは巻物を書きエリシヤマのへやに置いて庭にはいり、王のもとへ行って、このすべての言葉を王に告げたので、

二 王はその巻物まきものを持つてこさせるためにエホデをつかわした。エホデは書記エリシャマのへやから巻物まきものを取つてきて、それを王と王のかたわらに立つてゐるすべてのつかさたちつかさたちに読みかさせた。三時は九月であつて、王は冬の家に座いへしてゐた。その前に炉があつて火が燃えていた。三エホデが三段か四段を読むと、王は小刀こがたなをもつてそれを切り取り、炉の火に投げいれ、ついに巻物全部を炉の火で焼きつくした。四王とその家来たちはこのすべての言葉を聞いても恐れず、またその着物を裂くこともしなかつた。五エルナタン、デラヤおよびゲマリヤが王にその巻物を焼かないようにと願つたときにも彼は聞きいれなかつた。六そして王は王子エラメルとアヅリエルの子セラヤとアブデルの子セラミヤに、書記バルクと預言者エレミヤを捕えるようにと命じたが、主は彼らを隠された。

七モバルクがエレミヤの口述にしたがつて筆記した言葉を載せた巻物を王が焼いた後、主の言葉がエレミヤに臨んだ、八「他の巻物を取り、ユダの王エホヤキムが焼いた、前の巻物のうちにある言葉を皆それに書きしるしなさい。九またユダの王エホヤキムについて言いなさい、『主はこう仰せられる、あなたはこの巻物を焼いて言つた、『どうしてあなたはこの巻物に、バビロンの王が必ず来てこの地を滅ぼし、ここから人と獣とを絶やす、と書いたのか』と。三〇それゆゑ主はユダの王エホヤキムについてこう言われる、彼の子孫にはダビデの位にすわる者がなくな

る。また彼の死体は捨てられて昼は暑さにあい、夜は霜にあう。三わたしはまた彼とその子孫とその家来たちをその罪のために罰する。また彼らとエルサレムの民とユダの人々には災を下す。この災のことについては、すでに語つたけれども、彼らは聞くことをしなかつた』」。

三そこでエレミヤは他の巻物を取り、ネリヤの子書記バルクに与えたので、バルクはユダの王エホヤキムが火にくべて焼いた巻物のすべての言葉を、エレミヤの口述にしたがつてそれに書きしるし、また同じような言葉を多くそれに加えた。

第三十七章

一ヨシヤの子ゼデキヤはエホヤキムの子コニヤに代つて王となつた。バビロンの王ネブカデレザルが彼をユダの地の王としたのである。二彼もその家来たちも、その地の人々も、主が預言者エレミヤによつて語られた言葉に聞き従わなかつた。三ゼデキヤ王はセラミヤの子ユカルと、マアセヤの子祭司ゼパニヤを預言者エレミヤにつかわして、「われわれのために、われわれの神、主に祈つてください」と言わせた。四エレミヤは民のなかに出入りしてゐた。まだ獄屋に入れられなかつたからである。五パロの軍勢がエジプトから出て来たので、エルサレムを攻め囲んでいたカルデヤびとはその情報を聞いてエルサレムを

退いた。六その時、主の言葉は預言者エレミヤに臨んだ、七「イスラエルの神、主はこう言われる、あなたがたをつかわしてわたしに求めたユダの王にこう言いなさい、『あなたがたを救うために出てきたパロの軍勢はその国エジプトに帰ろうとしている。ハカルデヤびとが再び来てこの町を攻めて戦い、これを取って火で焼き滅ぼす。九主はこう言われる、あなたがたは、『カルデヤびとはきつとわれわれを離れ去る』といって自分を欺いてはならない。彼らは去ることはない。一〇たといあなたがたが自分を攻めて戦うカルデヤびとの全軍を撃ち破つて、その天幕のうちに負傷者のみを残しても、彼らは立ち上がつて火でこの町を焼き滅ぼす』」。

二さてカルデヤびとの軍勢がパロの軍勢の来るのを聞いてエルサレムを退いたとき、三エレミヤは、ベニヤミンの地で民のうちに自分の分け前を受け取るため、エルサレムを立ててその地へ行こうと、四ベニヤミンの門に着いたとき、そこにハナニヤの子セレミヤの子でイリヤという名の番兵がいて、預言者エレミヤを捕え、「あなたはカルデヤびとの側に脱走しようとしている」と言つた。五エレミヤは言つた、「それはまちがいだ。わたしはカルデヤびとの側に脱走しようとしていない」。しかしイリヤは聞かず、エレミヤを捕えて、つかさたちのもとへ引いて行つた。六つかさたちは怒つて、エレミヤを打ちたたき、書記ヨナタンの家の獄屋にいれた。この家が獄屋になつていたから

である。

七エレミヤが地下の獄屋にはいつて、そこに多くの日を送つてのち、八ゼデキヤ王は人をつかわし、彼を連れてこさせた。王は自分の家でひそかに彼に尋ねて言つた、「主から何かお言葉があつたか」。エレミヤはあつたと答えた。そして言つた、「あなたはバビロンの王の手に引き渡されます」。九エレミヤはまたゼデキヤ王に言つた、「わたしが獄屋にいれたのは、あなたに、またはあなたの家来に、あるいはこの民に、どのような罪を犯したからなのです。一〇あなたがたに預言して、『バビロンの王はあなたがたをも、この地をも攻めにこない』と言つていたあなたがたの預言者は今どこにいるのですか。一一王なるわが君よ、どうぞ今お聞きください。わたしの願いをお聞きとってください。わたしを書記ヨナタンの家へ帰らせないでください。そうでないと、わたしはそこで殺されるでしょう。一二そこでゼデキヤ王は命を下し、エレミヤを監視の庭に入れさせ、かつ、パンを造る者の町から毎日パン一個を彼に与えさせた。これは町にパンがなくなるまで続いた。こうしてエレミヤは監視の庭にいた。

第三十八章

一マツタンの子シパテヤ、パシユルの子ゲダリヤ、セレミヤの子

ユカル、マルキヤの子パシユルはエレミヤがすべての民に告げていたその言葉を聞いた。ニ彼は言った、「主はこう言われる、この町にとどまる者は、つるぎや、きんや、疫病で死ぬ。しかし出てカルデヤびとにくだる者は死を免れる。すなわちその命を自分のぶんどり物として生きることができる。ニ主はこう言われる、この町は必ずバビロンの王の軍勢の手に渡される。彼はこれを取る」。四すると、つかさたちは王に言った、「この人を殺してください。このような言葉をのべて、この町に残っている兵士の手と、すべての民の手を弱くしているからです。この人は民の安泰を求めないで、その災を求めているのです」。五ゼデキヤ王は言った、「見よ、彼はあなたがたの手にある。王はあなたがたに逆らって何事をもなし得ない」。六そこで彼らはエレミヤを捕え、監視の庭にある王子マルキヤの穴に投げ入れた。すなわち、綱をもつてエレミヤをつり降ろしたが、その穴には水がなく、泥だけであつたので、エレミヤは泥の中に沈んだ。七王の家の宦官エチオピヤびとエベデメレクは、彼らがエレミヤを穴に投げ入れたことを聞いた。その時、王はベニヤミンの門に座していたので、ハエベデメレクは王の家から出て行って王に言った、九「王なるわが君よ、この人々が預言者エレミヤにしたことはみな良いことではありません。彼を穴に投げ入れました。町に食物がなくなりましたから、彼はそこで餓死するでしょう」。一〇王はエチオピヤびとエベデメレクに命じて言っ

た、「ここから三人のひとを連れて行って、預言者エレミヤを、死なないうちに穴から引き上げなさい」。二そこでエベデメレクはその人々を連れて王の家の倉の衣服室に行き、そこから古い布切れや、着ふるした着物を取り、これを穴の中にあるエレミヤのところへ、綱をもつてつり降ろした。三そしてエチオピヤびとエベデメレクは、「この布切れや着物を、あなたのわきの下にはさんで、綱に当てなさい」とエレミヤに言った。エレミヤはそれのようにした。四すると彼らは綱をもつてエレミヤを穴から引き上げた。そしてエレミヤは監視の庭にとどまつた。五ゼデキヤ王は人をつかわして預言者エレミヤを主の宮の第三の門に連れてこさせ、王はエレミヤに言った、「あなたに尋ねたいことがある。何事もわたしに隠してはならない」。六エレミヤはゼデキヤに言った、「もしわたしがお話しするなら、あなたは必ずわたしを殺されるではありませんか。たといわたしが忠告をしても、あなたはお聞きにならないでしょう」。七その時ゼデキヤ王は、ひそかにエレミヤに誓つて言った、「われわれの魂を造られた主は生きておられる。わたしはあなたを殺さない、またあなたの命を求める者の手に、あなたを渡すこともしない」。

八そこでエレミヤはゼデキヤに言った、「万軍の神、イスラエルの神、主はこう仰せられる、もしあなたがバビロンの王のつかさたちに降伏するならば、あなたの命は助かり、またこの町は火で

焼かれることなく、あなたも、あなたの家の者も生きながらえることができる。一ハしかし、もしあなたが出てバビロンの王のつかさたちに降伏しないならば、この町はカルデヤびとの手に渡される。彼らは火でこれを焼く。あなたはその手をのがれることができない」。ニ九ゼデキヤ王はエレミヤに言った、「わたしはカルデヤびとに脱走したユダヤ人を恐れている。カルデヤびとはわたしを彼らの手に渡し、彼らはわたしをはずかしめる」。ニ〇エレミヤは言った、「彼らはあなたを渡さないでしよう。どうか、わたしがあなたに告げた主の声に聞き従ってください。そうすれば幸を得、また命が助かります。ニしかし降伏することを拒むならば、主がわたしに示された幻を申しましよう。ニ三すなわち、ユダの王の家に残っている女たちは、みなバビロンの王のつかさたちの所へ引いて行かれます。その女たちは言うのです、

『あなたの親しい友だちがあなたを欺いた、

そしてあなたに勝った。

今あなたの足は泥に沈んでいるので、

彼らはあなたを捨てて去る。』

ニ三あなたの妻たちと子供たちは皆カルデヤびとの所へひき出される。あなた自身もその手をのがれることができず、バビロンの王に捕えられる。そしてこの町は火で焼かれるでしょう」。ニ四ゼデキヤはエレミヤに言った、「これらの言葉を人に知らせ

てはならない。そうすればあなたは殺されることはない。ニ五わたしがあなたと話をしたこと、つかさたちが聞いて、彼らがあなたの所にきて、『あなたが王に話したこと、王があなたに話したことをわれわれに告げなさい。何事も隠してはならない。われわれはあなたを殺しはしない』と言うならば、ニ六あなたは彼らに、『わたしは王に願って、わたしをヨナタンの家に送り返さず、そこで死ぬことのないようにしてください』と答えないさい。ニ七さて、つかさたちは皆エレミヤのところへ来て尋ねたが、王が彼に教えたように彼らに答えたので、彼らは彼と話すことをやめた。その会話を聞いた者がなかつたからである。ニ八エレミヤはエルサレムの取られる日まで監視の庭にとどまっていた。

第三章

一ユダの王ゼデキヤの九年十月、バビロンの王ネブカデレザルはその全軍を率い、エルサレムに来てこれを攻め囲んだが、ニゼデキヤの十一年四月九日になって町の一角が破れた。ニエルサレムが取られたので、バビロンの王のつかさたち、すなわちネルガル・シャレゼル、サムガル・ネボ、ラブサリスのサルセキム、ラブマグのネルガル・シャレゼルおよびバビロンの王のその他つかさたちは皆ともに来て中の門に座した。四ユダの王ゼデ

キヤとすべての兵士たちはこれを見て逃げ、夜のうちに、王の庭園の道を通つて、二つの城壁の間の門から町を出て、アラバの方へ行つたが、五カルデヤびとの軍勢はこれを追つて、エリコの平地でゼデキヤに追いつき、これを捕えて、ハマテの地リブラにいるバビロンの王ネブカデレザルのもとに引いて行つたので、王はそこで彼の罪をさだめた。ハバビロンの王はリブラで、ゼデキヤの子たちを彼の目の前で殺した。バビロンの王はまたユダのすべての貴族たちを殺した。セ王はまたゼデキヤの目をつぶさせ、彼をバビロンに引いて行くために、鎖につないだ。ハまたカルデヤびとは王宮と民家を火で焼き、エルサレムの城壁を破壊した。九そして侍衛の長ネブザラダンは町のうちに残っている民と、自分に降伏した者、およびその他の残っている民をバビロンに捕え移した。一〇しかし侍衛の長ネブザラダンは、民の貧しい無産者をユダの地に残し、同時にぶどう畑と田地をこれに与えた。

一ニさてバビロンの王ネブカデレザルはエレミヤの事について侍衛の長ネブザラダんに命じて言つた、一ニ「彼をとり、よく世話をせよ。害を加えることなく、彼があなたに言うようにしてやりなさい」。一三そこで侍衛の長ネブザラダン、ラブサリスのネブシヤズバン、ラブマグのネルガル・シヤレゼル、およびバビロンの王のつかさたたちは、一四人をつかわして、エレミヤを監視の庭から連れてこさせ、シヤパンの子アヒカムの子である

ゲダリヤに託して、家につれて行かせた。こうして彼は民のうちにいた。

一五エレミヤが監視の庭に閉じこめられていた時、主の言葉が彼に臨んだ、一六「行つて、エチオピヤびとエベデメレクに告げなさい、『万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、わたしの言つた災をわたしはこの町に下す、幸をこれに下すのではない。その日、この事があなたの目の前で成就する。一七主は言われる、その日わたしはあなたを救う。あなたは自分の恐れている人々の手に渡されることはない。一八わたしが必ずあなたを救い、つるぎに倒れることのないようにするからである。あなたの命はあなたのぶんどり物となる。あなたがわたしに寄り頼んだからであると主は言われる』」。

第四〇章

一侍衛の長ネブザラダンは、バビロンに移されるエルサレムとユダの人々のうちにエレミヤを鎖につないで置いて、これを捕えて行つたが、ついにラマで彼を釈放した。その後、主の言葉がエレミヤに臨んだ。二侍衛の長はエレミヤを召して彼に言つた、「あなたの神、主はこの所にこの災を下すと告げ示された。三主はこれを下し、自ら言われたとおりに行われた。あなたが主に対して罪を犯し、み声に従わなかったから、この事があな

たがたの上に臨んだのだ。四見よ、わたしはきよう、あなたの手
の鎖を解いてあなたを釈放する。もしあなたがわたしと一緒に
バビロンへ行くのが良いと思われるなら、おいでなさい。わ
たしは、じゆうぶんあなたの世話をします。もしあなたがわた
しと一緒にバビロンには行きたくないなら、行かなくてもよろ
しい。見よ、この地はみなあなたの前にあります、あなたが良い
と思ひ、正しいと思ふ所に行きなさい。五あなたがどまるなら
ば、バビロンの王がユダの町々の総督として立てたシャパンの
子アヒカムの子であるゲダリヤの所へ帰り、彼と共に民のうち
に住みなさい。あるいはまたあなたが正しいと思ふ所へ行きな
さい。こうして侍衛の長は彼に糧食と贈り物を与えて去らせ
た。六そこでエレミヤはミツパへ行き、アヒカムの子ゲダリヤの
所へ行つて、彼と共にその地に残っている民のうちに住んだ。
七さて野外にいた軍勢の長たちと、その配下の人々は、バビロン
の王がアヒカムの子ゲダリヤを立てて、その地の総督とし、男
女、子供、および国のうちのバビロンに移されぬ貧しい者を
彼に委託した事を聞いたので、ハネタニヤの子イシマエルと、カ
レヤの子ヨハナンおよびタンホメテの子セラヤと、ネトパびと
であるエパイの子たちと、マアカびとの子ヤザニヤおよびその
配下の人々は、ミツパにいるゲダリヤのもとへ行つた。九シャパ
ンの子であるアヒカムの子ゲダリヤは、彼らとその配下の人々
に誓つて言つた、「カルデヤびとに仕えることを恐れるに及ばな

い。この地に住んでバビロンの王に仕えるならば、あなたがた
は幸福になる。一〇わたしはミツパにいて、われわれの所に来る
カルデヤびとの前に、あなたがたのために立ちましよう。あな
たがたは、ぶどう酒や夏のくだもの、油を集めて、それを器に
たくわえ、あなたがたの獲た町々に住みなさい。一一同じよう
に、モアブとアンモンびとのうち、またエドムおよび他の国々に
いるユダヤ人は、バビロンの王がユダに人を残したこと、シャ
パンの子であるアヒカムの子ゲダリヤを立ててその総督とした
ことを聞いた。一二そこでそのユダヤ人らはみなその追いや
られたもろもろの所から歸つてきて、ユダの地のミツパにいる
ゲダリヤのもとにきた。そして多くのぶどう酒と夏のくだもの
を集めた。

一三またカレヤの子ヨハナンと、野外にいた軍勢の長たちはみな
ミツパにいるゲダリヤのもとにきて、一四彼に言つた、「アンモン
びとの王バアリスがあなたを殺すためにネタニヤの子イシマエ
ルをつかわしたことを知っていますか」。しかしアヒカムの子
ゲダリヤは彼らの言うことを信じなかつたので、一五カレヤの子
ヨハナンはミツパでひそかにゲダリヤに言つた、「わたしが行つ
て、人に知れないように、ネタニヤの子イシマエルを殺しましよ
う。どうして彼があなたを殺して、あなたの周囲に集まつてい
るユダヤ人を散らし、ユダの残つた者を滅ぼしてよいでしよ
う」。一六しかしアヒカムの子ゲダリヤはカレヤの子ヨハナンに

言つた、「この事をしてはならない。あなたはイシマエルについて偽りを言っているのです」。

第四章

一七月のころ、王家のもので、エリシャマの子ネタニヤの子であり、また王の高官のひとりであるイシマエルは、王の十人のつかさたちと共にミツパにいたアヒカムの子ゲダリヤのもとにきて、ミツパで食を共にしたが、ニネタニヤの子イシマエルおよび共にいた十人の者は立ち上がつて、バビロンの王がこの地の総督としたシヤパンの子アヒカムの子であるゲダリヤを刀で殺し、ミイシマエルはまたミツパでゲダリヤと共にいたすべてのユダヤ人と、たまたまそこにいたカルデヤびとの兵士たちを殺した。

四ゲダリヤが殺された次の日、まだだれもその事を知らないうちに、五八十人の人々がそのひげをそり、衣服をさき、身に傷をつけ、手には素祭のさきげ物と香を携え、シケム、シロ、サマリヤからきて、主の宮にささげようとした。ホネタニヤの子イシマエルはミツパから泣きながら出てきて彼らを迎え、彼らに会つて、「アヒカムの子ゲダリヤのもとにおいてなさい」と言つた。そして彼らが町の中にはいったとき、ネタニヤの子イシマエルは自分と一緒にいた人々と共に彼らを殺して、その死体を穴に

投げ入れた。しかしそのうちの十人はイシマエルに向かい、「わたしたちは畑に小麦、大麦、油、および蜜を隠しています、わたしたちを殺さないでください」と言つたので、彼らをその仲間と共に殺さなかつた。

九イシマエルが自分の殺した人々の死体を投げ入れた穴は、アサ王がイスラエルの王バアシャを恐れて掘つた穴であつた。ネタニヤの子イシマエルは殺した人々をこれに満した。一〇次いでイシマエルはミツパに残っているすべての民、すなわち王の娘たちと侍衛の長ネブザラダンがアヒカムの子ゲダリヤに託したミツパに残っているすべての民とを捕虜とした。ネタニヤの子イシマエルは彼らを捕虜とし、アンモンびとのもとに渡り行こうとして立ち去つた。

二カレヤの子ヨハナンおよび彼と共にいる軍勢の長たちはネタニヤの子イシマエルの行つた悪事をみな聞き、三その兵士たちを率いて、ネタニヤの子イシマエルと戦うために出て行き、ギベオンの大池のほとりで彼に会つた。一ミイシマエルと共にいる人々は、カレヤの子ヨハナンおよび彼と共にいる軍勢の長たちを見て喜んだ。一四そしてイシマエルがミツパから捕虜にされてきた人々は身をめぐらしてカレヤの子ヨハナンのもとへ行つた。一五ネタニヤの子イシマエルは八人の者と共にヨハナンを避けて逃げ、アンモンびとの所へ行つた。一六そこでカレヤの子ヨハナンおよび彼と共にいる軍勢の長たちはネタニヤの子イシ

第四章

マエルがアヒカムの子ゲダリヤを殺して、ミヅパから捕虜として連れてきた、あの残っていた民、すなわち兵士や女、子供、宦官をギベオンから連れ帰ったが、エジプトへ行こうとしてベツレヘムの近くにあるゲルテ・キムハムへ行つて、そこにとどまった。ハこれは、ネタニヤの子イシマエルが、バビロンの王によつてこの地の総督に任じられたアヒカムの子ゲダリヤを殺したことにより、カルデヤびとを恐れたからである。

―そのとき軍勢の長たち、およびカレヤの子ヨハナンと、ホシヤヤの子アザリヤ、ならびに民の最も小さい者から最も大いなる者にいたるまで、ニみな預言者エレミヤの所に來て言つた、「どうかあなたの前にわれわれの求めが受け入れられますように。われわれのため、この残っている者すべてのために、あなたの神、主に祈つてください、（今ごろのとおりに、われわれは多くのうち、わずかに残っている者です）ミそうすれば、あなたの神、主は、われわれの行くべき道と、なすべき事を明示になるでしょう」。

四 預言者エレミヤは彼らに言つた、「よくわかりました。あなたがたの求めにしたがつて、あなたがたの神、主に祈りましょう。主があなたがたに答えられることを、何事も隠さないであなたがたに言いましょう」。

五 彼らはエレミヤに言つた、

「もし、あなたの神、主があなたをつかわしてお告げになるすべての言葉を、われわれが行わないときは、どうか主がわれわれに對してまことの眞実な証人となられるように。ハわれわれは良くて悪くても、われわれがあなたをつかわそうとするわれわれの神、主の聲に従います。われわれの神、主の聲に従うとき、われわれは幸を得るでしょう」。

セ十日の後、主の言葉がエレミヤに臨んだ。ハエレミヤはカレヤの子ヨハナンおよび彼と共にいる軍勢の長たち、ならびに民の最も小さい者から最も大いなる者までことごとく招いて、九彼らに言つた、「あなたがたがわたしをつかわして、あなたの祈願をその前にのべさせたイスラエルの神、主はこう言われます、――もしあなたがたがこの地にとどまるならば、わたしはあなたがたを建てて倒すことなく、あなたがたを植えて抜くことはない。わたしはあなたがたに災を下したことを悔いているからである。ニ主は言われる、あなたがたを恐れているバビロンの王を恐れてはならない。彼を恐れてはならない、わたしが共にいて、あなたがたを救い、彼の手から助け出すからである。ニわたしはあなたがたをあわれみ、また彼にあなたがたをあわれませ、あなたがたを自分の地にとどまらせる。ミしかし、もしあなたがたが、『われわれはこの地にとどまらない』といつて、あなたがたの神、主の聲にしたがわず、一四また、『いいえ、われわれはあの戦争を見ず、ラツパの声を聞かず、食物も乏しくないエジブ

トの地へ行つて、あそこに住まおう』と言うならば、一五あなたがた、ユダの残っている者たちよ、主の言葉を聞きなさい。万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、もしあなたがたがむりにエジプトへ行つてそこに住むならば、一六あなたがたの恐れているつるぎはエジプトの地であなたがたに追いつき、あなたがたの恐れているききんは、すぐあとを追つてエジプトまで行き、その所であなたがたは死ぬ。一七すべてむりにエジプトへ行つてそこに住む者は、つるぎと、ききんと、疫病で死ぬ。わたしが彼らに下そうとしている災をのがれて残る者はそのうちになり。

一八万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、わたしの怒りと憤りとをエルサレムの住民の上に注いだように、わたしの憤りは、あなたがたがエジプトへ行くとき、あなたがたの上に注ぐ。あなたがたは、のろいとなり、恐怖となり、ののしりとなり、はずかしめとなる。あなたがたは再びこの所を見ることができない。一九ユダの残っている者たちよ、『エジプトへ行つてはならない』と主はあなたがたに言われた。わたしがきよう警告したことを、あなたがたは確かに知らなければならぬ。二〇あなたがたはみずからそむき去つて、命を失った。なぜなら、あなたがたがわたしをあなたがたの神、主につかわし、『われわれの神、主に祈り、われわれの神、主の言われることをことごとく示してください。われわれはそれを行います』と言ったので、二一わた

しはきようそれを示したが、あなたがたはあなたがたの神、主の声を聞かず、主がわたしをつかわして命じさせられた事には、すこしも従わなかったからである。二三それゆえ、あなたがたが行つて住まうことを願っているその所で、あなたがたはつるぎと、ききんと、疫病で死ぬことを確かに知らなければならぬ。

第四三章

一エレミヤがすべての民にむかつて、彼らの神、主の言葉をことごとく語り、彼らの神、主が自分をつかわして言わせられるその言葉をみな告げ終つた時、二ホシヤヤの子アザリヤと、カレヤの子ヨハナンおよび高慢な人々はみなエレミヤに言った、「あなたは偽りを言っている。われわれの神、主が、『エジプトへ行つてそこに住むな』と言わせるためにあなたがたをつかわされたのではない。三ネリヤの子バルクがあなたをそのかして、われわれに逆らわせ、われわれをカルデヤびとの手に渡して殺すか、あるいはバビロンに捕え移させるのだ」。四こうしてカレヤの子ヨハナンと軍勢の長たちおよび民らは皆、主の声にしたがわず、ユダの地にとどまろうとしなかった。五そしてカレヤの子ヨハナンと軍勢の長たちは、ユダに残っている者すなわち追いやられた国々からユダの地に住むために帰ってきた者、――六男、女、

子供、王の娘たち、およびすべて侍衛の長ネブザラダンがシャパンの子であるアヒカムの子ゲダリヤに渡しておいた者、ならびに預言者エレミヤとネリヤの子バルクをつれて、セエジプトの地へ行った。彼らは主の声にしたがわなかったのである。そして彼らはついにタパネスに行った。

八 主の言葉はタパネスでエレミヤに臨んだ、九「大きな石を手に取り、ユダの人々の目の前で、これをタパネスにあるパロの宮殿の入口の敷石のしっくいの中に隠して、一〇彼らに言いなさい、『万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、見よ、わたしは使者をつかわして、わたしのしもべであるバビロンの王ネブカデレザルを招く。彼はその位をこの隠した石の上にすえ、その上に王の天蓋を張る。一 彼は来てエジプトの地を撃ち、疫病に定まっている者を疫病に渡し、とりこに定まっている者を取りこにし、つるぎに定まっている者をつるぎにかける。三 彼はエジプトの神々の宮に火をつけてこれを焼き、彼らを取りこにする。そして羊を飼う者が着物の虫をはらいきよめるように、エジプトの地をきよめる。彼は安らかにそこを去る。三 彼はエジプトの地にあるヘリオポリスのオベリスクをこわし、エジプトの神々の宮を火で焼く』。

第四章

一 エジプトの地に住んでいるユダヤ人すなわちミグドル、タパネス、メンピス、パテロスの地に住む者の事についてエレミヤに臨んだ言葉、二「万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたはわたしがエルサレムとユダの町々に下した災を見た。見よ、これらは今日、すでに荒地地となつて住む人もない。三これは彼らが悪を行つて、わたしを怒らせたことによるのである。すなわち彼らは自分も、あなたがたも、あなたがたの先祖たちも知らなかった、ほかの神々に行つて、香をたき、これに仕えた。四わたしは自分のしもべであるすべての預言者たちをしきりにあなたがたにつかわして、『どうか、わたしの忌みきらうこの憎むべき事をしないように』と言わせたけれども、五彼らは聞かず、耳を傾けず、ほかの神々に香をたいて、その悪を離れなかった。六それゆえ、わたしは怒りと憤りをユダの町々とエルサレムのちまたに注ぎ、それを焼いたので、それらは今日のように荒れ、滅びてしまった。七万軍の神、イスラエルの神、主は今こう言われる、あなたがたはなぜ大いなる悪を行つて自分自身を害し、ユダのうちから、あなたがたの男と女と、子供と乳のみ子を断つて、ひとりも残らないようにしようとするのか。八なぜあなたがたはその手のわざをもつてわたしを怒らせ、あなたがたが行つて住まうエジプトの地で、ほかの神々に香をたいて自分

の身を滅ぼし、地の万国のうちに、のろいとなり、はずかしめとなろうとするのか。九ユダの地とエルサレムのちまたで行ったあなたがたの先祖たちの悪、ユダの王たちの悪、その妻たちの悪、およびあなたがた自身の悪、あなたがたの妻たちの悪をあなたごは忘れたのか。○彼らは今日に至るまで悔いず、また恐れず、あなたがたとあなたがたの先祖たちの前に立てた、わたしの律法とわたしの定めとに従って歩まないものである。

二それゆえ万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、見よ、わたしは顔をあなたがたに向けて災を下し、ユダの人々をことごとく断つ。三またわたしは、エジプトの地に住むために、むりに行つたあのユダの残りの者を取り除く。彼らはみな滅ぼされてエジプトの地に倒れる。彼らは、つるぎとききんに滅ぼされ、最も小さい者から最も大なる者まで、つるぎとききんによつて死ぬ。そして、のろいとなり、恐怖となり、ののしりとなり、はずかしめとなる。四わたしはエルサレムを罰したように、つるぎとききんと、疫病をもつてエジプトに住んでいる者を罰する。五それゆえ、エジプトの地へ行つてそこに住んでいるユダの残りの者のうち、のがれ、または残つて、帰り住まおうと願うユダの地へ帰る者はひとりもない。少数ののがれる者のほかに、帰ってくる者はない。六その時、自分の妻がほかの神々に香をたいたことを知つて、人々、およびその所に立つてゐる女たちの大いなる群衆、な

らびにエジプトの地のパテロスに住んでいる民はエレミヤに答えて言つた、一六「あなたが主の名によつてわたしたちに述べられた言葉は、わたしたちは聞くことができません。一七わたしたちは誓つたことをみな行い、わたしたちが、もと行つていたように香を天后にたき、また酒をその前に注ぎます。すなわち、ユダの町々とエルサレムのちまたで、わたしたちとわたしたちの先祖たちおよびわたしたちの王たちと、わたしたちのつかさたちが行つたようにいたします。その時には、わたしたちは糧食には飽き、しあわせで、災に会いませんでした。一八ところが、わたしたちが、天后に香をたくことをやめ、酒をその前に注がなくなつた時から、すべての物に乏しくなり、つるぎとききんに滅ぼされました。一九また女たちは言つた、「わたしたちが天后に香をたき、酒をその前に注ぐに當つて、これにかたどつてパンを造り、酒を注いだのは、わたしたちの夫が許したことではありませんか」。

二〇そこでエレミヤは男女のすべての人、およびこの答をしたすべての民に言つた、二一「ユダの町々とエルサレムのちまたで、あなたがたとあなたがたの先祖たち、およびあなたがたの王たちとあなたがたのつかさたち、およびその地の民が香をたいたことは、主がこれを忘れず、また、心にとどめておられることではないか。二三主はあなたがたの悪しきわざのため、あなたがたの憎むべき行いのために、もはや忍ぶことができなくなつた。

それゆえ、あなたがたの地は今日のごとく荒れ地となり、驚きとなり、のろいとなり、住む人のない地となった。二三あなたが香をたき、主に罪を犯し、主の声に聞き従わず、その律法と定めと、あかしに従って歩まなかったので、今日のようにこの災があなたがたに臨んだのである。

二四 エレミヤはまたすべての民と女たちに言った、「あなたがたすべてエジプトの地にいるユダの人々よ、主の言葉を聞きなさい。二五 万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、あなたがたとあなたがたの妻たちは口で言い、手で言い、『わたしたちは天后に香をたき、酒を注いで立てた誓いを必ずし遂げる』と言う。それならば、あなたがたの誓いをかため、あなたがたの誓いをなし遂げなさい。二六 それゆえ、あなたがたすべてエジプトの地にいるユダの人々よ、主の言葉を聞きなさい。主は言われる、わたしは自分の大いなる名をさして誓う、すなわちエジプトの全地に、ユダの人々で、その口に、『主なる神は生きておられる』と言って、わたしの名をとるもの、もはやひとりもないようになる。二七 見よ、わたしは彼らを見守っている、それは幸を与えるためではなく、災を下すためである。エジプトの地にいるユダの人々は、つるぎとききんによつて滅び絶える。二八 しかし、つるぎをのがれるわずかの者はエジプトの地を出てユダの地に帰る。そしてユダの残っている民でエジプトに来て住んだ者は、わたしの言葉が立つか、彼らの言葉が立つか、いずれであ

るかを知るようになる。二九 主は言われる、わたしがこの所であなたがたを罰するしはこれである。わたしはこのようにしてわたしがあなたがたに災を下そうと言った事の必ず立つことを知らせよう。三〇 すなわち主はこう言われる、見よ、わたしはユダの王ゼデキヤを、その命を求める敵であるバビロンの王ネブカデレザルの手に渡したように、エジプトの王パロ・ホフラをその敵の手、その命を求める者の手に渡す。

第四十五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年に、ネリヤの子バルクがこれらの言葉をエレミヤの口述にしたがつて書にしるした時、預言者エレミヤが彼に語った言葉、二「バルクよ、イスラエルの神、主はあなたについてこう言われる、三 あなたはかつて、『ああ、わたしはわがわいだ、主がわたしの苦しみに悲しみをお加えになった。わたしは嘆き疲れて、安息が得られない』と言った。四 あなたはこう彼に言いなさい、主はこう言われる、見よ、わたしは自分で建てたものをこわし、自分で植えたものを抜いている――それは、この全地である。五 あなたは自分のために大いなる事を求めるのか、これを求めてはならない。見よ、わたしはすべての人に災を下そうとしている。しかしあなたの命はあなたの行くすべての所で、ぶんどり物としてあなたに与えると主

は言われる」。

第四十六章

「もろもろの国の事について預言者エレミヤに臨んだ主の言葉。

ニエジプトの事、すなわちユフラテ川のほとりにあるカルケミシの近くにいるエジプトの王パロ・ネコの軍勢の事について。これはユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年に、バビロンの王ネブカデレザルが撃ち破ったものである。その言葉は次のとおりである、

三「大盾と小盾とを備え、進んで戦え。

四騎兵よ、馬を戦車につなぎ、馬に乗れ。かぶとをかぶって立て。

ほこをみがき、よろいを着よ。

五わたしは見たが、何ゆえか彼らは恐れて退き、その勇士たちは打ち敗られ、あわてて逃げて、

うしろをふり向くこともしない、――

恐れが彼らの周囲にあると主は言われる。

六足早き者も逃げる事ができず、

勇士ものがれることができない。

北の方、ユフラテ川のほとりで

彼らはつまずき倒れた。

七あのナイル川のようにわきあがり、川々のように、その水のさかまく者はだれか。

ハエジプトはナイル川のようにわきあがり、

その水は川々のようにさかまく。

そしてこれは言う、わたしは上つて、地をおおい、

町々とそのうちに住む者を滅ぼそう。

九馬よ、進め、車よ、激しく走れ。

勇士よ、盾を取るエチオピアびとと、プテびとよ、

弓を巧みに引くルデびとよ、進み出よ。

一〇その日は万軍の神、主の日であつて、

主があだを報いられる日、

その敵にあだをかえされる日だ。

つるぎは食べて飽き、

彼らの血に酔う。

万軍の神、主が、北の地で、ユフラテ川のほとりで、

ほふることをなされるからだ。

二おとめなるエジプトの娘よ、

ギレアデに上つて乳香を取れ。

あなたは多くの薬を用いても、むだだ。

あなたは、いやされることはない。

二三あなたの恥は国々に聞えている、

あなたの叫びは地に満ちている。

勇士が勇士につまずいて、共に倒れたからである」。

二三 バビロンの王ネブカデレザルが来て、エジプトの地を撃とうとする事について、主が預言者エレミヤにお告げになった言葉、

一四 「エジプトで宣べ、ミグドルで告げ示し、またメンピスとタパネスに告げ示して言え、

『堅く立つて、備えよ、

つるぎがあなたの周囲を、滅ぼし尽すからだ』。

一五 なぜ、アピスはのがれたのか。

あなたの雄牛は、なぜ立たなかつたのか。

それは主がこれを倒されたからだ。

一六 あなたに属する多くの兵は、つまずいて倒れた。

そして互に言った、『立てよ、

われわれは、しえたげる者のつるぎを避けて、

われわれの民に帰り、故郷の地へ行こう』と。

一七 エジプトの王パロの名を、

『好機を逸する騒がしい者』と呼べ。

一八 万軍の主という名の王は言われる、

わたしは生きている、

彼は山々のうちのタボルのように、

海のほとりのカルメルのように来り臨む。

一九 エジプトに住む民よ、

捕われのために荷物を備えよ。

メンピスは荒地となり、

廃虚となつて住む人もなくなる。

二〇 エジプトは美しい雌の子牛だ、

しかし北から、牛ばえが来て、それにとまつた。

二一 そのうちにいる雇兵でさえ、肥えた子牛のようだ。

彼らはふり返つて共に逃げ、立つことをしなかつた。

彼らの災難の日、その罰せられる時が来たからだ。

二三 彼は逃げ去るへびのような音をたてる。

その敵が軍勢を率いて彼に臨み、

きこりのように、おのをもつて来るからだ。

二四 彼らは彼の林がいかに入り込みがたくとも、

それを切り倒す。

彼らはいなごよりも多く、

数えがたいからであると、主は言われる。

二五 エジプトの娘ははすかしめを受け、

北からくる民の手に渡される」。

二六 万軍の主、イスラエルの神は言われた、「見よ、わたしはテ-

ベのアモンと、パロと、エジプトとその神々とその王たち、すな

わちパロと彼を頼む者とを罰する。二七 わたしは彼らを、その命

を求める者の手と、バビロンの王ネブカデレザルの手と、その

家来たちの手に渡す。その後、エジプトは昔のように人の住む

所^{ところ}となると、主^{しゅ}は言^いわれる。

二モわたしのしもベヤコブよ、恐^{おそ}れることはない、イスラエルよ、驚^{おどろ}くことはない。

見よ、わたしがあなたを遠^{とほ}くから救^{すく}い、あなたの子孫^{しそん}をその捕^{とら}え移^{うつ}された地^ちから救^{すく}うからだ。

ヤコブは帰^{かえ}つてきて、おだやかに、安^{やす}らかになり、彼^{かれ}を恐^{おそ}れさせる者^{もの}はない。

三ハ主^{しゅ}は言^いわれる、わたしのしもベヤコブよ、恐^{おそ}れることはない、わたしが共^{とも}にいるからだ。

わたしはあなたを追^おいやつた国^{くに}々^々をことごとく滅^{ほろ}ぼし尽^{つく}す。

しかしあなたを滅^{ほろ}ぼし尽^{つく}すことはしない。わたしは正^{ただ}しい道^{みち}に従^{したが}つて、あなたを懲^こらしめる、決して罰^{ばつ}しないではおかない」。

第四十七章

一パロがまだガザを撃^うたなかつたころ、ペリシテびとの事^{こと}について預^{よげん}言^{しゃ}者^者エレミヤに臨^{のぞ}んだ主^{しゅ}の言葉^{ことば}。

二「主^{しゅ}はこ言^いわれる、

見よ、水^{みづ}は北^{きた}から起^{おこ}り、あふれ流^{なが}れて、

この地^ちと、そこにあるすべての物^{もの}、

その町^{まち}と、その中^{なか}に住^すむ者^{もの}とにあふれかかる。

その時^{とき}、人々^{ひとびと}は叫^{さけ}び、この地^ちに住^すむ者^{もの}はみな嘆^{なげ}く。三そのたくましい馬^{うま}のひずめの踏^ふみ鳴^ならす音^{おと}のため、

その戦^{せん}車^{しゃ}の響^{ひび}きのため、その車輪^{しゃりん}のとどろきのために、

父^{ちち}はその手^てが弱^{よわ}くなつて、自分^{じぶん}の子^こをも顧^{かえり}みない。

四これは、ペリシテびとを滅^{ほろ}ぼし尽^{つく}し、ツロとシドンに残^{のこ}つて助^{たす}けをなす者^{もの}をことごとく絶^たやす日^ひが来るからである。

主^{しゅ}はカフトルの海岸^{かいがん}に残^{のこ}つている。ペリシテびとを滅^{ほろ}ぼされる。

五ガザには髪^{かみ}をそることが始^{はじ}まつている。アシケロンは滅^{ほろ}びた。

アナクびとの残^{のこ}りの民^{たみ}よ、いつまで自分^{じぶん}の身^みに傷^{きず}つけるのか。

六主^{しゅ}のつるぎよ、おまえはいつになれば静^{しず}かになるのか。

おまえのさやに帰^{かえ}り、休^{やす}んで静^{しず}かにしておれ。七主^{しゅ}がこれに命^{いのち}を下^{くだ}されたのだ、

どうして静^{しず}かにしておれようか。

アシケロンと海岸の地を攻めることを
定められたのだ」。

第四八章

「モアブの事について、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、

「ああ、ネボはわざわいだ、これは滅ぼされた。

キリヤタイムははずかしめられて取られ、
とりでは、はずかしめられてこわされた。

ニモアブの誉は、消え去った。

ヘシボンで人々はモアブの害を限り、

『さあ、この国を断ち滅ぼそう』という。

マデメンよ、おまえもまた滅ぼされる、

つるぎがおまえを追う。

ミホロナイムから叫び声が聞える、

『荒廃と大いなる滅亡だ』という。

四モアブは滅ぼされ、

叫びはゾアルにまで聞える。

五彼らは泣きながらルヒテの坂を登る。

彼らはホロナイムの下り坂で、

『滅亡』の叫びを聞いたからだ。

六逃げて、自分の身を救え、
荒野の野ろぼのようになれ。

七おまえが、とりでと財宝とを頼みにしたので、

おまえも捕えられるからだ。

またケモシは、その祭司とつかさたちと共に、

捕えられて行く。

八滅ぼす者はすべての町に来る、

一つの町ものがれることができない。

谷は滅び、平地は荒される、

主の言われたとおりである。

九モアブに翼を与えて、飛び去らせよ。

その町々は荒れて、住む者はなくなる。

一〇主のわざを行うことを怠る者はのろわれる。またそのつるぎを押えて血を流さない者はのろわれる。

二モアブはその幼い時から安らかで、

酒が、沈んだおりの上にとどまつて、

器から器に、くみ移されなかったように、

捕え移されなかったので、

その味はなお存し、その香氣も変わることがない。

三主は言われる、それゆえ見よ、わたしがこれを傾ける者どもをつかわす日が来る。彼らはこれを傾け、その器をあげ、そのかめを砕く。四その時モアブはケモシのために恥をかく。ちよ

うどイスラエルの家がその頼みとしたベテルのために恥をかいたようになる。

一四 あなたがたはどうして

『われわれは勇士だ。強い戦士だ』というのか。

一五 モアブとその町々を滅ぼす者は上つて来、

モアブのえり抜きの若者たちは下つて殺された
万軍の主と名のる王が言われる。

一六 モアブの災難は近づいている、

その苦難はすみやかに来る。

一七 すべてその周囲にある者よ、

またその名を知る者よ、

彼のために嘆いて、

『ああ、強き笏、麗しきつえは、

ついに折れた』と言え。

一八 デボンに住む者よ、ああなたの栄えを離れて下り、かわいた地に座せよ。

モアブを滅ぼす者があなたに攻めのぼつて来て、

あなたの城を滅ぼしたからだ。

一九 アロエルに住む者よ、

道のかたわらに立つて見張りし、

逃げてくる男、のがれてくる女に尋ねて、

『何が起ったのか』と言え。

二〇 モアブは敗れて、恥をこうむっている。
嘆き呼ばわれ。

アルノン川のほとりで、

モアブは滅ぼされたと告げよ。

二一 さばきは高原の地に臨み、ホロン、ヤハズ、メパアテ、ミデボン、ネボ、ベテ・デブラタイム、ニキリヤタイム、ベテ・ガムル、ベテ・メオン、ニケリオテ、ボズラなどモアブの地のすべての町の、遠いものにも近いものにも、臨んだ。二五 モアブの角は砕け、その腕は折れたと主は言われる。

二六 モアブを酔わせよ、彼が主に敵して自ら高ぶったからである。モアブは自分の吐いた物の中にころがって、笑い草となる。

二七 モイスラエルはあなたの笑い草ではなかったか。あなたが、彼のことを語るごとに首を振ったのは、彼が盗賊の中にいたとでもいうのか。

二八 モアブに住む者よ、町を去って岩の間に住め。

谷の入口のかたわらに巢を作る

山ばとのようにせよ。

二九 われわれはモアブの傲慢な事を聞いた、

その傲慢は、はなはだしい。

すなわち、その尊大、傲慢、横柄、

およびその心の高ぶりのことを聞いた。

三〇 主は言われる、わたしは彼の横着なを知る、

彼の自慢は偽りで、その行いも偽りである。

三 それゆえ、わたしはモアブのために嘆き、モアブの全地のために呼ばれる。

キルヘレスの人々のためにわたしは悲しむ。

三 シブマのぶどうの木よ、

わたしはヤゼルのために泣くのにまさって

おまえのために泣く。

おまえのつるは延びて海を越え、ヤゼルに及んだ。

おまえの夏の実と、その収穫を滅ぼす者が

襲ってきた。

三 喜びと楽しみは、実り多いモアブの地を去った。

わたしは、ぶどうをしぼる所にも酒をなくした。

楽しく呼ばわって、ぶどうを踏む者もなくなった。

呼ばわっても、喜んで呼ばれる声ではない。

三 西ヘシボンとエレアレは叫ぶ。ヤハヅに至るまで、ゾアルから

ホロナイムとエグラテ・シリシヤに至るまで、彼らはその声をあ

げる。ニムリムの水も絶えたからである。三 主は言われる、わ

たしは犠牲を高く所にささげ、香をその神にたく者をモアブの

うちに滅ぼす。三 それゆえ、わたしの心はモアブのために笛の

ように嘆き、わたしの心はキルヘレスの人々のために笛のよう

に嘆く。彼らの獲た富が消えうせたからである。

三 人はみな髪をそり、皆ひげをそり、みな手に傷をつけ、腰に

荒布を着ける。三 モアブではどの屋根の上も、広場も、ただ
悲しみに包まれている。これは、わたしが、だれもほしがらない
器のようにモアブを砕いたからであると主は言われる。三九 あ
あ、モアブはついに滅びた。人々は嘆く。ああ、モアブは恥じて
顔をそむけた。モアブはその周囲のすべての者の笑い草となり
恐れとなった。

四〇 主はこう言われる、

「見よ、敵はわしのように速く飛んできて、

モアブに向かって翼をのべる。

四一 町々は取られ、城は奪われる。

その日モアブの勇士の心は

子を産む女の心のようになる。

四二 モアブは滅ぼされて、国を成さないようになる。

主に敵して自ら誇ったからである。

四三 主は言われる、

モアブに住む者よ、

恐れと、穴と、わなどがあなたに臨んでいる。

四四 恐れをさけて逃げる者は穴におちいり、

穴をよじ上って出る者は、わなに捕えられる。

わたしがモアブに、その罰せられる年に、

これらのものを臨ませるからであると

主は言われる。

第四章

四 五 逃げた者はヘシボンの陰に、力なく立ちどまる。
ヘシボンから火が出、シホンの家から炎が出て、
モアブの額、騒ぐ人々の頭の頂を焼いたからだ。
四六 モアブよ、おまえはわざわいだ。
ケモシの民は滅びた。
おまえのむすこらは捕え移され、
おまえの娘らも捕え行かれたからである。
四七 しかし末の日にわたしは再びモアブを栄えさせると
主は言われる」。

ここまでではモアブのさばきの事をいったのである。

一 アンモンびとについて、
主はこう言われる、
「イスラエルには子がないのか、世継ぎがないのか。
どうしてミルコムがガドを追い出して、
その民がその町々に住んでいるのか。
二 主は言われる、
それゆえ、見よ、アンモンびとのラバを攻める
戦いの叫びを、わたしが聞えさせる日が来る。
ラバは荒塚となり、その村々は火で焼かれる。

そのときイスラエルは自分を追い出した者どもを
追い出すと主は言われる。
三 ヘシボンよ嘆け、アイは滅ぼされた。
ラバの娘たちよ嘆け、アイは滅ぼされた。
荒布を身にまとい、悲しんで、
まがきのうちを走りまわれ。
ミルコムとその祭司およびつかさが
共に捕え移されるからだ。
四 不信の娘よ、
あなたはなぜ自分の谷の事を誇るのか。
あなたは自分の富に寄り頼んで、
『だれがわたしに攻めてくるものか』と言う。
五 主なる万軍の神は言われる、
見よ、わたしはあなたの上に恐れを臨ませる、
それはあなたの周囲の者から来る。
あなたは追われて、おのおの直ちに他人に続き、
逃げる者を集める人もない。
六 しかし、のちになつて、わたしはアンモンびとを再び栄えさせ
ると、主は言われる」。

七 エドムの事について、万軍の主はこう言われる、
「テマンには、もはや知恵がないのか。
さとい者には計りがなくなつたのか。

その知恵は消えうせたのか。

ハデダンに住む者よ、

逃げよ、のがれよ、深い所に隠れよ。

わたしがエサウの災難を彼の上に臨ませ、

彼を罰する時をこさせるからだ。

九ぶどうを集める者があなたの所に来たならば、

すこしの実をも残さないであろうか。

夜、盗びとが来たならば、

自分たちの満足するだけ滅ぼさないであろうか。

一〇しかしわたしはエサウを裸にし、

その隠れる所を現したので、

彼はその身を隠すことができない。

その子どもたちも、兄弟も、隣り人も滅ぼされる。

そして彼は、いなくなる。

二あなたのみなしごを残せ、

わたしがそれを生きながらえさせる。

あなたのやもめには、わたしに寄り頼ませよ。

三主はこう言われる、「もし、杯を飲むべきでない者もそれを

飲まなければならなかったとすれば、あなたは罰を免れること

ができるか。あなたは罰を免れない。それを飲まなければな

らない。三主は言われる、わたしは自分を誓った、ボズ

ラは驚きとなり、ののしりとなり、荒れ地となり、のろいとなる。

その町々は長く荒れ地となる」。

一四わたしは主からのおとずれを聞いた。

ひとりの使者がつかわされて万国に行き、

そして言った、

「あなたがたは集まり、行つて彼を攻め、立つて戦え。

一五見よ、わたしはあなたを万国のうちに小さい者とし、

人々のうちに卑しめられる者とする。

一六岩の割れ目に住み、山の高みを占める者よ、

あなたの恐ろしい事と、あなたの心の高ぶりが、

あなたを欺いた。

あなたは、わたしのように巢を高い所に作っているが、

わたしはその所からあなたを取りおろすと

主は言われる。

一七エドムは恐れとなる。そのかたわらを通り過ぎる者はみな

恐れ、その災のために、舌打ちする。一八主は言われる、ソドム

とゴモラとその隣の町々がくつがえされた時のように、そこに

住む人はなく、そこに宿る人もなくなる。一九見よ、ししがヨル

ダンの密林から上つてきて、じょうぶな羊のおりを襲うように、

わたしは、たちまち彼らをそこから逃げ走らせ、わたしの選ぶ者

をその上に立てる。だれかわたしのような者があるであろう

か。だれがわたしを呼びつけることができるか。どの牧者が

わたしの前に立つことができるか。二〇それゆえ、エドムに対

して主が立てた計りごとと、テマンに住む者に対してしようとする事を聞くがよい。彼らの群れのうちの小さいものまでも皆引かれて行く。彼らのおりのものもその終りを見て恐れる。三 その倒れる音を聞いて、地は震い、彼らの叫び声は紅海にも聞える。三 見よ、敵はわしのように上り、すみやかに飛びかけり、その翼をボズラの上に張り広げる。その日エドムの勇士の心は子を産む女の心のようになる」。

三 ダマスコの事について、

「ハマテとアルパデは、うろたえている、

彼らは悪いおとずれを聞いたからだ。

彼らは勇気を失い、

穏やかになることのできない海のように悩む。

二 ダマスコは弱り、身をめぐらして逃げた、

恐怖に襲われている。

子を産む女に臨むように痛みと悲しみと彼に臨む。

二五 ああ、名ある町、楽しい町は捨てられる。

二六 それゆえ、その日に、若い者は、広場に倒れ、

兵士はことごとく滅ぼされると

万軍の主は言われる。

二七 わたしはダマスコの城壁の上に火を燃やし、

ベネハダデの宮殿を焼き尽す」。

二八 バビロンの王ネブカデレザルが攻め撃ったケダルとハゾル

の諸国の事について、

主はこう言われる、「立つて、ケダルに向かつて進み、

東の人々を滅ぼせ。

二九 彼らの天幕と、その羊の群れとは取られ、

その垂幕とそのもろもろの器と、

らくだとは彼らの所から運び去られ、

人々は彼らに向かつて叫ぶ、

『恐ろしいことが四方にある』と。

三〇 主は言われる、ハゾルに住む者よ、

逃げよ、遠くさまよい行き、深い所に隠れよ。

バビロンの王ネブカデレザルが

あなたがたを攻める計りごとをめぐらし、

あなたがたを攻める、てだてを設けたからだ。

三一 主は言われる、

立つて進み、安全な所に住むきらくな民を攻めよ、

彼らは門もなく、貫の木もなく、ひとり離れて住む。

三二 彼らのらくだは、ぶんどり物となり、

家畜の群れは奪われる。

わたしは、かの髪の毛のすみずみを切る者を

四方に散らし、

その災難を八方からこさせると主は言われる。

三三 ハゾルは山犬のすまいとなり、

いつまでも荒れ地となつてゐる。

だれもそこに住む人はなく、

そこに宿る人もない」。

三 ユダの王ゼデキヤの治世の初めのころに、エラムの事について預言者エレミヤに臨んだ主の言葉。

五 万軍の主はこう言われる、「見よ、わたしはエラムが力として頼んでいる弓を折る。三六わたしは天の四方から、四方の風をエラムにこさせ、彼らを四方の風に散らす。エラムから追い出される者の行かない国はない。三モ主は言われる、わたしはエラムをしてその敵の前、またその命を求める者の前に恐れさせる。わたしは災をくだし、激しい怒りをその上にくだす。彼らのうしろに、つるぎを送つて滅ぼし尽す。三八そしてわたしの位をエラムにすえ、王とつかさたちとを滅ぼすと主は言われる。三九しかし末日の日に、わたしはエラムを再び榮えさせると、主は言われる」。

第五〇章

一 主が預言者エレミヤによつて語られたバビロンとカルデヤびとの地の事についての言葉。

二 「国々のうちに告げ、また触れ示せよ、旗を立てて、隠すことなく触れ示して言え、

『バビロンは取られ、ベルははずかしめられ、

メロダクは砕かれ、その像ははずかしめられ、

その偶像是砕かれる』と。

三 それは、北の方から一つの国民がきて、これを攻め、その地を荒して、住む人もないようにするからである。人も獣もみな逃げ去つてしまふ。

四 主は言われる、その日その時、イスラエルの民とユダの民は共に帰ってくる。彼らは嘆きながら帰ってくる。そしてその神、主を求める。五 彼らは顔をシオンに向けて、その道を問ひ、『さあ、われわれは、永遠に忘れられることのない契約を結んで主に連なるう』と言う。

六 わたしの民は迷える羊の群れである、その牧者がこれをいざなつて、山に踏み迷わせたので、山から丘へと行きめぐり、その休む所を忘れた。七 これに会う者はみなこれを食べた。その敵は言つた、『われわれに罪はない。彼らがそのまことのすみかである主、先祖たちの希望であつた主に対して罪を犯したのだ』と。

八 バビロンのうちから逃げよ。カルデヤびとの地から出よ。群れの前に行く雄やぎのようにせよ。九 見よ、わたしは大きい国々を起し集めて、北の地からバビロンに攻めこさせる。彼らはこれに向かつて勢ぞろいをし、これをその所から取る。彼らの矢はむなしく帰らない老練な勇士のようである。一〇 カルデヤは

人にかすめられる。これをかすめる者はみな飽くことができる
と、主は言われる。

二 わたしの嗣業をかすめる者どもよ、

あなたがたは喜び樂しめ、

雌の子牛のように草に戯れ、

雄馬のように、いなないているが、

三 あなたがたの母はいたくはずかしめられ、

あなたがたを産んだ者は恥をこうむる。

見よ、彼女は国々のうちの最もあとなるものとなり、

かわいた砂原の荒野となる。

三 主の怒りによつて、ここに住む者はなく、

完全に荒地となる。

バビロンのかたわらを通る者は、

みなその傷を見て驚き、かつあざ笑う。

一四 あなたがたすべて弓を張る者よ、

バビロンの周囲に勢ぞろいして、これを攻め、

矢を惜しまずに、これを射よ、

彼女が主に罪を犯したからだ。

一五 その周囲に叫び声をあげよ、彼女は降伏した。

そのとりでは倒れ、その城壁はくずれた、

主があだをかえされたからだ。

彼女に報復せよ、彼女がおこなったように、

これに行え。

一六 種まく者と、刈入れどきに、かまを取る者を

バビロンに絶やせ。

滅ぼす者のつるぎを恐れて、

人はおのおの自分の民の所に帰り、

そのふるさとに逃げて行く。

モイスラエルは、ししに追われて散った羊である。初めにアツ

スリヤの王がこれを食い、そして今はついにバビロンの王ネブ

カデレザルがその骨をかじった。一八 それゆえ万軍の主、イスラ

エルの神は、こう言われる、見よ、わたしはアッスリヤの王を罰

したように、バビロンの王とその国に罰を下す。一九 わたしはイ

スラエルを再びその牧場に帰らせる。彼はカルメルとバシヤン

で草を食べる。またエフライムの山とギレアデでその望みが満

たされる。二〇 主は言われる、その日その時には、イスラエルの

とがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それはわ

たしが残しておく人々を、ゆるすからである。

三 主は言われる、

上つて行つて、メラタイムの地を攻め、

ペコデの民を攻め、

彼らを殺して全く滅ぼし、

わたしがあなたがたに命じたことを皆、行いなさい。

三三 その地に、いくさの叫びと、大いなる滅びがある。

二三 ああ、全地を砕いた鎚はついに折れ砕ける。

ああ、バビロンはついに国々のうちの恐るべき見ものとなる。

二四 バビロンよ、

わたしは、おまえを捕えるためにわなをかけたが、おまえはそれにかかった。

そしておまえはそれを知らなかった。

おまえは主に敵したので、尋ね出され、捕えられた。

二五 主は武器の倉を開いて

その怒りの武器を取り出された。

主なる万軍の神が、

カルデヤびとの地に事を行われるからである。

二六 あらゆる方面からきて、これを攻め、

その穀倉を開き、

これを穀物の山のように積み上げ、

完全に滅ぼし尽し、そこに残る者のないようにせよ。

二七 その雄牛をことごとく殺せ、

それを、ほふり場に下らせよ。

それらのものはわざわいだ、

その日、その罰を受ける時がきたからだ。

二八 聞けよ、バビロンの地から逃げ、のがれてきた者の声がする。
われわれの神、主の報復、その宮の報復の事をシオンに告げ示

す。

二九 弓を張る射手をことごとく呼び集めて、バビロンを攻めよ。
その周囲に陣を敷け。ひとりも逃がすな。そのしわざにした

がってバビロンに報い、これがおこなった所にしたがってこれ

に行え。彼がイスラエルの聖者である主に向かって高慢にふる

まつたからだ。三〇 それゆえ、その日、若い者は、広場に倒れ、

兵士はみな絶やされると主は言われる。

三一 主なる万軍の神は言われる、

高ぶる者よ、見よ、わたしはおまえの敵となる、

あなたの日、わたしがおまえを罰する時が来た。

三二 高ぶる者はつまずき倒れる、

これを助け起すものはない。

わたしはその町々に火を燃やして、

その周囲の者をことごとく焼き尽す。

三三 万軍の主はこう言われる、イスラエルの民とユダの民は共に

しえたげられている。彼らをとりこにした者はみな彼らを固く

守って釈放することを拒む。四 彼らをあがなう者は強く、その

名は万軍の主といわれる。彼は必ず彼らの訴えをただし、この

地に安きを与えるが、バビロンに住む者には不安を与えられる。

三五 主は言われる、

カルデヤびとの上とバビロンに住む者の上、

そのつかさたち、その知者たちの上につるぎが臨む。

三六 占い師の上につるぎが臨み、彼らは愚か者となる。

その勇士の上につるぎが臨み、彼らは滅ぼされる。

三七 その馬の上と、その車の上につるぎが臨み、

またそのうちにあるすべての雇兵の上に臨み、

彼らは女のようになる。

その財宝の上につるぎが臨み、それはかすめられる。

三八 その水の上に、ひでりが来て、それはかわく。

それは、この地が偶像の地であつて、

人々が偶像に心が狂っているからだ。

三九 それゆえ、野の獣と山犬とは共にバビロンにおり、だちよう

もそこに住む。しかし、いつまでもその地に住む人はなく、世々

ここに住む人はない。四〇 主は言われる、神がソドムとゴモラ

と、その隣の町々を滅ぼされたように、そこに住む人はなく、そ

こに宿る人の子はない。

四一 見よ、一つの民が北の方から来る。

大いなる国と多くの王が

地の果から立ち上がっている。

四二 彼らは弓と、やりを取る。

残忍で、あわれみがなく、

その響きは海の鳴りとどろくようである。

バビロンの娘よ、彼らは馬に乗り、

いくさびとのように身をよろつて、

あなたを攻める。

四三 バビロンの王はそのうわさを聞いて、

その手は弱り、子を産む女に臨むような

痛みと苦しみに迫られた。

四四 見よ、ししがヨルダンの密林から上つてきて、じようぶな羊

のおりを襲うように、わたしは、たちまち彼らをそこから逃げ去

らせる。そしてわたしの選ぶ者をその上に立てる。だれかわた

しのような者があるであらうか。だれがわたしを呼びつけるこ

とができようか。どの牧者がわたしの前に立つことができよう

か。四五 それゆえ、バビロンに対して主が立てた計りとと、カ

ルデヤびとの地に対してしようとする事を聞くがよい。彼らの

群れのうちの小さい者は、かならず引かれて行く。彼らのおり

のものも必ずその終りを見て恐れる。四六 バビロンが取られた

との声によつて地は震い、その叫びは国々のうちに聞える」。

第五章

一 主はこう言われる、

「見よ、わたしは、滅ぼす者の心を奮い起して、

バビロンを攻め、カルデヤに住む者を攻めさせる。

二 わたしはバビロンに、あおぎ分ける者をつかわす。

彼らは、その災の日に、四方からこれを攻め、

それをあおぎ分けて、その地をむなくする。

三 射手にはその弓を張らせることなく、

よろいを着て立ち上がらせるな。

その若き者をあわれむことなく、その軍勢をことごとく滅ぼせ。

四 彼らはカルデヤびとの地に殺されて倒れ、そのちまたに傷ついて倒れる。

五 イスラエルとユダは

その神、万軍の主に捨てられてはいないが、

しかしカルデヤびとの地には

イスラエルの聖者に向かつて犯した罪が

満ちている。

六 バビロンのうちからのがれ出て、

おのおのその命を救え。

その罰にまきこまれて断ち滅ぼされてはならない。

今は主があだを返される時だから、

それに報復をされるのである。

七 バビロンは主の手のうちにある金の杯であつて、

すべての地を酔わせた。

国々はその酒を飲んだので、国々は狂った。

八 バビロンはたちまち倒れて破れた。

これがために嘆け。

その傷のために乳香を取れ。

あるいは、いえるかも知れない。

九 われわれはバビロンをいやそうとしたが、

これはいえなかつた。

われわれはこれを捨てて、

おのおの自分の国に帰ろう。

その罰が天に達し、

雲にまで及んでいるからだ。

一〇 主はわれわれの正しいことを明らかにされた。

さあ、われわれはシオンで、

われわれの神、主のみわざを告げ示そう。

二 矢をとぎ、

盾を取れ。主はメデヤびとの王たちの心を引き立てられる。主

のバビロンに思い図ることは、これを滅ぼすことであり、主があ

だを返し、その宮のあだを返されるのである。

三 バビロンの城壁に向かつて旗を立て、

見張りを強固にし、番兵を置き、伏兵を備えよ。

主がバビロンに住む者を攻めようと図り、

その言われたことを、いま行われるからだ。

四 多くの水のほとりに住み、

多くの財宝を持つ者よ、

あなたの終りが来て、その命の糸は断たれる。

一四 万軍の主はみずからをさして誓い、言われる、
わたしは必ずあなたのうちに、
人をいなごのように満たす。
彼らはあなたに向かつて、かちどきの声をあげる。
一五 主はその力をもつて地を造り、
その知恵をもつて世界を建て、
その悟りをもつて天をのべられた。
一六 彼が声を出されると、
天に多くの水のざわめきがあり、
また地の果から霧を立ちあがらせられる。
彼は雨のためにいなびかりをおこし、
その倉から風を取り出される。
一七 すべての人は愚かで知恵がなく、
すべての金細工人は
その造った偶像のために恥をこうむる。
その偶像は偽り物で、
そのうちに息がないからだ。
一八 それらは、むなしいもの、迷いのわざである。
罰せられる時になれば滅びるものである。
一九 ヤコブの分である彼はこのようなものではない、
彼は万物の造り主だからである。
イスラエルは彼の嗣業としての部族である。

彼の名は万軍の主という。
二〇 おまえはわたしの鎧であり、戦いの武器である。
わたしはおまえをもつてすべての国を砕き、
おまえをもつて万国を滅ぼす。
二一 おまえをもつてわたしは馬と、その騎手とを砕き、
おまえをもつて戦車とそれに乗る者とを砕く。
二二 わたしはおまえをもつて男と女とを砕き、
おまえをもつて老いた者と幼い者とを砕き、
おまえをもつて若い者と、おとめとを砕く。
二三 わたしはおまえをもつて、
羊飼と、その群れとを砕き、
おまえをもつて農夫と、くびきを負う家畜とを砕き、
おまえをもつておさたちと、つかさたちとを砕く。
二四 わたしはバビロンとカルデヤに住むすべての者にと、彼らが
シオンで行ったもろもろの悪しき事のために、あなたがたの目
の前で報いをする、主は言われる。
二五 主は言われる、
全地を滅ぼし尽す滅ぼしの山よ、
見よ、わたしはおまえの敵となる、
わたしは手をおまえの上に伸べて、
おまえを岩からころばし、
おまえを焼け山にする。

二六 主は言われる、
 人がおまえから石を取つて、隅の石とすることなく、
 また礎とすることもない。
 おまえはいつまでも荒れ地となつてゐる。
 二七 地に旗を立て、国々のうちにラツパを吹き、
 国々の民を集めてそれを攻め、
 アララテ、ミンニ、アシケナズの国々をまねいて
 それを攻め、
 軍の長を立ててそれを攻め、
 群がるいなごのように馬を上り行かせよ。
 二八 国々の民を集めてそれを攻め、
 メデアびとの王たちと、
 そのおさたち、つかさたち、
 およびすべての領地の人々を集めてこれを攻めよ。
 二九 その地は震い、かつもだえ苦しむ、
 主がその思い図ることをバビロンにおこない、
 バビロンの地を、住む人なき荒れ地とされるからだ。
 三〇 バビロンの勇士たちは戦いをやめて、
 その城にこもり、力はうせて、女のようなになる。
 その家は焼け、その貫の木は砕かれる。
 三一 飛脚は走つて飛脚に会い、使者は走つて使者に会い、
 バビロンの王に告げて、町はことごとく取られ、

三二 渡し場は奪われ、とりでは火で焼かれ、
 兵士はおびえていると言う。
 三三 万軍の主、イスラエルの神はこう言われる、
 バビロンの娘は、打ち場のようだ、
 その踏まれる時が来たのだ。
 しばらくしてその刈り取られる時が来る。
 三四 「バビロンの王ネブカデレザルはわたしを食い尽し、
 わたしを滅ぼし、わたしを、からの器のようにし、
 龍のようにわたしを飲み、
 わたしのうまい物でその腹を満たし、
 わたしを洗いざらいにした。
 三五 わたしとわたしの肉親におこなつた暴虐は、
 バビロンにふりかかる」と
 シオンに住む者は言わなければならない。
 「わたしの血はカルデヤに住む者にふりかかる」と
 エルサレムは言わなければならない。
 三六 それゆえ主はこう言われる、
 「見よ、わたしはあなたの訴えをただし、
 あなたのためにあだを返す。
 わたしはバビロンの海をかわかし、
 その泉をかわかす。
 三七 バビロンは荒塚となり、山犬のすまいとなり、

驚きとなり、笑いとなり、
住む人のない所となる。

三八 彼らはししのように共にほえ、
若いししのようにほえる。

三九 彼らの欲の燃えている時、
わたしは宴を設けて彼らを酔わせ、
彼らがついに氣を失って、ながい眠りにいり、
もはや目をさますことのないようにしようと
主は言われる。

四〇 わたしは彼らを小羊のように、
また雄羊や雄やぎのように、ほふり場に下らせよう。

四一 ああ、バビロンはついに取られた、
全地の人の、ほめたたえた者は捕えられた。

ああ、バビロンはついに国々のうちに驚きとなった。
四二 海はバビロンにあふれかかり、
どよめく波におおわれた。

四三 その町々は荒れて、
かわいた地となり、砂原となり、
住む人のない地となる。

人の子はひとりとしてそこを過ぎることはない。
四四 わたしはバビロンでベルを罰し、
そののみこんだものを口から取り出す。

国々が川のように彼に流れ入ることはなくなる。
バビロンの城壁は倒れた。

四五 わが民よ、あなたがたはその中から出て、
おのおの主の激しい怒りを免れ、その命を救え。
四六 心を弱くしてはならない、

この地で聞くうわさを恐れてはならない。
うわさはこの年にもくれば、また次の年にもくる。
この地に暴虐があり、

つかさとつかさどが攻めあうことがある。
四七 それゆえ見よ、

わたしがバビロンの偶像を罰する日が来る。
その全地ははすかしめられ、
その殺される者はみなその中に倒れる。

四八 天と地とそのうちにあるすべてのものは
バビロンの事で喜び歌う。
滅ぼす者が北の方からここに来るからであると
主は言われる。

四九 イスラエルの殺された者たちのために、
バビロンは倒れなければならない、
バビロンのために全地の殺された者は倒れたのだ。
五〇 つるぎをのがれてきたあなたがたは、
行け、立ちとどまってはならない。

遠くから主を覚え、

エルサレムを心にとめよ。

五二『われわれはのしりを聞いたので、恥じている。異邦人が主の宮の聖所にはいったので、恥がわれわれの顔をおおった』。

五三主は言われる、

それゆえ見よ、わたしがその偶像を罰する日が来る、傷つけられた者が、その全国にうめくようになる。

五三たといバビロンが天に上つても、

その城を高くして固めても、

滅ぼす者はわたしから出て、

これに臨むと主は言われる。

五四聞け、バビロンの叫びを、

カルデヤびとの地に起る大いなる滅びの騒ぎ声を。

五五主がバビロンを滅ぼし、

その大いなる声を絶やされるのだ。

その波は大水のように鳴りとどろき、

その声はひびき渡る。

五六滅ぼす者がこれに臨み、バビロンに來た。

その勇士たちは捕えられ、その弓は折られる。

主は報いをする神であるから必ず報いられるのだ。

五七わたしはその君たちと知者たち、

おさたち、つかさたち、および勇士たちを酔わせる。彼らは、ながい眠りにいり、目をさますことはない。

万軍の主と呼ばれる王がこれを言わせる。

五八万軍の主はこう言われる、

バビロンの広い城壁は地にくずされ、

その高い門は火に焼かれる。

こうして民の労苦はむなしくなり、

国民はただ火のために疲れる。

五九マアセヤの子であるネリヤの子セラヤが、ユダの王ゼデキヤ

と共に、その治世の四年にバビロンへ行くとき、預言者エレミヤ

がセラヤに命じた言葉。セラヤは宿営の長であつた。六〇エレ

ミヤはバビロンに臨もうとするすべての災を巻物にのしした。

これはすなわちバビロンの事についてしるしたすべての言葉で

ある。六一エレミヤはセラヤに言った、「あなたはバビロンへ

行つたならば、忘れることなくこのすべての言葉を読み、六二そ

して言いなさい、『主よ、あなたはこの所を滅ぼし、人と獣とを

問わず、すべてここに住む者のないようにし、永久にここを荒

れ地としようと、この所について語られました』と。六三あなた

がこの巻物を読み終つたならば、これに石をむすびつけてユフ

ラテ川の中に投げこみ、六四そして言いなさい、『バビロンはこの

ように沈んで、二度と上がつてこない。わたしがこれに災を下

すからである』と。六五まではエレミヤの言葉である。

第五章

一ゼデキヤは王となつたとき二十一歳であつたが、エルサレムで十一年世を治めた。母の名はハムタルといい、リブナのエレミヤの娘である。ニゼデキヤはエホヤキムがすべて行つたように、主の目の前に悪事を行つた。ミたしかに、主の怒りによつて、エルサレムとユダとは、そのみ前から捨て去られるようになった。

そしてゼデキヤはバビロンの王にそむいた。四そこで彼の治世の九年十月十日に、バビロンの王ネブカデレザルはその軍勢を率い、エルサレムにきて、これを包圍し、周圍に壘を築いてこれを攻めた。五こうしてこの町は攻め囲まれて、ゼデキヤ王の十一年にまで及んだが、六その四月九日になつて、町の中の食糧は、はなはだしく欠乏し、その地の民は食物を得ることができなくなつた。七そして町の城壁はついに打ち破られたので、兵士たちはみな逃げ、夜のうちに、王の園の近くの、二つの城壁の間の門から町をのがれ出て、カルデヤびとが、町を攻め囲んでいるうちに、アラバの方へ落ちて行つた。八しかしカルデヤびとの軍勢は王を追つて行つて、エリコの平地でゼデキヤに追いついたが、彼の軍勢がみな散つて彼のそばを離れたので、九カルデヤびとは王を捕え、ハマテの地のリブラにいるバビロンの王のもとに引いていったので、王は彼の罪を定めた。一〇すなわちバビ

ロンの王はゼデキヤの子たちをその目の前で殺させ、ユダのつかさたちをことごとくりブラで殺させ、一一またゼデキヤの目をつぶさせた。そしてバビロンの王は彼を鎖につないでバビロンへ連れて行き、その死ぬ日まで獄屋に入れて置いた。

三五月十日に、――それはバビロンの王ネブカデレザルの世の十九年であつた――バビロンの王に仕える侍衛の長ネブザラダンはエルサレムに、はいつて、一二主の宮と王の宮殿を焼き、エルサレムのすべての家を焼いた。彼は大きな家をみな焼きはらつた。一四また侍衛の長と共にいたカルデヤびとの軍勢は、エルサレムの周圍の城壁をみな取りこわした。一五そして侍衛の長ネブザラダンは民のうちの最も貧しい者若干、そのほか町のうちに残つた者、およびバビロンの王にくだつた人、その他工匠たちを捕え移した。一六しかし侍衛の長ネブザラダンはその地の最も貧しい者若干を残して、ぶどうを作る者とし、農夫とした。

一七カルデヤびとはまた主の宮の青銅の柱と、洗盤の台と、青銅の海を砕いて、その青銅をことごとくバビロンへ運び、一八また、つぼと、十能と、心切りばさみと、鉢と、香を盛る皿および宮の勤めに用いる青銅の器をことごとく取つて行つた。一九また彼らは小鉢と、心取り皿と、鉢と、つぼと、燭台と、香を盛る皿と、灌祭の鉢を取つた。金で作つた物は金として、銀で作つた物は銀として、侍衛の長は運び去つた。二〇ソロモン王が主の宮

につく
に造った二本の柱と、一つの海と、海の下十二の青銅の牛と、
台など、このすべての物の青銅の重さは量ることもできなかつた。三この一本の柱の高さは十八キュビト、周囲は十二キュビトで、指四本の厚さがあり、中は、うつろであつた。三その上に青銅の柱頭があり、柱頭の高さは五キュビト、柱頭の周囲は網細工と、ざくろとで飾り、これらもみな青銅であつた。他の柱もそのざくろも、これと同じであつた。三その四方に九十六個のざくろがあり、周囲の網細工の上にあるざくろの数は百個であつた。

三四侍衛の長は祭司長セラヤと次席の祭司ゼバニヤと三人の門を守る者を捕え、三五また兵士をつかさどるひとりの役人と、町にいた王の側近の者七人と、その地の民を募る軍勢の長の書記官と、町の中にいた六十人の者を町から捕え去つた。三六侍衛の長ネブザラダンは、これらの人を捕えて、リブラにいるバビロンの王のもとに連れて行つた。ニモバビロンの王は、ハマテの地のリブラで彼らを撃ち殺した。こうして、ユダは自分の地から捕え移された。

三八ネブカデレザルが捕え移した民の数は次のとおりである。第七年にはユダヤ人三千二十三人。ニ九またネブカデレザルはその第十八年にエルサレムから八百三十二人を捕え移した。三〇ネブカデレザルの二十三年に侍衛の長ネブザラダンは、ユダヤ人七百四十五人を捕え移した。この総数は四千六百人であつた。

た。

三ユダの王エホヤキンが捕え移されて後三十七年の十二月二十五日に、バビロンの王エビルメロダクはその即位の年に、ユダの王エホヤキンを獄屋から出し、そのこうべを挙げさせ、三親切に彼を慰め、その位を、バビロンで共にいる王たちの位よりも高くした。三こうしてエホヤキンは獄屋の服を脱いだ。そして生きている間は毎日王の食卓で食事し、三四彼の給与としては、その死ぬ日まで一生の間、たえず日々の必要にしたがつて、バビロンの王から給与を賜わつた。

哀歌

第一章

一ああ、むかしは、
民の満ちみちていたこの都、
国々の民のうちで大いなる者であったこの町、
今は寂しいさまで座し、やもめのようになった。
もろもろの町のうちで女王であった者、
今は奴隷となった。
ニこれは夜もすがらいたく泣き悲しみ、
そのほおには涙が流れている。
そのすべての愛する者のうちには、
これを慰める者はひとりもなく、
そのすべての友はこれにそむいて、その敵となった。
ミユダは悩みのゆえに、
また激しい苦役のゆえに、のがれて行って、
もろもろの国民のうちに住んでいるが、安息を得ず、
これを追う者がみな追いついてみると、
悩みのうちにあった。
四シオンの道は祭に上ってくる者のないために悲しみ、
その門はことごとく荒れ、

その祭司たちは嘆き、
そのおとめたちは引かれて行き、
シオンはみずからいたく苦しむ。
五そのあだはかしらとなり、その敵は栄えている。
そのとがが多いので、
主がこれを悩まされたからである。
その幼子たちは捕われて、あだの前に行つた。
ハシオンの娘の栄華はことごとく彼女を離れ去り、
その君たちは牧草を得ない、しかのようになり、
自分を追う者の前に力なく逃げ去つた。
セエルサレムはその悩みと苦しみの日に、
昔から持っていたもろもろの宝を思い出す。
その民があだの手に陥り、
だれもこれを助ける者のない時、
あだはこれを見て、その滅びをあざ笑つた。
ハエルサレムは、はなはだしく罪を犯したので、
汚れたものとなつた。
これを尊んだ者も皆その裸を見たので、
これを卑しめる。
これもまたみずから嘆き、顔をそむける。
九その汚れはその衣のすそにあり、
これはその終りを思わなかつた。

それゆえ、これは驚くばかりに落ちぶれ、
これを慰める者はひとりもない。

「主よ、わが悩みを顧みてください、
敵は勝ち誇っていますから」。

○ 敵は手を伸べて、その財宝をことごとく奪った。
あなたがさきに異邦人らはあなたの公会に、
はいってはいならないと命じられたのに、
彼らがその聖所にはいるのをシオンは見た。

二 その民はみな嘆いて食物を求め、

その命をささえるために、財宝を食物にかえた。

「主よ、みそなわして、

わたしの卑しめられるのを顧みてください」。

三 「すべて道行く人よ、

あなたがたはなんとも思わないのか。

主がその激しい怒りの日にわたしを悩まして、

わたしにくだされた苦しみのような苦しみ、

また世にあるだろうか、尋ねて見よ。

二 主は上から火を送り、

それをわが骨にくだし、

網を張ってわが足を捕え、

わたしを引き返させ、

ひねもす心わびしく、かつ病み衰えさせられた。

一四 わたしのとがは、つかねられて、

一つのくびきとせられ、

主のみ手により固く締められて、

わたしの首におかれ、

わたしの力を衰えさせられた。

主はわたしを、立ちむかい得ざる者の手に渡された。

一五 主はわたしのうちにあるすべての勇士を無視し、

聖会を召集して、わたしを攻め、

わが若き人々を打ち滅ぼされた。

主は酒ぶねを踏むように、

ユダの娘なるおとめを踏みつけられた。

一六 このために、わたしは泣き悲しみ、

わたしの目は涙であふれる。

わたしを慰める者、わたしを勇気づける者が

わたしから遠く離れたからである。

わが子らは敵が勝ったために、

わびしい者となった」。

一七 シオンは手を伸ばしても、

これを慰める者はひとりもない。

ヤコブについては、主は命じて、

その周囲の者を、これがあだとせられた。

エルサレムは彼らの中にあつて、

汚れた物のようになった。

一八「主は正しい、

わたしは、み言葉にそむいた。

すべての民よ、聞け、

わが苦しみを顧みよ。

わがおとめらも、わが若人らも捕われて行つた。

一九わたしはわが愛する者を呼んだが、

彼らはわたしを欺いた。

わが祭司および長老たちは、その命をささえようと、

食物を求めている間に、町のうちで息絶えた。

二〇主よ、顧みてください、

わたしは悩み、わがはらわたはわきかえり、

わが心臓はわたしの内に転倒しています。

わたしは、はなはだしくそむいたからです。

外にはつるぎがあつて、わが子を奪い、

家の内には死のようなものがある。

二一わたしはどんなに嘆くかを聞いてください。

わたしを慰める者はひとりもなく、

敵はみなわたしの悩みを聞いて、

あなたがこれをなされたのを喜んだ。

あなたがさきに告げ知らせたその日をきたらせ、

彼らをも、わたしのようになしてください。

第二章

二三彼らの悪をことごとくあなたの前にあらわし、

さきにわがもろもろのところがのために、

わたしに行われたように、彼らにも行つてください。

わが嘆きは多く、

わが心は弱りはてているからです」。

一ああ、主は怒りを起し、

黒雲をもつてシオンの娘をおおわれた。

主はイスラエルの栄光を天から地に投げ落とし、

その怒りの日に、

おのれの足台を心にとめられなかった。

二主はヤコブのすべてのすまいを

滅ぼして、あわれまず、

その怒りによつて、ユダの娘のとりでをこわし、

これを地に倒して、

その国とそのつかさたちをはずかしめられた。

三主は激しい怒りをもつて、

イスラエルのすべての力を断ち、

敵の前で、おのれの右の手を引きもどし、

周囲を焼きつくす燃える火のように、

ヤコブを焼かれた。

四主は敵のように弓を張り、

あだのように右の手を伸べて立ち、

シオンの娘の天幕におるわれわれの目に誇る者を、

ことごとく殺し、

火のようにその怒りを注がれた。

五主は敵のようになつて、イスラエルを滅ぼし、

そのすべての宮殿を滅ぼし、そのとりでをこわし、

ユダの娘の上に憂いと悲しみを増し加えられた。

六主は園の小屋のようにおのれの幕屋を倒し、

その祭の場所をこわされた。

主は祭と安息日とをシオンに忘れさせ、

激しい怒りによつて、王と祭司とを捨てられた。

七主はその祭壇を忌み、その聖所をきらつて、

もろもろの宮殿の石がきを敵の手に渡された。

彼らは祭の日のように、主の宮で声をあげた。

八主はシオンの娘の城壁を破壊しようとして

思い定めて、なわを張り、

打ちこわして、その手をひかず、

城壁と石がきを悲しませられた。

これらは共に衰える。

九その門は地にうずもれ、

主はその貫の木をこわし砕かれた。

その王と君たちはもろもろの国民の中におり、

もはや律法はなく、

またその預言者は主から幻を得ない。

一〇シオンの娘の長老たちは地に座して黙し、

頭にちりをかぶり、身に荒布をまとつた。

エルサレムのおとめたちはこうべを地にたれた。

二わが目は涙のためにつぶれ、

わがはらわたはわきかえり、

わが肝はわが民の娘の滅びのために、

地に注ぎ出される。

幼な子や乳のみ子が町のちまたに

息も絶えようとしてゐるからである。

三彼らが、傷ついた者のように町のちまたで

息も絶えようとするとき、

その母のふところにその命を注ぎ出そうとするとき、

母にむかつて、「パンとぶどう酒とは

どこにありますか」と叫ぶ。

三三エルサレムの娘よ、わたしは何をあなたに言い、

何にあなたを比べることができようか。

シオンの娘なるおとめよ、

わたしは何をもつてあなたになぞらえて、

あなたを慰めることができようか。

あなたの破れは海のように大きい、

だがあなたがをいやすことができようか。

「四 あなたの預言者たちはあなたのために人を欺く偽りの幻を見た。

彼らはあなたの不義をあらわして

捕われを免れさせようとはせず、

あなたのために人を迷わす偽りの託宣を見た。

「五 すべて道行く人は、あなたにむかつて手を打ち、

エルサレムの娘にむかつて、あざ笑い、

かつ頭を振って言う、

「麗しさのきわみ、全地の喜びと

となえられた町はこれなのか」と。

「六 あなたのもろもろの敵は、あなたをののしり、

あざ笑い、齒がみして言う、

「われわれはこれを滅ぼした、

ああ、これはわれわれが望んだ日だ、

今われわれはこれにあい、これを見た」と。

「七 主はその計画されたことを行い、

警告されたことをなし遂げ、

いにしえから命じておかれたように、

滅ぼして、あわれむことをせず、

あなたについて敵を喜ばせ、

あなたのあだの力を高められた。

「八 シオンの娘よ、声高らかに主に呼ばわれ、

夜も昼も川のように涙を流せ。

みずから安んじることをせず、

あなたのひとみを休ませるな。

「九 夜、初更に起きて叫べ。

主の前にあなたの心を水のように注ぎ出せ。

町のかどで、飢えて

息も絶えようとする幼な子の命のために、

主にむかつて両手をあげよ。

「一〇 主よ、みそなわして、顧みてください。

あなたはだれにむかつて

このように行われたのですか。

女は自分の産んだ子、

その大事に育てた幼な子を食べるでしょうか。

祭司と預言者が主の聖所で殺されていいでしょうか。

「二 老いも若きも、ちまたのちりに伏し、

わがとおめも、若人も、

つるぎで倒されてしまった。

あなたは、その怒りの日にこれを殺し、

これをほふつて、あわれむことをされなかった。

第三章

三 あなたは、わたしの恐れるものを、
祭りの日のように四方から呼び集められた。
主の怒りの日には、
のがれた者も残った者もなかった。
わたしが、いだき育てた者を
わたしの敵は滅ぼし尽した。

一 わたしは彼の怒りのむちによつて、
悩みにあつた人である。
二 彼はわたしをかり立てて、光のない暗い中を歩かせ、
三 まことにその手をしばしばかえて、
ひねもすわたしを攻められた。
四 彼はわが肉と皮を衰えさせ、わが骨を碎き、
五 苦しみと悩みをもつて、
わたしを囲み、わたしを閉じこめ、
六 遠い昔に死んだ者のように、
暗い所に住まわせられた。
七 彼はわたしのまわりに、かきをめぐらして、
出ることのできないようにし、
重い鎖でわたしをつながれた。

八 わたしは叫んで助けを求めたが、
彼はわたしの祈をしりぞけ、
九 切り石をもつて、わたしの行く道をふさぎ、
わたしの道筋を曲げられた。
一〇 彼はわたしに対して待ち伏せするくまのように、
潜み隠れるししのように、
二 わが道を離れさせ、わたしを引き裂いて、
見るかげもないみじめな者とし、
三 その弓を張つて、
わたしを矢の的のようにされた。
四 彼は彼の矢を
わたしの心臓に打ち込まれた。
五 わたしはすべての民の物笑いとなり、
ひねもす彼らの歌となつた。
六 彼はわたしを苦い物で飽かせ、
七 わが魂は平和を失ひ、
わたしは幸福を忘れた。
八 そこでわたしは言つた、「わが榮えはうせ去り、
わたしが主に望むところのものもうせ去つた」と。

一九どうか、わが悩みと苦しみ、
 にがよもぎと胆汁とを心に留めてください。
 二〇わが魂は絶えずこれをおもって、
 わがうちにうなだれる。
 二一しかし、わたしはこの事を心に思い起す。
 それゆえ、わたしは望みをいだく。
 二二主のいつくしみは絶えることがなく、
 そのあわれみは尽きることがない。
 二三これは朝ごとに新しく、
 あなたの真実は大きい。
 二四わが魂は言う、「主はわたしの受くべき分である、
 それゆえ、わたしは彼を待ち望む」と。
 二五主はおのれを待ち望む者と、
 おのれを尋ね求める者にむかつて恵みふかい。
 二六主の救を静かに待ち望むことは、良いことである。
 二七人が若い時にくびきを負うことは、良いことである。
 二八主がこれを負わせられるとき、
 ひとりすわって黙しているがよい。
 二九口をちりにつけよ、
 あるいはなお望みがあるであろう。
 三〇おのれを撃つ者にほおを向け、
 満ち足りるまでに、はずかしめを受けよ。

三一主はどこしえにこのような人を
 捨てられないからである。
 三二彼は悩みを与えられるが、
 そのいつくしみが豊かなので、
 またあわれみをたれられる。
 三三彼は心から人の子を
 苦しめ悩ますことをされないからである。
 三四地のすべての捕われ人を足の下に踏みにじり、
 三五いと高き者の前に人の公義をまげ、
 三六人の訴えをくつがえすことは、
 主のよみせられないことである。
 三七主が命じられたのでなければ、
 だれが命じて、その事の成ったことがあるか。
 三八災もさいわいも、
 いと高き者の口から出るではないか。
 三九生ける人はどうしてつぶやかねばならないのか、
 人は自分の罪の罰せられるのを、
 つぶやくことができようか。
 四〇われわれは、自分の行いを調べ、
 かつ省みて、主に帰ろう。
 四一われわれは天にいます神にむかつて、
 手と共に心をもあげよう。

四二「わたしたちは罪を犯し、そむきました、あなたはゆるしになりませんでした。」

四三あなたは怒りをもってご自分をおおい、わたしたちを追い攻め、殺して、あわれまず、

四四また雲をもってご自分をおおい、祈を通じないようにし、

四五もろもろの民の中に、

わたしたちをちりあくたとなさいました。

四六敵はみなわたしたちをののしり、

四七恐れと落し穴と、荒廃と滅亡とが、

わたしたちに臨みました。

四八わが民の娘の滅びによつて、

わたしの目には涙の川が流れています。

四九わが目は絶えず涙を注ぎ出して、やむことなく、

五〇主が天から見おろして、

顧みられる時にまで及ぶでしょう。

五一わが目はわが町のすべての娘の最期のゆえに、

わたしを痛ませます。

五二ゆえなくわたしに敵する者どもによつて、

わたしは鳥のように追われました。

五三彼らは生きているわたしを穴の中に投げ入れ、

わたしの上に石を投げつけました。

五四水はわたしの頭の上にあふれ、

わたしは『断ち滅ぼされた』と言いました。

五五主よ、わたしは深い穴からみ名を呼びました。

五六あなたはわが声を聞かれました、

『わが嘆きと叫びに耳をふさがないでください』。

五七わたしがあなたに呼ばわったとき、

あなたは近寄つて、『恐れるな』と言われました。

五八主よ、あなたはわが訴えを取りあげて、

わたしの命をあがなわれました。

五九主よ、あなたはわたしがこうむった不義を

ごらんになりました。

わたしの訴えをおさばしてください。

六〇あなたはわたしに対する彼らの報復と、

陰謀とを、ことごとくごらんになりました。

六一主よ、あなたはわたしに対する彼らのそしりと、

陰謀とを、ことごとく聞かれました。

六二立つてわたしに逆らう者どもものくちびると、

その思いは、ひねもすわたしを攻めています。

六三どうか、彼らのすわるをも、立つをも、

みぞなわしてください。

わたしは彼らの歌となっています。

六四主よ、彼らの手のわぎにしたがつて、彼らに報い、

第四章

六五 彼らの心をかたくなにし、
 あなたなのろいを彼らに注いでください。
 六六 主よ、怒りをもつて彼らを追い、
 天が下から彼らを滅ぼしてください」。

一 ああ、黄金は光を失い、
 純金は色を変じ、
 聖所の石は

すべてのちまたのかどに投げ捨てられた。

二 ああ、精金にも比すべきシオンのいとし子らは、
 陶器師の手のわざである土の器のようにみなされる。

三 山犬さえも乳ぶさをたれて、その子に乳を飲ませる。

ところが、わが民の娘は、

荒野のだちようなように無慈悲になった。

四 乳のみの舌はかわいて、上あごに、ひたとつき、
 幼な子らはパンを求めても、これに与える者がない。

五 うまい物を食べていた者は、

落ちぶれて、ちまたにおり、

紫の着物で育てられた者も、

今は灰だまりの上に伏している。

六 わが民の娘のうけた懲しめは、
 ソドムの罰よりも大きかった。
 ソドムは昔、人の手によらないで、
 またたくまに滅ぼされたのだ。
 七 わが民の君たちは雪よりも清らかに、
 乳よりも白く、

そのからだは、さんごよりも赤く、

その姿の美しさはサファイヤのようであつた。

八 今はその顔はすすよりも黒く、

町の中にいても人に知られず、

その皮膚は縮んで骨につき、

かわいて枯れ木のようになった。

九 つるぎで殺される者は、

飢えて死ぬ者よりもさいわいである。

彼らは田畑の産物の欠乏によつて、

刺された者のように衰え行くからである。

一〇 わが民の娘の滅びる時には

情深い女たちさえも、

手ずから自分の子どもを煮て、それを食物とした。

二 主はその憤りをことごとく漏らし、

激しい怒りをそそぎ、

シオンに火を燃やして、

その礎までも焼き払われた。

二 地の王たちも、世の民らもみな、

エルサレムの門に、あだや敵が、

討ち入ろうとは信じなかった。

三 これはその預言者たちの罪のため、

その祭司たちの不義のためであった。

彼らは義人の血をその町の中に流した者である。

四 彼らは盲人のように、ちまたにさまよい、

血で汚れている。

だれもその衣にさわることをできない。

五 人々は彼らにむかって、「去れよ、けがらわしい」、

「去れよ、去れよ、さわるな」と叫んだので、

彼らは逃げ去って放浪者となったが、

異邦人の中でも人々は「もうわれわれのうちに

宿つてはならない」と言った。

六 主はみずから彼らを散らして、

再び彼らを顧みず、

祭司を尊ばず、

長老をいたわられなかった。

七 われわれの目は、むなしく助けを待ち望んで

疲れ衰えた。

われわれは待ち望んだが、

救を与え得ない国びとを待ち望んだ。

八 人々がわれわれの歩みをうかがうので、

われわれは自分の町の中をも、

歩くことができなかった。

われわれの終りは近づいた、日は尽きた。

われわれの終りが来たからである。

九 われわれを追う者は空のはげたかよりも速く、

彼らは山でわれわれを追い立て、

野でわれわれを待ち伏せる。

一〇 われわれが鼻の息とたのんだ者、

主に油そそがれた者は、彼らの落し穴で捕えられた。

彼はわれわれが「異邦人の中でも

その陰に生きるであろう」と思つた者である。

二 ウズの地に住むエドムの娘よ、

喜び樂しめ、

あなたにもまた杯がめぐつて行く、

あなたも酔つて裸になる。

三 シオンの娘よ、あなたの不義の罰は終つた。

主は重ねてあなたを捕え移されない。

エドムの娘よ、主はあなたの不義を罰し、

あなたの罪をあらわされる。

第五章

一 主よ、われわれに臨んだ事を
覚えてください。

われわれのはずかしめを顧みてください。

二 われわれの嗣業は他国の人に移り、

家は異邦人のものとなった。

三 われわれはみなしごととなって父はなく、

母はやもめにひとしい。

四 われわれは金を出して水を飲み、

価を払って、たぎぎを獲なければならぬ。

五 われわれは首にくびきをかけられて追い使われ、

疲れても休むことができない。

六 われわれは足りるだけの食物を獲るために、

エジプトおよびアッスリヤに手をさし伸べた。

七 われわれの先祖は罪を犯して、すでに世になく、

われわれはその不義の責めを負っている。

八 奴隷であつた者がわれわれを治めるが、

われわれをその手から救い出す者がない。

九 われわれは荒野のつるぎのゆえに、

おのが命をかけて食物を獲る。

一〇 われわれの皮膚は飢餓の激しい熱のために、

灼のように熱い。

二 女たちはシオンで犯され、

おとめたちはユダの町々で汚された。

三 君たる者も彼らの手でつるされ、

長老たちも尊ばれず、

三 若者たちは、ひきうすをになわせられ、

わらべたちは、たぎぎを負つて、よろめき、

四 長老たちは門に集まることをやめ、

若者たちはその音楽を廃した。

一五 われわれの心の喜びはやみ、

踊りは悲しみに変り、

一六 われわれの冠はこうべから落ちた。

わざわいなるかな、われわれは罪を犯したからである。

一七 このために、われわれの心は衰え、

これらの事のために、われわれの目はくらくなつた。

一八 シオンの山は荒れはて、

山犬がその上を歩いてゐるからである。

一九 かし主よ、あなたはとこしえに統治められる。

あなたの、み位は世々絶えることがない。

二〇 なぜ、あなたはわれわれをながく忘れ、

われわれを久しく捨ておかれるのですか。

二一 主よ、あなたに帰らせてください、

われわれは帰^{かえ}ります。
われわれの日^ひを新^{あら}たにして、
いにしえの日^ひのよう^{まっ}たにしてください。
三 あなたは全^{まっ}くわれわれを捨^すてられたのですか、
はなはだしく怒^{いか}つていられるのですか。

エゼキエル書

第一章

一第三十年四月五日に、わたしはケバル川のほとりで、捕囚の人々のうちにいた時、天が開けて、神の幻を見た。ニこれはエホヤキン王の捕え移された第五年であつて、その月の五日に、ミ書の言葉がケバル川のほとり、カルデヤびとの地でブジの子祭司エゼキエルに臨み、主の手がその所で彼の上にあつた。

四わたしが見ていると、見よ、激しい風と大いなる雲が北から来て、その周囲に輝きがあり、たえず火を吹き出していた。その火の中に青銅のように輝くものがあつた。五またその中から四つの生きものの形が出てきた。その様子はこうである。彼らは人の姿をもっていた。六おのおの四つの顔を持ち、またそのおのおのに四つの翼があつた。七その足はまつすぐで、足のうらは子牛の足のうらのようであり、みがいた青銅のように光っていた。八その四方に、そのおのおのの翼の下に人の手があつた。この四つの者はみな顔と翼を持ち、九翼は互に連なり、行く時は回らずに、おのおの顔の向かうところにまつすぐに進んだ。一〇顔の形は、おのおのその前方に人の顔をもっていた。四つの者は右の方に、ししの顔を持ち、四つの者は左の方に牛の顔を持ち、また四つの者は後ろの方に、わしの顔をもっていた。二彼らの顔は

このようであつた。その翼は高く伸ばされ、その二つは互に連なり、他の二つをもつてからだをおおっていた。三彼らはおのおのその顔の向かうところへまつすぐに行き、霊の行くところへ彼らも行き、その行く時は回らない。四この生きもののうちには燃える炭の火のようなものがあり、たいまつのように、生きものの中を行き来している。火は輝いて、その火から、いはずまが出ていた。五生きものは、いはずまのひらめきのように速く行き来していた。

六わたしが生きものを見ていると、生きもののかたわら、地の上に輪があつた。四つの生きもののおのの、一つずつの輪である。七六もろもろの輪の形と作りは、光る貴かんらん石のようである。四つのものは同じ形で、その作りは、あたかも、輪の中に輪があるようである。八その行く時、彼らは四方のいずれかに行き、行く時は回らない。九四つの輪には輪縁と輻とがあり、その輪縁の周囲は目をもつて満たされていた。一〇生きものが行く時には、輪もそのかたわらに行き、生きものが地からあがる時は、輪もあがる。一一霊の行く所には彼らも行き、輪は彼らに伴つてあがる。生きものの霊が輪の中にあるからである。一二彼らが行く時は、これらも行き、彼らがとどまる時は、これらもとどまり、彼らが地からあがる時は、輪もまたこれらと共にあがる。生きものの霊が輪の中にあるからである。

三生きものの頭の上に水晶のように輝く大空の形があつて、

彼らの頭の上に広がっている。三 大空の下にはまっすぐに伸ばした翼があり、たがいに相連なり、生きものはおのおの二つの翼をもつて、からだをおおっている。四 その行く時、わたしは大水の聲、全能者の声のような翼の声を聞いた。その声の響きは、大軍の声のようで、そのとどまる時は翼をたれる。五 また彼らの頭の上の大空から声があつた。彼らが立ちとどまる時は翼をおろした。

六 彼らの頭の上の大空の上に、サファイヤのような位の形があつた。またその位の形の上に、人の姿のような形があつた。七 そしてその腰とみえる所の上方に、火の形のような光る青銅の色のものが、これを囲んでいるのを見た。わたしはその腰とみえる所の下の方に、火のようなものを見た。そして彼のまわりに輝きがあつた。八 そのまわりにある輝きのさまは、雨の日に雲に起るにじのようであつた。

主の栄光の形のさまは、このようであつた。わたしはこれを見て、わたしの顔をふせたとき、語る者の声を聞いた。

第二章

一 彼はわたしに言われた、「人の子よ、立ちあがれ、わたしはあなたに語ろう。二 そして彼がわたしに語られた時、霊がわたしのうちに入り、わたしを立ちあがらせた。そして彼のわたしに

語られるのを聞いた。三 彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの民、すなわちわたしにそむいた反逆の民につかわす。彼らもその先祖も、わたしにそむいて今日に及んでいる。四 彼らは厚顔で強情な者たちである。わたしはあなたを彼らにつかわす。あなたは彼らに『主なる神はこう言われる』と言いなさい。五 彼らは聞いても、拒んでも、(彼らは反逆の家だから)彼らの中に預言者がいたことを知るだろう。六 人の子よ、彼らを恐れてはならない。彼らの言葉をも恐れてはならない。たといあざみといばらがあなたと一緒にあつても、またあなたが、さそりの中に住んでも、彼らの言葉を恐れてはならない。彼らの顔をはばかりてはならない。彼らは反逆の家である。七 彼らが聞いても、拒んでも、あなたはただわたしの言葉を彼らに語らなければならない。彼らは反逆の家だから。

八 人の子よ、わたしがあなたに語るところを聞きなさい。反逆の家のようにそむいてはならない。あなたの口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。九 この時わたしが見ると、見よ、わたしの方に伸べた手があつた。また見よ、手の中に巻物があつた。一〇 彼がわたしの前にこれを開くと、その表にも裏にも文字が書いてあつた。その書かれていることは悲しみと、嘆きと、災の言葉であつた。

第三章

「彼はわたしに言われた。『人の子よ、あなたに与えられたものを食べなさい。この巻物を食べ、行つてイスラエルの家に語りなさい。』」そこでわたしが口を開くと、彼はわたしにその巻物を食べさせた。そして彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしがあなたに与えるこの巻物を食べ、これであなたの腹を満たしなさい」。わたしがそれを食べると、それはわたしの口に甘いこと蜜のようであつた。

四 彼はまたわたしに言われた、「人の子よ、イスラエルの家に行つて、わたしの言葉を語りなさい。五 わたしはあなたを、異国語を用い、舌の重い民につかわすのでなく、イスラエルの家につかわすのである。六 すなわちあなたがその言葉を知らない、異国語の舌の重い多くの民につかわすのではない。もしわたしがあなたをそのような民につかわしたら、彼らはあなたに聞いたであらう。七 しかしイスラエルの家はあなたに聞くのを好まない。彼らはわたしに聞くのを好まないからである。イスラエルの家はすべて厚顔でまた強情である。八 見よ、わたしはあなたの顔を彼らの顔に向かつて堅くし、あなたの顔を彼らの顔に向かつて堅くした。九 わたしはあなたの顔を岩よりも堅いダイヤモンドのようにした。ゆえに彼らを恐れてはならない。彼らの顔ははかつてはならない。彼らは反逆の家である」。一〇 また彼は

わたしに言われた、「人の子よ、わたしがあなたに語るすべての言葉をあなたの心におさめ、あなたの耳に聞きなさい。二 そして捕囚の人々、あなたの民の人々の所へ行つて、彼らが聞いても、彼らが拒んでも、『主なる神はこう言われる』と彼らに言いなさい」。

三 時に霊がわたしをもたげた。そして主の栄光がその所からのぼつた時、わたしの後に大いなる地震の響きを聞いた。四 それは互に相触れる生きものの翼の音と、そのかたわらの輪の音で、大いなる地震のように響いた。五 霊はわたしをもたげ、わたしを取り去つたので、わたしは心を熱くし、苦々しい思いで行つた。六 主の手が強くわたしのうへにあつた。七 そしてわたしはケバル川のほとりのテルアビブにいる捕囚の人々のもとへ行き、七日の間、驚きあきれて彼らの中に座した。

八 七日過ぎて後、主の言葉がわたしに臨んだ。九 「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの家のために見守る者とした。あなたはわたしの口から言葉を聞くたびに、わたしに代つて彼らを戒めなさい。一〇 わたしが悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、あなたは彼の命を救うために彼を戒めず、また悪人を戒めて、その悪い道から離れるように語らないなら、その悪人は自分の悪のために死ぬ。しかしその血をわたしはあなたの手から求める。一一 しかし、もしあなたが悪人を戒めても、彼がその悪をも、またその悪い道をも離れないなら、彼はその悪のために死

ぬ。しかしあなたは自分の命を救う。二〇また義人がその義にそむき、不義を行うなら、わたしは彼の前に、つまずきを置き、彼は死ぬ。あなたが彼を戒めなかったゆえ、彼はその罪のために死に、その行った義は覚えられない。しかしその血をわたしはあなたの手から求める。三けれども、もしあなたが義人を戒めて、罪を犯さないように語り、そして彼が罪を犯さないなら、彼は戒めを受け入れたゆえに、その命を保ち、あなたは自分の命を救う。

三三その所で主の手がわたしの上に臨み、彼はわたしに言われた、「立つて、平野に出て行きなさい。その所でわたしはあなたに語ろう」。三三そこで、わたしは立つて平野に出て行った。見よ、主の栄光が、かつてわたしがケバル川のほとりで見た栄光のように、その所に立ち現れたので、わたしはひれ伏した。二四しかし霊がわたしのうちにはいつて、わたしを立ちあがらせ、わたしに語って言った、「行つて、あなたの家にもつていなさい。五人の子よ、見よ、彼らはあなたの上になわをかけ、それであなたを縛り、あなたを民の中に行かせないようにする。二六わたしはあなたの舌を上あごにつかせ、あなたをおしにして、彼らを戒めることができるようにする。彼らは反逆の家だからである。二七しかし、わたしがあなたと語るときは、あなたの口を開く。あなたは彼らに『主なる神はこう言われる』と言わなければならない。聞く者は聞くがよい、拒む者は拒むがよい。彼らは

反逆の家だからである。

第四章

一人の子よ、一枚のかわらを取つて、あなたの前に置き、その上にエルサレムの町を描きなさい。二そしてこれを取り囲み、これにむかつて雲梯を設け、墨を築き、陣を張り、その回りに城くずしを備えてこれを攻めなさい。三また鉄の板をとり、それをあなたと町の間に置いて鉄の壁となし、あなたの顔をこれに向けなさい。町をこのように囲んで、その包囲を押し進めなさい。これがイスラエルの家のしるしである。

四あなたはまた自分の左脇を下にして寝なさい。わたしはあなたの上にイスラエルの家の罰を置く。あなたはこうにして寝ている日の間、彼らの罰を負わなければならない。五わたしは彼らの罰の年数に等しいその日数、すなわち三百九十日をあなたのために定める。その間あなたはイスラエルの家の罰を負わなければならない。六あなたはその期間を終つたなら、また右脇を下にして寝て、ユダの家の罰を負わなければならない。わたしは一日を一年として四十日をあなたのために定める。七あなたは自分の顔をエルサレムの包囲の方に向け、腕をあらわし、町に向かつて預言しなければならない。八見よ、わたしはあなたに、なわをかけて、あなたの包囲の期間の終るまで、左右に動く

ことができないようにする。

九あなたはまた小麦、大麦、豆、レンズ豆、あわ、はだか麦を取って、一つの器に入れ、これでパンを造り、あなたが横になつて寝る日の数、すなわち三百九十日の間これを食べなければならぬ。一〇あなたが食べる食物は量つて一日に二十シケルである。あなたは一日に一度これを食べなければならぬ。二また水を量つて一ヒンの六分の一を一日に一度飲まなければならぬ。三あなたは大麦の菓子のようにしてこれを食べなさい。すなわち彼らの目の前でこれを人の糞で焼かなければならぬ。四そして主は言われた、「このようにイスラエルの民はわたしに追いやるうとする国々の中で汚れたパンを食べなければならぬ」。五そこでわたしは言つた、「ああ、主なる神よ、わたしは自分を汚したことはありません。わたしは幼い時から今日まで、自然に死んだものや、野獣に裂き殺されたものを食べたことはありません。また汚れた肉がわたしの口にはいつたことはありません」。六すると彼はわたしに言われた、「見よ、わたしは牛の糞をもつて人の糞に換えることをあなたにゆるす。あなたはそれで自分のパンを整えなさい」。七またわたしに言われた、「人の子よ、見よ、わたしはエルサレムで人のつえとするパンを打ち砕く。彼らはパンを量つて、恐れながら食べ、また水を量つて驚きながら飲む。八これは彼らをパンと水とに乏しくし、互に驚いて顔を見合わせ、その罰のために衰えさせる

ためである。

第五章

一人の子よ、鋭いづるぎを取り、それを理髪師のかみそりとして、あなたの頭と、ひげとをそり、はかりで量つて、その毛を分けなさい。二その三分の一は包圍の期間の終る時、町の中で火で焼き、また三分の一を取り、つるぎで町のまわりでこれを打ち、さらに三分の一を風に散らしなさい。わたしはつるぎを抜いて、彼らのあとを追う。三あなたはその毛を少し取つて、衣のすそに包み、四またそのうちから少しを取つて火の中に投げ入れ、火でこれを焼きなさい。火はその中から出て、イスラエルの全家に及ぶ。五主なる神はこう言われる、わたしはこのエルサレムを万国の中に置き、国々をそのまわりに置いた。ハエルサレムは他の国々よりも悪しく、わたしのおきてにそむき、そのまわりの国々よりもわたしの定めに従ひなかつた。すなわち彼らはわたしのおきてを捨て、わたしの定めに従ひなかつた。セそれゆえ主はこう言われる、あなたがたはそのまわりにいる異邦人よりも狂暴であつて、わたしの定めに従ひなかつた。わたしのおきてを行わず、むしろ、あなたがたの回りにいる異邦人のおきてを守つていた。ハそれゆえ主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたを攻め、異邦人の目の前で、あなたの中にさばきを行う。九あな

たのもろもろの憎むべき事のために、わたしはまだした事のないような事、またこの後ふたたびしないような事をあなたにたいしてする。○それゆえ、あなたのうちで父はその子を食べ、子はその父を食う。わたしはあなたに対してさばきを行い、あなたのうちの残りの者をことごとく四方の風に散らす。――それゆえ、主なる神は言われる、わたしは生きている。あなたはその忌むべき物と、その憎むべき事をもって、わたしの聖所を汚したので、わたしは必ずあなたの数を減らす。わたしの目はあなたを惜しみ見ず、またわたしはあなたをあわれまない。――あなたの三分の一はあなたの中で疫病で死に、ききんで滅び、三分の一はあなたのまわりでつるぎに倒れ、三分の一は四方の風に散らされる。わたしはつるぎを抜いてそのあとを追う。

――こうしてわたしは怒りを漏らし尽し、憤りを彼らの上に漏らして、満足する。こうして、わたしの憤りを彼らの上に漏らし尽した時、彼らは主であるわたしが熱心に語ったことを知るであらう。――四わたしはまわりにある国々の中と、すべてそばを通る者の目の前であなただけを滅亡とあざけりに渡す。――五わたしが怒りと、憤りと、重い懲罰とをもって、あなたに對してさばきを行う時、あなたはそのまわりにある国々のあざけりとなり、しりとなり、戒めとなり、驚きとなる。これは主であるわたしが語るのである。――六すなわち、わたしがあなたを滅ぼすきんの矢、滅亡の矢をあなたに放つ時、わたしはあなたを滅ぼすため

に放つのだ。わたしはあなたの上にききんを増し加え、あなたがつえとするパンを打ち砕く。――七わたしはあなたにききんと野獣を送つて、あなたの子を奪い取り、また疫病と流血にあなたの中を通らせ、またつるぎをあなたに送る。主であるわたしがこれを言う」。

第六章

――主の言葉が、わたしに臨んで言った、――「人の子よ、あなたの顔をイスラエルの山々に向け、預言して、三言え。イスラエルの山々よ、主なる神の言葉を聞け。主なる神は山と丘と、谷と川に向かつて、こう言われる、見よ、わたしはつるぎをあなたがたに送り、あなたがたの高き所を滅ぼす。四あなたがたの祭壇は荒され、あなたがたの香の祭壇はこわされる。わたしはあなたがたの偶像の前に、あなたがたの殺された者を投げ出す。五わたしはイスラエルの民の死体を彼らの偶像の前に置き、骨をあなたがたの祭壇のまわりに散らす。六すべてあなたがたの住む所で町々は滅ぼされ、高き所は荒される。こうしてあなたがたの祭壇はこわし荒され、あなたがたの偶像は砕かれて滅び、あなたがたの香の祭壇は倒され、あなたがたのわざは消し去られる。七また殺された者はあなたがたのうちに倒れる。これによって、あなたがたはわたしに主であることを知るようになる。

「わたしは、あなたがたのある者を生かしておく。あなたがたが、つるぎをのがれて国々の中におり、国々に散らされる時、あなたがたのうちののがれた者は、その捕え移された国々の中でわたしを思い出す。これはわたしが、彼らのわたしを離れた姦淫の心と、偶像を慕つて姦淫を行う目をくじくからである。そして彼らはそのもろもろの憎むべきことと、その犯した悪のために、みずからをいとうようになる。一〇そして彼らはわたしが主であることを知る。この災を彼らに對して下すと、わたしと言ったのは決してむなしき事ではない」。

二主なる神はこう言われる、「あなたは手を打ち、足を踏みならして言え。ああ、イスラエルの家のすべての悪しき憎むべき者はわざわいだ。彼らはつるぎと、ききんと、疫病に倒れるからである。三遠くにいる者は疫病で死に、近くにいる者はつるぎに倒れる。生き残つて身を全うする者はききんによつて死ぬ。このようにわたしはわが憤りを彼らの上に漏らし尽す。四彼らの殺される者がその偶像の中にあり、その祭壇のまわりにあり、すべての高き丘の上にあり、すべての山の頂にあり、すべての青木の下にあり、すべての茂つた木の木の下にあり、彼らがこうばしいかおりを、すべての偶像にささげた所にある時、あなたがたはわたしが主であることを知るのである。五わたしはまた手を彼らの上に伸べて、その地を荒し、すべて彼らの住む所を、荒野からリブラまで荒地とする。これによつて彼らはわ

たしが主であることを知るようになる」。

第七章

一主の言葉がまたわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの地の終りについて主はこう言われる、この国の四方の境に終りが来た。三いま、あなたの終りが来た。わたしはわが怒りをあなたに漏らし、あなたの行いに従つて、あなたをさばき、あなたのもろもろの憎むべき物のためにあなたを罰する。四わたしの目はあなたを惜しみ見ず、またあなたをあわれまない。わたしはあなたの行いのためにあなたを罰する。あなたの憎むべき事があなたのうちにある。これによつて、あなたがたはわたしが主であることを知るようになる。

五主なる神はこう言われる、災が引き続いて起る。見よ、災が来る。六終りが来る。その終りが来る。それが起つて、あなたに臨む。見よ、それが来る。七この地に住む者よ、あなたの最後の運命があなたに来了。時は来た。日が近づいた。混乱の日で、山々に聞える喜びの日ではない。八今わたしはすみやかにわたしの憤りをあなたの上に注ぎ、わたしの怒りをあなたに漏らし尽し、あなたの行いに従つてあなたをさばき、あなたのもろもろの憎むべき事のためにあなたを罰する。九わたしの目はあなたを惜しみ見ず、またあなたをあわれまない。わたしはあなた

の行いのためにあなたを罰する。あなたの憎むべき事があなたのうちにある。これによつて、あなたがたは、主であるわたしがあなたを撃つことを知るようになる。

一〇見よ、その日を。また見よ、かの日が来た。あなたの最後の運命が来た。不義は咲き、高ぶりは芽を出した。二暴虐はつゝて悪につえとなつた。彼らもその群衆も、その富も消え、また彼らの名声も消えて何も残らなくなる。三時は来た。日は近づいた。買う者は喜ぶな。売る者は悲しむな。怒りがすべての群衆の上に臨むからだ。三売る者はたとい生きていても、その売つたものに帰ることはない。怒りがそのすべての民衆の上にあるからだ。それはもとに帰らない。その不義のために、だれも命を全うすることはできない。

一四人々がラツパを吹いて備えをしても戦いに出る者はない。それはわたしの怒りがそのすべての群衆の上にあるからだ。一五外にはつるぎがあり、内には疫病とききんがある。畑にいる者はつるぎに死に、町にいる者はききんと疫病に滅ぼされる。一六そのうちの、のがれる者は谷間のはとのように山々に行つて、おのおの皆その罪のために悲しむ。一七両手とも弱くなり、両ひざとも水のように弱くなる。一八彼らは荒布を身にまとい、恐れが彼らをおおい、すべての顔には恥があらわれ、すべての頭は髪をそり落す。一九彼らはその銀をちまたに捨て、その金はあくたのようになる。主の怒りの日には金銀も彼らを救うことはでき

ない。それらは彼らの飢えを満足させることができない、またその腹を満たすことができない。それは彼らの不義のつまりきであつたからだ。二〇彼らはその美しい飾り物を高ぶりのために用い、またこれをもつてその憎むべき偶像と忌むべき物を造つた。それゆえわたしはこれを彼らに對して汚れたものとす。三わたしはこれを外国人の手に渡して奪わせ、地の悪人に渡してかすめさせる。彼らはこれを汚す。三わたしは彼らから顔をそむけて、彼らにわたしの聖所を汚させる。強盜がこれにはいつて汚し、三また荒地とする。

この地は流血のとがに満ち、この町は暴虐に満ちているゆえ、二四わたしは国々のうちの悪い者どもを招いて、彼らの家をかすめさせる。わたしは強い者の高ぶりをやめさせる。また彼らの聖所は汚される。二五滅びが来るとき、彼らは平安を求めても得られない。二六災に災が重なりきたり、知らせに知らせが相つぐ。その時、彼らは預言者に幻を求める。しかし律法は祭司のうちに絶え、計りことは長老のうちに絶える。二七王は悲しみ、つかさは望みを失い、その地の民の手はおのきによつてこわばる。わたしは彼らの行いに従つて彼らをあつかひ、そのさばきに從つて彼らをさばく。そして彼らはわたしが主であることを知るようになる」。

第八章

一第六年の六月五日にわたしがわたしの家に座し、ユダの長老たちがわたしの前に座していたとき、主なる神の手がわたしの上に下った。ニわたしは見てみると、見よ、人のような形があつて、その腰とみられる所から下は火のように見え、腰から上は光る青銅のように輝いて見えた。三彼は手のようなものを伸べて、わたしの髪の毛をつかんだ。そして霊がわたしを天と地の間に引きあげ、神の幻のうちにわたしをエルサレムに携えて行き、北に向かつた内庭の門の入口に至らせた。そこには、ねたみをひき起すねたみの偶像があつた。四見よ、そこに、わたしがかの平野で見た幻のようなイスラエルの神の栄光があらわれた。五時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、目をあげて北の方をのぞめ」。そこでわたしが目をあげて北の方をのぞくと、見よ、祭壇の門の北にあたつて、その入口に、このねたみの偶像があつた。六彼はまたわたしに言われた、「人の子よ、あなたは彼らのしていること、すなわちイスラエルの家がここで行っている大いなる憎むべきことを見るか。これはわたしを聖所から遠ざけるものである。しかしあなたは、さらに大いなる憎むべきことを見るだろう」。

七そして彼はわたしを庭の門に行かせた。わたしが見ると、見よ、壁に一つの穴があつた。八彼はわたしに言われた、「人の子

よ、壁に穴をあけよ」。そこでわたしが壁に穴をあけると、見よ、一つの戸があつた。九彼はわたしに言われた、「はいって、彼らがここです所の悪しき憎むべきことを見よ」。一〇そこでわたしがはいって見ると、もろもろの這うものと、憎むべき獣の形、およびイスラエルの家のもろもろの偶像が、まわりの壁に描いてあつた。二またイスラエルの家の長老七十人が、その前に立っていた。三ヤパンの子ヤザニヤも、彼らの中に立っていた。おのおの手に香炉を持ち、そしてその香の煙が雲のようにのぼつた。三時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが暗い所で行う事、すなわちおのおのその偶像の室で行う事を見るか。彼らは言う、『主はわれわれを見られない。主はこの地を捨てられた』と」。三またわたしに言われた、「あなたはさらに彼らがなす大いなる憎むべきことを見る」。四そして彼はわたしを連れて主の家の北の門の入口に行つた。見よ、そこに女たちがすわつて、タンムズのために泣いていた。五その時、彼はわたしに言われた、「人の子よ、あなたはこれを見たか。これよりもさらに大いなる憎むべきことを見るだろう」。

六彼はまたわたしを連れて、主の家の内庭にはいった。見よ、主の家の入口に、廊と祭壇との間に二十五人ばかりの人が、主の宮にその背中を向け、顔を東に向け、東に向かつて太陽を拝んでいた。七時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、あなたはこ

れを見たか。ユダの家にとつて、彼らがここですいているこれらの憎むべきわざは軽いことであるか。彼らはこの地を暴虐で満たし、さらにわたしを怒らせる。見よ、彼らはその鼻に木の枝を置く。ハそれゆえ、わたしも憤って事を行う。わたしの目は彼らを惜しみ見ず、またあわれまない。たとい彼らがわたしの耳に大声で呼ばわつても、わたしは彼らの言うことを聞かない。

第九章

一時に彼はわたしの耳に大声に呼ばわつて言われた、「町を罰する者たちよ、おのおの滅ぼす武器をその手に持つて近よれ」と。二見よ、北に向かう上の門の道から出て来る六人の者があつた。おのおのその手に滅ぼす武器を持ち、彼らの中のひとりには亜麻布を着、その腰に物を書く墨つぼをつけていた。彼らははいつて来て、青銅の祭壇のかたわらに立った。

ここにイスラエルの神の栄光がその座しているケルビムから立ちあがって、宮の敷居にまで至った。そして主は、亜麻布を着て、その腰に物を書く墨つぼをつけている者を呼び、四彼に言われた、「町の中、エルサレムの中をめぐり、その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々の額にしるしをつけよ」。五またわたしの聞いている所で他の者に言われた、

「彼のあとに従い町をめぐつて、撃て。あなたの目は惜しみ見るな。またあわれむな。六老若男女をことごとく殺せ。しかし身にしるしのある者には触れるな。まずわたしの聖所から始めよ」。そこで、彼らは宮の前にいた老人から始めた。七この時主は彼らに言われた、「宮を汚し、死人で庭を満たせ。行け」。そこで彼らは出て行つて、町の中で撃つた。八さて彼らが人々を打ち殺していた時、わたしひとりだけが残されたので、ひれ伏して、叫んで言つた、「ああ主なる神よ、あなたがエルサレムの上に怒りを注がれるとき、イスラエルの残りの者を、ことごとく滅ぼされるのですか」。

九主はわたしに言われた、「イスラエルとユダの家の罪は非常に大きい。国は血で満ち、町は不義で満ちている。彼らは言う、『主はこの地を捨てられた。主は顧みられない』。〇それゆえ、わたしの目は彼らを惜しみ見ず、またあわれまない。彼らの行ふところを、彼らのこうべに報いる」。

二時に、かの亜麻布を着、物を書く墨つぼを腰につけていた人が報告して言つた、「わたしはあなたがお命じになつたように行いました」。

第一〇章

一時にわたしは見ていたが、見よ、ケルビムの頭の上の天空に、

サファイヤのようなものが王座の形をして、その上に現れた。ニ彼は亜麻布を着たその人に言われた、「ケルビムの下の回る車の間にはいり、ケルビムの間から炭火をとってあなたの手に満たし、これを町中にまき散らせ」。

そして彼はわたしの目の前ではいった。ミこの人がはいった時、ケルビムは宮の南側に立っていた。また雲はその内庭を満たしていた。四主の栄光はケルビムの上から宮の敷居の上にあり、宮は雲で満ち、庭は主の栄光の輝きで満たされた。五時にケルビムの翼の音が全能の神が語られる声のように外庭にまで聞えた。

六彼が亜麻布を着ている人に、「回る車の間、ケルビムの間から火を取れ」と命じた時、その人ははいつて、輪のかたわらに立った。セひとりのケルビムはその手をケルビムの間から伸べて、ケルビムの間にある火を取り、亜麻布を着た人の手に置いた。すると彼はこれを取って出て行った。ハケルビムはその翼の下に人の手のような形のものを持っているように見えた。

九わたしが見ていると、見よ、ケルビムのかたわらに四つの輪があり、一つの輪はひとりのケルビムのかたわらに、他の輪は他のケルビムのかたわらにあった。輪のさまは、光る貴かんらん石のようであった。一〇そのさまは四つとも同じ形で、あたかも輪の中に輪があるようであった。二その行く時は四方のどこへでも行く。その行く時は回らない。ただ先頭の輪の向くところに従

い、その行く時は回ることをしない。三その輪縁、その輻、および輪には、まわりに目が満ちていた。一その輪は四つともこれを持つていた。三その輪はわたしの聞いている所で、「回る輪」と呼ばれた。四そのおのおのには四つの顔があった。第一の顔はケルブの顔、第二の顔は人の顔、第三はししの顔、第四はわしの顔であった。

五その時ケルビムはのぼった。これがケバル川でわたしが見た生きものである。一六ケルビムの行く時、輪もそのかたわらに行き、ケルビムが翼をあげて地から飛びあがる時は、輪もそのかたわらを離れない。一七その立ちどまる時は、輪も立ちどまり、そののぼる時は、輪も共にのぼる。生きものの霊がその中にあるからである。

一八時に主の栄光が宮の敷居から出て行って、ケルビムの上に立った。一九するとケルビムは翼をあげて、わたしの目の前で、地からのぼった。その出て行く時、輪もまたこれと共にあり、主の宮の東の門の入口の所へ行って止まった。イスラエルの神の栄光がその上にあった。

二〇これがすなわちわたしがケバル川のほとりで、イスラエルの神の下に見たかの生きものである。わたしはそれがケルビムであることを知っていた。二これにはおのおの四つの顔があり、おのおの四つの翼があり、また人の手のようなものがその翼の下にあった。二三その顔の形は、ケバル川のほとりでわたしが見

たそのままの顔である。おのおのその前の方にまっすぐに行つた。

第二章

一時に霊はわたしをあげて、東に向かう主の宮の東の門に連れて行つた。見よ、その門の入口に二十五人の者がいた。わたしはその中にアズルの子ヤザニヤと、ベナヤの子ペラテヤを見た。共に民のつかさであつた。ニすると彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの者はこの町の中で悪い事を考え、悪い計りごとをめぐらす人々である。ニ彼らは言う、『家を建てる時は近くはない。この町はなべであり、われわれは肉である』と。四それゆえ、彼らに向かつて預言せよ。人の子よ、預言せよ」。

五時に、主の霊がわたしに下つて、わたしに言われた、「主はこう言われると言え、イスラエルの家よ、考えてみよ。わたしはあなたがたの心にある事どもを知っている。六あなたがたはこの町に殺される者を増し、殺された者をもつてちまたを満たした。七それゆえ、主なる神はこう言われる、町の中にあなたがたが置く殺された者は肉である。この町はなべである。しかし、あなたがたはその中から取り出される。八あなたがたはつるぎを恐れた。わたしはあなたがたにつるぎを臨ませると、主は言われる。九またわたしはあなたがたをその中から引き出して、

他国人の手に渡し、あなたがたをさばく。一〇あなたがたはつるぎに倒れる。わたしはあなたがたをイスラエルの境でさばく。これによつてあなたがたはわたしの主であることを知るようになる。二この町はあなたがたに對してなべとはならず、あなたがたはその肉とはならない。わたしはイスラエルの境であなたがたをさばく。三これによつて、あなたがたはわたしの主であることを知るようになる。あなたがたはわたしのために歩まず、またわたしのおきてを行わず、かえつてその周囲の他国人のおきてに従つて行つてゐるからである」。

三このようにわたしが預言していた時、ベナヤの子ペラテヤが死んだので、わたしは打ち伏して、大声で叫んで言つた、「ああ主なる神よ、あなたはイスラエルの残りの者をことごとく滅ぼそうとされるのですか」。

四時に主の言葉がわたしに臨んで言つた、五「人の子よ、あなたの兄弟、あなたの友、あなたの兄弟である捕われ人、イスラエルの全家、エルサレムの住民は言つた、『彼らが主から遠く離れた。この地はわれわれの所有として与えられてゐるのだ』と。六それゆえ、言え、『主なる神はこう言われる、たといわたしは彼らを遠く他国人の中に移し、国々の中に散らしても、彼らが行つた国々で、わたしはしばらく彼らのために聖所となる』と。七それゆえ、言え、『主はこう言われる、わたしはあなたがたをもろもろの民の中から集め、その散らされた国々から集めて、イ

第二章

スラエルの地をあなたがたに与える』と。一八彼らはその所に來る時、そのもろもろのいとうべきものと、もろもろの憎むべきものとをその所から取り除く。一九そしてわたしは彼らに一つの心を与え、彼らのうちに新しい靈を授け、彼らの肉から石の心を取り去って、肉の心を与える。二〇これは彼らがわたしの定めに従ってそのこうべに報いると、主なる神は言われる」。

三三時にケルビムはその翼をあげた。輪がそのかたわらにあり、イスラエルの神の榮光がその上にあつた。三三主の榮光が町の中からのぼって、町の東にある山の上に立ちどまつた。三四その時、靈はわたしをあげ、神の靈によつて、幻のうちにわたしをカルデヤの捕われ人の所へ携えて行つた。そしてわたしが見た幻はわたしを離れてのぼつた。三五そこでわたしは主がわたしに示された事をことごとくかの捕われ人に告げた。

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたは反逆の家の中にいる。彼らは見る目があるが見ず、聞く耳があるが聞かず、彼らは反逆の家である。三それゆえ、人の子よ、捕囚の荷物

を整え、彼らの目の前で昼のうちに移れ、彼らの目の前であなたの所から他の所に移れ。彼らは反逆の家であるが、あるいは彼らは顧みるところがあろう。四あなたは、捕囚の荷物のようなあなたの荷物を、彼らの目の前で昼のうちに持ち出せ。そして捕囚に行くべき人々のように、彼らの目の前で夕べのうちに出て行け。五すなわち彼らの目の前で壁に穴をあけ、そこから出て行け。六あなたは彼らの目の前でその荷物を肩に負い、やみのうちにそれを運び出せ。あなたの顔をおおつて地を見るな。わたしはあなたをしるしとなして、イスラエルの家に示すのだ」。

七そこでわたしは命じられたようにし、捕囚の荷物のような荷物を昼のうちに持ち出し、夕べにはわたしの手で壁に穴をあけ、やみのうちに彼らの目の前で、これを肩に負つて運び出した。

八次の朝、主の言葉がわたしに臨んだ、九「人の子よ、反逆の家であるイスラエルの家は、あなたに向かつて、『何をしているのか』』と言わなかつたか。一〇あなたは彼らに言いなさい、『主なる神はこう言われる、この託宣はエルサレムの君、およびその中にあるイスラエルの全家にかかわるものである』と。一一また言いなさい、『わたしはあなたがたのしるしである。わたしがしたとおりに彼らもされる。彼らはとりこにされて移される』と。一二彼らのうちの君は、やみのうちにその荷物を肩に載せて出て行く。彼は壁に穴をあけて、そこから出て行く。彼は顔をおおつ

て、自分の目でこの地を見ない。三わたしはわたしの網を彼の上に打ちかける。彼はわたしのわなにかかる。わたしは彼をカルデヤびとの地のバビロンに引いて行く。しかし彼はそれを見ないで、そこで死ぬであろう。四またすべて彼の周囲にいて彼を助ける者および彼の軍隊を、わたしは四方に散らし、つるぎを抜いてそのあとを追う。五わたしが彼らを諸国民の中に散らし、国々にまき散らすとき、彼らはわたしが主であることを知り。六ただし、わたしは彼らのうちに、わずかの者を残して、つるぎと、ききんと、疫病を免れさせ、彼らがおこなったものもろの憎むべきことを、彼らが行く国びとの中に告白させよう。そして彼らはわたしが主であることを知るようになる。七主の言葉がまたわたしに臨んだ、一八「人の子よ、震えてあなたのパンを食べ、おののきと恐れとをもって水を飲め。一九そしてこの地の民について言え、主なる神はイスラエルの地のエルサレムの民についてこう言われる、彼らは恐れをもってそのパンを食べ、驚きをもってその水を飲むようになる。これはその地が、すべてその中に住む者の暴虐のために衰え、荒地となるからである。二〇人の住んでいた町々は荒れはて、地は荒塚となる。そしてあなたがたは、わたしが主であることを知るようになる」。

三主の言葉がわたしに臨んだ、三「人の子よ、イスラエルの地について、あなたがたが『日は延び、すべての幻はむなしくなっ

た』という、このことわざはなんであるか。三それゆえ、彼らに言え、『主なる神はこう言われる、わたしはこのことわざをやめさせ、彼らが再びイスラエルで、これをことわざとしないようにする』と。しかし、あなたは彼らに言え、『日とすべての幻の実現とは近づいた』と。二四イスラエルの家のうちには、もはやむなししい幻も、偽りの占いもなくなくなる。五しかし主なるわたしは、わが語るべきことを語り、それは必ず成就する。決して延びることはない。ああ、反逆の家よ、あなたの日にわたしはこれを語り、これを成就すると、主なる神は言われる」。

二六主の言葉がまたわたしに臨んだ、二七「人の子よ、見よ、イスラエルの家は言う、『彼の見る幻は、なお多くの日の後の事である。彼が預言することは遠い後の時のことである』と。二八それゆえ、彼らに言え、主なる神はこう言われる、わたしの言葉はもはや延びない。わたしの語る言葉は成就すると、主なる神は言われる」。

第三章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの預言者たちに向かつて預言せよ。すなわち自分の心のままに預言する人々に向かつて、預言して言え、『あなたがたは主の言葉を聞け』。三主なる神はこう言われる、なにも見ないで、自分

の霊に従う愚かな預言者たちはわざわいだ。四 イスラエルよ、あなたの預言者たちは、荒れ跡にいますきつねのようだ。五 あなたがたは主の日に戦いに立つため、破れ口へのぼらず、またイスラエルの家のために石がきを築こうともしない。六 彼らは虚偽を言い、偽りを占った。彼らは主が彼らをつかわさないのに『主が言われる』と言い、なおその言葉の成就することを期待する。七 あなたがたはむなしい幻を見、偽りの占いを語り、わたしが言わないのに『主が言われる』と言ったではないか。

八 それゆえ、主なる神はこう言われる、「あなたがたはむなしいことを語り、偽りの物を見るゆえ、わたしはあなたがたを罰すると主なる神は言われる。九 わたしの手は、むなしい幻を見、偽りの占いを言う預言者に敵対する。彼らはわが民の会に臨まず、イスラエルの家の籍にしるされず、イスラエルの地に、はいることができな。そしてあなたがたはわたしの主なる神であることを知るようになる。一〇 彼らはわが民を惑わし、平和がないのに『平和』と言い、また民が塙を築く時、これらの預言者たちは水しつくいをもってこれを塗る。二 それゆえ、水しつくいを塗る者どもに『これはかならずくずれる』と言え。これに大雨が注ぎ、ひようが降り、あらしが吹く。三 そして塙がくずれる時、人々はあなたがたに向かつて、『あなたがたが塗った水しつくいはどこにあるか』と言わないであろうか。四 それゆえ、主なる神はこう言われる、わたしはわが憤りをもって大風を起し、

わが怒りをもって大雨を注がせ、憤りをもってひようを降らせ、これを滅ぼす。一四 またわたしはあなたがたが水しつくいをもって塗った塙をこわして、これを地に倒し、その基をあらわす。これが倒れる時、あなたがたはその中に滅びる。そしてあなたがたは、わたしが主であることを知るようになる。一五 こうしてわたしが、その塙と、これを水しつくい塗った者との上に、わたしの憤りを漏らし尽して、あなたがたに言う、塙はなくなり、これを塗った者もなくなる。一六 これがすなわち平和がないのに平和の幻を見、エルサレムについて預言したイスラエルの預言者であると、主なる神は言われる。

一七 人の子よ、心のままに預言するあなたの民の娘たちに対して、あなたの顔を向け、彼らに向かつて預言して、一八 言え、主なる神はこう言われる、手の節々に占いひもを縫いつけ、もろもろの大きな人の頭に、かぶり物を作りかぶせて、魂をかり取るうとする女はわざわいだ。あなたがたは、わが民の魂をかり取って、あなたがたの利益のために、他の魂を生かしおこうとするのか。一九 あなたがたは少しばかりの大麦のため、少しばかりのパンのために、わが民のうちに、わたしを汚し、かの偽りを聞きいれるわが民に偽りを述べて、死んではならない者を死なせ、生きていてはならない者を生かす。

二〇 それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたがたが用いて、魂をかり取るところの占いひもを奪い、あなた

第一章

がたの腕から占いひもを裂き取つて、あなたがたがかり取るところの魂を、鳥のように放ちやる。ニわたしはまたあなたがたの、かぶり物を裂き、わが民をあなたがたの手から救う。彼らは再びあなたがたの獲物とはならない。そしてあなたがたはわたしの主であることを知るようになる。三あなたがたは偽りをもつて正しい者の心を悩ました。わたしはこれを悩まさなかった。またあなたがたは悪人が、その命を救うために、その悪しき道から離れようとする時、それをしないように勧める。四それゆえ、あなたがたは重ねてむなしい幻を見ることができず、占いをする事ができないようになる。わたしはわが民を、あなたがたの手から救い出す。そのとき、あなたがたはわたしの主であることを知るようになる」。

一ここにイスラエルの長老のうちの一人々が、わたしの所に来て、わたしの前に座した。二時に主の言葉が、わたしに臨んだ。三「人の子よ、これらの人々は、その偶像を心の中に持ち、罪に落しいるところのつまずきを、その顔の前に置いてゐる。わたしはどうして彼らの願いをいれることができるか。四それゆえ彼らに告げて言え、主なる神は、こう言われる、イスラエルの家の人々で、その偶像を心の中に持ち、その顔の前に罪に落し

いれるところのつまずくものを置きながら、預言者のもとに来る者には、その多くの偶像のゆえに、主なるわたしは、みずからこれに答をする。五これはその偶像のために、すべてわたしを離れたイスラエルの家の心を、わたしが捕えるためである。

六それゆえイスラエルの家に言え、主なる神はこう言われる、あなたがたは悔いて、あなたがたの偶像を捨てよ。あなたがたの顔を、そのすべての憎むべきものからそむけよ。イスラエルの家の者およびイスラエルに宿る外国人のだれでも、わたしから離れ、その心に偶像を持ち、その顔の前に罪に落しいるところのつまずきを置きながら、預言者に来て、心のままにわたしに求めるときは、主であるわたしは、みずからこれに答をする。ハわたしはわたしの顔を、その人に向け、彼を、しるし、およびこゝろとなし、これをわが民のうちから断ち滅ぼす。その時、あなたがたはわたしが主であることを知るようになる。九もし預言者が欺かれて言葉を出すことがあれば、それは主であるわたしが、その預言者を欺いたのである。わたしは手を彼の上に伸べ、わが民イスラエルのうちから彼を滅ぼす。一〇彼らはその罰を負う。その預言者の罰は、問い求める者の罰と同様である。二これはイスラエルの家が、重ねてわたしを離れて迷わず、重ねてそのもろもろのたがによつて、おのれを汚さないため、また彼らがわが民となり、わたしが彼らの神となるためであると、主なる神は言われる」。

二三 主の言葉が、またわたしに臨んだ、二三「人の子よ、もし国がわたしに、もとりそむいて罪を犯し、わたしがその上に手を伸べて、そのつえとたのむパンを砕き、これにききんを送り、人と獣とをそのうちから断つ時、一四たといそこにノア、ダニエル、ヨブの三人がいても、彼らはその義によって、ただ自分の命を救うるのみであると、主なる神は言われる。一五もしわたしが野の獣にこの地を通らせ、これを荒させ、これを荒れ地となし、その獣のためにそこを通る者がないようにしたなら、一六主なる神は言われる、わたしは生きている、たといこれら三人の者がその中にいても、そのむすこ娘を救うことはできない。ただ自分自身を救いうるのみで、その地は荒れ地となる。一七あるいは、わたしがもし、つるぎをその地に臨ませ、つるぎよ、この地を行きめぐれと言つて、人と獣とをそこから断つならば、一八主なる神は言われる、わたしは生きている、たといこれら三人の者がその中にいても、そのむすこ娘を救うことはできない。ただ自分自身を救いうるのみである。一九あるいは、わたしがもし、この地に疫病を送り、血をもつてわが憤りをその上に注ぎ、人と獣とをそこから断つならば、二〇主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである。

二三 主なる神はこう言われる、わたしが人と獣とを地から断つた

めに、つるぎと、ききんと、悪しき獣と、疫病との四つのきびしい罰をエルサレムに送る時はどうであろうか。三しかし、もしそれがあなたがたに来るとき、むすこ娘たちを助け出す者が、その中に残っていて、あなたがたがその行いと、わざとを見るならば、わたしがエルサレムの上に与えたすべての災について慰められるであろう。三すなわち、あなたがたが、その行いと、わざとを見る時彼らはあなたがたを慰め、あなたがたはわたしがこれに行った事は、すべてゆえなくしたのではないことを知るようにになると、主なる神は言われる」。

第一章

一 主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ぶどうの木、森の木のうちにあるぶどうの枝は、ほかの木になんのまさる所があるか。三その木は何かを造るために用いられるか。また人はこれをを用いて、器物を掛ける木釘を造るだろうか。四見よ、これは火に投げ入れられて燃える。火がその両端を焼いたとき、またその中ほどがこげたとき、それはなんの役に立つだろうか。五見よ、これは完全な時でも、なんの用をもなさない。まして火がこれを焼き、これをこがした時には、なんの役に立つだろうか。六それゆえ主なる神はこう言われる、わたしが森の木のうちのぶどうの木を、火に投げ入れて焼くように、エルサレムの住民をそ

のようにする。セわたしはわたしの顔を彼らに向けて攻める。彼らがその火からのがれても、火は彼らを焼き尽くす。わたしが顔を彼らに向けて攻める時、あなたがたはわたしの主であることを知る。ハ彼らが、もとよりそむいたゆえに、わたしはこの地を荒れ地とすると、主なる神は言われる」。

第十六章

一 主の言葉が再びわたしに臨んだ、二「人の子よ、エルサレムにその憎むべき事どもを示して、三言え。主なる神はエルサレムにこう言われる、あなたの起り、あなたの生れはカナンびとの地である。あなたの父はアモリびと、あなたの母はヘテびとである。四あなたの生れについていえば、その生れた日に、へその緒は切られず、水で洗い清められず、塩でこすられず、また布で包まれなかった。五ひとりもあなたをあわれみ見る者なく、情をもつてこれらのことの一つをも、あなたにしてやる者もなく、あなたの生れた日に、あなたはきらわれて、野原に捨てられた。六わたしはあなたのかたわらを通り、あなたが血の中にころがりまわっているのを見た時、わたしは血の中にいるあなたに言った、『生きよ、七野の木のように育て』と。すなわちあなたは成長して大きくなり、一人前の女になり、その乳ぶきは形が整い、髪は長くなったが、着物がなく、裸であった。

八わたしは再びあなたのかたわらをとおつて、あなたを見たが、見よ、あなたは愛せられる年齢に達したので、わたしは着物のすそであなたをおおい、あなたの裸をかくし、そしてあなたに誓い、あなたと契約を結んだ。そしてあなたはわたしのものとなったと、主なる神は言われる。九そこでわたしは水であなたを洗い、あなたの血を洗い落して油を塗り、一〇縫い取りした着物を着せ、皮のくつをはかせ、細布をかぶらせ、絹のきれであなたをおおった。二また飾り物であなたを飾り、腕輪をあなたの手にはめ、鎖をあなたの首にかけ、三鼻には鼻輪、耳には耳輪、頭には美しい冠を与えた。四このようにあなたは金銀で飾られ、細布、絹、縫い取りの服をあなたの衣とし、麦粉と、蜜と、油とを食べた。あなたは非常に美しくなつて王の地位に進み、四あなたは美しさのために、あなたの名声は国々に広まった。これはわたしが、あなたに施した飾りによつて全うされたからである、主なる神は言われる。

五ところが、あなたは自分の美しさをたのみ、自分の名声によつて姦淫を行い、すべてかたわらを通る者と、ほしいままに姦淫を行った。六あなたは自分の衣をとつて、自分のためにはなやかに色どつた聖所を造り、その上で姦淫を行っている。こんなことはかつてなかったこと、またあつてはならないことである。七あなたはわたしが与えた金銀の美しい飾りの品をとり、自分のために男の像を造つて、これと姦淫を行った。八

また縫い取りのある自分の衣をとって彼らに着せ、わたしの油と香とをその前に供え、一丸またわたしがあなたに与えたパン、わたしがあなたを養うための麦粉、油および蜜を、こうばしきかおりとして彼らの前に供えたと、主なる神は言われる。二〇あなたはまた、あなたがわたしに産んだむすこ、娘たちをとって、その像に供え、彼らに食わせた。このようなあなたの姦淫は小さい事であろうか。二あなたはわたしの子どもを殺し、火の中を通して彼らにささげた。三あなたがそのすべての憎むべきことや姦淫を行うに当って、あなたが衣もなく、裸で、血の中にころがりまわっていた自分の若き日のことを思わなかった。

三三あなたがもろもろの悪を行った後、（あなたはわざわいだ、わざわいだと、主なる神は言われる）三四あなたは自分のために高樓を建て、広場、広場に台を造り、二五ちまた、ちまたのつじに台を造って、あなたの美しさを汚し、すべてかたわらを通る者に身をまかせて、大いに姦淫を行っている。二六あなたはまた、かの肉欲的な隣りエジプトの人々と姦淫を行い、大いに姦淫を行って、わたしを怒らせた。二七それゆえ、わたしはわたしの手をあなたの上に伸べて、あなたの賜わる分を減らし、あなたの敵すなわち、あなたのみだらな行為を恥じるペリシテびとの娘らの欲のままに、あなたを渡した。二八あなたは飽くことがないので、またアツスリヤの人々と姦淫を行ったが、彼らと姦淫を

行つても、なお飽くことがなかった。二九あなたはまたカルデヤの商業地と大いに姦淫を行ったが、これと姦淫を行つても、なお飽くことがなかった。

三〇主なる神は言われる、あなたの心はどんなに恋いわずらうのか。あなたは、これらすべての事を行った。これはあつかましい姦淫のわざである。三一あなたは、ちまた、ちまたのつじに高樓を建て、広場、広場に台を設けたが、何をもらうことをあげたので、遊女のようにではなかった。三二自分の夫に替えて他人と通じる姦婦よ。三三人はすべての遊女に物を与える。しかしあなたはすべての恋人に物を与え、彼らにまいないして、あなたと姦淫するために、四方からあなたの所にこさせる。三四このようにあなたは姦淫を行うに当って、他の女と違っている。すなわち、だれもあなたに姦淫をさせたのではない。あなたはかえって価を払い、相手はあなたに払わない。これがあなたの違うところである。

三五それで遊女よ、主の言葉を聞け。三六主なる神はこう言われる、あなたがその恋人と姦淫して、あなたの恥じる所をあらわし、あなたの裸をあらわし、またすべての偶像と、あなたが彼らにささげたあなたの子どもの血のゆえに、三七見よ、わたしはあなたと遊んだあなたのすべての恋人、およびすべてあなたが恋した者と、すべてあなたが憎んだ者とを集め、四方から彼らをあなたの所に集めて、あなたの裸を彼らにあらわす。彼らはあ

なたの裸を、ことごとく見る。三ハわたしは姦淫を行つた女と、
 血を流した女がさばかれるように、あなたをさばき、憤りと、ね
 たみの血とを、あなたに注ぐ。三九わたしはあなたを恋人の手に
 渡す。彼らはあなたの高楼を倒し、台をこわし、あなたの衣をは
 ぎ取り、あなたの美しい飾りの品を奪い、あなたを衣服のない
 裸者にする。四〇彼らは民衆をかり立ててあなたを攻め、石で
 あなたを撃ち、つるぎであなたを切り、四一火であなたの家を焼
 き、多くの女たちの前で、あなたにさばきを行う。こうしてわた
 しはあなたに淫行をやめさせ、重ねて価を払わせないようにす
 る。四二そしてあなたに對するわが憤りをしずめ、わがねたみを
 あなたから離し、わたしは心を安んじて、再び怒ることをしな
 い。四三またあなたはその若き日の事を覚え、すべてこれらの
 事をもつて、わたしを怒らせたから、見よ、わたしもあなたの行
 うところをあなたのこうべに報いると、主なる神は言われる。
 あなたはもろもろの憎むべき事に加えて、このみだらな事をお
 こなつたではないか。四四見よ、すべてことわざを用いる者は、
 あなたについて、『この母にしてこの娘あり』という、ことわざ
 を用いる。四五あなたは、その夫と子どもとを捨てたあなたの母
 の娘、またその夫と子どもとを捨てた姉妹を持つてゐる。あな
 たの母はヘテびと、あなたの父はアモリびと、四六あなたの姉は
 サマリヤ、サマリヤはその娘たちと共に、あなたの北に住み、あ
 なたの妹はソドムで、その娘たちと共に、あなたの南に住んでい

る。四七あなたは彼らの道を歩まず、彼らの憎むべき事に従つて
 いないが、しばらくすると、あなたのおこないは、彼らよりもさ
 らに悪くなる。四八主なる神は言われる、わたしは生きてゐる。
 あなたの妹ソドムとその娘たちは、あなたとあなたの娘たちが
 したほどのことはしなかつた。四九見よ、あなたの妹ソドムの
 罪はこれである。すなわち彼女と、その娘たちは高ぶり、食物
 に飽き、安泰に暮らしていたが、彼らは、乏しい者と貧しい者を助
 けなかつた。五〇彼らは高ぶり、わたしの前に憎むべき事をおこ
 なつたので、わたしはそれを見た時、彼らを除いた。五一サマリ
 ヤはあなたの半分も罪を犯さなかつた。あなたは彼らよりも多
 く憎むべき事をおこない、あなたのおこなつたもろもろの憎む
 べき事によつて、あなたの姉妹を義と見せかけた。五二あなたは
 その姉妹を有利にさばいたことによつて、あなたもまた自分の
 はずかしめを負わなければならぬ。それはあなたが彼らより
 も、さらに憎むべきことをした罪によつて、彼らはあなたよりも
 義とされるからである。それであなたも恥を受け、はずかしめ
 を負わなければならない。それはあなたがその姉妹を義と見せ
 かけたからである。
 五三わたしは彼らの幸福をもとに返す。すなわちソドムとその
 娘たちの幸福、サマリヤとその娘たちの幸福、また彼らの中にい
 るあなたの幸福をもとに返す。五四これはあなたに自分のはず
 かしめを負わせるため、またすべてあなたのなした事を恥じさ

せるためである。こうしてあなたは彼らの慰めとなる。五五あなたの姉妹ソドムと、その娘たちとは、そのもとの所に帰り、マリヤと、その娘たちとは、そのもとの所に帰り、あなたと、あなたの娘たちとは、そのもとの所に帰る。五六あなたの高ぶりの日に、あなたの姉妹ソドムは、あなたの口に、ことわざとなったではなかったか。五七すなわちあなたの悪があらわされた時まで、そうではなかったか。しかし今はあなたも彼女と同様に、エドムの娘たちと、すべてその周囲の者、および四方からあなたをあざけるペリシテの娘たちのそしりとなつた。五八あなたはあなたのみだらな行為と、あなたの憎むべき事のたとえを、身に負っていると言は言われる。

五九主なる神はこう言われる、誓いを軽んじ、契約を破つたあなたには、あなたがしたように、わたしもあなたにする。六〇しかしわたしはあなたの若き日に、あなたと結んだ契約を覚え、永遠の契約をあなたと立てる。六一わたしがあなたの姉および妹を受け、またあなたとの契約によらずに、娘として彼らをあなたに与える時、あなたは自分のおこないを思い出して恥じる。六二わたしはあなたと契約を立て、あなたはわたしが主であることを知るようになる。六三こうしてすべてあなたの行つたことにつき、わたしがあなたをゆるす時、あなたはそれを思い出して恥じ、その恥のゆえに重ねて口を開くことがないと、主なる神は言われる」。

第十七章

一時に主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、イスラエルの家になぞをかけ、たとえを語つて、三言え。主なる神がこう言われる、さまざまの色の羽毛を多く持ち、大きな翼と、長い羽根を持つ大わしがレバノンに来て、香柏のこずえにとまり、四その若枝の頂を摘み切り、これを商業の地に運び、商人の町に置いた。五またその地の種をとつて、これを肥えた土に植えた。すなわち水の多い所にもつて行つて、柳を植えるようにこれを植えた。六これが成長して、たけ低く、はびこるぶどうの木となり、枝はわしに向かい、根はわしの下にあり、こうしてついにぶどうの木となり、枝を伸ばし、葉を出した。

七ここにまた大きな翼と、羽毛の多いほかの一羽の大わしがあつた。見よ、このぶどうの木は、潤いを得るために、その根をわしに向かつてまげ、その枝をわしに向かつて伸ばした。八これが枝を出し、実を結び、みごとなぶどうの木となるために、わたしはこれを植えた苗床から水の多い良い地に移し植えた。九あなたは、主なる神がこう言われると言え、これは栄えるであろうか。わしはその根を抜き、その枝を切り、その若葉を皆枯らさないであろうか。これをその根からあげるには、強い腕や多くの民を必要としない。一〇見よ、それが移し植えられたら、また栄えるであろうか。東風がこれを打つ時、それは枯れてしまわな

いであろうか。その育つた苗床で枯れないであろうか」。

二 主の言葉がまたわたしに臨んだ、二三 反逆の家に言いえ。これらがなんであるかをあなたがたは知らないのか。彼らに言いえ、見よ、バビロンの王がエルサレムにきて、その王とつかさとを捕え、これをバビロンに引いて行つた。二三 また王の子孫のひとりをつかして、これをバビロンに結び、誓いを立てさせ、また国のおもだった人々を捕えて行つた。一四 これはこの国を卑しくして、みづから立つことができないようにし、その契約を守ることによつて立たせるためである。一五 しかし彼はバビロンの王にそむき、使者をエジプトに送つて、馬と多くの兵とをそこから獲ようとした。彼は成功するだろうか。このようなことをなす者は、のがれることができようか。一六 契約を破つてなおのがれることができるか。主なる神は言われる、わたしは生きています、必ず彼は自分を王となした王の住む所、彼が立てた誓いを軽んじ、その契約を破つた相手の王のいるバビロンで彼は死ぬ。一七 多くの命を断つために壘を築き、雲梯を建てるとき、パロは決して大いなる軍勢と、多くの人ともつて、彼を助けて戦いをしない。一八 彼は誓いを軽んじ、契約を破り、その手を与えて誓いながら、なおこれらの事をしたゆえ、のがれることはできない。一九 それゆえ、主なる神はこう言われる、わたしは生きています、彼がわたしの誓いを軽んじ、わたしの契約を破つたことを、必ず彼のこうべに報いる。二〇 わたしはわが網を彼の上に打ちかけ、

彼をわがわなに捕えて、バビロンに引いて行き、彼がわたしにむかつて犯した反逆のために、その所で彼をさばく。二三 彼のすべての軍隊のえり抜き、兵士は皆つるぎに倒れ、生き残つた者は八方に散らされる。そしてあなたがたは主なるわたしが、これを語つたことを知るようになる」。

二三 主なる神はこう言われる、「わたしはまた香柏の高いこずえから小枝をとつて、これを植え、その若芽の頂から柔かい芽を摘みとり、これを高いすぐれた山に植える。二三 わたしはイスラエルの高い山にこれを植える。これは枝を出し、実を結び、みごとな香柏となり、その下にもろもろの種類の獣が住み、その枝の陰に各種の鳥が巣をつくる。二四 そして野のすべての木は、主なるわたしが高い木を低くし、低い木を高くし、緑の木を枯らし、枯れ木を緑にすることを知らようになる。主であるわたしはこれを語り、これをするのである」。

第一八章

一 主の言葉がわたしに臨んだ、二「あなたがたがイスラエルの地について、このことわざを用い、『父たちが、酔いぶどうを食べたので子供たちの歯がうく』というのはどんなわけか。三 主なる神は言われる、わたしは生きています、あなたがたは再びイスラエルでこのことわざを用いることはない。四 見よ、すべての魂はわ

たしのものである。父の魂も子の魂もわたしのものである。罪を犯した魂は必ず死ぬ。

五人がもし正しくあつて、公道と正義とを行い、六山の上で食事をせず、また目をあげてイスラエルの家の偶像を仰がず、隣り人の妻を犯さず、汚れの時にある女に近づかず、もだれをもしえたげず、質物を返し、決して奪わず、食物を飢えた者に与え、裸の者に衣服を着せ、ハ利息や高利をとつて貸さず、手をひいて悪を行わず、人と人との間に真実のさばきを行い、九わたしの定めに歩み、わたしのおきてを忠実に守るならば、彼は正しい人である。彼は必ず生きることができると、主なる神は言われる。

一〇しかし彼が子を生み、その子が荒い者で、人の血を流し、これらの義務の一つをも行わず、一かえて山の上で食事をし、隣り人の妻を犯し、二三乏しい者や貧しい者をしえたげ、物を奪い、質物を返さず、目をあげて偶像を仰ぎ、憎むべき事をおこなひ、三利息や高利をとつて貸すならば、その子は生きるであらうか。彼は生きることができない。彼はこれらの憎むべき事をしたので、必ず死に、その血は彼自身に帰する。

一四しかし彼が子を生み、その子が父の行つたすべての罪を見て、恐れ、そのようなことを行わず、一五山の上で食事せず、目をあげてイスラエルの家の偶像を仰がず、隣り人の妻を犯さず、もだれをもしえたげず、質物をひき留めず、物を奪わず、かえつて自分の食物を飢えた者に与え、裸の者に衣服を着せ、一七その

手をひいて悪を行わず、利息や高利をとらず、わたしのおきてを行い、わたしのために歩むならば、彼はその父の悪のために死なず、必ず生きる。一八しかしその父は人をかすめ、その兄弟の物を奪い、その民の中で良くない事を行つたゆえ、見よ、彼はその悪のために死ぬ。

一九しかしあなたがたは、『なぜ、子は父の悪を負わないのか』と言う。子は公道と正義とを行い、わたしのすべての定めを守つておこなつたので、必ず生きるのである。二〇罪を犯す魂は死ぬ。子は父の悪を負わない。父は子の悪を負わない。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰する。

二一しかし、悪人がもしその行つたもろの罪を離れ、わたしのすべての定めを守り、公道と正義とを行うならば、彼は必ず生きる。死ぬことはない。二三その犯したもろのものがは、彼に對して覚えられない。彼はそのなした正しい事のために生きる。二三主なる神は言われる、わたしは悪人の死を好むであらうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでゐるではないか。二四しかし義人がもしその義を離れて悪を行い、悪人のなすもろの憎むべき事を行うならば、生きるであらうか。彼が行つたもろの正しい事は覚えられない。彼はその犯したとがと、その犯した罪とのために死ぬ。

二五しかしあなたがたは、『主のおこないは正しくない』と言う。イスラエルの家よ、聞け。わたしのおこないは正しくないのか。

正しくないのは、あなたがたのおこないではないか。二六 義人がその義を離れて悪を行い、そのために死ぬならば、彼は自分の行った悪のために死ぬのである。二七 しかし悪人がその行った悪を離れて、公道と正義とを行うならば、彼は自分の命を救うことができる。二八 彼は省みて、その犯したすべてのとがを離れたのだから必ず生きる。死ぬことはない。二九 しかしイスラエルの家は『主のおこないは正しくない』と言う。イスラエルの家よ、わたしのおこないは、はたして正しくないのか。正しくないのは、あなたがたのおこないではないか。

三〇 それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたを、おのおのそのおこないに従ってさばくと、主なる神は言われる。悔い改めて、あなたがたのすべてのとがを離れよ。さもないと悪はあなたがたを滅ぼす。三一 あなたがたがわたしに対しておこなったすべてのとがを捨て去り、新しい心と、新しい霊とを得よ。イスラエルの家よ、あなたがたはどうして死んでよからうか。三二 わたしは何人との死をも喜ばないのであると、主なる神は言われる。それゆえ、あなたがたは翻って生きよ。

第十九章

一 あなたはイスラエルの君たちのために悲しみの歌をのべて三言え、

あなたの母はししのうちにあつて、どんな雌じしであつたらう。

彼女が若いししのうちに伏して子じしを養った。

三 彼女は子じしの一つを育てたが、

それは若いししとなつて、

獲物をとることを学び、人を食べた。

四 国々の人は彼に対して叫び声をあげ、

落し穴でこれを捕え、

かぎでこれをエジプトの地に引いて行つた。

五 雌じしは自分の思いが破れ、

その望みを失つたのを見たので、

ほかの子じしをとつて、これを若い子じしとした。

六 彼はししのうちに行き来し、若いししとなつて、

獲物をとることを学び、人を食べた。

七 彼はその要害を荒し、その町々を滅ぼした。

そのほえる声によつて、

その地とその中に満ちるものとは皆恐れた。

八 そこで国々の人は彼に対して四方にわなを設け、

彼に網を打ちかけ、落し穴で彼を捕えた。

九 彼らはかぎをもつて、これをかごに入れ、

これをバビロンの王のもとに連れて行き、

これをおりの中に入れて、

第二〇章

一 第七年の五月十日に、イスラエルの長老たちのある人々が、主

再びその声をイスラエルの山々に

聞えさせないようにした。

二 あなたの母は水のほとりに移し植えられた

ぶどう畑のぶどうの木のように、

水が多いために実りがよく、枝がはびこった。

三 その強い幹は君たる者のつえとなつた。

それは茂みの中に高くそびえ、

多くの枝をつけて高く見えた。

四 しかしこのぶどうの木は憤りによつて抜かれ、

地に投げうたれ、東風がそれを枯らし、

その実はもぎ取られ、その強い幹は枯れて、

火に焼き滅ぼされた。

五 今これは荒野に、

かわいた、水のない地に移し植えられ、

六 火がその幹から出て、その枝と実とを滅ぼしたので、

強い幹で、君たる者のつえと

なるべきものはそこない。

これが悲しみの言葉、また悲しみの歌となつた。

に尋ねるためにきて、わたしの前に座した。二時に主の言葉がわ

たしに臨んだ、三「人の子よ、イスラエルの長老たちに告げて言

え。主なる神はこう言われる、あなたがたがわたしのもに來

たのは、わたしに何か尋ねるためであるか。主なる神は言われ

る、わたしは生きている、わたしはあなたがたの尋ねに答えな

い。四 あなたは彼らをさばこうとするのか。人の子よ、あなたは

彼らをさばこうとするのか。それなら彼らの先祖たちのした憎

むべき事を彼らに知らせ、五かつ彼らに言え。主なる神はこう

言われる、わたしがイスラエルを選び、ヤコブの家の子孫に誓

い、エジプトの地でわたし自身を彼らに知らせ彼らに誓つて、わ

たしはあなたがたの神、主であると言つた日、六その日にわたし

は彼らに誓つて、エジプトの地から彼らを導き出し、わたしが彼

らのために探り求めた乳と蜜との流れる地、全地の中で最もす

ばらしい所へ行かせると言つた。七わたしは彼らに言つた、あな

たがたは、おのおのその目を樂しませる憎むべきものを捨てよ。

エジプトの偶像をもつて、その身を汚すな。わたしはあなたが

たの神、主である。八ところが彼らはわたしにそむき、わたし

の言うことを聞こうとしなかつた。彼らは、おのおのその目

を樂しませた憎むべきものを捨てず、またエジプトの偶像を捨て

てなかつた。

それで、わたしはエジプトの地のうちで、わたしの憤りを彼らに

注ぎ、わたしの怒りを彼らに漏らそうと思つた。九しかしわたし

はわたしの名のために行動した。それはエジプトの地から彼ら
を導き出して、周囲に住んでいた異邦人たちに、わたしのことを
知らせ、わたしの名が彼らの目の前に、はざかしめられないため
である。一〇すなわち、わたしはエジプトの地から彼らを導き出
して、荒野に連れて行き、二わたしは定めを彼らに授け、わた
しのおきてを彼らに示した。これは人がこれを行うことによつ
て生きるものである。三わたしはまた彼らに安息日を与えて、
わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼
らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。四しかしイ
スラエルの家は荒野でわたしにそむき、わたしのために歩まず、
人がそれを行うことによつて、生きることのできるわたしのお
きてを捨て、大いにわたしの安息日を汚した。

そこでわたしは荒野で、わたしの憤りを彼らの上に注ぎ、これを
滅ぼそうと思つたが、一四わたしはわたしの名のために行動し
た。それはわたしが彼らを導き出して見せた異邦人の前に、わ
たしの名が汚されないためである。一五ただし、わたしは荒野で
彼らに誓い、わたしが彼らに与えた乳と蜜との流れる地、全地の
最もすばらしい地に、彼らを導かないと言つた。一六これは彼ら
がその心に偶像を慕つて、わがおきてを捨て、わがために歩ま
ず、わが安息日を汚したからである。一七けれどもわたしは彼ら
を惜しみ見て、彼らを滅ぼさず、荒野で彼らを絶やさなかつた。

一八わたしはまた荒野で彼らの子どもたちに言つた、あなたがた

の先祖の定めには歩んではならない。そのおきてを守つてはなら
ない。その偶像をもつて、あなたがたの身を汚してはならない。

一九主なるわたしはあなたがたの神である。わがために歩み、わ
がおきてを守つてこれを行い、二〇わが安息日を聖別せよ。これ
はわたしとあなたがたとの間のしるしとなつて、主なるわたし
があなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるため
である。二一しかしその子どもたちはわたしにそむき、わがために
歩まず、人がこれを行うことによつて、生きることのできるわた
しのおきてを守り行わず、わが安息日を汚した。

そこでわたしはわが憤りを彼らの上に注ぎ、荒野で彼らに対し、
わが怒りを漏らそうと思つた。三しかしわたしはわが手を翻
して、わが名のために行動した。それはわたしが彼らを導き出
して見せた異邦人の前に、わたしの名が汚されないためである。

三三ただしわたしは荒野で彼らに誓い、わたしは異邦人の間に彼
らを散らし、国々の中に彼らをふりまくと言つた。三四これは彼
らがわがおきてを行わず、わが定めを捨て、わが安息日を汚し、
彼らの目にその先祖の偶像を慕つたからである。三五またわた
しは彼らに良くない定めと、それによつて生きることのできな
いおきてとを与え、三六そして、彼らのういごに火の中を通らせ
るその供え物によつて、彼らを汚し、彼らを恐れさせた。わたし
がこれを行つたのは、わたしが主であることを、彼らに知らせ
るためである。

三〇 それゆえ人の子よ、イスラエルの家に告げて言え。主なる神はこう言われる、あなたがたの先祖はまた、不信の罪を犯してわたしを汚した。二八 わたしが彼らに与えようと誓った地に、彼らを導き入れた時、彼らはすべての高い丘と、すべての茂った木とを見て、その所で犠牲をささげ、忌むべき供え物をささげ、またこうばしいかおりをその所に上らせ、その所に灌祭を注いだ。二九(わたしは彼らに言った、あなたがたが通うその高き所はなんであるか。それでその名は今日までバマとなえられている。)三〇 それゆえ、イスラエルの家に言え。主なる神はこう言われる、あなたがたは、その先祖のおこないに従って、その身を汚し、その憎むべきものを慕うのか。三一 あなたがたは、その供え物をささげ、その子供に火の中を通らせて、今日まですべての偶像をもつて、その身を汚すのである。イスラエルの家よ、わたしは、なおあなたがたに尋ねられるべきであらうか。わたしは生きている。わたしは決してあなたがたに尋ねられるはずはないと、主なる神は言われる。

三二 あなたがたの心にあること、すなわち『われわれは異邦人のようになり、国々のもろものやからのようになって、木や石を拜もう』との考えは決して成就しない。

三三 主なる神は言われる、わたしは生きている、わたしは必ず強い手と伸べた腕と注がれた憤りをもつて、あなたがたを治める。三四 わたしはわが強い手と伸べた腕と注がれた憤りとを

もつて、あなたがたをもろもの民の中から導き出し、その散らされた国々から集め、三五 もろもの民の荒野に導き入れ、その所で顔と顔を合わせて、あなたがたをさばく。三六 すなわち、エジプトの地の荒野で、あなたがたの先祖をさばいたように、わたしはあなたがたをさばくと、主なる神は言われる。三七 わたしはあなたがたに、むちの下を通らせ、数えてはいらせ、三八 あなたがたのうちから、従わぬ者と、わたしにそむいた者とを分かち、その寄留した地から、彼らを導き出す。しかし彼らはイスラエルの地に入ることはできない。こうしてあなたがたはわたしの主であることを知ることになる。

三九 それで、イスラエルの家よ、主なる神はこう言われる、あなたがたはわたしに聞かないなら、今も後も、おのその偶像に行つて仕えるがよい。しかし再び供え物と偶像とをもつて、わたしの聖なる名を汚してはならない。

四〇 主なる神は言われる、わたしの聖なる山、イスラエルの高い山の上で、イスラエルの全家はその地で、ことごとくわたしに仕える。その所でわたしは喜んで彼らを受け入れ、あなたがたのささげ物と最上の供え物とを、その聖なるささげ物と共に求める。四一 わたしがあなたがたをもろもの民の中から導き出し、かつてあなたがたを散らした国々から集める時、こうばしいかおりとして、あなたがたを喜んで受け入れる。そしてわたしは異邦人の前で、あなたがたの中に、わたしの聖なることをあらわ

す。四二こうしてわたしがあなたがたを、イスラエルの地、すなわちあなたがたの先祖たちに与えたと誓った地に、はいらせる時、あなたがたはわたしが主であることを知るようになる。四三またその所であなたがたは、その身を汚したあなたがたのおこないと、すべてのわざを思い出し、みずから行ったすべての悪事のために、自分を忌みきらうようになる。四四イスラエルの家よ、わたしがあなたがたの悪しきおこないによらず、またその腐れたわざによらず、わたしの名のために、あなたがたを扱う時、あなたがたはわたしが主であることを知るのであると、主なる神は言われる」。

四五主の言葉がまたわたしに臨んだ、四六「人の子よ、顔を南に向け、南に向かって語り、ネゲブの森の地に対して預言せよ。四七すなわちネゲブの森に言え、主の言葉を聞け、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたのうちに火を燃やす。その火はあなたのうちのすべての青木と、すべての枯れ木を焼き滅ぼし、その燃える炎は消されることがなく、南から北まで、すべての地のおもては、これがために焼ける。四八すべて肉なる者は、主なるわたしがこれを焼いたことを見る。その火は消されない」。四九そこでわたしは言った、「ああ主なる神よ、彼らはわたしについてこう語っています、『彼はたとえをもつて語る者ではないか』と」。

第二章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたの顔をエルサレムに向け、あなたの言葉を聖所に向けてのべ、イスラエルの地に向かって預言し、三イスラエルの地に言え。主はこう言われる、見よ、わたしはあなたを攻め、わたしのつるぎをさやから抜き、あなたがたのうちから、正しい者も悪しき者をも断つてしまふ。四わたしがあなたがたのうちから、正しい者も悪しき者をも断つゆえに、わたしのつるぎはさやから抜け出て、南から北までのすべての肉なる者を攻める。五すべて肉なる者は、主なるわたしが、そのつるぎをさやから抜き放つたことを知る。このつるぎは再びさやに納められない。六それゆえ、人の子よ、嘆け、心碎けるまでに嘆き、彼らの目の前でいたく嘆け。七人があなたに向かつて、『なぜ嘆くのか』と言うなら、『この知らせのためである。それが来れば人の心はみな溶け、手はみななえ、霊はみな弱り、ひざはみな水のようになる。見よ、それは来る、必ず成就する』と言え」と主なる神は言われる。

八主の言葉がわたしに臨んだ、九「人の子よ、預言して言え、主はこう言われる、

つるぎがある、

とぎ、かつ、みがいたつるぎがある。

一〇殺すためにといであり、

いわずまのようにきらめくためにみがいてある。

わたしは喜ぶことができるか。わが子よ、あなたはつえとすべて木で作ったものを軽んじた。二このつるぎは手にとるために、とがれ、殺す者の手に渡すために、とがれみがかれるのである。三人の子よ、叫び嘆け、このことはわが民に臨み、イスラエルのすべての君たちに臨むからである。彼らはわが民と共につるぎにわたされる。それゆえ、あなたのももを打て。三これはためしにすることではない。もしあなたが、つえをあざけたら、どういうことになるうか」と主なる神は言われる。

一四「それゆえ、人の子よ、あなたは預言し、手を打ちなせ。つるぎを二度も三度も臨ませよ。これは人を殺すつるぎ、大いに殺すつるぎであつて、彼らを囲むものである。一五これがために彼らの心は溶け、多くの者がすべての門に倒れる。わたしはひらめくつるぎを彼らに送る。ああ、これはいわずまのようになり、人を殺すためにみがかれている。一六あなたの刃の向かうところ、右に左になぎ倒せ。一七わたしもまた、わたしの手を打ちならし、わたしの怒りをしずめると、主なるわたしは言った」。

一八主の言葉がまたわたしに臨んだ、一九「人の子よ、バビロンの王のつるぎが来るために、二つの道を備えよ。この二つの道は一つの国から出ている。あなたは道しるべを作り、これを町に向かう道のはじめに置き。二〇あなたはまたアンモンの人々のラバと、ユダと、堅固な城の町エルサレムとにつるぎの来る道を

設けよ。三バビロンの王は道の分れ目、二つの道のはじめに立つて占いをし、矢をふり、テラピムに問い、肝を見る。三彼らの右にエルサレムのために占いが出る。すなわち口を開いて叫び、声をあげ、ときを作り、門に向かって城くずしを設け、壘を築き、雲梯を建てよと言う。三しかしこれは彼らの目には偽りの占いと思われ、彼らは堅き誓いをなした。しかし彼は、彼らを捕えることによって、罪を思い出させる。

一四それゆえ、主なる神はこう言われる、あなたがたの罪は覚えられ、その反逆は現れ、その罪はすべてのわざに現れる。このようにあなたがたは、すでに覚えられているから、彼らの手に捕えられる。一五汚れた悪人であるイスラエルの君よ、あなたの終りの刑罰の時であるその日が来る。一六主なる神はこう言われる、かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ。すべてのものは、そのままには残らない。卑しい者は高くされ、高い者は卑しくされる。一七ああ破滅、破滅、破滅、わたしはこれをこさせる。わたしが与える権威をもつ者が来る時まで、その跡形さえも残らない。一八人の子よ、預言して言え。主なる神はアンモンの人々と、そのあざけりについて、こう言われる、つるぎがある。このつるぎは殺すために抜かれ、いわずまのようにひかりきらめくようにとがれている。一九彼らがあなたに偽りの幻を示し、偽りを占ったゆえ、これは殺さるべき悪しき者の首の上に置かれる。彼らの終りの刑罰の時であるその日がきている。三〇これをさ

やに納めよ、わたしはあなたの造られた所、あなたの生れた地であなたをさばく。三 わたしの怒りをあなたに注ぎ、わたしの憤りの火をあなたに向けて燃やし、滅ぼすことに巧みな残忍な人の手にあなたを渡す。三 あなたは火のための、たきぎとなり、あなたの血は国の中に流され、覚えられることはない、主なるわたしに言う」。

第二章

「また主の言葉がわたしに臨んで言った、二「人の子よ、あなたはさばくのか。血を流すこの町をさばくのか。それならこの町にそのもろもろの憎むべき事を示して、三 言え。主なる神はこう言われる、自分のうちに血を流して、その刑罰の時をまねき、偶像を造ってその身を汚す町よ、四 あなたはその流した血によつて罪を得、その造った偶像によつて汚れ、あなたの日を近づかせ、あなたの年の定め時はきた。それゆえわたしはあなたをもろもろの国民のあざけりとなし、万国の物笑いとする。五 あなたに近い者も、遠い者も、汚れと、混乱に満ちているあなたをあげける。

六 見よ、あなたのうちのイスラエルの君たちは、おのおのその力にしたがつて、血を流そうとしている。七 父母はあなたのうちで卑しめられ、寄留者はあなたのうちで虐待をうけ、みなしごと、

やもめとはあなたのうちで悩まされている。八 あなたはわたしの聖なるものを卑しめ、わたしの安息日を汚した。九 人をののしつて血を流そうとする者は、あなたのうちにおり、人々はあなたのうちで、山の上で食事をし、あなたのうちで、みだらなおこないをし、一〇 あなたのうちで、父の裸を現し、あなたのうちで、汚れのうちにある女を犯す。二 またあなたのうちに、その隣の妻と憎むべき事を行う者があり、淫行をもって、その嫁を汚す者があり、自分の父の娘である自分の姉妹を犯す者があり、三 また血を流そうとして、あなたのうちで、まいないを取る者がある。あなたは利息と高利とを取り、しえたげによつて、あなたの隣り人のものをかすめ、そしてわたしを忘れてしまったと、主なる神は言われる。

三 それゆえ見よ、あなたが得た不正の利の事、およびあなたのうちにある流血の事に対して、わたしは手を打ちならす。四 わたしがあなたを攻める日には、あなたの勇氣は、これに耐え得ようか。またあなたの手は強くあり得ようか。主なるわたしはこれを宣言し、これをなす。五 わたしはあなたを、もろもろの国民のうちに散らし、国々の間にまき、そしてあなたから汚れを除く。六 わたしはあなたによつて、もろもろの国民の前に汚される。そしてあなたはわたしの主であることを知る」。

七 主の言葉がまたわたしに臨んだ、八「人の子よ、イスラエルの家はわたしに対して、かなかずとなった。彼らはすべて炉の

中の銀、青銅、すず、鉄、鉛のかなかすとなった。一九それゆえ、主なる神はこう言われる、あなたがたは皆かなかすとなったゆえ、見よ、わたしはあなたがたをエルサレムの中に集める。二〇人が銀、青銅、鉄、鉛、すずなどを炉の中に集め、これに火を吹きかけて溶かすように、わたしは怒りと憤りをもつて、あなたがたを集め入れて溶かす。二三すなわち、わたしはあなたがたを集め、わたしの怒りの火を、あなたがたに吹きかける。あなたがたはその中で溶ける。二四銀が炉の中で溶けるように、あなたがたもその中で溶ける。そしてあなたがたは主なるわたしに、あなたがたの上に、わたしの怒りを注いだことを知るようになる」。

二三主の言葉がまたわたしに臨んだ、二四「人の子よ、これに言え、あなたは怒りの日に清められず、また雨の降らない地である。二五その中の君たちは、獲物を裂くほえるししのような者で、彼らは人々を滅ぼし、宝と尊い物とを取り、そのうちに、やめめの数をふやす。二六その祭司たちはわが律法を犯し、聖なる物を汚した。彼らは聖なる物と汚れた物とを区別せず、清くない物と清い物との違いを教えず、わが安息日を無視し、こうしてわたしは彼らの間に汚されている。二七その中にいる君たちは、獲物を裂くおおかみのようで、血を流し、不正の利を得るために人々を滅ぼす。二八その預言者たちは、水しつくいでこれを塗り、偽りの幻を見、彼らに偽りを占い、主が語らないのに『主なる神はこ

う言われる』と言う。二九国の民はしえたげを行い、奪うことをなし、乏しい者と貧しい者とをかすめ、不法に他国人をしえたぐ。三〇わたしは、国のために石がきを築き、わたしの前にあつて、破れ口に立ち、わたしにこれを滅ぼさせないようにする者を、彼らのうちに尋ねたが得られなかった。三一それゆえ、わたしはわが怒りを彼らの上に注ぎ、わが憤りの火をもつて彼らを滅ぼし、彼らのおこないを、そのこうべに報いたと、主なる神は言われる」。

第二三章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ここにふたりの女があつた。ひとりの母の娘である。三彼らはエジプトで淫行をした。彼らは若い時に淫行をした。すなわちその所で彼らの胸は押され、その処女の乳ぶさはいじられた。四彼らの名は姉はアホラ、妹はアホリバである。彼らはわたしのものとなつて、むすこ娘たちを産んだ。その本名はアホラはサマリヤ、アホリバはエルサレムである。

五アホラはわたしのものである間に淫行をなし、その恋人なるアッスリヤびとにこがれた。六すなわち紫の衣をきた軍人、長官、司令官、すべて好ましい若者、馬に乗る者たちである。七彼女は彼らに淫行を供えた。彼らはすべてアッスリヤのえり抜

きの人々である。彼女はまた、そのこがれたすべての者のものもろの偶像をもつて、おのれを汚した。ハ彼女はエジプトの日からおこなつていた、その淫行を捨てなかつた。それは彼女の若い時に、彼らが彼女と寝、その処女の乳ぶきをいじり、その情欲を彼女の上に注いだからである。九それゆえ、わたしは彼女をその恋人の手に渡し、そのこがれたアツスリヤの人々の手に渡した。○彼らは彼女の裸を現し、そのむすこ娘たちを奪い、つるぎをもつて彼女を殺した。こうして彼女に対するさばきが行われたとき、彼女は女たちの間の語り草となつた。

二その妹アホリバはこれを見て、姉よりも情欲をほしいままにし、姉の淫行よりも多く淫行をなし、ニアツスリヤの人々に恋こがれた。長官、司令官、盛装した軍人、馬に乗る者たちで、すべて好ましい若者たちである。三わたしは彼女が身を汚したのを見た。彼らは共に一つの道をたどつたが、四彼女はさらにその淫行を続け、壁に描いた人々を見た。すなわち朱で描いたカルデヤびとの像で、一五腰には帯を結び、頭にはたれさがつたずきんをいただいていた。これらはみな官吏のような姿で、その生れた国カルデヤのバビロン人に似ていた。一六彼女はこれらを見て、これに恋こがれ、使者をカルデヤの彼らのもとに送つた。一七そこでバビロンの人々は彼女のもとに来て、恋の床につき、情欲をもつて彼女を汚したが、彼女は彼らに汚されるにおよんで、その心は彼らから離れた。一八彼女がその淫行を

公然と続け、その裸をさらしたので、わたしの心は彼女から離れた。これはあたかもわたしの心が、彼女の姉から離れたと同様である。一九しかし彼女はなおエジプトの地で姦淫をしたその若き日を覚えて、その淫行を続け、二〇その情夫たちに恋こがれた。その人の肉は、ろばの肉のごとく、その精は馬の精のようであつた。二一このようにあなたは、かのエジプトびとが、あなたの胸に手をつけ、あなたの若い乳ぶきをおさえた時の、若い時の淫行を慕っている。

三それゆえ、アホリバよ、主なる神はこう言われる、「見よ、わたしは、あなたの心がすでに離れたあなたの恋人らを起して、あなたを攻めさせ、彼らに四方から来てあなたを攻めさせる。三すなわちバビロンの人々およびカルデヤのすべての人々、ペコデ、シヨア、コア、アツスリヤのすべての人々、好ましい若者、長官、司令官、官吏、軍人など、すべて馬に乗る者たちである。四彼らは戦車、貨車、および多くの民を率いて、北からあなたに攻めて来る。大盾、小盾、かぶとを備えて、四方からあなたに攻めかかる。わたしが彼らにさばきをゆだねるゆえ、彼らは、そのおきてに従つて、あなたをさばく。二五わたしはあなたに向かつてわたしの憤りを起すゆえ、彼らは怒りをもつてあなたを扱い、あなたの鼻と耳とを切り落とし、そして残りの者はつるぎに倒れる。彼らはあなたのむすこ娘たちを奪い、生き残つた者を火で焼く。二六彼らはまたあなたの衣服をはぎ取り、あなたの美

しい飾りを取り去る。二〇こうしてわたしはあなたの淫乱と、エジプトの地から持つて来た淫行とを取り除き、重ねてあなたの目を、エジプトびとに向けて上げさせず、彼らの事を思わないようにする。二一主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたの憎む者の手、あなたの心の離れた者の手にあなたを渡す。二二彼らは憎しみをもつてあなたを扱い、あなたの所得をこごとく取り去り、あなたを赤はだかにし、あなたの淫行の裸を現す。あなたの淫乱と淫行とのゆえに、二三すなわち、あなたが異邦人を慕つて姦淫を行い、彼らの偶像をもつて身を汚したゆえに、これらのことがあなたに臨むのだ。二四あなたはその姉の道を歩んだので、わたしも彼女の杯をあなたにわたす。二五主なる神はこう言われる、

あなたは姉の深い、大きな杯を飲み、

笑い物となり、あざけりとなる、

この杯にはそれらが多くこもっている。

二三あなたは酔いと憂いとに満たされる。

驚きと滅びの杯、

これがあなたの姉サマリヤの杯である。

三四あなたはこれを飲みこれをかたむけ、

あなたの髪の毛をひきむしり、

あなたの乳ぶさをかきさく。

わたしがこれを言う、主なる神は言われる。三五それゆえ、主

なる神はこう言われる、あなたはわたしを忘れ、わたしをあなたのうしろに捨て去つたゆえ、あなたは自分の淫乱と淫行との罪を負わねばならぬ。

三六主はわたしに言われた、「人の子よ、あなたはアホラとアホリバをさばくのか。それならば彼らにその憎むべき事を告げよ。三七彼らは姦淫を行い、血が彼らの手の上にある。彼らはその偶像と姦淫を行い、またわたしに産んだ子らを、食物のために彼らにささげた。三八さらに彼らは、わたしに対してこのようにした。すなわち、彼らは同じ日にわたしの聖所を汚し、わたしの安息日を犯した。三九彼らはその子らを、偶像にささげるためにほふつた同じ日に、わたしの聖所にきて、これを汚した。見よ、彼らがわたしの家の中でしたことはこれである。四〇さらに彼らは使者をやつて、遠くから来るように人々を招いた。見よ、彼らはきた。あなたは、この人々のために身を洗い、目を描き、飾り物を身につけ、四一尊い床に座し、食卓をその前に設け、わたしの香と、わたしの油とを、その上に供えた。四二こうして、のんきな群衆の声は彼女と共にあり、また、荒野から連れて来た通りがかりの酔いどれも、彼らと共にいた。彼らは女たちの手に腕輪をはめさせ、頭に美しい冠をいだかせた。四三そこでわたしは言つた、彼女と姦淫を行う時、人々は姦淫を犯さないであらうか。四四人が遊女の所にはいるように、彼らは彼女の所にはいつた。こうして彼らは姦淫を行うために、アホ

「うおよびアホリバの所にはいった。四五しかし正しい人々は淫婦のさばきと、血を流した女のさばきとをもつて、彼らをさばく。それは彼らが淫婦であつて、その手に血があるからである」。

四六 主なる神はこう言われる、「わたしは軍隊を彼らに向かつて攻め上らせ、彼らを恐れと略奪とに渡す。四七 軍隊は彼らを石で打ち、つるぎで切り、そのむすこ娘たちを殺し、火でその家を焼く。四八 こうしてわたしはこの地に淫乱を絶やす。すべての女はみずからいましめて、あなたがたがしたような淫乱を行わない。四九 あなたがたの淫乱の報いは、あなたがたの上にくだり、あなたがたはその偶像礼拝の罪を負い、そしてわたしが主なる神であることを知るようになる」。

第二章

一 第九年の十月十日に、主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたは今日すなわち今日の名を書きしるせ。バビロンの王は、この日エルサレムを包囲した。三 あなたはこの反逆の家にたとえを語つて言え。主なる神はこう言われる、かますをすえ、これをすえて、水をくみ入れよ。四 その中に肉の切れを入れよ、すべて良い肉の切れ、

すなわち、ももと肩の肉をこれに入れよ。良い骨をこれに満たせ。

五 羊の最も良いものを取れ。

かまの下にまきを積み、

その肉を煮たぎらせ、またその中の骨を煮よ。

六 それゆえ、主なる神はこう言われる、わざわいなるかな、流血の町、さびているかま。そのさびはこれを離れない。肉をひとつひとつ無差別に取り出せ。七 その流した血はまだその中にある。彼女はこれを裸岩の上に流し、土でこれをおおうために、地面には注がなかった。八 これは、わたしの怒りをつのらせ、あだを返すために、その流した血がおおれないように、裸岩の上に流したのである。九 それゆえ、主なる神はこう言われる、わざわいなるかな、流血の町。わたしもまた、まきをさらに積み重ねる。一〇 まきを積み重ね、火を燃やし、肉をよく煮て、煮つくし、骨を焼く。二 そしてかまを熱くするため、それをからにして炭火の上に置き、その銅を焼いて、汚れをその中に溶かし、そのさびを去れ。三 しかしわたしのほねおりは、むだであつた。その多くのさびは火によつて消えない。四 そのさびとは、あなたの不潔な淫行である。わたしはあなたを清めようとしたが、あなたはあなたの不潔から清められようとしなから、わたしの怒りをあなたに漏らし尽すまでは、あなたは汚れから清まることはない。一四 主なるわたしはこれを言った。そしてこれ

は必ず成る。わたしはこれをなす。わたしはやめない、惜しまない、悔いしない。あなたのおこないにより、あなたのわざによって、あなたをさばくと、主なる神は言われる。』

二五また主の言葉がわたしに臨んだ、二六「人の子よ、見よ、わたしは、にわかにあなたの目の喜ぶ者を取り去る。嘆いてはならない。泣いてはならない。涙を流してはならない。一七声をたえずに嘆け。死人のために嘆き悲しむな。ずきんをかぶり、足にくつをはけ。口をおおうな。嘆きのパンを食べるな。一八朝のうちに、わたしは人々に語つたが、夕べには、わたしの妻は死んだ。翌朝わたしは命じられたようにした。

一九人々はわたしに言つた、「あなたがするこの事は、われわれになんの関係があるのか、それをわれわれに告げてはくれまいか。二〇わたしは彼らに言つた、「主の言葉がわたしに臨んだ、二一『イスラエルの家に言え、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたがたの力の誇、目の喜び、心の望みであるわが聖所を汚す。あなたがたが残すむすこ娘たちは、つるぎに倒れる。二三あなたがたもわたしもしたようにし、口をおおわず、嘆きのパンを食べず、二三頭にずきんをかぶり、足にくつをはき、嘆かず、泣かず、その罪の中にやせ衰えて、互にうめくようになる。二四このようにエゼキエルはあなたがたのためにしるしとなる。彼がしたようにあなたがたもせよ。この事が成る時、あなたがたはわたしが主なる神であることを知るようになる。』

二五人の子よ、わたしが、彼らのとりで、彼らの喜びと栄え、彼らの目の喜びであり、その心の望みであるもの、また彼らのむすこ娘たちを取り去る日、二六その日に難をのがれて来る者が、あなたのもとにきて、あなたに事を告げる。二七その日あなたは、そののがれてきた者に向かつて口を開き、語り、もはや沈黙しない。こうしてあなたは彼らのためにしるしとなり、彼らはわたしが主であることを知る。』

第二章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、あなたの顔をアンモンの人々に向け、これに向かつて預言し、三アンモンの人々に言え。主なる神の言葉を聞け。主なる神はこう言われる、あなたがたはわが聖所の汚された時、またイスラエルの地の荒された時、またユダの家が捕え移された時、ああ、それはよい気味であると言つた。四それゆえ、わたしはあなたを、東の人々に渡して彼らの所有とする。彼らはあなたのうちに陣營を設け、あなたのうちに住居を造り、あなたのかだものを食べ、あなたの乳を飲む。五わたしはラバを、らくだを飼う所とし、アンモンびとの町々を、羊の伏す所とする。そしてあなたがたは、わたしが主であることを知るようになる。六主なる神はこう言われる、あなたはイスラエルの地に向かつて手をうち、足を踏み、心に悪意を満

たして喜んだ。セそれゆえ、見よ、わたしはわが手をあなたに向けて伸べ、あなたを、もろもろの国民に渡して略奪にあわせ、あなたを、もろもろの民の中から断ち、諸国の中から滅ぼし絶やす。そしてあなたは、わたしが主であることを知るようになる。ハ主なる神はわたしにこう言われる、モアブは言った、見よ、ユダの家は、他のすべての国民と同様である。九それゆえ、わたしはモアブの境界の町々、すなわち国の榮えであるベテエシモテ、バルメオン、キリアタイムの横腹を開き、一〇これをアンモンの人々と共に、東方の人々に与えて、その所有とし、モアブの人々をもろもろの国民の中に記憶させない。一一わたしはモアブの上にさばきを行う。そのとき、彼らはわたしが主であることを知る。

一二主なる神はこう言われる、エドムは恨みをふくんでユダの家に敵対し、これに恨みを返して、はなはだしく罪を犯した。一三それゆえ、主なる神はこう言われる、わたしはエドムの上に手を伸べて、その中から人と獣とを断ち、これを荒地とする。一四わたしが民イスラエルの手をもつて、エドムにわがあだを報いる。彼らがわが怒り、わが憤りに従つてエドムに行う時、エドムの人々は、わたしがあだを返すことを知るようになる、主なる神は言われる。

一五主なる神はこう言われる、ペリシテびとは恨みをふくんで

行動し、心に悪意をもつてあだを返し、深い敵意をもつて、滅ぼすことをした。一六それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしは手をペリシテびとの上に伸べ、ケレテびとを断ち、海べの残りの者を滅ぼす。一七わたしは怒りに満ちた懲罰をもつて、大いなる復讐を彼らになす。わたしが彼らにあだを返す時、彼らはわたしが主であることを知るようになる」。

第二十六章

一第十一年の第一日に主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ツロはエルサレムについて言った、『ああ、それはよい気味である。もろもろの民の門は破れて、わたしに開かれた。わたしは豊かになり、彼は破れはてた』と。三それゆえ、主なる神はこう言われる、ツロよ、わたしはあなたを攻め、海がその波を起すように、わたしは多くの国民を、あなたに攻めこさせる。四彼らはツロの城壁をこわし、そのやぐらを倒す。わたしはその土を払い去つて、裸の岩にする。五ツロは海の中にあつて、網をはる場所になる。これはわたしが言ったのであると、主なる神は言われる。ツロは、もろもろの民にかすめられ、六その本土における娘たちは、つるぎで殺される。そして彼らは、わたしが主であることを知るようになる。

七主なる神はこう言われる、見よ、わたしは王の王なるバビロン

の王ネブカデレザルに、馬、戦車、騎兵、および多くの軍勢をひきいて、北からツロに攻めこさせる。ハ彼は本土におるあなたの娘たちをつるぎで殺し、あなたに向かつて雲梯を建て、墨を築き、盾を備え、九城くずしをあなたの城壁に向け、おのてあなたのやぐらを打ち砕く。○その多くの馬の土煙は、あなたをおおう。人が破れた町にはいるように、彼があなたの門にはいる時、騎兵と貨車と戦車の響きによつて、あなたの石がきはゆるぐ。――彼はその馬のひずめで、あなたのすべてのちまたを踏みあらし、つるぎであなたの民を殺す。あなたの力強い柱は地に倒れし、二彼らはあなたの財宝を奪い、商品をかすめ、城壁をくずし、楽しい家をこわし、石と木と土とを水の中に投げ込む。三わたしはあなたの歌の声をとどめる。琴の音はもはや聞えなくなる。四わたしはあなたを裸の岩にする。あなたは網を張る場所となり、再び建てられることはない。主なるわたしがこれを言つたと、主なる神は言われる。

五主なる神はツロにこう言われる、海沿いの国々はあなたの倒れる響き、手負いのうめき、あなたのうちの殺人のゆえに、身震いしないであろうか。六その時、海の君たちは皆その位からおり、朝服を脱ぎ、縫い取りの衣服を取り去り、恐れを身にまとい、地に座して、いたく恐れ、あなたの事を驚き、七あなたのため悲しみの歌をのべて言う、

『あなたは海にあつて、強い誉ある町、

本土に恐れを与えていたあなたも、その住民も、海から消え去つた。

八島々はあなたの倒れる日に身震いする。

海の島々はあなたの去り行くことを見て驚く。』

九主なる神はこう言われる、わたしはあなたを、荒れた町となし、住む者のない町のようにし、淵をあなたに向かつてわきあがらせ、大水にあなたをおおわせる時、二あなたを穴に下る者どもと共に、昔の民の所に下し、穴に下る者どもと共に、昔のままの荒れ跡の中に、あなたを住ませる。それゆえ、あなたは人の住む所とならず、また生ある者の地に所を得ない。三わたしはあなたの終りを、恐るべきものとする。あなたは無に帰する。あなたを尋ねる人があつても、永久に見いださないと、主なる神は言われる。

第二十七章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ツロのために悲しみの歌をのべ、三海の入口に住んで、多くの海沿いの国々の民の商人であるツロに対して言え、主なる神はこう言われる、

ツロよ、あなたは言つた、

『わたしの美は完全である』と。

四あなたの境は海の中にあり、

あなたの建設者はあなたの美を完全にした。
五人々はセニルのもみの木で

あなたのために船板を造り、
レバノンから香柏をとって、

あなたのために帆柱を造り、

六バシヤンのかしの木で、

あなたのためにかいを造り、

クプロの島から来る松の木に象牙をはめて、

あなたのために甲板を造った。

七あなたの帆はエジプトから来るあや布であつて、

あなたの旗に用いられ、

あなたのおおいはエリシャの海岸から来る

青と紫の布である。

八あなたのこぎ手は、

シドンとアルワデの住民、

あなたのかじとりは、

あなたの中にいる熟練なゼメルの人々である。

九ゲバルの老人たち、およびその熟練な人々は、

あなたの中にいて漏りを繕ひ、

海のすべての船およびその船員らは

あなたのうちにいて、あなたの商品を交易する。

一〇ペルシヤ人、ルデびと、プテびとはあなたの軍に加わつて、あ

なたの戦士となる。彼らはあなたのうちに、盾とかぶとを掛け、
あなたに輝きをそえた。ニアルワデとヘレクの人々は、あなた
の周囲の城壁の上にあり、ガマデの人々は、あなたのやぐらの
中にあり、彼らは、あなたの周囲の城壁にその盾を掛けて、あ
なたの美観を全うした。

二あなたはすべての貨物に富むゆえに、タルシシはあなた
と交易をなし、銀、鉄、すず、鉛をあなたの商品と交換した。一
ミヤワン、トバル、およびメセクはあなたと取引し、彼らは人身
と青銅の器とを、あなたの商品と交換した。二四ベテ・トガルマ
は馬、軍馬、および驃馬をあなたの商品と交換した。二五ローツ
島の人々はあなたと取引し、多くの海沿いの国々は、あなたの
市場となり、象牙と黒たんとを、みつぎとしてあなたに持つてき
た。二六あなたの製品が多いので、エドムはあなたと商売し、彼
らは赤玉、紫、縫い取りの布、細布、さんご、めのうをもつて、
あなたの商品と交換した。二七ユダとイスラエルの地は、あなた
と取引し、麦、オリブ、いちじく、蜜、油、および乳香をもつ
て、あなたの商品と交換した。二八あなたの製品が多く、あなた
の富が多いので、ダマスコはあなたと取引し、ヘルボンの酒と、
さらした羊毛と、一丸ウザルの酒をもつて、あなたの商品と交換
し、銑鉄、肉桂、菖蒲をもつて、あなたの商品と交易した。二〇
デダンは乗物の鞍敷をもつて、あなたと取引した。三アラビヤ
びと、およびケダルのすべての君たちは小羊、雄羊、やぎをもつ

て、あなたと取引し、これらの物をあなたと交易した。三シバとラマの商人は、あなたと取引し、もろもろの尊い香料と、もろもろの宝石と金とをもつて、あなたの商品と交換した。三ハラン、カンネ、エデン、アッスリヤ、キルマデはあなたと取引した。四彼らは、はなやかな衣服と、青く縫い取りした布と、ひもで結んで、じょうぶにした敷物などをもつて、あなたと取引した。五タルシシの船はあなたの商品を運んでまわった。

あなたは海の中にいて満ち足り、いたく榮えた。

二六あなたのこぎ手らはあなたを大海の中に進め、海の中で東風があなたの船を破った。

二七あなたの財宝、あなたの貨物、あなたの商品、

あなたの船員、あなたのかじ取り、

あなたの漏りを繕う者、あなたの商品を商う者、

あなたの中にいるすべての軍人、

あなたの中にいるすべての仲間、皆、

あなたの破滅の日に海の中に沈む。

二八あなたのかじ取りの叫び声に、近郷は震い、

二九すべてのかじ取りをとる者は船からくだる。

船員および海のすべてのかじ取りは海べに立ち、

三〇あなたのために声をあげて泣き、はげしく叫び、

ちりをこうべにかぶり、灰の中にまろび、

三二あなたのために髪をそり、荒布をまとい、

あなたのために心を痛めて泣き、はげしく嘆く。

三三彼らは悲しんで、あなたのために悲しみの歌をのべ、あなたを弔つて言う、

『だれかツロのように海の中で滅びたものがあるか。

三三あなたの商品が海を越えてきた時、

あなたは多くの民を飽かせ、

あなたの多くの財宝と商品とをもつて、

地の王たちを富ませた。

三四今あなたは海で破船し、深い水に沈み、

あなたの商品と、あなたの手すべての船員とは、

あなたと共に沈んだ。

三五海沿いの国々に住む者は皆あなたについて驚き、

その王たちは大いに恐れてその顔を震わす。

三六もろもろの民の中の商人らはあなたをあざける。

あなたは恐るべき終りを遂げ、

永遠にうせはてる』。

第二十八章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、ツロの君に言え、主なる神はこう言われる、

あなたは心に高ぶつて言う、

『わたしは神である、神々の座にすわって、海の中にいる』と。

しかし、あなたは自分を神のように賢いと思つても、人であつて、神ではない。

三見よ、あなたはダニエルよりも賢く、すべての秘密もあなたには隠れていない。

四あなたは知恵と悟りによつて富を得、金銀を倉にたくわえた。

五あなたは大きいなる貿易の知恵によつてあなたの富を増し、

その富によつてあなたの心は高ぶつた。

六それゆえ、主なる神はこう言われる、

あなたは自分を神のように賢いと思つているゆえ、七見よ、わたしは、もろもろの国民の最も恐れている異邦人をあなたに攻めこさせる。

彼らはつるぎを抜いて、あなたが知恵をもつて得た美しいものに向かい、

あなたの輝きを汚し、八あなたを穴に投げ入れる。

あなたは海の中で殺された者のような死を遂げる。

九それでもなおあなたは、『自分は神である』と、あなたを殺す人々の前で言うことができるか。

あなたは自分を傷つける者の手にかかつては、人であつて、神ではないではないか。

一〇あなたは異邦人の手によつて割礼を受けない者の死を遂げる。

これはわたしと言うのであると、主なる神は言われる。

二また主の言葉がわたしに臨んだ、三「人の子よ、ツロの王のために悲しみの歌をのべて、これに言え。主なる神はこう言われる、

あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。

三あなたは神の園エデンにあつて、

もろもろの宝石が、あなたをおおつていた。すなわち赤めのう、黄玉、青玉、貴かんらん石、

緑柱石、縞めのう、サファイヤ、ざくろ石、エメラルド。

そしてあなたの象眼も彫刻も金でなされた。これらはあなたのために造られた日に、

あなたのために備えられた。四わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。

あなたは神の聖なる山にいて、

火の石の間を歩いた。

一五 あなたは造られた日から、
あなたの中に悪が見いだされた日までは
そのおこないが完全であった。

一六 あなたの商売が盛んになると、
あなたの中に暴虐が満ちて、あなたは罪を犯した。
それゆえ、わたしはあなたを神の山から
汚れたものとして投げ出し、

守護のケルブはあなたを
火の石の間から追い出した。

一七 あなたは自分の美しさのために心高ぶり、
その輝きのために自分の知恵を汚したゆえに、
わたしはあなたを地に投げうち、
王たちの前に置いて見せ物とした。

一八 あなたは不正な交易をして犯した多くの罪によって
あなたの聖所を汚したゆえ、
わたしはあなたの中から火を出して
あなたを焼き、

あなたを見るすべての者の前で
あなたを地の上の灰とした。

一九 もろもろの民のうちであなたを知る者は皆
あなたについて驚く。

あなたは恐るべき終りを遂げ、
永遠にうせはてる」。

二〇 主の言葉がわたしに臨んだ、三 「人の子よ、あなたの顔をシ
ドンに向け、これに向かって預言して、三 言え。主なる神はこ
う言われる、

シドンよ、見よ、わたしはあなたの敵となる、
わたしはあなたのうちで栄えをあらわす。

わたしがシドンのうちにさばきをおこない、
そのうちにわたしの聖なることをあらわす時、
彼らはわたしが主であることを知る。

二三 わたしは疫病をこれに送り、
そのちまたに流血を送る。

その四方からこれに臨むつるぎによって
殺される者がその中に倒れる時、
彼らはわたしが主であることを知る。

二四 イスラエルの家には、もはや刺すいばらはなく、これを卑し
めたその周囲の人々のうちには、苦しめるとげもなくなる。こ
うして彼らはわたしが主であることを知るようになる。

二五 主なる神はこう言われる、わたしがイスラエルの家の者を、
その散らされたもろもろの民の中から集め、もろもろの国民の
目の前で、彼らにわたしの聖なることをあらわす時、彼らはわた
しが、わがしもべヤコブに与えた地に住むようになる。二六 彼ら

はそこに安らかに住み、家を建て、またぶどう畑を作る。かつて彼らを卑しめたすべての隣り人たちに対して、わたしがさばきを行う時、彼らは安らかに住む。こうして彼らは、わたしが彼らの神、主であることを知る」。

第二十九章

「第十年の十月十二日に、主の言葉がわたしに臨んだ、ニ「人の子よ、あなたの顔をエジプトの王パロに向け、彼とエジプト全国に対して預言し、三語つて言え。主なる神はこう言われる、

エジプトの王パロよ、

見よ、わたしはあなたの敵となる。

あなたはその川の中に伏す大いなる龍で、

『ナイル川はわたしのもの、

わたしがこれを造った』と言う。

四わたしは、かぎをあなたのあごにつかけ、

あなたの川の魚を、あなたのうろこにつかせ、

あなたと、あなたのうろこについている

もろもろの魚を、あなたの川から引きあげ、

五あなたとあなたの川のもろもろの魚を、

荒野に投げ捨てる。

あなたは野の面に倒れ、

あなたを取り集める者も、葬る者もない。

わたしはあなたを

地の獣と空の鳥のえじきとして与える。

六そしてエジプトのすべての住民はわたしの主であることを知る。あなたはイスラエルの家に対して葦のつえであった。七彼らがあなたを手にとる時、あなたは折れ、彼らの肩はことごとく裂ける。彼らがまたあなたに寄りかかる時、あなたは破れ、彼らの腰をことごとく震えさせる。八それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはつるぎをあなたに持つてきて、人と獣とをあなたのうちから断つ。九エジプトの地は荒れて、むなしくなる。そして彼はわたしが主であることを知る。

あなたは『ナイル川はわたしのもの、わたしがこれを造った』と言っているゆえに、一〇見よ、わたしはあなたとあなたの川々の敵となつて、エジプトの地をミグドルからスエネまで、エチオピアの境に至るまで、ことごとく荒し、むなしくする。一一人の足はこれを渡らず、獣の足もこれを渡らない。四十年の間、ここに住む者はない。一二わたしはエジプトの地を荒して、荒れた国々の中に置き、その町々は荒れて、四十年のあいだ荒れた町々の中にある。わたしはエジプトびとを、もろもろの国民の中に散らし、もろもろの国の中に散らす。

一三主なる神はこう言われる、四十年の後、わたしはエジプトびとを、その散らされたもろもろの民の中から集める。一四すなわ

ちエジプトの運命をもとに返し、彼らをその生れた地であるパテロスの地に帰らせる。その所で彼らは卑しい国となる。二五これはもろもろの国よりも卑しくなり、再びもろもろの国民の上に出ることができない。わたしは彼らを小さくするゆえ、再びもろもろの国民を治めることはない。一六これはイスラエルが助けを求める時、その罪を思い出して、再びイスラエルの家の頼みとはならない。こうして彼らは、わたしが主なる神であることを知る」。

二七第二十七年の一月一日に、主の言葉がわたしに臨んだ、一八「人の子よ、バビロンの王ネブカデレザルは、その軍勢をツロに對して大いに働かせた。頭は皆はげ、肩はみな破れた。しかし彼もその軍勢も、ツロに對してなしたその働きのために、なんの報いをも得なかつた。一九それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはバビロンの王ネブカデレザルに、エジプトの地を与える。彼はその財宝を取り、物をかすめ、物を奪い、それをその軍勢に与えて報いとする。二〇彼の働いた報酬として、わたしはエジプトの地を彼に与える。彼らはわたしのために、これをしたからであると、主なる神は言われる。二一その日、わたしはイスラエルの家に、一つの角を生じさせ、あなたの口を彼らのうちに開かせる。そして彼らはわたしが主であることを知る」。

第三〇章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、預言して言え、主なる神はこう言われる、

嘆け、その日はわざわいだ。

三その日は近い、主の日は近い。

これは雲の日、異邦人の滅びの時である。

四つるぎがエジプトに臨む。

エジプトで殺される者の倒れる時、

エチオピアには苦しみがあり、

その財宝は奪い去られ、その基は破られる。

五エチオピア、プテ、ルデ、アラビヤ、リビヤおよび同盟国の人々は、彼らと共につるぎに倒れる。

六主はこう言われる、エジプトを助ける者は倒れ、その誇る力はうせる。

ミグドルからスエネまで、

人々はあるぎによつてそのうちに倒れると

主なる神が言われる。

七それは荒れて、荒れはてた国々のうちにあり、

その町々は荒れた町々のうちにある。

八わたしがエジプトに火を送り、

これを助ける者が皆滅びる時、
 彼らはわたしが主であることを知る。

九その日、早足の使者がわたしから出て、何事も知らぬエチオピアびとを恐れさせる。そしてかのエジプトの滅びの日に、彼らに苦しみが来る。見よ、これはかならず来る。

一〇主なる神はこう言われる、

わたしはバビロンの王ネブカデザルの手によつて
 エジプトの富を滅ぼす。

二彼と彼に従うその民、すなわち国民のうちの
 最も恐るべき者がきて、その地を滅ぼす。

彼らはつるぎを抜いて、エジプトを攻め、
 殺した者を国に満たす。

三わたしはナイル川をからし、

その国を悪しき者の手に売り、
 異邦人の手によつて国とその中のものとを荒す。
 主なるわたしはこれを言つた。

三三主なる神はこう言われる、

わたしは偶像をこわし、メンピスで偶像を滅ぼす。
 エジプトの国には、もはや君たる者がなくなる。
 わたしはエジプトの国に恐れを与える。

一四わたしはパテロスを荒し、
 ゾアンに火を放ち、

テーベにさばきをおこない、

一五わたしの怒りを、

エジプトの要害であるペルシウムに注ぎ、

テーベの群衆を断ち、

一六エジプトに火を下す。

ペルシウムはいたく苦しみ、

テーベは打ち破られ、

その城壁は破壊され、

一七オンとピベセテの若者はつるぎに倒れ、
 女たちは捕え移される。

一八わたしがエジプトの支配を砕く時、

テパネスでは日は暗くなり、

その誇る力は絶え、

雲はこれをおおい、

その娘たちは捕え移される。

一九このようにわたしはエジプトにさばきを行う。

そのとき彼らはわたしの主であることを知る」。

三〇第十一年の一月七日に主の言葉がわたしに臨んだ、三一人の子よ、わたしはエジプトの王パロの腕を折つた。見よ、これは包まれず、いやされず、ほうたいをも施されない。それは強くなつて、つるぎを執ることができない。三三それゆえ、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはエジプトの王パロを攻め、その強い

腕と、折れた腕とを共に折り、その手からつるぎを落させる。ニ
ミわたしはエジプトびとを、もろもろの国民の中に散らし、国々
に散らす。ニわたしはバビロンの王の腕を強くし、わたしのつ
るぎを、その手に与える。しかしわたしはバロの腕を折るゆえ、
彼は深手を負った者のように、彼の前にうめく。ニ五 わたしがバ
ビロンの王の腕を強くし、バロの腕がたれる時、彼らはわたし
主であることを知る。わたしがわたしのつるぎを、バビロンの
王に授け、これをエジプトの国に向かつて伸べさせ、ニ六 わたし
がエジプトびとを、もろもろの国民の中に散らし、国々に散らす
時、彼らはわたしが主であることを知る」。

第三章

一 第十一年の三月一日に主の言葉がわたしに臨んだ、ニ「人の子
よ、エジプトの王パロと、その民衆とに言え、

あなたはその大いなること、だれに似ているか。

ニ見よ、わたしはあなたを

レバノンの香柏のようにする。

麗しき枝と森の陰があり、たけが高く、

その頂は雲の中にある。

四 水はこれを育て、

大水がこれを高くする。

その川々はその植えた所をめぐつて流れ、
その流れを野のすべての木に送る。

五 これによつてそのたけは、

野のすべての木よりも高くなり、

その育つとき多くの水のために

枝葉は茂り、枝は伸び、

六 その枝葉に空のすべての鳥が、巢をつくり、

その枝の下に野のすべての獣は子を生み、

その陰にもろもろの国民は住む。

七 これはその大きなことと、

その枝の長いことによつて美しかった。

その根を多くの水に、おろしていたからである。

八 神の園の香柏も、これと競うことはできない。

もみの木もその枝葉に及ばない。

けやきもその枝と比べられない。

神の園のすべての木も、その麗しきこと、

これに比すべきものはない。

九 わたしはその枝を多くして、これを美しくした。

神の園にあるエデンの木は皆

これをうらやんだ。

一〇 それゆえ、主なる神はこう言われる、これは、たけが高くな

り、その頂を雲の中におき、その心が高ぶりおごるゆえ、ニわ

たしはこれを、もろもろの国民の力ある者の手に渡す。彼はこれに對してその惡のために正しい処置をとる。わたしはこれを追い出した。ニもろもろの国民の最も恐れている異邦人はこれを切り倒して捨てる。その枝はもろもろの山と、すべての谷とに落ち、その枝葉は碎けて、地のすべての流れにあり、地のすべての民は、その陰を離れて、これを捨てる。ニその倒れた所に、空のもろもろの鳥は住み、その枝の上に、野のもろもろの獸はいる。四これは水のほとりのすべての木が、その高さのために誇ることなく、その頂を雲の中におくことなく、水に潤う木が、みずから高ぶり立つことのないためである。これらは皆死に渡され、下の国に入り、穴に下る者と共に他の人々のうちにいる。

ニ五主なる神はこう言われる、これが陰府に下る日にわたしが淵をこれがために悲しませ、その川々をせきとめるので、大水はとどまる。わたしはレバノンを、これがために嘆かせ、野のすべての木を、これがために衰えさせる。ニ六わたしがこれを穴に下る者と共に陰府に落す時、もろもろの国民をその落ちる響きのために、打ち震えさせる。そしてエデンのすべての木、レバノンのすぐれて美しいもの、すべて水に潤うものは、下の国で慰められる。ニ七彼らもこれと共に陰府に下り、つるぎで殺された者のところに至る。まことにもろもろの国民のうちで、その陰に住んだ者も滅びる。ニ八エデンの木のうちで、その栄えと大いなるこ

とで、あなたはどれに似ているのか。あなたはこのように、エデンの木と共に、下の国に落され、つるぎで殺された者と共に、割礼を受けない者のうちに住む。これがパロとその民衆であると、主なる神は言われる」。

第三章

ニ第十二年の十二月一日に、主の言葉がわたしに臨んだ、ニ「人の子よ、エジプトの王パロのために、悲しみの歌をのべて、これに言え、

あなたは自分をもろもろの国民のうちの

ししであると考えているが、

あなたは海の中の龍のような者である。

あなたは川の中に、はね起き、

足で水をかきまぜ、川を濁す。

ニ三主なる神はこう言われる、

わたしは多くの民の集団をもつて、

わたしの網をあなたに投げかけ、

あなたを網で引きあげる。

ニ四わたしはあなたを地に投げ捨て、

野の面に投げうち、

空のすべての鳥をあなたの上にとまらせ、

全地の獣にあなたを与えて飽かせる。

五わたしはあなたの肉を山々に捨て、
あなたの死体で谷を満たす。

六わたしはあなたの流れる血で、
地を潤し、山々にまで及ぼす。

谷川はあなたの死体で満ちる。

七わたしはあなたを滅ぼす時、
空をおおい、星を暗くし、

雲で日をおおい、月に光を放たせない。

八わたしは空の輝く光を、

ことごとくあなたの上に暗くし、

あなたの国をやみとすると

主なる神は言う。

九わたしはもろもろの国民、あなたの知らない国々の中に、あなたを捕え移す時、多くの民の心を痛ませる。一〇わたしはあなたについて、多くの民を驚かせる。その王たちは、わたしがわたしのつるぎを、彼らの前に振るう時、あなたの事でおののく。あなたの倒れる日には、彼らはおのの自分の命を思つて、絶えず打ち震える。二主なる神はこう言われる、バビロンの王のつるぎはあなたに臨む。三わたしはあなたの民衆を勇士のつるぎに倒れさせる。彼らは皆、もろもろの国民の中で、最も恐れられている者たちである。

彼らはエジプトの誇を断つ、

エジプトの民衆は皆滅ぼされる。

一三わたしはその家畜をことごとく、
多くの水のかたわらから滅ぼす。

人の足は再びこれを濁さず、
家畜のひずめもこれを乱さない。

一四その時わたしはその水を清くし、
その川々を油のように流れさせると、

主なる神は言う。

一五わたしはエジプトの国を荒し、

その国に満ちるものが、ことごとく取り去られる時、

わたしがその中に住む者をことごとく撃つ時、

彼らはわたしの主であることを知る。

一六これは悲しみの歌である。人々はこれを歌い、もろもろの国の娘たちはこれを歌う。すなわちエジプトと、そのすべての民衆とのために、これを歌うのであると、主なる神は言われる。

一七第十二年の一月十五日に、主の言葉がわたしに臨んだ、一八「人の子よ、エジプトの民衆のために嘆き、これと大いなる国々の娘らとを、下の国に投げ下し、穴に下った者のところに至らせよ。」

一九『あなたの美はだれにまざっているか。』

下つて、割礼を受けない者と共に伏せよ。』

二〇 彼らはつるぎに殺される者のうちに倒れる。その民衆はこれと共に伏せる。三 勇士の首領はその助け手と共に、陰府の中から彼らに言う、『割礼を受けない者、つるぎに殺された者は下つて伏している』と。

二三 アッスリヤとその仲間とはその所におり、その墓はこれを囲む。彼らはみな殺された者、またつるぎに倒れた者である。三 彼らの墓は穴の奥に設けられ、その仲間はその墓の周囲にあり、これはみな殺された者、つるぎに倒れた者、生ける者の地に恐れを起した者である。

二四 その所にエラムがあり、その民衆は皆、その墓の周囲にいる。彼らはみな殺された者、つるぎに倒れた者、割礼を受けないで、下の国に下つた者、生ける者の地に、恐れを起した者で、穴に下る者と共に、恥を負うのである。二五 彼らはそのすべての民衆と共に、殺された者の中に床を置き、その墓はこれを囲む。これは皆、割礼を受けない者、つるぎに殺された者、生ける者の地に恐れを起した者で、穴に下る者と共に恥を負う。彼らは殺された者の中に置かれてゐる。

二六 その所にメセクとトバル、およびすべての民衆がおる。その墓はこれを囲む。彼らは皆、割礼を受けない者で、つるぎで殺された者である。生ける者の地に恐れを起したからである。二七 彼らは昔の倒れた勇士と共に伏さない。これらの勇士は、武器

を持つて陰府に下り、つるぎをまくらとし、その盾は骨の上にある。これは勇士の恐れが、生ける者の地にあつたからである。二八 あなたは割礼を受けない者のうちに、つるぎで殺された者と共に横たわる。

二九 その所にエドムとその王たちと、そのすべての君たちがおる。彼らはその力を持つにもかかわらず、かのつるぎで殺された者と共に横たえられ、割礼を受けない者および穴に下る者と共に伏している。

三〇 その所に北の君たち、およびシドンびとが皆おる。彼らは自分の力によつて恐れを起したので、殺された者と共に恥を受けて、下つて行つた者である。彼らはつるぎで殺された者と共に、割礼を受けない者、穴に下る者と共に恥を負う。

三一 パロは彼らを見る時、そのすべての民衆について慰められる。パロとすべての軍勢とは、つるぎで殺されると、主なる神は言われる。三 彼は生ける者の国に恐れを広げた。それゆえ、パロとすべての民衆とは、割礼を受けない者のうちにあつて、つるぎで殺された者と共に伏すと、主なる神は言われる。』

第三章

一 主の言葉がわたしに臨んだ、二 「人の子よ、あなたの民の人々に語つて言え、わたしがつるぎを一つの国に臨ませる時、その国

の民が彼らのうちからひとりを選んで、これを自分たちの見守る者とする。三彼は国につるぎが臨むのを見て、ラッパを吹き、民を戒める。四しかし人がラッパの音を聞いても、みずから警戒せず、ついにつるぎが来て、その人を殺したなら、その血は彼のこうべに帰する。五彼はラッパの音を聞いて、みずから警戒しなかつたのであるから、その血は彼自身に帰する。しかしその人が、みずから警戒したなら、その命は救われる。六しかし見守る者が、つるぎの臨むのを見て、ラッパを吹かず、そのため民が、みずから警戒しないでいるうちに、つるぎが臨み、彼らの中のひとりを失うならば、その人は、自分の罪のために殺されるが、わたしはその血の責任を、見守る者の手に求める。

七それゆえ、人の子よ、わたしはあなたを立てて、イスラエルの家を見守る者とする。あなたはわたしの口から言葉を聞き、わたしに代つて彼らを戒めよ。八わたしが悪人に向かつて、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言ふ時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかつたら、悪人は自分の罪によつて死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手に求める。九しかしあなたが悪人に、その道を離れるように戒めても、その悪人がその道を離れないなら、彼は自分の罪によつて死ぬ。しかしあなたの命は救われる。

一〇それゆえ、人の子よ、イスラエルの家に言え、あなたがたはこう言った、『われわれのとがと、罪はわれわれの上にある。わ

れわれはその中であつて衰へはてる。どうして生きることができようか』と。一一あなたは彼らに言え、主なる神は言われる、わたしは生きてゐる。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその惡しき道を離れよ。イスラエルの家よ、あなたは どうして死んでやろうか。二人の子よ、あなたの民の人々に言え、義人の義は、彼が罪を犯す時には、彼を救わない。悪人の惡は、彼がその惡を離れる時、その惡のために倒れることはな い。義人は彼が罪を犯す時、その義のために生きることができない。三わたしが義人に、彼は必ず生きると言つても、もし彼が自分の義をたのんで、罪を犯すなら、彼のすべての義は覚えられない。彼はみずから犯した罪のために死ぬ。四また、わたしは悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言つても、もし彼がその罪を離れ、公道と正義とを行うならば、一五すなわちその悪人が質物を返し、奪つた物をもどし、命の定めに歩み、惡を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない。一六彼の犯したすべての罪は彼に対して覚えられない。彼は公道と正義とを行つたのであるから、必ず生きる。

一七あなたの民の人々は『主の道は公平でない』と言ふ。しかし彼らの道こそ公平でないのである。一八義人がその義を離れて、罪を犯すならば、彼はこれがために死ぬ。一九悪人がその惡を離れて、公道と正義とを行うならば、彼はこれによつて生きる。二

○それであるのに、あなたがたは『主の道は公平でない』と言う。イスラエルの家よ、わたしは各自のおこないにしたがつて、あなたがたをさばく」。

三 わたしたちが捕え移された後、すなわち第十二年の十月五日に、エルサレムからのがれて来た者が、わたしのもとに来て言った、「町は打ち破られた」と。三 その者が来た前の夜、主の手がわたしに臨んだ。次の朝、その人がわたしのもとに来たころ、主はわたしの口を開かれた。わたしの口が開けたので、もはやわたしは沈黙しなかった。

三三 主の言葉がわたしに臨んだ、二四 「人の子よ、イスラエルの地の、かの荒れ跡の住民らは、語り続けて言う、『アブラハムはただひとりで、なおこの地を所有した。しかしわたしたちの数は多い。この地はわれわれの所有として与えられている』と。二五 それゆえ、あなたは彼らに言い、主なる神はこう言われる、あなたがたは肉を血のついたままで食べ、おのが偶像を仰ぎ、血を流して、なおこの地を所有することができるか。二六 あなたがたはつるぎをたのみ、憎むべき事をおこない、おのおの隣り人の妻を汚して、なおこの地を所有することができるか。二七 あなたは彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる、わたしは生きている。かの荒れ跡にいる者は必ずつるぎに倒れる。わたしは野の面にいる者を、獣に与えて食わせ、要害とほら穴にいる者は疫病で死ぬ。二八 わたしはこの国を全く荒す。彼の誇る力

はうせ、イスラエルの山々は荒れて通る者もなくなる。二九 彼らがおこなったすべての憎むべきことのために、わたしがこの国を全く荒す時、彼らはわたしの主であることを悟る。

三〇 人の子よ、あなたの民の人々は、かきのかたわら、家の入口で、あなたの事を論じ、たがいに語りあつて言う、『さあ、われわれは、どんな言葉が主から出るかを聞こう』と。三一 彼らは民が来るようにあなたの所に来、わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし彼らはそれを行わない。彼等は口先では多くの愛を現すが、その心は利におもむいている。三二 見よ、あなたは彼らには、美しい声で愛の歌をうたう者のように、また楽器をよく奏する者のように思われる。彼らはあなたの言葉は聞くが、それを行おうとはしない。三三 この事が起る時——これは必ず起る——そのとき彼らの中にひとりの預言者がいたことを彼らは悟る」。

第三章

一 主の言葉がわたしに臨んだ、二 「人の子よ、イスラエルの牧者たちに向かつて預言せよ。預言して彼ら牧者に言い、主なる神はこう言われる、わがわいなるかな、自分自身を養うイスラエルの牧者、牧者は群れを養うべき者ではないか。三 ところが、あなたがたは脂肪を食べ、毛織物をまとい、肥えたものをほふるが、

群れを養わ^やない。四 あなたがたは弱^{よわ}つた者を強^{つよ}くせず、病^やんでい^いる者をい^いやさず、傷^{きず}ついた者をつま^まず、迷^{まよ}い出^でた者を引^ひき返^{かえ}らず、う^うせた者^{もの}を尋^{たず}ねず、彼^{かれ}らを手^て荒^{あら}く、き^きびしく治^{おさ}めてい^いる。五 彼^{かれ}らは牧^{ぼくしや}者^{もの}がな^ないために散^ちり、野^ののもろもろの獣^{けもの}のえ^えじきにな^なる。六 わが羊^{やぎ}は散^ちら^られてい^いる。彼^{かれ}らはもろもろの山^{やま}と、もろもろの高^{たか}き丘^{おか}にさま^まよ^い、わが羊^{やぎ}は地^ちの全^{ぜん}面^{めん}に散^ちら^られてい^いるが、これ^{これ}を捜^{さが}す者^{もの}もな^なく、尋^{たず}ねる者^{もの}もな^ない。七 それゆ^ゆえ、牧^{ぼくしや}者^{もの}よ、主^{しゅ}の言^{こと}葉^はを聞^きけ。八 主^{しゅ}なる神^{かみ}は言^いわ^われる、わ^わたしは生^いきてい^いる。わが羊^{やぎ}はか^かすめ^められ、わが羊^{やぎ}は野^ののもろもろの獣^{けもの}のえ^えじきとな^なつてい^いるが、その牧^{ぼくしや}者^{もの}はい^いない。わが牧^{ぼくしや}者^{もの}はわが羊^{やぎ}を尋^{たず}ねない。牧^{ぼくしや}者^{もの}は自^じ身^{しん}を養^やうが、わが羊^{やぎ}を養^やわ^わない。九 それゆ^ゆえ、牧^{ぼくしや}者^{もの}らよ、主^{しゅ}の言^{こと}葉^はを聞^きけ。一〇 主^{しゅ}なる神^{かみ}はこ^こう言^いわ^われる、見^みよ、わ^わたしは牧^{ぼくしや}者^{もの}ら^らの敵^{てき}とな^なり、わ^わたし^しの羊^{やぎ}を彼^{かれ}ら^らの手^てに求^{もと}め、彼^{かれ}らにわ^わたし^しの群^むれを養^やうこと^{こと}をやめ^めさせ、再^{ふた}び牧^{ぼくしや}者^{もの}自^じ身^{しん}を養^やわ^わせない。ま^またわ^わが羊^{やぎ}を彼^{かれ}ら^らの口^{くち}から救^{すく}つて、彼^{かれ}ら^らの食^{しょく}物^{ぶつ}にさ^させ^せない。

二 主^{しゅ}なる神^{かみ}はこ^こう言^いわ^われる、見^みよ、わ^わたしは、わ^わたし^しみ^みずからわ^わが羊^{やぎ}を尋^{たず}ねて、これ^{これ}を捜^{さが}し出^だす。三 牧^{ぼくしや}者^{もの}がその羊^{やぎ}の散^ちり去^さつた時^{とき}、その羊^{やぎ}の群^むれを捜^{さが}し出^だすよう^{よう}に、わ^わたしはわ^わが羊^{やぎ}を捜^{さが}し出^だし、雲^{くも}と暗^{くら}やみ^みの日^ひに散^ちつた、す^すべての所^{ところ}からこれ^{これ}を救^{すく}う。三 わ^わたしは彼^{かれ}ら^らをもろもろの民^{たみ}の中^{なか}から導^{みちび}き出^だし、もろもろの国^{くに}から集^{あつ}めて、彼^{かれ}ら^らの国^{くに}に携^{たづ}え入^いれ、イス^{いす}ラ^らエ^えルの山^{やま}の上^{うへ}、泉^{いずみ}の

ほ^ほと^とり、ま^また国^{くに}のう^うち^ちの人^{ひと}の住^すむす^すべての所^{ところ}でこれ^{これ}を養^やう。一四 わ^わたしは良^よき牧^{まき}場^ばで彼^{かれ}ら^らを養^やう。その牧^{まき}場^ばはイス^{いす}ラ^らエ^えルの高^{たか}い山^{やま}にあり、そ^その所^{ところ}で彼^{かれ}ら^らは良^よき羊^{やぎ}の^のり^りに伏^ふし、イス^{いす}ラ^らエ^えルの山^{やま}々^々の上^{うへ}で肥^こえた牧^{まき}場^ばで草^{くさ}を食^くう。一五 わ^わたしはみ^みずからわ^わが羊^{やぎ}を飼^かい、これ^{これ}を伏^ふさせると主^{しゅ}なる神^{かみ}は言^いわ^われる。一六 わ^わたしは、う^うせたもの^{もの}を尋^{たず}ね、迷^{まよ}い出^でたもの^{もの}を引^ひき返^{かえ}し、傷^{きず}ついたもの^{もの}を包^{つつ}み、弱^おつたもの^{もの}を強^{つよ}くし、肥^こえたもの^{もの}と強^{つよ}いもの^{もの}とは、これ^{これ}を監^{かん}督^{とく}する。わ^わたしは公^{こう}平^{へい}をもつて彼^{かれ}ら^らを養^やう。

一七 主^{しゅ}なる神^{かみ}はこ^こう言^いわ^われる、あ^あなた^たが^がた^た、わ^わが群^むれよ、見^みよ、わ^わたしは羊^{やぎ}と羊^{やぎ}との間^{あいだ}、雄^お羊^{やぎ}と雄^お羊^{やぎ}との間^{あいだ}をさ^さばく。一八 あ^あなた^たが^がた^たは良^よき牧^{まき}場^ばで草^{くさ}を食^くい、その草^{くさ}の残^{のこ}りを足^{あし}で踏^ふみ、ま^また澄^すんだ水^{みづ}を飲^のみ、その残^{のこ}りを足^{あし}で濁^{にご}すが、こ^これは、あ^あまりのこと^{こと}ではな^ないか。一九 わ^わが羊^{やぎ}はあ^あなた^たが^がた^たが、足^{あし}で踏^ふんだもの^{もの}を食^くい、あ^あなた^たが^がた^たの足^{あし}で濁^{にご}したもの^{もの}を、飲^のま^まなければなら^らないのか。

二〇 それゆ^ゆえ、主^{しゅ}なる神^{かみ}はこ^こう彼^{かれ}ら^らに言^いわ^われる、見^みよ、わ^わたしは肥^こえた羊^{やぎ}と、や^やせた羊^{やぎ}との間^{あいだ}をさ^さばく。二一 あ^あなた^たが^がた^たは、わ^わきと肩^{かた}とをもつて押^おし、角^{つの}をもつて、す^すべて弱^{よわ}い者^{もの}を突^つき、ついに彼^{かれ}ら^らを外^{そと}に追^おい散^ちら^らした。二二 それゆ^ゆえ、わ^わたしはわ^わが群^むれを助^{たす}けて、再^{ふた}びか^かすめ^めさせず、羊^{やぎ}と羊^{やぎ}との間^{あいだ}をさ^さばく。二三 わ^わたしは彼^{かれ}ら^らの上^{うへ}にひ^ひと^とりの牧^{ぼくしや}者^{もの}を立て^{たて}る。す^すなわ^わちわ^わがしもベ^べダ^だビ^びデである。彼^{かれ}は彼^{かれ}ら^らを養^やう。彼^{かれ}は彼^{かれ}ら^らを養^やい、彼^{かれ}ら^らの牧^{ぼくしや}者^{もの}となる。二四 主^{しゅ}なるわ^わたしは彼^{かれ}ら^らの神^{かみ}とな^なり、わ^わがしもベ^べダ^だビ^びデは彼^{かれ}ら^らの

うちにあつて君となる。主なるわたしはこれを言う。

三五 わたしは彼らと平和の契約を結び、国の内から野獸を追ひ払う。彼らは心を安んじて荒野に住み、森の中に眠る。二六 わたしは彼らおよびわが山の周囲の所々を祝福し、季節にしたがつて雨を降らす。これは祝福の雨となる。二七 野の木は実を結び、地は産物を出す。彼らは心を安んじてその国におり、わたしは彼らのくびきの棒を砕き、彼らを奴隷とした者の手から救ひ出す時、彼らはわたしの主であることを悟る。二八 彼らは重ねて、もろもろの国民にかすめられることなく、地の獸も彼らを食うことはない。彼らは心を安んじて住み、彼らを恐れさせる者はない。二九 わたしは彼らのために、良い栽培所を与える。彼らは重ねて、国のききんに滅びることなく重ねて諸国民のはずかしめを受けることはない。三〇 彼らはその神、主なるわたしが彼らと共におり、彼らイスラエルの家が、わが民であることを悟ると、主なる神は言われる。三一 あなたがたはわが羊、わが牧場の羊である。わたしはあなたがたの神であると、主なる神は言われる。

第三十五章

一 主の言葉がわたしに臨んだ、二 「人の子よ、あなたの顔をセイイル山に向け、これに対して預言し、三 これに言え。主なる神はこ

う言われる、セイイル山よ、見よ、わたしはあなたを敵とし、わたしの手をあなたに向かつて伸べ、あなたを全く荒し、四 あなたの町々を滅ぼす。あなたは荒れはてる。そしてわたしが主であることを悟る。五 あなたは限らない敵意をいだいて、イスラエルの人々をその災の時、終りの刑罰の時に、つるぎの手に渡した。六 それゆえ、主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしはあなたを血にわたす。血はあなたを追いかける。あなたには血のどろろがあるゆえ、血はあなたを追いかける。わたしはセイイル山を全く荒し、そこに行き来する者を断ち、ハその山々を殺された者で満たす。つるぎで殺された者が、あなたのもろもろの丘、もろもろの谷、もろもろのくぼ地に倒れる。九 わたしはあなたを、永遠の荒れ地とし、あなたの町々には住む者がなくなる。そしてあなたがたは、わたしが主であることを悟る。

一〇 あなたは言う、『これら二つの国民、二つの国はわたしのもの、われわれはこれを獲よう』と。しかし主はそこにおられる。二 それゆえ、主なる神は言われる、わたしは生きている。あなたが彼らを憎んで、彼らに示した怒りと、ねたみにしたがって、わたしはあなたを扱う。わたしがあなたをさばく時、わたし自身をあなたに示す。三 あなたがイスラエルの山々に向かつて、『これは荒れはてて、われわれの食となる』と言つたもろもろのそしりを、主なるわたしが聞いたことをあなたは悟る。四 あなたがたは、わたしに対して口をもつて誇り、またわたしに対

して、あなたがたの言葉を多くした。わたしはそれを聞いた。一四主なる神はこう言われる、全地の喜びのために、わたしはあなたを荒れ地とする。一五あなたが、イスラエルの家の嗣業の荒れるのを喜んだように、わたしはあなたに、そのようにする。セイル山よ、あなたは荒れ地となる。エドムもすべてそのようになる。そのとき彼らは、わたしが主であることを悟るようになる。

第三十六章

一人の子よ、イスラエルの山々に預言して言え。イスラエルの山々よ、主の言葉を聞け。二主なる神はこう言われる、敵はあなたがたについて言う、『ああ、昔の高き所が、われわれのものとなった』と。三それゆえ、あなたは預言して言え。主なる神はこう言われる、彼らはあなたがたを荒し、四方からあなたがたを打ち滅ぼしたので、あなたがたは他の国民の所有となり、また民の悪いうわさとなった。四それゆえ、イスラエルの山々よ、主なる神の言葉を聞け。主なる神は、山と、丘と、くぼ地と、谷と、滅びた荒れ跡と、人の捨てた町々、すなわちその周囲にある諸国民の残った者にかすめられ、あざけられるようになったものに、こう言われる。五主なる神はこう言われる、わたしはねたみの炎をもつて、他の国民とエドム全国とに対して言う、彼らは心ゆくまで喜び、心に誇つてわが地を自分の所有とし、これを奪い、か

すめた者である。六それゆえ、あなたはイスラエルの地の事を預言し、山と、丘と、くぼ地と、谷とに言え。主なる神はこう言われる、見よ、あなたがたは諸国民のはずかしめを受けたので、わたしはねたみと怒りをもつて語る。七それゆえ、主なる神はこう言われる、わたしは暫つて言う、あなたがたの周囲の諸国民は必ずはずかしめを受ける。

ハしかしイスラエルの山々よ、あなたがたは枝を出し、わが民イスラエルのために実を結ぶ。この事の成るのは近い。九見よ、わたしはあなたがたに臨み、あなたがたを顧みる。あなたがたは耕され、種をまかれる。一〇わたしはあなたがたの上に人をふやす。これはことごとくイスラエルの家の者となり、町々には人が住み、荒れ跡は建て直される。一一わたしはあなたがたの上に人と獣とをふやす。彼らはふえて、子を生む。わたしはあなたがたの上に、昔のように人を住ませ、初めの時よりも、まさる恵みをあなたがたに施す。その時あなたがたは、わたしが主であることを悟る。一二わたしはわが民イスラエルの人々をあなたがたの上に歩ませる。彼らはあなたがたを所有し、あなたがたはその嗣業となり、あなたがたは重ねて彼らに子のない嘆きをさせない。一三主なる神はこう言われる、彼らはあなたがたに向かつて、『あなたは人を食い、あなたの民に子のない嘆きをさせる』と言う。一四あなたはもはや人を食わない。あなたの民に重ねて子のない嘆きをさせることはない、主なる神は言われ

る。二五わたしは重ねて諸国民のはずかしめをあなたに聞かせない。あなたは重ねて、もろもろの民のはずかしめを受けることはなく、あなたの民を重ねてつまづかせることはない、主なる神は言われる」。

二六主の言葉がわたしに臨んだ、二七「人の子よ、昔、イスラエルの家が、自分の国に住んだとき、彼らはおのれのおこないとわざとをもって、これを汚した。そのおこないは、わたしの前には、汚れにある女の汚れのようであつた。二八彼らが国に血を流し、またその偶像をもつて、国を汚したため、わたしはわが怒りを彼らの上に注ぎ、一九彼らを諸国民の中に散らしたので、彼らは国々の中に散つた。わたしは彼らのおこないと、わざとにしたがつて、彼らをさばいた。二〇彼らがその行くところの国々へ行つたとき、わが聖なる名を汚した。これは人々が彼らについて『これは主の民であるが、その国から出た者である』と言つたからである。二一しかしわたしはイスラエルの家が、その行くところの諸国民の中で汚したわが聖なる名を惜しんだ。

二三それゆえ、あなたはイスラエルの家に言え。主なる神はこう言われる、イスラエルの家よ、わたしがすることはあなたがたのためではない。それはあなたがたが行つた諸国民の中で汚した、わが聖なる名のためである。二四わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがたによつて、彼

らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる。二四わたしはあなたがたを諸国民の中から導き出し、万国から集めて、あなたがたの国に行かせる。二五わたしは清い水をあなたがたに注いで、すべての汚れから清め、またあなたがたを、すべての偶像から清める。二六わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。二七わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わが定めに歩ませ、わがおきてを守つてこれを行わせる。二八あなたがたは、わたしがあなたがたの先祖に与えた地に住んで、わが民となり、わたしはあなたがたの神となる。二九わたしはあなたがたをすべての汚れから救ひ、穀物と呼びよせてこれを増し、ききをあなたがたに臨ませない。三〇またわたしは木の実と、田畑の作物とを多くする。あなたがたは重ねて諸国民の間に、ききのはずかしめを受けることがない。三二その時あなたがたは自身の悪しきおこないと、良からぬわざとを覚えて、その罪と、その憎むべきことのために、みずから恨む。

三三わたしはなすことはあなたがたのためではないと、主なる神は言われる。あなたがたはこれを知れ。イスラエルの家よ、あなたがたは自分のおこないを恥じて悔やむべきである。

三三主なる神はこう言われる、わたしは、あなたがたのすべての罪を清める日に、町々に人を住ませ、その荒れ跡を建て直す。三

四荒れた地は、行き来の人々の目に荒れ地と見えたのに引きかえて耕される。三五そこで人々は言う、『この荒れた地は、エデンの園のようになつた。荒れ、滅び、くずれた町々は、堅固になり、人の住む所となつた』と。三六あなたがたの周囲に残つた諸国民は主なるわたくしがくずれた所を建て直し、荒れた所にものを植えたといふことを悟るようになる。主なるわたくしがこれを言

い、これをなすのである。

三七主なる神はこう言われる、イスラエルの家は、わたくしが次のことを彼らのためにするように、わたくしに求めるべきである。すなわち人を群れのようにふやすこと、三八すなわち犠牲のための群れのように、エルサレムの祝日の群れのようにすることである。こうして荒れた町々は人の群れで満ちる。その時人々は、わたくしが主であることを悟るようになる』。

第三十七章

一主の手がわたしに臨み、主はわたしを主の霊に満たして出て行かせ、谷の中にわたしを置かれた。そこには骨が満ちていた。二彼はわたしに谷の周囲を行きめぐらせた。見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨があり、皆いたく枯れていた。三彼はわたしに言われた、『人の子よ、これらの骨は、生き返ることができるのか』。わたしは答えた、『主なる神よ、あなたはご存じます』。四彼

はまたわたしに言われた、『これらの骨に預言して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。五主なる神はこれらの骨にこう言われる、見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。六わたしはあなたがたの上に筋を与え、肉を生じさせ、皮でおおい、あなたがたのうちに息を与えて生かす。そこであなたがたはわたくしが主であることを悟る』。

七わたしは命じられたように預言したが、わたくしが預言した時、声があつた。見よ、動く音があり、骨と骨が集まって相つらなつた。八わたくしが見ていると、その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおつたが、息はその中になかつた。九時に彼はわたしに言われた、『人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ』。一〇そこでわたくしが命じられたように預言すると、息はこれにはいつた。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となつた。

二そこで彼はわたしに言われた、『人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。見よ、彼らは言う、『われわれの骨は枯れ、われわれの望みは尽き、われわれは絶え果て』と。三それゆえ彼らに預言して言え。主なる神はこう言われる、わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓からとりあげて、イスラエルの地にはいらせる。四わが民よ、わたくしがあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓からとりあげる時、あ

なたがたは、わたしが主であることを悟る。一四わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、あなたがたをその地に安住させる時、あなたがたは、主なるわたしがこれを言い、これをおこなったことを悟ると、主は言われる」。

一五主の言葉がわたしに臨んだ、一六「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書き、また一本の木を取って、その上に『ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。一七あなたはこれらを合わせて、一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。一八あなたの民の人々があなたに向かつて、『これはなんのことであるか、われわれに示してくれないか』と言う時は、一九これに言え、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、一つの木となす。これらはわたしの手で一つとなる。二〇あなたが文字を書いた木が、彼らの目の前で、あなたの手にあるとき、二一あなたは彼らに言え。主なる神は、こう言われる、見よ、わたしはイスラエルの人々を、その行つた国々から取り出し、四方から彼らを集めて、その地にみちびき、二三その地で彼らを一つの民となしてイスラエルの山々におらせ、ひとりの王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて二つの国民とならず、再び二つの国に分れない。二三彼らはまた、その偶像と、そ

の憎むべきことどもと、もろもろのたとをもつて、身を汚すこととはない。わたしは彼らを、その犯したすべての背信から救い出して、これを清める。そして彼らはわが民となり、わたしは彼らの神となる。

二四わがしもべダビデは彼らの王となる。彼らすべての者のために、ひとりの牧者が立つ。彼らはわがおきてに歩み、わが定めを守って行ふ。二五彼らはわがしもべヤコブに、わたしが与えた地に住む。これはあなたがたの先祖の住んだ所である。そこに彼らと、その子らと、その子孫とが永遠に住み、わがしもべダビデが、永遠に彼らの君となる。二六わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。これは彼らの永遠の契約となる。わたしは彼らを祝福し、彼らをふやし、わが聖所を永遠に彼らの中に置く。二七わがすみかは彼らと共にあり、わたしは彼らの神となり、彼らはわが民となる。二八そしてわが聖所が永遠に、彼らのうちにあるようになるとき、諸国民は主なるわたしが、イスラエルを聖別する者であることを悟る」。

第三十八章

一主の言葉がわたしに臨んだ、二「人の子よ、メセクとトバルの大君であるマゴグの地のゴグに、あなたの顔を向け、これに對して預言して、三言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバル

の大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。四わたしはあなたを引きもどし、あなたのあごにかぎをかけて、あなたと、あなたのすべての軍勢と、馬と、騎兵とを引き出す。彼らはみな武器をつけ、大盾、小盾を持ち、すべてつるぎをとる者で、大軍である。五ペルシャ、エチオピア、プテは彼らと共におり、みな盾とかぶとを持つ。六ゴメルとそのすべての軍隊、北の果のベテ・トガルマと、そのすべての軍隊など、多くの民もあなたと共にいる。

七あなたは備えをなせ。あなたとあなたの所に集まった軍隊は、みな備えをなせ。そしてあなたは彼らの保護者となれ。八多くの日の後、あなたは集められ、終りの年にあなたは戦いから回復された地、すなわち多くの民の中から、人々が集められた地に向かい、久しく荒れすたれたイスラエルの山々に向かつて進む。その人々は国々から導き出されて、みな安らかに住んでいる。九あなたはすべての軍隊および多くの民を率いて上り、暴風のように進み、雲のように地をおおう。

一〇主なる神はこう言われる、その日に、あなたの心に思いが起り、悪い計りごとを企てて、二言う、『わたしは無防備の村々の地に上り、穏やかにして安らかに住む民、すべて石がきもなく、貫の木も門もない地に住む者どもを攻めよう』と。三そしてあなたは物を奪い、物をかすめ、いま人の住むようになっている荒れ跡を攻め、また国々から集まつてきて、地の中央に住み、家畜

と貨財とを持つ民を攻めようとする。三シバ、デダン、タルシシの商人、およびそのもろもろの村々はあなたに言う、『あなたは物を奪うために来たのか。物をかすめるために軍隊を集めたのか。あなたは金銀を持ち去り、家畜と貨財とを取りあげ、大いに物を奪おうとするのか』と。

四それゆえ、人の子よ、ゴグに預言して言え。主なる神はこう言われる、わが民イスラエルの安らかに住むその日に、あなたは立ちあがり、一五北の果のあなたの所から来る。多くの民はあなたと共におり、みな馬に乗り、その軍隊は大きく、その兵士は強い。一六あなたはわが民イスラエルに攻めのぼり、雲のように地をおおう。ゴグよ、終りの日にわたしはあなたを、わが国に攻めきたらせ、あなたをとおして、わたしの聖なることを諸国民の目の前にあらわして、彼らにわたしを知らせる。

一七主なる神はこう言われる、わたしが昔、わがしもべイスラエルの預言者たちによつて語つたのは、あなたのことではないか。すなわち彼らは、そのころ年久しく預言して、わたしはあなたを送つて、彼らを攻めさせると言つたではないか。一八しかし主なる神は言われる、その日、すなわちゴグがイスラエルの地に攻め入る日に、わが怒りは現れる。一九わたしは、わがねたみと、燃えたつ怒りとをもつて言う。その日には必ずイスラエルの地に、大いなる震動があり、二〇海の魚、空の鳥、野の獣、すべての地に這うもの、地のおもてにあるすべての人は、わが前に打ち

震える。また山々はくずれ、がけは落ち、すべての石がきは地に倒れる。二三主なる神は言われる、わたしはゴグに対し、すべての恐れを呼びよせる。すべての人のつるぎは、その兄弟に向けられる。三わたしは疫病と流血をもつて彼をさばく。わたしはみなぎる雨と、ひょうと、火と、硫黄とを、彼とその軍隊および彼と共にいる多くの民の上に降らせる。三三そしてわたしはわたしの大いなることと、わたしの聖なることとを、多くの国民の目に示す。そして彼らはわたしが主であることを悟る。

第三十九章

一人の子よ、ゴグに向かつて預言して言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。ニわたしはあなたを引きもどし、あなたを押しやり、北の果から上らせ、イスラエルの山々に導き、三あなたの左の手から弓を打ち落とし、右の手から矢を落させる。四あなたとあなたのすべての軍隊およびあなたと共にいる民たちは、イスラエルの山々に倒れる。わたしはあなたを、諸種の猛禽と野獣とに与えて食わせる。五あなたは野の面に倒れる。わたしがこれを言ったからであると、主なる神は言われる。六わたしはゴグと、海沿いの国々に安らかに住む者に対して火を送り、彼らにわたしが主であることを悟らせる。

七わたしはわが聖なる名を、わが民イスラエルのうちに知らせ、重ねてわが聖なる名を汚させない。諸国民はわたしが主、イスラエルの聖者であることを悟る。八主なる神は言われる、見よ、これは来る、必ず成就する。これはわたしが言った日である。九イスラエルの町々に住む者は出て来て、武器すなわち大盾、小盾、弓、矢、手やり、およびやりなどを燃やし、焼き、七年の間これを火に燃やす。一〇彼らは野から木を取らず、森から木を切らず、武器で火を燃やし、自分をかすめた者をかすめ、自分の物を奪った者を奪うと、主なる神は言われる。

二その日、わたしはイスラエルのうちに、墓地をゴグに与える。これは旅びとの谷にあつて海の東にある。これは旅びとを妨げる。そこにゴグとその民衆を埋めるからである。これをハモン・ゴグの谷と名づける。三イスラエルの家はこれを埋めて、地を清めるために七か月を費す。四国すべての民はこれを埋め、これによつて名を高める。これはわが榮えを現す日である。五主なる神は言われる。六彼らは人々を選んで、絶えず国の中を行きめぐらせ、地のおもてに残っている者を埋めて、これを清めさせる。七か月の終りに彼らは尋ねる。八国を行きめぐる者が行きめぐつて、人の骨を見る時、死人を埋める者が、これをハモン・ゴグの谷に埋めるまで、そのかたわらに、標を建てて置く。九（ハモナの町もそこにある。）こうして彼らはその国を清める。

二七 主なる神はこう言われる、人の子よ、諸種の鳥と野の獣とに言え、みな集まつてこい。わたしがおまえたちのために供えた犠牲、すなわちイスラエルの山々の上にある、大いなる犠牲に、四方から集まり、その肉を食い、その血を飲め。一八 おまえたちは勇士の肉を食い、地の君たちの血を飲め。雄羊、小羊、雄やぎ、雄牛などすべてバシヤンの肥えた獣を食え。一九 わたしがおまえたちのために供えた犠牲は、飽きるまでその脂肪を食べ、酔うまで血を飲め。二〇 おまえたちはわが食卓について馬と、騎手と、勇士と、もろもろの戦士とを飽きるほど食べると、主なる神は言われる。

二一 わたしはわが栄光を諸国民に示す。すべての国民はわたしが行ったさばきと、わたしが彼らの上に加えた手とを見る。三二 この日から後、イスラエルの家はわたしが彼らの神、主であることを悟るようになる。三三 また諸国民はイスラエルの家が、その悪によつて捕え移されたことを悟る。彼らがわたしにそむいたので、わたしはわが顔を彼らに隠し、彼らをその敵の手に渡した。それで彼らは皆つるぎに倒れた。三四 わたしは彼らの汚れと、とがとに従つて、彼らを扱い、わたしの顔を彼らに隠した。三五 それゆえ、主なる神はこう言われる、いまわたしはヤコブの幸福をもとに返し、イスラエルの全家をあわれみ、わが聖なる名のために、ねたみを起す。三六 彼らは、その国に安らかに住み、だれもこれを恐れさせる者がなくなつた時、自分の恥と、わ

たしに向かつてなした反逆とを忘れる。二七 わたしが彼らを諸国民の中から歸らせ、その敵の国から呼び集め、彼らによつて、わたしの聖なることを、多くの国民の前に示す時、二八 彼らは、わたしが彼らの神、主であることを悟る。これはわたしが彼らを諸国民のうちに移し、またこれをその国に呼び集めたからである。わたしはそのひとりをも、国々のうちに残すことをしない。二九 わたしは、わが霊をイスラエルの家に注ぐ時、重ねてわが顔を彼らに隠さないと、主なる神は言われる」。

第四〇章

一 われわれが捕え移されてから二十五年、都が打ち破られて後十四年、その年の初めの月の十日、その日に主の手がわたしに臨み、わたしをかの所に携えて行つた。二 すなわち神は幻のうちにおられた。その山の上に、わたしと相對して、一つの町のような建物があつた。三 神がわたしをそこに携えて行かれると、見よ、ひとりの人がいた。その姿は青銅の形のように、手に麻のなわと、測りざおとを持つて門に立つていた。四 その人はわたしに言つた、「人の子よ、目で見、耳で聞き、わたしがあなたに示す、すべての事を心にとめよ。あなたをここに携えて来たのは、これをあなたに示すためである。あなたの見ることを、ことごと

くイスラエルの家に告げよ」。

五見よ、宮の外の周囲に、かきがあり、その人の手に六キュビトの測りざおがあつた。そのキュビトは、おのおの一キュビトと一手幅とである。彼が、そのかきの厚さを測ると、一さおあり、高さも一さおあつた。六彼が東向きの門に行き、その階段を上つて、門の敷居を測ると、その厚さは一さおあり、七その詰め所は長さ一さお、幅一さお、詰め所と、詰め所との間は五キュビトあり、内の門の廊のかたわらの門の敷居は一さおあつた。八門の廊を測ると八キュビトあり、九その脇柱は二キュビト、門の廊は内側にあつた。一〇東向きの門の詰め所は、こなたに三つ、こなたに三つあり、三つとも同じ寸法である。脇柱もまた、こなたかなたともに同じ寸法である。二門の入口の広さを測ると十キュビトあり、門の長さは十三キュビトあつた。三詰め所の前の境は一キュビト、かなたの境も一キュビトで、詰め所は、こなたかなたともに六キュビトあつた。四彼がまたこの詰め所の裏から、かの詰め所の裏まで、門を測ると、入口から入口まで二十五キュビトあつた。五彼がまた廊を測ると二十キュビトあり、門の廊の周囲は、すべて庭である。六入口の門の前から内の門の廊の前まで五十キュビトあり、七詰め所と、門の内側の周囲の脇柱とに窓があり、廊の内側の周囲にも、同様に窓があり、脇柱には、しゆろがあつた。

七彼がまたわたしを外庭に携え入ると、見よ、庭の周囲に設

けた室と、敷石とがあり、敷石の上に三十の室があつた。一八敷石は門のわきにあり、門と同じ長さで、これは下の敷石である。一九彼が下の門の内の前から、内庭の外の前までの距離を測ると、百キュビトあつた。

二〇また彼はわたしに先だつて北へ行つた。見よ、そこに外庭に属する北向きの門があつた。彼はその長さと幅とを測つた。二三その詰め所が、こなたに三つ、かなたに三つあり、また脇柱と廊とがあつた。これらは初めの門と同じ寸法で、長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトである。三三その窓と、廊と、しゆろとは、東向きの門にあるものと同じ寸法である。そして七段の階段を経て、それに上ると、廊は内側にあつた。三内庭の門は北と東の門に向かつていた。彼が門から門までを測ると、百キュビトあつた。

三四彼がまたわたしを南へ行かせると、見よ、南向きの門があつた。その脇柱と廊を測ると、他と同じ寸法であつた。三五これと、その廊の周囲とに、他の窓のような窓があつて、その長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトあつた。三六これを上るのに七段の階段があり、その廊は内側にあつた。その脇柱の上には、こなたに一つ、かなたに一つのしゆろがあつた。三七内庭には南向きの門があり、門から門まで南の方へ測ると、百キュビトあつた。

三八彼がわたしを南の門から内庭にはいらせ、南の門を測ると、

さきのもと、同じ寸法であつた。三九その詰め所と、脇柱と、廊とは、他のものと同じ寸法で、その門と、廊の周囲とには窓があり、門の長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトであつた。三〇周囲に廊があつて、その長さは二十五キュビト、幅は五キュビトである。三一その廊は外庭に面して、脇柱の上にしゅうろがあり、その階段は八段であつた。

三二彼はまたわたしを内庭の東の方に携えて行つて、門を測つた。それは他と同じ寸法であつた。三三その詰め所と、脇柱と、廊とは、他と同じ寸法で、その門と、その廊の周囲とに窓があり、門の長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトである。三四その廊は外庭に面し、その脇柱の上には、こなたかなたに、しゅうろがあり、その階段は八段であつた。

三五彼がまたわたしを北の門に携えて行つて、これを測ると、それは他と同じ寸法であつた。三六その詰め所と、脇柱と、廊とは、他と同じ寸法で、その周囲に窓があり、門の長さは五十キュビト、幅は二十五キュビトである。三七その廊は外庭に面し、その脇柱の上には、こなたかなたに、しゅうろがあり、その階段は八段であつた。

三八門の廊に戸のある室があつて、そこは燔祭の物を洗う所である。三九門の廊に、こなたに二つの台、かなたに二つの台があり、その上で、燔祭、罪祭、愆祭の物をほふるのであつた。四〇北の門の入口にある廊の外の片側に、二つの台があり、門の廊の他の

側にも、二つの台があり、四一門のかたわら、内側に四つの台、外側に四つの台があつて、合わせて八つの台である。その上で、犠牲の物をほふるのである。四二そこにまた燔祭のために四つの切り石の台があり、その長さは一キュビト半、幅は一キュビト半、高さは一キュビト、その上に燔祭および犠牲をほふる器を置くのである。四三内の周囲に、一手幅の折り釘が打ちつけてあつて、供え物の肉は、台の上に置かれるのである。

四四彼はまたわたしを、外から内庭に連れてはいった。見よ、内庭に二つの室があり、一つは北の門のかたわらにあつて南に向かい、一つは南の門のかたわらにあつて、北に向かつていた。四五彼はわたしに言つた、この南向きの室は、宮を守る祭司のためのもの、四六また北向きの室は、祭壇を守る祭司のためのものである。その人たちは、レビの子孫のうちのザドクの子孫であつて、主に近く仕える者たちである。四七そして彼が庭を測ると、その長さは百キュビト、幅も百キュビトで四角である。宮の前には祭壇があつた。

四八彼がわたしを宮の廊に連れて行つて、廊の脇柱を測ると、こなたも五キュビト、かなたも五キュビトであり、門の幅は十四キュビトである。門の壁は、こなたも三キュビト、かなたも三キュビトである。四九廊の長さは二十キュビト、幅は十二キュビトであり、十の階段によつて上るのである。脇柱に沿つて、こなたに一つ、かなたに一つの柱があつた。

第四章

一彼がわたしを拜殿に連れて行つて、脇柱を測ると、こなたの幅も六キユビト、こなたの幅も六キユビトあつた。二その戸の幅は十キユビト、戸のわきの壁は、こなたも五キユビト、こなたも五キユビトあつた。彼はまた拜殿の長さを測ると四十キユビト、その幅は二十キユビトあつた。三彼がまた内にはいつて、戸の脇柱を測ると、それは二キユビトあり、戸の幅は六キユビト、戸のわきの壁は七キユビトあつた。四彼はまた拜殿の奥の室の長さを測ると二十キユビト、幅も二十キユビトあつた。そして彼はわたしに、これは至聖所であると言つた。

五彼が宮の壁を測ると、その厚さは六キユビトあり、宮の周囲の脇間の広さは、四方おのおの四キユビトあり、六脇間は、室の上に室があつて三階になり、各階に三十の室がある。宮の周囲の壁には、脇間をささえる突起があつた。これは脇間が、宮の壁そのものによつてささえられないためである。七脇間は、宮の周囲の各階にある突起につれて、階を重ねて上にいくにしたがつて広くなり、宮の外部の階段が上に通じ、一階から三階へは、二階をとおつて上るのである。八わたしはまた宮の周囲に高い所のあるのを見た。脇間の基を測ると、六キユビトの一さおあつた。九脇間の外の壁の厚さは五キユビト、あき地になつて高い所は五キユビトあつた。宮の高い所と、一〇庭の室の間には、宮

の周囲に、広さ二十キユビトの所があつた。二脇間の戸は、あき地になつて高い所に向かつて開け、一つの戸は北に向かい、一つの戸は南に向かつていた。そのあき地になつてゐる所の幅は、周囲五キユビトであつた。

三西の方の宮の庭に面した建物は、幅七十キユビト、その建物の周囲の壁の厚さは五キユビト、長さは九十キユビトであつた。四三彼が宮を測ると、その長さは百キユビトあり、その庭と建物と、その壁は長さ百キユビト、一四また宮の東に面した所と庭との幅は百キユビトであつた。

一五彼が西の方の庭に面した建物と、その壁の長さを測ると、こなた、こなたともに百キユビトであつた。宮の拜殿と、内部の室と、外の廊とには、羽目板があつた。一六これらの三つのものの周囲には、すべて引込み枠の窓があり、宮の敷居に面して、宮の周囲は、床から窓まで、羽目板であつて、窓には、おおいがあつた。一七戸の上の空所、内室、外室ともに、羽目板であつた。内室および拜殿の周囲のすべての壁には、同じように彫刻してあつた。一八すなわちケルビムと、しゅろとが彫刻してあつた。ケルブとケルブとの間に、しゅろがあり、おのおのケルブには、二つの顔があり、一九こなたには、しゅろに向かつて、人の顔があり、こなたには、しゅろに向かつて、若じしの顔があり、宮の周囲は、すべてこのように彫刻してあつた。二〇床から戸の上まで、ケルビムと、しゅろとが、壁に彫刻してあつた。

三 拝殿の柱は四角であつた。聖所の前には、木の祭壇に似たものがあつた。三その高さは三キュビト、長さは二キュビト、幅は二キュビトで、すみと、台と、壁とは、ともに木である。彼はわたしに言つた、「これは主の前にある机である」三 拝殿と聖所とは、二つの戸があり、二四その戸には、二つのとびらがあつた。すなわち二つの開き戸である。五 拝殿の戸には、おのおのにケルビムと、しゅろとが、彫刻してあつて、それは壁に彫刻したものと同じである。また外の廊に面して、木の天蓋があり、三六 廊の壁には、こなたかなたに引込み窓と、しゅろとがあつた。

第四章

一 彼はわたしを北の方の内庭に連れ出し、庭に向かつて北の方の建物に対する室に導いた。二 北側にある建物の長さは百キュビト、幅は五十キュビトである。三 二十キュビトの内庭に続いて、外庭の敷石に面し、三階になつた廊下があつた。四 また室の前に幅十キュビト、長さ百キュビトの通路があつた。その戸は北に向かつていた。五 その建物の上の室は、下の室と中の室よりも狭かつた。それは廊下のために、場所を取つたためである。六 これらは三階であつて、外庭の柱のような柱は持たなかつた。それで上の室は、下および中の室よりも狭いのである。七 室の外に沿つてかきがあり、それは他の室に向かつて外庭に至る。そ

の長さは五十キュビト、八 外庭の室の長さも五十キュビトあつた。宮に面する所は百キュビトであつた。九 これらの室の下に外庭からこれにはいるように、東側に入口があつた。一〇 外側のかきは、外庭に始まつている。

二 南の方で、庭と建物との前に、室があつた。三 北向きの室と同様に、その前に通路があり、その長さも幅も同様で、その出口もその配置もその戸も同様である。四 南の室の下に、人々が通路にはいる東の入口があり、これに対して隔てのかきがあつた。

三 時に彼はわたしに言つた、「庭に面した北の室と、南の室とは、聖なる室であつて、主に近く仕える祭司たちが、最も聖なるものを食べる場所である。その場所に彼らは、最も聖なるもの、すなわち素祭、罪祭、愆祭のものを置かなければならない。その場所は聖だからである。四 祭司たちが、聖所にはいつた時は、そこから外庭に出てはならない。彼らは勤めを行う衣服を、その所に置かなければならない。これは聖だからである。彼らは民衆に属する場所に近づく前に、他の衣服を着けなければならない」。

五 彼らは宮の庭の内部を測り終え、東向きの門の道から、わたしを連れ出して、宮の周囲を測つた。一六 彼が測りざおで、東側を測ると、測りざおで五百キュビトあり、一七 また転じて、北側を測ると、測りざおで五百キュビトあり、一八 また転じて、

南側を測ると、測りぎおで五百キュビトあり、一九また転じて、西側を測ると、測りぎおで五百キュビトあった。二〇このように、四方を測ったが、その周囲に、長さ五百キュビト、幅五百キュビトのかきがあつて、聖所と、俗の所との隔てをなしていた。

第四三章

一その後、彼はわたしを門に導いた。門は東に面していた。二その時、見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から来たが、その来る響きは、大水の響きのようで、地はその栄光で輝いた。三わたしが見た幻の様は、彼がこの町を滅ぼしに来た時に、わたしが見た幻と同様で、これはまたわたしがケバル川のほとりで見えた幻のようであつた。それでわたしは顔を伏せた。四主の栄光が、東の方に面した門の道から宮にはいった時、五霊がわたしを引き上げて、内庭に導き入れると、見よ、主の栄光が宮に満ちた。六その人がわたしのかたわらに立つた時、わたしはひとりの人が、宮の中からわたしに語るのを聞いた。七彼はわたしに言った、「人の子よ、これはわたしの位のある所、わたしの足の裏の踏む所、わたしが永久にイスラエルの人々の中に住む所である。またイスラエルの家は、民もその王たちも、再び姦淫と、王たちの死体とをもつて、わが聖なる名を汚さない。八彼らはその敷居を、わが敷居のかたわらに設け、その門柱を、わが門柱の

かたわらに設けたので、わたしと彼らとの間には、わずかに壁があるのみである。そして彼らは、その犯した憎むべき事をもつて、わが聖なる名を汚したので、わたしは怒りをもつて、これを滅ぼした。九今彼らに命じて姦淫と、その王たちの死体を、わたしから遠く取り除かせよ。そうしたら、わたしは永久に彼らの中に住む。

一〇人の子よ、宮と、その外形と、設計とをイスラエルの家に示せ。彼らはその惡を恥じるであらう。二彼らがその犯したすべての事を恥じたら、彼らに、この宮の建て方、設備、出口、入口、すべての形式すべてのおきて、すべての規定を示せ。これを彼らの目の前に書き、彼らにそのすべての規定と、おきてとを守り行わせよ。三宮の規定はこれである。山の頂の四方の地域はみな最も聖である。見よ、これは宮の規定である。

二三祭壇の寸法はキュビトですれば、次のようである。(そのキュビトは一キュビトと一手幅である。)土台は高さ一キュビト、幅一キュビト、その周囲の縁は半キュビトである。一四祭壇の高さは、次のとおりである。地面の土台から下のかさねまで二キュビト、幅は一キュビト、また小さいかさねから大きいかさねまで四キュビト、その幅は一キュビトである。一五祭壇の炉は四キュビトで、祭壇の炉から高さ一キュビトの角が四本出ている。一六炉は長さ十二キュビト、幅十二キュビトの四角形である。一七そのかさねは四方とも長さ十四キュビト、幅十四キュビ

トの四角形、その周囲の縁は幅半キユビト、その台は四方一キユビト、その階段は東に面する」。

「ハ彼はわたしに言った、「人の子よ、主なる神はこう言われる、祭壇を建て、その上に燔祭をささげ、これに血を注ぐ日には、次のことを祭壇の定めとせよ。一九すなわち主なる神は言われる、ザドクの子孫で、わたしに近く仕えるレビびとである祭司には、罪祭のために雄牛の子を与えよ。二〇またその血をとって、これを祭壇の四つの角と、かさねの四すみと、周囲の縁に塗つて、祭壇を清め、これをあがなえ。二一あなたはまた罪祭の牛をとつて、これを聖所の外、宮のうちの定められた所で焼け。二三第二日に、あなたは無傷の雄やぎを、罪祭としてささげよ。すなわち雄牛で清めたように、これで祭壇を清めよ。二四清めごとを終えたなら、無傷の雄牛の子と、群れの中の無傷の雄羊とをささげよ。二五これを主の前に持つてきて、祭司らはその上に塩をまき、これらを燔祭として主にささげよ。二六七日の間、あなたは日々雄やぎを罪祭とせよ。また雄牛の子と、群れの中の雄羊との無傷のものをとのえ、二七七日の間、彼らは祭壇をあがなひ、これを清め、これを聖別しなければならぬ。二八彼らがこれらの日を満したとき、八日目からは、祭司たちは、あなたがたの燔祭と、酬恩祭とを祭壇の上に供える。そうすれば、わたしは、あなたがたを受けいれると、主なる神は言われる」。

第四章

「こうして、彼はわたしを連れて、聖所の東に向いている外の門に帰ると、門は閉じてあつた。二彼はわたしに言った、「この門は閉じたままにしておけ、開いてはならない。ここからだれもはいつてはならない。イスラエルの神、主が、ここからはいつたのだから、これは閉じたままにしておけ。三ただ君たる者だけが、この内に座し、主の前でパンを食し、門の廊を通つてはいり、またそこから外に出よ」。

四彼はまたわたしを連れて、北の門の道から宮の前に行つた。わたしが見ていると、見よ、主の栄光が主の宮に満ちた。わたしがひれ伏すと、五主はわたしに言われた、「人の子よ、主の宮のすべてのおきてと、そのすべての規定とについて、わたしがあなたに告げるすべての事に心をとめ、目を注ぎ、耳を傾けよ。また宮にはいることを許されている者と、聖所にはいることのできないう者とに心せよ。六また反逆の家であるイスラエルの家に言え。主なる神は、こう言われる、イスラエルの家よ、その憎むべきことをやめよ。セすなわちあなたがたは、わたしの食物である脂肪と血とがささげられる時、心にも肉にも、割礼を受けない異邦人を入れて、わが聖所におらせ、これを汚した。また、もろもろの憎むべきものをもつて、わが契約を破つた。ハあなたがたは、わが聖なる物を守る務を怠り、かえつて異邦人を立てて、

わが聖所の務を守らせた。

九 それゆえ、主なる神は、こう言われる、イスラエルの人々のうちにいるすべての異邦人のうち、心と肉とに割礼を受けないすべての者は、わが聖所にはいつてはならない。一〇 またレビ人であつて、イスラエルが迷つた時、偶像を慕い、わたしから迷い出て、遠く離れた者は、その罪を負わなければならない。一一 すなわち彼らはわが聖所で、仕え人となり、宮の門を守る者となり、宮に仕えるしもべとなり、民のために、燔祭および犠牲のものを殺し、彼らの前に立つて仕えなければならない。一二 彼らはその偶像の前で民に仕え、イスラエルの家にとつて、罪のつまずきとなつたゆえ、主なる神は言われる、わたしは彼らについて誓つた。彼らはその罪を負わなければならない。一三 彼らはわたしに近づき、祭司として、わたしに仕えることはできない。またわたしの聖なる物、および最も聖なる物に、近づいてはならない。彼らはそのおこなつた憎むべきことのため、恥を負わなければならない。一四 しかし彼らには、宮を守る務をさせ、そのものもろの務と、宮でなすべきすべての事とに當らせる。

一五 しかしザドクの子孫であるレビの祭司たち、すなわちイスラエルの人々が、わたしを捨てて迷つた時に、わが聖所の務を守つた者どもは、わたしに仕えるために近づき、脂肪と血とをわたしにささげるために、わたしの前に立てと、主なる神は言われる。一六 すなわち彼らはわが聖所に入り、わが台に近づいてわたしに

仕え、わたしの務を守る。一七 彼らが内庭の門にはいる時は、麻の衣服を着なければならない。内庭の門および宮の内、務をなす時は、毛織物を身につけてはならない。一八 また頭には亜麻布の冠をつけ、腰には亜麻布の袴をつけなければならない。ただし汗の出るような衣を身につけてはならない。一九 彼らは外庭に出る時、すなわち外庭に出て民に接する時は、務をなす時の衣服は脱いで聖なる室に置き、ほかの衣服を着なければならない。これはその衣服をもつて、その聖なることを民にうつさないためである。二〇 彼らはまた頭をそつてはならない。また髪を長くのばしてはならない。その頭の髪は切らなければならない。二一 祭司はすべて内庭にはいる時は、酒を飲んではならない。二二 また寡婦、および出された女をめとつてはならない。ただイスラエルの家の血統の処女、あるいは祭司の妻で、やもめになつたものをめとらなければならない。二三 彼らはわが民に、聖と俗との区別を教え、汚れたものと、清いものとの区別を示さなければならない。二四 争いのある時は、さばきのために立ち、わがおきてにしたがつてさばき、また、わたしのものもろの祭の時は、彼らはわが律法と定めを守り、わが安息日を、聖別しなければならぬ。二五 死人に近づいて、身を汚してはならない。ただ父のため、母のため、むすこのため、娘のため、兄弟のため、夫をもたない姉妹のためには、近よつて身を汚すことも許される。二六 このような人は、汚れた後、自身のために、七日の間を数

えよ。そうすれば清まる。二七 彼は聖所に入り、内庭に行き、聖所で務に當る日には、罪祭をささげなければならぬと、主なる神は言われる。

二八 彼らには嗣業はない。わたしがその嗣業である。あなたがたはイスラエルの中で、彼らに所有を与えてはならない。わたしが彼らの所有である。二九 彼らは素祭、罪祭、愆祭の物を食べる。すべてイスラエルのうちのささげられた物は彼らの物となる。三〇 すべての物の初なるの初物、およびすべてあなたがたのささげるものもろのささげ物は、みな祭司のものとなる。またあなたがたの麦粉の初物は祭司に与えよ。これはあなたがたの家が、祝福されるためである。三一 祭司は、鳥でも獣でも、すべて自然に死んだもの、または裂き殺されたものを食べてはならない。

第四章

一 あなたがたは、くじを引き、地を分けて、それを所有するときには、地の一部を聖なる地所として主にささげよ。その長さは一萬五千キュビト、幅は一萬五千キュビトで、その区域はすべて聖なる地である。二 そのうち聖所に属するものは縦横五百キュビトずつであつて、それは四角である。また五十キュビトの空地をその周囲につくれ。三 あなたはこの聖なる地所から長さ二萬五

千キュビト、幅一萬キュビトを測り取り、その中に聖所と至聖所とを設けよ。四 これは国の中で聖なる所であつて、主に近く仕える聖所の仕え人である祭司に帰属する。これは彼らのためには家を建てる所、聖所のためには聖地となる。五 また長さ二萬五千キュビト、幅一萬キュビトの別の地所は、宮に仕えるレビびとに帰属し、彼らの住む町のための所有とする。

六 聖地として區別した部分に沿ひ、幅五千キュビト、長さ二萬五千キュビトは、町の所有とせよ。これはイスラエル全家のものとなる。

七 また君たる者の分は、かの聖地と町の所有地との、こなたかなたにある。すなわち聖地と町の所有地に沿ひ、西と東に向かい、部族の分の一つに應じて、地所の西から東の境に至り、ハその所有の地所はイスラエルの中にある。わたしの君たちは、重ねてわたしの民をしえたげず、部族にしたがつてイスラエルの家に土地を与える。

八 主なる神は、こう言われる、イスラエルの君たちよ、暴虐と略奪とをやめ、公道と正義を行え。わが民を追い立てることをやめよと、主なる神は言われる。

九 あなたがたは正しいはかり、正しいエバ、正しいバテを用いよ。二 エバとバテとは同量にせよ。すなわちバテをホメルの十分の一とし、エバもホメルの十分の一とし、すべてホメルによつて量を定めよ。三一 シケルは二十ゲラである。五シケル

は五シケル、十シケルは十シケルとせよ。一ミナは五十シケルとせよ。

三 あなたがたがささげるささげ物はこれである。すなわち、一ホメルの小麦のうちから六分の一エバをささげ、大麦一ホメルのうちから六分の一エバをささげよ。四 油は一コルのうちから十分の一バテをささげよ。コルはホメルと同じく十バテに当る。五 またイスラエルの氏族から、家畜の群れ二百につき一頭の羊を出して、素祭、燔祭、酬恩祭とし、彼らのために、あがないをなせと主なる神は言われる。六 国の民は皆これをイスラエルの君にささげ物とせよ。七 また祭日、ついたち、安息日、すなわちイスラエルの家のすべての祝い日に、燔祭、素祭、灌祭を供えるのは、君たる者の務である。すなわち彼はイスラエルの家のあがないのために、罪祭、素祭、燔祭、酬恩祭をささげなければならない。

八 主なる神は、こう言われる、正月の元日に、あなたは無傷の雄牛の子を取って聖所を清めよ。九 祭司は罪祭の獣の血を取って、宮の柱と祭壇のかさねの四すみ、および内庭の門の柱に塗れ。二〇月の七日に、あなたがたは、過失や無知のために罪を犯した者のために、このように行って宮のためにあがないをなせ。

三 正月の十四日に、あなたがたは過越の祭を祝え。七日の間、種を入れぬパンを食べよ。三三その日に君たる者は、自身のた

め、また国のすべての民のため、雄牛をささげて罪祭とし、三祝い日である七日の間は、七頭の雄牛と、七頭の雄羊の無傷のものを、七日の間毎日、燔祭として主に供えよ。また、雄やぎを罪祭として日々ささげよ。四 また素祭として麦粉一エバを各雄牛のため、一エバを各雄羊のためにととのえ、油一ヒンを各エバに加えよ。五 七月十五日の祝い日に、彼は七日の間、罪祭、燔祭、素祭および油を、このように供えなければならない。

第四十六章

一 主なる神は、こう言われる、内庭にある東向きの門は、働きをする六日の間は閉じ、安息日にはこれを開き、またついたちにはこれを開け。二 君たる者は、外から門の廊をとおつてはいり、門の柱のかたわらに立て。そのとき祭司たちは、燔祭と酬恩祭とをささげ、彼は門の敷居で、礼拝して出て行くのである。しかし門は夕暮まで閉じてはならない。三 国の民は安息日と、ついたちとに、その門の入口で主の前に礼拝をせよ。四 君たる者が、安息日に主にささげる燔祭は、六頭の無傷の小羊と、一頭の無傷の雄羊とである。五 また素祭は雄羊のために麦粉一エバ、小羊のための素祭は、その人のささげうる程度とし、麦粉一エバに油一ヒンを加えよ。六 ついたちには無傷の雄牛の子一頭、六頭の雄羊および一頭の雄羊をささげよ。これらはすべて無傷のもの

でなければならぬ。七素祭は雄牛のために麦粉一エパ、雄羊のために麦粉一エパ、小羊のために、その人のささげうる程度のものを供えよ。また麦粉一エパに油一ヒンを加えよ。八君たる者がはいる時は門の廊の道からはいり、またその道から出よ。九国の民が、祝い日に主の前に出る時、礼拝のため、北の門の道からはいる者は、南の門の道から出て行き、南の門の道からは、北の門の道から出て行け。そのはいつた門の道からは、帰つてはならない。まっすぐに進んで、出て行かなければならない。一〇彼らがいいる時、君たる者は、彼らと共にはいり、彼らが出る時、彼も出なければならぬ。

二祭日と祝い日には、素祭として、若い雄牛のために麦粉一エパ、雄羊のために麦粉一エパ、小羊のために、その人のささげうる程度のものを供え、麦粉一エパには油一ヒンを加えよ。三また君たる者が、心からの供え物として、燔祭または酬恩祭を主にささげる時は、彼のために東に面した門を開け。彼は安息日に行うように、その燔祭と酬恩祭を供え、そして退出する。その退出の後、門は閉ざされる。

三彼は日ごとに一歳の無傷の小羊を燔祭として、主にささげなければならぬ。すなわち朝ごとに、これをささげなければならぬ。一四彼は朝ごとに、素祭をこれに添えてささげなければならぬ。すなわち麦粉一エパの六分の一に、これを潤す油一ヒンの三分の一を、素祭として主にささげなければならぬ。

これは常燔祭のおきてである。一五すなわち朝ごとに常燔祭として、小羊と素祭と油とをささげなければならぬ。

一六主なる神は、こう言われる、君たる者が、もしその嗣業から、その子のひとりに財産を与える時は、それはその子らの嗣業の所有となる。一七しかし彼がその奴隷のひとりに、嗣業の一部分を与える時は、それは彼の解放の年まで、その人に属していて、その後は君たる人に帰る。彼の嗣業は、ただその子らにだけ伝わるべきである。一八君たる者はその民の嗣業を取つて、その財産を継がせないようにしてはならない。彼はただ、自分の財産のうちから、その子らにその嗣業を、与えなければならぬ。これはわが民のひとりでも、その財産を失わないためである」。

一九こうして彼はわたしを連れて、門のかたわらの入口から、北向きの祭司の聖なる室に、はいらせた。見ると、西の奥の方に一つの場所があった。二〇彼はわたしに言った、「これは祭司たちが懲祭および罪祭のものを煮、素祭のものを焼く所である。これは外庭にそれらを携えて、聖なるべきことを、民にうつさなためである」。

二三彼はまたわたしを外庭に連れ出し、庭の四すみを通らせた。見よ、庭のこのすみにも庭があり、また庭のかのすみにも庭があった。二三すなわち庭の四すみに小さい庭があり、長さ四十キュビト、幅三十キュビトで、四つとも同じ大きさである。二三

その四つの小さい庭の内部の四方には、石の壁があり、周囲の壁の下に、物を煮る所が設けてあつた。二四彼はわたしに言った、「これらは宮の仕え人たちが、民のささげる犠牲のものを煮る台所である」。

第七章

一そして彼はわたしを宮の戸口に帰らせた。見よ、水の宮の敷居の下から、東の方へ流れてゐた。宮は東に面し、その水は下から出て、祭壇の南にある宮の敷居の南の端から、流れ下つてゐた。二彼は北の門の道から、わたしを連れ出し、外をまわつて、東に向かう外の門に行かせた。見よ、水は南の方から流れ出てゐた。

三その人は東に進み、手に測りなわをもつて一千キュビトを測り、わたしを渡らせた。すると水はくるぶしに達した。四彼がまた一千キュビトを測つて、わたしを渡らせると、水はひざに達した。彼がまた一千キュビトを測つて、わたしを渡らせると、水は腰に達した。五彼がまた一千キュビトを測ると、渡り得ないほどの川になり、水は深くなつて、泳げるほどの水、越え得ないほどの川になつた。六彼はわたしに「人の子よ、あなたはこれを見るか」と言つた。

それから、彼はわたしを川の岸に沿つて連れ歸つた。七わたしが

歸つてくると、見よ、川の岸のこなたかなたに、はなはだ多くの木があつた。八彼はわたしに言つた、「この水は東の境に流れていき、アラバに落ち下り、その水が、よどんだ海にはいると、それは清くなる。九おおよその川の流れる所では、もろもろの動く生き物が皆生き、また、はなはだ多くの魚がいる。これはその水がはいると、海の水を清くするためである。この川の流れる所では、すべてのものが生きてゐる。一〇すなわける者が、海のかたわらに立ち、エンゲデからエン・エグライムまで、網を張る所となる。その魚は、大海の魚のように、その種類がはなはだ多い。二ただし、その沢と沼とは清められないで、塩地のままで残る。三川のかたわら、その岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖所から流れ出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は薬となる」。

一三主なる神は、こう言われる、「あなたがたがイスラエルの十二の部族に、嗣業として土地を分け与えるには、その境を次のように定めなければならない。ヨセフには二つの分を与えよ。一四あなたがたは、これを公平に分けよ。これはわたしに、あなたがたの先祖に与えると誓つたもので、これは嗣業として、あなたがたに属するものである。

一五その地の境はこのとおりである。北は大海からヘテロンの道を経て、ハマテの入口およびザデに至り、一六またペロテお

よびダマスコとハマテの境にあるシブライムに至り、ハウランの境にあるハザル・ハテコンに及ぶ。一七その境は海からダマスコの北の境にあるハザル・エノンにおよび、北の方はハマテがその境である。これが北の方である。

一八東の方は、ハウランとダマスコの間のハザル・エノンから、ギレアドとイスラエルの地との間の、ヨルダンに沿い、東の海に至り、タマルに及ぶ。これが東の方である。

一九南の方はタマルからメリボテ・カデシの川に及び、そこからエジプトの川に沿って大海に至る。これが南の方である。

二〇西の方はハマテの入口に至る大海を境とする。これが西の方である。

二三あなたがたはこのように、イスラエルの部族に従って、この地をあなたがたの間に分割せよ。三あなたがたは、くじをもつて、これをあなたがたのうちに分け、またあなたがたのうちにいて、あなたがたのうちに、子を生んだ寄留の他国人のうちに分けて、嗣業とせよ。彼らは、あなたがたには、イスラエルの人々のうちの本国人と同様である。彼らもあなたがたと一緒にくじを引いて、イスラエルの部族のうちに嗣業を得るべきである。二三他国人には、その住んでいる部族のうちで、その嗣業をこれに与えなければならぬと、主なる神は言われる。

第四八章

イスラエルの部族の名は次のとおりである。北の果からヘテロンを道を経て、ハマテの入口に至り、ハマテに相対するダマスコの北の境にあるハザル・エノンに及び、東の方から西の方へびる地方、これがダンの分である。ニダンの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方、これがアセルの分である。ミアセルの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方、これがナフタリの方である。四ナフタリの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方、これがマナセの方である。五マナセの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方、これがエフライムの分である。六エフライムの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方、これがルベンの分である。セルベンの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方、これがユダの方である。七ユダの領地に沿って、東の方から西の方へびる地方は、あなたがたのささげる献納地とせよ。その幅は二万五千キュビト、その東の方から西の方へびる長さは、部族の一つの分に同じで、聖所はその中にある。九すなわちあなたがたの主にささげる献納地は長さ二万五千キュビト、幅二万五千キュビトとである。一〇これが祭司への聖なる献納地である。すなわち祭司の分は、北は二万五千キュビト、西は幅一万キュビト、東は幅一万キュビト、南は長さ二万五千キュビトである。主の聖所はその中にあ

る。二これはイスラエルの人々が迷い出た時、レビびとが迷つたように迷つたことはなく、わが務を守り通したザドクの子孫のうちから、聖別された祭司に属する。三このようにレビびとの境に沿つて、いと聖なる地、すなわち聖なる献納地が、特別な分として彼らに帰属する。四レビびとの分は祭司の所有地の境に沿つて、長さ二万五千キュビト、幅一万キュビト、すなわち、そのすべての長さ二万五千キュビト、幅二万キュビトである。一四彼らはこれ売つてはならない、また交換してはならない、またその大事な分を手ばなしてはならない。これは主に属する聖なる物だからである。

一五その残りの地すなわち幅五千キュビト、長さ二万五千キュビトは町のため、すみかのため、また郊外のため一般人の地所とせよ。町はその中に置け。一六一般人の地所の広さは次のとおりである。すなわち北の方四千五百キュビト、南の方四千五百キュビト、東の方四千五百キュビト、西の方四千五百キュビトである。一七町は郊外を含む。郊外は北二百五十キュビト、南二百五十キュビト、東二百五十キュビト、西二百五十キュビトである。一八聖なる献納地に沿っている残りの地の長さは東へ一万キュビト、西へ一万キュビトである。これは聖なる献納地に沿つており、その産物は町の働き人の食物となる。一九町の働き人は、イスラエルのすべての部族から出て、これを耕作するのである。二〇あなたがたがささげる献納地の全体は二万五千

キュビト四方である。これは町の所有地と共に聖なる献納地である。

三聖なる献納地と町の所有地との、こなたかなたの残りの地は、君たる者に属する。これは聖なる献納地の二万五千キュビトに面して東の境に至り、西はその二万五千キュビトに面して西の境に至り、部族の分に沿うもので、君たる者に属する。聖なる献納地と、宮の聖所とは、その中にある。三町の所有地は、君たる者に属する部分の中にある、そして君たる者の分は、ユダの領地と、ベニヤミンの領地との間にある。

三三なお残りの部族では東の方から西の方に至る地方、これがベニヤミンの分である。三四ベニヤミンの領地に沿つて、東の方から西の方に至る地方、これがシメオンの分である。三五シメオンの領地に沿つて、東の方から西の方に至る地方、これがイツサカルの方である。三六イツサカルの方の領地に沿つて、東の方から西の方に至る地方、これがゼブルンの分である。三七ゼブルンの領地に沿つて、東の方から西の方に至る地方、これがガドの方である。三八南の方はガドの領地に沿つて、タマルからメリボテ・カデシの水に至り、そこからエジプトの川に沿つて大海に至る。三九これはあなたがたが、くじをもつてイスラエルの部族のうちに分けて、嗣業とすべき地である。これが彼らの分であると、主なる神は言われる。

四〇町の出口は次のとおりである。北の方の長さは四千五百

キュビトである。三 町の門はイスラエルの部族の名にしたがい、三つの門になつてゐる。すなわちルベンの門、ユダの門、レビの門である。三 東の方は四千五百キュビトであつて、三つの門がある。すなわちヨセフの門、ベニヤミンの門、ダンの門である。三 南の方は四千五百キュビトであつて、三つの門がある。すなわちシメオンの門、イッサカルの門、ゼブルンの門である。三 西の方は四千五百キュビトであつて、三つの門がある。すなわちガドの門、アセルの門、ナフタリの門である。三 町の周囲は一万八千キュビトあり、この日から後、この町の名は『主そこにいます』と呼ばれる」。

ダニエル書

第一章

ユダの王エホヤキムの治世の第三年にバビロンの王ネブカデネザルはエルサレムにきて、これを攻め囲んだ。主はユダの王エホヤキムと、神の宮の器具の一部とを、彼の手にわたされたので、彼はこれをシナルの地の自分の神の宮に携えゆき、その器具を自分の神の蔵に納めた。三時に王は宦官の長アシパナスに、イスラエルの人々の中から、王の血統の者と、貴族たる者数人とを、連れて来るように命じた。四すなわち身に傷がなく、容姿が美しく、すべての知恵にさとく、知識があつて、思慮深く、王の宮に仕えるに足る若者を連れてこさせ、これにカルデヤびとの文学と言語とを学ばせようとした。五そして王は王の食べる食物と、王の飲む酒の中から、日々の分を彼らに与えて、三年のあいだ彼らを養ひ育て、その後、彼らをして王の前に、はらせようとした。六彼らのうちに、ユダの部族のダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤがあつた。七宦官の長は彼らに名を与えて、ダニエルをベルテシヤザルと名づけ、ハナニヤをシャデラクと名づけ、ミシヤエルをメシヤクと名づけ、アザリヤをアベデネゴと名づけた。

八ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもつて、自分を汚すま

いと、心に思い定めたので、自分を汚させることのないように、宦官の長に求めた。九神はダニエルをして、宦官の長の前に、恵みとあわれみとを得させられたので、一〇宦官の長はダニエルに言った、「わが主なる王は、あなたがたの食べ物と、飲み物とを定められたので、わたしはあなたがたの健康の狀態が、同年輩の若者たちよりも悪いと、王が見られることを恐れるのです。そうすればあなたがたのために、わたしのこうべが、王の前に危くなるでしょう」。一そこでダニエルは宦官の長がダニエル、ハナニヤ、ミシヤエルおよびアザリヤの上に立てた家令に言った、三「どうぞ、しもべらを十日の間ためしてください。わたしたちにただ野菜を与えて食べさせ、水を飲ませ、一三そしてわたしたちの顔色と、王の食物を食べる若者の顔色とをくらべて見て、あなたの見るところにしたがつて、しもべらを扱ってください」。一四家令はこの事について彼らの言うところを聞きださい。一五十日の間、彼らをためした。一五十日の終りになってみると、彼らの顔色は王の食物を食べたすべての若者よりも美しく、また肉も肥え太つていた。一六それで家令は彼らの食物と、彼らの飲むべき酒とを除いて、彼らに野菜を与えた。

一七この四人の者には、神は知識を与え、すべての文学と知恵にさとい者とされた。ダニエルはまたすべての幻と夢とを理解した。一八さて、王が命じたところの若者を召し入れるまでの日数が過ぎたので、宦官の町は彼らをネブカデネザルの前に連れて

いった。一九王が彼らと語つてみると、彼らすべての中にはダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤにならぶ者がなかったたので、彼らは王の前にはべることとなった。二〇王が彼らにさまざまな事を尋ねてみると、彼らは知恵と理解において、全国博士、法術士にまさること十倍であつた。ニダニエルはクロス王の元年まで仕えていた。

第二章

一ネブカデネザルの治世の第二年に、ネブカデネザルは夢を見、そのために心に思い悩んで眠ることができなかつた。二そこで王は命じて王のためにその夢を解かせようと、博士、法術士、魔術士、カルデヤびとを召させたので、彼らはきて王の前に立つた。三王は彼らにむかつて、「わたしは夢を見たが、その夢を知ろうと心に思い悩んでいる」と言つたので、四カルデヤびとらはアラム語で王に言つた、「王よ、とこしえに生きながらえられますように。どうぞしもべらにその夢をお話してください。わたしたちはその解き明かしを申しあげましょう」。五王は答えてカルデヤびとに言つた、「わたしの言うことは必ず行ふ。あなたがたがもしその夢と、その解き明かしを、わたしに示さないならば、あなたがたの身は切り裂かれ、あなたがたの家は滅ぼされる。六しかし、その夢とその解き明かしを示すならば、贈り物と報酬

と大いなる栄誉とを、わたしから受けるだろう。それゆえその夢とその解き明かしとを、わたしに示さない」。七彼らは再び答えて言つた、「王よ、しもべらにその夢をお話してください。そうすればわたしたちはその解き明かしを示しましょう」。八王は答えて言つた、「あなたがたはわたしと言つたことは、必ず行ふことを承知しているの、時を延ばそうとしているのを、わたしは確かに知つてゐる。九もしその夢をわたしに示さないならば、あなたがたの受ける刑罰はただ一つあるのみだ。あなたがたは一致して、偽りと、欺きの言葉をわたしの前に述べて、時の變るのを待とうとしているのだ。まずその夢をわたしに示さない。そうすれば、わたしはあなたがたがその解き明かしをも、示しうることを知るだろう」。一〇カルデヤびとらは王の前に答えて言つた、「世の中には王のその要求に應じうる者はひとりもありません。どんな大いなる力ある王でも、このような事を、博士、法術士、カルデヤびとに尋ねた者はありませんでした。一王の尋ねられる事はむずかしい事であつて、肉なる者と共におられない神々を除いては、王の前にこれを示しうる者はないでしょう」。

二これによつて王は怒り、かつ大いに憤り、バビロンの知者をすべて滅ぼせと命じた。三この命令が発せられたので、知者らは殺されることになった。またダニエルとその同僚をも殺さうと求めた。四そして王の侍衛の長アリオクが、バビロンの

知者らを殺そうと出てきたので、ダニエルは思慮と知恵をもつてこれに応答した。「五すなわち王の高官アリオクに「どうして王はそんなにきびしい命令を出されたのですか」と言った。アリオクがその事をダニエルに告げ知らせると、「ニダニエルは王のところへはいって、その解き明かしを示すために、しばらくの時を与えられるよう王に願った。」

ニモそれからダニエルは家に帰り、同僚のハナニヤ、ミシヤエルおよびアザリヤにこの事を告げ知らせ、「共にこの秘密について天の神のあわれみを請い、ダニエルとその同僚とが、他のバビロンの知者と共に滅ぼされることのないように求めた。」二九ついに夜の幻のうちにこの秘密がダニエルに示されたので、ダニエルは天の神をほめたたえた。

三〇ダニエルは言った、

「神の名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな、

知恵と権能とは神のものである。

三一神は時と季節とを変じ、

王を廃し、王を立て、

知者に知恵を与え、

賢者に知識を授けられる。

三二神は深妙、秘密の事をあらわし、

暗黒にあるものを知り、

光をご自身のうちに宿す。

三三わが先祖たちの神よ、

あなたはわたしに知恵と力とを賜い、

今われわれがあなたに請い求めたところのものをわたしに示し、

王の求めたことをわれわれに示されたので、

わたしはあなたに感謝し、あなたをさんびします。」

三四そこでダニエルは、王がバビロンの知者たちを滅ぼすことを命じておいたアリオクのもとへ行つて、彼にこう言つた、「バビロンの知者たちを滅ぼしてはなりません。わたしを王の前に連れて行つてください。わたしはその解き明かしを王に示します。」

三五アリオクは急いでダニエルを王の前に連れて行き、王にこう言つた、「ユダから捕え移した者の中に、その解き明かしを王にお知らせすることのできる、ひとりの人を見つけました」。二六王は答えて、ベルテシヤザルという名のダニエルに言つた、「あなたはわたしが見た夢と、その解き明かしとをわたしに知らせることができるのか」。二七ダニエルは王に答えて言つた、「王が求められる秘密は、知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。ニハしかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。あなたの夢と、あなたが床にあつて見た脳中の幻はこれです。二九王よ、あなたが床におられ

たとき、この後どんな事があろうかと、思いまわされたが、秘密をあらわされるかたが、将来どんな事が起るか、あなたに知らされたのです。三〇この秘密をわたしにあらわされたのは、すべての生ける者にまさつて、わたしに知恵があるためではなく、ただその解き明かしを、王にお知らせすることによつて、あなたが心に思われたことを、お知りになるためです。

三 王よ、あなたは一つの大いなる像が、あなたの前に立つてゐるのを見られました。その像は大きく、非常に光り輝いて、恐ろしい外観をもっていました。三三その像の頭は純金、胸と両腕とは銀、腹と、ももとは青銅、三すねは鉄、足の一部は鉄、一部は粘土です。三四あなたが見ておられたとき、一つの石が人手によらずに切り出されて、その像の鉄と粘土との足を撃ち、これを砕きました。三五こうして鉄と、粘土と、青銅と、銀と、金とはみな共に砕けて、夏の打ち場のもみがらのようになり、風に吹き払われて、あとかたもなくなりしました。ところがその像を撃った石は、大きな山となつて全地に満ちました。

三六これがその夢です。今わたしたちはその解き明かしを、王の前に申しあげましょう。三七王よ、あなたは諸王の王であつて、天の神はあなたに国と力と勢いと榮えとを賜ひ、三八また人の子ら、野の獣、空の鳥はどこにいるものでも、皆これをあなたの手に与えて、ことごとく治めさせられました。あなたはあの金の頭です。三九あなたの後にあなたに劣る一つの国が起ります。

また第三に青銅の国が起つて、全世界を治めるようになります。四〇第四の国は鉄のように強いでしょう。鉄はよくすべての物をこわし砕くからです。鉄がこれらのことごとく打ち砕くように、その国はこわし砕くでしょう。四一あなたは足の指と足の指を見られましたが、その一部は陶器師の粘土、一部は鉄であつたので、それは分裂した国をさします。しかしあなたが鉄と粘土との混じつたのを見られたように、その国には鉄の強さがあるでしょう。四二その足の指の一部は鉄、一部は粘土であつたように、その国は一部は強く、一部は弱いでしょう。四三あなたが鉄と粘土との混じつたのを見られたように、それらは婚姻によつて、互に混ざるでしょう。しかし鉄と粘土とは相混じらないように、かれとこれと相合することはありません。四四それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かつてこれらのものもろの国を打ち破つて滅ぼすでしょう。そしてこの国は立つて永遠に至るのです。四五一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と、青銅と、粘土と、銀と、金とを打ち砕いたのを、あなたが見られたのはこの事です。大いなる神がこの後に起るべきことを、王に知らされたのです。その夢はまことであつて、この解き明かしは確かです」。四六そこでネブカデネザル王はひれ伏して、ダニエルを拝し、供え物と薫香とを、彼にささげること命じた。四七そして王はダ

ニエルに答えて言った、「あなたがこの秘密をあらわすことができたのを見ると、まことに、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であつて、秘密をあらわされるからだ」。四八こうして王はダニエルに高い位を授け、多くの大いなる贈り物を与えて、彼をバビロン全州の総督とし、またバビロンの知者たちを統轄する者の長とした。四九王はまたダニエルの願いによつて、シヤデラクとメシヤクとアベデネゴを任命して、バビロン州の事務をつかさどらせた。ただしダニエルは王の宮にとどまつていた。

第三章

一ネブカデネザル王は一つの金の像をつつた。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトで、彼はこれをバビロン州のドラの平野に立てた。ニそしてネブカデネザル王は、総督、長官、知事、参議、庫官、法官、高僧および諸州の官吏たちを召集め、ネブカデネザル王の立てたこの像の落成式に臨ませようとした。ニそこで、総督、長官、知事、参議、庫官、法官、高僧および諸州の官吏たちは、ネブカデネザル王の立てた像の落成式に臨み、そのネブカデネザル王の立てた像の前立つた。四時に伝令者は大声に呼ばわつて言った、「諸民、諸族、諸国語の者よ、あなたがたにこう命じられる。五角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞く時は、ひれ伏してネブカ

デネザル王の立てた金の像を拝まなければならない。六だれでもひれ伏して拝まない者は、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる」と。七そこで民らはみな、角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞くや、諸民、諸族、諸国語の者たちはみな、ひれ伏して、ネブカデネザル王の立てた金の像を拝んだ。

八その時、あるカルデヤびとらが進みきて、ユダヤ人をあしざまに訴えた。九すなわち彼らはネブカデネザル王に言った、「王よ、とこしえに生きながらえられますように。一〇王よ、あなたは命令を出して仰せられました。すべて、角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞く者は皆、ひれ伏して金の像を拝まなければならない。ニまた、だれでもひれ伏して拝まない者はみな、火の燃える炉の中に投げ込まれると。ニここにあなたが任命して、バビロン州の事務をつかさどらせられているユダヤ人シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴがおります。王よ、この人々はおなたを尊ばず、おなたの神々にも仕えず、おなたの立てられた金の像をも拝もうとしません」。ニそこでネブカデネザルは怒りかつ憤つて、シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを連れてこいと命じたので、この人々を王の前に連れてきた。一四ネブカデネザルは彼らに言った、「シヤデラク、メシヤク、アベデネゴよ、あなたがたがわが神々に仕えず、またわたしの立てた金の像を拝まないとは、ほんとう

なのか。一五あなたがたがもし、角笛、横笛、琴、三角琴、立琴、風笛などの、もろもろの楽器の音を聞くときにひれ伏して、わたしが立てた像を、ただちに拜むならば、それでよい。しかし、拜むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。いったい、どの神が、わたしの手からあなたがたを救うことができるか」。

一六シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴは王に答えて言った、「ネブカデネザルよ、この事について、お答えする必要はありません。一七もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されま

す。一八たといさうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拜みません」。

一九そこでネブカデネザルは怒りに満ち、シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴにむかつて、顔色を変え、炉を平常よりも七倍熱くせよと命じた。二〇またその軍勢の中の力の強い人々を呼んで、シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを縛って、彼らを火の燃える炉の中に投げ込めと命じた。二三そこでこの人々は、外套、下着、帽子、その他の衣服のまま縛られて、火の燃える炉の中に投げ込まれた。二四王の命令はきびしく、かつ炉は、はなはだしく熱していたので、シヤデラク、メシヤクおよびアベ

デネゴを引きつれていった人々は、その火炎に焼き殺された。二五シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの三人は縛られたままで、火の燃える炉の中に落ち込んだ。

二六その時、ネブカデネザル王は驚いて立ちあがり、大臣たちに言った、「われわれはあの三人を縛って、火の中に投げ入れたではないか」。彼らは王に答えて言った、「王よ、そのとおりです」。二七王は答えて言った、「しかし、わたしの見るのに四人の者がなわめなしに、火の中を歩いているが、なんの害をも受けていない。その第四の者の様子は神の子のようだ」。

二八そこでネブカデネザルは、その火の燃える炉の入口に近寄って、「いと高き神のしもべシヤデラク、メシヤク、アベデネゴよ、出てきなさい」と言ったので、シヤデラク、メシヤク、アベデネゴはその火の中から出てきた。二九総督、長官、知事および王の大臣たちも集まってきて、この人々を見たが、火は彼らの身にはなんの力もなく、その頭の毛は焼けず、その外套はそこなわれず、火のおいもこれに付かなかった。三〇ネブカデネザルは言った、「シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの神はほむべきかな。神はその使者をつかわして、自分に寄り頼むしもべらを救った。また彼らは自分の神以外の神に仕え、拜むよりも、むしろ王の命令を無視し、自分の身をも捨てようとしたのだ。二九それでわたしはいま命令を下す。諸民、諸族、諸国語の者のうちだれでも、シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの神をのしる者が

あるならば、その身は切り裂かれ、その家は滅ぼされなければならない。このように救を施すことのできる神は、ほかにないからだ」。三〇こうして、王はシャデラク、メシヤクおよびアベデネゴの位を進めて、バビロン州におらせた。

第四章

一ネブカデネザル王は全世界に住む諸民、諸族、諸言語の者に告げる。どうか、あなたがたに平安が増すように。二いと高き神はわたしにしろしと奇跡とを行われた。わたしはこれを知らせたいと思う。

三ああ、そのしろしの大いなること、

ああ、その奇跡のすばらしいこと、

その国は永遠の国、

その主権は世々に及ぶ。

四われネブカデネザルはわが家に安らかにおり、わが宮にあつて榮えていたが、五わたしは一つの夢を見て、そのために恐れた。すなわち床にあつて、その事を思いめぐらし、わが脳中の幻のために心を悩ました。六そこでわたしは命令を下し、バビロンの知者をことごとくわが前に召し寄せて、その夢の解き明かしを示させようとした。七すると、博士、法術士、カルデアびと、占い師たちがきたので、わたしはその夢を彼らに語ったが、彼

らはその解き明かしを示すことができなかった。八最後にダニエルがわたしの前にきた、――彼の名はわが神の名にちなんで、ベルテシヤザルとなえられ、彼のうちには聖なる神の霊がやどつていた――わたしは彼にその夢を語つて言つた、九「博士の長ベルテシヤザルよ、わたしは知つてゐる。聖なる神の霊があなたの中にやどつてゐるから、どんな秘密もあなたにはむずかしいことはない。ここにわたしが見た夢がある。その解き明かしをわたしに告げなさい。一〇わたしが床にあつて見た脳中の幻はこれである。わたしが見たのに、地の中央に一本の木があつて、そのたけが高かつたが、二その木は成長して強くなり、天に達するほどの高さになつて、地の果までも見えわたり、三その葉は美しく、その実は豊かで、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣はその陰にやどり、空の鳥はその枝にすみ、すべての肉なる者はこれによつて養われた。

三わたしは床にあつて見た脳中の幻の中に、ひとりの警護者、ひとりの聖者の天から下るのを見たが、四彼は声高く呼ばわつて、こう言つた、『この木を切り倒し、その枝を切りはらい、その葉をゆり落し、その実を打ち散らし、獣をその下から逃げ去らせ、鳥をその枝から飛び去らせよ。五ただしその根の切り株を地に残し、それに鉄と青銅のなわをかけて、野の若草の中におき、天からくだる露にぬれさせ、また地の草の中で、獣と共にその分にあずからせよ。一六またその心は變つて人間の心のよ

うでなく、獣の心が与えられて、七つの時を過ぎさせよ。一七この宣言は警護者たちの命令によるもの、この決定は聖者たちの言葉によるもので、いと高き者が、人間の国を治めて、自分の意のままにこれを人に与え、また人のうちの最も卑しい者を、その上に立てられるという事を、すべての者に知らせるためである』と。一八われネブカデネザル王はこの夢を見た。ベルテシャザルよ、あなたはその解き明かしをわたしに告げなさい。わが国の知者たちは、いずれもその解き明かしを、わたしに示すことができなかったけれども、あなたにはそれができる。あなたのうちには、聖なる神の霊がやどっているからだ」。

一九その時、その名をベルテシャザルとなえるダニエルは、しばらくのあいだ驚き、思い悩んだので、王は彼に告げて言った、「ベルテシャザルよ、あなたはこの夢と、その解き明かしのために、悩むには及ばない」。ベルテシャザルは答えて言った、「わが主よ、どうか、この夢は、あなたを憎む者にかかわるように。この解き明かしは、あなたの敵に臨むように。二〇あなたが見られた木、すなわちその成長して強くなり、天に達するほどの高さになって、地の果までも見えたり、二その葉は美しく、その実は豊かで、すべての者がその中から食物を獲、また野の獣がその陰にやどり、空の鳥がその枝に住んだ木、三王よ、それはすなわちあなたです。あなたは成長して強くなり、天に達するほどに大きくなり、あなたの主権は地の果にまで及びました。二

三ところが、王はひとりの警護者、ひとりの聖者が、天から下つて、こう言うのを見られました、『この木を切り倒して、これを滅ぼせ。ただしその根の切り株を地に残し、それに鉄と青銅のなわをかけて、野の若草の中におき、天からくだる露にぬれさせ、また野の獣と共にその分にあずからせて、七つの時を過ぎさせよ』と。二四王よ、その解き明かしはこうです。すなわちこれはいと高き者の命令であつて、わが主なる王に臨まんとするものです。二五すなわちあなたは追われて世の人を離れ、野の獣と共におり、牛のように草を食い、天からくだる露にぬれるでしょう。こうして七つの時が過ぎて、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るでしょう。二六また彼らはその木の根の切り株を残しおけと命じたので、あなたが、天はまことの支配者であるということを知った後、あなたの国はあなたに確保されるでしょう。二七それゆえ王よ、あなたはわたしの勧告をいれ、義を行つて罪を離れ、しえたげられる者をあわれんで、不義を離れなさい。そうすれば、あるいはあなたの繁栄が、長く続くかもしれません」。

二八この事は皆ネブカデネザル王に臨んだ。二九十二か月を経て、王がバビロンの王宮の屋上を歩いていたとき、三〇王は自ら言った、「この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもつて建てた王城であつて、わが威光を輝かすものではないか」。三

「その言葉がなお王の口にあるうちに、天から声がくだつて言った、「ネブカデネザル王よ、あなたに告げる。国はあなたを離れ去つた。三あなたたは、追われて世の人を離れ、野の獣と共におり、牛のように草を食い、こうして七つの時を経て、ついにあなたは、いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与えられることを知るに至るだろう。三この言葉は、ただちにネブカデネザルに成就した。彼は追われて世の人を離れ、牛のように草を食い、その身は天からくだる露にぬれ、ついにその毛は、わしの羽のようになり、そのつめは鳥のつめのようになつた。

三四こうしてその期間が満ちた後、われネブカデネザルは、目をあげて天を仰ぎ見ると、わたしの理性が自分に歸つたので、わたしはいと高き者をほめ、その永遠に生ける者をさんびし、かつあがめた。

その主権は永遠の主権、

その国は世々かぎりなく、

五地に住む民はすべて無き者のように思われ、

天の衆群にも、

地に住む民にも、

彼はその意のままに事を行われる。

だれも彼の手をおさえて

「あなたは何をするのか」と言いうる者はない。

三六この時わたしの理性は自分に歸り、またわが国の光栄のために、わが尊厳と光輝とが、わたしに歸つた。わが大臣、わが貴族らもきて、わたしに求め、わたしは国の上に堅く立つて、前にもまさつて大いなる者となつた。モそこでわれネブカデネザルは今、天の王をほめたたえ、かつあがめたてまつる。そのみわざはことごとく真実で、その道は正しく、高ぶり歩む者を低くされる。

第五章

一ベルシヤザル王は、その大臣一千人のために、盛んな酒宴を設け、その一千人の前で酒を飲んでいた。

二酒が進んだとき、ベルシヤザルは、その父ネブカデネザルがエルサレムの神殿から取つてきた金銀の器を持つてこいと命じた。王とその大臣たち、および王の妻とそばめらが、これをもつて酒を飲むためであつた。三そこで人々はそのエルサレムの神の宮すなわち神殿から取つてきた金銀の器を持つてきたので、王とその大臣たち、および王の妻とそばめらは、これをもつて飲んだ。四すなわち彼らは酒を飲んで、金、銀、青銅、鉄、木、石などの神々をほめたたえた。

五すると突然人の手の指があらわれて、燭台と相對する王の宮殿の塗り壁に物を書いた。王はその物を書いた手の先を見

た。六そのために王の顔色は変り、その心は思い悩んで乱れ、その腰のつがいはゆるみ、ひざは震えて互に打ちあつた。七王は大声に呼ばわつて、法術士、カルデヤびと、占い師らを召してこさせた。王はバビロンの知者たちに告げて言つた、「この文字を読み、その解き明かしをわたしに示す者には紫の衣を着せ、首に金の鎖をかけさせて、国の第三のつかさとしよう」と。八王の知者たちは皆はいつてきた。しかしその文字を読むことができず、またその解き明かしを王に示すことができなかったで、九ベルシャザル王は大いに思い悩んで、その顔色は変り、王の大臣たちも当惑した。

一〇時に王妃は王と大臣たちの言葉を聞いて、その宴会場にはいつてきた。そして王妃は言つた、「王よ、どうか、とこしえに生きながらえられますように。あなたは心に思い悩んでほなりません。また顔色を変えるには及びません。――あなたの国には、聖なる神の霊のやどつているひとりの人がおります。あなたの父の代に、彼は、明知、分別および神のような知恵のあることをあらわしました。あなたの父ネブカデネザル王は、彼を立てて、博士、法術士、カルデヤびと、占い師らの長とされしました。三彼は、王がベルテシャザルという名を与えたダニエルという者ですが、このダニエルには、すぐれた霊、知識、分別があつて、夢を解き、などを解き、難問を解くことができます。ゆえにダニエルを召しなさい。彼はその解き明かしを示すでしょう」。

一三そこでダニエルは王の前に召された。王はダニエルに言つた、「あなたは、わが父の王が、ユダからひきつれてきたユダの捕囚のひとりなのか。一四聞くところによると、あなたのうちには、聖なる神の霊がやどつていて、明知、分別および非凡な知恵があるそうだ。一五わたしは、知者、法術士らを、わが前に召しよせて、この文字を読ませ、その解き明かしを示させようとしたが、彼らは、この事の解き明かしを示すことができなかった。一六しかしまた聞くところによると、あなたは解き明かしをなし、かつ難問を解くことができるそうだ。それで、あなたがもし、この文字を読み、その解き明かしをわたしに示すことができたなら、あなたに紫の衣を着せ、金の鎖を首にかけさせて、この国の第三のつかさとしよう」。

一七ダニエルは王の前に答えて言つた、「あなたの賜物は、あなたご自身にとつておき、あなたの贈り物は、他人にお与えください。それでも、わたしは王のためにその文字を読み、その解き明かしをお知らせいたします。一八王よ、いと高き神はあなたの父ネブカデネザルに国と権勢と、光栄と尊厳とを賜いました。一九彼に権勢を賜つたことによつて、諸民、諸族、諸言語の者はみな、彼の前におのき恐れしました。彼は自分の欲する者を殺し、自分の欲する者を生かし、自分の欲する者を上げ、自分の欲する者を下しました。二〇しかし彼は心に高ぶり、かたくなになり、ごうまんにふるまつたので、王位からしりぞけられ、その

光栄を奪われ、三 追われて世の人と離れ、その思いは獣のようになり、そのすまいは野ろばと共にあり、牛のように草を食い、その身は天からくだる露にぬれ、こうしてついに彼は、いと高き神が人間の国を治めて、自分の意のままに人を立てられるということを、知るようになりました。三 ベルシャザルよ、あなたは彼の子であつて、この事をことごとく知つていながら、なお心を低くせず、三 かつて天の主にもかつて、みずから高ぶり、その宮の器物をあなたの前に持つてこさせ、あなたとあなたの大臣たちと、あなたの妻とそばめたちは、それをもつて酒を飲み、そしてあなたは見ることも、聞くことも、物を知ることもしない金 銀、青銅、鉄、木、石の神々をほめたたえたが、あなたの命をその手ににぎり、あなたのすべての道をつかさどられる神をあがめようとはしなかった。

二四 それゆえ、彼の前からこの手が出てきて、この文字が書きしるされたのです。二五 そのしるされた文字はこうです。メネ、メネ、テケル、ウパルシン。二六 その事の解き明かしはこうです、メネは神があなたの治世を数えて、これをその終りに至らせたことをいうのです。ニモテケルは、あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです。二ハペレスは、あなたの国が分かれたれて、メディアとペルシャの人々に与えられることをいうのです」。

二九 そこでベルシャザルは命じて、ダニエルに紫の衣を着せ、金

の鎖をその首にかけさせ、彼について布告を発して、彼は国の第三のつかさであると言わせた。

三〇 カルデヤびとの王ベルシャザルは、その夜のうちに殺され、三 ーメディアびとダリヨスが、その国を受けた。この時ダリヨスはおおよそ六十二歳であつた。

第六章

ーダリヨスは全国を治めるために、その国に百二十人の総督を立てることをよしとし、ニまた彼らの上に三人の総監を立てた。ダニエルはそのひとりであつた。これは総督たちをして、この三人の前に、その職務に関する報告をさせて、王に損失の及ぶことのないようにするためであつた。ミダニエルは彼のうちにあするすぐれた霊のゆえに、他のすべての総監および総督たちにまさつていたので、王は彼を立てて全国を治めさせようとした。四 そこで総監および総督らは、国事についてダニエルを訴えるべき口実を得ようとしたが、訴えるべきなんの口実も、なんのともが見いだすことができなかった。それは彼が忠信な人であつて、その身になんのあやまちも、とがも見いだされなかったからである。五 そこでその人々は言つた、「われわれはダニエルの神の律法に關して、彼を訴える口実を得るのだから、ついに彼を訴えることはできない」と。

六こうして総監と総督らは、王のもとに集まってきて、王に言った、「ダリヨス王よ、どうかとこしえに生きながらえられますように。七国の総監、長官および総督、参議および知事らは、相はかつて、王が一つのおきてを立て、一つの禁令を定められるよう求めることになりました。王よ、それはこうです。すなわち今から三十日の間は、ただあなたにのみ願ひ事をさせ、もしあなたをおいて、神または人にこれをなす者があれば、すべてその者を、ししの穴に投げ入れるのです。ハそれで王よ、その禁令を定め、その文書に署名して、メデアとベルシャの変ることのない法律のごとく、これを変えることのできないようにしてください」。九そこでダリヨス王は、その禁令の文書に署名した。

一〇ダニエルは、その文書の署名されたことを知って家に帰り、二階のへやの、エルサレムに向かって窓の開かれた所で、以前からおこなっていたように、一日に三度ずつ、ひざをかがめて神の前に祈り、かつ感謝した。二そこでその人々は集まってきて、ダニエルがその神の前に祈り、かつ求めていることを見たので、三彼らは王の前にきて、王の禁令について奏上して言った、「王よ、あなたは禁令に署名して、今から三十日の間は、ただあなたにのみ願ひ事をさせ、もしあなたをおいて、神または人に、これをなす者があれば、すべてその者を、ししの穴に投げ入れると、定められたではありませんか」。王は答えて言った、「その事は確かであつて、メデアとベルシャの法律のごとく、変えること

のできないものだ」。一三彼らは王の前に答えて言った、「王よ、ユダから引いてきた捕囚のひとりである、かのダニエルは、あなたをも、あなたの署名された禁令をも顧みず、一日に三度ずつ、祈をささげています」。

一四王はこの言葉を聞いて大いに憂え、ダニエルを救おうと心を用い、日の入るまで、彼を救い出すことに努めた。一五時にその人々は、また王のもとに集まってきて、王に言った、「王よ、メデアとベルシャの法律によれば、王の立てた禁令、または、おきては変えることのできないものであることを、ご承知ください」。

一六そこで王は命令を下したので、ダニエルは引き出されて、ししの穴に投げ入れられた。王はダニエルに言った、「どうか、あなたの常に仕える神が、あなたを救われるように」。一七そして一つの石を持ってきて、穴の口をふさいだので、王は自分の印と、大臣らの印をもつて、これに封印した。これはダニエルの処置を変えることのないようにするためであつた。一八こうして王はその宮殿に帰つたが、その夜は食をとらず、また、そばめたちを召し寄せず、全く眠ることもしなかつた。

一九こうして王は朝まだき起きて、ししの穴へ急いで行つたが、二〇ダニエルのいる穴に近づいたとき、悲しげな声をあげて呼ばわり、ダニエルに言った、「生ける神のしもべダニエルよ、あなたが常に仕えている神はあなたを救つて、ししの害を免れさせ

ることができたか」。ニダニエルは王に言った、「王よ、どうか、
とこしえに生きながらえられますように。ニニわたしの神はその
使をおくつて、ししの口を閉ざされたので、ししはわたしを害
しませんでした。これはわたしに罪のないことが、神の前に認
められたからです。王よ、わたしはあなたの前にも、何も悪い事
をしなかったのです」。ニニそこで王は大いに喜び、ダニエルを
穴の中から出せと命じたので、ダニエルは穴の中から出された
が、その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分
の神を頼みとしていたからである。ニ四王はまた命令を下して、
ダニエルをあしぎまに訴えた人々を引いてこさせ、彼らをその
妻子と共に、ししの穴に投げ入れさせた。彼らが穴の底に達し
ないうちに、ししは彼らにとびかかって、その骨までもかみ碎い
た。

ニ五そこでダリヨス王は全世界に住む諸民、諸族、諸国語の者に
詔を書きおくつて言った、「どうか、あなたがたに平安が増すよ
うに。ニニわたしは命令を出す。わが国のすべての州の人は、皆
ダニエルの神を、おののき恐れなければならない。

彼は生ける神であつて、

とこしえに変わることなく、

その国は滅びず、その主権は終りまで続く。

ニモ 彼は救を施し、助けをなし、

天においても、地においても、

しるしと奇跡をおこない、

ダニエルを救つて、

ししの力をのがれさせたかたである」。

ニ八こうして、このダニエルはダリヨスの世と、ペルシヤ人クロ
スの世において栄えた。

第七章

一バビロンの王ベルシヤザルの元年に、ダニエルは床にあつて
夢を見、また脳中に幻を得たので、彼はその夢をしるして、そ
の事の大意を述べた。ニダニエルは述べて言った、「わたしは夜
の幻のうちに見た。見よ、天の四方からの風が大海をかきたて
ると、ニ四つの大きな獣が海からあがってきた。その形は、おの
おの異なり、四第一のものは、ししのようで、わしの翼をもつて
いたが、わたしが見ていると、その翼は抜きとられ、また地から
起されて、人のように二本の足で立たせられ、かつ人の心が与え
られた。五見よ、第二の獣は熊のようであつた。これはそのから
だの一方をあげ、その口の歯の間に、三本の肋骨をくわえていた
が、これに向かつて『起きあがつて、多くの肉を食らえ』と言う
声があつた。六その後わたしが見たのは、ひょうのような獣で、
その背には鳥の翼が四つあつた。またこの獣には四つの頭があ
り、主権が与えられた。七その後わたしが夜の幻のうちに見た第

四の獣は、恐ろしい、ものすごい、非常に強いもので、大きな鉄の歯があり、食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは、その前に出たすべての獣と違って、十の角を持っていた。ハわたしが、その角を注意して見ていると、その中に、また一つの小さい角が出てきたが、この小さい角のために、さきの角のうち三つがその根から抜け落ちた。見よ、この小さい角には、人の目のような目があり、また大きな事を語る口があった。九わたしが見ていると、

もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、

頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。

一〇彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前に仕える者は万々、

審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。

二わたしは、その角の語る大いなる言葉の音がするので見えたが、わたしが見ている間にその獣は殺され、そのからだはそこなわれて、燃える火に投げ入れられた。三その他の獣はその

主権を奪われたが、その命は、時と季節の来るまで延ばされた。三わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、

見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、

日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。

一四彼に主権と栄光と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。

その主権は永遠の主権であつて、なくなる事がなく、

その国は滅びることがない。

一五そこで、われダニエル、わがうちなる霊は憂え、わが脳中の幻は、わたしを悩ましたので、一六わたしは、そこに立っている者のひとりに近寄つて、このすべての事の真意を尋ねた。するとその者は、わたしにこの事の解き明かしを告げ知らせた。一七『この四つの大きな獣は、地に起らんとする四人の王である。一八しかしついに、いと高き者の聖徒が国を受け、永遠にその国を保つて、世々かぎりなく続く』。

一九そこでわたしは、さらに第四の獣の真意を知ろうとした。その獣は他の獣と異なつて、はなはだ恐ろしく、その歯は鉄、そのつめは青銅であつて、食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。二〇この獣の頭には、十の角があつたが、そのほ

かに一つの角が出てきたので、この角のために、三つの角が抜け落ちた。この角には目があり、また大きな事を語る口があつて、その形は、その同類のものよりも大きく見えた。ニわたしが見ていると、この角は聖徒と戦つて、彼らに勝つたが、三ついに日の老いたる者がきて、いと高き者の聖徒のために審判をおこなつた。そしてその時がきて、この聖徒たちは国を受けた。

二三 彼はこう言つた、

『第四の獣は地上の第四の国である。

これはすべての国と異なつて、

全世界を併合し、

これを踏みつけ、かつ打ち砕く。

二十四の角はこの国から起る十人の王である。

その後またひとりの王が起る。

彼は先の者と異なり、

かつ、その三人の王を倒す。

三五 彼は、いと高き者の聖徒を出し、

かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。

彼はまた時と律法を変えようと望む。

聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、

彼の手にわたされる。

二六 しかし審判が行われ、

彼の主権は奪われて、

永遠に滅び絶やされ、

二七 国と主権と全天下の国々の権威とは、

いと高き者の聖徒たる民に与えられる。

彼らの国は永遠の国であつて、

諸国の者はみな彼らに仕え、かつ従う。』

二八 その事はここで終つた。われダニエルは、これを思いまわし

て、非常に悩み、顔色も変つた。しかし、わたしはこの事を心に

留めた。』

第八章

一 われダニエルは先に幻を見たが、後またベルシヤザル王の治世の第三年に、一つの幻がわたしに示された。ニその幻を見たのは、エラム州の首都スサにいた時であつて、ウライ川のほとりにおいてであつた。ニわたしが目をあげて見ると、川の岸に一匹の雄羊が立つていた。これに二つの角があつて、その角は共に長かつたが、一つの角は他の角よりも長かつた。その長いのは後に伸びたのである。四わたしが見ていると、その雄羊は、西、北、南にむかつて突撃したが、これに当ることのできる獣は一匹もなく、またその手から救い出すことのできるものもなかった。これはその心のままにふるまい、みずから高ぶつていた。五わたしがこれを考え、見ていると、一匹の雄やぎが、全地のお

もてを飛びわたつて西からきたが、その足は土を踏まなかつた。このやぎには、目の間に著しい一つの角があつた。六この者は、さきにわたしが川の岸に立つてゐるのを見た、あの二つの角のある雄羊にむかつてきて、激しく怒つてこれに走り寄つた。セわたしが見ていると、それが雄羊に近寄るや、これにむかつて怒りを発し、雄羊を撃つて、その二つの角を砕いた。雄羊には、これに当る力がなかつたので、やぎは雄羊を地に打ち倒して踏みつけた。また、その雄羊を、やぎの力から救いうる者がなかつた。ハこうして、その雄やぎは、はなはだしく高ぶつたが、その盛んになつた時、あの大きな角が折れて、その代りに四つの著しい角が生じ、天の四方に向かつた。

九その角の一つから、一つの小さい角が出て、南に向かい、東に向かい、麗しい地に向かつて、はなはだしく大きくなり、一〇天の衆群に及ぶまでに大きくなり、星の衆群のうちの數個を地に投げ下して、これを踏みつけ、一一またみずから高ぶつて、その衆群の主に敵し、その常供の燔祭を取り除き、かつその聖所を倒した。一二そしてその衆群は、罪によつて、常供の燔祭と共に、これにわたされた。その角はまた真理を地に投げうち、ほしいままにふるまつて、みずから榮えた。一三それから、わたしはひとりの聖者の語つてゐるのを聞いた。またひとりの聖者があつて、その語つてゐる聖者にむかつて言つた、「常供の燔祭と、荒すことをなす罪と、聖所とその衆群がわたされて、足の下に

踏みつけられることについて、幻にあらわれたことは、いつまでだろうか」と。二四彼は言つた、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」。

二五われダニエルはこの幻を見て、その意味を知ろうと求めていた時、見よ、人のように見える者が、わたしの前に立つた。二六わたしはウライ川の兩岸の間から人の声が出て、呼ばわるのを聞いた、「ガブリエルよ、この幻をその人に悟らせよ」。二七すると彼はわたしの立つてゐる所にきた。彼がきたとき、わたしは恐れて、ひれ伏した。しかし、彼はわたしに言つた、「人の子よ、悟りなさい。この幻は終りの時にかかわるものです」。

二八彼がわたしに語つてゐた時、わたしは地にひれ伏して、深い眠りに陥つたが、彼はわたしに手を触れ、わたしを立てて、一九言つた、「見よ、わたしは憤りの終りの時に起るべきことを、あなたに知らせよう。それは定められた終りの時にかかわるものであるから。二〇あなたが見た、あの二つの角のある雄羊は、メデアとペルシャの王です。二一また、かの雄やぎはギリシャの王です、その目の間の大きな角は、その第一の王です。二二またその角が折れて、その代りに四つの角が生じたのは、その民から四つの国が起るのです。しかし、第一の王のような勢力はない。二三彼らの国の終りの時になり、罪びとの罪が満ちるに及んで、ひとりの王が起るでしょう。その顔は猛悪で、彼はなぞを解き、二四その勢力は盛んであつて、恐ろしい破壊をなし、そのなすこと

る成功して、有力な人々と、聖徒である民を滅ぼすでしょう。ニ
五彼は悪知恵をもつて、偽りをその手におこない遂げ、みずから
心に高ぶり、不意に多くの人を打ち滅ぼし、また君の君たる者に
敵するでしょう。しかし、ついに彼は人手によらずに滅ぼされ
るでしょう。ニ六先に示された朝夕の幻は真実です。しかし、あ
なたはその幻を秘密にしておかなければならない。これは多くの
の日の後にかかわる事だから。

ニモわれダニエルは疲れはてて、数日の間、病みわずらったが、後
起きて、王の事務を執った。しかし、わたしはこの幻の事を思っ
て驚いた。またこれを悟ることができなかった。

第九章

一メディアびとアハシエロスの子ダリヨスが、カルデヤびとの
王となったその元年、ニすなわちその治世の第一年に、われダニ
エルは主が預言者エレミヤに臨んで告げられたその言葉によ
り、エルサレムの荒廃の終るまでに経ねばならぬ年の数は七十
年であることを、文書によって悟った。

三それでわたしは、わが顔を主なる神に向け、断食をなし、荒布
を着、灰をかぶつて祈り、かつ願い求めた。四すなわちわたしは、
わが神、主に祈り、さんげして言った、「ああ、大いなる恐るべ
き神、主、おのれを愛し、おのれの戒めを守る者のために契約を

保ち、いつくしみを施される者よ、五われわれは罪を犯し、悪を
おこない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒め
と、おきてを離れました。六われわれはまた、あなたのしもべな
る預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、君た
ち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いま
せんでした。七主よ、正義はあなたのものですが、恥はわれわれ
に加えられて、今日のような有様です。すなわちユダの人々、エ
ルサレムの住民および全イスラエルの者は、近き者も、遠き者
もみな、あなたが追いやられたすべての国々で恥をこうむりま
した。これは彼らがあなたにそむいて犯した罪によるのです。
八主よ、恥はわれわれのもの、われわれの王たち、君たちおよび
先祖たちのものです。これはわれわれがあなたにむかつて罪を
犯したからです。九あわれみと、ゆるしはわれわれの神、主のも
のです。これはわれわれが彼にそむいたからです。一〇またわ
れわれの神、主のみ声に聞き従わず、主がそのしもべ預言者たち
によって、われわれの前に賜わった律法を行わなかったからで
す。二まことにイスラエルの人々は皆あなたの律法を犯し、離
れ去つて、あなたのみ声に聞き従わなかったので、神のしもべ
モーセの律法にしろされたのろいと誓いが、われわれの上に注
ぎかかりました。これはわれわれが神にむかつて罪を犯したか
らです。三すなわち神は大いなる災をわれわれの上にくだし
て、さきにわれわれと、われわれを治めたつかさたちにむかつて

告げられた言葉を実行されたのです。あのエルサレムに臨んだような事は、全天下にいまだかつてなかった事です。一三モーセの律法にしろされたように、この災はすべてわれわれに臨みましたが、なわれわれの神、主の恵みを請い求めることをせず、その不義を離れて、あなたの真理を悟ることをもしませんでした。一四それゆえ、主はこれを心に留めて、災をわれわれに下されたのです。われわれの神、主は、何事をされるにも、正しくあらせられます。ところが、われわれはそのみ声に聞き従わなかったのです。一五われわれの神、主よ、あなたは強きみ手をもつて、あなたの民をエジプトの地から導き出して、今日のように、み名をあげられました。われわれは罪を犯し、よこしまなふるまいをしました。一六主よ、どうぞあなたが、これまで正しいみわざをなされたように、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山から、あなたの怒りと憤りを取り去ってください。これはわれわれの罪と、われわれの先祖の不義のために、エルサレムと、あなたの民が、われわれの周囲の者の物笑いとなつたからです。一七それゆえ、われわれの神よ、しもべの祈と願いを聞いてください。主よ、あなたご自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせてください。一八わが神よ、耳を傾けて聞いてください。目を開いて、われわれの荒れたさまを見、み名をもつてとなえられる町を、ごらんください。われわれがあなたの前に祈をささげるのは、われわれの義によるのでは

なく、ただあなたの大きいなるあわれみによるのです。一九主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。あなたの町と、あなたの民は、み名をもつてとなえられているからです」。

二〇わたしがこう言つて祈り、かつわが罪とわが民イスラエルの罪をさんげし、わが神の聖なる山のために、わが神、主の前に願いをしていたとき、二三すなわちわたしが祈の言葉を述べていたとき、わたしが初めに幻のうちに見た、かの人ガブリエルは、すみやかに飛んできて、夕の供え物をささげるころ、わたしに近づき、二三わたしに告げて言つた、「ダニエルよ、わたしは今あなたに、知恵と悟りを与えるためにきました。二三あなたが祈を始めたとき、み言葉が出たので、それをあなたに告げるためにきたのです。あなたは大きい愛せられている者です。ゆえに、このみ言葉を考えて、この幻を悟りなさい。

二四あなたの民と、あなたの聖なる町については、七十週が定められています。これはとがを終らせ、罪に終りを告げ、不義をあらがない、永遠の義をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐためです。二五それゆえ、エルサレムを建て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六十二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかふ不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもつて、建て直さ

れるでしよう。二六その六十二週しゅうの後にメシヤは断たれるでしよう。ただし自分のためにはありません。またきたるべき君の民は、町と聖所とを滅ぼすでしよう。その終りは洪水のよのうに臨むでしよう。そしてその終りまで戦争が続き、荒廃は定められています。ミモ彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしよう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしよう。また荒す者が憎むべき者の翼に乗つて来るでしよう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者の上に注がれるのです」。

第一〇章

一ペルシヤの王クロスの第三年に、ベルテシヤザルと名づけられたダニエルに、一つの言葉が啓示されたが、その言葉は真実であり、大いなる戦いを意味するものであった。彼はその言葉に心を留め、その幻を悟つた。

二そのころ、われダニエルは三週の間、悲しんでいた。ミすなわち三週間の全く満ちるまでは、うまい物を食べず、肉と酒とを口にせず、また身に油を塗らなかつた。四正月の二十四日に、わたしチグリズという大川の岸に立っていたとき、五目をあげて望み見ると、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、ウパズの金の帯を腰にしていた。六そのからだは緑柱石のごとく、その

顔は電光のごとく、その目は燃えたいまつのごとく、その腕と足は、みがいた青銅のように輝き、その言葉の声は、群衆の声のようであった。七この幻を見た者は、われダニエルのみであつて、わたしと共にいた人々は、この幻を見なかつたが、彼らは大いにおののいて、逃げかくれた。ハそれでわたしひとり残つて、この大いなる幻を見たので、力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく變つて、全く力がなくなつた。九わたしはその言葉の声を聞いたが、その言葉の声を聞いたとき、顔を伏せ、地にひれ伏して、深い眠りに陥つた。

一〇見よ、一つの手があつて、わたしに触れたので、わたしは震えながらひざまずき、手をつくとき、二彼はわたしに言つた、「大いに愛せられる人ダニエルよ、わたしがあなたに告げる言葉に心を留め、立ちあがりなさい。わたしは今あなたのもとにつかわされたのです」。彼がこの言葉をわたしに告げているとき、わたしは震えながら立ちあがつた。三すると彼はわたしに言つた、「ダニエルよ、恐れるに及ばない。あなたが悟ろうと心をこめ、あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉は、すでに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。ミペルシヤの国の君が、二十一日の間わたしの前に立ちふさがつたが、天使の長のひとりであるミカエルがきて、わたしを助けたので、わたしは、彼をペルシヤの国の君と共に、そこに残しておき、一四末の日に、あなたの民に臨まんとする事

を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、なおきたるべき日にかかわるものです」。

「五 彼がこれらの言葉を、わたしに述べていたとき、わたしは、地にひれ伏して黙っていたが、一六 見よ、人の子のような者が、わたしのくちびるにさわったので、わたしは口を開き、わが前に立っている者に語って言った、「わが主よ、この幻によつて、苦しみがわたしに臨み、全く力を失いました。一七 わが主のしもべは、どうしてわが主と語ることができましょう。わたしは全く力を失い、息も止まるばかりです」。

一八 人の形をした者は、再びわたしにさわり、わたしを力づけて、一九 言った、「大いに愛せられる人よ、恐れるには及ばない。安心しなさい。心を強くし、勇気を出しなさい」。彼がこう言ったとき、わたしは力づいて言った、「わが主よ、語ってください。さい。あなたは、わたしに力をつけてくださったから」。二〇 そこで彼は言った、「あなたは、わたしがなんのためにきたかを知っていますか。わたしは、今帰っていつて、ペルシヤの君と戦おうとしているのです。彼との戦いがすむと、ギリシヤの君があらわれるでしょう。二一 しかしわたしは、まず真理の書に記されている事を、あなたに告げよう。わたしを助けて、彼らと戦う者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはありません」。

第一章

一 わたしはまたメディアびとダリヨスの元年に立つて彼を強め、彼を力づけたことがあります。

二 わたしは今あなたに真理を示そう。見よ、ペルシヤになお三人の王が起るでしょう。その第四の者は、他のすべての者にまさつて富み、その富によつて強くなつたとき、彼はすべてのものを動員して、ギリシヤの国を攻めます。三 またひとりの勇ましい王が起り、大いなる権力をもつて世を治め、その意のままに事をなすでしょう。四 彼が強くなつたとき、その国は破られ、四方に分かたれます。それは彼の子孫に帰せず、また彼が治めたほどの権力もなく、彼の国は抜き取られて、これら以外の者どもに帰するでしょう。

五 南の王は強くなります。しかしその將軍のひとり、彼にまさつて強くなり、権力をふるいます。その権力は、大いなる権力です。六年を経て後、彼らは縁組をなし、南の王の娘が、北の王にきて、和親をはかります。しかしその女は、その腕の力を保つことができず、またその王も、その子も立つことができません。その女と、その従者と、その子およびその女を獲た者とは、わたされるでしょう。

七 そのころ、この女の根から、一つの芽が起つて彼に代り、北の王の軍勢にむかつてきて、その城に討ち入り、これを攻めて勝つ

でしよう。ハ彼はまた彼らの神々、鑄像および金銀の貴重な器物を、エジプトに携え去り、そして数年の間、北の王を討つことを控えます。九その後、北の王は、南の王の国に討ち入るが、自分の国に帰るでしよう。

一〇その子らはまた憤激して、あまたの大軍を集め、進んで行つて、みなぎりあふれ、通り過ぎるが、また行つて、その城にまで攻め寄せるでしよう。一一そこで南の王は、大いに怒り、出てきて北の王と戦います。彼は大軍を起すけれども、その軍は相手の手にわたされるでしよう。一二彼がその軍を打ち破つたとき、その心は高ぶり、数万人を倒します。しかし、勝つことはありません。一三それは北の王がまた初めよりも大いなる軍を起し、数年の後、大いなる軍勢と多くの軍需品をもつて、攻めて来るからです。

一四そのころ多くの者が起つて、南の王に敵します。またあまたの民のうちのあらくれ者が、みずから高ぶつて事をなし、幻を成就しようとするが失敗するでしよう。一五こうして北の王がきて、壘を築き、堅固な町を取るが、南の王の力は、これに立ち向かうことができず、またそのえり抜きの民も、これに立ち向かう力がありません。一六これに攻めて来る者は、その心のままに事をなし、その前に立ち向かうことのできる者はなく、彼は麗しい地に立ち、その地は全く彼のために荒されます。一七彼は全国の力をもつて討ち入ろうと、その顔を向けるが、相手と仲直

りをし、その娘を与えて、その国を取ろうとします。しかし、その事は成らず、また彼の利益にはならないでしよう。一八その後、彼は顔を海沿いの国々に向けて、その多くのものを取ります。しかし、ひとりの大將があつて、彼が与えた恥辱をそそぎ、その恥辱を彼の上に返します。一九こうして彼は、その顔を自分の国の要害に向けるが、彼はつまずき倒れて消えうせるでしよう。

二〇彼に代つて起る者は、栄光の国に人をつかわして、租税を取り立てさせるでしよう。しかし彼は、怒りにも戦いにもよらず、数日のうちに滅ぼされます。二一彼に代つて起る者は、卑しむべき者であつて、彼には、王の尊厳が与えられず、彼は不意にきて、巧言をもつて国を獲るでしよう。二三洪水のような軍勢は、彼の前に押し流されて敗られ、契約の君たる者もまた敗られるでしよう。二四彼は、これと同盟を結んで後、偽りのおこないをなし、わずかな民をもつて強くなり、二五不意にその州の最も肥えた所に攻め入り、その父も、その父の父もしなかつた事をおこない、その奪つた物、かすめた物および財宝を、人々の中に散らすでしよう。彼はまた計略をめぐらして、堅固な城を攻めるが、ただし、それは時の至るまでです。二六彼はその勢力と勇気とを奮い起し、大軍を率いて南の王を攻めます。南の王もまたみずから奮い、はなはだ大いなる強力な軍勢をもつて戦います。しかし、彼に対して、陰謀をめぐらす者があるので、これに立ち向

かうことができません。三六すなわち彼の食物を食べる者たちが、彼を滅ぼします。そして、その軍勢は押し流されて、多くの者が倒れ死ぬでしょう。三七このふたりの王は、害を与えようと心にはかり、ひとつ食卓に共に食して、偽りを語るが、それは成功しません。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。三八彼は大きな財宝をもって、自分の国に帰るでしょう。しかし、彼の心は聖なる契約にそむき、ほしいままに事をなして、自分の国に帰ります。

三九定まった時になつて、彼はまた南に討ち入ります。しかし、この時は前の時のようではありません。四〇それはキツテムの船が、彼に立ち向かつて来るので、彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対して憤り、事を行うでしょう。彼は帰って行って、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。四一彼から軍勢が起つて、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。四二彼は契約を破る者どもを、巧言をもってそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅く立つて事を行います。四三民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり、火に焼かれ、捕われ、かすめられなどして倒れます。四四その倒れるとき、彼らは少しの助けを獲ます。また多くの人が、巧言をもって彼らにくみするでしょう。四五また賢い者のうちのある者は、終りの時まで、自分を練り、清め、白くするために

倒れるでしょう。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。

三六この王は、その心のままに事をおこない、すべての神を越えて、自分を高くし、自分を大いにし、神々の神たる者にむかつて、驚くべき事を語り、憤りのやむ時まで栄えるでしょう。これは定められた事が成就するからです。三七彼はその先祖の神々を顧みず、また婦人の好む者も、いかなる神をも顧みないでしょう。彼はすべてにまさつて、自分を大いなる者とするからです。三八彼はこれらの者の代りに、要害の神をあがめ、金、銀、宝石、および宝物をもって、その先祖たちの知らなかつた神をあがめ、三九異邦の神の助けによつて、最も強固な城にむかつて、事をなすでしょう。そして彼を認める者には、榮譽を増し与え、これに多くの人を治めさせ、賞与として土地を分け与えるでしょう。

四〇終りの時になつて、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船をもつて、つむじ風のように彼を攻め、国々にはいつていつて、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。四一彼はまた美しい国にはいります。また彼によつて、多くの者が滅ぼされます。しかし、エドム、モアブ、アンモンびとらのうちのおもな者は、彼の手から救われましょう。四二彼は国々にその手を伸ばし、エジプトの地も免れません。四三彼は金銀の財宝と、エジプトのすべての宝物を支配し、リビヤびと、エチオピア

ヤびとは、彼のあとに従います。四四しかし東と北からの知らせが彼を驚かし、彼は多くの人を滅ぼし絶やそうと、大いなる怒りをもって出て行きます。四五彼は海と麗しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょう。しかし、彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう。

第二章

一その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。ニまた地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。三賢い者は、大空の輝きのように輝き、また多くの人を義に導く者は、星のようになつて永遠にいたるでしょう。四ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう。五そこで、われダニエルが見ていると、ほかにまたふたりの者があつて、ひとりは川のかなたの岸に、ひとりは川のかなたの岸に立っていた。六わたしは、かの亜麻布を着て川の水の上にいる人

にむかつて言った、「この異常なできごとは、いつになつて終るでしょうか」と。七かの亜麻布を着て、川の水の上にいた人が、天に向かつて、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうと言ふのを、わたしは聞いた。八わたしはこれを聞いたけれども悟れなかつた。わたしは言った、「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしようか」。九彼は言った、「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終りの時まで秘し、かつ封じておかれます。一〇多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう。一一常供の燔祭が取り除かれ、荒す憎むべきものが立てられる時から、千二百九十日が定められてゐる。一二待つていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。一三しかし、終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定められた日の終りに立つて、あなたの分を受けらるでしょう」。

ホセア書

第一章

「ユダヤの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世、イスラエルの王ヨアシの子ヤラバアムの世に、ベエリの子ホセアに臨んだ主の言葉。

「主が最初ホセアによって語られた時、主はホセアに言われた、
「行つて、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受けいれよ。
この国は主にそむいて、はなはだしい淫行をなしているからである」。
そこで彼は行つてデブライムの娘ゴメルをめとつた。
彼女はみごもつて男の子を産んだ。

四 主はまた彼に言われた、「あなたはその子の名をエズレルと名づけよ。しばらくしてわたしはエズレルの血のためにエヒウの家を罰し、イスラエルの家の国を滅ぼすからである。五その日、わたしはエズレルの谷でイスラエルの弓を折る」と。

六ゴメルはまたみごもつて女の子を産んだ。主はホセアに言われた、「あなたはその名をロルハマと名づけよ。わたしはもはやイスラエルの家をあわれまず、決してこれをゆるさないからである。セしかし、わたしはユダの家をあわれみ、その神、主によってこれを救う。わたしは弓、つるぎ、戦争、馬および騎兵によって救うのではない」と。

ハゴメルはロルハマを乳離れさせたとき、またみごもつて男の子を産んだ。九主は言われた、「その子の名をロアンミと名づけよ。あなたがたは、わたしの民ではなく、わたしは、あなたがたの神ではないからである」。

一〇しかしイスラエルの人々の数は海の砂のように量ること、も数えることもできないほどになつて、さきに彼らが「あなたがたは、わたしの民ではない」と言われたその所で、「あなたがたは生ける神の子である」と言われるようになる。二そしてユダの人々とイスラエルの人々は共に集まり、ひとりの長を立てて、その地からのぼつて来る。エズレルの日は大いなるものとなる。

第二章

一あなたがたの兄弟に向かつては「アンミ(わが民)」と言い、あなたがたの姉妹に向かつては「ルハマ(あわれまれる者)」と言え。

二「あなたがたの母とあげつらえ、あげつらえ——
彼女はわたしの妻ではない、
わたしは彼女の夫ではない——

そして彼女にその顔から淫行を除かせ、
その乳ぶさの間から姦淫を除かせよ。

三そうでなければ、

わたしは彼女の着物をはいで裸にし、

その生れ出た日のようにし、

また荒野のようにし、

かわききった地のようにし、

かわきによって彼女を殺す。

四わたしはその子らをあわれまない、

彼らは淫行の子らだからである。

五 彼らの母は淫行をなし、

彼らははらんだ彼女は恥ずべきことを行った。

彼女は言った、

『わたしはわが恋人たちについて行こう。

彼らはパンと水と羊の毛と麻と油と飲み物とを、

わたしに与える者である』と。

六 それゆえ、わたしはいばらで彼女の道をふさぎ、

かきをたてて、彼女には

その道がわからないようにする。

七 彼女はその恋人たちのあとを慕って行く、

しかし彼らに追いつくことはない。

彼らを探ねる、しかし見いだすことはない。

そこで彼女は言う、

『わたしは行って、さきの夫に帰ろう。

あの時は今よりもわたしによかったから』と。

八 彼女に穀物と酒と油とを与えた者、

またバアルのために用いた銀と金とを

多く彼女に与えた者は、

わたしであつたことを彼女は知らなかった。

九 それゆえ、わたしは穀物をその時になつて奪い、

ぶどう酒をその季節になつて奪い、

また彼女の裸をおおうために用いる

羊の毛と麻とを奪い取る。

一〇 わたしは今、彼女のみだらなことを

その恋人たちの目の前にあらわす。

だれも彼女をわたしの手から救う者はない。

一一 わたしは彼女のすべての楽しみ、

すなわち祝、新月、安息日、

すべての祭をやめさせる。

一二 わたしはまた彼女が先に『これはわたしの恋人らが、わ

たしに与えた報酬だ』と言つた彼女の

ぶどうの木と、いちじくの木とを荒し、

これを林とし、

野の獣にこれを食わせる。

一三 また彼女が耳輪と宝石で身を飾り、

その恋人たちを慕って行って、わたしを忘れ、

香をたいて仕えたバアルの祭の日のために、

わたしは彼女を罰すると主は言われる。

一四それゆえ、見よ、わたしは彼女をいぎなつて、荒野に導いて行き、ねんごろに彼女に語らう。

一五その所でわたしは彼女にそのぶどう畑を与え、

アコルの谷を望みの門として与える。

その所で彼女は若かった日のように、

エジプトの国からのぼつて来た時のように、

答えるであらう。

一六主は言われる、その日には、あなたはわたしを『わが夫』と呼び、もはや『わがバアル』とは呼ばない。一七わたしはもろもろのバアルの名を彼女の口から取り除き、重ねてその名をとなえることのないようにする。一八その日には、わたしはまたあなたのために野の獣、空の鳥および地の這うものと契約を結び、また弓と、つるぎと、戦争とを地から断つて、あなたを安らかに伏させる。一九またわたしは永遠にあなたとちぎりを結び、すなわち正義と、公平と、いつくしみと、あわれみとをもつてちぎりを結び、二〇わたしは真実をもつて、あなたとちぎりを結び、そしてあなたは主を知るであらう。

二一主は言われる、

その日わたしは天に答え、

天は地に答える。

二二地は穀物と酒と油とに答え、

またこれらのものはエズレルに答える。

二三わたしはわたしのために彼を地にまき、

あわれまれぬ者をあわれみ、

わたしの民でない者に向かつて、

『あなたはわたしの民である』と言い、

彼は『あなたはわたしの神である』と言う。

第三章

一主はわたしに言われた、「あなたは再び行つて、イスラエルの人々が他の神々に転じて、干ぶどうの菓子愛するにもかかわらず、主がこれを愛せられるように、姦夫に愛せられる女、姦淫を行う女を愛せよ」と。二そこでわたしは銀十五シケルと大麦一ホル半とをもつて彼女を買い取った。三わたしは彼女に言った、「あなたは長くわたしの所にとどまつて、淫行をなさず、また他の人のものとなつてはならない。わたしもまた、あなたにそうしよう」と。四イスラエルの子らは多くの日の間王なく、君なく、犠牲なく、柱なく、エポデおよびテラピムもなく過す。五そしてその後イスラエルの子らは帰つて来て、その神、主と、その王ダビデとをたずね求め、終りの日におののいて、主とその恵みに向かつて来る。

第四章

ーイスラエルの人々よ、

主の言葉を聞け。

主はこの地に住む者と争われる。

この地には真実がなく、愛情がなく、

また神を知ることもないからである。

ニただのろいと、偽りと、人殺しと、

盗みと、姦淫することのみで、

人々は皆荒れ狂い、

殺害に殺害が続いている。

ミそれゆえ、この地は嘆き、これに住む者はみな、

野の獣も空の鳥も共に衰え、

海の魚さえも絶えはてる。

四しかし、だれも争ってはならない、

責めてはならない。

祭司よ。わたしの争うのは、あなたと争うのだ。

五あなたは昼つまりずき、

預言者もまたあなたと共に夜つまりずく。

わたしはあなたの母を滅ぼす。

六わたしの民は知識がないために滅ぼされる。

あなたは知識を捨てたゆえに、

わたしもあなたを捨てて、わたしの祭司としない。

あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、

わたしもまたあなたの子らを忘れる。

七彼らは大きくなるにしたがつて、

ますますわたしに罪を犯したゆえ、

わたしは彼らの栄えを恥に変える。

八彼らはわが民の罪を食いものにし、

その罪を犯すことをせつに願っている。

九それゆえ祭司も民と同じようになる。

わたしはそのわざのために彼らを罰し、

そのおこないのために彼らに報いる。

一〇彼らは食べても飽くことなく、

淫行をなしてもその数を増すことがない。

彼らは主を捨てて、淫行を愛したからである。

二酒と新しい酒とは思慮を奪う。

三わが民は木に向かつて事を尋ねる。

またそのつえは彼らに事を示す。

これは淫行の霊が彼らを迷わしたからである。

彼らはその神を捨てて淫行をなした。

三彼らは山々の頂で犠牲をささげ、

丘の上、かしの木、柳の木、

テレビンの木の下で供え物をささげる。

これはその木陰がこちよいためである。
それゆえ、あなたがたの娘は淫行をなし、
あなたがたの嫁は姦淫を行う。

「四わたしはあなたがたの娘が淫行をしても罰しない。
またあなたがたの嫁が姦淫を行っても罰しない。
男たちみずから遊女と共に離れ去り、
宮の遊女と共に犠牲をささげているからである。
悟りのない民は滅びる。」

「五イスラエルよ、あなたは淫行をなしても、
ユダに罪を犯させてはならない。
ギルガルへ行つてはならない。」

ベテアベンにのぼつてはならない。

また「主は生きておられる」と言つて
誓つてはならない。

「六イスラエルは強情な雌牛のように強情である。
いま、主は小羊を広い野に放つようにして、
彼らを養うことができようか。」

「七エフライムは偶像に結びつらなつた。
そのなすにまかせよ。」

「八彼らは酒宴のとりことなり、
淫行にふけています。
彼らはその光栄よりも恥を愛する。」

「九風はその翼に彼らを包んだ。
彼らはその祭壇のゆえに恥を受ける。」

第五章

「祭司たちよ、これを聞け、
イスラエルの家よ、心をとめよ、
王の家よ、耳を傾けよ、
さばきはあなたがたに臨む。」

あなたがたはミツパにわなを設け、
タボルの上に網を張つたからだ。

「二彼らはシツテムの穴を深くしたが、
わたしは彼らをことごとく懲らしめる。」

「三わたしはエフライムを知っている。」

イスラエルはわたしに隠れることがない。
エフライムよ、あなたは今淫行をなし、
イスラエルは汚された。

「四彼らのおこないは彼らを神に帰らせない。
それは淫行の霊が彼らのうちにあつて、
主を知ることができないからだ。」

「五イスラエルの誇はその顔に向かつて証言している。
エフライムはその不義によつてつまずき、

ユダもまた彼らと共につまづく。

六 彼らは羊の群れ、牛の群れを携えて行つて、主を求めても、主に会うことはない。

主は彼らから離れ去られた。

七 彼らは主にむかつて貞操を守らず、

ほかの者の子を産んだ。

新月は彼らをその田畑と共に滅ぼす。

ハギベアで角笛を吹き、

ラマでラツパを鳴らし、

ベテアベンで呼ばわり叫べ。

ベニヤミンよ、おののけ。

八 エフライムは刑罰の日に荒れすたれる。

わたしはイスラエルの部族のうちに、必ず起るべき事を知らせる。

一〇 ユダの君たちは境を移す者のようになった。

わたしはわが怒りを水のように彼らの上に注ぐ。

二 エフライムは甘んじて、

むなししいものに從つて歩んだゆえ、

さばきを受けて、しえたげられ、打ちひしがれる。

三 それゆえ、わたしはエフライムには、しみのように、

ユダの家には腐れのようになる。

四 エフライムはおのれの病を見、

ユダはおのれの傷を見たとき、

エフライムはアツスリヤに行き、

大王に人をつかわした。

しかし彼はあなたがたをいやすことができない。

また、あなたがたの傷をなおすことができない。

一四 わたしはエフライムに対しては、ししのようになり、

ユダの家に対しては若きししのようになる。

わたしは、わたしこそ、かき裂いて去り、

かすめて行くが、だれも救う者はない。

一五 わたしは彼らがその罪を認めて、

わが顔をたずね求めるまで、

わたしの所に帰つていよう。

彼らは悩みによって、わたしを尋ね求めて言う、

第六章

一 「さあ、わたしたちは主に帰ろう。

主はわたしたちをかき裂かれたが、またいやし、

わたしたちを打たれたが、

また包んでくださるからだ。

二 主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、

三日目にわたしたちを立たせられる。

わたしたちはみ前で生きる。

三 わたしたちは主を知ろう、

せつに主を知ること求めよう。

主はあしたの光のように必ず現れいで、

冬の雨のように、わたしたちに臨み、

春の雨のように地に潤される」。

四 エフライムよ、わたしはあなたに何をしようか。

ユダよ、わたしはあなたに何をしようか。

あなたがたの愛はあしたの雲のごとく、

また、たちまち消える露のようなものである。

五 それゆえ、わたしは預言者たちによつて

彼らを切り倒し、

わが口の言葉をもつて彼らを殺した。

わがさばきは現れ出る光のようだ。

六 わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。

燔祭よりもむしろ神を知ingことを喜ぶ。

七 ところが彼らはアダムで契約を破り、

かしこでわたしにそむいた。

ハギレアデは悪を行う者の町で、

血の足跡で満たされている。

九 盗賊が人を待ち伏せするように、

祭司たちは党を組み、

シケムへ行く道で人を殺す。

このように彼らは悪しき事を行う。

一〇 わたしはイスラエルの家に恐るべき事を見た。

かしこでエフライムは淫行をなし、

イスラエルは汚された。

一二 ユダよ、あなたのためににも刈入れが定められている。

わたしがわが民の繁栄を回復するとき、

第七章

一 わたしがイスラエルをいやすとき、

エフライムの不義と、

サマリヤの悪しきわざとは現れる。

彼らは偽りをおこない、

内では盗びとが押し入り、

外では山賊の群れが襲いきたる。

二 しかし、彼らはわたしは彼らのすべての悪を

覚えていることを悟らない。

三 今、そのわざは彼らを囲んで、

わたしの顔の前にある。

四 彼らはその悪をもつて王を喜ばせ、

その偽りをもつて君たちを喜ばせる。

四 彼らはみな姦淫を行う者で、パンを焼く者が熱くする炉のようだ。パンを焼く者は、ねり粉をこねてから、それがふくれるまで、しばらく、火をおこす事をしないだけだ。

五 われわれの王の日に、つかさたちは酒の熱によつて病みわづらい、王はあざける者と共に手を伸べた。

六 彼らは陰謀をもつてその心を炉のように燃やす。

その怒りは夜通しくすぶり、朝になると炎のように燃える。

七 彼らは皆、炉のように熱くなつて、

そのさばきびとを焼き滅ぼす。

そのもろもろの王は皆たおれる。

彼らの中にはわたしを呼ぶ者がひとりもない。

ハ エフライムはもろもろの民の中に入り混じる。

エフライムは火にかけて、かえさない菓子である。

九 他国人らは彼の力を食い尽すが、

彼はそれを知らない。

しらがが混じつてはえても、それを悟らない。

一〇 イスラエルの誇は自らに向かつて証言している、彼らはこのもろもろの事があつても、

なおその神、主に帰らず、また主を求めない。

二 エフライムは知恵のない愚かな、はどのような。彼らはエジプトに向かつて呼び求め、

またアツスリヤへ行く。

三 彼らが行くとき、わたしは彼らの上に網を張つて、空の鳥のように引き落とし、

その悪しきおこないのゆえに、彼らを懲らしめる。

四 わざわいなるかな、彼らはわたしを離れて迷い出た。

滅びは彼らに臨む。

彼らがわたしに向かつて罪を犯したからだ。

わたしは彼らをあがなおうと思うが、

彼らはわたしに逆らつて偽りを言う。

五 彼らは真心をもつてわたしを呼ばず、

ただ床の上で悲しみ叫ぶ。

彼らは穀物と酒のためには集まるが、

わたしに逆らう。

六 わたしは彼らを教え、その腕を強くしたが、

彼らはわたしに逆らつて、悪しき事をはかる。

七 彼らはバアルに帰る。

八 彼らはあざむく弓のようだ。

九 彼らの君たちはその舌の高ぶりのために、

第八章

つるぎに倒れる。

これはエジプトの国で人々のあざけりとなる。

ーラツパをあなたの口にあてよ、

はげたかは主の家に臨む。

彼らがわたしの契約を破り、

わたしの律法を犯したからだ。

ニ彼らはわたしに向かつて叫ぶ、

「わが神よ、われわれイスラエルはあなたを知る」と。

ミイスラエルは善はしりぞけた。

敵はこれを追うであろう。

四 彼らは王を立てた、

しかし、わたしによつて立てたのではない。

彼らは君を立てた、

しかし、わたしはこれを知らない。

彼らは銀と金をもつて、

自分たちの滅びのために偶像造つた。

五 サマリヤよ、わたしはあなたの子牛を忌みきらう。

わたしの怒りは彼らに向かつて燃える。

彼らはいつになればイスラエルで

罪なき者となるであらうか。

六 これは工人の作つたもので、神ではない。

サマリヤの子牛は砕けて粉となる。

七 彼らは風をまいて、つむじ風を刈り取る。

立つてゐる穀物は穂を持たず、また実らない。

たとい実つても、他国人がこれを食い尽す。

ハ イスラエルはのまれた。

彼らは諸国民の間にあつて、

すでに無用な器のようになった。

九 彼らはひとりさまよう野のろばのように、

アッスリヤにのぼつて行つた。

エフライムは物を贈つて恋人を得た。

〇 たとい彼らが国々に物を贈つて同盟者を得ても、

わたしはまもなく彼らを集める。

彼らはしばらくにして、

王や君たちに油をそそぐことをやめる。

ニ エフライムは多くの祭壇を造つて罪を犯したゆえ、

これは彼には罪を犯すための祭壇となった。

三 わたしは彼のために、

あまたの律法を書きしるしたが、

これはかえつて怪しい物のように思われた。

ニ 三 彼らは犠牲を好み、肉をささげてこれを食べる。

第九章

しかし主はこれを喜ばれない。
 今、彼らの不義を覚え、彼らの罪を罰せられる。
 彼らはエジプトに帰る。

二四 イスラエルは自分の造り主を忘れて、
 もろもろの宮殿を建てた。
 ユダは堅固な町々を多く増し加えた。
 しかしわたしは火をその町々に送って、
 もろもろの城を焼き滅ぼす。

一 イスラエルよ、
 もろもろの民のように喜びおどるな。
 あなたは淫行をなして、あなたの神を離れ、
 すべての穀物の打ち場で受ける淫行の価を愛した。
 二 打ち場と酒ぶねとは彼らを養わない。
 また新しい酒もむなしくなる。
 三 彼らは主の地に住むことなく、
 エフライムはエジプトに帰り、
 アッスリヤで汚れた物を食べる。
 四 彼らは主に向かつて酒を注がず、
 また犠牲をもって主を喜ばせず、

彼らのパンは喪におる者のパンのようで、
 すべてこれを食べる者は汚される。
 彼らのパンはただ自分の飢えを満たすため、
 主の家に、はいることはできない。
 五 あなたがたは祝の日と、主の祭の日に、
 何をしようとするのか。
 六 見よ、彼らはアッスリヤへ行く。
 エジプトは彼らを集め、
 メンピスは彼らを葬る。
 あざみは彼らの銀の宝物を所有し、
 いばらは彼らの天幕にはびこる。
 七 刑罰の日は来た。
 報いの日は来た。
 イスラエルはこれを知る。
 預言者は愚かな者、
 霊に感じた人は狂った者だ。
 これはあなたがたの不義が多く、
 恨みが大きいためである。
 八 預言者はわが神の民エフライムの見張人である。
 しかし預言者のすべての道には
 鳥をとる者のわながあり、
 恨みはその神の家にある。

九 彼らはギベアの日のように、
深くおのれを腐らせた。
主はその不義を覚え、その罪を罰せられる。
一〇 わたしはイスラエルを荒野のぶどうのように見、
あなたがたの先祖たちを、
いちじくの木の初めに結んだ初なりのように見た。
ところが彼らはバアル・ペオルへ行き、
身をバアルにゆだね、
彼らが愛した物と同じように憎むべき者となった。
二 エフライムの栄光は、鳥のようにとび去る。
すなわち産むことも、はらむことも、
みごもることもなくなる。
三 たとい彼らが子を育てても、
わたしはその子を奪って、残る者のないようにする。
わたしが彼らを離れるとき、彼らはわざわいだ。
三 わたしが見たように、
エフライムの子らはえじきに定められた。
エフライムはその子らを、
人を殺す者に渡さなければならない。
一四 主よ、彼らに与えてください。
あなたは何を与えられますか。
流産の胎と、かわいた乳ぶさを

第二十章

彼らに与えてください。
一五 彼らのすべての悪はギルガルにある。
わたしはかしこで彼らを憎んだ。
彼らのおこないの悪しきがゆえに、
彼らをわが家から追いだし、
重ねて愛することをしない。
その君たちはみな、反逆者である。
一六 エフライムは撃たれ、
その根は枯れて、実を結ばない。
たとい彼らが子を産んでも、
わたしはそのいつくしむ子らを殺す。
一七 彼らは聞き従わないので、
わが神はこれを捨てられる。
彼らはもろもろの国民のうちに、
さすらい人となる。

一 イスラエルは実を結ぶ茂った
ぶどうの木である。
その実を多く結ぶにしたがつて、
祭壇を増し、

その地の豊かなるにしたがって、
柱の像を麗しくした。

ニ彼らの心は偽りである。

今、彼らはその罪を負わなければならない。

主はその祭壇をこわし、

その柱の像を砕かれる。

三、今、彼らは言う、

「われわれは主を恐れないので、

われわれには王がない。

王はわれわれのために何をなしえようか」と。

四、彼らはむなしき言葉をいだし、

偽りの誓いをもって契約を結ぶ。

それゆえ、さばきは畑のうねの毒草のように現れる。

五、サマリヤの住民は、

ベテアベンの子牛のためにおののき、

その民はこれがために嘆き、

その偶像に仕える祭司たちは、

その栄光のうせたるがために泣き悲しむ。

六、その子牛はアツスリヤに携えられ、

礼物として大王にささげられ、

エフライムは恥をうけ、

イスラエルはおのれの偶像を恥じる。

七、サマリヤの王は、

水のおもての木切れのように滅ぼされる。

ハイスラエルの罪であるアベンの高き所も滅び、

いばらとあざみがその祭壇の上にはえ茂る。

その時彼らは山に向かつて、

「われわれをおおえ」と言い、

丘に向かつて「われわれの上に倒れよ」と言う。

九、イスラエルよ、

あなたはギベアの日からこのかた罪を犯した。

彼らはその所に立っていた。

戦いはギベアにおける彼らに及ばないであろうか。

○わたしは来てよこしまな民を攻め、

これを懲らしめる。

彼らがその二つの罪のために懲しめられるとき、

もろもろの民は集まって彼らを攻める。

二、エフライムはならされた若い雌牛であつて、

穀物を踏むことを好む。

わたしはその麗しい首を惜しんだ。

しかし、わたしはエフライムにくびきをかける。

ユダは耕し、

ヤコブは自分のために、まぐわをひかねばならない。

三、あなたがたは自分のために正義をまき、

第一章

いつくしみの実を刈り取り、
あなたがたの新田を耕せ。

今は主を求むべき時である。

主は来て救いを雨のように、

あなたがたに降りそそがれる。

二三あなたがたは悪を耕し、

不義を刈りおさめ、

偽りの実を食べた。

これはあなたがたが自分の戦車を頼み、

勇士の多いことを頼んだためである。

二四それゆえ、あなたがたの民の中に

いくさの騒ぎが起り、

シャルマンが戦いの日に

ベテ・アルベルを打ち破ったように、

あなたがたの城はことごとく打ち破られる。

母らはその子らと共に打ち碎かれた。

二五イスラエルの家よ、

あなたがたの大きいなる悪のゆえに、

このように、あなたがたにも行われ、

イスラエルの王は、あらしの中に全く滅ぼされる。

一わたしはイスラエルの幼い時、
これを愛した。

わたしはわが子をエジプトから呼び出した。

ニわたしは呼ばわるにしたがつて、

彼らはいよいよわたしから遠ざかり、

もろもろのバアルに犠牲をささげ、

刻んだ像に香をたいた。

三わたしはエフライムに歩むことを教え、

彼らをわたしの腕にいだいた。

しかし彼らはわたしにいやされた事を

知らなかった。

四わたしはあわれみの綱、

すなわち愛のひもで彼らを導いた。

わたしは彼らに対しては、

あごから、くびきをはずす者のようになり、

かがんで彼らに食物を与えた。

五彼らはエジプトの地に帰り、

アッスリヤびとが彼らの王となる。

彼らがわたしに帰ることを拒んだからである。

六つるぎは、そのもろもろの町にあれ狂い、

その門もんの貫かんの木きを砕くだき、その城しろの中なかに彼らかれを滅ほろぼす。
セウが民たみはわたしからそむき去さろうとしている。
それゆえ、彼らかれはくびきをかけられ、
これを除のぞきうる者ものはひとりもない。

ハエフライムよ、

どうして、あなたを捨すてることができようか。

イスラエルよ、

どうしてあなたを渡わたすことができようか。

どうしてあなたをアデマのように

することができようか。

どうしてあなたをゼボイムのように

扱あつかうことができようか。

わたしの心こころは、わたしのうちに變かわり、

わたしのあわれみは、ことごとくもえ起たっている。

かわたしはわたしの激はげしい怒いかりをあらわさない。

わたしは再びエフライムを滅ほろぼさない。

わたしは神かみであつて、人ひとではなく、

あなたのうちにいる聖せいなる者ものだからである。

わたしは滅ほろぼすために臨のぞむことをしない。

○ 彼らかれは主に從したがつて歩あゆむ。

主しゅはししのほえるように声こえを出だされる。

主しゅが声こえを出だされると、

子こらはおののきつつ西にしから來くる。

ニ 彼らかれはエジプトから鳥とりのように、

アツスリヤの地ちから、はどのように急いそいで來くる。

わたしは彼らかれをその家いえに歸かえらせると

主しゅは言いわれる。

ニ エフライムは偽いつわりをもつて、わたしを囲かこみ、

イスラエルの家いえは欺あそむきをもつて、わたしを囲かこんだ。

しかしユダはなお神かみに知しられ、

聖せいなる者ものに向むかつて真しんじつ実である。

第二章

一 エフライムはひねもす風かぜを牧ぼくし、

東風ひがしかぜを追おい、

偽いつわりと暴虐ぼうぎやくを増まし加くわえ、

アツスリヤと取引とりひきをなし、

油あぶらをエジプトに送おくつた。

ニ 主しゅはユダと争あらそい、

ヤコブをそのしわざにしたがつて罰ばつし、

そのおこないにしたがつて報むくいられる。

ミヤコブは胎たいにいたとき、その兄弟きょうだいのかかとを捕とらえ、

成人せいじんしたとき神かみと争あらそった。

四 彼は天の使と争って勝つて、
泣いてこれにあわれみを求めた。
彼はベテルで神に出会い、
その所で神は彼と語られた。
五 主は万軍の神、その名は主である。
六 それゆえ、あなたはあなたの神に帰り、
いつくしみと正しきとを守り、
つねにあなたの神を待ち望め。
七 商人はその手に偽りのはかりを持ち、
しえたげることを好む。
八 エフライムは言った、
「まことにわたしは富める者となった。
わたしは自分ために財宝を得た」と。
しかし彼のすべての富も
その犯した罪をつぐなうことはできない。
九 わたしはエジプトの国を出たときから、
あなたの神、主である。
わたしは祭の日のように、
再びあなたを天幕に住ませよう。
一〇 わたしは預言者たちに語った。
幻を多く示したのはわたしである。
わたしは預言者たちによつてたとえを語った。

第二十三章

二 もしギレアデに不義があるなら、
彼らは必ずむなしき者となる。
もし彼らがギルガルで雄牛を犠牲にささげるなら、
彼らの祭壇は畑のうねに積んだ石塚のようになる。
三 (ヤコブはアラムの地に逃げつていった。
イスラエルは妻をめとるために人に仕えた。
彼は妻をめとるために羊を飼った。)
四 主はひとりの預言者によつて、
イスラエルをエジプトから導き出し、
ひとりの預言者によつてこれを守られた。
五 エフライムはいたく主を怒らせた。
それゆえ主はその血のとがを彼の上にのこし、
そのはずかしめを彼に返される。
一 エフライムが物言えば、
人々はおののいた。
彼はイスラエルの中に自分を高くした。
しかし彼はバアルによつて罪を犯して死んだ。
二 そして彼らは今もおますます罪を犯し、
その銀をもつて自分のために像を鑄、

巧みに偶像を造る。

これは皆工人のわざである。

彼らは言う、

これに犠牲をささげよ、人々は子牛に口づけせよと。

ミそれゆえ彼らは朝の霧のように、

すみやかに消えうせる露のように、

打ち場から風に吹き去られるもみがらのように、

また窓から出て行く煙のようになる。

四わたしはエジプトの国を出てからこのかた、

あなたの神、主である。

あなたはわたしのほかに神を知らない。

わたしのほかに救う者はない。

五わたしは荒野で、またかわいた地で、

あなたを知った。

六しかし彼らは食べて飽きて、

飽きて、その心が高ぶり、わたしを忘れた。

七それゆえ、わたしは彼らに向かつて、

ししのようになり、

ひょうのように道のかたわらに潜んでうかがう。

八わたしは子を取られた熊のように彼らに出会って、

その胸をかきさき、

その所で、ししのようにこれを食い尽し、

野の獣のようにこれをかき破る。

九イスラエルよ、わたしはあなたを滅ぼす。

だがあなたが助けることができよう。

一〇あなたが助けるあなたの王は今、どこにいるのか。

あなたがかつて「わたしに王と君たちとを与えよ」と言った

あなたを保護すべき、すべてのつかさたちは

今、どこにいるのか。

一二わたしは怒りをもってあなたに王を与えた、

また憤りをもってこれを奪い取った。

一三エフライムの不義は包みおかれ、

その罪は積みたくわえられてある。

一四三子を産む女の苦しみが彼に臨む。

彼は知恵のない子である。

生れる時が来ても彼は産門にあらわれない。

一五わたしは彼らを陰府の力から、

あがなうことがあろうか。

彼らを死から、あがなうことがあろうか。

死よ、おまえの災はどこにあるのか。

陰府よ、おまえの滅びはどこにあるのか。

あわれみは、わたしの目から隠されている。

一六五たとい彼は草のように栄えても、

東風が吹いて来る。

第一章

主の風が荒野から吹き起る。
これがためにその源はかれ、その泉はかわく。
それはすべての尊い物の宝庫をかすめ奪う。
「サマリヤはその神にそむいたので、
その罪を負い、つるぎに倒れ、
その幼な子は投げ砕かれ、
そのはらめる女は引き裂かれる。」

「イスラエルよ、
あなたの神、主に帰れ。
あなたは自分の不義によつて、つまずいたからだ。
「あなたがたは言葉を携えて、主に帰つて言え、
「不義はことごとくゆるして、
よきものを受けいれてください。
わたしたちは自分のくちびるの実をささげます。
ミアツスリヤはわたしたちを助けず、
わたしたちは馬に乗りません。
わたしたちはもはや自分たちの手のわざに向かつて
『われわれの神』とは言いません。
みなしごはあなたによつて、

あわれみを得るでしょう」。
四 わたしは彼らのそむきをいやし、
喜んでこれを愛する。
わたしの怒りは彼らを離れ去つたからである。
五 わたしはイスラエルに対しては露のようになる。
かれはゆりのように花咲き、
ポプラのように根を張り、
六 その枝は茂りひろがり、
その麗しきはオリブの木のように、
そのかんばしきはレバノンのようになる。
七 彼らは帰つて来て、わが陰に住み、
その園のように栄え、
ぶどうの木のように花咲き、
そのかんばしきはレバノンの酒のようになる。
八 エフライムよ、
わたしは偶像となんの係わりがあろうか。
あなたに答え、あなたを顧みる者はわたしである。
わたしは緑のいとすぎのようだ。
あなたはわたしから実を得る。
九 知恵のある者はだれか。
その人にこれらのことを悟らせよ。
悟りある者はだれか。

その人^{ひと}にこれらのことを知らせよ。
主^{しゅ}の道^{みち}は直^{なお}く、
正^{ただ}しき者^{もの}はこれ^{これ}を歩^{あゆ}む。
しかし罪^{つみ}びとはこれにつまずく。

ヨエル書

第一章

一 ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉。

二 老人たちよ、これを聞け。

すべてこの地に住む者よ、
耳を傾けよ。

あなたがたの世、またはあなたがたの先祖の世に

このような事があつたか。

三 これをあなたがたの子たちに語り、

子たちはまたその子たちに語り、

その子たちはまたこれを後の代に語り伝えよ。

四 かみ食らういなごの残したものは、

群がるいなごがこれを食べ、

群がるいなごの残したものは、

とびいなごがこれを食べ、

とびいなごの残したものは、滅ぼすいなごがこれを食べた。

五 酔える者よ、目をさまして泣け。

すべて酒を飲む者よ、

うまい酒のゆえに泣き叫べ。

うまい酒はあなたがたの口から断たれるからだ。

六 一つの国民がわたしの国に攻めのぼつてきた。

その勢いは強く、その数は計られず、

その歯はししの歯のようで、

雌じしのきばをもっている。

七 彼らはわがぶどうの木を荒し、

わがいちじくの木を折り、

その皮をはだかにして捨てた。

その枝は白くなつた。

八 あなたがたは若い時の夫のために

荒布を腰にまどつたおとめのように泣き悲しめ。

九 素祭と灌祭とは主の家に絶え、

主に仕える祭司たちは嘆き悲しむ。

一〇 畑は荒れ、地は悲しむ。

これは穀物が荒れはて、

新しい酒は尽き、油も絶えるためである。

二 小麦および大麦のために、

農夫たちよ、恥じよ、

ぶどう作りたちよ、泣け。

畑の収穫がうせ去つたからである。

三 ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、

ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ。

それゆえ楽しみは人の子らからかれうせた。

二三祭司たちよ、荒布を腰にまとい、泣き悲しめ、祭壇に仕える者たちよ、泣け。

神に仕える者たちよ、

来て、荒布をまとい、夜を過ぐせ。

素祭も灌祭も

あなたがたの神の家から退けられたからである。

一四あなたがたは断食を聖別し、

聖会を召集し、長老たちを集め、

国の民をことごとくあなたがたの神、主の家に集め、主に向かつて叫べ。

一五ああ、その日はわざわいだ。

主の日は近く、

全能者からの滅びのように来るからである。

一六われわれの目の前に食物は絶え、

われわれの神の家から

喜びと楽しみが絶えたではないか。

一七種は土の下に朽ち、倉は荒れ、

穀物がつきたので、穀倉はこわされる。

一八いかに家畜はうめき鳴くか。

牛の群れはさまよう。

彼らには牧草がないからだ。

羊の群れも滅びうせる。

一九主よ、わたしはあなたに向かつて呼ばれる。

火が荒野の牧草を焼き滅ぼし、

炎が野のすべての木を焼き尽したからである。

二〇野の獣もまたあなたに向かつて呼ばれる。

水の流れがかれはて、

火が荒野の牧草を焼き滅ぼしたからである

第二章

一あなたがたはシオンでラッパを吹け。

わが聖なる山で警報を吹きならせ。

国の民はみな、ふるいわななけ。

主の日が来るからである。

それは近い。

二これは暗く、薄暗い日、

雲の群がらまつくらな日である。

多くの強い民が

暗やみのようにもろもろの山をおおう。

このようなことは昔からあったことがなく、

後の代々の年にも再び起ることがないであろう。

三火は彼らの前を焼き、炎は彼らの後に燃える。

彼らのこない前には、

地はエデンの園のようであるが、

その去った後は荒れ果てた野のようになる。

これをのがれうるものは一つもない。

四そのかたちは馬のかたちのようであり、

その走ることは軍馬のようである。

五山の頂でとびおどる音は、

戦車のとどろくようである。

また刈り株を焼く火の炎の音のようであり、

戦いの備えをした強い軍隊のようである。

六その前にもろもろの民はなやみ、

すべての顔は色を失う。

七彼らは勇士のように走り、

兵士のように城壁によじ登る。

彼らはおの自分の道を進んで行つて、

その道を踏みはずさない。

八彼らは互におしあわず、おのおのその道を進み行く。

九彼らは武器の中にとびこんでも、身をそこなわない。

十彼らは町にとび入り、城壁の上を走り、

家々によじ登り、盗びとのように窓からはいる。

十一地は彼らの前におののき、天はふるい、

日も月も暗くなり、星はその光を失う。

二主はその軍勢の前で声をあげられる。

その軍隊は非常に多いからである。

そのみ言葉をなし遂げる者は強い。

主の日は大いにして、はなはだ恐ろしいゆえ、

だれがこれに耐えることができるか。

三主は言われる、

「今からでも、あなたがたは心をつくし、

断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。

四あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」。

あなたがたの神、主に帰れ。

主は恵みあり、あわれみあり、

怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、

災を思いかえされるからである。

五神があるいは立ち返り、

思いかえして祝福をその後に残し、

素祭と灌祭とを

あなたがたの神、主にささげさせられる事はないと

だれが知るだろうか。

六シオンでラツパを吹きならせ。

断食を聖別し、聖会を召集し、

七民を集め、会衆を聖別し、

老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、

花婿をその家から呼びだし、
花嫁をそのへやから呼びだせ。

二七主に仕える祭司たちは、
廊と祭壇との間で泣いて言え、

「主よ、あなたの民をゆるし、

あなたの嗣業をもろもろの国民のうちに、
そしりと笑ひ草にさせないでください。

どうしてももろもろの国民に、

『彼らの神はどこにいるのか』と
言わせてよいでしょうか。

一八その時主は自分の地のために、ねたみを起し、
その民をあわれまれた。

一九主は答えて、その民に言われた、

「見よ、わたしは穀物と新しい酒と油とを
あなたがたに送る。

あなたがたはこれを食べ飽きるであろう。
わたしは重ねてあなたがたに

もろもろの国民のうちでそしりを受けさせない。
二〇わたしは北から来る者をあなたがたから遠ざけ、

これをおろした荒れ地に追いやり、
その前の者を東の海に、

その後の者を西の海に追いやる。

その臭いにおいは起り、その悪しきにおいは上る。
これは大いなる事をしたからである。

二地よ恐るな、喜び樂しめ、

主は大いなる事を行われたからである。

三野のもろもろの獣よ、恐るな。

荒野の牧草はもえいで、木はその実を結び、
いちじくの木とぶどうの木とは豊かに実る。

三三シオンの子らよ、

あなたがたの神、主によつて喜び樂しめ。

主はあなたがたを義とするために秋の雨を賜い、
またあなたがたのために豊かに雨を降らせ、

前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる。

二四打ち場は穀物で満ち、

石がめは新しい酒と油とであふれる。

二五わたしがあなたがたに送つた大軍、

すなわち群がるいなご、とびいなご、

滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食つた年をわたしはあ
なたがたに償う。

二六あなたがたは、じゅうぶん食べて飽き、
あなたがたに不思議なわざをなされた

あなたがたの神、主の名をほめたたえる。

わが民は永遠にはずかしめられることがない。二七あなた

がたはイスラエルのうちに
わたしのいることを知り、
主なるわたしがあなたがたの神であつて、
ほかにないことを知る。

わが民は永遠にはずかしめられることがない。

二八その後わたしはわが霊を

すべての肉なる者に注ぐ。

あなたがたのむすこ、娘は預言をし、

あなたがたの老人たちは夢を見、

あなたがたの若者たちは幻を見る。

二九その日わたしはまた

わが霊をしもべ、はしために注ぐ。

三〇わたしはまた、天と地とにするしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。三一主のたいなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変わる。三二すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残つた者のうちに、主のお召しになる者がある。

第三章

一見よ、わたしがユダとエルサレムとの幸福をもとに返すその

日、その時、二わたしは万国の民を集めて、これをヨシヤパテの谷に携えくだり、その所でわが民、わが嗣業であるイスラエルのために彼らをさばく。彼らがわが民を諸国民のうちに散らし、わたしの地を分かち取つたからである。三彼らはわが民をくじ引きにし、遊女のために少年をわたし、酒のために少女を売つて飲んだ。

四ツツとシドンよ、ペリシテのすべての地方よ、おまえたちは、わたしとなんのかかわりがあるか。おまえたちはわたしに報復をしようとするのか。もしおまえたちがわたしに報復しようとするなら、わたしは時をうつさず、すみやかに、おまえたちのおこないの報復をおまえたちの頭上にこさせる。五これはおまえたちがわたしの銀と金とをとり、わたしの貴重な宝をおまえたちの宮に携え行き、六またユダの人々とエルサレムの人々をギリシヤびとに売つて、その本国から遠く離れさせたからである。七見よ、わたしはおまえたちが売つたその所から彼らを起して、おまえたちのおこないの報復をおまえたちの頭上にこさせる。八わたしはおまえたちのむすこ娘たちをユダの人々の手に売る。彼らはこれを遠い国びとであるシバびとに売ると、主は言われる」。

九もろもろの国民の中に宣べ伝えよ。

戦いの備えをなし、

勇士をふるい立たせ、

兵士をことごとく近づかせ、のぼらせよ。

一〇あなたがたのすきを、つるぎに、

あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。

弱い者に「わたしは勇士である」と言わせよ。

二 周囲のすべての国民よ、

急ぎ来て、集まれ。

主よ、あなたの勇士をかしこにお下してください。

三 もろもろの国民をふるい立たせ、

ヨシャパテの谷にのぼらせよ。

わたしはそこに座して、

周囲のすべての国民をさばく。

三三 かまを入れよ、作物は熟した。

来て踏み、

酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。

彼らの悪が大きいからだ。

三四 群衆また群衆は、さばきの谷におる。

主の日がさばきの谷に近いからである。

三五 日も月も暗くなり、星もその光を失う。

一六 主はシオンから大声で叫び、

エルサレムから声を出される。

天も地もふるい動く。

しかし主はその民の避け所、

イスラエルの人々のとりである。

一七 「そこであなたがたは知るであろう、

わたしはあなたがたの神、主であつて、

わが聖なる山シオンに住むことを。

エルサレムは聖所となり、

他国人は重ねてその中を通ることがない。

一八 その日もうもろの山にうまい酒がしたり、

もうもろの丘は乳を流し、

ユダのすべての川は水を流す。

泉は主の家から出て、

シツテムの谷を潤す。

一九 エジプトは荒地となり、エドムは荒野となる。

彼らはその国でユダの人々をしえたげ、

罪なき者の血を流したからである。

二〇 しかしユダは永遠に人の住む所となり、

エルサレムは世々に保つ。

二一 わたしは彼らに血の報復をなし、

とがある者をゆるさない。

主はシオンに住まわれる」。

アモス書^{しよ}

第一章

「テコアの牧者^{ぼくしや}のひとりであるアモスの言葉^{ことば}。これはユダの王ウジヤの世^よ、イスラエルの王ヨアシの子ヤラバアムの世^よ、地震^{じしん}の二年前^{ねんまえ}に、彼^{かれ}がイスラエルについて示^{しめ}されたものである。

ニ彼は言^いった、

「主^{しゅ}はシオンからほえ、

エルサレムから声^{こゑ}を出^だされる。

牧者^{ぼくしや}の牧場^{まきば}は嘆^{なげ}き、

カルメルの頂^{いただき}は枯^かれる」。

三主^{しゅ}はこゝ言^いわれる、

「ダマスコの三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰^{ばつ}してゆるさない。

これは彼ら^{かれ}が鉄^{てつ}のすり板^{いた}で、

ギレアデを踏^ふみにじったからである。

四わたしはハザエルの家^{いえ}に火^ひを送^{おく}り、

ベネハダデのもろもろの宮殿^{きゆうてん}を焼^やき滅^{ほろ}ぼす。

五わたしはダマスコの貫^{かん}の木^きを砕^{くだ}き、

アベンの谷^{たに}から住民^{じゆうみん}を断^たち、

ベテエデンから王^{おう}のつえをとる者^{もの}を断^たつ。
スリヤの民^{たみ}はキルに捕^{とら}えられて行^いく」と

主^{しゅ}は言^いわれる。

六主^{しゅ}はこゝ言^いわれる、

「ガザの三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰^{ばつ}してゆるさない。
これは彼ら^{かれ}が人々^{ひとびと}をこゝとく捕^{とら}えて行^いつて、

エドムに渡^{わた}したからである。

七わたしはガザの石^{いし}がきに火^ひを送^{おく}り、

そのもろもろの宮殿^{きゆうてん}を焼^やき滅^{ほろ}ぼす。

八わたしはアシドドから住民^{じゆうみん}を断^たち、

アシケロンから王^{おう}のつえをとる者^{もの}を断^たつ。

九わたしはまた手^てをかえしてエクロンを撃^うつ。

そして残^{のこ}ったペリシテびとも滅^{ほろ}びる」と

主なる神^{かみ}は言^いわれる。

九主^{しゅ}はこゝ言^いわれる、

「ツロの三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰^{ばつ}してゆるさない。

これは彼ら^{かれ}が人々^{ひとびと}をこゝとくエドムに渡^{わた}し、

また兄弟^{きやうだい}の契約^{けいやく}を心に留^とめなかつたからである。

一〇それゆえ、わたしはツロの石がきに火を送り、そのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす」。

二主はこう言われる、

「エドムの三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰してゆるさない。

これは彼がつるぎをもつてその兄弟を追ひ、
全くあわれみの情を断ち、

常に怒って、人をかき裂き、

ながくその憤りを保つたからである。

二三それゆえ、わたしはテマンに火を送り、
ボズラのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす」。

二主はこう言われる、

「アンモンの人々の三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰してゆるさない。

これは彼らがその国境を広げるために、
ギレアデのはらんでいる女を

ひき裂いたからである。

二四それゆえ、わたしはラバの石がきに火をはなち、
そのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。

これは戦いの日に、ときの声をもつてせられ、

第二章

つむじ風の日に、暴風をもつてせられる。

二五彼らの王はそのつかさたちと共に
捕えられて行く」と主は言われる。

一主はこう言われる、

「モアブの三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰してゆるさない。

これは彼がエドムの王の骨を焼いて
灰にしたからである。

二それゆえ、わたしはモアブに火を送り、
ケリオテのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。

モアブは騒ぎと、ときの声と、

ラツパの音の中に死ぬ。

三わたしはそのうちから、支配者を断ち、
そのすべてのつかさを彼と共に殺す」と

主は言われる。

四主はこう言われる、

「ユダの三つのとが、

四つのとがのために、

わたしはこれを罰してゆるさない。

これは彼らが主の律法を捨て、その定めを守らず、その先祖たちが従い歩いた

偽りの物に惑わされたからである。

五 それゆえ、わたしはユダに火を送り、

エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす」。

六 主はこう言われる、

「イスラエルの三つのとが、

四 つのとがのために、

わたしはこれを罰してゆるさない。

これは彼らが正しい者を金のために売り、

貧しい者をくつ一足のために売るからである。

七 彼らは弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、

苦しむ者の道をまげ、

また父子ともにひとりの女のところへ行つて、

わが聖なる名を汚す。

八 彼らはすべての祭壇のかたわらに

質に取った衣服を敷いて、その上に伏し、

罰金をもって得た酒を、その神の家で飲む。

九 さきにわたしはアモリびとを

彼らの前から滅ぼした。

これはその高きこと、香柏のごとく、

その強きこと、かしの木のようであつたが、

わたしはその上の実と、下の根とを滅ぼした。

一〇 わたしはまた、あなたがたを

エジプトの地から連れ上り、

四十年のあいだ荒野で、あなたがたを導き、

アモリびとの地を獲させた。

一一 わたしはあなたがたの子らのうちから

預言者を起し、

あなたがたの若者のうちからナジルびとを起した。

イスラエルの人々よ、そうではないか」と

主は言われる。

一二 「ところがあなたがたはナジルびとに酒を飲ませ、

預言者に命じて『預言するな』と言う。

一三 見よ、わたしは麦束をいっぱい積んだ車が

物を圧するように、

あなたがたをその所で圧する。

一四 速く走る者も逃げ場を失い、

強い者もその力をふるうことができず、

勇士もその命を救うことができない。

一五 弓をとる者も立つことができず、

足早の者も自分を救うことができず、

馬に乗る者もその命を救うことができない。

第三章

一六勇士のうちの雄々しい心の者も
その日には裸で逃げる」と
主は言われる。

一 イスラエルの人々よ、
主があなたがたに向かって言われたこと、
わたしがエジプトの地から導き上った
全家に向かつて言ったこの言葉を聞け。
二 「地のもろもろのやからのうちで、
わたしはただ、あなたがただけを知った。
それゆえ、わたしはあなたがたの
もろもろの罪のため、あなたがたを罰する。
三 ふたりの者がもし約束しなかったなら、
一緒に歩くだろうか。
四 ししがもし獲物がなかったなら、
林の中でほえるだろうか。
若しししがもし物をつかまなかったなら、
その穴から声を出すだろうか。
五 もしわながなかったなら、
鳥は地に張った網にかかるだろうか。

網にもし何もかからなかったなら、
地からとびあがるだろうか。
六 町でラツパが鳴ったなら、
民は驚かないだろうか。
主がなされるのでなければ、
町に災が起るだろうか。
七 まことに主なる神は
そのしもべである預言者にその隠れた事を
示さないでは、何事をもなされない。
ハ ししがほえる、
だれが恐れないでいられよう。
主なる神が語られる、
だれが預言しないでいられよう」。
九 アツスリヤにあるもろもろの宮殿、
エジプトの地にあるもろもろの宮殿に宣べて言え、
「サマリヤの山々に集まり、
そのうちにある大いなる騒ぎと、
その中で行われる暴虐とを見よ」と。
一〇 主は言われる、
「彼らは正義を行うことを知らず、
しえたげ取った物と奪い取った物とを
そのもろもろの宮殿にたくわえている」。

第四章

「二 それゆえ主なる神はこう言われる、
「敵がきて、この国を囲み、

あなたの防備をあなたから取り除き、
あなたのものもろもろの宮殿はかすめられる」。

三 主はこう言われる、「羊飼がししの口から、羊の両足、ある
いは片耳を取り返すように、サマリヤに住むイスラエルの人々
も、長いすのすみや、寝台の一部を携えて救われるであろう」。

三 万軍の神、主なる神は言われる、

「聞け、そしてヤコブの家に証言せよ。

一 四 わたしはイスラエルのものもろもろのとがを罰する日に
ベテルの祭壇を罰する。

その祭壇の角は折れて、地に落ちる。

一 五 わたしはまた冬の家と夏の家とを撃つ、

象牙の家は滅び、大いなる家は消えうせる」と
主は言われる。

一 「バシヤンの雌牛どもよ、
この言葉を聞け。

あなたがたはサマリヤの山におり、
弱い者をしえたげ、貧しい者を圧迫し、

またその主人に向かつて、

『持つてきて、わたしたちに飲ませよ』と言う。

二 主なる神はご自分の聖なることによつて誓われた、
見よ、あなたがたの上にこのような時が来る。

その時、人々はあなたがたをつり針にかけ、
あなたがたの残りの者を
魚つり針にかけて引いて行く。

三 あなたがたはおのおのまつすぐに
石がきの破れた所を出て、

ハルモンに追いやられる」と

主は言われる。

四 「あなたがたはベテルへ行つて罪を犯し、
ギルガルへ行つて、とがを増し加えよ。

朝ごとに、あなたがたの犠牲を携えて行け、
三日ごとに、あなたがたの十分の一を携えて行け。

五 種を入れたパンの感謝祭をささげ、
心よりの供え物をふれしめ。

イスラエルの人々よ、

あなたがたはこのようにするのを好んでいる」と
主なる神は言われる。

六 「わたしはまた、あなたがたのすべての町で
あなたがたの歯を清くし、

あなたがたのすべての所でパンを乏しくした。

それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と主は言われる。

七「わたしはまた、刈入れまでなお三月あるのに雨をとどめて、あなたがたの上にくださず、

この町には雨を降らし、

かの町には雨を降さず、

この畑は雨をえ、

かの畑は雨をえないで枯れた。

八そこで二つ三つの町が

一つの町によろめいて行つて、

水を飲んでも、飽くことができなかった。

それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と主は言われる。

九「わたしは立ち枯れと腐り穂とをもつて

あなたがたを撃ち、

あなたがたの園と、ぶどう畑とを荒した。

いちじくの木とオリブの木とは、いなごが食つた。

それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と主は言われる。

一〇「わたしはエジプトにしたように

あなたがたのうちに疫病を送り、

つるぎをもつてあなたがたの若者を殺し、

あなたがたの馬を奪い去り、

あなたがたの宿営の臭気を上らせて、

あなたがたの鼻をつかせた。

それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と主は言われる。

二「わたしはあなたがたのうちの町を

神がソドムとゴモラを滅ぼされた時のように

滅ぼしたので、

あなたがたは炎の中から取り出された

燃えさしのようであつた。

それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった」と主は言われる。

三「それゆえイスラエルよ、

わたしはこのようにあなたに行う。

わたしはこれを行うゆえ、

イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」。

三見よ、彼は山を造り、風を創造し、

人にその思いのいかなるかを示し、

また、あけぼのを変えて暗やみとなし、

地の高い所を踏まれる者、

その名を万軍の神、主と言う。

第五章

―イスラエルの家よ、わたしが悲しみの歌をもつて、あなたがたについて宣べるこの言葉を聞け、

ニ「おとめイスラエルは倒れて、

また起き上がらず、

彼女はおのれの地に投げ倒されて

これを起す者がない」。

ミ主なる神はこう言われる、

「イスラエルの家では、

千人出た町は百人残り、

百人出た町は十人残る」。

四主はイスラエルの家にこう言われる、

「あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ。

五ペテルを求めな、

ギルガルに行くな。

六エルシバにおもむくな。

ギルガルは必ず捕えられて行き、

ペテルは無に帰するからである」。

七あなたがたは主を求めよ、そして生きよ。

八あなたと主は火のように

ヨセフの家に落ち下られる。

九火はこれを焼くが、

ペテルのためにこれを消す者はひとりもない。

十あなたがた、公道をにがよもぎに変え、

正義を地に投げ捨てる者よ。

十一ハブレアデスおよびオリオンを造り、

暗黒を朝に変じ、

昼を暗くして夜となし、

海の水を呼んで、地のおもてに注がれる者、

その名は主という。

十二主は滅びをたちまち強い者に臨ませられるので、

滅びはついに城に臨む。

十三彼らは門にいて戒める者を憎み、

眞実を語る者を忌みきらう。

十四あなたがたは貧しい者を踏みつけ、

彼から麦の贈り物をとるゆえ、

あなたがたは切り石の家を建てても、

その中に住むことはできない。

十五美しいぶどう畑を作つても、

その酒を飲むことはできない。

十六わたしは知る、あなたがたのたがは多く、

あなたがたの罪は大きいからである。

十七あなたがたは正しい者をしえたげ、まいないを取り、

門で貧しい者を退ける。

一三 それゆえ、このような時には賢い者は沈黙する、これは悪い時だからである。

一四 善を求めよ、悪を求めるな。

そうすればあなたがたは生きることが出来る。

またあなたがたが言うように、

万軍の神、主はあなたがたと共におられる。

一五 悪を憎み、善を愛し、門で公義を立てよ。

万軍の神、主は、あるいは

ヨセフの残りの者をあわれまれるであろう。

一六 それゆえ、主なる万軍の神、

主はこう言われる、

「すべての広場で泣くことがあろう。

すべてのちまたで人々は

『悲しいかな、悲しいかな』と言う。

また彼らは農夫を呼んできて嘆かせ、

巧みな泣き女を招いて泣かせ、

一七 またすべてのぶどう畑にも泣くことがあろう。

それはわたしがあなたがたの中を

通るからである」と主は言われる。

一八 わざわいなるかな、主の日を望む者よ、あなたがたは何ゆえ主の日を望むのか。

これは暗くて光がない。

一九 人がししの前を逃れてもくまに出会い、

また家にはいつて、手を壁につけると、

へびにかまれるようなものである。

二〇 主の日は暗くて、光がなく、

薄暗くて輝きがないではないか。

二一 わたしはあなたがたの祭を憎み、かつ卑しめる。

わたしはまた、あなたがたの聖会を喜ばない。

二二 たといあなたがたは燔祭や素祭をささげても、

わたしはこれを受けいれない。

あなたがたの肥えた獣の酬恩祭は

わたしはこれを顧みない。

二三 あなたがたの歌の騒がしい音を

わたしの前から断て。

あなたがたの琴の音は、わたしはこれを聞かない。

二四 公道を水のように、

正義をつきない川のように流れさせよ。

二五 「イスラエルの家よ、あなたがたは四十年の間、荒野でわた

しに犠牲と供え物をささげたか。二六 かえつてあなたがたの王

シクテをにない、あなたがたが自分で作ったあなたがたの偶像、

星の神、キウンをになつた。二七 それゆえわたしはあなたがたを

ダマスコのかなたに捕え移す」と、その名を万軍の神となえら

れる主は言われる。

第六章

一「わざわいなるかな、
安らかにシオンにいる者、
また安心してサマリヤの山にいる者、
諸国民のかしらのうちの著名な人々で、
イスラエルの家がきて従う者よ。
ニカルネに渡って見よ。
そこから大ハマテに行き、
またペリシテびとのガテに下って見よ。
彼らはこれらの国にまきっているか。
彼らの土地はあなたがたの土地よりも大きいか。
三あなたがたは災の日を遠ざけ、
強暴の座を近づけている。
四わざわいなるかな、みずから象牙の寝台に伏し、
長いすの上に身を伸ばし、
群れのうちから小羊を取り、
牛舎のうちから子牛を取って食べ、
五琴の音に合せて歌い騒ぎ、
ダビデのように楽器を造り出し、

六鉢をもって酒を飲み、
いとも尊い油を身にぬり、
ヨセフの破滅を悲しまない者たちよ。
七それゆえ今、彼らは捕われて、
捕われ人のまっ先に立つて行く。
そしてかの身を伸ばした者どもの
騒ぎはやむであろう。
八主なる神はおのれによって誓われた、
(万軍の神、主は言われる、)
「わたしはヤコブの誇を忌みきらい、
そのもろもろの宮殿を憎む。
わたしはこの町とすべてその中にいる者を渡す。
九一つの家に十人の者が残っていても、彼らは死に、一〇そして
その親戚、すなわちこれを焼く者は、骨を家から運びだすため
に、これを取り上げ、またその家の奥にいる者に向かつて、「ま
だあなたと共にいる者があるか」と言い、「ない」との答がある
時、かの人はまた「声を出さな、主の名をとるな」と言うであらう。
二見よ、主は命じて、
大きな家を撃つて、みじんとなし、
小さな家を撃つて、切れ切れとされる。
二三馬は岩の上を走るだろうか。

人は牛で海を耕すだろうか。

ところがあなたがたは公道を毒に変じ、正義の実をにがよもぎに変じた。

「三あなたがたはロデバルを喜び、

「われわれは自分の力で

カルナイムを得たではないか」と言う。

「四それゆえ、万軍の神、主は言われる、

「イスラエルの家よ、

見よ、わたしは一つの国民を起して、

あなたがたに敵対させる。

彼らはハマテの入口からアラバの川まで

あなたがたを悩ます」。

第七章

「主なる神はこのようにわたしに示された。見よ、二番草のはえ出る初めに主は、いなごを造られた。見よ、その二番草は王の刈った後にはえたものである。三そのいなごが地の青草を食いついた時、わたしは言った、

「主なる神よ、どうぞ、ゆるしてください。

ヤコブは小さい者です、

どうして立つことができましょう」。

「三主はこのことについて思いかえされ、

「このことは起きない」と主は言われた。

「四主なる神はこのようにわたしに示された。見よ、主なる神はさばきのために火を呼ばれた。火は大淵を焼き、また地を焼くとした。五その時わたしは言った、

「主なる神よ、どうぞ、やめてください。

ヤコブは小さい者です、

どうして立つことができましょう」。

「六主はこのことについて思いかえされ、

「このこともまた起きない」と主なる神は言われた。

「七また主はわたしに示された。見よ、主は測りなわをもつて築いた石がきの上に立ち、その手に測りなわをもつておられた。ハそして主はわたしに言われた、「アモスよ、あなたは何を見るか」。「測りなわ」とわたしが答えると、主はまた言われた、

「見よ、わたしは測りなわを

わが民イスラエルの中に置く。

わたしはもはや彼らを見過しにしない。

九イサクの高き所は荒され、

イスラエルの聖所は荒れはてる。

わたしはつるぎをもつてヤラベアムの家に立ち向かう」。

「〇時にベテルの祭司アマジャは、イスラエルの王ヤラベアムに人をつかわして言う、「イスラエルの家のただ中で、アモスはあ

あなたにそむきました。この地は彼のもろもろの言葉に耐えることができません。

ニアモスはこのように言っています、

『ヤラベアムはつるぎによつて死ぬ、

イスラエルは必ず捕えられて行つて、

その国を離れる』と。

二三それからアマジヤはアモスに言った、「先見者よ、行つてユダの地にのがれ、かの地でパンを食べ、かの地で預言せよ。二三しかしベテルでは二度と預言してはならない。ここは王の聖所、国の宮だから」。

二四アモスはアマジヤに答えた、「わたしは預言者でもなく、また預言者の子でもない。わたしは牧者である。わたしはいちじく桑の木を作る者である。二五ところが主は群れに従っている所からわたしを取り、『行つて、わが民イスラエルに預言せよ』と、主はわたしに言われた。

二六それゆえ今、主の言葉を聞け。

あなたは言う、

『イスラエルに向かつて預言するな、

イスラエルの家に向かつて語るな』と。

二七それゆえ、主はこう言われる、

『あなたの妻は町で遊女となり、

あなたのむすこ、娘たちはつるぎに倒れ、

あなたの地は測りなわで分かつたれる。そしてあなたは汚れた地で死に、イスラエルは必ず捕えられて行つて、その国を離れる』。

第八章

一主なる神は、このようにわたしに示された。見よ、ひとかこの夏のくだものがある。二主は言われた、「アモスよ、あなたは何を見るか」。わたしは「ひとかこの夏のくだもの」と答えた。すると主はわたしに言われた、

「わが民イスラエルの終りがきた。

わたしは再び彼らを見過しにしない。

三その日には宮の歌は嘆きに変り、

しかばねがおびただしく、

人々は無言でこれを至る所に投げ捨てる」と

主なる神は言われる。

四あなたがた、貧しい者を踏みつけ、

また国の乏しい者を滅ぼす者よ、

これを聞け。

五あなたがたは言う、

「新月はいつ過ぎ去るだろう、

そうしたら、われわれは穀物を売ろう。

安息日はいつ過ぎ去るだろう、

そうしたら、われわれは麦を売り出そう。

われわれはエパを小さくし、シケルを大きくし、

偽りのはかりをもつて欺き、

六 乏しい者を金で買い、

貧しい者をくつ一足で買いとり、

また、くず麦を売ろう」。

七 主はヤコブの誇をさして誓われた、

「わたしは必ず彼らのすべてのわざを

いつまでも忘れない。

八 これがために地は震わないであろうか。

地に住む者はみな嘆かないであろうか。

地はみなナイル川のようにわきあがり、

エジプトのナイル川のようにみなぎって、また沈まないで

あろうか」。

九 主なる神は言われる、

「その日には、

わたしは真昼に太陽を沈ませ、

白昼に地を暗くし、

一〇 あなたがたの祭を嘆きに変らせ、

あなたがたの歌をことごとく悲しみの歌に変らせ、

すべての人に荒布を腰にまとわせ、

すべての人に髪をそり落させ、

その日を、ひとり子を失った喪中のようにし、

その終りを、苦い日のようにする」。

二 主なる神は言われる、

「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、

それはパンのききんではない、

水にかわくでもない、

主の言葉を聞くことのききんである。

三 彼らは海から海へさまよい歩き、

主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、

しかしこれを得ないであろう。

四 その日には美しいおとめも、

若い男もかわきのために氣を失う。

五 かのサマリヤのアシマをさして誓い、

『ダンよ、あなたの神は生きている』と言ひ、また

『ベエルシバの道は生きている』と言う者どもは

必ず倒れる。再び起きあがることはない」。

第九章

一 わたしは祭壇のかたわらに立つておられる主を見た。

主は言われた、
 「柱の頭を打って、敷居を震わせ、
 これを打ち砕いて、
 すべての民の頭の上に落ちかからせよ。
 その残った者を、わたしはつるぎで殺し、
 そのひとりも逃げおおす者はなく、
 のがれうる者はない。
 二たとい彼らは陰府に掘り下つても、
 わたしの手はこれをそこから引き出す。
 たとい彼らは天によじのぼつても、
 わたしはそこからこれを引きおろす。
 三たとい彼らはカルメルの頂に隠れても、
 わたしはこれを捜して、そこから引き出す。
 たとい彼らはわたしの目をのがれて、
 海の底に隠れても、
 わたしはへびに命じて、その所でこれをかませる。
 四たとい彼らは捕われて、その敵の前に行つても、
 わたしはその所でつるぎに命じて、これを殺させる。
 わたしは彼らの上にわたしの目を注ぐ、
 それは災のためであつて、幸のためではない。
 五万軍の神、主が地に触れられると、地は溶け、
 その中に住む者はみな嘆き、

地はみなナイル川のようにわきあがり、
 エジプトのナイル川のようにまた沈む。
 六主はご自分の高殿を天に築き、
 大空の基を地の上にすえ、
 海の水を呼んで、地のおもてに注がれる。
 その名は主となえられる。
 セ主は言われる、
 「イスラエルの子らよ、あなたがたはわたしにとつて
 エチオピアびとのようではないか。
 わたしはイスラエルをエジプトの国から、
 ペリシテびとをカフトルから、
 スリヤびとをキルから導き上つたではないか。
 ハ見よ、主なる神の目は
 この罪を犯した国の上に注がれている。
 わたしはこれを地のおもてから断ち滅ぼす。
 しかし、わたしはヤコブの家を
 ことごとくは滅ぼさない」と主は言われる。
 カ「見よ、わたしは命じて、
 人がふるいで物をふるうように、
 わたしはイスラエルの家を万国民のうちでふるう。
 ひと粒も地に落ちることはない。
 一〇わが民の罪びと、すなわち

『災はわれわれに近づかない、
われわれに臨まない』と

言う者どもはみな、つるぎで殺される。

二その日には、

わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、
その破損を繕い、そのくずれた所を興し、
これを昔の時のように建てる。

三これは彼らがエドムの残った者、

およびわが名をもつて呼ばれるすべての国民を
所有するためである」と

この事をなされる主は言われる。

三主は言われる、

「見よ、このような時が来る。

その時には、耕す者は刈る者に相継ぎ、
ぶどうを踏む者は種まく者に相継ぐ。

もろもろの山にはうまい酒がしたり、
もろもろの丘は溶けて流れる。

一四わたしはわが民イスラエルの幸福をもとに返す。
彼らは荒れた町々を建てて住み、

ぶどう畑を作つてその酒を飲み、
園を作つてその実を食べる。

一五わたしは彼らをその地に植えつける。

彼らはわたしが与えた地から
再び抜きとられることはない」と
あなたの神、主は言われる。

オバデヤ書

第一章

「オバデヤの幻。
主なる神はエドムについてこう言われる、
われわれは主から出たおとずれを聞いた。
ひとりの使者が諸国民のうちにつかわされて言う、
「立てよ、われわれは立つてエドムと戦おう」。
二見よ、わたしはあなたを国々のうちで
小さい者とする。
あなたはひどく卑しめられる。
三岩のはざまにあり、高い所に住む者よ、
あなたの心の高ぶりは、あなたを欺いた。
あなたは心のうちに言う、
「だれがわたしを地に引き下らせる事ができるか」。
四たといあなたは、わしのように高くあがり、
星の間に巢を設けても、
わたしはそこからあなたを引きおろすと
主は言われる。
五もし盗びとがあなたの所に来、強盗が夜きても、
彼らは、ほしだけ盗むではないか」。

ああ、あなたは全く滅ぼされてしまう。
もしぶどうを集める者があなたの所に来たなら、
彼らはなお余りの実を残さないであろうか。
六ああ、エサウはかすめられ、
その隠しておいた宝は探り出される。
七あなたと契約を結んだ人々はみな、
あなたを欺き、あなたを国境に追いやった。
あなたと同盟を結んだ人々はあなたに勝った。
あなたの信頼する友はあなたの下にわなを設けた、
しかしその事を悟らない。
八主は言われる、
その日には、わたしはエドムから知者を滅ぼし、
エサウの山から悟りを断ち除かないだろうか。
九テマンよ、あなたの勇士は驚き恐れる。
人はみな殺されてエサウの山から断ち除かれる。
一〇あなたはその兄弟ヤコブに暴虐を行ったので、
恥はあなたをおおい、あなたは永遠に断たれる。
二あなたが離れて立つていた日、
すなわち異邦人がその財宝を持ち去り、
外国人がその門におし入り、
エルサレムをくじ引きにした日、
あなたも彼らのひとりのようであった。

二三 しかしあなたは自分の兄弟の日、
すなわちその災の日をながめていてはならなかった。
あなたはユダの人々の滅びの日、
これを喜んではず、
その悩みの日に誇つてはならなかった。
二三 あなたはわが民の災の日に、
その門にはいつてはならず、
その災の日はその苦しみをながめてはならなかった。
またその災の日に、
その財宝に手をかけてはならなかった。
二四 あなたは分れ道に立って、
そののがれる者を切つてはならなかった。
あなたは悩みの日にその残つた者を
敵にわたしてはならなかった。
二五 主の日が万国の民に臨むのは近い。
あなたがしたようにあなたもされる。
あなたの報いはあなたのこうべに帰する。
二六 あなたがたがわが聖なる山で飲んだように、
周囲のもろもろの民も飲む。
すなわち彼らは飲んでよろめき、
かつてなかったようになる。
二七 しかしシオンの山には、のがれる者がいて、

聖なる所となる。
またヤコブの家はその領地を獲る。
一八 ヤコブの家は火となり、
ヨセフの家は炎となり、
エサウの家はわらとなる。
かれ彼らはその中に燃えて、これを焼く。
エサウの家には残る者がなく、
主は言われた。
一九 ネゲブの人々はエサウの山を獲、
セフェラの人々はペリシテびとを獲る。
また彼らはエフライムの地、
およびサマリヤの地を獲、
ベニヤミンはギレアデを獲る。
二〇 ハラにいるイスラエルの人々の捕われ人は、
フェニキヤをザレパテまで取り、
セパラデにいるエルサレムの捕われ人は、
ネゲブの町々を獲る。
二一 こうして救う者はシオンの山に上つて、
エサウの山を治める。
そして王国は主のものとなる。

ヨナ書

第一章

一主の言葉がアミッタイの子ヨナに臨んで言った、「ニ」立つて、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上つてきたからである。ミしかしヨナは主の前を離れてタルシシへのがれようと、立つてヨツパに下つて行つた。ところがちやうど、タルシシへ行く船があつたので、船賃を払い、主の前を離れて、人々と共にタルシシへ行こうと船に乗つた。

四時に、主は大風を海の上に起されたので、船が破れるほどの激しい暴風が海の上にあつた。五それで水夫たちは恐れて、めいめい自分の神を呼び求め、また船を軽くするため、その中の積み荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船の奥に下り、伏して熟睡していた。六そこで船長は来て、彼に言った、「あなたはどうして眠っているのか。起きて、あなたの神に呼ばわりなさい。神があるいは、われわれを顧みて、助けてくださるだろう」。

七やがて人々は互に言った、「この災がわれわれに臨んだのは、だれのせいかわかるために、さあ、くじを引いてみよう」。そして彼らが、くじを引いたところ、くじはヨナに当つた。八そこで人々はヨナに言った、「この災がだれのせい、われわれに臨ん

だのか、われわれに告げなさい。あなたの職業は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。あなたはどの民か。九ヨナは彼らに言った、「わたしはヘブルびとです。わたしは海と陸とお造りになった天の神、主を恐れる者です」。一〇そこで人々ははなはだしく恐れて、彼に言った、「あなたはなんたる事をしてくれたのか」。人々は彼がさきに彼らに告げた事によつて、彼が主の前を離れて、のがれようとしていた事を知っていたからである。

二人々は彼に言った、「われわれのために海が静まるには、あなたをどうしたらよからうか」。それは海がますます荒れてきたからである。三ヨナは彼らに言った、「わたしを取つて海に投げ入れなさい。そうしたら海は、あなたがたのために静まるでしょう。わたしにはよくわかっています。この激しい暴風があなただたに臨んだのは、わたしのせいです」。ミしかし人々は船を陸にこぎもどそうとつとめたが、成功しなかつた。それは海が彼らに逆らつて、いよいよ荒れたからである。一四そこで人々は主に呼ばわつて言った、「主よ、どうぞ、この人の生命のために、われわれを滅ぼさないでください。また罪なき血を、われわれに帰しないでください。主よ、これはみ心に従つて、なされた事だからです」。一五そして彼らはヨナを取つて海に投げ入れた。すると海の荒れるのがやんだ。一六そこで人々は大いに主を恐れ、犠牲を主にささげて、誓願を立てた。

一七 主は大いなる魚を備えて、ヨナをのませられた。ヨナは三日三夜その魚の腹の中にいた。

第二章

一 ヨナは魚の腹の中からその神、主に祈つて、二 言った、「わたしは悩みのうちから主に呼ばわると、主はわたしに答えられた。

わたしが陰府の腹の中から叫ぶと、

あなたはわたしの声を聞かれた。

三 あなたはわたしを淵の中、

海のまん中に投げ入れられた。

大水はわたしをめぐり、

あなたの波と大波は皆、わたしの上を越えて行つた。

四 わたしは言った、

『わたしはあなたの前から追われてしまった、

どうして再びあなたの聖なる宮を望みえようか』。

五 水がわたしをめぐつて魂にまでおよび、

淵はわたしを取り囲み、

海草は山の根元でわたしの頭にまといつた。

六 わたしは地に下り、

地の貫の木はいつもわたしの上にあつた。

しかしわが神、主よ、

あなたはわが命を穴から救いあげられた。

七 わが魂がわたしのうちに弱つているとき、

わたしは主をおぼえ、

わたしの祈はあなたに至り、

あなたの聖なる宮に達した。

八 むなしい偶像に心を寄せる者は、

そのまことの忠節を捨てる。

九 しかしわたしは感謝の声をもつて、

あなたに犠牲をささげ、わたしの誓いはたす。

救は主にある」。

一〇 主は魚にお命じになったので、魚はヨナを陸に吐き出した。

第三章

一時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、二 「立つて、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。

三 そこでヨナは主の言葉に従い、立つて、ニネベに行つた。ニネベは非常に大きな町であつて、これを行きめぐるには、三日を要するほどであつた。

四 ヨナはその町にはいり、初め一日路を行きめぐつて呼ばわり、「四十日を経たらニネベは滅びる」と言つた。

五 そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい

い者まで荒布を着た。

六このうわさが二ネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。七また王とその大臣の布告をもって、二ネベ中にふれさせて言った、「人も獣も牛も羊もみな、何を味わってはならない。物を食い、水を飲んでではない。八人も獣も荒布をまとい、ひたすら神に呼ばわり、おのおのその悪い道およびその手にある強暴を離れよ。九あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だがそれを知らるだろう」。

一〇神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。

第四章

一ところがヨナはこれを非常に不快として、激しく怒り、二主に祈って言った、「主よ、わたしがなお国におりました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです。三それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。わたしにとつては、

生きるよりも死ぬ方がまだからです」。四主は言われた、「あなたの怒るのは、よいことであらうか」。五そこでヨナは町から出て、町の東の方に座し、そこに自分のために一つの小屋を造り、町のなりゆきを見きわめようと、その下の日陰にすわっていた。六時に主なる神は、ヨナを暑さの苦痛から救うために、とうごまを備えて、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。七ところが神は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうごまをかませられたので、それは枯れた。八やがて太陽が出たとき、神が暑い東風を備え、また太陽がヨナの頭を照したので、ヨナは弱りはて、死ぬことを願って言った、「生きるよりも死ぬ方がわたしにはまだ」。九しかし神はヨナに言われた、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。

ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。一〇主は言われた、「あなたは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。一ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町二ネベを、惜しまないでいられようか」。

ミカ書

第一章

ユダの王ヨタム、アハズおよびヒゼキヤの世に、モレシテびとミカが、サマリヤとエルサレムについて示された主の言葉。

ニあなたがたすべての民よ、聞け。

地とそこに満てる者よ、耳を傾けよ。

主なる神はあなたがたにむかつて証言し、

主はその聖なる宮から証言される。

三見よ、主はそこご座所から出てこられ、

下つてきて地の高い所を踏まれる。

四山は彼の下に溶け、谷は裂け、

火の前のろうのごとく、

坂に流れる水のようにだ。

五これはみなヤコブのとがのゆえ、

イスラエルの家の罪のゆえである。

ヤコブのとがとは何か、

サマリヤではないか。

ユダの家の罪とは何か、

エルサレムではないか。

六このゆえにわたしはサマリヤを野の石塚となし、

ぶどうを植える所となし、

またその石を谷に投げ落し、

その基をあらわにする。

七その彫像はみな砕かれ、

その獲た価はみな火で焼かれる。

わたしはその偶像をことごとくこわす。

これは遊女の価から集めたのだから、

遊女の価に帰る。

八わたしはこれがために嘆き悲しみ、

はだしと裸で歩きまわり、

山犬のように嘆き、

だちのように悲しみ鳴く。

九サマリヤの傷はいやすことのできないもので、

ユダまでひろがり、

わが民の門、エルサレムまで及んでいる。

一〇ガテに告げるな、泣き叫ぶな。

ベテレアフラで、ちりの中にころがれ。

ニサピルに住む者よ、

裸になり、恥をこうむって進み行け。

ザアナンに住む者は出てこない。

ベテエゼルの嘆きはあなたがたからその跡を断つ。

ニマロテに住む者は気づかわしように幸を待つ。

第二章

災が主から出て、

エルサレムの門に臨んだからである。

一ミラキシに住む者よ、

戦車に早馬をつなげ。

ラキシはシオンの娘にとって罪の初めであつた。

イスラエルのとがが、

あなたがたのうちに見られたからである。

二四それゆえ、あなたはモレセテ・ガテに

別れの贈り物を与える。

アクジブの家々はイスラエルの王たちにとって、

人を欺くものとなる。

二五マレシヤに住む者よ、

わたしはまた侵略者をあなたの所に連れて行く。

イスラエルの栄光はアドラムに去るであらう。

一六あなたの喜ぶ子らのために、あなたの髪をそり落せ。

そのそつた所をはげたかのように大きくせよ。

彼らは捕えられてあなたを離れるからである。

一その床の上で不義を計り、
悪を行う者はわざわいである。

彼らはその手に力あるゆえ、

夜が明けるとこれを行う。

二彼らは田畑をむさぼつてこれを奪い、

家をむさぼつてこれを取る。

彼らは人をしえたげてその家を奪い、

人をしえたげてその嗣業を奪う。

三それゆえ、主はこう言われる、

見よ、わたしはこのやからにむかつて

災を下そうと計る。

あなたがたはその首を

これから、はずすことはできない。

また、まつすぐに立つて歩くことはできない。

これは災の時だからである。

四その日、人々は歌を作つてあなたがたをのしり、

悲しみの歌をもつて嘆き悲しみ、

「われわれはことごとく滅ぼされる、

わが民の分は人に与えられる。

どうしてこれはわたしから離れるのであらう。

われわれの田畑はわれわれを捕えた者の間に分け与えられ

る」と言う。

五それゆえ、主の会衆のうちには

くじによつて測りなわを張る者はひとりもなくなる。

六 彼らは言う、「あなたがたは説教してはならない。そのような事について説教してはならない。」

そうすればわれわれは恥をこうむることがない」と。
七 ヤコブの家よ、そんなことは言えるのだろうか。
主は気短な方であらうか。

これらは主のみわざなのであらうか。

わが言葉は正しく歩む者に、
益とならないのであらうか。

八 ところが、あなたがたは立つてわが民の敵となり、
いくさのことを知らずに、安らかに過ぎゆく者から、
平和な者から、上着をはぎ取り、

九 わが民の女たちをその楽しい家から追い出し、
その子どもから、わが栄えをとこしえに奪う。

一〇 立つて去れ、

これはあなたがたの休み場所ではない。

これは汚れのゆえに滅びる。

その滅びは悲惨な滅びだ。

一一 もし人が風に歩み、偽りを言い、

「わたしはぶどう酒と濃き酒について、

あなたに説教しよう」と言うならば、

その人はこの民の説教者となるであらう。

一二 ヤコブよ、わたしは必ずあなたをことごとく集め、

イスラエルの残れる者を集める。

わたしはこれをおりの羊のように、
牧場の中の群れのように共におく。

これは人の多きによつて騒がしくなる。

一三 打ち破る者は彼らに先だつて登りゆき、
彼らは門を打ち破り、これをとおつて外に出て行く。
彼らの王はその前に進み、

主はその先頭に立たれる。

第三章

一 わたしは言った、

ヤコブのかしらたちよ、

イスラエルの家のつかさたちよ、聞け、

公義はあなたがたの知つておるべきことではないか。

二 あなたがたは善を憎み、悪を愛し、

わが民の身から皮をはぎ、その骨から肉をそぎ、

三 またわが民の肉を食らい、

その皮をはぎ、その骨を砕き、

これを切りきぎんで、なべに入れる食物のようにし、
大なべに入れる肉のようにする。

四 こうして彼らが主に呼ばわつても、

主はお答えにならない。

かえってその時には、み顔を彼らに隠される。

彼らのおこないが悪いからである。

五わが民を惑わす預言者について主はこう言われる、

「平安」を叫ぶけれども、

その口に何も与えない者にむかつては、

宣戦を布告する。

六それゆえ、あなたがたには夜があつても幻がなく、

暗やみがあつても占いが無い。

太陽はその預言者たちに没し、

昼も彼らの上に暗くなる。

七先見者は恥をかき、占い師は顔をあからめ、

彼らは皆そのくちびるをおおう。

神の答がないからである。

八しかしわたしは主のみたまによつて力に満ち、

公義と勇氣とに満たされ、

ヤコブにそのとがを示し、イスラエルにその罪を示すことができる。

九ヤコブの家のかしらたち、

イスラエルの家のつかさたちよ、

すなわち公義を憎み、

第四章

すべての正しい事を曲げる者よ、これを聞け。

一〇あなたがたは血をもつてシオンを建て、不義をもつてエルサレムを建てた。

二そのかしらたちは、まいないをとつてさばき、その祭司たちは価をとつて教え、

その預言者たちは金をとつて占う。

しかもなお彼らは主に寄り頼んで、

「主はわれわれの中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない」と言う。

三それゆえ、シオンはあなたがたのゆえに

田畑となつて耕され、

エルサレムは石塚となり、

宮の山は木のおい茂る高い所となる。

一末の日になつて、

主の家の山はもろの山のかしらとして

堅く立てられ、

もろもろの峰よりも高くあげられ、

もろもろの民はこれに流れくる。

二多くの国民は来て言う、

「さあ、われわれは主の山に登り、
ヤコブの神の家に行こう。

彼はその道をわれわれに教え、

われわれはその道に歩もう」と。

律法はシオンから出、

主の言葉はエルサレムから出るからである。

三彼は多くの民の間をさばき、

遠い所まで強い国々のために仲裁される。

そこで彼らはつるぎを打ちかえて、すきとし、

そのやりを打ちかえて、かまとし、

国は国にむかつてつるぎをあげず、

再び戦いのことを学ばない。

四彼らは皆そのぶどうの木の下に座し、

そのいちじくの木の下にいる。

彼らを恐れさせる者はない。

これは万軍の主がその口で語られたことである。

五すべての民はおのおのその神の名によって歩む。

しかしわれわれは

われわれの神、主の名によつて、とこしえに歩む。

六主は言われる、その日には、

わたしはかの足のなえた者を集め、

またかの追いやられた者および

わたしは苦しめた者を集め、

七その足のなえた者を残れる民とし、

遠く追いやられた者を強い国民とする。

主はシオンの山で、今よりとこしえに

彼らを治められる。

八羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、

以前の主権はあなたに帰つてくる。

すなわちエルサレムの娘の国は

あなたに帰つてくる。

九今あなたは何ゆえわめき叫ぶのか、

あなたのうちに王がないのか。

あなたの相談相手は絶えはて、

産婦のように激しい痛みがあなたを捕えたのか。

一〇シオンの娘よ、

産婦のように苦しんでうめけ。

あなたは今、町を出て野にやどり、

バビロンに行かなければならない。

その所でああなたは救われる。

主はその所でああなたを敵の手からあがなわれる。

二いま多くの国民はあなたに逆らい、集まって言う、

「どうかシオンが汚されるように、

われわれの目がシオンを見てあざ笑うように」と。

第五章

二三しかし彼らは主の思いを知らず、
またその計画を悟らない。
すなわち主が麦束を打ち場に集めるように、
彼らを集められることを悟らない。
二三シオンの娘よ、立つて打ちこなせ。
わたしはあなたの角を鉄となし、
あなたのひずめを青銅としよう。
あなたは多くの民を打ち砕き、
彼らのぶんどり物を主にささげ、
彼らの富を全地の主にささげる。

一今あなたは壁でとりまかれている。
敵はわれわれを攻め囲み、
つえをもつてイスラエルのつかさのほおを撃つ。
ニしかしベツレヘム・エフラタよ、
あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、
イスラエルを治める者があなたのうちから
わたしのために出る。
その出るのは昔から、いにしえの日からである。
三それゆえ、産婦の産みおとす時まで、

主は彼らを渡しおかれる。
その後その兄弟たちの残れる者は
イスラエルの子らのもとに帰る。
四彼は主の力により、
その神、主の名の威光により、
立つてその群れを養い、
彼らを安らかにおらせる。
今、彼は大いなる者となつて、
地の果にまで及ぶからである。
五これは平和である。
アッスリヤびとがわれわれの国に来て、
われわれの土地を踏むとき、
七人の牧者を起し、
八人の君を起してこれに当らせる。
六彼らはつるぎをもつてアッスリヤの地を治め、
ぬきみのつるぎをもつてニムロデの地を治める。
アッスリヤびとがわれわれの地に来て、
われわれの境を踏み荒すとき、
彼らはアッスリヤびとから、われわれを救う。
七その時ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること、
人によらず、また人の子らを待たずに
主からくだる露のごとく、

青草の上に降る夕立ちのようである。

ハまたヤコブの残れる者が国々の中におり、多くの民の中にいること、

林の獣の中のししのごとく、

羊の群れの中の若いししのごとくである。

それが過ぎるときは踏み、かつ裂いて救う者はない。

九あなたの手はもろもろのあだの上にあげられ、

あなたの敵はことごとく断たれる。

一〇主は言われる、その日には、

わたしはあなたのうちから馬を絶やし、

戦車をこわし、

二あなたの国の町々を絶やし、

あなたの城をことごとくくつがえす。

三またあなたの手から魔術を絶やす。

あなたのうちには占い師がないようになる。

四またあなたのうちから彫像および石の柱を絶やす。

あなたは重ねて手で作った物を拝むことはない。

五またあなたのうちからアシラ像を抜き倒し、

あなたの町々を滅ぼす。

六そしてわたしは怒りと憤りをもつて

その聞き従わないもろの国民に復讐する。

第六章

一あなたがたは

主の言われることを聞き、

立ちあがって、もろもろの山の前に訴えをのべ、

もろもろの丘にあなたの声を聞かせよ。

二もろもろの山よ、地の変ることなき基よ、

主の言い争いを聞け。

主はその民と言い争い、

イスラエルと論争されるからである。

三「わが民よ、わたしはあなたに何をなしたか、

何によってあなたを疲れさせたか、

わたしに答えよ。

四わたしはエジプトの国からあなたを導きのぼり、

奴隸の家からあなたをあがない出し、

モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先だ

たせた。

五わが民よ、モアブの王バラクがたくらんだ事、

ベオルの子バラムが彼に答えた事、

システムからギルガルに至るまでに

起つた事どもを思い起せ。

そうすれば、あなたは主の正義のみわざを

知るであらう」。

六「わたしは何をもつて主のみに行き、

高き神を拝すべきか。

燔祭および当歳の子牛をもつて

そのみ前に行くべきか。

七主は数千の雄羊、

万流の油を喜ばれるだろうか。

わがとがのためにわが長子をささぐべきか。

わが魂の罪のためにわが身の子をささぐべきか」。

八人よ、彼はさきによい事のなんであるかを

あなたに告げられた。

主のあなたに求められることは、

ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、

へりくだつてあなたの神と共に歩むことではないか。

九主の声が町にむかつて呼ばわる――

全き知恵はあなたの名を恐れることである――

「部族および町の会衆よ、聞け。

一〇わたしは悪人の家にある不義の財宝、

のろうべき不正な枿を忘れ得ようか。

一一不正なばかりを用い、

偽りのおもしを入れた袋を用いる人を

わたしは罪なしとするだろうか。

一二あなたのうちの富める人は暴虐で満ち、

あなたの住民は偽りを言い、

その舌は口で欺くことをなす。

一三それゆえ、わたしはあなたを撃ち、

あなたをその罪のために滅ぼすことを始めた。

一四あなたは食べても、飽くことがなく、

あなたの腹はいつもひもじい。

あなたは移しても、救うことができない。

あなたが救う者を、わたしはつるぎにわたす。

一五あなたは種をまいても、刈ることがなく、

オリブの実を踏んでも、その身に油を塗ることがなく、

ぶどうを踏んでも、その酒を飲むことがない。

一六あなたはオムリの定めを守り、

アハブの家のすべてのわざをおこない、

彼らの計りごとに従つて歩んだ。

これはわたしがあなたを荒し、

その住民を笑ひ物とするためである。

あなたがたは民のはずかしめを負わねばならぬ」。

第七章

一 わざわいなるかな、

わたしは夏のくだものを集める時のように、
 ぶどうの収穫の残りを集める時のようになった。
 食らうべきぶどうはなく、

わが心の好む初なりのいちじくもない。

二神を敬う人は地に絶え、人のうちに正しい者はない。

みな血を流そうと待ち伏せし、

おのおの網をもつてその兄弟を捕える。

三両手は悪い事をしようと努めてやまない。

つかさと裁判官はまいないを求め、

大いなる人はその心の悪い欲望を言いあらわし、

こうして彼らはその悪を仕組む。

四彼らの最もよい者もいばらのごとく、

最も正しい者もいばらのいけがきのようだ。

彼らの見張びとの日、

すなわち彼らの刑罰の日が来る。

いまや彼らの混乱が近い。

五あなたがたは隣り人を信じてはならない。

友人をたのんではならない。

あなたのふところに寝る者にも、

あなたの口の戸を守れ。

六むすこは父をいやしめ、娘はその母にそむき、

嫁はそのしゅうとめにそむく。

人の敵はその家の者である。

七しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。

わが神はわたしの願いを聞かれる。

八わが敵よ、わたしについて喜ぶな。

たといわたしが倒れるとも起きあがる。

たといわたしが暗やみの中にすわるとも、

主はわが光となられる。

九主はわが訴えを取りあげ、

わたしのためにさばきを行われるまで、

わたしは主の怒りを負わなければならない。

主に対して罪を犯したからである。

主はわたしを光に導き出してくださる。

わたしは主の正義を見るであろう。

一〇その時「あなたの神、主はどこにいるか」と

わたしに言ったわが敵は、これを見て恥をこうむり、

わが目は彼を見てあざ笑う。

彼は街路の泥のように踏みつけられる。

二あなたの城壁を築く日が来る。

その日には国境が速く広がる。

三その日にはアスリヤからエジプトまで、

エジプトからユフラテ川まで、

海から海まで、山から山まで、

人々はあなたに来る。

二三 しかしかの地はその住民のゆえに、
そのおこないの実によつて荒れはてる。

二四 どうか、あなたのつえをもつてあなたの民、
すなわち園の中の林にひとりおる

あなたの嗣業の羊を牧し、

いにしえの日のようにバシヤンとギレアデで、
彼らを養つてください。

二五 あなたがエジプトの国を出た時のように、
わたしはもろもろの不思議な事を彼らに示す。

二六 国々の民は見て、そのすべての力を恥じ、
その手を口にあて、

その耳は聞えぬ耳となる。

二七 彼らはへびのように、
地に這うもののようにちりをなめ、

震えながらその城から出、

おのきつつ、われわれの神、主に近づいてきて、
あなたのために恐れる。

二八 だれかあなたのように不義をゆるし、
その嗣業の残れる者のために

とがを見過ごされる神があろうか。
神はいつくしみを喜ばれるので、

その怒りをながく保たず、

二九 再びわれわれをあわれみ、
われわれの不義を足で踏みつけられる。

あなたはわれわれのもろもろの罪を
海の深みに投げ入れ、

三〇 昔からわれわれの先祖たちに誓われたように、
真実をヤコブに示し、

いつくしみをアブラハムに示される。

ナホル書

第一章

一ニネベについての託宣。エルコシびとナホルの幻の書。
 ニ主はねたみ、かつあだを報いる神、
 主はあだを報いる者、また憤る者、
 主はおのがあだに報復し、
 おのが敵に対して憤りをいだく。
 三主は怒ることおそく、力強き者、
 主は罰すべき者を決してゆるされない者、
 主の道はつむじ風と大風の中にあり、
 雲はその足のちりである。
 四彼は海を戒めて、これをかわかし、
 すべての川をかれさせる。
 バシヤンとカルメルはしおれ、
 レバノンの花はしぼむ。
 五もろもろの山は彼の前に震い、もろもろの丘は溶け、
 地は彼の前にむなしくなり、
 世界とその中に住む者も皆、むなしくなる。
 六だれが彼の憤りの前に立つことができよう。
 だれが彼の燃える怒りに耐えることができるか。

その憤りは火のように注がれ、
 岩も彼によって裂かれる。
 セ主は恵み深く、なやみの日の要害である。
 彼はご自分を避け所とする者を知っておられる。
 ハしかし、彼はみなぎる洪水であだを全く滅ぼし、
 おのが敵を暗やみに追いやられる。
 ニあなたがたは主に対して何を計るか。
 九あなたは主に対して何を計るか。
 彼はその敵に二度としかえしをする必要がないように
 敵を全く滅ぼされる。
 一〇彼らは結びからまったいばらのように、
 かわいた刈り株のように、焼き尽される。
 二主に対して悪事を計り、
 よこしまな事を勧める者が
 あなたのうちから出たではないか。
 三主はこう言われる、
 「たとい彼らは強く、かつ多くあっても、
 切り倒されて絶えはてる。
 わたしはあなたを苦しめたが、
 重ねてあなたを苦しめない。
 三三今わたしは彼のくびきを砕いて、
 あなたからとり除き、
 あなたを切りのなす。」

第二章

「四主はあなたについてお命じになった、

「あなたの名は長く続かない。

わたしはあなたの神々の家から、
彫像および鑄造を除き去る。

あなたは罪深い者だから、

わたしはあなたの墓を設ける」。

「五見よ、良きおとずれを伝える者の足は山の上にある。
彼は平安を宣べている。

ユダよ、あなたの祭を行い、

あなたの誓願をはたせ。

よこしまな者は重ねて、

あなたに向かつて攻めてこないからである。

彼は全く断たれる。

一撃ち破る者が

あなたに向かつて上つて来る。

城を守れ、道をうかがえ。

腰に帯せよ、大いに力を強くせよ。

三主はヤコブの栄えを回復して、

イスラエルの栄えのようにされる。

かすめる者が彼らをかすめ、

そのぶどうづるを、そこなつたからである。

三その勇士の盾は赤くいろどられ、

その兵士は紅に身をよろう。

戦車はその備えの日に、火のように輝き、

軍馬はおどる。

四戦車はちまたに狂い走り、

大路に飛びかける。

彼らはいまつのように輝き、

いなずまのように飛びかける。

五将士らは召集され、

彼らはその道でつまずき倒れ、

城壁に向かつて急いで行つて大盾を備える。

六川々の門は開け、

宮殿はあわてふためく。

七その王妃は裸にされて、捕われゆき、

その侍女たちは悲しみ、

胸を打つて、はとのようにうめく。

ハ二ネベは池のようであつたが、

その水は注ぎ出された。

「立ち止まれ、立ち止まれ」と呼んでも、

ふりかえるものもない。

九銀を奪え、金を奪え。

その宝は限りなく、

もろもろの尊い物はおびたらしい。

一〇消えうせ、むなしくなり、荒れはてた。

心は消え、ひびきは震え、

すべての腰には痛みがあり、

すべての顔は色を失った。

二ししのすみかはどこであるか。

若いししの穴はどこであるか。

そこに雄じしはその獲物を携え行き、

その子じしと共にいても、これを恐れさせる者はない。

三雄じしはその子じしのために引き裂き、

雌じしのために獲物を絞め殺し、

獲物をもつてその穴を満たし、

引き裂いた肉をもつてそのすみを満たした。

三三万軍の主は言われる、見よ、わたしはあなたに臨む。わたし

はあなたの戦車を焼いて煙にする。つるぎはあなたの若いしし

を滅ぼす。わたしはまた、あなたの獲物を地から断つ。あなた

の使者の声は重ねて聞かれない。

第三章

一わざわいなるかな、血を流す町。

その中には偽りと、ぶんどり物が満ち、

略奪はやまない。

二むちの音がする。車輪のとどろく音が聞える。

かける馬があり、走る戦車がある。

三騎兵は突撃し、

つるぎがきらめき、やりがひらめく。

殺される者はおびたしく、

しかばねは山をなす。

死体は数限りなく、人々はその死体につまずく。

四これは皆あでやかな遊女の恐るべき魔力と、

多くの淫行のためであつて、

その淫行をもつて諸国民を売り、

その魔力をもつて諸族を売り渡したものである。

五万軍の主は言われる、

見よ、わたしはあなたに臨む、

わたしはあなたのすそを顔の上まであげ、

あなたの裸を諸民に見せ、

あなたの恥じる所を諸国に見せる。

六わたしは汚らわしい物を、あなたの上に投げかけて、

あなたをはずかしめ、あなたを見ものとする。

すべてあなたを見るものは、

あなたを避けて逃げ去つて言う、

「二ネベは滅びた」と。

だがこのために嘆こう。

わたしはどこから彼女を慰める者を、

尋ね出し得よう。

ハあなたはテールベにまさっているか。

これはナイル川のかたわらに座し、

水をその周囲にめぐらし、

海をとりでとなし、

水をその垣としてゐる。

九その力はエチオピア、またエジプトであつて、

限りがない。

プトびと、リビヤびともその助け手であつた。

一〇しかし、これもとりことなつて捕えられて行き、

その子供もすべてのちまたのかどで打ち碎かれ、

その尊い人々はくじで分けられ、

その大いなる人々は皆、鎖につながれた。

二あなたもまた酔わされて氣を失ひ、

あなたは敵を避けて逃げ場を求める。

三あなたのとりでは皆

初なりの実をもつ、いちじくの木のようだ。

これをゆすぶればその実は落ちて、

食べようとする者の口にはいる。

三見よ、あなたのうちにいる兵士は女のようにだ。

あなたの国の門はあなたの敵の前に広く開かれ、

火はあなたの貫の木を焼いた。

四籠城のために水をくめ。

あなたのとりでを堅めよ。

粘土の中にはいつて、しつこいを踏み、

れんがの型をとれ。

五その所で火はあなたを焼き、

つるぎはあなたを切る。

それはいなごのようにあなたを食い滅ぼす。

あなたはいなごのように数を増せ。

ばつたのようになよ。

一六あなたは自分の商人を天の星よりも多くした。

いなごは羽をはつて飛び去る。

一七あなたの君たちは、ばつたのように、

あなたの学者たちは、いなごのように、

寒い日には垣にとまり、

日が出て来ると飛び去る。

そのありかはだれも知らない。

一ハアツスリヤの王よ、

あなたの牧者は眠り、あなたの貴族はまどろむ。

あなたの民は山の上に散らされ、

これを集める者はない。

一九あなたの破れは、いえることがなく、

あなたの傷は重い。

あなたのうわさを聞く者は皆、

あなたの事について手を打つ。

あなたの悪を常に身に受けなかつたような者が、

だれひとりあるか。

ハバクク書^{しよ}

第一章

一 預言者^{よげんしや}ハバククが見た^み神の託宣^{たくせん}。
二 主よ、わたしが呼んで^よいるのに、
いつまであなたは聞きいれて下さらないのか。
わたしはあなたに「暴虐^{ぼうぎやく}がある」と訴えたが、
あなたは助けて下さらないのか。
三 あなたは何ゆえ、わたしによこしまを見せ、
何ゆえ、わたしに災を見せられるのか。
略奪^{りやくだつ}と暴虐^{ぼうぎやく}がわたしの前にあり、
また論争^{ろんそう}があり、鬭争^{とうそう}も起っている。
四 それゆえ、律法^{りつぽう}はゆるみ、公義^{こうぎ}は行われず、
悪人^{あくにん}は義人^{ぎじん}を囲み、公義^{こうぎ}は曲^まげて行われている。
五 諸国民^{しよこくみん}のうちを望み見て、
驚^{おどろ}け、そして怪しめ。
わたしはあなたがたの日に一つの事をする。
人がこの事を知らせても、
あなたがたはどうてい信じまい。
六 見よ、わたしはカルデヤびとを興す。
これはたけく、激しい国民であつて、

地を縦横^{じゅうおう}に行きめぐり、
自分たちのものでないすみかを奪う。
七 これはきびしく、恐ろしく、
そのさばきと威厳^{いげん}とは彼ら自身から出る。
八 その馬はひょうよりも速く、
夜のおおかみよりも荒い。
その騎兵^{きへい}は威勢よく進む。
すなわち、その騎兵は遠い所から来る。
彼らは物を食おうと急ぐわしのように飛ぶ。
九 彼らはみな暴虐^{ぼうぎやく}のために来る。
彼らを恐れる恐れが彼らの前を行く。
彼らはとりこを砂のように集める。
一〇 彼らは王たちを侮り、つかさたちをあざける。
彼らはすべての城をあざ笑い、
土を積み上げてこれを奪う。
一一 こうして、彼らは風のようになぎ倒して行き過ぎる。
彼らは罪深い者で、おのれの力を神となす。
一二 わが神、主、わが聖者よ。
あなたは永遠からいますかたではありませんか。
わたしたちは死んではならない。
主よ、あなたは彼らをさばきのために備えられた。
岩よ、あなたは彼らを懲しめのために立てられた。

第二章

「わたしはわたしの見張所に立ち、
物見やぐらに身を置き、

一三 あなたは目が清く、悪を見られない者、
また不義を見られない者であるのに、
何ゆえ不真実な者に目をとめていられるのですか。
悪しき者が自分よりも正しい者を、のみ食らうのに、
何ゆえ黙つていられるのですか。
一四 あなたは人を海の魚のようにし、
治める者のない這う虫のようにされる。
一五 彼はつり針でこれをことごとくつり上げ、
網でこれを捕え、
引き網でこれを集め、
こうして彼は喜び楽しむ。
一六 それゆえ、彼はその網に犠牲をささげ、
その引き網に香をたく。
これによつて彼はぜいたくに暮し、
その食物も豊かになるからである。
一七 それで、彼はいつまでもその網の獲物を取り入れて、
無情にも諸国民を殺すのであろうか。

望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見、
またわたしの訴えについて
わたし自らなんと答えたらよからうかを見よう。
二主はわたしに答えて言われた、
「この幻を書き、
これを板の上に明らかにし、
走りながらも、これを読みうるようにせよ。
三この幻はなお定められたときを待ち、
終りをさして急いでいる。それは偽りではない。
もしおそれれば待つておれ。
それは必ず臨む。滞りはしない。
四見よ、その魂の正しくない者は衰える。
しかし義人はその信仰によつて生きる。
五また、酒は欺くものだ。
高ぶる者は定まりがない。
彼の欲は陰府のように広い。
彼は死のようであつて、飽くことなく、
万国をおのれに集め、
万民をおのれのものとしてつどわせる」。
六これらは皆ことわざをもつて彼をあざけり、
あざけりのなぞをもつて彼をあざ笑わないだらうか。
すなわち言う、

「わざわいなるかな、

おのれに属さないものを増し加える者よ。

いつまでこのようであろうか。

しちもの
質物でおのれを重くする者よ」。

七 あなたの負債者は、にわかに興らないであろうか。

あなたを激しくゆすぶる者は目ざめないであろうか。

その時あなたは彼らにかすめられる。

八 あなたは多くの国民をかすめたゆえ、

そのもろもろの民の残れる者は皆あなたをかすめる。

これは人の血を流し、

国と町と、その中に住むすべての者に

暴虐を行つたからである。

九 わざわいなるかな、

災の手を免れるために高い所に巢を構えようと、

おのが家のために不義の利を取る者よ。

一〇 あなたは事をはかつて自分の家に恥を招き、

多くの民を滅ぼして、自分の生命を失つた。

一一 石は石がきから叫び、

梁は建物からこれに答えるからである。

一二 わざわいなるかな、

血をもつて町を建て、

悪をもつて町を築く者よ。

一三 見よ、もろもろの民は火のために勞し、

もろもろの国びとはむなししい事のために疲れる。

これは万軍の主から出る言葉ではないか。

一四 海が水でおおわれているように、

地は主の栄光の知識で満たされるからである。

一五 わざわいなるかな、

その隣り人に怒りの杯を飲ませて、これを酔わせ、

彼らの隠し所を見ようとする者よ。

一六 あなたは誉の代りに恥に飽き、

あなたもまた飲んでよろめけ。

主の右の手の杯は、あなたに巡り来る。

恥はあなたの誉に代る。

一七 あなたがレバノンになした暴虐は、あなたを倒し、

獣のような滅亡は、あなたを恐れさせる。

これは人の血を流し、

国と町と、町の中に住むすべての者に、

暴虐を行つたからである。

一八 刻める像、鑄像および偽りを教える者は、

その作者がこれを刻んだとてなんの益があるうか。

その作者が物言わぬ偶像を造つて、

その造つたものに頼んでみても、

なんの益があるうか。

第三章

「九わがわいなるかな、
木に向かつて、さめよと言ひ、
物言わぬ石に向かつて、起きよと言う者よ。
これは黙示を与え得ようか。
見よ、これは金銀をきせたもので、
その中には命の息は少しもない。
二〇しかし、主はその聖なる宮にいます、
全地はそのみ前に沈黙せよ。

一シギヨノテの調べによる、
預言者ハバククの祈。
二主よ、わたしはあなたのことを聞きました。
主よ、わたしはあなたのみわざを見て恐れます。
この年のうちにこれを新たにし、
この年のうちにこれを知らせてください。
怒る時にもあわれみを思いおこしてください。
三神はテマンからこられ、
聖者はパランの山からこられた。
その栄光は天をおおい、
そのさんびは地に満ちた。「セラ

四その輝きは光のようであり、
その光は彼の手からほとばしる。
かしこにその力を隠す。
五疫病はその前に行き、熱病はその後に従う。
六彼は立つて、地をはかり、
彼は見て、諸国民をおののかせられる。
とこしえの山は散らされ、永遠の丘は沈む。
彼の道は昔のとおりである。
七わたしが見ると、クシヤンの天幕に悩みがあり、
ミデアンの国の幕は震う。
八主よ、あなたが馬に乗り、
勝利の戦車に乘られる時、
あなたは川に向かつて怒られるのか。
川に向かつて憤られるのか。
あるいは海に向かつて立腹されるのか。
九あなたの弓は取り出された。
矢は、弦につがえられた。「セラ
あなたは川をもつて地を裂かれた。
一〇山々はあなたを見て震い、
荒れ狂う水は流れいで、
淵は声を出して、その手を高くあげた。
二飛び行くあなたの矢の光のために、

電光でんこうのようにきらめく、あなたのやりのために、
日も月つきもそのすみかに立ち止とどまった。

二三あなたは憤いきどおつて地ちを行ゆきめぐり、
怒いかつて諸国民しよこくみんを踏ふみつけられた。

二三あなたはあなたの民たみを救すくうため、
あなたの油あぶらそいで者を救すくうために出て行いかれた。

あなたは悪わるしき者の頭あたまを砕くだき、
彼かれを腰こしから首くびまで裸はだかにされた。「セラ

一四あなたはあなたのやりで将軍しょうぐんの首くびを刺さしとおされた。
彼かれらはわたしを散ちらそうとして、

つむじ風かぜのように来き、
貧まずしい者をひそかに、のみ滅ほろぼすことを樂たのしみとした。

一五あなたはあなたの馬うまを使つかつて、
海うみと大水おほみずのさかまくところを踏ふみつけられた。

一六わたしは聞いて、わたしのからだはわななき、
わたしのくちびるはその声こえを聞きいて震ふるえる。

腐くされはわたしの骨ほねに入り、
わたしの歩あゆみは、わたしの下したによるめく。

わたしはわれわれに攻め寄せよせる民たみの上に
悩なやみの日ひの臨のぞむのを静しずかに待まとう。

一七いちじくの木きは花咲はなさかず、
ぶどうの木きは実みらず、

オリブの木きの産さんはむなくなり、
田畑たはたは食物しよくもつを生しょうぜず、

おりには羊ひつじが絶え、
牛舎ぎゅうしゃには牛うしがいなくなる。

一八しかし、わたしは主しゆによつて樂たのしみ、
わが救すくいの神かみによつて喜よろこぶ。

一九主なる神しゆはわたしの力ちからであつて、
わたしの足あしを雌めじかの足あしのようにし、

わたしに高たかい所ところを歩あゆませられる。
これを琴ことに合あわせ、

聖歌隊せいかたいの指揮者しきしやによつて歌うたわせる。

ゼパニヤ書

第一章

「ユダの王アモンの子ヨシヤの世に、ゼパニヤに臨んだ主の言葉。ゼパニヤはクシの子、クシはゲダリヤの子、ゲダリヤはアマリヤの子、アマリヤはヒゼキヤの子である。

ニ主は言われる、

「わたしは地のおもてからすべてのものを一掃する」。

三主は言われる、

「わたしは人も獣も一掃し、

空の鳥、海の魚をも一掃する。

わたしは悪人を倒す。

わたしは地のおもてから人を絶ち滅ぼす」。

四「わたしはユダとエルサレムの

すべての住民との上に手を伸べる。

わたしはこの所からバアルの残党と、

偶像の祭司の名とを断つ。

五また屋上で天の万象を拝む者、

主に誓いを立てて拝みながら、

またミルコムをさして誓う者、

六主にそむいて従わない者、

主を求めず、主を尋ねない者を断つ」。

七主なる神の前に沈黙せよ。

主の日は近づき、

主はすでに犠牲を備え、

その招いた者を聖別されたからである。

八主の犠牲をささげる日に、

「わたしはつかさたちと王の子たち、

およびすべて異邦の衣服を着る者を罰する。

九その日にわたしはまた、すべて敷居をとび越え、

暴虐と欺きとを自分の主君の家に満たす者を罰する」。

一〇主は言われる、

「その日には魚の門から叫び声がおこり、

第二の町からうめき声がおこり、

もろもろの丘からすさまじい響きがおこる。

二しつくいの家に住民よ、泣き叫べ。

あきないする民は皆滅ぼされ、

銀を量る者は皆断たれるからである。

三その時、わたしはともしびをもつて、

エルサレムを尋ねる。

そして滓の上に凝り固まり、

その心の中で

『主は良いことも、悪いこともしない』と

言う人々をわたしは罰する。

二三 彼らの財宝はかすめられ、
彼らの家は荒れはてる。

彼らは家を建てても、それに住むことができない、
ぶどう畑を作っても、そのぶどう酒を飲むことができない。

い。

一四 主の大きいなる日は近い、
近づいて、すみやかに来る。

主の日の声は耳にいたい。

そこに、勇士もいたく叫ぶ。

一五 その日は怒りの日、

なやみと苦しみの日、

荒れ、また滅びる日、

暗く、薄暗い日、

雲と黒雲の日、

一六 ラツパとときの声の日、

堅固な町と高いやぐらを攻める日である。

一七 わたしは人々になやみを下して、

盲人のように歩かせる。

彼らが主に対して罪を犯したからである。

彼らの血はちりのように流され、

彼らの肉は糞土のように捨てられる。

第二章

一八 彼らの銀も金も、

主の怒りの日には彼らを救うことができない。
全地は主のねたみの火にのまれる。

主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される。

一 あなたがた、恥を知らぬ民よ、
共につどい、集まれ。

二 すなわち、もみがらのように追いやられる前に、

主の激しい怒りがまだあなたがたに臨まない前に、

主の憤りの日がまだあなたがたに来ない前に。

三 すべての主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、

主を求めよ。

正義を求めよ。

謙遜を求めよ。

そうすればあなたがたは主の怒りの日に、

あるいは隠されることがあろう。

四 ともあれ、ガザは捨てられ、

アシケロンは荒れはて、

アシドドは真昼に追い払われ、

エクロンは抜き去られる。

五 わざわいなるかな、
 海^{うみ}べに住^すむ者^{もの}、ケレテの国民^{こくみん}。
 ペリシテびとの地^ち、カナンよ、
 主^{しゅ}の言葉^{ことば}があなたがたに臨^{のぞ}む。
 わたしはあなたを滅^{ほろ}ぼして、
 住^すむ者^{もの}がないようにする。
 六 海^{うみ}べよ、あなたは牧場^{まきば}となり、
 羊飼^{ひつじかい}の牧草地^{ぼくそうち}となり、
 また羊^{ひつじ}のおりとなる。
 七 海^{うみ}べはユダの家^{いえ}の残り^{のこ}の者^{もの}に帰^きする。
 彼^{かれ}らはその所^{ところ}で群^むれを養^{やしな}い、
 夕暮^{ゆうぐれ}にはアシケロンの家^{いえ}に伏^ふす。
 彼^{かれ}らの神^{かみ}、主^{しゅ}が彼^{かれ}らを顧^{かえり}み、
 その幸福^{こうふく}を回復^{かいふく}されるからである。
 ハ「わたしはモアブのあざけりと、
 アンモンの人々^{ひとびと}の、のしりを聞^きいた。
 彼^{かれ}らはわが民^{たみ}をあざけり、
 自ら誇^{ほこ}って彼^{かれ}らの国境^{こつきよう}を侵^{おか}した。
 九 それゆえ、万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}、イスラエルの神^{かみ}は言^いわれる、
 わたしは生^いきている。
 モアブは必^{かなら}ずソドム^{ひとびと}のようになる。
 アンモンの人々^{ひとびと}はゴモラ^{ひとびと}のようになる。

いらくさと塩穴^{しおあな}とがここを占領^{せんりよう}して、
 永遠^{えいえん}に荒れ地^あとなる。
 わが民^{たみ}の残り^{のこ}の者^{もの}は彼^{かれ}らをかすめ、
 わが国民^{こくみん}の残り^{のこ}の者^{もの}はこれを所有^{しやうゆう}する」。
 一〇 この事^{こと}の彼^{かれ}らに臨^{のぞ}むのはその高^{たか}ぶりによるのだ。
 彼^{かれ}らが万軍^{ばんぐん}の主^{しゅ}の民^{たみ}をあざけり、
 みずから誇^{ほこ}ったからである。
 一一 主^{しゅ}は彼^{かれ}らに對^{たい}して恐^{おそ}るべき者^{もの}となられる。
 主^{しゅ}は地^ちのすべての神々^{かみがみ}を飢^うえさせられる。
 もろもろの国^{くに}の民^{たみ}は、
 おのおの自^じ分の所^{ところ}から出^でて主^{しゅ}を拜^{おが}む。
 一二 エチオピア^いびとよ、あなたがたもまた
 わがつるぎによつて殺^{ころ}される。
 一三 主^{しゅ}はまた北^{きた}に向^むかつて手^てを伸^のべ、
 アッスリヤ^あを滅^{ほろ}ぼし、
 ニネベ^あを荒^{あら}して、
 荒野^{あらの}のような、かわいた地^ちとされる。
 一四 家畜^{かちく}の群^むれ、もろもろの野^のの獸^{けもの}はその中^{なか}に伏^ふし、
 はげたかや、やまあらしはその柱^{はしら}の頂^{いただき}に住^すみ、
 ふくろうは、その窓^{まど}のうらになき、
 からすは、その敷居^{しきい}の上^{うへ}に鳴^なく。
 その香柏^{こうはく}の細工^{さいいく}が裸^{はだか}にされるからである。

第三章

一五この町は勝ち誇つて、安らかに落ち着き、その心の中で、

「ただわたしただ、わたしの外にはだれもない」と言つた町であるが、

このように荒れはてて、獣の伏す所になつてしまつた。

ここを通り過ぎる者は皆あざけつて、手を振る。

一わざわいなるかな、

このそむき汚れた暴虐の町。

二これはだれの声にも耳を傾けず、

懲しめを受けいれず、

主に寄り頼まず、

おのれの神に近よらない。

三その中にいるつかさたちは、ほえるしし、

そのさばきびとたちは、夜のおおかみで、

彼らは朝まで何一つ残さない。

四その預言者たちは、放縱で偽りびと、

その祭司たちは聖なる物を汚し、律法を破る。

五その中にいます主は義であつて、不義を行われない。朝ごとにその公義を現して、誤ることがない。

しかし不義な者は恥を知らない。

六「わたしは諸国民を滅ぼした。

そのやぐらは荒れはてた。

わたしはそのちまたを荒したので、

ちまたを行き来する者もない。

その町々は荒れすたれて、

人の姿もなく、住む者もない。

セわたしは言つた、

『これは必ずわたしを恐れ、懲しめを受ける。』

これはわたしが命じたすべての事を見失わない」と。

しかし彼らはしきりに自分の行状を乱した」。

ハ主は言われる、

「それゆえ、あなたがたは、わたしが立つて、

証言する日を待て。

わたしの決意は諸国民をよせ集め、

もろもろの国を集めて、

わが憤り、わが激しい怒りを

ことごとくその上に注ぐことであつて、

全地は、ねたむわたしの怒りの火に

焼き滅ぼされるからである。

九その時わたしはもろもろの民に清きくちびるを与え、

すべて彼らに主の名を呼ばせ、

心を一つにして主に仕えさせる。

一〇わたしを拝む者、

わたしが散らした者の娘は

エチオピアの川々の向こうから来て、

わたしに供え物をささげる。

二その日には、

あなたはわたしにそむいたすべてのわざのゆえに、

はずかしめられることはない。

その時わたしはあなたのうちから、

高ぶって誇る者どもを除くゆえ、

あなたは重ねてわが聖なる山で、高ぶることはない。

三わたしは柔和にしてへりくだる民を、

あなたのうちに残す。

彼らは主の名を避け所とする。

四イスラエルの残りの者は不義を行わず、偽りを言わず、

その口には欺きの舌を見ない。

それゆえ、彼らは食を得て伏し、

彼らをおびやかす者はいない。

五シオンの娘よ、喜び歌え。

イスラエルよ、喜び呼ばわれ。

エルサレムの娘よ、心のかぎり喜び樂しめ。

五主はあなたを訴える者を取り去り、

あなたの敵を追い払われた。

イスラエルの王なる主はあなたのうちにいます。

あなたはもはや災を恐れることはない。

一六その日、人々はエルサレムに向かつて言う、

「シオンよ、恐れるな。

あなたの手を弱々しくたれるな。

一七あなたの神、主はあなたのうちにいまし、

勇士であつて、勝利を与えられる。

彼はあなたのために喜び樂しみ、

その愛によつてあなたを新にし、

祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわられる」。

一八「わたしはあなたから悩みを取り去る。

あなたは恥を受けることはない。

一九見よ、その時あなたをしえたげる者を

わたしはことごとく処分し、

足なえを救い、追いやられた者を集め、

彼らの恥を誉にかえ、

全地にほめられるようにする。

二〇その時、わたしはあなたがたを連れかえる。

わたしがあなたがたを集めるとき、
わたしがあなたがたの目の前に、
あなたがたの幸福を回復するとき、
地のすべての民の中で、
あなたがたに名を得させ、
誉を得させる」と
主は言われる。

ハガイ書

第一章

一ダリヨス王の二年六月、その月の一日に、主の言葉が預言者ハガイによつて、シャルテルの子、ユダの総督ゼルバベル、およびヨザダクの子、大祭司ヨシユアに臨んだ、ニ「万軍の主はこう言われる、この民は、主の家を再び建てる時は、まだこないと言っている」。三そこで、主の言葉はまた預言者ハガイに臨んだ、四「主の家はこのように荒れはてているのに、あなたがたは、みずから板で張つた家に住んでいる時であろうか。五それで今、万軍の主はこう言われる、あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、考えるがよい。六あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、食べても、飽きることはない。飲んでも、満たされない。着ても、暖まらない。賃銀を得ても、これを破れた袋に入れていくようなものである。

七万軍の主はこう言われる、あなたがたは、自分のなすべきことを考えるがよい。ハ山に登り、木を持つてきて主の家を建てよ。そうすればわたしはこれを喜び、かつ栄光のうちに現れると主は言われる。九あなたがたは多くを望んだが、見よ、それは少なかった。あなたがたが家に持つてきたとき、わたしはそれを吹き払つた。これは何ゆえであるかと、万軍の主は言われる。こ

れはわたしの家が荒れはてているのに、あなたがたは、おのの自分の家の事だけに、忙しくしている。一〇それゆえ、あなたがたの上の天は露をさし止め、地はその産物をさし止めた。一一また、わたしは地にも、山にも、穀物にも、新しい酒にも、油にも、地に生じるものにも、人間にも、家畜にも、手で作るすべての作物にも、ひでりを呼び寄せた」。

三そこで、シャルテルの子ゼルバベルとヨザダクの子、大祭司ヨシユアおよび残りのすべての民は、その神、主の声と、その神、主のつかわされた預言者ハガイの言葉とに聞きしたが、い、そして民は、主の前に恐れかしこんだ。三時に、主の使者ハガイは主の命令により、民に告げて言つた、「わたしはあなたがたと共にいると主は言われる」。四そして主は、シャルテルの子、ユダの総督ゼルバベルの心と、ヨザダクの子、大祭司ヨシユアの心、および残りのすべての民の心を、振り動かされたので、彼らは来て、その神、万軍の主の家の作業にとりかかった。一五これは六月二十四日のことであつた。

第二章

一ダリヨス王の二年の七月二十一日に、主の言葉が預言者ハガイに臨んだ、ニ「シャルテルの子、ユダの総督ゼルバベルと、ヨザダクの子、大祭司ヨシユア、および残りのすべての民に告げて

言え、三『あなたがた残りの者のうち、以前の栄光に輝く主の家を見た者はだれか。あなたがたは今、この状態をどう思うか。これはあなたがたの目には、無にひとしいではないか。四主は言われる、ゼルバベルよ、勇気を出せ。ヨザダクの子、大祭司ヨシアよ、勇気を出せ。主は言われる。この地のすべての民よ、勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいると、万軍の主は言われる。五これはあなたがたがエジプトから出た時、わたしがあなたがたに、約束した言葉である。わたしの霊が、あなたがたのうちに宿っている。恐れるな。六万軍の主はこう言われる、しばらくして、いま一度、わたしは天と、地と、海と、かわいた地とを震う。七わたしはまた万国民を震う。万国民の財宝は、はいって来て、わたしは栄光をこの家に満たすと、万軍の主は言われる。八銀はわたしのもの、金もわたしのものであると、万軍の主は言われる。九主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きいと、万軍の主は言われる。わたしはこの所に繁栄を与える」と、万軍の主は言われる』。

二〇ダリヨスの二年の九月二十四日に、主の言葉が預言者ハガイに臨んだ、二「万軍の主はこう言われる、律法について祭司たちに尋ねて言え、三『人がその衣服のすそで聖なる肉を運んで行き、そのすそがもし、パンまたはあつもの、または酒、または油、またはどんな食物にでもさわったなら、それらは聖なるものとなるか』と」。祭司たちは「ならない」と答えた。三ハガイ

はまた言った、「もし、死体によって汚れた人が、これらの一つにさわったなら、それは汚れるか」。祭司たちは「汚れる」と答えた。四そこで、ハガイは言った、「主は言われる、この民も、この国も、わたしの前では、そのようである。またその手のわざもそのようである。その所で彼らのささげるものは、汚れたものである。五今、あなたがたはこの日から、後の事を思うがよい。主の宮で石の上に石が積み重ねられなかった前、あなたがたは、どんなであつたか。六あの時には、二十柵の麦の積まれる所に行つたが、わずかに十柵を得、また五十桶をくもつとして、酒ぶねに行つたが、二十桶を得たのみであつた。七わたしは立ち枯れと、腐り穂と、ひようをもつてあなたがたと、あなたがたのすべての手のわざを撃つた。しかし、あなたがたは、わたしに帰らなかったと主は言われる。八あなたがたはこの日より後、すなわち、九月二十四日よりの事を思うがよい。また主の宮の基をすえた日から後の事を心にとめるがよい。九種はなお、納屋にあるか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリブの木もまだ実を結ばない。しかし、わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与える」。

二〇この月の二十四日に、主の言葉がふたたびハガイに臨んだ、二「ユダの総督ゼルバベルに告げて言え、わたしは天と地を震う。三わたしは国々の王位を倒し、異邦の国々の力を滅ぼし、また戦車、およびこれに乗る者を倒す。馬およびこれに乗る者

は、たがいにその仲間のつるぎによつて倒れる。三 万軍の主は
言われる、シャルテルの子、わがしもべゼルバベルよ、主は言わ
れる、その日、わたしはあなたを立て、あなたを印章のように
する。わたしはあなたを選んだからであると、万軍の主は言わ
れる」。

ゼカリヤ書

第一章

「ダリヨスの第二年の八月に、主の言葉がイドの子ベレキヤの子である預言者ゼカリヤに臨んだ、^二「主はあなたがたの先祖たちに対して、いたくお怒りになった。^三それゆえ、万軍の主はこう仰せられると、彼らに告げよ。万軍の主は仰せられる、わたしに帰れ、そうすれば、わたしもあなたがたに帰ろうと、万軍の主は仰せられる。^四あなたがたの先祖たちのようであつてはならない。先の預言者たちは、彼らにむかつて叫んで言つた、『万軍の主はこう仰せられる、悪い道を離れ、悪いおこないを捨てて帰れ』と。しかし彼らは聞きいれず、耳をわたしに傾けなかつたと主は言われる。^五あなたがたの先祖たち、彼らはどこにいるか。預言者たち、彼らは永遠に生きているのか。^六しかしわたしのしもべである預言者たちに命じたわが言葉と、わが定めとは、あなたがたの先祖たちに及んだではないか。それで彼らは立ち返つて言つた、『万軍の主がわれわれの道にしたがい、おこないに従つて、われわれに、なそうと思ひ定められたように、そのとおりされたのだ』と」。

セダリヨスの第二年の十一月、すなわちセバテという月の二十四日に、主の言葉がイドの子ベレキヤの子である預言者ゼカリヤに臨んだ。そしてゼカリヤは言つた、ハ「わたしは夜、見てい

ると、ひとりの人が赤馬に乗つて、谷間にあるミルトスの木の間に立ち、その後、赤馬、栗毛の馬、白馬がいた。^九その時わたしは「わが主よ、これらはなんですか」と尋ねると、わたしと語る天の使は言つた、『これがなんであるか、あなたに示しましう』。^{一〇}すると、ミルトスの木の中に立つている人が答えて、『これらは地を見回らせるために、主がつかわされた者です』と言つた、^二彼らは答えて、ミルトスの木に立つている主の使に言つた、『われわれは地を見回つたが、全地はすべて平穩です』。^三すると主の使は言つた、『万軍の主よ、あなたは、いつまでエルサレムとユダの町々とを、あわれんで下さらないのですか。あなたはお怒りになって、すでに七十年になりました』。^四主はわたしと語る天の使に、^五ねんごろな慰めの言葉をもつて答へられた。^六そこで、わたしと語る天の使は言つた、『あなたは呼ばわつて言いなさい。万軍の主はこう仰せられます、わたしはエルサレムのため、シオンのために、大いなるねたみを起し、^七五安らかにいる国々の民に対して、大いに怒る。なぜなら、わたしが少しばかり怒つたのに、彼らは、大いにこれを悩ましたからである』。^八それゆえ、主はこう仰せられます、わたしはあわれみをもつてエルサレムに帰る。わたしの家はその中に建てられ、測りなわはエルサレムに張られると、万軍の主は仰せられます。^{一七}あなたはまた呼ばわつて言いなさい。万軍の主はこう

仰せられます、わが町々は再び良い物で満ちあふれ、主は再びシオンを慰め、再びエルサレムを選ぶ」と。

「ハわたしが目を見て見ていると、見よ、四つの角があった。九わたしと語る天の使に「これらはなんですか」と言うと、彼は答えて言った、「これらはユダ、イスラエルおよびエルサレムを散らした角です」。三その時、主は四人の鍛冶をわたしに示された。三わたしが「これらは何をするために来たのですか」と言うと、彼は答えた、「これらの角はユダを散らして、人にその頭をあげさせなかったものですが、この四人の者が来たのは彼らをおどし、かのユダの地にむかつて角をあげ、これを散らした国々の民の角を投げうつためです」。

第二章

「またわたしが目をあげて見ていると、見よ、ひとりの人が、測りなわを手持っている、二「あなたはどこへ行くのですか」と尋ねると、その人はわたしに言った、「エルサレムを測って、その広さと、長さを見ようとするのです」。三すると見よ、わたしと語る天の使が出て行くと、またひとりの天の使が出てきて、これに出会って、四言った、「走って行って、あの若い人に言いなさい、『エルサレムはその中に、人と家畜が多くなるので、城壁のない村里のように、人の住む所となるでしょう。五主は

仰せられます、わたしはその周囲で火の城壁となり、その中で栄光となる」と。

六主は仰せられる、さあ、北の地から逃げて来なさい。わたしはあなたがたを、天の四方の風のように散らしたからである。セさあ、バビロンの娘と共にいる者よ、シオンにのがれなさい。ハあなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのであるから、あなたがたを捕えていった国々の民に、その栄光にしたがって、わたしをつかわされた万軍の主は、こう仰せられる、九「見よ、わたしは彼らの上に手を振る。彼らは自分に仕えた者のとりことなる。その時あなたがたは万軍の主が、わたしをつかわされたことを知る。一〇主は言われる、シオンの娘よ、喜び歌え。わたしが来て、あなたの中に住むからである。二その日には、多くの国民が主に連なつて、わたしの民となる。わたしはあなたの中に住む。三あなたは万軍の主が、わたしをあなたにつかわされたことを知る。主は聖地で、ユダを自分の分として取り、エルサレムを再び選ばれるであろう」。三すべて肉なる者よ、主の前に静まれ。主はその聖なるすみから立ちあがられたからである。

第三章

一時に主は大祭司ヨシユアが、主の使の前に立ち、サタンがその

右に立つて、これを訴えているのをわたしに示された。ニ主はサタンに言われた、「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか」。ミヨシユアは汚れた衣を着て、み使の前に立つていたが、四み使は自分の前に立つている者どもに言った、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」。またヨシユアに向かつて言った、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」。五わたしは言った、「清い帽子を頭にかぶらせなさい」。そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた。主の使はかたわらに立つていた。

六主の使は、ヨシユアを戒めて言った、七「万軍の主は、こう仰せられる、あなたがもし、わたしの道に歩み、わたしの務を守るならば、わたしの家をつかさどり、わたしの庭を守ることができ。わたしはまた、ここに立つている者どもの中に行き来することを得させる。ハ大祭司ヨシユアよ、あなたも、あなたの前にすわっている同僚たちも聞きなさい。彼らはよいしるしとなるべき人々だからである。見よ、わたしはわたしのしもべなる枝を生じさせよう。九万軍の主は言われる、見よ、ヨシユアの前にわたしが生じさせた石の上に、すなわち七つの目をもっているこの一つの石の上に、わたしはみずから文字を彫刻する。そしてわたしはこの地の罪を、一日の内に取り除く。一〇万軍の主は言われる、その日には、あなたがたはめいめいその隣り人を招い

て、ぶどうの木の下、いちじくの木の下に座するのである」。

第四章

一わたしと語った天の使がまた来て、わたしを呼びました。わたしは眠りから呼びさまされた人のようであつた。ニ彼がわたしに向かつて「何を見るか」と言ったので、わたしは言った、「わたしが見ていると、すべて金で造られた燭台が一つあつて、その上に油を入れる器があり、また燭台の上に七つのもしび皿があり、そのもしび皿は燭台の上にあつて、これにおのの七本ずつの管があります。ミまた燭台のかたわらに、オリブの木が二本あつて、一本は油をいれる器の右にあり、一本はその左にあります」。四わたしはまたわたしと語る天の使に言った、「わが主よ、これらはなんですか」。五わたしと語る天の使は答えて、「あなたはそれがなんであるか知らないのですか」と言つたので、わたしは「わが主よ、知りません」と言つた。六すると彼はわたしに言つた、「ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。七大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼルバベルの前に平地となる。彼は『恵みあれ、これに恵みあれ』と呼ばわりながら、かしら石を引き出すであらう」。八主の言葉がわたしに臨んで言うには、九「ゼルバベル

の手はこの宮の礎をすえた。彼の手はこれを完成する。その時あなたがたは万軍の主が、わたしをあなたがたにつかわされたことを知る。〇だれでも小さい事の目をいやしめたる者は、ゼルバベルの手に、下げ振りのあるのを見て、喜ぶ。

これらの七つのものは、あまねく全地を行き来する主の目である。――わたしはまた彼に尋ねて、「燭台の左右にある、この二本のオリブの木はなんですか」と言い、三重ねてまた「この二本の金の管によつて、油をそれから注ぎ出すオリブの二枝はなんですか」と言う、と、三彼はわたしに答えて、「あなたはそれがないのであるか知らないのですか」と言つたので、「わが主よ、知りません」と言つた。――四すると彼は言つた、「これらはふたりの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です」。

第五章

――わたしがまた目をあげて見ていると、飛んでいる巻物を見た。二彼がわたしに「何を見るか」と言つたので、「飛んでいる巻物を見ます。その長さは二十キュビト、その幅は十キュビトです」と答えた。三すると彼はまた、わたしに言つた、「これは全地のもてに出て行く、のろいの言葉です。すべて盗む者はこれに照して除き去られ、すべて偽り誓う者は、これに照して除き去られるのです。四万軍の主は仰せられます、わたしはこれを出て行か

せる。これは盗む者の家に入り、またわたしの名をさして偽り誓う者の家に入り、その家の中に宿つて、これをその木と石と共に滅ぼす」と。

五わたしと語る天の使は進んで来て、わたしに「目をあげて、この出てきた物が、なんであるかを見なさい」と言つた。六わたしが「これはなんですか」と言う、と、彼は「この出てきた物は、エパ枒です」と言い、また「これは全地の罪です」と言つた。七そして見よ、鉛のふたを取りあげると、そのエパ枒の中にひとりの女がすわっていた。八すると彼は「これは罪悪である」と言つて、その女をエパ枒の中に押し入れ、鉛の重しを、その枒の口に投げかぶせた。九それからわたしが目をあげて見ていると、ふたりの女が出てきた。これに、こうのとりの翼のような翼があり、その翼に風をはらんで、エパ枒を天と地との間に持ちあげた。――わたしは、わたしと語る天の使に言つた、「彼らはエパ枒を、どこへ持つて行くのですか」。二彼はわたしに言つた、「シナルの地で、女たちのために家を建ててののです。それが建てられると、彼らはエパ枒をそこにすえ、その土台の上に置くのです」。

第六章

――わたしがまた目をあげて見ていると、四両の戦車が二つの山

の間から出てきた。その山は青銅の山であった。二第一の戦車には赤馬を着け、第二の戦車には黒馬を着け、三第三の戦車には白馬を着け、第四の戦車には、まだらのねずみ色の馬を着けていた。四わたしは、わたしと語るみ使に尋ねた、「わが主よ、これらはなんですか」。五天の使は答えて、わたしに言った、「これらは全地の主の前に現れて後、天の四方に出て行くものです。六黒馬を着けた戦車は、北の国をさして出て行き、白馬は西の国をさして出て行き、まだらの馬は南の国をさして出て行くのです」。七馬が出てくると、彼らは、地をあまねくめぐるために、しきりに出たがるのであった。それで彼が「行って、地をあまねくめぐれ」と言うのと、彼らは地を行きめぐった。八すると彼はわたしを呼んで、「北の国をさして行く者どもは、北の国でわたしの心を静まらせてくれた」と言った。

九主の言葉がまたわたしに臨んだ、一〇「バビロンから帰ってきたかの捕囚の中から、ヘルダイ、トビヤおよびエダヤを連れて、その日にゼパニヤの子ヨシヤの家に行き、二彼らから金銀を受け取って、一つの冠を造り、それをヨザダクの子である大祭司ヨシユアの頭にかぶらせて、三彼に言いなさい、『万軍の主は、こ

ある』。四またその冠はヘルダイ、トビヤ、エダヤおよびゼパニヤの子ヨシヤの記念として、主の宮に納められる。

五また遠い所の者どもが来て、主の宮を建てることを助ける。そしてあなたがたは万軍の主が、わたしをつかわされたことを知るようになる。あなたがたがもし励んで、あなたがたの神、主の声に聞き従うならば、このようになる」。

第七章

一ダリヨス王の第四年の九月、すなわちキスリウという月の四日に、主の言葉がゼカリヤに臨んだ。二その時ペテルの人々は、シヤレゼル、レゲン・メレクおよびその従者をつかわして、主の恵みを請い、三かつ万軍の主の宮にいる祭司に問わせ、かつ預言者に問わせて言った、「わたしは今まで、多年おこなつてきたように、五月に泣き悲しみ、かつ断食すべきでしうか」。四この時、万軍の主の言葉がわたしに臨んだ、五「地のすべての民および祭司に告げて言いなさい、あなたがたが七十年の間、五月と七月とに断食し、かつ泣き悲しんだ時、はたして、わたしのために断食したか。六あなたがたが食い飲みする時、それは全く自分のために食い、自分のために飲むのではないか。七昔エルサレムがその周囲の町々と共に、人が住み、栄えていた時、また南の地および平野にも、人が住んでいた時に、さきの預言者たちに

よつて、主がお告げになった言葉は、これらの事ではなかったか」。

八 主の言葉が、またゼカリヤに臨んだ、九 「万軍の主はこう仰せられる、真実のさばきを行い、互に相いつくしみ、相あわれみ、こゝやもめ、みなしづ、寄留の他国人および貧しい人を、しえたげてはならない。互に人を害することを、心に図つてはならない」。二とところが、彼らは聞くことを拒み、肩をそびやかし、耳を鈍くして聞きいれず、三その心を金剛石のようにして、万軍の主がそのみたまにより、さきの預言者によつて伝えられた、律法と言葉とに聞き従わなかつた。それゆえ、大いなる怒りが、万軍の主から出て、彼らに臨んだのである。三 「わたしが呼ばわつたけれども、彼らは聞こうとしなかつた。そのとおり、彼らと呼ばわつても、わたしは聞かない」と万軍の主は仰せられる。四 「わたしは、つむじ風をもつて、彼らを未知のもろもろの国民の中に散らした。こうして彼らが去つた後、この地は荒れて行き来する者もなく、この麗しい地は荒地となつたのである」。

第八章

一 万軍の主の言葉がわたしに臨んだ、二 「万軍の主は、こう仰せられる、『わたしはシオンのために、大いなるねたみを起し、ま

たこれがために、大いなる憤りをもつてねたむ』。三 主はこう仰せられる、『わたしはシオンに歸つて、エルサレムの中に住む。エルサレムは忠信な町となえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえられる』。四 万軍の主は、こう仰せられる、『エルサレムの街路には再び老いた男、老いた女が座するようになる。みな年寄の人々で、おのおのつえを手を持つ。五 またその町の街路には、男の子、女の子が満ちて、街路に遊び戯れる』。六 万軍の主は、こう仰せられる、『その日には、たとい、この民の残れる者の目に、不思議な事であつても、それはわたしの目にも、不思議な事であろうか』と万軍の主は言われる。七 万軍の主は、こう仰せられる、『見よ、わが民を東の国から、また西の国から救ひ出し、八彼らを連れてきて、エルサレムに住まわせ、彼らはわが民となり、わたしは彼らの神となつて、共に真実と正義をもつて立つ』。

九 万軍の主は、こう仰せられる、『万軍の主の家である宮を建てるために、その礎をすえた日からこのかた、預言者たちの口から出たこれらの言葉を、きよう聞く者よ、あなたがたの手を強くせよ。一〇 この日の以前には、人も働きの俤を得ず、獣も働きの俤を得ず、また出る者もはいる者も、あだのために安全ではなかつた。わたしはまた人々を相たがいにもかせた。一一 しかし今は、わたしのこの民の残れる者に対することは、さきの日のようではないと、万軍の主は言われる。一二 そこには、平和と繁栄と

の種がまかれるからである。すなわちぶどうの木は実を結び、地は産物を出し、天は露を与える。わたしはこの民の残れる者に、これをことごとく与える。三 ユダの家およびイスラエルの家よ、あなたがたが、国々の民の中に、のろいとなつていたように、わたしはあなたがたを救つて祝福とする。恐れてはならない。あなたがたの手を強くせよ」。

四 万軍の主は、こう仰せられる、「あなたがたの先祖が、わたしを怒らせた時に、災を下そうと思つて、これをやめなかつたように、――万軍の主は言われる――五 そのように、わたしはまた今日、エルサレムとユダの家に恵みを与えよう。恐れてはならない。六 あなたがたのなすべき事はこれである。あなたがたは互に真実を語り、またあなたがたの門で、真実と平和のさばきとを、行わなければならない。七 あなたがたは、互に人を害することを、心に図つてはならない。偽りの誓いを好んではならない。わたしはこれらの事を憎むからであると、主は言われる」。

八 万軍の主の言葉がわたしに臨んだ、九 「万軍の主は、こう仰せられる、四月の断食と、五月の断食と、七月の断食と、十月の断食とは、ユダの家の喜び樂しみの時となり、よき祝の時となる。ゆえにあなたがたは、真実と平和とを愛せよ。

一〇 万軍の主は、こう仰せられる、もろもろの民および多くの町の住民、すなわち、一つの町の住民は、他の町の人々のところ

に行き、二 『われわれは、ただちに行つて、主の恵みを請い、万軍の主と呼ぶ求めよう』と言うと、『わたしも行こう』と言う。三 多くの民および強い国民はエルサレムに来て、万軍の主を求め、主の恵みを請う。四 万軍の主は、こう仰せられる、その日には、もろもろの国ことばの民の中から十人の者が、ひとりのユダヤ人の衣のすそをつかまえて、『あなたがたと一緒に行く』。神があなたがたと共にいますことを聞いたから』と言う」。

第九章

一 託宣

主の言葉はハデラクの地に臨み、

ダマスコの上にとどまる。

アラムの町々はイスラエルのすべての部族のように主に属するからである。

二 これに境するハマテもまたそのとおりだ。

非常に賢いが、ツロとシドンもまた同様である。

三 ツロは自分のために、とりでを築き、

銀をちりのように積み、

金を道ばたの泥のように積んだ。

四 しかし見よ、主はこれを攻め取り、その富を海の中に投げ入れられる。

これは火で焼き滅ぼされる。
 五アシケロンはこれを見て恐れ、
 ガザもまた見てもだえ苦しみ、
 エクロンもまたその望む所のものが
 はずかしめられて苦しむ。
 ガザには王が絶え、
 アシケロンには住む者がなくなり、
 ハアシドドには混血の民が住む。
 わたしはペリシテびとの誇を断つ。
 またその口から血を取り除き、
 その齒の間から憎むべき物を取り除く。
 これもまた残つてわれわれの神に歸し、
 ユダの一民族のようになる。
 またエクロンはエブスびとのようになる。
 ハその時わたしは、わが家のために營を張つて、
 見張りをし、行き来する者のないようにする。
 したげる者は、かさねて通ることがない。
 わたしが今、自分の目で見ているからである。
 カシオンの娘よ、大いに喜べ、
 エルサレムの娘よ、呼ばわれ。
 見よ、あなたの王はあなたの所に来る。
 彼は義なる者であつて勝利を得、

柔和であつて、ろばに乗る。
 すなわち、ろばの子である子馬に乗る。
 一〇わたしはエフライムから戦車を断ち、
 エルサレムから軍馬を断つ。
 また、いくさ弓も断たれる。
 彼は国々の民に平和を告げ、
 その政治は海から海に及び、
 大川から地の果にまで及ぶ。
 二あなたについてはまた、
 あなたとの契約の血のゆえに、
 わたしはかの水のない穴から、
 あなたの捕われ人を解き放す。
 三望みをいだく捕われ人よ、あなたの城に歸れ。
 わたしはきようもなお告げて言う、
 必ず倍して、あなたをもとに返すことを。
 三わたしはユダを張つて、わが弓となし、
 エフライムをその矢とした。
 シオンよ、わたしはあなたの子らを呼び起して、
 ギリシヤの人々を攻めさせ、
 あなたを勇士のつるぎのようにさせる。
 二四その時、主は彼らの上に現れて、
 その矢をいはずまのように射られる。

第一〇章

主なる神はラツパを吹きならし、
 南のつむじ風に乗つて出てこられる。
 二五 万軍の主は彼らを守られるので、
 彼らは石投げどもを食い尽し、踏みつける。
 彼らはまたぶどう酒のように彼らの血を飲み、
 鉢のようにそれで満たされ、
 祭壇のすみのように浸される。
 二六 その日、彼らの神、主は、彼らを救い、
 その民を羊のように養われる。
 彼らは冠の玉のように、その地に輝く。
 二七 そのさいわい、その麗しさは、いかばかりであろう。
 穀物は若者を榮えさせ、
 新しいぶどう酒は、おとめを榮えさせる。

一 あなたがたは春の雨の時に、
 雨を主に請い求めよ。
 主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、
 野の青草をおのおのに賜わる。
 ニテラピムは、たわごとを言い、
 占い師は偽りを見、

夢見る者は偽りの夢を語り、
 むなし慰めを与える。
 このゆえに、民は羊のようにさまよい、
 牧者がないために悩む。
 三 「わが怒りは牧者にむかつて燃え、
 わたしは雄やぎを罰する。
 万軍の主が、その群れの羊であるユダの家を顧み、
 これをみごとな軍馬のようにされるからである。
 四 隅石は彼らから出、
 天幕の杭も彼らから出、
 いくさ弓も彼らから出、
 支配者も皆彼らの中から出る。
 五 彼らが戦う時は勇士のようになつて、
 道はたの泥の中に敵を踏みしめる。
 主が彼らと共におられるゆえに彼らは戦い、
 馬に乗る者どもを困らせる。
 六 わたしはユダの家を強くし、ヨセフの家を救う。
 わたしは彼らをあわれんで、彼らを連れ帰る。
 彼らはわたしに捨てられたことのないようになる。
 わたしは彼らの神、主であつて、
 彼らに答えるからである。
 セエフライムびとは勇士のようになり、

第一章

その心は酒を飲んだように喜ぶ。

その子供らはこれを見て喜び、

その心は主によって楽しむ。

ハわたしは彼らに向かい、口笛を吹いて彼らを集める、

わたしが彼らをあがなつたからである。

彼らは昔のように数多くなる。

カわたしは彼らを国々の民の中に散らした。

しかし彼らは遠い国々でわたしを覚え、

その子供らと共に生きながらえて帰ってくる。

一〇わたしは彼らをエジプトの国から連れ帰り、

アッスリヤから彼らを集める。

わたしはギレアドの地およびレバノンに

彼らを連れて行く。

彼らはいる所もないほどに多くなる。

二彼らはエジプトの海を通る。

海の波は撃たれ、

ナイルの淵はことごとくかたれた。

アッスリヤの高ぶりは低くされ、

エジプトのつえは移り去る。

三わたしは彼らを主によって強くする。

彼らは主の名を誇る」と

主は言われる。

一レバノンよ、おまえの門を開き、

おまえの香柏を火に焼き滅ぼさせよ。

二いとすぎよ、泣き叫べ。

香柏は倒れ、

みごとに木は、そこなわれたからである。

バシヤンのかしよ、泣き叫べ。

茂つた林は倒れたからである。

三聞け、牧者の泣き叫ぶ声を。

彼らの栄えが消え去つたからである。

聞け、ししのほえる声を。

ヨルダンの草むらが荒れ果てたからである。

四わが神、主はこう仰せられた、「ほふるべき羊の群れの牧者

となれ。五これを買う者は、これをほふつても罰せられない。こ

れを売る者は言う、『主はほむべきかな、わたしは富んだ』と。そ

してその牧者は、これをあわれまない。六わたしは、もはやこの

地の住民をあわれまないと、主は言われる。見よ、わたしは人

をおのその牧者の手に渡し、おのその王の手に渡す。

彼らは地を荒す。わたしは彼らの手からこれを救い出さない。

七わたしは羊の商人のために、ほふるべき羊の群れの牧者となつた。わたしは二本のつえを取り、その一本を恵みと名づけ、

一本を結びと名づけて、その羊を牧した。ハわたしは一月に牧者三人を滅ぼした。わたしは彼らに、がまんしきれなくなつたが、彼らもまた、わたしを忌みきらつた。九それでわたしは言つた、「わたしはあなたがたの牧者とならない。死ぬ者は死に、滅びる者は滅び、残つた者はたがいにくその肉を食いあうがよい。」一〇わたしは恵みというつえを取つて、これを折つた。これはわたしがあるもろの民と結んだ契約を、廃するためであつた。二そしてこれは、その日に廃された。そこで、わたしに目を注いでいた羊の商人らは、これが主の言葉であつたことを知つた。三わたしは彼らに向かつて、「あなたがたがもし、よいと思うならば、わたしに賃銀を払いなさい。もし、いけなければやめなさい」と言つたので、彼らはわたしの賃銀として、銀三十シケルを量つた。四主はわたしに言われた、「彼らによつて、わたしが値積られたその尊い価を、宮のさいせん箱に投げ入れよ。」わたしは銀三十シケルを取つて、これを主の宮のさいせん箱に投げ入れた。五そしてわたしは結びという第二のつえを折つた。これはユダとイスラエルの間の、兄弟関係を廃するためであつた。

五主はわたしに言われた、「おまえはまた愚かな牧者の器を取れ。六見よ、わたしは地にひとりの牧者を起す。彼は滅ぼされる者を顧みず、迷える者を尋ねず、傷ついた者をいやさず、健やかな者を養わず、肥えた者の肉を食らい、そのひずめをさえ裂く

者である。

一七その羊の群れを捨てる愚かな牧者はわざわいだ。

どうか、つるぎがその腕を撃ち、

その右の目を撃つように。

その腕は全く衰え、

その右の目は全く見えなくなるように」。

第二章

一託宣

イスラエルについての主の言葉。すなわち天をのべ、地の基をすえ、人の霊をその中に造られた主は、こう仰せられる、二「見よ、わたしはエルサレムを、その周囲にあるすべての民をよめる。三かす杯にしようとしている。これはエルサレムの攻め囲まれる時、ユダにも及ぶ。四その日には、わたしはエルサレムをすべての民に対して重い石とする。これを持ちあげる者はみな大傷を受ける。地の国々の民は皆集まつて、これを攻める。五主は言われる、その日には、わたしはすべての馬を撃つて驚かせ、その乗り手を撃つて狂わせる。しかし、もろもろの民の馬を、ことごとく撃つて、めくらとするととき、ユダの家に対しては、わたしの目を開く。六その時ユダの諸族は、その心の中に『エルサレムの住民は、その神、万軍の主によつて力強くなつた』と言う。七そ

の日には、わたしはユダの諸族を、たきぎの中の火皿のようにし、麦束の中のたいまつのようにする。彼らは右に左に、その周囲にあるすべての民を、焼き滅ぼす。しかしエルサレムはなお、そのもとの所、すなわちエルサレムで、人の住む所となる。七主はまずユダの幕屋を救われる。これはダビデの家の光栄と、エルサレムの住民の光栄とが、ユダの光栄にまさることのないようにするためである。ハその日、主はエルサレムの住民を守られる。彼らの中の弱い者も、その日には、ダビデのようになる。またダビデの家は神のように、彼らに先だつ主の使のようになる。九その日には、わたしはエルサレムに攻めて来る国民を、ことごとく滅ぼそうと努める。

「わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊とを注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういこのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ。二その日には、エルサレムの嘆きは、メギドの平野にあつたハダデ・リンモンのための嘆きのよう大きい。三国じゅう、氏族おのおの別れて嘆く。すなわちダビデの家の氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。ナタンの家の氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。三レビの家の氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。シメイの氏族は別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆く。四その他の氏族も皆別れて嘆き、その妻たちも別れて嘆くのである。

第三章

「その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家とエルサレムの住民とのために開かれる。

二万軍の主は言われる、その日には、わたしは地から偶像の名を取り除き、重ねて人に覚えられることのないようにする。わたしはまた預言者および汚れの霊を、地から去らせる。三もし、人が今後預言するならば、その産みの父母はこれにむかつて、『あなたは主の名をもって偽りを語るゆえ、生きていることができな』と言ひ、その産みの父母は彼が預言している時、彼を刺すであろう。四その日には、預言者たちは皆預言する時、その幻を恥じる。また人を欺くための毛の上を着ない。五そして『わたしは預言者ではない、わたしは土地を耕す者だ。若い時から土地を持つている』と言う。六もし、人が彼に『あなたの背中の傷は何か』と尋ねるならば、『これはわたしの友たちの家で受けた傷だ』と、彼は言うであろう。七万軍の主は言われる、

「つるぎよ、たち上がつてわが牧者を攻めよ。

わたしの次に立つ人を攻めよ。

牧者を撃て、その羊は散る。

わたしは手をかえして、小さい者どもを攻める。

ハ主は言われる、全地の人の三分の二は断たれて死に、

第一四章

三分の一は生き残る。
 九わたしはこの三分の一を火の中に入れ、
 銀をふき分けるように、これをふき分け、
 金を精錬するように、これを精錬する。
 彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。
 わたしは『彼らはわが民である』と言い、彼らは『主はわが神である』と言う。』

一見よ、主の日が来る。その時あなたの奪われた物は、あなたの
 中で分かれたる。ニわたしは万国の民を集めて、エルサレムを攻
 め撃たせる。町は取られ、家はかすめられ、女は犯され、町の
 半ばは捕えられて行く。しかし残りの民は町から断たれること
 はない。三その時、主は出てきて、いくさの日にみずから戦われ
 る時のように、それらの国びとと戦われる。四その日には彼の足
 が、東の方エルサレムの前にあるオリブ山の上に立つ。そして
 オリブ山は、非常に広い一つの谷によって、東から西に二つに
 裂け、その山の半ばは北に、半ばは南に移り、五わが山の谷はふ
 さがれる。裂けた山の谷が、そのかたわらに接触するからであ
 る。そして、あなたがたはユダの王ウジヤの世に、地震を避けて
 逃げたように逃げる。こうして、あなたがたの神、主はこれ

る、もろもろの聖者と共にこられる。
 六その日には、寒さも霜もない。七そこには長い連続した日があ
 る（主はこれを知られる）。これには昼もなく、夜もない。夕暮
 になっても、光があるからである。
 ハその日には、生ける水がエルサレムから流れ出て、その半ばは
 東の海に、その半ばは西の海に流れ、夏も冬もやむことがない。
 九主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つ
 のみとなる。

一〇全地はゲバからエルサレムの南リンモンまで、平地のよう
 になる。しかしエルサレムは高くなつて、そのもとの所にとど
 まり、ベニヤミンの門から、先にあった門の所に及び、隅の門に
 至り、ハナネルのやぐらから、王の酒ぶねにまで及ぶ。二その
 中には人が住み、もはやのろいはなく、エルサレムは安らかに立
 つ。

三エルサレムを攻撃したもろもろの民を、主は災をもつて撃た
 れる。すなわち彼らはなお足で立っているうちに、その肉は腐
 れ、目はその穴の中で腐れ、舌はその口の中で腐れる。三その
 日には、主は彼らを大いにあわてさせられるので、彼らはおの
 のその隣り人を捕え、手をあげてその隣り人を攻める。四ユダ
 もまた、エルサレムに敵して戦う。その周囲のすべての国びと
 の財宝、すなわち金銀、衣服などが、はなはだ多く集められる。
 五また馬、騾、らくだ、ろば、およびその陣営にあるすべての

家畜かちくにも、この災わざわいのような災わざわいが臨のぞむ。

二六エルサレムに攻めて来たもろもろの国くにびとの残のこつた者ものは、皆みな年々上ねんねんのぼつて来て、王おうなる万軍ばんぐんの主しゅを拝おがみ、仮庵かりほの祭まつりを守るようになる。二七地の諸族しよぞくのうち、王おうなる万軍ばんぐんの主しゅを拝おがむために、エルサレムに上のぼらない者ものの上うへには、雨あめが降ふらない。一八エジプトの人々ひとびとが、もし上のぼつてこない時ときには、主しゅが仮庵かりほの祭まつりを守るために、上のぼつてこないすべての国くにびとを撃うたれるその災わざわいが、彼らかれの上に臨のぞむ。一九これが、エジプトびとの受ける罰ばつ、およびすべて仮庵かりほの祭まつりを守るために上のぼつてこない国くにびとの受ける罰ばつである。

三〇その日には、馬うまの鈴すずの上うへに「主しゅに聖せいなる者もの」と、しるすのである。また主しゅの宮みやのなべは、祭壇さいだんの前まえの鉢はちのように、聖せいなる物ものとなる。三二エルサレムおよびユダのすべてのなべは、万軍ばんぐんの主しゅに對たいして聖せいなる物ものとなり、すべて犠牲ぎせいをささげる者ものは来てこれを取とり、その中で犠牲なかにぎせいの肉にくを煮にくことができる。その日には、万軍ばんぐんの主しゅの宮みやに、もはや商人しょうじんはいない。

マラキ書

第一章

「マラキによつてイスラエルに臨んだ主の言葉の託宣。」

「主は言われる、「わたしはあなたがたを愛した」と。ところがあなたがたは言う、「あなたはどんなふうにも、われわれを愛されたか」。主は言われる、「エサウはヤコブの兄ではないか。しかしわたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。かつ、わたしは彼の山地を荒し、その嗣業を荒野の山犬に与えた」。四もしエドムが「われわれは滅ぼされたけれども、荒れた所を再び建てる」と言うならば、万軍の主は「彼らは建てるかもしれない。しかしわたしはそれを倒す。人々は、彼らを悪しき国となえ、とこしえに主の怒りをうける民となえる」と言われる。五あなたがたの目はこれを見て、「主はイスラエルの境を越えて大いなる神である」と言うであろう。」

六「子はその父を敬い、しもべはその主人を敬う。それでわたしはもし父であるならば、あなたがたのわたしを敬う事実が、どこにあるか。わたしがもし主人であるならば、わたしを恐れる事実が、どこにあるか。わたしの名を侮る祭司たちよ、と万軍の主はあなたがたに言われる。ところがあなたがたは『われわれはどんなふうにあなたの名を侮ったか』と言ひ、七汚れた食物

をわたしの祭壇の上にささげる。またあなたがたは、主の台は卑しむべき物であると考えて、『われわれはどんなふうにも、それを汚したか』と言う。八あなたがたが盲目の獣を、犠牲にささげるのは悪い事ではないか。また足のなえたもの、病めるものをささげるのは悪い事ではないか。今これをあなたのつかさにささげてみよ。彼はあなたを喜び、あなたを受けいれるであろうかと、万軍の主は言われる。九あなたがたは、神がわれわれをあわれまれるように、神の恵みを求めてみよ。このようなあなたがたの手のささげ物をもって、彼はあなたがたを受けいれらるであろうかと、万軍の主は言われる。一〇あなたがたがわが祭壇の上にいたずらに、火をたくことのないように戸を閉じる者があなたがたのうちに、ひとりあつたらいいのだが。わたしはあなたがたを喜ばない、またあなたがたの手からささげ物を受けないと、万軍の主は言われる。二日の出る所から没する所まで、国々のうちにわが名はあがめられている。また、どこでも香と清いささげ物が、わが名のためにささげられる。これはわが名が国々のうちにあがめられているからである、と、万軍の主は言われる。三ところがあなたがたは、主の台は汚れている、またこの食物は卑しむべき物であると言つて、これを汚した。一三あなたがたはまた『これはなんと煩わしい事か』と言つて、わたしを鼻であしらうと、万軍の主は言われる。あなたがたはまた奪つた物、足なえのもの、病めるものを、ささげ物として携え

て来る。わたしはそれを、あなたがたの手から、受けるであろうかと主は言われる。二四群れのうちに雄の獣があり、それをささげると誓いを立てているのに、傷のあるものを、主にささげる偽り者はのろわれる。わたしは大いなる王で、わが名は国々のうちに恐れられるべきであると、万軍の主は言われる。

第二章

一祭司たちよ、今この命令があなたがたに与えられる。二万軍の主は言われる、あなたがたがもし聞き従わず、またこれを心に留めず、わが名に栄光を帰さないならば、わたしはあなたがたの上に、のろいを送り、またあなたがたの祝福をのろいに変える。あなたがたは、これを心に留めないで、わたしはすでにこれをのろった。三見よ、わたしはあなたがたの子孫を責める。またあなたがたの犠牲の糞を、あなたがたの顔の上にまき散らし、あなたがたをわたしの前から退ける。四こうしてわたしが、この命令をあなたがたに与えたのは、レビと結んだわが契約が、保たれるためであることを、あなたがたが知るためであると、万軍の主は言われる。五彼と結んだわが契約は、生命と平安との契約であつて、わたしがこれを彼に与えたのは、彼にわたしを恐れさせるためである。彼はすでにわたしを恐れ、わが名の前におののいた。六彼の口には、まことの律法があり、そのくちびるには、不義が

見られなかった。彼は平安と公義とをもつて、わたしと共に歩み、また多くの人を不義から立ち返らせた。七祭司のくちびるは知識を保ち、人々が彼の口から律法を尋ねるのが当然である。彼は万軍の主の使者だからだ。八ところが、あなたがたは道を離れ、多くの人を教えてつまづかせ、レビの契約を破つたと、万軍の主は言われる。九あなたがたはわたしの道を守らず、律法を教えるに当つて、人にかたよつたがために、あなたがたをすべての民の前に侮られ、卑しめられるようにする」。

一〇われわれの父は皆一つではないか。われわれを造つた神は一つではないか。なにゆえ、われわれは先祖たちの契約を破つて、おのおのその兄弟に偽りを行うのか。一一ユダは偽りを行い、イスラエルおよびエルサレムの中には憎むべき事が行われた。すなわちユダは主が愛しておられる聖所を汚して、他の神に仕える女をめとつた。一二どうか、主がこうした事を行う人ば、証言する者も、答弁する者も、また万軍の主にささげ物をする者をも、ヤコブの幕屋から断たれるように。

一三あなたがたはまたこのような事をする。すなわち神がもはやささげ物をかえりみず、またこれをあなたがたの手から、喜んで受けられないために、あなたがたは涙と、泣くことと、嘆きとをもつて、主の祭壇をおおい、一四「なぜ神は受けられないのか」と尋ねる。これは主があなたと、あなたの若い時の妻との間、契約の証人だつたからである。彼女は、あなたの連れ合い、

契約によるあなたの妻であるのに、あなたは彼女を裏切った。――五一つ神は、われわれのために命の霊を造り、これをささえられたではないか。彼は何を望まれるか。神を敬う子孫であるゆえ、あなたがたはみずから慎んで、その若い時の妻を裏切つてはならない。――イスラエルの神、主は言われる、「わたしは離縁する者を憎み、また、しえたげをもつてその衣をおおう人を憎むと、万軍の主は言われる。ゆえにみずから慎んで、裏切ることをしてはならない」。

――七あなたがたは言葉をもつて主を煩わした。しかしあなたがたは言う、「われわれはどんなふうにも、彼を煩わしたか」。それはあなたがたが「すべて悪を行う者は主の目に良く見え、かつ彼に喜ばれる」と言い、また「さばきを行う神はどこにあるか」と言うからである。

第三章

――「見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる。――二その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。

彼は金をふきわけける者の火のようであり、布さらしの灰汁のよ

うである。――三彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもつて、ささげ物を主にささげる。――四その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる。

――五そしてわたしはあなたがたに近づいて、さばきをなし、占いの者、姦淫を行う者、偽りの誓いをなす者にむかい、雇人の賃銀をかすめ、やもめと、みなしごとをしえたげ、寄留の他国人を押しのけ、わたしを恐れない者どもにむかつて、すみやかにあかしを立てると、万軍の主は言われる。

――六主なるわたしは変えることがない。それゆえ、ヤコブの子らよ、あなたがたは滅ぼされない。――七あなたがたは、その先祖の日から、わが定めを離れて、これを守らなかつた。わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろうと、万軍の主は言われる。ところが、あなたがたは『われわれはどうして帰ろうか』と尋ねる。――八人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもつてである。――九あなたがたは、のろいをもつて、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。――二〇わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもつてわたしを試み、わたしが

天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。二「わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしよう」と、万軍の主は言われる。三こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者となえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる。

三主は言われる、あなたがたは言葉を激しくして、わたしに逆らった。しかもあなたがたは『われわれはあなたに逆らって、どんな事を言ったか』と言う。四あなたがたは言った、『神に仕える事はつまらない。われわれがその命令を守り、かつ万軍の主の前に、悲しんで歩いたからといって、なんの益があるか。五今われわれは高ぶる者を、祝福された者と思う。悪を行う者は栄えるばかりでなく、神を試みても罰せられない』。

六そのとき、主を恐れる者は互に語った。主は耳を傾けてこれを聞かれた。そして主を恐れる者、およびその名を心に留めている者のために、主の前に一つの覚え書がしるされた。七「万軍の主は言われる、彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。一八その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者と

の区別を知るようになる。

第四章

一万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。ニしかしわが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。あなたがたは牛舎から出る子牛のように外に出て、とびはねる。三また、あなたがたは悪人を踏みつけ、わたしが事を行う日に、彼らはあなたがたの足の裏の下にあつて、灰のようになると、万軍の主は言われる。

四あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。

五見よ、主の大きいなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。六彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもつてこの国を撃つことのないようにするためである」。